
あノ神ハキミ。

千風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あノ神ハキミ。

【Nコード】

N6779G

【作者名】

千風

【あらすじ】

八百屋の末っ子、朝比奈アヒルは、変わった名前のせいで国語が嫌い。ところがある日、悪意ある言葉に潜む悪霊・忌^{イミ}に襲われている少女と出会い、言葉の力に目醒めてしまう。あの神となったアヒルは、言葉で戦う、五十音の世界へと巻き込まれていく！2／8、全85話完結！ご愛読、ありがとうございました！

Word. 1 あノ目醒メ (1) (前書き)

千風と申します。

新しく連載を始めました。

これから頑張っていきたいと思います。

「あノ神ハキミ。」、少しでも楽しんでいただければ幸いです。
では、どうぞ。

Word. 1 あノ目醒メ (1)

言葉には、霊が宿る。

言葉には、魂が宿る。

やがて神は、言葉の力に目を醒ます…。

そう田舎でも都会でもない、ごく普通の町、言ノ葉町。その商店街の一角にある、小さな八百屋。まだシャッターの降りている店の看板には、『あさひな』と、大きく書かれていた。

その八百屋の二階、数個ある部屋の一つ、六畳足らずの部屋に置かれた、簡素なベッドの上に、一人の少年が、何とも気持ち良さそうな表情で眠っている。

「んんっ…ふじ…りんごおっ…」

妙な寝言を呟きながら、少年が寝返りをうつ。その瞬間、部屋の扉が、勢いよく開いた。

「アーくうん！朝だっよおっんっ！」

開いた扉の向こうから、大声を放って部屋へと飛び込んできたのは、満面の笑顔を見せた、ヒゲ面の中年男。その両手は、大量の真っ赤なトマトで、すっかり塞がっている。

「必殺！トマト攻撃いっっ！」

「ブハっ！」

ヒゲ親父が持っていたトマトを、寝ている少年へと連続で投げつける。すると、トマトの一つが寝ていた少年の顔を直撃し、汁を飛び散らせて、勢いよく潰れた。その衝撃で、気持ち良さそうに眠っていた少年が、目を覚ました。

「あっ！アーくん！起きっ…！」

「朝っぱらから何してくれとんじゃあっ！クソ親父いいっ…！」

「ぐほおおおうっ！」

素早く起き上がった少年が、少年の目覚めを喜んでいたヒゲ親父の顎を、下から勢いよく蹴り上げる。少年は、ボサボサに乱れた、少し茶色がかった髪に、あまりいいとは言えない目つき。今、その顔面は、トマトの汁まみれである。

「さすがは我が息子っ…天晴れな蹴り技っ…」

「たくっ…!」

少年の父親らしきヒゲ親父が、顎を押さえ、苦しそうに呟く中、少年は近くにあったティッシュを一枚取り、顔についたトマトの汁を拭う。

「もっとマシな起こし方しろ!」

「だってアーくんがトマトを呼ぶから…」

「俺が呼んだのは富士りんごであって、トマトじゃねえっ」

「仕方ないでしょっ? ウチは八百屋なんだから! ってか、アーくんて、自分の寝言とか覚えてんのおっ?」

「俺が変態かのような言い方をすんなっ!」

怒鳴り返しつつも、ベッドに転がったトマトを拾う少年。

「だいたい売り物投げるかあ? 普通っ!」

「それっ、熟れ過ぎちゃって、もう売れないトマトだもんっ」

非難するように言い放つ少年に、父がどこか得意げに答える。

「熟れてたから汁の出も抜群だったでしょっ?」

「おおっ…そうだな…」

笑顔で話す父に、少年が頷きながらも、勢いよく表情を引きつった。

「ああゝあ…今日、トマト…?」

『んっ?』

あれこれと話していた少年と父が、部屋の外から聞こえてくる声に、同時に振り向く。

「帰ったらシーツ洗わないと…」

少年の部屋のすぐ外の廊下に立ち、部屋の中を覗き込みながら、少し面倒そうに呟いているのは、制服姿の青年であった。少年とよ

く似た顔立ちをしているが、少年よりは少し年上に見える。

「ツー兄っ」

「げえ！今日、俺、洗濯当番なんだから止めてくれよなあゝっ」

「スー兄っ」

呟いていた青年のすぐ横から、まったく同じ顔をした、同じ制服の青年が出てくる。二人の青年は、雰囲気こそ違うが、その顔はまさに瓜二つ。どうやら双子のようである。

「スーくん！ツーくん！アーくんがお父さんに冷たいよおゝっ！」

『だからっ？』

「ううう…」

声を揃えて冷たい言葉を放つ双子に、父が落ち込み、その場に膝をつく。

「ってか、“アヒル” うゝっ」

「へっ？」

青年の一人に“アヒル”と呼ばれ、少年が顔を上げる。

「今、何時だか知ってつかあゝ？」

「何時っ…？」

青年に言われ、少年が部屋の掛け時計へと目を移す。時計の針が指し示しているのは、八時十分。

「だああああっ！遅刻だあああっ！！」

八百屋『あさひな』の末っ子、朝比奈アヒル。今年高校に入学したばかりの十五歳。

八百屋を営む父と、二つ年上の双子の兄、スズメ・ツバメとの四人暮らしである。母親は諸事情で家を出ていったそうだが、温かくも明る過ぎる家庭で、元気に育った。

「あんのアホ親父！あれだけ派手に起こしといて、一時間遅かった

とか、マジありえねえ!!」

ボサボサのままの頭を掻きながら、急いで着替えたと言わんばかりの制服姿で、八百屋を飛び出していくアヒル。

「八時二十分!ダッシュすればいけるかつ!!」

腕時計を見ながら、アヒルがさらに足を速める。

「おおおいっ!朝比奈!」

「ああっ?」

自分の名を呼ぶ声が聞こえ、アヒルが眉間に皺を寄せながら顔を上げる。するとそこには、今時珍しい程にヤンキーオーラを放っている、丈の長い学ラン姿の男が十人程、アヒルの行こうとする道に、ずらりと立ち並んでいた。前方を塞がれ、アヒルが仕方なく、急いでいた足を止める。

「ちよつと面貸せやあっ!」

「はあっ…」

集団の中心で、挑戦的にアヒルへと言い放つサングラスを掛けた、金髪の子。その男の言葉を聞いて、アヒルが深々と溜息をつく。

「色々鬱憤も溜まってから、相手してやりてえのは山々なんだけどよお…」

アヒルが持っていた鞆をその場に捨て置き、ゆっくりと拳を鳴らす。

「生憎っ、てめえーらに面貸してる時間はねえんだよっ」

『へっ…?』

さらに目つきを鋭くするアヒルに、ヤンキー達が皆、顔を引きたった。

『あっぎゃあああああゝゝっ!!』

次の瞬間、悲痛な叫びが響き渡り、ざっと十人、さらに酷い顔となって倒れ込んだ。

「ふうっ」

一息ついたアヒルが、捨て置いていた鞆を拾い上げる。

「うわ!八時二十三分!」

再び腕時計で時間を確認したアヒルが、倒れたヤンキー達を飛び越えて、慌てて走り去っていく。

「アニキいゝ、あいつ、やっぱ強いよおゝっ…」

「もうケンカ売んの、やめましようよおゝ…アニキいゝっ…」

「うるせえ！勝つまでやるんだよっ！」

「でも俺、一生、勝てる気しなっ…痛っ！」

皆からアニキと呼ばれるサングラスの男が、弱音を吐こうとしていた、横の小男の頭を、勢いよく殴る。

「何も殴らなくても…」

「うるせえっ！」

アニキはツンと口を尖らせた。

公立・言ノ葉高等学校。

偏差値、制服、校風、すべてにおいて、中の中としか言いようのない、ごく普通の学校である。ここが、アヒルの通う高校であった。「げえっ、正門閉まつてるよおっ…クッソ！あいつ等さえ出てこなきや、間に合ったのにつ」

曲がり角の壁際に身を潜め、ひっそりと正門の様子をうかがうアヒル。固く閉ざされた正門の前には、教師と何人もの風紀委員が立ち並んでいる。今出ていけば、間違いなく連行されるであろう。

「仕方ねえっ、裏門から忍び込むかっ」

そう呟くとアヒルはそのまま急ぎ足で、角の道から学校の裏側へと大きく回り込んだ。そこには、誰もいない小さな門がある。

「よしよしよしっ」

思わず笑顔を零して、軽々と裏門を駆け上がるアヒル。

「いよおっ…！」

「一年D組二番・朝比奈アヒル君！今月十回目の遅刻っ！」

「ひい！おわあっ！」

アヒルが裏門の上から飛び降りようとしたその時、突如、大きな声のアヒルの耳に入り、慌てたアヒルはバランスを崩し、裏門の上から勢いよく転げ落ちた。

「痛てててっ…」

「つて、なつてたところだよお？ “ガア” っ」

「へっ…？」

打ちつけた背中を押さえながら、起き上がったアヒルが、上から降って来る声に、戸惑うように顔を上げる。

「俺が裏門当番じゃなかったらねっ」

こんべい
「紺平っ！」

「おはよう、ガア」

驚いたように名を呼ぶアヒルへと笑顔を向けるのは、サラサラと流れるような髪に、整った顔立ちをした、いかにも優等生といった雰囲気、大人しそうな少年であった。制服の袖に『風紀』と書かれた腕章をしている。

「んだよおっ…驚かすなよなあ…」

アヒルが制服についた砂を払い落しながら、その場でゆっくりと立ち上がる。

「紺平が裏門当番だって知ってたら、走ってなんか来なかったのによおっ」

「走って来なくても間に合うように、ちゃんと来なよ」

「間に合うとこだったんだよ！あいつ等が出て来なきゃ！」

「あいつ等って、また隣校のアニキ？また朝っぱらからケンカしてきたの？」

「ああっ」

「はあっ…」

素直に頷くアヒルに、紺平が深々と溜息を吐く。

「何度も言ってるけど、ケンカばかりしちゃダメだよ？ガアっ」

「何度も言ってるけど、いい加減、“ガア” っと呼ぶの、やめろよっ」

紺平を同じ言葉を繰り返しながら、アヒルが少し引きつった表情を向ける。

「それ、幼稚園時代のあだ名だろ？」

「何かもう“ガア”って呼ぶのが癖になっちゃって。“アヒル隊長”に変える？」

「あのなあっ…！」

「しつこいわねえ！いい加減にしてよっ！」

「あっ？」

紺平へ怒鳴り返そうとしたアヒルが、裏門の向こうから聞こえてくる、どこか荒々しい女の声に気づき、振り返った。

「でっでもっ…」

「これ以上、私に付き纏わないで！本当に警察呼ぶわよっ！？」

裏門の向こうの道端で、後を追ってきたいる冴えない男に、勢いよく怒鳴りつける一人の女。流暢な日本語を話してはいるが、縦に巻かれた金色の派手な髪に、日本人離れた翠色の瞳をしていた。

平日の朝から私服で道端を歩いてはいるものの、どう見てもアヒルと同年代、学生の年頃に見える。

「でっでもっ…僕…初めて見た時から、君のことっ…」

「あああー！気持ち悪い！それ以上、口開かないでっ！」

冴えない男が言葉が続けることも許さず、少女はさらに強く怒鳴りつけた。

「とっとと消えてよ！二度と私の視界に入ってきて来ないでっ…！」

そう言い捨てて、少女が足早にその場を去っていく。

「うっ…」

その場に一人残った男が、ゆっくりとその場で膝をつく。

「ううう…」

男は力なく、その場に泣き崩れた。

「ひっでえ…」

男と少女のやり取りの一部始終を見ていたアヒルが、裏門の向こう側で泣き崩れている男を見て、思わず呟く。

「あそこまで言うかあ？ 普通っ」

「あの二人、最近毎朝、モメてたんだよねえ」

去っていった少女に批判的な言葉を送るアヒルの横から、紺平が口を挟む。

「一週間くらい前に、あのキレイな子に男の人が声掛けて、それからは毎日、男の人が待ち伏せみたいな感じでさっ」

詳しく事情を語る紺平。

「男の人しつこいなあゝって思ってたけど、あそこまで言われてると、さすがに可哀想になってくるねえゝ」

「うううっ…」

まだ泣き崩れている男を、少し同情するように見つめる紺平。

「さあゝてとっ、じゃあまあホントの遅刻にならない内に、とつとと教室行くかあっ」

「ホントの遅刻って…まだ見逃すって言った覚えはっ…」

「いいじゃねえの！ 幼稚園の時から腐れ縁なんだからさあ！」

口を尖らせる紺平に笑顔を向けて、アヒルが紺平の横を通り過ぎ、校舎の方へと歩いて行く。

「今度、何か奢ってやつから！」

「あのねえ、俺にも風紀委員の立場ってものがっ…あっ」

「あっ？」

言葉の途中で何かに気づいたような声を発する紺平に、向き合っていたアヒルが首を傾げる。アヒルのすぐ後方を見つめる紺平の視線を追って、アヒルがゆっくりと振り返った。

「うげっ！」

「なあゝにを奢ってくれるんだってえゝ？」

アヒルのすぐ後方に立っているのは、長い黒髪を一つに束ねた、鋭く細い瞳の、軽い装いのまだ若い女性。女性の出現に、アヒルが思わず顔を引きつる。

「ええっ？朝比奈っ」

「めっ…恵先生…」
めぐみ

アヒルが力なく、その女性の名を呼ぶ。

「今月十回目の遅刻。罰として今日、放課後、国語資料室の掃除な
っ」

「うげえっ！」

「ああ…あっ…」

怪しく微笑む恵に、アヒルは大きく口を歪ませ、紺平はどこか疲れたように肩を落とした。

「うう…うう…」

アヒルたちが校舎の中へと去った後も、裏門の前で泣き崩れたままの男は、その場を動かず、ただ擦り切れたような声を、ぽとぽと落としていた。

「ううっ…！」

ゆっくりと顔を上げた男の背後に、黒い影が立ち込めた。

その日・放課後。国語資料室。

「はあ…あっ…」

本棚ばかり立ち並んだ部屋で、大量の本を抱え、深々と溜息を吐くアヒル。その表情には、面倒臭いという思いが前面に出ている。

「なんで俺がこんなことっ…」

「ちゃっちゃか働かないと、広辞苑で頭、カチ割るよおっ？」

「怖えーよっ」

真顔で広辞苑を振り上げる恵に、思わず顔を引きつるアヒル。

「だいたい俺、基本的に国語って嫌いなんだけど…」

「日本人のクセにバチ当たりなこと、言ってるんじゃないよっ」

ボヤクように呟くアヒルに、恵が注意するように言い放つ。

「こおゝんな美しい母国語を持てたことに感謝して、国語の授業に真剣に取り組むのが、お前らに与えられた使命だっ、使命っ」

「こおゝんな美しい母国語なのに、何で自分の名前がこおゝんな変ちくりんなのかって考えると、やる気が失せるんだよっ」

強く言い切る恵に、アヒルも負けじと答える。

「何言ってるんだ。いい名前じゃないかあつ、トンビっ」

「アヒルだ！認識もしてねえーくせに、適当に誉めてんじゃねえよっ！」

名前を間違ふ恵に、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「まっ、そう細かいことは気にすんなっ」

「どこが細かいんだよっ…」

「んっ？」

アヒルが呆れたように肩を落としていると、資料室の奥にある机で本を読んでいた恵が、ふと顔を上げ、部屋の掛け時計へと目をやる。針は九時を示していた。窓の外を見ると、日はすっかり沈んでおり、他の教室の電気も消えて、真っ暗である。

「おっ、もうこんな時間かっ」

「おうよっ、学生への労働過多で逮捕されっぞお？」

「本読んでると、時間がすぐ経っちゃうねえーホントっ」

「聞けよ…」

アヒルの言葉をまるで無視する恵に、アヒルが引きつった表情を見せる。

「後は私がやっとかから、お前はもう帰りなあつ、トンビの家族が心配すんだろ？」

「アヒルだつての！」

恵にそう怒鳴り返しながら、アヒルが持っていた本を床に置き、近くに置いてあった自分の鞆を手取る。

「じゃあ俺、帰るわっ」

「ああ、気をつけてな」

軽く笑みを浮かべた恵に見送られ、アヒルは資料室を後にした。

「……………」

静かになった資料室に一人残った恵が、そっと目を細め、鋭い表情を見せる。

「言葉が…揺らめいてる…」

そう呟いた恵が、机の上に置いてある、先程まで読んでいた本のすぐ上で、描かれた文字をなぞるように、細い指を動かす。すると、恵の指が辿った文字たちが、紙の上でかすかに動いているように見えた。

「特別な夜に、なりそうだね…」

恵が、どこか楽しげな笑みを浮かべた。

「ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！」

暗い夜道を駆け抜ける、荒々しく乱れた少女の声。

「ハアっ…！ハアっ…！」

「グオオオオオっ…！！！」

少女を追うように、深く呻くような声が、夜の闇の中に響いた。

Word. 1 あノ目醒メ (2)

「はあゝああ、すっかり遅くなっちゃったなあ」

資料室を出たアヒルは、すっかり静けさを増し、昼間とはまるで違う雰囲気を纏った廊下を歩きながら、ゆっくりと校舎を出た。暗くなった空には、丸い月が不気味なほど明るく、輝いている。

「正門も閉まってるし、裏門から帰るかあ」

朝と同じように固く閉ざされた正門を確認し、アヒルが裏門へと歩いていく。小さく開いている裏門から、少し体を横に向けるようにして、アヒルは学校の外へと出た。

「ふうっ」

「ハアっ…！ハアっ…！」

「ん？」

裏門を出たアヒルが、道の向こうから徐々に近づいてくる声に気づき、ふと顔を上げて振り向いた。

「ハアっ…！ハアっ…！」

「あれはっ…」

道の先から、アヒルの立っている方へと必死に駆けてくる、一人の少女。アヒルはその少女に見覚えがあった。

——いい加減にしてよっ！——

「今朝の女…？」

その少女が今朝、裏門の前で男とモメていた、あの少女であることに気づき、アヒルが戸惑うように眉をひそめる。

「何やって…んっ？」

駆けてくる少女を見つめていたアヒルが、少女の後方から駆けてくる、もう一つの人影に気づく。暗い空の下、目を凝らして、その

人影を見つめるアヒル。

「あいつはっ…」

——うううっ……——

「あいつも今朝のっ…」

「グオオオオオオっ…！」

「……っ」

追って来ている男は、今アヒルの方へと駆けてきている少女に、酷い言葉を投げかけられ、裏門の前で泣き崩れていた、あの男であった。だが今朝とは様子が違い、その瞳は視点の定まっていないうるな状態で、目には力がないというのに大きく口を開き、人のものとは思えないような禍々しい叫び声をあげている。その叫び声を聞き、アヒルが少し眉をひそめた。

「んっ？」

さらに男を見ていたアヒルが、何かに気づいたように目を細める。

「あれはっ…？」

「グオオオオオオっ…！！」

再び叫び声をあげる男の全身を、何かガスのような、実体のない黒い影が包み込んでいるように見えた。理由はわからないが、その黒い影から、何か嫌な空気のようなものを感じた。

「一体、何だっ…？」

「ハアっ…！ハアっ…！んっ？」

アヒルが戸惑うように声を漏らしたその時、後ろばかり気にしていた少女が、その声に反応したのか前を向き、すぐ前に立っているアヒルの姿を見つける。

「その学生！」

「あっ？」

大きな声で恐らくはアヒルのことを呼んでいるのであろう少女に、アヒルが少し首を傾げる。

「そこをどきなさい！どこでもいいから、とつと逃げななり、隠れるなりするのよっ！！」

「はあっ？」

必死に叫ぶ少女であったが、その言葉の意味がわからず、アヒルはさらに首を傾げる。

「何言ってっ…」

「いいから私の言う通りにしなさい！死にたいのっ！？」

「……っ」

呆れたような表情を見せていたアヒルが、真剣そのものの様子で叫ぶ少女に、そつと表情を曇らせる。少女の様子は危機迫っており、とても冗談を言っているようには見えなかった。

「グオオオオオっ…！」

「クっ…！」

背後から聞こえてくる男の叫び声に、振り向いた少女が、険しい表情を見せる。

「とにかく、とつととつ…！」

「……っ！」

「つて、へっ…！」

再び前を向き、もう一度、アヒルに忠告するように叫ぼうとした少女であったが、アヒルがいきなり少女の手を掴み、無理やり引っ張って、少女よりも前に立って、少女と共にその場から勢いよく駆け出していく。少女が目丸くして、前を走るアヒルを見る。

「何！？何なのっ！？私、ちゃんと日本語でしゃべったわよねっ！？」

アヒルの後を走りながらも、少女が困惑した様子で問いかける。

「それとも何？君、そんな顔のくせに、ハーフとかなわけっ？」

「うっせえなあ！国語の成績は二だけど、歴^{れっき}とした日本人だつてのっ！」

だんだんと失礼な問いかけになってくる少女に、アヒルが思わず怒鳴り返す。

「とにかく逃げるんだろ！？ニュアンス的には合ってんじゃないかっ！」

「あのねえ！そういう問題じゃっ…！」

「グオオオオオオっ…！“壊”…！！」

「…っ！」

叫び声ではない言葉を発する男に、少女が表情を厳しくする。

「曲がって！」

「へっ？」

「いいからコッチ！」

「うわわわっ！痛ててて！」

道を直進しようとしていたアヒルの腕を捻りあげ、曲がるよう指示する少女。腕を捻られたアヒルが、角の電柱にぶつかりそうになりながら、ぎりぎりのところで角を曲がる。

「痛ってなあ！いきなり曲がるとか言うんじゃないっ…！」

——バアアアアアンっ！

「いいっ!？」

アヒルが少女に文句を言おうとしたその時、二人が直進しようとしていた道の、両側の壁が一齐に崩れ落ち、横に立っていた電柱まが倒れ込んで、あっという間に道を塞いでしまう。あのまま進んでいたら、今頃は電柱と瓦礫の下敷きであっただろう。

「んなっ…」

曲がった道を走りながらも、その崩れ落ちた電柱を見つめ、啞然とするアヒル。

「ねっ？曲がって正解でしょ？」

「んなんなんなっ…！」

冷静に問いかける少女とは異なり、アヒルは、震えた声で言葉にならない声を発する。

「地震っ!？」

「どう考えても違うでしょうが!!」

走り続けながらも周囲を見回すアヒルに、少女が思わず怒鳴り声をあげる。

「あいつがやったのよ! あいつが! 空気で察しなさいよっ!」

「あいつがあ?」

少女の言葉に驚いたように目を開きながら、アヒルが少し後ろを振り返り、まだ二人の後を追って来ている男の方を見る。

「何々だあ? あいつ。さっきのとか明らかに人間技じゃねえーじゃねえしっ」

あまり焦った様子なく、少女へと問いかけるアヒル。

「何か変な黒い影、憑いてるし」

「えっ…?」

アヒルの言葉に、少女が目丸くする。

「見えるのっ? あれが」

「はっ?」

アヒルの方を見上げ、少し驚いたように問いかける少女に、アヒルが首を傾げる。

「ああ、まあ俺、視力は両目とも二・〇だし」

「そういうことじゃなくて…まあもういいわっ」

自分の目を指差しながら、どこか得意げに話すアヒルに、一度、否定しようとした少女であったが、どこか諦めたように肩を落とした。

「あれは忌^{イミ}っ」

「イミっ…?」

その聞き慣れぬ単語に、眉をひそめるアヒル。

「そっ、悪意ある言葉を向けられた人間の、傷ついた心を狙って巢食う悪霊よっ」

「悪霊って…」

少女の説明を聞きながら、アヒルが眉をひそめる。

「俺、集合写真が心霊写真になったことすらないのになあ」

「そういう次元の問題じゃないわっ」

「へっ？」

「グオオオオオオっ…！ “壊” …！！」

「また来たっ…！」

「…っ！」

追ってくる男の声に反応し、またしても崩れ落ちる道の外壁や電柱。少女の言葉にアヒルが表情を鋭くし、さらに走る速度を速めた。崩れ落ちる瓦礫をぎりぎりのところでかわしながら、二人が無理やりに道を直進して行くと、二人が通り抜けた後、壁たちは完全に崩れ落ち、道が塞がった。

「良し！これでもう追って来れねえだろっ…！」

「甘いわねっ…」

「へっ？」

「グオオオオオっ！ “碎”^{サイ}っ…！」

「んなあぁっ…！」

塞がった道に行く手を阻まれたはずの男であったが、またも男が言葉を放ったその瞬間、崩れていた瓦礫がすべて、一瞬にして砕け散り、男の道を開く。

「地震っ…！」

「だから違うっつってんでしょ！」

先程と同じように周囲を見回すアヒルに、少女が先程よりもさらに強い口調で怒鳴りあげる。

「っっ…か何々だよ？さっきから！あいつ、何かすっげえことばっかやってねっ？」

「忌は言葉の力を操るの」

「言葉の力？」

少女の答えに、アヒルが表情を険しくする。

「忌の放った言葉は、すべて現実のものとなる」

「アヒルかよっ、そんなのっ…」

“破”^ハ…！」

「げっ！また何か来たぞ！？」

「クっ…！」

男から放たれる衝撃波のようなものが、二人へと迫り、アヒルが焦る声をあげる中、少女が強く唇を噛み締める。

「コッチに！」

「うわああっ！」

今度は少女に引っ張られ、アヒルと少女は狭い路地裏へと入っていった。

その頃。言ノ葉町の八百屋・『あさひな』。

午後八時に店を閉め、それから後片付けなどを終えた朝比奈家は、午後九時、これから少し遅い夕食の時を迎えていた。和室の小さな丸テーブルに、アヒルの双子の兄・スズメとツバメが並んで座っている。

「ああー諸君、説明しよう！今日のメニューはあつ、八宝菜！焼きナス！ほうれん草のおひたしである！」

台所から料理を運びながら、やたらとテンションを上げる、朝比奈家の父。

「拍手うう！パチパチパチパチっ！」

『……………』

拍手をする父とは対照的に、まったく拍手をしようしないスズメとツバメ。

「つつーかここ最近っ、売り物の残りばっかじゃんっ？」

「うっ…」

「成長期の息子相手に、野菜づくしってどうなの？とか、思うよね…」

「うっ…」

スズメとツバメの言葉に、父の笑顔が徐々に引きつられていく。

「つつーか俺、肉食いたいっ」

「僕、魚…」

「うううっ…！」

さらに続く二人の言葉に、父が唇を噛み締める。

「アカネえっ！お前が出ていって早十一年…！男手一つで必死に育ててきた息子たちが、ついに反抗期をおっ…！！」

「出て行った母さんに、んなこと嘆いても無駄だろ？」

「そんなんだから…出て行かれたんじゃない…？」

天井に向かって叫ぶ父に、スズメとツバメはさらに冷たい言葉を投げかける。

「そういえば…アヒル君、遅くない…？」

「んあっ？」

ツバメに問いかけられ、スズメが台の上に置いてある、小さな時計へと目をやる。もう九時を回っているというのに、末っ子のアヒルは学校に行ったまま、帰って来ていない。

「遅刻の罰で残されてたとしても…そろそろ帰って来ていい時間だと思っただけ…」

「どっかのヤンキーとケンカでもしてんじゃねえーのお？アイツ、短気でバカだしっ」

「スズメと一緒にね…」

「おう！そうそう！って、うっせえーよっ」

一言付け加えるツバメに、一度は頷いたスズメが、しかめた表情を向ける。

「それか八宝菜が嫌で、どっかの家で肉とか食ってんじゃねえーのおっ？」

「うううっ…」

「父さんいじめも、そのくらいにしときなよ…スズメ…」

スズメの言葉に、さらに落ち込む父であった。

Word. 1 あノ目醒メ (3)

『ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！』

どのくらいの時間を、走り続けたのかわからない。だが体育のマラソンなどは軽く感じる程に、全力で走り続けた。人気のない荒地まで駆け抜けてきたアヒルと少女は、置かれていた壊れた車の横にしゃがみ込み、身を潜めて、その乱れた呼吸を、必死に整えていた。「ここまで来ればっ…さすがに追って来ねえだろっ…」

「ハアっ…ハアっ…ったく、何なの？君っ…」

疲れ切った様子でその場に座り込みながら、少女が横で呼吸を整えているアヒルを見上げる。

「何だって、私を引っ張って逃げたりなんかしたのよっ？」

「何となくっ」

「はあっ？」

短く答えるアヒルに、少女が大きく口を開く。

「何となくって、何それ？適当ねえっ」

「何となくなもんは、何となくなんだから仕方ねえだろおっ？」

「んっ…？」

少女の横にしゃがみ込むアヒルの鞆から、小さな長方形の何かが落ち、少女がそれに手を伸ばした。拾ったそれを表に向けると、顔写真が見える。どうやら生徒手帳のようであった。

「朝比奈…アヒル…？」

写真の横に描かれた名前を、口にする少女。

「何？この変な名前っ。本名っ？」

「うっせえなあ！本名だよっ！」

顔をしかめたアヒルが、少女の手から素早く手帳を奪う。

「悪かったな！変ちくりんな名前で！」

「ホントね。親のセンス、おかしいを通り越して、イカれてるわよ？」

「ちったあ遠慮しろっ！」

悪びれもなく言い放つ少女に、アヒルが強く怒鳴りあげる。

「お前の名前は？何ていうんだよ？」

「何で私が、見ず知らずの君ごときに名前を教えなきゃいけないのよ」

「人の名前、散々バカにしろって、それっ！？」

嫌そうな顔を見せて言い放つ少女に、アヒルが怒鳴りあげるを通り越して、ショックを受ける。

「ったく、んな口ばっかきいてっから、こんな目に遭ってんじゃねえーの？」

「え？」

アヒルの言葉に、少女が少し戸惑うように振り向く。

「あの男があの変な悪霊に取り憑かれたのって、悪意ある言葉を向けられて、傷ついたからなんだろ？」

「ええ、そうよ」

「その悪意ある言葉って、お前が今朝、あいつに言ってた、“消えろ”だの何だのじゃねえーのっ？」

「……っ」

驚いたように、目を見開く少女。

「何で君が、そんなこと知ってんのよ？」

「たまたま見てたんだよっ」

「盗み見？サイテーねっ」

「たまたまだっつってんだろうがっ！」

非難するようにアヒルを見る少女に、アヒルが思わず怒鳴りあげた。

「っっーかさ、お前があいつに謝れば、あいつの気も済んで、あの変な悪霊も消えるんじゃないっ……」

「冗談じゃないわっ」

「へっ？」

強く言い切る少女に、アヒルが少し驚いたように振り向く。

「なんで私が、あんな奴に謝らなきゃいけないのよっ」

「……っ」

不快そうな表情を見せ、煩わしそうに言い放つ少女を見て、アヒルがそっと目を細める。

「一方的に、付き纏ってきたのはあの男よっ？ 私はまだ迷惑 被っただけっ！ 被害者は私なのよっ？」

少女はさらに、強気なその言葉を続ける。

「あの男は、ああ言われて当然っ、私は何にも間違ったことなんてしてないわ！」

「……………」

少女の言葉を聞きながら、アヒルがそっと俯く。

——うううっ……！——

力なく落とされていた、悲しげな声。

「だから私が謝る必要なんてっ……」

「迷惑被ったからって……」

「……………」

少女の言葉を遮るアヒルの声に、少女が少し戸惑うような表情を見せながら、アヒルの方を振り向く。

「間違っていないからって……」

ゆっくりと顔を上げたアヒルが、まっすぐに少女を見つめる。

「だからって……人の心を傷つけていい、わけじゃないっ……」

「……………」

まっすぐに注がれるアヒルの視線とその言葉を受けて、少女が思わず大きく目を見開く。

「そっ、それはっ……」

「グオオオオオっ……！」

『……………っ……！』

少女が言葉に詰まっていたその時、激しい叫び声が響き渡ると、

二人が身を潜めていた車が勢いよく砕け散った。背もたれをなくし、二人が一気に険しい表情となって振り返る。

「グオオオオオオっ……!!」

「追って来たのかっ……!!」

「クっ……」

二人のいる荒地へと駆け込んでくる男に、アヒルと少女が厳しい表情を見せる。

「仕方ないわねっ……こうなったらっ……」

「へっ?」

そう言ってレースで飾られた服の、懷に手を入れる少女を、少し戸惑うように見つめるアヒル。

「“破”っ!!」

『うっ……!!』

少女が何かしようとしたその前に、駆け込んできた男は、二人へ向けて、先程と同じ衝撃波を勢いよく放った。迫り来る衝撃波に、今度は避けるような曲がり角もなく、二人の表情が歪む。

「しまった……!!」

「うわあああっ!!」

「クっ……!!」

焦ったように言う少女の横で、頭を抱えて叫ぶアヒル。そんなアヒルを横目に、少女が唇を噛み締める。

——バアアアアアンっ!!

「痛ててててっ……」

吹き抜ける、砂煙。表面が大きく削れた荒地のすぐ横で、倒れていたアヒルが、後頭部を押さえながら、ゆっくりと体を起こす。

「こんだけ痛けりゃ、夢ってことはなさそうだなっ……」

苦い笑みを見せながら、アヒルが少し残念そうに呟く。

「ううう……」

「ん？あつ…！」

すぐ傍から聞こえてくる、どこか苦しげな声に、アヒルが大きく体を起こすと、アヒルのすぐ横に、アヒルを庇うようにして倒れ込んでいる少女の姿があった。

「お前っ…！」

アヒルがすぐさま起き上がり、倒れている少女へと駆け寄る。少女のスカートから見える細い足は、深く傷つき、赤々とした血が流れ落ちていた。

「俺を庇ってっ…！？おいっ…！」

「ハア…ハアっ…」

起き上がったアヒルが、倒れ込んだままの少女の体を、支え起きます。呼びかけるアヒルに対し、少女は息を乱しながらも、ゆっくりと顔を上げた。

「まだ…動ける…？」

「はあっ？あ、ああっ」

途切れ途切れの言葉で問いかける少女に、少し戸惑いながらも頷き返すアヒル。

「じゃあ…とつとと、ここから…逃げ、てっ…」

「はあっ…！」

思いがけない少女の言葉に、アヒルが大きく驚く。

「あいつの狙いは…悪意ある言葉を向けたこの私っ…君が逃げても…追いかけていくことはないはず、だからっ…」

「バツカなこと言ってんじゃねえーよ！怪我人の女一人残して、逃げられるわけがっ…！」

「私だって…いたいけな一般人の家鴨あひるクン、巻き込んだじゃうわけにはいかないのよっ…」

「はっ？」

少女の言葉の意味がわからず、アヒルが大きく口を開く。

「それに…確かに、君の言う通りかも知れないっ…」

「えっ…？」

「間違っていないからって、人の心を傷つけていいわけじゃない”
ってやつっ」

「……っ」

先程、アヒルが言った言葉を繰り返し、そっと笑みを浮かべる少女に、アヒルが少し驚いたような表情を見せる。

「私は、あの人の心を傷つけた…だからお詫びしないとっ…」

少女が笑みを浮かべたまま、さらに言葉が続ける。

「でも、君は関係ない…だから逃っ…」

「フザけんなよっ」

「えっ…?」

少女の言葉を掻き消して、強く言い放つアヒルに、少女が少し戸惑うように、アヒルを見上げる。

「あいつに傷つけられてやることがっ、あいつに詫びることになるとでも思ってたのかっ?」

アヒルが少女に、突き刺すような視線を送る。

「んなことっ、少しの詫びにもならねえっ!」

必死に叫ぶアヒルが、徐々に声を大きくする。

「言葉で傷つけたんならっ…! 言葉で謝れよっ…!」

「……っ!」

その言葉に、少女が大きく目を見開く。

「言葉でっ、あいつと向き合えよっ…!」

「……っ」

必死に叫ぶアヒルを、少女はまるで眩しいものでも見つめるかのように、目を細めて見つめる。

「グオオオオオっ…!」

『……っ!』

再び聞こえてくる叫び声に、同時に振り向くアヒルと少女。

「破”っ…!」

『うっ…!』

男が二人へ向け、再び衝撃波を放つ。

「クソっ…！」

「なっ…！」

向かってくる衝撃波と倒れたままの少女の間に、強く立ち塞がるアヒル。そんなアヒルの姿に、少女が大きく目を見開く。

「何やってんのよっ！逃げなさいっ！」

「それはさっき、断っただろっ？」

「バカなことやってないでっ…！とっとと逃げっ…！」

「俺がっ…」

「えっ…？」

遮るアヒルの声に、少女が思わず言葉を止める。

「俺が絶対にっ…」

立ち塞がったアヒルが、迫り来る衝撃波を見つめながら、強い瞳を見せる。

「お前をっ…言葉で謝らせてやるよっ…！！！」

「…っ！」

アヒルの言葉に、大きく目を見開く少女。

「あっ…！」

だがその間にも、衝撃波は迫り来る。

「ダメ…！もうっ…！」

どうすることも出来ないと悟り、少女が厳しい表情を見せた。その時。

———パアアアアンっ！

『うっ…！』

二人のすぐ前方で、強い白色の光が突然、輝き、あまりの眩しさに、二人は思わず目を細めた。

「ガアアアアアっ！」

『えっ…？』

先程までの叫び声とは違う、悲鳴のような声が聞こえてきて、ア

ヒルと少女が顔を上げる。そこには、突然、現れた光に弾き返された、自らの衝撃波を受け、吹き飛んでいく男の姿があった。

「忌の技が弾かれるなんて…」

「何だあ？一体っ」

驚いたように呟く少女の声を背中で聞きながら、アヒルがその、目の前に現れた光を見つめる。

「んっ？」

徐々に白い光が小さくなっていくと、やがて、小さくなっていく光のその中心に、手のひらですっぽりと包み込めてしまう程の大きさの、丸くて赤い、宝石のようなものが見えてきた。その玉は、立っているアヒルの丁度、目の高さくらいのところで、宙に浮いている。

「玉っ…？」

「これはっ…！」

首を傾げるアヒルの横で、少女が大きく目を見開く。

「“言玉”^{ことだま}っ…！」

「コト、ダメっ…？」

またしても聞きなれない言葉を耳にし、少女の方を振り返りながら、困惑した表情を見せるアヒル。

「グっ…！ググっ…！」

「うげえっ！あいつ、あれ喰らって、まだ立ち上がってんぞっ！？」

自らの衝撃波を受けたというのに、特に体に傷を負った様子もなく立ち上がる男に、アヒルが焦ったように声をあげる。

「忌に憑かれてると、体が強化されるのよ」

「マジっ？じゃあ殴ったり蹴ったりしても、無駄ってことかあ」

「……っ」

ボヤクアヒルの後ろで、少女が少し考え込むような表情を見せる。

「ちよっと、アッヒーっ」

「変なあだ名つけんなっ」

傷のわりには元気そうな様子を見せながら、少女がアヒルを呼ぶ

と、その呼び名にアヒルが少し顔をしかめる。

「その玉っ、手にとってみて！」

「へっ？これを？」

少女の言葉に、アヒルが目丸くする。

「なんで？」

「なんでもいいから早くっ！」

「ああっ？わ、わかったよっ」

強く言い放つ少女に急かされるようにして、アヒルが浮いているその玉へと手を伸ばす。アヒルの指先が、玉に触れ、そしてその赤い玉を掴んだ。

「えっ…！？」

アヒルが玉を掴んだその瞬間、再び玉から強く白い光が放たれると、玉がアヒルの手の中で、光を放ちながら、形を変えていく。

「なっ…！何だよ！これっ…！」

「……………」

焦ったように叫ぶアヒルを、まっすぐに見つめる少女。

「うっ…！」

——パアアアアンっ！

「んっ…」

やがて一番強い光が放たれると、あっという間に光は止み、その場に静けさが戻った。思わず瞳を閉じていたアヒルが、ゆっくりと目を開き、自分の手の中を見る。

「こ、これはっ…！」

自分の手の中にあるものを見つめたアヒルが、大きく目を見開く。

「“銃”っ…？」

そう、あの赤い玉の代わりに、アヒルの手に握られていたのは、鈍い赤銅色の、一丁の銃であった。銃身が多少長いが、片手で十分に持てる重さで、トリガーもアヒルの指の太さによくフィットして

いる。だが、銃のはずなのに、銃弾を入れる部分は見当たらなかった。長い銃身の片側に描かれている、『安』の文字。持ち手の下部分には、金色の紐がついている。

「な、なんで玉が銃に…」

「グオオオオオオっ…！」

「うげえっ！」

アヒルに考える時間を与えることなく、立ち上がった男が、激しい叫び声をあげ、アヒルと少女のもとへと駆け込んでくる。

「ど、どうしたらっ…！」

「撃って」

「はあっ!？」

銃を持ったまま、焦ったように周囲を見回していたアヒルが、少女の言葉に大きく口をあげ、驚いたような声をあげて、少女の方を振り返る。

「バカかあ! お前は! 下手なところ撃って、あいつが死んだりなんかしたら、俺は即、刑務所行きでっ…!’

「大丈夫っ。いいから撃ってっ」

「大丈夫って、お前なあっ…!’

「あの人を助ける為なのっ」

「……っ」

真剣な表情で、迷いなく言い放つ少女。その少女の姿に、アヒルは少し目を見開いた。どうにも信じられない話ではあったが、少女が嘘をついているようには見えなかった。

「私を信じて…」

少女がアヒルをまっすぐに見つめ、さらに言葉を放つ。

「お願い…朝比奈アヒルっ…」

「……………」

アヒルの名を呼び、そっと願う少女に、アヒルは少し俯き、強く唇を噛み締めた。

「クッソっ…!’

意を決した様子で前を向いたアヒルが、今、立っている位置から、二、三步前へ出て、先程の銃を、見よう見真似で構える。

「どうなってもっ…知らねえーぞっ…！」

少し自棄になったように叫んで、アヒルが勢いよく引き金を引く。

——パァァン！

響き渡る、銃声。

「……って」

次の瞬間、少女が声を発する。

「どこ、撃ってんのよっ…！」

「へっ？」

少し煙が上がった銃口が向いているのは、星の輝く空の方角であった。放たれた銃弾は勿論、男を捉えてはおらず、どこに行ったのかもわからない。

「ハズすにしたって限度ってもんがあるでしょっ！？バカアヒルっ！」

「う、うつせえなあ！仕方ねえーだろっ！」

責めるように怒鳴りあげる少女に、少し恥ずかしそうにしながらも、必死に言い返すアヒル。

「本物の銃なんて、撃ったことなっ…！」

「グオオオオオオっ…！」

「ううっ…！」

「あっ…！」

言い訳を続けようとしていたアヒルのもとへ、銃弾が当たることなかった男が、その速度を緩めることなく、まっすぐに向かってくる。すぐそこまで迫る男に、アヒルが表情を引きつり、後ろで座る少女が思わず身を乗り出した。

「グオオオオオオオっ…！！！」

「アヒルっ…！」

「クっ…！」

少女が必死にアヒルの名を呼ぶ中、アヒルが、すぐ目の前へと迫る男へ向け、一か八かと、もう一度、銃を構えた。

「あっ…！」

アヒルが大きく、口を開く。

「“当たれ” ええええっ…！」

祈るようにそう叫び、アヒルが再び、引き金を引く。

——パアアアンっ！

銃声とともに、赤銅色の銃口から、弾丸が放たれる。だが銃口が向いているのは、向かってくる男ではなく、またしても高い空の先。「ああっ…！ダメ！またっ…！」

それを見ていた少女が、諦めるような言葉を発した、その瞬間であつた。

「えっ…？」

空へと向かったはずの弾丸が、空中で有り得ない程に軌道を変え、空とはまったく逆の下方、地面に立つ男のもとへと向かっていく。

「弾丸が…動く…？」

その有り得ない光景を、大きく開いた瞳で見つめる少女。

「グっ…！」

来るはずのなかった弾丸が目の前に迫り、思わず焦ったような声を漏らす男。

「ググっ…！」

だがすでに避ける時間も術もなく、男はただ、迫り来る弾丸に、表情を歪めた。

——…！

「うっ…！」

弾丸が男の体を貫いた瞬間、またしても強い白色の光が放たれ、アヒルは構えていた銃を下ろし、そっと目を細めた。

「ガアアアアアアっ…！」

「……っ」

アヒルの細めた瞳に、今までとは違う、苦しげな叫び声をあげる男の姿が飛び込んでくる。

「な、何だっ？」

「ガアアアアっ！アアアっ！」

「影が…消えていく…」

男の体を貫いた弾丸から放たれた白い光が、男を包み込んでいた、黒い影を吸い出し、その光の中へと消し去っていく。

「ああっ…ああ…」

「……っ！」

やがて黒い影も光も消え、力ない声を落とした男が、その場にゆっくりと倒れ込んだ。

「お、おい！大丈夫かっ！？」

焦った様子で、アヒルが倒れた男のもとへと駆け寄っていく。

「……………」

男のもとへと駆けていくアヒルの背中を見つめながら、茫然と座り込む少女。

「弾丸が動いたのは…」

——“当たれ” ええええっ！！——

「あの言葉が、発動したから…？」

誰に問いかけるわけでもない問いかけを、少女がそっと口にする。

「“あ”の言葉の発動…」

少女が鋭く、瞳を細める。
「彼が…“安^あの神”…」

Word. 1 あノ目醒メ (4)

「おい！おいっ！」

「うっ…」

「……っ」

アヒルが倒れた男のすぐ傍にしゃがみ込み、男の体を揺する。するとアヒルの声に反応してか、男がかすかに瞳を開き、苦しげではあるが、確かな声を漏らした。

「ふうっ、生きてんなっ」

どこか安心したように、肩を落とすアヒル。

「弾丸は忌を貫いただけだから、彼は無傷のはずよ」

「……っ？」

後方からやって来る声に気づき、アヒルがゆっくりと振り返る。

「忌に憑かれた後遺症で、しばらくは体が動かないと思うけどっ…」

「お前っ…」

先程の忌の攻撃で足に傷を負った少女が、足を引きずりながら、ゆっくりとアヒルと男のもとへと歩いてくる。まだ血の流れる少女の足を見て、少し眉をひそめるアヒル。

「お前こそ、大丈夫なのかよっ？すぐ医者行った方がっ…」

「大丈夫っ、後で治してもらおうから」

「治してもらおう？」

少女の言葉に、アヒルが首を傾げる。

「それって、どういうっ…」

「……っ」

「んっ？」

問いかけようとしたアヒルの視線を通り過ぎて、少女がアヒルのすぐ横へと座り込み、倒れている男の顔を、まっすぐに見下ろした。

「……ごめんなさい…」

「……っ」

少女が男へと放ったその言葉を聞き、思わず目を見開くアヒル。

「酷いこと言って…ホントにごめんなさい…」

男をまっすぐに見つめ、正面から謝罪する少女のその姿を、男も目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる。少女のその言葉からは、申し訳なく思っている気持ち、十分に伝わって来た。

「……僕も…ごめんなさい…」

「……っ」

弱々しい声ながらも、そっと微笑んで謝る男を見て、少女も小さな笑みを零した。その光景を少し後ろから見守っていたアヒルも、いつの間にか自然と、笑みを浮かべていた。

「すうーっ…すうーっ…」

「あ、寝ちゃった」

「このままにしておきましょう。そうすれば今夜のことは、夢か何かで片づけられるはずだわっ」

「このままって、ここにかあ？」

何もない荒地を見回しながら、アヒルが軽く頭を搔く。

「まっ、季節はいいし、風邪はひかねえーだろうけどっ…」

「ふうっ」

あまり賛成していない様子のアヒルの横で、少女は服のポケットからハンカチを出し、どこか手慣れた様子で、足の傷口にハンカチを巻き、傷の止血をする。

「そういや、お前って一体っ…」

そんな少女の姿を見ながら、思い出したように呟くアヒル。

「衣沢・アレクサンドラ・メアリー・エリザベス」

「はっ…？」

急に並べられる横文字に、アヒルが思わず大きく口を開く。

「何だ？それ。お経か？」

「私の名前よっ！！」

「名前っ？」

怒鳴りあげる少女に対し、アヒルが目を丸くする。

「長つげえ名前だなあ」

「まあアヒルよりはねっ」

「じゃあ略してザベスな、ザベス」

「せめてエリザにしなさいよ!!」

アヒルの提案した呼び名を、ムキになって強く否定するエリザ。

「んだよぉっ、人のこと、とやかく言ってたわりに、自分だって結構、笑える名前じゃねえーかあ!」

「アヒルに比べたら、私の名前の方が三百倍はマシよっ!」

大きな笑みを浮かべるアヒルに対し、エリザは険しい表情で、口を尖らせる。

「でえ、ザベスは何だって忌のこと、知っ…って、あれっ…?」

問いかけを続けようとしていたアヒルが、不意に言葉を途切らせ、そっとその瞳を細めていく。

「何かっ…急に眠っ…」

その言葉を言い終える前に、その場に前のめりになって、倒れていくアヒル。

「くかあーっ!くかあーっ!」

次の瞬間、アヒルの豪快な鼾いびきが、響き渡った。

「くかあー!くかあー!」

「……………」

あっという間に深い眠りについたアヒルを、座り込んだまま、まっすぐに見つめるエリザ。

「初めて言玉を使ったんじゃ、まあ無理もないわねっ…」

エリザがそう呟き、少し口元を綻ばせる。

「君とは、また会うことになるかもねっ、朝比奈アヒルっ…」

「くかあー!くかあーっ!くかあー!」

そっと落とされたその言葉が、豪快に眠るアヒルの耳に届くことはなかった。

「これは予想外っ…」

戦いの行われた荒地を、近くの家の屋根上から見下ろしている、二つの人影。その一人が小さな、美しい声を発し、屋根上でゆっくりと立ち上がった。

「まさか…私たちと接触する前に、“あ”の力が目醒めてしまうなんてねっ…」

立ち上がったのは、長く艶やかな黒髪を夜風になびかせた、どこかミステリアスな空気を纏った、美しい顔立ちの少女であった。

「どうするの…？ 箆也^{かじや}…」

少女が振り向き、すぐ横でまだ座っている、もう一人の人間へと声を掛ける。

「どう？ そんなの決まっている…」

問いかけに答えるように、涼しげな声が返って来る。

「行くさっ、勿論っ」

座ったままのその者が、そっと呟く。

「我らが“神”の、出迎えになっ…」

こうして、朝比奈アヒルの、穏やかなる日常は、静かに、終わりを告げた…。

Word. 2 へつづく。

Word. 2 泣イタ友ダチ (1)

穏やかな朝を迎える、八百屋『あさひな』こと、朝比奈家。末っ子・アヒルの部屋。部屋の寝台の上では、アヒルが気持ち良さそうに眠っている。

「んんんっ…夕張…メロン…」

「グッドモーニングサタデーナイトオオ！アーくうんっ！」

いつものようにハイテンションな、朝比奈家の父が部屋へと乱入してくる。部屋へと入った父は、両手いっぱいレタスを抱え持っていた。

「必殺うう！レタスミサアーイルっ！」

「喰らうか！ボケえええっ！！」

「ぬおおおうっ！」

寝台に向かってレタスを投げようとしていた父の顎に、勢いよく布団から飛び出したアヒルが、回し蹴りを喰らわせた。父が持っていたレタスを部屋にばら撒きながら、床へと倒れ込んでいく。

「見事だっ、息子よっ…よくここまで成長した…」

「言ってるっ」

苦しそうに起き上がる父を見ながら、アヒルが呆れきった表情で肩を落とす。

「だいたい、俺が呼んだのは、夕張メロンであって、レタスじゃねえ」

「キャベツを持って来なかった分、父を誉めろ」

「誉めるかっ！」

どこか自信満々に言い放つ父に、アヒルが勢いのいい突っ込みを入れる。

「アヒルーっ！とっとと支度して、飯食いに来いっ！」

「あ、ああっ！」

部屋の外、一階の方から聞こえてくる兄・スズメの声に、少し慌てた様子で返事をするアヒル。

「そうだった！今日こそ、遅刻すんのはやべえ！ええ〜っと、制服っ…！って、あれっ？」

焦ったように体の向きを変え、制服を探そうとしたアヒルであったが、よくよく自分の格好を見てみると、制服を着ていた。どうやら制服を着たまま、眠っていたようである。

「あれっ？俺、昨日着替えてなっ…」

——あれは忌……——

——グオオオオオ……！——

——“当たれ” えええっつ！——

「……っ」

どうやって眠ったのかを思い出そうとした時、アヒルの脳裏に、昨夜の出来事が鮮明に蘇った。謎の少女・エリザと、忌という悪霊に取り憑かれた男。そして、その忌を倒した自分自身のことを。

「俺…どうやって家に…」

「アークンてば、家の前で寝てたんだよね？」

「へっ？」

悩むように呟いていたアヒルが、父の暢気な声に振り向く。

「いつくら起こしても起きないからさあ、そのまま部屋に運んだんだよね。家の前で爆睡しちゃう程、疲れてたのよね？」

「えっ、と…」

昨夜の記憶は、忌を倒し、少女と男が和解したところまでで、途切れている。家の前まで戻って来た記憶は、まるでない。

「んん〜っ？夢、だったのかあ…？」

自分自身に問いかけるように、ゆっくりと声を落とすアヒル。昨夜、忌の攻撃を受け、痛んだはずの体も、今はまるで痛くない。鮮明だったはずの記憶が、徐々に霞んでいく。

「そうだよなあゝさすがにあんなもん、この世に存在しねえよなあ。あつ、でも結構、痛かったような…」

「青春ゆえの苦悩うゝ？アークくん！それなら父に、どおゝんと話してみっ…！」

「違えっての」

「うぎやおっ！」

両手を広げ、これ以上ないくらいに明るい笑顔で話しかける父に、アヒルがまたもや蹴りを喰らわせる。

「んっ？」

父を蹴り飛ばしたその時、アヒルの制服のズボンのポケットから、何かが床へと転がり落ちた。

「あっ…！」

床に転がり落ちたのは、丸い小さな、宝石のような、赤い玉。

——“言玉”っ！——

——コト、ダメ…？——

「……っ」

大きく目を見開いたアヒルが、ゆっくりとした動作でその場にしゃがみ込み、床に落ちていたその玉を拾う。

「夢じゃ…ない…」

手の中のその赤い玉を見ながら、アヒルがそつと呟いた。

「夢じゃない…夢じゃ、ない…」

無事、走らなくても学校に間に合う時間帯に、家を出ることが出来たアヒルは、何度も同じ言葉を繰り返しながら、深く考え込んだ様子で、ゆっくりと学校への道を歩いていた。

「おおゝい！朝比奈！」

そんなアヒルの前に立ち塞がるのは、昨日に引き続きヤンキー色全開のアニキとその仲間たち。

「夢じゃ、ない…夢じゃない…」

だがアヒルは、目の前にいるアニキたちにも気付いていない様子で、ひたすら呟きながら、少しも足を遅らせることなく、どんとどんと前に進んでいく。

「今日という今日は、コッテンパンのパンの助にしてやるぜえいっ！」

「夢じゃ、ない…」

「おっりゃああっ！」

気合いの入った声を出したアニキが、どんとどんと歩み寄って来る、まるでアニキの見えていない様子のアヒルへ向け、勢いよく拳を振り上げる。

「……っ」

「うっぎゃああああ！」

『アニキィっ!?!』

考え事をしたままのアヒルが、何げなく突き出した拳が、アヒルに殴りかかろうとしていたアニキの腹部に直撃し、アニキが潰れたような声の悲鳴をあげて、吹き飛ばされていく。そんなアニキの姿に、焦ったように叫ぶ仲間一同。

『アニキいっ!?!』

「夢じゃあ…ない…」

吹き飛んでいったアニキへと駆け寄っていくヤンキー達の間を通り、何事もなかったかのように、前方へと進んでいくアヒル。

「あっ？」

そんなアヒルが、ふと足を止め、道のすぐ横の電柱や、家の塀を見た。

——“壊”っ!——

そこは昨夜、忌の攻撃を受け、粉々に崩れ落ちてしまったはずの場所であった。だが今は、ヒビ一つなく、崩れた形跡も、まるで残

っていない。その様子に、アヒルが眉をひそめる。

「夢っ…?」

アヒルが繰り返していた言葉とは、正反対の言葉を発する。

「うっ…ううう…おのれっ…朝比奈…」

「アニキいゝ、いい加減、諦めた方がっ…」

「うるっしゃあーいっ!」

説得するように言い放つ仲間に、強く叫びながらも、倒れたままのアニキなのであった。

言ノ葉高等学校の正門前では、今日もいつものように、風紀委員が立ち並び、大きな声で挨拶を響かせながら、登校してくる生徒たちの身だしなみなどをチェックしていた。

「おはようございまあーす」

その委員の中には、アヒルの幼稚園の頃からの幼馴染みである、紺平の姿もあった。

「あれっ?」

登校してくる生徒たちを見回っていた紺平が、何かに気づいたような表情を見せる。

「ガアっ!」

生徒たちに紛れて、ゆっくりと歩いてくるアヒルの姿を見つけ、紺平が笑顔を作った。

「珍しいねえっ、今日は間に合っ…」

「夢じゃない…? 夢…?」

「ガア?」

親しげに話しかけた紺平の横を素通りして、小さく何やら呟きながら、正門から学校へと入ってってしまうアヒル。そんなアヒルの後ろ姿を、紺平が目を丸くして見つめる。

「夢じゃない…？ いや、夢っ…」

「んん？」

どんどんと遠ざかっていくアヒルの背中を見ながら、紺平は大きく首を傾げた。

言ノ葉高等学校、一年D組、教室。

「おっしゃー、とつとと授業やるよおつ、席着けえ」

出席簿を片手に持った恵が、乱雑な言葉を発しながら、教室へと入ってくる。

「出席取っから、返事ついでに三回転半捻りしろお」

『無理です』

教壇に立った恵の言葉に、生徒たちが慣れた様子で突っ込みを入れる。誰も騒いでいないところを見ると、恵はいつも、同じようなことを言っているのだろう。

「相沢あ」

「はい」

「朝比奈あ」

『……………』

「んあっ？」

返って来ない返事に、出席簿を見ていた恵が、顔を上げる。

「朝比奈はどうしたあ？ また遅刻かあ？ 小泉っ」

「えっ？」

恵に視線を向けられ、どこか呆れたような表情で、空いている前の席を見ていた紺平が、少し驚いたように顔を上げる。

「あ、ええーっと、朝、学校に入っていくところは見たんで、来てるには来てると思うんですけどっ…」

「ああ？ 何だあ？ それはっ」

紺平の答えに、恵が顔をしかめる。

「折角、遅刻しなかったのに、授業出ないで、どこほつつき歩

いてんだあ？あいつは」

「まったくです…」

呆れたように言い放つ恵に、反論することもなく、しみじみと頷く紺平。

「はあっ…」

誰もいない前の席を見ながら、紺平は深々と溜息を吐いた。

その頃、言ノ葉高等学校、屋上。

「夢じゃない…夢…」

誰もいない広い屋上の中央に、大の字になって寝転がったアヒルは、まだ相変わらず、朝から延々と呟いている言葉を繰り返していた。

「夢じゃな…あああゝ！ダメだあっ！」

アヒルが突然、大きな声を出し、頭を強く掻きながら、勢いよく起き上がる。

「いっくら考えたって、わかりやしねえ！俺の頭じゃ、絶対答えと出ねえよっ！」

「そうでしょうね…」

「ああ！？んだとおっ！？」

返って来る相槌に、アヒルが顔をしかめて、振り向いた。

「って…えっ…？」

「フフっ…」

アヒルが振り向くと、そこには長い黒髪の、どこかミステリアスな空気を纏った、アヒルと同じ年くらいの少女が立っていた。体の調子が心配になるほどに、少女は細く、そして色白であった。あまり生気を感じないような、神秘的な存在のようにも思える。いきなり現れた少女に、戸惑いの表情を見せるアヒル。そんなアヒルを見下ろし、少女がどこか楽しげな笑みを浮かべる。

「誰っ…」

「こんにちは、朝比奈アヒル…」

「えっ？」

名を呼ぶ少女に、アヒルが目丸くする。

「何で俺の名前っ…」

「フフっ…あだ名は“ガア”、だったかしら…？」

困惑するアヒルを、さらに困惑させるように、少女が意味ありげに微笑む。

「アヒルって名前なのに、あひる口じゃないのね…残念…」

「はっ…？」

少し身を屈め、座っているアヒルの方へと顔を近づけながら、どこか残念そうな顔を見せる少女。そんな少女の独特のペースに、アヒルが少し眉を引きつった。

「やっぱり、入浴時には湯船にあひる隊長を…」

「おいっ」

「……っ」

さらに言葉が続けようとしていた少女が、背後から聞こえてくる男の声に言葉を止め、ゆっくりと振り返る。アヒルもその声を追い、少女のさらに後方を見た。

「無駄な会話をするな、話すならとっとと話せ」

少女の後ろにある屋上の入口から、屋上へと姿を見せたのは、さりと流れるような艶やかな黒髪に、細く鋭い黒目の、キレイな顔立ちをした青年であった。こちらも年は、アヒルと同じくらいであろうか。

「囁ささや」

「ササヤキっ…？」

「フフっ、ごめんなさい。ついっ…」

青年の発する言葉にアヒルが首を傾げる前で、少女がどこか怪しげな笑みを、青年へと向ける。

「じゃあ改めて。初めまして、朝比奈アヒル」

少女が再びアヒルの方を見て、笑みを浮かべる。

「私の名前は、真田 囃^{まき}。彼は…」

「神月 箆也^{かんづき かじや}」

振り向いた囃に応えるように、青年、箆也が、素っ気なく名を名乗る。

「お前ら一体、誰なんだ？ウチの学校の生徒か？それにしちゃあ見ない顔だし、制服じゃねえーしっ…」

同年代に見える囃と箆也の二人であるが、学生がここで纏わなければならぬはずの制服を、二人は着ていない。それに、独特の雰囲気を持つ囃と、整った顔をした箆也であれば、同じ学校内に居れば、それなりに目立つはずであるが、そういった見覚えも、アヒルにはなかった。

「私たちは、この学校の生徒じゃないわ。私たちは、そうねえ…」
囃が少し間を置いた後、ゆっくりと口端を吊り上げる。

「あなたのその、出口のない悩みに、答えることの出来る者、かしらっ…？」

「えっ…？」

微笑む囃に、アヒルが思わず声を漏らす。

「俺の、悩み…？」

「夢か、夢じゃないか…」

「……っ！」

アヒルが何に悩んでいるのかを言い当てる囃に、アヒルが大きく目を見開く。

「どうして、んなこと知ってっ…」

「さっきから延々、呟いてたけど…？」

「あ、そっか」

一度、戸惑いの表情を見せたアヒルであったが、囃の言葉を聞き、どこか納得したように頷く。

「回りくどく言うと、箆也に怒られちゃうから、早速言っちゃおうと…答えは…」

囁がそつと、その小さな口を開く。

「“夢じゃない”…」

「えっ…?」

囁から告げられる答えに、アヒルが眉をひそめる。

「昨日の夜、あなたが見たもの、聞いたもの、感じたものは…すべて、現実っ…」

「現、実…」

囁の言葉を、ゆっくりと繰り返すアヒル。

「じゃあ、あの忌つてのは…」

「ええ、この世界に実在するものよ…」

「……っ」

頷く囁に、アヒルの表情が曇る。夢か、夢でないかの悩みが解決したとしても、あの忌という悪霊が実在していることが事実と言われ、少なからず頭の中は混乱した。

「あの人からは…どこまで聞いたのかしら…?」

「えっ…?」

「忌が、悪意ある言葉を向けられた人間の、傷ついた心に巢食う悪霊だということは…?」

「き、聞いた…」

囁から問いかけられ、アヒルが少し詰まりながらも答える。

「あなたの手の中にある、その玉のことは…?」

「へっ?」

囁の問いかけに戸惑いながら、アヒルが自分の手の中を覗き込む。するとそこには、丸い真っ赤な宝石のような玉が握られていた。今朝、父を蹴った時に零れ落ちたその玉を、アヒルはどうやら、悩んでいる間中、握り締めていたようである。

「“言玉”、だって…」

「そう…」

戸惑い気味に答えるアヒルを見つめ、囁がそつと頷く。

「じゃあ、あなた自身のことは…?」

「へっ？俺っ？俺のことって…」

「聞いてない、のね…」

目を丸くするアヒルに、どこか楽しげに微笑む囁。

「そう、じゃあまず、基本的なお話からっ…」

少し後方に下がり、アヒルとの間の距離を広げた囁が、軽く手をあげ、話を続ける。

「この世界にはね、忌を倒すために、忌と同じ“言葉”の力を持った人間たちが存在するの…」

「言葉の、力…？」

「五十音、それぞれの力を持つ人間…私たちはそれを、“五十音士”と呼んでいるわ…」

「五十、音士…？」

「そう…」

不慣れな様子で言葉を繰り返すアヒルに、囁が微笑みかける。

「五十音士たちは、ある特殊な宝玉を使って、言葉の力を操り、忌を倒すっ…」

困惑している様子のアヒルを知ってか知らずか、さらに言葉を続ける囁。

「この宝玉の名を、“言葉”…」

「言玉っ!？」

囁の言葉を大きく繰り返したアヒルが、自分の手の中にある、真っ赤な玉を見つめる。

「じゃ、じゃあっ…」

「そう…あなたは五十音士の一人…」

ゆっくりと言い放ち、アヒルに人差し指を向ける囁。

「五十音、第一の音…“あ”の言葉を操る者…」

「“あ”の…言葉…？」

特にその言葉を強調する囁に、アヒルがさらに大きく目を見開く。

「あなたの発する、“あ”から始まる言葉はすべて、現実のものとなる…それが例え、どんなに不可能なものであっても…必ず…」

「“あ”から：始まる言葉…？」

囁の言葉を繰り返しながら、アヒルが眉間に大きく皺を寄せる。

「あん団子、とか？」

「そんなにお団子が食べたいのなら、それでもいいけれど…フッフ…」

アヒルの放った単語を聞いて、囁がどこか楽しそうに笑う。

「折角試すなら、もっと派手なことをやりたいわねえ…例えば、そうねえ…」

「……っ」

「籠也？」

少し考えるように、周囲を見回していた囁の横から、籠也が出てきて、アヒルのすぐ前へと立つ。籠也は無い表情のまま、まっすぐにアヒルを見つめた。

「手を空へ向けろ」

「あっ？何で？」

「何でもいいから、早くしろ。時間の無駄だ」

「……っ」

籠也の言葉を不快に思い、顔をしかめながらも、立ち上がったアヒルが、ゆっくりと雲一つない青空へ、言玉を握り締めている、その右手を向けた。

「これでいいかあ？」

「僕の言った言葉を繰り返せ」

問いかけたアヒルに答えることもなく、籠也が次の言葉を言い放つ。

「何で？」

「何でもいいと、さっき言ったはずだ。二度も同じことを言わせるな」

「ああ！？」

「まあまあ…」

偉そうな籠也の態度に、思わず殴りかかりそうになるアヒルへ、

囁が宥めるように声を掛ける。

「いちいちムキになっていると、体力を無駄に使うわよ…？ 箆也って、常にケンカ腰だから…」

「むう…っ…」

説得なのか、諦めなのか、よくわからない囁の言葉に宥められ、乗り出していた身は引き下げても、まだ怒りの収まらない様子で、箆也を見つめるアヒル。

「いくぞ？」

箆也が改めて、アヒルに問いかける。

「“赤くなれ”」

「はっ？」

箆也の発したその言葉に、思い切り間の抜けた声を発するアヒル。
「何でんな、わけわかんねえことっ…」

「いいから早く言え」

「わ、わあったよっ」

少し怒ったように言い放つ箆也に、顔をしかめながらも、アヒルが仕方なく頷き、顔を上げて、空へと上げた右手を見つめる。

「あ…」

アヒルの発した“あ”の音に反応し、光を発する言玉。

「“赤くなれ”っ…！」

強く言い放つアヒルに、言玉がさらにその光を強くする。

「うおおっ!？」

その眩しい光に、アヒルが思わず声をあげる。言玉から発せられた光が、どんどん強くなって、勢いよく空へと弾き出された。

———パアアアアンっ！

『ぎゃああああああ!』

「……んっ？」

あまりの眩しさに、思わず俯き、深く目を閉じてしまっていたアヒルであったが、何やら下の方から聞こえてくる悲鳴に、ゆっくりとその瞳を開く。

「な、何っ…んなあぁっ!？」

空を見たアヒルの瞳が、これ以上は開かない程に、限界ぎりぎりまで開かれる。

「あっ…あ…赤けええっ!!！」

先程まで雲一つなく広がっていたはずの真っ青な空は、まだ午前中だというのに、まるで夕焼け空のように、真っ赤な空へと変わっていたのである。

『ひええええ!』

『うぎゃあああ!』

校庭や校舎内から聞こえてくる、ひどく混乱した悲鳴たち。突然、空の色が変われば、無理もない。

「さすがは籠也…派手な演出ねっ…フフっ…」

「んなっ、ななななっ…なっ…」

真っ赤に染まった空を見上げながら、どこか楽しげに微笑む囁の横で、ひたすらに声を震わせているアヒル。あまりの出来事に、思考がついていかない状況であった。

「なっ、何で空が、急にっ…」

「あなたがやったんだ」

「俺っ!？」

籠也の言葉に、アヒルがさらに驚いて振り返る。

「あなたの“あ”の言葉が発動し、言葉の通り、空が“赤く”染まった」

「あっ…」

——あなたの発する、“あ”から始まる言葉はすべて、現実のも

のとなる……

先程の囁の言葉を思い出し、ハツとした表情を見せるアヒル。

“あ”から…始まる言葉…

「そうだ」

戸惑うように呟くアヒルに、箆也が大きく頷く。

「昨夜、あなたの放った弾丸」

「へっ？」

箆也の言葉に、アヒルが驚いた様子で目を丸くする。何故、箆也がそんなことを知っているのか、そう思ったからであつたが、箆也はそう問いかけたいアヒルを遮るように、さらに言葉を続けた。

「あの的外れも甚だしかつた弾丸が、突如、軌道を変え、忌を貫いたのは、あなたの“当たれ”という言葉に反応したからだ」

“当たれ”…？

——“当たれ” ええっ！！——

——弾丸が…動く…？——

「あっ…」

箆也の言葉を聞き、アヒルが昨夜のことを、より鮮明に思い出す。言玉から姿を変えた銃を構えたアヒルは、まるで見当違いなところへと弾丸を放ったが、アヒルが無我夢中で『当たれ』と叫んだその時、弾丸は大きく軌道を変え、男に取り憑いた忌を貫いたのだ。

“あ”で始まる…言葉っ…

アヒルの言葉が現実化したものであるとすれば、確かに、昨夜の事象も頷ける。

『ぎゃああああ！』

「どうでもいいけど…」

屋上の端から、大騒ぎになっている校庭を見下ろし、囁が落ち着いた様子で呟く。

「そろそろ何とかしないと…見間違いどころじゃ済まなくなっちゃ
うわよ…?」

「あっ! そうだ!」

囁の言葉を受け、焦ったように声をあげるアヒル。

「ど、どうすんだよ! ? この赤い空!」

アヒルがどこか非難するように、箆也を見つめる。

「こんなもん、どうやって元につ…!」

「簡単な話だ。あなたがもう一度、“あ”で始まる言葉を言え
ばいい」

「へっ?」

箆也の言葉に、アヒルが目を丸くする。

“あ”で始まる言葉? ええ…とっ…」

アヒルが腕を組み、考え込むように首を傾げる。

「赤くならくなれ? ん? いや、赤くならなくなれで…あ
れっ?」

「バカ丸出しね…フフ…」

「うっせえ! こう見えて、俺は国語苦手なんだよっ!」

「見た目通りよ…フフ…」

「はあ…」

アヒルと囁の会話を聞きながら、箆也が深々と溜息を吐く。

“青くなれ”」

「へっ?」

“青くなれ”と言えばいい」

「あ、そっか」

まるで焦った様子も見せずに答える箆也に、アヒルがあっさりと
納得し、再び言玉を握り締めている右手を、空へと掲げた。

「“青くなれ”っ!」

———パアアアアンっ!

アヒルの言葉に、言玉が再び強い光を放ち、その光が空へと突き上げられると、夕焼けのような真っ赤な空は、元通りの真っ青な空へと染め戻された。

「あ、あれっ…?」

「何だったんだ…? 今の…」

校庭や校舎内で響いていた叫び声も、青くなった空に、一気に収まる。

「ふいっ」

元に戻った空を確認し、アヒルがどこか安心した様子で肩を落としながら、ゆっくりと言玉を握り締めている右手を下ろす。

「残念…このまま夕方ムードになったら、授業も終わったかも知れないのに…」

「えっ!? マジ!?!」

「囁」

「フフっ…冗談よ…」

「んだよ、冗談かつ…」

囁の言葉に、目を輝かせるアヒルであったが、注意するように名を呼ぶ籠也に囁が呟くと、アヒルはどこか残念そうに、その場に座り込んだ。

「五十音士に言葉の悪用は許されない。あなたも五十音士になったんだ、よく覚えておくといい」

「あっ?」

籠也の言葉に、アヒルが間の抜けた声を漏らす。

「何、勝手なことやってんだよ? 俺はまだ、その五十何とかになるなんて、一言もっ…」

「残念だけど…これは言葉にしくなくても、現実になってしまうの…」
「えっ?」

アヒルが今度は、囁の方を振り向く。

「あなたはもう五十音士の一人になってしまった…もう引き返すことは出来ない…」

「……っ」

どこか冷たく微笑む囁に、アヒルの表情が曇る。

「あなたにはこれから、私たちと共に、忌と戦っていつてもら…」

「ああー、無理っ」

「即答ね…フフフっ…」

囁が言葉を言い終える前に、大きく首を横に振るアヒル。そんなアヒルを見て、囁は、特に驚いた様子は見せず、どこか楽しげに微笑む。

「俺、やりたいことしかやらねえ性格だし、第一、国語の成績最悪なのに、言葉の力使うとか無理だしっ」

「それは言えてるわね…」

「おいっ！」

素直に頷く囁に、アヒルが顔をしかめる。

「その五十何とかって、要は五十人くらい、いんだろ？じゃあ俺一人抜けたって、大したことねえーじゃんっ」

「まあ、それはそうだけど…」

「というわけで、俺はパス！まあ忌見かけた時だけくらいなら、手伝ってやってもいいけどなあっ」

軽い口調で言葉を吐きながら、楽天的な笑顔を見せたアヒルが、近くの地面に置いてあった鞆を取り、ゆっくりとその場で立ち上がる。

「俺、昼寝してえーから、場所変えるわっ。じゃっ、まあまたどこかで会ったら、挨拶くらいするよっ」

「あっ…」

囁が止める間もなく、アヒルは足早に歩いて、二人のいる屋上から去っていった。静かになり、風の音がよく聞こえるようになった屋上で、囁と箆也が立ち尽くす。

「フラれちゃった…残念…フフっ…」

残念とは言いながらも、少しも落ち込んでいない様子で、そっと微笑む囁。

「どうする…？ 箆也…」

「別に…どうもしない…」

問いかける囁に、箆也が素っ気なく答える。

「どうせ、すぐに思い知る…」

顔を上げた箆也が、鋭い視線で、青い空を見上げる。

「もう…決して逃れることなど出来ないということを…」

「……っ」

箆也の冷たい声を聞き、そっと目を細める囁。

——その五十何とかって、要は五十人くらい、いんだろ？ じゃあ俺一人抜けたって、大したことねえーじゃんっ——

「そうね…」

先程のアヒルの言葉を思い出し、それに答えるように、囁が頷く。

「あなたが、ただの五十音士だったなら…それも可能だったかも知れないのにな…」

囁の声が、少し悲しげに、吹き抜ける風に乗った。

Word. 2 泣イタ友ダチ (2)

その日、放課後。昇降口。

「はあっ。ガアの奴、結局、最後まで戻って来なかったなあ」

呆れたように呟きながら、下校をしようと教室から出てきた紺平が、他の生徒に紛れながら、自分の下駄箱のある位置まで、ゆつくりと歩いてくる。

「はあゝあ、高校は留年あるって、わかってるのかなあ…ホントに…」

言葉が続けながら、紺平が“小泉”と書かれた、自分の下駄箱を開けた。

「……っ」

下駄箱を開けた途端、紺平の表情が、一気に曇る。

「……………」

紺平の下駄箱の中には、乱雑な文字で『死ね』や『消えろ』と書かれた紙が、入っていた。その紙を手に取り、紺平がそっと目を細め、書かれたその文字を見つめる。

“死ね”…か…

その文字を口にし、少し肩を落とす紺平。

「はあゝああゝ！毎日毎日、色々あんなあゝ！色々週間だなあゝ、今週はっ」

「……っ」

廊下から聞こえてくる、よく聞き覚えのあるその声に気づき、紺平は勢いよく顔を上げ、持っていたその紙を、咄嗟に体の後ろへと隠す。

「ガア」

「あっ、紺平」

紺平のいる下駄箱へと現れたのは、どこか面倒臭そうに頭を掻き

ながら歩いてくる、アヒルであった。

「よう！」

「“よう”じゃないよ。朝から、どこ行ってたわけ？ 恵先生、結構本気で怒ってたよっ？」

「マジ？ そりゃやべえなあ……」

紺平のすぐ前へとやって来たアヒルが、苦い表情を見せる。

「折角、遅刻しなかったっていうのに、一体こんな時間まで、何してたのさ？」

「いやあ、まあ……ちよつと色んなことが、色々とごったごたあつてよお」

「はあ？」

何一つ具体的でないアヒルの説明に、紺平が眉をひそめ、大きく首を傾げる。

「何っーのっ？ 今までの世界観が、こう五千四百度くらい変わった気分っっーかっ……あっ？」

自分でも混乱した様子で話を続けていたアヒルが、ふと、紺平が隠すように体の後ろで持っている紙の、そこに書かれている文字の一部を見つけ、顔をしかめる。

「んっ」

「あっ……」

アヒルが素早く手を動かし、紺平が後ろ手に持っていた、その紙を掠め取る。気まずそうに声を出す紺平の前で、アヒルがその紙に書かれた文字を、まじまじと見つめる。

「“死ね”……“消えろ”……」

「……………」

書かれた文字を読み上げるアヒルの前で、そっと俯く紺平。

「何だよ？ これっ」

「さあ……何、だろうね……」

厳しい表情を見せ、問いかけるアヒルに、俯いたままの紺平が、どこか歯切れ悪く答える。

「高校生にもなって、んなガキくせえこと、する奴いんだな」

「みたい、だね…」

「何回もあんのか？こういうことっ」

「さあ…？どう、だっただろっ…？」

「……っ」

少しもまともに答えようとしない紺平に、アヒルはさらに表情をしかめ、奪ったその紙をくしゃくしゃに丸めると、睨むような鋭い視線を、紺平へと向けた。

「お前さっ」

丸めた紙を握り締め、アヒルが強く言い放つ。

「嫌なら、ちゃんと言い返せよっ。何でも黙って受け入れてっから、こういう奴等も調子に乗ってだなあっ…」

「わかったような」

「……っ」

俯いたままの紺平の声に、途中で言葉を止めるアヒル。

「わかったような…口きかないでよっ…」

「紺平…？」

震えた声を発する紺平を、アヒルが少し戸惑うように見つめる。

「みんながみんな、ガアみたいに…言いたいこと言える人間なわけじゃ、ないんだよっ…？」

「……っ！」

ゆっくりと顔を上げ、そう呟いた紺平は、とても痛そうな顔を見せており、その紺平の表情に、アヒルは思わず大きく目を見開いた。

「……っ」

「あっ…！紺ぺっ…！」

すぐさまアヒルに背を向け、走り去っていく紺平を止めようと、アヒルは右手を伸ばしたが、その右手は紺平を捕まえることはなく、途中で止まった。

「……………」

その場に残ったアヒルは、悔やむように額を押さえ、そっと俯い

た。

「ハアっ…！ハアっ…！」

——“死ね”……

「ハアっ…！ハアっ…！」

——“消えろ”……

「ハアっ…！」

逃げるように必死に、学校からの帰り道を駆け抜けていた紺平が、思い出される言葉に思わず足を止め、どこか怯えるように頭を抱える。

「うっ…！ううっ…！」

強く痛むのか、顔を引きつった紺平が目を細め、その左胸を、制服の上から必死に握り締めた。

「うううっ…！」

<傷ついた…？>

「えっ…？」

どこからか聞こえてくる声に、深く俯いていた紺平が、ゆっくりと顔を上げる。

<ねえ…？傷ついているの…？>

「だ、誰っ…」

誰もいないはずの周囲を見回し、戸惑うように声を出す紺平。

<じゃあ力をあげるよ…>

「……っ」

すぐ背後に何かが立っている気配を感じ、紺平が恐る恐る、後方を振り向く。

<傷つけた奴等を殺す…力をあげるよっ…！！>

「うっ…！」

紺平が振り返った先に立っているのは、禍々しく不気味な黒い影。

「うわあああああっ!!」

「んっ…」

まだ学校の屋上に残っていた囁が、本当に夕焼け色に染まった空を見上げ、ふとその表情を曇らせた。

「忌の…気配…」

「ああ」

「……っ」

あっさりと頷く箆也の方を振り向き、囁が少し眉をひそめる。

「知ってたの…？意地悪ね…」

「……………」

囁の言葉に箆也は特に何を言い返すこともなく、ただ無表情のまま、下を見た。

「さあ…」

箆也から再び、真っ赤な空へと視線を移す囁。

「我らが神は…どうするのかしら…？」

囁はどこか楽しげに、空へと問いかけた。

その日、夜。八百屋『あさひな』。

「はぁっっ…」

今日は早々に帰宅し、制服から टीーシャツ に ジャージ という ラフな 服装 に 着 替 えた アヒル は、狭い居間に体を転がし、天井を見上げながら、深々と溜息を吐いていた。

——みんながみんな、ガアみたいに…言いたいこと言える人間なわけじゃ、ないんだよっ…？——

「……っ」

痛そうな表情。傷ついた表情。あの紺平の顔が、どうしても頭から離れなかった。

「なあ、スー兄っ」

「あっ？」

居間で寝転がったまま、アヒルが視線だけを動かし、すぐ隣の台所で夕食の準備をしている兄・スズメを呼ぶ。エプロン姿のスズメが、アヒルの声に、顔をしかめながら振り向いた。

「んだよっ？」

「スー兄、“死ね”って言われたら、その“死ね”って言った奴、どうする？」

「ああっ？」

アヒルの急な問いかけに、スズメが料理をしている手を止め、眉をひそめる。

「んんっ、殴り殺す」

「だろうな…」

そう悩みもせずに、恐ろしい答えを発する兄に、特に驚いた様子も見せずに頷くアヒル。

「ツー兄は？」

「んっ？」

アヒルが今度は、同じ居間で洗濯物を畳んでいる、もう一人の兄・ツバメの方を見た。シーツを畳んでいたツバメは、その手を止め、ゆっくりと顔を上げる。

「そうだな…」

少し考えるように、首を捻るツバメ。

「呪い殺す…」

「聞かなかったことにするわ」

どこからともなく藁人形を取り出し、不気味に微笑むツバメに、アヒルがすぐさま目を逸らした。

「アーくん！アーくん！お父さんはねえっ…！」

「聞いてねえ」

「ううっ：！」

閉店した店の方から戻って来て、話題に参加しようとした父に、アヒルが冷たく一言を吐き捨てると、父は悲しみのあまり、その場に膝をついた。

「こんな繊細とは程遠い家系に生まれちゃ、言いたいこと言えない奴の気持ちなんて、そりゃわかんねえよなあゝっ」

「結構、失礼なこと言ってるよ：？アヒル君：」

ボヤクように言い放つアヒルの横で、ツバメがひっそりと突っ込みを入れる。

——ジリリリリっ：！

『んっ？』

その時、居間の黒電話が、大きな音で鳴り始めた。

「ツーくん、出てくれるうゝ？」

「はいはい：」

父に頼まれ、一番電話の近くにいたツバメが、ゆっくりと立ち上がり、電話を取った。

「お掛けになった電話の主は：三年前、不慮の事故で：」

「まともに応えんかいっ！」

受話器を手にし、何やら不気味な声で話し始めるツバメに、アヒルが思わず起き上がって、怒鳴りあげる。

「もしもし：朝比奈ですけど：」

アヒルの怒鳴り声を受け、やっと普通に話し始めるツバメ。

「ああ、どうも：えっ：？来てないですけど：？はい：ちょっと待って下さいね：」

「：：：：？」

電話で話しながら、少し表情を曇らせるツバメを見て、アヒルが首を傾げる。

「アヒル君、今日、紺平君、どっか行ってるとか聞いている？」

「へっ？紺平？」

ツバメから出るその名に、アヒルが目を丸くする。

「別に聞いてねえけど…何で？」

「電話、紺平君のお母さんからなんだよ…いつもなら、とっくに帰って来てる時間なのに、まだ帰って来ないって…」

「えっ…？」

——ドクンっ。

その言葉を聞いた途端、アヒルの心臓が大きく揺れ動いた。

「おっ、何だあ？あの真面目コンペーも、ついに夜遊びを覚えたかっ？」

「スズメっ…」

台所から顔を出し、何やら楽しげな笑顔を見せるスズメを、ツバメが少し注意するように名を呼ぶ。

「しっかし心配だなあ。ちょっと学校に連絡取って、聞いてみっ…」

「……っ」

「ん？アーくん？」

急に立ち上がるアヒルを、目を丸くして見つめる父。

「俺…行かなきゃ…」

「へえっ？」

「……っ！」

「あっ…！アーくんっ…！」

父が止める間もなく、アヒルは居間を飛び出し、店の通用口から外へと駆け出して行った。

Word. 2 泣イタ友ダチ (3)

「ハアっ…！ハアっ…！」

家を飛び出したアヒルは、行く当てがあるわけでもなかったが、ただ必死に、全速力で、静かな夜の町を駆け抜けた。大きく揺れ動いた心臓は、収まることなく胸打ち続ける。その大きな鼓動とともに、徐々に不安が膨れ上がっていく。

「何だっ…！？この感じっ…！」

左胸を強く握り締め、自分でも戸惑うように言葉を吐くアヒル。

「嫌な…嫌な予感がするっ…紺平っ…！」

「金平糖こんぺいとうがどうかしたの…？」

「ううわあっ！」

まっすぐな一本道を必死に駆け抜けていたアヒルが、怪しげに響く声とともに、突然、曲がり角から飛び出てきた人影に驚き、声をあげて、足を止める。

「びっくりしたあ！って、お前っ…！」

「こんばんは…」

曲がり角から出てきたのは、長い黒髪の少女。

「お前、今朝のっ…」

「真田囃よ…また会ったわね、朝比奈アヒル…フフフっ…」

それは、今朝、屋上でアヒルに忌の存在を知らせに來た少女、囃であった。囃の後ろには、屋上の時も共にいた、箆也の姿もある。驚いているアヒルとは対照的に、どこか楽しげに微笑んでいる囃。

「こんな時間に金平糖なんて食べたら…太っちゃうわよ…？」

「違っげえーよ！俺は紺平っつーダチを探してるだけだっ！」

「友達を…？」

少し怒ったように答えるアヒルに、囃が眉をひそめる。

「ああ！そうだ！お前ら、見なかったかっ！？こうっ…」

両手を振り上げ、紺平の特徴を説明しようとするアヒル。

「“紺平”って感じの奴なんだけどよおっ…！」

「すっごく説明、下手ね…フフフっ…」

何一つ伝わって来ないアヒルからの説明に、囁が小バカにするように微笑む。

「まあいいわ！俺、とりあえず学校につ…！」

『うわあああああ！』

『……っ！』

アヒルが学校へ向かおうと、囁たちから離れようとしたその時、道のアヒルが向かおうとした方向から聞こえてくる、複数名の悲鳴のような叫び声が聞こえてきて、アヒルたちが一斉に振り返った。

「あ、あれはっ…！」

『ぎゃあああああ！』

「ウチの学校の連中…？」

夜だというのに非常識なこと、この上ない大声をあげながら道を駆け抜け、アヒルたちの立っている所へと向かって来ているのは、アヒルの通う高校の制服を着た、数人の青年であった。アヒルは、その青年たちに見覚えがあった。確か、何度か遅刻常習者として一緒にになっている。厳しく取り締まる紺平に、悪態づいていた連中だ。

「アヒルんの学校では…夜のジョギングが流行ってるのかしら…？」

「流行ってねえーよ！っーか、変に馴れ馴れしく呼ぶんじゃないね…！」

「グオオオオオオっ！」

「……っ！」

囁に怒鳴り返そうとしていたアヒルが、どこかで聞き覚えのある、その低く重く響く声に気づき、勢いよく振り向いた。

「この声っ、まさかっ…！」

振り向いたアヒルが、駆け抜けてくる青年たちのさらに後方を見る。すると、そこに、青年たちを追いかけるようにやって来る、もう一つの人影が見えた。

「なっ…！？」

その人影を捉え、アヒルが大きく目を見開く。

「紺平っ…!?!」

「グオオオオオっ…!」

青年たちを追いかけ、アヒルたちのいる方へと徐々に近付いてく
るのは、アヒルの探していた、紺平であった。大きく口を開け、禍
々しい声を発する紺平。その声は明らかに紺平のものは異なり、
瞳も虚ろで、表情がまるで見られない。

「あれはっ…!」

紺平の体を包む黒い影に気づき、アヒルが厳しい表情を見せる。

「忌、ね…」

「忌っ…!?!」

アヒルの言葉を続けるように言い放つ囁に、強く眉をひそめるア
ヒル。

「何でっ…! 何で紺平が忌にっ…! あっ…」

——悪意ある言葉を向けられ、傷ついた人間の弱った心に巢食う
悪霊……

——“死ね”…“消えろ”……

——わかったような…口きかないでよっ……

戸惑うように囁の方を振り向いたアヒルの頭の中に、放課後の、
紺平が見せた、あのとても痛そうな表情が思い出された。

「……っ」

「アヒるん…?」

前方を向き、駆け込んでくる青年たちの方へと歩き出していくア
ヒルを、囁が戸惑うように見つめる。

『うぎゃああああ!』

「てめえーらっ」

『うごっ!』

必死に走っていた青年たちの足に、アヒルが自らの足を引っ掛け、

青年たちを前のめりに倒すことで、その場に止める。

「な、何すんだよ……！とっとと逃げないと、あの変な野郎に……！」

「てめえーらがっ……」

「うえっ……！」

一早く起き上がった青年の一人の胸倉を、低い声を発したアヒルが、勢いよく掴み上げる。

「てめえーらが紺平に、あのフザけた紙を……！！？」

「ひいっ……！」

鬼の形相で怒鳴りあげるアヒルに、胸倉を掴まれた青年が勢いよく震え上がる。さらに、後方で起き上がった他の青年も、皆、怯えた表情で背筋を立てた。

「ごめんなさいごめんなさい……！遅刻取り締まられて、ちよっとムカついちゃってえっ……！」

『ほんの出来心だったんですぅ……っ！』

「何がちよっとムカついただ！何が出来心だっ！」

『ひいっ……！』

さらに音量をあげるアヒルに、青年たちがさらに震え上がる。

「お前らの、そのくだらない言葉にっ、あいつがどんだけ傷ついたと思ってやがるっ……！！？」

『ひい……！ご、ごめんなさっ……！』

「俺にじゃなくて、紺平に謝りやがれっ……！！！」

『は、はいっ……！』

アヒルに怒鳴りつけられた青年たちが、慌てて後ろを振り返り、こちらへと駆けてきている、忌に取り憑かれた紺平の方を見る。

「本当に申し訳ありませんでしたあ！」

「もう二度と、絶対に、神に誓って、こんなことはしませんっ……！！」
「だから許して下さい……！お願いしますぅっ……！」

謝罪というよりは命乞いのように、土下座をし、地面に顔を擦りつけ、必死に言葉を発する青年たち。

「グウウウっ……」

するとその声が届いたのか、紺平は足を止め、青年たちから少し距離を取った所で、ゆっくりと立ち止まった。

「こ、紺ぺっ…」

「グオオオオオオっ…!“破”っ…!!」

「なっ…!？」

アヒルが紺平の名を呼ぼうとしたその時、紺平が大きく声をあげ、青年たちと、その後ろに立っているアヒルへ向けて、勢いよく手を振り上げた。紺平の手から巻き起こった衝撃波が、アヒルたちの方へと飛び出して来る。

「どいてろ」

『うぎゃあああ!』

「アヒるんっ」

「うわっ!」

横から飛び出してきた箆也が、土下座していた青年たちを蹴り飛ばし、囁がアヒルを引っ張り出して、それぞれ、衝撃波の直撃コースから避けさせた。

——バアアアアンっ!

アヒルたちの避けた衝撃波が道の端まで駆け抜け、突き当たりの壁を、粉々に砕いた。

『うあ…あ…うつ…』

その衝撃的な光景に驚いたのか、箆也の蹴りが強く入ったのか、青年たちは皆、ゆっくりと瞳を閉じ、その場に力なく倒れ込んだ。

「……っ」

倒れた青年たちを見て、アヒルが眉をひそめる。

「何でだっ…!？」

まだアヒルのティーシャツの裾を掴んだままで、すぐ横に立っている囁の方を見つめ、戸惑うように問いかけるアヒル。

「あいつ等、謝ったのに…何で、紺平に取り憑いた忌が消えないっ

…!？」

「それは…」

「傷ついた心というものは…」

「……っ」

答えようとした囁の言葉を遮り、聞こえてくる簞也の声に、アヒルが振り向く。

「傷つけた人間が思っているよりも…ずっと深く、重い痕が残る…」
鋭い瞳で前方の紺平を見据え、言葉が続ける簞也。

「謝られたくらいでは…決して癒されない痕が…」

紺平を見つめていた簞也が、視線を移し、今度はアヒルを見つめた。

「そういうものだ…“言葉”とはな…」

「言、葉…」

“言葉”という言葉を強調する簞也に、アヒルが少し目を細める。

「グオオオオオっ…」

『……っ』

さらに呻き声をあげる紺平に、三人が表情を険しくする。

「囁」

「ええ…」

「へっ？」

囁を呼びながら、紺平と相對するように、紺平の前に立つ簞也を、アヒルを道の端に残し、簞也の横に並ぶ囁を、アヒルが目を丸くして見つめる。

「お、おい！お前ら！何をっ…！」

「私達の心配をしてくれているなら、大丈夫よ…アヒるん…」

「えっ…？」

身を乗り出したアヒルへ、囁がそつと微笑みかける。

「私達も…」

ほぼ同時のタイミングで、懐へと右手を入れる簞也と囁。

「五十音士だからっ…」

「なっ…!?!」

二人が懷から取り出したものは、アヒルもよく見覚えのある、小さく赤い、宝石のような玉であった。その玉を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「言玉っ…!?!」

「グオオオオオっ…!“壊”っ!?!」

「うおっ…!?!」

箆也たちの取り出した言玉に驚いている暇もなく、紺平の言葉により、近くの家の塀や電柱が、一斉に崩れ落ちる。降り落ちてくる瓦礫に、焦ったように声をあげるアヒル。

「囁」

「ええ…」

箆也の声に頷いた囁が、取り出した言玉を強く握り締める。

「五十音・第十一の音…“さ”…解放…」

言玉を握り締めた囁の右手の中から、赤く強い光が放たれ始める。

「うっ…!」

放たれる眩い光に、アヒルが思わず目を細めた。

——パアアアアんっ!

「“左守”…真田囁…フフフっ…」

「あっ…」

光が止み、アヒルが再び目を開いて囁を見ると、囁の右手には、言玉ではなく、赤色の鮮やかな横笛が握られていた。その赤色は、昨夜のアヒルの銃の色とよく似ていて、下端に小さく『左』と刻まれているあたりも、共通点を感じた。

「あれが…あいつの…ってか、そんな場合じゃなかった!」

感心しているアヒルを待ってくれるはずもなく、至近距離まで降り迫って来ている瓦礫に、アヒルが焦ったように声をあげる。

「うわああああ!」

「妨さまたげろ」…」

叫ぶアヒルを横目に、囁がそっと呟き、横笛に口を当てた。囁の白い指が滑らかに動くと、そこから美しい音色が響き渡る。

——バアアアン！バアアアン！

「へっ…？」

音が響き渡ったその瞬間、アヒルへと落下してきていた瓦礫が、空中で何かに弾かれたように音を立て、アヒルのいる方とは異なった方角へと飛び、力なく落下していく。

「音で…瓦礫を妨害したってのかっ…？」

落ちた瓦礫を見下ろしながら、戸惑うように呟くアヒル。

「グオオオオオっ！“破”っ！！」

「あっ…！」

囁の力のことなど気にも留めず、紺平がさらに声をあげ、攻撃を続ける。先程と同じように、振り上げられた紺平の手から、強い衝撃波が放たれた。

「……っ」

一歩前へと出た箆也が、向かってくる衝撃波をまっすぐに見つめる。

「五十音、第六の音…“か”、解放…」

箆也の言葉と共に、強く光を放つ、箆也の右手内の言玉。

「うっ…！」

囁の時同様、放たれる強い赤色の光に、また目を細めるアヒル。

「あっ…！」

「かもり加守”、神月箆也…」

「鉄格子…？」

言玉から姿を変えた、『加』と刻まれた、赤銅色の鉄の棒のようなものが六本、箆也の周囲を取り囲むように、地面に突き刺さっている。その光景が、まるで箆也が赤銅色の牢屋に捕えられているよ

うに見えて、アヒルは思わず呟いた。

「……っ」

向かってきている衝撃波を見つめ、箆也が鋭く目を細める。

“返せ”……」

箆也の言葉に反応し、箆也を取り囲んでいた六本の格子が同時に空中へと舞い上がると、六本の格子は、中心で一点を重なり合わせて、それぞれが円の骨組みのような形となり、重なり合った点を中心として、勢いよく回転し始めた。箆也へと向かって来ていた衝撃波が、その回転する格子へとぶつかる。

——パアアアアン！

回転する格子は、まるで盾のようになって、向かって来た衝撃波を弾き返した。

「グアアアアアッ！」

「あっ……！」

弾き返された自らの衝撃波を受け、紺平が、取り憑いている忌と共に、後方へと吹き飛ばされる。その紺平の姿に、横で見ていたアヒルは、思わず身を乗り出した。

「グっ……ググっ……」

「あっ……」

苦しいな声を漏らしながら、ゆっくりと起き上がる紺平。その表情は、忌に支配させているのでわからないが、紺平の手や足からは、紺平のものと思われる赤い血が滲んでいた。その血を見つめ、アヒルが表情を曇らせる。

「ふう……」

盾を作っていた格子が、互いに重なり合い、今度は一本の棒となつて、一息ついている箆也の右手へと、自動的に戻っていく。右手で格子を掴んだ箆也は、再び表情を鋭くし、ゆっくりと構えを取つた。

「か…」

「待てよっ!」

「……っ」

止めに入る大きな声に、箆也が発せようとしていた言葉を吞み込む。

「何だ?」

ゆっくりと横を振り向き、止めたアヒルを見る箆也。

「何だじゃねえよっ! 紺平の体、傷つけるような攻撃してんじゃねえーよっ!!」

必死に叫ぶアヒルを見つめ、箆也が眉をひそめる。

「仕方がないだろう? 忌を倒すためだ」

鋭い瞳を、アヒルへと向ける箆也。

「手加減はしている。死ぬことはないのだから問題なっ…」

「フザけんじゃねえっ!!」

「……っ」

箆也のすらすらと続けられた言葉は、アヒルの大きな声によって、あっという間に掻き消された。

「あいつは、言葉に傷つけられたただだぞ!? あいつは何にも悪くないんだ!」

アヒルが歩を進め、箆也のすぐ目の前へと立ち、睨みつけるように箆也を見る。

「なのに、何であいつが傷つけられなきゃいけないえーんだよ!? おかしいだろうがっ!!」

「………」

食ってかかるように叫ぶアヒルを、まっすぐに見つめる箆也。

「何も悪くないわけではない…」

「何っ…?」

箆也の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「忌に取り憑かれたのは、悪意ある言葉に負けた、あいつの心の弱さのせいでもある…」

「……っ！」

さらに言い放つ籠也に、大きく目を見開くアヒル。

「あいつが…悪いってのか…？」

「ああ、そうだ」

ゆっくりと問いかけるアヒルに、籠也がすぐさま頷く。

「グウウウっ…」

「……っ」

アヒルの向こうで、よろめきながらも立ち上がる紺平の姿に気がつき、籠也が眉をひそめる。

「てめえっ！フザけんじゃっ…！」

「邪魔だ」

「えっ？」

「^{かこ} 囲え」

——バアアアアアン！

「ううっ…！」

籠也の右手の格子から、分裂するように同じ棒が五本放たれると、飛び上がった五本の格子は、アヒルの周囲の地面に勢いよく突き刺さり、アヒルの動きを封じるように、アヒルを取り囲んだ。

「んなっ…！？」

取り囲んだ格子を掴み、必死に動かそうとするアヒル。だが格子はアヒルの力でもビクともせず、アヒルはその場に完全に封じ込まれてしまった。

「何だよ！？これはっ…！」

「籠也…」

「……っ」

強く顔をしかめるアヒルの姿に、囁が、どこか非難するように籠也を見つめる。だが籠也は囁へ向け、軽く左手をあげ、それ以上の進言を許さぬように、言葉を遮った。

「おい！お前っ…！」

「あなたは…」

睨むように見る、鉄格子の牢の中のアヒルを、籠也がそっと見つめる。

「今のあなたは…我らが神となるには、あまりに浅薄…」

「神っ…？」

籠也の発した言葉に、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「実戦も必要とは思うが…今回は黙って、ここで見てもらおう」
「なっ…！」

大きく目を見開いたアヒルを横目に、籠也がアヒルよりも前へと出て、立ち上がった紺平と相對する。手元に残った一本の格子を、ゆっくりと構える籠也。

「グウっ…」

「覚悟しろ、忌」

唸り声を漏らす紺平に、籠也が格子の先を向ける。

「クっ…！」

囲われた格子の中で、必死に首を動かし、紺平の方を見るアヒル。

「グウウっ…！」

「紺平っ…」

紺平のものとはまるで違う、禍々しい声。その表情に紺平の意志は映っておらず、その瞳には何の輝きもない。それなのに、流れ落ちる赤い血は、紺平のもの。

「紺平…」

——おはよ、ガアっ——

——またケンカ？いい加減にしなきゃダメだよ？——

——明日は、遅刻しないようにねっ——

紺平の笑顔が、次々と思い出された。

「……ざけんじゃねえ…」

「……っ？」

アヒルが小さく発した声に気づき、紺平と向き直っていた簞也が、少し眉をひそめて、振り返る。

「何っ…」

「ダチが…大事なダチが苦しんでんのにつ…」

簞也の言葉を遮ったアヒルが、囲んでいる格子を強く握り締める。

「黙って見てなんか、いられっかよおっ!!」

——パアアアアンっ！

Word. 2 泣イタ友ダチ (4)

「なっ…!?!? うあっ…!」

大きく叫びあげたアヒルの声に反応するかのように、アヒルの体全体から強い赤色の光が放たれ、囲んでいた籠也の格子を、あっという間に吹き飛ばした。その光景に、大きく目を見開いていた籠也のもとへ、吹き飛ばされた格子が向かっていき、籠也が道の端へと弾き飛ばされる。

「籠也の…格子を…」

横から、驚きの表情で、状況を見つめる囁。

「馬鹿なっ…」

壁に背をもたれかけるようにして、地面に座り込んだ籠也が、信じられないといった表情で顔を上げ、格子を吹き飛ばし、自由になった体で立っているアヒルを見つめる。

「僕の力を…上回っただと…?」

「……………」

籠也が見つめるその先で、格子から解放されたアヒルは、ゆっくりとその鋭い表情を上げ、紺平と真正面から向き合った。

「グオオオオオオっ…!」

「……………」

激しく叫ぶ紺平に、アヒルの方を見ていた籠也が振り向き、眉をひそめる。

「マズいっ…! 来るぞ!」

「“破”っ…!」

籠也の言葉に応えるように、前方に立つアヒルへと、衝撃波を放つ紺平。

「避けろっ…!」

「……………」

「なっ…!？」

座り込んだまま、必死に叫ぶ箆也に従うことなく、アヒルは、衝撃波が向かってくるにも関わらず、避ける素振りも見せずに、ゆっくりと紺平の方へと歩み寄っていく。

「何をっ…!おいっ…!」

身を乗り出し、止めようとする箆也であったが、アヒルは決して止まることなく、歩き続ける。

「チっ…馬鹿がっ…囁!」

「えっ?あ、あっ、ええっ!」

どこか啞然とした様子で、紺平に向かっていくアヒルを見つめていた囁が、箆也の声にハツとなり、慌てて右手の横笛を持ち上げた。

“妨っ…あっ!”

言葉の途中に、思わず大きく目を見開く囁。

「ダメだ…!間に合わないっ…!」

二人が何かをする時間もなく、衝撃波はアヒルへと迫っていった。

——バアアアアアンっ!

『あっ…!』

吹き荒れる衝撃風に、箆也と囁が、焦ったような表情を見せる。

「ハアっ…ハアっ…」

「……っ?」

巻き起こる風の中から聞こえてくる、小さな息使いに気づき、そつと眉をひそめる箆也。

「なっ…!？」

「ハア…ハア…ハア…」

風が止むと、そこには、衝撃波を直撃したのであろう、全身から滴り落ちる程の血を流しながらも、それでも立っているアヒルの姿があった。その姿に、箆也が思わず大きく目を見開く。

「馬鹿なっ…五十音士とはいえ、力に目醒めたばかりの人間が…」

「なんて…精神力…」

驚いた様子で呟く箆也に対し、囁も厳しい表情で、アヒルを見つめる。

「紺、平っ…紺平…」

途切れ途切れに紺平の名前を呼びながら、アヒルは、赤い血の流れ落ちる足を動かし、さらに紺平の方へと歩み寄っていく。

「グウウウ…」

「お前の苦しみ…何にもわかってやれなくて…ごめんなっ…」

唸り声を漏らす紺平のもとへと近付いていきながら、アヒルがまっすぐな瞳を、紺平へと向ける。

「お前の心を…傷つけるようなこと言って…ごめんなっ…」

謝罪の言葉を繰り返しながら、さらに歩を進めるアヒル。

『……………』

忌を攻撃をする機会はいくらでもあったが、箆也と囁は、アヒルの動きに目を奪われた様子で、決して動こうとはせず、ただ少しも目を逸らすことなく、アヒルの様子を見つめていた。

「けど、俺はっ…お前の友達だから…」

アヒルがそっと、口元を緩める。

「お前が“死ぬ”って言われたんなら、俺が“生きる”って言うってやるっ…」

二人の距離が縮まり、アヒルがゆっくりと上げた左手が、もうほんの数センチで、紺平に届くところまでいく。

「お前が“消えろ”って言われたんなら、俺が“ここに居ろ”って言うってやるっ…」

さらに大きく微笑み、アヒルが紺平を見つめる。

「グオオオオオオっ…!!」

『あっ…!!』

すぐ目の前まで歩み寄ったアヒルへと、手を振り上げる紺平に、箆也と囁が身を乗り出す。

「どれだけの人間がお前の敵に回ろうとっ、俺がお前の味方になっ

てやるっ!! 紺平っ!!」

「グオオオオっ…!」

強く叫ぶアヒルに、紺平が右手を振り下ろした。

「グウウウウっ…!」

「……っ」

『えっ…?』

だが、振り下ろされた紺平の手は、アヒルのすぐ目の前で、不意に動きを止めた。止まった手に、アヒルが目を細め、後方から見ていた二人も、驚いたように声を漏らす。

「グウウウっ…! グウウウっ…!」

「……っ?」

何やら、もどかしげな声を発する紺平。まるで、手が動かないことを、嫌がっているようであった。

「な、何っ…」

「ガ…ア…」

「……っ!」

紺平の動きに戸惑っていたアヒルが、呻くような声の合間に落とされる、弱々しく小さな声に気づき、大きく目を見開く。それは重苦しい忌の声ではなく、よく聞き覚えのある、紺平の声であった。

「紺、平…?」

「ガ…ア…ガ…ア…」

小さな声が呼んでいるのは、幼い頃からのアヒルの呼び名。

「彼が…忌の動きを止めたというの…?」

「有り得ないっ…」

その光景を、厳しい表情で見つめる囁と籠也。

「宿主の人間が…忌の動きをコントロールするなどっ…」

籠也が信じられないといった様子で、強く顔をしかめる。

「紺平…」

自分の名を呼ぶ友を、アヒルは少し細めた瞳で見つめる。

「泣くなよ…紺平…」

「……………」

忌に取り憑かれ、意志も光も失っているはずの紺平の瞳からは、止まることのない涙が、流れ落ちていた。

「大丈夫だ…」

流れ落ちる紺平の涙に手を触れ、アヒルが紺平に微笑みかける。

「俺が絶対っ…助けてやるっ…！」

「……………」

アヒルの笑顔に、涙の落ちる紺平の瞳が、大きく見開かれた。

「グアアアアアアアアアっ…！」

———パアアアアアンっ！

『うっ…！』

紺平の体から放たれる白い光に、アヒルや箆也たちが皆、思わず目を細める。

「うあっ…あ…」

光が止むと、紺平がゆっくりと瞳を閉じ、その場に倒れた。

「な、何っ…？どうなって…」

<グウウウっ…！>

『……………！』

倒れた紺平を、戸惑いの表情で見ていた囁と箆也が、上方から聞こえてくる声に、勢いよく顔を上げる。

『あっ…！』

顔を上げた二人が、大きく目を見開く。二人の見つめる先には、夜の空に完全に染まりながら、宙に浮かんでいる黒い影が存在した。黒い影の上部に、金色に輝く、二つの目のようなものが見える。

「忌っ…！」

「宿主の体から出たのかっ…！？」

<グウウウっ…!>

箆也たちが険しい表情を見せる中、宙を舞う影は、少し苦しげな声を漏らす。

<何だっ…!?!何故、外へっ…!?!>

紺平の体の中から出て来た忌は、自分自身も出て来たことに戸惑っている様子で、誰に問いかけるでもない声をあげた。

<まあいいっ…もう一度、取り憑けば、それで済むことっ…!>

『……っ』

忌の言葉に、箆也と囁が眉をひそめる。

「させるかっ」

「させないわ…」

箆也と囁が、それぞれに格子と横笛を構える。

「……っ」

『えっ?』

武器を構えた二人に、制止を促すように右手を横へと伸ばすアヒル。そんなアヒルに、二人が少し戸惑うように表情を曇らせる。

「アヒるん…?」

「何をっ…」

「お前らは下がってろ」

『……っ』

アヒルのその言葉に、どこか圧のようなものを感じて、二人は思わず、武器を構える手を止めた。

<何だあ?お前、ただの人間のくせに何をっ…>

「五十音、第一の音…“あ”…」

低い声を漏らす忌の言葉を遮り、アヒルがゆっくりと口を開く。

「解放っ…!」

横に伸ばされたアヒルの右手には、言玉が握り締められており、アヒルの発したその言葉に反応して、赤々と輝く、強い光を放った。

———パアアアアアンっ!

<何っ…!?!>

「……………」

光が止むと、そこには、右手に赤銅色の銃を持ったアヒルが立っていた。鋭く睨みつけるアヒルに対し、忌が驚きの声をあげる。

<あいつも五十音士っ…!?!>

「……………」

アヒルが横に伸ばしていた右手を垂直に曲げ、構えた銃口を、暗い夜空へと向ける。

——パアアアン!

何もない空へ向けて、放たれる弾丸。

<フハハハっ…! バァーカっ! どこを狙っているっ…!?!>

空へと飛んでいく弾丸に、大きく笑いあげる忌。

「終わったわね…」

「ああ…」

囁の言葉に、箆也が静かに頷く。

<フハハハハっ…! この隙にもう一度、あの人間にっ…!>

「……………」

空で大きく体を動かし、倒れている紺平に向かって降下していく忌を見て、アヒルがそつと目を細める。

「“当たれ”」

アヒルの口から、落とされる言葉。

<フハハハハっ…! ハっ…! 何っ…!?!>

紺平へと降下していた忌が、空の上から、降り落ちる一滴のようにして向かってくる弾丸に気づき、焦りの声をあげる。

<馬鹿なっ…！弾丸は確かに空へっ…！ウウウっ…！>

答えを出す間もなく、忌へと迫る弾丸。

<グウウウっ…！>

空から落ちた弾丸が、忌の黒い影を貫く。

<グっ…グギヤアアアアアっ…！！>

次の瞬間、忌は、白く強い光を放って、夜空の闇へと掻き消えた。

「……………」

光の消えた空をしばらく見つめた後、アヒルは銃をもとの言玉の姿へと戻し、ゆっくりと歩を進め、倒れたままの紺平のもとへと駆け寄った。倒れている紺平のすぐ横に、アヒルが膝をつく。

「紺平…」

「んっ…」

アヒルの声に反応して、紺平が閉じていた瞳を、ゆっくりと開いた。

「ガァ…」

その目に光を取り戻した紺平が、目の前にあるアヒルの顔を見つめる。

「ガァっ…」

もう一度アヒルを呼び、そっと口元を緩める紺平。

「ありがとう…」

「……………」

紺平の発した、“あ”から始まる言葉に、アヒルは嬉しそうな笑顔を見せた。

「すうー…すうー…」

アヒルに一言呟くと、紺平はすぐに再び瞳を閉じ、深い眠りになっていた。昨夜の男同様、忌に取り憑かれたことで、体に相当の負担がきてしまったのだろう。

「はぁっ…」

眠る紺平を見て、どこか安心したように肩を落とすアヒル。

「お疲れ様、アヒるん…」

「んあっ？」

背後から聞こえてくる声に、アヒルが振り返る。アヒルと同じように武器を言玉に戻した箆也と囁が、アヒルのすぐ後ろに、並んで立っていた。

「ああ、お前らっ…」

その場で立ち上がり、二人と向き直るアヒル。

「さっきは突っ走って悪かったなあっ、何か俺、つい偉そうなことっ…」

「それでいいのよ…」

「えっ？」

謝ろうとしたアヒルが、大きく頷く囁に、戸惑うように眉をひそめる。

「見事な戦い振りだったわ…さすがは我らが神…」

「神っ…？」

——今のあなたは…我らが神となるには、あまりに浅薄……——

首を傾げたアヒルの脳裏に、戦いの最中の箆也の言葉が思い出された。

「そーいやさっきも言ってたけど、その神ってのは一体っ…」

「あなたは…加守である僕や、左守である囁など、“安団”^{あだん}に属する五十音士の、頂点に立つ者…」

「へっ…？」

アヒルの言葉を遮って話す箆也に、目を丸くするアヒル。

「五十音士、“五神”^{いづがみ}の一人…」

箆也がまっすぐに、アヒルを見つめる。

「“安の神”^あ…」

「安の…神っ…？」

強調して言い放った籠也に、アヒルはただ、首を傾げるだけであつた。

W o r d . 3 へ つ づ く。

Word. 3 神トナル日 (1)

言ノ葉町三丁目。町の小さな八百屋さん、『あさひな』。

「ん、んんんっ…」

二階の一室では、朝比奈家の末っ子・アヒルが、今日も気持ち良さそうに眠っている。

「きよ…巨峰っ…」

「じゃんじゃじゃんっ！お父さん！今日も朝っぱらから大登場おっ！！」

いつものように意味不明の寝言を発しているアヒルの部屋へ、勢いよく扉を開いて乱入してくる、朝比奈家のヒゲ親父。その手には、左右に数個ずつ、紫色の鮮やかなナスビを持っている。

「必殺ううう！ナスビクラアーツシュっ！！」

「ブフっ！」

父の投げ放ったナスビが、眠っているアヒルの顔面へと、見事にヒットする。ナスビの衝撃に、気持ち良さそうだったその表情を、一気に歪めるアヒル。

「どお～お～？アーくん、起きっ…！」

「水っぱいわあっ…！」

「ぐほおおおうっ！」

目覚めた様子で顔面を押さえていたアヒルが、素早く立ち上がり、明るく話しかけて来た父の腹部へと、回し蹴りを喰らわせる。口から何かが出てきそうな程に苦しげな声を漏らして、腹を抱え、その場にしゃがみ込む父。

「お父さんっ…ギブ…アップっ…ぐふっ」

「アップでも何でもしてろっ」

力なく首を傾げる父に、素っ気ない言葉を吐いて、アヒルがティッシュを手に取り、顔についたナスビの水分を拭う。

「だいたい俺が呼んだのは、巨峰だったのっ」

「だから父さん、ナスビをつ…」

「色しか合ってねえーだろうがっ！」

ひっそりと訴える父に、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「ああー！もういい！んなことやってたら遅刻しちまう！ええーとっ…！あっ…」

学校へ行く準備をしようと、机の方を振り向いたアヒルが、不意に動きを止め、眉をひそめた。アヒルの見つめる先、机の上に置かれているのは、一つの小さな赤い玉。

——五十音士、“五神”の一人…“安の神”…——

「夢じゃ…ねえーんだよなっ…」

机の上の言玉を見つめながら、確かめるように、呟くアヒル。

「んんん？何々々？アーくん！悩みなら、お父さんにドッパアーンとっ…！」

「うるせえっ」

「ぐほおおおうっ！」

父の腹部に、もう一度、アヒルの蹴りが入った。

数分後。朝比奈家・居間。

「ううう…ううう…」

居間では、でかかど横たわった父が、赤く腫れあがった腹を出し、悲しげな表情で呻き声を漏らしていた。

「はい…湿布…」

「ううう…！痛い痛い痛い！」

ツバメが出ている父の腹に、乱雑に湿布を貼りつけると、父は苦しそうに声をあげた。

「もっと優しく貼ってよお…ツークうんっ」

「優しく…？難しい…」

「つーか朝っぱらから、息子に重傷負わされてんじゃねえーってのっ」

嘆くように訴える父に、戸惑うように首を傾げるツバメ。台所から居間の様子を覗いていたスズメが、呆れきった表情で言い放つ。

「はぁー！やべやべっ！」

「あ、おはよう…アヒル君…」

「おはよっ！ツー兄！」

二階から勢いよく降りて来たアヒルへ、ツバメが挨拶を向けると、アヒルも笑顔で挨拶を返した。そのまま倒れている父を素通りして、アヒルが台所へと駆け寄っていく。

「スー兄っ、朝飯いっっ」

「飯の前に、おはようだろうがっ」

台所へと顔を出したアヒルに、スズメが口を尖らせ、注意をする。

「おはようございます。で、飯っ」

「ったく…」

挨拶をした後、すぐに右手を差し出すアヒルに、スズメが呆れたように肩を落とす。

「ほらよっ」

「あっ？」

そう言ってスズメが、差し出されたアヒルの右手のひらの上に置いたのは、オレンジ色も鮮やかな、一本の人参であった。置かれた人参を見て、アヒルがしばらくの間、固まる。

「俺は馬か…？」

「しゃーねえーだろお？米もパンもねえーんだから。お前なんか、まだいい方だぞお？俺なんかパセリだっ」

パセリを片手に、しかめた表情を見せるスズメ。

「僕、ニンニク…交換する…？アヒル君…」

「いえ、結構です」

ニンニクを片手にトレードを持ちかけてくるツバメを、アヒルがすぐさま拒絶する。

「確かに人参が一番、マシかも…」

「おはようございまぁーす」

「んあっ？」

店の通用口の方から聞こえてくる声に、まじまじと人参を見つめていたアヒルが振り返った。

「紺平っ」

「おはよう、ガァっ」

まだ閉まっている店の中を通り、居間の入口へとやって来る紺平。驚いたように見るアヒルに、紺平は笑顔で挨拶を向けた。

「あれ…？紺平君…今日は風紀委員いいの…？」

「無遅刻強化月間が終わったんで、今日からは普通の時間に登校できるんですよ」

ニンニクを持ったまま問いかけるツバメに、紺平がすらすらと答える。アヒルの幼馴染みというだけあって、ツバメも紺平のことはよく知っている様子であった。

「そういう紺平っ、お前、昨日どこ行ってたんだよっ？」

「うぎっ！？」

台所から居間へと出て、思い出したように問いかけるスズメに、アヒルが焦ったように背筋を立たせる。

「そう言えばそうだったね…昨日、おばさんから電話あったけど…」

「それが俺もよく覚えてないんですよ。眠りこけてた俺を、ガァが家まで運んでくれたって聞いて…」

「アヒルがあ？」

「うげっ！」

スズメとツバメから同時に視線を向けられ、アヒルがますます焦った表情となる。

「俺もガァに昨日のこと、聞こうかと思っ…」

「さぁ！とつとと学校行こうぜえ！紺平！遅刻しちまうう〜！ハッハッハっ！」

「あっ…！ちよっ…！ガァっ！」

無理やりな笑みを浮かべながら、紺平の言葉を力強く遮り、居間から出て靴を履き、通用口の方へと歩いていってしまうアヒル。そんなアヒルに、紺平は焦ったようにスズメたちに一札をして、慌ててアヒルの後を追っていった。

「何だあ？ あいつ」

「さあ…？ ん…臭い…」

首を傾げるスズメに、ツバメはニンニクを食べながら答えた。

「ねえっ、昨日、俺、ホントに道端で寝てたの？」

「あ、あああゝ！ そうだぞおっ？ お前のおばさんから電話来て探しに行ったら、たまったま寝てるところ、見つけてなあっ！」

後ろから問いかけてくる紺平に、何やら必死に答えながら、その必死さを隠すために、右手の人参を、貪り食うアヒル。

「何で道端でなんか寝てたんだろ…俺っ…」

「さ、さあなあゝ！ ね、眠かったんじゃねえーのおっ？」

「何か、帰り道からの記憶が曖昧でさあ…」

人参を食うアヒルの後ろで、大きく腕組みをし、首を捻る紺平。

「けど、誰かと話してたような気がするんだよねえ」

「夢じゃねえーの！？ 夢っ！」

「夢、かなあ…」

アヒルの言葉を受け、紺平がさらに首を捻る。

「何かあ…ガアにも会った気がするんだよねえ」

「ゲホゲホゲホっ！」

紺平の口から自分の名が出ると、人参を食べていたアヒルが、勢いよくむせる。

「おおゝい！ 朝比奈っ！」

そこへ現れる、例のサングラスを掛けたアニキ率いる、ヤンキー集団。

「今日という今日はコッテンパンのパンパンジーにつ…!」

「だから夢だってっ!」

「やっぱそうだよねえ…だって昨日のガア…」

勇ましいアニキの言葉を完全に無視して、話を続けるアヒルと紺平。

「銃撃^{じゅうきつ}ってたもん」

「ぐぷっ…!?!」

紺平の言葉に、アヒルがその場で足を止める。

「覚悟おお! 朝比奈っ…!!」

「アッハッハッハッハアゝっ!」

「ぐぎゃあああ!」

大きな笑い声を発して、向かって来たアニキを、軽く突き出した拳で吹き飛ばしながら、アヒルが嘘臭いほどの満面の笑みで、紺平の方を振り返る。

「そりゃ完全夢だなっ! 俺は一般市民だぜえ? なのにそんな、じゅ、銃って! アッハッハっ!」

「そ、そうだよねえゝ! ハハハっ!」

「う、ううう…」

何やら楽しそうに笑い合いながら、何事もなかったかのように道を進んでいくアヒルたち。二人の去った道に、力なく転がる、アニキが一人。

『ア…アニキっ…』

「うるしゃいっ…何も言うな…」

憐みの視線を向ける子分たちに、アニキはそっと呟いた。

「それでその夢さあ、鉄格子みたいな振り回す男の子と、横笛吹いてる女の子も出てきてさあっ」

「ハハハ…ハっ…」

まだ昨夜見た夢についてを延々と語っている紺平の横で、ひたす

らに引きつった笑みを浮かべているアヒル。紺平には、忌のことや五十音士のことを知られるわけにはいかない。忌に取り憑かれていたので、記憶もそう残らないだろうと簞也たちは話していたが、饒舌に語る紺平に、アヒルの心は冷や冷やものであった。

「それでねえっ」

「おっはよお！バカガアっ！」

「グハっ！」

紺平が話を続けようとしたその時、アヒルの後頭部に、アヒルたちの学校の鞆らしきものが勢いよく激突し、アヒルが前のめりになりながら、潰れたような声を漏らした。

「ガア？」

「痛ってえ〜っ…」

驚きの表情を見せた紺平が、アヒルに駆け寄る。アヒルは少し膝を曲げて、痛々しく後頭部を抱え込んだ。

「何すんだよっ！？」

頭を押さえたまま、顔をしかめ、アヒルが勢いよく振り返る。

「想子そうちっ！」

「あらっ？よく私だってわかったわねえっ」

アヒルが振り返った先には、アヒルたちの学校の制服を纏った、ショートヘアの、いかにも活発そうな少女が立っていた。怒鳴るように名を呼ぶアヒルに、想子と呼ばれた少女は、軽い笑みを浮かべる。

「わかるに決まってるんだろ。朝っぱらから、こんな非常識なことを奴が、他にどこにしているってんだよっ」

「私は非常識なんじゃないわ」

しかめた表情を向けるアヒルに、想子は堂々と胸を張る。

「ちよっとお転婆なだけよ」

「そんなカワイイもんかよっ！」

「おはよう、想ちゃん」

「んっ？」

口を尖らせるアヒルの横から、紺平が顔を出し、想子へと笑顔を向けた。

「あらっ？紺平、今日は遅刻取り締まりないわけ？」

「うんっ。強化月間終わったからね」

「何だあ。遅刻記録更新して、すごい罰ゲーム喰らうガアが見たかったのに」

「仮にも幼馴染みに対して、お前なっ…」

見るからに残念そうな顔をする想子に、アヒルは怒鳴るまでもいかず、呆れきった表情を見せる。

「想ちゃんが一人で登校なんて、珍しいね。いつも奈々瀬^{ななせ}さんと一緒に来てるのにつ」

「はあっ？」

「えっ？」

眉間に皺を寄せ、大きく首を傾げる想子に、話を振った紺平が戸惑い、目を丸くする。

「んんっ」

「想ちゃん…？」

後方を振り返り、何やら探すように周囲を見回す想子。そんな想子の様子を、アヒルと紺平が不思議そうに見つめる。

「はあっ…」

一つ、深々と溜息を吐くと、想子は後方へと回れ右して、すぐ近くにある電柱の後ろ側を覗き込んだ。

「で、あんたは、そこで何してるわけ？ナナっ」

「えっ!？」

電柱の裏側に、身を縮め、隠れるようにして立っているのは、想子と同じ制服を着た、少し茶色があった、巻いた感のある長い髪に、くりくり大きな瞳の、愛らしい少女であった。想子に顔を覗き込まれ、少女が焦ったように、背筋を立たせる。

「あっ…そのっ…朝比奈くんがいて、驚いちゃって、つい電柱の後ろに引き寄せられたっていうかっ…」

「はあっ…あんたねえ…」

もじもじと両手の人差し指を合わせながら言う少女に、想子が呆れたように頭を抱える。

「そんなんじゃ、いつまで経っても、ただのクラスメイトのままよっ？ほらっ！」

「あっ…！」

想子に無理やり腕を引っ張られ、少女が電柱の裏から、道の真ん中へと出される。慌てる声を出した少女に、少し前の方に立っているアヒルと紺平の視線が集まった。

「あれっ？やっぱり一緒だったんだ。おはよう、奈々瀬さんっ」

「お、おはよう、小泉クン」

笑顔で挨拶を向ける紺平に、奈々瀬と呼ばれた少女も笑顔で挨拶を返した。紺平に挨拶を返した後、奈々瀬がゆっくりと、その横に立つアヒルへと視線を移す。

「お、おおおおおはようっ、朝比奈クン！今日も絶好のカラス鳴き日和だねっ！」

「あっ？あ、ああ…そう、か？」

妙に力んだ声で、言葉を震わせながら、よくわからない朝の挨拶を見せる奈々瀬に、アヒルが少し首を傾げながら、返事をした。

「ねえ…！見たあ…！？さっきの人！」

「んあっ？」

道の先にある学校の正門の方から聞こえてくる女生徒の声に、奈々瀬に首を傾げていたアヒルが、ゆっくりと振り返る。アヒルにつられ、紺平や想子たちも皆、正門の方を見た。

「超カッコ良かったよねえ…！転校生かなあ…？」

「ええ…！？どこのクラスなんだろお！？」

正門の前では、頬をほんのり赤く染めた二人の女生徒が、目をキラキラとさせながら、テンションの高い様子で、元気良く話している。

「転校生っ？」

「こんな時期に珍しいな」
首を傾げる紺平に、アヒルは特に興味なさそうに答えた。

午前八時三十分。一年D組（アヒルたちのクラス）。

「おらぁー、とっとと席着けえ」

今日もやる気のない様子と乱雑な言葉で、担任の恵が教室へと現れた。

「席着かねえー奴は、チョーク三十本、口ん中にぶっ込むよおっ」

「だから怖えって」

「んっ？」

生徒たちが皆、大人しく席に着いていく中、突っ込むように返ってくる言葉に反応し、教壇に立った恵が顔を上げた。

「おう、朝比奈トンビ。朝からいるなんて、珍しいなあ」

「朝比奈アヒルだったのっ…」

相変わらず名前を間違える恵に、大声で自分の名を叫ぶことも恥ずかしいので、ひっそりと呟くアヒル。呟きながら窓側の前から二番目の、自分の席へと着席する。

「お前、いいタイミングだよ。今日に限って、来てるなんざっ」

「はっ？」

椅子に座ったアヒルが、恵の言葉に首を傾げる。

「今日からウチのクラスに二人、転校生が入る」

「転校生？二人？」

「おい、入れっ」

アヒルが眉をひそめる中、恵が横を向き、教室の前扉の方へ向けて言い放つと、閉まっていた前扉が開き、廊下から、制服を着た二人の人間が、教室へと入って来た。

「んなっ…！」

その入って来た二人の転校生を見た途端、アヒルが大きく目を見

開く。

「転校生の、神月箆也です」

「同じく、真田囁です」

アヒルの学校の制服を纏い、何食わぬ顔で教室へと入って来て、自己紹介をしたのは、箆也と囁であった。

「んなあああっ!？」

二人を指差し、大きな声をあげて、勢いよく席から立ち上がったアヒルに、クラス中の視線が集まる。

「なっ…! なななななんっ…!」

「何だあ? 朝比奈、知り合いかっ?」

「へっ!？」

驚きに唇を震わせていたアヒルが、恵の言葉に、一気に焦った表情となる。

「ガア、知り合いなの?」

「へえ!？」

後ろの席に座る紺平から問いかけられ、さらに焦りの表情を見せるアヒル。

「何か俺もあの二人、会ったことあるようになっ…」

「し、知り合いなわけねえーだろお! 全然、知らねえーよっ! 他人だ、他人! アハハっ…!」

「ああっ?」

紺平にどこか必死に言いながら、大人しく席へと着くアヒルに、教壇の恵が眉をひそめる。

「まあいい。仲良くしろよおー、お前ら。席は後ろの二つだ。どっちがどっちでもいいから、適当に座れ」

『はい』

転校生に対する教師の態度としては、かなり雑だが、そんな恵の言葉に、箆也と囁は素直に頷いて、教室の一番後ろに設けられた、二つの空席へと向かっていく。

「神月クン、前はどこに住んでたのお?」

「スポーツ、何かやってたっ？」

「お家はどこなのおく？」

席に着いた簞也に、周囲の女生徒から、早速、質問が飛ぶ。

「ああゝあゝあいつにんなこと聞いたって、無駄な問いかけをする
なとかって言われるだけで…」

「前は、ずっと北の方に住んでました。スポーツは特にやってま
せんでしたが、家は言ノ葉町ですよ」

前の席から、こっそりと頭を抱えていたアヒルの予想とは裏腹に、
昨日では考えられない程の爽やかな笑みを浮かべた簞也が、丁寧に
女生徒たちの質問に答えていく。

「わからないことばかりなので、色々と優しく教えて下さいね、収
穫間近のチェリーガールさんたちっ」

『きゃあああああ！』

「何だっ！そりゃああつ！」

歯の浮くような台詞を吐いた簞也に、あまりにも腹が立ち、女生
徒が悲鳴にも似た歓声をあげる中、再び席から立ち上がったアヒル
が、振り上げた右足を一気に下ろし、自分の机を砕き割った。

『……………』

「あつ…」

机の砕き割れた音に、騒がしかった教室内が、一瞬で静まり返る。
その静けさに、気まずそうな顔をするアヒル。

「なあゝにをしているのかなあ？ええ？朝比奈」

「あ、ええゝとつ…」

恵に刺すような視線を向けられ、アヒルがさらに顔を引きつる。

「いやあゝ、今、ここに蚊がっ…」

「ほおー、お前の家では、蚊を踵落として退治すんのかあ？」

「え、ええ…先祖代々っ…」

「そうか…」

歯切れの悪いアヒルの答えに、ゆっくりと頷く恵。

「罰として放課後、国語資料室の掃除なっ」

「えっ!？」

恵の言葉に、アヒルが大きく顔を歪める。

「フフフっ…」

「はぁ…」

そんなアヒルを見て、そっと微笑む囁と、呆れた様子で溜息を吐く籠也。

「何やってんだかつ、バカガアはっ」

「……?」

呆れたように呟く想子の後ろの席で、奈々瀬はアヒルを見つめながら、少し戸惑うように、首を傾げた。

Word. 3 神トナル日 (2)

休み時間。学校・屋上。

「どういふことだよっ!？」

屋上から、空まで突き上げる程、大きなアヒルの声が、響き渡った。

「何がだ？」

「何がだじゃねえ！」

あっさりと聞き返す箆也に、アヒルが強く怒鳴りあげる。

「さっきのだよ！なあゝにが“収穫間近のチェリーガールさんたち”だ！薄ら寒みいーこと、言いやがって！」

「学校生活を円滑に進めていくためには、ああいったキャラがいて、囁に言われた」

「囁にっ？」

箆也の答えに、眉をひそめるアヒル。

「フフフっ…これで女生徒は利用し放題ね…フフフっ…」

「何する気だ!？てめえーはっ！」

怪しげに微笑む囁を、アヒルが焦ったような表情を見せながら、強く指差す。

「だいたい、何でお前らがウチの学校にいんだよ!？しかも二人して同じクラスとか、有り得ねえだろっ！」

「誰も言玉を使って、“策略しろ”^{さくりやく}だなんて言っていないわよ…フフフっ…」

「言ったな…確実に言ったな…」

白々しく答える囁に、呆れた表情を見せるアヒル。

「昨日の今日なんだぞ!？紺平がお前ら見て、忌のこと思い出したりしたら、どうすんだよっ!？」

「大丈夫よ…鮮明に思い出せば思い出すほど、夢にしか思えないか

ら：フフフっ：」

「鮮明につて、お前なあ：」

紺平が昨夜のことを思い出さないようにするために、アヒルが朝からどれほどに気を遣ってきたか。だというのに、思い出してもいいといった口振りをする囁に、アヒルが思わず顔をしかめる。

「仕方ないでしょう：？ 使命を全うする^{まっ}ためだもの：」

「使命だあ？」

「昨日、説明しただろう？」

アヒルが大きく顔をしかめていると、そこへ箆也が口を挟んだ。

「僕たち、加守と左守は、安の神の世話役・“安附”^{あつき}。常に神の傍に仕え、その身を守り、また、団の先頭に立てるよう、神の力を育てなければならぬ、と」

「聞いたっけかなあ：」

もう一度、説明をする箆也に、アヒルがあまり興味なさそうに、首を捻る。

「けどさあ、俺だってもう言玉使えんだから、別にお前らが傍にいなかったってっ：」

「言玉を使える？ “当たれ”と“赤くなれ”と“青くなれ”しか言えないあなだが？」

「うっ：」

箆也の鋭い指摘に、思わず顔を引きつるアヒル。

「あなたはまだ、力の百分の一、いや千分の一も使えていない。今後も忌と戦っていくためには、もっと力を使いこなす必要がある」

「使いこなすって、具体的には何をするんだよ？」

「そうねえ：まずは言葉の種類を増やすことかしら：フフフっ：」

「増やす？」

代わりに答えた囁へと、アヒルが視線を移す。

「箆也がさっき言った三つの言葉以外に、戦いで使えそうな“あ”から始まる言葉を探すのよ：」

「探すって、どうやって？」

「さあ…？辞書でも引けばいいんじゃない…？フフフっ…」

「辞書おっ！？」

囁から出たその単語に、あからさまに顔をしかめるアヒル。

「冗っ談じゃねえよ！国語の授業に出るのも苦痛なのに、家でまで国語の勉強しろってのかあっ？」

「仕方ないでしょう…？私達は言葉使いだもの…」

「絶対、無理！辞書とかマジ、開いただけで頭痛するしっ！」

「はあ…」

胸の前で両手を交差し、大きくバツ印を作って、断固拒否するアヒルに、箆也が深々と溜息を吐く。

「あのなあ、あなたには、僕たち安団を率いてもらうという役割がつ…」

「それが気に食わねえつつつてんだよ！」

「……っ」

今まで以上に強く怒鳴りあげるアヒルに、箆也が思わず言葉を止めた。

「何々だよ！？いきなり忌だの神だの言いやがって！俺は好きで安の神なんかになったわけじゃねえーしっ、安団とかを率いる気もねえーよっ！」

「アヒるんっ…」

必死に叫ぶアヒルを見て、囁がそっと目を細める。今までの軽い調子の断り方とは違い、今のアヒルは本気で嫌がっているような、そんな様子に見えた。

「……………」

そんなアヒルを、箆也はしばらくの間、まっすぐに見つめる。

「言葉の力というものは…様々な形で受け継がれていく…」

「あっ…？」

急に違う話を始める箆也に、眉をひそめるアヒル。

「血で受け継がれる文字もあれば、先代が選んだ者に、故意に受け継がれる文字もある…」

「何の話っ…」

「だが、“あ”の文字は違う」

「……っ」

問いかけようとしたアヒルの声を遮り、箆也が強く言葉を続ける。
“あ”の文字の力は、先代が死ぬか、その力を失った後、次の神へと自動的に受け継がれる…」

「自動的に…？」

「ああ…そこに外からの選抜は、一切入らない。力が勝手に、次の神を選ぶんだ」

少し首を傾げたアヒルに、言葉を続けながら、箆也がゆっくりと顔を上げ、突き刺すような瞳を、アヒルへと向けた。

「わかるか？」

「えっ…？」

そっと問いかける箆也に、眉をひそめるアヒル。

「僕たちだって、好きであなたを選んだわけじゃない」

「……っ！」

箆也が冷たく言い放つと、アヒルが大きく目を見開いた。

「ああっ…そうかよっ…」

少し足を後退させながら、アヒルが低い声を漏らす。

「じゃあもうっ…お前らだけで勝手にやってりゃいいだろっ！」

強く怒鳴りあげると、アヒルは二人に背を向け、大きく足音を立てながら、屋上を出て行った。

「ああゝあ…怒らせちゃった…」

「………」

悪戯っぽく微笑む囁に対し、箆也は厳しい表情を見せたまま、閉まった屋上の扉を見つめる。

「神への暴言は、五十音士の規律違反じゃなかったかしら…？」

「あれは神じゃない。ただのバカだ」

「フフフっ…」

乱雑に言い放つ箆也に、そっと微笑む囁。

「だからって、あんなこと言ったって…彼が私たちの神でなくなるわけでもないでしょう…?」

「……っ」

囁の言葉に、箆也が少し顔をしかめる。

「もう決して逃れることなど出来ない」…そう言ったのは、あなた自身よ…? 箆也…」

どこか試すような笑みを、囁が箆也へと向ける。

「彼が神という存在から逃れられないように…私たちも逃れることなど出来はしない…」

囁がその笑みを浮かべたまま、屋上から、下に広がる町並みを見下ろす。

「五十音士の…この宿命からはっ…」

「……………」

風に響く囁の声を聞きながら、箆也は神妙な表情で、そっと俯いた。

「だぁっっ！もう！ムカつくなぁ！何々だぁ！？あの野郎はっ！」

屋上から教室のある階へと降りて来たアヒルは、頭を力強く掻き毟りながら、箆也への怒りを口にすることで発散していた。

——僕たちだって、好きであなたを選んだわけじゃない——

「ああ！そうかよっ！こっちも神なんて願ひ下げだっのっ！」

廊下に立つ生徒たちからの視線を集める中、アヒルはそれにも気付かない程に怒りを煮え切らせているようで、次々と言葉を放ちながら、自分の教室の方へと歩を進めた。

「だいたい忌なんて化け物と戦うとか、冗談じゃねえってっ…！んんっ？」

教室の前まで戻って来たアヒルが、不意に怒鳴り声と足を止め、教室の後ろ扉を見る。後ろ扉には、教室から顔を出した紺平の姿が見え、その対面には、数人の男子生徒が並んでいた。

「あいつらはっ…」

——ひええええっ！——

その生徒は、昨夜、忌に取り憑かれた紺平に襲われていた、あの青年たちであった。紺平に“死ね”などと書いた手紙を渡し、忌の標的にされたのである。

「なんであいつらがっ…」

アヒルが眉をひそめる中、少し困った顔を見せた紺平に、青年たちが何度も紺平に頭を下げると、逃げるようにして紺平の前から去っていく。青年たちが去ったところで、アヒルは慌てて、紺平へと駆け寄った。

「紺平っ…！」

「んっ？あ、ガァっ」

呼ばれる名に振り向いた紺平が、アヒルの姿を見つける。

「どこ行つてたの？急に転校生引っ張って出て行くから、ビックリしっ…」

「さっきの奴らっ…！何しに来てたんだっ！？」

「えっ？」

問いかける紺平の声を掻き消し、アヒルが陰しい表情を紺平へと向ける。

「あ、あああ…：昨日の手紙あるでしょ？あれ入れたの、あの人たちだったみたいでさ」

「また何か言われたのかっ！？」

「ううんっ」

「へっ？」

あっさりと首を横に振る紺平に、肩透かしを食らったように、目を丸くするアヒル。

「何かよくわかんないんだけどお、“もう二度とあんなことしないから、二度と夢には出て来ないでくれ”って謝られちゃった」

「夢っ？」

紺平の言葉を聞き、アヒルが考えるように首を捻る。恐らくは、

昨夜の出来事を、紺平と同じように夢だと思い込んでいるのだろう。だが夢であっても見たくない程に、怖い思いをしたようである。

「ハハハっ…」

忌により殺されかけたとはいえ、反省したのであれば、それはそれでいい傾向なのかも知れないと、アヒルが乾いた笑みを浮かべる。

「ありがとう、ガア」

「へっ？」

聞こえてくる言葉に、アヒルが首を傾げる。

「なんで俺に礼言うんだよ？」

「えっ？」

問いかけるアヒルに、目を丸くする紺平。

「そうだよねえ…何でだろうっ…」

紺平が、自分でも戸惑うように、首を捻る。少しの間、首を捻った後、紺平が顔を上げ、笑みを浮かべた表情を、アヒルへと向けた。「でも何か、ガアにお礼言わなきゃいけないことが、あった気がしてさっ！」

「……っ」

笑顔で答える紺平に、アヒルがそつと表情を曇らせる。

「——ありがとう…ガア……」

昨夜も同じように、アヒルへと礼の言葉を呟いた紺平。夢として認識されているとはいえ、アヒルに助けられたという感覚が、紺平のどこかに残っているのかも知れない。

「——あなたは…“安の神”……」

「……っ」

思い出される籠也の言葉に、アヒルが厳しい表情を見せる。

「別にっ…」

紺平の横を通り抜け、教室へと入っていくアヒル。

「俺は…何にもしてねえーよっ…」

「ガアっ…？」

素っ気なく言い放ち、教室の中へと進んでいくアヒルに、紺平は

そつと首を傾げた。

Word. 3 神トナル日 (3)

その日・夕方。朝比奈家。

「はあゝあゝ…」

学校から家へと帰宅したアヒルは、二階の自室へと戻り、まだまったく眠気もないながら、ベッドへと横たわった。ジャージのポケットに手を入れ、言玉を取り出す。小さな赤い玉を天井へとかざし、アヒルはまじまじとそれを見つめた。

——僕たちだって、好きであなたを選んだわけじゃない——
——でも何か、ガアにお礼言わなきゃいけないことが、あった気がしてさっ！——

籠也の冷たい言葉と、紺平の明るい笑顔が、同時に思い出される。
「俺はっ…」

「先生、私、心臓がバクっちゃって死んじゃいそうなんです。盲腸ですか？」

「んあっ？」

言玉を見つめていたアヒルが、狭い部屋の中から聞こえてくる、居るはずのない自分以外の声に、勢いよく顔をしかめる。

「それは恋盲腸だよ、ヒトミくん。そして発病の原因はこの僕っ…！」
”先生っ…！”

「……………」

アヒルがベッドから起き上がると、アヒルの狭い部屋の、壁にもたれかかり、床に堂々と座り込んで、何やら本を朗読している囁の姿があった。囁の姿を確認し、アヒルがその表情を固まらせる。

「それなら私、手術なんていらない！一生、この痛みに耐えて生きる！」
”ヒトミくっ…！”

「おいっ」

「んっ…？」

音読に徐々に熱を入れ始めた囁に、アヒルが冷たい声を発すると、本に注がれていた囁の視線が、ゆっくりとアヒルへと向けられた。

「何っ…？アヒるん。私、今…真剣に読書に取り組み中よ…？」

「お前のやってたのは読書じゃなくて音読な上に、絶対、真剣に取り組むような内容じゃなかったっ！」

真面目な表情を向ける囁に、アヒルが細かい指摘を入れていく。

「だいたい何だぁ？そのアホ臭い、デロ甘な本は！」

「これっ…？これはね…“恋盲腸”ヒトミ発病・この痛み、竜巻より廻るゝの巻”よ…」

「うわっ…聞いただけで胸やけしそうっ…」

囁が本の表紙を見せ、丁寧に題名を読み上げると、アヒルは吐き気を覚え、思わず自分の胸を押さえた。

「あなたの上のお兄さんの本棚から拝借したわ…」

「えっ…？それ、スー兄の本っ…？」

知らされる真実に、かつてない衝撃を走らせるアヒル。

「あんニヤロー…そういう趣味がっ…」

「アヒるんも読む…？」

「読むかぁ！んなもん、高一男子が読むもんじゃねえっ！」

「えっ…？けど…」

アヒルの言葉を受け、囁が、狭い部屋の中の、自分の座る位置とは逆側の方へと視線を移す。

「ふむふむむっ…」

「箆也はすこぶる真剣に読んでるわよ…？」

「……………」

囁の見つめる先には、アヒルの部屋の机に座り、真剣な表情で『恋盲腸』と書かれた本を読み耽っている箆也。そんな箆也を視界に入れ、アヒルが呆れきった表情で立ち尽くす。

「お前…」

「んっ？ハっ！」

アヒルからの冷たい視線を感じたのか、顔を上げた箆也が、慌て

て読んでいた本を閉じた。

「ち、違う！僕が読んでいたのは、“恋盲腸／＼ジャンボパフェ級の痛みと甘みを君へ／＼の巻”だ！」

「どっちでもいいわ、んなもんっ」

必死に言い繕う籠也に、アヒルがまったく興味なさそうに言い放つ。

「つーか！何でお前らが、俺ん家にいんだよっ！？」

『安附だから』

「声を揃えるな！」

二人してあっさりと答える籠也と囁に、強く怒鳴りあげるアヒル。「言っただろう？常にあなたの傍に仕えることが、僕たちの使命だ」と

「というわけで…私たち今日から、この家のお隣のお家に住むことになったから…」

「はあっ！？」

囁の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「お隣の佐々木さん一家はっ！？」

「誰も言玉を使って、“貸し渡せ”などとは言っていないぞ」

「言ったな。確実に言ったな」

恋盲腸を読みながら、白々しく答える籠也に、アヒルは冷たい視線を送る。

「そして食費もままならない、可哀想な私たちのために、朝比奈家には食を提供していただくわ…」

「はあっ！？」

さらに続く囁の言葉に、勢いよく顔を引きつるアヒル。

「バツカ言うなよっ！誰がんなこと許しっ…！」

「アーくんの友達が引っ越して来たってことで、今夜は野菜パーティーだねえ／＼！アツハツハあ／＼！」

「あなたと血が繋がってるらしき、アホそうなヒゲ親父から、許可を取った」

「……………」

アヒルの声を遮り、部屋の扉から明るさ全開で現れる父に、アヒルが一瞬にして、凍りついたように固まる。

「父さん、張り切っちゃうぞぉー！アハハアー！アハハアー！」

「……………」

アヒルが固まったままの中、父は部屋を出て、家中に笑い声を響かせて、一階へと降りていく。まだ笑い声の響く部屋で、再び三人だけとなる。

「熱烈歓迎ね…照れちゃうわ…フフっ…」

「あんのバカ親父っ…」

楽しげに微笑む囁と、拳を強く握り締め、怒りを煮えたぎらせるアヒル。

「だいたい食を提供たってなあ！この家には野菜しかなっ…！」

『……………！』

「あっ？」

二人への文句を続けたようとしたアヒルであったが、急に表情を鋭くし、顔を上げる二人に気づき、眉をひそめる。

「箆也…」

「ああ」

「な、何だよっ…？」

厳しい表情で頷き合う二人に、戸惑うように問いかけるアヒル。箆也がゆっくりと振り向き、その鋭い表情をアヒルへと向けた。

「忌の気配だ」

「何だってっ…！？」

箆也の言葉に、アヒルが衝撃を走らせ、大きく目を見開く。

「三日連続なんて…結構な出沒率ねえ…」

「とっとと行くぞ！案内しろ！」

「へっ…？」

どこか考えるように呟いていた囁が、強く言い放ちながら、足早に部屋を出て行くアヒルに、目を丸くする。

「案内しろですって：朝は“お前らだけで勝手にやってろ”とか言
ってたのに：フッフっ：」

「くだらないことはいい。行くぞ」

「ええ：」

そつと微笑む囁に、本を置き、立ち上がった簞也が、短く言うと、
囁が頷き、二人も部屋を後にした。

言ノ葉町・河川敷。

「ひええええっ！」

月も雲に隠れ、真っ暗な空の下、闇に目立つ金髪に、ピアスやネ
ックレスを大量につけた軽い感じの男が、必死に逃げ惑っていた。

「グオオオオオっ！」

「うわあああ！」

男を追うのは、まだ若い一人の女。女のものとは思えない低く重
い声を放つ、その女性の周囲を取り巻くように、黒い影が見える。

「グオオオオオっ：！“破”っ！」

「うっ：！」

女が勢いよく手を振り下ろし、前方で走る男へと衝撃波を飛ばす。
何かが向かってくることを察した男は、焦りながらも、逃げ道もな
く、大きく目を見開いた。

「ひっ：！ひえええええ！神様ああっ！」

叫びあげた男が頭を抱え、救いを求めるように神の名を呼んで、
その場にしゃがみ込む。

「“妨げろ”：」

———パアアアアーンっ！

短い言葉の後に、美しい音色が流れると、男へと向かって来てい

た衝撃波が、男の前で突然、二つに割れ、男を避けるようにして、両側を通り過ぎていった。

「へっ…?」

「グっ…」

その光景に、男と女が、それぞれ驚きの声を漏らす。

「な、何が…」

「助けてあげたわよ…?」

「えっ…?」

すぐ後方から聞こえてくる声に、戸惑っていた男が振り返る。

「あっ…」

「私は神じゃないけれど…フフっ…」

男が振り返ると、そこには、横笛を右手に、少し怪しく微笑む囁が立っていた。“さ”の力を使い、男に飛んで来ていた衝撃波を妨げたのだ。囁の横には、共に駆けつけた、アヒルと箆也の姿もあった。

「忌が取り憑いているのは、あの女か」

「グウウっ…」

唸り声を漏らす女を見つめ、箆也が表情を鋭くする。

「第六の音、“か”・解放」

箆也が制服のポケットから、アヒルと同じ赤色の言玉を取り出し、言葉を発する。すると言玉は強い光を放ち、六本の格子へと姿を変えた。箆也が軽く右手をあげると、六本の格子が重なり合って一本となり、箆也の右手の中に自動的に収まる。

「あなたは、ここで見学だ」

「あっ? 何だよ?」

アヒルの方を振り向き、言う箆也に、アヒルが素直に聞き返す。

「昨日のような無茶をされては、こちらが迷惑だから」

「んだとお!」?

「まあまあ…迷惑極まりないのもご愛敬よ…? アヒるんっ…」

「なっにご愛敬だ!」

宥めようとする囁であったが、その言葉がさらにアヒルを怒らせる。

「とにかく、今日はあなたは…」

「は、早くあいつをぶっ倒してくれよっ！」

『……っ?』

あれこれとモメながら話していた三人が、すぐ前で座り込んでいる男の声に、同時に顔を上げる。男は忌に取り憑かれた女を指差し、必死の表情で三人を見上げていた。

「とつとあいつを、俺の前から消し去ってくれよっ！」

「……っ」

男の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「彼女…あなたの恋人とかじゃないの…?」

「んなわけねえーだろっ！ちよつと優しくしてやったら、つけ上がつて、付き纏ってきやがったんだよっ！」

囁の問いかけに、どこか煩わしそうに答える男。

「ウザいっつってんのに、あのクソ女っ！ちつとも付き纏うのやめなくてっ…！そしたらっ…！」

「忌が取り憑いたというわけか」

「ありがちな話ね…」

男の言葉の途中で、納得したように頷く箆也と囁。男の放った悪意ある言葉に女が傷つき、その心に忌が取り憑いたのであろう。そして、女を傷つける言葉を放った男を、今、襲おうとしている。

「グオオオオオっ…！」

「んっ」

さらに激しく声をあげる、忌の取り憑いた女に、箆也が再び正面を見つめ、その瞳を細めて、右手の鉄格子を構えた。

「さて、とつとと…」

「………」

「んっ？」

格子を構えた箆也の横から、アヒルが足を進め、前へと出て行く。

「おい、何をっ…」

「……っ」

「えっ…?」

箆也が戸惑うように見つめる中、男のすぐ目の前に立ったアヒルが、鋭い表情を見せ、勢いよく右足を振り上げた。

「どわあああ!」

「なっ…!?!」

迷いなく振り下ろされたアヒルの右足が、男を横へと勢いよく吹き飛ばした。蹴り飛ばされた男を目で追いながら、箆也が大きく目を見開く。アヒルがさらに歩を進め、蹴り飛ばされた男のもとへと歩み寄っていく。

「ぐぎゃん! がびん! ぐほっ! ぷぶんっ!」

「なっ…」

男にさらに、殴る蹴るの暴行を加えるアヒル。あまりの驚きに、大きく口を開いた箆也が、少し右手を震わせながら、その光景を見つめる。

「何をしているっ!?!」

「あっ?」

「ぐ、ぐぷっ…」

強い口調で問いかける箆也に、アヒルがしかめっ面で振り返る。アヒルに胸倉を掴まれ、立たされる格好となっている男は、頬を腫らし、鼻血を垂らして、力なく頭を垂れていた。

「アヒるん…忌に取り憑かれてるのは、あっちよ…?」

「わかってるっ」

囁の言葉に、短く頷くアヒル。

「ムカってきたから殴った」

「どんな単純な思考回路をしているんだ! あなたはっ!」
素直に答えるアヒルに、箆也が責めるように言い放つ。

「どうだあ? ちったあ反省したかあ?」

「ひゃい…しみゃした…」

顔を覗き込み、問いかけるアヒルに、男が先程までとは態度を変させ、何とも素直に頷く。

「良おーし！」

頷いた男を見て、満足げに微笑むアヒル。

「何が良しだっ」

「あっ？」

呆れたように聞こえてくる声に、アヒルが振り向く。

「そいつを殴り倒して、一体何になる？ 僕たちの敵は、忌であってっ……」

「俺の敵は忌じゃねえーさっ」

「何っ……？」

あっさりと言い切るアヒルに、箆也が眉をひそめる。

「忌じゃ……ないっ……？」

「ああっ」

戸惑うように聞き返した箆也に、アヒルが明るい笑みを浮かべる。

「だって、忌に取り憑かれてんのは、傷つけられた人間だろ？ そいつを倒すって、何か違う気するしっ」

「……っ」

続くアヒルの言葉に、箆也がさらに眉間に皺を寄せる。

「——あいつが悪いつてのか……？ ふざけんじゃねえっ！ ——」

昨夜の紺平の時も、アヒルは紺平は何も悪くないと叫び、紺平ごと忌を傷つけた箆也に、ひどく怒りを向けていた。

「なら、傷つけた人間が敵だとも言える気か？ 言っておくが、そいつをいくら殴り飛ばしても、傷ついた方の人間を攻撃しなければ、取り憑いた忌を倒すことなどっ……」

「臭いはもとから断つて言うだろっ？」

「え……？」

すぐさま答えるアヒルに、首を傾げる箆也。

「忌は傷ついた人間の心に巣食うんだ」

アヒルが単純そうな、笑みを浮かべる。

「だったら俺の敵は、言葉に傷つけられた、その心の痛みだっ！」
「……っ！」

アヒルの言葉に、箆也が大きく目を見開く。

「だから俺は痛みを倒すっ」

「わけのわからないことをっ…！それとそいつを殴ることと、一体何の関係がっ…！」

「幼稚園で習わなかったかあ？」

「えっ…？」

どこかムキになって言い返そうとした箆也の言葉を遮り、アヒルが軽い口調で問いかける。

「ひどいこと言ったら、ちゃんと謝れてよお！ほらっ！」

アヒルが掴んだ胸倉を動かし、男を、忌の取り憑いている女へと向き直らせる。

「ひどいこと、色々と言ってすみませんでしたっ…本当にごめんなさいっ…」

「グっ…」

ボロボロになった顔で、謝罪の言葉を述べ、深々と頭を下げる男。男から逸らすことのない視線を受け、女がかすかに、その表情を動かした。

「グウウウっ…！」

『……っ！』

大きく声を漏らす女に、箆也たちが一斉に振り返る。呻くような苦しげな声を響かせる女は、深く頭を抱え、もがくように、体を揺れ動かしていた。

「何だ？何が…」

「グアアアアアっ…！！！」

「うっ…！」

———パアアアアアンっ！

女がより一層、大きな声を放つと、女の全身から強い白色の光が放たれ、籠也たちは、闇夜に馴染んでいた目を思わず伏せた。

Word. 3 神トナル日 (4)

「えっ？」

「あ…あっ…」

光が収まると、何やら力の抜け切った様子となった女が、ゆつくりと目を閉じ、その場に倒れ込んでいった。倒れた女に、箆也たちが戸惑いの表情を見せる。

「彼女は一体…」

<グググっ…！何だっ…！？>

『…っ！』

倒れた女を見て、囁が首を傾げていたその時、上空から、先程まで女から聞こえていたはずの低い声が落ちてきて、三人は勢いよく顔を上げた。

「忌っ…！」

<何だ！？何故、あの女の体から出たんだっ…！？>

暗い夜空に浮かんでいるのは、空の闇と見分けもつきにくい、不気味な黒い影であった。女の体から出てしまったことを、忌は自分でも戸惑っている様子である。紺平の時の忌と、同じ反応であった。

「何故、また忌が…」

「よっしゃあ！これで心おきなく、攻撃出来んなあ！」

「ぐぷっ…」

考え込むように首を捻る箆也の横から、気合いの入った様子のアヒルが、胸倉を掴んでいた男から手を離し、前へと出る。アヒルから解放された男は、その場に力なく座り込んだ。前へと出たアヒルが、ジャージのポケットから言玉を取り出す。

「第一の音、“あ”・解放っ…！」

アヒルの言葉に反応し、言玉が強い光を放つと、言玉はアヒルの右手の中で、その姿を銃へと変えた。

「よしっ！」

三度目となり、違和感もなくなってきた様子で、銃を構えるアヒル。

「行くぜっ…！」

アヒルがやる気満々で、忌のもとへと飛び出していく。

「……………」

「箆也…私たちも手伝わないと…彼一人じゃ…」

忌へと駆け出していくアヒルを見つめ、茫然と立ち尽くしている箆也へと、囁が声をかける。

「昨日と同じだ」

「えっ…？」

「忌が自然に、宿主の体から飛び出た。あんな現象、見たことも聞いたこともない。あれは一体っ…」

「……………」

戸惑いの表情を見せる箆也を見つめ、そっと目を細める囁。

「彼が…彼の言うように、宿主の傷ついた心の痛みを倒したから…じゃないの…？」

「謝らせただぐらいで、あの女の心の傷をすべて癒やしたとでも言うのか？バカなっ…」

囁の言葉を、箆也はすぐに否定する。

「第一、昨日の紺平とかいう者の時は、謝らせても忌は出なかったじゃないかっ」

「でも昨日は昨日で…彼は、ちゃんと忌を出したわ…」

「んっ…」

鋭く切り返す囁に、箆也が思わず口ごもる。

「どうなっているのかは、よくわからないけれど…一つだけわかることは…」

倒れた女の方を見て、囁がそっと口端を吊り上げる。

「彼が目的としているのは…忌という悪霊を“倒す”ことではなく…言葉に傷ついた人間を“救う”こと…」

囁が目を細め、駆けていくアヒルの姿を、その目に捉える。

「彼は今までの五十音士とは違う…まったく新しいタイプの人なのかも…フフフっ…」

「そんな凄い奴とは思えないが…」

「あら…？知らないの…？箆也…」

「…っ？」

振り向く囁に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「神は人を救うのよ…？フフっ…」

「おっしゃっ！」

＜言玉っ…！五十音士かつ…！＞

銃を構えるアヒルを見て、上空を舞う忌が、焦りの声をあげる。

「行くぞっ！」

＜クっ…！＞

焦る忌に対し、迷うことなく、引き金を引くアヒル。だがいつものように、アヒルの放った弾丸は、明後日の方向へと、飛び出していく。

＜フハハっ…！一体、どこにつ…！＞

「“当たれ”っ…！」

＜何っ…！？＞

自分とはまったく違う方向へと飛んで行った弾丸を見て、余裕の笑みを浮かべていた忌であったが、アヒルが“あ”のつく言葉を発すると、飛んで行ったはずの弾丸が、忌へと舞い戻って来る。

＜言葉の力かつ…！クソっ…！＞

空を飛ぶように逃げても、迷うことなく向かってくる弾丸に、忌が悔しげな声を漏らした。

———パアアアアン！

＜ウウっ…！＞

避ける術もなく、忌がアヒルの放った弾丸に貫かれる。

「おっしゃあ！これでっ…！」

<ウウ…ウっ…？何ともない…>

「へっ？」

弾丸が貫き、黒い影の中心に出来たはずの風穴はすぐに塞がり、苦しげな声を漏らしていたはずの忌も、平気そうな自分に戸惑いながら、顔を上げた。そんな忌の様子に、アヒルが目を丸くする。

「あ、あれっ？何でっ…」

「言葉への集中が足りないからだ」

「えっ？」

戸惑うように右手の銃を見下ろしていたアヒルが、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「弾丸に込められた力が弱すぎる。あれでは、忌は倒せない」

アヒルが振り返ると、そこには箆也が立っていた。

「けどっ、昨日と一昨日はっ…！」

「自分の命とお友達の命が懸かってたんだもの…：火事場の馬鹿力ってやつじゃない…？フッフッフ…」

「へっ？」

箆也の横に立つ囁の言葉に、アヒルが間の抜けた表情を見せる。

「言葉への集中って、どうやるんだよっ？」

「簡単に言えば…：言葉に強く気持ちを乗せるといったところかしら…？でも、すぐに使いこなせるようなものじゃないわ…」

「だから今日は、あなたは見学だと言ったんだ」

解説する囁の横で、箆也が少し肩を落とす。

「僕たちから力の使い方を習って、ある程度のが出来るようになるまではっ…」

<いつまで、くっちゃべっているっ…！？>

「…っ」

言葉を遮られた箆也が、眉をひそめ、顔を上げる。

<随分と余裕だなあっ！>

空に高々と舞い上がり、三人を遥かに高い位置から見下ろす、不気味な笑みを浮かべた忌。

「当たり前だ。どこに焦る理由がある？」

「そうねえ…いくらアヒるんが使い物にならないからって、私と箆也がいるんだし…」

「だってが使い物にならないだっ！」

右手の横笛をあげながら、余裕の笑みを見せる囁に、アヒルが強く突っ込みを入れる。

「あんまり調子につ…乗るんじゃないぞっ！“消”^{シヨウ}っ…！>』…っ！』

忌がその言葉を発した途端、忌の黒い影のような体が、消えていく。夜の闇に紛れるのではなく、完全に視界から消える忌に、アヒルたちが大きく目を見開いた。

「ど、どうなってるんだ！？忌がっ…！」

「“消”の言葉がっ…しまったな…」

焦りの表情を見せるアヒルの後ろで、箆也が険しい顔を作る。

「気をつけろ、どこから狙ってくるかっ…うあっ！」

「箆也っ…！？」

注意を促していた箆也が、突然、何かに殴られたかのように、後方へと吹き飛んでいく。

「何だ！？まさか忌がっ…！」

<“破”…>

「…っ」

かすかに聞こえてくる声を、立てた耳で拾い、表情を厳しくする囁。

「アヒるん、こっちっ…」

「うわわっ！」

囁がアヒルの腕を掴み、強く引っ張り上げる。

——バアアアアンっ！

「……っ！」

アヒルたちが先程までいた場所を駆け抜けていく衝撃波を見て、アヒルが大きく目を見開く。囁が引っ張ってくれていなければ、直撃を受けていただろう。

「姿が見えないなんて…厄介ねえ…」

「うう…んっ…」

困ったように呟く囁の横で、少し考え込むように俯くアヒル。

「んっ？あっ」

首を捻っていたアヒルが、何やら思いついたのか、丸く口を開いて、顔を上げた。

「思いついた！」

「アヒるん…？」

ポンと手を叩き、勢いよく立ち上がるアヒルを、囁が戸惑うように見上げる。

「痛つつつつ…」

一方、姿の見えない忌に殴り飛ばされた籠也は、口端の血を指で拭い、殴られた頬を押さえて、ゆっくりと地面から起き上がった。

「姿が見えないんじゃ仕方ない。少々荒っぽいが、あの言葉を…んっ？」

右手で鉄格子を握り直し、忌を倒す策を講じていた籠也が、勢いよく立ち上がり、囁のもとから離れ、河川敷の真ん中へと無防備に立ち尽くすアヒルの姿を見つめる。

「なっ…！」

アヒルの行動に、またも顔をしかめる籠也。

「何をしているっ…！そんなところに立っただけでは、忌の攻撃的にされるぞっ…！」

「まあ見てろってっ」

「はあっ…！」

怒鳴りあげた箆也の方を振り返り、どこか余裕の笑みを浮かべるアヒルに、箆也の表情がさらに引きつられる。

「さあーてっ…」

箆也から前方へと視線を戻し、その表情を鋭くするアヒル。

「来いっ…！」

<来いだあっ…！？>

アヒルの言葉に答えるように、どこからか聞こえてくる忌の声。
<いいぜえ！そんなに殺されたきゃ、望み通りにしてやるよお！>

姿は見えないが、忌の声だけがアヒルへと差し迫った。

「アヒるんっ…！」

「クっ…！」

それぞれの武器を構え、何とかしようと身を乗り出す箆也と囁。

「……っ」

二人とは異なり、いたって落ち着いた表情を見せたアヒルが、前方を見上げ、右手の銃をゆっくりと構えた。

「えっ…？」

「何を…？」

誰もいない空へと銃を構えるアヒルに、箆也と囁が眉をひそめる。

「あ…」

銃を構えたアヒルは、自らの力の文字を口にした。

“赤くなれ”

——パアアン！

言葉とともに引き金が引かれ、弾丸が放たれる。

『あっ…！』

次の瞬間、大きく目を見開く箆也と囁。

<な、何いいいっ…！？>

激しく驚く声とともに、暗い夜空に、真っ赤に色を変えた忌の姿が、浮かびあがった。一際目立つ自らの体を見て、忌が焦りの表情を見

せる。

「こんにちはあゝ」

<グっ…!>

笑顔で手を振るアヒルに、忌が険しい表情を作る。

<何故だ!? 姿は消したはずなのに、何故、弾丸の狙いを定めることがっ…!>

「無防備に立ってる相手ほど、正面からぶん殴りたくなるもんはねえーだろっ?」

<ウっ…!>

余裕すら感じる口調で言い放つアヒルに、赤く染まった忌の顔が歪む。

<このっ…! 五十音士ごときがっ、調子に乗るなあっ!“破”っ…!>

真っ赤な手を振り下ろし、アヒルへと衝撃波を放つ忌。

「囁」

“妨げろ”…」

アヒルが名を呼ぶと、すでに横笛を構えていた囁が言葉を発し、美しい音色を奏でる。

<何っ…!?!>

アヒルのすぐ前で二つに分かれ、アヒルを避けるようにして後方へと流れていく衝撃波に、忌がさらに表情を引きつる。

<グっ…!>

忌が空中で向きを変え、その場から逃げ去ろうとする。

「籠也」

「……っ」

アヒルが名を呼ぶと、いつの間にか立ち上がっていた籠也は右手の鉄格子を構え、その目つきを鋭くした。

“囲え”」

<何っ…!?!>

籠也が空へ向け、勢いよく格子を投げ放つと、空中で格子は六本

へと分かれ、逃げようとしていた忌の四方を囲み、その動きを封じた。

<このっ…!>

「……っ」

格子の中でもがく忌を見つめながら、アヒルが再び銃を構える。

「大丈夫かしら…? アヒるん…」

「黙って見ている」

「え…?」

心配するように呟く囁に、まったく心配していない様子で言い放つ籠也。

「強い気持ちを…」

表情を鋭くし、銃を握る手に力を込めるアヒル。

「言葉に乗せるっ…!」

アヒルの瞳が、強く輝く。

「“当たれ”っ…!!」

大きな声とともに、放たれる弾丸。弾丸は言葉の力を受け、まっすぐに忌へと向かっていく。

<ウっ…! ウウっ…!>

迫り来る弾丸に、歪む忌の表情。

<グアアアアアアっ!!>

———パアアアアアーンっ!

弾丸に貫かれた真っ赤な忌は、眩いほどの白い光を放って、今度は完全に、その姿を消した。

「ふいっ」

忌が消えたことを確認し、力の抜けたように、銃を下ろすアヒル。下ろされた銃は、自動的に言玉へと戻った。

「お疲れ様…アヒるん…」

「おうっ、囁もさっきはサンキューなっ」

同じように横笛を言玉へと戻し、歩み寄って来る囁へ、アヒルが笑顔を向ける。

「お前もっ」

「……っ」

同じように歩み寄って来た箆也は、アヒルに笑顔を向けられると、すぐさま顔を背けた。

「見たかぁ？ “赤くなれ” と “当たれ” だけでやっつけたぜっ！」

「まあまあだな」

「フフっ…」

素っ気なく答える箆也を見て、囁が零すように微笑む。

「すっかり忌退治が板についてきた感じじゃない…？ アヒるん…」

「言っとくけどっ、俺は五十音士として戦う気も、安団とかを率いる気も、ねえーもんはねえーからなっ！」

「ハイハイ…わかってるわよ…」

「けどっ…」

『……っ？』

そっと言葉を付け加えるアヒルに、箆也と囁が視線を送る。

「俺は…見てしまったものを、知ってしまったものを…無かったことに出来る程、脳なしじゃねえっ…」

「あら、意外っ」

「うるせえよ！お前は！」

茶々を入れる囁に、アヒルが全力で突っ込む。

「それにっ…」

怒鳴った後、再び真剣な表情となるアヒル。

「目の前で苦しんだり、悲しんだりしてる人間を、見て見ぬ振り出来るほど、器用でもねえーんだっ」

遠くを見ていたアヒルが、ゆっくりと二人に顔を向ける。

「だから戦ってやるよっ！仕方ねえーから！」

『えっ…?』

面倒臭そうに言い放つアヒルに、少し目を開く籠也と囁。

「ただし！俺のやり方でだからなっ！文句は言わせねえぞ！？」

『……っ』

注意するように付け加えるアヒルに、二人の口元が緩んだ。

『仰せのままに…我が神…』

そう言う二人は、アヒルへ向け、深々と頭を下げた。

Word. 4 へつづく。

Word. 4 言葉ノ行方 (1)

——我慢した。ずっと、ずっと、我慢してた。

「あなたの子でしょう!？」

「お前の子だろうっ!？」

お父さんとお母さんの争う声。私を差す、冷たい指。

「お前が生んだんだろうっ!」

「私だってあんな子!好きで生んだんじゃないわ!」

「……………」

苦しい言葉。痛む言葉。これを我慢すれば、我慢しければ、いつかは私を見てくれる日が、愛してくれる日が来るって、そう信じてた。

「ご両親がどちらも、あなたの親権を放棄しました」

「えっ…?」

どんなに我慢しても、得られないものがあるって知った。

「……………」

だから私は、我慢することをやめたの……—

言ノ葉町三丁目、小さな八百屋さん、『あさひな』。

「う痛てててっ…」

朝比奈家一階の居間では、頭に大きなコブを作ったアヒルが、コブを氷で冷やしながら、苦々しい表情を見せていた。

「あれ…?今日はアヒル君が手当て中…?珍しいね…」

台所から朝食を持って運んで来たツバメが、アヒルの様子を見て、少し驚いたように呟く。朝一番のアヒルと父の攻防では、手傷を負わされるのは、いつも父の方だったので、アヒルが攻撃されているというのは、珍しい話なのである。

「ハッハッハッハ！アーくんにもついに、この偉大な父の偉大さを思い知る日があつ：！」

「コイツが親父に加勢して、大根投げつけてきやがったんだよっ」高々と笑いあげる父を完全に無視し、ブスっとした表情でアヒルが指差したのは、アヒルのすぐ横に座り、ごく自然に朝食を食べている籠也であった。アヒルに指を差され、籠也が箸を止める。

「我らが神のお父上なんだ。それに加勢するのは、当然のことだろう」

「その前に我らが神の身を守れってのっ」

何の悪びれもなく言い放つ籠也に、アヒルが勢いよく表情をしかめる。

「だいたい、何だってコイツが、親父と一緒に起こしにくんだよっ」

「食事を提供してもらおう礼だ」

「どこが礼なんだよ！」

朝比奈家の隣人・佐々木一家から、言玉の力を使って無理やり家を奪い取り、アヒルの家の隣に住み始めた籠也と囁。父の適当な約束のお陰で朝比奈家は、そんな二人に食を提供することとなったのである。

「何だあ？囁ちゃんに起こしてもらおう方が良かったってかあ？このエロガキめっ」

「誰もんなこと言ってねえだろうがっ！てめえと一緒にすんなっ！」茶化すように言い放つスズメに、アヒルが全力で怒鳴り返す。

「あらっ：？」

そんな二人の会話を聞いて、こちらもごく自然にテーブルにつき、朝食を食べていた囁が、箸を止め、ゆっくりと顔を上げる。

「ごめんなさい、アヒるん：私、そんなアヒるんの秘めたる想いに、ちっとも気付かなくて：」

「心配すんな。まったく秘めてねえっ」

どこか申し訳なさそうな表情を見せる囁に、アヒルがきっぱりと言い切る。

「アヒるんは私の神様だから…その想いに応えてあげたい気持ちは山々なんだけど…」

「だから秘めてねえつつってんだろうがっ！」

「早く食べないと遅刻するぞ？神」

まだ申し訳なさそうに話を続ける囁に、立ち上がって怒鳴りあげるアヒル。その隣で座ったままの箆也が、落ち着いた様子で声をかける。

「アッハッハ！神神って面白い奴らだなあ！新手の新興宗教かあっ？ハハハっ！」

「普通は怪し過ぎて、笑えねえーと思うけどなっ…」

アヒルは注意したというのに、それを聞きもせず、皆の前でアヒルを神扱いする箆也と囁に対し、何の不思議さも抱いていない様子で、豪快に笑いあげているスズメ。

「だあーい丈夫だって！恋盲腸好きの奴に、悪い奴はいねえーからっ！」

「あんなデロ甘な本読んでるだけで、十分、犯罪だろうがっ」

「何をお！？恋盲腸はなあっ、俺の憧れ、メロりんこ斉藤先生作の、俺のバイブルだぞ！？」

「どう考えたって、十七の男が読むもんじゃねえーだろっ！」

熱く語るスズメに、アヒルもまた、熱く怒鳴り返す。

「心配いらないよ…アヒルくん…」

「へっ？」

後ろからポンと肩を叩かれ、アヒルが戸惑うように振り返る。

「僕も…天国ってあると思うし…」

「ごめん。何の話？」

真面目な表情で言い放つツバメに、眉をひそめるアヒル。

「アークくん！父さんは神様ってねえっ…！」

「おはようございまあーすっ」

「あ、紺平っ」

「ぐほおおう！」

満面の笑みで神について語ろうとした父を、アヒルが紺平の声に振り返ると同時に、蹴り飛ばす。

「よう！」

「おはよう、ガアって、あれっ？」

いつものように、店の通用口から居間の方へとやって来た紺平が、手を上げるアヒルに笑顔を向けた後、ごく自然に居間で朝食を食べている籠也と囁の姿を見つけ、目を丸くする。

「君たち、確か転校生のっ…」

「……っ」

朝食を終えた籠也が、きちんと手を合わせた後、立ち上がり、ゆつくりと紺平の方を振り返った。

「転校生の神月籠也です。おはようございます、小泉君」

「あ、お、おはようっ」

背景に輝きが見えそうな満面の笑顔で挨拶を向ける籠也に、紺平が少し戸惑いながら挨拶を返す。

「今日も初夏の一陣の風のように、爽やかでいらっしやいますね」

「えっ？そ、そうかな？どっちかっていうと、神月君の方が爽やかだと思うけどっ…」

「………」

紺平に、上手いのかもよくわからない誉め言葉を向ける籠也を見て、アヒルが呆れきった顔を見せる。

「さあ、では学校へ行きましょうか。朝比奈君」

「ああっ？」

キラキラとした笑顔を向けてくる籠也に、眉をひそめるアヒル。

「何だあ？俺にまで、その気色悪い態度取るんじゃないやねっ…」

「あいつに忌のこと、思い出させたくないんだらう？」

「うっ…」

アヒルの方を振り向いた籠也が、紺平に見えないようにキラキラ笑顔を消し、鋭い視線で言い放つ。籠也が“神”など呼んで、いつもの態度を取って、紺平に一昨日の忌のことが夢ではなかったと

思われることは、確かにマズいのだ。

「そ、そうですねっ。い、行きましようかつ、か、神月く、くんっ」
「色々とギリギリねっ…フフフっ…」

無理やり作った笑みで、慣れない言葉を並べるアヒルの姿に、囁はどこか楽しげに微笑んだ。

「へえー、じゃあガアとは遠い親戚なんだあっ」

「ええ、遠すぎて、最早親戚とは呼べない程の親戚ですけどね」

朝比奈家を出た四人は、皆で仲良く学校へと向かっていた。何故、朝比奈家で朝食を食べていたのかという紺平の問いかけに、籠也は爽やかな笑顔で嘘を並べた。

「それって最早、他人じゃねえーかつ」

「人類、皆、兄弟よ…？アヒるん…フフフっ…」

二人の前方を歩きながら、ひっそりと突っ込みを入れるアヒルに、囁が横から微笑みかける。

「それで昨日から知り合いっぽい空気出してたんだねえー。ガアも言ってくれば良かったのにっ」

「まあ色々あってな…ハハハっ…」

背中に向けられる紺平の言葉に、アヒルが空笑いを零した。

「おぉーいっ！朝比奈！」

「あんっ？」

前方から大きく名を呼ばれ、少し俯いていたアヒルが、眉をひそめながら顔を上げる。

「ここで会ったが百年目えー！」

「毎日会ってます、アニキっ」

「うるっしやーいっ！」

アヒルたちの行く道の前に立ち塞がったのは、いつものごとくサングラスを掛けたアニキと、その取り巻きのヤンキー学生集団であ

った。子分の指摘に、アニキが朝から全力で怒鳴りあげる。

「今日こそっ、今日こそコテンパンのパンナコッタにしてやるぞお！朝比奈っ！」

「あらっ…？我が神に手をあげる気かしら…？」

「んんっ？」

アヒルを指差し、アニキが力強く言い放ったその時、アヒルの横から足を踏み出した囁が、アヒルの前へと立って、アニキへと鋭い瞳を向けた。

「なら…塵^{ちり}へと変えてあげないとね…フフフっ…」

「待て待て待てっ！」

不気味に微笑む囁を、アヒルが必死に止めに入る。

「塵にするなら、俺がする！」

「あっ…そっち…？」

「ふっはああっ！！」

「あっ？」

囁に訴え出たアヒルが、前から聞こえてくる大きな声に振り返る。

「く、黒髪ロング大和撫子風神秘的美少女っ…！ちょう好みのタ
イプ！」

「はあっ？」

サングラスの向こうの瞳を輝かせるアニキに、アヒルが大きく首を傾げる。

「は、初めまして！お嬢さん！」

「えっ…？」

アニキが小走りで駆け抜け、囁のすぐ目の前へと立つ。

「僕っ、安二木^{あにぎ まきむろ}守！十六歳！乙女座のA型でっす！」

髪を掻き上げ、格好良くはないのだが、格好をつけるアニキ。

「よろしければ、僕と交換日記からのお付き合いなど一つっ…！」

「あらっ…」

「ぐほおおう！」

積極的に好意をぶつけたアニキの腹部に、囁の重い拳が炸裂した。

ドスンと響く音とともに、アニキの口から声にならない声が漏れる。

「ぐ、ぐぷっ…」

『アニキいいー!!』

「ごめんなさい…私、弱い人に興味ないのっ…フフっ…」

倒れ込んだアニキへと駆け寄る子分たち。地面に横たわったアニキを見下ろして、囁はそっと微笑んだ。

「はあっ…」

「っていうか、あの人、ホントに“アニキ”って名前だったんだあ
呆れたように肩を落とす箆也の横で、紺平はどこか感心するように
呟いた。

「んだよお、俺がボコろうと思ってたのにつ…」

「おっはよう！バカガア！」

「んっ…！」

背後から聞こえてくる声に、アヒルがその瞳を鋭くし、左腕を振り上げた。

「……っ！」

後方からアヒルの頭部へ向けて勢いよく振り下ろされた鞆を、素早く振り向いたアヒルが、振り上げた左腕で完璧に受け止める。

「チっ…！防がれたかつ」

「てめえの攻撃はワンパターンなんだよっ、クソ想子っ」

アヒルの受け止めた鞆を下ろしたのは、悔しげな表情を見せた、アヒルの幼馴染み・想子であった。

「おはようっ、想ちゃん」

「おっはあ、紺平っ」

慣れた様子で笑顔を向ける紺平に、想子も軽い挨拶を返す。

「奈々瀬さんもっ」

「えっ！？あ、あっ、お、おはようっ」

紺平が想子の後方を覗き込むと、そこには想子の後ろに身を隠すようにして立っている奈々瀬の姿があった。紺平に見つけられた奈々瀬が、少し焦るように挨拶をする。

「何だ、奈々瀬もいたのか」

「お、おとおおはよう！朝比奈クンっ…！きよ、今日も絶好の部屋干し日和だねっ…！」

「そ、そうかあ？俺ん家は外に干してたけどっ…」

声を震わせながら、妙に気合いの入った挨拶をする奈々瀬に、アヒルが少し呆れた表情で答えた。

「あれっ？」

想子が、アヒルや紺平と並んで立つ、箆也と囁の姿に気づく。

「なあ〜んで、噂の転校生二人と一緒に登校してんのお？」

「うえっ？」

想子の問いかけに、焦った様子で、思わず声をひっくり返すアヒル。

「おはようございます、お二方。朝から煌めくようにお美しいですね、眩暈がしそうですよ」

「こっちが眩暈するっての…」

外面用のきらきら笑顔で挨拶をする箆也に、アヒルはひっそりと顔を引きつりまくる。

「神月君と真田さん、ガアの遠い親戚で、今、ガアの隣の家で一緒に暮らしてるんだってっ」

「へえ〜、親戚い」

紺平からの説明を受け、想子が感心したように二人を見つめる。

「ガアの親戚にしては美形よねえ。血が遠いからかなっ？」

「うっせえ！クソ想子っ！」

嫌みっぽく言い放つ想子を、アヒルが睨みつける。

「し、親戚って、二人、ともっ…？」

「へっ？」

遠慮がちではあるが、真剣な瞳で問いかけてくる奈々瀬に、目を丸くするアヒル。

「あ、ああっ、一応っ」

「そ、そうなんだっ」

頷くアヒルを見て、奈々瀬は満面の笑みを浮かべると、どこか満足した様子で想子の方へと駆け寄っていった。

「何でそこで笑顔…？」

「我が神は秘めたる想いには鈍し、と…」

「あっ？」

「こっちの話よ…フフフ…」

首を傾げるアヒルに、囁はどこか意味深に微笑んだ。

その日・放課後。

「…で、何で俺はまた、国語資料室の掃除やらされてんのかねえ…」

山積みの本を抱えながら、自分に問いかけるように呟くアヒル。

「昨日呼び出したのに、お前がばっくれるからだろうが」

「ばっくれたんじゃないっしょ！昨日はアイツらが来て、ごたごたしてたから、つい忘れちゃったってゆうかっ…」

資料室横の机で本を読みながら言い放つ恵に、アヒルが思わず言い返す。昨日、自分の机を踵落として叩き割ったアヒルは、放課後、恵から資料室へ来るよう言われていたのだが、籠也と囁が急に転校してきたこともあって、すっかり忘れ、そのまま家に帰ってしまっただけであった。

「と、とにかく、掃除終わったし、もういいだろうっ？」

「ああ。あっ、ついでにコレも片しといってくれっ」

「おっとっ」

恵が投げ放った分厚い本を、アヒルが両手で抱えるようにして受け止める。

「何だぁ？これっ」

「国語辞典。中坊レベルってどこかねえ」

「ふうんっ」

答える恵の言葉を聞きながら、興味なさそうに辞典を見るアヒル。

「トンビが読むには、ちょっと難しいかもなあ」

「うっせえな！俺はアヒルだっつってんだろうがっ！」

からかうように言い放つ恵に、アヒルが全力で怒鳴り返す。

「だいたい誰が辞典なんて、クソ面白くなさそうなもん、読むかよっ」

「そうかあ？結構、面白いよお。“あ”から順番に読んでったりするとさあ」

「“あ”っ…？」

その恵の言葉を聞き、アヒルがハツとした表情を見せる。

——まずは言葉の種類を増やすことかしら……
——戦いで使えそうな“あ”から始まる言葉を探すのよ……

「“あ”から順番に、か…」

囁の言葉を思い出しながら、アヒルが辞典のページをめくり、辞典の一番初めに記されている“あ”の文字を見つめる。

「恵先生！これっ、俺借りていいっ？」

「へっ？あ、ああ。いいぞお」

「サンキュ！」

辞典を閉じたアヒルが、恵へと笑顔を向ける。

「んじゃあ俺、帰るわ！さいならあ〜！」

「あ、ああっ、気を付けてな」

辞典を左手に持ったまま、右手で床に置いてあった鞆を引っ掛けたアヒルは、足早に資料室を去っていった。扉が閉まると、恵が軽く肩を落とす。

「まあ精々、頑張って勉強しなあ」

恵が口端を吊り上げる。

「“神様”っ…」

「ふいっ、やっと帰れっ…って、あれっ？」

「遅い」

「待ちくたびれたわ…アヒるん…」

資料室を後にし、昇降口へと降りていったアヒルを、出迎えるように下駄箱の前で待っていたのは、箆也と囃であった。降りて来たアヒルに、二人はどこかうんざりとした表情を向ける。

「んだよ？待ってたのかあ？先帰ってて良かったのに」

「そういうわけにはいかない。僕たちはっ…」

「安附だからって？そりゃご苦労なこって」

「んっ…？」

アヒルと箆也が言葉を交わす中、囃がアヒルの左手に握られた、例の国語辞典に気づいた。

「アヒるん…それ…」

「んっ？ああっ、恵先生が貸してくれたんだ。囃、辞書引けとか言ってたろ？だから丁度いいと思ってさっ」

「ふう…ん…アヒるんが辞書をねえ…」

笑顔で答えるアヒルに、囃がどこか意外そうに呟く。

「さっ、とっとと帰ろうぜえっ」

上履きを靴へと履きかえたアヒルが、二人よりも先に進み、校舎の出口へと歩いていく。

「んっ…？」

アヒルに続こうとした囃が、下駄箱の前で止まったままの箆也に気づき、不思議そうに振り返った。

「箆也…？どうしたの…？」

「いやっ…」

問いかける囃に、箆也が鋭い表情を見せる。

「随分とタイミングよく、辞書が出てくるものだと思ってな」

「……っ」

箆也の言葉に、眉をひそめる囃。

「考え過ぎじゃない…?」

「……………」

そっと微笑む囁に対し、箆也はどこか考え込むように俯いた。

Word. 4 言葉ノ行方 (2)

「嗚呼、愛、合う…ううん、何かいまいち、使えそうな言葉がねえーよなあ」

「当然だ。そう簡単に見つかるものじゃない」

「まあまあ…アヒルんが辞書読んでるだけ、進歩じゃない…？フフっ…」

帰り道を歩きながら、辞書の“あ”のページから順番に読み、大きく首を傾げるアヒル。冷たく指摘する箆也に、囁は宥めるように笑みを向けた。

「けっどさあ、もう言葉に気持ちを乗せるってヤツも出来たんだし、無理に他の言葉増やさなくてもっ…」

「阿呆」

「ああっ!？」

箆也の方を振り向いたアヒルが、急に飛ばされる罵声に、勢いよく顔をしかめる。

「今まで倒してきた忌は、全てト級の忌だ」

「ト級？」

「忌は、強さによって、イロハ二ホヘトの七段階に分けられるのよ…」

首を傾げながら振り向いたアヒルに、囁が丁寧 to 答える。

「イ級が一番強くて、ト級が一番格下…」

「じゃあ今まで俺が倒してきたのは、全部っ…」

「そう…一番弱っちい忌よ…フフフっ…」

ショックを受けたような表情を見せるアヒルに対し、囁は遠慮することなく、微笑みかけた。

「ハ級以上の忌が現れたら、今のあなたじゃ相手にもならない。それにつ…」

言葉を続ける籠也が、そつと目を細める。

「敵は…忌だけじゃない…」

「へっ？」

「……っ」

険しい表情で呟く籠也に、アヒルが首を傾げ、囁が眉をひそめる。

「それって、どういう…」

「まあまあ、ハ級以上の忌なんて滅多に出ないんだし…今のところはバカの“当たれ”覚えていいじゃない…？」

「あのなあっ…！」

問いかけようとしたアヒルの声を遮り、囁が笑顔で暴言を口にする、アヒルは勢いよく眉間に皺を寄せた。

「あら…？」

「あっ？」

不意に何かに気づいた様子で、道の横へと視線を移す囁に、アヒルが首を傾げる。

「彼女…今朝の子じゃない…？」

「へっ？」

囁に言われ、アヒルも囁が見ている先へと視線を移した。

「ちよつとお！窓の拭き掃除しといてって言ったじゃない！」

「えっ…？」

言ノ葉町の中央道沿いに建ったコンビニの前では、コンビニ店員の制服に身を包み、店の前のゴミ箱の袋の入れ替えをしていた奈々瀬が、大きく聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を上げた。

「いつまでゴミ出しやってる気よ！とつとと掃除しなさいよ！」

大通りにまで響き渡る程の大声で、奈々瀬へと怒鳴りあげるのは、奈々瀬と同じ店員の制服を着た、短い金髪の、目つきの鋭い女であった。奈々瀬と同じ年頃に見える。

「で、でも私、まだゴミ出しの後に他の仕事もっ…」

「はあ！？私に口応えする気！？ドジってばっかで何にも役立たな

いくせに、口だけは達者ねえ！」

奈々瀬がリンと呼んだその女に意見すると、リンの表情はさらにきつく引きつられた。

「あんたみたいなグズ！同じ空気吸ってるだけで、イライラするわ！とっととその存在、消してよっ！」

「あんたのバカでかい声の方が、よっぽどイライラすると思うけどお？」

「……っ」

後方から入って来る声に、リンが怒鳴る声を止め、素早く振り向く。

「っーか、あんたの怒鳴り声のせいで絶対、客減ってるよお？」

「誰っ…？」

「あ…朝比奈クン…」

リンが振り返ると、そこにはアヒルが立っていた。眉をひそめるリンの後ろで、奈々瀬が驚いた表情を見せる。

「営業妨害っ。あんたの方が役立ってねえーんじゃねえの？」

「それは言えてるわね…フフフっ…」

「……っ」

鋭く言い放つアヒルと、その横から不気味に微笑む囁を見て、リンが強く顔をしかめた。

「フンっ！」

「あっ…」

不機嫌全開で勢いよくアヒルたちから顔を背けると、リンは、奈々瀬が声を掛ける間もなく、店の中へと入っていった。店の前にアヒルたち三人と、奈々瀬だけが残る。

「大丈夫ですか？奈々瀬さん」

「あ、うんっ…」

リンの入っていった店の方を見つめていた奈々瀬が、籠也の声に振り向く。

「ありがっ…」

「コンビニ店員服姿も、またフレッシュ満載で素敵ですね」

「えっ…?」

「はあっ…」

礼を言おうとした奈々瀬が、きらきらとした笑顔を向ける簞也を見て、思わず顔を引きつった。相変わらぬの簞也の様子に、アヒルが深々と溜息を吐く。

「朝比奈クンもありがとう…ご、ごめんねっ…変なところ見せちゃって…」

簞也からアヒルへと視線を移した奈々瀬が、申し訳なさそうにアヒルを見つめる。

「別に大丈夫だけど、さっきの女、バイト仲間か？」

「あ、うんっ…リンちゃんていって、もう結構長い間、一緒に働いてるかなっ…」

「バイトのお仲間としては…あまり好ましい人には見えなかったけれど…フフフ…」

「あ…うんっ…」

怪しく微笑む囁に、奈々瀬が少し俯く。

「でもそれも…仕方ないかなって思うの…」

「えっ？」

「他に…ぶつける場所もないから…」

『……っ?』

どこか遠くを見るような瞳で、少し悲しげに呟く奈々瀬に、アヒルたちは皆、首を傾げた。

「じゃあ私、バイト中だからごめんねっ」

「あ、ああっ。また明日なっ」

「うんっ」

軽く手を上げたアヒルに笑顔を向けると、奈々瀬は店の中へと入っていった。

「帰るかあ」

「そうね…」

コンビニの前から再び、家への道を進んでいくアヒルを、頷いた囁が、ゆっくりとした足取りで追っていく。

「……っ」

少し上空を見上げた後、箆也もまた、二人の後に続いた。

<……………>

箆也の見上げた上空、赤く染まった夕空の闇に隠れて舞う、一つの黒い影。

<見いゝつけたっ…>

黒い影が、低く重い、声を落とす。

<傷ついた奴っ…見いゝつけたっ…フハハハっ…!>

怪しげな笑い声が、赤い空に響いた。

その日の夜。朝比奈家、アヒル自室。

「ヒトミっ…!」 “先生…!!” “ヒトミ…!!” “先生っ!”

「……………」

同じ部屋の中から聞こえてくる、呼びかけ合いのひたすらの繰り返しに、ベッドに転がったアヒルの表情が、どんどん引きつられていく。

「ヒトっ…」

「うるせええっ!!」

「んっ…?」

ついに堪忍袋の緒が切れたのか、ベッドから勢いよく起き上がったアヒルが、部屋の壁にもたれて本を読んでいる囁へと、激しく怒鳴りあげた。

「今のアヒルんの声の方が、相当、近所迷惑だと思っけど…?」

「うっせえなあ! だいたい何回、呼びかけ合えば気が済むんだよ! その二人っ!」

「愛の深さのメートル数だけ呼び合うのが恋盲腸よ…?」

「色々と鬱陶しいわっ！」

得意げに恋盲腸の解説をする囁に、アヒルがさらに怒鳴りあげる。
「っっーか、お前ら、自分の家があんだから、自分の家で読めよ！」

「アヒルんが寂しがるかと思って…」

「まったく寂しがらねえーよっ！」

「強がり…」

「ああっ!？」

囁がそっと微笑むと、アヒルの表情がどんどん歪んでいく。

「うるさいな…」

二人のやり取りを聞き、部屋の机の前の椅子に腰かけていた箆也が、煩わしげな表情で、二人の方を振り向いた。

「人を怒鳴っている暇があったら、せっかく借りた辞書を読んで、言葉の勉強でもしたらどうだ？」

「恋盲腸読んでる奴に言われたかねえーわっ」

真面目な顔をして言い放つ箆也ではあるが、その両手はしっかりと、開かれた恋盲腸の本を握り締めている。そんな箆也を見て、アヒルは一気に呆れた表情となった。

「まったく、こううるせえんじゃ、辞書読むゆとりもっ…」

——ドクンっ。

「……っ」

ぼやくように呟いていたアヒルが、突然、左胸を走った大きな鼓動に、大きく目を見開いた。

「今の…はっ…」

アヒルが戸惑うような表情を見せ、ゆっくりと自分の左胸に手を当てる。言いようのない不安が、心臓の奥から込み上げてくるような、そんな気分であった。

「四日目で感知…上出来だな」

「へっ？」

読んでいた恋盲腸の本を机に置き、椅子から立ち上がる籠也に、アヒルが眉をひそめる。

「感知って何をっ…」

「忌の気配だ」

「……っ！」

籠也の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「じゃあ、また忌がっ…!？」

「ええ…しかも結構、近いわよ…」

同じように床に恋盲腸の本を置いた囁が、ゆっくりとその場で立ち上がり、アヒルの座っているベッドのすぐ横の、窓の方を見つめる。

「こっちの方向に数キロ…そうね…帰りに寄った、あのコンビニの辺り、くらいかしら…」

「コンビニっ…? あっ…」

——ご、ごめんねっ…変なところ見せちゃって……

コンビニと言われ、アヒルがその頭の中に浮かべたのは、申し訳なさそうに微笑む奈々瀬の姿であった。

「まさかっ…奈々瀬に忌がっ…!？」

Word. 4 言葉ノ行方 (3)

——バアアアアンっ！

『うわああああっ！』

アヒルたちが帰り道に訪れた、あのコンビニ内で、大きな衝撃音のようなものが走り、働いていた店員や、訪れていた客たちが、激しい悲鳴をあげて、その場に倒れ込んだ。

「ハアっ……！ハアっ……！」

品物などが散乱した床を、震えで動かなくなった足を引きずるようにしながら、必死に逃げる人間。

「グオオオオオオっ……！」

その人間を追う、全身を黒い影に包まれた、もう一人の人間。

「うあっ……！」

必死に逃げていたその人間が、レジの台へと背中をぶつけ、思わずその場に倒れ込む。狭い店内で、これ以上先へは逃げる事が出来ず、震え上がった足では、立って店の外へ出ることも出来なかった。

「グウウっ……！」

「うっ……！」

逃げ場を失った人間へ、迫る黒い影に包まれた人間。

「グアアアアアっ！」

「たっ……！助けてっ……！！！」

黒い影に包まれた人間の右手が、逃げ場を失ったもう一人の人間へと、勢いよく振り下ろされた。

——……………っ！

「グっ…！」

「えっ…？」

振り下ろされた右手は、横から入って来た手に、力強く握り止められた。手を止められた人間からは驚きの声が、いつまでも手が振り下りて来なかった、もう一人の人間からは、戸惑いの声が漏れる。
「ふいっ！」

二人の人間の間に入り、振り下ろされたはずの手を掴み止めたのは、アヒルであった。

「何とか間に合っ…！」

「あ、朝比奈くん…？」

「へっ…？」

背後から聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、アヒルが目を丸くして振り返る。

「やっぱり…朝比奈くん…！」

「奈々…瀬っ…？」

アヒルの振り向いた先、逃げ場を失い、今にも手を振り下ろされそうだった人間は、アヒルのクラスメイト・奈々瀬であった。奈々瀬の姿を確認し、アヒルが首を傾げる。

「奈々瀬が無事ってことは、じゃあ誰が忌にっ…あっ…！」

疑問を持って、再び正面を見たアヒルが、自分が手を掴んでいるその人物の顔を見て、大きく目を見開く。

「グウウウっ…！」

「お前はっ…！」

——あんたみたいなグズ！同じ空気吸ってるだけで、イライラするわ！——

「さっきの…！」

忌の黒い影に包まれ、女性のものとは思えない、低く重い声を漏らしているのは、奈々瀬に酷い言葉をぶつけていた、あのリンとい

う女であつた。

「何で、傷つけられた奈々瀬じゃなくて…傷つけたあいつが…？」

「グオオオオオッ…！“壊”っ…！！」

「うげっ…！」

アヒルが戸惑っている間に、忌に取り憑かれたリンが言葉を発すると、その言葉に反応し、アヒルと奈々瀬の上方の天井が、突然、勢いよく崩れ落ちた。

「うわわわわっ…！」

「“囲え”」

アヒルの焦り声が響く中、聞こえてくる言葉。

———パアアアアアン！

『あっ…』

アヒルと奈々瀬の上に広がった六本の格子が、崩れ落ちて来た天井の瓦礫を弾き飛ばし、二人の身を守った。すぐ上に広がる格子を、アヒルが奈々瀬と同じように、大きく口を開け、見上げる。

「何をしている」

そこへやって来る、素っ気ない声。

「忌を前に、考え事などしている場合か？神」

「神月…クン…？」

二人の頭上にあつた格子を手元に戻しながら、アヒルに注意するように言い放つたのは、箆也であつた。学校とはまるで違う様子の箆也に、奈々瀬が目丸くする。

「悪い悪い。てっきり奈々瀬が忌に憑かれてるもんだと思ってたからさあ」

アヒルが苦い表情で、箆也へと詫びを入れる。

「けど何だって、あいつに忌がっ…」

「彼女を襲っていたことから考えると…彼女に何らかの言葉で傷つけられたと考えるのが妥当だけれど…」

「真田さん、まで…」

戸惑うアヒルに答えるようにして、その場へと現れる、すでに言玉を変形させた横笛を持った囁。注がれる視線に、奈々瀬はさらに首を傾げた。

「奈々瀬があいつをお？」

「まあ…さっき会った時の印象からして…凄く考えにくいわね…フフっ…」

「グオオオオっ…！」

「……っ」

唸り声をあげる前方のリンを見て、箆也が目つきを鋭くする。

「話は後だ。来るぞ！」

『……っ』

箆也の言葉に、アヒルと囁もそれぞれに表情を引き締めた。

「グオオオオオ！ “破” っ…！！」

激しい叫び声をあげて、リンが右手を振り下ろすと、アヒルたちへ向けて、大きな衝撃波が放たれた。皆より前へ出た囁が、横笛を構える。

「“ 妨げろ ”…」

言葉の後に流れる、美しい音色。音色は大きな振動となって、向かってくる衝撃波とぶつかり合う。

「……っ」

二つの力のぶつかり合いを見つめていた囁が、ふと眉をひそめる。

「アヒるん…奈々瀬さんを連れて、横へ飛んでくれる…？」

「へっ？」

囁の急な言葉に、アヒルが目丸くする。

「なんで？」

「それはね…」

素朴に問いかけるアヒルに、ゆっくりと口を開く囁。

「妨げきれないから…」

「えええっ!？」

囁の放った振動を吹き飛ばした衝撃波が、立ち塞がるものもなく
なつて、まっすぐにアヒルたちへと向かってくると、アヒルは大き
く目を見開いた。

「奈、奈々瀬っ…！」

「きゃっ…！」

アヒルが奈々瀬の手を引き、横へと逃げる。箆也と囁も、素早い
動きで、衝撃波の直線上から逸れた。

——バアアアアアン！

四人の避けた衝撃波が店のレジ部分を直撃し、そのまま店の壁を
突き破ってしまう。大きくあいた壁の穴からは、暗い外の景色が見
えた。

「お…お店が…」

「あっぶねえ…」

その衝撃的な光景に啞然とする奈々瀬の横で、アヒルが額に浮か
んだ冷や汗を拭う。

「何やってんだよ！囁！」

「ごめんなさい…ト級の忌だと思って、つい油断しちゃったわ…フ
フ…」

「えっ…？」

そつと微笑みながら答える囁に、アヒルが眉をひそめる。

「ト級と思つて…じゃあっ…！」

「ええ…あの忌の階級は…」

微笑んだまま、瞳だけを鋭くした囁が、リンに取り憑いた忌を見
つめる。

「“ハ級”よ…」

「ハ級っ…！？」

——ハ級以上の忌が出たら、今のあなたじゃ相手にもならない…

――まあまあ…ハ級の忌なんて滅多に出ないんだし…――

「け、けどお前ら、ハ級の忌なんて滅多に出ないってっ…」

「ああ、滅多に出ない。何せ忌の階級は…」

アヒルの言葉に頷いた後、まっすぐにアヒルへと視線を送る籠也。
「宿主が悪意ある言葉により受けた、痛みの深さに比例するんだからな」

「……っ！」

籠也の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「じゃあ…」

「ええ…あのリンという女性は、今までの者たちよりも、ずっと深い傷をつけられたということになる…」

アヒルが言おうとした言葉を、先に口にする囁。

「そこにいる…奈々瀬さんによって…」

「えっ…？わ、私…？」

注がれる囁の視線に、奈々瀬が困惑の表情を見せる。

「ずっと…深い傷…」

囁の言葉を、考え込むように、繰り返すアヒル。

――みんながみんな、ガアみたいに…言いたいことが言える人間なわけじゃないんだよ…？――

ト級の忌に取り憑かれた紺平の傷の深さは、アヒルもよく知っている。どんなに深いものだったか、痛いものだったか、思い知ったつもりであった。だが目の前にいるリンという人間は、奈々瀬によって、さらに深い傷をつけられたという。

「そんなこと…」

「まあとにかく、今日こそは見学だ。神」

「へっ？」

冷たく言い放たれる言葉に、考えるように俯いていたアヒルが、間の抜けた表情で顔を上げる。

「ハ級の忌は、“赤くなれ”“青くなれ”の大道芸が通じる相手じゃない」

「大道芸っ…」

容赦なく言う箆也に、顔を引きつるアヒル。

「それに、お得意の“謝らせる”戦法も、今回は使えそうにないしな」

「……っ」

少し奈々瀬へと視線を移す箆也に、アヒルがそつと眉をひそめる。奈々瀬がリンに傷つけるような言葉を吐いたのかも疑問の状態で、奈々瀬を謝らせることは、確かに不可能だ。

「行くぞ、囁」

「ええ…」

短く言葉を交わすと、箆也と囁は、それぞれの武器を構え、リンの方へと駆け出していた。崩れ落ちた壁のすぐ脇に、アヒルと奈々瀬だけが残る。

「あ、あの朝比奈クン…」

二人の背中を見つめていたアヒルに、どこか遠慮がちに声をかける奈々瀬。

「さっきから、その、トとかハとか…何の話っ…」

「奈々瀬」

「えっ…？」

問いかけようとした奈々瀬の言葉を遮り、アヒルが呼びかける。

「な、何…？」

「お前さ…その、あの人に何かこう…傷つけるようなこと、言ったりしたか？」

問い返した奈々瀬に、アヒルがどこか遠慮がちに問いかける。奈々瀬が人を深く傷つけるような人間とは思えなかったが、リンに忌が憑いている以上、そう考えるしかなかった。

「傷つける、ようなこと…?」

「ああ。例えばそのお…“消えろ”とかっ…」

「そんなっ、絶対言わないよっ」

奈々瀬が両手を左右に振り、強く否定する。

「傷つけたことないって、はつきり言い切れはしないけど、リンちゃんにそういう言葉を向けた覚えはないよ」

「だよなあ」

大きく頷いたアヒルが、がっくりと肩を落とした。

「うう…ん…じゃあなんでっ…」

「リンちゃんの言葉には、何も言い返さないようにしてるし…」

「……っ」

さらに首を捻り、考え込んでいたアヒルが、奈々瀬のその言葉に、ハッと表情を止める。

「何も…言い返さない…?」

「あ、う、うんっ…」

聞き返したアヒルに頷いた後、奈々瀬がゆっくりと俯く。

「リンちゃんね、前は我慢して、何にも言わずに何でもやる人だったんだけど…両親が離婚して、両親二人ともに親権放棄されてから、変わっちゃって…」

俯いたまま、落ち着いた口調で、リンの話始める奈々瀬。

「それからの…人を傷つけるような言葉を、たくさん言うようになったのは…」

「……………」

続く奈々瀬の言葉を、アヒルが真剣な表情で聞く。

「きつと…色んな思いが込み上げて…でも他にぶつける場所もないから、私にぶつけてるんだろうなって…」

———それも…仕方ないかなって…他にぶつける場所もないから…

「……っ」

夕方出会った時に、奈々瀬が口にしていた言葉。やっとその言葉の意味を理解し、アヒルはそっと目を細めた。

「仕方ないって思うから…だからっ…何を言われても、何も言い返さずに黙ってようって思っ…」

「投げかけた言葉が…」

「えっ…？」

遮るアヒルの声に、奈々瀬が戸惑うように顔を上げる。

「投げかけた言葉が、誰にも受け止めてもらえなかった時…」

籠也や囁と向き合っているリンを、どこか遠い瞳で、見つめるアヒル。

「その言葉は…どこに行くんだろうな…」

「朝比奈…クン…？」

そのアヒルの言葉に、奈々瀬はただ、首を傾げた。

Word. 4 言葉ノ行方 (4)

「グオオオオっ…!! “破”っ…!!」

「……っ」

向かって来る衝撃波に、箆也が目つきを鋭くする。

「返せ”…!!」

箆也が言葉を発すると、箆也を包んでいた六本の格子が、箆也の前で盾のように重なり合い、素早く回転して、やって来た衝撃波を正面から受け止めた。

「グっ…!!」

格子から伝わる圧力に、箆也が思わず顔を引きつる。

「押されるっ…」

“妨げろ”」

箆也の表情が曇ったその時、囁くような声とともに、美しい音色が響き渡った。

——パアアアアン!

「クっ…!!」

横から入って来た音の振動に、向かって来ていた衝撃波の一部が押し潰されると、箆也は態勢を崩しながらも、残りの衝撃波を、空へと弾き返された。

「大丈夫…? 箆也…」

「ああ、悪い」

格子を手元に戻しながら、歩み寄って来る囁の方を振り向く箆也。

「ハ級の忌の相手など久々にしたが、やはり手強いな」

「そうね…」

箆也の言葉に、囁も真剣な表情を見せて頷く。

「一人の力では無理だな。囁、同時に攻撃をっ…」

「私が…」

「んっ？」

囁に話しかけようとしていた箆也が、前方から聞こえてくる、忌のものではない女の声に振り向く。口を開いているのは、忌に取り憑かれたリンであった。

「私がそんなに…可哀想…？」

『……っ』

問いかけを口にするリンに、箆也と囁が眉をひそめる。

「忌がしゃべっているの…？」

「いや、これは、忌と強く同調した宿主自身の声だ」

囁の問いに、箆也が冷静に答える。

「親に捨てられた私が…そんなに可哀想…？」

「リンちゃん…？」

「………」

アヒルと奈々瀬も箆也たちと同じように、自らの言葉を発するリンを、まっすぐに見つめる。

「だから…何も言わないんでしょう…？」

静かなその場に響く、リンの声。

「どんなに酷い言葉を向けても…何も言い返さずに黙っているんでしょう…？」

忌が憑き、虚ろになったままのリンの瞳が、確かにアヒルの横の奈々瀬を捉える。

「私に…同情してるんでしょう…?!？」

「……っ！」

一際大きな声で放たれる言葉に、奈々瀬が思わず目を見開いた。

「リンちゃんっ…」

「投げかけた言葉が、誰にも受け止めてもらえなかった時…」

「……っ」

リンを見つめていた奈々瀬が、横から聞こえてくるアヒルの声に振り向く。

「その言葉は、投げかけた本人に戻る」

「朝比奈…クン…?」

同じようにリンを見ていたアヒルが、真剣な表情を見せ、ゆつくりと奈々瀬の方を振り向いた。

「お前が受け止めなかったアイツの言葉は、アイツに戻って、アイツ自身の痛みになった」

「えっ…?」

『……っ』

奈々瀬とともに、前方から聞いていた箆也たちも、驚いたような表情を見せた。

「自らの言葉に傷ついて、忌が取り憑いたというのか…?」

「………」

強く眉をひそめる箆也の横で、囁も厳しい表情を見せる。

「奈々瀬」

奈々瀬をまっすぐに見つめたまま、アヒルが奈々瀬の名を呼ぶ。

「何も言い返さずに黙っていることは、その言葉を否定するよりも、ずっと相手を傷つけるんだ」

「……っ!」

アヒルの言葉に、奈々瀬が大きく目を見開く。

「私がリンちゃんを…傷つけた…?」

「ああっ」

確かめるように問いかけた奈々瀬に、アヒルは躊躇うことなく、はつきりと頷いた。

「グウウっ…」

『……っ』

アヒルと奈々瀬のやり取りに見入っていた箆也たちが、再び聞こえてくる忌の声に、すぐさま表情を引き締めて、振り返る。

「来るぞ、囁」

「ええっ…」

瞳を鋭くし、箆也と囁が、それぞれに武器を構える。

「かつ…!」

「リンちゃんのバカあつ…!」

「はっ…?」

言葉を発しようとした簞也が、後方から聞こえてくる、小学生並みの怒鳴り声に、間の抜けた表情となって振り向いた。

「リンちゃんのわがまま! リンちゃんの自分勝手! リンちゃんのおたんこナス!」

震え上がっていた足を、いつの間にか立ち上がらせた奈々瀬は、幼稚な言葉を並べながら、リンへ向けて、必死に怒鳴りあげていた。
「グウっ…?」

「……っ」

目の前にいる簞也たちから、叫んでいる奈々瀬へと視線を移すリンに、簞也が眉をひそめる。

「神! このままでは的になる! 止めさせっ…!」

「いいから見てろ」

「……っ」

強く言い放つアヒルに、どこか威圧されるように、思わず言葉を呑み込む簞也。

「今日の拭き掃除だって、リンちゃんが店長に頼まれたんだから、リンちゃんがやれば良かったでしょ!？」

アヒルと簞也のやり取りも目に入っていない様子で、奈々瀬がさらに叫びを続ける。

「同じバイトなんだから、自分ばかり偉そうにしないでよっ!」

奈々瀬が拳を力一杯握り締め、まっすぐにリンを見つめる。

「リンちゃんなんてっ…リンちゃんて、大っ嫌いっ…!」

「……っ…!」

奈々瀬のその言葉に、リンが大きく目を見開く。

「ああ…あっ…言っちゃった…」

「本当に傷つけるようなことを言わせてどうするっ…」

呆れたように微笑む囁と、悩ましげに頭を抱える簞也。

「嫌いって…」

『えっ…?』

再び聞こえてくる女の声に、箆也と囁が振り向く。

「嫌いって…言われる方が良かった…」

忌の声ではなく、弱々しいリンの声が、もう一度、その場に響き渡る。

——お父さん、お母さんっ——

—————

「何にも言ってもらえないより…ずっと良かったっ…」

搾り出されたその言葉とともに、リンの瞳から、大粒の涙が零れ落ちた。

「グウウっ…! グアアアアアっ!!」

『うっ…!』

悲鳴のような激しい忌の叫び声が響き渡ると、リンの全身から白い光が放たれ、箆也たちが皆、目を伏せた。

——パアアアアンっ!

「あっ…あぁ…」

光が止むと、力なく瞳を閉じたリンが、その場に倒れ込んだ。

「リンちゃんっ…!」

倒れたリンのもとへと、奈々瀬が必死に駆け寄っていく。

<グウっ…! な、何だっ…! ? >

「あら…また出ちゃったわね…フフっ…」

「何が何だかサッパリわからない」

穴のあいた天井付近に浮かぶ、黒い影・忌を見上げ、囁が微笑み、箆也が表情を引きつる。

<他に傷ついた人間をっ…! >

「あっ…！」

天井の穴から、店の外へと飛び出していく忌。

「逃がすかよっ…！」

「なっ…！待て！神っ…！」

忌を追い、店を駆け出ていくアヒルを、慌てた様子で箆也と囁が追う。

「五十音、第一の音…“あ”、解放っ…！」

外へと出ながら、ポケットから取り出した言玉を光らせ、いつものように『安』と書かれた銃を手取る。

「待ちやがれ！」

＜五十音士かっ…！＞

銃を構えるアヒルを見て、険しい表情を見せる空中の忌。

「待つのはあなただ、神」

「ああっ？」

後方からやって来る声に、アヒルが面倒臭そうに振り返る。

「僕たちでも苦戦しているんだぞ？あなた一人の力で、どうにかなるわけがっ…」

「だったら皆でやりやいいだろうがっ」

「へっ？」

あっさりと言い放つアヒルに、思わず目を丸くする箆也。

「フフっ…一理あるわね…」

箆也の後からやって来た囁が、どこか楽しそうに微笑む。

「援護するわ…神…」

「おいっ、ささやっ…」

「我が神の仰せのままに、でしょ…？箆也」
「……っ」

異論を唱えようとした箆也であったが、人差し指を突き立て、微笑む囁に、それより先の言葉を止められ、言いくるめられてしまう。

「僕たちが先に行く。あなたは最後にぶっ放せ」

「了解！」

箆也の言葉に大きく頷き、アヒルが気合いの入った様子で銃を構える。

「同時に行くぞ、囁」

「ええっ…」

アヒルよりも数歩前に出たところで並んだ箆也と囁が、それぞれに格子と横笛を掲げる。

『“変格”』

——パアアアアン！

二人が声を合わせ、その言葉を発すると、それぞれの武器から強く赤い光が放たれた。囁の横笛は、下端から長い刃が伸び、刃の長い槍のように変形し、箆也の格子は一本に重なりあった後、その先端に大きく角度のついた刃が生え、鎌のように変形する。

「武器が…変わった…？」

その光景に、目を見張るアヒル。

<グウウっ…>

空中で、唸り声をあげる忌。

<五十音士の言霊くらいっ、ぶっ潰してやるよおっ！“破”っ…！>

忌が大きく手を振り下ろし、二人へ向けて衝撃波を放つ。

『……っ』

向かってくる衝撃波に、箆也と囁は避ける素振りも見せず、冷静に姿を変えたその武器を振りかぶった。

「“裂け”…」

「“刈れ”」

勢いよく振り上げられた鎌と槍から、空中にいる忌に向かい、大きな赤色の一閃が放たれる。

<ウウウっ…！ギャアアアアっ…！>

駆け抜ける一閃に、避けることも出来ずに斬り裂かれた忌が、激

しい悲鳴をあげる。

「今だ、神っ」

「ああっ！」

籠也の言葉に大きく頷き、アヒルが苦しんでいる忌へと銃口を向ける。

「“当たれ”っ！」

放たれた弾丸は、アヒルの言葉を受け、まっすぐに忌へと向かっていく。

<グウウウっ…!>

歪む忌の表情。

<ギャアアアアアアっ!>

———パアアアアアン!

アヒルの弾丸に貫かれ、忌は白い光を放つと、跡形もなく消えていった。

Word 4 言葉ノ行方 (5)

「ふいっ!」

忌が消えたことを確認すると、アヒルは銃を持ったまま、リラックスするように、大きく伸びをした。

「やれやれ、ね…」

そんなアヒルを見つめながら、振り上げていた槍を下ろす囁。

「まさか変格形まで使うことになるとはな」

「ハ級の忌が相手だったんだもの…まあ仕方ないわ…フフっ…」

会話を交わしながら、箆也と囁が、それぞれの武器をもとの言玉の姿へと戻す。

「しかし…」

そっと肩を落とし、アヒルの方へと視線を流す箆也。

「まったくもって、困った神だな」

「そうねえ…フフっ…」

呆れたように呟く箆也に、囁が笑みを向ける。

「けど…」

「けど？」

「言葉の大切さを知っている…」

「……っ」

微笑む囁に、少し目を見開く箆也。

「私は結構気に入ってきたけど…箆也は？」

「さあなっ…」

「素直じゃないわね…フフっ…」

素っ気ない答えを返す箆也に、囁はそっと笑みを零した。

「はぁ…あぁっ」

銃を言玉へと戻し、ポケットへとしまおうアヒル。

「眠みいっ…おおい！さっさと帰っ…！」

「あ、あのっ…あ、ああ朝比奈クンっ…」

「へっ？」

二人に呼びかけようとしたアヒルが、後方から名を呼ばれて振り返る。

「あっ…奈々瀬っ…」

アヒルが振り返ると、そこには、ひどく困惑した様子の奈々瀬が立っていた。どうやらアヒルたちの後を追いつ、店の外まで出てきてしまったようである。

「あのお…私…色々混乱してっ…そのお…さっきのとか今のとか、あれこれ一体、何なのかつ…」

「催眠^{さいみん}」

「へっ…？」

問いかけの途中だった奈々瀬の額に、囁の言玉が当てられると、奈々瀬はすぐさま瞳を閉じ、その場に倒れ込んだ。

「奈々瀬っ…！」

「安心して…眠らせてただけよ…フフフっ…」

「お前に言われると安心できねえーよっ…」

不気味に微笑む囁に、アヒルが思わず顔を引きつる。

「眠らせておけば、夢で片付く」

「いっつも思うけど、結構雑な考えだよな…」

自信を持って言い切る囁也に、少し疑いの目を向けるアヒル。

「けどよお…」

どこか困ったように眉尻を下げ、アヒルが顔を上げる。

「これじゃあ、さすがに夢では片付けられねえーんじゃねえーのっ…？」

アヒルの見つめる先には、奈々瀬の働いているコンビニがあった。店内で戦ったものだから、天井や壁は突き抜けており、店の中も瓦礫などで総崩れである。

「そうだな。店を直さない」と

「あっ？直す？」

アヒルが首を傾げる中、箆也が自分の言玉を掲げる。

“改修”」

——パアアアアン！

「うおっ！」

箆也の言玉から、強い赤色の光が放たれ店を包むと、店はあっという間に、夕方、アヒルたちが訪れた時のような、きれいな状態へと戻った。

「すっげっ…」

一瞬で元通り戻った店を見つめ、目を見張るアヒル。

「おっ前、こんなことも出来んのかよっ！」

「はあ？」

感心して振り向くアヒルに、箆也が冷めた視線を送る。

「今までの戦いでも、壊れた壁や電柱を直していたのに、気付かなかったのか？」

「あっ…そういえば…」

「神の目は節穴だな」

「ああ！？んだとお！？」

「まあまあ…それより、奈々瀬さんを店の中へ運んであげましょう…？フフフ…」

何はともあれ、アヒルと箆也、囁の三人は、ハ級の忌を倒すことに、成功したのであった。

「ふうりんっ…」

三人のいるコンビニの、すぐ前に建っているビルの屋上から、三人の様子を見下ろす、一人の男。

「なかなか面白い三人組だねえ…」

二十代程に見えれば、もつと年を重ねた落ち着きのようなものも持っているその男は、黒い髪を風に揺らし、鋭く光る瞳を細め、そつと笑う。紫紺の袴を纏い、その右手には水色の扇子が握られている。

「いやあ興味湧くねえ〜そう思わないかい？ 雅クンみやびっ」

男が話しかけたのは、隣に立っている、制服姿の青年であつた。雅と呼ばれた青年は、掛けている眼鏡の縁を指で押し上げ、その瞳を鋭くする。

「ハ級の忌程度に、あれほど手こずっているような者たちに、興味など湧きません」

「手厳しいなあ〜雅クンはっ」

冷たく言い切る雅に、男がどこか拗ねるように呟く。

「ボクはぜひとも、お知り合いになつてみたいねえ〜」

男が扇子を揺らし、怪しげな笑みを浮かべる。

「特にあの、“神様”クンの方っ…」

「はあっ…」

楽しげに笑う男を見て、雅はがっくりと肩を落とした。

「すぐに誰にでも興味を持つのは、あなたの悪い癖ですよ？ 為介いすけさん…」

「ハハハっ、それは気をつけないとねっ…」

翌日。

「和え物、青、赤…ううんっ…」

「使える言葉は、まだまだ見つかりそうにないわね…フフっ…」
学校からの帰り道、辞書をめくり、首を捻りながら道を歩くアヒルを、その後ろから、囁は微笑ましげに見つめる。

「青、赤…あっ！ 思いついた！ “青紫くなれ” とかはどっ…！」

「阿呆」

「ああっ!？」

勢いよく振り向いたアヒルに、箆也が冷たく言い放つと、アヒルが一瞬にして顔をしかめる。

「何だよ! 人が真面目に考つ…!」

「壁の拭き掃除やってよお! ナナっ!」

「んっ?」

どこかで聞き覚えのある、その女の声に、アヒルが振り向く。

「ダァーメ、リンちゃんが店長に頼まれたことでしょっ?」

「えええゝ? ダルいいゝ」

「ダルくてもやるの。仕事なんだからっ」

昨夜の戦いの痕もまるでなく、昨日の帰り道とまったく同じそのコンビ二の前では、気さくに言葉を掛け合っている奈々瀬とリンの姿があった。

「ほら早くっ」

「はあゝいっ」

強く言う奈々瀬に、渋々頷くリン。昨日の二人からは想像もつかない光景が、そこに広がっていた。

「まったくっ」

「奈々瀬」

「えっ? あ、朝比奈クンっ!」

名を呼ばれて振り向いた奈々瀬が、アヒルの姿を確認し、大きな笑顔を見せる。

「きよ、今日も絶好のお漬け物日和だねっ!」

「あ? あ、ああ…そう、だな」

相変わらずわけのわからない発言をする奈々瀬に、アヒルが少し戸惑いながらも、一応頷く。

「今日もバイトか?」

「あ、うんっ」

「頑張れよっ」

「うんっ…!」

笑顔を見せるアヒルに、奈々瀬はさらに大きな笑顔となつて頷いた。

「ナナあゝ！手伝つてえゝ！」

「もう！すぐ人に頼らないのっ！」

「ぶゝゝ」

「……っ」

何の気兼ねもしていない様子で、はっきりと言い放つ奈々瀬と、その言葉に口を尖らせながらも、それでも嬉しそうな笑みを零しているリンの姿を見て、アヒルが思わず口元を綻ばせる。

「どうかした？朝比奈くん」

「へっ？あ、ああゝいやっ！じゃあ、また明日、学校でなっ！」

「うん、また明日っ」

誤魔化すように微笑んで、アヒルが手をあげ、少し前方の道で待っている籠也と囁の方へと駆けていく。応えるように手を上げた奈々瀬は、歩き去っていく三人の姿を、まっすぐに見つめた。

「……っ」

三人の背を見つめながら、奈々瀬が少し考え込むような表情を見せる。

「どうかしたの？ナナ」

「えっ？」

横からリンに話しかけられ、少し驚いたように振り向く奈々瀬。

「あ、うんっ…あのさ、リンちゃん…」

「んっ？」

「昨日…何か変な夢、見なかった…？」

少し躊躇うように、奈々瀬がリンへと問いかける。

「夢？別に見てないけど？」

「そうっ…」

あっさりと答えるリンに、奈々瀬が少し肩を落とす。

「ってかナナさっ、さっきの人のこと、好きなんでしょっ!？」

「えっ…!？」

いきなりのリンの言葉に、奈々瀬が顔を真っ赤にし、焦ったように顔を上げる。

「な、なんでっ…!？」

「丸わかり! ナナってば、わかりやすいんだもん! ウフフっ!」

「もう! からかわないでよ! リンちゃん!」

楽しげに笑って店へと入っていくリンに、頬を膨らませ、思わず怒鳴りあげる奈々瀬。リンが店へと入り、店の前に奈々瀬だけが残ると、奈々瀬は神妙な表情を見せ、そっと空を見上げた。

「夢…に、決まってるよね…?」

青い空へと、問いかける奈々瀬。

「あんな黒い影の化け物…実際にいるわけないもんね…」

奈々瀬は、自分自身に言い聞かせるように、そっと呟いた。

物語は徐々に、動き始める。

Word. 5 へつづく。

Word. 5 乱レル弾丸 (1)

奈々瀬とリンを忌が襲ってから数日。あの日以来、四日連続現れていた忌も姿を見せなくなり、アヒルたちは平穏な日々を過ごしていた。そんな平穏な朝比奈家に、またも賑やかな朝が来る。

「んんっ…二十八世紀ナシいっ…」

枕をきつく抱き締め、ベッドの上で気持ち良さそうに眠っているのは、朝比奈家の末っ子・アヒル。

「いいかい？ 箆也君。よく聞くんだよ？」

「はい」

外の廊下から、少しだけ開かれた扉を覗き込み、眠っているアヒルの様子をうかがっているのは、朝比奈家の父。その横で父の言葉に頷くのは、すでに制服姿で、朝の支度も完璧な様子の箆也であった。

「出来るだけ顔面を狙って、コレを投げ込むんだ」

そう言って父が取り出したのは、大量のジャガイモ。

「投げる時に、“イモイモジャーガアタック”というのを忘れないようにっ」

「はい」

父の教えに、箆也はしっかりと頷く。

「じゃあ行くよお？ イモイモジャーガア、アタアーっ…！」

「クウウっ…！」

「ぐほおおうっ！」

父が部屋の扉を開け放ち、今まさにアヒルへ向けてジャガイモを投げつけようとしたその時、素早く起き上がったアヒルにより、下顎を勢いよく蹴り上げられた。鼻血を出した父が、その場に力なく倒れ込む。

「ううっ…さすがはアーくん…今日もいい蹴りっぷりっ…」

「なあゝに、朝っぱらから作戦立ててまで、息子にイモ投げつけよ

うとしてんだよ！」

鼻血を押さえながら言い放つ父に、アヒルが呆れきった表情を向ける。

「だって、アーくんがイモを呼ぶから……」

「呼んでねえ！俺が呼んだのは、二十一世紀ナシだ！」

「アーくん、二十八世紀って言ってたよ？」

「あ？そうか？」

「隙ありっ」

父と話しながら、首を傾げているアヒルへ向け、箆也がジャガイモを振りかぶる。

「イモイモジャーガアタック！」

「ぐあああっ！」

物凄いスピードで放たれたジャガイモは、見事にアヒルの額へと命中した。ジャガイモのスピードをそのまま受け、アヒルがベッドへと倒れ込んでいく。

「やりましたよ、お父上」

「おお！素晴らしいよお！箆也君！さすがは我が愛弟子！」

「てっ……めえらっ……」

得意げに微笑む箆也と、そんな箆也に大きく手を振り、何とも嬉しそうな顔を見せる父。二人の様子に怒りを沸き上がらせたアヒルが、引きつった表情でベッドから起き上がる。

「ぶっ殺おおーすっ！」

「望むところだ」

「いっやあー！朝から盛り上がって来たねえー！」

「まあゝたやってるよ、あいつらっ」

居間で、軋む天井を見上げながら、新聞を読んでいるのは、アヒルの上の兄・スズメであった。天井の揺れから、アヒルたちの朝の攻防の激しさを察知し、呆れた表情を見せるスズメ。

「箆也君が加わって：より一層、激しさを増したよね：」

同じく軋む天井を気にしながら、本日、食事当番のため、朝食の支度をしているのは、アヒルの下の兄・ツバメであった。

「懲りねえよなあ、オヤジも」

スズメが新聞をめくりながら、そっと肩を落とす。

「あんなことしなくっても、アヒルはもう大丈夫だと思うけどっ：」
「……っ」

呟かれたスズメの言葉に、ツバメが朝食を作る手を止め、その表情を曇らせる。

「そうだね：」

「……？」

小さく頷くツバメを見て、居間で先に朝食を食べていた囁は、戸惑うように首を傾げた。

時は流れて昼休み。言ノ葉高校一年D組。

「あっ！弁当忘れた！」

「またあ？」

鞆の中を見て叫ぶアヒルに、紺平が呆れた表情を向ける。

「ガアって三日に一回はお弁当忘れるよねえ」

「おい！箆也！囁！」

呆れきった紺平の言葉を聞き流して、アヒルが席から立ち上がり、教室の後ろの席に並んで座っている箆也と囁の方を見る。

「お前ら、俺の弁当持ってねえ？」

「自分の分しか持っていない」

「横にアヒルんのお弁当が置いてあったけど：敢えて無視してきたわ：フフっ：」

「ああ、敢えて無視した」

「おいっ！」

持ってきたという自分の弁当を広げ、困っているアヒルのことなど完全に無視して、弁当を食べ始める籠也と囁。食を提供されているので、その弁当も勿論、今日、食事当番であるツバメのお手製であった。

「クッソ！神相手に何て薄情な奴らだっ…」

「神？」

「へっ！？い、いや！何でもねえよっ！」

二人への文句を口にしたアヒルであったが、思わず言ってしまった“神”という単語を紺平に聞かれ、必死に笑みを作って誤魔化す。

「あゝでも金もねえーし、どうすっかなあ。昼飯っ」

「ある日の夜…小さな男の子が、細く暗い道を…たった一人で歩いていました…」

「へっ？」

悩むように首を捻っていたアヒルが、どこからか聞こえてくる不気味な声に、目を丸くする。

「すると後ろから…シュトラトロ…シュトラトロ…と、男の子を追ってくる足音がっ…」

「な、何っ…」

「“一体、何の音だろう…？” 恐る恐る、男の子が振り返ってみると…そこにはっ…」

「そこにはっ…？」

最初は戸惑っていたものの、徐々にその話に集中し、続きを気にするように、その声の最後の言葉を繰り返すアヒル。

「四ツ目スカンクがっ…」

「スカアアーク！」

「ぎゃあああああっ！」

どこからか聞こえてくる“スカンク”という大きな声に、アヒルが驚き、思わず激しい悲鳴をあげた。スカンクよりも大きなアヒルの声に、教室中の皆からの視線が集まる。

「ゼハアっ…！ゼハアっ…！」

「いいリアクションだね…アヒル君…」

「ツー兄！」

アヒルが振り返ると、そこには、窓の外の中庭からアヒルの教室を覗いている、ツバメの姿があった。どうやら先程の不気味な怪談話は、ツバメが話していたようである。

「驚かすなよなあ…ツー兄は、ただでさえ存在が不気味なんだからさあっ」

「ごめんごめん…つい日課でね…」

非難するように言い放つアヒルに、ツバメがやはり不気味な笑みを向ける。

「つつーか、どさくさに紛れて、“スカンク”って叫んだ奴、誰だあ？」

「箆也…」

「何の話だ？」

振り向くアヒルに対し、そっと箆也の名を呼ぶ囁。そんな囁に、何も知らないように言い放ちながら、箆也はマイペースに弁当を食べ進める。

「あ、はい…これ、お弁当…」

「おっ！サンキュー！」

ツバメから自分の弁当を受け取り、アヒルが嬉しそうな笑顔を見せる。

「丁度、今、昼飯どうしようって困ってたとっ…」

「ツバメさあーん！」

「ぐはっ！」

弁当を受け取ったアヒルを横へと弾き飛ばして、窓の外に立つツバメの前へと出たのは、想子であった。

「そ、想子っ…てめえ…」

「あれ…？想子ちゃん…久し振りだね…」

「ホント、お久し振りですねえ！せっかく同じ高校に入ったのに、一年と三年じゃ全然、会わないんですものおー！」

恨みがましく名を呼ぶアヒルを完全に無視し、いつもより相当にキラキラと瞳を輝かせ、乙女のように胸の前で両手を組んだ想子が、ツバメに熱い視線を送る。

「まったく会いたくもない弟の方とは、毎日会っちゃってるんですけどねー！」

「おい、コラっ」

満面の笑顔を見せる想子に、さらに強い睨みをきかせるアヒル。

「今度、またウチに遊びにおいでよ…昔みたいにさ…あ、でも部活とか忙しいかな…？」

「いーえ！分身してでも行きます！」

「来なくていいよ。って、痛っ！」

こっそりと呟いたアヒルの膝に、ツバメからは見えないように、想子の蹴りが入る。

「じゃあ僕…そろそろ行くから…」

「はあーい！」

去っていくツバメを、きらびやかな笑顔で、いつまでも手を振り、見送る想子。蹴られた膝を抱え込んでいたアヒルが、ツバメがいなくなった頃に、やっと立ち上がる。

「ああ…あっ、ツバメさん、行っちゃったあ…」

「想ちゃんて、昔っからホント、ツバメさんのこと好きだよねえ」

「弟の俺が言うのもなんだけど、お前、ツー兄のどこがいいわけ？」

蹴られた膝を軽く気にしながら、アヒルが想子へ問いかける。

「全てよ！」

「変態だろ？お前」

はっきりと答える想子に、呆れきった冷たい視線を送るアヒル。

「私はきつと、ツバメさんが理想としている、口裂け女のような女性になってみせるわあ！」

「そんな時は俺が退治してやるよ」

「何ですってえ！？」

「やんのか！？ああ！？」

「まあまあっ」

いつも通り、睨み合うアヒルと想子を、間に入って必死に止める紺平であった。

「ふう…」

「おおーい！ツバメ！」

「んっ…？」

アヒルに弁当を渡し、三年の教室がある三階へと戻って来たツバメが、よく聞き覚えのあるその声に振り向く。

「スズメ…」

「無事、アヒルに弁当渡せたかあ…？」

廊下の向こうからやって来るのは、ツバメと瓜二つの姿の持ち主、双子の片割れのスズメであった。スズメは明るい表情で手を振りながら、ツバメのもとへと歩み寄って来る。

「うん…スズメもどこか行つてたの…？」

「おう！ちよーつと隣校の番長に呼び出されてなっ」

「またケンカ…？」

得意げな笑顔を見せるスズメに、ツバメが少し呆れた表情を向ける。

「すんげえ弱くってさあつ、“お前ら、ゴキブリ以下だ”って、吐き捨ててきてやったぜっ」

「はあ…」

スズメがさらに言葉を続けると、ツバメは深々と肩を落とした。

「あんまり酷い言葉向けると…その内、痛い目に遭うよ…？」

「痛い目くらい上等だつての。いつでも来いって感じ？」

「じゃあ今すぐ、僕の呪術で…」

「ちよいちよいちよい！それは待てっ！」

制服の内ポケットから藁人形を取り出すツバメを、必死に止めるスズメであった。

さらに時間は流れ、放課後。完全下校時間が間近に迫った言ノ葉高校では、生徒たちが続々と正門を通り、家へと帰って行こうとしていた。

「じゃあ想子、またねえ」

「うん、また明日！」

正門の前で他の女子生徒たちと別れ、想子だけが左へと曲がり、帰り道を進んでいく。

「想子ちゃん」

「えっ？」

名を呼ばれ、想子が足を止めて振り返る。

「ツバメさん！」

想子に遅れるようにして学校の正門から出てきて、想子のいる方へと歩み寄って来るのはツバメであった。ツバメを見て、想子思わず大きな笑顔を零す。

「今、帰り…？」

「はい！剣道部で！ツバメさんは？」

「僕も部活が長引いちゃってね…」

ツバメが想子の隣まで並ぶと、想子が再び前を向き、二人は並んで道を歩き始める。

「えっ？ツバメさん、何の部活に入ってるんですか？」

「オカルト同好会…」

「まあ！素敵過ぎですね！」

「そう…？」

ツバメの答えに、目を輝かせる想子。同好会が部活でないことも、オカルトが素敵過ぎではないことも、この二人には大した問題ではないようである。

「こんなに遅くまで、何をやってたんですか？」

「吸血鬼とニンニクの関係について…」

「まあ！実に興味深い研究テーマですね！」

「そう…？」

同じような調子で、進む会話。ツバメの言うことに対してならば、想子は何でも誉めちぎるであろう。

「最近…アヒル君、クラスでどう…？」

「えっ…？」

いきなりのツバメの問いかけに、想子が少し戸惑った声を漏らす。

「別に普通ですよお？あつ、でも神月君と真田さんが来てからは、さらに騒がしくなったかなあ？」

首を捻らせながら、答える想子。

「そう…」

「……っ」

これ以上ないくらいの優しい笑顔で、そっと頷くツバメの横顔を見て、想子がふと、表情を止める。

「んっ…？想子ちゃん…？」

急に足を止めた想子に気づき、ツバメが戸惑うように振り返った。

「どうし…」

「ツバメさんて…いつもそうですよね…」

「えっ…？」

俯いた想子が小さく零した声に、首を傾げるツバメ。

「ううんっ…ツバメさんだけじゃない。ガアの家族はみんな、そうっ…」

顔を上げた想子は、どこか寂しげな表情を見せていた。

「みんな必死にっ…ガアを守ってるっ…」

「……っ」

想子のその言葉に、ツバメはまるで、痛い所でも突かれたかのよう
うに、そっと目を細めた。

「私…ガアが少し、羨ましいっ…」

「想子ちゃん…」

少し哀しげに微笑む想子を、まっすぐに見つめるツバメ。

「想っ…」

「あ、あああゝ！さっ！とっとと帰りましょう！ガア達、みんな待ってますよ！きつと！」

「……っ」

急に明るい笑顔を作り、必死に言葉を繋げた想子は、ツバメの言葉をそれ以上は許さずに、少し足早に家への道を再び歩き始めた。前に行く想子の背中を見て、ツバメが少し眉をひそめる。

「あれっ？」

「ん…？」

前方から戸惑うような想子の声が聞こえてきて、ツバメが顔を上げた。

「想子ちゃん、どうし…あっ…」

『グウウウっ…』

想子に問いかける前に、ツバメの視界へと入ってきたのは、二人の前方に、二人を待ち伏せするようにして、道に広がり並んでいる複数の男たちであった。皆、イカつい顔をしており、体格も大きい。派手な毛色やピアスなどが目立ち、いかにも不良といった連中であつた。

「あれって確か…隣校の番長じゃ…」

「ちよつとー！何ですかあ！？」

ツバメが表情を曇らせる中、想子は恐ろしい外見の連中に怯えることもなく、正面から堂々と問いかける。

「善良な市民に乱暴なことしようってんならあ、まず間違いなく警察にっ…」

『グウウウっ…！』

「うっ…」

さらに大きな唸り声をあげ、想子の言葉も聞かずに臨戦態勢を取る男たちに、想子が思わず言葉を止め、やっと少し怯んだ表情を見せる。

「な、何かすんごくやる気満々って感じじゃっ…」

「まさか…」

「朝比奈スズメ…」

「朝比奈スズメ…」

何か思いついたようにツバメが呟いたその時、男たちが口にしたのは、ツバメの片割れの名であった。

『殺すっ…！』

「やっぱり…」

「やっぱりって、ツバメさん！？」

本気の殺意を感じさせる男たちに焦りながら、想子が戸惑うようにツバメの方を振り向く。

「あの人たち…今日の昼間にスズメがケンカして、やっつけちゃった人たちだよ…」

冷静に話を続けるツバメ。

「僕とスズメを間違えて…仕返ししに來たみたい…」

「えええ！？」

ツバメの言葉に、想子が大きく顔をしかめる。

「あんの馬鹿男！今度会ったら、肋骨砕き割ってやるっ！」

「一応、僕の身内なんだけど…？想子ちゃん…」

スズメへの殺意を燃え上がらせる想子に、ツバメが呆れた表情で、こっそりと呟く。

「まあスズメには悪いけど…説明して、ちゃんとスズメに仕返しに行ってもらうようにしっ…」

『グオオオオオっ…！』

「……っ」

事情を説明しようと、想子よりも一歩前に出たツバメであったが、男たちが発した、普通の人間のものとは思えない、低く重く響き渡る声に、思わず目を見開き、立ち止まった。

「ツ、ツバメさん…何かあの人たち…ただのイカつい不良ってわけでもなさそうな気がっ…」

「グオオオオ！ “壊”！」

「……っ！」

男の一人が大きく叫ぶと、何か悪寒のようなものを感じ、背筋を震え上がらせたツバメが、一気に険しい表情を作った。

「想子ちゃんっ……！こっちっ……！」

「えっ……！？」

想子の腕を掴み、強く引っ張るようにして、脇道へと走り出すツバメに、体を大きく捻りながら、想子が戸惑った顔を見せる。

——バアアアアン！

「えっ……？」

二人が脇道に逸れた途端、先程まで二人の立っていた道の両端の壁やら電柱やらが、一気に崩れ落ち、想子は大きく目を見開いた。

「な、何……！？」

『グオオオオオオっ！』

「何なのっ……！？」

激しい咆哮をあげながら、逃げるツバメと想子を追ってくる男たち、さらに困惑の表情を見せる想子。

「せっかくのツバメさんとの帰り道だったのにっ……もう！馬鹿スズメえー！」

Word. 5 乱レル弾丸 (2)

その頃、朝比奈家。

「ふええ〜っくしょん! くしょん!」

居間で豪快なくしゃみをするスズメ。

「ズビっ…ううっ…どこぞのイイ女が俺の噂してやがるぜっ」

「くしゃみ二回は嫌な噂だぞぉー」

鼻をすすりながら、どこか得意げに微笑むスズメに、横に座ったアヒルが、冷たく言い放つ。

「うう〜んっ」

スズメに突っ込みを入れた後、すぐに浮かない表情となったアヒルが、居間の掛け時計を確認し、さらに眉をひそめる。

「なあ、ツー兄遅くね? 今日、食事当番なのにさあ」

「そうね…いい加減、帰ってきてもらわないと、お腹が空いたわ…」

「ああ、腹が減った」

「お前ら、ちったあ遠慮しろ!」

相変わらず自然に朝比奈家の居間で寛ぎ、何の迷いもなく食事が出されるのを待っている籠也と囁に、アヒルが強く怒鳴りあげる。

「どっかで買いい物でもしてんじゃねえのかあ?」

「この辺は九時過ぎたら、コンビニとパチンコ以外、閉まっだろっ」

「んなに気になんなら、お前探して来いよ」

「ええっ!?!」

適当に言い放つスズメに、アヒルが勢いよく顔をしかめる。

「スー兄が行ってくれればいいだろ!?!」

「俺は“恋盲腸〜降り止まぬ恋雨前線の巻”を読むので忙しいから、ダァ〜メっ」

「……………」

デロ甘そうな表紙の本を持ち上げ、笑顔を見せるスズメに、怒鳴

る力も湧かず、ただ呆れきった視線を向けるアヒル。

「んっと」

『んっ?』

アヒルが振り向き、箆也と囁の方を見ると、二人は同時に顔を上げた。

「私も“恋盲腸くライバル登場・三角関係タイフーンの巻”を読
んでるから駄目よ…フフっ…」

「僕はだな、ええっと…」

「もういい」

一度、本を閉じ、タイトルを確認しようとする箆也に、アヒルが
冷たく言い放つ。

「アーくうくん！お父さんが一緒に行ってあげっ…！」

「結構です」

「ううっ…」

店の片付けから居間へと戻ってきた父が、アヒルにあっさりと断
られ、その場に膝をついてショックを受ける。

「アカネエ…お前が出て行って早十一年…息子たちがついに父と距
離を置き始めっ…」

「俺、ちよっと思ってくるわっ」

「んん…」

「四ツ目スキャンクに襲われないようにね…フフフっ…」

「余計なこと言うんじゃねえ！」

出て行った妻へと嘆いている父を完全に無視し、言葉を交わすア
ヒルとスズメ。脅すように呟く囁に怒鳴り返すと、サンダルを履き、
アヒルは店の通用口から、家の外へと出て行った。

「さてと…」

「あら…？」

恋盲腸の本を居間のテーブルへと置き、立ち上がる箆也を、囁が
物珍しそうに見上げる。

「結局行くの…？」

「僕は安附だ。仕方ないだろう」

「そうね…そういうことにしておいてあげるわ…フフっ…」

少し楽しい笑みを浮かべると、囁も本を置き、立ち上がった。

『ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！』

強く手を握り合ったツバメと想子は、人通りのない薄暗い道を、ひたすら必死に駆け抜けていた。全速力で走り続けた疲れと、不安や焦りから、徐々に呼吸が乱れ始める。

「ツバメさん…！あいつらって一体っ…！」

「わからない…わからないけど…」

想子を引っ張るようにして前を走るツバメが、真剣な表情を見せる。

「凄まじい怨念を感じるよ…」

「きゃ！私たちがまるで、ホラー映画のヒーローとヒロインみたいですね！」

どちらかというところから怨念を感じそうな程に不気味な表情で呟くツバメに、何故か黄色い声をあげる想子。追われているわけには、緊張感が足りていないようである。

「いつまでも逃げていても仕方ないし…」

「えっ…？」

走りながら、何やら鞆の中をあさり始めるツバメに、想子が首を傾げる。

「この必殺の降霊シートで、魔神ヘンタラコンタラを召喚しようか…」

「きゃあー！何だかめっちゃ素敵ですね！」

「そう…？」

怪しげな紋様の描かれたシートを取り出すツバメに、期待一色の瞳を向ける想子。そんな想子に、ツバメが少し嬉しそうに笑みを零

す。

『グオオオオオっ…!』

「……っ!」

「前からっ…!?!」

二人の走っていた道の前方で、角から曲がってきた先程の男たちが数名姿を現し、ツバメと想子は、必死に動かしていた足を止めた。

『グオオオオオ!!』

「後ろからもっ…!」

追いかけるようにしてやって来る男たちに、少し振り返り、焦りの表情を見せる想子。

「挟まれた…」

「うっ…」

険しい表情で呟くツバメの横で、怯むように肩をすぼめた想子が、ツバメの手をさらに強く握り締める。

「うう…ん…こうなったらやっぱり…僕の降霊シートで…」

「こうなったら、私の剣道で面してやるわっ!」

「あれ…?」

ツバメがシートを広げるより先に、想子が部活の鞆から竹刀を取り出し、ツバメより前へと出て、力強くそれを構えた。シートを広げるタイミングを失ったツバメは、少し丸くした瞳で、想子を見つめる。

「あのっ…想子ちゃん…?」

「ツバメさんは退がって下さい!ここは私が何とかしますから!」

「いや…けど…」

「ツバメさんに傷一つ、つけさせるわけにはいきません!」

何とかシートを広げようとするツバメであるが、想子の強い意志に押され、どうにも広げることが出来ない。

「いや…でも…魔神ヘンタラコンタラが…」

「私が面しますって!」

「グウウっ…」

二人がシートと竹刀を構えて、それぞれ前へ出ようとモメていたその隙に、二人の前方に立ちはだかる男の一人が、唸り声をあげながら、勢いよく右手を振り上げた。

「破”っ!”」

『えっ…?』

その禍々しい声に、ツバメと想子が同時に振り向く。

「うっ…!」

「なっ…!」

男の振り下ろした右手から、大きな衝撃波が放たれ、まっすぐに二人へと向かって来る。背後には他の男たちがおり、逃げ場もない二人は、大きく顔を歪ませた。

「きゃあああ!」

「クっ…!」

——バアアアアン!

激しい衝撃波が二人を直撃し、二人は大きく空へと突き上げられると、力なく地面へと落ちた。

「ううっ…」

手や足、口からも血を流したツバメが、苦しげに表情を引きつり、地面にひれ伏した状態で、ゆっくりと顔だけを上げる。

「想子…ちゃん…?」

「……………」

ツバメのすぐ前で、仰向けになって倒れ込んでいる想子は、頭から血を流しており、深くその瞳を閉じ、ツバメの呼びかけにも、ピクリとも体を動かさなかった。

「想子ちゃんっ…」

そんな想子の状態を目の当たりにし、ツバメが険しい表情を見せる。

『グウウウっ…』

近づいてくる唸り声の重奏に気付き、ツバメがさらに顔を上げる。前後に立った男たちがそれぞれ、ゆっくりと間合いを詰めるように、ツバメたちの方へと歩み寄ってきていた。

「クっ…」

厳しい表情を見せたツバメが、もう一度、倒れている想子を見る。

——みんな必死に…ガアを守ってる…——

——私…ガアが少し、羨ましい…——

「……っ」

思い出される想子の言葉に、ツバメがそっと目を細める。

「この子だけは…守らないと…」

意を決するように、呟くツバメ。

『グオオオオオオっ…!』

「うっ…!」

一気に駆け込んでくる男たちに、ツバメが焦りの表情を見せる。

「こうなったらっ…!」

強く瞳を輝かせたツバメが起き上がり、道の真ん中に広げたのは、先程の降霊シート。

「出でよ…! 魔神ヘンタラコンタラ…!」

合わせた両手を天へと掲げ、ツバメが瞳を閉じ、叫びあげる。

「ギャアアアアア!」

「おっ…?」

近くから聞こえてくる、咆哮と同じ声の悲鳴に、意外そうな声を漏らしたツバメが、恐る恐る目を開いていく。

「まさか…本当にヘンタラコンタラが…」

「言っとくけどっ」

「……っ」

目を開いたツバメが、目の前に立つその人物の姿を目に入れ、さらに大きく目を見開く。

「俺は神になった覚えはあっても、ヘンタラ何たらになった覚えはねえーからなっ！」

「ギャアアアア！」

ツバメの前に、ツバメを庇うようにして立ち、ツバメに向かって来ていた男の一人を勢いよく殴り飛ばしたのは、ジャージ姿のアヒルであった。

「アヒル…君…？」

目の前に現れたアヒルを、ツバメは咂然とした様子で見つめる。

「まさかアヒル君が…ヘンタラコンタラだったなんて…」

「だから違うっつつってんだろ！」

驚きの表情を見せるツバメに、アヒルが勢いよく怒鳴りあげた。

『グウウウウっ…』

二人があれこれと会話をしている間に、アヒルに吹き飛ばされた仲間を見て、同じようにツバメへと駆け込んできていた男たちは皆戸惑うように足を止め、ゆっくりとその足を後ろへと下げた。

「あらら…凄い数の忌ね…フフフっ…」

「感心している場合か」

引き下がる忌の間から、アヒルたちのもとへとやって来る箆也と囁。

「箆也君に…囁ちゃんまで…」

さらに現れた二人を、ツバメが驚いたように見つめる。

「みんな…実は人間じゃなかったんだね…」

「だから違うっつの！」

まだ皆を自分が召喚した魔神だと思っているツバメに、怒鳴るアヒルの顔がどんどん引きつられていく。

「それより大丈夫かよお？ ツー兄っ」

体の所々から血を流すツバメを、アヒルが少し心配そうに見る。

「僕は大丈夫っ…僕より想子ちゃんがつ…」

「想子…？ あっ…！」

ツバメの視線を追ったアヒルが、すぐ近くで倒れ込んでいる想子

を見つける。

「想子っ…！」

慌てて、想子のもとへと駆け寄るアヒル。

「怪我をっ…」

深く瞳を閉じた想子の頭部から流れる赤い血を見て、アヒルがその表情を曇らせる。頭の怪我となれば、不用意に動かすことも出来ない。

「とつとと病院にっ…」

「どいてろ、神」

「ああ!？」

背後から聞こえてくる偉そうな声に、アヒルが顔をしかめて振り返る。アヒルが振り返った先に立っていたのは勿論、箆也で、神であるアヒルより偉そうな態度を取った箆也は、アヒルを横にどかせて、想子のすぐ傍へとしゃがみ込んだ。

「どうすんだよ？」

「見ていればわかる」

アヒルの問いかけに適当に答え、箆也が取り出した言玉を持った右手を、血の流れる想子の頭部へと近づけた。

「“回復しろ”」

箆也の“か”の言葉に反応し、言玉が強い光を放ち始める。

「あっ…」

光の先を見つめ、驚いたように大きく目を見開くアヒル。言玉の放つ光に包まれると、想子の頭の傷は目にも明らかで、あっという間に塞がっていき、流れていた血もすぐに止まった。

「傷はそう深くない。もう大丈夫だ」

「すっげえ。お前、こんなことも出来んだなあっ」

「……………」

立ち上がった箆也が、感心しきった表情を見せているアヒルを見て、少し目を細める。

「辞書は読んでいるのか？」

「うっせえなあ！まだ三ページ目だったのっ」

嫌味のように問いかけてくる箆也に、アヒルがしかめた表情を見せた。

「さすがは僕の魔神…攻守ともに完璧なバランスだ…」

「ツー兄も頭、怪我してんじゃねえーの…？」

箆也の能力を見て、特に驚いた様子もなく、何やら満足げに何度も頷いているツバメを見て、アヒルが冷たい視線を送る。

『グオオオオオオっ！』

「敵さんはやる気満々みたいよ…アヒるん…」

「ああっ」

囁の声に、アヒルが真剣な表情となって振り向く。

「僕と囁で蹴散らしっ…」

「ツー兄、あいつらに見覚えある？あいつらに何か言った？」

「……………」

戦う気満々で言玉を構えた箆也であったが、いきなり戦う素振りも見せずに、ツバメへと問いかけをするアヒルに、一気に呆れた表情となる。

「またこれか…」

「まあまあ…これが、我らが神のやり方なんだから…」

深々と肩を落とす箆也に、囁がどこか説得するように声を掛ける。

「あの人たちは確か隣校の番長一味だったと思うよ…」

「隣校の番長？っつーことは、あのアホアニキたちの上かあ。そういや見覚えがあるようなっ…」

いつも朝やって来るアニキたちの通う隣校と、アヒルたちの学校は、昔から何故かケンカの強さで争っているようで、両校のあまり品行の良くない生徒同士の間では、よくモメ事が起こっているのがある。

「でも、あいつらってよく、スー兄にやられてる連中じゃっ…」

「うん…僕、スズメに間違えられて、仕返しされそうになってるみたい…」

「へっ…？」

他人事のように答えるツバメに、アヒルが少し目を丸くする。

「ってことは、スー兄があいつらに何かを言ってる…？」

“ゴキブリ以下だ” って言ってるやっただって…昼間、自慢してたよ…」

「……………」

ツバメの言葉を聞き、黙り込んだアヒルが、勢いよく表情を引きつった。

「あんのバカ盲腸！今度会ったら、力の限りぶん殴ってやるっ！」

「一応、僕らの身内だよ…？アヒル君…」

スズメへの殺意を燃やすアヒルを、ツバメが少し呆れた表情で見つめる。

「で？どうするんだ？神」

「へっ…！」

横から籠也に問いかけられ、アヒルが焦るように声を裏返す。

「ええ…と…急いで戻って、スー兄を連れてきて、謝らせるとかつ…」

「“破”っ…！」

「おえっ…！？」

話しているアヒルたちへと、男の一人が右手を振り下ろし、衝撃波を放つ。迫り来る衝撃波に、言葉を止めて、慌て始めるアヒル。

「“妨げる”…」

——パアアアアン！

「うっ…！」

目の前で弾かれる衝撃波に、アヒルが思わず身を屈めた。

「とてもじゃないけど、そんなこと…させてもらえそうにないわよ…？神…フフフっ…」

「クっ…」

すでに言玉を解放し、横笛を構えた囁がそう言うのと、アヒルは険しい表情を作った。これ程の人数の忌に取り憑かれた人間を相手には、逃げる時間も、謝らせる時間も、確かにないだろう。

「とりあえず二人をこちらへ」

「あ、ああ！ツー兄、こっち！」

「えっ…？」

想子を抱きかかえた箆也が、道の端へと想子を運んでいく。箆也の言葉に頷いたアヒルが、ツバメの手を引き、後に続いた。

「妨げろ」…」

道端に想子を寝かせ、その横にツバメを座らせると、後からやって来た囁が言葉を発し、二人の周囲に、振動で作り上げた膜を張る。

「これで多少の攻撃は大丈夫…」

「ああっ。じゃあこっから出ないようにな？ツー兄っ」

「あ、えっ…あの、アヒルくっ…」

「第一の音、“あ”・解放！」

「……っ！」

ひどく困惑した表情を見せ、アヒルを呼び止めようとしたツバメであったが、アヒルの取り出した言玉が、強い光を放ち、その姿を銃へと変えると、ツバメはその信じ難い光景に目を見張り、それ以上、言葉が続けることが出来なかった。

「アヒル…君っ…」

ツバメが戸惑うように、ただまっすぐ、アヒルの背中を見つめる。

Word. 5 乱レル弾丸 (3)

「で…作戦は…?」

「作戦っ?」

「この神にそんなものか思いつけるはずがないだろう」

「ああ!？」

囁の問いに困り顔を見せたアヒルは、小バカにしたような発言の籠也に、勢いよく顔をしかめた。

「確かに忌の数は多いが、僕と囁が変格形を使えば、すぐに倒せる」
「変格形って、あいつらを、この前の鎌や槍でぶった斬るってのか!？」

籠也の言葉に、どこか焦った様子で問いかけるアヒル。

「殺さないように気を付ける。問題ない」

「どこが問題ないんだよ!」

素っ気なく答える籠也に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「今回の相手は、親友でもクラスメイトのバイト仲間でもなく、ただの不良だろう?」

「いっくらただの不良共とはいえなあ!アホなスー兄の言葉に、少なからず傷ついた人間を、攻撃するなんてっ…!」

「さっき見せたはずだ」

「へっ?」

急に話を変える籠也に、目を丸くするアヒル。

「僕の言葉で傷は回復することが出来る。傷つけたところで、後で治せば問題ないだろう?」

「……っ」

籠也のその言葉に、アヒルが一気に眉をひそめる。

「囁、変格形の準備をっ…」

「問題なくなかねえーよっ…」

「えっ…?」

囁の声を掛けようとした箆也が、そっと呟かれたアヒルの言葉に振り返る。

「神っ…」

「傷ついた人間を、後で治すからって平気で傷つけるような奴とっ…」

ゆっくりと顔を上げたアヒルが、振り向いた箆也をまっすぐに見る。

「俺は一緒に戦えない」

「……っ」

射るような強い瞳で、迷いなく言い放つアヒルに、箆也が思わず目を見開く。すぐにアヒルから目を逸らした箆也は、何も言わないまま、少し時間を置いた。

「…なら、戦わなくていい。あなたは兄と共に、大人しく見ている」
沈黙の時を置いて、箆也がやっと口を開く。

「忌の相手は、僕たちだけです。囁」

「はいはい…」

そう言い捨てると、箆也は言玉を六本の格子へと変えながら、囁とともにアヒルの横から足を進めていき、待ち構える男たちの方へと歩み寄っていった。

「……っ」

その場に残ったアヒルが、右手の銃を握る手に、そっと力を込める。

「僕は前の一団を相手する。囁は後ろを」

「本当に変格形で攻撃をするの…? 箆也…」

「当たり前だ。僕はいつまでも、神の馬鹿らしい発言に従う気はない」

囁の問いかけにきっぱりと答えると、六本の格子を一本に重ね合わせ、箆也が前方にいる男たちのもとへと向かっていった。

『グウウウっ…』

「……っ」

唸り声を漏らしながら、ゆっくりと近づいてくる男たちに、籠也が鋭く目を細め、一本となった格子を構える。

「変かつ…」

——傷ついた人間を、平気で傷つけるような奴と、俺は一緒に戦えない……

「……っ」

思い出されるアヒルの言葉が、責めるような表情が、籠也が放とうとしていた言葉を止めた。

「“破”っ…！」

「クっ…！」

言葉を止めてしまった籠也へ向け、男の一人が衝撃波を放つと、籠也は思わず表情をしかめながら、一本にした格子を、もう一度、六本へと分かれさせた。

「“返せ”…！」

六本の格子を盾のように重ね合わせ、籠也が衝撃波を、放った本人へではなく、誰もいない空へと弾き返す。

『グウウウっ…』

「何で僕がつ…こんなことっ…！」

傷つけまいとする自分に嫌気が差したように、籠也は表情をしかめた。

「……やっぱり変格形はなし、か…」

そんな籠也の様子を、振り返り見ながら、囁が落ち着いた様子で呟く。

「そうだと思った…あなたは優しい人だもの、籠也…」

表情をしかめている籠也とは対照的に、囁はどこか楽しげな笑み

を浮かべた。

「なら私もっ…」

「グオオオオオオ！ “破” っ…！！」

「……っ」

衝撃波を放つ男の方を振り向き直し、そっと目を細める囁。

「妨げろ」…」

囁も横笛を変格形へと変えることなく、そのまま吹き鳴らし、向かってくる衝撃波を振動で妨害した。

「優しい振りをしてないかね…フフっ…」

横笛を口から離すと、囁はさらに楽しそうに微笑んだ。

「あいつ等っ…」

変格形を使わずに戦う箆也と囁の姿に、戦いをただ見ているだけのアヒルは、驚いたような表情を見せた。

「俺の言葉を…聞いて…？」

その態度とは裏腹に、箆也も囁も、アヒルの無責任な言葉に、従おうとしてくれている。不利な状況になるとわかっているのに、相手を傷つけないように、戦ってくれている。

「箆也…囁…」

そんな二人の姿に、そっと目を細めるアヒル。

「俺が言い出したんだ…俺が、何とかしないとっ…」

「ア…アヒル君…」

「へっ？」

何とかしようと必死に考え始めたアヒルが、後方からの名を呼ぶ声に、戸惑うように振り返った。

「あ、ツー兄っ」

アヒルが振り返ると、そこには囁の振動の膜に包まれた、ツバメの姿があった。

「そっか。ツー兄いたんだっけ…」

初めはツバメを助けに来たというのに、戦いに集中しすぎて、ツバメのことをすっかり忘れてしまっていた。

「大丈夫…？」

「えっ…？」

心配そうに問いかけてくるツバメに、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「大丈夫、って…？」

「箆也君たちと…モメてたみたいだったから…」

「……っ」

優しい瞳を見せるツバメに、少し目を細めるアヒル。

「だ、大丈夫だって！っつーかツー兄、俺の心配なんかしねえーで、自分か想子の心配してろって！」

「無理だよ…」

「えっ…」

すぐさま答えるツバメに、アヒルが目丸くする。

「だって僕…アヒル君のお兄ちゃんだもんっ…」

「……っ」

これ以上ない程に優しく、穏やかに微笑むツバメに、アヒルは丸くした瞳を大きく見開き、込み上げるものを押さえるように、口元を手で覆った。

「ツー兄っ…」

「グオオオオオオっ！」

「なっ…！」

ツバメの方を見ていたアヒルの背後から、男の一人が、ナイフを振り上げ、アヒルへと迫り来た。振り向いたアヒルが、焦りで表情を歪める。

「しまったっ…一人、向こうへっ…」

「神っ…！」

他の者たちと交戦中の箆也と囁が、思わず身を乗り出す。

「クっ…！」

素早く振り返ったアヒルが、ナイフを振り上げるその男へ向け、右手に握り締めていた銃を構える。

「あっ…」

“当たれ”の言葉などなくても当たりそうな距離であったが、アヒルは引き金を引く指を、動かすことが出来なかった。

「グオオオオオオっ…！」

「うっ…！」

迫る刃に、表情を引きつるアヒル。

「アヒル君っ…！」

その時、大きくアヒルの名を呼んだツバメが、勢いよく囁の張った膜の中から飛び出した。

——……っ！

「……っ！」

飛び散る赤い血に、アヒルが大きく目を見開く。

「うあっ…」

「ツっ…ツー兄いいっ…！！」

膜を飛び出したツバメは、アヒルを庇うように、アヒルと男の間に割って入り、男の振り下ろしたナイフに、アヒルの代わりに斬り裂かれ、血を流してその場に倒れ込んだ。

「籠也っ…！」

「わかってるっ…！」

焦るような囁の声に、こちらも焦りを見せ、少し荒げた声で答える籠也。

「だがこれではっ…！」

周囲を囲う男たちに、籠也の額から、焦りの汗が流れ落ちた。

「ツー兄！ツー兄っ！」

倒れ込んだツバメを抱えるようにして、その場に座り込むアヒル。アヒルが必死に呼びかけるが、胸を斬り裂かれたツバメは深く目を閉じ、その呼びかけに答えることはなかった。

「ツー兄っ…」

青白く変わった表情で、アヒルが必死にツバメを見つめる。

＜この人間共の心を傷つけた…＞

「……っ」

ナイフを振り下ろした男を包む黒い影、忌が重苦しい声を発する。
＜こいつ等、みんな思っている…そんな奴、“居なくなればいい”
となっ…！＞

「……っ！！」

忌の発したその言葉に、アヒルが大きく目を見開いた。

「あっ…」

声にならない声を漏らしたアヒルが、唇を、肩を、全身を震わせる。

「うあっ…！」

震わせた体で深く俯き、額から汗を流すアヒル。

——兄ちゃんなんかっ…！居なくなればいいんだっ…！！——

「……っ！」

思い出される過去の言葉に、アヒルはさらに目を見開いた。

——パアアアン！

『えっ…？』

暗闇に鳴り響く銃声に、戦っていた箆也と囁が、思わずその動きを止めた。

——パアアン！パアアン！パアアン！——

『ギャアアアアッ！』

「なっ…」

銃声はさらに鳴り響き、箆也の周囲を囲んでいた男たちが、次々と銃弾に貫かれ、倒れ込んでいく。倒れていく男たちを、戸惑うように見回す箆也。

「神っ…？」

男たちが倒れ、視界の広がった箆也が、アヒルの方を見る。

「“当たれ”…“当たれ”…“当たれ”…」

倒れ込んだツバメの横に座り込んでいるアヒルは、深く俯いたまま、銃口だけを空へと向け、何度も何度も引き金を引き、ひたすら“当たれ”の言葉を繰り返していた。

「アヒルん…？」

箆也と同じように、周囲の男たちが倒れていき、囁も戸惑うようにアヒルを見つめる。

「“当たれ”…！」

「ギャアアアアアア！」

『グウっ…ウウっ…』

「……っ」

アヒルの放つ弾丸に貫かれた男は、激しく苦しみ、痛々しい声をあげながら、倒れ込んでいった。先に倒れた男たちからも、苦しい声が漏れており、その光景を見つめ、箆也は表情を険しくした。

——少なからず傷ついた人間を、攻撃するなんてっ…！——

「何をっ…」

——傷ついた人間を、平気で傷つけるような奴と、俺は一緒に戦えない……

「何をしているっ……！」

強く拳を握り締めた箆也が、勢いよく顔を上げる。

「神っ……！！」

思い出されるアヒルの言葉に、箆也は思わず声を荒げ、必死にアヒルへと叫びあげた。

「“当たれ”……“当たれ”……」

「神っ……！」

「“当たれ”……！！」

「……っ」

どんなに強く呼びかけても、引き金を引く手を止めようとしないうアヒルに、箆也が強く唇を噛み締める。

「アヒルっ……！！」

「……っ！」

箆也が強く、アヒル自身の名を呼ぶと、アヒルは虚ろだった瞳を、大きく見開いた。

「あ……」

アヒルがやっと顔を上げ、右手から銃を力なく零れ落とす。アヒルの手から離れた銃は、地面に落ちるとすぐに、ただの言玉の姿へと戻った。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

必死にアヒルに呼びかけた箆也が、叫びすぎたのか、乱れた呼吸を、大きく肩を揺らしながら整える。

「箆也……」

「……っ」

アヒルの連続的な攻撃により、もう男たちは誰一人立っておらず、何の障害もなくなった囁は、スムーズに箆也のもとへと歩み寄って

きた。

「早く忌を倒さないと、忌自身のダメージが連動して、宿主にもダメージを与えてしまうわ…」

「ああ、わかっている」

『グウウウっ…！ウウウっ…！』

倒れたまま、苦しげな声を漏らしている男たちに、箆也と囁が焦った表情を見せる。

「だが今の状態の奴らを変格形で攻撃すれば、それこそ致命的なダメージにつ…」

「射^{いぬ}抜け”…」

——パアアアアン！

『グオオオオオオ！』

「えっ…？」

どこから走り抜けてきた青く細長い無数の光が、倒れていた男たちをすべて貫くと、男たちに取り憑いていた黒い影が、その青い光に突き刺されるようにして、男たちの体から飛び出した。忌の出した男たちは、苦しみから逃れ、気を失って、その場に倒れていく。

「な、何っ…」

「“凍^いてつけ”…」

『ギャアアアアアアっ！』

「…っ！」

男たちから飛び出た忌たちは、今度はどこから吹き抜けてきた吹雪に、一瞬で氷づけにされてしまった。大量の忌を包んだ氷は、次の瞬間、粉々に砕け散り、忌もろともきれいに消えていった。

『あっ…』

一瞬で起こった、あまりに衝撃的な出来事に、咄然とした箆也と囁は、大きく目を見開いたまま、しばらく表情一つ、動かすことが出来なかった。

「ふうゝ何とか間に合ったみたいだねえゝ」

『……っ！』

後方から聞こえてくる聞き慣れない声に、箆也と囁が同時に振り向く。

「何者だっ…！」

「ええゝ？何者かってえゝ？」

静まり返った道に響く、草履で歩く音と、どこか軽い口調の声。

「べっつに名乗る程のもんじゃあっ…！」

「井戸端いすけ為介いすけという変な名前です」

「ああゝ言っちゃダメだよおゝ！みやび雅くうゝん！しかも変な名前って、ヒドいしゝゝ」

軽いノリの会話をしながら、その場へと現れたのは、為介という名前らしき、紫色の袴姿に、『為』と書かれた水色の扇子を持った黒髪の男と、雅と呼ばれた、眼鏡を掛けた制服姿の青年であった。

「井戸端…為介…？」

男の名を繰り返し、箆也が少し眉をひそめる。

「やあっ、こんにちはあゝあっ、こんばんはかなあ？」

『……っ』

歩み寄って来る二人に、警戒の色を強め、それぞれの武器を身構える箆也と囁。

「そんなに警戒しないでよおゝ一応、助けてあげたんだからさあゝ」

「一応、ね…」

為介の言葉が引っ掛かったのか、少し眉をひそめながらも、囁が構えていた横笛を下ろす。すると、囁に続くように、箆也も格子を言玉へと戻した。

「あなたたちは一体っ…」

「お話はちよっと待ってえゝ」

「えっ…？」

問いかけようとした箆也が、目の前に手を出され、少し戸惑った声を漏らす。

「怪我人を先に看ないとお」

「ああ、そういえば」

為介に言われ、簞也がアヒルのすぐ傍で倒れているツバメへと視線を移す。

「早く回復をっ…」

「ボクに任せといてえ」

「何っ？」

言玉を持ち、ツバメの方へと歩み寄っていかうとした簞也を制した為介が、簞也の代わりにツバメのもとへと歩み寄っていく。

「……っ？」

「アハっ」

戸惑うように見上げるアヒルへ、為介が笑顔を向ける。

「これはヒドいだねえ、このまま放っておいたら、二時間くらいで死んじやいそおっつ、アハハっ」

「……っ」

重傷のツバメを見ながら、まったく場の空気の読めていない、陽気な笑顔を零す為介に、アヒルは自分の感情を隠すことなく、あからさまに表情をしかめた。

「あっ、ごめんごめん。失言だったかなあ？」

そんなアヒルを見て、軽く謝る為介。

「大丈夫っ、ちゃあゝんと治すからっ。ほいっ！」

そう言うのと、為介はツバメへ向けて、持っていた扇子を振り下ろした。

「“癒^{いや}せ”」

扇子から青く淡い光が放たれ、光がツバメの胸の傷を包み込んでいく。

「あっ…」

青い光に包まれた傷は、まるで手品のように、一瞬にして消える。「消えたっ…」

ツバメを見下ろし、驚きの表情を見せるアヒル。

「箆也の回復より速いわ…」

「……っ」

アヒルと同じように、ツバメの傷の回復を見た箆也と囁が、それぞれ表情を曇らせる。

「あ、ありがっ…」

「忌との戦闘中にもかかわらず、自我を失い、銃弾を乱発っ…」

「……っ」

為介を見上げ、礼を言おうとしたアヒルが、為介の言葉に、思わず声を呑み込む。

「一発で倒せるならともかく、力が中途半端なせいで、宿主にいらぬ痛みを与えた…」

突き刺すような為介の瞳に、アヒルが思わず眉をひそめる。

「オマケに…大切なものすら守れてないし…」

為介がツバメの方に目を移し、さらに言葉が続ける。

「君っ…」

アヒルをまっすぐに見つめる、為介。

「神、失格だね」

「……っ！」

冷たく放たれた為介の言葉に、アヒルは大きく目を見開いた。

「我が神に随分と…勝手な口きいてくれるわね…」

「んん…？」

後方から聞こえてくる声に、為介がアヒルから目を逸らし振り返ると、そこには、威嚇するような強い瞳で、為介を見つめる囁の姿があった。

「あなたはどこの誰…？忌や神を知っているのだから…五十音士ではあるのでしょうか…？」

為介を刺すように見つめながら、囁がさらに言葉が続ける。

「五十音士であるのなら…五神にそんな口をきいたら…どんな罰を受けることになるか…」

「思い出した」

「えっ…?」

囁の言葉は、隣でハツとした表情を見せた箆也の声に、遮られた。

「箆也…?」

「井戸端…為介…」

為介の名を呼びながら、まっすぐに為介の方を見つめる箆也。

「五十音第二の音：“い”の力を持つ者…」

“い”…?」

箆也の言葉に、囁が首を傾げる。

“為の神”…井戸端為介…」

「えっ…?」

その単語に、大きく目を見開く囁。

「為の…」

同じように驚きの表情を見せたアヒルが、ゆっくりと為介を見上げる。

「神っ…?」

「アハッ」

“神”という言葉を口にし、顔を上げるアヒルに、為介はどこか不敵な笑みを向けた。

Word. 6 へつづく。

Word. 6 二人目ノ神 (1)

「為の…」

箆也が知らせた事実を、為介を見上げながら、ただ茫然と呟くアヒル。

「神…？」

「アハハあゝ、正体がバレたところで、改めまして初めましてえゝ、
“安の神”・朝比奈アヒルくんっ」

困惑しきった様子のアヒルへ、為介が陽気な笑顔を向ける。

「俺と同じ…神…？」

「ううゝん、正確に言うとお、“君と同じ”ではないんだけどねえ
」

「へっ？」

少し首を捻る為介に、アヒルが目を丸くする。

「その男は、あなたと同じ五神の一人、“以^いの神”ではない。“以
の神”はまた、別にいる」

「箆也」

話しているアヒルと為介のもとへ、箆也が歩み寄ってくる。

「“い”の旧字体に“ゐ”という字があるだろう？」

「はっ？」

「いや、いい。あることを今知れ」

勢いよく首を傾げるアヒルに、すぐさま理解を諦め、説明を省略する箆也。国語嫌いのアヒルに、旧字体の話をして、伝わるはずがないと踏んだのであろう。

「その男は旧字体“ゐ”の力を持つ神。“為の神”と呼ばれ、今の
“以の神”とは区別されている。わかるか？」

「まったく」

「……………」

大きく首を横に振るアヒルに、怒りが込み上げたのか、勢いよく眉を引きつる箆也。

「つまり彼は……旧世代の神」、というわけね……」

「ああ」

「旧世代っ？」

箆也に続くようにして歩み寄ってきた囁の言葉に、頷く箆也。アヒルは聞きなれぬ言葉に、さらに首を傾げる。

「でも、なら何故……旧世代の神がこんなところに……？」

「ああ。僕も“為の神”は、数十年前に五十音士の世界から、姿を消したと聞いている」

「数十年前っ!？」

箆也の言葉に、思わず大きく目を見開くアヒル。

「っつーことはコイツ、若く見えるけど、結構なオッサンでことっ……？」

「アハハハアゝっ」

疑いの目を向けるアヒルに、ただ陽気に笑うだけの為介。

「ボクがここにいるのは、たまたまこの辺に住んでるからだよね」
言ノ葉町って居心地良くてさあゝ」

笑みを浮かべたまま、二人の疑問に、為介があまり信用出来ない、軽い口調で答えていく。

「そしたら近くで、新しい神様が誕生したっていうじゃなあい？」

「うえっ？」

急に視線を向けられ、アヒルが思わず声を漏らす。

「だからちよっと挨拶をって思ってたねえ」

「挨拶、ね……」

「それとっ」

「それと……？」

言葉を付け加える為介に、箆也が眉をひそめ、顔を上げる。

「忠告に……」

「忠告？」

「最近、この辺りでの、忌の増加が報告されてる」

『……っ』

為介の言葉に、箆也と囁が、同時に表情を曇らせた。

「忌の…増加…?」

「うん。正しく言う増発かなあ? 今までは問題なかった、些細な悪意ある言葉にまで、忌が憑くようになってるわけ」

「些細な…」

少し首を捻りながら、箆也が近くで倒れている、ツバメを襲った男たちを見る。スズメが向けた言葉を軽視するわけではないが、これ程大勢の人間に、一斉に忌が憑くというのも、確かに今まででは考えられない話であった。

「増発か…確かに思い当たる節はあるわね…」

箆也と同じことを考えたのか、囁が納得するように言葉を発した。
「他の五十音士たちも気付き始めてるよおゝ直に動き出すんじゃないかなあゝ」

「随分と詳しいんだな」

「情報集めが大好きなもんでねえゝ」

睨むように見る箆也に、動じもせずに笑顔を返す為介。

「んじゃあ忠告はしたからあゝ」

「へっ?」

軽く手を上げた為介が、あっさりとアヒルたちに背を向ける。

「挨拶も済んだし、眠いから、とっとと帰ろうかあゝ雅くうゝんっ」
「嫌です」

「えっ!? ここって断る流れっ!?!」

共にやって来た雅という青年に、一緒に帰ることを断られ、ショクを受けながら、為介は足早にその場を去っていく。

「お、おいっ…! 待て! まだ話がっ…!」

「箆也」

「……っ」

為介たちを追って行こうとした箆也が、囁に呼び止められる。

「今は為の神より…この場を何とかしないと…」

「あっ…」

囁に言われ、箆也が冷静な表情となって、周囲を見回す。傷は治したが、まだ気を失ったままのツバメと想子に、忌に取り憑かれた後で倒れこんでいる男達。囁が言うように、この者たちをどうにかすることが、今は急がれることであつた。

「そう、だな…」

齒切れ悪く頷きながら、為介たちの去っていった方角を振り返る箆也。もう二人の姿は見えず、どちらにしろ、追うことは不可能であつた。

「……っ」

箆也がそつと目を細め、ツバメの横に座り込んだまま、まだ不安げにツバメを見ているアヒルを見る。

——“当たれ”：“当たれ”：！——

あれ程、忌に取り憑かれた人間を傷つけることを嫌がっていたというのに、何の躊躇いもなく、銃弾を撃ち続けたアヒル。

「神っ…」

「……っ」

箆也に呼ばれ、アヒルが顔を上げる。

「その…」

「お、俺っ、想子、家まで運んでくっから、お前ら悪りいけど、ツ―兄連れて、俺ん家戻っててくれっ」

「えっ…?」

箆也の言葉を遮るようにして立ち上がったアヒルが、地面に寝かせていた想子を背負い、急に大きな声を放つと、箆也は少し眉をひそめた。

「すぐ帰っから！」

「あっ…」

まるで逃げるように背を向けるアヒルに、箆也が思わず身を乗り出す。

「神っ…!」

「……っ」

強く呼ぶ箆也の声に、動かしていた足を止めるアヒル。

「今日のことは…十発十中、全部俺が悪いっ…」

「えっ…?」

「ごめんっ…」

「……っ」

そっと謝罪の言葉を落とすと、アヒルは想子を背負い、想子の家へと足早に歩き去っていった。その場に、アヒルを追うように伸ばされた手を、ゆっくりと下ろした箆也と、囁が残る。

「アヒるん…」

アヒルの去っていった方角を見つめ、そっとアヒルの名を呟く囁。「やっぱりもっと国語のお勉強させないとね…使うところも間違ってる上に、十発十中って…」

「…………」

「ふうっ…」

冗談めかして話す囁であったが、隣で厳しい表情を見ている箆也を見て、そっと肩を落とした。

「我が神は…どんな傷痕を抱えているのかしらね…」

「えっ…?」

囁の言葉に、箆也が眉をひそめて振り向く。

「前から少し…おかしいとは思ってたの…」

囁が箆也から目を逸らし、再びアヒルの歩き去っていった方を見つめる。

「彼の傷ついた者への配慮…言葉を大切にするその行動…それはあまりに強くて…まるで執着のようにも見えたわ…」

「執…着…」

その言葉を繰り返しながら、過去のアヒルの言動を思い出す箆也。

——紺平は傷つけられたただぞ！？どうして傷つけられなきゃならない！——

——誰にも受け止めてもらえなかったアイツの言葉は、アイツに返って、アイツ自身を傷つけた：——

——傷ついた奴を、平気で傷つけるような奴と、俺は一緒に戦えない：——

確かにアヒルは、傷ついた者を傷つけまいとする思いは異常なほど強く、人の放つ言葉の重みを知り、そして知ろうとする人間であった。

「彼の抱^{いだ}いている傷痕がその執着を生んでいるのか：まあとにかく、彼に何かがあることは確かでっ：」

「何を抱^{いだ}いていたとしても：」

「……っ」

遮るように放たれる箆也の声に、囁が言葉を止める。

「言葉にしないなら：何も伝わらないっ：」

「………」

どこか寂しげな表情を見せる箆也に、囁がそっと目を細める。

「そうね：」

頷く囁の声が、静かな夜の闇に落とされた。

翌朝・朝比奈家。

「おっはよおん！アーくうくん！」

今日も全力で元気な朝比奈家の父が、満面の笑顔で、アヒルの部屋へと飛び込んでいく。

「喰らえ！ピーマン爆弾っ！って、あれれっ？」

「あっ？」

両手一杯にピーマンを抱えた父が部屋に飛び込むと、そこにはすでに眠りから覚め、制服姿に着替えて、用意万全といった様子のアヒルが立っていた。そんなアヒルの姿に、父が目を丸くする。

「おはよう」

「お、おはよう。アーくん、今日は随分と早いねえ」

「まあな」

少し戸惑った様子の父に答えながら、アヒルは机の上に置いてあった鞆を持ち、父の横を通り抜けて、階段を降りていく。

「さあ、朝飯朝飯っ」

「んんんっ？」

足早に一階に降りていくアヒルを見ながら、父は大きく首を傾げた。

「悪かった！堪忍！ごめん！マジで許して！」

朝比奈家一階の居間では、スズメが深々と頭を下げ、合わせた両手を下げた頭よりも上にあげながら、隣に座るツバメへと、必死に謝っていた。

「恋盲腸の限定版ヒトミオリジナルクッションあげるから許して！」

「いらないよ……」

必死に言い放つスズメに、ツバメがどこか呆れたように呟く。

「そんなんじゃない、とても許せそうにないから……呪っていい……？」

「いやあー！ヒトミオリジナルストラップもあげるから、それだけは勘弁してえー！」

どこからともなく藁人形を取り出し、不気味な空気を醸し出すツバメに、スズメが今にも泣き出しそうに、さらに必死に懇願する。

「隣校の番長には後でちゃんと焼き入れてっ……あ、いやっ、後でちゃんと謝っとくからさあ！」

「想子ちゃんにもちゃんと謝っておいてよ…？関係ないのに、巻き込んだじゃったんだから…」

「わかったわかった！謝る！絶対、謝るから！」

顔を上げたスズメは、ツバメの言葉に何度も何度も頷いた。

「おはよう」

「あ、おはよう…アヒル君…」

そこへ二階からアヒルが降りて来ると、ツバメはスズメから視線を外し、アヒルの方を振り向いた。

「昨日は悪かったね…アヒル君…隣校の番長連中から助けってもらった上に、家に運んでもらっちゃって…」

「ああ、いや、別に…」

「あの番長をやるとは、さっすが俺の弟！アツハツハッ…！」

『……………』

「ごめんなさい」

得意げに笑いあげたスズメであったが、アヒルとツバメから同時に冷たい視線を投げかけられ、笑い声をすぐさま止めて、深々と謝った。

「おはよう…アヒル君…」

「ああ、おはよう。って、あれ？箆也は？」

相変わらず自然に食卓に並び、朝食を取っている囁に挨拶を返したアヒルが、いつもは囁の横で朝食を食べているはずの箆也の姿がないことに気付く。そういえば父がアヒルを起こしに来た時、いつも一緒に来るはずなのに、今日はいなかった。

「箆也は何か用事があるらしくて…学校も途中から行くそうよ…」

「ふうん…」

囁の答えに、アヒルは少し不思議そうにしながらも頷く。

「そういえば、アヒル君…」

「んあっ？」

ツバメに呼びかけられ、アヒルが再びツバメの方を見る。

「昨日、番長から助けってもらった時さ…アヒル君、変な銃みたいな

もの持ってなかった…」

「あっ！紺平だぁ！とつとと学校行くぞお！囁！」

「あれっ…？アヒル君…？」

ツバメが昨夜のことを聞こうとした途端、アヒルが勢いよく話題を逸らし、妙に大きな声を発しながら、囁とともに足早に家を出て行ってしまった。

「もう紺平の来る時間かぁ？とつとと洗濯終わらせねえーとやべえなぁっ」

居間の時計を見ながら、スズメが少し慌てたように立ち上がる。

「ううーん…」

「あっ？どうかしたのか？」

「ううん…毎日、色々と研究し過ぎて…妄想が色々入り込んだ、変な夢見たみたい…」

「はっ？」

どこか納得しきれていない様子で首を捻るツバメのその言葉に、スズメがまったく理解出来ていない様子で顔をしかめた。

「っーかっ…」

少し眉をひそめ、居間から見える通用口を見つめるスズメ。

「アヒル、何かちょっと元気なかったよな…」

「…っっ」

そっと呟くスズメに、ツバメが表情を曇らせた。

「ふいー！」

「金平糖なんて、まだ来ていないじゃない…」

「ツー兄が昨日のこと、聞いてきそうだったから、慌てて出て来たんだよっ！」

まだ閉まっている八百屋『あさひな』の前へと出る、アヒルと囁。周囲を見回し、紺平の姿を探す囁に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげた。

「ああ…そういうこと…」

「色々あったし、ツー兄、ちゃんと忌のこととか夢って思ってくれ
っかなあ…」

「まあなるようになるわよ…」

「なるようになるってお前なあっ…！もし、ツー兄が忌のこと、覚
えてたらっ…！」

「イミって、何？」

「うげっ！」

いつの間にか、アヒルと囁の横に立ち、不思議そうに首を傾げ、
アヒルたちの会話に口を挟む紺平。振り向き、紺平の姿を見たアヒ
ルが、勢いよく顔を引きつる。

「い、いやあ！昨日のテレビの話だよっ！」

「ふうりん。ってか、珍しいね。ガアが家の前で待ってるなんて」

「今日はやたらと早く目が覚めてなあ！」

紺平の言葉に、やたらと必死に答えるアヒル。忌のことをツバメ
が覚えていてもまずいが、紺平が思い出してもまずいのである。

「そういえば今日、神月君は？」

「用事があるから遅刻するらしいわ…」

「へえ…」

「とっとと行くぞお」

「あ、うん」

珍しくアヒルが先陣を切り、三人は『あさひな』の前から、学校
への道を歩き始めた。

「はあっ…」

「……っ？」

三人の先頭を歩きながら、どこか遠くを見るような瞳で空を見上
げ、小さな溜め息を落とすアヒルに、紺平が少し眉をひそめる。

「ねえ、真田さん。ガア、何かあったの？」

「えっ…？」

急な紺平の問いかけに、振り向いた囁が、少し目を丸くする。

「別に何もっ…」

「何か、元気ないよね」

「……っ」

忌や神のことを話すわけにもいかなないので、笑みを浮かべ、適当に誤魔化そうとした囁であったが、紺平の何気ないその言葉に、浮かべたばかりの笑みを消した。

「元気…ない…?」

「うん。何となくだけど」

「………」

聞き返した囁に紺平が頷くと、囁は先に行くアヒルの背を、まっすぐに見つめた。

「おおーい！朝比奈！」

「んあっ?」

『……っ?』

前方からアヒルの名を呼ぶ声が聞こえてきて、アヒルが空を見ていた顔を下ろし、足を止める。後ろを歩いていた囁と紺平も、それにつられて、その場に足を止めた。

「今日の今日こそ、コッテンパンのパンチパーマにしてやつぞお！こらあ！」

「あ、また出た」

アヒルたちの行く道に立ち塞がったのは、アニキこと安二木守率いる、いつものヤンキー軍団であった。もう物珍しくもないので、紺平が冷めきった反応を示す。

「覚悟しやがれえ！朝比奈あ！」

「………」

「んあっ?」

気合い十分に構えたアニキであったが、ここでいつもならば、話すら聞かずにすぐさま飛んでくるはずのアヒルの拳がなく、警戒十分に構えていたアニキが、少し戸惑うように目を丸くする。

「朝比奈?」

「うん、やっぱりそうしよう」

「へっ？」

戸惑うようにアヒルを見たアニキが、一人で勝手に納得したように頷くアヒルに、さらに首を傾げる。

「安二木君」

「はっ？」

アニキの名を呼んだアヒルが、アニキの両肩に自分の両手を、それぞれ置く。

「今まで散々、殴ったり、蹴ったり、消えろって言ったり、カスって言ったり、ミジンコって言ったりして、悪かったっ」

「オレ、そこまで酷いこと、言われてたっけ…？」

アヒルの言葉に、小さな疑問を抱くアニキ。

「もう二度と酷いことは言わねえ。これからは良き友でいよう」

「はっ？」

その思いがけない言葉に、大きく口を開いたまま、アニキが固まる。

「あ、朝比っ…」

「うん。それがいい。良き友、良きこと。うんうん」

「あっ…」

またしても一人で納得した様子で何度も頷いたアヒルが、アニキの肩を持っていた手を離し、アニキの横を通り過ぎて、何やら満足げに先へと進んでいく。

「はっ…？」

アヒルの背を見送り、大きく首を傾げるアニキ。

「何？あれっ」

「まあアヒルにも色々あるのよ…」

引きつった表情を見せる紺平の横で、何やら意味深に呟く囁。恐らくは、スズメが隣校の番長に酷いことをしたせいでツバメと想子が襲われたことを受け、自分の日頃のアニキへの行いを反省したのであろう。

「あっ！囁ちゃ〜ん！」

「んっ…？」

急に態度を変えたアヒルに、呆氣に取られていたアニキが、囁の姿を見つけ、一気に笑顔となって、囁のもとへと歩み寄ってくる。

「どう！？オレと交換日記してみようって気になった！？」

「我が神の意志が私の意志だから…“消えろ”とは言わないわ…」
勢いよく問いかけてくるアニキに、囁が落ち着いた表情を向ける。

“失せろ”」

「ぐはあああっ！」

『アニキイイっ！？』

囁の言葉に傷つき、その場に膝をつくアニキ。そんなアニキのもとへ、他の取り巻きたちが駆け寄っていく。

「ああ〜あっ…ある意味、“消えろ”より厳しいんじゃっ…」

「あいつが忌に取り憑かれても知らねえーぞっ…」

「イミっ？」

「あっ！いや！何でもねえ！」

思わず呟いてしまったアヒルが、首を傾げる紺平に、妙に上ずった声を返す。

「そういえばさあ」

「あっ？」

「神月くんの用事って何だろうね」

「……っ」

紺平の言葉を聞き、アヒルが不意に眉をひそめる。

「確かに…あいつの用事って、何だ…？」

言ノ葉町五丁目。町の小さな何でも屋『いどばた』。

「ふんふんふう〜ん♪」

まだ戸の閉まった店の前で、陽気に鼻歌を歌いながら、箒を片手

に店の前の掃き掃除をしているのは、今日も袴の為介であった。

「ふんふんふう〜んんっ？」

人の気配を感じた為介が、鼻歌を止め、掃いたゴミを見下ろしていた顔を、ゆっくりと上げた。

「すみませえ〜ん、お店は十時からでえっ…」

「まさか本当に、こんな近くに住んでいるとはな」

「ありゃっ」

顔を上げた為介が、少し驚いた顔を見せる。

「言ノ葉町の居心地がいいという言葉は、真実のようだ」

為介の前へと現れたのは、鋭い表情を見せた箆也であった。

「よおく、ここがわかったねえ〜」

「言玉にあんたの匂いを“嗅^かぎ当て”させた」

「アハハっ、犬みたいっ」

箆也の刺すような視線を受けながら、軽い笑みを浮かべた為介が、箆を掃く手を止め、まだ閉まっている店の戸を開ける。

「いらっしゃい。歓迎するよお？ 神月クンっ」

「……っ」

不敵に微笑む為介を見て、箆也はそっと目を細めた。

Word. 6 二人目ノ神 (2)

その頃。言ノ葉高校一年D組。

「はあああゝっ…」

自分の机に肘をつき、両手のひらに顎を乗せて、深々と溜め息を吐いているのは、想子であった。

「どうしたのお？ 想子ちゃん」

想子の前の席に座る奈々瀬が、どこか心配そうに想子の方を振り返る。

「さっきから溜め息ばかりだよお？」

「なあゝんか昨日、変な夢見ちゃってさあ…」

「夢っ？」

しかめた表情で呟く想子に、奈々瀬が首を傾げる。

「夢って、どんな夢？」

「何か、やたら“グオオオオ”とか叫ぶ変な連中に、ひたっすら追いかけられる夢っ」

内容を思い出していったからか、想子がさらに眉をひそめ、険しい表情を作る。

「夢の中でなのにあ、全速力で必死こいて逃げたからなのか、朝起きたら、すんごく疲れちゃってっ」

「ああゝわかるっ！ 私もこの前、同じような夢見たよおっ」

「へっ？」

大きく頷く奈々瀬に、目を丸くする想子。

「ナナも？」

「うん。“グオオオオ”とか叫んでる変な黒い影の化け物が、人に取り憑いて、壁とか壊す夢でしょ？」

「黒い影？」

奈々瀬の話を聞き、想子が大きく首を傾げる。

「黒い影…は私、見なかったけど…」

「あれっ？じゃあ違う夢かなあ？」

「……っ」

眉間に皺を寄せながら、強く腕組みをする奈々瀬を見ながら、想子がそつと目を細める。

「やっぱ夢かっ…」

——想子ちゃん…！こっちっ…！——

「そうだよねえ…カッコ良すぎたもんっ…」

そう呟くと、想子はさらに顎を、両手のひらへと沈めた。

戻って、何でも屋『いどばた』。

「一体、何の店なんだ？」

開店前の店の中へと通された籠也は、薄暗い店内を見回し、思わず眉をひそめた。棚に並んでいるのは、鍋や本や菓子類など、種類もバラバラで、何の統一性もない。

「文字通り“何でも屋”だよお、ボクが気に入ったら、何でも置くお店っ」

「気に入ったら、ねえ…」

妙にリアルなワニの置物を手に取りながら、籠也がさらに眉をひそめる。店に置かれているものの大半は、どこを気に入ったのか、まったく理解出来ない品物ばかりであった。

「んんっ…フハっ！」

周囲を見回していた籠也が、不意に目を見開く。

「こ、恋盲腸のドラマCDっ…」

籠也が手を震わせながら、デロ甘な絵の描かれたドラマCDを手取る。

「はあゝいつ、お茶入ったよお」

「あ、ああっ」

店の奥から為介の声が聞こえると、箆也は慌ててドラマCDを置き、真面目な表情を作って、奥へと足早に進んでいった。

「どうぞお」

「どうもっ」

為介が座る店の縁側へと、箆也が腰を下ろし、すぐ横に出された湯呑みを手取る。

「でえ、わざわざ学校おサボりしてまで、ボクに何の用」？

「決まっている。昨日の忌増発の話についてだ」

「忌増発う」？

素早く答える箆也に、為介が顔をしかめる。

「それなら昨日、ぜえゝんぶ知ってることは話しっ」

「原因は？何故、そんなことが起こっている」？

面倒臭そうに答える為介の言葉を遮り、箆也が鋭く問いかける。

「知らないよお、そんなのっ。別にボクが調べてるってわけでもない。ただあ」

「ただ」？

言葉を付け加える為介に、箆也が眉をひそめる。

「忌自体が勝手に、増発するように進化したとは思えない。外部から何らかの力が加わったって、考えるのが自然だろうねえ」

「外部から」？

為介の言葉を聞き、途端に箆也の表情が曇る。

「五十音士が…絡んでると」？

「さあっ、そこまでは何ともっ」

「……っ」

軽い笑みを浮かべる為介に、箆也が疑うような瞳を向ける。

「本当に何も知らないのか」？

「君も大概、しつこいねえ」

再度、確認するように問いかける箆也が、為介が少し呆れたよう

に肩を落とす。

「ボクより、君の方がよっぽど、情報に精通してるんじゃないのかあゝい？神月箆也くんっ」

どこか試すように微笑んだ為介が、まっすぐに箆也を見る。

「いっやあ、於崎箆也くん、って呼んだ方がいいのかなっ…？」

「……っ」

呼ばれる名に、箆也の表情が一気に曇った。

「わかった。増発の件は、こちらで調べることにする」

湯呑みを床へと置いた箆也が、勢いよく立ち上がる。

「邪魔したな。失礼する」

鞆を持ち直すと、箆也は為介に背を向け、店の入口へと歩き出ていく。

「神月くんっ」

「……っ？」

箆也が戸を開き、店を出ようとしたその時、為介が箆也を呼び止め、箆也は少し戸惑うように、為介の方を振り返った。

「何っ…」

「君の神様は未熟過ぎるよ。とっととやめさせて、次のを探した方がいい」

「……っ」

為介の言葉に、箆也が思わず顔をしかめる。

「神は団の先頭に立つ者。言葉の重みを知る者より、言葉の知識に優れた者になるべきだ」

まっすぐな瞳を、箆也へと向ける為介。

「傷ついた者を救うことよりも、忌を倒すことを最優先に出来る者になるべきだよ」

言葉を続ける為介が、そっと口元を緩める。

「君もそう思うだろう？」

「……っ」

試すように問いかける為介に、箆也がそっと目を細める。

「言葉の知識に優れ、忌を倒すことを最優先に出来る神、か…」
少し俯いた箆也が、為介の放った言葉を繰り返す。

「確かにそうだな。それこそが神だと、僕も思う」

箆也がひどく納得した様子で、大きく頷く。

「だが…」

「……っ？」

さらに口を開く箆也に、為介が少し眉をひそめる。

「そんな面白みのない神、僕が附く価値もない」

「……っ」

顔を上げ、はっきりと言い放つ箆也に、為介は驚いたように、大きく目を見開いた。

「失礼する」

素っ気ない挨拶を残し、箆也は店を出て行った。戸の閉まる音が強く響き渡ると、薄暗い店内に、無音の時間が流れた。

「僕が附く価値もない」、か…」

先程の箆也の言葉を繰り返して、そっと笑みを零す為介。

「確かに面白い子たちですよ…あなたの言う通りねっ…」

その日、放課後。言ノ葉高校。

「ふわぁーあっ、やっと一日が終わったあっ」

「ガアの場合、昼休み以外、ずっと睡眠学習だったけどね」

「昨日、あんま寝れなかったから眠くってさっ」

紺平と会話を交わしながら、教室を出たアヒルは、そのまま行き交う生徒たちの間を進み、下校する生徒で混み合う昇降口へと出た。

「じゃあ俺、今日、委員会あるから」

「ああ、また明日な」

階段を上っていく紺平と別れ、アヒルが一人、自分の下駄箱の方へと歩いて行く。下駄箱を開け、上履きから靴へと履き替えたアヒ

ルは、そのまま一人で校舎を出た。

「ゲーセンでも寄ってくかなあ」

「あれ…？アヒル君…？」

「んっ？」

よく聞き覚えのある声に呼ばれ、アヒルが足を止めて、振り返る。

「今、帰り…？奇遇だね…」

「ああ、ツー兄って…」

アヒルのすぐ後に、校舎から出て来たのはツバメであった。ツバメに笑顔を向けようとしたアヒルであったが、ツバメのすぐ横に立つ、眼鏡の青年の姿が目に入り、笑みを止める。

「ああーっ！」

「へっ…？」

ツバメの横に立つその人物を、強く指差すアヒルに、ツバメが首を傾げる。

「あ、あんたはっ…！」

「どうも」

指差すアヒルに軽く挨拶をしながら、人差し指で眼鏡の縁を持ち上げるのは、昨夜、為介とともにアヒルたちが戦っている場へと現れた、雅と呼ばれていた、あの青年であった。

「な、なんであんたがここにっ…！」

「僕のクラスメイトだからだよ…」

「えっ…？ツー兄のクラスメイト…？」

雅の代わりに答えるツバメに、アヒルが激しく驚く。

「って、そう言われてみると、昨日もウチの学校の制服着てたっけ…」

雅が着ている制服を見て、思い出したように呟くアヒル。昨日は色々とありすぎて、そこにまで目がいかなかったようである。

「アヒル君で…雅君と知り合いだったの…？」

「えっ…？いや！まあちょっとっ！」

昨夜、ツバメを助けた時に知り合ったとも言えず、アヒルが誤魔

化すように笑みを浮かべる。

「ツー兄こそ、知り合いなんだ？」

「うん：知り合いというか、友達：？クラスメイトだし、部活も同じだし：」

「ということは、オカルト同好会っ！？」

「何か？」

驚きの表情で振り向くアヒルに、雅が眼鏡を上げながら、文句があるのかと言わんばかりに聞き返す。

「うん：雅君、部長だよ：」

「同好会なのに部長っ！？」

「何か？」

もう一度驚くアヒルに、もう一度聞き返す雅。

「でも接点が見えないなあ：雅君、いつアヒル君と知り合いになったの：？」

「昨日の夜です」

「昨日の：夜：？」

「やべっ：！」

雅の答えを聞いたツバメが、勢いよく表情を曇らせ、何か思い出そうとするように首を捻り始める。そんなツバメに、一気に焦った表情となるアヒル。

「昨日の夜って：」

「あっ！あああ！俺っ、この人と込み入った話があるんだったあ！ツー兄、悪いけど、先帰ってくれよお！あははあ！」

「えっ：？あ、アヒル君っ：？」

ツバメが止める間もなく、アヒルは雅の手を引き、正門を通り抜け、学校を走り去っていった。

「ふい！あつぶねっ」

勢いよく学校を飛び出し、近くの公園に入ったところで、アヒル

は雅の手を離し、その場に足を止めた。一息つくように、大きく胸を撫で下ろす。

「で、込み入った話というのは何です？」

「はあっ？」

真顔で問いかけてくる雅に、アヒルが顔をしかめる。

「あんなのウソに決まってんだろ？」

「嘘……？」

雅が眼鏡を上げながら、眉をひそめる。

「何故、そのような嘘を？」

「あんたが“昨日の夜”とか言ったせいで、ツー兄が昨日のこと、思い出しそうだったからだよっ！」

「ああっ」

怒鳴るように答えるアヒルに、納得した様子で頷く雅。

「そうか……知らないんでしたね」

「当たたり前だろ！ ツー兄に、忌だの神だの、知られてたまるかよっ」

「……っ」

吐き捨てるように言い放つアヒルを見ながら、雅がそっと目を細める。

「急に引っ張ってきて悪かったなあっ。じゃあっ」

「待って下さい」

「へっ？」

その場を去ろうとしたアヒルが、不意に雅に呼び止められ、戸惑うように顔を上げる。

「本当に少し、話をしていきませんか？」

「……っ」

雅の誘いに、アヒルは少し眉をひそめた。

午後真つ盛り。言ノ葉町の小さな八百屋さん『あさひな』。

「毎度お！また頼みますねえ！」

店の前では、ハチマキを巻いた朝比奈家の父が、商店街を歩く主婦を相手に、商売に精を出していた。

「あ！箆也くん！」

「ただいま戻りました」

主婦に紛れて、八百屋へと歩み寄ってくる箆也に、父が笑顔进行ける。

「お父さんに会えなかったこの数時間っ、寂しくなかったあ！？」

「いえ、全然」

「そうっ…」

爽やかな笑顔ですぐさま答える箆也に、多少のショックを受ける父。

「一人だけえ？学校の帰りにしては早いねえっ」

「用事をしてたら遅くなって、結局、学校へは行かなかったのど時計を見ながら問いかける父に、箆也が少し困ったように笑う。

「神はまだ帰ってませんよね？」

「うんっ、まあ中で待ってなよ。直に帰ってくるだろうからさあ」

「すみません、お邪魔します」

笑顔で奥へと進める父に、軽く一礼をしながら、箆也が店の中を通り抜け、靴を脱ぎ、店から続く居間へと上がる。

「スズメさん？」

「おう、箆也。えらく早いな」

箆也が居間へと入ると、居間にはすでに制服から着替え、すっかり寛いでいる様子のスズメの姿があった。

「スズメさんこそ、学校から帰ってきたにしては、早すぎませんか？」

「隣校の番長に謝りに行ったらさあ、何か学校戻んのもダルくなっちまって、そのまま帰宅っ」

「成程」

スズメの言葉に、籠也が納得した様子で頷く。

「本当に謝りに行ったんですね、スズメさん」

「だってツバメの呪い、怖えーんだもんっ」

少し意外そうに言い放つ籠也に、スズメがしかめた表情を見せる。

「それにつ…」

「えっ…？」

ふと表情を曇らせるスズメに、籠也が首を傾げる。

「昨日、何かあって、アヒルの様子がおかしくなったんなら、それはそれで反省しねえといけねえしっ…」

「神の…様子っ…？」

スズメのその言葉に、籠也が表情を曇らせる。

——“当たれ”…“当たれ”…！——

——今日のは、十発十中、俺が全部悪い…ごめん…——

「……っ」

昨夜、突然、様子を変えたアヒルを思い出し、籠也はそっと目を細めた。

Word. 6 二人目ノ神 (3)

「どうぞ」

公園のベンチに腰掛けたアヒルに、雅が買ってきた二つのペットボトルの内の一つを手渡す。

「ありがとう。ええーっと…」

「みのしま箕島雅といいます。雅で結構ですよ」

「雅…さん。えっと、俺はっ…」

「安団、安の神・朝比奈アヒルくん」

「よくご存知でっ…」

アヒルが名乗る前に、アヒルの名を呼ぶ雅に、アヒルは少し顔をしかめながら、もらったばかりのペットボトルを開け、中の水に口をつけた。雅もアヒルの横に腰掛け、同じように水を飲む。

「忌や神を知ってるってことは、あんたも五十音士なのか？」

「ええ。僕は五十音、第三十二音“みもりみ”の力を持つ者。“美守”と呼ばれる者です」

「美、守っ…」

まだ聞きなれぬ五十音士たちの言葉を、アヒルが戸惑いながら繰り返す。

「っつーことは、“み”から始まる言葉を操るってことか？」

中の水を飲み干し、空になったペットボトルを手で回しながら、首を捻るアヒル。

「ええーっと、“み”っていうとっ…」

「考えるより、見た方が早いでしょう」

「へっ？」

雅は軽く笑みを浮かべると、まだ水の入ったペットボトルをベンチの上に置き、何やら制服のポケットをあさり始めた。

「よいしょ」

「あっ…！」

ポケットから雅が取り出したものは、青く輝く、宝石のような丸い小さな玉。その玉を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「青いっ…言玉…？」

「第三十二音、“み”解放…」

雅の言葉に反応し、雅の手の中の言玉が、淡い青色の光を発し始める。雅は光る言玉を、アヒルの持つ空のペットボトルへと向けた。
「満^みたせ」

——パアアアアン！

「うっ…！」

一際強く輝く言玉に、思わず目を伏せるアヒル。視覚を封じたアヒルであったが、起こった変化は、他の感覚から伝えられた。

「あれっ…？」

光が止み、目を開けたアヒルが、右手に、先程までとは異なる重みを感じ、顔を下へと向ける。

「あっ…！」

アヒルが下を見ると、確かに飲み干したはずなのに、水が満杯に詰まっているペットボトルが、アヒルの右手に握り締められていた。

「あ…」

「これが僕の力です」

「すっげ…」

満杯に入ったペットボトルをまじまじと見つめながら、アヒルが感心した表情を見せる。

「こんなことも出来んのかあ」

「言葉の力は無限ですよ。言葉さえあれば、人はきっと何でも出来る」

「ふう…んっ…」

頷きながらも、少し眉をひそめるアヒル。

「無限なわりに、俺は“赤くなれ”と“青くなれ”と“当たれ”しか言えねえけどなあ」

「えっ？」

「辞書も読んではいるんだけどさっ、どーも字の羅列が耐えられなくって、一日二分しかもたねえしっ」

満杯のペットボトルをベンチに置いたアヒルが、ベンチから立ち上がり、大きく両手を伸ばしながら、どこかボヤクように呟く。

「もっと勉強しなきゃとは、思ってたんだけどっ…」

「焦って学ぶ必要なんて、ありませんよ。言葉は、自然に身につくものです」

「自然に、ねえっ…」

手を下ろしたアヒルが、背中で雅の声を聞きながら、どこか遠い瞳で、空を見つめる。

「けど、あんたの神にも言われたしなあ」

「行動を共にしているだけであって、あんなのを我が神と思ったことは、一度たりともありませんよ」

「あ…そう…」

満面の笑顔で、どこか刺々しく言い放つ雅に、アヒルが少し引きつつた表情を見せる。

「為介さんに、“神、失格”と、言われたことですか？」

「……っ」

アヒルが引きずっている言葉を、言い当てた雅に、アヒルが少し表情を曇らせる。

「もっと神らしくなりたいと、あなたはそう思っているのですか？」

「別につ、神らしくなりたいなんて、チビっとも思ったことねえよっ」

雅の方を振り返ったアヒルが、大きく首を横に振る。

「ただっ…」

「ただ？」

そっと俯くアヒルに、雅がすぐさま聞き返す。

「こんな出来損ない神様の俺なんかの言葉を、真正直に聞いてくれるあいつ等に…」

——— 援護するわ、神…… ———

——— 何で僕がっ……こんなっ……！———

箆也と囁は、アヒルの言葉を違うと否定しながらも、昨夜もアヒルの言葉を聞き、忌に取り憑かれた人間たちを、攻撃しないでくれた。

「あいつ等に……ちょっとでも応えたいって、そう思って……」

「……っ」

アヒルの言葉を聞き、そっと目を細める雅。

「仲間の為、ですか……」

そう呟いた雅が、深々と肩を落とす。

「朝比奈くん」

「へっ？」

名を呼ばれ、アヒルが顔を上げる。

「本来なら、他団のことに口出しするべきではありませんが、ツバメくんの友人として、友人の弟であるあなたに、一つだけ言いたいことがあります」

「言いたいこと……？」

真剣な表情でアヒルを見つめる雅に、アヒルが少し戸惑うように首を傾げる。

「五十音士の世界は、あなたが思っているよりもずっと醜く、汚く、残酷で、そして冷たいものです」

「……っ」

雅の言葉に、アヒルがそっと眉をひそめる。雅の瞳は、ただまっすぐにアヒルを捉えており、とても冗談や脅しで言っているようには見えなかった。

「仲間の為に」なんて甘い考えで、やっていけるような世界じゃない」

「雅、さんっ…」

強く言い切る雅を、アヒルもまっすぐに見つめる。

「昨日のツバメくんもそうですが、これからもきつと、神であるあなたの周囲の人間は、少なからず巻き込まれることになるでしょう」

「……っ」

はつきりと言い放つ雅に、曇るアヒルの表情。

「それは、あなたが神である以上、決して変えられない」

ベンチに座ったままの雅が、突き刺すような瞳で、アヒルを見上げる。

「失うことの怖さを、あなたはもう十分にご存じなのでしょう？」

「それはっ…」

雅の問いかけに、アヒルが思わず口ごもる。

「はつきり言います、朝比奈くん」

雅がゆっくりと、ベンチから立ち上がる。

「もしあなたに、“神で在ろう”とする気持ちがあるが、ほんの少しもないのなら…」

上がった目線から、アヒルを見下ろす雅。

「あなたは今すぐ、神をやめた方がいい」

「……っ」

雅の言葉に、アヒルはさらに険しい表情を作った。

その頃。朝比奈家・アヒル自室。

「……っ」

アヒルのいない部屋で、アヒルの机の椅子に座り、寛いでいた簞也が、ふと顔を上げ、部屋の時計を見る。

「遅いな…」

学校からどこにも寄らずに帰って来たのであれば、もうとつくに家に着いているくらいの時間であった。

「囁もまだだし、どこかに寄って来ているのか…まあ忌の気配もないし、問題ないか」

自己解決するように呟いた箆也が、机に置いてある恋盲腸の本を手取る。

「恋盲腸でも読みながら待つか。んっ？」

本を広げた箆也が、何かに気付いた様子で眉をひそめる。

「これ、もう読んだ巻だな。スズメさんの部屋に、次の巻を…」

本を閉じると、箆也は椅子から立ち上がり、アヒルの部屋を出た。「それにしても、あの為の神の店のドラマCD…気になるなあ…」

為介よりもドラマCDが気になっている様子の箆也が、廊下を出て、二階にある四つの部屋の内、アヒルの向かいにある部屋の扉を開ける。

「スズメさんに頼んで購入をっ…んっ？」

部屋の扉を開けた箆也が、顔を上げ、部屋の入口で足を止める。

「あれ？ここはっ…？」

箆也の入ったその部屋は、必要最小限の家具だけが置かれている、きれいと言えきれいだが、妙に殺風景な部屋であった。ただきれいというだけでもなく、生活感のないような、もう何年も使っていないような、そんな部屋だ。

「間違えたか。同じような部屋があつて、どうもまだっ…」

そう呟き、箆也が再び廊下へと出る。

「だがツバメさんの部屋にも見えないし、一体っ…」

首を傾げながら、箆也が部屋の扉を閉める。

「……っ！」

閉めた扉を見つめ、大きく目を見開く箆也。

「これはっ…」

部屋の扉には、アヒルの部屋の扉に掛かっている、『アヒル』と描かれた表札と同じものが掛かっていた。そしてそこには、ある文

字が書かれている。

「“カモメ”…？」

その書かれた文字を、そつと口にする箆也。

「あつれえ？ 箆也っ」

そこへ、一階からスズメが上がってくる。

「お前、廊下で何やつ…」

「スズメさん」

「あっ？」

スズメの言葉を勢いよく遮り、箆也がスズメの名を呼ぶ。

「この部屋はっ…」

『カモメ』と書かれた表札の掛かった、その扉を指差しながら、箆也がスズメの方を振り向く。

「この部屋は…誰の部屋ですか…？」

「……っ」

箆也の問いかけに、スズメはそつと目を落とした。

「入れ」

「えっ？ けどっ…」

箆也が閉めたばかりのその扉を開き、スズメが顎を少し出すようにして、部屋の中へ入るよう言う。だが箆也は、少し躊躇うように、眉をひそめる。

「大丈夫。お前には“言っている”って、そんな気がする」

「えっ…？」

そのスズメの言葉の意味がわからず、箆也は首を傾げた。

「入れよっ」

「失礼、します…」

もう一度、スズメに誘導され、箆也が扉に『カモメ』と書かれた表札の掛かった、その部屋へと足を踏み入れる。遠慮がちに部屋の中を見回し、箆也が表情を曇らせる。先程、一瞬だけ入った時の感覚は正しく、その部屋には生活感がなく、住人の気配を感じさせなかった。

「キレイなもんだろ？五年も誰も使ってねえーんだぜ？」

軽く笑みを浮かべてそう言いながら、スズメが部屋のベッドへと腰を掛けた。

「こんだけ狭い家だからなあ、誰も使ってない部屋なんて、物置かなんかにすべきなんだろうけどっ…」

ベッドに深く腰を掛け、天井を見上げるスズメ。

「どうしても、残しておきたくてさ…」

微笑んだスズメのその表情は、どこか悲しげであった。

「あの人が…生きてたって証にっ…」

「……っ」

すぐさま俯くスズメに、箆也がそっと目を細める。

「この部屋の主の名は、朝比奈カモメ」

どこか遠い瞳で、窓からの景色を見つめるスズメ。

「俺たち四人兄弟の、一番上の兄貴だった…」

——カー兄が、大好きだった……。

Word・7 へつづく。

Word. 7 神ニ、誓ウ (1)

——五年前。アヒル、十歳の冬。

「ああゝ！スー兄が俺の唐揚げ取ったあ！」

「あつれえゝ？最後まで残ってるから、いらないのかと思ったあゝ
っ」

「んだとおっ！？」

小学生のアヒルと、中学生のスズメが並び、朝比奈家の食卓は、今日もとても賑やかである。おかずの取り合いは、日常茶飯事であった。

「唐揚げなんて、貧乏な我が家じゃ滅多に出ねえんだぞ！？勿体振るのも無理ねえーだろっ！」

「そういう文句は、俺じゃなくてオヤジに言えよっ」

「アーくん！ごめんねえ！お父さんに甲斐性がないばかりにい！」

「ホントにな」

今にも泣き出しそうな表情で謝る父に、アヒルが冷めた視線を送る。

「その代わり、お父さんの唐揚げあげるからあゝ！」

「マジ！？やったあ！」

父から唐揚げをもらい、満面の笑みを見せるアヒル。

「へっへえゝっ！」

「スズメ：アヒル君：」

『へっ？』

どこからか聞こえてくる不気味な声に、唐揚げを食べようとしていた二人が、それぞれ振り向く。

「呪われたくなかったら：唐揚げ頂戴：」

『……どうぞっ』

藁人形片手に、有無を言わさぬ威圧を与えてくるツバメに、逆ら

うことも出来ず、アヒルとスズメが大人しく唐揚げを差し出す。

「結局、この家で一番強いのもって、ツー兄だよな…」

「ってか、お前がうるさく騒がなきゃ、俺は無事に唐揚げを食えてたんだよっ」

「元はと言えば、スー兄が俺の唐揚げ取るから、いけないんだろうっ!？」

「何、騒いでんのっ? 食事中だよっ」

『……っ』

台所から、居間へと入ってくる声に、アヒルとスズメが勢いよく振り向く。

「カー兄っ!」

「食事中は静かになって何度も言ってるでしょう? アーくん」

エプロン姿で居間へと現れたのは、高校生になる朝比奈家の長男・カモメであった。当時の朝比奈家は、母が出て行った関係で、炊事洗濯掃除はすべて、長男のカモメが担当していたのである。

「だってスー兄があっ…!」

「またアーくん、いじめたの? スーくんっ」

「いじめてねえよっ。兄弟のコミュニケーションだ、コミュニケーションっ」

「どこがコミュニケーションなんだよっ!」

適当なことを言うスズメに、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「スーくんはお兄さんなんだから、アーくんに優しくすることっ」

「へえっ!」

「やあっ!」

「アーくんも、いちいち騒がないっ」

「はあっ!」

カモメに注意され、アヒルが少し拗ねるように肩を落とした。

「ほらっ、野菜スープ運ぶの、手伝って」

「野菜スープ!？」

その言葉を聞き、拗ねていたアヒルが、一気に表情を輝かせる。

「売りものの残り汁」、の間違いじゃねえーのおっ？」

「そういうこと言うんなら、飲まなくていいよ？ スーくん」

「えっ！？ いやっ！ ウソウソ！ いるいるっ！」

茶化すように言ったスズメであったが、悪戯っぽく問いかけるカモメに、焦ったように必死に言い繕う。売り物の残りでカモメが作る野菜スープは、朝比奈家の定番メニューであった。

「俺っ！ カー兄の野菜スープ、大好き！」

「そう？ じゃあ今度は、一緒に作ろうか？」

「うん！」

穏やかな笑顔を見せるカモメに、アヒルは満面の笑顔で、大きく頷いた。

アヒルにとって、カモメは兄である前に、母のような存在であった。

「カー兄！ 買い物、俺も行くよお！」

「いいけど、おやつは買ってあげないよお？」

「ええっ？」

「カー兄！ 今日、俺っ、リレーで一番になったよっ！」

「凄いねえ、アーくんはっ！ さすがは僕の自慢の弟だっ」

「エヘヘっ！」

本当の母は、アヒルがまだ小さい頃に家を出て行ってしまったので、アヒルに母の記憶はなかったが、優しく包み込んでくれる存在を“母”と呼ぶならば、カモメは“母”そのものであった。

そんな優しいカモメを、アヒルは誰よりも深く、慕っていた。

だがある日、二人は、些細なことで、言い争いとなった。

「ねえ、アーくん、何度も言ってるでしょ？」

「うるさいなあ！カー兄には関係のないことだろっ！」

原因は何であったのか、きつとほんの些細なことであった。ただ虫の居所が悪かったのか、いつものように注意するカモメに、アヒルは激しい剣幕で怒鳴り返した。

「関係ないって…あのねえアーくん、僕はアーくんのお兄ちゃんです…」

「別に俺が兄ちゃんについて選んだわけじゃないっ」

「僕はアーくんのためを思ってるっ…」

「別に俺は頼んでないっ」

強く口を尖らせたアヒルは、カモメが言葉を言い終える前に、その言葉をすぐに否定した。

「アーくん、あのねえっ…」

「ああー！もうっ！ホントにうるさいっ」

大きく首を横に振ったアヒルが、鬱陶しそうにカモメを見る。

「兄ちゃんなんかっ…！居なくなればいいんだっ…！」

「あっ…！アーくんっ…！」

そう、カモメに強く言い放ち、そのままアヒルは、家を飛び出していった。

だが、帰宅したアヒルを待っていたのは、思いもよらぬ光景であった。

「えっ…？」

居間に敷かれた布団に横たわっていたのは、深く目を閉じたカモメであった。生気のない白い顔のカモメは、指一本動かさず、ただ眠っているよりも静かであった。

「ううっ…！」

「クっ…！」

カモメのすぐ傍で座るスズメとツバメは、とめどなく涙を流しており、あのいつも無駄に明るい父でさえ、暗い表情を見せていた。

「何っ…？これっ…」

茫然と呟きながら、アヒルが、横たわったままのカモメへと歩み寄っていく。

「ウソ…だろっ…？ねえっ…」

『……っ』

助けを求めるように問いかけたアヒルに、父たちは皆、ただ深く俯くだけであった。

「こんなの…ウソだよねえっ…？ねえっ？カー兄っ…」

再び助けを求め、アヒルがそっと、カモメの顔に手を伸ばす。

「うっ…」

触れたその顔はとても冷たく、生きている人間の体温は、カモメのぬくもりは、そこにはなかった。

「カー…兄っ…？」

深く目を閉ざしたカモメは、アヒルの問いかけに答えることもない。

「カー兄っ…」

アヒルが両手で覆うように、カモメの冷たい頬に触れる。

「違うんだっ…ねえっ、違うんだよっ…カー兄っ…」

そう呟き、アヒルが必死に首を横に振る。

——兄ちゃんなんかっ…！居なくなればいいんだっ…！——

「こんなことっ…こんなことになって欲しくてっ、あんなこと言ったんじゃないんだっ…」

カモメに触れながら、アヒルが震えた声で、必死に言葉を続ける。

「あんなことっ…あんなこと、本当に思ってるわけじゃないんだよっ…！ねえっ！カー兄っ…！」

「アヒルっ…」

必死に叫ぶアヒルを、スズメが目を細め、見つめる。

「居なくなればいいなんて、本当は思っていないんだよっ…！ねえっ

！カー兄っ…！」

カモメの体を揺らすアヒルの瞳からは、いつの間にか、透き通った涙が溢れ出していた。

「違う、んだっ…違っ…たのにつ…」

どんなに体を揺らしても、涙を頬へと落としても、カモメがその瞳を開くことはなかった。

——アーくんっ——

優しい笑顔が、思い出されて、そして、消えていく。

「ううっ…！」

涙を流したアヒルが、強く唇を噛み締める。

「あああああああっ…！！！」

カー兄が、大好きだった…——

Word. 7 神ニ、誓ウ (2)

「……………」

スズメから話を聞き終えたと、箆也はまるで痛むようにその左胸を押さえ、部屋に立ち尽くしたまま、そっと俯いた。

「俺はアヒルいじめてばっかだったし、ツバメは昔っからあんな調子だったからっ…」

ベッドから立ち上がったスズメが、部屋の奥の机の方へと移動する。

「あいつにとって…兄ちゃんって呼べるのは、カー兄だけだったのかもなあ…」

「スズメさん…」

机に手を置き、どこか寂しげに呟くスズメに、箆也が目細める。
「カー兄が死んでから毎日さっ、あいつ、ずうーとここで座ってるのっ」

「えっ…?」

箆也の方を振り返ったスズメが、少し笑みを見せながら、机のすぐ横の椅子を指差した。

「何日も何日も、飯も食わずにずうーと…」

「……っ」

目を落とすスズメに、箆也も少し表情を曇らせる。

「何とかしようとしてオヤジがさっ、ここに座って、寝てるあいつに、レタス投げたわけっ」

「レタス?」

思いがけない展開に、思わず目を丸くする箆也。

「そっ。“起きろおレタスマイルうー!”とか言っちゃってさっ」

笑顔を見せたスズメが、レタスを投げる真似をして見せる。

「そしたらあいつ、出て来たんだよねえ。」「痛ってえなあ！馬鹿オヤジ！」とか言いながらさっ」

箆也から目を逸らし、スズメが再び、窓の外の景色を見つめる。

「笑ってさっ…」

「……っ」

笑顔を見せるスズメに、箆也がそつと目を細める。

「それから毎日、オヤジ、野菜投げつけて、アヒルを起こすようになってよおっ」

「えっ…」

スズメの言葉に、箆也が驚いた顔となる。

「日曜もお盆も正月もっ…ホント、毎日。五年だぜえ？五年っ」

どこか呆れたように、言い放つスズメ。

「バカだよなあっ…ホント、バカだよ…」

「……っ」

呆れたような口調では言いながらも、穏やかで温かい笑みを浮かべているスズメに、箆也がそつと目を細めた。

——喰らええ！ピーマン爆弾！——

——喰らうか！ボケえ！——

「……………」

朝の賑やかな光景を思い返し、心の奥底から込み上げるような、温かい何かを感じて、箆也は思わず、優しい笑みを浮かべた。

「あいつはさっ、自分の“居なくなれ”って言葉が、カー兄を本当に居なくならせたって思ってるんだ」

「……っ」

再び箆也の方を見るスズメに、箆也が笑みを止め、真剣な表情を見せる。

「言葉には力があるって、そう信じてるんだよっ…」

「言葉に…力…」

言葉の力を持つ箆也は、その言葉を、どこか噛み締めるように呟いた。

「だからあいつは、誰よりも、言葉の重みを知ってるっ……」
机から離れ、箆也の方へと歩み寄ってくるスズメ。

「だからあいつは、誰よりも、言葉に傷ついた人間を守ろうとするっ……」

穏やかな笑みを浮かべ、スズメが箆也の前へと立つ。

「傷つけた人間に……自分と同じ後悔をさせないためにっ……」

「……っ」

——迷惑被ったからって……人の心を傷つけていい、わけじゃないっ……

——傷ついた人間を、平気で傷つける奴と、俺は一緒に戦えない

……

アヒルが何故、あそこまで、傷つけた人間を謝らせることにこだわるのか、やっとわかったような気がした。

「まあバカで頑固な奴だから、色々手は焼くだろうけどさっ」

スズメが笑顔を深くし、箆也の肩に手を置く。

「あいつのこと、よろしく頼むよっ」

「えっ……?」

微笑みかけるスズメに、少し戸惑った表情を見せる箆也。まるでスズメが、アヒルが神であり、そして箆也がその付き人であることを知っているような、そんな錯覚を覚えた。

「……っ」

だがすぐにその戸惑いを消し、箆也がそっと口元を緩ませる。

「はいっ」

「……っ」

大きく頷く箆也に、スズメが少し目を細めた。

「あの、スズメさん」

「んあっ？」

「一つ、お願いがあるんですけど」

「ふうっ」

カモメの部屋を出た箆也が、色々と聞いた自分の心を落ち着かせるように、一つ、深々と息をついた。

「……盗み聞きか？相変わらず、悪趣味だな」

「フフフっ…生まれつきよっ…」

箆也が振り向くと、カモメの部屋の扉のすぐ横に、壁にもたれかかるようにして、囁が立っていた。鋭い瞳を向ける箆也に対し、囁がどこか楽しげに微笑んだ。

「聞いていたのか？」

「ええ…だいたい…」

問いかける箆也に、そっと頷く囁。

「誰かさんのあんまり可愛らしいお願いに…思わず腹を抱えて笑いそうになったけれどっ…」

「悪かったな」

小ばかにするように言い放つ囁に、箆也が思わず顔をしかめる。

「神の所へ行く。一緒に来るなら、とっとと来い」

「フフっ…喜んでっ…」

一階へと降りていく箆也に、微笑んで続いていく囁であった。

——あなたは今すぐ、神をやめた方がいい……——

一方、公園で雅と話していたアヒルは、雅に厳しい現実を突きつけられ、険しい表情を見せていた。

「……っ」

そつと眉間の皺を消したアヒルが、少し俯くように下を見る。

「俺っ…前は、“神なんて冗談じゃねえ”、“国語も嫌いなのに言葉でなんか戦えるか”って、そう思ってた…」

「……っ？」

下を向いたまま、落ち着いた声を発するアヒルを、雅が少し眉をひそめながら見つめる。

「けど…今は、ちょっと違うんだ…」

「違う…？」

アヒルの言葉に、首を傾げる雅。

「俺は昔…言葉で、大切な人を傷つけて…そのまま、謝ることも出来ずに、その大切な人を失った…」

「……っ」

急に話を変えたアヒルのその話に、雅が少し驚いたような、険しい表情を見せた。

「死ぬほど後悔した…」

——兄ちゃんなんかっ、居なくなればいいんだっ…！——

「なんで、あんなこと言ったんだろうって…」

カモメの死の原因が何であったにしろ、もしもアヒルがあんなことを言わなければ、カモメは死ななかったのではないか。そんな考えは、毎日のように、アヒルの脳裏に過ぎった。

「言葉がどんなに重いものなのか、思い知らされた…」

「朝比奈くん…」

どこか悲しげな笑みを浮かべるアヒルに、雅がそつと目を細める。「どうしたら、あの人に報いることが出来るんだろうって、どうしたら、この後悔は消えるんだろうって、ずっと考えてたけど…なんも浮かばなくてさっ…」

アヒルが顔を上げ、そのまま青い空を見上げる。

「きっと方法なんてないんだって、そう諦めかけた時…俺は言葉の力を手に入れたっ…」

——あなたは安の神……——

「何の根拠があるわけでもないんだけどさっ、この力を手に入れて、何回か戦っていくうちに、思ったんだよなあ…」

空を見るアヒルが、まっすぐに曇りのない瞳を見せる。

「こうやって、言葉の力で戦っていくことで、この道の先に…俺がずっと見つけることの出来なかったものが、あるんじゃないかって」

「……………」

続くアヒルの言葉を、雅は真剣な表情で聞いた。

「だからっ…」

空を見ていたアヒルが、ゆっくりと顔を下ろし、真正面から雅を見つめる。

「だから俺は、神をやめない」

「……………」

笑顔を見せ、はっきりと答えるアヒルに、雅が少し驚いたように、目を見開く。

「甘い考えなのかも知れないけど、俺はやっぱり、あいつ等に応えもしたいしっ」

笑顔を見せたまま、さらに言葉が続けるアヒル。

「俺が神だから、周りの人たちが巻き込まれるってんなら…みんなを守るように、俺が強くなる」

アヒルが見下ろした自分の拳を、強く握り締める。

「安の神として！」

「……………」

その言葉に何らかの力を感じるように、雅は思わず、衝撃の走ったような、そんな表情を見せた。

「色々と気にかけてもらって、悪かったなっ」

雅に微笑みかけると、アヒルがベンチに置いてあった鞆と、水の入ったペットボトルを手を取った。

「ツー兄の友達っつーから、ただの怪しい人種かと思ってたけど、意外といい人そうだっ、あんたっ」

「……っ」

鞆を背負い、再び雅の方を振り向いたアヒルの見せた、屈託のない笑顔に、雅が少し驚いたような顔となる。

「じゃあ、またな！」

「あっ、はい」

雅に軽く手を振り上げると、アヒルは公園から歩き去っていった。
「……………」

その場に一人残った雅が、そっと目を細める。

「あんな感じで良かったんですか？ 為介さん」

「うんっ、ばっちしいっ」

どこか疲れたように肩を落としながら、雅がベンチの方を振り返ると、ベンチの後ろの木陰から、軽い口調を発して、扇子を扇ぎながら、為介が姿を現した。

「さっすが雅くん！ 超演技派だねえ！ ボクってば、思わず泣きそうになっちゃったよおっ」

本気で誉めているのかもわからない、軽い言葉を雅へと投げかける為介。

「でもボクがお願いしたより、なあ〜んか親切じゃなかったあ？」
「……っ」

わざとらしく問いかける為介に、雅が少し眉をひそめる。

「やあ〜っば、お友達の弟クンでことで、情が出ちゃったかなあ？」

「いえ、別に。ただ、人を試すようなことをするのが、あまり好きではないだけです」

詮索するように問いかけてくる為介に、顔色一つ変えずに、雅が冷静に答えた。

「為介さんがやってくれば良かったのに」

「ほらあゝっ、ボクってば、正直な人間じゃなあゝい？だからいまいち、上手く出来ないっていうかあゝ」

「……………」

頭の軽そうな笑みを浮かべる為介に、雅が表情を止める。

「じゃあ僕、帰ります」

「ああゝ！待ってえゝ！雅くうゝん！見捨てないでえゝ！」

鞆を持ち、すぐさまその場を去ろうとする雅を、為介が必死に止める。

「はあっ…まあ彼は神をやめないそうですし、期待通りになって良かったじゃないですか」

どこか呆れるように肩を落とした雅が、再び為介の方を見る。

「でも何だってこんな、試すような真似っ…」

「仕方ないじゃなあゝい？頼まれたんだもおゝんっ」

少し眉をひそめる雅に、面倒臭そうに答える為介。

「それにつ…」

為介がそっと目を細め、鋭い笑みを浮かべる。

「こんなところで壊れてもらっちゃ、面白くないんだよねえっ…」

Word. 7 神ニ、誓ウ (3)

「ああゝあ、結構遅くなっちゃったなあゝ」

腕時計で時間を確認しながら、アヒルが少し歩く足を早める。日は傾き、空は徐々に暗くなり始め、夕日で赤色に染まり出していた。「今日の食事当番はスー兄かあ？後で頼まれても面倒だし、電話して、買い物するもんでも聞くなあ」

「きやあああああっ！」

「あっ？」

首を捻っていたアヒルが、どこからか聞こえてくる悲鳴に眉をひそめる。

「何っ…あっ…！」

振り返った途端、アヒルが険しい表情を見せる。

「この気配は…忌っ…！」

目つきを鋭くすると、アヒルはすぐさま、その場から駆け出していった。

「グオオオオオオっ…！“壊”っ！」

『うわああああ！』

『きやあああああ！』

広場の中央で、激しい咆哮をあげる、三十代半ばくらいの一人の男。男が言葉を発し、手を振り上げると、広場の遊具やら電灯やらが、一気に崩れ落ち、広場に集まっていた人々が、一斉に逃げ惑った。

「あいつかつ…！」

気配と悲鳴を頼りに、広場へと駆け込んでくるアヒル。

「第一音、“あ”・解放っ…！」

逃げ惑う人々の間から広場へと入ったアヒルは、素早くポケットから言玉を取り出し、力を解放して、銃の姿へと変える。姿を変えた銃を、アヒルがすぐさま右手に構える。

「グオオオオオ！ “破” っ…！」

「ひいひいっ！」

「あっ…！」

広場を逃げ惑う中年男へ向け、衝撃波を放つ、忌に取り憑かれた男。向かってくる衝撃波に、背筋を震え立たせる中年男を見て、アヒルが少し焦ったように顔をしかめながら、素早く銃を構える。

「“当たれ” っ…！」

銃から放たれた弾丸が、アヒルの言葉に従い、まっすぐに衝撃波へと向かっていく。

———パアアアアン！

アヒルの弾丸が衝撃波を貫き、撃ち碎く。

「グっ…！」

「ふいっっ」

碎かれた衝撃波に、少し曇った声を発する男に対し、どこかホッとしたように、一息入れるアヒル。

「でえ？ オッサン、あの人に一体、どんなこと言っ…！」

「ひええええっ！」

「ありっ？」

難を逃れ、急いで広場から逃げていく中年男に、アヒルが目丸くする。

「お、おいっ！ ちょっと待っ…！」

「グオオオオオっ…！」

「うえっ…！？」

中年男を追いかけようとしたアヒルへ向け、駆け込んできた男が、勢いよく右腕を振り抜く。

「うわわっ！あっ…！」

必死に男の攻撃を避けるアヒル。避けながら、アヒルが広場の入口を少し振り返ると、中年男は広場を出て、そのままどこかへと走り去って行ってしまった。

「クッソっ…！これじゃあ謝らせることもっ…！」

「破”っ…！」

「うえっ…！」

逃げていった中年男に気を取られていたアヒルへ、男が至近距離から衝撃波を放つ。

「ヤバっ…！」

迫る衝撃波に、顔を歪めるアヒル。

「クっ…！」

「“妨げろ”…！」

アヒルが諦めるように歯を食いしばったその時、言葉が聞こえ、音色が流れると、アヒルへと向かって来ていた衝撃波が、横から入ってきた振動とぶつかり、勢いよく砕け散った。

「あっ…！」

目の前で砕け散った衝撃波を見て、アヒルが目丸くする。

「今のって…！」

「ご機嫌いかが…？アヒるん…！」

「……っ！」

よく聞き覚えのあるその声に、アヒルが大きく目を見開き、勢いよく振り返る。

「囁！箆也もっ…！」

広場の入口に立っているのは、箆也と囁であった。すでに臨戦態勢で、それぞれ格子と横笛を右手に持っている。驚くように見るアヒルに、囁はどこか楽しそうに笑みを向けた。

「お前ら、何でっ…！」

「聞いてくれる…？アヒるん…！」

「へっ？」

戸惑うように問いかけようとしたアヒルの声を遮り、言い放つ囁に、アヒルが首を傾げる。

「さっき、そこで…全速力で駆け抜けていく、言ノ葉町商店街でラーメン屋経営中のオジサンに会ったんだけど…」

「はっ…？」

急によくわからない話をし始める囁に、意味がわからず、顔をしかめるアヒル。

「いきなり何言ってっ…」

「バイトの人をね：“トロくて使えない”って言って、一方的に解雇した上に、それまでの分のお給料、払わなかったらしいのよ…」

問いかけようとしたアヒルの言葉を遮り、囁が言葉を続ける。

「酷い話だと思わない…？」

「ひえええ！」

「あっ…！」

話を続けながら、囁が入口から広場の中へと押し出したのは、先程、逃げてしまった、あの中年男であった。広場に座り込んだ中年男は、焦った様子で声をあげる。

「グオオオオオ！」

「いやあ！ひいっ！」

「おっと」

威嚇するように咆哮をあげる男に、ひどく怯え、立ち上がって、再び広場を出て行くとする中年男を、囁の横に立った箆也が、逃がすことなく捕まえる。

「おい」

「ひい！」

中年男の胸倉を掴み、右手の格子を、中年男の顔のすぐ傍まで近づける箆也。箆也の突き刺すような視線に、中年男が忌に対してと同じくらい、怯えた表情を見せる。

「痛い目に遭いたくなかったら、とっとと謝るんだな」

「ひいっ！ごめんなさあーい！」

箆也の脅しにあっさりと負けて、中年男が大声で謝る。

「解雇は取り消しますうゝ！今までの分のお給料も払いますから、どうか許して下さいいゝ！」

「グっ…」

必死に謝る中年男の姿に、忌に取り憑かれた男が、今までとは異なる、どこか苦しいような声を漏らして、その動きを止めた。

「グウウウっ…！グアアアアアアっ！」

空を見上げた男が、今までで一番の激しい叫び声をあげると、男の全身から、眩いばかりの白い光が放たれる。

「あ…あ…あっ…」

白い光が止むと、全身を包んでいた黒い影の消えた男が、ゆっくりと瞳を閉じ、力なくその場に倒れ込んだ。

「こ、これは一体っ…」

「上出来ね…」

「へっ？」

そっと呟く囁に、中年男が戸惑うように振り向く。

「ご苦労様…“催眠”…」

「うっ…！うあっ…すうーっ…すうーっ…」

言葉の後に続く囁の横笛の音色を聞くと、中年男はその場に横になり、音に呑み込まれるように、深い眠りについた。

＜グウっ…！グググっ…！何だっ…！？＞

「あっ…！」

まだ暗がりの広がりきっていない夕焼け空に浮かぶ、その黒い影を塊を見つけ、顔を上げたアヒルが、大きく目を見開く。

「忌っ…！あの人の体の中から出たのか…！」

「箆也…」

「ああ」

アヒルが忌の姿を確認している間に、箆也はその表情を鋭く研ぎ澄まし、一本に重なった格子を素早く身構えた。

「“変格”」

箆也の言葉に反応し、格子が赤い光を放つと、格子の先端に曲がった刃が現れ、格子は鎌へと姿を変えた。その鎌を、箆也が大きく振り上げる。

「“刈れ”…！」

<グっ…！>

振り上げられた鎌から放たれた赤い一閃が、迷うことなく上空の忌へと向かっていく。

<グアアアアッ！>

突き上げた一閃に右腕部分の影を斬り裂かれ、忌が痛々しい叫び声をあげる。

「あっ…」

「何をしている？神。とっとと構えろ」

「箆也っ…」

上空で苦しむ忌を、啞然とした表情で見上げていたアヒルに、厳しい言葉を投げかける箆也。そんな箆也を、アヒルが少し戸惑うように振り返り見る。

「これが、あなたのやり方だろうか？」

「……っ」

どこまでもまっすぐな瞳で、はっきりと言い放つ箆也に、少し驚いた表情を見せるアヒル。

「お前等っ…」

「ねえ、アヒるんっ…」

「へっ？」

箆也より一步前へと出た囁が、穏やかに微笑みながら、アヒルの名を呼ぶ。

「私たちは、ただの安附よ…あなたの家族でもなければ、幼なじみでもない…」

「はっ？」

突然の囁の言葉に、アヒルが困惑した様子で首を傾げる。

「だから…あなたに元気がなくても…それをすぐに察して、わかっ

てあげることなんて出来ないわ…」

「……っ」

その言葉を聞き、家族や幼なじみが、自分の様子の変化に気付いていたことを知り、アヒルはどこか複雑そうに、表情を曇らせた。

「でもね…」

囁がさらに、言葉が続ける。

「私たちは、安附…。安の神の、あなたの付き人だから…」

より一層、口元を緩め、大きく微笑む囁。

「あなたが迷って、傷ついて…弱くなってしまいうことがあるといふなら…私たちはその時、強くなるわ…」

「……っ！」

囁の笑顔に、アヒルが思わず大きく目を見開く。

「ねえ…？ 箆也…」

「別に、僕はいつも強い」

同意を求めるように振り向く囁に、箆也はそっぽを向いて、どこか意地を張るように答えた。

「………」

そんな二人を見つめながら、そっと目を細めるアヒル。

——甘い考えなのかも知れないけど、俺はやっぱり、あいつ等に応えもしたいしっ——

先程、雅へ向けて言ったその言葉を、胸の内で、さらに強く思った。

<ググ…！グっ…！>

『……っ』

上空から聞こえてくる忌の声に、三人が一斉に表情を鋭くし、素早く上を見た。

<グっ…！>

籠也の攻撃により右腕をきり落とされた忌が、少し重そうな体で宙を流れるようにして、その場から遠ざかろうとしていた。宿主も失い、勝てないと踏んで、逃げようとしているようである。

「届くか？ 囁」

「無理ね…距離が開き過ぎてるわ…」

「お前もか…」

問いかける籠也に、囁が冷静に答える。その囁の答えを聞き、少し肩を落とす籠也。上空と地上でただでさえ距離がある上に、さらに遠ざかられては、籠也や囁の攻撃では、忌には届かないのだ。

「クソっ…ここまできて、見逃すことになるとはっ…」

「……………」

「んっ？」

悔しげに唇を噛んだ籠也が、態勢を整え、銃を握り直しているアヒルの様子に気付き、眉をひそめる。

「何をしている？ やめておけ、神。ここまで距離が開いては、あなたの銃弾でもっ…」

「……………」

「はあっ!？」

ゆっくりと持ち上げた銃の、その銃口を、自分のコメカミへと当てるアヒルに、籠也が思わず大きく目を見開き、驚きを前面に出した声をあげた。

「な、何をっ…!」

「あら、また乱調…？ フフっ…」

焦る籠也に対し、どこか楽しげに微笑んでいる囁。

「か、神っ…!」

「あ…」

籠也が必死に呼びかける中、アヒルがゆっくりと口を開いた。

「“上^あがれ”っ…!」

———パアアンっ!

その言葉とともに弾丸が放たれると、弾丸に貫かれたアヒルの体から、強い赤色の光が放たれ、次の瞬間、アヒルは夕焼け空へと、高々と舞い上がった。

「とっ…飛んだ…？」

「あら、凄…フフ…」

空へと飛び上がったアヒルを、箆也が驚きの表情で、囁が感心した様子で、それぞれ見上げる。

「くんなっ…！！」

上空で逃げようと、ゆっくりと空を流れていた忌は、自分を追うように空へと飛び上がってきたアヒルを、焦った表情で見た。

「何っ…！！？」

「終わりだっ」

直線上に並んだ忌へと、アヒルが素早く銃口を向ける。

「“当たれ”っ…！！」

「——パアアンっ！」

放たれた弾丸が、空を駆け抜け、忌の黒い影を正面から貫く。

「<ギャアアアアっ！！>

夕焼け空に、花火のように白い光を飛び散らせて、忌はあっという間に、その姿を消し去った。

「ふうっ」

無事、忌を倒したアヒルは、ゆっくりと降下し、地面へと降り立った。足に触れる地面の感触に、アヒルが一つ、息をつく。

「アヒるん…」

「んっ？」

名を呼ばれ、アヒルがその声の方を振り返ると、すでに武器を言玉へと戻した様子の箆也と囁が、ゆっくりとアヒルのもとへと歩み

寄ってきた。

「やったわね：四つ目の言葉…」

「ああっ」

優しく微笑みかける囁に、アヒルも嬉しそうな笑顔を見せる。

「辞書を引いた成果…？」

「いやっ、今のは何かこう自然とっ…あっ…」

——焦って学ぶ必要なんて、ありませんよ。言葉は、自然に身につくものです——

囁の問いに答えようとしたアヒルの脳裏に、公園で話した時の雅の言葉が過ぎった。

「……あの人の、言う通りだったなっ」

「えっ…？」

「あっ、いやっ」

そっと呟き、微笑んだアヒルが、聞き取れなかったのか、首を傾げる囁へ、誤魔化すように笑みを向けた。それから銃を言玉の姿に戻し、戻った言玉をポケットの中へと入れる。

「来てくれて、ありがとうな。助かったよっ」

「安附として、当然のことをしたまでだ」

笑顔を見せるアヒルに、箆也が素っ気なく答える。

「まあ忌の気配が出る前から：神のところへ行こうって箆也はうるさかったけれどね：フフフっ…」

「囁っ」

「……っ」

からかうように呟く囁に、しかめた表情を見せる箆也。そんな二人を見て、アヒルがどこか穏やかな笑みを浮かべる。

「箆也、囁」

『……っ?』

名を呼ばれ、箆也と囁がアヒルの方を振り向く。

「俺さっ、まだまだ言葉も四つしかねえーし、国語はやっぱり嫌いだし、バカだけどっ…」

「あなたがバカなことくらい知っている」

「ああっ!？」

「まあまあ…少しの間くらい、落ち着いて話しましょうよ…」

余計な口を挟む箆也に、言葉の途中にもかかわらず、勢いよく顔をしかめ、怒声のような声をあげるアヒル。そんな二人を、囁がどこか冷めた視線で、宥める。

「俺っ、こんな神だけどさ、俺なりに頑張るから、だからっ…!」

改めて言葉を続けたアヒルが、まっすぐに二人を見つめる。

「俺に附いて来てほしいっ!」

『……っ』

堂々と告げられるその言葉に、箆也と囁は、驚いたように大きく目を見開いた。だがすぐにその瞳を細め、箆也は少し視線を逸らし、囁は口元を緩ませる。

「そんなこと言われなくても、もとより、そのつもりだ」

「フフフっ…」

素っ気なく答える箆也の言葉を聞きながら、囁がどこか楽しげに微笑む。

「地獄の果てまで、附いて行ってあげる…」

「いや、そこまではちよっとっ…」

その笑みを怪しげなものへと変える囁に、思わず表情を引きつるアヒル。

「でもまあ…ハハっ! あんがとなっ!」

すぐに大きな笑みを作り、アヒルは二人へ礼を向けた。

「そんなことより、とつとと家へ帰るぞ」

「あっ?」

そう言って、すぐさま広場の入口へと歩き出していく箆也に、アヒルが首を傾げる。

「珍しいなあ。見たいテレビでもあんのかあ？」

「フフっ…可愛いお願いが待ってるのよ…」

「お願い？」

「囁っ！」

アヒルがさらに首を傾げる中、箆也の怒るような声が響き渡った。

Word. 7 神ニ、誓ウ (4)

十分後・朝比奈家。

「たっただいまあゝ」

「おかえりいゝ！アーくうゝんっ！」

「うわっ」

店の横の通用口を開けた途端に、勢いよく飛び出してくる父に、アヒルが思わず身を引く。

「アーくんが帰って来るの遅いから、お父さん、寂しかったよおゝっ！」

「あっ、そう」

両手で目の下を押さえ、泣いている真似をして見せる父に冷たく答え、アヒルが父の横を通り抜け、家の中へと入っていく。

「つつーか、何でもう店閉めてんの？まだ七時まっ…」

「あっ、おかえりいゝ、ガアっ」

「あっ？」

靴を脱ぎ、居間へ入りながら、父へ問いかけようとしていたアヒルが、台所の方から聞こえてくる声に、振り向く。

「こ、紺平！？」

「おっそいわよお！いつまで待たせる気よ！バカガア！」

「想子！それにつ…」

「こ、こここんばんは！朝比奈クンっ…！今日も絶好のノーマイカーディだねっ！」

「奈々瀬までっ…」

居間へと入ったアヒルを迎えるように、台所から次から次へと姿を見せる、紺平、想子、奈々瀬の三人。そんな三人を見て、アヒルが驚ききった様子で、どこか啞然とする。

「な、何でお前らがここにっ…」

「真田さんにお呼ばれしたんだよ」

戸惑うアヒルに、紺平が笑顔で答える。

「囁にっ？」

「お父さんも囁ちゃんに頼まれて、今日は早めにお店閉めたんだよ
お〜！」

「店までえ？」

便乗して答えてくる、いつの間にか居間へとやって来た父に、アヒルがさらに顔をしかめた。

「ああっ？何だぁ？お前、誕生日か何かか？」

「フッフっ：私に誕生日なんてものは存在しないわよ…」

「いや、それはそれでおかしくねっ？」

意味深な囁の言葉に、思わず顔をしかめるアヒル。

「いらっしやい、麗しき友人の皆さん。こんな所ですが、ゆっくり
していつて下さいねっ」

「まるで自分の家かのような物言いだな…」

クラスメイトモードということで、これ以上ないくらい爽やかな
笑みを浮かべた笹也が、三人へ丁寧な言葉を向ける。そんな笹也へ、
アヒルは冷たい視線を送った。

「おお〜い！アヒル！帰って来たんなら、お前も飯の準備、手伝え
え〜！」

「へっ？」

台所の奥からするスズメの声に呼ばれ、アヒルが三人を横切って、
台所の中へと入る。台所では、エプロンを着用したスズメとツバメ
が、仲良く並び、何やら調理をしていた。客が来た時用の大きな鍋
が、火にかかっている。

「何？何作ってんの？」

「野菜スープだよ…」

「えっ…？」

振り向き、微笑んで答えるツバメに、アヒルがそっと表情を止める。

——俺っ、カー兄の野菜スープ大好き！——
——そう？じゃあ今度、一緒に作ろうか？——
——うんっ！——

それは大好きだった兄が、いつも作ってくれた、大好きなものであった。

「野菜…スープっ…」

どこか噛み締めるように、アヒルがその単語を繰り返す。

「何をしている？神。とっとと作るぞ」

「全力で援護するわよ…？神…フフっ…」

「あっ…」

立ち尽くしていたアヒルの背を、後ろからやって来た籠也と囁が、そっと押す。一步前へと進んだ足に、一瞬、道が拓けたような、そんな感覚を覚えて、アヒルは大きく目を見開いた。

「お前等っ…」

「さてと…まずは鍋を砕き割ればいいのかしら…？」

「何でだよっ！」

「皮むきなら、僕に任せておいて下さい、皆さん」

「お前はまず、その嘘臭い笑顔の皮を剥けっ」

気合いを入れて台所には立ったものの、まるで料理をわかっていない様子の囁と、外用の爽やか笑顔を見せる籠也に、次々と突っ込みを入れながら、慌てて二人のもとへと駆け寄っていくアヒル。

「俺も手伝うよ、ガアっ」

「仕方ないから、私も手伝ってあげるわ！」

「あっ…わ、私もっ…」

アヒルたちが続くようにして、紺平、想子、奈々瀬の三人も、台所へと寄っていく。

「おっとっと」

ただでさえ狭い家の、狭い台所に人が集中し、それまで調理を担当していたスズメが、弾き出されるように台所から、居間へと出て来る。

「やれやれっ」

身につけていたエプロンはずし、テーブルの横へと腰掛けるスズメ。

「ハッハッハあー！今日はいいーっぱい売れ残ったからなあ！じゃんじゃん作れえー！若人たち！」

「それって、あんま笑顔で言うことじゃなくねっ…？」

居間に座り、明るい笑顔を見せている父に、スズメが呆れた表情となる。

「これ以上、貧乏になったら俺、働かなきゃいけねえーじゃんっ」

「働けばいいだろうっ？ウチで！」

「いやっ…それじゃ意味ねえーしっ…」

得意げに親指を立ててくる父に、最早、突っ込む気力も湧かなくなってくるスズメ。

「だいたい俺、八百屋とかダサくって嫌だしっ」

「がびいいーんっ！」

スズメのその一言に、激しくショックを受ける父。

「アカネええ！お前が出ていって早十一年っ…！スーくんはウチを継いでくれる気がないらしいっ！」

「だから出ていった母さんに、んなこと嘆くなつて。うんっ？」

父に呆れた表情を向けていたスズメが、父の後ろに見える、居間の隅に置かれた仏壇を目に入れた。

「あっ…」

仏壇の上には、つい先程まで置かれていなかった、一枚の写真が飾られていた。穏やかで、優しい笑みを浮かべている、青年の写真であった。その写真を見て、スズメが少し驚いたように声を漏らす。

「出したんだ、写真っ」

「あ、うんっ」

スズメの言葉に、そつと頷く父。

「もうそろそろ… “思い出の人” になってもいい頃かなあって、思
つてね…」

「……っ」

そう言つて微笑む父に、スズメが少し目を細める。

「ふうっ…」

「んっ？」

台所から出てきたツバメが、スズメと同じようにエプロンをはず
しながら、一息ついて、スズメのすぐ横へと腰を掛ける。

「何だあ？ お前も定員オーバーかよ？ ツバメ」

「ううん… 準備はほぼ終わったからね…」

畳の上で正座をしたツバメが、両手を合わせて、目を閉じる。

「僕は最後の一味のために、瞑想に入ることにするよ…」

「何だあ？ それっ」

瞑想に入るツバメを、呆れた表情で見つめるスズメ。

「うっわあ！ これ、人参かよっ？」

「……っ？」

台所から聞こえてくる、大きなアヒルの声に、スズメが座ったま
ま、台所を振り返る。

「どこに器用さ、置いてきたんだあ？ クソ想子っ」

「うっさいわねっ！ バカガア！」

「……っ」

想子や囁たちと騒々しく調理をしながら、何とも楽しそうに笑っ
ているアヒルを見て、スズメがどこか安心したような、優しい笑み
を浮かべる。

「アヒル君… 楽しそうだね…」

「そうだなあ」

まだ瞑想の態勢を取りながら、そつと呟くツバメに、スズメがど
こか素っ気なく答える。

「……良かったね…」

「そうだなあ」

もう一度答えたスズメの笑顔を横目に、ツバメも手を合わせたまま、笑みを浮かべた。

「ツバメさあ〜ん！出来上がったんで、早速どうぞお〜！」

満面の笑みを浮かべた想子が、スープの湯気が上がるお椀を大事そうに両手で抱えて、台所から、居間にいるツバメのもとへと駆け寄ってくる。

「ありがとうございます…想子ちゃん…」

「いえいえ！ツバメさんの為なら、お代わり二千杯でも取りに行っちゃいますよ！」

札を言うツバメに、想子がどこか照れたように言い放つ。

「想子ちゃ〜んっ、俺のはあ〜？」

「あ、あっちにありますよっ？」

「……………」

ツバメへの態度とはまるで違う、淡白な反応を示す想子に、スズメが笑顔のまま、しばらく制止する。

「相変わらずだね…想子ちゃん…」

「落ち込んでないで、ほらっ、こっちにちゃんとありますから。スズメさんっ」

見るからに凹んだ様子で肩を落とすスズメにフォローを入れながら、紺平が奈々瀬とともに、皆の分のお椀を運んでくる。

「これで人数分かあ〜？」

お椀にスープを入れながら、誰にともなく確認するアヒル。

「んっ」

「へっ？」

そんなアヒルに、笹也がまだ運んでいない、お椀の一つを差し出した。

「とっとと毒味をしろ」

「毒味ってお前なっ…」

笹也の言葉に顔をしかめながら、アヒルがそのお椀を受け取る。

湯気の上がるスープに、何度か息を吹きかけて、アヒルがお椀に直接口をつけ、スープを一口飲む。

「んっ、カー兄の味だっ」

『……っ』

懐かしそうに笑うアヒルを見て、顔を見合わせ、笑顔を零す籠也と囁。

「アーくうーん！お父さんにもスープうー！」

「うっせえなっ！今持ってくから、騒ぐなってのっ！」

残りのお椀を持ちながら、アヒルが台所から居間へと移動していく。

「まったく、いいオッサンのくせしてっ」

「聞いたあ！？カーくうーんっ！アーくんがお父さんに、あんな冷たいこと、言ってるよお！」

呆れたように言い放つアヒルにショックを受けたのか、父が今にも泣き出しそうな表情で、仏壇に飾られたカモメの写真へと継りつく。

「ああー！もう鬱陶しい！とっとと食べろっ！」

「はあーいっ！」

目の前にスープが置かれると、父が一気に明るい笑顔となる。

「ったくっ…」

そんな父に呆れながら、仏壇の上のカモメの写真へと目を移すアヒル。

「……っ」

カモメの写真を見つめ、アヒルがそっと笑みを零す。

——カー兄、俺っ…元気だよっ…

その頃。言ノ葉町五丁目。何でも屋『いどばた』。

「ふんふんふうくん♪」

公園でアヒルと雅の会話を盗み聞きしていた為介は、夕方になって店に戻り、そして定時となったので、いつものように店を閉めようとしていた。開店前と同じように、店の前の掃き掃除をして、箒を持ったまま、店の中へと戻り、戸を締める。

「おっやあ？」

店の奥から人の気配がして、為介は少し驚いたように声を出した。「珍しいですねえ、あなたがウチのお店に来るだなんてっ」

縁側に座るその人物のもとへと、ゆっくりと歩み寄っていく為介。

「結果は…？」

その人物が、為介の方を振り向くことなく、短く問いかけてくる。「あなたに言われた通りに接触して、雅クンに手伝ってもらって、神をやめるよう脅しましたよお」

為介が明るい笑顔を浮かべながら、いつもの軽い口調で答えている。

「あなたの予想通り、彼は“神をやめない”と言いましたけどっ」
少し目を細め、その笑みを鋭くする為介。

「これで満足ですか？」

為介が足を止め、その人物のすぐ横に立つ。

「恵サンっ…」

「……………」

為介の店の縁側に座っているのは、アヒルの担任の国語教師・恵であった。

「ああ、満足したよっ。ありがとうねっ」

恵が振り向き、為介へと笑みを向ける。

「あちらの方は…？」

「動き出したよ。直にこっちへ来るっ」

少し表情を曇らせ、問いかける為介に、そっと目を細める恵。

「そうですか…」

恵の答えを聞くと、為介が少し肩を落とした。

「ということはっ、彼らもいよいよ本格的に、五十音士の戦いに参加していつちゃうってことですかねえ」

「ああっ…」

為介の言葉を受け、真剣な表情を見せた恵が、ゆっくりと頷く。

「呑み込まれていくのさっ…」

どこか遠い瞳を見せ、窓の外に広がる夜空を見上げる恵。

「この薄暗い世界へ、ねっ…」

恵の視界には、月明かりさえない、真っ暗な空が、どこまでも広がっていた。

Word. 8 転校生ト言姫 (1)

穏やかな朝。窓の外からは、小鳥たちの囀さえずりが聞こえてくる。

「んんっ：ハウス、テンボスっ：」

いつものように寝言を呟きながら、アヒルが自室のベッドで寝がえりをうち、気持ち良さそうに眠っている。

「準備はいいか？ 籠かご也くん、囁ささちゃん」

『いつでも』

アヒルの部屋の扉の、少しだけ開いたその隙間からアヒルの様子を見つつ、またしても何か企んでいる様子の朝比奈家の父と、籠也・囁の両名。

「よし行くぞっ！ 玉ネギラッシュュっ！！」

勢いよく扉を開き、三人が一斉に、眠っているアヒルへと玉ネギを投げつけ始める。

「痛ででっ！ 何すんだよ！？ てめえーらっ！」

全身に玉ネギをぶつけられ、痛みに素早く起き上がるアヒル。

「んっ？ のおーおっ！？」

起き上がったアヒルの鼻に、勢いよく飛び込んでくる一つの玉ネギ。避ける暇もなく、見事に玉ネギを喰らったアヒルが、折角起きたというのに、再びベッドへと倒れ込んだ。

「鼻に当てましたよ、お父上」

「さっすがは籠也君！ 鼻はボーナスで十点貰えるからあ、トータルで四十八点だねっ！」

「てっめえらっ：」

何やら楽しげに会話をしている父と籠也に、鼻を押さえたまま、怒りを剥き出しにした表情で、アヒルが再びベッドから起き上がる。「いい加減にっ：！ あっ？ ぐほおおうっ！」

アヒルが怒鳴りあげようとしたその時、またしてもアヒルの鼻に

玉ネギが直撃し、アヒルがもう一度、ベッドへと倒れ込んでしまう。
「私も当てたわ…フフっ…」

「おお！囁ちゃんも十点獲得で、トータルは四十九点！箆也君を追い越したあ！」

「むっ」

父の実況のようなその言葉を聞き、箆也があらさまに顔をしかめる。

「囁ごときに遅れを取るとは不覚」

「あら、言ってくれるわね…私の実力が測れないのかしらっ…？」

「お前こそ、僕との力の差が見えていないんじゃないか？」

玉ネギを持ちながら、何故か互いに闘志を剥き出しにしていく箆也と囁。

「どうやら目で見ないとわからないようねえ…」

「それはこちらの台詞だっ」

「お、おいおいっ、お前らまさかっ…」

真剣この上なく鋭い表情を見せた二人が、アヒルが焦ったように見つめる中、素早く持っている玉ネギを、アヒルへと構えた。

『神、覚悟っ…！』

「だああああ！やめろおお！」

二人からの玉ネギ総攻撃を受け、いつもにも増して、必死な叫び声をあげるアヒル。

「アハハあゝっ！アーくん、大人気いゝ！」

「……っ」

傍から、他人事のように楽しんでいる父に、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、額に血管を浮かび上がらせたアヒルが、近くに落ちていた玉ネギを、素早く拾い上げる。

「いい加減にっ…しやがれえええっ…！」

「ぐはあああっ！」

アヒルの投げ放った玉ネギが、父の鼻へと見事に炸裂する。

「十点っ…獲…得っ…ぐぷっ」

そう呟きながら、力尽き倒れる父であった。

「痛てててっ…」

箆也と囁にそれぞれ玉ネギをぶつけられ、まだ赤く腫れあがった鼻を押さえながら、二人や紺平とともに、学校への道を行くアヒル。「今日も派手にやらかしたみたいだねえ」

「俺は何もやってねえってのっ」

どこか呆れたように呟く紺平に、アヒルが表情をしかめて言い返す。

「こいつらがだなあっ…!」

「僕？ 僕が麗しき友人である朝比奈君に、鼻が腫れあがる程、酷いことをするはずがないじゃないですか」

「ニヤロウっ…」

後ろを歩く箆也と囁の方を振り返ったアヒルであったが、紺平がいるため、外面用の爽やか笑顔を全開に向けてくる箆也に、勢いよく表情を引きつった。

「だいたい、何でハウステンボスだったのに、玉ネギなんだよっ」

「初参加ということ…私が提案させてもらったわ…フフフっ…」

「ほう…」

楽しげに笑う囁に、アヒルが冷たい視線を投げかける。

「うおーい！ 朝比奈あ！」

「あっ？」

前方から名を呼ばれ、後方を振り返っていたアヒルが前を向く。するとそこには、毎度おなじみとなったアニキ率いるヤンキー集団であった。

「この前のこと、あれから俺なりに色々と考えてみた」

「はっ？」

いつもとは違う、何やら真剣な空気を醸し出し、いつもの怒鳴りあげる声ではなく、落ち着いた口調で話し始めるアニキに、アヒル

が眉をひそめ、首を傾げる。

「お前と俺とは小学生の頃からの因縁っ…今までの様々な出来事を振り返れば、無かったことになど出来るはずもないっ…」

真面目な顔つきで、少々大袈裟なようにも思えるが、言葉が続けるアニキ。

「小学校の頃からの因縁というのは？」

「確かガアがいたから、アニキ君の出席番号が四年四組四番になっちゃって、不吉な一年が続いたとかって、この前、ツバメさんが言ってたけどっ…」

「実にくだらないわね…」

籠也の問いかけに対する紺平の答えを聞き、呆れきった表情を見せる囁。

「だが俺も人の子っ…お前が望むというのならっ、スパツとトイレに流して、和解しようじゃないかっ…！」

『立派っス！アニキっ！』

きらめく笑顔で言い放つアニキに、子分たちが感動するように目を輝かせる。

「さあ！友としての第一歩！和解の証の、熱い握手をっ…！」

「うざい」

「ぎゃあああ！」

『アニキいいっ！？』

アヒルの前へと立ち、笑顔でアヒルへと右手を差し出したアニキが、アヒルの繰り出した拳に、あっさりと弾き飛ばされる。吹っ飛んで返ってくるアニキに、子分たちが驚きの表情を見せる。

「な、何をっ…する…朝比奈っ…」

「なあんか色々吹っ切れちゃってさ。この前言ったこと、全部なしなっ」

「はあっ！？」

軽く言い放つアヒルに、大きく目を見開き、殴られた腹部を押さえながら、何とか起き上がるアニキ。

「なしってお前っ…！」

「お前が忌に取り憑かれたら、そんな時はちゃんと謝るからよお。じゃあ今後ともよろしくなあ…っ」

「あ、朝比っ…！」

アニキが呼び止める間もなく、アヒルは陽気に手を振り、何事もなかったかのようにアニキの横を通り過ぎて、学校への道を進んでいく。

「……………」

『あ、アニキっ…』

道に座り込んだまま、茫然とするアニキを、心配そうに見つめる子分たち。

「さあ、僕たちもとつと行きましようか」

「そうね…」

「あっ、さ、囁ちゃんっ…！」

「んっ…？」

アヒルに続くように、アニキの横を通り過ぎていく簞也たちであったが、アニキが呼び止め、囁がアニキのすぐ傍で足を止める。

「傷ついた俺の心を癒せるのは君しかないっ！今こそ、交換日記を始っ…！」

「嫌」

「ぐふっ！」

『あ、アニキいいいっ…！！』

囁に一瞬にして断られ、その場に倒れ込むアニキなのであった。

言ノ葉高校。一年D組。

「おらあー、とつとと席着けえっ」

いつものように面倒臭そうな顔をしながら、出席簿を抱えた恵が、アヒルたちの教室へと入って来る。恵が教壇に立つと、立ち歩いて

いた生徒たちが皆、大人しく自分の席に着いた。

「席着かねえー奴は、黒板に頭、叩きつけるよおっ」

「だから怖えーって」

「おっ、珍しく今日も居るじゃねえーかつ。朝比奈トンビっ」

「アヒルだつてのっ！最近、別に遅刻してねえーだろ？いちいち感心すんなよっ」

席に座っているアヒルを見て、物珍しそうに笑う恵に、アヒルが少し悪態づく。

「ああー、出席を取る前に、今日は転校生を紹介する」

「転校生っ？」

「またあ？」

「この前、二人来たところなのに、またウチのクラスにいい？」

恵の一言に、急にざわつき始める生徒たち。箆也と囁が転入して来て、まだ数えるほどしか経っていない。短期間でこれほど転校生が来るというのは、確かにおかしい話であった。

「転校生って、またガアの親戚とかじゃないよねえ？」

「俺に、んなに親戚はいねえっての。だいたい、あいつ等だって親戚じゃねえーしっ」

「えっ？」

「いや、何でもないっ」

後ろの席から聞き返してくる紺平に、アヒルが誤魔化すように、首を横に振る。

「おおーい、入れっ」

「あ、はいっ」

『……っ』

箆也や囁、奈々瀬や想子も見つめる中、教室の前扉がゆっくりと開いた。

「あ、えと…失礼、します…」

教室へと入って来たのは、金色にも近い色素の薄い短髪に、茶色寄りの瞳をした、長身で、手足も長く、全体的に細長い青年であっ

た。大きな図体のわりに、どこかオドオドしており、体を小さく締め込んでいる。伏し目がちに、ろくに顔を上げぬまま、恵の隣へと立った。その転校生へ、クラス中の視線が集まる。

「名前っ」

「あ、はいっ」

恵に言われ、転校生が慌てた様子で頷く。

「あ、ええーっと、俺の名前はそっ…えっと…」

『……っ?』

なかなか名乗ろうとしない転校生に、クラス中の皆が不思議そうに首を傾げる。

「せ、先生っ」

「あっ? 何だ?」

助けを求めるように振り向く転校生に、恵が首を傾げる。

「お、俺なんかが、こんな大勢のみんなの前でっ、名前なんて名乗っていいんでしょうか?」

「はあ?」

転校生が控え目な態度のまま問いかけると、恵は勢いよく表情を引きつった。

「そんなにオーソドックスな名前じゃないですけど、でも聞いたところで“だから何?”って感じの名前ですし…」

深く俯いたまま、両手の人差し指を合わせ、まるで子供のように言葉を続ける転校生。

「俺が名乗った後に、みんなに不快感を残したらと思うとっ…」

「今、この時がまさに不快じゃあっ!」

「ぎゃあああ!」

『転校生、蹴ったあっ!?!』

ウジウジといつまでも名乗ろうとしない様子に、煮え切ってしまったのか、目尻を吊り上げた恵が、勢いよく転校生を蹴り飛ばした。前扉に叩きつけられ、倒れ込む転校生を見て、生徒たちが焦ったように声を揃える。

「デカイ図体して、ウジウジと鬱陶しいんだよ！とっとと名乗れっ！」

「ひゃ、ひゃいっ…高市保たかいちたもつでふっ…」

叩きつけられた背中を押さえ、ふらふらと立ち上がりながら、転校生が弱々しい声で名を名乗る。

「容赦ねえー」

「席はそこだ」

「あっ？」

恵の暴挙に顔を引きつっていたアヒルが、アヒルのすぐ横の席を指差す恵に、少し驚いた顔となる。

「その目つきの悪い、朝比奈トンビってクソガキの横の席っ」

「だっからトンビじゃなくて、アヒルだっつってんだろうがっ！誰がクソガキだ！」

「朝比奈…アヒルっ…？」

立ち上がった保が、アヒルの名を呟きながら顔を上げ、ゆっくりとアヒルの方を見た。

「ま、まさか俺の隣の席が不快過ぎてっ、そんな変な名前になってしまったんじゃないっ…！」

「なるかあっ！ブン殴んぞ！てめえっ！」

「ひえええええ！」

「ちよっと！ガァっ！」

保の言葉にブチ切れ、保へと殴りかかっていこうとするアヒルを、後ろの席から必死に止める紺平。アヒルの恐ろしい顔を見て、保はその大きな体を震わせる。

「あらあら…楽しそうっ…フフ…」

「……っ」

まだ殴りかかろうとしているアヒルと、震えている保を、一番後ろの席から眺めながら、楽しげに微笑む囁。その囁の横の席に座る箆也が、そっと表情を曇らせる。

「どうかした…？箆也…」

「いやっ…」

そんな箆也に気づき、問いかける囁であったが、箆也はすぐさま首を横に振る。

「気のせいだ。たぶん…」

そう言うものの、曇らせた表情を変えようとはしない箆也であった。

Word 8 転校生ト言姫 (2)

その日・昼休み。

「ふいっ！ やあつと飯だあ！」

「今日も十分に睡眠取れて良かったね」

「お陰さまでっ」

両手を伸ばすアヒルに、後ろから嫌味のように声を掛ける紺平。

アヒルは苦い笑みを浮かべながら、机の横に掛けてある鞆から、弁当を取り出す。

「お前も飯食うだろっ？」

「へっ!？」

アヒルが隣の席で、まだ教科書などを片付けている保へと不意に声を掛けると、驚いたのか、保が声を裏返して、背筋を震え上がらせた。

「あつ、は、はい！ お、俺みたいな中途半端な名前の奴が、一丁前に昼飯なんか食おうとして、すいませんっ！」

「はあっ？」

振り向いた保は、何やら申し訳なさそうに、必死に謝る。そんな保に、大きく顔をしかめるアヒル。

「あのなあつ、別にどんな名前の奴でも飯くらいっ！」

「そうですよねえっ！ アヒルなんて、こっぴどく面白い名前の人じやなきや、ご飯なんて食べちゃいけませんよねえっ！」

「うっせえつつってんだろっ！ ホントにブン殴んぞ！ この野郎っ！」

「ひえええええ！」

「ああゝあっ…！」

また殴りかかりそうになっているアヒルと、怯えている保を見て、紺平が深々と溜息をついた。

「殴られたくなかったら、とっとと食え！」

「は、はいっ…！」

アヒルに脅されるようにして、慌てて教科書を片付け、弁当を取り出す保。

「神月君たちは？」

「ああ、あいつはっ…」

紺平に問われ、アヒルが少ししかめた表情で、教室の後方を振り向く。

『神月くうくん！一緒にご飯食べましょっ！』

「いいですよ。こんな可愛らしい皆さんに囲まれて、ご飯が食べれるなんて、僕は世界一の幸せ者ですね」

『きゃああああ！』

「……っ」

爽やか笑顔の籠也の周囲で巻き起こっている黄色い声を聞き、さらに顔をしかめるアヒル。

「やめよう。あいつと食うと、飯がマズくなる」

「そ、そうだねっ…」

同じように少し顔を引きつり、紺平が控え目に頷く。

「あれっ？うっわあ、美味しそうだねえ。高市君のお弁当っ」

「へっ…！」

保が自分の机に弁当を置き、フタと開いた途端、紺平がすかさず声を掛ける。また不意に話しかけられ、背筋を震え上がらせる保。話しかけられるという行為に、慣れていない様子であった。

「ホントだっ、ウチのキャベツメインの弁当とはエライ違いっ」

「高市君のお母さん、料理上手いんだねえ」

「あっ、い、いえ、これは自分でっ…」

「えっ！？このお弁当、高市君が作ったの！？」

「あ、は、はいっ」

驚いた表情で聞き返す紺平に、遠慮がちに頷く保。

「す、すみません！お、俺みたいな、無駄に身長ばっかデカイ奴が、一丁前に包丁なんて握ってしまっっっ！」

「いやあ、別にいいことだと思っけどっ…」

何故か謝る保に、紺平が少し呆れた笑みを浮かべる。

「でも、そんなに料理上手なら、お母さんとか大助かりじゃないっ？」

「あっ…」

「……っ？」

笑顔で話しかける紺平に、ふと曇る保の表情。その表情を見逃さず、アヒルが眉をひそめる。

「親は…いないので…」

「えっ…？」

保の言葉に、紺平の表情が変わる。

「あっ、ご、ごめんっ…！」

「いえ、大丈夫です。気にしないで下さい」

慌てて謝る紺平に、保が穏やかな笑顔を向ける。

「もう…心が痛まなくらい、いないことに…慣れてしまいましたから…」

『……っ』

どこか悲しげに微笑む保に、アヒルと紺平は表情を陰しくした。

「ああ！すいません！こんな薄暗い話っ…！不快さで、お二人の弁当の味が、マズくなってしまうっ…！」

「落ち着けて…」

席から立ち上がり、焦ったように叫びあげる保に、宥めるように声を掛けるアヒル。

「そうだあ！こんな時は、アヒルさんのキャベツ一色のお弁当を、皆で回し見して、笑いをっ…！」

「やっぱお前！ブン殴るっ…！」

「ひえええええ！」

「落ち着いてえ！ガァー！」

保に殴りかかりにしようとするアヒルを、必死に止める紺平。

「す、すみませえん！失言のお詫びに、お、俺がそのキャベツ一色

の弁当を食べます！」

「人ん家の弁当っ、罰ゲームみたいに言ってるじゃねえーよっ！」

「ひいひいっ！」

「んっ？」

怒り狂うアヒルに怯え、机の下へと身を縮め込んだ保の制服のポケットから、何かが落ち、アヒルは向かっていくことをやめ、床に落ちたその物へと目を移した。

「あっ…」

床に落ちていたのは、丸く赤い、宝石のような玉であった。どこかで見覚えのあるその玉に、アヒルが思わず目を見開く。

「あっ…！」

保が慌ててその玉を拾い、もとのポケットの中へと入れる。

「ええっと、すみませえん！アヒルさあ〜ん！こんな俺っ、弁当箱まで食って、お詫びしますう〜！」

「ちょ、ちよっと！高市君っ！」

弁当箱ごと弁当を食べようとする保を、アヒルから手を離して、慌てて止めに行く紺平。

「落ち着いてっ！」

「ひいひいっ！」

「……………」

紺平と保のやり取りを見つめながら、アヒルが険しい表情を見せる。

「今のは…言玉っ…？」

その日・放課後。

「ふっはあ〜、疲れたあ〜っ」

委員会のある紺平を残し、学校から帰路へとつくアヒル、箆也、囁の三人。帰り道を歩きながら、アヒルがひどく疲れた様子で肩を

落とす。

「アヒるん：今日は一日中、転校生のお守だったものね：フフフ…」

「弁当食うまでに結局、三十分もかかったんだぜえ？お陰で五分で飯食う羽目になるしっ」

そつと微笑む囁に、嫌気がさしたように呟くアヒル。転校してきた保に対し、隣の席になった縁もあって、あれこれと世話を焼くアヒルであったが、保の遠慮がち過ぎる性格のせいで、あれこれと無駄に疲れが溜まってしまったのであった。

「放っておけば良かっただろう？何の義理もない転校生など」

「だってあいつ、あれじゃオドオドしたまんまで、絶対弁当食えねえーと思ったからさあ」

「はあっ…」

「我が神は世話好きね：フフっ…」

アヒルの答えを聞き、籠也は深々と溜息をつき、囁はどこか楽しそうに笑みを浮かべた。

「それにっ…」

——あっ——

保が落とした、あの赤い小さな玉。

「……っ」

俯いたアヒルが、少し考え込むように眉をひそめる。

「神？」

「あ、いやっ。そ、そういうさ、お前、この前学校休んだ時、どこ行ってたんだ？」

「ああ、為の神のところへ行っていた」

思い出したように問いかけるアヒルに、籠也がすぐさま答える。

「為の神？あの扇子野郎のどこか」

「忌の増発の件で…？」

「ああ。他にも知っていることがあれば、吐かせようと思っていたんだが、どうやら本当に何も知らないようだな」

「そう…」

囁が頷きながら、少し考え込むように目を細める。

「だが忌自身の変化とは考えにくく、何者かの力が働いている可能性があると Saying していた」

「何者かって？」

「……っ」

素朴に聞き返すアヒルに、箆也の表情が曇る。

「五十音士…」

「えっ：！？」

黙った箆也に代わるようにして答える囁に、アヒルが驚きの表情を見せて振り返る。

「五十音士って、んなことっ：！」

「世の中はね：私たちみたいに素直で優しい、穏やかな五十音士ばかりではないのよ：アヒルん…」

「いやっ、ぶっちゃけ誰も、それに当てはまってねえと思うけどっ：？」

落ち着いた口調で話す囁に、呆れきった表情を向けるアヒル。

「五十音士の中には、その言葉の力を使って、良からぬ事をする連中もいるということだ」

「じゃあそいつが忌をっ：？」

「まだ、そこまではわからない」

厳しい表情を見せながら、箆也が答える。

「だが上も動いているという話だ。直に原因も明らかになるだろう」
「上っ？上って？」

箆也の言葉に首を傾げたアヒルが、振り向いて囁へと問いかける。
「私たち五十音士の上には：五十音士を管理する“韻”^{いん}という組織が存在するのよ…」

「韻っ：？」

「良からぬ事をしている五十音士を裁いたり：まあ他にも色々と役目はあるけれどっ：フフっ：」

「神という位は、五十音士の中では最も尊いとされるが、韻からは逆に管理されることとなる」

「ふう〜ん、何か難しいなあ：」

二人から説明を聞いたアヒルが、少し混乱した様子で、頭を掻く。まだ自分の神という立場もあまり理解していないアヒルにとっては、余計に難しい話であった。

「まあ今すぐ理解しなくとも、まだあなたが韻と接触する機会はないっ：」

「アーくうう〜んっ！」

籠也の言葉を遮って、アヒルのもとへと駆け込んでくるのは、相変わらずの陽気なことこの上ない笑顔を浮かべた、朝比奈家の父であった。いつの間にか、『あさひな』の前まで帰って来ていたようである。

「会いたかったよお〜！」

「あっそう」

「痛たたたたっ：！まだ鼻腫れてるんだから、押さないでえ〜！」

飛び込んでくる父を、鼻に手を突き出すようにして止めるアヒル。今朝の玉ネギ攻撃で、まだ腫れあがっている鼻に、父が苦い表情を見せる。

「そういえば、アーくんにお客さんが来てるよお〜」

「客っ？」

店の中を指差す父に、アヒルが首を傾げる。

「客って…」

「お邪魔しておりますわ」

「えっ…？」

店の中から聞こえてくる、凜と響くその声に、アヒルがゆつくりと顔を上げ、声の聞こえて来た方を見る。

「あっ…」

「こんにちは、朝比奈アヒルさん」

直接、店の奥から繋がっている朝比奈家の居間に、ゆったりと腰を下ろし、振り向いたアヒルへと笑顔を向けたのは、一人の美しい少女であった。アヒルよりは少し年上くらいであろうか、二十歳前後に見えた。見事に整った綺麗な顔立ちに、花柄の豪勢な着物を纏っている。一つにまとめあげた髪の周囲は、いくつもの宝石で飾られていて、少し重そうであった。

「だ、誰っ…」

「お久し振りですね」

「へっ？」

微笑んだ少女が、アヒルからアヒルのすぐ横へと視線を移す。

「箆也」

「箆也っ？」

よく知った名を呼ぶ少女に、目を丸くするアヒル。

「箆也、お前の知り合っ…」

「……っ！」

「へっ？」

アヒルが問いかける間もなく、箆也は、今まで見せたことのない全速力で、勢いよくその場から駆け出していく。

「逃げたわ…」

「何でえっ!？」

「……っ」

囁が冷静に呟き、アヒルが戸惑った表情を見せる中、居間に座り込んでいた少女がゆっくりと立ち上がり、店の外へと出て、アヒルたちのすぐ横へと並んだ。

「「割れる」」

——バアアアアン!

「うおっ！」

少女がそう呟いた途端、地響きでも起こったように激しく地面が唸り、『あさひな』の前の道が、真つ二つに割れていく。割れた地面をギリギリのところまで渡り、何とか難を逃れるアヒル。

「ふいゝ！危ねっ…」

「ぎゃああああ！アーくうゝんっ！」

「落ちそうになってんじゃねえよっ！」

割れた地面の左右それぞれに足を置き、大きく股を開いて、必死に落ちまいとしている父に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「うわあああああ！」

「あっ…」

「あっちは落ちたわね…」

遠くの方から聞こえてくる、籠也のものらしき悲鳴に気づき、地割れた地面から前方へと顔を上げるアヒルと囁。二人が見つめる中、少女が割れた地面の端を歩き、籠也の消えた地点へと向かっていく。

「なあっ、今のって…」

「言葉の力よ…まず間違はなく…」

少し眉をひそめ、問いかけるアヒルに、囁も鋭い表情を見せる。

「それも…一層、特別な文字の、ね…」

「えっ…？」

囁の言葉に、アヒルが首を傾げる。

「どちらへ行かれるんですの？」

笑顔を見せた少女が、地割れた地面を上から覗き込むようにして、落ちた籠也を見下ろす。

「籠也」

「わ、和音わおんっ…」

威圧されるように名を呼ばれ、あからさまに表情を引きつる籠也であった。

Word. 8 転校生ト言姫 (3)

その後、アヒルと囁が手を貸して、何とか地割れから箆也を引き上げると、話をするため、三人は謎の少女・和音とともに、アヒルの部屋へと入った。

『……………』

満面の笑顔を見せている和音と、見るからに不機嫌そうな表情の箆也を見比べ、少し困った顔を見せるアヒル。囁はというと、マイペースに壁にもたれて、恋盲腸を読んでいる。

「え、ええくと、で、あんたはっ…?」

長い沈黙にも耐えきれず、アヒルがやつのことで和音へと問いかける。

「申し遅れました。わたくし、五十音第四十六の音、“わ”の力を持ちます、二十八代“言姫”、和音と申します」

「言姫っ?」

「“わ”の力を持つ者に、代々受け継がれる呼び名のようなものよ…」

「へえっ」

首を傾げたアヒルに、恋盲腸を読んでいたはずの囁が、話の流れを理解しているように、素早く答える。答えた後、囁は恋盲腸を閉じ、床へと置いて、和音の方を見た。

「代々、言姫は…五十音士の中で唯一、韻に属する…」

「韻って、さっき言ってた?」

「ええ…だから彼女は、五十音士でありながら…五十音士を管理する力を持つ…つまり…」

囁が、和音を見つめる瞳を、より一層、鋭くする。

「五十音士の中でただ一人…神よりも上の存在となる者…」

「…………」

その囁の言葉に、そつと表情を曇らせるアヒル。

「わたくしは、そんな大それたものではありませんわ」

表情を曇らせたアヒルを、まるで安心させるように、和音が穏やかな笑みを向ける。

「今日も、新たに安の神となられた、朝比奈アヒルさんに挨拶をと思ひ、参っただけであつてっ…」

「嘘をつくな。あなたが挨拶だけのために、わざわざ来るはずっ…」

「今、話しているのは、わたくしですわよ？ 簞也」

「………」

和音に、どこか凍りつきそうになるほど、冷たい笑みを向けられ、自分の言葉を呑み込み、急に大人しくなる簞也。

「あの偉そう、この上ない簞也がっ…」

「明日は大雪かしらね…フフっ…」

そんな簞也を、アヒルたちは驚いた様子で見つめる。

「お二人は知り合いで…？」

「ええ。家同士の仲が良くて、子供の頃、よく一緒に遊んだりしておりましたの」

「……っ」

囁の問いかけに答える和音の声を聞きながら、簞也がどこか悲しげに俯く。

「……っ？」

そんな簞也を見て、アヒルは不思議そうに首を傾げた。

「そんな話はどうでもいいだろう。それよりこの前、僕が報告を入れた件は？ どうなっている？」

「報告？」

「ああ、為の神のことですわね」

鋭く問いかける簞也に、アヒルが眉をひそめる中、和音が笑顔を崩さぬまま頷く。

「彼は何を考えているのか、わからぬ男ですが、我々に危害を加えるようなことをする者ではありません。放っておいても、問題ない

でしょう」

「しかしっ…！」

「問題は、忌増発の方です」

「えっ…？」

言い返そうとした簞也が、強く言い放つ和音に、その表情を変える。

「忌増発の原因がわかったのかっ!？」

「ええ」

「……っ」

ずっと浮かべていた笑みを消し、真剣な表情で頷く和音に、アヒルも表情を曇らせた。

「我々、韻が調査した結果、忌増発の裏に、ある五十音士の名が浮かび上がりました」

「ある、五十音士？」

「誰だ？それはっ」

座っていた椅子から身を乗り出し、必死に問いかける簞也。

「名を波城灰示^{はじょうはいじ}。五十音第二十六の音、“は”の力を持つ、“波守^{はもり}

”の男です」

『……っ』

伝えられる名に、三人が皆、険しい表情を見せる。

「だが、一介の五十音士が、どうやって忌の増発などっ…」

「その詳細は不明ですわ」

怪訝そうに眉をひそめる簞也に、和音も表情を曇らせて答える。

「波、守っ…？ “は” って…」

和音の発した言葉を繰り返し、アヒルが少し考え込むように首を捻る。

「ア段っ!？」

「よくわかったわね…アヒるん…」

「奇跡だな」

“は”をア段を理解したアヒルを、感心した様子で見つめる簞也

と囁。

「つつーことは、その忌を増発させた奴は、俺のっ…安団の一人ってことかあっ!？」

「いやっ」

「へっ？」

すぐさま首を横に振る簞也に、アヒルが目を丸くする。

「安団に含まれるのは、ナ行、つまり“奈守”までの五人。“波守”は安団には含まれない」

「なんで？」

「五十音でもね…前半二十五音と後半二十五音は、まったく違う組織で動いているのよ…アヒるん…」

「違う、組織っ…？」

人差し指を突き立て、説明をする囁に、困惑した表情を見せるアヒル。

「前半二十五音…つまりア行からナ行までは、横の系列、段を繋がりとして、私たち安団のように、団単位で行動を共にしているわ…」

「だが、後半二十五音、ハ行からワ行までの五十音士は、団には属さず、自由に動く」

「う、ううんっ…」

もうすでに頭の中が混乱している様子で、アヒルが天井を見上げながら、何となく頷く。

「あなたの出会った、為の神に附いている“美守”の青年も、以団^{いだん}には属していないのですよ」

「雅さん？」

「ええ」

確かめるように問いかけるアヒルに、和音が笑顔を見せる。

「それにわたくしも、ア段ではありますが、あなた方の安団には属さず、こうして自由に動いておりますし」

「成程っ…」

微笑む和音に、やっと納得したように頷くアヒル。

「だから波守は安団じゃないってわけかつ」

「本当にわかったのか？」

「何となくはわかったっての！」

疑うように問いかけてくる箆也に、アヒルが勢いよく怒鳴り返した。

「でも…それを伝えるためだけに、わざわざ言姫さまが、こんな所へいらっしやったとは思えないけれど…」

「……ええ」

「へっ？」

含んだ笑みの囁の言葉に、そっと頷く和音を見て、アヒルが再び目を丸くする。

「じゃあ一体、何の用でっ…」

「今日はあなたにお願いがあつて参りました。安の神」

「えっ？俺？」

和音に真剣な眼差しを向けられ、戸惑うように聞き返すアヒル。

「俺にお願いって、なっ…」

「あなたに、波守・波城灰示の討伐を行っていただきたいのです」

「えっ…」

「はあっ!？」

思いがけない和音の言葉に、アヒル以上に驚きの声をあげたのは、箆也であった。

「何を馬鹿なことをっ…!昔から変わった所があるとは思っていたが、ついに頭のネジが取れたんじゃないっ…!」

「あなたは少し黙っていて下さいます…?箆也…」

「はい…」

「フフフっ…情けないものね…」

和音に凍りつく笑みを向けられ、大人しく頷く箆也。そんな箆也を、囁は、どこか嘲笑うように見つめる。

「ですが…それについては、私も異論があります…言姫さま…」

「……っ?」

籠也に続くように話す囁に、和音がそつと振り向く。

「我が神は、まだ神になって間もない身…使える言葉もたった四つの、超未熟、ド素人ですよ…?」

「悪かったなっ、ド素人でっ」

本人を目の前にしても、遠慮なく言い放つ囁に、思い切り顔をしかめるアヒル。

「そんな、忌を増発させるような、未知の力を持つ者の相手…他の神を行かせる方が得策かと思いますが…?」

「そうだ!他の神を行かせればいい!」

「……っ」

「よ、ような気がするっ…」

和音に睨まれ、籠也がすぐさま発言を弱気なものへと変える。

「お前、だっせえなっ」

「うるさい。僕には僕の事情があるんだ」

改めて言い放つアヒルに、籠也が少し表情を引きつつ言い放つ。

「安の神にお願いする前…」

『……っ』

口を開く和音に、アヒルたちが皆、言葉を止め、和音の方を見た。
「わたくしは、とある神に、安の神に対してと同じように、波城灰示の討伐を依頼しました」

「とある、神っ…?」

和音の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「ですが、戻って来たのは瀕死の附き人のみ…その神との連絡は途絶え、未だに行方は不明です」

「……っ」

深刻そうに話す和音に、部屋全体に不穏な空気が流れて、籠也も思わず表情を曇らせた。

「波城灰示により囚われているのか、もしくは…」

「すでに殺されているか…」

「お、おいっ…!」

「だって…その可能性の方が高いでしょう…？」
「うっ…」

不吉なことを言う囁に、思わず怒鳴ってしまうアヒルであったが、囁の言葉は正しく、それ以上、言葉が続けることは出来なかった。

「ええ…ですがわたくしは、その神が無事であることを信じ、一刻も早く救出を考えております」

顔を上げた和音が、力のある強い瞳を見せる。

「他の神を呼び寄せていては、手遅れになってしまう…。ですから、一番近くにいて、あなた方へとお願いに参ったのです」

「近く？」

「これが、忌の発生地点から割り出した、波城灰示の根城と思われる場所ですわ」

首を傾げたアヒルへ、和音が差し出したのは、一枚の地図であった。それはアヒルの住む言ノ葉町近辺の地図で、一ヶ所、赤く丸をつけられた場所がある。

「確かに近くだな…」

「忌増発は、この町付近限定で起こっている現象。恐らくは波城灰示が、この近くに居るからだと踏んだのです」

「成程ねっ…」

地図の丸を見つめながら、囁が納得した様子で頷く。

「それでアヒルんに依頼をっ…」

「ええ。どうでしょう？ 簞也。わたくしの判断、間違っているでしょうか？」

「……っ」

問いかける和音に、きつく唇を閉じ、厳しい表情で黙り込む簞也。確かに和音の考えに間違いはなく、いくらアヒルが未熟とはいえ、これが一番、得策のように思えた。

「神の意志が、僕の意志だ。僕から言うことは、何もない」
「……っ」

はつきりと答える簞也に、和音が少し驚いた表情を見せる。

「そうですか。では、どうでしょう？ 安の神」

「へっ？」

落ち着いて頷き、簞也からアヒルへと視線を移す和音に、アヒルが少し焦ったように声を出す。

「わたくしの願い、聞き入れてはいただけないでしょうか？」

「あ、いやあ、そのっ…」

和音に真剣な表情を向けられ、アヒルが困ったように視線を逸らす。状況すらあまり理解出来ないアヒルには、簡単に返事をすることが出来ない。

「あなたと同じ神を救う為…そして、これ以上、忌増発で苦しむ者を増やさぬ為にもっ…」

「……っ」

その和音の言葉に、アヒルが急にハッとした表情を見せる。この辺りで忌が増発しなければ、紺平や奈々瀬、そしてツバメや想子も、苦しい思いをしなくて済んだかも知れないのだ。

「わかった。やるっ」

「アヒルん…」

「そいつのせいで、やたらと忌が多いんだろ？ 俺って、臭いはもとから断つ主義だし、丁度いいってっ」

どこか止めるように名を呼ぶ囁に、アヒルが笑顔を向ける。

「それに、その捕まってるかも知れない神様も、放っておけねえしなっ」

「まあ…アヒルんがそう言うなら、私はそれに従うけれど…」

頷きながらも、囁は少し困ったように肩を落とした。

「決まりですわね」

「ああっ」

笑顔を見せる和音に、もう一度、大きく頷くアヒル。

「では早速、行っていましたか？」

「へっ…？」

さらに大きな笑みを浮かべてくる和音に、アヒルが間の抜けた表

情で声を漏らす。

「さ、早速って、もしかして今からっ…?」

「ええ。必要なものはすべて、こちらで揃えておきましたので」

「……………」

携帯用の食料や水、懐中電灯に時計まで、ありとあらゆる物の入ったリュックを、どこからともなく人数分取り出してくる和音に、アヒルが思わず固まる。

「何かあったら、こちらで連絡して下さいね」

「は、はあ…」

携帯電話を手に持ち、笑顔を見せる和音に、引きつった表情で頷くアヒル。

「ですが、夜十一時以降の電話は遠慮して下さいます?」

「へっ? な、なんで?」

「わたくし、眠りを妨げられることが、この世の中で一番、嫌いですの」

「……………」

和音の満面の笑みに、アヒルが呆れを通り越して、少し恐怖すら覚える。

「な、何か俺…お前があの人に頭上がらねえ理由っ…何となくわかった気がする…」

「だろう…?」

引きつった表情を見せ、小声で呟くアヒルに、籠也も小声で返事をした。

「では、わたくしは韻への報告などもありますので、これで。善戦を期待しておりますわ」

「は、はあ…」

言いたいことだけ言って、すぐさま立ち上がる和音を、アヒルたちが皆、啞然として見上げる。

「下まで送って下さいます? 安の神」

「へっ? あ、ああ」

そんな誘いを断ることが出来るはずもなく、アヒルは和音と共に、和音を送るため、自室を後にした。箆也と囁だけが残った部屋に、二人が階段を降りていく足音が響く。

「で…どう思う…？」

足音が聞こえなくなったところで、タイミングを計るかのように、口を開く囁。

「本当に“一番近いから”って、理由だけなのかしら…？」

「さあな」

深々と肩を落とした箆也が、短めに答える。

「あの人の考えは、どうにも読めない」

「あら…随分と弱気ねっ…」

「苦手なんだ。昔からな…」

少し遠くを見るような瞳で、窓の外の景色を眺める箆也。

「だが…」

景色を眺める箆也が、ふとその瞳を鋭くする。

「我が神がやると決めた以上、迷うつもりはない」

「フフフっ…そうね…」

はつきりと言い放つ箆也に、囁はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

「あつれえ…？和音ちゃん、もうお帰りい…？」

一階へと降り、居間を抜けて店へと出たアヒルと和音に、店頭で商売中であつた父が気づき、明るく声を掛ける。

「ええ、お邪魔しましたわ」

「いやいやあゝ！和音ちゃんみたいな美人さんなら、いつでも大歓迎だよおゝまた遊びに来てねえゝ！」

「ええ、是非」

「言葉の姫様とも知らずに…馴れ馴れしい親父だぜっ…」

和音へと気安く話しかけている父に、アヒルが呆れた表情を見せながら、二人には聞こえないように、そっと呟く。父に見送られな

がら、二人は家を出て、道を歩き始めた。

「箆也は、随分とあなたを信頼しているのですね」

「へっ？」

急な和音の言葉に、アヒルが目を丸くする。

「あなたをよく認めている…」

「そうかあ？」

そう言われ、大きく首を傾げるアヒル。

「あいつ、いつもバカにしてくるぜ？玉ネギもぶつけてくるし、絶対、俺のこと、神と思ってなっ…」

「思っていますよ」

「えっ…？」

遮る和音に、アヒルが戸惑うように振り向く。

「あなたを、“神”と呼んでいますもの」

「……っ」

和音が微笑むと、アヒルが少し目を見開く。

「彼は、認めていない人間を、間違っても“神”などとは呼びませんわ」

「箆也のことなら、何でも知ってるって口振りだな」

「……っ」

眉をひそめ、鋭い視線を送るアヒルに、和音は動じることもなく、ただ感情の読めない笑顔を浮かべた。

「知っているわけではありませんわ」

アヒルから視線を逸らし、和音が上空を見上げる。

「ただ、ずっと見てきましたの…彼を…」

「えっ…？」

不意に笑みを優しいものへと変える和音を、アヒルが戸惑うように見る。

「わたくしが見てきた限り、彼は、周りを誰一人信用しておらず、自分すら信じていないように見えました」

「……っ」

和音から聞かされる箆也の事実、そつと表情を曇らせるアヒル。「いつもいつも一人きりで、他者との繋がりをすべて拒絶しているようで…」

空を見上げていた和音が、ゆっくりと顔を下ろす。

「ですから、あなた方を見た時は驚きましたわ」

「えっ？」

「箆也がまるで仲間のように、自然に共に居るんですもの」

「……っ」

再びアヒルの方を見て微笑む和音に、アヒルが少し顔をしかめる。

「まるでじゃねえよ。あいつは俺の仲間だ」

「そうですわね」

どこかムキになるように答えるアヒルに、そつと目を伏せ、余裕ある笑みを浮かべる和音。怒る子供を、冷静に見つめる大人のような笑みであった。

「もうここで結構ですわ」

和音がふと足を止め、少し後ろで立ち止まったアヒルの方を振り返る。

「期待しております。箆也が認めた、あなたの力」

アヒルへと、愛らしい笑みを向ける和音。

「ではまた、安の神」

「あ、ああっ」

あつさりとそう言い放ち、アヒルに背を向けると、和音はそのまま一度も振り返ることなく、アヒルの前を去っていった。アヒルはしばらく立ち止まったまま、見えなくなるまで、和音の背中を見つめていた。

「なあゝんか、よくわかんねえお姫様だったなあ」

「神」

「んあっ？」

頭を掻いていたアヒルが、後方から呼ばれ、振り返る。するとそこには、先程、和音の置いていったリュックを持った、箆也と囁が

立っていた。

「とっとと行くぞ。夜になったら、こちらも分が悪い」

「ああ、そうだな」

「私は暗闇の方が得意だけど…？フフっ…」

「やめろ。余計な不安が増える」

怪しげに微笑む囁に、少し表情を引きつつて答えるアヒル。

「じゃあ…安団の初陣と行きましょうか…フフっ…」

「油断するなよ、神」

「ああっ！」

二人の言葉に、アヒルは大きく頷いた。

Word. 8 転校生ト言姫 (4)

その頃、言ノ葉町・中央通り。

「ええっと、今晚のおかずは何にしようかな」

アヒルたちと同じように下校した転校生・保は、慣れぬ様子で町を歩きながら、商店街に並ぶ店を眺め、何を作るか悩むように、首を傾げていた。

「あっ」

「きゃっ！」

店頭で目をやっていた保が、前から歩いてきた女性と勢いよくぶつかる。

「ご、ごめんなさい。余所見しててっ…」

ぶつかった女性が、態勢を立て直しながら、保へと申し訳なさそうな顔を向ける。

「ううっ…ううっ…」

「えっ…!？」

女性が振り向くと、そこには今にも泣き出しそうに目を潤ませた保が、大きな体を小さく丸めながら、女性よりも遥かに高い目線で、女性を見下ろしていた。

「す、すみませえんっ！お、俺なんかが、一丁前に夕飯のおかずを考えていたばかりにいっっっ！」

「はっ…?」

必死に謝りあげる保に、思わず顔を引きつる女性。

「この罪は、一生をもつて償いますうっっ！」

「け、結構です！」

「へっ?」

深々と頭を下げる保であったが、女性は必死に首を横に振り、逃げるようにして、保の前から去っていった。顔を上げた保が、もう

そこにはいない女性に、目を丸くする。

「許してくれるなんてっ、なんていい人なんだ！」

強く感動した様子で、拳を握り締める保。

「売り物に近づくんじゃないやねえよっ！この泥棒猫がっ！」

「んっ？」

引き続き感動していた保が、近くから聞こえてくる怒声と、叩きつけるような大きな音に気づき、振り向く。

「あっ…」

保が振り向くと、道端に、魚屋の店主に乱暴に追い払われたのか、ひどく弱った様子の子猫が横たわっていた。魚屋の店主が店の中に入ったことを確認した後、保がその子猫のもとへと歩み寄っていく。

「怪我しちゃった？」

しゃがみ込んだ保を、弱々しい瞳で見上げる子猫。

「ちよつとこっちにおいで」

保が大きな手で子猫を抱え上げ、人気のない路地裏へと入って、子猫を持っていない方の手を、制服のポケットへと入れる。

「よつと」

保がポケットから取り出したのは、赤く小さな、宝石のような玉であった。保がその玉を、子猫の怪我をして血が滲んでいる前足へと近づける。

「助けてあげて^{たす}」

その言葉に反応し、玉が赤い光を放ち始めると、その光に包まれた子猫の前足の傷が、見る見る内に塞がっていった。

「さあ、これで大丈夫」

怪我の治った子猫を、保が地面へと降ろしてやる。

「泥棒は程々にね」

保の言葉に反応してなのか、子猫は小さく鳴き声をあげると、保も前から去っていった。光の止んだ玉を、保が再びポケットの中へと入れる。

「さてと…んっ？」

また、路地裏から中央通りへ戻ろうとした保が、通りを行く見知った人影を見つけ、目を丸くする。

「あれはっ…アヒルさん？」

保がその視界に入れたのは、厳しい表情でどこかへと向かっていく、アヒルたち三人の姿であった。

八百屋『あさひな』から歩いて二十分程。アヒルたちは、言ノ葉町のはずれまでやって来ていた。

「ここが言姫さまの地図に印された場所よ…」

和音からもらった地図を閉じ、囁がゆっくりと顔を上げる。

「廃園になった遊園地か…」

囁の横に立った箆也が、鋭い表情で前方を見つめる。鳶で巻かれた大きな黒い門の向こうに広がるのは、錆びついたアトラクションが並ぶ、遊園地跡であった。箆也の声がどこまでも響く程に静かで、日も傾き始めた頃では、余計に不気味に見えた。

「お誂^{あつら}えむきだな」

「薄気味悪過ぎだったのっ…」

冷静に呟く箆也の横で、その表情を引きつっているアヒル。

「あら…怖いなら、手を繋いであげるわよ…？アヒるん…」

「いらねえーよっ！」

「強がり…」

「ああっ!？」

小バカにしたように微笑む囁に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「一応、潜入するんだ。静かにしろ」

「うっ…」

箆也に厳しく指摘され、アヒルが両手で自分の口を塞ぐ。確かにこの静けさでは、アヒルの怒声一つで、敵に気づかれてしまう可能性が高い。

「ちんたらしていても仕方がない。早速入るぞ」

目つきを鋭くした箆也が、アヒルの方を振り向く。

「安団の名誉もかかっている。やると言ったからには、やって見せろよ。神」

「わかってるよっ」

警告するような箆也に言葉に、少しムキになるように頷くアヒル。

「行くぜ！箆也！囁！」

「ああ」

「ええっ……」

アヒルの呼びかけに箆也と囁が頷くと、三人はその遊園地跡へと足を踏み入れていった。

「う、うう……」

アヒルたちがやって来た道の電柱の影から、遊園地跡へと入っていくアヒルたちを、こっそりと見つめる、一人の男。

「思わず付いて来ちゃったけど、何か不気味なとこだなあ」

それは、保であった。

「こんな所に何の用なんだろ？アヒルさんたちっ……」

保が、怯えるように引きつった表情で、静まり返った遊園地跡を見つめた。

遊園地跡・トリックハウス内。

「ねえ、知ってる？ヒロト」

派手な内装の部屋の中で、ふわふわとしたショートカットの少女が、同じ部屋にいる、女性のような柔らかな顔立ちの青年へと、何やら楽しげに声を掛ける。

「もうすぐここに、“神様”が来るんだってっ」

「知ってる」

「なあんだ、つまんないっ」

ヒロトと呼ばれた青年が素っ気なく答えると、少女は拗ねるように、その小さな口を尖らせた。

「つつーか、さっき灰示サマが言ってたし。それ、知らねえ奴いねえーんじゃんっ?」

「言えてる…」

同じ部屋の、見たこともない奇抜なデザインの長椅子に座った、ヒロトと少女以外の二人が、次々と口を挟んだ。

「ええ!? さっき灰示サマ、来たのお!?」

「お前が出掛けている間に、連絡があったよ」

「なあ〜んだっ、不治子^{ふじこ}も灰示サマとお話したかったのにいっ」

自らを不治子と呼んだ少女が、見るからに残念そうに肩を落とす。

「まあいいやつ。この前みたいに神様やつつけっちゃって、また灰示サマに褒めてもらうんだっ!」

「早々上手くいくかねえ〜っ」

「行くよお!」

口を挟んだ一人に、大きく頷きかける不治子。

「だって不治子、強いもんっ」

不治子が自信を持った笑みで、どこか怪しげに微笑む。

「この前だって、ちゃ〜んと神様、ボッロボロにやつつけたしっ!」

「付き人の連中は見事に逃がされたけど…」

「あんなの雑魚じゃん! 大事なのは神様だよっ、神様!」

口を挟むもう一人に、不治子が少しムキになって言い返す。

「神をやっつければ、私たちの世界が来るって、灰示さまも言ってたものっ」

「じゃあまあ、そろそろ行こうか」

椅子に深々と腰を下ろしていたヒロトが、ゆっくりとその場で立ち上がる。

「オレたち^{はぎょう}波行の力、成り立ての安の神ってのに、見せつけてやる

「うよ」

「うん！」

「ああ…」

「灰示サマの出番、ねえーんじゃんっ？」

ヒロトの言葉を合図に、四人はトリックハウスを後にした。

Word. 9 招カレザル客 (1)

言姫・和音の依頼により、忌増発の裏で動く五十音士の一人、“波守”・波城灰示の討伐を任された、アヒルたち安団の面々は、和音より提供された、波城灰示の根城と思われる、廃園となった遊園地へと足を踏み入れた。

そこに待ち受けるものが、何なのかも知らずに……。

「広いな……」

電灯も点いていない薄暗い遊園地跡を、和音からもらった懐中電灯で照らしながら、大きく体を動かして、見渡すアヒル。道の端に小さく造られた門からは予想外なほどに中は広く、小さな町にあったにしては、様々なアトラクションが並んでいた。だがそのアトラクションも、勿論どれ一つ、動いていない。

「アヒるん……私、ジェットコースターに乗りたいわ……」

「勝手に乗って来いっ」

並んでいるアトラクションの一つ、巨大で長いジェットコースターを指差し、まるでデート中のカップルのように楽しげに言い放つ囁に、アヒルが冷たく答える。

「釣れないわねえ……」

「釣られてたまるか！無駄口叩いてつと、また籠也に注意されんぞっ！」

「僕はメリーゴーランドに乗りたい」

「だあああっ！」

注意するどころか、ジェットコースターの横のメリーゴーランドを、目を輝かせながら見つめている籠也に、アヒルが勢いよく倒れ込んだ。

「お前まで何言ってたんだよ！しかも乙女チックっ！」

「この前の恋盲腸で、ヒトミと先生が乗っていたんだ」

「何、デロ甘に懂れてんだよ!」

いたって真面目な表情で言う箆也に、立ち上がり、全力で突っ込みを入れるアヒル。

「恋盲腸の良さがわからんとは、まだまだだな、神」

「んなもん、一生わからんでいいわっ!」

「ウフフっ」

『……っ』

どこからか聞こえてくる笑い声に、あれこれと言いつつ合っていたアヒルと箆也、そして囁が、同時に表情を鋭くし、互いの背中を合わせ、それぞれ違う方向を警戒するようにして、身構える。

「気付かれたみたいだな」

「どこかの神が、大声で騒ぐから…」

「お前らが騒がせたんだろうがっ!」

「ウフフフフっ!」

「……っ」

囁に怒鳴っていたアヒルが、再び聞こえてくる笑い声に、言葉を止めて、険しい表情を見せる。

「誰だ!?!どこに居やがる!?!」

「ウフフっ…ジェットコースターに、メリーゴーランド…?そんなに乗りたいならっ…」

上方を見上げ、叫びあげたアヒルに答えるように返ってくる、可憐な少女の声。

「乗せてあげるっ…!」

「んなっ…!?!」

その声に反応するように、突然、メリーゴーランドの馬が動き出し、周囲を包む柵を越え、アヒルたちのもとへとまるで駆けるように迫って来て、ジェットコースターのレールを、誰もいない列車が駆け抜け、レールを飛び越え、アヒルたちのもとへと飛び込んでくる。

「んなあぁっ!？」

向かって来る馬と列車を見つめ、大きく目を見開くアヒル。

「イ、イリユージョンっ!？」

「あらあら…凄いわね…」

「感心している場合か」

どこか楽しげに笑っている囁に、注意するように眩きながら、箆也がポケットから言玉を取り出す。

「早く構えろ。死ぬぞ」

「あ、あぁっ!」

「ええ…フフっ…」

箆也に言われ、アヒルと囁もそれぞれポケットから、赤い言玉を取り出した。

「第一音“あ”…」

「第六音、“か”」

「第十一音：“さ”…」

三人が右手で、言玉を握り締める。

『解放っ…!』

三つの言玉が同時に赤く強い光を放つと、言玉はそれぞれ姿を変え、アヒルは銃を、箆也は格子を、囁は横笛を構えた。

「“欠^かけろ”っ…!」

箆也が格子を放り投げると、格子は上空で六本へと分かれ、迫り来るメリーゴーランドの馬たちの足元へと向かい、その足を砕いて、馬を横倒しにし、動きを止めた。

「“妨げろ”…」

箆也に続くように、囁が言葉を発し、横笛を奏でる。するとその音色は大きな振動の塊を生み、向かってくる馬たちを、正面から吹き飛ばした。

「よぉーし!俺もっ!」

二人の戦い振りを見て、後に続けと、気合いを入れて銃を構えるアヒル。

「“当たれ”！」

銃から放たれた弾丸が、まっすぐに、駆け込んでくるジェットコースターの列車へと向かっていく。

「よしっ！って、ありっ？」

弾丸は、列車の真っ赤な鋼鉄のボディを貫きはしたが、小さく穴をあけただけであって、その速度を緩めることはなかった。その光景を見つめ、アヒルが間の抜けた声を漏らす。

「うわわっ！どわあああ！」

引き続き迫り来る列車に追われ、その場から必死に走り出すアヒル。

「神っ…！」

「あらら…ダサイ…」

列車に追いかけられ、遊園地のさらに奥へと一人、遠ざかっていくアヒルに、籠也が焦ったように声を出し、囁が呆れきった笑みを浮かべる。

「動きを止めたければ、普通、車輪を撃つだろうっ！？」

「アヒルんの頭が、そこまで回るはずないじゃない…！」

少し怒るように、誰にともなく問いかける籠也に、冷静に答える囁。

「ウフフフっ…神様はあっちねっ…」

『……っ』

先程の声が、アヒルの走り去っていく方向へと消えていくことに気づき、籠也と囁が表情を鋭くする。

「狙いはアヒルん…？」

「チっ」

眉をひそめる囁の横で、籠也が少し舌を鳴らす。

「“囲え”…！」

籠也が言葉を発すると、馬の足を碎き続けていた六本の格子が、一列に並ぶように地面に突き刺さり、馬たちを押さえて、前へと進む道を作った。

「ここは僕が抑える。神を追え、囁っ」

「えっ…？」

箆也の言葉に、囁が少し驚いた顔を見せる。

「あら…一人で大丈夫なの…？」

「誰に向かって言っているっ」

「フフっ…」

試すように問いかけた囁であつたが、すぐさま答える箆也に、そつと笑みを浮かべた。

「じゃあ遠慮なく、そうさせてもらうことにするわ…」

「ああ。神は頼んだぞ」

「勿論よっ…」

大きな笑みで頷くと、囁は箆也の作った道を進み、アヒルの後を追つて、遊園地の奥へと駆け出していった。

「ふうっ…んっ？」

囁を進めることに成功し、一息ついてた箆也であつたが、迫り来る馬たちの勢いに、格子の囲いが壊され、吹き飛ばされた格子が、一本に戻って、箆也の右手へと返って来る。

「一頭ずつ相手にしては、キリがないな」

向かってくる大勢の馬に、少し肩を落とすと、箆也が格子を身構えた。

「“変格”」

箆也がそつと呟くと、赤い光を放ち、先端から曲線を描く刃を生やして、格子が鎌へと姿を変える。

「“刈れ”っ…！」

箆也が勢いよく鎌を振り切ると、鎌の刃部分から放たれた、大きな赤色の一閃が、一瞬にして馬たちの間を駆け抜け、一頭残らず馬の胴体を斬り裂いた。砕けた馬が地面に崩れ落ちると、その場に静けさが戻る。

「ふうっ…」

鎌を下ろし、もう一度、一息つく箆也。

「早く二人の後をつ…」

「ヒヒっ、それが“変格活用”ってヤツ？」

「……っ！」

アヒルの囁の後を追うため、遊園地の奥へと進もうとした箆也が、横から聞こえてくる声に目を見開き、進もうとしていた足を止める。

「噂には聞いてたけど、初めて見たやあ。ヒヒヒっ」

静かなその場に足音を響かせ、ゆっくりと箆也のもとへと歩み寄って来るのは、女性のような柔らかな顔立ちをした青年と、長い前髪が少し怪しげな雰囲気を出している、小柄の少年であった。

「……っ」

歩み寄って来る二人に対し、箆也が警戒するように、鎌を身構える。

「あなたたちは一体っ…」

「オレたち、ハ行に、変格はないからね」

「ハ行っ…？」

青年の放った言葉に、素早く眉をひそめる箆也。

「じゃあまさかっ、あなたたちはっ…！」

「波行、はぎよう“比守”ひもり・昼川ヒロトっ、ヒヒっ」

「同じく波行：“保守”ほもり、穂並螢_{ほなみほたる}…」

青年が青い玉を、少年が白い玉をそれぞれ取り出しながら、それぞれ名を名乗る。

「言玉：五十音土っ…」

二人が持ち出したその玉を見つめ、表情を曇らせる箆也。

「波守だけじゃないのかっ」

「第二十七音“ひ”、解放っ」

「第三十音：“ほ”、解放…」

それぞれの言葉に反応し、ヒロトと螢の言玉が、強い光を放ち始める。

「さあっ、オレたちに見せてよ。安団の実力ってヤツをさっ」

「クっ…」

楽しげに笑うヒロトに、箆也は険しい表情を見せた。

Word. 9 招カレザル客 (2)

「どわああああ！」

箆也が敵と対峙しているその頃、箆也の神であるアヒルはいえ
ば、まだジェットコースターの列車に追いかけられ、遊園地を駆け
回っていた。

「クッソ！ “当たれ”！ “当たれ”！」

アヒルが後方を振り返りながら、銃を構えて、追ってくる列車へ
と弾丸を撃ち込む。だが相変わらず、弾丸はボディを貫くだけで、
列車の動きはまったく止まらない。

「なんでえ！？なんで止まんねえのっ！？」

大きな音を立てて迫り来る列車に、走りながら、思わず頭を抱え
るアヒル。

「んんんっ、んあっ！もしかして、車輪撃ち抜いたら止まるんじゃ
っ…！」

それこそ神でも降りてきたかのように、いきなり思いついたアヒ
ルが、再び後方を振り返り、銃を身構える。鋭くした瞳で、列車の
車輪を見つめるアヒル。

「“当たれ”っ…！」

———パアアアンっ！

アヒルの弾丸が、見事に列車の前輪を撃ち抜くと、撃ち抜いた穴
から勢いよく空気が漏れ、前輪がしぼみ、列車はバランスを崩して、
地面に擦りつくように制止した。

「ふいっっ」

列車が止まったことを確認し、アヒルも足を止め、胸を撫で下ろ
す。

「助かった…」

「アヒるん…」

「だああああ！」

ホッとしていたアヒルが、突然すぐ横に現れる囁きに驚き、思わず奇声をあげる。

「さ、囁！なんでお前、ここにっ！？」

「お馬さんたちを籠也に任せて、追ってきたの…列車は止まったよ
うね…」

「ああ、前輪を撃ち抜いてなんとか」

「前輪を…？」

アヒルの言葉に少し驚くような顔を見せた囁が、振り向き、動きを止めた列車の方を見た。

「そんなことに気づくなんて、凄いわ…アヒるん…人類並みの進化
ね…」

「お前は、俺を猿人か何かだと思ってんのかっ？」

「ううん…単細胞生物…」

「えっ！？アメーバあっ！？」

「ウフフフフ…」

『…っ！』

どこからか聞こえてくる笑い声に、アヒルと囁が会話を止め、素早く振り向く。

「誰だ！？どこに居やがる！？」

「ここに居るわよ」

「へっ？」

威勢よく強い声をあげたアヒルであったが、割りと近くから返ってくる声に、少し目を丸めながら、ゆっくりと後方を振り返った。

薄暗い遊園地の中で、広場にあるショーのステージの照明が、突然点灯する。

「あっ…！」

「こんにちはあゝ神様！ウフフっ！」

照らし出されたステージの上に立っているのは、ふわふわとしたショートカットの、愛らしい顔立ちをした少女であった。小さな口元を綻ばせ、柔らかく微笑んではいるが、その瞳は鋭く、どこか刺すようにアヒルを見ている。

「お、女っ…？」

「アヒるん、あれ…」

「えっ？」

囁に声を掛けられ、アヒルが囁の指差している方向を見る。その方向の先、少女の右手には、小さな黄色い、宝石のような玉が、しっかりと握り締められていた。

「あれはっ…言玉？」

「ええ…」

眉をひそめるアヒルに、囁がそつと頷きかける。

「じゃあ、あいつが根性クララかつ！」

「波城灰示よ…アヒるん…」

思い切り名前を間違えて覚えているアヒルに、呆れた表情を向ける囁。

「てつきり男だと思ってたけどっ…」

「不治子は灰示さまじゃないよおっ」

「へっ？」

驚いた様子で少女を見ていたアヒルが、少女の言葉に、さらに驚いた表情となる。

「不治子は、不二^{ふじ}不治子！波行^{ふもり}の“不守”だよおっ」

「フジフジコ？不守っ？」

「どうやら…ここに居るのは、波守だけではないようね…」
首を傾げるアヒルの横で、囁がそつと目を細める。

「何人も五十音士が居るとなると…少し厄介かも…」

「ど、どういことだよっ？なんで他の五十音士までっ…」

「ねえっ、神様あっ」

「あっ？」

表情を曇らせる囁に、問いかけていたアヒルであったが、ステージから不治子に呼ばれ、そちらへと顔を向けた。

「神様はあ、この前来た神様より強いのかなあ？」

「……っ」

その不治子の問いかけに、すぐさまアヒルの表情が曇る。

「この前来た神って……」

「その神はどうしたの……？」

囁が素早く、表情をしかめるアヒルの前へと出て、不治子へと鋭く問いかけた。

「ウフフっ！さあ？どうしたんだろうっ？」

『……っ』

無邪気に笑う不治子に、アヒルと囁がさらに表情をしかめる。

「ねえ、神様あっ」

「……っ？」

もう一度、今度は少し低い声で呼びかけてくる不治子に、アヒルが少し警戒するように、眉間に皺を寄せる。

「不治子が灰示さまに褒めてもらうために、不治子に倒されてくれないっ？」

「なっ……！」

不治子が冷たく微笑むと、何やら戦慄のようなものが全身に走り、アヒルは思わず身構えた。

「こいつ……！」

「下がって……アヒるん……」

「えっ……？」

不治子の醸し出す殺気に、警戒を強めるように銃を身構えようとしたアヒルであったが、そんなアヒルの前に手を伸ばし、制止を促したのは、少し前に立っている囁であった。

「囁？」

「我が神に手出ししようというのなら……私がお相手するわよ……？」
アヒルの前に立った囁が、挑戦するように、不治子へと言い放つ。

「誰？あなたっ」

「“左守”、真田囃…」

「左守？ああ、安附の一人かあっ」

不治子が、あまり興味なさそうに頷く。

「不治子が興味あるのは、神様だけだよおっ？悪いけど、雑魚には興味ないのっ！」

口端を吊り上げ、冷たく微笑む不治子。

「あんなイラつく話し方の女…私がすぐさま消してくるから…アヒるん…」

「ちよっとおっ！」

挑発するように微笑んだ不治子を完全に無視して、アヒルに強気な言葉を放っている囃に、不治子が思わず不満げな声をあげる。

「不治子は雑魚に興味ないって言ってるでしょお！？付き人は引っ込んでっ…！」

「そんなわけにはいかないわ…」

囃が、不治子の言葉を強く遮る。

「安附として…我が神に“雑魚”の相手をさせるわけには、いかななもの…」

「…っ！」

嘲笑うかのような笑みで言い放つ囃に、不治子が大きく目を見開く。

「すっげえ挑発っ…」

あまりにもケンカ腰の囃に、思わず呆れた表情を見せるアヒル。

「不治子、超ムカついたあ！やっぱり、付き人から始末しちゃうんだからあ！」

「フッフ…上等っ…」

アヒルから囃へと狙いをしぼり、言玉を持って身構える不治子に、囃はどこか楽しげに微笑みながら、持っていた横笛をゆっくりと上げる。

「お、おいつ、ささやっ…」

「“凹め”っ！」

「……っ！」

囁に呼びかけようとしたアヒルが、上空から迫る何かに気づき、大きく目を見開く。

「アヒるんっ…？」

「クっ…！」

囁が戸惑うように振り向く中、アヒルが少し顔をしかめながら、囁から離れるように、後方へと飛ぶ。すると、先程までアヒルの居た辺りに、上空から何者かが降り落ちてきて、その拳を誰も居なくなった地面へと叩きつけた。

——バアアアアン！

『なっ…！』

拳が当たった瞬間、地面に巨大な穴があき、アヒルと囁がそれぞれ、驚いた表情を見せる。その力は、人間のものとは思えない威力であった。

「へへ、避けられたじゃんっ」

「……っ」

地面にあいた、深い穴の中で体を起こし、アヒルたちへとその姿を見せたのは、派手に染め上げた金色の髪に、耳にいくつもピアスをつけた、アヒルと同じ年くらいの青年であった。楽しげに笑って拳をあげるその青年に、アヒルが警戒するように眉をひそめる。

「兵吾っ…！」

「よお！二人相手に困っちゃってんじゃんっ？不治子っ」

青年の名らしきものを呼ぶ不治子に、兵吾と呼ばれた青年が、穴から普通の高さの地面へと飛び上がり、不治子の方を振り返った。

「だから、神様は俺っちが引き受けてやるじゃんっ！」

「んなっ…！」

兵吾の言葉に、不治子が大きく顔を歪める。

「ダメだよお！神様は不治子がやっつけて、灰示さまにっ…！」

「お前はソッチの女の相手するんじゃないっ？それとも、言い負かされたまま、退くじゃんっ？」

「むっ…！」

まるで試すように問いかける兵吾に、思わず赤くなった頬を膨らませる不治子。

「何よお！兵吾なんて、“部守”^{へもり}で、ヘナチヨコで、屁の河童のくせにいつ！」

「すっげえムカつくじゃんっ…！」

子供のように叫び散らす不治子のその言葉に、兵吾が勢いよく顔を引きつる。

「部守っ…？」

「んっ？」

不治子の方を見ていた兵吾が、部守という単語を聞き、眉をひそめているアヒルに気づき、再びアヒルの方を振り向いた。

「おおっとっ、神様に自己紹介すんの、忘れてたじゃんっ」

そう言って兵吾が、不敵な笑みを浮かべる。

「俺っちの名前は、辺見^{へんみ}兵吾！波行の部守！宜しくじゃんっ」

「不守に…部守っ…」

不治子と兵吾を見て、アヒルが表情を曇らせる。

「神様っ、俺っちの相手、してくれじゃんっ！」

「……っ！」

兵吾の振り上げた右拳から、緑色の光が放たれ始め、険しい顔つきとなるアヒル。

「“凹め”っ…！」

「クっ…！」

勢いよく振り下ろされる拳に危機感を感じ、アヒルが素早く銃を、自分のコメカミへと向ける。

「“上がれ”っ…！」

弾丸の放たれる音と、地面が大きく凹む音が、同時に辺りに響き

渡った。

「へえ」

深く凹んだ地面のすぐ前に立ち、兵吾がゆっくりと顔を上げる。

「飛べるんじゃないっ」

「ふうっ」

兵吾が見上げた上空には、凹む地面から逃れるため、空へと飛び上がったアヒルの姿があった。ぎりぎりのところで兵吾の攻撃をかわし、ホッとしたように一息ついている。

「アヒるんっ…！」

「大丈夫だ！」

少し身を乗り出して呼びかける囁に、アヒルがすぐさま答える。

「俺のことはいい！だからお前は、その女を倒せ！」

「……っ」

アヒルの言葉に、囁がハッとした表情となる。

「空飛べるくらいで、余裕ぶっこいてんじゃないやねえーじゃんっ！？」

「クっ…！」

再び緑色の光を放ち始めた拳を、勢いよく振り上げる兵吾に、アヒルが少し唇を噛み締め、空に飛び上がったまま平行移動をし、その場を離れていく。

「逃がさねえーじゃんっ…！」

離れていくアヒルを、素早く追いかけていく兵吾。

「もお！兵吾に神様取られちゃうなんて、サイテー！」

アヒルと兵吾が去り、その場に囁と不治子だけが残るが、不治子は何とも悔しげな表情で、足を振り上げ、ステージの床へと勢いよく降り下ろした。

「これで灰示さまに褒められなくなっちゃったら、全部、あんたのせいだからねえっ！」

「どうでもいいけど…いい加減、その幼稚で不快極まりない話し方…やめてくれない…？」

「きいいい！ムカつく！」

落ち着いて、小バカにしてくる囁に、不治子がより一層、怒りを燃やす。

「まあいいわあ！あんたも安附のくせに、神様守れもしなかったんだしっ、いい気味よお！」

「あらっ…？神を守る必要が、どこにあるの…？」

「えっ？」

すぐさま聞き返してくる囁に、戸惑うように眉をひそめる不治子。

「我が神の命は、“あなたを倒せ”…なら、私は…」

鋭く微笑んだ囁が、右手の横笛をゆっくりと構える。

「その命に…忠実に従うだけよ…」

「…っ」

自信を持った笑みを覗かせる囁に、不治子がどこか気に食わない様子で顔をしかめた。

「やれるもんならっ…やってみなさいよおっ！」

不治子が高々と右手を掲げると、不治子の握り締めていた黄色の言玉が、強い金色の光を放ち始める。

「第二十八音“ふ”、解放っ！」

光がさらに強くなり、不治子の言葉が解放される。

「なっ…」

不治子の手を離れ、姿を変えた言玉に、囁が思わず大きく目を見開く。

「トラっ…？」

囁が見つめる先、不治子のすぐ横に、不治子に従うようにして立っているのは、金色の光に包まれた、一頭のトラであった。四本の足を力強く地面につけ、赤い瞳を鋭く光らし、その口からは大きな牙を覗かせている。

「ウフフっ、あんたも五十音士の端くれなら、段によって、言玉の形状が違ふことくらい知ってるでしょ？」

驚きを隠せない様子の囁を、不治子が滑稽そうに見つめる。

「ア段は武器だったっけえ？不治子のウ段はねえっ、“生物”！」

「生物っ…」

もう一度、トラを見つめながら、囁がそつと眉をひそめる。

「話に聞いたことはあったけど…実際、見てみると結構驚きね…」

「ウフフっ、さあ、私のトラトラ子っ…」

微笑んだ不治子がトラの頭を撫でると、トラが気持ち良さそうに瞳を閉じる。

「とつとあのムカつく女を倒して、灰示さまのところに帰ろっ」

不治子が撫でていた手を離し、途端に表情を鋭くする。

「“踏み潰せ”っ！」

「ガアアアっ！」

不治子の言葉に反応し、トラが勢いよく囁のもとへと飛びかかってくる。

「クっ…！」

囁は厳しい表情を見せ、横笛を構えた。

Word 9 招カレザル客 (3)

一方、遊園地跡入口付近の箆也。

「浸^{ひた}せ」っ」

「……っ！」

青い言玉を握り締めた“比守”ヒロトの言葉に反応し、箆也の立っている周囲の地面から、何の囲いもないはずなのに水が溢れ、徐々にその水位を上げて、箆也の体を浸していく。

「水系能力：イ段の言玉かっ……」

腰まで上がって来る水に顔をしかめながら、箆也が右手の鎌を振り上げ、先端部を水から引き上げて、勢いよく上空へと投げ放つ。

「原形」っ！」

上空に投げられた鎌が、箆也の言葉に反応し、もとの六本の格子の姿へと戻ると、箆也が飛び上がり、その格子の一本へと片足をつけた。

「重^{かさ}なれ」……！」

箆也の乗った格子を一番上として、六本の格子が縦一列に重なり、長い一本の格子となると、箆也はその高さを利用して、先程のメリーゴーランドの屋根へと飛び移った。箆也が屋根の上へと降りると、格子がまた一本に戻って、箆也の右手に収まる。

「身軽だねえっ」

屋根の上の箆也を下から見上げ、ヒロトがどこか感心するような笑みを浮かべる。

「さすがは安附ってとこっ？ ヒヒっ」

「……っ」

試すように問いかけてくるヒロトに、箆也が眉をひそめる。

「変格」」

屋根の上で立ち上がった箆也が、再び格子を鎌の姿へと変え、素

早く構えた。

「刈れ」！」

箆也が鎌を振り下ろし、笑っているヒロトへと、赤い一閃を向ける。

「……っ」

向かってくる一閃を見つめながら、ヒロトは特に避ける素振りも見せず、柔らかに微笑んだまま、言玉を持った右手を一閃へと突き出した。

「ひるがえ翻せ”っ」

「なっ…！」

ヒロトの言葉が放たれた途端、箆也の放った一閃がピタリと動きを止め、まるで弾き返されたかのように、箆也の方へと戻ってくる。

「ちっ…！」

箆也が顔をしかめ、屋根の上から飛び降りると、返された箆也の一閃は、そのまま突き進み、メリーゴーランドの屋根を斬り裂いた。

「ひろ広がれ”っ」

「うっ…！」

ヒロトが休むことなく言葉を発すると、今度は、地面に降り立った箆也の周囲を囲うように、高さのある水の壁が生じた。

「こんなものっ…！」

箆也が水を斬ろうと、鎌を構える。

「蛭っ」

「ああ…」

ヒロトの呼びかけに答え、今までずっとヒロトの横でただ、戦いを見ていた蛭が、右手を掲げ、持っている白い言玉を輝かせ始めた。

「ほとほし“迸れ”…」

「何っ…!？」

放たれる白い光に、鎌を振り下ろそうとした箆也が、焦った声をあげる。

——パアアアアン！

「うああっ…！」

籠也の周囲を囲んでいた水壁が、突然、勢いよく飛び散り、その衝撃をもろに受け、中にいた籠也が吹き飛ばされる。

「うっ…！ううっ…！」

アトラクションの囲いへと背中を打ちつけた籠也が、苦しい表情を見せながら、力なくその場に座り込む。相当な衝撃でぶつかったのか、その囲いは、籠也の当たった部分だけ大きく凹んでいた。「安附も、前の付き人たちと同じだねえ」

まだ座ったままの籠也のもとへと歩み寄りながら、少しがっかりしたように肩を落とすヒロト。

「大したことないっ」

「クっ…」

はつきりと言い放ち、嘲笑うかのような笑みを浮かべるヒロトに、籠也が悔しげに唇を噛み締める。

「二人が相手ではっ…」

「この分だと、君んこの神様ってのも、大したことないんだろうねっ、ヒヒっ」

「…っっ」

ヒロトとその後ろに立つ蛍を見つめ、厳しい表情を見せていた籠也が、ヒロトのその、アヒルをも侮辱する言葉に、思わず顔をしかめた。

「もう少し遊ぼうかと思ったけど、もういいかなあ？君の相手してても、つまんないだけだしっ」

「うっ…」

まだ立てない状態で向けられる言玉に、籠也が険しい表情を作る。

「手伝うか…？」

「必要ないよ」

後方から不気味に問いかける蛍に、ヒロトがすぐさま短く答える。

「この位の相手、オレだけで十分さっ」

ヒロトが冷たく言い放ち、言玉を強く握り締めた。

「バイバイ、“加守”クンっ」

微笑んだヒロトの言玉が、青く輝き始める。

「引き裂け”っ」

ヒロトが言葉を放つと、ヒロトの周囲の地面から細長い水の塊が何本か突き上がり、その先端を刃のように鋭くすると、一斉に簞也へと向かって来た

「クっ…！」

座った状態のまま、必死に体を動かし、鎌を構えようとする簞也。

「満ちれ”」

———パアアアアン！

「えっ…？」

「何っ…！？」

水の刃がヒロトの言葉通り、まさに簞也を引き裂こうとしたその瞬間、簞也の上方から大波のように、大量の水が流れ落ち、簞也へと向かって来ていた水の刃を、呑み込むように掻き消した。その光景に、簞也とヒロトが、それぞれ驚きの表情を見せる。

「グっ…！」

ヒロトの刃を呑み込んでも直、波は勢いを止めず、そのままヒロトへと向かっていく。迫り来る波に、顔をしかめながら、後方へと下がるヒロト。

「ほ、蛭っ…！」

「“干せ”…！」

呼びかけにすぐさま答え、蛭が言葉を呟くと、ヒロトへと向かって来ていた波が一気に干上がり、あっという間に水一滴なくなってしまった。

「水っ…！」

波が消え、足を止めたヒロトが、濡れた地面を見下ろし、険しい表情を見せる。

「ほおー… “この位の相手、オレだけで十分さ” …」

「うるさいっ」

嫌味のように、先程のヒロトの言葉を繰り返す蜚に、ヒロトが思わず顔を引きつる。

「もう一人いるなんて、思ってたんだよっ」

煩わしそうに言い放ち、箆也の方を見るヒロト。

「誰っ？」

「いえ、別に…」

「あっ…！」

ヒロトの問いかけに答えるように、箆也のすぐ横へとやって来るその人物を見上げ、箆也が驚いた様子で、大きく目を見開いた。

「あなたはっ…！」

「名乗る程の者ではありませんよ」

箆也の横へと現れたのは、人差し指で眼鏡の縁を軽く上げる、箆也たちと同じ制服姿の青年。それは、為の神・為介とともに居た、あの雅であった。

「確か“美守”の…」

「どうも、言ノ葉高校三年A組、オカルト同好会部長の箕島雅です」

「いや、それはわりとどうでもいい情報だがっ…」

箆也に対しては丁寧になを名乗る雅に、箆也が軽く表情を引きつける。

「何故、あなたがここにっ…」

戸惑うように雅の方を見ながら、箆也がゆっくりとその場で立ち上がる。

「上からの命で仕方なくです。なので、あなたが恩に着る必要はありませんよ」

「上っ…？」

あっさりと答える雅の言葉に、そっと首を傾げる箆也。

「為の神が…？何故、あの男が僕たちの手助けなどっ…」

「さあ？あの人の考えは、僕には理解出来ません。まあ、理解したくありませんが」

「神相手に、凄いい言いようだな…」

冷たく言い放つ雅に、箆也が少し呆れた表情となる。

「ただ」

「……っ？」

雅が言葉を付け加えると、箆也は戸惑うように首を傾げた。

「こんなところで、あなた方に死なれては、“面白くない”のだからですよ」

「面白くない、ね…」

その意味ありげな言葉を繰り返し、箆也がそつと表情を曇らせる。
「まあいい、今は緊急事態だ。あの男の腹の中を探るより、あなたの力を当てにさせてもらおう」

「どうも」

そう言って再びヒロトと蛍の方を向き、鎌を構え直す箆也に、雅が少し笑みを浮かべる。

「ほお…さっきの波に、“み”のつく言葉…あれ、お前と同じ、イ段の五十音士か…？ヒロト…」

「そうみたいだね」

確認するように問いかける蛍に、ヒロトが素っ気なく答える。

「ヒヒっ、どうやらアッチも、ア段だけってわけじゃあないみたいだっ」

少し肩を落としたヒロトが、吹っ切れたように軽く微笑む。

「そういうば灰示様が言ってたよおっ」

『……っ？』

ヒロトの言葉に、箆也と雅が同時に振り向く。

「安の神と安附の三人の他に、“招かれざる客”が二人来てるってねっ」

左手の指を二本立て、箆也たちへと向けて見せるヒロト。

「メガネのお兄さんが、その内の一人かな？」

「そうですね」

「二人っ…？」

ヒロトの問いかけに答えている雅の横で、箆也は先程のヒロトの言葉を繰り返し、困惑するように首を捻っていた。

「雅、あなた、為の神と来たのか？」

「いいえ、ここに来たのは僕一人ですよ」

「えっ…？」

すぐさま答える雅に、箆也の表情が曇る。

「じゃあ、もう一人は一体っ…」

「さあて、じゃあ二対二となったところで、第二ラウンドといこうかっ、ヒヒっ」

「……っ」

箆也に考える暇を与えることなく、ヒロトと蛍が言玉を構え、戦いの態勢を取る。その様子を見つめ、箆也は考えることをやめ、再び鎌を構えた。

「どちらがいいですか？ 神月君」

「えっ…？」

問いかけてくる雅に、箆也が少し驚いた顔を見せる。

「何だ？ 選ばせてくれるのか？」

「一応、あなたの戦いですから」

「それはどうもっ」

義理堅く答える雅を見て、少し笑みを零した後、箆也が前を向き、並んでいるヒロトと蛍を見比べる。

「じゃあっ…」

——この分だと、君んとこの神様ってのも、大したことないんだろうね——

「我が神を侮辱してくれた、比守の方の相手をさせてもらおうかな」

「では僕は保守ですね。了解しました」

箆也の言葉に反対することもなく、素直に頷いて、雅が螢のみへと視線を絞る。箆也も構えた鎌の狙いを、ヒロトのみへと向けた。

「ほおー…あいつら、やる気満々…」

「望むところさっ」

身構える二人を見つめながら、螢の眩きに、ヒロトはどこか楽しげに笑う。

「オレたちの言葉の力、もっともって見せつけてやろうよっ！ヒヒっ！」

Word. 9 招カレザル客 (4)

「クっ…！」

囁と不治子を広場へと残し、空を飛び上がりながら、遊園地のさらに奥へと移動していたアヒルが、観覧車のゴンドラの一つへと飛び降り、険しい表情で後方を振り返る。

「“凹め”っ！」

「うわっ…！」

アヒルの後を追って来た兵吾が、緑色に輝くその拳を、地面からでも届く、観覧車の下部の車輪へと炸裂させると、その部分が勢いよく凹み、観覧車が、アヒルの乗ったゴンドラごと、総崩れとなる。

「このっ…！」

ゴンドラから飛び降り、地面へと降下していきながら、アヒルが空へと弾丸を放つ。

「“当たれ”！」

アヒルの言葉を受け、空へと舞った弾丸は、百八十度角度を変え、下にいる兵吾へとまっすぐに向かっていく。

「弾丸じゃんっ？」

降りてくる弾丸を見ながら、避けようともせず、楽しげな笑顔を浮かべる兵吾。

「直撃する気かっ…！？」

「へへっ…！」

兵吾が笑ったまま、弾丸へと右手を突き上げる。すると、またしても兵吾の右手が、緑色の光を放ち始めた。

「“隔^{へだ}たれ”っ…！」

———パアアアン！

「なっ…!？」

アヒルの弾丸は、強く輝く兵吾の右手に当たりはしたが、兵吾の右手に傷一つつけることなく、そのまま力なく地面へと落下した。その光景に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「弾丸をつ…？」

しゃがみ込むようにして、地面へと着地しながら、アヒルが戸惑いの表情を兵吾へと向ける。

「ゴ、ゴッドハンドっ…？」

「へへっ、神に神の手って言われたじゃんっ」

真剣な表情で呟くアヒルを見て、兵吾がどこか得意げな笑みを浮かべる。

「神様は成り立てだから、知らないかもだけど、言玉は段によって、その形状が違うんじゃないっ」

「段に、よって…？」

兵吾の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「ア段は武器、イ段は水、ウ段は生物、そして俺っちのエ段はっ…」

先程、弾丸さえ叩き落とした右手を、アヒルの方へと見せるように掲げる兵吾。

「“身体強化”っ」

「身体、強化っ…？」

「そうじゃんっ」

聞き返すアヒルに兵吾が頷くと、再び兵吾の右手が強く輝いた。

「ほいっ」

「あっ…!」

光輝く兵吾の右手から、分離するようにして、その手のひらの中へと現れる、緑色の宝石のような玉。そのよく見慣れた玉を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「言玉っ…!」

「俺っちたちエ段の五十音士は、体の一部に言玉を取り込んで、その部分を強化するじゃんっ」

そう言いながら、兵吾が再び言玉を、右手の中へと取り込んでいく。言玉が右手に吸い込まれると、再び右手から緑色の光が漏れた。「そうかつ、だからあんな腕力や、弾丸を叩き落したりなんかがつ…」

「その通りじゃんっ」

納得した様子で呟くアヒルに、兵吾が笑顔を向ける。

「じゃあ下手に弾丸を撃ち込んでも意味なっ…んっ？」

兵吾の力を理解し、どう攻撃しようか悩んでいたアヒルが、ふと何か思いついたような表情を見せる。

「それって、つまりは右手以外は、生身の人間ってことかつ
考えを巡らせ、目つきを鋭くするアヒル。

「よしっ！」

「…っ？」

勢いよく銃口を空へと向けるアヒルに、兵吾が少し眉をひそめる。

——パアアン！パアアン！パアアン！——

空へと向かって、何度も何度も、その引き金を引くアヒル。

「数撃ちやつ…！“当たんだろ”っ…！？」

アヒルの言葉に反応し、空へと放たれた無数の弾丸が、一斉に軌道を変えて、下方にいる兵吾へと降り落ちてくる。

「へへっ」

雨のように落ちてくる弾丸を見上げ、緑色に光る右手を掲げる兵吾。

「あの数は、右手一本じゃっ…！」

「へ…」

直撃を確信し、思わず笑みを見せたアヒルであったが、兵吾はゆつくりと自らの言葉を口にした。

「“減らせ”」

「なっ…！」

兵吾の広げられた右手から、降り注ぐ弾丸へ向け、大きな緑色の光が放たれると、無数あったはずの弾丸は、たった一個だけを残し、光に吸い込まれるように、どこへともなく消えていってしまった。

「何だっ……!?」

消えた弾丸を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「余裕じゃんっ」

「……っ」

「んんっ？」

向かってくる最後の弾丸へ、右手を突き出した兵吾が、何かに気づいたように、ふと視線を横へと動かす。

「“隔たれ”っ」

「あっ？」

先程と同じように、光る右手で弾丸を叩き落とすのかと思われた兵吾であったが、人差し指を立て、まるで狙いでも定めていたかのように、とある方向へとアヒルの弾丸を弾き飛ばした。アヒルが、弾丸の飛んでいく方角を、目で追う。弾丸の向かっていく先には、休憩用のベンチが置かれていた。

「何だって、あんなどこへっ……」

「ひええええっ！」

「はあああっ!？」

その弾丸が向かっているベンチの後ろから、逃げるようにして飛び出て来る人物に、アヒルが目玉が飛び出しそうなほどに、激しく驚く。

「た、保っ……!？」

——パアアアアンっ!

「ひいっ!」

弾丸が直撃し、粉々になって碎け散るベンチに、地面に座り込んだまま、身を屈める保。ベンチの残骸が地面に落ちると、辺りに静

けさが戻った。

「ふう〜っ、た、助かつ…」

「おいっ」

「ひいひい〜っ！」

自分の無事を確認するように胸を撫で、ホッと一息ついていた保が、背後から急に呼びかけたアヒルの声に驚いたのか、勢いよく背筋を震え上がらせた。

「って、あっ！アヒルさあ〜ん！」

「アヒルさあ〜ん」じゃねえよっ。んなとこで何やってんだよっ？お前はっ」

振り向いた保が、見知ったアヒルの姿を確認し、安心したような笑顔を見せる。笑う保に、アヒルはしかめた表情を向けた。

「いやあ、晩御飯の買い物の最中にたまたま、アヒルさんたちが連れだって、どこかへ行くのを見かけまして」

「見かけまして？」

「どこ行くのかなあ？」と思って、つい、付いて来ちゃったりなんかつ…」

「はああっ！？」

「ひいっ！」

しかめていた表情を、さらにしかめるアヒルに、保が怯えた声を出す。

「す、すいません〜！一人で電車にも乗れない俺が、び、尾行なんて大それた真似しちゃって、すいません〜！」

「電車乗れねえーのかよっ…」

必死に謝る保に、謝罪よりも電車のこと引掛かり、表情を引きつるアヒル。

「ふう〜んっ、てっきり神様の加勢かと思ったのに、マジ普通に、ただの迷子じゃんっ？」

アヒルと保の様子を見ながら、兵吾が少し残念そうに呟く。

「そーいや灰示サマが、招かれざる客が二人来てるって、言ってた

じゃんっ」

「二人っ…?」

兵吾の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「二人って保、お前、誰かと一緒にっ…」

「ひいひい！ひ、人とのごく普通の日常会話が、ろくに出来なくてすみませえくん！」

「来るわけねえーよなっ…」

まだ一人であれこれと騒いでいる保に、アヒルが呆れきった表情を見せる。

「まあいいじゃんっ。神様とまとめて、ぶっ倒してやるじゃんっ！」
「……っ」

そう言って右手を振り上げる兵吾に、再び険しい表情を作るアヒル。

「おい、保っ」

「は、はいいっ?」

アヒルに名を呼ばれ、深く俯いていた保が顔を上げる。

「いいか、よく聞け。ここは夢の世界、イツツアドリームワールドだ」

「はっ…?」

真剣極まりない表情で、ロマンチックなことを言い出すアヒルに、思わず間の抜けた声を漏らす保。

「今から、俺の言う通りに動け。でないと死ぬぞ」

「随分と怖いんですね…夢の世界って」

アヒルが脅すように言うのと、保が今にも泣き出しそうな顔となる。

「じゃあ、まずはっ…」

「へっへっ！“凹め”えっ！」

「走れっ！」

「うわっ！ひえええっ！」

兵吾の拳に撃たれ、凹み出す地面から逃げるように、必死にその場を駆け出していくアヒルと保。勢いよく凹む地面に、激しく叫び

あげながらも、保は全速力でアヒルの後に付いてくる。

「逃がさねえーじゃんっ：！」

追いかけてっことを楽しむように、笑顔を見せて、二人の後を駆け出していく兵吾。

「ア、アヒルさん！あの人っ：！」

「だから、ここはドリームワールドだってっ：！」

「う、腕相撲大会出たら、絶対、優勝出来ますよお〜！」

「そこかよっ：！」

兵吾が何故、あのような力を持っているのかよりも、その力の凄さの方に感心がいつている保に、アヒルが走りながら、呆れたような、安心したような、複雑な表情を浮かべる。

「あぁ〜！右手握力一桁の俺なんかが、世界語っちゃってすみませえ〜んっ！」

「うっせえなあ！もう黙って走れよっ！」

叫んばかりいる騒々しい保に、前を走るアヒルが、思わず振り返り、怒鳴りあげる。

「へへっ！随分と楽しそうじゃんっ？」

「クっ：！」

「んんっ？」

上方から聞こえてくる声に、アヒルと両手で口を抑え込んだ保が、同時に顔を上げる。

「“凹め”っ！」

『……っ！』

近くの建物の屋根から飛び降りた兵吾が、すぐ横のコースターのレールへと拳を振り下ろすと、レールが勢いよく砕け散り、その上の、二人乗りの小さな車が、勢いよくアヒルたちのもとへと降下してくる。

「んんん〜っ！」

「クソっ：！」

口を抑え込んだまま、声にならない焦りの声を漏らす保の横で、

険しい表情を見せるアヒル。

「どいてろっ！」

「うわっ…！」

アヒルが大きな背中を勢いよく押し、保を横へと弾き飛ばす。吹き飛ばされた保が、勢い余って、地面へと倒れ込む。

「ア、アヒルさっ…！」

「……っ」

保が焦るように身を乗り出す中、アヒルが銃を構え、銃口を落ちてくる車へと向けた。

「“当たれ”っ…！」

——パアアンっ！

アヒルの放った弾丸が、落ちて来ていた車の中心を見事に貫き、車は空中でバラバラに碎ける。

「クっ…！」

落ちてくる車の残骸に、思わず身を屈めるアヒル。

「ふいっっ！」

すべての残骸が落ちると、アヒルがホッとした様子で、やっと顔を上げる。

「す、凄いです！アヒルさん！」

「んあっ？」

横から聞こえてくる保の声に、アヒルが面倒臭そうに振り向く。

「現実世界では、ただの面白い名前だけの高校生なのに！夢の世界では、超強のガンマンなんですねっ！」

「今すぐ撃ち抜いてやろうかっ…？」

どこか興奮した様子で叫んでいる保に、勢いよく顔を引きつけるアヒル。

「ああ！すみません！俺みたいな中途半端な名前の奴が、アヒルさんの名を語っちゃっ…！」

「凹め”っ」

「へっ？」

その場に座り込んだまま、いつものように必死にアヒルに謝っていた保が、上から降ってくる声に、目を丸くして、顔を上げる。

「うっ…！うひい…っ！？」

先程、アヒルへと落とされたコースターの車が十台ほど、今度は保へ向かい、勢いよく降り落ちていく。

「保っ…！」

焦ったようにその場を駆け出し、悲鳴をあげている保の前へと立つアヒル。

「このっ…！ “当たれ” っ！」

アヒルが先程と同じように、銃口を空へと向け、弾丸を放って、落ちてくる車の一台を貫いた。粉々になって碎け散る破片のさらに上から、新しい車がどんどん落ちてくる。

「あ、 “当たれ” ！ “当たれ” っ！」

何度もその言葉を繰り返し、弾丸を放つアヒル。だが徐々に、車は迫り来る。

「か、数が多過ぎるっ…！このままじゃっ…！」

「ええっ！？うっ…！」

焦ったように叫ぶアヒルの姿を見て、後ろで座り込んでいる保も、焦ったように顔を上げる。すぐ上まで迫り来ている車たちに、保の顔色が青ざめた。

「 “当たれ” っ…！クっ…！」

必死に応戦するアヒルの口から、悔しげな声が漏れる。

「へへっ、終わりじゃんっ」

自らの勝利を確信し、コースターの上から、高々と二人を見下ろす兵吾。

「クソっ…！何とか保だけでもっ…！」

「ア、 アヒルさんっ…」

保だけは助けようと、保の頭上の車に狙いを絞り、必死に弾丸を

撃ち続けるアヒル。そんなアヒルを、保はまっすぐに見つめる。

「あっ：！」

そんなアヒルの頭上に、一台の車が差し迫った。

「たっ：」

保が思わず、口を開く。

「^{たす}助けて” ええっ：！」

——パアアアンっ！

「えっ：？」

「何っ：！？」

アヒルのすぐ傍から、強い赤色の光が放たれると、その光は辺り全体を包み、アヒルたちへと落ちて来ていた車を、一台残らず、レールの上の兵吾へと弾き返した。

「な、何じゃん！？ううっ：！」

焦りと戸惑いの表情を見せながら、兵吾が、向かってくる車を避けるため、レールの上から地面へと飛び降りる。兵吾が降りたすぐ後、車はレールを直撃し、そのコースターは粉々になって、総崩れした。

「これはっ：」

崩れ落ちたコースターを見つめ、少し圧倒されたように、顔を引きつる兵吾。

「あ、あれえ？く、車はどこへ：」

「……っ」

ずっと目でも閉じていたのか、まったく状況を理解していない様子で、いつの間にか車のなくなっている空を見回している保の姿を捉え、兵吾がそっと目を細める。

「さっきの言葉：まさか、あいつもっ：んんっ？」

鋭い表情で保を見ていた兵吾が、ふと目を丸くする。

「か、神が居ねえーじゃんっ！？」

先程まで、保のすぐ横に立っていたはずのアヒルの姿が、いつの間にか、なくなっていた。

「ど、どこにっ…!？」

周囲を見回し、アヒルの姿を探す兵吾。

「あっ! そういえば、あいつっ…! “上がれ”の言葉があるから、空へっ…!？」

兵吾が思い出したように叫び、勢いよく空を見上げる。

「遅せえーよっ」

「うっ…!」

兵吾が顔を上げると、空にはすでに、銃口を兵吾へと向けたアヒルの姿があった。

「こ、このっ…! “へっ…!”

“当たれ”っ…!!」

兵吾の言葉を掻き消して、アヒルの言葉が響き渡る。

——パアアアン!

「うっ…うわあああっ!」

アヒルの弾丸が兵吾の体を貫くと、兵吾は激しい叫び声をあげ、その場に倒れていった。

「う、ううっ…」

地面へと倒れ込み、目を閉じた兵吾の右手から、力なく緑色の言葉が転がり落ちた。兵吾の意識がなくなったことで、言葉の解放が止まったのだろう。

「ふうっ」

こちらも地面へと降りたアヒルが、兵吾が倒れたことを確認し、ホッと一息つく。

「無事かぁ? 保っ」

「あ、は、はいっ!」

振り向いたアヒルに、呆然としていた保が慌てた様子で頷き、そ

の場を立ち上がると、ゆっくりとアヒルの方へと歩み寄って来る。

「そ、その人っ…し、死んじゃったんですかっ…?」

「んなわけねえーだろっ。氣い失ってるだけだよっ」

「そ、そうですかっ…」

「……っ」

不安げに兵吾を見つめる保が、アヒルの言葉を聞き、安心したように笑みを零す。そんな保を、少し驚いたように見るアヒル。自分を危険な目に遭わせた人間を、どうやら心配しているらしい。

「変な奴だなあ、お前っ」

「えっ? 変? アヒルさんの名前がですか?」

「おっ前! ホントに撃ち殺おーすっ!」

「ひいひいっ!」

容赦なく銃口を向けるアヒルに、保が今にも泣きそうな悲鳴をあげる。

「とにかく! ここは危ねえーから、お前は今のうちに、とっとと遊園地の外へっ…」

「あ、見て下さいよお? アヒルさん! あっちに恐怖の館やかたがありますよお〜!」

「俺の話を聞けっ!」

「ひい〜! ビビりのくせに、無駄に恐怖の館だけ好きで、すみませえ〜んっ!」

アヒルの言葉を聞かず、どんどんと奥へと進んでいく保を、アヒルは怒鳴り散らしながらも、仕方なく追っていった。

「ハハハっ…」

暗闇の中に響く、不気味な笑い声。

「ハハっ…早く来るといいっ…」

赤い瞳が、暗闇に光る。

“安の神”…朝比奈アヒル…

Word. 10 予期セヌ再会 (1)

波守・波城灰示の討伐のため、遊園地跡へと乗り込んだアヒルたちを待ち受けていた波行の五十音士たち。招かれざる客である雅と保も加え、アヒルたちは波行との戦いを繰り広げた。そして部守を倒したアヒルは、半ば無理やり付いてきた保とともに、遊園地の最奥・恐怖の館へとやって来ていた。

「うっわぁ、さらにも増して不気味な雰囲気ですねえ」

「……………」

いつの間にかアヒルの懷中電灯を手にし、アヒルよりも前を歩き、薄暗い恐怖の館の中をどんどんと突き進んでいく保。そんな保の後ろを付いていくように歩きながら、アヒルが呆れた表情を見せる。

「ん？どうしたんですかぁ？アヒルさん。こう言っちゃなんですけど、ププっ、怖い、とかあっ？」

「笑うな！ちよつと薄気味悪い所が苦手なだけだっ！」

小バカにしたように笑う保に、思わず怒鳴り、苦手なことを認めてしまうアヒル。

「だいたいビビりのお前が、何でこんなところ、平気なんだよ？」

「俺、昔っから、こういうところは大丈夫なんですよねえ。コーヒークップとかは死ぬほどダメなんですけど」

「普通、逆だろっ」

「何かこうっ」

保が懷中電灯の光を地面に向け、真っ暗な天井を見上げる。

「暗闇が、落ち着くっていうかっ」

「……………」

いつもとは違う、どこか大人びた笑顔を見せる保を、アヒルは少し驚いたように見つめた。

「たもっ…んあっ？」

保に呼びかけようとしたアヒルが、ふと何かに気づく。

「何だよ？ お前、怪我してんじゃねえーかっ」

「へっ？」

アヒルが保の左腕を指差すと、保が目を丸くして、左腕を見下ろした。確かに制服の裾が破れ、白いシャツに血が滲んでいる。

「ぎゃあああゝ！ 血いいゝっ！」

「落ち着け、明らかに軽傷だっ」

先程の大人びた笑顔はどこにいったのか、激しく取り乱す保に、アヒルが一気に呆れた表情となる。

「俺が吹っ飛ばした時に、切っちゃったかあ？ まあとりあえず、これでも巻いてろよっ」

「ふえっ？」

アヒルが取り乱している保へと差し出したのは、鳥のアヒル柄の可愛らしい一枚のハンカチであった。

「こ、こここれって、も、もしかして、ア、アヒルさんのっ…」

「笑うんじゃねえ！ アホ親父が買ってきたから、仕方なく使ってたよっ！ 仕方なくっ！」

笑いを堪えるように声を震わせる保に、アヒルが勢いよく怒鳴りながら、半ば無理やり、そのアヒルのハンカチを手渡す。

「ハハハっ、ありがとうございますっ」

ついに笑いを零しながら、保が傷に巻こうと、ハンカチを広げる。

「はあっ…！！」

「あっ？」

急に大きな声を出す保に、首を傾げるアヒル。

「も、もしハンカチに、俺みたいなB型の血がこべりついちゃって、赤染みドバンとなってしまうたらっ、どうしましようっ!？」

「そんな時はやるよ、そのハンカチ」

慌てふためく保に対し、アヒルは至って冷静に答える。

「でも折角、アヒルさんのお父さんが買ってきてくれたものをつ…」

！」

「ウチの親父なら、そういうの逆に喜ぶから大丈夫だって。むしろ、すぐに次のハンカチとか買ってきてそうだしっ」

「……っ」

嫌そうに答えるアヒルを見て、保がそっと目を細める。

「とつても仲がいいんですね」

「んなことっ…あっ」

——親は…いないので…——

その時、思い出されたのは、昼間の保の言葉であった。

「わ、悪いっ」

「いえ、気にしないで下さい」

申し訳なさそうな顔を見せるアヒルに、保が笑みを向ける。

「昼間も言いましたけど、もう、いないことに慣れちゃったんで、特に悲しいとか、そういうのないですから」

「……っ」

微笑んだまま答える保を見つめ、アヒルが目を細める。

「お前の親、その、何でっ…？」

「自宅が火事になって、その時、両親ともに…もう十年くらい前の話です」

「そう、かつ…」

保の答えを聞き、アヒルが歯切れ悪く頷く。

「最初はすごく辛かったですけど…俺、両親との楽しい思い出とか、全部忘れるようにしたんで、もう大丈夫なんですっ」

「えっ…？」

笑顔で答える保に、アヒルの表情が曇った。

「忘れる…？」

「はい。ずっと憶えていたら、笑うことすら出来なくなってしまう
そうで…ならいっそ、楽しかった思い出ごと、忘れた方がいいと思

っつっ」

「……………」

保がさらに言葉が続けると、アヒルはその視線を暗い恐怖の館の床へと落とし、考え込むような表情を作った。

「俺は…忘れたくないな…」

「へっ…?」

突然、眩き落とすアヒルに、保が戸惑うように顔を向ける。

「すっげえ悲しかったし、今だって思い出す度に痛いけど…でも、忘れなかったし、これからも忘れない…」

「ア、アヒルさんっ…?」

「……………」

困惑する保を前に、アヒルがそっと目を伏せる。

——アークくん、朝御飯だよおっ——

楽しかった、思い出。

——兄ちゃんなんかっ！いなくなればいいんだっ…！！——

何よりも痛い、傷痕。

「あの人が“生きてた”ってことっ、忘れたくない」

「……………」

顔を上げ、まっすぐな瞳で言い放つアヒルに、保は思わず目を見開いた。アヒルの過去を知らない保にとって、何故、アヒルがこんなことを言うのかなど、理解の出来ないことではあったが、その言葉には、確かな力があつた。

「この痛みを忘れたら、俺は一生…本当の笑顔で、笑えなくなる気がするからっ…」

「……………」

再び俯き、そっと左胸に手を当てるアヒルを、保が真剣な表情で見つめる。

「あ…あの、アヒルさっ…」

「……っ！」

「えっ？」

呼びかけようとした保が、急にその表情を鋭くし、前方を見つめるアヒルに、戸惑うように首を傾げる。

「アヒルさっ……」

「黙れっ」

「んっ！」

アヒルに制するように手を出され、保が慌てて両手で口を押さえる。

「誰か来るっ……」

「えっ……？」

近づいてくる足音に、アヒルと保が、その表情を陰しくする。

「……っ」

保の前に立ち、保の懷中電灯の光の差す方向を見つめ、右手に持った銃を身構えるアヒル。

『……………』

徐々に大きくなる足音に、アヒルと保が息を殺し、意識を集中する。

「……っ！」

現れたその人物へ、鋭く銃口を向けるアヒル。

「誰だっ……！」

「誰っ……！？」

静かな廊下で、重なる声。

『えっ……？』

互いに重なった声に、アヒルとその人物が戸惑うように、声を漏らす。

「あっ……！」

だが、その人物の姿を、懷中電灯が照らし出した瞬間、アヒルが大きく目を見開いた。

「おっ、お前っ……！」

「アヒルさんっ?」

懐中電灯が照らしだしたのは、アヒルと同じように驚きの表情を見せる、金色の巻き毛の美しい少女。そんなアヒルを、後ろから保が、戸惑うように見つめる。

「お前はっ…」

——あれは忌っ……——

——私を信じて…お願いっ……——

それは、初めて忌に遭遇した日、出会った少女。

「あの時、のっ…」

「君はっ…」

少女もアヒルを見つめ、声を発する。

「朝比奈…アヒルっ…?」

Word 10 予期セヌ再会 (2)

ステージ付近。“左守”・真田囃vs“不守”・不二不治子。

“踏み潰せ”っ！トラトラ子！」

「ガァァっ！」

不治子の言葉を受け、囃へと飛びかかって来るのは、不治子の言玉が姿を変えた、一頭の金色のトラ。

“避ける”…

飛びかかって来る獰猛なトラを前に、囃は冷静に自分の言葉を呟き、横笛を吹いて、美しい音色を奏でる。すると、音色に包まれた囃の体が、まるで宙に浮いているかのように、何の音も立てずに、自然とトラの直線コースから外れた。

「ググっ…！？」

「……っ」

トラが戸惑うように囃を振り向く中、囃が吹き口から口を離し、ゆっくりと口を開く。

“叫べ”…

言葉を放つと、囃が再び横笛を吹く。奏でられた音色が、横笛から放たれた赤い光とともに結集し、やがて大きな塊を作って、トラへと向かっていく。

「振動の塊…？」

その塊を見つめ、眉をひそめる不治子。

“防げ”！トラトラ子！」

「ガァァっ！」

不治子の言葉に応えるように、トラが激しい咆哮をあげると、その声に弾き返されるように、振動の塊が囃のもとへと返っていく。

“妨げろ”…

囃も返って来た振動を、さらに妨害し、今度はトラではなく、不

治子へと弾き返す。

「同じ技を同じ言葉では返せない……これでっ……」

「ウフフっ」

確信するように呟く囁の予想とは反して、振動の塊の迫った不治子は、避ける素振りも見せず、不敵な笑みを浮かべた。

「“塞^{ふさ}がれ”っ……」

「ガアアアっ……」

「なっ……!」

不治子がそう言い放つと、離れた位置にいたはずのトラが、突如、不治子の前に壁のように立ち塞がり、またしてもその塊を囁のもとへと返してきた。

「うっ……!」

横笛を構えようとする囁であったが、肝心の言葉が出て来ない。

——バアアアアン!

「うあああっ……!」

自らの音の塊を受け、囁が勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

「うっ……! ううっ……」

近くの電柱へと背中を打ちつけ、力なくその場に座り込む囁。

「同じ技を同じ言葉では返せない……残念だったわねえっ、ウフっ」

「クっ……」

トラの頭を撫でながら、嘲笑うように言い放つ不治子に、しゃがみ込んだまま、囁が少し顔をしかめる。

「さあっ、こんな女、とっととやっつけて、不治子とはとっとと、さっきの神様倒しに行かなくっちゃっ」

その微笑みを冷たくした不治子が、トラを撫でていた手を、ふと止める。

「それで、たあ……っぷり灰^{ハイ}示^シさまに褒めてもらうんだあっ」

「……っ」

灰示に褒めてもらうことを、心底楽しみにしている様子の不治子を見つめ、そつと眉をひそめる囁。

「そんなに…その“灰示さま”とやらの褒めてもらいたいの…？」

「うんっ！」

戸惑うように問いかける囁に、不治子が迷いなく、大きく頷く。

「だって、灰示さまは不治子の“神様”だものっ！」

「神…？」

よく聞き慣れたその単語に、囁の表情が曇る。

「波城灰示はただの波守でしょう…？神などではっ…」

「不治子の神様は灰示さまだけだよっ」

「…っ」

囁の言葉を勢いよく遮って言い放つ不治子の、その言葉の力強さに、囁は少し驚いたような顔を見せる。

「だから不治子が、灰示さまを本当の神様にするのっ」

不治子がその目つきを鋭くし、囁へと投げかける。

「今の神様をやっつけてねえっ！“増えろ”っ！」

『ガアアアっ！』

「なっ…！」

不治子の言葉が響き渡るとともに、トラの姿が分裂し、一頭から二頭へと増える。重なる咆哮に、思わず目を見開く囁。

「こんなことまでっ…」

「さあっ、ダブルトラトラ子っ」

囁が険しい表情を見せる中、不治子が楽しげに右手をあげる。

「“踏み潰せ”っ！」

『ガアアアっ！』

「うっ…！」

勢いよく駆け込んでくる二頭となったトラに、しゃがみ込んでいた囁が、焦った様子で立ち上がる。

「さ、“避ける”…！」

囁が必死に言葉を発し、慌てて構えた横笛で音色を奏でると、先

程と同じように囁の体が赤い光に包まれ、宙に浮くようにして、囁の体が、トラの迫り来っていた場所から移動した。

「ガァァっ！」

「うっ…！」

攻撃を避けた囁の後方から、もう一頭のトラが勢いよく飛びかかって来る。

「うぐっ…！」

囁が言葉を発する間もなく、トラの鋭い牙が、囁の細い腕を斬り裂いた。

「クっ…！ “下^さがれ”！」

左腕から赤い血が滴り落ちる中、囁が言葉を発し、傷ついた腕で必死に横笛を吹いて、後方へと体を下げ、二頭のトラとの距離を大きくした。

「はあ…はあ…」

「ウフフっ」

軽く息を乱す囁を見つめながら、不治子が楽しげに笑う。

「自信满满みたいなこと言ってたのに、なあんかギリギリだねえっ」

「動物嫌いなだけよ…」

「ウフフっ！」

挑発めいた話し方をする不治子に、負けじと強気に答える囁。どんな囁を見て、不治子がさらに楽しそうに笑い声をあげる。

「待っててねえ？ 灰示さまっ。不治子、すぐに倒しちゃうからっ」

ここには居ない灰示へと話しかけながら、微笑んだままの不治子が、大きく右手を振り上げる。

「“伏^ふせろ”っ！」

「なっ…！」

放たれた言葉に、囁が大きく目を見開く。

「しまっ…！ うううっ…！」

焦るように声を出す囁であったが、すでに逆らう術もなく、その場に勢いよく倒れ込んでしまった。

「うっ…！うっ…！」

地面にうつ伏せになったまま、苦しげな声を漏らす囁。倒れた体は、上から大きな圧力がかけられたかのように、どう力を入れても動くことはなかった。

「ウフフっ、チェックメイトだねえっ、左守ちゃんっ」

「クっ…」

二頭のトラを両脇に従え、ゆっくりと歩み寄って来る不治子を見上げ、囁が険しい表情を見せる。

「せめて、最っ高に苦しませて、死なせてあげるっ」

冷たく微笑み、不治子がそっと右手をあげた。

「“踏み潰せ”！」

『ガァァァっ！』

不治子の言葉を合図に、二頭のトラが、伏せたままの囁へと勢いよく飛びかかっていく。

「うっ…！」

動くことも出来ずに、表情を歪める囁。

「あああああっ…！！！」

二頭のトラの下に囁の姿が見えなくなると、囁の悲鳴が、辺りに響き渡った。

「ウフフっ…ウフフフっ！」

悲鳴が消えると、今度は不治子の楽しげな笑い声が響き渡る。

「やったあ！やったよお！灰示さま！不治子、また一人、五十音土をやったよおっ！」

大きく両手を広げ、空を仰いだ不治子が、大きな声で叫ぶ。

「やったあ！やった！ウフフフフ！ウフフフフっ！」

「大きな声ね…」

「…っ！」

後方から聞こえてくる声に、不治子が大きく目を見開き、響かせていた笑い声を止める。

「もう空も暗いんだから…近所迷惑よ…？フフっ…」

「なっ…！」

不治子が振り返ると、そこには、余裕の笑みを浮かべた囁が立っていた。囁は、先程トラの牙に斬り裂かれた腕の傷こそあるが、トラに踏み潰されたような痕はない。何事もなかったかのように自然と、そこに立っている。

「なんでっ…！？あの女はあそこにつ…！あっ…！」

確かめるように再び前を見た不治子であったが、トラの下敷きになっていた囁の姿が、徐々に消えていくのが目に入り、驚きの表情を見せた。

「消えたっ…？」

「“錯覚”…」
さっかく

「……っ！」

背後から聞こえてくる囁の声に、不治子が再び後ろを見る。

「錯覚っ…？ “熟語”^{イディオム}っ… “動詞”^{ヴァーブ}より難易度の高い言葉をつ…」

「フフっ…」

険しい表情を見せる不治子に、囁が余裕の笑みを向ける。

「でもなんでっ！不治子が“伏せろ”って言ったらっ、言葉なんて使えないはっ…！あっ」

問いかけるように叫んでいた不治子が、何やら気付いたように、ハッとした表情を見せ、言葉を止める。

「まさかっ…伏せた時から、もうっ…」

「あら…意外と頭が回るじゃない…？」

「クっ…！」

感心したように言い放つ囁に、悔しげに唇を噛み締める不治子。

「ダブルトラトラ子っ！」

不治子がトラを呼ぼうと、勢いよく右手を振り上げる。

「んっ？ダブルトラトラ子？」

後方のトラの反応がなく、不治子が戸惑うように振り返る。

『ぐううーっ』

「んなっ…！」

不治子が振り返ると、二頭のトラは、こたつに潜ったネコのように、大きなその体を丸め、すやすやと寝息を立てて、気持ち良さそうに眠っていた。

「催眠”…フフっ…”」

「いつの間につ…”」

怪しげに微笑む囁に、思わず歪んでしまった表情を向ける不治子。
「さあてと…”変格”」

囁が横笛を振り下げると、笛が赤い光を発し始め、先端から細い刃が伸び、その姿を槍へと変えた。

「チェックメイトのようね…不守さん…”」

「うっ…！」

槍を構える囁の前に、不治子が少し怯むように、足を二、三步、後ろへと下げる。

「嫌っ…嫌よっ…！」

「…っ…？」

強く叫ぶ不治子に、囁が少し戸惑うように眉をひそめる。

「負けたら…負けちゃったらっ、不治子は灰示さまにとって、“要らないもの”になっちゃうっ！」

必死に口を開き、大声で叫ぶ不治子。

「そんなの嫌っ！絶対、嫌よっ…！！」

「…っ…」

叫び続ける不治子を、囁が細めた瞳で、まっすぐに見つめる。

「そんなの…あなたの都合でしょう…？」

「うっ…！」

冷たく言い放った囁が、不治子の叫びを聞くこともなく、鋭く槍を振り上げる。

「“裂け”…”」

「…っ…！」

振り下ろされた槍から放たれた赤い一閃が、まっすぐに不治子へと向かっていく。

「は、灰示さまっ…灰示さまっ…！」

助けを求めるように、不治子が繰り返し、灰示の名を呼ぶ。

「灰示さまっ…！ああああああっ…！！」

囁の放った一閃に斬り裂かれ、不治子は灰示の名を残し、その場に倒れていった。地面に横たわった不治子が、力なく目を伏せる。

「……………」

不治子が意識を失くしたことを確認し、囁が槍を下ろして、もとの言玉の姿へと戻す。不治子が倒れたと同時に、二頭のトラも、もとの黄色い言玉へと戻った。

「そうそう…一つだけ…」

言玉を握り締めた囁が、思い出したように、倒れた不治子の方を見る。

「一度、負けたくらいで見捨てるような神…信じるだけ、無駄だと思うわよ…」

“左守”・真田囁VS“不守”・不二不治子。勝者・囁。

Word. 10 予期セヌ再会 (3)

メリーゴーランド近辺。“美守”・箕島雅vs“保守”・穂並蛍。
「満ちれ」!

青い言玉を構えた雅の言葉により、どこからともなく生じた大波が、遊園地の地面を走り抜け、蛍へと向かっていく。

「干せ」

蛍も雅と同じように白い言玉を構え、自らの言葉を発して、その波を一瞬にして干上がらせる。

「懲りない…何度、消されれば、気が済む…?」

「……っ」

呆れたように、上から目線で言い放つ、雅よりも幼く見える蛍の言葉に、雅が少し眉をひそめながら、眼鏡の縁を人差し指で押し上げた。

「あんなの大波は僕には通じない…それがわからないか…? それとも他に、言葉がないか…?」

「随分と偉そうな物言いですね」

問いかけを続ける蛍に、雅は眉をひそめたままの表情を向ける。

「年上への態度というものがありません」

「ほおー、態度…」

雅の言葉を受け、蛍が嘲笑うかのような笑みを浮かべる。

「そんなもの、一度も習ったことがない…」

「ならここで、教えて差し上げますよっ」

急に表情を鋭くした雅が、言玉を持った右手を掲げた。

「みずばしら水柱”っ!」

「うっ…」

突如、蛍の周囲の地面から、幾本かの水柱が突き上がり、蛍が思わず顔をしかめて、後方へと飛び避ける。

「逃がしません」

「何っ？」

後方へと飛んだ蛍を、突き上げた水柱がその柱部分を大きく曲げ、まるで生きているかのように動いて、追っていく。

「クっ…！」

地面に着地した蛍が、そのまま地面を駆け抜け、追ってくる水柱から必死に逃げる。

「ほおー…熟語イデオムか…」

追ってくる水柱を振り返りながら、蛍がどこか感心したように呟く。

「だがっ…！」

「えっ…？」

突然振り向き、水柱と向き合う蛍に、雅が目丸くする。

「あんただけが、熟語イデオムを使えるわけじゃないっ…！」

蛍が勢いよく、言玉を握り締めた右手を前へと突き出す。

「保護ほご」！

——パアアアン！

「なっ…！」

蛍の言葉に反応し、言玉が白い光を放つと、その光は蛍の体全体を包むようにして広がり、蛍へと向かっていた雅の水柱を、次々と受け止め、碎き落とした。飛び散る水飛沫に、雅が驚いたように目を見開く。

「熟語イデオムを…」

「僕を、その辺の五十音士と一緒にしてもらっては困る…それにつ…」

圧倒された様子で蛍を見つめる雅に、蛍がまるで勝ち誇ったかのような笑みを向けた。

「僕は“保守”…才段に属する五十音士…」

「……っ」

蛍の言葉に、雅の表情が曇る。

「その表情…才段の力を知っている…？」

「言玉の形状は、段によって異なる…」

蛍に答えるように、すぐさま言葉が続ける雅。

「ア段は武器、イ段は水、ウ段は生物、エ段は身体強化、そして…」
雅がそっと、眉間に皺を寄せる。

「才段はその形状に限りがなく、どんな形状でも複数個使える…言わば、何でもありの力…」

「ほおー、詳しい…その通りっ」

すらすらと答えた雅に、蛍がどこか満足げに笑う。

「だから、才段は強い…五段の中で最も…」

蛍を包んでいた保護の光が消え、光の収まった言玉を、蛍が強く握り締める。

「灰示様に敵うとは思ってないが…他の誰より強い自信はあるっ…！」

「あっ…！」

蛍の右手に握り締められた言玉が、再び強い白色の光を放ち始めると、今度はその形状を変えていく。姿を変えていく言玉に、思わず目を見張る雅。

「ほ、砲銃っ…？」

「……っ」

言玉から姿を変えた、バズーカのような巨大な白色の砲銃を、蛍が小さい体の肩に乗せるようにして、力強く構える。

「“砲撃”…！」

「うっ…！」

蛍の言葉に乗り、その砲銃から、白い光の塊のような砲弾が放たれる。

「み、“満ちれ”っ…！」

後ろへと下がりながら、砲弾へ向け、生じさせた波を向かわせる

雅。

——パアアアン！

「うっ…！」

だが砲弾は、波をあつさりと突き抜け、雅へと向かってきた。

「波なんかで止められるはずない…」

険しい表情を見せる雅とは対極に、勝ち誇ったように微笑む蚩。

「うっ…！うああああっ！」

波を突き抜けた砲弾を受け、雅が勢いよく後方へと弾き飛ばされる。

「うっ…！くっ…」

何とか踏み止まった雅が、所々血の流れる体を必死に支える。

「グウウっ…！」

「えっ…？」

すぐ背後から聞こえてくる獣の声に、雅が戸惑うように振り向く。

「イヌっ…？」

雅が振り向くと、そこには一匹の白いイヌの姿があった。睨みつけるように雅を見上げており、その体全体は、淡い白色の光で包まれている。

「あっ…！まさかこれも言玉っ…！？」

“吼^ほえろ”っ！」

「グアアアっ！」

「ううっ…！」

雅が焦りの表情を見せたその時、蚩が大きく言葉を発すると、その言葉に応えるように、イヌが激しい咆哮をあげ、勢いよく雅へと飛びかかって来た。

「うあっ…！」

イヌに足を噛みつかれ、思わず、その場に倒れ込む雅。

「う、ううっ…」

「ほおー…」

倒れた雅を見つめ、どこか満足そうに微笑みながら、蛍がイヌを、もとの言玉の姿へと戻す。

「どうだ…？わかったか…？」

もとに戻った言玉を右手で転がしながら、蛍がゆっくりと雅の方へと歩み寄って来る。

「これが才段の力…僕の力…イ段のあんたごときの力、相手にもならない」

「偉そうな…口振りですね…」

倒れたまま顔を上げた雅が、刺すような視線で、蛍を見上げる。

「当たり前…強い者が偉いのが、この世界…あんたより僕が強いから、あんたより僕が偉い…」

「そうですか…」

蛍の言葉に頷いた雅が、上げていた顔を下ろし、下を向く。

「では年上の態度を教える前に、あなたに勝つとしましょうか」

「何…？」

その言葉を聞いた途端に、蛍が眉をひそめる。

「この状況で何を馬鹿なことを…」

「“満ちれ”」

「…っ」

下を向いたままの雅が言葉を発すると、二人の周囲から勢いよく波が吹き出し、天高く突き上げたところで合流して、二人を包むようにして、水のドームのようなものを形成した。

「今更、こんな水で何を…」

そう言って軽く笑うと、蛍が再び、言玉を砲銃へと変えた。

「言葉も発せなくしてやるっ…！」

砲銃を、雅へと向ける蛍。

「“砲撃”っ…！」

白い光の塊が、勢いよく雅へと放たれた。

——パアアアン！

「なっ…！」

砲弾を受けた雅の体が、水飛沫となって、勢いよく弾け飛ぶ。

「水っ…！？」

飛び散る水を見回し、蛍が少し焦ったような声を出す。

「どこを撃っているんです？」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、蛍が勢いよく振り返る。すると波で出来た水壁にもたれるようにして、平然とした表情の雅が立っていた。

「そこかっ…！ “砲撃” …！」

再び砲弾を、雅へと向ける蛍。

——パアアアン！

「うっ…！」

だが、またしても砲弾に撃ち抜かれた雅の体は、水飛沫となって飛び散っていった。

「また…水っ…？」

「どこを撃っているんです？」

「……っ！」

同じように聞こえてくる声に、蛍がさらに目を見開く。

「どこを撃っているんです？」

『どこを撃っているんです？』

「なっ…！」

重なるようにして聞こえてくる、雅の、まるで同じ声の、まるで同じ言葉。蛍が顔を上げ、周囲を見回すと、水の壁一面に立ち並ぶ、幾人もの雅の姿がそこにあった。視界に入る複数の雅の姿に、蛍が思わず言葉を失う。

「こ、これはっ…」

『水鏡^{みづかがみ}』と言います』

戸惑う蛍に答えるように、周囲に並ぶ雅が、一斉に声を揃える。

「水、鏡っ…」

『ここまでのようですね。保守くん』

「…っ」

幾人もの雅の言葉に、蛍が勢いよく顔をしかめる。

「何を言っている…！？ 数が増えたくらいで、才段の僕に勝てるわけがっ…！」

『確かにあなたは強かった』

強く叫ぶ蛍の声を、幾つもの声で遮る雅。

『ですが…僕よりは弱かったようですよ』

「なっ…！」

強く言い切る雅のその言葉に、何か強いものを感じ、蛍が表情を曇らせる。

「偉そうな口をっ…！ こんな水鏡っ、片っ端から撃ち抜いてやっ…！」

『そんな時間はありません』

「えっ…？」

砲銃を構えた蛍に対し、周囲を取り囲んだ雅たちが、一斉に右手を上へと掲げる。

「ま、まさかっ…！」

焦ったように、上方を見上げる蛍。

『“充^みたせ”』

「…っ！」

ドームのように蛍の上方を覆っていた水が、一気に崩れ落ち、滝のように激しく、蛍へと落ちてくる。

「うっ…！」

歪む、蛍の表情。

「うわああああっ！」

落ちてくる水に、呑み込まれていく蜚。

——バァァァンっ！

「……………」

崩れ落ちていく水のドームを、少し離れたアトラクションの柵の上から、遠い瞳で見つめる雅。やがてすべての水が地面へと流れ落ちると、水はすぐさま姿を消し、地面に気絶して、倒れ込んだ蜚の姿だけが残った。

「ふうっ」

一息ついた雅が、人差し指で眼鏡の縁を上げる。

「あ、そういえば、年上への態度教えるの、忘れましたね」

“美守”・箕島雅VS“保守”・穂並蜚。勝者・雅。

Word 10 予期セヌ再会 (4)

ジェットコースター横。“加守”・神月箆也vs“比守”・昼川ヒロト。

「^{かこ}“囲え”っ：！」

箆也が強く言葉を発すると、六本の鉄格子が、ヒロトへ向けて次々と飛んでいき、ヒロトの周囲を取り囲むように地面へと突き刺さり、ヒロトの行動範囲を狭めた。

「閉じ込められたかあ、ヒヒっ」

周りを囲む格子に、焦った表情一つ見せず、そっと微笑んだヒロトが、右手に持った言玉を握り締める。

「引き裂け”っ」

ヒロトの言玉が青く輝くと、ヒロトの足元から細長い水の柱が何本か突き上げ、その先端を刃のように鋭く尖らせ、ヒロトの周囲に突き刺さる格子を弾き飛ばした。

「クっ：」

「^{ひた}“浸せ”！」

弾き飛ばされた格子を受け止めながら、険しい表情を見せる箆也に、ヒロトがさらに言葉を発する。すると先程の刃のような水が、一斉に箆也へと向かい、箆也の体を浸し始めた。

「チっ」

箆也が舌を鳴らしながら、六本の格子を一本へとまとめる。

「^か“涸れろ”：！」

「……っ」

一本となった格子を、箆也が水の浸食する地面へと突き刺すと、格子から赤い光が放たれ、高さを上げていた水を、あっという間に掻き消した。その光景に、ヒロトが少し驚いたように目を見開く。

「ナイスワードっ。イ段には最適の言葉だっ」

すぐに驚きの表情を笑顔へと戻し、冷静に言い放つヒロト。

「さっきは避けただけだったのに、今、思いついたわけ？」

「ああ」

「ヒヒっ、さすがは安附ってところ？」

短く頷く簞也に、ヒロトが感心した様子で微笑む。

「じゃーあ、こういうのって、どう？」

「……っ？」

再び右手を挙げるヒロトに、簞也が眉をひそめる。

「“冷えろ”！」

ヒロトが言葉を発すると、右手の中の言玉が青く輝き、簞也の周囲の地面から、今度は水ではなく、氷が、山を積み上げるように、徐々に空へ向け上がってくる。

「こ、氷……？うっ……！」

地面に突いていた簞也の格子も、その氷に吞まれ、凍りついて動かなくなってしまう。顔をしかめながら、必死に格子を引き抜こうとする簞也。

「イ段の能力には、水が状態変化した氷も含まれるっ。知ってる？ヒヒっ」

氷の上に立ちながら、ヒロトがどこか得意げに話す。

「さあ、これで武器は使えないっ。どうする？安附っ」

「……っ」

挑発するように問いかけるヒロトに、曇る簞也の表情。

「ヒヒっ、やっぱ大したことないね、安附なんてもっ……」

「あまり……」

「んっ？」

簞也の口から発せられる声に、ヒロトが言葉を止めて、顔を上げる。

「あまり、安団をナメるなよ」

「何っ……」

「“解凍”」

「……っ！」

ヒロトが問いかけ終える前に、箆也が言葉を口にする、箆也の凍りついた格子が赤い光を放ち、その光に当たれるようにして、徐々に周囲の氷が溶け始めた。溶けていく氷に、ヒロトが険しい表情を見せる。

イデオム
「熟語っ…」

「イ段には最適の言葉だろう？」

表情を曇らせるヒロトへ、箆也が強気に問いかける。

「為の神が忌を凍りつかせて倒したのを見た時に、相手がイ段ならば、この言葉が有効だと考えていた」

「……ヒヒっ」

冷静に話す箆也に、少し間を置いた後、ヒロトがそっと笑みを零す。

「さっすがは安附ってどこ？」

「ああ、僕は安附だ」

先程と同じ言葉を繰り返すヒロトに、箆也が自信を持って頷く。

「だから、あなた如き比守に負けはしない」

「……っ」

挑発的な箆也の言葉に、ヒロトの表情が、明らかに歪む。

「言ってくれるなあ。けどっ」

ヒロトが不意に目つきを鋭くし、右手の言玉を光らせる。

「そっちこそっ…！あんまりオレをナメないでくれるかなあっ！ヒヒっ！」

青く強い光を放つ言玉を、ヒロトが高々と掲げる。

ひょうけつ
「“氷結”っ…！」

「なっ…！」

ヒロトがそう叫ぶと、箆也が言葉で解凍したはずの氷が、再び生じ、先程よりも速い速度で、辺り全体を包み、空まで届きそうなほどに氷の壁を築きあげていく。

イデオム
「熟語っ…！」

周囲に出来上がっていく氷の壁を見回しながら、箆也が険しい表情を見せる。

「クっ…！」

地面に広がった氷が積み重なり、箆也の足元をも凍りつかせていく。

「クソっ…！ “解とっ…！”

「“引き裂け”っ」

「うっ…！」

格子を構え、言葉を放とうとした箆也の右腕を、地面から突如、突き上がって来た鋭い氷が、勢いよく斬り裂いた。格子とともに、氷に映える真っ赤な血が、地面へと落ちる。

「クっ…」

「ヒヒっ」

格子を手放し、傷ついた右手を左手で押さえて、顔をしかめる箆也を見て、ヒロトが楽しげに笑う。

「グっ…！クっ…！」

地面に落ちた格子を拾おうとする箆也であったが、すでに下半身は上がってきた氷により凍らされており、足の指一本動かすことの出来ない状態であった。

「これで解凍も出来ないねえ？ 安附っ」

「くっ…」

ゆっくりと歩み寄ってくるヒロトの方を見つめ、箆也が表情を陰しくする。

「やっぱり、“たかだか安附”、だったかな？ ヒヒっ」

箆也のすぐ前に立ったヒロトが、箆也の険しい顔を覗き込むようにして、笑う。

「きつと君の神様も“たかだか神”で、オレの仲間に、あっさり倒されてるんだらうねえっ」

「……っ」

「ヒヒっ、怒った？」

ヒロトのその言葉に、今まで以上に強く、表情をしかめる箆也に、ヒロトがどこか楽しむかのように、聞き返す。

「さっきも怒ってたよねえ？オレが君の神様を馬鹿にしたらっ」

ヒロトが試すような口調で、大きく首を傾ける。

「そんなに崇め^{あが}ちゃうなんて、やっぱり変わってるよねえ、団の連中ってっ」

ヒロトがさらに言葉を続ける。

「だからオレ、団の連中って嫌いなんだよね」

微笑みを浮かべながら、笑っていない冷たい瞳を、箆也へと向けるヒロト。

「“神様がすべて”？“すべては神のために”？ヒヒっ、馬鹿馬鹿しいっ」

「……っ」

鬱陶しそうに声を大きくするヒロトに、箆也の表情が曇る。

「人間っ、本当に信じられるのは自分だけでしょっ？オレは神様なんて信じないっ」

笑ったヒロトが、はっきりと言い切る。

「オレが信じてるのは、オレだけっ！ヒヒっ！」

「……………」

さらに笑みを大きくするヒロトを、箆也は細めた瞳で、逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

「別に、いいんじゃないか？」

「えっ…？」

返ってくる思いがけない言葉に、ヒロトが眉をひそめた。

「あなたがあなただけしか信じなくても」

箆也がまっすぐな瞳を、ヒロトへと向ける。

「別に僕は、あなたに“自分を信じるな”とも、“神を信じろ”とも言わない」

追いこまれた状況にあっても、まるで攻めるような口調で、ヒロトへの言葉を続ける箆也。

「僕の神は、僕が信じていれば、それでいい」

「……っ」

箆也が、まっすぐに言葉をぶつけてくるのが気に食わなかったのか、ヒロトが不快そうに、その顔を歪ませる。

「ヒヒっ、何、それっ？どっかの宗教っ？」

歪ませた表情を笑みへと変え、小バカにしたように問いかけるヒロト。

「異常信者じゃあるまいし、今時、神神って流行らなっ…」

「僕は僕の神を信じている」

「えっ…？」

ヒロトの言葉を強く遮る箆也に、ヒロトが戸惑ったように声を漏らす。

「だから、僕の神を侮辱する者を、僕は許しはしない」

「……っ！」

箆也のその言葉に、ヒロトが大きく目を見開く。

「あ、そうっ」

ヒロトが深く俯き、少し低い声を発する。

「じゃあっ、やってみなよっ…！」

冷たい声が、氷の地面へと落ちる。

「“氷柱”^{ひょうちゅう}っ…！」

ヒロトが大きな声で言葉を発すると、右手の中の言玉が強く輝いて、ヒロトの右手全体が氷で包まれた。指先の氷が鋭く尖り、腕自体が、まるで氷の刃のように姿を変える。

「こいつで君の心臓を突き刺してっ、それで終わりだっ！」

「……っ」

向けられる氷の刃の先端に、箆也が表情を厳しくする。

「君の神様につ、最期の祈りでも送るといいよっ！ヒヒっ！」

「……っ！」

振り上げられる刃に、大きく目を見開く箆也。

「か…」

箆也が、自らの言葉を呟く。

「“火炎”^{かえん}　っ…！」

——バアアアアンっ！

「何っ…！？」

箆也が言葉を発すると、地面に落ちていた箆也の格子が赤く輝き、激しい炎へとその姿を変えて、箆也へ向けて振り下ろされていた、ヒロトの氷の刃を、一瞬にして溶かし尽くした。

「馬鹿なっ…！うあああああっ！」

驚きの表情を見せていたヒロトが、氷を溶かした炎に右腕を焼かれ、苦しげな叫び声をあげる。

「うっ…ううっ…！」

ヒロトの焦げた右手から、力なく落ちる青い言玉。その瞬間、周囲を取り囲んでいた氷の壁が、一気に消え去る。

「こ、こんなっ…！」

「……………」

右手を押さえながら、箆也の前から数歩後退していくヒロトの前に、箆也は至って落ち着いた表情で、火炎から姿を戻し、地面に落ちていた格子を、ゆっくりと拾い上げた。

「ア段の言玉の形状は武器のはずっ…！なんで火なんかっ…！」

少し息を乱しながら、困惑した表情を、箆也へと向けるヒロト。

「まさかっ…君はっ…！」

「あなたに話す必要はない」

何かを思いついた様子のヒロトへ、冷たく言い放つ箆也。

「“変格”」

箆也がそう呟くと、格子の先端から刃が伸び、格子が鎌へと姿を変えた。

「終わりだ」

「うっ…！」

鎌を構える箆也に、ヒロトの表情が歪む。

「刈^かれ”っ…！」

箆也が鎌を振り下ろすと、ヒロトへ向けて、赤い一閃が放たれた。
「うううっ…！」

言玉もなく、ただ表情を引きつるヒロト。

「うあああああああっ！」

正面から箆也の一閃を喰らい、ヒロトは全身から血を流して、後方へと倒れていった。ヒロトが地面に倒れた音を最後に、辺りに静けさが戻る。

「ふうっ」

少し肩を落とした箆也が、鎌と言玉の姿へと戻し、一息つく。

「神と囁、それに雅はっ…」

「ヒヒっ…」

「…っ？」

他の皆が気になり、すぐにその場を離れようとした箆也が、後方から聞こえてくる、かすかな笑い声に、戸惑うように振り返った。

「ヒヒ…ヒヒヒっ…」

「…何がおかしい？」

倒れ込んだまま、薄く笑みを浮かべているヒロトに、箆也が眉をひそめ、問いかける。

「言ったよね…？ “招かれざる客が二人来てる” って…」

もうあまり力強くもない声で、ヒロトがゆっくりと言葉を発する。

「その言葉の後に、灰示様はこう言った…」

ヒロトがそっと、目を細める。

「“本当は、自分一人のはずだったのに” って」
「なっ…！」

そのヒロトの言葉に、箆也が大きく目を見開く。

「さあて…君の神様は大丈夫かな…？ ヒヒヒっ…ヒっ…ヒ…」

笑い声が徐々に小さくなると、ヒロトはついに力尽きたのか、その瞳を閉じ、がくりと首を落とした。

「……っ」

ヒロトの笑い声が止み、再び静かになったその場で、表情を曇らせた籠也が立ち尽くす。

「波城灰示が、招かれざる客として、ここへ来ている……？」

籠也が顔を上げ、遊園地の奥を見つめる。

「神っ…」

籠也の不安げな声が、その場に響き渡った。

“加守”・神月籠也 vs “比守”・昼川ヒロト。勝者・籠也。

Word. 10 予期セヌ再会 (5)

「朝比奈…アヒル…？」

籠也の脳裏に不安が過ぎっていたその頃、遊園地最奥・恐怖の館でアヒルは、思いがけぬ人物と再会を果たしていた。

「お、お前はっ…」

自分の名を呼んだその者に、戸惑いの表情を向けるアヒル。

「三沢・コーンフレーク・シュガーレス・キャサリンだっけ？」

「衣沢・アレクサンドラ・メアリー・エリザベスえいざわよっ！何一つあってないじゃないっ！」

「ああゝ！ザベスカあ！」

「エリザって呼びなさいって言ったでしょっ！？」

名前を勢いよく間違えるアヒルに、かつて出会った少女、エリザは、久し振りにあったにも関わらず、まるで遠慮していない様子で、思い切り怒鳴り返した。

「ったく、私は君のバカウケな名前、覚えてあげてたっていうのにっ」

「相変わらず失礼だな、お前」

酷い言いようをするエリザに、アヒルが呆れた表情を向ける。

「あ、あのおゝ、アヒルさん…」

「んあっ？」

後方から遠慮がちに名を呼ばれ、アヒルが振り向く。するとそこには、困惑した表情を見せた保が、アヒルとエリザを見つめていた。

「あの方、アヒルさんのお知り合いなんですか？」

「へっ？ああゝ、まあ知り合いっちゃあ、知り合いかなあ？」

保の言葉に、思わず首を傾げるアヒル。一度しか会ったこともない上に、エリザのことを何も知らないのです、知り合いと呼んでいいのか、自分でも疑問だったのだ。

「つつーか、ザベス」

「エリザよっ」

「お前、何だって、こんな所にいるんだよっ？」

「えっ!？」

アヒルの問いかけに、あからさまに困ったような声をあげるエリザ。

「え、ええーっと、それはそのお、まあ色々あって、そのっ…だから色々よっ!」

「はあっ？」

まるでわからないエリザの説明に、アヒルが大きく顔をしかめる。
「ちゃんとわかるように話せよっ」

「アヒル語は苦手なのっ」

「んだとおっ!？あっ…?」

またしても刺々しく言うエリザに、怒鳴りあげようとしたアヒルであったが、ふと何かに気づいた様子で、その言葉を止めた。

「エリザ、お前、何か色々と怪我してねっ？」

「えっ!？」

アヒルの問いかけに、またしても困った声をあげるエリザ。確かにエリザの頬には、斬られたような痕があった。よく見れば、手足も所々傷ついており、血が固まったのか、服には黒い染みが出ている。

「こ、これはそのお、まあ…色々よっ!」

「だからわかんねえって」

先程と同じような答えを返すエリザに、呆れた表情を見せるアヒル。

「まあいっか。今は居ねえーけど、俺の仲間がいるから、後で治してもらっ…!」

「仲間っ!？」

「うおっ!」

凄いい剣幕で聞き返してくるエリザに、アヒルが驚き、思わず心臓

を押さえる。

「つてことは、もしかして君、波城灰示の討伐で来たのっ!？」

「え? あ、ああっ」

勢いよく問いかけてくるエリザに少し押されながら、アヒルが短く頷く。

「ウチへの任務だったのに、ったくっ…」

「へっ?」

「えっ! ? あっ、な、何でもないわよっ!」

アヒルには聞き取れない程、小さな声で、どこか悔しげに呟くエリザ。何を言ったのかわからず、アヒルが首を傾げると、エリザは慌てた様子で笑顔を作った。

「つつーか、何だってお前が波城灰示のこと、知ってっ…」

「んっ?」

「へっ?」

問いかけようとしたアヒルの言葉が、何かに気づいた様子のエリザに、遮られる。

「大丈夫? 君っ」

エリザがアヒルから視線を移し、そっと問いかける。

「すっごく顔色悪いけど」

「えっ…?」

気にかけるようなエリザの言葉を向けられ、ゆっくりと顔を上げたのは、アヒルの後ろに立つ保であった。確かに先程より青白い顔色となっており、額に汗もかいている。

「保っ…?」

急に様子の変わった保に、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「す、すみませんっ…急に頭痛と眩暈と吐き気とぐるぐるとおえおえみたいなのがちよっとっ…」

「おいおい、大丈夫かよ?」

頭を押さえながら呟く保に、アヒルが心配するように問いかける。

「だ、大丈夫です…! 二週間に一回は風邪引く俺のことなんてっ、

き、気にしないで下さい…!」

「気にしないでくれつつたつてなあ」

必死に笑顔を見せる保に、アヒルが困ったように腕を組む。

「場所が場所だから、一人で帰すってわけにも行かねえーしっ…」

「すぐそこに広間があるわよ?そこで少し、休ませてあげたら?」

「そうすっか」

エリザの提案に、アヒルがすぐさま頷く。

「ほらっ、保っ」

「す、すみませんっ…」

肩を貸そうと手を差し伸べるアヒルに、保は申し訳なさそうな顔を見せた。

暗い廊下を数分歩くと、エリザの言った通り、大きな広間へと出た。二階まで吹き抜けの天井に、壁に置かれたロウソクの火が、かすかな灯りとして、部屋を照らしている。広間の壁へともたれかけられるようにして、アヒルは保を床に座らせた。

「ふう、しっかし広い部屋だなあ」

保から離れ、部屋の中央へと立ったアヒルが、高い天井を見上げる。

「ここが恐怖の館のゴール地点、この遊園地の最奥にあたる場所よ」
「えっ?」

すぐ隣へと歩み寄ってくるエリザの言葉に、アヒルが目丸くする。

「マジ!?誰もいねえーじゃんっ!」

周囲を見回し、誰の姿もないことを確認するアヒル。

「そうなのよねえっ…」

首を捻ったエリザが、困ったように眉間に皺を寄せる。

「それで私もどうしたもんかと思って」

「ううゝんっ…っ」

悩むように首を傾げていたアヒルが、何か思い出したかのように、勢いよくエリザの方を振り向く。

「だからあつ、結局、お前は何者でっ…！」

——ドクンっ。

「……っ！」

突如、胸に走る大きな音に、アヒルは目を見開いた。

「アヒルっ…？」

「……っ」

様子の変わったアヒルを、エリザが戸惑うように見つめる中、アヒルはゆっくりと体の向きを変え、広間の入口の方を振り返った。

「………」

入口付近に、立っている人影が見えた。

「保っ…？」

その人影は確かに保で、アヒルが戸惑うように保の名を呼ぶ。保は確かに先程、壁のすぐ傍に座させたはずである。体調も本当に悪そうで、すぐに立てる状態には見えなかった。

「何やってんだよ、保。もっとちゃんと座ってろってっ…」

「……っ」

「えっ…？」

アヒルが保のもとへと歩み寄って行こうとしたその時、立っている保の周囲から、白い靄もやのようなものが起こり、保の体を包み込んだ。

「な、何だ？」

「……っ」

部屋の中で立ち込める靄もやに、アヒルが戸惑うように声を発し、エリザもアヒルの後ろで眉をひそめる。

「おい、たもっ…」

「ハハっ…」

「……っ！」

アヒルが呼びかけようとしたその時、靄の中から聞こえてきた声は、妙に震えた、遠慮がちな保の声ではなく、もっと冷たく響く、聞いたことのない笑い声。その笑い声に、アヒルの表情が強張る。

「保じゃっ…ない…？」

「誰っ…！？」

アヒルの横へと足を進め、エリザが鋭く問いかける。

「誰”っ…？」

エリザの問いかけを受け、靄の中から、先程の声が返ってくる。

「おかしなことを聞く…」

徐々に、立ち込めていた靄が晴れ、中に立つ者の姿が明らかとなっていく。

「君たちは…僕に会いに来たんじゃないのかい…？」

見えてくるのは、流れるような黒い髪に、鋭く光る、血のように赤い、二つの瞳。靄の中から姿を現したのは、保と同じ、アヒルたちの高校の制服を着た、一人の青年であった。だが青年は、妖艶な空気を纏い、保とは違う、まるで人間ではないような、そんな印象を受ける。

「この、“波守”の僕にっ…」

『……っ』

そっと口元を緩めるその青年に、アヒルとエリザが、厳しい表情を見せる。

「波城っ…」

アヒルが青年を見つめ、口を開く。

「波城…灰示っ…！」

「ハハハっ…」

名を呼ばれた灰示は、どこか楽しげな笑みを零した。

Word 11 はノ真実 (1)

遊園地跡最奥、恐怖の館ゴール地点の広間。

「波城っ…」

アヒルが険しい表情で、目の前に立った男を見つめる。

「波城…灰示っ…！」

「ハハハっ…」

暗闇と同じ黒い髪に、鋭く光る赤い瞳を持ったその男、波城灰示は、名を呼んだアヒルの方を見ながら、どこか楽しげに笑みを浮かべた。

「初めまして、安の神。ようこそ、我が館へ」

出迎えるように軽く右手をあげる灰示に、アヒルが眉をひそめる。

「君は…初めまして、ではないかな？」

「……っ」

どこか問いかけるように首を傾げる灰示に、エリザは答えぬまま、ただその表情を厳しくした。

「どういうことだ…？ さっきは確かに保がっ…」

戸惑うように灰示を見つめていたアヒルが、ふとその視線を逸らし、先程、保を座らせたはずの壁際の方を見る。だが、そこに保の姿はなかった。さらに部屋を見回し、保の姿を探すアヒル。

「保っ？」

「ハハハっ…」

「……っ！」

姿の見えない保の名を、不安げに呼んだアヒルが、不意に聞こえてくる笑い声に、その瞳を鋭くし、睨みつけるように灰示を見た。

「てめえっ！ 保をどこへやりやがった…！」

「“どこへ”…？ 何のことかな？」

「んだとおっ…！？」

「アヒルっ」

「ああっ？」

不思議そうに問い返す灰示に、思わず身を乗り出したアヒルであったが、横からエリザに呼ばれ、顔をしかめたまま振り向く。

「んだよ？ ザベスっ」

「エリザよっ。それより、見て。彼の左腕」

「左腕っ？」

しっかり呼び名の訂正を入れたエリザに言われ、アヒルが灰示の左腕を見る。

「あっ…！ あれはっ…！」

左腕を見て、大きく目を見開くアヒル。灰示の左腕の制服の破けた部分に、灰示とは似ても似つかない、アヒル柄の可愛いハンカチが巻かれていた。ハンカチには、赤く血が滲んでいる。

「あれは、さっき俺が保に貸したっ…」

「ええ、君のお友達が巻いてたハンカチだわ。しかも、まだ血の滲みが大きくなっていったる」

アヒルの言葉に頷き、エリザが鋭い表情で、さらに言葉を続ける。確かにエリザの言うように、ハンカチについた血の染みは、まだ徐々に大きくなっていった。ハンカチで覆われた左腕の傷が、まだ塞がっていない証拠であろう。

「つまり、君のお友達は、初めから波城灰示だった」

「えっ？」

「ううん、波城灰示が君のお友達に姿を偽って、ここへやって来たって言った方が正しいのかも」

「初めからっ…？」

エリザの言葉に困惑しながら、アヒルがゆっくりと灰示を見つめる。

「で、でもっ、保は今日、俺の学校に転校してきたとこの奴でっ…」
「えっ？」

そのアヒルの言葉を聞き、エリザが驚いたように声を出す。

「じゃあ、もうその学校に転校してきた段階から、波城灰示だった

って考えるのが妥当でしょうね」

「学校の時から？」

——ひゃ、ひゃいっ…高市保でふっ…——

「あの、保がっ…？」

恵にどやされ、アヒルも何度も怒鳴りあげながら、学校で同じ時を過ごした保が、灰示であったとはどうにも考えられず、アヒルはただ戸惑いの表情を見せた。

「君を油断させるために、言葉の力を使ったのよ、きつとっ」

「言葉の力で、んなことがっ？」

「相手は忌を増発させるような奴なのよ？言姫から聞いてきてないわけっ？」

「いや、き、聞いたけどっ…」

戸惑うように問いかけたアヒルに、エリザは強い口調で言い返した。忌を増発させたというその力に、和音も箆也も、確かに警戒を強めていた。

「何が出来たって不思議じゃないわっ」

「ハハハっ…」

さらに眉をひそめ、見つめるエリザに、灰示は余裕すら感じる、不敵な笑みを浮かべた。

「一応聞くけど、君たちは、どうしてここへ来たのかな？」

微笑んだまま、少し首を傾げ、二人へと問いかける灰示。

「そんなの決まってっ…！」

「決まってんだろ！？てめえをぶっ飛ばすためだよっ！」

「あっ…」

声を張り上げたエリザであったが、もっと大きいアヒルの声に、その言葉を掻き消されてしまう。

「なんで私が言おうとしたこと、先に言うのよっ！」

「ああっ！？俺が何言おうと、俺の勝手だろうが！」

突然怒るエリザに、迷うことなく怒鳴り返すアヒル。敵を前にしているわりには、マイペースである。

「ハハハッ」

「ほらっ、お前が変なことでキレっから、笑われたじゃねえかつ」
「そんなくだらないことで、笑ってるわけないでしょっ」

よく響く笑い声を漏らす灰示を指差すアヒルに、エリザが呆れた視線を送る。

「僕を“ぶっ飛ばす”…？神様が、同じ五十音士である、この僕をっ？」

「あなたは五十音士なんかじゃないわっ」

「……っ」

強く言い放つエリザに、灰示が少し眉をひそめる。

「忌を増発させて、皆を傷つけるような真似をする人間に、五十音士である資格はないっ」

「……ふうんっ」

エリザの言葉に、少し間を置いてから、感心したような声を放つ灰示。

「もうバレてるんだね…僕が忌を増発させたってこと」

灰示がそっと目を細め、口端を吊り上げる。

「韻も、そう無能じゃないらしいっ…」

「じゃあ、やっぱりお前がっ…」

「そうだよ」

険しい表情で口を開くアヒルに、微笑んだ灰示が、静かに頷きかける。

「僕が増やしたんだ…この町に溢れるくらい、いっぱい、たくさん
の忌をっ…」

『……っ』

さらにその笑みを冷たくする灰示に、アヒルとエリザの表情が曇った。

「忌を増やすなんて、どうやって、そんなこっ…！」

「なんでっ…」

「えっ…?」

問いかけようとしたエリザの言葉を、同じように問いかけの言葉を放った、アヒルの声が、遮った。

「なんでっ! そんな真似っ…!」

「…っ」

その瞳に怒りを燃やし、鋭く問いかけるアヒルを見て、灰示がそつと目を細める。

「“なんで”、か…」

アヒルが放ったのは、エリザとは違う問いかけの言葉。

「変わった問いかけだね、安の神」

そう言っつて、灰示が口元を緩める。

「でも、そういう問いかけは嫌いじゃないから、答えてあげるよ」
少し嬉しそうに微笑んだ灰示が、顔を上げ、アヒルを見つめる。

「言葉の力を、世の中の人間に知ってもらうためさっ」

「言葉の力を…知ってもらう…?」

「そうっ…」

眉間に皺を寄せ、ゆっくりと確かめるように、灰示の言葉を繰り返すアヒルに、灰示がすぐさま頷きかける。

「悪意ある言葉が、どれほどに人の心を傷つけるのか、それを多くの人間に知ってもらうためっ…」

軽く右手をあげ、灰示がさらに言葉が続ける。

「別に、五十音士として間違った行為でもないだろう…?」

「知ってもらうためっ? それが、どうして忌を増発させることになるのよ!？」

自分の行動を正すように問いかけてくる灰示に、エリザは思わず身を乗り出し、鋭い表情を作つて、勢いよく問い返した。

「だって、そうしなきゃ、わからないだろう?」

「えっ?」

続く灰示の問いかけに、エリザが眉をひそめる。

「何げなく放たれた、その些細な言葉に、人の心がどれほど傷つくのか……」

あげられた灰示の右手が、そっと灰示の左胸に触れる。

「いくら言葉で“痛い”と伝えたって、悪意ある言葉を平気で吐くような人間は、その痛みを理解しない……」

「何をっ……!」

「なら、どうすればいいかつ」

「……っ」

反論しようとしたエリザの声を強く遮り、灰示がさらに言葉を続ける。

「同じ“痛み”を与えればいいのさ。傷つけた人間にね」

『……っ!』

一層、笑みを冷たくする灰示の、その言葉に、同時に険しい表情を見せるアヒルとエリザ。

「傷ついた人間に痛めつけられれば、傷つけた人間は、自分が吐いた言葉の力を、その言葉の罪を、知るだろう？」

「罪っ……」

——兄ちゃんなんかっ! いなくなればいいんだっ……! ——

「……っ」

灰示の言葉に、過去の言葉が思い出され、アヒルは厳しい表情を見せた。

「それを実行するのに、忌は最適な存在だ。だから僕は、忌を増やした」

左胸から離れた手を、灰示がゆっくりと横へ広げる。

「どんな些細な悪意にも忌が宿れば、人は痛みを恐れ、他者を傷つける言葉なんて口にしなくなる」

横へと広げられた手が、今度は天井へと上げられる。

「そうなれば、この世界はやがて……悪意ある言葉のない、穏やかな

世界へと変化を遂げるんだよ」

「何がっ：！」

天井へと上げた自分の手を見上げながら、まるで酔いしれるように言い放つ灰示に、エリザは煩わしそうに顔をしかめ、勢いよく声を張り上げた。

「何が穏やかな世界よっ！忌みたいな化け物で溢れる世界が、穏やかなはずないでしょう！？」

「ふうん…忌を否定するのか…」

ゆっくりと手を下ろした灰示が、意外そうにエリザを見る。

「それは、悪意ある言葉を向けられた人間の、傷ついた心まで否定することになるんだよ…？」

「うっ…！」

鋭く問いかける灰示に、エリザが顔を眉を引きつる。

「そ、そんなことないわ！傷ついた人間は、ただ、その弱った心につけ込まれただけで、相手を傷つきたいなんて思ってたっ…！」

「本当にそうかな？」

「……っ」

またしても、エリザの言葉が、灰示の問いかけに遮られる。

「忌に取り憑かれて、傷つけた相手を痛めつけることを望んでいる人間だって、いると思うよ」

自信に満ち溢れた笑顔で、はつきりと言い放つ灰示。

「だって、僕だったら、絶対にそう思うからっ」

「えっ…？」

不意に強い意志を持った瞳を見せる灰示に、アヒルが少し戸惑うように眉をひそめる。

「君たちは思わない？どんなに傷つけられても、どんなに痛くても、相手を傷つけようとは思わないかい？」

「それはっ…」

灰示の鋭い問いかけに、エリザが思わず口ごもる。

「ああー！もうっ、君も何か反論しなさいよ！」

「ええっ？俺っ？」

いきなり話を振られ、困ったように顔をしかめるアヒル。

「いやあ、でもあいつの言うこと、何かそこまで間違っているように感じないっつーかっ…」

「あんなの正論っぽく言ってるだけよ！忌を増やすなんてことっ、許せないに決まってっ…！」

「ハハハっ…“許せない”、か…」

「……っ」

どこか悩むように頭を掻くアヒルに、勢いよく怒鳴りあげていたエリザが、聞こえてくる灰示の声に、険しい表情となって振り向く。
「神様らしい、自己顕示欲ばかり強い言葉だ」

呆れるように、灰示が少し首を横に振る。

「神がそんな考えだから、五十音の世界はいつまでも変わらないんだよ」

灰示が少し、責めるように言う。

「だからいつまでも、悪意ある言葉に傷つく人間は減らないっ…」

「……っ？」

傷つく人間が出ることに、まるで怒りでも感じているかのようになり、煩わしげな表情を見せる灰示に、少し違和感を覚え、アヒルが表情を曇らせる。

「だから、僕は思うんだ」

一瞬だけ見せた怒りをすぐに消し、灰示が再び不敵に笑う。

「傷つく人間に無干渉な、そんな神たちを、殺そうって」

『……っ』

灰示に獲物を狙うように見つめられ、アヒルとエリザが冷や汗を流しながら、警戒するように身構える。

「やっぱり、戦うしかっ…！」

「“戦う”…？面白いことを言うね」

「えっ…？」

戦う態勢を取り、懐へと手を入れたエリザに、灰示が右手を振り

上げ、素早く何かを投げ放った。

「うっ…！」

「エリザっ…！」

灰示の放った何かがエリザの右足へと突き刺さると、エリザは苦しげな声をあげ、力なくその場に座り込んだ。そんなエリザに、アヒルが慌てて駆け寄る。

「エリザっ…！」

「ううっ…」

「これはっ…針？」

座り込んだエリザの右足には、細長い銀色の針が一本、突き刺さっていた。余程無駄なく刺さったのか、刺さった部分からは、血一滴流れていない。

「エリザ、お前…」

アヒルが険しい表情で、エリザを見下ろす。

「針灸にでも行ってたのか？」

「んなわけないでしょ！あいつが投げたのが、刺さったのよ！相変わらずボケてるわね！」

真顔で問いかけるアヒルに、エリザが勢いよく怒鳴り返す。

「やっぱり、立っているのもやっとの状態だったようだね」

「…っ」

エリザに怒鳴られていたアヒルが、正面から聞こえてくる声に振り向く。

「不治子にやられた傷が、まだ塞がっていないんじゃないのかい？」

「クっ…！」

嘲笑うように問いかける灰示に、エリザが悔しげに唇を噛み締める。

「不治子っ…？あの女か」

ステージであった不治子のことを思い出し、アヒルが眉をひそめる。

「エリザ、お前は大人しくここに座っ…」

「冗談じゃないわっ！」

「へっ？」

すぐさま返ってくる答えに、目を丸くするアヒル。

「元はと言えば、ウチに來た話だったのよっ、何だってポツと出の安団なんかにっ……」

「はっ？」

「えっ！？ ああ、いえ、えっと、そのっ」

エリザの言っている言葉の意味がわからず、大きく首を傾げるアヒルに、エリザが何とか言い繕おうと、必死に言葉を探す。

「とにかくっ、君だけに波城の相手をさせるわけにはっ……！ ううっ……！」

「エリザっ……！」

大きく声を張り上げたエリザであったが、そのために足に力が入ったのか、針の突き刺さったところが痛んだようで、顔をしかめ、力なく体を縮ませた。

「大丈夫かよっ？」

「……っ」

心配そうに問いかけるアヒルの声を聞きながら、俯いたままのエリザが、険しい表情を見せる。

「朝比奈アヒル」

「へっ？」

急に名を呼ばれ、アヒルが首を傾げる。

「いいっ？ 私のことは気にせずに、波城灰示を倒すことだけに集中しなさいっ」

「えっ……？」

先程までとは違い、真剣な表情となって言い放つエリザに、アヒルが戸惑った声を漏らす。

「誰かを気にしながら勝てる相手じゃないわ」

「け、けどよっ……！」

「例え、彼の言っていることが、間違っているように聞こえなくて

もよっ」

「……っ！」

アヒルが言い返そうとした言葉を知っていたかのように、強く言い放つエリザに、アヒルは驚きの表情で、目を見開く。

「エリザっ…」

「彼がどんな理由をつけたところで、彼が忌を増やして、傷つくはずのなかった、多くの人間を傷つけたことは事実なの」

少し困ったような顔を見せるアヒルに、エリザがまっすぐな視線を送る。

「君だって、彼を許してはいけないと思ったから、ここへ来たんでしょう？」

「それはっ…」

エリザの問いかけに、アヒルが少し俯く。忌が増発したことにより、アヒルの周りの人間も、大切な人たちも、多く傷ついた。波城灰示を野放しにはしておけないと、そう思ったからこそ、確かにアヒルはここへ来たのだ。

「君が彼を許せば、また多くの人間が傷つくことになる」

エリザが、強い瞳をアヒルに向ける。

「神なら、みんなを守りなさいっ」

「……っ！」

はつきりと言い放つエリザに、アヒルが大きく目を見開く。

「……っ」

まるで教えを説くような、そんなエリザの言葉を受け、アヒルの表情から戸惑いの色が消えた。

「わかった」

急に引き締まった表情を見せたアヒルが、大きく頷き、その場で静かに立ち上がって、座ったままのエリザから数歩遠ざかり、灰示に向き合うようにして、右手の銃を構える。

「俺が相手だ。波城灰示」

「ハハハっ、光栄だよ。安の神」

鋭く言い放つアヒルに、灰示はどこか楽しげに笑う。

Word. 11 はノ真実 (2)

「神の相手をするんだ。失礼のないよう、こちらも存分に力を見せないかね」

「あっ…」

そう言って制服のポケットに手を入れた灰示が、ポケットから取り出したものは、小さく丸い、宝石のような赤い玉であった。

「あれはっ…」

——あっ…！——

昼間、保が落とし、慌てて拾っていた、赤い玉。

「言玉っ…」

保が言玉らしきものを持っていたこと、アヒルは確かに、気になっていた。

「やっぱり…あいつが保だったのかっ…？」

「ハハハっ…」

アヒルが小声で、誰にともなく問いかけを呟く中、灰示は不敵な笑みを零し、ポケットから取り出した言玉を、右手で強く握り締めた。

「五十音、第二十六の音…」

灰示の握り締めた言玉が、赤く強い光を放ち始める。

「“は”、解放っ…」

「うっ…！」

灰示の言葉とともに放たれる強い光に、アヒルは思わず目を伏せた。

「んっ…？あっ…！」

光が止み、アヒルが目を開くと、そこには言玉とは違うものを持った、灰示が立っていた。

「針っ…」

「ハハハっ…」

灰示が指の間に挟むようにして構えているのは、赤銅色の細長い、大きめの針であった。鋭く尖った先端部分が、怪しげに光っている。右手と左手にそれぞれ四本、計八本の針を構え、灰示が微笑む。

「どこからでも、どうぞ」

「……っ」

挑発するように言い放つ灰示に、アヒルが少し顔をしかめる。

「警戒してたって仕方ねえかつ」

あれこれ考えを巡らせるアヒルであったが、吹っ切るように首を横に振り、銃口を、正面から灰示へと向けた。

“当たれ”っ！

弾丸の放たれる音が、静かな部屋に響き渡る。

“あ”の言葉っ…！

アヒルの言葉に乗って、まっすぐに灰示へと向かって飛んでいく弾丸に、エリザが目を見張る。

「ハハっ」

「……っ？」

微笑んだまま、その場に立ち尽くしている灰示に、アヒルが眉をひそめる。

「直撃する気かつ？」

「は…」

アヒルが戸惑いの表情を見せる中、灰示がゆっくりとその口を開いた。

“外^{はず}れろ”

「なっ…！」

灰示へと向かっていた弾丸が、灰示の言葉を受けて、急に軌道を変え、灰示とはまるで違う、遙かに高い部屋の天井へと突き上がった。天井を見上げ、大きく目を見開くアヒル。

「は、外れろっ…？」

天井を見ながら、灰示の放った言葉を、アヒルがそつと繰り返す。
「“当たれ”の対義語……」

エリザも険しい表情で、弾丸の消えていった天井を見上げる。

「アヒルには最悪の言葉ねっ……」

ゆっくりと顔を下ろし、アヒルと灰示を見つめるエリザの額から、汗が流れ落ちた。

「“は”で外れるか、そっかぁ。んな言葉がっ……困ったなあ」

唯一の攻撃手段である弾丸を、避ける術を持つ灰示に、アヒルが悩み込むように、首を捻る。

「ならっ……!」

「……っ?」

悩んでいたわりにそう間も置かず、すぐさま銃を構えるアヒルに、灰示が少し意外そうな顔を見せる。

「これでどうだ!」

天井へ向け、三度、銃弾を放つアヒル。

「“当たれ”っ……!」

アヒルが大きな声で叫ぶと、天井へと向かっていた三発の弾丸が、一斉にその軌道を変え、下方にいる灰示へと向かっていった。

「数を増やしたところで……」

向かってくる三発の弾丸を冷静に見つめ、灰示がまたしても避ける素振りも見せず、針を持った右手を突き出す。

「“外れる”」

灰示の言葉に、弾丸が三発とも、一斉にその向きを変え、天井へと上がっていく。

「このっ……!」

「……っ?」

天井へと上がった弾丸へ向け、銃を構えるアヒルに、灰示が眉をひそめる。

「“当たれ”っ……!」

アヒルが上がっていく弾丸へ向け、引き金を引くと、銃口から赤

い光の塊のようなものが放たれ、その光が三発の弾丸を包み込んだ。
「何っ？」

光に包まれた弾丸が、再びその軌道を変え、灰示へと落ちてくる。
「そうかつ…！同じ技を同じ言葉では返せない！これならっ…！」

灰示へと向かっていく弾丸に、エリザが確信に満ちた笑みを零す。
「ハハハっ…」

だがエリザの予想とは裏腹に、余裕の笑みを見せた灰示は、両手に構えた針のうちの三本を、それぞれの弾丸へと素早く飛ばした。

「針っ？」

そんな灰示を、アヒルが戸惑うように見つめる。

「“弾^{はじ}け”っ」

「んなっ…！」

長細い針が弾丸に突き刺さると、弾丸はその針に弾かれて、またしても軌道を変えた。今度は天井へではなく、撃ったアヒルの方へと戻っていく。

「うわ！とっと！だあああっ！」

「アヒルっ…！」

必死に逃げ惑うアヒルに、思わず身を乗り出すエリザ。

「うおっ…！」

アヒルが頭を抱え、その場に小さく屈み込む。すると、アヒルの頭上を通り過ぎた三発の弾丸は、そのまま勢いよく突き進み、広間の壁を貫いた。弾丸の威力に壁が崩れ落ち、壁の向こうの廊下まで吹き抜けとなる。

「危ねっ…」

壁にあいた穴を見ながら、ゆっくりと立ち上がり、思わず呟くアヒル。自ら放った弾丸とはいえ、あれを喰らえば、一溜りもない。

「針で弾丸弾くとか、マジ反則でっ…」

「行ったわよ！アヒルっ！」

「へっ？」

苦い表情を見せていたアヒルが、後ろから聞こえてくるエリザの

声に振り返る。

「うえええっ!？」

振り返ったアヒルに、まっすぐに向かって来ているのは、灰示の赤銅色の針。だが灰示が構えていたものよりも一回り大きく、まるで刃物が飛んでくるようで、アヒルが焦りの声を出す。

「大きさまで自由自在かよっ!クソっ!」

向かってくる針へ向け、銃を構えるアヒル。

「“当たれ”っ!」

アヒルが引き金を引くと、針へ向け、弾丸が放たれる。針が迫り来ていたため、弾丸はアヒルのすぐ近くで、針へと当たった。

「ハハっ」

灰示がそつと微笑み、微笑んだ口の形をそのままにする。

「“破裂”^{はれつ}」

「何っ:!!?」

放たれた言葉に、大きく目を見開くアヒル。

——パアアアン!

「うっ:!!」

弾丸が当たったその瞬間、針が破裂するように大きな音を立て、無数の細かい針へと分解させる。一斉に飛んで来る無数の針に、アヒルが表情を引きつる。

「うああああっ!」

「アヒルっ:!!」

全身にその細かい針を受け、後方へと吹き飛ばされるアヒル。すぐ横へと倒れ込んだアヒルに、エリザが座り込んだまま、上半身だけを乗り出す。

「痛ってえっ:」

思わず眩きながら、アヒルがしかめた表情で起き上がる。その手や足には、細かい針が何本か突き刺さっており、針がかすめた箇所

からは、赤い血が流れ落ちていた。

「気を付けて、彼は熟語イデオムを使うわっ」

「インディアン？何だ？それ」

「はっ？」

手足に刺さった針を抜きながら、アヒルが率直に聞き返すと、エリザが間の抜けた表情を見せる。

「熟語イデオム、動詞ヴァーブより難易度の高い言葉でしょ？」

「バーブー？」

「……………」

聞き覚えのない様子で、大きく首を傾げるアヒルに、固まるエリザ。

「し、知らないの？ “同じ物を同じ言葉で返せない” ってルールは知ってるのにつ？」

「同じ物を？何だあ？それ。そうなのっ？」

「はあっ！？」

心から不思議そうに目を丸くし、アヒルが問いかけると、エリザが思わず大きな声をあげる。

「じゃあ何で、さっき外された弾丸、もう一回当てようと思ったのよっ！？」

「いやあ、こう何となくっ？」

「何とっ…なく…」

自分でもわかっていない様子で、首を傾げながら答えるアヒルに、エリザはがっくりと肩を落とした。

「君の付き人に会ったら、多分蹴るわ。私」

「へっ？」

アヒルとは違う方向を向き、そっと呟くエリザに、アヒルがもう一度、首を傾げる。

「まあ、もういいわ。それより言葉は？まさか“当たれ”しか使えないとか言わないわよねっ？」

「へっ…！？」

鋭く問いかけてくるエリザに、アヒルが思わず焦った声を出す。

「ちゃ、ちゃんと使えるっての！後三つくらい！」

「じゃあ、それを使って、とっとと攻撃！今の所、押されっ放しよっ？わかってる？」

「言われなくても、わあってるよっ」

エリザの小言のような言葉に顔をしかめながら、手足に突き刺さった針を粗方抜いたアヒルが、銃を持ち直しながら、その場にゆっくりと立ち上がる。

「まだやるのかい？」

「当たり前だ！」

「ハハっ、それは良かった」

強気に答えるアヒルを見て、灰示がどこか楽しげに笑う。

「とりあえずっ…」

アヒルが銃口を天井へと向けると、上方へ、何発も弾丸を放った。

「数撃ちや当たんだろ作戦！“当たれ”っ！」

天井へと放たれた十発ほどの弾丸が、アヒルの言葉を受け、一斉に灰示へと向かっていく。

「……っ」

灰示が両手を大きく広げ、上方の弾丸へ向け、同じ数の針を投げた。

「“弾け”っ」

針が弾丸へと突き刺さると、弾丸は軌道を変え、アヒルへと返っていく。

「クっ…！」

——バアアアン！

弾丸が厳しい表情を見せたアヒルへと戻り、爆煙の中に、アヒルの姿が消える。

「ハハハっ」

微笑んだ灰示が手を一振りすると、投げてなくなってしまった針が、再び指の間に現れた。

「もう終わりかな？もう少し遊びたかったのに」

灰示が残念そうに呟く中、弾丸により巻き起こっていた爆煙が、徐々に止んでいく。

「んっ…？」

爆煙が薄れると、灰示が眉をひそめた。

「いないっ…？」

完全に爆煙は晴れるが、そこに灰示の予想していた、倒れているアヒルの姿はなく、灰示は戸惑うように、周囲を見回した。

「どこへっ…」

「ここだっ！」

「……っ！」

アヒルの声が響いたのは、灰示のすぐ後方。灰示が振り返ると、そこには銃を左手に持ち替え、灰示へ向けて、右手を振り上げているアヒルの姿があった。

「なっ…！素手でっ…！！？」

拳を振り上げるアヒルに、驚きの表情を見せるエリザ。

「言玉の力じゃねえーならっ…！外せねえーだろっ…！」

「クっ…」

迫る拳に、灰示が初めて、その表情をしかめる。

「喰らっ…！」

「“這^はえ”っ」

「えっ？」

灰示が素早く針を幾本、天井へと投げ放つと、放たれた針が上空で先端部を地面へと変え、アヒルへ向けて、一斉に落ちてくる。

「うあっ…！」

落ちてきた針に、まるで服の裾を縫われるように貫かれ、アヒルが思わず倒れ込み、地面へとうつ伏せになる。

「ううっ…！」

地面へと突き刺さった針を抜こうと、必死に体を動かすアヒルであつたが、針に強い言玉の力が働いているのだらう、少々体を動かしたくらいでは、少しも針は抜けなかった。

「神が這いつくばる姿もいいものだね」

「クっ…」

顔を上げたアヒルが、高々と見下ろす灰示を、睨みあげる。

「さあ、終わりにしようか…」

「うっ…!」

見下ろしたアヒルへと針を構える灰示に、アヒルの額から汗が流れ落ちた。

「さようなら、安の神」

「アヒルっ…!」

「……っ」

灰示が冷たく微笑み、エリザが身を乗り出す中、アヒルはかすかに動く指先で、左手の銃の銃口を自分へと向け、引き金を強く引いた。

「「上^あがれ」っ…!」

「何っ?」

アヒルが言葉を放ちながら、自分へと弾丸を撃ち込む。銃から放たれた、赤い光の弾丸を喰らうと、アヒルの体から強い光が放たれ、アヒルの動きを封じていた灰示の針が、弾き飛ばされる。

「クっ…!」

「あっ…」

針から解放されると、そのまま天井に高々と飛び上がるアヒル。

「飛んだ…?」

上方に浮かぶアヒルを見上げ、灰示が少し表情を曇らせる。

「二つ目の言葉っ…やるじゃないっ」

灰示と同じようにアヒルを見上げ、エリザが嬉しそうな笑顔を見せる。

「「上^{みくだ}がれ」か…やっぱり神様は、上から見下すのが好きなのかな

「？」

アヒルの見上げるその瞳を細め、そっと突き刺すような視線を送る灰示。

「なら…叩き落としてあげるよっ…！」

「……っ！」

灰示が、上方にいるアヒルへ向け、両手に構えていた八本の針を一斉に投げ放つ。

「こんなもんっ…！」

「ハハハっ」

「……っ？」

すぐさま空中を移動し、針を避けようとしたアヒルが、不敵に微笑む灰示に何かを感じ、眉をひそめる。

「“倍^{ばい}せ”…！」

「何っ…！？」

アヒルが避けようとしたところで、灰示が放った言葉が発動し、針が赤く輝いて、分裂するように二つに分かれ、その数を二倍とする。

「グっ…！うあっ…！」

さらに大きく体を捻り、二倍となった針を避けようとしたアヒルであったが、数本避けることが出来ず、左腕に受けて、赤い血を流した。

「“バ”って…バ守とかの言葉じゃねえーのかよっ」

痛みに表情をしかめながら、アヒルが思わず呟き、下方の灰示を見る。

「“倍せ”…濁音の言葉まで…」

灰示の放った言葉を繰り返し、エリザが驚きの表情を見せる。

「何て底知れない…波城灰示っ…」

「ハハハっ」

アヒルやエリザが少し圧倒されたように見つめる中、灰示は楽しげに笑い、新たな針を両手に構えた。

「まだまだ行くよっ…！安の神…！」

「うっ…！」

灰示が再び、上方を飛ぶアヒルへと、針を投げ放つ。

“倍せ”、“倍せ”っ…！」

「んなっ…！」

先程と同じように二倍に増えた針が、もう一度、灰示の言葉を受け、今後はそのさらに倍に数を増やす。計四倍となった針は、アヒルに逃げる隙間も与えず、襲いかかっていく。

「クソっ…！」

「終わりだ…」

顔をしかめるアヒルと、勝利を確信し微笑む灰示。

「こうなりゃっ…！」

アヒルが目つきを鋭くし、銃を構える。

“当たれ”っ…！」

四方向に適当に弾丸を放ち、自らの言葉を口にするアヒル。それぞれの方向に飛んだ弾丸が、向かってくる針を叩き落としていくが、落とす針はほんの一部で、向かってくる針すべてを落とすことは、出来てはいない。

「その程度では、すべての針から逃れることなどっ…」

“上がれ”っ…」

「えっ…？」

上から飛んで来た赤い光の弾丸が、不意に灰示の体を貫く。

「何っ…？」

赤い光に包まれた灰示の体が、勢いよく空へと飛び上がる。

「うっ…！」

飛び上がる灰示を、上方から待ち構えるようにして落ちてくるのは、先程、アヒルが弾丸で叩き落とした、灰示自身の針。言葉を出す暇もなく、針が灰示に差し迫る。

「うああっ…！」

自らの針を受け、苦しげな声をあげる灰示。針の突き刺さった灰

示の体から、赤い血が飛び散った。

「クっ…！」

何の支えもない空中で、少し体を屈め、痛みを堪える灰示。

「……っ」

「なっ…！」

そんな灰示のすぐ後方へ、先程の灰示の針を受け、さらに傷だらけとなったアヒルが現れ、身を屈めた灰示の背中へと銃口を向けた。

「クっ…！」 “はっ…！”

「遅せえよ！」

必死にアヒルの方を向き、言葉を放とうとする灰示に、アヒルが強く言い放つ。

「“当たれ”っ！」

「うっ…！」

灰示よりも先に放たれる、アヒルの言葉。

「……っ！」

言葉に乗せるため、アヒルが引き金を引こうとした、その時。

——アヒルさんっ……——

「えっ…？」

振り向いた、険しい表情を見せた灰示の顔が、何故か、助けを求めるような保の表情と重なり、アヒルは、引き金を引く指を、止めてしまった。

「アヒルっ？」

「……っ」

動きを止めたアヒルに、エリザが首を傾げる中、灰示は一瞬の隙も見逃さず、引く手を止めたアヒルへと、針を持っていない素の右手を開き、手のひらを向けた。

「“破”っ…！」

「えっ…？」

灰示の手のひらから放たれるのは、巨大な衝撃波。

「うあああああっ！」

衝撃波をもろに喰らったアヒルが、広間の入口の方の壁まで吹き飛ばされ、壁に背中を叩きつけて、近くに飾ってあったロウソクを掻き消すと、そのまま壁伝いに落下し、床へと倒れ込んだ。

Word. 11 はノ真実 (3)

「……っ」

倒れ込んだアヒルを見下ろし、開いていた右手を握り締めた灰示の体が、ゆっくりと下降していく。アヒルが倒れ、“上がれ”の言葉の力が切れたのであろう。

「今の言葉はっ……」

戸惑うように、降りてくる灰示を見上げるエリザ。

「忌の……？」

エリザが眉をひそめ、少し考え込むように呟く。

「うっ、うう……」

「あっ！アヒルっ……！」

考え込んでいたエリザが、聞こえてくる苦しげな声に、思い出したように振り向く。壁際に倒れ込んだアヒルが、起き上がることも出来ない様子で、小さな声を漏らしていた。

「アヒルっ！グっ……！」

先程、灰示に突き刺された、足の針を抜き、エリザが顔をしかめながらも、何とか立ち上がる。

「アヒルっ……！」

針で刺された方の足を引きずりながら、必死の足取りで、倒れ込んでいるアヒルへと駆け寄るエリザ。

「ちよっと！大丈夫！？」

アヒルのすぐ横へと座り込んだエリザが、倒れたままのアヒルへと手を伸ばす。

「痛ててっ……あんまり、大丈夫じゃねえかもっ……」

エリザに手を貸してもらい、何とかその場で起き上がるアヒル。

「何かもう痛すぎて、意識飛びそうだしっ……」

「自業自得よっ、戦いの最中に攻撃の手を止めたりなんてするからっ」

頭を押さえるアヒルに、エリザが厳しい言葉を投げかける。

「どうして撃たなかったのよ？ 絶好のチャンスだったのにつ」

「それはっ…」

「そうだよ」

『……っ』

会話の中に入ってくる声に、アヒルとエリザが同時に振り向く。

「あんなチャンス、もう二度となかったのに」

「………」

空中から床へと降り立った灰示が、相変わらずの不敵な笑みを浮かべながら、ゆつくりとアヒルたちの方へ歩み寄って来ていた。近づいてくる灰示を見つめながら、アヒルがその表情を曇らせる。

「お前…」

「……っ？」

ゆつくりと口を開くアヒルに、足を止め、眉をひそめる灰示。

「お前と保は、本当に同じ人間か…？」

「……っ」

アヒルの問いかけに、灰示がハッとなって、目を開く。

「保は本当に…お前が力で作り出した、架空の人間か…？」

「………」

さらに問いかけを続けるアヒルを、一度開いた目を細め、灰示がまっすぐに見つめる。

「アヒル？ 何言っ…」

「ハハっ、さすがに勘が鋭いね、神様は」

「……っ！」

アヒルに問いかけようとしたエリザが、そこへ聞こえてくる灰示の声に、驚きの表情を見せる。

「えっ…？」

「そうだね。その問いかけも気に入ったから、答えてあげるよ」

エリザが戸惑うように振り向く中、灰示がどこか満足げに微笑む。
「本当のことを言うと、僕、波城灰示と、君の知っている高市保は、

同じ人間じゃない」

灰示が両手を広げ、はっきりとした口調で言い放つ。

「僕たちは、同じこの体に宿る、別々の人格だからね」

『えっ…!?!?』

灰示のその言葉に、アヒルとエリザが衝撃を走らせる。

「同じ体に宿る、別々の人格っ…?」

「まさかっ…二重人格!?!?」

二人が戸惑いの表情で、灰示を見つめる。

「二重人格か…ニュアンス的には近いけど、それとはまるで別物かな…」

「えっ…?」

「彼と僕とは、まるで異なる存在だからね」

「異なる…?」

灰示の言葉を聞けば聞くほど、戸惑いの表情を濃くしていくアヒル。

「お前は…一体っ…」

「……っ」

言葉の先の答えが見えず、思わず問いかけるアヒルを見て、灰示がそっと笑みを零す。

「僕は忌…」

「えっ…?」

「僕は、保に取り憑いた忌が人格を持ち、実体化した姿なんだよ」
『……っ!』

示される答えに、アヒルとエリザは、さらに衝撃を走らせた。

「なっ…」

あまりの驚きに目を見開き、思わず発する言葉さえ失うアヒル。

「忌っ…?」

その言葉をすぐには信じられないほど、目の前に立つ灰示と、アヒルの知る忌とでは、存在が違い過ぎていた。ただの黒い影のような化け物の忌と、完璧に人間にしか見えない灰示が、同じ種とは思

えなかった。

「そんな、ことっ…」

思ったことを、必死に前に出し、言葉にするアヒル。

「そんなことが、あるはずっ…!」

「あるかも」

「エリザっ?」

アヒルのすぐ横で、アヒルとは真逆のことを口にするエリザに、アヒルが戸惑うように振り向いた。

「あるかもって、どういうことだよっ…?」

「さっき、彼が使った言葉」

遠慮がちに問いかけるアヒルに、エリザがすぐさま答える。

——“破”——

「あれは、本来は忌の言葉だわ」

「……っ」

エリザの言葉を聞き、アヒルが少し考え込むように俯く。確かに『破』という言葉を使って衝撃波を放つのは忌の技であり、アヒルも今までに何度か、この目で見て来た。

「それに、ずっとおかしいと思ってたの」

「おかしい?」

「いくら、強い力を持った五十音士でも、異質な存在である忌を増やすなんてこと、出来ないんじゃないかって」

アヒルの方を振り返り、真剣な表情を見せるエリザ。

「でも彼が忌だというのなら、それも納得がいくわ」

「あいつも忌だから、同じ忌を増やすことが出来るってことか?」

「ええ」

問い返すアヒルに、エリザが短く頷く。

「でも、忌が人の姿に実体化したなんて話は、聞いたことがないっ…」

灰示を見つめたエリザの表情が、深く曇る。

「そんなの、最も強力な力を持つ、イ級の忌でも無理なはずっ…」

「忌だけの力ではね」

「……っ」

入ってくる灰示の声に、エリザが少し驚いたように目を開く。

「神様なら知っているだろう？ 忌の階級は、宿主が言葉により受けた、痛みの深さに比例するってこと」

「あっ…」

——お前ら、ハ級の忌なんて滅多に出ないってっ……

——ああ、滅多に出ない。何せ忌の階級は、宿主が悪意ある言葉により受けた、痛みの深さに比例するんだからな……

奈々瀬の友・リンにハ級の忌が取り憑いた時、箆也から確かにそう聞かされていた。

「その痛みが深ければ深いほど、忌の力は強くなる…ある時には、イ級の忌すら超えてしまうほどにっ…」

「イ級を、超えるほどって…」

灰示の話に、エリザが険しい表情を見せる。

「保が…」

「……っ？」

そっと保の名を口にするアヒルに、灰示が少し首を傾げる。

「保がお前を…強くしたっていうのか…？」

「……そう」

アヒルの問いかけに、少し間を置いた後、灰示が微笑んで頷く。

「保の底知れぬ痛みが、僕を生み出したんだよ…」

「……っ」

その灰示の微笑みを見つめ、アヒルが表情を険しくする。

「痛みがイ級以上の忌を生み出すなんて…そんなことがっ…」

「何だ…？」

「えっ…?」

あまりにも信じられない話に、茫然としていたエリザの横から、聞き取るのもやっとなほどに小さな声で、アヒルが静かに問いかける。

「お前を生み出したほどの、あいつの“痛み”って、何だ…?」

「……………」

アヒルの問いかけを聞き、灰示がそっと目を細める。

「何だ」、か…君は本当に、五十音士らしくない問いかけばかりをするね、安の神…」

どこか感心するように呟き、再び笑みを浮かべる灰示。

「いいよ。気に入ったから答えてあげる」

浮かべた笑みを、灰示がアヒルへと向ける。

「この“痛み”を知って、君たちも理解するといい…」

灰示が細めた瞳を光らせ、鋭い視線を二人へと送る。

「この世界から、“痛み”を失くさなきゃいけないわけを…」

——八年前。言ノ葉町とは別の、とある小さな町。

ごく普通の小さな町は、とても平和な町で、幼い保は、そのごく普通の町の、ごく普通の小さな家に生まれて、そして七歳になったその年まで、ずっとここで育ってきた。

「おかえりなさい!お父さん!お母さん!」

「ただいま、保」

「いい子にしてたか?保」

「うん!」

優しい父と、優しい母と、共に。

「忌は?取り憑かれた人、大丈夫だった?」

「ああ、問題ないよ」

「そっかあっ」

保の父と母は、五十音士で、町に現れた忌を退治するため、度々、保を家に置いては、二人で出掛けていた。そんな二人に、保は寂しいと思うこともあったが、だがそれ以上に、二人を誇らしく思っていた。

「良かったあ。さすがお父さんとお母さんっ！」

幼いながらに五十音士というものを教えられ、それを深く理解していた保は、言葉に傷ついた人間たちを救う二人を、心から誇りに思っていたのである。

「お父さんとお母さんがいれば、この町はずっと平和だねっ」

「本当は、忌なんてものが生まれなくなれば、それが一番なんだけどな」

大きく笑う保の頭を撫でながら、父親が少し困ったような笑みを浮かべる。

「世の中から、悪意ある言葉なんてものが、なくなってしまうばいいのになっ…」

「お父さんっ…」

願うように言う父親を、保がまっすぐに見上げる。

「悲観していても仕方ないわ。それに、保が五十音士になる頃には、きっと世界も良くなってるわよ」

母親が、父親を励ますように、温かい笑顔で言い放つ。

「そうだな。保たち、新しい時代の五十音士が、この世界を変えてくれるかもな」

「うん！僕、頑張るよ！」

微笑みかける父と母に、保は大きく頷いた。

「頑張っつて、お父さんたちみたいなの、立派な五十音士になってみせるよ！」

いつか、五十音士になって、この世界を痛みのない世界に見せると、あの頃の保は、心から強く、そう思っていた。

だが、些細な言葉が、保の穏やかだった日常を、大きく変えた。

「あの家の夫婦は、おかしな力を持っている」

言玉で忌退治をしていることが知られたのか、ある日、誰だかが放ったその言葉は、噂となって、あつという間に町中に広がった。二人が必死に戦って、守ってきた町人たちは皆、保たち一家に、冷たい疑いの目を向けるようになった。

「……………」

郵便ポストに入れられていた、乱雑に『出て行け』や『化け物』と書かれた大量の紙を、新聞と一緒に取り出しながら、保の母親は複雑な表情を見せ、立ち尽くしていた。

「どうかしたの？お母さん」

「えっ…！？」

すぐ背後から聞こえてくる声に、母親が慌てた様子で振り返る。

「た、保っ…な、何でも、ないのっ」

「……………」

入れられていた紙を隠すように後ろ手に持ち、誤魔化すような笑みを浮かべる母親に、保は追及することもなく、そっと笑みを浮かべて頷いた。

「もう学校行くの？」

「うん」

「いってらっしゃい」

「うん、いってきます」

ランドセルを背負った保が、母親の横を通り、家の門から外へと出て行く。

「あ、保っ…！」

「……………」

学校へと向かおうとした保が、母親の声に呼び止められる。

「何っ？」

「あっ…えっと…」

聞き返す保に、少し躊躇うように俯く母親。

「何でもないわ。ごめんなさい」

「……っ」

無理に作ったとわかる笑みを浮かべ、首を横に振る母親に、保はそっと目を細めたが、すぐに大きな笑顔を作り、母親へと向けた。

「じゃ、じゃあっ、いってきます！」

「ええ、いってらっしゃい」

温かく微笑んだ母親に見送られ、保は学校への道を、少し駆けるようにして、進んでいった。保の姿は、あっという間に見えなくなってしまう。

「……………」

母親は、保の去っていった道を見つめながら、作った笑みを消し、無気力な表情を見せた。

「痛い…」

再び『化け物』と書かれた紙を見つめ、母親がポツリと呟く。

「痛い…」

母親の暗い声が、何度も何度も落とされた。

その些細な言葉は、保の学校生活にまで、大きな影響をもたらした。

「化け物だ！化け物の子供が来たぞ！」

「帰れ帰れ！気色悪い！」

無邪気なはずの子供たちは、親の真似をしているのか、平気な顔をして、保に悪意ある言葉を向けた。その言葉の数々は、無邪気な分、より残酷に保の心に突き刺さり、保の心を痛めつけた。

「とっとこの町から出て行けよ！」

「うっ…！」

言葉だけでは飽き足らず、時には、保を殴る者や蹴る者もいた。

「死ねよ！消えろよ！」

「いなくなれ！いなくなれ！」

「ううっ…！」

だが、どんな酷い言葉を投げかけられても、何度殴られても、保は言い返すことも、殴り返すこともしなかった。それが両親との約束だった。どんなに傷つけられても、相手を傷つけることはしないという、約束だった。

「ううっ…！」

だから保は、ひたすら、すべてを受け入れ続けた。

殴られた体が痛み、結局、保が家へと帰れたのは、すっかり日が沈んだ頃だった。

「た、だいま…」

「保？」

少し気まずそうに言いながら、保が玄関の戸を開けると、家の奥から、いつもの母親の声がした。

「どうしたの？こんなに遅くまっ…保っ！？」

玄関へと出て来た母親が、傷だらけの保を見て、顔色を変えた。

「どうしたの！？何！？この傷っ！」

「ちよ、ちよっと、そこで転んじゃってっ…」

保に駆け寄り、強い剣幕で問いかける母親に、保が必死に笑顔を向ける。化け物の子供と言われて殴られたなど、保にはとても言えなかった。

「転んで出来るような傷じゃないでしょう！？保っ、一体何がっ…！」

「大丈夫だよっ！」

「……っ」

追及しようとする母親の声を、張り上げた声で遮る保。

「僕なら大丈夫だから…ねっ？」

「保っ…」

悲しげな笑顔を向ける保に、それ以上、強い言葉を向けることも出来ず、母親はそっと目を細め、保の名を呼ぶことしか出来なかった。

「僕、着替えてくるねっ…！」

「あっ…」

まるで、母親から逃げるように、保は家の奥へと駆け去っていった。

「……………」

玄関に残った母親が、そっと自分の左胸に手を当てる。

「痛い…」

その言葉が、再び母親の口から、零れ落ちた。

その日の夜、忌に取り憑かれた保の母親が、町の人間を傷つけた。傷つけたのは、保を殴った、保の同級生の一人。まだ幼い子供だった。

Word. 11 はノ真実 (4)

翌日。

「……………」

自分のベッドで眠り続ける母親を見つめながら、父親がそっと目を細める。父親が、無事に母親に取り憑いた忌を倒し、母親が傷つけた子供の傷も治したので、町には何事もなかったように平穏な朝が来たが、保の家だけは、そうではなかった。

「お父さん」

「……………」

部屋に入ってくる幼い声に、父親が振り向く。すると、そこには、不安げな表情を見せた、保が立っていた。

「お母さん、起きた…?」

「いや、まだだよ」

「そう…」

父親の言葉を聞き、保が少し肩を落とす。

「……………」

眠ったままの母親を見つめ、保がその表情を曇らせる。

「保」

「んっ…?」

父親に名を呼ばれ、母親を見ていた保が顔を上げる。

「この町を、出ようか…?」

「えっ…」

その思いがけない言葉に、保は大きく目を見開いた。誰よりもこの町が大好きだった父が、そんな言葉を口にするとは、思ってもみなかったのである。

「僕たちのことを、誰も知らない町で…三人で、やり直そうか…?」
「……………」

言葉を続ける父親に、目を細める保。この町を捨てようと思える

ほどに、今、父が苦しいのだと思うと、保の胸まで、ひどく苦しかった。

「うん、そうだねっ」

大きく笑顔を作り、保が頷く。

「そうしようっ、それがいいよっ」

「ああ…」

もう一度頷く保に、父親もそっと笑顔を見せる。

「ああ、そうだ。保、買い物をして来てくれるか？父さん、母さんを看てないといけないから」

「うん、いいよっ」

思い出したように言う父親に、保が快く返事をする。

「これ、買ってきてほしいもの、書いておいたから」

「わかった！」

メモを受け取り、笑顔を見せる保。

「じゃあ、行って来るね！」

「ああ」

父親に軽く手を上げ、保が足早に部屋を出て行く。部屋の扉が閉まると、静かな空気が流れた。

「……………」

部屋に残った父親が、保へと向けていた笑みを消し、そっと俯く。

「うっ…！」

俯いた父親が、急に苦しげな声を漏らす。

「ううっ…うっ…！」

＜傷つけた者に…報復を…＞

「クっ…！」

父親の体を包み込む黒い影が、父親に囁くように言い放つと、その言葉に、父親は険しい表情を見せた。

「保っ…」

苦しむ中、父親がそっと保の名を呼ぶ。

「ごめんな…」

小さな声が、部屋に落ちた。

「買い忘れないよねえ？」

メモと袋の中の食品などを見比べながら、確認をする保。

「うん、大丈夫っ！あれっ？」

買い忘れないことを確認し、顔を上げた保が、道の中央に集まっている人影に気づき、戸惑うように首を傾げた。

「何かあっ…えっ…？」

集まっている人々の視線を先を見た保が、ふと、その表情を止める。

「えっ…？」

皆が見つめているのは、赤々とした炎に包まれている、一軒の家。それは、保が今から帰ろうとしていた、保の家であった。

「か、火事だあ！」

「しょ、消防車っ…！急げっ！」

保の家の前へと集まった近所の人間が、慌てた様子で、声を張り上げている。

「嘘…」

燃え上がる炎を、ただまっすぐに見つめる保。

「なん、でっ…」

目の前で真っ赤に染まる自分の家に、優しい父と母が待っているであろう温かい家に、保が目を開いたまま、茫然とした様子で、近づいていく。

「お父さんっ…！お母さんっ…！」

「や、やめろっ！ダメだ！」

燃え盛る炎の中へと駆けていこうとした保を、近くにいた大人たちが必死に押さえ込む。

「嫌だ！お父さん！お母さん！嫌だあっ！」

何人もの大人に体を押さえつけられながら、保が燃える家へと、

必死に手を伸ばす。

「なんでっ…？なんでっ…」

保が戸惑うように、炎へと問いかける。

——僕たちのことを、誰も知らない町で…三人で、やり直そうか…？——

「なんでっ…！なんでえっ…！！」

つい先程の父親の言葉が思い出され、保は必死に声を張り上げた。

「離してっ…！離してよおっ…！！」

叫ぶ保の瞳から、透明な涙が零れ落ちる。

「お父さんっ！お母さっ…！」

——バアアアアンっ！

「……っ…！！」

保が両親を呼ぼうとしたその瞬間、爆発音のようなものが辺りに響き渡り、燃え盛る家が、一階から潰れるようにして、崩れ落ちた。目の前で崩れていく自分の家に、保がさらに目を見開く。

『うっ…』

その衝撃的な光景に、保の体を押さえ込んでいた大人たちも皆、力なく手を下ろし、保の体は解放された。

「あっ…」

自由になった体で、数歩足を動かし、崩れ落ちた家へと、歩み寄っていく保。

「お父さん…？お母さん…？」

その呼びかけの前に広がるのは、ただ残酷なだけの光景。

「ううっ…！」

保が両手で頭を抱え、強く唇を噛み締める。

「うあああああああっ…！！」

悲痛な叫び声が、天まで響き渡った。

「……………」

火が消えた時、もう家の形は少しも残っていなかった。ただ、瓦礫と燃え尽きた家の残骸と、底知れぬ絶望だけが、保に残った。

「何が…違ったの…？」

燃え尽きた家の前に立ち尽くし、保が誰へともなく、力なく問いかける。

「何か…間違えたの…？」

「——大丈夫っ？お父さんっ——」

「——みんなを守るためだ。このくらいの傷、全然痛くないさっ——」

父も母も、必死に戦っていた。時には傷つきながら、その体から血を流しながら、大好きなこの町の人間を守るため、一生懸命に戦っていた。

「なんでっ…！」

涙を流した保が、膝からその場に崩れ落ちる。

「痛いっ…！痛いよ…！痛いよっ…！！」

地面に泣き崩れた保が、地面へとその涙の粒を落としながら、何度も何度も、その言葉を繰り返す。

「痛い、よっ…」

感情のこもった声が、静かに落とされる。

「くじゃあ、その痛み…僕に出来ない…？」

「えっ…？」

すぐ近くから聞こえてくる声に、深く俯いていた保が、ゆつくりと顔を上げた。

「く君のその痛み…この僕に出来ない…？」

顔を上げた保の目の前に浮かんでいたのは、小さな黒い影であった。不気味な雰囲気纏っていたが、その影から聞こえてくる声は、妙に澄んでいた。

＜僕がその痛みを力に変えて…痛みのない世界をつくってあげるから…＞

「痛みの、ない…？」

＜そう…＞

虚ろな瞳で聞き返す保に、影はそっと頷く。

＜一緒に…痛みのない世界をつくろう…？＞

「……っ」

その言葉を聞き、保はゆっくりと、その黒い影へと、手を伸ばした……—

『……………』

灰示から保の話を聞き終えたアヒルとエリザは、険しくも、どこか哀しげな表情を見せ、すぐさま口にする言葉も見つけられず、ただ黙り込んでいた。

——親は…いないので……—

——ずっと憶えていたら、笑うことすら出来なくなってしまいそうで……—

「……っ」

昼間と先程の保の言葉を思い出し、そっと俯くアヒル。あの保の言葉は、灰示による言葉ではなく、紛れもない、保自身の言葉だったのだ。

「それが…あなたがこの世界から、痛みを失くさなきゃいけない理由……？」

「そうだよ…」

少しの沈黙を置いて、やっと問いかけたエリザに、灰示が微笑んで頷く。

「悪意ある言葉を失くして、傷つく人間が存在しなくなるようにする…これが僕と、保の望み…」

「……っ」

灰示の言葉を聞き、アヒルが厳しい表情を作る。

「でもっ…」

同じく厳しい表情を見せ、言葉を挟むエリザ。

「そんなことしたって、彼の失ったものは、もうっ…」

「だからって…他の人間が傷つくのを、黙って見てていいって言うのかい…？」

エリザが言い終える前に、灰示がすかさず言い放つ。

「随分と心が狭いんだね、神様はっ…」

「……っ」

鋭く微笑む灰示に、エリザが眉をひそめる。

「僕は黙って見てたりなんてしないよ」

灰示がさらに口端を吊り上げ、笑う。

「僕はちゃんと救ってみせる。保と同じような痛みを抱く人間が、いなくなるようにしてみせる」

両手を広げ、自信を持って言い放つ灰示。

「僕が神となって、素晴らしい世界をつくってみせるよっ…」

広げられた両手の先から、いつの間にか構えられる、赤銅色の針。

「君たち、神を殺してねっ…！」

『……っ！』

冷たく微笑み、針を投げ放つ灰示に、アヒルとエリザが、険しい表情を見せた。

Word 12 救イ (1)

遊園地跡、ステージ付近。

「囁っ」

「んっ…?」

不治子との戦いを終え、静まり返ったステージ付近に立ち尽くしていた囁が、呼ばれる自分の名に、ゆっくりと振り返った。

「箆也、それにあなたは…」

「言ノ葉高校三年、オカルト同好会部長の箕島雅です」

「あら、そう。フフっ…」

囁が振り向くと、遊園地の入口の方から、それぞれヒロトと蛍との戦いを終えた、箆也と雅がやって来た。眼鏡の縁を指で押し上げながら、自己紹介をする雅に、囁がそっと微笑む。

「手を貸してもらったの…? 随分と苦戦したみたいね、箆也…」

「放っておけ」

笑みを向ける囁に、素っ気なく言い放つ箆也。

「それより神は？」

「あそこ…」

「んっ?」

箆也の問いかけに、囁が指差したのは、遊園地の遥かに奥。数々のアトラクションの向こうに、かすかに館のようなものが見えた。

「今は止んでるけれど…さっきまで、あそこから戦いの音がしていたわ…」

「神が戦っているのか?」

「銃の音も聞こえたから、たぶん…」

「……っ」

囁の言葉に、箆也が表情を曇らせる。

——“招かれざる客が二人来ている。自分一人のはずだったのに”って——

「……………」

先程のヒロトの言葉が思い出され、考えるように俯いた箆也は、険しい表情を見せた。

「浮かない顔ね…何かあった…？」

「少しな…」

問いかける囁に、箆也が短く答える。

「とにかく、朝比奈くんのもとへ急ぎましょう」

「ああ」

「ええっ…」

雅の言葉に箆也と囁が頷くと、三人はすぐに、奥へと駆け出していった。

遊園地最奥、恐怖の館。

「ううっ…痛つつつ…」

全身に細かい針を浴びたアヒルが、その表情をしかめながら、ゆっくりと起き上がる。

「大丈夫か…？ザベスっ…」

「エリザよっ…人の心配、する暇があったら…自分の心配してなさいっ…」

アヒルがゆっくりと横を向くと、そこには、同じように全身に細かい針を浴びた、エリザの姿があった。エリザも何とか起き上がり、いつもの通り、アヒルに強い言葉を投げかけるが、その声に、先程までの力強さはなかった。

「ちゃんとツボに刺さってんのかねえ？これっ…」

「これだけ刺さってるんだからっ…一本くらいは、刺さってるんじ

やないのっ？」

どこか暢気に言葉を交わしながら、決して暢気ではない、引きつった表情で、体に刺さった針の何本かを抜く、アヒルとエリザ。

「ハハハッ」

『……っ』

前方から聞こえてくる笑い声に、アヒルとエリザが同時に顔を上げる。

「いいザマだね、神様っ」

「クっ……」

両手に針を構えたまま、楽しげに笑う灰示の姿に、エリザは険しい表情を見せた。

「何とか攻撃をっ……そうだ！」

考えるように俯いたエリザが、何か思いついたように声を出し、すぐさま顔を上げる。

「君の残り二つの言葉はっ？」

「うえっ……!？」

エリザの問いかけに、アヒルが焦りの声を漏らす。

「それで何とか、突破口をっ」

「いやあ、それはあ、そのおっ……」

「何よ？ 歯切れが悪いわね。言ってみなさいよ？ 残りの言葉。私が作戦考えてあげるからっ」

「……っ」

さらに強く問いかけてくるエリザに、アヒルがそっぽを向くように、視線を逸らした。

「あ……“青くなれ”と、“赤くなれ”……」

「はっ……？」

アヒルの口から出た言葉に、エリザが大きな口を開けて、固まる。

「はあああっ!？」

しばらく間を置いた後、声を張り上げるエリザ。

「何よ、それ！ そんな言葉、数に入れてるんじゃないわよっ！」

「うっせえ！数えるかどうかは、俺の自由だろうがっ！」

「ハハハッ」

『……っ』

大きな声でモメていたアヒルとエリザであったが、入ってくる、もう聞き慣れたその笑い声に、眉をひそめ、再び正面を向いた。

「また笑われただろうがっ」

「だから、おかしくて笑ってるわけないでしょっ」

正面の灰示の方を向いたまま、二人が小声で言葉を交わす。

「まだ元気そうだね。じゃあ……」

灰示が、針を構えた両手を振り上げる。

「話すことすら、出来なくしてあげるよっ……！」

『……っ！』

勢いよく放たれる針に、アヒルとエリザが目を見開く。

「“倍^{ばい}せ”っ……！」

「うっ……！」

灰示の言葉を受け、赤い光を放った針が、その数を倍へと増やし、二人へと向かっていく。差し迫る針に、険しい表情を見せるエリザ。

「エリザっ……！」

「えっ……？きゃっ……！」

アヒルがエリザを横へと押し出し、針の直線コースから追い出す。

「アヒルっ……！？」

「クっ……！」

横へと倒れ込んだエリザが、戸惑うように呼びかける中、アヒルは素早く銃口を、自分のコメカミへと向けた。

「“上^あがれ”っ！」

銃から放たれた光を浴び、上へと飛び上がるアヒル。アヒルが居なくなり、灰示の放った針が、アヒルのすぐ後ろにあった壁へと突き刺さった。

「……っ」

飛び上がったアヒルを見上げ、そっと目を細める灰示。

「倍せ」…！」

灰示が上方へ向けて針を放ち、またしてもその数を増やして、宙を舞うアヒルへと向ける。

「クソっ…！」

上空で必死に動き、向かってくる針をすべて避けるアヒル。

「青くなれ」と“赤くなれ”は問題外としてっ、“上がれ”も攻撃の言葉ではねえっ」

針を避け、空中を移動しながら、アヒルが必死に考えを巡らせる。

「やっぱり、“当たれ”で何とかしねえとっ…！」

自分の中で結論を導き出し、すべての針を避け終えたアヒルが、空中で態勢を整え、右手の銃を、下方にいる灰示へと向ける。

“当たっ…！”

「撃つのかい？」

「……っ」

アヒルの言葉が、問いかける灰示の声に遮られる。

「この体は、保の体…僕を撃てば、同時に保を傷つけることになるんだよ？」

「うっ…！」

灰示の言葉に、アヒルの表情が険しくなり、引き金を引こうとしていた指が、勢いよく止まった。

「クっ…！」

「ハハハっ…！」

銃を構えたまま、その引き金を引こうとしないアヒルを見上げ、灰示が楽しげな笑みを浮かべる。

「そんな卑怯なっ…！」

「“卑怯”…？」

思わず声をあげたエリザの方を、灰示がゆっくりと振り返る。

「僕は別に脅しているわけじゃないよ…？攻撃したければ、すればいい」

エリザを見た灰示が、冷たい笑みを浮かべる。

「君たち五十音士が、そうしてきたように…」

「えっ…?」

「……っ」

灰示の言葉に、エリザが少し首を傾げ、空中のアヒルが、かすかに眉をひそめる。

「そうだろう…? 君たち五十音士は、言葉に傷ついた人間を、忌を倒すためと言って、傷つけてきた…」

灰示がエリザから、アヒルへと視線を移す。

「平気な顔で…」

「……っ」

微笑む灰示に、アヒルが複雑な表情を見せる。

「傷ついた者を甚振^{いたぶ}って、救ってやったと偉ぶって…何が五十音士っ…」

灰示が煩わしそうに、首を振る。

「何が神っ…」

「………」

突き刺すような灰示の視線を浴び、アヒルが、その視線から少し逃げるように俯く。

「傲慢だよね、ホントっ…!」

「……っ!」

灰示が上方のアヒルへ向け、針を一本、投げ放った。

「“爆^はぜろ”…」

「は、ぜ…?」

針を避けようと体を逸らしながら、聞き慣れぬ言葉に、首を傾げるアヒル。

「あっ…!」

大きく目を見開いたエリザが、上へと身を乗り出す。

「離れて! アヒル! 爆発するわっ…!」

「えっ…!?!」

エリザの叫びに、アヒルが焦りの表情となる。

「もう遅いっ…」

だがアヒルがその場を離れる時間も置かずに、灰示が微笑むと、その針は、強い赤色の光を放った。

——バアアアアン！

「うあああああっ…！！！」

「アヒルっ…！」

勢いよく爆発した針の衝撃を受け、アヒルが苦しげな叫び声をあげ、空中から力なく落下する。エリザは必死に体を起こし、アヒルの落下地点へと入り込んだ。

「うっ…！」

落ちてきたアヒルを、自分の体を下敷きにするようにして、何とか受け止めるエリザ。だが、エリザ自身も酷い傷を負っており、その衝撃に、強く表情を歪めた。

「ク、ソっ…」

「言葉の数に差がありすぎるわ…」

ゆっくりと起き上がるアヒルの体を、横から支えながら、エリザが厳しい表情で言い放つ。

「それに、君の友達のことを考えたら…ろくに攻撃することだって…」

「あいつが…」

「…っ？」

小さな声を発するアヒルに、エリザが顔を上げる。

「あいつが、取り憑いた忌だってんなら…保の体から、追い出すことが出来るはずっ…」

「そうか！そうすれば、忌である彼だけに攻撃をっ…！」

「無駄だよっ」

『…っ』

二人がやっと思いついた策を、すぐさま否定する灰示の声。

「八年もの時を共有して：僕と保は、互いの存在がなければ、生きていくことが出来ない状態になっている」

灰示が、鋭い視線を二人へと送る。

「保が死ねば、勿論、取り憑いている僕も死ぬし、保から僕が存在を切り離せば、保も死ぬっ」

『なっ：！』

灰示の言葉に、衝撃を走らせるアヒルとエリザ。

「そ、そん なっ：」

「残念だったね」

茫然とした表情を見せる二人に、灰示が針を投げ込む。

「“爆ぜろ”：」

『うっ：！』

赤く光る針に、二人の表情が歪んだ。

「うああああっ！」

「きゃああああ！」

爆発した針の衝撃に吹き飛ばされ、アヒルとエリザが、入口横の壁へと背中を叩きつける。鈍い音を響かせると、二人はその場に、力なく倒れ込んだ。

Word. 12 救い (2)

『うう…うっ…』

「ハハハっ」

床に倒れ込んだまま、かすかにしか体を動かすことも出来ず、苦しげな声を漏らすアヒルとエリザを眺め、灰示が満足げに笑う。

「ここまでのようだね、神様っ」

「グっ…!」

アヒルが両手で強く床を押し、必死に体を起き上がらせようとする。だが、今まで散々針も浴びてきて傷だらけの腕は、ろくに力が入らなかった。

「クソっ…」

思うように動かぬ体に、悔しげな表情を見せるアヒル。

「何とか、あいつをっ…!」

痛む体に表情をしかめながら、アヒルがそれでも必死に起き上がり、銃を灰示へと向ける。

「このっ…!」

——保から僕が存在を切り離せば、保は死ぬ——

「うっ…!」

思い出される灰示の言葉に、引き金を引こうとするアヒルの動きが止まった。

——この世界から、痛みを失くさなければならぬわけを……
——なんでっ…!なんでえっ…!!——

——君たち五十音士は、言葉に傷ついた人間を、忌を倒すためと言って、傷つけてきた……

「クっ…！」

思い出される灰示の言葉に、保の過去に、アヒルが苦しげに顔を歪める。保の過去はあまりにも悲しく、灰示の言葉は確かに事実で、それは、アヒルには、どうすることも出来ないことであった。

「クソっ…！」

もどかしい思いを胸に抱き、アヒルが唇を噛み締める。

「撃たないのかい？ 神様」

迷うアヒルの心を見透かすように、わざとらしく問いかけ、灰示が口端を吊り上げる。

「なら僕が、打つよ？」

「えっ…？」

唇を噛んでいたアヒルが、ふと顔を上げる。

「放て”^{はな}っ」

「うっ…！」

灰示が投げた大きめの針が、目にも留まらぬ速度で進み、あっという間に、アヒルの右肩を貫いた。

「う…あっ…」

針で貫かれた肩から、ボタボタと血を落としたアヒルが、力なく、構えていた銃を下ろす。下ろされた腕に、アヒルの真っ赤な血が流れる。

「ア、ヒルっ…」

倒れたままのエリザが、弱々しくアヒルの名を呼ぶ。

「うううっ…うっ…」

「苦しいかい？ 神…」

右肩を左手で押さえ込み、背を丸めて、身を縮めるアヒルを眺め、灰示がそっと問いかける。

「それが、“痛み”だよ」

「…っ」

灰示の言葉に、アヒルの表情が曇る。

「痛みを抱きながら、死ぬといい」

そう言い放つと、灰示が大きいめの針を、アヒルの上の天井へと投げ放った。

「“爆ぜろ”」

「……っ！」

アヒルの遥か頭上で針が爆発し、その爆発で崩れ落ちた天井の瓦礫が、下方にいるアヒルへと、勢いよく落下してくる。

「うっ…！」

満足に体を動かすことも出来ず、アヒルはただ、降ってくる瓦礫を見上げ、顔を歪めた。

——バアアアアン！

「うっ…！」

崩れ落ちる衝撃音が止み、アヒルがきつく閉じていた瞳を、かすかに開く。近くに瓦礫が落ちた気配は感じたが、思ったほどの衝撃は、体には落ちて来なかった。

「うう…！」

「えっ…？」

すぐ傍から聞こえてくる苦しげな声に気づき、アヒルがはっきりと目を開き、顔を上げる。

「エリザっ…！？」

「ううっ…！」

アヒルが顔を上げると、アヒルの上に覆いかぶさるようにして、落下してきた瓦礫の盾となったエリザの姿があった。背中に傷を負ったエリザが、険しい表情を見せている。

「エリザっ！」

倒れ込みそうになるエリザを支えるようにして、アヒルがその場に起き上がる。

「エリザっ…！」

「アハハっ…何だ、か…初めて会った時、みたいね…」

「えっ…?」

アヒルに背中を支えられながら、地面へと座り込んだエリザが、アヒルへと笑顔を向けると、アヒルは戸惑うように眉をひそめた。

——お前っ…!——

初めて会った時も、エリザは忌の攻撃から、今と同じように覆いかぶさるようにして、アヒルを守った。

「あっ…」

エリザの言葉を聞き、思い出したようにアヒルが声を漏らす。

「って、んな暢気なこと言ってる場合じゃっ…!」

“言葉で傷つけたんなら、言葉で謝れ”

「へっ?」

この状況で、まるで懐かしむように笑うエリザに、思わず怒鳴りそうになったアヒルであったが、その声はエリザの言葉に遮られた。

“言葉でちゃんと、相手に向き合え”

「エリザっ…?」

言葉を続けるエリザを、アヒルが戸惑うように見つめる。

「あの日、君が私にくれた言葉よ…朝比奈アヒル…」

「……っ」

まっすぐにアヒルを見つめ、そっと微笑むエリザに、アヒルがハッとしたように目を見開く。確かにその言葉は、酷い言葉を向け、相手に忌を取り憑かせてしまったエリザに、アヒルが放った言葉であった。

「エリザっ…」

「あの時、君は…五十音士でもなかったのに、私にそう教えてくれて、私に言葉で謝らせてくれた…」

少し目を細めたアヒルが見つめる中、エリザがさらに言い放つ。

「そして、神になった…」

「……………」

注がれる視線を、アヒルはまっすぐに見つめ返す。

「ねえ、朝比奈アヒル…」

エリザの白く細い手が、傷ついたアヒルの右手に乗る。

「君の武器は…この銃じゃない…」

銃を握り締めたアヒルの右手を握り締め、エリザが小さな声で、ゆっくりと呟く。

「五十音士の武器は…銃でも、針でも、拳でもない…」

穏やかな笑顔を浮かべ、エリザがまっすぐにアヒルを見つめる。

「君の武器は…“言葉”っ…」

「……っ」

エリザが口にしたその武器の名に、少し驚いた表情を見せるアヒル。

「言、葉っ…」

その言葉を、アヒルがゆっくりと、噛み締めるように繰り返す。

「言葉の力を信じて…自分の力を信じて…」

エリザがアヒルの手を握る手に、力を込める。

「安の神は…君なんだからっ…」

「……っ！」

伝えられる言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

——これが、あなたのやり方だろうか？——

——すべては神の仰せのままよ…アヒるん……

「……っ」

いつかの簞也と囁の言葉を思い出し、すべてのもどかしさが取れたような、引き締まった表情となったアヒルが、ゆっくりと左手をあげ、右手を握り締めるエリザの手を、上から覆うようにして握り締めた。

「エリザ」

「……っ？」

名を呼ばれ、エリザがゆつくりと顔を上げる。

「ありがとう」

「……勝ってから言いなさいっ」

「……っ」

礼を言うアヒルに、そう強気に言い返しながらも笑顔を浮かべるエリザ。そんなエリザを、そつと後ろの壁にもたれかからせるようにして座らせ、アヒルがゆつくりと立ち上がる。

「驚いたな。まだやる気なのかい？」

立ち上がったアヒルへ向け、前方に立つ灰示が、意外そうに言い放つ。

「その肩じゃ、もう銃を撃つことも出来ないだろう？」

「俺の場合、別に的を絞ってるわけじゃねえっ」

灰示の問いかけに答え、アヒルが右手の銃を、左手へと持ち替えた。

「引き金が引ければいい。左手で十分だっ」

「……っ」

今までとは異なる、迷いのない表情で、はっきりと言い放つアヒルに、その変化を感じたのか、灰示が多少、表情を曇らせる。

「へえっ、撃つ気なんだね」

すぐに曇らせた表情を笑顔へと戻し、灰示が余裕な口調を見せる。

「僕をっ…」

「撃つさっ」

「……っ」

すぐさま答えるアヒルに、少し目を見開く灰示。

「俺は安の神として、お前を許すわけにはいかない」

“許すわけにはいかない”…?」

アヒルの言葉を繰り返し、灰示がおかしそうに笑う。

「それは、保の痛みも否定するということでもいいのかな？」

「んなわけねえーだろっ」

「何っ…?」

アヒルがすぐに首を横に振ると、灰示は笑みを止め、眉をひそめた。

「俺は別に保の痛みは否定しない。お前がやってきたことを、やろうとしてることを、許さないつつってるだけだ」

「何をっ…」

その言葉に、馬鹿にするような笑みを浮かべる灰示。

「僕がやろうとしていることは、保の望んでいることでっ…」

「違うなっ」

「……っ」

強く否定するアヒルに、灰示が少し顔をしかめる。

「あいつがそんなこと、望むはずがねえ」

アヒルがまっすぐな瞳を、灰示へと向ける。

——その方、死んじやったんですか…？——

——良かった…——

「あんなっ…見ず知らずの敵の命まで心配するような奴がっ…」

——なんでっ…！なんでえっ…！！——

「誰よりもっ…“痛み”を知ってる奴がっ…」

アヒルが銃を握る左手に、力を込める。

「忌が増えまくって、みんなが痛みを怖がって生きなきゃいけないような世界っ、望むはずがねえよっ…！」

「……っ！」

その叫び声が部屋中に響き渡ると、灰示は思わず目を見開いた。「わかったような口をっ…」

今まで冷静な表情を見せてきた灰示が、怒りを示すように少しその声を震わせ、整った顔立ちを歪めて、両手の針を構える。

「君にとって保は、たかだか今日知り合ったばかりの人間だろうっ

？」

どこか挑戦的に、アヒルへと問いかける灰示。

「僕と保は、八年もの時を共有してきたんだ。保の望みなら、僕が誰よりも理解してっ…」

「俺はっ」

「……っ」

灰示の言葉が、アヒルの声に遮られる。

「俺は、一緒に過ごしてきた時間ぐらいで、友達を決めたりしないっ」

「友達っ…？」

アヒルの放った言葉に、灰示が意外そうに目を見開く。

「今日出会ったばかりの保が、友達？保のことを何も知らなかった君が、友達？」

「確かに過去は知らなかった。けど、知ってることだってある。言っただろ？」

「……っ？」

確かめるように問うアヒルに、灰示が少し眉をひそめる。

「お前の望みを、保は望んじやいねえってっ」

「……っ」

アヒルが自信の見える笑顔を向けると、灰示がその表情を、不快そうにしかめた。

「その口振りが気に入らないねえ！神様っ…！」

荒々しく声をあげ、灰示がアヒルへと両手の針を投げる。

Word 12 救い (3)

「倍せ”っ！」

その数を数倍に増やし、逃げる場所もなく、周囲を埋め尽くすようにして、アヒルへと向かっていく、無数の針。

「……………」

アヒルは落ち着いた表情を見せ、向かってくる針へ向け、左手で銃の引き金を引いた。

「その数の針は、“当たれ”なんかじゃっ…」

すべてを防ぎ切れるはずもないと、確信の笑みを浮かべる灰示。

「…………っ！」

だが、弾丸の光を浴びた針の一本が、空中で大きく軌道を変え、アヒルとはまるで違う方向へと飛んでいく。その一本を合図とするように、他の針も、次々にアヒルを避け、あらゆる方向へと飛んでいってしまった。

「な、何だっ…?」

すべての針がアヒルを避けると、灰示が戸惑うようにアヒルを見つめる。

「なんで針がっ…」

「“当たらねえーよ”！」

「…………っ！」

アヒルの発した言葉に、灰示が大きく目を見開く。

「“当たらない”：“当たれ”の否定形…」

「つまりは僕の“外れろ”と同じ…」

その言葉を、灰示と、二人の様子を見守るエリザが、冷静に分析する。

「そんな言葉があったとはねっ…」

「…………っ」

少し苦い笑みを浮かべる灰示に、アヒルはすぐさま銃口を向けた。

「当たれ」

「うっ：！」

躊躇いもなく、すぐさま引き金を引くアヒルに、灰示が焦ったように右手で新たな針を出す。

「弾^{はじ}け”っ：！」

向かってくる弾丸へ、針を投げる灰示。針は見事に弾丸に突き刺さり、弾丸を弾いて、天井へと飛ばす。

「こんなものっ：！」

「当たれ」

「何っ：！？」

弾いてすぐに、新たな弾丸が、灰示へと向かってくる。投げたばかりで、針を手を持っていない灰示は、少し焦ったように、向かってくる弾丸を見た。

「クっ：！ “外れろ”：！」

灰示の放った言葉に反応し、弾丸が大きく逸れ、天井へと上昇し、消えていく。

「ハアっ：ハアっ：！」

連続して言葉を使ったからか、初めて大きく息を乱す灰示。肩を揺らし、その表情からも、先程まであった余裕は消えている。

「本当に：撃つ気になったみたいだねっ：！」

「ああ。お前の望みは、俺がここで撃ち砕く」

「……っ」

はつきりと言い放つアヒルに、灰示が眉をひそめる。

「君の問いかけは気に入ってたけど：！」

乱していた呼吸をすぐさま整え、その表情を鋭くして、灰示が大きな針を、右手に構える。

「今の君の言葉は気に入らないよっ：！」

構えたばかりの針を、アヒルへと放つ灰示。

「“爆ぜろ”：！」

「……っ」

目つきを鋭くしたアヒルが、左手で銃を構える。

「無駄だっ、撃ち抜いた途端に、その針は爆発するっ」

「……“当たれ”っ！」

灰示がそつと微笑む中、引き金を引き、弾丸を放つアヒル。

「何っ…!？」

次の瞬間、大きく目を見開く灰示。アヒルの放った弾丸は、灰示の放った針のすぐ横を通り抜け、灰示自身へと向かってきた。

「僕へっ…!？」

針を迎撃すると思い込んでいた灰示が、向かってくる弾丸に、焦りの表情を見せる。

「“はっ…! うっ…!”

言葉を放とうとする灰示であったが、まだ『爆ぜろ』の言葉で放った針が発動していないため、他の言葉を発することが出来なかった。

「クっ…!」

「……っ」

迫る弾丸に、顔を歪める灰示。弾丸を放ったアヒルにも、赤く輝き始めた針が、差し迫った。

——バアアアアン!

弾丸の衝撃と爆発が同時に起こり、部屋の至る部分を吹き飛ばして、広い部屋中を爆風が包み込んだ。

「うっ…」

黒い煙に、壁にもたれかかっているエリザが、少し目を細める。

「あっ…」

だが目に入ってくる光景に、その細めた瞳を、再び開いた。

『ハアっ…ハアっ…ハアっ…』

それぞれに傷を負い、血を流したアヒルと灰示が、お互い床に膝をつき、苦しげな息を漏らしている。

「う、ううっ…」

もうすでにかなりの傷を負っていたアヒルは、今受けた爆撃により、さらに体全体が軋んでいた。気を抜けば、すぐにでも倒れてしまいそうである。

「うっ…」

「何故、だ…」

「…っ?」

軋む体を何とか支えるアヒルが、前方から聞こえてくる声に、ゆっくりとその顔を上げる。

「何故…理解しようと、しない…?」

アヒルの前方で、アヒルと向き合うようにして膝をついている灰示が、厳しくも、どこか戸惑うような表情を見せ、アヒルへと問いかけをする。

「僕のつくる世界は…僕が世界をつくればっ…世界から、悪意ある言葉はなくなるっ…」

睨みつけるように強くアヒルを見つめ、灰示が少し弱った声で言い放つ。

「人間はっ…“痛み”から解放されるんだっ…!」

「…っ」

声を張り上げる灰示に、アヒルがそっと目を細める。

「確かに…忌を増やして相手に痛みを返せばっ…人間は痛みを恐れて、悪意のある言葉なんて、言わないようになるかも知れねえっ…」

まだ乱れた呼吸で、言葉を少し途切らせながら、ゆっくりと呟くアヒル。

「でも、そんなことをしたらっ…この世界から、“言葉”までなくなっちまうっ…」

眉をひそめ、アヒルが険しい表情を見せる。

「いいじゃないか!言葉がなくなれば、傷つく人間がいなくなるということでっ…!」

「そんな世界、俺は嫌だっ」

「……っ」

灰示の主張を、強く遮るアヒルの声。

「嫌っ…？ハハっ、愚かしい言葉だね。神様っ」

アヒルを嘲笑うように、言い放つ灰示。

「そんな愚かな言葉が言えるのはっ…君が傷つく“痛み”も、失う恐怖も知らないからだよっ…！」

「……っ」

大きく叫ぶ灰示に、アヒルがそっと目を細める。

「知ってるさっ…」

「何っ…？」

ゆっくりと答えるアヒルに、灰示が表情を曇らせる。

——兄ちゃんなんかっ…！いなくなればいいんだっ…！！——
かつて、幼い自分が放った言葉。

「言葉に潜む…その残酷さもっ…」

——アーくんっ……—

思い出される、優しい笑顔。

「言葉で…大切な人を失ってしまった悲しみもっ…」

細めた瞳で、どこか遠くを見るように過去のことを思い返しながら、アヒルが辛そうな表情を見せる。

「人は、一時の感情に吞まれて…言おうとも思ってた言葉の口にする…」

銃を握り締めた左手を、そっと左胸に当てるアヒル。

「挨拶するより簡単につ…相手を傷つける言葉を放つ…」

「……ああっ」

アヒルの言葉に、灰示が笑顔で頷きかける。

「よくわかっていないか、神様」

まるで褒めるように、アヒルへと笑顔を向ける灰示。

「そうなんだよっ…！だからこそ、悪意の潜む、“言葉”なんてものはっ…！」

「けどっ…！」

「……っ」

強く放たれるアヒルの声に、灰示が思わず言葉を呑み込む。

「言葉に…“悪意”が潜んでいたとしてもっ…それでもっ…」

少し乱れた息で、必死に言葉を続けるアヒル。

——安の神は…君なんだからっ……

「諦めそうになった時、もう一度、立ち上がる勇気をくれたりっ…」
先程のエリザの言葉を思い出し、胸に手を当てたアヒルが、穏やかな笑みを浮かべる。

——アヒル！パワーの源、『恋盲腸』だ！これを読み、これを！

——

——何でも言ってよ、アヒル君…僕が憑いてるから……

——アーくん！喰らえ！レタスミサイルうゝ！——

「どうしようもない悲しみに、潰れそうになった時…泣きそうなくらいの温もりをくれるようにっ…」

家族の笑顔を思い出し、アヒルがさらに、晴れやかに笑う。

「言葉の中には、“救い”もあるって…俺はそう、信じてるっ…！」

「……っ！」

アヒルの力ある言葉に、まるで気圧されるように、唇を噛み締める灰示。

「アヒルっ…」

見守るエリザは、まるで眩しいものでも見るように、そっとその

瞳を細める。

「何をっ…」

少し戸惑うような声を発しながら、アヒルの言葉を必死に否定しようとして、小さく首を横に振る灰示。

「何が、“救い”っ…」

アヒルの言葉を繰り返して、灰示が少し声を震わせる。

「それがっ、神の戯言だと言ったっ…！」

「……っ」

大きな声で叫んだ灰示が、右手に一本の針を構え、アヒルに投げ放とうと振りかぶる。銃をまだ胸に当てたままのアヒルは、その灰示の動作に、驚きの表情を見せた。

「アヒルっ…！」

「クっ…！」

エリザが身を乗り出す中、アヒルが表情を歪ませる。

「これで終わりだっ…！安の神っ…！」

アヒルへ、針を投げようと、手を振り下ろす灰示。

——また明日なっ、保！——

「ううっ…！」

「えっ…？」

急に針を投げようとしたその手を止める灰示に、アヒルが思わず戸惑いの声を漏らす。

「な、何だっ…？」

構えていた針を力なく地面に落とし、灰示が苦しげに頭を抱える。

「これは…保の、記憶っ…？ううっ…！」

割れるように、激しく痛み始める頭を両手で抱えた灰示が、地面に膝をついたまま、身を屈める。

「うううっ…！」

「……っ」

苦しむ灰示を、まっすぐに見つめるアヒル。

「あれはっ…」

——グウウウウっ…！——

——有り得ない…宿主の人間が…忌の動きをコントロールするな
どっ…——

それは、紺平に取り憑いた忌が、紺平の、アヒルを助けようとする意志に妨げられ、苦しんでいた姿とよく似ていた。

「保っ…」

灰示の中の保の意志を感じ、アヒルが目を細める。

「うっ…！ううっ…！」

アヒルが見つめる中、さらにひどく、苦しみもがく灰示。

「何、だっ…！これはっ…！」

声を途切らせながら、灰示が戸惑うように叫ぶ。

「頭の中につ…入り込んでくるっ…！」

灰示が痛みを堪えるように強く唇を噛み締め、思わず目を伏せる。

「ううううっ…！！！」

——すべてが燃え尽きた時、そこには絶望しか残ってなかった。

そこには、“悲しい”とか“辛い”とかしか残っていないくて、な
らもう、全部、忘れてしまおうと思った。

“嬉しい”も“楽しい”も、すべて捨てて。

「今日は色々ありがとうございました、朝比奈くん」

「あっ？ああっ、おうっ」

一日の授業が終わり、皆が帰ろうとしたその時、保は、隣の席に
座るアヒルへ、礼を言った。教科書を見せてもらったり、昼休みの

弁当事件では色々失礼な発言をしたので、それに対しての礼であった。

「つつーか、朝比奈じゃなくてアヒルでいいぞっ」

「えっ…!?!」

アヒルが素っ気なく放った言葉に、保は声を裏返し、派手なりアクシヨンで驚いた。

「こ、こんな平凡極まりない名前の俺なんかが、そんな面白い名前を呼んじゃっていいんですかぁ!?!」

「だから、ブン殴んぞ! お前っ!」

「ひえええ〜!」

殴りかかろうとするアヒルに、保が両手で頭を抱え、本気で怯える。

「まあまあ、ガアっ」

二人の間に割って入った紺平が、アヒルに宥めるように声を掛ける。

「面白い名前なのは事実なんだし」

「お前ねっ…」

笑顔ではつきりと言い放つ紺平に、アヒルが少し顔をしかめながら、振り上げていた手を下ろす。

「俺のことも紺平でいいよっ? 保くんっ」

「ええっ…!?!? そんなっ…!?!? こんな腕長すぎて、制服のサイズ合っていないような俺がっ…!?!」

「もういいって」

相変わらずの自虐的な言葉を叫ぼうとする保を、紺平が引きつった笑みで止める。

「帰りましょう…?!? アヒるん…!」

「へっ? あ、ああっ」

そこへ籠也と囁が、アヒルを迎えに来たように、三人のもとへとやって来た。

「転校生クンも一緒にどう…?!」

「あ、いえ！俺はちよつと先生のところに行かなきゃなんでっ…！」

「そう…残念っ…フフっ…」

「あああゝ！俺みたいな典型的日本人が、一丁前にお誘いを断っちゃって、すみませんゝっ！」

「うるさい奴…」

囁の誘いを断り、それに対して、何故か勝手に、罪の意識に苛さいまれてる保に、箆也が呆れきった表情を見せる。

「じゃあ帰るか」

「うん。明日、遅刻しないようにねっ？保くんっ」

「あ、は、はいっ！」

風紀委員らしい紺平の言葉に、保がしっかりと頷く。

「じゃあ、また明日な、保！」

「……っ！」

箆也、囁、紺平に続くようにして席を立ったアヒルが、保の方を振り返り、笑顔でそう言い放つ。その言葉に、保は思わず目を見開いた。

「ガアも遅刻厳禁ねっ」

「わあってるよっ」

「私が叩き起こしてあげるわよ…アヒるん…」

「頼むから、普通に起こしてくれ」

「………」

教室を出て行くアヒルたちの背中を、まっすぐに見つめる保。アヒルたちが出て行った後も、保はしばらく、四人の出て行った前扉を見つめていた。

「“また、明日”…」

アヒルが放った言葉を、ゆっくりと繰り返す保。

「……っ」

保の表情から、笑顔が零れ落ちた。

楽しい。

楽しい。

“楽しい”なあ…。

「ずっと憶えていたら、笑うことすら出来なくなってしまいそうで…ならいっそ、楽しかった思い出ごと、忘れた方がいいと思ってっ」
そう言った保に、アヒルが言った言葉。

「この痛みを忘れたら、俺は一生…：本当の笑顔で、笑えなくなる
気がするからっ…」

「……っ」

胸を突き刺した、アヒルの言葉。

“ねえ…俺でもまだ…：本当の笑顔で、笑えるかなあ…？”

――

「うううっ…！！」

頭を巡る保の記憶に、保の声に、灰示が強く閉じていた瞳を、大きく見開く。

「違うっ…！違うよ！保っ…！」

灰示が俯いたまま、自分の中にいる保へ向け、必死に叫ぶ。

「こんな痛みは忘れなきゃっ…！！こんな痛みは失くさなきゃいけないだっ…！」

声を震わせ、叫びを続ける灰示。

「だからっ…！僕はっ…！！」

灰示が大きく目を見開いたまま、深く俯いていた顔を勢いよく上げる。

「……っ」

顔を上げた灰示の視界に入るのは、保の記憶の中に出てきたアヒルの姿。

「僕たちをつ、惑わせるなあっ……!!」

「……っ！」

今までになく感情を全面に出し、叫び散らした灰示が、アヒルへ向けて、数本の針を放つ。放たれた針に、アヒルは表情を鋭くし、素早く左手の銃を構えた。

「保を惑わせてんのはっ……お前だろっ!？」

アヒルも強く叫び、迷いなく引き金を引く。

「爆ぜろ”っ……!”

“当たれ”っ!”

同時に放たれる、言霊。

——バアアアアン!

Word 12 救イ (4)

「うっ…！」

それぞれの言葉を受けた弾丸と針が正面からぶつかり合い、激しい衝撃を生む。吹きつける強い風に、戦いを見守るエリザは、思わず目を細めた。

「ここに来て…言葉の威力が上がってるっ…」

先程よりも強い衝撃で、揺れ動く館全体に、驚きの表情を見せるエリザ。

「なんて戦いなっ…」

エリザが目を見張り、爆煙の晴れていく部屋の中央を見つめる。

「はあっ…はあっ…」

灰示の爆撃を受け、さらにその傷を増やして、床に膝をついているアヒル。血の流れ落ちる額を押さえ、苦しそうに呼吸をしている。血を流し過ぎたのか、目が霞み始め、意識も朦朧とし始めていた。

「う、うう…うっ…」

一方、アヒルの弾丸を直に喰らい、床に倒れ込んでいた灰示は、傷だらけで血の流れ落ちる体を必死に起き上がらせながら、苦しいな声を漏らす。

「何故…何故、なんだっ…？」

上半身を起こし、誰にともなく問いかける灰示。

「何故っ…僕の邪魔をするんだっ…？保っ…」

そう言って灰示が、まだ激しく痛む自分の頭へと左手を触れる。

灰示の問いかけている相手は、灰示の中にいる保であった。

「神の、言葉がっ…」

——言葉の中には“救い”もあるって…俺はそう、信じてるっ！
！——

「あんな…言葉がっ…」

先程のアヒルの言葉を思い出し、大きく顔を歪める灰示。

「君の痛みをつ…救ったとも言うのかっ…!!?」

「波城っ…」

自分の中の戸惑いを前面に押し出すように、激しく声を荒立てる灰示を、アヒルが目を細め、見つめる。

「そんなの…認めないっ…」

灰示が急に、声を低くする。

「僕は…認めないっ…!!」

言葉とともに勢いよく立ち上がった灰示が、素早く両手に針を構える。

「“倍せ”っ…!!」

針をアヒルへと放ち、言葉でその数を倍へと増やす灰示。

「…っ」

向かってくる針に、アヒルが少し考え込むような表情を見せた後、すぐに立ち上がり、左手の銃を自分のコメカミへと向けた。

「“あ…………”」

誰にも聞き取れないほど小さな声で、“あ”のつく言葉を呟くアヒル。

「……っ！」

赤い光に包まれたアヒルの体が、空中へと飛び上がる。

「“上がれ”だろっ!!?読めてるんだよっ…!!」

飛び上がったアヒルに、初めからアヒルの行動を予想していたかのように、構えていた大きめの針をすぐさま投げ放つ灰示。

「“放て”っ…!!」

「うっ…!!」

飛び上がっている最中のアヒルへと、高速で放たれる一本の針。銃を構える暇もなく、アヒルが表情を歪める。

「うううっ…!!」

次の瞬間、灰示の針が、アヒルの左胸へと、勢いよく突き刺さった。

「あっ……」

その光景に、大きく目を見開くエリザ。

「アヒルううううっ……!!」

エリザの悲痛な叫び声が、広間中に響き渡る。

「ハハハっ……」

エリザの叫びを聞きながら、針の突き刺さったアヒルの姿を見上げ、喜びの笑顔を向かべる灰示。

「ハハハハハっ……!!」

灰示が喜びに溢れる、大きな笑い声をあげる。

「やったあ！やったぞ！ついに神をっ……！これで！これで僕はっ……！」

——パアアアアン！

「何っ……!!?」

灰示が勝利を確信し、高々と叫びあげていたその時、左胸に針の突き刺さったアヒルの体が、赤い光の粒となって、勢いよく弾け飛んだ。その光景に、灰示が笑みを一瞬で消し、大きく目を見開く。

「こ、これはっ……!!」

「“欺^{あやむ}け”……」

「……っ!!」

背後から聞こえてくる声に、すぐさま振り返る灰示。

「なっ……!!」

「…………」

灰示が振り返った、すぐ先に立っているのは、灰示へと銃口を向けた、鋭い表情のアヒルであった。勿論、その左胸に、針の刺さった傷などない。

「新たな言葉をっ……!!?」

「欺きの、弾丸っ…」

アヒルを見つめ、灰示とエリザがそれぞれ、驚きの表情を見せる。

「これで終わりだ、波城灰示っ！」

「うっ…！」

強く言い放つアヒルに、灰示が思わず顔を歪める。

「クっ…！」

「…っ」

針を構えようとする灰示に、アヒルが迷いなく、引き金を引く。

「“当たれ”っ…！！」

——パアァン！

響き渡る、銃撃音。

「うっ…！」

向かってくる赤い光の弾丸に、針を構えることも出来なかった灰示は、どうすることも出来ず、ただ強く表情を引きつり、唇を噛み締めた。

「うあああああっ…！！」

アヒルの弾丸に貫かれ、灰示が後方へと吹き飛んでいく。

「うっ…！あっ…」

背中から、床へと倒れていく灰示。

「僕、はっ…」

高く、天井を見上げながら、灰示がそっと小さな声を漏らす。

「僕、はっ…世界から…“痛み”をっ…」

灰示の背中が、床へと落ちる。

「“痛み”を…なく、すっ…うっ…」

その言葉を最後に、灰示は深くその瞳を閉じ、床に倒れ込んだまま、指一本動かすことはなかった。

「……………」

構えていた銃を下ろし、どこか切なげな表情で、倒れた灰示をまっすぐに見つめるアヒル。戦いの終わりを知っているのか、下ろされた銃が、アヒルの手の中で、言玉の姿へと戻る。

「アヒルっ」

「あっ？」

名を呼ばれ、アヒルがゆっくりと振り返る。

「エリザっ…」

アヒルのもとへとゆっくりと歩み寄ってくるのは、傷ついた足を引きずるようにしている、エリザであった。エリザは大きな笑顔を、アヒルへと向ける。

「やったわねっ、本当に波城灰示を倒したじゃないっ」

「ああ…」

「……っ？」

あまり浮かない表情で、小さく頷くアヒルに、エリザが不思議そうに首を傾げる。

「何？あんまり嬉しくなさそうじゃない？」

「うう…んっ…」

エリザの問いかけに、少し唸るような声を漏らしたアヒルが、再び倒れている灰示の方を見つめる。

「やり方は間違ってるって思うけど、こいつの、“痛み”をなくしたいって気持ちだけはっ…」

灰示を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「やっぱり…そんなに間違ってたようには、思えなくてさっ…」

「……っ」

アヒルのその言葉に、エリザも同じように目を細めた。

——だから、いつまで経っても、傷つく人間が減らないっ…——

——人間は“痛み”から解放されるんだっ…！——

必死に叫ぶ灰示のその思いは、ひどく純粋なもののように思えて、それをすべて否定することなど、アヒルには出来なかった。

「いいんじゃない？君がそう思うなら、それで」

「へっ…？」

あっさりと肯定するエリザに、アヒルは少し戸惑うように振り向く。

「君が無理に、彼を“間違っている”と思う必要はないわ」

「……そっか」

エリザの言葉もらい、アヒルはどこか安心したような、そんな笑みを浮かべた。

「さあ、早く君の仲間のところへ行って、傷をっ…」

「うあっ…」

「えっ…？」

急に声にならない声を漏らしたアヒルが、力なく体を傾け、その場に倒れ込んでいく。

「俺、もうっ…限界、かもっ…」

「アヒルっ…！」

倒れていくアヒルを、エリザが抱きとめるようにして受け止め、アヒルを胸に抱えたまま、その場に座り込む。

「アヒルっ…！？」

「すうーっ…すうーっ…」

「……っ」

体の向きを変え、アヒルの顔を覗き込んだエリザであったが、穏やかな表情を見せ、気持ち良さそうに寝息を立てているアヒルに、安心したように笑みを零した。

「アハハっ、何かこれも、初めて会った時と同じね」

エリザが、アヒルの寝顔を見つめながら、どこか懐かしむように笑う。

——ゴゴゴゴゴゴっ…！

「……っ？」

微笑んでいたエリザが、上方から聞こえてくる、響くような重い音に気づき、ふと眉をひそめ、顔を上げる。高い天井からは、パラパラと天井の破片のようなものが落ちてきており、柱や壁、広間全体が、大きく揺れ動き始めた。

「派手に戦ってたからね…崩れ落ちるのも時間の問題って感じか」
表情を曇らせながら、エリザが冷静に呟く。

「アヒル抱えて、入口まで走ってる時間もなさそうだし、それにつ…」

「……………」

エリザが動かした視線の先には、床に倒れている灰示の姿があった。

「仕方ないわね…」

そう言つてエリザが、右手を懐に入れる。懐から取り出したのは、緑色の、小さな宝石のような玉であった。

「第四の音、解放…」

エリザがそう言葉を発すると、その玉が強い緑色の光を放ち、玉を持っていたエリザの右手へと、吸い込まれるようにして消えていく。すると今度は、エリザの右手の指先が、緑色の光を放ち始めた。
「……………」

顔つきを鋭くし、エリザが輝く指先を、崩れ落ちてくる天井へと掲げる。

「“描^{えが}け”っ…!!」

———パアアアアンっ！

Word 13 戦イノオワリ (1)

「んっ…」

アヒルが深く閉じていた瞳を、ゆっくりと開く。

「俺っ…」

「ようこそ、地獄へっ…フフフっ…」

「へっ…？」

目を開いたアヒルの視界いっぱいに入り込んでくるのは、不気味に微笑んだ囁の顔。

「うぎゃあああああっ！」

思わず悲鳴のような声をあげ、勢いよく起き上がったアヒルが、すぐ傍に座り、アヒルの顔を覗き込んでいた囁から、地面に腰を下ろしたまま、手足を動かし、逃げるように距離を取る。

「って、痛てててっ…！」

大きく動いたアヒルが、急に体中に走る痛みを感じ、その場にうずくまった。

「まだすべて傷を塞いだわけじゃないんだ。無暗に動くな」

「か、箆也っ」

うずくまっていたアヒルのもとへと歩み寄ってきて、そう声を掛けたのは、箆也であった。箆也を見上げたアヒルが、少し驚いたような顔を見せる。

「お前ら、無事だったんだなっ」

「当たり前だろう」

安心したような笑顔を見せるアヒルに、箆也は腕を組み、素っ気なく答えた。

「この通り、私はピンピンしてるわ…」

「っっーか、マジで地獄かと思っただろうがよっ」

「フフフっ…そう…？」

再びアヒルのすぐ横へとやって来た囁が、少ししかめた表情を向

けるアヒルを見て、満足げに微笑む。

「朝比奈くん」

「へっ？」

近くから聞こえてくるもう一つの声に、アヒルが戸惑うように振り向く。

「み、雅さん!？」

箆也や囁と並ぶようにして立っている雅に、驚きの表情を見せるアヒル。

「傷以外に痛むところや、体で動かしにくい場所などは、ありませんか？」

「へっ？あ、いやっ、別にねえーけどっ…」

「それは良かった」

アヒルの答えを聞き、雅が穏やかな笑顔を見せる。

「な、なんで雅さんがここにっ…？」

「為の神の命で冷やかに来たそうだ」

「扇子野郎のっ？」

代わりに答える箆也に、アヒルが目を丸くする。

「箆也はその冷やかしで来た彼に、とても助けられたみたいよ…？」
「囁」

「フフフっ…」

余計なことを言うなとばかりに名を呼ぶ箆也に、囁がどこか楽しげに笑う。

「そっか…って、そーいや俺っ…!あ、あれっ？」

何かを思い出したように顔を上げ、周囲を見回したアヒルが、周りに広がる光景に、戸惑うように首を傾げる。そこは暗い空の広がる屋外で、遊園地の広場のような場所であった。

「俺…恐怖の館に居たはずじゃっ…」

「ああ、あれのことか？」

「あれっ？」

箆也の言葉を聞き、アヒルが箆也のしている先へと視線を送る。

「あっ…！」

アヒルが動かした視線の先にあったのは、アヒルが足を踏み入れた頃の姿など、見る影もなく崩れ落ちた、恐怖の館の残骸であった。ただの瓦礫の山と化している館に、アヒルが啞然とした表情を見せる。

「な、なんでっ…」

「崩れ落ちちゃったのよ…派手に戦い過ぎたんじゃない…？フッフ…」

「えっ？」

微笑む囁の言葉に、アヒルが少し驚いた顔となる。

「けど俺、あんなどこから、どうやって外に…」

「ああ、それは彼女がっ…」

「こちらでしたか」

『……っ』

戸惑うアヒルに籠也が答えようとしたその時、よく響く凜とした声が入って来て、二人は言葉を止め、同時に振り返った。

「あっ…！あんたはっ…！」

「十時間ぶりくらいですわね、安の神」

その場に現れたのは、着物姿の美しい少女。昼間に突然、アヒルたちの前へと現れ、灰示の討伐を依頼していった、言姫、和音であった。同じ黒色の着物を着た従者を、数名連れている。

「なんで、あんたがここにっ…」

「僕が連絡した」

「十一時十分前でしたので、仕方なく、出て差し上げましたわ」

籠也が答えると、その着物姿には似合わぬ携帯を持ちながら、和音がどこか含みのある笑みを浮かべた。

「わたくしの依頼を、見事に聞き届けて下さって、ありがとうございます
いました。安の神」

「へっ？」

急に礼を言われ、アヒルが間の抜けた声を漏らす。

「あなたのお陰で、波城灰示は倒れ、もう一人の神も、無事に救出することが出来ましたわ」

「もう一人の、神っ…?」

和音の言葉に、アヒルがしばらく考え込むように間を置く。

「ああっ…!!」

急に思い出した様子で、大きな声をあげるアヒル。

「やっべ! そういや俺っ、波城のことでもいいっばいで、もう一人の神のこと、すっかり忘れてたっ!」

焦ったように、アヒルが言葉を放つ。

「そーいや波城に捕まってるんだったよなっ! ? やっべえ! 一体、どこにいったあっ! ?」

「えっ…?」

もう一人の神を探すように、必死に周囲を見回すアヒルに、和音がどこか驚いた表情を見せる。

「神なら、ずっとあなたと一緒に居ましたよ」

「へっ?」

和音の言葉に、アヒルが目丸くする。

「何言ってるんだあ? 俺がずっと一緒に居たのは、保とザベスでっ…」

「はあ…」

「……?」

戸惑うように呟くアヒルに、和音が少し呆れるように、深々と肩を落とす。そんな和音の様子に、アヒルが戸惑うように首を傾げた。「安の神に、自分が神であること、お話していらっしやらなかったのですか?」

そう問いかけながら、和音がそっと後ろを振り返る。

「“衣えの神”」

「えっ! ?」

「へっ…?」

和音が振り返った先で、深々と地面に座り込んでいたのは、先程までアヒルと共に灰示と戦っていた、エリザであった。和音の言葉

に、焦ったように声を出すエリザと、そんなエリザを見つめ、しばしの間、固まるアヒル。

「えええええっ!? ザベスがあああ! ?」

「エリザよっ!」

両手で頭を抱え、激しく驚くアヒルに対し、エリザが名前の呼び名の訂正だけをしっかりと入れる。

「って、“えのかみ” って何だ?」

『あららっ』

驚いたわりには、不思議そうに首を傾げるアヒルに、エリザや和音たちが一斉に肩を透かす。

「安附の君たち、戦いの最中から言おうと心に決めてたけど、神への教育がなっていないんじゃないの?」

「まったくだな」

「言い返す言葉もないわね…フフっ…」

「ちったあ反論してくれよっ…」

エリザの指摘に、うんうんと頷く箆也と囁を見て、アヒルが少し落ち込んだ表情を見せる。

「衣の神は五十音、第四の音“え”の力を持つ者。“五神”^{いつがみ}の一人で、衣団^{えだん}に属する五十音士を束ねる方だ」

「まあつまり、アヒルと同じ“神様”というわけ…フフフっ…」

「えええええっ!? ザベスが神様あああっ! ?」

「だからエリザだっつってんでしょうがっ」

改めて驚きの声をあげるアヒルに、エリザがもう一度、名前の訂正を入れる。

「んなっ…! なななななっ…!」

「本当に言ってなかったようですわね」

「アハハっ…色々あって、つい言いそびれちゃったっていうかっ…」

まだ信じられないといった表情を見せているアヒルに、和音が少し呆れたように、エリザを見る。するとエリザは、誤魔化すような、苦い笑い顔を和音へと向けた。

「衣の神には、箆也から報告を受ける以前から、この言ノ葉町で、忌増発の原因を探っていたಿದೆいたのです」

和音がアヒルの方を向き、経緯を説明するように、言葉が続ける。「わたくしが“安の神が目醒めた”という報告を聞いたのも、彼女からでしたのですが…」

「えっ？」

和音のその言葉に、驚きの表情を見せるアヒル。

「じゃあ、あの時…お前が忌に襲われてたのってっ…」

「調査の一環よ」

戸惑うように見つめるアヒルに、エリザはすぐさま答えを放った。

「まあ、どの程度の言葉で忌が取り憑くかって、軽い気持ちで試しちゃったことは反省してるけどっ」

「本当、神として、あるまじき行為でしたわよねえ」

「うっ…」

どこか棘のある口調で言い放つ和音に、思わず顔をしかめるエリザ。

「おまけに、巻き込んだじゃった一般人は安の神で、ホント、色々あった調査だったわっ」

「……っ」

困ったような笑みを浮かべるエリザに、アヒルがやっと驚きをおさめ、落ち着いた表情を見せる。

「エリザが神…」

——私だって、一般人の家鴨あひるくんを巻き込むわけにはいかないのよっ！——

——うちへの任務だったのに、ったくっ……——

「ああっ…」

エリザが神であったと、そうわかると、今までのエリザに対しての疑問が、すべて自動的に解き明かされていくようであった。忌の

存在を知っていたことも、何故、この場で再び出会ったのかも、すべてに納得がいく。

「そういう、ことだったのかっ…」

「館が崩れ落ちた時も、衣の神が“え”の力を使って、あなたたちを外まで連れ出したんだ」

「へっ？ エリザが？」

「ああ」

聞き返すアヒルに、籠也が短く頷く。

「でなきゃ、アヒルん…今頃、あの瓦礫の下で生き埋めよ…？ フフッ…」

「不気味に言うな。夢に見る」

まるで脅すように耳元で呟く囁に、アヒルが少し引きつった表情を見せる。

「ありがとうなっ、ザベス」

「エリザよ」

アヒルが笑顔を見せ、礼を言うのと、エリザはいつものように、きつちりと呼び名の訂正を入れた。

「まあっ、あれくらい、私の力を使えば簡単でっ…」

「そういえば、衣の神」

「勢いよく割って入ってくるわね…言姫…」

得意げに話そうとしたエリザであったが、自分のペースを乱さない和音に、あっという間に言葉を遮られ、少し引きつった笑みを見せる。

「あなたの付き人が、どうしても来たいと言って聞かなかったので、同行を許可しましたわよ」

「げっ…」

「付き人？」

和音の言葉に、エリザがさらに嫌そうに顔を引きつり、アヒルが首を傾げる。

「付き人って、エリザの仲間のこっ…」

「エリザ様 ああっ!!」

「どわあああっ!」

問いかけようとしたアヒルのすぐ目の前へと、空から降ってくるようにして突如、人が現れ、アヒルは思わず大きな声を出して、体を逸らした。

「って…」

「エリザ様 ああっ!」

「に、忍者っ…?」

アヒルの目の前へと降りてきたのは、本物の忍者のような装束を纏った、長い黒髪を一つに束ねている、黒く大きな瞳の少女であった。年はアヒルたちよりも少し下くらいであろうか。忍者のような装束ではあるが、その色は派手な緑色で、どこに居ても目立ちそうである。

「ご無事でっ…! ご無事で何よりでございますうっ!」

「ああ、ハイハイっ…」

大きな瞳に涙を浮かべ、至近距離まで駆け込んでくる、その忍者の少女に、エリザがどこかうんざりしたような表情を見せる。ハーフのエリザと、忍者の組み合わせというのも、妙な違和感がある。

「エリザ様にもしものことがあればっ…! 私ほっ、私はっ…!」

言葉を詰まらせながら、感情の高ぶっている様子で、さらに声を張り上げるその少女。

「大好きな大福モチすら食べられないほど、三日間、落ち込むところでしたあっ!」

「わりかし小さい落ち込みようだな…」

叫びあげる少女のその言葉に、アヒルが思わず突っ込みを入れてしまう。

「ああ、ハイハイっ、この通り、無事よっ。そこの家鴨クンのお陰でね」

「うえっ?」

エリザに指を差され、アヒルが目を丸くする。

「アナタ様が安の神でございますねっ…！」

「うおっ」

急激に接近してくるその少女に、驚き、思わず後ずさるアヒル。

「我が神を助けていただき、誠にありがとうございましたあ！この御恩っ、墓に入っても忘れませんっ！」

「いや、そこまで行ったら忘れろよっ…」

少女の必死の叫びに、アヒルが引きつった表情で、突っ込みを入れる。

「っつーか、我が神ってことは、お前はっ…」

「はいっ！私、衣団、衣附えつきが一、“計守”けもり、慧左衛門子けいざえもんこと申します！

「俺が言うのも何だけど、変な名前だな…」

アヒルの前で片膝をつき、笑顔で名乗る忍者の少女のその名に、アヒルが少し顔を引きつる。

「普段は慧けいとお呼び下さいませっ！」

「はあ…」

大きな笑顔を見せる慧に、強く突っ込みを入れることも出来ず、大人しく頷くアヒル。

「まあ見ての通り、うちの連中は、個性強いのが多くって。うつ…」

「エリザっ？」

「エリザ様っ…！」

どこか困ったように、少し肩を落として話していたエリザが、急に顔をしかめ、身を屈める。そんなエリザにアヒルは首を傾げ、慧はすぐさま駆け寄った。

「お前、傷っ…！」

「僕が治そう」

「大丈夫っ」

「えっ…？」

心配する表情を見せたアヒルの横から、簞也が名乗り出るように前へと出たが、そんな簞也に、エリザは軽く右手を突き出した。

「だがっ…」

「他団の人間の手を煩わせるまでもないわ。慧っ」

「はっ！」

エリザに名を呼ばれると、慧がその場に膝をついたまま、懐へと手を入れ、緑色の宝石のような玉を取り出した。

「言玉っ…」

「五十音、第九の音“け”、解放っ」

慧がそう言って、緑色の淡い光を放つ言玉を投げ放つと、言玉は慧の長い黒髪へと吸い込まれるようにして消えていく。言玉を吸収した途端、慧の髪留めが取れ、その黒髪がまるで浮き上がるように、大きく広がった。

「“消^けせ”っ…！」

慧の黒髪から放たれた強い光が、エリザの体全体を包み込む。

「あっ…」

すると、その言葉の通り、見る見るうちに、エリザの全身の傷が消えていく。掻き消えていく傷を、驚いたように見つめるアヒル。

「“け”だけに、毛っ…」

「フフフっ…言うと思った…」

どうやら違うところに感心を寄せていたらしいアヒルに、囁が楽しげに笑みを零す。

「それにしても…なかなかの治癒能力ね…」

「あれくらい、僕なら二秒だ」

「フフフっ…負けず嫌いっ…」

囁が慧の力に感心していると、隣に立つ箆也が、どこかムキになるように様子で言い放った。

「ふうっ」

粗方、傷を消し終わると、慧の髪から言玉が分離され、髪が元通りの一つ結びに戻り、慧がホッと一息つく。

「申し訳ありません。すべての傷を、完全に消すことは出来ませんでした」

「随分、楽になったし、問題ないわ」

そっと頭を下げる慧に、エリザが軽く笑顔を向ける。

「しかし、言葉の力でも、すべてを治しきれないとは…」

言玉を右手の中に戻しながら、慧が少し驚いた顔を見せる。

「まあ、ただでさえ傷だらけの状態で力を使い、二人も連れて、外へ脱出したのですもの。無理もないですわ」

「えっ…？」

不意に口を挟んだ和音の言葉に、アヒルが目を見開く。

「ええっ!？」

「うわっ」

突然、大声を放つアヒルに、エリザが少し驚く。

「な、何よっ？」

「言姫さんっ! あんた、今っ、“二人も連れて” っつったよなっ!？」

エリザが戸惑うように見る中、アヒルが確かめるように和音へと問いかける。

「ええ、確かに」

「じゃあっ…!」

「彼なら、そこよ」

「…っ!」

アヒルが何を気にしているのかわかっている様子で、エリザが指を指し示す。アヒルはすぐさま、エリザの指の先を、振り向き見た。

Word 13 戦イノオワリ (2)

「あっ…」

「……………」

そこには、和音の連れてきた従者に取り囲まれ、手足を縄で封じられている灰示の姿があった。灰示は深く瞳を閉じており、意識を取り戻している様子はない。傷の治療も、行っていないようであった。

「波城っ…」

「波城灰示は、他の四人の仲間とともに、わたくしが韻へと連行します」

「……………」

灰示を見ていたアヒルが、和音の声に振り向く。

「保っ…いや、波城はどう、なるんだ…?」

少し躊躇うように、和音へと問いかけるアヒル。

「決めるのは韻の上層部ですので、わたくしにはわかりませんが…」

和音がそつと目を細め、厳しい表情を見せる。

「彼の犯した罪に対し、それ相応の罰が与えられることとなるでしょう」

「……………」

その言葉に、アヒルも表情を陰しくする。

「保、もっ…?」

「確かに、高市保という人間と、波城灰示という忌は、それぞれの人格を持つ、別の人物なのかも知れませんが…」

アヒルの問いかけに、少し眉をひそめる和音。

「彼らを切り離すことが出来ない以上、高市保にも罰を受けていたく他にありません…」

落ち着いた口調で、言葉を続ける和音。

「どうか、ご理解を」

「あ、ああ…」

『……………』

和音の言葉を受け、頷きはするものの、どこか遣り切れない表情で俯くアヒル。それを見つめる籠也や囁たちも皆、ひそめた表情で、そっと俯いた。

「ではわたくしは、彼らを韻へと連れて行かねばなりませんので、これで」

気を失ったままの灰示を、従者たちが拘束し、抱え上げたことを確認すると、和音はアヒルたちにそう言い放つ。

「波城灰示のことは、処罰が決まり次第、またお知らせに参りますわ、安の神」

「あ、ああっ…」

和音の丁寧な言葉に、アヒルが少し詰まりながら頷く。

「衣の神も、ご苦労さまでした」

「ええ」

振り向く和音に、エリザが笑みを浮かべる。

「では、失礼いたします」

軽く頭を下げると、和音は従者を引き連れ、灰示共々、アヒルたちの前から去っていった。

「……………」

和音たちが去っていった方角を、和音たちの姿が見えなくなってもずっと見つめ、神妙な表情を見せるアヒル。

「さあて、私もとっと帰ろうかなっ」

「……………」

両手を空へと伸ばし、大きく伸びをしながら立ち上がるエリザに、アヒルが振り向く。

「帰るって？」

「家によ。もうずっと言ノ葉町に居たせいで、一ヶ月くらい帰っていないからね」

「そっか。エリザは言ノ葉の人間じゃないんだもんな」

エリザが言ノ葉町に居たのは、忌の増発の原因を探るため。原因であつた波城灰示が倒され、韻に連行された今、この町に残る理由もないのだ。

「色々、世話になったなつ、エリザ。ありがとうっ」

「……っ」

笑顔を見せ、改めて礼を言うアヒルに、エリザが少し目を細める。

「朝比奈アヒル」

「へっ？」

急に名を呼ばれ、アヒルが目丸くする。

「初めて会った日と今日、君には二回も助けられた」

アヒルの方をまっすぐに向いたエリザが、爽やかな笑みを見せる。
「だから、君がピンチになった時は、今度は私が助けに行つてあげるわっ、安の神っ」

「……っ」

そう言つて右手を差し出すエリザに、アヒルがそつと口元を緩ませ、エリザと向き合うようにして、立ち上がる。

「ああっ、頼むぜ。衣の神っ」

立ち上がったアヒルが差し出されたエリザの手を掴むと、二人の神は、強く握手を交わした。

『……っ』

その光景を見つめ、箆也や囁、雅が皆、笑顔を見せる。

「ご立派でございますう！エリザ様あつ！」

同じく二人の様子を見守っていた慧が、感心しすぎたのか、今にも泣きそうな表情で叫ぶ。

「あつの跳ねっ返りエリザ様が、こんなに大きゅうなられてっ……！」

「ハイハイっ、とつとと行くわよ、慧っ」

熱く語っている慧を、半ば無理やりに引っ張つて、その場を歩き出していくエリザ。

「じゃあまたねっ、アヒル！」

「ああっ」

振り返り、笑顔を見せるエリザに、アヒルが軽く手を挙げると、エリザと慧も同じく手を振り上げながら、その場を後にした。

「では僕も、これで失礼します」

「へっ？」

和音、エリザに続くようにして、そう言い放ったのは雅であった。「面倒この上ないのですが、為介さんのところへも行かなければならないので」

「どうせ、僕たちの戦いの様子を報告でもしに行くんだろう？ 為の神の命令で」

「箆也…」

悪態づく箆也に、囁が少し注意するように名を呼ぶ。

「あなたは予想以上に強かったと、報告しておきますよ、神月くん」
「……っ」

箆也の言葉など、まるで気にしていない様子で、余裕の笑みを見せる雅に、箆也は少し眉をひそめた。

「まあ僕は衣の神とは違って、この町に住んでいますので」

笑顔を浮かべた雅が、箆也からアヒルへと視線を移す。

「何かあったら、いつでも、オカルト同好会の部室まで来て下さい」
「いやっ…部室がどこかも知らねえーし…いまいち、行く気にもな
んねえーしっ…」

その雅の誘いに、思わずアヒルが表情を引きつる。

「けど、まっ、ありがとうなっ、雅さん」

「えっ…？」

笑顔で礼を言うアヒルに、雅が少し戸惑ったように声を出す。

「僕は別に、あなたを助けた覚えはありませんが…」

「けど、俺の仲間を助けてくれたんだろっ？ だから、ありがとうっ」
「……っ」

すぐさま答え返すアヒルに、雅が驚いたように目を開く。

「以前より少し、神らしくなりましたね…」

「へっ？」

「いえ。では、また」

「あ、ああっ」

あっさりとした挨拶を済ませると、雅は足早に去っていった。

「ふいっ」

その場到大勢居た人間も、あっという間にアヒル、箆也、囁の三人だけとなり、久々に戻る静けさに一息つきながら、アヒルはゆっくりと顔を上げ、崩れ落ちた恐怖の館跡を見た。

「……………」

瓦礫の山を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「神」

「……………」

箆也に呼ばれ、細めていた瞳を一度閉じ、そしてゆっくりと開くアヒル。

「さっ！俺たちも家に帰るか！」

「ああ」

「ええっ…」

笑顔で言い放つアヒルに、箆也と囁が同時に頷いた。

こうして、長い長い、戦いの夜は、終わりを告げた……。

翌日。言ノ葉高校、一年D組。

「どっはああああっ！セエーフっ！」

これ以上ないくらいに両手を目一杯横へと広げながら、アヒルが前扉から、教室へと飛び込んでくる。

「んなわけあるかつ。アウトだ、ボケっ」

「痛ってえっ！」

そんなアヒルの額へ、容赦なく炸裂する白チョーク。チョークを喰らったアヒルが、額を両手で押さえ、思わずその場にしゃがみ込

む。

「罰として、放課後、国語資料室の掃除な」

「ええっ！？またあ！？」

「私の貴重なホームルームに遅れたんだ。当然だろう」

まだ額を押さえながら、不満げに顔を上げたアヒルに、教壇に立つ恵が、強く言い放つ。

「ほらっ、とっとと座れ。トンビっ」

「アヒルだったの！」

怒鳴るように名前を言いながら、アヒルが教室の中へと進み、窓際の自分の席へと腰を下ろす。

「あれほど遅刻厳禁だって言ったのにっ」

「うっ…」

後ろの席から聞こえてくる紺平の声に、思わず表情を引きつるアヒル。

「つつーか、なんで揃いも揃って、先行ったんだよ？家来た時に、起こしてくれりゃ良かっただろっ？」

「“起こさないことが、自立させるための第一歩だ”って、神月くんと真田さんが」

「ニヤロウっ…」

紺平の答えを聞き、アヒルが睨むように、一番後ろの席の箆也と囁を見る。二人は素知らぬ顔で、前方の恵を見つめていた。

「よおーし、これで全員揃ったなあっ」

「……っ」

そこへ聞こえてくる恵の言葉に、アヒルがハッとなって、目を見開く。

「とっとと授業始めるよおっ」

「……………」

恵の声を聞きながら、ゆっくりと右横を見るアヒル。

「——アヒルさあーん！——」

「……っ」

今はもう、誰もいないその席を見つめながら、アヒルはそつと目を細めた。

和音や韻が何らかの操作をしたからなのか、高市保がクラスから居なくなったことを、疑問に思う者は誰もいなかった。

いや、操作をしなくとも、誰も疑問になど思わないのかも知れない。

たった一日だけ居た、転校生のことなど。

だがアヒルは、この“痛み”を忘れないと、そう思うのであった。

Word. 13 戦いのオワリ (3)

数日後。言ノ葉高校、一年D組。

「どっはああああっ！セエーフっ！」

今日もまた、手が千切れるのではないかというくらいに両手を目一杯広げながら、アヒルが前扉から、教室へと飛び込んでくる。

「だからアウトだって言ってるんだろ、アホっ」

「痛ってえっ！」

そんなアヒルの額へ、またしても容赦なく炸裂する、今度は白ではなくて、赤チョーク。チョークを喰らったアヒルが、額を両手で押さえ、その場にしゃがみ込む。

「罰として、放課後、国語資料室の掃除な」

「ええっ！？またまたまたあ！？」

「またまたまただ。遅刻したんだから、当然だろう」

連日のように喰らったチョークで、赤く腫れあがった額を見せ、勢いよく顔を上げるアヒルに、教壇に立つ恵が、相変わらずの口調で言い放つ。

「俺のエンジョイ放課後ライフがっ…」

「そう思うんだったら、遅刻してくんなよっ」

「うわああああっ！あっ！」

「へっ？」

がっくりとしながらも教室へと入ったアヒルが、大きな叫び声と、再び勢いよく開く前扉の音に、戸惑うように振り返った。

「あっ…！」

振り返ったアヒルが、大きく目を見開く。

「セ、セーフっ…！」

アヒルと同じように、目一杯両手を横へと広げながら、教室へと駆け込んでくる、一人の人物。

「あっ…」

目の前に現れたその人物に、アヒルが信じられない様子で、ただ茫然と立ち尽くした。

「セーフですかあ!？」

開いた前扉から、教室へと現れたのは、焦った表情を見せた、保であった。アヒルより一段と長い手は、広げると扉の幅を、余裕ではみ出している。

「アウトだ、ボケっ」

「ひええ〜!こんな年中寝ぼけ顔の俺が、一丁前に夢なんか見て、寝過ぎしちゃってすみませえ〜んっ!」

「鬱陶しいっ…」

アヒルに対してと同じようにアウトを宣告する恵であったが、両手で頭を抱え、叫びあげる保に、引きつった表情を見せる。

「た、保っ…?」

「へっ?あ、おはようございまあ〜す!アヒルさあ〜んっ!」

「お、おはようって…」

戸惑った様子で見つめるアヒルに、大きく手を挙げ、笑顔で挨拶をする保。そんな保の笑顔を見ながら、アヒルがさらに戸惑った顔となる。

「お、お前、なんでっ…!」

「へえっ?」

「もう風邪は治ったのかあ?高市っ」

「か、風邪っ?」

「あ、はい!」

横から問いかける恵の言葉に、アヒルが目丸くする中、保が大きく頷いて返事をする。

「はあっ!こんなバカ丸出しのはずの俺が、風邪なんか引いて、都市伝説覆しちゃってすみませえ〜んっ!」

「ああ、鬱陶しいっ…」

またしても叫び散らす保に、恵がさらに引きつった顔となる。

「か、風邪って…?」

「んあっ？ああ、お前は遅刻して来たから、知らないんだったな」
困惑した様子で振り向くアヒルに、恵がゆっくりと頷く。

「高市は転校してきたその日に、熱出してぶっ倒れたらしくて、それからしばらく、学校休んでたんだよっ」

「ね、熱っ…？」

「ああ、よっぽど初日に緊張したのか」

「ひええ〜！俺みたいな無神経そうな奴が、意外と繊細ですみませえ〜んっ！」

視線を送る恵に、保が叫びで答える。

「ね、熱ってっ…」

——あっれえ？アヒルさあ〜ん！——

転校初日といえば、保が、遊園地跡に居たアヒルの目の前に現れ、波城灰示となって、アヒルと戦いを繰り広げた、あの日であった。その後も和音により、韻へと連行されたのだ。熱で寝込んでいたはずがない。

「お前っ…！」

「えっ？」

勢いよく歩み寄ってくるアヒルに、頭を抱えて叫んでいた保が、その動きを止める。

「お前、そのっ…！波城は…！韻はっ…！」

「ハジヨウ？イン？」

必死に問いかけるアヒルの言葉に、大きく首を傾げる保。

「何ですかあ？それ」

「えっ…？」

不思議そうに聞き返してくる保に、アヒルが大きく目を見開く。

「おっ前！すっとなげてんじゃっ…！」

「ひえええっ！」

「アヒるん…」

「……っ」

掴みかかるアヒルに、保が怯えるような声を出していたその時、アヒルを止めるようにして、その肩に手を置いたのは、囁であった。

「囁っ？」

「彼に問いかけても無駄よ…彼は何も憶えていないのだから…」

「えっ…」

囁の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「憶えて、いない…？」

「どういうことだ？」

丁度その頃、言ノ葉高校の屋上では、箆也と和音が話をしていた。

「ですから、高市保は、両親が五十音士であったことやその死の深い原因、そして、自分の中に眠る波城灰示の存在、すべてを憶えていないのです」

和音がはっきりとした口調で、冷静に話す。

「いえ、記憶から消えているのですから、憶えていないと言うよりは、知らないと言った方が、正しいかも知れませんわね」

「知らないって…」

和音の言葉に、箆也が表情を曇らせる。

「まさか、あなたが…あの悪趣味な言葉を使ったんじゃないっ…」

「人聞きが悪いですわね。わたくしは何もしていませんわ」

疑うような目を向ける箆也に、和音がきっぱりと答える。

「彼の記憶が消されたのは、もっと以前。恐らくは、両親の死の直後です」

「えっ…」

その言葉に、箆也が驚いた顔となる。

「直後ってことは、じゃあっ…転校してきた時のあいつはっ…」

「ええ、五十音士や波城灰示の存在など知らず、ただ、高市保とし

て、あなた方と接していたようですわね」

「……っ」

——ひええー！ごめんなさあーい！——

確かに、学校でアヒルたちと時間を共有していた時も保は、含みを抱えているようには見えず、ごく自然に笑っているように見えた。波城灰示のことを認識していれば、あのような顔では笑えないだろう。

「遊園地跡でのことも、ほとんど記憶はなく、本人は発熱により見た夢と思っているようです」

「記憶が消されているって……」

和音の話を聞きながら、箆也が深く考え込むように首を捻る。

「誰がそんなことっ……」

「恐らくは、波城灰示でしょう」

「えっ……？」

出てくるその名に、驚きの表情を見せる灰示。

「同じ体の中に眠る波城灰示が、高市保の記憶に干渉し、一定部分の記憶を削除したと考えられます」

「波城灰示が……？なんでそんなことをっ……」

「高市保が、自分のことや五十音士のことを知らない方が、色々と行動が起こしやすいから、というのが韻の見解ですが……」

「が……？」

言葉を付け加える和音に、箆也が眉をひそめる。

「わたくしは、波城灰示が、高市保から、悲しみや痛み、そして、この五十音の世界を遠ざけるためだったのではないかと、思います」

「……っ」

和音のその言葉に、箆也がそっと目を細め、表情を曇らせる。

「遠ざける、ため……」

「波城灰示は、我々や自分自身が思っていた以上に、高市保という

人間に、同調していたのかも知れません……」

屋上から言ノ葉町の景色を眺め、和音が複雑な顔を見せる。

「だからこそ、あんなにも必死に、この世界から“痛み”を消そうとした……」

「……………」

箆也が黙ったまま、少し考えるように、俯く。

「随分と美談にしたがるんだな」

「そう考えた方が、少しは気持ち上が浮上するではありませんか」

あまり納得していない表情で言い放つ箆也に、和音がまるで宥めるような笑みを向ける。

「それに、その方が“救い”もある……」

「……………」

和音が放つその単語に、ふと顔をしかめる箆也。

「あなたが救いを求めるのか。柄にもないだろう」

「あら、わたくしに、そんな口を聞きますの？」

「うっ……」

悪態づく箆也であったが、和音に冷たい笑みを向けられ、どこからかかかる圧力に、思わず顔を引きつった。

「だが、いいのか？学校になど来させたりして」

逃げるように、話題を逸らす箆也。

「韻の力により、波城灰示は強く封印されております。もう、高市保の中から出てくることもありませんわ」

「そうか。他のハ行の連中は？」

「彼らは波城灰示により、利用されていただけです。処罰を受けることはあっても、五十音士の称号を剥奪されることはないでしょう」

「そうか」

返ってくる和音の答えに、箆也がもう一度頷く。

「このこと、安の神に伝えておいて頂けます？」

「会っていかないのか？」

「わたくしも忙しい身ですので」

問いかける箆也に、和音はそつと笑みを向けた。

「何がそんなに忙しいんだかな」

「韻の仕事は、幅広いですから」

突き刺すように鋭く言い放つ箆也に、誤魔化すように柔らかく答える和音。

「では、わたくしはもう行きますわ。また何かありましたら、報告を」

「ああ」

箆也にそう言うと、和音は箆也に背を向け、屋上の出口へと、ゆっくりとした足取りで歩き始めた。そんな和音の背を、箆也がまっすぐに見つめる。

「ああ、そういえば」

「……っ？」

屋上の扉を開けたところで、不意に振り向く和音に、箆也が眉をひそめる。

“彼”が、あなたの神に、非常に興味を持っていましたよ」

「……っ」

どこか強調するように言う和音に、一気に曇る箆也の表情。

「近いうちに、見に来るかも知れせんわね」

含みを持った笑みを浮かべ、和音が扉から屋上を出て行く。

「ではまた、いずれ…」

その言葉をその場に響かせるように残して、和音は屋上を去っていった。扉が閉まると、その場に箆也だけが残り、静かな空間に、風の吹く音が聞こえる。

「興味、ね…」

和音の放った言葉を繰り返し、そつと空を見上げる箆也。

「あなたが見たいのは、僕の神などではなく、神に附いている僕だろう…？」

見上げた空へ、答えを期待するわけでもなく、箆也が問いかける。

“檻也”おりや…」

その名がそつと、風に流れた。

その日、放課後。

「クッソ！なんで俺は資料室掃除なのに、保は無罪放免なんだよっ！」

「常習犯と初犯の違いじゃない？」

納得のいつていない様子で、不満げに叫ぶアヒルの後ろの席から、紺平が冷静に言い放つ。

「すみませえくん！アヒルさあくん！俺がインパクトのない名前なばかりにっ、アヒルさんばかりが目立ってしまってえっ！」

「お前、いい加減、ケンカ売ってんだろ…？」

隣の席で叫んでいる保のその、相変わらずアヒルの名前を馬鹿にした発言に、アヒルが強く表情を引きつる。

「明日は二人とも、遅刻厳禁だからねっ？」

「へえへえ」

「はい！任せて下さい！」

注意するように言い放つ紺平に、やる気なく頷くアヒルと、やる気満々に頷く保。

「ああっ…！でもまた、巨大クラゲと戯れる楽しい夢見ちゃって、寝過ぎしたらどうしようっ…！」

「その夢のどこか楽しいんだ…？」

不安げに頭を抱える保に、アヒルが呆れきった表情を見せる。

「行きましよう…アヒるん…」

「とっとと掃除を終わらせて来い、神」

「あ、ああっ」

そこへ、鞆を持ってやって来る籠也と囁。二人に急かされるようにして、アヒルが鞆を持って、席から立ち上がる。

「俺も委員会だっ」

アヒルに続くようにして、紺平も席を立つ。

「じゃあね、ガア、神月くん、真田さんっ」

「ああっ」

「じゃあね、保くんっ」

「あっ、は、はいっ！」

手を振り上げ、笑顔を見せて、教室を駆け出ていく紺平に、頷くアヒル。アヒルたちに続くように呼ばれた自分の名に、少し慌てながらも、保は大きく頷いた。

「さあーで、じゃあ俺たちも行くかつ」

「ええ…また明日、無事に会えたら会いましょうね、転校生クン…フフっ…」

「明日はもう少し静かにしろ、あなたの叫び声は耳障りだ」

「えっ？あ、は、はあっ…」

不気味な囁の言葉と脅すような籠也の言葉に、少し引き気味に頷く保。

「じゃあ、また明日なっ、保！」

「……っ！」

最後に向けられるアヒルの言葉に、保が思わず目を見開く。

「はっ…」

保がすぐに、口を開く。

「はいっ！また明日！」

零れんばかりの笑顔で、保は大きく頷いた。

Word 14 新たなル試練 (1)

言ノ葉町の小さな八百屋『あさひな』こと、朝比奈家。朝七時。

「んんっっ」

二階の一室では、朝比奈家の四男坊、末っ子のアヒルが、いつものように気持ち良さそうに眠っている。

「切り干しっ…大根…」

「何いっ!？」

こちらもいつものように、アヒルをへの目覚まし作戦を行おうと待機していた朝比奈家の父と、箆也、囁の三人であったが、アヒルの寝言を聞いた父が、突然、焦りの声をあげた。

「しまったあ！人生最大の失敗だ！」

「どうしましたか？お父上」

「アーくんが折角、野菜を呼んだというのに、今日はゴボウを用意しちゃったんだよお！」

「大した失敗とは思えないけど…フフっ…」

箆也の問いかけに、両手いっぱいゴボウを持って、困ったように叫ぶ父を見て、囁がそっと微笑む。

「読み誤ったかあ！仕方ない！箆也くん、囁ちゃん、下に行つて、急いで大根を持ってくるよおっ！」

「来んでええわいっ」

「ぎゃうっ！」

慌てて大根を取りに行こうとした父の背中に、いつの間にか起きた様子のアヒルの蹴りが、勢いよく炸裂する。父はそのまま勢いよく、顔面から床へと倒れ込んだ。

「痛いよお、アーくうんっ」

「ったく、いつも全然違うもん、投げてくるくせに、なんで大根にはこだわるんだよっ」

「そりゃあ、やっぱりいゝ、野菜屋さんだからあ？」

「じゃあ野菜投げんなよ」

起き上がりながら、大きく首を傾げる父を見下ろし、アヒルが呆れた表情を見せる。

「あら：起きちゃったの：？アヒるん：」

「あんだけ騒いでたら、普通、起きんだろ」

アヒルが顔を上げ、今度は囁へと呆れた表情を向ける。

「残念：ゴボウをアヒるんの鼻の穴に入れて、大笑いしたかったのに：」

「ああ。ついでに口にも入れて、窒息死させたかった」

「何してくれようとしちゃってんだよ！お前らはっ！」

何の躊躇いもなく答える籠也と囁に、アヒルは朝から勢いよく怒鳴りあげた。

数分後。朝比奈家、居間。

「だいたい朝っぱらから、ゴボウで自分とこの神、窒息死させようとすつかあ？」

「あら：単なる愛情表現じゃない：」

「どこが愛情表現だよっ！」

制服に着替えたアヒルが、籠也、囁とともに、騒々しく会話を交わしながら、二階から一階の居間へと降りてくる。

「おはよう、アヒル君」

「あっ、おはよ。ツー兄」

居間へと入ったアヒルが、籠也や囁への文句を一旦止め、先に居間で座っているツバメへと笑顔を向けた。

「おっ、今日は遅刻しなくて済みそうじゃねえーかつ」

「さすがにこれ以上、連続遅刻すると、担任に殺されそうだし：」

「ハハハっ！恵ちゃん、怖えーからなあっ」

浮かない表情で答えるアヒルに、ツバメの隣に座るスズメが、ど

こか楽しげに笑う。

「さあ、とっとと飯食ってって、うおっ!？」

ツバメの横へと並ぶようにして座ったアヒルが、テーブルの上に並んでいる朝食を見て、思わず驚きの声をあげる。そこに並んでいるのは、いつもの、いかにも売り物の残りといった料理ではなく、見たこともない、見映えから美しい、創作料理の数々であった。

「何だよ!今日の飯はえっらい美味そうだなあ!今日はどっちが当番でっ…って、あれっ?」

顔を上げ、問いかけようとしたアヒルが、途中でその言葉を止める。いつもは片方、台所で食事の準備をしているはずのスズメとツバメが、今日は揃って居間にいる。

「あれっ?今日の食事当番でっ…」

「あっ!アヒルさあゝんっ!」

「へっ?」

戸惑っていたアヒルが、台所から聞こえてくる、どこかで聞いたことのあるその声に振り向く。

「た、保っ!？」

「おはようございますっ」

朝比奈家の台所から顔を出し、アヒルへと笑顔で朝の挨拶を向けるのは、いつもはスズメかツバメが着ているエプロンを、制服の上から纏った、保であった。

「な、なんでお前がここにっ…!」

「はあ!俺みたいなの、居るだけで部屋の二酸化炭素濃度上がりそうな奴が、お邪魔しちゃってすみませえゝんっ!」

「い、いやっ…」

いつもの如く、叫び散らしながら頭を抱える保に、途端に鬱陶しそうな表情を見せるアヒル。

「で、何でお前が俺ん家にいるんだ?」

「あ、はい!一人暮らしだと話したら、真田さんが一緒にご飯を食べようと誘って下さいましてっ!」

「囁があ？」

保の答えを聞き、首を傾げながら、アヒルが囁の方を振り向く。

「これで少しはマシなものが食べれるわ…フフフ…」

「明らかに私欲だな」

満足そうに保の作った料理を頬張っている囁を見て、アヒルが一気に冷めた顔つきとなる。

「これから毎日作りに来てくれていいぞお！たもっちゃーん！」

「遠慮なんてしないでいいから、毎日おいで…保君…」

「は、はい！こ、こんな俺につ、ありがとうございますっ！俺っ、嬉しくて三点倒立しちゃいそうですっ！」

「感動すんなって。食事当番押しつけようとしてるだけなんだから」
二人の兄の言葉に、目を輝かせている保に対し、冷静な言葉を投げかけるアヒル。

「うん、確かに美味しい」

「でしよう…？」

囁の隣に座り、保の作った料理を口に運んだ籠也が、感心した様子で頷く。

「良し。僕の前に存在することを許してやる」

「あ、ありがとうございますっ！俺っ、感動です！」

「色々とおかしいだろ、その会話」

この上なく偉そうな籠也と、その籠也を素直に受け入れ、喜んでいる保の様子を見て、アヒルが呆れた表情を見せながらも、保の手作り朝食を食べていく。

「おはようございまぁーすっ」

「あ、紺平っ」

店の通用口の方から聞こえてくる、聞き慣れた紺平の声に、箸を止めて顔を上げるアヒル。

「おはよう、ガア、みんなっ」

「おう、おはっ…」

「おはようございます、小泉君。今日も高校球児の一滴の汗のよう

に、爽やかですね」

「そ、そうっ……？ 今日も神月くんの方が、至って爽やかだと思うけど……」

「……………」

紺平がやって来た途端に、爽やかな笑顔を浮かべ、先程までの偉そうこの上ない態度を一気に捨て去る簞也を見て、アヒルが呆れきった表情を見せる。

「あれ？ 保くん？」

「はあっ！ こんな制服もロクに似合っていない俺が、エプロン姿なんかで存在しちやってすみませえくん！」

「あ、えっ……いやっ……」

「んあっ？」

保と紺平の会話になっていない会話を聞いていたその時、ふと何かに気づいたような顔となるアヒル。

「お前、保には、その気色悪い猫かぶり、しねえーんだな」

「波城灰示であるアイツに、気を遣う必要はないだろう」

「すぐさま爽やかな笑顔を消し去り、簞也がいつもの口調で答える。

「だがあなたは、あまり気を許さない方がいい」

「へっ？」

鋭く言い放つ簞也に、アヒルが首を傾げる。

「和音は大丈夫と言っていたが、いつまた、波城灰示が出てくるかもわからないんだからな」

「うう……んっ……」

簞也の言葉を聞きながら、考え込むように首を捻るアヒル。

「あいつ、そんなに悪い奴じゃねえーと思うけどっ……」

「そういう楽観的な考えが、己の身を滅ぼすんだ」

「はあっ……」

厳しく言い放つ簞也に、アヒルがそっと息を吐く。

「疑り深い奴っ……」

——わたくしが見てきた限り、彼は、周りを誰一人信用しておらず、自分すら信じていないように見えました——

「あっ…」

思わず呟いたアヒルの脳裏に、初めて出会った時の和音の言葉が過ぎった。

「何だ？」

「あ、いやっ…」

すぐさま問いかける籠也に、アヒルが誤魔化すように首を振る。

「……っ」

首を振った後、何やら考え込むように俯く、アヒルであった。

「こ、こんなデカイ図体のわりに歩幅の狭い俺が、皆さんと一緒に登校なんかしちゃってすみませえくん！」

「へえへえ、わかったから、もうちょい静かに歩けよ」

すぐ後ろを歩き、相変わらず叫び散らしている保の方を振り返りながら、アヒルが呆れた表情で注意するように言い放つ。朝食を終えたアヒルたちは、迎えに来た紺平に、新たに保も加えて、五人で学校への道を進んでいた。

「すみませえくん！俺が、素敵声でも何でもない声のせいで、アヒルさんを不快にいっっ！」

「だから、うっさいっっってんだろぅがっ！」

「まあまあガア、今現在、ガアの方がうるさいからっ」

保へと怒鳴りあげるアヒルに、横から紺平が宥めるように言葉をかける。

「平和ねえ、フフっ…」

「ああ」

三人と少し距離を置いた後方に並び、見守るようにアヒルたちを

見ながら、言葉を交わす箆也と囁。

「波城灰示の一件が片付いて以来、忌もぱったり出なくなったからな」

「フフっ…平和ボケしちゃいそうよねえ…アヒるんもすっかり、辞書読まなくなっちゃったし…」

囁が微笑みながらも、少し呆れたように言い放つ。

「何か起こってくれないと…折角、波城灰示との戦いで成長した力も、衰えちゃうわ…」

「……………」

囁の言葉を聞きながら、そっと俯く箆也。

——近いうちに、会いに来るかも知れませんわね……——

「……っ」

和音の言葉を思い出し、箆也がそっと表情を曇らせる。

「浮かない顔…」

「えっ…」

囁の声に、俯いていた箆也が顔を上げる。

「最近多いわよ…どうかした…？」

「…別に、何でもない…」

問いかける囁に、再び俯き、素っ気なく答える箆也。

「そうっ…」

口元を緩めた囁が、箆也の答えに、すぐさま頷く。

「どうせ話す気がないんだったら…もう少し上手く、誤魔化してほしいもののね…」

「……………」

「フフっ…」

顔をしかめる箆也を見て、囁がどこか不敵に笑う。

「ぼ、僕は別にっ…」

「おおい！朝比奈あつ！」

『……っ』

そんな囁に進言しようとした箆也の声が、前方から聞こえてくる、大きな品のない声に遮られる。その声を受け、箆也と囁、それに前を歩くアヒルたちが、一斉に前を向いた。

「ここで会ったが百年目えっ！」

『毎日会ってます！アニキ！』

「うるっしーいっ！」

アヒルたちの前方に現れたのは、毎度お馴染み、アニキとその連れのヤンキー集団であった。

「今日という今日こそっ、コテンパンのパンの耳にしてやるぜえいっ！」

「出た出た…」

気合い十分のアニキを前に、どこか疲れたように肩を落とすアヒル。

「今日こそは遅刻厳禁なんだから、早めにね」

「わかってるよっ」

「が、頑張って下さい！アヒルさん！」

釘を刺すように言う紺平の横で、保がアヒルへとエールを送る。

「ああっ！お、俺みたいなのケンカはおろか、ジャンケンでも勝ったことのない奴が、応援なんてしちゃってすみませえくん！」

「はいはい、わかったわかった」

鬱陶しく叫んでいる保に鞆を手渡し、アヒルが手ぶらとなって、アニキと向き合うように数歩、前へと出る。

「ほら、とっとと、かかって来いっ」

「んなっ！余裕ってかぁ！？この野郎っ…！」

手招きするような動作を見せるアヒルに、アニキが表情を引きつける。

「上等だぁ！目にもの見せてやっ…！」

「どきな…」

「へっ？うっぎゃあぁ！」

背後からの声に振り返った途端、後ろから飛んで来た何かに、アニキが勢いよく吹き飛ばされる。

『アっ、アニキいっ！』

「あっ？」

吹き飛んでいくアニキを、慌てて追いかけていく子分たちを見ながら、首を傾げるアヒル。

「何だあ？」

「あんたが安の神か？」

「……っ」

あっという間に見えなくなっていくアニキを見つめ、戸惑うような表情を見せていたアヒルであったが、前方から聞こえてくる声に眉をひそめ、すぐさま振り向いた。

「誰だっ……！？」

少し身構えるように、厳しい表情を作って、アヒルが叫ぶ。

「……っ！」

「名前は確か……」

アヒルの前方、先程までアニキの居た辺りに立っているのは、左右で長さの違うショートカットに、ミリタリースタイルで、ハーフパンツから惜しみなく長い足を出した、ボーイッシュな少女であった。見慣れぬ少女の姿に、アヒルがさらに眉をひそめる。

「朝比奈……ヒヨコ……？」

「アヒルだ！可愛さの増す名前にすんじゃねえっ！」

名前を間違える少女に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「ああ、そうそう……アヒルだ。そうだ……」

少女が納得したように、軽く手を叩く。

「安の神、朝比奈アヒル……」

「俺が神だって知ってるって、まさかお前っ……」

「神っ！」

『……っ』

背後からの籠也の声に、アヒルが振り返り、少女がふと視線を逸

らす。

「フフっ…また厄介事…？」

「わからない。だが、あまりいい予感はない」

短く言葉を交わしながら、箆也と囁が、それぞれの言玉を取り出す。

「神月くん？真田さん？」

「あの玉って…」

そんな二人の方を振り返り、戸惑いの表情を見せる紺平と保。

「五十音、第六音“か”っ…」

「第十一音“さ”…」

「お、おいっ…！」

言玉を解放しようとしている二人に、アヒルが慌てた様子で声をあげる。

「や、やめろって！紺平も保もいつ…！」

「遅い…」

「へっ？」

すぐ傍から聞こえてくる声に、再び前を振り向くアヒル。

「あっ…！」

黒いグローブを付けた右手を、箆也たちへと向けている少女の、その右手の中には、青く輝く宝石のような玉が握られていた。その玉を見て、大きく目を見開くアヒル。

「あれはっ…！」

「言玉っ…？」

アヒルと同じように、驚きの表情を見せる箆也と囁。

「し…」

言玉を構えた少女が、ゆっくりと口を開く。

「“沈^{しず}め”…」

「んなっ…！」

少女がそう呟いた途端、アヒルのすぐ後方の地面から、壁のように広がった水が勢いよく突き上がった。

「み、水っ？」

「な、何なのっ!？」

「ひえええええっ!」

「あっ…!」

突き上げた水を戸惑うように見上げていたアヒルであったが、その壁のような水が大波を形成し、紺平や保の方へと流れ込んでいくのを見て、焦ったように声をあげる。

「紺平! 保!」

「ちっ…!」

アヒルが身を乗り出す中、顔をしかめた籠也が、言玉の解放が終わっていない内に、大波の迫る二人の前へと飛び出していく。

「“か”、解放…!」

「籠也っ…!」

——バアアアアアン!

「あっ…!」

言玉を格子へと変える籠也であったが、その後すぐに大波が押し寄せ、溢れるばかりの水の中に、籠也たち四人の姿が消えていった。水に呑み込まれた仲間たちに、アヒルが大きく目を見開く。

「みんなっ…」

「これで邪魔者はいなくなった…!」

「クっ…!」

聞こえてくる声にアヒルが顔をしかめ、胸ポケットから言玉を取り出しながら、少女の方を振り向く。

「てめえ! 一体っ…!」

「安の神、朝比奈アヒル…!」

言玉を取り出し、身構えるアヒルに、少女は落ち着いた様子で呼びかける。

「ウチの神が呼んでる。あたいと一緒に来てもらうよ…!」

「ウチの、“神”っ…？」

少女のその言葉に、途端に表情を曇らせるアヒル。

「神って、じゃあっ…」

“縛^{しば}れ”…」

「へっ？」

少女が再び言葉を放つと、どこからともなく生じた水が、まるで縄のように細長い形を作って、アヒルの胴と両手を力強く握り締めた。あっという間に動きを封じられ、目を丸くするアヒル。

「よっ…」

「へえっ？」

動けなくなったアヒルの体を、軽々と片手で持ち上げる少女。その怪力っぷりに、アヒルがさらに間の抜けた表情となる。

「行くか…」

「へえええっ!？」

アヒルを抱えたまま、少女が素早い身のこなしで、その場を去っていく。アヒルの困惑の叫び声が、その姿とともに徐々に小さくなり、やがて消えていった。

「……“涸^かれろ”」

静かになったその場に、小さな声が響くと、道の中心で大きな塊を作っていた水が、蒸発するようにあっという間に涸れ果て、その塊の中から、格子を構えた箆也が姿を現わした。

「無事か？囁」

「ええ…」

箆也が振り返ると、そのすぐ後ろに、横笛を構えた囁がしゃがみ込んでいた。

「二人は？」

「大丈夫よ…ちゃんと“催眠”の言葉で眠らせ…」

「はぁっつ、すっごい大波でしたねぇ」

「えっ…？」

すぐ傍で横たわり、眠っている紺平を見ながら、答えようとした

囁が、聞こえてくる暢気な声に言葉を止める。

「今日、波浪警報出てたかなあ？」

「……………」

眠っている紺平の横に座り、不思議そうに首を傾けている保の姿に、啞然とした表情を見せる囁。

「私の言葉が効かないなんて…」

「一応は、波城灰示の宿主だからな」

驚いている囁に、籠也が冷静に答える。

「それより神だ。理由はまったくわからないが、どうやら攫さらわれたらしい」

「身代金目的かしら…？フフフ…」

「ええええ！？アヒルさん家に、身代金出せる甲斐性なんてあるんですかっ！？」

囁の言葉に敏感に反応し、焦ったように叫ぶ保。

「はあっ！俺みたいな働いてもいない学生が、一丁前に一般家庭の心配しちゃってすみませえくん！」

「とっとと行くぞ」

「ええ…」

叫び散らしている保を完全に無視し、アヒルを追うべく、態勢を整える籠也と囁。

「あ、えっ？あ、あのっ…！」

「あなたはソイツと一緒に学校へでも行っている。間違っても付いてくるな。邪魔だ」

「は、はあっ…」

冷たく言い放つ籠也に、逆らうことも許されず、保が大人しく頷く。

「行くぞ、囁」

「ええ…フフ…」

籠也の呼びかけに囁が頷くと、二人は、少女が去っていった方角へと、勢いよく駆け出していった。

「あっ…」

見えなくなっていく二人の背に、座っていた保が思わず立ち上がる。

“言玉”…？」

戸惑うように呟いた保のその右手には、先程、箆也や囁が持っていたものと同じ、赤色の言玉が握り締められていた。

「すみません、紺平さん…」

眠っている紺平を見下ろし、保がそっと呟く。

「俺、行かないとっ…」

そう言っ、意を決した表情で顔を上げると、保は二人の後を追うようにして、その場を走り去っていった。

Word 14 新たなル試練 (2)

一方、その頃、謎の少女に連れ去られたアヒル。

「お、おい！おいっ！」

少女の細い肩に何故か軽々と担ぎあげられたまま、水の縄で動きを封じられた状態で足だけをバタつかせながら、アヒルが必死に少女の背中へと呼びかける。

「お前、一体、何者なんだよ！？俺をどうしようっていつ…！」

「着いた…」

「へっ？って、どわああっ！」

急に立ち止まった少女が、担いでいたアヒルを、地面へと投げ落とす。

「痛ってえ…っ…」

地面に強く背中を打ちつけ、アヒルが思わず表情を引きつる。

「ここはっ…？」

仰向けに倒れたまま、視線だけを動かし、周囲を見回すアヒル。

そこはアヒルもよく見覚えのある、言ノ葉町の空き地であった。先程、アヒルたちの居た場所から、そう遠くは離れていない。

「何だって、こんなところにっ…」

「ほら…」

「へっ？」

倒れているアヒルへ向け、少女が言玉を光らせると、アヒルの胴と腕を縛り付けていた水の縄が、流れ落ちるようにして解けた。体の自由が戻ったアヒルが、その場で起き上がり、すぐ前に立つ少女を見上げる。

「あれっ？なんで縄っ…」

「ん…？何だ、縛られていたかったのか…？」

戸惑いの表情を見せているアヒルに、眉をひそめる少女。

「悪いけど…あたいにそういった趣味はっ…」

「俺にだってねえよっ！誤解してんじゃねえ！」

困ったように腕を組む少女に、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「つつーか、んなどこに連れてきて、一体、俺に何のよっ…！」

「ソイツが“安の神”かあ？シャコっ」

「あっ？」

新たに聞こえてくる男の声に、アヒルが少し眉をひそめ、振り向く。

「衣の神が苦戦したつつー、イ級超えの忌を倒したつつーから、もつとゴっついヤローかと思ってたぜっ」

アヒルが振り向いた先に立っていたのは、大きめのジャンパーに、ダボダボのジーンズを履き、目元のすぐ上まで深々とニット帽を被った、一人の青年であった。空き地に無造作に置かれているドラム缶の上に、身を丸めて、しゃがみ込んでいる。

「ただの学生チャンじゃねえーのっ」

「……っ」

口端を吊り上げる青年に、アヒルが少し顔をしかめる。

「てめえがコイツの神か？」

「えっ？」

厳しい表情を見せ、鋭く問いかけるアヒルに、青年が驚いた顔を見せる。

「神！？俺がっ！？」

「へっ…？」

ドラム缶の上で立ち上がって、自分を指差し、目を輝かせる青年に、アヒルが戸惑うように声を漏らす。

「俺が神に見えちゃったって！？マジかあ！そうかそうかあ！」

「はっ？」

何やら勝手に一人で、満足げに踏ん反り返っている青年に、思わず眉を引きつるアヒル。

「まあ無理もねえよなあ！俺から溢れ出るオーラが神々しいもんな

あ！まさに神！」

「いや、ええーっと、あの…」

片手を空に掲げ、何やら熱く語る青年に、アヒルがいまいち口を挟むことも出来ず、困ったような表情を見せる。

「金八…」
きんぱち

「んんっ？」

少女に名らしきものを呼ばれ、上げていた顔を下ろす青年。

「うるさい、ウザい、鬱陶しい、カス」

「泣くぞお！？そこまで言われたら、さすがに俺泣くぞお！？シャコっ！」

「……………」

悪口を連ねる少女、シャコに、金八と呼ばれた青年が、今にも泣きそうな表情で叫ぶ。そんな二人の様子を、どこか呆れた表情で見つめるアヒル。このやり取りを見ていると、思わず警戒も解け、アヒルは身構えていた姿勢を少し緩めた。

「つつーか、さっきから言ってるけど、お前らは一体何者で、俺に一体何の用でっ…！」

「それはボクたちっ！」

「私たちから説明するわっ！」

「へっ？」

アヒルが再び問いかけようとしたその時、どこからともなく新たな声が降ってくると、金八の立つドラム缶の前に、空中から飛び降りてくるようにして、二人の人間が姿を現わした。

「お、お前らはっ…」

「ボクの名前はチラシっ！」

「私の名前はニギリっ！」

戸惑うアヒルにアピールするように、両手を合わせながらポーズを取る、一人の青年と一人の少女。似たような髪色、瞳の色に、お揃いのデザインのスーツを着ている。髪の長さこそ違えど、前髪の分け目は逆で、対称性を出しているように見えた。

『こんな二人は、ただの他人っ!』

「他人なのかよっ! 紛らわしいな!」

笑顔で他人と名乗る二人に、てっきり兄妹か何かだと思っていたアヒルは、思わず突っ込みを入れる。

「チラシ、ニギリ:」

『んんっ?』

アヒルの横に立つシャコに名を呼ばれ、二人が明るいノリで振り向く。

「うるさい、ウザい、鬱陶しい、カスども」

「泣くぞお!? そこまで言われたら、さすがのその二人でも泣くぞお!? シャコ!」

『アハハあゝ! カスって言われちゃったあゝ!』

「……………」

先程と同じように悪口を連ねるシャコに、自分が言われたわけでもないのに泣きそうになっている金八、そして暢気に笑っているチラシとニギリを見て、呆然と立ち尽くすアヒル。

「な、何なんだ:!? こいつら:」

「あ、そうだったあ! 説明説明!」

アヒルが表情を引きつっていると、ニギリが思い出したように手を叩き、アヒルの方を振り向く。

「安の神、朝比奈アヒルさん!」

「……………」

ニギリに勢いよく名を呼ばれ、アヒルが思わず目を丸くする。

「な、何だ?」

「あなたには今からっ:」

勿体ぶるように、ニギリが少し間を置く。

『“神試験”を受けてもらいまっすう! いええゝい! ぱふぱふっ!』

「はっ:!?」

またしてもポーズを取り、何やら勝手に盛り上がるチラシとニギリに、アヒルが固まる。

「神、試験っ？」

『そうでっすう！』

戸惑うように聞き返すアヒルに、二人が大きく頷く。

「何だ？それっ」

「んだよっ、付き人から聞いてねえーのっ？」

「へっ？」

二人の後ろから口を挟む金八に、アヒルがさらに戸惑った表情を見せる。

「神試験とは、新たに五十音の力に目醒めた神を」

「五神の一人として良いか、神としての資質を見極める試験のことです」

「神としての、資質っ…？」

チラシとニギリの説明を聞き、表情を曇らせるアヒル。

「じゃあもし、資質がないってなった場合はっ…？」

『勿論、神をやめていただきますっ』

「……っ」

笑顔で答える二人に、アヒルがごくりと息を呑む。

「試験って、一体何をっ…」

「試験の内容は、最も最近、神試験に受かり、五神となった神が決め…」

「その神を含めた、神の率いる団が、試験を取り行います」

「神が、神を試験する…？」

『はい』

曇らせた表情のまま問いかけるアヒルに、二人が笑顔で大きく頷く。

「今回、あなたの神試験を実施するのは、三ヶ月前、五神となったばかりの神」

「そして、我らが“以団”^{いだん}を率いる神」

「……っ？」

そう説明した途端、その場で片膝をつき、深々と頭を下げるチラ

シとニギリ。アヒルの横のシャコもしゃがみ込み、金八はドラム缶から飛び降りる。

「お前が、安の神か…」

「えっ…？」

新たに聞こえてくる五つ目の声に、しゃがみ込んだ四人を戸惑うように見下ろしていたアヒルが、ゆっくりと振り向く。

「あっ…」

「……………」

空き地の右端の太木にもたれかかるようにして立っているのは、全身黒一色の服を纏った、派手なオレンジ色の短髪に、鋭い切れ長の瞳の、一人の男。纏う空気は冷たく、アヒルは、目が合っただけで突き刺されるような、そんな感覚を覚えた。

「お前が…こいつらの、神っ…」

『はい』

男へと放たれたアヒルの言葉に頷いたのは、深く頭を下げたままのチラシとニギリであった。

『五十音第二音、“い”の力を持ちます、“以^いの神”、伊賀栗^{いがぐり}イクラ様でございます』

「イ、イクラっ…？」

その名に、緊張感を持っていたアヒルの表情が、一気に緩む。

『こんな名前ですが、一応は本名でございます！いええい！ぱふぱふっ！』

「顔と合っていない、完全に名は体を表していない、海産物、神」

「泣くぞお！？さすがの神でも泣くぞお！？しかも海産物はお前もだあ！シャコっ！」

「……………」

先程と同じような調子で、会話を展開する四人に、木の幹から背を離れたイクラが、少し眉を引きつる。

「うっせえぞ…お前ら…」

『すみませえくんっ！アハハあゝ！』

「でも神、事実だし…」

「言ってやんなあ！神だって、生まれ持った宿命を気にしてんだからよお！しゃこっ！」

「……………」

イクラの圧のかかった言葉にも動じず、ヘラヘラと笑って謝るチラシ、ニギリに、謝ろうともせずに呟くしゃこど、そんなしゃこに注意するように叫ぶ金八。四人の様子を見つめ、イクラがさらに顔をしかめた。

「何だろ…微妙に他人な気がしねえっ…」

名前で馬鹿にされているイクラに、妙な親近感を覚えるアヒル。

「でも確か、“いの神”って…」

「神っ…！」

「……………」

後方から聞こえてくる声に、アヒルがゆっくりと振り返る。

「籠也、囁っ」

「無事…？アヒるん…」

空き地へとやって来たのは、籠也と囁であった。どうやら先程の波を受け流し、アヒルを追って、ここまで来たようである。空き地へ足を踏み入れた二人が、イクラたち五人を警戒しながら、アヒルの傍へと駆け寄る。

「付き人も来て、これで役者は揃ったって感じかぁ？」

『……………』

軽い笑みを零す金八に、籠也と囁が顔をしかめ、少し身構える。

Word 14 新たなル試練 (3)

「こいつらはっ…?」

『“以の神”伊賀栗イクラと、以団の陽気な仲間たちでありますう！いええゝい！』

「以の神、だとっ…?」

明るく自己紹介をしながら立ち上がるチラシたちに、箆也が一気に表情を曇らせる。

「イクラだなんて…これはまた、アヒるんに負けず劣らずの変な名前ね…フフっ…」

眉をひそめる箆也の横で、そっと微笑む囁。

「こつらあ！ウチの神の名前、バカにしてんじゃねえ！神だってわかってんだよお！俺が泣くぞお!？」

「そうだ…神の名は、可愛い名前だ…神の強面な顔に合っていないだけ…」

「お前ら…」

囁へと言い返す金八とシャコの、あまりフォローになっていない言葉を聞き、思わず顔をしかめるイクラ。

「なあ、“以の神”って確か、扇子野郎じゃなかったっけ？」

「前に言っただろう？あいつは“以”の旧字体“ゐ”の力を持つ“為の神”で、“以”の力を持つ“以の神”は別に居ると」

「あ、そういえば聞いたかもっ」

箆也の言葉を受け、アヒルが何やら思い出すように首を捻る。

「で…?その以の神様が、我が神に何の用なのかしら…?」

「あんたたちの神に、神試験を受けさせるために来た…」

「なっ…!」

「神試験っ…?」

シャコの言葉に、箆也と囁がすぐさま表情を変える。

「馬鹿なっ…! 神試験の申請など、僕たちは行っていないぞ!？」

『安の神はすでに神試験を受ける実力あり』と、韻から強い推薦がありましたあ!』

「韻からっ…?」

チラシたちの言葉に、眉をひそめる簞也。

「和音っ…」

一人の人物の姿が浮かび、簞也が険しい表情を見せる。

「俺たちはあくまで試験官…試験を受けるかどうかは、受験する神が決めることとなっている…」

空き地の端にいたイクラが、ゆっくりとした足取りで金八やチラシたちのもとへとやって来て、やがてアヒルの正面に、向き合うようにして立った。

「決めるのは安の神、お前だが…どうする…?」

「えっ…?」

イクラの低い声に問いかけられ、戸惑いの表情を見せるアヒル。

「つつーか、こっちがわざわざ、こおんな辺鄙な町にまで足運^{へんび}んのにっ、受けないとか無しだろお!」

「金八…くだらないこと言うな、空気読め、屈伸運動、カス」

「さすがに俺、泣くぞお!」? シャコ! つつーか、最後の屈伸運動って何っ!」?

金八とシャコが、緊張のかけらもない会話を展開する。

「おい…」

『……………』

イクラに突き刺すような瞳を向けられ、今度はさすがに大人しくなる金八たち。

「で、どうする…? 安の神…」

「ええっと」

「試験を受けるつもりはない」

「へっ?」

もう一度、問いかけるイクラに、悩んでいたアヒルよりも先に答えたのは、簞也であった。はっきりと言い放った簞也を、アヒルが

少し戸惑うように見る。

「俺は安の神に聞いたんだが…」

「僕は安附だ。安の神の代わりに判断する資格は、十分にある」

「……っ」

イクラの突き刺すような視線に、負けることなく強い瞳を投げかけてくる簞也を見て、イクラがそっと目を細める。

“安附”、か…

その高い視線で、見下ろすように簞也を見るイクラ。

「随分と熱心なんだな…もっと適当にやっているのかと思っていたが…」

「何っ…？」

イクラの言葉に、簞也が眉をひそめる。

「お前にとって、“安附”は仕方なくやっていることなんだろう…？」

「……っ？」

そっと口端を吊り上げるイクラに、首を傾げるアヒル。

「なあ…？ 神に成り損ねた五十音士よ…」

「……っ！」

「えっ…？」

イクラのその言葉に、簞也が大きく目を見開き、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「神に、成り…損ねた…？」

その言葉の意味はわからぬまま、ただ繰り返しながら、少し遠慮がちに簞也の方を見つめるアヒル。

「お前も大変だなあ。神の一族に生まれながら、神としての資質がなく、家からも見放されて…」

「……っ」

続くイクラの言葉に、簞也が唇を噛み締め、深く俯く。

「その上、今度は、自分が成れもなかった神の付き人とはっ…本当に哀れなもんだっ」

言葉とは裏腹に、イクラは嘲笑うような表情で、箆也を見下す。
「まあ、成り損ないのお前が附いているような神、試験などしなくても、実力は知れるがなあ」

「なっ…！」

——パアアアン！

「えっ…？」

イクラのあまりの言葉に、思わず顔を上げ、何かを言おうとした箆也であったが、箆也の言葉よりも先に、その場に響き渡ったのは、一つの銃声であった。

「……っ」

すぐ横を駆け抜けていった弾丸に、イクラのオレンジ色の髪が数本、地面へと落ち、イクラがその表情を冷たくする。

「………」

睨みつけるように見るイクラの視線の先には、言玉から姿を変えた、赤銅色の銃を構えた、鋭い表情のアヒルが立っていた。

「か、神っ…」

箆也が少し驚くように、アヒルを見る。

「て、てっめえっ！何してくれちゃってんだよっ…！」

啞然としていた皆の中で、一早く声を発した金八が、イクラの横から身を乗り出す。

「神への手出しは、五十音士最大の罪だぞ！？てっめえ、それ、わかっててやってっ…！」

「騒ぐな、金八」

「……っ」

強く怒鳴りあげる金八であったが、イクラの声に言葉を止める。

「けど、神っ…！」

「俺の言葉が、理解出来ないかっ…？」

「うっ…」

イクラに鋭い視線を向けられ、金八が大人しく黙り込む。

「で、何のつもりだ…？ 安の神…」

「受けてやるよ、その神試験ってやつっ」

再びアヒルの方を向いたイクラに、アヒルがはっきりと言い放つ。

「なっ…！ 神…！」

アヒルの言葉を聞き、籠也が焦りの表情を見せる。

「安い挑発に乗るな！ 神！ 試験はまだ、あなたにはっ…！」

「お前も黙ってろ、籠也。これは俺が決めることだ」

「……っ」

いつもよりも低く重い声で言い放つアヒルに、籠也が思わず口を噤む。

「俺たちの神試験を受ける、ということでもいいのか…？」

「ああ」

確認するように問いかけるイクラに、アヒルが大きく頷く。

「お前の試験くらい、一瞬でクリアしてやるさっ」

「フンっ…」

挑発のようなアヒルの言葉に、少しも顔をしかめることなく、むしろ軽く笑みを浮かべるイクラ。

「お前のような右も左もわかっていない神が、早々簡単に、俺の試験をクリア出来ると思うか…？」

「やってみりゃわかる」

「……っ」

試すようなイクラの問いかけに、一步も退くことなく、強く言い切るアヒル。イクラの言葉に負けない姿勢のアヒルの姿に、イクラがその笑みを一瞬消し、瞳を鋭く光らせた。

「随分な自信だな…」

再び笑みを浮かべながら、イクラが懐へと右手を入れる。

「その自信、この場で碎き落としてやろうか…？」

「何っ…？」

アヒルが戸惑うように眉をひそめる中、イクラが右手を引き、懐

から何かを取り出そうとする。

「ストオォーっプ！」

『……っ！』

そこへ割って入ってくる声に、アヒルとイクラが思わず目を見開き、それぞれの動きを止める。

「あ、あんたはっ…」

「どうもおく、ご無沙汰だねえ。朝比奈クンっ」

どこからともなく、何の気配も感じさせぬまま、二人の間へと現れたのは、どこか怪しげな笑みを浮かべた、袴姿の男、為介であった。為介はいつも持っている扇子を閉じたまま、その先を鋭く、何かを取り出そうとしたイクラの右手に向けている。

「雅さんも」

「どうも」

為介のすぐ後ろには、相変わらず眼鏡の縁を人差し指で押し上げている、雅の姿もあった。

「井戸端…為介…」

「君も久し振りだねえ、イクラくんっ…」

静かに名を呼ぶイクラの方を振り向き、為介が少し目つきを鋭くする。

「ここは、平和な町のだ真ん中だよお？ 一体、何をしようとしたのかなっ…？」

「……っ」

腹の中を探るように問いかけてくる為介に、軽く眉を引きつるイクラ。

「先に銃を抜いて、手を出したのはあいつだ…」

「君の今しようとしたことが、“手を出す”なんて、可愛らしいことのように、とても思えなかったけど…？」

為介がさらに鋭い瞳で、見透かすような笑みをイクラへと向ける。

「フンっ…」

少し肩を落とすと、イクラが懷に入れていた右手を下ろした。

「随分とご執心じゃないか。何十年も姿を暗ましてた奴が、ここに来てしゃしゃり出てくるなんざっ」

「まあ、君よりは氣に入ってるかもねっ…」

「……っ」

挑発するように言い放ったイクラへ、挑発するような言葉を返す為介。為介のその言葉に、イクラはあからさまに表情をしかめる。

「……っ？」

二人の間に何か因縁のようなものを感じ、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「フンっ…まあいい…」

そっと笑みを零したイクラが、金八たちのいる後ろへと下がり、為介との距離を離して、再びアヒルたちのいる正面を振り向く。

「安の神、朝比奈アヒル」

「……っ」

イクラに名を呼ばれ、アヒルが顔を上げる。

「試験は三日後。場所はこちらで指定した。そこへ来い」

「こちらが場所の書かれた地図になりまあっすう！」

「んっ？」

ニギリが軽い足取りでアヒルへと歩み寄り、場所の記された地図を手渡す。

「今回の神試験は団単位での試験となりまっすう！」

「安の神は安附の四名、加守、左守、太守、たもり奈守なもりと共に、指定された場所へと集合して下さあゝい！」

「団、単位っ…？」

説明を行うチラシとニギリの言葉に、籠也が眉をひそめる。

「ちょ、ちょっと待っ…！」

『一度、承諾された試験を、拒否することは叶いません』

「……っ」

籠也の声を遮るように放たれる、二人の突き放すような声。

「試験の拒否は、神であることを放棄することとなりますので、ご

了承ください」

「試験日の集合は正午です。三十分以上の遅刻も試験の拒否と見なし、神失格となりますので、お気を付け下さい」

「だがっ…！」

「わかった！」

「神!？」

あっさりと頷くアヒルに、箆也が非難するように声をあげる。

『以上で説明は終わりました、神様』

「ああ、ご苦労っ…」

深々と頭を下げるチラシとニギリを、イクラが短く労う。

「試験日を楽しみにしている…安の神…」

「ああっ！」

「……っ」

大きく頷くアヒルを見て、イクラがどこか満足げに笑う。

「行くぞ…お前ら…」

『はっ！我が神！』

イクラの言葉に、声を揃える四人。イクラが飛び上がり、その場から姿を消すと、他の四人も、イクラに続くようにして飛び上がり、その場を去っていった。

Word 14 新たなル試練 (4)

「ふう〜っ」

五人がいなくなり、ホッとしたように一息つくアヒル。

「ああ、何か疲れっ…」

「何を勝手なことばかりしているっ!？」

「うわっ!」

ホッとしていたところに、至近距離から放たれる怒声に、アヒルが驚き、思わず胸を押さえる。

「な、何っ…」

「神試験などっ、まだ言葉もロクにない、イデオム熟語も使えないあなたが受けて、受かるはずがないだろうっ!？」

「うっ…」

責め立てるように怒鳴る箆也に、アヒルが少し顔をしかめる。

「そ、そんなのやってみなけりゃ、わかんねえーだろっ!？」

「やってみてからでは遅いから、言っているんだ!」

負けじと言い返すアヒルに、箆也がさらに怒声を浴びせる。

「まあまあ、二人ともお〜っ」

『引っ込んでろ!』

「うう〜っ」

止めようとした為介であったが、二人に睨みつけられ、あっさりと挫折する。

「雅くう〜んっ」

「情けない声、出さないで下さい。吐き気がします」

「がぁ〜んっ!」

「旧世代の神の名が泣くわね…フフフっ…」

体を丸め、落ち込んでいる為介を、冷たい言葉を投げかけ、さらに落ち込ませる雅。二人の様子を横から見つめ、囁がそっと微笑む。

「まあまあ二人とも…」

為介と同じように、今度は囁が二人を止めに入る。

『だから引っ込んでっ…!』

「黙らないと…すんごい手を使って、黙らせるわよ…?」

『……………』

不気味に呟く囁のその言葉に、あっという間に静かになるアヒルと箆也。

「おお、止まったあっ」

「フフフ…」

感心するように言う為介に、囁が得意げに微笑む。

「す、すんごい手って…知りたいような、知りたくないような…」

囁の言葉の意味を考えながら、アヒルが複雑そうな表情を浮かべる。

「もう試験は受けることになっちゃったんだし…今更グダグダと言いついても仕方ないでしょう…?」

「それはそうだがっ…」

宥めるように言う囁に、箆也があまり納得のいっていない様子で俯く。

「だが、それにしたって…」

箆也が表情を険しくし、先程のイクラの言葉を思い出す。

「——まあ、成り損ないのお前が附いているような神、試験などしなくても、実力も知れるがなあ——」

「あんな安い挑発でっ…」

「あそこでアヒるんが、挑発に乗って銃ぶっ放さなくても…試験は受けることになってたと思うわ…」

「えっ…?」

囁の言葉に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「私が挑発に乗って、以の神をぶん殴ってただろうからっ…」

「……………」

そつと微笑む囁に、箆也が驚くように、大きく目を見開く。

「だろお？ やっぱムカついたよなあ？ あのイクラちゃんっ」

「ええ…食べ物イクラも嫌いになりそうなほどに、イラつとしたわ…」

「……………」

深々と頷き合っているアヒルと囁を見ながら、どこか浮かぬ表情のまま唇を噛み締め、両拳を握り締める箆也。

「まあ色々言ってたって仕方ないってえ！ 前向きに行こうよおつ、前向きにいっ！」

「あ、居たんだっけ？」

「雅くうん！」

「僕の名前、呼ばないで下さい。吐き氣がします」

「がびいゝんっ！」

皆に明るく声を掛けようとした為介であつたが、アヒルに存在すら忘れられており落ち込み、雅の言葉でさらに落ち込みを深くする。

「そういう扇子野郎、あんた、あの以の神と知り合いでっ…」

「まあ、今考えるべきは、三日後の神試験だよねえ」

「へっ？」

アヒルの言葉を遮るように、すぐさま落ち込みから立ち直った為介が、話題を変える。

「どういう試験内容は知らないけど、今の朝比奈クンの実力を考えるとっ…」

「えっ…？」

為介が真剣な表情で、まっすぐにアヒルを見つめる。

「まあ、まず無理だろうねえっ」

「そうですね。百パー、無理です」

「うっせえ！ んなに思いつき言い切るんじゃねえっ！」

あっさりと言い放つ為介と、為介の言葉に何度も頷く雅に、アヒルが思わず怒鳴りあげた。

「ま、まだ三日あるんだ！ 三日間、みっちり辞書読んで、言葉探せ

「ば何とかつ…！」

「そうねえ…それもいいけれど…」

「その前に、まずはメンバー集めだろう」

「へっ？」

耳に入る籠也の言葉に、目を丸くするアヒル。

「三日で二人を見つけるのか…厳しいな」

「試験は団単位って言ってたものねえ…やっぱり揃ってないと、失格かしら…？」

「えっ…？」

さらに続く二人の会話に、さらにアヒルが間の抜けた表情となっていく。

「も、もしかして安団のメンバーって、全員揃ってねえのっ!？」

「ええ…今居るのは、ここに居るこの三人だけよ…」

「つまり、太守と奈守は誰かもわからない上に、五十音の力にも目醒めていない可能性があるということだ」

「ま、まじっ…？」

二人の言葉を聞き、引きつった表情となるアヒル。

「お、俺…てつきり、もう居るもんだとっ…」

「だからやめろと言ったんだ」

「まあまあ…もう仕方ないことなんだから…フフっ…」

がっくりと肩を落とすアヒルに、強い口調で投げかける籠也。そんな籠也を宥めるように、囁がそっと笑う。

「三日で二人か…確かに厳し過ぎかもっ…」

「そう悲観することもないよお」

「へっ？」

落ち込むように呟いていたアヒルが、横から聞こえてくる暢気な声に、顔を上げる。

「二人くらい、すうぐ見つかってえ」

大きな笑顔を見せた為介が、軽い口調でアヒルへと言い放つ。

「また適当なことをっ…」

「ホントだよお。その証拠にほらっ」

呆れたように呟く箆也にもう一度、言い放ち、為介がゆっくりと空き地の入口の方を振り返る。

“太守”クンなら、もうそこに居るしいっ」

『えっ…？』

為介の指差した方向を、一斉に振り向くアヒルたち。

「ええっ！？」

『あっ…』

空き地を囲う柵の裏から姿を見せているのは、指を差され、ひどく慌てた様子の保であった。

「た、保っ！？」

「あらあら…フフっ…」

驚くアヒルの横で、囁が不敵な笑みを浮かべる。

「保が何だって、ここにっ…」

「ひええ〜！一人じゃ道も聞けない俺なんかが、一丁前に皆さんを追って来ちゃってすみませえ〜んっ！」

「はあ…」

こちらへとやって来ながら、いつものように叫び散らす保に、アヒルが深々と溜息をつく。

「僕は付いてくるなと言ったはずだが…？」

「いやあ〜、そう言われると、付いて来なくなっちゃうのが人間の心理といえますかっ…」

冷たい視線を向ける箆也に、保が両手の人差し指を合わせながら、ひっそりと呟く。

「はあ…？」

「ひええ〜！そもそも人間として“どうなの？”って感じの俺が、心理とか語っちゃってすみませえ〜ん！」

ひどく怒っている様子の箆也に睨みつけられ、いつもよりも必死に謝る保。

「まあまあ、箆也…」

「それにい…この玉のことっ…」

「……っ?」

囁が箆也を宥めていると、保が急に真面目な口調となり、制服のポケットへと手を入れる。

『あっ…!』

「皆さんが同じ玉を持ってるの見て、何となく気になっちゃってっ…」

そう言って保がポケットから取り出したのは、赤色の言玉であった。

「こ、言玉っ…?」

「あっ…」

箆也と囁が驚きの表情を見せる中、前に一度、保がその言玉を落としたところを見ていたアヒルは、あの時のことを思い出し、ハッとした表情を見せる。

「赤い言玉…確かに、ア段の五十音士しか持っていないものだけど…」

「だが、こいつのは、波城灰示のものじゃないのか…?」

保に聞こえないよう、小声で為介へと問いかける箆也。

「じゃあちよっと、試してみるう…?」

「試す?」

「そこの君いっっ」

「は、はいっ!」

首を傾げるアヒルの横を通り抜け、為介が保へと呼びかける。保は少し怯えるように肩を震わせながらも、大きな返事でそれに答えた。

「名前、なんていうのお?」

「た、高市保です!」

「そっかあ、高市クンっ」

聞いたばかりの保の名を呼びながら、閉じていた扇子を広げる為介。

「ちょっと、その玉を握り締めた状態で、朝比奈クンへ向けて、“高い高い” って言ってみてくれるう〜？」

「へっ？」

「あ、は、はい！」

アヒルが目を丸くする中、為介の言葉に、とても素直に頷く保。

「ちょ…！ちょっと待っ…！」

「“高い^{たか}高い”！」

アヒルが止める間もなく、右手に握り締めた言玉をアヒルへと向けた保が、大きな声で、その言葉を放つ。すると、保の右手の中の言玉が、強い赤色の光を放った。

「だあああああっ！」

言玉から放たれた赤い光に包まれたアヒルが、勢いよく空へと上昇していく。

「ぎゃああああああ！」

「ふわあ…アヒルさんて、空も飛べるんですねえ」

空中で叫びあげるアヒルを、不思議に思うこともなく、感心した様子で見上げる保。

「間違はなく“太守”だ…安団、安附の一人」

「でしょお？」

保の言葉が発動したことを確認し、さらに驚いた表情となる簞也に、為介が何やら得意げに笑顔を向ける。

「内に潜む波城は“波守”なのに…不思議ね…」

「彼の両親は共に五十音士で、父親が“太守”、母親が“波守”であつたそうです」

戸惑う囁に答えるように、雅が話し始める。

「太守と波守の力は、血によって受け継がれます。ですから彼には、“た”と“は”、両方の力があるはずなのですが…」

「忌である波城灰示が入り込んだことで、力が二人に分割されちゃつたのね…フフっ…」

「んっ？」

保に聞こえないよう、小声で話す囁と雅に、保が大きく首を傾げている。

「つつーか、とつとと下ろせえっ!!」

「と、朝比奈君が叫んでいますますが、為介さん、下ろす言葉、考えてあるんですか？」

「あっ」

雅の問いかけに、いかにも、うっかりとした声をあげる為介。

「み、雅くうーんっ!」

「僕は知りません」

「いっやあゝ! 見捨てないでえゝ!」

「はあっ…」

情けない声をあげている為介を見て、箆也が深々と溜息をつく。

「囁」

「ええ…」

箆也の呼びかけに頷き、囁が右手に持っていた横笛を構える。

「“下^さがれ”…」

囁の言葉の後に、美しい音色が空き地に響く。

「ふいゝっ…」

赤い光に包まれながら、やっと遙か上空から帰還するアヒル。

「助かった…」

「景色はどうだったあゝ? 朝比奈クンっ」

「お前、いつかブン殴ってやるっ…」

陽気に問いかけてくる為介に、アヒルが拳を握り締め、怒りを燃えたぎらせる。

「まあこれで太守まで揃ったしい、良かったじゃなあゝいっ」

「全然良くねえーよっ!」

「なんでえ?」

「なんでってだなあっ…! ……っ」

アヒルが保を気にするように少し振り返り、為介のすぐ前まで寄っていった、保に聞こえないよう、耳元に口を近づける。

「あいつは親が五十音士だったことも、自分の中に波城灰示がいることも知らないんだぞっ!？」

必死の口調で、訴えるアヒル。

「第一、安附として試験に参加させたりなんかしてっ、その最中に波城灰示が出てきでもしたらっ!!」

「頼もしい限りじゃなあゝいつ、朝比奈クンよりよっぽど、頼りになりそうだよおゝ? 彼えゝ」

「なるかあっ!」

暢気に答える為介に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「あいつが出てきた時点で、安団で内輪モメになって終わりだろお! ? どう考えても!」

「それは言えてるわね…フフっ…」

「だが…」

微笑む囁に横から、箆也がゆっくりと口を挟む。

「太守があいつである以上…あいつを参加させないと、試験を放棄することになる…」

「うっ…」

厳しい表情で言い放つ箆也に、思わず顔をしかめるアヒル。

「あ、あいつの他に太守って…!」

「“た”の力は血によって受け継がれるんだよおゝ? 高市クンは、天涯孤独っ」

「転校生クンに、急いで子作りさせても…とても三日じゃ間に合わないわねえ…フフっ…」

「うっ…」

為介と囁の言葉に、アヒルは反論する力すら失くす。

「はあ…」

「な、何かよくわかんないけど、俺、頑張りますよっ! アヒルさん!」

落ち込むように肩を落とすアヒルに、保が必死に明るい笑みを浮かべ、何とか励まそうと声を掛ける。

「ああ！こんなピーマン食べれない俺なんかが、アヒルさんの心配しちゃってすみませえくんっ！」

「はあっ…」

相変わらずの保の姿に、先が思いやられ、アヒルはさらに深々と溜息をついた。

「とはいえ…転校生クンが太守だったから、見つけるのは後一人ね…」

「ああ。三日で後一人なら、まあ可能性はなくてもない」
薄く笑みを浮かべる囁に、籠也が冷静に言い放つ。

「後一人、“奈守”か…」

「奈守…」

「朝比奈クンっ」

「へっ？」

籠也の言った“奈守”という言葉を繰り返していたアヒルが、為介に名を呼ばれ、振り向く。

「周りをよおしく見てみることだよっ」

「えっ…？」

為介の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「付き人は、自然と神のもとに集まるものだ。最後の一人は、もう君の傍にいるかも知れないよっ？」

「もう、俺の…傍にっ…？」

その頃。言ノ葉高校、一年D組。

「お前が遅刻なんて、珍しいなあ、小泉っ」

「はあ…」

恵の立つ教壇のその前で、浮かない表情を見せているのは、紺平であった。

「どうした？何かあったか？」

「それがあ…よく覚えてないんですよねえ。大波に襲われる夢見た
と思ったら、道のと真ん中に寝てて…」

「はっ？」

紺平のよくわからない言葉に、恵が強く顔をしかめる。

「んでは？今日は、朝比奈はどうしたあ？」

「さあっ…？一緒に登校してたような気もするんですけど…起きた
らいなかったし、夢だったのかも…」

「はあっ？」

曖昧なことばかり言う紺平に、さらに顔をしかめる恵。

「まあいい。お前はとつとと座れ。じゃあ出席取んぞお！」

「はい」

浮かぬ表情で返事をする、紺平が自分の席へと歩いていく。

「相沢！」

「はい」

「朝比奈！は、いないっ…」

返事が返ってくるはずもなく、恵が出席簿に印をつける。

「これで八日連続…あのクソガキっ、今日という今日は絞め上げて
やるっ…」

『ひいっ！』

そう言って、右手のペンをへし折る恵に、クラス中の生徒たちが、
思わず震え上がる。

「次！磯野！」

「はい！」

へし折ったペンの教壇に置き、引き続き出席を取っていく恵。

「ガアの奴、まあ…た遅刻かあ。懲りないわねえっ」

教室の後方の席で、アヒルの幼馴染み、想子が、呆れた表情を見
せる。

「うんっ…」

想子の前の席で、どこか考えるような表情を見せ、そっと頷く、
想子の友人、奈々瀬。

「でも、今日は神月クンと真田さんもないし：お家で何かあったとかかも：」

「そういえば、あのうるさい転校生もないわねえ」

空席の目立つ教室内を見回し、言葉を交わす想子と奈々瀬。

「奈々瀬！」

「ううゝん：」

「んっ？」

出席を取る恵が、続いて奈々瀬の名を呼ぶが、考え込むように首を捻っている奈々瀬は、それに気づかない。返って来ない返事に、恵が出席簿から視線を上げる。

「奈々瀬七架！^{ななせななか}いないのかっ！？」

「あ、は、はいっ！」

恵がもう一度、大きな声で名を呼ぶと、奈々瀬はやっと気付いた様子で、少し慌てながら返事をした。

「ふうっ：」

「アハハっ」

「えっ？」

ホッと一息ついていた奈々瀬が、後ろから聞こえてくる笑い声に、少し振り返る。

「もうっ、笑わないでよ、想子ちゃん」

「ごめんごめんっ」

口を尖らせる奈々瀬に、想子が軽く笑みを向ける。

「けど、ナナの名前って、フルネームで改めて聞くと、ホント“なばっかだよねえっ”

「何それ、今更っ」

「アハハっ、確かに今更かっ」

顔をしかめる奈々瀬に、想子がまた笑みを浮かべる。

「もうっ：」

少し呆れるように前を向き、再び視線を、空いているアヒルの席へと移す奈々瀬。

「どうしたのかなあ…朝比奈クン…」

Word. 15へつづく。

Word. 15 タイムリミット (1)

突然、現れた“以いの神”伊賀栗いがりイクラと、金八たち四人の以団いだんメンバーにより、神試験を受けることとなったアヒルたち。

試験は団単位で行われるため、アヒルは安団あだんの四人のメンバーを揃える必要がある。加守の籠也、左守の囁は居るものの、他の二人太守と奈守はまだ、誰かもわかっていなかった。だが、保が太守であることが発覚し、残るは奈守を見つけるのみとなった。

試験まで後三日。一刻も早く、最後の一人を見つけなければならぬ。

「つて、いうのに…なんでまた俺は、国語資料室の掃除なんか、やってっかなあ…」

ボヤクように呟くアヒル。その手にはホウキが握られ、アヒルは、面倒臭そうな表情を見せながら、本棚の並んだ国語資料室の掃除を行っていた。

「なんでか教えてやろうかあ？ 八日も連続で遅刻したからだよっ」隣の部屋の机に座り、本を読んでいた恵が、アヒルの方を振り返り、突き離すように言う。以団との接触の後、為介の“奈守はすでに傍にいるかも知れない”という助言を受けたアヒルたちは、大人しく学校へ行くことにしたのだが、またしても遅刻したアヒルを恵が見逃すはずもなく、放課後、相変わらずの資料室掃除をやらされる羽目になったのである。

「はあゝあっ…」

疲れたように息をつきながら、難しそうな本の並ぶ本棚を見上げるアヒル。

——僕たちは先に帰って、奈守について調べてみる——

——まあ頑張って：アヒるん：フフっ：——

「二人はああ言って帰っちゃったし：」

——太守クンの指導は、ボクと雅クンに任せておいてえ——

——一人で勝手にやって下さい——

——いやあゝ！雅クン、見捨てないでえゝ！——

「保は扇子野郎んとこだしっ：」

ホウキを握る手を止めたアヒルが、皆の言葉を思い出しながら、ゆっくりと肩を落とす。

「はああゝっ：」

奈守のこと、保を五十音士として戦わせること、三日後の神試験のことなど、頭の容量が満杯になるほどに色々なことに考えを巡らせ、アヒルが深々と溜息を吐いた。

「何だあ？その、こっちの気分まで悪くなりそうな溜息はっ」

「うっせえなあ。俺にだって色々、悩みくらいあんだよっ」

恵の言葉に、アヒルが少し口を尖らせながら、言い返す。

「トンビが悩みなんで、百年早えーよっ」

「どういう意味だあ！っつーか、俺はアヒルだっつってんだろぅがっ！」

いつものように名を間違える恵に、勢いよく怒鳴り返すアヒル。

「はあっ：」

「：……っ」

怒鳴りあげた元氣も束の間で、すぐまた悩み込む表情を見せ、深々と溜息を吐くアヒルに、恵は少し目を細めた。

「気晴らしに面白い話でもしてやろうか？」

「ああ？面白いったって、どうせ国語の話だろ？」

「ああ、漢字の成り立ちについてだ」

「うげっ」

国語嫌いのアヒルが、恵のその言葉を聞いただけで、勢いよく顔をしかめる。

「冗談っ、誰がんな、まるで面白くもなさそうな話、聞っ…」

“しんじる”って、漢字があんだろお？」

「無視して、話進めんなよっ！」

アヒルの言葉に完全に無視し、座っていた椅子から立ち上がり、壁にある黒板の方へと歩いていく恵に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「大人しく聞けよ。チョーク、目玉にブチ込むぞ？」

「怖えーわ！いつか訴えられるぞ！体罰教師！」

チョークを右手に持ち、サラリと言い放つ恵に、アヒルがさらに声を大にする。

「お前、書けるか？」

「あっ？それくらい、さすがの俺でも書けるってのっ」

どこか試すように問いかける恵に、怒っていたアヒルが少しムキになったのか、黒板の前、恵のすぐ横へと並び、チョークを手にとって、黒板に文字を描いた。

「“信じる”、これだろっ？」

アヒルが黒板に描いた、『信』の文字を、チョークで指し示す。

「ああ、その通りだ」

「ハっ！どうだ！俺だって、漢字くらいの教養はなあっ…！」

「小学校四年で習う漢字だからな。さすがのトンビでも書けたか」

「うるせえ！それに俺はアヒルだったの！」

小バカにするように言う恵に、再び怒鳴るアヒル。

「この“信じる”っつー字、にんべんに“言”って書くだろ？」

恵が自分の持っている赤チョークで、アヒルの書いた『信』の文字を差しながら、話を進める。

「にんべんは“人”の意味。つまり信じるって字は、“人の言葉”って書くんだ」

「人の、言葉っ…」

その話を聞き、少し驚いたような顔を見せながら、アヒルが自分の書いた文字を、まじまじと見つめる。

「じゃあなんで、“人の言葉”と書いて、“信じる”と読むか…」
恵が『信』の文字を何度も指し示しながら、まるで授業をするかのように、言葉を続ける。

“人の言葉”には嘘がない。つまり、“人の言葉”こそが、真実だからさっ

「人の言葉…こそが真実っ…？」

「ああっ…」

ゆっくりと聞き返すアヒルに、恵が大きく頷く。

「漢字が出来たのは三千五百年も前…その頃、神だの仏だのがいた
か知らないが、それでも一番信じられるものと考えられたのは、“
人の言葉”だったんだろうなあ」

「……っ」

恵の言葉にそっと目を細め、アヒルがまっすぐな瞳で、描かれた
『信』の文字を見つめる。

「どうだあ？クソガキ。たまには国語の勉強も悪くないだろ？」

「まあなっ…」

軽く微笑んで問いかけてくる恵に、少し顔をしかめながらも、頷くアヒル。

「じゃあ、今日はもう帰っていいぞっ」

「へっ？」

そう言っって背を向け、再び机の方へと歩いていく恵に、アヒルが
目を丸くする。

「今日は随分、早くね？」

「八日も連続じゃあ、掃除する所もないんだよ」

意外そうに問いかけるアヒルに、机に置かれた本を読みながら答える恵。

「それとも何かあ？他の部屋の掃除でもしたいってかあ？」

「い、いや！全然！大人しく帰らせていただきます！」

悪戯っぽく言い放つ恵に、慌てた様子で必死に首を横に振りながら、アヒルがホウキを元の場所へと戻し、部屋の端に置いてあった自分の鞆を持ち上げて、資料室の出口へと駆けていく。

「じゃ、じゃあ俺、帰るから」

「おう、明日こそは遅刻すんなよっ」

「わかってるよっ」

恵が釘を刺すように言うと、アヒルが頷きながら、資料室の扉を開ける。

「朝比奈アヒル」

「……っ?」

アヒルが資料室を出ようとしたその時、恵が珍しく、間違えることなく名を呼び、アヒルを呼び止めた。

「誰の言葉を信じるか、間違えんなよ」

「えっ……? あ、ああっ……」

恵の言葉に戸惑うアヒルであったが、その真剣な眼差しに、急に何を言い出すのかと問うことも出来ず、アヒルは大人しく頷く。

「じゃあ、気をつけてな」

「あ、ああっ。失礼、しました」

軽く頭を下げると、アヒルはそのまま、資料室を後にした。

「ふうっ」

アヒルが出ていき、資料室に一人となった恵が、小さく息をつきながら、椅子にもたれかかるようにして、天井を見上げる。

「神試験、か……」

そっと目を細め、厳しい表情を見せる恵であった。

言ノ葉町の小さな八百屋さん、『あさひな』。二階、アヒル自室。

「ふいっ」

「あら……おかえりなさい、アヒルん……」

「おう、ただいま」

無事、寄り道することもなく学校から家へと戻って来たアヒルを迎えたのは、アヒルの部屋ですっかり寛いだ様子で本を読んでいる囁であった。

「今日は随分と早かったのね…」

「八日連続じゃ、掃除する場所もねえーから帰っていいってさ」

「あらそう…フフフ…」

囁と会話をしながら、アヒルが鞆を机の上へと置き、ブレザーを脱いで、壁のハンガーへと掛ける。

「あれっ？　そういや箆也は？　下？」

「箆也なら、奈守の情報収集に出掛けてるわ…」

「ふうん」

ネクタイを緩めながら、囁の言葉を聞くアヒル。

「んで、お前は何やってるわけ？」

「私…？　私は“恋盲腸くヒトミ悪化、恋の痛みは無限大くの巻”を読んでるのよ…フフフ…」

「お前、奈守探す気ねえーだろ…」

後三日で探さねばならないというのに、まるで焦った様子を見せず、暢気に本を読んでいる囁に、アヒルが呆れた表情を向ける。

「焦って無意味にバタバタしても仕方ないじゃない…？　一先ず、箆也の情報を待ちましょう…」

「ま、まあなあ…」

冷静な囁の言葉に、素直に頷いて、机の前の椅子へと腰掛けるアヒル。

「保は大丈夫かねえ？」

「さあ…？　まあ為の神が任せておけと言ったんだし…任せておけばいいんじゃない…？　フフフ…」

少し不安げに問いかけるアヒルに、囁がまたもや冷静に答える。

「記憶、戻ったりしねえーかなあ…」

「……っ」

窓の外の景色を眺めながら、保の記憶の心配をしているアヒルを見つめ、囁がそっと目を細める。

「アヒルんは…気になったりしないの…？」

「へっ？」

急な問いかけに、アヒルが囁の方を振り向く。

「いや、勿論、保のことも奈守のことも気にしてっ…」

「そうじゃなくて…」

「へっ？」

「箆也のこと…」

「……っ」

囁の口から箆也の名が出ると、アヒルはハッとした表情を見せた。
「あんなこと聞いちゃったら…普通は気にならない…？」

——神に成り損ねた五十音士よ——

「……………」

イクラの言葉を思い出し、アヒルが椅子に座ったまま、考え込むように深く俯く。

「でもアヒルん…箆也にも私にも、何も聞こうとしないし…」

「別に気になってねえーわけじゃねえーけどさっ…」

顔を上げたアヒルが、少し肩を落としながら、そっと呟く。

「でも別に、そこまで気になってないってのも事実なんだよなあ…」

「えっ…？」

そのアヒルの言葉に、囁が意外そうな顔を見せる。

「アヒルんて…結構、薄情者なのね…」

「お前にだけは言われたかねえーわっ」

あっさりと言い放つ囁に、思わず言い返してしまうアヒル。

「まあ、何っーか、出会ったばかりのイクラちゃんの言葉、全部真に受けて影響される気はねえーし、俺、あいつのことは…」

アヒルが再び、窓の外の方を見つめる。

——誰の言葉を信じるか、間違えんなよ……

「あいつの言葉で聞く以外、信じる気ねえーからさっ」

「……っ」

恵の言葉を思い出し、そっと微笑んで言い放つアヒルに、囁が少し驚いたような表情を見せる。

「だから俺は、今まで安附として附いてきてくれた、あいつの言葉を信じて……今まで通り、神でいる」

何の迷いもない、晴れやかな笑みを浮かべ、言葉を続けるアヒル。
「それが、あいつの神として、俺がするべきことだって思うから」

「アヒるん……」

微笑むアヒルを、まっすぐに見つめる囁。

「そうね……」

頷くように少し俯いた囁の表情からも、小さな笑みが零れた。

「ちゃんと聞こえたかしら……？」

「へっ？」

「いいえ……何でもないわ……フフっ……」

その小さな声が聞き取れず、聞き返したアヒルに、囁はそっと首を横に振った。

「……………」

アヒルの部屋の外の廊下では、扉の前の籠也が、ドアノブを握ったまま、扉を開けることが出来ず、その場に立ち尽くしていた。部屋からの二人の話が聞こえ、入るタイミングを脱していたのである。

——それが、あいつの神として、俺がするべきことだって思うから……

「……っ」

先程のアヒルの言葉を思い出し、何か込み上げるものを我慢するように、強く唇を噛み締める簞也。

「ふう……」

中に聞こえないように、小さく一つ、息を吐くと、簞也はドアノブを回した。

「戻った」

「おうっ、おかえり！」

簞也が扉を開け、部屋の中へと入っていくと、アヒルが椅子の上から軽く手を上げ、笑顔で出迎える。

「あら……おかえりなさい……」

どこかわざとらしい笑顔で、同じように出迎える囁。

「まさか簞也……さっきの、アヒるんと私のイチヤイチャ恋盲腸風会話、聞いていたんじゃ……」

「んな会話っ、誰がするかぁ！」

囁の言葉に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「心配するな。僕にそんな不快極まりない会話を、盗み聞きする趣味はない」

「っーか、してねえしっ！」

「そんなことよりも、今は奈守だ」

「あ、あぁっ」

冷静に言い放つ簞也に、すぐさま怒りが冷め、大人しく頷くアヒル。

「奈守について……何かわかったの……？」

「ああ、調べられることは、すべて調べてきた」

囁の問いに答えながら、簞也が鞆の中から、何やら書類のようなものを数枚取り出す。

「まず、奈守の“な”の言葉の力だが、これは、あなたの“あ”の力同様、血や人為的継承で行われるものではなく、力が自動的に選ぶタイプのものらしい」

「じゃあ人物の特定は難しそうね…」

「ああ。先代奈守の周辺の人間を粗方調べたが、それらしい人物は該当しなかった」

箆也が言葉が続けながら、険しい表情を見せる。

「次に、最近数ヶ月の言玉の力、発生例をすべて調べた」

「んなことまで調べられんのかっ!？」

「韻の特殊な装置を用いてのみ、知れる情報だ」

「よく、そんなもの…使わせてもらえたわね…フフフ…」

「まあ、少しな…」

感心するように言う囁に、あまり浮かぬ表情で答える箆也。

「だが、未知の言玉の使用例は、一つもなかった」

「それってえ、つまりは、どういうことだあ？」

「使用された言玉は、すべて使用した五十音士が明らかになってい
る…つまり、まだ見つかっていない奈守が、言玉を使った例はない
ということでしょう…? フフフ…」

「ああ。奈守はまだ、言玉の力に目醒めていない可能性が高いとい
うことだ」

「成程」

二人の補足説明を聞き、アヒルがやっと、もたらされた情報の意
味を理解する。

「って、それって益々、見つけにくいってことじゃっ…」

「ああ、そういうことだ」

少し眉をひそめて呟くアヒルに、箆也が困ったように肩を落とし
ながら頷き、見ていた書類を鞆の中へと片付ける。

「とにかく、有力な情報がない以上、後はしらみつぶしに探してい
くしかない」

「あら、面倒そう…」

「お前ねっ…」

あからさまに嫌そうな顔を見せる囁に、呆れた視線を送るアヒル。
「明日から僕と囁は、学校を休んで、手分けして調査を進める」

「時給は…？」

「見つかったら、奈守にでも請求するんだな」

興味深く問いかける囁に、箆也が冷たく言い放つ。

「俺は？」

「あなたは学校へ行きながら、ひたすら辞書を読んで、とにかく語彙を増やせ」

目を丸くして問いかけたアヒルに、箆也がすらすらと言葉を続ける。

「本来なら、僕と囁で指導して、熟語イデオムまで使えるようになってもらいたいところだが、今はその時間がない」

「熟語、か…」

箆也の言葉を繰り返しながら、アヒルが少し表情を険しくする。

「今のあなたの力では、どんな試験内容であれ、神試験に受かるのは至難の業わざだ」

「波城灰示との戦いで、“欺あぶせけ”が増えたものの…まともな言葉は、まだ三つですものね…」

「うっ…」

「ああ。攻撃用の言葉で考えたら、“当たれ”のたった一つだしな」
「うっ…」

二人の容赦ない言葉に、徐々に小さくなっていくアヒル。

「とにかく、ひたすら辞書を読め。いざという時、最良の言葉が思いつくようにしておくんだ」

「わ、わかった」

少し強張った表情を見せながらも、アヒルが箆也の言葉に頷く。

「神試験まで後三日…いや、もう三日とない。一分、一秒すら、無駄には出来ないぞ」

「ああっ…」

警告するような箆也の言葉に、アヒルは真剣な表情を見せた。

その後、箆也の言葉通りに、箆也と囁は学校を休み、奈守の調査を進めた。だが、奈守は見つからないまま、一日、また一日と、貴重な時間は、あっという間に過ぎ去っていった。

Word. 15 タイムリミット (2)

神試験まで後一日。放課後。学校からの帰り道。

「ふっはぁあゝっ…」

箆也と囁がないため、今日も一人で帰り道に行くアヒル。両手で辞書を広げたまま、深々とやる気の飛んでいきそうな溜息を吐いた。

「もう明日か…やっべえなあ…」

そう呟きながら、アヒルが不安げな表情を見せる。あれから二日の時が過ぎ、神試験はいよいよ、明日へと差し迫っているのである。

「結局、奈守は見つかってねえーし、色々気になって、いくら辞書読んでも言葉、頭に入んねえーしっ…」

悪循環の中にいる自分を認識しながらも、それでも抜け出すことが出来ない今の状況に、頭を悩ませるアヒル。

「まじ、どうしょっ…」

辞書に羅列された文字を見ながら、アヒルが困ったように呟く。

「浮かない顔ですね」

「へっ？」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、思わず足を止め、振り返るアヒル。

「あっ…雅さん！」

「どうも」

アヒルが振り返ると、そこには穏やかな笑顔を浮かべた、雅が立っていた。

「神試験のことで、お悩み中ですか？」

「えっ？あ、まあ…」

雅の問いかけに、少し齒切れ悪く答えるアヒル。

「悩みなら、オカルト同好会の部室に来て下されば、いつでも聞くのに」

「いや、まず部室がわかんねえーっていうか、あんまり行きたくねえーっていうかつ…」

雅の気持ちは有り難いのだが、どうにも気が引け、アヒルが困ったように眉をひそめる。

「そうだ」

「へっ？」

急に何か思いついたように手を叩く雅に、アヒルが首を傾げる。

「気晴らしに、太守くんの様子でも見に来ませんか？」

「保、のっ…？」

言ノ葉町五丁目。町の何でも屋さん『いどぼた』。店裏の敷地。

「はあっ、はあっ、はあっ」

「じゃあ、ちょっと休憩にしようかなぁ」

「あ、は、はい！」

大きく息を乱し、地面に倒れ込んでいた保が、為介の言葉に、慌てて体を起こし、大きな声で頷く。

「お茶でも淹れてこよっかなあゝふふふうゝんっ」

「あっ…」

全身傷だらけの保とは異なり、服に汚れ一つついていない為介が、何やらご機嫌な様子で扇子を振りながら、店の中へと入っていく。

そんな為介を、保は呼び止めることなく、見送った。

「はあっ…疲れた…」

「随分とボロボロだなあ」

「えっ…？」

背後から聞こえてくる声に、感心していた保が振り向く。

「何をどうやったら、んなボロボロになんだよっ？」

「あ、アヒルさあゝんっ！」

保が振り向いたその先にいるのは、雅に連れられここまでやって

来た、アヒルであった。この三日間、学校を休んでいたの、久々に見るアヒルの姿に、保は笑顔を見せる。

「お久し振りです！お元気でしたかあ！？」

「そんなに久々でもねえーだろっ」

まるで何年も会っていないかったかのように問いかけてくる保に、アヒルが少し呆れた笑みを向ける。

「あ、そうですよねえ。す、すみませんっ…この三日間、何か雪山で遭難した時並みに、長く感じちゃって…」

「んなに、扇子野郎の指導、きついのか？」

「あ、いえ、指導の方はそんなにっ…」

問いかけるアヒルに、保が笑顔を向ける。

「午前中は言葉の勉強して、午後は為介さん、雅さんと手合わせして、力の実践的な使い方を学んだりって感じで」

「ふうんっ」

保の話を聞きながら、アヒルが感心するように声を漏らす。

「はあっ！こんな俺なんかのせいであ、お二人の貴重なお時間を無駄にさせてしまってますみませえん！」

「本当ですね」

「ひいえええ！ごめんなさあ〜いつ！」

「雅さん…」

笑顔であっさりと頷いて、保をさらに追いこんでいる雅に、アヒルが少し呆れた表情を見せる。

「指導の方では疲れてないんですけど、何か急に色々知っちゃったから、少し気疲れしてしまっっ…」

「……っ」

どこか曇った笑顔で話す保に、そっと目を細めるアヒル。

「そのお、保」

「へっ？」

どこか遠慮がちに問いかけるアヒルに、保が目丸くして振り向く。

「ごめんな。俺が勝手に突っ走ったせいで、お前まで巻き込んだまま
ってっ…」

「そんなんっ…！アヒルさんのせいじゃないですよ！」
申し訳なさそうに謝るアヒルに、必死に訴えかける保。

「これは俺の問題でもあるし、俺だって、アヒルさんの力になりた
いですからっ！」

「保っ…」

アヒルへまっすぐな瞳を向け、大きな笑顔で言い放つ保を、アヒ
ルが細めた瞳で、嬉しそうに見る。

「それにっ！宇宙侵略から、この言ノ葉町を守るためじゃないです
か！」

「はっ？」

次に放たれた保のその言葉に、アヒルの表情が一気に歪む。

「まさか、この前の人たちが地球外生命体だとは思いませんでした
あ。どう見たって、人間ですよねぇっ」

「た、保っ…？」

「それにまさか！言ノ葉町に、地球の核となる超特殊鉱石、ダイヤ
モンドンが埋まってるだなんて！もう驚きですっ！」

「……………」

どこか興奮気味に話す保に、何から突っ込んでいいのかもわから
ず、否定する元気すらなくして、引きつった表情で黙り込むアヒル。
「はぁ…い、お茶入ったよぉ…って、あつれえ？」

そこへ、店から茶を淹れて出てきた為介が、保と話しているアヒ
ルに気づく。

「雅クン、それに朝比奈クンもお…いつ来たのお…？」

「おいっ…」

「へっ？」

店から出て、近づいてくる為介のもとへ、アヒルが早足で歩み寄
っていく。

「話が…あんだけどっ…？」

「アハハあゝ嫌な予感ゝっ」

圧をかけるような瞳で睨みつけるアヒルに、為介が引きつった笑顔を見せる。

「んんゝっ？」

「僕らは中で休憩にしましょう、高市くん」

「あ、は、はいっ！こんな俺がお茶なんかいただいちゃって、すみません！」

アヒルと為介の様子に首を傾げていた保であったが、雅がその場の空気を読んで、保へと声を掛けると、二人はそのまま、アヒルと為介を残して、店の中へと入っていった。

「で、どういうことだ…？」

「何があゝ？」

「宇宙侵略やらダイヤモンドンやらの話だよっ！」

惚けるように聞き返してきた為介に、アヒルが我慢ならなかったのか、勢いよく怒鳴りあげる。

「ああっ！よく出来た大ウソでしょお？」

「どこがじゃいっ！リアリティのカケラもねえわっ！」

為介が得意げな笑顔を見せると、アヒルはさらに顔をしかめる。

「何、ウソばかり、吹き込んでんだよっ！」

「だってえゝ、下手に話して、記憶復活しちゃったりしたら、マズいんでしょゝ？」

「それはそうだけどっ…」

為介の指摘に、アヒルが少し言葉を詰まらせる。

「けどっ、あんな大ウソまで吐く必要なんてっ…！」

「ホントはねえ、話そうとしたんだっ」

「えっ…？」

「五十音土のことや、神試験のこおゝとっ」

「…っ」

そっと微笑み、落ち着いた口調で言い放つ為介に、少し驚くように目を見開くアヒル。

「じゃあ、なんでっ…」

「話そうとしたら、すうぐ眠っちゃうんだよ、彼っ」

「えっ？」

その言葉に、アヒルが目を丸くする。

「まるで、彼の中にいる誰かさんが、彼がすべてを知ることを、邪魔してるみたいでさあ」

「それって…」

一気に曇る、アヒルの表情。

「波城灰示、が…？」

「さあ？ボクは彼のこと、詳しく知ってるわけじゃないから、何とも言えないけどお」

「……っ」

首を傾げる為介を見て、考えるように俯くアヒル。灰示が保の記憶に干渉し、五十音士や灰示自身の記憶を消したということは、アヒルも箆也を通して、和音から聞いていた。灰示がそこまでしているというのに、保を五十音士の太守として戦わせることに、アヒルは気の引ける思いであった。

「まっ、お話はともかく、ボクらの指導を邪魔しないってことは、神試験に参加するのは一応、認めてくれてるってことなんじゃないのお？」

「一応、ねえっ…」

為介のどこか適当そうなその言葉を聞きながら、アヒルが複雑な表情を見せる。

「太守クンはいいとして、他はどうなの？」

「えっ？」

「奈守クン、まだ見つかってないわけ？」

「あ、ああっ…まだ…」

アヒルが浮かない表情を見せながら、そっと頷く。

「箆也と囁には、奈守探しは二人に任せて、辞書読んで勉強するようについて、言われてんだけどっ…」

「その分だと、全然、^{はかど}拂ってなさそうだねえ」
「うっ」

為介に言い当てられ、アヒルが思わず口をすぼめる。

「辞書は読んでんだけど、何か色々と気になっちゃって、こう、言葉が右から左に抜けてくつつーかつ」

「イクラくんてねえ」

「へっ？」

急に言葉を挟む為介に、目を丸くするアヒル。

「さすがに、忘れてないでしょお？以の神の伊賀栗イクラくんっ」

「あ、ああっ」

イクラの鋭い、突き刺すような瞳を思い出しながら、アヒルがゆつくりと頷く。

「ボクの教え子っていうか、弟子っていうかあ…ボクが彼に言葉の力の使い方を教えたんだよねえ」

「えっ…？」

為介の言葉に、アヒルが驚いたような顔を見せる。

——君も久し振りだねえ…イクラくん……

「あっ」

アヒルが、イクラが現れたあの日、為介とイクラが互いに知っているように言葉を交わしており、二人の間に、何やら因縁めいたものを感じたことを思い出した。

「彼ねえ、どうしても神になりたかったらしくて、血や力による選出のない、人為的に継承出来る“以の神”になろうって決めて、ボクのところに無理やり、弟子入りしに来たの」

「神に、なりたくて…？」

「うん。彼がどうして、そこまで神に執着しているのかは知らないけどねえ」

眉をひそめ、聞き返したアヒルに、為介が涼しげな表情で答える。

「ボクは彼の望む通り、“い”の力を教えて、数年後、彼は自分の望み通り、“以の神”になった…」

空を見上げた為介が、遠くを見るような瞳を見せる。

「そして、“以の神”となった彼は、三ヶ月前、神試験を受けた」

「神試験っ…？」

「うんっ」

敏感に反応するアヒルに、為介が大きく頷きかける。

「本来なら、以団五名で参加するはずの試験を、彼は“自分だけで十分だ”と、たった一人で受験」

顔を下ろした為介が、まっすぐにアヒルを見つめる。

「当時、五団の中で最強と言われた、“於団”^{おだん}の於附^{おつき}四名を、一瞬で倒し、あっさりと神試験を合格した…」

「……っ」

伝えられる事実に、アヒルが険しい表情を見せ、思わず強く、唇を噛み締める。

「そういう人間なんだよ、君の試験官はっ」

為介が口端を吊り上げ、どこか不敵に笑う。

「さあて…彼の試験、君は合格できるかなっ…？」

「……………」

どこか試すように問いかける為介に、アヒルは頷くことも出来ず、ただ厳しい表情を見せた。

Word. 15 タイムリミット (3)

「神に、執着…か…」

先程の為介の言葉に少し不安と疑問を抱きながら、アヒルは一人、『いどばた』からの帰り道を歩いていた。居残って資料室の掃除をした日であれば、空は暗いのだが、今日はまだ明るく、人通りも多い。

——彼の試験、君は合格できるかなっ…？——

「……っ」

試すような、あの問いかけが何度も頭の中で巡り、アヒルは一気に浮かない表情を作る。

「ああ！ダメだダメだ！始まっていいねえのに、弱気になってどうすんだよっ！」

両手で頭を抱え、必死に首を横に振って、アヒルが、自分に言い聞かせるように必死に叫ぶ。

「つつーか、まず、奈守が見つかんねえーと、試験に出ることすらっ…」

「おらおらあ！早く来いよお！」

「あっ？」

悩み込むように俯いたアヒルが、どこからか聞こえてくる大きな子供の声に気づき、顔を上げた。

「ほらほらあ！」

「か、返してよお！」

「あっ…」

アヒルが左横を振り向くと、町の小さな公園で、大きなランドセルを背負った少年が、胸にもう一個、ランドセルを抱え、両脇に仲

間らしき少年を従え、公園中を駆けていた。その三人の少年を、ランドセルも持っていない小柄な少年が、必死に追いかけている。

「ガキのケンカかぁ？」

思わず立ち止まり、公園の中のその様子を見つめるアヒル。

「返して！返してよお！僕のランドセル！」

「返して欲しいなら、とっとと取り返してみろっての！ほれ！」

「あっ…！」

三人の少年はパスを回すようにランドセルを投げ合い、小柄な少年が、ランドセルを取り返せないようにする。その行為に、さらに困った顔を見せる小柄な少年。

「い、いい加減にしてよ！僕っ、ランドセルないと家に帰れなっ…！」

「別に帰んなくてもいいだろお？お前、家帰っても、親いないんだからさぁ！」

「…っ！」

その言葉に、少年が大きく目を見開く。

「……っ」

ランドセルを取り返そうと、必死に伸ばしていた手を力なく下ろし、その場に立ち止まって、深く俯く少年。

「そうそっ！おかえりって言ってくれる相手もいないんだから、帰る意味ねえよなぁ！」

「このまま、この公園で寝てけよお？誰もいないんだから一緒だろっ？」

「言えてる！アハハハっ！」

「おいっ…」

『へっ…？』

背後から聞こえてくる、低く重い声に、高々と笑っていた三人の少年たちが、ゆっくりと振り返る。

「随分と楽しそうだなぁ…ええっ…？」

『うっ…！』

少年たちが振り返った先に立っていたのは、その辺りの不良学生も飛んで逃げそうなほど、恐ろしく鋭い目つきを見せたアヒルであった。そんなアヒルに睨まれ、少年たちが背筋を震え上がらせる。

「お兄ちゃんも混ぜてくんねえーかなあっ…?」

『ひっ…ひええええっ!』

アヒルに睨みつけられながら問われ、震え上がった少年たちは、その場に小柄な少年のランドセルを投げ捨て、逃げるように公園を駆け去っていった。

「つたく、ロクな育ち方してねえーなあ。クソガキがつ」

呆れたように言い放ちながら、アヒルが三人の投げ捨てていったランドセルを拾いあげる。

「ほらっ」

「あ、ありが…とう…」

「…っ」

顔を上げぬまま、ランドセルを受け取る少年に、少し目を細めるアヒル。

「おいっ、大丈夫かあ？」

俯いたままの少年を心配するように、アヒルが大きく腰を折り、少年と視線を近づけながら問いかける。

「悪ガキどもの言葉なんか、聞く必要なっ…」

「聞いてないよ…」

「へっ？」

遮るように返ってくる言葉に、アヒルが少し首を傾げる。

「聞いてないから…ムカっとしてもいないし、イラっとしてもいない…」
受け取ったランドセルを握り締めながら、少年がことばを続ける。
「そんなことしたって…いなくなった人が、帰ってくるわけでもないんだからっ…」

「…っ」

どこか諦めたような少年の言葉に、一気に曇るアヒルの表情。

「お、おい、おまっ…」

「……っ！」

「あっ…！」

アヒルが声を掛けようとしたその時、少年はランドセルを抱えたまま、勢いよくその場を駆け出し、あっという間に公園を出てしまった。

「あっ…」

伸ばそうとした手をゆっくりと下ろし、少年の去っていった公園の出口を見つめるアヒル。

「痛、い…？」

アヒルは自分の左胸を押さえ、どこか晴れぬ表情で呟いた。

「はあっ…！はあっ…！はあっ…！」

公園を飛び出した少年は、一度も足を止めぬまま町中を走り抜け、十分ほど走ったところで、やっと足を止めた。

「はあっ…」

足を止めた少年が、呼吸を整えるように一つ、深い息を吐く。

「あれ？六騎^{むつき}？」

「えっ…？」

少年が六騎と呼ばれ、ゆっくりと顔を上げる。

「お、姉ちゃん…」

六騎が顔を上げると、そこには、六騎を覗き込むように少し首を傾げた、奈々瀬が立っていた。奈々瀬を姉と呼ぶ六騎。よく見れば、茶色の髪や大きな瞳が似ている。

「どうかしたの？今日は遅かったんだね」

「あ、うん。えと、掃除当番で…」

どこか誤魔化すように、奈々瀬から視線を逸らしながら、六騎が歯切れ悪く答える。

「そう、今日も学校楽しかった？」

「あ、う、うんっ…」

微笑んで問いかけてくる奈々瀬に、無理やり作ったような笑みを浮かべて、大きく頷く六騎。

「お姉ちゃん、今からバイト？」

「うん。今日は遅番だから、先お風呂入って、寝ていいからね」

「わ、わかった」

奈々瀬の言うことに、六騎が素直に頷く。

「じゃあ行ってくるねっ」

「うん、行ってらっしゃい」

横を通り過ぎていく奈々瀬に、六騎が軽く手を上げ、笑顔で見送る。

「……………」

奈々瀬が去った後、六騎はしばらくの間、その場で立ち尽くし、何やら神妙な表情を見せていた。

その日、夜。朝比奈家、アヒル自室。

「十時半、か…」

夕飯を食べ、風呂にも入り、ジャージ姿ですっかり寝る態勢となつて、ベッドへと寝転がったアヒルが、机の上に置いてある時計を見ながら、少し眉をひそめる。

「まだ、奈守探してんのかなあ？ あいつら…」

窓から、隣の家に明かりがついていないことを確認し、ポツリと呟くアヒル。箆也と囁は、朝出掛けて以来、一度もアヒルに姿を見せておらず、まだ家にも戻っていないようであった。

「試験まで、後半日…おっと！ ボヤいてる間に、勉強勉強っと！」
時計の隣に置いてあった辞書を持ち上げ、ベッドに寝転がったまま、顔の上に広げるようにして、辞書を開くアヒル。

「ええーっと？ 浅漬け、明日、アスパラガスっ…」

辞書の“あ”のページを、アヒルがひたすらに読んでいく。

「……っ」

だが、ふと気が逸れ、アヒルが再び机の上の時計を見た。

「ああゝ！ダメだ！何かもう色々気になって、とても、じっとしてらんねえっ！」

閉じた辞書をベッドの上へと置くと、アヒルは勢いよくベッドから起き上がり、足早に部屋を出た。階段を降り、一階の居間へと入っていく。

「おっ？どうしたあ？アヒル」

居間で寛いでいた、風呂上がりらしき様子のスズメが、座ったままアヒルを見上げ、声を掛ける。

「ちよっと散歩行ってくる」

「んな時間からかあ？」

靴を履き、もう閉まっている店の方へと出ていくアヒルを、目を丸くしながら見送るスズメ。

「補導されんなよお？」

「喝上げしちゃダメだよ…？アヒル君…」

「犯罪者にはならないでねえゝ！アーくうゝんっ！」

「ならねえよっ！」

口々に言いながら見送る家族に怒鳴りあげながら、アヒルが店の通用口を出て、すっかり暗い外へと出た。

「ったく、人を危険人物みたいに言いやがってっ」

家族の言葉に不満を感じながら、アヒルが道を歩き始める。昼間は活気のある商店街も、もう、すべての店が閉まり、静まり返っていた。ろくに人通りのない道を、ゆっくりとした足取りで進むアヒル。

「はあっ…何か気の紛れることねえーかなあっ…」

「朝比奈クン？」

「へっ？」

ふらふらと歩いていたアヒルが、左方から聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、振り向く。

「こんな時間に歩いてるから、見間違いかと思っちゃったっ」

「奈々瀬」

アヒルが振り向いた先に立っていたのは、笑顔を見せた奈々瀬であつた。

「こ、こんばんは！きよ、今日も絶好の遠足日和だねっ！」

「そ、そうか…？っつーか、後一時間くらいで、今日終わるけどなっ…」

気合いの入った言葉を掛けてくる奈々瀬に、アヒルが少し呆れた表情を見せる。

「んっ？」

アヒルが、奈々瀬の後ろに見えるコンビニを見る。

「今日もバイトだったのか？」

「う、うんっ」

「こんな時間まで大変だな」

「きよ、今日はたまたま遅番頼まれちゃってっ…いつもはもうちょっと早いんだけどねっ」

アヒルの言葉に、奈々瀬が少し緊張するように声を上ずらせながらも、嬉しそうな表情で答えていく。

「朝比奈くんは、こんな時間にどうしっ…」

「お待たせえ〜！ナナっ！」

「あ、リンちゃんっ」

「あっ」

奈々瀬がアヒルに問いかけようとしたその時、コンビニから少女が出てきて、奈々瀬へと手を振り上げた。その少女を見て、少し驚いたような顔を見せるアヒル。それは以前、忌に取り憑かれた、あのリンという少女であつた。リンは忌のことを覚えていないが、もし思い出してしまったらと気にかかり、アヒルが思わず顔を下へ向ける。

「さあ、さっさと帰っ…んんっ？」

「うっ…」

奈々瀬へと駆け寄って来たリンが、まさか見逃すはずもなくアヒルに気づき、アヒルは少し顔を引きつる。

「あなた、確かっ…」

「朝比奈クンでいって、わ、私と同じクラスの人なの。今、ぐ、偶然会って」

眉をひそめるリンに、少し照れたような様子で話す奈々瀬。

「ああっ！」

奈々瀬の話を聞くと、リンが大きく手を叩き、何やら満面の笑顔を浮かべる。

「あのお偶然も何かの縁なんでえ、ナナ、家まで送っていってもらえますう〜？」

「へっ？」

「えっ!？」

笑顔で言い放つリンに、それぞれ驚いた顔を見せるアヒルと奈々瀬。

「ちよっ…!リンちゃんっ…!」

「この子の家までって、結構、薄暗い道多いんですよ〜もうこんな時間だし、一人じゃ危ないですしい」

「何言ってるの!?!だいたい私の家、大通り沿っ…!」

「んんっ!？」

「うっ…」

反論しようとした奈々瀬が、リンに睨みつけるように見られ、思わず言葉を呑み込む。

「じゃっ、私は家、すぐそこなんでえ〜!ナナっ、また明日ねえ〜っ」

「あ、ちよっ…!リンちゃっ…!」

「ばいばあ〜い!」

「あっ…」

奈々瀬が止める間もなく、大きな笑みを浮かべたリンは、軽やかな足取りで、あっという間にその場を去っていった。リンへと伸ば

した手を、奈々瀬が力なく下ろす。

「ご、ごめんね、朝比奈クン」

リンの去っていった方から、再びアヒルの方を振り向く奈々瀬。

「リンちゃんの言ってたことは気にしないで！私の家、すっごく大通り沿いにあっ…」

「いいよ、送ってく」

「ええええっ!？」

「そ、そんなに驚くとか…?」

柄にもない大声を発し、大きく体を反らして驚く奈々瀬に、アヒルが少し呆れるように問いかける。

「け、けど、どこか行くとこなんじゃっ…」

「いや、気晴らしに散歩してたところだから、丁度いいし。行こうぜ」
「あ、う、うんっ…」

奈々瀬が少し頬を赤く染めながら、アヒルの横に並び、二人は夜道をゆっくりと歩き始める。

「気晴らしって…何か考え事？」

「まあなあ」

「朝比奈クン…三日前くらいから、ずっと考え事してるよね…」

「まあなあっ…って」

一度頷いた後、アヒルがどこか意外そうに奈々瀬を見る。

「なんで奈々瀬が、んなこと知ってるの？」

「えっ!？」

素朴な疑問を口にするアヒルに、奈々瀬がどこか焦るように声をあげる。

「あ、あのえっとっ…学校で、いかにも悩んでるって感じの顔してたからっ…!」

「えっ?俺、そんなに顔出てたあ?」

慌てて答える奈々瀬に、少し驚くように聞き返すアヒル。

「んなつもりなかったんだけどなあ、俺、結構わかりやすいなあ」
「あ、あはは…」

しみじみと呟くアヒルの横で、奈々瀬が乾いた笑い声を漏らす。

「ね、ねえ…朝比奈クン…」

「んっ？」

「その、考え事って…」

「……っ」

「えっ…？」

問いかけようとした奈々瀬が、急に足を止めるアヒルに気づき、二、三步前に行ったところで立ち止まり、戸惑うように振り返る。

「ど、どうかしたの…？朝比奈クっ…」

「グオオオオオオっ！」

「……っ」

アヒルの方を振り返っていた奈々瀬が、かなり遠くから聞こえてくる、唸るような重苦しい声に気づき、再び前を見る。

「今、のって…」

「……っ！」

「あっ…！朝比奈クンっ…！？」

戸惑うように呟く奈々瀬の横を駆け抜け、勢いよく前方へと走り出して行ってしまうアヒル。そんなアヒルに驚いたような表情を見せながら、奈々瀬もアヒルの後を追うように、駆け出していく。

「この気配っ…！まさかっ…！」

険しい表情を見せながら、アヒルが人通りのない道を、止まることなく駆け抜ける。

「あっ…！」

暗い道に倒れている人影に気づき、足を止めるアヒル。

「こ、こいつらはっ…」

倒れている人物の顔を覗き込み、アヒルがさらに眉をひそめる。

——返して欲しいなら、とっとと取り返してみろっての！——

「昼間のっ…」

道端に倒れている二人は、夕方、アヒルが公園で見かけた、小柄な少年のランドセルを奪い、酷い言葉を投げかけていた、三人の少年の内の二人であった。二人は体の所々に傷を負い、血を流している。気を失っているようで、その瞳は深く閉ざされていた。

「こいつらが襲われた…？って、ことはっ…」

——そんなことしたって…いなくなった人が、帰ってくるわけでもないんだからっ……

「あいつが…忌に…？」

すべてを諦めたような、そんな表情を見せていた、あの時の少年を思い出し、アヒルが表情を曇らせる。

「朝比奈クン…！」

「奈々瀬」

そこへ、アヒルを追うようにして、奈々瀬が走って来た。

「急にどうし…て、あっ！この子たちっ…！」

戸惑いの表情を見せていた奈々瀬が、倒れている二人の少年に気づき、驚いた表情を見せる。

「怪我してる…！どうしよう！？救急車呼んだ方がいいのかなっ…！？」

「えっ？いやあ、救急車はちよっとっ…」

焦ったように問いかける奈々瀬に、答えを濁すアヒル。取り憑いた忌がいるとすれば、今ここに、関係のない人間を集めることは好ましくない。

「あれっ…？」

「んあ？」

倒れている少年を見つめながら、何かに気づいたような声を漏らす奈々瀬に、アヒルが首を傾げる。

「どうした？」

「この子たち、確か…六騎の同級生のっ…」

「ムツキ？」

「あっ、私の弟の名前っ」

「弟っ…？」

奈々瀬の言葉に、眉をひそめるアヒル。

「まさか、あいつが…奈々瀬の弟っ…」

悲しげだった少年の顔を思い出し、アヒルが胸の中の嫌な予感を膨らませる。

「やっべえなあっ…」

アヒルが、右手で軽く頭を掻く。

「奈々瀬は、ここでちよっと、こいつら見ててくれ！」

「えっ…？ あ、朝比奈クン！？」

「すぐに戻るから！」

「あっ…！ 朝比奈クン…！」

その場に奈々瀬を残し、アヒルは急いで、その場を駆け出していた。

Word 15 タイムリミット (4)

「ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！」

暗い夜道を、息を切らしながら、必死に駆け抜ける少年。後方を気にするように、度々後ろを振り返りながら、少年はまったく人気のない公園へと駆け込んだ。

「ハアっ…！ハアっ…！」

公園の隅にある、水場の後ろへと姿を隠すように深くしゃがみ込みながら、乱れた呼吸を整える少年。その額からは、大量の汗が滴り落ちた。

「な、何なんだよっ…あいつっ…」

少し息を詰まらせながら、少年が言葉を発する。

「なんでっ…オレがこんな目につ…」

「見つけた…」

「うっ…！」

どこからか聞こえてくる声に、背筋を震え上がらせる少年。

「見つけたぞ…」

「ひいっ…！」

「無事かぁ？クソガキっ」

「えっ…？」

怯えた表情で震え上がった少年であったが、聞こえてくるその声は少年の身を案じているようで、少年は思わず目を丸くし、ゆっくりと顔を上げた。

「あっ…お前、夕方のっ…」

「年上に対して、“お前”はねえーだろっ」

少年の目の前に立っていたのは、少し顔をしかめたアヒルであった。少年の方もどうやらアヒルのことを覚えていたらしく、驚いたようにアヒルを見る。

「ガキが一人で、うろつく時間じゃねえーぞお？」

「だ、だって、タカシがっ…」

「タカシって、夕方、お前らがランドセル取って、いじめてた奴か？」

「う…うんっ…」

アヒルの問いかけに、少年がどこか気まずそうに頷く。

「ったく、くだらねえことすつから、こういう目に遭うんだよっ。ほら、とっとと来いっ」

「こ、来いって、どこにっ…？」

「そのタカシって奴のどこに決まってるだろうが」

「い、嫌だよっ…！」

少年が、自分の腕を掴んだアヒルの手を、必死に振り払う。

「他の二人が、あいつにやられたんだ！次はオレが殺されるっ！」

「大丈夫だって。他の二人も別に死んでねえーし、スパッと謝って、あいつの痛みを何とかしっ…」

「嫌だよっ！」

「あっ」

再び掴もうとしたアヒルの手を、少年が叩き落とすようにして、拒絶する。

「往生際の悪い奴だなあ！いいから、とっとと来いって！」

「嫌だっ！絶対行かないっ！」

夜の公園に大きな声を響かせながら、アヒルと少年が、一步も譲らぬ、引っ張り合いを展開する。

「あのならっ…！」

「朝比奈クン！」

「へっ？」

呼ばれる名に、アヒルが目丸くして、顔を上げる。

「奈々瀬っ」

公園の入口から、こちらへと駆けてくるのは、奈々瀬であった。

「あそこに居ろつったのにっ…」

「お姉ちゃんっ…！」

「へっ？」

アヒルの手を振り払い、奈々瀬の方へと駆け出していく少年に、アヒルが間の抜けた声を出す。

「六騎っ……？」

「お、お姉ちゃん……？」

駆けてきた少年と、両手を広げるようにして受け止める奈々瀬を見ながら、呆然とした表情を見せるアヒル。

「あれっ？そっち？」

「あのお兄ちゃんにイジメられたよお！」

「誰がじゃいつ！」

大きく首を傾げていたアヒルが、奈々瀬へと泣きつく少年、六騎に、思わず顔をしかめ、怒鳴りあげる。

「こんな時間に、こんな所で何してるのよ？六騎っ」

「え、ええ……と、それはっ……」

少し眉間に皺を寄せ、問いかける奈々瀬に、六騎が言葉を詰まらせる。

「朝比奈クン、六騎と知り合いだったの？」

「へっ？あ、ああ、まあ知り合いっつか、ちょっと通りすがっただけっつかだなあっ」

「通りすがった？」

弟が同級生をいじめている現場に遭遇した、とも言えずに、どこか誤魔化すように笑みを浮かべ、上ずった声で答えるアヒル。そんなアヒルに、奈々瀬が首を傾げる。

「ってか、こっちが奈々瀬の弟ってことはっ……」

「グオオオオオオオっ……！」

『……っ！』

耳に届く、禍々しい咆哮に、アヒルや奈々瀬たちが、一斉に顔を上げる。

「あいつはっ……！」

空を高々と舞うようにして、アヒルたちのもとへと飛び込んでく

るのは、夕方、六騎たち三人がいじめていた、タカシという、あの小柄な少年であった。その小さな体を包み込むように、夜の闇よりも深い、黒色の影がはっきりと見える。

「あれって…」

「うううっ…！来た！」

「六騎？」

戸惑うようにタカシを見上げていた奈々瀬が、奈々瀬の手の中で震え上がる六騎に、眉をひそめる。

「グオオオオオ！“破”っ！」

「うっ…！」

タカシの放つ言葉に、アヒルが一気に険しい表情となる。

「奈々瀬っ…！」

「えっ？きゃあっ！」

奈々瀬と六騎を抱え込むようにして、後方へと飛び込むアヒル。

——バアアアアンっ！

激しい衝撃波がアヒルたちの居た、公園の水場へと落ち、水場が砕け散る。周囲の砂が舞い上がる中、後方へと飛び込んだアヒルたち三人は、何とか難を逃れていた。

「痛ててっ…」

二人を庇うようにして倒れ込んだアヒルが、砕けた水場の破片が当たった背中を押さえながら、少し歪めた表情で、ゆっくりと起き上がる。

「大丈夫か？奈々瀬」

「あ、う、うんっ」

先に起き上がったアヒルの手を借りながら、奈々瀬が六騎を支えるようにして、共に起き上がる。

「クソガキも大丈夫かあ？」

「痛ってえっ…」

起き上がった六騎を、アヒルが少し体を傾けながら覗き込む。

「グウウウっ…」

「あっ」

唸り声を漏らしながら、空からゆっくりと地面に降り立つタカシに気づき、ふと振り向く奈々瀬。

「あれはっ…」

タカシの体を包む黒い影が、その瞳にはっきりと映り、奈々瀬が表情を曇らせる。

——あたしがそんなに可哀想っ…？——

「んっ…」

いつか夢の中で見た、黒い影に包まれたリンの姿とその姿が重なり、戸惑うように、奈々瀬が頭を右手で押さえる。

「グオオオオオオっ…！」

「ひいっ…！」

地面へと降り立ったタカシが、先程と同じように激しく咆哮をあげると、奈々瀬にしがみつくようにしていた六騎が、一気に表情を強張らせ、背筋を震え上がらせる。

「“破”っ！」

「うわあああっ！」

再び放たれる衝撃波に、頭を抱えて叫ぶ六騎。

「チっ…！」

奈々瀬と六騎の前へと立ち塞がるようにして起き上がったアヒルが、ジャージのポケットから、素早く言玉を取り出す。

「第一の音“あ”、解放っ…！」

アヒルがそう叫ぶと、言玉は強い赤色の光を発し、その姿を銃へと変える。

「こんのっ…！」

形を変えたばかりの銃を、慣れた手つきで構えるアヒル。

「あれは…」

そのアヒルの様子を見つめ、奈々瀬が目を見張る。

「“当たれ”…！」

アヒルの言葉とともに、放たれる赤い光の弾丸。

「グっ…！」

放たれた弾丸が、タカシの放った衝撃波を正面から貫き、大きな音を立てて、撃ち砕く。砕かれた衝撃波に、虚ろな瞳を見せたタカシは、目に光のないまま、少し表情をしかめた。

「今、のは…」

——朝比奈クン…？——

「あの夢と、同じ…」

夢で見た時とまるで同じ、赤銅色の銃を構え、戦うアヒルの姿を見つめ、奈々瀬が戸惑うように呟く。

「どういうことっ…？これも、夢なの…？」

奈々瀬が、誰にともなく問いかける。

「に、逃げよう！お姉ちゃんっ！」

「えっ…？」

タカシが攻撃の手を止めている隙に、その場から走り去ろうと、奈々瀬の手を掴む六騎。

「ちょい待てっ」

「うわ！」

そんな六騎の手を、アヒルが力強く掴み止める。

「な、何すんだよ！離せよ！」

「離すかよ」

睨みあげる六騎に、アヒルがあっさりと言い放つ。

「逃げたって、追いかけられるだけで意味ねえーぞ？いいから、大人しく謝れって」

「い、嫌だっ！」

六騎が強く叫び、アヒルの手を振り払う。

「オレは謝らない！オレは謝るようなことなんてっ、何にもしてないっ！」

「何にもしてないってっ……」

必死に主張する六騎に、どこか困ったように頭を掻くアヒル。

「してないってことはないだろお？お前はあいつにっ……」

「してない！オレは何にもしてない！」

宥めるように言葉を掛けようとしたアヒルの声を、六騎が初めから聞く様子もなく、強く遮る。

「あっ……」

そんな二人の様子を見て、奈々瀬が急にハッとした表情となる。

——お前が受け止めなかったアイツの言葉は、アイツに戻って、アイツ自身を傷つけた……

——私が……リンちゃんを傷つけたの……？——

——ああ……

奈々瀬の中で、より鮮明になっていく、夢だと思われていた夜の記憶。

「あのなあっ……！いい加減にっ……！」

「六騎」

「……っ」

そっと六騎の名を呼ぶ奈々瀬に、アヒルが思わず言葉を止め、振り向く。

「あの子の心を、傷つけるようなことを言ったの……？」

「……っ！」

どこか少し責めるように、厳しい表情を見せて問いかける奈々瀬に、問われた六騎が大きく目を見開く。

「奈々瀬っ……？」

その奈々瀬の様子に、少し戸惑うように首を傾げるアヒル。

「な、何だよっ、お姉ちゃんまでっ」

六騎が唇を震わせ、同じように、少し震えた声を発する。

「今っ、オレたちを襲ってるのは、あいつだろっ？ 今、悪いのは、どう考えてもあいつだろっ！？」

徐々に声を大きくし、感情を高ぶらせて叫ぶ六騎。

「なんでオレが悪いみたいに言うんだよっ！」

「六騎っ」

「オレは悪くないっ！」

共に逃げようと掴んでいた奈々瀬の手を、六騎が投げ捨てるように、振り払う。

「オレはっ…！ 何にも悪くないっ…！」

「あっ…！」

そう言い放ち、アヒルや奈々瀬に背を向けるようにして、その場から飛び出していく六騎。

「馬鹿っ…！ 離れるんじゃっ…！」

「グオオオオオオっ…！」

「あっ…！」

アヒルが引き止めるように言い放つ中、激しく叫びながら、高々と飛び上がったタカシが、あっという間に空を移動し、公園の入口へと駆けていく六騎の目の前へと降り立つ。

「うあっ…！」

目の前に立ったタカシに、思わず足を止め、震え上がる六騎。

「六騎っ！」

「クソっ…！」

奈々瀬が六騎の名を呼ぶ横から、アヒルが険しい表情を見せ、必死に六騎のもとへと駆けていく。

「グアアアアアっ！ “斬”^{ザン}っ！」

「ううううっ…！」

手を振り上げるタカシに、六騎の表情が凍りつく。

「グオオオオオオオっ…！」

「……っ！」

振り下ろされるタカシの右手に、六騎が固く瞳を閉じた、その時であった。

「うううっ……！」

「えっ……？」

何かが斬れたような音と、すぐ目の前で聞こえる苦しげな声に、六騎がゆっくりと目を開く。

「グっ……！」

「あっ……」

六騎の目の前には、六騎の代わりにタカシに背中を斬り裂かれ、真っ赤な血を流しながら、地面へと倒れていく、アヒルの姿があった。

「あ……」

そのアヒルの姿に、奈々瀬が大きく目を見開く。

「朝比奈クンっ……！！！」

奈々瀬の悲痛な声が、静かな公園に響き渡った。

Word. 16 安団集結 (1)

ずっとわからないまま、ただ晴れない気持ちだけを抱えてた。

「朝比奈クン…?」

「奈々瀬!」

あの夜の出来事が、現実だったのか、夢だったのか。

「やっぱり夢かぁ…」

都合のいい夢を見ただけと結論づけた時、こう思った。“夢じゃなければ良かったのに”と。

“夢じゃない”ことが、どんなに痛むことかも、知らないまま。

「うううっ…!」

「朝比奈クンっ…!!」

六騎を庇い、忌に取り憑かれたタカシに背中を斬り裂かれ、大量の血を流して、その場にしゃがみ込むアヒル。そのアヒルの痛々しい姿に、奈々瀬が大きく目を見開き、身を乗り出す。

「お、お前っ…」

「グウウウウっ…」

「うっ…!」

驚きの表情で、茫然とアヒルを見つめていた六騎が、再び唸り声をあげるタカシに、一気に怯えた表情となる。震えたその手は、いつの間にかアヒルの服の裾を、握り締めていた。

「グオオオオオ! “破”っ!」

「ひいっ!」

「クっ…!」

アヒルと六騎に向け、衝撃波を放つタカシ。震え上がる六騎の前で、アヒルが焦るように、顔をしかめながら、右手の銃を自らのコメカミへと向けた。

「“上^あがれ”っ…！」

「う、うわっ…！」

自分へと弾丸を放ったアヒルが、六騎を抱えたまま飛び上がり、タカシの放った衝撃波を避ける。

「と、飛んだっ…！」

「うううっ…！」

「えっ…？」

宙に浮いた自分の体に、恐怖の色を消し、驚いていた六騎が、自分を抱えているアヒルの苦しげな声に気づき、顔を上げる。背中に負った傷が痛むのか、ひどく顔をしかめたアヒルは、空中で飛んでいる状態を維持出来ず、すぐに地面へと下降した。

「クっ…！」

「お、お前っ…！」

地面へと降り立つと、すぐにその場に膝をつくアヒルを、アヒルの前に立ちながら、六騎がどこか不安げに見つめる。

「朝比奈くんっ…！」

「お姉ちゃん…！」

空中から降りてきた二人のもとへ、慌てて駆け寄ってくる奈々瀬。

「朝比奈くん！」

膝をついたアヒルの横へと、奈々瀬が寄り添うようにしゃがみ込む。

「大丈夫っ…！？」

「あんまっ…大丈夫ではねえーかも…ハハハっ…！」

「朝比奈くん…！」

問いかける奈々瀬に、ゆっくりと顔を上げ、力ない笑みを浮かべるアヒル。そんなアヒルの表情を見て、奈々瀬が不安げに、眉をひそめる。

「六騎っ」

「えっ…?」

強く六騎の名を呼び、振り向く奈々瀬に、六騎が戸惑うように声を漏らす。

「あの子に、何を言ったの…?」

「……っ」

奈々瀬が鋭く問いかけると、六騎は逃げるように奈々瀬から目を逸らし、深く俯いた。

「何を言ったのっ…!?!」

「うっ…!」

両手で強く六騎の肩を掴み、奈々瀬が六騎の顔を上げさせる。いつもは穏やかな姉に、睨みつけるような表情を向けられ、どこか怯えた表情を見せる六騎。

「オ、オレは何もっ…」

「何もしてないわけじゃないでしょう!?! どうして本当のことを言わないの!?! 六騎っ!」

「うううっ…!」

姉に強く責められ、六騎の大きな瞳に涙が浮かんだ。

「六っ…!」

「奈、々瀬っ…」

「……っ」

さらに責め立てようとする奈々瀬を止めるように、奈々瀬の肩に手を置いたのは、まだ苦しい表情を覗かせているアヒルであった。

「そう…怒ってやるなよっ…」

「朝比奈くんっ…」

宥めるように微笑みかけるアヒルに、奈々瀬がそっと目を細める。

「け、けど六騎のせいで、こんなことにつ…!」

「こいつのせいじゃねえーさっ…」

「えっ…?」

奈々瀬が戸惑いの表情を見せる中、アヒルがゆっくりと奈々瀬か

ら六騎へと視線を移し、まっすぐな瞳で、六騎を見つめる。

「なあ？クソガキ！」

「……っ？」

責め立てる奈々瀬の口調とは異なり、乱雑な言葉使いながらも、どこか優しいアヒルの声に、深く俯いていた六騎が、ゆっくりと顔を上げた。

「確かにお前は、何にも悪いことはしてない……」

「えっ……？」

思いがけないアヒルの言葉に、六騎が戸惑いの表情を見せる。

「別に悪気があつて、あいつの心を傷つけようと思つて、あんなこと言つたわけじゃねえーんだろっ？」

アヒルが少し首を傾けながら、六騎へと問いかける。

「つい、口から出ちまつただけなんだろっ……？」

「……っ」

続くアヒルの問いかけに、まるで言い当てられて、気まづくなつたかのように、そっと俯く六騎。

「俺も、お前くらいの時……そういうこと言つて、人の心を傷つけちまつたから……よくわかるよ……」

「朝比奈くん……」

六騎へと語りかけるアヒルを、奈々瀬は横からまっすぐに見つめる。

「けどな、傷つけてやろうと思つて言つた言葉より、そういう、つい出ちまつた言葉の方が、相手を傷つけることもあるんだ」

アヒルが、穏やかな表情を、六騎へと向ける。

「相手の心に、深あーい傷をつけちまうことも、あるんだよ」

「…………」

俯いていたはずの六騎が、いつの間にか顔を上げ、少し細めた瞳で、逸らすことなくアヒルを見つめている。

「そのことにちゃんと気づける奴が、“優しい奴”なんだっ……」

ゆっくりと伸びたアヒルの手が、六騎の頭を撫でる。

「そのことに気づいて、ちゃんと謝ることが、相手を“思いやる”
ってことなんだよっ…」

「……っ！」

頭を撫でる温かい手に、胸を打つその言葉に、六騎が涙を溜めた
目を大きく見開き、瞬きをすればその滴が溢れてしまいそうなほど
に、瞳を潤ませる。

「……っ」

アヒルの言葉を聞き、奈々瀬がそっと六騎の方を振り向く。

「大丈夫だよ、六騎」

六騎の左肩に手を置き、その場にしゃがみ込んで、六騎と視線を
合わせ、まっすぐに六騎を見つめる奈々瀬。

「お姉ちゃんも、六騎と一緒に謝るから…だから、ねえ…？六騎」
「ううっ…！」

奈々瀬が優しく微笑むと、その笑みを見た途端、六騎が目を細め、
その瞳からポロポロと涙を流した。

「あいつっ…あいつっ…ずっと前、交通事故で親、二人とも死んでっ
…」

ゆっくりとした口調で、言葉を発し始める六騎。

「な、なのにオレっ、タカシに、“お前なんか、親もいないんだか
ら、帰ったって意味ない”って…そう、言ったんだっ…！」

涙を流し、声を震わせながら、六騎が言葉を吐き出す。

「そんなことっ、言おうなんて思ってなかったのにっ…他の奴らが
言ってるから、ついっ…口から言葉が出ていっちゃったんだっ…！」

ひどく後悔した表情を見せ、言葉を続ける六騎。

「そんなこと言ったらっ…あいつが傷つくって、すっごく傷つくっ
て、オレわかってたのにっ…」

六騎の頬を伝った涙が、地面へと何度も落ちる。

「わかってたのにっ…！」

「うん…」

声を大きくし、泣きじゃくる六騎を、奈々瀬が、その言葉を受け

止めるように頷きながら、ゆっくりと抱き締める。

「うんっ…」

六騎を力一杯抱き締め、もう一度、頷く奈々瀬。

「何があの子の心を傷つけたのか、誰が悪いのか…六騎はもう、ちゃんとわかってるんだよね…？」

「…うんっ」

「じゃあ…ちゃんと謝れるよね…？」

「…っ」

奈々瀬に抱き締められながら、六騎がそっと目を細める。

「うんっ…！」

奈々瀬の問いかけに、六騎は大きく頷いた。

「ふうっ…」

いつの間にか六騎の頭を撫でていた手を引っ込め、奈々瀬と六騎の様子を見守っていたアヒルが、頷いた六騎を見て、どこか安心したような笑顔を浮かべる。

「グオオオオオっ…！」

「…っ！」

その時、再び聞こえてくる咆哮に、アヒルが険しい表情を作って振り向く。

「“破”っ…！」

「クっ…！」

アヒルの振り向いた先に立つタカシが、三人へ向け、またもや巨大な衝撃波を放った。

「クッソっ…！」

「えっ？」

「うわああっ！」

すでに銃を構える時間はなく、アヒルが奈々瀬と六騎を、横へと突き飛ばすようにして、押し出す。

「あ、朝比奈くんっ…！」

押し出されてすぐ、後方を振り返り、アヒルの方へと身を乗り出

す奈々瀬。

「うあああああっ…！」

「朝比奈くんっ…！！！」

一人、衝撃波をもろに喰らい、アヒルが激しい叫び声をあげ、その場に倒れていく。飛び散るアヒルの血に、奈々瀬が大きく目を見開く。

「う、うううっ…」

地面にうつ伏せに倒れ込んだアヒルが、苦しげに顔を上げ、目の前に落ちている銃を見つめる。

「クッ…ソ…」

銃に手を伸ばすことも出来ず、アヒルが険しい表情を見せる。

「六騎っ…！」

「う、うんっ…！」

奈々瀬に急かされるように名を呼ばれ、奈々瀬から体を離れた六騎が、奈々瀬に肩を支えてもらったまま前へと出て、忌に憑かれたタカシと向き合う。

「グウウウウっ…」

「うっ…」

唸り声を漏らすタカシに、少し怯むように息を呑む六騎。

「んっ…！」

だがすぐに意を決したような表情となって、六騎が力を入れるように、拳を握り締める。

「タカシっ…！」

六騎がまっすぐにタカシを見つめ、大きな声でタカシの名を呼ぶ。

「ごめんっ…！」

「……っ」

六騎の口から放たれる謝罪の言葉に、タカシの唸り声が止まる。

「タカシを傷つけるようなこと言って、ごめんっ…！本当にごめんっ…！ごめんなさいっ…！！！」

嘘偽りのない、六騎の心からの謝罪の言葉が、静かな夜の公園に、

何度も響き渡った。

「グウウウウ…」

「これでっ…」

今までよりも静かな唸り声を漏らすタカシを、強い瞳で見つめるアヒル。

「グアアアアアっ…!!」

『えっ…?』

「なっ…!」

だがタカシは、先程よりも荒々しい叫び声をあげ、勢いよく両手を振り上げた。そのタカシの様子に、六騎と奈々瀬が戸惑いの表情を見せ、アヒルが驚いたように目を見開く。

「忌が…出ないっ…?」

アヒルが険しい表情で、タカシを見つめる。

「リンちゃんの時は、確かっ…」

「お、お姉ちゃんっ…」

奈々瀬がアヒルと同じように戸惑う中、六騎がどうすれば良いか問いかけるように、奈々瀬の方を振り返る。

「何が、“ごめん”だよ…」

『…っっ』

その時、タカシの口から聞こえてくる唸り声ではない、タカシのものである幼い声に、アヒルや奈々瀬たちが一斉に振り向いた。

「あれはっ…」

——私がそんなに可哀想…?——

「あの時と、同じっ…」

忌に取り憑かれながら、自らの言葉を発したリンの姿を思い出し、アヒルが眉をひそめる。

「宿主との強い同調っ…あの忌もハ級クラスってことか…?」

誰にともなく言葉を発しながら、アヒルがさらに険しい表情を作

る。

「君はいいよね…優しいお姉ちゃんが傍にいてくれてさ…」

「タ、タカシ…？」

向けられるタカシの言葉に、六騎が戸惑いの表情を見せる。

「そんなヤツに…僕の気持ちなんてわかるもんか…わかるはずがないっ…！」

「……っ！」

声を張り上げるタカシに、大きく目を見開く六騎。

「謝られたくらいじゃ、許せないっ…」

タカシの声が、怒りにか悲しみにか、かすかに震える。

「お前にもっ…僕と同じ痛みを味あわせてやるっ…！！」

「ううっ…！」

そう叫び、駆け込んでくるタカシに、六騎が再び怯えた表情を見せる。

「クソガキっ…！ううっ…！」

六騎のもとへ行くため、起き上がろうとするアヒルであったが、喰らった傷の痛みが激しく、体が言うことを聞かない。

「クッソ…！」

アヒルが悔しげに唇を噛みながら、顔を上げ、奈々瀬と六騎の方を見る。

「逃げろっ！奈々瀬！クソガキ！」

痛みを堪えながら、必死に叫ぶアヒル。

「グオオオオオオオオっ…！」

「うううっ…！」

だが、極度の恐怖に六騎の足は硬直し、逃げることも出来ない状態となっていた。そんな六騎に、タカシは止まることなく、どんどん駆け込んでいく。

「うううっ！」

「……っ」

「えっ…？」

「なっ…！」

震える六騎を後ろへと下がらせ、六騎の前に立ち塞がるように出たのは、真剣な表情を見せた奈々瀬であった。そんな奈々瀬を、六騎が戸惑うように見上げ、アヒルが驚きの表情を見せる。

「お、姉ちゃん…？」

「何やってんだっ！奈々瀬！」

六騎がゆっくりと奈々瀬を呼ぶ中、アヒルが倒れ込んだまま、奈々瀬へと声を張り上げる。

「逃げる！弟を連れて逃げるんだっ！奈々瀬！」

「逃げないっ…！」

「何っ…？」

すぐさまアヒルの言葉を拒否する奈々瀬に、思わず目を丸くするアヒル。

「何言ってるんだ！いいから早くっ…！」

「ここで逃げたらっ…あの子の痛みからも逃げることになるっ…！」

「…っ！」

もう一度叫びかけようとしたアヒルが、奈々瀬のその言葉に、思わず言葉を止める。

「私はっ、六騎が傷つけたあの子の痛みから、逃げるようなことはしたくないっ…！」

「奈々瀬っ…」

必死に叫ぶ奈々瀬に、アヒルが少し目を細める。

「グオオオオオオっ！」

「あっ…！」

アヒルがそれ以上は、“逃げる”と言えずにいると、六騎を庇うようにして立った奈々瀬のすぐ前まで、両手を振り上げたタカシが迫って来た。

「お姉ちゃんっ…！」

目の前に立つ姉の手を、六騎が必死に握り締める。

「グアアアアアっ…！」

「……っ」

激しく叫びながら、両手を振り下ろそうとするタカシを、奈々瀬が鋭い目つきで、恐れることなくまっすぐに見つめる。

「ごめんなさいっ…」

「グっ…!」

奈々瀬の口から発せられる言葉に、タカシの手が止まる。

「六騎があなたの心を傷つけたこと、私からも謝るわ…ごめんなさい…」

「お、お姉ちゃんっ…?」

タカシへと謝る奈々瀬を、六騎が戸惑うように見上げる。

「何が“ごめん”だっ…!今更、お前が謝ったくらいでっ…!」

「傷つけたのは六騎…あなたが許せないというのなら、同じ痛みを与えたいというなら、それは仕方ないことだわ…」

「何っ…?」

素直に認めるような発言をする奈々瀬に、忌と同調したタカシが、戸惑うような声を漏らす。

「でも、六騎は私の大切な弟だからっ…」

奈々瀬が言葉を口にしながら、ゆっくりと両手を広げる。

「私は、六騎を傷つけさせるわけにはいかないのっ…!」

「奈々瀬っ…」

両手を目一杯広げ、強い瞳を見せる奈々瀬に、そっと目を細めるアヒル。

「だからっ、六騎が与えたあなたの痛み、あなたと同じ痛みをつ、私が全部受け止めるっ…!」

「……っ!」

そう叫ぶ奈々瀬に、アヒルが大きく目を見開く。

「お、お姉ちゃん…?何言って…」

「弟の身代わりになるというか…いい度胸だ…」

「えっ…?」

奈々瀬に問いかけようとしていた六騎が、奈々瀬の背の向こうか

ら聞こえてくるタカシの声に、眉をひそめる。

「なら…！弟の代わりに死ねっ…！」

「…っ！」

放たれるその言葉に、六騎が大きく目を見開く。

「グオオオオオオっ…！」

「クっ…！」

「奈々瀬っ…！！」

振り下ろされるタカシの手に、奈々瀬が覚悟を決めるように唇を噛み締め、アヒルが動かない体で、必死に身を乗り出す。

「い、嫌だっ…」

六騎の口から、零れ落ちる言葉。

「嫌だっ…！死なないで！お姉ちゃんっ…！！」

——タカシっ…——

——嫌だよおっ…！死なないでえっ！お父さん！お母さん！——

「グウウウっ…！」

「えっ…？」

タカシが急に苦しげな声を漏らしたかと思うと、奈々瀬へと向かって来ていたその手が、勢いよく止まった。目の前で止まる手に、奈々瀬が戸惑った表情を見せる。

「グウウっ！ウウウウっ…！」

止めた手で頭を抱え、激しく苦しみ始めるタカシ。まるで体の中で、何かと戦っているような、そんな様子であった。

「あれはっ…」

そんなタカシの様子を、アヒルがまっすぐに見つめる。

「グウっ…グアアアアアアアっ！」

『うっ…！』

タカシの体から放たれる、眩いばかりの白色の光に、アヒルや奈々瀬が思わず目を細める。

Word. 16 安団集結 (2)

「あ…ああ…あっ…」

光が止むと、虚ろな表情を見せていたタカシが、その顔色をよくした後、光の戻った瞳をすぐさま閉じて、力なくその場に倒れ込んだ。

「タ、タカシ…?」

「これは…」

すぐ前で倒れ込んだタカシを、奈々瀬と六騎が戸惑うように見下ろす。

<グググ…! な、何だっ…?>

「……っ!」

奈々瀬たちが倒れたタカシを覗き込む、その様子を見ていたアヒルが、上方から聞こえてくる、どこか濁ったような低い声に気づき、勢いよく顔を上げた。

「忌っ…」

夜の暗い空に紛れるようにして浮かんでいるのは、禍々しく黒い影の塊。

<何故…突然、あいつの体からっ…?>

「……っ」

自分自身でも戸惑っているような様子を見ている忌を見つめ、目を細めたアヒルが、倒れたタカシの方へと視線を移す。

「奈々瀬の弟を想う、強い気持ちに…宿主の心が動いたのか…?」

六騎の謝罪ではなく、六騎を庇って痛みを受けようとした奈々瀬の姿が、タカシの痛みへの救いになったのかも知れない。

「あの黒い影…リンちゃんの時と同じ…」

「お姉ちゃん…?」

空を見上げながら、険しい表情で何やら呟いている奈々瀬に、見上げていた六騎がそっと首を傾げ、奈々瀬の見ている上空を見上げ

た。

「……っ？」

だが、そこには暗い空が広がっているだけで、何の姿も見えず、六騎が戸惑った表情を見せる。

くまあいいっ…宿主など無くとも、奴等を殺すくらい容易いことだっ…>

「クっ…！」

「……っ」

不気味に微笑む忌に、アヒルと奈々瀬が同時に厳しい表情となる。
「こっの…！」

アヒルが目の前に落ちていた銃を右手で拾い上げ、重い体を引きずるようにして、必死に上半身を起こし、銃口を上空の忌へと向ける。

“当たれ”っ…！」

言葉とともに、銃口から弾丸が放たれる。

<グっ…！グウウウっ…！>

必死に逃れようとする忌であったが、弾丸はどこまでも忌を追い、ほどなくして忌の黒い体を貫いた。

「あっ…！」

「んっ…？」

思わず声を出す奈々瀬の横で、ひたすら首を傾げている六騎。

「やったかっ…？」

<グウウウっ…>

「……っ！」

目を見張って空を見上げていたアヒルが、何らダメージを負った様子もなく、先程までとまるで同じ状態で、空へと浮いている忌の姿に、大きく目を見開く。

<何だ？今のは。ゴム玉か…？>

「クっ…！」

挑発するように問いかける忌に、アヒルがさらに険しい表情を作

る。

「傷のせいで、言葉への集中が：クソっ：」

アヒルがそう呟き、どこか悔しげに唇を噛む。相手は恐らく、リンの時と同じハ級の忌。いつも以上に集中しなければならぬというのに、激しい痛みで、今のアヒルにとって、ひどく困難な状態なのである。

「ううっ：！」

「朝比奈くん：！？」

再び体中が痛み、銃を構えていた右手を地面へとついてしまうアヒルに気づき、奈々瀬が不安げに振り向く。

「朝比奈くっ：」

「奈々瀬！」

「えっ：？」

名を呼ぶ前に呼ばれ、奈々瀬が少し戸惑うように首を傾げる。

「そいつら二人を連れて、ここから離れろっ：！」

「えっ？け、けどっ：！」

「いいから急げっ！」

「……っ」

言い返そうとする奈々瀬であったが、アヒルに強く言われ、それ以上、言葉が続けることが出来なかった。

「お姉ちゃんっ：！」

「六騎っ？」

忌の姿は見えていないが、何かを察したのか、いつの間にか倒れたタカシを背負った六騎が、奈々瀬の手を強く引き、公園の出口へと一直線に駆けていく。

「六騎っ：！」

「何かよくわかんないけど、ここは危ないよ！あいつに任せて、オレたちは逃げようっ：！」

「で、でもっ：！」

出口へと駆けていきながらも、奈々瀬が背後を振り返り、アヒル

の方を見る。

<逃げるか…まあいい…>

逃げていく奈々瀬たちを見た後、ゆっくりと、下方のアヒルを見下ろす忌。

<見たところ、五十音士は貴様だけ…他の奴等は、貴様を殺してから、存分に狩ることにしようっ…!>

「クっ…!」

「あっ…!」

勢いよく降下していく忌と、その表情を陰しくするアヒル。その様子を見て、奈々瀬が大きく目を見開く。

「朝比奈くんっ…!」

「お、お姉ちゃんっ…!?!」

出口へと引いていく六騎の手を振り解き、奈々瀬がアヒルのもとへと駆けていく。

「朝比奈くんっ!」

「えっ?」

近づいてくる声に、振り向くアヒル。

「なっ…!く、来るな!逃げろ!奈々瀬っ…!」

<グオオオオオオっ…!“破”っ…!>

「うっ…!」

そこへ、上空から下降してきた忌が、起き上がれることもままならない状態のアヒルへ向け、勢いよく衝撃波を放った。

「クっ…!」

「朝比奈くんっ…!?!」

顔を歪めるアヒルのもとへと、奈々瀬が迷うことなく飛び込んでいく。

——バァァァンっ!

公園の地面へと衝撃波が落ち、周囲に激しい砂埃を巻き起こす。

「う、ううっ…」

「クっ…」

砂の舞う、少し凹んだ地面のすぐ横に、アヒルと奈々瀬が並ぶようにして倒れ込んでいた。奈々瀬が飛び込み、動けぬアヒルを、間一髪のところまで、衝撃波から避けさせたのであった。

「お、お姉ちゃんっ…!」

忌の见えていない六騎であるが、その衝撃波は目に映り、出口付近から不安げに身を乗り出す。

「痛ったあ…」

打ちつけた頭を押さえながら、奈々瀬がゆっくりと起き上がる。

「あっ、だ、大丈夫!? 朝比奈くんっ」

「おっ前…見かけによらず、無茶する奴だなっ…」

問いかける奈々瀬に、感心するように答えながら、アヒルが体の向きを変え、仰向けになって、頭だけを軽く上げる。

「アハハっ、そ、そうかなっ?」

「別に誉めてねえぞ…?」

照れるように頬を赤く染めながら、軽く頭を掻く奈々瀬に、アヒルが呆れたような視線を送る。

「助かった。俺は大丈夫だから、だからお前は弟と、とっと逃げろ」

「えっ…?」

奈々瀬を送り出すように、奈々瀬の肩をそっと押すアヒルに、奈々瀬が驚いたような顔を見せる。

「だ、大丈夫じゃないでしょ!? 朝比奈くん、その傷じゃ、あの黒い影と戦うなんて無理だよっ…!」

「へっ…?」

奈々瀬のその言葉に、アヒルの表情がふと止まる。

「奈々瀬、お前…忌が見えて…」

くもう別れは十分に惜しんだかあっ…!?!?>

『……っ!』

上から降ってくる声に、アヒルと奈々瀬が同時に顔を上げる。

<そう惜しむこともない：二人仲良く、殺してやるからなあ：！>

「クっ：！」

忌の言葉に、アヒルが表情を引きつりながら、必死に体を起き上がらせる。

「早く逃げろ！奈々瀬っ：！」

「でもっ：！」

「お前がいなくなったらっ、あいつの心に痛みを与えることになるだろうがっ！」

「……っ」

出口付近に立つ六騎の方を指差しながら、必死に叫ぶアヒルを見て、奈々瀬が強く唇を噛み締める。

「朝比奈くんがいなくなっただってっ、心が痛む人はいるよっ：！」

「奈々瀬っ：！」

強く叫ぶ奈々瀬の言葉に、思わず目を見開くアヒル。

「だから：！朝比奈くんも一緒にっ：！」

<グオオオオオオっ：！！！>

『……っ！』

激しい咆哮に、二人の会話が遮られる。

<死ねえええっ：！“破”っ：！！>

「ああっ：！」

「クっ：！」

上空の忌から、二人へ向けて、先程よりもさらに大きな衝撃波が放たれた。

「このっ：！」

アヒルが必死に銃を握った右手を上げようとするが、負った傷がひどく、手は思うように上がらない。

「クッソっ：！」

「あっ：！」

銃を撃つことが無理だと察すると、アヒルは横に座り込んでいる

奈々瀬の前へと出るように、立ち上がれないまま、体を動かした。前へと出るアヒルを見て、奈々瀬が大きく目を見開く。

「朝比奈くんっ…！」

「クっ…！」

奈々瀬が名を呼ぶ中、アヒルが一層、険しい表情を見せた。

「何とかっ…」

迫り来る衝撃波を見つめながら、奈々瀬が声を漏らす。

「何とか、しなきゃっ…」

その声が徐々に大きくなり、かすれていた言葉が、はっきりと奈々瀬の口から放たれる。

「“何とかしなきゃ”っ…！！」

———パアアアンっ！

<グウウウっ…！>

「えっ…？」

アヒルと奈々瀬の前で突然、赤い大きな光のようなものが弾けると、その光が、二人へと向かって来ていた衝撃波を、あっという間に掻き消した。

くな、何だっ…！？グアアアアっ…！>

さらに、弾け飛んだ光の一部が上空へと舞い上がり、宙に浮かんでいた忌へと直撃して、光に戸惑っていた忌を吹き飛ばす。

「な、何だ…？」

その光を、忌と同じように、戸惑った様子で見上げるアヒル。

「あっ、あれは…」

弾け飛んだ光の中心に、やがて何かが見えてくる。それを見て、アヒルが大きく目を見開いた。

「言玉っ…！？」

そこに浮いているのは、赤く小さな、宝石のような玉。そう、言玉であった。

「なんで…言玉が…んっ？」

上空に浮いていた言玉が、アヒルの方へと自動的に下降してくる。だが、言玉はアヒルの横をあっさりと通り過ぎると、アヒルの横に座る奈々瀬の目の前で、その動きを止めた。

「えっ…？わ、私…？」

目の前に来る言玉に、奈々瀬が戸惑いの表情を見せる。

「言玉が、奈々瀬のところに…？」

戸惑う奈々瀬とその前の言玉を見つめ、眉をひそめるアヒル。

「そういや、さっきの言葉っ…」

——「何とかしなきゃ」っ…！！——

奈々瀬のあの言葉に応えるように、突然、姿を見せた言玉。

「“な”で始まる言葉っ…まさかっ…」

——奈々瀬、お前…忌が見えてっ…——

——最後の一人はもう、君の近くにいないかも知れないよ…？——
すべての出来事が、一つの道に繋がっていく。

「奈々瀬がっ…“奈守”…？」
なもり

「こ、これって…一体…」

言玉を見つめながら、大きく首を傾げている奈々瀬を、アヒルが迷いながらも、どこか確信を持った瞳で見つめる。

＜グウウウっ…！お、己っ…！＞

『……っ！』

上空から聞こえてくる声に、再び同時に顔を上げるアヒルと奈々瀬。暗い空の上には、先程の光でダメージを負った様子の、忌が浮かんでいた。だがダメージは受けていても、今のアヒルでは、あの忌を倒すことは出来ない。

「あの影、まだっ…」

「クソっ…」

奈々瀬が表情を曇らせる横で、アヒルが少し悔しげに唇を噛む。

「悩んでる暇はねえか…！奈々瀬っ…！」

「えっ…？」

急に名を呼ばれ、奈々瀬が戸惑うようにアヒルを見る。

「言玉を手にとって、“な”で始まる言葉を言うんだっ！」

“な”で始まる…言葉っ…？」

アヒルのその言葉に、さらに困惑したような表情となる奈々瀬。

「それって、どういうっ…」

「ああ…！いきなり言ってもわっかんねえか。そうだよなあっ」

まるで状況を理解していない様子で聞き返してくる奈々瀬に、アヒルが困ったように頭を掻く。国語嫌いのアヒルでは、一つずつゆっくり話さねば伝わらないだろうが、今はその時間もない。

「だからこうっ、今のこの場を何とか出来そうな、役に立ちそうな、

“な”のつく言葉をだなあっ…！」

「役に立ちそうな…“な”…？」

アヒルの説明を聞けば聞くほど、奈々瀬が困った表情となっていく。

「やあ…！俺が考えるしかねえかつ！ええ…つと、納豆巻き…いやっ、流し素麺…いやあっ！」

必死に言葉を考えるアヒルであったが、役に立ちそうもない言葉ばかりが浮かび、大きく首を横に振る。

「ああ！んなことなら、辞書持ってこりゃ良かったあっ！」

「じ、辞書っ…？あっ…」

頭を掻きむしりながら叫ぶアヒルに、首を傾げていた奈々瀬が、ふと、傷ついたアヒルの顔や腕へと視線を移す。痛々しく刻まれた傷からは、今も直、赤い血が流れ続けていた。

「“な”で始まる…言葉っ…」

真剣な表情で、奈々瀬がその言葉を繰り返す。

「朝比奈くん…」

「んあっ？何っ…」

「“治なおって”」

「……っ！」

奈々瀬の口から放たれたその言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

“治なおって”…」

奈々瀬が、言玉を握り締めた両手をアヒルの体へと向け、もう一度、その言葉を繰り返す。すると、奈々瀬の言玉から赤い、柔らかな光が放たれ、傷ついたアヒルの体を、優しく包み込んだ。

「傷がっ…」

自分の腕を見つめ、驚きの表情を見せるアヒル。赤い光に包まれると、流れていた血が止まり、負っていた傷があっという間に塞がっていく。やがて傷だらけだったアヒルの手は、傷一つない状態へと完治した。

「す、すげえっ…」

すっかり痛みの消えた手で、銃を握る感覚を確かめながら、アヒルが感心するような声を漏らす。

「奈々瀬っ…」

アヒルが顔を上げ、驚きの表情で奈々瀬を見つめる。

「役に、立ったかなっ…？」

「……っ」

そっと微笑んで問いかける奈々瀬に、アヒルも口元を綻ばせる。

「ああっ、ありがとう」

大きく頷き、礼を言っていると、アヒルがその場に立ち上がった。

「十分だっ」

<グっ…！>

立ち上がったアヒルが、その目つきを鋭くし、上空にいる忌を睨みつけると、忌は怯むように、少し体を引いた。

くま、まさか五十音士が二人も居るとはっ…こ、こうなればっ…！>
「あっ…！」

その実体のない体を翻し、逃げようとする忌に、奈々瀬が思わず

声を出す。

「……っ」

だが奈々瀬の横に立ったアヒルは、特に焦ったような様子は見せず、冷静にその銃口を、自らのコメカミへと向けた。

「^{あさむ}欺け”っ……」

アヒルの口から放たれる、“あ”で始まる言葉。

<この場は逃げて、新たな宿主をっ……！ウウウっ……！？>

公園の上空から逃げ去ろうと、空を移動していた忌が、驚きの表情を見せ、急に動きを止める。

<なっ……！？き、貴様はっ……！>

「……………」

忌の進もうとしたその先の空に浮いているのは、鋭い表情を見せたアヒル。

<い、いつの間につ……な、ならば向こうへっ……！ウウウっ……！？>

逃げる方向を変えようと、体の向きを変え、振り向いた忌が、さらに驚いた表情となる。

「……………」

忌が振り向いたその先にも、同じように鋭い表情を見せたアヒルが浮かんでいた。

<こ、これはっ……！>

焦った様子で忌が四方を見回すと、次々とアヒルの姿が現れ、何人ものアヒルが忌の周りを取り囲んだ。その有り得ない光景に、忌がさらに焦った表情を見せる。

<幻覚系の言語かっ……！グウっ……！>

忌が勢いよく下降し、何人ものアヒルの囲いから脱出する。

<ウウっ……？>

「……………」

地面へと下降していく忌を迎えるように、地面に立っているのは、上空の者たちと同じ、鋭い表情のアヒル。

<また幻覚だろうっ……！？突き破ってやるっ……！>

「……っ」

今度は、目の前に立つアヒルに止まることなく、突き進んでくる忌に、その目の前に立っているアヒルが、ゆっくりと銃を構えた。

「悪いなっ……」

アヒルの小さな声とともに、弾丸が放たれる。

「俺は幻覚じゃねえ……」

<何っ……!!?>

強い光を放ち始める弾丸に、忌が一気に表情を歪める。

<グウっ……!!>

「……“当たれ”っ」

忌が弾丸から逃れようと体を反らしたその時、アヒルの口から言葉が放たれ、弾丸は軌道を変え、逃れようとした忌へと、その向きを改めた。

<なっ……!!?グウウウっ……!!>

忌が驚きの表情を見せたのも一瞬、アヒルの弾丸が、勢いよく忌の体を貫いた。

<ギャアアアアアアっ……!!>

——パアアアアアンっ!

弾丸が忌を貫くと、忌は激しい叫び声をあげながら、赤い光に呑み込まれ、その影の体はあっという間に掻き消されていった。大きな音とともに光が砕け、公園に夜の静けさが戻る。

「ふいっ！」

大きく息を吐きながら、力なくその場に座り込むアヒル。右手に握り締めた銃が、戦いの終わりを察してか、光を放って、元の言玉の姿へと戻った。

「黒い影が…消えた…」

忌のいなくなった空を見上げながら、アヒルから少し離れた位置で、奈々瀬がゆっくりと立ち上がる。

「あれは一体…それに…」

戸惑うように眩きながら、奈々瀬がそっと視線を下ろす。

「これは…」

広げられた奈々瀬の右手のひらの上には、光の止んだ、赤い言玉が乗っていた。

「お姉ちゃんっ…！」

「六騎っ」

そんな奈々瀬のもとへ、逃げようと公園の出口付近まで行っていた六騎が、気を失ったタカシを背負ったまま、勢いよく駆け込んできた。

「だ、大丈夫っ…！？お姉ちゃんっ…！」

駆け寄って来た六騎が、姉へと不安げな表情を向ける。

「色々光ったり、吹っ飛んだりしてたけど、一体、何だったのっ…！？」

「えっ…？ええ…っとお…」

六騎に問いかけられ、途端に困った顔となる奈々瀬。自分でもよ

くわかっていないことを、弟に説明出来るはずもない。

「ねえ！お姉ちゃっ…！」

「催眠^{さいみん}」…」

「んっ…？」

「む、六騎っ…！？」

呼びかけの途中で急に目を閉じ、その場に倒れ込む六騎に、奈々瀬が焦った表情で駆け寄る。

「ぐうぐ、ぐうぐっ」

「ね、寝てるっ…？」

「間一髪ね…フフフっ…」

「えっ？」

先程まで話していたというのに、すっかり眠りこけている六騎に、戸惑っていた奈々瀬が、すぐ傍から聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を上げた。

「これで…すべては夢になるわ…フフフっ…」

「さ、真田…さん…？」

奈々瀬が顔を上げた先に立っていたのは、横笛を片手に、不気味に微笑む囁であった。

「囁？」

「遅くなった、神」

「……っ」

現れた囁に、起き上がったアヒルが、背後から聞こえてくる声に振り向く。

「まったくだぜ。お前ら、それでも安附かよっ」

「こちらにも、こちらの事情があったんだ」

口を尖らせるアヒルに、負けじと言い返すのは、簞也であった。囁とともに、ここへやって来たようである。

「か、神月くんまでっ…」

囁に続き現れた簞也に、奈々瀬がさらに驚いた表情となる。

「それに神ならば、ハ級の忌一匹、僕たちなどいなくても、余裕で

勝ってみせるのが普通だろう」

「ああっ!？」

「まあまあ…」

籠也の厳しい言葉に、勢いよく表情を引きつるアヒル。そんな二人を宥めるように声を掛けながら、囁が二人のもとへと歩み寄っていく。

「こうして、アヒルんもその他の皆も無事だったんだから、何よりじゃない…？それに…」

「……っ？」

流れた囁の視線が、奈々瀬を捉える。

「“奈守”も見つかったみたいだし…フフフっ…」

「えっ…？」

含んだ笑みを浮かべる囁に、奈々瀬が大きく首を傾げる。

「やっぱ奈々瀬が“奈守”なのかっ？」

「赤い言玉はア段の五十音士の証…それにアヒルんの傷を、言葉を使って“治した”…間違いないわ…フフフっ…」

「そうだよなあ…」

囁の言葉を受けながら、どこか浮かない表情で頷くアヒル。

「んっ？っつか、なんでお前が、奈々瀬が俺の傷治したこと、知ってんだよっ？」

「見てたからよ…」

「そっかあ。見てたのかあ…って！見てたんなら、助けるよっ！」
アヒルが、一度は頷いたものの、ハッと気づき、勢いよく怒鳴りあげる。

「奈守が目醒める絶好のチャンスかなと思って…フフフっ…」

「チャンスって、俺、結構危なかったんだぞっ!？」

「まあその時はその時よ…フフフっ…」

「その時はって、お前なあっ…」

不気味に微笑む囁に、アヒルがどこか疲れたように、深々と肩を落とした。

「しかし…」

あれこれと話しているアヒルと囁の横から、箆也が鋭い視線で奈々瀬を見つめる。

「本当に、こんなに近くに“奈守”が居たとはなっ…」

「だから言ったでしょおっ？」

「うっ…」

耳元で聞こえてくる、暢氣極まりないその声に、箆也が勢いよく顔をしかめる。

「そうだって言ってるのに、神月クンてば、バツカみたいに真面目に調査しちゃうんだもんねえっ？」

「為の神っ…」

「扇子野郎っ！」

いつの間にか箆也のすぐ横へと立ち、ペラペラと陽気なしゃべりを繰り広げるのは、為の神、為介であった。アヒルが驚いたように為介を見る中、嫌味のような発言を向けられた箆也は、怒りを震わせながら、拳を握り締めた。

「何だって扇子野郎まで、ここにっ…」

「アヒルさあゝんっ！」

「保うっ？」

為介の後ろから、横に出るようにして姿を見せたのは、こちらも陽気な笑顔を見せた保であった。その横には、眼鏡を押し上げている雅の姿もある。大きく手を振る保に、アヒルが顔をしかめる。

「保まで、一体どうしっ…」

「地球外生命体の先行部隊がやって来て、アヒルさんとビーム戦を繰り広げてるって聞いたんで、急いで駆けつけましたあっ！大丈夫ですかあっ！？」

「……………」

勢いよく問いかけてくる保に、一気に表情を凍りつかせるアヒル。

「おいっ…」

「アハハアゝ、まあまあっ」

睨みつけてくるアヒルに、為介が少し引きつった笑みを向ける。

「はあっ…！地球の生命体としてもイマイチな俺が、一丁前にアヒルさんの心配なんかしちゃって、すみませえ…んっ！」

「お前はちったあ黙ってろっ！」

「んっ！」

アヒルに怒鳴りあげられ、保が両手で口を押さえて黙り込む。

「ったく」

「まあ、でも良かったじゃなあ…いっ」

「はあ？何が良かったっていっ…」

「これで君の付き人、加守、左守、太守、奈守の四人、全員揃ったんだからあっ」

「えっ…」

笑顔で言い放つ為介に、ハツとした表情を見せるアヒル。

「全、員…？」

アヒルがゆっくりと首を動かし、籠也たち四人を見回す。

「まあ、内容はともかく、揃ったは揃ったな」

「フフフっ…そうね…」

「んっ、んん…っ！」

「えっ…？」

相変わらずの落ち着いた口調で話す籠也、不敵な笑みを浮かべている囁、口を押さえたまま嬉しそうに叫んでいる保、まるで意味のわかっていない様子で首を傾げている奈々瀬。

「そっか…これで安団が全員っ…」

「そう、君の団は完成したんだよおっ」

四人を見つめ、感慨深い表情を見せるアヒルに、為介がもう一度、大きく頷きかける。

「まさか、本当に三日で集まるとは…」

為介の横で、少し意外そうに呟く雅。

「いっやあゝ！ボクは初めっから、君なら出来るって信じてたよおゝ！」

「嘘ですね」

「ウソだな」

胡散臭さ全開の笑みで言い放つ為介に、雅とアヒルが冷たい視線を送りながら、頷き合う。

「あ、あのっ、朝比奈くん」

「へっ？」

急に名を呼ばれ、アヒルがゆっくりと振り向く。するとそこには、困惑しきった表情を見せた奈々瀬が立っていた。

「さ、さっきから私…まるで話が見えないっていうか…その、他に聞きたいことも色々あってっ…」

「あ、そっか。そういや、奈々瀬に、ちゃんと説明しねえーといけねえんだったなっ」

ひどく混乱した様子の奈々瀬を見て、アヒルが思い出したように軽く手を叩く。

「ええーっと、まずだなあ、俺たちはあっ」

「説明はいい、神」

「へっ？」

奈々瀬に五十音土のことなどを話そうとしたアヒルを、横から割って入るようにして止めたのは、箆也であった。

「何だよ？説明しなきゃ、奈々瀬も意味わかんねえーだろっ？まさか保みたいに、適当話す気じゃっ…」

「違う。奈々瀬七架には、後からちゃんと説明をする。だが、今はそれよりも時間を見ろ」

「時間？」

箆也に言われ、アヒルが公園に立っている柱時計を見る。針は丁度、十二のところで長針と短針が重なり合っていた。

「うわっ、もう十二時かよっ」

「ああ、そうだ」

「じゃあ一先ず全員、帰って、ゆっくり寝るかあ？」

「……っ」

暢気なアヒルの言葉に、勢いよく顔をしかめる箆也。

「信じられないほど、国宝級に馬鹿だな」

「ああっ！？んだとおっ！？」

「まあまあ…」

険悪な空気となって睨み合う二人を、囁が慣れた様子で宥める。

「十二時ということは、明日の正午、つまり神試験まで、後十二時間しかないということだ」

「あ、そっか」

箆也の言葉に、気付いたようにポンと手を叩くアヒル。

「じゃあ益々、ゆっくり寝っ…」

「ほざけっ」

「ああっ！？」

アヒルが言い終わらないうちに、冷たい一言を放つ箆也に、アヒルがまたしても顔をしかめる。

「あなたにはこの十二時間で、出来る限り言葉の勉強をして、新しい言葉を覚えてもらう」

「げえっ！まじかよおっ！？」

箆也の言葉に、心の底から嫌そうな顔をするアヒル。

「アヒルさんも大変ですねえ」

「あなたもですよ、高市君」

「あ、はい…はあっ…」

顔をしかめているアヒルを他人事のように見ていた保であったが、横に立つ雅から冷たく言い放たれ、小さく頷いた後、深々と溜息を吐いた。

「奈々瀬七架への説明と力の指導は、囁に任せる」

「私…？」

急に指名され、意外そうな顔を見せる囁。

「とにかく時間が無い。すべて任せるぞ」

「あら、責任重大ね…フフフ…」

真剣に言い放つ箆也に対し、囁はあまり焦った様子もなく、どち

らかというと楽しむように微笑んだ。

「高市保のことは、あなたに任せたままでいいか？ 為の神」

「うーんっ、全然いいよおっ」

箆也の問いかけに、暢気に手を挙げる為介。

「では、神」

「んあっ？」

振り向く箆也に、アヒルが少し首を傾げる。

「今から、僕があなたの指導を行う。十二時間後まで、出来る限り力を上っ…」

「ちよっと待てっ」

「…っ」

止めるように入ってくるその声に、箆也が眉をひそめた。

「誰だ？」

「何だあ？ 二、三日休んだだけで忘れたかあ？」

「この声っ…」

聞こえてくるその声に、アヒルがハッとした表情で振り向く。

「毎日、有り難あーいホームルームやってやってる、私の声をっ」

Word. 16 安団集結 (4)

「め、恵先生っ…!」

公園の入口から、ゆつくりとした足取りで公園の中へと入ってくるのは、アヒルたちのクラスの担任である国語教師、恵であった。現れた恵の名を、思わず大きな声で呼ぶアヒル。

「なっ…!」

「えっ…?」

籠也や、状況がわかっていない奈々瀬もまた、そのよく見知った顔に、驚きの表情を見せた。

「な、なんで恵先生がっ…」

「あつれえ〜? もう出て来ちゃったんですかあ〜? 恵さあ〜んっ」
「へっ?」

何やら親しげに恵へと声を掛ける為介に、アヒルが目丸くする。
「何だあ〜、もうちょつと正体ヒミツにしたい方が面白かったのにい」

「私はお前と違って、騙くらかす趣味はないんだよ」

「酷いなあ〜」

アヒルたちのもとへと歩み寄って来た恵が、突き放すように言い切ると、為介は少し拗ねるように口を尖らせた。

「お、お前ら…知り合いで…」

「神月」

「……っ?」

戸惑いながら呟いたアヒルの言葉を遮り、恵が籠也へと呼びかける。

「朝比奈の指導は私がやる」

「なっ…!」

「へえっ!?!」

恵のその思いがけない言葉に、同時に驚きの表情を見せる籠也と

アヒル。

「な、何を言っ……！」

「神試験まで残り十二時間……言葉三つのこの神様に、イデオム熟語まで叩き込みたいんだろっ？」

「えっ？」

「……っ」

現状を把握しきっている恵に、アヒルや箆也たちが、一気にその表情を曇らせる。ただ単に担任の教師であれば、そんなことなど知っているはずがない。

「あなたは一体……」

「あの人は五十音第三十四音、“め”の力を持つ、“女守”めもりの五十音士です」

「女守……？」

「えええ！？恵先生って、五十音士だったのかあ！？」

代わりに答える雅の言葉に、箆也が目細め、アヒルが激しく驚いた様子で声をあげる。

「し、知らなかった……」

「まあ言っ……たからな。普通は知らないだろうな」

しみじみと呟くアヒルに、恵が冷静に言い放つ。

「私がこいつに、後十二時間で熟語まで叩き込む。イデオムお前は真田と奈々瀬の相手でもしてろ」

「………」

はつきりと言い放つ恵に、そつと眉をひそめる箆也。

「あなたが、ただの“女守”であつたとして……」

「……っ」

箆也がどこか含むような言い方をすると、恵の表情がかすかに曇った。

「この短時間で、イデオム熟語まで習得させるなんてことは……」

「ああ、無理に決まってるだろうなあ。だがそれは、お前が指導したところで同じだろう？」

「うっ…」

鋭い指摘を入れる恵に、箆也が思わず口ごもる。

「だが、お前が指導するより、私が指導した方が可能性は上がる。確実に」

「随分な自信ですね」

「お前の力がどうこう言ってるんじゃない。人生経験の差だ」
顔をしかめる箆也に、恵がまるで諭すように言う。

「まあ決めるのはお前だが、どうする？ トンビっ」

「だから俺はアヒルだったの！ こんなところに来てまで、間違えんなよなっ！」

相変わらずの様子で名を間違える恵に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「私の言葉、信じてみないか？」

「あっ…」

恵のその問いかけに、アヒルがハッとした表情を見せる。

——人の言葉こそが、“真実”だからさっ……

——誰の言葉を信じるか、間違えんなよっ——

「……………」

放課後の恵の言葉を思い出し、アヒルが真剣な表情で、少し考えるように俯いた後、ゆっくりと顔を上げた。

「俺、信じるよっ、あんたの言葉」

「なっ…！」

笑顔を見せ、大きく頷くアヒルに、箆也が少し目を見開いて振り向く。

「神っ…！」

「いくら担任の先生でも…まったく得体が知れてないのよ…？ アヒるん…」

止めるように強く名を呼ぶ箆也の横から、囁が落ち着いた口調で

説き伏せる。

「大丈夫だって。この人の言葉を、俺は信じられるから」
そんな二人へ、アヒルが笑顔を向ける。

「お前たちは、恵先生を信じるっつー、俺の言葉を信じてくれよっ」
『……っ』

自信を持って言い放つアヒルのその笑顔に、籠也と囁が衝撃を受けるように、大きく目を見開いた。

「フンっ…」

その様子を見つめ、どこか満足げに微笑む恵。

「仕方ないな」

「仕方ないわね…」

アヒルの言葉を受け、籠也と囁が納得しきってはいない表情で、渋々と頷く。

「そうですねえ、仕方ないですよねえ」

「あなたには聞いていない。会話に混ざってくるな」

「はあっ！俺みたいな年中無休でオドオド口調の奴が、会話に混ざっちゃってすみませえ〜んっ！」

二人に続くようにして頷いた保であったが、籠也に冷たく一蹴され、頭を抱えて謝り散らす。

「まあっ、恵さんに任せとけば、だあ〜い丈夫だってえ〜」

「あなたにも聞いていない」

「雅くう〜んっ！」

「僕の名前を呼ばないで下さい。吐き氣がします」

「はあっ…」

保と同じように籠也に冷たくされ、雅へと泣きつく為介であったが、雅にも冷たく突き放される。そんな為介の様子を見て、アヒルは呆れるように深々と溜息を吐いた。

「では、神のことは任せますよ、恵先生っ」

「ああ」

嫌味のように先生と呼ぶ籠也に、眉一つ動かさずに、恵が素直に

答える。

「じゃあ時間もないことだし、とっとと行くとするかあっ」

そう言って、恵が服のポケットから取り出したのは、緑色の言玉であった。

「言玉っ？」

「よっ」

恵が光を放ち始める言玉を手の中で弾くと、恵の手から零れ落ちた言玉は、光を放ったまま、恵の右足へと吸い込まれるようにして消えていく。

「トンビっ」

「へっ？」

言玉を足の中へと取り込んだ恵が、空いた手で、がっちりとかヒルの腕を掴む。

「振り落とされんなよっ？」

「えっ…」

「“巡^{めぐ}れ”っ」

恵の言葉を受け、恵の右足が強い緑色の光を放ち始めた。

「行くぞっ…!」

「どわああああああっ!」

光り輝く右足を使い、超高速で駆け抜けていく恵に、引きずられるようにして、アヒルがその場を去っていく。アヒルの激しい叫び声が徐々に遠ざかり、やがて完全に聞こえなくなった。

「だ、大丈夫かな…？朝比奈くん…」

「さあ…？フフフっ…」

不安げに問いかける奈々瀬に、囁が軽く微笑んで答える。

「だから、恵さんに任せとけば問題ないってばあゝ」

「…っ」

恵を信用しきっている様子の為介を見て、籠也が少し眉をひそめる。

「あの人は本当に、ただの女守か？」

「んんっ？」

鋭く問いかける箆也の方を、ゆっくりと振り返る為介。

「さあっ？」

「……………」

惚けるように首を傾げ、微笑む為介に、箆也の表情が曇った。

「さあゝて、ボクらも戻って、お修行の続きでもするのでしょうかあゝ高市くうゝんっ」

「は、はいっ！」

箆也にあっさりと背を向けると、横に雅を従え、為介は公園の出口へと歩いていく。為介の言葉に頷き、慌てて為介たちを追っていく保。

「では神月くん、真田さん、奈々瀬さん、また明日あ！」

保が足を止め、箆也たちの方を振り返って、軽く手を挙げる。

「はあっ…！友達いない年が三年くらいあったくせに、偉そうに“また明日”とか言っちゃってすみませえゝんっ！」

「とっとと行けっ」

「また明日、会えたら会いましょう…フフフっ…」

またしても謝り出す保に、箆也がしかめた表情で強く言い放ち、囁は笑顔を見せ、どこか不吉なことを言いながらも、手を振り返して見送った。

「さあ…じゃあ私たちも、奈々瀬さんの指導に入るとしましょうか…」

「あ、ああっ」

囁の言葉に、箆也が少し詰まりながら頷く。

「ここでの立ち話もなんだし…弟さんたちを送って行ったら、私たちの家へ来てもらってもいいかしら…？」

「えっ？あ、うんっ」

振り向いた囁に問いかけられ、慌てて頷く奈々瀬。

「じゃあとっとと行くか。今は何にせよ、時間が惜しい」

「そうね…フフフっ…」

籠也が倒れている六騎とタカシを抱え上げ、公園を出ようと、出口の方へと一早く、歩いていく。

「……っ」

歩きながら、ふと公園の柱時計へと視線を移す籠也。

「後、十二時間か……」

動く秒針を見つめながら、籠也はどこか浮かない表情を見せた。

「さあ……じゃあ私たちも……」

「あ、あのっ……!」

「んっ……?」

籠也を追って、出口へと歩いて行こうとした囁を、奈々瀬が急に呼び止める。

「何……?」

「先に一個だけ……聞いでもいいっ……?」

「どうぞ……?」

遠慮がちに問いかける奈々瀬に、囁が軽く手を差し出し、微笑んで答える。

「親戚……じゃ、ないんだよねっ……? やっぱり……!」

「えっ……?」

奈々瀬のその問いかけに、囁が少し意外そうな顔を見せる。

「フフっ……そうねえ。残念ながら、私とアヒるんは赤の他人よ……」

「そ、そうっ……」

微笑んで答える囁に、どこか落ち込むように俯く奈々瀬。

「でも安心して……」

「えっ……?」

続く囁の言葉に、俯いていた奈々瀬がゆっくりと顔を上げる。

「私……アヒるんに百パーセント全開、まるでもって、天と地がひっくり返っても興味ないからっ……フフフっ……」

「そ、そこまで言わなくてもっ……」

満面の笑顔で凄まじく否定する囁に、奈々瀬が思わず呆れた表情を見せる。

「はあっ…」

だがどこか安心した様子で、ホッと一息つく奈々瀬。

「……っ」

そんな奈々瀬を見て、囁が微笑んだまま、そっと目を細める。

「今のところはね…」

「えっ…!?!」

「フフフっ…」

あからさまに焦るような声をあげる奈々瀬に、囁はどこか楽しむように微笑んだ。

その頃。以団、滞在場所。

「後十二時間かあゝっ」

ソファ―に腰掛け、両手を目一杯伸ばしながら、退屈そうに壁に掛かった時計を見つめている金八。

「待ちくたびれたぜえ。とっとと始まんねえゝかなあゝ神試験っ」

「金八…」

「んあっ？」

向かいのソファ―に座るシャコに名を呼ばれ、金八が時計からシヤコへと視線を移す。

「ウザい」

「えええっ!?! いきなりい!?! 泣くぞお!?! 俺、泣くぞお!?! シヤコっ!」

何の前触れもなく冷たく言い放つシャコに、金八が激しくシヨツクを受ける。

「ボクの名前はチラシ!」

「私の名前はニギリ!」

部屋の大きな鏡に向かって、満面の笑顔で自己紹介をしているのは、チラシとニギリ。

『こんな二人は、ただの他人っ!』

二人が鏡へ向けて、ポーズを決める。

「よおっし! 神試験でのポーズはこれで行こう! ニギリちゃん!」

「了解よお! チラシくんっ!」

ポーズの出来が良かったのか、二人は満足げな表情で頷き合い、親指を立てて、ガッツポーズを作っていた。

「後十二時間か…」

『……っ』

部屋の上座のソファーに、深々と腰を下ろしているイクラがゆっくりと口を開くと、騒々しいほどに会話を交わしていた四人が、一瞬にして静まり返った。

「金八、シャコ、チラシ、ニギリ…」

『はっ!』

名を呼ぶイクラに、四人はすぐさま頭を下げ、大きな声で返事をする。

「勘違いするなよ…? これは神試験なんかじゃない…」

イクラの切れ長の瞳が、鋭く光る。

「かみつぶ神潰し”だ…」

鋭い眼光とともに、吊り上がる口端。

「遠慮することはない。神も付き人も、殺すつもりで叩き潰せっ…」

イクラの低い声が、部屋中に響き渡る。

「神などっ…俺一人で十分だ…」

『……っ』

イクラのその言葉を受け、金八たち四人も、先程までの緩んだ表情とは違う、冷たい顔を見せる。

『仰せのままに、我が神…』

神試験まで、後、十二時間。

Word 17 神試験スタート (1)

神試験当日、午前七時。言ノ葉町の小さな八百屋さん、『あさひな』。

「おっはようくん！アーくうくんっ！」

二階のアヒルの部屋へと、笑顔全開で飛び込んでくるのは、朝比奈家の大黒柱のヒゲ親父。

「とっとと起きるんだようそれえっ！人参乱れ斬りい！って、あれっ？」

いつものように、ベッドに向け、大量に持ってきたオレンジ色の人参を投げつけようとした父であったが、ベッドの上にアヒルの姿はなく、飛び込んだアヒルの部屋は、もぬけの殻であった。

「あ、アーくん…？」

アヒルの名を呼ぶ父の表情が、青ざめていく。

「た、大変だよおっ！スーくうくんっ！」

父が慌ててアヒルの部屋を飛び出し、すぐ隣にある、スズメと書かれた表札のかかっている部屋へと駆け込んでいく。

「スーくうくんっ！！」

「んだよお…休みだっつーのに、朝っぱらからっ…」

無断で部屋に入り、遠慮のない大声で名を呼びあげる父に、ベッドの上で布団にくるまり、眠っていたスズメが、どこか不機嫌そうに目を覚まし、体を起き上がらせる。

「た、大変なんだよお！スーくうくんっ！」

「んだよっ？」

「アーくんがっ…！アーくんが家出しちゃったんだよおっ…！！」

「……………」

切羽詰まった表情で叫ぶ父に、起き上がったスズメが、しばらくの間、固まる。

「あつそ。おやすみ」

「えええっ！？それだけえっ！？」

あつさりと頷いただけで、再び布団の中へと入っていくスズメに、父が驚いた様子で目を見開く。

「アーくんが家出しちゃったんだよおっ！？あの家出だよお！？家出ええっ！」

「十五ん時なんて、三日に一回は家出したくなるもんだろうがっ」

「ええええ！？そうなのお！？思春期ってそんなもんなのお！？」

布団にくるまりながら、冷静に答えるスズメの体を必死に揺さぶり、焦った様子で聞き返す父。

「ねえ…」

「んんっ？」

部屋の入口の方から聞こえてくる声に、父が振り向く。すると、開いたままのスズメの部屋の扉から、ツバメが不気味な雰囲気で、少しだけ顔を覗かせていた。

「おお！ツークん、いい所にいっ！た、大変なんだあ！実はアーくんが家出しっ…！」

「あんまりうるさいと…呪うよ…？」

「…っ」

父の顔写真の貼られた藁人形片手に、そっと言い放つツバメに、父が一瞬にして黙り込む。

「アヒル君なら…籠也君たちの家に泊まってるって、昨日の夜、言っただでしょう…？」

「えっ？」

ツバメの言葉に、父が目丸くする。

「グループでやる課題があるから…今日も泊まってくるって言うってたよ…」

「あ、そ、そうだっけえ？アハハあゝっ」

一気に慌てていた表情を消し去り、父が惚けるように、大きな笑みを浮かべる。

「グループ交際かあゝ楽しそうでいいなあ、アヒルの奴っ」

「だから課題だって…」

布団に潜ったまま、勝手に勘違いをしているスズメに、ツバメが呆れた表情を見せる。

「そっかそっかあ！お父さん、一安心だあ！」

「じゃあ…」

「へっ…？」

ゆっくりと藁人形を持った手を上げるツバメに、父の笑みが止まる。

「睡眠妨害の罰として、呪うね…」

「いっやあゝ！それだけは勘弁してえ！ツークうゝんっ！」

父の悲鳴が、近所中の睡眠を妨害することとなる、朝比奈家であった。

午前十時半。以団^{いだん}、滞在場所。

「神」

「……っ」

シャコに名を呼ばれ、ソファアに腰掛けたまま、深く瞳を閉じていたイクラが、ゆっくりとその鋭い瞳を開いた。

「そろそろ行かないと…」

「……ああ」

シャコの言葉に短く頷くと、イクラがソファアから立ち上がる。

「行くぞっ…」

『はっ』

イクラの声を合図として、イクラを先頭に、以団の五人は部屋を後にした。

正午十分前。言ノ葉の森自然遊園。

そこは、大きなドームで囲われた園内に、あらゆる地方の自然が共存する、緑をメインとした、言ノ葉町一のテーマパークであった。「ここが、その以団…の人たちが、指定した場所？」

どこか言い慣れない様子で“以団”と口にしながら、周囲に広がる青々とした森林を見回し、七架がそっと問いかける。

「ええ…地図には、確かにこのこと印されているわ…」

囁が、ニギリがアヒルへと手渡していた地図を七架へと見せながら、ゆっくりと頷く。

「休日だっというのに休園日になってるし…おまけに中には人っ子一人見当たらない…まるで貸切状態ね…」

「恐らくは言葉の力を使ったんだろう。神試験では、一般人に力を使うことも、例外的に許可されているからな」

囁の言葉を受け、箆也が冷静に分析をする。三人は、静まり返っている園内の入口付近に立っており、まるで本物の森のように、広大な園内の様子を見つめていた。

「一般人がごろごろ居ては、試験に集中出来ないしな。賢明な判断だろう」

「……っ」

箆也の話を聞いていた七架が、どこか緊張した面持ちで、ごくりと息を呑む。

「フフっ…緊張する…？」

「えっ…？」

そんな七架の様子を見逃さず、すぐさま問いかける囁。

「う、うん。まあ…」

「昨日も言ったが、あなたは無理に戦う必要はない。“治せ”の言葉で、仲間の回復にのみ集中しろ」

小さく頷いた七架に、箆也が冷静に言い放つ。

「フオローはこちらでする」

「う、うん…」

冷静すぎるその口調に、少し遠慮がちに頷く七架。

「あら、頼もしい…惚れちゃいそう…フフフ…」

「余計な口を叩くな」

悪戯っぽく微笑む囁に、箆也が鋭い視線を送る。

「それにしても…もう正午になる。神と太守のバカはまだっ…」

「あああ！皆さぁ…んっ！」

『……っ』

箆也が時計を気にしていたその時、遊園の入口から陽気な声が入って来て、三人が皆、一斉に振り返った。

「遅くなりましたぁ…！お待たせしましたぁ…！」

「高市くんっ」

大きく手を振りながら、遊園へと入って来たのは、声と同じように陽気な笑みを浮かべた保であった。保が手を振ったまま、三人のもとへと歩み寄ってくる。

「誰も待っていない。だが、来るのが遅過ぎる」

「はぁっ！道に迷った上に、道聞くのに必要な勇気がなかなか出なくて、すみませえ…んっ！」

少ししかめた表情で言い放つ箆也に、保が頭を抱えて謝り散らす。

「為の神様とお附きの眼鏡さんは…？」

「あっ、為介さんと雅さんなら、外出たところに居ます！」

囁の問いかけに、立ち直って答える保。

「何か参加者以外は、入っちゃいけないみたいで」

「そう…」

入口の方を指差す保に、囁が問いかけたわりには、あまり興味なさそうに頷く。

「いっやゝ、今日で地球の運命が決まるんですねえ…頑張って、ダイヤモンドン守りましょうね！皆さん！」

『……………』

笑顔全開で、まるで見当違いなことを言っている保に、箆也たち

三人が同時に固まる。

「か、神月くん…高市くんも確か、安団あだんの仲間なんじゃっ…」

「バカは放っておくに限る」

ひそめた表情で小声で問いかける七架に、簞也は冷たい一言で答えた。

「後はアヒるんだけね…」

「そうだな」

少し周囲を気にしながら、簞也と囁が頷き合う。

「へえ、ちゃんと人数揃ってんじゃねえのおっ」

『……っ!』

上方から聞こえてくる声に、四人が一斉に顔を上げる。

「優秀優秀っ!」

簞也たちの見上げた大木の上の方の、太い枝の上にしゃがみ込んでいるのは、金八であった。深く被ったニット帽で目元を見せぬまま、吊り上げた口端だけで、笑っていることを示している。金八のすぐ横にはシャコが立っており、すぐ下の枝にはポーズを決めたチラシとニギリの姿があった。

「あれはっ…」

「ああ。あいつらが以っ…」

「出ましたねえ!地球外生命体っ!」

「……………」

初めて見る四人の姿に、表情を曇らせる七架に、説明をしようとした簞也であったが、その言葉は保の気合いの入った声に掻き消される。

「あなたはとりあえず黙っている」

「はあっ!大したトーク力もない俺が、ペラペラしゃべっちゃって、すみませえくんっ!」

睨みあげながら言い放つ簞也に、保が大きな声で謝る。

「以団、それにっ…」

大木の上から、遊園の奥へと視線を移す簞也。

「……………」

「以の神、伊賀栗イクラっ…」

木々に挟まれた細い道を、ゆっくりとした足取りで歩きながら、遊園の奥から、籠也たちのいる入口付近へと姿を現したのは、緑一色の遊園に、その真っ黒な服が目立つ、相変わらず突き刺すような瞳を見せた、イクラであった。

『…………』

イクラの放つ強いオーラのようなものを感じたのか、保と七架が同時に、ごくりと息を呑む。

「誰が変な名前だ。我らが神をバカにするな」

「誰もバカにしてねえよお！？ シャコ！ そんなこと言ってっと、神、泣いちゃうぞお！？」

何故か怒っているシャコに、金八が勢いよく突っ込みを入れる。

「おいっ…」

『…………』

イクラが下からそっと呼びかけると、騒いでいた金八とシャコが、すぐさま黙り込む。

「加守…」

「……………」

イクラの鋭い視線を向けられ、籠也が少し眉をひそめる。

「左守…太守…奈守…」

安団のメンバーを確認するように、イクラが囁、保、七架を一人ずつ見回していく。

「安の神がまだのようだな…」

軽く周囲を見回し、アヒルの姿がないことを確認して、イクラがそっと呟く。

「まっさか、肝心の神様が逃げ出しちゃったとかあっ？」

枝の上から飛び降り、イクラのすぐ横へと着地する金八。金八に続くように、シャコたち三人も次々と地面へと降り立ち、イクラの左右に分かれて並ぶ。

「だったら笑えるなあっ」

『むっ』

挑発するような金八の言葉に、四人が一斉に顔をしかめる。

「我が神が逃げるはずがないでしょう…?」

「そうですね！アヒルさんは逃げたりしませんっ!」

強く言い放つ囁に続くように、抗議する保。

「逃げ出すよりもむしろ：遅刻して失格になる方が、よっぽど確率が高いわよ…」

「あらっ!」

妙に自信を持って言う囁に、保が思わず肩をすかす。

「真田さあくんっ」

「だって：遅刻とかアヒるん、毎日だし…」

「言えてるな」

「言えてるかも…」

囁の言葉に思わず納得し、どことなく不安げな表情を見せる籠也と七架。

「間もなく正午です」

「正午を三十分過ぎても安の神が来なければ、神試験は自動的に失格となります」

『…っ』

ルールをもう一度、確認するように説明するチラシとニギリに、四人が厳しい表情を作る。

「だ、大丈夫でしょうか？アヒルさんっ」

「さあな」

「さあなって…」

不安げに問いかける保であったが、あまりに興味なさそうに答える籠也に、困ったように眉をひそめる。

「地球の運命が懸かってるんですよお！神月くんっ!」

「ああー、はいはい。勝手に懸けてろ」

熱弁する保を、籠也が適当にあしらう。

——ゴォォーンっ！

『……っ』

その時、遊園入口の扉上の壁に掛けられている、巨大な掛け時計の針が十二時を差し示し、重く響く鐘の音を、広い遊園中に大きく轟かせた。その音に皆、思わず言葉を止め、十二時を差した時計を見上げ、どこか厳しい表情となる。

「正午……」

「何だよっ、やっぱ来ねえーじゃんっ。安の神様っ」

ぼそっと呟くシャコと、どこかがっかりしたように肩を落とす金八。

「時間になっちゃったわね……」

「朝比奈くん……」

少し眉をひそめながら時計を見上げている囁の横で、七架が不安げにアヒルの名を呟く。

「チラシ、ニギリ」

『はっ』

イクラに名を呼ばれ、お揃いのスーツを身に纏ったチラシとニギリが、籠也たちに向けて一步、前へと出る。

「正午になりました。ただいまから、時間を計らせていただきます」

「三十分経っても、安の神が現れなかった場合、神試験は失格となっ……」

「時間なんか、計る必要ねえーよっ！」

『……っ！』

二人の説明を割って入ってくるその声に、籠也たちや以団の面々が皆、大きく目を見開く。

「俺なら、ここにいます」

堂々とそう言い放ち、遊園の入口から、その場へと現れたのは勿論、アヒルであった。

「アヒルさん！」

「朝比奈くんっ！」

「フフフっ…やっと来た…」

「まったく…」

嬉しそうにアヒルの名を呼ぶ保と七架に、不気味の微笑む囁、そして、どこか呆れるように肩を落とす箆也。

「おおっ！神様登場っ」

「……っ」

何やら楽しげに笑う金八の隣で、イクラがそつと目を細める。

「ふいっ、絶対ダメだと思ったのに、よおっく間に合ったもんだよなあ」

「当たり前だ」

ホッとしたように胸を撫で下ろしたアヒルの横から、姿を見せたのは、恵であった。

「私が附いてんのに、お前を遅刻させるはずがないだろ？」

「アハハっ」

得意げに微笑む恵に、アヒルが少し引きつった笑みを浮かべる。

「よお！」

「“よお”じゃない。時間ギリギリだぞ」

「悪い悪いっ」

明るく手を挙げるアヒルに、箆也が注意するように言い放つと、アヒルは少し苦い笑みを浮かべた。

「こ、こここんにちは！朝比奈くん！きよ、今日も雲一つない青空だねっ！」

「お、おうっ、ドーム中で空とか見えねえーけどなっ…」

「アヒルさあーん！アヒルさんが遅刻しちゃうんじゃないかって、俺、心配しちゃいましたよおー！」

七架の気合いの入った挨拶に、少し呆れているアヒルへと、保が全力で声を掛ける。

「はあっ！アヒルさんに負けず劣らず、週に一回は遅刻してる俺な

んかが、一丁前にすみませえ〜ん！」

「へえへえっ」

「フフフっ…」

相変わらず謝り散らしている保を、適当にあしらうアヒル。そんな皆の様子を眺め、囁がどこか楽しげに笑う。

「ふうっ」

アヒルが加わって、一気に明るくなった皆に、籠也が呆れたような、安心したような、息を一つ吐く。

「ん？」

籠也がふと顔を上げ、アヒルとともにやって来た恵へと視線を移した。

「恵先生」

「悪かったな。もっと早めに来るつもりだったのに、ギリギリまで遊んじまった」

名を呼ぶ籠也に、恵が詫びるように軽く手を挙げる。

「えええ！？こんな時に、お二人で遊んで来ちゃってたんですかぁ！？」

「うっせえ。チョーク、口にぶっ込むぞっ」

「ひえええっ！」

「だから怖えーって」

間の抜けたことを言う保を、本気で睨みつける恵に、アヒルが呆れた様子で声を掛ける。

『お話中、失礼いたします』

「んっ？」

改まった様子で会話へと入ってくるチラシとニギリに、恵が少し眉をひそめながらも顔を上げる。

「神試験中、参加者以外の遊園内への立ち入りは、禁止とさせていただきます
ただいております」

「参加者以外の方は、外のモニターにて、神試験の様子を視聴下さい」

「わかったわかった」

丁寧に説明する二人に、どこか雑に返事をする恵。

「じゃあまっ、せいぜい死なないようになあ。教え子どもっ」

「あっ、恵先生っ…！」

「んっ？」

入口から再び外へと出て行こうとした恵を、アヒルが慌てて呼び止める。その声に恵が足を止め、ゆっくりと振り返った。

「色々、ありがとうなっ！」

「……っ」

大きな笑顔を見せるアヒルに、そっと目を細める恵。

「受かってから言え」

「ハハっ、じゃあ受かったら、もう一回言うわっ！」

「そうしろ。じゃあなっ」

迷いなく答えるアヒルを見て、どこか満足げに微笑むと、恵はそのまま入口の扉を出て、遊園の外へと消えていった。

「札を言うくらいの成果は出たんだろうな？」

「んっ？それはまあっ」

箆也の問いかけに答えながら、恵を見送っていたアヒルがゆっくりと振り向き、遊園の奥、イクラたちの並ぶ方へと向き直る。

「見てのお楽しみっ？」

「………」

イクラへ向けて笑みを浮かべるアヒルに、イクラがかすかに眉をひそめる。

「神」

「ああ…」

シャコに名を呼ばれ、イクラがゆっくりと足を前へと踏み出す。

「ではこれより、“安の神”朝比奈アヒル及び、安団メンバーに対する、神試験を開始する」

『……っ』

イクラの言葉に、アヒルたち五人が皆、その表情を厳しくした。

「ふうっ」

遊園を出た恵は、扉を通り抜けてすぐのところで足を止め、少し疲れた様子で一つ、深い息を吐いた。

「お疲れ様でえゝすっ」

「あっ？」

暢気な声に一息ついてた恵が顔を上げると、恵の正面には、扇子を扇ぎながら軽い笑みを浮かべている為介の姿があった。その横には、付き従うように雅が立っている。

「何だ、お前も来てたのか」

「一応、弟子っぽいのが二人も参加してますからねえゝ」

「二人？ ああっ」

少し眉をひそめた恵が、納得するように頷く。

「そういえば、あのまるで可愛げのないイクラちゃんは、お前の元教え子だったな」

「えええ、まあっ」

恵が思い出したように言うと、為介は少し目を細めて答えた。

「でえ？ そちらの指導はどうだったんですうゝ？」

「たったの十二時間だ。そう期待するな」

会話を交わしながら、恵と為介が入口のすぐ近くに設置されている、巨大モニターの前へと移動していく。モニターには遊園内のアヒルたちの様子が、何個にも分かれた画面を通して、事細かに映し出されていた。

「朝比奈君たちは、合格できるでしょうか？」

「さあなあ。それこそっ…」

雅の問いかけに素っ気なく答えながら、恵が厳しい表情でモニターを見つめる。

「“神のみぞ知る” って、やつじゃないかっ…？」

Word 17 神試験スタート (2)

再び、遊園内。

『ばんぱかぱあゝんっ！ではこれより、神試験のルールを説明させていただきますう！』

イクラの前へと出て、アヒルたちとイクラたちの間に入るように立ったチラシとニギリが、きれいに声を揃え、アヒルたちへ向けて、ルール説明を始める。

「ルール紹介を行うのはっ、このボク、チラシとおゝ！」

「この私、ニギリでっすうゝ！」

軽く片足を上げ、ポーズを決めるチラシとニギリ。

『こんな二人はあつ、ただの他人っ！』

「だから紛^{まぎ}らわしいってのっ」

「とっととルール説明を始めろ」

ばっちりポーズを決める二人に、アヒルと箆也が冷たく言い放つ。

「ルールは至ってシンプルでっす」

「我々、以団と勝負をして、安団が勝った場合は合格、我々が勝った場合は不合格となります！」

「その勝負というのは…？」

『それは今から説明いたしまっすう！』

鋭く問いかける囁に、二人がすぐさま声を揃える。

「皆さま、言玉をお持ちでしょうか？」

「言玉っ？」

チラシの問いかけに、アヒルが目丸くする。

「当たり前だろう。言玉を持ち歩くのは、五十音士の常識でっ…」

「あつ、良かったあゝ。ちゃんと持ってきてた。忘れたかと思ったあゝ」

「……………」

強い口調で言い放とうとした箆也であったが、ポケットから取り

出した言玉を見て、どこかホッとした様子で肩を落とす保に、それより先の言葉を呑み込んだ。

「他の皆さまも、言玉をお出しただけですか？」

「所持されているか、確認を行います」

「確認っ？」

首を傾げながらも、アヒルが制服のポケットから言玉を取り出す。アヒルに続くように簞也、囁、七架の三人も皆、同じ真っ赤な言玉を、その手のひらの上へと出した。

『確認いたしました』

チラシとニギリが、同時に大きく頷く。

「では我々も」

「面倒いなあゝっ」

以団の方を振り向くニギリに、金八が嫌そうな顔を見せる。

「金八、消えろ、消え去れ、消えてなくなれ、カス」

「泣くぞお！？俺、泣くぞお！？シャコ！だいたい全部、消えろ系だしい！」

相変わらずの様子で騒ぎながら、金八とシャコがそれぞれ、服の中から青色の言玉を取り出す。ルール説明を行っていたチラシとニギリも、スーツの胸ポケットから、同じ青色の言玉を取り出した。

「神」

「……っ」

チラシに促されるように名を呼ばれ、イクラが黒服の懷から、ゆっくりと青色の言玉を取り出す。

「みんな、青い…」

「言玉の色は、団で共通なのよ…」

ふと気付いたように呟く七架に、囁がそつと説明をする。

「これで我々全員の言玉も、確認していただけたかと思えます」

「ではこれを」

「んあっ？」

ニギリがアヒルへと、丸い穴の五つあいた、青いプレートのような

なもの差し出した。両手でそれを受け取り、軽く持ち上げて、不思議そうにプレートを見るアヒル。

「何だぁ？これ」

「相手側の団から奪った言玉を、収納する用のプレートです」

「えっ？」

「奪う…？」

チラシの言葉に、アヒルと箆也が同時に表情を曇らせる。

『はい。皆さまには今から、我々以団を相手に、言玉争奪サバイバルを行っていただきますっすう！パフパフ！』

「言玉…争奪サバイバルっ…」

繰り返しながら、囁もそつと眉をひそめる。

「奪い方は自由です。騙^{だま}すなり、話し合うなり、ジャンケンするなり」

「ジャンケンで…」

「勿論、力ずくで奪うことも可能です」

『……っ』

どこか強調するように言い放つニギリに、アヒルたち五人が、同時に険しい表情となる。

「このプレートに、相手側の言玉をすべて、集めることが出来た団が、勝ちとなります」

「神、これを」

「ああ…」

チラシがイクラへ、アヒルが持っているものとまるで同じ形で、色だけが赤く異なっているプレートを差し出す。イクラはゆっくりと手を伸ばし、そのプレートを受け取った。

「何個か奪われていても、こちらが五つ奪えば、勝ちということか？」

『はい。先に何個奪われようとも、先に五つ、言玉を集めた団が、勝ちとなります』

箆也の問いかけに、チラシとニギリが息びったりに答える。

『ご理解いただけましたでしょうか？安の神』

「へえっ？」

『えっ…』

まるでわかっていない様子で首を傾げているアヒルに、今まで冷静だったチラシとニギリが初めて、困ったような表情を見せる。

『あ、あのっ…』

「いい。我が神には、こちらで追々説明する」

「そうね…言葉のいっぱい並んだ説明を聞いても…どうせ、アヒルは理解できないだろうし…フフフっ…」

『は、はあ…』

箆也と囁に言われ、どこか呆れた様子で頷くチラシたち。

「とりあえず、ダイヤモンドンを守ればいいんですよねえっ！」

「あなたは黙っている。耳触りだ」

「んんっ！」

気合いを入れて言い放った保であったが、箆也に本気で睨みつけられ、謝り散らすこともなく、口を押さえ込む。

『会場はこの遊園内すべてです』

「この遊園内、すべて…」

大自然広がる、ドームいっぱいの遊園を眺め、少し考えるように呟く囁。

『はい。そして、この遊園内にはすでに、我々以団が仕掛けたトラップが、いくつも張り巡らされておりますので、ご注意下さい』

「トラップ？」

「注意するくらいなら…トラップなんて仕掛けないでほしいものだけど…フフフっ…」

二人からの注意に、少し顔をしかめる箆也たち。

「制限時間はありません。どちらかの団が、五つの言玉を奪い終えた時点で、この試験は終了となります」

「ただし、団全員が試験続行不可能の状態となった場合は、言玉の数によらず、続行不可能となった団の負けとなります」

「続行不可能って…」

説明を聞きながら、七架が少し不安げな表情を見せる。

「力押ししてしまえば…言玉サバイバルなんかしなくても、勝つことは出来るということね…フフフっ…」

「結局はそういうことか」

微笑む囁の横で、険しく眉をひそめる箆也。

「では我々は、遊園内に散在し、配置につきますので」

「試験開始は十分後です。その間の作戦会議などは、ご自由にどうぞ」

説明を終え、軽く一礼すると、チラシとニギリがその場から下がり、イクラの両隣に立つ金八とシャコの横へと並んだ。

「では…」

五人の中央に立ったイクラが、ゆっくりと口を開く。

「健闘を祈る」

イクラのその言葉を合図とするように、以団の五人はその場を飛び去り、遊園の奥へと姿を消した。入口付近に並ぶ安団の五人のみを残し、急に辺りが静まり返る。

「“健闘を祈る” って顔じゃなかったよなあ、どう見てもっ」

「そうね…どちらかというところ、どっからでもかかってこいや”って顔に見えたわ…フフフっ…」

「ふっはあゝっ、怖かったあゝ」

「う、うんっ…」

しみじみと呟き合うアヒルと囁の横で、保と七架がホッとしたように胸を撫で下ろす。

「遊園内での、言玉を賭けたサバイバルか…」

「フフ…楽しそうっ…」

「暢気でいいな」

本当に楽しげに微笑む囁に、箆也が呆れた視線を送る。

「俺、ジャンケン強えーから、意外とあっさりいけっかもなあっ」

「はあ！絶対最初にパー出しちゃう、わかりやすい俺ですみませえ」

「んっ！」

「んな致命的なこと、大声でバラすなよっ！」

「……………」

あれこれと言いつけているアヒルと保の様子を見つめながら、そつと目を細め、厳しい表情を見せる籠也。

「ジャンケン勝負なんて、仕掛けてくるかしら…？」

「間違っても来ないな。奴等は力づくで奪いに来る。確実にな」

「もしくは…力づくで、私たち全員を試験続行不可能状態にしに来るか…かしらねっ…」

「……………」

囁の言葉に、曇る籠也の表情。

「そ、それって…」

二人の話を横で聞いていた七架が、さらに不安げな表情となって、二人へと何か言いたげに身を乗り出す。

「大丈夫…以団は五団一、好戦的って有名な団だもの…こうなることは、想定内よ…フッフ…」

不安げな七架を安心させるように、囁がそつと微笑みかける。

「それに…そう簡単に奪われてあげるつもりも、やられてあげるつもりもないし…フッフ…」

「ああっ」

囁の言葉に、籠也が大きく頷く。

「相手が力づくで来るといふのなら、こちらも力づくでいってやるさっ」

籠也が遊園の奥を見つめ、鋭い表情を見せる。

「んあっ？」

遊園内に鳴り響くブザー音に、保とあれこれ話していたアヒルが、戸惑うように顔を上げる。

＜十分経ちました。神試験、開始。神試験、開始＞

「すっげえなあ。放送まで入んのかあ」

“安の神やられました”とかも放送入るのかしらね…」

「不吉なこと言うなよっ」

「フフフっ…」

ブザー音の後に流れる無機質な女性の声に、感心していたアヒルであったが、縁起でもないことを言う囁に、少しその表情をしかめた。

「で？どうするんだ？神」

「作戦会議するようないこともねえし、とっとと行っちゃまうかあっ」

「まあ、そう言うとは思ったが…」

特に緊張した様子もなく、散歩にでも行くような軽いノリで言い放つアヒルに、呆れたように肩を落とす籠也。

「でも私も神に賛成ね…作戦なんか練ったって、通用する相手な気がしないもの…」

「まあな」

「じゃあ決定だな！」

囁の言葉に頷く籠也を見て、アヒルが明るく声をあげる。

「よおーし！じゃあ早速！安団、出撃開っ…！」

——パカっ…！

「へっ？」

アヒルが遊園の奥へと一步、足を踏み出した途端に、大きな音を立てて、アヒルの足の下の床が開く。

「あっらあああっ…！」

突然開いた床から、真っ逆さまに下へと落ちていくアヒル。

「あ、朝比奈くん…！」

「アヒルさん…！」

慌てて開いた床付近へと駆け寄り、アヒルの落ちていった床の下を覗き込む七架と保。だが、床の下は遙か先まで続く落とし穴となっており、遠くの方にかすかにアヒルの叫び声が響いているだけで、もうアヒルの姿は見えなかった。やがて、叫び声も聞こえなくなる。

「あ、朝比奈くん…」

穴を見下ろし、茫然とアヒルの名を呟く七架。

「あらあら…早速、罨に掛かっちゃったみたいね…フフっ…」

「相変わらず、間の抜けた神だ」

「そ、そんなこと言ってる場合っ!？」

「そうですよお!」

楽しげに微笑む囁と、冷静に言い放つ箆也の、まるでアヒルのことを心配していないその態度に、七架と保が、どこか非難するように声をあげる。

「アヒルさんが地底世界で、ちよつと寧猛なモグラ星人さんとお友達になったらどうするんですかぁ!？」

よくわからない危機感を持って、強く主張する保。

「はあっ! ろくに人間の友達もない俺なんかが、モグラさん批判しちゃってすみませえ〜んっ!」

「いいから、とりあえず黙れ」

ワンパターンで謝り散らす保に、箆也が嫌気がさした様子で、冷たく言い放つ。

「そう心配する必要はない」

「えっ?」

はつきりと断言する箆也に、七架が少し首を傾げる。

「我が神は確かに阿呆ではあるが、無能ではない」

『……っ』

その言葉は、まるでアヒルを強く信頼しているような、そんなようにさえ思え、他の三人は皆、少し驚いたように箆也を見た。

「ん? どうした?」

「いいえ…随分、丸くなったものだと思って…フフフっ…」

見つめる皆に、箆也が怪訝そうに首を傾げると、囁がそつと微笑みを向ける。

「馬鹿なことを言うな。とにかく神のことは神に任せるとして、僕たちは何としても、先に相手の言玉を…」

『そろれっ！』

「……っ！」

その時、遊園内から聞こえてくる、きれいに揃った二つの声に、
箆也が言葉を止め、表情を険しくした。

「構えろっ！来るぞ！」

『えっ？』

叫びながら言玉を取り出す箆也に、保と七架が戸惑った表情を見せる。

「“散らせ”っ！」

「クっ…！」

「うわわっ！」

言葉とともに、遊園上空のドームの天井から、まるで滝のように、
大量の水が一気に降り落ちてきて、一箇所固まっていた四人が、
左右へと分かれて避ける。

「“滲め”っ！」

「きゃあっ！」

「うわああっ…！」

降り落ちてきた水が、保と七架の体を呑み込むように広がっていき、
水に包まれた二人が、滝のように流れる水の一部と化して、遊
園の奥へと勢いよく流れ込んでいってしまう。

「奈々瀬！高市！」

「こっちにも来るわ、箆也っ」

「クっ…！」

流れていく二人に思わず身を乗り出す箆也であったが、残った箆
也と囁にも、大量の水が迫り来ており、箆也は厳しい表情で、右手
の言玉を掲げる。

「第六音“か”、解放っ…！」

箆也の言玉から、赤い光が放たれた。

遊園内、原始の森地点。

「早速始めやがったなあ、チラシとニギリっ」

耳を立てながら、遠くの方から聞こえてくる水音を捉え、そっとその口元を緩める金八。原始の森に囲まれた広場の中央には、大きな岩があり、その上にイクラが腰掛け、イクラの傍に金八とシャコが並んで立っていた。

「あいっら、ちゃんと獲物残しといてくれっかなあ」

「ふう…」

「んあっ？」

金八が心配するように言っていると、シャコが金八の横から歩を進め、広場の出口へと歩き出した。そんなシャコに、金八が首を傾げる。

「何だ、もう行くのかあ？ シャコっ」

「うん…あんたらと居ても、つまらないし、空気悪い…」

「泣くぞお！？ 俺つつーか、神が泣くぞお！？ シャコっ！」

相変わらず、小声で毒を吐くシャコに、金八が今にも泣きそうな表情で喚く。

「じゃあ行つて来る…神」

「ああ…」

喚く金八を無視し、イクラへと軽く声を掛けるシャコ。ゆっくりと頷くイクラの姿を確認すると、シャコはそっと目を細め、そのまま原始の森の広場から去っていった。

「さあゝてっ」

泣きそうな顔を見せていた金八が、不意に鋭い笑みを作り、上空のドームを見上げる。

「こっからサバイバル開始だぜえ？ 安団っ」

Word 17 神試験スタート (3)

遊園内、遠未来の森地点。

「ん、んんっ…」

妙に尖った珍しい青葉に、天井のドームまで届きそうな細長い木の並ぶ森に囲まれた広場へと、水に流されるようにしてやって来た七架。頭を振り、濡れた髪から滴を落としながら、七架がゆっくりとその場で起き上がった。

「ここ、は…」

「大丈夫ですかあ？ 奈々瀬さんっ」

「えっ…？」

すぐ近くから聞こえてくる大きな声に、七架が戸惑った様子で振り向く。

「はあっ！ クラスでも目立たない存在の俺が、奈々瀬さんに馴れ馴れしい口きいちゃって、すみませえくん！」

「た、高市くん…」

七架が振り向いた先には、両手で頭を抱え、空を見上げて謝り散らしている保の姿があった。静かな森に大声を響かせている保に、七架が一気に呆れた表情となる。

「あ、えとっ… 神月くんと真田さんは？」

「それが見当たらないんですう…。いきなりハグれちゃったみたいですねえ」

七架の問いかけに、がっくりと肩を落とす保。

「そっか…」

「はあっ！ 無駄に背ばっかデカイ俺なんかと二人つきりで、不快にさせちゃってすみませえくんっ！」

「えっ？ べ、別にそんなこと思ってなっ…」

「はああっ！ 小学生の頃から、牛乳が大好きでしたあーっ！」

「……………」

ろくに七架の話も聞かずに、ひたすら叫んでいる保に、七架は引きつった表情を見せ、思わず固まる。

「と、とにかくさっ!」

「へっ?」

声を張る七架に、叫んでいた保が言葉を止め、目を丸くして振り向く。

「神月くんたちを探そっ? わ、私たち二人じゃ、どうにもならなそうだしっ…」

「あ、は、はいっ!」

七架の言葉に、保は満面の笑みを見せて頷く。

「あっ、でも…神月くんたちも、どこかの森に流されちゃってるのかな…?」

「向こうにあった地図を見たら、どの森も結構近い位置でしたし、合流は難しくないですよ、きっと」

「そ、そっかっ」

ゆっくりと立ち上がりながら、七架が保の言葉に笑みを零す。

「合流するまで、以団の人が来なかったらいいけど…」

「イダンっ? 何でしたっけえ? それえ」

「えっ?」

以団という言葉に、聞き慣れていない様子で首を傾げる保に、七架が戸惑ったような表情を見せる。

「た、高市くんも聞いてるんじゃないの? その、安団のこととか、自分が五十っ…」

「ああ! あの地球外生命体の皆さんのことですねえ!」

「へっ…?」

説明しようとした七架の声を勢いよく遮り、大きな声を放つ保。

「俺らで頑張って、地球を守って見せましようねえ! 奈々瀬さんっ!」

「あ、う、うん…」

妙に決意の入った、まっすぐな瞳と晴れやかな笑顔で言い放つ保に、“違うよ”と言うことも出来ず、七架は思わず頷いてしまう。

「なんで高市くんには話してないんだろう…？」

保には聞こえないよう、ひっそりと疑問を口にする七架。

「はあっ！俺なんかが、アニメ番組のヒーロー的なセリフ、口にしちゃって、すみませえくんっ！」

「…どうしよう…一人でいるより、不安かもっ…」

相変わらず叫び散らしている保を、後方から見つめ、七架が思わず呟く。

「……っ」

ふと振り返り、どこまでも広がる遊園を見つめる七架。

「大丈夫かな…？朝比奈くん…」

七架の不安げな声が、その場にそっと落ちた。

遊園内、枝垂桜の森地点。

「んっ…」

ふと何かボタンのようなものを踏んだ感覚が足の裏に走り、囁はそっと足を止めた。

「妨さまたげろ」…」

囁が小さな声で言葉を落とした後、持っていた横笛を奏でる。

———パアアアアン！

囁のすぐ横の桜の木から、細いナイフのようなものが雨のように勢いよく降ってくるが、奏でられた音が振動の塊となって、その落ちてくるナイフを一本残らず、弾き落とした。

「ふう…物騒な桜っ…」

「本当に至るところに罠が仕掛けられているようだな」

横笛を下ろした囁のすぐ横に立っている箆也が、どこか感心するように桜の木を見上げる。

「まあ、早々引っ掛かるのは我が神くらいだと思うが」

「フフフっ…」

少し毒づく箆也に、囁がそつと口元う緩める。

「でも結局、流されて来ちゃったわね…入口からは随分、遠いのかしら…？」

「ああっ…」

季節外れの桜並木の続く道を、周囲を警戒するように見回しながら、ゆっくりと歩く箆也と囁。二人は言玉を解放したものの、降り落ちてきた水からは逃れることが出来ず、入口からこの森まで流されてしまったのであった。

「先制攻撃…この分断は厳しいな…」

「私たち二人がここに居るということは…あっちは奈々瀬さんと転校生くんだけってことだものね…」

「ああ。五十音士に成り立てな上に、戦いの経験もない、あの二人ではっ…」

桜の花びらの散っていく様子を眺めながら、箆也が表情を曇らせる。五十音士として未熟な保と七架には、箆也か囁が付き、フォロ―を入れるつもりであったが、いきなりそれが出来なくなってしまう。った。

「恐らくは、計画的分断だろう。僕たちのことをよく把握している」「下調べは十分って感じかしら…？こっちはギリギリまで奈守探してたから…以団について、何の情報も持っていないのにね…フフフっ…」

険しい表情を見せる箆也とは対照的に、どこか余裕すら感じる笑みを浮かべている囁。

「以団…ただの好戦的連中の集まり、というわけでもなさそうだな」「そうね…素人集団相手なんだから、もっと手加減してほしいものだけど…」

スカートの裾を手で軽く振り、水滴を払い落しながら、囁がどこか困ったように呟く。

「まるで…全力でアヒるんを、不合格にしようとしてるみたいっ…」
「……っ」

鋭く言い放つ囁に、箆也の表情が曇る。

「とにかく、一刻も早く二人を探さなければ…このままでは言玉など、あっという間に奪われてしまう」

「これを見て…」

「んっ？」

囁に呼ばれ、箆也が振り向く。囁が指差しているのは、桜並木の木々の間に設置されている、遊園地の地図であった。二人が進む足を止め、地図へと近づいていく。

「私たちが今居る桜の森がここ…入口で二人が流されていった方角を考えると…」

囁が地図に触れた指を、左へと流していく。

「深海の森、遠未来の森、雪国の森…この三つのどこかに、二人が居る可能性が高いわね…」

「向こうか。よし、行こう」

地図と見比べ、方角を定めた箆也が、そちらへ向かおうと一歩、足を踏み出す。

「んっ…？」

箆也に続こうと振り向いた囁が、箆也の足元から溢れ出てくる水に気づく。

「箆也っ…！」

「えっ…？」

「“沈め”…」

「うっ…！」

囁の声に振り向く箆也であったが、振り向ききるその前に言葉が響き渡り、箆也と囁の足元の道から、勢いよく水が噴き出した。

「こ、この言葉はっ…！」

「そう、あたいの言葉…」

「…っ！」

上方から聞こえてくる声に、箆也が素早く顔を上げる。

「五十音第十二音、“し”…」

二人の立っている場所のすぐ近くにある、桜の木の枝の上に立ち、青い言玉を右手に掲げている人物。

「あなたはっ…」

「以団、以附が…“之守”、東雲シャコ…」

そこへ現れたのは、無気力な、あまり感情のない表情を見せた、シャコであった。

「之守っ…」

「彼女、確か…学校へ行く途中で、アヒるんを攫^{さら}っていった…」

「ああ。この言葉も、あの時と同じ言葉だ」

シャコを見つめながら、冷静に言葉を交わす箆也と囁。だが、シャコの言葉により生じた水は、徐々にその水位を上げ、二人の体を浸していく。

「あの時と同じように…沈めてやる…」

「馬鹿を言え」

シャコの言葉を、箆也があっさりと一蹴する。

「僕たちに、同じ言葉が通じると思うなっ…！」

箆也が右手に持っていた格子を振り上げ、水位の上がる水に覆われた地面へと、勢いよく突き刺した。

「“涸^かれろ”っ…！」

言葉とともに地面に突き刺さった格子から赤い光が放たれると、水位を上げてきていた水が一気に涸れ果て、地面の底へと干からびていった。

「イ段の水系能力は見飽きている。あなたの言葉などっ…」

「“縛^{しば}れ”…」

「何っ？」

噴き出した水が涸れた途端、すぐさま次の言葉を発するシャコに、

籠也が焦るように顔をしかめる。

「うっ…！」

地面から突き上げ、縄のように伸びてきた細い水の塊に、格子を持つ右手を絡め取られる籠也。次々と縄状の水が地面から突き上がり、籠也の足や胴を縛り付けた。

「クっ…！」

身動きの取れない体に、籠也が眉をひそめる。

「囁！この水をどうにかしてくっ…！」

「あら…捕まっちゃったわ…フフっ…」

「だああっ！」

横で同じように縄状の水に縛られ、身動きの取れない状態となっている囁に、助けを求めようとした籠也が、思わず間の抜けた声を漏らす。

「何をやっている！？」

「先に捕まったのは籠也でしょう…？」

「だったら、僕をおとりに避ければいいだろうっ！？」

「私、籠也を見捨てるなんて…そんなこと出来ないっ…」

「ウソをつけっ！」

嘘臭いほどにきらきらと瞳を輝かせて言い放つ囁に、籠也が思いきり怒鳴りあげる。

「チっ…！こうなったら変格でっ…！」

「そうはさせない…」

「あっ…！」

縄状の水が言玉を持つシャコの右手に操られるように、巧みに動き、籠也が武器の変格を行う前に、籠也の右手の中から格子を奪い取った。同じように、囁の手から横笛も奪っていく。

「あんたたちのことは、よく調べた…戦い方も把握してる…」

「よく調べられちゃったなんて…何だか照れるわね…フフフっ…」

「暢気なことを言っている場合か！」

武器を奪われたというのに、余裕すら感じる笑みを浮かべている

囁に、箆也が思わず怒鳴りあげる。

「これで二個っ…」

『……っ!』

持ち主の手から離れ、武器から元の玉の姿へと戻った言玉を、シヤコが縄状の水からまるで手渡されるように、ゆっくりとその左手で受け取る。その様子に、箆也と囁が一気に表情を曇らせる。

「結構、あっさり…」

二人の言玉を手にし、少しがっかりしたように呟くシヤコ。

「安団の中で、注意すべきは加守と左守だけ…あんたらでこの程度じゃ、他も知れてるな…」

「クっ…」

上から見下すように言い放つシヤコに、箆也が険しい表情を見せる。

「さあ、次の言玉を奪いに行くか…」

「なっ…!」

身動きの取れない箆也と囁に、あっさりと背を向けるシヤコに、箆也が大きく目を見開く。

「ま、待てっ…!」

思わず声を張り上げ、シヤコを呼び止める箆也。

「あなたを、このまま行かせるわけにはっ…!」

「いけないわっ…」

『……っ』

水の縄に縛られたまま、何とかしようと必死にもがく箆也たちを、シヤコがゆっくりと振り返り見る。

「あたい…無駄な努力は、好きくない…」

もがく二人の様子を見つめながら、シヤコが少し煩わしそうに顔をしかめる。

「この言葉で、楽に逝かせてやる…」

『……っ?』

シヤコが二人へ再び自分の言玉を向けると、箆也と囁が戸惑うよ

うに、眉をひそめる。シヤコの構えた言玉が、強い青色の光を放つていく。

「死ね”…”」

「えっ…？」

「なっ…！」

放たれる言葉に、箆也と囁が大きく目を見開いた。

Word 17 神試験スタート (4)

一方、遠未来の森を抜け、雪国の森地点へと入った、保と七架。
「ふわああゝあっ！」

人工雪に覆われた、真っ白な森の中に作られた雪の道を、叫び声をあげながら必死に駆け抜けている保。

「だるまさんが転んだっ。だるまさんが転んだっ」

「ひええええゝ！」

保を追いかけているのは、保の腰くらいの背丈の、丸々と太った雪だるまであった。雪の積もった地面を器用に飛び回り、逃げる保を追い立てている。体部分は白ではあるが、手などは鉄製で、どうやら雪だるまに似せたロボットのようである。

「あれもトラップかなあ？」

逃げ惑う保を余所に、落ち着いた様子で雪だるまを観察している七架。

「ひえええゝ！宇宙じいゝんっ！」

「どう見ても宇宙人じゃないけど…」

「何とかして下さあゝい！奈々瀬さあゝん！」

「ええっ！？」

逃げながら必死に叫ぶ保に、七架が一気に困った顔となる。

「な、何とかって言われてもっ…」

「ひええええゝっ！」

七架が悩んでいる間に、雪だるまが徐々に保との距離を詰め、保がさらに切羽詰まった叫び声をあげる。

「た、^{たす}助けて” ええゝっ！」

保のその言葉に反応し、保の右手の中の言玉が、強く輝く。

「だるまさっ…ん…が…ころ…ん…」

「あっ…」

「へえっ？」

赤く光っていた瞳が、電源が落ちたように黒くなると、雪だるまはその場に止まり、動かなくなった。出ていた音声も、動きともに止まり、その様子に保と七架が目を丸くする。

「あっれえ？」

逃げる足を止め振り返り、動かなくなった雪だるまの頭を撫でて、首を傾げる保。

「今のってもしかして…“た”の、力…？」

不思議そうにしている保を見つめながら、七架が少し眉をひそめる。

——ブー！ブー！ブー！

『んっ？』

その時、突然、ブザー音が鳴り響き、保と七架が同時に足を止め、天井のドームを見上げた。ブザー音はまだ、大きく鳴り響いている。

「何？この音っ…」

「さあ…？」

<神試験参加中の安団、以団各位に連絡>

「連絡っ…？」

首を傾げていた二人が、ブザー音とともに流れてくる放送の女性の声に、ふとその表情を曇らせる。

<以団“之守”、安団“加守”“左守”、両名の言玉を奪取>

「えっ…？」

放送に耳を傾けていた七架が、伝えられる言葉に、大きく目を見開く。

<これにより、ただいまの言玉数…安団、ゼロ。以団、二。以上>
冷たく途切れる放送の声。

「言玉が…取られたっ…？」

「そ、そんなっ…！」

内容を繰り返す七架に、保が思わず声を張り上げる。

「神月くんと…真田さんが…」

——緊張してる…？——

——フォローはこちらです…——

「そんなっ…」

サバイバル前の二人の顔を思い出し、ショックを受けるように、深く俯いてしまう七架。

「それじゃあ、私たちっ…」

「ひいえああ〜！もうお終いですう〜っ！」

「……………」

落ち込んでしまいそうになった七架であったが、自分よりも激しく取り乱している保の様子を見て、ふと冷静さを取り戻す。

「二人がやられるなんて、そんなこと、あるはずないよっ」

「で、ですが今、放送があっ…！」

「さっきの雪だるまみたいに、畏かも知れないし」

「あ、そっかあ」

七架の言葉に、保が不安げだった表情を掻き消し、大きく手を叩く。

「そうですねえ！きっと、俺たちを焦らせるための罠っ…！」

「じゃないんだなあっ、これがっ」

『……………っ！』

突然、会話に入ってくる声に、保と七架がすぐさま顔を上げる。

「あっ…！」

『流れる放送はすべて事実なんですよ〜！パフパフっ！』

雪国の森の白い風景の中では一際目立つ、派手色のスーツに身をつつんだチラシとニギリが、雪に覆われた木の一本の枝に立ち、樂しげにポーズを決めている。

「あなたたちはっ…」

「ボクの名前はチラシ！」

「私の名前はニギリっ！」

眉をひそめる七架に答えるように、大きな声で名を名乗り、決めのポーズを変えていくチラシとニギリ。

『こんな二人は、ただの他人っ！』

「さっき聞いたけど…」

気合いの入ったポージングを見せる二人に、呆れたような表情で呟く七架。

「シャコちんてば、もう二個も言玉取っちゃったんだあゝズルズル狡いよねえゝ」

「こっち、とっとと取らないとお、もう獲物なくなっちゃうかもよお？ニギリちゃんっ」

「それはイヤイヤ嫌だなあっ」

「うっ…」

ルール説明の時と同様、明るい笑顔を浮かべて話すチラシとニギリであるが、その瞳は狙うように鋭く、視線を向けられた七架は、思わず怯むように身を縮めた。

「こ、このままじゃっ…」

保と七架はまだ、五十音士としての力もままならない。二人と戦えば、言玉が奪われる確率は圧倒的に高いだろう。そして二人まで言玉を奪われれば、以団の言玉は四つ。安団の言玉は、アヒルのたった一つだけとなってしまふ。

「に、逃げて下さいっ、奈々瀬さんっ」

「えっ？」

そう勇ましく言い放ち、七架の前へと出たのは保であった。

「高市くん？」

「このままここで、二人ともやられてしまうわけには行きません」

「け、けどっ…」

「俺なら大丈夫ですから、奈々瀬さんは他の皆さんのところへ行っ
て下さい」

不安げな表情を見せる七架に、保が笑顔を向ける。

「言玉は奪われても、神月くんたちはご無事かも知れませんし、まだ、アヒルさんもいます。諦めないでいきましょうっ」

「高市くんっ…」

堂々と言い放つ保が何やら頼もしく見え、七架も少し口元を緩める。

「う、うんっ！そ、そうっ…！」

「地球の未来を守るためにもっ！」

「そう、だよ、ね…」

保の言葉に勇気づけられ、笑顔を見せようとした七架であったが、相変わらず勘違いの気合いを入れている保に、一気にその表情が冷める。

「さあ！じゃあ俺が、あの人たち引きつけますから、奈々瀬さんは行って下さいっ！」

「あ、わかっ…」

「はあ！一人でホラー映画も見れない俺が、一丁前にヒーローぶったこと言っちゃって、すみませ〜んっ！」

「行って、いいかな…？」

謝り散らす保に、行くに行けず、引きつった表情を見せる七架。

「はあっ！実は俺っ、一人でお化け屋敷にも入れなっ…！」

——カチっ！

「あれっ？」

謝り散らしていた保が、頭を抱え過ぎて少し体のバランスを崩し、下ろした左手で咄嗟に近くの木の手を触れると、手の触れた部分が凹み、何やらボタンを押すような音が響いた。

「今のって…」

『だるまさんが転んだっ。だるまさんが転んだっ』

「へっ…？」

徐々に近づいてくる、そのどこかで聞き覚えのある音声に、保が恐る恐る振り向く。

『だるまさんが転んだ！だるまさんが転んだ！』

雪国の森の奥から、一直線に保のもとへとやって来る、群れを成した雪だるまたち。

「ひいええ〜っ！また、だるまああ〜っ！」

「えっ？あ、ちよっ…！高市くっ…！」

「ひいぎゃあああっ！」

「あっ…」

大量の雪だるまに追いかけられ、保が勢いよくその場を駆け去っていく。七架は伸ばした手を下ろすことも出来ぬまま、遠ざかっていく保と雪だるまの集団を見つめた。

「……………」

やがて保と雪だるまの姿が見えなくなると、その場に七架と、チラシ、ニギリの三人だけが残り、どことなく気まずい雰囲気の流れる。

「あの人に期待した私がバカだった…」

思わず呟き、がつくりと肩を落とす七架。

「にげにげ逃げちゃったよお〜太守ちんっ」

「面倒だけど追いかけるかなあ〜言玉取んなきやだしっ」

保の去っていった方を眺めながら、特に焦った様子も見せず、言葉 exchanges チラシとニギリ。

「あの子、ニギリちゃんに任せちゃっていいっ？」

「もちもち勿論だよおっ、チラシくんっ」

問いかけるチラシに、ニギリが笑顔で大きく頷く。

「奈守ちゃんは、私に任せてっ」

「……………」

チラシに答えながら、鋭い笑みを向けてくるニギリに、七架が思わず表情を険しくする。

「じゃあ行ってくるねえ！ニギリちゃん！」

「うんっ、行つてらっしゃい！チラシくんっ」

「あっ…！」

二人が軽く手を振り合うと、チラシがその場を飛び出し、保の逃げていった方へと駆けていく。

「ま、待っ…！」

「おいおい追いかける気いゝっ？」

「うっ…！」

去っていくチラシに身を乗り出し、手を伸ばそうとした七架であったが、正面から聞こえてくる弾むような声に、その動きを止めた。
「そんなのムリムリ無理だよおっ」

ニギリが冷たい微笑みを浮かべながら、青い言玉を持った右手をゆっくりと掲げる。

「以団、以附が一…“仁守”、新渡戸ニギリ」

名を名乗ったニギリが、そつと口端を吊り上げる。

「第二十二音、“に”…解放っ…！」

ニギリが高々と言い放ったその瞬間、ニギリの言玉が、強い青色の光を放ち始める。

「“握れ”っ…！」

「えっ…？」

ニギリが勢いよく言葉を放つと、七架の後ろの地面から、まるで手のような形をした、巨大な水の塊が突き上げる。

「なっ…うううっ…！」

驚く暇もなく、雪で覆われた地面から突き上げた水の手に覆われるように、七架が体を掴まれる。

「うううっ…！ああああっ…！」

巨大な水の手に、強い握力で思い切り全身を掴まれ、体を軋ませた七架が、苦しげに声をあげる。

「ううっ…！」

「神に言われてね、よくくしらしら調べてたのっ、君たちのことっ」

木の上から地面へと降りてきたニギリが、ゆっくりと歩を進め、苦しんでいる七架の方へと歩み寄っていく。

「奈守ちんてえ、昨日、五十音士になったばかりなんだってねえっ」
「……っ」

感心するように七架の顔を覗き込むニギリに、七架がきつく閉じていた瞳を少し開き、目の前のニギリを見つめる。

「そんな素人さん相手に、ほんほん本気になっちゃうのは、さすがに可哀想だからさあっ」

見つめる七架に、ニギリがそつと微笑みかける。

「言玉だけもらっちゃって、さっさと終わりにしてあげるねえ、その方が奈守ちんも助かるでしょっ？」

「うっ…」

親切ぶりながらも、どこか小バカにしたような笑みを浮かべ問いかけるニギリに、痛みに引きつった表情を、さらに顔をしかめる七架であったが、今の七架には言い返して戦う力などなく、大人しく口ごもった。

「じゃあ、もらもら貰うねっ、奈守ちんの言玉っ」

一層微笑んだニギリが、七架が右手に握り締めている言玉へと、手を伸ばす。

「これで三つ目っ」

手を伸ばしながら、どこか楽しげに声を弾ませるニギリ。

「これでもう、安の神様の合格はないない無いわねえっ、きつとっ」
「……っ！」

ニギリが素っ気なく言い放ったその言葉に、七架が大きく目を見開いた。

「朝、比奈…くん…」

水の手に強く掴まれたまま、七架がそつとアヒルの名を呟く。

——放った言葉が、誰にも受け止めてもらえなかった時…その言葉はどこに行くんだろうな……—

——つい出ちまった言葉の方が、相手を傷つけることもある……

——そのことにちゃんと気づける奴が、“優しい奴”なんだっ……

「……っ」

思い出されるアヒルの姿に、七架がそっと目を細めた。

「これでっ……」

ニギリが左手で七架の右手へと触れ、確信を持った笑みを零す。

「五十音…第二十一音」

「えっ？」

言玉を奪おうとした瞬間、七架が小さな声で何かを呟き、言玉に目をやっていたニギリが顔を上げる。

「何？何か言っ……」

“な”、解放っ……！

「えっ……！？」

今度ははつきりと言い放つ七架に、ニギリが大きく目を見開く。

「まさかっ……！昨日目醒めたばかりで、言葉なんてまだ何もっ……！」

“薙ぎ払え”っ……！

——パアアアアン！

「きゃああああっ！」

七架の体を掴んでいた水の手が、分解されるように粉々に弾き飛ばされ、その水の一部が目の前に立っていたニギリへと飛んで来ると、ニギリも勢いよく吹き飛ばされた。

「な、なにになに何っ……！？」

地面に足を擦りつけるようにして必死に踏み止まりながら、ニギリが戸惑った様子で七架の方を見る。

「なっ……！」

顔を上げたニギリが、驚きの表情を見せる。

「決めたの…」

水の手から解放された七架の、右手に握り締められている言玉が、赤く強い光を放ちながら、徐々にその形を変えていく。

「ううん…」

長い赤銅色の棒の先端に、大きく曲がった鋭い金色の刃。その刃と棒の付け根から左右に、金色の羽根のような形をした装飾が顔を出している。棒の部分に『奈』と刻まれたその武器は、薙刀であるが、刃と装飾の先端部分は、金の色と形から、まるで十字架のようにも見えた。

「決めてたの…」

言玉から姿を変えたその薙刀を、ゆっくりと構える七架。

「あの人のために、私は戦うって…！」

鋭い表情で顔を上げた七架が、堂々と言い放った。

遊園内、放送も届かない地下。熱帯の森地点。

「あつぢいゝっ…」

袖を捲り、汗ばんだ手で必死に顔を扇ぎながら、ジャングルのような道もない森を、ひたすらに歩くアヒル。地下で太陽もないというのに、室内はサウナのように強力に蒸しており、アヒルは干からびる寸前であった。

「どう行きゃ、みんなのところに戻れるんだあ？」

流れる汗を拭いながら、アヒルは大きく首を傾げた。

Word. 18 初陣 (1)

午後一時二十分（神試験スタートから一時間）。

言ノ葉の森遊園内、枝垂桜の森地点。

「ふう…」

桜の舞い散る並木道に立ち、どこか疲れたように、ゆっくりと息を吐くシャコ。

「“死^しね”、か…」

「フフフっ…これで本当に天国行きかと思っちゃったわ…」

「天国へ行けると思っていたのか？」

「あら、心外ね…フフフっ…」

息を落としたシャコの前には、何ら変わらない様子で、いつも通りの会話を進めている籠也と囁の姿があった。“之^{しもり}守”であるシャコの“死ね”という言葉に向けられたはずなのだが、二人はいたって元気そうである。

「よく逃げなかったな…」

『…っ』

意外そうに声を掛けるシャコに、二人がゆっくりと振り向く。

「あたいの言葉が本当に発動していたら…あんたたち、今頃死んでいたよ…？」

「発動しないとわかっていたからだ」

シャコの問いかけに、籠也がすぐさまはっきりと答えた。

「五十音士の言霊は絶対だが、人の生死に関わる場合のみ、その効力を発しない時がある」

まるで説明するように、言葉を続ける籠也。

「例えば、死に逝く人間に“生^いきろ”と言っても、命を承らえさせることが出来ないように、あなたの“死ね”も、まだ寿命のある僕らには効かない」

「ご名答っ…」

すらすらと答える箆也に、シャコが少し目を細め、小さく頷く。
「こけおどしくらいにはなるかと思っただけど…そこまで知ってたとは、調査不足っ」

そう呟き、シャコがそっと肩を落とす。

「言葉のことを、よく知ってる…さすがは一応、神の血筋っ？」

「……っ」

シャコのその言葉に、箆也が表情を曇らせる。

「とにかく…」

「……っ？」

そんな箆也を庇うように、囁が一步前へと出る。

「こけおどしとか…そういう遊びは、もうやめにしない…？いくら制限時間がなくても、時間の無駄だわ…」

「やめてどうする気だ？あんなたちの言玉は、あたいの手の中につ…」

「丁度、時間だし…」

「何っ…？」

意味深な囁の言葉に、シャコが眉をひそめる。

『……っ』

「あっ…！」

突然、霞み、掻き消えていく箆也と囁の姿に、見つめるシャコが大きく目を見開いた。

「これは…幻影っ…？クっ…！」

消えていく二人の姿を見つめ、表情を曇らせていたシャコが、ふと何かに気づいた様子で、慌てて自分の左手の中を見る。シャコの左手には、二人から奪った言玉が握られているはずである。

「あっ…」

シャコが手にしたはずの言玉も、二人の姿と同じように、霞みがかって消えていく。

「そういえば、左守の語句の中に“錯覚”^{さっかく}の言葉があったか…ちっ

…」

空っぽとなった左手を握り締め、シャコがどこか悔しげに舌を鳴らす。

「それにしても…」

右手に残った自分の言玉の光を止ませ、桜の舞い散る上空を見上げるシャコ。

「下調べした時は…即効で逃げを選択するような奴等には思えなかったが…」

< “加守” “左守” 両名、 “之守” から言玉を奪還。現在の言玉数、安団、ゼロ。以団、ゼロ。 >

「初めから別に奪われていないっ」

「放送に文句言っても仕方ないわよ…フフフっ…」

その頃、“錯覚”の言葉を使い、シャコから逃れた箆也と囁は、無事、枝垂桜の森を抜け、次の森へと進もうとしていた。

「“錯覚”の言葉が切れたのね…追いかけてくるかしら？彼女…」

「このまま大人しく引き下がるはずがないだろう」

「フフフっ…それもそうね…」

少し顔をしかめて答える箆也に、囁はそっと笑みを浮かべる。

「それにしても珍しいわね…箆也が迷わず“逃げ”を選ぶなんて…」

「個人戦なら誰に止められても戦っていたが、これは団体戦だ」

意外そうに言い放った囁に、箆也が厳しい表情を見せる。

「一刻も早く、あのバカと奈々瀬の所へ向かわねばならないのに、之守の相手をしている暇はない」

「あら…随分と心配性なのね…」

「心配などしていない。あの二人の言玉が奪われては、こちらが不利となるからなだけだ」

「そういうことにしてあげるわ…フフフっ…」

どこかムキになって答える箆也を、囁が大人の笑みを浮かべて見

守る。

「とにかく、之守に追いつかれる前に、二人と合流するぞ」

「ええっ…」

そう言葉を交わすと、二人はさらに歩を速めた。

一方、遊園内。雪国の森地点。

「何だあゝシャコちゃん、言玉とりとり取り返されちゃったのおく？
情けなっ」

同じように放送を聞いたニギリが、シャコを馬鹿にするように言い放ち、がっくりと肩を落とす。

「でもこれでっ、私にもまだ、言玉いっっぱい奪うチャンスがあるあるあるってことかっ」

考え方を前向きに変え、ニギリが大きな笑みを浮かべる。

「じゃあ素人さんの奈守ちゃんは、とっとと、たおたお倒しちゃってえっっ」

「……………」

「……っ」

言玉から姿を変えた薙刀を構え、鋭い表情でニギリを睨みつけている七架の方を振り向き、ニギリがそっと、その表情を曇らせる。

「さっきの放送に：顔色一つ、変えてない…」

仲間二人が言玉を奪還したというのに、喜ぶどころか、安心した表情一つ見せない七架。

「放送が聞こえていないのね…それほどに集中している…」

そんな七架を見つめ、ニギリが目を細める。

「おもおも面白いじゃないっ」

声を張り、口端を吊り上げたニギリが、言玉を持った右手を振上げる。

「昨日、目醒めたばかりの五十音士の力、私がためため試してあげ

るわあ！」

「……っ」

高らかと言い放つニギリに、七架は薙刀を握る右手に、さらに力を込める。

「“滲^{にじ}め”！」

「うっ……！」

ニギリの言葉を受け、ニギリの右手の言玉が青色の光を放つと、七架の足元から滝のように水が噴き出し、七架の足場を侵食し始めた。

「そのまま、おぼおぼ溺れ死んじゃええっ！」

「クっ……！」

笑いあげるニギリに対し、七架が鋭い表情で、薙刀を振り下ろす。
“流^{なが}せ”っ……！」

七架がニギリへ向けて薙刀を振り切ると、七架の足元を侵食していた水が、その薙刀の動きに合わせるように、ニギリの方へと飛び出していく。

「えっ……？」

向かってくる水に、驚きの表情を見せるニギリ。

「……っ」

そんなニギリに、七架がさらに薙刀を振り下ろす。

「“波^{なみう}打て”……！」

「なっ……！」

ニギリへと向かっていく水に、七架が薙刀の刃先を向けると、その刃先から赤い光が放たれ、その光を浴びた水が、その場で大きく広がり、巨大な波を作って、ニギリへと襲いかかった。

「クっ……！」

迫り来る身長よりも遥かに大きな波に、ニギリが表情を歪める。

「に、“逃^にげろ”っ……！」

ニギリが言葉を放つと、ニギリの足下に小さな波が生まれ、その波が素早く動いて、迫り来ていた巨大な波から、ニギリが何とか逃

げ切る。

「ハア：ハア：」

避けた波が近くの木々を薙ぎ倒していく様子を見ながら、軽く息を乱すニギリ。

「結構、まともな攻撃、してしてしてくれんじゃないっ」

「はあっ：はあっ：」

微笑みながらも、その額から汗を流すニギリの見つめる先で、ニギリと同じように、少し呼吸を乱している七架。

「じゃあこっちもえんえん遠慮なく、行っちゃうよお！」

ニギリが再び、言玉を持った右手を振り上げる。

「“滲め”っ！」

今度は右手の言玉から、七架の方へと放つように水を生じさせるニギリ。

「また“滲め”：」

向かってくる水の塊を見つめながら、七架がニギリの言葉を分析するように、そつと眉をひそめる。

「もう一回っ： “流”っ：！」

「“濁れ”っ」

「えっ：？」

先程と同じように薙刀を振り上げ、水を流し返そうとした七架であったが、ニギリがさらに言葉を放つと、七架へと向かってくる水が、その色を灰色へと変え、七架の視界を遮る。

「こ、これはっ：」

その濁った水に周囲を囲まれ、七架が戸惑うように周りを見回す。灰色一色に覆われてしまった視界では、言葉を使って、ニギリへと水を返すことも出来ない。

「これじゃあっ：」

「ござん残念だったねえ、奈守ちんっ」

困ったように表情を曇らせる七架に、ニギリの嘲るような声が届く。

「「煮えろ」っ」

微笑んだまま、そっと次の言葉を放つニギリ。

「煮えっ…？あっ…！」

ニギリの言葉を繰り返した七架が、険しい表情で周囲の水を見る。七架を取り囲んだ水は、急に沸騰し始め、熱い蒸気が七架へと吹きつけた。

「これはっ…！」

「熱湯地獄っ、くらくら喰らっちゃええ！」

「うっ…！」

煮え立った熱い水が、一斉に中央の七架へと襲いかかって来る。

「ああああああっ…！」

熱い水を全身に浴び、激しく悲鳴をあげる七架。

「うっ…！ううっ…！」

水が地面に飛び散り、その姿を消すと、手や足に火傷を負った七架が、力なくその場に倒れ込んだ。

「アハハハハっ…！ごめんねえっ」

倒れた七架を見つめ、楽しそうに笑いながら、笑顔とは裏腹に謝るニギリ。

「成り立ての奈守ちゃん相手につ、私ってばおとおと大人げなかったかなあ…っ？アハっ」

「な…」

「んんっ？」

倒れ込んだまま、小さな声を落とす七架に、笑っていたニギリが眉をひそめる。

「なになに何いっ？命乞いとかあ？」

「なお“治れ”…」

「…っ！」

七架がそっと言葉を呟くと、七架のその体を、淡い赤色の光が優しく包み込み、七架が先程負った火傷を、見る見るうちに治していく。その光景に、ニギリが笑みを止め、大きく顔をしかめた。

「治れ」…回復の言葉っ…」

そつと眉をひそめ、言玉を握る右手に力を込めるニギリ。

「はあっ…はあっ…」

「……っ」

息を乱しながらも、火傷を治し、ゆっくりと立ち上がる七架を見て、ニギリが険しい表情を見せる。

「やるやるじゃない、憎たらしいっ」

ニギリは笑みを浮かべるが、その表情からは確実に、余裕がなくなっていた。

「その方が、たおたお倒し甲斐があるわあ！ “滲め”っ！」

ニギリが右手を七架へと向け、水の塊を七架へ向けて放つ。

「……っ」

向かってくる水に、七架は鋭く目を細め、今度は待ち構えるのではなく、こちらからも素早く薙刀を振り上げる。

「“凧げ”っ…！」

「何っ…！？」

七架が薙刀を振り切り、言葉を発すると、ニギリの放った水の塊がその場でピタリと動きを止め、力なく地面へと落ちていった。

「私の攻撃をっ…！」

「“薙ぎ、倒せ”…！」

「うっ…！」

攻撃を防がれ、啞然としていたニギリに、七架が休むことなく次の言葉を放つ。七架の振り下ろした薙刀から、赤い一閃が飛び出し、勢いよくニギリへと向かっていき、ニギリがその表情を歪めた。

「に、“逃げろ”！」

先程、返って来た水を避けた時と同様に、足の下に小さな波を作り、素早く流れて、七架の攻撃を避けようとするニギリ。

「グっ…！」

だが言葉を放つのが遅れたためか、完璧に避け切ることは出来ず、七架の放った一閃はニギリの頬をかすめ、そのまま森の奥へと消え

ていった。切れたニギリの右頬から、真っ赤な血が滴り落ちる。

「クっ…」

流れる血を左手で拭いながら、そっと険しい表情を作るニギリ。

「何て…言葉数っ…」

目の前に立つ七架を見つめながら、ニギリが眉をひそめる。

「あれが本当につ…昨日、五十音士になったばかりの人間っ…？」

「はあっ…はあっ…」

表情を歪めるニギリを見つめながら、荒い呼吸を続ける七架。

——あなたは五十音士の一人…“な”の力を持つ“奈守”となったの…——

——あなたが“な”のつく言葉を口にすれば、それはすべて現実のものとなる——

「はあっ…」

昨夜、箆也と囁から聞かされた言葉を思い出し、七架が呼吸を整えながら、再び薙刀を握る手に力を込める。

「国語は得意教科っ…何度も辞書は読んだ…“な”のつく言葉は、出来る限り頭に入れてきた…」

そっと呟きながら、七架がその瞳に光を灯す。

「いけるっ…！」

自信すら覗かせる表情で、薙刀を構え直す七架。

「いける…？」

七架の放った言葉を繰り返し、ニギリが今まで見せていた明るい表情を消し、そっと眉をひそめる。

「何か、かかん勘違いしてない？奈守ちゃんっ…」

「えっ…？」

弾むような声というよりは、落ち着き払った声で問いかけるニギリに、七架が戸惑うような表情を見せる。

「例え、語句の数が同じだけあったとしても…君と私には、決定的

な違いがある」

「決定的な、違い……？」

ニギリの言葉を繰り返し、首を傾ける七架。

「そう、決定的で、そして致命的な違い……」

再び笑みを浮かべるニギリであったが、その笑みは今までの明るいものではなく、どこか冷たく、鋭い微笑みであった。微笑んだニギリが、右手に握り締めた言玉を、七架に見せるように掲げる。

「君と私は、偶然にも、同じナ行の五十音士だけ……」

さらに口端を吊り上げたニギリが、言玉を握り締めた手を、高々と掲げる。

「君にこんなことは、出来ないでしょうっ……！？」

「うっ……！」

今までで一番、強い輝きを放つニギリの言玉に、七架が思わず目を細め、身を屈める。

「えっ……？」

ニギリの掲げた言玉が、青く強い光を放ちながら、徐々にその形を変えていく。その光景は、安団の言玉が武器へと姿を変えていく様子に酷似しており、七架は思わず戸惑いの声を漏らした。

「どうしてっ……？ 以団の言玉は確かっ……水を生じるだけで、姿を変えることはないはずじゃっ……」

籠也たちから与えられた知識とは異なるニギリの様子に、首を傾げる七架。

「“変格”っ……」

「変、かくっ……？」

片目を伏せたまま、ニギリの放った言葉を繰り返し、七架が表情を曇らせる。

「“仁王”っ……！！」

「なっ……！」

雪国の森全体を包み込むほどの強い光を放って、ニギリの言玉が姿を変えたのは、横の太木と同等か、それよりも大きな背丈の、水

で出来た、巨大な二体の仏像であった。水で出来ているというのに、その作りは精巧で、細かい表情までよくわかる。二体の像は片方が口を閉じ、片方が口を開いている阿吽の像。寺の門などに置かれている、仁王像そのものであった。目の前に現れた巨大な像を見上げ、七架が大きく目を見開く。

「こ、こんなっ…」

水像を見上げた七架が、思わず言葉を失う。

「こんな…ことがっ…」

「一部の五十音士にはね」

「……っ？」

聞こえてくる声に、七架が二体の水像の間に見える、ニギリの方を見る。

「言玉の力を、さらに高めることのできでき出来る人が存在するのっ」

「言玉の力を、高める…？」

「そう、それをねっ…」

聞き返す七架に、ニギリが微笑んだまま、そっと頷きかける。

「“変格”という…」

「変、格…？」

先程も聞いた、ニギリのその言葉を繰り返し、表情を曇らせる七架。“変格”の話は、籠也と囁からの説明の中には出て来なかった。「はっはっ初耳？まあ教えてなくっても、無理ないよねえ。今の奈守ちゃんには、関係ない話だものっ」

そう言いながら、ニギリがどこか小バカにしたような笑みを浮かべる。

「“変格”はね、カ行、サ行、ナ行、そしてウ行の五十音士にのみ与えられた力」

「カ行、サ行、ナ行っ…？」

入っている自分の文字に、七架がそっと眉をひそめる。

「そう、君と私は同じナ行の五十音士っ…」

言玉が姿を変え、空になった右手を、ニギリがゆっくりと上げる。
「でも五十音土成り立ての君には、到底、“変格”は使えない。これが決定的で致命的な、ちがちが違いよおっ!“仁王”っ！」

「阿っ！」

「咩！」

ニギリの声に答えるように、低く重い声を発する二体の像。

「“躡れ”っ！」

「ううっ…！」

ニギリの言葉に応えるように、二体の像がその巨大な足を振り上げ、膝丈ほどもない七架へ向けて、勢いよく振り下ろす。

「ああああっ…！」

下りて来た二本の巨大な足を、必死に避ける七架であったが、足が地面を踏みつけた衝撃に吹き飛ばされ、近くの木に背をぶつけて、力なくその場に倒れ込む。

「うううっ…！」

七架が地面にうつ伏せに倒れ込んだまま、弱々しい声を漏らす。

「ごめごめ御免ねえっ、奈守ちゃん」

倒れた七架へと、ニギリが気持ちのこもっていない謝罪の言葉を吐く。

「素人さん相手に、ここまでほんほん本気出す気とかなかったんだけどさあっ」

ニギリが単調に言葉を並べながら、嘲るように七架を見下ろす。

「まあそれも、奈守ちゃんが結構強かった証拠ってことで、ゆるゆる許してえっ？」

「うっ…！」

軽々しく言い放つニギリを、倒れ込んだまま、目線だけを上げるようにして見つめる七架が、その心ない言葉に、そっと表情をしかめる。

「さあっ、そろそろおわおわ終わりにしちゃおうっ?“仁王”っ」
「阿！」

「咩っ！」

ニギリの言葉に頷き、再びその巨大な足を振り上げる二体の像。

「じゃあねえ、奈守ちんっ」

「……っ」

残酷に微笑み、手を振るニギリに、そっと目を細める七架。

「神に、最初の言玉をおくおく贈るのは、この私なんだからあっ…！」

「か、みっ…？」

ニギリの放ったその単語を、七架がゆっくりと繰り返す。

「あ…朝、比奈…くん…」

“ 朝比奈くん…”

Word 18 初陣 (2)

———二年前、春。

「あっ…！」

「おわぁ！」

初めて話したのは、初めて同じクラスになった春。私が先生に頼まれた資料を運んで、廊下を歩いていたら時、その人と、見事に正面からぶつかってしまった。

「痛ってえ…っ…」

「ご、ごめんなさい！って、朝、比奈くんっ…？」

「あぁっ？」

廊下に撒き散らされた資料の中で振り返ったその人は、不機嫌そうに私を見下ろした。

「ご、ごめんなさい！ごめんなさいっ！ごおめんなさいっ！ごめんなさい！」

「へっ？あ、おいつ、ちよっ…」

「本っ当に、ごめんなさいっ…！」

私は何度も謝りながら、急いで落とした資料を拾って、その人には何も言わずに、逃げるように、その場を走り去った。

「何だっ…？あいつ…」

それが、初めての会話。といっても、私は『ごめんなさい』しか言っていないけど。

「ナナってさあ、ガアのこと、嫌いなのか？」

「へっ…？」

それは、中学になって仲良くなった想子ちゃんからの、突然の問いかけだった。

「なっ：なななな、なんでっ：？」

「だってあからさまに避けてるっていうか、話すどころか、近づこうともしないっていうかつ」

「べ、ベベベ別に嫌いってわけじゃないけどっ：」

想子ちゃんが朝比奈くんの幼馴染みだということは知っていたから、面と向かって“苦手”とは、少し言いにくかった。

「ちょ、ちよつと“怖い”っていうかつ：その、目つきとか怒鳴り声とかっ：」

「あいつ、目つき悪いの、三歳児の時からだよお？デカイ声も生まれつきだしっ」

「そ、そういうことじゃなくってっ：」

「うっせえなあ！」

「あっ」

同じ教室の中から聞こえてくる、大きな怒鳴り声に、振り向いた。「アヒル隊長とか呼んでんじゃねえっ！ぶん殴んぞっ！？クソ野郎っ！」

教室の中央では、名前を馬鹿にされたのか、朝比奈くんが他のクラスメイトへ向かって、大声で怒鳴りあげていた。それは、新しいクラスになったばかりの春でも、もうすっかり見慣れた光景だった。「まあゝたムキになっちゃって。あのバカガアっ」

『よっ！アヒル隊長！カッコイイっ！』

「うっせえ！黙れ！ボケどもっ！」

怒鳴り声が、また教室に響く。

「何を騒いでいる！朝比奈！放課後、職員室に来いっ！」

「ええっ！？なんで、俺っ！？」

『アハハハハあゝ！』

廊下を通りかかった先生に注意されて、大きく驚く朝比奈くん。そんな朝比奈くんを見て、クラス中のみんなが笑う。いつも騒ぎの中心で、クラスの人。たくさんの人に囲まれて、たくさんの人と笑い合ってる。同じクラスにいるのに、とても遠い人のように

思える。

「バツカガアっ」

「……っ」

クラスみんなと同じように笑っている想子ちゃんの横で、私はそつと目を細めた。

「居る世界が違う、って感じかな……」

「へえっ？」

私がそつと呟くと、想子ちゃんが不思議そうに首を傾げた。

「あっちは凄く明るくて、賑やかな世界に居て……私は目立たない地味いゝな世界に居る感じ……」

私は、自分が抱いた、朝比奈くんへの距離間を説明する。

「違う世界に居るからさ、私の言葉とか、きつと何言っても、朝比奈くんには聞こえないんだろうなって……」

「それは違うよ」

「えっ……？」

言い終わらないうちに否定する想子ちゃんを、私は少し驚くように見た。

「それは違うよ、ナナっ」

優しく微笑んで、想子ちゃんがもう一度、否定の言葉を繰り返す。

「ガアには、“聞こえない言葉”なんて、一つもないよっ？」

「えっ……？」

その時の想子ちゃんの言葉の意味を、その時の私は、理解することが出来なかった。

それから、数日。

「ふう〜、掃除終わりっつと。んっ？」

掃除当番でゴミ捨てに行った帰りに、中庭を通った時だった。

「ほらほらっ！とつとと掃けよお！」

「こっちにもゴミ残ってんぞおっ？」

「あっ…」

振り向いた先には、下級生だろうか、中庭を掃除している数人の男子生徒がいた。中の一人だけにホウキを持たせ、掃除をさせて、後の数人は皆、見ているだけで掃除をしようともせず、その掃除をしている一人に、強制するように冷たい言葉を投げかけている。

「嫌なところに出くわしちゃったなあっ…」

特に止める気もなく、私はただ困ったように立ち止まり、事が終わるのを待とうとした。

「ほんっとノロマだなあ、お前っ。まじウチの班にいらねえーんだけどっ」

「ホントホントっ！ウチの班から、“いなくなっ”くんねっ？」

「っっーか、この世界から“いなくなれ”って感じ？」

『アハハハハハっ！』

「……っ」

苛められている一人に浴びせられる言葉の数々を、聞いていることが不快で、私は少し遠回りだけど、違う道を通って、教室に戻ろうとした。

「痛ってえ！」

「……っ？」

後ろから聞こえてくる大きな声に、違う道を行こうとした足を止めて、ふと振り向く。

「あっ」

「痛ってえなあ！何すんだよ！？てめえっ！」

「……………」

私は思わず、目を見開く。そこに立っていたのは、朝比奈くんだった。苛めていた男子生徒の一人を蹴り飛ばしたのか、地面に座り込んだその生徒が、睨みあげるように、朝比奈くんを見て、怒鳴っていた。

「てめえっ！何年の何組でっ…！」

「ああっ？」

『ひいっ!』

朝比奈くんは、いつもにも増して鋭くなった目つきで睨まれて、苛めていた数人は皆、背筋を震え上がらせて、あっという間に黙り込む。

「くだらねえーこと、やってんじゃねえよっ」

『う、ううっ…』

どこか庄のあるその言葉を向けられて、皆が怯えるように身を縮める。

「そ、そうですよねえ〜! 掃除はみんなでやるもんなんですもんねえ〜!」

「さあ! レッツ、お掃除い〜ング!」

「お、俺、チリトリ持ってくるわあ!」

朝比奈くんの圧力に負けたのか、苛めていた生徒たちは皆、慌てた様子でホウキを持って、必死に掃除をしながら、朝比奈くんから離れていった。

「あ…」

苛められていた生徒だけがその場に残って、戸惑った様子で朝比奈くんを見る。

「あ、あの…ありがっ…」

「ごめんな…」

「えっ…?」

お礼を言おうとしたその生徒の言葉を遮って、そっと謝ると、朝比奈くんは、その場を去っていった。

「……っ」

その時の顔が、とても哀しそうで、辛そうで、痛そうだった。

朝比奈くんは、どうしてあの時、助けたのに、謝ったんだろう。朝比奈くんは、どうしてあの時、“いなくなれ”と言われた本人よりも、ずっと痛そうだったんだろう。

そんなことが気になって、時々、朝比奈くんを目で追うようになっていった。

想子ちゃんから朝比奈くんの話を聞いたのは、それからすぐ後のことだった。

大好きなお兄さんがいたこと。

そのお兄さんが死んでしまったこと。

自分が放った、“いなくなれ”という言葉が、お兄さんの命を奪ったのだと、後悔していること。

あの日、朝比奈くんが言った“ごめん”が、誰に向けられたものなのか、やっとわかったような気がした。

それからか、“時々”が、“いつも”になって、気がついたら、目が離せなくなっていった。

また、数日。

「はぁ、またプリント運び、頼まれちゃったよお」

両手にいっぱい、プリントを抱えて、憂鬱な足取りで、廊下を進む。

「あっ…！」

「おわぁ！」

その時、同じ時間が繰り返されたのかと思うほど、同じようなタイミングで、同じ人とぶつかった。

「痛ってえっっ！」

「あ、ああ朝比奈くんっ…！」

プリントが廊下に散らばる中、ぶつかった頭を押さえる朝比奈くんを、焦りながら見る。

「って、お前…」

「ご、ごごごごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！私はまだ必死に謝罪の言葉を繰り返しながら、廊下に落ちたプリントを拾っていく。

「ご、ごめんなっ…！」

「ほらっ」

「えっ…？」

私の声を遮るようにして、差し出されるプリント。差し出したのは、朝比奈くんだった。

「はああ、結構飛び散ったなあ」

「あっ…」

廊下に散らばったプリントを集めていく朝比奈くんを、呆然と見つめる。

「あっ！いい、いいいいよっ！朝比奈くんが拾わなくても、そんなの私がっ…！」

「なんでっ？プリント落ちたの、俺とぶつかったせいだろ？俺が拾うの、普通じゃん」

「えっ…？」

朝比奈くんがあまりにも自然にそう言うから、私は言おうとしていた言葉を呑み込んでしまった。

「それに、この前、ぶつかった時は拾えなかったしなあ」

「あっ…」

そっと笑う朝比奈くんは、目を開く。

「覚、えて…」

「あっ？」

「う、ううんっ！何でもないよっ！」

不思議そうに首を傾げる朝比奈くんは、必死に首を横に振る。その時の私は、妙に動揺していて、その動揺を隠すのに、何故か必死だった。

「よし、完了っ」

「あ、ありがとう」

全部のプリントを拾い終わって、二人でゆっくりと立ち上がる。

「じゃあ私、行っ…」

「奈々瀬」

「えええっ!?!」

「ええっ?」

名前を呼ばただけなのに、激しく驚いて振り向く私に、朝比奈くんも少し驚いたようだった。

「悪かったな。ぶつかっちゃって」

「えっ…?」

改まって言う朝比奈くんに、私は少し戸惑うように目を丸くする。

「この前、お前、謝ってくれたのに、俺、謝ってなかったよなあ」私を見ながら、朝比奈くんが笑う。

「この前も今日も、ホントごめんなっ」

「…:…っ」

伝えられる言葉に、大きく目を見開く。

——私の言葉とか、きつと何言っても、朝比奈くんには聞こえないんだろうなって:——

そんなこと、なかった。

——ガアには、“聞こえない言葉”なんて、一つもないよっ?——

想子ちゃんの言ったとおりだった。

——ごめんなさい!ごめんなさいっ!——

ちゃんと、聞いていてくれた。

「う、ううんっ」

「三回目はないように気をつけるわ、じゃあなっ」

「あっ…」

軽く手を振り上げて、朝比奈くんが歩き去っていく。

「あ…朝比奈くんっ…！」

「へっ？」

「あっ」

思わず呼び止めてしまったけど、特に言うことがあったわけでもなくて、振り返った朝比奈くんに、私は困ったように目を泳がせる。

「え、ええ…と、そのっ…」

何か言うことはないかと、必死に言葉を探す。

「あ、明日！明日はっ、雲一つない青空で、絶好の運動会日和だろ
うねっ！」

「へっ？」

咄嗟に放った、自分でも訳の分からない言葉。心の中で、『あちやっ』と呟いた。

「そうかぁ？明日、大雨だって、天気予報で言ってたぞお？」

「えっ…」

そんな言葉にも、ちゃんと返事が来る。

「天気予報、しっかり見とけよっ」

「あ…」

そう言う朝比奈くんはまた背を向けて、廊下を歩き去っていく。
「……………」

去っていく朝比奈くんの、その後ろ姿を、見えなくなるまで、見つめていた。

誰よりも、人の言葉に、耳を傾ける人。

誰よりも、言葉の中の、痛みを知る人。

たぶん、もうきつと、目なんて離せない……………

「……っ！」

仁王像の二本の巨大な足が迫る中、倒れていた七架が大きく目を見開き、目の前に落ちていた薙刀を握り締め、刃先を足の降りてくる上空へと突き上げた。

「なっ…“鈍^{なま}れ”っ…！」

突き上げた薙刀の刃先から、赤い光が放たれる。

「阿…あ…あ…」

「う…う…咩…」

「んっ？」

スローモーションでも見ているかのように、急に緩やかになる仁王の動きに、ニギリが眉をひそめる。

「これは、鈍化っ…？」

「クっ…！」

「なっ…！？」

戸惑うように仁王を見上げていたニギリのもとへ、動きの鈍くなった仁王の間から、勢いよく七架が駆け込んでくる。向かってくる七架に、驚きの表情を見せるニギリ。

「ウソっ…！どこにそんな力がっ…！」

「…っ」

焦るニギリへ、七架が迷うことなく、右手の薙刀を突き出す。

“薙^なげ”っ…！！」

「うううっ…！」

七架の振り切った薙刀が、ニギリの腹部を斬り裂く。

「あっ…あ…」

大きく目を見開き、苦しげな声を漏らすニギリ。

——パアアアアン！

「えっ…？」

だが次の瞬間、七架が斬り裂いたはずのニギリの体が、水飛沫と

なって飛び散った。

「ざんざん残念っ」

「……っ！」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、七架が戸惑いの表情を消し、すぐさま振り返る。

「偽物^{にせもの}」、だよおっ」

「クっ……！」

七架のすぐ後ろに立ち、楽しげに微笑むニギリに、振り返った七架が厳しい表情を見せる。

「これで本当に、おわおわ終わりっ」

「うっ……！」

顔の前へと向けられるニギリの右手に、七架が大きく目を見開いた。

「“滲^{にじ}め”っ」

「ううっ……！ きゃあああああっ……！！！」

至近距離から放たれた水の塊が直撃し、七架が勢いよく吹き飛ばされる。

「うっ……！！ううっ……！」

傷ついた七架が、力なく地面に倒れ込む。

「おしかったねえ、結構、イイとこだったのにっ」

右手を下ろしたニギリが、微笑みながら、ゆっくりとした足取りで、倒れた七架の方へと歩み寄っていく。

「ま、まだっ……」

向かってくるニギリを、顔だけを上げて見つめながら、薙刀をもう一度、握り締めようとする七架。

「ううんっ、もう終わりだよ」

「えっ……？ あっ……！！」

ニギリの言葉に、七架が戸惑うように眉をひそめたその時、突然、薙刀が赤い光を放つと、次の瞬間、薙刀は元の言玉の姿へと戻ってしまっていた。驚いた七架の右手の中から、言玉が転がり落ちてい

く。

「な、なんでっ…?」

目の前の地面を転がっていく言玉に、七架が困惑した表情を見せる。
「言玉の使用時間はねえ、五十音士の力によるのっ」

「えっ…?」

「戦い始めて二十分っ、昨日、五十音士になったばかりの奈守ちゃんにしては、もった方じゃないかなあ?」

「そん、なっ…」

言玉が使えなければ、もう七架には戦う術はない。突き付けられた事实に、体を動かそうとする気持ちすらなくしてしまう七架。

「奈守ちゃんはよく、がんが頑張ったよお。奈守ちゃんの神様の代わりに、私が誉めてあげるっ」

「あっ…!」

七架の前に転がっていた言玉を、歩み寄ってきたニギリが、そっと拾い上げる。

「だけどこれはあ、私が神様に誉めてもらうためにい、もらもら貰ってくねえっ」

「まっ…!」

七架の言玉を持ったニギリが、仁王像の一体に持ち上げられ、その平たい手のひらの上に乗る、大きな足で歩き去っていく仁王とともに、遠ざかっていく。

「アハハハあゝっ!」

「ま、待ってっ…! ううっ…!」

遠くなっていくニギリの笑い声に、必死に起き上がろうとする七架であったが、痛みが全身に走り、再びその場に倒れ込んでしまった。

「待っ、てっ…」

少し震えた声を漏らしながら、七架が地面を握るように両手に力を込め、何とか起き上がろうとする。

「待っ…!」

「もういい」

「……っ！」

血が滲みそうなほどに強く握り締められた七架の手の上に、制止を促すように手を置き、七架のすぐ横へと現れたのは、箆也であった。

「神…月くん…」

「もういい。もうやめておけ、奈々瀬」

少し顔を上げ、振り向いた七架に、箆也がもう一度、宥めるように言葉を放つ。もう一方の側へと囁が姿を現すと、二人は協力して、倒れ込んでいる七架を、ゆっくりと起き上がらせた。

「け、けどっ…」

二人に支えられ、体を起こしながら、七架が険しい表情で箆也を見つめる。

「けど私っ…！言玉をっ…！あの人から言玉を取りっ…！」

「追いかけたところで、取り返せはしない」

必死に喰らいつくように言い放つ七架に、箆也は冷静な言葉を吐く。

「今のあなたでは、あの仁守には勝てない」

「……っ」

はつきりと言い放つ箆也に、七架は大きく目を見開くと、それ以上、何も言うことが出来ずに、力なく俯いた。

「うっ…」

俯いた七架の口から、声にならない声が漏れる。

「うううっ…！」

唇を噛み締めた七架の瞳から、透き通った涙が零れ落ちた。

＜以団“仁守”、安団“奈守”の言玉を奪取。現在の言玉数、安団、ゼロ。以団、一。以上＞

「アハハァっ」

流れる勝利コールのような放送に、仁王の手のひらの上に立ち、高々と森を見下ろしながら、ニギリが嬉しそうな表情を見せる。

「やったあ、私、やったよお？ 神っ」

七架から奪った言玉を、うっとり見つめるニギリ。

「早速、これを神のところに、とどとど届けなくっちゃっ」

そう言うのと、ニギリが乗っている像ではない方の仁王像を振り向く。

「^{にな}担え」

「咩っ！」

真一文字に口を閉じた方の像が、ニギリから、その指の爪ほどもない小さな言玉を受け取ると、大きく頷いて、遊園の奥へと、大きな足を踏み出しながら進んでいく。

「たのたの頼んだよおっ」

去っていく仁王像の片割れを、軽く手を振りながら見送るニギリ。

「さあゝてっ、チラシくんのもでも行こっかなあゝって、痛っ」

これからの行動を考え、首を傾げていたニギリが、ふとその表情を歪めた。

「……っ」

そっと視線を落とし、自分の右足を見下ろすニギリ。短いスカートの下から覗く細い足の膝から、赤い血が少量流れていた。七架との戦いで、いつの間にか傷を負ったようである。

「素人相手に、傷を負うとはねっ……」

自分の血を眺め、ニギリが眉をひそめる。

「言玉の使用時間、かっ……」

先程、自らが七架に放った言葉を思い出し、表情を曇らせるニギリ。

「これじゃあまるで、奈守ちゃんが素人じゃなきゃ、私が、まけまけ負けてたみたいじゃないっ。後味悪っ」

完全に勝利の喜びに浸ることも出来ず、思わず顔をしかめるニギリであった。

Word. 18 初陣 (3)

戻って、雪国の森地点。

「奈々瀬さんの傷は…？」

「そう大した傷じゃない。ほぼ塞ぎ終えた」

囁の問いかけに、素早く答える箆也。その箆也のすぐ傍には、雪で覆われた地面に横になり、深く目を閉じている七架の姿があった。どうやら、眠っているようである。

「だが、疲労が著しい。余程、言葉を使っただろう。しばらくは目を覚まさない」

「初陣だったんだものね…無理もないわ…」

箆也の言葉を聞きながら、囁が少し肩を落とす。

「囁、奈々瀬を看ていてくれるか？」

「いいけど…箆也はどうするの…？」

「僕はもう一人の方へ行く」

「ああっ…転校生くんね…」

今思い出したかのように、素っ気なく言い放つ囁。

「奈々瀬の言玉も取り返せるかも知れないしな。囁はここで、奈々瀬と待機していてくれ」

「わかったわ…フフっ…」

その場で立ち上がる箆也に、囁が笑顔を向ける。

「じゃあ」

「気をつけてね…」

「柄にもないことを言うな」

「フフフっ…」

心配するような言葉を吐いた囁に、そう悪態をついて、箆也は素早く、その場を駆け出していった。静まり返った雪国の森に、囁と七架だけが残る。

「ふう…」

「ん、んんっ…」

「……っ？」

一息ついていては囁が、小さく寝返りをうつ七架に気づき、そっと振り向く。

「あさひな…くんっ…」

「あらあらっ…妬けちゃうわね…」

寝言でアヒルの名を呟く七架に、囁が笑みを零す。

「ニギリは勝ったのか…」

「……っ」

そこへ聞こえてくる声に、微笑んでいた囁の表情が、不意に鋭くなる。

「あなたは…」

「そこで寝てるのが奈守…？」

その場に現れたのは、先程、箆也と囁が一度対峙した、“之守”

のシャコであった。ゆっくりと二人のもとへと歩いて来ながら、シャコが囁の右手を見る。見つめた右手には、しっかりと赤銅色の横笛が握られていた。

「あんたの言玉は、まだ取られてないみたいだね…」

「だったら何…？」

どこか試すように問いかけながら、囁が七架の傍から立ち上がり、七架から少し離れるように、シャコの方へと歩いていく。

「あなたが奪ってみる…？」

「当たり前っ」

囁の問いかけに、迷うことなく答えるシャコ。

「まあ、あんたがさっきみたいに逃げたら別だけど…」

「フフフっ…それなら大丈夫よ…」

どこか刺々しく言い放つシャコに、囁が穏やかな笑みを向ける。

「一回逃げただけでも、相当ストレス溜まったもの…もう二度と御免だわっ…」

「そうか…」

余裕の笑みで言い放つ囁に、シャコが動揺することもなくそっと頷く。

「それは良かった…」

「……っ」

言玉を持った右手を振り上げるシャコに、囁もゆっくりと横笛を構えた。

遊園内。紅葉の森地点。

「ひいいえあああゝっ！」

『だるまさんが転んだっ、だるまさんが転んだっ』

七架が死闘を繰り広げたこの二十分間、保はといえば、ひたすらに雪だるまロボットとの追いかっこを続けていた。いくつもの森を越え、いつの間にか遊園内でも端の方にある、紅葉の森まで辿り着いてしまっていた。

「はあゝっ」

保を追いかける雪だるまロボットの、さらに後を追うようにして、保を追跡しているチラシが、疲れたような表情で深々と溜息を吐く。
「さっきからあいつ、逃げてばっかだし。ロボットも倒せないなんて、あいつ、本当に安団なのかあっ？」

チラシが眉間に皺を寄せ、思わず疑問を口にする。

「まあいいや。ニギリちゃんも言玉奪ったみたいだし、ボクもそろそろ貰うとしようかなっ」

そう言うと、チラシがスーツの胸ポケットから、青色の言玉を取り出した。

「五十音、第十七の音、“ち”、解放っ…！」

チラシが言葉を発すると、言玉が青い光を放ち始める。

「“散^ちらせ”っ！」

チラシが輝く言玉を握り締めた右手を、勢いよく振り下ろすと、

手の振り下ろされた地面から、温泉でも湧き出たかのように、大量の水が激しく噴き出した。

『だるだるうっ！』

「へえっ？」

地面から噴き出した水が、激流となって、保の後を追いかけていた雪だるまロボットたちを、一体残らず流し去っていく。苦しい声をあげながら、流れていく雪だるまを見送り、保は目を丸くした。

「だるま、流し…？」

「そろそろいいですかあ？」

「えっ？」

雪だるまを見送り、首を傾げていた保が、正面から聞こえてくる声に気づき、振り向く。

「こっちもいい加減、本題に入りたいんですけどお？」

「あっ…」

目の前へと現れたチラシに、保が驚いたような表情を見せる。

「あなたは…」

「そうそう、ボクはあっ」

「だるまさん総攻撃から、俺を助けてくれたんですねえ！ありがとうございますごさいまあゝすっ！」

「ちっがあーうっ！」

満面の笑顔で礼を言う保に、チラシが勢いよく怒鳴りあげる。

「ボクはっ…！」

「はあっ！そうですよねえ！こんな世の中の何の役にも立たなそうな俺を、助けるわけありませんよねえ！すみませえんっ！」

「……っ」

主張しようとするチラシの声を遮って、謝り散らす保に、チラシの表情が歪む。

「だからボクはあっ…！」

「もしや、ただ単に雪だるまがお嫌いとかっ？」

「ちっがあーうっ！」

「またもやチラシの声を遮って、大きく首を傾げる保に、チラシが怒鳴りあげる。」

「ボクは、以団の一人っ！さっき、ルール説明やってやっただろうっ！？」

「イ、ダンっ…？」

チラシの言葉を繰り返して、目を丸くする保。

「ということは、地球外生命体っ！？」

「違うっ！」

頭を抱えて叫ぶ保の言葉を、チラシがすぐさま否定する。

「一体、どういう説明を受けてきたわけっ？ボクは以団、以附が一、
“知守”の千歳川チラシでっ！」

「ひいえあああゝっ！」

「……………」

説明しようとするチラシの言葉に耳を傾けることなく、叫び声をあげながら、一目散に逃げ去っていく保。

「また逃げるしっ…」

遠ざかっていく保の背中を見つめ、チラシが勢いよく顔をしかめる。

「人の話は、最後まで聞くもんだよっ…！」

少し声を荒げながら、チラシが言玉を握る右手を振り上げた。

「近づけ”っ！”
ちか

チラシが言葉を放つと、足元から勢いよく水が噴き上げ、その勢いに乗り、チラシの体が天高く宙へと浮き上がる。そのまま大きく移動すると、チラシはあっという間に、逃げ行く保の目の前へと降り立った。

「うえっ…！」

すぐ前へと現れたチラシに、慌てて足を止める保。

「さあっ、とっとと戦っ…」

「ひいえあああゝっ！」

「チっ…」

すぐさま体の向きを変え、逆方向へと逃げ去っていく保に、チラシがまたしても顔をしかめる。

「戦う気がないんなら、とっとと終わりにさせてもらおうよっ…！」
チラシが言玉を持った右手を、逃げていく保の背中へと向ける。

「“散れ”っ…！」

言玉が青く輝くと、チラシの周囲に無数の水泡が生じ、一斉に保へ向けて放たれた。

「ひいひいっ！」

向かってくる水泡に、逃げることもせず、ただ叫ぶ保。

「た、助けて”ええっ！”」

保のその言葉に、保の右手に握り締められていた赤い言玉が、強い光を放った。

——パアアアンっ！

「な、何っ…！？」

言玉が放った光を中心として、幾重にも枝分かれした、細長い赤い光線のようなものが辺り一面に飛び出すと、その光に突き刺され、チラシの放った水泡が、一個残らず碎き割られる。

「この光はっ！？んっ？」

周囲を蜘蛛の巣のように覆った、その細長い光を見つめていたチラシが、ふと眉をひそめる。

「これはっ…糸…？」

光が止むと、そこには森中に張り巡らされた、赤い糸が見えてくる。

「ふうっっ」

「……っ」

どこかホッと一息つくような声が聞こえてくると、辺りに張り巡らされていた糸が、自発的に一定の方向へと下がっていく。糸の下がっていくその方向に立っているのは、大きく胸を撫で下ろした、

保であった。

「助かったあゝっ」

張り巡らされていた大量の糸を、コンパクトに両手の中に収めていく保。その両手の指には、今にも絡まりそうなほど、何本もの赤い糸が巻かれていた。

「あれが…あいつの言玉の形状っ…？」

その糸を見つめ、チラシがそっと表情を曇らせる。

「あんなもので、ボクの水を全部砕くなんてっ…」

「このあやとりって、こんなことも出来るんですねえっ」

「…まぐれか」

保を見つめ、考え込むような表情を見せていたチラシであったが、保の間の抜けた発言に、一瞬にして偶然の出来事と決めつける。

「なら、今度こそっ…！」

「へっ？」

再び右手を振り上げるチラシに、保が目丸くする。

「“散れ”っ…！」

チラシが保へ向けてもう一度、無数の水泡を放つ。

「うわっ！またっ…！」

向かってくる水泡に、焦ったように声をあげる保。

「これでっ…！」

焦る保を見て、チラシが確信めいた笑みを零す。

「たっ…」

迫り来る水泡を見つめ、保が素早くその口を開く。

「“耐えろ”！」

保が言葉を放つと、保の両指の糸が勢いよく伸び、保の正面で幾重にも重なって、まるで盾のように、保の前へと立ち塞がって、チラシの放った水泡を受け止めた。

「なっ…！何っ…！？」

見事に攻撃を止める保に、チラシが大きく目を見開く。

「“溜めろ”」

保が自然な口振りで、さらに言葉を呟くと、盾のようになっていた糸が大きく曲がり、皿のような形となって、チラシの放った水を言葉の通り溜めていく。糸の中に水がいっぱいに溜まると、保がそっと右手を動かした。

「倒せ^{たお}」っ！」

「なっ…！」

保が次の言葉を放つと、大きく糸が揺れ動き、その溜まった水が一斉にチラシへ向けて放たれる。

「うっ…！」

返って来る自らの技に、焦りの表情を見せるチラシ。

「ち…“鏤^{ちりば}めろ”っ…！」

チラシの言葉により、チラシに向かって来ていた水の塊が、勢いよく弾け飛ぶ。

「クっ…！」

直撃は避けたものの、弾け飛んだその衝撃に、チラシが少し押され、身を屈める。

「こ、こいつっ…！」

態勢を整えながら、眉をひそめ、保を見つめるチラシ。

「あんなんのくせに、言葉が的確だ…！」

呟くチラシの額から、そっと汗が流れ落ちる。

「強いっ…！」

保の力に、曇るチラシの表情。

「ふうっ」

チラシが険しい表情を見せる中、保が伸びた糸を両手の中へ収めて、ホッとしたように一息つく。

「この順番の通り、言葉を言えば何とかなるって為介さんが言ってたけど、ホントになったなあゝ凄いなあゝ」

テストのカンニングのように、手のひらにでかかど書かれた、今さっき保の放った、『耐えろ』、『溜めろ』、『倒せ』の言葉の文字。その文字を眺めながら、保が感心したように言う。

「あいつは言葉での戦闘経験なんてない、素人だって調査ではなつてたのにつ…」

「うわ！糸が絡まっちゃった！」

「……まぐれか」

武器である糸を絡めてしまい、変な方向に手を曲がらせている保に、チラシが一気に呆れた表情となる。

「なら今度こそ、この熟語でっ…！」
イデオム

表情を鋭くし、右手を振り下ろすチラシ。

「“地熱”っ…！」
ちねつ

「ちねっ…？」

———パアアアアン！

「うわああっ！」

チラシの放った言葉に保が首を傾げていたその時、保の足元の地面から、勢いよく水が噴き出した。湯気のアがるその水は、熱湯である。

「熱つつつつ…！」

噴き出してくる熱湯に、顔の前へと両手を持ってきて、思わず叫ぶ保。

「アハハハハっ！熱湯地獄を味わうといっ…！」

「“高い高い”っ」
たか

「何っ…！？」

チラシが大きく笑いあげようとしたその時、保が軽く言葉を放つと、噴き出す熱湯の中にいた保の体が、勢いよく宙へと舞いあがっていく。そんな保を見上げ、チラシが驚きの表情を見せる。

「と、飛んだっ…？」

「ふうっ」

戸惑いの表情でチラシが見上げる中、宙に上がった保が、上空でホッと一息つく。

「地面からの攻撃の時は高い高いと言うって、これもバッチリだあ、凄いなあゝ為介さあゝん」

手のひらに書いたメモを見つめ、再び感心の声を漏らす保。

「そこから反撃、ええゝつと、“溜めろ”っ」

「えっ…?」

上空を舞う保の両指からまたもや糸が伸びると、糸が上空で重なり合い、先程と同じ皿のような形を作って、地面から噴き上げた熱湯を、重力に逆らうように、上空で溜めていく。その様子に、思わず目を丸くするチラシ。

「それでえ、“倒せ”っ!」

「うっ…!」

保の言葉に応えるように、糸が大きくなり、溜まった熱湯が一気に、チラシへと飛び出していく。

「うわあああああっ…!!」

全身に熱湯を浴び、チラシの叫び声が、紅葉の森内に響き渡った。

「へえっ」

一方、遊園の外では、モニターで保とチラシの戦いを見つめる恵が、どこか感心するように声を漏らした。

「やるじゃないか。よくあのオドオドを、あそこまで戦えるようにしたな、為介」

「あははあゝ、そこまで誉められると照れちゃいますねえゝっ」

「まあ、使う言葉を搾らせた方がいい、と提案したのは僕ですけどね」

「ああ、やっぱ雅か」

「ううう…」

恵の言葉に照れていた為介であったが、冷静に会話を交わす恵と雅に、がっくりと肩を落とす。

「“た”のつく言葉は、僕の“み”なんかよりも、ずっと言葉数が

あります。辞書を読ませても、彼を混乱させるだけだと思ったんですよ」

「いい判断だな。的確に言葉を言ってくるもんだから、相手も高市の力にビビっちまってる」

すらすらと答える雅を、嫌味なく誉める恵。

「五人の内の誰と戦うことになっても、相手は皆、以団。その能力が水系とわかっていれば、使える言葉も搾りやすかったですから」

「ああ。確かに、ここまでは高市の優勢だ」

「……っ？」

恵のその含みある言葉に、雅が少し眉をひそめる。

「ここまでは？」

「ああ」

聞き返す雅に、真剣な表情で頷く恵。

「相手は忌でも成り立ての素人でもない。何度も言葉で戦って来ている、正規の五団メンバーだ」

恵がモニターを見つめ、そっと目を細める。

「搾った言葉で、どこまで通じるかっ…」

「……っ」

先を案じるような恵の言葉に、横に立つ為介も、その表情を曇らせた。

Word. 18 初陣 (4)

「ふうっ」

熱湯を見事にチラシへと弾き返した保が、深く息を吐きながら、上空から地面へとゆっくりと降りてくる。

「うっ…ううっ…」

「あっ…」

自分で生じた熱い水を全身に浴び、体の所々に火傷を負って倒れ込んでいるチラシを見て、保が少しその表情をひそませる。

「いくら地球外生命体が相手でも…やっぱり嫌だなあ…」

保が攻撃したせいで、傷ついた相手の姿を見て、保が顔をしかめる。

「で、でもっ、地球の未来を守るためだしっ…！」

「ハアっ…ハアっ…」

「あっ」

大きく首を横に振り、自分に言い聞かせるように言葉を吐いている保が、傷だらけの体で、息を乱しながら、ゆっくりと立ち上がるチラシに、少し驚くように声を漏らす。

「ハアっ…」

「うっ…」

顔を上げたチラシの、その刺すような視線に、思わず怯む保。

「もう、いいよ…」

「へっ？」

少しかすれたような声で吐きだされたチラシの言葉に、保が目を見丸くする。

「じゃ、じゃあ！地球侵略を諦めてくれるんですねっ…！」

「違うっ…」

目を輝かせる保に、すぐさま否定の言葉を吐くチラシ。

「君との言葉遊びは、もういいって言ったんだっ…」

今まで見せていなかった冷たい表情で、チラシが笑う。

「ねえっ…？ニギリちゃんっ」

「うんっ」

「えっ？」

後方から聞こえてくるもう一つの声に、保が慌てて振り返る。

「あ、あなたはっ…！」

「アハハア…っ」

保が振り向いた先に立っていたのは、何やら楽しげな笑みを浮かべたニギリであった。

「んっ？」

そのニギリが乗っている、巨大な水の像に気づき、保がまじまじとそれを見上げる。

「阿っ！」

「ひいええええっ…っ！」

恐ろしい人相で、重い声を放つ仁王の像に、思わず震え上がる保。

「な、なななななっ…！」

「“変格”まで出したんだねえ、ニギリちゃんっ」

「うんっ、しろしろ素人の奈守ちゃんに、結構苦戦しちゃってっ」

「えっ…？」

仁王を見上げ、声を震わせていた保が、二人の会話を聞いて、ふとその表情を曇らせた。

「じゃ、じゃあ奈々瀬さんはっ…」

「さあ…？どうどうどうなっただろうっ？」

「そ、そんなんっ…」

微笑んだまま大きく首を傾げるニギリに、保の表情が険しいものへと変わる。

「だいたい大丈夫っ、君もすうぐ、奈守ちゃんと同じにしてあげるからっ」

ニギリが冷たく微笑み、仁王の手のひらの上から飛び降りる。

「仁王っ！」

「阿っ！」

「うっ…！」

ニギリが手のひらの上から降りると、仁王はその空いた右手を、勢いよく保へと向けた。大きな体のわりに素早く動く仁王の手に、保があっさりと捕えられてしまう。

「握れ”っ」

「うっ…！うううううっ…！」

仁王の巨大な手に、保の大きな体もすっぽりと収まり、骨が軋むほどに、力一杯握り締められ、保が苦しげな声をあげる。

「うううううっ…！」

「アハハアゝっ」

苦しむ保を見て、楽しげに笑うニギリ。

「うっ…！こ、こんな時のっ…言葉っ…」

全身を締め付ける力に表情を歪ませながら、保が必死に手の開き、中に書いてある文字を見ようとする。

「させないよっ」

「えっ…？」

いつの間にか仁王の手首に立ったチラシが、仁王の手の中の保を見下ろす。

「君にはもう、何一つ言葉なんて言わせないっ」

チラシが火傷を負った右手を、保へと向けると、右手に握られた言玉が青く輝き始めた。

「“注水”っ」

「あっ…」

保の頭上から、滝のように落ちてくる大量の水。

「うううううっ…！」

落ちてきた水が、囲いもないのにその場に留まり、徐々に水位を上げて、保ごと、仁王の手をその水の中へと浸らせる。

「うっ…！うううっ…！」

鼻の高さ程までに上がってくる水位に、何とか息をしようと、必死に体を水の上へと伸ばす保。だが仁王により体の動きは制限され、呼吸もままならなくなる。

「た、“ たっ…！うううっ…！”

呼吸すら遮られ、言葉など放てる状態ではなくなる保。

「ニギリちゃんっ」

「うんっ」

振り向いたチラシに、ニギリが大きく頷く。

「握り締めちゃって”、仁王っ」

「阿っ！」

「うっ…！」

仁王がもう一方の手も添え、保をさらに握り締めた。

「うあああっ…！」

水の中でさえも響く、保の悲鳴。

「あ…ああっ」

仁王の手の中で、力なくうなだれる保。周囲を取り囲んでいた水が辺りへ流れ落ち、仁王が手を離すと、少し水の残った地面に、保が力なく倒れ込んだ。

「うっ…」

保の手が地面へと落ちると、指に絡まっていた赤い糸がそっと光り、もとの言玉の姿へと戻る。保の体力が奪われ、武器の形状を保っていらなくなったのだろう。

「一丁、あがあが上がりだねえ、チラシくんっ」

「うん、これで終わりだ」

仁王の手首から降りたチラシが、倒れている保に、さらに言玉を向けた。

「“ 千切れろ”…」

「うううっ…！」

チラシが言葉を放つと、無数の水の刃が一斉に保へと降り注ぎ、保の体を斬り裂く。

「うああああああつ…!!」

飛沫のように赤い血を流し、保が倒れたまま、激しく叫びあげる。
「うっ…! うう…」

全身を斬り裂かれ、もう一度、地面に背中を打ちつけられる保。

「アハハっ」

「アハハアハっ」

チラシとニギリの笑い声が、重なり合って、周囲に響く。

「……っ」

その笑い声を聞きながら、かすんできた視界で、天井のドームを見上げる保。

「痛、い…」

意識が遠のく中、ただその言葉だけが頭の中に残り、保は力なく、そう呟いた。

「痛い、よ…」

もう一度繰り返しながら、保がそつと瞳を閉じる。

『……………』

じっと観察するように見つめ、保が意識を失ったことを確認する
チラシとニギリ。

「結構あっさりだったね」

「チラシくんと私がそろそろ揃えば、無敵だもおくんっ」

「そうだねっ」

嬉しそうに頷き合いながら、チラシとニギリが互いの手を合わせ
る。

「ボクの名前はチラシ！」

「私の名前はニギリっ！」

誰も見ていないというのに、自己紹介を始める二人。

『こんな二人は、ただの他人っ!』

チラシとニギリが、試験が始まる前に打ち合わせていたポーズを、
ばっちり決める。

「よおし、ポーズも決まったところでえっ」

「言玉取っちゃって、早く次行こつかあゝっ」

.....！

『……っ！』

ウキウキと弾むような会話をしながら、微笑み合っていた二人が、ふとその場に流れ込む、何か不穏な空気を感じ取り、すぐさま浮かべていた笑みを止める。

「な、なにになに何っ…？」

戸惑うように、周囲を見回すニギリ。どこからともなく発生した靄^{もや}が、色鮮やかな紅葉の森全体を覆うように広がり、辺りの景色を霞ませていく。

「こ、これはっ…」

「ハハハ…」

「……っ！」

ニギリと同じように周囲を見回していたチラシが、どこからともなく聞こえてくるその笑い声に、勢いよく振り向く。

「だ、誰だっ…！？」

叫ぶチラシにつられるように、ニギリもそちらを振り向いた。

「……っ」

『あっ…！』

靄の中に佇む人影に、チラシとニギリが大きく目を見開く。

「ハハハっ…」

そこに立っていたのは、黒い髪に、不気味に光る赤い瞳の、一人の青年であった。

「あれはっ…！」

モニターを見つめ、大きく目を見開く雅。

「波城っ…」

同じくモニターを見つめながら、恵が険しい表情を見せる。

「波城灰示…」

「ハハハっ…」

どこか楽しそうに微笑みながら、灰示が、血の流れ落ちる両手を、ゆっくりと左右に広げる。

「さあ、君にも贈ろう…」

その冷たい視線を、前方のチラシとニギリへ向ける灰示。

「この、“痛み”をっ…」

Word 19 灰示、再び (1)

午後二時四十五分（神試験スタートから二時間二十五分）。

言ノ葉の森遊園内、原始の森地点。

「^{うん}咩っ！」

「おう、ご苦労さまっ」

イクラと金八の待機している原始の森には、ニギリの仁王の片割れ像が、大きな足を使つたため、あつという間に辿り着いていた。仁王が金八へと、ニギリから預かつて来た七架の言玉を手渡す。

「ニギリんところ、戻っていいぞお」

「咩っ！」

金八の言葉に頷くと、仁王は再び、戦いの場となっている遊園の中央へと、大きな足で歩きだしていった。

「ふいっっ」

金八が七架の言玉を軽く投げては捕る動作を繰り返しながら、イクラの待つ森の奥へと進む。

「神いっ、ニギリが奈守の言玉、奪ってきたぜえ？」

「……………」

「無視っ!？」

言玉を強調するように前へと出し、得意げに笑う金八であったが、まるで何も言わないイクラに、激しく驚いた表情を見せる。

「無視とか泣いちゃうよお!？俺、泣いちゃうよお!？神いっっ！」

「この気配…」

「へっ？」

ゆっくりと口を開くイクラに、泣きそうになっていた金八が目を丸くする。

「気配？」

「この…禍々しい気配は…」

金八が首を傾げ、周囲を見回す中、眉をひそめたイクラが、ゆつくりと天井のドームを見上げる。

「“忌”^{いみ}」…」

言ノ葉の森遊園内地下、熱帯の森地点。

「ダメだあああっ！！」

灼熱のジャングルに響き渡る、こちらにも負けじと暑苦しい大きな声。ジャングルの中心で叫びあげているのは、この神試験の受験者であり、安団を率いているはずのアヒルであった。

「いっくら歩いても、このジャングル抜けやしねえ！このままじゃ干からびちまうよっ！」

ニギリから渡された、言玉を入れる用のプレートを持ったまま、両手で頭を抱え、心底困った様子で叫ぶアヒル。すでに試験開始から二時間半あまり。試験開始直後にここへと落ちたアヒルは、試験の間中、灼熱のジャングルを歩き回っており、何もしていないのに体力は限界に近付いてきていた。

「ああ〜どうしたらっ…！って、あっ」

頭を抱えたまま、大きく首を後ろへ反らしたアヒルが、無機質な白色の天井を見上げ、ふと何か思いついたような顔つきとなる。

「俺って、穴から落ちてここに来たんだよなあ。っつーことはっ…」
プレートを持っていない方の手を下ろし、アヒルがポケットから赤い言玉を取り出す。

「とりあえず上に上がれば、皆のここに行けるかもっ」
暑さで参っていた瞳を輝かせ、アヒルが強く言玉を握る。

「第一の音、“あ”、解放っ…！」

赤く強い光を放って、言玉がその姿を銃へと変える。

「よしっ！」

姿を変えたばかりの赤銅色の銃を、天井へ向けて構えるアヒル。

「あ…」

アヒルが大きく口を開く。

「“^あ当たれ”っ…！」

アヒルの言葉とともに、真っ赤な光の銃弾が、天井へ向けて放たれた。

その頃、遊園内地上、紅葉の森地点。

「確かこちらの方から、衝撃音が…」

囁と七架を雪国の森に残し、一人、保のもとへと向かっていた簞也は、遠くから響いてくる戦いの音らしきものを頼りに、紅葉の森まで辿り着いていた。

「あのバカが戦っているのか…どちらにせよ、急がないとっ…んっ？」

保の身を案じ、表情を曇らせていた簞也が、ふと何かに気づいたように、足を止める。

「何だ？遠くの方から変な音が…」

——バアアアアンっ！

「うわああっ！」

簞也が周囲を見回し、音の原因を探ろうとしていたその時、簞也のすぐ目の前の地面が、大きな音を立て、爆発でもしたかのように勢いよく吹き飛び、地面に散っていた紅葉が宙を舞った。

「な、何だ…？」

恐る恐る歩み寄り、簞也が地面にあいた大きな穴を覗き込む。

「一体、何っ…」

「“^あ上がれ”ええっ！」

「へっ？」

穴の遥か下方から聞こえてくる、その聞き覚えのある大きな声。

「なっ…！」

下から勢いよく上昇してくる人影に、覗き込んでいた箆也が焦ったように声をあげる。

「ちょ、ちょっと待っ…！」

「よおーしっ！ いっけえっ！」

「うっ…！ どわああああっ！」

「へっ？ おわあああああっ！」

穴から地上へと飛び出してきたアヒルが、覗き込んでいた状態から避けようとするも、後少しのところで間に合わなかった箆也と、勢いよく衝突する。

「ぐっ…うう…」

「痛つつつつっ…」

地面に座り込んだまま、ぶつけた頭を押さえるアヒルと、同じくぶつけた腹を抱え込む箆也。

「よ、よう、箆也。 ひ、久しぶりっ…」

「ろ、ろくなことをしないな…あなたは…」

頭を押さえながら顔を上げ、軽く笑みを零すアヒルを、箆也が強く睨みつける。

「って、箆也が居るってことは、ここ、地上かあ？」

「当たり前だろう？ 僕があなたのように愚かに、落とし穴に嵌^{はま}るはずがない」

「よっしゃあ！ 地下ジャングル、脱出成功だあ！」

「ジャングル？」

箆也の冷たい言葉に傷つくこともなく、大きく両手を伸ばし、喜びの声をあげるアヒル。 そんなアヒルを見ながら、箆也が怪訝そうに首を傾げる。

「つつーか、お前一人か？ みんなは？」

「えっ…？」

目を丸くして問いかけるアヒルに、箆也が少し戸惑ったような声を漏らす。

「攻撃を受けて、分断されたんだ。僕は今、高市のところに向かっている」

「そうだったのかあ」

「……っ」

どこか暢気に頷くアヒルを見て、そつと眉をひそめる箆也。

「神、地下のジャングルで、放送は聞こえていたのか？」

「放送っ？ いやあ？ 何も聞こえなかったけど？」

「そうか…」

どこか納得したように頷く箆也。すでに放送では、箆也と囁が一度、言玉を取られたことや、七架の言玉が取られてしまったことが流れている。それを聞いていれば、アヒルが平然と、皆はどうしたなどと聞くはずもない。

「では状況は何も把握していないということだな。はあっ…」

「状況っ？」

深々と溜息を吐く箆也に、アヒルが大きく首を傾げる。

「何だよ？ 何かあったのか？」

「あったもあった。大ありだ」

問いかけるアヒルに、箆也が少しうんざりしたように答える。

「以団五人の内、すでに三人は動いている。僕や囁もだが、奈々瀬と恐らくは高市も、もう相手と戦闘を始めた」

「戦闘ってっ…」

箆也の言葉に、アヒルの表情が曇る。

「そして奈々瀬は、以団の一人“仁守”に敗れ、言玉を奪われた」

「えっ…？」

どこか早口で言い放つ箆也に、アヒルが顔色を変える。

「奈々瀬は！？ 奈々瀬は無事なのかっ！？」

「えっ？ あ、ああっ」

身を乗り出して、勢いよく問いかけてくるアヒルに、箆也が少し戸惑いながら頷く。

「多少の傷は負ったが、僕が治した。今は囁が看ている」

「そっかあゝ良かったあっ」

「……っ」

安心したように胸を撫で下ろすアヒルに、箆也がそっと目を細める。

「どこがいいんだ。今のところ、言玉の数はゼロ対一。僕たちが負けているんだぞ？」

「たったの一個だろ？ 後四つも残ってんだし、問題ねえって」

「気楽な考え方が出来て、羨ましい限りだな」

アヒルが笑顔で言い放つと、箆也は呆れるように肩を落とした。

「じゃあとつとと保んどこ、行こうぜ。場所はわかってんのか？」

「ああ。さっきこの森の辺りから衝撃音がしていたから、恐らくはこの近くに……んっ？」

周囲を見回しながら、アヒルの問いかけに答えていた箆也が、ふとその表情を曇らせる。

「どうした？」

「気付かないか？ この気配……」

「へっ？ 気配？」

箆也の言葉を受け、アヒルが言葉を止め、集中して、感覚を研ぎ澄ませる。

「あっ……」

ハッとしたように、目を見開くアヒル。

「これ、って……」

「ああ……」

険しい表情を見せるアヒルに、大きく頷きかける箆也。

「忌だ」

「忌っ……」

その単語に表情を曇らせ、アヒルが気配を感じる方角を見つめる。

「けど、この感じっ……忌とはちよつと違うような……」

さらに感覚を研ぎ澄ませながら、気配を探るアヒル。

「それに、前にどっかで……あっ……！」

考え込んでいたアヒルが、何か思いついたように、不意に大きな声を出す。

「まさか…保っ…」

「ハハハハっ…」

『……っ』

手や足から血を流しながらも、どこか楽しげに天井を見上げ、笑みを浮かべる灰示の姿を見つめ、眉をひそめるチラシとニギリ。

「誰なの？ あいつっ…」

「わからない。わからないけど…」

「けど？」

言葉を付け加えるチラシに、ニギリが首を傾げる。

「あいつの格好、それに傷っ…あれは間違いなく、あの太守と同じものだ…」

灰示の纏っているものは、保が着ていたものと同じ制服。それに灰示の全身の傷は、先程、チラシとニギリの攻撃により、保が受けたものに他ならなかった。

「けど、あの太守ちゃんとは、まるで別人にしかみえみえ見えないわっ…それにこの気配っ…」

「うんっ…」

ニギリの言葉に、チラシが表情を曇らせながら頷く。

「この気配は、忌っ…」

「ハハハっ…」

忌の気配を放つ目の前の人間に、チラシとニギリが険しい表情を作る。

「君っ…！」

「……っ」

大きく呼びかけるチラシに、灰示が笑みを止め、天井を見上げて

いた顔をゆっくりと下ろし、チラシの方を見る。

「君は一体、何者なんだっ…!?!」

「何者っ…?」

灰示が、チラシの問いかけをそつと繰り返す。

「くだらない問いかけだね。とても答える気になれないな」

「何っ…!?!」

「僕が何者かなんて、どうでもいいよ」

『あっ…!』

そう言いながら、灰示が少し膝を折り、地面に転がっていた赤い言玉を拾い上げる。

「あれはっ…!」

「太守ちんの言玉っ…!?!」

力尽きた保が手から零れ落とした言玉を、灰示がそつと握り締める。

「君たちは、“痛み”を与えた…」

「痛、み…?」

灰示の言葉に、チラシが少し眉をひそめる。

「僕が君たちにも“痛み”を与えてあげるから、その罪を知るといいよ…」

『うっ…!』

「……っ」

灰示の放つ冷たい空気に、まるで突き刺されたかのような感覚を覚え、表情を引きつるチラシとニギリ。そんな二人の様子を見て、灰示が満足げに笑う。

「五十音、第二十六の音…」

灰示の右手の中の言玉が、赤く輝き始める。

「“は”、解放っ」

『なっ…!』

さらに輝きを強めた言玉が、その姿を数本の赤銅色の細長い針へと変える。その針を、灰示は慣れた手つきで回し、両手に指の間へ

と素早く構えた。

「“は”っ!？ “は”だって!？」

「“波守”っ!？ 何で後半音の“波守”が、こんな所につ!？」

針を身構える灰示を見て、チラシたちがさらに驚きの声をあげる。

「これは安団と以団のみが参加する神試験よっ!？」

「そうだ! 波守が出てくるなんて、ルール違反でっ!！」

「うるさいな!」

必死に訴える二人の声を、灰示があっさりと遮る。

「君たちは、喚く必要なんてないんだよ!」

灰示がゆつくりと、針を構えた両手を上げ、首の前で交差させる。

「君たちはただ、この“痛み”を受け入れればいいっ!」

そっと口端を吊り上げ、灰示が両手の針を投げ放つ。

「“倍せ”!」

『うっ!』

灰示の放った針が、灰示の言葉を受け、チラシとニギリへと向かっていくその空中で、徐々にその数を倍へと増やし、二人が逃げる隙もないほどに広がっていく。

「に、ニギリちゃんっ!！」

「“逃げる”っ!！」

「阿っ!」

チラシに名を呼ばれ、ニギリが言葉を放つと、二人の後ろにいた仁王がその巨大な手で二人を持ち上げ、針の嵐の中から救い出す。

「ハアっ! ハアっ! チラシくん、いまいま今の言葉って!」

「うん! “変格”と同等に難しいとされる、“濁音”の言葉だ!」

「五団メンバーでもない波守が、濁音をつかつか使えるなんてっ!」

「ハハハっ!」

微笑みながら、新たな針を構える灰示を見て、チラシとニギリが表情を曇らせる。

「とにかく、あいつが何者かとか、そういうこと考えてる場合じゃなさそうだね」

「うん。とつととあいつをげきげき撃退しちゃおっ」

そう言葉を交わすと、二人が仁王のそれぞれの手のひらの上で、素早く言玉を構えた。

「散れ^ち」っ！」

チラシが仁王の手の上から飛び降りながら、言玉を持つ手を振り上げると、チラシの周囲に無数の水の玉が発生し、一斉に灰示へ向けて飛んでいく。

「……………」

その場に立ち尽くしたまま、静かに向かってくる水泡を見つめる灰示。

「外^{はず}れろ」…」

「何っ…!？」

灰示がそつと言葉を呟くと、無数の水泡が一個として残ることなく、灰示の体を見事に避けていく。その光景に、大きく目を見開くチラシ。

「も、もう一度っ…!」

「……………」

再び言玉を構えようとしたチラシへ、灰示が一本の針を投げ放つ。

「一本くらい、すぐに避けっ…!」

「破^{はれ}裂”…」

「なっ…!」

灰示が囁くその言葉に、チラシが焦りの表情を浮かべる。

「うわああああああっ!」

チラシへと向かっていた一本の針が、チラシの目の前で赤い光を放って破裂し、無数の細かい針となって、一斉にチラシへと襲いかかった。

「うあっ…!」

全身に針を浴び、体中から血を流しながら、倒れ込むチラシ。

「チラシくんっ…!」

倒れたチラシを見て、ニギリが仁王の手の上で思わず身を乗り出

す。

「熟語イデオムまで簡単につ…」

少しだけ灰示の方を振り向いたニギリが、その額から汗を流す。

「う、ううっ…」

「少しは“痛み”を理解したかい…？」

苦しむチラシを見下ろし、そっと問いかける灰示。チラシへと問いかけた灰示がゆっくりと視線を動かし、今度は仁王の手の上に立つニギリの方を見上げる。

「次に“痛み”が欲しいのは、君かな…？」

「クっ…！」

嘲るように微笑む灰示に、ニギリの表情が歪む。

Word 19 灰示、再び (2)

「こっのっ…！仁王っ…！」

「阿っ！」

ニギリが大きく叫ぶと、仁王がそれに答えるように返事をし、灰示へ向けてニギリの乗っていない方の手を、勢いよく振り上げる。

「握^{にぎ}れ”っ！」

「阿っ！」

振り下ろされた仁王の巨大な手が、長身の灰示の体をあっさりと掴みあげる。だが、仁王の手に捕らえられたというのに、灰示は顔色一つ変えなかった。

「アハハっ！これで、おわおわ終わりよお！」

高々と灰示を見下ろし、笑いあげるニギリ。

「握^{にぎ}り締めちゃえ”！仁王！」

「阿！」

ニギリがそう言い放つと、仁王が灰示を握る手に、さらに力を込めようとした。

「…：“払^{はら}え”」

落ち着いた表情のままの灰示が、ニギリにも聞こえないほどにそつと、言葉を落とす。

「阿あああっ！？」

「えっ…？」

灰示を握り締めようとした仁王の手が、突然、滑ったかのように振り払われ、その勢いで仁王がバランスを崩し、巨大な体を傾かせていく。

「きゃあああ！」

地面へと倒れ込んでいく仁王に巻き込まれ、地面へと落下していくニギリ。

「二、ギリちゃんっ…！」

ニギリの悲鳴を聞き、先程倒れたチラシが、ゆっくりと起き上がる。

「クソっ…！」

まだ針の刺さった腕を振り上げ、言玉を持った右手を地面へと叩きつけるチラシ。

「“地熱”っ…！」

「……っ」

周囲から噴き上げる熱湯にも、その表情は変えず、灰示は冷静に周囲を見回す。

「“弾け”…」

「えっ？」

灰示が噴き上がった熱湯へ向け、両手に構えていた針を投げると、その水の塊が、灰示の言葉に従い、チラシの方へと一斉に飛び出していく。

「うううっ…！うわああああっ！」

自らの技を喰らい、チラシが激しい叫び声をあげて倒れていく。

「もっと、“痛み”が欲しいかい…？」

「グっ…」

そっと微笑んで問いかける灰示に、倒れ込んだチラシが顔を歪める。

「なら…」

「咩！」

「ん…？」

倒れたままのチラシへ向け、さらに針を構えようとした灰示であったが、その灰示の背後から突如、仁王像がもう一体現れた。言玉を届けに行っていた方の像が、戻って来たようである。

「もう一体…？」

「“躡れ”！仁王！」

「咩っ！」

「……っ」

眉をひそめた灰示へと、勢いよくその巨大な足を振り下ろす仁王。迫り来る足に、言葉を放つ時間もなく、灰示が後方へと飛んで、力を使わずに仁王の足を避ける。

「アハハ！二体になれば、こっちのもんもんだわあ！仁王！」

「阿！」

「咩！」

仁王の片割れの肩の上に乗り、高々と笑いあげるニギリに、声を揃えて返事をする二体となった仁王。二体の仁王が灰示の前後にそれぞれ立ち塞がり、灰示を挟み込む。

「^{にじ}躪り潰すのよ”っ！仁王！」

「阿っ！」

「咩っ！」

ニギリの言葉に応え、同時にその巨大な足を振り上げる二体の仁王。前後から向かってくる足に他に逃げ場もなく、灰示が横へと飛んで避ける。

「もっとよ！もっと“^{にじ}躪れ”っ！仁王！」

「阿っ！」

「クっ…！」

横へと避けた灰示に、その動きを始めから読んでいたかのように、すぐに上空から右手を振り下ろす仁王。森の木を背後に、二体の仁王に追い込まれ、逃げ場もなく、その表情を初めて歪める。

「阿あああ！」

「うううっ…！」

勢いよく振り下ろされた仁王の手に弾き飛ばされ、灰示が背中を森の木の幹へと勢いよく打ちつける。

「ううっ…！」

「アハハハっ…！」

力なくその場にしゃがみ込む灰示を見て、仁王の肩の上のニギリが、楽しげな笑い声を響かせる。

「“変格”も持たないハ行ごときが調子に、のるのる乗るから、こ

ういう目に遭うのよお！アハハハっ！」

さらに高い声を、森全体へと響かせるニギリ。

「アハハっ！アハハハっ…！」

「痛い…」

「ハっ…？」

ひたすら笑い声を繰り返していたニギリが、そっと呟かれたその言葉を聞き逃さずに、素早く笑い声を止めた。

「“痛い”、な…」

「……っ！」

額から流れる血を手で拭いながら顔を上げた灰示は、その言葉とは裏腹に、どこか楽しげな微笑みを浮かべていた。その妖艶な光景に、ニギリが思わず表情を歪める。

「な、何よっ…！」

追い込んだはずだというのに感じる恐怖に、ニギリが声を荒げる。

「“痛い”ならっ…！もっと、くるくる苦しそうな顔しなさいよっ…！」

どこか必死に、灰示へと叫びあげるニギリ。

「そうだね…」

額の血を拭い終えた手を払い、ニギリの言葉に頷きながら、灰示がその場にゆっくりと立ち上がる。

「じゃあ、君が見せてよ…」

立ち上がった灰示が顔を上げ、再びニギリを見つめる。

「“痛み”に苦しむ、その顔を…」

「クっ…！」

挑発めいた灰示の言葉に、ニギリがさらに表情を歪める。

「憎たらしいっ…！仁王っ！」

「阿っ！」

「咩っ！」

「“握り潰すのよ”っ！あいつをっ…！」

感情を高ぶらせ、声が枯れてしまいそうなほど大きな声で、強く

叫ぶニギリ。

「阿あ!？」

「う吽っ!？」

「えっ…?」

だが、ニギリの言葉に乗り、灰示へと振り下ろされようとした二体の仁王の手は、灰示に届く手前の遙か上空で、突然、その動きを止めてしまった。戸惑うような声を漏らす仁王たちに、ニギリもその表情を曇らせる。

「な、なにになに何っ?なんで、仁王の動きがっ…」

“張^はりつけろ”…」

「なっ…!」

灰示の言葉とともに、仁王の周囲を目まぐるしく取り囲む、無数の赤い線のようなものが姿を現わす。

「こ、これはっ…!」

「さっきの太守の、糸っ…?」

ニギリが驚きの表情で周囲を見回す中、倒れ込んだままのチラシが、すぐ近くのその赤い線を見つめ、そっと呟く。それは確かに、先程の戦いで保が張り巡らせていた、あの赤い糸であった。その赤い糸の先に、灰示の針が取り付けられており、森の木のとすところ突き刺さって、何本もの糸を張らせ、仁王の動きを封じてしまっている。

「どうして…?」

周囲に、まるで蜘蛛の巣のように張り巡らされた赤い糸を見つめながら、ニギリが険しい表情を作る。

「どうして君が…! 太守ちゃんの糸をっ…!」

「残念。それもくだらない問いかけだな…」

「えっ…?」

「…っ」

灰示の言葉にニギリが眉をひそめる中、灰示がそっと構えた赤い針を一本ずつ、音も立てずに静かに仁王へと投げ放つ。放たれた針

は、仁王の水の体の、その中へと入り込んだ。

「なにになに何をつ…!?!」

「爆ぜろ」

ニギリが戸惑うように声を漏らした直後、灰示が言葉を呟いた。

「阿あああああっ!」

「うううううう吽!!」

「…っ!」

体内に投げ込まれた針が、勢いよく爆発すると、二体の仁王は細かい水の粒となって弾け飛び、叫び声をあげながら、爆発した腹部を中心に、まるで滝のように一気に崩れ落ちた。

「なっ…」

崩れ落ちていく巨大な水の像を見つめながら、ニギリが信じられないものでも見ているかのように、大きく目を見開く。

「ふう…」

やがて仁王は見る影も失くし、代わりに空中から落ちてきた、ニギリの青い言玉を、灰示が左手でそっと受け止める。

「そんなっ…私の仁王が、私の“変格”がっ…」

先程まで仁王が立っていた、今はもう何もない景色を見渡し、啞然とした表情を見せるニギリ。

「たった、一言でっ…?」

あまりのことに思考がついていかないのか、肩を震わせ、口の前で両手を握り締めたニギリが、そのか細い声も震わせる。

「そんなことっ…!」

「少しは“痛み”を理解したかい…?」

「うっ…!」

聞こえてくるその問いかけに、表情が強張らせたニギリが、素早く顔を上げる。ニギリが見つめる先には、ニギリへと針を構えた灰示が立っていた。

「じゃあ、サヨウナラ…」

「ううっ…!」

冷たく微笑む灰示に、さらに震え上がるニギリ。

「嫌っ…いやいや嫌！助けてっ…神っ…神っ…！！」

「いいことを教えてあげるよ…」

助けを求め、必死に叫ぶニギリに、灰示がどこか優しい口調で話しかける。

「神様は、人を救ったりなんかしない…」

冷たい言葉とともにニギリに放たれる、一本の針。

「人は“痛み”を知ってのみ、救われる…“倍^{ばい}せ”」

「……っ！」

空中で倍、倍へとその数を増やし、無数となった針が、逃げる隙間すらも与えず、ニギリへと襲いかかり、ニギリが大きくその表情を歪めた。

「きゃああああああっ！」

無数の針に全身を突き刺され、ニギリが力なく後方へと倒れ込んでいく。

「あ…ああっ…う…」

地面へと倒れ込んだニギリは、そのままゆっくりと大きな瞳を閉じ、気を失った。

「この野郎っ…！」

「んっ…？」

倒れたニギリを見ていた灰示が、違う方向から聞こえてくる声に振り向く。

「よくもっ…！よくもニギリちゃんを…！」

その表情に怒りを見せたチラシが、すでに傷だらけの体を立ち上がらせ、右手の言玉を灰示へと向ける。

「“千切^{ちぎ}れろ”っ！」

チラシの言玉が輝くと、灰示の上空に無数の水の刃が生じた。その刃を見上げ、灰示がそっと目を細める。

「……………」

「なっ…！」

降り落ちる水の刃にも、動こうともせず、落ち着いた顔つきのまま、その場に立ち尽くす灰示に、チラシが驚きの表情を見せる。

「まさか…避けない気かつ…!？」

「ハハハっ…」

「……っ！」

避けないどころか、両手を大きく広げ、まるで迎えるように、灰示は水の刃を喰らった。

——バアアアアン！

「うっ…！」

水の刃が地面に降り注いだその衝撃風に吹かれ、傷だらけの体を少し傾かせるチラシ。軽く目を細めながら、水飛沫を向こうに霞む景色を見つめる。

「直撃、した…？」

チラシが喜ぶというよりは、どこか意外そうに呟く。

「何でだ…？急に頭でもおかしくなっ…」

「ハハハ…」

「……っ！」

豪雨のように降り注ぐ水飛沫の向こうから聞こえてくる笑い声に、チラシの表情が止まる。

「ハハハっ…」

「なっ…！」

水飛沫の向こうに立っているのは、全身を水の刃に斬り裂かれ、先程よりもさらに激しく、手や足、全身から赤い血を流している灰示であった。水も大量に流れているが、灰示が流すその血の量も、半端ではない。見ている方が、気を失ってしまいそうであった。

「ハハハっ…」

流れ落ちる血を見ながら、どこか楽しげに微笑んでいる灰示。

「あ…」

そんな灰示に、チラシは思わず言葉を失くす。

「痛覚が…ない、のか…？」

「ん…？」

思わず呟いたチラシの声に気づいたのか、灰示が血を流しながら、ゆっくりとチラシの方を振り向いた。

「面白い問いかけだね…気に入ったから答えてあげるよ…」

「えっ…？」

一層微笑む灰示に、チラシが戸惑いの声を漏らす。

「痛覚なら、勿論あるよ…今も、とても“痛い”…」

空いている右手で、そっと左手の傷を撫でる灰示。

「この“痛み”が、僕を僕で在^あらせてくれる…」

「痛みが…僕を…？」

灰示の言葉を繰り返し、チラシが困惑するように首を傾げる。

「そして、この“痛み”が…君に“痛み”を教える為の、力をくれる…」

「うっ…！」

血だらけの手で針を構える灰示に、チラシが怯えた表情を見せる。どんな痛みにも動じぬ灰示には、チラシももう攻撃する気力が残っていないかった。

「“爆^はぜろ”…」

「ううっ…！」

逃げる力すらもないチラシへ、一本の針が投げ込まれる。

「うがあああああっ!!」

目の前で爆発した針の爆風に弾き飛ばされ、チラシは背後の木へと背中を打ちつけると、その木の幹にもたれかかったまま、その場に力なく座り込んだ。

「う、うう…」

もう虫の息であるチラシのもとへ、灰示がゆっくりとした足取りで進んでいく。

「少しは“痛み”を理解したかい…？」

「う…うう、う…」

問いかけながら歩み寄ってくる灰示を、“来るな”とでも言うかのように何度も大きく首を振りながら、声にならない声を漏らすチラシ。

「じゃあ、サヨウナラ…」

「ううっ…！」

再び針を構える灰示に、チラシの表情が恐怖の色へと染まる。

『ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！』

その時、二人の居るその場へと、アヒルと箆也が息を切らせながら、駆けつけてきた。

「あっ…！」

追い込まれたチラシと、針を構えている灰示を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「や、やめろっ…！」

灰示へ向け身を乗り出し、必死に叫びあげるアヒル。

「殺すなっ！灰示っ…！！！」

「…っ…っ」

「ひいっ…！」

だが、アヒルの声も届かず、灰示は躊躇うことなく針を投げつけ、チラシの表情が勢いよく歪んだ。

———パァァン！

Word 19 灰示、再ビ (3)

次の瞬間、静かな森に響き渡ったのは、一つの金属音であった。

「ふう…」

灰示が息をつきながら、投げた針でチラシの右手から弾き飛ばし、空中へと舞い上がらせたチラシの青い言玉をそっと受け止める。

「あ…あ…」

命を奪われることのなかったチラシは、針は当たらずとも、恐怖心が限界を超え、意識を保っていられなくなってしまったのか、力なく瞳を閉じ、そのまま気を失った。

「殺しはしないよ」

気を失ったチラシを見下ろし、灰示がそっと呟く。

「殺したら、この“痛み”を忘れてしまうからね…」

そう言って灰示は、小さな笑みを零した。

「灰示っ…！」

「……？」

背後から聞こえてくる自分の名を呼ぶ声に、灰示がゆっくりと振り返る。木々の間をくぐり抜け、灰示のもとへと駆けてくるのは、アヒルと籠也であった。

「やあ、安の神様」

アヒルの方を見た灰示が、軽く笑みを浮かべる。

「久し振りだね」

「おう、久し振り！って、暢気に挨拶してる場合じゃねえーしっ！」
手をあげて、笑顔で挨拶をした後、自らの行為に突っ込みを入れるアヒル。

「っつーか、なんでお前、保の中から出っ…」

「五十音、第六音“か”…」

「へっ？」

灰示に話しかけようとしたアヒルが、すぐ横から聞こえてくる、

何やら不穏な言葉に気づき、振り向く。

「解放」

アヒルが振り向くと、そこには、言玉から姿を変えた格子を構え、鋭い表情を灰示へと向ける簞也の姿があった。

「か、簞也っ…?」

「下がっている、神。こいつは僕が仕留める」

「待て待て待て待てっ」

迷いなく言い放つ簞也の前へと出て、必死に制止の言葉を繰り返すアヒル。

「仕留めてどうすんだよ!こいつは保なんだぞ!」

「だが今は波城灰示だ。韻の封印が解けている以上、こいつを野放しにしておくわけにはいかない」

「あのなあ…!」

「ハハハっ…」

『……っ』

言い争っていたアヒルと簞也が、不意に笑い声を漏らす灰示に、同時に振り向く。

「何がおかしい?」

「いや…君程度の人間に、僕が仕留められるかなって思っただけ」

「何だどっ…?」

「おいおいっ、やめろって」

灰示の挑発に、険しい表情を見せる簞也。不穏な空気となる二人の間に割って入り、アヒルが何とか止めようとする。

「今はんなことより、神試験だろうがっ」

「こんな奴にうろちよろされては、神試験にも集中出来ない。あなたもそう言っていただろう?」

「いや、ま、まあそうだけだよおっ」

強く主張する簞也に、思わず口ごもるアヒル。確かに保が太守と知った時から、試験の最中に灰示が出て来ることを、アヒルも不安に思っていたのである。

「けど、こいつはっ…！」

「心配、ないよっ…」

「へっ？」

籠也を説得しようとしたアヒルが、後ろから聞こえてくる灰示の、どこか細い声に、戸惑うように振り向く。

「灰示？」

「もう、時間みたいだ…」

「えっ…？」

冷笑ではない、穏やかな笑みを浮かべ、胸に手を当てて、そっと呟く灰示のその言葉の意味が理解出来ず、アヒルが大きく首を傾ける。

「うううっ…」

「灰示っ…！？」

急にその場にしゃがみ込む灰示に、アヒルが慌てて駆け寄る。

「灰示…！」

「ハア…ハア…」

しゃがみ込んだ灰示は乱れた呼吸で、大きく肩を揺らしており、額からは汗を流し、その顔色もどこか青白く、調子が悪いように見えた。

「灰示、お前っ…」

「忌々しいものだね…この韻の封印も…」

そっと目を細め見つめるアヒルに、灰示が安定しない呼吸の中、言葉を呟き、そっと笑みを浮かべる。

「安の神、これ…」

「へっ？」

そう言って灰示がアヒルへと差し出したのは、二個の青い言玉、灰示がチラシとニギリから奪った言玉であった。

「あげるよ…僕には別に必要のないものだからね…」

「言玉…」

灰示から受け取った二個の言玉を、アヒルがまじまじと見つめる。

「神試験だったっけ？精々、頑張るといいよ…」

「お前っ…」

「勘違いはしないでね。これは単なる“貸し”だよ」

何かを言いかけたアヒルの言葉を遮るように、灰示が間を置くことなく言い放つ。

「僕は必ず、“痛み”のない世界をつくってみせる…」

灰示がまっすぐな瞳を、アヒルへと向ける。

「君の“救い”なんて、認めない」

「……ああっ」

「……っ」

大きく頷くアヒルを見て、どこか満足げに微笑むと、灰示はそつと瞳を閉じ、その場に力なく倒れ込んだ。

「う、ううっ…」

「あっ」

「こ、来いっ…地球外、生命たあゝいっ…」

灰示が倒れ込んだその瞬間、そこに灰示の姿はなくなり、代わりに何やらあれこれと寝言を放っている保が姿を現わした。

「保に戻った」

「よくわからない仕組みだな」

アヒルの後ろから保を見下ろしながら、少し肩を落とした籠也が、構えていた格子を言玉へと戻し、戦闘態勢を解く。

「籠也、保の傷を」

「ああ」

そう言うと、保の傍に駆け寄っていたアヒルが、その位置を籠也と交代する。保のすぐ横にしゃがみ込んだ籠也は、格子から戻ったばかりの言玉を、保へと向けた。

「“回復かいふくしろ”…」

言玉から放たれた赤い光が保の体を包んでいき、徐々にその傷を塞いでいく。

「それにしても…」

回復を続けながら、箆也が少し視線を動かし、近くで倒れているチラシとニギリ、それぞれの姿を確認する。

「五団メンバー二人を、一気に圧倒するとは…」

まだ五十音士になったばかりとはいえ、七架があればどこまで苦戦したニギリと、そして恐らくはニギリと同じ程度の力を持っていたであろうチラシの二人を同時に相手し、灰示はそれを圧倒した。

「恐ろしい男だな…」

その力を目の当たりにし、思わず呟く箆也。

「本当にあの男に勝ったのか…？我が神は」

「んんっ？これ、どれをどこに入れるんだあ？」

箆也の見つめる先には、プレートのどこに言玉を入れるかで頭を悩ませている、アヒルの姿があった。

一方、遊園外。モニター前。

「へえっ」

戦いの一部始終をモニター越しに見終えた恵が、軽く腕を組み、少し驚いたような声を漏らした。

「意外と丸い奴じゃないか、波城灰示っ」

そう言っ、恵が小さく笑みを零す。

「話に聞いた時は、もつとヤバイ奴かと思ってたが」

「忌発生やハ行との戦いの時のことを考えると、間違っても、親切に言玉を渡すような人には思えませんでしたけどね」

「ただの気まぐれじゃなあっいいっ？」

的確に答える雅の横で、雅とは真逆に、適当な言葉を放ちながら、扇子を扇いでいる為介。

「高市の勝算の中に、波城の出現を含めていたのか？為介」

「さあ？どうでしょうっ？」

「まったく…」

誤魔化すように答える為介に、恵はそれ以上の追及はせず、ただ呆れた様子で肩を落とした。

「まあ、確かに彼の行動は、予想外なものが多かったですけどねえ」
為介がそつと目を細め、モニターに映る、まだ気を失っている状態の保を見つめる。

「余程、入れ込んでる高市クンのいる安団に勝たせたかったのか……」
「あるいは、高市保に居場所を与えた、安の神へのお礼の気持ちだったのかも知れませんかねえ」

『……っ』

背後から響いてくる声に、恵や為介たちが同時に振り向く。

「こ、言姫様ことひめっ……！」

驚いたように名を呼ぶ雅。黒い着物を纏った従者を数名引き連れ、その場へと現れたのは、今日も艶やかな着物姿に、品の良い笑みを浮かべた、五十音の世界の言姫、和音であった。

「和音っ……」

「そうは考えられませんか？恵さん」

「……っ」

同意を求めるように問いかけてくる和音に、恵がそつと眉をひそめる。

「お前のその、無理やり美談に持っていく感じが好きじゃない」

「よく言われますわ」

はつきりと言い放つ恵に動じることなく、和音は穏やかな笑みを浮かべる。

「なあ、うんでまた、言姫サマがただの神試験なんかにい？」

「……？」

為介に問いかけられ、恵の方を見ていた和音が、ふと振り向く。

「韻の仕事で波城灰示の監視か？なら、もう出終わったぞ」

「いいえ、今日は韻の仕事ではなく、個人的にこの神試験の見学に参りましたの」

「言姫様が、個人的にっ……？」

笑顔で答える和音に、恵や雅がその表情を曇らせる。

「彼が、どうしても神試験を見たいと仰るので、その付き添いで」

「彼？」

「ええ」

和音の言葉に、首を傾げる恵。

「ねえ？」

『……っ？』

後方を振り向く和音につられるようにして、恵や為介たちも後方へと視線を移す。

「あっ……」

「あなたはっ……！」

和音の後方から、ゆっくりとした足取りでその場に現れるその人物に、恵たちが皆、驚きの表情を見せる。

「おりや檻也……」

「……………」

その場に現れたのは、艶やかな黒髪に鋭い瞳の、まだ幼さを残した顔立ちの青年であった。

＜安団“太守”、以団“知守”“仁守”の言玉を奪取。現在の言玉数、安団、二。以団、一。以上＞

「ああゝらら、逆転っ」

原始の森地点では、流れる放送を聞き、まだ待機したままの金八が、少し呆れるように肩を落としていた。

「チラシとニギリをいっぺんには、結構やる太守だったのかねえっ」

——バァァァン！

「うおっ！」

その時、森の奥から聞こえてくる大きな声に、金八が驚き、思わず背筋を震え上がらせた。

「何だあ？」

「……………」

「あ、神っ」

戸惑った様子で金八が振り向くと、そこには元々恐ろしい表情を、さらに恐ろしく歪めたイクラが立ち尽くしていた。イクラの前方には、先程までイクラが座っていたはずの大岩が、粉々になって砕け散っている。

「びっくりしたよお？びっくりし過ぎて俺、泣いちゃうよお？神いゝ」

「どいつもこいつも役立たずが…」

「……………」

いつものように泣きそうな表情を見せて話しかける金八であったが、粉々になった岩を踏み潰して、さらに粉々になっているイクラの様子を見て、そっと眉をひそめる。いつも冗談など通じないが、今はいつも以上にさらに、冗談の通じない状態のようである。

「金八」

「あっ？」

「わかってるな…？」

「……………」

イクラに圧のある瞳を向けられ、金八が少し目を細める。

「ああ、わかってるっ」

軽く口元を緩め、当然のように答える金八。

「俺だって、神はあんただけで十分さっ」

金八が迷いのない笑みを浮かべ、はっきりと言い放つ。

「行け」

「仰せのままに、我が神」

イクラの命に、答えながら軽く頭を下げると、金八は素早くその

場を飛び去った。

「……………」

原始の森に、イクラだけが残る。

「これで終わりだ…安の神…」

「さあ〜てとっ」

原始の森を素早く移動した金八は、遊園内でも特別高い木のとっぺんに立ち、どこまでも広がるいくつもの森を見渡した。

「じゃあまっ、とつととやるかねえ」

そう言って金八が、ズボンのポケットの中から青い言玉を取り出す。

「ウチの神、怒らせちゃったのが、運の尽きだったなあ？安団っ」
金八が、右手に握り締めた言玉を、ゆっくりと持ち上げる。

「これで終わりだ」

手の中の言玉が、青い光を放つ。

「“築^{きず}け”っ！」

——バアアアアン！

「何っ…？」

遊園内から響き渡る大きな音に、シャコと戦いを繰り広げていた囁が、素早く顔を上げる。囁が周囲を見回すと、遊園内に広がる森のあらゆるところから、大木よりもさらに高い位置まで、まるで巨大な噴水のように水が噴き出し始めていた。

「あれはっ…」

視界に入るいくつもの噴水を見つめ、囁がそつと眉をひそめる。

「ん、んん〜っ…」

「あっ…」

噴き出した水の一部が流れついたのか、近くで眠っている七架へと、その水が迫る。

「遮^{かきしほ}れ」

素早く言葉を放ち、横笛の音色を響かせる囁。すると七架の周囲を、赤く光る振動の膜が張り、水の浸食から七架の身を守る。

「ふうっ…」

囁が少しホッとしたように息を吐く。

「それにしても、これは…」

再び眉をひそめ、囁が地面を埋め尽くすほど、あっという間に広がっていく水を見下ろした。

「始めたんだね…」

同じように舞い上がった噴水を見つめながら、シャコがどこか遠い瞳で呟く。

「それが神の意志なら…」

言玉を握る右手に、力をこめるシャコ。

「あたいはそれに従うっ…！」

「……っ」

右手を振り上げるシャコに気づき、囁が戸惑うように振り向く。

「何をっ…」

「“閉^しめろ”…！」

「……っ！」

シャコが放つ言葉に、大きく目を見開く囁。先程の噴水の時と同じように大きな音が響き渡ると、今度は遊園内の壁一面を水の壁が埋め尽くし、窓や出入口など、外部と繋がる場所をすべて、水で閉ざしていく。

「水の、壁っ…？」

その様子を見つめ、さらに険しい表情を作る囁。

「まさかっ…」

何か考えを過ぎらせた囁の額から、静かに汗が流れ落ちた。

Word 19 灰示、再ビ (4)

遊園の外でも、恵たちに和音を加えた皆が、モニターで中の異常を察知していた。

「水の壁で内部を覆った…」

水に覆われた入口を見つめ、恵が険しい表情を見せる。

「このままでは噴水によって内部の水位が上がって、遊園内が水浸しになってしまいます」

「何やってんだ。全員で溺死志望かあ？」

冷静に分析する雅の言葉を聞き、恵が思いきり顔をしかめる。

「全員は溺死しないでしょっつ」

「あっ？」

隣から聞こえてくる軽い口調の声に、振り向く恵。

「溺死するのは、水の力が使えない安団のみんなだあけっ」

「……っ」

嘘臭い笑顔を見せて言い放つ為介に、恵の表情が曇る。

「じゃあ以団は、初めから朝比奈君たちをつ…？」

「馬鹿なっ…これはただの神試験だぞ？」

「自分だけが神で在るためになら、なあぐんの容赦もしない子なんですよお」

厳しい表情を見せる恵と雅に、どこか落ち着いた笑みのまま、冷静に話す為介。

「昔っからねえ…」

徐々に水に覆われていく、モニターの中の遊園を見つめながら、為介は鋭く目を細めた。

「どう、思われます？」

恵や為介の少し後ろから、同じくモニターを見つめる和音が、隣に立つ、先程の幼さを残した青年、檻也へと、意見を求めるように

問いかける。

「ここで死ぬなら、ここまでの男だったということだ」

ひどく冷静な口調で、はっきりと言い放った檻也が、そっと目を細める。

「籠也…」

遊園内、紅葉の森地点。

「うわわわっ！」

アヒルたちの居る紅葉の森からも噴水が噴き上げ、アヒルたちの足元を水が侵食し始めていた。

「何だあ？水道管でも破裂したのかあ？」

「そんな規模じゃない」

「へっ？」

はっきりと言い放つ籠也に、アヒルが少し目を丸くする。

「これは明らかに言霊の力だ」

「言霊っ…」

籠也の言葉に、眉をひそめるアヒル。生じているのが水ということとは、残りの以団メンバーの攻撃の一つなのであろう。

「とにかく避難をっ…“かこ囲え”」

籠也が再び言玉を格子の姿へと変え、言葉を放つと、一本だった格子が六本に分かれ、籠也と、そのすぐ横に倒れている保の周りを取り囲むように、地面に突き刺さった。すると、格子から赤い光が放たれ、格子内へ入ろうとする水を、その光が堤防のように防ぐ。

「神」

「ああっ」

籠也に呼ばれ、アヒルも格子内へ入るため、籠也の方へと歩み寄って行こうとする。

——バァァァン！

「……っ！」

アヒルが駆け寄って行こうと足を踏み出したその時、大きな音を響かせて、アヒルたちのすぐ傍の地面から、新たに水が勢いよく噴き出した。それにより、地面から迫り来る水の速度が、一気に上がる。

「あっ……」

噴水を見上げていたアヒルが、先程の戦いで灰示に敗れ、気を失って倒れたままのチラシとニギリの姿を見つける。

「早くしろ、神」

「………」

急かす箆也の声が背中に届く中、アヒルがそっと目を細める。

「箆也」

「……？」

名を呼ばれ、少し戸惑うような表情を見せる箆也。

「俺、あいつら連れてくから、保のこと頼むなっ」

「なっ……！」

笑顔で振り向くアヒルに、箆也が大きく目を見開く。

「な、何をっ……！」

「大丈夫だって、俺、水泳は得意だからさっ。じゃあなっ！」

「あっ……！」

抗議しようとする箆也の言葉も聞かぬまま、チラシとニギリの方へと駆け出していってしまうアヒル。

「神っ……！ううっ……！」

箆也が格子の外へと出て、アヒルを止めようとするが、すでに水は膝の辺りまで水位をあげてきており、箆也は格子の囲いを解くことが出来なかった。

「ダメだ！戻れ……！神っ……！」

走り去っていくアヒルの背中へ向け、必死に叫ぶ箆也。

「神っ…!!」

だが、その籠也の必死の声は、溢れ出す水の音に掻き消されていた。

遊園内、雪国の森地点。と言っても、雪はすでに溢れ出る水の中に溶け、消えてしまっていた。

「ふうっ…」

膝上まで上がって来た水を見下ろしながら、囁が少し疲れた様子で一息つく。

「お気に入りの服だったのに…」

すでに水浸しのスカートをみて、がっくりと肩を落とす囁。

「さすがにそろそろ…危なそうね…」

その勢いを止めることなく、どんどんと水位をあげてくる水に、囁が困ったような表情を見せる。このままでは囁は水の中に沈み、あっさりと溺死させられてしまう。

「じゃあ、頼むわね…」

囁が、眠る七架を包み込み、水から守っている振動の膜へ向け、こもつて言伝るように呟く。

「……っ」

七架に背を向け、少し鋭い表情を見せると、囁は水で溢れ返る地面を勢いよく蹴り、近くの木の上方の枝の上へと移動した。この高さならば、これ以上水位が上がっても、しばらくの間は沈まずに済む。

「上がって来た…」

「ん…？」

すぐ近くから聞こえてくる声に、ふと顔を上げる囁。

「下はもう…結構沈んだ…？」

囁の立つ木のすぐ近くの木の枝に立ち、あまりない表情で囁へと

問いかけるのは、シャコであった。シャコも囁が七架に構っている間に、上へと来ていたようである。

「ええ…結構な勢いで水浸しよ…」

シャコの問いかけに、囁が素直に答える。

「これで満足…？」

「……………」

どこか含みのある問いかけをする囁に、無い表情で、かすかに眉だけを動かすシャコ。

「森の遊園を、水族館にでも変えたいのかしら…？あなたたちは…」

「あたいは…」

囁からの問いかけに、シャコがゆっくりと口を開く。

「あたいは…ウチの神に従うだけ…」

迷いのない、まっすぐな視線を、囁へと向けるシャコ。

「だから…ただの神試験は、もう終わり…」

「終わり…？」

シャコのその言葉に、囁が戸惑うような表情を見せる。

「ここからは…」

ゆっくりとした口調で言葉を放ちながら、シャコが言玉を持った右手を、高々と振り上げる。

「沈みゆく遊園の中で行われる…命を賭けた、ただの潰し合い…」

「……………」

冷たく呟くシャコに、そっと眉をひそめる囁。

「そう…」

だが囁は特に動じた様子も見せず、騒ぐこともなく、シャコの言葉を素直に受け入れ、頷いた。

「だったら、何…？」

囁がどこか強気に問いかけ、右手の横笛を身構える。

「あなたたちを倒せばいいってルールに…変更はないんでしょう…？」

「……………」

自信を持った表情で微笑む囁に、シャコは少し顔をしかめた。

遊園内、紅葉の森地点。

「クっ…」

二メートル程の高さまで水位を上げた水の上に浮かぶ、籠也が作った格子の囲い。赤い光が籠也と保の足場となって、水面に浮かんでいる。籠也は囲いの中から水浸しの周囲を見渡し、そつとその表情を曇らせた。チラシとニギリのもとへと駆け去ったアヒルの姿は、どこにも見当たらない。

「神っ…」

すでに高身長の間でも沈む程の水位である。見当たらないアヒルの姿に、籠也は少し不安げな表情を見せた。

「このまま“囲っている”」

周囲の格子に言葉を投げかけると、籠也が六本ある格子の一本を右手に取り、光の足場を蹴って、近くの高い木のとっぺんへと飛び上がった。

「これはっ…」

高い位置から、水で溢れ返った遊園内を見渡し、険しい表情を見せる籠也。

「これでは囁と奈々瀬もっ…」

二人の身を案じ、籠也がさらに険しい表情となる。

「そう、みいゝんな仲良く、水の底っ！」

「……っ！」

どこからか聞こえてくる声に、籠也が目つきを鋭くし、素早く振り向く。

「あなたはっ…」

「あんたが残っててくれて良かったぜえ」

籠也の立つ木のすぐ近くから噴き出している噴水の上に、水の勢

いも何もかもまるで関係なく、まるで椅子のようにゆったりと腰を掛けているのは、金八であった。その金八の奇妙な状態に、思わず目を丸くする箆也。

「あんたとは前から戦いたいって思ってたからさあっ」

「以団の…」

「そう、以附が一、“幾守”、木坂本金八！よろしくなあ！」

笑顔で名を名乗った金八が、どこか親しげに、箆也へと手を振り上げる。

「あなたたちは一体、どういうつもりなんだ？遊園のこの状態は…」

「ウチの神は、とおってもイカれた神様でねえっ」

「……？」

問いかけようとした箆也の言葉を遮り、どこか軽い口調で言い放つ金八。

「自分以外には神なんていらなんて、そういう考えのお人なのさあっ」

「神が…いない…？」

金八の言葉を繰り返し、箆也がそつと表情を曇らせる。

「そう。だから、あんたんとこの神を、神様にする気なんてサラサラねえってわけ」

「……っ」

微笑む金八に、箆也が眉をひそめる。

「初めから、まともに神試験を行う気などなかったということか…」
「正解っ」

箆也の言葉に、金八が楽しげに口端を吊り上げる。

「これは神試験なんかじゃない。ただの“神潰し”さっ」

イクラからの言葉を口にし、より一層、楽しそうに微笑む金八。

「残念だったなあっ、あんたの神を神様に出来なくてっ」

「……………」

さらに言葉を続ける金八であったが、箆也はそれ以上険しい表情を作ることはなく、その表情は、すぐに落ち着いた、冷静なものへ

と変わった。

「何を言っている？」

「ああんっ？」

言っている意味がわからないとばかりに聞き返してくる籠也に、金八が少し眉をひそめる。

「誰が、我が神を神に出来ないなどと言った？」

どこか挑戦的に言い放ち、格子を持つ右手に力を込める籠也。

「僕は、僕の神を神にする」

籠也の鋭い瞳が、金八へと突き刺さる。

「誰を叩き潰してでもな」

「……っ」

その突き刺さるような視線に、一瞬だけ笑顔を消し、金八が冷たい表情を見せる。

「おっそろしいっつ、俺、泣いちゃうよお？」

すぐにまた笑みを浮かべ、金八が軽い口調を見せる。

「けどっ」

微笑みを残したまま、鋭く変わる金八の瞳。

「面白そうじゃんっ」

「……………」

噴水の上で立ち上がる金八に、籠也がそっと格子を構えた。

Word 20 譲レナイ勝負 (1)

午後五時二十分（神試験スタートから四時間）。

言ノ葉の森遊園は、水に埋め尽くされ始めていた。

遊園内、遠未来の森上空地点。

突如突き上げたいくつもの巨大噴水と、遊園内部を取り囲んだ水の壁により、広い遊園内が一気に浸水し、その水位は人間の背丈を軽く越え、木々の上部分まで迫るほどの勢いであった。

「プハっ！」

その激しく上がっていく水面から、這い上がって来たのか、少し苦しげな表情のアヒルが顔を出す。その傍らには気を失っているチラシとニギリ、二人を抱え込んでいた。

「クっ…！」

アヒルが多少水を鼻や口に入れながら、銃を持った右手を自分へと向ける。

「“上^あがれ”っ！」

銃声とともにアヒルたち三人の体を赤い光が包み込むと、三人の体が水の中から飛び出し、ドーム状となっている高い天井へと上昇していく。

「ハアっ…ハアっ…」

やっと水から逃れたアヒルが、銃をズボンのポケットへと片し、両手一方ずつでチラシとニギリを抱え直しながら、軽く息を乱す。

「どっか…こいつらをっ…あっ」

高い位置で平行に周囲を見回していたアヒルが、ドーム形天井の片端に造られた、非常用出口のようなものを見つける。アヒルはすぐさま体の向きを変え、そちらへと進んでいった。

「よっと」

出口用扉の前に造られた狭い足場へとチラシとニギリを横たわらせると、アヒルはその扉へと手を伸ばした。扉には薄い水の膜のようなものが張られている。

「開かねえーか……」

回そうとしても回らないノブに、アヒルが少し息を吐く。アヒルは知らないが、シャコが『閉める』の言葉を放ち、すべての出入口や壁に水を張ってしまったために、遊園内から外へと続く道は、すべて封鎖されてしまっているのである。

「んっ？ “開かない”？」

自らが放った言葉を繰り返し、そつと眉をひそめるアヒル。

「つてことは」

アヒルがポケットから再び銃を取り出し、その閉ざされた扉へと向ける。

“開け”っ！

その言葉とともに弾丸が放たれ、扉を貫くと、扉全体が赤い光を放ち、張られていた水の膜が崩れ落ちて、扉が自動的に開いた。

「よっしゃ！」

開く扉に、アヒルが銃を持つ手を挙げ、ガッツポーズを見せる。
「ここで待ってりゃ、外の誰かが助けに来てくれると思うからよおっ」

アヒルがそう呟きながら、扉の外からも広がっている狭い足場へと、気を失っているチラシとニギリを移す。

「んじゃあなあ！」

別に起きているわけでもない二人に笑顔で手を振り、そのまま開いた扉を再び閉めるアヒル。閉ざされた扉には再び水の膜が張り、出入口を塞いだ。

「ええーつと、プレート、プレートっ」

やっと両手が自由になったアヒルが、懷の中へと手を入れる。するとシャツの中から、胸元に仕込んでいたのか、言玉を入れるプレートが出てきた。プレートの中には、灰示がチラシとニギリから奪

った、二個の青色の言玉が収納されている。

「よしっ」

プレートを左手に持ち、準備を整えるアヒル。

「さてとっ…」

アヒルが不意に鋭い表情となり、下に広がる、すでに相当浸水している遊園内を見下ろす。

「籠也、囁、保、奈々瀬っ…」

この遊園内のどこかにいる仲間の名を呼び、アヒルが不安げな表情を見せた。

その頃。遊園外、モニター前。

「先程の場所へ行き、知守^{ちもり}、仁守^{にもり}、両名の保護を」

『はっ!』

和音が黒い着物を纏った従者へと指示を出すと、数名の中から二名がその場を駆け出していく、先程、アヒルが外へと出した、チラシとニギリの元へと向かった。

「神試験をブチ壊した連中だ。わざわざ助けてやる義理もないだろう?」

「そうはいきませんわ。貴重な戦力の五十音士ですもの」

何やら煩わしそうに問いかける恵へ、迷うことなく、爽やかな笑みを向ける和音。

「彼らを助けておきませんと、その他が皆、溺死してしまった時に、事情聴取に困りますし」

「お前ね…」

満面の笑顔で不吉なことを言い放つ和音に、恵が思わず呆れた表情を見せる。

「それに安の神も、彼らが助かることを望んでいるのではありませんか?」

「……っ」

微笑みながらも、まっすぐな瞳で、鋭く問いかけてくる和音に、そっと目を細める恵。

「けれど朝比奈君、また遊園の中へ戻ってしまいましたね」

恵の横でモニターを見つめる雅が、少し不安げな表情を見せ、口を挟む。

「もう神試験と呼べるものでもないのですから、あのまま脱出してしまっても…」

「あいつが、んなことするような奴だと思うか？」

「えっ？ いや、まあ、その…思わ、ないですけど…」

すぐさま問いかける恵に、歯切れを悪くしながらも、思わず否定してしまう雅。

「はあ…」

自分自身の言葉に、雅が思わず溜め息を吐く。

「兄弟揃って無茶な性格してますからね、朝比奈家は」

「……っ」

呆れたように呟く雅のその言葉に、恵がそっと目を細める。

「本当に…」

恵は、どこか遠くを見るような瞳で頷いた。

遊園内、雪国の森地点。

「沈め」
しずめ

シャコが言葉を放つと、遊園内で徐々に水位を上げる水の一部が舞い上がり、シャコの正面に立つ囁へと、大波のように勢いよく襲いかかっていく。

「妨さまたげろ」…」

囁が言葉を落とし、横笛で音色を奏でると、その音色が振動の塊のようになって囁の前に立ち塞がり、向かってくる大波の水を弾き碎いた。

「あっ…」

だが弾き碎かれた大波の水飛沫が、一気に囁の方へと押し寄せ、ただでさえ迫り来ている水かさがさらに増し、囁の足場が水へと沈んでいく。

「クっ…！」

さらに上の枝へと飛び移り、何とか水から逃れる囁。

「……っ」

だが下から迫る水の勢いは止まらず、上にある木の枝も、もう先が見えており、囁はそつとその表情を曇らせた。このまま水位が上がって行けば、囁はやがて足場を失くし、水の中へと沈んでしまう。
「あんたが置かれている状況が、理解出来てきた…？」

「……っ？」

前方から聞こえてくる問いかけに、囁がゆっくりと顔を上げる。
そこには、徐々に上昇する水面の上に、平然と立っているシャコの姿があった。

「このまま行けば後二十分…いや、後十分で、この遊園は完全に水に埋め尽くされる…」

半分以上水に沈んでいる、入口付近の大時計を指差しながら、シャコが冷静に言い放つ。

「そうなれば、水系の力を持つ、ウチら以団は生き延びられるが…あんたら安団は皆、死ぬ…」

「そうね…それがあなたたちの目的なんでしょう…？」

「ああ…」

「そうあっさり頷かれると…逆に清々しいわね…フフフ…」

頷くシャコを見ながら、どこか楽しげに微笑む囁。その笑みには余裕すら感じられ、追い込まれて焦っている様子は、微塵も見せていない。

「何故、笑う…？あんたたちは、もうすぐ死ぬんだよ…？」

「あら…何故、“死ぬ”と決めつけるの…？」

問いかけるシャコに、囁が微笑んだまま、問いかけを返す。

「後二十分…十分だったかしら…？その間に、あなたたちを倒して…この水を消してしまえばいいんでしょう…？」

「そんなことが出来ると思っているのか…？」

強気な発言をする囁に、そつと眉をひそめるシャコ。

「もうすぐ、あんたの足場はなくなる…そうなれば、攻撃することさえ出来ない…」

「その前に終わらせるわよ…」

「ナメられたもんだね…あたかも…」

互いを見合いながら、囁とシャコがそれぞれ、構えを取った。

「叫べ」…

囁の言葉と音色とともに、巨大な振動の塊が生じ、シャコへと向かっていく。

「こんな音っ…」

向かってくる振動に、まるで嘲るような笑みを浮かべながら、シ

ヤコが右手の言玉を突き出す。

「静まれ」っ…！

「……っ！」

シャコの言玉が青く輝くとともに、囁の放った振動の塊が、一瞬にして掻き消される。あっさりと消される自らの技に、囁は思わず目を見開いた。

「静まれ」…音を封じる言葉か…これじゃあ…」

「縛れ」…！

「うっ…！」

囁が表情を曇らせていると、シャコが新たな言葉を放ち、水面から突き上げた数本の縄状の水が、囁へと迫り来た。

「さ、避ける」…！

目にも留まらぬ速度で迫り来る水の流れに、慌てて言葉を放ち、横笛を奏でる囁。生じた振動が今度は囁の体を包み込み、囁を水の流れの攻撃から逃がす。

「逃げていいの…？」

「えっ…？あっ…！」

シャコの問いかけに、少し眉をひそめる囁であったが、攻撃から逃れたその先に広がる一面の水に、焦った表情を見せる。

「うっ…！“叫べ”…！」

囁が空中で慌てて横笛を奏でると、振動の塊が水面へと放たれ、その衝撃風に空中の囁の体が流されると、囁は近くの木へと身を寄せ、その枝の上へと飛び乗った。

「はあ…はあ…」

枝に膝をついた囁が、軽く息を乱しながら、シャコの方を見つめる。

「随分と大口叩いてたわりには、ギリギリだね…」

「……っ」

水面に悠々と立ちながら、まるで上から見下すように言い放つシャコに、曇る囁の表情。もう背丈の低い木々はほぼ水に沈み、いくら広い森と言えど、囁の足場は限られて来てしまっている。これでは囁は、自由に攻撃することも、防御することも出来ない。

「思ってたより…厳しいわね…」

先程と同じように微笑む囁であったが、その額からは汗が流れ落ちていた。

「……………」

「んっ…？」

そつと右手を掲げるシャコに、囁が警戒するように横笛を身構える。

「したた“滴れ”」

「えっ…？」

シャコが放ったその言葉に、少し目を丸くする囁。だがすぐに、上空から、何やら不穏な音が近づいてくることに気づき、顔を上げた。

「上からっ…！？」

ドーム状の天井から勢いよく降り注いでくる、無数の水の粒。

「さ、“妨さまたげろ”っ…！」

囁が自分の頭上へ向け、音の振動を放ち、盾にしようとする。

「うっ…！」

だが降り注ぐ無数の水粒、すべてを妨げきることが出来ず、いくつかの水粒が、振動の盾を掻い潜って、囁のもとまで落ちてくる。

「ああああっ…！」

足場がないため、横に避けることも出来ず、囁が水粒を直撃する。

「ううっ…」

「“縛しれ”…」

「…っ…！」

枝の上にしゃがみ込み、苦しい表情を見せていた囁が、さらに放たれるシャコの言葉に、大きく目を見開く。

「しまっ…」

囁が立ち上がる暇もなく、囁のいるすぐ下の水面から縄状の水が突き上げた。

「うううっ…！」

水の縄が囁の両腕と胴体を縛り上げ、座り込んでいた囁を、引っ張り上げるように無理やり、立ち上がらせる。勢いよく立ち上がらされると、先程、水粒を喰らった時の傷から血が溢れ出し、囁は強く、その表情をしかめた。

「うっ…」

「捕まえた…」

水に捕らえられた囁のもとへと、シャコが水面をゆっくりと歩きながら、近づいていく。

「これで終わ…んっ…？」

「…っ」

囁のすぐ前へと歩み寄って来たシャコが、徐々に霞みがかって消えていく囁の体に気づき、そっと眉をひそめる。

「これは…」

「残念だったわね…」

「……っ！」

眉をひそめていたシャコが、後方から聞こえてくる声に、勢いよく振り返る。

「錯覚^{さっかく}」…」

シャコの後方にある木の上へと立ち、横笛を構えているのは、水の縄になど縛られていない囁の姿。

「これで終わりよ…」

囁がさらに攻撃をするべく、口元に寄せていた横笛を、下ろそうとする。

「んっ…？」

だが、下ろそうとしたその囁の手は、動かなかった。

「何っ…」

“縛れ”…」

「なっ…！」

動かない手に戸惑い、囁が自らの手を見ると、囁の両手は左右から伸びている水の縄に縛られ、その動きを封じられていた。両足にもそれぞれ水の縄が伸び、囁の体の動きを完全に封じている。

「そんなっ…」

「あんたの“錯覚”は…もう見飽きてんだよね…」

「クっ…」

そう言いながら、ゆっくりと振り返るシャコに、囁が軽く唇を噛む。

「……っ」

「えっ…？うっ…！」

シャコが軽く右手を動かすと、新たに突き上がった水の縄が囁へと迫り、囁の細い首を勢いよく捕らえた。

「絞^しめろ」…」

「ううううっ…！」

シャコの言葉に反応し、囁を縛り付けた縄が、囁の四肢と首を、容赦なく絞め上げる。首を締め付けられ、囁は苦しい表情を見せ、

声にならない声を漏らした。

「うっ…ううっ…！」

「溺死の前に…絞め殺しちゃうかな…」

苦しむ囁を、平然とした表情で見つめるシャコ。

「さっきの言葉…もう一度、言ってあげる…」

シャコが囁へと、冷たい視線を送る。

「死ね…」

「ううううっ…！」

吐かれる残酷な言葉とともに、さらに苦しげな声をあげる囁。これ以上、絞め上げられれば、シャコの言葉が発動しなくとも、本当に死んでしまう。

「うっ…」

必死に歯を食いしばり、囁が鋭い目つきとなる。

「へっ…」

絞め上げられながらも、何とか言葉を口にしようとする囁。

「変格”…！」

「……っ」

囁の言葉とともに、強い赤色の光を放ってその姿を変えていく、囁の右手の横笛に、見つめていたシャコがそっと表情を曇らせる。

「裂け”っ…！」

横笛から姿を変えた赤銅色の槍から、赤い一閃が放たれると、一閃が囁を縛る水の縄をすべて斬り裂き、解放された囁は、力なくその場に座り込んだ。

「ハアっ…！ハアっ…！ハアっ…！」

先程まで絞め上げられていた首元を押さえ、囁が必死に呼吸を整える。

「“変格”、か…」

そんな囁を見ながら、落ち着いた様子で呟くシャコ。

「安団の“変格”は確か…より攻撃性の強い武器への変化…」

「ハア…ハア…」

やっと呼吸の落ち着いた囁が、変化した槍を握り締めながら、ゆつくりとその場で立ち上がる。

「さすがに、素人の奈守とは違うか…でもっ…」

「……っ？」

言葉を付け加えるシャコに、囁が少し怪訝そうな顔を見せる。

「あたいもあんたも、同じサ行の五十音士…」

まっすぐに囁を見つめ、シャコがさらに言葉を続ける。

「これが…どういふことだか、わかるか…？」

「あなたも…“変格”が使えると…？」

「その通り…」

囁の言葉を聞き、そっと微笑んだシャコが、右手をゆつくりと開き、握り締めていた言玉を見せる。

「以団の“変格”は…水の具現…」

「具現…？」

シャコの言葉に、首を傾げる囁。

「“変格”…」

シャコの手のひらの上の言玉が、青く強い光を放ち始める。

「“四海”っ…！」

Word 20 譲レナイ勝負 (2)

「しか…?」

——バァァァンっ!

「なっ…!」

囁の四方に巨大な水の柱がそそり立つと、その柱の間に立方体を作るように水の壁が現れ、水の箱が、中に居る囁を、完全に閉じ込めた。

「こ、これはっ…」

囲われた水の立方体を見ながら、囁が焦りの表情を見せる。

「あたいの変格、“四海”は…脱出不可^{いふがな}能、死へと誘^{いざな}う水の牢…」
「クっ…」

シャコの言葉に、囁の表情がさらに陰しくなる。

「脱出不可^{いふがな}能なんて…まさかっ…」

信じられないといった様子で、徐に水の壁へと手を伸ばす囁。

「あまり容易に触れない方がいい…」

「えっ…?」

「“痺^{しび}れろ”…」

「うっ…!」

囁を取り囲む水の壁全体に、白い閃光のようなものが走った。

「あああああっ…!!」

壁に触れていた手から、激しい電流が体へと流れ、囁が叫びあげ、力なくその場にしゃがみ込む。

「うううっ…」

「“四海”は…電気をよく通すから…」

「クっ…」

まだ痺れのとれない左手を押さえながら、囁が陰しい表情でシャ

コを見上げる。

「ならっ…」

痺れていない右手で、槍を振り上げる囁。

「“裂け”っ…！」

囁の振り下ろした槍先から、壁の一面へ向け、赤い光の一閃が放たれる。

「えっ…？」

だが囁の放ったその一閃は、水の壁にあっさりと弾き返され、囁のもとへと戻って来る。

「きゃあああああっ…！」

避ける暇すらなく、自らの一閃を直撃する囁。吹き飛ばされ、その背中が逆側の水の壁へと当たる。

「“痺れる”…！」

「うっ…ああああああっ…！！！」

背中に触れた壁から、一気に流れ込む電流。

「あ…ああっ…」

自らの技と大量の電流を食らい、あっという間にボロボロとなった囁が、水の立方体の中で、力なく倒れ込む。囁は痛みと全身の痺れにより、立ち上がることが出来なかった。

「“四海”は…内部からの攻撃は、すべて弾き返す…」

倒れた囁を、四海の外から、静かに傍観するシャコ。

「まさに八方塞がりだね…左守…」

「うっ…うう…」

槍を支えにしながら、囁がゆっくりと体を起こす。だが足の痺れがまだとれず、立ち上がることは出来なかった。

「これで本当に終わりだ…」

「……？」

「“しみし滲出”…」

「うっ…！」

囁を包む水の立方体の地面部分の水の壁から、徐々に水が滲み出

始める。足元に広がっていく水に、険しい表情を見せる囁。

「四海を水が埋め尽くし：あんたは溺れ死ぬ：」

徐々に水が浸水する四海を見つめ、冷静に言い放つシャコ。

「四海の中で何を言ったところで、あんたの言葉は無効：あんたにはもう、どうする術もない：」

「クッ：」

手詰まりなこの状況に、囁が思わず唇を噛む。

「だが：」

「……？」

言葉を付け加えるシャコに、戸惑うように顔を上げる囁。

「今すぐ、その言玉を差し出すというなら：あんたを助けてやる：」

「えっ…？」

思いがけないシャコの言葉に、囁が訝しげに眉をひそめる。

「随分と言うことが変わるのね：さっきは、神試験はもう終わり、ここからはただの潰し合いだ、だの言ってたのに：」

「ウチの神の望みは：自分以外、神と呼ばれる者がいなくなることだ：」

「……っ」

シャコが口にするイクラのその望みに、囁が少し表情を曇らせる。

「神は、あんたんとこの神が神でなくなれば、それでいいはず：だから、あんたたちを殺すまでする必要はない：」

「あら：随分と優しいのね：さっきは絞め殺そうとしてたクセに：」
「気を失わせて、言玉だけ奪うつもりだった：別にあたいに、人殺しをする趣味はない：」

どこか含んだように言い放つ囁に、シャコは焦る様子も見せず、落ち着いた口調で話した。それはシャコの言葉が本心であることの、表れであろう。

「言玉をすべて渡せば：あんたたちは誰も溺死せずに、この勝負を終えることが出来る：」

「………」

シャコの言葉を聞きながら、そつと視線を横へと流し、遊園内を見つめる囁。遊園内は先程よりも水位が上昇し、周囲の木々はすべて水の中に沈んでいて、この立方体を出たとしても、最早、囁に足場はない。このままでは確かに、囁たちは皆、溺れ死ぬ以外に道はないように思えた。

「あんたたちにとっても：悪い条件じゃないだろう：？」

遊園を見つめている囁へ向け、シャコがさらに言葉を投げかける。

「あんたの神が神でなくなることで、あんたたち全員の命を比べたら：？」

「そうねえ：折角の素敵なお話だけど：」

「……っ？」

そつと入ってくる囁の声に、シャコが少し眉をひそめる。

「お断りさせてもらおうわ」

「えっ……？」

はっきりと答える囁に、思わず戸惑いの表情を見せるシャコ。

「断る……？」

「ええ……」

戸惑いの表情のまま聞き返したシャコに、囁が迷うことなく頷きかける。

「な、何をっ……」

そつと微笑む囁に、シャコは突いて出たように言葉を吐く。

「仲間たち全員の命より、この神試験の勝敗を優先するっていうのか……？」

シャコがどこか必死に、囁へと言い放つ。

「例え全員死ぬことになったとしても、この勝負には負けたくない」とでもいうのか……？」

「……………」

問いかけを続けるシャコに、囁がそつと目を細める。

「私ね……」

「えっ……？」

小さく言葉を挟む囁に、そつと眉をひそめるシャコ。

「私ね…正直、別に神試験に、そこまで興味とかないの…」

シャコの方を振り向いた囁が、どこか穏やかな笑みを浮かべる。

「箆也と違って…神様とか安団とかに、こだわってる方でもないし…」

「なら、余計にっ…」

「でもね」

戸惑いの表情を見せたシャコに、囁がすかさず言葉を挟む。

「昨日、五十音士になったばかりの奈々瀬さんが…必死に、命懸けて戦ってる所を見て…」

——朝、比奈くんっ……——

——でも私…！言玉をっ…！——

——うううっ…！——

「傷だらけなのに、まだ敵を追おうとしてる所を見て…勝負に負けて、悔しそうに泣いてる所を見て…」

思い出される七架の姿に、囁がそつと目を細める。

「それで思ったの」

はつきりと言い放った囁が、口元をさらに柔らかく緩める。

「あんな姿見せられた後に、命欲しさに言玉渡せるほど…私、腑^ふ抜けた人間じゃないって」

「……………」

堂々と微笑む囁に、シャコがかすかに表情をしかめる。

「それだけで…命を捨てるというのか…？」

戸惑いの色を深くし、囁へと問いかけるシャコ。

「あんただけじゃない…他の仲間全員が、死ぬかも知れないんだよっ…？」

「それも色々と考えてみたけれど…結局はこう思うのよねえ…」
「えっ…？」

シャコの問いかけに答えながら、囁が水の立方体の中で、ゆつくりと立ち上がる。

「アヒるんが神様でなくなってもいいから命が惜しい」なんて人私の仲間にはいないって…」

「……っ」

自信に満ちた笑みを浮かべる囁に、シャコの表情が大きく歪む。

「馬鹿ばかりということかっ…」

「それは否定しないけど…フフフっ…」

呆れたように言い放つシャコに、囁がどこか楽しげな笑みを浮かべる。

「だが、どうする気だ…?」

鋭い瞳を見せ、まっすぐに囁を見つめるシャコ。

「言玉を渡さないんなら、四海の中に居るこの状況は変わらない…あんたには勝つ術なんて…」

「私の“変格”はね…」

「……?」

遮るように入ってくる囁の声に、シャコがそっと表情を曇らせる。

「言玉の形状が変わるだけじゃないの…」

「何っ…?」

シャコが戸惑いの表情を見せる中、囁が右手に持った槍をそっと振り上げ、その槍先を足元の水の壁へと向ける。

「“原型”の時には使えない…新たな言葉の使用が可能となる…」

「新たな、言葉だっ…?」

「ええっ…」

少し表情をしかめるシャコに、微笑みかけるように頷きながら、囁がその槍先を足元に広がる水壁へと、勢いよく突き刺した。

「“サけ”…」

「……っ」

囁が放つその言葉に、シャコが驚いたように目を丸くする。

「何が新たな言葉だっ…あんたの“裂け”なんて、聞き飽きてっ…」

！」

「“咲^さけ”……」

「えっ……？」

立っている水面の下から聞こえてくる、かすかな音に気づき、シヤコが戸惑うように足元を見つめる。

「何っ……」

「……“咲^さき誇れ”……」

「うっ……！」

シヤコの足元へ向け、水中をまっすぐに上昇してくるのは、一本の大きな木。

「うあああああっ……！！」

異常な速度で生長した木が、沈んでいた水面から顔を出し、真上に立っていたシヤコを勢いよく吹き飛ばす。すると顔を出した雪国の森の裸の木は、急速に芽吹き、そしてあっという間に花を咲かせた。

——パアアアアンっ！

咲き誇った桜の花びらが宙を舞い、囁を包んでいた四海に降り注ぐと、桜の花びらが付着した部分から水壁が崩れ落ち、やがて水の立方体が、粉々になって流れ落ちる。

「んなっ……！」

その光景に、水面に倒れ込んでいたシヤコが、大きく目を見開く。

「そ、そんなっ……私の四海が……」

「ふう……」

舞い散る桜の花びらを見つめ、シヤコが啞然とした表情を見せる中、四海から解放された囁は、美しい花を咲かせている桜の木の枝へと、軽い足取りで飛び乗った。

「内部からの攻撃には強くて……外部からの攻撃には、意外と脆^{もろ}かったみたいね……」

桜の木の上で、ゆっくりと立ち上がる囁。

「ここが森の遊園地で、本当に良かったわ…」

桜の木の幹を撫でながら、囁が穏やかな笑みを浮かべる。

「植物のない水族館だったら…本当に危なかったもの…」

「クっ…!」

桜の上に立つ囁を見上げ、険しい表情を見せながら、水面に倒れ込んでいたシャコが素早く立ち上がる。

「まだだ…!まだっ…!」

「あら…どうやって戦うつもり…?」

闘志を剥き出しにするシャコに、どこか余裕の口調で問いかける囁。

「言玉も…持っていないのに…」

「あっ…!」

そう言った囁が、シャコへと見せるように左手を突き出す。その左手には、青い言玉が握られていた。

「あたいの言玉っ…!」

「フフフっ…」

焦るように声をあげるシャコに、そっと微笑む囁。先程、四海が崩れ落ちた時に、姿を戻したシャコの言玉を、囁はしっかりと捕らえていたのである。

「これで本当に終わり…」

「クっ…!」

右手の槍を振り上げる囁に、シャコが険しい表情を見せる。

「“裂け”…」

「うっ…!」

振り下ろされた槍先から、シャコへと放たれる赤い一閃。だが、言玉を奪われたシャコに、その一閃をどうにかする術など、ありはなかった。

「神っ…」

迫り来る一閃を見つめながら、そっと神の名を落とすシャコ。

「あああああああつ…!!」

囁の放った一閃を正面から直撃すると、シャコは全身を斬り裂かれ、体中から真っ赤な血を流しながら、後方へと倒れていった。広がる水面の上に、シャコが力なく倒れ込む。

「神…」

水面に倒れ込み、ドーム状の天井を見上げ、そっと目を細めるシャコ。

「ごめん…神っ…ごめん、なさいっ…」

天へ向け、神へと謝ると、シャコはゆっくりと、その大きな瞳を閉じた。

「……………」

そっと槍を振り下ろした囁が、倒れたシャコを、どこか複雑そうな表情で見つめる。

“ごめんなさい”か…

シャコが最後に呟いた言葉を、ゆっくりと繰り返す囁。

「私は、私の神様に…誉めてもらえるのかしら…?」

＜安団“左守”、以団“之守”^{しもり}の言玉を奪取。現在の言玉数、安団、三。以団、一。以上＞

囁の言葉と同時に、水に埋め尽くされた遊園内に放送が響き渡り、囁の勝利を知らせた。

「うっ…」

槍を元の言玉の姿へと戻した囁が、少し表情をしかめ、力なくその場に膝をつく。

「さすがに言葉を使い過ぎたか…」

右手に収まった赤い言玉を見つめ、囁がそっと呟く。

「でも、何とかこれを…アヒるんに届けないと…」

次に左手のシャコの青い言玉を見つめ、呟く囁。

「んっ…?」

どこからか、水が流れ落ちていくような音が聞こえ、囁がゆっくりとした動作で振り向いた。

「あれはっ…」

顔を上げた囁が、そっと目を細める。遊園内部の壁一面に張られていた、薄い膜のような水が一気に崩れ落ち始めていた。

「之守が気を失って…“閉めろ”の言葉の効果が無くなったのね…」
崩れ落ちていく水を見つめながら、冷静に分析する囁。

「このままじゃ…遊園の外に水が…」

囁は、どこか不安げな表情を見せた。

——バアアアアン！

『なっ…！』

囁の不安は的中し、シャコの水の壁が無くなると、遊園の正面出口から、遊園内に溜まった水が、その扉だけではとてもせき止めきれず、扉を突き破るように溢れ出してきた。大波のように押し寄せてくる水に、和音の従者たちが皆、焦ったように声を出す。

「三十二音、“み”、解放っ…」

雅が素早く制服のポケットから言玉を取り出し、右手で強く握り締める。

「みずかがみ水鏡”…！」

皆の前へと出た雅が、自分の前に大きな水の盾を作り、遊園から溢れ出てきた大波を受け止める。

「うっ…！」

だが受け止めたその瞬間、雅の両手に強い圧力がかかり、雅の足が少し後退した。

「な、なんて水の量っ…」

かかる圧力で震える右手を、左手で必死に押さえながら、雅が陰しい表情を見せる。

「このままではっ…」

「凍てつけ”っ」

「……っ」

雅がそつと眉をひそめたその時、雅の後方から言葉が放たれると、出口から溢れ出て来ていた水が一気に凍りつき、その動きを止めた。

「あっ…」

右手にかかっていた圧力が一気に消え、雅が少し気の抜けた声を漏らす。

「す、すみません。為介さん」

「ぜえゝん然、大丈夫だよおゝっ」

振り返った雅に、雅の後方に立った為介が、扇子を扇ぎながら、軽い口調で答える。

「今度、ボクの大好物奢ってくれたら、それでえっ」

「明日は満月でしたっけ？」

「あらあゝ？無視かなあ？雅くゝんっ」

奢らせようとする為介をあっさりとかわして、まるで違う話題を始めようとする雅に、為介が少し引きつった笑顔で問いかけを入れる。

「んなこと言ってる場合か？為介」

「ああ、ハイハイっ」

恵に鋭く言葉を挟まれ、為介が軽く頭を掻きながら頷く。

「言姫サマあゝ」

「……？」

為介の軽い口調で名を呼ばれ、和音がゆっくりと振り向く。

「またお水がドバンと来るかも知れませんがここは危険ですので、どこか安全なトコまで避難をおゝ」

「その方が良さそうですわね」

凍りついた大波を見上げながら、和音が冷静な表情で頷く。

「檻也、あなたはどうかしますか？」

和音が振り向き、隣に立っている青年、檻也へと問いかける。

「別に…自分の身くらい、自分で守る。お前だけ避難すればいい」

「そうですか。わかりました」

素っ気ない檻也の返事にも、慣れた様子で微笑みながら頷く和音。

「恵サンはどうしますう？」

「私も残るよ。一応、クソガキ共の引率者だからね」

「そうですかあゝじゃあ雅くうゝん、言姫サマを安全な場所まで、誘導してつてもらえるう？」

「えっ？あ、はい」

為介からの言葉に、少し戸惑いながらも、雅が素直に頷く。

「では、あちらへ」

「ええ、お願いしますわ」

誘導するべく右手をあげる雅へ、和音が柔らかな笑みを向ける。

「では、檻也。わたくしの分も、しっかりと観ていつて下さいね」
足を踏み出す前に、もう一度、檻也の方を見る和音。

「あなたの“お兄さん”の雄姿を」

「……っ」

『……………』

まるで強調するかのようにはっきりと言い放った和音のその言葉に、檻也の表情がかすかに動き、檻也を見ていた為介と恵も、それぞれ表情を曇らせる。

「では、失礼いたしますわ」

為介たちに微笑みを向けると、和音は、雅に誘導され、安全な場所へと案内されていった。和音の従者もそれに続き、その場に為介、恵、檻也の三人だけが残る。

「読めないお姫サマですねぇ」

「ああ。この上なく気に食わないっ」

どこか感心したように呟く為介の横で、あからさまに顔をしかめる恵。

「……………」

そんな二人から少し離れた所に立つ檻也が、鋭く瞳を細め、水浸しとなったモニターを見つめる。

「籠也…」

檻也が見つめるモニターの向こうには、金八と戦う、籠也の姿が映し出されていた。

Word. 20 讓レナイ勝負 (3)

遊園内、紅葉の森地点。

「シャコも負けたかあ」

流れた放送と、遊園の外へと流れ始めた水を見つめ、遊園内で噴き上げる巨大噴水の一つに乗った金八が、かすかに表情をしかめる。

「こりゃ、また大荒れだな。我が神はっ」

原始の森の方角を見ながら、金八が少し困ったように笑う。

「さてとお」

一つ、気合いの入った声を出した金八が、軽く首を回しながら、ゆっくりと振り返る。

「んじゃまあ、続きといこつかあゝ？加守っ」

「はあ…はあ…」

金八の振り返った先には、幹の半分以上が水に浸かった木の枝の上にしやがみ込み、苦しげに息を乱している簞也の姿があった。その手足には、いくつもの切り傷があり、赤い血が滲んでいる。

「これ以上、ウチの神キレさせたら、後が怖えからさあっ」

そっと微笑んだ金八が、言玉を持った右手を振り上げる。

「とっとと終わりにさせてもらうぜっ…？」

掲げられた言玉が、青色の光を放つ。

「霧吹け”っ…！」

「クっ…」

金八が言葉を放つと、簞也の周囲の水面から突如、冷たい蒸気が噴き上げ、辺りを深い霧が包み込んだ。霧に覆われ、見えなくなっていく景色に、簞也が険しい表情を見せる。

「また霧かっ…」

周囲の霧を見回しながら、警戒するように格子を身構える簞也。

「どこからっ…」

「“斬^きれ”っ」

「うっ…！」

何も見えないまま、その場に言葉だけが聞こえてくる。

「あっ…！」

空気を切るような鋭い音とともに、無数の水の刃が、簀也の後方から、簀也へ向かって飛んで来る。

「グっ…！あっ…！うあああああっ…！！！」

刃の来る方向に気付いた時には、すでに遅く、避ける時間すらなかった簀也は水の刃を直撃し、体中を斬り裂かれながら、勢いよく吹き飛ばされた。

「うっ…！」

吹き飛ばされた簀也が、覆っていた霧を抜け、近くの木の幹へと叩きつけられる。

「うあっ…！」

叩きつけられた後、そのまま水面に落ちそうになるところを、必死に格子を幹へと突き刺し、何とかその場で踏み止まる簀也。突き刺した格子を支えにして、何とか枝の上へと上がる。

「はあっ…！はあっ…！」

枝の上で膝をついた簀也が、先程よりもさらに苦しげに息を乱す。「思ってたより、全然弱えなあ」

正面から聞こえてくる声に、俯いていた簀也がゆっくりと顔を上げる。

「とんだ期待ハズレっ？」

「…っ」

噴水の上で嘲るような笑みを浮かべている金八に、簀也が顔をしかめる。

「一本では…やはり厳しいかっ…」

追い込まれながらも、冷静に言葉を発した簀也が、枝の上で立ち上がり、金八とは違う方向へと飛び出していく。

「んあっ？敵前逃亡かあ？」

「ふうっ」

金八が首を傾げる中、箆也が水面に浮かんでいる、残り五本の格子が作った囲いへと飛び移る。その中には、まだ気を失っている保が横たわっていた。

「ああ、お仲間んとこねえっ」

囲いへと入っていく箆也を見て、金八が納得したように頷く。

「抱^{かか}えろ」

箆也は右手に持っていた格子の一本に、保の体を抱え上げさせると、水面に浮いていた囲いを崩し、格子に抱えられた保とともに、近くの木の、一番上の枝の上まで移動した。

「囁が勝ったお陰で、出入口の封鎖は解かれた。ここまで水が上がりつつくることはないだろう」

その高い木の枝の上へと、箆也が保を寝かせる。

「悪いな。万全の状態でないと、勝てそうにないんだ」

眠っている保にそう言い放つと、箆也は六本の格子に取り巻かれながら、金八の近くの木の枝まで、飛び降りていった。

「囲いを解いて、本気モードって感じいい？」

「ああ、そういうことだ」

ニヤニヤと微笑みながら問いかけてくる金八に、箆也が六本の格子を一本にしながらか、はつきりと頷く。

「おおお、怖っ。泣いちゃうよお？俺っ」

言葉とは裏腹に、どこか楽しげに笑いながら、金八が言玉を持った右手を振り上げる。

「霧吹け」っ！

金八が言葉を発すると、先程と同じように、箆也の周囲の水面から冷たい蒸気が噴き上げ、箆也の周りを深い霧が包み始めた。

「……っ」

周囲を覆っていく霧を見つめながら、箆也が目つきを鋭く変える。
「掻^かき消せ」っ…！

箆也が言葉を放つと、格子が箆也の手の中から飛び出し、再び六

本に分かれ、箆也の周囲に広がって、箆也を中心に円形に勢いよく回転していく。その回転の風圧により、覆おうとしていた霧が、あつという間に消されていく。

「ありっ？」

霧の消えた箆也の後方には、言玉を構えた金八の姿。掻き消された霧に、目を丸くしている。

「まあいっか。“斬れ”っ！」

姿は明らかになってしまったが、それも構わずに、金八が箆也へと、先程と同じ、無数の水の刃を向けた。

「……………」

箆也は冷静な表情で振り向き、そっと右手を掲げる。

「返せ”っ”^{かえ}」

間を置くことなく箆也が言葉を放つと、回転していた六本の格子は、箆也の前で一点を中心に集まり、今度はその点を中心に回転して、まるで箆也を守る盾のようになって、向かって来ていた水の刃をすべて、金八へと弾き返す。

「おおっとっ！」

戻ってくる水の刃に、少し驚いたように声をあげる金八。

「拮抗”！”^{きつこう}」

金八が再び言葉を発すると、水面から向かってくるものとまるで同じ水の刃が生まれ、一本も数を違えることなく、互いを打ち消し合っていく。

「熟語も余裕で使うか…さすがは以附だな^{イデオム}」

「ふいっっ」

箆也が観察するように鋭く見つめる中、金八は自らの水の刃を防ぎきり、どこかホツとした様子で肩を落としていた。

「さっすがは安附だなあ。本気になったら、やあっぱ強えやつ」

「……………」

感心したような笑みを向けてくる金八に、箆也がそっと目を細める。

「どうするつもりだ…？」

「あっ？」

急に問いかけてくる箆也に、金八が大きく首を傾げる。

「あなたたちは神試験を滅茶苦茶にした。五十音士の規律を破^{やぶ}ったんだ」

「……っ」

箆也の言葉に、金八が少し眉をひそめる。

「僕たちを叩き潰したところで、この件は韻に伝えられる…伝えられれば、あなたの神は、神の称号を剥奪されることになるかも知れない…」

真剣な表情で、金八を見つめる箆也。

「そうなたら…いくら僕らの神を神でなくしたところで、無意味だろう…？」

「………」

笑みを止めた金八が、どうとも取れぬ見透かせぬ表情で、箆也を言葉を静かに聞いた。

「そうなたら、韻を叩き潰せばいいだけの話さっ」

「えっ…？」

思いがけない金八の言葉に、箆也が戸惑いの表情を見せる。

「それでもダメなら、今度は五十音の世界を叩き潰す」

そっと微笑み、言葉が続ける金八。

「俺は、俺の神が神である為なら、何だって叩き潰してみせる」

「……っ」

初めは驚きの表情を見せた箆也であったが、金八があまりに迷いなく言い放つので、驚いた顔も出来ずに、ただ複雑そうにしかめた表情で、金八をまっすぐに見つめた。

「俺は、神の“執着”に惚れた」

「執着…？」

「ああ。異常としか言いようないぜえ？」

聞き返す箆也に、金八が大きく頷きかける。

「あんなに“神”ってもんに執着してる神は、絶対、他にはいねえっ」

自信を持った表情で、強く言い切る金八。

「だから俺の神は、あの人しかいねえーし、世界中の神だって、あの人しかいらねえって、俺は思ってるっ」

金八が、どこか誇らしげに笑う。

「だから、あんたの神はいらねえーって、俺は思ってる」

「……………」

はつきりと言い放つ金八に、箆也の表情が曇る。

「それに、これは、神の意志だ」

さらに口端を吊り上げ、笑みを深くする金八。

「“すべては神の仰せのままに”が、俺ら、神附きのモットーだろっ!？」

強く言い放って、金八が再び、言玉を持っている右手を振り上げる。

「“変格”」

「……………」

金八が放つ言葉に、大きく目を見開く箆也。

「“鬼刀”^{きとう}っ…!」

「なっ…」

金八の右手の中で青く輝いた言玉が、その形状を変え、水で出来た先の鋭い、太身の刀へとなって、金八の右手の中に収まる。

「刀っ…あれが以団の変格…」

刀を構える金八を見つめ、箆也がそっと眉をひそめる。

「……………」

箆也は目を細め、表情を鋭くすると、広がっていた六本の格子を一本に戻し、右手で強く握り締めた。

「“変格”っ…」

格子が赤色の光を放つと、その下端部から、曲線を描いた鋭い刃が牙のように生え、格子が鎌へと姿を変える。

「そっちも変格ってか。俺、泣いちゃうよお？」

相変わらず“泣く”と言いながら、楽しげな笑みを浮かべる金八。
「カ行の五十音士は、各団の神附きの中でも、最も強いとされる五十音士っ」

水の刀を構えながら、金八が言い放つ。

「あんたと俺で決めようぜえ？ 安附と以附っ、どっちが強いかをなあっ……！」

「……っ！」

箆也と金八が互いに鋭い瞳を見せ、身構えた武器を、それぞれ振り上げた。

「“斬^きり裂け”っ……！」

金八が鬼刀を振り下ろすと、その刀身から分裂したように大きな水の刃が飛び出し、一直線に箆也へと向かっていく。

「“掻き消せ”……！」

鎌を振り切り、向かって来た水の刃を砕く箆也。刃を砕くと、箆也がすかさず鎌を振り上げる。

「“刈^かれ”っ……！」

振り上げられた鎌から赤い一閃が放たれ、目にも留まらぬ速度で金八へと向かっていく。

「“消^きえろ”！」

金八が言葉を放ちながら鬼刀を振り下ろすと、刀身から放たれた水飛沫が一閃へと飛び散り、火でも消すように、箆也の一閃も掻き消した。

「ふいっ、イイ勝負っ」

攻撃を防ぎ、満足げな表情を見せた金八が、振り下ろしていた鬼刀を持ち上げる。

「いっやあー、やあっぱ楽しみにしといて良かった……」

「“欠^かけろ”」

「へっ？」

しみじみと語っていた金八が、新たに聞こえてくる声に、目を丸

くする。箆也がその言葉とともに鎌を振り切ると、放たれた赤い一閃が、今度は金八の立っている噴水の下へと向かっていき、噴水の一部を、挟えぐり取るように欠けさせた。

「うわわわわっ！」

下部の欠けた噴水が一気に崩れ落ち、乗っていた金八も水面へと勢いよく落ちる。だが金八は水に沈むことはなく、水面がまるで地面かのように、その場に倒れ込んだ。

「痛ってえっっ」

水面に打ちつけた後頭部を押さえながら、ゆっくりと起き上がる金八。

「俺、泣いちゃうよぉ〜？」

「……っ」

「んあっ？」

後頭部を撫でながら、今度は本当に泣きそうな表情を見せていた金八が、上方に感じる気配に、ゆっくりと顔を上げた。

「これで」

金八の上空には、鎌を振りかぶる箆也の姿。

「終わりだっ」

「へへっ」

鎌を振り下ろす箆也を見上げながら、金八は焦った表情を見せることなく、どこか含みのある笑みを浮かべる。

「刈っ…！」

「禁きんじろ」

「うっ…！」

金八の鬼刀から小さな水の一滴が飛び、鎌を振り下ろそうとしていた箆也の喉へと当たると、言葉を放とうとした箆也の口の動きが止まり、言葉を発することが出来なかった箆也は、鎌を振り下ろすのをやめ、近くの木の上へと飛び移った。

「な、何だ？言葉がっ…」

「刈れ」は禁句タブーになっちまったぜえ」

「……っ」

戸惑っていた籠也が、水面の上で立ち上がる金八の言葉に、眉をひそめる。

「タブー……？」

「そっ。禁じられた言葉は、俺が言玉の力を解除するまで使えないっ」

「そんなことがっ……」

まるで罰ゲームでも説明するかのように、悪戯っぽく笑う金八に
対し、一層険しい表情を見せる籠也。五十音士にとって、言葉を封
じられるというのは、最も致命的なことである。

「“斬り裂け”っ！」

「……っ」

言葉を封じられたことに戸惑っている籠也に、金八が鬼刀を振り
上げ、先程と同じ、水の刃を放つ。

「“掻き消す……！”

“禁じろ”」

「えっ……？」

鎌を振り上げた籠也が発しようとした言葉が、またしても途中で
止まってしまう。

「うっ……！」

言葉を禁じられた籠也へと、迫る水の刃。

「うわあああああっ！」

掻き消すことの出来なかった水の刃をもろに食らい、籠也の体が
勢いよく斬り裂かれていく。

「うううっ……」

籠也の立つ枝に、ボタボタと流れ落ちる赤い血。脇腹から血を流
した籠也が、左手で傷口を押さえながら、少し苦しそうに体を屈め
る。

「これで“掻き消す”も禁句っ」

「クっ……」

冷たく微笑む金八に、箆也が厳しい表情を見せる。

「そろそろ終わりがねえ？ ええっ？ 加守っ！」

「うっ…！」

鬼刀を振り上げた金八が、水面を蹴り上げ、箆也の方へと勢いよく飛びかかってくる。

「かっ…！ あっ…！」

鎌を構え、言葉を放とうとする箆也であったが、ふと思い立ったように、その声を止める。

「下手に言葉を言っても…タブーが増えるだけかっ…！」

少し顔をしかめると、箆也が何も言わぬまま、ただ鎌を突き出した。

『……っ！』

箆也の鎌と、金八の鬼刀が、勢いよくぶつかり合う。

「何も言わないってのは、イイ判断だねえっ。けどっ」

「……っ」

そっと意味ありげに微笑む金八に、嫌な予感がして、箆也が表情を曇らせる。

「強化^{きょうか}」っ

「うううっ…！」

金八が言葉を放った途端、鬼刀の刃を受け止めていた鎌の刃先部分に、強い圧力がかかり、両手に押し掛かるその重みに、箆也が思わず表情を険しくする。

「へへっ」

そんな箆也を見て、楽しげに微笑みながら、金八がさらに口を開いた。

「“斬れ”」

——パアアアアン！

「……っ！」

金八の言葉とともに、鬼刀に強く押された鎌の刃部分が、一気に
砕き割れ、その残骸が周囲に飛び散る。ガラスの破片のように散っ
ていく刃に、箆也は大きく目を見開いた。

「なっ…」

「ああ、これで本当に終わっちゃうねえっ」

武器を砕かれ、啞然とする箆也へ向け、金八は微笑んだまま、躊
躇なく鬼刀を振り上げた。

「きん“刻め”っ…！」

「うっ…！」

振り下ろされた鬼刀から、無数の細かい水の刃が放たれ、平行に
空中を移動し、まっすぐに箆也のもとへと向かってくる。武器を砕
かれた箆也には、それをどうする術もなかった。

「うあああああっ…！！」

水の刃を浴びるように食らい、箆也が全身を勢いよく斬り裂かれ
る。

「うっ、ううっ…」

すべての刃を食らい終えた箆也が、その場に膝をつくその動作す
らも苦しそうにしながら、力なくしゃがみ込む。斬り裂かれた腕や
足からは、ボタボタと真っ赤な血が流れ落ちる。

「さあてとっ」

箆也の様子を見つめながら、金八が軽く左手を振り上げると、金
八の真下の水面が盛り上がり、金八を乗せたまま上昇して、金八を
箆也のいる枝のすぐ目の前へと運んだ。

「んじゃあ、そろそろ終わりにしよっか、加守っ」

「クっ…」

目の前にやって来た金八を、箆也がわずかに顔を上げ、睨み上げ
るように見つめる。

「これで決まるっ」

楽しげに笑いながら、金八がゆっくりと鬼刀を振り上げる。

「あんたと俺、どっちの神様が正しいかなあっ…！」

「グっ……！」

Word 20 譲レナイ勝負（4）

振り下りてくる刃に、箆也が強く唇を噛み締め、そして大きく口を開いた。

「かっ…」

「何言ったって、あんたの武器はもうっ…！」

「かまいたち鎌鼬”っ…！」

「何っ…？」

箆也の放った、その思いがけない言葉に、思わず振り下ろそうとしていた鬼刀を止めてしまう金八。箆也の言葉を受け、先程碎き割れ、周囲に飛び散った鎌の刃部分が赤く光り、強い風を巻き起こして、金八の周囲で吹き上がる。

「こ、これはっ…！」

周囲を取り囲む強い風に、金八が焦りの表情を見せるが、巻き起こった風は止まることなく、一斉に金八へと襲いかかった。

「うわあああああっ…！」

強い風に斬り裂かれ、金八が勢いよく吹き飛ばされる。

「うあっ…！ううっ…」

傷だらけとなって、水面に倒れ込む金八。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

まだ風の吹き荒れるその中心で、箆也が大きく肩を揺らしながら、乱れた呼吸を必死に整える。

「か…風、だとっ…？」

困惑したような、険しい表情を見せながら、金八が水面上で起き上がる。

「安団の言玉の形状は…武器じゃっ…そうかっ」

戸惑っていた金八が、急に納得した様子で頷く。

「あんたは安団とはいっても、一応は、あの“おひき於崎”の人間だったんだっけなっ…」

「……っ」

金八が口にするその名に、箆也の表情が曇る。

「ならっ、言玉の形状を自由に変えられるはずだぜっ…」

「はあ…はあ…」

座り込んだまま、互いを強い瞳で睨みつけ合う箆也と金八。

「神に成り損ねた五十音士かつ…確かに、あんたの力は、神附きの中じゃ抜けてんのかもなあっ」

金八が俯いたまま、箆也を称賛するような言葉を呟く。

「けど…けどなあっ…!」

金八が声を張り上げ、右手の鬼刀を振り上げる。

「“きょくせつ曲折”っ!」

「……っ!」

空中で蛇のように曲がりくねり、伸び上がった鬼刀の刀身が、箆也の胴体を縛るように、強く巻きつけた。

「クっ…!」

しゃがみ込んだまま胴と両腕を巻きつけられ、身動きが取れなくなる箆也。

「“きし軋め”っ…!」

「うっ…!ううああっ…!」

金八の言葉とともに、箆也を巻きつけた鬼刀の刀身が、きつく箆也の体を縛り上げ、すでに傷だらけの体を強く軋ませる。

「うっ…うううっ…!」

「俺はっ…」

苦しげな声をあげる箆也を見ながら、金八がゆっくりと口を開く。

「俺は…ただ、神を信じてっ…五十音士になった…」

———この世界に、神は俺一人でもいい……—

———俺を信じるなら、附いて来い……—

「俺の神は…あの人、たった一人だっ…」

「うううっ…！」

過去のイクラの言葉を思い返しながら、金八が鬼刀の柄を握る手に、さらに力を込める。金八が力を込めるほどに、箆也の表情は苦しげに歪んでいく。

「俺は、神が神である為なら、何だってするっ…！だからっ…！」
少し震わせた声を、大きく張り上げる金八。

「神になれなかったからって、仕方なく神附きやってるような奴にっ…！俺は負けたりしなねえんだよっ…！！」

「……っ！」

金八のその言葉に、苦しんでいた箆也が大きく目を見開いた。

「これでえっ…！んっ…？」

鬼刀を握る手に、さらに力を入れようとした金八が、ゆっくりと立ち上がっていく箆也に気づき、ふと眉をひそめた。すでに傷は重く、おまけに今は金八が鬼刀を巻きつけ、体の自由を奪っているのだ。箆也がそうすなりと、立ち上がれるはずがない。

「な、何だ…？」

金八が立ち上がり、戸惑うように箆也を見つめる。

「何で、動っ…」

「随分と…勝手なことばかり言ってくれるんだな…」

金八の言葉を遮るようにして、落とされる箆也の声。その声は、巻きつく刀身に苦しんでいる様子もなく、とても落ち着いたトーンの声であった。

「誰がいつ、“神になれなかったから、仕方なく神附きをやっている”などと言った…？」

「……っ」

そつと顔を上げた箆也の、その突き刺すような視線を向けられ、金八が思わず顔をしかめる。

「し、仕方なくやってんだろっ…？ちゃんと調べたから、知ってんだぜっ！」

どこかムキになるように、金八が強く言い返す。

「神に選ばれなくて、神附きになるしか道がなくてっ、だから苗字も“於崎”から、神附きの“神月”に変えたってっ：！」

「前まではな。でも今は違う」

「何っ：！？」

はつきりと言いつ放つ簞也に、戸惑いの表情を見せる金八。

「言葉もろくに覚えないし、聞き分けもヘツタクレもない、阿呆な神だが：」

簞也が金八をまっすぐに見つめ、真剣な表情を作る。

「僕の神だって、あの神、たった一人だ」

堂々と胸を張り、誇らしげに言いつ放つ簞也。

「あの神が神である為になら、何だって出来るっ：」

簞也が両手を、力強く握り締める。

「今は、安の神の神附きであることに、誰よりも誇りを持っているっ：！」

「うっ：！」

強く叫び、主張する簞也に、まるで気圧されるかのように、思わず足を数歩、後退させてしまう金八。

「だから、こんなところで：あなたに負けるわけにはいかないっ：！」

「なっ：！」

簞也がそう言い放った途端、簞也の体から強い赤色の光が放たれると、簞也を巻きつけていた鬼刀の刀身が、弾かれるように金八のもとへと戻って来た。

「こ、これはっ：！」

「“かえん火炎”っ：」

簞也の周囲から舞い上がるのは、簞也が放った光のように、赤々と燃え上がる大きな炎。

「火っ：！？ 今後は火かよっ：！」

「これで終わりだ」

炎を見つめ、険しい表情を見せる金八へ向け、簞也が冷静に右手

を向けた。

「“涸^かれる”…！」

「グっ…！」

箆也の言葉とともに、金八へと一斉に襲い掛かっていく、逆巻く炎。

「こんな火っ…！ “鬼とっ…！ ううっ…！？”

憶すことなく鬼刀を振り上げようとした金八であったが、足場の水が急に不安定になったことに気付き、戸惑うように足元を見下ろす。

「なっ…！」

箆也の炎により、遊園を埋め尽くしていた水が、あっという間に蒸発され、どんどんとその水位を下がらせていつていた。

「そ、そんなっ…！ 俺の、水がっ…！」

足元から崩れ落ちるように無くなっていく水に、金八が焦ったように声を出す。

「俺の水っ…ううっ…！」

金八が焦るように遊園内を見回していたその時、金八が握り締めていた右手の中の鬼刀も、箆也の炎の影響を受け、蒸気と化し始めていた。

「そ、そんなっ…！」

手の中で、形を失くしていく刀に、大きく目を見開く金八。

「神っ…！」

——わかつているな…？ 金八：——

「神っ…！」

イクラの姿を思い出し、金八が強く唇を噛み締める。そんな金八へと、赤々とした炎が迫った。

「うううっ…！ うああああああっ…！」

箆也の炎に包まれた金八は、激しい叫び声をあげながら、自らが

生んだ水とともに、遊園の下方へと崩れ落ちていった。

「はあ：はあ：」

炎に包まれたまま、水の中へと沈んでいく金八を見下ろしながら、
簞也が呼吸を乱す。

「ううっ：！」

強く顔をしかめ、その場に力なくしゃがみ込む簞也。すると簞也
を包んでいた赤い光が消え、次の瞬間、簞也の前に赤い言玉が転が
り落ちた。簞也の力に限界が来て、言玉が自動的に元の姿に戻った
のだろう。

「全部涸らすのは：さすがに無理、だったか：」

下方を見つめ、簞也がそっと呟く。まだ遊園内を浸す水は残って
いるが、それでも先程よりはかなり水かさが減り、水の下に地面が
見えるようにまでなっていた。

「これじゃあ傷の回復もっ：いや、それよりあの幾守きもりの言玉を：」

「へへへへっ：！」

「……っ！」

すぐ近くから聞こえてくる笑い声に、簞也が目を見開き、俯けて
いた顔を、勢いよく上げる。

「なっ：！」

「う：ううっ：」

顔を上げた簞也が、驚きの表情を見せる。簞也の居る木の正面の
木の上には、今、意識を取り戻したのか、険しい表情を見せる保の
首元に、鬼刀の刃を突き付けている金八の姿があった。

「た、高市っ：！」

「神、月くんっ：」

思わず身を乗り出す簞也の名を、保が弱々しく呟く。

「へへっ、残念だったなあ。加守っ」

「クっ：！」

保へと刃を向けながら、楽しげに微笑む金八に、簞也が大きく表
情を歪ませる。身を乗り出した体にも、すぐさま痛みが走り、簞也

は再び力なく体を屈めてしまった。

「さあっ、太守の命とあんたの言玉、物々交換といこうぜえっ？」

「なっ……！」

「……っ」

金八が提示する条件に、保が驚きの表情を見せ、箆也が眉間に皺を寄せる。

「そ、そんなっ……！」

「言ったら？俺は神が神である為なら、何だってするって」

険しい表情を見せた保が見る中、金八がその笑みを冷たいものへと変える。

「どんな汚い手だって使ってみせるっ……」

「………」

揺らぎのない意志を覗かせる金八を、目を細め、まっすぐに見つめる箆也。

「だ、ダメです……！神月くんっ……！俺のことなんて、構わないで下さいっ……！」

刃を突き付けられている保が、箆也へ向け、必死に声を張り上げる。

「俺一人の命で地球が救われるならっ……！あああ……！あっさり人質になっちゃってる俺なんかが、カッコつけたこと言っつて、すみませえ……んっ！」

「………」

いつの間にか、いつもの調子で謝り散らしている保の、人質に取られても緊張感のないその姿に、箆也が思わず呆れた表情を見せる。

「とにかく、俺なんかより地球をお……！」

「地球？何だあ？それっ。新手のギャグかあ……？俺、悪者役とか、泣いちゃうよお……？」

まだ叫び続ける保に、その言葉の意味がまったくわからず、金八が大きく首を傾げた。

「うるさい」

「んっ…！」

どこか煩わしそうに呟く簞也に、保が反射的に黙り込む。

「あなたは黙っている、もう何度も言ったはずだ」

保へと鋭い視線を向けながら、簞也が傷だらけの手を伸ばし、前方に落ちていた言玉をそっと拾いあげる。

「約束は守れよ」

「あっ…！」

拾いあげた言玉を、金八へ向けて投げ放つ簞也。飛んで来る言玉を見つめ、保が大きく目を見開く。

「ああっ」

頷きながら、簞也の言玉を受け止める金八。

「約束は守るぜえ？ 太守に手出しはしねえっ。けどっ！」

「うわっ！」

「あんたは倒しきらせてもらうぜえっ…！」

保を横へと蹴り飛ばした金八が、保の首元から離れた鬼刀を、しやがみ込んだままの簞也へ向けて、勢いよく振り上げる。

「“斬り裂け”っ！」

振り下ろされた鬼刀から、簞也へ向け、巨大な水の刃が放たれる。

「あっ…！」

蹴り飛ばされ、倒れていた保が素早く起き上がり、思わず身を乗り出す。

「神月くんっ…！」

「クっ…」

保が必死に名を呼ぶ中、そっと表情を歪める簞也。言玉を渡してしまった簞也には、それを防ぐ術はなく、すでに全身傷だらけのため、避ける行為すら出来はしない。

「グっ…！」

起き上がった保が、素早く言玉を取り出し、言玉の形状を変えていく。

「た、^{たす}“助ける”っ…！」

保の右手の中で、無数の赤い糸へと姿を変えた言玉が、金八の水の刃を追い越す速度で一気に伸び、籠也の目の前で何層にも重なり合って、大きな盾を作る。

「うううっ…！」

目の前で出来上がった糸の盾に、金八の放った水の刃が直撃する。その衝撃風に、籠也は思わず目を伏せた。

「ふはあゝっ」

何とか籠也を助けることが出来て、無数の糸を言玉の姿へと戻しながら、ホッとしたように胸を撫で下ろす保。

「そーいや、忘れてたぜえっ」

「へっ？あっ…！」

背後からの声に保が振り向いた途端、保が右手に握り締めていた言玉を、金八が素早く奪い取る。

「あんたの言玉も回収しねえとなっ」

「待っ…！」

「よっ」

「うっ…！」

奪い返そうとした保であったが、顔を上げるとすぐそこに、鬼刀の刃があり、動きを止めざるを得なかった。

「んじゃあまっ、確かに頂いてくぜえ？」

満足げに微笑むと、金八が噴き上げた水に包まれ、そのまま姿を消していった。

「あっ…」

水飛沫だけが飛び散り、先程まで目の前にあった金八の姿がなくなると、保は茫然とした表情で、ポツリと小さな声を漏らす。

「言玉がっ…」

「うううっ…！」

「えっ？あっ…！神月くんっ…！」

聞こえてくる苦しげな声に気づき、保が振り返ると、しゃがみ込んでいる籠也が、さらに苦しそうに傷だらけの体を抱え込んでいた。

保が慌てて立ち上がり、木の枝を飛び移って、箆也のもとへと駆け寄っていく。

「大丈夫ですかっ！？神月くん！」

心配そうに声を出しながら、箆也のすぐ横へと屈み込む保。

「はあっ！こんな存在自体が心配の種でしかない俺なんかが、一丁前に神月くんを心配しちゃってすみませえくんっ！」

「うるさい。傷に響く…」

すぐ横で謝り散らす保に、思わず表情を引きつる箆也。

「すみませんでした…」

「……？」

急に声のトーンを下げる保に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「俺のせいで、言玉をっ…」

「……っ」

申し訳なさそうに俯く保を見つめ、箆也がそつと目を細める。

「いい…」

「えっ？」

短く落とされた箆也の言葉に、首を傾げる保。

「神の言葉は…守った…」

——保のことを頼むっ——

噴き上げる水の中で別れた時の、アヒルの言葉を思い返し、箆也がそつと呟く。

「これで…いいっ…」

「あっ…！」

言葉を言い終えると、箆也がその瞳を閉じ、ゆっくりと倒れ込んでいく。

「神月くん…！神月くんっ…！！」

保の箆也を呼ぶ声が、静かになった紅葉の森に、響き渡った。

く以団“幾守”、安団“加守”、“太守”、両名の言玉を奪取。現在の言玉数、安団、三。以団、三。以上＞

遊園外、モニター前。

「大したもんだな…」

モニター越しに、籠也と金八の戦いを見終えた恵が、倒れた籠也を見つめながら、どこか感心したように声を漏らす。

「あの神月籠也に、あそこまで言わせるとは…」

「……っ」

その恵の言葉を聞きながら、恵よりも後方で同じようにモニターを見つめていた檻也が、そつとその表情を曇らせる。

「無様なものだ…」

傷だらけで倒れ込んだ籠也の姿を見つめ、冷たく吐き捨てる檻也。

「……………」

「んんん？どこへえっ？」

モニターに背を向け、足を踏み出そうとした檻也に気づき、為介が軽い口調で声を掛ける。その声に足を止めた檻也は、再びモニターの方を振り向いた。

「帰るんだ。これ以上見ている、時間の無駄だからな」

「ああ、そうですかあ」

はつきりと答える檻也に、為介があまり興味なさそうに頷く。

「じゃあ、俺はこれで…」

「まあ待てよっ」

「……っ」

もう一度去ろうとした檻也に、今度は恵が声を掛けた。

「ついでだ。見ていったら、どうだ？」

檻也の方を振り向いた恵が、そつと口元を緩める。

「お前の兄貴が神と認めた、“安の神”って奴をっ」

「……………」

鋭く微笑む恵に、檻也は少し目を細め、籠也とは別のモニターに映るアヒルの姿を視界へと入れた。

Word. 21 神 vs 神 (1)

言ノ葉町の小さな八百屋さん『あさひな』。

「こんにちはあつ」

「んおっ？」

夕方の買い物客も落ち着き、店主である朝比奈家の父が店先でゆつくりとしていたその時、休日のため、いつもの制服姿ではなく私服を纏った紺平が、『あさひな』へとやって来た。

「おおお！紺平くうくんっ！」

「こんにちは、オジさん」

立ち上がって紺平を出迎える父に、紺平が柔らかな笑みを浮かべる。

「あの、ガア居まっ…」

「休日でお父さんに会えないからって、会いに来てくれたんだねえ〜！この胸に飛び込んでおいでえ〜！」

「えっ？いや、そのっ…」

勢いよく両手を広げる父に、紺平が引きつった表情を見せる。

「おおおっ、紺平じゃねえか」

「あつ、スズメさん！」

「あらっ？」

店の奥の居間からスズメが顔を出すと、紺平が助かったとばかりに父の両手をぐり抜け、居間の方へと駆け寄っていった。去っていく紺平に、父が手を広げたまま、間の抜けた顔を見せる。

「あのっ、今、ガア居っ…」

「お前もグループ交際かあ？」

「へっ？」

問いかけようとした紺平が、スズメの言葉に、首を傾げる。

「グループ、交際っ…？」

「いいよなあゝ恋盲腸並みにトキメキ度高い単語だぜえゝ」

「グループ交際じゃなくて、グループ学習だからゝスズメゝ」

「あ、ツバメさんっ」

スズメの言葉を訂正しながら、居間にツバメが姿を現す。

「紺平くんも課題あるんでしょゝゝ？ 大変だねゝ」

「課題？」

「グループ課題あるからゝ籠也くんたちの家に泊まってるんでしょゝ？ 今日も帰れそうにないってゝ」

「えっゝ」

ツバメの言葉に、紺平がそっと目を開く。

「あれゝ？ 違ったゝ？」

「えっゝ！？」

紺平の反応に首を傾げ、戸惑うように聞き返すツバメに、紺平が少し慌てた様子で声をあげる。

「そ、そういうばそうでした！ 俺、神月くんたちの家行こうとしてたのに、ついコッチ来ちゃってっ」

「ハハっ、そりゃ習性だな、習性っ」

無理やり笑みを作り、明るく言い放つ紺平に、横で聞いていたスズメが軽い笑みを零す。

「じゃあ俺、神月くんたちの家行きますんでっ」

「晩御飯とか何か差し入れしようかゝ？ どうせ野菜だけどゝ」

「どうせってヒドいゝ！ ツーくゝんっ！」

ツバメが棘のある発言をすると、聞き逃すことなく、父が店の方から叫び声をあげてくる。

「だ、大丈夫です！ みんなで色々、持ち寄ってるしっ！」

ツバメの好意に、紺平が小さく手を揺れ動かしながら、笑顔で断りを入れる。

「じゃ、じゃあっ、俺はこれで！」

「うんゝ」

「おう、またなあっ」

「またいつでも会いに来てねえ！紺平くうんっ！」

紺平が軽く頭を下げると、父、スズメ、ツバメの三人に見送られ、慌てて『あさひな』を出て行く。店を出ると、紺平は足早に歩を進め、すぐ隣にある、籠也たちの住んでいる家の前へとやって来た。

「さつき来たけど…留守だったんだよなあ。電気も点いてないし、それに…」

浮かない表情で、ゆっくりと家を見上げる紺平。もう日も落ち、薄暗いというのに、その家はどの部屋の電気も点いておらず、静まり返っていて、とても人の気配などしなかった。

「課題なんて…出てないし…」

そっと俯き、紺平が眉をひそめる。

「どこ行っただろ？ガアたち…」

紺平が、どこか不安げに呟いた。

午後六時五十分（神試験スタートから五時間半）。

言ノ葉の森遊園内、雪国の森地点。

「ふうっ…」

シャコとの戦いを終えた囁が、囁の言葉『遮れ』により守られ、水の中に沈んだままとなっていた七架を引き上げ、自分の立つ木の上へと寝かせると、ホッとしたように一つ、息を吐いた。

「さつきより…水かさが低くなった感じだけど…」

<以団“幾守”…>

「んっ…？」

下に広がる、相変わらず遊園内を埋め尽くしている水を見下ろしていた囁が、そこへ入ってくる放送に、ゆっくりと顔を上げる。

<安団“加守”、“太守”、両名の言玉を奪取。現在の言玉数、安団、三。以団、三。以上>

「えっ…」

伝わる放送内容に、囁の表情が曇る。

「負けた…？ 箆也が…」

少し考え込むように、俯く囁。

「珍しいわね…ん…？」

そっと呟いていた囁が、壁の方から聞こえてくるかすかな音に気づき、振り向く。囁が振り向いて見ると、入口から続く遊園内の白い壁に、大きくヒビが入っていた。

「中の水が、一斉に飛び出した時に出来たのね…」

そのヒビ割れは、遊園内のあらゆる所に出来ており、ドーム状の天井にまで続いていた。

「これ以上、衝撃を加えたら…遊園ごと、崩れ落ちてしまうかも知れないわね…」

「囁！ 奈々瀬！」

「んっ…？」

聞こえてくる大きな声に、囁が今度は逆方向を振り向く。

「アヒるん…」

「よっ」

『^あ上がれ』の言葉で空を飛んでいたのであろうアヒルが、上空から囁たちの姿を見つけ、二人のいる木の上へと降りてくる。

「大丈夫かっ？」

「ええ…気を失ってるだけで、傷はもう箆也が…」

「それは奈々瀬のことだろ？」

「えっ…？」

遮るアヒルの言葉に、囁が少し目を丸くする。

「お前は大丈夫なのか？」

「あ…え、ええっ…ちよっと言葉を使い過ぎちゃったけど…大丈夫よ…」

「傷は？」

「動けないほどじゃないわ…」

「そうか」

どこか戸惑うように答える囁の言葉を聞き、アヒルが安心したような笑みを浮かべる。

「私たちのことより…箆也と転校生くんの方を気にした方がいいんじゃない…?」

「へっ?」

「へって…」

間の抜けた表情を見せるアヒルに、囁が少し表情をしかめる。

「聞こえなかったの…? さっきの放送…」

「ああ、聞こえてたけど」

「箆也が負けたのよ…? 下手したら、二人とも、もうこの世にいないかも知れなっ…」

「大丈夫だって」

「えっ…?」

笑顔を見せるアヒルに、囁が首を傾げる。

「箆也のことだから、俺のワガママ聞いて、言玉奪われても、生き残ることを優先してくれたんだろっ」

「……っ」

箆也を信頼しきった笑みで答えるアヒルに、囁は驚いたように、思わず大きく目を見開いた。

「いつの間にか、随分と出来上がってるものね…信頼関係って…」

「へっ?」

「いいえ…何でもないわ…フフフっ…」

聞き取れなかったのか、大きく首を傾げるアヒルに、囁は誤魔化すようにそっと笑みを向けた。

「けどっ…」

「……?」

ふと眉をひそめ、上空を見上げるアヒルに、囁が首を傾げる。アヒルの見つめる先を目で追っていくと、先程まで囁が見ていた、大きくヒビの入った天井が映っていた。

「そうね…今、生き延びていても…ここが崩れ落ちたら、全滅だものね…フフフっ…」

「ちよっと楽しそうに言うなよっ…」

不気味に微笑む囁に、顔を下ろしたアヒルが少し顔をしかめる。

「ああ、そうだ…アヒるん、之守しもりの言玉を…」

「囁」

「ん…？」

シャコから奪った言玉を渡そうとした囁が、真剣な表情で名を呼ぶアヒルに、手を止める。

「何…？」

「奈々瀬を連れて、ここを出てくれないか？」

「えっ…」

アヒルのその思いがけない言葉に、囁が一気に表情を曇らせる。

「万が一、ここが崩れ落ちても大丈夫のように、安全な所まで避難してほしいんだ」

周囲を見渡しながら、アヒルが言葉を続ける。

「戦った後で、傷もあるお前に、こんなこと頼んで悪いって思うんだけどっ…」

「アヒるんは…？」

「へっ？」

アヒルの言葉を遮り、囁がそっと問いかける。

「アヒるんは…一緒に、行かないの…？」

「……っ」

囁にまっすぐな瞳を見せられ、アヒルが少し目を細める。

「俺は、ここに残る」

「……………」

はつきりと答えるアヒルに、少し険しい表情を見せる囁。

「どうして…？この試験はもうすでに、神試験と呼べるものではないわ…」

鋭い表情で、囁がアヒルへと問いかける。

「ここを抜け出た所で…失格になることは無いわよ…?」

「俺はっ…」

少し口元を緩め、アヒルがゆっくりと口を開く。

「俺は、まだ何にも応えてないからっ…」

「応、える…?」

「箆也、囁、保、奈々瀬…それに灰示もっ…みんな、必死に戦ってくれたっ」

アヒルが銃を握り締める右手に、グツと力を込める。

「俺みたいな神の、神試験の為にっ…」

「アヒるん…」

「だから俺は、それに応えるまで、ここからは出れないっ」
「……っ」

晴れやかな笑顔を見せ、はっきりと言い放つアヒルに、囁はそつと目を細めた。アヒルの瞳から伝わってくる想いはとてもまっすぐなもので、囁が止める気にもなれないようなものだった。

「わかったわ…奈々瀬さんを連れて、ここを出る…」

「サンキュ、囁っ」

頷く囁に、アヒルがさらに笑顔を見せる。

「じゃあ、これ…」

「おうっ」

囁からシャコの言玉を受け取り、アヒルが左手に持っていたプレートへと、その言玉を入れる。プレートには、青い言玉が三つとなつた。

「それから、これも…」

「へっ?」

そう言って囁が次にアヒルへと差し出したのは、赤色の言玉であつた。

「これって…」

「私の言玉よ…」

「へっ? 囁の?」

囁の言玉を右手に受け取り、アヒルが戸惑うような表情を見せる。
「何でっ…」

「その言玉は…私以外の人間が手にしたら…その人間の生気を吸い取っていくの…」

「ぎゃああああああっ!」

「嘘よ…フフフっ…」

不気味な囁の言葉に、受け取った言玉を掲げながら、騒ぎ立てるアヒル。そんなアヒルを見て、囁が楽しげに微笑む。

「そんなわけないじゃない…フフフっ…」

「お前が言うと、そんなわけあるように聞こえるんだよっ」

微笑む囁に、しかめた表情を向けるアヒル。

「一度、外に出たら…もう試験にも参加出来なくなるだろうし…その言玉はアヒルんが持っていて…」

不気味だった笑みを穏やかなものへと変えて、囁がアヒルを見つめる。

「私の…私たち安団の想い、託すわよ…神」

「……っ」

囁の笑顔に、アヒルも同じように微笑んで見せる。

「ああっ!」

囁の言玉を握り締め、アヒルは大きく頷いた。

遊園内、原始の森地点。

「………」

遊園を埋め尽くす水の水面に浮かび上がった、水で出来たソファのような大きな椅子。その上に、いつもながら険しい表情を見せたイクラが、深く腰を下ろしていた。

「か、神っ…!」

そこへ、水面を蹴るように走りながら、籠也に勝利した金八が、

どこか嬉しそうな笑みを浮かべながら、少し急いだ様子でやって来る。

「神っ…！俺、やったぜえ！」

金八が籠也と保、それぞれから奪った二個の赤い言玉を掲げ、声を張り上げる。

「あいつ等からっ…言玉、二個も奪ってきてやったんだ！」

駆け込んできた金八が、座っているイクラの前までやって来て、その足を止める。

「これで、あいつ等と俺たちの言玉が同じ数にっ…！」

「金八…」

「へっ？」

興奮気味に話していた金八であったが、どこか冷たく呼ぶイクラの声に言葉を遮られ、戸惑うように首を傾げた。

「神、何っ…」

「俺がいつ…“言玉を奪って来い”と言った…？」

「……っ」

静かに問いかけるイクラに、金八の表情が曇る。

「俺は、“安の神と安団を叩き潰して来い”と、そう言ったはずだが…？」

「そ、それはっ…」

鋭く、まるで睨みつけるように注がれる視線に、金八がさらに表情を曇らせ、イクラの顔を直視することが出来ないのか、深く俯いてしまう。

「それはっ…」

「俺の言葉が…わからなかったか…？」

「そ、そんなことっ…！」

イクラのその問いかけを、金八が顔を上げ、必死に否定する。

「なら…俺ごときの言葉は、聞けないか…？」

「ち、違うっ…！」

金八が何度も首を横に振り、イクラへと強く訴える。

「俺は、あんたの為にっ…！あんたの言葉なら何だってっ…！」

「俺の言葉が聞けぬ者など、俺はいらない…」

「えっ…？」

さらに言葉が続けようとした金八へと、イクラが目にも留まらぬ速さでそっと、その右手を振り払った。

「うあああああっ…！！」

強く振り払ったとも思えぬイクラの手に当たり、金八が勢いよく吹き飛ばされる。後方の木へと背中を叩きつけられた金八は、上昇した水面の上に、うつ伏せに倒れ込んだ。

「一応、これは貰っておくぞ…」

振り払った時に奪ったのか、イクラの右手の中には、箆也と保の赤い言玉と、そして金八自身の青い言玉の三つが握り締められていた。

「か、神っ…」

倒れた金八が、まるで救いを求めるように弱々しく、神という単語を呟く。

「なん、でっ…」

「何故だと…？わかりきった問いかけをするな…」

箆也たちの言玉をプレートに、金八の言玉を懐に入れ、自由になった右手を、イクラが倒れたままの金八へと向ける。

「神の言葉は絶対。それに従えぬ者には…」

イクラの瞳が、冷たく光る。

「死、あるのみ」

「ううっ…！」

向けられる冷たい視線とその右手に、金八の表情が凍りついた。

「神っ…！ま、待っ…！」

「“逝い”…」

「うううっ…！」

金八の声に止まることなく放たれる、イクラの冷たい言葉。イクラの右手から放たれた青い閃光が、動くことも出来ない金八へとま

っすぐに向かっていく。

「クっ…！」

向かってくる青い光に、金八は強く唇を噛み締め、目を閉じた。

——パアアアアン！

イクラの放った光が、金八の倒れている場所へと勢いよく落ち、周囲の水が高々と噴き上がる。

「……………」

その噴き上がる水を、静かに見つめるイクラ。

「そんなものを助けて、どうするつもりだ…？」

誰へともなく問いかけながら、イクラがゆっくりと視線を上げていく。

「安の神…」

「……………」

イクラが見上げた先には、左手に金八を抱え、右手に銃を持って、上空に浮かんでいるアヒルの姿があった。金八は気を失ってしまったのか、アヒルに抱えられたまま、深く俯いている。アヒルは鋭い表情を見せたまま、上空を移動し、近くの木の上へと降り立った。

「か…み…」

「……………」

木の上へと金八を下ろすアヒルであるが、金八がうわ言のように呟いたその言葉に、そっと眉をひそめた。

「てめえ…こそ、自分の仲間は何してやがんだよ？」

アヒルが振り向き、イクラへと強い視線を送る。

「以の神」

その表情に怒りを滲ませるアヒルを見つめ、イクラが口元を緩ませる。

「そいつは俺の、神の言葉に逆らった…」

薄く笑みを浮かべながら、イクラがアヒルの問いかけに答えるよ

うに、言葉を放つ。

「神の言葉は絶対だ：聞けぬ者など、生かしておく価値もない：」
「……っ」

そのイクラの言葉に、大きく顔を歪ませるアヒル。

「そんな神っ：」

もう一度、金八を見た後、アヒルが勢いよく顔を上げる。

「俺が認めないっ：」

アヒルが右手に持った銃の銃口を、鋭くイクラへと向ける。

「俺を認めるのは、貴様ではない：」

アヒルの言葉を否定しながら、イクラがゆっくりと、腰掛けていたその水の椅子から立ち上がる。イクラが立ち上がると、すぐにその水の椅子は崩れ落ち、下の水と一体化した。

「俺を神と認めるのは、世界だ」

イクラがはっきりと言い放ち、懷から青色の言玉を取り出した。

Word 21 神 vs 神 (2)

遊園外、モニター前。

「いよいよ神戦か…」

モニターの中で向き合ったアヒルとイクラの姿を見つめながら、恵が真剣な表情で呟く。

「戦いと呼べるものになればいいですけどねえ」

「……っ」

意味深な言葉を放ちながら、そっと笑みを浮かべる為介の方を振り向き、恵が少し眉をひそめた。

「ふう…」

「んんっ？」

モニターを見ていた為介が、右方から聞こえてくる声にゆっくりと振り向く。

「おっ」

「あら」

為介が振り向くと、水が止めどなく流れる遊園の入口から、七架を肩に背負った囁が姿を現した。為介と囁が目を合わせ、互いに短い声を発する。

「皆さん、お揃いで見物…？」

七架を近くの地面に横たわらせながら、囁が為介たちへと声をかける。

「じゃあ状況説明は、しなくても良さそうね…あら…？」

「……………」

囁が、為介や恵から少し離れたところに立っている、檻也の姿に気づき、そちらを見る。囁に視線を向けられると、檻也は俯き、そっと視線を逸らした。

「あなたは…」

「傷治したげるよぉ〜真田さぁ〜ん」

「えっ…？あ、ええっ…」

檻也に言葉をかけようとした囁の声を遮り、為介が囁のもとへと歩み寄ってくる。

「“癒^いやせ”…ホイっ」

為介が言葉を放った後、囁へ向けて扇子を扇ぐと、扇がれた扇子から淡い青色の光が零れ落ち、傷ついた囁の体を包み込んだ。光に包まれ、囁の傷が見る見るうちに塞がっていく。

「箆也と転校生くんは…？」

「生きてはいるよお〜まだ遊園内だけど」

「そう…」

為介の答えに、囁がどこか浮かない表情を見せる。

「アヒるんは…？」

「今から戦うとこだよ」

さらに問いかける囁に、為介が瞳を鋭くしながら、再びモニターの方を見つめる。

「もう一人の、神様とね…」

「……っ」

為介に続くようにしてモニターを見つめ、囁は少し険しい表情を見せた。

——ブー！ブー！

『……っ？』

鳴り響くブザー音に、アヒルとイクラが、戸惑うように顔を上げる。

＜再度、お知らせいたします。ただいまの言玉数、安団、三。以団、三＞

静かな原始の森に響き渡るように、もう聞き慣れてきた、放送が

流れる。

＜安団“左守”、“奈守”、以団“知守”、“仁守”、計四名の、神試験会場からの離脱を確認。これにより、四名の神試験参加資格を剥奪＞

「……っ」

囁と七架が無事、会場を出たことを知り、アヒルが少し安心したような表情を見せる。

＜また、安団“加守”、“太守”、以団“幾守”、“之守”の計四名を、戦闘続行不可能状態と認めます＞

その放送を聞きながら、アヒルが横で倒れている金八へと目を落とす。

＜以上により、ただいまの神試験参加者は安団“安の神”、以団“以の神”、以上二名＞

『……………』

アヒルとイクラが、互いを強く見合う。

＜残り二個の言玉を、それぞれの神が所持しておりますので、この勝負に勝った神を、神試験の勝者いたします＞

「神試験としては、お誂えむきの展開あつらというわけか…」
放送を聞きながら、イクラが少し肩を落とす。

「計画とは違うが…まあいい」

どこか諦めたように言い放ち、イクラがゆっくりとアヒルと向き合う。

「ここで貴様を叩き潰せば…それで済むことだ」

「……っ」

余裕の笑みを浮かべるイクラに、アヒルが少し顔をしかめる。

「やれるもんなら、やってみやがれっのっ！」

アヒルが大きく声をあげ、銃を握る手に力を込める。

＜では神試験最終戦、“安の神” v s “以の神”、始めて下さい＞
「……っ！」

放送の声を合図に、アヒルが鋭い目つきを見せる。

「色々考えてたって仕方ねえ、まずは先制っ…！」

アヒルの銃口が、イクラへと向く。

「“当たれ”っ…！」

アヒルの言葉とともに、赤い光の弾丸が、銃口からイクラへ向けて放たれる。

「“当たれ”か…」

向かってくる光の弾丸を、冷静な表情で見つめるイクラ。

「面白い…」

「……っ」

そつと言玉を持った右手を掲げるイクラに、アヒルが眉をひそめる。

「“諫めろ”」

イクラの言葉に反応し、イクラの右手の言玉が、強い青色の光を放つと、イクラの立っている水面の周囲から、自動的に水が噴き上げ、アヒルの放った弾丸の上空に、鎮火するように勢いよく降り注いだ。

「あっ…！」

水に叩き落とされる弾丸に、アヒルが思わず目を見開く。

「“い”の言葉かつ」

「貴様の武器は銃だったな、安の神…」

表情を曇らせるアヒルに、イクラがゆっくりと話しかける。

「ならばこちらも、それに合わせるとしよう…」

「何っ…？」

イクラの意味深な言葉にアヒルが首を傾げる中、イクラが掲げていた右手を下ろし、言玉を大きな手で包み込むように、強く握り締める。

「あれはっ…」

言玉を握り締めたイクラの右手から、水が溢れ始め、その水が銃のような形を作り始める。言玉が銃身に埋め込まれた水の銃を、イクラがそつと構え、その銃口をアヒルへと向けた。

「水の、銃…？」

「さあ、銃撃戦といくか…」

イクラが軽く口元を緩め、水で出来た引き金を引く。

“射れ”」

その言葉とともに、銃口から、水の粒が勢いよく放たれた。

「水鉄砲かあ…？」

飛んで来る水粒を見つめ、暢気に首を傾げているアヒル。

「……っ」

「んっ？」

薄く微笑んでいるイクラに気づき、アヒルがふと、その表情を曇らせる。

「何かヤバそうだなっ」

額から汗を流し、顔をしかめたアヒルが、銃を持っていない左手で、近くに倒れている金八を抱え上げ、素早く銃口を自分のコメカミへと向けた。

「“上^あがれ”！」

アヒルが引き金を引き、自らに銃弾を放つと、赤い光がアヒルの体を包み込み、アヒルの体が勢いよく上昇していく。アヒルが上空へと逃れると、目標を失ったイクラの水弾が、先程までアヒルの立っていた木の幹へと、直撃した。

——バアアアアン！

「んなっ…！」

水弾に当たり、いとも簡単に碎き折れて、水面へと沈んでいくその木に、上空のアヒルが思わず大きく目を見開く。ただの水の弾丸だというのに、とんでもない強度である。

「水鉄砲なんて、可愛いもんじゃねえなあ」

水底に沈んでいく木を見下ろしながら、少し表情を陰しくするアヒル。

「あんなもん喰らったら、一発だな。避けて良かったあ」

しみじみと呟きながら、アヒルが近くにある別の木の上へと降り、気を失ったままの金八を横たわらせる。

「コイツ、巻き込まねえように、ちょっと離れるか」

そう言って、アヒルが再び、自分のコメカミへと銃口を向ける。

「^あ上^あがれ」

弾丸を浴びて空へと飛び上がり、金八から遠ざかるように、上空を移動していくアヒル。

「金八を巻き込まぬための配慮か…ご苦労なことだな」

移動していくアヒルを見上げながら、イクラがどこか呆れたように呟く。

「まあ、それもいい…“行^いけ”」

イクラが自らの言葉を呟くと、銃に埋め込まれている言玉が青く輝き、イクラの立っている水面が自発的に動き出し、移動していくアヒルを追うように、流れていく。

「この辺りでいっか」

金八とある程度、距離を置いた位置まで来ると、アヒルが上空で体を止める。そこから一分も経たぬうちに、水の流れに乗って、イクラがその場へと姿を現した。

「脆弱な者を助け、恩を売り、それで神気取りか…？」

「……っ」

現れるとすぐに問いかけを向けるイクラに、アヒルが少し眉をひそめる。

「無理やりにでも人を助ければ、神になれるとも思っているのか…？ 樂觀的なものだな、安の神」

「んんっ」

言葉を続けるイクラに、上空に浮いたまま、大きく首を捻るアヒル。

「俺は別に、そんな風には…」

“神の救い”など、所詮、幻想だ」

自分の意見を述べようと、口を開いたアヒルの声を、イクラが勢いよく遮る。

「“祈り”になど、何の意味もないっ…」

「……っ？」

どこか煩わしそうに言い放つイクラに、アヒルが戸惑うような表情を見せる。

「おまっ…」

「神に必要なのは、“救い”などではない」

またしても、声をかけようとしたアヒルの声を、イクラが遮る。

「“力”だ」

鋭く微笑んだイクラが、上空のアヒルへ向けて、銃を構えた。

「“射れ”…！」

「うっ…！」

イクラが引き金を引くと、数発の水弾が、上空にいるアヒルへ向けて、まっすぐに飛んで来る。

「“当たれ”っ…！」

向かってくる水弾へ向け、アヒルも銃を構え、赤い光の弾丸を放った。アヒルの弾丸は、アヒルの言葉に乗り、寸分と違えることなく、真正面からイクラの水弾へ直撃する。

「あっ…！」

正面からぶつかり合った二つの弾丸であったが、ぶつかったその瞬間に、イクラの水弾がアヒルの光弾を掻き消し、速度を変えることなく、そのままアヒルへと向かっていく。

「クっ…！」

迫り来る水弾に険しい表情を見せながら、銃口をコメカミへと向けるアヒル。

「“上^あがれ”！」

アヒルが自らへと弾丸を放ち、さらに体を上昇させ、向かって来ていた水弾から何とか逃れる。

「ふうっ」

ドーム型の天井すれすれのところまで上がり、アヒルが深く息を吐く。

「碎かれた…灰示の針ん時は相殺出来たのにつ…」

少し眉をひそめたアヒルの額から、一滴の汗が流れ落ちる。

「完全に力負けしてるってことかよっ」

「その程度か…？安の神」

表情を曇らせるアヒルを見上げながら、イクラがどこか余裕の笑みを浮かべる。

「拍子抜けだな…」

「うっ…！」

再び銃口を向けてくるイクラに、アヒルの表情が歪む。

「ク、クソっ…！」

「遅い…」

慌てて銃を構えようとするアヒルに、イクラがはっきりと言い放つ。

「射れ」

「あっ…！」

アヒルが銃を構える間もなく、イクラがアヒルへ向けて水弾を放った。引き金も引けず、これ以上、上昇するスペースもないアヒルのもとへと、躊躇うことなく水弾が飛んでいく。

「うわああああっ…！」

水弾がアヒルを直撃し、アヒルの激しい悲鳴が響き渡った。

「脆いものだ…」

「…っ」

「ん…？」

水弾に撃たれたアヒルを、涼しげな表情で見上げていたイクラが、すぐに叫び声を止め、赤い光に包まれていくアヒルに気づき、ふと眉をひそめる。

「あれは…」

イクラが見つめる中、水弾に射抜かれたはずのアヒルの体が、赤

い光となって周囲へと散っていく。

「幻覚……？」

「“欺^{あざむ}け”……」

「……っ」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、イクラが表情を険しくし、素早く振り向く。イクラの背後には、水弾に貫かれたらしき傷など一つもないアヒルが、イクラの背へと銃を構え、水面上に浮かんでいた。

「貴様……」

「喰らいな」

アヒルが目つきを鋭くし、躊躇うことなく引き金を引く。

「“当^あたれ”……！」

「クっ……！」

振り向いたところのイクラが、向けられる弾丸に、冷静だったその表情を崩す。

「うあああああ……！」

アヒルの弾丸を喰らい、今度はイクラの叫び声が、原始の森へと響き渡った。

「よしっ……！ やった……！」

響く叫び声に、思わず笑みを零すアヒル。

——パアアアアン！

「えっ……」

だが、笑みを零したのも束の間、次の瞬間、弾丸を喰らったイクラの体が、水飛沫となって周囲に飛び散り、見つめていたアヒルが戸惑いの表情を見せた。

「これって……」

「“偽^{いつわ}れ”……」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、アヒルが大きく目を見開いて振り向

く。アヒルが振り向くとそこには、先程のアヒル同様、傷一つないイクラが、前と同じ涼しげな表情で水面に佇んでいた。

「“偽れ”……あっちも幻覚をつ……」

「専売特許じゃなくて、残念だったな……」

動揺を見せるアヒルを、イクラが落ち着いた表情で見つめながら、素早く右手の水銃を構える。

「“逝^いけ”……」

「うっ……!」

冷たい言葉とともに、アヒルへ向けて放たれる水弾。今度は幻覚を作り出す間もなく、アヒルがその表情を歪める。

「うわあああああ……!!」

幻覚ではなくアヒル自身に水弾が直撃し、辺りの水面にアヒルの赤い血が飛び散った。

Word 21 神 vs 神 (3)

「アヒるん…！」

地面に座り込み、モニターを見つめていた囁が、水弾に倒れるアヒルの姿に、思わず身を乗り出す。

「うっ…」

「ほおーら、動かなあーい。まだ傷の手当て、終わってないんだからあー」

身を乗り出した囁が、苦しげに体を屈めると、横に立っている為介が、注意するように言い放った。囁はまだ、シャコとの戦いで負った傷を、為介に治してもらっている途中なのである。

「今日は随分と時間がかかるのね…この前は一瞬だったじゃない…」

「言葉の力で負った傷は、治りが遅いんだよお」

文句をつけるように呟く囁に、為介が軽い笑みを浮かべながら答える。

「それにしても…欺きの弾丸までかわされるなんて…」

「やっぱ強いなあーイクラクくんはあ」

扇子を囁へと向けたまま、顔だけをモニターへと向け、感心するように言う為介。

「ああ。強い上に、トンビの使う言葉をよく調べてある」

為介に答えるように、恵がそっと口を挟んだ。

「調べてあるからこそ、すぐに最適な言葉を放つことが出来る。さっきの“偽れ”がいい例だ」

モニターを見つめながら、冷静に言葉を続ける恵。

「これまではトンビに合わせた戦い方。以の神はまだ、実力の半分以上も出してないぞ」

「それに引き換え、朝比奈クンは、三つしかない言葉をすでに出し切っちゃったもんねえーまずいなあ」

「……っ」

恵と為介の言葉を聞き、囁が表情を曇らせる。

「^{イデオム}熟語”は…？やっぱりに合わなかったの…？”

「……………」

厳しい表情で問いかける囁に対し、恵はモニターを見つめたまま、表情一つ変えず、答える素振りを見せなかった。

「よぉーし、こんなもんかなあ？」

その時、治療が終わったのか、為介が明るい声を上げながら、囁へと向けていた扇子を振り上げた。

「まだ痛むところ、あるうー？」

「いえ、特には…」

問いかける為介に、囁が軽く首を横に振る。

「そう、じゃあ手当て完了ねえ」

「こ、こっちも手当て、お願いしますっ…！」

『……………』

扇子を閉じ、満足げな笑顔を見せていた為介と、話をしていた囁が、横から勢いよく入ってくる大きな声に、戸惑うように振り向いた。

「あ…」

「ハアっ…ハアっ…」

溢れ出した水により崩壊した遊園の出入口から、囁たちのいるモニター前へとやって来たのは、少し息を切らせた保であった。その背には、気を失ったままの籠也を背負っている。

「……………」

保に背負われ現れた籠也の姿を視界に入れ、少し表情を曇らせる檻也。

「転校生くん…」

「はあっ！明らかにコミュニケーション能力不足の俺なんかが、お二人の会話に割って入っちゃって、すみませえーん！」

「元氣そうね…フフフっ…」

いきなり頭を抱えて謝り散らす保に、囁は呆れながらも、どこか安心したような笑みを零した。

「はいはい、とっとと怪我人、こっちに置くらう」

「あ、は、はいっ！」

為介に言われ、保が慌てて駆け寄っていき、為介のすぐ前へと、背負って来た箆也を横たわらせる。箆也のすぐ傍へとしゃがみ込んだ為介が、閉じた扇子を再び開いた。

「“癒やせ”……」

扇子から淡い青色の光が放たれると、傷だらけの箆也の体を包み込んでいく。

「だ、大丈夫でしょうか？ 神月くんっ」

保が為介の背後から覗き込むように顔を出し、不安げに問いかける。

「もうちょつと早く運んでくれたら、助かったのにねえ」

「ひええええ！ ごめんなさあ！ い！」

「ウツソー。全然助かるよお」

「ええええ！？ ウソお！？」

為介に調子良くからかわれ、保が顔色をあれこれと忙しなく変えている。

「無事で良かったわ！ 転校生くん……」

「へっ？」

背後から聞こえてくる声に、為介にからかわれていた保が振り返る。

「あっ、真田さあくん！」

「フフフ……」

不気味に微笑んでいる囁の姿を見つけ、安心したような笑みを零す保。

「真田さんも！ ご無事で何よりです！」

保が笑顔で、囁のもとへと駆け寄っていく。

「はあっ！ こんな地味で陰気臭い俺なんかが、一丁前に真田さんの

心配なんかしちゃって、すみませえ〜ん！」

「ええ、本当ね…フフフ…」

謝り散らしている保に、囁が満面の笑みで頷きかける。

「あの、それでアヒルさんはっ…」

「んっ…」

「へっ？」

少し不安げな表情となって、保が囁へ問いかけようとしたその時、横から小さく漏れてくる声に、保は言葉を止め、戸惑うように振り向いた。

「あっ」

「んっ…んん…」

囁たちのすぐ傍の地面で横たわり、眠っていた七架が、ゆっくりとその大きな目を開き、体を起き上がらせる。

「ここ、は…？」

上半身を起こ上がらせた七架が、周囲を見渡し、戸惑いの表情を見せる。

「奈々瀬さん！」

「気が付いたようね…フフフ…」

「真田さんに、高市くんも…」

起き上がった七架を見て、嬉しそうに笑っている囁と保の方を振り向きながらも、まだ戸惑った表情を見せる七架。

「あの、私っ…えっと、その、神試験、は…」

「神試験でのお前たちの役目は終わった」

「えっ…？」

困惑しながら、二人へとまとまりきらない問いかけをしようとした七架に、二人の代わりに言葉を放ったのは、モニター前に立っている恵であった。

「よくやったな、高市、奈々瀬。五十音士初陣にしては、上出来だったぞ」

「恵先生」

薄く笑みを浮かべる恵を見つめ、七架が少し目を細める。

「はぁ！ろくに誉められたこともない俺に、なんと勿体のない言葉
あっ…！」

「そうだな、お前には勿体ないな。よくやったぞ、奈々瀬」

「はぁ！言い直したぁ！」

恵の言葉に感動していた保であったが、あっさりと言い直す恵に、
激しくショックを受ける。

「そっか…私、仁守の人と戦って…あっ！」

俯き、試験のことを思い返していた七架が、思い出したかのよう
に、勢いよく顔を上げた。

「朝比奈くんっ…！朝比奈くんは！？」

「そ、そうです！アヒルさんはどうなってるんですかっ！？」

身を乗り出す七架に続くように、保も必死の表情で問いかける。

「恵先生…」

答えを求めるように、恵の名を呼ぶ囁。

「……っ」

言葉を待つ三人の視線を受けながら、恵が再びモニターを見つめ、
そっと目を細める。

「まあ精々、信じることだな」

モニターを見つめる恵の瞳に、映るアヒルの姿。

「お前らの神を」

『……っ』

その恵の言葉に、囁、保、七架の三人が皆、より一層、厳しい表
情を見せた。

遊園内、原始の森地点。

「う…ううっ…」

イクラの水弾を喰らったアヒルが、上空で浮いている姿勢を保っ

ていられなくなり、近くの木の枝の上へと落ち、うつ伏せに倒れ込んでいる。何とか手をつき、起き上がるアヒルの体からは、真っ赤な血が滴り落ちていた。

「“当たれ”に“上がれ”、そして“欺け”か……」

必死に起き上がりとうしているアヒルを、余裕の表情で見つめるイクラ。

「調査の通りだな……」

「調、査……？」

体を起こしながら、アヒルがイクラの言葉に表情をしかめる。

「貴様と安団の面々のことは、試験の前にじっくり調べさせてもらった」

戸惑うアヒルに、答えるように言い放つイクラ。

「“使える言葉はたったの三つ”という調査結果を見た時は、冗談にしか思えなかったが、本当のようだな……」

「ま、だ……あるってのっ……」

「“赤くなれ”か……？それとも“青くなれ”か……？」

少しムキになって言い返すアヒルに、イクラが嘲るような笑みを向ける。

「さっき“開け”も覚えたってのっ」

「そうか……それは鍵要らずで、実に羨ましいな……」

微笑んだイクラが、小バカにするように言い放つ。

「だっれが鍵要らずだっ……！」

嘲るイクラに怒りを示しながら、アヒルが枝へとつく手にさらに力を込め、傷ついた体を無理やり、何とか起き上がらせる。

「どれ程喚こうが、所詮はこの程度……」

アヒルから目を逸らしたイクラが、少し肩を落とす。

「貴様の戦い方に合わせてやったというのに、そのザマ……」

イクラが銃口を左手で持ち、銃身に埋め込まれていた言玉を取り出すと、両手で握り締められていた水の銃が、あっという間に崩れ落ちた。

「退屈凌ぎにもなりはしないな…」

「クっ…」

悠々と顔を上げるイクラに、アヒルがさらに顔をしかめ、傷ついた手で再び銃を握り締める。

「貴様に、神の力量はない」

銃から取り出された言玉を右手で握り、イクラがはっきりとした口調で言い放つ。

「俺が引導を渡してやろう、安の神」

「誰がっ…！」

そつと微笑むイクラへと、アヒルが勢いよく銃口を向ける。

「“^あ当たれ”…！」

アヒルの言葉とともに、赤い光の弾丸が、再びイクラへと放たれる。

「もう、見飽きてきたな…」

口端を吊り上げながら、イクラが言玉を握り締めた右手を掲げる。

「“凍^いてつけ”…」

「あっ…！」

イクラの言葉に反応し、噴き上げた水流が、上がった空中で、アヒルの放った弾丸とともに、瞬間的に凍りつく。そして、弾丸を包んだ氷塊は、深い水底へと沈んでいった。

「今のって…扇子野郎と同じ言葉っ…」

その言葉は、アヒルが為介に初めて出会った時、為介が忌を倒すために使用した言葉であった。

「当然だろう」

「えっ？」

少し表情を曇らせていたアヒルが、聞こえてくるイクラの声に、顔を上げる。

「あの男と俺は、同じ“い”の神…あの男に使えて、俺に使えない言葉はないということだ」

「同じ…神っ…」

底知れぬ強さを感じた為介と、目の前に立つイクラがまったく同じ言葉を使えると考え、アヒルがそっと俯き、考え込むように険しい表情を見せる。

「まあ、俺はあの男も“神”とは認めぬがな」

「えっ…？」

「“神”は、俺一人がいい」

再び顔を上げたアヒルに、イクラが突き刺すような視線を見せる。

「俺一人でもいいんだ…」

「……っ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、重く深く言い放つイクラを見つめ、アヒルがそっと目を細める。

——彼がどうして、そこまで神に執着しているのかは知らないけどねえ——

「執、着…」

いつか、為介から聞いたその言葉は、今のイクラを見ると、自然と零れ落ちた。

「だから貴様を、“神”にはしない」

「うっ…」

イクラのその突き刺すような視線を正面から向けられ、アヒルが思わず怯むように声を漏らす。

「“怒れ”…！」

その言葉が表す通り、イクラの周囲の水が、まるで怒ったかのように勢いよく突き上げ、大きな波を形成し、激しく荒れ狂って、アヒルの座り込んでいる木の方へと向かっていく。

「クっ…！」

迫り来る大波に険しい表情を見せたアヒルが、素早く銃口を自らのコメカミへと持っていく。

「あ、“上^あがれ”…！」

使い慣れた言葉を発し、上空へと飛び上がっていくアヒル。

「……っ」

上昇していくアヒルを見上げながら、大波が避けられたというのに、イクラが楽しげな笑みを零す。

「稲妻^{いなずま}」…」

——バリーイイン！

「えっ…？」

空から降り落ちた黄色い閃光が、遊園のドーム型の天井を貫き、飛び上がったアヒルへと落ちてくる。

「うあああああっ…！！」

上空から落ちてきた光の刃がアヒルを掠め、アヒルが激しい悲鳴をあげて、力なく降下していく。アヒルとともに遊園内の木も一本、稲妻に撃たれ、その瞬間、遊園内を照らしていた電灯が一気に消えた。

＜落雷により、電気系統の一部断裂…放送、遮断されます＞

「電気までイカれたか…」

知らせの放送を流して間もなく、遮断される放送に、イクラがそつと目を細める。

「まあ煩わしかったし、丁度いいか」

「う…あ…」

「んっ…？」

イクラがか細い声に気づき、ゆっくりと顔を上げる。穴のあいたドーム型天井の覗く上空から、稲妻に撃たれたアヒルが、力なく落ちて来ていた。

「おおっと、“戒めろ^{いまし}”」

「ううっ…！」

水面へと墜落するところであったアヒルの体を、イクラの言葉に反応して突き上げた、細長い水流が、まるで絡め取るようにアヒル

の体に巻きつき、アヒルを空中で縛り上げる。

「電気ショックはどうだった…？ 安の神」

「なん、で…」

楽しげに問いかけるイクラを、ゆつくりと顔を上げたアヒルが、開ききっていない瞳で見つめる。

「イ段の力は…水のはずっ…」

「ああ、勿論“稲妻”もイ段の、水の力だ」

戸惑いの表情を見せるアヒルに、イクラはあっさりと答える。

「大気中の水蒸気で雨雲を作り、稲妻を生む。状態変化する水の能力、ならではの言葉…」

「何、言ってつか…わかんねえっ…」

「国語だけじゃなく、理科も苦手なようだな」

険しい表情を見せるアヒルを、呆れたように見つめるイクラ。

「やはり貴様に、神の力量はない」

イクラが先程も言ったその言葉を、また繰り返す。

「人助けしたくらいでは神になれぬことを、俺が教えてやろう…」

「……っ」

ゆつくりと言玉を持った右手を向けるイクラに、アヒルが目を細める。

「別に…」

「んっ…？」

「別に俺は…“神だから”って、人を助けるわけじゃないっ…」

「何…？」

小さな声ではあるが、はっきりと放たれるそのアヒルの言葉に、イクラがかすかに眉をひそめる。

「俺は、“人だから”っ…人を助けるんだ…」

痛みに歪みながらも、まだ力を失っていない強い瞳を、アヒルがイクラへと向ける。

「それは…貴様が“神”ではないことを認めている、ととっていいのか…？」

鋭い表情を見せたイクラが、確かめるように問いかける。

「ああ、俺は“神”なんかじゃないっ…」

イクラの言葉を認めるように、そっと頷くアヒル。

「ならば…」

「けどっ…」

「……？」

イクラの声を遮り、アヒルがさらに言葉が続ける。

「けど…一緒に戦ってくれた仲間のために、俺を信じてくれる仲間のためにもっ…」

少し震わせた声で、アヒルが徐々に声を大きくしていく。

「俺は“神”にならなきゃいけないっ…！」

「……っ」

強く、そして堂々と叫ぶアヒルの姿に、あからさまに不快そうに顔をしかめるイクラ。

「“信じてくれる”、か…」

アヒルの放った言葉を、イクラがゆっくりと繰り返す。

「くだらない…くだらないな。“信じる”など、この世で最も愚かな言葉だ…」

またしても煩わしげな表情を作って、イクラが少し感情を露に言い捨てる。

「“神を信じる”など、この世で最も愚かな行為だ」

「………」

冷静だったその表情を大きくしかめ、強く言い切るイクラを見て、アヒルが目を細め、表情を曇らせる。

「お前はよっぽど、“お前の神”が嫌いらしいな…」

「“俺の神”、だっっ…？」

見透かすようなアヒルの言葉に、イクラが眉を吊り上げる。

「この世に神は俺一人だ！この世界に、他の神など必要ないっ…！」

怒りを剥き出しにしたイクラの右手に握り締められた言玉が、強

く輝き始める。

「“怒れ”っ!!」

「……っ!」

イクラの怒りに呼応するかのように、先程よりもさらに激しく、荒々しい大波が、水で縛られ、身動きの取れないままのアヒルへと襲いかかってくる。

「グっ…」

どうする術もなく、強く唇を噛み締めるアヒル。

「うああああああっ……!!」

大波に吞まれ、アヒルが遊園を埋め尽くす、深い水の底へと、力なく沈んでいく。

「暗い水の底で朽ち果てる…安の神」

右手を下げたイクラが、アヒルの沈んでいった水面を見下ろした。

「う…うう…」

大波に吞まれ、水底へと沈んでいくアヒル。すでに体は傷だらけで、這い上がる力もなかった。

「うあっ…」

苦しげに歪んだ表情の口元から、わずかに含んでいた空気が放出される。

「うう…うううっ…」

空気を失い、さらに険しくなっていくアヒルの表情。

「……っ」

徐々に意識が遠のき、瞳がゆっくりと閉じられていく。

——そこに、言葉を感じないか…?——

「……………」

意識を手放しかけたアヒルの脳裏に、半日だけの恵の指導が思い

出された。

Word 21 神 vs 神 (4)

——— 箆也たちと別れ、恵が強制的にアヒルを連れてやって来たのは、言ノ葉町のはずれにある、静かな山の中であった。緑が生い茂り、川のせせらぎが心地よく聞こえてくる。

「眠みい」

恵からやっと解放されたアヒルは、夜の薄暗い山の中で、何度も目を擦り、いかにも眠たそうな顔を見せていた。時間はすでに深夜の一時を回っており、戦いの後というのもあって、アヒルの眠気はピークに達していたのである。

「なあ？ 恵先生、俺、ちょっとだけ寝ていい？」

「ああ、いいぞ」

「へっ？」

あっさりと返ってくる言葉に、アヒルが眠たげだった瞳を、まん丸にする。

「寝て…いいの？」

「ああ、ちよつと言わず、ずっとでも寝てていいぞお」

「ずっとって…」

川岸の大きめの石の上に腰を下ろし、どこからか出てきた本を片手に、いかにも適当そうに答える恵の姿に、思わず呆れた表情を作るアヒル。

「先生、俺を指導する気ある？」

「んなもん、ないに決まってるんだろ」

「んなっ…！」

あっさりと答える恵に、アヒルが大きく顔をしかめる。

「何だよ！ それっ！ やる気ねえーなら、初めっから、箆也と囁に指導してもらった方が良かったっ…！」

「あいつ等が教えられるとすれば、知識と技術だ」

「えっ？」

非難するアヒルの言葉を遮り、冷静に言い放つ恵。

「だがお前は、知識と技術で、力を身につけるタイプの人間じゃないだろう？」

恵が読んでいた本を閉じ、鋭い瞳をアヒルへと向ける。

「わりかし何でも、感覚で片づけるタイプだ」

「確かに」

自分のことを言い当てられ、思わず納得するように頷いてしまうアヒル。

「だから、指導なんてものは無駄だ」

本を石の上へと置いた恵が、ゆっくりと立ち上がる。

「私にくれてやるのは、ただのきっかけ」

「きっかけ……？」

「後は自分で何とかするんだな、クソガキ」

「えっ……」

額へと伸びてくる恵の手に、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「“瞑想”^{めいそう}」

「……っ！」

アヒルの額へと触れた恵の指先が、淡い緑色の光を放つと、アヒルの体全体がその光に包まれ、アヒルの瞳がアヒルの意志とは関係なく閉じられ、アヒルはその場に倒れ込んだ。

「こ、これって……」

「黙れ。無駄口叩くと、口にチョーク、ぶっ込むぞ」

「……………」

地面へと寝転がり、瞳を閉じたまま、戸惑うように問いかけようとしたアヒルであったが、恵の脅しとも取れる発言を聞き、すぐさま黙り込む。

「けど、瞑想っつか、この態勢じゃ、俺マジで寝ちまつ……」

「何か聞こえないか？」

「へっ？」

横たわり、視界も真っ暗になった状態で、さらに襲いかかってき

た眠気に焦っていたアヒルに、恵がそっと問いかける。

「聞こえる…？」

戸惑うようにその言葉を繰り返しながら、周囲へと耳を傾けるアヒル。

「……っ」

二人が同時に黙った途端、夜の山の小さな音たちが、アヒルの耳へと届いてきた。

「聞こ、える…」

「何が聞こえる…？」

恵の言葉に誘導されるように、さらに耳を澄ますアヒル。

「水の、音…風の音…木の、音…」

アヒルが、聞こえる音を次々と並べていく。

「そこに、言葉を感じないか…？」

「言、葉…？」

恵の問いかけを、戸惑うように繰り返しながら、アヒルが耳を澄ませ、聞こえてくる音の中に、言葉を探していく。まず耳に入ったのは、水の音だった。アヒルがじつくりと、その水の音を聞く。

「川が…“流れる”…“流れてる”…」

音の中に見えてくる言葉を、アヒルがそっと口にする。

「風が…“そよぐ”…緑が…“生い茂る”…」

音の中に、言葉を探していくアヒル。

「山が…“生きてる”…」

「ああ、そうだ…」

口元を緩めた恵が、アヒルに頷きかける。

「言葉はいつだって、お前の傍に、こんなにも溢れている…」

恵が周囲を見渡しながら、ゆっくりと言葉が続ける。

「確かに、辞書を引いて見つかる言葉もあるが…」

穏やかに微笑んだ恵が、地面に寝転がっているアヒルを見下ろす。「こうやって耳を澄まして、目を凝らして、それで初めて、見つかる言葉もある…」

「……っ」

アヒルがゆっくりとその瞳を開くと、開けた視線のその先で、恵が微笑んでいた。

“それを忘れんなよ、安の神” ……――――

「聞こ、える…」

恵の言葉を思い出し、水に沈んでいくアヒルが、水の中でかすかな声を漏らす。

「聞こえる…」

遠のいていく意識の中で、感覚の研ぎ澄まされた耳に、確かな音が届く。

「水の、逆巻く音っ…」

届く音に、今度は逆にはっきりとしていく音。

「力強く…生きる音っ…!」

水中で大きく目を見開いたアヒルが、銃を持つ右手に、力を込める。

「あっ…」

アヒルが上方の水面へと銃口を向け、自分の言葉を口にした。

「“荒^あれろ” ……!」

水に逆らい、アヒルが強く引き金を引く。

「水に沈んで五分…」

遊園内の大時計で時間を確認し、水面上に立ったイクラがそっと呟く。

「上がって来ないところを見ると、死んだか…口程にもない…」
イクラが冷たく言い捨て、右手に持っていた言玉を懐へと戻す。

「言玉は回収し損ねたが…まあ神試験など、どうでもいい」

少し首を横に振り、ドーム型の天井を見上げるイクラ。

「これで一人、俺以外の神が減っ…んっ…？」

足元にかすかな違和感を覚え、天井を見上げていたイクラが、ふと視線を落とす。イクラの立つ水面が波立ち、波紋が円を描いて、周囲へと広がっていた。

「何だ…？水が動いている…？」

徐々に大きくなり、どんどん広がっていく波紋に、イクラが眉をひそめる。

「何っ…！？」

訝しげに波紋を見下ろしていたイクラであったが、水面が大きく波立ち、足元を崩されると、思わずその表情をしかめた。

「何なんだ！？一体っ…！」

困惑を怒りで表現しながら、イクラが懷から再び、言玉を取り出す。

「“諫めろ”…！」

イクラが強く叫ぶと、イクラの言玉から強い青色の光が放たれる。言玉から放たれた光が、イクラの周囲の水を照らした。

「なっ…！？ううっ…！」

だが逆立つ波は収まらず、イクラはさらに足元を崩され、水面上に立っていらなくなり、思わずその場に膝をついた。

「俺の制御が効かないだっ…！！？クっ…！」

水面上に居ることに限界を感じ、近くの木の上へと避難するイクラ。

「何故だっ…水が違う言葉の影響を受けているとでもいうのか…？ま、まさかっ…！」

ハッとした表情を見せたイクラが、強く波立つ水面を見下ろす。

「“上^あがれ”っ…！」

「…っ！」

激しく揺れ動く波の中心から、その言葉とともに、アヒルが飛び

出してくる。現れたアヒルのその姿に、大きく目を見開くイクラ。

「貴様っ…！」

「まだ勝負は終わっちゃいねえぜっ！」

荒々しく声をあげるイクラに、アヒルが力強く言い放つ。

「愚かなことをっ…！所詮、“荒れる”とでも言っただけだろうっ！？」

さらに声を大きくし、焦りを隠すように、必死に叫ぶイクラ。

「波を荒らしたくらいで、俺に勝てると思っ…！」

「……っ」

「……っ？」

右手に持った銃の銃口を、荒れ狂う水面へと向けるアヒルに、イクラが思わず言葉を止め、眉をひそめる。

「また波でも荒らす気かっ？そんなもの、俺の言葉で、いくらでも止めてやるっ…！」

“荒れ狂え”…

イクラの言葉に動じることもなく、アヒルがそっと自らの言葉を呟き、引き金を引く。

「嵐”っ…！！”」

「何っ…！？」

アヒルが発した思いがけない言葉に、イクラが大きく目を見開く。
「熟語をっ…！？ううっ…！」

アヒルの放った光の弾丸が荒れ狂う水面へと落ちると、その水面から、まるで竜巻のように、激しく逆巻く水の塊が、辺りの木を薙ぎ払うほどに巨大になって、勢いよくイクラへと向かっていく。

「うあっ…！」

イクラの表情に、浮かぶ焦りの色。

「うがあああああっ…！！」

激しい水の嵐に吞まれ、イクラが勢いよく吹き飛ばされていた。

「朝比奈くんっ…！」

「やったあ！いいですよ！アヒルさんっ！」

モニターでアヒルとイクラの戦いを見守っていた七架と保が、アヒルの攻撃が決まったことを確認し、思わず両拳を握り締め、歓声をあげる。

「はあっ！ろくに活躍してない俺なんかが、偉そうな口叩いちゃって、すみませえくんっ！」

「す、少し静かにしてくれない…？高市くん…！」

すぐ横で謝り散らす保に、軽く耳を塞ぎながら、そっと呟く七架。

「でも凄い、朝比奈くん。半日で本当に熟語、覚えちゃうなんてっ」

「あれは熟語じゃないわ…」

「えっ？」

感心するように言い放っていた七架が、横から聞こえてくる囁の声に、戸惑うように振り向く。

「熟語じゃ、ない…？」

「熟語は、二文字以上の漢字を組み合わせて成り立つもの…“嵐”じゃ一文字だもの…フッフっ…」

聞き返す七架に、囁が不気味に微笑みながら答える。

「じゃあ、あれは…」

「名詞よ…」

「けど、ただのお名詞でもないねえ」

「えっ…？」

今度は囁が口を挟まれ、戸惑うように振り向く。囁が振り向くとそこには、簞也の治療を終えたのか、扇子を閉じ、腕を組んでいる為介の姿があった。

「あれは、“荒れ狂え”と“嵐”が組み合わされた言葉…つまり、
フレーズ
語句」

「語句…？」

「熟語より、遥かに難易度の高い言葉だよ…」

七架が首を傾げる中、為介がどこか鋭い微笑みを浮かべる。

「まっさか半日で語句^{フレーズ}まで使えるようになったっやうとはあゝさっすが恵さんですねえっ」

「私はきっかけを与えただけだ」

誉めるように笑顔を向ける為介に、恵はモニターを見つめたまま、素っ気なく答える。

「お前はそれでいい」

モニターを見つめる目を細め、恵が小さく笑みを零す。

「朝比奈アヒル…」

「ハアっ…ハアっ…ハアっ…」

空中に浮かんだまま、アヒルが右手の銃を体に近づけるように握り締め、乱れている呼吸を整える。アヒルの言葉により荒れ狂っていた水面は、徐々に落ち着き始めていた。

「全然楽になってこねえっ…言葉の使い過ぎか…」

苦しさの止まない胸を左手で押さえながら、アヒルが少し顔をしかめる。傷も十分に負っている上に、もう何度も言葉を使った。アヒルの体力は、限界まで来ようとしていた。

——バアアアン！

「……っ！」

その時、落ち着いたはずの水面の一部が激しく噴き出し、アヒルがそちらを振り向いた。

「はあっ…！はあっ…！」

噴き上げた水の底から姿を現す、全身に傷を負い、体の所々から血を流したイクラ。荒々しく呼吸を乱しており、先程の攻撃で、相当にダメージを負ったことはうかがえる。

「負けて…たまるかっ…認めて、たまるかよっ…」

乱れた呼吸のまま、険しい形相で、必死に言葉を繋げるイクラ。

「“神”は…俺一人だっ…」

イクラが傷だらけの右手で、強く言玉を握り締める。

“神”はっ…俺だけだああっ!!」

「……っ」

取り憑かれたように必死に叫ぶイクラに、アヒルが思わず目を細める。

「執着っ…」

「俺だけがっ…俺だけが、“神”だああ!!」

イクラの荒々しい叫び声が、遊園中に響き渡った。

Word. 22 執着ト覚悟ト (1)

午後九時二十分（神試験スタートから八時間）。

言ノ葉の森遊園内、原始の森地点。

神試験最終戦、“安の神”朝比奈アヒルvs“以の神”伊賀栗イクラ。

「神は：俺、だけだっ：俺だけが：神、だ：」

乱れた呼吸のまま、体の所々から赤い血を流しながら、イクラが何度も何度も必死に、その言葉を繰り返す。まるで皆に、自分に、言い聞かせているようであった。

「執着：」

そんなイクラを、アヒルは少し細めた瞳で見つめる。

「これが、扇子野郎の言ってた、あいつの執着ってやつか：」

一撃を決め、イクラを追い込んだというのに、アヒルの額からは冷えた汗が流れ落ちた。逆に追い込まれている気分になるような、重い何かを、目の前のイクラから感じていた。

「神は、俺だけだ：俺は、認めないっ：」

言葉を続けながら、イクラが強く拳を握り締める。

「俺以外の神などっ：！！！」

「……っ！」

言玉を持った右手を振り上げるイクラに、アヒルが警戒する態勢を取る。

「「憤れ^{こみんば}」っ：！！」

イクラの言葉に応えるように、静かになっていたはずの水面が、また激しく荒れ始める。噴き上がったいくつかの大波が、上空に浮かぶアヒルへと、舞い上がって来た。

「クっ：！！」「荒れろ^あ」：！！」

上がって来た大波へ向け、アヒルが言葉を放ちながら、弾丸を撃ち込む。だが弾丸が直撃しても、大波はアヒルの言葉に従うことはなく、イクラの言葉に従い、アヒルへとそのまま向かって来た。

「言葉の上書きは無理かつ…！クソ！“上^あがれ”…！」

自らに弾丸を放ち、さらに体を上昇させ、大波から逃れるアヒル。

「このパターンで、さっきもっ…」

「^{いなすま}稲妻”！」

「やっぱりい！？」

ドーム型の天井付近まで上昇したアヒルが、先程もあった似たような状況に首を捻らせていると、イクラが言葉を放ち、天井を突き破って、黄色い閃光が降り落ちてくる。

「フハハっ…！焦げ尽きろ！」

「クッソっ…！」

イクラが高らかと笑いあげる中、落ちてくる稲妻を見つめ、アヒルが険しい表情を見せながら、自分へ向けていた銃口を、その落ちてくる稲妻へと向ける。

「“^あ当たれ”！」

降ってくる稲妻へと、向けられる弾丸。まるで地面から落ちる赤い雷のように、勢いよく飛び出した弾丸が、イクラの稲妻と激突した。

「うううっ…！」

「クっ…！」

二つの力が激しくぶつかり合い、かかる衝撃に、アヒルとイクラは同時に顔をしかめた。

遊園外、モニター前。

「ん、んんっ…」

モニター近くの地面に横たわっていた箆^{へら}也^やが、ゆっくりとその瞳

を開く。

「僕、はっ…」

「神月くうくん！」

「はっ…?」

雨雲の広がる暗い空を見上げ、戸惑った表情を見せた箆也が、いきなり目の前に顔を出した、今にも泣きそうな表情の保に、その表情を勢いよくしかめた。

「気が付いて良かったですう！はぁ！こんな良い所なんて一つもない俺が、一丁前に神月くんの心配なんかしちゃってすみませえん！」

「どうでもいいから、とにかく黙れ…」

相変わらずの調子で謝り散らす保に、呆れたように言い放ちながら、箆也がゆっくりとその場で起き上がる。

「気分はどう…?フフフっ…」

「囁」

保の横から声を掛けてきた囁に気づき、箆也が振り向く。

「あまり良くはない」

「あら、そう…フフフっ…」

少し顔をしかめて答える箆也に、囁が楽しげに微笑む。

「そういえば、ご家族が観覧に来てるわよ…」

「家族…?」

囁の言葉に眉をひそめながら、箆也が囁の指差した方向を見る。

「箆也っ…」

「……………」

モニター前から少し離れた所に、一人立っている箆也を見つけ、大きく目を見開く箆也。振り向いた箆也を見て、箆也も少し厳しい表情を見せる。

「何故、箆也がここに…」

「言姫様がお連れになったのよ…」

「和音が?」

口を挟む囁の言葉に、箆也が表情を曇らせる。

「檻也、何で…」

「あっ…！」

「……っ」

檻也に声を掛けようとした箆也が、モニターの前に立ち、食い入るようにモニターを見つめていた七架が漏らした声につられ、檻也からモニターへと視線を移した。

「二人とも、一步も譲らないな」

「朝比奈くん…」

真剣に呟く恵の横で、七架が不安げな表情を見せている。

「神…神が戦って？」

「……っ」

身を乗り出して問いかける箆也のその言葉に、少し表情をひそめる檻也。

「口にしたくもない程、“神”を嫌っていたのに…」

箆也を見つめたまま、誰に聞かれることもない程、小さな声で、檻也が呟く。

「安の神のことは…いとも簡単に、“神”と呼ぶんだな…」

少し目を細めた檻也は、どこか複雑そうな表情を見せていた。

「神が戦っているのかっ？」

「ええ…今まさに、以の神と激しい攻防を繰り返している最中よ…フフフっ…」

「神っ…」

箆也がすぐに立ち上がり、モニターの前へと向かって行こうとする。

「うっ…！」

「神月くんっ…！」

だが立ち上がった途端にバランスを崩し、すぐにしゃがみ込んでしまう箆也に、保が慌てて支えに入る。

「ダメだよぉ無理しちゃあ」

横から皆の様子を見ていた為介が、暢気な口調で声を掛ける。

「傷は治したけど、言葉の使い過ぎで、体力はかなあゝり消耗されちゃってるんだからあゝ」

扇子で自分を扇ぎながら、ゆっくりと言葉を続ける為介。

「ア段の形状以外の言葉も使っちゃったみたいだし」

「……っ」

含んだような、鋭い笑みを向けてくる為介に、箆也が少し眉をひそめる。

「ア段の形状、以外っ？」

「……………」

為介の言葉の意味がわからず、首を傾げている保の横で、囁も鋭い表情を見せる。

「とにかく、肩貸しますよ。神月くん」

保がしゃがみ込んだままの箆也へと、そっと手を差し伸べる。

「はあ！今までの人生、何かと借りてばっかだった俺が、一丁前に“貸す”とか言って、すみませえくん！」

「いいから、貸すならとっとと貸せ」

「フフフっ…」

謝り散らす保と、楽しげに微笑んでいる囁に片方ずつ肩を貸してもらい、箆也がモニターの前へとゆっくりと移動していく。

「あっ、神月くん。こっち、いいよ」

「済まない」

モニターの前に立っていた七架が、一番よくモニターが見える場所を、箆也へと譲る。加わった七架にも手伝ってもらい、箆也がゆっくりとその場に座り込んだ。

「お前が負けるとは、予想外だったぞ」

横に立つ恵が、座った箆也を見下ろし、そっと声を掛ける。

「すみませんね、期待に応えられなくて」

「別に期待してたわけじゃないから、気にすんな」

「ああ、そうですか」

素っ気ない恵の言葉に少し顔をしかめながら、箆也も素っ気なく返事をする。

「……っ」

モニターに映るアヒルとイクラの戦いを見つめ、そっと目を細める箆也。

「どうだ？」

モニターを見つめる箆也へと、恵が静かに問いかける。

「勝つと思うか？ 安の神は」

「愚問ですね」

恵の問いかけに、鋭い答えを返す箆也。

「誰の神だと思ってるんです？」

『……っ』

自信に満ちたように、はっきりと言い放つ箆也を見て、囁たち三人が少し驚いたような表情を見せるが、その表情はすぐに笑顔へと変わった。

「そうね…私たちの自慢の神様だものね…フッフっ…」

「そうです！ アヒルさんは絶対、負けませんよお！」

「うん、うん！ 絶対、勝つよね！」

箆也の言葉に勇気づけられたかのように、三人が次々と自信に満ちた言葉を放つ。

「フンっ…」

そんな自信に満ちた四人の神附きを見つめ、小さな笑みを零す恵。

「耳が痒い^{かゆ}な…」

「けっどお、そう樂觀視してばかりもいられないと思いますよお」

「んっ？」

恵の横へとやって来た為介が、盛り上がっている四人に水を差すような言葉を放つ。

「為介」

「彼の“神への執着”は、そんなに生易しいものじゃない」

「……っ」

意味深な為介の言葉に、恵がそっと眉をひそめる。

「確かに、あの男の神への執着には、異常な強さを感じる…」
先程のイクラの様子を思い出し、険しい表情を見せる恵。

「あの男は何故、あそこまで神に執着する…？」

恵が鋭い瞳で、為介へと問いかける。

「あの男に、伊賀栗イクラに、何があったんだ…？」

「……………」

恵の問いかけを聞きながら、モニターを見つめ、為介がそっと目を細める。

「許せないんですよ」

「許せない？」

「えええっ」

聞き返す恵に、為介が大きく頷く。

「たった一人、信じた神様のことが、ねえ…」

「信じた神、か…」

為介の言葉に少し厳しい表情を見せながら、恵は再び、モニターの中の二人を見つめた。

再び遊園内、原始の森地点。

『ハア…ハア…ハア…』

互いに傷を負い、互いに多くの言葉を使って体力を消耗したアヒルとイクラは、乱れた呼吸を合わせるように零しながらも、まだ強く光る瞳で、互いの姿を見合っていた。

「まだだっ…まだ…」

力の入らない右手の手首を左手で握り締め、イクラが何とか言玉を握り締める。

「俺は…負けないっ…！」

握り締められた言玉が、強い青色の光を放った。

「怒れ^{いか}」っ：！！！」

水面から噴き上げた水流が、大波を作り上げ、本当に怒っているかのように、激しくアヒルのもとへと向かっていく。

「荒れろ^あ」：！！」

アヒルも躊躇うことなく、近くの水面へと弾丸を放つと、弾丸の撃ち込まれた水面から、大きな荒々しい波が立ち上げ、イクラの波へと向かっていった。

『はあああああっ：！！！』

二人の激しい声とともに、二つの大きな波が、遊園の奥で激しくぶつかり合う。

「うううっ：！！」

「グっ：！！」

互いに碎け散った大波の残骸を浴び、アヒルとイクラがそれぞれ、険しい表情を見せる。

「このっ：！！」

「クソ：！！」

二人がすぐに態勢を整え、銃を、言玉を、相手へと突き出す。

「嵐^{あらし}」っ：！！」

「稲妻^{いなずま}」！！」

水底から発生する嵐と、天井を突き破り落ちてくる稲妻。言葉の力により起こる天変地異に、遊園が徐々に軋み、崩れ落ち始める。

「この、ままじゃっ：！！」

どこからか聞こえてくる重々しく崩れていく音と、天井から降ってくる破片に、アヒルの表情が曇り始める。

「どこを見ている：！！？」

「うっ：！！」

落ちてくる破片に気を取られていたアヒルへと、新たに噴き上げた大波が迫ってきており、アヒルが険しい表情を見せる。

「あ、上^あがれ」！」

自らへと弾丸を放ち、上昇して大波から逃れるアヒル。

「ワンパターンだな」

「それはてめえもだろっ？」

上がりながらアヒルが、自分へと向けていた銃口を、天井へと向ける。

「次、稲妻が来るって、こっちだって読めてんだよ！」

「ハッ」

天井から稲妻が落ちてくることを見越して、銃口を上へと向けているアヒルを見て、イクラが小さく笑みを零す。

「誰が稲妻を落とすと言った？」

「何っ？」

「俺の言葉は、まだこんなものじゃないんだよっ……」

得意げに微笑んだイクラが、言玉を持った右手を掲げる。

「“抱^{いだ}け”……！！」

「なっ……！！」

天井付近まで上がっていたアヒルを、水面から突き上げた、まるで手のような形をした二個の水の塊が、アヒルの両側から包み込むように、一気に覆い尽くした。

「うっ……！！うっ……！！」

手の形をした水が上空で合わさり、さらに大きな水の塊となると、その中にアヒルを完全に捕らえる。水中に閉じ込められたアヒルは、呼吸を封じられ、厳しい表情を見せた。

「そのまま溺れ死ねえっ！！」

水の中のアヒルを見上げ、確信に満ちた笑みを零すイクラ。

「うううっ……！！」

酸素を得られず、アヒルがさらに苦しい顔つきとなる。

「言、葉っ……言葉をっ……」

必死にもがいていた手や足の動きを止め、水の中で落ち着きを取り戻したアヒルが、静かになった水の中で、そっと耳を澄ませる。

「あっ……」

ゆつくりと、口を開くアヒル。

「^{あふ}溢れ出せ”っ：！」

——パアアアン！

「何っ：！？」

塊を突き破り、水の中から飛び出てくるアヒルに、イクラが大きく目を見開く。

「また新しい言葉をっ：！？」

「これでも喰らえっ」

イクラが驚いている中、アヒルが鋭い目つきとなって、今飛び出て来たばかりの水の塊へと、弾丸を放つ。

「^{あめあられ}雨霰”！」

「うっ：！」

塊が細かい水の粒となって、下方にいるイクラへと、一斉に降り注ぐ。

「うわああああああっ！！！」

激しい雨霰を全身に浴び、激しい叫び声をあげるイクラ。

「うあっ：あ：」

すべての雨霰が降り切ると、イクラは声にならない声を落とし、力なく下の水面へと倒れ込んだ。水面の上で、まるで地面の上のように、イクラはうつ伏せに倒れ込む。

「……っ」

細めた瞳のその視界の中に、水面に映し出された、倒れ込んだ自分の姿が入った。

「俺…俺がこんな…」

倒れている自分の姿を見つめ、イクラがどこか疑うような声を漏らす。

「違、う…こんなの、俺じゃない…こんなのは…俺じゃない…」

水面に映し出された自分の姿を、必死に否定するイクラ。

「俺は…神、なんだ…神、なんだよっ…」

また言い聞かせるように、何度もその言葉を呟く。

「なあ…“先生”っ…」

Word. 22 執着ト覚悟ト (2)

——その人は、俺に、“祈^{いの}る”という言葉^{ことば}を、教えてくれた人だった。

十数年前、小さな町の片隅にある、小さな養護施設が、イクラたちの帰る家だった。

「イクラくん、金八くん、シャコちゃんっ」

その施設で働いていたのは、たった一人のまだ若い女性だった。小さい頃、すでに親のなかったイクラたちを施設に引き取ると、女性^{おんな}は、大好物の海産物から、イクラたち三人にそれぞれ名前をつけた。女性^{おんな}はイクラたち三人を、まるで本当の子供のように、心底可愛^{あい}がり、大事に大事に育てた。

「なあに？ “先生”」

そのたった一人の育て親のことを、イクラたちは親しみを込めて“先生”と、そう呼んでいた。

「お祈りの時間よ」

先生は、決まった時間に、決まってそう言う。

「さあ、私たちの“神様”に、祈りを捧げましょう」

『はぁい』

イクラたちは素直に、その言葉に従っていた。施設にある大きな十字架の前で手を組み、膝をつき、瞳を閉じて、先生に言われた通り、イクラたちは祈りを捧げた。

「ねえ、先生」

祈りが終わった後、金八が先生に問いかけた。

「どうして僕たちは、毎日、神様に祈るのお？」

「それはね」

首を傾げたイクラたちに、先生はどこか誇らしげな笑みを浮かべ

る。

「祈りを捧げれば、神様が私たちに“救い”を下さるからよ」

「救い？」

「幸せにしてくれるってことよ」

『へえっ』

小さい頃から親がいなくて、些細な幸せさえ程遠かったイクラたちにとって、その言葉は、とても眩しいものだった。その言葉に金八たちは目を輝かせた。

「幸せ…？本当に？」

「本当よ」

疑うように問いかけたイクラに、先生は笑顔で大きく頷く。

「じゃ、じゃあ俺、毎日しっかり祈る！」

「あ、あたしも！」

「フッフ」

必死に手を挙げる金八やシャコを見て、先生は嬉しそうに笑った。

「イクラくんは？」

「俺は…」

振り向いた先生に問いかけられ、イクラは少し口ごもる。

「他人に頼るのって、好きじゃない」

「イクラの意地っ張りい」

「うっせえ！泣かすぞ！金八！」

「俺、泣いちゃううっ！」

「こらこら」

モメ出すイクラと金八を宥めながら、先生がもう一度、イクラへと笑顔を向けた。

「そうねえ。じゃあイクラくん、先生が祈ってもいい？」

「えっ？」

先生の言葉に、イクラは戸惑うように声を漏らした。

「イクラくんが幸せになれるように、先生が神様にお祈りしてもいいかな？」

「べ、別にいいけどっ…」

「じゃあお返しに、イクラくんも神様に祈ってくれる？」

「えっ…？」

その言葉に、イクラは少し眉をひそめる。

「私が、大好きな海産物を、たらふく食べられますようにって」

「海さっ…？」

「フッフ、冗談よ。ちょっと本気だけど」

呆れたような表情を見せたイクラに、先生は悪戯っぽく微笑んだ。

「私が幸せになりますようにって」

「先生、が…？」

微笑む先生を見つめながら、イクラがゆっくりと聞き返す。

「俺が祈ったら…先生は嬉しい…？」

「もちろんっ」

「…っ」

笑みを大きくして頷く先生に、イクラはそっと目を細めた。喜んでほしい。嬉しいと笑ってほしい。赤の他人をとっても大切に育ててくれた先生に、ただ、幸せになってほしいと、イクラはそう思った。

「うん、わかった」

「ありがとう、イクラくん」

頷いたイクラを見て、先生はさらに嬉しそうに笑う。

「さあ、じゃあみんなでもう一度、祈りましょう」

先生の温かい手に包まれながら、イクラたちはまた、十字架の方を見る。

「みんなで、幸せになれるように」

『…っ』

それから毎日、手を組んで、膝をついて、瞳を閉じて、ただ、神に祈った。“幸せ”になれるようにと。

そんな日々が二年程続いた、ある日の出来事だった。

「先生っ！お祈りの時間だよお！」

時間になっても祈りの部屋へやって来ない先生を迎えに、イクラは先生の自室へ行った。

「先、生……？」

部屋の扉を開けても、何の返事も返って来ないことを不審に思い、イクラが首を傾げる。

「先せ……あぁっ……！」

部屋の中へと入り、周囲を見渡したイクラの視界へと飛び込んできたのは、床へと力なく倒れている先生の姿だった。その先生の姿を見て、イクラが大きく目を見開く。

「先生っ……！！？先生……！！」

すぐに病院へ運んだが、先生はそのまま、帰らぬ人となった。

身寄りのなかった先生の葬儀は、近所の人間の厚意で、施設内の祈りの部屋で、しめやかに行われた。もちろんイクラたち三人も、その葬儀に、親族として参列した。

「泣いちゃう。俺、泣いちゃうよぉっ！うわぁ……ん！」

「もう泣いてるっ……金八……ううっ……」

金八とシャコは、先生の遺影を見ながら、ずっと泣いていた。

「栄養失調ですって。可哀想に」

「収入が少なくて、困ってたんでしょ？食料も全部、子供たちに優先させてたって」

「三人も引き取るから……これからあの子たち、どうなるのかしら……？」

「……………」

近所の人間の話を聞きながら、イクラはただ、先生の遺影の後ろに見える、毎日祈りを捧げていた、あの十字架を見ていた。

「神よ」

「……………」

皆の前に立った神父の言葉に、イクラは大きく顔を歪めた。

「我々は今日、親愛なる友を、あなたのもとへと送ります」
十字架を見上げ、神父が言葉を続ける。

「神よ、願わくばこの者に、安らかなる永久の眠りを…」

「何が…神だ…」

「んっ…？」

イクラの落とした声に、神父が続けていた言葉を止める。

「何が…神だよっ…」

「イクラ…？」

泣いている金八たちの横で立ち上がり、イクラはまっすぐに神父のいる方へと突き進んでいく。

「お、おいっ、君っ」

「毎日、祈ったのに…」

止めようとする神父の手を振り切って、イクラは構わず、さらに足を進めた。先生の遺影も通り過ぎ、その後ろにある大きな十字架の前へと立ち、十字架を見上げた。

「先生が“幸せ”になれるようにっ…祈ったのにっ…」

イクラの発する声が、徐々に震えていく。

「祈ったのにいいっ…!!」

イクラは強く叫びあげ、力一杯握り締めた拳を、その十字架へと叩きつけた。

「なんで…!なんでええっ…!!」

「き、君っ…!」

「イクラ…!」

何度も何度も十字架に拳を叩きつけるイクラを止めようと、神父や参列者、金八とシャコも、皆が必死に駆け寄ってくる。

「やめるんだ…!君っ…!」

「祈ったのにっ…!祈ったのになんでっ…!なんで先生を救ってくれなかったんだよっ…!」

手を抑え込まれながらも、イクラは必死に叫び続けた。

「なんで先生を“幸せ”にしてくれなかったんだよおっ……!!」

「イクラっ……!」

「やめてよ!イクラ!」

叫び続けるイクラを、金八とシャコが泣きながら、必死に止める。
「なんでっ……なんで……」

十字架に叩きつけた拳をそのままに、イクラが力なくその場にしゃがみ込む。

「なんでえええっ……!!」

叫びあげるイクラの瞳から、涙が飛び散った。

その日、夜。

「この施設、取り壊しになるんだって」

神父や参列者が皆帰り、三人だけとなった静かな祈りの部屋で、

金八がポツリと呟いた。

「家族もいないし……僕たち、どうなるんだろ……」

金八がどこか不安げな表情を見せる。

「他の施設に行くことになるのかな……」

「神様にでも祈る……? 親が見つかりますようにって……」

「イクラの前で、そういうこと言うなよ」

どこか皮肉って言い放ったシャコに、金八が注意するような視線を送る。

「俺は……」

『……っ』

ゆっくりと口を開くイクラに、金八とシャコが同時に振り向く。

「俺はもう……神になんて祈らない……」

「イクラ……」

何度も十字架に叩きつけ、赤く腫れあがった右手を握り締めながら、そっと呟くイクラ。そんなイクラを、金八たちが、どこか哀しげな瞳で見つめる。

「顔も知らない、神に祈るくらいなら…」

睨みつけるように十字架を見つめ、イクラがゆっくりと立ち上がる。

「俺が神になる」

『えっ…?』

はつきりと言い放つイクラに、金八とシャコが同時に戸惑いの声を漏らす。

「神になるって…」

「イクラ…?」

「救いもくれない神を信じるくらいなら、俺が神になる」
首を傾げる二人に、イクラは迷いのない言葉を向ける。

「金八、シャコ」

鋭い表情を見せ、二人へと呼びかけるイクラ。

「俺を信じるなら、附いて来い」

『……っ』

そのまっすぐな曇りのない瞳に、金八とシャコは、何か衝撃でも走らせたかのように、大きく目を見開いた。

「わかった…」

少し間を置いて、金八がゆっくりと答える。

「俺はイクラに、“神”に附いていく」

「あたかも…イクラを、“神”を信じるっ…」

「よし…」

二人の言葉を聞き、イクラは満足げに頷いた。

「附いて来いっ」

こうして三人は、先生に別れを告げ、育った施設を後にした。

“神”という言葉だけを頼りに、イクラが為介のもとへと辿り着いたのは、それから数年後のことだった。

“い”の言葉の力を教えてほしいいっ?」

「ああ」

不思議そうに聞き返した為介に、イクラははっきりと頷く。

「なあんてまたあ？ “い” って、超微妙なとこだよお？」

為介が大きく首を傾げながら、イクラの方を見る。

「どうせ身につけるならあ、“取れ”とか“増えろ”とか、もっと実用的な言葉のある文字の方があっ…」

「言葉の種類など、どうでもいい」

「へっ？」

はつきりと答えるイクラに、為介が目丸くする。

「俺は、“神”になれば、それでいい」

「神に、ねえ…」

強い意志を覗かせるイクラを見つめ、少し疲れたように肩を落とす為介。

「まあいいや。ボク、そういうくだらない執着ってわりと好きだし」

扇子を開き、為介が明るく頷く。

「教えてあげるよ、“い”の力。けえどっ」

言葉を付け加えた為介が、突き出した人差し指を、イクラの顔へと向ける。

「神になれるかどうかは、君次第だからねえ」

「……………」

そっと微笑む為介を見つめ、イクラが目細める。

「望むところだ」

こうして俺は、“祈る”ことを捨て、自らが“神”となる道を選んだ……………」

「そうだ…俺は“神”なんだ…」

過去の出来事を思い返し、もう一度確認するように、イクラがゆっくりと言い放ちながら、うつ伏せになっていた体を回転させ、水面の上で仰向けになる。

「俺は…“神”でなければ、ならないんだっ…」

言玉を握り締めた右手を、イクラが天井へと掲げる。

「だからっ…！」

声を震わせるイクラの言葉に反応するように、今までよりもさらに強い青色の光を放ち始める言玉。

「まだ、言葉を使う気かっ…？」

発生する強い光を見つめ、アヒルが戸惑うように声を漏らす。

「この、言葉っ…」

アヒルが見つめる中、イクラが言玉を握り締めたまま、水面の上でゆっくりと立ち上がる。

「二度と、口にすることもないと思っていた、この言葉をっ…」

立ち上がったイクラが、光り輝く言玉を掲げる。

「“^{いの}祈れ”…！！」

「な、何だっ…？」

イクラの言葉とともに、一面震え始める水面に、上空に浮かぶアヒルが、首を傾げる。

——バアアアン！

「あっ…！」

次の瞬間、イクラの背後の水面から、巨大な水の塊が勢いよく噴き上げ、真上の天井を突き破った。水の塊は徐々に空中で広がり、緻密な形を造り上げていく。

「あれはっ…」

形造られていく水の塊を見上げ、アヒルが眉をひそめる。

「人っ…？」

そこに形造られていくのは、一人の女性の水像であった。

Word. 22 執着ト覚悟ト (3)

遊園外、モニター前。

「なんて巨大な…」

天井を突き破り、造られていく水の像に、モニター越しに見つめる籠也が、少し圧倒されたように呟く。

「“祈れ”だから、女神様ってところかしら…」

「でも何だか…悲しそうな顔…」

その水像の女性の顔を捉えたモニターを見つめ、七架が少し表情を曇らせる。

「あんな巨大な像が、一気に降り注いだら…」

「遊園内は完全に水没しちゃうわね…フフフ…」

「えええ！？水没！？」

怪訝そうな表情を見せる籠也の横で、特に心配する素振りもなく微笑む囁。囁の言葉を聞き、保が焦りの声をあげる。

「水没どころじゃない」

「へっ？」

横から聞こえてくる声に、焦っていた保が振り向く。皆が振り向いた先には、固く腕を組んだ恵が立っていた。

「遊園はすでにボロボロで、崩れかかってんだ。あんなもんが降り注いだら、一気に大崩落だぞ」

「大崩落うっ！？」

冷静に言い放つ恵の言葉に、勢いよく頭を抱える保。

「大変ですうー！アヒルさんを助けないとおー！」

「待って」

「ぐへえっ！」

アヒルを助けるため、遊園内へと駆けて行こうとした保を、囁が後ろからネクタイを引っ張りあげるようにして、無理やり引き止め

る。

「今、私たちが中へ入ったら、ルール違反。アヒるんの負けになっちゃうわ…」

「で、ですがあ…」

囁の言葉は理解しつつも、保が複雑な表情でモニターを見つめる。

「このままじゃ、朝比奈くんが…」

「……っ」

不安げに呟く七架の横で、箆也もそっと険しい表情を見せる。

「よぉーしっ」

あまり気合いの入っていない気合いの声が聞こえた後、その場に何かが割れる音が響いた。

——ブー！ブー！ブー！

『えっ？』

響き渡る大きなブザー音に、皆が戸惑うように周囲を見回す。

「な、何だ？」

「緊急連絡用ボタンっていうの、押してみたんだあ」

「為の神」

ガラスの碎き割られた、『緊急』と赤く書かれたボタンを指差し、笑顔で言い放つ為介の方を振り向き、箆也が少し驚いた表情を見せる。

「これで、このマイク使えば、中の人に声が届くようになったよぉ」

その横のマイクを手にし、為介がさらに笑顔を作る。

「言いたいことあったら、言ったらいいんじゃない？」

「へっ？」

為介からマイクを手渡され、七架が目丸くする。

「言いたいことって…そんな急に言われても…」

マイクを見つめ、少し困ったような表情を見せる七架。

「朝比奈くん、大好きですう」とかっ？きゃあっ」

「こんな時にそんなこと、言いませんっ！」

冷やかすように言う為介に、七架がムキになって怒鳴り返す。

「貸せ」

「あっ」

七架から奪うようにマイクを取ったのは、すぐ横に立つ恵であった。

「朝比奈」

マイクを口に近づけ、恵がアヒルの名を呼ぶ。

「でっけえなあ…」

見上げても顔を確認することが出来ないほど、巨大に造り上げられたその水の像に、どこか圧倒された様子で声を漏らすアヒル。

「さすがに、これが降って来たらヤバっ…」

<朝比奈>

「んあっ？」

啞然と像を見上げていたアヒルが、どこからか聞こえてくる自分の名を呼ぶ声に、ふと顔を上げる。

「今、誰か、俺のこと呼んで…」

<朝比奈トンビ>

「だから、俺はアヒルだってえのっ！」

聞こえてくる声に、思わず反射的に言い返すアヒル。

「んっ？って、恵先生？」

<ああ、そうだ>

いつもの名前間違いをされ、アヒルがやっと、その声が恵のものであることに気づく。

「なんで恵先生の声が、中に？放送はさっきの稲妻で、ヤラれちまっただし…」

<今は、んなことは後回しだ。いいか、よく聞け。朝比奈>

「へっ？あ、ああっ」

急かすように言い放つ恵の言葉に、アヒルが戸惑いつつも、とりあえず頷く。

<今すぐ、その場を退避しろ>

「えっ…？」

思いがけない恵の言葉に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「た、退避って…」

<今、置かれている状況は、いくら頭の悪いお前でもわかるだろう>

「頭悪いって…」

齒に衣着せぬ恵の発言に、思わず顔をしかめるアヒル。

<その像が降り落ちれば、間違いなく遊園は崩れ落ちて、お前は死ぬ。その前に退避するんだ>

「け、けど、それじゃあ、この勝負がつ…！」

<これは、すでに神試験じゃない>

「……っ」

訴えかけようと身を乗り出したアヒルが、恵の声に言葉を止める。

<あいつらのやり方も、今のあいつのあの力も、明らかに五十音士の規約違反だ>

恵の声が、さらに続いていく。

<これは正式な試験じゃない。あいつのただの執着による、無産の戦いだ>

「執、着…」

その言葉を繰り返し、アヒルがそつと、像へと力を高めているイクラの方を見つめる。

<そんなもので命を落とすことはない。神試験はまた、新たな神に正式にやつてもらえばいい>

「新たな、神っ…」

アヒルが、イクラを見つめる瞳を、そつと細める。

——俺だけが、神だああっ…！！——

その時浮かんだのは、イクラが必死に叫んでいた、先程の言葉であつた。

<だから、とつとと退避を…>

「嫌だ」

<はあっ!?!>

アヒルがすぐさま答えると、恵のひっくり返ったような大きな声が、遊園内に思いきり響き渡った。

<嫌だあ?>

「ああ、無理だ」

<無理いっ!?!>

恵がさらに大きな声を、轟かせる。

<何、フザけたこと言ってる! いいかつ? これはもう、神試験ではなくてだなあっ…!>

「俺は、神試験だからって理由だけで、あいつと戦ってるんじゃないな
いっ!」

<何っ…?>

どこへともなく強く叫ぶアヒルの言葉に、恵が戸惑いの声を漏らす。

「神試験だからってだけで、あいつと向き合ってるんじゃないんだ」
真剣な表情を見せ、アヒルがさらに言葉を続ける。

「これは…」

アヒルが鋭い瞳で、まっすぐにイクラを見つめる。

「これは…あいつの執着と、俺の覚悟、どっちが強いかの勝負」
右手の銃を握り締め、アヒルが堂々と言い放つ。

<覚悟…?>

「ああっ」

聞き返す恵の声に、大きく頷くアヒル。

「俺の、神としての覚悟だっ」

「……っ」

アヒルの放つ言葉に、力を高めているイクラの表情が、かすかに動く。

「ここで逃げたりなんかしたら、俺は一生、あいつらの神として胸を張れないっ…！」

<……っ>

恵のマイクから、声にならない声が漏れる。

「だから俺は、最後までここに残って、あいつとの決着をつけるっ…！！」

銃をあげたアヒルは、強い瞳ではっきりと言い放った。

「アヒるん…」

「朝比奈くんっ…」

そんなアヒルの主張を聞き、少し細めた瞳で、眩しいものでも見るかのように、まっすぐにアヒルを見つめる囁と七架。

「……っ」

モニターに映るアヒルの強い瞳を見つめ、マイクを持ったまま、恵が表情をしかめる。

「何がっ…」

またマイクを通し、声を発する恵。

「何が神としての覚悟だ！さっきから何度も言っているだろう！？これはもう、神試験じゃなっ…！」

「……っ」

「あっ」

アヒルを説得するように、再び言葉を投げ掛けようとした恵の手の中から、マイクを奪い取ったのは、いつの間にか立ち上がった様子の、籠也であった。

「神月っ」

「神」

恵が睨むように見つめる中、籠也がマイクを口元へ寄せ、そっと

神という語を呟く。

<おっ、その声、箆也かぁ？お前、やっぱ無事だったんっ…>

「神」

<んっ？>

モニターから聞こえてくるアヒルの言葉を遮り、箆也がもう一度、アヒルを呼ぶ。

「いいか、神。よく聞け」

<また、このパターンかよっ…>

恵と同じような語りかけをする箆也に、アヒルが少しうんざりするように肩を落とす。

「あなたが、そこから退避する必要はない」

<へっ…？>

『えっ！？』

箆也の思いがけない言葉に、アヒルが間の抜けた表情を見せ、箆也の傍にいた皆が、一斉に驚きの表情を見せた。

「あなたが決着をつけたいというのなら、そうしろ。あなたの思った通りにすればいい」

<箆也っ…>

「だが…」

<……っ？>

言葉を付け加える箆也に、モニターの中のアヒルが、少し首を傾げる。

「絶対に負けるな」

<……っ>

マイクから放たれる箆也の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「そうですねっ！絶対に勝って下さい！アヒルさぁんっ！」

「あっ」

箆也からマイクを奪い取り、保が力一杯、叫びあげる。

「人類の未来をお願いしますっ！」

「訳もわかってない奴がマイクを使うな…」

必死に叫ぶ保に、箆也が横から冷たい視線を送る。

<はあ！俺みたいなのボが服着て歩いてるような奴が、偉そうに言
ってすみませえ〜んっ！>

<いいから、とっととマイクを返せ！>

「ハハハっ」

聞こえてくる保と箆也が言い争っている声に、アヒルが思わず笑
みを零す。

<あ、朝比奈くんっ、死なないでねっ…！>

「奈々瀬」

<死んだら私が地獄まで送ってあげる…フッフっ…>

「囁…」

七架の言葉に笑みを見せていたアヒルが、不気味な言葉を落とし
てくる囁に、一気にその表情を曇らせる。俯きながら、少し肩を落
とし、アヒルがどこかホっとしたような表情を見せた。

「みんな…元気そうだっ…」

仲間の無事を確認し、嬉しそうな笑みを零すアヒル。

「よっしゃあ！そんじゃあ、気合い入れていくぜえっ！」

アヒルが力の入った声を出し、銃を握る手に力を込める。

「神…」

『…っ』

マイクのスイッチを切り、モニターの中のアヒルを見守ることに
集中する、箆也たち四人。

「いいんですかあ〜？」

「ここまで来たら、もうどうにもならないだろ」

軽い口調で問いかける為介に、恵が少し呆れたように肩を落とし
ながら答える。

「まったく…」

呆れきった瞳を、モニターの中のアヒルへと向ける恵。

「ああいう向こう見ずなところは、お前とまったく同じだな…」
その瞳が、そっと細められる。

「カモメ…」

小さな声が、静かに落とされた。

「いいのか…？ 仲間の言ったように、ここから逃げ出さなくて」

「何、聞いてやがったんだ？」

試すように問いかけるイクラに、アヒルが強きに問いかけ返す。

「俺の仲間は“負けるな”って言ったんだよ」

アヒルが誇らしげな笑みを浮かべ、堂々と胸を張る。

「だから俺は、お前に勝つ」

その瞳を鋭くし、右手に持った銃の銃口を、イクラへと向けるアヒル。

「お前に勝って、俺は神になるっ…！」

「……っ」

アヒルが口にした“神”という語に、イクラがあからさまに表情をしかめる。

——じゃあイクラくん、先生が祈ってもいい…？——

今も、まるで瞼に焼きついていてるかのよう、瞳を閉じただけで浮かぶ、あの微笑み。

——イクラくんが幸せになれるように……——

「何が、神っ…」

過去の出来事を思い出し、イクラが煩わしそうに顔をしかめる。

「俺が神だ：俺だけが神だっ：」

少し声を震わせ、またしても言い聞かせるように必死に、その言葉を繰り返すイクラ。

「他の神など、この世界にはいないっ：」

———なんでええええっ：！！———

声を震わせたイクラが、力一杯、自らの拳を握り締める。

「俺以外の神など：この世界には必要ないっ：！！！」

顔を上げたイクラが、勢いよく叫びあげる。

「“行け”っ：！！」

イクラが言葉を放ち、掲げていた右手を力強く振り下ろすと、天井の上まで伸びあがっていた水像が、顔面から、下方にいるアヒルへと向かってくる。

「……っ」

降り落ちてくる水像を見上げ、グッと唇を噛み締めるアヒル。

「あ……」

口を開きながら、アヒルが銃口を、向かってくる水像の顔へと向ける。

「“当たれ”！！」

銃口から放たれた赤い光の弾丸が、正面から水像へとぶつかっていく。

「グっ：！！」

「クウっ：！！」

ぶつかり合う二つの力に、アヒルとイクラがそれぞれ、険しい表情を見せる。

「こっのっ：！！」

「うっ：！！」

銃を握る手に力を込め、弾丸の勢いを増させるアヒル。勢いの強

まった弾丸に、少し水像が押され、水像の足元に佇むイクラが、思わず顔をしかめる。

「俺はっ…俺は神なんだっ…」

必死に力を込めながら、イクラはまるで祈りのように、何度も言っ
て来たその言葉を繰り返す。

——俺はもう、神になんて祈らない……

——顔も知らない神に祈るくらいなら…俺が神になる……

「俺は…神でなければっ…ならないんだっ…」

瞳を細め、唇を噛み締めたイクラが、震えた声を落とす。

「こんな、ところでっ…負け、られるかっ…」

下ろしていた右手を、再び掲げるイクラ。

「何の意志もなく選ばれた貴様などにつ、負けられるかあああっ！
！」

「なっ…！」

掲げられた右手の中の言玉が強く輝き、アヒルが押し始めていた
水像が、勢いを増して、今度は逆に、アヒルの弾丸を押し始める。

「ううっ…！」

右手に一気に掛かってくる圧力に、アヒルが顔をしかめる。

「俺がっ、神だあああっ…！！！」

「……っ」

イクラの叫び声とともに、どんどん勢いを増していく水像。徐々
にその力に押され始めながらも、必死に叫ぶイクラのその姿を見つ
め、アヒルがそっと目を細める。

「お前が…」

掛かる圧力に耐えながら、アヒルがゆっくりと言葉を落とす。

「お前が、どんなもん、背負ってんのか知らねえーけどっ…」

アヒルの曇りない瞳が、まっすぐにイクラを捉える。

「俺だっ…」

——決めてたの：あの人のために、私は戦うって：！——
——これは俺の問題でもあるし、俺だってアヒルさんの力になりたいですから！——

——これは単なる“貸し”、だからね：！——

——“アヒルさんが神様でなくなってもいいから命が惜しい”なんて人、私の仲間にはいないって：！——

——今は、安の神の神附きであることに、誰よりも誇りを持って
いるっ：！——

「俺だってっ：！」

銃を握る手に、力を込めるアヒル。

「半端な覚悟でっ、神になろうってわけじゃねえんだよっ：！！」

アヒルの声に応えるように、赤い光の弾丸が、さらに激しく光を放ち、周囲を照らしながら、押されていた水像を、再び力強く押し返していく。

「うううっ：！？」

一気に押されていく自らの力に、驚きの表情を見せるイクラ。

「な、何だ？この力はっ：！」

イクラが戸惑いをそのまま、声にする。

「俺が、負けるっ：！？」

信じられないといった表情を見せながら、イクラが押されていく水像を見上げる。

「違うっ：！俺は神だ：！俺だけが神なんだっ！あんな偽物の神に、負けたりなどっ：！あっ：！」

必死に言葉が続けていたイクラの視界に入って来たのは、押されていく水像の女性の、どこか悲しげな、その表情であった。

「先、生っ：！」

重なるその姿に、イクラがそっと目を細める。

「俺は：あなたを救う、“神”になりたかった：！」

水像を見上げながら、力ない声を落とすイクラ。

「なりたかった…だけなんだっ…」

今までのどの言葉よりも自然に、素直に零れ落ちたイクラのその言葉に、水像の悲しげだった女性が、少しだけ、微笑んだように見えた。

「……っ」

その微笑みを見て、イクラがゆっくりと目を閉じる。

——バアアアアン！

アヒルの放った弾丸の光に吞み込まれ、イクラの水像は蒸発するように、空中へと掻き消されていった。

Word. 22 執着ト覚悟ト (4)

「はあ…はあ…はあ…」

呼吸を乱しながら、アヒルが構えていた銃をゆっくりと下ろす。

右手が下りると、もう限界が来ていたのか、銃は自動的に赤い言玉の姿へと戻った。

「やべっ」

銃が言玉へと戻り、“^あ上がれ”の力を失ったアヒルが、下の水面へと落ちる。

「このままじゃ溺れ死っ…んっ？」

泳ぎ耐える体力も残っておらず、焦りの表情を見せたアヒルであったが、周囲を見回し、ふとその眉をひそめた。

「水が…引いていく…？」

遊園内を埋め尽くしていた大量の水が、イクラの力を失ったからか、どこへともなく消え始め、その水位が徐々に減っていくと、水に浮かんでいたアヒルは、やがて水のなくなった地面へと降り立った。

「ふう、助かったあ」

久々に立つ地面の感触を確かめながら、アヒルが安心したように肩を落とす。

「う、うううっ…」

「あっ…」

声に反応し、アヒルが振り返ると、そこには、傷だらけの状態で、地面に力なく倒れ込んでいるイクラの姿があった。下がった水位に、イクラもまた、一緒に地面へと落ちてきたのであろう。

「んっ？」

イクラを見ていたアヒルの視界に、イクラの横に転がっている、二個の言玉が映った。

「……………」

ゆつくりとそこへと歩いていき、しゃがみ込んで、その二個の言玉を拾いあげるアヒル。

「ええーっと…」

懐に入れていたプレートを取り出し、そこに、今拾った二個の言玉を入れる。プレートは五つの穴すべてに言玉が入り、完成された状態となった。

「神試験最終戦、勝者、“安の神”朝比奈アヒル」

「へっ？」

背後から聞こえてくる声に、アヒルが戸惑うように振り返る。

「よって、神試験は安団の勝利となり、安の神を正式な“五神”の一人として認めます」

「言姫、さんっ…？」

アヒルが振り返るとそこには、黒い着物を着た数名の従者を連れた、和音が立っていた。神試験に和音が来ていることすら知らなかったアヒルは、驚きの表情を見せる。

「放送が遮断されていなければ、こんな感じだったでしょうかね？」

「な、なんで言姫さんがここにっ…」

「認証式は少々待っていただけます？安の神」

「へっ？」

問いかけようとするアヒルの言葉を遮り、和音がマイペースに話を続ける。

「包囲を」

『はっ！』

「えっ…？」

和音の言葉に頷き、勢いよくその場を飛び出した従者たちが取り囲んだのは、気を失っているのか、地面に倒れ込んだままのイクラであった。

「なっ…！何をっ…！」

「彼は自らの意志を優先し、神試験を遂行するのではなく、あなた

をただ神にせぬよう、悪戯に攻撃を仕掛けました」

イクラを取り囲んだ従者たちの方へ身を乗り出そうとしたアヒルに、和音が冷静に言葉を放つ。

「これは、五十音士として、ましてや五神の一人として、決して許されぬ行為です」

「……っ」

厳しく言い放つ和音に、アヒルが少し表情をしかめる。

「よって、彼の神称号を剥奪し、彼を五十音界から追放致します」

「なっ…！」

和音の言葉に、大きく目を見開くアヒル。

「剥奪って…」

——俺が…俺だけが神だっ…——

思い出される、イクラの必死な姿。

「まっ…」

アヒルが勢いよく、身を乗り出す。

「待ってくれよっ…！何もそこまでっ…！」

「そんなマネ、誰がさせるかよっ…！」

『……っ』

割って入ってくる声に、アヒルと和音が同時に振り向く。

「お前らはっ…」

「ウチの神を神でなくすようなマネ、あたいたちが絶対にさせないっ…！」

アヒルが振り向いた先に立っているのは、金八とシャコであった。二人とも戦いの傷でボロボロの体な上に、言玉も持っていないというのに、強い瞳で、まるで威嚇するかのように、和音を睨みつけていた。

「主犯は以の神と考えています」

二人の威嚇にも動じず、冷静に言葉を放つ和音。

「大人しく処分に従えば、あなた方の五十音士の称号は、剥奪致しませんわ」

「いらねえーよ！んなもんっ！」

「あたいたちの神は、この海産物な名前の神以外、他なんていないっ…！」

「…っ」

イクラを庇うように、必死に叫ぶ金八とシャコの姿を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「わかりました。では望み通り、三人揃っての追放を…」

「ちょ、ちよっと待っ…！」

「お待ち下さい」

『…っ』

アヒルに代わるように聞こえてくるその声に、アヒルや和音、金八たちが一斉に、その声の聞こえてきた方向を振り向いた。

「言姫様」

その場へと現れたのは、保と囁に支えられるようにして、ゆっくりと歩いて来た箆也であった。戦いが終わり、モニター前から中へと戻って来たのだろう。横には、七架の姿もある。

「箆也…」

現れた箆也を見つめ、和音がそっと目を細める。

「何でしょう？加守さん」

「以団は、決められた通りに神試験を行い、ルールに従い戦いを進め、そして、安団に敗れた。それだけです」

問い返した和音に、箆也がすらすらと言葉を並べていく。

「どこに、以の神や神付きの彼らが処分される必要が、あるのでしようか？」

『えっ…？』

「…っ」

その箆也の言葉に、金八とシャコが驚いたように声を漏らし、和音がかすかに表情をしかめる。

「ルールに従い…？この惨状で、ですか？」

すでに崩壊しかかっている遊園内を軽く見渡し、試すように問いかける和音。

「彼らが故意に、遊園を水に沈めようとしていたところも、わたくしは見ていました」

「それは白熱する戦いに、気持ちが高ぶって、思わず出してしまった言葉。別に故意ではありません」

「なっ…」

すぐさま言い返す箆也に、和音が驚きの表情を見せる。

「そうそう…戦いで熱くなると、つい周りを見失っちゃうのよねえ…フフフ…」

「うんうん！そ、そういうこと、ある！」

「お、俺も、あると思います！」

箆也に続くように、囁、七架、保も口々に言い放つ。

「ですが、以の神は確かに、安の神を殺そうとっ…」

「戦いなど、互いに殺す気でやるものです。ねえ？神」

「へっ？あ、お、おおう！」

不意に箆也に振られ、焦ったように声を上ずらせながら、アヒルが必死に頷く。

「俺なんか、隣校の奴とケンカする時だって、“死ねえ”とか言っちゃうぜえ？ハハハあゝっ」

「だ、そうです」

「…っ」

アヒルの発言を聞かせ、強い瞳を向けてくる箆也に、和音がそつと目を細める。

「あんたらっ…」

「うおおー！感動で、俺、泣いちゃうよおっ？」

必死に庇ってくれる箆也たちを、驚いたように見つめるシャコの横で、すっかり泣きそうになっている金八。

「まさかあなたが、彼らを庇うとは思いませんでした…」

「別に僕は、事実を述べただけですよ」

「……そうですか」

シレッと答える籠也に、和音がどこか諦めたように肩を落とす。

「どうやら、あなたの甘さが、皆にうつってしまったようですわね」

「へっ？」

少し呆れたような笑みを向ける和音に、その言葉の意味がわからず、アヒルが大きく首を傾げる。

「まあいいですわ。今回のことは、お咎めなしとすることにしましょう」

「じゃ、じゃあっ…！」

「ただし」

「……っ」

強く言葉を付け加える和音に、アヒルが少し緊張した面持ちで息を呑む。

「今後もし、彼らが新たな問題を起こした場合、その時は、あなた方にも責任を取っていただき…」

和音が鋭い瞳を、アヒルへと向ける。

「あなたからは、安の神の称号も剥奪させていただきますので、そのおつもりで」

『えっ…！？』

「いいぞお」

「だあああああ！」

和音からの厳しい言葉に、険しい表情を見せる籠也たちであったが、一人あっさりと頷くアヒルに、籠也が勢いよくズッコケた。

「苦勞して得たばかりの神資格を、剥奪されることを、あっさりと承諾するんじゃないっ！」

「別に、あいつらが問題起こさなきゃいいだけの話だろっ？」

注意するように怒鳴る籠也に、アヒルは暢気に言い返す。

「と、いうわけでお前らっ」

『えっ？』

アヒルに呼びかけられ、金八とシャコが戸惑った様子で振り向く。
「そいつが起きたら、なるべく問題起こさないようにって、伝えといてくれるかあ？」

深く瞳を閉じたままのイクラを見つめ、アヒルが言い放つ。

「って、んな言葉、聞くような奴じゃねえーかつ」

『……っ』

少し困ったように言いながらも、穏やかな笑みを浮かべるアヒルの姿を見て、金八とシャコがそっと目を細める。

「では、そういうことで、我々はここで失礼致しますわ」

「ああ」

イクラを取り囲んでいた従者を退かせ、その従者を引き連れ、遊園の出入口へと歩を進めていく和音を、頷きながら、アヒルたちが見送る。

「ああ、そういえば箆也」

「……っ？」

足を止める和音に、名を呼ばれた箆也が、少し首を傾げる。

「箆也には…お会いになりました…？」

「……っ」

「オリヤ？」

和音のその問いかけに、アヒルが首を傾げる横で、箆也がそっと表情を曇らせる。

「ああ…」

「そうですか…」

頷く箆也を見て、和音がどこか満足げに微笑む。

「では、失礼致しますわ。安の神、また」

「あ、ああっ」

アヒルへ向けて軽く一礼すると、和音は従者とともに歩を進め、やがてその姿は、アヒルたちから見えなくなった。辺りに静けさが戻る。

「何だったんだ？今の」

「あの人のいつもの嫌味行為だ。別に気にしなくていい」

「ふうん」

籠也の答えに一応は頷くアヒルであったが、その表情を見ると、和音の真意や籠也の心情は、あまり理解していない様子であった。

「安の神」

「んっ？」

神の名を呼ばれ、アヒルがゆっくりと振り返る。するとそこには、それぞれの肩に手をかけ、イクラを担ぎあげた、金八とシャコが立っていた。

「例え恩義が出来たとしても、あたいたちは以団。あんたたち安団は、あたいらの敵だ」

「俺たちは、お前らと慣れ合うつもりも、今度、お前らに従って大人しくするつもりも、一切ない」

「あらあら…困った人たちね…フフフっ…」

厳しい言葉を吐き捨てる二人に、囁が呆れたように声を出す。

「だが」

「……っ？」

言葉を付け加える金八に、アヒルが少し首を傾げる。

「我が神を神のままに在らせてくれたこと、我が神の執着と正面からぶつかってくれたこと…」

言葉が続けながら、金八がそっと口元を緩める。

「礼を言う。ありがとう」

「ありがとう」

「……っ」

口々に礼を言い放つ金八とシャコに、アヒルの表情からも笑顔が零れ落ちた。

「俺、思わず泣いちゃいそうだったぜいっ！」

「さっき、チラッと泣いてた…金八…」

「うっせえ！とっとと行くぞお！シャコ！」

少し言い争った後、金八とシャコが再び笑顔を作る。

「では、安の神」

「また、どこかで」

「ああっ。あ、そうだ」

二人の言葉に頷いたアヒルが、何か思い出した様子で、顔を少し俯ける。

「これっ、返しとくな!」

「んっ?」

そう言っアヒルがシャコへと投げ放ったのは、以団五人の言玉が入った、青いプレートであった。シャコがしっかりと、そのプレートを受け取る。

「それ、ないと困んだろ?」

「確かに…」

「そういや、こっちもだったな。ほらっ!」

『あっ』

頷いているシャコの横で、イクラの懷をあさった金八が、上空へ向けて勢いよく何かを投げ飛ばす。しばらくすると、簞也、保、七架のもとへ、それぞれの言玉が落ちてきた。

「じゃあなあゝ! 安団! 次会った時は、負けねえぞお!」

「次こそ…倒してやる…」

金八とシャコが、戻って来たばかりの言玉を握り締め、それぞれに手を掲げる。

——パアアアン!

三人の周囲から噴水のように水が突き上げ、その水が再び地面へと落ちると、すでにそこに、三人の姿はなくなっていた。

『……………』

地面にかすかに残った水の滴を見つめ、安団の面々がどこか考え込むような表情を見せる。

「何か…」

一番に口を開いたのは、保。

「そこまで悪い人たちでもなさそうでしたね」

「ああ、そうっ…」

「地球外生命体の皆さん」

「だあああっ！」

保の発言に、頷こうとしていたアヒルが、その場で勢いよく転ぶ。

「だ、大丈夫っ？ 朝比奈くん！」

「どうしたんですかぁー！？ アヒルさぁーん！」

「そういや…地球侵略ってことになってたんだっただな…色々あります、忘れてたっ…」

七架と保に心配されながら、アヒルが頭を少し重そうに抱え込む。

「これで無事、神試験クリアね…」

「まあまあだな」

「フフフっ…素直じゃないわね…」

素っ気ない態度を見せる箆也を見て、囁はどこか楽しげに笑った。

「……………」

遊園内の少し離れたところから、あれこれと騒いでいるアヒルたち五人の様子を見つめ、穏やかな笑みを浮かべている恵。

「即席のわりには、いいチームになったじゃねえかつ」

恵の口元が、そっと緩む。

「まあ、とりあえずはお疲れ様ってとこだな。安団っ」

「ふはぁー！ こんなありふれた名前の俺が、アヒルさんみたいな思いきった名前の人のこと、心配しちゃってすみませえーん！」

「だからケンカ売ってんのかよっ！ てめえはっ！」

「うるさいから、どちらも黙れ…」

「ええーっと、その、みんな、えと、もっと仲良くっ…そのっ…」

「フフフっ…」

こうして、十時間に及んだ神試験は、安団の勝利で、幕を閉じた。

その頃、遊園外、モニター前。

「為介さんっ」

「あ、雅くうくん。久し振りいっ」

放水により、和音とともにモニター前から避難していた雅が、モニター前に残っていた為介のもとへとやって来る。

「戦いが終わったそうで、言姫様は遊園の中につ…」

「あ、うん、見てたあ。もうお帰りになったみたいだよお」

「そうですか」

モニター越しにアヒルたちの無事な姿を確認し、口には出さないが、雅も安心したような表情を見せる。

「……………」

「んん？」

ふと視線を逸らした為介が、その場を立ち去ろうとする檻也の姿を見つける。

「どうでしたあ？彼らの戦いはっ」

「……………」

為介の問いかけに、止まる檻也の足。

「“於^おの神”」

「えっ…？」

為介が呼ぶその名に、横に立っていた雅が、少し眉をひそめる。

「ふう…」

軽く息を吐いた後、檻也がゆっくりと為介の方を振り返る。

「とんだ茶番だった」

落ち着いた表情を見せた檻也が、どこか冷たく、言葉を吐き捨てる。

「あいつらのどちらが神か？くだらない」

煩わしそうに眉をひそめ、重い声を落とす檻也。

「あいつらは、どちらも神じゃない」

その瞳を鋭くし、檻也が睨むように為介を見つめる。

「本当の神は、正統な神の血筋を引く、この俺だけだ」

はつきりと言い放つと、檻也が再び、為介たちに背を向けた。

「籠也の神も、いずれ思い知る」

その言葉を最後に、檻也は振り返ることなく歩を進め、やがて為介たちの前から去っていった。

「難しそうな神様ですねえ」

「そお？ボクには、わりかし単純に見えたけどお」

檻也が去り、その場に二人だけとなった為介と雅が、どこか暢気に言葉を交わす。

「さあゝてっ」

為介がゆっくりと振り向き、モニターに映る、仲間たちと笑い合っているアヒルを見つめる。

「これが終わりじゃない。これが始まりだよおゝ？朝比奈クンっ」

まるで試すような為介の言葉が、モニターのアヒルへと、そっと投げかけられた。

Word 23 異国ノ音士 (1)

言ノ葉町三丁目、町の小さな八百屋さん『あさひな』。

「んんっ…シロナガス…クジラっ…」

二階の一室では、朝比奈家の四男坊・アヒルが、ベッドの上で寝返りを打ちながら、いつものように、意味のわからない寝言を呟いている。

「グッドモーニング！グッドルッキング！アーくうん！」

部屋の扉を勢いよく開け放って、中へと飛び込んでくるのは、今日も相変わらずのヒゲ面に、持ち前のハイテンションの朝比奈家父。その両脇には、大量にネギを抱えた、箆也と囁の姿があった。

「箆也くん、囁ちゃん、レッツゴー！白髪ネギいっ、トリプルアタアアアック！」

『ラジャー』

父の指示に躊躇うことなく頷いた箆也と囁が、抱えていた大量のネギを、まだ寝ているアヒルへ向け、勢いよく投げつける。

「だあああああっ！！！」

ネギの大群が体中に押し寄せ、ベッドの上ですぐさま立ち上がるアヒル。

「いい加減につ…しやがれえええ！！！」

「ぐはあああ！」

アヒルが投げつけられたネギの一本を力一杯に投げ返すと、そのネギが見事に父の大きく開いた口に突き刺さり、父はそのまま、後方へと倒れていった。

「ノックアウト…フフっ…」

倒れた父を見下ろし、囁がどこか不気味な笑みを浮かべる。

「ったく」

呆れきった表情で肩を落としながら、アヒルがベッド周辺に散乱しているネギを一本ずつ拾っていく。

「だいたい俺が呼んだのはシロナガスクジラだし、白髪ネギじゃ“シ”しかあってねえーだろうがっ」

“シ”があつてただけ父を誉めろお！」

「そうだ。あなたの父が五十音を理解していたことを、奇跡と思え」
「お前が言うな。悲しくなる」

起き上がって訴える父を、フォローするように冷静に言葉を挟む
箆也に、アヒルがどこか複雑な表情を見せる。

「いっやあー、アーくんがグループ学習で土日とお家に居なかったから、この感覚、久し振りだねえ」

「へっ？あ、ああ。そ、そうだな」

嬉しそうに笑う父に、どこか歯切れ悪く答えるアヒル。土日と、アヒルは神試験のため家を空けていたのだが、そのことを父に話すわけにも行かず、グループで課題があつたため、箆也たちの家に泊まっていたことにしたのである。

「というわけで、嬉しいついでにもう一ラウンドおっ：！」

「誰がやるかあ！」

「ぐはあああ！」

ネギを振りかぶろうとした父に、アヒルが素早くネギを投げつけると、ネギが再び父の口に突き刺さり、父はまたしても床へと倒れ込んだ。

「つたく、やっと家に帰って来たと思ったら、これだからなあ」

「あら：？遊園で溺死サバイバルしてる方が楽しかった：？」

「いや：それはちよつと：」

試すように問いかける囁に、引きつった表情を見せるアヒル。必死に戦い、ようやく“以の神”伊賀栗イクラ率いる以団に勝利し、正式な“五神”の一人として認められたのだ。もうしばらく修行だの試験だのは、遠慮したいアヒルであつた。

「早く支度しろ、神。またあの“女守”教師にどやされるぞ」

「あ、ああっ」

急かすように言い放つ箆也に、アヒルが頷きながら、壁にかかっ

た制服を見上げる。

「戻って：来たんだよな。“日常”に：」

制服を見つめながら、アヒルはどこか確かめるように、そつと呟いた。

「うーん！美味しい！」

朝比奈家一階の居間では、口一杯に物を頬張り、大きく頬を膨らませた次男のスズメが、何とも幸せそうな笑顔を見せていた。

「今日の朝飯も最高に美味だぜえ！たもっちゃん！」

スズメが後ろを振り返り、台所に立つ保の方を見る。

「この腕前なら、恋盲腸検定準二級、合格だあ！」

「あ、ありがとうございます！こんな俺なんかが準二級だなんてえっ！感動です！」

「朝っぱらから意味不明な会話、してんじゃねえーよっ：」

スズメのいかにも適当そうな言葉に、何故か感極まっている保に、二階から居間へと降りてきた、制服に着替えたアヒルが、呆れた表情を向ける。

「あ、アヒルさあーん！おはようございます！」

「ようっ」

「恋盲腸検定とか、適当なことやってんじゃねえよ、スー兄っ」

軽く手を挙げ、朝の挨拶を向けてくるスズメに、アヒルが冷めた視線を送る。

「適当じゃねえよお。本当にあんだぜ？恋盲腸検定。俺、一級持ってるし」

「マジっ!？」

「ちなみに僕は準一級だ」

「お前も持ってんの!？」

後方から会話に混ざってくる箆也に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「うん…」

スズメのすぐ隣で、ゆっくりと保の作った朝食を堪能している、三男・ツバメ。

「この腕前なら、薫人形検定十八級、合格だね…」

「その検定は絶対ねえだろ」

スズメと同じようなことを言うツバメに、アヒルが鋭く突っ込みを入れる。

「おはようございまーすっ」

「あ、紺平」

そこへ、いつものように、紺平が迎えにやって来る。声のすぐ後、店の通用口から居間の方へと、紺平が姿を見せた。

「よっ、紺平」

「おはよう、ガア、みんな」

軽く手を挙げたアヒルに、紺平が爽やかな笑顔を向ける。

「んじゃまっ、とっとと学校行きますか」

「ああ」

「ええ…フフっ…」

「はい！何、勉強しても頭に入って来ない俺なんかが、学校とか行っちゃってすみませえ〜んっ！」

アヒルの言葉に、箆也、囁、保が、それぞれに頷いた。

「神月くん」

「はっ？」

「いつもにも増して、眉毛が吊り上がってませんかあ？」

不機嫌さ全開のしかめた表情で、学校への道を歩く箆也に、横に立つ保が、どこか恐る恐る問いかける。

「はあ！もしかして、俺の作った朝飯がマズすぎて、そんなしかめっ面になったままなんじゃあっ…！」

「違う。不快極まりないデカ声のあなたが、横に居るからだ」

「ひやあゝ！無駄に身長デカくって、神月くんの低身長が目立つちやって、すみませえゝん！」

「黙れ…」

「フフフ…」

あれこれとモメている箆也と保の様子を、すぐ後ろから見守りながら、囁が楽しげな笑みを浮かべる。

「神月くんて…あんなキャラだっけ？」

「さ、さあ？あんなもんじゃねっ？」

その三人の前方を歩く紺平が、後ろを振り返りながら大きく首を傾げる。怪訝そうに呟く紺平に、隣を歩くアヒルは、どこか上ずった声で言葉を返した。

「つつーか、キラキラ青少年キャラでいくなら、最後まで貫けよっ…」

「へっ？」

「い、いや、何でもねえっ」

思わず文句を口にするアヒルであったが、紺平に振り向かれ、慌てて首を横に振る。

「ってか、何か仲良くなってるよね。あの二人」

「そ、そうか？あんなもんだったらっ」

「……っ」

再び箆也たちの方を振り返り、鋭く言い放つ紺平に、アヒルがまたしても誤魔化すように答える。そんなアヒルに軽く視線を流し、紺平がそっと目を細めた。

——グループ課題あるから…箆也くんたちの家に泊まってるんでしょ…？——

「……………」

思い出されるツバメの言葉に、紺平がそっと俯き、少し陰しい表情を見せる。

「ねえ、ガア」

「ああ？」

紺平に呼びかけられ、アヒルが振り向く。

「ガアたちって、昨日、さっ……」

「朝比奈ああ！」

「んあっ？」

ゆっくりと落とされた紺平の声を勢いよく遮る、前方から聞こえてくる大きな声に、紺平の方を見ていたアヒルが、首を前へと向け直した。

「ここで会ったが百年目ええっ！」

『金曜日会いました！アニキ！ただの三日ぶりっス！』

「うるっしやーいっ！」

アヒルたちの行く道の前方へと現れたのは、今日もリーゼントにグラサン姿のアニキに、アニキの子分集団であった。いつものように、無駄に元気一杯である。

「今日の今日こそ！コテンパンのパンの耳にしてやるうう！」

「ああ、日常って感じだなあ」

勢いよくアヒルを指差し、叫びあげるアニキを見て、焦るどころか、まったりとした表情を見せるアヒル。

「覚悟おおっ……！！」

「ハイハイ」

「あっぎゃあああっ！」

勇んで、アヒルへと飛びかかっていったアニキであったが、アヒルが右手に持った鞆を軽く振り切ると、その鞆がアニキの腹部に直撃し、アニキが勢いよく吹き飛ばされていく。

『アニキいいいっっ！』

飛んでいくアニキを、必死に追いかけていく子分たち。

「はあっ、あのイクラちゃんに比べたら、アニキなんて可愛いもんだよなあ」

「朝比奈くん！」

「あっ？」

アニキの飛んでいった方角を見つめ、しみじみと呟いていたアヒルが、またしても呼ばれる名に、右方の脇道を振り向く。

「奈々瀬」

「おはよう、朝比奈くん」

脇道からアヒルたちの行く大通りへと出て、アヒルへと満面の笑みを向けるのは、七架であった。

「ああ、おはよう」

「きよ、今日も絶好のホノルルマラソン日和だね！」

「そうだなあ。まあ今日、ホノルルマラソンやってつかは知らねえーけど……んっ？」

「……………」

よくわからない七架の言葉に対し、少し困ったような表情で返事をしていたアヒルが、その七架の横で、何やら啞然とした表情を見せ、何も言わずに立ち尽くしている想子を見つけ、首を傾げる。

「んだよ？何、アホ面かましてんだ？想子」

「へっ？あ、ああ、べ、別に何でもないわよっ。ちょっ、ナナっ」

「えっ……？」

問いかけるアヒルに誤魔化すように答えながら、想子が七架を引っ張り、アヒルに背を向けるように、体の向きを変えさせ、その耳元に口を寄せる。

「あんた、いつの間にすんなり、ガアにおはよう言えるようになったわけ？何かあったの？」

「へっ？」

アヒルに聞こえないように、ひっそりと問いかける想子に、七架が目丸くする。

「べ、別に何もないよ！」

「ホントにいっ？」

「ほ、ホントホント！」

疑うように見てくる想子に、大きく手を振りながら、必死に答え

る七架。想子に奈守になって、安団に入って共に戦ったため、アヒルと親しくなったなどと言うことが、出来るはずもなかった。

「あっ！おはようございまあゝす！奈々瀬さあゝん！」

「んっ？」

そこへ、後方からやって来ていた籠也や保たちが、やって来る。

「はあ！こんなクラスのウザい人ランキングに選ばれちゃいそうな俺が、奈々瀬さんに気安く朝の挨拶しちゃって、すみませえゝん！」

「ああ、ウザいウザい」

「お、おはよう…みんな…」

謝り散らす保と、保に冷たい言葉を吐き捨てている籠也に少し呆れながらも、七架が皆へと挨拶をする。

「具合はどう…？」

「あ、真田さん」

二人の横から七架へと歩み寄った囁が、気にかけるように七架へと問いかける。

「大丈夫だよ。真田さんは？」

「私も大丈夫よ…フフフ…」

互いに元気なことを知り、囁と七架がどこか安心したような笑みを見せる。

「昨日、死者の魂を三つ、喰らったから…」

「ぎゃああああ！」

「フフフ…冗談よ、アヒるん…」

悲鳴をあげるアヒルに、囁が不気味な笑顔を向ける。

「なあゝんて言うか…」

あれこれと騒がしい五人の様子を見ながら、ゆっくりと言葉を呟く想子。

「妙な連帯感があるわねえ」

「……………」

不思議がるように首を傾げる想子の横で、紺平は複雑そうに眉をひそめた。

言ノ葉高校、一年D組。

「相沢」

「はい」

朝のホームルームでは、D組の担任の恵が、いつもと何ら変わらない様子で、淡々と出席と取っていた。

「朝比奈」

「はい」

「……んっ？」

出席簿にチェックをいれていた恵が、返って来る返事に、しばらくしてから、驚いたように顔を上げる。

「何だ。遅刻じゃねえとは、珍しいなあ、朝比奈トンビ」

「だから、俺はアヒルだっての！」

いつもと同じように名前を間違える恵に、アヒルがいつもと同じように勢いよく怒鳴り返す。

「トンビのくせに遅刻せずに来るとは、生意気だな」

「だから俺はアヒルでえっ」

「罰として今日、放課後、資料室掃除な」

「いやっ、意味わかんねえーし！」

遅刻しなかったというのに、遅刻した時と同じように掃除を言い渡され、アヒルが反論するため、思わず席を立つ。

「職権乱用だろ！それ！」

「職権なんてものは、乱用するためにあんだよ」

「どういう理屈だあ！それえ！」

自信満々に言い放つ恵に、怒鳴り散らすアヒル。そのいつもの光景を、クラスメイトたちは皆、のんびりと見つめていた。

「んっ？」

「……………」

そんな中、一人、険しい表情で、窓の外の景色を見つめている紺平の姿が、恵の視界に入ってくる。

「……っ」

その紺平の様子を見つめ、恵はそっと目を細めた。

Word. 23 異国ノ音士 (2)

放課後、国語資料室。

「はあっ…」

必死の訴えも認められず、遅刻もしていないというのに資料室の掃除をすることとなったアヒルは、ホウキで床を掃きながら、深々と溜息をついていた。

「その、こっちの幸せまで吹き飛んできそうな溜息、やめろよ」

「あんたのせいで、出たんだろうが！」

隣の部屋で本を読みながら、煩わしそうに言い放つ恵に、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「ったく、今日は帰りにみんなで、扇子野郎のどこ来るように言われてんのにさあ」

「為介の？」

アヒルの言葉に、恵が少し眉をひそめる。

「ああ。言姫さんの代わりに、扇子野郎が俺の認証式やるんだとっ」

「ふうーん」

恵があまり興味なさそうに頷きながら、読んでいた本を閉じる。

「ま、あれは言姫か神が立ち合うのが決まりだからな」

本を机の上に置いた恵が、椅子かた立ち上がり、アヒルのいる資料室の方へと歩いてくる。

「といっても、神としての決まりをゴタゴタと説明されるだけだ。

クソつまんねえーぞ」

「げえっ」

恵の話聞き、アヒルがあからさまに嫌そうな顔を見せる。

「面倒だなあ。説明かあ」

「……………」

床を掃きながら、憂鬱そうに呟くアヒルを見つめ、恵がそつと目を細める。

「お前さ」

「へっ？」

恵に呼ばれ、アヒルが顔を上げる。

「目の前のことにばっか気取られてっと、横にあるもの、見失うぞ」

「はあっ？」

その言葉の意味がわからず、アヒルが大きく首を傾げるが、恵はそんなアヒルに補足の言葉を付けるでもなく、また先程の部屋へと戻っていった。

「横っ…？」

恵の言葉を繰り返し、アヒルは戸惑うような表情を見せた。

「ふう」

放課後、下校する生徒たちの姿も少なくなった昇降口の前の廊下を、少し息を吐きながらゆっくりと歩く紺平。紺平は左腕に風紀と書かれた腕章をしており、黒いノートを持っていた。

「ええーっと、次は茶道部の下校チェックを…あれっ？」

ノートを見ていた紺平が、ふと顔を上げ、何かに気づいた様子で声を出す。

「あれは…」

紺平が見つけたのは、昇降口を出たところで集まり、何やら楽しそうに話をしている籠也、囁、保、七架の四人であった。

「珍しい四人だなあ。こんな時間まで何してっ…」

「おう、紺平」

「えっ？」

四人を見つめていた紺平が、後方から聞こえてくる声に、戸惑うように振り返る。

「あ、ガァ」

「委員会か？大変だな」

紺平の後ろから、その場へと現れたのはアヒルであった。今まで国語資料室の掃除をやっていたのだろう。振り返った紺平に、アヒルが明るく笑顔を向ける。

「おっ、いるいる」

「……っ」

昇降口の前で待っている四人を確認するアヒルに、紺平がそっと目を細める。

「どこか、行くの？」

「へっ？」

紺平が問いかけると、アヒルは少し目を丸くして、振り向いた。

「五人って、何か珍しいよね」

「えっ!？」

その指摘に、思わず焦ったように声をあげるアヒル。

「あ、え、ええーっとだなっ、お、俺らの知り合いの共通の知り合いが店やってて、た、たまたまこの前、その話になって、そんな時のノリで一緒に行こうみたいな感じになってっ…!」

「ふうーん、そうなんだ」

「へっ…?」

苦し紛れに言葉を繋いだアヒルであったが、あっさりと返って来る紺平の声に、戸惑うように顔を上げる。

「いってらっしゃい。明日も遅刻しないようにね」

「あっ…」

いつもと同じ注意を投げかけると、紺平はアヒルに背を向け、廊下の奥へと消えていった。

「紺、平…?」

どこか感じる違和感に、アヒルが少し首を傾げる。

「何をしている? 神。とっとと行くぞ」

「えっ? あ、ああっ!」

昇降口の外から、急かすように呼ぶ箆也に、アヒルは慌てて頷きながら、学校を後にした。

言ノ葉町五丁目、町の小さな何でも屋『いどぼた』。

「以上、全二百六十二条。これで五神規約の説明は終わりだよお」
「ぶっはあああゝっ！」

トイレットペーパーと間違えそうな程に長い巻物に書かれた、全ての説明を為介から聞き終え、アヒルが大きな声を出しながら、居間の畳に思いきり寝転がる。小難しい内容の話を、じっと同じ姿勢で聞き続けることは、アヒルにはとても苦痛であった。

「長かったあゝ死ぬかと思ったあゝ」

「フフっ…」

「情けない。それでも言葉の神か」

畳に寝転がったまま、緩みきった声をあげるアヒルに、横に座る囁がそっと微笑み、箆也がどこか呆れた様子で肩を落とす。

「痛たたたっ…足の感覚があっ」

「だ、大丈夫…？高市くん…」

ずっと正座をしていたため、足の感覚を失っている保に、七架が少し心配するように声をかける。

「朝比奈くん、規約の内容わかったあゝ？」

「全然っ」

「あ、そう。じゃあ次行こっかあゝ」

「おいっ！」

大きく首を横に振ったアヒルを気にすることなく、話を進めようとする為介に、箆也が思わず立ち上がる。

「何だ！その適当な説明は！仮にも、他神や言姫を代表して、認証式を行っているというのになっ！」

「式なんてだいたい、こんなもんだよお。こんな長い巻物、一回で全部理解するなんて無理に決まってるしい」

「そ、それはそうかも知れないが…」

為介の軽い口調の正論に、箆也が思わず言葉を詰まらせる。

「だが、一応は決まりなのだから、もっとこうっ…」

「ほいじゃあ朝比奈くん、これえ…」

「へっ？」

何かを差し出す為介に、畳に寝転がっていたアヒルが、ゆっくりと起き上がる。

「何だあ？これっ」

起き上がったアヒルが、為介から受け取ったのは、銀製の、ずっしりと重みのある腕輪であった。腕輪の中央部分には、『安』と文字が彫られている。

「五神の証みたいなもんだよね。それは“安の神”の証」

「だから“安”って彫られてるんですね」

為介の説明を聞きながら、七架が感心するように腕輪を見つめる。
「代々の“安の神”が受け継いでる、由緒正しいものだから、なくさないようにねえ」

「代々の？」

その言葉を聞き、アヒルが少し眉をひそめる。

「そのわりには新しいわね…」

「ああ。むしろ新品っぽいつつーかつ…」

汚れ一つなく、銀も錆びつくことなくキラキラと輝いているその腕輪に、アヒルと横から覗く囁が、どこか戸惑うように言葉を交わす。

「ああ、そういえば安の神の証は、先代安の神が壊しちゃったから、新しくなったとこだったっけえ」

「壊したあ？」

思い出したように言う為介に、驚きの表情を見せるアヒル。

「こんな頑丈そうなもん、壊すとは、随分と荒っぽい奴だったんだなあ。先代安の神ってのは」

「アヒルんもいい勝負じゃない…？フフっ…」

感心しながら腕輪を見つめるアヒルに、囁がそっと笑いかける。

「……………」

「……っ」

どこか陰しい表情を見せている簞也を見て、為介が鋭く目を細める。

「さあ、じゃあ、これで朝比奈くんの認証式は終わりにっ…」

「頼モオオオオーウ！」

「んんん？」

式を締めくくろうとした為介が、店の外から聞こえてくる大きな声に気づき、顔を上げる。

「何だ？」

「お客さんじゃない…？フフっ…」

「今日、雅くん、いないんだよねえ。仕方ないなあ。はいはあ、い、今、行きますよお」

アヒルたちが顔を上げる中、為介がどこか面倒臭そうに立ち上がり、居間を出て、店へと繋がっている部屋を通り、店の前へと出て行く。

「ハイハイ、いらっしやいまっ…」

「へろっ！」

「へろっ…？」

店の戸をくぐり、外へと出た為介が、前方から聞こえてくるその声に、戸惑うように顔を上げる。

「ナイストゥーミーチューっ！」

「えっ…？」

為介が顔を上げた先に立っていたのは、染めているものとは明らかに違う自然な金色の髪に、透き通った青色の瞳に、足ばかりの長身の、まだ若い男性であった。視界に入っているのではないのかと思うほどの高い鼻の顔立ちが、日本人のそれとは異なっている。

「あら…？外人さん…？」

「海外からも客が来るのか、この店」

為介に続くようにして、家の中から出てきた簞也と囁が、意外そ

うにその外国人を見る。

「どうしよお〜？ボク、外国語は、ドングリゴロゴロドングリ語しか、話せないんだよねえ〜」

「絶対ねえだろ、んな語っ」

困ったように首を捻る為介に、箆也たちとともにその場に現れたアヒルが、鋭く突っ込みを入れる。

「大丈夫デェ〜ス！」

『へっ？』

いきなり割って入って来る外国人のその声に、アヒルたちが一斉に振り向く。

「ワタシ、日本語ペラペェ〜ラノペラノ助！英語ワカラナクテモ、何モ問題、アリマセェ〜ン！」

「ペラの助って…」

「その時点で問題ありだろ」

流暢というよりは不自然な日本語を使うその外国人に、アヒルと箆也が呆れた表情を見せる。

「アアァ〜、スミマセェ〜ン。少シ、オ尋ネシタイノデスガァ〜」

「んあっ？何だ？」

片言ながらも流暢な日本語を話す外国人に、耳を傾けるアヒルたち。

「コチラニ、朝比奈ダックサン、イラツシャイマスカァ〜？」

「朝比奈…？」

「ダック…？」

外国人の言葉に首を傾げながらも、皆がゆっくりと視線をアヒルの方へと動かしていく。

「へっ？俺？」

皆からの視線が集まり、戸惑うように自分を指差すアヒル。

「間違いなく、あなただろう」

「そうね…ダックはアヒルのことだし…フフっ…」

「ほら、呼ばれてるよお〜北京ダックくんっ」

「誰が北京だ！苗字まで変えてんじゃねえ！」

「オオっ！」

箆也たちから口々に指摘され、軽く苛立っているアヒルを見て、外国人が目を輝かせる。

「アナタガ朝比奈ダックサンデスカァー！」

「だから、俺は朝比奈アヒルだったの！ダックじゃねえ！」

外国人が嬉しそうな笑顔を浮かべながら、勢いよくアヒルの目の前へと歩み寄り、両手でアヒルの手を取る。もう一度名を呼ぶ外国人に、アヒルは強く怒鳴りあげた。

「デハ、アナタガ“安ノゴッド”、デスネェー！」

「えっ…？」

『……っ』

外国人のその言葉に、アヒルや箆也たちが皆、顔色を変える。

「なんで、俺が安の神ってこと知って…」

「何者だ？」

「アヒるんが神って知ってるってことは…それなりの関係者かしら…？」

アヒルが戸惑っていると、アヒルを庇うように、箆也と囁が素早くアヒルの前へと出て、外国人へと鋭い視線を向けた。

「オオ！怖い顔、シナイデ下サァーイ！ワタシモ、アナタ方ト同じ、五十音士デェース！」

「何？」

「五十音士い？」

必死に主張する外国人に、アヒルたちが驚きの表情を見せる。

「ハァーイ！ワタシ、五十音第四十一ノ音、“ら”^{ちから}ノ力ヲ持ツ、“良守”^{らもり}ノ、ライアンデェース！」

「良守？」

身分を明かすライアンに、アヒルがさらに驚いた様子で、目を丸くする。

「五十音士って、外人でもなれんのかよっ？」

「異国の者がなったという話を聞いたことはないが…」

「なれないって決まりも、そういえば、なかった気がするわね…フフっ…」

アヒルの問いかけに、少しひそめた表情で答える簞也と、そっと微笑む囁。

「ワタシ、日本語大好きデ、タツクサン勉強シマシタァー！モットモット日本語使イタクテ、五十音士ニナツタノデスウー！」

「成程ねえ」

熱く語るライアンに、為介があまり興味なさそうに頷く。

「でえ、その良守クンが、朝比奈クンに何の用なわけえ？」

「オオ！ソウデシタ！」

為介に問いかけられると、ライアンが思い出したように声をあげる。

「ワタシ、五十音士ニナツタバカリ！チャント戦エルカ不安デエ、不安デエ、昼モ眠レマセエーン！」

「昼は寝ないだろう」

「ちよいちよいオカシイな、日本語」

ライアンが話す中、こっそりと突っ込みを入れるアヒルと簞也。

「同ジク五神ニナツタバカリノ、安ノゴッドニ、腕試しシテモライタクテ来マシタァー！」

「腕試しい？」

「ハァーイ！」

聞き返した為介に、ライアンが笑顔で大きく頷く。

「ワタシ、モットモット日本語、強クナリタイノデエース！」

「熱心なことだねえ？でえ？どうするのお？朝比奈クン」

「俺は別にいいぞ」

為介が問いかけると、アヒルは躊躇うことなく、あっさりと頷く。

「オオ！ホントデスカ！？ゴッド！」

「ああ、別に暇だし」

「相変わらず軽いねえ、君」

もう一度問いかけたライアンにも、あっさりと頷くアヒル。悩むことなく決めるアヒルに、為介が少し呆れた表情を向ける。

「止めなくていいの…？ 箆也」

「単なる腕試しだ」

小さな声で問いかける囁に、箆也が冷静に答える。

「それに相手は、成り立ての五十音士。“良守”程度、以の神に比べれば、問題なく神が勝つだろう」

「そうね…“ら”のつく言葉なんて、そんなにないものね…」

特に心配する様子も見せず、箆也と囁が言葉を交わす。

「じゃあ裏の広場でやろうぜ」

「ハァーイ！ サンキューベリーマッチョデス！ ゴッド！」

アヒルに案内され、ライアンが店の裏へと進んでいく。二人の後に続くようにして、箆也と囁も、裏の広場へと向かっていった。店の前に、為介だけが残る。

「“良守”って、確かあ…」

何やら考え込むように、大きく首を捻る為介。

「こりゃあ、一混乱ありそうだねえ」

Word. 23 異国ノ音士 (3)

『いどばた』、裏の広場。

「あれ？どうしたんです？」

家の中から裏へと行くアヒルたちを見かけ、追って来たのか、アヒルたちが裏の広場に着いてすぐに、『いどばた』の中から、保と七架が姿を現した。

「お客さんじゃなかったの？それに、あの外国人さんは…」

「良守だ」

「良守？」

「五十音士になったばかりだから、アヒるんに腕試ししてほしいんですって…」

不思議そうにライアンを見つめる七架に、籠也と囁が、ここに来た経緯を説明する。

「ハア！もしや、また地球外生命体じゃあっ…！」

「あなたは黙っている」

「ん！」

未だに五十音士のことを知らないままの保に、籠也が説明する気もなく、冷たく言葉を吐く。籠也に言われると、保はすぐに両手で口を塞いだ。

「腕試しって…朝比奈くん、大丈夫かな…？」

「“ら”のつく言葉など、そうないんだ。問題ない」

「それに相手は外国人…いくら国語が大の苦手なアヒるんでも、一応、日本国籍なんだから大丈夫よ…」

不安げに問いかける七架に、籠也と囁が安心させるように言葉をかける。

「五十音、第一の音“あ”…」

アヒルが制服のポケットから言玉を取り出し、右手で強く言玉を握り締める。

「解放っ…！」

言玉から強い赤色の光が放たれると、次の瞬間、アヒルの右手に赤銅色の銃が握られていた。

「オオオ！ソレガゴッドノ武器デスカァー！素晴ラシイ！」

アヒルが構えた銃を見て、向かいに立ったライアンが目を輝かせる。

「さあ、とつとと始めようぜっ」

「ハァーイ！」

ライアンがアヒルの言葉に頷くと、懐へと手を入れ、中からアヒルたちと同じ、真っ赤な言玉を取り出した。

「赤い言玉…」

“ら”はア段だものね…」

ライアンの取り出した言玉を、七架と囁が興味深く見つめる。

「オオオ！ソウデシタァー！安団ノ皆サァーン！」

『……っ？』

思い出したように箆也たちの方を振り向いたライアンが、箆也たち四人へと大きな声で呼びかける。

「ユアゴッドガピンチニナツタラァー、イツデモ助ケニ入ッテモラッテ、構イマセンノデ…」

『えっ…』

今までの緩い笑顔ではなく、どこか鋭い微笑みで言い放つライアンに、箆也たちが皆、戸惑った様子で眉をひそめる。

「い、今のって…」

「あの男…」

不安げな表情を見せる七架の横で、箆也がそっと目を細める。

「サァ！デハ！」

再びアヒルの方を見たライアンが、言玉を持った右手を高々と掲げる。

「五十音、第四十一音“ら”…解放！」

今までの会話とは違い、スムーズにライアンが言葉を発すると、

ライアンの掲げた言玉が強く光を放ち、光の中で徐々にその形状を変えていった。

「あれはっ…」

形を変えていく言玉に、アヒルが目を見張る。

「オウケェーイ！」

「んんっ！」

「羅針、盤…？」

両手で口を塞いだまま、驚いているような声をあげる保の横で、そつと眉をひそめる囁。ライアンが言玉から姿を変えさせ、その右手に構えたのは、アヒルたちの武器と同じ赤銅色の、小脇に抱えられるほどの円盤であった。文字盤の中央に、一本の針が取り付けられている。

「変わった武器だな」

「文字盤に何か書いてあるみたいだけど…」

箆也と七架も、ライアンの構えたその羅針盤を見つめる。

「ララララァ」

「……っ」

緊張した様子も見せず、どこか楽しげに怪しく微笑むライアンに、箆也がそつと眉をひそめる。

「サァ、始メマシヨウカァ！ゴッド！」

「おう！」

気合いの入った声を出し、羅針盤を構えるライアンに対し、アヒルも大きな声で頷き、銃を構える。

「ま、待て！神！」

戦いが始まることを止めるように、強く身を乗り出す箆也。

「やはり、あの男には何かある！まずは僕たちで様子見をっ…！」

「よっしゃあ！先制攻撃！」

戦いに集中し始めたのか、箆也の言葉が耳に届いた様子もなく、アヒルが勢いよく銃口をライアンへと向ける。

「“当たれ”！」

大きな言葉とともに、アヒルの銃から、真っ赤な光の弾丸が放たれる。

「アレガゴッドノ“当たれ”デスカァ…」

向かってくる弾丸を興味深く見つめたまま、特に避ける様子を動きを見せないライアン。

「何だ？避けない気か？」

そんなライアンを、アヒルが戸惑いの表情で見つめる。

「“当たれ”、“当たれ”…“れ”、“礼”」

「……っ？」

アヒルの放った言葉を呟きながら、左手のひらに乗せた羅針盤の上で、右手を回すように掲げるライアン。すると羅針盤の針がゆっくりと動き出し、五つに分かれた文字盤の、『礼』と書かれた部分を指し示した。

「あれは…」

見つめる籠也が、羅針盤に目を見張る。

「ラララァゝ“良”！」

ライアンがまるで歌うように高らかと声をあげると、羅針盤の針が鋭く動き、今後は『良』と書かれた部分を指し示した。

「一体、何をっ…」

「当た“ら”ナァゝイ！」

「何っ…！？」

戸惑うようにライアンのその行動を見ていたアヒルであったが、ライアンがそう言い放った途端、アヒルの放った弾丸が見事にライアンから逸れ、驚きの表情を見せる。

「“当たらない”…？俺の言葉が変わられたってのか…？」

「モウイツチヨデス！」

「えっ…？」

明かに動揺した様子を見せていたアヒルが、さらに羅針盤へと右手を向けるライアンに、眉をひそめる。

「ララララァゝ“呂”！」

またしても歌うような声をあげて、羅針盤の針を動かすライアン。針が今度は、『良』から、『呂』と書かれた部分へと動く。

「当あゝた“ろ”ウカア、当た“ろ”ウヨォ！」

「へえっ!？」

先程、自発的にライアンを避けていったアヒルの弾丸が、高い空へと上昇していたその途中でふと動きを止め、下方にいるアヒルへ向かって、一直線に落ちてくる。

「やっべ!えっとっ」

アヒルが慌てながら、降り落ちてくる弾丸を避けるため、自らのコメカミへと銃口を向ける。

「“上^あがれ”！」

「ララララアゝ“良”！」

「へっ?」

赤い光に包まれ、空へと上昇し始めたアヒルが、再び聞こえてくるその声に、目を丸くして顔を下ろす。

「上^あが“ら”ナアゝイ！」

「へっ…?」

ライアンが言葉を放った途端、アヒルの全身を包み込んでいた赤い光が、一瞬にして消え去り、上昇していたアヒルの体が止まって、重力に引かれるように、強く下方へと落ちていく。

「おわわわわ!何でえ!？」

その信じ難い出来事に焦り、新たに弾丸を放つことも出来ず、ただ慌てた様子で下降していくアヒル。下降するアヒルを追うように、弾丸も速度を上げて落ちていく。

「のわあああゝっ！」

「神っ…!」

「あ!神月くんっ…!」

アヒルの様子を見て、居ても立ってもいられなくなったのか、七架が止める間もなく、箆也がアヒルのもとへと駆け出していく。

「第六音“か”、解放…!」

駆けていきながら、ポケットから取り出した言玉を解放し、六本の格子へと姿を変えさせる箆也。

「“^{かこ}囲え”……！」

「うわっ……！」

アヒルの上空で六本の格子が円形に重なり合い、落ちてきた弾丸を勢いよく弾き返す。目の前から伝わる衝撃に、アヒルは思わず身を屈めながら、そのままの態勢で地面へと落ちた。

「か、箆也……」

「“変格”」

体を起こしたアヒルが名を呼ぶ中、箆也は間を置くことなく、一本にした格子を手元に戻し、変格でさらにその姿を変えさせる。

「“^か刈れ”！」

鎌となった言玉を振り下ろし、言葉を発して、ライアンへと赤色の一閃を放つ箆也。

「“刈れ”、“れ”、“礼”」

向かってくる一閃を見つめながら、ライアンがまたしても右手を掲げると、羅針盤の針が、『礼』と書かれた部分へと移動していく。

「ラララアゝ“利”！」

今度は『利』と書かれた部分へと、動いていく針。

「刈“り”マセェン！」

ライアンが高らかと言い放つと、箆也の放った一閃が、器用にライアンの数センチ横を素通りしていく。

「なっ……！」

「箆也の言葉まで……！」

その光景に驚き、目を見開くアヒルと箆也。

「逆ニィ……」

ライアンがさらに言葉を続けながら、羅針盤の針を、最後の一部分『留』と書かれたところへと移動させていく。

「刈“る”デショ……！」

「げえっ……！」

「うっ…！」

先程ライアンの横を素通りした箆也の一閃が、ブーメランのように大きく曲がり、アヒルと箆也の方へと舞い戻って来る。

「また戻って来たあっ！」

「クっ…！」

焦ったように叫びあげるアヒルと、険しい表情を見せる箆也。

「アヒルさん！神月くん！」

ピンチの二人に、今まで口を塞いで立っているだけであった保が、口から両手を離し、勢いよく二人のもとへと駆け出していく。

「た…」

今まで塞いでいた口を、大きく開く保。

「助^{たす}けろ”！」

保がそう言い放つと、ポケットに入れられていた言玉が空中へと飛び出し、その場で無数の赤い糸となって周囲に伸び上がり、幾重にも重なり合って、アヒルたちの前に巨大な盾を作る。

「大丈夫ですか！？アヒルさっ…！」

「ララララアゝ“良”！」

「へっ？」

盾のすぐ後ろ、アヒルたちの前へと立ち、後方を振り返ろうとした保が、前方から聞こえてくる歌声のようなその声に、戸惑うように振り向く。

「助け“ら”レナアゝイ！」

羅針盤の針を『良』へと動かしたライアンが、またしても言葉を放つ。

「あれっ？」

そのライアンの言葉を受け、保の前でしっかりと重なり合っていた糸が、さらさらと解けていってしまふ。

「へえっ！？」

解けた糸が力なく地面へと落ち、何の防御もなくなった保たちに、返って来た箆也の一閃が迫り来る。

「ふわあああああああ！」

「うえええええっ!？」

「うっ…!」

悉く言葉を打ち消された三人へ、容赦なく襲いかかる一閃。

『うわあああああ!』

「あ、朝比奈くん…!みんなっ…!」

一閃を直撃し、後方へと吹き飛ばされていく三人に、見守っていた七架が焦ったように身を乗り出す。

「五十音、第二十一音っ…!」

「待って…」

「えっ…?」

言玉を解放しようとした七架の手の上に、まるで制止を促すかのように、囁の手がそっと乗る。

「真田、さん…?」

「焦って言葉を仕掛けるのはうまくないわ…」

「け、けど、みんながっ…!」

「みんなの二の舞になったら、意味ないでしょう…?」

「あっ…」

囁の冷静な言葉に、ハッとした表情を見せ、言玉を解放しようとした手を下ろす七架。

「けど、じゃあ、どうしたら…」

「大丈夫…私に考えがあるから…」

「考え…?」

どこか自信ありげに微笑む囁に、七架は戸惑うように首を傾げた。

Word 23 異国ノ音士 (4)

「痛ててててっ…」

一方、一閃を直撃し、後方へと吹き飛ばされたアヒルが、打ちつけた背中を押さえながら、少ししかめた表情で、ゆっくりと起き上がる。

「大丈夫か？保っ」

「は、はいっ、何とかっ…」

アヒルの横で、同じように表情を引きつった保が、体を起こす。

「はぁ！こんな年中大丈夫じゃない俺なんかが、アヒルさんに心配してもらっちゃって、すみませえくん！」

「ハイハイ」

相変わらずの様子で謝り散らす保を、アヒルがもうさすがに慣れた様子で軽くあしらう。

「まったく：助けられないなら出て来なければ良かっただろうが」

「すみませえくん！でも正直、神月くんもそうだったような…」

「はあっ？」

「まあまあっ」

険悪な空気となる籠也と保の間に割って入り、アヒルが笑顔を作って宥める。

「けっど、それにしても、あいつの力って一体っ…」

「ラ行の五十音土っていうのは特殊でねえ」

『……っ？』

真剣な表情でライアンを方を見つめ、考え込むような表情を見せていたアヒルが、すぐ後方から聞こえてくる声に、籠也、保ともに振り返る。

「扇子野郎っ」

「はぁっいっ、やっぱり苦戦しちゃってるみたいだねえ。朝比奈クンっ」

アヒルたちの立つすぐ後ろの壁の上に乗る、その暢気な笑顔で、高々とアヒルたちを見下ろすのは、為介であった。どうやら皆を追って、広場までやって来たようである。

「やっぱり……？」

「ラ行の五十音士が特殊とは、どういうことだ？ 為の神」

まるでこの展開がわかっていたかのように話す為介に、大きく首を傾げるアヒル。そんなアヒルの横から、簞也が鋭く為介へと問いかける。

「戦ってみて、わかったんじゃない？ 彼が操ってるのは動詞でも形容詞でもない。“助動詞”だってえ」

「助動詞？」

為介の言葉に、そっと眉をひそめるアヒル。

「って、何だ？」

「さあ？ 存じあげてない感じです」

「あなたたちは、とりあえず、もっと国語を勉強しろ……」

まったく理解していない様子で、大きく首を傾げるアヒルと保に、簞也が少し怒ったように言い放つ。

「助動詞というのは、活用のある付属語のことだ」

眉間に皺を寄せながら、首を傾げている二人へ向け、説明を始める簞也。

「他の語の後について、受け身や可能、打ち消しなどの意味を表す。わかるか？」

『はあっ？』

「わからないだろうな」

間抜け面全開にするアヒルと保に、簞也が諦めたように肩を落とす。

「さっき、朝比奈クンの“当たれ”が、“当たらない”に変えられちゃったでしょ……？」

「んっ？」

そこへ口を挟む為介に、アヒルが顔を上げる。

「彼の持つ“らりるれろ”の力は、動詞の後につく“れる”とか“られる”を変化させて、相手の言葉を操っちゃうんだよね」

「らりるれろ？」

「うん、彼の羅針盤の文字盤に刻まれてるでしょお？ “良利留礼呂”ってえ」

「だが、あの男は良守だろう？」

説明する為介に、箆也が鋭い瞳を向ける。

「何故、“り”や“る”の文字まで…」

「ラ行の五十音士は一人のみ」

戸惑いの表情を見せる箆也に、為介が笑顔で答える。

「つまり、良守が他の“利守”^{りもり}、“留守”^{るもり}、“礼守”^{れもり}、“呂守”^{ろもり}の四つを兼ねるのさあ」

「へっ！？じゃあ、あいつ、一人で五人分の五十音士やってるってことかっ！？」

「そういうことお」

「ひやあ」

為介の話を聞き、感心しきった表情でライアンを見つめるアヒル。一つの文字を操ることに苦戦しているアヒルにとって、五つも文字の力を持っているライアンは、尊敬ものであった。

「けど、言葉変えられちゃうんじゃ、ろくに使えねえし、一体どうしたらっ…」

「ハァーイ！ゴッド！」

「んあっ？」

悩み込むように俯いていたアヒルが、正面から聞こえてくるライアンの声に、ゆっくりと顔を上げる。

「モウ、降参デスカァ？」

「ああっ！？」

挑発するようなライアンの問いかけに、アヒルが勢いよく顔を引きつける。

「だっれが降参なんかすっ…！」

「降参なんてしないわ」

『えっ…？』

アヒルが言おうとした言葉を代わりに放って、入って来るその声に、アヒルとライアンが戸惑うように振り向く。

「安団を、あまりナメないで」

「奈々瀬！」

言玉を解放し、赤い薙刀へと姿を変えさせた七架が、鋭い表情を見せ、ライアンへとその刃を振りかぶろうとしていた。

「や、やめろ！奈々瀬！下手に言葉使うと、俺らの二の舞になるぞっ…！」

「オ国柄、ガールニ手ヲアゲルノハ、アマリ好マシクナイデスガア、仕方ナイデスネエ」

ライアンに向かっていこうとする七架を止めようと、必死に身を乗り出すアヒル。一方、ライアンは、鋭い表情を見せている七架を見つめ、少し目を細めた後、困ったように言い放ちながら、羅針盤を構える。

「サア！オイデヤスウ！」

「な…」

いつでもかかって来いとはかりに両手を広げるライアンに対し、七架がゆっくりと口を開く。

「奈々瀬！」

「奈々瀬さんっ…！」

不安げに身を乗り出す、アヒルたち。

「“薙^なぎ倒せ”…！」

振り下ろされた七架の薙刀から、鋭い赤い光が放たれる。

「エエエ、 “薙^なぎ倒せ”、 “薙^なぎ倒せ”…ンンっ？」

羅針盤に右手を掲げながら、七架の放った言葉を繰り返していたライアンが、ふと首を傾げる。

「オウ！ラ行ガ、アリマセエ…ンっ！」

頭を抱えたライアンが、焦ったように叫び声をあげる。羅針盤で

言葉を変えることが出来なかったライアンのもとへ、七架の放った光が迫っていく。

「ノオオオオオ！」

そのまま避けることもなく、光を直撃したライアンが、後方へと吹き飛ばされる。

『おおっ！ナイス！』

見事、ライアンに一撃を喰らわせた七架に、アヒルと保が目を輝かせる。

「そっかあ。ラ行のついてねえ言葉使えば、変えられねえってことかあっ」

「まあ、それに気付いた奈々瀬も凄いが、こればかりは、文字の相性があるからな」

「神月クンてば、自分の言葉が通用しなかったことに対して、さりげなく言い訳してないいゝ？」

「していない」

からかうように問いかけてくる為介に、箆也が少しムキになったような表情で答える。

「痛タタノタデスウ」

後頭部を押さええながら、地面に倒れ込んでいたライアンが、ゆっくりと起き上がる。

「今ノハ、薙げ“れ” ナイト言エバ良カタデスネエ。ヤハリ日本語ハ、難シイデスウ」

立ち上がりながら、先程、攻撃が防げなかったことを反省するライアン。

「ヨォーシ、次コソハアっ…！」

「“変格”」

「ンンっ？」

気合いを入れようとしたライアンが、前方から聞こえてくる声に顔を上げる。

「オウ、マタモヤ、ガールっ？」

「さ…」

ライアンが顔を上げると、そこには解放させた言玉を、さらに変格させた、赤銅色の槍を構えた囁の姿があった。ライアンが見つめる中、囁がゆっくりと口を開く。

「裂け」

囁が言葉とともに槍を突き出し、ライアンへと赤い一閃を向ける。

「裂け」：今回モラ行ハナイデスガア、デモデモ先程ト同ジヨウニハイキマセンヨォ！」

ライアンが大きな声を出し、勢いよく羅針盤を構える。

「ラララァゝ“礼”！」

羅針盤の針が、『礼』の部分へと移動していく。

「裂け“れ”マセェン！」

高らかと、言葉を言い放つライアン。

「ええ…そうね…」

「ホワットっ？」

自信を持った笑みを浮かべていたライアンが、囁の言葉に、目を丸くする。

「確かに…フフっ…」

まっすぐにライアンを見つめる囁が、どこか不敵な笑みを浮かべる。

「“避けれない”、わ…」

「ンナっ…!？」

ライアンの放った言葉が、囁により上書きされると、ライアンへと向かっていた赤い一閃は、ライアンを避けることなく、まっすぐに向かっていく。

「ノオオオオオっ！」

向かってくる一閃に、最早、かわす術もなく、焦りの表情を見せるライアン。

「オー！マイゴオオオードっ!!！」

頭を抱え、神を呼んだライアンへと、一閃が直撃する。

——バァァァン！

「オ…オウ、ノウっ…」

直撃を受けたライアンが、地面へと倒れ込み、そのまま力なく瞳を閉じた。

「ふうっ…」

ライアンが倒れたことを確認し、軽く息を吐きながら、構えていた槍を下ろし、もとの言玉の姿へと戻す囁。

「やったね！真田さん！」

「んっ…？」

そこへ、明るい笑顔を見せた七架が、早足で駆け寄って来る。

「ええ…」

「真田さんに教えてもらった言葉、バッチリだったよ！凄い凄い！」
「フフフっ…でしょう…？」

「ああ、終わっちゃったあ」
「感激したように話す七架に、囁もどこか嬉しそうな笑みで返した。

「ああ、終わっちゃったあ」
「微笑み合っている囁、七架と、倒れ込んだライアンを見ながら、少し肩を落とす為介。

「今回、なあくんもイイトコ、なかったねえ。三人サンっ」
『うっ…』

為介の鋭い指摘に、思わず顔を引きつるアヒルたちであった。

一時間後、『いどばた』前。

「イッヤァー！マタ新タニ日本語ノ奥深サ、面白サヲ知リマシタ！
トテモイイ勉強ニナリマシタ！」

七架から傷の治療を受け、目覚めたライアンは、とても満足した様子で、大きく言葉を放った。

「腕試しニ来タ甲斐アリマシタァ！本当ニアリガトウゴザイマシタ

！ガールズノ皆サン！」

「フフっ：それは良かったわ：」

笑顔を見せるライアンに、囁もそっと笑みを向ける。

「また、いつでも来て下さいね。ライアンさん」

「ハイ！ソウサセテ、イタダキマスウ！」

七架の言葉に、ライアンは大きく頷く。

「いっやあゝ、不甲斐なかったボーイズの皆さんは、見事に無視されてるねえ」

「はあ！生まれながらに不甲斐なかったことがなくて、すみませえゝん！」

「別に僕は、腕試しごときに本気にならないだけだ」

「ハハハっ：」

囁たちとライアンの立っている場所から少し離れたところでは、嫌みのように言い放つ為介に、保が謝り散らし、箆也が少し口を尖らせ、アヒルが乾いた笑みを浮かべていた。

「ソシテ、ダック」

「お前、あからさまに俺の格、下げたろ」

今まではゴッドと呼んでいたのに、いきなり呼び名を変えたライアンに、アヒルが少し表情を引きつる。

「安団デハナイトハイエエ、ワタシモア段ニ属スル五十音士」

囁たちのもとから、アヒルの方へと歩み寄って来たライアンが、アヒルの目の前へと立つ。

「アナタノ五神トシテノ今後ノ活躍、期待シテオリマスデスヨォっ」

「……っ」

笑顔を浮かべ、右手を差し出すライアンに、アヒルが少し驚いたような表情を見せる。

「……ああっ」

だがすぐにアヒルも笑みを浮かべ、しっかりと差し出されたライアンの手を取った。

「まあ、そう期待しない方がいいと思うが」

「はあ！期待よりもインパクトばかり大きな名前のアヒルさんで、すみませえくん！」

「うっせえよ！お前ら！」

「アハハハハっ！」

アヒルの大きな怒鳴り声とともに、ライアンの笑い声が、その場に響き渡った。

Word. 23 異国ノ音士 (5)

翌朝、言ノ葉町三丁目『あさひな』。

「だから俺が呼んだのは、ナウマン象だっつてんだろ!？」

静かな朝から、朝比奈家の居間に響き渡る、アヒルの大声。

「なんで、ほうれん草投げつけてくんだよ!」

「だって、見事に語呂が合ってるじゃなくって!」

「何が見事にだ!」

睨みつけるように見るアヒルの視線の先で、どこか得意げな笑みを浮かべている朝比奈家の父。どうやら今日の朝の攻防では、ほうれん草が投げられたようである。

「どうでもいいけどよお」

そこに、洗濯を干し終えたのか、庭から戻って来たスズメが口を挟む。

「そろそろ学校行かないと、また遅刻すっぞお? アヒル」

「へっ!?! もうそんな時間?」

「今、八時十五分だよ…」

焦ったように振り向くアヒルに、台所で洗い物をしていたツバメがそっと答える。

「もう十五分? 紺平来てねえーから、まだ五分くらいかと思ってた」
壁の掛け時計を確認しながら、アヒルが意外そうに呟く。

「とつとと行くぞ、神。こちらまで資料室掃除は、御免だからな」

「えっ? でもまだ、紺平がっ…」

「委員会か何かなんじゃない…? とりあえず、学校に向かいましよう…」

「あ、ああっ」

囁に説得されるように言われ、アヒルが少し詰まりながらも頷きながら、籠也たちとともに店の通用口を通り、家の外へと出る。

「……っ」

いつも紺平のやって来る方角を振り返りながら、アヒルはそっと目を細めた。

言ノ葉高校、一年D組。朝のホームルーム。

「小泉」

いつものように出席簿を持った恵の声が、教室に響き渡る。だが、その声に戻って来るはずの声はなく、教室は一瞬、静まり返った。

「んあ？小泉は休みか？」

出席簿を見つめていた顔を上げ、恵が窓際の、アヒルのすぐ後ろの席を見る。

「何だ？鞆はあるじゃねえかつ」

アヒルの後ろの紺平の席に置いてある鞆を見つけ、顔をしかめる恵。

「おい、トンビ」

「だから、俺はアヒルでっ…！」

「お前、ちょっと探して来い」

「へっ？」

いつものように名前を訂正しようとしたアヒルが、恵のその言葉に、目を丸くする。

「さ、探す？」

「ああ、とっとと行け。じゃないと、遅刻にすっぞ」

「どんな脅しだよ！ったく」

恵の横暴加減に文句を放ちながら、少し肩を落としたアヒルが席を立ち、紺平を探すため、教室を出て行く。

「紺平がサボりなんて珍しいわねえ」

「……………」

意外そうに呟く想子の前の席で、教室から出て行くアヒルの姿を見つめながら、少し目を細める七架。

「どうかした…？」

「いやっ…」

そつと問いかける囁に、箆也はどこか誤魔化すように首を振る。

「じゃあ出席、続けるぞぉ」

再び出席簿へと視線を落とした恵が、皆へ向けて言い放つ。

「……っ」

出席簿の名前を指でなぞりながら、恵はどこか、神妙な表情を見せた。

「……………」

その頃、紺平はホームルームには出ずに、誰もいない学校の屋上で、柵に両肘をかけ、まだ誰もいないグラウンドと、どこまでも広がる言ノ葉町の町並みを、落ち着いた表情で眺めていた。

「あ、いたいた!」

「……っ?」

後方から聞こえてくる声に、景色を見つめていた紺平が、ゆつくりと振り返る。

「んなどこで何してんだよ? 紺平っ」

「ガァ」

屋上へと現れたのは、恵に言われ、紺平を探しに来たアヒルであった。振り返った紺平が、ゆつくりとアヒルのあだ名を口にする。

「お前がサボりなんて、珍しいなあ。恵先生も、ちよつと驚いてたぞ?」

紺平へと話しかけながら、紺平の方へと歩み寄っていくアヒル。

「今日、ウチに迎えにも来なかったし、お前、何かあっ…」

「ガァさ」

「んあっ?」

アヒルの問いかけを遮って名を呼ぶ紺平に、アヒルが少し首を傾げる。

「土日、何してた？」

「へっ？」

いきなりの紺平の問いかけに、アヒルが目を丸くする。

「んだよ？急に」

「何となく。何してたかなあと思って」

「何って、ええーっと…」

その問いかけに、少し言葉を詰まらせるアヒル。土日といえば、アヒルは神試験のため修行に行き、そのまま神試験を受けていた。だがそれを、紺平に話すわけにはいかない。

「ず、ずっと家でゴロゴロしてたぞお！」

「……っ」

少し上ずった声でアヒルが答えると、紺平はそっと目を細める。

「俺、日曜に行ったよ？ガアン家」

「へっ！？」

アヒルに背を向け、再び景色を眺めながら言い放つ紺平に、アヒルが思わず、焦ったような声を出す。

「ツバメさんには、課題があるから神月くんたちの家に泊まってるって言われたけど…神月くんたちの家も留守だった」

「あ、ああーっと…」

言葉を続ける紺平に、アヒルが気まずそうに頭を掻く。

「じ、実はあの日は、みんなで家族には内緒のドキドキピクニックをだなあっ…！」

「本当のこと言ったら、俺を傷つけるの？」

「えっ…？」

入って来る紺平の問いかけに、止まるアヒルの言葉。

「だって、そういう時でもないし、ガアは俺に言わないでしょ？」

紺平が再び、ゆっくりとアヒルの方を振り返る。

「嘘”って」

「紺平っ…」

そっと微笑む紺平に、アヒルが少し目を細める。

「傷つけるとか、そういうわけじゃねえーけどっ…」

——ガァっ……——

以前、紺平は、忌に取り憑かれ、アヒルを傷つけ、涙を流した。その時の記憶は、勿論、今の紺平にはない。アヒルが神のことを、忌のことを話せば、あの時のことを、紺平は思い出してしまいかも知れない。アヒルは、それだけではどうしても、避けたかった。

「俺はっ…」

「ガァは、言葉が人を傷つけるって知ってるから、必死に言葉を隠すんだろうけど…」

「……っ」

静かに言い放つ紺平のその言葉に、そっと目を細めるアヒル。

「でも…じゃあ、何も言わなければ…傷つけない…？」

「えっ…」

紺平の問いかけに、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「何も話さないことは、傷つけることにはならない…？」

「紺平…」

まっすぐに向けられる紺平の瞳に、困ったような表情となるアヒル。

「そ、それはっ…！」

「こんなところに居たか」

「へっ？」

紺平に答えようと声をあげたアヒルが、すぐ後ろから聞こえてくる声に、驚いた様子で振り返る。

「あっ」

「……………」

アヒルが振り返ると、そこには、鋭い瞳の、まだどこか幼さを残した顔立ちの青年が立っていた。制服を着ていないところを見ると、学校の生徒ではないらしい。

「お前、は…」

初めて会った青年なのだが、どこか見覚えのあるその顔に、アヒルは少し眉をひそめた。

「お前とこうして直接会うのは、これが初めてか。安の神」

「えっ？」

青年の言葉に、アヒルが目丸くする。

「な、なんで俺が安の神ってことっ…」

「俺の名は、おんい於崎おりや檻也」

「オリ、ヤっ…？」

聞き覚えのあるその名に、アヒルが首を傾げる。

「お前と同じ五神の一人、“お於の神”と呼ばれる者だ」

「えっ…!？」

檻也のその言葉に、アヒルが衝撃を走らせる。

「神…? 於の、神…?」

目の前に現れた自分とは別の神に、困惑の表情を見せるアヒル。

「ガァ、知り合い？」

「あっ…」

柵の方から怪訝そうな表情で問いかける紺平に、アヒルがハッとした表情となる。

「あ、え、ええ…と、そのだな、ああ…」

それでも真実を告げられず、口ごもるアヒル。

「お、おい、お前! 話なら後でするから、今はちょっと下がっ…」

「誰がお前に話があると言った」

「へっ？」

アヒルに突き放すように言い放つと、間の抜けた顔を見せたアヒルの横を通り、檻也が紺平の方へと歩いていく。

「俺が用があるのは、お前だ。小泉紺平」

「えっ…? 俺…?」

檻也に名を呼ばれ、紺平が戸惑うように眉をひそめる。

「あのお、俺、君と会ったこととかあったっけ…?」

「初対面だ」

どこか遠慮がちに問いかける紺平に、檻也が素っ気なく答える。

「小泉紺平」

檻也が紺平の前に立ち、もう一度、紺平の名を呼ぶ。

「お前を、俺の神付き、“己守”^{こもり}に指名する」

「えっ…？」

「なっ…！」

檻也のその言葉に、首を傾げる紺平と、大きく目を見開くアヒル。

「こ、紺平をっ…己守に…？」

Word. 24 おノ神八弟 (1)

——お前を、俺の神付き、“己守”^{いもつ}に指名する——

「紺平を…己守に…？」

「カミ、ツキ…？」

突如、学校の屋上に現れた“於^おの神”於崎檻也のその言葉に、その場に居たアヒルと紺平は、それぞれに戸惑いの表情を見せていた。
「あの、まったく言ってる意味がわからないんだけど…」

「だろうな」

困惑の表情を向ける紺平の方を見ようとせず、視線を外したまま、冷たい態度で答える檻也。

「一度だけ話す。よく聞け」

忠告するように、檻也が紺平を強く見る。

「俺たちは…」

「ちょ、ちよつと待てよ！」

「ん…？」

少し荒げた声を挟むアヒルに、檻也がゆっくりと顔を上げる。

「何だ？」

「何だじゃねえーよ！勝手に話、進めてんじゃねえっ！」

面倒臭そうに聞き返す檻也に、アヒルが怒鳴るように言い放つ。

「な、なんでっ…なんで、紺平が己守になんなきゃなんねえんだよ！？己守なら、お前の団にいんだろ！？」

「今、我が団の己守は欠員している」

「欠員？」

「ああ」

顔をしかめたアヒルに、短く頷く檻也。

「以の神への神試験の際、伊賀栗イクラとの戦いが原因で、前の“己守”は於団を脱退した」

「イクラとの戦いでっ…?」

眉をひそめながら、アヒルがイクラのその姿を思い出す。

——俺がっ…神だぁ…!!——

「……………」

思わず納得するように、黙り込んでしまうアヒル。確かに、イクラとの戦いは、トラウマとなって、五十音の世界から逃げてしまいたくなるかも知れない。

「だ、だからって、なんで、次の己守が紺平なんだよ!？」

「ガァ？」

「……………」

必死に訴えるアヒルに、少し眉をひそめる紺平。同じくアヒルを見つめながら、檻也がそっと目を細める。

「調査結果だ」

「調査、結果…?」

檻也の答えに、大きく首を傾げるアヒル。

「ああ。この付近に住む、あらゆる人間を調査し、年齢、知能、性格などにより、この小泉紺平が、己守に最も相応しい人物という結果を得た」

「そ、それだけっ…?」

「それだけではない。これは、歴代於団メンバーを選抜する際にも用いられた、最も合理的な方法だ」

戸惑いの表情を見せるアヒルに、檻也がどこか強く言い切る。

「合理的だか何だか知らねえーけどなっ、たったそんだけの理由で、紺平を五十音士にするなんてことっ…!」

「安の神」

檻也がアヒルへと呼びかけ、勢いよくアヒルの言葉を遮る。

「これは俺たち、於団の問題だ。いくら神といえど、他団の者が口出ししていいことではない」

「けどっ…！」

「安の神」

「うっ…！」

もう一度、先程よりも強く呼びかけた檻也が、アヒルの目の前へと、懷から取り出した白色の言玉を突き付けた。

「これ以上の口出しは、五十音士の規律違反とみなし、力によって、無理に黙らせることとなるが…？」

「……っ」

冷たい瞳を向ける檻也に、アヒルも険しい表情を見せる。

「その言動は、他団への攻撃意志とみなされ、五十音士の規律を犯すものと思われませんが」

『……っ』

屋上の入口の方から、新たに入って来る声に、アヒルと檻也が同時に振り向く。

「於の神」

「籠也っ」

「………」

檻也へと鋭い瞳を向けながら、扉から屋上へと姿を現したのは籠也であった。アヒルが少し驚いたように、籠也の名を呼ぶその横で、檻也はあからさまに表情を歪める。

「他神へ言玉を向ける行為も、規律違反になったかと思えます」

二人の方へと歩み寄りながら、籠也がさらに言葉を続ける。

「その言玉、引いていただけませんか…？ 於の神」

「……フンっ」

どこか睨みつけるように見つめる籠也に、檻也が軽く鼻を鳴らすと、籠也の言葉に従うかのように、アヒルへと突きつけていた言玉を、もとの懷の中へとしまい込んだ。

「相変わらず、規律だけはよく覚えているもんだな、籠也」

「えっ…？」

自然に籠也の名を呼ぶ檻也に、アヒルが眉をひそめる。

「知り合い…？」

「フフフ…それはちよつと違うわねえ…」

「どおわああ！」

アヒルの肩口から突然、顔を出し、不気味に眩きかける囁に、アヒルが思わず怯えたような声を出す。

「さ、囁…！」

「彼らはただの知り合いではないわ…」

驚き、離れるアヒルへと、そつと微笑みかける囁。

「彼らは兄弟…於の神は箆也の弟よ…フフフ…」

「お、弟…！？」

囁の言葉に、アヒルが衝撃を走らせる。

「あ…」

思わず、目の前の箆也と、屋上へとやって来たばかりの箆也の顔を、見比べてしまうアヒル。箆也の方が少し幼い顔立ちではあるが、目や顔のつくり、それに纏っている雰囲気などが、二人はよく似ていた。

「そ、そういや似てるかも…」

「フフフ…」

納得したように眩くアヒルに、囁が楽しげに笑う。

「けど、箆也の弟が神だなんて話、一度も…」

——神に成り損ねた五十音士よ——

——神の一族に生まれながら、神としての資質がなく、家からも見放されて——

「あ…」

そんな話は聞いたことがないと言おうとしたアヒルの脳裏に、イクラの言葉が思い出された。

「神の、一族…」

箆也と箆也を見つめ、アヒルが少し険しい表情で眩く。

「二百以上ある規律を、一つとして忘れることなく覚えているのは、成れなかった神への未練からか？」

「……………」

挑発するように問いかける檻也に、箆也がそつと目を細める。

「まあいい。だが、そこまで記憶しているなら、わかるだろう？ 箆也」

檻也がゆっくりと、アヒルの方へと視線を戻す。

「今、俺を邪魔しようとしていることが、規律違反であることが」

「……………」

睨むような鋭い視線を投げかけてくる檻也に、アヒルが思わず表情をしかめる。

「け、けど、それはっ…！」

「確かに、これは五十音士の規律を犯すものですが、於の神」

「……………」

言い返そうとしたアヒルを制し、前へと出た囁が、檻也へと鋭く言葉を向ける。

「一般人の候補者を、強制的に五十音士に指名することも、規律違反の一つのはず…」

檻也をまっすぐに見つめ、囁が言葉を続ける。

「今、この小泉紺平を、彼の意志に沿わず己守とすることは…神として、好ましくない行為と思われませんが…？ フフっ…」

「……………」

そつと微笑む囁に、檻也が眉をひそめる。

「んん、これは正論っ。これは参りましたねえ」

「へっ？」

『……………っ？』

そこへ入って来る、またしても新たな、今度は聞き覚えのない声に、アヒルたちが皆、戸惑うように振り向いた。

「あっ…」

「これはこれは、コンニチハあ。そして初めましてえ、安の神、

そして安団の皆さまっ」

扉から屋上へと姿を見せたのは、少し長めの白髪に、長身の、白いスーツ姿の、まだ若い男だった。整った顔立ちをしているが、大きく浮かべた笑みに目が細められ、その瞳がどんな色をしているのかは、確認できない。どこか軽い口調で挨拶をしながら、その男がアヒルたちへ深々と頭を下げる。

「だ、誰だ？」

「棘一」
とげいち

「とっ…？」

男の名らしきものを呼ぶ檻也に、アヒルが少し首を傾げる。

「おや、これはこれは、こんなところに我が神っ」

棘一と呼ばれた男が、檻也をゆっくりと見下ろし、驚いたような顔を見せる。

「いらっしゃったのですねえ、身長が小さいあまり、ワタクシの視界から消えておりましたよお」

「殺す…」

悪びれない笑顔で、失礼なことを言い放つその男に、檻也がそっと俯き、表情を引きつる。

「我が神ってことは…」

「ああ、申し遅れましたっ」

男が勢いよく、戸惑いの表情を見せるアヒルの方を振り向く。

「ワタクシ、於団、おつき“於附”が一、“止守”ともりをやっております、棘一と申します」
とげ

首を傾げたアヒルに答えるように、笑顔のまま、すらすらと名を名乗る棘一。

「こちらは同じく於附であります、“乃守”のもりの海苔次のりつぐです」

「こちら？」

「のの…」

「うおっ！」

棘一が手で指し示した方を、アヒルが手につられるようにして振

り向くと、そこにはアヒルの視線が丁度、腹の辺りにくるほどの、巨漢の男が立っていた。顔を見上げるだけで首が折れそうになるその男は、定まらない視線で、のんびりと口を動かし、低い声を発している。

「で、でけえ…」

「……………」

大男、海苔次に圧倒されているアヒルの横で、そっと鋭く瞳を細める囁。

「ちなみに海苔次は、ワタクシの可愛い可愛い弟であります」

「見た目では、まるで可愛さが見当たらなねえーけどなっ…」

満面の笑みで言い放つ棘一に、アヒルが少し引きつった表情で呟く。

「いやはや、あなたが噂の安の神ですかあ…」

「噂っ…?」

まじまじとアヒルを見つめる棘一の言葉に、アヒルが少し戸惑った表情を見せる。

「いっやあ、想像以上に頭の悪そうな顔をしておられますねえ…」

「ああっ!?!」

笑顔で失礼極まりないことを言い放つ棘一に、思わず大きく顔をしかめるアヒル。

「いきなり失礼にも程があんだろ!てめえ!」

「ああっ、大変申し訳ありませんえ…ん。ワタクシ、素直だけが取り柄なものでえ…」

「ああっ!?!」

棘一の発言に、さらにアヒルの顔が歪む。

「てつめえ!いい加減にっ…!」

「まあまあ落ち着いて、アヒるん…そんないちいち、彼の言葉に踊らされなくても…」

「これはこれはあ、ロングヘアが売りのわりに、毛先が随分と痛んでる左守さんですねえ…ケアが足りないのではあ…」

「刺し殺すわ…」

「いやいや！待てよ！お前、今、俺になんつつた！？」

アヒルを宥めようとした囁であったが、棘一から向けられる言葉に、殺意を全開にして、言玉を構える。そんな囁を、焦った様子で止めるアヒル。

「はあ…」

「そして、あなたが加守さんですかあ」

「んっ…？」

棘一が今度は、アヒルと囁の様子を見て、深々と溜息を吐いている籠也へと、声を掛ける。

「いやはや、さすがは兄弟。よく似ておられる」

少し背を反らして、棘一が籠也と檻也を見比べる。

「神の才がまるでなかったとはいええ、やはり同じ血を引いていらつしやるようですねえ」

「……………」

嫌みとは思えない棘一の言葉であったが、籠也は特に言い返す素振りも見せず、ただ静かな表情を見せていた。

「おや、こちらは無反応ですかあ」

「何をしにきた？棘一」

「んんっ？」

檻也がどこか不機嫌そうな表情で、棘一の方を見る。

「己守の件は、俺一人で片付けると言っただけだ」

「確かにあなたはそう仰っていました、我が神いゝ」

語尾を長く伸ばして、棘一がさらに口元を緩める。

「無愛想で、交渉術にもまるで長けていないあなたがあ、己守の勧誘なんて、とてもとても無理かとお」

「何だと…？」

遠慮なく言い放つ棘一に、檻也の表情が歪む。

「というのは、冗談のような本音でえ」

「殺す…」

「常に神と共に在るのが、神付きというものお。ワタクシたちが、あなたのもとへ参るのは、当然の責務ですっ」

棘一が、浮かべた満面の笑みを、檻也へと向ける。

「ねえ？あなたもそう思われませうん？神月籠也サンっ」

「……っ」

棘一から問いかけられ、籠也が少し表情を曇らせる。

「ですがあ、今の我々はあ、於附の要となる力行の五十音士、己守を欠いていますう」

「えっ…？」

不意に棘一からの視線を向けられ、焦ったような顔を見せる紺平。

「我々としては、一刻も早く己守を揃ええ、完璧な於団となって、我が神をお守りする必要がありまあす」

「のの…」

棘一の言葉に同意するように、海苔次も遥かに高い視線から頷く。

「だ、だからって、紺平を己守にするなんて権利、お前らにはっ…！」

「ええ、そうです。安の神」

アヒルの言葉に、勢いよく割って入って来る棘一。

「小泉紺平が己守になるかどうか、それをどうこう言う権利は、あなたにもありません」

「……っ！」

今までとは異なる、どこか冷たい口調ではっきりと言い放つ棘一に、アヒルが大きく目を見開く。

「選ぶのは、彼。そしてそしてえ、小泉紺平サァンっ」

「へっ？」

棘一に名を呼ばれ、紺平が目丸くして、顔を上げる。

「己守だの何だの言われたところでえ、すべてを知らねば、あなたも答えが出せないでしょう？」

「そ、それはっ…」

「ですからあなたにはあ、今からワタクシたちと共に来て、詳細な

説明を受けた上で、答えを出していただきますうつ」

『なっ…！』

その棘一の言葉に、驚きの表情を見せるアヒルたち。

「棘一、勝手に話を進めることはっ…」

「すべてはワタクシに任せておいて下さい、神いゝ」

「……………」

口を挟もうとした檻也だが、振り向いた棘一の有無を言わさぬ空気に、そつと言葉を呑み込んだ。

「ちよつと待て。そんなことが認められるか」

「さっきも言ったはずよ…？ まだ一般人である金平糖を、強制的に五十音士にすることはっ…」

「別に我々は、無理に五十音士にしようとしているわけではありませえゝん。ただ、彼が答えを出すために必要な情報を、与えようとしているだけのことお」

『…………』

間違いのない棘一の言葉に、反論もできず、険しい表情を見せる籐也と囁。

「まあっ」

微笑んだ棘一が、ゆつくりとアヒルの方を振り向く。

「あなたが今、ここで、彼にすべてをお話になるというのならあ、彼を連れていく必要はなくなりますがあ」

「えっ…？」

棘一の言葉に、戸惑いの表情を見せるアヒル。

「すべて、をっ…？」

「えええっ」

眉をひそめ、聞き返したアヒルに、棘一は大きく頷きかける。

「ガァ…」

「…………」

少し紺平の方を見たアヒルであったが、向けられる紺平のまっすぐな視線に、まるで逃げるようにすぐに目を逸らし、悩み込むよう

に深々と俯いてしまった。

「……………」

どこか辛そうに見えるアヒルの姿を見つめ、少し考え込むように下を向いた後、紺平がゆっくりと顔を上げる。

「俺、行くよ」

「えっ？」

「……………」

紺平の放った答えに、アヒルが驚きの表情で顔を上げ、棘一が少し口角を上げる。

「よくわからないけど、とりあえず君たちと一緒に行って、説明を聞く」

まっすぐな瞳を見せ、棘一の方を見る紺平。

「それで、俺が答えを出せばいいんでしょう？」

「えええ、そうしていただけると、非常に助かりますっ」

問いかける紺平に、棘一が大きな笑みで頷く。

「では、小泉紺平サンもこう言ってることでですので、神い」

「ああ、戻るか」

振り返った棘一に、檻也がそっと頷く。

「では、俺に附いて来い。小泉紺平」

「あ、う、うん」

「ま、待て…！まだ…！」

「危害を加えるつもりはない。そこまで友達とやらが心配なら、お前たちも来るといい」

身を乗り出した籠也へ、檻也が鋭く言い放つ。

「於崎の屋敷へな」

「……………」

檻也が放ったその言葉に、大きく目を見開く籠也。

「……………」

「籠也…」

黙って俯いてしまった籠也を、囁が少し不安げに見つめる。

「先に行く。そいつを連れて戻れ、棘一」

「仰せのままに」

棘一へと言い放ち、特に躊躇うこともなく、皆へ背中を向ける檻也。棘一が軽く頭を下げる中、檻也が歩を進め、屋上の出口へと向かっていく。

『……っ』

檻也が籠也のすぐ横を通り過ぎるその瞬間、一瞬だけ目を合わせた籠也と檻也は、互いに厳しい表情で見合うと、すぐさま視線を逸らした。そのまま檻也は止まることなく歩を進め、屋上を後にした。「行っちゃったわね、弟さん……いいの……?」

「いい」

歩み寄りながら問いかける囁に、籠也が肩を落としながら、すぐに答える。

「どうせ、“兄”とも思われていないだろうからな……」

「歪んでるわね……」

どこか諦めたように呟く籠也に、囁は呆れたように呟いた。

「では、小泉紺平さん」

「あっ」

棘一に名を呼ばれ、紺平が少し焦ったような声を漏らす。

「え、ええ……と……」

「……っ」

困ったような表情を見せながら、俯いたままのアヒルを気にする素振りを見せる紺平に、棘一が細められている瞳を、さらに細める。「では、我々は校門でお待ちしております。準備が出来たら、来て下さい」

「えっ? あ、は、はいっ」

「海苔次」

「のの……」

紺平にそう言い残すと、棘一は屋上を後にし、名を呼ばれた海苔次も、棘一の後を追うように、その巨体で器用に屋上の、体には小

さすぎる扉をぐり抜け、屋上を出て行った。屋上にアヒルと紺平、そして籠也と囁の四人だけが残る。

「ガァ」

ゆっくりとアヒルの方を振り向き、アヒルの名を呼ぶ紺平。

「ごめんね…」

「えっ…?」

紺平が放ったその言葉に、大きく目を見開いたアヒルが、顔を上げ、まっすぐに紺平の方を見る。

「無理に言葉を言わせようとしちゃって…」

「紺平…」

「別に、どうしても話してもらいたいわけじゃなかったんだ」
アヒルから視線を流し、再び屋上から景色を眺める紺平。時間が経ち、授業が始まったのか、グラウンドには体操着姿の生徒たちがたくさん、姿を見せ始めていた。

「ただっ…」

景色を眺める紺平の表情が、かすかに曇る。

「もどかしかった、のかな…」

自分でも戸惑うように、言葉を選ぶ紺平。

「みんながわかり合えてることを、自分だけがわからなくて…」
屋上の柵を握る手に、軽く力を加えた後、紺平はすぐに柵から手を離し、アヒルの方を振り返った。

「ごめんね、ガァ…」

「……っ」

そっと微笑んで謝る紺平に、アヒルが険しい表情を見せる。

「じゃあ俺、行くね」

「あっ…」

そう言って足早に出口へと歩いていく紺平に、アヒルが口を開く。

「こ、紺っ…!」

アヒルが紺平の名を呼び切る前に、紺平の通っていった屋上の扉は、力強く閉じられた。

「……っ」

扉の方へと伸ばされた手を下ろし、アヒルが険しい表情で俯く。

「どうする…？」

アヒルを見つめながら、小声で箆也へと問いかける囁。

「やっぱり、私たちだけででも、金平糖を追っていった方が…」

「……………」

「それはそれで、無理そうね…」

厳しい表情を見せているすぐ横の箆也に、囁がそっと肩を落とす。

「……………」

紺平が見つめていた景色を振り返りながら、アヒルはどこか悩み込むような表情を見せていた。

「マズいことになって来たな…」

屋上のさらに上、取りつけられた給水ポンプのすぐ脇に立ち、アヒルたちのいる屋上を見下ろしているのは、先程までアヒルたちにホームルームを行っていた恵であった。恵は腕を強く組み、どこか険しい表情でアヒルの方を見つめている。

「小泉が己守候補とは…知っていたのか？ 為介」

「まっさかあ…」

恵がすぐ横を振り向くと、そこには、相変わらずの軽口調の為介が立っていた。

「ボクにだって知らないことは山ほどあるんですよ…？ 恵さあ…ん」

「それもそうだ。お前が詳しいのは、くだらないことばかりだもんな」

「ひどいなあ…」

冷たく言い放つ恵に、為介が少し口を尖らせる。

「しかし、あいつらまでが動き出したとなると…」

瞳を細めた恵が、さらに厳しい表情を作る。

「いよいよ本格的に、五十音の世界が変わり始めるな…」

「えええ、それはもうっ」

真剣に言い放つ恵の横で、為介はそっと不敵な笑みを浮かべた。

Word. 24 おノ神ハ弟 (2)

その日、放課後。

「ふっはぁぁっ」

一日の授業を終え、下校しようと昇降口の下駄箱を開けるアヒル。珍しく資料室掃除をせずに帰れるというのに、その口からは、いつも以上に深い溜息が零れ落ちた。

「ぶっはぁぁっ…」

「なぁゝに死にそうな溜息吐いてんだぁ？お前っ」

「うおおっ！」

さらに深々と溜息を落としていたアヒルが、すぐ後ろから聞こえてくる声に、背筋を震え上がらせる。

「ス、スー兄！」

「よっ」

アヒルが振り返ると、そこには軽く手をあげ、笑顔を見せたスズメが立っていた。

「あ、もしかしてアレかぁっ？好きな子を、昇降口で待ち伏せして、恋文を渡そうって場面か？おいっ」

「んなわけ、ねぇーだろ！っつーか何か古りいんだよ！そのシチュエーション！」

ウキウキと目を輝かせながら言い放つスズメに、アヒルが勢いよく怒鳴り返す。

「“恋盲腸”じゃ日常茶飯事だぞお？んなもんっ」

「話ん中と現実を、一緒にたにすんじゃねぇーよっ…」
得意げに話すスズメに、冷たい瞳を向けるアヒル。

「コンペーとケンカでもしたかぁ？」

「へっ！？」

スズメの言葉に、アヒルが驚いたように顔を上げる。

「おっ、凶星かぁ。お前らよく懲りもせずに、ケンカばっかするよ

なあ」

どこか感心するように、スズメが言い放つ。

「ケンカするほど仲がいいっつーし、別にいいとは思うけどよっ」
軽く笑みを浮かべるスズメ。

「まっ」

少し目を細め、スズメが言葉を付け加える。

「後悔する前に、とっとと謝っちまえよっ？」

「……っ」

スズメのその言葉に、アヒルがそつと眉をひそめる。

——カー兄いいいっ……!!——

「……………」

謝ることの出来なかった過去を思い出し、少し俯くアヒル。

「そうそう、俺、今日さ、恋盲腸のスペシャルトークライブ行くから、帰り遅くなるって、親父に言っというてえっ」

「へっ？」

「んじゃあなあっ！ヒトミ、待ってろよおー！」

「あっ……」

アヒルに軽く手を振ると、スズメはそのまま昇降口を出て、気合の入った様子で学校から駆け去っていった。

「恋盲腸の……スペシャル、トークライブ……？」

一体、何が行われるのかを考えながら、アヒルが少し表情を引きつる。

——後悔する前に、とっとと謝っちまえよっ？——

「……っ」

スズメの言葉を思い出し、アヒルが再び険しい表情を作る。

「“謝る”か……」

少し細めた瞳で、どこか遠くの方を見つめるアヒル。

——ごめんねっ：——

「先に、謝られちゃったなっ…」

靴を履き、昇降口を出たアヒルが、下校していく生徒たちの中を歩き、ゆっくりと校門を出る。

「はあゝああ…」

「朝比奈くん！」

「んあっ？」

溜息を吐きながら、重い足取りで家へと帰る道を歩いていたアヒルが、後方から聞こえてくる名に足を止め、振り返る。

「奈々瀬」

「朝比奈くん！」

校門を出てきたばかりの七架が、振り返ったアヒルのもとへと、嬉しそうな笑顔を見せながら駆けてくる。

「きよ、今日も絶好の登校日和だねっ！」

「今、まさに下校しようとしてるところだけだなっ…」

相変わらず、意味不明の発言をする七架に、少し引きつった表情で答えるアヒル。

「今日もバイトか？」

「ううん、今日は六騎むつきと一緒に買い物に行く約束なの」

「六騎？ ああ、あの弟か」

七架がアヒルの横へと並ぶと、二人は足並みを揃え、帰り道を歩き始める。

「何か、不思議だよね」

「へっ？ 何が？」

しみじみと呟く七架に、アヒルが大きく首を傾げる。

「つい一昨日まで、あんな大変な戦いしてたのに、今はこんなのにびりしてて、平和で」

「……っ」

穏やかな笑みを浮かべて話す七架を、横から見つめ、アヒルが少し表情を曇らせる。

「奈々瀬」

「んっ？」

「ごめん、なっ…」

「えっ…？」

急に謝るアヒルに、七架が笑みを止め、戸惑いの表情となる。

「まだちゃんと、謝ってなかったと思ってさ」

「なんで謝るの？」

「いや、その、いくら神試験が迫ってて、奈守を探すことに焦ってたとはいえさ…」

問いかけた七架に、アヒルがどこか気まずそうな表情を作りながら、ゆっくりと言葉を繋いでいく。

「お前を、こんな戦いだらけの世界に、考える暇も与えないまま、巻き込んでしまったっ…」

「朝比奈くん…」

申し訳なさそうな顔を見せるアヒルに、七架がそっと目を細める。

「“巻き込まれた”なんて、少しも思っていないよ」

「えっ…？」

返って来る言葉に、アヒルが驚いたように顔を上げる。

「少しも思っていない」

顔を上げたアヒルへ、七架が優しい笑顔を向ける。

「確かに、戦いは思ってた以上にずっと激しくて…痛い思いも、苦しい思いも、いっぱいしたけど…」

七架が空を見上げながら、どこか思い出すように呟く。

「でも、それ以上に嬉しかった」

——俺だって、半端な覚悟で、神になろうってわけじゃねえーんだよっ…！——

「朝比奈くんが勝った時、すごく嬉しくて：安団のみんなで喜びを分かち合えた時、もっと嬉しくてっ…」

話しながら、七架が笑みを大きくしていく。

「ここに居られて良かったって、みんなの仲間になれて良かったって、心からそう思えたの」

「奈々瀬…」

七架の言葉を聞きながら、アヒルが少し目を細める。

「きつと、小泉くんも同じじゃないかな」

「えっ…?」

急に紺平の名を出され、驚きの表情を見せるアヒル。

「ごめんね。真田さんから、話聞いちゃったの」

「そ、そうか…」

頷きながらも、アヒルがどこか困ったような顔を見せる。

「小泉くんも、五十音士のこととか、全部知ったって、“巻き込まれた”なんて、思わないと思うよ」

そんな困ったような表情のアヒルへ、そっと微笑みを向ける七架。

「それは…」

———もどかしかった、のかな…?———

———みんながわかり合えてることを、自分だけがわからなくて

……—

「それは…そう、かも知れないけどっ…」

「それだけの問題でもないのかな…」

「えっ…?」

アヒルの言葉に続くように、七架が代わりに先を口にする。

「けどね、朝比奈くん」

七架が再び笑顔を浮かべ、まっすぐにアヒルを見つめる。

「どんな想いも、言葉にしなきゃ、きつと伝わらないよ」

強く光る瞳で、アヒルを捉える七架。

「それは、朝比奈くんが、一番よくわかってるんじゃないかな…？」
「……っ」

七架の言葉に、少し表情を動かすアヒル。だがアヒルは、その言葉に特に答えることもせず、また悩むように俯いた。そんなアヒルを見て、七架が小さく笑みを零す。

「じゃあ、私はここで」

「へっ？あ、ああっ」

分かれ道に辿り着き、それぞれ左右への道を選ぶアヒルと七架。

「じゃあ、また明日、学校でね、朝比奈くんっ」

「お、おう」

アヒルへ大きく手を振ると、七架は右へと曲がっていき、さらにその先の曲がり角へと、姿を消していった。道の分岐点に立ち尽くしたまま、アヒルが少しの間、考え込む。

「言葉っ…」

そう言って、アヒルがそっと空を仰いだ。

その頃、紺平は、檻也、棘一、海苔次と共に車に乗り込み、言ノ葉町からはかなり離れたところにある、あまり人口の多くない山ばかりの町へとやって来ていた。

「ふわあっ…」

やっとのことで止まった車を降りると、紺平は思わず感嘆の声を漏らした。目の前に広がっていたのは、山一個分の敷地を丸々使った、壮大な屋敷であった。木造建築で、その様式も古く、歴史ある屋敷であることがうかがえる。

「ここが代々、於の神を務めておられます、於崎のお屋敷であります」

屋敷を指し示し、棘一が紺平に説明するように話す。

「まあ、ワタクシから言わせれば、ただのバカデッカイだけのボロ屋敷ですけどねえ」

「棘一…」

相変わらず失礼極まりない棘一を、檻也が鋭く名を呼んで注意するが、棘一は特に、その笑顔を崩すことはなかった。

「もう、お前たちはここでいいぞ。下がって、休め」

「おやつ？ですが小泉サンへの説明はあつ…」

「空音にさせる」
そらね

「空音サンに…そうですね。でしたら確かに、ワタクシたちまで行く必要はなさそうですね」

檻也の言葉に、納得するように頷く棘一。

「口下手にも程がある神が説明するといふのであれば、無理やりにも残るのですがあ」

「お前、いい加減に殴るぞ…？」

棘一の発言に、そろそろ怒りも頂点に達してきたのか、檻也が強く拳を握り締める。

「では、お言葉に甘えて、今日はこのまま休ませていただくのでしょうか、海苔次」

「のの…」

棘一がそう声を掛けると、海苔次が遥かに上の方で首を縦に振る。

「ああ。じゃあまた、必要であれば呼ぶ。来い、小泉紺平。中へ入るぞ」

「あ、うん」

二人にそう言い放ち、紺平を連れ、檻也が屋敷の中へと入って行くとする。

「ああ、神い」

「……っ？」

呼び止める棘一に、門をくぐったところで、檻也がゆっくりと振り返り向く。

「何だ？」

「いいええ、そのお、あまりこういう小言のようなことは言いたくないのですがあ」

「……………」

言葉を選ぶように、少し詰まらせながら話す棘一に、眉をひそめる檻也。

「この間の神試験のことといい、今回のことといい、最近の神はいささか、勝手が過ぎるかとお」

「俺に、お前の言うことだけを聞いて、動けと…?」

「いいええ、そんなとんでもなあいつ」

そつと問いかける檻也に、棘一が大きく首を横に振る。

「ただあ、ワタクシはあなたに、神として常に冷静であってほしいと、そう願っているだけですう」

「俺は常に冷静だ」

「えええ、お兄様のいらっしやらないところでは、ねえっ」

「……………」

まさに棘の含んだ、その棘一の言葉に、一気に曇る檻也の表情。

「俺に、兄などいない」

少し瞳を細めた檻也が、まるで睨みつけるように棘一を見つめ、強く言い切る。

「行くぞ」

「あつ、えつと、ちよつと…!」

足早に屋敷の奥へと入っていく檻也を、紺平が慌てた様子で、必死に追っていく。二人の姿が屋敷の中へと消えると、辺りに静けさが戻った。

「ふうっっ」

海苔次と二人、門前へと残された棘一が、どこか一息つくように、深々と肩を落とす。

「まったく、本当にからかい甲斐のある神様ですねえ」

「ののの…」

「んっ?」

楽しげに微笑んでいた棘一が、上方から聞こえてくる声に、そつと顔を上げる。

「何だい？海苔次」

「の…トド、ロキ…」

「今は棘一だよ。その名で呼んでは駄目だ」

途切れながらも名を呼んだ海苔次に、棘一がどこか注意するように言い放つ。

「でもまあ、この名でいるのも後少しかな」

棘一が口元を歪め、怪しく微笑む。

「これでは、ここに安の神が来れば…」

Word 24 おノ神八弟 (3)

戻って、言ノ葉町。小さな町の八百屋さん『あさひな』二階。

「ぶっはああっ…」

七架と別れ、家へと戻って来たアヒルは、制服も着替えないままベッドに転がり、深い溜息を、止めどなく吐き続けていた。

「はあっ…」

「……っ」

部屋の壁にもたれ、恋盲腸の本を読んでいた囁が、そんなアヒルの様子を見て、そっと本を閉じる。

「アヒルん…」

「んあっ？」

「溜息一回吐くごとに五百円罰金だから…今で合計、二万三千円ね…」

「ちよい待てええ！」

囁の言葉に、アヒルがベッドから勢いよく起き上がる。

「誰がいつ、そんなゲームに参加するつつたあ!？」

「さっき、テレパシーで言ってたじゃない…」

「言うかあ！」

「あら、言ってなかった…？フッフっ…」

勢いよく突っ込むアヒルに、囁は何やら楽しげに微笑む。

「だって…アヒルんの溜息が、あんまりうるさいんですもの…」

「仕方ねえだろ？俺だって、たまには悩むこともあるんだよっ」

ベッドの上に座り直しながら、アヒルが大きく顔をしかめる。

「あら…？“悩んだ”の…？」

「あのなあっ、お前、俺を悩みのない生物かなんかだと思っ…」

「“後悔してる”のかと思った…」

「……っ！」

囁の言葉に、言い返そうとしていたアヒルが思わず言葉を止め、

大きく目を見開く。

「金平糖を於の神と行かせちゃったことを…後悔してるのかと思っ
た…」

「そ、れはっ…」

鋭い笑みを向ける囁から目を逸らし、アヒルがそっと俯く。

「神っ」

『……っ?』

その時、部屋の扉が勢いよく開き、少し慌てた様子で、籠也が入
って来る。

「あら、籠也…あなた、スズメさんと一緒に、恋盲腸のスペシャル
トークライブに行ったんじゃないかったの…?」

「お前も行ったのかよ!」

囁の言葉を聞き、思わず突っ込みを入れるアヒル。

「ああ。だが急に思い立ってな、待っているヒトミに心の中で別れ
を告げて、ここへ戻って来た」

「まあ、ヒトミはお前を待っちゃいねえと思うけどな…」

真剣に答える籠也に、アヒルがひっそりと呟く。

「籠也がヒトミを置いてくるなんて…明日の天気はやりね…」

「だから、ヒトミは待ってねえって」

同じく真面目な表情で呟く囁に、アヒルがまたしてもひっそりと
突っ込む。

「けど、何だって、んな大事なライブ抜けて、帰って来たりなんか
っ…」

「出掛ける支度をしろ、神」

「へっ?」

問いかけようとしたアヒルが、籠也の言葉に目を丸くする。

「出掛けるって、どこにっ…ああ!まさか、俺までトークライブに
参加させようってんじゃないっ…!」

「於の神の、於崎の屋敷へだ」

「えっ…?」

「……っ」

思いがけない箆也の答えに、アヒルが戸惑いの声を漏らし、囁もそっと眉をひそめた。

「お、於崎の屋敷っ…?」

「ああ、僕が案内する。そこに小泉がいるはずだ」

戸惑うアヒルに、箆也が迷いのない口調で答える。

「箆也、あなた…」

「ちょ、ちょい待てっ!」

何かを言いかけた囁の声を遮り、アヒルが大きく叫ぶ。

「な、何だよ? 急にっ。於崎の屋敷ってのは、お前にとっても、あんま行きたくねえ場所なんだろうっ?」

眉間に皺を寄せたアヒルが、箆也へと問いかける。

「それに、朝言ってただろ? 俺らが何したところで、己守になるかどうか決めんのは紺平でっ…」

「別に、小泉が己守になるかどうかなど、どうでもいい」

「はあっ?」

箆也の答えに、アヒルが大きく顔をしかめる。

「どうでもいいって、じゃあなんでっ…」

「あなたはまだ、小泉に何も言っていない」

「……っ」

強く言い放つ箆也に、ハッとした表情を見せるアヒル。

「謝るにしろ、怒るにしろ、泣くにしろ、何か、言葉は伝えるべきだ」

部屋の奥へと踏み込み、ベッドに座るアヒルの正面へと立った箆也が、アヒルへとまっすぐな瞳を向ける。

「そうしなければ、必ず悔いが残る」

強い瞳で、アヒルを見続ける箆也。

「あなたも言葉の神のなら、言葉から逃げることはするなっ」
「箆也…」

力のあるその箆也の言葉に、アヒルがそっと眉をひそめる。

「……………」

「アヒルん…」

考え込むように俯くアヒルを、囁がどこか心配するように見つめる。少しの間を置いた後、アヒルがゆっくりと顔を上げた。

「よし！行っ…！」

「アヒルさあゝゝんっ！」

「どわあああ！」

張り切って言葉を発しようとしたアヒルであったが、その声は、窓から勢いよく入って来た保の大声に、あっという間に掻き消された。

「た、保っ…俺、今カッコよく言おうとし…ってかお前、どっから入ってきっ…」

「為介さんから、話はすべて聞きましたよおゝ！アヒルさあゝん！」
「へっ？」

窓の外からベッドの上へと降り立ち、勢いよくアヒルの手を取る保に、アヒルが目を丸くする。

「今度は地上侵略を企む地底人の軍団に、紺平さんをさらわれてしまったんですってねえゝ！」

「あの扇子っ…また適当なことを…」

「毎度毎度、簡単に騙されてくるわね…フフっ…」

切羽詰まった様子で叫ぶ保に、一気に呆れた表情となるアヒルの後ろで、囁が笑しげに微笑む。

「今回も、こんなデカいだけの俺でお役に立てることがあればっ、手を貸しますよお！ぜひい！」

「役に立てることなどない。帰れ」

「いっやあゝ！神月くん、ばっさりいゝ！」

冷たく言い放つ籠也に、保がさらに声の音量を上げる。

「フフっ…良かったわね、頼もしい仲間が一人増えて…」

「頼もしい、のか？あれっ…」

微笑む囁に対し、どこか呆れた様子で肩を落とすアヒル。

「まあいつか。訳わかってなくても、まああいつも一応は安団なわけだし」

「じゃあ、私も行っていいかな？」

「へっ？」

部屋へと入って来る新たな声に、アヒルが戸惑いの表情で顔を上げる。

「私も一応、安団なわけだし」

「奈々瀬！」

開いたままであった部屋の扉から、中へと姿を見せたのは、笑顔を見せた七架であった。現れた七架に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「お前、なんでここにっ…」

「小泉くんのこと、やっぱり気になっちゃって…それに」

戸惑いながら問いかけるアヒルに、七架が穏やかな笑顔を向ける。

「朝比奈くんなら絶対、“行く”って言うって思ったから」

「奈々瀬っ…」

アヒルを信じきった笑みを浮かべる七架に、アヒルがそっと目を細める。

「フフフっ…何だかんだで全員揃っちゃったわね…」

「神附きとして、当然の責務だろう」

「面白くない答え…フフフっ…」

素っ気なく答える籠也に、囁がそっと笑みを浮かべる。

「ありがとう。みんなっ…」

『……っ』

そっと笑みを浮かべ、礼を言うアヒルに、籠也たち四人が皆、それぞれに笑みを見せる。

「では、神」

「ああ」

呼びかける籠也に、アヒルが大きく頷き、立ち上がる。

「今から於の神ん家に、紺平のところに行く」

アヒルが目つきを鋭くし、はっきりとした口調で皆へと言い放つ。

「俺に附いて来てくれ！」

『仰せのままに、我が神』

強く叫ぶアヒルに、箆也たち四人が、声を揃えた。

『お帰りなさいませ、檻也様』

「ああ」

一方、棘一たちと別れ、屋敷内へと入った檻也と紺平は、どこかの公園かとも思える広い中庭を通り、屋敷のさらに奥にある建物へと向かっていた。中庭には、どこから沸いて出てきたのか、山程の使用人たちが列をなし、皆、檻也へ向け、深々と頭を下げている。

「す、凄いねっ……」

頭を下げている使用人たちを見回し、思わず顔を引きつる紺平。一般家庭に生まれ、ごく普通に生きてきた紺平にとって、この景色は、とても見慣れないものであった。

「お坊ちゃんなんだ、檻也くんて……」

「別に、皆、俺に頭を下げているわけじゃない」

「えっ……？」

すぐさま返って来る檻也の言葉に、後ろを歩く紺平が、少し首を傾げる。

「皆、俺の“於の神”という称号に、頭を下げているだけだ」

「……っ」

その言葉は冷たく、そしてどこか諦めているようにも聞こえ、紺平はそっと表情を曇らせた。

「そ、それにしても、大きなお家だよね！ 神月くんも、ここで育ったの？」

「……………」

重くなった空気を変えようと、無理やり話題を変える紺平。だが

その問いかけに、檻也は強く眉をひそめた。

「籠也がこの家に居たのは、五歳までだ」

「えっ？五歳？」

「それからは、屋敷内に立ち入ることさえ、禁じられたからな。育つたとは言えないかも知れないな」

「あぁっ…」

またしても重くなる空気に、今度は話題を変えることすらできずに、紺平はどっか気まずそうな表情で俯いた。

「ここが本邸。於崎の屋敷の中でも、ごく一部の者しか立ち入れない場所だ」

「えっ？」

あれこれと話している間に、二人は広い中庭を渡り終え、敷地内の一番奥にある、より一層立派な屋敷へと辿り着いていた。敷地内にさらに存在する門を通り、檻也たちがその屋敷の囲いの中へと足を踏み入れる。

「お帰りなさいませ、檻也様」

「んっ？」

門をくぐってすぐのところでは出迎える声に、檻也が顔を上げる。
とききた

「時定」

屋敷の前に立ち、檻也と紺平を出迎えたのは、紺色の甚平姿の、金髪的青年であった。二十代半ばくらいであろうか。青年が心優しいような、爽やかな笑みを、檻也へと向ける。

「ご無事で？」

「ああ、この通りな」

「それは何よりでございました」

安心した微笑みを見せ、時定と呼ばれた青年が深々と頭を下げる。

「これはこの屋敷で唯一、俺個人の世話役をしている時定だ」

「時定にございます」

「あ、ああ、えと、小泉です。ど、どうもっ」

頭を下げる時定に、紺平が少し慌てた様子で頭を下げる。

「何かあれば、こいつに言うといい」

「檻也様の神付きは、私にとっての神。何なりと、お申しつけ下さいませ、小泉様」

「は、はあ…」

まるで崇めるような態度を取る時定に、どこか困惑した様子で頷く紺平。

「時定、空音はいるか？」

「空音様でしたら先程、裏庭の方に。お呼びしましょうか？」

「いや、いい。裏庭を通って行く」

問いかける時定に軽く手をあげ、檻也が足を進める方向を変える。

「こっちだ」

「あ、うん」

檻也に誘導され、二人はそのまま屋敷の中には入らず、囲いに沿うようにして屋敷の周囲の庭を歩き、屋敷をぐるっと回って、裏にある広い庭へと出た。

「あっ」

「……………」

庭の真ん中に立っている人影を見つけ、紺平が思わず声を漏らす。そこに立っていたのは、鮮やかな水色の着物を纏った、一人の少女であった。肩ほどもで伸びた黒色の髪に、大きな黒色の瞳のその少女は、首を大きく曲げ、ひたすら上に広がる空を見つめている。

「空音」

「……………」

「空音っ」

「えっ…？」

一度目、檻也が呼んでもまったく気付かなかったその少女が、二度目、強く呼ぶ声に、空を見上げていた顔を下ろし、やっこのことで振り向く。

「あっ…神…」

檻也の姿を視界へと入れたその少女が、そっと穏やかな笑みを浮

かべる。

「戻られたのですね。お帰りなさいませ」
美しい微笑みを、檻也へと向ける少女。

「ああ。また空を見ていたのか？」

「ええ…」

問いかける檻也に、少女が微笑んで頷く。

「空が…とても荒々しく動いていたので…」

そう言いながら、再び上空を見上げる少女。

「まるで…世界が変わる、その前兆のようで…」

「空が…動く…？」

見上げる少女につられるように、紺平も首を曲げ、空を見上げる。
だが空はただの空で、紺平が見る限り、少しも動いているようには
見えなかった。

「神…そちらは…？」

「ああ。小泉紺平、次の己守候補だ」

「彼が…」

「ど、どうもっ…」

檻也に名を紹介され、状況を理解していないながらも、少女へと
頭を下げる紺平。

「こいつは空音。曾守^{そもり}で、棘一、海苔次と同じ、於附の一人だ」

「ソ、モっ…？」

「今のお前には言ってもわからないか。空音」

大きく首を傾げる紺平に、檻也はどこか諦めるように肩を落とし
た後、再び空音の方を見た。

「こいつに五十音士のことや、神附きのことを説明しろ」

「話もされていないのに、ここまで連れて来られたのですか…？」

「棘一が勝手をしたんだ」

少し眉をひそめる空音に、檻也が答えながら顔をしかめる。

「棘一とまた、おモメに…？」

「いつものことだ。気にする必要はない」

「棘一にも困ったものですわね…」

檻也は素っ気なく答えるが、空音はどこか困ったように肩を落とした。

「こいつが十分に理解した上で、己守になるかどうかを決めさせる。説明は丁寧に行え」

「わかりました…」

檻也の言葉に、空音が深々と頷く。

「俺は屋敷内に居る。終わったら、呼べ」

「はい…」

しっかりと頷きながら、空音が頭を下げると、それを確認した檻也が、裏庭にある入口から、足早に屋敷の中へと入っていった。檻也の姿がなくなると、空音がゆっくりと顔を上げる。

「はあっ、かったるっ」

「へっ？」

急にその口調を乱雑なものへと変え、今までの大人しそうな雰囲気を一変させる空音に、紺平が戸惑うように目を丸くする。

「なあゝにが“丁寧に行え”よっ。そこまで言うんなら、自分でやれっつーのっ」

「あ、あのおっつ…」

「んっ？」

美しい微笑みを浮かべていたその表情をしかめ、あれこれと文句を口にしていた空音が、どこか恐る恐る声を掛ける紺平に、面倒そうに振り向く。

「何っ？」

「ええーっと、これはそのお…」

言葉を選ぶように、紺平が間を置く。

「蜃気楼か何かで？」

「んなもんが、ここで見えるわけないでしょっ。あんた、バカあ？」さらに顔をしかめた空音が、紺平へと容赦なく、言葉を吐き捨てた。

「今までののは演技よ、演技っ。空の動きなんか、わかるかつーのっ」

「え、演技？」

空音の言葉に、さらに目を丸くする紺平。

「なんで、そんな真似っ……」

「神に気に入ってもらうためよ」

紺平が問いかける前に、空音が即答する。

「いっくらムカつくつつたって、神に嫌われたんじゃ、神附きとして色々都合悪いしねえ」

「そ、そうなんだ……」

割りきった様子ではっきりと答える空音に、紺平が少し呆然としながら頷く。

「ここにいる人間なんて、みんな、そんなもんよお？」

はつきりとした口調で、空音がさらに言葉が続ける。

「あんな奴、神でさえなきや、誰も相手にしないんだからっ」

「……っ」

空音の言葉に、曇る紺平の表情。

――皆、俺の“於の神”という称号に、頭を下げているだけだ……

「……………」

先程の檻也自身の言葉を思い出し、紺平はどこか考え込むように俯いた。

「あんたも、あんな神に附くなんてやめた方がいいわよお？ って、まだ色々知らないんだっけ」

「は、はあ……まあ……」

空音が、確かめるように言い放つ。

「んじゃあ、とっとと説明を始めちゃいましょうかっ」

「あ、うん」

振り向く空音に、紺平が頷く。

「こっち来てえ」

「あ、うんっ」

檻也が入っていったところとは別の入口から、屋敷の中へと入っていく空音を、紺平が少し慌てた様子で追っていく。

「そういえばガアも、“神”って呼ばれてたけどっ」

入口付近で立ち止まり、紺平が思い出したように呟く。

「何か：ガアたちとは、全然違う感じの雰囲気だなっ」

どこか浮かない表情を見せながら、檻也が入っていった方の入口を見つめる紺平。

「どうなるんだろ：これからっ」

紺平は少し不安げに呟き、先程まで空音が見上げていた空を、そっと見上げた。

Word. 24 おノ神八弟 (4)

その頃、簞也の案内により、於崎の屋敷を目指すアヒルと安団のメンバーは、電車とバスを乗り継いで、やつのことで於崎の広大な敷地、その山一つ分を使った屋敷の前へと辿り着いていた。アヒルたちが辿り着いた頃には、すでにすっかり日が落ちており、周囲は山ばかりのため真っ暗で、屋敷の光だけが辺りを照らしていた。

「ふっはあ、やっと着いたあ」

「本当、結構遠かったですねえ」

がっくりと肩を落とすアヒルの横で、保も力なく声を漏らす。

「よくもまあ、こんな山奥に好んで家を建てたものね…」

「確かに、お買い物とかは大変そう…」

本当に何もない周囲を見回し、囁と七架がどこか感心するように呟いた。

「けどさあ」

アヒルがふと、眉をひそめる。

「すっげ厳戒態勢なんだけど、これって通れんの？」

突き出した人差し指を、軽く指し示すアヒル。その指し示した方向、屋敷の門の前には、アヒルたちを威嚇するように、強い視線で睨みつける、屋敷の使用人と思われるたくさんの者たち。痛いほどの視線には、その場に居ることも気まづくなる。

「通れるに決まってるじゃない…？何せ、簞也はこの屋敷のお坊ちゃまで…」

「何をしにおいでなさったのです！？簞也様！」

「あなたはもう十年も前に、この屋敷への立ち入りを禁じられたのですよ！」

「あら…？」

使用人たちから浴びせられる声に、囁が少し間の抜けた声を漏ら

す。

「立ち入りを、禁じられた……？自分の家なのに……？」

「……っ」

戸惑いながら首を傾げる七架の横で、アヒルがそつと眉をひそめる。

「はぁ！もしかして神月くんっ、子供の頃から、近所で評判の跳ねっ返りだったんじゃないあっ……！」

「黙れ。殴るぞ」

「んっ！」

場の空気を読まずに大きな声を出した保が、箆也に突き刺すような言葉を返され、すぐさま両手で口を押さえ、黙り込む。

「しかし、こうなるなら裏口の方から、こっそりと行けば良かったな」

「気付くの、遅せえよ……」

今更ながらの反省をする箆也に、アヒルが少し呆れた表情を見せる。

「まあ入れねえーもんは、仕方ねえや。とりあえずここ出て、この近くで泊まれそうなところをっ……」

「まあ、これは珍しいお客様ですわね」

「えっ？」

皆にそう言って、屋敷の前から去ろうとしたアヒルが、門を取り囲む使用人たちのその奥から聞こえてくる、聞き覚えのある、その凜とした声に、振り返った。

「いつ振りでしょうか……」

その声の主を、アヒルたちの前まで通すように、所狭しと並んでいた使用人たちが、きれいに素早く、左右へと分かれていく。

「この屋敷で、あなたの姿を見るのは……」

「あっ……！」

使用人たちの中から姿を現したのは、豪華な着物を纏った、美しい女性。

「言姫さんっ！」

「お久し振り：でもないですわね。安の神」

驚きの表情を見せたアヒルに、笑顔を向けたのは、言姫、和音であつた。

「最近、安の神とはよくお会いしますわねえ。縁があるのでしょ
うか」

「な、なんで言姫さんが、この屋敷にっ：」

「まあ居てもおかしくはないだろう」

「へっ？」

口を挟んだ箆也の方を、アヒルが戸惑うように振り返る。

「和音は、檻也の婚約者だからな」

「へっ？」

「婚約者あ！？」

箆也の言葉に、アヒルが目丸くし、保や七架も皆、驚きの表情を見せる。

「代々言姫は、於の神の、この於崎の人間に嫁ぐと決められている」

「凄い勢いで政略結婚ね：」

「何か：ちよつと切ないね：」

箆也からの説明に、囁は呆れたように肩を落とし、七架はどこか複雑な表情を見せた。

「それで？もう十年以上も、この屋敷に戻ってなかったあなたが、今になってこの屋敷に何の用なのです？」

「用があるのは、僕じゃない。我が神だ」

「安の神が：？」

「へっ？ええつとっ」

振り向く和音に、アヒルが少し困ったような顔を作る。

「神の友が、己守に選ばれたんだ。檻也とともに、この屋敷に来て
いるはずなんだが」

「安の神のお友達が、己守に：？」

代わりに答えた箆也の言葉に、和音がそつと眉をひそめる。

「本当に、檻也は己守を連れて…?」

「え? え、ええ。己守であるかどうかはわかりませんが、昼頃、制服姿の少年を連れて、お戻りに」

「そうですか」

和音が近くに立つ使用人に聞くと、使用人は戸惑いながらも答えた。

「わかりました。どうぞ、お入りになって下さい、安の神」

「えっ?」

『なっ…!』

あっさりと言い放つ和音に、アヒルや、周りを取り囲む使用人たちが皆、驚きの表情を見せる。

「こ、言姫様…! 何をっ…!」

「於崎家の者の許可もなしに、部外者を屋敷内に入れるなどっ…!」
「何か言われたならば、わたくしの指示だと言っていただいて構いません」

口々に言い放つ使用人たちの声を遮り、はっきりと言い放つ和音。
「すべての責任は、わたくしが取ります」

『……っ』

反論する使用人たちを、和音が強い口調で黙らせる。

「言姫さんっ…」

「しっかりと感謝していただいて結構ですわよ、安の神」
振り向いたアヒルへ、満面の笑みを向ける和音。

「ですが、中へ入っていたくのは安の神、お一人だけです」

『えっ…?』

言葉を付け加える和音に、保たちが驚きの表情を見せる。

「他の安団の皆さまには、離れを解放させますので、そちらで休んでいただきます」

「そ、そんなっ…!」

「我々、神附きに、神から離れろと…?」

思わず声をあげる保の横から、囁が鋭く問いかける。

「この条件を呑んでいただけないのであれば、安の神の立ち入りも取り消させていただきますわ」

『うっ…』

和音から突き付けられる厳しい言葉に、保たちが黙り込む。

「これでよろしいですか？ 箆也」

「ああ」

問いかける和音に、箆也は反論する様子もなく、あっさりと頷いた。

「元より、僕自身は、屋敷内に入るつもりはなかったからな」

「……………」

はっきりと答える箆也に、和音が少し目を細める。

「ではそういうことで、参りましょうか。安の神」

「お、おうっ」

和音が通って来た道を指し示し、屋敷の中へとアヒルを案内しようとする和音に、アヒルが少し慌てた様子で答える。

「朝比奈くん…」

「んっ？」

足を踏み出そうとしたアヒルが、不安げに名を呼ぶ七架の声に、振り向いた。

「悪いいな、みんな」

仲間たちへと、笑顔を向けるアヒル。

「紺平とちゃんと話して、すぐ出てくっからさ。ちょっと待っててくれ」

「気を付けてね」

「ちゃんとお話してくるのよ…アヒるん…」

「ああっ」

声を掛ける囁と七架に、アヒルがしっかりと頷く。

「地底巨大モグラのヒゲヒゲアタックには、十分に注意して下さいねえー！アヒルさあーん！」

「あ、ああっ…」

必死に叫ぶ保に、呆れた表情を見せながらも、とりあえず頷くアヒル。

「じゃあ箆也、後は任せるぞ」

「ああ。神もしっかりな」

「おう！」

箆也の言葉に答え、軽く右手を突き上げると、そのままアヒルは、まだ納得しきっていない表情の使用人たちに見送られ、和音に先導されて、屋敷の中へと消えていった。

「大丈夫かな…？朝比奈くん…」

「さあ…？フフフっ…」

「アヒルさあくん！地底人から無事に、紺平さんを助け出して下さあ〜い！」

「……………」

不安げな様子を見せる皆の横で、かつて暮らした屋敷を見つめながら、箆也はそっと目を細めた。

於崎屋敷から少し離れた場所に位置する、於崎の別邸。今は棘一と海苔次が、待機の間として、そこを使用していた。

「ののの…」

「んん〜っ？」

窓際でソファーに座り、優雅に本を読んでいた棘一が、急に声を出す海苔次に、ゆっくりと顔を上げる。

「どうしたあ〜？海苔次っ」

「ののの…」

「そうかあ。安の神が屋敷の中へえ〜」

“の”としか言っていない海苔次の言葉を、棘一が瞬時に理解する。

「いよいよかなあ？」

「の…?」

「うん、そお。後は指示を待っただけえ」

本を閉じ、近くのテーブルの上へと置いた棘一が、何やら楽しげな笑みを浮かべる。

「あああゝ、ついにこの瞬間が来たのかあ。本当に楽しみだねえ」
ソファーから立ち上がった棘一が、窓から見える、丸い月を見上げる。

「これでっ…これで五十音の世界は、一気に崩れ落ちるっ…」

棘一が口角を吊り上げ、不気味な笑顔を作る。

「一気に、ねえっ…」

かすかに開いた瞳が、見上げたその月を捉えた。

Word. 25 この勇氣 (1)

箆也の弟である“於^おの神”於崎檻也により、於附の一人、己^{こもり}守として、於崎の屋敷へと招かれた紺平。

そして、アヒルたち安団の面々も、紺平を追うように、於崎の屋敷へと辿り着いていた。

於崎家屋敷、入口棟廊下。

『ざわざわざわわっ…』

「……………」

周囲から聞こえてくる声と、あからさまに不審がっている屋敷の使用人たちの態度に、アヒルが思わず表情を引きつる。アヒルは元来、こういった視線は気にならない人種であるが、ここまで極度であると、気にしないことも困難である。

「この屋敷は、余所者の出入りを悉く禁じているのです」

「……………」

アヒルが、前を歩く和音の声に顔を上げる。

「ですから、この屋敷の者たちは、訪れる者を迎え入れることが、どうも苦手なようですわ」

「苦手っつーか…ううん」

感じる冷たい視線を見回しながら、アヒルが少し首を捻る。

「於附といえども、出入りは困難です。他団の者となれば、より一層の珍客でしょう」

和音は周囲を特に気にする素振りは見せず、まっすぐに前だけを向いて、言葉が続ける。

「だから…」

「……………」

声を発するアヒルに、和音がかすかに振り返る。

「だから、箆也の出入りも禁じた…?」

「……………」

アヒルのその問いかけに、和音がそっと目を細める。

「お庭へ出ましょうか」

和音はその問いかけには答えようとせず、急に方向を転換させ、廊下にあった大窓から、庭へと出た。月明かりが眩しく、空はもう暗いというのに、庭は程良く明るかった。

「わたくしが初めてこの屋敷を訪れたのは、わたくしが六歳、箆也がまだ三歳の時でした」

庭で立ち止まり、不意に昔の話を始める和音に、アヒルは少し眉を動かしたが、特に口を挟むこともなく、和音の話に耳を傾けた。

「丁度、この辺りでしょうか。箆也は一つ年下の弟、檻也と、とても楽しそうに遊んでいましたわ」

庭にある池の近くへと立ち、穏やかな笑みを浮かべる和音。

「とても、楽しそうに…」

「……………」

その言葉を繰り返す和音に、アヒルが少し表情を曇らせる。

「ですが、箆也が五歳になったばかりの頃、檻也が“お”の力に目醒めたのです」

「“お”の、力に…？」

「ええ。歴代の“於の神”の中でも、最も早い目醒めでしたわ」

池の水面をまっすぐに見つめながら、和音はどこか厳しい表情を見せる。

「屋敷中の者が、檻也を、“天才だ”“生まれながらの神だ”と、崇めました…」

和音がそっと、瞳を細める。

「ですが、皆が檻也を崇める度に、箆也の居場所はなくなっていったのです…」

——神に成り損ねた五十音士よ……——

「……………」

イクラの言葉を思い出し、アヒルは少し視線を落とした。

「それで、簞也はこの屋敷を…」

「ええ。ですが、この屋敷から出されたことは、簞也にとって、良いことであつたと思います」

「えっ…？」

和音の言葉に、戸惑うように顔を上げるアヒル。

「自分の家追い出されたつてのに、良かったつてのはっ…」

「簞也は、“俺”とも“お前”とも言わないでしょう…？」

「へっ？」

急な和音の問いかけに、アヒルが目丸くする。

——僕は、あなたのためを思つて言っているんだ——

「あ、ああっ。そういや、言わねえーかもなあ」

簞也の今までの言葉を思い返し、納得するように頷くアヒル。

「それが、どうかしたのか？」

「“お”の力に選ばれなかった者が、“お”のつく言葉を口にする
ことなど、おこがましい」

問いかけたアヒルに、和音はすぐさま言葉を返す。

「この屋敷の者たちは、そう言つて、簞也から、“お”のつく言葉を
奪つたのです」

「なっ…！」

知らされる事実、アヒルは思わず言葉を失う。

「そうして簞也は、言葉の自由さえ、奪われました」

「何も、そこまでっ…」

「それが、この於崎という家です」

表情を曇らせるアヒルに、和音が厳しい口調で言い放つ。

「ですから、簞也がこの屋敷を出て行つた時、正直、ホッとし
ました」

和音が少し、険しかった顔を和らげる。

「あのまま、この屋敷に残っていれば…簞也は、壊れてしまっていたかも知れませんから…」

「……っ」

遠い瞳を見せる和音に、アヒルが険しい表情を作る。

「どうして、簞也は加守に？」

「先代の加守が、屋敷を出たばかりの、何もかもを諦めてしまっていた簞也を見つけてくれましてね…」

「先代加守？」

「ええ」

首を傾げ、聞き返したアヒルに、和音がそっと頷きかける。

「何もない簞也に何かを与えるため、“か”の力を教え、簞也を次代の加守へと導いたそうですわ」

「先代の、加守が…」

簞也から先代の話を聞いたことがなかったので、アヒルはどこか新鮮な感覚でその話を聞いた。

「ですが、簞也の反発も強かったようです」

和音がそっと、眉をひそめる。

「“神”という存在のためにすべてを失ったのに、“神”など守れるか、と…」

「……っ」

その言葉に、曇るアヒルの表情。

「それほどに、簞也にとって“神”という存在は大きく、そして重いものでした…」

和音が池に背を向け、アヒルの方へと戻って来る。

「“神”のその名を、口にすることも拒むほど…」

アヒルの目の前に止まり、和音がアヒルへとまっすぐな視線を送る。

「ですから、わたくしは驚いたのです」

「えっ…？」

「箆也が、ごく自然に、あなたを“神”と呼ぶことに…」

「……っ」

和音のその言葉に、アヒルはハッとしたように目を見開いた。“神”と呼ばれることを、初めは煩わしいとさえ思っていたが、箆也にとって、その言葉はとても重く、呼ぶことにさえ、強い覚悟のいるものだったのかも知れない。

「あなたとの出会いは、箆也にとって、とても大きなものだったのでしょう…」

「相変わらず、箆也のことなら、何でも知ってるって口振りだな」

「前にも言いましたでしょう？」

アヒルの方を見て、和音がそっと微笑む。

「知っているのではなく、ただ、彼を見てきたただけだと…」

「……………」

そっと視線を落とす和音に、アヒルが少し目を細める。

「あんたはそう、口では言うけどっ…態度とか、言葉とか聞いていると、そう感じないっつかっ…」

気難しい表情を見せ、どこか躊躇いがちに、言葉を繋ぐアヒル。

「箆也に、そう優しくないように見えるっつかっ…」

「……っ」

搾り出すように放たれるアヒルの言葉に、和音はそっと口元を緩めた。

「そうですわね」

「へっ？」

あっさりと認めるように言う和音に、アヒルが少し間の抜けた声を漏らす。

「わたくしも、歪んでしまったのかも知れせんわ」

和音が空を見上げ、そっと声を発する。

「この、五十音の世界の中で…」

「歪、む…？」

意味深な和音の言葉に、表情を曇らせるアヒル。

「五十音の世界は、“神”の存在は…少なからず、人の心を狂わせていきます…」

夜の闇に、しっとりと響く和音の声。

「箆也と檻也もまた、狂わされた人間の一人…」

和音がそつと、眉をひそめる。

「皮肉なものだと、そう思われませんか…？安の神」

明るく照らす月を見上げながら、和音がゆっくりと問いかける。

「もし、“神”という存在がなければ…彼らはごく普通の、仲の良い兄弟のままであられたかも知れないのに…」

「“神”という、存在…」

——神の救いなどっ…僕は認めない…！——
——俺だけが…“神”だああ！——

脳裏に浮かぶ、必死に叫んでいた灰示やイクラの姿。あの二人と同じように、箆也もまた、“神”という存在に、人生を狂わされた人間なのかも知れない。

「救うも“神”、狂わせるも“神”…神は色々忙しいですわね」

「忙しいって、あんた…」

「和音様？」

『……？』

微笑む和音に、アヒルが眉をひそめていたその時、ふと横から声が入って来て、アヒルと和音は同時にその声の方を振り向いた。

「時定」

「どうなさったのです？こんな場所で」

二人の前へと現れたのは、甚平姿の青年、時定であった。

「ん？」

「へっ？」

時定がアヒルへと視線を移し、見られたアヒルが困ったように目を丸くする。

「今日はお客人の多い日ですね」

「こちら、檻也専属の世話役を務めております、時定ですわ」

「時定と申します」

「あ、ああっ」

和音からの紹介を受け、深々と頭を下げる時定に、少し戸惑いながらも頷くアヒル。

「時定、こちらは客人は客人でも、とても特別なお客人ですわよ」顔を上げた時定に、和音が微笑みかける。

「なにせ、あなたの主人と同じ、神様ですから」

「神っ？」

「ええ、安の神ですわ」

「安の、神…」

和音の放った言葉を繰り返しながら、時定がまじまじとアヒルを見つめる。

「他団の神を立ち入らせるなど、また無茶をされましたね、和音様」
「わたくしはわたくしの意志に従うのみですわ」

少し呆れたように見つめる時定に対し、和音は得意げに微笑んで見せる。

「丁度、良かったですわ、時定」

和音が改めて、時定の名を呼ぶ。

「安の神を、己守さんのところまで、お連れしてくれませんか？」

「己守？小泉様のところへですか？」

「ええ、安の神のお友達だそうですわ」

「友達…？そういうば、同じ制服を着ていらっしゃいますね」
アヒルが着ている制服を確認し、時定が納得するように頷く。

「それは構いませんが、檻也様の許可は…」

「出ているはずが、ありませんでしょう？」

「です、よね…」

自信を持って答える和音に、時定ががっくりと肩を落とす。

「わたくしの指示だと、檻也にはそう伝えていただいて構いません

わ

「そう言うと余計、檻也様の機嫌を損ねるから困るのですがっ」
和音から視線を逸らし、そっと呟く時定。

「まあ何とかなるでしょう。お連れしますよ」

「ありがとうございます、時定」

笑顔を見せる時定に、和音が礼を言う。

「では安の神、わたくしは別の用がございますので、申し訳ありませんがここで」

「ああ、わかった。入れてくれてサンキューな、言姫さん」

「いいえ。では後はお任せしますわよ、時定」

「はい」

庭から再び、屋敷の方へと歩き去っていく和音に、時定が深々と頭を下げる。やがて和音は屋敷の中へと入り、アヒルからはすっかり姿が見えなくなった。

「では参りましょうか。こちらへどうぞ、朝比奈様」

「ああ、悪い。って、あれ？」

時定の後をついていこうとしたアヒルが、不意に足を止め、首を捻る。

「どうかされました？」

「へっ？ あ、い、いやっ」

振り返り、不思議そうに問いかける時定に、アヒルは誤魔化すように、慌てて首を横に振った。

その頃、於崎家離れでは、アヒルと別れた籠也たち安団の面々が、待機していた。

「……………」

縁側に立った籠也は、神妙な顔つきで、空に浮かぶ明るい月を見上げている。

「大丈夫かな？朝比奈くん」

「……っ？」

急に背後から聞こえてくる問いかけに、すぐに振り返る簞也。

「奈々瀬」

「ちゃんと、小泉くんと話出来るといいけど……」

離れの中から、その場へと現れたのは、七架であった。屋敷に入ったアヒルのことを気に掛けているのか、その表情はあまり晴れやかではない。

「心配ない。あの人は阿呆ではあるが、相手に対して、どこまでも真っ直ぐな言葉を向ける人間だ」

「そうだね」

答えながら、再び月を見上げる簞也の横へと、七架がゆっくりと歩み寄る。

「……私にもね、弟がいるの」

「……っ」

不意に呟く七架に、空を見ていた簞也の表情が曇る。

「あ、でもっ、神月くんのところと違って、全然仲はいいんだけどねっ！」

「随分とまた、失礼な発言だな……」

必死に主張する七架に、簞也が思わず顔をしかめる。

「だからかなっ……あんまり想像つかないんだよね……」

七架が少し、視線を落とす。

「神月くんと、弟さんみたいな関係っ……」

「……」

その七架の言葉に、そっと瞳を細める簞也。

「思い出せないんだ」

「えっ……？」

小さく声を落とす簞也に、下を向いていた七架が顔を上げる。

「昔はごく普通の、仲の良い兄弟だったはずなのに、今はその時のことすら、思い出せない」

「……っ」

籠也の言葉に、曇る七架の表情。

「仲の良い兄弟に戻るなど、遙か昔に諦めたし、もう檻也にとつて、僕は兄でも何でもないとかわかって……」

落ち着いた口調で、籠也が言葉を続ける。

「だが……」

そっと、付け加えられる言葉。

「神の、神の兄弟を見ていると、羨ましく思う……」

——恋盲腸は、日本人の心のバイブルだぞお！アヒル！——

——今日も朝一、呪ってあげようか……？アヒルくん……——

——スー兄もツー兄もうっせえよっ！——

「羨ましく、映る……」

何でも言い合うことのできる、心を通わせ合った兄弟。その兄弟の暮らしは、毎日が本当に楽しそうで、その日々すら得ることのできなかった籠也には、とても眩しいものに映ったのである。

「神月くん……」

話しを続ける籠也を、七架はまっすぐに見つめる。

「こんな僕でもまだ、普通の兄弟に憧れる気持ちがあったことに、驚いっ……」

「神月くうくうんっ！」

「……っ」

しんみりとした空気で、籠也が言葉を言い終えようとしたその時、その場の空気を一蹴するような間の抜けた声を放って、庭から保が駆け込んできた。

「何だ？バカ市」

「はぁ！名前をバカ市保に変えたっていいくらい、馬鹿ですみませえくん！」

言葉を邪魔され、あからさまに不機嫌となって、保を睨みつける

簗也に、保が着いた途端に、思い切り謝り散らす。

「どうかしたの？高市くん」

「それが、真田さんがいないんですよ！」

「囁が？」

困ったように言い放つ保に、簗也が眉をひそめる。

「あいつのことだ。その辺りで寝てるんじゃないか？」

「離れの中、三回も探したんですけど、全然いないんですよ！」
適当に答える簗也に、保が必死に言い返す。

「もしかして、朝比奈くんを追って屋敷の中へ……？」

「いや、それはないと思うが……」

「あら……？どうかしたの……？」

『……っ』

離れの中から聞こえてくる声に、三人が同時に振り向く。

「真田さんっ」

「みんなで縁側に集まって……密会……？フッフっ……」

いつものように不気味な笑みを浮かべながら、中から縁側へと、
ゆっくりと歩み寄って来るのは囁であった。

「居るじゃないかっ」

「はあ！とんだ節穴ですみませえくん！でも、本当にちゃんと探したんですぅ！」

「あらあら、騒がしいわね……」

簗也に責められ、謝り散らしている保を見て、囁が楽しげに笑う。

「どこかへ行っていたのか？囁」

「どこか……？ああ」

問いかける簗也に、思い出したように頷く囁。

「死んだお爺ちゃんが近くまで来てたものだから……ちょっとお話を……」

「ひつやあああ……！おじいちゃん、カムバックうう……！」

自然と話す囁に、保が尋常ではない悲鳴をあげる。

「喚くな。囁の冗談に決まっているだろう」

「へえっ？　そうなんですかあ？」

「フフフっ…」

問いかける保に微笑みかけるだけで、囁は明確な答えを言おうとはしなかった。

「夕御飯、屋敷の人たちが用意してくれたらしいわよ…」

「本当っ？　良かったあ。実はお腹減ってたんだよね」

「俺もですうゝ！　はあ！　こんな明らかに栄養足りてる俺が、さらに飯食おうとしちゃって、すみませえゝん！」

七架と保が嬉しそうに、離れの中へと入っていく。

「箆也も…別に食欲はあるんでしょう…？」

「ああ、すぐ行っ…ん？」

振り向いた箆也が、囁の方を見て、少し眉をひそめる。

「どうか、したのか…？」

「えっ…？」

急な箆也の問いかけに、囁が戸惑いの表情を見せる。

「何が…？」

「えっ？　あ、いや、悪い。何でもない」

囁に聞き返されると、答えに詰まり、箆也は少し首を横に振って、七架と保の後に続くように、離れの中へと入っていった。縁側に、囁だけが残る。

「……………」

月明かりに照らされ、囁はどこか神秘的な表情を見せた。

Word. 25 この勇氣 (2)

その頃、於崎家本邸。

「はあっ、かつたるかつたあゝ」

大きく肩を回しながら、本邸の長い廊下を歩く、着物姿の少女。
曾守を務める、空音。

「ご、ごめんね…こんな時間まで、長々と説明してもらっちゃって…」

「ホントよお。つか、あんたさあ、質問多過ぎっ」

「いや、でも、わかんないこと、いっぱいあって…」

空音の後を歩きながら、紺平が、きつい口調を浴びせる空音に、少し困ったような表情を見せる。檻也とともに本邸へとやって来た紺平は、今の今まで、空音に、五十音土のことや、神、団のことなど、色々と説明してもらっていたのであった。

「ったく、何回、同じ説明したと思って…」

「終わったのか？空音」

「あ、神」

廊下の先の襖が開き、そこから檻也が出てくると、空音はすぐさま面倒臭そうにしていた空気を捨て去り、大人しい少女へと変貌する。

「ええ、たった今…」

美しい微笑みを、檻也へと向ける空音。

「小泉さんに理解していただけるまで、何度も説明したもので…遅くなって、申し訳ございません…」

「いや、構わない」

「……………」

二人のやり取りを聞きながら、空音のあまりの態度の違いに、紺平が思わず顔を引きつる。

「ご苦労だったな。今日はもう休め」

「はい…では失礼致します。小泉さんも、また明日…」

「は、はあ…」

恭しく頭を下げ、去っていく空音を、その姿が見えなくなるまで、紺平は呆然と見送った。

「小泉紺平」

「へっ？」

「中に入れ。話がある」

「あ、うん…」

檻也に誘導され、紺平は開いた襖の中へと足を踏み入れた。入るとそこは、小さな机のみが置かれた、何もない、簡素な和室であった。檻也の自室のようだが、それを示すような写真や物は、何一つ置かれていないように見えた。

「空音の説明で、だいたいのことはわかったのか？」

「ううーん、まあ一応…」

紺平が指で頬を掻きながら、檻也の問いかけに歯切れ悪く答える。

「でも何か、やっぱり、言葉の力とか言われても、ピンと来ないし…」

窓際に歩いていく檻也に対し、紺平は襖のすぐ前に立ったまま、あまりしつくりきていない表情で話す。

「忌、とかだって…その、本物見てみないといまいち、信じられないっていうかっ…」

「お前は前に一度、忌に取り憑かれている」

「へっ？」

檻也の言葉に、紺平が目を丸くする。

「俺が、忌に…？」

「ああ。まあ宿主に、忌に取り憑かれている最中の記憶は残らないから、覚えていなくて当然だろう」

「その時、俺を助けたのって…」

「……………」

途中で言葉を終わらせる紺平に、檻也が少し目を細める。

「安の神だと、聞いている」

「……っ」

檻也から出るその名に、そっと眉をひそめる紺平。

———本当のこと言ったら…俺を傷つけるの…？———
———そ、それはっ……—

「そう…」

紺平の問いかけに、困ったように言葉を詰まらせたアヒル。その時、アヒルが何を考えていたのが、少しわかったような気がして、紺平は少し俯いた。

「安の神は…」

窓から外を見ながら、檻也がゆっくりと口を開く。

「お前の友は…どんな人間だ…？」

「えっ？ガア？」

その檻也からの問いかけに、戸惑うように顔を上げる紺平。

「どなんて言われると難しいけど…そうだなあ…」

紺平が考えるように、首を大きく捻る。

「すぐく、まっすぐな人だよ。人の言葉に対しても、自分の言葉に対しても…」

「……そうか」

少し間を置いた後、檻也がゆっくりと頷く。

「さぞや、凄いのだろうな。その“まっすぐ”というのは」

「えっ…？」

「でなければ、あれが神附きになど、なるはずがない…」

「……っ」

落ち着いた口調ではあるが、どこか必死に、まるで自分自身に言い聞かせるように言葉を発する檻也のその様子に、紺平がそっと表情を曇らせる。

「やっぱり気になる…？その、お兄さんのこと」

「俺に兄などいないと言ったはずだ」

「そっか…」

強く答える檻也に、諦めるように肩を落とす紺平。

「難しいよね。兄弟も、友達も」

「……？」

紺平の声に、窓から外を見ていた檻也が、少しだけ振り向く。

「言葉が多過ぎればケンカになるし、言葉が足りなくなったら距離が開いちゃう…」

少し視線を落としながら、曇らせた表情のまま話す紺平。

「丁度いい言葉の数を、見つけられない…」

「………」

紺平の言葉を聞きながら、檻也もどこか考え込むように俯いた。

「檻也様、いらっしゃいますか？」

『……っ』

襖の向こうから聞こえてくる声に、檻也と紺平が同時に振り向く。

「ああ、居るぞ。入れ、時定」

「はい、失礼いたします」

頷く声のすぐ後に襖が開くと、その向こうには、廊下に片膝をつき、深々と頭を下げている時定の姿があった。紺平が少し後ろへ下がりが、襖との間に距離を取る。

「お話中のところを失礼しました」

「問題ない。何か用か？」

「はい、小泉様にお客人が見えられておりまして」

「俺？」

時定の言葉に、紺平が目丸くする。

「俺に…誰がっ…」

「安の神にございます」

「ガァが!？」

「……っ」

驚く紺平の後ろで、檻也がそっと表情を曇らせる。

「何故、他団の神が、この屋敷の中に居る？」

「和音様がお通しに」

「和音が…」

時定のその答えに、さらに険しい表情を作る檻也。

「和音様には小泉様のところまで案内をすると言われましたが、本邸に入れるのは憚はばかりましたので、すぐ外でお待ちいただいておりますが、いかがなさいましょう？」

「……………」

アヒルは紺平を訪ねに来たというのに、時定は答えを求めるように、まっすぐに檻也を見る。紺平も、答えを待つように、檻也を見つめた。

「お前の好きにしろ」

「えっ？」

放たれる言葉に、紺平が目を丸くする。

「会いたければ会えばいい。会いたくないのであれば帰させる」

「け、けどっ…」

「早く決めろ。三秒以内だ」

「ええっ？えとっ」

急かすように言い放つ檻也に、焦った様子で悩む紺平。

「あ、会うよ。会うっ」

「ならば、外へ出てこい。場所はわかるだろう」

「あ、う、うんっ」

檻也の言葉に頷くと、紺平は時定のすぐ横を通り、足早に外へと駆け出していった。部屋に一人残った檻也が、再び窓の外を見つめる。

「宜しいのですか？」

「構わん。会わさねば、こちらが和音にどやされる」

遠慮がちに問いかける時定に、やれやれといった様子で答える檻也。

「和音はいつも、籠也の味方だからな…」

「……………」

窓ガラス越しに、遠い瞳を見せている檻也を見つめ、時定がそつと目を細める。

「そういえば、安の神の他に、安団の面々も来ているそうです」

「安団が？」

「はい、今は離れで待機しているとか」

「そうか…」

頷きながら、檻也がゆっくりと視線を落とす。

「自身の神のためになら…十年以上、近づきもしなかった、この屋敷にも来るか…」

「檻也様…」

どこか寂しげな表情を見せる檻也を、時定は心配するように見つめた。

於崎家本邸前。

「ガァ！」

「んっ？」

時定に待機を命じられ、一人、本邸の門の前に立ち尽くしていたアヒルが、中から聞こえてくる聞き覚えのあるその呼び名に、ゆっくりと顔を上げる。

「紺平っ」

「よく来たね、こんな所まで」

「ああ、籠也に案内してもらってな。結構、時間はかかったけどよ」
感心するように言う紺平に、アヒルは明るく笑顔を向ける。

「お前にちゃんと、話しておきたくてさ」

「話？」

アヒルの言葉に、紺平が首を傾げる。

「聞いたのか？籠也の弟から、俺や籠也たちが五十音士だってこととかっ」

「うん。忌のこととか、言玉のこととかも色々っ…」

「そうか…」

紺平に向けられていたアヒルの視線が、そっと落とされる。

「そのっ…色々黙ってて、ごめんな…」

「……………」

落とされるその言葉に、曇る紺平の表情。

「俺、聞いたんだ。俺にその、忌ってのが取り憑いちゃったってことも…」

「……………」

浮かぬ表情のまま、ゆっくりと話す紺平。その事実すら知ったことに、アヒルは厳しい表情を作る。

「ガアが助けてくれたんでしょ？それも聞いた」

そう言いながら、紺平が顔を上げ、アヒルの方を見る。

「ガアが俺に本当のことを言えなかったのは、話せば、俺が忌に取り憑かれてたことを知って、辛いことを思い出しちゃうからだったんじゃない…？」

紺平がアヒルをまっすぐに見つめながら、問いかける。

「だから…必死に言葉を隠したんじゃないの…？」

「……………」

問いかける紺平に、少し下を向いたアヒルが、そっと目を細める。

「いやっ…」

「えっ…？」

返って来る否定の言葉に、紺平は驚くように目を開いた。

「俺がお前に何も言わなかったのは、ただ単に、逃げてたからだ…」

「逃げ、てた…？」

「ああ」

聞き返す紺平に、アヒルが深く頷く。

「あの時の、俺の不用意な言葉が…」

——お前さあ、嫌なら、ちゃんと言い返せよ。何でも黙って受

け入れてっから、こういう奴等も調子に乗ってだなあっ……

「お前に、忌を取り憑かせる原因の一つになったんじゃないかって、俺、ずっとビクビクしてた」

「ガァ……」

アヒルの言葉に、紺平が眉をひそめる。

「だから、言えなかった。俺は、お前に放った言葉から、ずっと逃げてただけなんだ」

「……………」

辛そうにさえ見えるアヒルの表情を、目を逸らすことなくまっすぐに見つめ、紺平が目を細める。

「だから、ごめん……」

再び落とされる、謝罪の言葉。

「本当に、ごめんなっ……」

「……………」

正面から向けられる、アヒルの偽りのない瞳に、紺平はハッとした表情で目を開いた。

——お前の心を、傷つけるようなこと言って……ごめんなっ……
——どれだけの人間がお前の敵に回ろうと、俺がお前の味方になってやる！紺平！——

「あっ……」

謝るその姿が、かすかに脳裏に残された、あの日の夜の記憶と重なり、そこから流れるように思い出される記憶に、紺平は思わず声を漏らした。

「……………」

「紺平？」

急に俯いた紺平に、アヒルが少し首を傾げる。

「その言葉なら、あの時、ちゃんと言ってもらったよ」

「えっ…?」

俯いたままの紺平の言葉に、戸惑いの表情を見せるアヒル。

「それに、例え、ガアの言葉に傷ついてたとしても、そんな傷なんて吹き飛ぶくらいの嬉しい言葉を、あの時、いっぱいもらった」

「紺平、お前、あの時のこと、思い出してっ…」

「うん、まだボンヤリとだけど、何となく思い出してきた」

紺平が顔を上げ、アヒルへと笑みを向ける。

「でも、ガアが“生きる”って言うてくれて、“味方だ”って言うてくれて、嬉しかったのは、ちゃんと思ひ出せる…」

胸に残る喜びを確かめるように、右手を左胸に当てる紺平。

「だから、ありがとう、ガアっ」

「紺平っ…」

大きく微笑み、礼を言う紺平に、アヒルがそっと目を細める。

「その言葉なら、あの時、ちゃんと言ってもらった」

「あ、そうっ?」

笑みを零すアヒルに、紺平が目丸くする。

『ハハハっ…!』

二人の表情から自然と笑みが零れ、二人を、今までの緊迫した空気ではなく、いつも通りの穏やかな、明るい空気が包み込んだ。

「ねえ、ガア。一つだけ、聞いていい?」

「んっ?」

改まって聞く紺平に、アヒルが顔を向ける。

「ガアはなんで、五十音士に、安の神になろうって思ったの?」

「えっ…?」

どこか真剣な表情で問いかける紺平に、アヒルが少し意外そうな顔を見せる。

「んん、まあ成り行きつてのもあるけど、そうだなあ」

アヒルが考え込むように、首を捻る。

「カモメさんに放った言葉への、罪悪感から…?」

「……っ」

紺平の言葉に、考えていたアヒルの表情が止まる。

「紺平…」

「こんな言い方して、ごめん。でもどうしても、そこだけは確かめておきたくって…」

小さく名を呼んだアヒルへ、紺平が真剣な眼差しを向ける。その言葉は、決してアヒルを傷つけるためではなく、アヒルを心配しての言葉のように思えた。

「……カー兄のことが、まるで理由になってないって言ったら、嘘になるけど…」

少し間を置いた後、アヒルがゆっくりと言葉を発する。

「罪悪感とかじゃないんだ。ただっ…」

「ただ…？」

「……っ」

聞き返す紺平の声を聞きながら、アヒルがそつと口元を緩める。

「もっと、言葉の力を知りたいって思ってたさっ」

「言葉の、力…？」

「ああ」

アヒルが笑みを見せ、もう一度、大きく頷く。

「言葉の力を知って、一人でも多くの人にそれを伝えていけたらって、そう思う」

遙か先を見据えるような、まっすぐな瞳を見せるアヒル。

「そうすれば、きっと、俺はもっと、言葉を大切に出来る気がするからっ」

「言葉を…大切に…」

自分の中に刻みつけるように、ゆっくりと、紺平がアヒルの言葉を繰り返す。

「そっか」

頷いた紺平の表情から、柔らかな笑みが零れる。

「そっかそっか。うん、わかった」

「紺平？」

何度も何度も頷く紺平に、アヒルが少し首を傾げる。

「参考にさせてもらうね」

「参考？」

「俺が己守になるかどうかのっ」

「……っ」

晴れやかに微笑む紺平に、アヒルが驚いたような顔を見せる。

「紺平、お前っ……」

「自分でちゃんと答えを出したいんだ」

何か言いたげなアヒルへ、紺平はさらに笑みを向ける。

「己守になるかどうか、ちゃんと自分で答えを出してから、俺は言
ノ葉に帰るよ」

「……………」

迷いなく言い放つ紺平を、まっすぐに見つめるアヒル。

「そっか、わかったっ」

「……っ」

笑顔で大きく頷くアヒルに、紺平もさらに笑みを大きくした。

「おやおや、これはこれは素晴らしい友情物語ですねえ」

本邸の上空に自然と浮かび上がった棘一が、相変わらず瞳の色が見えぬほどに目を細め微笑み、門の前で話しているアヒルと紺平の様子を、高々と見下ろしている。

「安の神ですか。確かに“まっすぐ”な神様ですねえ。あれと比べれば、捻くれ者の我が神に人望がないのも頷けるうゝ」

「のの、の……」

「んんゝ？」

横から聞こえてくる低い声に、棘一がゆっくりと振り向く。そこには巨漢の男、海苔次が、棘一と同じように、上空に浮かび上がっていた。

「ああ、わかってる。もう行くよ、海苔次」

急かすようなことでも言ったのか、海苔次を宥めるように言い放つ棘一。

「さあ、作戦開始だっ」

本邸を見下ろし、棘一が怪しく微笑んだ。

Word. 25 この勇氣 (3)

「ふうっ」

「ん…？」

アヒルとの話を終え、紺平が檻也の部屋へと戻って来ると、窓から外を見つめていた檻也が、ゆっくりと振り返る。

「あ、も、戻りました！ 於の神」

「まだお前は己守ではないんだ。無理して、神神言わなくていい」

「あ、そ、そう？」

檻也の言葉に、紺平がどこか安心したような笑みを作る。

「話は終わったのか？」

「うん。何か色々とスッキリしたよ」

「そのようだな。顔に出ている」

出て行った時よりも、遥かに晴れやかな笑顔を見せている紺平に、特に興味もなさそうに言いながら、檻也が部屋の大窓を開け、外からの風を入れる。

「やっぱり、言葉って凄いと思うよ」

大きな笑みを浮かべたまま、檻也の背中へ向けて、言葉を掛ける紺平。

「さっきは多過ぎるとケンカになっちゃうって言ったけど、やっぱり違うって思った」

「……………」

外からの風を浴びながら、檻也が静かに紺平の話を聞く。

「どんなに多過ぎても、無駄な言葉なんて一つもない。そう思う」

「……………」

はつきり言い切る紺平に、かすかに動く檻也の表情。

「だからね、檻也くんももっと、少しでもいいから、お兄さんと二人で話してみた方がっ…」

「俺に兄などいないと、何度言えばわかる？」

説得するような紺平の言葉を、檻也が勢いよく遮った。

「け、けどっ…！」

「俺に兄はいないっ」

「……っ」

もう一度、強くその言葉を繰り返す檻也に、紺平はそれ以上、言葉を放つことが出来なかった。

「それに…」

檻也がそっと目を細め、外を見つめる。

「戦う以外の言葉など…もうとっくの昔に失くした…」

「檻也くん…」

遠くを見つめる檻也に、紺平もそっと目を細める。

「俺は神だ。俺に偉そうな口を叩くことは許さない」

「……っ」

それ以上の発言を許さぬように、強く言い放つ檻也に、紺平はどこか悲しげな表情を見せる。

「おやおや、そんな言い方はいけませんねえ…神い…」

「……っ」

風とともに部屋に入って来る声に、檻也がそっと眉をひそめる。

「あっ」

「絶対服従方式だなんて、今時流行りませんよお…？」

部屋の奥から外を見た紺平が、思わず声を漏らす。上空からゆっくりと降りてくるようにして、檻也の部屋の庭へと姿を現したのは、楽しげに微笑んでいる棘一と、海苔次であった。

「そんな調子だから、だあ…れもあなたの後に附いて来ないんですよお」

「棘一…」

二人を見つめ、檻也が目を細める。

「何故、お前たちがここにいる？」

「朝も言いましたでしょう？常に神とともに在るのが、我ら神附きの使命でえっ…」

「お前たちに本邸への入室を許した覚えはないっ」

「まあ確かにい、許された覚えもないですねえ」

睨みつけるように見つめる檻也に、棘一はただ、楽しげな笑みを向ける。

「フザけているのか？棘一」

「フザけてなんていませんよお。ワタクシはいつでも真面目ですう」
「ならば神命令だ！今すぐ、この屋敷から出て行け！」

「檻也くん…」

声を荒げ、棘一の方へと勢いよく手を振り下ろす檻也を、紺平が少し驚いた様子で見つめる。冷静な檻也が、ここまで怒りを露にしているのは、初めてであった。

「そうですねえ、あなたがワタクシの本当の神であったならあ、その命を聞いても良かったのですがあ」

棘一が語尾の音調を、大きく下げる。

「でも残念ながらあ、あなたはワタクシの本当の神ではないのですよお」

「何だどっ…？」

棘一の言葉に、檻也が益々、眉をひそめる。

「一体、何を言ってる…」

「“止まれ”っ」

「なっ…！」

急に放たれる言葉に、大きく目を見開く檻也。棘一の長い指の指先が、白く輝いたかと思うと、発せられた光が檻也を包み込み、一瞬にして消え去った。

「うっ…うう…！」

「檻也、くん…？」

その場で動きを止め、足どころか、指一本も動かさぬまま、険しい表情を見せる檻也のその様子を不思議に思い、紺平が大きく首を傾げる。

「何のつもりだ！？棘一！」

「言ったでしょう？あなたはワタクシの本当の神様ではないとお怒鳴るように問いかける檻也に、棘一は冷たく言い放つ。

「これは、ワタクシの本当の神様からの指令っ」

「本当の神だどっ…？お前たちは一体、何者だ！答えろ！棘一！」

「ああ、ちなみにい、棘一というのは、ワタクシの本当の名前ではありませんのでえ」

「何っ…？」

笑顔で言葉を付け加える棘一に、檻也が眉をひそめる。

「ワタクシの名は轟^{しじろぎ}。ちなみに海苔次^{のしり}の名は罵ですう」

細められていた棘一の瞳が、ゆっくりと開いていく。

「とど、ろき…？」

「“七声^{しちせい}”の一人、と言えばあ、あなたにはわかっていただけますかねえ？」

「……っ！」

氷のような、冷たい青色の瞳が檻也へと向けられたその瞬間、檻也は大きく目を見開いた。

「七声っ…お前がっ…」

「七、せい…？」

驚きの表情を見せている檻也の遙か後方で、紺平は聞きなれない言葉に大きく首を傾げる。

「我が神の命でえ、あなたのとても大切なものをお、奪いに参りましたあっ」

「……っ」

「大切な、もの…？」

青い瞳を開いたまま、冷たく微笑む棘一の、轟の言葉に、より一層険しい表情を見せる檻也。一方、まったく状況を把握できない紺平は、首を傾げたままでいる。

「チっ…逃げろ！紺平！」

「えっ…？」

轟の言葉により、身動きを取れず、振り返れることもできない檻

也が、紺平に背中を向けたまま、強く叫ぶ。急に名を呼ばれ、紺平は戸惑いの表情を見せた。

「で、でもっ…」

「いいから、早く行けっ！」

「う、うんっ…！」

大きく響く檻也の声はどこか必死で、紺平は逆らうこともできずに、とにかく頷き、襖を開け、檻也の部屋から出て行こうとする。

「罵っ」

「のの…」

轟から呼ばれる名に、海苔次、罵が頷きらしき声を漏らし、その大きな手のひらには小さすぎる白い言玉を、懷の中から取り出す。

「の…“伸び、ろ”…」

罵の言玉から白色の光が放たれると、光が罵のすぐ後ろの木を包み込み、次の瞬間、その木の枝が、駆け去っていく紺平へ向け、勢いよく伸びていった。

「えええっ!？」

伸びてきた枝に手足を捕えられ、動きを止められた紺平が、驚きの表情を見せる。

「うわ!わっ!」

「紺平っ…!」

伸びていた枝が、紺平の体を包んだまま元へと戻っていき、紺平が轟たちのいる庭の方へと引っ張って行かれる。

「うううっ…!」

枝に引かれるまま、幹へと強く背中を打ちつけ、紺平が力なくその場に倒れ込む。

「すみませんねえ、小泉サンっ」

「うっ…」

地面に横たわっている紺平を、轟が笑顔で見下ろす。

「あなたに用はないのですが、今、あなたにうろちよろされるのは困りますのでえ、少しここで大人しくしてて下さあい」

冷たい笑顔で、微笑みかける轟。

「気が向いたらあ、殺さないで置いて差し上げますのでえっ」

「……っ」

注がれる冷たい視線に、倒れたままの紺平は、かすかに眉をひそめた。

「さあゝて、では我が神いゝ」

「クっ……」

再び檻也の方を見る轟に、檻也が顔をしかめる。

「俺は、お前の神ではないのだろう？ なら、我が神などと呼ぶな。吐き気がするっ」

「これはこれはっ……では、於の神っ」

悪態づく檻也に、眉一つ動かすことなく、笑みを浮かべる轟。

「あなたの大切なもの、お渡しいただきましょうかあ」

轟が、求めるように、そっと右手を差し出す。

「あなたは、人望はないが、脳はある方だあ。ワタクシが求めているものが何か、もうおわかりなのでしょう？」

「……っ」

轟の問いかけに、眉をひそめる檻也。

「お前たちに渡すものなど、何一つないっ」

「これはこれはっ……指一つ動かせない状態だというのに、気丈なことだ」

「指など動かなくともっ……」

挑戦的に微笑む轟に、檻也は力強い瞳を見せる。

「口さえ動けば、十分だっ……！」

檻也の服の胸ポケットから、強い白色の光が放たれる。

「“落ちろ”……！！」

「……っ」

空へと放たれた光が、細かく分かれて、一斉に轟へと降り注いだ。

——バァァァン！

「んあっ？」

紺平との話を終え、本邸から再び屋敷の出口へと向かっていたアヒルが、遠くの方から聞こえてくる衝撃音のようなものに、足を止め、振り返る。

「何だあ？今の音っ」

同時刻、於崎家離れ。

『あれっ？』

屋敷の使用人たちにより運ばれた夕飯を、居間に並び、食べていた保や七架が、どこからか聞こえてくる音に、同時に顔を上げる。

「何だろう？今の音」

「さあ？何かが落ちたみたいなの、そんな音でしたけどねえ」

問いかける七架に、保が大きく首を傾げる。

「はあっ！まさか地底のモグラマンが、ついに姿を現したんじゃないやあっ……！」

「……っ」

「あ、あれっ？神月くんっ！？」

焦った様子で頭を抱える保の横を素早く通り過ぎ、箆也が居間を飛び出し、離れの出口へと勢いよく駆け出していく。

「はあ！まさか、俺の発言があまりにも鬱陶しかったんじゃないやあっ……！！」

「まあ、あながち間違っていないと思うけど……」

さらに頭を抱える保の横で、ひっそりと呟く七架。

「でも、どうしよう？神月くんを追う？真田さっ……あれっ？」

保とは逆の方向を振り向いた七架が、目を丸くする。

「真田、さん……？」

七架が振り向いた先の食卓の前には、誰の姿もなかった。

Word. 25 この勇氣 (4)

「はあっ…はあっ…」

体の動きを封じられたまま、肩を揺れ動かすこともなく、ただ息だけを乱しながら、まっすぐに前を見据える檻也。

「クっ…」

前を見つめる檻也の表情が、ゆっくりと曇っていく。

「“止まれ”…」

檻也の見つめる先には、檻也へと差し出していた右手を突き上げ、言葉で降り注ぐとうとしていた光を止めている轟の姿があった。余裕の笑みを見せる轟に、檻也がさらに顔をしかめる。

「こんなものですかあ？ 神様のお力とやらはあっ」

「チっ…」

挑発する轟に、檻也が舌を鳴らす。

「まあ、予想通りですかねえっ、“尖れ”っ」

空中で止まっていた白い光の粒が、轟の言葉を受け、その先を鋭く尖らせ、それぞれ刃のように形を変える。

「ではっ、お返ししますよお」

「うっ…！」

その刃たちが、一斉に檻也へと向かっていく。

「うわあああああっ！」

「お、檻也くんっ…！」

崩れ落ちる部屋とともに、響き渡る檻也の叫び声。その悲痛な声に、倒れたままの紺平が、思わず身を乗り出した。

「う、うううっ…」

部屋が半壊し、庭へと放り出された檻也が、血だらけとなって、力なく地面に倒れ込む。

「“止まれ”の効果が消えましたかあ。まあいいでしょうっ、どの道、その傷では動けはしない」

「クっ…」

倒れ込んだまま、檻也が顔だけを上げ、強い瞳で轟を睨みあげる。
「おっ…“覆^{おお}え”っ…!」

檻也から放たれた白い光が、縦横に広がり、轟の四方を取り囲んで、轟を捕えようとする。

「…っ」

包み込もうとする光を見つめ、そっと微笑む轟。

「跳^とべ”っ」

「あっ…!」

轟がその場で高々と跳躍し、捕えようとしていた檻也の光から逃れる。

「残念っ」

「うっ…! うううっ…!」

すぐさま上空から降りてきた轟が、足で強く、倒れたままの檻也の背中を踏みつける。背中から走る痛みに、檻也はさらに顔を引きつった。

「いかがですう? 人に踏みつけられる気分はあ。於の神様っ」

「グっ…」

轟の言葉に、檻也が唇を噛み締める。

「俺はっ…」

「んん…?」

「俺は…お前たちが、芯に俺を神と認め、神附きになったわけではないことに気付いていたっ…」

「おやおや、そうでしたかあ」

そう言い放つ檻也に、轟が少し意外そうに頷く。

「だからっ…お前たちは決して、屋敷内には入れなかった…」

「そうでしたねえ」

「俺は、例え殺されようとも、お前たちにアレの場所を言うつもりはないっ…」

ボロボロにされながらも、檻也は覇気のある口調で言い放つ。

「だから、諦めるんだなっ…！」

「……っ」

強気に叫ぶ檻也に、轟がそっと目を細める。

「そうですね。確かに、あなたは我々を信用してはいなかったあ
檻也の背中を踏みつけたまま、轟が上から声を落とす。

「我々との接触を必要最小限に留めえ、我々を自分の領域には少し
も近づけなかったあ」

静かな声を、辺りへと響かせる轟。

「だから我々にはあ、あなたの大切なものの居場所など、皆目見当
もつきませえ〜んっ」

「だから、とっとと諦めてっ…！」

「ですがあっ」

「……っ」

檻也の言葉を、轟が勢いよく遮る。

「我々にあなたの注意を向かせることこそがあ、ワタクシたちの狙
いっ」

「何っ…？」

そっと言い切る轟に、檻也の表情が曇る。

「あなたはワタクシたちを警戒するあまりい、他への注意を緩めた
のですう」

「他、だどっ…？」

「そう、だから君は、気付かなかった」

「……っ！」

別方向から聞こえてくるその、どこか聞き覚えのある声に、檻也
が大きく目を開ける。

「俺が、潜伏者であったことに…」

「とっ…」

首を動かし、ゆっくりと振り向いた檻也が、驚きの表情を見せる。
「時定っ…」

その場に現れたのは、檻也の世話役、時定であった。いつもの質

素な甚平ではなく、どこか高級感のある黒い革の服を纏っている。格好が違っただけで、随分と雰囲気は違っように見えた。

「時、定…さん…？」

庭の木の前で倒れたままの紺平も、先程まで一緒だった時定のその違っ姿に、戸惑いの表情を見せる。

「のの…」

「やあ、久し振りだね。罵」

嬉しそうに声を漏らす罵に、時定がそっと笑顔を向ける。

「君も」

「これはこれはあゝ時定サアーン」

振り向く時定に、轟が大きな笑みを浮かべる。

「着替えてしまわれたのですねえ、勿体ない。くたくたの甚平姿が、よくお似合いましたのにいっ」

「相変わらずだね。君の刺々しさには、眠気も覚めるよ」

「そんなにお誉めいただきと、照れてしまいますねえっ」

微笑みかける時定に、轟が明るい口調で答える。

「ご紹介しましょう、於の神」

轟が檻也の背中の上から足を下ろし、現れた時定のすぐ横へと並ぶ。

「我が“七声”の神、弔様とびやうさまにございまあゝす」

「とむ、らいっ…？」

時定を紹介する轟に、檻也が大きく眉をひそめる。

「時定、お前っ…」

「弔様と、言いましたでしょう？ そのように気安く、我が神を呼ぶのはご遠慮とんりょ下さあゝい、於の神っ」

「……っ」

先程までは檻也の神付きであったはずの轟が、檻也ではなく、時定を神と崇めるその態度に、檻也は思わず顔をしかめた。

「構わないさ、轟。彼もまだ、この状況を受け入れきれて、いないだろうからね」

そんな轟を宥めるように、時定が、弔が言い放つ。

「仕えていた身としては、詳しく説明してあげたい気もするけどねえ、でも、時間がないんだ」

弔がゆっくりと歩を進め、倒れている檻也の方へと歩み寄っている。

「韻の人間に、ごろごろ来られても困るからねえ。とつとと本題に入ろう」

「本題、だどっ…？」

歩み寄って来る弔に、檻也が大きく顔を歪める。

「お前が出て来たところで同じだ。俺はお前たちに、アレの場所を話すつもりなどっ…！」

「君の世話役として、潜り込んで数年…」

強く叫びあげようとした檻也の声を、弔がそっと遮る。

「ずっと君の傍で、ずっと君を見てきて、一つ、確信したことがあるよ」

弔が檻也のすぐ前で、足を止める。

「君は自分以外、この世界の人間を、誰一人として信用していない」
その場にしゃがみ込み、倒れたままの檻也と視線を近づける弔。

「君に決して失ってはいけない、とても大切なものがあるとしたら…君はきつと、こう考えるだろう」

視線を近づけ、弔が口元を緩める。

“自分で、肌身離さず、持っていよう”

「クっ…！」

「…っ」

ボロボロの体を引きずり、その場から何とか逃げようとする檻也へと、弔が素早く手を伸ばす。

「ううっ…！」

弔が逃げようとした檻也の襟元に、かすかに覗いた銀色の鎖を、力強く千切り取った。千切れた鎖の先に、言玉と同じ大きさ程の、水晶のような美しい玉がついている。

「これが、“夢言石”……」

その場で立ち上がった弔が、その水晶を月明かりに照らすようにして見つめ、嬉しそうな笑みを零す。

「おおっ」

「のの、の……」

弔が手にした石を見つめ、轟と罵も感嘆の声を漏らす。

「代々、於の神が受け継ぐ、すべての言葉を司る石……」

「グっ……」

石を見つめる弔を見上げ、檻也が強く唇を噛む。

「それを、返せっ……！」

「おっと」

その石へ向け、必死に手を伸ばす檻也に、弔がそっと目を細める。

“硬”」

「うっ……！」

放たれた濃い藍色の光が、檻也の体を一瞬にして包み込む。

「うあっ……！」

「お、檻也くんっ……！？」

弔へと手を伸ばそうとしていた檻也が、伸ばした手をそのままに、地面にまるで押し付けられるように、勢いよく倒れ込んだ。重々しく響く音に、紺平が目を見開く。

「な、何だっ……？体がっ……」

再び身動きの取れなくなった自分の体を見つめ、檻也が戸惑いの表情を見せる。

「今の言葉は、一体っ……」

「さてと、じゃあ用事も済んだし、帰るとしようか。轟、罵」

「なっ……！ま、待てっ……！」

退避しようと、檻也に背を向ける弔に、体の動かぬ檻也が、必死に声をあげる。

「それは……！夢言石だけは渡さないっ……！」

いつの間にか、檻也のすぐ目の前へと転がり落ちた、檻也の白い

言玉が、強い光を発する。

「“^お圧し潰せ”っ！」

上空へと目一杯広がった白色の光が、檻也の前から立ち去ろうとしている弔のもとへと、勢いよく降下していく。

「ののっ…！」

「だあゝい丈夫っ、問題ないよ。罵っ」

飛び出して行こうとした罵を、轟が余裕の表情で止める。

「……………」

弔がそつと足を止め、夢言石を持った右手を、そつと振り上げる。

——パァァァン！

「なっ…！」

弔が手を振り上げた瞬間、弔へと圧しつけられようとしていた光の塊が、空中でピタリと止まった。弔が止めたというよりは、弔の持つ夢言石が止めているように見えた。

「お、俺の言葉がっ…！」

「そうだね。折角手に入れたんだし、この石の力を確かめるっていうのも悪くはない」

唾然としている檻也の方を、弔が再び振り返る。

「君は知っているか？この石の力を」

「夢言石の、力っ…？」

「そう」

眉をひそめる檻也に、弔が微笑みかける。

「それはね、“言葉の吸収”だよ」

「言葉の、吸収だどっ…？」

「五十音、第五の音…」

「……っ！」

困惑の表情を見せていた檻也が、ゆっくりと放たれる弔の言葉に、大きく目を見開く。

「や、やめっ…！」

“お”、封印っ

「ううっ…！」

夢言石から放たれた青白い光が、長細くなって、檻也の口へと入り込んでいく。

「うあっ…あ…」

光がすべて、檻也の中へと吸い込まれると、檻也はただ、言葉にならない声を漏らした。

「あっ…ああ…！うう…！」

「な、何…？檻也くんに一体、何が…」

何かを言おうともがいている檻也の姿を、紺平が戸惑うように見つめる。

「素晴らしいっ」

石の中に刻まれた“於”の文字を見つめ、満足げな笑みを浮かべる弔。

「か…か…せっ…」

「ん？」

かすかに聞こえてくる声に、弔が顔を上げる。

「俺の言葉を…返せえっ…！」

「…っ」

必死に叫ぶ檻也を見て、弔がさらに楽しげに笑みを浮かべる。

「欲しいか？轟」

「んん…っ？」

急に名を呼ばれ、轟が少し目を丸くする。

「えええー、貰えるのでしたら、ぜひいー」

「いいだろう」

笑顔で答える轟に、弔が夢言石を向ける。

「や、やめろっ…！それは俺のっ…！」

“お”、解放

弔が言葉を発すると、石から再び青白い光が放たれ、その光が今

度は一直線に、大きく開かれた轟の口の中へと注がれた。

「うううっ…！」

その様子を、険しい表情で見つめる檻也。やがてすべての光が轟の中へと入り、轟がゆっくりと口を閉じる。

「どうだ？ 轟」

「さあ？ 体感的には何もおっ」

問いかける弔に、轟は素っ気なく答える。

「か、返せっ…！ 俺の言葉を、返せっ…！」

「ん？」

轟へ向け、必死に叫んでいる檻也の姿を見つめ、弔が何か思いついたような表情を見せる。

「そうだ。試してみろ、轟」

「なっ…！」

檻也を指差し、楽しそうに言い放つ弔に、檻也が思わず目を見開く。

「それはいいですねえ。では早速っ」

轟が一つ、咳払いをし、声の調子を整えた後、その右手を檻也へと向けた。

「“押せ”っ」

「うっ…！ うああああっ！」

轟が言葉を放った途端、轟の右手から、強風のような、凄まじい圧が飛び出し、倒れ込んだままの檻也さえ、軽々と弾き飛ばした。檻也が崩れかけの自分の部屋の壁へと、背中を打ちつける。

「檻也くんっ…！」

「うう…ん、いい使い心地だっ」

必死に身を乗り出す紺平のすぐ横で、轟が満足げな笑みを浮かべる。

「クっ…ううっ…」

「どうかな？ 自らの言葉に、傷つけられる気分は」

「グっ…！」

壁にもたれかかりながら、力なくしゃがみ込む檻也の元へと、弔が微笑みながら歩み寄って来る。目の前に立つ弔を、檻也が強く睨みあげた。

「言葉を…石を返っ…！」

「……っ」

「うううっ…！」

「檻也くんっ…！」

弔が檻也の首を掴み上げ、檻也の普通の言葉さえ封じると、紺平はさらに必死に檻也の名を呼んだ。

「ううう…！うっ…！」

首を掴んだまま、壁へと押しつけるようにして檻也の体を持ち上げ、強く檻也の首を握り締める弔。檻也は表情を歪め、苦しげな声を漏らした。

「たった一つの取り柄だった、言葉の力も失ってしまったね。於の神」

「クっ…！」

首を絞めたまま微笑みかける弔を、檻也がかすかに開いた瞳で見つめる。

「屋敷の皆が言ってたよ。君なんて、於の神でさえなければ、誰も相手にしないと」

冷たい笑みを浮かべた弔が、檻也を追い込む言葉を吐く。

「君など所詮、於の神でなければ、誰からも必要とされない存在」

「……っ！」

その言葉に、檻也が大きく目を見開く。

「今の、言葉を失った、ただの人である君を、誰が必要としてくれるだろう？」

「クっ…」

「そう、誰も必要としない」

「……っ」

止まることなく浴びせられる言葉に、檻也がそっと目を閉じ、堪

えるように唇を噛み締め、必死に抵抗していた手や足の動きを止める。

「可哀想な於の神。たった一人の兄さえ蹴落として、神になっただけなのに」

弔はまだ、言葉を止めない。

「屋敷を追い出された兄よりも、君は遥かに孤独で、遥かに不必要な存在だ」

「や、やめっ…」

「君の兄も家族も使用人たちも、皆が思っているよ」
止めようとした檻也の声を、弔が力強く遮る。

「君など、いなくなればいいと」

「……っ！」

残酷な言葉に、檻也が再び大きく目を見開く。

「あ…ああっ…」

ゆっくりと、力なく閉じられていく、檻也の両の瞳。

「うっ…ううっ…！」

檻也の閉じられた瞳から、ポロポロと零れ落ちる涙。

「檻也…くん…」

涙を落とす檻也を、紺平が険しい表情で見つめる。

「やっぱり怖いなあ、我が神は」

轟がどこか感心するような笑みで、檻也と弔の様子を見つめる。

「ワタクシの棘より、遥かに心を突き刺す」

そう呟き、轟は口角を吊り上げた。

「泣いているのか…？ 於の神…」

「うっ…！」

檻也の涙の落ちる右手で、弔はさらに檻也の首を絞めつける。

「大丈夫。誰から必要とされない君は、ここで俺が、殺してあげるよ」

「……っ」

「ああっ…！」

そつと微笑む弔に、どこか諦めるように肩の力を抜く檻也。そんな檻也に、紺平はさらに身を乗り出す。

「誰か：誰かをっ：！」

痛みの残る体を動かし、その場を駆け出して行こうとする紺平。

「のの： “伸^のび、ろ”：」

「うあっ：！」

本邸の外へと駆けて行こうとした紺平を、罵の言葉を受け、伸びた庭の草が絡み取る。草に足を取られ、紺平はその場に勢いよく倒れ込んだ。

「そこでじつとしていてもらいましょうかあゝ、小泉サアゝン」

「うっ：」

振り向く轟に、顔を上げた紺平が眉をひそめる。

「そこで大人しく、あなたの神の最期をおゝああつ、まだ、あなたの神なわけではなかったですねえっ」

「神っ：」

轟の発したその言葉に、目を開く紺平。

「では、そこで大人しく、可哀想な於の神の最期でも、ご覧になつて下さあゝい」

「神：ガアっ：」

“神”と聞いて、紺平の脳裏に浮かんだのは、幼い頃からの一番の友、アヒルの姿であった。

「ガアっ：どうしよう：？このままじゃ、檻也くんがっ：」

この場にはいないアヒルへ、まるで問いかけるように言葉を呟く紺平。目の前で起こったあまりの事態に、紺平は平常な状態でいられなくなり始めていた。

「ガアっ：！」

——言葉の力を知って、一人でも多くの人にそれを伝えていけたらって、そう思う——

「……っ」

強く目を閉じた紺平の頭の中に、先程のアヒルの言葉が響き渡る。

——そうすれば、きっと、俺はもっと、言葉を大切に出来る気がするからっ……

「言葉の、力っ……」

ゆっくりと瞳を開いた紺平が、アヒルの言葉を繰り返した。

「お別れだ、於の神」

「クっ……!」

振り下ろされる弔の左手に、檻也が強く歯を食いしぼる。

「……っ!」

弔の手がまさに檻也の左胸を貫こうとしたその瞬間、紺平が大きく目を見開いた。

——パアアアン!

「なっ……!?!」

大きな音を立てて放たれる巨大な光に、見守っていた轟が驚きの表情を見せる。

「弔様っ……!」

「んっ?」

必死に叫ぶ轟の声に、檻也へと向けていた手を止め、振り返る弔。

「何っ……!?!」

弔が振り返ると、巨大な白い光の塊が、弔へと、物凄い速度で迫り来ていた。間近に迫る巨大な力に、さすがの弔も焦りの表情を見せる。

「クっ……!」

すぐに檻也から手を離し、その場から跳び去る弔。

「ううっ……」

弔の手を逃れた檻也は、力なくその場にしゃがみ込むが、弔が避けたことにより、その巨大な光が、まっすぐに檻也へと迫り来ていた。

「ふうっ…んんっ？」

ホッと一つ、息をつきながら、光の迫る檻也を見ていた弔が、ふとその表情を曇らせる。物凄い速度で迫り来ていたはずのその光が、檻也の目の前で、ピタリとその動きを止めたのである。まるで意志を持っているような、その力に、弔は思わず眉をひそめる。

「何だ？この光はっ…あっ…！」

弔が見つめていると、やがて巨大な光は徐々に小さくなっていき、空中に、小さな白い、宝石のような玉だけが残る。

「あれは…言玉っ…？」

空中を舞う言玉が、ゆっくりと移動し、庭へと進んでいく。その言玉の動きを、目で追っていく弔。

「君はっ…」

「……………」

言玉が戻っていった先に立つ人物に、弔が表情を曇らせる。

「五十音、第十の音…」

戻って来た言玉へと、そっと伸ばされる手。

「“こ”、解放っ…！」

言玉を握り締め、紺平は迷いのない瞳で、力強く叫んだ。

Word. 26 冒澆 (1)

於崎家入口棟付近。

「先程からの衝撃音は何だ！？檻也様は！？」

「本邸との連絡が途絶えております！詳細は不明です！」

入口棟の屋敷から外へと出た於崎の使用人たちは、あらゆるところで大きな声を発しており、そこはまさにてんやわんやの状態であった。

「韻に連絡をしろ！」

『えっ？』

大混乱のその場によく響き渡るその声に、使用人たちが一斉に振り向く。

「於崎の人間と、和音の安全を確保するんだ！急げ！」

「か、箆也様っ？」

その的確な声を響かせているのは、皆のいる離れを飛び出していた箆也であった。衝撃音の影響で門を見張る者がいなかったのか、いつの間にか屋敷内へと入って来たようである。

「な、何をなさっているのです！？あなたは、この屋敷へは立ち入り禁止のはずでっ…！」

「我が神が、この屋敷内にいる！無事を確認すれば、すぐに出る！」

「で、ですがっ…！」

「今は、そんなことに、こだわっている場合ではないでしょう？」

『……っ』

使用人たちが先を急ぐ箆也を止めようとしたその時、凜とした声が、割って入って来た。

「わ、和音様っ…！」

「緊急事態なのです。箆也を止めるよりも、まず先に、状況の把握を急いで下さい」

屋敷の縁側から、庭へと降り立ったのは、和音であった。振り向

いた使用人たちに、和音は厳しい言葉を投げかける。

「韻への連絡はすでに、わたくしが行いました。皆様は於崎の方々の保護を」

『は…はっ！』

圧のある和音の言葉に頷くと、庭であれこれと騒いでいた大勢の使用人たちが、散り散りに去っていき、あっという間にその場に、箆也と和音だけが取り残される。

「済まない」

「わたくしはわたくしの思うままに、言葉を発しただけですわ」
そっと礼を咄く箆也に、和音は素っ気なく微笑む。

「あなたも、屋敷の外へ避難をつ…」

「いいえ、避難などいたしません」

「えっ…？」

すぐさま否定する和音に、箆也が眉をひそめる。

「わたくしはこの事態に対応するため、韻からの命を受け、この於崎家に待機していたのですから」

「韻からの、命で…？」

和音の言葉に、表情を曇らせる箆也。

「どういうことだ？ 今、この屋敷で何が起こっている？」

「わたくしたち韻は、少し前から、とある組織を追っておりました」

「組織？」

「ええ。組織の名は“七声”^{しちせい}。主導者は弔^{とまら}という名の男です」

「七声…？」

その名に、箆也が眉をひそめる。

「どこかで聞いたことのある名だな…」

「あなたがすでに遭遇した、“止守”の棘一、“乃守”の海苔次は、共に七声の幹部です」

「なっ…！」

間を置くことなく、衝撃的な事実を放つ和音に、大きく目を見開き、驚きの表情を見せる箆也。

「幹部だと？ 於附となって、潜り込んでいたというのか？」

「ええ。そして主導者の弔は、檻也の世話役、時定として、数年も前から、この屋敷に潜り込んでいました」

「檻也の、世話役…？」

「籠也が益々、表情を曇らせていく。」

「奴らは一体、何が目的で…？」

「彼らの目的は、檻也の持つ“夢言石”^{むげんせき}」

「夢言石？」

聞き慣れていない様子で、籠也が大きく首を傾げる。

「代々、於の神が受け継ぐ、すべての言葉を司る石、五十音の核とも言える石です」

「そんな石が…」

少し考え込むように、俯く籠也。於崎家の人間とはいえ、於の神ではなかったためか、そのような石の存在は、まったく知らされていなかった。

「だが、そこまでわかっていたのなら、その石を韻で管理すれば、こんな事態には…」

「それでは、七声を捕えられませんかでしょう？」

「…っ！」

平静に言い放つ和音に、籠也が大きく目を見開く。

「まさか…檻也を囷に使ったのか！？ 韻は！」

強い剣幕で、籠也が和音へと問いかける。

「そういうことに…なるかも知れませんわね」

「何故、そんなことを…！」

「これは…」

「…っ」

口を挟む和音に、籠也が言葉を止める。

「これは、檻也の両親、つまりはあなたの両親からの許可もあつての司令です」

「…っ！」

厳しい表情で言い放つ和音に、思わず言葉を失う箆也。

「おわかりになるでしょう？わたくしやあなたの意見、ましてや檻也の気持ちなど、まったく配慮されるはずのない問題であることが」「クっ…」

和音の言葉に、箆也は俯き、唇を噛み締める。

「すでに弔たち七声は、檻也と接触していると考えることが妥当でしょう」

「あっ…」

俯き、どこか悔しげな表情を見せていた箆也が、和音の言葉に現在の状況を思い出し、ハッとした様子で顔を上げる。

「そうだな。とにかく、急いで檻也のところへっ…」

「韻からの情報によれば、今回の件で潜伏している七声の幹部は、全部で四人だそうです」

「四人っ…？」

箆也の表情が、再び曇る。

「一人足りなくないか？」

「ええ。時定、棘一、海苔次の他に、もう一人、潜伏者がこの屋敷内にいるはずなのです」

「韻でも、正体はわかっていないのか？」

「わかっていません」

問いかける箆也に、和音がはっきりと答える。

「主導者である弔以上に警戒し、その正体を隠したというのは恐らく、その最後の一人が、今回の彼らの作戦において、最も重要な役目を持っているから…」

「逃走経路の、確保っ…」

「ええ。わたくしも同意見です」

眉をひそめ、言い放つ箆也に、大きく頷きかける和音。

「わたくしが韻から受けた命は、その最後の一人を確保し、彼らの逃走を防ぐことです」

「わかった。一人では危険だ。僕も行こう」

強く頷き、和音のもとへと歩み寄る箆也。

「検討はついているのか？」

「いえ。ですが、恐らくは檻也の近くにつ…あつ」

「……？」

思い当ったような声を発する和音に、箆也が首を傾げる。

「何だ？」

「いえ、まさかとは思いますが…」

「この緊急事態にまさかも何もないだろう。誰だ？」

「……っ」

和音が少し考え込むように、視線を落とす。

「空音：檻也のもう一人の於附、“曾守”を務めている者です」

「曾守か…止守たちが幹部であったのだから、十分に可能性はあるな」

箆也が、納得するように頷く。

「よし、その曾守のところへ急ごう」

「はい…」

箆也の言葉に、和音はどこか浮かぬ表情で頷いた。

於崎家本邸。

「五十音、第十の音：“こ”、解放っ…」

夢言石を奪われ、自らの“お”の言葉さえも奪われて、檻也が絶対絶命の危機に陥ったその時、言葉の力に目醒めたのは紺平であった。生じたばかりの白い言玉を手にし、紺平が鋭い表情を弔へと向ける。

「のの、のっ…」

「いやはや、まさか、こんな時に五十音士として目醒めるとはっ」
驚いた様子を見せる罵と、不敵に微笑む轟。

「紺、平っ…」

「……っ」

茫然と紺平の名を呼ぶ檻也の横で、弔がそっと瞳を細める。

「どういふつもりかな？小泉紺平君」

再び表情に笑みを戻した弔が、体の向きを変え、言玉を手にした紺平の方を見る。

「今更、言葉の力を手にして、君は一体、何をしようと言うんだ？」

「そんなの、決まってる」

問いかける弔に、間を置くことなく、言葉を発する紺平。

「俺は己守だ。だからっ…」

紺平がさらに、目つきを鋭くする。

「於附として、我が神を守るっ…！」

言玉を握る手に力を込め、紺平が堂々と言い放った。

「紺平…」

そんな紺平を、ただひたすらに見つめる檻也。

「その“まっすぐ”さ…嫌いかな」

少し俯いた弔が、近くにしゃがみ込んでいる檻也にも聞こえぬほどの、小さな声を落とす。

「いいだろう。轟、罵」

「んんっっ？」

「のっ…」

呼びかける弔に、轟と罵が振り向く。

「この生まれたばかりの己守君と、少し遊んであげるといい」

「宜しいのでえ？」

「ああ。まだ迎えも来ないようだからね」

「迎、え…？」

弔のその言葉を聞き、しゃがみ込んだままの檻也が少し眉をひそめる。

「ではあっ、お言葉に甘えてえ」

「……っ」

「あっ…！」

楽しげな笑みを浮かべて振り返る轟に、険しい表情で身構える紺平。その様子を見て、檻也が大きく目を見開く。

「だ、ダメだ……！逃げろ！紺平……！」

“溶ける”っ」

檻也の言葉を届かせる時間も与えず、轟が素早く言玉を持った右手を掲げ、自らの言葉を放つ。

「えっ……？」

轟の言玉から放たれた光が、辺りの地面いっぱいへ広がっていく。すると光に包まれた草原は、やがて赤々と泡立つ、熱い液体へと姿を変えた。

「こ、これはっ……！マグマ……！？」

焦ったように声をあげる紺平の元へ、広がるマグマが徐々に迫ってくる。

「うっ……！こっ……！」

険しく顔を歪めながら、必死に口を開く紺平。

「凍れ……！」

紺平の放った言葉に反応し、言玉が白く輝くと、言玉から白い光の塊が、迫り来るマグマへと飛び出し、マグマの先頭を一瞬にして凍りつかせ、その場で動きを止めた。

「いい……言葉です」

見事に攻撃を防いだ紺平に、感心するように言い放つ轟。

「ですがあ、次はどうですかねえ？」

「えっ……？」

「のの……“伸^のび、ろ”……！」

「あっ……！」

罵の言葉に反応し、罵の近くの木々から数本の枝が、紺平のもとへと伸びてくる。

「こ……！ううっ……！」

何も言葉が浮かばず、紺平が思わず苦い表情を見せる。その次の瞬間、紺平の手足に伸びて来た枝が巻きつき、紺平の動きを封じた。

「クっ…！」

「の…“昇、^{のぼ}れ”…」

「えっ…？うわああああっ！」

紺平の手足を捕えた枝が大きく曲がり、紺平の体を、空へと高々と持ち上げる。

「トド、ロキ…」

「えええっ」

低い声で名を呼ぶ罵に、轟が笑顔で大きく頷き、右手を掲げる。

「“^お押しつけろ”っ」

「…っ！」

轟が言葉を放ったと同時に、強い圧力を上から掛けられたように、勢いよく落下していく紺平。

「うあっ…！」

胸から地面へと叩きつけられ、紺平が声にならない声を漏らす。

「あ…うあっ…」

「紺平っ…！」

巻きついた枝が離れると、紺平は叩きつけられたその格好のまま、力なく地面に倒れ込んだ。そんな紺平の様子に、思わず大きく目を見開く檻也。

「イイ線ってますよお？言葉の選び方も良かったですしい、ワタクシのマグマも防いでましたしい」

倒れ込んだ紺平へと、轟が誉めるように言葉を投げかける。

「ですがあ、ワタクシたちが相手では赤子のようなものっ。残念でしたねえ、小泉サンっ」

「うっ…」

かすかに顔を上げた紺平が、冷たく微笑む轟を見つめ、そっと目を細める。

「ク…ううっ…！」

「んん…っ？」

地についた両手に力を入れ、その場で必死に立ち上がろうとする

紺平の姿に、轟が不思議そうに首を傾げる。

「何の真似ですう〜？」

立ち上がろうとする紺平へ、軽い口調で問いかける轟。

「まだワタクシたちと戦おうとでもお〜？」

「あ、たり前でしょっ…」

「ほお、当たり前」

紺平が少し途切れた言葉で答えると、轟は感心するようにその言葉を繰り返した。

「わかりませんねえ〜大人しくただの人間のままでいればあ、こんな痛い目にも遭わずに済んだのにい」

首を傾げた轟が、立ち上がろうとしている紺平の顔を覗き込む。

「あの、誰からも必要とされていない神様にい、そこまでして守る価値があ〜？」

「……………」

片膝をつき、胴体を起こした紺平が、轟の問いかけに真剣な表情を作る。

「俺が…」

「……………」

「俺が、誰からも必要とされてない時っ…」

———「死ぬ」…“消えろ”……—

かつて紺平に向けられた、冷たい言葉。

「誰が俺の敵になろうと、俺の味方になってくれるって…そんな言葉くれた人がいたんだ…」

その言葉を思い返し、紺平がそっと口元を緩める。

「その時、俺は…すごく嬉しかった…だからっ…」

目つきを鋭くし、勢いよく顔を上げる紺平。

「俺もこの言葉をつ、俺の神のために使うっ…！」

強く言い放った紺平が、言玉を持った右手を、思い切り振り下ろ

す。

「“壊せ”っ……!!」

光り輝く言玉が、紺平の手とともに地面に打ちつけられると、言玉の光が地面へと一気に広がり、まるで地震でも起こったかのように、地面が勢いよく砕かれていく。

「……………」

砕けていく地面の先に、立ち尽くす轟。

「実にくだらない言葉ですっ」

冷たく眩き、轟は軽く右手を上げた。

「“遠のけ”っ」

「なっ……!!」

轟が言葉を発した途端、轟の姿がその場から残像となって消えていく。先程まで轟の立っていた付近を砕き、地面の割れは収まった。

「ど、どこにっ……」

「ここですう」

「…………っ!!」

戸惑うように周囲を見回していた紺平が、すぐ後ろから聞こえてくる声に、大きく目を見開く。

「残念でしたねえっ」

いつの間にか、紺平のすぐ後方に移動していた轟が、紺平の背中へと、言玉を持った右手を向ける。

「紺平っ……!!」

傷だらけの体で、必死に身を乗り出す檻也。

「これで、お別れです」

「うっ……!!」

輝き始める言玉に、紺平の表情が歪む。

Word. 26 冒澆 (2)

「と…」

“当^あたれ”！」

「何っ…？」

横から入って来る声に、今まさに紺平へと言葉を向けようとしていた轟が眉をひそめる。

「なっ…！」

轟が声の聞こえて来た方を振り向くと、真っ赤な光の塊が、轟へ向け、まっすぐに向かって来ていた。目に飛び込んでくるその光に、轟が珍しく焦りの表情を見せる。

「クっ…！と、“逃^{とう}”！」

焦りながらも轟が言葉を発すると、白い光で包み込まれた轟の体が途端に空中へと浮上し、向かって来た真っ赤な光から、何とか逃れた。

「ハアっ…ハアっ…」

少し息を乱しながら、再び地面へと降り立つ轟。

「何だぁ？今の言葉っ」

「…っ」

真っ赤な光の飛んで来た方から近付いてくるその声に、轟が顔を上げる。

「熟語^{イデオロム}？あっ、名詞^{ナウン}ってやつかぁ？」

「安の、神っ…」

問いかけるようにそう言いながら、本邸の入口の方からその場へと現れたアヒルに、轟が表情を曇らせる。

「ガアっ…！」

「よっ、紺平」

嬉しそうな笑顔を見せる紺平に、アヒルも笑みを浮かべ、真っ赤な銃を持った右手を、軽く振り上げた。

「悪いなあ。話も終わったから、大人しく帰ろうと思ってたんだけどよお…」

アヒルが言葉を続けながら、徐々に視線を動かしていく。

「大人しく帰るわけにも、いかねえー事態っばいからよおっ」

「……っ」

向けられるアヒルの鋭い視線に、傍観していた弔が、どこか楽しげに微笑む。

「やあ、こんばんは。安の神」

「世話役っ…やっぱてめえだったか」

「やっぱ…？」

険しい表情を見せながら言い放つアヒルの言葉に、弔が少し目を丸くする。

「まるで、俺が潜伏者だと、気付いていたような発言だな」

「ああ、引っ掛かってたからな」

弔に、アヒルが大きく頷きかける。

「てめえは、初対面の俺を“朝比奈”って呼んだ。言姫さんは俺を、“安の神”としか言っていなかったのに」

「成程っ…」

弔が納得するように頷く。

「噂程、無能でもないらしい…」

「どんな噂聞いてやがんだよ、ったく」

感心するように言い放つ弔に、アヒルが少し顔をしかめる。

「とにかく！てめえら全員、言姫さんここに突き出させてもらうぜ！」

堂々と言い放ち、右手の銃を構えるアヒル。

「轟、罵」

「はいいつ」

「ののっ…」

「……っ」

弔の指示を受け、アヒルの前後にそれぞれ立ち塞がる轟と罵。二

人の姿を交互に見比べながら、アヒルが鋭い表情を見せる。

「のっ…“伸び、ろ”…」

罵が言葉を放つと、先程の紺平に対してと同じように、周囲の木々の枝が伸び、一斉にアヒルへと飛び出していく。

「……っ」

素早く銃口を、自らのコメカミへと向けるアヒル。

「“上^あがれ”…！」

アヒルが自分へと弾丸を放ち、遙か上空へと飛び上がって、向かって来ていた枝を避ける。

「の、“昇^{のぼ}、れ”…！」

「おっ？」

避けた枝たちが、その向かう先を上方へと変え、再びアヒルへと向かって来る。

「避けても意味ねえか。ならっ…」

アヒルが銃口を、昇^{のぼ}って来る枝たちへと向ける。

「“荒^あれる”…」

言葉とともに、引き金を引くアヒル。

「“嵐^{あらし}”…！！」

「のっ…！？」

アヒルが引き金を引くと、銃口から激しく逆巻く風の塊が吹き出し、向かって来ていた枝を、その風の中に巻き込むようにして叩き落とし、地面に立つ罵へと降下していった。

「のおおおおっ…！！」

勢いよく降下した嵐を、避ける間もなく直撃した罵の重く低い声が、辺りへと響き渡る。

「チっ…」

アヒルの攻撃に倒れ込む罵の姿に、轟がかすかに舌を鳴らす。

「“飛^とべ”っ」

「……っ！」

轟が言葉を使って飛び上がり、上空に浮かぶアヒルよりもさらに

上へと行って、その右手を下にいるアヒルへと向ける。

「^お圧しつけろ”っ」

「クっ…！」

放たれる言葉に、歪むアヒルの表情。

「ガア…！」

下方から見守る紺平も声をあげた、その時であった。

——パアアアン！

「何っ…！？」

上からの圧力に押されたアヒルの体が、煙のような淡い光となつて、掻き消えていく。

「これはっ…！」

“欺^{あざむ}け”…」

「…っ！」

下を見ていた轟が、さらに上方から聞こえてくる声に大きく目を見開き、勢いよく顔を上げた。

「うっ…！」

轟が見上げた先には、銃を構えたアヒル。

“^あ当たれ”っ…！」

「グっ…！」

放たれる弾丸に、轟が険しい表情を見せる。

「と、^{とう}“登”！」

「…っ」

轟が放つ言葉に、眉をひそめるアヒル。その言葉が放たれた途端、轟へと下降していたアヒルの弾丸は、まるで逆の軌道となって、遙か上空へと舞い上がっていった。

「す、凄い…」

一連の戦いの様子に、見つめていた紺平が、思わず感嘆の声を漏らす。

「あれが…ガアの、神の戦いっ…」

銃を身構えたアヒルを、紺平がまっすぐに見上げる。

「ハア…！ハア…！」

攻撃を防いだものの、追い込まれているような様子で、大きく息を乱している轟。

「また、“トウ”…？」

そんな轟を見下ろし、アヒルが少し眉をひそめる。

「でも、さっきの言葉とは違う…何だ…？」

轟が使う未知の言葉に、考え込むように呟くアヒル。

「あれが…安の神…」

同じように戦いを見つめる檻也も、どこか驚いた様子で、上空のアヒルを見上げていた。

「籐也の、神…」

その言葉を発し、檻也が表情を曇らせる。

「……………」

「あっ…！」

表情を曇らせていた檻也の視界に、夢言石を握り返し、上空のアヒルへと向けようとしている弔の姿が入る。

「よ、避ける…！安の神っ…！」

「へっ？」

檻也の声に、振り向くアヒル。

「うおっ！」

弔が掲げた夢言石から一直線に飛んで来た青白い光を、アヒルが空中を移動し、ぎりぎりのところで何とかかわす。

「ひい、あつぶねっ」

空の向こうへと飛んでいった光を見送り、アヒルがホッとしたように声を出しながら、上空から再び地面へと降り立つ。

「ああ、残念」

光を避けられ、夢言石を下ろした弔が、少し肩を落とす。

「せっかく、神の言葉がもう一つ、手に入るところだったのに…」と

んだ邪魔が入ったな」

「……っ」

そっと流れてくる弔の刺すような視線に、見つめられた檻也が顔をしかめた。

「んだよ？次はてめえが相手かっ？」

「いいやつ」

「……？」

すぐさま首を横に振る弔に、アヒルが戸惑うように、眉をひそめる。

「やっと、迎えが来たようだからね」

「迎え……？」

「やあ、遅かったね」

アヒルがやって来た方とは逆の庭先を振り向き、誰へともなく話しかける弔に、アヒルや檻也、紺平が戸惑った顔を見せる。

「君の言葉で、この本邸を遮よそよそってくれたはずなのに、何故か、安の神だけが入って来たよ」

皆の戸惑いも気にすることなく、そのまま言葉を続ける弔。

「これは、どういうわけかな？」

「そのくらいは、見逃して欲しいわね……」

「えっ……？」

弔が振り向いた方から聞こえてくる声に、アヒルがその戸惑いを深くする。

「きちんと……挨拶くらいしたいじゃない……？」

近付いてくる、どこか不気味な色の強い、その響く声とともに、姿を現すその人物。

「それが……今から冒瀆する、私の神様への……せめてもの報いかと思っ
て……」

「さ……」

その人物を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「囁っ……？」

いつものように不気味な笑みを浮かべながら、その場へと現れたのは、囁であった。

その頃、於崎家第五邸。於附待機棟。

「ここか！」

「はっ？」

勢いよく開く扉に、部屋の大きなソファアーの上に横たわり、テレビを見ながらグダグダとしていた空音が、少ししかめた表情で体を起こした。

「何？ ってか、誰？」

「あなたが曾守だな」

開いた扉の向こうから、遠慮もなく部屋へとどんと入って来るのは、険しい表情を見せた箆也であった。

「はあ？ だから、あんた一体、誰っ……」

「空音」

「……っ」

箆也とは別の声が聞こえてくると、空音がその表情を変える。

「あんたは……」

「空音、話があります」

箆也に少し遅れるようにして、空音のいる部屋の中へと入って来たのは和音であった。和音の姿を見つめ、空音が少し目を細める。どうやら、互いに知った仲のようである。

「用なんて珍しいわね。で？ こいつは誰？」

「彼の名は神月箆也。安団の加守で、檻也のお兄様です」

「えっ？ あんたが、神のっ……？」

和音が箆也のことを説明すると、空音は驚きの表情を見せた。だが、檻也と似ているその容姿からか、空音は驚くことはあっても、疑おうとはしなかった。

「屋敷追い出された、神のお兄さんが一体、私に何の用なわけ？」

「あなたが七声の、もう一人の幹部か？」

「はあ？」

率直に問いかける簞也に、空音が大きく顔をしかめる。

「何言ってるの？それ、日本語？」

「誤魔化しても無駄だ。すでにあなたに逃げ場はない」

「はあっ？」

簞也が強く言い放つと、空音は益々、首を傾げた。

「一体、何なわけ？さっきから、全然意味わかんないんだけど」

「あなたが七声の幹部で、僕たち安団がやって来た、この時に乗じて、檻也を襲うことを目論んだのかと聞いている」

「神をつ…？」

問い詰めるように厳しく言い放つ簞也のその言葉に、しかめっ面を見せていた空音が、不意に眉をひそめる。

「何っ？神に何かあったわけ？」

「……？」

どこか不安げに問いかける空音に、簞也が戸惑った顔となる。

「和音、この曾守…」

「ねえ！神に何かあったのっ？お姉ちゃんっ！」

「はっ…？」

空音が放った思いがけない言葉に、和音へと話しかけようとしていた簞也が、思わず間の抜けた声を漏らす。

「お、お姉、ちゃん…？」

「はあっ？何よ？姉妹だったら、何か文句あるわけっ？」

引きつった表情で聞き返す簞也に、空音が不満げに答える。

「和音…」

「やはり、空音は七声の幹部ではないようですわね」

少し頭を抱え気味に振り向く簞也に、和音は何食わぬ表情で、冷静に答える。

「やはりって…あなたの妹なのだから、当たり前だろう…」

「妹だからといって、疑わぬわけにはいきませんわ」

「まっ、こういう姉よ。昔っから」

シレッと答える和音に、諦めるように肩を落とす空音。

「だが、ならば一体、誰が最後の一人で…」

「つつーか、“この時に乗じて”って、於団の私が、安団のあんたたちがいつ来るかなんて、知るわけないじゃないっ」

『……っ！』

「へっ？」

籠也が再び考え込もうとしたその時、空音が素っ気なく放ったその言葉に、籠也と和音が、同時に大きく目を見開いた。突然変わった二人の様子に、空音が少し戸惑うように首を傾げる。

「な、何っ…」

「そう言われてみると、そうですわね…」

空音が問いかけるその前に、和音が納得した様子で頷く。

「安の神に親しい者を新しい己守に選拔し、この屋敷へ招くことで、安の神と安団を呼び寄せ、檻也と屋敷の者たちの気を逸らし、作戦を実行に移す…」

「だ、だがそれはっ…！」

「それには、檻也を誘導する於団の者と…」

必死に言いかけた籠也の言葉を強く遮り、和音がさらに言葉を続ける。

「安の神の日常に詳しく、安の神とともにこの屋敷へと来るだろう、安団の者が仲間である必要があります」

「……っ！」

籠也をまっすぐに見つめ、はっきりに言い放つ和音に、籠也は大きく目を見開いた。

「そうでは、ありませんか？ 籠也」

「そ、それはっ…」

『神月くん！』

『……っ』

問いかける和音に簞也が答えようとしたその時、合わさった二つの簞也を呼ぶ声が聞こえてきて、簞也と和音は同時に部屋の入口を振り返った。

「あ！ いたいた！」

「神月くん！ 探しましたよぉ〜！」

「高市、奈々瀬」

部屋へと入って来たのは、保と七架の二人であった。走って来たのか、軽く息を乱している。

「何故、あなたたちまでここに…」

「神月くんが、急に屋敷の方へ走っていったからですよぉ〜」

「屋敷の方から衝撃音もしたし、何かあったのかと思って」

戸惑いの表情を見せる簞也に、二人が口々に答える。

「真田さんも、いつの間にかいなくなっちゃっし」

「……っ！」

困ったように肩を落とした七架のその言葉に、簞也が再び、大きく目を見開く。

「あれ？ そういえば神月くん、真田さんと一緒じゃなかったんですねえ〜」

「………」

周囲を見回しながら、言い放つ保の前方で、深く俯いたまま、黙り込んでしまう簞也。

「神月くんっ？」

そんな簞也を、保と七架が戸惑うように見つめる。

「簞也」

「……っ」

和音に名を呼ばれ、簞也が、俯けた顔をかすかに上げる。

「七声の幹部は、互いを暗号名で呼び合います」

真剣な表情を見せた和音が、強い眼差しで簞也を見つめる。

「その暗号名はすべて、漢字一字で表すことのできる、仮名四文字の名…」

「漢字一に、仮名四？」

「お、俺じゃないですよ！」

「高市くんは、仮名三文字でしょう…？」

続く和音の話に、その意図がわからず、大きく首を傾げていた七架が、焦ったように主張する保に、少し困った顔を見せる。

「彼女の名は、確かこうでしたわね」

和音が大きく口を開き、さらにははっきりとした口調で言い放つ。

「囁ささや」

「……っ」

出されるその名に、籠也がより一層、険しい表情を見せる。

「本邸へ…本邸へ行くっ！」

「えっ！？神月くん！？」

「ちょ、ちょっと待って下さいよぉー！」

その場から勢いよく駆け出していく籠也を、保と七架が慌てて追っていく。

「な、何なのよ！？ちゃんと説明してから、行きなさいよ！」

文句を言いながらも、空音も部屋を飛び出し、籠也たちの後へと続いていく。

「……………」

その場に一人残った和音は、険しい表情で、月明かりの照らす空を見上げた。

Word 26 冒澆 (3)

「囁…？」

アヒルが戸惑いの表情で、その場に姿を現した囁を見る。

「真田、さん…？」

アヒルと同じように、困惑の表情を見せる紺平。

「お、おう！囁っ…！」

もう一度強く囁の名を呼んだアヒルが、囁の方へと体を向ける。

「な、何かこいつら、於附だったけど、でも何か於の神の奴を襲っててさあっ」

拙い説明で、今の状況を囁へと伝えようとするアヒル。

「敵っぽい感じだから、やっぱこう言姫さんとかに差し出した方がっ…」

「ええ…」

アヒルが言い終わらないうちに、囁はそっとアヒルに頷きかけた。

「知ってるわ…」

「えっ…？」

静かに声を響かせ答える囁の言葉に、アヒルが少し眉をひそめる。

「彼らは“七声”と呼ばれる組織の幹部…」

「七、声…？」

「ええ…五十音士と同じく言葉の力を持ちながらも、五十音士とはまったく異なる、特殊な組織…」

聞き返したアヒルへ、囁が丁寧に答えていく。

「そして彼らの目的は、於の神が持っていたその石…すべての言葉を司るとされている夢言石…」

「夢言、石…？」

囁の言葉にさらに眉をひそめながら、アヒルが弔に先程向けられた、その右手の中の石を見つめた。

「その石の力を使い…五十音士に成り代わって、すべての言葉を支

配することこそが…彼らの目的…」

「五十音士に成り代わってって…」

「……っ」

アヒルと同様に、檻也もその目的に、表情を曇らせる。

「やっぱ言姫さんとかに、差し出した方が良さそうだな！」

目つきを鋭くし、アヒルが再び銃口を弔へと向ける。

「こいつらは俺が引きつけとくから、囁！お前は、箆也や言姫さんのとこにっ…！」

「叫^{さけ}べ”…」

「へっ？」

言葉とともに勢いよく飛んで来る、大きな音の塊に、アヒルが思わず目を見開く。

「痛っうっ！」

「ガァ！」

その音塊がアヒルの右手へと直撃し、アヒルが構えていた銃が、地面へと転がり落ちた。顔をしかめるアヒルに、紺平が思わずアヒルの名を呼ぶ。

「さ、囁っ…？」

アヒルが右手を左手で押さえながら、音塊の飛んで来た方を見つめると、そこには真っ赤な横笛を唇へと当てた、囁の姿があった。

「な、何をっ…！」

「ここまで言ってもわからないとは…君の神様は、相当に頭が悪いようだね、囁」

「……っ？」

二人の間へ割って入るように言葉を放ち、不敵な微笑みを浮かべながら囁の方へと歩み寄っていく弔に、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「悪かったなあ！どうせ、俺は国語の成績二でっ…！」

「ああ、“元”神様か」

「……っ」

弔が強調して言うその言葉に、アヒルの表情が曇る。

「元っ…？　どういう意味だよ？　それっ」

「俺から言った方が？」

「いいえ…自分で言うわ…」

問いかける弔に、横笛を下ろし、冷静に答える囁。二人の間には初対面ではない、むしろどこか親しげな空気さえ流れており、アヒルはさらに戸惑いを深めた。

「その為に…彼だけを“遮かぎらなかった”んだもの…」

「ささや、き…？」

アヒルをまっすぐに見つめながら、囁が弔と並んでいたその場所から一步前へと出て来る。

「ごめんなさいね…アヒるん…」

いつもは不気味に響く声が、今日はどこかしつとりと響く。

「私の神様…あなたじゃなかったみたい…」

「えっ…？」

そっと告げられる言葉に、険しい表情を見せるアヒル。

「何だよ？　何言って…」

「私の本当の神様は…ここに居る弔…」

囁が少し後方を振り返り、すぐ後ろに立つ弔を一瞬見やる。

「私はね…安団に送り込まれた潜伏者…彼らと同じ、“七声”の幹部なの…」

「……っ！」

その衝撃の事実、アヒルが大きく目を見開く。

「なっ…！」

「ずっと安団の五十音士の振りをしながら…今日の日を迎える為の準備をしていたのよ…」

声にならない声を発するアヒルに、囁はさらに言葉を続ける。

「な、何言ってんだよっ？　囁！」

引きつった笑みを浮かべながら、アヒルが必死に囁へと話しかける。

「いつものまあまあ笑える冗談ならともかくつ、んな笑えねえ冗談、言うもんじゃっ…！」

「冗談でもギャグでもダジャレでもないわ…」

アヒルの声を、勢いよく遮る囁。

「これはすべて、現実よ…アヒるん…」

「……っ」

冗談と思うことすら出来ない、真剣な表情を向ける囁に、アヒルはそれ以上、言葉を吐くことも出来ず、かすかに口を開いたまま、その場で固まってしまった。

「あああ、お話中のところ、すみませんがあ」

「……？」

横から入って来る声に、アヒルを見つめていた囁がゆっくりと振り向く。

「あら…生きてたの…」

「初めっから死んでませんけどお？相変わらず、ワタクシより失礼な方ですねえ、あなたはっ」

「どっちもどっちだと思うけど…」

割って入って来た轟と、囁が親しげに言葉を交わす。学校の屋上で会っていた時の空気とは、まるで別の空気が二人の間に流れていた。

「安の神に丁寧の説明されるのも構いませんがあ、そろそろ行かないと、本当に言姫様と韻の団体が来てしまうのではあ？」

「のの、の…」

アヒルの攻撃に倒れたはずの罵が、いつの間にか立ち上がっており、轟の後ろから、轟の意見に賛成するように、低い声を漏らす。

「一理あるな。どうだ？囁。もう行けそうかな？」

「ええ…もう話は終わったから…」

「なっ…！」

弔の問いかけにあっさりと頷く囁を見て、アヒルが顔をしかめる。
「ふ、ふざけんじゃねえっ！」

「……っ」

荒げた声を発するアヒルに、囁が再び振り向く。

「何が“話は終わった”だよ！俺は全然、終わった気とかしてねえし、納得もしてねえよっ！」

拳を力強く握り締め、アヒルが必死に言葉を発する。

「安団の潜伏者って、そいつらの仲間って、どういことだよっ！？」

怒鳴るように、強く問いかけるアヒル。

「俺たちを裏切るってのか！？んなもん、納得できるか！ちゃんと理由を言えよ！理由をっ！」

「理由…？」

アヒルの放った言葉を繰り返し、囁が片方の眉をかすかに上げる。

「可笑しなことを言うのね…アヒるん…」

「何っ…？」

囁の言葉に、アヒルがグッと眉間に皺を寄せる。

「初めから信じてもない神に…何故、裏切る理由を話す必要があるのっ…？」

「……っ！」

放たれる冷たい言葉に、目を見開き、言葉を失うアヒル。

「信じて、ないって…」

——さすがは我らが神……

——私たち安団の想い、託すわよ…神……

脳裏を過ぎる、これまでの囁の言葉。

「信じてないって、お前っ…！」

“叫^{さけ}べ”…」

「うっ…！」

感情とともに顔を振り上げたアヒルへ、その言葉を許さぬかのように、再び音塊が飛んで来る。

「うわああああ！」

「ガァ！」

銃を落としたままのアヒルは、避けることも出来ずに、その音塊を直撃し、勢いよく吹き飛ばされた。

「うううっ…！」

アヒルが地面に倒れ込み、苦しげに表情を歪める。

「聞き分けのない人は嫌いよ…弔…」

「ああ」

横笛を下ろした囁の言葉に頷きながら、弔が囁のすぐ横へと出て来る。

「じゃあ、頂くとしようか」

倒れたままのアヒルへ、ゆっくりと夢言石を向ける弔。

「あっ…！」

「ク…！」

夢言石を向ける弔に、紺平が大きく目を見開き、檻也も険しい表情を見せ、ボロボロのその体を、何とか必死に動かそうとする。

「うっ…！」

「五十音、第一音“あ”…封印…」

厳しい表情を見せたアヒルへと、夢言石から、青白い光が放たれる。

「ガァ…！」

「グっ…！」

紺平の声が響く中、アヒルが強く唇を噛み締めた。

「“助^{たす}ける”！」

『……っ！』

アヒルへと青白い光が直撃しようとしたその瞬間、アヒルの前方に幾重にも重なり合った赤い糸の盾が降り立ち、向かって来た光を、空へと勢いよく弾き返した。その一瞬の出来事に、アヒルや皆が、大きく目を見開く。

「あれは…」

「刈^かれ」！

「薙^なぎ倒せ」っ！

「ん？」

そのアヒルを守った糸の盾に、目を見張らせていた弔のもとへ、アヒルのいるところとは別方向から、赤い二つの一閃が飛び出してくる。

「……っ」

すると、横笛を構えた囃が、素早く弔の前へと躍り出た。

「妨^{さまた}げろ」…」

言葉とともに囃が音色を奏でると、振動の膜が囃の前に生じ、飛んで来た二つの一閃を防ぐ。

「あっ…」

『……………』

倒れたままのアヒルが、顔を上げ、思わず声を漏らす。糸の盾が解けるようになってなくなると、アヒルの前に、アヒルを守るようにして立つ、簞也、保、七架の姿が明らかとなった。皆、それぞれの武器を構え、鋭い表情を、前方へと向けている。

「安団が勢揃いか」

夢言石を下ろしながら、弔がそっと呟く。

「やはり、そう簡単に神の言葉は貰えないようだね」

「……………」

攻撃を防がれながらも、余裕の笑みを浮かべている弔の前で、横笛を下ろした囃が、少し険しい表情を見せる。

「お、お前らっ…」

「大丈夫ですか！アヒルさあ〜ん！」

「どおわっ！」

体を起こし、皆の方を見たアヒルへと、保が大声をあげながら、勢いよく飛び込んでいく。

「ああ！相変わらず、大丈夫じゃない俺が、一丁前にアヒルさんを心配しちゃって、すみませえ〜ん！」

「へえへえ、大丈夫、大丈夫っ」

いつもの調子で謝り散らす保に、アヒルがどこか適当に答える。

「朝比奈くん！」

保に続き、七架もアヒルのもとへと不安げな表情で駆け寄る。

「大丈夫っ？ 今、“治せ”^{なお}で傷を…」

「いやっ、俺は別に大丈夫だから、先に於の神の奴と紺平をつ…」

「どういうことか、理由を聞こうか」

言葉を交わしていたアヒルと七架が、アヒルたちの前方に立ったまま、どこか鋭く言い放つ箆也のその声に、それぞれ言葉を止め、箆也の方を見た。

「囁」

『……っ』

囁の名を呼ぶ箆也に、アヒルたちが皆、その表情を厳しくし、少し躊躇うように囁の方を見つめる。

「本邸には“遮れ”^{さへぎ}の言葉を使ったから…入れなかったはずだけど…？」

「そんなものは、僕が“掻き消した”」

「“掻き消す”、か…そういえば、そんな言葉も持っていたわね…あなたは…」

箆也と囁が、互いに落ち着いた口調で言葉を交わす。

「そんなことよりも、理由を言え。囁」

箆也がもう一度、強く囁に訴えかける。

「何故、神に攻撃をした？」

「……………」

責めるような視線を向けて来る箆也に、囁がそっと目を細める。

「そんなの…とても簡単な理由よ、箆也…」

単調に、言葉を吐く囁。

「アヒるんは、私の神様ではないから」

囁が少しアヒルへと視線を流し、はっきりと言い放つ。

「私は、彼らと同じ“七声”の幹部…ただ、この作戦のために、安

団に潜入していただけたからよ…」

「そ、そんなっ…!」

「真田さんっ…」

告げられる事实に、保が思わず声をあげ、七架もどこか信じられないといった表情で囁を見つめる。

「あなたたちとの仲間ごっこも…まあ楽しかったけれど…」

囁が何かを思い出すように、少し空を見上げる。

「でもね…」

再び下ろされた視線が、安団の皆を捉える。

「もう、飽きたの…」

『…っ!』

冷たく囁かれる言葉に、アヒルたちは皆、大きく目を見開き、誰も言い返す言葉を見つけられずに、ただ黙り込んでしまった。

「じゃあね、私の神様…」

囁がアヒルだけに視線を集中させ、風に流れるように、そつと言葉を吐く。

「短い間だったけど…楽しかったわ…」

囁と、囁の周囲に集まった弔、轟、罵の四人を、淡い赤色の光が包み込んでいく。

「“さようなら”…」

「…っ!」

その“さ”から始まる言葉に、大きく目を見開くアヒル。

「ま、待てっ…!」

その場で必死に立ち上がり、光の中へと包まれていく囁へ、アヒルが必死に手を伸ばす。

「ささやっ…!」

「…っ」

———パアアアアン!

「あっ…！」

アヒルの手が届くその前に、囁と弔たち三人は、強く輝いた光に包まれ、一瞬にして、その場から姿を消してしまった。光の残像が残る中、アヒルが伸ばしたままの手を、空中で止める。

「あっ…」

力なく声を落とし、アヒルがその手を、ゆっくりと下ろす。

「真田さん、がっ…」

「朝比奈くん…」

茫然と光の消えた方を見つめる保と、心配するようにアヒルを見つめる七架。

「……………」

箆也も険しい表情を見せながら、そっと俯いた。

「箆也！」

「神っ！」

そこへ、箆也が囁が作った“遮れ”の結界を消したこともあってか、韻の従者を引き連れた和音と、必死な表情を見せた空音が駆け込んでくる。

「和音、空音も…」

「神っ…！」

駆け込んでくる空音に、檻也が少しホッとした顔つきとなる。

「箆也、七声は？」

「……………」

着いてすぐさま問いかける和音に、箆也は俯いたまま、そっと首だけを横に振った。その箆也の様子を見て、和音が眉をひそめる。

「そうですか。ではやはり、彼女が…？」

「ああ」

続く和音の問いかけに、小さく頷く箆也。その彼女が誰のことを示しているかなど、聞き返さなくとも明らかであった。

「韻本部へ連絡し、すぐに周辺への包囲網を。残りの者は、怪我人の救助を行って下さい」

『はっ！』

和音の指示に頷き、韻の従者たちが素早く、散っていく。

「……っ」

その散っていく韻の者たちを見つめながら、目を細めた箆也が、視線を流し、茫然と立ち尽くしているアヒルを見た。

「神……」

「……………」

先程まで囁の居たその場所を見つめ、ただ立ち尽くすアヒル。

「囁……」

アヒルの掻き消されそうな小さな声が、そっとその場に落ちた。

Word. 27 思わく (1)

檻也を襲った、謎の組織“七声”^{しちせい}。

檻也の世話役の時定、止守の棘一、乃守の海苔次は、それぞれ七声の幹部の弔、轟、罵であつた。

そして囁もまた、七声の幹部であり、アヒルたちにその事実を告げると、弔たちとともに、於崎の屋敷を去った。

そんな衝撃の一夜が明けた、翌朝。

「ん、んっ…」

広い和室の真ん中に一つ、ポツリと敷かれた布団で眠っていた檻也が、ゆっくりとその瞳を開く。

「ここ、は…」

「気が付いた？」

「んっ…？」

すぐ横から聞こえて来る声に、檻也が振り向く。

「紺、平…」

「ここは於崎の別邸だよ。本邸は壊れちゃったから、こっちに移ったんだ」

檻也の眠る布団のすぐ横に正座し、起きた檻也へと声をかけたのは紺平であつた。笑みを浮かべた紺平が、檻也にここの場所を説明する。

「体の方は大丈夫？一応、傷は全部、奈々瀬さんが、言葉を使って治してくれたみたいなんだけどっ…」

「ああ、問題ない」

心配するように問いかける紺平に短く答え、檻也が布団から起き上がる。檻也は、昨夜着ていた服ではなく、シンプルな寝着を纏っていた。袖から覗く手を見ても、昨日負わされた傷の跡は一つもない。

「状況は？他の者たちは、どうしている？」

「韻いんってこの人たちが、この辺りを搜索してるみたいけど、まだ、あの人たちのことは見つけられてないみたい」

外の様子を気にする檻也に、紺平が冷静に答えていく。

「それと、ガアたちはっ…」

「起きたか、檻也」

「えっ…？」

話を続けようとした紺平が、開く襖の音と、入って来る落ち着いた声に、ゆっくりと振り返る。

「あっ…」

部屋へと現れたのは、渋い濃紺色の着物を纏った、四十代半ば頃に見える、どこか気難しそうな表情の男性と、こちらも地味めの薄紫色の着物を纏った、同じくらいの年の頃の、気品あふれる、美しい女性であった。見たことのない二人の姿に、紺平が少し戸惑うような顔を見せる。

「えっと…」

「父上、母上…」

「えっ！？お父さんとお母さん！？」

そっと呼ぶ檻也に、驚きの表情となって、檻也の方を振り返る紺平。

「つてことは、神月くんのっ…」

「夢言石むげんせきを奪われたそうだな、檻也よ…」

「……っ」

父から放たれるその言葉に、檻也が少し俯く。

「も、申し訳ございません…」

「そう、気に病むことはありません」

「えっ…？」

すぐさま返って来る母の声に、どこか戸惑うように顔を上げる檻也。

「母うっ…」

「夢言石には、この事態に備え、前々から、韻が特別に作製した発信機が取り付けられていました。直に、七声の場所も知れるでしょう」

「この事態に、備えっ…?」

益々戸惑った檻也が、その表情を曇らせていく。

「母上、それはどういうっ…」

「ですが、あなたが“お”の言葉を奪われてしまったことは、計算外でした」

檻也に問いかける間すら与えず、母が深々と肩を落とす。

「言葉を奪われては、夢言石の奪還にも行けませんし、とんだ大失態ですね。まったく」

「……っ」

呆れたように、冷たく言い放つ母に、檻也は言葉を失う。

「これで万が一、“お”の言葉を悪用され、危害を及ぼす事態でも起これば、於崎家の名に傷がつきます。一刻も早く、七声を捕まえてもらわないと」

「ああ」

母の言葉に、短く頷く父。

「韻上層部とも少し話したが、お前が言葉を失った以上、夢言石の奪還是他神に任せることとなるだろう」

母に代わるようにして、父が表情を崩さぬまま、どこか単調に言葉を続ける。

「言葉を失った神になど、何の価値もない」

「……っ!」

「なっ…!」

はつきりと言い放つ父に、目を見開く檻也と、思わず座り込んでいた体を立ち上がらせる紺平。

「ちよっと待って下さい!そんな言い方っ…!」

「いい。紺平」

「えっ?」

強く言い返そうとした紺平を、檻也がすかさず止める。その止める檻也の声に、立ち上がった紺平は、戸惑うように振り返った。

「で、でもっ…！」

「いいんだ」

「……っ」

もう一度、強く告げる檻也の、その必死に耐えるような、唇を噛み締めた表情に、紺平はそれ以上、言葉を続けることも出来ず、ただ険しい表情で黙り込んだ。

「とにかく今回の事態は、韻の者以外には伏せておいてもらわねば、いけませんね」

「ああ。我が於崎家の失態は、何が何でも他の神や五十音士に知られないようにし…」

「そんな相談をしている時間があるのなら、この事態に戸惑っている屋敷の者たちに、一言でも声をお掛けになったらどうです？」

『……っ』

背後から聞こえてくる声に、あれこれと話していた父と母が、同時に振り返る。

「本邸には、かなりの被害が出ています。皆、どう動くべきか、迷っていますよ」

「か、籠也っ…」

二人の後ろから、その部屋へと現れたのは、籠也であった。籠也の両親でもあるというのに、二人は、籠也の姿を見た瞬間、あからさまに顔をしかめた。どこか責めるような口調で言いながら、籠也が二人の横を通り、檻也と両親の間へと割って入るように立つ。

「それが、屋敷の当主である、あなた方の役目でしょう？」

「………」

強気に言い放つ籠也に、父がそっと目を細める。

「親を相手に生意気な口を…」

「育てられた覚えもないのに、親として敬う必要が？」

低い声を出す父に、籠也が負けじと言い返す。二人の間には、と

でも同じ血が通っているとは思えない、冷たい空気が立ち込めていた。

「箆也、あなたに対しては、この屋敷への出入りを禁じたはずです。即刻この場を出ていってもらっ……」

「今回の件は、我が団も関係しています。この屋敷への滞在は、韻からの命です」

「……っ」

言い終わらぬうちに答えを返してくる箆也に、母は不快そうに、さらにその表情を歪めた。

「はあっ、とても気分が悪いです。もう行きますわっ」

「ああ。檻也、言葉が戻り次第、韻上層部へ謝罪に行くからな。体調は万全にしておけ」

深々と溜息を吐いて、部屋を去っていく母に続き、檻也に声を掛けて、出ていく父。だが、その最後に言い残した言葉にすら、檻也を想うような言葉は、一言も入っていなかった。

「ふうっ……」

二人が去り、部屋の襖が閉まると、箆也はどこか疲れたように、少し肩を落とした。

「神月くん」

「んっ？」

背後から聞こえてくる声に、箆也が振り返る。するとそこには、まだ少し表情を曇らせたままの紺平が立っていた。

「ああ、済まないな。あの人たちの言動で、あなたも不快になっただろう」

「い、いやっ、俺は全然！それよりっ……」

「……？」

明るく首を横に振った後、そっと視線を流す紺平に、箆也が少し首を傾げる。

「………」

紺平が見つめる先には、布団の上に起き上がったまま、深く俯き、

黙り込んでいる檻也の姿があった。その檻也の姿を視界に入れ、箆也が少し目を細める。

「小泉、少し外してくれるか？」

「えっ？あ、う、うん！わかった！」

箆也の言葉に少し焦りながら頷くと、紺平は足早に歩を進め、素早く部屋を出て行った。箆也と檻也、二人だけとなった部屋が、より一層、静まり返る。

「檻也……」

体を檻也の座る布団の方へと向け、箆也が小さく呼びかける。

「笑いたければっ……笑えばいいだろう……？」

俯いたままの檻也から返って来たのは、どこか震えた、か細い声であった。

「皆が、お前よりも選んだ俺なのにつ……父上たちが、お前を屋敷から追い出しまでして、神になった俺なのにつ……」

檻也の声の震えが、徐々に大きくなっていく。

「言葉を失くしたってだけで、この扱いだっ……！」

張りあげられた声が、静かな部屋中に響き渡る。

「皆、俺が“お”の言葉を持ってたから、チャホヤしてただけなんだっ……親も、使用人も、附き人もっ……」

「……………」

どこか必死に言葉が続ける檻也を、箆也は目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

「俺の言葉しかいららないんだ……神じゃない俺なんて、いららないんだっ……」

布団の上に置いた手を、檻也が強く強く握り締める。

「誰も、俺自身なんて、必要としてないんだよっ……！」

「檻也……」

勢いよく顔を上げる檻也と、目を合わせる箆也。その必死に開かれた檻也の瞳には、かすかに光る何かが滲んでいた。

「笑えよ！お前と違って何でも持ってるって顔してたのにつ、お前

よりも選ばれた存在だって偉ぶってたくせにつ、俺はこんなに惨めだ！」

箆也を見上げ、檻也が怒鳴りあげる。

「笑えよ！自分をこんな目に遭わせた報いだとか何とか言っ、笑ってみせろよっ！」

「……………」

必死に叫び続ける檻也を、箆也はただ黙ったまま、細めた瞳でまっすぐに見つめる。

「笑えよっ…！わらっ…うっ！うううっ…！」

言葉の途中で、瞳から涙が零れ落ちると、檻也は言葉を詰まらせ、そのまま力なく俯いた。すすり泣く声とともに、強く握られた拳の上に、透明な滴が何度も落ちる。

「……………」

その姿に少し眉をひそめると、箆也は静かにその場にしゃがみ込み、檻也に視線を近づけた。

「檻也…」

箆也が、俯いたままの檻也へと声を掛ける。

「あなたが僕を兄と思っているかどうかはわからないが、僕はあなたを弟と思っている…今も…」

落ち着いた声が、檻也の耳へと届いていく。

「それは、あなたが神でいようが神でいまいが、言葉を持っていようが持っていまいが、変わらない…」

単調な、だがどこか優しい声。

「それと…」

その声が、そっと付け加えられる。

「僕は、あなたを“必要ない”と思ったことは、一度もない…」
「……………」

放たれる言葉に、檻也が大きく目を見開く。

「それだけだ。邪魔をしたな」

素っ気なくそう言い残すと、箆也はすぐにその場を立ち上がり、

檻也の方を振り返ることもなく、部屋を去っていった。襖の閉まる音の後、廊下を歩く、部屋を遠ざかっていく足音が、どんどん小さくなっていく。

——あなたを“必要ない”と思ったことは、一度もない……

「……っ」

思い出される籠也の言葉に、目を細め、唇を噛み締める檻也。

「うう……ううっ……！」

閉じられたその瞳から、再び涙が零れ落ちた。

「あっ、神月くん！」

「んっ？」

籠也が檻也の部屋を出て、廊下を進んでいると、突き当たりのところで、紺平が待っていた。籠也の姿を見つけ、紺平が籠也のもとへと駆け寄っていく。

「檻也くん、どうだった？大丈夫そうかな？」

「どうだろうな」

「えっ……？」

自分でもわからないといった様子で首を傾げる籠也に、紺平が少し戸惑うように声を出す。

「僕は神と違って、気の利いた言葉を使えるわけではないから……」

「神月くん……」

自らを嘲るような笑みを浮かべる籠也を見つめ、目を細める紺平。「もうしばらく、一人にしておいてやってくれるか？檻也も色々、考えたいだろうから」

「そうだね。うん、わかった」

籠也の言葉に、紺平が大きく頷く。

「それと、小泉」

「んっ？」

「ありがとう…」

「えっ…？」

急に向けられる礼の言葉に、紺平が思わず目を丸くする。

「あなたが居なければ、檻也は死んでいたかも知れない。感謝する」

「神月くん…」

深々と頭を下げる籠也に、少し目を細める紺平。紺平は籠也のことをよく知るわけではないが、籠也が頭を下げるその姿は珍しく、そして何よりも檻也のために頭を下げる籠也に、どこか心が温まった。

「於附として、当然のことをしただけだよ」

顔を上げた籠也に、紺平が穏やかな笑みを向ける。

「神様を守ることが、神附きの責務なんでしょう？」

「ま、まあそうだが…」

得意げに微笑みかけて来る紺平に、籠也が少し濁しながら頷く。

「それでえそのお…」

「……？」

どこか躊躇うように言葉を伸ばす紺平に、籠也が首を傾げる。

「ガア、や皆はっ…？その、真田さん、のことっ…」

「……っ」

紺平の言葉に、一気に曇る籠也の表情。

「正直、こんなにも目を逸らしたくなるような気持ちになるとは、思ってもみなかった」

「神月くん…」

その言葉の通り、紺平から瞳を逸らし、誰もいない静かな庭を見つめた籠也が、どこか複雑そうな表情で、そつと言葉を落とす。

「それは僕だけじゃなく、皆きつと、同じなんだと思う」

庭先を見つめ、どこか遠い瞳を見せる籠也。

「だが」

「えっ？」

「僕は、安附だから…」

遠くを見つめていた箆也の瞳が、急に強く光る。

「神の出す答えを待っただけだ」

「……っ」

はつきりと言い放つ箆也に、どこか驚いたような表情を見せる紺平。

「じゃあ、僕は行くところがあるから。檻也のことを頼む」

「あ、う、うんっ」

紺平にそう言うと、箆也はすぐさま紺平に背を向け、足早に廊下を歩き去っていった。紺平はその場に立ちつくしたまま、見えなくなるまで、箆也の背中を見送った。

「はあっ、強い人だなあ」

箆也の背が見えなくなると、紺平はどこか感心するように、しみじみと呟く。

「んん」と、ええ」と

「んっ？」

近くから聞こえて来る唸り声のような声に気づき、紺平が、先程まで箆也が見つめていた庭へと視線を流す。すると、庭の木陰の背後に、かすかに動く人影のようなものが見え、紺平は庭へと下りていった。

「空音、さん…？」

「へっ!？」

紺平の声に、ひどく驚いた様子で振り返ったのは、於団の曾守であり、和音の妹でもある、空音であった。

「な、何だ。あんたかっ」

振り返った空音が、紺平の姿を確認し、どこか安心した様子で肩を落とす。

「何してるの?こんなところで」

「べ、別に!散歩よ、散歩!」

「散歩っ…?」

明かに木陰に隠れていたというのに、散歩と言い張る空音に、紺平が少し首を傾げる。

「で？その、どうなのよっ？」

「へっ？どうって…」

空音が何を聞いているのかがわからず、さらに首を傾げる紺平。

「何が？」

「き、決まってんでしょ！？神よ！神！」

「ああ、檻也くんか」

言葉を少し詰まらせながら、怒鳴るように答える空音に、紺平がやっとわかった様子で大きく頷く。

「さっき気がついたよ。全部が全部大丈夫になったわけじゃないけど、傷も平気そうだったし」

「そ、そうっ…」

紺平の言葉に、空音がどこかホっとした様子で、薄く笑みを浮かべる。

「し、シブとい神ね！あのまま、くたばっちゃえば良かったのに！」

「えっ？」

無理やり悪態づく空音に、思わず目を丸くする紺平。

「アハハっ…！」

「な、何よ？笑ってんじゃないわよ！」

急に大きな笑い声を発する紺平に、空音が勢いよく顔をしかめる。

「ごめんごめん。そうだよねえ、空音さんもいるもんねえっ」

「はっ？何の話よ？」

「んっ？」

眉をひそめる空音に、紺平が大きく笑いかける。

「於団はこれからだ”って話っ」

「はあっ？」

明るい笑顔を見せる紺平に、空音は思いきり首を傾げた。

Word. 27 思わく (2)

その頃、於崎家本邸。

弔たちの攻撃により破壊された、元檻也の部屋であったその場所は、特に修理される様子もなく、瓦礫の積まれた昨夜の状態のまま、ひっそりと静まり返っていた。

「……………」

その崩れた本邸の庭先、昨夜は戦場となったその場所に立ち尽くし、アヒルはどこか茫然としている。何かを考えているのか、何も考えていないのか、その瞳は、何を表しているのか、わからなかった。

「朝比奈くん、朝からずっとあそこに立っただままだね…」

「はい…」

一部残った縁側に並んで座り、庭に立っているアヒルを見守る保と七架。アヒルがずっと立ち尽くしたままなので、二人もずっと、縁側でアヒルを見守ったままなのであった。

「まあ仕方ないですよ。俺だってまだ、信じられませんか…」

「うん…」

保の言葉に、七架も浮かぬ表情で頷く。

「真田さんが、悪質地底人たちの仲間だったなんてっ…!」

「私は高市くんの思考回路が信じられないけど…」

まだ地底人だの何だの言っている保に、一気に呆れた顔つきとなる七架。

「何をしている？」

「へっ? あ、神月くんっ」

横から聞こえてくる声に保と七架が振り向くと、本邸の入口の方から、籠也がこちらの庭へと歩いて来ていた。紺平と別れ、ここへやって来たようである。

「何って…神月くんがアヒルさんを見ていろって言ったからっ…」

「ただ単に見ていて、どうするんだ。それでも神付きか？」

「えっ？ いや、俺は高市だから、神月ではないですけどお」

「はあっ…そういうえば、そういう段階だったな…」

保に神だの神付きだの言っても無駄であったことを思い出し、籠也が深々と溜息をつく。

「で、でも神月くん」

保の横から、七架が身を乗り出し、籠也へと声を掛ける。

「朝比奈くんも色々と考えたいだろうし…今は私たちが附いておくよりも、一人にしてあげた方がっ…」

「これは、神一人の問題じゃない」

七架が言い終えぬうちに、籠也がはっきりと言葉を放つ。

「僕たち、安団の問題だろう？」

『……っ』

当然のように言い放つ籠也に、少し驚いたように、目を見開く保と七架。籠也がそういった仲間を意識した言い回しをするのは、珍しいことであった。

「神」

「ん？」

二人から目を逸らした籠也が、庭に立ち尽くしているアヒルへと呼びかける。アヒルは目を丸くしながら、籠也たちの方を振り返った。

「おう、籠也。於の神の奴は、どうだった？」

「問題ない。小泉も附いてくれているしな」

「そっか」

籠也の言葉に、少し安心したような笑みを浮かべるアヒル。そんなアヒルのもとへと、籠也がゆっくりと歩み寄っていき、籠也に続くように、保と七架も縁側から立ち上がり、庭の方へと歩を進める。

「で、どうするつもりだ？」

「ん？ どうするって、何が？」

「決まっているだろう。囁のことだ」

「……っ」

躊躇うことなく言い放つ箆也に、アヒルの表情がふと曇る。

「か、神月くんっ…！」

「そんなにはつきりと言わなくてもっ…」

後ろからやって来た保と七架が、表情を曇らせたアヒルに気づき、箆也へと注意するように声を掛ける。

「いつまでも悩んでいても、仕方ないだろう」

歩み寄って来た二人へと、箆也が真剣な眼差しを向ける。

「悩んで、答えが出るような問題ではないんだ」

「それは、そうだけどっ…」

「なあ〜んも、知らなかったなあって思ってたさっ」

『……？』

言葉を交わしていた三人が、アヒルの声に同時に振り向く。

「俺、囁のこと、何も知らなかったなって思ってたさ」

「朝比奈くん…」

薄い笑みを浮かべ、晴れ渡った空を見上げながら呟くアヒルを、皆がまっすぐに見つめる。

「どこで生まれたのか、親は何してんのか、兄弟はいんのか、どんな風に育ってきたのか…」

知っていて当然のはずの事柄を、アヒルが羅列する。

「囁ってのは、本当の名前だったのか…」

『……っ』

アヒルの言葉に、曇る三人の表情。

——七声の幹部は、互いを漢字一字、仮名四字の暗号名で呼び合います——

箆也たち三人は、和音のその言葉を聞いていた。囁のその名が、弔たちと同じただの暗号名であったのなら、アヒルたちは、囁の本当の名さえ、知らないことになる。

「何も知らなかったのに、別に、何にも聞こうとしなかった」

アヒルがそのまま、言葉を続ける。

「安心しきってたのかもなあ。あいつが左守で、安団だから、俺たちの仲間に決まってるんだって」

「……っ」

アヒルの言葉に、思い当たる節でもあるかのように、そっと俯く箆也。

「ただ、仲間だ仲間だって言ってばっかで、真田囁って、あいつ自身とはちっとも向き合ってなかった」

空を見上げるアヒルが、そっと目を細める。

「だから、わからねえんだよなあ」

アヒルが視線を落とし、昨夜、囁のいた、その辺りを見つめる。

「俺が神だって言ったあいつの言葉と、俺は神じゃないって言ったあいつの言葉……あいつのことを何も知らない俺は、どっちを信じていいのか、わからない……」

「なら……」

「……っ?」

声を発する箆也に、アヒルがゆっくりと振り向く。

「なら、知りに行けばいい」

箆也がアヒルをまっすぐに見つめ、迷うことなく言い放つ。

「真田囁という人間のことを、知りに行けばいい」

強く光る瞳を、箆也がアヒルへと向ける。

「あなたには、“言葉”があるのだから」

「……っ」

強く言葉という単語を強調する箆也に、アヒルがハッとした様子で、大きく目を見開く。

「言葉があれば、知り合える。言葉とは、そういうものだろう?」

アヒルへと確認するように、問いかける箆也。

「そうだよなっ……」

小さく呟いたアヒルの表情から、少し晴れやかになった笑みが零

れる。

「よっしゃ！ いっちょ、行くか！」

「うん、行こう行こう！ 真田さんのところへ！」

「行っちゃいましょう！ 地底世界へ殴り込みですよお！」

「あなたは勝手に、一人で穴でも掘っている」

笑顔を見せ、大きく声を張り上げるアヒルに、答えるように同じく声を出す七架と保。保の的外れな発言に、箆也が呆れた表情を見せ、冷たく言い放つ。

「けど行くつつつても、あいつ等の場所がわかんねえーか」

盛り上がったいた笑顔をふと止め、困ったように呟くアヒル。

「韻があらかじめ、夢言石に発信機を付けていたらしい。少し待てば、場所も判明するだろうが…」

「じゃあ、言姫様に場所を聞けば、わかるのね」

「和音が教えてくれれば、の話だな」

「えっ？」

意味深に表情を曇らせる箆也に、明るく微笑んでいた七架が首を傾げる。

「どうして？ 教えてくれないの？」

「普通に考えて居場所は、七声討伐に選抜された神と、その団の神附きにのみ、知らされることとなるだろう」

「えっ…」

箆也の言葉に、七架が眉をひそめる。

「それって、私たち安団以外の団が、討伐に選ばれるかもってこと？」

「ああ」

「そんなんっ…」

短く頷く箆也に、七架が表情を陰しくする。

「でも、今回の件に関わったのは、安団と於団でしょ？ 於の神の檻也くんがあの状態なら、私たちが選ばれるのが普通なんじゃっ…」

「僕たちだって、囁を、神附きを一人、欠いている」

「……っ」

はつきりと言いつ放つ箆也に、七架が思わず言葉を呑み込む。

「それに囁が七声幹部となると、安団の手の内は、すべて読まれていると言ってもいい」

「それはっ…」

箆也の言葉は正しく、七架には言い返す言葉も思いつかなかった。

「それを思えば、安団以外の団を行かせるのが得策、と和音や韻上層部は考えるだろうな」

「確かに、そうかも…」

並べられる正論に、どこか落ち込むように頷く七架。七声討伐に選ばれなければ、囁の場所を知ることすら出来ない。ただ、他の神が囁たちを倒して戻って来ることを、待つことしか出来ないのだ。

「そんなあ！俺、どうしても、地底世界でモグラに会ってみたいんですよお！」

「あなたは黙っている」

「んっ！」

熱く拳を握り締め、言葉を挟む保であったが、箆也の一瞬の冷たい言葉に、呆気なく両手で口を塞ぐ。

「大人しく待っている気もないが、韻に逆らえば、それこそ大変な事態にっ…」

「よしっ！」

「……？」

悩んでいた箆也が、どこか気合いを入れるようなアヒルの声に、ゆっくりと顔を上げる。

「どうした？神」

「ん？いやあ、言姫さんところ行って、俺たちに行かせてくれって頼もうと思っさ」

「はっ…？」

何やら得意げな笑顔で言い放ち、その場から歩き出そうとしているアヒルに、箆也が思わず顔をしかめる。

「あのなあ、神：頼んだからといって、どうにかなる問題ではないんだ」

少し頭を抱えた箆也が、どこかうんざりとした様子で言葉を吐く。
「今、話しただろう？ 僕たちは四人な上に、相手側に囁がいては、こちらの手の内もっ…」

「大丈夫だって、たぶんっ。俺、何とかするしっ」
「……………」

何の根拠もないアヒルの言葉に、箆也が哑然として、固まる。

「何とかって…あのなあ…」

呆れたように溜息をついた箆也が、アヒルへと声を掛ける。

「頼みに行くなら行くで、そういうたぶんとか何とかとか、適当な言葉ではなく、もっと確信を持てる発言をっ…」

「確信なら、さっきお前がくれたじゃねえかっ」

「えっ…？」

遮るアヒルの声に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「俺には、“言葉がある”って」

「……………」

大きく微笑んで言い放つアヒルに、箆也が驚いたように目を開き、思わず黙り込む。

「だから大丈夫！ たぶん何とかなるって！」

「はあっ…また“たぶん”か…」

明るく言い切るアヒルを、呆れたように見る箆也。

「でも、私は信じられるよ？ 朝比奈くんの“たぶん”も、“何とか”もっ」

「お、俺も信じてます！」

アヒルをフォローするように、七架と保が口を挟む。

「はあ！ こんな発言する価値すらない俺が、一丁前に“信じる”とか言っちゃってすみませえ〜ん！」

「うるさい」

いつもの調子で謝り散らす保に、箆也が鋭く注意を投げかける。

「別に、僕だって、信じていないとは言っていない」

『えっ…?』

少し口を尖らせながら、どこか怒っているかのように言い放つ箆也に、保と七架が目を丸くする。

「ただ、“たぶん”だの“何とか”だのでは、頭の固い言葉の姫を納得させることは出来ないと言っているだけでっ…」

「誰の頭が固いんですの?」

「うっ…」

背後から聞こえてくるその声に、一気に凍りつく箆也の表情。

「どなたの頭が固いのか、わたくし、とても興味がありますわ」

「わ、和音…」

品のいい美しい笑みながらも、どこか冷たく刺すような、そんな強さを感じさせる笑顔を浮かべながら、数名の従者とともにその場へと現れたのは、和音であった。和音の姿を捉え、箆也があらさまに表情を歪める。

「い、いや、今丁度、最近巷で噂になっている“石頭女伝説”の話をしていただけだ」

「あら、そうでしたの」

上手いかどうかわからない誤魔化しをする箆也に、和音がさらにその笑みを深くする。

「わたくしはてつきり、どなたか、身近な方の悪口かと」

「はははっ…」

含んだ笑みを浮かべる和音に、渴いた笑い声を漏らしながら、ひたすらに和音の視線から逃げる箆也。

「相変わらず、言姫さんには弱えなあ。お前」

「人間、どうしても敵わぬものが、世の中に三つはあるという話だ」呆れたように見つめるアヒルに、箆也は開き直った様子で答える。

「で?僕たちに何か用なのか?」

「ええ、七声の居場所が判明しましたので、ご連絡をと」

「そうか」

すらすらと答える和音に、特に驚いた様子もなく頷く籠也。

「だがどうせ、討伐には他の団を向かわせるから、僕たちには教えられないだの、何だの言う気でっ…」

「居場所も知れましたので、安の神と安団の皆さまには、これから七声討伐に向かっていただこうと思ひまして」

「えっ…?」

『えっ?』

籠也の声を遮って言い放つ和音のその言葉に、最初は籠也が目を見開き、続いてアヒルや、保と七架も同時に目を丸くする。

『ええええっ!?!』

「あら、息ぴったりですわね」

声を揃える四人に、そっと微笑みかける和音。

「お、俺たちが七声の討伐にっ…!?!」

「ええ、あなた方の他に、安の神と安団の皆さまはいらっしゃらないでしょう?」

まだ落ち着いていない声で、確かめるように聞き返すアヒルに、和音が大きく頷きかける。

「な、何故だ? 敵方には囁きがあるんだぞ? 僕たちが行っても、手の内は知られているから不利であってっ…」

「韻上層部も、初めはそのような意見でしたわ」

問いかける籠也に、和音が笑みを止め、真剣な表情を見せる。

「ですが、今回は緊急事態。事は一刻を争います」

「一刻を…?」

「ええ」

聞き返すアヒルに、深々と頷く和音。

「檻也が奪われた夢言石…一刻も早くあれを取り返さねば、多くの言葉が奪われ、彼らに新たな力を与えることとなります」

「それはわかるが…それだけで、我が安団を選抜したと…?」

「いえっ…」

表情を曇らせ、問いかける籠也に、和音がそっと首を横に振る。

「本当の選抜理由は、彼らの持つ“言葉”にあります」

「言、葉…？」

一層、真剣な表情を作る和音に、保や七架も皆、どこか表情を陰しくする。

「ええ…安の神、あなたが彼らと相対した時、彼らは五十音士にはない、特別な言葉を使いませんでしたか？」

「特別な、言葉…？」

和音に問われ、アヒルが考えるように首を捻る。

「ええ…と、あつ…」

考え込んでいたアヒルが、不意に何か思いついたような声を漏らす。

「トウ…」

“トウ”？何だ？それは

「いや、俺もよくわかんねえんだけど…」

怪訝そうに問いかけてくる籠也に、アヒルがそつと眉をひそめる。

「あの止守だった奴が、戦ってる最中、二回くらい“トウ”って言葉を使っててさあ」

——と、“逃”！——

——何だ…？今の言葉…——

「けど、その“トウ”って言葉、一回目と二回目で効果が違うつか…何か別の言葉だったみてえなんだよなあ…」

「同じ言葉で…別の言葉…？」

戸惑うように話すアヒルに、聞いていた籠也も、徐々にその表情を曇らせていく。

「それが奴等の、“特別な言葉”とやらか…？」

「ええ…」

眉をひそめたまま問いかける籠也に、和音が深々と頷く。

「彼らは、同音の言葉であれば、その数に限りなく、自由に使うこ

とが出来るそうです」

「同音の言葉というのは？」

「現在、韻で、それ以上のことはわかっていません。どんな言葉があるのか、どれほどの種類があるのかも」

少し視線を落とし、申し訳なさそうに言い放つ和音。

「韻でも何もわかっていないのか…」

「ええ…安の神が聞いたという“トウ”…それが最も有力な情報と言えるでしょう」

「“トウ”、か…」

確かに、戦っていたアヒルが聞いたというのであれば、それは確実な情報ではあるが、“トウ”というだけでは、どれほどの言葉があるか、どんな言葉があるか、正確にはわからない部分が多い。

「彼らの言葉は、五十音士のものとも、忌のものとも違う、特別なものです」

顔を上げた和音が、真剣な表情を見せる。

「ですから、少しでも戦った経験を持つ安の神を、ということで、韻も安の神と安団を選抜したのですわ」

「成程な」

和音の説明に、箆也が納得するように頷く。

「まあいいじゃねえか。何にせよ、俺らが行けるんだろ？」

「そうですよお！モグラが見れるんなら、万々歳じゃないですかあ！」

「いいな。単純な思考回路の人間は」

暢気に言い放つアヒルと保に、大きく肩を落とす箆也。

「あ、あのっ…」

「はい？」

少し遠慮がちな七架に呼ばれ、和音が振り向く。

「言葉のこと以外で、“七声”についてわかってることって、何かないんですかっ…？」

「“七声”について、ですか…」

七架の問いかけに、和音の表情が、途端に厳しいものとなる。

「今のところ、我々五十音士と同じく、言葉の力を持つ、特別な組織としか…」

囁がアヒルへと放った言葉と同じものを、和音が口にする。

「創られたのは、そう古くもなく、十年程前との話ですが」

「十年、前っ…」

俯いたアヒルが、その頃の囁はまだ幼い子供だったのではないだろうか、と考える。

「真田囁の話ですと、彼らの目的は、わたくしたち五十音士に成り代わり、すべての言葉を支配すること、だそうですね」

「ああ。恐らくはその為に、檻也から夢言石を奪ったのだろう」

籠也が和音に答えるように、言葉を発する。

「だが何故、七声が、ごく一部の五十音士しか知らない、夢言石の存在を知っていたのか…」

「……………」

鋭く言い放つ籠也に、和音が見えぬように、ひっそりと目を細める。

「あと、彼らのことで我々が把握していることといえば、そうですね」

和音が、話を切り替えるように言う。

「七声の幹部は、その名の通り全部で七人いる、ということくらいでしょうか」

「七人…？」

和音の言葉に、アヒルが少し首を傾げる。

「では、僕たちが遭遇した三人と囁以外にも…」

「ええ、他に三人の幹部がいるということになりますわ…」

『…………』

知らされる事実、安団の皆が、どこか険しい表情を見せた。

Word. 27 思わく (3)

とある山奥にポツリと佇む、鳶の張り巡らされた、大きな古城。

「久し振りだな。この城へ来るのも」

「弔様はずっと、於の神のお守りでしたからねえっ」

城の廊下を進みながら、懐かしそうに天井を見上げる弔。その後ろから、轟がどこか含んだような口調で、言葉を発する。轟の後は罵、囁が続いて歩いていた。

「……………」

最後尾を歩く囁は、あまり晴れやかではない表情で、静かに俯いたままである。

「君もここへ戻って来るのは、久し振りだろう？ 囁」

「えっ…？ え、ええっ…」

不意に弔に問われ、顔を上げた囁が、少し齒切れ悪く答える。

「懐かしいものだね。ここが君と俺との始まりの場所だ」

「……………」

少しだけ後方を振り返り、鋭く微笑む弔に、囁がそつと眉をひそめる。

「ええ…そうね…」

囁は頷きながら、向けられる視線から逃げるように、深く俯いた。「皆、久し振り過ぎて、あなたの顔を忘れてしまっているかも知れませんかえっ」

「それはちよつと悲しいかな」

毒づく轟に軽く笑みを浮かべながら、廊下の突き当たりまで辿り着いた弔が、ゆっくりと目の前にある、鉄製の古びた扉へと手をかけた。錆びついているのか、低く響く音を残しながら、扉が徐々に開いていく。

「弔！」

「ん？」

扉が開かれた途端、中から大きな声が飛び出してきた。

「みちびき どういうことだよっ！ 弔！」

「導」

しかめた表情を見せながら、部屋の中へと踏み込んだ弔のもとへ歩み寄ってきたのは、派手な赤色の髪がよく目立つ、まだ若い青年であった。鼻な耳にピアスをしており、細く整えられた眉毛を、きつく吊り上げている。

「やあ、久し振りだな。導」

「久し振りとかじゃねえよ！ どういうことだったってんだよ！」

「弔様に対して、失礼ですよお。導」

怒鳴りあげる導と呼ばれた青年を見かねたのか、弔の後ろから、轟が前へと出てくる。

「ちゃんと人語で話さないとお。あなたは人類としての進化が、今一つ遅れているのですからあ」

「だってが原始人だっ！」

轟の嫌味な言葉に、導が全力で怒鳴り返す。

「だいたい、それもこれも全部、お前のせいなんだからな！ 轟！」

「わたくしい？」

導から向けられた人差し指を見つめ、轟が大きく首を傾げる。

「わたくしが一体、何をしたとお？」

「お前！ “お” を、新しい言葉貰っただろ！？ “と” も持ってるくせに！」

「あああゝっ」

導がそう言い放つと、納得したように轟が頷く。

「なあんだ。そんなことですかあ」

「んなことじゃねえよ！ 次は俺が貰うって約束だったのに！」

「ああ、そうだったな。悪かったね、導」

そっと微笑んだ弔が、導に謝罪の言葉を述べる。

「あの場ですぐ“お”の言葉を使いたかったものだから、つい、轟にあげてしまったんだ」

「チェっ」

「いい〜いじゃないですかあ。お猿さんには、五十音はまだ早いですよお」

「だっれがお猿さんだよ!」

口を尖らせていた導が、まったく悪びれた様子のない轟に、さらに顔をしかめ、怒鳴りあげた。

「本当に悪かった。次、言葉を手に入れたら、必ず導に渡すようにするから」

「ほ、ほんとっ!?!」

弔の言葉に、導が一気に表情を晴れやかにし、その瞳を輝かせる。

「本当だ」

「絶対!?!」

「絶対だよ」

「やったあ!」

頷く弔に、導が両手を高々とあげ、喜びを全身で表現する。

「ウッフ、単純なお子ちゃまは、実に可愛いわねえ」

「うっせえぞ! 償!^{つぐない}俺はお子ちゃまじゃねえっ!」

「ウッフっ」

部屋の壁際に置かれたソファアの上に座り、大きくスリットの入ったスカートから覗かせた真っ白な足を、大胆に組んで座っているのは、真っ赤な口紅がよく映える、妖艶な美しさの女性であった。ゆるく巻かれた黒い髪を、掻きあげる仕草もまた、艶めかしい。

「おかえりなさい、弔」

「ああ、ただいま。償」

微笑みかける償と呼ばれた女性に、弔もまた、笑顔を向ける。

「あらあ〜? あなたも戻って来たの?」

「……………」

償が、弔たちに少し遅れるようにして、部屋へと入って来た囁きを見つけ、どこかわざとらしい声をあげる。

「七声の女性幹部は、私一人で十分なんだから、ずっと安団? って

のとかに居てくれて良かったのに」

「まあ確かに、お色気チームはお一人でも十分そうですね」

どこか棘のある言葉を囁へと向ける償に、轟が横から口を挟む。

「そんなことはない。囁がこの七声に居てくれないと、とても困るんだよ、償」

「……っ」

囁をフォローするような弔の言葉に、償はあからさまに表情をしかめ、囁はその言葉を受け止めることを拒むように、そっとその場で俯いた。

「そういえばあ、もう一方が見えませんがあ？」

「どこに目え付けてんだよ？そこにいんだろ」

「んん〜？」

導が乱暴に指差したのは、弔たちが入って来た扉のすぐ横、部屋の片隅であつた。轟が指につられるように、そちらを振り向く。

「ああ、あんなところに居ましたかあっ」

「……………」

部屋の片隅にしゃがみ込んでいるのは、まっすぐな白髪に、まったく輝きのない灰色の瞳の、無表情の青年であつた。導と同じ年頃であろうか。何も主張のない、不思議な空気を纏っている。

「元氣そうだな、誘^{いざな}」

「……………」

弔が声を掛けるが、誘と呼ばれたその青年は、微動だにしない。

「ふうっ」

「相変わらず、話しかけ甲斐のない方ですねえっ」

肩を落とす弔の横で、轟が呆れるように言い放った。

「無口くんに、“の”しか言えない大男に、とても言葉の力を持つ組織とは思えないメンツねえ。ウッフ」

「人語の話せない原始のお方もいらっしやいますしねえ」

「誰が原始じゃ！」

向けられる視線に、導が再び怒鳴りあげる。

「まあいい。こうして再び、皆で会うことが出来たんだ。それだけで、何よりだよ」

皆をまとめるように声を放った弔が、導、償の横を通り過ぎ、部屋の中央を突き進む。広い吹き抜けの部屋の奥には、ポツリと、金で装飾された真つ赤な玉座が、置かれていた。弔が振り向き、その玉座へと腰を下ろす。

「囁、彼らはここへ来ると思うか？」

「……………」

玉座から問いかける弔に、一番離れたところに立つ囁が、ゆつくりと顔を上げる。

「ええ…必ず…」

「いい答えだ」

すぐさま頷く囁に、弔が満足げに微笑む。

「五十音士たちを迎え討つのですか？弔様」

「勿論。折角、向こうから来てくれるんだ。迎え討って、この夢言石で言葉を貰おうじゃないか」

弔が、懷から取り出した夢言石を掲げる。

「次、言葉奪ったら、俺にくれるんだよな！？なっ！？」

「ああ、今度こそ約束だ」

「おっしゃあ！即効倒して、即効奪ってやるぜ！」

「ウッフ、やる気満々ね」

気合いを入れる導を見て、償が楽しむように笑う。

「ワタクシも新しい言葉を試せる、いい〜い機会ですしねえ」

「のの…」

「……………」

同じように楽しげに微笑む轟と、轟に同調するように言葉を発する罵。そして、部屋の片隅にしゃがみ込んだまま、会話が聞こえているのかもわからないほど、まったく表情を動かなさい誘。

「轟、罵、導、誘、償」

弔が一人ずつ、名を呼んでいく。

「囁」

「……………」

名を呼ぶ弔の声に、囁の眉がかすかに動く。

「すべての五十音士を倒し、すべての言葉を奪い尽くそう」

夢言石を握り締め、弔が口角を吊り上げる。

「言葉を支配するのは、俺たち…この“七声”だ」

『……っ』

弔の言葉に、他の六人は、それぞれに思惑を秘めた表情を見せるのであった。

日中。於崎家、屋敷前。

「ホントにいいのかあ？ 箆也」

静かなその場所に、アヒルの声が響き渡った。

「於の神の奴に、挨拶とかしてかなくって」

「必要ない」

気にかけるように問いかけるアヒルに、腕を組んだ箆也が、一際素っ気なく答える。

「話なら、朝終えた」

「まっ、お前がそういうならいいけどよ」

軽く頭を掻きながら、アヒルが少し呆れたように肩を落とす。

「つつーわけで、挨拶はいいみたいだから、俺らそろそろ行くわ。」

紺平

「うん」

屋敷の門前まで、アヒルたちを見送りに出て来ているのは、紺平ただ一人であった。元々、入ることが許可されていなかった上に、昨日の騒ぎの後処理などがあるため、使用人たちの姿はまったくないのである。そんな中で、アヒルたちは和音からの命を受け、七声の討伐へと出掛けようとしていた。

「しっかりね、ガア」

「おうっ」

元気づけるべく声をかける紺平に、アヒルが笑顔で答える。

「保くんと奈々瀬さんも気をつけて」

「うん」

「は、はいいゝ！こんな俺なんかにもったいないお言葉！すみませえゝん！」

紺平が続いて保と七架へ声をかけると、笑顔で頷く七架の横で、保が激しく叫び散らした。

「神月くんも」

「ああ」

振り向く紺平に、箆也が短く頷く。

「小泉」

「んっ？」

「箆也を…」

少し躊躇うように、一度俯いた後、箆也が再び顔を上げる。

「弟を頼む」

「……っ」

はつきりとそう言い放つ、箆也のそのまっすぐな瞳に、少し目を細める紺平。

「うんっ、任せといて！」

笑顔を見せ、紺平が大きく頷くと、箆也もどこか安心したような笑顔を見せた。二人のやり取りを見て、アヒルもそっと笑みを浮かべる。

「よっしゃ！じゃあ、そろそろ行くか！」

「ああ」

「はい！」

「うんっ」

アヒルの言葉に箆也、保、七架がそれぞれに頷くと、四人は決意を持った表情で、足並みを揃え、於崎の屋敷から旅立っていった。

門の前に立った紺平が、山を下っていく四人の姿を、その背が見えなくなるまで、ずっと見送る。

「はあっ…」

四人が見えなくなり、紺平が一つ、息をつく。

「そこまで来るなら、ついでに出て来ちゃえば良かったのに」

後ろを振り返り、誰にともなく話しかける紺平。

「そこからここまで、二メートルくらいだよ？」

「……………」

振り返った紺平が見つめる先、於崎の門の向こうにある、玄関口の小さな木陰の後ろに立っているのは、檻也であった。檻也は寝巻から着替え、顔色も良くなっており、すっかり大丈夫そうである。

「見送りに来たんでしょう？お兄さんのこと」

紺平が門を開け、檻也の方を覗き込む。

「俺に兄などいない」

「ハイハイ」

「神を軽くあしらうな」

相変わらずの言葉を吐き捨てる檻也を、適当に受け流す紺平。そんな紺平に、檻也が少ししかめた表情を見せる。

「お前こそ、安の神に附いていなくて良かったのか？」

「今の俺じゃ、附いてったって足手まといなだけだしね」

切り返して問いかけてくる檻也に、紺平が落ち着いた笑みを浮かべる。

「それに俺、安附じゃなくて、於附だしっ」

「……………」

向けられる紺平の笑顔から、少し逃げるようにして俯く檻也。於附であった二人に裏切られた檻也としては、その紺平の言葉は眩しく、どこか直視出来ないような、そんな気分になった。

「だからさ、我が神。一つ、お願いがあるんだけど」

「んっ？」

紺平の言葉に、檻也が少し戸惑うように顔を上げる。

「何だ？」

「俺に強くなる方法、教えてくれない？」

「……っ」

迷いのない笑顔で言い放つ紺平に、檻也が驚いたように、目を丸くする。だがその驚きはすぐに消え、檻也は晴れやかな笑みを浮かべた。

「いいだろう。ここには、辞書なら、いくらでもあるからな」

得意げな言葉を放つ檻也。

「だが、俺は説明下手だぞ」

「それなら大丈夫だよ。ねえ？ 空音さん」

「えええっ！？」

「んっ…？」

紺平がそう声を掛けると、檻也が身を隠していたところとは別の木陰から、急に空音が立ち上がり、その姿を見せる。焦ったような空音の声に、檻也が眉をひそめ、振り向いた。

「あんた！ なんで、私がここに居るってわかって…！」

「空音？ そんなところで、何をしている？」

「えっ！？ え、ええっと、そ、空を見ておりましたのよっ？ か、神っ」

「ハハハっ」

檻也に問われ、焦ったように答えている空音のその姿を見て、こっ所りと笑い声を漏らす紺平。

「そういえば空音、和音はどうした？」

「えっ…？」

急に真剣な表情を見せて問いかける檻也に、空音も少し眉をひそめる。

「さ、さあ…？ 安の神に七声の場所を教えた後、すぐに屋敷を出て行きましたけど…」

「そうか…」

「………？」

浮かぬ表情で頷く檻也を見て、紺平は不思議そうに首を傾げた。

その頃、韻本部。

「そうか…では、安の神と安団は、七声討伐へ向かったのだな…」
「はい…」

横長の台座に幾人も並んだ老人たちを前に、数段低い高さのところに立った和音は、深々と頭を下げていた。中央に座る白髪の老人の言葉に、和音が短く頷く。

「すべては予定通りだな…」

「ああ…七声と安の神の接触…」

「これこそが我らが韻の望み…」

「……………」

重なり合うように、次から次へと聞こえてくる声を、顔を下げたまま、ただ耳から入れ、和音が少しその瞳を細める。

「これからも、我らの言葉通り動くのだぞ…言姫…」

「ええ…仰せのままに…」

その老人の言葉に、和音が迷うことなく答える。

「すべては、言葉の秩序を守る為ですから…」

そう言い放った和音の瞳が、どこか鋭く光った。

Word. 28 スレ違ウ言葉 (1)

和音から韻の命を受けた、“安の神”朝比奈アヒルと安団の面々は、弔率いる“七声”を討伐し、彼らが檻也から奪った夢言石を取り返すため、彼らの潜伏場所へと向かっていた。

「あの城だな…」

山奥にポツリと佇む、古びた蔦だらけの城を眺め、籠也がそっと眉をひそめる。

「いかにも、悪党組織の滞在場所といった感じが」

「そうだなあ」

遠くに見える城の頭部分を見つめ、言い放つ籠也の横から、アヒルも同意するように頷く。

「こういう雰囲気、何か灰示と戦った時のこと思い出すっつーかつ…」

「ハイジ？」

「へっ！？あ、い、いや！廃寺で肝試しした時のこと、思い出すっつーかさあ！ハハハっ…！」

保に不意に聞き返され、慌てて誤魔化し笑いを浮かべるアヒル。

灰示の存在を知らない保の前で、灰示の名を出してしまったのは失敗であった。

「ああ、肝試しのことですかあ。わかりますよお、俺、お化けにビツクリすぎて一回、心肺停止しましたもおーんっ」

「俺はそのことにビツクリだけだな…」

明るく話す保に、アヒルが少し顔を引きつる。

「結局、ここに来るまで、丸一日かかったちゃいましたね」

「戦いを前に、言葉の力を消費するのは上手くない。仕方ないだろう」

歩き疲れた足を軽くほぐしながら、話題を変えて呟く保に、冷静に言い放つ籠也。そう、アヒルたちが於崎の屋敷を出てから、すで

に丸一日が過ぎ、空には再び明るい太陽が昇っていた。

「けど、不思議だね。七声の人たち、一昨日の夜に屋敷を出たはずなのに、居場所がわかってたってことは、昨日の朝にはもうここに居たってことでしょ？」

「そういや、そうだな。俺たちは丸一日かかったのに、あいつ等は半日もかかんなかったってことか？」

七架の言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「そりゃあアレですよ！あの人たちは何てったって地底人だから、穴を掘って、こうボォーンとっ…！」

「囁の言葉だ」

「へっ？」

熱弁しようとした保を、箆也が勢いよく遮る。

「囁があなたへ放った、“さようなら”のあの言葉」

「……っ」

箆也により繰り返されるその言葉に、アヒルが思わず表情をしかめる。

「あの言葉は、向けた相手の視界から消えることが出来る上に、自分が思い描いた場所まで行ける、一種の瞬間移動の言葉だそうだ」

「瞬間移動？」

「それは凄いですねえ！」

「ああ」

驚きの表情を見せる保と七架に、頷きながらも、箆也が少し眉をひそめる。

「まあ、僕にそう話した囁の言葉が真実であれば、の話だがな…」

『……っ』

付け加えられる箆也の言葉に、二人は表情を曇らせた後、何も言わぬまま俯いた。

「居場所を発見したまででもいいが、ここからはどうする？神」

「ん？」

箆也に問われ、アヒルが目を丸くする。

「突入して、突っ込んでって、ぶっ倒す？」

「……………」

シンプルで簡潔なアヒルの言葉に、思わず固まる箆也。

「いいか？ 韻からの命は七声の討伐だが、僕たちのやるべきことは、彼らを倒すことではない」

「あ、無視したっ」

アヒルの言葉を完全に無視して、保と七架へ向けて、話を始める箆也に、アヒルが軽くショックを受ける。

「僕たちの目的は、あくまで夢言石の奪還だ。深追いをして、自分の言葉を奪われることだけは避ける」

「わ、わかりました！」

箆也の説明に、気合いの入った返事を返す保。

「要は、いかにモグラのヒゲヒーゲアタックを返すかが鍵、ということですね！？」

「というわけだ。無茶はするなよ、奈々瀬」

「うん、わかった」

「はぁ！ 完全に無視！」

保の言葉など、まるでなかったかのように、スムーズに会話を進める箆也と七架に、保が思わず頭を抱え込む。

「皆さんの耳を傾ける価値もないような発言しか出来ない、こんな俺ですいません〜ん！」

「うるさい。折角、無視してたんだから、静かにしろ」

謝り散らす保に、箆也がさらに冷たい言葉を投げかける。

「それと、神」

「んだよ？ どうせ俺の言葉も無視すっ…」

「一つだけ、確認しておきたいことがある」

「……………」

真剣な表情を作り、改まった様子で言う箆也に、アヒルが少し不思議そうな顔を見せる。

「何だ？」

「戦いの場で囁と出会った時の対応についてだ」

『……っ』

箆也の言葉に、皆の表情が一気に険しくなる。

「この先、十分に有り得る場面だろう。その時、戦うか、戦わないか……僕たちは、どうすればいい？それだけは、あなたに確認しておきたい」

「……………」

箆也にまっすぐな瞳で問いかけられたアヒルが、少し俯き、考え込むような様子を見せる。

「お前たち、それぞれの判断に任せるよ」

顔を上げたアヒルが、そっと笑みを浮かべる。

「お前たちが、それが一番いいって決めたことなら、きっと俺も納得すると思うから」

「……わかった」

少し間を置いた後、箆也がしっかりと頷く。

「ちなみに、ね……」

「ん？」

小さく声を漏らす七架に、アヒルが振り向く。

「ちなみに朝比奈くんは……どうするつもりなの？戦いの場で、その……真田さんと会った時……」

七架が少し遠慮がちに、アヒルへと問いかける。

「戦うの……？戦わない、の……？」

「……………」

差し出される二択に、そっと目を細めるアヒル。

「まだわかんねえかな。そんな時になってみねえと」

そう呟いたアヒルが、少し困ったような、薄い笑みを浮かべる。

「ごめんな？何かあやふやなことしか言えなくって」

「う、ううん！ぜ、全然！わ、私の方こそ、変なこと聞いちゃって、ごめんね！」

謝罪するアヒルに、七架が慌てた様子で謝り返す。

「そ、そうだよねっ…そんなこと、今、この場でなんて、決められないよねっ…」

「けど…」

「えっ…?」

続くアヒルの言葉に、俯いていた七架がゆっくりと顔をあげる。

「怒鳴っちゃまうかも、叫んじまうかも知れねえーけどっ…」

少し口元を緩めたアヒルが、そのまっすぐな瞳を、山の奥に佇む城の方へと向ける。

「話してみようとは、思うよっ」

『……っ』

アヒルのその言葉に、七架や皆が、ハッとしたような表情を見せた。

「うんっ…そうだね…」

大きく頷いた七架の顔から、自然と笑みが零れ落ちる。

「では、神」

「ああ、行こう！」

振り向いた簞也に頷いたアヒルが、強く声をあげた。

――嘘…嘘…あの言葉も、その言葉も…全部、嘘…――

――この世界に存在する、すべての言葉に…意味なんてない…――

――なら、創ろう…? 僕らが支配する、僕らだけの言葉を…――

「ん…」

深い眠りから目を覚まし、囁がその瞳を開く。開かれた瞳のその先には、薄黒く汚れた、厚い石の天井が広がっていた。

「そう…」

天井を見つめながら、囁が小さく声を落とす。

「またここに：戻って来てしまったのね…」

「まるで、戻って来なくなかったような、そんな言い回しだね」

「……っ」

すぐ傍から聞こえてくる声に、天井を見ていた囁が、横になったまま首だけを動かし、振り向く。

「弔…」

「よく眠っていたようだね、囁」

囁が眠っていた寝台のすぐ横に腰掛け、寝台の上の囁を、薄く浮かべた笑みで見つめているのは、弔であった。弔の姿に気付き、囁が寝台の上で、ゆっくりと体を起こす。

「十分に休めたかな？」

「ええ…」

問いかける弔に、短く頷く囁。

「深く眠っていたようだけど、何か夢でも見ていたのか？」

「………」

どこかわざとらしく聞く弔に、囁が少し眉をひそめる。

「ええ…あなたと出会った頃の夢を…」

「そうか」

囁の答えに、弔が少し口元を緩める。

「それは結構な悪夢だね」

「……っ」

楽しげな笑みを浮かべ、明るく言い放つ弔に、囁は何も答えることなく、そっとその場で俯いた。

「あなたは？眠らなくていいの…？」

「俺はいいんだ」

問いかけた囁に、弔が微笑みかける。

「眠るのは、あまり得意ではないから」

「そうだったわね…」

弔の言葉に答えながら、囁が掛けていた布団を横へと置き、寝台から足を下ろして、立ち上がろうとする。

「どこへ？」

「彼らが来たんでしょう…？」

問いかけた弔に、囁は問いかけで返した。

「迎え討つのが…あなたの作戦じゃなかったかしら…？」

「それはただけだね」

寝台の上に座ったままの囁のもとへ、すぐ横の椅子に腰掛けていた弔が立ち上がり、そっと歩み寄っていく。

「なるべくなら、君を戦いの場に向かわせたくはないんだ」

囁の前に立ち、優しい微笑みを浮かべる弔。表情は柔らかいが、その瞳だけがとても冷たく、まったく笑っていないように見えた。

「振りとはいえ、君だって、仲間として日々を過ごしてきた彼ら、安団と戦うのは気が引けるだろう？」

優しい口調で、まるで諭すように、弔は言う。

「君は、安の神を、随分と気に入っていたようだし…」

「……っ」

言葉を付け加え、どこか含んだような笑みを向ける弔に、囁がかすかに眉をひそめる。

「可笑しなことを言うのね…」

「ん？」

批判するような言葉を呟き、囁が寝台から立ち上がる。

「私が、今の言葉の神なんて、気に入るはずがないでしょう…？」

「……………」

強気に言い放つ囁に、弔が口元を緩めたまま、瞳だけを細めた。

「そうか」

「そうよ…他のメンバーを起こして、臨戦態勢を取るわ…いいわね…？」

「ああ、頼むよ」

部屋の扉へと向かいながら、弔の方を見ることなく、冷静な言葉を口にする囁に、弔はその背中を見つめたまま、異論なく頷く。

「囁」

囁が扉を開けたところで、弔が囁を呼び止めた。

「何…？」

足を止め、振り返ることはせずに聞き返す囁。

「俺がやろうとしていることは、正しいかな…？」

「……っ」

弔の問いかけが放たれた後も、振り返ることはなかったが、囁がかすかに表情を動かしたことは、感じ取れた。

「ええ…正しいわ。あなたは決して、間違っていない…」

「そうか…」

返って来る言葉に、弔がさらに大きく笑みを浮かべる。

「ありがとう、囁。君がそう言ってくれと、それだけで安心するよ」

「じゃあ…私、行くから…」

「ああ、気を付けて行っておいで」

弔に見送られ、囁が部屋を出て、ゆっくりと扉を閉める。古びた石造りの扉は、重々しい音を廊下に響き渡らせて、強く閉まった。静かな廊下に、囁が立ち尽くす。

「……嘘つき…」

囁の小さな声が、そっと零れ落ちた。

Word. 28 スレ違ウ言葉 (2)

一方、アヒルたちはさらに歩を進め、七声の潜伏場所と見られる城のすぐ傍まで、近付いてきていた。

「ここまでではあっさり来れたな」

「ああ。七声も、韻がここまで早く場所を突き止めるとは思わずに、油断しているのかも知れない」

「わっかりませんよぉ」

アヒルと籠也の会話に、後方から保が口を挟む。

「相手は何せ地底人なんです！穴を掘って、地面の下から、俺たちを狙ってるかも知れません！」

「ああーハイハイ。いいから、あなたは黙って…」

『来たぞおっ！』

「えっ…？」

必死に熱弁する保を、籠也がいつものように軽くあしらおうとしたその時、アヒルたちと城の間の地面のあらゆる所から、土がまるで噴き出るように飛び散り、下方から無数の人間が姿を現した。ラフな格好をした、若い男や女が多い。

『侵入者めえ！覚悟しろ！』

「……………」

声を揃えるその者たちを見つめ、籠也が少し呆然とする。

「たまにはバカの言葉も、聞いておくもんだったな…」

「いっやあ！ホントに出たあ！地底人！！」

呆れたように呟く籠也の後ろで、地下に潜んでいることを予測していたわりに、激しく混乱している保。

『襲っ！』

「……………」

前方に現れた人間が、口々に同じ言葉を放つと、アヒルはすぐさま、その表情を陰しくした。

「“あ”、解放……！」

「朝比奈くん？」

素早く言玉を解放するアヒルに、七架が戸惑うように首を傾げる。

「奴等の言葉だ！ 避けねえと危ねえ！」

『えっ？』

アヒルの声に皆、眉をひそめながら、再び前方を振り向く。すると確かに、謎の言葉を放った連中から、白い光の玉のようなものが、一斉にアヒルたちの方へと向かって来ていた。

「あれはっ……！」

「クっ……！」

飛んでくる光に、箆也と七架が厳しい表情を作る。

『死ねえ！ 侵入者ども！』

「あ……“上^あがれ”！」

現れた連中が叫びあげる中、アヒルは自らの言葉を発し、素早く弾丸を、四人全員へと撃ち込んだ。

——バアアアン！

放たれた無数の光の玉が、やがて一つの大きな塊となり、先程までアヒルたちの立っていた場所へと直撃する。近くの木が吹き飛び、激しく砂煙が舞い上がった。草もすべて吹き飛び、その場に何もない荒地が広がる。

「ふわあ……」

荒地となった地面を見下ろし、驚きの声を上げる、上空に浮かんだ保。

「空を飛ぶって、こんな感じなんですわねえ……」

「あ、そっち？」

連中が放った言葉の威力よりも、空に浮かんでいる自分自身の方に感心のいつている保に、すぐ横に浮かぶアヒルが、思わず突っ込みを入れる。

「ありがとう、朝比奈くん」

「“シュウ”：今のが奴らの言葉か」

笑顔でアヒルへと礼を向けている七架の横で、箆也がそっと表情を曇らせる。

「たぶん。この前戦った、轟って奴の言葉とは違うけど、何か似たような感じだ」

「凄い威力だったね」

「ああ、五十音士の言葉に、見劣りすることのない力だ」
禿げ上がった地面を見下ろし、厳しく目を細める箆也。

「幹部ですらなさそうな、あんな連中まであれほどの言葉を使えるとなると…かなり厳しいな」

箆也がそう言いながら、懷から真っ赤な言玉を取り出す。七架も箆也のその行動を見て、制服のポケットから言玉を取り出した。

「おい、バカ。あなたもさっさと言玉を出せ」

「へっ？ あ、は、はっ…！」

「“集”！」

「へっ？」

言玉を出そうとポケットをあさっていた保に対し、地面に立つ連中の一人、若い男が先程と同じ響きの言葉を向ける。すると男から放たれた白い光が、上空にいる保の体を包み込んだ。

「うわ！ わわわあゝ！」

「保っ…！」

まるで引力にでも引き寄せられるかのように、男の方へと体を引っ張られていく保。

「別の言葉か…！」

「で、でもさっきと同じこと言ってっ…！」

「それが奴等の力ということだ！ とにかく、あのバカをっ…！」
焦ったように言いながら、箆也が言玉を握る手に力を込める。

「第六音、“か”：解っ…！」

「“襲”！」

「なっ…！」

箆也が言玉を武器へと変形させるその前に、保を引き寄せたその男が、自分の方へと向かってくる保目がけて、先程の白い光の玉を向けた。

「うっひゃああゝ！」

「あっ…！神…！」

「ダメだ！こっから撃ったら、保にも当たる！」

「高市くんっ…！」

光の玉の迫り来る保に、空中の三人が表情を険しくする。

「いっひゃああああゝ…！」

目前に迫る攻撃に、一層の叫び声をあげる保。

「ううううっ…！」

「ひるがえ“翻せ”」

「えっ…？」

保が諦めるように、固く目を閉じたその時、横から入って来る言葉が聞こえ、保は戸惑うように瞳を開いた。すると、目の前まで来ていた光の玉が、急に方向を転換し、器用に保の体を逸れて、後方へと飛んでいった。

「あ、あれ…？」

飛んでいった光の玉を見送り、地面に着地した保が目丸くする。

「何だあ？」

「今の言葉は…」

大きく首を傾げるアヒルの横で、そつと眉をひそめる箆也。

「ヒヒっ、雑魚相手に随分と苦戦してるねえ？安団諸君っ」

『…っ！』

背後から聞こえてくる声に、アヒルたちが同時に振り返る。

「あっ…！」

「それでも五団の一つなわけえ？ヒヒっ」

アヒルたちが振り返ると、そこには少し口元を緩めた、女性のような柔らかな顔立ちの青年が立っていた。その横には前髪の長い、

少し不気味な雰囲気の少年と、ピアスをつけた、派手な金髪頭の青年の姿もある。

「へへっ！ 久し振りじゃん！ 安の神様！」

「お、お前らは……！ 誰だっけ……？」

「だあああっ！」

アヒルへと馴れ馴れしく声を掛けた金髪の青年が、首を傾げるアヒルに、思わず肩すかしを喰らう。

「俺っちじゃん！？ “部守”^{へもり}の辺見兵吾！ 遊園地跡でバトったじゃんっ！？」

「あああ。そういやあ、そんな奴も居たっけかなあ」

必死に主張する兵吾に、まだ思い出しきれていない様子で呟くアヒル。そのやり取りの間に、空中に上がっていたアヒルたち三人が地面へと戻り、兵吾たち三人のすぐ前へと降り立つ。

「でも、こっちの奴等は見覚えねえーなあ」

「“比守”^{ひもり}の昼川ヒロトと、“保守”^{ほもり}の穂並蛍だ」

「ほおー……よく覚えてた……」

二人の名を言う籠也に、蛍が感心したように声を漏らす。

「ヒヒっ、よっぽど、ボクにヤラれたことを根に持ってたかなあ？

加守くん」

「忘れたか？ 勝ったのは僕だ。比守」

籠也とヒロトが、鋭い視線を交わす。

「比守、部守って……この人たちも、五十音土ってこと？」

「ああ、前戦った、ハ行の連中だ」

問いかける七架に、アヒルが短く答える。

「けっど、何でお前らがここにっ……」

「いひゃあああ……！」

「あっ？」

ヒロトたちへと問いかけようとしたアヒルが、城の前の方から聞こえてくる、大きな叫び声に振り返る。

『“襲”^{しゅう}！』

「いぎゃあああゝ！」

アヒルが振り返ると、そこには現れた連中に言葉を放たれ、その攻撃から、必死に逃げ回っている保の姿があった。

「まだやってたのか、あのバカは」

「助けないとっ」

呆れる籠也の横で、七架が右手で強く、言玉を握り締める。

「第二十一音、“な”解放！」

言玉を真っ赤な薙刀へと変形させ、七架が素早く構えを取る。

「“薙^なぎ払え”！」

『ぎゃああああっ！』

七架が薙刀を振り下ろすと、その刀先から赤い一閃が放たれ、保を取り囲んでいた連中を二十人ほど、一気に吹き飛ばした。

「よし！」

「容赦ねえーな…奈々瀬…」

満足げに頷く七架を横目に、アヒルが少し引きつった表情を見せる。

「ふうゝ、助かったあ」

「まだまだ！」

「へっ？」

ホッと一息ついていた保のもとへ、若い女が飛び出してくる。

「“蹴^{しゅう}”！」

「うっ…！」

白い光を纏った右足を、上空から保へと振り下ろす女に、保の表情が再び歪む。

「ひええええゝ！」

「保っ…！」

叫ぶ保に、アヒルが素早く銃を構えようとする。

「“踏^ふみ潰せ”」

「えっ？」

足を振り下ろそうとした女の耳に届く、一つの言葉。

「グアアア！」

「えっ!？」

空から舞い降りるようにして現れた、金色の光を纏った一頭の虎が、保を攻撃しようとしていた女に、上から勢いよく襲いかかる。

「と、虎っ!？ きゃああああ！」

降り落ちて来た虎に踏み倒され、女が強く地面へと押しつけられた。

「と、トラさんっ!？」

「ウフフ!とつてもいい感じよお、さすがは私のトラトラ子っ」

「へっ?」

目の前へと降りて来た虎に戸惑っていた保が、その虎の後方から聞こえてくる声に顔を上げる。

「あっ!」

虎のすぐ後ろまで歩み寄って来たのは、ふわふわとした短い髪の毛の、愛らしい顔立ちの少女であった。少女はその可憐な表情を鋭くし、座り込んでいる保を、まっすぐに見下ろす。

「間の抜けた顔っ。灰示様とは大違いっ」

「えっ!？」

保から視線を逸らし、素っ気なく呟く少女。だが保には、その少女の言葉の意味が理解出来ず、大きく首を傾げるだけであった。

「あいつ確か、“不守”^{ふもり}の!」

「不二不治子じゃんっ」

アヒルに答えるように、兵吾が不治子の名を放つ。

「ハ行が勢揃いというわけか。どういうことだ? あなたたちは、波城灰示の一件で処分中のはずだろう」

「処分中だから、ここに居んじゃんっ?」

「何っ!？」

兵吾の言葉に、眉をひそめる籠也。

「七声討伐に向かった安団の援護にあたれっというのが…韻からの命令…」

「処分中のボクらとしては、その命令に逆らうことが出来るはずもなく、言わば強制的にこの場にいるってわけ。ヒヒッ」

「成程な」

蚩とヒロトの説明を聞き、箆也が納得したように頷く。

「僕たちを助けたのは、別にあなたたちの本意ではないというわけか」

「そういうこと。ヒヒッ」

箆也の言葉に、ヒロトが含んだ笑みを浮かべる。

「韻からの命って、言姫さまかな？」

「ああ、僕たちのために思ったのか、ただ単に僕たちだけでは力不足と思ったのか」

「まあいいじゃねえか。仲間が多い方が、心強えしよっ」

怪訝そうに眉をひそめる箆也に、アヒルが明るく声を掛ける。

「別に仲間が増えたわけではないだろう。こいつ等は、僕たちの敵だ」

「なんでえ？こいつ等、もとは灰示の仲間だったんだぜ？んじゃあ、俺たちの仲間みたいなもんだろっ」

「どこかだっ」

よくわからない言い分をするアヒルに、箆也が呆れたように肩を落とす。

「ほおー…単純な思考回路の神様…」

「ヒヒッ、加守くんが苦労するはずだね」

そんなアヒルと箆也の様子を見て、ヒロトが楽しげに笑う。

「お前ら、援護してくれるってことは、ここは任せていいのかあ？」

「おう！俺っちに任せとけじゃん！神様あ！」

アヒルの呼びかけに、兵吾が右手を高々と突き上げ、気のいい返事をする。

「まあ一応命令だし…これ以上、何かやって…五十音士の資格は剥奪されたくないから…」

「ここは引き受けてあげるから、君たちはとっとあの城へ行くと

いいよ、ヒヒっ」

「わかった！ありがとうな！」

満面の笑みを浮かべ、ハ行の面々へと礼を言うアヒル。

「ヒヒっ、じゃあ道作りといこうか。不治子」

「えええっ！不治子にまっかせといてえ！ウフフ！」

ヒロトの呼びかけに、前方に立つ不治子が大きく答える。

「増えろ」！トラトラ子！」

不治子の言葉通り、金色の光を纏った虎が次々と分裂し、その数を倍、倍へと増やしていく。

「“振り払え”！」

『グガアアア！』

数十頭へと数を増やした虎が、城前に立ち塞がる連中へと、一斉に飛び掛かっていく。

「へへっ！」

緑色の言玉を、右手の中へと取り込む兵吾。言玉が手の中に消えると、右手が強い緑色の光を放ち始める。

「“凹め”ええ！」

『ぎゃああああ！』

光り輝く右手を、兵吾が勢いよく振り下ろすと、地面に地割れのようにヒビが入り、その直線上にいた数人が、隙間に呑み込まれた。

「ヒロト…」

「あああっ」

蛍の呼びかけに頷き、ヒロトが青い言玉を持った右手を、高々と挙げる。

「“浸せ”！」

『な、何っ！？』

ヒロトの言葉に反応し、ヒロトの言玉が強い青色の光を放つと、地面から水が生じ、囲いのないというのにその水位をあげて、連中を水に浸し始めた。

「蛍っ」

「うん：」

ヒロトの声に頷いた蛍が、一步前へと出て、右手の指に挟むようにして持った白い言玉を、水の中の連中へと向ける。

「ほとぼし 迸れ”：」

『ぎゃああああっ！』

蛍が言葉を呟くと、白い閃光のようなものが、一瞬にして浸す水の中を駆け巡ると、浸された連中が、一斉に叫び声をあげ、力なくその場に倒れ込んだ。

「ウフフ！開いたわよお？神様っ」

「おう！行くぞ！」

「ああっ」

「うん！」

連中を蹴散らし、城へと向かうまっすぐな一本道を見事に作り上げ、不治子が得意げにアヒルを呼ぶと、アヒルは皆へと声を掛け、籠也、七架とともに勢いよく、その出来上がった道を駆け抜けた。

「ほおくらっ、あんたもとっとなんか行きなさいよおっ」

「へっ？ああ、は、はい！」

不治子に促され、不治子のすぐ横でまだしゃがみ込んでいた保が、慌てて立ち上がり、城へと駆けていくアヒルたちの後を追いかけるようにする。

「あっ！」

走りだした足をすぐに止め、振り返る保。

「あ、あのっ：！」

「へえっ？」

声を発する保に、不治子が振り向く。

「あ、ありがとうございました！」

「……っ」

大きな笑顔で礼を言う保に、少し驚いたように目を見開く不治子。不治子に深々と頭を下げた後、保は再び体の向きを変え、アヒルたちの後を追って、城へと駆けて行った。そんな保の背中を、不治子

がまっすぐに見つめる。

「灰示様なのに、負けたりなんかしたら、許さないんだからっ…」
どこか願うような不治子の声が、城の中へと消えていく保の背
中に向けられた。

「こ、このっ…!」

「五十音士めっ…!」

不治子たちの攻撃で倒れていた連中が、苦しげに表情を歪ませながらも、次々と立ち上がっていく。立ち上がるその者たちを回し見し、目を細める不治子。

「さあゝて、じゃあとっ々と片付けちゃおうかあゝヒヒっ」

「ほおー…実に面倒だけど…」

「へへ!俺っちたちの力、見せつけてやろうぜえ!」

「ウフフっ!そうねえ」

不治子の周りに集まって来るヒロトたちの言葉に、不治子もそつと笑みを浮かべた。

Word. 28 スレ違ウ言葉 (3)

『はあっ…！はあっ…！はあっ…！』

ヒロトたちハ行四人の援護を受けたアヒルたちは、城の前で待ち受けた連中を越えて、一直線に城へと向かった。大きな黒い門を通り抜け、古い蔦だらけの、大きな石扉の前へと辿り着く。

「ここか。神」

「ああっ」

籠也に呼ばれ、アヒルが扉のすぐ前へと立つ。

「“開^あけ”…！」

アヒルはその扉へと銃口を向け、思いきり引き金を引いた。赤い光の弾丸が直撃すると、石扉はギシギシと軋むような音を響かせながら、両側からゆっくりと開いていく。

『……っ』

扉の向こうに見えるくる景色に、アヒルたちが皆、緊張するように息を呑む。

「ようこそお、我が“七声”の城へえっ」

扉を開いてすぐさま聞こえてくる声に、皆が一斉に顔を上げる。

「歓迎いたしますよお？安団の皆様っ」

「お前はっ…！」

扉からすぐのところにある階段の、途中の踊り場に立ち、城へと入ってきたアヒルたちを高々と見下ろす、白いスーツに、細目の男。

「棘一…！」

「轟、と呼んでいただきましょうかあ。棘一は偽名ですのてえ。まっ、轟も偽名ですがっ」

名を呼んだアヒルに、まるで注意でもするかのように言い放つ轟。笑みを作り、細められた瞳がかすかに覗き、冷たく突き刺すようにアヒルたちを見つめる。

「あの人が、元“止守”の…？」

「ああ。それに今は、於の神の奴から奪った“お”の言葉も持ってやがる。気を付けろ」

問いかける七架に、注意を促すように言うアヒル。

「ののの…」

「こちらでも海苔次ではなく、罵ののしりとお呼び下さあゝいっ」

轟の横から主張するように、『の』の言葉を呟く大男。罵の言葉を通訳するように、轟が言う。

「相変わらず、頭の悪そうな顔していらっしやいますねえ、安の神」
「ああんっ!？」

毒を含んだ発言をする轟に、アヒルが思いきり顔をしかめる。

「止せ、神。安い挑発に乗るな」

「クール発言が目立つ加守さんの愛読書が“恋盲腸”とは、世も末ですねえ」

「……っ」

アヒルを宥めようとしていた箆也が、続く轟の言葉に、眉を引きつる。

「僕のこととは、何を言われてもいい。だが、恋盲腸を馬鹿にするこ
とだけは許さない」

「ちよつとカッコ良く言っただけ、すっげえダサイぞ?」

強気に言い放つ箆也に、アヒルが思わず突っ込む。

「正直、こんなにお早い到着とは思ってもみませんでしたよお。な
ので、お茶も淹れられませんでしたあ」

「はあっ! 万年遅刻のアヒルさんなのに、早くお邪魔しちゃって、
すみませえくん!」

「うっせえ! 敵に謝ってんじゃねえよ!」

轟の言葉を真に受け、勢いよく謝り散らす保に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「あんなにも援軍が来るとは、思ってたんですけどねえ。しかも、
かつては敵だったハ行の皆さんとはっ」

「何故、そんなことを知って…」

「我が同胞が、教えてくれましたのでっ」

「……っ」

その言葉に、一気に曇る箆也の表情。ハ行のことを知る轟の同胞など、一人しかいるはずもなかった。

「まあですが、折角のお客様です。厚く歓迎いたしましょうっ」

「結構だ」

「そういう人の好意を、すぐさま無下にするとところ、弟さんにそっくりですねえ」

あっさりと拒否する箆也に、轟が少し困ったような笑みを浮かべる。

「あなたに檻也のことを、語られる筋合いはない」

「おやおや、もしかしくなくともワタクシ、嫌われてますう？」

しかめた表情を見せる箆也に、さらに怒りを買わせるような、そんな言い方を見せる轟。

「弟さんの“お”の言葉を、いただいちゃったからでしょうかねえっ」

「…………」

試すような笑みを浮かべる轟に、箆也がさらに眉を引きつる。

「では、このお城内でのルールを説明いたしますねえ」

「ルールっ？」

急に話を変える轟に、アヒルが首を傾げる。

「あなた方の目的はやはり、夢言石の奪還ですかねえ？ 安の神」

「当たり前だろっ」

「そうですかあ。では、安の神と安団の皆さんには、我々、七声と戦っていたくしかありませんねえ」

「ええっ!？」

「安心しろ。バカ一名以外は皆、そのつもりだ」

驚く保の横で、箆也がはっきりと言い放つ。

「この城の至るところに、七声の幹部が待機しておりますので、安団の皆さんには散っていただき、それぞれ対戦していただきますう」

「それでどうすんだっ？ 対戦で多く勝った方が勝ちってルールか？」
「いいええー、この城でのルールはもつとシンプルですっ」
問いかけるアヒルに、轟が大きく首を横に振る。

「負けた方が、言葉を失います」

「なっ……！」

「何っ……!？」

轟のその言葉に、アヒルたちが皆、大きく目を見開く。

「言葉を失う、だとっ……？」

「ええええつ」

聞き返した籠也に、轟が楽しげに頷く。

「現在、この城全体が、弔様の持つ夢言石の力に包まれていますのでえ、負けた者は自動的に、持っている言葉を吸収される形となりますう」

「そんなことっ…」

一氣に、険しい表情となる筈也。

「そんなルール、認められるはずがっ……！」

「うわあああああ！」

「きゃあああ！」

「何っ……!？」

籠也が轟に對し、強く言い返そうとしたその時、アヒルと籠也の両側の床が、落とし穴のように勢いよく開き、真上に立っていた保と七架が、それぞれの穴に、吸い込まれるようにして落ちていく。

「高市っ！」

「ひえええええ！」

籠也が止める間もなく、保は叫び声をあげ、穴へと落ちていく。

「奈々瀬！」

落ちていく七架へ、必死に手を伸ばすアヒル。

「あ、朝比奈くっ…！」

「あつ……！」

七架もアヒルへと手を伸ばしたが、その二つの手が触れ合うこと

はなく、七架はそのまま、穴の下へと姿を消していった。

「あああ、それと言いついて忘れてましたあ」

穴を見下ろし、茫然とする二人へ、わざとらしく言い放つ轟。

「城に足を踏み入れたその瞬間からあ、このルールには従っていた
だくことになっていますのでえっ」

「クっ…」

冷たく微笑む轟に、アヒルは険しい表情を見せる。

「さあゝて、ではこちらも、とっととゲーム開始といきましょうか
あ」

轟がスーツの胸ポケットから、スーツの色と同じ、真っ白な言玉
を取り出す。

「罵、あなたは加守さんの相手をお願いしますう」

言玉を軽くお手玉しながら、轟が罵へと言い放つ。

「ワタクシは安の神のお相手をつ…」

「のの…」

轟の言葉に、異論なく返事をする罵。

「神の言葉、もう一つ頂くとしましうかあっ」

「…っ」

微笑む轟に、アヒルがそっと目を細める。

「上等だあ！やってやんっ…！」

「神」

「へっ？」

やる気満々で銃を構えようとしたアヒルが、簞也に呼び止められ
る。

「何だよ？簞也。今、俺、カッコよく決めようとしっ…」

「僕に、あの男と戦わせてほしい」

「えっ…？」

思いがけない簞也の言葉に、驚いた様子で眉をひそめるアヒル。
だが簞也は、ただ真剣な表情で、まっすぐにアヒルを見つめていた。
「こんな勝手を言うのは、神附きの行いとして間違っていると理解

している。だが、どうしても戦わせてほしい」

「箆也っ…」

いつになく本気な様子の箆也に、アヒルが少し目を細める。

「おっやあゝ？そこまで、加守さんにご執心いただけるとは、光栄ですねえっ」

そこに階段の上から、轟が口を挟んでくる。

「やはりいゝ、弟さんの言葉を奪ったこと、怒ってらっしゃるのでしょうかあ？」

「……っ」

わざとらしく問いかける轟に、箆也がかすかに表情を歪める。

「箆也」

「まあ、そういうことだ」

再び名を呼んだアヒルに、箆也が轟の言ったことを認めるように一つ、頷く。

「こんな怒り、檻也には迷惑なだけかも知れないがな」

「……………」

そっと呟く箆也に、アヒルが少し考えるように間を置く。

「箆也」

「……？」

呼びかけるアヒルに、俯いていた箆也が顔を上げる。

「生まれてこのかた十五年、弟やってきた俺の意見を言わせてもらうとなあ」

腕組みをしたアヒルが、少し偉そうにしながら、箆也を見る。

「どおんなことがあったとしても、俺は絶対、一生、兄ちゃんを嫌いになったりなんかしないっ」

「……っ」

アヒルの言葉に、箆也が目を見開く。

「だいたい弟がそうだと思うぞおっ？俺の勘だけどなっ」
「神…」

明るく微笑むアヒルに、つられるように笑みを零す箆也。

「だから、あいつとはお前が戦え、箆也」

微笑んだアヒルが、まっすぐに箆也を見つめる。

「弟の言葉、取り返して来い」

「……ああッ」

アヒルの言葉に、箆也が大きく頷いた。

「五十音第六音“か”、解放！」

箆也が言玉を変形させ、姿を変えた一本の格子を力強く構え、鋭く轟を見上げる。

「おやおや、神に振られてしまいましたかあ。こんな空気じゃ、戦わないわけにもいきませんしねえ」

闘志をみなぎらせている箆也を見下ろし、轟が少し困ったように肩を落とす。

「仕方ありませんねえ、神はあなたにお譲りしますよお、罵」

「の…」

轟の言葉に頷くと、罵がすぐさま一步前へと出て、轟よりも前に立つ。

「おっしゃあ！お前の相手は俺だあ！大男！」

出て来た罵へ向け、勢いよく声をあげるアヒル。

「どっからでもかかって来ッ…！」

「の…“登、^{のぼ}れ”…」

「へっ…？のおおおおッ！」

罵の言葉に包まれ、アヒルが床から浮き上がると、そのまま一気に上昇し、拭き抜けとなっている上方へと勢いよく上がっていった。アヒルの姿は二階か三階か、とにかく一階からは見えなところまで行ってしまう。

「“登、^{のぼ}る”…」

罵がもう一度、言葉を呟き、アヒルの後を追っていくようにして、自らも上方へと登っていく。

「場所を移しましたか。神様と離れ離れになってしまいましたねえ」
「問題ない」

動揺を誘うように言い放った轟であったが、箆也は冷静に言葉を返した。

「我が神は、あの程度の者に負けはしない。それに…」

箆也が細めた瞳で、鋭く轟を見つめる。

「僕の目的は、あなたに勝つことだけだ」

はつきりと言い放つ箆也に、轟は楽しげに両手を広げる。

「いいでしょう。兄弟諸共、ワタクシに言葉を献上していただくと思いますかねえ」

「……っ」

箆也は格子を構え、握るその手に力を込めた。

「のおおおお！うおっ！」

罵の言葉により、拭き抜けの城の中を上昇したアヒルは、途中の空中で弾き飛ばされ、柵を越えて、三階部分へと転がり込んだ。カーペットの敷かれた床を転がり、アヒルが体を起こす。

「痛つつうー！ここはっ…」

「三階の広間よ…もう一階、上に上がれば、玉座のある王様のお部屋…」

「……っ」

耳に入ってくるその声に、アヒルがハッとした表情を見せる。

「あっ…！」

床についた手に力を込めるようにして、勢いよく顔を上げるアヒル。

「そこに行けば、夢言石を持った弔が居るわ…」

「さっ…」

目の前に立つその人物に、アヒルが大きく目を見開く。

「まあ…行ければの話だけれど…」

「囁…」

アヒルの前へと立っていたのは、落ち着いた表情を見せた、囁で

あった。

「きゃああ！」

一方、穴に落ちた七架はしばらくの間、真っ暗なトンネルのような細いところを通り、やっとのことで明るい光のある場所へと出た。
「痛たたっ…ここは…？」

少し後頭部を押さえ、制服についた埃を払いながら、七架がゆっくりと立ち上がる。

「お庭…？」

七架が見渡した周囲に広がっているのは、色取り取りの花の咲く、豊かな庭園であった。一見、外に出たようにも思えるが、その花畑の先には石の壁が見え、天井も石造りで、人工の光が花を照らしていた。

「お城の中に、お庭が…」

「あつらあ？ お客様かしらあ？」

「……っ」

前方から聞こえてくる声に、七架がその表情を鋭くし、右手に持っていた薙刀を構える。

「誰っ…！？」

「ウッフ。あらあら、可愛らしいお嬢さんっ」

花畑の真ん中に置かれた、真っ赤なソファアの上から、気だるいような、ゆっくりとした動きで立ち上がるのは、色気たっぷりの、美しい女性であった。

「私は“七声”幹部の一人、償つぐないよお」

「つぐ、ない…」

償の名を繰り返しながら、七架が険しい表情を作る。

「歓迎するわあ。奈守のお嬢さん」

真っ赤な口紅を塗った唇を、そっと緩める償。

「私、可愛い子を甚振^{いた}るのは大好きなの。ウッフっ」
「……っ」

楽しげに微笑む償に、七架はさらに厳しい表情を見せた。

「うわあああっ！」

同じく、七架とは別の穴から落ちた保も、トンネルのような場所を通り抜け、広い部屋へと飛び出た。こちらは七架の辿り着いた庭園とは逆に、壁とやたら高い天井以外何もない、だだっ広いだけの質素な部屋であった。

「ふう〜、死ぬかと思ったあ」

ゆっくりと起き上がった保が、無事であった自分を確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

「はあ！生きてるだけで迷惑な俺が、死ぬかと思ったとか言っちゃって、すみませえ〜ん！」

謝る相手もないというのに、保が勢いよく叫び散らす。

「ふう〜、頭打ったかなあ？何か痛いやあ」

保が少し顔を歪め、後頭部へと手を伸ばす。

「痛たたたっ、痛い痛い。あっ…」

その言葉を発した途端、保がふと、表情を止める。

「“痛い”…？」

もう一度ゆっくりと、その言葉を繰り返す保。

「ううっ…」

保が頭を抱え込むようにして、深く俯く。

「何、だろ…？さっきから、何かっ…」

「んだよお？降って来たのは一人だけかあ？」

「……っ」

自分の体に違和感を覚え、戸惑うように額に触れていた保が、聞こえてくる声にゆっくりと顔を上げる。

「こっちは二人だったのに、ナメてんのかあ？轟の野郎っ」

「あっ…」

保が顔を上げると、何もないその質素な部屋の中央に、派手な赤髪青年が立っていた。

「なあ？誘いざない！」

「……………」

「ちえっ、相変わらずのだんまりかよっ」

赤髪の青年が振り返り、壁にもたれかかっている無表情の青年、誘へと声をかける。だが誘は、まるで声が聞こえていないかのよう
に無反応で、赤髪の青年は、諦めるように再び保の方を見た。

「あ、あの、あなたは…」

「ああっ？ああ、俺は“七声”の幹部の一人で、導みちびきってゆっ…」

「噂の地底人さんですね！」

「はあっ！？」

名を名乗ろうとした赤髪の青年、導が、保の突拍子もない発言に、思わず大きく顔をしかめる。

「モグラ星人さんて、結構茶髪率が高いもんかと思ってたんですけど、赤毛のモグラさんもらっしやるんですねえ」

「何だあ？こいつっ…」

自分の世界で話を進める保に、導が呆れきった表情を見せる。

「おい、誘！こいつ、何かややつこしそうだから、とっとと片付けてえんだけど、俺がやってもいいかあ？」

「……………」

導の言葉に、相変わらず反応を示さない誘。

「はあっ、無口と組まされるとストレス溜まんぜっ」

誘に背を向け、導が大きく肩を落とす。

「まあ、返事がねえってことは、オツケイってことでいいだろ！」

「へっ？」

勢いよく右手を振り上げる導に、保が目を丸くする。

「つつーわけで、とっとと倒れて、とっとと俺に言葉、提供してくれよお！五十音士！」

導の振り上げられた右手の中で、輝きを放つ、白い言玉とよく似た宝石の玉。

「“ソウ”！」

「……っ！」

放たれる言葉に、保は大きく目を見開いた。

Word. 28 スレ違ウ言葉 (4)

「囁…」

罵により、城の上階へと押し上げられたアヒルが、三階の広間で遭遇したのは、囁であった。思いのほか早い再会に、アヒルが少し戸惑った表情を見せる。

「あ、ああ…えっと…」

話そうとは思うものの、その言葉に詰まるアヒル。

「よ、よお、囁！一昨日振りだなあ。元気かあ？」

「……………」

無理やり明るい笑みを作り、軽く左手をあげるアヒルに、囁がそっと目を細める。

「私は元気よ…」

囁が口元を緩め、鋭い笑みを浮かべる。

「安の神…」

「えっ…」

呼ばれる名が、いつもとは違うことに気づき、アヒルがかすかに眉をひそめる。

「やっと、重荷だった仲間ごっこから解放されて…とてもいい気分だわ…」

「……………」

微笑んで答える囁のその言葉に、アヒルが表情を曇らせる。

「仲間ごっこ、か…」

「ここに来たのは、韻からの命令…？わざわざ言葉を奪われに来るなんて、ご苦労なことね…」

少し俯いたアヒルを気に留めることなく、囁は言葉を続ける。

「そんなの他の神に任せて…とっとと新しい左守さもりでも探しに行けば良かったのに…」

囁の発言に、アヒルが目を細める。

「新しい左守なんて、いらねえよっ…」

「……？」

俯いたままでそう呟き、ゆっくりとその場から立ち上がるアヒル。そんなアヒルを、囁が眉をひそめながら見つめる。

「それに、韻からの命令受けなくなつて、俺たちはここへ来た…」
立ち上がったアヒルが、銃を握る右手に力を込め、勢いよく顔を上げる。

「お前と、話をするためにっ…！」

「私と…話…？」

力強く叫ぶアヒルの言葉を繰り返し、囁がさらに怪訝そうな顔を見せる。

「相変わらず、可笑しなことばかり言うのね…一体、私と、何の話があるっていうの…？」

「それはっ…」

「のの、のっ…！」

「なっ…！」

アヒルが囁の問いかけに口を開こうとしたその時、アヒルを追うようにして一階から登って来た罵がその場に姿を現した。

「のの…“伸^のび、ろ”…！」

「うっ…！」

罵が言葉を放つと、罵の体から、細い光の紐のようなものが伸びてきて、アヒルを捕えようとする。それを見たアヒルは素早く振り返り、応戦しようと銃を身構えた。

「こっの…！」

「待って、罵」

「のっ…！」

「へっ…？」

囁の声に、アヒルへと向かって来ていた光の紐が、アヒルの目の前でピタリと止まる。

「さ、囁…？」

罵を止めた囁を、アヒルが戸惑うように振り返り見る。

「まだもう少し、安の神に用があるの…あなたはそこで、待機して…」

「のの、の…」

囁の言葉に素直に従うように声を漏らし、光の紐を掻き消した罵は、囁のすぐ横へと降り立って、大人しくその巨体を丸めた。

「囁、あのっ…」

「さあ、話というのは何…？」

「へっ？」

再びアヒルを見た囁が、少し急かすように問いかける。

「聞いてあげるから…早く言ってくれる…？」

「……っ」

見るからにさっさと済ませてしまおうとしている、囁のその様子に、アヒルがそっと目を細める。

「別に、話す内容なんか決めてねえよっ…」

「えっ…？」

アヒルの言葉に、囁が首を傾げる。

「ただ、何でもいいから話したいって思ってたただけだ…何でもいいから言葉を交わせば、もっとこうっ…」

顔を上げたアヒルが、まっすぐな視線を囁へと向ける。

「お前のこと、わかれるんじゃないかって…そう思ったから」

「私を…わかる…？」

アヒルの言葉を繰り返し、またもや眉をひそめる囁。

「ああ。言葉を交わせば、もっとお前と歩み寄れるっつか、今まで見えてなかったお前自身が見えるかもって、そう思ってたっ…」

「くだらない…」

勢いよく割って入って来る囁の声に、アヒルは続けようとしていた言葉を止めた。

「くだらないわ…安の神…」

もう一度、その言葉を繰り返した囁が、まるで睨みつけるように、

アヒルを見つめる。

「わかり合う…？歩み寄る…？よく、そんな綺麗ごとばかり、並べられるわね…」

囁が煩わしそうに、その顔を歪める。

「だから、言葉なんて嫌いなよ」

「……っ」

吐き捨てるように言い放つ囁に、アヒルが少し目を見開いた。

「言葉はいつも、嘘ばかりだわ…言葉はいつも、平気で人を裏切る…」

「囁…？」

怒りでか、かすかに震えた声で主張する囁を見つめ、戸惑うように眉をひそめるアヒル。

「今、この世界に存在する言葉のすべてに、意味なんてない」

囁が鋭い瞳を見せ、声を先程よりも強くする。

「意味なんてないのっ…」

続く囁の言葉を、アヒルは囁をまっすぐに見つめながら、静かに聞き続ける。

「だから、私たちがすべての言葉を奪って…新しく、意味のある言葉をつ…」

「意味はある」

「……っ」

遮るアヒルの声に、囁が眉をひそめる。

「意味ならある…」

「はあ…」

強気に言い放つアヒルに、囁が少し疲れたように肩を落とし、溜息を吐く。

「わからない人ね…その言葉がすでに無意味だわ…」

「無意味な言葉なんて、この世界に、一個もないさっ」

囁に言いながら、アヒルが穏やかな笑みを浮かべる。

「そりゃ人間なんだし、たまには嘘もつくだろうけど、けど、意味

のない言葉なんて、きつと一個もない」

アヒルは笑みを浮かべたまま、はっきりとした口調で言い放つ。

「だから、今まで俺がお前に言った言葉にも、お前が俺に言った言葉にも、絶対に意味はあるっ」

「それは、あなたの勝手な言い分でしょう…?」

堂々と胸を張るアヒルに、またしても煩わしそうな顔を見せる囁。

「そんな主張…ただ、あなただけが思ってることでっ…」

「ああ。別に俺のことなんだから、俺が勝手に信じんのは自由だろっ?」

さらに言い放つアヒルに、囁が少し唇を噛む。

「だから、俺は信じる」

アヒルが口元を緩め、大きく笑う。

「“神”だって言ったお前の言葉は、“仲間”だって言ったお前の言葉は、嘘じゃねえって俺が信じるっ」

「…っ」

アヒルの言葉に、さらに歪む囁の表情。

「これ以上、無意味な言葉を並べても、疲れるだけだわ…罵っ」

「ののっ」

囁が横を振り向いて呼ぶと、罵が背を伸ばし、返事をする。

「もういいわ…私は上へ行くから、後は任せる…」

「のの、の!」

アヒルへ背を向けた囁が指示すると、どこか嬉しそうに、罵は頷いた。立ち上がった罵が、背を向けた囁の前へと出て、アヒルの前に立ちはだかる。

「安の神…」

罵の後方から、囁が振り返り、アヒルへと声を掛ける。

「精々、上に上がって来れるよう…頑張るといいわ…」

髪を翻し、囁はまた、アヒルへ背を向けようとする。

「じゃあ…“さような…”」

「囁っ…!」

「……っ」

一昨日の夜と同じように、別れの言葉を告げようとした囁であったが、その言葉は大声で呼ぶアヒルの声に、勢いよく掻き消された。その声に、囁がかすかに振り返る。

「お前が何回、“さようなら”って言葉を言って、俺たちの前から消えようって……」

アヒルは背を向けたままの囁へと、必死に身を乗り出す。

「俺はお前に、“会^あいに行く”……！」

「……っ！」

アヒルから放たれるその言葉に、囁が大きく目を見開く。

「どんなことやってでも、何度だって、お前に“会いに行つて”やるから……！」

声を張るアヒルの大声が、部屋中に響き渡る。

「この言葉は嘘じゃねえ！意味がないなんて、絶対に言わせねえからっ！」

「……っ」

強く唇を噛み締めた囁が、震える拳を握り締める。

「任せたわよ……罵……」

「ののっ」

念を押すように、もう一度罵へと声を掛けると、囁は“さようなら”の言葉は使わずに、自らの足で階段を上っていき、四階の扉の向こうへと姿を消していった。

「…………」

囁の消えていった扉を、アヒルはしばらくの間、じっと見上げていた。

「のの、のおっ……！」

「……っ」

何やら主張するように、今までよりも大きな声をあげる罵に気づき、扉を見上げていたアヒルが、やっとその視線を下げる。

「やる気満々ってかあ？」

その巨体を激しく動かし、構えを取る罵を見つめ、アヒルが目つきを鋭くする。

「いいぜえ。かかって来いっ」

アヒルが銃を握る右手を一度あげ、ゆっくりと振り下ろして、その銃口を罵へと向ける。

「俺の目的は、お前の向こうにあるんだっ…！」
銃を握る手に力を込め、アヒルが力強く叫んだ。

「はあっ…！はあっ…！」

階段を上がり、四階へと出た囁は、ひたすら続く長い廊下を、息を切らしながら必死に駆け抜けていた。まるで何かから逃げるように、まるで何かを振り払うように、必死に足を動かし、辿り着いた大きな扉の前で、囁が力なくしゃがみ込む。

「はあっ…はあっ…」

乱れた息を整えようと、両手で胸を押さえつける囁。

———どんなことでもやってでも、何度だって、お前に“会いに行つて”やるからっ…！———

「ううっ…！」

思い出されるアヒルの言葉に、囁が胸を押さえていた手をあげ、強く耳を塞ぐ。

「違うっ…違う…！あんなのっ…あんな言葉…！」

「“嘘”、だよ…」

「…っ！」

すぐ上から落ちてくる声に、囁が大きく目を見開き、勢いよく顔を上げる。

「と、弔…」

囁の目の前の扉を開き、開いた扉の向こうから、廊下にしゃがみ込んだままの囁へと声を落としたのは、薄く笑みを浮かべた弔であった。

「あんな言葉は、“嘘”だよ…？囁…」

「……っ」

告げられる言葉に、囁が再び顔を下ろし、深く俯く。

「君はちゃんと、わかっているだろう？囁」

俯いたままの囁へ、弔が間を置くことなく、言葉を落とす。

「この世界に存在する言葉は、みんな、偽りだって…」

「わかってる…」

言葉を続ける弔に、囁が声と呼べるかもわからないほど、かすかな声を出す。

「みんな、虚像だって…」

「わかってるっ…」

囁の口から零れ落ちるその声が、先程少し大きくなり、震えていることが感じ取れる。

「この世界に存在する言葉に、何一つ、意味なんてっ…」

「わかってるわよ…！そんなことっ…！！」

「……っ」

ずっと続いていた弔の言葉は、囁の、怒鳴りあげるような強い声に、一気に掻き消された。

「囁…」

「あっ…」

顔を上げた囁の視界に入る、少し驚いた様子の弔の表情。その弔の顔を見て、囁はハッと気付いたように、耳を塞いでいた手を口にあてた。

「ごめ…ごめん、なさいっ…」

動揺を見せ、言葉を詰まらせながら謝り、顔を上げぬまま囁が、その場でそっと立ち上がる。

「疲れが取れきっていないみたい…部屋でもう少し、休むわっ…」

弔にそう告げると、囁は弔の横を通り過ぎるようにして部屋の中へ入り、その部屋の奥の扉を開けて、そこから繋がっている自室へと、足早に入っていた。

「……………」

囁の消えた部屋の扉を見つめ、弔がそつと目を細める。

「言葉に絶望したあの子が、あれ程の動揺を見せるとは…」
軽く腕を組んだ弔が、意外そうに呟く。

「やはり邪魔な存在だなあ」

扉に背を預け、高い天井を見上げる弔。

「“安の神”というのは…」

天井を見上げる弔が、どこか冷たい笑みを浮かべた。

——愛しているわ…囁……—

——もちろん、君が一番、好きだよ…囁……—

「やめて…やめてっ…」

部屋に入った囁は、その閉めた扉にもたれかかるようにして、その場にすぐさましゃがみ込んだ。思い出される言葉を掻き消そうと、両手で必死に耳を塞ぐ。

——俺はお前に、“会いに行く”…!——

「もう、やめてっ…」

力なく願うような声が、静かな部屋に響き渡る。

「もう、これ以上っ…」

耳を塞いだ囁が、そつとその瞳も閉じる。

「言葉に…裏切られたくないっ…」

その瞳から、透明な滴が零れ落ちた。

Word. 29 はなツチカラ (1)

——負けた方が、言葉を失います——

七声の城、地下一階。吹き抜け大広間。

「ふいっ」

衝撃風の収まらない中、前方を見つめながら、どこか満足げな笑みを浮かべているのは七声幹部の一人、導^{みちびき}。

「今日も絶好調だぜえっ、俺の“爪”^{そま}は！」

そう言って振り上げた導の右手からは、細長い白光が、まるで獣の爪のように伸びていた。その光を見下ろし、導はさらに満足そうに笑う。

「なあ？ お前もそう思うだろ？ 誘^{ごうなう}！」

「……………」

導が振り向き問いかけるが、壁際の青年は、相変わらず無反応であった。

「ちえっ、クソつまんねえ奴っ」

そんな誘に、呆れ果てたように肩を落とす導。

「まあいいやあ！ 何にせよ、これで俺も言葉が貰えるぜえ！」

導が右手の爪の光を消し、伸びをするように両手をあげる。

「早速、弔^{しむらひ}んどこ行っ…」

「居る…」

「あっ？」

部屋の出口へと足先を向けようとした導が、壁際から聞こえてくる小さな声に、眉をひそめる。

「今喋ったの、お前か？ 誘」

導が戸惑うような表情を見せながら、再び誘を見る。

「んだよ、お前、ちゃんと話せっ…」

「何か…居る…」

「ああっ？」

「ハァ…」

「……っ！」

誘の言葉に首を傾げていた導が、後方から聞こえてくる吐息に気づき、勢いよく振り返る。

「チっ…！まだ生きてやがっ…！あっ…？」

振り返り、顔をしかめた導であったが、その表情はすぐに曇った。

「誰、だ？」

「誰…？」

問いかける導に、そっと返って来る声。

「くだらない問いかけだね…」

消えゆく衝撃風の中から見えてくる、風になびく黒髪と、鋭い赤色の瞳。

「答える気にも、なれないな…」

そこに立っていたのは、薄く笑みを浮かべた灰示であった。

「……っ！」

城の前で待ち受けていた七声の手下連中と、戦いを続けていた不治子が、ふとその手を止め、何かに気づいた様子で顔を上げる。

「んん…っ？どうしたんじゃん？不治子」

すぐ横で戦っていた兵吾が、不治子の様子に気づき、不思議そうに声をかける。

「あの方の気配だわ…」

連中の向こうに見える城を見つめ、不治子が満面の笑みを浮かべる。

「また、会えたっ…ウッフ！ウッフ！」

両手を胸の前で組み、不治子が嬉しそうに笑う。

「灰示様っ…！」

「くだらない問いかけだあ？」

灰示の挑発的な発言に、導は正面から乗り上げ、勢いよくその表情をしかめた。

「いいから、誰か答えろつつつてんだよ！俺が用あんのは、さっきの五十音士でっ…！」

「波城灰示…」

「へっ？」

「……っ」

怒鳴りあげていた導が、また小さく落とされる誘の声に、その言葉を送途中で止める。正確に呼ばれる名に、灰示もそっと眉をひそめた。

「太守^{たもり}」高市保に取り憑いた忌…実体を成し、五十音の一つ、“は”の力を持つ…」

「よくご存じで」

スラスラと話す誘に、灰示が皮肉った笑みを向ける。

「こいつが囁の言ってた“波守^{はもり}”の奴か」

導も戸惑っていた表情を消し、納得した様子で灰示を見つめる。

「まあいいやあ！人だって忌だって、構いやしねえ！“爪^{そう}”！」

声を張り上げた導が、勢いよく右手を振り上げる。導が言葉を放つと、その右手の先から、爪のような白い光が三本伸びる。

「俺にその言葉、寄越しなあ！“搔^そ”！」

導が高々と飛び上がり、爪を振り上げながら、灰示のもとへと下降してくる。

「五十音、第二十六音“は”…解放っ…」

灰示が右手に持っていた言玉を握り締め、そっと言葉を落とす。

「“阻^はめ”」

「何っ？」

赤い光を放つ言玉に、下降しながら導が眉をひそめる。

「グっ…！」

導の掻き下ろした爪が、灰示の手の中で変形した、真っ赤な細長い針にあっさりと受け止められる。上空から勢いをつけたというのに、眉一つ動かさずに止め切る灰示に、導は思わず顔をしかめた。

「このっ…！」

「言葉にあるのは“痛み”だけ…」

「あっ？」

爪にさらに力を加えようとした導が、向けられる灰示の声に、少し眉を吊り上げる。

「“痛み”だけだというのに、どうしてそうも言葉を放つんだろうね…人間^{きみ}たちは…」

導を見つめ、灰示が鋭くその真っ赤な目を細める。

「“弾^{はじ}け”」

「ううっ…！」

灰示が言葉を放つと、針と爪の間にまるで磁力でも生じたかのように、導が強い反発を受け、再び上空へと押し戻される。

「クッソ…！」

「“爆^はぜろ”…」

「なっ…！？うっ…！」

上空へと弾き飛ばされた導へと、間髪入れずに針を放つ灰示。灰示の放った針が、導の寸前で勢いよく爆発すると、その爆風の中に導の姿が消えた。

「……………」

仲間が攻撃を食らったというのに、顔色一つ変えずにいる誘。

「ほら…」

針を投げた右手をゆっくりと下ろし、灰示がその口を開く。

「そこにあるのは…“痛み”だけだ…」

「なっ…にが痛みだけだってえっ？」

「……………」

上空から降り落ちてくる声に、灰示が眉をひそめる。

「“装^{そう}”…」

爆風の去った上空に見えてきたのは、得意げな笑みを浮かべる導の姿であった。導の体全体を、導を守るように白い光が包み込んでおり、あれ程の爆発が目の前で起こったというのに、導には傷一つなかった。

「どこも痛くないんですけどお？」

「五十音とは異なる言葉…」

小バカにするように高々と見下ろしてくる導に、灰示の表情が曇る。

「面白いね…」

「面白いだあ？余裕のつもりかよっ」

そっと微笑みを浮かべる灰示に、導が面白くなさそうに顔を歪める。

「いいぜえ？すぐその余裕、掻き消してやる！“早”^{そう}！」

導がまた、先程までと同じ音の言葉を放つと、その瞬間、上空から導の姿が消え去った。導を見失い、灰示が少し眉をひそめる。

「消えた…？どこへ…」

「ここだあ！」

上空ではなく、後方から聞こえてくる声に、灰示が振り返る。

「“早”！“早”！“早”！」

「これはっ…」

何度もその言葉を繰り返しながら、広間の端から灰示のもとへと駆け込んでくる導。だが、その姿は途切れ途切れに見えなくなり、見えなくなったと思うと、一気にその距離が縮まる。導の不自然な動きに、曇る灰示の表情。

「言葉でスピードを上げているのか…」

「当たり前！」

「うっ…！」

灰示が考えているその間に、姿を消していた導が、灰示のすぐ目の前へと現れる。白光の爪の伸びた右手を振り上げる導に、灰示も針を持った右手を突き出す。

「“阻っ…!”」

「遅せえ!“搔”!」

灰示が言葉を放つ前に、一足早く言葉を放った導が、勢いよくその爪を振り下ろした。

「グウ…!」

爪が灰示の左肩から胸にかけて、強く振り下ろされる。三本の爪に斬り裂かれた制服から、真っ赤な血が滴り落ち、灰示の表情が歪んだ。

「クっ…!」

「へへへ!」

斬られた部分を左手で押さえながら、少し身を屈める灰示を見つめ、楽しげに微笑みながら、導が後方へと飛び下がり、灰示との間に距離を取る。

「どうだあ?俺の爪の威力はっ」

爪を振り上げながら、導が得意げに笑う。

「教えてやろうかあ?それが“痛み”だ!ハハハハっ!」

「ああ…!」

「ああんっ?」

高らかと笑っていた導が、不意に聞こえてくる頷きに、上げていた顔を下ろし、そっと眉をひそめる。

「そうだね…!」

滴る血を拭った左手を見つめ、口角を吊り上げる灰示。

「これが…“痛み”だっ…!」

「…っ」

顔を上げ、まるで血に酔うような、不気味な笑みを浮かべる灰示に、導が思わず笑みを止め、その表情を曇らせる。

「な、何だよ?変態かあ?」

苦い笑みを作りながら、灰示へと挑戦的な声をかける導。その額から、一筋の汗が流れ落ちる。

「んなに甚振られんのが趣味なら、望み通り甚振ってやるよお!」

勢いよく叫びあげ、右手を振り上げる導。

「“槽”！」

導が言葉を放った瞬間、灰示の四方から白光の柱が四本、突き上げた。その四本の柱の間に、白光の壁が現れ、まるで水槽か何かのように、灰示を囲う。

「そおら！痛みの贈呈だあ！“送”！」

灰示を囲った光槽の四面から、無数の白光の刃が一気に放たれた。
「……っ！」

無数の刃がほぼ同時に灰示へと直撃し、光槽の中が光でいっぱいになった次の瞬間、大きな音を立てて光槽が弾け飛び、中から光の粒が飛び出してくる。

「ハハハハっ！どうだあ！今の食らっちゃ、痛いかどうかもわからねえぜえ！」

導の高笑いが、広間に響き渡る。

「ハハハハ！これで俺も言葉をっ……！」

「まだ……」

「ああん？」

得意げに言葉を続けようとしていた導が、割って入ってくる小さな声に、顔をしかめながら振り返る。そこには、相変わらず壁際にもたれかかったまま、まだ消えない光の塊を見つめる誘の姿があった。

「まだ……居る……」

「何だとお？」

「ハハハっ……」

「……っ」

誘の言葉に眉をひそめていた導が、聞こえてくる笑い声に、再び前を見る。

「ハハハ……」

「まさかっ……！」

床へと落ちるようにして消えていく光の塊の向こうから、聞こえ

てくるその不気味な笑い声に、見つめる導の表情が強張る。

「あれを食らって、まだっ…!？」

「そう…」

ポタポタと、まるで雨のように止むことなく、流れ落ちる鮮血。

「これが…“痛み”…」

消えた光の中から姿を見せたのは、全身血だらけながらも、苦しみの色一つない表情で微笑む、灰示であった。

「さあ、君にも贈ろう…」

灰示が血の流れる右手を、そっと振り上げる。

「この、“痛み”を…」

「うっ…!」

鋭く向けられる微笑みに、導が思わず怯むように腰を引かす。

「こ、こいつはっ…!」

「“爆^はぜろ”」

導が焦ったように声をあげるその途中で、灰示が言葉を遮るように真っ赤な針を投げ放つ。

「さっきと同じ言葉かよ!なら!“装”!」

全身を光で包み込み、守りを固める導。

「こいつを使えば、無傷でっ…!」

自信を覗かせる笑顔を見せる導の前で、先程と同様に、灰示の針が爆発をする。

「な、何っ…!?!」

先程よりも爆発の規模が大きいことに気付き、導が焦りの表情を見せる。

「うわああああっ!」

装の言葉では爆発を防ぎきれず、その爆風を受け、勢いよく吹き飛ばされる導。飛ばされた導が、誘いのもたれかかっている壁のすぐ横へと背中を打ちつけ、その壁の一部が崩れ落ちる。

「ううっ…う…」

えぐれた壁の中から体を起こしながら、苦しげな声を漏らす導。

「何だ…？あいつ、さっきより力が上がってやがるっ…」

呼吸を整えるように、左手で胸を押さえながら、導が少し戸惑ったような表情を見せる。

「何でだっ…？」

「相手は…忌…」

「…っ」

誰にともなく問いかけた導の声に、答えるように言葉を返したのは、すぐ近くでもたれかかっている誘であった。

「誘…」

「忌は…“痛み”により、その強さを増す生き物…」

「痛、みっ…」

誘の言葉を聞きながら、導が先程の灰示の言葉を思い出す。

「まさかっ…！いくらあいつが実体化した忌だからって、自分の痛みで力を増すなんて、んな芸当っ…！」

「“倍^{ばい}せ”」

「あっ…！」

導に答えを出す時間を与えることなく、灰示が次の言葉を放ち、針を投げ込んでくる。投げられた一本の針は、灰示の言葉を受け、その数を倍へ、倍へと増やし、やがて無数の針となって、導へと襲いかかる。

「こっの…！“掃^{そう}”！」

右手に伸びたままの爪を振り切り、導が向かってきた針を一瞬で一掃する。

「ああんっ？」

一掃された無数の針の向こうから、再び向かってくる一本だけの針。

「たったの一本で何が出来るってんだよ！“爪”！」

迫り来る一本の針を叩き落とそうと、導が勢いよく自らの爪を振り下ろした。

「“破^{はれ}裂”…」

「何っ…!?!」

さらに聞こえてくる言葉に、爪を振り下ろしたまま、導が大きく目を見開く。

「まさかっ…! うっ…! うあああっ!」

導が爪をぶつけた途端、灰示の針が破裂し、無数の小さな針となつて、導のいる壁一面へと正面から降り注いだ。

Word. 29 はなツチカラ (2)

「うあっ…あ…」

えぐれた壁にあいた穴の中へと、再び力なく倒れ込む導。

「ふう…」

導が倒れたことを確認し、両手の血を軽く拭いながら、灰示が一息つくように肩を落とす。

「ん…？」

不意に灰示が目を細め、右方を振り向いた。

「……………」

灰示の振り向いた先に立っていたのは、右方の壁にもたれかかるようにして、相変わらず無表情のまま立ち尽くしている誘であった。先程まで、導の倒れ込んでいる壁にもたれていたのだが、灰示の針が壁に降り注いだ時にか、いつの間にか移動したようである。

「僕の針を…避けた…」

そんな誘を見つめながら、灰示が眉をひそめる。

「ハアっ…！ハアっ…！」

「……………」

聞こえてくる荒い息遣いに、灰示が再び前を見る。

「ク、クッソっ…！」

えぐれた壁の穴から立ち上がり、吐き捨てるように声を落とす導。その体の所々に、灰示の先程放った針が刺さっており、そこから赤い血が流れ落ちていた。息遣いを聞くと、相当のダメージを負っているようである。

「どうだい…？少しは痛みを理解したかな…？」

「ハア…ハア…」

灰示の問いかけに、導が苦しい表情をさらに歪ませる。

「冗談じゃ、ねえっ…」

導が途切れ気味の声で、必死に言葉を吐き出す。

「俺は：俺は言葉を手に入れるんだっ：」

左手で、右手に刺さっている針を引き抜き、導が再び爪の伸びた右手を構える。

「てめえの言葉を、奪い尽くすんだよおっ：！！」

大きく声を放ち、導が灰示のもとへと駆け込んでいく。

「早””！」

言葉を放った導が、先程と同じように、その速度を増し、一瞬一瞬姿を消しながら、灰示へと一気に距離を詰める。

「食らええ！ “搔”！」

灰示の目の前まで迫り、導が勢いよく爪を振るう。

「跳ねろ”」

灰示が言葉を放ち、その場を高々と飛び上がって、導の爪から逃れる。力強く振り下ろされた爪が、床を大きくえぐりあげた。

「避けんのかよっ」

導が爪を床からあげ、上空へと跳び上がった灰示を見上げる。

「痛みが欲しいんじゃない、なかったのかよっ：！！」

灰示を追うようにして、天井めがけて、勢いよく飛び上がる導。

「僕は別に痛みが欲しいわけじゃない：」

飛び上がってくる導へと、灰示が両手で八本の針を構える。

「痛みを知って欲しいだけだよ」

灰示の両手の針が、一斉に導へと放たれる。

「爆ぜろ”」

「……っ」

向かってくる針に、上空へと上がりながら、導が少し目を細め、爪を振りかぶる。

「“霜”！」

「なっ：」

導が言葉を吐き、爪を振り切ると、灰示が向けた八本の針がすべて、一斉に氷に包み込まれてその動きを止め、力なく地面へと落ちていった。落ちていく針を見送り、灰示が表情を曇らせる。

「霜：同音なら、どんな形態でも使えるのか…」

「余所見してる場合かぁ!？」

灰示のすぐ目の前まで飛び上がってくる導に、灰示が落ちていく針から顔を上げ、再び右手で針を構える。

「“爪”！」

「“弾^{はじ}け”っ」

導の振り下ろす爪を、言葉を使って針で弾く灰示。

「その程度の言葉では…」

「一つ止めたからって、油断すんなよお!? “増^{ぞう}”！」

「何っ：!？」

右手の爪を弾かれた導が、今度は左手から白光の爪を伸ばす。

「濁音もっ：!？」

「そおくらっ、くれてやるよお！」

この戦いで初めて、焦りの表情を見せる灰示に対し、導が伸びたばかりの左手の爪を突き出す。

「“痛み”をお！」

「うううっ：!」

導の爪が、灰示の右鎖骨のすぐ下付近を、勢いよく貫いた。その与えられる痛みにも、灰示が大きく目を見開く。

「うあっ：」

導が爪を引き抜くと、血が上空に飛び散り、灰示は態勢を崩して、そのまま力なく地面へと降下していった。倒れ込んだ灰示の近くの床に、真っ赤な血が滲む。

「ハハハハっ：!」

笑い声をあげながら、導も灰示に続くように、床へと降りてくる。「さつき、痛みを知って欲しいとかどうとか言ってたよなあ？」

床へと足をついた導が、倒れたままの灰示へと話しかける。

「お前のお陰で、十分知れたぜえ？」

導が、皮肉った笑みを浮かべる。

「言葉で痛みを与えることの楽しさがなあ! ハハハハっ！」

「……っ」

広間に響き渡る導のその大きな声に、倒れたままの灰示が表情を動かし、力なく床につけていた手を握り締めた。

「楽、しい……？」

灰示が高い天井を見上げたまま、小さく導の言葉を繰り返す。

——痛いっ…痛い…！痛いよおっ…！！——

「あれ、が…？」

ずっと昔に出会った、激しい痛みの中で、叫び続けていた少年の姿を思い出し、灰示がそっと目を細める。

「あれが…楽しい…？」

もう一度、言葉を繰り返した灰示の全身から、部屋全体に広がるほどの、巨大な黒い光が放たれた。

「なっ…！？」

あっという間に部屋中に広がっていく黒光に、笑っていた導が戸惑いの表情を見せる。

「な、何だぁ？これはっ…」

周囲を見回し、誰へともなく問いかける導。その黒光は、ただの光ではなく、どこか重苦しい空気を纏っていて、包まれるだけで押し潰されてしまいそうな、そんな力を感じた。

「これは一体っ…」

「くだらないね…」

聞こえてくる声に、辺りを見回していた導が、素早く正面を見る。
「あっ…！」

「実にくだらない…」

正面を振り向いた導の視界へと入ってきたのは、立ち上がった灰示の姿であった。まだ血も滴り落ちているが、バランスを崩すこともなく、ごく自然に立っている。

「そんなっ…あの傷で…」

「まさに愚の骨頂…愚かな人間の代表のようだね、君は…」

「……っ」

言葉を続ける灰示を見つめながら、導が少し眉をひそめる。

「体から光が…漏れ出してる…？」

導の見つめる灰示の全身から、溢れ出るように空中に流れていく黒光。それは部屋に広がっているものよりも色濃く、さらに禍々しい空気を纏っている。部屋中に広がるこの黒光の発生源が、灰示であることは、一目見れば明らかであった。

「忌の姿に戻ろうとしてんのか…？けど、普通の忌じゃ、ここまでの光はっ…」

「君みたいな人間がいるから…世界から“痛み”が消えないんだ…」戸惑う導に、灰示が言葉を投げかける。

「でもそれじゃあ、いけない…」

そつと吊りあがる、灰示の口角。

「この世界から“痛み”を消すのが…彼と僕の交わした契約だからね…」

「契約、だと？」

「だから君に、もう一度、教えよう…」

「えっ…？」

「“破”^は」

「……っ！」

灰示の右手から突き出してきた黒く細い光線が、空中を駆け、一瞬で導の左腕を貫いた。

「うあああああっ…！」

光線に貫かれた左腕から、噴き出すように真っ赤な血が飛び散り、導が激しい悲鳴をあげる。

「うううっ…うう…」

右手で必死に左腕を押さえ、その表情を強く歪ませる導。

「今のは、忌の言葉っ…」

「それが“痛み”…」

「クっ…！」

灰示の声が耳へと入り、導が険しい表情で顔を上げる。

「このっ…！」

“破”…」

「うっ…！」

すぐさま攻撃しようと、右手を振り上げ、白光の爪を伸ばした導であったが、灰示の指先から突き出した黒光線により、生まれたばかりの爪は、あっという間に消滅した。

「あっ…」

「“痛み”にあるのは、恐怖と辛苦、そして底知れぬ悲哀…」

爪の消えた右手を見上げ、茫然としている導に、灰示は冷静に言葉を投げかける。

“破”」

「なっ…！？」

語りかける言葉の一部かのように、自然とその言葉を挟んで、導へと再び光線を向ける灰示。茫然としていた導は、それを避けようとする暇すらなかった。

「うああああっ！」

今度は右足を貫かれ、導が激しく声をあげる。

「うううっ…うう…」

左足だけで何とか踏ん張り、その場に力なくしゃがみ込む導。貫かれた右足から、床に血が広がった。

「ねえ…？」

しゃがみ込んだ導へと、灰示がそっと問いかける。

「そこに“楽しさ”なんて、ないだろう…？」

「クっ…！」

涼しげな表情で問いかけてくる灰示に、導が不快感を露にし、大きくその表情を歪ませる。

「もういいっ…」

顔を下ろした導が、少し震えた声を漏らす。

「言葉を奪うために、殺さないように気をつけてたけど…もうブチ切れたっ…！」

勢いよく顔を上げた導が、顔と同時に爪を消された右手もあげる。
「跡形もなく掻き消してやるよお！“層”！」そう

右手を突き上げた導の周囲から、何層にも重なるようにして強い白光が溢れだし、部屋中に広がっていた黒光を押し返すように、徐々にその範囲を大きくしていく。

「……………」

広がっていく白光を、押さえていく自らの光を、冷静な表情で見つめる灰示。

「てめえへの葬送曲だ！喰らいなあ！“葬”！」そう

何層にも広がった白光が、凝縮された大きな円状の塊となり、導の右手が振り下ろされたのを合図に、灰示へと飛び出していく。

「“葬”、か…」

迫り来る巨大な白光の塊を見つめながらも、灰示はその冷静な表情を崩さない。

「ならこちらも、それに相応しい言葉を贈ろう…」

「……………」

右手で針を一本構える灰示に、導が眉をひそめる。

「無駄だ！“葬”は俺の最強の言葉！お前がどんな言葉を使ったところで、負かすことなんてっ…！」

「は…」

自信満々に叫ぶ導の声を遮って、灰示が自らの言葉を落とす。

「“破滅”」はめつ

告げられた言葉とともに、放たれる針。

——パアアアン！

「ん…！！！」

灰示の放った針が突き刺さったその瞬間、導の白光の塊は、大き

な音を立てて、粉々に砕け散った。その衝撃で激しく風が吹き荒れる中、導は目いっぱい、目を見開く。

「そ、そんなっ…俺の、最強の言葉がっ…」

信じられないといった表情で、導が床に散らばった白光の残骸を見回す。

「さてと…」

「うっ…！」

再び針を構える灰示に、啞然としていた導が表情を歪ませる。その歪みは今までの怒りによるものではなく、明らかに恐怖の色が見て取れた。

「ま、待てよっ…！」

「んっ…？」

止めるように、必死に声を出し、手を前へと突き出す導に、灰示が少し眉をひそめる。

「お、お前の目的は、この世界から“痛み”を持つ、言葉を失くすことなんだろうっ!？」

早まった口調で、灰示へと問いかける導。

「お、俺たちの目的は、今の言葉を失くして、新しい言葉を創り出すことなんだ!」

「だから…？」

「へっ？」

鋭く問いかける灰示に、導が言葉を詰まらせる。

「だ、だからっ、今の言葉を失くしたいってのは、俺たちもお前も共通の目的じゃねえかっ!」

導がまるで説得するように、熱く言葉を続ける。

「今の言葉を守ろうとしてる安の神に附くより、俺たちに附いた方がお前だっ…！」

「傲慢だね…」

導の言葉を遮って、灰示がはっきりと言い放つ。

「君たちの創る、その新しい言葉とやらの…“痛み”がないとでも

…?」

「えっ…?」

灰示のその問いかけに、導が少し目を丸くする。

「あ、ああっ！当たり前じゃねえか！俺たちの創る言葉は、完全無欠でっ…！」

「それが傲慢だと言うんだよ」

「……っ」

強まる灰示の口調に、思わずその先の言葉を呑み込む導。

「どんな言葉を創り出したところで、人が使う限り、その言葉には“痛み”が含まれる」

どこか遠くを見るような瞳を見せ、灰示が言葉を吐き捨てる。

「人は言葉を持ったその時、傷つき、傷つける道を選んだのさ…」
薄く、笑みを浮かべる灰示。

「自分たちの創り出す言葉は完全無欠などと、ほざく君たちは傲慢の極み…」

灰示が冷たく鋭い瞳で、導をまっすぐに見つめる。

「なら、言葉の中に、在りもしない“救い”を求める安の神の方が、幾分かはマシだよ」

「だ、だけどっ…！」

「無駄な会話は、ここまでにしよう…僕の機嫌を損ねるだけだ」

導の言葉を無理やり終わらせ、灰示が導へと構えていた針を投げ放つ。

「言葉の先にある、虚無を知るといい」

導へと、まっすぐに向かっていく針。

「“果てろ”^は」

「うううっ…！」

部屋中に広がった黒光を、その小さな先端に纏って、灰示の針が導へと突き進む。足を負傷し、その場から動くことも出来ない導は、恐怖に表情を歪ませた。

「うっ…うわああああっ…！」

黒光に包まれた針を正面から直撃し、導が後方へと勢いよく吹き飛ばされていく。

「あっ…！うあ…うう…」

壁へと激突した導は、そのまま力なく床へと倒れ込んだ。

「言、葉っ…」

導の懷から、白い言玉のような宝石が零れ落ち、床へと転がると、その宝石は大きくヒビ割れ、真つ二つに分かれて、砕け散った。

「俺の、俺だけの…言葉っ…」

うわ言のように呟くと、やがて力尽きたのか、導は深くその瞳を閉じる。

「そんなにまで欲するものじゃないよ…言葉なんて」

針を投げ終わった右手をゆっくりと下ろし、灰示がそっと肩を落とした。

七声の城、四階。王の間。

「ん？」

誰もいない広間の玉座に腰を下ろし、右手の中にある夢言石を見つめていた弔が、ふと眉をひそめる。夢言石のその透明な空間の中に、小さく文字が浮かび上がったのだ。

「“そう”、か…」

弔が、浮かび上がった文字を読み上げる。

「負けたか…導…」

文字を隠すように夢言石を握り締め、弔はそっと呟いた。

Word 29 はなツチカラ (3)

「ふう…」

一つ息をつきながら、自分の両手を見下ろす灰示。部屋中を包み込んでいた黒光は、先程の灰示の攻撃でほぼなくなり、灰示の体から溢れていた黒光も、徐々に消え始めていた。

「忌の力が強い…韻^{いん}の封印が弱まっているのか…」

両手を見つめたまま、灰示が少し考えるように呟く。

「いや、僕に七声を倒させるために、わざと弱めたかな…？ あんまり面白くないね…」

考えを口に出し、灰示が少し眉をひそめる。

「んっ…？」

灰示がその場に立ち尽くしていると、導と戦っている間中、壁にもたれかかっているだけであつた誘が、いつの間にか壁際から離れ、ゆっくりとした足取りで、灰示のもとへと歩み寄って来ていた。

「次は君かい？」

その灰示の問いかけに答えることはなく、誘が足を止める。

「……………」

「言玉…？」

答えを言わぬまま、懷から、導と同じような白い宝石を取り出す誘に、灰示が少し眉をひそめる。

「言葉も話さない君が、戦う気満々というわけかい？」

灰示がどこか呆れたように、問いかける。

「まあいいよ、君にも“痛み”を贈っ…」

「“狂”^{きやう}…！」

「えっ…？」

灰示の声を遮るようにして、言葉が放たれると同時に、誘がその瞳を大きく見開いた。

「ヒヤハハハっ！ 殺す！ 殺してやるぜえ！」

「なっ…！」

大きく目を見開いた誘は、その纏っている空気を、不気味さの漂う静かなものから一気に、狂気的なものへと変え、高々と狂ったような笑い声をあげる。

「これはっ…」

「ヒヤハハハ！俺の強さに恐怖しなあ！“経”！」
「……っ！」

狂った誘が、右手の言玉を巻き物の姿へと変え、それを空中へと放り投げると、自動的に広がった巻き物が白い光に包まれ、そこに描かれていた無数の文字が、空中へと飛び出す。その光景に、灰示は驚きの表情を見せる。

「文字の、具現化っ…？」

「ヒヤハハア！響けえ！“響”！」

「うっ…！」

空中に浮かびあがった文字たちが、強い光を纏って、一斉に灰示へと向かってくる。

「仕方がないっ…」

険しい表情を見せた灰示が、再び針を構える。

「“阻め”っ…！」

灰示が素早く針を投げ放つと、針から真っ赤な光が溢れだし、向かって来ていた文字を一つ残らず阻む。

「ふう…」

「ヒヤハハ！ヒヤハハ！いいぜえっ？もっと俺を楽しませろよお！」
「……っ」

文字を防ぎ、ホッと一息ついていた灰示が、正面から聞こえてくる高い笑い声に、その表情を曇らせる。

「物静かな少年が早変わり…まさに“狂”だね…」

先程までとはまるで異なる誘だが、灰示は落ち着いた様子で、余裕とも取れる笑みを浮かべた。

「面白そうだから、相手になってあげるよ」

楽しげに言い放ち、両手にそれぞれ針を構える灰示。

「ヒヤハハハ！叫べえ！“叫”！」

再び巻き物から文字が飛び出すと、文字たちは先程よりも強い光を放って、空中で大きな塊を作り、一個の巨体となって、灰示へと飛び出していく。

「さっきより言葉が強い…」

向かってくる文字の塊を見つめながら、灰示が冷静に呟く。

「は…うつ…！うつ…！」

自らの言葉を放とうとした灰示が、不意に苦しみ始め、その身を屈める。

「こんな…ところでっ…！」

深く俯き、苦しげに声を漏らした灰示に、文字の塊が迫る。

——バアアアン！

身を屈めたまま、特に抵抗も見せなかった灰示へと、誘の攻撃が炸裂し、激しい爆発が起こると、広間中に強い爆風が吹き荒れた。

爆煙で霞む景色を、誘が少し細めた瞳で見つめる。

「もう終わりかあ？超つまんねえっ」

「う…うつ…」

「んあっ？」

不満げに顔をしかめていた誘が、爆煙の向こうから、かすかに漏れてくる声に気付く。

「痛たたたたっ…」

爆煙が晴れると、そこには後頭部を押さえながら、ゆっくりと起き上がる人物の姿。

「はあ！人生最大の大怪我といえば、足首捻挫の俺が、一丁前に“痛い”とか言っちゃって、すみませえ〜ん！」

それは、相変わらぬの様子で謝り散らしている、保であった。

「ヒヤッハ！ちやあ〜んと生きてんじや〜ん！」

「へっ？」

謝り散らしていた保が、正面から聞こえてくる声に顔を上げる。
保の視界に、楽しげに笑いあげている誘の姿が飛び込んできた。

「え、ええーっと…」

誘を見つめ、戸惑った表情を見せる保。

「あのお、どちら様でっ…」

「いいぜえ！もっともっと俺を楽しませてから、死ね！ヒヤハハハ
！“叫”！」

「へっ…？」

笑い声とともに勢いよく向かってくる、文字たちの攻撃に、保が
目を丸くする。

「へえええっ！？」

大きく目を見開き、保が驚きの声をあげた。

七声の城、地下一階。城内庭園。

「“薙ぎ払え”！」

人工照明の照らす天井めがけて、高々と飛び上がった七架が、空
中で真っ赤な薙刀を振り下ろし、下方へと、赤い光の一閃を放つ。

「ウッフ」

一閃の向かう先、花畑の間に立っているのは、妖艶な美しさの女
性、償。

「“掌”」

償がそう呟くと、償の白い手に握り締められていた白い宝石が、
その掌の中へと吸い込まれるようにして消え、代わりに償の掌から、
強い白色の光が放たれ始める。

「ウッフ、“消”っ」

光る掌を一閃へと向け、償が新たに言葉を放ったその瞬間、七架
の一閃がどこへともなく、あっという間に消え去る。

「ウッフッフ」

掌を確かめるように見つめ、償が満足げに微笑む。

「何度、消されれば気が済むのかしらあ？」

「はあ…はあ…」

問いかけながら償が振り向いた先には、床へと降りてきた七架の姿があった。七架は疲れが見て取れる様子で、大きく肩を揺らし、息も乱している。

「あなたの言葉は、私には通じない。それがわからないっ？」

「……っ」

大きく首を傾げ、問いかけてくる償に、七架が少し眉をひそめる。

「な…」

七架が、償いの問いに答えることなく、自らの言葉を呟く。

「“薙ぎ倒せ”…！」

再び薙刀を振り切り、七架が償へと一閃を放つ。

「わからない子ねえ…」

向かってくる一閃を見つめながら、償が呆れたように肩を落とす、先程と同じように掌を向ける。

「“消”」

償の掌から放たれた白光を浴びると、七架の一閃が一瞬にして消える。

「だから通じないって言って…あらっ？」

攻撃を消し去り、再び七架の方を見た償が、首を傾げる。先程まで、そこに居たはずの七架の姿が、いつの間になくなっていった。

「“薙ぎ…”

「なっ…！」

七架の姿を探していた償が、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「払え”…！」

「クっ…！」

もう一度、振り下ろされた薙刀から放たれる、新たな赤色の一閃に、背中を向けたまま、首だけを後ろに向けた状態の償は、その掌

をかざすことも出来ず、表情をしかめる。

「これでっ…！」

「甘いわね…“昇”！」

「えっ…！？」

確信を持った七架を嘲笑うかのように、余裕の表情で償が言葉を放つと、償の体が宙へと浮き上がり、七架の攻撃をあっさりとかわして、舞い上がる。

「飛べるっ…？朝比奈くんの“上がり”と同じ…？」

「攻撃を消すだけが、私の言葉じゃあないのよお？」

戸惑う七架に、償が上空からそっと微笑みかけ、その掌をあげる。

「“照”！」

「なっ…！？うううっ…！」

償の言葉により、太陽のように強い光を放つ償の右掌。その天井の照明よりも何倍も強い光を、もろに目に入れてしまい、七架が思わず俯いて、目を閉じる。

「目、目がっ…」

「しっかり喰らってねっ」

「えっ…？」

まだ視界のはっきりとしない七架へと、償が掲げていた掌を向ける。

「“衝”！」

償の掌から放たれる、白い衝撃波。

「あっ…きゃあああああっ！」

ろくに目の見えぬ状態の七架に、それを避けることが出来るはずもなく、正面から衝撃波を食らった七架は、勢いよく吹き飛ばされ、庭園の花畑を背中であぐるようにして、倒れ込んだ。

「うっ…うう…」

地面へと倒れ込んだまま、七架が苦しげな声を漏らす。

「ウッフ、素敵なものねえ」

ゆっくりと地面に降り立ち、倒れた七架を眺める償。

「可憐な少女が、傷だらけで倒れ込む姿はっ」

「クっ…」

その償の挑発とも思える言葉に、七架が眉をひそめ、軽く唇を噛む。

「まだっ…ここから…」

「なんなら、負けてあげてもいいわよ」

「えっ…?」

諦めずに立ち上がろうと体を起こした七架であったが、償から放たれた、その思いがけない言葉に、目を丸くし、動きを止めた。

「ま、負けてあげてもって…」

「だって私、あなたの言葉なんていらないものお。この“ショウ”があれば十分っ」

自分の掌を見つめ、償が満足げに微笑む。

「で、でもあなたたちは、私たちの言葉を奪うことが目的なんですよ?」

「他の連中はねえ。でも私はいいのっ。弔とむらひがそう言うから、賛成してるだけ」

戸惑いながら問いかける七架に、笑顔で答えていく償。

「それにあなたたちってえ、あの女を連れ出すことも目的なんですよ?」

「あの女っ…真田さんのこと?」

「そお。あの目障り極まりない女のことおっ」

囁の口を口にし、償があらゆる様子で顔をしかめる。

「連れ出してくれるなら、私にとっては願ったり叶ったりだわあ」

「な、なんでっ…? 真田さんは、あなたの仲間のはずじゃっ…」

「仲間? ウッフ、冗談っ」

「えっ…?」

鼻で笑う償に、七架の表情が曇る。

「だいたい、初めっから気に食わなかったのよ、あの女。大して力もないくせに、やたら弔の傍に居てっ」

不快感を表すように、償が口を尖らせる。

「何があったか知らないけど、あそこまで言葉言葉って、言葉にこだわって、私から言わせてもらえば、正直、バカっ？」

「……っ」

吐き捨てるように言い放つ償に、七架がさらに眉をひそめる。

「言葉なんて、所詮は言葉でしょっ？ そんなものを、まるで宝物のように言うのよお？ あの女っ」

償が、呆れるように肩を落とす。

「私にとってあの女は仲間でも何でもないの。ただの邪魔者」

償の声が、冷たく放たれる。

「私、あんな女いないから。だから、あなたたちにあげるわっ」

「………」

償の言葉をただ聞きながら、七架がその場で深く俯く。

「そうね……」

「……っ？」

小さく落とされる七架の声に、償が少し首を傾げる。

「真田さんは返してもらおうわ……」

言葉を落としながら、七架がゆっくりと、その場で立ち上がる。

「こんな、言葉の大切さも知らないような人たちの仲間には、真田さんは勿体ないから……」

「あら、随分な言われ様ね」

七架の挑戦的な言葉に、償は怒りを見せることもなく、余裕の笑みを浮かべる。

「じゃあ、とっとと上にでも行っ……」

「でも、あなたに負けてもらうことは断る」

「……っ」

上へと行く道を指し示そうとした償が、七架が続けて放ったその言葉に、眉をひそめる。

「断る……？」

「ええ、折角のお話だけど」

確かめるように聞き返した償に、大きく頷く七架。

「あなたには、自力で勝つことにする」

七架が薙刀を握る手に力を込め、鋭い瞳を見せた顔を上げていく。

「あなたの言葉に、結構、腹が立ったからっ」

「……………」

はつきりと言い放つ七架に、償が少し目を細める。

「奇遇ね…」

償がそつと言葉を呟き、口角を吊り上げる。

「私もあなたの生意気な態度に、腹が立ってきたところよっ…」

少し引きつった笑みを浮かべながら、償が七架へと掌を向けた。

二人が強く睨み合い、室内に張り詰めた空気が流れ込む。

Word. 29 はなツチカラ (4)

「“衝”…！」

償が七架へと、先程と同じ衝撃波を放つ。

「なっ…」

七架は素早く薙刀を構え、大きく口を開いた。

「“流^{なが}せ”！」

七架が言葉を放ちながら薙刀を振り上げると、薙刀から放たれた赤い光を受け、七架へと向かって来ていた衝撃波は、まるで風にも流されるように七架から逸れていき、後方まで向かって、壁へとぶつかった。

“流せ”で攻撃を受け流せるのね…んっ？」

言葉の分析をしていた償が、勢いよく空中へと飛び上がる七架に気付き、眉をひそめる。

「また、そのパターン？」

空中で薙刀を振りかぶる七架に、償が呆れたように言い放ちながら、掌を向ける。

「懲^{なま}りない子ねえ。どうせ、私の言葉に消さっ…」

“鈍^{なま}れ”…！」

「えっ…？」

放たれた言葉が予想とは異なり、償が思わず目を見開く。

「こ、これはっ…！」

飛んで来る赤い光は物理的なものではなく、消すことの出来ない償が、その光を浴びる。

「うっ…！あっ…ク…！」

浴びた途端、償の動きが鈍くなり、その表情の動き、一つ一つまですぐ遅くなる。

「か、体がっ…」

「な…！」

「なっ…!?!」

動きの鈍った償に対し、地面へと降り立った七架が、再び薙刀を振り上げる。

「薙ぎ倒せ”…!」

「うっ…! あああああああっ!!」

緩やかにしか体を動かせない償は、いつものように攻撃を消し去ることも出来ず、七架の放った一閃を直撃した。激しい叫び声をあげながら、償が後方へと吹き飛ばされていく。

「うっ…うう…」

「はあ…はあ…」

傷ついた体を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる償。その償の正面で、七架も少し息を乱す。消されてはしまったが、すでに何度も言葉を使っており、五十音士としての経験の浅い七架には、厳しい状況となってきた。いた。

「また言玉が戻っちゃう前にっ…」

そう呟き、七架がさらに目つきを鋭くする。

「決めるっ…!」

七架が力強く薙刀を握り、まだ振らついている償のもとへと、勢いよく駆け込んでいく。

「ハアっ…ハアっ…」

立ち上がったばかりの償が、顔を上げ、駆け込んでくる七架の姿を視界に入れる。七架は償が構えを取るその前に、攻撃を向けようと薙刀を振り上げる。

「薙ぎ払っ…!」

「“錠”…」

「えっ…!?!」

七架が薙刀を振り下ろそうとしたその時、償が言葉を呟くと、七架の両手首に白光の手錠が現れ、七架の手首を強く縛りつけて、その動きを止めた。

「錠…濁音の言葉もっ…?」

「あんまり私を…ナメるんじゃないわよ、お嬢さんっ」

「あっ…！」

手の動きを止められた七架に、冷たく微笑んだ償が、右掌を向ける。

「^{しょう}焼”…！」

光輝く掌で、償が七架の左手を、強く握り締める。

「なっ…あああああああっ！」

激しく熱を持った掌に腕を焼かれ、七架が強く叫び声をあげながら、その場にしゃがみ込む。七架がしゃがみ込むと、七架の手首を掴んでいた錠も消えた。

「ううう…ううっ…」

焼かれた左手を、解放された右手で押さえ、^{うずくま}蹲る七架。

「ウツフ、どう…？焼かれ心地は？」

蹲ったままの七架を見下ろし、償が満足げな笑みを浮かべる。

「これで左腕は、使い物にならなくなっ…」

「な…^{なお}“治せ”…」

「んっ…？」

聞こえてくるか細い言葉に、笑みを浮かべていた償が、一気に表情を曇らせる。

「はあっ…はあっ…」

七架の右手から放たれる赤い光を受け、先程、償の焼いた七架の左腕は、徐々にその焼け跡を小さくしていく。

「回復の言葉っ…厄介ねえ」

治っていく傷を見つめ、償が顔をしかめる。

「なら、回復すら追いつかないほどに焼いてあげるわっ…！“焼”
！」

「うっ…！」

再び熱を持った掌を向けてくる償に、七架が慌てて後方へと飛び退く。

「距離を取っていかないとおっ…さっきの言葉に…」

「距離を取るう？」

呟き落とした七架の言葉を、軽い口調で繰り返す償。

「じゃあ、近付けちゃおうかしらっ」

「えっ…？」

七架へと向けていた掌をそっと曲げ、手の甲が天井へと向くようにして右手を構える償に、七架が眉をひそめる。

「招”っ”」

手招きするように右手を動かし、言葉を放つ償。

「えっ？あっ…！うっ…！」

その手招きに体を操られるように、離れたはずの七架の両足が勝手に動き、七架の考えとは逆に、どんどん償の方へと近付いていく。

「これはっ…！」

「お帰りなさい」

「クっ…！」

勝手に動く足のために、償のすぐ前までやって来た七架に、償が微笑みながら掌を向ける。

「鈍^{なま}っ…！」

「させないっ…“焼”！」

「うっ…！ああああああっ！」

償の攻撃を封じるため、再び動きを鈍らせようとする七架であったが、振り上げられた七架の右手を償が素早く掴み止め、その掌の熱で焼く。

「ううううっ…！」

「腕だけじゃなくって、一応、こっちも壊しておきましょうか」

苦しむ七架の腕を放し、償が掌を七架の持つ薙刀へと向けた。

「傷^{しやう}”っ…”」

掌から放たれた白光を浴びると、薙刀の持ち手部分に、自動的にヒビが入っていく。

「あっ…！」

ヒビが端から端まで到達すると、薙刀は、七架の手の中で、真っ

二つに分かれるようにして、砕け折れてしまった。左右の手に分かれた薙刀を見つめ、大きく目を見開く七架。

「私の薙刀がっ…」

「ウッフ！これで完全に終わりね、お嬢さん」

「うっ…！」

構える武器すらもない七架の顔面に、真正面から向けられる償の掌。

「残念賞っ。“衝”！」

「うっ…！きゃああああっ！！」

目の前から強い衝撃波を放たれた七架は、防ぐ暇すらなく、その衝撃波を直撃し、後方の壁まで勢いよく吹き飛ばされた。壁に強く背中を打ちつけると、七架がそのまま、うつ伏せで地面へと倒れ込む。

「あっ…あう…」

倒れた七架が、激しい痛みから、声にならない声を漏らす。

「ウッフ、ここまでかしらあ？」

七架を見つめ、楽しい笑みを浮かべる償。

「まあ所詮はこの程度でしょうねえ、言葉の力なんて手を下ろし、償が少し肩を落とす。

「言葉で何かが変えられるだなんて、信じる方がバカなのよっ」

「……………」

声すらも出なくなった七架が、地面に片頬をつけたまま、耳に届いてくる償の言葉を聞く。

「言、葉…」

——あなたには、“言葉”があるのだから——

——話してみようとは、思うよっ——

「言、葉っ…」

もう一度呟いた七架が、強く唇を噛み締め、二本に分かれた薙刀

を力いっぱい握り締め、その拳を地面へとつける。

「うっ…うう…！」

「んっ…？」

地面に拳をつけ、強く踏ん張って、必死に体を起こそうとする七架に気付き、償が少し眉をひそめる。

「あら、まだ諦めないつもり？」

傷だらけの体を痛みに震わせながら、それでも必死に立ち上がるうとする七架を、償が嘲るように見る。

「頑張り屋さんのねえ。それともただ、バカなだけかしらあ？」

「…っっ」

「うっ…」

立ち上がった七架が顔を上げ、まっすぐ突き刺さるような瞳を償へと向けると、小バカにしたような口調で話しかけていた償が、その瞳に少し怯んだのか、その先の言葉を呑み込んだ。

「生意気な目ねえ。けど、そんな目をしたところで、どうするののお？」

償が、すぐさま負けじと言い放つ。

「あなたの武器は、そのザマっ」

七架の両手に握られた薙刀を指差し、笑みを浮かべる償。

「あなたにはもう、私と戦う術^{すべ}なんてっ…」

「本当は…」

償の言葉を遮り、七架がそっと声を発する。

「本当は…ただ、大切な人に傷ついてほしくなくって…ただ、大切なあの人を守りたくって…」

七架がゆっくりとした口調で、言葉を続ける。

「そのために、使うつもり言葉だった…」

「何ですって？」

その言葉が引っかけたのか、償が少し眉を吊り上げる。

「でも、こんなところで負けてたら、話になんてならないから…使うことにする」

「ウッフ！」

はつきりと言い放つ七架と向き合い、思わず吹き出すような笑みを漏らす償。

「可愛い強がりねえ。けど、いくら可愛かったって、武器が壊れた以上、どんな言葉も使えなっ…」

「言葉の力を知るといいわっ」

償の言葉を勢いよく遮り、七架が強く目を見開く。

「へんかく変格”…！」

「えっ…？」

七架の放つ言葉に、眉をひそめる償。

「なっ…！？」

七架の両手に握られている、二本に分かれた薙刀が、赤い光を放ち、その光に包まれながら、形を変えていく。

「そ、それはっ…！」

形を変える薙刀を見回し、償が目を見開く。

「変格活用っ…！？」

「そう、カ行、サ行、ナ行、ラ行の五十音土のみが使える、更なる言玉の変形」

「そんなっ…！」

冷静に話す七架に、動揺からか、償が声を荒げる。

「あの女の話じゃ、あなたはまだ変格なんてっ…！ま、まさか、あの女、私を謀たばかったんじゃないっ…！」

「真田さんはウソなんてついてない」

「えっ？」

すぐさま答える七架に、首を傾げる償。

「私の“変格”はみんな、安団の誰も知らないわ…」

下ろしていた両手をあげ、七架が左右の手を、胸の前で交差させる。

「あなたに初めて見せるの。だから、しっかりと見て行ってね」
胸の前で交差した七架の左右の手の薙刀が、やがて一つとなり、

一つとなつてまたさらに、その形を変化させていく。やがて光が空中へと放たれ、薙刀の変形が終わった。

「あなたの目が、何も映さなくなるまで」

「あっ……！」

さらなる変形を終えたその姿に、大きく目を見開く償。

「く、十字架……？」

七架の両手に包まれるようにして、胸の前に現れたのは、十字の下部分が長く尖っている、赤銅色の大きな十字架であった。横幅は七架の肩幅より、少し狭いくらいであろうか。丈はそれよりも長く、相当に巨大な十字架であった。

「な、何それっ？ ふざけてるわけ？」

姿を変えたその武器を見つめ、償が思わず笑みを浮かべる。

「確かに素敵やお？ 祈りでもあげれば、まるでシスターねっ。まっ、色が赤いのが頂けないけどお」

早口で、言葉を続ける償。

「でも、だから何？ それで、どう攻撃しようっていうのお？」

問いかけながら、償が大きく首を傾ける。

「それなら、さっきまでの折れた薙刀で、殴りかかってでも来た方が、まだマシでっ……」

「言玉の“変格”は、武器の形を変えたとともに、新たな言葉を解放する……」

「新たな言葉っ……？」

遮る七架の声に、眉をひそめる償。

「な……」

七架が口を開き、高々と十字架を掲げる。

「“啼け”」

言葉が放たれると、十字架から、分裂したかのように、まったく同じ大きな十字架型の赤光が飛び出て、償へと向かっていく。

「こ、こんなもの……！ “消”……！」

償が十字の光へと掌を向け、力強く言葉を放つ。

「なっ…!？」

だが十字の光は、償の放った白光を浴びても、消え去ることなく償へと向かってきた。

「き、消えないっ…!?!? ううっ…!」

焦る償へと、迫る十字。

「あああああああっ…!!」

償が光を正面から受け、激しい悲鳴をあげる。

「ううう…! うっ…!」

必死に足に力を入れ、何とかその場に踏み止まる償。だが、傷ついた体の所々から真っ赤な血が滲み、地面に咲き乱れる花へと、その血滴が落ちた。

「な、なんでっ…」

唇にも血を滲ませながら、償が必死の形相で顔を上げる。

「なんで、私の言葉がきかないのっ…!?!」

怒りをぶつけるかのように、誰にともなく言い放つ償。

「言葉は想い…」

声が聞こえ、償が視線を七架へと向ける。

「喜びも怒りも哀しみも楽しみも、すべての想いが含まれるからこそ、強く在^あれる」

迷いのまいまっすぐな瞳を見せ、はっきりとした口調で言葉を続ける七架。

「人にとって、言葉は宝」

「宝あ？」

七架の言葉を繰り返し、償があらさまに顔をしかめる。

「あの女と同じこと言う氣い? だから、そんなバカげたことはっ…」

「それすらわからないあなたに、私の言葉は消せない」

「…っ」

強く言い放つ七架に、さらに表情を歪める償。

「いつまでもっ…生意気な口きいてんじゃないわよっ! お嬢さん!」

償が大きく声をあげ、少し傷ついた掌を、七架へと向ける。

「“衝”……！」

「……………」

衝撃波を放つ償を、落ち着き払った表情で、冷静に見つめる七架。

「な……」

七架がゆっくりと、十字架を掲げる。

「なげ
“嘆け”」

七架が言葉を放つと同時に、十字架から先程と同じように、その形を模った光が飛び出し、償の放った衝撃波へとまっすぐに向かっていく。

「そんなもの、私の言葉でっ……！」

償が確信めいた笑みを浮かべたその時、七架の十字光が、償の衝撃波をあつという間に吹き飛ばした。

「なっ……！」

一瞬にして掻き消えた衝撃波に、償が大きく目を見開く。

「そ、そんなんっ……うううっ……！」

衝撃波に打ち勝った十字光が、償へと迫り来て、償がその表情を険しくする。

「こ、今度こそ……！ “消”……！」

十字光へと掌を向け、必死に言葉を発する償。

「き、消えないっ……！？」

またしても消えぬ十字光に、償がさらに焦りの表情を見せる。

「何なのよ！ “昇”……！」

償がさらに言葉を放ち、空中へと舞い上がる。

「ウッフフ！ もういいわぁ！ もう止め！」

空中へと浮かび上がった償が、高い位置から七架を見下ろし、開き直ったような笑みを浮かべる。

「こんな戦いしたって、私にメリットないんだものお。だから私、このまま上に帰らせてもらっ……」

「逃げられないよ」

「えっ…?」

飛び上がったまま、出口へと移動しようとした償が、七架の言葉に動きを止める。

「私の嘆きからは」

「えっ? うっ…!」

空中にいる償へと迫る、地面から長く伸びた十字光の先端。

「うあああっ…!!」

避ける間もなく、十字光の先端が償の腹部を貫き、償が大きく目を見開く。

「うあ…あ…あっ…」

十字光が細かい粒となって砕け散ると、償は力なく降下し、そのまま地面へと落下した。

「う、うう……」

地面に倒れ込んだ償が、そのまま目を閉じ、気を失う。

「……………」

償が気を失ったことを確認し、七架がゆっくりと十字架を下ろす。

「十字の前で、償^{つぐな}って」

倒れている償へ、届かないとわかっている言葉を投げかける七架。

「言葉と、私の大切な仲間を、侮辱したことを」

はつきりとした口調でそう言い終えると、七架は償から視線を動かし、先程、償が飛んで行こうとしていた方向を見上げた。吹き抜けの壁の向こうに、上へと上がる階段が見える。

「真田さんっ…」

階段を見据え、七架はさらに強い瞳を見せた。

Word. 30 唯一ツノ真実 (1)

七声の城、城門前。

「へへっ！ “凹め” ええ！」

『ぎゃああああ！』

兵吾が緑色に光る拳を地面へと勢いよく振り下ろすと、地面が大きくヒビ割れし、その上に立っていた待ち伏せ連中がバランスを崩し、雪崩のように一気に倒れ込んだ。

「おおーし、コンプリートじゃん！」

周囲に立っている連中が誰もいなくなったことを確認すると、兵吾は満足げに微笑み、光っていた右手から言玉を分離させる。

「全部片付いたじゃん！ ヒロト！」

「ああ」

兵吾が振り向き、すでに休戦状態のヒロトへと声をかける。

「で、どう？ わかった？ 蛍」

「ほおー……」

ヒロトのすぐ横には、深くしゃがみ込み、手の中にある白い宝石をじっと見つめている蛍の姿があった。宝石を見つめながら、蛍が唸るような声を出す。

「これ……言玉じゃないね。とってもよく出来てるけど、精巧なニセモノ……」

「ニセモノ？」

「うん……誰かが人工的に造ったものだ……」

聞き返したヒロトへ、蛍が顔を上げて頷き返す。

「それって、こいつらの持ってた言玉じゃんっ？」

「ああ」

戦いを終え、歩み寄って来ながら問いかける兵吾に、ヒロトが答える。

「人工的って、んな簡単に言玉って造れるものじゃん？」

「まあ、まず造れない…」

「ああ。それに、こんな五十音士でも何でもない普通の人間たちに、言葉を与えていた」

ヒロトが蛍の持つ偽の言玉を見下ろし、真剣な表情を作る。

「これを造った人間は、相当な力の持ち主と考えて、間違いないと思う」

「ほおー：で、どうするの？この件、韻^{いん}に報告とかするわけ…？」

「そうだなあ」

蛍の問いかけに、首を捻るヒロト。

「報告するに越したことはないと思うけど…んっ？」

考えていたヒロトが、トラの姿から戻った言玉を握り締め、足早にその場を歩き去って行こうとしている不治子に気付く。

「どこへ行くんだ？不治子」

「帰る」

「えっ？」

短く答える不治子に、ヒロトが少し目を丸くする。

「帰る？」

「うん。もうここに、あの方の気配はないもん。居る意味ないから、不治子帰る」

あっさりと答え、不治子はそのまま背を向け、何も迷うことなく帰っていった。

「相変わらず灰示様命だね、不治子は。ヒヒっ」

見えなくなっていく不治子を見送り、ヒロトがどこか呆れたように笑みを浮かべる。

「けどまあ、一理あるかな。言われたことはやり終えたんだし、余計なことする必要もないだろ？ヒヒっ」

「ほおー、そうだね…そこまで韻に義理立てする必要もないし…」

「へへ！じゃあ、俺たちもとっと帰ろうじゃん！」

三人は言葉を交わし、先程まで見つめていた偽の言玉を地面へと放り投げて、その場を去ろうと立ち上がる。

「ヒヒ、まあ精々頑張つてよ。安団つ」
ヒロトが振り向き様にそう言い落とすと、ハ行の四人は、その場から去っていった。

七声の城、地下一階。吹き抜け大広間。

「ひげえあああっ!!」

大きな大きな広間に、届かない場所などないくらいいっぱいに広がる叫び声。

「か、勘弁して下さいあゝい!」

「響けえ!“響”!」

「ぎいやああああ!」

大きな叫び声をあげて、広間を逃げ回る保。その後方では、七声の幹部の一人、誘が、巻き物の中から飛び出て来た無数の文字を、保へと向けて放っていた。

「お、俺、アヒルさんたちと城に入って、穴にどわあっと落ちただけなのに、何でこんなことにつ…!?!」

「いつまでも逃げられると思うなよお?」

「えっ?」

後方から聞こえてくる誘の声に、保が振り向く。

「“狭”!」

「へっ? うわああ!」

誘が言葉を発すると、その次の瞬間、前方へと走り続けていた保が、壁に思いきり体当たりし、思わずその場にしゃがみ込んだ。

「痛たたたたっ…な、なんでこんな所に壁があ?」

打った胸部を押さえながら、保が顔を上げ、目の前に立ち塞がる壁を見上げる。

「確かこの部屋、もっと広かったような…」

「壁とお話してる場合かあ?」

「えっ？うっ…！」

振り返った保に迫る、文字の集団。

「うわああああっ！」

激しい衝撃音とともに、保の叫び声が響き渡った。

「ああゝあ、終わっちゃった」

まだ止むことのない衝撃風を見つめながら、誘がつまらなそうに口を尖らせ、深々と肩を落とす。

「ああゝあ、これじゃ全然、遊び足りな…んっ？」

言葉を吐き捨てていた誘が、何かに気付いた様子で、ふと眉をひそめる。

「あれは…？」

「ふう…っ」

安心するような声とともに、衝撃の去った風の中から見えてきたのは、真っ赤な塊であった。その塊は、細長い糸となって徐々に解けていき、中を明らかにしていく。

「た、^{たす}助かった” あゝ…」

糸の塊の中から姿を現したのは、ホツとした様子の保であった。両手の指に赤い糸を巻きつけており、その糸で身を包んで誘の攻撃を防いだようで、傷は負っていない。

「あ、また出てきてる。この糸」

「あの一瞬で言玉の解放を…」

わけのわかっていない様子で、両手の糸を見下ろしている保を見つめ、誘が少し考えるように目を細める。

「ってことは、あの人はやっぱり地底人さんで、俺はやっぱりここは戦うべきでえ…」

「ヒヤハハハ！面白いぜえ！」

「へっ？」

考えを巡らせていた保の声を遮るように、勢いよく叫びあげる誘。その声に、保が戸惑うように顔を上げる。

「もっと俺を楽しませろよお！“響”！」

「ま、またあ!？」

誘の突き出した右手を合図に、空中に広がった巻き物から、再び飛び出してくる無数の文字。向かってくる文字の集団を見上げ、保が困った表情を見せる。

「ひいひい! た、^た耐えろ」!

「何っ?」

情けない声をあげながらも、言葉を放つ保。すると保の両手の糸が、保の前で幾重にも重なり、盾のように形を変えて、誘の攻撃を受け止める。その様子に、誘は眉をひそめた。

「た、^た溜めろ」っ

保がさらに言葉を放つと、糸がしなり、文字を受け止めている部分が大きく曲線を描く。

「^{たお}倒せ」!

「なっ:!!」

しなった糸が勢いをつけて、受け止めていた文字たちを、誘へと弾き返す。返ってくる文字たちに、大きく目を見開き、驚く誘。

「クっ:!!」

誘から言葉は出ず、文字たちはそのまま誘へと直撃した。

「ふはあ〜っ」

誘に攻撃が当たったことを確認し、保がどこか安心したように一息つく。

「為介さんたちに教えてもらった言葉、地球大生命体さんだけじゃなくって、地底人さんにも有効でっ:」

「ヒヤハハハハ!」

「……っ」

部屋に響き渡るその笑い声に、止まる保の言葉。

「ヒヤハハハ! いいぜ! いいぜえ! 太守! 面白れえ!」

「有効、じゃないみたい:」

確かに攻撃は直撃したはずだが、まるで平気な様子で、高々と笑いあげている誘を見て、保がどこかがっかりしたように肩を落とす。

「波守のんが強えって聞いてたが、太守でも十分に楽しめそうだ」
「ハモリ…?」

聞きなれない言葉に、保が大きく首を傾げる。

「じゃあこっちも、本気といこうかあっ」

「えっ…?」

右手を振り上げる誘に、保が戸惑いの表情を見せる。

「饗”っ”
きょう

「またキョウ…?」

誘が放つ、先程と同じ言葉。誘の言葉が放たれると、先程まで空中に浮かんでいた巻き物が白い言玉の姿へと戻り、ゆっくりと降下してくると、突き上げられている誘の右腕の中へと収まる。

「ヒヤハ！」

「なっ…!?!」

長い舌を伸ばし、誘がそのまま言玉を口の中へと入れて、よく響く音を立てて呑み込む。その光景に、大きく目を見開く保。

「こ、言玉をっ…」

「ヒヤハハっ！」

「えっ…?」

言玉を呑み込んだ誘が、保のもとへと、勢いよく駆け込んでいく。

「ま、丸腰でっ…?」

何の武器を持ったわけでもなく、ただ大きく笑って駆け込んでくる誘に、保が戸惑いながらも両手を構える。

「た、“倒せ”…!!
たお

向かってくる誘へと両手向け、数本の糸を放つ保。前方から鋭く迫る糸に、誘は足を止めることもなく、そのまま突き進み続けた。
「直で食らう気っ…?」

「ヒヤハっ！」

前方の糸に、右手を振り上げる誘。

「“凶”!
きょう

「あっ…!」

言葉とともに誘の振り上げた右手が白く輝き、勢いよく振り下ろされたかと思うと、保の向けていた糸がすべて、あっという間に切り落とされた。

「そ、そんなっ…手で糸を…?」

「気を付けろよお?今の俺は、全身凶器だあ!」

「凶器って…うっ…!」

戸惑う保の懷へと入り、思いきり右足を振り上げる誘。

「た、“耐え…!”」

「遅せえっ!」

「…っ!」

保が言葉を言い終える前に、誘が白く輝く右足を振り下ろす。

「うあっ…!」

振り下ろされた誘の右足が、まさに凶器のように保の胴体部を斬り裂き、飛び散る自らの血に、保は大きく目を見開いた。

「うあああああっ…!!」

激しく叫び声をあげ、保がその場に倒れしやがみ込む。

「い、痛いっ…痛い…!」

血の流れ落ちる腹部を押さえ、苦しそうにその言葉を繰り返す保。
「“痛い”…?そういえば、もう一人のお前の口癖は、こうだったな」

保の前に立った誘が、薄く浮かべた笑みで、高々と保を見下ろす。

「“もっと痛みをあげよう”」

「うっ…!」

再び振り上げられる右足に、保の表情が強張る。

「ヒヤハハハ!」

「うわあああああっ!」

誘がもう一度、保へ向けて右足を振り切ると、保はその足に刃のように斬り裂かれながら、蹴りの衝撃も受けて、勢いよく吹き飛ばされた。壁に背中を打ちつけ、保が力なく床に倒れ込む。

「どうだあ?“痛み”は。これだけ与えてもらえば満足かあ?ヒヤ

ハハハ！」

「う…ううっ…」

誘の笑い声が響き渡る中、床に突っ伏した保が、苦しげに声を漏らす。

「痛、い…痛いよ…」

力なく、その言葉を呟く保。

「嫌だ…痛いのは、嫌だっ…」

過去に得た痛みを、記憶では失っていても、そのものは強く拒絶する。

——僕に、痛みをくれない…？——

「助けて…助けてよっ…」

あの日、差し出された手へと、無意識のうちに、必死に助けを求める保。

「…助けて…くれないんだね…」

返って来ない声に、保が諦めたように笑みを浮かべる。

「おおい！もう終わりかあ？ 太守！」

「…っ」

誘から投げかけられる言葉に、保がかすかに表情を動かす。

「これで終わりじゃ、つまんねえーんだけどおっ？」

「…もう、いいよ…」

倒れたままの保が、誘には届かないであろう、か細く弱々しい声を発する。

「立ち上がったって…また痛い目に遭うだけ…」

諦めきった表情で、保が力のない言葉が続ける。

「また痛みを味わうくらいなら…このまま…」

そう言って、そっと目を閉じる保。

「何だっ、ホントに終わりかよ」

目を閉じた保に、誘ががっかりした様子で肩を落とす。

「まあ、次行って楽しめばいいかあ。ヒヤハハ！じゃあ、そういうことでっ」

見切りをつけたように言い放ち、倒れたままの保へと、右手を向ける誘。

「じゃあなあ、太守！“行”！」

誘の右手から、大きな白い光の塊が放たれると、その光は逆巻いてさらに規模を増し、倒れたままの保へと勢いよく向かっていく。

「ヒヤハハハ！終わりだあ！」

「……………」

勝ち誇った誘の笑い声が響く中、保が目を閉じたまま、静かに光がやって来るのを待つ。

「もう…いっ…」

——この“痛み”を忘れたら、俺は一生っ…本当の笑顔で笑えなくなる気がするから……………

「……………」

再び諦めの言葉を発しようとした保の脳裏に、浮かぶ一つの言葉。その言葉を思い出した途端、保は深く閉じていた瞳を、パツと見開いた。

「誰…？」

誰の言葉を思い出せず、保が戸惑うように視線を泳がせる。

「アヒル…さん…？」

かすかに残る記憶を頼りに、保がそつとその名を口にする。

——神の言葉は…守った……………

——私そんなに、腑抜けじゃないって……………

——あの人のために、私は戦うって…！……………

「みんな、な…」

思い出される仲間の姿に、力なく床に落ちていた拳を、強く握り締める保。

「……っ！」

保が大きく目を見開き、口を開く。

Word. 30 唯一ツノ真実 (2)

「た…“高^{たか}くなれ”！」

「何っ？」

言葉を放って空へと舞い上がり、誘の攻撃を避ける保。上昇した保を目で追いながら、誘が驚いた様子を見せる。

「まだ言葉を…」

「束^{たば}ねろ」

誘が表情を曇らせる中、保が上空に飛び上がったまま両手を交差させ、左右の手から伸びる数本の糸を束ね、一本の太めの糸を形成する。

「叩^{たた}け”っ…！」

二本となった左右それぞれの糸を、腕を振り上げ、大きくしならせて、保が上空から勢いよく、床に立つ誘へと振り下ろした。

「チっ…！」

降りてくる糸を見上げ、少し顔をしかめる誘。

「“鏡^{きよう}”！」

誘が上空へと両手を押し出すと、両手から白い光が放たれ、誘の前に、鏡のように輝く盾を造り出す。その鏡に、保の繰り出した二本の糸が、思いきり振り降りた。

「なっ…！」

だがすぐに鏡にヒビが入り、誘がその表情を険しくする。

「こ、これはっ…！」

ヒビは一気に鏡全体へと走り、次の瞬間、あっという間に砕け散った。

「うっ…！ぐううう…！」

鏡を砕き割った糸が、誘の腹部に炸裂し、誘が勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

「うがっ…！」

腹部へとめり込んだ糸に、地面へと強く叩きつけられ、誘が声にならない声を漏らした。

「う、くう…」

床に倒れた誘が、そのまま腹を抱えて倒れ込む。

「はあ…はあ…はあ…」

倒れ込んだ誘を見つめながら、大きく息を切らし、上空からゆっくりと降りてくる保。

「はあ…」

「ヒヤハハ…」

「……っ」

呼吸を整えていた保が、かすかに聞こえてくる笑い声に、その眉をひそめる。

「ヒヤハハっ…面白れえ…まじサイコーっ…」

糸に叩きつけられた腹部を庇うように、少し身を屈めながらも、その表情には笑みを浮かべた誘が、ゆっくりとその場で立ち上がる。

「マジ楽しいぜえ。ええっ？ 太守っ」

「……………」

立ち上がり、微笑みかける誘に、保が表情を険しくする。

「お前の強さで、もっともっと俺を狂わせろ！」

誘が間髪入れずに、保のもとへと駆け込んでくる。

“凶”！

先程と同じ、白く輝く凶器の右手を、誘が保へと突き出した。

「た…」

保が表情を鋭くし、自らの言葉を口にする。

「耐^たえろ」！

両手の糸を体の前で幾重にも重ね合わせ、盾を形成する保。

「ヒヤハハハ！ さっき見てなかったかあ？ てめえの糸なんぞ、俺の凶器相手じゃなあっ…！」

盾ごと保を斬り裂こうと、誘が右手を勢いよく振り下ろす。
「うっ…！」

だが振り下ろされた誘の右手は、保の糸を斬り裂くことなく、それに止められる。

「な、何でだ！？ さっきは簡単につ……！」

「たお倒せ」

「クっ……！」

誘が戸惑っている中、保が新たな言葉を口にすると、誘の手を受け止める盾となっていた糸が解け始め、誘の手を絡め取りながらも、その中の数本が誘へと、勢いよく飛び出してくる。

「チっ……！ “行”！」

険しい表情を見せた誘が、向かってくる糸へと、左手で白光の玉を飛ばし、糸を弾き返す。

「うっ……」

糸と白光の衝撃で、後ろへと押し返される誘。右手は、先程の自らの攻撃で傷を負い、赤い血が流れ落ちていた。走る痛みに、誘が少し顔をしかめる。

「さっきとは力の具合がまるで違うっ……」

前方に立つ保を見つめ、誘がそっと目を細める。

「言葉に気持ちに乗ってるってヤツかあ？ ヒヤハッ」

追い込まれながらも、まだ楽しそうに微笑む誘。

「じゃあ俺も、もっともっと狂わなきゃっ……ヒヤハハハハ！ “強”きょう」

「……っ？」

高々と笑いあげ、再び言葉を発する誘に、保が戸惑うように眉をひそめる。

「ヒヤハハハハハア！」

狂気に満ちた瞳をさらに大きく見開き、声が枯れてしまうのではないかと思えるほどに、大きな声を発した誘が、両手をいっぱい広げ、天を仰ぐ。

「まじサイコー！ まじ楽しい！ ヒヤハハハハハ！」

解放感を楽しむように、誘が力いっぱい叫ぶ。

「久々だぜえ。ここまで力出して、戦える相手はよお。ええっ？ 太守！」

「うっ…！」

みなぎるほどの白光を纏って、再び保へと駆け出してくる誘に、保が思わず表情を険しくし、素早く両手を身構える。

「束ねろ」っ

左右の手の数本の糸を、それぞれ一本へと束ね上げる保。

「叩け」…！」

大きくしならせ、保が糸を駆け込んでくる誘へと向ける。

「ヒヤハ！」

前方から向かってくる糸を見つめ、誘が口角を吊り上げる。

「鏡」！」

胸の前へと突き出した両手で、鏡の盾を造り出した誘が、その鏡で向かってきた保の糸を受け止める。

「ほらよおっ…！」

「うううっ…！」

誘が強く鏡を押し出すと、その勢いで受け止められていた保の糸が、弾き返って来る。糸の戻って来る衝撃で、保が少しバランスを崩した。

「さっきは碎けたの…！」

「ヒヤハハハ！ “凶”！」

「クっ…！」

力の強くなっている誘の言葉に、保が眉をひそめていると、保の目の前まで駆け込んできた誘が、保へと勢いよく右手を振り下ろした。

「耐えろ」…！」

先程同様に、重ね合わせた糸で誘の右手を受け止める保。

「倒せ」…！」

またしても先程と同様に、数本の糸で誘の右手を絡め取ったまま、その他の糸を、誘へと向かわせる。

「……っ」

向かってくる糸を見つめ、誘はそっと目を細めた。

「なっ…!？」

次の瞬間、大きく目を見開く保。誘は左腕を突き出し、向かってきた糸をすべて直接、その腕で受け止めた。鋭く尖った糸の突き刺さった誘の左腕から、真っ赤な血がボタボタと流れ落ちる。

「そ、そんなっ…手で…」

「ヒヤハハハ…!」

茫然としている保へと、誘が楽しげに笑いかける。

「喰らいやがれええ!」

「うっ…!」

左腕に糸を突き刺されながらも、誘は間を置くことなく、保へと右足を振り上げる。誘の左右の手に、すべての糸を封じられた保は、言葉を放つことも出来ず、表情を歪めた。

「うああああっ…!」

振り下ろされた誘の右足に斬り裂かれ、保が後方へと吹き飛ばされる。

「う…うう…」

強く斬り裂かれた左肩を押さえ、床へと蹲^{うすくま}る保。

「ヒヤハハっ…ハハ…」

左腕に突き刺さった糸を一本一本抜き、滴る血を見つめながら、誘が溢れだすような笑みを零す。

「楽しい…楽しいっ…ヒヤハハっ」

自らの血を眺め、誘は心から楽しそうに笑う。

「う、うううっ…」

「んっ？」

楽しさに酔っていた誘が、かすかに聞こえてくる声に顔を上げる。すると誘の視界に、ふらつく体を必死に動かし、何とか立ち上がるうとしている保の姿が入って来た。

「まだ動けんのかあっ」

立ち上がろうとする保を見て、誘はさらに楽しげに笑う。

「結構、根性あんじゃねえか」

立ち上がる保へと、誘が意外そうに声をかける。

「どういう心境の変化だあ？ええっ？さっきはあっさり諦めようとしてたくせによお」

「はあ：はあ：べ、別に、どうってことじゃないんです：」

息を乱しながら、やっこのことで立ち上がった保が、屈めていた上半身を起こしながら、誘の問いかけに答えていく。

「ただっ：本当の笑顔で、みんなと：仲間と笑い合いたいからっ：」
力なく下げていた右手をあげ、傷だらけの胸の前で、強く握り締める保。

「こんな“痛み”くらいで、倒れてなんかいられないんですっ：！」
顔を上げた保が、迷いのない表情で、堂々と言い放つ。

「ふうんっ」

保の言葉を聞いた誘が、あまり興味なさそうに頷く。

「一人は“痛み”を消し去ろうとして、もう一人は“痛み”を受け入れようとする」

先程までここに居た灰示と、今の保の姿を比べ、誘が感心するよう言う。

「可笑しな人間だな、お前たちは」

「はあっ：はあっ：」

微笑みかける誘の言葉が届いているのか、届いていないのか、保は必死に呼吸を整えることに集中する。

「まあでも、楽しかったぜえ？お前との戦いつ」

誘が、満足げな笑みを浮かべる。

「後は：」

少し低く落とされた誘の声が、部屋に響く。

「俺がもっともっと狂えるように、お前の言葉を貰うぜえ！」
声を張り上げた誘が、右手を高々と突き上げる。

「ヒヤハハ！“狭”！」

「なっ…！」

誘の言葉とともに、眩いばかりの白光が部屋全体へと放たれると、部屋の四方の壁が前方へと動き出し、広間であった部屋を、保と誘、それぞれの立っている空間、六畳間分ほどまでに小さく、狭めた。^{せば}

「これは…」

背中ofすぐ後ろまで迫った壁を振り返り、保が少し眉をひそめる。

「これで逃げ場はねえっ」

誘が、掲げていた手をゆっくりと下ろす。

「ヒヤハハ！さあっ、最後の一撃を思いっきり楽しもうぜえ？ 太守
！」

「……っ」

勢いよく両手を広げる誘を見つめ、鋭い表情を作る保。

「行つくぜえ！？」

両手を前へと突き出した誘が、今までで一番大きな白光の塊を造り出す。

「“行”っ…！」

造り出した白光を、保へ向けて、勢いよく放つ誘。白光は逆巻きながら、その規模をさらに大きくして、狭い部屋の中を、保へ向かって突き進む。

「……………」

だが保は両手を力なく下げたまま、微動だにせず、向かってくる白光を見つめた。

「何だあ？ やっぱり諦めたかあ？」

そんな保の様子に、怪訝そうに顔をしかめる誘。

「言葉とか、そういうのはよくわかんないけど…」

白光が迫る中、保がそっと声を発する。

「ボケボケでバカで、何にもよくわかってない俺だけどっ…」

———“サヨウナラ”……—

「……っ！」

思い出される囁の言葉に、保が目つきを鋭くし、勢いよく顔を上げる。

「この戦いが、絶対に負けられないものだってことくらいはわかるからっ……！」

糸を絡めた両拳を、保が目いっぱい広げる。

「“猛^{たけ}ろ”……！！！」

——パアアアン！

保が言葉を放ったその瞬間、保の両手から無数の糸が放たれ、床や天井を突き刺したかと思うと、また別の壁から突き出し、狭い部屋の中を、一瞬で駆け巡った。

「な、何っ……！？」

視界に一気に増えていく赤い糸に、焦りの表情を見せる誘。

「あぁっ……！」

あらゆる角度から突き出す糸を浴びた誘の白光が、細かい光の粒となって、床へと砕け散っていく。その光景に、誘が大きく目を見開く。

「そ、そんな、俺の言葉がっ……うっ……！」

茫然としていた誘に、床から飛び出してきた一本の糸が迫る。

「グっ……！」

避ける術もなく、険しい表情を見せる誘。

「うううう……！」

床から突き上げた糸が、思いきり誘の腹部を貫いた。誘が大きく目を見開き、押し潰されたような声を漏らす。

「お、俺が……負ける……？」

見開いた瞳のまま、信じられないといった表情で、誰へともなく問いかける誘。

「ヒヤハっ……楽しく、ねえっ……！」

笑みを零した誘へと、八方から、無数の糸が襲いかかった。

「うがあああああっ!!」

無数の糸に突き刺され、誘が激しい叫び声をあげる。

「あっ…ああ…う…」

狂気に満ちた瞳をゆっくりと閉じ、その場に力なく倒れる誘。開かれたままの誘の口から、自発的に出てくるように、言玉が床へと零れ落ちる。

「……っ」

言玉が床へと落ちると、誘の言葉の効果が消えたのか、部屋を狭めていた壁が後方へと下がっていく。広い部屋へと戻った広間に、ただ一人、保だけが立ち尽くした。

「はぁ…はぁ…」

乱れた息のまま、ゆっくりと手を下ろす保。

「こんな俺が…勝っちゃってすみませんっ…」

誰へ向けた謝罪なのか、小さな声が広間へと落とされた。

「“シヨウ”に、“キヨウ”…」

夢言石に刻まれていく言葉を見下ろし、玉座に座る弔が、その言葉を読み上げる。

「やっぱり捨て駒か。言玉を与えても、たかが知れてたな…やれやれ…」

弔が深々と、肩を落とす。

「このままだと、すぐに俺も動くことになりそうだね…」

Word. 30 唯一ツノ真実 (3)

「はあ…か、階段…？」

壁のもとに戻った部屋を見回していた保が、部屋の隅にある、上へと続く階段を見つける。

「上れば…みんなのところに戻れるかな…」

保が傷だらけの体を引きずるように、重い足取りで階段へと進み、ゆっくりと一段ずつ、階段を上っていく。静かなその場に、保の足音がよく響き渡った。

「何か…不気味だなあ…」

あまりの静けさに、思わず表情を引きつる保。

「あれ？ここまで？」

一階分上った辺りで階段は途切れ、保は、何もない横長の部屋へと辿り着いた。何もない部屋の奥の壁際に、横開きの扉のようなものが見える。

「あれは…」

それを見て、眉をひそめる保。

『エレベーター？』

保と揃う、もう一つの声。

「へっ？」

重なるその声に、保が戸惑うように振り向く。

「だっ…」

「誰っ!？」

「ひいひいひい！」

誰かを確かめようとしたその時、眼前へ、勢いよく突き出される刃に、保は思わず情けない悲鳴をあげた。

「ご、ごめんなさあ…いい！こんな俺、ゆ、許して下さいあ…いい！」

「た、高市くん？」

天井を見上げたまま、必死に謝る保に、目を丸くしたのは七架で

あった。保へと向けられたのは、七架の薙刀の刃であった。

「良かった～高市くんも無事だったんだねっ」

「今、まさにその無事が失われようとしてますけど…」

刃を向けたまま、大きな笑顔を見せる七架に、保が少し表情を引きつつて呟く。

「あ、ごめんごめんっ」

七架が慌てた様子で、保へ向けていた刃を引っ込める。

「また七声の人が出たのかと思っちゃって」

「俺もまた、トチ狂った人が来たのかと思いましたよ…」

「トチ狂った？って、高市くん、ひどい傷だよっ!？」

げっそりとした様子で答える保に、首を傾げていた七架が、保の全身の傷に気付き、驚きの声をあげる。肩口や腹部の傷からは、まだ血が流れており、保が暢気な表情を見せているのが信じられないほどの傷であった。

「大丈夫っ？す、すぐ治すねっ」

「あ、お願いします」

保の傷へと、薙刀を持った右手を伸ばす七架に、保が軽く頭を下げる。

「はあ！こんな、そもそも神経通ってんの？って感じの俺が、一丁前に傷の治療なんてしてもらってすみませえくん！」

「ま、まあ元気そうで良かったよ…」

相変わらず謝り散らす様子に呆れながらも、傷のわりには元気そうな保に、七架が少しホッとした表情を見せる。

「あのエレベーター乗りながら行こ？上行ったら、朝比奈くんたちと合流出来るかも知れないし」

「あ、はい！」

七架の言葉に保が頷き、二人が部屋の奥にあるエレベーターへと向かう。すぐ横にあるボタンを押すと、横開きの扉が開き、狭い空間の中に二人が足を踏み入れた。七架が上という選択肢しかない、エレベーターのボタンへと指を伸ばす。

「何階とかはないんだ…」

「はぁ！ちよつとばかり、閉所恐怖症ですみませえくん！」

「はいはい、すぐ着くと思うから我慢してね」

頭を抱え、閉所な空間を恐れている保を、あしらうように適当に宥め、七架がボタンを押した。

「高市くん、傷」

「あ、はい」

七架に言われ、保が頭を抱えていた両手を下ろし、七架の方へと傷口を向ける。

「“治せ”…」
なお

七架が言葉を発すると、保の傷口へと向けられた七架の右手から、柔らかな赤色の光が放たれ、保の体を包み込んだ。淡い光に包まれた傷が、徐々に塞がっていく。

「すごい傷…よっぽど、大変な戦いだっただね」

「ま、まあ…半分以上は記憶ないんですけど…」

「えっ？」

保のその言葉に、七架が戸惑うように顔を上げる。

「記憶がない？」

「は、はいっ…この前の地球外生命体さんの時もなんですけど、俺戦ってる最中、結構記憶失くすみたいで…」

「記憶失くすって…」

微笑んで答える保に、ますます表情を曇らせる七架。

「大丈夫なの？それって。為介さんとか、恵先生とかに相談してみた方が…」

「大丈夫です」

「えっ？」

七架の声を遮って即答する保に、七架が戸惑うように目を丸くする。

「大丈夫って、確信だけはあるんです。何かっ…」

「高市くん…」

左胸に手を当て、保が穏やかな笑みを浮かべる。そんな、いつもとは違う様子の保を、七架は少し目を細め、見つめた。

「随分と楽になりました。ありがとうございます、奈々瀬さん」

「あ、うん」

二人がそう会話を交わしていたその時丁度、エレベーターが到着を告げる甲高い音を立てる。

「着いたみたい」

「でも何か変な感じしますよねえ」

保が、開いていくエレベーターの扉を見つめながら、そっと呟く。

「こんなお城の中に、エレベーターだなんてっ…」

「不釣り合いで申し訳ないね」

『……っ』

開いた扉の向こうから聞こえてくる声に、保と七架が同時に表情を強張らせ、勢いよく振り向く。

「一階から四階まで階段で上るの、結構辛いもんだからさ」

エレベーターから出て来た二人を迎えたのは、広い部屋にポツリと置かれた玉座に腰を下ろしている弔とむらいであった。エレベーターで辿り着いたのは、四階の王の間だったようである。

「あ、あなたはっ…!」

「あの時の…!」

険しい表情を見せ、それぞれの武器を構える保と七架。

「ああ、於崎の屋敷で会ったかな？悪いね。君たちのこと、あまりよく覚えていないや」

二人を見つめながら、弔が涼しげな笑みを浮かべる。

「はあ！大して記憶にも残らない存在で、すみませえ〜ん!」

「高市くん…」

挑発で言われているというのに、謝り散らしている保に、七架が呆れた表情を見せる。

「あなたも七声の人？」

「ああ。一応、七声のリーダーをやってる、弔さ。よろしくね、安

団の皆さん」

問いかける七架に、弔が隠すことなく、あっさりと答える。

「ならっ」

七架が目つきを鋭くし、勢いよく薙刀を振り上げる。

「真田さんを返してっ！」

「あっ」

強く叫ぶ七架に、ハッとした様子で顔を上げる保。

「そ、そうです！真田さんを、地底世界から解放してもらいますよ！」

保も大きな声で言い放ち、糸を絡めた左右の手を構えた。

「囁なら、すぐ隣の部屋にいるよ。俺に勝ったら、連れて帰るといい」

隣の部屋を指差しながら、弔が落ち着いた様子で答える。

「ただし、俺が勝ったなら……」

ゆっくりと玉座を、立ち上がる弔。

「君たちの言葉、貰うからね……」

『……っ』

冷たく微笑む弔に、保と七架が厳しい表情を見せた。

七声の城、三階。

「“上^あがれ”！」

言葉を放ちながら、自らの体へと弾丸を撃ち、赤い光に包まれたアヒルが、天井へ向けて高々と上昇する。

「のの……昇^{のぼ}れ”」

巨体の男、罵^{ののしり}も、言葉を発し、アヒルを追うように空中へと舞い上がる。

「の……伸^のびろ”」

舞い上がった罵が、アヒルへと両手を向け、周囲に網状の白光を

張り巡らせ、アヒルを捕らえようとアヒルへ向かって伸ばす。

「“荒^あれろ”……」

周囲を巡る白光を見つめながら、アヒルが目つきを鋭くする。

「“嵐^{あらし}”……」

「のっ……」

吹き荒れる強い風に、アヒルへと向かって来ていた白光の網がすべて押し返され、その後ろに居た罵も風を受け、床へと吹き落される。

「のの、の……」

床へと着地した罵が、少し乱れた声を落とす。

「食らっとけ！」

「のっ……？」

上空から降って来るアヒルの声に、罵が顔を上げる。

「“当^あたれ”……」

「のっ……」

まだ膝を床についたままの罵へ向け、アヒルが上空から弾丸を放つ。勢いよく向かってくる赤い光の弾丸に、罵が焦ったように表情を歪める。

「のの……」

その大きな手にはあまりにも小さな言玉を、指で必死に挟み込み、自分の前へと突き出す罵。

「“納^{のう}”……」

「ノウっ……？」

罵が発する言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「あっ……」

白く輝いた言玉の中へと、吸い込まれるようにして消えていくアヒルの弾丸。その光景に、アヒルが驚いた様子で、大きく目を見開く。

「轟^轟の“トウ”と同じ、あいつらの特殊言葉ってやつかつ……」

「の……臨^{のぞ}め”……」

「何っ…!？」

罵のその言葉が放たれたと同時に、罵の言玉から、先程吸収され
たはずのアヒルの弾丸が、アヒルへ向かって飛び出してくる。

「うおっ! あ、“当たれ”!」

アヒルが慌ててもう一度、弾丸を放ち、向かってきた弾丸と相殺
させる。

「ふうっ」

弾丸が互いに碎け散ったことを確認し、ホッとしたように一息つ
くアヒル。

「吸収したもんを返すことまで出来んのかよお」

「のの…」

言玉を下ろした罵が、アヒルに攻撃を浴びせ損ねたからか、少し
不満げな表情を見せる。

「こりゃ、下手に弾丸撃ち込むわけにもいかっ…」

「のの…」

「んあっ？」

再び言玉を構える罵に、アヒルが首を傾げる。

「“濃霧”…」

「へっ？」

罵の言葉により、部屋中に一気に広がる濃い霧。上空にいるアヒ
ルの周囲にも、真っ白な霧が立ち込め、アヒルの視界を遮っていく。
「熟語か。やっべ、これじゃ何も見えねえっ…」

周りに広がる白い霧を見つめ、アヒルが険しい表情を見せる。

「一体、どっからっ…」

「ののっ…!」

「なっ…!」

霧の中で罵の姿を探していたアヒルの、その背後から、罵の巨体
が勢いよく飛びかかって来る。

「クソっ…! “上^あが…!」

「“乗^のり上げろ”…」

「ううっ…！」

上へと上がろうとしたアヒルよりも先に、アヒルの上空へと乗り上げる罵。舞い上がった罵の巨体が、そのまま真下のアヒルへと、降り落ちてくる。

「うわあああああっ！」

罵に乗られる形となって、勢いよく床へと下降していくアヒル。
「うぐっ…！」

床へと背中をついたアヒルが、自分の二倍はある大きな体の罵に押し潰され、苦しげに顔を歪める。

「く、クソ…！どけ！このっ…！」

何とか右手だけを、その体重から解放し、上に乗る罵へとアヒルが銃を向ける。

“当^あたれ”…！」

アヒルが素早く、罵の顔面めがけて、弾丸を放つ。

「のの…」

「あっ…！」

罵が顔の前へ、言玉を持ってくると、アヒルが大きく目を見開いた。

「やっべ…！しまっ…！」

「“納”…」

罵が先程と同じように、言玉の中へとアヒルの弾丸を吸収する。弾丸を吸いきると、罵は吸い取ったその言玉を、アヒルの目の前へと持ってきた。

“臨^{のぞ}め”…」

「うっ…！」

罵の言玉から、アヒルの弾丸が、今度は相殺させる間もない至近距離から、アヒルへと放たれた。

——バアアアン！

弾丸がアヒルへと放たれ、アヒルの下の床まで貫いて、大きな衝撃音を立てる。

「ののっ…」

目の前に立ち込める衝撃風を見ながら、満足げに微笑む罵。

「ののの…のふふふっ…！」

「へえ、笑うと“の”以外の文字も言うようになんだあ」

「のふっ…？」

背後から聞こえてくる声に、罵が漏らしていた笑い声を止める。

「のっ…！？」

「結構面白い仕組みしてんなあ、お前っ」

罵が振り返った先には、まるで傷を負っている様子もなく、元氣そうなアヒルが立っていた。

「の…！？のっ…！？」

自分の下にアヒルの姿がないことを確認し、再び立っているアヒルを見て、戸惑いの表情を見せる罵。

「^{あざむ}欺け”」

困惑している罵へ、アヒルが微笑んで、言葉を投げかける。

「残念ながら、お前の乗った俺はニセモノでしたっ」

「ののっ…」

得意げに微笑むアヒルに、罵が悔しげな表情を見せる。

「のの…！“伸^のびろ”…！」

怒りを表情に示した罵が、勢いよく声をあげ、再び網状に広がった白光をアヒルへと向ける。

「うおっ…！」

襲いかかって来る白光を、身を反らして、必死に避けるアヒル。だが一本を避けても、他の白光が一気に飛びかかって来る。

「やべ…！“当^あたれ”…！」

正面から向かってくる白光に対し、アヒルが反射的に弾丸を放つ。

「ののっ…」

「何っ…！？」

アヒルが放った弾丸の前へと、後方から罵が乗り出してくる。

「納」…」

アヒルの弾丸を、突き出した言玉で吸収する罵。

「臨^{のぞ}め」…！」

「うっ…！」

吸収した弾丸を、罵がアヒルへと返す。アヒルは向かってくる弾丸を避けようとするが、その周囲には、網状の白光が張り巡らされている。

「く、クソっ…！」

弾丸に当たるか、白光に飛び込むか、二択を迫られたアヒルが表情を歪めながら、勢いよく白光の小さな隙間の中へと飛び込んでいく。

「うっ…！くう…！」

それでも数本の白光が腕をかすめ、掠り傷を負ったアヒルが、表情をしかめた。

「痛って」

弾丸が床へと落ち、周囲の白光が消えると、傷ついた右腕を押さえたアヒルが、その場にしゃがみ込む。破れた制服の下からは、赤い血が滲み出していた。

「のの、のっ…」

再び満足げな笑みを浮かべ、言玉を持ちあげる罵。

「マっズイなあ。“当たれ”が使えないんじゃ、ろくに防御も出来っ…おっ」

顔をしかめ、首を捻っていたアヒルが、急に何か思いついたような声を漏らす。

「どうかなあ…まっ、思いついちまったし、とりあえずやってみっかつ」

軽い調子で声を出したアヒルが、罵へ向けて、銃を構える。

「“当たれ”^あ！」

「のっ…？」

何か回りくどい攻撃をするわけでもなく、ただシンプルに罵へ向けて、弾丸を放つアヒル。そんなアヒルの攻撃に、罵が少し戸惑った表情を見せる。

「の…“納”！」

戸惑いつつも弾丸を食らうわけにはいけないので、罵は言玉を突き出し、またしても同じように、言玉の中に弾丸を吸収した。

「の…“臨^{のぞ}っ…」

「“当たれ”」

「のっ？」

返そうとしたその時に、再び向かってくる弾丸に、罵が少し目を丸くする。

「の…？ “納”！」

首を傾げながらも、再び言玉の中へと弾丸を吸収する罵。

「“臨っ…」

「“当たれ”っ」

「のっ…！？」

再び返そうとする罵であったが、またしてもアヒルが弾丸を放ってくる。

「“当たれ”、“当たれ”、“当たれ”っ」

休むことなく、何度も何度も、罵へ向けて弾丸を撃ち込むアヒル。

「ののっ…！ “納”！」

次々に向かってくる弾丸を、罵は一つ残らず、すべて吸収していく。

「よっ」

今度は何も言葉を言わずに、引き金を引くアヒル。そこで引き金を引く手を止め、やっと銃の連射を終わらせる。

「“納”…！」

その最後の弾丸も、言玉に吸収する罵。

「ののっ…！ “臨っ…！」

「あ…」

罵が言葉を放つ前に、アヒルが言葉を口にした。

「溢^{あふ}れろ」

そっと落とされる、言葉。

「のっ…!？」

アヒルの言葉が放たれると、罵の大きな手の中に収まっていた言玉から、激しい赤色の光が溢れ始めた。

「のののおおおっ！」

溢れ出す光に堪え切れなかったのか、言玉は勢いよく碎け散り、その中から一気に溢れ出した赤い光が、罵へと降り注いだ。

「の…のぐっ…」

床に両手をついた罵が、苦しげに声を漏らす。

「……………」

「のっ…!」

すぐ前へと立つ気配を感じ取り、俯いていた罵が、勢いよく顔を上げる。そこには、銃を構えたアヒルの姿があった。

「の…!ののおっ…!」

言玉を失った罵は、恐怖に顔を歪ませながら、必死に首を横に振り、懇願するような瞳でアヒルを見つめる。

「悪いな」

そんな罵へと、はっきりとした口調で言い放つアヒル。

「こんなところで、止まっちゃもうわけにはいかねえんだ」

「のっ…!」

“当たれ”^あ!

大きく口を開いた罵へと、アヒルが躊躇うことなく、弾丸を放った。

「のおおおおおおっ…!!」

弾丸に貫かれ、罵が奥の壁まで吹き飛ばされていく。

「のっ…のの、の…」

壁に背中を打ちつけ、そのままその場に倒れ込むと、罵は力なく瞳を伏せ、気を失った。

「ふうっ」

銃を下ろしたアヒルが、ホッと一息つくように、肩を落とす。

「さてとっ」

体の向きを変え、上へと続く階段へと視線を移すアヒル。

「囁っ…」

階段の上に見える四階を見上げ、アヒルはそつと瞳を鋭くした。

Word 30 唯一ツノ真実 (4)

—— 『もちろん、君が一番好きだよ、囁。君が世界で一番、大好きだ』

その言葉が口癖だった父は、私が五歳の時、私と母を捨てて、他の女のところへ去って行った。

「母さんは大丈夫よ。囁が居てくれるもの」

見るからに弱っていった母は、私の前ではいつも、無理して笑っていた。

「私は囁が居てくれるだけでいいの」

「……………」

母がそう言うから、私もあんな父のことは忘れて、母と二人、初めから二人であったように、生きていけばいいと、諦めた。なのに。

『愛しているわ、囁。母さんはいつも、どこに居ても、あなたのことを見守っているから』

そう書かれた手紙だけを残して、母が消えたのは、それから一年も経たない頃だった。

言葉では、何とでも言える。

例え、まったくそう思っていなかったとしても、言葉で紡ぐのは、とても簡単。

言葉なんていつも、そう、嘘ばかり。

「辛いことがあったら、何でも言ってね、囁ちゃん」

嘘。そんな気、さらさらなくせに。

「一人じゃ寂しいでしょ？ いつでも遊びに来て」

嘘。行ったら絶対、迷惑そうな顔するくせに。

「おばさん、ちよくちよく会いに来るから、何かあったら、すぐに言うのよ？」

嘘。ろくに会いにも来なくせに、ろくに聞く気もなくせに。

「私たちが力になるから、気を落とさないで」

嘘。そんなのは、嘘。あの言葉も、その言葉も、全部、嘘。嘘。

この世界の言葉は、どうしてこうも、嘘ばかりなんだろう。

この世界の言葉に、意味のあるものなんて、きつと、たったの一個もない。

嘘ばかりの人間の中に居ることが嫌で、特にあてもなく抜け出した。辿り着いたのは、人の気配もまるでしない、深い森の中だった。

「お城……？」

深い森の中に建つ、古びた城を見つけた。

「何で、こんなところに……」

「珍しいな」

「……っ」

人の気配なんてまるでしなかったのに、すぐ近くから聞こえてきたその声に、私は勢いよく振り返った。

「こんな場所に、お客さんなんて」

そこに立っていたのは、まだ若い男の人だった。とても穏やかに微笑んでいたけれど、その瞳はどこかとても冷たくて、その矛盾が、とても印象的だった。

「こんなところで、何をしてるの？ お嬢ちゃん」

「……………」

「んっ？」

何も答えない私に、その人は少し首を傾げる。

「口がきけないのかな？」

その人が私の顔を覗き込み、考えるように呟く。

「えっと、じゃあ紙とペンで…」

「……きけるわ…」

「あれっ？」

ようやく口を開いた私を見て、その人は驚いたような顔を見せる。

「何だ。話せるなら、初めからちゃんと話してくれればいいのに」

「話したって、意味がないもの…」

「えっ…？」

諦めたように言い放った私に、その人は眉をひそめる。

「この世界の言葉は嘘ばかり…意味のあるものなんて、一個だってないの…」

今、こうして放っている言葉にも、きっと意味はない。

「だから、こんな言葉…使うだけ無駄で…」

「わかるな」

「えっ…？」

返ってきた思いがけない言葉に、私は少し驚いて、振り向く。

「本当、この世界の言葉って、意味のないものばかりだよね」

「……っ」

私の言葉に賛同しながら、薄く笑みを浮かべ、遠くを見つめるその人を、私は戸惑いながら見つめた。

「あなた、は…」

「だから、ねえ、君」

振り向いたその人が、私を見る。

「僕と一緒に、新しい言葉を創らないか？」

「えっ…？」

その言葉に、私は戸惑いの表情を見せる。

「新しい…言葉っ…？」

「うん、そう」

聞き返した私に、その人は大きく頷いた。

「嘘偽りのない、意味ある言葉を創るんだよ…」

「嘘、偽りの、ない…」

すべての言葉が嘘に聞こえていたあの頃の私に、何故か、その言葉だけは嘘に聞こえなかった。

「意味の、ある…」

「ああ」

その人は私に、もう一度、大きく頷きかける。

「創ろう？ 僕らが支配する、僕らだけの言葉を…」

「私たち、だけのっ…」

差し伸べられたその手に、ゆっくりと手を伸ばす。

「言葉っ…」

嘘ばかりの世界を生きてきた私にとって、彼のその言葉だけが、ただ一つの真実だった……——

「ん…」

部屋の寝台に転がり、再び眠りについてた囁が、ゆっくりとその瞳を開く。目を開くとそこには、相変わらず無機質の白い天井が広がっている。

「また、あの夢か…」

繰り返し見る、この城の前で弔と出会った頃の夢。夢が頭の中に刻みつけているようで、囁はどこか疲れたように、深く肩を落とした。

「はぁ…そろそろ外に…んっ…？」

寝台の上で起き上がった囁が、壁の向こうからかすかに聞こえてくる、何かがぶつかり合うような衝撃音に気付き、そっと耳を澄ませた。

「誰か…戦っているの…？」

その音は、明らかに戦いの音であった。

「弔、と…?」

——“会いに行く”からっ…!——

「……っ!ま、まさかつ…!」

アヒルの姿が脳裏を過ぎり、囁は焦った様子で身を乗り出した。

「うあ…あぁ…」

七架に傷の治療をしてもらったばかりであったというのに、再び全身傷だらけとなった保が、真っ赤な血を床に滴り落としながら、力なくその場に倒れ込んでいく。

「た、高市くんっ…!」

倒れた保の名を必死に呼ぶ七架もまた、全身に傷を負い、保の後方で、うつ伏せに倒れ込んでいた。

「安団もこんなものか。大したことないな」

「うつ…」

倒れた保のすぐ目の前に立つ弔が、挑発めいた笑みを浮かべる。その笑みに七架は顔をしかめるが、七架には、その場から立ち上がる力も残されていなかった。

「クっ…うう…」

痛みが激しく、七架の意識も、徐々に失われ始める。

「こんなに…強いなんてっ…」

「残念だったね。囁を取り返せなくて」

「……っ」

弔の笑みをその視界に入れたまま、七架がゆっくりと目を閉じていく。

「真田、さんっ…」

前へと、必死に伸ばされる七架の左手。

「朝比奈…くん…」

その手が、力なく床へと落ちた。

「ふうっ」

保と七架が気を失ったことを確認し、弔が一息つくように肩を落とす。

「暇潰しにもならなかったな」

少し不満げに、言葉を吐き捨てる弔。

「まあいい。とりあえず言葉を頂くでしょうか」

そう言っただけ微笑んだ弔が、懷から夢言石を取り出し、倒れたままの二人へと夢言石を向ける。

「貰うよ。君たちの言葉」

「弔」

「んっ？」

弔が二人の言葉を奪おうとしたその時、左方から名を呼ぶ声がして、弔は手の動きを止め、ゆっくりと振り返った。

「やあ、囁」

弔が振り向いた先から、弔の方へと歩いてくるのは囁であった。

「お目覚めかな？」

「ええ…ここから戦う音がしっ…なっ…」

自分の部屋から出て、弔へと歩み寄っていた囁が、弔の前で倒れている傷だらけの保と七架を見つけ、思わず眉をひそめる。

「ああ、これね」

囁の視線の先を追い、そっと微笑む弔。

「さっき来たんだ。導^{みちびき}たちが結構、役に立たなくてね」

困ったように笑いながらも、弔のその瞳はひどく冷たい。

「何か、とても熱くなっていたよ？彼ら」

弔がその笑みを、今度は囁へと向ける。

「君を返せて、しつこくてね」

弔の言葉が続く中、囁がますます険しい表情を見せながら、倒れ込んでいる保と七架を見つめる。

「彼らも可笑しなことを言うよね。君は元々、俺たちの仲間だつていうのに」

微笑みかける弔と視線を合わせることはなく、囁が少し俯く。

「本当に勝手な人間ばかりだ。今の言葉を使う連中というのは」

弔がどこか呆れた様子で、肩を落とす。

「自分の都合のいいようにしか、言葉を使わない。君もそう思うだろう？ 囁」

「……………」

問いかける弔に答えず、囁はただ、険しい表情を見せる。

「けど、大丈夫」

囁の答えを待たずに、弔は次の言葉を口にした。

「こんな連中からは、すぐに取り上げることにするよ。言葉をね…」

「なっ…！」

再び夢言石を保たちへと向ける弔に、囁が大きく目を見開く。

「と、弔っ…！」

「大丈夫。すぐ終わるさ」

思わず身を乗り出した囁に、弔はまるで安心させるかのように、

優しい笑みを向ける。

「少しの間だけ待っていてくれ、囁。これで…」

弔の右手の中の夢言石が、淡い白色の光を放ち始める。

「君と俺の夢に、また一步近づくから…」

「あっ…！」

徐々に輝きを強くする夢言石が、保と七架へと向けられる。倒れ

たまま、気を失っている二人は、夢言石を向けられていることすら

知らない。囁は思わず、手を伸ばそうと右手を上げる。

「クっ…」

だがその右手はすぐに下げられ、囁は何かを堪えるように、強く唇を噛み締めた。

——やったね！ 真田さん！ 真田さんに教えてもらった言葉、バッ

チリだったよ！——

——はあっ！朝から見るにはちよつとキツイ俺なんかが、真田さんと登校しちゃって、すみませえくん！——

「クっ…！」

思い出される二人の笑顔に、囁が力いっぱい拳を握り締める。

「さあ…」

部屋中に広がるほどに光を発し始めた夢言石を、弔は微笑みながら、ゆっくりと握り直した。

「言葉を貰うよ…」

冷たい微笑みが、夢言石の光に映える。

「五十音“た”、“な”…封印…」

夢言石から保と七架へ向け、まっすぐに放たれる白い光線。

「……っ！」

その光線に、囁は大きく目を見開いた。

——パアアアン！

放たれた光線が何かに当たり、部屋に響く、高い音を立てる。

「……………」

その音を聞き、弔が浮かべていた笑みが消える。

「何の、つもりだ…？」

どこか、低い声を発する弔。

「囁…」

「……………」

振り向いた弔の、突き刺すような鋭い視線の先に立っていたのは、真っ赤な横笛を口に当てている囁であった。囁が手を動かし、ゆっくりと唇から横笛を離す。

「“遮れ”…」

横笛から離れた口で、小さく言葉を落とす囁。倒れている保と七

架の周囲に、淡い赤色の光が、まるで二人を守るかのように張られていた。先程の高い音は、その張られた膜が、夢言石の光を弾いた音だったようで、二人の言葉が奪われた様子はなかった。

「もう一度、聞こうか…」

弔が夢言石を下ろし、囁の方へと体の向きを変える。

「何の、つもりだ？ 囁…」

「……ごめんなさい…」

問いかける弔に、囁は謝罪の言葉を呟いた。

「でもっ…」

その瞳を強く光らせ、囁がまっすぐに弔を見つめる。

「彼らの言葉は、あげられないわっ…」

「……っ」

はつきりと言い放つ囁に、弔はそっと目を細めた。

Word. 31 意地 (1)

アヒルたち安団と、七声との激戦が続いている頃。於崎家屋敷。

「……………」

どこか厳しい表情を見せた和音が、見張りのいる門をくぐり、再び屋敷の中へと足を踏み入れた。

「おかえり」

「……………」

入口棟に入ってすぐのところでは声を掛けられ、和音が振り向く。和音を出迎えるように、屋敷の奥から玄関へと現れたのは、檻也であった。

「あら、檻也」

和音がすぐに、笑顔を作る。

「もうお体はよろしいんですの？」

「ああ、問題ない」

問いかける和音に、檻也はどこか素っ気ない態度で答える。

「どこへ行っていたんだ？」

「韻^{いん}へ、七声のことを報告にですわ」

檻也の問いに答えながら、和音が玄関を上がり、廊下をゆっくりとした足取りで進んで、檻也の立っているすぐ前まで歩み寄っている。

「討伐に行く安団の見送りもせずに…？」

「急いでいたものですから」

少し責めるように、鋭く問いかける檻也に対し、和音は笑顔を崩すことなく、すぐさま答えた。

「安の神たちは無事、七声のアジトに辿り着いたようですわよ。援軍に送った者たちから、報告が来ました」

「そうか」

和音の言葉に、檻也がホッとした様子で肩を落とす。

「和音」

「はい？」

改めて呼びかける檻也に、和音が不敵な笑みを向ける。

「何故、七声討伐に安の神を…」

「檻也くんっ」

『……っ』

檻也の後方から聞こえてくる声に、檻也の言葉は止まり、檻也と和音は同時に声をした方へと視線を移した。

「紺平」

「言われた通り、辞書読み終わっ…って、あつ、ごめん。話し中だった？」

屋敷の奥から現れた紺平が、檻也の背後に和音を姿を見つけ、申し訳なさそうに表情を歪める。

「構いせんわ」

「えっ？」

そっと微笑みかける和音に、戸惑った顔となる紺平。

「あなたは、えっと…」

「自己紹介がまだでしたわね。わたくし、“わ”の力を持つ、第二十八代言姫の和音ですわ」

「言姫、様っ…」

「以後、お見知りおきを。己^{じもっ}守さん」

「あ、は、はいっ！こちらこそ！」

名を名乗る和音に、紺平が慌てた様子で深々と頭を下げる。まだ言姫のことなどは詳しく知らぬはずの紺平であるが、和音が纏っているその空気に、身分の高さを感じ取ったのだろう。

「あなたにも、今回の件では、色々にご迷惑をおかけしましたわね」

「ああ、いえ！そんな…！俺は何もっ…」

「韻に行っていたのだろう？」

かしこまる紺平の横から、再び檻也が口を挟む。

「七声のこと、新たに何かわかったのか？」

「ええ、色々…」

檻也の問いかけに頷き、和音が真剣な表情を見せる。

「今からお話いたしますわ」

「じゃあ、こちらへ。ここの客間が空いている」

檻也は指し示した手で、廊下のすぐ横にある襖を開いた。誰もいない、テーブルだけが置かれた畳の部屋へと、先に和音を通し、檻也も中へ入っていく。

「あ、あの俺は、居ない方が…」

「いいえ、あなたもぜひ、一緒に聞いて下さい」

遠慮がちに問いかけた紺平の方を、和音が振り返る。

「あなたにも、関係のないお話ではありませんので…」

「えっ？」

「……っ」

意味深に言い放つ和音に、紺平は首を傾げ、檻也もそつと眉をひそめた。三人が客間へと入り、紺平が襖を閉じる。三人はテーブルを囲むように、畳へと腰を下ろした。

「今回、新たに判明したのは、七声主導者のこの男のことです」

和音がそう言つて、テーブルの上に一枚の写真を出す。

「時定…いや、弔てうとのことか…」

「ええ…」

名を言い直した檻也に、和音が深々と頷く。

「弔。本名を、鴻上皇紀こうがみ こうき」

和音が、その瞳を鋭くする。

「かつて五十音士の己守であつた者です」

「えっ…？」

「なっ…！」

和音のその言葉に、檻也と紺平がそれぞれ、衝撃を走らせる。

「奴が、元・五十音士っ…？」

「俺と同じ、己守…」

「あなたから数えて、三代前の己守になります」

驚く二人に対し、和音が紺平の方を見ながら、冷静に言葉が続ける。

「十四の時、“こ”の力に目覚めた彼は、その優れた知識と身体能力で、五十音士の中でも圧倒的な強さを示しました」

和音がテーブルの上に置かれた、弔の写真へと視線を落とす。五十音士時代の写真なのか、その写真の弔は、檻也が知っている弔よりも少し若く見えた。

「彼は多くの忌を倒し、また於附として、完璧なまでに於の神を守り抜きました。ですが…」

和音の表情が、ふと曇る。

「その裏で、とある研究を行っていたのです…」

「研究…？」

その言葉に、檻也が大きく首を傾ける。

「嘘言玉きよげんぎよくと呼ばれる、言玉と同等の力を持つ物体を、人工的に造り出す研究です」

「言玉を、造る…！？」

檻也が大きく目を見開き、和音の言葉を繰り返す。

「馬鹿なっ…！言玉を造るなんて、そんな真似が出来るはずっ…！」

「ですが、彼の研究は成功しました」

声を荒げた檻也に、和音が冷静に切り返す。

「その嘘言玉を使えば、五十音士でもない人間が言葉を使えるようになる…しかも、その言葉の力は、五十音士のそれに匹敵するほどの強さでした」

「そ、そんなっ…」

あまりの驚きに、紺平も言葉を失う。

「彼の力を恐れた韻は、彼から己守の称号を剥奪し、五十音の世界からも追放して、すべての嘘言玉を処分したのです」

「だが奴は、再び動き出した」

「ええ…恐らくは新たに嘘言玉を造り出し、仲間を集め、機を狙っていたのでしょう…」

檻也の言葉に、和音が険しい表情を作る。

「彼がかつて己守であったのなら、代々於の神が受け継いでいる、夢言石の存在を知っていたことも頷けます」

「夢言石を奪った、奴の目的は…？」

「……………」

檻也の問いかけに、和音がそっと目を細める。

「自分を追放した我々五十音士への復讐か、すべての言葉を奪い尽くすという野心か、もしくは…」

「もしくは…？」

「我々、五十音士とは異なる…まったく新しい、言葉世界の構築…」

「世界の、構築って…」

「……………」

大きくなっていく話に、恐怖すら覚え、険しい表情を見せる紺平の横で、檻也が考え込むようにそっと俯く。

——彼らの目的は…五十音士に成り代わって、すべての言葉を支配すること……—

考える檻也の脳裏に浮かんできたのは、弔たちの反逆に遭った際の、囁の言葉であった。

「三つめが正解だな、恐らく…」

「檻也くん…？」

そう呟きながら、その場から立ち上がる檻也を、紺平が戸惑うように見上げる。

「三つめが正解だというのであれば、言葉世界の未来がすべて、安団の皆様懸かってくるというわけですね」

「懸けさせたのは、お前だろう」

「わたくしは韻の考えの下、最も合理的な方法を選んだだけですわ」
鋭く言い放つ檻也に、和音は穏やかな笑みを向ける。

「安の神を選んだことにも、きちんとした理由があっ…」

「大丈夫かな…」

和音の言葉を、どこか不安げな紺平の声が遮る。

「ガアたち…」

「……っ」

アヒルたちの身を案じ、表情を曇らせる紺平に、檻也もそつと目を細める。

「大丈夫ですわよ」

すぐさま笑顔で、紺平へと語りかける和音。

「彼らは強いものですもの。ねえ？ 檻也」

「……………」

和音の問いかけを聞きながら、檻也が厳しい表情を見せたまま、客間の大窓へと近付いていき、外に広がる空を見つめる。

「言葉世界の未来、か…」

空を見つめ、遠くを見るような瞳を見せる檻也。

「籠也…」

檻也の、どこか不安げな声が、小さく落とされた。

七声の城、一階。玄関ホール。

「“落^おちろ”」

轟が右手を掲げ言葉を放つと、二階まで吹き抜けとなっている天井から、小さな白光の玉が幾つも、雨のように勢いよく降り注ぐ。

「“^{かこ}囲え”」

降り注ぐ光の雨の真下に立つ籠也が、同じく言葉を発し、六本の格子で頭上を覆って、それを防ぐ。

「うっ…」

だが格子にかかる力は強く、籠也が少し表情を歪める。

「“^{とが}尖れ”…」

「なっ…！」

轟が新たに言葉を重ねると、降り注いでいた光が鋭く尖った刃のように形を変え、受け止めていた格子を四方から刻むように傷つける。

「クっ…！か、“返せ”…！」^{かえ}

箆也が言葉を変え、格子を激しく回転させて、降下してくる光を天井へ向けて、一つ残らず弾き返した。

「はあっ…はあっ…」

攻撃を凌ぎきった箆也が、軽く息を乱す。

「ワタクシの持っている言葉は、弟さんの“お”の言葉だけではないのですよお〜？」

「……っ」

耳に届く、その軽い口調の声に、箆也が眉をひそめながら振り向く。

「ワタクシは元々、止守^{ともしり}だったんですからあ」

「そうだったな…」

轟の言葉に答えながら、箆也が少し目を細める。

「そんなワタクシを相手に、そのままでもよろしいんですかあ？」

「………」

含んだ笑みを向けてくる轟に、表情を曇らせる箆也。だがすぐに箆也は六本の格子を一本にまとめ、その一本を右手へと納めた。

「……“変格”」

箆也の声に反応し、格子が赤い光を放ちながら、その形を変えていく。

「それが、あなたの変格活用ですか…」

真っ赤な鎌を構えた箆也を見て、轟が満足げな笑みを浮かべる。

「面白…！」

大きく口元を歪ませて、轟が両腕を振り上げた。

「“捕^とらえろ”っ」

言葉を放った轟の周囲から、紐状の白光がいくつも飛び出し、箆也を捕らえようと伸びてくる。

「絡^{から}まれ”…！」

箆也が鎌を振り下ろしながら言葉を発すると、鎌から放たれた赤い光を浴びた、その紐状の白光が、空中で互いに絡まり、動きを封じられ、床へと落ちて消える。

「“圧^おし潰せ”っ」

「“掻^かき消せ”！」

轟がすかさず向けた白光の塊を、鎌を手元に戻すように一振りして、一瞬で消し去る箆也。

「さすがに言葉数が多いっ…」

次々と轟の攻撃を打ち破る箆也を見つめ、轟がそっと目を細める。

「ならばっ…」

「……っ？」

言玉を左手へと持ち替え、右手を振り上げる轟に、箆也が眉をひそめる。

「“灯^{とう}”っ」

振り上げられた轟の右手から生じたのは、真っ白に輝く炎であった。

「ほ、炎っ…？」

轟の纏った炎に、戸惑いの表情を見せる箆也。

「行きますよ？…っ！」

「うっ…！」

右手を振りかぶり、こちらへと勢いよく駆け込んでくる轟に、箆也が戸惑いを払い、少し慌てた様子で身構える。

「か、“刈^かれ”…！」

向かってくる轟に対し、先手を討つべく鎌を振り上げる箆也。

「……っ」

鎌を振り上げる箆也を前に、轟はそっと口元を歪め、炎を纏った右手を、振り落ちてくる鎌へと掲げた。

「“凍^と”っ…」

「なっ…！」

轟が同じ音のその言葉を放った瞬間、炎が勢いよく鎌へ向け燃え盛ると、鎌があつという間に凍りつく。

「炎で、凍るっ…!？」

「“討”…」

「うっ…!」

鎌を凍らされた籠也へと、放たれる炎。

「うあああああっ…!」

正面から炎を浴びた籠也が、勢いよく後方へと吹き飛ばされた。

「うう…うっ…」

軽く火傷を負った左腕を抱えながら、籠也が起き上がり、床に鎌を何度か突き刺して、纏わされた氷を払いながら、すぐさまその場で立ち上がる。

Word. 31 意地 (2)

「トウ」…」

箆也が顔を上げ、睨むように轟を見つめながら、先程、轟が繰り返した言葉を口にする。

「それが、神や和音の言っていた、あなたたちの特殊言葉というものか…」

「えええっ」

楽しげに微笑んだ轟が、大きく頷く。

「弔様は偉大なお方っ。五十音士を務めながら、その一方で、ひたすらに言葉の研究を行っていましたあ」

「五十音士…？あの男がっ…」

「えええゝ、元々は己守であつたお方ですう」

「己守っ…」

轟の話に、箆也が表情を曇らせる。

「その、五十音士を務めながら行っていた研究というのが、さっきの特殊言葉と…？」

「えええ。言葉の中でも、特に音に注目した弔様は、同じ音の文字ならば何個でも、制限なく自由に操ることの出来る“嘘言玉”というものをお造りになったのですう」

「嘘言玉っ…」

箆也が考え込むように、そつと俯く。

——“襲”——！——

「成程な。その嘘言玉を使って、五十音士でもない、不特定多数の人間に言葉を与えていたというわけか」

「えええゝっ」

鋭く言い放つ箆也に、軽い口調で答える轟。

「嘘言玉の力は絶大。それに加えて、夢言石ですべての言葉を奪い尽くせば、最早、我々に敵は居ませんっ」

「そんなことっ…」

箆也が目を細めながら、再び鎌を構える。

「僕たちがさせないっ…！」

鎌を振り上げた箆也が、勢いよく轟のもとへと駆け込んでいく。

「カッコイイ言いっぷりで…」

駆け込んでくる箆也を見つめながら、轟がどこか感心するように呟く。

「でもお」

そっと、声のトーンを落とす轟。

「口だけ達者でもねえっ…！ “討”！」

「……っ！」

轟が右手を突き出し、向かってくる箆也へと、白い炎の塊を放つ。

「か、“掻き消せ”…！」

素早く鎌を振り下ろし、炎を消し去る箆也。

「この程度の炎っ…！」

炎を消し去り、さらに足を速めて、箆也が一気に轟へと迫る。

「刈れ”…！」

箆也が轟へ向け、勢いよく鎌を振り下ろした。

「“飛べ”っ」

「あっ…！」

言葉を発し、高々と空へと舞い上がる轟に、箆也の鎌は空を斬り、そのまま床へと突き刺さる。

「今度は“と”の言葉かっ…」

「先程も申し上げましたよお？ ワタクシは元々は止守だどっ」
眉をひそめる箆也を見下ろし、轟が余裕の笑みを浮かべる。

「それを、お忘れなきようにどっ」

「クっ…！」

微笑む轟を見上げ、箆也が鎌を突き上げる。

「“欠^かけろ”……！」

「んっ……？」

言葉とともに、天井に突き上げられる箆也の赤い光に、上空の轟が少し眉をひそめる。

「今の言葉はっ……なっ……！」

光を浴びた途端に、天井に勢いよくヒビが入り、崩れ始めた轟の真上から、大きな瓦礫が降ってくる。すぐ上へと迫る瓦礫に、轟は珍しく表情を崩した。

「チっ……！ “止^とまれ”……！」

言玉を持った左手を頭上へと掲げ、降って来る瓦礫の動きを止める轟。

「……っ」

「何っ……！？」

轟が瓦礫へと気を取られていた、そのわずかの間に、箆也が高く飛び上がって、轟のすぐ背後へと現れた。

「いつの間に……！」

鎌を振りかぶる箆也に、焦りを見せながら、轟が必死に体の向きを変えようとする。だが、完全に向きが変わる前に、箆也は口を開く。

「“刈^かれ”……！」

「……っ！」

力強く放たれる言葉に、大きく目を見開く轟。

「……っ」

だが、轟の表情はすぐに、笑みへと変わった。

「“折^おれ”……！」

「うっ……！」

微笑んだ轟の放った言葉により、箆也が振り下ろそうとしていた鎌が真ん中で真っ二つに折れ、刃のついた先の部分が、轟を捉えることなく、空中へと落ちていく。

「ワタクシが操る言葉は、“トウ”に“と”、そして弟さんの“お”……！」

啞然とする箆也に、轟がさらに微笑みかける。

「お忘れなきようにと言ったでしょう…？」

勝ち誇ったように笑い、轟がゆっくりと言玉を持つ左手をあげた。

「さあ、終わりです。“と…”」

「あなたも、覚えておいた方がいい…」

「何…？」

追い込まれているというのに、落ち着いた口調で話す箆也に、轟が思わず言葉を止め、眉をひそめる。

「僕の言玉は、折ったところで意味などない」

「なっ…！」

箆也の手に残っていた鎌のもう一方が、赤い光を放ちながら、その姿を変えていく。

「そ、それはっ…！」

「かまいたち鎌鼬”…！」

「うっ…！」

鎌の残骸がその姿を変え、風の塊となって、轟へと直撃する。

「ぐああああああっ…！」

箆也の鎌鼬を喰らった轟が、風に全身を斬り裂かれ、床へと叩きつけられるように落下していく。

「うがっ…！」

言葉を発する間もなかった轟は、背中を強く床へと打ちつけ、その場に倒れ込んだ。

「……っ」

轟から遅れるようにして、箆也も床へと着地する。箆也の右手付近に赤い光が生じると、光は集まるようにして形を成し、再び鎌が生み出された。

「ハア…ハア…成程っ…」

息を大きく乱し、傷ついた体を庇うようにゆっくりと立ち上がりながら、納得したように声を漏らす轟。轟の声に箆也は顔を上げ、まっすぐに轟を見つめた。

「安団安団と思って、うっかりしていましたよ…」

傷ついた頬から血を流しながら、轟がまだ余裕の見られる笑みを浮かべる。

「あなたは元は於崎の人間…言玉の形状は武器だけではなく、我々と同じように、自由にその形を変えられるんでしたね…」

「そういうことだ。忘れないでおいといい」

「フっ…」

偉そうに言い放つ簞也に対し、轟が軽く鼻で笑う。

「良かったですよ。安の神ではなく、あなたの相手に選ばれてっ」
轟が頬の血を拭い、さらに口角を吊り上げる。

「実に面白いつ…！」

「……っ！」

大きく微笑んで両手を振り上げる轟に、簞也も真剣な表情を見せ、鎌を構え直す。

「“燈”！」

轟が両手を突き出し、先程よりも一回り大きな、白の炎を放つ。

「“か…”

炎を見つめ、簞也が構えていた鎌から手を放す。

「“火炎”…！」

鎌が光とともに、真っ赤に燃え盛る炎へと姿を変え、簞也のもとから飛び出すと、向かって来ていた轟の炎と、正面からぶつかり合った。

「風も炎も自由自在ですかっ…」

二色の炎のぶつかり合いを見ながら、轟がそっと目を細める。

「“捕らえろ”…！」

轟が両手を広げ、自分の四方から無数の紐状の白光を伸ばす。

「……っ」

向かってくる白光の紐を視界へ入れた簞也は、その場を駆け出していき、ぶつかり合っている炎のもとへと進んだ。

「“返せ”っ！」

箆也の言葉を受け、箆也の方の炎がさらに勢いを増して、轟の炎を弾き返して、箆也へと向かって来ていた紐状の光を、その弾き返した炎で掻き消す。

「チっ…」

消された光に、轟が表情を歪める。

「「駆かけろ”っ」

「何っ？」

炎を右手に纏うようにして、鎌の姿へと戻した箆也が、新たな言葉を発して、轟のもとへと目にも留らぬ速さで駆け込んでくる。

「チっ…！小癩れんなっ…！」

向かってくる箆也を見つめ、表情を歪めながら、轟が右手を振り上げる。

「「止とまれ”！」

「うっ…！」

振り下ろされた轟の手から放たれた白光を浴びると、駆けていた箆也がその場で足を止め、全身、指一本動かすことなく、その動きを止めた。

「フッフ、これでっ…」

「“か…」

「何っ…？」

体が動かぬ中、箆也は動揺することなく、すぐに唯一動く、口を動かす。

「「固かたまれ”…！」

「なっ…！？」

放たれるその言葉に、轟が驚きの表情を見せる。だが動かぬ箆也から放たれた赤い光は、大きく目を見開いた轟へと、真正面から降り注いだ。

「「ううう…！」

光を浴びた轟が、箆也同様、全身の動きを止める。

「クっ…！こ、これではっ…！」

「これで条件は同じだ」

「チっ…！」

鋭く言い放つ箆也に、その表情を歪める轟。全身の動きを止められたまま、二人が同時に口を開く。

“^お押し潰せ”…！」

“刈^かれ”…！」

動作はまったくないまま、言葉だけが発せられると、赤と白の光がそれぞれ放たれ、逃げることもさえ出来ない互いへと、正面から向かっていった。

「うあああっ…！」

「ぐうううう…！」

攻撃が炸裂すると同時に、体の動きを封じていた言葉の効果が消え、箆也と轟がそれぞれ、後方へと勢いよく吹き飛ばされる。箆也は床へと転がり込み、轟は膝をつくようにして、しゃがみ込んだ。

「はぁ…はぁ…」

床に手をつき、傷ついた体を庇うようにしながら、箆也がゆっくりと起き上がる。

「フフフ…」

前方から聞こえてくる声に、俯いていた箆也が顔を上げる。

「強い…強いですねえっ…実に…」

顔を上げた轟が、微笑みながら箆也へと言葉を向ける。頭部から流れる血が、細い瞳の横を通過し、真っ白なスーツに目立つ汚れを残した。

「於崎の屋敷で弟さんとも戦わせていただきましたが、あなたの強さは弟さんの比ではありませんよお」

傷も負っているというのに、轟は自然と立ち上がり、平気な様子で大きく両手を広げる。

「あなたがもし、“お”の言葉に選ばれ、神になっていたならば、実に有能な神になったでしょうねえっ」

「……………」

轟の褒める言葉に、箆也はただ複雑そうな表情を作る。

「そんな話に興味はない」

「またまたあゝ興味がないはずがないでしょう？」

はつきりと言い放つ箆也に、轟がすぐさま言い返す。

「あなたは喉から手が出るほどに、“お”の言葉を欲したはずだあ」
轟がさらに瞳を細め、冷たく箆也を見つめる。

「あなたは、あなたを蹴落とし神となった弟さんを、殺したいほど憎んだあ」

「……っ」

「フフフ、凶星でしたかあ？」

かすかに表情をしかめた箆也のその変化を捉え、轟が嘲るような笑みを浮かべる。

「これほどに実力はあるながらも、言葉に選ばれなかったというだけで神になれなかった、神付きさんっ」

箆也を見つめたまま、轟が口角を吊り上げる。

「どうです？我々の仲間になりませんかっ？」

「何っ…？」

轟の思いがけない言葉に、箆也は少し驚いたように聞き返す。

「ワタクシたちの仲間になればあ、夢言石により、自由に言葉を得ることが出来るう」

聞き返した轟へと、笑顔で答えていく轟。

「今、ワタクシの持っている“お”の言葉を、あなたに渡すことだって可能だっ」

その言葉に、箆也の表情が再び動く。

「あなたは念願の“お”の言葉を得ることが出来るのですよお？どうですか？」

「……興味がない」

「フフ、またまたあゝ」

少し間を置いて答えた箆也に、轟が軽く吹き出すように笑う。

「願ってもない話でしょう？あなたが幼い頃から長年、憧れた神

になれるのですよお？」

大きく首を傾け、あげた右手の掌を天井へと向ける轟。

「それに、目障り極まりなかった、生意気な弟さんを蹴落とす、絶好のチャンっ……」

「刈^かれ」

「うっ……！」

轟の言葉を遮るように、勢いよく飛んで来る赤い一閃。

「チっ……！ “遠^{とお}のけ”……！」

あげていた右手をそのまま前方へと向け、轟が迫っていた一閃を、遠くの方へと吹き飛ばす。

「まだ、話の途中だったのですが……？」

眉を吊り上げ、轟が箆也へ鋭い瞳を見せる。

「あまりにも興味が持てなかったものでな」

鎌を振り上げた箆也が、落ち着いた口調で言い放つ。

「一つ、教えておいてやる。今、僕が興味あるのは、“お”の言葉でも、神になることでもない」

箆也が鎌先を轟へと向け、強く轟を睨みつける。

「あなたを倒すことだけだ」

「……っ」

挑戦的に言い放つ箆也に、轟がそっと目を細める。

「いいでしょう。そこまで言うのであれば、叩き潰して差し上げますよ……！」

声を張り上げる轟に、箆也も改めて構えを取る。

「灯」

掲げた右手に、再び白い炎を灯す轟。

「覆^{おお}え」

灯った火が一気に燃え上がり、瞬く間に箆也の周囲へと広がっていく。箆也の周囲を覆った炎は、さらに燃え上がり、その勢いを天井に届くほどまで伸ばした。

「咎^{とが}めろ」！

轟のその言葉を合図に、周囲の炎が、一気に箆也へと襲いかかって来る。

「限^{かぎ}れ」！

箆也が鎌を構えたまま、その場で一回転し、四方からやって来た炎を流すようにして、一ヶ所へと集め込む。

「火^{かえん}炎」

集めた炎に、鎌から姿を変えた自らの炎も、混ぜ合わせる箆也。

「返^{かえ}せ」！

その炎を、強く押し出し、轟へと返す。

「戻^{かえ}って来ましたか…」

返って来る炎を、冷静に見つめる轟。

「送^{おく}れ」っ

「あっ…！」

轟へと返ろうとしていた炎が、その直前で新たな言葉を受け、もう一度向きを変えて、箆也のもとへとやって来る。

「同じものの相手に、同じ言葉は使えない…避けるしかないかつ。」「駆^かけろ」！

炎に対抗する言葉がなく、箆也はその場を駆け出し、向かってくる炎を避けた。箆也の避けた炎が城の扉へと直撃し、扉をあつという間に貫いて、外へと飛び出していく。あいた穴から、涼しい風が

舞い込んだ。

「いい反応ですねえ。では、これならどうですか？ “刀”^{とう}っ」

余裕の笑みを浮かべた轟が右手を伸ばし、その先から、炎のように燃え上がった白光の刃が、大きく伸びる。

「また違う“トウ”かつ…」

「フフっ」

眉をひそめる箆也に微笑みながら、轟が伸ばした刃を振り上げ、箆也のもとへと駆け出していく。

「クっ…！」

炎へと変えていた言玉を鎌へと戻し、箆也が構える。

『…っ！』

力強くぶつかり合う、箆也の鎌と轟の刃。

「容易に触れて、よろしいのでえ？」

「何っ…？」

軽い口調で問いかける轟に、箆也が表情を曇らせる。

「“衰えろ”^{おとろ}…」

「なっ…！」

轟の言葉が放たれると、轟の刃と触れていた、鎌の刃部分が勢いよく錆び始め、持ち手の金属部分も瞬間的に腐り出した。

「こ、これはっ…！」

「フフっ…」

「うっ…！」

使い物にならなくなった鎌を見て、戸惑っている箆也に、轟は待つことなく、刃を振り上げる。

「グっ…！」

必死に体を反らし、突き出された轟の刃を避ける箆也。

「…“届け”^{とど}っ」

「何っ…！？」

だが、箆也が避けたはずの轟の刃が勢いよく伸び、箆也へと迫った。

「ううう…！」

伸びた刃が、鋭く箆也の右肩を突き刺す。

「う…あああああ…！」

激しく血を流した箆也が、苦しげな叫び声をあげながら、力なくその場に倒れ込んだ。

「ううう…うっ…」

傷ついた右肩を抱え、箆也が蹲る。

「ふう…」

伸びていた刃を手元に戻し、一息つくように声を漏らす轟。

「確かに、あなたはお強いですう」

「う…うう…」

引き続き苦しげな声を漏らす箆也へと、上から落とすように、轟が声をかける。

“トウ”、そして“お”に“と”の言葉…どれか一つでも欠けていれば、ワタクシはあなたに敗れていたでしょう…」

蹲ったままの箆也へと、冷静に言い放つ轟。

「三種ものの言葉を持ったワタクシを相手に、“か”の言葉一つのあなたは、実によく戦いましたよお」

褒めるように言いながら、轟が箆也へと、刃の伸びた右手を向ける。

「ですが、単純に言葉の数が違い過ぎたっ」

向けたその右手を、ゆっくりと振り上げる轟。

「残念でしたねえ」

轟の口元が、そっと歪む。

「終わりです…！ “届け”^{とど}！」

振り下ろされた轟の右手から、箆也へ向け、勢いよく刃が伸びていく。

「か…」

俯いたままの箆也が、小さく声を落とす。

“欠^かけろ”…！」

「……っ」

箆也が強く言葉を放つと、轟の刃が、箆也に届くその一歩手前で、高い音を立てて、割れ落ちた。力なく落ちる刃を見て、轟が少し驚いた表情を見せる。

「はあっ…！はあっ…！」

血の流れ落ちる肩を揺らし、大きく呼吸を乱しながらも、箆也が必死に体を起き上がらせる。

「……ふうっ」

割れた刃と、起き上がった箆也を見比べ、轟ががっくりと肩を落とす。

「まだあ、諦めてはいただけませんかあ。やれやれっ」

轟が、どこか呆れたように言い放つ。

「ワタクシの言葉の総数は、ざっと百。いくら、あなたの言葉数が多かったとしても、三十が精々でしょう…」

指を折りながら、冷静に語る轟。

「三倍以上の言葉を持つワタクシに、あなたが勝てるはずもない」

「はあ…はあ…」

続く轟の言葉を聞きながら、箆也はゆっくりと呼吸を整えていく。

「だから…何だ？」

「フフフっ…」

強気に問い返す箆也を、轟が鼻先で笑い飛ばす。

“届とどけ”っ」

「うっ…！」

轟の右手の、刃の割れ落ちた先から、再び勢いよく刃が伸びる。

“か…！あっ…！”

言葉を放とうとする箆也であったが、それよりも先に、刃が箆也の脇腹へと突き刺さった。

「うあああっ…！」

貫かれた脇腹を押さえ、箆也が再びその場に蹲る。

「うううっ…ううっ…」

「ここまで戦っても、まあだあ、わかりませんかあ？」

苦しむ声を漏らす箆也に、轟がそつと語りかける。

「か”の言葉しか持たぬあなたに、勝ち目はないのですっ」
轟が大きく口を開け、はっきりと言い放つ。

「いい加減諦めて、あなたのその言葉もワタクシにつ…」

「冗談じゃないっ」

「んっ？」

すぐさま返って来る声に、轟が眉をひそめる。

「数でしか、言葉の価値を計れぬような者に…」

右肩に加え、脇腹からもポタポタと血を流したまま、重い体を引きずるようにして、箆也がゆっくりと起き上がる。

「やる言葉など、一つもないっ…！」

正面へと顔を上げた箆也が、強い瞳ではっきりと言い放つ。

「フンっ…」

どこか不快そうに、その鼻を鳴らす轟。

「そこまで言われると、意地でもあなたの言葉、頂きたくなってきましたねえっ…！」

轟がそう言い放ち、右手の刃を炎へと変える。

「“燈”…！」

大きな白色の炎が、箆也へ向けて、勢いよく放たれる。

「か…“鎌鼬”^{かまいたち}！」

鎌を風の塊へと変え、炎とぶつかり合わせて、相殺させる箆也。

「うううっ…！」

だがその衝撃に体が軋み、箆也は思わず顔をしかめる。

「フフフっ、自らの攻撃にすら耐えれぬような体で、どうやってワタクシに勝つというのですっ？」

その箆也の様子に、さらに自信を持った笑みを覗かせる轟。

「あなたに勝ち目はないのですよお！“^お押し潰せ”！」

「うあっ…！」

軋んだ体を押さえていた箆也へと、正面から襲いかかる重い光。

「あああああっ…！」

その光をもろに喰らい、箆也がいとも簡単に、吹き飛ばされていく。後方へと吹き飛んだ箆也は、そのまま先程貫かれた扉跡の穴を抜け、城の外へと投げ出された。

「うあっ…あああ…」

外の地面へと倒れ込んだ箆也が、力なく声を発する。

「おやおや、ついつい外へ出してしまいましたねえっ」

穴の向こうの箆也を見つめ、轟が軽く頭を搔く。

「イケナイ、イケナイっ。“捕らえろ”っ」

轟の周囲から伸びる紐状の白光が、穴を抜け出て、地面に倒れ込んでいる箆也の手足を絡め取り、倒れ込んでいた箆也を無理やり、立ち上がらせる。

「夢言石の効果は城内のみ。中で倒さなければ、せつかくのあなたの言葉が頂けませんからねえっ」

指で紐を操作し、轟が箆也の城の中へと連れ戻していく。

「さあ、ワタクシに献上して頂きましょう。その言葉っ」

近付いてくる箆也を見つめ、そっと瞳を細める轟。

「兄弟揃って、ねえっ…」

「……………」

薄く開いただけの瞳で、視線を落したまま、箆也がはっきりとしない意識の中、届く轟の言葉をただ聞き続ける。

「兄、弟…」

小さな声で、力なく轟の言葉を繰り返す箆也。

「檻、也っ…」

——お兄ちゃんっ！——

「……っ」

思い出されたのは、幼き日の弟の姿。まだ、箆也を“兄”と呼んでいた、幼き檻也の姿であった。脳裏を過ぎる過去の記憶に、箆也

が閉じかけていた瞳を開く。

——俺っ、今日も新しい言葉覚えたんだよ！俺、もっともって勉強して、早くお兄ちゃんみたいに強くなりたいんだ！——
——だからお兄ちゃんっ、もっともって強くなって——

「檻也…」

次々と思ひ出される檻也の言葉に、箆也がまた瞳を細める。

——俺がいつまでも、お兄ちゃんのこと追いかけていけるように、もっともって強くなってっ！——

「……っ」

今はもう見ることもない大きな笑顔を思い返し、箆也が強く唇を噛み締め、力いっぱい拳を握り締める。

「未だに覚えてるなんて…僕も大概、馬鹿だな…」

頭に、心に、刻みつけられたように、忘れることの出来なかったその言葉。その言葉を思い出し、箆也がどこか自嘲するような笑みを浮かべる。

「あんな、遠い昔の言葉っ…あいつが覚えているはずもないのに…」

———どんなことがあったとしても、俺は絶対、一生、兄ちゃんを嫌いになつたりなんかしないっ———

「……本当に、あなたの言葉は厄介だ…」

次に思ひ出されたのは、先程のアヒルの言葉であった。

「僕から、“諦め”を奪うっ…」

「んんっっ？」

捕らわれながら、そっと笑みを浮かべる箆也に、轟が首を傾げる。
「追い込まれすぎて、可笑しくなっちゃいましたかあ？」

「か…」

轟が嘲るように微笑む中、箆也がゆっくりと口を開く。

「^{かがや}輝け”…！」

箆也が言葉を放ったと同時に、箆也の全身から、強い光が放たれる。

「何っ…！？クっ…！」

瞳の中に光を入れた轟は、思わず目を伏せ、身を屈める。轟の気が逸れたからか、箆也の体を捕らえていた紐が解け、箆也の体が解放された。

「に、逃がしはしませんよっ…！」

必死に目を開き、轟が再び右手を伸ばす。

「逃げたりなどしない」

捕らえていた紐から逃れ、体の自由を取り戻した箆也であったが、そのまま城の外へと逃れるのではなく、自らの足で進み、城の中へと戻って来た。

「この中であなたに勝たないと、あなたから言葉は奪えないのだから？」

再び城へと足を踏み入れた箆也が、まっすぐに轟を見つめる。

「僕の目的は、あなたから“お”の言葉を取り返すこと。なら、ここであなたを倒さねば、意味がないからな」

「ハっ！」

強気に言い放つ箆也に、やっと視力を取り戻してきた轟が大きく笑みを浮かべる。

「あなたも大概、大馬鹿ですねえ。まあだ、ワタクシに勝つ気でえ？」

「ああ…」

問いかける轟に、箆也はあっさりと頷く。

「自分が馬鹿だったことは、自覚した。だが、馬鹿だからこそっ…」

「——もっともっと強くなって！——」

「僕は、意地でも負けられないっ…！」

籠也が手元に鎌を作り、力強く構えを取る。

「意地、ですかあ」

構えを取った籠也を、轟はどこか冷めた瞳で見つめる。

「ではワタクシはあ…意地でも、あなたの言葉を奪うこととしまし
よう…！」

轟が勢いよく叫び、両手を高々と広げる。

「“燈”！」

広げられた轟の両手から、燃え盛る白い炎が噴き上げる。

「“覆え”…！」

噴き上げた炎が左右へと広がり、あっという間に籠也の周囲を取り
囲んでいく。天井に届くほどの大きな炎に包まれ、完全に四方を
塞がれる籠也。

「さあ、これで本当に終わりです…！」

確信を持った笑みを浮かべる轟。

「“咎めろ”…！」

轟の言葉を合図に、高々と舞い上がった炎が、上空で重なるよう
にして集まり、大きな塊を作って、一気に籠也へと降り落ちる。

「フフフっ！さあっ！焼け死になさいっ…！」

炎を落としながら、徐々に笑みを大きくする轟。

「さあっ…！さあっ…！さっ…！んっ？」

笑い続けていた轟が、何かに気付いた様子で、ふと笑みを止める。

「な、何だ…？」

轟が下へと落とそうと、右手を何度も振り下ろしているというの
に、空中で止まったまま、まったく動かない炎の塊。

「な、何故、動かなっ…！」

「“抑えろ”」

「…っ！」

そこへ聞こえてくる一つの言葉に、轟が大きく目を見開く。

「ま、まさかつ…！」

轟が焦った様子で、止まったままの炎のすぐ下へと視線を動かし、見開いた瞳でその下にいる箆也の姿を目に入れる。

「……………」

箆也は構えた鎌を上空へと掲げ、降り落ちようとしていた炎の塊を、確かに止めていた。

「お、“抑えろ”…？な、何故、あなたがそんな言葉をつ…！」

「返せ^{かえ}」

「うっ…！」

轟の言葉が終わる前に、箆也が静かな動作で鎌を振り下ろすと、先程まで箆也へと向かっていた炎の塊が、あっさりとその向きを変え、轟へと返っていく。

「うあっ…！！うがああああっ！！」

焦っていた轟は、咄嗟に言葉を出すことが出来ず、そのまま、返ってきた炎を直撃した。轟を焼いた炎が、後方まで貫いていき、そこにあった二階へと続く階段を燃やし尽くす。

「ぐううう…うううっ…」

燃えた階段の欠片が落ちてくる中、すっかり黒くなったスーツを握り締めながら、険しい表情を見せ、立ち上がる轟。

「こ、こんなっ…はずは…」

ろくに動かぬ自分の体を押さえながら、轟が信じられないといった表情を見せる。

「あなたが何故、“お”の言葉、をつ…」

震える声で、轟が必死に箆也を見つめる。

「あなたはまさか…於の、神っ…！」

「違う」

放たれた轟の言葉を、箆也が一瞬で否定する。

「僕は神じゃない。僕は神付き…」

箆也が言葉を続けながら、柔らかな動きで鎌を構える。

「安の神、朝比奈アヒルの神付き」

構えた鎌を、高々と振り上げる箆也。

「加守の、神月箆也だ！」

誇らしげに言い放ち、箆也が勢いよく鎌を振り下ろした。

「刈^かれ”…!!”」

振り下ろされた鎌から、轟へ向け、赤色の一閃がまっすぐに飛んでいく。

「うっ…！」

向かってくる一閃に対し、避ける力すら残っていない轟は、言葉を放つことも出来ず、ただその表情を歪める。

「うがあああああっ…!!”」

一閃が轟を貫き、轟は全身を斬り裂かれ、力なく後方へと倒れていく。その右手から言玉が零れ落ちると、言玉は空中で、力なく砕け散った。

「ああっ…」

砕けた言玉を視界に入れ、轟がそっと目を細める。

「弔、様っ…ううう…！」

最後に力なく弔の名を呼ぶと、轟はそのまま気を失い、瞳を閉じて、床へと倒れ込んだ。

「はあ…はあ…」

倒れた轟を見ながら、少し呼吸を乱した箆也が、ゆっくりと鎌を下ろす。

「弟の言葉は、返してもらおう…」

箆也の強い意志の見た言葉が、部屋に凜と響き渡った。

Word. 31 意地 (4)

七声の城、四階。王の間。

「彼らの言葉は、あげられない」…？」

少し首を傾けた弔が、ゆっくりと、どこか責めるように、囁の言葉を繰り返す。

「何を、言っているんだい？ 囁…」

弔が優しく微笑みながらも、視線だけを鋭くして、まっすぐに正面に立つ囁を捉える。

「彼ら、五十音士からすべての言葉を奪うことが、俺と君の夢への一歩だろう…？」

「……………」

問いかける弔を、囁もまっすぐに見つめ返す。

「彼らの言葉は、彼らが使ってこそ意味を成すもの…」

囁の小さな声が、静まり返った広い部屋に響き渡る。

「私たちが奪っても、何の意味も成さないわ…」

「“意味を成す”…？」

弔が再び囁の言葉を繰り返し、大きくその表情を曇らせる。

「何を言っているんだ？ 囁。この世界の言葉に、何一つ意味などっ

…」

「ないって思ってた」

「……………」

囁が弔の言葉が続けるようにして、弔の言葉を遮る。

「この世界の言葉は全部、嘘だって…」

———大好きだよ、囁。世界で一番、君が大好きだ———

———愛してるわ、囁。お母さんはこの世界のどこに居ても、あなたを見守ってるから……—

「この世界の言葉は全部、たったの一つだって、意味なんてないって…」

言葉に裏切られたあの日から、言葉に意味がないことを確信し、言葉を信じることをやめた。

「けど、あなたの命で安団に潜入してた数ヶ月…」

囁が弔から視線を落とし、懐かしむように、そっと目を細める。

「私の周りで飛びかった、たくさんの言葉の中には…」

——ダチが泣いてんのに、黙って見てなんかいられっかよお！——

——神付きであることを、誰よりも誇りに思っている…！——

——俺もいつか、本当の笑顔で、笑えるかなあ…——

——あの人のために、私は戦うって…！——

思い出されるアヒルたちの姿に、囁が強く拳を握り締める。

「意味のない言葉に思えるものなんて、何一つなかった…！」

顔を上げた囁が、再びまっすぐに弔を見つめ、はっきりと言い放つ。

「意味のない言葉が、何一つない…？」

囁の言葉を繰り返す弔の表情が、先程までとは異なり、明らかに歪む。

「何を、馬鹿なことをっ…潜入している間に、悪影響を受けすぎたんじゃないのかい？囁」

弔が笑みを浮かべるが、その笑みは引きつったものとなる。

「この世界の言葉に、意味なんてものはっ…」

「ならっ…」

「……っ」

弔の言葉を、囁が再び遮る。

「本当に彼らの言葉に意味がないのなら、なら何故っ…」

囁の声が、かすかに震え、徐々にその音量をあげていく。

「何故、あんなにも強く、私の心を打ったの…!？」

「囁…」

強く声を張り上げ、問いかける囁に、弔が目を細める。

「あの時、初めてこの城で出会ったあの時…私にとって、あなたの言葉だけが、唯一つの真実だった…」

———なら、一緒に言葉を創らないかい…? ———

「新しい言葉を創ろうって言う、あなたのその言葉だけが、私の真実だった…」

「それでいいんだよ、囁」

弔が両手を広げ、すかさず囁に語りかける。

「君にとつての真実は、俺の言葉だけでいいんだ。君は、俺の言葉にさえ従っていれば、それでいい」

何度も自ら頷き、自分の言葉を肯定する弔。

「ずっと、そうやって生きてきたじゃないか!俺たちはっ…!」

「けど、あなたの言葉は、彼らから言葉を奪おうと言うわ!」

説得するように、強く言い放つ弔に、囁も負けじと言葉を発する。

「彼らは、私の仲間ではないと言うわ…」

「ああ、そうだ。それが真実だろう?」

大きく頷き、弔が問いかける。

「彼らは、君の仲間などではっ…」

「でも、私はどうしても、その言葉を信じたくないの」

険しい表情を見せながら、囁がはっきりと言い放つ。

「私は…」

囁が少し後方を振り返り、傷つき倒れている保と七架の姿を目に入れる。

「私は…彼らの仲間になりたいっ…これからもずっと、彼らの仲間
で居たいっ…!」

「……っ」

強く主張する囁に、弔の表情から笑顔が消える。

「愚かなことを…んっ？」

思わず囁から視線を外した弔の視界に、右手の中で淡く光る夢言石が入って来る。輝き始めた夢言石に、敗北し、石へと奪われた言葉が浮かび上がった。

「“の”に、“と”と“お”…」

その文字を見て、弔の表情が一層、曇る。

「轟までがっ…」

唇を強く噛み締め、弔が表情を歪める。

「やはり、彼らの言葉だけでも奪っておいた方が良さそうだな」
瞳を鋭くし、弔が再び保たちへと夢言石を向ける。

「た”、”な”、封印…！」

夢言石から白い光線が、勢いよく放たれる。

「“遮れ”」

「…っ！」

言葉とともに、美しい笛の音が流れると、夢言石の光が、再び強く弾き飛ばされた。弾かれ、天井へと突き刺さった光を見送った後、弔がゆっくりと視線を落とす。

「囁…！」

「言ったはずよ？彼らの言葉はあげられないと…」

睨みつけるように見つめる弔に、囁も強い視線を送る。

「何故だ。今になって何故、こんなことをっ…」

どこか困惑するように、弔が囁へと問いかける。

「やっと夢言石を手にしたんだ。後もう少しっ…もう少しで、俺たちの夢が完成するというの…！」

「たぶん…」

険しい表情を見せる弔に、囁がそつと言葉を投げかける。

「たぶん…出会ってしまったから…」

——囁っ…！——

「私の、本当の神様に…」

「……………」

はつきりと、何の迷いもなく言い放つ囁に、弔の目が細まる。

「そうか…俺は君の、本当の神様ではなかったというわけか…」

「ええ…」

ふいに低い音調に戻す弔に、囁が頷きかける。

「じゃあ、もうっ…」

弔が夢言石を懐へと入れ、代わりに白い言玉を取り出す。

「優しくする必要もないねっ…」

「……………」

その表情を冷たく変える弔に、強い殺気を感じ、囁が素早く横笛を身構える。

「“変格”…！」

構えた横笛を、槍へと変形させる囁。

「“裂け”…！」

囁が槍を突き出し、強い突きを弔へと向ける。

「……………」

向かってくる赤い光の突きを、落ち着いた表情で見つめる弔。

「“向”」

「えっ…？」

弔が一言呟いた途端、囁の放った突きが、その向きを真逆に変え、囁の方へと戻って来る。

「戻って…？クっ…！」

後ろで倒れている保と七架の姿を振り返り、避けられないことを確認して、その表情を歪める囁。

「“遮れ”…！」

言葉を使い、前方に赤い膜を張って、囁が戻ってきた自らの技を防ぐ。

「うっ…！」

弾き返した時にかかった圧に、囁は思わず表情をしかめた。

「はあ…」

「“硬”っ」

「えっ…?」

一息つく暇もなく、囁の耳に届く言葉。

「ううう…!」

囁の全身を白い光が包み込むと、次の瞬間、囁の体が鉛のように重く、硬くなって、囁は立っていられずに、思わずその場に膝をついた。

「こ、これはっ…」

「悪く思わないでね、囁」

「うっ…」

思うように体の動かない囁へと、弔がさらに、言玉を持った右手を向ける。

「君が悪いつ」

冷たい微笑みで、弔が言い放つ。

「俺と、俺たちの夢を裏切った、君が悪いんだ…」

「クっ…」

輝き始める言玉に、囁が厳しい表情で唇を噛み締める。

「さようなら…」

弔の言玉から、大きな白い光の塊が放たれる。

「“光”」

「…っ!」

向かってくる光に、囁は諦めるように、強く目を閉じた。

———パアアアアン!

大きく、光の弾ける音が、広い部屋へと響き渡る。

「…っ?」

光の音が響いたというのに、何の痛みも、何の変化もない体に、

きつく瞳を閉じていた囁が、戸惑った様子で瞳を開く。

「……………」

「あっ…」

開かれたばかりの瞳に映る、すぐ目の前の人影。

「アヒ、るん…」

その人物を見上げ、囁はそっと、その人物の名を口にした。

「やあっぱお前には、そう呼ばれる方が落ち着くなあ」

囁の前に、囁を庇うようにして立っているその人物が、明るい口調を発しながら、ゆっくりと囁の方を振り返る。

「別に気に入ってはねえけどっ」

振り返り、囁へと大きな笑顔に向けたのは、アヒルであった。

「アヒるん…」

目の前に現れたアヒルを、囁が戸惑うように見つめる。

「なっ？ちゃんと、“会^あいに来た”だろっ？」

「……………」

アヒルの言葉に、大きく目を見開く囁。

「俺の言葉、嘘なんかじゃなかっただろっ？」

「……………」

続けて問いかけるアヒルに、細められた囁の瞳が、かすかに潤む。

「ええっ…」

囁は潤んだ瞳をさらに細め、笑顔を見せながら、少し震えた声で大きく頷いた。

「さあーてとっ」

笑顔を見せた囁に、安心するように微笑んだ後、アヒルがすぐさま目つきを鋭くし、再び正面へと体を向ける。

「やっ与会えたな、弔」

「俺は別に、焦がれた覚えもないけれどね…」

はつきりと言い放つアヒルに、弔はどこか皮肉った笑みを浮かべる。

「まあいいよ。今のところ全敗な上に、仲間だと思ってた女の反逆

にもあつて、むしゃくしゃしてた所だし…」

「……っ」

弔のその言葉に、そつと視線を落とす囁。

「君の言葉くらい奪わないと、収まりそうにないからねえ」

「………」

冷たい瞳を見せる弔と見つめ合いながら、アヒルが素早く、右手の銃を構えた。

「囁、保と奈々瀬を頼む」

「アヒルんっ…」

囁へと二人を託し、一步前へと出るアヒル。

「俺は、あいつを倒すっ…!」

「……っ」

強気に言い放つアヒルに、弔はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

Word. 32 神ニ、捧グ (1)

七声の城、四階。王の間。

「遮^{かへぎ}れ」…」

部屋の間へと移動させた保と七架の周囲に、囁が横笛を吹き、赤い光の薄膜を張る。膜を張り終わると、囁は横笛を下ろし、ゆっくりとした動作で部屋の中央を振り向いた。

「アヒるん…」

囁のどこか不安げな声が、響く。

『……………』

部屋の中央には、銃を構えたアヒルの姿があり、アヒルはまっすぐ前を向いて、玉座の前に立つ弔へと、鋭い視線を投げかけていた。「君の団を前に、七声は皆、敗北したようだよ」

再び懷から夢言石を取り出し、弔がそつと呟く。

「まあ、ここに君の仲間しか来ていないところを見れば、一目瞭然だけれどね」

弔はそう言いながら、玉座の上へと夢言石を置いた。

「だから、後、七声で残っているのは、俺の言葉のみ…」

石を置いた後、弔が体の向きをアヒルの方へと変える。

「俺に勝ったなら、この夢言石は君のものだ。韻^{いん}に手渡すなり、於の神に返すなり、好きにするといい」

ゆっくりと歩を進め、アヒルのもとへと歩み寄っていく弔。

「ただし、俺が勝ったなら、君は勿論、君の団の人間、すべての言葉^{言葉}を貰い受けるよ」

「んなマネっ」

アヒルが銃を握る手に、力を込める。

「絶対、させねえよっ」

「素晴らしい自信だね、さすがは皆の神様だ」

はつきりと言い放つアヒルに、弔がどこか感心したように微笑む。

「でも、そのまっすぐさ……」

ふと細まる、弔の瞳。

「嫌いだなっ……“光”！」

「……っ」

言玉を持った右手を振り上げ、アヒルへと白い光線を放つ弔。アヒルがさらに表情を鋭くし、銃口を自分のコメカミへと向ける。

「“上”がれ”……！」

銃声とともに赤い光に包まれ、上空へと舞い上がるアヒル。

「“当たれ”！」

上空へと上がったアヒルが素早く銃を下方へ向け、床に立つ弔へと弾丸を放った。

「……“高”っ」

「何っ？」

弔がそつと声を落とすと、弔の体が白い光に包まれ、勢いよく上昇した。弾丸は弔を捉えることが出来ずに、そのまま床を貫く。

「あいつも空、飛べんのかっ」

同じ程度の高さまで上昇した弔を見つめ、少し眉をひそめるアヒル。

「“コウ”……あれがあいつの言葉っ……」

「考え事なんか、していいのかい？」

「へっ？」

聞こえてくる声に、首を捻っていたアヒルが振り向く。

「“硬”」

「クっ……！」

すかさず飛んできた白い光を、避ける暇もなく、正面から浴びるアヒル。

「うおっ……！？」

光を浴びた途端、急にアヒルの体が鉛のように重くなり、下降し始める。勝手に落ちていく体に、アヒルは焦った様子で声をあげた。
「な、何だ！？これっ！」

「神が落ちていく様も、なかなか素敵だよ」

「うっ…！」

下降していくアヒルへと、上から右手を向ける弔。

「光」

「……っ！」

重い体に、腕も動かすことが出来ないアヒルへと、白い光線が降り落ちた。激しい衝撃音とともに、床の破片の混じった白い煙が、部屋を覆う。

「ふう…」

その煙を見下ろしながら、弔が上空で一息つく。

「これ以上、俺の機嫌を損ねる真似は、あまりしてほしくないんだけどね…」

弔がゆっくりと、その冷たい視線を動かしていく。

「囁…」

「……………」

弔が見つめる先には、横笛を構え、険しい表情を見せた囁の姿があった。

「ふっはあゝ、危なかったあつ」

収まってきた煙の中から、姿を見せるアヒル。アヒルの周囲には、赤い光の膜が張られており、その光に守られたからか、弔の攻撃を直撃したというのに、アヒルはまったくの無傷であった。

「これ、囁の“遮れ”か」

「君が、自身で選んだ神に味方するというのは、それは構わないよ」

「んっ？」

周囲に張り巡らされた膜を見ていたアヒルが、上から降って来る声に顔を上げる。

「だが、それは同時に、俺から“手加減”というものを奪うことになる」

「……………」

見透かすような笑みを浮かべる弔に、さらに厳しい表情を作る囁。
「だが、手加減してくれなんて頼んだよ！」

『……っ』

割って入って来る声に、同時に振り向く弔と囁。

「どんっどん本気で来いよ！俺はいつでも、受け入れ態勢出来てんぜ！」

「アヒるん……」

「虚勢を……」

立ち上がりながら、強く言い放つアヒルに、囁が少し表情を曇らせ、弔がそっと笑みを零す。

「君など、囁の助けがなければ、今の攻撃で終わっていたんだよ？」

「さあっ？それはどうか、わからねえーぜっ」

「……っ」

得意げに笑うアヒルに、少し顔をしかめる弔。

「試そうか……？」

「ああっ！行けぜ！“上^あがれ”！」

弔の挑発にあっさりと乗り、再び自らに弾丸を向け、アヒルが上空へと舞い上がる。

「“当^あたれ”……！」

「また“当^あたれ”か……」

向かってくる弾丸を見つめ、弔がどこか呆れた様子で肩を落とす。

「本当に馬鹿の一つ覚えだね。“向^{こう}”っ」

弔が冷静に言葉を放ち、迫り来る弾丸の向きを変える。

「へっ？うお！あ、“上^あがれ”！」

戻ってきた弾丸に焦りながらも、アヒルがさらに自らへと弾丸を放って上昇し、何とか避ける。

「ふいっっ」

「“硬”」

「しまっ……！うっ……！」

一息ついていたアヒルに、下方から弔がすぐさま言葉を放つと、

アヒルの体が再び鉛のように重くなり、上昇していた動きを止め、ゆっくりと下降していく。

「また、これかよっ…！」

「終わりだ」

弔の横を通り、落ちていくアヒルへ、弔が右手を向ける。

「光」

「クっ…！」

迫り来る光線に、アヒルが険しい表情を作るが、光線はそのまま、アヒルへと直撃した。先程と同様に激しい衝撃音が響き渡り、部屋の中を白い煙が立ち込める。

「どうして、今回は助けなかったんだい？ 囁」

ゆっくりと床へと降り立ち、再び囁の方を振り向く弔。

「君が助けなかったせいで、君の神様がやられてしまったよ…？」

「……………」

横笛を下ろしたまま、囁は鋭い表情で、弔を見つめ続ける。

「それとも、やはり彼の言葉の無意味さを知っ…」

「なんで助けなかったか、教えてやろうか？」

「……………」

囁へと言葉を投げかけていた弔が、別方向から聞こえてくる声に、少し驚いた表情となって振り向く。だが煙の収まったそこに、アヒルの姿はなかった。

「どこにっ…」

「助ける必要がなかったからだよ！」

「上…？」

上空から聞こえる声に、顔を上げる弔。

「“^あ当たれ”！」

弔が顔を上げた先には、銃を身構えたアヒルの姿。弔が顔を上げたとはほぼ同時に、アヒルが引き金を引き、勢いよく弾丸を放つ。

「クっ…！」

顔を上げた途端に迫る弾丸に、弔がその表情を歪めた。弾丸はそ

んな弔を直撃し、部屋に再び、大きな衝撃音が走る。

「ハァっ」

上空で、深く息を吐くアヒル。

「いけると思ったんだけどなあゝっ」

アヒルがすぐにその表情を、苦い笑みへと変える。

「甲”…”」

アヒルの見下ろすその先、すでに赤い絨毯も吹き飛び、穴だらけとなった床の上に立っているのは、無傷の弔であった。弔が突き上げた右手の上方には、分厚い白光の膜が張られている。

「“欺き”の弾丸か。そういえば君には、そんな言葉もあったね…」
膜を消しながら、弔が顔を上げ、上空のアヒルへと、余裕の笑みを向ける。

「でも、俺には通じないよ」

「通じるかどうかは…」

微笑む弔へと、アヒルが再び銃を身構える。

「俺が決めるさ!“当たれ”！」

勢いよく言い放ち、弔へと弾丸を撃ち込むアヒル。

「“高”」

弔が短く言葉を落とし、降って来た弾丸を避けて、上空へと舞い上がる。

「“絞”っ」

「何っ…!?!クっ…!」

上空へとやって来た弔が、アヒルへ向けて右手を伸ばすと、まるで指が伸びるように、五本の白い光が伸びてきて、アヒルの四肢と首を捉えた。

「“降”…!」

「えっ…!?!うわわわわっ!」

弔が右手を振り下ろすと、アヒルの四肢を捉えた白光も、アヒルの体を引っ張るようにして、勢いよく振り落ちていく。

「うぐっ…!」

床に思いきり叩きつけられ、アヒルが苦しげな声を漏らす。

「痛ってえ！痛てててっ」

打ちつけた背中を押さえながら、アヒルが起き上がり、痛みにその表情を歪める。

「ったく、一体いくつあんだよっ。“コウ”って」

「素晴らしいだろう…？」

「……っ」

ボヤクように吐き捨てていたアヒルが、そこへ入って来る声に顔を上げる。涼しげな笑みを浮かべた弔が、上空からゆっくりと床へと降り立った。

「たったの二文字：“コウ”という、たったの二文字で、こんなにもたくさん言葉が生まれる…」

右手に持つ言玉をアヒルに見せるようにして、どこか得意げに話す弔。

「君たち五十音士では、とても思いつかない…俺が生み出した、俺だけの言葉の力だ」

「………」

弔の言葉を聞きながら、アヒルが鋭く目を細める。

「君たち五十音士は、俺のこの素晴らしい力を恐れ、俺を五十音の世界から追放した…」

「追放？じゃあ、お前はっ…」

「ああ。元は君と同じ五十音士、己守こもりだった」

「己守って、紺平の…」

アヒルが少し俯き、その表情を曇らせる。

「じゃあ、お前がすべての言葉を奪おうとすんのは、その追放した五十音士たちへの復讐か？」

「復讐？そんな陳腐な言葉で、片づけしないで欲しいな」

「……？」

あっさりと否定する弔に、アヒルが眉をひそめる。

「俺が、そこに居る囁とともに目指したのは、新たな言葉世界の創

造だ」

「新たな、言葉世界…？」

その言葉に、アヒルが一層、困惑した表情となる。

「この世界には、意味のない言葉が満ち溢れている…口にする価値もないような言葉が、山ほどっ…」

——愛しているわ、囁……—

「……………」

言葉に絶望するきっかけとなった言葉を思い出し、囁は思わず、深く俯いた。

「何故、こんなに意味のない言葉が溢れているか、わかるかい…？」
微笑んだ弔が、アヒルへと問いかける。

「君たち、無能な五十音士が、言葉世界を支配しているからだよ」
はつきりと言い放つ弔に、アヒルも厳しい表情を見せる。

「新しい言葉を創る力も持たぬくせに、大昔に創られた古臭い言葉を振りかざしては、神を気取る…」

弔が少し煩わしそうに、その表情を歪める。

「自らが創った言葉でもなくせに、まるで創造主のように君臨する。偉そうにっ…」

その歪みが、さらに大きくなる。

「その権威を絶対のものとするため、俺の言葉の素晴らしさを理解せず、俺を言葉世界から追放したんだよ。君たちは」

歪みを消し、そっと微笑んだ弔が、冷たい瞳でアヒルを見つめる。

「だから俺は、君たちから言葉を奪う。すべての言葉を、無能な君たちから解放して、新しい、意味ある言葉の世界を創る」

弔が大きく両手を広げ、自信満々にそう語る。

「それが俺と、そこに居る囁が目指した夢だよ」

「……………」

弔のその言葉を聞き、囁は少し目を細める。

—— 一緒に、新しい言葉を創らないかい…？ ——

「……………」

囁の脳裏に、ただ一つの真実であった言葉と、あの日差し伸べられた手が思い出された。

Word. 32 神ニ、捧グ (2)

「どうして…」

弔の言葉を聞き、少しの間を置いて、口を開くアヒル。

「どうして、大昔からの古臭い言葉を使うことが、いけないんだ…？」

「何…？」

ゆつくりとした口調で問いかけるアヒルに、弔が眉をひそめる。

「今更、何を愚かなことをっ…言葉は廃れ^{すた}逝くもの。古き言葉は捨て、新しい言葉を生みだしていかなば、この言葉世界はっ…」

「ウチの国語教師が言ってたんだ」

弔の言葉を遮り、アヒルがよく響く声を発する。

「“信じる” って漢字が出来たのは、今から三千五百年も昔のことだって」

“信じる”、だと…？」

「アヒルん…？」

突発的に話を始めるアヒルに、弔と囁がそれぞれ、戸惑った表情を見せる。

「俺は凄げえって思ったよ。そんなに大昔から、“信じる” って言葉がこの世界にあったこと」

話しながら、アヒルが穏やかな笑みを零す。

「“信じる” って言葉が、三千五百年、なくならずにずっと、今、この時まで伝えられてきたってことを」

「何をっ…」

弔が浮かべていた笑みを消し、眉間に皺を寄せる。

「今は、国語の授業中ではなっ…」

「そんなに長い間、人は“信じる” って言葉を忘れることなく、ずっと使ってきたんだ」

弔の言葉を、アヒルが再び遮る。

「俺は詳しくねえけど、他の言葉だって、きっとそうなんだと思う」正面を見るアヒルの瞳が、強く光る。

「だからこそ、今、俺たちの発するこの言葉には、重みがある。力があるっ」

握る拳に、力を込めるアヒル。

「意味があるっ！」

「……っ！」

大きく微笑んで言い放つアヒルのその言葉に、部屋の端で聞いていた囁は、思わず大きく目を見開いた。ずっと意味がないと思っていたその言葉は、囁にとっても強く、響いたのである。

「意、味っ……」

その二文字を口にしながら、囁が強く胸元の服を握り締め、俯く。「意味があると……？馬鹿らしいっ……」

アヒルのその言葉を受け、先程よりもさらに不快そうに、その表情を歪める弔。

「君たちの放つ言葉になど、意味はない」

冷たく言い放ち、弔が言玉を握る右手を振り上げる。

「古き言葉とともに、君もここで消え逝くがいいっ……！“光”！」
「……っ！“上^あがれ”！」

弔の向けた光線を、天井へと舞い上がり、避けるアヒル。

「“絞”……！」

「さっきのっ……！」

上げられた弔の指先から伸びてくる、五本の白い光に、アヒルが険しい表情を見せる。

「あれっきゃねえか！“荒^あれろ”……」

言葉を発しながら、アヒルが下方へと銃口を向ける。

「“嵐^{あらし}”っ……！」

アヒルが強く引き金を引くと、銃口から激しい風の塊が放たれ、徐々にその規模を大きくし、向かって来ていた五本の白光を掻き消しながら、一気に下降していく。

「名詞と動詞の併用：語句か…」

迫り来る嵐を、冷静に分析しながら見つめる弔。

「確かに強力だ…けれど…」

「……っ？」

嵐へと右手を向ける弔に、アヒルが少し眉をひそめる。

「抗」

「あっ…！」

生み出した小さな白光で、弔があっさりとアヒルの嵐を受け止める。

「お、俺の嵐を、簡単につ…？」

「力を拮抗させただけのことだよ…」

驚きの表情を見せるアヒルに、そっと微笑みかける弔。

「それに、驚くのはまだ早い」

「へっ？」

“荒”っ

「なっ…！？」

弔の言葉を受けた途端、嵐がその勢いを増し、より一層荒れ狂う。

「行くよ…？ “攻”！」

「うっ…！」

激しさを増したその嵐が、アヒルへと返って来ると、アヒルは大きく目を見開いた。

「うわあああああっ…！」

浮いている状態で風の塊をかわす術もなく、アヒルは嵐に吞まれるようにして切り裂かれ、力なく床へと墜落していく。

「アヒるんっ…！」

床へと倒れ込むアヒルに、思わず身を乗り出す囁。

「うっ…ク…」

「どうかな…？」

苦しげな声を漏らしながら、傷ついた体を何とか起き上がらせるアヒルを見つめ、弔がそっと問いかける。

「君の言葉と俺の言葉、どちらが消え逝くべきか、理解してもらえたかな…？」

「クっ…」

頬から流れる血を拭いながら、アヒルが少し顔を歪める。

「さすがは、ラスボスってところか…他の連中とは、比べもんになんねえ強さだっ…」

アヒルが呟きながら、苦い笑みを浮かべる。

“嵐”も効かねえんじゃ…もう、言葉もねえっ…やっべえな…」

「……………」

弔の力を前に追い詰められ、苦い笑みを浮かべているアヒルを見つめ、囁が目を細める。

「言葉の数も、力も、違い過ぎる…」

アヒルと弔の言葉を比べ、厳しい表情を見せる囁。

「このままじゃっ…」

囁の額から、一滴の汗が流れ落ちた。

「ハアっ…ハアっ…」

息を乱しながら、アヒルがその場で何とか立ち上がる。

「まだ、続けるのかい…？」

「当ったり、前だろっ…」

「そうか…」

強気に答えながらも、明らかに弱っているアヒルの状態に、弔が冷たく笑みを浮かべる。

「じゃあ…“絞”」

「うっ…！」

弔の指先から、伸びる白光。

「うがっ…！」

立っている時でさえ、足元をふらつかせた状態であったアヒルが、その白光を避けられるはずもなく、伸びてきた白光に、アヒルは四肢と首を絡め取られた。首を絞られ、アヒルが苦しげに表情を歪める。

「グ、ウウウ…！」

「“光”…」

「……っ！」

アヒルが苦しみもがきながら、放たれた光線に、大きく目を見開いた。

「うああああああっ…！！！」

光線に貫かれ、アヒルが血を流しながら、再び床へと倒れこんでいく。

「うあっ…！あぐっ…うう…」

「………」

倒れたまま、全身に走る痛みに苦しげな声を落とすアヒルの方へと、弔が静かな表情で、ゆっくりと歩み寄っていく。

「そろそろ…理解したかな…？君の言葉の、無意味さを…」

「クっ…」

すぐ前までやって来た弔を見上げ、強く睨み上げるアヒルであるが、銃を構える力は愚か、その場に立ち上がる力すらなかった。

「君は先程、囁にこう言ったね…？“俺はあいつを倒す”、と…」
薄く笑みを浮かべたまま、落ち着いた口調でアヒルへと問いかける弔。

「君のその言葉…」

弔が、ゆっくりと右手を振り上げる。

「“嘘”にしてあげるよ…！」

「クっ…！」

振り下ろされる弔の右手に、アヒルは強く唇を噛み締めた。

「“裂け”…！」

「……っ！」

「えっ…？」

聞こえてくるその言葉に、アヒルと弔が同時に目を見開く。

「クっ…」

アヒルへと振り下ろされようとしていた弔の右手が、赤い光に斬

り裂かれ、その動きを止める。空中で止まった弔の手から、赤い血が滴り落ちた。

「君は、どうあっても俺の邪魔をしたいようだね」

滴る血を拭いながら、視線を動かしていく弔。

「囁…」

「……………」

弔が見た先には、真っ赤な槍を構え、弔へと鋭い瞳を向けている囁の姿があった。

「囁っ…」

アヒルも少し体を起こし、囁の方を見る。

「もう…もう、やめましよう…弔…」

構えていた槍を下ろし、囁がそつと言い放つ。

「やめる…？何をかな…？」

「あなたがやろうとしていること、すべてよ…」

問い返した弔に、囁は間を置くことなく答えた。

「彼らからすべての言葉を奪うことも…まったく新しい言葉世界を創ることも…もう、やめましよう…」

囁が険しい表情を見せながら、諭すように弔へと語りかける。

「こんなことっ…すべてが無意味だわ…」

「無意味…？」

囁のその言葉に、弔が一気にその表情を引きつる。

「俺のやろうとしていることの、何が無意味なんだ？」

すぐに笑みを浮かべた弔が、軽く手を広げながら、囁へと聞き返す。

「無意味なのは、俺を認めなかった五十音士たちの言葉や…」

弔が鋭く細めた瞳を、囁へと向ける。

「“愛している”とほざきながら、あっさりと君を捨てた、君の両親の言葉の方だろう…？」

「捨てた…？」

「……………」

わざとらしく言い放った弔に、アヒルが少し首を傾げ、囁がその表情を曇らせる。

「確かに…あなたの浴びた言葉も、私の浴びた言葉も、無意味なものだったかも知れない…」

険しい表情を見せたまま、囁が黙り込むことなく、言葉が続ける。

「でも、それは無意味で当然よ」

「何…？」

強く言い切る囁に、弔が眉をひそめる。

「だって、私たちは…言葉の可能性を、まるで信じていなかったんだもの」

曇っていた囁の表情が、徐々に晴れていく。

「そんな私たちに、言葉が応えてくれるはずもないわ」

「言葉が、応える…？」

囁の言葉を繰り返しながら、弔が表情をしかめる。

「まるで、言葉に意志でもあるかのような言い方だね。馬鹿らしいっ…」

「そんなことばかり言ってるから、あなたにとって、言葉はいつまでも無意味なままなのよ」

「…っ」

少し強い口調で言い放つ囁に、弔の表情が明らかに曇る。

「いい加減にしなよ…？ 囁…」

一層、冷たくなった表情で、弔が囁を睨みつける。

「俺が許せているうちに、その愚かな口を閉じっ…」

「閉じないわ」

「……………」

言葉を遮られ、弔がさらに目を細める。

「そうか…なら…」

弔が、言玉を握る右手に力を込める。

「俺が閉じてあげるよ…！ “焦^こがせ”…！」

囁へと向けられた弔の右手から、激しく燃え上がる、真っ赤な炎

が放たれる。

「……っ！」

「囁っ……！」

大きく目を見開く囁と、必死に身を乗り出すアヒル。

「きゃああああっ！」

真っ赤な炎に包まれ、囁の姿が見えなくなっていく。

「その愚かな言葉とともに、燃え尽きるといいよ……」

炎に包まれた囁を、楽しげな笑顔で見つめる弔。

「……………」

「ん……？」

だが、それ以上は続かない囁の悲鳴と、倒れることもなく立ち尽くしている炎の中の人影に、弔が眉をひそめる。灼熱の炎の中にいて、平気なはずもないのに、その人影はもがくどころか、動こうともしていない。

「これは……」

あさむ

「“欺け”……」

「……………」

聞こえてくる言葉とともに、消える炎の中の人影。

「やはり、君の言葉だったか……」

「ハアっ……ハアっ……」

弔が後方を振り向くと、そこには少し息を乱したアヒルが立っていた。アヒルのすぐ横には、まるで無傷の囁の姿がある。アヒルが、あの炎の中から、言葉を使って囁を助け出したのであった。

「“焦がせ”って、今の言葉っ……」

「弔は元・己守……今も、“こ”の言葉が使えるの」

表情を曇らせたアヒルに、答えるように横から囁が言い放つ。

「そっか。そりゃ、さらにやべえな」

「えっ……？」

困ったような笑みを浮かべながら、アヒルが傷だらけの手で再び銃を構え、囁よりも数歩前へと出る。

「あ、アヒるん…！」

「お前は下がっててくれ、囁」

前へと出たアヒルを、止めるように名を呼んだ囁へ、アヒルは振り返ることなく、そう言った。

「俺はあいつを倒すから」

「まだ言うのか…」

強く言い切るアヒルに、弔がどこか呆れたように肩を落とす。

「いいだろう。今度こそ、君のその言葉…打ち砕いてあげるよ…！」

弔が冷たく微笑み、右手を振り上げる。

「“焦^こがせ”…！」

「……っ “上^あがれ”！」

放たれた灼熱の炎をかわし、再び天井へと上がるアヒル。

「“高”っ」

弔も言葉を放ち、上空へと舞い上がる。

「“当^あたれ”！」

「“光”」

空中で弾丸と光線が、激しくぶつかり合う。

「アヒるんっ…」

赤と白の光のぶつかり合いを、大きく見開いた瞳で見上げる囁。

「“荒^あれ狂え”…」

アヒルが言葉を呟きながら、そっと目を細める。

「“嵐^{あらし}”…！」

アヒルの銃から放たれた風の塊が、先程よりもさらに激しく逆巻き、まっすぐに弔へと飛んでいく。

「………」

向かってくる嵐を、冷静に見つめる弔。

「“越^こえろ”」

小さく、言葉が落とされる。

「………」

「えっ…？」

一瞬にして嵐を越えた弔が、アヒルの目の前へと現れる。

「なっ…！」

「こ…」

驚きながら、必死に身構えようとするアヒルへと、伸ばされる弔の右手。弔の右手がアヒルの左手を掴み、弔の口が開かれた。

「壊せ^{こわ}」…

「…っ！」

アヒルが目を見開くと同時に、骨の碎ける音が響き渡った。

「うがあああああっ…！」

アヒルの悲痛な叫び声が、部屋全体へと落ちる。

「うああっ…！ああああっ…」

骨の碎かれた左手を、押さえつけることも出来ず、ただ空中で苦しむアヒル。

「うううっ…！」

「苦しいか…？安の神…」

苦しむアヒルへと、口元を歪めた弔が静かに問いかける。

「その苦しみから、今すぐ解放してあげるよ…」

「…っ！」

微笑む弔に、下方から見上げていた囁が大きく目を見開く。

「ま、待って！弔…！」

飛べぬ体で必死に身を乗り出し、手を伸ばし、枯れそうなほど大声で叫ぶ囁。

「そ、その言葉っ…！その言葉だけはっ…！」

「こ…」

苦しむアヒルの額へと、弔が右手の人差し指を当てる。

「殺せ^{ころ}」…

「…っ！」

放たれる言葉に、大きく目を見開くアヒル。

「……………」

だがアヒルは、見開いた瞳のまま、声を発することもなく、体のすべての動きを止め、力なく下へと落ちていく。

「ああっ…！」

落ちてくるアヒルを見上げ、表情を止める囁。

「嫌…嫌っ…」

目の前に広がる光景を否定するように、囁が必死に首を横に振る。

「アヒるんっ…！！！」

「……っ」

轟との戦いを制し、四階を目指して、必死に階段を駆け上がったいた箆也が、ふと何かに気付いたように顔を上げ、その足を止める。

「何、だ…？今の…」

感じた何かに自分でも戸惑いながら、箆也が確認するように、周囲を見渡す。

「まさか…」

見回していたその視線を、先程から衝撃音の聞こえてくる最上階へと移す箆也。

「神っ…」

箆也が、どこか不安げに呟いた。

Word. 32 神ニ、捧グ (3)

——私の世界は、嘘ばかりだった。

「安団へ潜入？私が？」

それは、囁が弔と出会って数年が過ぎた頃。弔の新しい嘘言玉創りも順調に進行し、轟や罵をはじめとする、二人の仲間になる者が一人、また一人と増えた頃のことであった。

「ああ。丁度、安団が新しい左守さもりを探しているんだよ」

「私に五十音士になれと言うの…？」

「そんなに怖い顔、しないでくれよ」

表情を曇らせ、問いかける囁に、弔は少し困ったように微笑む。

「俺たちの夢を実現するためには、五十音の世界への潜入が必要不可欠なんだ」

弔が、どこか諭すように言う。

「俺は於崎家に潜入しているし、轟と罵には於団に入ってもらうつもりだ。他に務められるのは、君しかないんだよ、囁」

「でもっ…」

説得されながらも、納得できない様子で囁が俯く。

「君をまた、嘘だらけの世界の中に戻すのは、俺としても心苦しいことだよ？囁」

弔が冷たい瞳のまま、優しい笑みを浮かべ、囁へそつと話しかける。

「けど、これが上手くいけば、必ず言葉世界は変わる。わかってくれないかい？囁…」

「……………」

少し考え込むように間を置いた後、囁はゆっくりと顔を上げた。

「わかったわ…」

こうして、囁は五十音士、左守の試験を受け、適任者として認められ、安団への潜入に成功した。

「神は不在？」

「ええ」

囁に左守の資格を与えた言姫、和音は、正式に安団へと入った囁に、現在、安の神が不在であることを伝えた。安の神に近い者となることが、弔に与えられた囁の使命であったため、その言葉に、囁は動揺を隠せずにいた。

「ちなみに太守と奈守も不在ですので、現在、安団は計二名となりますわね」

「二名って…」

最早、団とも呼べないその人数に、囁は思わず表情を引きつる。

「守るべき神もないのに、一体、何をしろと…？」

「その守るべき神を探すことが、あなたの左守としての初めての任務ですわ」

「神を…探す…？」

楽しそうな笑顔で話す和音に、囁は益々、表情を曇らせた。

「紹介しますわ、真田囁」

「…っ？」

不意に足を止める和音に、眉をひそめる囁。

「彼があなたと同じ安附あつきの一人、神月簞也です」

「簞、也…？」

和音が囁へと紹介したのは、すでに安団の一員、加守となっていた簞也であった。

「では簞也、彼女の指導、お願いしますわね」

「ああ」

和音は簞也へと囁のことを託すと、次の用があるのか、足早にその場を去っていった。その場に二人だけが残り、沈黙の時間が流れる。

「あ、あの…えっと…」

沈黙を破ろうと、囁が口を開く。

「初めまして。今回、新しい左守になった、真田囁といっ…」

「自己紹介はいい。名前や他の必要最小限のことは、和音から聞いている」

「えっ…?」

勢いよく言葉を遮った箆也に、囁は少し戸惑うように首を傾げた。

「僕は、あなたに左守としての素養があるのなら、それだけで十分だ。他のことに興味はない」

「ああ、そう…」

すらすらと言い放つ箆也に、とりあえず頷く囁。

「新人相手に、随分と冷たいのね…」

「……………」

囁がどこか、呆れたように肩を落とすと、箆也は少し目を細めた。

「冷たくて当然だろう」

「えっ…?」

「僕は、あなたに優しくする理由がない」

「……………」

迷うこともなく自然に、はっきりと言い放つ箆也に、囁は驚いたように目を丸くする。

「フフフッ」

「んっ? 何だ?」

急に吹き出すように笑みを零した囁に、箆也が不快そうに顔をしかめる。

「あなたに笑われる理由もないはずだが?」

「あら、ごめんなさいっ」

問いかける箆也に、囁がそっと笑いかける。

「あなた、優しくはないかも知れないけれど、とても素直な人ね」

「はっ?」

囁のその言葉に、箆也の眉間に皺が寄る。

「意味のわからないことを言うな。とっとと我が神を探しに行くぞ」
「ええ…」

乱雑で、ぶっきらぼうで、温かみのまるでない言葉。

でも、その言葉は、幼い頃に浴びてきた、どんなに優しい言葉よりも、真実に近い気がした。

それから半年程の時間が流れ、安の神を探し続けていた簞也と囁は、ようやく、自身の神を見つけることとなった。

「こんにちは、朝比奈アヒル…」

「えっ？なんで、俺の名前っ…」

「フフっ…あだ名は“ガア”、だったかしら…？」

朝比奈アヒルと、出会うこととなった。

「ダチが泣いてんのに、黙って見てなんか、いられっかよお！」

「お前が受け止めなかったアイツの言葉は、アイツ自身に戻って、アイツの痛みになった」

「言葉の中には“救い”もあるって、俺はそう、信じてるっ…！」

「俺だって、半端な覚悟で、あいつらの神になろうってんじゃねえんだよっ…！」

その言葉は一つずつ、囁の心に響き、少しずつ、囁の心を動かしていく。

「おっ前、また勝手に人の部屋にあがりこみやがってっ」

「あら、おかえりなさい…フフフっ…」

ある日、学校から帰ったアヒルを、すでに部屋で寛いでいる様子の囁が出迎えた。

「まったく、勝手に入んって何回言わせれば気が済っ…」

「今、読書中だから…邪魔しないでくれる…?」

「邪魔してんのは、お前だ!」

偉そうな物言いの囁に、机の上へと鞆を放り投げ、アヒルが勢いよく怒鳴り上げる。

「だいたいっ、読書たってまたどうせ、しょうもないあの本だろうがっ」

「“恋盲腸―声なき告白・ヒトミVSエヘン虫―の巻”よ…」

「あっそう…」

丁寧に答える囁に、アヒルが一気に呆れた表情となる。

「エヘン虫によって声を失ってしまったヒトミが、その状態で直、先生に愛を伝えようとするの…」

「聞いてねえよ…っつーか、エヘン虫だろ? 薬かなんか、飲めば良くなっ?」

物語の内容まで話す囁に、アヒルが色々と突っ込みを入れる。

「……ねえ、アヒるん…」

「ああっ?」

ふいに真剣な表情を見せた囁が、読んでいた本を閉じ、制服の上着をハンガーへと掛けているアヒルの背中へと呼びかけた。

「もしね…アヒるんがエヘン虫で、すべての言葉を失ったとして…」

「大げさだな、エヘン虫」

アヒルが囁の方を振り返りながら、突っ込みを入れる。

「それでも…どうしても、私に愛の告白をしたいとして…」

「何か不快な例え話だな」

「その時、アヒるんは…どうする…?」

「……っ」

少しふざけた例え話をしているだけだというのに、囁のアヒルを見つめるその瞳は何故か真剣で、アヒルは思わず呆れきっていた表情を変えた。

「んん、そうだなあ…」

窓の方を見つめ、頭を掻きながら、アヒルが少し考え込む。

「叫ぶ、かな。叫び続けるっ」

「えっ…？」

アヒルの言葉に、囁は思わず、戸惑いの表情を見せた。

「どんなに声を出しても…それは言葉にならないのに…？」

「ああっ」

「そんなことしたら…喉が潰れるわよ…？」

「どうしても伝えたいんだろっ？なら、仕方ねえさっ」

次々と問いかける囁に、アヒルは迷うことなく微笑む。

「叫び続けてたら、いつか…」

その微笑みが、囁へと向けられる。

「いつか、俺の想いが言葉になるっ」

「……っ」

その言葉に、囁は大きく目を見開いた。だがすぐに目を細め、囁が穏やかな笑みを浮かべる。

「そうね…きつと、そうだわ…」

零れんばかりの笑みを浮かべ、そつと頷く囁。

「まあ、俺がお前に愛の告白をすることは、絶対ねえけどな」

「あら、わからないわよ…？フフフっ…」

あなたに会って、嘘ばかりの私の世界は、ゆっくりと変わり始める…――

「アヒるん…!!アヒるんっ!」

力なく床へと落ちたアヒルのもとへと、囁が必死に駆け込んでいく。

「アヒっ…!あっ…」

「……………」

床へと仰向けに倒れ込んだアヒルは、先程まで開いていた瞳を深く閉じ、指一本動かすことなく、固まっていた。倒れたアヒルに遅れるようにして、いつの間にか銃から戻った言玉が、アヒルのすぐ横へと落ちた。アヒルのすぐ横に座り込み、囁が床へと槍を置いて、アヒルへと右手を伸ばす。

「アヒ…るん…？」

囁の右手が、アヒルの頬へと触れる。

「……………」

冷たいその頬に、囁は少し目を見開いた。

「アヒるん…」

触れていた右手を下ろし、囁はただ茫然と、目の前のアヒルを見つめる。

「これが、真実だよ。囁」

アヒルに遅れるようにして床へと降り立った弔が、勝ち誇った笑みを浮かべ、囁へと語りかける。

「ねえ？俺を倒すと言った彼の言葉も、嘘だっただろう…？」

静まり返った部屋に、弔の冷たい声がよく響いた。

「君の信じた神の言葉も、所詮は虚像だ…やはり真実なのは、俺の言葉だけで…」

「ぼろぼろ…」

「……………」

小さく落とされた囁の声に、弔の言葉は止まる。

「傷だらけ…骨も折られて…きつと、物凄く痛かったね…」

アヒルの傷だらけで、骨も砕かれてしまった左手を撫でながら、囁は、深く目を閉じたアヒルへと話しかけるように、小さな言葉が続ける。

「ごめんね…いっぱい、痛い思いをさせて…」

左手を撫でた後、囁が再び、アヒルの頬へと手を触れる。

「ごめんね…こんなことに、巻き込んで…」

冷たくなった頬に触れ、囁がそつと目を細める。

「ごめんねっ…」

今まで以上に深く落とされる、謝罪の言葉。

「私…アヒるんのために、何にも出来なかったけれど…」

頬に触れていた手を離し、囁が床に置いていた槍を再び手に取る。

「これが…今の私に出来る、ただ一つのことっ…」

そつと微笑んだ囁が、槍を握る手に力を込めた。

「……っ！」

「んっ…？」

アヒルのすぐ横で、槍の先を天井へと突き上げる囁の姿に、弔が戸惑うように眉をひそめる。

「何だ…？ 一体、何をっ…」

「これが私の…」

弔が戸惑う中、突き上げた槍を見上げ、囁は目つきを鋭くする。

「最期の言葉っ…」

突き上げた槍から、赤い光が溢れだす。

「“捧たかげろ”…」

Word 32 神ニ、捧グ (4)

「んなっ…！」

部屋中に放たれる、あまりに強い赤色の光。目の中に飛び込んできた光に、弔は思わず目を閉じ、身を屈めた。

「な、何だっ…？こ、この光は…！」

薄く目を開き、何とかその光の正体を知ろうと、前方を見る弔。

「あ、あれはっ…！」

前を向いた弔が、驚きの声をあげる。

「……………」

部屋中に広がった赤い光の中心には、すでに槍を下ろした囁の姿があった。

「……………」

囁の見つめる先で、床に横たわっていたアヒルが、ゆっくりとその瞳を開く。

「俺…」

瞳を開いたアヒルは、まだどこか惚けた様子で、戸惑いの声を漏らした。

「馬鹿なっ…！」

目を開いたアヒルを見て、徐々に光にも慣れてきた弔は、大きく目を見開いた。

「俺が放った言葉は“殺せ”っ…彼は確かに、死んだはずっ…ま、まさかっ…！」

考えを張り巡らせた、弔が、さらに驚きの表情となる。

「“捧げろ”…？まさか、捧げたのはっ…」

信じがたいといった表情で、弔が今度は囁を見つめる。

「囁…」

囁をその視界へと入れ、弔はそっと目を細めた。

「俺、はっ…」

「アヒるん…」

「へっ？あ、囁！」

戸惑うように天井を見上げていたアヒルが、横から聞こえてくる声に振り向く。すぐ横に囁の姿を見つけると、アヒルはすぐさま体を起こした。

「お前、無事でっ…！って、あれっ？」

思いきり左手を床へとつき、起き上がったアヒルが、戸惑うように左手を見る。

「俺、確かさっき、左手っ…」

「アヒ…るん…」

「えっ…？なっ…！」

囁に呼ばれ、アヒルが再び顔を上げると、ゆっくりと後方へと倒れ込んでいく囁の姿が目映った。

「さ、囁っ…！？」

アヒルが必死に手を伸ばし、倒れていく囁を、抱え込むようにして受け止める。

「囁っ…！？どうした！？囁！」

「アヒるん…」

抱え込んだ囁へと、アヒルが必死に呼びかけると、囁はアヒルの腕の中で、そっと力ない笑みを浮かべた。

「良かった…上手く、いって…」

「上手く…？何をっ…」

——“殺せ”——

「あっ…」

戸惑っていたアヒルの脳裏に、先程の戦いのことが鮮明に思い出される。

「そ、そうだ…俺は確かに、あいつの言葉を喰らって…」

“捧げる”…」

「へっ？」

困惑した様子で自分の体を見回していたアヒルが、後方から聞こえてくる声に振り返る。アヒルが振り返ると、そこには厳しい表情を見せた弔が立っていた。

「囁が、君へ贈った言葉だ」

「捧げろって…」

弔の言葉を聞き、ハッとした表情となるアヒル。

「ま、まさか、お前っ…！」

「フフ、フっ…」

再び囁の方を見たアヒルに、囁がそっと微笑みかける。

「私の命…無駄遣いしたら、あの世から呪ってやるから…ね…」

「んな時に、馬鹿なことやってんじゃねえ！お前っ…！」

怒鳴りあげながらも、アヒルの細められた瞳が、どこか悲しげに光る。

「なんでこんなっ…こんな馬鹿なことっ…！」

「馬鹿なこと…なんかじゃないわ…」

囁が少し首を横に振り動かし、アヒルへ笑みを向ける。

「だって…神様を守ることが…神附きの、役目だから…」

微笑んだ囁が、どこか誇らしげに言う。

「安の神を守ることが…安附の私の…役目だから…」

「んなことっ…！んなことっ…」

言葉に詰まったアヒルが、苦しげに少し俯く。

「ねえ…アヒるん…」

ゆっくりと上げられた囁の手が、俯いていたアヒルの頬へと触れると、アヒルが顔を上げる。先程の冷たい頬ではなく、指先からは確かな温もりが伝わってきた。

「私の…神様…」

アヒルの頬に手を触れ、囁が穏やかに微笑む。

「どうか…死なない…でっ…」

途切れていく言葉の中、頬に触れていた囁の手がゆっくりと落ち、

その瞳が閉じられていく。

「囁っ…？」

瞳を閉じた囁に、アヒルが戸惑うように問いかける。

「囁…？囁…！囁っ…！！」

徐々に大きくなっていくアヒルの声にも、囁はまったく反応しない。

「囁…！囁…！！」

「死んだようだね…」

「……っ」

囁へと呼びかけ続けていたアヒルが、前方から聞こえてくる弔の声に、呼びかける声を止め、ゆっくりと顔を上げる。

「覚えば、可哀想な子だったよ」

アヒルの手の中で、その瞳を閉じた囁を見つめ、弔がそっと目を細める。

「嘘偽りの言葉の中で苦しんで、本当の温かい言葉を探しては見つけられず、いつも泣いていた…」

弔が昔を懐かしむように、少し口元を緩める。

「だからこそ、君たちとの仲間ごっこの中で得た、小さな温もりを…捨てきれなかったのかも知れないね…」

どこか悟るように、声の音調を落ち着かせる弔。

「本当に…可哀想で、愚かな女だった」

「……っ」

冷たく微笑んだ弔のその言葉に、アヒルの表情が止まる。

「あっ…」

———こんにちは、朝比奈アヒル……—

———私たちの想い、託すわよ…我が神……—

———さようなら……—

———どうか…死なない…でっ……—

「……っ！」

今までの囁の姿を思い出し、アヒルが勢いよく顔を上げた。

「ああああああああっ……！！！」

激しい叫び声とともに、アヒルの体から、強い光が発せられる。

「な、何っ……!？」

囁の放った光以上に強く、威圧的な重さを感じるその光に押され、思わず足を数歩、後ろへとさげられてしまった弔が、戸惑った様子で眉をひそめる。

「また光っ……？だが先程の光とは違うっ……」

吹き抜ける強い風を防ぐように、顔の前へと持って来た両手の隙間から、弔が前方を覗く。

「何だっ……!？この重さはっ……!」

弔の表情には、明らかに焦りが浮かんでいた。

「一体、何がっ……？あ、あれはっ……」

前方を見る弔が、何かに気づき、その表情を曇らせる。

「言玉っ……？」

まだ囁を抱え、座り込んだままのアヒルの手を離れ、アヒルのすぐ上に、一つの真っ赤な言玉が浮かび上がる。

「何故、言玉が……」

浮かんだ言玉が、アヒルが何も言葉を口にしていないというのに、強い光を放ち始める。

「あの光はっ……」

放たれる光は、輝くばかりの金。

「金色っ……？さっきまでとは違う……あっ……!」

言玉から放たれる、先程までアヒルが放ってきた赤色の光とは異なる、金色の光を見つめ、戸惑いの表情を見せていた弔が、さらに驚いた様子で、大きく目を見開く。

「言玉の色がっ……」

光に包まれ、まるで染まるように、その色を変化させる言玉。

「変わるっ……!？」

弔が見つめるその中で、アヒルの言玉は、真っ赤から金色へとその色を変えた。

「……………」

強く重い光の中心、色を変えた言玉の下にいるアヒルが、深く目を閉じた囁を、床へと丁寧に寝かせる。

「ここに居てくれ…囁…」

寝かせた囁へそつと微笑みかけ、アヒルがその場で立ち上がる。

「言玉が色を変えるなんて、そんなの聞いたこともないっ…あれは一体…」

「……………」

「うっ…！」

戸惑うように言玉を見つめていた弔が、立ち上がり、顔を上げたアヒルの、その鋭い視線に、突き刺されるような何かを感じ、思わず怯むような声を漏らした。

「お、お前はっ…！」

「五十音…第一の音…」

立ち上がったアヒルが、ゆっくりとした動作で、浮かんでいる言玉の方へと、右手をあげる。

「“あ”、解放っ…!!！」

———パアアアアン！

「うううっ…!!！」

その重さを増す光に、再び押される弔。光に片目を閉じながら、弔が何とかその場に留まろうと、必死に足を踏ん張る。

「……………」

少し俯いていた弔が、何かの気配を感じ、ハッとした表情で顔を上げた。

「クウアアアアアっ…!!！」

「なっ…！」

顔を上げた弔の視界に飛び込んできたのは、金色の翼を部屋いっぱいに広げた、巨大な金色の光の鳥であった。嘴を開いた鳥の、甲高い鳴き声が響き渡る。

「と、鳥……？」

「……っ」

弔が戸惑う中、鳥の真下に立ったアヒルは、鳥を従えるように、右手を掲げた。

「お前だけは……」

アヒルが、鋭い瞳を弔へと向ける。

「お前だけは、絶対許さねえっ……！」

「クウアアアアアっ……！」

強く言い放つアヒルの怒りに呼応するように、鳥は激しく、咆哮をあげた。

Word 33 あキラメナイ (1)

「はあっ…！はあっ…！」

七声の城の、四階へと続く階段を、息を乱しながら必死に駆け上がり、アヒルたちのもとへと急ぐ箆也。やがてすべての階段を上り終え、箆也の視界に大きな扉が見えてくる。

「神…！囁っ…！」

扉へと手をかけ、箆也は迷うことなく、勢いよくその扉を開いた。

「クアアアアッ！」

「なっ…！？」

扉を開いた途端、視界すべてを埋め尽くす巨大な金色の生物に、箆也が大きく目を見開く。

「こ、これはっ…！」

見開いた瞳で、その生物を見上げる箆也。

「鳥…？」

翼を広げたその金鳥を見つめ、箆也は戸惑いの表情を見せた。

広がる翼は羽根の一枚、一枚が美しく輝き、見つめているだけでも目が眩む。長い嘴に、鋭い瞳、しなやかでありながら、迫力のある大きな体躯。金色の光のその鳥は、伝説に出てくる火の鳥のような、そんな神秘的なものにも見えた。

「鳥…」

目を逸らすことも許されぬような、そんな力ある空気を纏ったその鳥を、弔は曇った表情で、ただまっすぐに見つめる。

「何だ…？この力は…」

徐々に戸惑いの色が深くなる、弔の表情。

「安団の言玉の形状は、武器のはず…」

目の前にいるそれは、武器などではなく、確かな生き物である。

「変格」…？いや、ア行は、神は変格を持たない…」

思いついた可能性を、すぐに首を横に振っては否定する弔。

「なら、何だというのだ…？あの力は…」

「……………」

弔が戸惑う中、アヒルは落ち着いた表情で、少しだけ後ろを振り返った。

「……………」

床に横たわり、深く目を閉じている囁の姿を見て、アヒルがそつと目を細める。

「見ててくれ、囁…」

囁の名を呼び、アヒルが再び前を見る。

「俺の…言葉の、力をっ…！」

強く叫びあげ、アヒルは勢いよく右手を振り上げた。

「“当たれ”…！」

「クアアアアア！」

アヒルの言葉に反応し、鳥が大きな翼を真横に広げ、甲高い鳴き声をあげて、勢いよく弔へと飛び出していく。

「グっ…！」

迫力満点に飛び込んでくる鳥に、弔は思わず表情を引きつった。

「“甲”…！」

弔も素早く言葉を発し、自分の前に、大きな六角形の白光の盾を形成して、飛び込んできた鳥のその鋭い嘴を、正面から受け止めた。

「クアアアア！」

「な、何っ…！？」

鳥が鳴くとともに、嘴に入る力が増し、弔の盾に大きなヒビが入る。

「こ、これはっ…！うう…！」

ヒビが入って間もなく、弔の盾は、その嘴に粉々に砕き割られた。「ぐあああああっ！」

盾を失った弔が、そのまま後方へと吹き飛ばされる。玉座に弔が

直撃すると、その衝撃に玉座の一部が破壊された。

「グっ…うう…」

壊れた玉座を支えとして、何とか起き上がる弔。その口端からは、赤い血が流れ落ちる。

「俺の言葉でっ…止められないとはな…」

さらに表情を険しくしながら、弔がゆっくりと立ち上がる。

「だがっ…これなら、どうだ！ “光”…！」

弔がすかさず右手を前へと向け、鳥へと光線を放った。

「……………」

アヒルは言葉を放つ様子も見せず、ただ鋭い表情で、鳥に迫り来る光線を見つめる。アヒルの上空を舞う鳥は、その大きな嘴をゆっくりと開いた。

「クアアアッ！」

「なっ…！」

鳥が鳴き上げたその瞬間、弔が向けた光線が、碎かれるように突然、粉々になって消え去った。その光景に、弔が衝撃を受ける。

「何だっ…！？」

大きく見開いた目で、鳥の下にいるアヒルを見る弔。

「今、言葉など放っていなかったっ…」

静かに立ち尽くした状態のアヒルを見つめ、弔が確かめるように呟く。

「言葉も放たずに…圧だけで俺の言葉を碎いたというのかっ…？」

弔の表情が、より一層険しいものとなる。

「あの…力は…」

「籠也」

「えっ？」

鳥の力に圧倒され、思わず啞然としていた籠也が、不意にアヒルに名を呼ばれ、少し驚いた様子で振り向いた。

「神…」

「保と奈々瀬がそこに倒れてる。傷の治療を頼む」

「……っ」

アヒルの言葉を受け、箆也が横を振り向くと、入口近くの壁際に、傷だらけで倒れている保と七架の姿を見つけた。まだ気を失っている様子の二人を確認し、箆也が少し目を細める。

「わかった」

「それから…」

「んっ？」

言葉を付け加えるアヒルに、箆也が首を傾げる。

「囁も連れて、三人をお前の力で“囲って”てくれ」

アヒルが弔の方を見たまま、箆也への言葉を続ける。

「今から、本気を出す。巻き込まねえ自信はねえから、俺の力から、みんなを守ってほしいんだ」

アヒルのその言葉に、箆也がそっと目を細める。

「わかった。“担^{かつ}げ”」

箆也が言葉を放ち、右手に持っていた格子から手を離すと、格子は空中で六本に分かれ、それぞれ二本ずつ、囁、保、七架のもとへと寄っていき、三人を箆也のもとまで運んでいく。

「神」

運ばれてくる囁を見ながら、箆也がアヒルを呼ぶ。

「囁の、傷の治療は…？」

「……っ」

箆也のその問いかけに、曇るアヒルの表情。

「必要ない」

「……そうか」

告げられたアヒルの答えに、箆也は少し俯きながら頷いた。

「みんなを頼む」

「ああ」

三人が格子に運ばれ、箆也のすぐ横の床へと横たわると、箆也は右手を掲げ、六本の格子を周囲に広げた。

「“囲^{かこ}え”」

籠也が言葉を放つと、四人を取り巻いた格子の間に、赤い光の膜が張られ、四人を完全に覆う。

「神…」

光の膜越しにアヒルを見つめ、籠也はそっと目を細めた。

「……………」

弔から視線を逸らし、籠也が三人とともに言葉の力で周囲を囲ったことを確認するアヒル。

「“本気を出す”…？」

前方から聞こえてくる声に、アヒルが再び振り向く。

「相も変わらず、“嘘”ばかりの言葉を口にするものだね」
薄く浮かべた笑みで、アヒルを見る弔。

「それでは何かな？ 今までは本気で戦っていなかったとでも言う気かい？」

「ああ」

あっさりと頷くアヒルに、弔が眉をひそめる。

「みんな、避難した。これでやっと、こいつの本気が出せる」
軽く鳥を見上げた後、アヒルが再び弔を見る。

「これでやっと、お前を倒せる」

「……………」

挑発的なアヒルの言動に、弔の表情が歪む。

「だから、君の言葉は無意味だと言うんだ…」

冷たく響き渡る、弔の声。

「“絞”！」

弔が掲げた両手の指先から、糸状の白光が伸び、上空にいる鳥の巨大な胴体や羽根を、幾重にも重なって絡み取り、その動きを封じる。

「君に俺が倒せるはずがないだろうっ…！ “攻”！」

動きを封じられた鳥へと、弔が幾つもの光線を放つ。

「あ…」

アヒルは落ち着き払った表情で、自らの言葉を口にした。

「暴^{あば}れろ」

「……っ！」

静かに落とされる言葉に反応し、鳥が体の動きを封じていた光を引き千切り、その巨大な翼を、部屋中に目いっぱい広げる。

「クアアアアアアっ！」

広げられた翼から、鳴き声とともに放たれる、羽根のような無数の赤い光の刃。その刃はあっという間に弔の光線を突き破り、弔自身へと降り注いでいく。

「何っ…！？クっ…！」

向かってくる刃に焦りの表情を見せながらも、弔が眉間に皺を寄せ、右手を掲げた。

「抗^{こう}…！」

弔の右手から、言葉とともに、巨大な白い光が放たれる。

「あっ…！」

だがその光も、鳥の放った無数の羽根の前に、一瞬にして消え失せる。

「ううっ…！」

迫り来る力に、弔の表情が歪んだ。

「うがあああああっ！」

羽根を一斉に浴び、弔が全身から血を撒き散らしながら、勢いよく後方へと吹き飛ばされていく。羽根の降り注いだ床には穴があき、弔が背中を打ちつけた部分から壁は崩壊し始め、鳥の広げた翼により天井は碎かれ、部屋は徐々に原型を失い出した。

「何て力だ…」

パラパラと、崩れた天井の欠片の落ちてくる上空を見上げながら、簞也が表情を曇らせる。

「城ごと、崩れ落ちかねない…早めに傷の治療を済ませた方が、良さそうだな」

そう呟くと、簞也はその場にしゃがみ込み、床に倒れている保と七架の傷の手当てを始めた。

「ハアっ…ハアっ…」

崩壊し始めた壁に、大きくあいた穴の中から這い出て、息を乱しながら必死に立ち上がる弔。全身についた傷からは赤い血が溢れ、床に模様を作っていく。

「何故、効かない…」

戸惑うように、そつと言葉を口にする弔。

「俺の創り出した…素晴らしい、俺だけの言葉が…何故っ…」

小さく、途切れ途切れに落とされる弔のその言葉を聞き、アヒルが目つきを鋭くする。

「これが、言葉だ」

「……っ」

アヒルの発するその言葉に、弔が俯けていた顔を上げる。

「これが、お前が無意味だと、偽りだと言った言葉の力だ」

「言葉の…力…？」

アヒルの言葉を繰り返しながら、弔があからさまに、その表情をしかめる。

「まだ、そんなことを言うのかい？ 言っただろう。言葉なんてものは嘘ばかり…すべて無意味だどっ」

「俺だって言ったださ。言葉は無意味なんかじゃない。言葉には意味があるって」

「その言葉が、すでに無意味だと言うのだよ」

額から流れ落ちる血を拭い、弔が少し口元を歪める。

「言葉に意味などない。人は進化の過程で間違っただ」

吐き捨てるように、言い放つ弔。

「人は決して、言葉など得るべきではなかった」

「なんでっ…」

弔の言葉を聞きながら、アヒルが眉をひそめる。

「なんで、そこまで、言葉が無意味だと言い切る…？」

「……………」

立ち上がった姿勢を安定させた弔が、アヒルの問いに、そつと目

を細めた。

「俺だって：昔は、君のように、言葉が意味のあるものだと思じていたよ」

落ち着いた口調で、弔が話を始める。

「だからこそ、自分のこの言葉で、五十音士として必死に忌と戦い、於附として必死に神を守ってきた：」

弔がどこか懐かしむように、少し上方を見上げる。

「新しい言葉を生み出したのも、もっと言葉の力を強くして、もっと神を守れるようにする為だった：」

続く弔の言葉に、アヒルの表情がかすかに曇る。

「だが実際は先程、言った通り。俺の力を恐れた韻^{いん}は、俺を五十音の世界から追放した」

弔の声が、不意に冷たく響く。

「俺は必死に言った。“この力は神を守る為のもの、五十音の世界の力となるものだ”と、何度も叫んだ」

言葉を発しながら、弔が表情を険しくしていく。

「だが、何度叫んだところで届かなかった」

上を見ていた弔が、顔を下げ、アヒルの方を見る。

「ずっと守ってきた俺の神さえ、俺の言葉を聞きはしなかった」

「……っ」

憎しみか、哀しみか、渦巻いた感情に揺れる弔の瞳を見つめ、アヒルが少し目を細める。

「その時、今まで自分の信じてきた言葉が、何よりも無意味なものであったことを知った」

弔が瞳から込み上げていた感情の色を消し、どこか冷めきった様子で言い放つ。

「これが俺が、言葉が無意味だと言う理由だ」

弔の突き刺すような視線が、アヒルへと向けられる。

「これを聞いても、まだ言葉が意味のあるものだと言えるのかい？」

「……………」

その問いかけに、アヒルが少し考えるように間を置く。

「言える」

「……っ」

答えるアヒルに、弔が再び表情を歪める。

「日本語が通じないのかい？　そういえば君は、随分と頭の悪い神だと、囁から聞いていたがっ」

弔が呆れた様子で、肩を落とす。

「なら、聞こうか。言葉の神よ」

挑戦的な笑みを浮かべ、弔がアヒルへと問いかける。

「君に言えるのかい？　すべての言葉に意味があると」

鋭い視線が、アヒルを見る。

「すべての言葉が、相手に必ず届くと、君にそう言い切れるのかい？」

「……………」

続く問いかけに、アヒルが少し目を細める。

「すべての言葉に、意味はあると思う。けどっ…届かない言葉が一個もないなんて…俺には言えない」

少し俯きながら、小さく呟くアヒル。

——違うんだっ…違うんだよ！　カー兄っ…！　——

「俺の中にも、届かなかった言葉はある…」

アヒルが噛み締めるように、きつく胸元のシャツを握り締める。

「なら、やはり言葉は無意っ…」

「けどっ」

弔の言葉を、アヒルが強く遮る。

「届かないって諦めたら…言葉はそこで、死んでしまう…」

「死ぬ…？」

アヒルのその言葉に、弔が眉をひそめる。

「言葉が…死ぬ…？」

「ああ」

聞き返した弔に、アヒルは大きく頷き返した。

「一度叫んで届かなかった言葉も、二度目なら届くかも知れない。二度目が駄目だったなら、三度目で届くかも知れない」

アヒルが視線を下へと向けたまま、ゆっくりとした口調で言葉を続ける。

「届かないって諦めた時点で、その言葉は死ぬんだ」

顔を上げたアヒルが、まっすぐに弔を見つめる。降り注ぐアヒルの視線に、弔は少し表情を歪めた。

「不快だね…」

弔が短く、声を落とす。

「それではまるで、届かないと諦めた、俺がすべて悪いようだ」
少し目を細め、弔が不快感を露にして言い放つ。

「悪いのは、俺の言葉に耳を傾けなかった、五十音の世界の連中だよ」

弔が、自信を持って言い切る。

「だから俺は、君たちから言葉を奪うっ…！」

強く叫びあげ、弔が高々と右手を振り上げる。

「無意味な五十音の世界を、この手で終わらせてあげるよっ…！」
“強”！！」

Word 33 あキラメナイ (2)

「うっ…！」

言葉とともに弔の全身から放たれる、強い白色の光に、アヒルは思わず身を屈め、目を細めた。

「濁音をつ…？」

「これで…！これで終わりだ！言葉の神っ！」

「なっ…！？」

白い光を放った弔の髪が、光に染まるように真っ白になり、重力に逆らって立ち上がる。大きく見開かれた瞳からは眼球が消え、白目を剥きだすような形となった。変わっていく弔の風貌と、その全身から放たれる、今までよりも圧倒的に強い力に、アヒルは眉をひそめた。

「これはっ…！」

「“強”…言葉の強化か…いや…！」

戸惑うアヒル同様、弔の様子を見つめる箆也も、その表情を曇らせる。

「強化の域を越えている…強すぎる力が、言葉の制御を越え、暴走を始めたか…！」

「ハハハハハハっ…！！！」

箆也が冷静に分析する中、先程までとはすっかり風貌も変え、落ち着き払っていた様子さえ一変させた弔が、高らかと笑いあげる。

「ふう…！」

笑いあげていた声を止め、弔がそっと息をつく。

「“光”…！」

「…っ…！」

静かに落とされる言葉に、アヒルは大きく目を見開いた。

「なっ…！？」

弔の全身から放たれる、流星群のような、無数の白い光線。迫り

来る光線に、簞也が思わず表情を歪める。

「うううっ…！」

簞也が皆を囲った赤い光の膜に、光線が幾つも突き刺さると、その衝撃に、簞也は険しい表情を見せた。光線の力はあまりに重く、一本でも十分に強いというのに、それが終わることなく迫り続てくる。

「先程より、力が増しているっ…こ、これではっ…！」

抑えきれない巨大な力に、焦ったように声を出す簞也。

「うっ…！」

「クアアアッ」

「あっ」

あまりの力に囲いを碎かれそうになったその時、簞也の目の前に、白い光線の代わりに、金色の翼が広がった。

「これは…神のっ…」

それは、アヒルの鳥の片翼であった。鳥は弔に背中を向ける形で、片方の羽根を簞也たちの前に、もう片方をアヒルの前へと広げて、弔の放った光線をすべて、受け止める。

「クアアアアアッ！」

大きな鳴き声をあげて、鳥が受け止めた光線を弾き返す。弾き返された光線は天井を貫き、崩壊し始めた天井にさらに穴をあけた。空から射す日の光が、部屋の中にまで届くようになる。

「あの力を弾き返すとは…」

穴のあいた天井を見上げ、茫然と呟く簞也。

「クウウウっ…」

「ううう…！」

「あっ…！」

広げていた翼を、どこか苦しげに丸めこむ鳥とともに、その表情を痛みに歪めるアヒルに、簞也が驚いた様子で振り向く。

「神っ…！」

「うう…！」

少し身を屈めたアヒルは、その両手を苦しげに下ろしていた。

「成程：どうやら、君とその鳥の体は連動しているようだね」

苦しげなアヒルを見つめ、弔が冷静に微笑む。

「壊せ」
「あっ……！」

弔が右手を鳥の左翼へと向け、言葉を放つ。弔に背を向ける形となっていた鳥は、向かってくる言葉を避けることが出来なかった。

「クアアアアアアっ……！」

「うあああああ……！」

鳥が叫び、左翼を折りたたむようにして、床へと巨体を下ろすと同時に、アヒルも左腕を押さえ、その場へと崩れ落ちた。

「神っ……！」

力なくしゃがみ込んだアヒルに、箆也が思わず身を乗り出す。

「ああ、やはり間違いないようだ」

楽しげに微笑む弔に、しゃがみ込んだままのアヒルが、険しい表情のその顔を上げる。

「折角、治ったのに……また折れてしまったね、安の神……」

「クっ……」

折れた左手を力なく下方へと垂らしたまま、アヒルが眉をひそめる。

「どうだい？これが俺の力っ……君たち五十音士の力など、到底及ばない、俺だけの力だよ……」

「……………」

得意げに微笑む弔を見つめ、アヒルがその表情を曇らせる。

「神……！今、治療を……！」

「そこを動くな、箆也」

アヒルのもとへと飛び出して行こうとした箆也が、強く叫ぶアヒルの声に、踏み出そうとしたその足を止める。

「お前はそこで、みんなを守ってろって、そう言ったはずだ」

「だがっ……！」

アヒルの言葉に、箆也が声を荒げる。

「だが、その腕ではっ…！」

「大丈夫っ」

「……っ」

聞こえてくるその言葉に、箆也の声が止まる。

「大丈夫だっ、きっと何とかなる」

箆也へと笑みを向けるアヒルに、箆也がそっと目を細める。それは、いつもアヒルが口にする言葉。何の根拠もないが、安団の皆が信じてきた、アヒルの言葉であった。

「左腕が折られたって、俺にはまだ、言葉があるっ」

——あなたには、“言葉”があるのだから——

「神…」

それは、箆也がアヒルへと贈った言葉であった。

「それに…俺、言ったんだ。囁に…」

アヒルが少し視線を流し、箆也の近くに横たわっている囁の方を見る。

「“俺はあいつを倒す”って…」

アヒルの瞳が、そっと細まる。

「だから俺はっ…」

勢いで立ち上がったアヒルが、鋭い瞳で、弔を見つめる。

「あの言葉を絶対、“嘘”にはしないっ…!!」

強く叫ぶアヒルの想いと連動するかのように、床に体を落としていた鳥も、その右翼だけを大きく広げ、その場で堂々と立ち上がった。

「いいだろうっ…」

口角を吊り上げた弔が、再び言玉を持った右手を掲げる。

「言葉が意味のあるものなのか、ないものなのか…君のその言葉の真偽で、確かめようじゃないかっ…！」

掲げられた言玉から、さらに強い白光が放たれていく。

「ねえっ…安の神…！」

大きくなる声とともに、弔の放つ光が、その強さを増していく。

「囁…見ててくれ…」

胸元のシャツを強く握り締め、アヒルが弔にすら届かないような、小さな声を落とす。

「俺が…言葉の意味を、証明してくっからっ…！」

「クアアアアアッ！」

アヒルの叫びとともに、アヒルの上空の鳥からも、強い金色の光が放たれた。

「……一緒に見よう。囁」

アヒルと弔の様子を見守る籠也が、すぐ横で眠る囁へと、静かに声をかける。

「あれが、僕らの神だ」

籠也の声が、誇らしげに響き渡った。

『……………』

しばらく互いを見合って、アヒルと弔が、攻撃のタイミングをそれぞれにうかがう。

「行くよ…“絞”！」

「……っ！」

鳥を捕らえるべく向かってくる紐状の白光に、アヒルが素早く右手を上げる。

「“上^あがれ”…！」

アヒルの言葉で、同時に上昇するアヒルと鳥。鳥の巨体が舞い上がると、崩れ始めていた天井は完全に突き破られ、さらに空が見えるようになった。

「“暴^{あは}れろ”！」

「クアアアアアッ！」

鳥の広げられた右翼から、赤い光の刃が、雨のように降り注ぐ。

「……っ“甲”！」

弔が迷うことなく言葉を発すると、弔の周囲に六角形状の白光の盾が形成され、降り注ぐ光の刃を防いだ。あっさりと防がれる力に、アヒルが表情を曇らせる。

「さっきは効いたのにっ…」

先程は突き破れた盾を思い出し、アヒルが額から汗を流す。

「力そのものが、さっきまでとは全然違うっ…」

「ふう…」

すべての刃を防ぎ終えると、弔は周囲に張り巡らせてた盾を消した。

「“殺せ”を使えば、一瞬で終わらせられるんだけど…」

上空で表情を曇らせているアヒルを、弔が白目だけの瞳で見上げる。

「一度、殺した人間には、“殺せ”の言葉は効かないからね…」

アヒルへと向けられていた視線が、ゆっくりと下ろされる。

「本当に厄介なことをしてくれるよ…君は…」

その下ろされた視線には、箆也の囲いの中で眠る、囁の姿が映っていた。

「さてとっ」

弔が再び、視線をアヒルへと戻す。

「もう終わりかい…？ 安の神」

「クっ…」

挑発めいた弔の問いかけに、アヒルが少し表情をしかめる。

「まだまだっ…いくらでも、やってやるさっ…！」

鳥のすぐ横に浮かび、アヒルが右手を振り上げる。

「“荒れろ”っ…」

大きく口を開いたアヒルが、次の言葉を発する。

「“嵐”…！」

「クアアアアアっ…！！！」

鳥が大きく嘴を開くと、鳥の口から下方へと、逆巻く風の塊が放出される。風が向かって来ていた紐状の白光を吹き飛ばし、床に立

つ弔へと向かっていく。

「またこれか：ワンパターンだねっ：」

だが弔は冷静な表情で、ゆっくりと口を開いた。

「……“焦^こがせ”！」

弔の両手から放たれる、白熱の炎。炎が風の塊とぶつかり、さらにその勢いを増すと、逆巻く炎の嵐は、部屋全体へと、一気に広がっていく。

「うっ…！」

上空にまで届く炎の勢いに、思わず顔をしかめるアヒル。

「大人しく喰らってたまるかよっ！」

だがすぐに、アヒルは鋭い瞳を見せた。

「あ…」

アヒルが大きく、口を開く。

「“扇^{あお}げ”…！」

アヒルが言葉を発すると、鳥が広げた右翼を思いきり振りきって、上空へと燃え上がって来た炎を、弔へと弾き返した。

「新しい言葉か：面白いっ」

返って来る炎を見つめ、弔がそつと微笑む。

「“向^{こう}”っ」

「あっ…！」

弔の手前で、再び変わる向き。またしてもこちらへと向かってくる炎に、アヒルは大きく目を見開く。

「同じ言葉でじゃ返せないっ：クソ！」

険しい表情を見せたアヒルが、炎へと呑み込まれていく。

「うあああああっ…！！」

逆巻く炎に、あっという間に包まれていくアヒルと鳥。全身を焼かれたアヒルは、そのまま力なく降下し、床へと倒れ込んだ。アヒルのすぐ横に、同じように焼かれた鳥も倒れ込む。

「うっ…ううう…」

全身に火傷を負ったアヒルは、何とかその場で必死に起き上がろう

とするが、左腕を折られているため、右手一本にしか力を入れることが出来ず、横たわったまま、苦しげにもがいた。

「どうだい…？ 安の神…」

苦しみもがくアヒルへと、弔がそつと問いかける。

「君と俺の力の差は、歴然だ」

微笑んだ弔が、自信を持って言い放つ。

「これでもまだ、“俺を倒す”などと…無意味な言葉を吐けるかい…？」

「クっ…」

アヒルが顔だけを必死に上げ、まだ鋭さを失っていない瞳で、前方に立つ弔を睨みつける。

「君は言ったね。届かない言葉がないとは言えないと…」

弔が落ち着いた口調で、アヒルへと言葉を投げかける。

「そう、届かないよ。君の言葉は」

強く言い切る、弔。

「俺にも、囁にも、決して届かない」

「……っ」

弔のその言葉に、アヒルの表情が曇る。

「自分の言葉が、いかに無意味であったかを知るといい…」

弔がゆっくりと右手を上げ、倒れたままのアヒルへと向ける。

「あの世でねっ…！ “強”…！」

「なっ…！」

もう一度、強化の言葉を口にし、全身に纏う光を、さらに強いものへと変える弔に、アヒルは大きく目を見開いた。

「まだ…強くなるというのか…」

見守る籠也も、さらに厳しい表情を見せる。

「ハハハハっ…！！これが…！これが俺の力のすべてだっ…！」
止まることなく光を発しながら、上空を見上げた弔が、大きく両手を広げる。

「俺のこの素晴らしき力っ…！ 貴様らが否定したこの力っ…その目

に焼きつけるといい！五十音士どもっ！」

かつて自分を否定した韻へか、神へか、弔が思いをぶちまけるように、大きく叫びあげる。

「ハハハハハハっ……！！」

「……………」

笑いあげる弔を見つめながら、アヒルは少し落ち着いた表情となつて、そつと目を細めた。

「囁…」

アヒルが力なく、囁の名を口にする。

「俺…もう…」

——すべての言葉を失ったとして…それでも、どうしても私に愛の告白をしたいとして……—

「……っ」

囁の名を呟いたアヒルの脳裏に、ある日の囁の言葉が過ぎった。

——その時、アヒるんは…どうする…？——

——叫ぶ、かな。叫び続ける。叫び続けてたら、いつか……—

「“いつか…俺の想いが、言葉になる”…」

あの日、囁へと告げた自らの答えを、アヒルがもう一度、口にする。すると、その言葉を口にした瞬間、諦めの色さえ見え始めていたアヒルの瞳に、明るい光が灯った。

「そう…だよなっ…」

アヒルが必死に床へ右手を突き、両足を踏ん張って、ゆっくりと立ち上がる。

「諦めたらそこでっ…言葉は死ぬんだ…」

足を奮い立たせ、何とか立ち上がるアヒル。立ち上がるアヒルに合わせ、アヒルの横で倒れていた鳥も、ゆっくりとその巨体を起き

上がらせる。

「俺は：俺の言葉を、死なせないっ：」

立ち上がったアヒルが、強く右拳を握り締める。

「俺は絶対っ：」

鋭い瞳を見せ、アヒルが勢いよく顔を上げた。

「諦^{あきら}めない”：！！！」

アヒルの言葉に応えるように、アヒルとともに立ち上がった鳥が、折られていない右翼を大きく広げた。

「ハハハハっ！これで、終わりだ！安の神っ！」

高らかと笑いあげた弔が、広げた両手を、勢いよく頭の上へと持っていく。

「“光”っ！！」

弔の大きな声とともに、部屋中に一斉に放たれる、無数の白い光線。

「……っ」

向かってくる光線を見つめながら、アヒルはきつく唇を噛み締め、そして大きく、口を開いた。

「“当^あたれ”っ：！！！」

「クアアアアアっ！」

アヒルの言葉が発せられると同時に、降り注ぐ光線の中へと、真正面から鳥が飛び込んでいく。二人の間で、光線の白い光と、鳥の金色の光が、激しくぶつかり合った。

「消えろっ：！消え失せろ！無意味な言葉よっ：！！！」

さらに自らの力を巨大にしながら、大きく白目を剥きだし、弔が必死に叫ぶ。

「消え失せろおおっ：！！！」

「クっ：！」

強まる弔の力に、アヒルの方が徐々に押され始める。

「言っただっ：あいつに：言っただっ：」

アヒルが必死に堪えながら、自分に言い聞かせるように、その言

葉を繰り返す。

「だからっ…！」

さらに目を見開き、アヒルは大きく右手を振り上げた。

「俺はお前を倒すっ…！！！」

「……っ！」

アヒルのその言葉に応えるように、鳥の纏う光が、一気に強くなる。

「クアアアアアアアっ…！！！」

「何っ…！？」

より一層、甲高く響く鳥の鳴き声とともに、押し返され始める弔の光。両手にかかる重い力に、弔は驚いた様子で声を漏らした。

「こ、この力はっ…！」

どんどん勢力を増していく金色の光に、弔の白光が呑み込まれるようにして、消えていく。

「消え失せるのはっ…俺だというのかっ…！」

震わせた声で、弔が呟く。

「無意味なのはっ…俺の言葉の方だというのかっ…！？」

信じられないといった様子で、白目を剥きだし、弔が必死に声を荒げる。

「クウウウっ…！」

弔の白光がアヒルの金色の光に完全に吞まれると同時に、弔の右手に握り締められていた白い言玉が、勢いよく碎け散った。

「うがあああああっ…！！！」

白い光の中に、弔が消えていく。

——バアアアアン！

Word. 33 あキラメナイ (3)

激しく起こった爆発は、王の間の天井も壁も柱も、何もかも吹き飛ばした。屋上のように床だけ残った部屋の中央に立ち尽くす、たった一つの人影。

「ハアっ…ハアっ…」

それは、アヒルであった。

「……っ」

肩を揺らし、呼吸を乱しながら、アヒルがそっと顔を上げる。アヒルが見上げると、そこには金色の鳥が、広がる大空のもとに浮かんでいた。先程の攻撃で力をすべて使い果たしたのか、纏っている金色の光が弱々しく、小さいものとなっていた。

「ありがとう…」

「クアアアア！」

微笑んだアヒルに答えるように鳴くと、鳥は淡い金色の光を発し、言玉の姿へと戻っていった。金色の鳥が、もとの赤色の言玉へと戻り、ゆっくりと降下して、アヒルの右手の中へと収まる。

「ふうっ…」

収まった言玉を見下ろし、アヒルが深く息をつく。

「あっ…」

言玉を握り締めた途端、気が抜けたのか、意識がかすみ、アヒルの足元がふらついた。

「……っ」

「へっ…？」

アヒルが、横から伸びてきた手に右手を掴まれ、倒れ込みそうだったところを支え止められる。

「籠、也…」

「大丈夫か？神」

アヒルを支えたのは、籠也であった。三人を囲む格子をそのまま

に、箆也だけ、アヒルのもとへと歩み寄って来たようである。

「ああ。クラクラしてっけど、一応無事だっ」

「今、傷の治療をする」

微笑むアヒルに、安心したような様子も見せず、箆也は素っ気なく、アヒルの折れた左腕へと右手を伸ばした。

「う、うううっ…」

「んっ？」

アヒルの傷の治療をしようとした箆也が、前方から聞こえてくる小さな声に気付き、振り向いた。

「あっ」

「うううっ…ううう…」

崩れ落ちた壁の際、ぎりぎりのところで倒れているのは、弔であった。アヒルの最後の攻撃を直撃した影響であろっ、全身は傷だらけである。だが小さく声を漏らしていることから、まだ息も意識もあるようである。

「弔…」

「お、俺の…言葉っ…で…」

うつ伏せに倒れている弔が、薄くしか開いていない瞳で、必死に前方へと手を伸ばす。

「無意味な…世界を、壊、すっ…うっ…」

その言葉を最後に、ついに力尽きたのか、弔は深く瞳を閉じ、そのまま動かなくなった。

「……………」

そんな弔を見つめ、箆也がそっと目を細める。

「“言葉”というものに、誰よりもこだわってたのは、あの者だったのかも知れないな…」

「ああ…」

横で同じように弔を見つめるアヒルが、静かに呟く箆也の言葉に、小さく頷く。

「生かすのか…？」

「……っ」

箆也のその問いかけに、アヒルの表情が曇る。弔は意識を手放してはいるが、まだ息はある。

「あの者のせいで、囁は……」

「……生かす」

厳しい表情を見せた箆也に、少しの間を置いた後、アヒルは答えた。

「生かして、韻に連れていく……」

アヒルのまつすぐな瞳が、弔を捉える。

「届かなかった言葉が生んだ、この事実を……俺は、伝えなきゃならない……」

「……わかった」

そう言ったアヒルに反論することはなく、箆也はあっさりとその答えを受け入れた。

「僕たちの役目は終わった。帰ろう、神」

「ああ……」

箆也の言葉に頷きながら、アヒルがゆっくりと振り返る。

「帰ろう……」

振り向いたアヒルの視線の先には、床に横たわり、深く目を閉じたままの囁の姿があった。

こうして、安団と七声の戦いは、静かに終わりを告げた。

——大好きだよ、囁。君が世界で一番、大好きだ——
もういいわ。嘘だって、もうちゃんと、わかってるから。

——愛しているわ、囁……——

だから、もういいって言ってるのに。何度だって、思い出す。私って、諦めが悪いのね。

——囁……

誰かが、私を呼んでる。誰…？

「んっ…」

何度も繰り返した見た、父と母の残した言葉の夢から、囁はゆつくりと目を覚ました。目を開くと目の前には、何も代わり映えのしない、質素な白色の天井が広がっていた。

「ここ…は…？」

天井を見上げ、戸惑った表情を見せた囁は、少し重たい体をゆつくりと起こした。そこは寝台の上で、横には小さなテーブルが置かれているだけの、狭い部屋の中である。

「どうやら…天国でも地獄でもなさそうね…」

周囲を見回しながら、囁が小さく呟く。

「でも、私…確か…」

囁が顔を下へ向け、自らの両手を見つめた。

——“捧ささげろ”——

死んでしまったアヒルへと命を捧げ、自らの命を絶った記憶が、確かに鮮明に、頭の中に残っていた。

「なんで…」

“生きているのだろう”

「……っ」

囁が口にしようとした言葉が、そのまま横から聞こえてきて、囁は驚いた様子で顔を上げた。

「そう、思われましたか？」

「あなたは…」

部屋の扉を開き、中へと入って来たのは、穏やかな笑顔を見せた和音であった。

「言姫、様っ…」

入って来た和音を見つめ、囁がそっと眉をひそめる。

「あなたがここにいらっしゃるということは、ここは韻ですか…？」

「……………」

囁の問いかけに、和音は黙ったまま、静かな表情を見せるだけであつた。

「何故、生きているのかは不思議ですが…でも、もういいです。私のしたことは、決して許されるべきではないことと、理解しています」

俯いた囁が、どこか諦めるように、言葉を並べる。

「覚悟は出来ています。どんな罰も、受けっ…」

「真田囁」

「……………」

遮って名を呼ぶ和音の声に、囁がゆっくりと振り向く。

「あなたのこと、韻の方で、色々調べさせていただきました」

「……そうですか」

和音の言葉に、囁が少し顔を俯ける。

「真田囁とは、本名だそうですわね」

囁の声を遮り、和音がそつと言い放った。

「はい…」

「七声は互いを暗号名で呼び合うと聞いていたので、あなたのその名も、てっきり偽名かと思っていました」

「暗号名は元々、私の名を気に入った弔が、同じように一字で四文字を表す漢字をつけたものだったので…」

「そうでしたか…」

黙秘することなく、素直に答える囁に、和音も笑みを浮かべる。

「失礼ですが、あなたの生い立ちも、ご両親のことも、調べさせていただきます…」

「……………」

その言葉が、囁がもつとも苦しんできた過去を知るものと察し、

囁はその表情を曇らせた。

「あなたを捨てた、両親の名づけたその名を…捨てようとは、思わなかったのですか…？」

「……思いました…」

和音の問いかけに、囁は素直に頷く。

「けど…捨てられませんでした…」

俯いたまま、自分の両手を見つめた囁が、過去を思い返すように、そっと目を細める。

「この名前だけが…嘘の言葉を残して消えた両親が、私に与えてくれた…」

——囁——

「ただ一つの、真実だったから…」

今も囁の胸に残る、名を呼ぶ両親の声。

「……そうですか」

囁のその言葉は偽りには到底、聞こえず、和音も納得した様子で頷いた。

「何も弁解することはありません」

迷うことのない表情を見せた囁が、まっすぐに和音を見つめる。

「一度、捨てた命です…死すら、恐ろしくありません…」

光のない瞳が、ただ前だけを見る。

「早く、罰をお願いします」

「……………」

罰を求める囁に、和音はそっと目を細めた。

「そう、死を望むような言葉、仰らないで下さい」

そんな囁へと、和音が優しく微笑みかける。

「そんなことを言っては、必死にあなたを助けた、彼らの努力が、無駄になってしまいますわ…」

「彼らっ…？」

囁の足元の方を振り向く和音につられ、囁も視線を動かしていく。
「あっ…」

視線を移した囁は、大きく目を見開いた。

「俺が呼んだのは、糸こんにゃくだあ！バカ親父い！くかあー！くかあー！」

「くう…くう…ヒト、ミ…」

「ううう…こんな俺が…寝ちゃってすみませんっ…むにやむにやっ…」

「朝、比奈くんっ…すうー…すうー…」

囁の足元側の壁に、並ぶようにしてもたれかかり、眠りこけているのは、アヒル、籠也、保、七架の四人であった。皆、よく眠っている様子で、各々の寝息がよく響いている。

「みんな、なっ…？」

眠っている四人を見つめ、囁が戸惑うように首を傾げる。

「よく眠っていらっしやいますでしよう？」

和音が囁の横から、微笑ましく四人を見つめる。

「無理ありませんわ。随分と、疲れていたようですから」

「疲れて…？何故っ…」

「…っ」

首を傾げる囁の方を振り向き、和音は一層の笑みを浮かべた。

「わたくしの言葉で、彼らの命を四分の一ずつ、あなたに“分け与え”しました」

「分け与えたっ…？」

「ええ、彼らのたつての希望で」

聞き返した囁に、和音が大きく頷きかける。

「激しい戦闘の直後の上、四分の一ずつとはいえ、疲労は相当のものだったはずです。しばらくは、眠らせて差し上げましょう」

「分け、与えたって…」

和音の言葉を聞きながら、囁が再び、眠っている四人の方を見る。
「それで、私は…」

「ええ」

囁へと、和音が大きく頷きかける。

「それであなたは、生きているのです」

「……っ」

囁が思わず、両手で口元を覆う。

「なんでっ……」

細められた囁の瞳が潤み、声がかすかに震える。

「なんで……そんなことっ……」

「それは、あなたが彼らにとって、大切な仲間だからでしょう」

「大切な、仲間っ……?」

和音の言葉を繰り返し、囁が困惑した表情を見せる。

「だってっ……私……私はっ……!」

「あなたにとって、彼らは大切な仲間ではありませんか?」

「えっ……?」

和音の問いかけに、囁が少し目を丸くする。

「そ、それはっ……そうでっ……」

「彼らも、同じです」

「……っ」

その言葉に、何か気付かされたかのように、ハッと目を見開く囁。

「け、けど私はっ……!」

「例えばあなたにどんな過去があったとしても、誰と共にあったとしても、彼らにとって、あなたは大切な仲間にはならないのですわ」

必死に否定しようとする囁に、和音が優しく微笑みかける。

「あなたにとっても、彼らは大切な仲間にはならないでしょう……?」

優しい問いかけが、ゆっくりと続く。

「ただ、それだけのことなのですわ……」

「うっ……」

口元を手で覆い、そっと俯いた囁の瞳から、透明な滴が零れ落ちる。

「うううっ……!」

「真田囁…」

涙に暮れる囁へ、和音がそつと呼びかける。

「死をも恐れぬというのなら…仲間があなたに与えたその命、仲間の為に、使って下さい…」

俯いたままの囁を覗き込むようにして、言葉続ける和音。

「恐れぬその強い覚悟で、大切な仲間と共に戦い、大切な仲間を守るために、生きて下さい…」

「……っ」

涙を拭いながら、囁が強く唇を噛み締める。

「あなたを助けるために、必死に戦った彼らに、報いてあげて下さい…」

和音が囁の肩に、静かに手を置く。

「それが、あなたへの罰です」

「はいっ…」

和音の言葉を受け止めるように、囁がしっかりと頷く。

「はいっ…はい…！」

涙を流しながら、何度も頷く囁。

「ありがとうございますっ…！」

込み上げる想いが、感謝の言葉となって、囁の口から、零れ落ちた。

Word. 33 あキラメナイ (4)

二日後。於崎家屋敷。

「悪かったなあ。何日も部屋借りっ放しで寝ちまって」

「いや…」

囁へと命を分け与え、眠り続けていたアヒルたち安団の面々も、二日の時が流れ、やっと全員が目を覚ました。場所の提供や、看病をかって出てくれた於崎家に礼を言うため、目覚めたアヒルは、檻也のもとへと訪れた。檻也の部屋のある別邸の前庭で、アヒルと檻也は向き合っていた。

「部屋だけは、やたらと余っている屋敷だ。気にする必要はない」
「そう言ってくれると、有難てえよっ」

素っ気なく答える檻也に、アヒルは笑顔を向ける。

「あ、そうだ。これっ」

「ん…？」

そう言ってアヒルが檻也へと差し出したのは、透き通る水晶の玉、夢言石であった。

「夢言石っ…」

「お前のだろ？返すよっ」

笑顔を見せたアヒルが、檻也へと、少し無理やりな形となって、夢言石を手渡す。自分の手の中に戻って来た夢言石を、檻也は感慨深げに見つめた。

「安の神…」

「んんっ？」

「ありがとう…」

「へっ？」

檻也の口から、聞けるとは思っていなかった言葉を聞き、アヒルは少し驚いた様子で、目を丸くする。

「お前たちが七声を倒してくれなければ、俺は言葉を取り戻せず、

神であることも出来なかった…」

俯いていた檻也が、そっと顔を上げる。

「感謝する…」

改めて礼を言う檻也に、アヒルが少し目を細める。

「礼言う相手、間違ってるぞ？」

「えっ…？」

アヒルの言葉に、檻也が戸惑いの表情を見せる。

「お前の言葉を取り戻したのは、俺じゃない。籠也だ」

「……っ」

籠也の名が出ると、檻也が眉をひそめる。

「あいつ、お前の言葉を取り戻すために、必死になって戦ったんだぜえ？ あんなに熱くなってる籠也、初めて見たな」

「……………」

微笑むアヒルを見ることはなく、俯きながら、何やら考え込むような表情を見せる檻也。

「だから、礼なら籠也に言ってやってくれよっ」

俯いたままの檻也へ、アヒルがもう一度、笑顔を向ける。

「神」

「んあ？」

呼ばれる声に気付き、アヒルが振り向く。

「こんな所に居たのか」

「籠也」

本邸の方から、アヒルたちの居る前庭へとやって来たのは、籠也であった。どうやら、アヒルを探して、やって来たようである。

「もうすぐ出る。早く、支度を済ませろ」

「おうっ、わかった」

籠也の言葉に、アヒルがあっさりと頷く。

「僕たちは門の所で待っている。支度が出来たら、出て来い」

「おうっ」

「あっ…」

「んっ？」

アヒルに短く言伝して、すぐに踵を返し、その場を去って行こうとする箆也を見て、檻也が小さな声を漏らす。箆也を呼びとめようと顔を上げながらも、すぐに俯いてしまう檻也に、アヒルが気付いた。

「あ、あああゝ、か、箆也あ！」

「えっ？」

アヒルに呼び止められ、去ろうとしていた箆也が足を止め、振り返る。

「何だ？」

「お、俺、紺平とチラっと挨拶したら、すぐに行けっからさあゝ、ちよっここで待っててくんねっ？」

「別に構わないが……？」

「じゃあ、すぐ行つてくっから！ここで待っててくれなあ！」

慌ただしく言いながら、アヒルは紺平のいる別邸の中へと、駆け込んでいった。静かになったその場に、箆也と檻也だけが残る。

「何だ……？ 一体……？」

「あ、あああゝ、あっ……？」

「ん？」

アヒルの不自然な態度に首を傾げていた箆也が、横から聞こえてくる、呼びかけとも何ともいえない声の連続に、戸惑うように振り向いた。

「どうした？ 檻也」

「えっ……！」

箆也に問われ、檻也が焦ったように声をあげる。

「いや、あああゝ、え、ええゝつと……その、あのっ……？」

「ん……？ ああっ……？」

檻也の様子に首を傾げていた箆也であったが、何か思いついたように、納得するように頷いた。

「何か言われたか」

「えっ…?」

「我が神はお節介だからな」

箆也が少し呆れた様子で、肩を落とす。

「気にしなくていい」

檻也を見つめ、箆也が薄く笑みを浮かべる。

「またこの屋敷で、こうしてあなたと向き合うことを許されているだけで、僕はもう、十分だ」

「……っ」

優しく微笑む箆也を見つめ、檻也がそっと目を細める。

「それにしても、遅いな。神はまだっ…」

「ありがとう…」

「えっ…?」

別邸の方を振り向いた箆也が、背中の方から聞こえてくる声に、大きく目を見開く。

「檻っ…」

「ありがとう…」

振り返った箆也を、檻也は逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

「“兄さん”…」

「……っ」

呼ばれるその言葉に、箆也はさらに目を見開く。

「ああっ…」

そして、見開いた瞳を細め、何とも嬉しそうな笑顔を零す箆也であつた。

「良かった…」

別邸の門の陰に隠れながら、ひっそりと箆也と檻也の様子を見つめていた紺平が、笑い合う二人に、安心したような笑顔を見せる。

「ガアにしては、気が利くじゃない」

「どういう意味だよっ」

振り向く紺平に、すぐ隣でしゃがみ込んでいるアヒルが、不満げに顔を上げる。

「でも、本当に良かった…」

紺平が二人を見つめ、もう一度、呟く。

——俺に、兄などいない……

「二人の間に、言葉が戻って来てくれて…」

間に挟む言葉を失い、距離ばかり開いてしまった兄弟が、やっと元の関係に戻ろうとしている。冷めきっていたかつての檻也を思い出すと、紺平はより一層、安心の笑顔を見せた。

「ねえ？空音さんっ」

「へえっ!？」

紺平に名を呼ばれ、ちゃっかり、アヒルの横で二人の様子を見守っていた空音が、焦ったように声をあげる。

「べ、別に私は、あんな神のことなんて、どうでもいいんだから！ふんっ！」

何故か一人、怒った様子で怒鳴り上げながら、空音は足早に、その場を去って行ってしまった。

「何だあ？あれっ」

「んん？いわゆる一つの、照れ隠し？」

顔をしかめるアヒルに、紺平が笑顔で答える。

「そういや、俺たちは今から帰っけど、お前はどうすんだあ？」

「俺も夜には帰るよ。明日は学校もあるし」

問いかけるアヒルに、紺平がすらすらと答える。

「七声の件は落ち着いたし、言葉の勉強とかはまあ、追々やってくつもり」

「そうか」

紺平の言葉を聞きながら、アヒルがその場で立ち上がる。

「ちょっと学校も休み過ぎちゃったしね。いい加減、行かないと」

「俺は一生、行かなくってもいいけど」

「ガァ？」

「へーへー。心配しなくっても、明日っからちゃんと行きますよっ」
注意するように睨む紺平に、アヒルが少し苦い顔を作りながら、
軽く手を振る。

「もちろん、遅刻厳禁だからね？」

「ハイハイっ」

「じゃあまた明日、学校でね。ガァっ」

「ああっ」

微笑みかける紺平に、アヒルは大きく頷いた。

その頃、韻本部。

「そうか…安の神は例の力に目覚めたか…」

「はい…」

深く頭を下げた和音は、前方から聞こえてくる、老いたその声に、
かしこまった返事をした。

「すべては予定通りですな…」

「まさか、かつて追放したあの己守が、これほどまでに役に立って
くれるとは…」

「願ったり叶ったりではないですか…ついでに反乱分子も、始末出
来たのですから…」

「追放した甲斐もあったというものですな…」

「……………」

目の前で繰り広げられる会話を、和音は静かな表情で、黙ったま
ま、聞き続ける。

「良き働きにあった、言姫よ…」

中央に座る影が、代表するように和音へと声を掛ける。その者が
口を開くと、周囲で今まで雑談をしていた者たちも、すぐに静まり

返る。

「いえ…」

「これで、失われし彼の神も、動き出すに違いない…」
中央の影が、少し上を見つめる。

「すべての神が揃うところ…我らの望み…」

老いたその声が、広い部屋に響き渡る。

「引き続き、頼んだぞ…言姫…」

「はい…」

その言葉に、和音は深々と頭を下げた。

「ふう…」

報告を行った部屋を出た和音は、少し息をつきながら、長く広い廊下を歩み始めた。報告の場が長かったのか、和音の表情からは疲れが見て取れる。

「あらっ」

廊下を歩き続けていた和音が、その先に立つ人影に気づき、人影の前で足を止めた。

「ここは、韻の関係者以外は、立ち入り禁止の場所ですわよ？」

和音が穏やかな笑顔を見せ、その者へと声を掛ける。

「恵さん」

「……………」

和音を待ち構えるように、廊下に立っていたのは、恵であった。振り向いた恵は、厳しい表情で、和音を見つめる。

「何を、企んでいる…？」

「あら、随分といきなりですわね」

鋭い瞳を向け、挨拶もなしに問いかけてくる恵に、和音は少し困ったように微笑む。

「別に何も企んでいませんけど？」

「嘘をつけ。お前と韻が、陰でこそこそ動いてんのは、もう、ずっと」

と前から知っている」

「嘘、ですか…」

厳しく言い返してくる恵に、和音はそつと肩を落とした。

「仮に、わたくしと韻が何かを企んでいるとして…あなたの言うように、陰でこそそと動いているとして…」

和音がゆっくりと顔を上げ、まっすぐに恵を見つめる。

「仮にそうであったとしても、わたくしがあなたに真実を話す必要は、どこにもありませんわ」

「……っ」

はつきりと答える和音に、恵があからさまに顔をしかめる。

「ふざけるな！言え！言わないとっ…！」

「ここは韻の領域…」

声を荒げる恵の言葉を、和音が冷静に遮る。

「そして、わたくしは韻の人間…」

冷たく光る和音の瞳が、正面から恵を捉える。

「例え、あなたが元神であったとしても…所詮は一介の五十音士。

この場で、わたくしに逆らえるとは、思わないで下さい」

「クっ…」

和音の言葉に、恵がきつく唇を噛み締める。鋭い和音のその言葉は事実であり、この場でこれ以上、言葉が続けることは、恵には許されなかった。

「失礼いたします」

押し黙った恵に一礼し、和音が再び、廊下を歩み出していく。

「あいつにっ…」

「……っ」

背後から聞こえてくる声に、和音がふと足を止める。

「あいつに何かしようってんなら…私が許さないっ…」

「あいつ…？」

恵の言葉を繰り返しながら、和音がゆっくりと振り返る。

「ああ、安の神のことですか…」

和音が、どこかわざとらしく頷く。

「どうして、そうまで…彼にこだわるのです…？」

鋭い笑みを浮かべ、和音が恵へと問いかける。

「失ってしまった大切な人とでも…重ねていらっしゃるのですか…？」

「…っ！」

和音のその言葉に、恵が大きく目を見開く。

「お前っ…！」

「わたくしは次の用がございますので、失礼いたしますわ」

声を荒げた恵に、動じることなく、和音はあっさりと背を向けた。

「安の神には、何をするつもりもありません」

「何っ…？」

背を向けたまま話す和音に、恵が眉をひそめる。

「彼が、わたくしたちの思う通りに、動いて下さっている限りは…」

「…っ」

意味深なその言葉に、曇る恵の表情。

「失礼」

短く言葉を残すと、和音はそのまま歩を進め、廊下の奥へと姿を消していった。静まり返ったその場に残った恵が、強く壁を叩きつける。

「クソっ…」

恵は浮かぬ表情で、唇を噛んだ。

戻って、於崎家屋敷。

「於崎の車で、言ノ葉町まで送ってくれるらしい」

「へえ、そりゃ有難てえや」

檻也や紺平との挨拶を終え、支度を整えたアヒルと箆也は、言ノ葉へと戻るため、於崎屋敷の入口の門までやって来た。門の前には、

大きな黒のリムジン車が待ち構えている。

「こっから電車とバス乗り継ぐの、結構ダルいもんなあっ」

「はあく！こんな貧乏臭い俺が、あんな高級車に乗っちゃっていいんですかあく！？」

「うおっ」

リムジン車と共に待ち構えていたかのように、門を出たアヒルのすぐ横に現れる保。すっかり回復した様子で、相変わらず叫んでいる。

「俺が乗っただけで、車としての価値が下がっちゃったら、すみませえくん！」

「そう思うのなら、あなただけ歩いて帰れ」

「えええ！？やっぱ、その方がいいですかねえ！？」

「ああ、いい」

「まあまあ、そう言わないで。神月くん」

焦る保に、さらに冷たく言葉を投げかける籠也を、横から七架が必死に宥める。七架も保と同じように、すっかり回復し、元気そうな様子であった。

「フッフっ：あんなに痛い目にあったのに、なかなか治らないものなのね：バカって：」

「自分助けるために、大怪我負った奴に、そういう言い方すっか？普通っ」

不気味に微笑みながら、冷たい言葉を呟いている囁に、アヒルは呆れた様子で肩を落とした。

「だいたい涙の一つもなしに、あっさり自然と、何事もなかったかのように戻って来るしよお」

「あら…？」

ぼやくように言うアヒルに、囁が意外そうな表情で振り向く。

「大丈夫よ：アヒるん：」

囁がアヒルへと、不気味な笑みを向ける。

「私、過去のことはすんなり、トイレの水に流すタイプだから：気

にしないで…」

「それは俺が言うことだあ！つつーか、ちったあ気にしろお！」

「フフフっ…」

怒鳴りあげるアヒルを見て、囁は楽しそうに笑う。

「ったく…」

「……………」

呆れきった表情で、肩を落としているアヒルを、囁が横目で、じつと見つめる。

——なっ？ちゃんと、“会いに来た”だろ？——

「……っ」

あの時のアヒルの言葉を思い出し、アヒルに気付かれないところで、囁は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「とっとと行くぞ、神」

「んあ？おうおうっ」

籠也に急かされ、アヒルが囁の横から突き進んで、車の方へと駆け寄っていく。車にはすでに、保が乗り込もうとしていた。

「ふはあー！こんな日光遮断デカブツ男が、窓際に座ろうとしちゃってすみませえーん！」

「いいから、早く乗れ！」

「まあまあ、神月くんっ」

「ハハハっ」

謝り散らす保を、無理やり車の中に押し込める籠也。怒る籠也を七架が宥め、その様子を見て、アヒルが楽しそうに笑みを零す。

「んっ？」

笑っていたアヒルが、まだ一人、車から離れた場所で立ち尽くしている囁に気付き、振り向いた。

「何してんだあ？お前もとっとと来いよっ！」

アヒルが笑みを浮かべ、大きな声で囁を呼ぶ。

「囁っ！」

「……っ！」

自分の名を呼ぶアヒルのその笑顔に、囁は、何故か大きく目を見開いた。

「アヒルさあ〜ん！やっぱり、アヒルさんが窓際行って下さあ〜い！」

「どうわあっ！引っ張んなって！」

「誰でもいいから、早く乗れ！」

車に乗り込むだけだというのに、アヒルも巻き込んで、騒ぎはさらに大きくなる。

「はあっ…あれっ？」

その様子に、深々と溜息をついていた七架が、離れた場所に立ち尽くしたまま、深く俯いている囁に気付き、囁のもとへと足を動かした。

「どうかした？真田さん」

俯いた囁の顔を覗き込み、七架が声を掛ける。

「顔…真っ赤だよ？」

「……っ」

俯いたまま、口元の手で覆った囁は、頬も額も、耳の端まで、顔全体を真っ赤に染め上げていた。

「ごめん、なさい…」

「へっ？」

何故か謝る囁に、不思議そうに首を傾げる七架であった。

Word 34 ゆガム世界 (1)

とある町。月の輝く、とある夜。

「グガアアアア！」

静かな夜に、荒々しい叫び声を響かせるのは、赤い瞳を光らせた、不気味な黒い影であった。

「出たか…忌…」

叫ぶ黒い影を見つめ、鋭く切れ長の青い瞳の、まだ若い男。金色の短髪に白いバンドを巻いており、夜にまぎれる黒い服、怪我をしている素振りはないが、首や手首、そして足首に包帯を巻きつけていた。男は、落ち着いた様子でそう呟き、懷に手を入れ、何かを取り出す動作を見せる。出てきた男の手には、真っ赤な宝石のような玉が握られていた。

「五十音…第三十六音…」

男の手の中の玉が、淡い赤色の光を発し始める。

「“や”…解放…」

より一層、強い光を放って、その形を変えていく男の手の中の赤い玉。やがて玉は、鮮やかな赤色の、太身の大剣へと姿を変えた。

男がその真っ赤な大剣を、そう太くもない腕で、力強く振り上げる。

「“焼^やけ”…！」

男が大剣を勢いよく振り下ろすと、振り下ろされた剣先から、赤々と輝く、大きな炎が放たれた。炎はあっという間に夜空を駆け昇り、上空に浮かぶ忌へと迫る。

「グっ…！ギアアアアア！」

忌は炎を避けることも出来ず、あっさりとその身を焼かれ、激しい悲鳴をあげて、掻き消されていった。

「ふう…」

忌が消えたことを確認し、男が肩の力を抜き、ホッと一息つく。

「刃^{やいば}！」

「ん…？」

後方から聞こえてくる声に、刃と呼ばれた男がゆっくりと振り返る。

「弓…」
ゆみ

後方から刃のもとへと駆け込んでくるのは、長い黒髪を一つに束ねた、美しい少女であった。短パンから長い脚を惜しみなく出しており、刃へと大きく手を振る姿など、とても元気そうである。

「そっちは終わったのか？」

「うん！」

刃の問いかけに、弓と呼ばれた少女は大きく頷く。

「これで任務完了だな。帰るぞ」

「えっ？でもまだ、鎧が…」
よろい

「鎧なら、お前が来るより前から、そこに居る」

「えっ？」

刃の指差す方向へと、顔を上げる弓。

「あっ」

「……………」

二人の居るすぐ傍の電柱の上に、器用に立っているのは、全身を鎧兜で覆った人間であった。重々しくつけられた鉄仮面で、その顔も今の表情も、まるで覗くことが出来ない。身長や体格から、男であることはうかがえる。

「鎧！」

「待たせたな、鎧。帰るぞ」

「来る…」

「ん…？」

小さく落とされる、鎧の仮面でくぐもったその低い声に、刃が少し眉をひそめる。

「どうした？鎧」

「何か…来る…」

「何…？あっ…」

鎧の言葉に首を傾げていた刃であつたが、迫り来る何かを感じ、その表情を不意に険しくし、振り向く。

「刃？ 鎧？」

警戒した様子を見せる二人に、戸惑うように首を傾げる弓。

「何？ 一体、どうしっ…」

「来るぞ…」

「避ける！ 弓っ！」

「えっ…？ きゃあああ！」

鎧の言葉を合図に、必死に叫んだ刃が、戸惑ったままの弓を勢よく突き飛ばした。後方に吹き飛ばされた弓が、近くの壁に背中を打ちつける。

「痛たた…何？ いきなり…」

背中を押さえながら、弓が閉じていた瞳を、ゆっくりと開く。

『ううう…ううっ…！』

「あっ…！」

開かれた弓の瞳が、さらに大きく開かれる。弓の目の前では、刃と鎧が、周囲を覆い尽くすような黒い影に手足を捕らわれ、全身を呑み込まれようとしていた。

「刃…！ 鎧…！」

「来るな！ 弓っ！」

「うっ…！」

二人のもとへと駆けて行こうとした弓が、刃の声に、その足を止める。

「逃げろ！ 今すぐ、ここから離れるんだ！ 弓！」

「で、でもっ…！」

「ぐあああああっ！」

『……っ！』

飛び交っていた二人の声が、大きな叫び声に掻き消される。二人が振り向くと、鎧が、完全に黒い影に呑み込まれてしまっていた。

「鎧っ…！」

「グっ…！」

呑み込まれていく鎧に、思わず身を乗り出す弓。刃も、首元まで迫り来た黒い影に、強くその表情を歪めた。

「早く行け！弓！」

「刃っ…」

「行くんだ！早くっ！」

「……っ」

黒い影に徐々に顔まで浸食されながら、それでも必死に叫ぶ刃に、弓は逆らうことが出来ず、辛そうに歪めた表情で、強く唇を噛み締めた。

「ううううっ…！」

涙を零しながら、弓が刃へと背を向け、その場を必死に駆け出していく。

「頼むぞ…弓っ…うぐううっ！」

祈るように呟いた刃の体を、黒い影が完全に呑み込んでいく。

「ぐあああああっ…！！！」

刃の悲痛な叫び声が、静かな夜に響き渡った。

その頃、言ノ葉町。とあるコンビニ。

「はあ！こんなすでに目障りなくらいでっかい俺が、牛乳なんて買っちゃってすみませえ〜ん！」

「あ…ありがとうございます…」

コンビニのレジの前で、いつもの調子で謝り散らしているのは保。保へと牛乳の入ったレジ袋を差し出した店員は、引きつった表情で礼を言った。

「ふあゝ、風呂上がり用の牛乳も無事買えたことだし、家に帰るかあ」

コンビニを出た保が、袋の中の牛乳を確認しながら、家へと帰る

道を進み始める。辺りはすっかり更けており、コンビニの明かりが一際目立っている。その明るい場所を離れ、薄暗い道を歩く保。「今日はいつもより、明るい感じがするなあ。あっ」

周囲を見回していた保が、何かに気付いた様子で、顔を上げる。見上げたその先の夜空には、真ん丸の月が明々と輝いていた。

「今日は満月…それで明るかったのかあ」
ふと足を止め、保がまじまじと満月を見つめる。

「綺麗だなあ」

——見つけた……——

「へっ？」

頭の中に響くようにして聞こえてくる声に、保が目丸くする。

「だ、誰っ…？」

声の主を探そうと、周囲を見回す保。だが保の傍には、人影一つありはしない。

「あれっ…？空耳かな…」

——やっど…見つけた……——

「……っ」

空耳として片付けようとしたその時、再び響くその声に、保は大きく目を見開いた。

「こ、これはっ…」

——見つけた…見つけた……——

「ううう…！」

頭の中で徐々に大きくなっていくその声に、保は思わず頭を抱える。

——灰示……——

「……っ！」

満月へ向けて顔を上げた保の手から、牛乳の入ったレジ袋が零れ落ちた。

アヒルたちが、於崎家から言ノ葉町へと戻った翌朝。町の小さな八百屋『あさひな』こと、朝比奈家。

「んんっ……」

二階の自室のベッドで、大きく寝返りをうったアヒルが、小さく口を開ける。

「アメリカ…合衆国っ…」

アヒルの口から零れ落ちるのは、相変わらず意味不明の寝言。

「アーくうん！ハッピーニューイヤアー！」

勢いよく部屋の扉を開き、新年でもないのに、めでたさ全開で部屋の中へと飛び込んだのは勿論、アヒルの父であった。

「喰らええい！アスパラガス、シューティング！！」

「喰らわねえよっ！」

「ぐほおおう！」

アヒルへ向けて、両手いっぱいのアスパラガスを投げ放とうとした父であったが、素早く起き上がったアヒルがそのアスパラの一本を奪い取り、父の鼻の穴へと、勢いよく突き刺した。突き刺された父は、床にアスパラを撒き散らしながら、力なく後方へと倒れ込む。
「ううう、アーくん、冷たいい」

「朝からアスパラ投げつけてくる親父に、優しく出来るかっ」

鼻の穴からアスパラを抜きながら、悲しげな表情を見せる父を、アヒルが睨みつける。

「だいたい俺が呼んだのは、アメリカ合衆国だつての！」

「朝からアメリカ合衆国を呼ぶ意味がわからないが…」

「お、籠也」

いつものように父を倒し、強く主張しているアヒルに、扉のすぐ横に立った籠也が、ひっそりと突っ込みを入れる。

「はよっス！囁は？」

「いや、それが…」

「あっ？」

アヒルの問いかけに、途端に表情を曇らせる籠也に、アヒルは戸惑うように首を傾げた。

朝比奈家一階、台所。

「うん…完璧だわ…」

ぐつぐつと、食べ物とは思えない、何とも気持ちの悪い色で煮立っている鍋の前に、どこか満足げに頷く、おたま片手にエプロン姿の囁。

「後はワサビで最後の一味ね…」

「あ、あのっ、さ、囁ちゃんっ…？」

「ん…？」

背後からスズメに呼びかけられ、囁がゆっくりと振り返る。

「今、料理に集中してるの…話しかけないで…」

「ごめんなさい」

囁に鋭く睨みつけられ、スズメが大人しく頭を下げる。

「ダメだ。阻止に失敗した」

「料理だったんだね…アレ…」

囁に謝り、大人しく居間へと戻って来たスズメを、感心したように呟くツバメが迎える。

「とりあえず胃薬、用意しようかな…」

「胃薬で何とかなる代物には、見えなかったぞお？」

「おはよ」

「おっ」

スズメがボヤいていたその時、階段から降りてきたアヒルが、籠也とともに居間へと入って来た。

「よお、不良少年っ」

「だあれが不良少年だよっ」

軽い口調で声を掛けるスズメに、アヒルが顔をしかめる。

「無断で一週間も家空けてた奴の、どこが不良少年じゃないっつーんだよ？」

「だから言っただろ？連絡しようにも、ずっと山の上でっ…」

「修行してたってかぁ？どっかの僧かよ、お前はっ」

「うっ…」

スズメの突っ込みに、思わず口ごもるアヒル。七声の件でしばらく家を空けていたアヒルは、今回は課題をやるため、泊まりに行っていたとも言えず、苦しまぎれに、山登りをしてそのまま戻れず、しばらくこもっていたということにしたのである。

「い、いやっ、だからそれはあっ…！」

「もういいでしょ…スズメ…終わったことなんだし…」

「ツー兄っ」

助け舟を出してくれたツバメを、アヒルが目を輝かせて見つめる。

「けど…」

「へっ？」

低い声で言葉を付け加えるツバメに、アヒルが目を丸くする。

「あんまり勝手が過ぎると…呪うよ…？いいね…？アヒルくん…」

「は、はい…」

藁人形片手にそっと微笑むツバメに、何やら命の危機のようなものを感じ、アヒルは逆らうことなく、大人しく頷いた。

「出来たわ…」

「あっ？」

台所から聞こえてくる囁の声に気付き、アヒルが顔を上げる。

「囁？んなとこで何やって…」

「さあ、アヒるん…」

笑顔を見せた囁が、台所から居間へと入って来る。

「たあーんと、お食べ…」

「……………」

差し出された、ぐつぐつと煮立っている不気味な汁に、アヒルの動きがしばし、固まる。

「いや、絶対無理」

大きく手を振り、囁の料理を、一瞬にして拒否するアヒル。

「フフフ…やってみなきゃ、わからないわよ…アヒるん…」

「やってみなくてもわかるわあ！んなもんっ！」

おたまに不気味汁をすくい、無理やり飲ませようとする囁に、アヒルが必死の抵抗を見せる。

「料理に挑戦なんて…山ごもりの間に何かあったの…？囁ちゃん…」

「こっちが聞きたいくらいです…」

ツバメに問いかけられた籠也が、肩を落しながら、引きつった表情で答える。

「ああ、たもっちゃんもいねえし、今日は全員、買い弁だなあ」

「えっ？」

スズメのその言葉に、顔を上げる籠也。

「高市、来てないんですか？」

「ああ、今日は来ないみたいだなあ」

「そう、ですか…」

頷きながら、籠也は少し眉をひそめた。

言ノ葉高校、一年D組。

「セエエーフ！」

大きく両手を横に広げながら、教室へと駆け込むアヒル。

「セーフだろ！？恵先っ：！って、あれ？」

「はいはい。セーフにしてあげるから、早く席に座ってねえ、朝比奈くん」

主張しようとしたアヒルであったが、教壇に立つ、恵ではない、小太りの男教師の姿に、思わず言葉を途中で止めた。

「あれ？恵先生は？」

「目白^{めじろ}先生は今日はお休み。さっ、出席の続き、取るよお」

「休みっ…」

降って来ない怒鳴り声に、どこか物足りなさを感じながら、アヒルが大人しく自分の席へと座る。

「良かったねえ、遅刻にならなくて」

後ろの席から、紺平がアヒルへと声を掛ける。元気に学校に登校しているところを見ると、紺平も無事、於崎の屋敷から戻って来たようである。

「ああ。恵先生、休みなんだな」

「うん、珍しいよね。そういえば高市くんも休みみたいだけど…」

紺平が、アヒルの横の空席を見る。

「やっぱり疲れてたのかなあ。昨日は元気そうだったのにね」

「……………」

紺平の言葉を聞きながら、アヒルは保の席を見つめ、そっと目を細めた。

放課後。

「為の神のところへ寄っていく？」

「ああ、ちょっとスー兄に頼まれた買い物があってさっ」

恵が休みだったこともあり、放課後残されることもなく、あっさりと帰るこの出来たアヒルは、昇降口で籠也にそう告げた。

「なら、僕たちも…」

「大した用じゃねえから、お前らは先帰っててくれよ」

笑顔を見せたアヒルが、箆也の言葉を途中で遮る。

「だが…」

「すぐ帰っから！じゃあなあ！」

「あっ…！神…！」

箆也に止める暇も与えず、アヒルは自分の靴を履くと、そそくさとその場を駆け去っていった。

「まったく…」

思わず伸ばした手を下ろし、箆也が呆れたように肩を落とす。

「何か妙だな…」

すでに正門を出て、道を曲がろうとしているアヒルの背中を見つめ、箆也が少しその表情を曇らせる。

「どう思う？囁」

「えっ…？」

箆也の問いかけに、何か考え事でもしていたのか、囁は驚いた様子で顔を上げた。

「そうね…やっぱり突然、訪れるものだと思うわ…恋って…」

「何の話だ」

真面目に答える囁に、箆也は呆れきった表情を見せた。

Word 34 ゆガム世界 (2)

町の小さな何でも屋、『いどばた』。

「言玉が使えないいど？」

「ああ…」

店の奥の和室で、テーブルを囲み座り込むアヒルと為介。大きく聞き返す為介に、アヒルはどこか困ったような表情で頷いた。

「昨日から何回も解放しようとしてんだけど、全然反応しなくて…」

「ううーん…」

為介が、アヒルから受け取った言玉を右手に持ち、あらゆる角度から真剣に見つめる。

「特に壊れてる感じもないけどなあ…」

「少しの間、力が眠ってしまっているだけではありませんか」

「みやび雅さん」

部屋の中へと雅が入って来て、テーブルの上へ、茶の入った湯呑みを差し出す。

「朝比奈君は、七声との戦いで相当の力を使ったとのことですよ」

「……っ」

雅のその言葉に、アヒルが少し俯く。

———何だというのだ…？あの力は……—

———クアアアアアア！———

銃から、その姿を変えた言玉。目覚めた、金色の鳥。圧倒的な強さを誇っていた弔さえも圧倒した、その力。それはアヒル自身さえ、疑問に思うことばかりであった。

「……………」

自身の力を思い返しながら、アヒルがどこか険しい表情を見せる。

「そう気にしなくても、しばらく休めば元に戻るのでは？」

「そんな単純なものだといいいけどねぇ」

「えっ…？」

意味深にそう言いながら茶を飲む為介に、雅が少し戸惑うように首を傾げる。

「でえ？恵さんには言ったのおく？」

「いやっ、言おうと思ったなら恵先生、今日休みでさ」

「休みいゝ？」

アヒルの言葉に、意外そうに声を漏らす為介。

「そう、まだ戻って来てないんだあ」

「戻る？んだよ？恵先生、どっか行っ…」

——バアアアン！

『……っ！』

アヒルが為介へと問いかけようとしたその時、店の外から激しい衝撃音のようなものが聞こえてきて、アヒルたち三人は、一斉に顔を上げた。

「何々？昼間っからケンカ？」

「ただのケンカで、あんなバカでけえ音するかよ！」

「あっ、朝比奈君…！」

雅が止める間もなく、アヒルは為介の手の中の言玉を取り去り、外へと駆け出していった。

「ハアっ…！ハアっ…！」

『いどばた』のすぐ後方にある、何もない空き地を必死に駆け、一人の少女、弓。大きく息を乱しており、傷ついた体の所々から、痛々しく赤い血が滴り落ちていた。

「シャハハハ！」

空き地に落ちる、大きな笑い声。

「いいぜえ？もっと逃げろ！逃げろお！」

「……っ」

険しい表情で、弓が振り返り、顔を上げる。すると空き地の上空には、細身の色黒男が、ごく普通に空の上に浮かんでいた。男は逆立つ青髪も印象的だが、それよりもずっと印象的なのは、その真っ赤な瞳であった。

「逃げ回る獲物の方が、狩りはずっと面白れえからなあ！シャハハ！」

「クっ…！」

高らかと笑いあげる男に、弓は唇を噛むと、短パンのポケットから素早く、宝石のような、金色の玉を取り出した。

「五十音第三十八音、“ゆ”…解放…！」

金色の光が放たれ、言玉が姿を変えていく。

「パオオオオン！」

「行くよ！弓象！」

言玉が変えたその姿は、金色に輝く大きな体に、長い鼻を天に届く程に長々と伸ばした、一頭の象であった。象の横に並び、弓が強く叫ぶ。

「んだよお？鬼ごっこはもう終わりかあ？」

「ゆ…」

つまらなそうに言い放つ男に構うことなく、弓が大きく口を開いた。

「“揺らせ”っ…！」

「パオオオオオン！」

弓が言葉を放つと、それに応えるように、象がその場で強く足踏みをする。歩く巨体に、辺りの地面が、まるで地震のように、大きく揺れる。揺れる地面により、近くの電柱が倒れ、浮かんでいる男へと倒れていく。

「おおっとお」

倒れてくる電柱を、男が空中を悠々と移動し、あっさり避ける。

「へへっ、象狩りつてのも面白そっ…うっ…！」

男が楽しげに微笑んでいたその時、下方から伸びてきた金色の鼻が、男の体を巻き取るようにして捕まえた。

「ちっ…」

「これで終わりだ！」

少し顔を歪めた男へ、弓がさらに声をあげる。

「“歪めろ”！」

「パオオオオオン！」

弓の言葉が響き渡ると、象が激しく鳴きあげ、男を捕らえた鼻に力を込め、男の体を一気に締めあげる。

「うううっ…！」

象の鼻に締めあげられた男が、苦しげな声を漏らし、大きく目を見開く。

「やった…！」

「なあ…んつつてっ」

「えっ…？」

嬉しそうな笑顔を見せた弓であったが、鼻に巻きつかれたまま、余裕の笑みを浮かべる男に、笑顔を消し、戸惑いの表情を見せる。

「よっ」

「あっ…！」

男の体が黒い霧のようになって、象の鼻から抜け出し、空へと舞い上がる。舞い上がった霧は、すぐに男の体へと戻った。

「また、あの霧っ…」

「残念だったなあ。五十音土っ」

「クっ…！」

弓へと右手を差し出す男に、弓の表情が引きつる。

「“破”！」

「うううっ…！」

男の右手から放たれる衝撃波に、弓は諦めるように、きつく瞳を閉じた。衝撃波が弓のいた辺りの地面を直撃し、爆風により砂が舞い上がる。

「シャハハハ！これで五十音士も、ボロボロのクソカスにいつ…！ああんっ？」

笑いあげようとした男が、爆風の止んだ下方を見下ろし、そっと眉をひそめた。

「うう、うっ…」

大きく穴のあいた地面のすぐ横に膝を下ろし、苦しげな声を漏らす弓。傷だらけではあるが、衝撃波を喰らった様子はない。弓のすぐ傍に、いつの間にか象から姿を戻したのか、金色の言玉が力なく落ちた。

「避けたのか…？んっ？」

「おい！大丈夫か！？」

弓のすぐ横にしゃがみ込み、弓へと声を掛けたのは、アヒルであった。アヒルの姿を見つけ、男がさらに眉をひそめる。

「あいっ…」

アヒルを見つめ、男が何か考えるように、目を細める。

「大丈夫かよ！？お前！」

「だ…れ…？」

声を掛けるアヒルを、戸惑うように振り向く弓。

「ううう…うっ…」

「あっ…！おい！」

だがアヒルを認識することはなく、そのまま力なく瞳を閉じて、倒れ込む弓を、アヒルが慌てて受け止めた。アヒルが続けて声を掛けるが、弓は気を失ってしまったようで、アヒルの呼びかけに答えることはなかった。

「こいつ、一体っ…んっ…？」

気を失った弓を見下ろしながら、戸惑いの表情を見せるアヒル。そんなアヒルの視界に、弓のすぐ近くに落ちた、金色の言玉が入っ

て来た。

「金色の、言玉…さっきの、象…」

先程までここに居た、金色の象を思い返し、落ちている言玉と見比べ、アヒルが考え込む表情を見せる。

——クアアアアア！——

「あれって…」

「シャハハハ！」

「……っ」

考えを巡らせていたアヒルが、上空から聞こえてくる笑い声に、顔を上げる。

「お前！お前も臭うぜえ？五十音士の臭いがなあ！」

「やっぱ五十音士関連だよな」

笑う男に表情を曇らせながら、アヒルが素早く言玉を取り出す。

「五十音、第一音っ…“あ”、解放…！」

アヒルが高々と言玉を掲げ、勢いよく叫ぶ。

「……あれっ？」

まったく反応のない言玉に、目を丸くするアヒル。

「あ！やべ！そういえば俺、今、言玉解放出来ないんだった！」

「シャハハハ！狩らせてもらうぜえ！五十音士！」

「うっ…！」

焦ったように叫ぶアヒルへ、男が右手を振り下ろす。

「“破”！」

「やべっ…！」

放たれる衝撃波に、アヒルの表情が歪む。

「“満ちれ”」

そこへ、横から大波が打ち寄せて、アヒルと弓へと向かって来ていた衝撃波を、吹き飛ばした。

「何っ…？」

「あっ」

男が眉をひそめ、アヒルが驚いた顔を見せる。

「言玉も使えないのに、あまり無理をしないで下さいね、朝比奈君」
「雅さん！」

その場に姿を見せたのは、青い言玉を右手に持った、雅であった。雅は眼鏡を上げ直しながら、アヒルへと注意するような声をかける。
「まあゝた五十音士か。次から次へとウジャウジャ出てきやがんなあっ」

雅の姿を確認しながら、男が少しうんざりとした表情を見せる。

「まあいいやあ！とにかく全員、狩ってっ：！」

「凍てつけ」

「なっ：！？うっ：！」

アヒルたちへ向け、再び右手を振り上げた男であったが、季節でもない吹雪が男へと吹き抜け、男の右腕を凍りつかせた。凍りつき、動かなくなった右手を見て、男が少し表情を引きつる。

「な、何だっ：！？」

「お店の前で、あんまり騒ぎ、起こさないでくれるう？」

「……っ」

聞こえてくる声に、振り返る男。

「営業妨害だよお？」

男へと笑顔を向けるのは、ゆったりと扇子で自分を扇いでいる為介であった。雅と同じように、為介も店の中から出てきたようである。

「また五十音士：しかも今の言葉は、神のっ：」

為介を見下ろし、男が警戒するように、そっと目を細める。

「どうします？為介さん」

「んんゝ、面倒事に巻き込まれるのは嫌なんだけどお、仕方ないから一応、捕まえところかあ」

「わかりました」

為介の言葉に頷いた雅が、瞳を鋭くして、上空の男を見上げる。

「チっ…！」

「み…」

右腕を凍りつかせたまま、表情をしかめる男へと、雅が右手を向け、ゆっくりと口を開いた。

「満ちっ…！」

“壊”…！」

「なっ…！」

雅が言葉を放とうとしたその時、別の声がその場に響いて、次の瞬間、雅の周辺の地面に、地割れのように大きくヒビが入った。

「ううっ…！」

「雅さん！」

地割れで足元のバランスを崩し、その場に手をつく雅に、思わず身を乗り出すアヒル。

「雅くっ…！」

“破”…！」

「…っ」

雅の助けに入ろうとした為介へと、上空にいる男とは別の方角から、先程と同じ衝撃波が飛んで来る。それに気付いた為介は、素早く振り返り、扇子を振り上げた。

“諫めろ”…！」

為介が言葉とともに扇子を振り下ろすと、為介へと向かって来ていた衝撃波が、降り注いだ水により、沈静化される。

“い”の言葉…やっぱあの野郎、神かつ…！」

戦いを見つめていた男が、為介の使った言葉を分析するように呟く。

“砕”…！」

「うおっ」

男のすぐ近くから声が聞こえてくると、男の右腕を封じていた氷が、高い音を立てて砕き割れた。

「萌芽！」

「何をチンタラやっている…？碧鎖…」^{ヘキサ}

男を碧鎖と呼び、男のすぐ横へと姿を現したのは、雪のように真っ白な肌に、長い黒髪の、小柄の青年であった。長く伸びた前髪の間から覗くのは、やはり印象的な、真っ赤な瞳。

「だってあいつら、次から次へと湧いて出やがっからさあ」

「言い訳はいい。他の連中は俺が引きつけておいてやる。お前はとつとと、あの女を狩れ」

「了解」

萌芽の言葉に、碧鎖が楽しげな笑顔で頷き、氷から解放された右腕を振り上げる。

「シャハハハ！狩るぜ！狩るぜえ！」

「うっ…！」

上空から、勢いよく下降してくる碧鎖に、弓を支えるようにしてしゃがみ込んでいるアヒルが、険しい表情を見せる。

「朝比奈君っ…！」

「“破”…」

「あっ…！うああああ！」

碧鎖の迫るアヒルと弓の助けに入ろうとした雅であったが、アヒルたちに気を取られるあまり、萌芽の放った衝撃波を避けることが出来ず、直撃して、後方へと吹き飛ばされた。

「仕方ないねえ、よいしょっ」と

吹き飛ばされた雅の方を少し見て、為介がどこか呆れた表情で扇子を振り上げる。

「い…」

「させない…」

「……っ」

言葉を発しようとした為介の前に、萌芽が立ち塞がり、為介がそつと眉をひそめる。

「雅さん！扇子野郎！」

「シャハハハ！」

「クっ…！」

雅と為介を気にかけていたアヒルだが、笑いながら向かってくる碧鎖に、険しい表情で、再び前方を見る。

「このっ…！ “あ”、解放…！」

言玉を握り締め、もう一度、力強く叫ぶアヒル。だが言玉は、アヒルのその言葉にもまったく反応せず、光を発することもなかった。

「やっぱダメかつ…！」

「狩ってやんぜえ！ “碎”^{サイ}！」

「うっ…！」

右手を、尖った刃の切先のように変形させ、すぐ目の前まで飛び込んでくる碧鎖に、どうすることも出来ず、アヒルの表情が引きつった。

「“薙ぎ払え”…！」

「何っ…！？」

碧鎖がアヒルへと、鋭く尖った右手を振り下ろそうとした、まさにその時、碧鎖へと、横から赤色の一閃が飛び込んできた。

「クソっ…！ ううう…！」

必死に上空へと飛び上がり、一閃を避けようとした碧鎖であったが、振り下ろそうとしていた右手の避難が遅れ、一閃により右腕が斬り裂かれる。斬り裂かれた碧鎖の腕から、赤い血が流れ落ちた。

「チっ…！」

上空に浮かび上がった碧鎖が、右腕を押さえ、その表情を歪める。

「今のはっ…！」

「朝比奈くん！」

「奈々瀬っ」

消えゆく一閃を戸惑うように見上げていたアヒルが、聞き覚えのある声に振り向く。空き地の入口から、アヒルのもとへと駆け寄って来るのは、真っ赤な薙刀を持った七架であった。

「大丈夫！？ 朝比奈くん！」

「奈々瀬…お前、何でここにっ…！」

「バイトの帰りで近くを歩いてたら、大きな音がしたから来てみたの」

七架がアヒルのすぐ横まで駆け寄り、そっとしゃがみ込む。

「大丈夫？ 怪我は？」

「ああ、俺なら大丈夫だ。助かったよ、ありがとう」

「えっ！？ そ、そんなっ：！」

不安げに問いかける七架に、アヒルが笑顔を向ける。アヒルに礼を言われ、一気にその頬を赤く染め上げる七架。

「私はただっ、その、自分の神様を守っただけっていうか、あ、でもやっぱり、朝比奈くんだからっていうのもっ：」

「奈々瀬、来てもらってすぐで悪りいけど、こいつの手当て頼むっ」

「えっ？ あ、うん」

七架のぶつぶつとした小さな主張を耳に入れた様子はなく、アヒルがあっさりと、支えていた弓を七架へと引き渡し、その場で立ち上がる。

「また五十音士か：」

アヒルから弓を預かる七架の方を振り向きながら、萌芽が少し眉をひそめる。

「これ程に五十音士がわんさかと：この町は一体っ：」

「刈^かれ」

「何っ：？」

七架に気を取られていた萌芽へと、先程、七架が放ったものと同じような、赤色の一閃が降り落ちてきた。

「グっ：！」

素早く上空へと飛び上がって、その一閃を避ける萌芽。

「萌芽っ：！」

「叫^{さけ}べ”：」

「なっ：！？」

攻撃された萌芽の身を案じるように、名を呼んだ碧鎖であったが、その碧鎖の後方からも、大きな振動の塊が飛び込んできた。

「うおっ！」

碧鎖が必死に体を逸らし、何とかその塊を避ける。

「あら…避けられちゃった…」

「だ、誰だ！？」

響き渡る声に、碧鎖が勢いよく振り返る。

「アヒル人を傷つける気なら…私が容赦しないわよ…」

真っ赤な横笛を構え、上空にいる碧鎖へと鋭い視線を向けるのは、囁であった。

「囁っ」

「今日の真田さん、いつもより何か迫力満点だね」

空き地を入ってすぐのところ立っている囁を、アヒルとともに見つめ、何やら感心したような言葉を漏らす七架。

「また五十音士…」

囁を見下ろし、そっと目を細める萌芽。

「我が神に刃を向けようというのなら、僕たちが黙っていない」

「あっちも…」

萌芽がゆっくりと視線を流すと、囁から少し離れたところに、真っ赤な鎌を構えた箆也が立っていた。箆也の姿も確認し、萌芽がさらに表情を曇らせる。

「“我が神” だあ？ じゃあ何？ あいつ、神かよっ」

「……………」

アヒルを見下ろし、碧鎖がどこか楽しげな笑みを浮かべる。そんな碧鎖と目を合わせ、厳しい表情を見せるアヒル。

「おっもしれえ！ じゃあいっちょ、神狩りとしても行っ…！」

「待て、碧鎖」

「……………」

アヒルへと再び攻撃に行こうとした碧鎖が、飛び出す寸前で、萌芽に止められる。

「んだよ？ 萌芽」

「一旦、退くぞ」

「はあっ？」

萌芽の思いがけない言葉に、碧鎖は大きく顔をしかめた。

「何言ってるんだよ！第一、目的のあの女だって、まだっ…！」

「ここまで人数差があつては、さすがにこちらの歩が悪い」

「けどっ…！」

「ここで俺たちがヤラれては、無意味の極みだ。そのくらい、わかるだろう？」

「チっ…」

冷静に言い放つ萌芽に、少し俯いた碧鎖が舌を鳴らす。

「十分に役目は果たした。行くぞ」

「わあつたよっ」

『あっ…！』

黒い霧の中へと包まれていく二人に、下方にいる皆が、思わず身を乗り出す。

「待っ…！」

『…っ』

「あっ…」

箆也が振り上げた鎌を下ろさない内に、霧に包まれた二人はその場から姿を消し、残っていた霧も、風の中に掻き消されるようになって、なくなっていくた。

「痛つつつ…」

「大丈夫う…？雅くう…ん」

「あ、はい」

萌芽の衝撃波を喰らい、地面に倒れ込んでいた雅が、ゆっくりと起き上がる。そんな雅に歩み寄り、為介は扇子を扇ぎながら声を掛けた。

「追いますか？」

「追えないでしょう消えたんだからっ」

「それも、そうですね…」

素っ気なく答える為介に、雅が少し肩を落とす。

「大丈夫…？アヒるん…」

「無事か？神」

「ああ、俺は全然、大丈夫だ」

歩み寄って来た籠也と囁に、アヒルが笑顔を見せる。

「俺よりも…」

アヒルがゆっくりと振り返り、治療をする七架の腕の中で、まだ気を失ったまま眠っている弓の方を見つめる。

「……いば…」

「えっ…？」

弓の口から小さく漏れる声に、体を支える七架が、少し首を傾げる。

「やい…ば…よろ…い…」

「あっ…」

小さな声とともに、弓の瞳から流れ落ちる滴に、七架がそつと表情を曇らせる。

「何だってんだ…？一体…」

弓を見つめながら、アヒルは戸惑うように呟いた。

Word. 34 ゆガム世界 (3)

三十分後、『いどばた』。

「回復かいふくしろ」

格子を持った右手を雅へと向け、言葉を放つ箆也。格子から淡い赤色の光が放たれ、雅の傷を包み込むと、雅の負った傷が、あっという間に塞がった。

「ありがとうございます、神月君」

「あなたも我が神を助けてくれたようだし、一応な」

「一応、ですか」

素っ気なく答える箆也に、雅が薄く笑みを浮かべる。

「いやあゝ悪いねえ、神月くうくん。ボクが治せばいいんだけど、最近、年のせいか、どおゝも扇子の調子がいまいちでさあゝ」

「年と扇子、関係ねえーじゃん」

軽い調子で言い放つ為介に、アヒルが引きつった表情で、思わず突っ込みを入れる。

「で？ どういうわけだ？ 神」

「へ？」

不意に箆也に問いかけられ、振り向いたアヒルが目を丸くする。

「いっやあゝ、それは俺にもよくっ…」

「連中のことではない」

「えっ？」

「言玉が使えないこと、何故、僕たちに言わなかった？」

「あっ…」

箆也に鋭く言われ、アヒルが困ったように声を漏らし、自然と逃げるように、箆也から視線を逸らす。

「そういうことは、この軽薄極まりない、なんちゃって神よりも先に、僕たち神附きに言うのが普通だろう」

「何かすっごい言われようだよおゝ雅くうくん」

「事実ですから、仕方ありませんよ」

箆也の冷たい言葉に、傷つく為介へと、雅がさらに冷たい言葉を投げかける。

「何故、黙っていた？」

「いやあ、それはそのお…」

「私に、知られたくなかったからでしょう…？」

『……っ』

部屋へと入って来る声に、アヒルと箆也が同時に振り向く。

「囁」

「急に使えなくなるなんて…とむら弔との戦いが原因だって考えるのが普通なもの…」

襖を開け、隣の部屋から入って来たのは、囁であった。

「私が知れば、私が責任を感じるから…だから、私にも箆也にも黙っていたんでしょう…？」

囁が真剣な表情で、さらに言葉が続ける。

「言ってみれば、私のせいで使えなくなっちゃったようなものなのね…」

「囁…」

そっと視線を落とす囁に、目を細めるアヒル。

「いや！そんなことはっ…！」

「でも大丈夫よ、アヒルん」

「へっ？」

すぐさま顔を上げる囁に、アヒルが目丸くする。

「私、まったくもって、責任は感じていないわ…」

「いや！ちったあ感じろよ！」

何の悪びれもない笑顔で答える囁に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「で、囁、あの者の様子は？」

「ええ…それなら今、奈々瀬さんが…」

箆也に問いかけられ、囁が、やって来た隣の部屋の方を振り返る。

すると、囁の後方から、七架が姿を見せた。

「傷の治療は終わったよ。でも意識は戻らなくて、まだ眠ってる」
「そうか…」

七架の言葉に頷きながら、箆也が少し顔を俯ける。

「無理やり起こすわけにもいかないしい、話を聞くには、彼女が目覚めるまで待つしかなさそうだねえ」

「ああ」

為介の言葉に、同調するように頷くアヒル。

「ま、彼女の持ってた言玉と、彼女の使ってた言葉から、彼女が何者かってのはだいたい、想像つくけどお」

「“由守”、ですか…」

為介がはぐらかすように言った言葉の答えを、雅がすぐさま口にする。

「由守ってことは、後半音だから、団には属してないってことだよな？」

「ああ。だが…」

アヒルの言葉に頷いた後、箆也が少し表情を曇らせる。

「ヤ行の五十音士、“也守”^{やもり}、“由守”^{さんげんしゅう}、“与守”^{よもり}は代々、五十音士の中でも優れた力を持ち、“三言衆”という別称を与えられている」

「三言衆？」

「ああ。普段から三人で行動を共にし、忌退治に励んでいるという話を聞いたことがあるのだが…」

右方を振り向き、隣の部屋に敷かれた布団の上で、眠っている弓を見つめる箆也。弓は現れた時からただ一人で、他に仲間の姿は見当たらなかった。

「じゃあ也守と与守に、何かがあったってこと…？」

「そう考えるのが、妥当だろう」

眉をひそめながら問いかける囁に、箆也が短く答える。

「やいば…よろい…」

『……っ？』

小さく呟く七架に、皆が振り向く。

「奈々瀬？」

「そう言っ、泣いてた…あの人…」

『……っ』

険しい表情で呟く七架に、皆もその表情を曇らせる。

「雅くうくん、資料室行って、現や行五十音士の顔と名前、確認してきてくれるう？」

「わかりました」

為介が指示すると、雅はすぐさま立ち上がり、皆の居る部屋を後にした。

「まあ、彼女の方の正体は、じきに知れると思うよお」

雅が去り、閉まった襖を確認した後、為介が再び、アヒルたちの方を見る。

「問題はあ」

「彼女を襲っていた連中の方ね…」

「うん。彼らに見覚えあったあ？ 神月くん」

「いやっ、まったく…」

為介の問いかけに、箆也がすぐさま首を横に振る。

「だが奴等の使っていた言葉と、わずかだが感じた気配から察するに…」

「“忌”…」

「ああ…」

そっと呟いたアヒルの言葉に、箆也も険しい表情を見せて頷く。

碧鎖と萌芽、そう呼ばれた二人の男が使っていた言葉には、アヒルも聞き覚えがあった。それは、悪意ある言葉に潜む悪霊、忌が使うものであった。

「まあ、言葉の力が使えるのは五十音士と忌だけなんだし、彼らが五十音士じゃないとすると、答えは自然とそうなっちゃうよねえ」
「じゃあ、あの人たちは、忌に取り憑かれた人間ということですか

？」

「ううーん、取り憑いてるって感じじゃなかったけどなあ」

「そうね…どちらかというと、忌そのものに見えたわ…」

首を捻る為介に、賛同するように囁も言う。

「でも風貌は人間そのもので、忌って感じじゃなかったものね…」

「忌が実体化してるってことか？ 灰示ん時みたいに」

「それは違うと思うけどねえ」

「へっ？」

アヒルの言葉をすぐさま否定する為介に、アヒルが少し目を丸くする。

「波城灰示クンという忌が実体化したのは、高市クンとの強い同調や、まあその他諸々、色おーんな力が働いたからと考えられるうっ」

「後半、結構適当だな」

ざっくりとした説明をする為介に、思わず呆れた表情を見せるアヒル。

「まあつまり、波城灰示クンが生まれたのは、偶然の産物、奇跡にも近い状況ってことだよお」

適当な説明のまま、為介が締めくくる。

「そう簡単に、ポンポンと生まれるものじゃあない」

「じゃあ、灰示みたいに実体化してるわけじゃないってことか？」

「そう考えるのが普通だねえ」

「じゃあ益々、正体不明ってわけね…」

そう呟き、少し肩を落とす囁。

「波城灰示、か…」

為介の言葉に、箆也はさらに考え込むような表情となって、俯く。

「そういえば、高市くんだけ来なかったねえ」他のみんなは神様のピンチに、大集合したっていうのに」

「学校も休んでいたからな。大方、風邪でもひいて、寝込んでいるんだろう」

不思議そうに辺りを見回す為介に、箆也が淡泊に答える。

「あいつ、馬鹿のくせに風邪はひくからな」

「七不思議ね：フフフっ：」

「……っ」

箆也と囁の言葉を聞きながら、アヒルが少し眉をひそめる。

「帰りに様子でも見に行つてあげたらあゝ？彼、一人暮らしだしっ」

「あ、ああ。そうだなっ」

為介の言葉に、アヒルはどこか齒切れ悪く頷いた。

弓の身元を確認するにも時間が必要で、七声の件で昨日まで家を空け放っていたアヒルたちは、これ以上、家族に心配をかけることを良しとせず、今日の内は解散をして、家へ帰ることとなった。すっかり夕方に差し掛かった頃、為介の店を出たアヒルと箆也、囁、七架の四人は、保が住んでいる小さなアパートの一室を訪れていた。

「よっ」

アヒルが人差し指を出し、保の家のインターホンを鳴らす。中に響く音が、扉の外からも十分に聞こえた。だが、しばらく待っても、保が出てくる気配はない。

「あれ？」

「留守、かな？」

アヒルがもう一度、インターホンを鳴らす。それでも保の出る様子はない。開かない扉を見つめ、アヒルと七架が大きく首を傾げた。

「どっか行つてんのかなあ？」

「天涯孤独で、正直、友達の一人もいなそんな転校生くんが……？」

「一人旅、とかっ……」

「昨日まで散々、出掛けていたのか？」

「うっ……」

箆也と囁から次々と突っ込みを受け、アヒルがあらゆる可能性を

消される。

「中で野垂れ死んでたりして…フフフっ…」

「やめろ！縁起でもねえ！」

不気味に微笑む囁に、思わず怒鳴りあげるアヒル。

「だが、ぶっ倒れている可能性はある。管理人を呼んで、鍵を開けてもらうか？」

「あ、あああ、そうだなあ」

「高市君の友達？」

「へっ？」

籠也の問いかけに、アヒルが悩んでいたその時、保の部屋のすぐ隣の部屋の扉が開き、まだ若い、二十歳前後の男が出てきた。

「あ、はい」

「僕は友達になった覚えはない」

「そんな、むきにならなくても…」

頷くアヒルの横で、強く否定する籠也に、七架が少し呆れた表情を見せる。

「高市君なら、今日は帰って来てないよ」

「えっ？帰って来てない？」

「うん。昨日の夜中に出掛ける音がして、それっきりだから」

「昨日の、夜中…？」

男の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「帰って来たばかりだっていうのに、高校生も結構、忙しいんだね」

感心するようにそう言うと、男は部屋の中へと戻っていった。

「昨日の夜からって…高市くん、どこ行っちゃったんだろう…？」

「さあ…？」

「興味が持てない」

「二人とも…」

ただ白状に、首を傾げるだけの二人に、七架が困った顔となる。

「保っ…」

アヒルは一人、どこか浮かぬ表情で、夕暮れに染まる空を見上げた。

Word. 34 ゆガム世界 (4)

漆黒の闇が支配する、光の一切届かない空間。そこに響く、二つの足音。

「ちえ！痛てえ！あの五十音士の女！」

すでに血は止まっているが、痛々しく斬り裂かれた跡の残っている右手を振り上げ、碧鎖が不機嫌な声を放った。静まり返った空間に、その声が大きく響く。

「良かったじゃないか…」

「ああっ？」

すぐ横から声を掛ける萌芽に、碧鎖がしかめ面のまま振り向く。

「俺たちは痛みにより、強さを増す生物…これでお前も、少しは強くなれるかも知れない…」

「んだとお！？狩るぞ！てめえ！」

「勝手に狩れ…」

怒鳴りあげる碧鎖を、適当にあしらいい、萌芽はさらに前方へと歩を進めていく。

「マジで狩るかなあ！萌芽！てめえ、覚悟しやがっ…！」

「戻ったようだな…萌芽、碧鎖」

『……っ』

碧鎖があっさりと挑発に乗り、萌芽に向かって行こうとしたその時、前方からの、低く重く響くその声に、碧鎖と萌芽は言葉を止め、同時に振り向いた。

「ああ、戻った…」

「ご苦労…」

答えた萌芽に、劳いの言葉が返って来る。

「ホントにご苦労だったぜえ。あんな人間臭い町に行かされてさあっ」

「何がご苦労よ！」

「あっ？」

ボヤクように言い放った碧鎖へと、まるで責めるような、愛らしい女の子の声が降って来る。

「あんたたちが、あの由守の女、捕まえて来なかったせいで、私だけまた、実体化出来ないじゃないっ！」

そう強く碧鎖へと怒鳴りあげたのは、碧鎖の上空に浮かぶ、黒い影の塊であった。影の持つ、二つの真っ赤な瞳が、きつく碧鎖を睨みつける。

「しゃーねえーだろお？色々邪魔が入っちゃったんだからよお」

「この役立たず！」

「んだとお！？」

容赦なく降り注ぐ声に、碧鎖が強くその表情を歪めた。

「だいたいてめえが、実体化するなら女の五十音士がいいとか、ややこしいこと言うから、こうなんだろ！」

「虹乃ニジノは女の子なんだから、女の子として実体化するのがいいに決まってるでしょ！」

碧鎖と、自らを虹乃と呼んだ黒い影の、子供の喧嘩のような言い争いが続く。

「じゃあ次は、てめえが自分で行けよ！」

「私だって行けるもんなら、行きたいわよ！」

「まあ、そう怒るな。虹乃」

「……っ」

碧鎖を責め続けていた虹乃が、後方から聞こえてくる、諭すようなその声に、すぐさま大人しくなる。

「もうすぐ緑呂ロクロと桃真トウマが、元五十音士の女を連れ帰る。その者を使つて、実体化すればいい」

「元かぁーやっぱ現役が良かったなあ」

「ワガママ言ってるじゃねえよ！」

不満げな声を漏らす黒い影に、碧鎖が大きく怒鳴りあげた。

「現五十音士を狙えば、それだけリスクも高くなる…」

「あんたに言われなくっても、わかってるわよっ」

言葉を挟む萌芽にも、虹乃が不満げな声を向ける。

「で…」

まだ怒っている様子の虹乃の横を通り過ぎ、碧鎖よりも数歩前へ出て、萌芽がまっすぐに前方を見つめ、そこにいる人物へと声をかける。

「虹乃が実体化すれば、全員の実体化が完了する…その後は、どうするんだ…？」

「ああ、説明する。丁度、客も来たようだからな」

「客…？」

「……………」

『……………！』

萌芽が首を傾げていたその時、後方から響いてくる足音に気付き、萌芽たちが一斉に振り返った。

「緑呂たちか？」

「足音は一つだ…」

「誰…！？」

やって来る人影に、虹乃が強く問いかける。

「誰…？」

後方の闇から、姿を見せるその人物。

「くだらない、問いかけだね…」

『あっ…！』

深い闇の奥から、足音を響かせ、萌芽たちの前へと現れたのは、いつものように、どこかうんざりとした口調で話す灰示であった。灰示の姿を捉え、萌芽たちが大きく目を見開く。

「誰？こいつ…なんで、この場所につ…」

「何者だ…？お前…」

「狩られ希望者かあ！？ああっ！？」

現れた灰示に、一斉に警戒態勢を取る萌芽たち。

「久し振りだな」

『えっ…?』

背中から聞こえてくる声に、戸惑うように振り向く三人。

「灰示^{ハイジ}…」

「……っ」

萌芽たちの後ろにいるその人物に名を呼ばれ、灰示はそっと目を細めた。

「お前ならば、必ず気付き、ここへ来ると思っていた」

「あれだけしつこく呼ばれて、気付かなきゃ、聴覚障害だと思うけどね…」

向けられる声に、灰示がどこか皮肉った答えを返す。

「何? 知り合い?」

「俺だって知らねえーよっ」

「灰示…?」

言葉を交わす碧鎖と虹乃の横で、萌芽が表情を曇らせる。

「で…? 今更、君が…こんなところにまで出てきて、一体、何のつもりだい…?」

突き刺すような鋭い瞳を見せた灰示が、前方へ向け、ゆっくりと問いかける。

「伍黄^{イツキ}…」

「何のつもり? 可笑しなことを聞くんだな、灰示」

灰示の問いかけに、すぐさま声が返って来る。

「お前とともに在った頃から、俺の望みは変わっていない。俺が成そうとしていることは、後にも先にも一つだけだ」

迷いなく届く、その声。

「この世界から、すべての“痛み”を消し去る…」

「……っ」

放たれるその望みに、灰示が眉をひそめる。

「“痛み”を、消す…」

「お前の望みも、変わっていないのだろう? 灰示」

そっと繰り返した灰示へ、声は続けて問いかけ、声の主である、

闇の中にいたその人物が、ゆっくりと歩を進める。足音が一つずつ、重く響き渡る。

「すべての“痛み”を消す為に、俺たちは動き出した…なあ、俺たちに手を貸さないか？ 灰示」

徐々に見え始める、その人物の姿。

「お前に、やつてもらいたいことがある…」

「……………」

そっと目を細める灰示の前に立ったのは、あの日、弓とともに居た、あの日とは異なる真っ赤な瞳を見せた、刃であった。

「ただいまあ」

結局、保に会うことの出来なかったアヒルたちは、保の行方の見当もつかなかったため解散し、三人と分かれた七架は、自分の家へと帰宅した。

「おかえりい！ お姉ちゃん！」

玄関へと入った七架を、元気な少年が出迎える。

「ただいま、六騎」

「結構、遅かったんだねえ。バイト、今日早番じゃなかったっけ？」

「えっ!？」

不思議そうに問いかける弟、六騎に、思わず焦った表情を見せる七架。六騎は一度、忌に襲われているが、囁の言葉により、その時の記憶は消されている。五十音士等の話をするわけには、いかなかった。

「あ、ああ、最後の最後に棚だし頼まれちゃって！それで遅くなっちゃったの！」

「そうなんだあ」

無理やり作った笑顔を見せ、どこか必死に言葉を繋ぐ七架であったが、六騎は特に疑うこともなく、玄関を上がった七架の手を掴ん

だ。

「ねえ、宿題でわからないところ、あるんだけどお」

「じゃあ、着替えたら見てあげるね」

「うん！」

優しい笑顔を見せる七架に、六騎が満足げに微笑む。

「七架…帰ったの…？」

「あっ」

廊下の奥の扉が開き、七架と雰囲気よく似た女性が出てくる。

「うん、ただいま。お母さん」

「もうご飯出来るから…着替えたら、食べなさい…」

「うん、わかった」

母の言葉に、七架が素直に頷く。

「じゃあ六騎、宿題はご飯終わってからにしようか？」

「うん！」

楽しい笑顔で言葉を交わしながら、七架と六騎が、自分たちの部屋のある二階へと上がっていく。

「……………」

去っていく足音の中、静かに一階に佇む母。

「フフ、フ…」

途切れ途切れに、小さく落とされる笑い声。

「フフ、フフ…」

母の茶色の瞳が、真っ赤に染まった。

Word. 35 安國、包囲 (1)

“由守”らしき少女、弓と、弓を狙う謎の二人組が現れた、翌朝。朝比奈家隣、箆也と囁の家(旧・佐々木さんの家)。

「ふう…」

朝比奈家とは異なる、洋風のリビングでは、制服に着替えた囁が、姿見で自分の姿を確認しながら、どこか深い溜息を落としていた。表情も少し、浮かぬ様子である。

「まだ居たのか」

二階から降りてきた、同じく制服姿の箆也が、リビングへと入って来る。

「そろそろ神を起こしに行く時間だぞ」

「ええ…」

箆也の言葉に答えながら、視線を落とす囁に、箆也が眉をひそめる。

「今日は朝食、作りに行かないのか？」

「ええ…」

箆也の問いかけに、さらに落ちる、囁の視線。

「アヒるんの力…」

少し躊躇いがちに、囁が口を開く。

「アヒるんの力…やっぱり、弔との戦いが原因、よね…」

「……っ」

——あの力は、一体……——

囁の言葉を受け、アヒルが弔との戦いで見せた、今までにはなかった力のことを思い出し、箆也はそっと表情を曇らせた。

「激しい戦闘だったからな。ああなくても、無理はない」

アヒルの未知なる力のことには触れず、箆也が冷静に答える。

「最低、よね…」

囁が、重くその言葉を落とす。

「力を失わせるようなことまでしておいて…何食わぬ顔で仲間に戻ったりして…どこが安附あつきなんだか」

「……………」

自嘲の言葉を述べる囁を、箆也がまっすぐに見つめる。

「神が力を失っているのなら、その間、あなたがあなたの力で、神を守ればいいだけの話だろう」

「えっ…？」

箆也の声に、囁がやっと顔を上げる。

「あなたは、安附なのだから」

「…………」

まっすぐに見つめる箆也に、少し目を見開く囁。だがすぐに、その表情は笑みへと変わった。

「随分と優しいのね…珍しい」

「心外だな」

「だって箆也…初めて会った時、“あなたに優しくする理由がない”って言ってたのよ…？」

過去のことを思い出し、囁が微笑んだまま問いかける。

「仲間のことを気遣って、何が悪い」

「えっ…」

思いがけない箆也の言葉に、止まる囁の笑み。

「とっとと行くぞ。もう遅刻は懲り懲りだ」

「……………」

リビングを出て、玄関へと歩いていく箆也を、囁が茫然と見つめる。

「フフフっ…」

だがすぐに込み上げたように笑みを零し、囁も玄関へと出た。

「気遣うのは別に悪くないけれど…あなたがやると気持ち悪いわよ…？」

「どういう意味だっ」

囁の言葉に、箆也は大きく表情をしかめた。

「へえ、昨日の帰りに、そんなことがあったんだ」

「ああ」

無事、箆也と囁に起こされ、目覚めたアヒルは、迎えに来た紺平とともに、通学路を歩く。五十音士の一人、己守こもりとなった紺平にも、関係のないことではないので、アヒルは昨日起こった出来事を、紺平へと説明した。

「由守、かあ…」

「連中の狙いは、恐らくは五十音士だ」

「えっ？」

後ろを歩く箆也の言葉に、紺平が振り返る。

「あなたが狙われる可能性もある。今後は出来る限り、僕たちと行動を共にしろ」

「それは別に構わないけど…」

はつきりとした口調で言い放つ箆也に、紺平が少し委縮しながら頷く。

「このこと、檻也くんに報告とかした方がいいのかなあ？」

「檻也には昨日、電話で連絡したから大丈夫だ」

「へっ？」

箆也のその言葉に、目を丸くする紺平。

「電話したんだあ」

「あっ」

驚いたように言う紺平に、箆也が少し顔を引きつる。

「ち、違っ…！ただ単に、於の神へ事務的連絡をと思ってっ…！」

「兄弟ホットコール…？フフフっ…」

「良かったなあ！箆也！」

「……っ」

満面の笑みを向けるアヒルと囁に、これ以上言い返すことも無駄
と思ったのか、箆也は深々と頭を抱えて、黙り込んだ。

「アハハ、あれっ？」

その箆也の様子に、楽しげに笑みを浮かべていた紺平が、不意に
前方を向き、何かに気付いたような声を発する。

「ガァ、あれ」

「んあ？」

紺平に呼ばれ、アヒルも前を見る。

「あつりいゝ？ ありありいゝ？ んんゝ？」

四人の歩く道の前方には、相変わらずのリーゼント頭にサングラ
スを掛けたアニキが、何やら探している様子で、周囲を何度も見回
していた。

「あつりいゝ？」

「邪魔」

「どわああああ！」

大きく腰を曲げて、周囲を見回していたアニキの、その突き出し
た尻を、アヒルが勢いよく蹴り飛ばした。アニキはそのまま、勢い
よく前のめりに倒れ込む。

「な、何しやがる！？ って、朝比奈ああ！」

顔を上げたアニキが、大きな声を出しながら、アヒルを認識する。

「いきなり蹴るたあ、どういうことだあ！？ てめえ！」

「道のと真ん中に突っ立ってる方が、悪いんだろ」

「くうゝ！ 相変わらず、理不尽な野郎だあゝ！」

立ち上がったアニキが、勢いよく顔をしかめる。

「ここで会ったが百年目ええ！ 今日の今日こそ、コテンパンのパン
ティストツキングにっ…！」

「何か探し物でもしてるの…？」

「さ、真田さあゝん！？ 」

アヒルの横から顔を出す囁に、怒り狂っていたアニキが、あつと

いう間の表情から怒りを消して、目を輝かせる。

「そうなんだよぉー！朝から、俺の可愛い子分たちが一人もいなくて、ずっと探してるんだぁ！」

「子分？」

「ああ、そういえばいつも無駄に居る取り巻きが、今日は居ないね」

首を傾げるアヒルの横から、紺平が辺りを見回しながら言い放つ。

「いつもこの道に、八時集合って決めてんのによお」

「暇人」

「愛想つかされたんじゃないの？」

不思議そうに首を捻るアニキに、箆也とアヒルが次々と、冷たい言葉を投げかける。

「アホかぁ！俺たちの絆、ナメんじゃないぞお！？思い出アルバム全五十巻、見せたらどうかぁ！？」

「いらねえー」

ムキになって言い返すアニキに、呆れた様子で肩を落とすアヒル。
「おっかしいなぁ。おぉーい！どこだぁ！？お前らぁ！」

アニキは大声を張り上げ、子分たちを探して、別の方角へと歩き去っていつてしまう。

「でも確かに変だよなぁ。結構長い付き合いだけど、あの人の子分引き連れてないのなんて、初めてだよ」

「だから愛想、つかされたんだって」

そう言葉を交わしながら、アヒルと紺平が、再び学校へ向かう道を進み始める。

「……………」

その場に足を止めたまま、ふと顔を上げ、背後を振り返る箆也。

「どうかした…？」

「えっ？」

囁に問われ、箆也が前を向く。

「いや…」

籠はどこか曇らせた表情のまま、そつと首を横に振った。

言ノ葉高校、一年D組。

「よっしゃ！今日もセーっ！って、あっ」

勢いよく教室に入ったアヒルが、何かに気付いた様子で声を漏らす。

「早く席につきなさい」

今日も教壇でアヒルを迎えるのは恵ではなく、小太りの男教師であった。教室へと入ったアヒルに、男教師が素っ気なく声を掛ける。

「あれ？今日も恵先生、休み？」

「早く席につきなさい」

「へっ？」

アヒルの問いかけに答えることなく、すぐに前を向いてしまう男教師。それ以上、問いかけることも出来ず、アヒルは大人しく、自分の席へと向かった。

「あの先生、あんなに愛嬌なかったっけ？」

「ガアが何か、悪いことでもやったんじゃないの？」

「俺は何もやってねえよっ」

突き放すように言う紺平に、少しムキになって言い返しながら、アヒルが自分の席へと座る。

「あっ」

ハッとなって、すぐ隣の席を振り向くアヒル。だがそこは、空席であった。

「やっぱ、来てねえーか…」

今日もない保の姿に、アヒルが眉をひそめる。

「今日の休みは高市君と奈々瀬さんだけだね…」

「へっ？」

出席簿をチェックする男教師の言葉に、アヒルが顔を上げ、後方

の廊下側の席を確認する。アヒルの幼馴染み、想子の前の席が、確かに空いていた。

「奈々瀬も、休み…？」

空いているのは、七架の席であった。

『ハア…！ハア…！ハア…！』

重なる、乱れた二つの息。後ろを振り返りながら、人気のない道を必死に駆け抜けるのは、固く手を握り合った七架と六騎であった。

「お姉、ちゃんっ…し、しんどいよっ…」

「頑張っ！六騎！もう少しだから…！」

苦しげに声を漏らす六騎に、先導する七架が言い放つ。

「なん、でっ…お母さんたち…俺たちのこと…？」

「わからない…でも、何かが起こってる…」

戸惑う六騎に、七架も険しい表情を見せる。

「とにかく、朝比奈くんのところへっ…学校へ行かなくちゃ…！」
瞳を鋭く光らせ、七架はさらに足を走らせた。

その日、昼休み。

「おおーい、想子っ」

「……っ」

教室で、他の女子生徒を話していた想子が、呼びかけるアヒルの声に振り向いた。

「何…？」

笑みを零すこともなく、どこか煩わしそうな表情で、アヒルの方を見る想子。

「今日、奈々瀬休みだろ？　なんでか、理由聞いてねえーかと思って」
「奈々瀬…？」

アヒルの問いかけに、想子が眉をひそめる。

「誰？それ」

「はっ？」

思いがけない想子の言葉に、アヒルが大きく口を開く。

「な、何言ってるんだよ！奈々瀬だよ、奈々瀬！お前ら、仲良いんだろ！？」

「うるさいわね：知らないわよ、そんな奴」

「はぁ！？」

冷たく答える想子に、さらに顔をしかめるアヒル。

「おっ前なあ！冗談もいい加減につ：！」

「また、想ちゃんとケンカしてるの？ガア」

「紺平っ」

アヒルが想子に怒鳴りあげようとしたその時、教室へと戻って来たばかりの紺平が、アヒルへと声を掛けた。

「いい加減にしなよお、もう小学生でもないんだから」

「違って！こいつが奈々瀬を知らねえーとか、意味不明なこと言うからっ：！」

「えっ：？」

アヒルの言葉に、紺平も眉をひそめる。

『想子：』

「ごめん。こいつらうるさいし、あっち行こっか」

「お、おいっ：！」

他の女子生徒とともに、その場から離れようとする想子へと、アヒルが思わず手を伸ばす。

「待てよ！想子！」

「しっこいわねえ！」

「あっ」

肩を掴み止めようとしたアヒルの右手を、想子が勢いよく振り払った。力強く振り払われたその勢いで、アヒルの胸ポケットから、言玉が零れ落ちる。

「……っ！」

落ちる言玉を見つけ、大きく目を見開く想子。

「やべやべっ」

アヒルが慌てて左手を出し、床に落ちるところだった言玉を受け止める。

「言玉……」

「へっ？」

小さく落とされる想子の声に、アヒルが顔を上げる。

「想子？」

「そう……ガアが……五十音士だったのね……」

「えっ……？」

アヒルを冷たく見つめる想子の瞳が、真っ赤に染まりあがるとともに、想子がアヒルへと右手を向けた。

「破”……！」

「何っ……！？」

想子の右手から放たれる衝撃波に、アヒルが大きく目を見開く。

「“壊せ”……！」

「うおっ……！」

言葉が響いたかと思うと、アヒルのすぐ目の前の机が勢いよく弾け飛び、アヒルへと向けられていた衝撃波が、その勢いで掻き消された。

「紺平……！」

「五十音第十音、“こ”解放っ」

アヒルが振り向くと、そこには、白い言玉を突き出した、紺平の姿があった。

「ガア、大丈夫？」

「ああ。でもなんだって想子が忌の技をっ……」

「五十音士……」

「あいつも……五十音士……」

『……っ』

言葉を交わしていたアヒルと紺平が、周囲から次々と聞こえてくる、低く響き渡る声に振り返る。教室で明るく雑談していた生徒たちが皆、想子と同じようにその瞳の色を赤くし、全員で取り囲むようにして、二人へと迫って来る。

「どうやら、想子だけじゃねえみてえだな…」

迫り来る、明らかに異様なクラスメイトたちを見つめ、表情を陰しくするアヒルと紺平。

『五十音士…五十音士…』

「ガア、これって…」

「わかんねえ。わかんねえけどっ…」

二人へ向け、クラスメイトたちが皆、一斉に右手を向ける。

『“破”…!!』

「とりあえず逃げっぞ！紺平！」

「う、うんっ…！」

二人が教室を飛び出すとともに、教室に激しい衝撃音が響き渡った。

その頃、学校、正門前。

「……………」

昼間でも開かれたままの正門の前に立った箆也は、何やら瞑想でもしている様子で、深く瞳を閉じていた。その周囲には六本の格子が浮かび、淡い赤色の光が放たれている。

「ふう…やはり駄目か…」

ゆっくりと瞳を開き、肩を落とす箆也。箆也が目を開くと同時に、格子は一本に戻り、自動的に箆也の手の中へと戻った。

「何をしているの…？」

「ん？」

後方からする声に、箆也が振り返る。

「囁」

正門前へと現れたのは、囁であった。

「あのバカの気配を“嗅ぎ当て”られないかと思ったんだが…」

「ああ、転校生くんね…」

箆也の言葉に、囁が納得した様子で頷く。

「フフ…何だかんだで、気にしてるんじゃない…」

「事態が事態だからな。厄介なことに巻き込まれて、こちらの足を引っ張られても困る」

「フフフ…」

素っ気なく答える箆也へ、微笑みを向ける囁。

「で、転校生くんの居場所は知れたのかしら…？」

「駄目だ。僕の言葉で、この言ノ葉町全域を調べられるんだが、まるで気配は感じられなかった」

「じゃあ、転校生くんはこの町には居ないってこと…？」

「そうなるな」

箆也が頷きながら、右手に持った格子を言玉の姿へと戻す。

「今日は奈々瀬さんまでお休みだし…何となく、いい予感はないわね…」

「……………」

囁のその言葉に、箆也も表情を曇らせる。

『グ…グア…ア…』

「んっ？」

前方から聞こえてくる、いくつも重なった、声にならない声に気付き、箆也が囁から視線を移し、再び前方を見る。そこには、見た目から柄の悪そうな連中が、集団で並んでいた。だがその者たちに表情はなく、皆、同じように瞳が赤い。

「この者たちは…」

「確か、あのリーゼントくんの子分さんたちね…」

「ん…？」

アニキの子分たちの並ぶその後ろにも、同じように瞳を赤くした、町も者らしき主婦や、商店街の店の者たちが、次々と集まってきていた。

『五十音士…五十音士…』

「これは…」

まるで取り憑かれたように、五十音士の語を繰り返す町の者たちに、箆也が眉をひそめる。

「確かに、いい予感はないな」

「フフフ…でしょう…？」

この事態にも楽しげに微笑みながら、囁が制服のポケットから言玉を取り出す。

「第六音“か”、解放っ」

「第十一音…“さ”解放…」

それぞれ言玉から姿を変えた格子と横笛を身構える、箆也と囁。

『“破”…！』

『……………！』

武器を構えた二人へ、町人たちが襲いかかった。

「同じく学校、屋上。」

「ああゝ」

屋上に大の字になって寝転び、本を読んでいるのは、アヒルの兄、スズメであった。

「ヒトミいゝ、どうしてお前は、そこまで先生のことをおゝっ」

スズメが読んでいるのは勿論、スズメの愛読書『恋盲腸』である。スズメは恋盲腸を読みながら、内容に浸るように、その表情をころころと変化させていく。

『グウウ…』

「んあっ？」

すぐ近くから響いてくる声に、本だけに集中していたスズメが上体を起こし、顔を上げる。

『グア…ア…ウ…』

屋上の入口から続々とやって来る、学校の生徒たち。皆、赤い瞳を見せ、言葉にもならない声を発して、スズメの方へと向かってくる。

「ふうゝっ」

スズメが息をつきながら、本を閉じて、自分のすぐ横へと置く。

「俺の、ヒトミとのデロ甘読書タイム邪魔しようたあ、いい度胸だなあ。ああっ？」

向かってくる生徒たちに、スズメは強く睨みをきかせた。

同じく学校、オカルト同好会部室。

「今日の議題…何にしようか…？雅くん…」

「そうですねえ」

昼休みから部室に集まった雅とツバメは、オカルト同好会の部長、副部長として、放課後の部活動内容の相談を行っていた。

「前に議題候補に挙がってたのは、“口裂け女の口紅の消費量は、常人の二倍かどうか”についてですが…」

雅が眼鏡を押し上げながら、真剣にノートをめくる。

「ん…？」

だが不意に、その表情が曇り、雅は席を立ち上がって、部室の扉へと歩み寄った。

「どうかしたの…？ 雅くん…」

「いえ…」

扉に取り付けられた窓から、外の廊下を見て、さらに眉をひそめる雅。

「君はここでゆっくりと、議題の続きでも考えていて下さい。ツバメ君」

雅がそつと扉を開き、廊下へと出る。

「ほんの、些細なことですから…」

『グア…ア…アア…』

廊下へと出た雅の前には、赤い瞳を見せた生徒や教師たちが立ち並んでいた。

『ハア…！ ハア…！ ハア…！』

廊下を走り、階段を駆け降りて、追いかけてくるクラスメイトたちから必死に逃げる、アヒルと紺平。

「破^ハ」！

「うおっ！」

衝撃波により、廊下の窓のガラスが碎け散ると、すぐ横を駆けていたアヒルが慌てて横へ逸れ、飛び散るガラスの破片を避けた。

「無茶すんなあ〜」

先程から、クラスメイトたちが所構わず飛ばす衝撃波に、教室や廊下は何度も吹き飛ばされ、学校内は大惨事である。

「これじゃ学校、修理費だけで大損害だなあ」

「そんなこと、言ってる場合!？」

暢気に周囲を見回しているアヒルに、横を駆ける紺平が、少し怒るように言い放つ。

「何とかしないと、このままじゃやられちゃうよ!？」

「つつつても、俺は言玉使えねえーし!」

悩み込む表情を見せたアヒルが、走りながら、後方を振り返る。

アヒルたちを追いかけてくるのは、想子を初めとした、アヒルのよく知るクラスメイトの顔ぶれ。

「あいつら、攻撃するわけにもいかねえーしっ」

アヒルの額から、汗が流れ落ちる。

「とにかく外に出よう!」

「わかった!」

頷きあつたアヒルと紺平が、大きく方向を転換し、昇降口を上履きのまま通り抜けて、校舎の外へと出る。そのまま校舎沿いに足を進め、裏庭へと出る二人。

「この辺で一旦、隠れっ!」

「ハア!ハア!」

「あっ?」

裏庭周辺で隠れる場所を探していたアヒルが、校舎の曲がり角の向こうから近付いてくる息遣いに気付き、そっと眉をひそめる。

「だっ!」

「誰っ!？」

「うおおおっ!」

「ガァ!」

角の向こうを覗き込んだとしたアヒルが、角から飛び出してくる鋭い刃に、焦りの声をあげる。刃を向けられるアヒルに、思わず身を乗り出す紺平。

「って、あれ?朝比奈くん?」

「な、奈々瀬っ!」

だが、アヒルの喉元寸前まで突き付けられた、その刃は、七架の薙刀の刃であった。驚く七架に対し、アヒルは青白くなった表情で、七架を見る。

「きよ、今日も絶好のお茶漬け日和だね…！朝比奈くん！」

「お、俺ん家は卵かけご飯だったけどな…っ！か早く、刃引いてっ…」

「あ、ご、ごごごめん！」

アヒルに言われ、七架が慌てて薙刀を引っ込める。

「ガア、平気？」

「死ぬかと思った…」

「ご、ごめんね！ま、また町の人かと思って、ついっ…」

「また？」

七架のその言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「またって、もしかしてお前も、あいつらに…んあ？」

「ハアっ…ハアっ…」

七架に問いかけようとしたアヒルが、七架の横に居る、七架の手を強く握り締めたまま、肩を大きく揺らして息を乱している少年、六騎に気付く。

「誰かと思えば、クソガキじゃねえか」

「誰がクソガキだ！目つき悪男！」

「だあれが目つき悪男じゃい！」

「こら、六騎っ」

「大人げないよ、ガア」

激しく睨み合うアヒルと六騎に、紺平と七架がそれぞれ注意をする。

「けど、どうしたの？奈々瀬さん。学校休みだったのに、こんなところで…」

「それが…」

紺平の問いかけに、七架の表情が曇る。

「朝起きたら、両親の様子がおかしくて…忌の技で、急に襲いかか

つてきて…」

「……っ」

七架の言葉を聞いて事態を思い出したのか、六騎がさらにきつく、七架の手を握り締める。

「それで六騎を連れて、必死に外へ逃げたんだけど…町の人たちもそんな状態で、次々と…」

俯いた七架が、途中でその言葉を止める。

「学校に來れば、朝比奈くんや皆と合流出来るかと思って…」

「想ちゃんたちと同じだね…」

「ああ」

「えっ！？想子ちゃんも!?!」

「うん」

驚いた様子で問いかける七架に、紺平が厳しい表情で頷きかける。

「想子だけじゃねえ。学校に居る皆が皆、忌に取り憑かれちまってる…」

「そんなんっ…」

深刻な事態に、七架も険しい表情を見せる。

「でも、どうしてこんなっ…」

「神!」

「……っ」

皆が考え込むように俯いたその時、裏庭へと新たな声が響いて、アヒルたちが一斉に顔を上げた。

「箆也!囁!」

アヒルたちのもとへと駆け込んでくるのは、それぞれ武器を構え、多少ばかり後方を気にする素振りを見せた、箆也と囁であった。

「箆也!クラスの連中がっ…!」

「ああ、わかっている」

「同じように忌に取り憑かれた状態の町人さんたちが、わんさかと学校の前に集まってきているわ…」

「学校へ?」

囁の言葉に、眉をひそめるアヒル。

「何だって学校に…」

「それはやっぱり…私たちを捕らえるため、じゃないかしら…？ フフ…」

戸惑いの表情を見せるアヒルに、囁が不気味に微笑みかける。

「昨日の人たちと、何か関係あるのかな？」

「わからない。だがこのままここに居ては、僕たちは確実にやられる」

「町人や学校の子たちに、バンバン攻撃出来るはずないものね…」
七架の問いに答えながら、厳しい表情を見せる箆也。

「とにかく、学校はもう駄目だ。何とかこの場をくぐり抜けて、為^いの神の店まで行こう」

「ああ」

箆也の言葉に、アヒルが頷く。

「囁、あなたは奈々瀬と小泉のフォローを」

「わかったわ…」

「神、あなたは僕と一緒に…」

「あっ」

「ん？」

アヒルへと声をかけていた箆也が、急に思い出したような声を発するアヒルに、首を傾げる。

「何…」

「スー兄とツー兄も学校に居ndった！俺、ちょっと行って連れてくっから、先行っててくれ！」

「あ、おい！神…！」

箆也が止める間もなく、アヒルは再び、校舎の入口へ向けて、駆け出していくてしまう。

「また、あの神はっ…」

「フフフ…我が神は、無鉄砲が売りだから…」

深々と頭を抱える箆也の横で、囁がそっと微笑む。

「あなたたちは先に行け。神は僕が何とかする」

「わかったわ」

「気をつけてね、神月くん」

「ああ」

手短に言葉を交わすと、籠也はアヒルの後を追ひ、囁たちは学校の外へと駆け出して行った。

学校、廊下。

「満^みちれ」

『グウ：！』

迫り来ていた生徒たちの前面に、滝のように流れる水の壁を作り、これ以上、接近出来なくさせる雅。

「ふう」

眼鏡を押し上げ、ホッと一息つく。

「真っ向から攻撃出来ないというのも、結構辛いものですね」

相手は忌に取り憑かれている様子ではあるが、元はこの学校の生徒や教師。その者たちに対し、力を向けるわけにもいかず、そして攻撃を喰らうわけにもいかなかったため、雅は難儀していた。

「学校がこの状態ということは、朝比奈君たちも…」

「おおーい！」

「ん？」

眉をひそめた雅が、近付いてくる大きな声に気付き、顔を上げる。

「スー兄！ ツー兄！ どこだぁ！？」

「朝比奈君？」

「へっ？ あ、雅さん！」

裏庭から校舎内へと戻って来たアヒルが、廊下で戦闘の最中である雅を見つけ、足早に駆け寄っていく。

「そーいや、雅さんも居たんだっけ」

「何か？」

「あ、い、いやっ」

すっかり雅の存在を忘れていたとも言えず、アヒルは引きつった笑みで軽く首を横に振る。

「ご無事でしたか。他の皆さんは？」

「扇子野郎のところに避難するって。たぶんもう、学校出てる頃だと

思う」

「そうですか」

アヒルの言葉に、雅が安心したように笑う。

「なら何故、朝比奈君はここへ？」

「スー兄とツー兄、探しててさ」

「スズメ君とツバメ君を…？」

「ああ。三年の教室って、この辺だろ？雅さん、知らね？」

「ああー…」

問いかけるアヒルに、雅は何故か少し、困ったような表情を見せる。

「彼らなら大じょっ…いえ、彼らなら僕が連れて行きますので、朝比奈君は早くこの場を避難して下さい」

「へっ？」

雅の言葉に、アヒルが目を丸くする。

「なんで？俺も一緒に探すけど？」

「いえ、それはそのっ…」

『グア…アアっ…』

『……っ』

不思議そうに首を傾げるアヒルに、雅が声を詰まらせていたその時、アヒルの背後から不気味な声が響き、二人はすぐに表情を鋭くした。

「追いつかれたか…！」

アヒルの後方から迫り来るのは、先程までアヒルを追いかけいていた、アヒルのクラスメイトの面々であった。やって来た連中を見て、アヒルが陰しい表情を見せる。

「朝比奈君、この場は僕に任せて、君は早く為介さんの所へっ」

「へっ？」

右手の言玉を握り直しながら、急かすように言い放つ雅に、アヒルが眉をひそめる。

「なんだよ？さっきから妙に帰れ帰れって言っ…あっ」

「グアっ…ア…」

雅の方を振り向いたアヒルが、雅の作った水の壁を破り、雅へと右手を向けている生徒に気付く。

「危ねえ！雅さんっ…！」

「えっ…？」

「“破”！」

『ううう…！』

生徒の一人が雅へ向け衝撃波を放ったその時、アヒルが雅を押しながら横へと飛び、近くの窓ガラスを突き破って、二階から校舎の外へと飛び落ちる。校舎の外へと飛び出した二人は、そのまま学校の中庭にある花壇へと落ちた。

「痛ってえ〜！」

花や土がクツシヨンになったといっても、相当に体に走る痛みに、アヒルが起き上がりながら、顔をしかめる。

「大丈夫か？雅さん」

「ああ、はい。すみません、朝比奈くっ…」

『グアア…』

「うっ…！」

アヒルに礼を言おうと顔を上げた雅であったが、二人の落ちた花壇を、すでに取り囲んでいる忌に取り憑かれた生徒たちに、その表情を引きつる。

「こいつらっ…！」

「クっ…」

アヒルも険しい表情を見せる中、雅が力を使おうと、言玉を握り締めていた右手を上げる。

「んっ？」

だが右手に、言玉を持っている感覚がなく、雅は戸惑うように下を見た。先程まで右手の中にあったはずの、雅の青い言玉がなくなっている。

「落ちた時に…？どこへ…あっ」

周囲を見回した雅が、花壇の外に転がっている言玉に気付く。

「言玉っ…」

『“破”！』

「あっ…！」

雅が言玉を拾いに行く間もなく、二人の前方に立つ数人の生徒たちが、アヒルたちへ向け、一斉に衝撃波を放った。向かってくる巨大な衝撃波に、雅が大きく目を見開く。

「しまっ…」

「……っ」

「なっ…！？」

焦りの表情を見せる雅の前に、アヒルが立ち塞がる。自分を庇うようにして立つアヒルに、さらに驚きの表情を見せる雅。

「朝比奈君！何をっ…！」

「クっ…！」

言玉も使えないアヒルは、覚悟を決めたように、強く唇を噛み締めた。

「“貫^{つらぬ}け”…」

——パアアン！

アヒルへと衝撃波が直撃しようとしたまさにその時、横から、目にも留らぬ速さで駆け抜けてきた金色の光が、衝撃波をあっという間に碎き、そのまま遠くへと駆け抜けていく。

『グアアっ…！』

「えっ…？」

衝撃波の碎かれた爆風に押され、後方へと雪崩れ込んでいく生徒たち。きつく唇を噛み締めていたアヒルも、戸惑いの表情を見せ、ゆっくりと光の飛んできた方向を振り向いた。

「あっ…」

そこに見える人影に、アヒルが目を見張る。

「ツ―につ…」

「“睡魔”」
すいま

「えっ…?」

その者の名を呼ぼうとしたアヒルに届く、もう一つの言葉。

「なっ……ん……」

淡い金色の光に包まれたアヒルは、すぐさまその瞳を閉じ、力なく前方へと倒れ込んだ。

「よっ」

倒れ込むアヒルを、アヒルの前方へと現れた人物が、しっかりと受け止める。

「ふいっ」

アヒルを受け止め、大きく一息をついたのは、スズメであった。

「悪いいな、アヒル。まだバレるわけにはいかねえーんだ」

「スズメ君…」

そう言いながら、深く瞳を閉じたアヒルへ微笑みかけるスズメを、雅が少し茫然とした状態で見つめる。

「大丈夫…? 雅くん…」

「ツバメ君…」

衝撃波を破壊した光の飛んできた方から、雅たちのもとへと歩み寄って来るのは、ツバメである。

「はい…これ…」

「あ、すみません」

ツバメから、手放していた言玉を受け取り、雅は礼を言った。

「学校中が忌に取り憑かれるなんて…結構、びっくりな事態だね…」

「ああ。まっ、可愛い女の子たちに襲いかかれんのは、結構萌えたけどっ」

「そのまま呪い死んじやえば良かったのに…」

「いっやあー！俺、呪い死にだけはしたくない！」

「……………」

まだ周囲には、忌に取り憑かれた連中がわんさかと居るとい

に、緊張感のまるでない様子で言葉を交わしているスズメとツバメを見つめ、雅がどこか呆気に取られた表情を見せる。

「相変わらずですね、お二人は」

「動けるか？雅」

「ええ、全く問題ありません」

スズメの問いかけに答えながら、雅が花壇の真ん中で立ち上がる。

「じゃ、こいつ連れて、とっとと為介んところ行ってくれ」

「えっ？」

そう言ってアヒルを託すスズメに、少し眉をひそめる雅。

「ですが…」

「ここは僕たちが呪い抑えるから…」

「俺は“呪い抑え”は出来ねえぞ？」

不気味に微笑むツバメに、スズメが横から口を挟む。

「お前も雅と一緒に、学校を出ろ」

スズメが誰もいない、中庭の大きな木へ向け、声を掛ける。

「籠也」

「……っ」

スズメに呼ばれると同時に、木の陰から出てきたのは、厳しい表情を見せた籠也であった。アヒルを追いかけてきたところを、この場に遭遇したようである。

「神月君」

「雅だけじゃ、アヒル連れて逃げんのは厳しいからな」

「あなた、たちは…」

疑うような、戸惑うような顔を見せながら、籠也がスズメとツバメへと歩み寄る。

「あなたたちは…一体…」

「神月君、彼らはっ…」

「余計なことは言うな、雅」

「……っ」

籠也に何やら話そうとする雅であったが、その言葉はスズメによ

り止められた。

「時期が来れば、いずれわかることだ」

「今はまだ…何も話せはしないよ…」

「……………」

向けられるスズメとツバメの突き刺すような視線に、問い詰めることも許されず、籠也は険しい表情を見せたまま黙り込む。

『グア…アア…』

「ん？」

先程の衝撃で雪崩れ込んでいた連中が、徐々に立ち上がっていく姿を確認し、スズメがそっと眉をひそめる。

「ゆっくり閑談してる時間はなさそうだね…」

「ああ。雅、行ってくれ」

「わかりました」

雅が背中にアヒルを背負い、二人へとその背を向ける。

「さあ、神月君」

「あ、ああっ」

雅に言われ、その場を離れようとしながらも、籠也はやはり気になっている様子で、スズメとツバメの方を振り返る。

「弟を頼んだぜえ？」

そんな籠也に気付き、スズメが景気のいい笑みを向ける。

「安附っ」

「……………」

呼ばれるその言葉に、さらに眉をひそめながらも、籠也は二人に背を向け、アヒルを背負った雅とともに、門のある方向へと走り出していった。

「さあ…てとっ」

去っていく籠也たちを見送ったスズメが、再び前方を振り向き、気を取り直すように声を出す。

「じゃあま、久々に暴れますかあっ」

「程々にね…」

そう言葉を交わしながら、二人はそれぞれのポケットから、金色の言玉を取り出した。

言ノ葉町、町の小さな何でも屋『いどばた』。

『グア：アア：アア：』

店の周囲には、ふらふらとした足取りで、彷徨うように町中を徘徊する町人たちの姿があった。

「……っ」

店の中では、固く閉ざしたカーテンの隙間から外の様子をうかがい、囁がそつと目を細める。

「どうだ？囁」

「大丈夫：：“遮^{さへぎ}れ”の言葉で、この店全体を外界と遮断したから：」
カーテンを閉じた囁が、和室の広間へと戻り、箆也たちの座っているテーブルの周りへと、ゆっくりと腰を下ろす。

「忌に取り憑かれた程度の人間じゃ：入って来られないはずよ：」
「そうか：」

囁の言葉に、箆也は少し安心するように肩を落とした。

「昼間っからカーテン閉め切ってる、何かこうっ、怪談話とかしたくなっちゃうよねえ！」

「お一人でどうぞ」

「いっやあゝ！雅クン、冷たいいゝ！」

「……………」

雅に冷たい言葉を投げかけられ、激しく落ち込んでいる為介の、緊迫とは程遠いその様子に、箆也が勢いよく表情を引きつる。

「この緊急時に、よくそんなに暢気でいられるものだな」

「人間、少しは余裕残しとかないと、頭回らないんだよね？神月クウ〜ン」

「まあ：忌に取り憑かれた人間だらけの町なんて見たら：いやでも

余裕なんてなくなるわよね…」

囁がそう言いながら、深く肩を落とす。

「町中、忌だらけ、かぁ…」

同じようにテーブルを囲んで座っている紺平が、浮かぬ表情を見せる。

「先生も皆も、朝から少し変だったもんね…アニキさんは子分がいなくて騒いでたし…」

「でも何故、リーゼントくんだけ平気だったのかしら…?」

「さあ? 忌もあんなのには、取り憑きたくなかったんじゃないか?」不思議がる囁に、素っ気なく答える箆也。

「ともかく、今はこの事態を…」

「ん、んんっ」

『……っ』

静かな部屋に響き渡る寝息らしきその声に、箆也たちが皆、一斉に振り返る。部屋の隅には、布団もなしに寝転がったアヒルが、すやすやと気持ちよさそうに寝息を立てていた。

「中華人民、共和国うっ」

「また国名…」

相変わらず意味のわからない寝言を呟くアヒルに、箆也が呆れた表情を見せる。

「っていうか、いつまで寝てんのおっ?」

「ぶふっ!」

為介が持っていた扇子を、寝ているアヒルの顔面に勢いよく叩きつけた。

「痛ってえなあ! クソ親父! 今日は何の野菜、持ってきたやがっ…!」

勢いよく起き上がったアヒルが、降り注がれている皆の視線に気づき、目を丸くする。

「ここはどこ? 俺は誰?」

「何言ってるのさっ」

「ここは地獄への入口よ：フフフっ…」

すっかり寝惚けている様子のアヒルに、紺平が呆れた視線を、囁
が不気味な微笑みを向ける。

「神月クンと雅クンが、忌だらけの学校から、無事に君をここまで
連れて来てくれたんだよぉ」

「忌だらけ？ ああぁ、そう言われてみると、そんなようなことが
あったようなっ…」

軽く頭を押さえながら、アヒルが色々と思いつくのを首を捻る。

「何か、記憶が曖昧だなあ。ええーっと、奈々瀬と合流して確かあ、
そっからスー兄とツー兄を探しにっ…ん？」

アヒルが、不意に顔を上げる。

「って、そーいやスー兄とツー兄は！？」

「えっ…？」

勢いよく振り向き、アヒルがまっすぐに箆也を見る。

「あ…っ…」

言葉に詰まった箆也が、雅の方へかすかに視線を送ると、雅はア
ヒルに気付かれないように、そっと首を横に振った。その雅の様子
を見て、箆也が目を細める。

「こ、ここではないが、安全な場所へ避難させた。問題ない」

「そっか。良かったあ」

箆也の言葉を疑うことなく受け入れ、アヒルが安心しきった笑顔
を見せる。

「ま、事態は全然良くない状況だけどねえ」

「…っ」

為介の言葉に、すぐさま険しい表情を作るアヒル。

「町中の人間に忌が取り憑くなんて、一体どうなってんだよ？ 昨日
の連中とやっぱ、関係あんのか？」

「そんなこと、僕にもわかんないよぉ」

問いかけを続けるアヒルに、為介も大きく首を横に振る。

「とりあえず、調べられたことの報告だけっ」

「んっ？」

為介がテーブルの上に、紙のようなものを置くと、部屋の隅にいたアヒルもテーブルへと身を寄せ、箆也たちとともにそれを見つめた。

「この子、昨日の…」

差し出された紙の右上には、昨日、アヒルたちが出会った少女、弓の写真が記載されていた。

「弓削弓、十七歳。“ゆ”の力を持つ、“由守”の五十音士」

「やはり由守だったのか」

「うん」

箆也の言葉に頷きながら、為介がさらに二枚の紙を差し出す。

「そしてこっちが、“也守”と“与守”の五十音士くんたち」

「ん？」

同じように紙に記載されている顔写真を見つけ、アヒルが眉をひそめる。

「何だあ？この鉄仮面。これじゃ、顔わかんねえじゃねえか」

「ホントだねえ」

“与守”と書かれた紙の方に入っている、分厚い仮面をつけた者の顔写真を、まじまじと見つめるアヒルと紺平。確かに、この写真だけでは、年齢も性別もまるでわからない。

「八城刃…横川鎧…」

紙を見つめた囁が、二人の名を口にする。

「刃と鎧…昨日、奈々瀬さんが聞いたっていう、彼女の呟きとも一致してるわね…」

「ああ」

「ではやはり、この二人に何かが起こり、そこから彼女だけが逃げ延びてきたと…？」

「そうだろうねえ」

問いかける雅に、為介が深々と頷く。

「一体、彼らに何が…？」

「そこまではわかんないよお。何があったのかは、彼女が目覚めてから聞くしか…」

「起きたよ！」

「へえっ？」

そこへ、タイミングよく、隣の部屋から七架が駆け込んでくる。

「起きたよ！あの人！」

『……っ』

七架のその言葉に、アヒルたちは皆顔を見合わせ、大きく頷き合った。

Word. 35 安國、包圍 (4)

『いどばた』一室。

「ん…」

「大丈夫？ ゆっくりと起き上がって」

「ありが、とう…」

七架の言葉通り、目を覚ました弓は、七架に支えられながら、長い間横になっていた布団から、ゆっくりと体を起こした。傷は塞がっているが、その表情からは、まだ疲労が見て取れる。

「気分はどうだい？ 弓削弓さんっ」

「えっ…？」

自分の名を知る為介に、弓が戸惑うように声を発する。

「なんで、私の名前…ここ、は…？」

「僕の店だよぉ、何でも屋さんっ」

「何でも屋…？」

戸惑うように部屋を見回した弓に、扇子を振りながら、為介が明るく答える。

「覚えていますか？ 君は二人組の男に追われ、この店の裏の広場で、戦闘を行っていたんです」

「戦、闘…」

為介の横から、状況を説明する雅に、弓が少し考えるように俯いた。

「あの者たちは何者だ？ 何故、追われていた？」

「ストレート過ぎよ…籠也…」

鋭く問いかける籠也に、囁が注意するように声を掛ける。

「のんびりと話している場合ではないだろう」

「まあまあ、別にゆっくり話したっていいじゃねえか。追われてるわけでもねえーんだしっ」

「あっ…」

さらに籠也へと声を掛けるアヒルの姿を見て、弓がハツとした表情を見せる。

「あなたは…」

——大丈夫か！？おい！——

「あの、時の…」

アヒルに見覚えのある様子で、声を発する弓。どうやら、アヒルが助けてくれたことを、覚えているようである。

「彼らがあの二人を追い払って、君を介抱してくれたんだよね？」
「追い払って…？」

為介の言葉に、弓は戸惑うように眉をひそめる。

「あなたがたは…一体…」

「俺？俺はあ…」

「朝比奈アヒル。五十音第一音“あ”の力を持つ、安の神だ」
「神…？」

アヒルの代わりに答える籠也に、弓が驚きの表情を見せる。

「まあ、今は言葉一つ使えないけれど…フフフ…」

「うっせえなあ」

「そ、それは失礼いたしました！」

「へっ？」

ひっそりと言葉を付け加える囁に、アヒルが顔をしかめていたその時、弓が勢いよく布団の中から体を出し、畳の上に正座して、アヒルへと深々と頭を下げた。頭を下げる弓に、アヒルが目丸くする。

「な、何っ…」

「神をあのような事態に巻き込んだ上、私のような者の介抱まで…！何とお詫びしてよいか…！」

「おいおいおいっ」

必死に言葉を連ねる弓に、アヒルが困ったように声を発する。

「やめろって。俺、確かに神だけど、そんな偉そうなもんでもねえしっ」

「そうよ…頭を下げる価値なんて、微塵もないわ…」

「そうだ。存分に軽んじろ」

「お前らね」

アヒルに続くように言葉を述べる囁と箆也であったが、その失礼極まりない言動に、アヒルが思わず表情を引きつる。

「三言衆、ヤ行の五十音士たちは、古くからの伝統を重んじる習慣があるからねえ…神様を崇めちゃうのも無理ないよお」

「ま、まあとにかく、顔上げろって」

「は、はい…申し訳ありません…」

まだかしこまった態度は抜けないながらも、アヒルの言葉に、弓はやつと深々と下げていた頭を上げた。

「色々聞きたいことがあるんだ」

顔を上げた弓の正面へと、アヒルが腰を下ろす。

「お前が追われていたあの二人組、あいつらは一体、何者だ？　なんで、お前は追われていた？」

「それが…」

アヒルの問いかけに、弓が厳しい表情を作る。

「わから…ないんです…」

「わからない？」

「はい…申し訳ありません…」

聞き返すアヒルに、弓がまたしても謝罪の言葉を述べる。

「わからないとは、どういうことだ？」

アヒルの後方から、箆也が鋭く問いかける。

「いつものように、仲間と共に…忌退治をしていた夜でした…満月の、綺麗な夜…」

弓は自身でも戸惑いながら、ゆっくりと話を始める。

「忌退治が終わって、帰ろうとしたその時…私たちは、黒い影のようなものに…襲われたんです…」

「影…？」

「はい…仲間の助けで、私だけは何とか…その場から逃げる事が出来たのですが…」

そつと曇る、弓の表情。

「刃と鎧は…その影に呑み込まれて…」

弓が震える拳を、強く握り締める。

「あ、刃と鎧というのはっ…」

「君のお仲間さんだねえ…？君と同じヤ行の五十音士、也守と与守のっ」

「は、はい…」

為介の言葉に、弓が大きく頷く。

「一人になって…どうしていいのか、わからなくて…とりあえず、韻へ報告にと思っていた時、あの二人が現れて…急に襲ってきたんです…」

「あの二人に見覚えは…？」

「いえ、まったく…」

囁の問いかけに、弓が大きく首を横に振る。

「忌の気配がして、忌の言葉を使って…忌のように、体を黒い霧に変化させることくらいしか…」

「成程ねえ。それじゃあ確かに、何もわからないだろうなあ」

弓の話が終わったところで、為介が納得したように頷く。

「結局、奴等の正体は知れぬままか」

「そうだねえ…」

壁にもたれかかった箆也が、少し肩を落とす。

「申し訳、ありません…」

「お前が謝る必要はねえって。お前が悪いわけじゃねえんだから」
またしても謝罪する弓に、アヒルは明るく笑みを向けた。

「でも手がかりは無いままだし…これから、どうするの…？アヒルん…」

「どうする？箆也」

「少しは自分で考えろ」

囁の問いかけを、そのまま箆也へと持ってくるアヒルに、箆也が呆れた様子で言い放つ。

「とりあえず、僕が韻に出向いて、今回のことを報告してくる。和音なら何か知っているかも知れない」

腕を組んだまま、冷静に答える箆也。

「それもそうだな」

「それまでの間、神たちはここで、その者と共に待機を…」

「ちょっと待ってえ」

「ん？」

割って入って来る為介の声に、箆也が眉をひそめる。

「何だ？」

「そう何でもかんでもポンポン、韻に報告するのはどうかと思ってさあ」

「何…？」

為介の言葉に、箆也が眉尻を吊り上げる。

「どういう意味だ？」

「いやねえ、僕は別にどうでもいいんだけどお、恵さんが言ったんだあ」

扇子を閉じ、為介が鋭く目を細める。

「“あまり韻を信用するな”って」

『……っ』

為介のその言葉に、箆也と囁の表情が、同時に曇る。

「恵先生が？ なんだよ？ どういうことだ？」

「はあ…」

大きく首を傾げるアヒルの後ろで、箆也が深々と溜息をつく。

「そんな何の根拠もない言葉を、真に受けろというのか？」

箆也がしかめた表情を、為介へと向ける。

「僕から言わせてもらえば、あなたやあの女教師の方が余程、信用出来ない」

「ありゃ、ヒドイっ」

冷たく言葉を吐き捨てる箆也に、為介が余裕の笑みを浮かべる。

「とにかく、この件は韻へ…んっ…?」

「箆也?」

急に眉をひそめる箆也に、アヒルが首を傾げる。

「全員! 襖から離れろ!」

『えっ…?』

急に身を乗り出し、強く叫ぶ箆也に、皆が戸惑ったその時。

——バアアアアン!

『なっ…!?!』

縁側へと繋がる襖を突き破り、緑色の光線のようなものが部屋へと飛び込んできた。

「うおっとと!」

アヒルが必死にその場で寝そべり、飛び込んできた光線を、ぎりぎりのところで避ける。皆の避けた光線は、そのまま部屋の壁を突き破り、店の外まで吹き飛んでいった。

「ああゝあ…僕のお家が…」

「んなこと言ってる場合かよ! あ! あいつはっ…!?!」

壁に大きくあいた穴を見つめ、がっくりと肩を落とす為介に突っ込みを入れながら、アヒルが自分の前に座っていた弓を気にかける。
「こっちは大丈夫だよ!」

弓を後方へと引っ張った七架が、茫然としている弓とは異なり、アヒルへとしっかりとした声を掛ける。

「ふうっ…良かった。敵か?」

「忌なら、私の言葉で遮ってたはずだけれど…」

起き上がりながら問いかけるアヒルに、囁は表情を曇らせ、言玉を横笛へと変えた。同じく、言玉を格子の姿へと変えた箆也が、壁際から、突き破られた襖の外へと飛び出していく。

「何者だっ…!?!」

格子を身構え、強く言い放つ箆也。

「なっ…!?!」

「あっ」

縁側へと出た箆也が、庭に立っているその人物を見て、大きく目を見開く。部屋の中から外を見たアヒルも、同じように驚きの表情を見せた。

「ザ、ザベスううっ!?!」

「エリザよ。久し振りね、朝比奈アヒル」

為介の家の庭へと現れたのは、金色の巻き髪の眩しい、緑色の瞳の、日本人離れた顔立ちの少女。アヒルもよく知る、エリザであった。

「誰、だろ…?」

「衣沢・アレクサンドラ・メアリー・エリザベス。衣団えだんを束ねる、

“衣えの神”さんだよ」

「神?あの人も?」

「……っ」

為介の言葉を聞き、驚く七架の前で、弓もそつと目を細める。

「おっ前、何ド派手にやって来てんだよ? いっくら文化の違いつたって、限度ってもんがっ…」

「お邪魔するわよ」

「お、おいっ!」

あれこれと言葉を掛けるアヒルの横を素通りし、靴のまま、堂々と家の中へと上がり込むエリザ。縁側に立ち、皆の居る部屋を見回す。

「ん?」

「えっ…?」

弓と目を合かし、そつと眉をひそめるエリザ。そんなエリザの様子に、弓が戸惑う。

「慧けい」

「ここに」

エリザが呼びかけると、エリザのすぐ横に、派手な忍者装束を纏った、黒髪の少女が姿を現す。エリザの付き人の慧左衛門子であった。

「彼女？」

「はい、恐らく。顔写真と一致します」

「……？」

エリザと慧の会話を聞きながら、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「由守の、弓削弓ね？」

「えっ？」

すぐ目の前に立ったエリザに問いかけられ、顔を上げた弓が目丸くする。

「あ、はい…そ、そうですが…」

「韻へ引き渡すため、あなたを拘束するわ」

「えっ…？」

『なっ…！』

思いがけないエリザの言葉に、アヒルや箆也たちが皆、一斉に驚きの表情を見せた。

「エリザ！何をっ…！」

「これは我々、衣団が、韻から受けた命。神である君でも口出しは無用よ、アヒル」

「韻から…？」

声を荒げたアヒルへ、エリザが冷静な言葉を返す。アヒルの横では、箆也が戸惑いの表情を見せていた。

「為介さん…」

「………」

厳しい表情で振り向く雅に、黙り込んだまま、特に動こうとはしない為介。

「さあ、大人しく私たちと一緒にっ…」

「ちょ、ちよつと待てよ！」

弓を連れて行こうとしたエリザを、アヒルが弓とエリザの間に割って入りながら、強く止める。

「こ、こいつは変な連中に狙われてたんだぞ！？それに、俺の町が今、忌だらけになってて…！」

「一連のことに關しての対処は、彼女を韻へ連行した後、韻が主体となっていくわ」

まっすぐにアヒルを見つめるエリザが、勢いよくアヒルの言葉を遮る。

「君たちは、それに従えばいい」

「んなっ…！」

強く言い放つエリザに、顔をしかめるアヒル。

「んなもん、大人しく待ってられる状況じゃっ…！」

「彼女を連行する理由は何…？」

アヒルが怒鳴りあげようとしたその時、エリザの後方から、囁が冷静に問いかけた。

「どちらかといえば、彼女は被害者…保護ならともかく、拘束されるのはおかしいんじゃない？」

「ここ三日の間で、元五十音士の人間が、行方不明になる事件が数件、続いているわ」

エリザが囁の方を振り返り、その疑問へと答える。

「元五十音士が…？」

「そう。そして、その失踪現場数ヶ所で、同じ五十音士の目撃情報が増えている」

再び前を向き、弓を見つめるエリザ。

「“也守” 八城刃と、“与守” 横川鎧の目撃情報がね」

「えっ…！？」

エリザのその言葉に、弓が衝撃を走らせる。

「成程。それで、同じくや行五十音士の弓さんを取り調べようってわけ」

「そ、そんなっ…!」

補足するように言う為介に、声を荒げた弓が、思わず身を乗り出す。

「二人がそんな失踪とか、そんなことに関係しているはずがありません…!」

「そうだ。第一、その二人自身も、謎の黒い影に襲われて、行方不明に…」

「その話、誰から聞いたの?」

口を挟もうとした箆也の言葉を、エリザが勢いよく遮る。

「それは…」

「彼女でしょう?そして、その襲われたって現場を目撃したのも、彼女だけ」

「えっ…」

再び振り向くエリザの、その鋭い視線を向けられ、どこか怯えるように、肩を震わせる弓。

「そ、そんなっ…初めから弓さんを疑うような言い方…!」

「也守と与守が関与してるのよ。由守を疑うのは当然のことだわ」

怯える弓を気遣い、声をあげる七架であったが、七架の発言もエリザの前に、あっさりと掻き消された。

「とにかく、韻に行ってすべてを話せば、真実は知れるわ」

エリザが弓へと、白い手を差し出す。

「さあ、私と一緒にっ」

「うっ…」

強く言うエリザに、身を小さく丸め、さらに怯えた表情を見せる弓。

「素直に従って。でないと本当に、無理やり力で拘束することに…」

「エリザ」

「……っ?」

弓を説得しようとして声を掛けていたエリザが、横から呼びかけられ、ゆっくりと振り向く。

「アヒル…」

エリザが厳しい表情で、アヒルを見つめる。

「今ここで、こいつを韻へ引き渡す気はねえ。韻に戻って、言姫さんにそう伝えてくれ」

「……ふうっ」

強く主張するアヒルに、エリザが少し困ったように、頭を抱える。

「これは韻の命令よ？ 君も五十音士なら、神であるなら、これに従いなさい」

「俺は納得出来ねえ命令に、従う気はねえよ」

どちらにも一歩も譲らず、強く睨み合うアヒルとエリザ。

「彼女を庇いだてすれば、君まで事件に関与してると見られるわよ？」

「別に構わねえさ。こいつ助けた時点で、もう関係のないことでもなくなつたしな」

「安の神…」

そっと微笑むアヒルを見つめ、怯えていた弓が少しその表情を崩し、目を細める。

「彼女の言葉を鵜呑みにする気？ 彼女は嘘をついていて、君たちを利用する気かもっ…」

「こいつは嘘なんて、ついてねえーさ」

「……っ」

あつさりと否定するアヒルに、エリザが眉をひそめる。

「会ったばかりだっていうのに、随分な自信ね。いつもの君の勘とやらかしら？」

「ああ」

挑発的に問いかけるエリザに、アヒルは迷いなく、堂々と頷いた。

「誰の言葉を信じるか、俺はいつだって、自分で決める」

アヒルのまっすぐな瞳が、エリザへと向けられる。

「だから俺は、こいつの言葉を信じる。韻の命令には、従わない」
「……………」

はつきりと言い放つアヒルを見つめ、その表情を厳しくするエリザ。

「バカまっすぐな君のことだもの…一度決めたことを、早々には変えてくれないんでしょうね」

どこか諦めたように言いながら、エリザが少し肩を落とす。

「君には二度、助けられてる。今度会った時は、この借りを返そうって、そう決めてたけど…」

一度俯けた顔を、ゆっくりと上げるエリザ。

「残念だわ…」

「……っ」

そっと声の音調を低くするエリザに、どこか警戒するように表情を曇らせるアヒル。

「慧」

「はっ」

エリザの呼びかけに、素早く立ち上がった慧が、右手に持っていた言玉を、留め紐を解いた長い黒髪へと吸収させる。

「削^{けず}れ」！

「うっ…！」

言玉を吸収した慧の髪が淡い緑色の光を帯び、毛先がドリルのように鋭く尖って、勢いよくアヒルへと向けられた。

「妨^{さまた}げろ」

「……っ」

慧の毛先が、アヒルのすぐ前で、赤い光の膜により止められる。

「刈^かれ」

「クっ…！」

さらにエリザと慧へ向け、赤色の一閃が飛んで来る。

「エリザ様！」

慧の呼びかけにより、エリザが慧と共に庭へと飛び降り、飛んできたその一閃を避ける。二人がかわした一閃は、そのまま隣の部屋まで突き破っていった。

「ああゝあ、僕のお店…」

「いい加減、諦めて下さい」

さらに穴のあいた部屋を見つめ、がっくりと肩を落とす為介に対し、雅は冷たく声を掛ける。

「箆也、囁」

エリザと慧を退け、アヒルを庇うように、アヒルの前へと立ったのは、それぞれの武器を身構えた箆也と囁であった。二人は鋭い表情で、庭へと降りたエリザを見つめる。

「君たちも、韻の命令に背く気？」

庭に立ったエリザが、厳しい表情で箆也たちを見る。

「背く…？フフ…可笑しなことを言うのね…」

「えっ…？」

そつと微笑む囁に、眉をひそめるエリザ。

「我ら神附きが従うのは、自身の神の命のみ。僕たちは何にも、背いてなどいない」

「……はあ」

堂々と言い放つ箆也に、エリザが一つ、溜息を落とした。

「わかった。そっちがその気なら、仕方ないものね」

どこか諦めたように、言い放つエリザ。

「誠子^{せいこ}、徹子^{てつこ}、音音^{ねね}」

「はっ」

エリザの呼びかけを合図に、庭先へと姿を現す、三人の女性。

「我々、衣団は、“由守”弓削弓を拘束する為…」

そつと左手を掲げ、その中の緑色の言玉を明らかにするエリザ。

「障害と成り得る、安団の排除を行うわ」

「……っ」

冷たい瞳を向けるエリザに、アヒルは厳しい表情を見せた。

Word. 36 窮地 (1)

——障害と成り得る、安団の排除を行うわ——

韻^{いん}の命により、“由守^{ゆもり}”弓削弓を韻へと引き渡すため、再びアヒルの前に現れた、“衣^えの神”エリザ。弓を渡すことを拒んだアヒルに対し、エリザと衣団^{えだん}は、戦意を示した。

『……………』

「こいつらが衣団…」

エリザの両側に立ち並んだ、慧と他の、タイプは異なるが、皆、美しい三人の女性を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「女の子ばかり…」

「衣団は五団の中で唯一、女性のみで構成された団となっている」
「へえ…」

驚いたように呟く七架に答えるように、箆也が解説をすると、アヒルは感心の声を漏らした。

「ウハウハだな…」

顎を右手で押さえ、思わず思ったことを口にしてしまうアヒル。

「アヒるん…？」

「ごめんね…朝比奈くん…ウハウハじゃなくって…」

「へっ!？あ、いや!別に羨ましいとか、そう言った意味で言ったわけじゃなくってだなあっ…!」

冷たく睨みつける囁と、ひどく落ち込む七架に気付き、アヒルが必死に弁解しようと言葉を繋ぐ。

「容赦する必要はないわ。思いつきりやりなさい」

『はっ』

エリザの言葉に、慧たちが声を揃える。

「“計守^{けもり}”慧左衛門子、参ります!」

勢いよく叫んだ慧の髪が、淡い緑色の光を放ちながら、空中へと

広がっていく。

「“消し飛べ”！」

『……っ！』

振り乱れる髪先から飛んで来る緑色の光の塊に、内輪もめしていた安団の面々が、一気に険しい表情となる。

「“掻き消せ”……！」

皆の前へと出て鎌を振り切り、慧の向けてきた光を消し去る簞也。

「お相手願えますか？ 神月様」

「臨むところだ」

微笑む慧に、簞也が力強く答える。

「“削れ”！」

「“刈れ”！」

二人が一斉に庭の上空へと飛び上がり、鎌と鋭く尖った毛束を交わらせる。

「お、おい！ 簞也！ まじでやる気じゃっ……！」

『お初にお目にかかりますわ、安の神』

「へっ？」

本気で慧と戦おうとしている簞也を止めようと、上空へ声を張り上げていたアヒルが、前方から聞こえてくる重なり合った上品な声に、目を丸くして、顔を下げた。

「衣団、“世守”の誠子と申しますわ」

「同じく衣団、“天守”の徹子と申しますわ」

エリザより数歩前へと出て、アヒルに丁寧な挨拶をするのは、茶色の巻き髪に、大きな茶色の瞳をした、容姿のまったく同じ、二人の若い女性であった。アヒルより少し年上くらいであろうか。まったく同じデザインで、色はまったく異なる白と黒の、フリルが可愛いらしい洋服を着ている。

「双子……？」

「ええ、そう」

「私たち、ツインなのですわ」

少し眉をひそめたアヒルに、誠子と徹子は気品ある微笑みで、大きく頷いた。

『お相手願いますわ、安の神』

「あっ」

誠子と徹子が、フリルの服のポケットから取り出した緑色の言玉を、対称に同じ動きをして、左右それぞれの手へと吸収する。

「五十音、第十四音“せ”……」

「第十九音“て”……」

言玉を吸収した二人の手が、緑色の光を放つ。

『解放っ』

涼やかな二人の声が重なる。

“正拳”っ

“鉄拳”っ

二人の言葉により、拳の輝きがさらに増す。

「あれはっ……」

——“凹め”ええ！——

二人の輝く拳は、かつてアヒルが戦った“部守”の兵吾が見せたものと、よく似ていた。エ段の言玉の能力は、身体強化。輝く拳は強化されており、一度でも喰らえば、相当のダメージを受ける。

『ツイン突き！』

「やべっ……！」

輝く拳を突き付けてくる誠子と徹子に、アヒルが焦ったように顔を引きつる。

“妨げろ”……！」

『……っ』

アヒルの前へと飛び出た囁が、横笛を奏で、前方に赤い光の膜を張って、二人の拳を受け止める。

「囁っ」

「下がっていて…アヒルん…」

真剣な表情で、囁が振り返ることなく、アヒルに言う。

「私たちの拳を止めるなんて、やりますわねえ」

「ええ。でも、私たちの力をこんなものと思わないでいただきたいわ」

「えっ…？」

余裕で微笑む誠子と徹子に、囁がそっと眉をひそめる。

「攻めろ」

「なっ…！ううう…！」

誠子が言葉を呟いた途端、二人の拳に宿る光がさらに強まり、囁の防御が一気に押され始める。

「囁…！」

苦しげに表情を歪める囁に、思わず身を乗り出すアヒル。

「クッソ…！何とか俺が言葉をつ…！」

「弓さんをお願い！朝比奈くん！」

「へっ？」

自分の言玉を取り出そうとしたアヒルが、背後から聞こえてくる七架の声に振り返る。

「奈々っ…」

「“薙ぎ払え”！」

「どわあああ！」

振り返った途端、その先から飛んで来る赤色の一閃に、アヒルが叫び声をあげながら、大きく背中を曲げ、何とか必死にその一閃を避ける。アヒルが避けた一閃は、囁を押していた誠子と徹子へ、まっすぐに向かっていった。

「徹子」

「ええ、誠子お姉さま」

二人は頷き合うようにして上空へと飛び上がり、やって来た一閃を避ける。

「ふう…」

「大丈夫？」

誠子たちの攻撃が消え、一つ息をついた囁のもとへと、七架が駆け寄っていく。

「私も一緒に戦うよ」

囁へと、大きな笑顔を向ける七架。

「“囁ちゃん”っ」

「……っ」

呼ばれる名に、囁が少し驚いたように目を開いた。だがすぐに、その表情には笑みが浮かぶ。

「ええ、お願いするわ…“七架”」

笑ってそう呼ぶ囁に、七架もより一層、嬉しそうに微笑んだ。

「あの二人、結構やりますわね。誠子お姉さま」

「ええ。こちらも手加減なしでいきますわよ、徹子」

『……っ』

再び拳を構える二人に、囁と七架は鋭い表情で、それぞれの武器を振り上げた。

「んんゝ…」

一方、七架から託された弓とともに、戦う皆から離れた場所で待機するアヒル。

「何か俺…出る幕なし…？」

アヒルが力を失っている状況でも、衣団と見劣りすることなく戦いを繰り広げる仲間たちに、アヒルが少し寂しさを覚える。

「ガアっ」

そんなアヒルのもとへ、部屋の隅に居た紺平が駆け寄っていく。

「ガア、大丈夫…」

「………」

「あっ」

アヒルのもとへ行こうとした紺平の前に立ちはだかる、十三、四歳の着物姿の少女。肩程まで伸びたまっすぐな黒髪に、深い黒色の瞳が印象的である。

「君はっ…」

「五十音、第二十四音“ね”…」

「あっ…！」

少女が懷から、緑色の言玉を取り出すと、紺平は思わず身構えた。

「言葉をつ…！」

「解放…」

「えっ…！？」

そう言って少女は、取り出した言玉を、自らのその大きな瞳へと吸収させる。目の中へと入り込んでいく言玉に、驚いた紺平は、言玉を出そうとするその動きを止めてしまった。

「目に言玉を…？」

「ね…」

右の瞳を緑色に輝かせた少女が、まっすぐに紺平を見つめる。

「“眠れ”…」

「なっ…！んっ…」

「紺平っ！？」

急にその場で倒れ込む紺平に、アヒルが焦ったように身を乗り出す。

「ねの言葉ってことは…」

「ねね 音音は“ねもり 禰守”…」

振り向いたアヒルに答えるように、音音が小さな声を落とす。

「お前も夢の中へ誘ってやろう…」

「クっ…！」

鋭く光る瞳を向けられ、アヒルの額から汗が流れた。

「“満みちれ”」

「……っ」

アヒルへと言葉を向けようとした音音が、横から飛んで来る大波に気付き、上空へと飛び上がって、それを避ける。

「雅さん！」

眼鏡を指で押し上げながら、音音の方へと歩み寄っていくのは雅。

「高市君がいない分、禰守さんの相手は僕がしましょう」

「美守^{みもり}も味方か…」

庭へと降りた音音が、やって来る雅を見つめ、そっと眉をひそめた。

「みんな…」

「五十音、第四音…」

「へっ？」

衣団と戦いを繰り広げる仲間たちを見つめ、困ったように瞳を細めたアヒルが、前方から聞こえてくる声に気付き、顔を下げる。そこには他の四人と同じく、緑色の言玉を持ったエリザが立っていた。

「エリザ」

“え”、解放

言葉を解放したエリザが、言玉を細長く美しい、自らの右足へと吸収させる。

「え…」

淡い緑色の光を放つ右足を、高々と振り上げるエリザ。

「^{えぐ}抉れ”…！」

「うっ…！」

振り下ろされたエリザの右足が、強く地面を砕き、その地割れが駆けるようにして、一気にアヒルのもとまで迫って来る。

「やばっ…！」

“^ゆ往け”…！」

「うおっ！」

目前まで迫る地割れに、焦った表情を見せていたアヒルが、横へと強く押し飛ばされた。押されたアヒルがそのまま、縁側から庭先へと転がり落ちる。

「痛ててて…」

「はあ…はあ…」

「お前っ…」

アヒルを突き飛ばし、アヒルとともに庭先へと落ちたのは、弓で

あった。病み上がりで言葉を使ったせい、少し息を乱している弓を見て、アヒルがそっと目を細める。

「悪い」

「いえ…」

アヒルの言葉に、弓は軽く首を横に振った。

「君が今、言葉を使えないことは知っているわ」

聞こえてくるエリザの声に、アヒルが振り向く。

「守るべき彼女に守ってもらわねば、私の言葉一つかわせないような状況で、よく韻に逆らおうなんて気が起こったものね」

鋭く冷たい視線を、アヒルへと向けるエリザ。

「無駄な抵抗はやめて、大人しく彼女を引き渡しなさい。アヒル」
「……っ」

突き付けられるエリザの言葉に、険しい表情を見せるアヒル。

「断る」

「君ねえ、今の状況が理解出来てないわけ？」

あっさりと拒否するアヒルに、エリザがまたしても呆れたように肩を落しながら、言葉が続ける。

「今の、言葉も使えない君じゃ、どう足掻いたって私たちにはっ…」
「言葉が使えなくなたって、俺は、俺の発した言葉には責任を持つ」

転がり落ちた庭先で起き上がりながら、アヒルが堂々と言い放つ。

「俺は、こいつの言葉を信じる」

自らの発した言葉を、もう一度、繰り返すアヒル。

「韻に引き渡す気はねえ！」

「……………」

声を張り上げるアヒルのその言葉を受け止め、あからさまに顔をしかめるエリザ。

「そう…なら私はっ…」

エリザが強く、アヒルを睨みつける。

「君を排除するまでよ…！」

「クっ…！」

再び高々と右足を振り上げるエリザに、アヒルは険しい表情で唇を噛む。

「“抉^{えぐ}れ”…！」

言葉とともに、勢いよく振り下ろされるエリザの右足。

「……っ」

「なっ…！？」

「えっ…？」

地面へと降りようとしたエリザの右足が、横から伸びてきた別の足により、止められる。止められた足と止めたその人物に、アヒルとエリザはそれぞれ、驚きの表情を見せた。

「エリザ様の足を、止めたっ…？」

「あれは…」

戦闘が続けていた筈也と慧も、一時腕を止め、その光景に眉をひそめる。

「貴女はっ…」

すぐ傍に立つその人物を見つめ、険しい表情を作るエリザ。

「目白…恵っ…」

「久し振りだねえ、エリザベス」

颯爽とその場に現れ、その足でエリザの足を止めたのは、恵であった。名を呼ぶエリザを見て、恵が不敵な笑みを浮かべる。

「恵、先生…？」

久々に見る恵の姿に、アヒルも戸惑った様子を見せる。

「何故、貴女がこんなところにっ…」

「悪いね。けど」

戸惑うエリザに、恵がそっと微笑みかける。

「これ以上、韻の好きにさせるわけにもいかないんだよ」

「あっ…！」

エリザの足を止めていた恵の右足が、強い緑色の光を放ち始めると、エリザは大きく目を見開く。

「待っ…！」

「“巡^{めぐ}れ”」

「うっ…！」

止められていた右足を振り上げ、次の行動を起こそうとするエリザであったが、エリザが何かをする前に恵の言葉は落ち、強い緑色の光が、辺りに一気に広がった。

「……っ」

光が収まり、エリザが思わず伏せてしまった瞳を開くと、目の前に立っていたはずの恵の姿も、アヒルや弓の姿もなくなっていた。

「消えた…？」

「これは…」

先程まで戦っていたはずの箆也、囁、七架の姿もなくなっており、慧や誠子たちが皆、戸惑った表情を見せる。

「………」

振り上げていた足から言玉を取り出し、足を下ろして、ゆっくりと空を見上げるエリザ。

「何故、今になって…」

エリザが戸惑う声を、空へと放つ。

「“恵の神”…」

「エリザ様！」

「……っ」

空を見つめ、考えを巡らせていたエリザが、駆け寄って来る慧の声に気付き、ゆっくりと振り返る。

「申し訳ありません！安団の加守他二名、逃がしてしまいました！」

「私だって逃がしまくったのよ？君たちだけを責めたりしないわ」

深く頭を下げる慧へ、エリザが肩を落としながら声を掛けた。

「あ、それもそうですねえ！むしろ、エリザ様のせいでみんな、逃げられてしまったということですか！」

「なんで、そうなるのよ！」

明るく微笑む慧に、エリザが思わず怒鳴りあげる。

「ああゝあ、僕のお家がこおんなボロボロに…」

「為の神」

「へえ〜?」

すっかり破壊されてしまった家を見回し、がっくりと肩を落としていた為介が、エリザの声に振り返る。

「貴方を、安の神の仲間とみなし、取り調べをつ…」

「ああ〜!こんな、わけもわからない戦闘に急に巻き込まれて、めっちゃ怖かったねえ〜! 雅くう〜ん!」

「はっ…?」

急に、そう黄色くもない声をあげる為介に、エリザが勢いよく顔をしかめる。

「まさか、たまたま助けた女の子が由守だったなんてえ、超驚きだよお〜あんな子庇うとか、朝比奈クンてば何考えてんだろお〜?」

「為介さん…」

妙にキャピキャピと言葉を続ける為介を見て、雅があからさまに不快な顔を見せる。

「あくまで、自分たちは関与していないと主張するつもり…?」

「そうだねえ〜。まっ、僕たちが関与したって証拠があるんなら、別だけどお?」

「…っ」

鋭く微笑む為介に、エリザがそっと眉をひそめる。為介が関与していたことは、見るよりも明らかだが、取り調べを行えるほどの証拠を、エリザは持つてはいなかった。

「まあいいわ」

エリザが諦めたように、肩を落とす。

「安の神や由守が戻って来る可能性もある。この屋敷は見張らせてもらうわよ」

「勝手にどうぞお〜」

為介が扇子を振りながら、適当な返事をする。

「音音、屋敷を見張って」

「わかった…」

「誠子と徹子は、周辺の搜索を。町は忌だらけらしいから、気を付けるのよ」

『わかりましたわ』

エリザの言葉に、衣団の面々が素直に頷き、それぞれの役目をこなすべく、場所を移動していく。

「それにしても、誠子お姉さま」

「なあに？ 徹子」

周辺の搜索に当たるため、庭から外へ出る通用口のところへと移動しながら、徹子が誠子へと声を掛ける。

「あの安の神、どこかの忌々しい双子に、雰囲気似ていると思わなくて？」

「それは私も思ったわ、徹子」

徹子の言葉に、誠子が大きく頷く。

「あの顔立ちに、あのバカ極まりない言動：忌々しい“うだん宇団”の双子にそっくりでしたわ」

「やっぱり、そうですねえ」

大きく頷き合いながら、誠子と徹子は、通用口から、屋敷の外へと出て行った。

「“巡れ”の言葉が使われたんじゃ：搜索しても、見つかる確率は低いわね…」

誠子たちが出て行き、再び閉まった通用口の戸を見つめ、エリザが険しい表情を見せる。

「エリザ様」

「ん？」

呼ぶ慧の声に、振り向くエリザ。

「本当にこれで、よろしかったのですか…？」

慧が少し遠慮がちに、エリザへと問いかける。

「いくら韻の命とはいえ、大恩ある朝比奈さまに敵対するなど…」
「……っ」

慧のその言葉に、エリザがそっと目を細める。

「いっくら頑固で高慢ちきのエリザ様でも、ちょっとやり過ぎってものでは…」

「うっさいわね！誰が高慢ちきよ！」

小言のように言う慧に、勢いよく怒鳴りあげるエリザ。

「韻の命令には従うのが、五十音土ってもんでしょうがっ」

「しかし…」

慧がさらに眉をひそめ、小さく口を開く。

「あの由守…本当に、拘束されるようなことをしたのでしょ…
？」

戸惑いの表情を見せる慧。

「朝比奈さまがあそこまで言うのであれば…そう、悪い人間とも思えないのですが…」

「言葉だけで、君にまでそう思わせるなんて、大したものね。アヒルも」

固く腕を組んだエリザが、どこか感心するように呟く。

「さすがは神ってところかしら」

あくまで逆らい続けたアヒルの姿を思い出し、エリザがそっと目を細める。

「一度、韻へ戻るわ。附いて来なさい、慧」

「今回の件の報告ですか？」

「ええ。それに…」

頷いた後、エリザが少し眉をひそめる。

「ちよっと、調べたいことがあるの…」

再び空を見上げたエリザは、どこか厳しい表情を見せていた。

Word. 36 窮地 (2)

言ノ葉町の隣町、矢文町。^{やぶみ}

「ここは？」

エリザたちから何とか逃れたアヒルたちは、恵の誘導により、矢文町のとあるマンションの一室へとやって来た。部屋を見回しながら、アヒルが前に行く恵へと問いかける。

「私人家だ」

「えっ！？恵先生の家！？」

恵の言葉に、大きく目を見開くアヒル。

「おっきい家…」

「教師って、意外と儲かるのね…フフ…」

アヒルの後から部屋へと入る囁と七架も、感心するように広い、その部屋を見回す。

「恵先生ん家のわりには、結構キレっ…」

「ああんっ？」

「いえ、何でもありません」

よく整頓された室内を見つめ、感心するように言葉を発しようとしたアヒルであったが、勢いよく振り返る恵に、言葉の続きを呑み込んだ。

「ここなら、しばらくは韻にも見つからないだろう。まあ、ゆっくりしていい」

恵がそう言って、アヒルや皆を、広いリビングへと通す。

「お前も」

「あ、はい…ありがとうございます…」

アヒルたちの後ろを、少し距離を取るようになって歩いてきた弓へと、恵はどこか気遣うように声を掛けた。そんな恵に、弓が薄く笑みを浮かべる。

「けど、大丈夫かな…？井戸端さんの家に、六騎置いてきちゃった

…」

「為の神たちが一緒なら、きっと大丈夫よ…問題ないわ…」

「そう、だよな」

不安げに呟く七架へ、励ますように囁が声を掛ける。

「この町の人間は、特に忌に取り憑かれている様子はないな」

部屋の大窓から、外の様子を眺め、楽しげに会話をしながら道行く人々を観察し、籠也がどこか分析するように呟く。

「ああ。他の町にも、異変はない。言ノ葉町だけ、町中の人間に忌が取り憑いてるようだな」

部屋の中央にあるソファーにもたれかかり、一気に寛いだ様子となった恵が、籠也の言葉に答える。

「何故、言ノ葉町だけが…？」

「さあな。お前らが居るからってのが、理由じゃねえーか？」

ソファーの前にあるテーブルの横に、小さく座り込み、囁が問いかけると、恵は素っ気ない答えを返した。

「私たちのせいで…お母さんや想子ちゃんたちが…」

囁の横に座る七架が俯き、どこか暗い表情を見せる。

「あれ…？」

俯いていた七架がふと顔を上げ、ソファーのすぐ横にある小さな物置台へと視線を移した。物置台の上には、写真立てが一つ、大事そうに飾られている。

「これって…」

写真に写っているのは、優しそうに微笑んでいる青年。

「この人…どこかで…」

「……っ」

「あっ」

どこか見覚えのある、その写真の青年を、七架がまじまじと見つめていると、ソファーから起き上がった恵が、勢いよくその写真立てを伏せた。

「人のもの、勝手に見るんじゃないよ」

「す、すみませんっ」

威圧するように重い雰囲気醸し出して、言い放つ恵に、七架は大きく頭を下げた。

「けど恵先生、ゆっくり休んでる場合じゃなくねえか？このままじゃ言ノ葉町のみんながっ…」

「忌に取り憑かれた町人たちの狙いは、あくまで五十音士。互いを傷つける様子は見受けられなかった」

「つまり、五十音士が身を守れば、問題はないということか」

「ああ、そうだ」

恵が言おうとしたことを先に口にする箆也に、恵が大きく頷きかける。

「だからといって、このままにしておくわけにもいかないのでは…？」

「ああ、それくらいはわかっている」

問いかける囁に、恵は当然のように答える。

「だから、こっちで元凶を叩く。そうすれば、町人に取り憑いてる忌も消えるはずだ」

「元凶を、叩く…？」

恵のその言葉に、大きく首を傾げるアヒル。

「だが、僕たちは何一つ、敵の情報を得ていないのだぞ？」

同じく眉をひそめた箆也が、鋭く恵へと問いかける。

「唯一の情報源と見られていた、その由守も、敵に関する情報は一つ持っていないかったしな」

「……………」

箆也の言葉に、弓がどこか申し訳なさそうに俯く。

「箆也」

「少しは気を遣ってよ、神月くん」

「何がだ？」

責めるように振り向く囁と七架に、箆也がまったくわかっていない様子で問いかけた。

「まあ仕方ねえじゃねえか。知らねえもんは知らねえんだしっ」

「安の神…」

「んあ？」

籠也へとフォローを入れていたアヒルが、弓に呼ばれ、振り返る。

「申し訳、ありませんでした…」

「へっ？」

深々と頭を下げる弓に、戸惑うように目を丸くするアヒル。

「いや、だから、何もわかんねえのは、別にお前のせいじゃっ…」

「いえ、そうではなくて…」

アヒルの言葉を遮り、弓がゆっくりと顔を上げる。

「私のせいで、安の神や安団の皆様まで…韻や衣団と敵対する羽目になってしまっ…」

「あああゝ、そんなことか」

「えっ？」

軽い口調で返って来る声に、弓が戸惑うように声を発する。

「気にすんなって。俺がやりたいように、好き勝手やっただけなんだからっ」

「ですが、関係のない安の神たちをこんな…」

「俺たちの仲間も一人、行方不明になってる。全然関係ないってわけじゃねえさ」

「行方不明の奴など、居たか？」

「神月くん…」

わざとらしく周囲を見回す籠也に、七架が呆れた表情を見せる。

「それにお前、さっきエリザの攻撃から、俺のこと助けてくれただろ？」

「えっ…？」

アヒルが大きな笑みを、弓へと向ける。

「だから今度は、俺がお前を助ける番だ」

「安の神…」

その大きな微笑みに、ずっと不安げであった弓の表情からも、小

さな笑みが零れ落ちた。

「話の続き、していいか？」

「おうっ」

割って入って来る恵の声に、アヒルが大きく頷く。

「敵の正体は何なのかってのまではわかんなかったが、敵の現れそうな場所なら一つ、見当がついている」

「敵の現れそうな場所…？」

「どうということだ？」

囁と箆也が、次々と恵へ問いかける。

「エリザベスから聞いたろう？元五十音士が数人、失踪してるって」

「ああ」

「その現場で也守さんと与守さんが目撃されたから、弓さんは拘束されそうになったんですね」

「……っ」

七架の言葉に、弓の表情が再び曇る。

「そうだ。そしてこれが、失踪した元五十音士の詳細だ」

『……っ』

恵が乱雑にテーブルの上へと放り投げた書類に、皆が一斉に視線を注ぐ。

『なっ…！？』

次の瞬間、皆の顔が同時に、驚きの表情へと変わった。

「こいつらは、昨日のっ…！」

書類に記載された顔写真に写っているのは、昨日、弓を襲っていたあの二人組、萌芽^{ホウガ}と碧鎖^{ヘキサ}の両者であった。

「この人たちは…昨日、私を襲ってきた…」

「どうということだ？あの者たちが元五十音士…？」

「何故、失踪した元五十音士が、由守を…」

その写真を見つめ、皆が戸惑いの表情を見せる。

「けれど、彼等の名前…昨日、彼等が呼び合っていたものとは、違うように思えるわ…」

「あ、確かに」

囁の言葉に、アヒルが大きく頷く。

「あなたが敵の名を記憶しているはずがないだろう」

「何となくの感覚で、違うってことくらいはわかんだよ！」

鋭い指摘を入れる箆也に、アヒルがどこかムキになって言い返す。

「まあそりゃ違うだろう。昨日、お前らを襲ってきた奴等と、そいつらは、まったくの別人だからな」

「はあっ？」

恵の言葉を聞き、アヒルが思いきり顔をしかめる。

「まったくの別人？ どう見たって、同じ奴だぜえ」

書類を持ちあげ、まじまじと写真を見つめるアヒル。

「ハっ！ まさかこれが所謂、ドッペルペルガーってやつかっ！？」

「ドッペルゲンガーよ…アヒるん…フフ…」

「そんなはずがないだろう」

思いついた様子で勢いよく叫ぶアヒルに、囁が微笑みながら訂正を入れ、箆也が呆れきった表情で肩を落とす。

「つまり、昨日現れたこの者たちは、この者たちであって、この者たちではなかったというわけだな」

「この者たちであって、この者たちでない…？」

箆也の言葉を繰り返し、さらに混乱した様子となるアヒル。

「お前、頭大丈夫か？ 箆也」

「あなたにだけは言われたくない」

心配するように問いかけるアヒルに、箆也が冷たい視線を送る。

「要は、昨日現れたこいつ等の中に、こいつ等とは別の何かが入り込んでたってわけさ」

「入り込んでた？」

補足するように口を挟む恵に、アヒルが首を傾げる。

「奴等が忌に酷似した技を使っていたことは、お前たちも確認済みだろう？」

「あ、ああっ…」

「也守と与守が襲われたのは、謎の黒い影だったな？」

「はい…」

「これらと、元五十音士失踪の現場に、也守と与守が居たことを考慮すれば、こう考えられる」

恵が鋭い表情で、アヒルたちを見る。

「敵は五十音士の体に乗っ取る能力を有し、その体と力を得るため、次々と五十音士を襲っている」

『……っ』

恵のその言葉を聞き、皆が表情に衝撃を走らせた。

「乗っ取るって…」

恵の言葉を繰り返し、アヒルが険しい表情を見せる。

「じゃあ昨日の人たちはすでに、敵に乗っ取られた状態だったということですか？」

「ああ」

「その敵は、忌と…？」

「それはまだ、言い切れない。ただの忌じゃ人間、ましてや五十音士の体に乗っ取るなんて芸当、到底無理だからな」

囁の問いかけに、恵が首を横に振る。

「力を持った特別な忌、とでも考えた方がいいのか…まあ、どちらにせよ、曖昧だな」

「特別な、忌…」

アヒルが何やら考え込むように、そっと俯く。

「じゃあ昨日、弓が襲われたのは…」

「こいつも捕まえて、体に乗っ取ろうって魂胆だったんじゃないか」

「五十音士が狙いだから、やたら五十音士の存在する言ノ葉町が忌化されたのか…」

考え込むように俯き、箆也が厳しい表情を作る。

「では、刃と鎧はっ…」

「すでに敵の手に落ちたと考えるべきだろう」

「そんなっ…」

突き付けられる厳しい現実には、弓の表情が曇る。

「だが敵が忌、もしくは忌に似た存在であるならば、乗っ取られた五十音士たちの体内から追い出すことも可能なはずだ」

俯いた弓へと、箆也が声を掛けるように言い放つ。

「ああ、その通り。別に死んだわけじゃないんだ。気を落としている場合じゃないぞ」

「は、はい」

励ますような恵の言葉に、弓が自分に言い聞かせるように、大きく頷く。

「で…？その、見当がついている、敵の現れそうな場所というのは…？」

「ああ、これだ」

『……？』

頷いた恵が再びテーブルへ、別の書類を置く。それは他の書類と同じ、五十音士の詳細書類で、記載された顔写真には、一人の女性が写っていた。

「この女は？」

「元五十音士の一人だ」

問いかける箆也に、恵が答える。

「昨夜、こいつから韻本部へ、緊急救助要請があった」

「緊急救助要請…？」

「ああ」

首を傾げる弓へと、頷きかける恵。

「“忌みたいな技を使う、謎の連中に追われているから、助けて欲しい”とな」

『……っ』

恵のその言葉に、皆の表情が一斉に変わる。

「それって、弓を襲ってきた奴等じゃあ…！」

「可能性は高い」

「じゃあ…この女性を彼らより先に見つけて、待ち伏せすれば、必

然的に会えるってことね……」

「だが、そう簡単にはいかないだろう。探すといったって、それこそ情報が何もっ……」

「それなら、大丈夫だ」

恵が新しい紙をもう一枚、テーブルへと差し出す。

「韻本部が調べた、現在、この女が居ると思われる場所だ」

「なっ……」

詳細に記してある位置に、箆也が驚きの表情を見せる。

「こんな内部の情報、どうやって……」

「本部に、ちょっとした知り合いがいてね」

「呆れたものだな……」

含んだ笑みを見せる恵に、箆也は強く眉をひそめた。

「まあいい。神」

「ああ」

振り向く箆也に、アヒルが大きく頷く。

「とにかく、今からすぐこの場所へ行って、あいつ等捕まえて、弓の仲間と言ノ葉の皆を助けっ……！」

「に、行って来い。トンビ以外でな」

「おう！そうだ！俺以外でっ……なんで！？っつーか、俺はトンビじゃなくて、アヒルだし！」

予想外の恵の言葉に、勢いよく突っ込みを入れるアヒル。

「なんでだよ？恵先生、俺も一緒に行っ……」

「阿呆」

「痛ってえ！」

振り向いたアヒルの額へと、恵がチョークをぶつけた。

「言葉の使えない奴と一緒に居て、どんだけ仲間に負担がかかるか、もう十分にわかっただろう」

「うっ……」

恵の鋭い指摘に、思わず口ごもるアヒル。確かに、アヒルが言葉を使えないために、安団の皆を始め、雅や弓にまで迷惑を掛けた。

「そりゃわかるけどっ…だからって、俺だけ大人しく留守番なんてっ…」

「誰が大人しく留守番していろと言った」

「へっ？」

「すぐさま否定する恵に、アヒルが目を丸くする。」

「お前は私と一緒に来い」

恵が強く光る瞳を、アヒルへと向ける。

「居眠りしてるお前の力、私が叩き起こしてやる」

「……っ」

力強い恵の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「も、戻んのか！？俺の力！」

「戻すんだよ。まっ、私に任せろ」

「おう！」

微笑む恵に、アヒルも嬉しそうに笑って、大きな声を発する。

「相変わらず、あの女教師の言葉を、あっさり信じると信じるものだな」

「まあいいじゃない…？神試験の時だって、本当に熟語^{イディオム}まで使えるようにしてきたわけだし…フフフ…」

顔をしかめる籠也に、囁がそっと微笑みかける。

「と、いうわけだ。お前たちは、今すぐこの場所へ向かえ。力が戻り次第、こいつもすぐに向かわせる」

「ああ」

恵から、女性の位置の記された紙を受け取る籠也。

「俺が行くまで、頼んだぜ？籠也っ」

「あなたが来る前に、すべて終わらせるさ」

声を掛けるアヒルに、籠也が強気に答える。

「あの、わ、私は…？」

「お前も神月たちと一緒に行け。仲間を自分の手で助けて来い」

「は、はい！」

勇気づけるような恵の言葉に、弓は決意した表情で、大きく頷いた。

「すぐに向かうぞ。囁」

「ええ…」

箆也に声を掛けられ、囁が言玉を横笛の姿へと変えて、口に当てる。

「敵が、お前たちの体に乗っ取ろうとしてくる可能性もある。油断はするな」

「気を付けてな！」

「ああ」

「朝比奈くんも、頑張ってね」

「行くわよ…？」

皆が言葉を交わす中、囁がゆっくりと口を開く。

“攫え”…

『……っ』

囁が言葉を発すると、強い赤色の光が箆也たちを包み込み、次の瞬間、赤い光が飛び散ると、すでにそこに、箆也たちの姿はなかった。

「頼んだぜ…みんな…」

皆の居た場所を見つめ、アヒルが祈るように呟く。

「私たちもすぐに行くぞ」

「ああっ」

「付いて来い、トンビ」

「だから俺はアヒルだったの！」

あれこれともめながらも、アヒルは恵とともに、恵の部屋を後にした。

Word. 36 窮地 (3)

「ハア…！ハア…！ハア…！」

すっかり日の暮れた暗い、人気のない道を、息を切らしながら必死に駆け抜ける一人の女。派手な金髪のショートカットに、少し吊りあがった大きな茶色の瞳の、まだ若い女。その女は、アヒルたちが恵に見せられた書類に記載されていた、顔写真に写っていた、あの女であった。

「なんで…！なんで誰も来ないのよ…！？」

女が右手に握り締めた携帯電話を見下ろし、その表情を引きつる。
「緊急救助要請してから、もう一日経つていうのに…なんでっ…！？」

「ホントだよねえ」

「…っ！」

上空から聞こえてくる声に、女が思わず足を止め、顔を上げる。

「あんたはっ…！」

「こっちも待ちくたびれちゃったよお」

女が顔を上げたその先の空に、自然と浮かび上がっているのは、一際目立つ桃色の短髪に、暗い空にも真っ赤に輝く瞳の、キレイな顔立ちをした青年であった。睨みつけるように見る女に対し、青年はどこか軽い口調で言葉を発する。

「あんたが緊急救助要請してんのが見えたからさあ、少し泳がせとけば、他の五十音士が駆けつけてくるんじゃないかって思ったのに」
青年の赤い瞳が、ゆっくりと女へ向けられていく。

「結構冷たいんだねえ、韻つてのも。元五十音士なんて、所詮はどうでもいいのかなあ？」

「クっ…」

嘲笑うかのように問いかける青年に、女が険しい表情を見せる。

「そうよ！私はただの、元五十音士！もう言葉の世界とは、何の関

係もないの！」

女が両手を広げ、強く主張を始める。

「もう何の力も持っていないのよ！？だから殺したって意味ないでしょ！？お願い！殺さないで！」

「ふうりん：救助が来ないってなったら、命乞いかあ」

必死に叫ぶ女を、青年は特に興味なさそうに見下ろす。

「だってさ。どうする？緑呂^{ロクロ}」

「どうする」だと…？愚かなことを聞くでない」

振り向いた青年に答えるのは、低く響く、くぐもった声。

「我らのやるべきことは一つ。それすらも理解出来ぬほどに、そなたは愚かであったか…？桃真^{トウマ}」

厳しい口調を続け、青年を桃真と呼んだのは、全身に漆黒の鎧を纏い、その顔には鉄の仮面をつけた、まったく表情すら見えない男。緑呂と呼ばれるその男の外見は、弓の仲間、鎧そのものであった。

「ちょっと聞いてみたただだってえ」

厳しく問いかける緑呂に、桃真は少し呆れたように肩を落とす。

「一応、あんたのんが“階級”上だしいい」

「こんな時に、そんなことを気にする必要など有りはせん。とつとと狩れ」

「はぁい」

緑呂の言葉に大きく頷いた桃真が、そっと微笑んで、女のもとへと下降していく。

「うっ…！」

降りてくる桃真に、怯えた表情を見せる女。

「や、やめて…！殺さないでっ…！」

「別に殺すわけじゃないって」

必死に乞う女に、桃真は冷たく微笑んで、右手を向ける。

「その体を、貰うだけっ」

「いやっ…！」

“ば…”

「刈^かれ」

「……っ！」

桃真が女へ向け、言葉を放とうとしたその時、桃真へ向け、横から赤色の一閃が勢いよく飛び込んできた。

「桃真……！」

「おおうつとお」

緑呂が身を乗り出す中、軽い動きで上空を舞った桃真が、その一閃を避ける。

「やあっぱ、泳がせて良かったねえ、緑呂っ」

緑呂のすぐ横まで舞い上がって来た桃真が、笑顔を見せる。

「五十音士が、わんさかだっ」

『……………』

微笑んだ桃真の見下ろす先には、それぞれの武器を身構え、鋭い表情を見せた箆也、囁、七架、そして弓が立っていた。

「ああ、そのようだな……」

「あっ……！」

桃真に答える緑呂を見て、弓が大きく目を見開く。

「鎧……！」

「何……？」

「弓さん？」

強く叫びあげる弓に、箆也たちが皆、戸惑いの表情を見せる。

「鎧……！鎧……！！！」

「鎧……？」

何度も名を呼ぶ弓に、呼ばれた緑呂もまた、戸惑ったような声を漏らす。

「そういえば、そのような名であったな……この五十音士は」

『……………っ！』

緑呂のその言葉に、皆が衝撃を走らせる。

「体に乗っ取る力を有するっていう予想は……正しかったようね……」

「ああ」

眉をひそめながら、箆也と囁が言葉を交わす。

「鎧をっ…」

弓が声を震わせ、拳を握り締める。

「鎧を返せええ！」

「ゆ、弓さんっ…！」

勢いよく叫びあげ、七架が止める間もなく、上空に居る緑呂のもとへと飛び出していく弓。

「行くよ！弓象！」

「パオオオオン！」

弓が飛び上がりながら言玉を解放し、その姿を巨大な象へと変化させる。

「わおっ、すっげえ。象だっ」

「そなたは、他を狩れ。桃真」

迫り来る金色の象に目を輝かせる桃真へと、緑呂が冷静に声を掛け、構えを取る。

「あれの相手は、我がする」

「了解っ」

身構える緑呂から離れ、再び降下して来る桃真。

「弓さん…！」

「乗っ取られた仲間を目の前に…冷静さを欠いちゃったみたいね…フフ…」

「あんなに熱くなっているのは、勝てるものも勝てなくなる」

微笑む囁の横で、箆也が険しい表情を見せる。

「囁、由守のフォローに入れ」

「仕方ないわね…」

箆也の言葉に、少し肩を落とした後、囁が弓を追うように、上空へと飛び出していく。

「奈々瀬は、あの者を避難させろ」

「わかった！」

その指示に従い、すっかり気の抜けた様子で座り込んでいる、先

程まで襲われていた女のもとへと、駆け寄っていく七架。

「大丈夫ですか!？」

「あんたは…五十音士…？」

駆け込んでくる七架の持つ、真っ赤な薙刀を見つめ、女が少し目を細める。

「あ、はい。そうでっ…」

「助けに来るのが遅いのよ!こっちがどれだけ前から、救助要請してたと思ってんのよ!」

「えっ…？」

急に強く責め立てられ、七架が思わず目を丸くする。

「あんたたちのせいで、こっちがどれだけ怖い思いしたと思っ…！」

「折角、助けに来てくれたっていうのに、うわぁ、性格ブスう」

「うっ…！」

「なっ…!？」

七架のすぐ後方へと現れた桃真に、七架と女が、驚きの表情を見せる。

「そう思ったでしょお?あんたもっ」

「クっ…！」

向けられる右手に、七架が唇を噛む。

「“刈^かれ”」

「……っ」

七架へと攻撃の手を向けようとした桃真が、またしても横から飛び込んでくる一閃に阻まれ、上空へと飛び上がって、七架たちとの距離を取らされる。

「あなたの相手は僕だ」

「神月くん」

七架たちの前に立ちはだかり、桃真へと鋭い視線を向ける箆也。

「虹乃のご所望は女の五十音士だから、ホントはそっちの女の子、狩りたいんだけどなぁ。まあいいやっ」

箆也を見下ろし、桃真が不敵に笑う。

「あんた、こん中で一番強そうだしっ」

「……っ」

鋭く光る桃真の瞳に、箆也はそっと目を細めた。

光の届かない、暗闇の空間。

「……………」

その空間の隅に映し出された映像を、萌芽は真剣な表情で見つめている。

「言ノ葉の様子はどうか？ 萌芽」

「^{イツキ}伍黄…」

萌芽が振り返るとそこには、刃の姿そのものの男、伍黄が立っていた。

「問題ない。町人のほぼ全員に忌が取り憑き、五十音士の搜索を行っている…」

「そうか」

萌芽の答えに、伍黄が満足げに微笑む。

「たったの数時間で、これほどまでの忌を発生させることが出来るとは…」

「灰示ならではの能力だ。あいつは、忌増殖の実験を数多く行っていたからな」

「……っ」

伍黄から灰示の名が出ると、萌芽はそっとその表情を曇らせた。

「伍黄…」

「ん？」

「あの灰示という男、そう簡単に信用していいのか…？」

真剣な表情で問いかける萌芽に、伍黄はかすかにその眉を動かした。

「いくら俺たちと似た存在とはいえ…人間どもと仲良く、五十音士

ごっこをやっていたような奴を、俺は信用出来ない…」

「五十音士ごっこ、か」

厳しく言い放つ萌芽の言葉を受け、伍黄が少し肩を落とす。

「問題ない。あいつは俺やお前よりも、誰よりも強く、この世界から“痛み”を消したいと思っている」

伍黄がそっと、冷たく微笑む。

「“痛み”を消す為になら、何でもする男だ」

「だが、あいつは人間と共存をっ…！」

「萌芽」

伍黄が名を呼び、萌芽の言葉を強く遮る。

「俺は、お前が生まれるよりも遥か昔から、あいつと共に在ったんだ」

天を仰ぎ、懐かしむように目を細める伍黄。

「あいつのことなら、何でも知っている。だから、問題ない」

「……っ」

そう言い切った伍黄の言葉には、どこか逆らえない圧のようなものがあり、萌芽はそれ以上、反論することはせず、大人しく黙り込んだ。

「おい！伍黄！」

「ん？」

そこへ勢いよく入って来る声に、伍黄がゆっくりと振り返る。

「どうした？碧鎖」

どこか慌てた様子で、その場へと現れたのは、碧鎖であった。

「いねえ！虹乃がいねえんだ！」

「何？」

碧鎖の言葉に、伍黄が眉をひそめる。

「まさかあいつ…」

伍黄の後方で、表情を曇らせる萌芽。

「体が来ないことに煮え切って、緑呂たちのところへ行っただんじや…」

「仕方ないな」

萌芽の言葉を受け、伍黄が少し困ったように言う。

「まあいい。時が流れるというのなら、逆らわずに進むとするか」
ゆっくりと顔を上げ、伍黄がそっと笑みを浮かべる。

「俺たちも行くぞ、萌芽、碧鎖」

「へっ？」

伍黄の思いがけない言葉に、碧鎖が目を丸くする。

「俺たちも？」

「ああ」

聞き返す碧鎖に、大きく頷く伍黄。

「この“痛み”ある世界に、宣戦布告といこうじゃないか」
顔を上げた伍黄は、どこか楽しげな笑みを浮かべた。

「破^は”！」

「遮^{さへぎ}れ”…」

緑呂が放った衝撃波を、前方に赤い光の膜を張って防ぐ。攻撃を防いだ囁が、吹いていた横笛を前へと突き出し、新たな構えを取る。

「“変格”…」

囁の言葉に反応し、横笛が槍へと姿を変える。

「“さ…”

「弓象！」

「あら…？」

槍を振り上げ、緑呂へと攻撃の言葉を発しようとした囁であったが、その前に巨体の象が飛び出してきて、囁の攻撃を阻む。

「“往^ゆけ”！」

「パオオオオン！」

象に乗り上げ、真正面から緑呂へと向かっていく弓。

「“碎^{サイ}”」

飛びかかって来る象に焦る様子もなかう、緑呂は冷静に言葉を発した。緑呂の言葉をもろに受け、弓の乗っていた象が、一気に碎かれる。

「あっ…！」

「“支^{オキ}えろ”」

空中へと放り出された弓を、囁が槍の先を長く伸ばし、受け止める。囁がそのまま降下し、弓を地面へと降ろした。

「す、すいませんっ…」

「…っ」

謝る弓を見つめ、囁がそっと目を細める。

「もう一度っ…」

「あなたはそのまま、下がっていなさい…」

「えっ…？」

元の姿へと戻ってしまった言玉を握り直し、再び解放しようとした弓へ、囁は冷たく言葉を投げかけた。その言葉に、弓が目を丸くする。

「い、いえ！私もっ…！」

「わからない…？」

身を乗り出す弓へと、囁が静かに問いかける。

「冷静さを欠いた、今のあなたと一緒に戦われても…足手まといなだけの…」

「…っ！」

厳しく放たれる囁のその言葉に、弓が大きく目を見開く。

「乗っ取られた仲間を前に、そうなってしまうのも無理はないわ…だからこの場は、私に任せて…」

冷たかった声が、優しく変わる。

「あなたの仲間は、私が必ず助けるわ…」

「囁さん…」

穏やかに微笑む囁に、そっと目を細めると、弓はそのまま俯き、言玉を握り締めていた右手を、ゆっくりと下ろした。

「さてと」

弓に背を向け、囁が上空に居る緑呂へと、鋭い視線を上げる。

「我と一人で戦おうというのか…？小娘」

「いえ…そうでもないわ…」

「何…？」

「“薙^なぎ払え”！」

「なっ…！」

そっと微笑む囁に、緑呂が戸惑っていたその時、緑呂へ向け、勢いよく赤色の一閃が飛び込んできた。

「グっ…！」

慌ててその一閃を避ける緑呂であったが、わずかに左腕をかすめ、

その漆黒の鎧に傷がつく。

「五十音士の防具に救われるとはな…」

鎧の傷ついた部分を、緑呂がそっと撫でる。

「下がってて！弓さん！」

「奈々瀬さん」

弓の前に立ち、勢いよく薙刀を身構える七架。

「あの元五十音士は…？」

「安全なところまで避難させたから、大丈夫。まあ、色々とうるさく言われちゃったけど…」

「フフフっ…そう…」

苦い笑みを浮かべる七架を見て、囁が楽しげに笑う。

「じゃあ、とつとところらも終わらせましょうか…七架」

「うんっ」

「チっ…」

構えを取る囁と七架を見下ろし、緑呂は少し表情をしかめた。

「へえ、あの緑呂を追い詰めるなんて、結構やるなあ。あの人たちっ」

すぐ横の戦況を見つめ、仲間が追いこまれているというのに、焦った様子は見せずに微笑む桃真。

「“刈^かれ”！」

「……っ」

そこへ飛んで来る一閃を、桃真が軽い動きで、素早く避ける。

「まっ、こっちも結構やるんだけどねえ」

鎌を構えた箆也を見下ろし、桃真が不敵に微笑む。

「避けてばかりいないで、攻撃の一つでもしてきたらどうだ？」
しかめた表情で、箆也が桃真へと問いかける。

「うん、その内しようとは思ってるよお」

軽い口調で答える桃真に、箆也がさらに眉をひそめる。

「余裕というわけか？」

「そんなことはないさあ」

問いかける箆也に、微笑んだ桃真が大きく、首を横に振る。

「あんたはこの中じゃ間違ひなく一番強い、ボクは仲間の中じや、一番階級も下だしねえ」

「“階級”…？」

桃真が口にしたその言葉に、箆也が少し戸惑う。

「まともにぶつかり合ったら、結構すぐに負けちゃってたかもっ」

「弱気なものだな」

「謙虚なんだあ、ボクっ」

上空を舞う桃真が、得意げに微笑む。

「だから避け続けたんだあ。時間が来るまで、あんたの気を引いていられるようにっ」

「何っ…？」

意味深な桃真の言葉に、一気に曇る箆也の表情。

「どういうことだ？ あなたたちは、一体何をっ…」

「あれえ？ ここに駆け付けたくらいだから、てっきり気付いてるのかと思ったのにい。ボクたちの目的にっ」

「目的っ…？」

——敵は体に乗っ取る能力を有し、その体と力を得るため、次々と五十音士を狙っている——

「……っ！」

思い出される恵の言葉に、箆也が大きく目を見開く。

「まさかっ…！」

勢いよく箆也が振り向き、少し離れたところに立っている弓の方を見る。すると、弓に背後から近づく、怪しげな黒い影が目に入っ
た。

「その場から離れろ！ 弓っ！」

「えっ…？」

囁たちと緑呂の戦いを見つめていた弓が、箆也の大きな声に振り

向く。

「神月さ…」

「キャハハハハ…！」

「なっ…！？」

戸惑いの表情を見せていた弓の前へと姿を現す、禍々しい黒い影。

「クソっ…！」

箆也が弓のもとへ、飛び出して行こうとする。

「破”」

「うっ…！」

だが目の前へと降り注がれる衝撃波により、弓のもとへ行こうとした箆也の足は止められる。

「さっ、リクエストもあったことだし、攻撃でも始めよっかなあ」

「クっ…！」

楽しげに微笑む桃真に、箆也の表情が歪んだ。

「あれは、忌っ…？」

「弓さんがっ…！」

緑呂と戦っていた囁と七架も、箆也の声により弓に迫る黒い影に気付き、弓のもとへと駆けつけようと、体の向きを変える。

「“縛”」

『ううっ…！』

だが、緑呂の手から放たれた、体に纏わりつく黒い霧により、二人の動きは止められた。

「キャハハハハ…！」

「こ、これはっ…」

目の前で甲高い笑い声をあげる黒い影を見つめ、弓がそっと眉をひそめる。

——逃げろ！弓！——

「あの、時のっ…」

刃と鎧の襲われた夜、現れた黒い影の塊と、よく似た目の前にあるその姿に、険しい表情を見せる弓。

「すぐにその場を離れるんだ！弓！」

「弓さん……！」

「……っ」

二人の仲間を失った日と同じように、箆也や七架から降り注がれる声に、弓はきつく唇を噛み締め、言玉を握る右手を振り上げた。

「私はもうっ……二度と、仲間を置いて逃げたりしない！」

弓の右手の中で、言玉が強い金色の光を放ち始める。

「第三十八音“ゆ”、解っ……！」

「戴きまあーすっ」

「……っ！」

弓が言葉の解放を終える前に、愛らしい声が響くとともに、黒い影が弓へと勢いよく飛び込んでいった。

「ああああああっ……！！！」

影が弓の体の中へと入り込んだ瞬間、弓が激しい叫び声をあげる。

「うっ……！」

桃真に応戦しながら、表情を引きつる箆也。

「ああああああっ……！！！」

「弓さんっ……！」

「クっ……」

響き渡る悲鳴に、黒い影に縛られたまま、七架が必死に身を乗り出し、囁が何とか右手だけを自由にして、持っていた槍を突き上げた。

「“咲き誇れ”……！」

囁が言葉を発すると、二人を捕らえていた黒い影に周囲に、色とりどりの花が咲き乱れ、黒い影を逆に縛りつけ、二人の体を解放する。

「何……？」

咲き乱れた花を見下ろし、少し驚いたような声を漏らす緑呂。

「由守さんを…」

「うん…！」

囁の言葉に大きく頷き、七架が弓のもとへと飛び出していく。

「あああああっ！！うっ…！」

苦しんでいた弓が、勢いよく顔を上げ、一度目を見開くと、響き渡らせていた悲鳴を止め、静かに俯いた。

「弓さんっ…！」

俯いた弓へと、七架が駆け込んでいく。

「弓さん…！」

弓のすぐ前まで、駆け寄る七架。

「……………」

「弓、さん…？」

俯き、黙り込んだままの弓に戸惑いながら、七架がゆっくりと弓の顔を覗き込む。

「キャハハハハ！」

「なっ…！？」

勢いよく顔を上げた弓が、弓らしからぬ、甲高い声で笑う。その瞳は先程までの弓とは異なり、血のように真っ赤に染まっていた。

「これはっ…！」

「“破”！」

「うっ…！」

目を見開く七架へ、間を置くことなく、衝撃波を向ける弓。

「きゃああああ！」

「奈々瀬…！」

弓の繰り出した衝撃波により、吹き飛ばされる七架に、箆也が思わず声をあげる。

「やった！やったわあ！ついに、ついに手に入れた！」

「乗っ…取られたの…？由守さんの体が…」

笑いあげる弓の、明らかに弓ではないその様子を見つめ、額から汗を流す囁。

「私の体！虹乃だけの体よお！キャハハハハ！」

「あれが：奴等の能力っ：」

箆也も弓を見つめ、険しい表情を見せる。

「ご機嫌だねえ、虹乃っ」

「桃真」

虹乃と呼ばれた弓が、すぐ横へとやって来る桃真に微笑みを向ける。

「当たり前じゃなあーい？念願の実体だものっ」

「そなたはアジトで待機していたはず：」

二人のもとへと、緑呂も降りてくる。

「何故、この場に居る：？」

「あんたたちが遅いから、碧鎖たちみたいに失敗したんじゃないかって心配して、わざわざ来てやったのよ」

虹乃となった弓が、緑呂へと冷たい視線を向ける。

「やっぱり来て良かったわあ。私が来なきゃ、どうなってたことかっ」

「そなたが来んでも、その女の体くらい、手に入れられた」

「どうかなあ？正直ボクたち、苦戦してたしい」

「桃真」

「ごめんごめんっ。そう怒らないでよお」

仮面の奥から、緑呂に鋭い視線を投げかけられ、桃真が少し困ったように笑みを浮かべる。

「大丈夫：？」

「う、うん：」

三人が集まっている間に、虹乃から衝撃波をもろに受け、倒れ込んだ七架のもとへと駆けつける囁。囁に体を起こされた七架が、少し苦しげに返事を漏らす。

「大丈夫か？」

「箆也：」

その場に、桃真と戦っていた箆也も駆けつける。

「箆也…七架の傷の手当てを…」

「逃げるぞ」

「えっ…？」

七架の手当てを求めようとした囁だが、箆也から返って来た思いがけない言葉に、驚きの表情を見せる。

「逃げる…？」

「ああ。僕が奴等の気を引く。その間に、言葉の準備をしておけ。僕が来たら、すぐにこの場を離れるんだ」

「珍しいわね…あなたがそんな選択をするなんて…」

「不本意だがな」

囁に答えながら、箆也が険しい表情を見せる。

「だがこのまま、僕たちまで奴等に乗っ取られてしまうようなことだけは、絶対に避けねばならない」

「…：…そうね」

敵と化した弓の姿を見つめ、箆也たちがそっと目を細める。

「というわけだけど…大丈夫…？」

「う、うん。平気」

囁の声に答えると、七架が傷ついたままの体を立ち上がらせ、囁の横へと並ぶ。

「頼んだぞ」

「ええ…」

囁にもう一度言うと、箆也は鎌を構え、集まっている緑呂たちのもとへと駆け出していく。

「あつれえ…？一人で突っ走ってくるけどお？」

「妙だな…」

「まあいいじゃないっ」

戸惑う二人に対し、真ん中に立つ虹乃が、楽しげに微笑む。

「一人ずつ、ぶっ潰しちゃえば！」

駆け込んでくる箆也へと、一斉に右手を向ける緑呂たち。

『“破”！』

三人の放った衝撃波が合わさり、さらに大きな衝撃波となって、勢いよく箆也へと向かっていく。

「……っ」

「何っ…?」

そんな向かってくる衝撃波の塊へと、右手に持っていた鎌を放り投げる箆也。武器を手放す箆也に、桃真たちが戸惑いの表情となる。

「火炎^{かえん}」

『なっ…! ううう…!』

衝撃波の中で、鎌からその姿を赤々とした炎へと変えた言玉が、三人の放った衝撃波を巻き込むようにしてその規模を広げ、三人を包み込んでいく。

「炎っ…!?!」

「何なのよ! もう!」

包まれた炎の中で、身動き出来なくなる三人。

「よしっ」

右手に炎から戻った鎌を掴み直した箆也が、まだ炎に包まれている三人の姿を確認し、すぐに背を向けて、後方で待機している囁と七架のもとへと駆け出していく。

「行くぞ!」

「ええ…」

箆也の声に答え、右手の槍を掲げる囁。

「攫^{さら}え」…」

駆けてきた箆也が囁のすぐ横で立ち止まると、三人の体を、赤い光が包み込んでいく。

「奴等、逃げる気だ」

「えええっ!?! ウツソおお!?!」

「ああゝららっ」

動きを止められたまま、光に包まれていく箆也たちを見つめ、表情をしかめる虹乃たち。

「阻^{はば}め」…」

「えっ…?」

上空から降り落ちてくる赤い光に、囁が眉をひそめる。

「うううっ…!」

降って来た光に弾かれ、囁が掲げていた槍を手放す。

「なっ…」

「囁ちゃん!」

驚きの表情を見せる、箆也と七架。囁がその場にしゃがみ込み、槍が力なく地面へと落ちると、三人を包み込んでいた光も消えてしまった。

「大丈夫!? 囁ちゃん!」

「今の、言葉はっ…」

七架が駆け寄る中、囁が表情を曇らせる。

「何者だっ…!?!」

光の降り落ちてきた上空を見上げ、勢いよく叫ぶ箆也。

「“何者だ”…?」

聞き返すように、空から落ちてくる一つの声。

「くだらない、問いかけたね…」

「なっ…!?!」

上空に浮かぶその人物を視界に入れ、箆也が大きく目を見開く。

「は、灰示っ…?」

戸惑いの声が、箆也の口から漏れる。

「波城、灰示…?」

「……………」

箆也たちの前へと現れたのは、赤い瞳を輝かせた、灰示であった。

Word. 37 始マリノ忌 (1)

言ノ葉町。町の小さな何でも屋さん『いどばた』。

「雅くうゝん、こっちも板あゝ」

「あ、はい」

恵に連れて行かれたアヒルたちと別れ、『いどばた』に残った為介と雅は、アヒルとエリザたちの戦闘により、家中の壁にあいた穴の修復作業を行っていた。

「もうそろそろ寒い時期だっていうのに、困っちゃうよねえゝ」

「為介さん：これ本当に全部、自分たちで直すんですか：？」

板などでは塞げそうもない、壁一面の巨大な大穴を見つめ、雅がどこか不安げに問いかける。

「仕方ないじゃなあゝい？僕も雅くんも、家直せる系の言葉は使えないんだからあゝ」

「神月くんが戻って来るのを待って、“改修”してもらった方が早いのでは？」

「あ、そっかあ」

雅の言葉に、為介が大きく手を叩き、その表情を明るく輝かせる。

「そうしようっ。じゃ、修復作業やめえゝ」

「……………」

すぐに板を放り出す為介を見て、雅がどこか呆れた表情を見せる。

「君も、もういいよおゝええっとお、六騎^{むつき}クン、だっけえ？」

「えっ？あ、おう」

為介に声をかけられ、庭で飛び散った壁の破片を拾っていた六騎が、その作業を止める。

「なあ」

「んんゝ？」

「お姉ちゃん、大丈夫かなあ？」

不安げな表情で、六騎が為介へと問いかける。五十音士や忌のこ

とは理解していないものの、今の危機的状況については、何となく察しているようであった。

「大丈夫だよ、朝比奈くんはともかく、恵サンが付いてるんだから」

「そうだいいけど」

為介の言葉にも、特に安心することはなく、六騎は浮かぬ表情のまま庭から家の中へと上がり、和室のテーブルのすぐ横に座り込んだ。

「ん、今時のお子ちゃまっていうのは、気難しいものだねえ」

「単に、為介さんの適当な言葉が、信用出来ないだけじゃないですか？」

「ええ！？ ショックウ」

雅の冷たい言葉に、為介は両手で自らの両頬を挟み込む。

「ですが、妙ですね」

「ん？」

不意に眉をひそめる雅に、為介が首を傾げる。

「何故、彼は忌に取り憑かれなかったのでしょうか？ 他の奈々瀬さんの家族は取り憑かれていたのに」

七架と共に逃げ、為介の家へとやって来た六騎は今も直、忌に取り憑かれる気配はない。

「やはり以前、忌に襲われたことが何かのきっかけとなって…」

「いいや、理由はもっと単純なものだよ」

「えっ…？」

そっと微笑む為介に、雅が戸惑った表情を見せる。

「単純というのは？」

「彼が忌に取り憑かれたいのは、僕らが忌に取り憑かれたいのと同じ理由ってことっ」

「……っ」

為介のその言葉に、驚いたように目を見開く雅。

「では、彼も五十音士と？」

「うん、じきに目醒めるんじゃないかなあ」

「ですが彼はまだ子供ですよ？」

「君が初めて僕んとこ来たのも、あれくらいの年じゃなかったっけえ？」

「それは、そうですねっ…」

過去のことを思い出したのか、雅が少し面白くなさそうに顔をしかめる。

「あんな小さな子供まで、その内、巻き込んでしまうかも知れないなんて…気持ちが悪くなりますね」

「そうですね…」

浮かぬ表情を見せる雅の横で、為介がそっと目を細める。

「本当に必要なのかねえ…この世界に、五十音士なんてものは…」

「為介さん…」

どこか遠い瞳を見せ、呟く為介を見つめ、雅が少し眉をひそめる。

「ふうっ」

「んん？」

一息つく声が部屋へと入って来て、為介がゆっくりと振り向く。

「小泉君」

「どうだったあ？ 於の神クンと連絡取れたあ？」

「あ、はい」

為介の問いかけに、部屋へとやって来た紺平が、少し慌てた様子で頷く。

「でも檻也くん、今忙しいみたいで、詳しいことはまた後で聞くて…」

「忙しい？」

「はい。それが…」

聞き返した為介に、浮かぬ表情を見せる紺平。

「今、韻の本部に居るみたいなんです…檻也くん…」

『……っ』

紺平のその言葉に、為介と雅は驚きの表情を見せた。

その頃、韻本部。

「そうですか。由守の拘束には失敗しましたか」

本部の静かな一室で、どこか厳しい表情を見せるのは、言姫、和音であった。

「ま、まあ失敗っちゃ失敗だけど、別に失敗ってほどの失敗じゃあ
っ」

「自分の非は大人しく認めて下さい。見苦しいです、エリザ様」
「うっさいわね！」

失敗という言葉を確認たくない様子のエリザに、隣に付き従った慧が、冷めた視線を送る。為介の屋敷を去った二人は、韻本部に居る和音のもとへと、弓のことを報告するために訪れていた。

「仕方ないでしょ。安団の邪魔が入ったんだからっ」

「安団、ですか……」

エリザの言葉を受け、和音がそっと目を細める。

「あなたがた衣団えだんが、言葉の使えない安の神相手に、あっさりと逃げられるとも考えにくいのですが……」

鋭く微笑んだ和音が、まっすぐにエリザを見つめる。

「誰か、他の者の介入を受けたのでは……？」

「……っ」

和音のその問いかけに、エリザが少し眉をひそめる。

——目白……恵……？——

——久し振りだねえ、エリザベス——

「いいえ、ちょっと油断しただけよ」

恵のことを思い返しながらも、エリザは恵のことを口にするのではなく、和音に対し、はつきりと答えた。

「そうですか」

「……………」

含んだ笑みで和音が頷く中、慧が少し曇らせた表情でエリザを見つめる。

「では、衣団は引き続き由守と、安の神の拘束を。拘束後すぐに、韻本部へ連行して下さい」

「えっ…？」

和音の言葉に、エリザが戸惑いの表情を見せる。

「アヒっ…安の神、も…？」

「ええ」

ひそめた表情で聞き返すエリザに、和音が何の迷いもなく頷きかける。

「何故…？」

「安の神は由守と共に逃走しているのですよ？共に拘束するのは、当然のことでしょう。何か重大な事実を知っている可能性もあります」

エリザの問いに、すらすらと答える和音。

「ですから、一刻も早く、由守と安の神の拘束を…」

「それよりも、忌に取り憑かれた者たちを助けるのが先じゃないのか？」

『…………』

部屋へと入って来る声に、和音とエリザが同時に振り向く。

「檻也…空音も」

部屋へ入って来たのは、鋭い表情を見せた檻也であった。檻也のすぐ横には、和音の妹で“曾守”そもりの空音が付き従っている。檻也は早い足取りで、和音の方へと歩み寄って来る。

「エリザ様、あの御方は？」

「於崎檻也。於の神よ」

「ではあの方が、神月様の弟っ…」

エリザから教えてもらい、檻也を見つめ、慧がそっと目を細める。

「いつから韻は、五十音士捕縛部隊になったんだ？忌に取り憑かれた人間を救うことが、俺たちの役目だろう」

「敵の正体が知れぬ内は、早々に動くわけにはいきません」

「ではこのまま、忌に取り憑かれた人間たちを放っておくというのか？」

「そうは言っていないません。きちんと対処は行いますわ」

強い口調で問いかける檻也に対し、和音は余裕を感じる、穏やかな笑みを向ける。

「由守と安の神を拘束した後に」

「……っ」

不敵な笑みを浮かべる和音に、檻也が表情を曇らせる。

「行くぞ、空音」

「えっ？」

そう言い放ち、和音へと背を向ける檻也に、すぐ横に立っていた空音が戸惑った声を漏らす。

「どちらへ？」

背を向けた檻也へと、凜とした声を発する和音。

「言ノ葉へ行く。構わないな？」

「ええ。どうぞ、ご勝手に」

「………」

止める素振りは一切なく、どこか楽しげにさえ見える笑みを浮かべる和音を振り返り見て、檻也はさらに表情を曇らせた。

「お前は、昔から信用ならない奴だが……」

再び和音へと背を向けた檻也が、ゆっくりと口を開く。

「籠也の害となるようなことだけは、しなないと思っていた……」

「……っ」

去り際の檻也のその言葉に、ずっと浮かべられていた和音の笑みは、静かに止まった。そのまま振り返ることなく檻也は部屋を去り、空音も続いて部屋を後にする。

「………」

「言姫？」

「あっ」

何やら考え込むように俯いていた和音が、エリザの呼びかけに、ハッとした表情を見せて顔を上げる。

「あなたがたも行つて下さい。わたくしは別の用がありますので、これで失礼いたしますわ」

「えっ？ ええ」

和音はエリザへとそう言うと、足早に部屋を後にした。和音の去った扉を見つめ、エリザが少し考え込む表情を見せる。

「エリザ様…」

「言姫を見張ってくれる？ 慧」

「えっ…？」

思いがけないエリザの言葉に、慧が目を丸くする。

「そ、そのようなことっ…」

「責任はすべて、私取るわ」

「えっ？ あ、じゃあっ…」

「余計なことしたら責任は全部、君持ちよ」

急に表情を緩めた慧に、エリザが鋭く言い放つ。

「エリザ様、言姫様が何か…」

「わからないわ」

戸惑いの表情を向ける慧に、エリザも眉をひそめながら、はつきりと答える。

「ただ、予感がするのよ…」

そう言い放ったエリザは、険しい表情を見せていた。

「波城、灰示…」

「……………」

弓の体を謎の敵・虹乃に乗っ取られ、窮地に追い込まれた簞也た

ちがその場から立ち去ろうとしたその時、囁の言葉を阻み、その場へと現れたのは、灰示であった。

「波城灰示…」

「誰…?」

表情を曇らせる囁の横で、七架は、初めて見る灰示の姿に首を傾げる。

「誰え?あれっ」

「我は知らん」

「何で、あいつがっ…」

大きく首を傾げる桃真と緑呂の横で、虹乃が表情をしかめる。

「どういうことだ…?」

眉をひそめ、まっすぐに灰示を見つめる箆也。

「何故、あなたがここに居る…?」

「何故…?」

灰示が涼しげなその表情を少しも動かさずに、そっと箆也の言葉を繰り返す。

「それもくだらない問いかけだ」

灰示が口角を、少しだけ上げる。

「僕の役目は、君たちに“痛み”を与えること」

「なっ…!」

両手に数本の真っ赤な針を構える灰示に、箆也が大きく目を見開く。

「ただ、それだけだよ」

「クっ…!」

微笑んで針を投げ放つ灰示に、鎌を構える箆也。

「刈^かれ…!」

箆也が向かってくる数本の針へ向け、赤い一閃を放つ。

「外^{はず}れろ」

「何っ…!」

灰示の言葉に反応し、空中で大きく曲がって、誰もいない空へと

舞い上がっていく箆也の一閃。舞い上がっていく一閃を見上げ、箆也が驚きの表情を見せる。

「“破裂”^{はれつ}」

「うっ…！」

箆也の一閃が流れたため、そのまま、防がれることなくやって来た灰示の針が、箆也の目の前で破裂し、小さな無数の針となって、箆也へと降り注ぐ。

「うああああっ…！」

「箆也…！」

「神月くん…！」

小さな針を全身に浴び、後方へと吹き飛ばされていく箆也に、囁と七架が身を乗り出す。

「逃げるのは無理そうね…」

立ち尽くす灰示の姿を見つめ、そつと目を細める囁。

「七架、私が彼等を引きつけておくから…あなたはその間に、傷の治療を…」

「だあれが引きつけておけるのかしらあ？」

「なっ…」

七架へと指示を飛ばそうとした囁の後方から、冷たく微笑んだ虹乃が、勢いよく飛びかかって来る。

「さ、“妨げ”^{さまた}…！」

「遅お…い！“破”^は…！」

「うっ…！ああああ！」

囁が言葉で防御膜を張る前に、虹乃が素早く衝撃波を放つと、囁はそれを直撃し、勢いよく吹き飛ばされた。

「囁ちゃんっ…！」

「ねえ…？こいつ等も捕まえんのお？」

「……っ」

囁のもとへと行こうとした七架が、すぐ後ろから聞こえてくる声に振り返る。

「虹乃があの子の体を獲得し、我々はすでに全員、実体化した。最早、器は必要ない」

「じゃっ、殺しちゃっていいってことかあ」

「クっ…！」

緑呂の言葉を受け、楽しげな笑みを浮かべる桃真に、七架は厳しい表情を作り、薙刀を構える。

「“変格”！」

赤く輝く薙刀が、その姿を巨大な十字架へと変えていく。

「“嘆け”…！」

十字架からそのまま飛び出た、十字型の赤い光が、緑呂と桃真の方へと向かっていく。

「へえ、あれが“変格”ってやつかあ」

「感心しとる場合か」

「わかってるよお」

鋭く言い放つ緑呂に余裕の笑みを向け、桃真が向かってくる十字の光へと、右手を向ける。

「“返”」

「えっ…？」

桃真が突き出した右手の指先を軽く捻っただけで、桃真たちへと向かっていった光が、その向きを一変させ、七架へと一直線に戻って来る。

「そんな…ああああっ…！」

避ける間もなく、自らの光を浴びる七架。

「囁…！奈々瀬…！うううっ…！」

地面に膝をついていた籠也が、桃真たちに圧倒されている二人の姿に、身乗り出す。だが、急に体を動かしたため、突き刺さった針がさらに体へと食い込み、籠也は大きくその表情を歪めた。

「苦しいかい？」

「…っ」

聞こえてくる問いかけに、そっと顔を上げる籠也。

「それが、“痛み”だよ…」

「クっ…」

微笑む灰示に、箆也が強く唇を噛み締める。

「か…」

箆也が膝をついたまま、大きく口を開く。

「かまいたち鎌鼬”…！」

持っていた鎌を勢いよく灰示へと投げ放ち、大声で言葉を叫ぶ箆也。鎌は、灰示へと向かっていく間に、その姿を風の塊へと変え、徐々に勢力を増して、灰示へと襲いかかった。

「…はじ弾け」

灰示が小さく言葉を落とし、一本の針を投げると、風の塊がその小さな針にあっさりと弾かれ、箆也のもとへと返って来る。

「クっ…！“か変われ”！」

険しい表情を見せた箆也が、戻って来る風へと右手を突き出し、言葉を放って、風をもとの鎌の姿とし、持ち手の部分の強く握り締める。

「“か駆ける”…！」

鎌を構え、言葉を使って、箆也が勢いよく灰示のもとへと駆けこんでいく。

「…っっ」

向かってくる箆也を見つめ、そっと微笑むと、灰示は右手の数本の針を合体させ、一本の大きな針を作り出した。

『…っっ！』

箆也の鎌と灰示の針が、強くぶつかり合う。

「何故だっ…」

目の前に立つ灰示へと、問いかけを向ける箆也。

「僕たちの味方のような振る舞いをして…今になって何故…！」

「味方の振る舞いをした覚えなんて、一度もないよ」

「何っ…？」

灰示の言葉に、箆也が眉をひそめる。

「僕はただ、“痛み”を生み出す人間を排除しただけ…」

「……っ」

微笑む灰示に、さらに表情を曇らせる箆也。

「所詮は忌^{イミ}かつ…！」

「そう、僕は忌…」

顔をしかめた箆也に、灰示は肯定するように大きく微笑む。

「“痛み”より生ずる…人とは異なる存在…」

灰示が笑みを止め、目を細める。

「挟^{はさ}め」

「あっ…！」

灰示と向き合っていた箆也の両側から、挟み込むように、無数の針が飛んで来る。

「うううう…！」

すべての針が箆也へと命中し、箆也の真っ赤な血が、辺りに飛び散った。

「うううう…！」

「それが“痛み”…」

両膝を地面につき、前方に蹲^{うずくま}る箆也を見下ろして、灰示が静かに声を掛ける。

「もっと、“痛み”を…」

「グっ…！」

新たな針を構える灰示に、箆也は一層険しい表情となって、唇を噛んだ。

「……っ」

「ん…？」

「あっ…」

針を投げようとした灰示の右手を、横から伸びてきた別の手が、力強く止める。止められる右手に、灰示は少し眉をひそめ、箆也は目を見開く。

「神……」

「……………」

灰示の手を強く掴み、その場へと姿を現したのは、厳しい表情を見せたアヒルであった。

「やあ」

アヒルを見つめ、薄く笑みを浮かべる灰示。

「久しぶりだね、安の神様……」

「灰示……」

微笑む灰示へと、アヒルは鋭い視線を向けた。

Word. 37 始マリノ忌 (2)

「安の神”…?”」

灰示の言葉に反応し、七架と戦っていた桃真が、灰示のすぐ傍へと現れたアヒルの方を振り向く。アヒルの姿を確認し、その表情を曇らせる桃真。

「あれが、今の…」

「“巡^{めぐ}れ”っ」

「へっ？」

アヒルを見たまま、何やら考え込むような表情を見せていた桃真が、どこからか響く言葉と、前方から漏れる緑色の光に気付き、再び前を見る。すると、前方に広がっていた緑色の光が消え、先程までそこに倒れていたはずの七架の姿が、なくなっていた。

「あれ？消えちゃったあ」

「何をしておる」

間の抜けた声を出す桃真に、緑呂が後方から呆れきった言葉を向ける。

「キャハハハ…！」

甲高い悲鳴を、辺りに響かせる虹乃。

「死んじゃってえ！“碎^{サイ}”！」

「クっ…！」

黒い光を纏った右手を振り下ろしてくる虹乃に、そのすぐ前でしやがみ込んだままの囁が、険しい表情を見せた。

「よいしょっ」

「んんっっ？」

鋭く伸びてきた足により止められる手に、虹乃が首を傾げる。

「だあれえ？あんたっ」

「どうやら、さっきまでの由守とは別人のようだな」

不快そうに問いかける虹乃を見つめ、少し困ったように言い放っ

たのは、小脇に七架を抱えた恵であった。

「恵、先生っ！」

「奈々瀬と一緒にじっとしてろ。真田」

「わわっ」

どこか茫然と恵を見つめる囁へと、恵が抱えていた七架を放り投げる。七架は少し焦りながら、囁のすぐ前へと転がり込んだ。

「だから誰なのよ！？あんた！」

「小娘に名乗る名前は、持ち合わせていない」

「何ですってえ！？」

虹乃を方を振り向き、挑発的な言葉を投げかける恵に、虹乃が大きく顔をしかめる。

「ムカつく！そいつらより先に、あんたから殺してやるわあ！」

「め……」

叫び散らす虹乃に構うことなく、恵がそつと口を開く。

「“滅^めせ”……」

「えっ……？」

虹乃の右手を止めていた恵の足が、強い緑色の光を放ち始める。

その光が浸透するように、虹乃の右手を包み込んだ。

「うっ……！あああああっ！」

光に包まれた右手を、すぐさま恵の足から離し、激しい悲鳴をあげる虹乃。

「虹乃っ……？」

「グウ……！」

悲鳴に緑呂と桃真が振り向く中、虹乃が右手を抱え、苦しげに声を漏らす。

「虹乃……！」

「クっ……」

「これは……」

苦しむ虹乃の元へと駆け寄って来る、緑呂と桃真。俯いた虹乃の額からは汗が流れ落ち、恵の足に触れた虹乃の右手は、黒い霧のよ

うに実体のない姿となっていた。その様子を見て、緑呂が曇った声を発する。

「ああゝあ、痛そおゝ」

「何なのよ!? 一体っ…!」

「これ程の力、あの女…」

怒りに震えた言葉を吐き出す虹乃の横で、緑呂がそっと恵の方を振り向く。

「大丈夫かぁ? お前らっ」

「あ…は、はい…」

振り返る恵に、その強さに圧倒されていた七架が、啞然としながら返事をする。

「アヒるんの…」

「んっ?」

ゆっくりと口を開く囁に、恵が少し首を傾げる。

「アヒるんの力は、戻ったの…?」

「ああ。まっ、一応な」

「一応…?」

恵のどこか曖昧な答えに、囁は眉をひそめた。

「ふう…」

恵が現れ、囁と七架が助けられたことを確認すると、箆也が少し安心した様子で息をつく。息をつくと箆也は、すぐにまた、目の前のアヒルと灰示の方へと視線を戻した。

「灰示…」

アヒルは灰示をまっすぐに見つめ、もう一度、灰示の名を呼ぶ。

「なんでお前が…こんなことっ…」

「それは、“痛み”を失くす為…」

『…っ』

灰示の方を見ていたアヒルと箆也が、上空から降るように聞こえてくる新たな声に、ハッとなって顔を上げる。

「あっ…！」

上空に見える人影に、アヒルが大きく目を見開く。

「この世界から、すべての“痛み”を消し去る為…」

アヒルたちの見上げた上空に浮かんでいるのは、金色の短髪に、何よりも印象的な真っ赤な、切れ長の瞳の、まだ若い青年であった。闇に紛れる黒い服を纏い、手足や首に、包帯を巻いている。

「お前、はっ…」

どこか見覚えのあるその青年に、アヒルが眉をひそめる。

「“離^{はな}れろ”」

「あっ」

アヒルが青年に気を取られていたその時、灰示が言葉を放ち、掴まれていたアヒルの手から逃れて、上空へと舞い上がり、現れた青年のすぐ横まで寄っていく。

「灰示っ…！」

「……………」

思わず身を乗り出し、灰示の名を呼ぶアヒルであったが、灰示がその呼びかけに答えることはなかった。

「ハイジ…？」

「初めて聞く名前なんだけどお、誰^{イツキ}え？ 伍黄」

その青年、伍黄のもとへと、灰示と同じように舞い寄っていく緑呂と桃真。

「あれっ？」

鉄仮面の男、緑呂をその視界へと入れ、アヒルが再び眉をひそめる。

「あいつも、どっかで…」

「也^{やもり}守と与^{よもり}守だ。写真で見ただろう」

「ああっ！そうそう！あの鉄仮面！」

横から口を挟む籠也の言葉に、アヒルが納得した様子で大きく手を叩く。

「だが、気をつけろ。見た目は也守たちであっても、中身はまるで

別物だ」

「そうみてえだな…」

アヒルが表情を曇らせ、そっと視線を流す。

「大丈夫か？虹乃」

「平気よ。これくらいっ」

アヒルが視線を流したその先には、緑呂たちと同じように、伍黄のもとへと寄っていく虹乃の姿があった。問いかける伍黄に、虹乃が強気に答える。

「体が手に入ったからって、調子乗り過ぎたんじゃねえのお？」

「勝手な行動ばかり、するからだ」

「うるさいわね！」

伍黄の後方から姿を見せた碧鎖と萌芽に口々に言われ、虹乃がその表情を大きくしかめる。

「弓っ…」

今はまるで別人となってしまうた弓のその姿を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「あなたたちは…」

上空に顔を揃えた伍黄たちを見上げ、鋭い表情を見せる箆也。

「あなたたちは一体、何者だ!？」

「何者？」

箆也の言葉を聞き返し、伍黄が少し不思議そうな顔を見せる。

「可笑しなことを言う。もうとっくに、気付いているのではないのか？」

伍黄が口角を吊り上げ、冷たく微笑む。

「俺たちは忌…お前たち五十音士のよく知る、忌だ」

『……っ!』

はつきりと答える伍黄に、皆が衝撃を走らせるように、大きく目を見開く。

「忌、だどっ…？」

伍黄の答えに、益々困惑の表情を見せる箆也。

「随分と驚いた顔をするのだな」

衝撃を走らせたアヒルたちの顔を見回し、伍黄が薄く微笑む。

「こいつの存在を知っているのであれば、容易に想像がつくかと思っただが」

そう言って伍黄が、隣に居る灰示の方を見る。

「そいつは、“痛み”を持った人間と強く同調し、実体化した」
「ん？」

アヒルたちから少し離れた場所で、伍黄へ向け、言葉を投げかけたのは、恵であった。別方向から聞こえてくる声に、伍黄はゆっくりと振り向いた。

「奇跡的とも言える存在だ。そんな奴が、早々簡単に生み出されるはずがない」

「ああ、その通りだ」

恵の鋭い言葉を、認めるように大きく頷く伍黄。

「灰示と、灰示の取り憑いた人間との同調は、あまりに特異的…俺たちがそうしようとしたところで、出来るものではなかった」

「……………」

振り向いた伍黄の方を見ることもなく、灰示は細めた瞳を、ただ下へと向けている。

「だが俺たちは、灰示の存在に、一つの可能性を見出した」

「可能性…？」

伍黄の言葉に、恵が眉をひそめる。

「取り憑いた人間が五十音士であったことが、灰示の実体化に関与したのではないかと」

「……っ」

恵の表情が、徐々に陰しくなる。

「灰示は“は”の言葉を支配することで実体化し、その人間の中に存在し続けている。ならば俺たちも、五十音士の言葉を呑み込めば、実体化出来るのではないかと」

「言葉を、呑み込むっ…？」

「そんなことが…」

伍黄の話を聞き、表情を曇らせる囁と七架。

「五十音士の言葉を呑み込むなんてことが、そこら辺の忌にそう簡単に出来るはずがっ…」

「確かに、そこら辺の忌には出来ないだろうな」

否定しようとした恵の言葉を、伍黄があっさりと肯定する。

「だが、俺たちには確信があった」

伍黄が言葉の通り、自信に満ちた笑みを浮かべる。

「俺たちは灰示と同じく、忌の中でも特別な存在だからな」

「特、別…？」

「どういう意味だ!？」

眉をひそめるアヒルの横から、箆也が鋭く問いかける。

「俺たちは“始忌”…始^{シキ}まりの忌」

「始忌…？」

「始まりの、忌…？」

伍黄の言葉に、皆が戸惑いの表情を見せる。

「この世界に生み出された初めての忌…それが俺たちだ」

『なっ…!？』

皆の表情に、再び走る衝撃。

「初めて生み出された忌、だどっ…？」

「ああっ」

困惑した様子で聞き返す箆也に、伍黄が大きく頷きかける。

「俺たちは、お前たちが生まれる数百年も前から、この世に存在したのさ。“痛み”と共にな」

伍黄が左手を胸に当て、自分の存在を主張するように、堂々と言い放つ。

「数百年…」

「そんな、ことってっ…」

「…聞いたことがある」

『えっ…?』

あまりにも信じがたい話に唾然としていた囁と七架が、ポツリと落とされた恵の声に、同時に振り向く。

「初めてこの世に生まれた七匹の忌：その忌たちをもとに、今の忌の強さを示す、七つの階級が作られたとな」

「七匹：」

「数はぴったりね：」

上空に並ぶ七人を見上げ、囁がそつと眉をひそめる。

「階級：」

恵の言葉を受け、何やら考え込むような表情を見せる箆也。

——ボクは仲間の中じゃ、一番階級も下だしねえ——

「階級：一番下っ：」

先程の桃真の言葉を思い出し、箆也がさらに考えを巡らせる。

「イロハニホヘト：そうかつ」

「箆也？」

俯けていた顔を勢いよく上げ、伍黄の横に並ぶ桃真の方を見上げる箆也に、アヒルが少し首を傾げる。

「そお。ボク、一番格下のト級の桃真！」

「嬉しそうに言うことか」

明るく微笑み、答える桃真に、緑呂が冷たく言葉を投げかける。

「んで俺が、へ級の碧鎖」

「ホ級、萌芽」

「二級の虹乃よお！キャハハっ」

「我、ロ級の緑呂」

桃真に続くように、皆が自らの階級と、名を名乗る。

「成程。一番格上のイ級がお前ってわけか」

「ああ。名は伍黄だ」

恵の言葉に答えるように、伍黄も名を名乗る。

「じゃあ、灰示はっ：」

「ああ、こいつはハ級の忌。俺たち六人と同じ、始忌だ」

「……………」

伍黄の言葉にも、灰示は相変わらずの無言である。

「長い時を生き、その内にバラバラになった俺たちだったが、灰示が実体を得たことに気付き、再び集結した」

伍黄が話を戻すように、言葉を発する。

「灰示のように実体を得るため、俺たちは先程の考えを実行に移し……」

「ヤ行の五十音士を、襲った……」

「ああ。結果は見ての通りだ」

也守・刃のものであった体を見せるようにし、伍黄が楽しげに微笑む。

「そうして俺たちは五十音士、元五十音士を襲い、やっとこうして、全員が実体化することが出来た」

『…………』

並んだ虹乃や碧鎖たちが、皆、笑みを浮かべる。

「数百年前生まれた大昔の忌共が、今更実体化して、何しようって言うんだ？」

「言っただろう？俺たちの望みは唯一つ、この世界、すべての“痛み”を消し去ることだと」

恵の問いかけに、伍黄がもう一度、強く答える。

「すでに、種は蒔いた」

「何……？」

「あっ」

恵が眉をひそめる中、アヒルがハッとした表情を見せる。

「言ノ葉っ……!？」

伍黄を睨みあげ、アヒルが勢いよく声をあげる。

「神っ……？」

少し驚くように、簞也がアヒルの方を振り向く。

「まさかお前たちが、言ノ葉を忌だらけにしたってのか!？」

「当たり前じゃんっ」

「ボクはああいいうバカな人、結構好きだよお」

呆れたように言い放つ虹乃の横で、桃真がそっと微笑む。

「お前が、安の神か」

注がれる伍黄の視線に、アヒルが警戒するように、眉間に皺を寄せる。

「そうだ、安の神。お前の町を忌で埋め尽くしたのは、俺たちだ」
「……っ！」

あつさりと認めるように頷く伍黄に、アヒルが大きく目を見開く。

「一体、何の為にそんなことっ：！」

「さっき言っただろう？ 何度言えばわかる」

声を荒げるアヒルの言葉を、伍黄が冷静に遮る。

「この世界の、すべての“痛み”を、消し去る為だ」

「“痛み”……？」

強調するように言われたその言葉に、アヒルが眉をひそめる。

——僕は、この世界からすべての“痛み”を消し去る……——

それは、かつてアヒルが対峙した時に、灰示が放った言葉と、同じものであった。そのことを思い出し、アヒルが伍黄のすぐ横に居る灰示へと、少しだけ視線を移す。

「お前たちも見ただろう？ 町中の人間が忌に取り憑かれた光景を」

『……っ』

続く伍黄の言葉を聞きながら、箆也や囁たちも、そっと表情を曇らせる。

「あれ程の人間が忌に取り憑かれた。つまり、あれ程の人間が、言葉の中にある“痛み”に傷ついているということだ」

「そんなことっ：あなたたちが町人たちに、強制的に忌を取り憑かせただけだろうっ：！？」

「俺たちは、町に大量の忌を蒔いただけだ、加守」

力強く言い放つ竈也に、伍黄は余裕の笑みを浮かべる。

「何なら、忌を放った本人にでも聞いてみるか？」

そう言って、伍黄が灰示の方を振り向く。

「まさか、お前が言ノ葉に忌をつ…？ 灰示…！」

「……………」

アヒルが険しい表情で見つめるが、灰示は無表情のまま、眉一つ動かしはしなかった。

「世界は“痛み”に溢れている…お前たちの町に証明されるようにな」

「だからまた、忌増やして、“痛み”増やして、みんなに“痛み”のある言葉を言わせないようにしようっていうのかよ！？」

「いいや」

「えっ…？」

あっさりと否定する伍黄に、アヒルが戸惑いの声を漏らす。

「その方法もいいとは思いますが…だが根治的ではない」

伍黄が少しだけ灰示に視線を流した後、再びアヒルの方を見て、言い放つ。

「“痛み”を完全に消し去る為には、人間に“痛み”を教え込むだけでは駄目だ」

鋭い瞳を見せ、伍黄がさらに言葉を続ける。

「そう、“痛み”を完全に消し去る為には、世界中、すべての人間が、言葉を話さなくなればいい」

「なっ…！」

伍黄のその言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「んなバカなことっ…！」

「お前たちの町を埋め尽くした忌は…」

アヒルの声を、伍黄が力強く遮る。

「更なる“痛み”を生み、新たな忌を生む…忌は次の町、次の町へと、どんどんと広がって、やがて世界中を埋め尽くす…」

包帯の巻かれた右手を、ゆっくりと広げる伍黄。

「忌に支配された世界に、一切、通う言葉は無い」
「……っ！」

言い切られる言葉に、さらに目を開くアヒル。

「その世界に、一切、“痛み”はない」

そう言った伍黄が、一際冷たく笑う。

「んなことっ…んなこと、させるわけがっ…！」

「なら、倒してみせるか？」

声を荒げるアヒルへ、伍黄が試すように問いかける。

「世界中の人間に取り憑く忌を、お前たち、たったの五十人で」
「……っ」

伍黄のその言葉に、放とうとしていた言葉を吞み込んでしまうアヒル。言ノ葉町を埋め尽くした忌すら、どうすることも出来なかったアヒルに、言い返す言葉はなかった。

「そん、な…」

「………」

茫然とする七架の横で、恵も厳しい表情を見せる。

「後悔するといい、五十音土」

黙り込んだアヒルたちを見下ろし、伍黄がそつと微笑む。

「自ら生み出した、この過^{あやま}ちを…」

「えっ…？」

伍黄のその言葉に、アヒルが戸惑いの声を発する。

「行くぞ」

「ええ…？ 狩らねえのお？」

「一人で勝手に狩れ」

アヒルたちへと背を向ける伍黄に、碧鎖が不満げに声をあげ、そんな碧鎖に萌芽が冷たく言い放つ。

「その女！ 覚えておきなさい！」

「おお、怖っ」

「とっとな行け、虹乃」

恵へ向け、宣戦布告する虹乃に、桃真がふざけた口調で身震いす

るような動作を見せ、緑呂が注意するように声を掛ける。そんなやり取りをしながら、伍黄を先頭に一人ずつ、黒い霧の中へと、その姿を消していく。

「……っ」

「あっ…！」

最後に灰示が霧の中へと入ろうとした時、アヒルが大きく口を開いた。

「は、灰示っ…！」

「………」

必死に呼びかけるアヒルに、灰示が足を止め、ゆっくりと振り返る。

「お前っ…！お前なんで、あんな奴等とっ…！」

「何故…？君にしては、くだらない問いかけだね、安の神様」

いつもと変わらぬ口調で、灰示がまっすぐにアヒルを見下ろす。

「聞いていただろう？僕は始忌。彼等の仲間だ」

冷たい赤色の瞳が、正面からアヒルを捉える。

「それに本来、君と僕とは敵同士だろう…？」

「……っ」

灰示のその問いかけに、アヒルが眉をひそめる。

「け、けど…！保はっ…！」

「僕の望みは、伍黄と同じ。この世界から、すべての“痛み”を消し去ることだよ」

「望みって…」

はっきりと言い切る灰示に、アヒルが少し表情をしかめる。

「世界中の人間を忌にして、世界中から通う言葉を奪って、そうやって“痛み”を消すことが、本当にお前の望んだことなのかっ…！？」

アヒルが身を乗り出し、灰示へと必死に問いかける。

「お前が保のために目指した世界は、本当にそんなものなのかよっ…！？灰示…！」

「神…」

必死に叫ぶアヒルの背を見つめ、籠也がそっと目を細める。

「……っ」

「あっ…！」

灰示がアヒルたちへと背を向け、黒い霧の中へと呑み込まれていく。

「灰示っ…！」

そのアヒルの呼びかけが、灰示に届くことはなく、灰示はそのまま、黒い霧と共に消えていった。

「灰示…」

アヒルの小さな声が、その場に落ちた。

「……………」

黒い霧の中を通り、元居た場所へと戻って来た灰示が、その場で静かに立ち尽くし、何やら考え込むような、神秘的な表情を見せる。

「保…僕は…」

どこか弱々しいとさえ思える声が、そっと落とされる。

「いつまで、そんなところに突っ立っている？」

灰示が立ち尽くしているその場へと、奥から萌芽が姿を現した。

「伍黄が集合をかけている。早く来っ…」

「……………」

「んっ？」

面倒臭そうに灰示へと声を掛けていた萌芽であったが、不意に前方へと倒れ込んでいく灰示に、眉をひそめる。

「お、おいっ」

「……………」

驚く萌芽に構うことなく、灰示はそのまま倒れ、地面にうつ伏せとなった。

「な、何だ…？」

萌芽が戸惑いながら、倒れた灰示のもとへと歩み寄っていく。

「んんっ」

「……っ」

聞こえてくる寝言のような声に、少し警戒するように表情をしかめる萌芽。

「なっ……」

「こんな俺があ……眠っちゃってすみませえっんっ……」

そこで気持ち良さそうに眠っているのは、灰示ではなく、保であった。まるで別人となった灰示に、萌芽が驚いたように目を見開く。

「に、人間っ……?」

萌芽の口から、戸惑いの声が漏れた。

Word. 37 始マリノ忌 (3)

一時間後、言ノ葉町『いどばた』。

「^{かいしやう}改修」

「^{なお}直せ」

穴だらけの部屋へ向け、簞也と七架がそれぞれの言葉を放つ。すると、『いどばた』全体を淡い赤色の光が包み込み、大きくあいていた穴が塞がって、元通りの綺麗な部屋へと戻った。

「これでいいのか？」

「うん、ありがとお」

呆れたように問いかける簞也に、為介が扇子を扇ぎながら、満足げな笑顔で頷く。

「あの小泉くん、六騎は？」

「奥の部屋で寝てるよ。大丈夫」

「そうっ…」

少し不安げに問いかけた七架であったが、紺平の答えを聞き、ホッとした様子で笑顔を見せる。

「しかし、それにしても“始忌”、ですかあ」

為介が扇子を持っていない方の手で、自らの顎を撫でながら、ゆっくりと前方を見る。

「あんなもの、ただのおとぎ話かと思ってましたよお。まさか実現してるなあんてっ」

「ああ…」

為介の正面に座った恵が、気難しい表情で頷く。

「私も、言い伝えくらいにしか思ってた。数百年経った今も存在してるとはな」

『……………』

恵と為介の会話を聞き、皆が真剣な表情となる。

「波城灰示は、その始忌の一人、ということですよ」

「ああ」

為介の横から口を挟む雅に、恵が答える。

「ま、だからこそ、取り憑いた人間の中で実体化なんて真似が、出来たのかも知れないけどな」

「けれど、びっくりしました」

七架が言玉をポケットへとしまい、部屋の隅に腰を下ろす。

「あの人が、高市くんに取り憑いた忌だなんて…」

「転校生くんと違って、イケメンなものね…フフフ…」

「そういう問題ではないだろう」

微笑む囁の横から、箆也が鋭く突っ込みを入れる。

「ぶっはあゝっ」

『……っ』

部屋中に響き渡る、アヒルの大きな溜息に、皆が会話を止め、振り向く。

「なあゝんか不幸を掻き集めそうな溜息だねえゝ朝比奈くゝん」

「うっせえなあ。こっちにだって、色々と悩みがあんだよっ」

「最近アヒるん…やたらと仲間に裏切られているものね…フフフ…」

「お前が言うな」

自分のことを棚に上げて、不気味に微笑む囁に、アヒルが冷ややかな視線を送る。

「波城灰示は元々、僕らの仲間ではない。裏切られたうちにも入らないだろう」

「箆也…」

厳しい言葉を投げかける箆也に、囁が注意するように名を呼ぶ。

「奴は忌だ。今まで何事もなかったことの方が、むしろ不思議なくらいなんだ」

「そんな風な言い方…そんなにボコボコにされたのが、気に食わなかったの…?」

「誰がボコボコだ」

からかうように言う囁に、箆也が引きつった表情を見せる。

「けど、その灰示さん……？を何とかしないと、高市くんが戻って来ないままにっ……」

「構わないだろう、別に」

「神月くんが構わなくても、皆、構うのっ」

あっさりと答える箆也に、七架が非難の目を向ける。

「そうだねえ、仲間が少ないと心もとないよねえ。由守さんも敵側にいっっちゃったようだし」

『……っ』

為介のその言葉に、箆也、囁、七架の三人の表情が、同時に曇る。

「そのことに關しては、済まないと思っている」

「私たちが附いていながら……」

「見す見す、弓さんを、乗っ取られてしまったものね……」

「終わったことを悔いても仕方ないだろう」

「悔いる……？」

俯いた三人へ、恵が強い口調で声を掛ける。恵のその言葉に、敏感に反応するアヒル。

——後悔するといい……五十音士……——

「……………」

伍黄の言葉を思い出し、アヒルがそっと目を細める。

「とにかく、今は……」

「町中の忌だな」

『……っ』

部屋へと入って来る声に、話していた皆が、一斉に振り向く。

「徐々にこの町の外にも広がり始めている」

「お、箆也？」

「箆也くん！」

険しい表情を見せながら、固く腕を組み、部屋へと入って来たの

は、檻也であった。檻也の横には、空音の姿もある。韻本部から、こちらへとやって来たようだ。部屋へと現れた檻也の姿を見て、箆也は驚きの表情を見せ、紺平は明るく笑みを零した。

「檻也、なんでここに…」

「あ、俺が連絡したんだ」

戸惑う箆也へ、紺平が横から声を掛けた。

「何とか食い止めないと、一気に広がるぞ」

「ああ、わかっている」

檻也の言葉に、冷静な表情で頷く恵。

「本部に行ってたんでしょ？ 韻はあ？ どうするってえ？」

「……っ」

為介の問いかけに、檻也が眉をひそめる。

「韻は動かない」

「えっ…？」

「やっぱりな」

檻也の答えに、箆也が表情を曇らせ、恵が納得しながらも肩を落とす。

「だが、俺たちの行動を制限する気はないらしい」

「ま、でなきゃ、お前はここにいないだろうな」

「これから俺たちは町へ行き、出来る限りの忌を倒して、その拡大を最小限に留める」

檻也がはっきりとした口調で、強く言い放つ。

「紺平、お前は俺に附いて来い」

「へっ？ あ、は、はい」

神からの命に、紺平は戸惑いながらも、大人しく頷く。

「出来る限りの忌を倒すたって、お前ら三人だけじゃあっ…」

「そういうことなら、私の団も手を貸すわ」

『へっ？』

また新たに入って来る声に、アヒルたちが一斉に振り返る。

「エ、エリザあ！？」

「昼振りね、アヒル」

檻也とは別の入口、昼間突き破って入って来た庭の方向から、再びその場へと姿を現したのは、エリザであった。驚くアヒルに、エリザが明るく声を掛ける。

「こんなに神が揃うなんて…」

「確かに珍しいねえっ」

周囲を見回し、感心したように言う雅の横で、為介が楽しげな笑みを浮かべる。

「第六音“か”、解放っ」

「お、おいっ、籠也？」

素早く立ち上がり、言玉を解放する籠也に、アヒルが焦った様子で声を掛ける。

「油断するな、神。またいきなり、攻撃してくるかも知れない」

「いや、だからって武器構えなくてもっ…」

「確かに、韻からの拘束命令は、まだ継続中よ」

「えっ！？まじ！？」

認めるように言い放つエリザに、アヒルが驚いた様子で聞き返す。
「ええ。由守と安の神、つまり君を拘束するのが、私が韻から受けた新たな命令」

「由守と、神も…？」

エリザの言葉に、籠也が眉をひそめる。

「和音が、そう言ったのか？」

「ええ」

「そう、か…」

「……っ」

俯く籠也を見て、檻也がそっと目を細める。

「けど、もう命令はいいわ。そんなこと、してる場合じゃないさそうだし」

「へっ？」

その言葉に、アヒルが目丸くする。

「い、いいのかあ？んなことしたら、お前っ…」

「なんで私が、世界が忌で埋め尽くされるかも知れないって時に、たかが家鴨と追いかけっこしなきゃなんないのよ」

「たかがって、お前…」

相変わらずきつい物言いをするエリザに、思わず引きつった表情を見せるアヒル。

「それはそうと、昼間見たあの由守の子が見当たらないけど…」

『……っ』

そう言って部屋を見回すエリザに、アヒルたちが皆、一気に暗い表情となる。

「残念だが、あいつなら敵の手に落ちた。今は始忌の一匹に、取り憑かれちゃってる」

「そう…」

恵の言葉を受け、エリザが険しい表情を見せる。

「やっぱり、追いかけてっこしてる場合じゃなさそうね」

エリザが歩を進め、今度はしっかりと靴を脱いで、部屋の中へと上がってくる。

「於団は今三人でしょ？うちの連中、二人ほど貸すわ。自由に使って」

「ああ、恩に着る」

エリザの言葉に、檻也が大きく頷く。

「それから、アヒル」

「あっ？」

不意に名を呼ばれ、アヒルが少し目を丸くして、顔を上げる。

「これ。韻からくすねてきた、波城灰示の言玉の位置」

「灰示のお!？」

その言葉に思わず声をあげ、アヒルが、エリザの差し出した紙を、奪うように受け取る。

「君たちが戦い始める前に探知したやつだから、たぶん、連中のアシトよ。この位置」

「アジト…」

「あらあら…探す手間が省けたわね…」

じつくりと紙を見つめるアヒルの横で、囁がそっと笑みを浮かべる。

「お前、結構、無謀なことするなあ」

「誰かさんのマネよ」

「そうか」

呆れたように言う恵に、エリザが悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「場所も知れたことだし、俺たちが忌を食い止めている間に、その始忌とかいう連中を何とかしろ。安の神」

「何とかって、お前ね…」

偉そうな物言いをする檻也に、アヒルが呆れた表情を見せる。

「何とかするのが、お前の必殺技だと紺平から聞いた」

「んな必殺技があるか！」

真顔で言い放つ檻也に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「けどアヒル、その始忌ってのを何とかしないと、このままじゃ、本当に世界が忌だらけに…」

「わかってる。行くのは、行くさ」

エリザの声を遮り、真剣な表情で頷くアヒル。

「けど、その前に一つ、確かめたいことがある」

「確かめたいこと？」

アヒルの言葉に、首を傾げるエリザ。

「先生」

「んあっ？」

不意にアヒルから名を呼ばれ、恵が振り向く。

「何だあ？ トンっ…」

「あいつ、言ってたよな？」

「は？」

「“後悔するといい、五十音土” “自ら生み出した過ちを” って」
「……………」

アヒルのその言葉に、恵の表情が一気に曇る。表情を変えた恵に連鎖するように、為介もそっと眉をひそめた。

「自ら、生み出した…？」

「……っ」

檻也がアヒルの言葉を繰り返し、エリザがそっと眉をひそめる。

「トンビ、お前はどの聞いた？ 忌と、私たち五十音士のことを」

「へっ？ どうって…」

恵に問われ、アヒルが少し考えるように俯く。

「忌を倒す為に、五十音士が存在するって…」

「ああ、そうだ。そう教えた」

アヒルの言葉に同意するように、籠也が大きく頷く。

「僕たちも、そう教わったからな」

「だろうなあ」

答える籠也を見て、恵が少し肩を落とす。

「じゃあ、おかしくない…？ あの忌さんの言葉…」

「ああ」

囁の問いかけに、恵が大きく頷く。

「お前たちがどう教わったかは知らないが、実際、この世界に存在したのは、五十音士の方が先だ」

『えっ…？』

恵の言葉に、皆が一気に戸惑いの表情となる。

「五十音士は忌を倒す為に生まれたはずじゃっ…なのに、五十音士の方が先に存在、した？ えっ？」

言葉を続けながら、七架が困惑した表情を見せる。

「僕も初耳ですが…」

「もう、むかあゝしの連中しか、知らないような話だからねえ」

眉をひそめ、振り向く雅へ、為介が薄く浮かべた笑みを向ける。

「韻が必死こいて隠したお陰で、今の若い五十音士くんたちはあ、だあれも知らないんじゃないかなあゝ」

「韻が、隠した…？」

為介の言葉に、籠也がさらに表情を曇らせる。

「どういうことだよ？ 恵先生」

アヒルが改めて、恵へと問いかける。

「言っただろう？ この世界に存在したのは、五十音士の方が先だ
て」

「それはわかったって」

もう一度、同じ言葉を繰り返す恵に、アヒルが顔をしかめる。

「だったら、忌は？ 忌は、どうやって存在するようになったんだよ
？」

「……………」

アヒルの問いかけに、恵が鋭く瞳を細める。

「五十音士が、存在したからだ」

「へっ？」

恵の答えに、アヒルが眉をひそめる。

「五十音士の存在が、忌の存在を生んだ…」

どこか遠い瞳で、天井を仰ぐ恵。

「五十音の世界の歪みが、あいつ等、忌という存在を生み出したん
だ」

「五十音の、歪み…？」

恵の言葉に、アヒルは戸惑いの表情を見せた。

Word. 37 始マリノ忌 (4)

始忌、アジト。

「ふう…」

少し疲れた様子で肩を落としながら、萌芽が皆の居る場所へとやって来る。

「萌芽、灰示の様子はどうか？」

「よく眠っている。ただし、人間の方がだが」

問いかける伍黄に答えながら、眉をひそめる萌芽。

「いきなり倒れた上に、人間の姿になるとは…」

どこか呆れたような口調で、萌芽が言い放つ。

「実体化しているとはいえ、あくまで体はあの人間のものだからな。長い間、灰示が表立っていたせいで、その反動が来たんだろう」

「へえ、面白い仕組みっ」

解説するように言う伍黄の横で、桃真が楽しそうに笑う。

「俺があの人間、狩ってやろうかつ？ シャハッ」

「そんなことをしたら、灰示まで消えてしまうから、是非ともやめてくれ。碧鎖」

楽しげに言い放つ碧鎖に、伍黄が薄く笑みを浮かべて頼みかける。

「っていうか、本気であいつ、仲間にする気なわけえ？ 伍黄」

虹乃が伍黄へと、不満げに問いかける。

「ああ。俺たちは同じ始忌だ。当然だろう？」

「同じ始忌、かあ。私、なあんかいまいち好きになれないのよねえ。あいつっ」

「そう言うな。あいつが糸口となって、俺たちはこうして実体化することが出来たのだから」

口を尖らせる虹乃に、伍黄が宥めるように声を掛ける。

「灰示が仲間になること、お前は賛成だろう？ 緑呂」

「ん…？」

伍黄に呼ばれ、皆と少し離れた場所に立っていた緑呂が、ゆつくりと振り返る。

「ああ：灰示が仲間となれば、我らの大きな力となる」

「あれえ？緑呂もあの灰示って人、知ってんのお？」

「あ、ああ：」

問いかける桃真に、どこか緑呂は歯切れ悪く答える。

「俺たちの階級、イロハニホヘトは強さの順序と共に、生まれた順序を表す。灰示が生まれた時、俺と緑呂はすでに、この世に存在していたからな」

緑呂が灰示を知る理由を代わりに答えるように、説明をする伍黄。

「けど虹乃が生まれた時、あいつはいなかったわっ」

「ああ。灰示はすぐに、俺たちから離れていったからな」
笑みを浮かべた伍黄が、虹乃の疑問に答える。

「“痛み”のない、場所を探して：」

そつと上を見上げた伍黄が、どこか遠い瞳を見せる。

「まあ、灰示は問題ない。俺たちに問題があるとすれば：」

「五十音士っ」

「そうだ、桃真」

笑顔で答える桃真に、大きく頷く伍黄。

「奴等も、一応は言葉の戦士：このまま我々の思い通りには、させてくれまい：」

「ああ、そうだな」

緑呂の言葉にも、伍黄が頷く。

「まあ、来るというのであれば、いくらでも迎え討とうじゃないか」

伍黄が皆へと、楽しげな笑みを向ける。

「今こそ、恨みを晴らしてやろう」

伍黄の瞳が、そつと細められる。

「積年の、恨みを：」

細められた伍黄の瞳が、赤々と鋭く輝いた。

——痛い…痛い…——

声が聞こえてくる。

——痛い…痛いよ…痛いっ…——

すすり泣くような小さな声が、激怒するような大きな声が、朝も昼も夜も、一日中、ずっと聞こえてきては、僕を苦しめる。

——痛い…痛い…——

眠れない。耳が痛い。頭が痛い。苦しい。

この声の、聞こえてこない場所へ行きたい。

「んっ…」

視点の定まらない瞳を、ゆっくりと開いたのは、保であった。

「俺…」

長く眠り過ぎてしまった時の、気だるさを全身に感じながら、保がやっと目を開ききる。ぼやける意識の中で、妙に強く刻まれている、苦しげだった一つの声。

「夢…？」

静まり返った周囲を確認し、保がそっと呟く。

「はぁ！こんな夢叶える力もまるでない俺が、一丁前に夢なんか見ちゃってすみませえ〜ん！」

いつものように謝り散らしながら、保が勢いよく起き上がる。

「あれ？ここ、は…？」

起き上がった保が、周囲を見回し、戸惑うように首を傾げる。そこは壁すらも見えない、ただ真っ暗な空間で、保は寝台らしきものの上で寝ていたようだが、暗過ぎて、その寝ていたものが何なのかすら、確認することが出来なかった。

「暗いなぁ。ええ〜っと、電気電気っ…」

「気がついたか」

「へっ？」

手さぐりで電気を探していた保が、近くから聞こえてくる声に振り返る。だが、声で何となくの方向はわかって、その声の主の姿は、暗闇でまったく見つけることが出来なかった。

「どなた、ですかね…？ 暗くて、ちょっと…」

「ああ…」

戸惑う保に、またしても声がやって来る。

「そうか。人間は暗闇の中では、何も見えないんだったな」

「えっ…？ 人間…？」

その声の言葉が引っかけ、眉をひそめる保。

「明かりはあまり、好きじゃないが…まあいい。“焼^やける”」

「やっ…？」

落とされる言葉に、保が少し首を傾げる。

「あっ」

言葉が落とされたその直後、壁に設置されていた小枝が一斉に燃え始め、保のいるその場へと光を落とす。急に視界が開けると、保は目の前に立つ人影を見つけた。

「あなた、は…」

「俺の名は、伍黄」

保の前に立っているのは、伍黄であった。

「イツ、キ…？」

「ああ。もう一人のお前の、大昔の友だ」

「もう一人の、俺…？」

伍黄の言葉に、保が戸惑いの表情を見せる。

「お前と、話がしたい」

「俺、とっ…？」

少し首を傾けた保は、かすかにその表情を曇らせた。

Word. 38 罪無キ痛ミ (1)

——生まれた理由は、よくわからない。

気付いたら、真っ暗な、どこまでも真っ暗な、闇の中に居た。

「次が生まれたか」

「三匹目だな」

すぐ傍で声が聞こえて、視線を上げた。そこには生物とも言い難い、黒い霧の塊のようなものが二つ、存在していた。霧の中で輝く、瞳のような真っ赤な二つの光がそれぞれ、こちらを見つめていた。

「ようこそ」

「君、は…？」

「俺たちは、お前の仲間。お前は俺たちと同じ存在だ」

「同じ、存在…」

自分もこんな、生物か何かもわからない形をしているのだろうか。そう思ったが、確認する術など持ち合わせていなかった。

「ここ、は…？」

「……………」

僕の問いかけに、その影は黙る。

「ここは…」

かすかに曇る、その声。

「地獄だ」

僕がその言葉の意味を知るまで、そう時間はかからなかった…

その頃、灰示と入れ替わった保は、伍黄と向き合っていた。

「俺と、話…？」

「ああ」

戸惑った様子で聞き返す保に、伍黄が薄く微笑んで頷きかける。

「こ、こんな正直、会話通じなそうな俺と話だなんてっ、何か色々すみませえくん！」

「ああ」

「えっ…？」

いつものように謝り散らす保であったが、淡泊な反応を返す伍黄に、さらに戸惑うように、頭を抱えていた手を下ろした。

「えっと、あの、すみません…あなたは…」

「言っただろう？俺はもう一人のお前の、大昔の友だと」

もう一度問いかける保に、伍黄は先程と同じように答える。

「大昔の…」

「ああ、数百年も昔の話だ」

「すっ…！？」

伍黄の言葉に、保が激しく驚いた表情を見せる。

「あ、あのお…もしかしくともとも、あなたさまはあ、人間ではあ…」

「ああ、俺は人間ではない」

「ええっ…！？」

あつさりと認める伍黄に、さらに驚きの表情となる保。

「そ、そうですか…底なしの暗闇より生まれた、ヤミヤーミ族の方でしたか…」

保が何故か、決めつけた様子で話を続ける。

「はあ！まさか人間の中でも一際ダメダメな俺を、マツクラお鍋の生贄にいつ…！」
いけにえ

「俺たちは…」

「あれ？」

保の勘違いな発言を特に気にすることなく、伍黄は聞こえていなかのように自然に、自分の話をし始めた。

「俺たちは、“痛み”から生まれた」

「痛み…？」

「ああ」

眉をひそめる保に、伍黄が大きく頷きかける。

「人の言葉の中にある、あまりに強い“痛み”：そこから生まれたのが俺たち、忌という存在だ」

「忌…」

聞き慣れぬ言葉に、保がそつと表情を曇らせる。

「俺たちって…」

「俺や、もう一人のお前のことだ。今となっては五万というがな」

「もう一人の、俺…」

もう一度告げられるその言葉に、保が少し考え込むように俯く。

「まあ、灰示を認識していないお前に言ったところで、訳などわからんだろうが…」

「知って、います…」

「何…？」

小さく落とされた保の声に、伍黄が眉をひそめる。伍黄が見つめる中、ゆっくりと顔を上げた保は、今までとは異なる真剣な表情を見せていた。

「知っています…」

伍黄をまっすぐに見つめ、保がもう一度、言い放つ。

「俺の中に誰か、俺ではない人がいること…」

保が薄く、穏やかな笑みを浮かべる。

「俺が“痛い”って思った時、いつも、その人が助けてくれること…」

「……っ」

保のその言葉に、伍黄がそつと目を細める。

「そうか…」

頷きながら、伍黄が保のいる寝台のすぐ横に置かれた、小さな椅子へと腰を下ろす。

「“痛み”の中から生まれた俺たちは、人の“痛い”という声が勝手に耳に入ってくる」

「声…？」

「ああ。今も、五月蠅い程に聞こえてくる」

伍黄が耳を澄ますような動作を見せながら、どこか煩わしそうに答える。

「この声は一秒と、聞こえてこない時がなく、その上、ひどく悲痛で、俺たちは生まれてからずっと、ろくに眠ることも出来ない」

「……っ」

伍黄の話を聞き、保が険しい表情を見せる。

「俺たちは、この声からの解放を願った…人が“痛み”をなくすことを願った…」

「痛みを、なくす…」

「だが、何年経っても声は消えず、むしろ、その声はでかくなっていく一方だった」

伍黄の表情も、険しいものとなる。

「俺たちは、絶望した。この“痛み”から、逃れることは出来ないのだと、絶望した」

遠くを見るような、瞳を見せる伍黄。

「もう一人のお前も強く絶望し、“痛み”のない場所を探すと言って、俺たちの前から姿を消した」

固く組んでいた腕を解き、伍黄が再び保の方を振り向く。

「だからこそ、俺にはわからない」

「えっ…？」

鋭く向けられる伍黄の視線に、保が戸惑いの表情となる。

「灰示が何故、お前と共に在るのか…灰示が何故、お前のような人間に、そんなにもこだわるのか…」

「灰、示…？」

伍黄の言葉に、保が大きく首を傾ける。

「確かに、お前の“痛み”は極上だ。他者の痛みより、遥かに深い」

「俺の、“痛み”…？」

「ああ。灰示の操作によってお前自身は覚えていないようだが、その記憶はお前の中に残り、今も強く、俺に訴えかけてくる」

まっすぐに保へと、視線を向ける伍黄。

「痛い”、とな…」

「俺が…覚えて、いない…？」

保の表情が、戸惑いの色を濃くする。

「俺たちは“痛み”より生まれた存在…痛みにより強くなりはするが、何百年も痛みを浴び続けた俺たちにとって、極上の痛みなど、最早、煩わしいだけだ」

伍黄が鋭く、保を見つめる。

「灰示がお前と共に在る利点など、まるで有りはしない」
さらに強く輝く赤い瞳が、まっすぐに保を捉える。

「なら何故、灰示はお前と共に在る…？」

伍黄がゆっくりと、保へと問いかける。

「俺は、それが知りたい…」

「……っ」

その偽りのない瞳に、保はそっと、瞳を細めた。

Word. 38 罪無キ痛ミ (2)

言ノ葉町、何でも屋『いどぼた』。

「ど、どういふことだ…？」

少し言葉に詰まりながら、アヒルが険しい表情で、恵へと問いかける。

「五十音の歪みが、あいつ等、忌を生み出したって…」

「……………」

戸惑った様子を見せるアヒルを前に、恵も厳しい表情を見せる。

「数百年以上前の話だ」

ゆっくりと口を開いた恵の声に、エリザも檻也も、そこにいる皆が真剣に耳を傾けた。

「言葉を実現化出来る不思議な物質が発見され、少数の人間が、その物質を使って言葉の力を使い始めた」

「物質…？」

「言玉か」

「ああ。その不思議な物質がのちの言玉。そして、その少数の人間というのが、のちの五十音士だ」

鋭く口を挟んだ籠也に頷きながら、恵が話を続ける。

「五十音士の数は増え、早い段階で、五十音士たちを統べる組織が形成された。この組織がのちの韻^{いん}だ」

「そんなに前から韻が…」

「今の本部のお爺ちゃんたちも、その頃の組織の人たちの子孫の皆さまだからねえ」考えが古臭くっても、当然っちゃ当然だよねえ」
為介が扇子を扇ぎながら、どこか呆れたように肩を落とす。

「組織が作られると、五十音士は淘汰され、それぞれの言葉の力を明確化し、さらに力を増していった。だがそこで、問題は起こる」
『……？』

不意に表情を曇らせた恵に、アヒルたちが皆、首を傾げる。

「有り余る力を手に入れた五十音士たちは、その力を誇示するため、私利私欲のため、あらゆる理由から、互いに争いを始めたんだ」

「まるで戦争ね…」

「ああ、戦争そのものだ」

眉をひそめる囁に、大きく頷く恵。

「徐々に争いは拡大し、何の罪もない人間たちが巻き込まれ、死んでいくという最悪の事態にまで発展していった…」

恵が肩を落とし、視線を下へと向ける。

「この事態をどうにかしなければならぬ。組織の上層の者たちは頭を悩ませ、やがて、一つの結論に辿り着く」

ゆっくりと上げられていく、恵の視線。

「五十音士がその強過ぎる力を向けられる、何か別の存在があればいい」とな

「……っ」

恵からまっすぐに視線を受けたアヒルが、急にハッとした表情を見せる。

「“生まれろ”。そのたった一つの言葉から生み出されたのが…」

「忌…」

「ああ」

小さく呟いたアヒルに、恵が大きく頷きかける。

「それが、忌だ」

恵は強調するように、もう一度、はっきりと言い放った。

「初めは、五十音士たちによる争いが収まればそれでいいと、そう考えていた組織だったが、忌は人の“痛み”を糧に、増殖を始めた」

「痛み…」

恵の言葉を聞きながら、アヒルが厳しい表情を見せる。

「その増殖は圧倒的な速さで進み、あっという間に忌は、五十音士の手に負えない数にまで達したんだ」

そっと俯く恵。

「まあ、当初の目的通り、五十音士たちの争いは収まったんだけど

な…」

俯いた恵は、どこか遣り切れない表情を見せていた。

「五十音士の言葉で、忌が生まれたなんて…」

「私たちの教えられた歴史とは…まるで逆ね…」

「組織は、いや韻は、この事実をひた隠しにしているからな」

鋭い瞳を見せ、恵が顔を上げる。

「この、過^{あやま}ちを」

「……っ」

恵のその言葉に、そつと視線を落とすアヒル。

——自ら生み出した、この過ちを：——

伍黄の言った言葉の意味が、やっと通じていく。

「成程な。その“生まれろ”の言葉によって、初めて生み出されたのが、あの始^{シキ}忌の者たちであるというわけか」

「さぞや、憎いんでしょね…」

籠也に続くように、囁も言葉を発する。

「私たち、五十音士が…」

「………」

囁の言葉を聞きながら、アヒルはどこか神妙な表情を見せた。

「彼等が忌に取り憑かれた人間に、五十音士を狙わせているのも…復讐のようなものなのかしら…」

「かも知れないな」

囁の言葉に、籠也が厳しい表情のまま頷く。

「……っ」

「ん？」

頷いていた籠也が、部屋を出て行こうと歩を進める檻也に気付く。

「檻也？」

「俺は、忌の生まれた理由など、どうでもいい」

眉をひそめる籠也に、檻也は振り返り、言葉を発した。

「俺たちのやるべきことは、忌に取り憑かれた人間を救うことだ。忌が何であれ、韻がどうであれ、俺はその意志を変えるつもりはない」

「檻也くん……」

はつきりと言い放つ檻也を見て、紺平が少し目を細める。

「こうしている間にも、忌が広がる。俺は行くぞ」

「えっ……!? ちょっ……! 檻也くっ……!」

「そう焦らずに、ちょっとは待ちなよ。於の神クン」

すぐさま部屋を出て行こうとした檻也を、紺平が慌てて止めようとしていたその時、為介が軽い口調で声を掛けた。

「俺は神だ。旧世代の神とはいえ、俺のすることに口出しは無用だぞ」

「確かに君は神だけとお、ここには君以外の神も居るんだしい、君だけの意見では動けないんじゃないか?」

「んっ……」

為介の正論に、檻也が思わず言葉を詰まらせる。

「わかった。聞くでしょう」

再び部屋の中央を振り向いた檻也が、意見を待つように、固く腕を組む。

「まっ」

そこへ、エリザが口を挟む。

「取り憑かれた人たちを助けることが先決なのは、私も同意ね。アヒルは?」

「へっ?」

不意にエリザに問いかけられ、アヒルが驚いたように顔を上げる。

「俺?」

「君も神でしょ? 一応っ」

「一応って言うなよ……」

相変わらず一言余計なエリザに、アヒルが少し顔をしかめる。

「伍黄の言葉の意味が知りたかったんだろう?」

「えっ？あ、ああ。まあな」

横から恵に問いかけられ、少し齒切れ悪く頷くアヒル。

「で、聞いて納得したのか？それとも迷ったか？」

恵がアヒルへと、鋭い視線を向ける。

「五十音士の勝手な都合で生み出された奴等を、本当に倒しているのかどうか……」

「……っ」

どこか探るような恵の言葉に、アヒルがそっと目を細める。

「んん、そうだなあ」

「倒していいに決まっているだろう。あいつ等のせいで、この町は忌だらけにされているんだぞ」

「檻也くん」

首を捻るアヒルの横から、檻也が口を挟むと、紺平が注意するよ
うに名を呼んだ。

「俺さあ」

『……っ』

言葉を交わしていた檻也と紺平が、口を開いたアヒルに、同時に
振り向く。

「俺、灰示と戦った時さあ、あいつは敵なのにあいつの言葉、正直
“わかる” って思ったんだよなあ」

「神……」

どこか懐かしむように、灰示のことを話し始めるアヒルを見つめ、
籠也が少し目を細める。

「やり方は間違ってるって思ったけど、あいつが痛みを消そうとす
る姿は本当に必死で、俺はそれにどっか共感した」

——だから、言葉に傷つく人間が減らない……——

——この世界から、言葉までなくなっちまうっ……！——

「……………」

アヒルと灰示の戦いの場に居たエリザは、当時のことを思い出し、どこか考え込むように俯いた。

「その時のように、始忌の言葉にも共感したとでも言うのか？」

「いやっ、ちっとも共感出来なかった」

「えっ…？」

あっさりと否定するアヒルに、少し戸惑ったような声を発する檻也。

「あの伍黄って奴の言葉聞いた時は、全く共感出来なかったんだよなあ。これがっ」

自分でも戸惑うかのように、アヒルが言葉を続ける。

「あいつは灰示と同じ忌で、灰示と同じように“痛み”を消そうとしてんのに、何か違う気がしたんだよなあ」

「何だ、それは」

大きく首を捻るアヒルに、檻也が呆れたように顔をしかめる。

「全く理解出来ない上に、何の答えにもなっていないぞ」

「あ、確かにそうだな！ハハハっ」

「紺平」

「俺に言われても…」

笑い飛ばすアヒルに、さらにしかめっ面となって紺平の方を振り向く檻也。檻也の鋭い視線を浴び、紺平は少し困ったように肩を落とした。

「んん、難しいなあ…」

「無い頭で考える必要はない」

「ああっ!？」

横から挟まれた籠也の言葉に、アヒルが大きく顔をしかめる。

「行くのは、行くんだろう？」

「ああ、勿論」

『えっ?』

当然のように言葉を交わすアヒルと籠也に、檻也と紺平が目丸くする。

「保、何とかしねえとだし、灰示の奴を一回、ブン殴ってやりてえし、弓との約束もあるしなっ」

「答えが決まっているなら、早く言え」

「まあ、ガアだから……」

不機嫌そうに呟く檻也の横で、紺平が少し苦い笑みを見せる。

「それにっ」

アヒルがそっと口元を緩め、さらに言葉が続ける。

「俺は、この世界に通う言葉を、たったの一つだって失わせたくない」

アヒルが迷いなく、笑みを浮かべる。

「俺は、言葉を、みんなの言葉を守りたいっ」

『……っ』

晴れやかな笑みで、はっきりと言い放つアヒルのその言葉に、皆は驚いた表情を見せたが、籠也や囁、七架はすぐに笑みを零した。

「それだけ決まっていれば、十分だ」

「ええ……仰せのままにね、神様」

「うん、行こう！守ろう！皆で！」

籠也たちが、アヒルの言葉に、明るい笑顔を見せて頷く。部屋中を包み込んでいた暗い空気が一蹴され、一気に明るくなっていくようであった。

「確かに、何とかなりそうだな」

「でしょっ？」

そっと笑みを浮かべる檻也の横から、紺平が得意げに微笑みかける。

「そうと決まれば、善は急げね。誠子、徹子」

『はっ』

エリザの呼びかけに、すぐさまその場へと姿を現す、衣団の双子。

「於の神と共に、この町の人間に取り憑いた忌の退治を」

『仰せのままに、我が神』

深々とエリザへと頭を下げると、誠子と徹子が素早く立ち上がる。

「では、於の神」

「ああ、恩に着る。衣の神」

檻也とエリザが、短く言葉を交わす。

「では早速、行くぞ。紺平、空音」

「はい、我が神」

「うん」

檻也に言われ、紺平と空音も出る準備を整える。

「気を付けろよ？ 紺平」

「ガアも、頑張って」

檻也と共に出て行こうとする紺平へと、アヒルが笑顔で声を掛けた。振り向いた紺平も、明るい笑顔をアヒルへと向ける。

「しっかりね、安の神」

「おうっ」

紺平の言葉に、アヒルは大きく頷いた。

「それぞれ、町の東西南北へ。一先ず、忌の広がりを抑え、何とかこの町だけに留まらせるんだ」

『はい！』

檻也の指示に頷き、紺平、空音、そして誠子と徹子の四人が、素早く部屋を出て、『いどばた』の外へと駆け出していく。

「では、こちらは任せたぞ」

「おう」

「あ、檻也…！」

「ん…？」

紺平たちが続くようにして、部屋を出ようとした檻也を、箆也が少し慌てて呼び止める。部屋の外に片方足を出したところで、檻也はゆっくりと振り返った。

「何だ？」

「あ、いや、そのっ…えっとだな…」

檻也に問われると、箆也はすぐに俯き、迷うように頭を掻く。

「気を付けろってさあ」

「お兄ちゃんが心配しちゃうから…程々にね…フフフっ…」
「んなっ…!？」

箆也の代わりと言わんばかりに、檻也へと笑顔で手を振るアヒルと囁に、箆也が大きく顔をしかめる。

「だ、誰がそんなこと言っ…!!…っ」

アヒルたちに言い返そうとした箆也であったが、言葉を途中で止め、少し俯いた後、顔を上げ、まっすぐに檻也を見た。

「気を付けてな、檻也」

「……っ」

箆也から放たれる言葉に、檻也が驚いた顔を見せる。

「ああっ」

嬉しそうな笑顔で大きく頷くと、檻也は部屋を駆け出て、その場を去っていった。

「丸くなったものだねえ…君たち兄弟もっ」

「あなたは、尖っているところがなさすぎだ」

暢気な口調で呟く為介に、箆也が鋭い視線を向ける。

「町の忌のことは一先ず、あいつ等に任せるしかないな」

「ああ」

恵の言葉に、アヒルがしっかりと頷く。

「私たちも、連中のアジトへ急ぎましょう」

エリザが振り向き、真剣な表情をアヒルへと向ける。

「ああ。って、お前も一緒に行くのかよ？ザベス」

「エリザよ。何？私が一緒に行くの、不満？」

「い、いやっ、別に不満じゃっ…」

「一緒に行ってもらっつけ」

「へっ？」

強く問いかけてくるエリザに、アヒルが言葉を詰まらせていたその時、横から口を挟んだのは恵であった。

「高市がいない上、お前の力も戻ったとはいえ、まだ不安定だ。エリザベスが加わったって、足りないくらいだろう」

「えっ…」

「あなたと一緒に来ないのか？」

恵の言葉に戸惑いの表情を見せたアヒルの、その戸惑いを代弁するかのように、箆也がすぐさま問いかける。

「ああ、行かない」

箆也の問いかけに、恵ははっきりと答える。

「行けない…」

「えっ…？」

そつと俯く恵に、アヒルが首を傾げる。

「僕らはまだ、動いちゃうわけにはいかないんだよね。ごめんねえ。朝比奈クンっ」

「まだ？」

「…っ」

横から割って入って来る為介に、アヒルが益々戸惑いの表情を見せる横で、エリザはそつと目を細めた。

「まあいいじゃないっ。私が居るんだから、問題ないわよ」

「お前のその自信は、どこから出てくんだかな…」

自信満々の笑顔を見せて言い放つエリザに、アヒルが呆れたように肩を落とす。

「忌を止めてくれてる於の神たちにも悪いわ。とつとと動きましよう」

「ああっ」

エリザが不意に目つきを鋭くし、強く言うと、アヒルも真剣な表情を見せ、大きく頷いた。

「あのっ」

「はい？」

少し躊躇いがちな七架に呼ばれ、雅がゆつくりと振り向く。

「六騎のこと、その、よろしくお願いします」

「はい、お任せ下さい」

深々と頭を下げる七架に、雅は快い笑顔を見せた。

「念のため、ここには音^ね音を置いていくわ」

「そうしてくれると助かるよぉ最近、どうにも体が動きにくくてさぁ」

「あっそう」

「エリザベス」

「……？」

為介に呆れていたエリザが、周囲に聞こえないような小さな声で恵に呼ばれ、すぐさま振り向く。

「あいつのことを頼む」

「………」

真剣な表情で言う恵に、エリザが少し目を細める。

「ええ」

何故、恵がそこまでアヒルにこだわるのか。エリザは疑問を抱きはしたが、それを口にするのではなく、ただ恵の言葉に、しっかりと頷いた。

「じゃあ、アヒル」

「ああ、行こう。始忌のところへ！」

エリザの呼びかけに頷き、アヒルははっきりと言い放った。

——俺は、それが知りたい：——

「えっと……」

伍黄に鋭い瞳を向けられた保が、どこか困ったように、言葉を詰まらせる。

「す、すみませんっ……俺、話が半分以上、よくわかんないっていうか、そのっ……」

「だろうな」

頭を掻きながら、申し訳なさそうな表情を見せる保に動じること

なく、予想通りと言わんばかりに一息つき、椅子から立ち上がる伍黄。

「お前からの答えなど、初めから期待していなかった」

「はぁ！ 答えも期待出来ない、こんな俺ですみませえ〜ん！」

素っ気なく言い放つ伍黄に、保が勢いよく謝り散らす。

「同じ体を共有しているとはいえ、お前と灰示は全く別の存在だ。お前が灰示のことを、理解しているはずもないしな」

「……っ」

伍黄の口から再び灰示の名が出ると、保はそつと眉をひそめた。

「俺は……」

「ん？」

小さく声を落とす保に、伍黄が下を向き、視線を向ける。

「確かに俺は、俺の中に居るこの人のこと……何にも知りませんし、何にもわかっていません……」

保が左手を左胸につけ、ゆっくりとした口調で言葉を続ける。

「俺は何にも知らないのに、この人は、いつも俺が“痛い”って思ったら助けてくれて、俺が次に目を覚ますと、その“痛み”はなくなっています……」

「“痛み”がなくなっている、か……」

感慨深げに保の言葉を繰り返しながら、伍黄が少し目を細める。

「俺が少しでも“痛い”って思ったら、この人が助けてくれる。俺の中でそれは、いつの間にか、当たり前になっていました」

——助けて……助けてよ……——

七声、誘^{いざな}との戦いの時も、あまりに強い誘^{いざな}を前に傷を負い、痛み^{いたみ}に倒れた保は、ひたすらに助けを求めた。

「俺はこの人に頼りっきりで、“痛み”から目を背けることばかり、覚えてしまっていました」

俯いたままの保が、薄く笑みを浮かべる。

「でも、このままじゃいけないって、最近思うようになってきたんです」

笑みを浮かべたまま、保が顔を上げる。

「だから、俺も“痛み”を受け入れて、もっとちゃんと、この人に向き合おうって、そう思っ…」

「その必要はない」

「えっ…？」

勢いよく言葉を遮る伍黄に、戸惑いの表情を見せる保。

「お前が“痛み”を受け入れることはなくなる」

伍黄がまっすぐに、保を見下ろす。

「もうすぐこの世界から、“痛み”がなくなるからな」

「痛みが…なくなる…？」

「ああ。何百年と時が経っても傷つけることを止めない、愚かな人間たちの間に通う言葉たちとともにな」

「言葉と、ともに…？」

伍黄の言葉に、どんどん戸惑いの色を濃くする保。

「もうすぐ世界中の人間が、言葉も持たない存在となる」

「あなたたちが…そう…？」

「ああ。そうすれば、この世界の“痛み”は消えるからな」

問いかける保に、伍黄が迷うことなくはっきりと答える。

「もう一人のお前も、これに賛同している。お前の仲間に敵対してな」

「仲間…」

伍黄の言葉に、保が目を細める。

「アヒルさん…」

俯いた保の脳裏にアヒルや箆也たち、仲間の姿が過ぎった。

「お前を苦しめた“痛み”もじきになくなる。良かったな」

「……………」

「……………」

保へと笑みを向けた伍黄であったが、保の何か言いたげな、厳し

い表情を見て、そっと眉をひそめた。

「お前は人間だからな。やはり俺たち忌のすることに、賛同はしないか」

伍黄がどこか、諦めるように肩を落とす。

「まあいい。俺たちに必要なのはお前じゃない。灰示だ」
突き放すように、言い放つ伍黄。

「早めに灰示と代わるようにしてくれ。邪魔したな」

「あっ…」

保へと背を向け、部屋から出て行くとする伍黄に、保が思わず身を乗り出す。

「あ、あのっ…!」

「ん…?」

保に呼び止められ、部屋の出口である扉の前まで行っていた伍黄が、ゆっくりと振り返る。

「何だ?」

「はあゝ!こんな口も聞きたいと思えない存在の俺が、一丁前に呼び止めちゃってすみませえゝん!」

「早く言え」

「あ、は、はい!」

伍黄が少し怒るように急かすと、保は焦りながら大きく頷いた。

「その、どうしてそんなに、“痛み”をなくそうとするんですか…?」

「何…?」

保の問いかけに、伍黄が少し驚いたように眉をひそめる。

「変なことを聞くんだな。お前は十分にわかっているだろう? “痛み”など、この世界には、ない方がいいんだ」

伍黄が当然のように、自信を持って言い放つ。

「なくそうとすることを、何故疑問に思う?」

「それは…」

逆に問い返す伍黄に、保が少し俯く。

「俺の、友達が言ってたんです」

保が真剣な表情を作り、言葉を発する。

「はぁ！いや、こんな俺が一丁前に、“友達”とか言っちゃってすみませえくん！一度、言ってみたかったんですぅ！」

「……………」

「あ、で、そのですねえ」

特に突っ込むこともなく、冷やかな視線のみを向けている伍黄に、保が気を取り直して、言葉を続ける。

「友達が、言ってたんです。“この痛みを忘れたら、本当の笑顔で笑えなくなる”って…」

「……………」

保のその言葉に、伍黄の眉がかすかに動く。

「“痛み”って、確かにそんないいものじゃないですけど…でも、なくしてしまえばいいってものでも、ない気がするんです」

まっすぐに伍黄を見つめ、保が穏やかな笑みを浮かべる。

「人の“優しさ”とか“強さ”っていうのは、きっと…」

——この痛みを忘れたら、俺は一生、本当の笑顔で笑えなくなる気がするから……

——俺だって、半端な覚悟で、あいつ等の神になろうってんじゃないだよっ…！！——

「きっと、“痛み”を知らなきゃ、得られない…」

アヒルの姿を思い出しながら、保がそっと呟く。

「“痛み”をなくせば幸せ、とか…俺たちはきっと、そんな単純なものじゃない…」

まっすぐに伍黄を見た保が、さらに大きな笑みを見せる。

「はぁ！こないかにも単細胞生物な俺が、複雑気取っちゃって、すみませえくん！」

「……………」

謝り散らす保の前で、伍黄は俯いたまま、黙り込む。

「だから…だから、すべての“痛み”をなくすなんてことは、やっぱりっ…」

「くだらない意見だな」

「えっ…？」

保の言葉を、伍黄が勢いよく遮る。

「お前に聞こえるのか？この、割れんばかりに響く、“痛い”という声が」

「……っ」

伍黄が、煩わしげに言い放つと、保は表情を曇らせた。

「お前にわかるのか？一瞬と休むことなく、この声に魘^{うな}され続けた俺たちの何百年が」

「それはっ…」

伍黄のあまりに険しい表情に、保は思わず言葉を詰まらせた。

「所詮は愚かな人間の意見。本当に何故、灰示はお前と共に在るのか…」

眉間に皺を寄せ、より一層、険しい表情となる伍黄。

「俺たちは“痛み”をなくす。俺たち自身の為にな」

伍黄が鋭い瞳で、保を睨みつける。

「灰示と共にじっくりと見ているといい」

そう言いながら、伍黄が部屋の扉を開ける。

「お前たちの言葉が、失われていく様をな」

「あっ…」

保が呼び止める間もなく、伍黄は吐き捨てるように言葉を残して、足早にその部屋を出て行った。強く扉が閉まる音が響くと、すぐに沈黙が訪れる。

「“痛い”、か…」

小さく声を落とした保が、力なく寝台へと寝転がる。

「君にも、聞こえているのかな…」

天井を見上げた保は、自分の中に居る、自分ではない人物へと、

そつと問いかけた。

一方その頃、アヒルたちは、エリザが入手した灰示の言玉の位置を頼りに、始忌のアジトを探していた。

「この辺りのはずなんだけど…」

位置の記された紙と周囲を見比べながら、エリザが呟く。エリザの言葉につられるようにして、アヒルたち四人も皆、周囲を見回す。そこは、もう何年も使われていない、古い建物の並ぶ、廃墟のような場所であった。人気はまるでなく、不気味な雰囲気漂っている。

「あゝ、気味悪っ」

そのいかにもな空気を感じ、思わず顔をしかめるアヒル。

「手繋いであげましょうか…？アヒるん…」

「いらねえよ！」

「フフフ…」

強く言い返すアヒルを見て、囁が楽しげに微笑む。

「それっぽい空気は出てるけど…」

「忌らしき気配は感じないな」

周囲を見つめながら、七架と箆也がそれぞれ、首を傾げる。

「結界…」

「ま、普通はそうでしょうねえ」

そっと呟いた箆也の言葉に、賛同するようにエリザが続く。

「どういうことだ？」

「私たちみたいな敵の侵入を防ぐために、アジトを結界で覆って、隠してるんじゃないかってこと」

「つまりは、囁の張る“遮れ”と同じだ」

「成程ねえ」

二人の説明を聞き、納得したように頷くアヒル。

「じゃあ、どうやって中に入るんだ？」

「そりゃ、結界通り抜けられるような言葉、使うしかないんじゃない

い？」

アヒルの疑問に、エリザがあっさりと答える。

「誰か、そういう関連の言葉、持ってる？」

「私は張る方、専門だから…フフフ…」

エリザが皆へと問いかけると、囁が微笑みながら、首を横に振った。

「神月くんの“掻き消せ”は？」

「どのくらいの結界かにもよるが、あまり大きいものだど、一気に掻き消せない場合がある」

七架が聞くと、籠也は気難しい表情を作った。

「それに、掻き消せたとしても、目立ちすぎる。侵入を相手に知らせるようなものだ」

「いいじゃねえか」

「良くないから言っている」

軽く言い放つアヒルへと、鋭い言葉を投げかける籠也。

「気付かれて、囲まれて、全員乗っ取られてジ・エンドじゃ、困るものね」

「ああ、そういうこと」

エリザの言葉を聞き、アヒルが納得する。

「だが、ひっそり入る言葉となると…“通れ”“抜けろ”…んん…」

この場に居る者の言葉の中で、何とか中へ入れないかと、籠也が首を捻る。囁と七架も同じように首を捻り、皆、言葉を探した。

「アヒル、君、もう言葉使えるんでしょ？」

「へっ？ ああ、まあ」

「じゃあ問題ないわ」

「えっ？」

笑顔を見せるエリザに、アヒルが首を傾げる。

「君の言葉で、この結界は抜けられる」

「俺の言葉でえ？ えっとお…」

アヒルが視線を上へ向け、自分の言葉を探す。

「あ、“あっち向いてホイ”か！」

「“開け”よ!“あっち向いてホイ”で、どうやって結界抜けるってのよ!阿呆！」

思いついたように、大きな声で言い放つアヒルに、エリザが強く怒鳴りあげた。

「何だ、“開け”かあ」

「それは僕も考えたが…」

横から、少し眉をひそめた箆也が、口を挟む。

「神、あなたは本当に、言葉の力が戻ったのか?あの女教師もまだ、不完全などと言っていたし…」

「力は問題ねえよ。ただちよつと…」

『ただ、ちよつと?』

口ごもるアヒルに、箆也たちが首を傾ける。

「ただちよつと、何だ?」

「恵先生の“目醒めろ”の言葉で、眠ってたっていう力は起きて、言玉は解放出来るようになったんだけどさあ」

問いかける箆也に答えながら、アヒルが懐へと右手を入れる。

「形がさあ…」

「形?」

「グワァっ」

「があ?」

聞き慣れない声が聞こえてきて、箆也は強く眉間に皺を寄せた。

「グワァ」

『へっ…?』

アヒルの懐から、アヒルの手のひらの上に乗る、皆の前へと示し出されたのは、手乗りサイズの小さなあひるであった。少しくすんだ白い胴体と羽根に、真っ黒な瞳。嘴だけ、きらきらと金色に輝いているが、小さな鳴き声と少し間の抜けた表情が、何とも可愛らしい。

「んなっ…!?!?」

「カワイイっ！」

「あらあら：まさにあひるね：フフっ：」

激しく驚いた表情を見せる籠也の横で、囁と七架が楽しそうにアヒルの手の上にあひるを見つめる。

「何？弟？」

「んなわけあるか！」

短く問いかけるエリザに、アヒルが勢いよく言い返す。

「言玉解放したら、何かよくわかんねえけど、こいつが出てきたんだよ」

「へえ」

エリザが腰を折り、まじまじとあひるを見る。

「ダッサ」

「グワァ！？」

冷たい一言で片づけるエリザに、人の言葉がわかっているのか、傷ついた表情を見せるあひる。

「うっせえなあ。俺だって銃のんが、持ちやすくて良かったっての」「そういう問題ではないだろう！」

ボヤクように言うアヒルに、籠也が怒ったように声を張り上げた。
「何が問題ないだ！こんな家鴨を片手に、敵の本拠地に乗り込む気なのか！？あなたはっ：！」

「問題ないんだって。こいつでも別に、ちゃんと力は使えるんだぜ？」

勢いよく怒鳴る籠也に、アヒルが口を尖らせて答える。

「見てろよ？行くぞ、ガアスケ」

「名前までつけたの：？」

「呼ぶ時、困るから一応な」

横から問いかける囁に答えながら、アヒルが正面へ向け、ガアスケの乗った右手を差し出す。

「あ：」

大きく口を開く、アヒル。

「“開^あけ”…！」

「グワァっ！」

アヒルが言葉を発すると、ガースケも同じように大きく口を開いた。その口の中から、強い赤色の光が光線のように発射されると、どこまでも続くはずの廃墟のある場所で、まるで壁でもあるかのように、勢いよくぶつかる。

「あれはっ…」

ガースケの赤い光を浴びた、その壁のような部分の景色が、切り取られていくように剥がれ落ちると、その向こうに、真っ暗な空間が姿を現した。

「結界が開いた」

「あれが、奴等のアジト…」

視線の先にその暗い空間を映し、皆が一気に、真剣な表情を作る。

「なっ？ 問題ないだろお？」

「力に問題はないかも知れないが、今後、戦闘するにあたってだなあっ…」

『グアアアアっ…！』

『……っ』

相変わらずの様子で言葉を交わしていたアヒルと箆也が、前方の、その現れたばかりの空間から聞こえてくる禍々しい声に気付き、素早く振り向く。

『グアアアアア！』

「忌っ…」

空間から溢れ出るように現れたのは、激しく声をあげる、大量の忌であった。その暗い空間は、忌の黒い体で形成されているのではないかと思えるほどの、おびただしい数である。

「どうやら、始忌のアジトというよりは…忌のアジトのようね…フフ…」

「……っ」

微笑みながら横笛を構える囁の横で、七架も薙刀を力強く振り上

げる。

「よっしゃあ！どっからでもかかって来っ…！」

「あの空間の中に、突っ込むわよ」

「へっ？」

ガアスケを身構え、気合いを入れて叫ぼうとしたアヒルが、エリザの言葉に、目を丸くして振り返る。

「突っ込むう？あの忌の群れの中にかあ？」

「ええ」

聞き返すアヒルに、何の迷いもなく頷くエリザ。

「なんでんなマネっ…」

「全員が入ったら、私がああ入口を閉じるわ」

「閉じる？」

益々、困惑した表情となるアヒル。

「適策だな」

「これ以上、忌を外にばら撒くわけにもいかないものね…フッフ…」

「あ、そういうことね」

囁の言葉に、アヒルがやっとエリザの言葉の主旨を理解する。

「けど、大丈夫なのかよ？閉じるなんて、そんなことっ…」

「私を誰だと思ってるの？」

問いかけるアヒルに、エリザが自信に満ち溢れた笑みを向ける。

「こっちは君より長く、神やってんのよっ」

「そうだったな」

エリザの笑顔に、つられるようにアヒルも笑顔を見せた。

『グアアアアア…！』

「神、忌が溢れ出る前にっ…」

「ああ、一気に押し込む。全員で行くぞっ！」

『……っ』

アヒルの言葉に、同時に頷き、それぞれの武器を構える籠也、囁、七架。鋭い表情を見せた四人が、武器を構えたまま、勢いよく空間の方へと駆け出していく。

「“当^あたれ”！」

「“刈^かれ”：！」

「“裂^さけ”：」

“薙^なぎ払え”！」

四人が駆け込みながら、同時に言葉を放つと、それぞれの武器から繰り出された赤い光が合わさり合い、空間から溢れ出ようとしていた大量の忌へと、直撃する。

『ギャアアアアっ！』

「突っ込むぞ：！」

一瞬にして掻き消えた忌たちの居た場所を通り抜け、空間の中へと侵入するアヒルたち。アヒルたち四人が入ったことを確認し、遅れるようにして、エリザも空間の中へと足を踏み入れる。

「第四音“え”、解放っ」

後方を振り返りながら、エリザが言玉を解放し、緑色の言玉をその長い指先へと吸収させる。言玉の光を受け継ぎ、光り輝く指先を、勢いよく振り上げるエリザ。

「“描^{えが}け”：！」

入口目がけて、エリザが指先で大きく長方形を描く。すると、指先の動きにより、緑色の光が大きな長方形を作り出し、その長方形は、開いていた入口にきれいに重なって、あっという間に入口を塞いだ。

「壁を、描いたっ：？」

エリザの方を振り返りながら、アヒルが驚いた表情を見せる。

「衣の神特有の、物質形成の力だ」

驚くアヒルの横から、同じように後ろを振り返っている簞也が、解説するように言葉を放つ。

「あなたが波城と戦った後も、衣の神はあの力で出口を作り、崩れる建物から、あなたたち二人と脱出した」

「すっげえなあ。ザベスっ」

「エリザよ！」

アヒルたちのもとへと追いついてきながら、しっかりと名前の訂正を入れるエリザ。

「それより、次の団体さんが来てるわよっ」

「へっ？」

エリザが前方を指差すと、アヒルが顔を正面へ向ける。

『グアアアアア！』

「うおっ」

「さっき結構倒したのに、まだあんなに……」

驚くアヒルの横で、七架が少し困ったような顔を見せる。

「あらあら、身がもたないわね……フッフ……」

「本拠地なんだ。仕方ないだろう」

あれこれと言葉を口にしながらも、箆也と囁が再び武器を構える。

「まあ前に進むしかねえよなあ。ザベスが入口も塞いじまったし」

「エリザよ！私が悪いことしたみたいと言わないでよね！」

アヒルへと怒鳴り返しながら、エリザが指先から言玉を取り出し、今度は駆けている右足へと吸収させる。

「とにかく蹴散らすわよ！“抉れ”！」

『ギャアアアア！』

緑色に輝く右足を振り下ろし、前方の忌を掻き消して、先頭を駆け抜けていくエリザ。

「おし、行くぞ？ガアスケ」

「グワァ！」

声を掛けるアヒルに、準備万端とばかりに答えるガアスケ。

「“当たれ”……！」

「ふう……」

「ん……？」

保のもとを訪れていた伍黄は、保との会話を終え、他の始忌の待機する部屋へと戻って来た。いつも座っている椅子へと腰を下ろし、

どこか疲れたように肩を落とす伍黄に気付き、緑呂が伍黄のもとへと歩み寄っていく。

「どうかしたのか…？伍黄」

「いや…」

気にかけるように問う緑呂に、伍黄はすぐさま首を横に振る。

「人間というものに、さらに絶望したただけだ」

伍黄が天井を見上げ、うんざりした表情で言い放つ。

「……………」

そんな伍黄の様子に、萌芽はそっと目を細める。

——人間…？——

「……っ」

灰示から姿を変えた、人間の姿を思い出し、萌芽は眉をひそめた。

「ふんふんふうんっ」

部屋の片隅で、ご機嫌に鼻歌を奏で、壁に掛けられた鏡を見て、長い髪の毛を整えているのは、弓の体に乗った虹乃であった。

「自分の顔見て、何がそんなに楽しいんだかねえ」

虹乃の様子を見て、碧鎖がどこか呆れたように言う。

「折角手に入れた実体なのよお？存分にオシヤレを楽しまないと、損じゃないっ」

「オシヤレねえ…んあっ？」

さっぱりわからないといった様子で首を傾げていた碧鎖が、部屋を出て行くかとしている桃真に気付き、顔を上げる。

「どっか行くのかあ？桃真っ」

「うんっ」

碧鎖の問いかけに、桃真が満面の笑みで頷く。

「ちよっと、暇潰しいっ」

微笑んだ桃真は、突き刺すような、鋭い瞳を見せていた。

Word. 38 罪無キ痛ミ (4)

———確かにそこは、地獄だった。

———痛い：痛いよ：痛い：———

止むことなく聞こえてくる声が、頭から、耳から、僕を蝕んでいくようだった。聞こえ続ける声に、眠ることさえ許されないこの体で、僕は、生まれてすぐに死にたいと思った。でも、死に方もわからない。本当に生きているのかも、わからない。

「声の聞こえて来ない場所を探す？」

僕と同じ黒い影は、どこか驚いたように聞き返してきた。

「ハっ、冗談だろ？ ハイジ」

仲間のイツキが、何となく決まった僕の名前を呼ぶ。

「この世界に、この声の聞こえて来ない場所なんてない。この世界に、人間が生きている限りな」

「でも、探す…」

僕はもう一度、主張した。

「このまま、この場所に居ることは…もう耐えられない…」

「お前がそう言うなら、止めはしない。俺やロクロも、生まれてすぐはそうだったからな」

冷静な、どこか悟りきってしまったような声が、返って来る。

「だが、一つだけ覚えておけ。ハイジ」

イツキは強く、僕を見た。

「どこまでも行けば行くほど、お前は人間に絶望する。それだけだ」
「……………」

すべてを諦めたような、言葉だった。

そうして僕は、どこまでも、どこまでも、行き続けた。

——痛い……！痛い……！——

「うううっ……」

でも、声の聞こえて来ない場所なんて、無かった。北の果てに行っても、南の果てに行っても、その声は聞こえてくる。その声は、僕を蝕み続ける。

「うるさい……」

必死に耳を塞いでも、聞こえてくる。

「うるさいっ……！」

どんなに拒絶しても、聞こえてくる。

「もう……嫌だっ……」

そこに在ったのは、確かな、絶望だった。

それから、数えきれない程、長い時が流れた。

「今日も……聞こえる……」

長い時の中で僕は、聞こえてくる声にも、それしか見えない絶望にも、すっかり慣れてしまっていた。どんなに大きな声が響いても、もう何の感情も湧かないほどに、僕は疲れ切っていた。

「消えたい……」

僕の望みは、それだけ。

「死にたい……」

他の望みなんて、何一つない。

——痛い……——

「……っ」

そこへ、声が聞こえてきた。特に大きくもない、か細い、弱々しい声。強く響いたわけでもないのに、その声だけが何故か際立って、まるで呼んでいるように、僕の耳に届いた。

「な、に……？」

呼ばれた気がして、呼ばれるがままに、僕はその声のもとへと急

いだ。自分が何故、こんなことをするのか不思議だったが、行かずにはいられなかった。

「痛い……」

声の主は、まだ幼い子供だった。

「痛いっ……痛いよおっ……！」

小さな体で、泣き叫ぶ子供。すべてを失った、深い悲しみが痛みとなって、強く僕に訴えかけてくる。痛みを嘆くその声は、幼いからか、ひどく純粋で、他のどんな声よりも強く、僕まで届いた。

「……っ」

その声にまた呼ばれて、僕は子供へと近付いていく。

「誰……？」

痛みを嘆くその子供は、涙をいっぱい溜めた瞳で、僕の、禍々しい姿を捉えた。

「君……」

小さな手が、臆することなく、僕へと伸ばされる。

「君も、“痛い”の……？」

……

「……っ！」

大きく目を見開き、飛び起きたのは、灰示であった。そこは、先程まで保の眠っていた寝台である。寝台の上で起き上がった灰示は、ゆっくりと右手をあげ、自らの額に触れた。

「夢……」

夢だというのに鮮明に残る映像を思い出し、灰示が少し眉をひそめる。

「……くだらないね……」

呆れたように呟くと、灰示はすぐに寝台を降り、暗い空間を戸惑うことなく突き進んだ。やがて、始忌の皆がいる部屋へと、灰示が辿り着く。

「ん…？」

部屋へと入って来た灰示に、緑呂が気付く。

「もう良いのか…？ 灰示」

「まるで問題ないよ」

緑呂の問いかけに答えながら、灰示が部屋の中を進み、奥の椅子に腰かけている伍黄の方へと歩み寄っていく。灰示がすぐ前で立ち止まると、俯いていた伍黄がゆっくりと顔を上げた。

「どうした？ 灰示」

「少し、記憶が飛んでる…」

問いかける伍黄へと、視線を投げかける灰示。

「保が？」

「保…？ ああ、お前が取り憑いている人間の名か」

眉をひそめる灰示に対し、伍黄はどこかわざとらしく答えた。

「出て来ていたよ、さっきまでな」

「保と話を…？」

「ああ」

「…っ」

頷く伍黄に、灰示はあからさまに表情を曇らせる。

「何だ？ 俺とは、会話をさせるのも嫌か？」

「別に。妙な詮索をされるのが、嫌いなだけだよ」

「詮索、ねえ」

灰示の言葉を繰り返し、伍黄がそっと目を細める。

「まあ確かに、興味は湧いている。あれほどに煩わしく、痛みの声を発している人間と、何故、お前が共に在るのか…」

試すような口調の伍黄に、厳しい表情を見せる灰示。

「だが、あの人間に聞いたところで、わからなかった。残念ながら」

「保に忌のことを？」

「知られたくなかったか？」

「……………」

微笑んで問いかける伍黄に、灰示は答えを口にしない。

「あのような人間と共に在るとは…本当に、お前は何を考えているのか…」

伍黄が椅子から立ち上がり、体の向きを変えて、灰示へ背を向ける。

「僕は…」

「ん？」

灰示の声が聞こえ、伍黄がゆっくりと振り返る。

「僕は、この世界から“痛み”を消すことしか、考えていないよ…」
「……ああ、知っている」

灰示の言葉に頷き、楽しげな笑みを浮かべる伍黄。

「次の忌を撒く準備をしろ、灰示」

伍黄が灰示へと、指示を飛ばす。

「俺たちの手で、この“痛み”ある世界を終わらせるんだ」

「……そうだね…」

伍黄の言葉に、灰示は反論することなく、頷いた。

一方、その頃。始忌のアジトへの潜入に成功したアヒルたち。

「“抉^{えぐ}れ”…！」

『ギャアアアア！』

前方に立ち塞がっていた忌の群れを、エリザが足を振り上げ、一瞬にして消し去る。

『グアアアアアっ…！』

「うっ…」

だが消し去った忌の後方から、すぐに新しい忌の群れが現れ、エ

リザは思わずその表情を引きつった。

「ったく、キリがないわねえ」

「このまま相手してたんじゃ…始忌のところに行った頃にはクタクタよ…？フフフ…」

「言えてるっ」

不気味に微笑む囁の声に、大きく頷くエリザ。

「要は誰か一人が足止めして、他が始忌のところへ行けばいいのよねっ」

「そうだな」

エリザの意見に、アヒルも賛同する。

「じゃあ頼むわ、ザベス」

「エリザよ！ってか、何で私なのよ！？」

迷うことなくエリザを指名するアヒルに、エリザが不満この上ない表情で聞き返す。

「君がやればいいでしょ！？」

「俺はダメだ。灰示に用がある」

「あああ、もうっ」

強く主張するアヒルに、仕方ないとばかりに頷くエリザ。

「じゃあ他がっ…！」

「僕は神附きだ。神と共に行く」

「私も神附きだから…神様を守らないと…フフ…」

「私も安附なので、出来れば朝比奈くんと一緒に…そのっ…」

「……………」

振り向いたエリザへと、口々に答える籠也、囁、七架の三人。その似たり寄ったりな答えを聞き、エリザが引きつった表情のまま固まる。

「ハハハっ！完全ハブだな！ザベス！」

「うっさいわね！」

勢いよく笑い飛ばすアヒルに、怒鳴りあげるエリザ。

「私だってねえ一応、目白恵に君のこと、頼まれっ…」

「エリザ」

「えっ…?」

珍しく、間違えることなく呼ばれる名に、エリザが発していた言葉
を途中で止めた。

「頼む」

アヒルが真剣な表情で、まっすぐにエリザを見る。

「俺たち、安団で決めたことなんだ」

仲間を見回し、アヒルが言い放つ。

「弓を、ヤ行の奴等を、絶対に助けるって」

「……………」

迷うことなく放たれるその言葉に、エリザはそっと目を細めた。

「わかったわよ。ただし、君への貸し二つ、これで一個減らさせて
もらうからねっ」

「ああ。サンキュ、エリザ！」

渋々と頷くエリザに、アヒルは大きな笑顔で礼を言う。

「向こうにある突き当たり、とりあえずそこまで行きましょう」

エリザが右足から言玉を戻し、再び指先へと吸収させる。

「“描^{えが}け”！」

緑色に輝く指先をエリザが振るうと、空間中に広がる忌の上空に
光の橋が描かれ、忌の向こうに見える突き当たりの壁まで、一気に
伸びた。

「走って！」

「おう！みんな！」

アヒルが皆を先導するように、その描かれた光の橋の上を駆け抜
け、忌たちを一気に追い越して、壁際まで突き進んでいく。突き当
たりは曲がり角になっており、さらに暗い空間へと続く道が広がっ
ていたが、今までの道のように、忌の姿はなかった。

「ここから先に忌はいないようだな」

「君たちは先に行って」

続く道を見つめ、箆也がそっと目を細めると、一番最後尾で壁際

へとやって来たエリザが、架かっていた橋を消しながら、指示を飛ばす。

「私はここに壁作って、忌を足止めするから」

「そんなことしたら、エリザベスさんの退路がなくなっちゃうんじゃないっ？」

「大丈夫なのか？」

七架と箆也が、少し不安げな表情をエリザへと向ける。

「私を誰だと思ってるの？そんなこと言って、神への暴言で処分されても知らないわよっ？」

「物凄い自信ね…フッフ…」

偉そう極まりない態度を見せるエリザに、囁が感心するように微笑む。

「エリザなら大丈夫だって。何せ、衣の神様のだもんなんっ」

「よくわかってるじゃないっ」

エリザを信頼しきった笑顔を見せるアヒルに、エリザも得意げに笑う。

「ここはエリザに任せて、先へ進もう」

「ああ」

「了解よ…フッフ…」

「エリザベスさんも、気を付けて」

「ええ」

アヒルの言葉に、素直に頷く箆也と囁。心配するように声をかける七架に、エリザは笑顔で答えた。

「じゃあっ」

「あ、アヒル」

「へっ？」

先へと足を踏み出そうとしたアヒルを、エリザが呼び止める。

「何だ？」

「私が足止めしてあげてるんだから」

エリザが強い瞳を、まっすぐにアヒルへと向ける。

「しくじったりしたら、蹴り倒すわよっ」

「……っ」

大きく笑って言い放つエリザに、アヒルもその表情から笑みを零した。

「ああっ！」

アヒルがしっかりと、頷く。

「行こう！」

「ああ」

強く言葉を放ち、アヒルが勢いよく先頭を駆け出していく。アヒルの言葉に頷いた籠也たちも、次々とアヒルの後を続いた。遠ざかっていくアヒルたちの背を、エリザが少しの間、見送る。

「さてとっ」

背を見送ることを止め、指先をあげるエリザ。

「“描^{えが}け”……！」

エリザが指を動かし、曲がり角の手前へと、長方形を描き、壁を作り出す。作り出されていく光の壁の向こうに、駆けて行くアヒルたちの姿が消えていく。

『グアアアアアっ……！』

「………」

目の前へと迫り来る大量の忌を見つめながら、エリザが指先から右足へと、言玉を移動させた。

「衣の神の名に懸けて、ここから先は、一步も通さないわっ」

無数の忌へ向け、エリザは力強く言い放った。

『ハア……！ハア……！ハア……！』

エリザに忌を足止めしてもらったアヒルたちは、忌のいない長く暗い道を、ひたすらに駆け抜けた。十分程駆け抜けたところで、細長い道は終わり、ただ何も見えない、真っ暗な空間へと出る。

「ここは……？」

「真っ暗…これじゃ、何にも見えないね」

その空間へと出たところで立ち止まり、囁と七架が周囲を見回す。だが、辺りは本当に真っ暗で、目を凝らしても、暗闇しか見えてこなかった。

「神」

「ああ。ガアスケ」

箆也の呼びかけに頷いたアヒルが、右手の上に乗っているガアスケを見る。

「“明^{あか}るくなれ”！」

「グワアっ！」

アヒルが言葉を放つと、ガアスケが大きく口を開き、その中から赤い光の玉を吐き出す。その光の玉は、勢いよく上空へと上がると、そこで弾け飛んで、次の瞬間、その空間一面へ光を落とした。

「ふわあゝ」

あっという間に広がっていく視界に、七架が驚いたように声を漏らす。暗かった空間は、明るくなると予想以上に広く、ただ何も無い、無地の床や天井が続き、その果てに白い壁が見える。

「アヒるん…いつの間に、そんな言葉を…？」

「俺だって、常日頃からちゃ〜んと、辞書を引いて、言葉の勉強をだなあっ…！」

「この前、朝比奈家が停電した時に、僕が教えた」

「あっさりバラすなよ」

神を立てることなく、淡泊に言葉を放つ箆也に、アヒルが少し不満げな表情を向ける。

「ああゝ、明るっ」

『……っ』

広い空間に響くようにして聞こえてくる声に、アヒルたちが一斉に振り向く。

「ずっと暗いところに居たからかなあゝ、急に明るくなると、目にくるよねえゝ」

「あいつは…」

何もない空間の中にポツリと立つ、派手な桃色の髪の毛、きれいな顔立ちの青年。その見覚えのある青年に、アヒルがそつと眉をひそめる。

「えっとお、誰だっけ？」

「始忌の格下だ」

「ひどい言い方だなあゝそりゃ階級は一番下のト級だけどさあ」

「ト級…」

「桃真だよお」

小さく呟いたアヒルへと、桃真が満面の笑みを向ける。

「ようこそおゝ、ボくらのお家へっ」

桃真が大きく両手を広げ、アヒルたちを出迎えるような動作を見せる。

「ちょうど暇してたんだあ」

楽しげに、桃真の声が踊る。

「ボクと遊んでってよお、安の神っ」

「……っ」

微笑みながらも、鋭い瞳を見せる桃真に、アヒルはそつと陰しい表情を見せた。

Word. 39 神ニ、問ウ (1)

言ノ葉町南西部、上空。

『グア：アア：』

「あらあら、本当に見事に、町人全員が忌に取り憑かれていますわね」

「何ともおぞましい光景ですわ」

五十音士を探しているのか、夜も更け、辺りは真っ暗であるというのに、多くの町人がまとまることなく徘徊しているその異様な景色を見下ろし、上空に浮かぶ衣団えだんの誠子と徹子が、それぞれ険しい表情を見せる。

「では早速参りましょうか、徹子」

「ええ、誠子お姉さま」

視線を交わした二人が、互いに頷き合う。そして再び後方を見下ろしながら、誠子と徹子はドレスの懷からそれぞれ、緑色の言玉を取り出した。

「第十四音“せ”：」

「第十九音“て”：」

二人の言玉が、強い緑色の光を帯びていく。

『解放…！』

強い光を放つ言玉を、それぞれの拳へと吸収させる誠子と徹子。

「“正拳”せいけん」

「“鉄拳”てっけん」

言玉を吸収した二人の細く、白い腕が、緑色の光を帯びて輝く。

「ちまちま倒してはいられませんわ。一気にいきますわよ、徹子」

「ええ、誠子お姉さま」

誠子と徹子は鋭い表情を見せ、輝く拳を、下方にいる無数の忌へ向け、身構える。

「“鉄槌”てつち…！」

「^{せんめつ}殲滅”…！」

『ギャアアア！』

二人の言葉と共に緑色の光が言ノ葉の町を駆け抜け、多くの忌の叫び声が響き渡った。

言ノ葉町北方。

「ふうっ…」

心を落ち着かせるように、大きく一つ、息をつくのは紺平。

「よしっ」

気合いの入った表情を見せた紺平が、懷から取り出した白い言玉を、勢いよく掲げる。

「五十音第十音“こ”、解放…！」

まだ少し慣れない様子で、紺平が自分の言葉を解放する。

「^{こお}凍れ”…！」

『ギャアアア…！』

紺平の掲げた言玉から、激しい吹雪が放たれると、その強風に押されるようにして忌が町人の体から飛び出し、黒い霧状の体をあつという間に氷の塊へと変えた。

「はぁ…上手くいったぁ…」

まだ実戦経験の浅い紺平は、何とか忌を封じられたことを確認し、ホッと胸を撫で下ろす。

「グア…！」

「えっ…？」

紺平の吹雪から逃れた一匹の忌が、上空へ舞い上がり、安心しきっていた紺平へと、その体を向けた。

「^は破”…！」

「うっ…！」

まっすぐに放たれる衝撃波に、紺平が大きく表情を歪める。

「う、うわっ…！」

「「逸^それろ」」

「あれっ？」

避ける言葉も持たない紺平は、険しい表情を見せたが、紺平へと向かって来ていたその衝撃波は、紺平に当たる直前で大きく軌道を変え、まったく違う方向へと飛んでいった。

「あれえ〜？」

空の彼方へと消える衝撃波を見送り、不思議そうに首を傾げる紺平。

「世話が焼けるわね。ったく」

「あっ、空音^{そらね}さん！」

呆れたような表情を見せながら、紺平の前へと現れたのは、紺平と同じ於^{おだん}団の一人、曾^{そもり}守の空音であった。

「あんまり弱っちいと、於^{おだん}団の面汚^{めんご}して呼ぶわよ？」

「一応、五十音士になってまだ一週間経ってないんだけどね…俺…」
冷たい言葉を投げかけてくる空音に、紺平が少し引きつった表情を見せる。

「グガ…！」

「あっ、またっ…！」

「…っ」

二人へ向け、再び構えを取る上空の忌に気付き、焦った表情を見せる紺平の横で、空音がそっと目を細め、言玉を持った右手を挙げる。

「「殺^そげ」」

空音の言玉から忌へ向け、鋭い白色の光が放たれる。

「ギャアアアア！」

目にも留まらぬ速さで空を駆け上がった、空音の光は、上空にいた忌を真っ二つに斬り裂き、一瞬にして消し去った。

「す、凄っ…」

空音の言葉の強力さに、紺平が思わず圧倒された声を漏らす。

「意外と強いんだね、空音さんて」

「意外は余計っ」

感心したように言う紺平に、空音が鋭い視線を送る。

「だいたい、まだろくに言葉も使えないんだったら、大人しく留守番してればいいでしょ？　なんでわざわざ、しゃしゃり出てくんのよ？」

「一応は、俺の神様の命令だし」

眉間に皺を寄せる空音へ、紺平は悪びれない笑みを向ける。

「ガアたちも頑張ってるのに、俺だけ留守番ていうのもなあって思っただけだし」

「だからってねえっ」

「それに」

「……？」

さらに付け加えられる言葉に、空音は自分の言葉を止め、首を傾げる。

「ここは、俺の町だよっ」

「……っ」

大きな笑顔を見せる紺平に、空音は驚いたように、目を見開いた。だがすぐにどこか不満げな表情となって、紺平から視線を逸らす。

「勝手にしなさいよ！　でも言っとくけど、もう二度と助けないから！」

強く人差し指を突き出し、釘を差すように言う空音。

「あんたがあっさりヤラれようとねえ、私は知ったこっちゃなっ…」

「ここに居たか」

「檻也くん」

空音の言葉を遮るように、その場に檻也が現れた。

「神…」

先程までの紺平へとあれこれ言っていた音調から一転、落ち着いた物静かな口調となって、空音が現れた檻也の方を振り向く。

「俺は町の東方へ向かう。空音、お前は紺平の補佐を頼む」

「お任せ下さい、我が神」

「十秒前の言葉、覚えてる…？空音さん…」

檻也へと深々と頭を下げる空音を見て、呆れきった表情を見せる紺平であった。

一方、忌アジトへと潜入したアヒルたちは、エリザの支援のお陰で先へと進むことが出来た。だが、そんなアヒルたちを出迎えたのは、始忌の一人、ト級の桃真^{トウマ}であった。

「ようこそお、ボクらのお家へえ。五十音士の皆さんっ」
無邪気な微笑みを、桃真がアヒルたちへと向ける。

「始忌の彼がここに居るということは…」

「もう、気付かれちゃったの…？」

「まだボク以外は気付いてないから、安心してえ」

「えっ？」

不安げな表情を見せた七架であったが、桃真から返って来る明るいつい声に、戸惑った表情となる。

「入口にうじゃうじゃ居た忌いるでしょ？あれは番忌^{ばんき}って言って、あれの管理は、一番格下のボクの仕事なんだあ。だからボクが真っ先に気付いたってわけっ」

「真っ先に気付いたというのに、仲間に報告しなかったということか？」

「うん。だってえ、その方が独り占め出来るでしょっ？」

籠也の問いかけに、桃真が満面の笑みで頷く。

「君たち四人の“痛み”をっ」

『……っ』

楽しげに言い放つ桃真に、アヒルたちが皆、険しい表情を作る。

「気を付けろ、神」

厳しい表情を見せた籠也が、アヒルへと声を掛ける。

「昨日、少しだけ戦ったが、一番格下とはいえ、相当の強さだ」

「ああっ」

「グワァ！」

大きく頷くアヒルと同じように、アヒルの右手の上のガアスケもしっかりと頷く。

「うわぁゝ、何それ？可愛いねぇ」

そんなガアスケの姿を見て、桃真が無邪気な声を出す。

「安団の言玉は武器だって聞いてたけどお、それ、最新モデルう？」

「ああ、そうだ」

「あっさり嘘ついたわね：フッフ：」

何の迷いもなく頷くアヒルに、囁が不気味な笑みを零す。

「面白そおっ、じゃあ早速始めようかあ」

「おう！どつからでも掛かってこっ：！」

“包”^{ホウ}っ

「へっ？」

気合い十分のガアスケを構えたアヒルであったが、桃真が間を置くことなく言葉を放った瞬間、桃真の周囲から放たれた黒い霧が、どこまでも広い空間へと一気に広がっていき、あっさりとアヒルたちを包み込んでいく。

「な、何だあ？これっ」

周囲を覆っていく霧を見回し、困惑の表情を見せるアヒル。

「これは：」

「まさか：私たちの体に乗っ取る気じゃ：」

「えっ：！？」

囁の言葉に、七架が焦りの声をあげる。

「掻き消せ」！

眉をひそめた籠也が、周囲を一回転するように鎌を振り回し、勢いよく言葉を放つ。だが覆っていく霧は掻き消えることなく、それどころか、その濃さを増していくばかりであった。

「消えない：？」

消えぬ霧に、さらに眉をひそめる籠也。

「囁ちゃんっ…」

「私たちの言葉で、どうこう出来る霧さんじゃなさそうね…」

振り向く七架に対し、囁もそっと表情を曇らせる。

「安心していいよお。別に君たちの体に乗っ取る気はないからあゝ」

「何っ…?」

桃真の言葉に、籠也が振り向く。

「だってこれ以上、乗っ取ったって、実体化する始忌もないしねえ」

「じゃあ一体、なんだっていつ…!」

「真っ向から、言葉と言葉のぶつけ合いでもすると思ったあ?」

「……っ」

体全体を覆っていく霧に困惑しながら、問いかけようとしたアヒルに、桃真が問いかけで返す。

「勘違いしちゃダメだよお? ボクらは五十音士じゃなくって、忌なんだあっ」

黒い霧の向こうから、桃真がアヒルへと微笑みかける。

「言葉なんて、どうでもいいんだよっ」

桃真がそっと、右手を掲げる。

「さあ、ボクに見せて」

掲げた右手で、指を鳴らす桃真。

「君たちの、一番の“痛み”をっ」

「クっ…!」

冷たく微笑む桃真と、周囲に迫り来る霧に、アヒルが険しい表情を見せる。

「きゃあああ!」

「ううっ…」

「奈々瀬! 囁!」

黒い霧の中へとその姿を消していく七架と囁に、思わず身を持ち出すアヒル。だが、アヒル自身も全身を黒い霧に覆われ、ろくに身

動きの取れない状態であった。

「ク……！クソっ……」

「箆也！」

険しい表情を見せながら、箆也も霧の中へと掻き消えていく。

「うううっ……！」

そして最後に、アヒルを霧が包み込んだ。

「うわああああっ……！」

アヒルの激しい叫び声が、広い空間に響き渡った。

………

「痛つつつつっ……」

頭部に何かぶつけたような痛みを感じながら、アヒルはその場でゆっくりと起き上がった。

「あれっ？黒い霧は？」

いつの間にか、体に纏わりついてた霧がなくなっていることに気付き、アヒルが自由になった体に戸惑いながら、周囲を見回す。

「えっ……？」

見回したその景色は、先程まで居たはずの空間ではなく、アヒルは思わず目を見開いた。

「ここ、は……」

よく知る道、よく知る景色。

「俺ん、家……？」

アヒルの座るその目の前には、大きく看板に『あさひな』と書かれた、一軒の八百屋がある。一番見慣れたその建物に、アヒルはさらに戸惑った表情となる。

「な、なんでだ？俺、いつの間に言ノ葉につ……」

「おかえり」

「……っ！」

困惑しながら立ち上がろうとしたアヒルであったが、店の方から聞こえてくるその声に、大きく目を見開いた。その声は、アヒルにとって、忘れたくても忘れられない、たった一つの声である。

「おかえり、アーくん」

「……カー兄っ……」

アヒルの目の前へと現れたのは、アヒルがかつて、失ったはずの兄であった。

Word. 39 神ニ、問ウ (2)

その頃、言ノ葉町。何でも屋『いどばた』。

「眠^{ねむ}れ”…」

『グ、ググっ…』

言葉を放ち、『いどばた』へと迫り来ていた忌憑きの町人たちを、一氣に眠らせる、衣団の禰^{ねもり}守、音音。

『グガアアアアっ…!』

「次から次へとっ…」

すぐさま後方から現れる次の集団に、音音はどこかうんざりしたように表情を引きつった。

「うう…ん…」

窓から外に居る音音の様子を見ながら、少し首を捻る為介。

「やっぱり一人では厳しそうかなあゝ加勢に入ってくれるう？ 雅くんっ」

「構いませんが…」

和室に敷いた布団で眠る、七架の弟、六騎の様子を見ていた雅が、人差し指で眼鏡を押し上げながら、ゆっくりと立ち上がる。

「僕が出ている間、奈々瀬さんの弟さんのこと、お願いしますよ？」

「大丈夫だってえゝ僕が面倒見いいの、知ってるでしょゝ？」

「初耳です」

「あ、そうっ…」

きっぱりと答える雅に、為介が落ち込みながらも頷く。

「では、行ってきます」

「はいはあゝい、よろしくねえゝ」

足早に屋敷の外へと出て行く雅を、為介が手を振りながら送り出す。

「ふうゝっ」

一息ついた為介がゆっくりと振り返り、部屋の逆方向にある大窓

のすぐ傍に立ち、険しい表情で、じっと外を見つめている恵を見る。
「韻へ、行ってきていたんでしょ？」

「……っ」

不意に問いかける為介に、窓ガラスに映る恵の表情が曇った。

「どうでしたあ？」

「どうもこうもない。お前が考えている通りだ」

「では韻は、朝比奈くんのあの力に気付いて……？」

「ああ」

恵が、短く頷く。

「気付くというより、奴等は七声との戦いの場を用意し、朝比奈の力が目醒めるきっかけを自ら作ったんだ」

「成程ねえ……」

恵の言葉を受け、為介がそっと目を細める。

「朝比奈くんのあの力は、失われし神をこの世界にもう一度、復活させるもの……それでもし、すべての神が揃ってしまえば……」

「させやしないさ」

為介の続こうとした言葉を、恵が力強く遮る。

「それだけは、絶対につ……」

「………」

強い意志というよりは、何とも必死に見える恵のその表情を見つめ、為介は少し考え込むように俯いた。

『グガアアアアアっ！』

「何っ……!？」

その時、恵のすぐ前にある大窓のガラスが、勢いよく碎け散り、屋敷の外から、忌に取り憑かれた町人たちが、飛び入ってきた。

「中にまでっ……!」

「ああ、あ、ガラス代があ……」

焦ったように言いながら、懷から取り出した言玉を、素早く右足へと吸収させる恵。割れたガラスに困ったように肩を落しながら、為介も扇子を振り上げる。

「滅^{めつ}せ”…！」

「射^{いぬ}抜け”っ」

『ギャアアア！』

恵が右足を振り下ろし、為介が扇子を一振りして、部屋の中へと侵入してきた町人たちに取り憑く忌を、一瞬にして一掃する。忌の離れた町人が気を失い、次々と床へと倒れ込んだ。

「あゝああ…こんなにお客さん来ちゃってえ」

「何をしてるんだ？ 雅たちは」

「なかなか抑えきれないってことでしょおゝ何せ、町人全員が相手ですからねえ」

不満げに言い放つ恵に、為介が笑顔でフォローを入れる。

「だが、私たちはそう力を使うわけにもいかないんだ。あんまり次から次へと来られてもっ…」

「う、うわああああっ！」

「……っ」

言葉を掻き消す叫び声に、恵が素早く顔を上げる。

『グア…アア…』

「うううっ…！く、来るな…！来るなあっ！」

いつの間にか目覚め、布団の中から飛び出した様子の六騎が、庭から入ってきた別の町人の団体に、襲われていた。迫り来る忌に、六騎は必死の叫び声をあげている。

「奈々瀬の弟かっ…！あんまり力が使えないって時に…！」

恵が少し表情を引きつりながら、六騎を助けるべく、右足を振り上げる。

「ちよつと待あゝって下さあゝい」

「ああっ？」

右足を振り上げた恵へと、為介が制止を促すように、扇子を差し出す。

「何だ？ 何故、止める？」

恵がしかめた表情を、為介へと向ける。

「ガキを見殺しにする気か？」

「いいえ」

鋭く問いかける恵へと、やわらかな口調で答える為介。

「どうせ避けられないなら、早めの方がいいかと思ひましてえ」

「何…？」

為介の意味深な言葉に、恵はそつと眉をひそめた。

「うううう…！うっ…！」

『グア…アア…』

必死に逃げ惑っていた六騎であったが、やがて町人たちの集団に、壁際へと追い込まれてしまう。逃げる場所すら失い、六騎はさらに怯えた表情となる。

『“破”！』

「あっ…！」

前方から放たれる複数の衝撃波に、大きく目を見開く六騎。

「うっ…うわあああああっ！」

六騎が両手で頭を抱え込み、激しく叫びあげた、その瞬間であった。

——パアアアン！

『ギャアアア…！』

「えっ…？」

固く目を閉じていた六騎であったが、忌の悲鳴のようなものが辺りに響くと、戸惑うようにゆっくりと、その大きな瞳を開いた。

「あっ…」

開いた瞳を、さらに見開く六騎。六騎の目の前に、強い光を放ちながら浮かんでいるのは、手のひらにすっぽりと収まる程度の大きさの、宝石のように美しい、金色の玉であった。周囲には、六騎を襲ってきた町人たちが、気を失っているのか、重なり合うようにして倒れている。

「これ、は…？」

目の前に浮かぶ玉を見つめ、六騎が少し首を傾げる。

「言玉っ…!？」

六騎の前に現れた玉を見て、恵が驚きの表情を見せる。

「まさか、あいつも五十音士っ…？」

「恵さん」

「ん？」

六騎に目を見張っていた恵が、為介に呼ばれ振り向く。

「言っていたきたい、言葉があるんですけど…」

「……っ」

いつになく真剣な表情で言い放つ為介に、恵は、もうその言葉が何なのか、わかっていているかのように、すぐさま表情を曇らせた。

「無理やり巻き込めっていうのか…？まだ、あんなに幼いあのガキを…」

「僕らはもうすでに、たくさんものを巻き込んできました」

鋭く問いかける恵に、為介は間を置くことなく答える。

「今更、たった一つのものを巻き込まない為に、引き返すわけにはいかない…」

「……………」

為介のその言葉に、恵は少し目を細める。

「……それも、そうだな」

恵が納得した様子で、小さく頷く。

「今更、キレイ事を並べても、仕方ないよな」

そう言いながら、再び六騎の方を見た恵が、右足から言玉を取り出し、今度は右手のひらへと、その言玉を吸収させる。

「恨むなら、私を恨め」

言玉を吸収し、強い緑色の光を放つ右手を、六騎の目の前に浮かぶ金色の言玉へと向ける恵。

「“目醒めろ”！」

恵の右手から、強い光が放たれた。

「何だ…？この玉…」

六騎が戸惑いながら、目の前の言玉に手を触れようとしていたその時、恵の放った光がまっすぐに飛んできて、その言玉へと直撃した。

「うわっ…！」

目の前で弾けるように輝く強い光に、六騎が思わず身を屈める。

「な、何っ…」

「……っ」

「えっ…？」

六騎が次に顔を上げた時、六騎の前にあったのは、小さな言玉などではなかった。感じる呼吸にさらに戸惑いの表情となって、六騎がまじまじと、目の前のそれを見つめる。

「う、馬…？」

目の前に姿を現したのは、鍛え上げられたかのような立派な肢体の、美しいとさえ思える姿の、一頭の馬であった。だが普通の馬とまったく異なるのは、鼻先から長い四肢、なびくように広がる鬣と尾も、すべてが金色一色であるところである。

「金色の、馬…」

「ヒヒーン！」

茫然と見つめる六騎の前で、金馬は堂々と鳴き声をあげる。

「な、何…？一体、どうなって…」

『グアアアアア！』

「あっ…！」

六騎が頭を抱え、目の前の状況に混乱していたその時、部屋のまた別の扉が外から突き破られ、忌に取り憑かれた町人たちが、続々と中へと入り込んできた。

「ま、またっ…！」

「ヒヒーン！」

「えっ…？」

入ってきた町人たちに六騎が表情を引きつり、その場から逃げ去

ろうとした時、六騎のすぐ前に逃げることを遮るように、先程の金馬が立った。何かを求めるように鳴く金馬に、六騎が眉をひそめる。「彼は、君と一緒に戦いたいんだってえ」

「えっ？」

横から入ってくる声に、六騎が振り向くと、そこには笑顔を見せた為介が立っていた。

「あんたは……た、戦うって何っ……」

「君は僕らと同じ、言葉の力を持つ五十音士……」

「五十っ……？」

「そして、君に与えられた言葉は、“む”」

「“む”……？」

「ヒヒーン！」

六騎がその一文字を口にした途端、金馬は待ち望んでいたかのように、大きく声をあげた。

「そう……君は“む”の力を持つ五十音士、“武守”」

為介が細めた瞳を鋭く光らせ、戸惑う六騎へと、白いその手を伸ばす。

「君に、最初の言葉をあげよう……」

「……っ」

為介の口がゆっくりと動き、その鋭い瞳が、六騎に“繰り返し言葉”とまるで強く訴えかけるようであった。

「む……」

六騎が大きく、口を開く。

「“向かえ”……！」

「ヒヒーン！」

放たれた六騎の言葉に応えるように、金馬は高らかと鳴き、その大きく開いた口から、巨大な金色の光の塊を、部屋へと侵入してきた町人たちへ向け、放った。

『ギャアアアア！』

金馬の放った光を浴びた途端、町人たちに取り憑いていた忌が一

気に掻き消され、忌から解放された町人たちが気を失い、次々と倒れていった。

「はぁ…はぁ…」

倒れた町人たちを見つめながら、少し息を乱す六騎。

「す、凄げえ…」

六騎の口から、思わず感心するような声が漏れた。

「……………」

見事に忌を撃退した六騎の様子を、少し離れたところから見つめる恵は、厳しい表情を見せていた。

「巻き込むことしか、出来ない…」

どこか悔いるように、恵の声が落ちる。

「こんな私たちの、何が“神”だっていうんだろ…」

恵が割れた窓から、外を見つめる。

「アケル…」

恵の少し弱々しい声が、風の中へ、掻き消えた。

Word. 39 神二、問ウ (3)

「んっ…?」

桃真の放った黒い霧に呑み込まれた七架が、きつく閉じていたその瞳をゆっくりと開く。するとそこに霧はもうなく、体に纏わりついていたあの感覚もなくなっていた。

「あ、朝比奈くん!?!」

飛び起きた七架が、アヒルの姿を探すように、周囲を見回す。

「神月くん? 囁ちゃんっ? あ、あれっ…?」

三人の姿を探していた七架であったが、周囲に広がる、よく見覚えのあるその光景に、戸惑うように眉をひそめた。

「ここって、コンビニ…」

立ち上がった七架の前には、七架がバイトをしているコンビニがあった。学校や家と同じほどに見覚えのあるそのコンビニを見つめ、七架が首を傾げる。

「なんで私…今日、シフト入ってないんだけどなあ…」

大きく首を傾げ、七架が不思議そうな表情を見せる。

「というか、私さっきまで確か、始忌のアジトに居っ…」

「私が、そんなに可哀想…?」

「えっ…?」

その場を歩き去ろうとした七架が、コンビニの方から聞こえてくる声に気付き、再び振り向いた。コンビニの入口の前に、いつの間にか人が立っている。

「親にも見捨てられた私が、そんなに可哀想…?」

「リ、リン…ちゃん…?」

コンビニの前に立っていたのは、七架のアルバイト仲間のリンであった。リンは虚ろな瞳を見せ、かつて忌に取り憑かれた時と同じ

ような問いかけを、七架へと投げ放ってくる。

「だから、何も言わないんでしょう…？ 私がどんなにきついことを言っても…」

リンはまっすぐに七架を見つめ、さらに言葉が続ける。

「私に同情してるから、何にも言い返さないんでしょう…？」

「リンちゃん…」

問いかけ続けるリンを見つめ、七架がそっと目を細める。

「だから嫌い…そんなあんたが、大嫌い…」

「……………」

リンの言葉を聞き、七架は一度、深々と目を閉じると、再び大きく瞳を開いた。

「いいよ、嫌いでっ」

「……………」

認めるように大きく頷く七架に、リンは少し驚くように目を見開いた。

「その代わり、私もリンちゃんのこと、嫌っちゃうからっ」

七架はどこか、開き直ったように言葉が続ける。

「シフト代わって言われても絶対断るし、ゴミだしだって押し付け返すし、それにあれとあれとあれでしょお」

考えるように、七架が首を捻る。

「……朝比奈くんが言ってた」

穏やかな笑みを浮かべた七架が、捻っていた首を元に戻し、その笑顔をリンへと向ける。

「何も言い返さずに黙っていることは、その言葉を否定するよりも、ずっと相手を傷つけるんだって」

アヒルの言葉を思い出し、七架は誇らしげに胸を張る。

「だから私は、もう逃げたりしない…」

さらに大きな微笑みを、浮かべる七架。

「リンちゃん言葉、全部を受け止める！」

七架がはっきりと言い放ったその瞬間、辺りを真っ白の光が包み

込んだ。

「ここ、は…?」

七架と同じように黒い霧に吞まれた囁もまた、始忌のアジトとは異なる、どこか別の場所へと辿り着いていた。目の前にあるのは、洋風の一軒家。特に代わり映えのない、ごく普通の家であった。

「こっつて…」

その家を見つめ、囁が少し眉をひそめる。

「おかえり…」

「ん…?」

家の方から聞こえてくる声に、囁がゆっくりと視線を向ける。

「おかえり…世界で一番大好きな、僕の囁…」

「愛してる…愛してるわ、囁…」

「……っ」

その家の前に並び、囁を出迎えるように優しい言葉を投げかける、まだ若い男と若い女。二人の姿を見た瞬間、囁の表情は一気に曇る。その二人は、遥かに昔ながらも、囁の記憶に鮮やかに残る、囁の父と母であった。

「一番の、“痛み”ね…」

桃真の言葉を思い出し、囁がそっと眉をひそめる。

「納得だけど…嫌なものね…フフフ…」

かつて囁を捨て去った頃の、若い姿のままの両親を見つめ、自嘲するような笑みを浮かべる囁。

「囁…」

「囁」

両親が重ね合わせるようにそれぞれ、囁の名を呼ぶ。

「大好きだよ…大好きだ、囁…」

「愛してる…私はどこに居ても、あなたを見守っているわ…囁…」

「……………」

夢に見る程に忘れられなかった言葉を放つ両親を、囁は目を逸らすことなく、まっすぐに見つめた。

「ついこの前まで：私にとって、言葉は無意味でしかなかったわ：」
囁がゆっくりと口を開き、自分の中の痛みとは知りながら、両親へと語りかける。

「でも今は：言葉に、確かな意味を感じられる：」
囁み締めるように呟き、囁が自分の左胸に手を当てる。

「囁」

「囁…」

「私の神様が言っていたの：」

再び呼びかける両親の声を遮り、囁が言葉を続ける。

「自分のことなんだから：何を信じるのかは、何の言葉を信じるのかは、自分の勝手だって：」

両親を見つめる囁の表情に、穏やかな笑みが浮かぶ。

「だから私も、信じてみる：」

笑顔で、はっきりと言い放つ囁。

「あなたたちの言葉、すべてじゃなくても、ほんの一部でも：きつと、真実だったって」

囁がその笑みを大きくした瞬間、辺りを白い光が包み込んだ。

「神！囁！奈々瀬！」

囁、七架と同じように黒い霧に吞まれた籠也は、霧のない空間で気付くと、すぐに立ち上がり、近くに仲間の姿を探した。だが返って来る声はなく、辺りにアヒルたちの姿も見当たらなかった。

「近くにはいないのか：？ 一体、どこへ：」

「何度も仰いましたでしょう！」

「…：…？」

すぐ近くから聞こえてくる、怒鳴るような大きな声に気付き、籠也が振り返る。

「俺”ではなく“僕”です!“お前”も“おかえり”も、“お”のつく言葉はすべて、口にしてはなりません!」

怒鳴りあげているのは、和装姿に眼鏡を掛けた、まだ若い女。

「あなたは於の神には選ばれなかったのです! 身分をわきまえて下さいませ!」

「あれはっ…」

怒鳴りあげる女のすぐ前に立つ、まだ幼い子供の姿に、簞也が目を見張る。

「簞也様!」

「……っ」

「僕…?」

女の前で深く俯き、きつく唇を噛み締め、震える拳を、血が滲むのではないかと思うほどに握り締めている、一人の少年。それは間違うはずもない、過去の簞也の姿であった。

「け、けどっ…おれ、は…」

「“お”の言葉はすべて、檻也様のものです! あなたの言葉など、たったの一つもありません!」

必死に何かを訴えかけようとした幼い少年は、その言葉さえ遮られ、すべての言葉を取りあげられるように、怒鳴られていた。

「……………」

さらに俯いていく少年を見つめ、簞也が目を細める。

「これが僕の“痛み”、か…」

心に触れるように、そっと胸に手を当てる簞也。

「あなたは神ではないのですからね!」

女はそう言葉を吐き捨て、俯いたままの少年の前から、足早に去っていく。

「神っ…」

一人残った少年が、小さくその言葉を口にする。

「神…神っ…神…!」

恨むように、求めるように、何度もその言葉を繰り返す少年。

「神……」

前方の少年と同じように、簞也がその言葉を口にする。

「ただ、煩わしいだけの言葉だったのにな……」

そう呟いた簞也の表情から、小さく笑みが零れた。笑みを零した簞也が、静かに歩を進め、俯いたままの少年のもとへと歩み寄っていく。

「……っ？」

目の前までやって来た簞也に気付いた様子で、少年が、ずっと俯けていた顔を、やっと上げる。

「だ、誰っ……」

「期待しているといい」

戸惑う少年のその頭を、簞也がそっと撫でる。

「あなたの神は、相当の厄介者だ」

「……っ」

微笑む簞也を見て、少年が少し目を見開いたその瞬間、辺りを強い白色の光が包み込んだ。

……………

—————

「ふう……ん……」

楽しげな笑みばかりを浮かべていた桃真は、初めて、どこかつまらなそうな表情を作った。

「ボクの空間から出てくるなんて、結構やるねえ……でもまあっ」
だがすぐに桃真は、笑顔を見せる。

「見物だったよお。君たちの“痛み”っ」

『……………』

桃真の笑顔の前に立つのは、黒い霧の呪縛から逃れた簞也、囁、七架の三人であった。三人は厳しい表情を見せながら、それぞれの

武器を構え直す。

「ナメられたものだな。あんな程度の幻惑で、僕たちをどうにか出来ると思ったか？」

「あれは幻惑じゃないよお。君たちの心に刻まれた、真実の痛みさあっ」

「……っ」

すぐに言い返す桃真の言葉に、箆也が少し表情を曇らせる。

「確かに真実だわ……」

箆也の横から、囁が一步、前へと踏み出る。

「けれど……私たちは、痛みに負けはしない……」

「私たちは、痛みを乗り越える。乗り越えられることを、知ったの」

「ふうん……」

囁に続くように主張する七架に、桃真が再び、つまらなそうに顔をしかめる。

「でもさあ、乗り越えられてない人が一人、居るみたいだけどおっ？」

「えっ……？」

桃真の言葉に、戸惑った声を漏らす七架。

「あっ」

箆也がハッとした表情となって、周囲を回し見る。

「神……？」

二、三度周囲を見回す箆也であったが、その場にアヒルの姿はなく、代わりに一つの黒い塊が残っていた。箆也たちが呑み込まれたものと同じ、霧の塊である。

「ま、まさかっ……」

その霧を見つめ、箆也が眉をひそめる。

「神……」

――……………

「カー兄っ…」

黒い霧に呑み込まれたアヒルは、籠也たち三人と同様、自らの一番の痛みである、かつて失ってしまった兄、カモメと向き合っていた。

「アーくん」

「……っ」

再び名を呼び、穏やかで優しい笑顔を見せるカモメに、アヒルの体の動きが、ぴたりと止まる。カモメの姿を前にした途端、呼吸すら上手く出来ない、そんな感覚になった。

「あ…」

言葉を発しようとするが、上手く口が動かず、声にならない声が漏れる。

「あっ…」

「アーくんが“いなくなれ” って言ったから、いなくなったんだよ？」

「……っ！」

笑顔で放たれるその言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「アーくんの、言葉の通りになったんだよ？」

「違…違っ…」

「嬉しいでしょ？アーくん」

必死に否定しようと、何度も首を横に振るアヒル。だがカモメはアヒルの言葉を聞こうとはせず、自らの言葉を続けた。

「違うっ…！」

「違わないよ」

「……っ」

アヒルの叫びも、一瞬にして否定される。

「これがアーくんの本心、これがアーくんの望んだ未来」

「違う…！違う！違うっ！」

何度も強く首を振り、頭を抱えたアヒルが、その場に膝をつき、

深々と俯く。

「違うんだっ……!!」

俯いたアヒルが、苦しげな声を発する。

「違うないよ……」

俯いたままのアヒルへ、カモメが優しい笑顔を向ける。

「だって、アーくんがそう言ったんだから」

「……っ！」

両手で頭を抱えたまま、アヒルが大きく目を見開く。

「あ……」

苦しげに漏れる、小さな声。

「あああああ……!!」

………

「神……」

「そお。君たちの神様、自分の“痛み”にすっかり囚われちゃって
るみたいだよお？アハハあゝっ」

険しい表情を見せる籠也に、桃真が楽しげな笑い声を向ける。

「アヒるん……」

「そんな……朝比奈くん……」

霧の塊を見つめ、囁と七架も険しい表情を見せる。

「朝比奈くん……!!」

「あっ」

居ても立ってもいられず、霧へ向け、駆け出していく七架に、籠
也が目を見開く。

「ま、待て！奈々瀬……!!」

籠也が七架の腕を掴み取り、駆け込んでいこうとした七架を強く
止める。

「神月くん……!!」

「落ちつけ。下手に動くのは、良くない」

「アハハア」

箆也と七架のやり取りを見て、桃真はさらに楽しそうに笑う。

「止めて正解っ」

『……っ』

桃真のその言葉に、箆也たちが同時に振り向く。

「人間の痛みに他人が割って入ったら、痛みごと、その人間の精神を崩壊させちゃうこともあるからねえ」

「崩壊っ…」

七架が駆け込んでいこうとした足を止め、少し青ざめた表情を見せる。

「そんな…じゃあ、どうしたら…」

「何てことはない。簡単な話だ」

「えっ…?」

困惑する七架の言葉を掻き消すように、箆也がはっきりと言い放つ。

「囁」

「ばっちりよ…」

箆也の呼びかけに、すでに構えていた横笛で、すぐさま音色を奏でる囁。

「“鎖線”…」

横笛から口を離れた囁が、そっと言葉を落とす。

「うっ…!」

囁の周囲から伸びた鎖状の赤い光が、一気に広がると、桃真の体に何重にもなって巻きつき、桃真の動きを封じた。鎖に強く縛られ、桃真がかすかに表情をしかめる。

「あの霧を消せないのであれば、あなたの方を消せばいい」

「単純な理論だねえっ」

「的は射ているつもりだ」

不敵に微笑む桃真にも動じず、箆也は鋭く鎌を振り上げた。

「刈^かれ”…！」

鎖で動きを封じられた桃真へと、箆也が鎌を振り下ろし、赤色の一閃を向ける。

「クっ…！」

唇を噛み締め、厳しい表情を見せる桃真。

「なあゝんてねっ、“散^{サン}”！」

だがすぐにその表情は笑顔となり、鎖に捕らえられていた桃真の体が、黒い霧へと変化して鎖の中から逃れ、上昇していく。舞い上がった上空で、黒い霧は再び、桃真の体を形成した。

「ざあゝん念っ、ボクら忌に実体はなっ…！」

「“変格”…！」

「えっ…？」

上空に舞っているというのに、上から聞こえてくる声に、桃真は戸惑うように顔を上げた。

「なっ…！」

「……………」

桃真のさらに上空には、巨大な十字架を構えた七架。

「“嘆^{なげ}け”…！」

「グっ…！」

十字架から放たれる、真っ赤な十字の光に、桃真の表情が歪んだ。「うあああっ…！」

実体を消す間もなかったのか、光を真正面から浴びた桃真が、叩きつけられるように地面へと落下する。

「痛たたっ…！」

地面に倒れ込んだ桃真は、後頭部を押さえながら、すぐに起き上がった。

「ああゝあ、久々だなあ。自分の痛みなんてっ」

感覚を楽しむかのように微笑みながら、桃真が後頭部に触れた手を目の前へと持ってくる。その掌には、真っ赤な血が滲んでいた。

「“困^{かこ}え”」

「……っ」

さらに聞こえてくる言葉に、眉をひそめる桃真。桃真が顔を上げると、座り込んだままの桃真の周囲に、囲うように、赤い光が張り巡らされていた。

「さっき聞いてなかったあゝ？ボクラ、実体のない忌に、こんな囲いなんて…」

「囁」

「“遮れ”…」

桃真を囲いこんだ箆也が再び囁の名を呼ぶと、囁はすぐに言葉を発した。囁の言葉により、張り巡らされた赤い光の上にもう一重、光の膜が張られる。

「これは…」

「この光は忌を通さない」

「……っ」

箆也の声に、桃真がゆっくりと顔を上げる。

「逆に、あなたはこの光の中から出られない」

「そうみたいだねえ」

箆也の言葉を受け、周囲の光を見つめながら、桃真がどこか暢気に答える。

「終わりだ、忌」

「そうだねえ、終わりみたいだあ」

「……っ」

あっさりと負けを認めるような発言をする桃真に、箆也が少し表情を曇らせる。

「随分と余裕だな。まだ何か企んでいるのか？」

「別にいゝこれといって、策もないよお」

箆也の問いかけに、軽い口調で答える桃真。

「ただっ…」

桃真が、鋭く細めた瞳を、箆也へと向ける。

「ボクラには、生まれたその瞬間から、存在する理由なんてないか

らあ、消えるのも別に怖くないだけえっ」

桃真の言葉に、眉をひそめる箆也。

——五十音士が有り余るその強い力を向けられる、何か別の存在があればいいのではないかと……

——“生まれろ”。そのたった一つの言葉から生み出されたのが、忌だ——

箆也の脳裏に、恵の言葉が過ぎる。

「君たちが勝手に生み出したんだから、君たちが勝手に消すといいつ」

「……………」

そう言って微笑む桃真を見つめ、箆也は何か思うように目を閉じた後、すぐに目を開き、右手に持った鎌を振り上げた。

“掻き消せ”！

箆也が鎌を振り下ろし、言葉を放ったその瞬間、桃真を囲んでいた光は、中に座り込んでいた桃真と共に、弾け飛ぶようにして、掻き消えた。小さな光の粒が周囲を舞っていく。

「うっ…うっ…」

光の舞う中に倒れ込んだ桃色の髪の青年は、気を失うかのように、力なく目を閉じた。

「忌の気配が…消えた…？」

「取り憑いていた始忌が消えたのよ…彼は、あの忌に取り憑かれていた元、五十音士の人間でしょうね…」

倒れた青年を見つめ、囁と七架が言葉を交わす。

「で、アヒるんは…？」

「あ、そうだ！朝比奈くん…！」

七架の横で、囁がすぐさま振り向くと、七架もつられるようにして振り向いた。

『なっ…』

振り向いた二人が、同時に驚きの表情を見せる。

「こ、これはっ…」

「霧が…消えていない…?」

禍々しい黒い霧の塊は、桃真が消えたことに何ら影響された様子もなく、ゆっくりと蠢いていた。消えない霧を見つめ、囁と七架が険しい表情を作る。

「どうということだ?」

鎌を下ろした箆也もまた、険しい表情を見せる。

「奴を倒したというのに、何故、霧が…」

<消えないよ…>

「……っ」

辺りに響くようにして聞こえてくる声に、箆也がすぐさま振り向く。その声は、確かに先程まで聞いていた、桃真の声であった。

「あっ…」

降り注ぐ光の粒の中に見える、消えかけの、かすかな小さな黒い霧を見つけ、箆也が眉をひそめる。

「忌…」

「あれが彼の、本来の姿のようね…」

その小さな霧へと、囁と七架も視線を注ぐ。

<ボクの言葉で生み出された“痛み”は…本人が消し去るまでは絶対に、消えない…>

霧から、細い声が響く。

<ボクが消えたって、消えない…君たちの神様が…自分の“痛み”を拭えるまでは、ね…>

霧が薄れていくとともに、響く声も徐々に小さくなっていく。

<さあて…君たちの神様は、出て来られるかな…? アハハハっ…>
不気味な微笑みを残して、小さな霧は完全に掻き消え、桃真という名の忌は、その存在を静かに消していった。

『……………』

箆也たち三人が、静まり返った空間に、厳しい表情で立ち尽くす。

「どうやら…アヒるんが自分の痛みに打ち勝つまで、アヒるんはあの霧の中から、出て来られないようね…」

「朝比奈くん…」

囁の言葉を聞きながら、七架が不安げに霧を見つめる。

「……っ」

七架と同じように霧を見つめ、そっと目を細める箆也。

「ふう…どうする…？ 箆…」

「僕たちだけで先に行こう」

「えっ…？」

「えっ…！？」

思いがけない箆也の言葉に、囁は戸惑い、七架は驚きの声をあげた。

「さ、先につて、神月くんっ」

「アヒるんを置いていくというの…？ 箆也…」

どこか責めるように、囁が箆也を見つめる。

「あなたが、そんな薄情な神附きだとは、思ってもみなかったわ…今すぐ、恋盲腸読者をやめなさい…」

「やめない」

囁のよくわからない訴えに、箆也はすぐさま、強く拒否する。

「ほ、本気なの…？ 神月くん…」

「……………」

改めて問いかける七架に、箆也が真剣な表情を作る。

「今、戦っているのは、僕たち、安団だけではない…」

箆也が口を開き、ゆっくりとした口調で言葉を放つ。

「衣団や於団、それのための神や美守も、多くの五十音士がこの戦いに参加している。この戦いは、僕たち安団だけのものではない」

曇りのないまっすぐな瞳で、囁と七架を見つめる箆也。

「我が神が動けないのであれば余計に、僕たち安団は先へと進み、奴等を倒す必要が、目的を達成する必要がある」

箆也が、アヒルの呑み込まれた霧を振り向く。

「僕が神の立場であつたなら、きっと“先に行け”と言うと思う」
霧を見つめ、目を細めた後、箆也は再び囁たちを見た。

「きっと神も、そう言うと思う」

『……っ』

はつきりと言い放つ箆也を見つめ、囁と七架は少し考えるように
間を置いた後、笑みを零した。

「フフフ：確かに：アヒルんなら、“とっとと行け”とか言いそう
だものね…」

「うん、わかった！行こう！」

さらに笑みを大きくし、二人が箆也へと言葉を投げかける。

「パパッと始忌を倒して：私たち安団の評判を、鰻昇りにしちゃい
ましよう…？フフフ…」

「うん、そうだね！私、朝比奈くんの分も、頑張る！」

武器を握る手に力を込め、やる気を見せる囁と七架。

「随分とやる気だな」

「何なら、箆也も来なくていいわよ…？」

「誰がだっ」

「フフフ…」

顔をしかめる箆也を見て、囁が楽しげに微笑む。

「とっとと行くぞ」

「ええ…」

「うん！」

箆也の声に頷き、囁と七架が先へと進む歩を踏み出す。

「……っ」

二人の背を見ていた箆也が、ゆっくりと振り返り、再び、アヒル
の呑み込まれた霧を見つめた。

「皆、あなたの言葉があつたからこそ、自身の痛みを乗り越えた…」
霧の中に居るアヒルへ向け、届くはずはないと知りながらも、箆
也が言葉を掛ける。

「あなたもきつと、乗り越えろ」

箆也の声が、まるで願うように響く。

「箆也…」

「神月くん」

前方の広間の出口に立ち、箆也を呼ぶ囁と七架。二人の声に箆也が前を向き、アヒルの居る霧へ背を向ける。

「ああ、行こう」

大きく頷き合うと、三人はその広間を駆け去っていった。

『……っ！』

アジトの奥で寛いでいた緑呂、虹乃、碧鎖の三人が、同時に顔色を変える。

「桃真の気配が…消えた…？」

なくなった仲間の気配に気付き、虹乃が戸惑いの表情で顔を上げる。

「おい！どうなってんだよ！？なんだって桃真がっ…！」

「私に聞かれたって、わかるわけないでしょ！」

責めるように問いかける碧鎖に、虹乃が険しい顔つきとなって怒鳴り返す。

「緑呂っ…！」

答えを求めるように、碧鎖が今度は緑呂の方を振り向いた。

「今、見せる…」

鉄の仮面の後ろから、静かに答える緑呂。

「よ…」

緑呂の声が、そっと響く。

「“過ぎれ”…！」

緑呂が言葉を放ち、壁の一面へと右手の指先を向けると、その指先から白い光が放たれ、壁にぶつかって広がり、壁に何やら映像を映し出した。

「こいつらはっ…！」

壁に広がった光の中に、暗闇を駆ける籠也、囁、七架の三人の姿が映し出される。

「五十音士っ…！」

三人の姿を見て、碧鎖が眉間に強く、皺を寄せる。

「いつの間に侵入を…」

「ばんき番忌の管理は桃真の役目のはずだが…獲物を独占しようとして、逆に狩られたか…あの愚か者…」

「チっ…！」

緑呂と虹乃が表情を曇らせる中、舌打ちを漏らした碧鎖が、座っていた椅子を蹴るようにして立ち上がり、部屋の出口へと歩を進めていく。

「どこへ行く？ 碧鎖」

「決まってんだろ！？ 五十音士どもを狩りに行くんだよ！」

問いかける緑呂へ、怒鳴るように答える碧鎖。

「伍黄が戻っておらんだ。少し待たんか。動くのは、伍黄の指示を待ってから…」

「んなもん、待ってられっかよ！」

緑呂の言葉を遮って、碧鎖がさらに声を荒げる。

「俺はもうっ、あいつ等の勝手で生み出されんのも、消されんのも沢山なんだよっ！」

「碧鎖っ…！」

強く叫びあげると碧鎖は、緑呂が止めるのも聞かずに、その場を飛び出していった。

「まったく…」

緑呂が、どこか困ったように肩を落とす。

「キャハハっ！ 面白そお。私も行こうっと！」

「お、おい！ 虹乃…！」

楽しげに足を踊らせ、虹乃も緑呂の声には止まらずに、碧鎖の後を追うようにして、部屋を去っていった。部屋には緑呂だけとなり、

緑呂は止められなかった手を、ゆっくりと下ろした。

「仕方のない奴等だ！」

呆れたように、深々と溜息をつく緑呂。

「一先ず、伍黄に報告に行くか！」

そう呟くと、緑呂も足を動かし、その部屋を後にした。

Word. 39 神二、問ウ (4)

その頃、言ノ葉町。

「変格”：」

鋭い瞳を見せた空音が、細い両手を空へと、勢いよく掲げる。

「蒼穹”：！」

言葉とともに、空音の両手から強い白光が放たれると、真っ暗な夜空にその白い光が一際輝いて広がり、まるでそこだけが青空かのように、明るく輝いた。

「注げ”：！」

空音がさらに手を振りかざすと、広がった青空から、無数の光の粒が降り注ぐ。

『ギャアアアア！』

降り注いだ光に当たり、町人に取り憑いていた忌たちが、一気に数多く、掻き消えていく。

「凄い：」

その光景を、目を凝らして見つめる紺平。

「あれが空音さんの、“変格”：」

真剣な表情で見つめながら、紺平が、自分とはあまりに違う、その力強さに、きつく拳を握り締める。

「ふうっ」

一息つくように、空音が振り上げていた手を下ろした。

「はあっ、これで結構っ：」

『グアアアアア！』

「えっ：：？」

感じる手応えに、ホッとしたような笑顔を浮かべた空音であったが、その時、空音の作った青空を砕き割って、再び現れた夜空から、無数の忌が降り落ちてきた。

『なっ：：！？』

黒い雨のように、忌が降り注ぐその光景に、紺平と空音が大きく目を見開く。

『グアアアア！』

降って来た忌が、地面に倒れていた町人たちに再び取り憑き、禍々しい叫び声をあげる。

「そ、そんなっ…」

一瞬にして復活した忌たちを、空音が信じ難いといった表情で見つめる。

『グアア…アアア…』

「……っ」

言葉にもならない、低く重たい声を落とす忌たちを見つめ、紺平がそっと目を細める。

「痛みが…」

紺平の口から、小さく声が零れ落ちる。

「痛みが止まないよ…ガア…」

「これは…」

言ノ葉町の別箇所では、同じように檻也が、復活していく忌を見つめ、険しい表情を見せていた。

「忌の、第二波が打たれたか…」

言ノ葉町、『いどばた』。

「恵さん…」

窓の向こうの、遠くの空から忌が降り落ちる光景を見て、為介がゆっくりと恵の方を振り返る。別の窓から、同じように外の光景を見つめる恵は、どこか遠くを見るような瞳を見せていた。

「世界が“痛み”に呑み込まれていく…」

空を見上げ、恵がそっと呟く。

「消えるのは痛みか、言葉か…」

戻って、始忌アジト。

「素晴らしい…」

壁に映し出された言ノ葉町の様子を見て、伍黄は満足げな笑みを浮かべた。映しだされた無数の映像の中には、復活していく忌に言葉すら失っている檻也や紺平、言ノ葉町に居る五十音士たちの姿も多く、映しだされている。

「これ程までに忌を増発させられるとは…」

感心するように言いながら、伍黄がゆっくりと振り返る。

「やはり、お前の力は素晴らしいよ、灰っ…ん…？」

先程まで背後に立っていたはずの灰示へと話しかけた伍黄であったが、そこにすでに灰示の姿はなかった。辺りを見回しても、姿はない。いつの間にか、部屋を出ていったようである。

「相変わらず、読めない男だ」

伍黄が少し呆れるように、肩を落とす。

「伍黄」

「ん？」

名を呼ぶ声が部屋へと入って来て、伍黄が入口の方を振り向く。

「緑呂」

部屋へと現れたのは、緑呂であった。

「どうした？」

「五十音士が侵入した。すでに桃真がやられている」

「……そうか」

緑呂の言葉にかすかに眉をひそめながら、伍黄がゆっくりと頷く。「やっと、恨みを晴らす時が来たようだな」

再び映し出された言ノ葉町の様子を見つめ、伍黄はそっと、不敵な笑みを浮かべた。

「違う：違うんだよ：カー兄っ：」

アヒルのものとは思えない、弱々しい声が、小さく落とされる。

「違うんだ：」

「違わないよ」

アヒルが発した言葉を、アヒルの前に立つカモメは、笑顔ですぐさま否定する。

「だってアーくんが言った。アーくんが言ったんだ。“いなくなれ”って」

強調するように、ゆっくりとした口調で言うカモメ。

「“いなくなれ”って」

「……っ！」

もう一度放たれる言葉に、アヒルがさらに強く、唇を噛み締める。

「違う：違う、違うんだっ：違うっ：」

頭を抱え、額が地面につきそうなほどに背を曲げ、俯いていくアヒル。縮こまったその姿は何とも小さく、弱いものに見えた。

「違っ：」

＜大丈夫だよ：＞

「えっ：？」

すぐ目の前から聞こえてくる声に、アヒルは俯けていた顔をかすかに上げた。

＜大丈夫だから：ほら：＞

戸惑っていたアヒルに、もう一度、確かに届く声。空耳などではないことを確信し、アヒルはさらに顔を上げた。

＜この手を、取って：＞

顔を上げたアヒルへと差し出される、一本の手。

「……っ」

アヒルは迷うことなく、その手を取った。

——パアアアン！

アヒルがその手を取った瞬間、八方に大きな強い光が放たれると、アヒルを包み込んでいた黒い霧を一気に吹き飛ばした。

「あれっ…？ここ、さっきの…」

完全に顔を上げたアヒルが周囲を見回すと、そこはもう八百屋『あさひな』の前ではなく、先程までいた、広い空間であった。辺りを見回し、アヒルが目丸くする。

「あ、あいつっ…」

アヒルが、空間の中央に力なく倒れている、桃真であった青年の姿を見つける。

「忌の気配がしない…箆也たちがいないってことは、あいつに勝って、先へ進んだのか」

考えを巡らせ、どこかホツとした表情を見せるアヒル。

「それにしても、何…だったんだ…？今の…」

先程まで見ていたカモメの姿を思い出し、困惑した表情を見せるアヒル。悪い夢か、よく出来た幻惑でも見ていたのだろうか。だが、最後に握った手の感触だけは、妙にしっかりと残っていた。

「あの、手…」

アヒルがゆっくりと顔を下ろし、先程、伸びてきた手を取った、自分の右手を見下ろす。

「グワァ！」

「……っ」

手のひらの上に乗っているのは、一羽の小さなあひる。

「ガアスケ…」

「グワァ！」

名を呼ぶアヒルに答えるように、ガアスケは少し間の抜けた笑顔

で、大きく鳴く。

「お前…あっ？」

ガアスケを見つめ、何やら考え込むような表情を見せたアヒルであったが、部屋の奥からゆっくりと近付いてくる、一つの足音に気付き、顔を上げた。

「誰だっ…!？」

響く足音に警戒の色を強めながら、アヒルが勢いよく問いかける。

「あっ…!」

奥の暗闇から現れた、その人物を見つめ、大きく目を見開くアヒル。

「は、灰示…!」

「……………」

アヒルの前へと現れたのは、灰示であった。灰示は静かな表情でアヒルを見つめながら、ゆっくりと歩を進め、アヒルの方へと近付いてくる。

「灰示っ…」

戸惑いの表情を浮かべながら、もう一度、アヒルが灰示の名を呼ぶ。

「お前…」

「五十音、第二十六音…」

「……………」

灰示の口から零れる言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「“は”、解放…」

「なっ…!？」

灰示がそう言うと、右手に握られていた言玉が強く輝き、次の瞬間、灰示の右手は、数本の真つ赤な鋭い針を持っていた。言玉を目醒めさせた灰示を見て、アヒルが驚きの表情を見せる。

「灰示！お前っ…!」

ガアスケを身構え、武器を構えた灰示に、警戒の態勢を取るアヒル。

「安の神様…」

強く見つめるアヒルを、灰示が静かに呼ぶ。

「君に一つ、問いたいことがある…」

「えっ…?」

真剣に言葉を放つ灰示に、アヒルはそつと、戸惑いの表情を見せた。

Word. 40 違エシ道 (1)

始忌アジト、入口付近。

「だああああ！“扶^{えぐ}れ”！」

『ギャアアアア！』

エリザが緑色に光輝く右足を振り回し、周囲を取り囲んでいた忌の群れを、一気に掻き消す。雄たけびのようなエリザの声のすぐ後に、忌の叫び声が響き渡った。

「ふうっ！」

掻き消えた忌を確認し、一息ついて、額の汗を拭うエリザ。

『グアアアアア！』

「うげっ」

大して時間も置かないうちに現れる、次の忌の群れに、エリザが大きく顔を引きつる。

「ったく、キリがないじゃない。もうっ」

疲れ果てた様子で、エリザが深々と肩を落とす。

『グアア…アア…アっ…』

「んっ？」

どこか苦しげな声に気付き、ふと後方を振り返るエリザ。エリザの視界に入ってきたのは、苦しみながら、分裂する細胞のように、一つから二つへと数を増やす忌の姿であった。

「……っ」

その光景を見つめ、エリザがそっと目を細める。

『グアア…ア…』

「“痛み”が、新たな“痛み”を生んでいく…」

数の増えた忌を見つめ、険しい表情を見せるエリザ。

「早く何とかしないと、マズイわよ。アヒル…」

先へと進んだアヒルへ向け、エリザは小さく呟いた。

一方、アヒルを残し、アジトのさらに先へと進む箆也、囁、七架の三人。

『ハア…！ハア…！ハア…！』

ただ暗闇の、だだっ広い道の中を、三人が必死に駆ける。無音のその場に、三人の息の重なる音だけが響き渡る。だが目は徐々に暗闇に慣れ始め、三人は辺りの様子がうかがえるほどになっていた。

「見えるようになってきても…別に何もないものね…」

殺風景な辺りの様子に、囁が少しがっかりしたように呟く。

「白骨死体の一つでもあれば、気分出るのに…フッフ…」

「何を求めている」

不気味に微笑む囁に、箆也が呆れ果てた様子で突っ込みを入れる。

「それに、奴ら忌は、人間を殺すようなことはしないだろう」

「それもそうね…フフ…」

「えっ？」

二人の会話を聞いていた七架が、戸惑うように目を丸くする。

「なん、で？なんで忌は、人を殺さないの？」

「あら、七架も白骨死体派…？」

「違うけど…」

囁の言葉を、すぐさま否定する七架。

「人を殺せば、奴らは存在出来なくなるからだ」

「えっ…？」

答えを放つ箆也に、七架が首を傾ける。

「存在、出来なくなる…？」

「ああ…」

聞き返す七架に、深々と頷く箆也。

「奴らは、人の放つ言葉の悪意に潜むもの。人が居なくなれば奴らは生まれず、“痛み”も無いため、生き永らえることも出来ない」
「え…えっ？」

少し混乱したように、七架が自分の額へと手を当てる。

「それって、おかしくない…？じゃあなんで、あの人たちは、人から言葉を奪おうと…」

戸惑いの表情で、七架が箆也を見つめる。

「そんなことしたら、あの人たちはっ…」

「ああ、死ぬ」

「……っ」

はっきりに言い放つ箆也に、眉をひそめる七架。

「彼らが望んでいるのは、“痛み”からの解放…そして自身の消滅…」

箆也に続くように、囁も真剣な表情で言葉を放つ。

「彼等は“痛み”から逃れるため、自ら消えようとしている…私たちの、言葉を道連れにしてね…」

「そんな…」

囁の言葉に、七架がさらに険しい表情となる。

「どうして、そこまでする必要がっ…」

「あるんだよおっ！」

『……っ！』

上方から聞こえてくる声に、三人が素早く顔を上げる。

「あれはっ…！」

「シャハハ！」

上空から降って来るようにして、その場に姿を現したのは、始忌の一人で、鮮烈な青髪の青年、碧鎖^{ヘキサ}であった。碧鎖が高らかと笑いあげながら、右手を振り上げる。

「お前ら人間には、死んでもわからねえだろうがなあ！」

「う…！」

振り上げた手を、七架へ向け、勢いよく振り下ろす碧鎖。

「うううっ…！」

「七架…！」

振り下ろされた右手へと、素早く薙刀を突き出した七架であった

が、その勢いに押され、七架が一気に後退していく。碧鎖に押される七架に、囁が思わず身を乗り出す。

「クっ…！」

七架が薙刀を握り直し、目の前に居る碧鎖を、睨み上げる。

「お前…！」

睨む七架を見つめ、そっと口角を吊り上げる碧鎖。

「忘れてねえーぜえ？お前、あの時俺に、“痛み”を与えた女だっ
「……っ」

楽しげに微笑む碧鎖に、そっと眉をひそめる七架。初めて弓が『いどばた』へとやって来た日、七架はアヒルを助けるため戦いへと参加し、弓を追っていた碧鎖へと傷を負わせたのであった。

「今度は俺が、お前に“痛み”を与えてやるよ」

碧鎖の突き刺すような瞳が、七架へと向けられる。

「お前を狩ってなあ！シャハハハ！」

「クっ…！」

笑いあげる碧鎖に、七架は薙刀を振り払って後ろへと飛び、碧鎖との距離を開ける。

「七架」

「神月くんと囁ちゃんは、先に行ってっ」

呼びかける囁に、七架がはっきりと言い放つ。

「この人の相手は、私が」

「シャハハハ！そうこなくっちゃなあ！五十音士！」

薙刀を構え直す七架を見て、碧鎖が嬉しそうに笑う。

「箆也…」

「奈々瀬は変格も習得している。任せても、問題はないだろう」
意見を求めるように振り向く囁に、箆也が答える。

「奈々瀬、この場は任せる」

「うんっ」

箆也の言葉に、大きく頷く七架。

「だが…」

「えっ…?」

付け加えるように言う箆也に、七架が少し首を傾げた。

「迷うなよ」

「……っ」

その言葉に、七架がどこかハツとするように、大きく目を見開く。

「うん」

七架がもう一度、大きく頷く。

「行くぞ、囁」

「ええ…」

その場に七架と碧鎖を残し、箆也と囁がさらに先へと歩を進めていく。

「……………」

遠ざかっていく二人の背中を、静かに見守る七架。

「いいの? あっさりと行かせちゃって」

「俺は桃真みてえに、獲物一人占めしようとして、逆にヤられるよ
うなへまはしねえよっ」

問いかける七架に、碧鎖が口角を吊り上げる。

「それに、俺は狩りたい奴を狩れば、それでいいしなあ! シヤハ
ハハ!」

「……っ」

楽しげに笑う碧鎖を見つめ、七架がそっと目を細める。

——ああ、死ぬ……——

——彼等は“痛み”から逃れるため、自ら消えようとしている……

——

先程の箆也と囁の言葉を思い出し、七架は少し迷うような表情を見せた。

——俺は、この世界に通う言葉を、たったの一つだって失わせた

くない――

「朝比奈くん…」

為介の家を出る時、アヒルが口にした言葉を思い出すと、七架はその表情から迷いを消し、強く瞳を光らせ、薙刀を持つ手に力を込めた。

「そう…私は、言葉を守る…」

自分自身に言い聞かせるように、呟く七架。

「だから、あなたを倒す…！」

「シャハハッ」

高らかと言い放つ七架の前に、碧鎖も素早く、両手を構えた。

「……っ」

箆也と共に先へと進んだ囁だが、もう見えはしない七架のことを気に掛けるように、どこか不安げな表情で、後方を振り返った。

「心配か？」

「えっ…？」

箆也に問われ、囁が首を横へと向ける。

「そう、ね…」

少し歯切れ悪く、頷く囁。

「確かに彼女は強いわ…目を見張る速さで“変格”を習得して、神附きとして申し分ない力も手にしてる…」

細めた瞳で、囁がそっと下方を見る。

「でも、五十音士になってからの日が浅過ぎる…忌との戦闘経験もあまりないから…その辺りが少し、ね…」

「……………」

囁の言葉を聞き、箆也が少し目を細める。

「そんなに心配なら、戻ってもいいぞ」

「フフフ…そんなことしないわよ…」

はつきりと言い放つ箆也に、囁が不気味な笑みを向ける。

「どちらかとうと…箆也の方が心配だし…」

「どういう意味だ」

「それに…」

箆也が顔をしかめる中、囁がさらに言葉を続ける。

「そんなことしたら…私が七架に怒られるわ…」

「…確かにな」

微笑む囁に、納得するように頷く箆也。

「とにかく、僕たちは一刻も早く、先へ…」

「キャハハハあゝ！」

「んっ？」

暗闇に響く甲高い笑い声に、囁の方を見ていた箆也が、前方へと視線を向ける。

「来た来たあゝお客様がつ」

「あれは…」

「弓っ…」

その場に足を止め、眉をひそめる箆也と囁。二人の前方に、二人を待ち構えるようにして立っているのは、楽しげな笑顔の、妖艶な少女。派手な化粧と、強く巻かれた髪で、弓とはまったく違う印象を与えているが、それは確かに弓の体で、現れたのは、弓を乗っ取った始忌の一人、虹乃^{ニジノ}であった。

「ようこそおゝ五十音士さんたちっ」

虹乃が軽い口調で、二人へと手を振る。

「碧鎖がないけどお、もしかしてもう倒しちゃったとかあ？ だったら超笑えるんだけどお。キャハハっ」

『……っ』

まったく仲間を心配している様子のない虹乃に、箆也と囁が不快感を露にする。

「まあいいやあ。ねえ？ 私とも遊んでいかないっ？」

誘うように、首を傾げる虹乃。

「折角手に入れた実体の力、味わいたいんだよねえ」

「ふう…」

弾むように言葉を続ける虹乃の姿に、箆也はどこか疲れたように肩を落とした。

「まあ、丁度いい。あの者を倒せば、弓を助けられっ…」

「箆也」

「ん？」

箆也の言葉を遮るように、囁が箆也の名を呼ぶ。

「何だ？囁」

「彼女とは、私が一人で戦うから…あなたは先へ進んで」

「何…？」

そう答える囁に、箆也が少し眉をひそめる。

「確かに先は急ぐが…相手は弓だ。二人で相手をして、確実に助け出した方が…」

「あの時」

囁が再び、箆也の声を遮る。

「あの時、私が彼女に“退がってろ”なんて言わなければ…彼女は乗っ取られずに済んだ…」

真剣な瞳で、囁がまっすぐに箆也を見つめる。

「自分のミスくらい、自分で責任を取りたいのよ…」

「……………」

その瞳から、強い意志を覗かせる囁に、箆也はそっと目を細める。

「わかった。ここは任せる」

「フフフ…ありがとう…」

箆也の答えに、囁が嬉しそうに笑みを浮かべる。

「まだ始忌は複数居るわ…先に進んで、一人で無茶しちゃダメよ…？」

「それは“わかった”とは言えないな」

「フフフ…困った人ね…」

忠告を聞こうとする素振りのない箆也に、言葉とは裏腹に、困っ

た様子はなく、穏やかな笑みを作る囁。

「じゃあ、先へ行く」

「ええ…」

囁にそう告げた箆也が、そっと右手に構えていた鎌を振り上げる。

「“駆^かけろ”」

「へえっ？」

言葉を放ったその瞬間、箆也がまるで姿を消すように、その場を高速で移動し、さらに奥へと進んでいく。素早く動いた箆也が、風のように虹乃の横を通り過ぎると、虹乃は少し戸惑うように後方を振り返った。だがすでにそこに、箆也の姿はなかった。

「ああ、行かれちゃったあ」

まだかすかに残る風に、巻いた髪を揺らしながら、虹乃がそっと肩を落とす。

「まあいつかあ。まだ緑呂も萌芽もいるんだしい」

開き直ったように微笑み、虹乃が再び囁の方を見る。

「それにい、あんたが虹乃の遊び相手になってくれるんでしょ？」

「ええ…」

楽しげに声を掛ける虹乃に、微笑みかける囁。

「確か一回会ってるよねえ？」虹乃がこの体、手に入れた時につ

「ええ…」

虹乃の言葉に、囁が笑顔で頷いていく。

「あの時とは…随分、雰囲気が変わったわね…」

「でっしょ？」

囁の言葉を聞いた途端、虹乃がますます、その表情を輝かせる。

「ああ、んな田舎臭い小娘の体でもお、虹乃が中に入れば、こお、んなに輝いちゃうのお！」

着飾った自分を強調するように、大きく両手を広げる虹乃。

「虹乃に乗っ取られたことをお、感謝して欲しいくらいだわあつ」

「そうね…」

相槌を打った囁であるが、その声は先程までより低く、どこか重

々しかった。

「その濃い化粧も、巻き過ぎのくるくる髪も…本当に似合っていない…」

「……っ」

はつきりと向けられる言葉に、虹乃が浮かべていた笑みを止める。
「何、って…?」

「あの子の持つてる良さを…すべて殺してしまっているわ…」

戸惑うように聞き返す虹乃に、囁は躊躇うことなく言葉が続ける。

「本当、見れたもんじゃないわね…」

「……っ!」

鋭く落とされる囁の言葉に、大きく目を見開く虹乃。

「だから、すぐに出ていってもらうわ…その体から…」

囁がそう言っ、横笛を構える。

「……超ムカつくっ」

しばらく言葉を失っていた虹乃が、引きつった表情で、やっと口を開く。

「あんたも狩って、虹乃の実体コレクションにしてやるわあ!」

勢いよく言い放ち、虹乃は両手を振り上げた。

「んっ…?」

碧鎖を七架に、虹乃を囁にそれぞれ任せ、一人、さらに先へと進んだ籠也が、不意に広い部屋へと辿り着き、足を止める。その部屋の中央には、籠也を待ち構えるように、一人の男が静かに佇んでいた。

「来たか…五十音士」

「あなたは…」

出迎えた仮面の男を見て、籠也がそっと目を細める。

「我が名は緑呂。口級の始忌成り」

「口級…」

緑呂の階級に、思わず表情を曇らせる簞也。口級といえば、イ級に次いで二番目に強い階級である。

「何だ。イ級を相手にするつもりでいたんだがな」

警戒する心とは裏腹に、簞也が強気な言葉を放つ。

「其方そなたなど、伍黄イツキが相手するまでもない」

緑呂が仮面の後ろから、簞也へと冷たく声を発する。

「本来ならば、我が相手するまでですらないが…今は人不足ゆえ、仕方あるまい」

そう言って、緑呂が懐へと右手を入れる。

「少しばかり、遊んでやろうぞ」

「なっ…!？」

緑呂が懐から取り出したのは、簞也もよく見覚えのある、真つ白な言玉であった。

「こ、言玉…？」

「五十音、第四十音…」

簞也が戸惑う中、緑呂は五十音士と同じように、言葉を放っている。

「“よ”、解放っ…」

「…っ!」

光り輝く言玉に、簞也は大きく目を見開いた。

Word. 40 違エシ道 (2)

始忌の一人、桃真^{トウマ}の力により、自身の“痛み”に囚われてしまったアヒルであったが、謎の声と差し伸べられた手により、救出された。そして、“痛み”から抜け出たアヒルの前へと現れたのは、同じく始忌の一人としてアヒルたちに敵対をする、灰示であった。

「俺に、聞きたいこと……？」

真剣な眼差しを向ける灰示に、アヒルが少し首を傾げる。

「何だあ？」

「……………」

暢気な笑みを浮かべ、素直に聞き返すアヒルに、灰示が少し啞然とした様子で見つめる。

「ハア……」

「あっ？」

深々と溜息をつく灰示に、アヒルが目を丸くする。

「なんだよ？ 質問内容、忘れたか？」

「違うよ。少し呆れていたただけさ」

問いかけるアヒルに、肩を落としながら答える灰示。

「君は、武器を構えもしないんだね」

「へっ？」

呆れたように言い放つ灰示に、アヒルが間の抜けた声を漏らす。

「僕は敵だよ？ 敵が武器を構えているというのに、何を、丸腰のまま、聞き返しているんだい？」

「だって、必要ねえだろ？」

灰示の問いかけに、アヒルはすぐさま問いかけで返す。

「お前に俺を攻撃する気があんなら、もうとっくにその針、投げまくってるさっ」

アヒルが浮かべた笑みを、さらに大きなものとする。

「一回、戦ってたんだ。それくらい、わかるって」

「……っ」

そのアヒルの微笑みを見つめ、少し目を細める灰示。

「……くだらないね」

口癖であるその言葉を、灰示は小さく落とした。

「ん？ 俺に聞きたいことってのは？」

「……君は……」

聞き返すアヒルに、灰示がゆっくりと口を開く。

「君は、人が言葉を話すままでも、すべての“痛み”を無くすことが、出来ると思うかい……？」

「えっ……？」

その灰示の問いかけに、少し驚くように目を見開くアヒル。

「ず、随分といきなりな質問だなっ」

「………」

「……っ」

突発的な灰示の問いかけに、思わず笑みを浮かべたアヒルであったが、灰示の真剣な表情を見ると、すぐにその笑いを止め、そっと目を細めた。

「ああ！ 勿論！」

大きな笑顔を見せたアヒルが、自信を持って頷く。

「……っ」

そのアヒルの笑顔に、途端に曇る灰示の表情。

「そう……」

「なあーんてなっ」

「えっ……？」

そっと俯き、灰示が頷こうとしたその時、アヒルの覆すような声が聞こえてきて、灰示は戸惑うように顔を上げた。

「でっかい声で自信持って、そう言い切れたらいいんだけどな……」

浮かべていた笑みを薄くして、アヒルが視線を下へと向ける。

「けど、悪い。俺には、はっきり“出来る”だなんてこと、言えねえ」

その力ない笑みを、アヒルは顔を上げ、灰示へと向けた。

「人の心は繊細で、そこに通う言葉ってのは、すごく難しいっ…」
アヒルがそっと、目を細める。

「何気ない言葉でも、言い方一つで、相手を傷つけちゃったり、受け止め方一つで、自分で勝手に傷ついちゃったりする…」

——アークくんが言ったんだよ？ “いなくなれ” って——
——違う…違うんだよ…！ カー兄！ ——

言葉を続けるアヒルの脳裏に、先程、アヒルを捕らえたアヒル自身の“痛み”、カモメの姿が過ぎる。

「何年経ったって、消えない“痛み”も、忘れられない“痛み”もあるから…」

カモメを思い出しながら、きつく自分の左手を握り締めるアヒル。
「人が言葉を話していく限り、“痛み”を無くすことなんて出来ないんじゃないかって、正直、俺は思う」

「……………」

はつきりと言い切るアヒルに、灰示は少し目を細める。

「じゃあ、“痛み”を無くすには、人を、人の言葉を、消すしかない…？」

「そ、それは…！」

問いかける灰示に、アヒルは思わず声を張り上げた。

「それはっ…駄目だ…」

「何故…？」

灰示が、戸惑う表情をアヒルへと向ける。

「何故、駄目なんだい…？ 矛盾してないかな？ 安の神様」
鋭い灰示の瞳が、アヒルを突き刺す。

「人が言葉を持ったままでは、“痛み”は無くせないと、君は言った…」

アヒルを見つめたまま、灰示が言葉を続ける。

「なら、すべての“痛み”を消し去るためには、人の言葉を無くすしかない。違うかい…？」

「それはっ…」

灰示の言葉に、アヒルが思わず口ごもる。

「違わない…違わねえけどっ…でも駄目だ！言葉を無くすなんてことはっ…！」

「何故、そうまでして、言葉を守るんだい…？」

声を張り上げたアヒルへ、灰示は不思議そうに問いかけた。

「言葉は“痛み”を生むばかり…」

煩わしそうに、灰示が声を低くする。

「人が言葉を持たぬ生物であったなら…君も、その“痛み”を抱えずに済んだかも知れないというのに…」

「えっ…？」

そつと人差し指をアヒルの心臓辺りへと向ける灰示に、アヒルが少し驚いた表情を見せる。

「僕ら始忌には、人の心の中の“痛い”という声が聞こえてくる…」

「声…？」

灰示の言葉に、首を傾げるアヒル。

「今も聞こえてくる…君の“痛い”という後悔の声が…」

「……………」

アヒルがそつと、視線を落とす。

「君だけじゃない…保も、君の他の仲間も、人は皆、何かしらの“痛み”を抱えている…」

そう言いながら、灰示がアヒルを差していた指を下ろした。

「不思議な生物だ、人は…」

灰示が少し上空を見上げ、遠くを見るような瞳を見せる。

「褒められた言葉よりも、傷つけられた言葉ばかりを、まるで大事なもののように、その心に刻んでいる…」

「別に、刻んでるわけじゃねえーさ…」

「……………」

アヒルの声に、灰示が視線を、天井から下ろしていく。

「勝手に刻まれてくんだ。傷ついた言葉や、傷つけちゃった言葉ってのは」

刻まれた心に触れるように、左手を左胸へと当ててるアヒル。

「勝手に、なんてことはないよ」

「えっ…?」

否定する灰示の言葉に、アヒルがゆっくりと顔を上げる。

「君たちは自分で刻んでいる。傷つけられた言葉を、憎しみとして」

灰示の突き刺すような瞳が、まっすぐにアヒルへと向けられる。

「傷つけた言葉を、戒めとして」

「……っ」

強調されるように放たれる言葉に、そっと目を細めるアヒル。

——兄ちゃんなんて、いなくなればいいんだ!——

「……そう、かも知れねえな……」

灰示の言葉に動かされたからか、アヒルは考えを変え、ふと笑みを浮かべた。

「何故、そうまでして…自分の心を刻んでまで、言葉を話す必要があるんだい…?」

再び不思議そうな表情を見せ、問いかける灰示。

「言葉を無くせば、君たちはその“痛み”から解放される…逆に言葉を話し続ければ、永遠に“痛み”から逃れることは出来ない…」

灰示の刺すような瞳が、アヒルへとまっすぐに向けられる。

「君たちが、言葉を話す必要は、どこにある…?」

「………」

静かな表情で、アヒルは灰示の問いかけを受け止める。

「わからねえ…」

小さく、声を落とすアヒル。

「そんな難しい質問の答え、俺はまだ、持っていない…」

俯いたまま、アヒルが言葉を続ける。

「もしかしたら、人だってまだ、その答えを見つけられてないかも知れねえ」

「答えも知らぬまま、ただ話し続けているというのかい…?」

「ああ」

灰示の問いかけに頷いたアヒルが、ゆっくりと顔を上げる。

「だからそれが、“答え”なんじゃないかと思う」

「えっ…?」

顔を上げ、微笑んだアヒルのその言葉に、灰示がそつと眉をひそめる。

「言葉から生まれるのが、本当に“痛み”だけなら、人だってさすがに、話すの止めると思うんだ」

アヒルが笑みを大きくし、口調を少し弾ませる。

「それでも人が、長い間、言葉を話し続けてるってのは、言葉が生むのが“痛み”だけじゃない証拠だろ?」

アヒルが手を広げるようにして、灰示へと問いかける。

「人が言葉を話す必要があるって、証^{あかし}だろ?」

「……っ」

その言葉に、そつと目を細める灰示。

「それが…」

「へっ?」

口を開く灰示に、アヒルが目丸くする。

「それが、君の言う“救い”だと…?」

——言葉の中には“救い”もあるって、俺はそう、信じてるっ…
!——

アヒルと灰示が初めて戦った時、アヒルは灰示に、言葉の中には、“痛み”だけでなく“救い”もあるのだと、そう強く主張した。灰示の問いかけに、アヒルは笑みを止め、そつと俯く。

「……わからねえ」

少し間を置いた後、アヒルがゆっくりと答える。

「言葉の受け取り方って、人それぞれ違いえから、俺がそう思ってたって、誰かにとってはまるで違うもんかも知れねえし…」

「わからないことの多い神様だね、君は…」

「ハハハっ、確かにね」

灰示の言葉に頷きながら、アヒルは再び笑みを浮かべた顔を上げた。

「悪いな。お前の問いかけに、何にも答えられなくてっ…」

「いや…」

「へっ？」

どこか否定するように言葉を挟む灰示に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「くだらなくはなかったよ、君との会話…」

「灰示…？」

「これで僕も、答えが出せそうだ…」

「……っ」

気持ちの晴れたような笑みを浮かべる灰示を見つめ、アヒルは少し目を細める。

「お礼を言うよ。安の神様」

灰示が浮かべた笑みを、アヒルへと向ける。

「じゃあね…」

「あっ…」

軽く右手を上げて、アヒルへと背を向ける灰示に、アヒルが思わず身を乗り出す。

「お、おい！どこ行くんだよ！？」

「敵の君に、言う必要はないよ」

必死に問いかけるアヒルへ、振り向かず、声だけを返す灰示。

「灰示っ…！」

「……っ」

アヒルに強く呼び止められ、奥へと消えようとしていた灰示は、
ゆっくりとアヒルの方を振り返った。

「何だい…？」

「お前のっ」

問いかける灰示に、アヒルは大きく口を開ける。

「お前の、望みは何だっ…！？」

アヒルが真剣な瞳を、灰示へと向ける。

「……僕の望みは…」

少し間を置いた後、灰示がゆっくりと口を開く。

「僕の望みは、この世界からすべての“痛み”を無くすことだよ」

「……っ」

迷いなく答える灰示を見て、アヒルはその姿を焼き付けるように、
目を見開いた。

「そうかつ」

その灰示の答えに、満足したような笑みを浮かべるアヒル。

「……………」

笑顔を見せるアヒルに灰示も薄く笑みを浮かべると、灰示はその
ままアヒルへ背を向けると、黒い霧のようになって、その場から掻
き消えていった。

Word. 40 違エシ道 (3)

「ふう…」

アヒルの前を去った灰示は、まるで明かりのない道を迷いなく進みながら、一息つくように、深々と息を落とした。

「……っ」

息を落とした灰示が足を止め、そっと目を細める。

「いつまで、付いてくるんだい…?」

横を振り向き、誰へともなく問いかける灰示。

「さすがにちょっと、鬱陶しいんだけど…」

「……………」

灰示の問いかけたその先の暗闇から、灰示の前へと姿を現したのは、始忌の一人、萌芽^{ホウガ}であった。萌芽は鋭い視線を、灰示へと浴びせる。

「こんなところで僕を追い回しているくらいなら、侵入した五十音士の排除にでも行ったらどうだい…?」

萌芽の鋭い視線にも動じることなく、灰示が挑発的な問いかけを向ける。

「安の神様なら、そこに居たよ? 一人、もうやられていたみたいだったけど…」

「なら何故、お前はあいつを排除しなかった…?」

「……っ」

鋭く問いかける萌芽に、灰示がかすかに表情をしかめる。

「かつて仲間だった神には、その針を向けられないか?」

「くだらないね…」

萌芽の問いかけを、そっと笑い飛ばす灰示。

「僕と彼は仲間じゃないよ。排除しなかったのは、今、そういう気分じゃないから」

「そんな言葉を、俺が信じると思うか?」

素早く言葉を返し、萌芽がさらに鋭く灰示を睨みつける。

「俺はお前が信用出来ない」

「……っ」

はつきりと言い切る萌芽に、灰示は少し眉をひそめる。

「人と、五十音士と共に在ったような者を、俺は仲間として信じようとは思えない」

萌芽が突き刺すような視線を、灰示へと向ける。

「例え伍黄が何と言おうと、俺はお前を信用する気はない」

「別に、信用して欲しいとも思っていないよ」

強く言葉を続ける萌芽に、どこか開き直ったように言い放つ灰示。

「僕らは“痛み”より生まれた存在：他者と分かり合えるようになって、元から出来ていないんだしね」

「ならば……」

萌芽がゆっくりと、白い右手をあげる。

「俺がここでお前を殺してしまっても仕方無い、ということだな……」

「……………」

殺気を見せ、身構える萌芽に、灰示がそっと目を細める。

「ああ、仕方の無いことだよ……」

灰示が向き合うように、萌芽の方を見る。

「僕らは、“痛み”しか知らない生物だからね……」

「……………」

冷たく微笑み、灰示は右手に真っ赤な針を構える。その灰示の様子を見て、萌芽は少し距離を取るように後方へと飛び、真っ白な二本の腕を、灰示へと向けた。

「消えろ！ “破”！」

灰示へ向け、大きな衝撃波を向ける萌芽。

「…… “阻め”」

そつと言葉を落とし、灰示が針を一本放つと、針は萌芽の衝撃波に突き刺さり、衝撃波の動きが、その場でピタリと止まった。

「“撥ねろ”」

止まったままの衝撃波にもう一本、針が突き刺さると、衝撃波は萌芽の方へと勢いよく戻っていく。

「チっ…」

少し顔をしかめながら、上空へと飛び上がり、戻って来た衝撃波を避ける萌芽。

「よくもまあ、ぬけぬけと五十音士の言葉ばかりをっ…」

「……………」

「なっ…!?!」

気に食わぬ様子で呟いていた萌芽が、気配に気づき、飛び上がった状態のまま、さらに上へと顔を向けると、そこには静かな表情で、針を身構えた灰示の姿があった。

「いつの間につ…!」

「は…」

必死に身構えようとする萌芽を下方に、灰示がそつと口を開く。

「はりつけ磔”」

「うっ…!」

言葉と共に、赤い雨のように、萌芽に降り注ぐ無数の針。

「うぐう…!」

そのまま勢いよく地面へと落下した萌芽が、強く背中を打ちつける。

「ク…!グクっ…!」

萌芽の体を貫き、さらに地面まで鋭く突き刺さった無数の針に捕らえられ、地面に張り付けになったまま、動きを封じられてしまう萌芽。必死に足掻きながら、その表情を引きつる。

「クソっ…!」

「……………」

「なっ…!?!」

もがく萌芽を横目に見た後、あっさりと背を向け、その場を歩き去っていくとする灰示に、萌芽が驚いた様子で、大きく目を見開く。

「ま、待てっ…！どこへ行く気だ！？」

「どこへ…？」

萌芽の問いを繰り返しながら、灰示がゆっくりと、萌芽の方を振り返る。

「くだらない問いかけだね…」

「うっ…」

灰示の浮かべたその冷たい微笑みに、思わず言葉を吞み込んでしまう萌芽。

「折角だけど…君に“痛み”を与えている時間はないんだ…」

落ちついた口調で、灰示が萌芽へと言葉を向ける。

「少し…やることがあるんでね…」

鋭い赤色の瞳を見せ、灰示はその場を後にした。

「灰示…」

一方、アヒルは、灰示の消えていったその場所を、しばらくの間、見つめ続けていた。

「って、ボーっとしてる場合じゃねえなっ」

気を取り直すように、勢いよく顔を上げるアヒル。

「とっとと、皆の後追わねえとっ。行くぞ？ガアスケっ」

「グワァ！」

ガアスケの頷きを確認すると、アヒルは急いで、その広い空間を駆け出していった。

「……………」

誰も居なくなり、騒がしかった空間が、やっと静まりかえる。

「…………ふうっ」

静まり返っていたそこに、一つ落とされる小さな息。どこか疲れたような息をつきながら、その空間で起き上がったのは、気を失い、倒れていたはずの桃真であった。いや、始忌の桃真はすでに消滅しているの、正確には、桃真に取り憑かれていた五十音士の青年で

ある。始忌から解放されたからか、その瞳は忌の象徴である真っ赤な瞳ではなく、どこか冷たい真っ青な瞳であった。

「はぁゝあ。意識保ったまま、忌に取り憑かれとくつてのも、結構ダルかったなあ」

少し腕を伸ばしながら、青年がその場でゆっくりと立ち上がる。

「さてとお」

青年がアヒルの駆け去っていった方を振り向き、そっと目を細める。

「面倒だけど、言姫様に連絡にでも行こうかなあ」

そう呟き、青年はどこか不敵な笑みを浮かべた。

その頃、言ノ葉町。

「“振^ねれ”：」

言玉を吸収した大きな瞳を、緑色に輝かせ、向かってくる忌たちへとその視線を向ける、禰^ね守の音音。

『ギアアアア！』

音音へと向かって来ていた忌たちは、その霧状の体を掻き回されるように捻られ、叫び声とともに消えていった。

「はぁ…はぁ…」

忌を撃退した音音が、かすかに息を乱す。肩は少し上下に揺れ、額からは汗が流れ落ち、その表情からは確かな疲れを感じ取れた。

『グアアアア…！』

「うっ…！」

そんな音音に、更なる忌の大群が迫り、音音が思わず表情を引きつる。

「“満^みちれ”」

『ギアアアアアア！』

「あっ…」

そこへ、横から大きな波が押し寄せ、音音へと向かって来ていた大群を、一気に掻き消していった。そのまま流れていく波を、音音が少し唾然をした表情で見送る。

「大丈夫ですか？ 禰守さん」

その場に姿を現し、音音へと声を掛けたのは、相変わらず指先で眼鏡を押し上げている、雅であった。

「美守^{みもり}……」

互いに名を知らぬ二人が、五十音士としての呼び名で呼び合う。

「恩に、着なくもない……」

「微妙な言われ方ですね」

歯切れの悪い言葉を投げかける音音に、思わず引きつった表情を見せる雅。

『グアアアアア！』

『……っ』

けたたましい叫び声に、二人が同時に振り向く。前方には、先程掻き消したばかりだというのに、溢れんばかりの忌が存在していた。「悪夢でも見ているようだ……」

「……………」

音音のうんざりとしたような言葉を聞きながら、雅がそっと目を細める。

「さすがに、そろそろ限界ですよ……為介さん」

そう呟いた雅の額からも、焦りの汗が流れ落ちた。

一方、『いどばた』。

「はあっ……！はあっ……！はあっ……！」

大きく肩を揺らし、激しく息を乱しているのは、七架の弟、六騎であった。

「うっ……！うう……」

六騎が、どこか力尽きたように、その場にぺたりとしゃがみ込む。

すると、六騎の横に立っていた、金色の光の馬が、一瞬にして掻き消え、金色の言玉が力なく床へと落ちた。

「ありゃりゃ、ついに電池切れですかあ」

「無理もない。言葉に目醒めたばかりな上に、あいつはまだガキだしやがみ込んだ六騎を見つめ、冷静に言葉を交わす、為介と恵。」

「店に入って来た忌を、ほぼ一人で倒したんだ。初戦にしては、上出来だろう」

「そうですねえ、お陰で僕らは、戦わずに済みましたしい」

扇子を扇ぎながら、為介が恵の言葉に暢気に頷く。

「でもこれから先は、どうしますう？」

窓際へと歩いて行きながら、為介が恵へと問いかける。

「雅くんたちも、いい加減、限界っぽいですよお？」

「……っ」

為介の問いかけにそつと目を細め、恵が厳しい表情を見せる。

「間に合わないか……」

恵が窓の外の暗い空へと、視線を投げかける。

「朝比奈……」

言ノ葉町、南西部。

「“鉄拳”！」

『ギアアアア！』

緑色に輝く拳を繰り出し、向かってきた忌を殴り飛ばしたのは、^{てもり}天守の徹子。悲鳴とともに、徹子を取り囲んでいた忌が一斉に消える。

「ふう……痛っ！」

一息ついていた徹子が、不意に表情をしかめ、右手を抱え込んだ。光の止んだ拳は、真っ赤に腫れ上がっていた。

「嫌ですわねえ……白魚のような、乙女の拳なのにつ……」

腫れ上がった拳を見つめ、険しい表情を見せる徹子。

「グアアアアア！」

「なっ…！？」

拳を見下ろしていた徹子へと、新たな忌が飛び込んでくる。

「うっ…！」

すでに至近距離に迫った忌に、拳を構える暇すらない徹子は、きつく唇を噛み締めた。

「“正拳”^{せいけん}突きいい！」

「ギャアアアア！」

そこへ現れた誠子が、徹子へと向かって来ていた忌の上空から飛び降りてきて、重力の勢いもそのままに拳をぶつけ、あっという間に忌を掻き消す。

「大丈夫ですか？ 徹子」

「誠子お姉さま！」

忌を消し、そのまま地面へと着地した誠子に声を掛けられ、徹子が嬉しそうな笑みを浮かべる。

「助かりましたわっ」

声を弾ませ、誠子のもとへと駆け寄っていく徹子。

「私、拳が腫れ上がってしまったって」

「私ですわ」

そう言った徹子に、誠子も真っ赤に腫れ上がった右手を差し出した。

「まったく、スプーンよりも重いものを持ったことのない、乙女の拳ですのに…」

「苦戦しているのでしょうか？ エリザ様たち」

「そのようですわねえ」

徹子の問いかけに、誠子が厳しい表情を作る。

「このままでは…」

『グアアアアア…！』

「あっ…！」

「誠子お姉さま！」

不安げな表情を見せた誠子の後方から、群れを成して襲いかかって来る忌たち。振り返った誠子が大きく目を見開き、徹子が必死に誠子の名を呼ぶ。

『グっ…！』

すぐに拳を出すことも出来ず、表情を引きつる誠子と徹子。

「貫^{つらぬ}け」

その時、落とされる言葉。

『ギャアアア！』

「えっ…？」

金色の閃光のようなものが一瞬、空中を駆け抜けたかと思うと、二人に襲いかかろうとしていた忌たちが、激しい叫び声をあげて、一斉に掻き消えていった。大量に居たはずの忌が消え、一気に広がった視界に、誠子が戸惑うように声を漏らす。

「だ、大丈夫ですよ！？誠子お姉さま！」

「今、の…」

駆け寄る徹子を余所に、茫然とした表情を見せる誠子。

「今の、言葉は…」

「ふうっ…」

挙げていた手を下ろし、ホッとしたように一息ついたのは、ツバメであった。人気のない学校の屋上から、あちこちで戦いの繰り広げられている言ノ葉の町を見下ろしている。

「大丈夫かな…？誠子ちゃんたち…」

どこか心配するように、声を落とすツバメ。

「ねえ…？スズメ…」

「ああんっ？」

ツバメが振り返ると、そこには、屋上に大の字に寝そべりかえり、相変わらず、“恋盲腸”の本を読んでいるスズメの姿があった。

「邪魔すんなよ、ツバメ。今、ヒトミが先生に激甘アタックしてる、超いい場面なんだからさあっ」

「はあ…」

強く言い放つスズメに、ツバメが呆れきった溜息を漏らす。

「呪っちゃおうかな…」

「はい！何でございましょうかあ！？ツバメくん！」

不気味に呟き、どこからともなく藁人形を取り出すツバメに、スズメが素早く本を閉じて、その場から起き上がる。

「どうするの…？これから…」

「へえっ？」

問いかけるツバメに、起き上がったスズメが目を丸くする。

「どうするってえ？」

「さつきより忌が倍増してる…もう、於の神たちだけじゃ、止められないよ…」

聞き返すスズメに、ツバメが真剣な表情を向ける。

「もう忌を言ノ葉だけには留めておけない…このまま忌が広がれば、世界が…」

「そりゃ、信じるしかねえんじゃねえのお？」

ツバメの言葉を少し遮り、スズメがはっきりと言い放つ。

「“安の神”って奴をっ」

「……っ」

強調されるスズメの言葉に、ツバメはそつと眉をひそめた。

「……もどかしいものだね…神を信じるだけっていうのも…」

再び町を見下ろし、ツバメはどこか不安げな表情を見せた。

Word. 40 違エシ道 (4)

言ノ葉町、北部。

「剃^それ」！」

誠子や徹子同様、町で忌たちとの戦闘を続ける曾^{そもり}守の空音が、言葉で鋭い白光を向け、地面ごと削るようにして、周囲に居た忌を、一気に掻き消す。

「ふうっっ…」

振り上げていた手を下ろすと同時に肩も下ろし、深々と息をつく空音。言葉を遣いながらずっと戦っているため、疲労は相当に溜まっていた。

「変格使い過ぎたかなあ…何かクラクラしてきた…」

頭を抱え、空音が困ったように呟く。

「ったく、他神の連中…一体、何やって…」

「破^は」！」

「えっ…?」

聞こえてくる声に、俯いていた空音が顔を上げる。生き残っていたらしき忌が、空音へ向け放った衝撃波が、もう空音の目の前まで迫って来ていた。

「や、やばっ…!」

空音が焦った様子で、表情を引きつる。

「クっ…!」

「壊^{こわ}せ」！」

「……っ」

横から入って来た言葉により、空音へと向かって来ていた衝撃波が、空音に当たる直前で、自ら砕け散るように弾け飛ぶ。

「なっ…」

「……………」

驚いた様子で目を見開く空音の前に現れ、衝撃波を放った忌へ向

け、言玉を持った右手を向ける、鋭い瞳を見せた紺平。

「凍^{こお}りつけ”!”」

「ギャアアア!」

紺平が言葉を放つと、紺平の言玉から強い吹雪が吹き荒れ、忌を氷付けにすると、そのまま氷は、忌もろとも砕け散った。

「ふうっ」

無事に忌を倒したことを確認し、紺平がホッと息をつく。

「大丈夫? 空音さっ…」

「新入りのくせに、しゃしゃり出てくんじやないわよお!」

「グへっ!」

空音の方を振り返り、優しい笑みで声を掛けた紺平であったが、空音に勢いよく襟元を掴まれ、絞まる首に、思わず表情を引きつる。

「ぞ、ぞらねさっ…ぐ、ぐるしっ…」

「誰が助けてって言ったのよ!」

必死に訴える紺平にも構わず、空音が怒鳴りあげる。

「言っとくけどね、私は他人に助けられることが、不眠不休より嫌いな!」

『グアアアア…』

「うあっ…!」

空音の後方に迫る、新たな忌の群れに、首を絞められながらも、大きく目を見開く紺平。

「ぞ、ぞらねさっ…! び…! びみ…!」

「私は助けられるくらいならねえ、ババッとヤられちゃった方がずつとマシでえっ…!」

紺平が忌の接近を伝えようとするが、空音は熱が入り、まったく聞くことなく、語り続ける。

「だからあ、あんたに助けられたって、ちい…つともっ…!」

『グアアアアア…!』

「うああああっ!」

「へっ?」

すぐ背後まで迫った忌が、雄たけびをあげると、空音がやつと氣付いた様子で後ろを振り返る。

「んなぁ!？」

後方を取り囲んだ忌を見て、空音が大きく目を見開く。

「なんで、とつとと教えないのよ!？」

「教えてたよ…さっきからずっと…」

責め立てる空音に、やつと首を解放された紺平は、非難するような瞳で空音を見つめる。

『グアアアアア!』

『うっ…!』

群れを成して襲いかかって来る忌に、モメていた紺平と空音が前方を向き、表情を引きつる。

「押し潰せ」

『えっ…?』

降るように落ちてくる、言葉。

『ギャアアア!』

「……っ」

二人の目の前へと迫っていた忌を押し潰して、檻也が上空から、二人のすぐ前へと降りてくる。

「神っ…」

「檻也くん…!」

現れた檻也を見て、目を見開く空音と、思わず嬉しそうな笑顔を零す紺平。

「お…」

二人の前で立ち上がった檻也が、周囲を囲む忌を見回し、ゆつくりと口を開く。

「おのの
“慄け”」

『……っ!』

言葉を放った檻也に鋭く睨みつけられると、忌たちがその霧状の体を、まるで背筋を震え上がらせるように、強張らせた。

『ギャアアアア!』

檻也に恐怖した次の瞬間、忌たちが悲鳴をあげ、一瞬にして掻き消えていく。

「す、凄い…」

紺平や空音とは、力のレベルがまるで違う檻也の強さに、紺平が思わず感嘆の声を漏らす。

「大丈夫か？ 紺平、空音」

「うん」

「問題ありません」

振り向き、問いかける檻也に、紺平と空音がそれぞれ答える。

「助けていただいて、ありがとうございます、神。この御恩、一生涯、忘れないたしません」

「他人に助けられるの、不眠不休より嫌いなんじゃないかなかったつけ…？」

眩い笑顔で檻也へと礼を言う空音に、紺平が思わず白い目を向ける。

「ごめんね。神を守る立場の神付きなのに、助けてもらっちゃって…」

「気にするな。事態が事態だ」

申し訳なさそうな顔を見せる紺平に、檻也が軽く肩を叩き、声を掛ける。

「不甲斐ないばかりですが、神…私たちの力も、もう限界です」

「ああ、わかってる」

空音が弱々しく訴えると、檻也はそれを責めることなく、素直に頷いた。

「他の連中も限界に近い。このままでは、もう一時間とたたないだろう」

「じゃあ…」

「ああ…」

紺平に頷きながら、檻也がそっと視線を落とす。

「間もなく、忌は言ノ葉の外に広がる：そうならば、世界は一気に忌に吞まれるだろう」

「そんなっ…」

檻也の言葉に、険しい表情を見せる檻也。

「安の神たちは、間に合わなかったようですね…」

「……………」

空音がそう言うのと、檻也は表情を曇らせた。

「……っ」

「ん？」

俯いていた檻也が、どこかへ行こうと足を踏み出す紺平に気付き、戸惑うように顔を上げる。

「どこへ行く？紺平」

「忌を倒しに」

「何っ…？」

すぐさま答える紺平に、檻也が眉をひそめる。

「何をっ…」

「そうよ！バカなことやってんじやなっ…！ハっ！」

思わず紺平に怒鳴りあげようとした空音であったが、すぐ横に檻也が居ることに気付き、焦った様子で口を噤む。

「先程、神が仰られたでしょう…？」

勢いよく口調を変えて、紺平へと語りかける空音。

「この事態では、もう忌を止めることは不可能です。ここは諦めて、一旦、体力の回復を…」

「諦めたくない」

「……っ」

はつきりと返って来る紺平の答えに、空音が少し驚くように目を開く。

「諦めたくないっ」

もう一度、その言葉を繰り返す紺平。

「だって、ガアはまだ絶対、諦めてないから…！」

『……っ』

強く言い放つ紺平の、その真剣な眼差しに、檻也と空音がハツとした表情を見せる。

「ガアも皆も、まだきつと、諦めずに戦ってる。だから俺も、まだ諦めたくない」

訴えるように、まっすぐに檻也を見つめる紺平。

「最後の最後、限界ギリギリまで、絶対に諦めたくない！」

「紺平……」

必死に主張する紺平を見つめ、檻也は眩しいものでも見るかのように、そっと目を細めた。

「紺平……そういう子供染みた考えだけで、突き進むのは、愚かというもので……」

「わかった」

「へっ？」

紺平に冷静に言葉を投げかけようとしていた空音が、横から聞こえてくる檻也の頷きに、どこか間の抜けた表情となる。

「我が兄も相当に、諦めが悪いしな。こんな所で、俺が先に諦めては、後で会わす顔がない」

「檻也くん」

穏やかな笑みを浮かべる檻也を、紺平が少し驚いたように見つめる。

「もがき切ろうじゃないか。最後の最後まで」

「檻也くん！」

微笑む檻也に、紺平も嬉しそうに笑みを零す。

「さすがは我が神……素晴らしいお言葉。私の意志も、神とまったく同じですわ……」

「空音さんは、すごい勢いで、否定しようとしてた気、するけど……」

満面の笑みを浮かべる空音に、疑いの瞳を向ける紺平。

『グアアアアア！』

「……っ」

聞こえてくる声に、檻也が素早く振り向く。檻也の言葉で、周囲を囲んでいた忌は粗方、消し去ったはずであったが、また新たな忌が生まれ、すぐに三人を取り囲んでいく。

「まったく、見回しただけで溜息が出るな」

どんどん増えていく忌を見回しながら、檻也がそつと両手を構える。

「行くぞ、於団」

「うん」

「はい」

檻也の言葉に、しっかりと頷く紺平と空音。

「“押し潰おっ……!”」

『ギアアアアア!』

「何っ?」

檻也が言葉を放とうとしたその時、突然、三人を取り囲んでいた忌たちが苦しげな悲鳴をあげ、霧状の体が散り散りとなって、掻き消えていく。

『ギアアアア!アアアアア!』

「こ、これって……」

「何?どうなってんの……?」

三人を取り囲んでいた忌も、上空に浮かんでいた忌も、遠くの方に見える忌まで、次々と消えていく。その状況に、戸惑いの表情を見せる紺平と空音。

「忌が……」

忌が消滅し、空一面を覆っていた黒い影が消えて、視界が晴れていくと、そこには、忌に取り憑かれていた多くの町人たちが、気を失い倒れ込んでいた。皆、気絶しているが、忌が憑いている者は一人もいない。

「消えた……?」

充滿していた忌の気配がまったく感じられなくなり、檻也も戸惑

った様子で周囲を見回す。

「これは、一体…」

「タイムオーバーって、やつじゃん？」

「……っ」

横から聞こえてくる声に、勢いよく振り向く檻也。

「お前たちは…！」

振り向いた檻也が、大きく目を見開く。

「ほおー…よく持ちこたえたものだ…」

「結構やるじゃん？ 於団っ」

そこに現れたのは、軽い口調の青年と、前髪で目元の見えない、少し不気味な少年。

「ハ行のっ…」

「へへっ」

檻也たちの前へと姿を見せたのは、ハ行の五十音士、部守の兵吾へもりと、保守の蛭ほもりであった。

「ん なっ…」

始忌アジト内で、壁に映し出された、忌に呑み込まれていく言ノ葉町の様子を見つめ、満足げな笑みを浮かべていた伍黄が、突如、消えていく忌たちの姿に驚き、大きく目を見開く。

「何、だ…」

映像の中には、誰に攻撃されているわけでもないというのに、悲鳴をあげながら、次々と消えていく忌。

「何を…」

伍黄が、その声をかすかに震わせる。

「一体、何をしたっ…」

声を荒げ、伍黄が勢いよく後方を振り返る。

「灰示…！」

「……………」

伍黄が振り返ったその先には、落ち着いた表情を見せた、灰示が立っていた。

『いどばた』周辺も、檻也たちの居る場所同様に、突然、忌が消える事態が起こっていた。

「はあっ…はあっ…はあっ…」

「これは…」

力尽きた様子でしゃがみ込んだ音音の横で、道端に倒れた町人たちを見回し、雅がどこか茫然と呟く。

「ああ〜りやりやり、急に消えちゃったねえ〜忌さん方っ」

「為介さんっ」

そんな雅のもとへと、『いどばた』の中から為介が姿を現した。

「無事でしたか」

「うん〜小さい五十音士クンが、守ってくれたからねえ〜」

「えっ…?」

為介の言葉に、雅が戸惑うように首を傾げる。

「ホント、きれいさっぱり消えてるなあ〜すっごお〜い」

先程まで忌が覆い尽くしていた空を見上げ、感心するような声を発する為介。

「この状況は…為介さんたちが…?」

「まさかあ〜僕は何にもやってないよお」

雅の問いかけに、為介が扇子と合わせ、首も横に振る。

「では一体、何故、忌が突然…」

「初めから、そういう風に出来ていたんだよ」

『…っ』

横から入って来る声に、雅と為介が同時に振り向く。

「あなたは…」

「久し振りだね。美守さん」

「確か、比守の…」

雅たちの前へと現れたのは、ハ行の五十音士、比守のヒロトであった。かつて雅が、簞也とともに遊園跡地で戦った相手である。

「何故、あなたがここに…」

「それよりも、さっきの言葉の意味はあ…?」

戸惑う雅の横から、為介がヒロトへと問いかける。

“初めからそういう風に出来てた” って、どういうことお…?」

「言葉の通りさ」

問いかける為介に、ヒロトが涼しげに答える。

「この町の人間に取り憑いていた忌は、すべて不完全な忌。もともと数十時間経てば、消えるようにしていたのさ、あの方は」

「あの方…?」

ヒロトの言葉に、雅が眉をひそめる。

「あの方というのは…波城灰示のことですか…?」

「……っ」

雅の問いかけに、ヒロトがそっと目を細める。

「こんな芸当が出来るのは、この世界で、たった一人しかない」

はつきりとは答えないヒロトであったが、その言葉が、雅の問いかけが正しいものであることを、告げているようであった。

「何故、僕たちにそれを伝えにいく?」

「すべては、あの方の意志だよ」

為介が問いかけると、ヒロトはすぐさま答える。

「この町に忌が撒かれる前、僕たちハ行を集めたあの方は、この事実を告げ、忌が消えた後に君たちにもこの事実を伝えるよう言った」

「忌が…撒かれる前…?」

ヒロトの言葉に、雅が困惑した表情を見せる。

「では、波城灰示は初めからっ…」

「うん…始忌に味方する気はなかったみたいだねえ…」

振り向いた雅に、為介も少し首を捻りながら答える。

「つまりは、どういうことだ?」

「あ、恵さあゝんっ」

為介に遅れるようにして店から出てきた恵が、ヒロトへと鋭い瞳を向ける。

「波城灰示は、五十音士側に附いたということか？」

「そんな安っぽい言葉で、あの方を語らないで」

「んっ？」

ヒロトの方を見ていた恵が、違う方向から返って来る声に振り向く。そこには、金色の虎の上に乗った、ふわふわ髪の毛の、愛らしい少女の姿があった。

「不治子」

ヒロトが、少女の名を呼ぶ。その少女も、八行の五十音士の一人、不守^{ふもり}の不治子であった。

「あの方の考えは、あんたたちの考えなど及ばない、遙か先に向いている…」

空を見上げた不治子が、どこか遠い瞳を見せる。

「——灰示様…不治子は、あなたが人間から言葉を奪うというのなら、それでもっ——」

「——僕の望みは…たったの一つだけなんだよ。不治子…それはね……」

「……っ」

灰示と会った時に繰り広げられた会話を思い出し、不治子はそっと目を細めた。

「世界も言葉も…どうでもいい…」

小さな声が、発せられる。

「どうかご無事で…灰示様…」

不治子の祈るような声が、空へと贈られた。

「何を…？」

問いかけた伍黄に対し、聞き返すように、灰示がそつと口を開く。
「くだらない問いかけだね…伍黄…」

「灰示っ…」

いつものように答え返し、静かに微笑む灰示に、伍黄が歪ませていた表情を、さらに引きつる。

「何故、突如、すべての忌が消えた？」

「僕が言ノ葉に撒いたのは、生まれて間もない幼忌ようぎでね…」
問いかける伍黄に、今度はしっかりと答える灰示。

「まだ安定していない幼忌は、あまり多い“痛み”を浴びると、逆にその形を保てなくなり、数十時間で消滅してしまうんだよ…」

「幼忌っ…」

灰示の言葉を聞き、少し映像の方を振り返る伍黄。すでに町を覆っていた忌の姿は一匹としてなくなり、解放された町人たちは気を失い倒れ、戦い疲れた五十音士たちが、茫然を立ち尽くしていた。

「初めから、世界を忌で埋め尽くす気はなかったというわけか…」

伍黄が鋭い瞳を見せ、再び灰示の方を振り向く。

「五十音士に…人間どもに、味方をするというのか？灰示…」

「人間に附く気なんて、さらさらないよ」

伍黄の問いかけに、灰示はすぐさま、首を横に振る。

「僕はただ、僕の望みを叶えるために、動いているだけ」

「望み、だと…？」

灰示の言葉を繰り返した伍黄が、眉を吊り上げる。

「何を言っている…？俺とお前の望みは、同じだろう！？灰示…！」

「同じ、じゃないよ。伍黄…」

「何っ…？」

灰示が静かに答えると、伍黄が眉間に皺を寄せる。

「僕と君の望みは、“同じ”じゃない…」

もう一度、主張するように、その言葉を繰り返す灰示。

「僕と君の道は違^{たが}えたんだよ…伍黄…」

そう言いながら、灰示がゆっくりと上げた右手で、真っ赤な針を構える。

「数百年の、昔にね…」

灰示の鋭い瞳が、まっすぐに伍黄へと向けられた。

Word. 41 ヤサシイ傷痕 (1)

——僕と君の道は違えたんだよ…数百年の、昔にね……

突如として消えた、言ノ葉を覆っていた無数の忌。困惑する伍黄イツキの前へと姿を現した灰示は、伍黄へと、そう言葉を投げかけた。

「違えた…？」

伍黄がゆつくりと、灰示が口にした言葉を繰り返す。

「何を言っている…？灰示…」

目の前に立つ灰示へと、鋭い瞳を向ける伍黄。

「この世に生まれ落ちた時から、俺とお前の望みはただ一つ…！それは、この“痛み”からの解放だろう…！？」

「そうだね…」

声を荒げる伍黄へと、灰示が静かに頷く。

「僕らは願った…この降り止むことのない、“痛い”という声からの解放を…」

灰示が少し、耳を澄ませるような動作を見せる。

「人が、“痛み”ある言葉を、口にしなくなることを…」

「ならば…」

伍黄が強く、眉間に皺を寄せる。

「ならば、何故…！」

「そいつは裏切り者だ！」

「…っ？」

伍黄が灰示を問い詰めようとしたその時、部屋へと新たな声が響き、灰示と伍黄は同時に振り向いた。

「萌芽…」
ホウガ

「はあっ…はあっ…」

二人の居る部屋へと現れたのは、始忌の一人、萌芽であった。萌芽は肩を揺らして息を乱しており、その全身の所々に、小さな傷を

負っている。

「へえ、僕の“はりつけ磔”から抜け出して来たのかい？」

灰示がそっと笑みを浮かべ、萌芽へと向ける。

「結構やるんだね……」

「……っ」

微笑む灰示を睨みつけながら、萌芽が足早に動き、伍黄のすぐ横へと駆け寄っていく。

「伍黄……！」

萌芽が伍黄へと、強く呼びかける。

「あいつはっ……あの男は裏切り者だ……！」

必死に訴え、乱れた呼吸で声を荒げる萌芽。

「さっき、安の神と話しているところを見た！しかも奴は、神を殺しもせずに、その場を去った！」

萌芽が灰示を指差し、言葉が続ける。

「あの男は裏切り者だ！五十音士側の回し者に違いない……！」

「ハア……言葉が通じない人だねえ、君も……」

そんな萌芽を見て、灰示が呆れたように、がっくりと肩を落とす。

「僕は五十音士たちの味方ではないよ。さっきもそう言っただろう？」

「裏切り者の言葉など、信じられるか！」

「ハア……」

すぐさま言い返す萌芽に、灰示はまたしても一つ、大きな溜息を落とす。

「裏切り者、裏切り者と……よくわからないことを言う……」

灰示がそっと、目を細める。

「僕がいつ、“君たちの仲間になる”と、言ったんだい？」

「こいつっ……！」

「…………」

表情を陰しくする萌芽の横で、伍黄がそっと目を細める。

「伍黄……！もうこんな奴を、野放しにしておくわけにはいかない！」

俺たちでとつとと、こいつを消そう！」

萌芽がさらに声を大きくし、隣に立つ伍黄へと言い放つ。

「……五十音、第三十六音……」

萌芽の言葉に特に頷きもしないまま、伍黄が懐へと右手を入れ、ゆつくりと言葉を発しながら、懐の中から、真っ赤な言玉を取り出した。

「あれは……」

自分と同じ色の言玉に、灰示がそつと眉をひそめる。

「“や”、解放……」

真っ赤な言玉から強い光が放たれると、言玉は光を放ったまま変形し、やがて大きな剣へと姿を変えた。分厚い刀身の、その重そうな剣を、伍黄がゆつくりと構える。

「“也守”^{やもり}の力……乗っ取ったのは、体だけじゃないというわけか……」
剣を構えた伍黄を見つめ、灰示が冷静に呟く。

「フハハハハ！五十音士の言葉を自由に扱えるのは、貴様だけではないということだ！」

伍黄の前へと身を乗り出して来た萌芽が、自分のことのように得意げに、笑いあげる。

「さあ、伍黄！こんな人間と馴れ合った奴、とつとと俺たちの手でつ……！」

「五月蠅い」

「えっ……？」

笑顔で伍黄の方を振り返った萌芽のその腹部に、伍黄が目覚めさせたばかりの剣が、勢いよく突き刺さる。自分の体を貫く音を聞いた萌芽は、痛みに顔を歪ませるよりも先に、戸惑いの表情を見せた。

「なっ……何、故……？」

鋭く、貫通するまでに突き刺さった太い刀身と、滝のように流れ落ちていく真っ赤な血を見下ろし、萌芽が途切れ途切れの声を発する。

「何、故……何故……だ……？伍黄……」

「今は、俺と灰示が話している」

問いかける萌芽の方を見ようともせず、伍黄が冷たく言い放つ。

「お前の言葉など、誰も求めていない」

「うううっ…！」

そう言つて、伍黄が勢いよく、萌芽の体から剣を抜く。その痛み
に顔を歪ませ、支えを失った萌芽はゆっくりと前方へと倒れていく。
「痛、い…痛い…」

倒れた萌芽の体から、徐々に黒い霧のようなものが漏れ出し、弱
々しく風に揺れながら、小さな形を作っていく。黒い体に刻まれた、
二つの赤色の瞳。それは、忌である萌芽の、本当の姿であった。

「嫌、だっ…俺はまだ、消えたくないんだっ…」

影となった萌芽が、人間の時とは異なる、禍々しい声を発する。

「消えたく、ないっ…消えたくない…！う、ううう…！」

叫び続けていた萌芽の聲が、不意に途絶える。

「うっ…ウガアアア…！！」

激しい断末魔を最期に、その黒い霧の塊は、周囲に弾け飛ぶよう
にして、跡形もなく消えていった。

「感謝しろ…」

消え去った霧を見つめ、伍黄がそつと声を落とす。

「これでお前は、永遠に“痛み”から解放される」

「……………」

その冷たい言葉に、灰示の表情がかすかに動く。

「灰示…」

伍黄が再び灰示の方を向き、話を改めるように、灰示の名を呼ぶ。

「俺を、裏切る気か？」

「また、そのくだらない話かい？」

問いかける伍黄に、灰示はどこかうんざりとした表情を見せる。

「さっきも言ったはずだよ？僕は、君たちの仲間になると言った覚えは…」

「俺たちは、同じ始忌の仲間だ」

「同じ始忌の仲間……？」

伍黄の言葉に、灰示が眉尻を吊り上げる。

「随分とおもしろいことを言うんだね。たった今、同じ始忌の仲間を消し去った君が」

「こいつ等は、ただ単に実体が欲しくて、俺に付き従って来たような連中だ」

伍黄が床に倒れている、今まで萌芽が取り憑いていた人間の方を見下ろし、はっきりと言い切る。

「俺にとっては、駒に過ぎない」

「なら、僕も君にとっては駒だろう……？」

灰示が伍黄へと、不敵な笑みを向ける。

「忌を撒き散らしてくれる、都合のいい駒」

「ああ、俺の求める力を持っている、とても良き仲間だ。良き仲間だと、そう思っていた」

伍黄が灰示の言葉に、すぐさま頷きを返す。

「そう、思っていたんだがな……」

少しずつ声の音調を低くしていく伍黄の、その眉間にさらに皺が寄る。

「何故、俺の言う通りにしない？ 灰示」

伍黄が睨むように、灰示を見る。

「俺の言う通りにすれば、俺とお前の望みは叶うんだぞ？」

「僕の望み、か……」

伍黄の言葉を繰り返しながら、灰示がそつと視線を落とす。

「まるで君が、僕の望みを、しっかり把握出来てるみたいな口振りだね……」

「当たり前だろう。何年の付き合いだ？ 俺たちは」

「数百年、かな……」

問いかけに答えながら、灰示が薄い笑みを浮かべる。

「ねぇ伍黄……君の望みは何だい……？」

「何だ、今更。俺の望みなど、決まっているだろう」

少し顔をしかめた伍黄が、煩わしそうに言う。

「俺の望みは、人間共からすべての言葉を奪い、この世界からすべての“痛み”を無くすことだ」

「……………」

告げられる伍黄の望みに、灰示がそつと目を細める。

「…そうだね。それが君の望みだ」

灰示がどこか、納得したように頷く。

「知っていたよ。数百年も昔から…」

「それはそうだろう？俺たちは数百年前から、同じ望みを抱いて…」

「でもそれは、僕の望みじゃない」

「何…？」

はつきりと言い放つ灰示に、伍黄の表情が曇る。

「何を言っている？先程、お前も言ったじゃないか。望みは、この“痛み”からの解放だと」

伍黄が灰示へと、鋭い瞳を向ける。

「人間共が、“痛み”ある言葉を口にしなくなることだと」

「確かに、そう言ったよ…」

灰示も目を逸らすことなく、まっすぐに伍黄を見つめる。

「でも誰も、“人間からすべての言葉を奪うのが望み”とは言っていない」

「何…？」

灰示のその言葉に、伍黄が少し戸惑うような表情を見せる。

「僕は、人が言葉を無くすことなんて、数百年前から、一度も望んでいないよ。伍黄…」

「な…何を…」

伍黄が少し、動揺したような声を発する。

「お前も望んでいたじゃないか！人が悪意ある言葉を口にしなくなることをつ…！」

「悪意ある言葉を口にしなくなことは望んだ。でも、すべての言葉を口にしなくなことを望んだわけじゃない」

「何を、馬鹿なことをっ…」

少し動揺の見えるその表情で、伍黄が声を震わせる。

「人間共の言葉など、一つ残らず、すべて悪意ある言葉なんだ！悪意ある言葉以外の言葉など、ないんだ！」

徐々に大きくなっていく、伍黄の声。

「悪意ある言葉を消し去るためには、人間共の言葉を奪い尽くすしかないんだ！灰示…！」

「僕はそうは、思わないよ。伍黄」

必死に訴える伍黄に、灰示はあっさりと答える。

「人間の言葉すべてが、悪意ある言葉だとは思わない」

「……っ」

はつきりと答える灰示に、伍黄の表情が大きく歪む。

「じゃあ何か…？」

伍黄の少し力の抜けた声が、静かに灰示へと向けられる。

「人間共の言葉の中には、悪意なき言葉もあると…？」

静かな問いかけが、部屋に響いていく。

「人間共が生み出す言葉の中に、“痛み”を生まない言葉もあると

…お前はそう言うのか？灰示」

「そうだよ」

「……っ」

素直に頷く灰示に、驚きを隠せない様子の伍黄。

「何を馬鹿なことを…！とち狂ったか！？灰示…！」

「狂ってもいないし、ふざけてもない」

再び声を荒げた伍黄へ、灰示が冷静に答える。

「僕は本気でそう思っているよ、伍黄」

「灰示っ…」

はつきりと答える灰示に、伍黄が険しい表情を作る。

「何故…何故、そこまで人間共を過信する…？」

荒げていた声を落ち着かせ、伍黄が静かに問いかける。

「その人間の、お前が取り憑いているその人間の所為か…？」

灰示の中にいる保を指差すように、灰示へと人差し指を向け、伍黄が問いかけを続ける。

「人間の味方をしてしまうほどに、その人間が大切か……？」

「……違うよ」

あっさりと否定した灰示は、そつと小さな笑みを零した。

「別に人間の味方をしてる気もないし、彼を贖罪してるつもりもない。でもまあ、多少の執着はあるかな」

灰示が軽く、首を傾げる。

「僕と彼は、似た者同士だからね」

「似た者同士……？」

そう言って笑う灰示に、伍黄は強く眉をひそめる。

「そう、僕らは似た者同士」

聞き返した伍黄に頷いた灰示が、穏やかな笑みを浮かべる。

「人の言葉に、大き過ぎる理想を追い求めている……」

少し上を見た灰示が、遠くを見るような瞳を見せる。

「でもね、彼の神様は許してくれたんだよ」

「神……？」

その言葉に、またしても伍黄の表情は曇る。

——だからそれが、“答え”なんじゃないかって俺は思う……——

思い出される、アヒルの言葉。

「僕らが、この馬鹿げた理想を持ち続けることを」

「…………」

微笑んだ灰示のその笑みは、迷いのない晴れやかな笑みで、伍黄はその笑みを、ただまっすぐに見つめていた。

「人間ごときの言葉に、理想を求めるか……」

伍黄がどこか、くぐもった声を落とす。

「……変わったな、灰示」

「僕は変わっていないよ、伍黄」

吐き出された伍黄の言葉を、灰示がまたしてもあっさりと否定する。

「だから、こうなる気がしてた…」

灰示がそう言いながらゆっくりと、真っ赤な針を構えた右手を上げる。

「僕と君はいつか、言葉ではなく、刃を交える日が来るって、そんな気がしてた」

「……そうか」

小さな声で頷きながら、伍黄もゆっくりと、右手に持っていた剣を構えた。

「残念だよ、灰示…」

伍黄がどこか憐れむような瞳を、灰示へと向ける。

「お前に、“痛み”の無い世界を見せてやれないなんて」

灰示を見る伍黄の瞳が、冷たく変わる。

『……っ』

灰示と伍黄が互いに互いを見合い、機を計るように間合いを取る。

「“焼^やけ”！」

「放^{はな}て”…！」

二人の言葉が、同時に放たれた。

Word. 41 ヤサシイ傷痕 (2)

同刻、箆也 V S 緑呂^{ロウロ}。

「……っ」

アジトのある空間で、箆也と向き合っていた緑呂は、何かに気付いたように、その仮面で覆われた顔をそっと上げた。

「何だ？」

「……いや」

眉をひそめ問いかける箆也に、緑呂がすぐさま首を横に振る。

「萌芽…」

緑呂が仮面の奥から、箆也には届かない程の小さな声で、気配の消えてしまった仲間の名を呼ぶ。

「やはりお前は、そういう答えを出したか…」

まるでわかっていたかのように、緑呂がゆっくりと肩を落とす。

「灰示…」

緑呂の口から、かつての仲間の名が零れ落ちる。

「迷いがあるのであれば、とつとと振り払え」

「ん…？」

箆也のはっきりとした言葉に、俯いていた緑呂が、戸惑うように顔を上げた。

「でないと、僕とあなたの戦いは、一瞬にして終わる」

「……っ」

その言葉が現す意味に気付き、緑呂は少し顎を下げる。

「終わらせたりなどせん…」

低く響く声を放って、緑呂が右手の白い言玉を、強く握り締める。

「其方も見たはずだ。我はこの与守^{よもり}の言葉を取得しておる」

「だから、何だ？」

「……っ」

強気に聞き返す箆也に、緑呂が仮面の下表情が、かすかに動い

たような気がした。

「その強気な言葉、我がすべて、奪い尽くしてやる…」
言玉を握った右手を構え、緑呂が強気に言い放つ。

「そう、我が終わらせるのは…」

仮面の奥から、溢れ出る殺気。

「お前たち人の、その言葉のみっ…!」

「……っ」

駆け込んでくる緑呂に、箆也も素早く、格子を身構えた。

同刻、囁 vs 虹乃。^{ニジノ}

「んんっ?」

囁と向き合っていた虹乃が、緑呂と同じように萌芽の気配がなくなったことに気づき、もう一度、確かめるようにゆっくりと首を回した。

「キャハハハっ」

「……?」

不意に笑い始める虹乃に、囁が少し首を傾げる。

「何か…面白いことでもあったのかしら…?」

「えええ」

囁の問いかけに、大きく頷く虹乃。

「仲間が一人、消されたみたいっ。あんたの仲間がやったのかしらあ?」

「えっ…?」

虹乃の言葉に、囁が少し戸惑った表情を見せる。

「箆也か七架が…?それにしても早過ぎるわね…」

二人が敵と相対したのは、囁とそう変わらない時間のはずである。まだ数分と経っていない間に、始忌の一人を倒すとは、少し考えにくい。

「アヒるんか…それとも…」

「間っ抜けよねえゝあっさりと消されちゃうなんてっ」
「……っ」

考えを巡らせていた囁が、冷たい言葉を吐き捨てる虹乃に、その考えを止め、どこか不快そうに眉をひそめる。

「随分な言い方ね…仲間が死んだっていうのに…」

「死んだ？」

囁の言葉を繰り返し、虹乃が顔をしかめる。

「ううん、萌芽は“死んだ”んじゃない。“消えた”のっ」

「えっ…？」

どこか強調するように言う虹乃の、その言葉の意味が理解出来ず、囁は表情を曇らせた。

「消えた…？」

「うん、そお」

聞き返す囁に、大きく頷く虹乃。

「私たちは、あんたたちの言葉によって、勝手に“生じた”だけの存在。別に望まれて、“生まれた”わけじゃない」

主張する虹乃の赤い瞳が、鋭く光る。

「だから私たちは、“命”じゃない。だから死なない、消えるの」
「……………」

自らの存在を否定するような、その虹乃の言い分は、囁にはどこか哀しく届いた。命であることを諦めてしまった虹乃の姿に、囁はそっと目を細めた。

「でも私は消えないっ」

声を強くした虹乃が、その表情に再び笑みを浮かべる。

「やっと手にしたこの実体で、私はこの世界に存在し続けるのっ！」

虹乃が勢いよく両手を広げ、高らかと声をあげる。

「あんたたち五十音士を、殺してねえっ…！」

「あれはっ…」

虹乃の右手の中で光る、金色の言玉に、囁が目を見張る。

「五十音、第三十八の音…」

「まさかつ…」

光り輝く金色に、曇る囁の表情。

“ゆ”、解放…！」

言葉とともに放り投げられた金色の言玉が、より一層の強い光を放って、空中でその姿を変えていく。金色の光は徐々に大きくなり、やがて、真っ暗な空間すべてを照らし出すほどに、巨大な存在となった。

「パオオオオーン！」

雄たけびのように響く、その鳴き声。それは、光り輝く金色の巨体の、象であった。

「あの象は…」

——行くよ！弓象！——

「弓の…」

その象は、確かに弓の言玉の能力であった。

「弓から…言葉まで、乗っ取ったというの…？」

「そうよお。驚いた？キャハハハハッ」

険しい表情で問いかける囁に対し、虹乃はただ、楽しげな表情で笑いかける。

「私がこの言葉で、あんたたち五十音士を、みいゝんな消し去ってあげるわっ！」

「そんなこと…」

自信を持って言い放つ虹乃に対し、囁は横笛を握る手に力を込める。

「私が、させないわ…」

横笛を構えた囁は、弓へと鋭い瞳を向けた。

同刻、七架　v s　碧鎖。^{ヘキサ}

「……萌芽…」

一方、七架と向き合っている碧鎖も、緑呂や虹乃と同じように、萌芽の気配が消えたことを、察知していた。

——俺たちは“痛み”により強さを増す生物。これでお前も、少しは強くなるかも知れん——

——狩りたければ、勝手に狩れ——

「……っ」

行動を共にしていた時の、萌芽の言葉を思い出し、碧鎖は強く、唇を噛み締めた。

「まだだ…またっ…」

碧鎖が小さく言葉を落としながら、きつく拳を握り締める。

「勝手に生んで…勝手に消しやがってっ…」

「……？」

小さな言葉ばかりを落とす碧鎖の正面に立つ七架は、その碧鎖の落としている声を聞き取ることが出来ず、明らかに変わった碧鎖の様子には気付きながらも、戸惑うように首を傾げるだけであった。

「フザけんじゃねえよっ…！五十音士があ…！」

「えっ…？」

怒りを前面に押し出して、勢いよく顔を上げる碧鎖に、七架がさらに戸惑った様子を見せる。

「“鎖”！」

碧鎖が言葉を放つと、碧鎖の褐色の腕に巻きつくように、黒い鎖が現れた。碧鎖が手を振り上げると、巻きついていた鎖が解放され、空中へと広がっていく。

「“縛”！」

「うっ…！」

まるで手足のように、碧鎖の意志通り、自由に動き回った鎖が、

簡単に七架の右手を捕らえる。武器を持った方の手を封じられた七架は、思わずその表情を険しくした。

「な、“薙ぎ”！」

「遅せえよっ！」

「あっ…！きゃあああ！」

七架が言葉を放ち、鎖から逃れようとする前に、碧鎖が勢いよく鎖を振り回し、七架の細い体を鎖ごと高々と放り投げて、地面へと強く叩きつける。

「ううう…！」

床へと全身を打ちつけ、七架が表情を歪ませる。

「鎖…？」

床から少し顔を上げた七架が、戸惑いながら声を発する。

「忌が…武器を形成出来るなんて…神月くんたちは言っていなかった…」

先程の鎖を思い出し、七架が眉間に皺を寄せる。

「もしかしてあれは…あの人が乗っ取った五十音士能力…」

「痛てえかあ？五十音士っ」

「……っ」

鎖を手元に戻し、笑顔で問いかける碧鎖に、七架は歪めていた表情を戻し、気丈に顔を上げる。

「んな顔したって無駄だぜえ？俺には聞こえてくる」

まっすぐに見つめる七架を、強く見返す碧鎖。

「お前の、“痛い”っっー声がな」

「痛い…？」

碧鎖の言葉を、少し戸惑うように七架が聞き返した。

「ああ。俺たちには、聞こえてくるんだ。お前ら人間の“痛い”っー声が、うるさいほどにな」

「声…」

その話を聞き、七架が考え込むように眉をひそめる。

「あなたたちが…」

「ああん？」

体を起こしながら、そっと口を開いた七架に、碧鎖が首を傾げる。

「あなたたちが…人間からすべての言葉を奪おうとしているのは、その声から解放されるため…？」

「……っ」

起き上がったばかりの七架の問いに、そっと目を細める碧鎖。

「ああ」

「言葉を奪うことで、あなたたちは消えてしまうのに…？」

「……ああ」

二つ目の問いには少し間を置いて、碧鎖はゆっくりと頷いた。

「そんなんっ…」

「………」

深々と俯く七架を見つめ、碧鎖はどこか考えるような表情を作る。

「哀しそうな顔だな」

「えっ…？」

碧鎖の言葉に、七架が顔を上げる。

「俺たちを哀れんでいるのか？」

そう言って、碧鎖が皮肉った笑みを浮かべる。

「慈悲深いことだな」

「そ、そんなんつもりじゃっ…！」

碧鎖の言葉に、七架が思わず声を張る。

「ただ私は…！言葉も、あなたたちも、互いに消えずに、苦しまずに歩んでいけたらって、そう…！」

「敵である俺たちも、救いたってか？」

「そっ…そうだよ…」

鋭く問いかける碧鎖に、七架が詰まらせながらも頷く。

「もっと模索すれば、お互いにとって、もっといい形が見つけられるかも知れない…！」

「……優しいんだな」

「えっ…？」

碧鎖の思いがけない言葉に、七架は戸惑うように声を漏らした。

「お前は優しい人間だな、五十音士」

穏やかな笑みを浮かべ、碧鎖はまっすぐに七架を見つめた。

「お前だけじゃない。人間ってのは、本来、優しい生き物だ」

語り始めた碧鎖が、そっと天井を見上げる。

「他人を敬って、他人を思って、生きていく…」

続く碧鎖の言葉を、七架はまだ少し困惑したような表情で、見つめていた。

「なのに、なんで…」

ゆっくりと降りてくる、碧鎖の視線。

「“痛み”が消えねえーんだ…？」

「……っ！」

碧鎖のシンプルな問いかけに、思わず目を見開く七架。

「なんで、この声は止まねえーんだ…？」

耳を澄ませる動作を見せ、碧鎖が続けて問いかける。

「なあ…？なんでだ？五十音士」

「そ、それは…」

もう一度、問いかける碧鎖に、七架が言葉を詰まらせる。

「優しいお前には、わかんねえーかぁ！？あぁっ！？“破”！」

「うっ…！」

起き上がった状態のままの七架へと、声を張り上げた碧鎖が、容赦なく衝撃波を放つ。

「あああっ…！」

武器すらも構える時間のなかった七架は、そのまま衝撃波を直撃し、勢いよく後方へと吹き飛ばされた。床に倒れこんだ七架の体から、赤い血が滴り落ちる。

「う…うう…」

「俺たちは、同情も優しさもいらねえよ、五十音士」

苦しむ七架へと、碧鎖が語りかける。

「ただ、お前たちの言葉が消えてくれれば、それでいいんだよお！」

“破”！

「……っ」

さらに飛んでくる衝撃波に、七架は強く唇を噛み締めた。

“変格”……！

「何っ……？」

放たれる強い赤色の光に、碧鎖の向けた衝撃波があっさりと吹き飛ばされ、碧鎖が少し眉をひそめる。

“啼け”……！

「うっ……！」

眉をひそめていた碧鎖へと、不意に十字型の赤い光が、高速で飛んでくる。

「クっ……！ “碎”……！」

言葉を放ちながら右手の鎖を振るい、向かってきたその光を砕く碧鎖。

「ふいっ、危ねっ」

「……っ」

「んっ？」

一息ついていた碧鎖が、人の立ち上がる気配を感じ、正面を見やる。

「へえっ」

碧鎖の見つめる先に立っていたのは、変格形の武器である、巨大な赤銅色の十字架を構えた七架であった。鋭い瞳を向けている七架の姿に、碧鎖が口角を吊り上げる。

「神へ祈りを捧げる十字架か……慈悲深いお前にはお似合いだぜえ」
「……………」

挑発的に微笑む碧鎖に特に答えることもなく、七架は鋭い表情のまま、じつと黙っている。

——迷うなよ……——

「そうだよ、迷わない…」

——俺はこの世界に通う言葉を、たったの一つだって、失わせた
くない……—

「言葉を守る…」

思い出される箒也とアヒルの言葉に、従うように、言い聞かせる
ように呟く七架。

「私は言葉を…言葉を守るって、そう決めたの…！」

強く言い放った七架が、十字を握る手に力を込める。

Word 41 ヤサシイ傷痕 (3)

「啼^なけ”！」

「またかよ…！」

向かってくる十字の光に、碧鎖が少し顔をしかめながら、両手を突き出す。

「破^ハ”！」

碧鎖が衝撃波を放ち、向かってくる光と相殺させる。

「嘆^{なげ}け”！」

「何っ…！？」

二つの力が相殺し、開けた視界のその先から、新たな言葉を放つ七架。すると先程よりも巨大な赤色の光が、碧鎖目がけて駆け抜けてくる。

「クッソ…！ “碎^{サイ}”！」

鎖を振り上げ、言葉を向ける碧鎖。

「なっ…！？」

だが碧鎖の向けた鎖は、七架のその強い光に、あっさりと弾き飛ばされてしまった。飛んでいく鎖に、碧鎖が驚きの表情を見せる。

「碎けねえだと…？ うっ…！」

戸惑っていた碧鎖へと、光が直前へ迫る。

「クッソ！ ううう…！」

そこから必死に横へと飛び退き、避けようとした碧鎖であったが、光がかすかに左腕をかすめ、碧鎖は大きく表情を歪めた。碧鎖をかすめた光はそのまま後方へと突き進み、真っ暗な空間の先へと消えていく。

「チっ…」

赤い血の流れ落ちる左腕を抱え、碧鎖が少し舌を鳴らす。

「だっから俺にっ…」

血の流れる左腕をそのままに、鎖の絡まった右手を振り上げる碧

鎖。

「痛み”くれてんじゃねえって言ってんだよお！“壊”！」^{カイ}

碧鎖が怒鳴るように言い放ち、黒い光に包まれた鎖を、勢いよく七架へと向ける。

「……………」

向けられた鎖にも慌てずに、七架は落ち着き払った表情のまま、両手で十字を持ちあげた。

「薙ぎ払え”…！」^な

七架がその細い腕で巨大な十字を振り切り、碧鎖が向けていた鎖を弾く。

「ならっ…“破”！」^ハ

鎖が弾かれたことには動じず、碧鎖がすぐさま、今度は衝撃波を七架へと向ける。

「な…」

そつと目を細めながら、口を開く七架。

「“無くせ”…！」^な

「うっ…！」

七架の言葉により十字が輝き、その中心部から強い赤色の光線が放たれると、碧鎖の放った衝撃波へと突き刺さり、衝撃波は一瞬にして消え去った。

「き、消えた…？」

忽然と無くなってしまった衝撃波に、碧鎖が少し啞然とした表情を見せる。

「“無くせ”って…んな言葉、ありかよっ…」

「“啼け”」^な

「なっ…！」

碧鎖がその汗を流す間すら与えず、七架は次の言葉を放った。

「うああああ…！」

向けられた光を、今度は避けることすら出来ずに、碧鎖がもろに食らう。勢いよく後方へと吹き飛ばされた碧鎖は、壁があるのか、

暗い空間の途中で背中を打ちつけ、その場に倒れこんだ。

「痛ってえっ…」

血の流れ落ちる両手で床を押しながら、その言葉を、碧鎖が重々しく口にする。

「クソ強えじゃねえかよっ…あの変格っての…」

——碧鎖、其方は所詮、格下二番目のへ級。強い五十音士では相手にならん。気を付けよ——

——キャハハ！弱いんだから、ちゃんと引っこんどきなさいよお
く？碧鎖！——

「……うつせえよっ…」

ここへ来る前に掛けられた、緑呂ロクロと虹乃ニジノの言葉を思い出し、碧鎖が思わず言い返すように口を開く。

「んなどころで、引けっかよっ…」

床につく手に力を込め、傷ついた体をどうにか起こす碧鎖。

「五十音士を前に、引けっかよおっ…！」

激しく声をあげ、碧鎖がその場で立ち上がる。

「ハアっ…ハアっ…ハアっ…」

「……………」

立ち上がったものの、息を乱し、大きく肩を揺らしている碧鎖を見つめ、七架が少し目を細める。

「どうしたよ？さっきみたいなのに、勢いよく攻撃して来ねえのか？」

碧鎖の挑戦的な問いかけにも答えず、七架は碧鎖を見つめたままでいる。

「それとも優しい五十音士さんは、また同情して、俺に攻撃すんのを止めてくれんのか？」

「……ううん、止めない」

「……………」

すぐさま答える七架に、碧鎖の表情が曇る。

「随分とあっさりだな。慈悲深き女神様は、どこ行っただあ？」

「だって、あなたは…」

軽い口調で問う碧鎖に、七架はすぐさま口を開く。

「この世界から、私たち人間から、すべての言葉を奪いたいんでしよう…？」

「ああ、そうだぜえ」

七架の問いかけに、碧鎖が素直に認めるように頷く。

「私が何を言っても、その考えを、変えてくれる気はないんでしよう…？」

「……ああ」

次の問いかけにも、素直に頷く碧鎖。

「当たり前だ」

「だったら、止めれないよ」

強く主張する碧鎖に、七架が少し眉をひそめながらも答える。

「私は別にあなたに恨みもないし、あなたを消したいってわけじゃないから、本当は、こんなことしたくないけど…」

少し迷うように瞳を彷徨わせた後、七架がそっと顔を上げる。

「私はどうしたって、言葉を守りたいから」

まっすぐな瞳を、碧鎖へと向ける七架。

「あなたに、あなたたちにこの言葉を消させるわけにはいかないから、だからっ…」

少し視線を落とした七架が再び顔を上げ、きつく拳を握り締める。

「だから私は、あなたを消す」

「……っ」

はつきりと言い放つ七架に、そっと曇る碧鎖の表情。

「消す、か…」

少し俯いた碧鎖が、ゆっくりと七架の言葉を繰り返す。

「ええ」

繰り返した碧鎖に、七架がもう一度、頷きかける。

「それが私たち、人間の為なの」

「……っ」

言い切る七架に、曇っていた碧鎖の表情が、ぴたりと止まる。

「さすがは五十音士だぜ…勝手な言い分だ」

俯いたまま、小さな声を漏らす碧鎖。

「俺たちが生み出された時だって、お前らは言っただぜ。 “俺たち、人間の為だ” ってな…」

込み上げてくる怒りからか、徐々に震えていく、碧鎖の声。

「人間の為だけに勝手に生み出して…人間の為に勝手に消すってか…」

俯いていた碧鎖が、一気に顔を上げる。

「フザけたことばかり、抜かしてんじゃねえっ…!!」

「……っ！」

勢いよく怒鳴りあげた碧鎖の体から、周囲へと一気に広がる黒い光に、七架が思わず目を見開く。

「こ、これはっ…」

《グガアア…アアア…》

「なっ…」

広がっていく黒い光を見回し、戸惑うような表情を見せていた七架が、広がった黒い光の中から、這い出るようにして次々と生まれ出てくる黒い影の存在に気づき、眉をひそめる。

「あれは…忌っ…」

次々と這い出てくるその禍々しい姿に、七架の表情が一気に曇る。

「ううん…」

七架が自分の言葉を否定するように、そっと首を横に振る。

「あれは… “痛み” …」

溢れ出る無数の忌を見つめ、七架が目を細める。

「あの人の “痛み” …」

「ううう…うっ…」

忌の溢れ出る黒い光の中央で、どこか苦しげな声を漏らしている碧鎖。

「私が言葉で傷つけた…あの人の“痛み”…」

碧鎖を傷つけた言葉を確かめるように、七架が強く、自分の胸を握り締める。

「うううう…うう…」

黒い光の中で、碧鎖はもがくように、苦しげな声を漏らし続ける。

——また次が生まれたのか。これで何匹目だ？——

——誕生、おめでとう。生まれたところ悪いが、お前に生まれた意味はないよ——

——精々、こんな何の意味もない存在に生まれたことを、残念がるんだな——

「何の意味もない存在になんか…ならねえっ…」

次々と思い出されていく言葉に逆らうように、碧鎖は苦しげな呼吸の中、必死に声を発する。

「ただ、生まれてしまっただけの…ただ、消えていくだけの存在になんか…ならねえっ…」

碧鎖が歯を食いしばり、必死に言葉を繋げる。

「好きには…させねえ…」

その声が、一際重く響く。

「俺の存在を、俺が存在する意味をつ、お前ら五十音士の好きにはさせねえっ…!!」

《グアアアアアアっ…!!!》

碧鎖の心からの叫びに、まるで共鳴するように、周囲に溢れ出した忌たちも一斉に声をあげると、中心にいる碧鎖の方へと、一気に飛び出していく。

「うがあああああっ…!!」

「うううっ…!」

碧鎖の激しい叫び声とともに放たれる、強く眩い黒色の光に、正面に居た七架は、思わず身を屈め、目を伏せた。

「ん…？」

目を閉じててもわかるほどに強かった光が、止んだことを確認し、七架がゆっくりと目を開く。

「なっ…！？」

開いた途端、その瞳をさらに大きく見開く七架。

「そ、そんなっ…」

<グウウっ…ウウウ…>

七架の目の前に存在しているのは、碧鎖という人間の形をした忌ではなく、ただの巨大な黒い影の塊であった。無数の忌が凝縮し、巨大な一匹の忌になったのだろう。大きな体の先にある真っ赤な瞳を、遙か先に見上げ、七架が戸惑いの表情を見せる。

「こ、こんなことって…」

<許さねえ…絶対に許さねえっ…>

その巨大な忌から落とされるのは、忌の言葉なき叫びではなく、碧鎖のものらしき言葉であった。鈍く響いていて聞き取りづらいが、その声は確かに碧鎖のものである。

<許さねえっ…！五十音士いい…！！！>

「うっ…」

悲痛なほどに届く碧鎖の叫びに、七架が辛そうに表情を歪め、思わず顔を下ろし、目を逸らそうとする。

「ダメ」

背けようとしたその顔を、自ら強く止める七架。

「ここで目を逸らしたら、リンちゃんの時と何も変わらない」

七架が言葉を発しながら、再び姿を変えた碧鎖へと視線を向ける。

「私の言葉があの人を傷つけて、あの子の“痛み”があの子になった」

その禍々しい姿を、はっきりと視界の中に入れる。

「私はこれを受け止めて、これを打ち碎かなきゃいけないっ」

七架が十字を握る手に、力を込める。

「言葉を、守る為にっ…！」

迷いを払った表情で、再び十字を構える七架。

「嘆^{なげ}け”…！」

七架が両手で十字を突き出し、言葉を放つと、十字から十字型の真っ赤な光が飛び出し、碧鎖の巨大になった体へと、まっすぐに向かっていく。

<五十音士っ…!!！>

「えっ…？」

だが七架の向けた光は、叫んだだけの碧鎖の声に、あっさりと弾き飛ばされてしまう。

「なっ…」

<五十音士いいっ…!!！>

「……っ！」

弾き飛ばされた自らの光を目で追っていた七架であったが、さらに碧鎖が叫び声をあげると、その巨大な声が塊となって、衝撃波のように七架へと向かってくる。

「な、“無^なくせ”…！」

向かってくる衝撃波へと、七架が少し焦りながら言葉を発する。

だが、衝撃波は七架の言葉通りに無くなることはなく、そのまま七架へと突き進む。

「け、消せないっ…!!？」

消えぬ衝撃波に、さらに焦った表情となる七架。

「そんなっ…きゃああああっ！」

消せなかった衝撃波をもろに食らい、七架が後方へと勢いよく吹き飛ばされる。

「ううう…!!うっ…」

壁に背中をぶつけ、七架がその場へと倒れ込む。全身に傷を負った七架の血が、倒れこんだ床に広がっていく。

「はあっ…!!はあっ…!!」

七架が激しく息を乱しながらも、すぐさま体を起こし、右手に持った十字を掲げる。

「“薙^なげ”…！」

勢いよく放たれた言葉とともに、碧鎖の巨体へと突き進む、赤色の一閃。

くグガアアアア！>

「あっ…！」

だが七架の一閃は、振り上げられた碧鎖の手と思われる部分によって、簡単に弾かれる。弾き返って来た一閃は、まっすぐに七架へと戻って来た。

「ああっ…！」

一閃を喰らい、左肩を斬り裂かれた七架が、再びその場に倒れ込む。

「“無くせ”も“薙^なげ”も…言葉が…効かないなんてっ…」

七架が床へと手をつき、重い体を起こそうとしながら、弱々しく声を落とす。

「私の言葉より、あの人の言葉に乗った気持ちの方が…強いんだ…」言葉の効かなかった理由を、七架は傷つきながらも、冷静に分析する。

「ちゃんと、心の底からちゃんとっ…あの人を消そうって思わなきゃ…」

自分でそう言った途端に、七架の表情が曇る。

「迷ってたら…倒せない…」

曇らせた表情のまま、七架が血だらけの自分の手を見つめる。

「ちゃんと…」

くグガアアアア！>

「うっ…！」

七架が決意をする間すら与えずに、その影で出来た体を前のめりに広げ、七架のすぐ上空まで迫る碧鎖。

Word 41 ヤサシイ傷痕 (4)

< “破” あああ…! >

「なっ…」

再び向けられる衝撃波に、七架が素早く起き上がり、言葉を口にする。

「“流せ”…!」

言葉とともに十字を掲げ、向かってきた衝撃波を横へと逸らせる七架。すぐ横へと落ちた衝撃波が、辺り一面の床を抉る。

「…っ」

抉られ、崩れていく床から飛び上がり、七架が上空で十字を振るう。

「“薙ぎ倒せ”…!」

十字を振り下ろし、碧鎖へと赤い一閃を向ける七架。

< “壊” いいい! >

「うっ…!」

七架の放った一閃は、碧鎖の言葉により、あっさりと碎かれる。

< “碎” いいい…! >

「…っ!」

言葉と共に勢いよく向かってくる、黒い影の腕。

「な、“宥めろ”…!」

十字を突き出し、その黒い腕を受け止める七架。だが腕は十字ごと強く七架を押し進み、七架の体が一気に後方へと下がる。

「ううう…! うっ…!」

食い止めるどころか、七架はひたすら押され続け、十字を通して強い圧のかかる両手が、一気に痺れ始める。

「あああっ…!」

やがてその圧から弾かれるようにして、横へと吹き飛ばされる七架。その時の衝撃で、十字の先が少し碎かれ、赤銅色の破片が力な

く地面へと落ちる。

「ううう…うっ…」

十字を支えに床に滑らせ、何とか倒れ込まずに、持ちこたえる七架。

<“破” あああっ…!!>

「えっ…?」

そんな七架へと、さらに放たれる衝撃波。

「きゃああああっ!」

避ける力すらも残っておらず、十字を構えようにも両手の痺れきっていた七架は、もろにその衝撃波を食らった。

「ううう…うっ…」

七架が勢いよく吹き飛ばされ、暗い空間の端まで転がっていく。二度目の衝撃波を受けた七架の体はボロボロで、流れる血の量も半端なく、もう立ち上がることが出来るようには見えなかった。

「痛い…痛いよっ…」

感覚をなくしそうな、ぎりぎりのところで、七架はただ考えもなく、浮かんできたその言葉を口にする。

「朝比奈…くん…」

助けを求めるようにその名を呼び、力なく目を細める七架。

「私…もう…」

<グウウウウっ…!>

「……っ」

何度も攻撃を受けたのは七架だというのに、前方から聞こえてくる、七架よりも苦しげなその声に、七架は戸惑うように顔を上げた。<痛いっ…痛い…! 痛い…!!>

顔を上げた七架の視界に入ってきたのは、“痛い”の言葉を繰り返しながら、何とも苦しそうに叫んでいる碧鎖の姿であった。

「あれは…」

初めは姿を変えたことにより、体が痛んでいるのかとも思ったが、黒い影で出来た二本の腕で、まるで耳を塞ぐような動作を見せてい

る碧鎖の姿に、七架がそつと目を細める。

——俺たちには、お前ら人間の“痛い” っつー声が聞こえてくるんだ——

——なのに、なんで、“痛み” は消えねえーんだ……？——

「……っ」

思い出される碧鎖の言葉に、七架がどこか考え込むような表情を見せる。

「聞こえ、るんだね……私の“痛み” が……」

<グウウウウ……！>

苦しむ碧鎖へと語りかけるように、穏やかに言葉を放つ七架。

「聞こえるんだね……皆の“痛み” が……」

穏やかな口調で、七架がさらに言葉を続ける。

「苦しいんだね……」

言葉が続けながら、七架が床に立てた十字を支えにするようにして、その場でゆっくりと立ち上がっていく。

「解放、されたいんだね……」

立ち上がった七架が、上体を起こし、真正面から碧鎖を見つめる。
<グウウウウ……！ウウウウ……！>

「……………」

激しさを、苦しみを増していく碧鎖の声に、七架がそつと目を細める。

「同情も優しさも、あなたへの“救い” にはならない……」

床につけていた十字を、そつと持ち上げる七架。

「今の私が、あなたに出来ることはっ……」

七架の瞳が、鋭く変わる。

「ただ、一つだけ……！」

十字を構えた七架が、大きく声を張り上げる。

「“無^なくせ” ……！！」

強く響いた七架の声とともに、十字から飛び出た十字型の強い赤色の光が、まっすぐに突き進み、苦しむ碧鎖へと直撃する。

<グアアアアア……!>

光をもろに浴び、さらに苦しい悲鳴をあげる碧鎖。

《グアアアアア……!アアアアア……!》

先程、一つへと固まっていた無数の忌が、今度は逆に分解されるように、碧鎖の巨大な体から次々と溢れ落ちていく。

《痛い……!痛い……!痛い……!》

出て来た忌は皆、一様にその言葉を繰り返しながら、床へと降り落ちるその前に、黒い影の体を崩し、掻き消えていく。

「……………」

その地獄のような光景を、目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる七架。

「ううう……!」

見つめ続けていた七架も、再び傷の痛みで顔を歪めた。七架がその場に力なくしゃがみ込むと、七架が両手で握り締めていた十字が、もとの薙刀の姿へと戻る。傷のせいか、言葉を使い過ぎたのか、七架が変格を保っていることに、限界が来たのであろう。

「はあ……はあ……」

「ううう……ううう……」

「……………」

息を乱していた七架が、呻くように聞こえてくる声に、そっと顔を上げる。

「ハア……ハア……」

七架が顔を上げた先には、七架と同じように、大きく息を乱した、もとの碧鎖の姿があった。碧鎖は外傷はないものの、相当に苦しうに見える。恐らくは、先程、無数の忌を取り込んだことで、多くの力を消耗したのだろう。

「まだ、だ……」

途切れ途切れの声を繋ぎ、碧鎖が鋭く七架を睨みつける。

「まだっ…終わらせねえ…」

「……っ」

碧鎖の言葉に、七架がそっと目を細める。

「まだっ…消えねえ…!!」「鎖^サ」!

必死に叫びあげ、七架へと再び、黒い鎖を向ける碧鎖。

「……っ」

七架もしゃがみ込んだ状態のまま、強く唇を噛み締め、重い右手をあげて、変格から戻ってしまった薙刀を掲げる。

「薙^ナぎ…払え」…!」

薙刀を振り切り、向かって来た鎖を横へと払う七架。

「クっ…!」

鎖の払われた衝撃だけで、大きくその体を揺らせる碧鎖。もう、少しの衝撃でも立ってられないほどに、碧鎖の体は弱り切っていた。

「まだ、だ…まだっ…!」

立っているのもやっとの状態も気にせずに、碧鎖がさらに右手を七架へと向ける。

「破^ハ」…!」

碧鎖の右手から放たれる、先程よりは格段に威力の衰えた、小さな衝撃波。

「あっ…きゃあああ!」

だが、今の七架には、その小さな衝撃波を避ける力も、砕く力も残っておらず、もろに直撃し、後方へと勢いよく吹き飛ばされていた。

「ううう…うっ…」

「終わりだ、五十音土っ…“鎖^サ”っ…」

床に倒れ込んだまま、苦しげな声を漏らす七架に対し、碧鎖はすでに勝ち誇ったような笑みを浮かべ、再び右手に黒い鎖を巻きつける。

「死ねえっ…!」「碎^{サイ}」…!!」

「うっ…！」

勢いよく向かってくる鎖に、もう薙刀を持つ手も動かすことが出来ず、大きく目を見開く七架。まっすぐに向かってくる鎖を真正面に捉え、七架はその瞳を閉じようとした。

「……っ」

だが、瞳を閉じようとしたその時、七架の目の前で、鎖は止まってしまった。

「えっ…？」

止まった鎖を見つめ、七架が戸惑うように声を漏らす。

「もう、少し…」

鎖の向こうから聞こえてくる、弱々しい碧鎖の声。

「もう少し…だったのに、よ…」

そう呟いた碧鎖が、どこか自嘲するような笑みを浮かべる。

「うううっ…！」

「あっ…！」

七架の目の前まで迫った鎖が、一瞬にして掻き消えた後、碧鎖は苦しげに声をあげ、前方へとゆっくりと倒れ込んでいった。倒れていく碧鎖の姿に、七架が思わず目を見開く。

「もう、少し…」

倒れた碧鎖が、どこか虚ろな瞳で、自分の右手を見つめる。その右手からは、黒い霧のようなものが、漏れだすように生じていた。碧鎖の忌の体が、この人間の体から、出ようとしているのである。

「もう、少しっ…」

その溢れ出ていく黒い霧を見つめながら、碧鎖がまるで祈るように、その言葉を繰り返す。

「……………」

そんな碧鎖の様子をまっすぐに見つめる七架は、どこか哀しげに目を細めると、傷だらけで重くなっている体をゆっくりと起き上がらせた。

「俺は…俺はっ…」

「……っ」

「んっ…？」

碧鎖の見つめていた右手の前へと差し出される、碧鎖のものとは別の手に、碧鎖はそつと眉をひそめた。

「お前、は…」

もうろくに動かない体で、首だけを動かし、少しだけ顔を上げる碧鎖。

「何の、マネ…だ…？」

「………」

碧鎖の見上げた先には、碧鎖へと手を差し伸べる、七架の姿があった。

「また慈悲か…？優しい五十音士様よお…」

「人間がみんな、違う人だから…」

「はあ…？」

不意に放たれた七架の言葉に、碧鎖が大きく顔をしかめる。

「いきなり、何言っ…」

「さっきの、あなたの問いかけへの答え…私なりに、考えてみたの…」

「俺の、問いかけ…？」

「人間は優しい生き物なのに、なんで“痛み”が消えないのかって…」

「……っ」

七架の言葉に、確かに自分が問うたことを思い出し、碧鎖はそつと目を細めた。

「この世界には、たくさん人間がいるけど…たったの一人も、同じ人はいない…」

傷ついた体で少し息を乱しながら、七架がゆっくりと言葉を続ける。

「考え方も、捉え方も、感じ方も…みんながみんな、違うものを持つてる…」

真剣な表情で、碧鎖を見つめる七架。

「だから、“優しさ”も“痛み”も…人によって、全然違う…」
「……………」

続く七架の言葉を、碧鎖は遮ることなく、静かに聞き続けた。

「私が“優しさ”だと思って取った行動は、私の大切な友達を傷つけた…」

——私、いつも何も言い返さないようにしてたし……

——放った言葉が、誰にも受け止めてもらえなかった時、その言葉はどこに行くんだろうな……

かつてのリンを思い出し、七架がさらに言葉を紡ぐ。

「私が“優しさ”だと思って掛けた言葉は…あなたの心を傷つけた…」

——もっと模索すれば、お互いにとって、もっといい形が見つけれられるかも知れない……！——

——フザけたことばかり、抜かしてんじゃねえっ……！！——

「……………」

見つめる七架に、碧鎖がそっと視線を落とす。

「自分が“優しさ”だと思ってても…他人にとって、それは“優しさ”とは限らない…その相違が、“痛み”になる…」

七架がその表情に、力のない笑みを浮かべる。

「人が優しい生き物だから…だから、“痛み”が消えないの…」
「……………」

そのはつきりとした七架の答えを、碧鎖は否定することなく、受け止めた。

「人間がみんな、まったく同じ人だったら…“痛み”なんて、なかったかも知れないのにね…」

「ハっ…簡単だろ。んなもん…」

少し視線を落とした七架に、碧鎖がやっと、言葉を投げかける。

「人間が、“優しさ”を失くせばいい」

「無理だよ、それは」

碧鎖が放った言葉を、七架は間を置くことなく、すぐさま否定した。

「人は…“優しさ”を失ったら、生きてはいけないから…」

「……………」

はつきりと答える七架の、そのまっすぐな視線を浴びながら、碧鎖が徐々に視線を下ろし、自分へと差し出された、その七架の右手を見つめる。その手は、碧鎖のような忌へと差し出されたその手は、人の“優しさ”を表したもののようであった。

「だから…私たち人は、“痛み”とも一緒に、生きていくの…」

「“痛み”とも一緒に…か…」

ゆっくりとした口調で、七架の言葉を繰り返す碧鎖。その表情は今までの怒りに満ちた表情ではなく、どこか落ち着いた、穏やかな表情であった。

「ホント、厄介なもんだな…」

「えっ…？」

碧鎖の声に、七架が少し首を傾げる。

「人ってのは…」

「……………」

そう呟いた碧鎖は、今までに見せたことのない、穏やかな笑みを浮かべており、七架は思わず目を見張った。

「……………」

碧鎖の手がゆっくりと、七架が差し伸べた手の方へと、伸びていく。

「碧っ…」

七架が碧鎖の名を呼ぼうとした、その時であった。

——ブシュっ……!

「……っ!」

七架へと伸びた碧鎖の手は、差し伸べられた方の手ではなく、もう一方の、薙刀を持つ七架の手を強く引き、その鋭い刃を、碧鎖の胸の中央へと突き刺した。刃を突き立てた碧鎖の胸からは、赤い血が飛び散り、七架の顔や、服へとその飛沫が舞う。

「あっ……」

あまりにも思いがけないその碧鎖の行動に、七架は大きく目を見開いたまま、言葉を失う。

「一度や、二度……手を差し伸べたくらいで……」

碧鎖が霞み始めたその瞳で、まっすぐに七架を睨みつける。

「お前らのやったことが……許されると思うなよっ……五十音士……」

七架を睨みつけたまま、碧鎖がそっと笑みを浮かべた。すべてを諦めたような笑みでもなく、力のない弱い笑みでもなく、どこか挑戦的な笑みであった。

「お前が本当に“優しい”なら、今、俺に掛ける言葉を間違えんな……」

その笑みを少しだけ柔らかくして、碧鎖が七架へと微笑みかける。

「………」

「……っ」

碧鎖が七架をまっすぐに見つめる。その赤い瞳が、まるで慈悲を求めるもののようで、七架はそっと、瞳を閉じた。

「な……」

目を閉じたまま、七架がゆっくりと口を開く。

「“亡^なくせ”……」

大きく目を見開いた七架が、小さい声ではあったが、はつきりとした口調で、その言葉を述べる。七架が言葉を発すると、碧鎖に突き刺さったままの薙刀から、強い赤色の光が放たれ、あっという間に碧鎖の体を包み込んでいく。

「……っ」

赤い光の中で、碧鎖はその真っ赤な瞳をゆっくりと閉じる。すると碧鎖の体がすぐにその場に倒れ込み、その体から溢れ出るように、黒い霧の塊が姿を現した。

<じゃあなあ……>

空間に響く、碧鎖のものらしき声。

<優しい、優しい……五十音土……>

最早、生物とも呼べない黒い霧の塊は、七架に最期にそう伝えると、空中に掻き消えるようにして、その姿を亡くしていった。消える瞬間に吹き抜けた風が、そっと七架の顔を撫でる。

「……………」

静まり返ったその場で、七架は力なくしゃがみ込んだ。

“^{なお}治せ”……」

七架が薙刀を引き抜き、倒れ込んだまま、気を失っている青年へと治癒の言葉を投げかける。そこに居る青年は、碧鎖と同じ姿をしているが、もうそこに、碧鎖はいない。

「……………」

青年へと向けられた七架の手に、透明の滴が落ちる。

“痛い”……」

落ちた滴は、七架の涙であった。

「勝ったのに……“痛い”よ……」

震える声を発しながら、七架がその場に蹲る。

“痛い”よ……！朝比奈くん……！」

七架の涙は、止まることなく、溢れ続けた。

Word. 42 あラタナル闇 (1)

始忌アジト、入口付近。

「だから、しつこいっつってんのよ…! “扶^{えぐ}れ”!」

『ギヤアアアア…!』

エリザが右足を勢いよく振り切り、飛びかかってきていた忌を数十匹、一斉に消し去る。

「はあ…はあ…はあ…」

アヒルたちを先へと進めるため、一人この場に残り、足止めをしていたエリザであったが、消しても消しても湧いて出てくる忌に、エリザの体力もさすがに限界が近づいてきていた。

「このままじゃ…」

「グアアアア…!」

「うっ…!」

険しい表情で、眉間に皺を寄せたエリザのもとへ、新たな忌の集団が勢いよく襲い掛かってくる。

「クっ…!」

右足を振り上げる間もなく、エリザが表情をしかめた、その時であつた。

“落^おちろ”」

『ギヤアアアア!』

「えっ…?」

雨か雷のように、上空から降り落ちてきた無数の白い光が、エリザへと向かってきた忌を一匹残らず貫き、あっという間にその存在を消し去ってしまった。その光景に、エリザが戸惑った表情を見せる。

「今の、言葉は…」

「大丈夫か? 衣^えの神」

「……っ」

久し振りに聞く、忌の禍々しいものではないその声に、素早く振り向くエリザ。

「於^おの神……！」

「一人で足止めか？随分と無茶をしたものだな」

エリザの前へと現れたのは、涼しげな表情を見せた檻也であった。檻也の横に並ぶようにして、紺平も立っている。思いがけない二人の姿に、エリザは大きく驚く。

「ど、どうして於の神たちがここへっ？言ノ葉町は？」

「言ノ葉町の忌は、一掃された」

「えっ？」

檻也の言葉に、エリザが目丸くする。

「あの人数とこれだけの時間で一掃？見た目より、やるのねえ。於の神って」

「見た目より、は余計だ」

エリザの齒に衣着せぬ発言に、思わず顔をしかめる檻也。

「別に檻也くんが凄いわけじゃないよ」

「おいっ」

あっさりと否定する紺平を、檻也が少し睨むように見る。

「高市くんに取り憑いてる忌の人……灰示さん、だっけ？その人が操作してくれたみたいで」

「波城灰示が……？」

説明する紺平に、エリザは少し考え込むように俯き、その手で自らの顎に手を触れた。

——“痛み”を知れば、愚かな君たちも、人を傷つける言葉なんて口にしなくなるだろう……？——

「あの男が、人間の味方をするとはね……」

かつて戦った灰示の姿を思い出し、エリザがどこか感心するように呟く。誰かを傷つける言葉ばかりを吐く人間に、かつての灰示は

ひどく絶望していた。エリザが見た限り、人間を守るような行動を取る者には、まったく見えなかった。

「これも、アヒル効果かしら」

「ガア？」

そつと微笑むエリザに、紺平が少し首を傾げる。

「空音とお前たちの団の者は、言ノ葉町に残し、町人たちの手当てや事後処理に当たってもらっている」

檻也が言葉を投げかけると、俯いていたエリザが顔を上げた。

「ここに連れて来るには、あまりにも力を消耗していたんでな」

「適切な判断だと思うわ。ありがとう」

エリザが檻也へと、力強く笑いかける。

「この場は俺たちが援護する。とつと切り抜けて、先へ急ごう」
「了解っ」

檻也の言葉にエリザが大きく頷くと、三人は周囲を囲む忌へ向け、それぞれの言玉を構えた。

「ハア…！ハア…！ハア…！」

一方、灰示との話を終えたアヒルは、どこまでも真っ暗な空間の続くアジト内を、ひたすらに駆け抜けていた。

「ハアっ…こう暗いと、方向感覚がちっともっ…」

——バアアアーン！

「……っ」

遠くの方から聞こえてくる衝撃音が、不意に耳に入り、アヒルはすぐに立ち止まって、音の聞こえてきた方角を振り向いた。その先は暗くて何も見えはしないが、確かに衝撃音が続いている。

「誰かが…戦ってんのか…？」

音に耳を澄ませ、アヒルがそつと眉をひそめる。

「よしっ：！」

表情を鋭くし、アヒルはその音のする方へと、さらに足を速め、駆け抜けていった。

始忌アジト内、囁　V S　虹乃^{ニジノ}。

「“揺らせ”！」

「パオオオオン！」

「うっ：！」

虹乃の言葉を合図に、その場で大きくその巨体を揺らす弓象。弓象の巨体に空間全体が揺らされ、立っていた囁は、思わずバランスを崩される。

「キャハハ：！隙ありい！“破”！」

「クっ：！」

バランスを崩した囁へ向け、虹乃が楽しげな笑顔で衝撃波を放つ。

「さ：：“叫べ”：！」

囁が言葉を放ち、横笛を奏でると、美しい音色とともに赤い光の玉が生まれ、向かってきた衝撃波とぶつかり合って、大きな衝撃音を響かせながら相殺する。

「やっるう！！」

「……っ」

攻撃を防がれたというのに、余裕の笑みを浮かべている虹乃を、鋭く見つめたまま、囁は口元に当てていた横笛を素早く下ろした。

「“変格”：！」

下ろした横笛を、囁が下方へと振り抜く。その瞬間、横笛の先が伸び、横笛は真っ赤な槍へと姿を変えた。

「そっかぁ。サ行って、変格使えるんだっけえ」

囁の、姿を変えたその武器を、興味深く見つめる虹乃。

「面白そおー！あんた乗っ取ったら、使いまくっちゃおおー！」

「誰がそんなこと…させるもんですか…」

笑いあげる虹乃に少し不快そうな顔を見せた後、槍を構えた囁が、勢いよく虹乃へと駆け込んでいく。

「真っ向勝負うー？」

駆け込んでくる囁を見つめ、虹乃が口角を吊り上げる。

「それはさすがに、無謀じゃなあーい？“行け”！」

「パオオオオン！」

駆け込んでくる囁を出迎えるように、弓象も虹乃の前から、巨体とは思えぬほどの速度で、勢いよく突っ込んでいく。

「去れ」

弓象と正面衝突するその直前、囁が小さく言葉を落とす。

「パ、パオオンっ？」

言葉を落とした瞬間、弓象の目の前から消えてしまった囁の姿。

向かっていたものが急になくなり、弓象は足を止め、戸惑うように周囲を見回す。

「どこに…？」

弓象と同じように、消えた囁の姿を探す虹乃。

「…っ」

「えっ…！？」

その時、虹乃の目の前へと、急に囁が姿を現す。驚く虹乃に躊躇うことなく、囁は構えた槍を、鋭く振り上げた。

「“裂け”…」

「グっ…！」

振り下ろされる囁の槍に、虹乃が陰しい表情を見せる。

「なあーんちゃってっ」

「えっ…？」

微笑む虹乃に、囁が眉をひそめる。

「“譲れ”っ」

「えっ…？なっ…」

虹乃が言葉を発した途端、まっすぐに虹乃へと振り下ろしていたはずのその槍先が勝手に逸れ、きれいに虹乃のすぐ横へと落ちていく。

「これは…」

自分の意志とは異なる動きをした槍に、戸惑いの表情を見せる囁。

「キャハハ！余所見しちゃってて、いいのおく？」

「え…？」

「“結^ゆえ”！」

「パオオオオン！」

「うっ…！」

虹乃の声に、槍へと落としていた視線を上げた囁であったが、後方から伸びてきた弓象の長い鼻に、その胴体を絡めとられてしまう。

「うっ…クっ…！」

槍を持った右手ごと絡まれたため、逃れる言葉を放つことも出来ず、表情を歪める囁。弓象は囁を捕らえた鼻を高々と掲げ、天井近くまで囁の体を持っていく。

「“緩^{ゆる}めろ”」

「えっ…？」

虹乃の言葉により、弓象の鼻が急に緩むと、囁が天井近くの高さから、勢いよく落下していく。

「ああああっ…！」

床に全身を勢いよく打ちつけ、囁が苦しげに声を漏らす。

「トドメっ」

倒れこんだままの囁へと、右手を向ける虹乃。

「“破^は”」

「うっ…！きゃあああ！」

倒れたままの囁へと虹乃が衝撃波を放つと、囁はそれを直撃し、後方へと勢いよく吹き飛ばされた。

「痛たた…」

少し血の流れる体を、囁がゆっくりと起き上がらせる。

「どお〜お？」

虹乃の軽い口調の声に、そっと顔を上げる囁。

「虹乃ってば、あの五十音士の女より、よっぽど言葉を使いこなしてるでしょお〜？」

「……っ」

虹乃の言葉に、答えることなく、囁が表情を曇らせる。虹乃のその言葉の通り、囁も、虹乃は弓よりも、弓の言葉を使いこなしているように感じていた。言葉の数も、言葉の選択も、目を見張るものがある。虹乃が五十音士であつたなら、相当にレベルは上の方に分類されるであろう。

「人間はねえ、言葉の中に変な感情持ち込むから、弱くなんのよっ」
まるで指摘するように、虹乃が言葉が続ける。

「言葉なんて、ただの力を得るための道具。そう考えれば、もっと有効的に使えるのにい」

「道具、ね…」

虹乃の言葉の一部を繰り返しながら、囁が槍を支えにするようにして、その場に立ち上がる。

「じゃあ、言葉から生まれたあなたたちは…道具以下ってことかしら…？」

「……っ」

囁の挑発的なその言葉に、虹乃はあからさまに顔をしかめる。

「そうねえ…そうかもっ」

挑発を認めるように、静かに呟く虹乃。

「でも、ただの道具じゃないわ」

虹乃が冷たく、笑みを浮かべる。

「私たちは刃…愚かなあんたたちの胸を貫く、鋭い刃よっ…！」
勢いよく叫んだ虹乃が、大きく両手を広げる。

「“破”！」

「……っ」

向かってくる衝撃波に、囁が表情を鋭くして、槍を振り上げる。

「妨さまたげろ”…！」

囁が赤い光の膜を放ち、向かってきた衝撃波を、別方向へと弾き返す。

「さ…！」

“揺ゆらせ”！」

「あっ…！」

囁が次の言葉を放とうとした時、虹乃が先に言葉を放ち、動く弓象により再び地面が揺れ、またしても囁がバランスを崩される。

「今よお！弓象！“結ゆえ”！」

「パオオオオン！」

「うっ…！」

バランスを崩していた囁へと伸びた弓象の鼻が、再び囁の体を絡み取る。

「う…！うう…！」

「キャハハっ！今度はその体、めっちゃくちゃに斬り裂いてやつ…！」

「フッフ…」

「えっ…？」

弓象の鼻に絡み取られたままの囁が、どこか不敵な笑みを浮かべると、徐々にその捕らえられていた体が霞んでいき、やがて消えていく。

「なっ…！？」

「パオン？」

忽然と姿を消した囁に、驚きの表情を見せる虹乃と弓象。

「消えた…？また、さっきの言葉っ？」

「いいえ…違うわ…」

「…っ！」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、目を見開いた虹乃が、素早く振り返る。虹乃が振り返ると、そこには不気味な笑みを浮かべた、囁が立っていた。

「今の言葉は…“錯覚”…」
さっかく

「錯覚…？」

その言葉に、虹乃が表情を曇らせる。

「突進攻撃しか出来ないあなたには…少し難しすぎたかしら…？」

「……っ」

挑発する囁に、虹乃がまたしても大きく顔を歪める。

「望み通り突進してやろうじゃないっ。“行け”！弓象！」

「パオオオオン！」

鋭く手を振り上げた虹乃の言葉に応え、弓象が重く響く足音を響かせながら、囁のもとへと駆け込んでくる。

「“咲き乱れろ”…」

槍を手元で一回転させ、言葉を放つ囁。

「パっ…！？」

囁へと駆け込もうとしていた弓象の足元から、多くの花が一斉に咲き始め、その茎や蔓で弓象の足を絡め取り、巨体の動きを止めてしまう。

「なっ…！」

動きの止まった弓象を振り返り、大きく目を見開く虹乃。

「何してんのよ！弓ぞっ…！」

「さ…」

「……っ！」

弓象に怒鳴りあげていた虹乃が、すぐ後ろから聞こえてくる声に振り向き、表情を歪める。

「“裂け”…」

「うっ…！」

振り向いた虹乃へと、振り下ろされる囁の槍。

「きゃああああっ…！」

囁の槍に斬り裂かれた虹乃が、動きを止められた弓象の方まで、吹き飛ばされる。

「うううっ…！」

弓象の巨体に背をぶつけ、その場に倒れこんだ虹乃は、苦しげに表情を引きつった。斬り裂かれた左肩から胸への傷から、真っ赤な血が流れ落ちている。

「血っ…」

忌である頃は流れたこともなかった、その赤い血を見つめ、虹乃がそっと目を細める。

——痛い…痛い…——

「うる、さいわねえ…」

頭の中に響く声に、虹乃が煩わしそうに声を発する。

「言われなくても…“痛い”のなんて十分、わかってるわよっ…!」
誰にともなく怒鳴るように声をあげながら、虹乃がその場で立ち上がる。

「ハア…ハア…」

「あら…もう立ち上がったの…?」

少し息を乱した虹乃の姿を見つめ、囁が余裕に満ちた笑みを浮かべる。

「結構、しぶといのね…」

「当たり前でしょ」

一方、すっかり余裕の笑みも消えた虹乃は、睨みつけるような瞳で囁を見た。

「虹乃は、あんたの、五十音士の、人間の、全員の言葉を奪いきるまで、絶対に消えたりしないんだからっ」

「奪いきる、ね…」

虹乃の言葉を繰り返し、囁がそっと眉をひそめる。

「それは…やめておいた方が、いいと思うわ…」

「はあ？」

助言のような口振りで言う囁に、虹乃が思わず顔をしかめる。

「何?それっ」

鼻で笑い飛ばすように、言葉を吐き捨てる虹乃。

「命乞いなら、もっと可愛らしく言えないわけっ？」

「言えないわね…命なんて、乞うてないもの…」

「……？」

あつさりと否定する囁に、虹乃が少し戸惑うように眉をひそめる。

「じゃあ何だって…」

「あなたたちは…人の“痛み”により力を増すもの…人間が言葉を失えば、あなたたちは弱化する…」

戸惑う虹乃へと、囁が真剣な眼差しを向ける。

「あなたたちは…五十音士の言葉により生み出されたもの…五十音士が言葉を失えば、あなたたちの存在は消える…」

「えっ…？」

囁の言葉に衝撃を走らせた虹乃が、その赤い瞳を大きく揺らす。

「消、える…？」

「ええ…」

聞き返すように呟いた虹乃へと、囁がもう一度、頷きかける。

「言葉が消えれば、“痛み”は消えるかも知れない…でもそれ以上に、確実に、あなたたちが消えるわ…」

「……っ！」

はつきりと告げる囁に、虹乃は目一杯、その瞳を見開いた。

「そ、そんな…」

やっとのことで声を漏らした虹乃が、かすかに口元を緩める。

「そ、そんなはずないじゃない！だって、虹乃たちはこうして、実体化もしてっ…！」

「形あるものは、いずれ朽ち逝くもの…」

虹乃の必死の言葉を、囁は静かに遮った。

「あなたたちが実体を持ったことは…あなたたちが消える理由にはなっても、消えない理由にはならないわ…」

「……っ」

放たれる囁の言葉に、言い返す言葉も見つけられず、虹乃は強く

唇を噛み締めたまま、その視線を落とした。

「そんなの…そんなの、嘘よ…」

否定するように、拒むように、必死に首を横に振る虹乃。

「だって、言ったもの…」

——俺たちの目的は、人間からすべての言葉を消し去り、この“痛み”から解放されることだ……

「伍黄が言ったもの！言葉を消せば、虹乃たちは自由だって、そう言ったものっ…！」

必死に叫んだ虹乃が、勢いよく右手を振り上げる。

「だから、消えない…？」

ゆとりのない表情を見せる虹乃に、囁はさらに追い込むように、鋭い瞳を向けた。

「それは…私たち人が、“永遠に生きられる”と口にすれば死なない、と言っているようなもの…」

囁の瞳が、虹乃を突き刺す。

「あまりにも、愚かな考え方だわ…」

「…っ！」

どこか責めるように言い放つ囁に、虹乃が大きく目を見開く。

「そんなこと、ないわ…」

囁の言葉を否定するように、必死に言葉を紡ぐ虹乃。

「虹乃は…愚かなんかじゃないっ…」

まるで自分に言い聞かせるように、虹乃が呟く。

「虹乃は、消えたりなんかしないっ…！」

そう叫び、虹乃が勢いよく右手を振り上げる。

Word 42 あラタナル闇 (2)

「“行け”！弓象！」

「パオオオオン！」

今まで以上に声を張り上げた虹乃に応え、弓象が足を捕らえていた花の茎や蔓を引き裂いて、力づくでその巨体を解放する。自由になった弓象が、囁へと突進していく。

「“結え”！」

「……“遮れ”っ」

またしても囁の体を絡め取ろうと伸びてきた弓象の鼻を、囁が前方に赤い光の膜を張って遮る。囁へと向かっていた鼻は、その膜に正面から激突した。

「ふう……」

「それで防いだつもりっ？」

「え……？」

挑戦的に言葉を投げかける虹乃に、囁が表情を曇らせる。

「“融解”っ」

「……っ！」

微笑んだ虹乃の言葉とともに、融け始める囁の膜。

「熟語……！」

融けていく膜を見つめながら、囁がその表情に焦りの色を浮かべる。

「“結え”！弓象！」

「うっ……！」

融けた膜の向こうから、再び伸びてくる弓象の鼻。

「“遮っ……！！……っ”

言葉を放とうとした囁だが、すぐに唇を噛む。

「同じものを、同じ言葉ではっ……」

同じ言葉で二度、同じものを防ぐことの出来ない、五十音のルー

ルにより、囁は発せられる言葉を失ってしまう。

「ううう…！」

弓象の鼻が囁の体を絡め取り、囁の体を軽々と、上空まで振り上げた。

「いい眺めね…」

「クっ…！」

高々と舞い上がった囁を見上げ、涼しげに言葉を放つ虹乃。そんな虹乃の姿を見下ろし、囁は厳しい表情を作る。

「今度こそ、めっちゃくちゃにしてあげるっ」

虹乃が冷たく微笑み、囁へと右手を伸ばす。

「“逝^ゆけ”…！」

「うっ…！」

虹乃の右手から放たれた、雨のような、鋭く尖った、無数の細い金色の刃が、上空の囁へと一斉に飛び出していく。

「あああああっ…！」

全身を刃で貫かれ、激しく悲鳴をあげる囁。赤い血が、天井から床へと飛び散る。

「ううう…！うっ…！」

弓象の鼻から解放された囁は、傷だらけの体で、床へと墜落した。鈍い音が響くと、無地の床に、囁の赤い血が広がっていく。

「“痛い”、“痛い”…」

少し耳を澄ませながら、虹乃がゆっくりと囁のもとへと歩み寄って来る。

「痛いほど、聞こえてくるわぁ。あんたの声がっ」

「はぁ…はぁ…」

息を乱しながら、顔を上げ、やって来る虹乃を見上げる囁。

「ホント、“痛い”ほどっ」

煩わしそうに吐き捨てた後、囁のすぐ前にしゃがみ込んだ虹乃が、床に力なく流れたままの、囁の右手を手にとった。

「“歪^{ゆが}め”…」

「……っ！あああああっ……！」

言葉と同時に、不自然な方向に曲がる囁の手。曲がった途端に激しい痛みが走り、囁は思わず、大きな声をあげた。

「ううう……ううっ……」

「キャハハハっ」

蹲り、必死に痛みを堪える囁の姿に、虹乃が楽しげな笑みを浮かべる。

「“痛い”、“痛い”っ」

その楽しげな笑みとは、真逆の言葉を繰り返す虹乃。

「ああ、”痛い”っ」

「……っ」

そんな虹乃を前に、囁は痛みに苦しむことも忘れ、どこか見入るように虹乃を見つめていた。

「聞こえる、の……？私の“痛み”が……」

「勿論、聞こえるわよお。頭が割れそうなくらいっ」

笑顔で答える虹乃に、囁がそっと目を細める。

「だから嫌、もう嫌っ……こんな声は、“痛み”に苛まれるだけの存在は、もう嫌っ」

まるで我が儘を言う子供のように、ただ、ただ、言葉を続ける虹乃。

「こんな“痛み”は消さなきゃっ……だから、だから言葉を消さなきゃっ」

「………」

言葉を続ける虹乃を、囁はまっすぐに見つめる。

「けど……言葉を消せば、あなたも消えるわ……」

「……っ」

放たれた囁の言葉を聞いた途端、虹乃の方の言葉は止まり、虹乃は言葉だけでなく、浮かべていた笑みも止めた。

「嫌よ……消えたくないわ……」

ゆっくりと首を横に振りながら、虹乃が少し低い声を漏らす。

「絶対に、消えたくないっ！」

「何故：そこまで、消えることを嫌がるの：？」

まるで願うように呟き続ける虹乃に、囁がそっと疑問を投げかける。

「あなたたちはただ、生じただけの存在：死ぬのではなく、ただ、消えるだけなんでしょう：？」

俯いたままの虹乃へと、まっすぐに視線を向ける囁。

「なのに何故：そんなに消えることを、恐れるの：？」

「だって：」

囁の問いかけに、虹乃が小さく口を開く。

「だって：やっと、手に入れたのよっ：？自分の体を、自分の言葉を、自分の存在をっ：」

その存在を確かめるように、虹乃が両手で自らの体を抱く。

「この後も虹乃は、きつと見つけていくの：！自分の道を、自分の未来を、自分の世界をっ：！」

顔を上げ、徐々に声を張り上げていく虹乃。

「だから消えたくないのっ！消えるのがっ：！」

不意に途切れる、虹乃の言葉。

「消える、のが：」

「……っ」

もう一度、繰り返した虹乃に、囁はそっと目を細めた。

「恐い：？」

虹乃の言葉の続きを補うように、その言葉を口にする囁。

「それはね、あなたが死ぬから：」

囁が、諭すように言葉を続ける。

「あなたが、“命”^{いのち}だからよ：」

「……っ！」

囁の言葉に、虹乃は大きく目を見開いた。

「あなたが選べる道は、私たち人と同じ：“痛み”と共に生きていくか、死ぬか：それだけよ」

「嫌…」

虹乃がすぐさま言葉を発し、拒むように首を横に振る。

「嫌よ、嫌…！嫌っ…！！」

立ち上がった虹乃は、徐々に強く首を振り、必死に言葉を繰り返す。

「私は生きるの…！“痛み”からも解放されて、自由になって、生き続けるのっ…！」

後方へと飛び下がり、囁と距離を取った虹乃が、囁へと右手を向ける。

「“破”！」

「…っ」

衝撃波を放つ虹乃を見て、目を細めた囁が、折られた左腕を下に垂らしたまま、右手だけで床に落ちていた槍を持ち、その刃先を衝撃波へと向ける。

「“逆^{さか}らえ”…！」

突き出された槍先から、赤い光の玉が放たれると、その玉は向かってきていた衝撃波を弾き返し、衝撃波をも巻き込んで、虹乃へと襲いかかっていく。

「えっ…？」

目の前へと迫る赤い光に、焦った表情を見せる虹乃。

「ゆ、弓ぞっ…ううっ…！」

弓象を呼ぶ間もなく、光が虹乃に降り注ぐ。

「きゃああああっ…！」

光を正面から受け、虹乃が勢いよく後方へと吹き飛ばされていく。

「ううう…う…あっ…」

さらに傷の増えた体を、すぐに起き上がらせた虹乃が、床に強くつけた自分の右手を見て、その表情を曇らせる。

「これ…って…」

弓の体であるその手から、黒い霧のようなものが、漏れ始めている。媒体である弓の体から、忌である虹乃の体が、漏れ始めている。

のである。

「嫌…嫌っ…」

溢れ出る黒い影に、拒否するように、強く顔をしかめる虹乃。

「虹乃は消えないっ…！虹乃は存在し続けるのっ…！！」

必死に叫び、虹乃が勢いよく立ち上がる。

「弓象！“行け”！」

「パオオオオン！」

虹乃の強い言葉に応えるように、弓象も今までで一番の大きな鳴き声を発し、大きく地面を揺らして、囁のもとへと突っ込んでいく。

「……っ」

傷だらけの体を立ち上がらせ、冷静な表情で、向かってくる弓象を見つめる囁。

「さ…」

槍を構えた囁が、そっと口を開く。

「“叫べ”…！」

大きな赤色の光の塊が、まっすぐに弓象へと向かっていく。

「パっ…！」

そのあまりに強い光に、思わず足を止める弓象。

「パオオオオオンっ…！」

「うあっ…！」

赤い光に掻き消されるようにして消えていく、弓象の金色の巨体。

弓象が消え、金色の言玉が力なく床へと落ちると、虹乃は目を見開いたまま、茫然と立ち尽くした。

「そんな…弓象っ…」

「……………」

「うっ…！」

弓象の消えたその向こうから、突き刺すように向けられる囁の鋭い視線に、虹乃が思わず背筋を震え上がらせる。

「け、消すのっ…？虹乃を…」

どこか震えた声で、足を二、三步下げながら、虹乃が囁へと問い

かける。

「ええ…殺すわ…」

「……っ！」

はつきりと答える囁に、目を見開く虹乃。

「消えたく、ないのっ…死にたくないのよ！虹乃っ…！」

「そんなの、皆、そうだわ…」

必死に訴える虹乃へと、冷静な言葉を放ちながら、囁が歩を進め、徐々に虹乃との距離を縮めていく。

「私だって、死ぬのは怖い…命ある者は皆、自らの死を恐れるものよ…」

「じゃあっ…！」

「けれど…その体は、あなたのものじゃない…」

「……っ」

囁の言葉に一瞬、目を輝かせた虹乃であったが、続くようにして放たれた言葉に、一気に浮かべたばかりのその笑顔を掻き消した。

「あなたがそこで生き続けられ…本来、そこで生きようとしていた子の道も、未来も、世界も…すべてが閉ざされてしまう…」

——私はもう二度と、仲間を捨てて逃げたりしないっ…！——

仲間の為に立ちほだった、まっすぐな瞳の少女の姿を思い出し、囁がそっと目を細める。

「だから私は…あなたが生き続けることを、認めるわけにはいかない…」

「………」

告げられたその言葉に、虹乃は今までのように取り乱すことなく、一瞬、ひどく落ち着き払った表情を見せた。

「何よ、そんなのっ」

すぐさま虹乃が、冷たい微笑みを浮かべる。

「虹乃は認めるわあっ。この五十音士は、虹乃が生きていく為の道

具になるのっ！」

虹乃がさらに口角を吊り上げ、大きく両手を広げる。

「あんたたちが虹乃たちを戦争を治めるための道具にしたように、虹乃もあんたたちを道具にしてやるわあ！」

歩み続ける囁へと、右手を突き出す虹乃。

「破”……！”

右手から繰り出された衝撃波が、まっすぐに囁へと向かっていく。

「遮れ”……！”

囁がそつと言葉を放つと、すぐさま囁の目の前に赤い光の膜が張られ、虹乃が放った衝撃波を簡単に弾き飛ばした。そのまま囁は歩を進め、虹乃のすぐ前までやって来る。だが目の前に立った囁の前に、虹乃がそれ以上、言葉を放つことはなかった。

「……………」

「さ……」

まっすぐに見つめる虹乃の前に、囁がゆっくりと口を開く。

「“咲き誇れ”」

「うううっ……！」

床から勢いよく伸びた色取り取りの花たちが、一斉に虹乃の体を突き刺した。

「あああ……あっ……」

苦しげな声を漏らしながら、虹乃がゆっくりと、その赤色の瞳を閉じていく。

＜アアア……アア……＞

すると次の瞬間、虹乃の、いや弓の体が床へと崩れ落ち、その体から抜け出るようにして、黒い影の塊が現れた。黒い影の中で、赤い二つの光が、弱々しく揺らめく。

「それがあなたの……本当の姿ね……」

槍を下ろした囁が、まっすぐにその黒い影を見つめる。

＜やっ……＞

黒い影から届く、虹乃の声。

<やっと…手に入れたのに、な…>

光る赤色の瞳が、倒れた弓を見つめる。

<お化粧の…出来る顔、も…オシャレの出来る…体も…>

未練ある黒い影の手が、少しだけ弓の方へと伸びる。

<やっと…>

「……………」

そんな虹乃の姿を見つめながら、そっと目を細める囁。

「私は神じゃないから…あなたを救う術は持たないわ…だから…」

囁が真剣な表情を、虹乃へと向ける。

「だから…今度は、神に祈ることの出来る形で、生まれて来なさい

…」

<…………>

囁のその言葉に、虹乃の瞳が少し、微笑んだような気がした。

——パアアアアン！

目を逸らすことなく囁が見つめる中、その黒い影は、散り散りになつて、やがて、跡形もなく消えていった。

「……“さようなら”」

天を仰いだ囁が、小さく別れの言葉を口にする。

「んん、んっ…」

「……………」

下方から聞こえてくる声に気付き、囁が視線を下ろす。小さな声を漏らしたのは、床に倒れている弓であった。虹乃が消え、その体は解放されたはずである。

「んん…？あれ…？」

倒れたままの弓が、ゆっくりとその大きな瞳を開く。虹乃が残した厚い化粧は多少残っているが、その開かれた瞳は、透き通るような茶色で、虹乃の真っ赤な瞳ではなかった。

「気がついた…？」

「えっ？」

すぐ横にしゃがみ込んだ囁が声を掛けると、弓は戸惑いながら、ゆっくりと顔を上げた。

「囁、さん…？」

弓はその大きな瞳で、戸惑うように囁を見つめる。

「あの、私…えっと、ここは…？」

体を起き上がらせた弓は、周囲を見回し、見慣れないその光景に、さらに戸惑った様子で首を傾げる。

「あの、私は一体…」

「大丈夫よ…」

問いかけようとした弓の言葉を、囁がそっと遮る。

「もうすべて…終わったから…」

そう言いながら、囁が少し視線を落とす。

「もう悪夢は…醒めたから…」

「囁さん…？」

囁の浮かべた笑みは、どこか哀しげで、見つめる弓は、ただ不思議そうに首を傾げた。

Word 42 あラタナル闇 (3)

その頃。始忌アジト内、箆也 VS 緑呂^{ロクロ}。

「……っ」

箆也と向き合っていた緑呂が、振り上げようとしていたその腕を、ふと止める。腕を止め、体全体の動きを一瞬止めた後、緑呂はそつと天井を見上げた。

「お前も逝ったか…虹乃…」

緑呂が、仮面の奥から、箆也の耳には届かないほどの小さな声を放つ。仲間である虹乃の気配が消えたことを、察したのであった。虹乃だけではない。桃真も萌芽も、そして碧鎖の気配も、虹乃の気配が消える少し前に、同じように消えてしまった。

「限らない“痛み”で生まれた我らも、残りは三名か…」

「……？」

小さな眩きばかりを落とす緑呂に、向き合っていた箆也が少し首を傾げる。

「どうした？」

「いや…」

問いかける箆也に、そつと首を横に振る緑呂。

「我らは…」

ゆつくりと口を開いた緑呂に、箆也が耳を傾ける。

「我らは、道を、間違えたのやも知れん、と…そう思ってな…」

「……っ」

緑呂の口から放たれたその言葉に、箆也は反応を返すことなく、そつとその表情を曇らせた。

「革新など求めず、ただ、この“痛み”を耐え抜いてさえ居れば…誰も消えずに済んだというのに…」

緑呂の声が、どこか哀しげに響く。

「若き五十音士よ」

緑呂が顔を前へと向け、正面から箆也を見る。

「少しばかり、我の話を聞いてはくれんか：？」

「僕はあなたと戦いに来たのであって、楽しく会話をするつもりはない」

「まあ、そう言うな」

不快そうに顔をしかめる箆也に、緑呂は微笑んだ声を向ける。

「ほんの少しだけ、聞いてくれ：」

「……………」

願うように放たれるその緑呂の声を、箆也は跳ねのけることが出来ず、ただ静かに、緑呂の声へと耳を傾けた。

「今、この先で：我の古くからの友が二人、戦っておる：」

「二人っ：？」

緑呂の言葉に、眉をひそめる箆也。

「まさか：波城が：？」

「二人は決して、仲が悪かったわけではない。むしろ、とても仲が良かった：」

緑呂が懐かしそうに、話し始める。

「ただ、正反対な二人だった：よく似ているようで、まったく似ていない二人だった：」

表情を曇らせる箆也を前に、緑呂は自分の話を進める。

「この世界から“痛み”が消えることを、誰よりも強く願う二人だったが：人間に対するその感情は、まるで違っていた」

緑呂の声が、穏やかに二人の人物を語る。

「一人は、よく、人間を観察しに、一人で人間の居る場所まで行っていた」

語られる緑呂の話を、箆也は真剣な表情で聞く。

「“痛み”を発する人間だというのに、我らを苦しめる人間だというのに、其奴は^{そやつ}とても、人間に興味を持っているように見えた」

天井を見る緑呂は、どこか遠いところを見ているようであった。

「そして、見つめる人間たちが他者を傷つける度、“痛み”が生ま

れる度、哀しそうに、我らのもとへと戻って来た…」

言葉とともに、その声も哀しく響く。

「もう一人は、出来る限り、人間から離れた場所に閉じこもり、ひたすら、その耳を塞いでいた…」

緑呂の声が、かすかに曇る。

「人間の“痛い”という声が聞こえてくる度、自分を苦しめる人間という存在を、自分の運命を、呪っていた…」

天井を見上げていた緑呂が、ゆっくりとその顔を下ろしていく。

「誰よりも人間に絶望し、誰よりも人間を憎んでいた…」

「……っ」

急に低くなる緑呂の声に、箆也も表情を曇らせる。

「我は、人間に、彼奴ほどの憎しみを抱いてはおらぬ…」

低い声のまま、緑呂が言葉を続ける。

「だが、我は、二番目に生まれた始忌…存在した時にはすでに彼奴あやつはおり、激しく頭に響く、“痛い”という声にも、二人で耐えゆくことが出来た…」

低い声が、暗い部屋に響き渡る。

「ならば、一番目に生まれた彼奴はどうだったのであろう、と…ふと思うことがある」

緑呂が仮面に覆われた顔で、そっと俯く。

「割れんばかりに響くこの無数の声の中、たった一人で…どんな孤独を味わったのであろうと思うと、我の胸も恐怖に震える…」

「……っ」

その言葉を理解するように、目を細める箆也。

「そう思うと、彼奴の底知れぬ憎しみも…無理はないと思った…」
緑呂がゆっくりと、顔を上げる。

「それと思うと、“人間からすべての言葉を奪おう”と言った彼奴を、止めることが出来なかった…」

緑呂の手が、何もない空へと伸ばされる。

「止めることなど…出来なかった…」

「……………」

何もない空を掴んだ緑呂が、その拳をきつく握り締める。そんな緑呂の姿を、箆也は目を逸らすことなく、まっすぐに見つめ続けた。「其方たち人の言葉に、“後悔先に立たず”という言葉があるな…？」

拳を下ろし、箆也へと問いかける緑呂。

「まったく、その通りだ…」

緑呂が、噛み締めるように、天井を見上げる。

「其方たちは本当に…言葉を生み出すのが上手い…」

どこか感心したように、緑呂の声が響く。

「だがなあ、五十音士よ…」

緑呂の顔が、再び箆也の方を向く。

「どんなに後悔をしたとしても、一度、踏み出した我らには、退く道などない」

まっすぐ、突き刺さるように、放たれる言葉。

「この道突き進む他に、戻る道も、進む道も、我らにはないのだ…」

「……っ」

緑呂の言葉を受け、箆也がそっと目を細める。

「あなたたちに、同情するつもりはない」

箆也が鋭く、言葉を投げ放つ。

「あなたたちが言葉を消すというのであれば、僕は全力であなたたちを消す」

「ああ」

はっきりと言い切る箆也に、緑呂は認めるように頷きかけた。

「当然だろう…」

「だが」

「……？」

遮る箆也の声に、少し首を傾げる緑呂。

「なっ…!？」

箆也の姿に、緑呂が驚いた様子で声を漏らす。

「済まなかった…」

そう言葉を放った箆也は、深々と、緑呂へと頭を下げていた。

「な、何をっ…!？」

「詫びて済むこととは思っていない。だが、一度こうせねば、僕の気が済まない」

「馬鹿なっ…! 我らを生み出したのは、其方が生まれるよりも遙か前の五十音士だぞ…!？」

「僕は五十音士」

戸惑う緑呂へと答えながら、箆也がゆっくりと、下げていた頭を上げていく。

「すべての言葉から逃げぬと、そう誓った」

まっすぐに緑呂を見つめ、箆也が言葉を続ける。

「だから、どんなに大昔の五十音士が放った言葉であっても、その言葉には責任を持つ」

「……っ」

真剣な箆也の眼差しに、思わず言葉を呑み込む緑呂。

「それが僕の、五十音士としての信念だ」

「……………」

曇りの一つもない、まっすぐな瞳を見せる箆也を、緑呂は黙ったまま、しばらくの間、見つめていた。

「何とも潔いことだな…」

感心するように放たれたその声は、どこか微笑んでいるように聞こえた。

「若き五十音士よ」

呼びかける緑呂に、箆也が続けて視線を送る。

「其方の言葉、確かに頂戴した」

受け取ったことを表すように、緑呂が自らの手を胸へと当てる。

「これで我は、迷いなく戦える」

「ああ」

身構える緑呂に対し、大きく頷いた後、箆也も素早く格子を構える。

「僕も、迷いはない」

「……っ」

はつきりと答える箆也に、仮面の奥の緑呂が、そっと微笑んだような気がした。

「過ぎれ」……！」

緑呂が白い言玉を持った右手を突き出し、言葉を放つ。すると、緑呂の右手から、無数の白い光の刃が放たれ、まっすぐに箆也へと向かっていく。

「か……」

右手に持った格子を空中へと放り出し、箆也が大きく口を開く。

「……っ」

空中で六本へと分かれた格子が、箆也の前に立ちはだかり、緑呂の放った白光の刃を、一つとして残すことなく受け切る。

「変格」

攻撃を防ぐと、すぐに一本に戻った格子を手の中へと戻し、その形を鎌へと変える箆也。

「刈れ」……！」

箆也が鎌を振り下ろし、緑呂へと赤い一閃を向けた。

「よ……」

向かってくる一閃を見つめながら、緑呂が口を開き、言玉を構える。

「避ける」

緑呂が言葉を放った途端、緑呂の体が白い光に包みこまれ、その体が、足も動かしていないというのに、わずかに横へとずれる。ずれた緑呂のすぐ真横を、通り過ぎていく箆也の一閃。

「今のは……」

「浴せ」

「……っ」

戸惑っている籠也へと、さらに言葉を投げかける緑呂。今度は白く光る滝のような大波が、籠也のもとへと押し迫って来る。

「固^{かた}まれ」：！」

籠也が鎌を振り上げ、言葉を放つと、籠也へと迫り来ていた大波が、凍りつくようにして一瞬で固まり、大波の形を作ったまま、空中でその動きを止める。

「ふう：」

目の前で止まった波を見上げ、籠也がどこかホッとしたように一息つく。

「素早い反応だ」

波の向こうから、感心するような声が聞こえてくる。

「さすがは、安附の中でも最強の加守、といったところか：だが」

「……っ？」

付け加えられる緑呂の声に、籠也が少し眉をひそめる。

「蘇^{よみがえ}れ」

「なっ：！」

緑呂が言葉を放つと、凍りついていた大波の氷部分に勢いよくヒビが入り、あっという間にそのヒビが全体へと駆けていくと、氷が砕け、再び動き出した波が、籠也へと襲いかかった。

「うっ：！うあああ：！」

今度は止めることの出来なかった籠也が、降り注ぐ大波に吞み込まれる。

「グっ：うう：」

波が掻き消えると、そこには苦しげに倒れ込む籠也の姿があった。体の所々に傷を負い、その傷から赤い血を流している。

「だが、三言衆と呼ばれる“与守”の力を、そうナメてかからぬことだな」

「……っ」

強気に言い放つ緑呂を見つめ、少し眉をひそめる籠也。

「よくもそこまで、人の言葉を使いこなせたものだな」

「我らは元々、言葉より生まれた存在……」

箆也の言葉に、緑呂がすぐさま反応する。

「言葉のことは、人よりもわかっている」

「……そうか……そうかも、知れないな……」

緑呂に頷きかけながら、箆也が素早く、傷を負った体を立ち上がらせる。

「だが、僕も言葉の戦士……」

立ち上がった箆也が、両手で鎌を握り直す。

「言葉の強さで、負けるわけにはいかない……！」

両手で持った鎌を、高々と上空へと放り投げる箆也。

「かまいたち鎌鼬……！」

「……っ」

鎌が上空で激しい風の塊となり、さらにその勢いを増して、緑呂のもとへと駆け込んでいく。

「イデオム熟語か……」

分析するように呟きながら、右手を振り上げる緑呂。

「よ避ける……！」

緑呂が先程と同じように、その体を白い光に包み込ませ、わずかにその体を動かして、鎌鼬の直線上から逸れる。

「かさ“重なれ”」

「何っ……！？」

箆也がさらに言葉を放つと、鎌鼬が分裂するように二つになり、横へと広がって、避けたはずの緑呂を、その射程距離へと入れる。

「重語狙いか……」

もう“避ける”の言葉を使うことの出来ない緑呂が、少し曇った声を発する。

「ならばっ……」

すぐに、右手を構え直す緑呂。

「よくし“抑止”……！」

緑呂が力強く言葉を発し、直前へと迫ってきていた鎌鼬を、何と

か抑え止める。

「あちらも熟語イデオムか……」

言葉を止められた箆也は、そっと眉をひそめた。

「“寄よれ”！」

「うっ……！」

緑呂が新たに言葉を放つと、止められていた箆也の鎌鼬がその向きを真逆に変え、戻って来るようにして、箆也へと迫り来る。

「クっ……！ “変かわれ”！」

少し表情を険しくしながら、箆也が素早く言葉を放ち、向かってきた鎌鼬を、元の鎌の姿へと戻して、その右手の中に、きつく握り締める。

「“刈かれ”……！」

「“過よぎれ”！」

一閃を放つ箆也に対し、緑呂もすぐさま、無数の刃を投げかける。赤と白の二つの光は、二人の間で、勢いよくぶつかり合った。

「ううう……！」

「グっ……！」

互いの言葉を打ち破った一部の光が降り注ぎ、箆也と緑呂がそれぞれ、後方へと弾き飛ばされる。

「ハア……ハア……」

少し息を乱しながら、額に流れ落ちる汗を拭う箆也。

「強い……さすがは口級といったところか……」

そう呟きながら、箆也が厳しい表情を見せる。

「ふう……」

一方の緑呂は、一部砕けた、鎧の右手部分をすべて払い落とし、大きく一息ついて、肩を落とした。

——痛い……——

「……っ」

頭の中に響いてくるその声に、緑呂が少し俯く。

「後、何度…」

緑呂がゆっくりと、言葉を発する。

「後何度…この言葉を聞けば、我らは解放されるのだろうか…」

誰へともなく問いかけた緑呂が、その場で立ち上がり、言玉を持った右手を突き上げた。

「“装え”」

言玉から放たれた白い光が、緑呂の鎧で覆われた体を、さらにその上から包んでいく。

「ん…？」

光に包まれると、勢いよく地面を蹴り、箆也のもとへと駆け込んできく緑呂に、箆也が少し眉をひそめる。

「飛び込んでくる気か…？」

戸惑うように呟きながらも、向かってくる緑呂へ向け、箆也が鎌を構えた。

「“刈れ”…！」

箆也が鎌を振り下ろし、赤色の一閃を放つが、緑呂は言葉を発することもなく、そのまま駆け込み続けてくる。

「直撃する気か…！？」

そんな緑呂の様子に、さらに戸惑った表情を見せる箆也。

「……っ」

「んな…！」

緑呂が避けようとしなかったため、緑呂の体へと見事に直撃した箆也の一閃であったが、緑呂の体に当たった途端、まるで金属にでも衝突したような、甲高い音を響かせた後、一閃は軽々と弾き飛ばされてしまう。その光景に、箆也が驚いた様子で目を見開く。

「まさか…さっきの言葉は身体強化…？」

「終わりだ、五十音士」

「うっ…！」

箆也の攻撃を弾いた緑呂が、箆也のすぐ目の前まで辿り着き、そ

の足を止める。鋭く振り上げられる緑呂の右手に、箆也は身構える間もなく、大きく目を見開くだけであった。

「“碎”……！」

「うううっ……！」

突き出された緑呂の右手が、勢いよく箆也の胸部を貫く。

「うあ……ああ……」

苦しげに漏れる、箆也の声。

「これで……」

目の前の箆也を見つめ、緑呂がどこか安堵したような声を発する。

「これで……我らは……」

「“霞め”」

「なっ……！？」

一つの言葉が落ちると同時に、緑呂が貫いたはずの箆也の体が、徐々に霞み、消えていく。

「ぞ、残像っ……！？」

「か……」

「うっ……！」

消えた箆也に、焦っていた緑呂が、すぐ背後から聞こえてくる声に、振り返ろうと体を動かす。

「“刈れ”……！」

「クっ……！」

だが緑呂が振り返り切る前に、緑呂のすぐ後ろへと立った箆也は、緑呂に鎌を振り切った。

「うわあああああっ！」

箆也の一閃に斬り裂かれ、緑呂が勢いよく吹き飛ばされる。

「ううう……！」

壁へと打ちつけられ、床に崩れ落ちる緑呂。その身につけていた鎧の右半分が崩れ落ち、鎧の奥まで届いた傷口から、赤い血が滴り落ちた。

Word 42 あラタナル闇 (4)

「グっ…うう…」

倒れた緑呂が、床を両手で強く押し、何とか起き上がろうと上半身を起こす。

「このっ…」

顔を上げた緑呂が、何とか上げた左手を、前方に立つ箆也へと向ける。

「破”…！」

緑呂の左手から放たれる、巨大な衝撃波。

「……………」

箆也は迫り来る衝撃波を、落ち着いた表情で見つめ、そっと鎌を振り上げた。

「“返せ”^{かえ}」

「うっ…！」

振り下ろされた鎌により、あっさりと弾き返って来る衝撃波に、

緑呂は大きく目を見開いた。

「あああああっ…！」

立ち上がれてすらいなかった緑呂に、さらに自らの衝撃波が降り注ぎ、緑呂は再び壁へと打ちつけられる。あまりに強い衝撃に、少し壁が崩れ落ちた後、緑呂は力なく、その場に倒れ込んだ。

「ううう…う…」

もうほぼ原型のない、緑呂の身につけていた鎧兜。唯一残った仮面の向こうから、緑呂が声にならない声を漏らす。

「これほどまで、とはな…」

緑呂がどこか、自嘲するような声を発する。

「我も…ここまで、か…」

——バアアアアン！

「……っ」

緑呂が諦めるように弱々しく、言葉を発したその時であった。遠くの、空間のさらに奥の方から、大きな衝撃音が響いてきて、緑呂たちの居る空間までもを、かすかに揺らす。

「戦いの音…？」

その衝撃音に気づき、箆也がゆっくりと振り返る。

「ここまで響いてくるとは…余程、激しい戦いが行われているのか…」

「……………」

箆也が表情を曇らせる中、倒れたまま、じっと床を見つめた緑呂が、何やら考え込むように黙り込む。

——人間たちが、悪意ある言葉を言わなくなればいいのに……

「灰示…」

——人間どものすべての言葉を奪い去り、俺たちは、この“痛み”から解放される……

「伍黄…」

かつての友の言葉を思い出し、その友の名を呟き、緑呂は握り締める拳に、さらに力を入れる。震えるその拳からは、強く握られ過ぎたのか、血が滲み始めていた。

「まだ、終われぬよな…我らの、数百年、はっ…」

言葉を発しながら、ゆっくりと、徐々に体を起こしていく緑呂。

「そうだ…まだ、終わらせるわけにはいかんっ…！」

「……っ」

勢いよく立ち上がる緑呂に、箆也が驚いたように眉をひそめる。

「呼び、起こせ」…！！」

今までのどの言葉よりも強く、その言葉が放たれたその瞬間、立ち上がった緑呂の周囲から、真っ黒い光が柱のようにき上げられ、そのまま天井まで伸びていく。

「あれは…」

その黒い光を見上げ、表情を曇らせる籠也。

「忌の力を…増幅させているのか…」

そう呟き、籠也が鋭い瞳を見せる。

「はあっ…はあっ…」

黒い光の中心で、大きく息を切らしながら、言玉を握り締めたままの右手を振り上げる緑呂。

「すべての“痛み”よ…」

乱れた呼吸の中、緑呂がそっと、声を落とす。

「我に力をつ…!“^{サイ}砕”…！」

周囲を噴き上げていた黒い光が、緑呂の右手へと集約し、右手に覆いかぶさるようにして、刃の形を作っていく。黒い光で形成された刃を、緑呂は勢いよく振り上げた。

「はあああああっ…！」

「……っ！」

刃を振り上げ、まっすぐに駆け込んでくる緑呂に、籠也は少し驚いたような顔を見せる。

「正面攻撃かっ…」

そう言いながら、鎌を振り上げる籠也。

「駆け…！……っ」

言葉を放ち、その場から去ろうとした籠也であったが、ふと何かが過ぎった様子で言葉を止め、緑呂の向かってくるその場に残った。

「来いっ…！」

緑呂の刃を受け止める姿勢を全開に示し、籠也が鋭く鎌を構える。

「はああああああっ！」

籠也へと勢いよく、刃を振り切る緑呂。

『……っ！』

箆也の鎌と、緑呂の黒い刃が、正面から強くぶつかり合う。

「クっ…！」

「グウ…！ウウ…！」

互いに一步も譲らない、力勝負をする箆也と緑呂。武器を伝ってかかる、相手の重みに、二人はそれぞれに表情をしかめた。

「グウウウ…！」

「……っ」

力の攻防が続く中、すぐ目の前にある緑呂の体から、徐々に漏れ始めている、黒い影のようなものに気付き、箆也はそつと眉をひそめた。

「あなたは…」

「何も言うな…」

「……っ」

言葉を投げかけようとした箆也であったが、その声は、緑呂によって遮られてしまった。緑呂のどこか悟ったような声に、箆也が表情を曇らせる。

「この世界にとって…我らは、何であつたのだろうか…」

「えっ…？」

不意に放たれる問いかけに、箆也が戸惑うように首を傾げる。

「生まれたその瞬間から…“痛み”に魘され、眠りも出来ずに…ただ苦しいだけの時間を生きて来た…」

武器を交えたまま、緑呂が物静かな声を続ける。

「その苦しみから解放されたいと願っても…行き着く先は、消滅のみ…」

「……っ」

緑呂の言葉を至近距離で聞きながら、箆也がそつと目を細める。

「世界にとって…我らの存在は、何かに成り得たのだろうか…」

緑呂が刃を構えたまま、深く俯く。

「それとも…何でもなかったんだろうか…」

「………」

俯いた緑呂を、箆也が細めた瞳のまま、まっすぐに見つめる。

「さあな」

緑呂の問いかけに対し、箆也は素っ気なく、とても短い答えのみを放った。

「僕はまだ、生まれてたったの十六年しか経っていない人間だ」

箆也が素っ気ない声を、緑呂へと向ける。

「長い時を生きて来たあなたたちのことも、世界のことも、到底わかりはしない」

答えではない言葉を、緑呂へと向ける箆也。

「だから、今の僕が、あなたに出来ることがあるとすれば、一つ」

箆也の瞳が、強く光る。

「もう二度と、あなたたちのような存在を生み出さないと、誓うことだけだ」

「……っ」

箆也の言葉に、俯いていた緑呂が、その顔をかすかに動かす。

「それくらいだ」

「………」

その言葉を聞きながら、緑呂が刃を構えている方ではない、下に下ろしてある左手を、そっと握り締めた。

「本当に不思議なものだ…言葉とは…」

穏やかに流れる、緑呂の声。

「それだけで十分と、思わせるのだから…」

ゆっくりと顔を上げた緑呂が、刃に込められていた力を、少しずつ抜いていく。

「……っ」

かかる重さがなくなっていくのを感じながら、箆也はゆっくりと鎌を振り上げた。

「か…」

箆也が大きく、口を開く。

「刈^かれ”…！」

「……っ」

放たれる言葉に、そっと目を細める緑呂。

——パアアアン！

「ううううっ…！」

振り下ろされた箆也の鎌が、真正面から、緑呂の体を斬り裂いた。血飛沫が舞う中、ゆっくりと、緑呂が後方へと倒れ込んでいく。

「あああ…あっ…」

右手を覆っていた黒光の刃が掻き消える中、緑呂は力なく、床へと倒れ込んだ。

「はあっ…はあっ…」

箆也が少し息を乱しながら、構えていた鎌を下ろす。

「見事であった…若き五十音士よ…」

倒れたまま、箆也を見上げ、緑呂がそっと声を発する。

「最後に…其方と戦えて良かったよ…」

「緑呂…」

緑呂の言葉に、箆也が少し目を細める。

「これで我も…」

先程の箆也の攻撃がかすめていたのか、緑呂の顔を覆っていた鉄仮面に、勢いよくヒビが入る。

「やっ…と…逝ける…」

ヒビにより、真っ二つに割れた仮面の向こうから現れたのは、そっと微笑む、燃えるように真っ赤な髪、まだ若い青年の顔であった。色白の肌に、美しく整った顔立ちはどこか神秘的で、何より、鋭い金色の瞳が印象的であった。

「緑…んっ…？」

やっと素顔をさらした緑呂を見た途端に、箆也が眉をひそめる。

「ん…？…どうした？…五十音っ…」

「誰、だ…？…誰だ…？…あなたは…」

「何…？」

問いかける籠也に、緑呂も戸惑いの声を発した。

同刻、韻本部。

「ただいま戻りましたあゝ、言姫様っ」

軽い口調でそう言いながら、韻本部の和音の部屋へとやって来たのは、派手な桃色髪 of 青年。始忌の一人、桃真に取り憑かれていた、というよりは取り憑かれている振りをしていた、あの青年であった。桃真が消え去った後、アジトを出て、韻本部へとやって来たようである。

「ご苦労さまでした」

扉の方を振り返った和音が、青年を出迎える。

「毛守^{ももり}」、百井桃雪^{ももいもゆき}さん」

「いいええゝ、お安いご用ですよ」

名を呼ばれた桃雪は、和音へと、気のいい笑みを向ける。

「と、言いたいところですけどお、今回はさすがにきつかったですねえゝ」

桃雪が途端に、顔をしかめる。

「真っ暗で陰気なところで、ずうーっと忌ごっこしてなきゃだったし、言姫様の命令じゃなきゃ、絶対に断ってますよおゝ」

「それは、申し訳ありませんでした」

「うわあゝ、心こもってない感じっ」

笑顔で謝罪する和音に、桃雪も少し楽しげに笑みを零す。

「まあ、無事に終わったからいいですけどねえ」

桃雪が首を回しながら、気楽に答える。

「さっ、潜入調査してる間のこと、とっとと報告しちゃっていいですかあゝ？」

「ええ。ですが、その前に一つ、私からも報告があります」

「へっ？」

和音の言葉に、桃雪が目を丸くする。

「報告？」

「今朝、芽得町^{めえる}というところで、重傷の一人の青年が発見されました」

首を傾げる桃雪に、和音が言葉を続ける。

「身元を調べたところ、五十音士“与守^{よもり}”、横川鎧であったそうですわ」

「……っ」

和音のその言葉に、桃雪の表情が、険しく変わる。

「どういう、ことですか？ 与守は確かに、始忌に乗っ取られてたはず……」

「ええ、ですから……」

答える和音が、鋭い瞳を見せる。

「あなたの他にも、始忌の中に潜入された方が、いらっしゃったようですわね……」

「潜入……緑呂に……？」

和音の言葉に、そっと俯く桃雪。

「一体、誰が……？」

「な、何を……言っているんだ……？ 五十音士……」

戸惑った声を、箆也へと向ける緑呂。

「我は、始忌で……」

「あなたじゃない。あなたが乗っ取っている、その人間のことだ」「人間の……？」

箆也の言葉に、緑呂が少し確かめるように、自らの手を見る。

「今更、何を言う？ 我が乗っ取ったのは、与守の五十音士で……」

「あの女教師から、与守の素顔の写真を見せてもらった。だがその

顔は、与守とはまるで別人だ」

「何っ…？」

緑呂がさらに戸惑い、眉間に皺を寄せる。

「それに…」

まだ、言葉を付け加える簞也。

「始忌に取り憑かれた人間は皆、赤い瞳を持っていた…だが、あなたの瞳は、赤じゃない」

「えっ…？」

緑呂の赤色ではない、金色の瞳が開かれた、その時であった。

「うううっ…！」

緑呂が急に苦しげに声をあげ、右手で頭を抱える。

「な、何だっ…？急に…」

途切れた声を、発する緑呂。

「緑呂っ…？」

突然、様子の変わった緑呂を、戸惑うように見つめる簞也。

「おいっ」

「頭に…何かがっ…」

簞也が呼びかける中、緑呂は徐々にその表情を歪めていく。

「何かが…入り込んでくるっ…！」

「えっ…？」

緑呂の言葉に、眉をひそめる簞也。

「どういうことだ？一体、何だとい…」

「ダメだ！もう…！掻き消されるっ…！！！」

「ろ、緑っ…！」

「あああああああっ…！！！」

「…っ！」

激しい叫び声をあげた緑呂の体から、黒い霧状の塊が、勢いよく溢れ出ていく。それは、忌である緑呂の、本来の姿であった。
くイ、イツキっ…ハイジっ…>

黒い霧が、まるで追い求めるように、その手ともわからない体の

一部を伸ばす。

<グア：！アアアアアッ：！！！>

人の体から吐き出された黒い霧の塊は、激しい断末魔を残し、掻き消えるようにして、その存在をこの世界から無くしていった。

「あっ…」

消えていく黒い影を、茫然を見つめる箆也。

「……緑呂が、死んだ…」

先程まで戦っていたはずの緑呂が、突如として消え去り、箆也は動揺した表情を見せる。

「一体…」

「驚いたな」

「……っ」

啞然とした様子で、霧の掻き消えた空中を見つめていた箆也が、後方から聞こえてくる、緑呂のものとは別の声に気付き、目を見開いたまま、どこか恐る恐る、ゆっくりと振り返った。

「いくら、他人の言葉しか使えなかったとはいえ、俺がここまで苦戦するとは、思ってもみなかったよ」

「あっ…」

箆也の振り返った先に立っていたのは、赤い髪に、鋭い金色の瞳の青年。

「あなた、は…」

「ふうー…」

箆也が困惑した視線を向ける中、少し息をついたその青年が、床に落ちていた白色の言玉を拾い上げ、右手の中で軽く転がす。

「^あ明かせ」…

「えっ…？」

そつと落とされたその言葉に、大きく目を見開く箆也。言葉が落ちると、青年の体に刻まれていた、箆也がつけたはずの傷の数々があつという間に消え去り、青年の右手の中の言玉は、その色を白から、真っ赤へと変化させた。

「あ、“明かせ”…？」

青年が放った言葉を、籠也が戸惑うように繰り返す。

「あ”…？」

混乱するように、表情を曇らせる籠也。

「あ”の、言葉…？」

「……っ」

戸惑う籠也を前に、青年はどこか冷たい微笑みを浮かべた。

Word. 43 灰示ト保 (1)

同じ姿であったなら、同じ形であったなら、同じ存在であったなら、こんなにも興味を持つことなんて、きつと無かったと思う。

違う姿をしていたから、違う形を保っていたから、違う存在であったから、きつと惹かれたんだ。

僕は、人間に。

「おはよう」

振り合える、手がある。

「元気だった？」

歩み寄れる、足がある。

「そういえば、昨日ねえっ…」

言葉を交わせる、口がある。

黒い影の塊でしかない僕には、人間を形作るすべてのものが羨ましくて、ただ憧れて、ただ見つめていた。何時間も何時間も、飽きることなく、見つめ続けていた。

「なんで、そういうこと言うの!？」

「うるさいわね! あんたなんか、居なくなればいいのよ!」

でも人間たちは、他人を傷つける言葉を、よく口にした。

「……どうして、傷つけることばかり、言うんだろう…」

取り合える手も、駆け寄れる足も、優しい言葉を放つことの出来る口も、すべてを持っているのに、人間たちはどうして、傷つける言葉ばかりを、口にするのか。

——痛い…痛い……

今日も聞こえてくる、声。

どうして人は、“痛み”ばかりを抱えて生きているのか。

「人間が…人を傷つける言葉を、言わなくなればいいのに…」

小さな、けれど叶うことのない、望みを持った……――――

始忌アジト、深部。灰示 vs 伍黄^{イツキ}。

「……………」

伍黄と向き合っていた灰示が、かすかにその表情を動かす。

「……緑呂^{ロクロ}が死んだよ、伍黄…」

少し天を見上げた後、再び正面の伍黄を見て、そっと呟く灰示。

このアジトの少し離れた場所で、かつて、ずっと共に居た仲間の気配が失われたことを、灰示は察したのである。

「ああ、わかっている」

伍黄も察したらしく、当然のように答えた。

「五十音士を前に、あっさりと消されたか。緑呂も他の使えない奴等と、大して変わりはないかったな」

「……っ」

冷たい笑みを浮かべる伍黄に、灰示がそっと眉をひそめる。

「何百年もの時を共に生きてきたっていうのに、随分な言い方だね…」

「時は、平気で人を裏切る」

伍黄がはつきりとした口調で、言い放つ。

「長い、長すぎるほどの時は、決して、俺とお前の道を、一本にはしてくれなかっただろう？」

その問いかけに、灰示は黙ったままだった。

「緑呂も消えた。始まりの忌、始忌も、残るは俺とお前の二人だけ

だな」

「そうだね…」

今度の言葉には、そっと頷く灰示。

「そして、君も消える…」

ゆっくりと言葉を発し、灰示が穏やかに笑う。

「今、ここで…」

「俺は消えないさ」

灰示へと、微笑みを返す伍黄。

「俺が消える時は、人の言葉が消える時だ」

伍黄の笑みが、自信を持って光る。

「今、ここで消えるのはお前だよ、灰示」

そう言った伍黄は、鋭い瞳を見せ、右手に持っていた大きな刀を、再び構えた。

「……………」

刀を構えた伍黄を見つめながら、そっと目を細める灰示。

「同じ種として生まれながら…ささいな相違で殺し合う…」

灰示の声が、少し寂しげに響く。

「僕らまるで…人間みたいだね。伍黄…」

楽しむような、哀しむような、どちらとも取れない笑みを浮かべた灰示は、右手から数本の針を伸ばし、刀を構えた伍黄と、真正面から向き合った。

「そうかも、知れないな…」

認めるようにそっと呟いた後、伍黄は勢いよく刀を振り上げた。

「“焼^やけ”！」

振り下ろされた伍黄の刀から、激しく逆巻く、赤い炎の塊が放たれる。

「……………」

向かってくる炎へと、数本の針を投げ放つ灰示。

「“外^{はず}れろ”」

灰示の言葉を受けた針が炎に突き刺さったその瞬間、炎は大きく

軌道を変え、天井へと伸びて行って、やがてはその暗がりの向こうへと消えていく。

「放^{はな}て”」

少しの間を置くこともなく、すぐに針をもう一本、伍黄へと放つ灰示。

「こんなものっ」

向かってくる細長い針のたかが一本を見つめ、伍黄がどこか馬鹿にするように笑みを落とした後、素早く刀を振り上げた。

「叩き落してやる」

“倍^{ばい}せ”」

「何っ？」

灰示がさらに言葉を放つと、伍黄へと向かって来ていたその一本の針が、倍へ、また倍へと、どんどんその数を増やし、避ける隙間もない程の無数の針山となって、伍黄へと迫って来る。

「濁音言葉か：チっ：」

表情をしかめ、舌打ちを鳴らしながらも、振り上げた刀を勢いよく振り下ろす伍黄。

「“焼^やけ落ちろ”：！」

伍黄が大きな声を発すると、向かって来ていた無数の針が、一本残らず、突然燃え始め、黒い炭となって、力なく床へと落ちた。

「この程度でっ：」

“破^は”」

「なっ：！」

余裕の笑みを浮かべ、刀を上げようとした伍黄へと、さらに向かってくるのは巨大な衝撃波。目の前に迫る力の塊に、伍黄が思わず目を見開く。

「やっ：」

大きく口を開き、必死に刀を突き出す伍黄。

“破^{やぶ}れ”：！」

伍黄が言葉を発すると、刀の先から真っ赤な強い光が放たれ、灰

示の向けた衝撃波を、正面から見事に打ち砕いた。

「ハアっ…ハアっ…」

刀を突き出した態勢のまま、伍黄が少し息を乱す。

「もう息切れしているのかい…？」

「……っ」

前方から挑戦的に問いかけてくる灰示に、伍黄が思わず表情をかめる。

「今の言葉…ただの、俺たち忌の言葉ではないな…」

伍黄がどこか、探るように言葉を発する。

「忌の言葉を、五十音の“は”の力で強化してある…忌と五十音士、どちらの力も持つお前、独自の言葉だ」

「だったら…？何…？」

「だったら…」

問いかける灰示に対し、伍黄がゆっくりと口を開く。

「今の、この俺にも出来るということだ…！“矢^ヤ”！」

「……っ！」

振り下ろされた刀から放たれた炎が、空中で巨大な一本の矢を形作って、真正面から灰示へと突っ込んでいく。

「“阻^{はば}め”」

前方に赤い光の膜を形成し、向かって来た矢を受け止める灰示。

「あっ…」

だが矢はその膜に徐々に侵入し、さらに進んで、貫こうとしている。

「阻みきれない…」

眉をひそめながら、灰示が矢へと針を放つ。

「“弾^{はじ}け”…！」

針を矢の先端へとぶつけ、言葉を発する灰示。すると矢は大きく弾かれ、灰示の右方の壁へと当たって、炎の欠片となりながら崩れ落ちた。

「“焼^やけ”！」

「うっ…！」

矢を防いだばかりの灰示へと、前方からさらに炎が差し迫る。

「は、“払え”…！」

急いで針を放ち、向かって来た炎を、何とか払い落す灰示。

「ハア…ハア…」

連続して言葉を使ったからか、灰示が小さく肩を揺らしながら、その息をかすかに乱す。

「もう息切れか？」

「……………」

先程、灰示が問いかけた挑発と同じ言葉を投げかける伍黄に、灰示の表情が曇る。

「“放て”」

だが灰示はすぐに態勢を立て直し、伍黄へと新たな針を向けた。

「あの目…」

向かってくる針の、その後方に見える灰示を見つめ、伍黄が少し目を細める。

「また、何か企んでいる目だな」

焦って刀を振るうことはせず、灰示が次に放つ言葉を待つように、静かに刀を構える伍黄。

「は…」

灰示が次の言葉を発しようと、口を開く。

「“爆ぜ…！あ…”」

「……………」

言葉を発しようとしたその途中、伍黄のすぐ横へと視線を逸らし、何かに気付いたような表情を見せる灰示に、向き合っていた伍黄が少し眉をひそめる。

「ば、“倍せ”…！」

「ば…？」

明らかに言葉を言い直した灰示に、戸惑いの表情を見せる伍黄。

伍黄の前で一本の針は、先程と同じようにその数を無数へと増やす。

「同じ言葉などっ…」

向かってくる無数の針を見やりながら、伍黄が鋭く刀を振り上げる。

「俺に通じるか…!“^や焼き落とせ”！」

伍黄が言葉を発し、刀を振るうと、灰示の向けた無数の針は、焼け焦げた炭となって床へと落ちた。

「何故、言葉を変えたりなど…ん…？」

針を防いだ伍黄が、先程の灰示の行動を不可解に思い、灰示が一瞬、目を逸らした方向へと視線を持っていく。その先で何か見つけたのか、伍黄が少し眉を動かした。

「成程…」

小さく、そして冷たい笑みを零す伍黄。

「ふうっ…」

焼け落ちた針を見下ろしながら、少し表情を曇らせた後、灰示がまた新しく針を構え直す。

「は…」

「随分と、ささいなものにまで気を回すんだな」

「……っ」

針を投げる態勢を取り、言葉を放とうとした灰示が、伍黄を見た途端、目を見開く。

「ええっ？ 灰示」

「うう…うっ…」

灰示へと笑みを向けた伍黄が、刀を持っていない方の手、左手で首の後ろを掴み、一人の人間を高々と空中へと持ちあげている。苦しげな声を漏らすその人間は、先程まで存在していた始忌の一人、萌芽ホウガが取り憑いていた、元五十音士であろう人間の青年であった。気を失っているらしく、深く瞳は閉じている。

「こいつが俺の近くに居たから、巻き添えにしなければいけないよう、言葉を変えたのだろうか？」

「……………」

伍黄の問いかけに答えようとはせず、灰示は険しい表情を作る。

「……別に」

しばらく間を置いて、やっと言葉を発する灰示。

「何となく気分を変えたただだよ。そんな人間、関係ないな……」

「そうか……」

微笑んで答える灰示に、伍黄も楽しげな笑みで頷く。

「ならば、この人間がどうなっても構わない、ということだな……？」

「……っ」

刃先を人間へと向ける伍黄に、灰示が一気に険しい表情となる。

「“焼き尽く……”

「“挟め”……！」

伍黄の言葉を勢いよく遮り、灰示が素早く二本の針を放ち、伍黄へと向ける。

「んっ……」

二本の針が伍黄の刀を挟み込み、萌芽であった青年へと突き出されようとしていた刃先の動きを止める。動かぬ刀に、表情をしかめる伍黄。

「あくまで、人間の味方をするか……」

灰示の取ったその行動に、伍黄は低い声を落とす。

「灰示……」

「“弾っ……”

「“破”……！」

「なっ……！」

伍黄が青年の背中越しに衝撃波を放ち、灰示へと向ける。気を失っている青年の体を先頭に、迫り来る衝撃波に、灰示が思わず驚いた表情を見せる。

「言葉を碎けば、奴も死ぬ。さあ、どうする？」

両手を広げ、どこか楽しげに問いかける伍黄。

「灰示」

「……………」

灰示は驚いた表情をすぐさま、落ち着きの表情へと戻して、右手に素早く一本の針を構え、その針を、衝撃波の先頭に居る青年へ向けて投げ放った。

「は…」

「砕くことを選んだか…」

口を開いた灰示を見つめ、伍黄が笑う。

「“運^{はこ}べ”…！」

針が青年の体へと突き刺さると、青年の体を赤い光が包み込み、その光が上空へと目にも留らぬ速さで舞い上がり、その場から去っていく。

「……………」

青年は去ったが、残った衝撃波はまっすぐに灰示へと降り注ぐ。もう針を投げる時間すらない灰示は、静かに衝撃波を待った。

「うううう…！」

「何っ…！？」

衝撃波を喰らう灰示の姿に、驚きの表情を見せる伍黄。衝撃波を直撃した灰示は、後方の壁際まで吹き飛ばされ、壁に強く背中を打ちつける。

「ううう…うっ…」

苦しい声漏らし、その場にしゃがみ込む灰示。

「……………」

そんな灰示の様子を見つめながら、伍黄はひどく困惑した表情を見せていた。

「自らが衝撃波を喰らってまで…人間を助けた…？」

戸惑う伍黄が、少し頭を抱える。

「それも、取り憑いているあの人間でも何でもない、関係のない人間を…」

言葉を口にすればするほど、伍黄の戸惑いは深くなっていく。

「何故だ、灰示」

問いながら、刀を振り上げる伍黄。

「お前は何故、そこまで人間を…！」

伍黄の刀が、高々と振り上げられる。

「“八^やつ裂け”…！」

「うっ…」

振り下ろされた伍黄の刀から放たれる、強く速い赤色の光に、しやがみ込んだまま、顔だけを上げた灰示は、厳しい表情を見せる。

「クっ…！」

目の前に迫る光に、灰示が強く唇を噛み締めた。

「立てる…？」

「は、はい…」

囁の手を借りながら、ゆっくりとその場で立ち上がる弓。始忌、虹乃から解放されはしたが、弓は囁との戦闘により虹乃が負った傷を、そのまま受け継いでおり、相当にボロボロの状態であった。

「ごめんなさいね…」

「囁さんが謝ることじゃないです」

申し訳なさそうに謝る囁に、弓が穏やかな笑顔を向ける。

「むしろ、お礼を言わなきゃ…」

「左^{さむら}守！」

『……っ』

後方から聞こえてくる、威勢のいい女性の声に、囁と弓が同時に振り返る。

「左^{さむら}守！」

「衣^えの神…」

二人のもとへと駆けてくるのは、エリザであった。エリザの姿を見た囁が、少し驚いたように目を開く。

「確か名前は…ザベス…」

「エリザよ！」

アヒルと同じように名を間違える囁に、エリザが勢いよく怒鳴りあげる。

「無事？　って、あ！　君！」

「へっ？」

エリザに強く指を刺され、弓が目を丸くする。

「始忌…！？」

「えっ…！？」

緑色に輝く右足を振り上げるエリザが、焦ったような声をあげる弓。

「わ、わわわ私はあのっ…！」

「彼女は大丈夫…もう解放されています…」

「なあ…んだ、そうなのっ」

「はあ…怖かった…」

エリザが足を下ろすと、弓はホッとした様子で胸を撫で下ろした。
「ったく、人に雑魚ばっか相手にさせてえ。獲物の一匹くらい、残しときなさいよねえ」

「神とは思えない発言ね…フッフ…」

文句を垂れるエリザに、囁が不気味に微笑む。

「ひどい怪我じゃない。とりあえず、とっととアジトの外へっ…」

「あ、いえっ…！」

「えっ？」

外へと連れ出そうとしたエリザの手を、弓が思わず拒む。逃れていった弓の手を見つめ、エリザは戸惑うように振り向いた。

「あ、あの、その…私…」

「行きましよう…」

弓の言葉を補完するように、囁がそつと言葉を発する。

「大切な仲間を、迎えに行かなくちゃ…」

「は、はいっ…！」

囁の言葉に、弓は大きな笑顔で頷いた。

「ううゝ、怖いなあ」

紺平は一人、どこまでも暗いアジト内の廊下を、不安げな表情で何度も見回しながら、ゆっくりとその足を進めていた。何かから守るように、両手で自分の体を抱いている。

「三手に分かれた方が、探すの早いっていうのはわかるけど…檻也くんもエリザさんも、俺が新人五十音士だって、気付いてないよね」

ボヤクように、言葉を続ける紺平。

「ああゝ、敵がいっぱい出てきちゃったら、どうしょ。あれ？」

不安げに言葉を発していた紺平が、ふと前方の暗がり到人影のよ
うなものを見つけ、その足を止める。

「ま、まさか始忌とかいうっ…!？」

「……………」

「あっ」

焦りの表情を見せ、身構えようとした紺平であったが、思わず取り出した言玉の光により、前方の人間が照らされ、その姿が確認出来る、すぐに言玉を持つ手を引いた。

「奈々瀬さん!」

思わず笑顔を作り、前方へと駆けこんでいく紺平。

「良かったあゝ無事だったんだ!大丈夫?怪我とかしてない?」

紺平が色々と声を掛けながら、前方へと歩を進めていく。

「奈々瀬さっ…奈々瀬、さん…?」

まったく返って来ない声に、紺平が戸惑うように首を傾げる。

「奈々瀬、さん…」

「……………」

紺平の前方には、天を仰いだまま茫然と座り込んでいる七架の姿があった。

Word. 43 灰示ト保 (2)

「“あ”の、言葉…？」

「……………」

緑呂を圧倒した箆也の前へとその姿を明らかにしたのは、五十音“あ”の言葉を口にした、謎の男であった。戸惑いきった表情を見せる箆也を見つめ、その男はどこか冷たく微笑む。

「どういう、ことだ…？あなたは、一体…？」

「いずれ、すべてが明かされるよ」

問いかける箆也に、男はゆっくりとした口調で答える。

「その時にまた、俺とお前は会うことになる」

すべてを見透かすような、どこまでも透き通っていて、何よりも冷たい、その金色の瞳。

「そして、お前の神とも…」

「……………」

神の名が出ると、箆也は眉間に強く皺を寄せた。

「じゃあ…」

男がそっと、箆也と同じ赤い言玉を持った右手を振り上げる。

「また出会う、その時まで…」

「あっ…！」

赤い光に包まれ、その姿を消していく男に、箆也が焦ったように身を乗り出す。

「ま、待っ…！」

「箆也！」

「……………」

男へと伸ばそうとした箆也の手は、横から入って来た箆也の名を呼ぶ声に、思わず止められた。

「箆也…！」

「檻也…？」

遠い暗がりの廊下から、その場へと駆け込んできたのは、檻也であつた。檻也の姿を捉えた箆也が、戸惑つたように首を傾げる。

「無事か……!？」

「何故、檻也がここに……あつ……!」

檻也へと問いかけようとした箆也が、ハッと気付いた様子で、再び前方を振り向く。

「あつ……」

だが、そこに、あの男の姿はなかった。

「……? どうかしたのか？」

「いやっ……」

不思議そうに問いかける檻也に、箆也は素直に頷くことはせず、咄嗟に否定してしまった。自身の神と同じ言葉を使ったあの男の存在を、今はまだ明かしてはならないと、咄嗟にそう、思つたのである。

「それより、檻也が何故ここに? 言ノ葉は？」

「言ノ葉の忌は一掃された」

問いかける箆也へ、檻也が問われることをわかつていたかのように、冷静に言葉を返す。

「波城灰示が言ノ葉を、人の言葉を守つたんだ」

「……っ」

檻也の言葉に、箆也が眉をひそめる。

——この先で、我のかつての友が二人、戦つておる……——

緑呂の言葉から、灰示が伍黄と戦っていることは予想がついていた。だがそう聞いてはいても、かつて戦つたあの男が、人間の味方をしているなど、どうしても想像出来なかった。

「波城、灰示が……」

「ああ」

ゆっくりとその名を繰り返した箆也に、檻也が強く頷きかける。

「……っ」

箆也が顔を上げ、緑呂の指差した先を見つめる。

「灰示……」

名を呼んだ箆也は、まるで仲間を気遣うような、不安げな表情を見せていた。

「ううう……うっ……うう……」

斬り裂かれた全身から、ポタポタと赤い血を滴り落とさせながら、灰示が必死に踏ん張り、何とか倒れていた体を起き上がらせる。無理な動きに、体中の傷から、さらに血が流れ落ち、灰示の表情は大きく歪んだ。

——“痛い”……“痛い”……——

「……………」

頭の中に響き渡る自らの声に、灰示が少し目を細める。

「何故だ……?」

「……っ」

前方から聞こえてくる問いかけに、灰示は俯けていた顔を、ゆっくりと上げた。

「何故だ? 灰示……」

灰示の血であろう、赤い液体を滴らせた刀を右手に、伍黄は戸惑いの表情で、まっすぐに灰示を見つめた。

「何故、お前はそうまでして……人間の味方をする……?」

伍黄の静かな問いかけが、灰示へと向けられる。

「思えば、お前は昔からそうだった……人間に興味を持ち、よく人間を見つめに行っていた……」

伍黄の言葉に、灰示がかすかに下を向く。

「何故だ？」

改めて、問いかける伍黄。

「人間たちがお前に、一体何をくれた？」

戸惑う伍黄の、問いかけが続く。

「響き割れる声を、眠れぬ夜を、引き裂かれる胸を、絶望の日々をくれただけだろう？」

伍黄の続く声が、かすかに震える。

「奴等は何も与えてなどくれなかっただろう！？ “痛み” 以外、何もっ……！」

徐々に伍黄の声が、大きくなっていく。

「なのに何故、お前はそんなにも人間の味方をするんだ！？ 灰示……！」

「……っ」

強く問いかける伍黄を見つめ、灰示がそっと目を細める。

——君も……“痛い” の……？——

脳裏を過ぎる、初めて差し伸べられた、小さな小さな手。

「くだらない、ことだよ……」

そっと答えながら、灰示がその場でゆっくりと立ち上がる。

「本当に、くだらない……だから……」

微笑んだ灰示が、その赤い瞳で伍黄を見つめる。

「君にはきつと……何百年生きたって一生、理解出来ないっ……」

「クっ……！」

挑戦的になる灰示の笑みに、伍黄が大きくその表情を歪め、右手の刀を強く振り上げる。

「“焼^やけ” ！」

「……っ」

伍黄の繰り出す炎に、灰示も血だらけの手を振り上げ、真っ赤な針を構える。

「放^{はな}て”…！」

炎へ向け、針を投げ放つ灰示。二人の丁度、中間地点で、針の纏った真っ赤な光と、真っ赤な炎が勢いよくぶつかり合い、どこまでも暗かったはずの空間を一気に照らし出す。

“破^へ”…！」

灰示がぶつかり合っている力の後方から、さらに、衝撃波を放つ。ぶつかり合っていた力は、その衝撃波に押し出され、巻き込まれるような形で一つとなり、伍黄へと向かっていく。

「や…」

避ける素振りは見せず、冷静に口を開く伍黄。

“瘦^やせろ”…！」

伍黄が言葉を発すると、伍黄へと向かっていた三つものの力の塊は徐々にその規模を縮小し、速度も落としていく。

「力の弱体化…？」

小さくなっていく力を見つめ、灰示が眉をひそめる。

“焼^やき払え”…！」

弱々しくなった小さな力の残骸を、伍黄が刀を一振りして、あっという間に掻き消す。

“八^やつ裂け”…！」

さらに刀を振り、灰示へと赤い光の塊を放つ伍黄。

“奔^{はし}れ”…！」

灰示が言葉を発し、目にも留らぬ速さでその場を移動して、伍黄の放った言葉から逃れる。駆け出した灰示は、逃れるだけでなく、素早く新たな針を構え、伍黄へと投げ放った。

“焼^やけ”…！」

向かってくる針を、焼き落そうと刀を振るう伍黄。真っ赤な炎が、灰示の針を巻き込んでいく。

“爆^はぜろ”…！」

「なっ…！」

針が炎に包まれたその瞬間、針は周囲に弾け飛び、勢いよく爆発

した。

「うがあああっ…！」

炎も巻き込んで、その勢力を増した爆発をもろに受け、後方へと吹き飛ばされる伍黄。暗がりの地面に、伍黄の体が崩れ落ちる。

「ハア…ハア…」

右手に新しい針を出しながら、灰示が額に流れる汗を拭う。傷だらけの全身では、一つの言葉を使うだけでも、相当の負担がかかっていた。

「ううう…うっ…」

爆発に巻き込まれ、体のところどころに傷を負った伍黄が、苦しげな声を漏らしながら、ゆっくりとその体を起き上がらせる。負った傷からは、赤い血が流れ落ちる。

——“痛い”…“痛い”……

「五月蠅ひるつかいっ…」

頭に響く、もう数えきれないほどに聞いて来たその言葉に、伍黄が声を震わせる。

「五月蠅ひるつかいいいっ…!!」

溢れる怒りをぶつけるように、叫びあげ、伍黄が鋭く刀を突き出す。

「“夜光やこう”…！」

「…っ！」

突き出された伍黄の刀から、飛び出してくる高速の光に気付き、

灰示が大きく目を見開く。

「熟語イデオム…!! ううううっ…！」

灰示に考える間を与えることもなく、その高速の光は、あっさりと灰示の腹部を貫いた。灰示の見開かれていた瞳が、さらに大きく開くと、今度はゆっくりとその瞳が細められていく。

「あ…うあ…」

声にならない声を落としながら、血の流れ落ちる腹部を抱え込み、その場にしゃがみ込んでいく灰示。

「うううっ…！」

両膝を床についた灰示が、堪えるように、首を項垂れる。

「苦しいか？灰示…」

刀を軽く振り切って、伍黄がどこか単調に、灰示へと問いかける。

「それが、“痛み”だ」

「……っ」

放たれる言葉に、俯いたままの灰示が、少し表情を動かす。

「それが、何百年もの長い時間、俺たちを苦しめ続けた“痛み”だ、灰示」

伍黄が強調するように、さらに言葉が続ける。

「なあ？灰示…」

問いかけるような声を発しながら、伍黄がゆっくりとした足取りで、しゃがみ込んでいる灰示へと歩を進める。

「お前は言ったな。“この広い世界のどこかには、きっと、悪意ある言葉を発しない人間もいる”と…」

言葉を静かに続けながら、足音を響かせ、灰示へと近付いていく伍黄。

「そんな人間を探すと言って、お前は俺と緑呂の前を去っていったよな…？」

やがて灰示の前へと辿り着き、伍黄が足を止める。

「見つかったか？そんな人間は」

どこか試すように、伍黄が問いかける。

「“八^やつ裂け”！」

「うあああああっ…！」

伍黄の振るった刀に斬り裂かれ、灰示が血を撒き散らしながら、さらに後方へと吹き飛ばされる。壁へと背をぶつけると、灰示は壁にもたれかかり、座りこんだまま、力なく体の動きを止めた。

「うう…うっ…」

「居なかっただろう…?」

弱々しい声を落とす灰示に、伍黄が冷たく言葉を投げかける。

「そんな人間は…この世界の、どこにもっ…」

「……………」

伍黄から突き付けられる言葉に、灰示がそっと目を細める。

「居なかった、よ…」

「……………」

小さな、聞き取ることがやっとの言葉を発する灰示に、伍黄が少し眉をひそめる。

「悪意ある言葉を、人を傷つける言葉を…一つも口にしない人間なんて、この世界のどこにも居なかった…」

灰示がどこか、哀しげな笑みを浮かべる。

「そうだろう?」

灰示の言葉を受けた伍黄が、満足げに微笑み、大きく両手を広げる。

「だから、なあ灰示。この世界から“痛み”を消し去る為には、人の言葉を消し去る以外っ…」

「でも」

伍黄の言葉を、灰示が強く遮る。

「でも、代わりに見つけた」

灰示が穏やかで、晴れやかな笑みを見せる。

——言葉の中に“悪意”が潜んでいたとしても、それでも…言葉の中には“救い”もあるって、俺はそう信じてる…! ——

——君も…“痛い”の…? ——

——じゃあ、じゃあさ… ——

「“救い”ある、言葉を…」

噛み締めるように微笑んだ灰示が、きつく胸元の服を握り締める。

「だから、僕は守る…」

服を握り締める手をそのままに、灰示がそっと顔を上げる。

「人間たちの、言葉を」

「……っ！」

誇らしげに微笑む灰示のその笑顔を見て、伍黄は見るからに不快そうに、強く表情を歪めた。

「ならば…そんなに人間共の言葉が好きならばっ…」

しゃがみ込んだままの灰示へと、勢いよく刀を振り上げる伍黄。

「その言葉と共に死ね…!!」

「……っ」

振り下ろされる刀に、そっと目を細め、唇を噛み締める灰示。

「ごめん、ね…」

灰示の赤い瞳が、ゆっくりと閉じられていく。

「保っ…」

灰示の声が、小さく落とされた。

Word. 43 灰示ト保 (3)

——そこは、きれいな場所であった。

色取り取りの花が咲き乱れ、雲一つない空がどこまでも広がっている。小高い丘のようで、その向こうには、青い青い海が地平線の彼方まではっきりと見えていた。

「ここ、は…？」

“痛み”の塊として生まれた自分には、あまりにも縁遠い、美しいその場所に、灰示は戸惑うように周囲を見回した。その場に立つ灰示は、不思議なことに、伍黄との戦いで負った傷が一つもなく、その体は軽々と自由に動いた。

「僕は…」

「こんにちは」

「……っ」

後方から向けられる、よく聞き覚えのあるその声に、灰示が驚いたように目を見開き、恐る恐る、ゆっくりと振り返る。

「た、保っ…」

灰示が振り返ったその先に立っていたのは、穏やかな笑顔を見せた保であった。灰示が驚きの表情のまま、まっすぐに保を見つめる。「こうして会うのは、初めてだね。えっと…灰示さん、だっけ？」

「……灰示でいいよ、保」

慣れない様子で名を呼ぶ保に、灰示は優しい笑みを向けた。

「そうか…ここは君の心の中か…」

美しい景色の広がる周囲を見渡し、時折吹く穏やかな風に、灰示が心地良さそうな顔を見せる。

「きれいなものだね…」

「何か、不思議な感じがするな…」

「ん…？」

目の前に立つ灰示をまじまじと見つめ、保がそっと笑みを零す。

景色を見つめていた灰示が、保の方を振り向き、まっすぐに保を見つめた。

「こうして、向き合っているのが…」

「そうだね…」

保の言葉に納得するように、灰示が頷く。

「僕らは太陽と月のようなもの…どちらかが昇れば、どちらかは隠れてしまうから、こうして向き合うのは、確かに不思議だね…」

灰示が、例えた太陽を探すように、上空を見上げる。

「君ともう少し、ゆっくりと話していたいけど…でも、ごめん。僕、行かないと…」

空から視線を下ろし、灰示が再び保を見つめる。

「ずっと昔に、ずっと一緒に居た友達が…待ってるんだ」

伍黄の姿を思い出し、灰示がそっと目を細める。

「戦いに、行かないと…」

「…っ」

決意したような表情を見せる灰示を見つめ、保がそっと、その表情を曇らせる。

「もういいよ」

「えっ…?」

耳に入る言葉に、灰示が戸惑うように顔を上げる。

「もう、いい…」

「保…」

そう言って微笑みかける保に、灰示はさらに戸惑った表情となる。

「言葉が、人間たちの言葉が消えてしまっても、いって言うのかい…?」

「ううん」

灰示の問いかけに、保は笑顔のまま、あっさりと首を横に振った。

「言葉は守る」

保がはっきりと、自信を持って言い放つ。

「俺が守る」

「……っ」

保の言葉に、灰示が驚いたように目を見開く。

「保っ……」

「俺はずっと、“痛み”から逃げて来た」

呼びかけた灰示から視線を逸らし、保が少し下を向く。

「君が助けてくれるって、俺の代わりに“痛み”を背負ってくれて、心のどこかでわかってたから、何の躊躇いもなく逃げ続けた」

保がゆっくりと上げた右手を、自分の左胸へと当てる。

「でも、逃げてばかりじゃいけないんだ」

「——この“痛み”を忘れたら、俺は……本当の笑顔で、笑えなくなる気がするから……」

「——俺だって、半端な覚悟で、あいつらの神になろうってんじやねえんだよっ……！——」

「“痛み”を乗り越えて、強くなりたいって……」

アヒルの言葉を、姿を思い出し、保が笑みを浮かべ、ゆっくりとその顔を上げていく。

「あの人のように強くなりたいって、今は、そう思えるようになったから」

「………」

迷いなく微笑む保を、灰示はまっすぐに見つめた。

「だから今度は……」

保が左胸に当てていた右手を、目の前に立つ灰示へと差し伸べる。
「君の“痛み”を、俺が背負うよ」

「……っ」

差し出された手を見て、灰示がそっと目を細める。

「ねえ、保」

「ん？」

呼びかける灰示に、保が首を傾げる。

「初めて会った日のこと、覚えているかい…？」

微笑みを零しながら、灰示が保を見る。

「あの時も君はこうして、僕に手を差し伸べた…“君も痛いのか？”
って…」

「うん、だから君は言った」

保が代わるように、灰示の言葉の後に続く。

「“痛いよ” って…」

「そして、君が言った…」

——じゃあ、じゃあさ：——

「“痛みを分かち合って、生きていこう” って…“一緒に、乗り越えていこう” って…」

長い長い時を生きてきて、あの日やっと、初めてもらうことの出
来た、温かい言葉。それだけで、苦しかった数百年が吹き飛ぶほど
に、救われた言葉。

「うん。長い間、待たせてごめん」

さらに笑みを大きくし、保が灰示へと手を伸ばす。

「さあ、分かち合おう？一緒に、乗り越えていこう？」

「……っ」

灰示がその手へと、ゆっくりと自分の手を伸ばしていく。

「この“痛み”を」

「ああ…そうだね…」

二つの手が重なり合うと、そこから白色の強い光が放たれた…

——

——パァァァン！

「何…？」

灰示へと振り下ろしたはずの刀が、空中で突然止まり、伍黄は思わず表情をしかめた。止まった刀のすぐ下には、ピンと張り詰められた、赤い何かが見える。

「これは…糸…？」

「五十音、第十六音…」

「なっ…！」

聞こえてくる声に前方を見た伍黄が、驚きの表情となる。

「お、お前はっ…！」

「“た”、解放…！」

伍黄が驚きの表情で見つめる中、真っ赤な言玉を振り上げ、言葉を解放したのは、いつになく強い表情を見せた保であった。

「“倒^{たお}せ”…！」

「クっ…！」

言玉から目覚めた無数の赤い糸を、一斉に向けてくる保に、伍黄が刀を引き、後ろに飛び下がるようにして、それを避ける。

「お、お前っ…！」

態勢を立て直し、曇らせた表情で保を見つめる伍黄。

「安団、安附が一、“太守”高市保」

伍黄へと向けた糸を引き、手元へと戻しながら、保が立ち上がった、堂々と言い放つ。

「何故、お前が…？」

壁際で立ち上がった保を見つめ、伍黄が眉をひそめる。

「選手交代とは…ついに、灰示の奴がくたばったか？」

「俺たちは、二人で一つ。俺の望みも、灰示と同じ…」

両手の指に糸を絡ませ、保が鋭い瞳で、伍黄を見つめる。

「皆の言葉を守る為に、俺はあなたを倒します…！」

保が両手を構え、高らかと言い放つ。

「生意気な口をっ…」

顔をしかめた伍黄が、今まで以上に低い声を発する。

「きくなよ！たかだか人間の小僧が…！“焼^やけ”…！」
「…っ」

向かってくる逆巻く炎に、保が両手を伸ばし、糸を向ける。

「耐^たえろ”…！」

保が前方に糸を張り巡らせ、伍黄の炎を受け止める。

「足^たせ”」

「何…？」

保の糸に包まれた伍黄の炎が、周囲の糸を取り込むようにして、その勢力を増す。

「力の増強だと…？」

「た…」

伍黄が戸惑いの表情を見せる中、保が間を置くことなく、口を開く。

「滾^{たぎ}れ”…！」

「うっ…！」

勢力を増した炎が、保の言葉により、伍黄のもとへと戻って来る。

「チっ…！“瘦^やせろ”！」

言葉を発し、向かってくる炎を弱体化させる伍黄。だが保の言葉により、一度増強されたその炎は、伍黄の言葉を受けても直、十分の力を維持していた。

「グっ…！うううう…！」

もう一度、弱体化の言葉を放つことも出来ず、自らの炎を受けた伍黄が、その場で少し身を屈める。

「高^{たか}くなれ”！」

その間にも、数本の糸を床へと突き刺し、その反動を利用して、保が高々と上空へと飛び上がる。上空で勢いよく、両手を振り上げる保。

「叩^{たた}け”…！」

「あっ…！」

空中で絡まり合い、太い一本の綱のように姿を変え、降り落ちて

くる糸に、伍黄が険しい表情を見せる。

「クっ…！グウウ…！」

素早く突き出した刀で糸を受け止める伍黄であったが、その糸は予想以上に重く、伍黄の体が一気に押し込まれていく。

「うあああああっ…！」

糸に振り払われ、壁へと叩きつけられる伍黄。

「はあっ…はあっ…」

上空で保が、肩を揺らしながら、大きめに呼吸をする。言葉を連続で使い過ぎたためか、少し息が上がっていた。

「グっ…ウウ…」

少し崩れた壁から体を起こしながら、伍黄が苦しげに表情をしかめる。

「この程度の“痛み”などっ…」

伍黄が刀を持つ手に、力を込める。

「俺に力を与えるだけだというのが…わからんかあっ…！！！」

「なっ…！」

激しく咆哮をあげた伍黄の体から、黒い光が放たれる。

「うわあああっ！」

目にも留らぬ速さで周囲一帯を駆け抜ける、伍黄の放った黒光。

その光の一部に弾かれ、上空を舞っていた保が、地面へと突き落とされる。

「この光は…？」

床へと着地した保が、戸惑いながら、周囲に広がっていく黒い光を見つめる。

「“破”！」

「あっ…！」

振り上げられた伍黄の刀から、黒い衝撃波が放たれる。

「た、“耐えろ”…！」

保が先程と同じように糸を張り巡らせ、その衝撃波を受け止める。

「なっ…！！？」

だが、その衝撃波のあまりの威力に、糸はすぐ解かれ、保へと迫って来る。

「ううっ…！」

何とか必死に横へと飛び、衝撃波をすれすれのところで避ける保。「力が、上がっている…？」

黒い光とともに上昇し始めている伍黄の力を察知し、保が厳しい表情を見せる。

「早めに、ケリをつけた方が良さそうだっ…」

その瞳を鋭くし、再び糸の絡まった両手を構える保。

「“猛ろ”…！」

保が勢いよく両手を突き出し、赤い光を帯びた鋭い無数の糸を、伍黄へと向ける。

「グウウ…ウウウ…」

苦しげに声を漏らしながら、ゆっくりとその場で立ち上がる伍黄。

「ウウウウっ…！」

「えっ…？」

立ち上がった伍黄は、思いきり顔を上げ、突き刺すような瞳で糸を睨みつけるが、その場を動かこうとする素振りは見せなかった。

「避けない…？」

「うっ…！うあああああっ…！」

保が戸惑いの瞳で見つめる中、その場を一步たりとも動かなかった伍黄は、大きく両手を広げ、まるで受け止めるように、すべての糸をその体へと喰らった。

「ううう…うう…」

体のあらゆるところを突き刺した糸から、伝うようにして、伍黄の赤い血が滴り落ちる。その姿と苦しげな伍黄の声は、向き合っている保にも十分に、その痛みを伝えていた。

「そう…これが、“痛み”だ…」

伍黄がその痛みを確かめるように、そっと呟く。

「俺が…何百年と、魘され続けて来た…痛み…」

まるで噛み締めるような言葉が、ゆっくりと続く。

「だから俺は：痛みを消す：この痛みから、解放されるっ：」
もがくように、願うように、言葉を発する伍黄。

「その為になら、俺はっ：！」

伍黄が勢いよく、その顔を上げる。

「どんな痛みも受け入れようっ：！ “宿^{やど}れ”：！：！」
「あっ：！」

辺り一面に広がった黒い光が、伍黄の言葉を合図に、一斉に伍黄の体の中へと吸い込まれていく。

「うあっ：！」

黒い光の吸い込まれていく勢いで、伍黄の体を突き刺していた糸がすべて弾かれ、返ってきた糸の勢いにより、少し後方へと押し出される保。嵐のように吹き荒れる強風の中、身を屈めながらも、保が何とか伍黄の方を見る。

「うううう：！ううううっ：！」

「……っ」

黒い光の中心で、苦しげな声をあげる伍黄を見つめ、そっと目を細める保。

「ここら中の、すべての忌を取り込んでいる：」

どんどんとやって来る、黒い光の塊を見渡し、保がさらに、その表情を陰しくした。

「伍黄、さん：」

「うううう：！がああああっ：！」

保がどこか哀しげに名を呼んだすぐ後、すべての忌を吸収し終えたのか、伍黄が一際大きな声をあげると、一瞬、強い黒光が放たれ、やがて光が収まった。風も止み、保がゆっくりと体を起こす。

「あっ：！」

前方に立つ人影を見つめ、大きく目を見開く保。

「フハハハハっ：」

保の目の前に立っていたのは、真っ黒な肌に、髪を逆立たせ、鋭

く牙を生やし、赤い眼球を剥き出しにした、最早、人間とも呼ぶことの出来ない伍黄の姿であった。姿を変えた伍黄が、どこか不気味な笑みを零す。

「さあ、終わりにしよう。五十音士……」

伍黄が黒い右手で、刀を構える。

「お前たち人間の、その言葉をつ……！」

「クっ……！」

勢いよく駆けこんでくる伍黄に、保が慌てて両手を構える。

Word. 43 灰示ト保 (4)

「倒せ」…！」

何本もの糸が絡まり合い、一本の太い糸となって、向かってくる伍黄へと突き出される。

「破れ」…！」

言葉を放ち、刀を振るって、いとも簡単に、その糸を引き裂く伍黄。

「焼け」…！」

「耐えろ」…！」

伍黄の放つ炎を、保が素早く受け止める。

「猛ろ」…！」

受け止めた炎の後ろから保が飛び上がり、伍黄へとさらに糸を向ける。保へと駆けこんで来ていた伍黄は、今更その勢いも止められずに、向かってくる糸へとその足を進め続けた。

「えっ…？」

糸が伍黄に辿り着いたその時、保が一気に困惑の表情となる。

「そ、そんなっ…！」

光を帯び、勢いよく突き出したはずの糸は、まるで鋼鉄の壁にでも突き当たったかのように、伍黄の体の前で、固く止められてしまっていた。

「何だ…？これは」

糸が貫くことの出来なかった伍黄が、楽しげな笑みを浮かべる。

「糸が…きかない…？」

「や…」

「うっ…！」

保が戸惑っていたその隙に、伍黄は保のすぐ目の前まで距離を詰め、保へと刀を振り上げていた。

「八つ裂け」…！」

「クっ…！た、“高くなれ”！」

刀を振るう伍黄から、ぎりぎりのところで言葉を放ち、上空へと逃れる保。

「はぁ…はぁ…」

「それで逃れたつもりか？」

「えっ？」

上空で呼吸を整えていた保が、伍黄の言葉に眉をひそめる。

「甘いな、五十音士…」

牙の覗くその口を歪ませ、伍黄が刀を振り上げる。

「闇討て”…”」

「闇っ…？」

伍黄の放った言葉に、保が首を傾げていたその時であった。

「ううううっ…！」

突然、保の左肩が、勢いよく斬り裂かれる。

「なっ…」

空中に溢れ出る自分の血に、困惑した表情を見せる保。

「何、で…ううああっ…！」

次は背中が斬り裂かれ、保はまたしても痛々しい悲鳴をあげた。右腕が、左足が、胸部が、周囲のどこにも刃はなく、伍黄は地面に突っ立っているというのに、次々と斬り裂かれていく。

「これ、はっ…」

「闇討て”。お前の目には映らぬ無数の刃が、お前を斬り裂き続ける」

戸惑う保に答えるように、伍黄が下方から言葉を投げかける。

「さぁ、死ね」

刀の先を、上空の保へと向ける伍黄。

「“夜光”」

「うっ…！」

高速の黒光が、勢いよく保の右足を貫いた。

「うあああああっ…！！！」

保が枯れそうなほどに大きな声をあげて、力なく地面へと降下していく。着地の態勢も取らぬまま、保は胸から勢いよく床へと落ちた。

「ううう…うっ…」

床にうつ伏せに倒れ込んだ保が、苦しげな声を漏らす。

「苦しいか…？五十音士」

保へと問いかけながら、伍黄がゆっくりと歩を進め、保のもとへと歩み寄っていく。

「それが、“痛み”だ」

「うぐっ…！」

保の目の前に立った伍黄が、右足を振り上げ、勢いよく保の後頭部を踏みつけた。顔が床へとめり込むように押しつけられ、保がさらに苦しげに声を出す。

「高市…保…」

伍黄がそっと、保の名を呼ぶ。

「お前さえ…お前さえ居なければ、灰示は俺を裏切ったりなど、しなかっただろうに…」

保の頭を踏みつけたまま、伍黄がゆっくりと言葉を続ける。

「人間の言葉を守るなどと、くだらぬ考えを、持ったりしなかっただろうに…」

伍黄の声が低く、重く響き渡る。

「つくづく邪魔な存在だよ、お前ら人間はっ」

「うあっ…！」

伍黄に勢いよく蹴り上げられ、保が後方の壁へと叩きつけられる。「うっ…」

壁に背をもたれかけたまま、力なく首を落とす保。血の流れ続ける全身には最早、どこにも力が入らず、保は顔を上げることすら、満足に出来ない状態であった。

「そうだ。聞こえているか？灰示」

不意に何か思いついたように笑みを浮かべ、伍黄が、保の中に居

るはずの灰示の方へと話しかける。

「取引をしないか？今、また、俺に力を貸すというのなら、この人間を殺さずにおいてやる」

「……っ」

伍黄の言葉に、俯いていたままの保が、その表情を動かす。

「お前は、この人間がひどく大事なんだろう？どうだ？」

保の中の灰示への問いかけを、続ける伍黄。

「世界中の人間共の言葉と、この人間一人の命と、お前に選ばせてやろう、灰示」

「や……」

「ん？」

かすかに漏れる声に、伍黄が視線を下ろす。

「どうだ？出て来たか？灰示」

「やめて、下さい……」

「何……？」

返って来る灰示のものではない声に、伍黄が眉をひそめる。ゆっくりと顔を上げたのは保であり、その姿は保のままで、灰示ではなかった。

「お前には話していない。とつとと灰示と代われ」

「やめて、下さい……もう、これ以上……」

灰示との交代を促す伍黄に対し、保は答えようとはせず、自分の言葉を続ける。

「もう、これ以上……灰示に“痛み”を与えるのは……やめて、下さい……」

「何、だと……？」

保の言葉に、伍黄が顔をしかめる。

「俺が、この俺が灰示に痛みを与えているだと……？」

聞き間違えを確かめるように、伍黄が驚いたような顔を見せる。

「おかしいことを。灰示に痛みを与えているのは、お前たち、人間だろう？俺じゃない」

「あなたに…自分の言葉が届かなくて、“痛い” って…」
途切れ途切れながらも、必死に言葉を繋げる保。

“痛い” って、灰示の声が…聞こえるんです…」

「聞こえる、だと…？」

伍黄が強く、眉を吊り上げる。

「フザけたことを言うなっ…！」

「うううっ…！」

伍黄が保の首を掴み上げ、壁へと勢いよく叩きつける。

「お前に聞こえるはずがないだろう…！この悲痛な声がっ…！割れんばかりに響くこの声がっ…！」

怒鳴りあげながらも、その声は、どこか哀しげに響く。

「お前ら人間などに、この苦しみがわかるはずがないだろうっ…！」

「……っ」

強く睨みつける伍黄をすぐ目の前に、保がそっと目を細める。

「痛みを…」

首を絞めつけられながら、か細い声で保が口を開く。

「痛みを、与えない人間が、一人も居ないように…」

薄く細められながらも、まっすぐな瞳が、伍黄を見つめる。

「痛みを、知らない人間だって…一人も居ないんです…」

小さな声で、保が訴えを続ける。

「人間にだって、聞こえるんです…自分の痛いて声も、誰かの痛いて声も…」

保がさらに、言葉を放つ。

「時間がかかる時だってあるけど…見過ごしてしまう時だってあるけれど…でも、聞こえるんです…」

「馬鹿なことっ…」

保の言葉を、伍黄が鼻で笑う。

「聞こえるならば、何故、痛みが消えない！？何故、痛みを消そうとしないんだ！？人間は…！」

問いかける伍黄の声が、自然と荒げる。

「俺もずっと…あなたのように思っていました…」

少し緩まった伍黄の手の中から、保が先程までよりもスムーズに言葉を発する。

「この世界から、“痛み”が消えてなくなればいいって…」

——おかえりなさい、保——

——お前も立派な五十音士になって、皆の言葉を守っていくんだぞ？保——

「大切な人を、とても大切だった人たちを…冷たい言葉で失った、あの時から…」

今はもう居ない、優しい両親の笑顔を思い出し、保がそっと目を細める。

「でも、灰示と出会って…アヒルさんや紺平くんや…他にも友達が出来て…」

——また明日な！保！——

「やっと、気付きました…」

保がそっと、穏やかな笑みを浮かべる。

「“痛み”は、きれいさっぱり消し去れるものじゃない…けれど…」
ゆっくりと顔を上げ、保がまっすぐに伍黄を見つめる。

「誰かと分かち合ったり、一緒に乗り越えたり…そういうことが、出来るものだって…」

保が眩しそうに、目を細める。

「分かち合うから、優しくなれる…乗り越えるから、強くなれる…」
正面から、向けられる言葉。

「そうやって、生きていくんです…俺たち、人間はっ…」
その笑顔が、誇らしげに輝く。

「何が：分かち合うだ：何が、乗り越えるだ：」

煩わしげに、保の言葉を繰り返す伍黄。

「くだらない言葉ばかりをほざくな：！人間があっ：！：！」

「うああっ：！」

伍黄が再び強く保の首を掴み、勢いよく腕を振るって、保を横へと投げ飛ばす。床に弾かれるようにして倒れ込み、保が苦しげに声を漏らす。

「“八^ゃつ裂け”：！：！」

「うっ：！」

倒れたままの保へと飛んで来る、黒い光の刃。

「うあああああっ：！」

保のすぐ目の前で、無数の小さな刃へと分解した黒光が、立ち上がってもいない保を容赦なく斬り裂いた。さらに激しく血を流し、保がもう一度、床へと叩きつけられる。

「ううう：うっ：」

重苦しい声を漏らす保。血を流し過ぎ、あまりの痛みに、意識を離しかけていた。

「痛いかな？ええ？人間：」

倒れ込んだままの保へと、伍黄が冷たく言葉を投げかける。

「分かち合って見せろよ？乗り越えて見せろよ？お前の言葉の通り

…今、ここで：！」

「うぐっ：！」

伍黄が保の腹部へ、鋭い蹴りを入れると、保の口から血が流れ落ちた。

「なあっ！？人間：！：！」

「ううう：！」

保が蹴り飛ばされ、伍黄から少し離れた地面へと、滑るようにして倒れ込む。

「そら見ろ！どうにも出来ないじゃないかっ：！所詮は、お前ら人間の得意な綺麗事だ！」

苦しみ続ける保を見つめ、伍黄が高らかと言い放つ。

「痛みはどうやったって、無くならないんだよ！どうにもならないんだよ！」

伍黄の声が、どこか必死に響く。

「だから俺は、言葉を消す！世界中の言葉ごと、痛みを消し去るんだっ……！！」

「……っ」

伍黄の叫びを聞きながら、保は何とか右手を強く握り締め、飛びそうな意識を奮い起こした。

「そうやって……自分一人の殻に閉じこもって、差し伸べられる手を……無視し続けてきたんですか……？」

「何っ……？」

保から届く小さな声に、伍黄の表情が一気に曇る。

「まだ、くだらん言葉を吐く力があるか……」

伍黄が少し、感心するように笑う。

「第一、ただの痛みの塊である俺に、差し伸べられる手などっ……」

「灰示は、言っていました……」

遮る保の声に、伍黄が言葉を止める。

「ずっと昔に、ずっと一緒に居た“友達”が待ってるって……」

「……っ」

強調される言葉に、伍黄が眉をひそめる。

「だから、行かなきゃって……」

「友……」

伍黄が眼球だけの、その赤い瞳をそっと細める。真意は見取れないが、どこか遠くを見つめるような、そんな瞳であった。

「くだらないな……」

すぐさま鋭い瞳に戻り、伍黄が吐き捨てるように笑う。

「あいつ等が一体、俺に何をくれたというんだ？」

黒い左手を振り上げ、保へと問う伍黄。

「俺の望み一つ、ろくに叶えてはくれなかった。何の役にも立たな

い、無力な友ばかりだった」

「そうやって…」

保が倒れ込んだまま、伍黄へと、どこか哀れむような瞳を向ける。
「そうやって…自分のことばかり考えて、周りに居てくれた人たちを…少しも大切にしようとしなかった…」

ひどく落ちついた、冷静な声が伍黄へと向けられる。

「それがあなたの、何よりの“痛み”です」

「……っ！」

見透かすように言い放つ保に、伍黄が勢いよく表情を歪める。

「生意気な口を…」

伍黄が足早に、保の方へと歩み寄っていく。

「きくなと言っているだろうが…！人間の小僧があっ…！」

「ううっ…！」

保がまたしても伍黄に蹴り上げられ、後方にあつた壁へと背中を打ちつけ、その場に力なく倒れ込む。もう保には、指先一本でさえも、動かす力は残っていなかった。

「あ…うあ…」

倒れた保が、虚ろな瞳で、声にならない声を漏らす。

「灰示の力が、失われることを惜しんで、手加減していたが…もういい」

伍黄がどこか、諦めたように肩を落とす。

「あいつが居なくても、どうとでもなる」

刀を握る手に、力を込める伍黄。

「くだらん言葉は、もう終わりだ」

動かない保へと、伍黄が振り上げた刀の、その刃先を向ける。

「言葉と共に、消え失せろ…！」

伍黄の刀が、振り下ろされる。

「“焼^やき尽くせ”…！！」

赤々と燃え上がる炎が、保へと向けられる。

「……っ」

動くことが出来ない保は、言葉を発する力もなく、迫り来る炎を、ただまっすぐに見つめた。

——パアアアン！

「何っ…！？」

横から飛んで来た赤い光により、弾かれるようにして消える炎に、伍黄が驚きの表情を見せる。

「消させねえーさ」

「……っ」

聞こえてくる声に、伍黄がすぐさま振り向く。

「言葉も、こいつもっ」

強気な口調でそう言いながら、その場へと姿を現したのは、鋭い笑顔を見せたアヒルであった。

「あ…あっ…」

閉じかけていた保の瞳が、アヒルの姿を捉えた瞬間、大きく開かれる。

「アヒルさんっ…！」

もう声など出ないはずであったが、保の口から、アヒルの名を呼ぶ声が、大きく放たれる。

「安の神…」

保と同じように、その瞳にアヒルの姿を捉え、伍黄がそっと目を細める。

「朝比奈、アヒル…！」

「……………」

アヒルは鋭い目つきで、振り向いた伍黄と、真正面から向き合った。

Word 44 痛ミノ果テ (1)

始忌アジト、最奥。

「安の神」：朝比奈アヒル：」

始忌リーダー、伍黄^{イツキ}と、激しい戦闘を繰り広げた灰示。灰示と入れ替わり、応戦する保であったが、多くの忌の力を取り込んだ伍黄を前に、力尽きようとしていた。その時、保と伍黄の前へと現れたのは、アヒルであった。

「よっ」

「アヒル：さん：」

笑顔で振り返ったアヒルを見て、傷だらけの保が、弱々しい声で、もう一度確かめるようにアヒルの名を呼ぶ。

「久し振りだなあ、保」

アヒルが伍黄へ背を向け、保のもとへと歩み寄っていく。アヒルが壁際に倒れ込んでいた保へ手を貸し、そのボロボロの体を起こして、後ろの壁にもたれかけさせる。

「元気そうではねえけど」

「アハハ：」

起き上がった保が、あまり表情を動かさぬまま、力なく笑みを零す。

「こんな俺を：助けてもらっちゃって：すみません：」

「何言ってるんだよ」

申し訳なさそうに謝る保へ、アヒルが優しく笑みを向けた。

「仲間なんだから、助けんのは当たり前だろ？」

「……っ」

当然のように言い放つアヒルに、保は力ないながらも、嬉しそうに微笑む。

「俺、手当ての言葉使えねえーから、痛てえだろうが、箆也か奈々瀬が来るまで、ちょっと我慢しててくれな」

そう言つてアヒルがポケットからハンカチを取り出し、一番出血のひどい、保の右足の傷へと、そのハンカチをきつく巻きつける。縛っていたアヒルの手が離れると、血の染みるハンカチの模様が明らかになる。愛らしい、あひるの描かれたハンカチだ。

「また…あひるさん柄…」

「仕方ねえだろ？」

そのハンカチを見て、笑みを浮かべる保。そのハンカチは、アヒルが灰示と戦うため、遊園跡地へと行ったあの時、怪我をした保に、今と同じように巻いてあげたものであった。

「やるつつてんのに、お前が洗って返してくっから」

「だって…あひるさん柄は、アヒルさんが持っていないと…意味ないじゃないですか…」

顔をしかめるアヒルへ、保が笑みを向ける。

「折角、そんなに面白い名前、なのに…」

「だっれが面白いだよ！」

「すみません…」

「……っ」

一度は怒鳴ったアヒルであつたが、微笑みながら謝る保を見ると、すぐにまた、笑みを浮かべた。

「ここに居ろ、保」

座り込んだままの保の肩を手で軽く叩き、アヒルがその場で素早く立ち上がる。保へと背を向けると、アヒルは数歩前へと出て、再び伍黄と向き合った。

「よお」

「……………」

改めて挨拶とばかりに、短めに声を発するアヒルを正面に見て、伍黄はその赤い眼球だけの瞳を、そっと細めた。

「お前、あん時の奴だろ？イ級の。見た目結構変わってるから、初め、わかんなかったぜ」

アヒルが初めて会った時の伍黄は、也守の刃の姿、そのものであ

ったが、今は肌も黒く、瞳は赤色だけに染まり、鋭い牙も生えている。アヒルがわからなくても、当然であろう。

「安の神、か…」

アヒルの姿を確認し、低い声を発する伍黄。

「知りたくもないが…まあ一応、聞こう」

伍黄がアヒルへと、鋭い眼光を向ける。

「この場へ、何をしに来た？言葉の神」

伍黄の問いかけに、アヒルが真剣な表情を見せる。

「お前を、消しに」

アヒルが迷いなく、はっきりとした口調で答える。

「俺を、消しに…か」

伍黄がゆっくりと、アヒルの言葉を繰り返す。

「さすがは、愚かなる五十音士の頂点に立つ神…実に、勝手極まりないっ」

伍黄が呆れたように、言葉を吐き捨てる。

「自ら生み出した過^{あやま}ちが、自らの手に負えそうになくなら消す」
少し微笑んでいた伍黄の表情が、そっと冷たく変わる。

「それだけのことだというのに、自分たちが言葉を守ったなどと言つて、胸を張るのだろう？お前たちは」

軽蔑するような瞳が、アヒルへと向けられる。

「本当に、愚かで醜い生き物だ。お前たち、人間は…」

「……………」

重々しく言い放つ伍黄に、アヒルがそっと目を細める。

「まあいい」

言葉を切った伍黄が、右手に持っていた刀を振り上げる。

「お前が俺を消す前に、俺がお前を消し去ってやろう」

振り上げられた刃先が、まっすぐにアヒルへと向けられる。

「この世界の、すべての言葉と共に…」

構えた伍黄の姿を強く目で捉えたまま、アヒルが懐へと手を入れ、何やら取り出す。

「ガアスケ」

「グワァ！」

「ん…？」

アヒルが取り出したのは、手のひらサイズの愛らしい、金色に光るあひるであつた。アヒルの手の上で、戦う気満々の勇ましい表情で、鳴き声をあげるガアスケを見て、伍黄が眉をひそめる。

「あひる、さん…？」

保も驚いた表情で、アヒルの手の上のガアスケを見つめる。

「ハッハッハッ！」

ガアスケを見た伍黄は、大きな声で高らかと笑いあげた。

「何だあ？その、見るからに脆弱そうな生き物は！ペットの自慢でも始めようというのかあ？」

「……………」

小馬鹿にしたように笑う伍黄の前で、アヒルは鋭い表情を見せた。

——アヒルが言玉を復活させるため、恵と別行動を取った際、籠也たちと別れたアヒルは、恵と共に矢文町の人通りのない河原へとやって来た。

「じゃあ、やるぞ」

「ああ、頼む」

恵の言葉に、アヒルが大きく頷く。

「五十音、第三十四音…」

恵がポケットから取り出した緑色の言玉を、右手のひらの上で輝かせる。

「“め”、解放…！」

一際強く輝いた言玉が、恵の右手の中へと吸収されていく。恵が言玉の光を受け継いだ右手を、赤い言玉を持つアヒルの右手へと向ける。

「め…」

ゆつくりと口を開く恵。

「“目醒めろ”…！」

「……っ！」

放たれる強い光に、アヒルは思わず目を伏せた。

「グワァッ」

「……へっ？」

固く瞳を閉じていたアヒルが、自分の手の方から聞こえてくる、恵のものではない、明らかに鳴き声なその声に、首を傾げる。言玉を乗せていた手からも、何やら動く、ふわふわとした感触が伝わってきており、アヒルは戸惑うように目を開いた。

「グワァ！」

「んなっ…！ななななっ…！」

手の上に乗る小さなあひるの姿に、開いた瞳をアヒルが勢いよく見開く。

「なああっ…！？」

「どうやら、上手くいったようだな」

「どこがだよ！」

あまりの衝撃に、顎がはずれそうなほど口を開いていたアヒルは、自分の言玉を手の中から取り出しながら、満足げに頷く恵に、強く怒鳴りあげた。

「な、何だよ！？これ！こんなので、どうやって戦えってんだよ！？」

「まあ落ち着け」

必死に問いかけるアヒルに、恵が宥めるように声を掛ける。

「別に失敗したわけじゃない。これはお前の言玉の、もう一つの姿だ」

「もう一つの、姿…？」

恵の言葉に、アヒルが戸惑うように眉をひそめる。

「ああ。お前は弔とむらいって奴との戦いの時に、一度見てるだろう？」
「弔との戦いの時…？」

——クアアアア……

アヒルの頭に浮かんだのは、美しく巨大な、黄金色の怪鳥。

「あ、あれがこれえっ!？」

あまりにも巨大で、優美であった記憶の中の鳥と、手のひらの中のちっぽけなあひるを見比べ、アヒルが驚きの表情を見せる。

「ま、まじかよ……」

「まあ、眠ってた力の一部を起こしただけだからな。大きさとしては、そんなもんだろう」

啞然と呟くアヒルへ、恵がさらに説明を続ける。

「だが、その姿でも言玉は言玉だ。ちゃんと言葉も使えるから、安心しろ」

「安心って……」

アヒルが手の中のアひるを見た後、不安げに顔を上げる。

「いくら言葉が使えるったって、この鳥抱えて、あいつ等と戦えっていうのかよ?」

「言玉は、自分の力が必要になる時を知っている」

問いかけるアヒルへ、恵が力強い笑みを向ける。

「こいつの全力が必要な場面が来たら、こいつは自分で勝手に目醒めるさ」

「ふう……ん……」

「グワァ!」

まだどこか疑わしげな視線を送るアヒルへ、その小さな鳥は、頼もしく鳴きあげた——

恵の言葉を思い出し、さらに研ぎ澄ませた表情を見せるアヒル。

「相手にとって、不足はねえか? ガアスケ」

「グワァっ!」

問いかけるアヒルに、ガースケは思いきりのいい返事を返した。

「そうか。じゃあ行こう！」

満足げに微笑んだアヒルが、指で軽くガースケの頭を撫でると、その小さな体を、高々と空中へと放り投げる。

「五十音、第一音」

アヒルが上空を見上げ、高らかと声を張る。

「“あ”、解放……！」

空中で羽根を広げたあひるが、全身から強い金色の光を放ち、その姿を光の塊へと変える。光は形を作り直し、やがて放つその光を、金色から赤色へと変えた。

「行くぜっ……！」

赤い光の中から落ちてきた真っ赤な銃を、アヒルが素早く受け止め、力強く構える。

「言玉が姿を、変えた……？」

「あ……」

戸惑いの表情を見せる伍黄へと、アヒルが銃口を向ける。

「“当たれ”……！」

銃口から、赤い光の塊が、勢いよく放たれる。

「クっ……！ “焼け”……！」

伍黄が表情をしかめながらも刀を振るい、迫りくる光へと、赤々とした炎を向ける。同じ色をした二つの力は激しくぶつかり合い、やがて互いを掻き消した。

「俺の力と、互角……」

「“当たれ”……！」

「何……！？」

アヒルの力を分析するように呟いていた伍黄のもとへ、さらに赤い光が駆け抜けてくる。

「連射か……！ “痩せろ”……！」

伍黄が言葉で、弾丸の威力を落とし、小さくなった光を刀で振り払う。アヒルの攻撃を防いだ伍黄は、すぐさま刃先をアヒルへと向

けた。

「“夜光”^{やこう}”！」

刀の先から、鋭い黒色の光線が放たれる。

「……っ」

迫る光線を見据え、自らのコメカミへと銃口を向けるアヒル。

「“上^あがれ”！」

アヒルが自らに弾丸を放ち、赤い光に包まれて、上空へと舞い上がる。アヒルを捉えることの出来なかった光線は、そのまま壁の向こうまで貫いて、消えていった。

^{イデオム}「熟語か。危っね」

光線が貫いていった壁の跡を見下ろし、アヒルがホっとしたように肩を落とす。

「飛べるのか……」

上空のアヒルを見上げ、そっと目を細める伍黄。

「だが……」

「あっ！」

いやらしく口元を歪める伍黄の姿に、保がハツとした表情となつて、顔を上げる。

「逃げて下さい……！アヒルさん……！」

「へっ？」

「“闇^{やみ}討て”……」

保の声にアヒルが目を丸くしたのとはど同時に、伍黄が言葉を放った。

「うううっ……！」

「アヒルさん……！」

突如、左肩を斬り裂かれるアヒルに、保が悲痛な声をあげる。

「ハハハハ……！神附きが神附きなら、神も神だなあ！」

斬り裂かれていくアヒルの姿を見て、楽しげに笑いあげる伍黄。

「そのまま、見えない刃に斬り裂かれ続けて、死ぬがいっ……！」

「……っ」

「何…!？」

伍黄が高らかと言い放とうとしたその時、刃に斬り裂かれ続けていたアヒルの体が、突然、霞のように薄れて、あっという間に上空から消えてしまう。

「これはっ…」

「あざむ欺け”っ」

「なっ…!」

戸惑いの表情を見せていた伍黄が、背後から聞こえてくる声に、すぐさま振り返る。伍黄が振り返った先には、まるで無傷のアヒルが立っていた。

「幻覚か…」

「残念だったな」

眉をひそめる伍黄に対し、アヒルはどこか得意げに微笑む。

「アヒルさんっ…」

微笑んでいるアヒルの姿に、保も安心したように笑みを零す。

「残念? 一度、避けたくらいで、防ぎきった気か?」

「えっ…?」

問いかける伍黄に、曇るアヒルの表情。

「幻覚を作れたところで、お前にこの刃が見えない限り、防ぐことなど不可能…!」

伍黄が勢いよく、刀を振り上げる。

「やみ闇討て”…!」

「またか…!」

伍黄の放った言葉を聞き、アヒルが険しい表情を見せる。

「うっ…!」

見えない刃がアヒルの右腕をかすめ、斬り傷を作って、赤い血を流す。

「まあ確かに、見えなきゃ防ぐことなんて出来ねえよなっ…!」

傷を負いはしたが、すぐさま笑みを零し、アヒルが余裕の様子で上空へと弾丸を撃ち抜いた。

「赤くなれ」！

アヒルの放った弾丸が上空で弾け飛ぶと、辺り一面に赤い光が広がり落ちる。光が落ちると、やがて、数本の刃のような物体が、赤く染め上げられるようにして、その姿を現した。

「うあ…！」

姿を見せた刃に、伍黄が驚きの表情を見せる。

「赤くなれ」だと…？そんな言葉が…」

「一回、自分の姿を消す忌と戦ったことがあってな。それで学んだんだ」

茫然としている伍黄へと、得意げな笑みを見せるアヒル。

「これで安心して防げるぜっ」

周囲の刃の位置と数を確認し、アヒルがさらに引き金を引く。

「荒れろ」

短めに落とされる、言葉。

「嵐…！」

銃口から放たれた逆巻く嵐が、アヒルの周囲で猛威を振るい、アヒルへと迫り来ていた赤く染まった刃を、一つ残らず叩き落とした。

「名詞…」

落とされた刃が、次々と力なく消え失せていく光景を見つめながら、険しい表情を見せる伍黄。

「こんな…」

「余所見してていいのか？」

「なっ…！」

哑然としていた伍黄が、聞こえてくる声に顔を上げると、鋭い表情を見せたアヒルが立っていた。

「チ…！“焼き尽くせ”！」

伍黄がすぐさま刀を振り下ろし、アヒルへと燃え上がる炎の塊を向ける。アヒルは冷静な表情で炎を見つめたまま、まだ右方で逆巻いている嵐へと、さらに一発、銃弾を撃ち抜いた。

「荒れ狂え」！

「何…!?!」

逆巻くその勢いを、それ以上に増した嵐が、伍黄の向けていた炎を一瞬にして取り込む。炎を取り込み、燃え上がる嵐となったその巨大な塊は、まっすぐに伍黄へと向かっていく。

「うっ…!!うああああ!!」

燃え上がる炎に巻き込まれ、斬り裂かれ、焦がされ、弾き飛ばされる伍黄。

Word 44 痛ミノ果テ (2)

「ず、凄い…」

目の前で繰り広げられる戦闘を見つめ、保が圧倒されたような表情を見せる。

「神試験の時とは…比べものにならない…」

今はしっかりと開かれた瞳で、保はまっすぐにアヒルを捉える。

「本当に強くなった…アヒルさん…」

「ふうっ」

保が見つめる中、銃を持った手を振り下ろし、一息つくように長く息を吐くアヒル。息を吐き切ったアヒルがゆっくりと顔を上げ、吹き飛んでいった伍黄へと視線を送る。

「うっ…ううう…」

床に倒れ込んでいた伍黄が、重い体を引きずるようにして起き上がる。その右手は、先程の炎と嵐に巻き込まれたのか、ひどく傷つき、だらりとぶら下がり落ちていた。握られていた刀も、力なく床に放り出されている。

「ハア…ハア…」

完全に体を起こし、前方に立つアヒルを見やる伍黄。その呼吸は苦しそうに、乱れていた。

「確かに強い…さすがは五十音士の頂点に立つ者だ、言葉の神…」
「……っ」

苦しげに表情を歪めたまま、口元を緩め、笑みを浮かべる伍黄の姿を見つめ、アヒルが険しい表情で、目を細める。

「その手じゃもう、刀は振れねえ」

アヒルが細めた瞳で、伍黄を見つめる。

「お前は、もうっ…」

「フフフフ…ハハハハハハっ…！」

「へっ？」

突然、笑い出す伍黄に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「この程度の傷を負わせたくらいで、もう勝った気か？言葉の神よ」
歪んだ笑顔を見せ、伍黄がアヒルへと語りかける。

「忘れたか？俺たちは忌…痛みより生まれ、痛みによりその強さを増す生き物っ…」

「何…？」

＜痛い…痛い…＞

「……っ！」

伍黄の言葉に表情を曇らせていたアヒルが、周囲から漏れてくる、どこか禍々しい、重く響く声を耳に入れ、目を見開いて、回し見る。
《痛い…痛い…》

「こ、これは…」

どんどんと重なり、響きあっていくその声に、保も顔を上げ、困惑した表情を見せる。壁から床から天井から、その部屋のすべてから漏れ出してくる声。その声は、アヒルたちのよく知る、忌の声そのものであった。

「ま、まさか…」

「そう…」

アヒルの声に頷きかけながら、伍黄が冷たく微笑む。

「このアジト内の部屋、廊下、すべての空間は、忌で出来ている…」

「忌で…？」

「そんな…」

伍黄の言葉に、驚きの表情を見せるアヒルと保。その間にも、壁や床や天井は、重なり合って一つの“痛い”という言葉を口にする。四方八方、すべての方角から攻め立てられているような、そんな感覚を覚えた。

「そして…」

さらに口を開いた伍黄が、力なく垂れ下がった右腕を、床へとつける。

「“養え”…」
やしな

《グアアアアア…!》

「なっ…!」

伍黄が言葉を放つと、床から数匹の忌が飛び出し、吸収されるようにして伍黄の右腕へと取り込まれていく。忌を取り込むと、伍黄の右腕が見る見る内に再生され、力を取り戻したのか、強く握り締められた。

「傷がっ…」

「この通り、俺は消えない」

再生させた右腕を振り上げ、伍黄が楽しげに笑う。

「この世界に痛みがある限り、言葉がある限り…俺は決して、負けはしない…!」

「うっ…!」

素早く床の刀を拾い、伍黄がアヒルのもとへと飛び出してくる。

「“焼^やけ”!」

「“当^あたれ”…!」

アヒルへと駆けこんでいきながら、刀を振るい、炎の塊をアヒルへと向ける伍黄。アヒルはその炎を迎え撃つべく、素早く銃を構えて、光の弾丸を炎へと放つ。二人の中央でぶつかり合う二つの力は、先程は相殺したというのに、今度は炎が勢いよく弾丸を押し出した。

「あっ…!」

弾き出される弾丸に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「力が、増してる…?ク…!“上^あがれ”!」

弾丸を圧倒してやって来る炎に、アヒルは戸惑いながらも立ち尽くしているわけにもいかず、すぐに自分へと次の弾丸を放って、上空へと飛び上がった。

《痛い…痛い…》

「何っ!?!」

上空へと舞い上がったアヒルを、天井から抜け出るようにその姿を現した数匹の忌が、呪詛のように言葉を繰り返しながら、黒い霧状の手で捕らえる。

「離せ！このっ…！」

「…っ」

「えっ…？」

忌に捕らえられたアヒルのすぐ目の前へと、いつの間にか姿を現す伍黄。

「は、速いっ…！」

「や…」

焦って銃を振り上げるアヒルだが、それよりも先に、伍黄が刀を振り下ろした。

「“破れ”…！」

「うううっ…！」

「アヒルさん…！」

振り下ろされた伍黄の刀に、アヒルが胸部を勢いよく斬り裂かれる。上空を舞う赤い血に、アヒルが歪んだ表情を見せ、下方の保は思わず身を乗り出す。

「グ…！」

斬られた傷を左手で押さえながら、忌の手から離れたアヒルが、力なく下降していく。

「言葉と共に消え失せろ」

落ちていくアヒルへと、何の躊躇いもなく刃先を向ける伍黄。

「“破”…！」

「クっ…！」

迫り来る衝撃波に、落下中で態勢を変えることも出来ないアヒルが、険しい表情を見せる。

「“助ける”…！」

「なっ…！」

言葉と共に、アヒルの周囲を取り囲むようにして形成されていく、赤い糸の塊。糸が驚きの表情を見せるアヒルと包みこんで、アヒルの代わりに衝撃波を喰らう。

「あれは…」

その光景を見つめ、眉をひそめる伍黄。衝撃波を受けた糸は、焦げつきながらもゆっくりと降下し、床へと着地すると自発的に解けていき、中に居るアヒルの姿が再び露となった。

「これって…」

「ううう…!」

「あっ…! た、保…!」

戸惑うように糸を見下ろしていたアヒルが、聞こえてくる苦しいな声に振り向く。そこには、糸の張り巡らされた右手を床へと落とし、痛みを堪えるように深く俯く保の姿があった。

「保…!」

「ハアっ…ハアっ…」

アヒルの呼びかけに顔を上げることも出来ずに、ただ荒々しく息を乱す保。糸を向けた右手は痙攣しており、傷口から一度は止まった血が流れ始めていた。

「その傷で力を使うとは、大したものだ。だが…」

感心するように保を見下ろしていた伍黄が、不意にその瞳を、冷たいものへと変える。

「邪魔なんだよ。“夜光”^{やこう}」

伍黄が刃先を保へと向け、鋭い黒色の光線を放つ。すでに傷だらけで、指一本動かすことさえままならない保が、その光線を避けられるはずもない。

「保っ…! クソ…! ガースケ!」

焦ったように叫んだアヒルが、右手に握り締めていた銃を、保へ向けて、勢いよく投げ放つ。

「クワアアアア…!」

「何っ…?」

空中を舞う赤銅色の銃が、黄金色の光を放ちながら、その姿を巨大な鳥へと変える。

「また言玉が姿を…?」

「クアアアア!」

「クっ…！」

巨鳥が保の前で、その美しく光る翼を大きく広げると、翼からさらに強い金色の光が発せられ、伍黄が保へと向けた光線が、あつという間に掻き消される。突き刺すように浴びせられる光に、伍黄は思わず身を屈め、目を細めた。

「はあっ…はあっ…」

呼吸を乱しながら、ゆっくりと立ち上がるアヒルのもとへと、保を守った巨鳥が翼を広げたまま、近付いてくる。

「助かった、ガアスケ」

「クワァ！」

礼を言うアヒルに、巨鳥は、ガアスケは、当たり前だとばかりに大きく鳴きあげた。

「また鳥…先程の小鳥の進化した姿か…」

アヒルの横のガアスケを見つめ、少し考え込むような表情を見せる伍黄。

「ア段の能力は武器…生物形態はウ段の五十音士の能力のはずだが…不思議な男だ、安の神」

眉をひそめた伍黄が、首を捻る。

「まあいい。お前の力などに興味はない」

言葉を切った伍黄が、再び刀を振り上げる。

「俺が興味あるのは…お前の死のみ！」

鋭い刃先が、天井を向いて輝く。

「遣^やれ”！」

《ガアアアア…！》

「あっ…！」

伍黄の言葉を掛け声に、天井から次々と無数の忌が抜け出て、まるで降り注ぐ雨のように、アヒルへと迫って来る。

「ガアスケ！」

ガアスケの名を呼びながら、アヒルが素早く身構える。

「暴^{あば}れる”！」

「クワアアアアっ！」

アヒルの言葉に応えるように、ガアスケが鋭い鳴き声をあげ、翼を広げて上空へと舞い上がっていく。上空で大きく転回するガアスケの翼に掻き消され、降り注いでいた忌が次々と散っていく。何度も転回するガアスケにより、やがて、無数居たはずのすべての忌が姿を消した。

「よし……」

何とか防いだことを確認し、アヒルが胸を撫で下ろす。

「……た……い……」

「えっ……？」

そこへ聞こえてくる、今にも消えてしまいそうなほどに小さな、弱々しい声。

「……痛い……痛い……」

《……痛い……痛い……》

「なっ……！」

ガアスケの攻撃により、ほとんど消えかけていた忌の欠片が、ひたすらにその言葉を繰り返しながら、その個体を一個から二個へと分裂させる。すべての欠片が同じように数を増やし、そこから響く声が徐々に重なっていく。

「……こ、こんなっ……」

忌の欠片からまた次の忌が、その忌からさらに次の忌が、次々と新しい忌が生み出されていくその光景に、思わず青ざめ、言葉を失ってしまうアヒル。

「……痛みは無限……」

「……っ」

背後からする声にアヒルが振り返ると、上空へと舞い上がっていた伍黄が、静かに床へと降り立ってきていた。

「痛みを消そうとする力が、また新たな痛みを生む……」

伍黄の細められた瞳が、まっすぐにアヒルへと向けられる。

《……痛い……痛い……》

「苦しいのに、消えない…痛いからまた、生まれる…まるで地獄のようだろう…？」

伍黄が口元を緩め、そつと微笑む。

「今のこの光景を、よく見ておくといい」

そつと左手を広げ、そこに広がるおぞましい光景を強調する伍黄。

「これが、お前たち五十音士の、お前たちの言葉のもたらした結果…これが、俺たち忌という存在…」

自分でも確かめるように、伍黄が次々と生まれていく忌を見回す。

「これが、この世の縮図だ」

はつきりと言い放つ伍黄に、アヒルの表情が険しく変わる。

「こんな世界を、良しとするか…？ 神」

試すように、アヒルへと問いかける伍黄。

「悪しに決まっているっ」

「……っ」

問いかけたというのに、伍黄が自らはつきりと答えを放つ。その力強い声に、アヒルは思わず唇を噛み締めた。どこかに強く力を入れていなければ、耐えられないような、そんな心情であった。

「だから俺は終わらせる。こんな世界を、地獄のような世界を終わらせる」

まるで自分に言い聞かせるように、伍黄が言葉を繰り返す。

「神を名乗るお前にも、この俺を止める権利などない…！」

叫びあげた伍黄が、勢いよく刀を振り上げる。

「“焼き尽くせ”！」

《グアアアア…！！》

伍黄の刀から放たれた炎は、周囲で生み出されたばかりの忌を巻き込み、その赤々とした色を禍々しいばかりの黒色へと変え、アヒルへと向かってくる。

「ク…！ “当たれ”…！」

「クワアアア！」

アヒルが言葉を放ち、炎へとガアスケを向かわせる。激しく燃え

上がる黒炎と、翼を広げたガースケの金色の巨体が、勢いよくぶつかり合った。

「うっ…！」

ガースケが黒炎と当たったその瞬間、アヒルが大きく目を見開く。

「クワアアア…！」

「う…！うあああああ…！」

「アヒルさん…！？」

ガースケが悲痛な鳴き声をあげたのと同時に、アヒルも天を仰ぐように体を反らしながら、激しい叫び声をあげる。そんなアヒルに、保が焦ったように名を呼びかける。

「ううう…うっ…！」

「鳥と感覚を共有しているのか…」

苦しむアヒルを見つめ、伍黄が感心するように呟く。

「どうだ？痛いかな？」

「……っ」

問いかける伍黄に、アヒルが必死に歯を食いしばり、堪えるように自分の体をきつく抱きしめながら、少しだけ顔を上げる。

「それが、俺たちの浴び続けて来た“痛み”だ」

「な、に…？」

伍黄の言葉に、アヒルが戸惑うような表情を見せる。

「始忌の能力も五十音士と同じように、一人ひとり異なる」

困惑するアヒルに説明するように、さらに言葉が続ける伍黄。

「灰示の能力は“痛み”の増殖、緑呂の能力は“痛み”との同化…
そして、俺の能力は…」

伍黄の口元が、そっと笑う。

「“痛み”の伝達」

「痛みの、伝、達…？」

アヒルが痛みの中で、ゆっくりと伍黄の言葉を繰り返す。

「ああ。俺の力を受けた者には、俺の浴びて来た痛みの一部が伝達される」

聞き返したアヒルに、答えるように言う伍黄。

「奪った“や”の言葉に、俺の始忌としての力を組み込んだ…」

伍黄が左手を振り上げると、床からすくいあげられるようにして忌が現れ、その忌がすぐさま、伍黄の刀の中へと吸収されていく。

「さあ、存分に味わえ」

忌を吸収した刀を、伍黄が強く振り切る。

「この“痛み”を…！“八つ裂け”！」

振り下ろされた刀から放たれる、黒く輝く無数の刃。刃が先程の炎と同じように、周囲の忌を取り込み、その大きさを一回り大きくして、一気にガースケへと攻め込む。

「クワアアアアア…！！！」

「ガースケ！うっ…！」

刃を浴び、悲鳴をあげるガースケに身を乗り出していたアヒルが、その瞳を大きく見開く。

「うあああああ…！！！」

次の瞬間、喉が潰れそうなほどに激しい叫び声をあげるアヒル。

「うああ…！！あああああ…！！！」

「ああ…！」

叫び続けるアヒルを見つめ、保が声にならない声を発する。

「アヒル、さんっ…」

「あああああああ…！！！」

攻撃を受けているとはいえ、傷を負ったわけではない。少しの傷を負ったところで、アヒルはここまで激しい叫び声をあげたりしない。どれほどの痛みを受けているのか想像が出来ないほどに、あまりに、その声は悲痛であった。

「ク…クワア…！」

刃を受けたガースケが、力なく声を漏らし、その姿を掻き消していく。ガースケの姿がなくなると、床に力なく、もとの赤銅色の銃が落ちた。

Word 44 痛ミノ果テ (3)

「うううう…うっ…」

激しく傷を負っているわけでもないというのに、床に小さく蹲り、苦しいな声を発しているアヒル。

「どうだ？言葉の神」

蹲っているアヒルへと、伍黄が問いかける。

「それが、“痛み”だ」

「……っ」

強調される言葉に、俯くアヒルの表情がかすかに動く。

「俺が何百年と浴び続けて来た“痛み”…お前たち人間の生み出し続けて来た、無限の“痛み”…」

言葉が続ける伍黄の表情は、どこか哀しみを帯びていた。

「少しは理解出来たか？俺の苦しみが」

自分を指し示すように、伍黄が左手で自分の胸に触れる。

「少しは理解出来たか？言葉を消そうという俺の望みが」

胸に触れた手は、またゆっくりと落ちていく。

「わからないだろうなあ…一度や二度、その“痛み”を浴びた程度では…」

「……………」

どこか諦めるように呟く伍黄のその言葉を、保が真剣な、そして厳しい表情で聞き続ける。灰示の痛みを背負うと誓った保は、伍黄の言葉から目を逸らすわけにはいかなかった。

「そうだ…誰にもわかるはずなどない…この痛みも、この苦しみも…」

落とした左手をあげ、伍黄がまじまじと見つめる。

「誰にも…伝わりなどしないっ…」

「……っ」

諦めるように落とされるその声に、俯いているアヒルの頭が動く。

「さあ、もう一度浴びろ」

伍黄が左手を刀の柄に戻し、再び刀を構える。

「そして、死ね」

冷たい言葉が、吐き捨てられる。

「“焼^やき尽くせ”…！」

振り切られた刀から炎が放たれ、炎が忌を巻き込んで黒色に染まり、アヒルへと向かっていく。

「ああっ…！」

目を口を、必死に見開き、何とかしようともがく保。だが先程、アヒルを助けた時に力を使いきってしまった保には、どうすることも出来なかった。

「アヒルさんっ…アヒルさん…！」

保の必死の呼びかけが、まるで助けを求めるように響き渡る。

「う、ううっ…！」

アヒルが強く歯を食いしばり、床に両手を押しつけるようにして、上半身を起こし、その起こした勢いを味方につけ、その場で立ち上がる。

「まだ立ち上がる力があるか…」

立ち上がったアヒルを見つめ、感心するように微笑む伍黄。

「だがお前がどう攻撃したところで、その力が更なる“痛み”を生むだけで…」

「……っ」

「何っ…!？」

立ち上がったアヒルは、まるで受け入れ態勢を取るように、大きく両手を広げ、避けようともせず、向かってくる伍黄の力を待ち構えた。そんなアヒルの姿に、伍黄が一気に驚きの表情となる。

「馬鹿な…! 何を…!」

「ううう…!」

伍黄が戸惑う中、アヒルが黒々とした炎を、真正面から浴びる。
「うっ…!」

体に吸収されるようにして炎が消えた途端、アヒルが大きく目を見開いた。

「うあああああっ……!!」

炎から痛みが伝わったのか、アヒルがまたしても激しい叫び声をあげる。

「ううう……うっ……」

「な、何をっ……」

力なく膝をつき、再び蹲ったアヒルを見つめ、伍黄が戸惑うような表情を見せる。少し詰まったその声は、あまりの動揺に、震えているようであった。

「何のつもりだ!? 気でも触れたか!? 言葉の神……!」

「……っ」

ひどく困惑した様子で問いかける伍黄に、苦しげに自分の体を抱いていたアヒルが、そっと口を開く。

「わ、っかんねえ……からっ……」

「何……?」

アヒルから返って来る小さな声に、伍黄が耳を傾ける。

「お前の言う通り……お前のこと、全然わっかんねえ……」

戸惑う伍黄へ、アヒルがさらに言葉を続ける。

「お前の言う……お前の痛みとか苦しみてのが、全然わからねえから……」

痛みを堪えた声が、辺りに響く。

「喰らえば、ちったあ……わかるもんかと思って……」

「だから……だから、もう一度わざと、痛みを浴びたというのか……?」

アヒルの言葉を聞いた伍黄は、聞く前よりももっと、困惑した表情を作る。

「フザけたマネをっ……! 言っただろう!?! 一度や二度、痛みを浴びたくらいでは、俺の痛みはっ……!」

「ああ。でもっ……」

伍黄の声を遮り、アヒルがゆっくりと顔を上げる。

「この痛みが、お前の言葉の代わりだってんならっ…」
顔を上げたアヒルが、まっすぐに伍黄を見つめる。

——誰にも…伝わりなどしないっ……

「それでも…お前が、伝えようとしてんならっ…」
突き刺すように、伍黄を捉える瞳。

「俺はそれを、受け止めてえ…！」

「……っ！」

力強く放たれるアヒルの言葉に、伍黄が大きく目を見開く。

「何、をっ…」

さらに震える、伍黄の声。

「フザけたことを抜かすなよ！言葉の神ごときがあ…！」

怒りをブチ撒けるように叫びながら、伍黄が勢いよく刀を振り上げる。

「“焼^やけ”！ “焼^やけ”！ “焼き尽くせ” ええっ…！！」

伍黄が右方へ左方へ、上へ下へと振り回し、膝をついたままのアヒルへと、何度も何度も、少しの間を置くこともなく、黒炎を放ち続けた。放たれたいくつもの黒炎は、互いに合わさり、アヒルの周囲を取り囲むようにして炎上して、アヒルの姿を隠してしまう。

「ああ…あっ…」

燃え上がる黒い炎を、不安げな表情で見つめる保。

「フハハハハハっ…！」

燃え上がる炎を崇めるように両手を振り上げ、伍黄が高らかと笑い声をあげる。

「どうだ！？ どうだあ！？ 言葉の神っ…！」

炎の中で、姿の見えないアヒルへ向け、伍黄が大きな声で問いかける。

「受け止められるかあ！？ 神！ 所詮は人間であるお前に、俺のこの痛みがあ…！」

伍黄の言葉が響く中、徐々に黒炎が収まり、中に居るアヒルの姿が明らかに becoming くる。

「か…カハッ…」

炎の中から姿を現したのは、膝をついたままの状態、全身に火傷を作ったアヒル。アヒルが小さく咳を零すと、その口から赤い血が吐き出された。先程のように叫び声を発していないのは恐らく、あげないのではなく、あげる力もないのであろう。

「受け止められるはずがない…！」

アヒルの姿を捉えた伍黄は、さらにその声を大きくした。

「俺の、この俺の痛みは、誰にも、この世界の誰一人にも、受け止めることなどっ…！」

「……っ」

「なっ…！？」

ボロボロの体ながら、痙攣する両腕をゆっくりと広げ、またしても受け入れるような態勢を取ってみせるアヒルに、伍黄が眼球が飛び出しそうなほどに、目を見開く。

「何、を…何をっ…」

「……………」

戸惑う伍黄を、アヒルは目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

「止めろ…止めろっ…！」

まるで願うように、伍黄が言葉を繰り返す。

「“止めろ” おおおっ…！！！」

「ううう…！」

叫びあげる伍黄の全身から、強い衝撃波のようなものが放たれ、両手を広げる態勢を取っていたアヒルが、勢いよく後方へと吹き飛ばされる。飛ばされたアヒルは、そのままバランスを崩し、力なく地面へと倒れ込んだ。

「ううう…」

「何故、だ…？」

アヒルが苦しげに声を漏らしながら、必死に体を起こそうとする中、伍黄が戸惑いの心を声にして発する。

「何故だ…！何故、そうまでしてっ…！」

「これが…お前が何百年って長い時間、浴び続けてきた痛みか…？」
「……っ」

逆に問うように声を返してくるアヒルに、伍黄が自らの言葉を呑み込む。

「痛てえなあ…死ぬほど、痛てえ…」

全身に走る痛みを確かめるように、アヒルが痙攣する両手で、自分の体の色んな部分に触れていく。

「けど、悪い」

アヒルの口元が、そっと緩む。

「どんなに痛くても、後何回、この痛みを浴びても…やっぱ俺、言葉を全部消してやろうなんて、思えない」

痛みを引きつった笑顔を見せながらも、アヒルがはっきりと言い放つ。

「この世界に言葉が無かったら…きつと、今、俺の周りには、誰も居なかった…」

体を起き上がらせながら、アヒルが必死に言葉を続ける。

「……これが、あなたのやり方だろう？……」

「……俺だって、アヒルさんの力になりたいですから！……」

「言葉があったから…言葉でわかり合って来たから…今、俺の周りには、たくさんの仲間が居るっ…」

アヒルが噛み締めるように言葉を発し、床につけた右手を固く握り締める。

「言葉が、言葉がくれるっ…」

「……アーくうくん！必殺レタスマイルうう！……」

——おはよう、ガア！——

——何だあ？今日は遅刻じゃないのか。珍しいなあ、トンビっ——

「当たり前なのやり取りが、何気ない挨拶が、些細な言葉がっ…俺に、幸せをくれる…」

握り締めた拳を、左胸へと当てるアヒル。

——きよ、今日も絶好の、焼きそばパン日和だね！朝比奈くん！

——私が地獄まで附いていってあげる…フフフっ…——

「嬉しいも、楽しいも…たくさんくれるっ…」

アヒルの顔から、笑顔が零れ落ちる。

「だから…どんなに痛くても…俺はっ…」

笑顔を止め、鋭い瞳を伍黄へと向けるアヒル。

「言葉を無くす方が、もっと痛いっ…！」

「……っ！」

放たれるアヒルの言葉に、大きく目を見開く伍黄。

「違うっ…違う違う違う！」

伍黄は両手で頭を抱え、ひどく混乱した様子で、必死に否定するように強く、何度も何度も首を横に振る。

「俺は…！俺はあああ…！！！」

《グアアアアア…！》

「あっ…」

伍黄の苦しい叫び声に呼応するように、天井や壁を形成していた忌たちも一斉に呻き声をあげていく。次々と新たな個体を生み出していた忌も、その活動を止め、力なく掻き消えていく。

「これは…」

消えていく忌に部屋が開け、徐々にその空間が広くなっていく。

その様子を見つめながら、保はそつと目を細めた。

「アヒルさんの言葉が…痛みの連鎖を、止めていく…」

地獄の終わりのような光景を見つめ、保は感慨深い表情を見せる。

「止める…！止める！俺はこんな…！」

忌たちが掻き消えていく中、伍黄はさらに苦しげに、深く深く頭を抱える。

「俺はこんなことはっ…望んでいない…！」

自分に言い聞かせるように、必死に、その主張を続ける伍黄。

「俺の…俺の痛みがっ…」

——ここは、どこ…？——

生まれたその時から、たったの一人きりだった。

——何？この声っ……

自然と耳に入ってくる、無数の“痛い”と言う声に、ただ肩を震わせた。

——誰か…！誰かいらないの！？ねえっ…！——

助けを求めても、周りには一人の味方も居なかった。

——怖いよっ…怖いよお…！ねえ…！——

届く“痛み”に、ただ怯え続けた。

「あの、俺の痛みがっ…」

数百年以上昔の時を思い出し、伍黄がきつく唇を噛み締める。

「こんなに簡単につ、掻き消されて、たまるかあぁっ…！！！」

「うううっ…！」

伍黄の全身から、またしても強烈な衝撃波が放たれ、アヒルが身を屈め、何とかその場所で堪える。まるで嵐でも発生したかのよう
に、辺りに強い風が吹き荒れ始める。

「これは…あっ！」

戸惑うように周囲を見回していた保が、何かに気付いた様子で目を見開く。

《グアアアア…!!》

天井や壁を形成していた忌が、次々とその形を崩し、忌本来の形になったかと思うと、その吹き荒れる風に巻き込まれ、伍黄の体へと吸収されていく。

「な、何をつ…!!」

その光景に、思わず声をあげる保。

「やめて下さい…!! それ以上やれば、あなたがっ…!!」

「五月蠅い!!」

「……っ!!」

保の必死の呼びかけは、伍黄の強い怒鳴り声で止められてしまう。

「お前に、お前らに何がわかる…」

忌を吸収し続けながら、伍黄がまるで、怒りに震えたような声を発する。

「“痛み”も聞こえぬ人間のお前らに…たかが十数年しか生きていないお前らにっ…」

伍黄の手が、血が滲みそうなほど、強く握り締められる。

「俺の痛みが、わかってたまるかあ…!!」

「ううう…!!」

再び放たれる衝撃波に、保が背中を壁へと押しつけられる。

「すべての忌よ、すべての“痛み”よ…俺にっ…“宿^{やど}れ”…!!」

《グアアアアア…!!》

伍黄の言葉を合図に、風に乗り、周囲を舞う忌が、一斉に伍黄のもとへと飛び込んでいく。

「うあああああ…!!」

さらに多くの忌を吸収し始め、全身から黒色の光を放ちながら、激しく荒々しく、そしてどこか痛々しい叫び声をあげる伍黄。

「伍黄、さん…」

叫び続ける伍黄を、その凄惨な光景を、保が圧倒されたような表情で見つめる。

「灰示…伍黄さんが…」

友のあのような姿を見て、もう一人の自分は、どう思うのである。
う。

「伍黄さんがっ…」

止めたくても、どうすることも出来ない今の自分に、保はただ、
もどかしい気持ちを抱いた。

Word 44 痛ミノ果テ (4)

——ドオオオン！

「うっ…！」

「何なの…！？」

箆也たち安団の面々と合流し、一箇所に集って、先を目指していたエリザや檻也たちが、突然走る、アジト全体を揺るがすほどの大きな揺れに、進めていた歩を思わず止める。

「この建物自体が、崩れようとしているわ…」

周囲を見回しながら、囁が冷静に言う。

「刃…」

激しい揺れの続く天井を見上げ、不安げな表情を見せる弓。

「刃っ…！」

「あっ」

借りていた囁の肩を振りほどき、弓が前方へと駆け出していってしまう。

「待っ…」

「僕が追う！」

追おうと足を踏み出そうとした囁の横から、箆也が飛び出していく。

「箆也…！」

「あなたたちは、先に脱出しろ！」

名を呼んだ檻也にそう言い放ち、箆也は弓の後を追って、薄暗い廊下のその向こうへと、消えていってしまう。

「箆也…」

「私も行くわ！於^おの神！後をお願い！」

囁がどこか不安げに箆也の名を呟く中、エリザも二人の後を追うようにして、飛び出していく。

「衣えの神…！」

「大丈夫！足止めしかしてないから、体力は有り余ってるの！」

思わず身を乗り出して呼びかける檻也に、駆けていきながら振り返ったエリザが笑顔を向ける。すぐにまた前方を向き、エリザも籠也たちと同じように、前方の暗がりへとその姿を消す。

「……………」

「檻也くん」

真剣な表情で前方を見据える檻也に、紺平が横から、指示を求めるように呼びかける。

「左守、奈守を連れて脱出するぞ、紺平」

「うん！」

檻也の言葉に、紺平は大きく頷いた。

「……………」

自分の居るその部屋が、地震のように小刻みに震えていることに気付き、保がふと顔を上げる。

《グアアアア…アアアア…》

「伍黄さんが忌を吸収することで…忌で形成されていたこの空間が、崩れようとしてるんだ…」

次々と忌が抜け出ていき、形を保てなくなっている辺りの天井や壁を見つめ、保が表情を曇らせる。このまま放っておけば、アジトを形作っているすべての忌が吸収され、保たちのいるこの空間自体が無くなってしまふのだろう。

「ふうっっ」

「えっ…？」

聞こえてくる息遣いに気付き、保が振り向く。するとそこには、重そうな体を何とか動かしながら、少し離れたところに落ちていた銃を拾いあげている、アヒルの姿があった。

「あ、アヒルさん…！」

「ん？」

呼びかける保に、アヒルが振り返る。

「何だあ？」

「はあ！こ、こんなウザったいだけの俺が、アヒルさんに馴れ馴れしく、話しかけちゃってすみません！」

「今更だな…」

何故か今になって謝り散らす保に、アヒルが一気に呆れた表情となる。

「へ、部屋が崩れ始めてます…！脱出しないと、このままじゃっ…！」

「ああ、わかってる」

焦ったように言う保に、あっさりと頷くアヒル。

「けど悪い、保」

「へっ？」

突然謝るアヒルに、保が目丸くする。

「面白い名前ですか？それこそ、今更ですね」

「だつれが面白い名前だ！んなことで謝るか！」

「ひえええ〜！すみません！」

勢いよく怒鳴りあげるアヒルに、頭を必死に下げて謝る保。

「ったく…」

呆れたように肩を落とした後、アヒルが再び、真剣な表情を作る。

「俺は、今、この場所から避難する気はねえ」

「えっ…？」

はつきりと言い放つアヒルに、保が少し戸惑ったような表情を見せる。

「あいつは…あいつはまだ、俺たちに何かを伝えようとしてる…」

忌を吸収し続け、苦しげな叫び声をあげている伍黄の方を振り返り、アヒルがそっと目を細める。

「どんな形であっても、あれがあいつの言葉なら、俺はそれを聞き

届けたい」

「アヒルさん…」

迷いのない、まっすぐな瞳を見せるアヒルを見つめ、保も目を細める。

「本当はお前だけでも脱出させてえんだけど…悪いな。んな便利な言葉も持ってなくてさっ…」

保の方を振り返ったアヒルが、穏やかな笑みを浮かべる。

「それに、出来れば…お前と灰示には、この戦いを見届けてもらいたい…」

「……っ」

願うように放たれる言葉を、保が正面からまっすぐに受け止める。

「構わねえか…？」

静かに問いかけるアヒルを前に、保はそっと、口元を緩めた。

「仰せのままに、我が神」

「……ありがとう」

笑顔で頷く保を確認すると、アヒルは少しだけ嬉しそうな笑みを作り、礼の言葉を零した。

「さあーととっ」

アヒルが保へと背を向け、再び伍黄の方を見る。

「ウウウウウっ…」

すでに百を超すほどの忌を吸収した伍黄は、その黒い体を一回り大きくし、両指からは長く鋭い黒色の爪を、そして背からは、まるで羽根のような黒く巨大な刃を生やしていた。最早、刃の体の原型もない。完全に、忌の塊と化してしまっている。

「消す…“痛み”を消す…言葉を、消すっ…」

重苦しい声を、まるで呪いのように響かせる伍黄。

「お前を、消す…!!」

「……っ」

突き刺すような赤い瞳が向けられると、アヒルはその表情を研ぎ澄ませ、右手の銃を素早く構えた。

「“当たれ”：！」

アヒルが引き金を引き、光輝く弾丸を伍黄へと向ける。

「グアアアアアっ：！」

「うっ：！」

伍黄が忌のような咆哮を放ち、アヒルの弾丸をその声だけで砕いてしまう。そのあまりに強い声が超音波のように辺りに響き、アヒルは思わず顔をしかめた。

「“八つ裂け”：！」

言葉を放った伍黄の背中から、巨大な黒色の刃が伸び、空中で幾重にも分かれ、四方を取り囲むようにして、アヒルへと迫る。

「クっ：！“上がれ”！」

アヒルが自身へと弾丸を放ち、上空へと舞い上がる。

「“遣れ”！」

「うっ：！」

上空へと上がったばかりのアヒルが、響くその伍黄の言葉に、険しい表情を見せながら、さらに上空を見上げる。崩れ始めている天井から、抜け出す忌が刃へと形を変え、雨のようにアヒルへと降り注ぐ。

「チっ：！」

軽く舌を鳴らしながら、銃口を天井へと向けるアヒル。

「“荒れ狂え”っ」

アヒルが大きく、口を開く。

「“嵐”：！」

周囲に激しい風を巻き起こしたアヒルは、その風を中心に立って、降り注ぐ雨の刃を防ぐ。

「“夜光”」

「あっ：！」

強い風を貫き、アヒルへと迫る黒い光線。

「ク：！うぐっ：！」

必死に体を逸らすアヒルであったが、後一瞬のところで間に合わ

ず、黒い光線がアヒルの左腕をかすめる。

「うっ…！うああああっ…！！」

かすめたその瞬間、強い痛みがアヒルの全身の感覚を駆け巡り、アヒルは大きく目を見開き、激しい叫び声をあげる。痛みを意識が奪われたのか、嵐は砕け、上空に浮かんでいたアヒルの体が、力なく降下していく。

「うううっ…！」

何とか床に着地したアヒルが、苦しげな表情で左手を抱え込む。

傷自体は小さな掠り傷で、ほとんど血も出ていないが、強く走る痛みには左手は激しく痙攣し、まったく自由がきかない状態となっていた。

「痛みの、伝達ってやつか…」

痙攣する左手を見下ろし、アヒルが険しい表情を見せる。

「こりゃ、掠り傷一つ、負えねえーなっ」

苦い笑みを浮かべながら、動く右手を振り上げ、銃口を天井へと向けるアヒル。言葉を放たないまま、アヒルが十発ほどの弾丸を、上空へと撃ち抜く。

「“浴びせろ”！」

アヒルが言葉を発すると、上空へと放たれた弾丸は、赤い光の塊へと姿を変えて、一斉に伍黄へと降り注いだ。

「グワアアアアっ…！！」

光の雨が伍黄へと鋭く降り注ぎ、伍黄がほとんど忌と同化してしまった、重苦しい叫び声をあげる。光に背中の巨大な刃や、黒い全身のところが貫かれていく。

「痛い…痛いっ…」

こちらにまで痛みの伝わりそうな、強く訴える声を漏らす伍黄。

「痛い痛いっ…！！」

《グアアアア…！！》

「…っ！」

伍黄の一際大きな叫び声があがったと同時に、アヒルの攻撃によ

り貫かれた伍黄の体にあいた穴から、新たな忌が生まれ、すぐに伍黄に取り込まれ、あいていた穴を塞いでしまう。そのおぞましい光景を見て、アヒルは驚いたように目を見開いた。

「中途半端な攻撃じゃ…新しい痛みを生むだけかつ…」

険しい表情を見せたアヒルの額から、一滴の汗が流れ落ちる。

「もっと…もっと強い力を、一発で向けねえと…」

考えを巡らせながら、アヒルが銃を握る右手に、力をこめる。

「とりあえず、適当に攪乱して、攻撃する隙を…」

「後…何度、だ…？」

「……っ？」

今後の戦略を練っていたアヒルが、前方から聞こえてくる、問いかけのような、ひどく疲れた声に気付き、戸惑うように顔を上げた。

「伍黄…？」

「後、何度…」

その声は先程の叫び声のように、忌と同化したものではなく、伍黄の声であった。

「後何度…この“痛み”を浴びればっ…俺は、解放される…？」

「……っ」

答えを持たぬその問いかけを向けられ、アヒルは厳しい表情で、そっと目を細めた。しばらく考え込むような表情で俯いた後、アヒルが再び銃を構え、その銃口を自身へと向ける。

「“上^あがれ”」

アヒルが自らへ弾丸を放ち、赤い光に包まれて、高々と上昇する。崩れ落ちていく忌の天井のすぐ近くまで昇り、空中で体を止めるアヒル。

「今更、宙などに昇って何をっ…」

伍黄がまた、忌と同化した重苦しい声を発する。

「的になるだけだというのが、わからんかあ…！？」 “八^やつ裂け”！」

荒々しく言葉を放った伍黄が、背中の巨大な刃を、無数に枝分かれさせながら、空中にいるアヒルへと向けた。

「うううう…！」

鋭く迫って来た刃を、避けることも出来なかったアヒルは全身に浴び、体中を斬り裂かれて血を流すとともに、すべての感覚に激しい痛みを走らされる。

「ク…グっ…！」

それでもその場は動かず、空中に居続けるアヒル。

「ん…？」

そんなアヒルの行動の真意が読めず、伍黄は少し困惑するような表情を見せた。

「余計な攻撃はしない気だ、アヒルさん…」

伍黄とは逆に、保はアヒルの考えをわかっているような様子を見せる。

「伍黄さんに、余計な痛みを与えないために…」

アヒルを見上げるその瞳が、そっと細められる。

「一緒に…一緒に見届けよう、灰示…」

保がもうあまり動かぬ右手を、自分の左胸へと当てる。

「この、“痛み”の果てを…」

胸へと当てた手を握り締め、保はどこか祈るような表情を見せた。

「はあっ…はあっ…」

「何の、つもりだ…？」

苦しげに息を乱しながらも、空中に浮かんだまま、その場を一步も動こうとしないアヒルを見上げ、伍黄が戸惑うように眉をひそめる。

「まあいい。それほどまでに痛みを浴びたいというのであれば、浴びせてやる…！“八^やつ裂け”！」

強く叫びあげた伍黄が、アヒルへと再び、無数の刃を向ける。

「ううううっ…！」

またしても避けることなく、その刃をすべて直撃し、激しく血を流して、苦しげな声をあげるアヒル。

「ク…！ううう…！」

全身に走る痛みと、全感覚に走る痛みの両方に襲われ、アヒルは一瞬、意識さえ手放しそうになる。

「何故、動かない…？本当に、気でも触れたか…？」

それでも空中を動かぬアヒルを見上げ、伍黄が益々、戸惑いの表情を濃くする。

「はあ…はあ…」

ひどく息を乱しながら、血の流れ続ける右手を、アヒルがゆつくりと振り上げる。

「ん…？」

銃口を天井へと向け、鋭い表情で構えるアヒルを見つめ、眉間に皺を寄せる伍黄。

「何だ…？」

「あ…」

伍黄が戸惑う中、アヒルがゆつくりと口を開く。

「“集まれ”…！」

アヒルが力強く言葉を放つと、アヒルの銃口の先に赤と金色の光が、混ざり合うようにして輝きを放ちながら、集約し始める。

「あれはっ…」

四方から集まり、その大きさを、輝きを増していく光を見上げ、そっと目を細める伍黄。

「すべての力を結集し、最後の一撃に懸ける、か…」

やっとアヒルの行動の意味を理解した様子で、伍黄が呟く。

「わずかな時を生きる、愚かな人間の好みそうなことだ…」

アヒルを見上げたまま、伍黄が嘲るような笑みを浮かべる。

「だがまあ…たまには、神の一興に付き合うのも…悪くはないか…」

一瞬だけ、その嘲りの笑みを穏やかなものにしたかと思うと、伍黄はすぐさま笑みを止め、鋭い表情となって、長い爪の伸びた両手を、上空のアヒルへ向け、突き上げた。

「“宿れ”…！」

伍黄が言葉を放つと、伍黄の突き上げた両手の前に、アヒルの銃

口の先と同じように、黒い、忌で形成された力の塊が集約されていく。

「伍黄さん…」

まるでアヒルに合わせるように、力の集約を始めた伍黄を見つめ、保がそつと目を細める。

「アヒルさんっ…」

その視線が上へ昇り、上空のアヒルへと向けられる。

『グっ…！うううう…！』

集められていく二つの力は、徐々にその勢力を増し、あまりの強い力にか、周囲には、激しい風が吹き荒れ始めた。

「これで終わりだ、言葉の神っ」

強く言い切った伍黄が、アヒルを見つめるその赤い瞳を、さらに鋭いものへと変える。

「言葉と共に消え失せろ！」

激しく放たれる、伍黄の声。

「“焼^やき尽くせ” えええ…！！」

その言葉を合図に、集約された黒い光の塊が、上空にいるアヒルへと、勢いよく放たれる。

「…っ」

どんどんと迫って来る巨大な黒光を見つめながら、焦り一つなく、落ちついた表情を見せたアヒルは、集約されたその赤と金の光とともに、ゆっくりと銃口を下方へと下ろしていく。

「あ…」

狙いを定め、口を開くアヒル。

「“当たれ” えええっ…！！」

強く引き金が引かれ、集約された光が、一気に放出される。

「クワアアアアアアっ…！！」

その光が空中で美しい巨鳥へと姿を変え、所狭しと大きな翼を広げた鳥は、向かってくる黒光と、正面からぶつかり合った。

——
バ
ア
ア
ア
ン
！

Word 45 波紋 (1)

——孤独でいることが嫌で、存在することが嫌で、人のように
儚く消えて無くなれるのかと、左胸を突き刺してみた。

でも、消えて無くなれなかった。

——痛い：痛い：——

いつもの声が頭の中に響けば、すぐに貫いたはずの胸の大穴は埋
まった。

喉を引き裂いても、腹を抉っても、“痛い”の声に、俺の体は逆
に癒えていく。

消えてしまいたいのに、無くなってしまいたいのに、死ねない。
どんなに足掻いても、死ねない。

痛い。存在し続けることが、痛い。

「うっ：ううう：！」

ただ、声を枯らせて、泣いた：：：——

「ああ：そうか：」

激しくぶつかり合う二つの力により、周囲に巻き起こる嵐のよう
な強い風。その風に吹かれながら、過去を思い出した伍黄は、懐か
しむようにそっと目を細めた。

「俺の、俺の望みは：“痛み”の消滅でも、言葉の消滅でもなかつ
た：」

やがて伍黄の放った黒い光の塊が、アヒルの放った赤と金の強烈
な光に呑み込まれ、消えていく。

「俺の望みは：俺自身の、消滅っ：」

伍黄の光を破ったアヒルの光が、伍黄へと迫る。

「……っ」

目の前の光を確かめると、伍黄はそっと、その瞳を伏せた。

.....！

強い強い、どこまでも響きそうなほどに強い音が一瞬だけ聞こえ、すぐに止む。

アヒルと伍黄、二人が互いに残っているすべての力を集約し、ぶつけ合った二つの巨大な光も、あれだけの光を放っていたというのに、今はどちらも一片の欠片の残っていない。巻き起こされた強風も、すっかり収まり、崩れかけのその空間には、静けさが漂っていた。長い長い戦いの、終わりを告げるような、そんな静けさである。

「はあ…はあ…」

右手に構えていた銃を下ろし、アヒルが上空からゆっくりと地面へと降りる。

「う、うう…」

地面に足を着けると、アヒルはすぐに左肩を抱え込むようにして、身を屈めた。激しく負った傷からは、まだ赤い血が流れ落ちている。

「あ…ああ…」

「……？」

前方から聞こえてくる、声にならない声に気付き、アヒルが少し顔を上げる。

「ああ…あ…」

取り込んでいた忌の力がすべて消え失せたのか、背中^{やもり}の刃も、爪も牙も無くなり、黒い肌ではなくもとの人の肌色に戻った伍黄が、力なく地面に倒れ込んだ。

「忌の気配が…消えてる…」

倒れ込んだその者から、忌の気配は感じられない。恐らく、もうその男は伍黄ではなく、伍黄の支配から逃れ、也守^{やいほ}の刃に戻ったのであろう。

「あいつ…あいつは…？」

刃の体から抜け出ているはずの伍黄の姿を探し、アヒルが周囲を

見回す。

<グウ…ウウっ…>

「あっ…」

漏れるように聞こえてくる禍々しい声に、振り向いたアヒルが眉をひそめる。

<ウウウ…ウ…>

刃から少し離れた地面に、這いつくばるように伏せている、黒い影の塊。それは、刃の体から出た伍黄の、本来の姿なのだろう。その体は少し溶けるように崩れており、見るも無残な姿であった。

<ア…アア…ウウ…ウ…>

「伍黄…」

最早、言葉にもならないのであろう、細かく途切れた声を発する伍黄のその姿を見て、アヒルがそっと目を細める。

「……っ」

どこか意を決したような表情を見せ、アヒルが右手の銃の銃口を、もう動くことも出来ないであろう伍黄へと向けた。

「“当た…”

「……っ」

「えっ…?」

アヒルが言葉を発しようとしたその時、アヒルの銃の上に、銃を下ろすように、一本の手が乗って来た。

「灰示っ…」

「………」

その手は、真剣な表情を見せた灰示のものであった。

「お前、なんっ…あっ」

アヒルが問いかける間もなく、灰示はアヒルの銃から手を離し、傷だらけの両足をゆっくりと動かして、伍黄のもとへと歩いていく。灰示のその様子を見つめ、アヒルは一瞬、どこか悲しげに目を細めた後、銃を持つ右手を下ろした。

「イツキ…」

<ウ…ウウ…>

倒れている伍黄のすぐ横に座り込み、伍黄へと呼びかける灰示。灰示のその声に反応し、伍黄が顔と思われる部分を、かすかに上げる。中央に輝く二つの赤い瞳は、今は弱々しく瞬いていた。

<ハイ、ジ…>

力ない声が、懐かしそうに灰示の名を呼ぶ。

<俺が…この俺が、負けるとは…思っても、みなかったよ…>

赤い瞳が少し細まり、ただの黒い影の伍黄が、どこか微笑んでいるように見える。

<“痛み”を…生むばかりだと、思っていたが…>

伍黄が視線を落とし、徐々に消え始めている自分の体を見つめる。

<“痛み”を…消し去る言葉も、あるんだな…>

禍々しかったその声は、今はとても、穏やかに響いていた。

<初めて…知った…>

「うん…」

ゆっくりと零れ落ちる言葉を、受け止めるように、灰示が頷く。

「僕も、知らなかったよ…」

——君も…“痛い”の…?——

今までの痛みを拾いあげるように、掛けられた言葉。

「つい、この前までは…」

<そう、か…>

今までのように、灰示の言葉を批判することではなく、伍黄は納得した様子で頷く。

<ハイ、ジ…ハイジ…>

伍黄が弱り切った声で、必死に灰示へと呼びかける。

「何だい？イツキ…」

その呼びかけに、灰示は優しく応じた。

<声が…あの声が、聞こえないんだ…>

少し戸惑うように発せられる、伍黄の声。

<一瞬も止まることなく、聞こえていたのに：あんなに強く、頭の中に：響いていたのに：>

伍黄の心の中の戸惑いを表すように、赤い瞳が左右に揺れる。

<今はもう：こんなに、静かだ：>

「うん」

頷きながら、灰示がそっと目を細める。

「うん…」

もう一度頷きながら、灰示が地面に力なく放り出されている、伍黄の手を取る。その手は溶けるように消え始めており、灰示はすくい上げるように持ち上げ、自分の手でそっと包み込んだ。

「静かに、眠るといい…」

灰示が伍黄の手を握る手とは別の手に、一本の赤い針を構える。

「おやすみ、イツキ…」

穏やかな笑みを浮かべると、灰示は包み込んだ伍黄の手に、構えたその針の先を、優しく、決して痛くないように優しく、突き刺した。

「“果^はてろ”」

灰示が静かに、言葉を落とす。

<……っ>

針から放たれる赤い光を見つめながら、灰示の言葉を聞き届け、伍黄はゆっくりとその瞳を閉じた。

——パァァァン！

針から発せられた赤い光に包まれると、伍黄の黒い影の体は、高い音を響かせた弾け飛んだ。宙を舞う水粒のような黒い欠片が、引き寄せられるように空へと舞い上がり、そして、消えていく。

「……………」

その場に立ち上がり、その欠片を見送る灰示。

「灰示…」

アヒルが灰示の後方へと歩み寄り、上方を見上げる灰示へと呼びかける。

「ただの、“痛み”の塊だから…かな…」

「えっ？」

背中の方から聞こえてくる灰示の声に、アヒルが少し首を傾げる。

「こういう時…どうしたらいいのか、よくわからないんだ…」

「……っ」

聞こえてくるその言葉に、アヒルがそっと目を細める。

「祈ってやれよ」

「えっ…？」

返って来る答えに、灰示が少しだけ後ろを向く。

「あいつが…今度こそゆっくり、眠れるように…祈ってやれよ」

「……そうか…」

アヒルからの言葉を受け、灰示が再び、上を見上げる。

「………」

そのまま目を伏せ、しばらくの間、立ち尽くす灰示。数秒の時間が経つと、灰示はまた、その赤い瞳を開いた。もう、黒い欠片は一粒もなく、すべて消えてしまっている。

「神に…」

上を見上げたまま、灰示がゆっくりと口を開く。

「神に祈るのなんて、生まれて初めてだ…」

「そうか…」

そう言った灰示の背を見つめながら、アヒルは小さく笑みを零す。

「安の神様…」

「ん？」

背を向けたままの灰示に呼ばれ、少し首を傾げるアヒル。

「一応、礼は言っておくよ」

素っ気ない声が、アヒルへと届く。

「ありがとう…」

「……っ」

灰示から届けられるその言葉に、アヒルはより一層深く、笑みを浮かべた。

「ああ…」

小さな札を受け止めるように、アヒルはしっかりと頷いた。

「んあっ？」

何やら重く響く音が聞こえ、アヒルが不思議そうに顔を上げる。

崩れ始めていた天井や壁のあらゆるところから、大きなヒビが入り始め、アヒルたちの居る空間は、本格的に崩れ始めていた。

「やっべ！マジ崩れが来てんぞ！」

どんどんと崩れ落ちて来る天井を見上げ、焦ったように声をあげるアヒル。

「やべえぞ！灰示！急いでここをっ…！」

「んんん、こんな年中、寝惚けっぱなしの俺が眠っちゃって、すみませえ〜んっ」

「えええ！？もう交代してるう！？」

灰示が先程まで立っていた場所に横たわり、気持ち良さそうに眠っている保の姿に、アヒルが勢いよく驚く。

「えええっと…ああ！あいつも居るし…！」

少し離れたところで倒れている刃の方を振り向き、焦ったように頭を掻くアヒル。

「とにかく、ガアスケで…！ううう…！」

銃をガアスケの姿へと変えようとしたその時、アヒルの全身に激しい痛みが走り、アヒルが思わずその場に膝をついてしまう。

「やべっ…もう力が…」

アヒルが力なく声を発すると、右手の銃が赤い言玉へと戻ってしまふ。

「ク、っソ…」

「情けない声を出すな」

「……っ」

すぐ目の前から聞こえてくる、聞き覚えのあるその声に、アヒルがパツと目を見開く。

「諦めないことが、あなたの唯一の取柄だろう？」

「か…籠也！」

アヒルのすぐ前に立ち、手を差し伸べる籠也の姿に、アヒルが思わず嬉しそうな笑みを零す。

「悪い、マジ助かった」

「あのバカだけに、神を任せてはおけないからな」

籠也が肩を貸し、アヒルがその場で立ち上がる。

「刃…！」

「弓？」

倒れている刃のもとへと駆け込んでいく弓に気付き、アヒルが振り向く。

「戻ったのかっ」

「手当ても会話も、全部後回しにして！」

アヒルがホツとしたように笑みを浮かべていると、唸り始めた崩壊音の隙間から、高らかと声が響いた。

「ザベス！」

「エリザよ！とにかく、この場から脱出するわよ！」

眠りこけている保を背負い、勇ましく声をあげたエリザが、緑色に輝く右足を勢いよく振り上げる。

「描^{えが}け”…！！」

エリザの振り切った足から放たれた強い光が、崩れゆく真っ黒な壁に、大穴をあけた。

「あっ」

まだ日の昇っていない暗い朝空の下、広がる森の向こうを見つめ、

紺平が何か気付いたような表情を見せる。果てしなく広がる森の光景の一部に、大きなヒビが入り、そこから無数のヒビが空へ、地面へと走っていくと、割れた景色の向こうに、黒い影の塊のようなものが見えた。

「あれは…」

「アジトに張り巡らされていた結界が、壊れたのね…」

「結界がっ？」

冷静に言い放つ囁の言葉に、紺平が素早く振り向く。

「もうすぐ、アジトも崩れ落ちるわよ…」

「えっ！？じゃあ、ガアたちは！？」

「フフフ…生き埋めかしら…？」

「えええっ！？」

囁が不気味に微笑むと、紺平が焦ったように声をあげる。

「ど、どうしよう！？早く、助けに行かないとっ…！」

「落ち着け」

慌てふためく紺平に、檻也が短く声を掛ける。

「落ち着いてられるわけないよ！だってガアたちが…！」

「あれを見ろ」

「へっ？」

前方を指差す檻也に、紺平が言葉を止め、檻也の指の先へと視線を移す。

「あっ…！」

その瞬間、大きく目を見開く紺平。

「ったく、アヒルと戦うといつも最後、こんな感じねえっ」

「全部、俺のせいみたいに言うなよ、ザベス」

「エリザよ！」

あれこれと言ひ合ひながら、紺平たちの居る方へと歩いてくるのは、アヒルとエリザ。アヒルに肩を貸している籠也や、エリザに背負われた保、そして刃を背負った弓の姿もある。

「ガア！」

「アヒるん…」

紺平と囁が思わずその場を飛び出し、歩いてくるアヒルの方へと駆け出していく。

「大丈夫？ ガア」

「おお、紺平。お前も来てたのか」

紺平が籠也とは逆側に肩を貸し、アヒルを支えると、アヒルは紺平へと笑顔を向けた。

「フフフ…地獄の底からこんばんは…アヒるん…」

「おお、お前も無事みたいだな…囁…」

不気味な笑みを向けてくる囁に、アヒルはすぐに表情を引きつる。

「はぁ！」

背負っていた保を地面へと下ろし、その場にしゃがみ込んで、一息つくエリザ。

「つたく、足止めして散々疲れてる私を、よくもまあ、更に疲れさせてくれたものよねえっ」

「足止めしかしていないから、体力は有り余ってるんじゃないかったのか…？ 衣えの神…」

自由気ままな物言いを見せるエリザに、呆れたように言葉を投げかけながら、檻也も皆のもとへと歩み寄って来る。

「奈々瀬、あのバカの治療を頼む」

「あ…うん…」

「……？」

籠也に言われ、ゆっくりとした足取りで皆のもとへとやって来て、地面で眠る保へと両手を差し伸べる七架の様子を見て、アヒルが少し首を傾げる。アヒルたちが無事に帰って来たというのに、七架は笑顔一つ見せず、淡々と保の治療を始めている。

「奈々、瀬…？」

そんな七架の様子を見つめ、首を傾げるアヒル。

「刃…！ 刃…！」

「……っ」

後方から聞こえてくる声により、七架へと向けられていたアヒルの注意は、すぐに動かされる。

「刃……!!」

アヒルたちの少し後方では、地面に座り込んだ弓が、両手に抱えるようにして横たわらせた刃に向かい、必死の呼びかけを行っていた。

「神……」

「大丈夫だ」

不安げに振り向く箆也に、アヒルはすぐさま笑顔を見せる。

「刃っ……!!」

「ん……」

「刃……!」

薄く開かれた刃の口から、わずかに漏れる小さな声。その声を逃さず耳に入れた弓は、さらに声の音量をあげ、刃の名を呼んだ。

「ゆ……み……?」

刃がゆっくりとその瞳を開き、すぐに視界に入った弓の名を、そっと呟く。開かれたその瞳は、忌の真っ赤ではなく、透き通った青色をしていた。

「刃……! 刃っ……!」

「弓……?」

両目から涙を溢れさせた弓が、倒れたままの刃の首元へと、強く両腕を回し、抱き締める。

「俺は……一体……」

泣きじゃくる弓を見つめながら、刃は戸惑うような表情を見せた。

「ふう」

「何とかなったわね……フフ……」

刃と弓の様子を眺め、箆也と囁が、どこかホッとしたように胸を撫で下ろす。

「……っ」

始忌から解放された刃と弓、二人の姿を確認し、安心した笑顔

見せるアヒルであったが、刃のその姿に、伍黄がもうここには居ないことを思い知らされるようで、そつとその瞳を細めた。

「あ、そういやもう一人の鎧よろいとかって奴は？ 助けられたのか？」

「与守よもりは、ここには居なかった」

「へっ？ 居ない？」

「また戻ったら、説明する…」

アヒルへ答えながら、箆也は厳しい表情を見せた。

「見ろ」

『……っ』

檻也の声に、皆が一斉に後方を振り返る。

「始忌のアジトが、完全に崩れ落ちるぞ」

まるで、その檻也の言葉を合図にするかのように、割れた景色の向こうから見えた、黒い忌たちの塊であるアジトは、大きな音を立てて爆発した。爆発が次の爆発を呼び、吹き荒れる風の中に、アジトの姿は完全に消えてなくなっていった。

「終わったな」

「いや…」

「えっ…？」

すぐさま否定するように声を発する箆也に、檻也が眉をひそめる。

「終わりじゃない」

「そうね…」

箆也の言葉に頷くように、エリザが続く。

「例え彼等が消えても、この世界に“痛み”がある限り、忌はまた生まれる…生まれ続ける…」

アジトが消え去り、ヒビも無くなった景色を眺めながら、エリザがどこか遠くを見るような瞳を見せる。

「私たち五十音士が、本当に戦わなきゃいけないのは…忌ではなく、言葉に潜む、“痛み”の方なのかも知れないわね…」

「ああ…」

エリザの言葉に、アヒルが深く頷く。

「そうだな…」

アヒルの声が風に乗り、空へと舞い上がった。消えていった始忌たちのその後を、追いかけるように。

こうして、アヒルたち五十音士と、始忌との戦いが終わった。
たくさんの、大きな波紋を残して……。

Word 45 波紋 (2)

完全に夜が明けきる前に、忌に取り憑かれ、町を徘徊していた言ノ葉町の人々を自宅へと戻し、壊れた町の建物などを修繕するためエリザたち衣団えだんと檻也たち於団おだんは、合流した韻いんの部隊とともに、そのまま休むことなく、事後処理の任務を行うこととなった。

戦いで疲れ果てていたアヒルたち安団には、休息が許可され、アヒルたちは言ノ葉町へ戻ったが、自宅へ戻る前に一旦、為介の家へと向かうことにした。

言ノ葉町。町の小さな何でも屋『いどぼた』。

「えっ…？」

長い戦いを終え、アヒルたちと共に『いどぼた』へと戻った七架は、待ち構えていた衝撃的な現実には、思わず耳を疑った。

「六騎むつきを…武守むもりに…？」

「うん」

聞き間違えではないかと、確認するように聞き返す七架に、為介が扇子を振りながら、軽い口調で返事をする。

「もともと忌に取り憑かれなかった時点で、五十音士なんじゃないかなあ」とは思ってたんだけどさあっ」

為介がその軽い口調のまま、話を続ける。

「ほらあ？大量の忌さんに襲われて、こっちも色々たいへんだっただけじゃない？だから、ちよっつと彼を無理やり五十音士にして、助けてもらっちゃったってわけえ」

「無理やりって…」

その言葉に、アヒルが一気に険しい表情となる。

「あんなガキ相手に、あんた一体、何考えてっ…！」

「為介を責めんのは、お門違いだ」

為介へと怒鳴りあげようとしたアヒルを、横から口を挟み、止め

る恵。

「恵先生っ」

「あいつを五十音士にしたのは、私だ」

「えっ？」

「……っ」

はつきりと言い放つ恵に、アヒルと七架が驚きの表情を見せる。

恵は鋭い表情を見せ、そのまま七架のすぐ目の前まで歩み寄っている。

「私が“目醒めろ”の言葉を使って、あいつを無理やり、五十音士にした」

「……っ！」

まるで現実を突き付けるように、七架の目の前で強く言い放つ恵。恵のその言葉に、七架が衝撃を走らせ、大きく目を見開く。

「言葉使ったって、恵先生っ……！」

「第二十一音“な”、解放……」

「えっ……？」

アヒルが恵へと怒鳴りあげようとする中、深く俯いたまま、右手の言玉を解放させる七架に、見守っていた箆也が焦ったように声を発する。

「ま、待て……！ 奈々……！」

「……っ！」

箆也が止める間もなく、七架は解放された真っ赤な薙刀を、恵へ向けて振り下ろした。

『あ……』

仲間たちが大きく目を見開き、声すら出せないままに、目の前の光景を見つめる。

「………」

鋭い表情を見せたまま、一瞬も目を逸らさず、七架を見つめている恵。その恵のすぐ横の壁に、七架の振り下ろした薙刀の刃が、深々と突き刺さっていた。

「ああゝあ、また家に穴っ」

壁を抉った薙刀の刃を見て、為介ががっくりと肩を落とす。

「先生の…」

薙刀を振り下ろした七架が、下を向いたまま、決して恵の方は見ようとせず、言葉を発する。

「先生のやったことは…間違っていないだと、思います…」

その声はかすかに震え、薙刀を握っている七架の手も、小刻みに震えている。

「先生が言葉を使ったから…六騎も、みんなも無事だったんだろうけど…けど…」

七架の声が、強く震える。

「私は、先生のこと…許せそうにありません…！」

「……………」

震えながら、搾り出されたその声を聞き、恵がそっと目を細める。

「許さなくて、いい…」

恵が落ち着いた声を、俯いたままの七架へと向ける。

「好きなだけ恨め」

「……………」

恵の言葉に、七架は強く唇を噛み締めると、壁に突き刺していた薙刀を引き戻し、すぐに体の向きを変えて、恵へと背を向けた。

「六騎は…？」

「こっちの部屋、壊れまくっちゃったから、店の方で寝かせてあるよぉ」

「連れて、帰ります…」

「どうぞお。ご自由にっ」

扇子を振りながら、場違いなほど暢気な表情で答える為介。為介の答えを聞くとすぐに、七架は皆に背を向け、足早に部屋を後にした。

『……………』

七架が出ていくと、部屋に未だかつてないほどの静けさが訪れた。

「恵、先生…」

「……っ」

ゆっくりと振り向いたアヒルにも答えず、恵はただ、深く俯いてしまう。そんな恵の様子を見て、アヒルはそっと表情を曇らせた。

「アヒるん…」

「えっ？ あっ」

囁に呼びかけられ、初めは首を傾げていたアヒルが、ハツとした表情となる。

「奈々瀬…！」

七架の後を追うように、部屋を飛び出していくアヒル。

「大丈夫かしら…？」

出て行ったアヒルを、囁が少し不安げに見送る。

「報告はもういいだろう。僕たちも、檻也たちの手伝いに行くぞ、囁」

「え…？ ええ…」

急にそう言う籠也に、囁が詰まらせながらも返事をする。部屋を出て行こうと、部屋の出口まで歩を進めた籠也が、すぐ手前で足を止め、素早く恵の方を振り返った。

「あなたのやったことは、五十音士としては正しい。だが…」

言葉を付け加えた籠也が、刺すような瞳で恵を見る。

「人としては、最低だ」

「………」

はつきりと言い放つ籠也の言葉を受けても、恵はその凍りついたような表情を、少しとして動かそうとはしなかった。

「行くぞ、囁」

「ええ…」

細めた瞳で恵を見つめながら、囁も籠也に続くようにして、部屋を出て行く。安団の皆の居なくなっただけの部屋に、恵と為介だけが残された。

「あゝらら、言いたい放題ですねえ。彼らっ」

皆を見送り、どこか呆れた様子で肩を落とす為介。

「恵サン？」

「……後は、お前に任せる」

首を傾げて呼びかける為介に、搾り出すようにそれだけ伝えた後、恵は部屋の壁にあいた大穴から外へと出て、静かにその場を去っていった。

「あらあゝ、珍しく傷心、かなあ？」

「為介さん」

「ん？あ、雅^{みやび}クンっ」

去っていく恵の姿を見送り、少し困ったような笑みを浮かべた為介が、呼ばれる名に再び部屋の中を振り向くと、別の部屋から雅がやって来た。

「どうだったあ？高市クンの様子はあ」

「傷は奈々瀬さんの治療により、ほぼ完治していますが、余程の力を使ったのでしょうか。深く眠っています。しばらくは目覚めないかと」

「ま、仕方ないねえ」

雅は、アヒルたちが運んで来た保を、別の部屋へと寝かせ、戻って来たのである。雅の報告を受け、為介は納得するように頷いた。

「皆さんは？」

誰も居ない部屋を見回し、雅が不思議そうに首を傾げる。

「ああゝ何か修羅場っぽくなっちゃってさあゝ、皆、出て行っちゃった」

問いかける雅に、為介が相変わらずの軽い口調で答える。

「修羅場？」

「ほらあ、奈々瀬さんの弟の武守クンのことだえ。無理やり目醒めさせたの、皆すっごく怒っちゃってさあ」

「……っ」

話の内容とは裏腹に、明るく話す為介。だが為介の言葉を聞いた途端、雅は表情を曇らせた。

「何か、考えがあつてのことなのですか？」

「へっ？」

「今回、無理に武守を目醒めさせたこと……」

「べっつにいゝ」

真剣に問いかける雅に、為介はすぐさま首を横に振る。

「しいて言うならあ、我が身可愛さつて感じ？ボクらが戦わなくていいようにい、彼を目醒めさせたのっ」

「……………」

答える為介の笑みを見つめながら、雅が険しい表情を作る。

「あなたのことは、常日頃から軽蔑していますが……」

「ひっどいなあ」

「今回のことは、今までで最も、軽蔑します」

「……………」

はつきりと言い放つ雅に、為介がそつと目を細める。

「だろうね……」

為介は諦めたように呟き、どこか困ったような笑みを浮かべた。

「奈々瀬！奈々瀬……！」

「……………」

店の方で眠っているという六騎を連れていくため、長い廊下を足早に突き進んでいた七架は、後ろから必死に呼ぶアヒルの声に、やつとその足を止めた。

「奈々瀬……」

足を止めた七架と少し距離を取ったところで、アヒルも足を止める。

「あ、あの……」

引き止めたはいいが言葉が出ず、アヒルが少し考えるように俯く。
「その……！め、恵先生のことなんだけどっ……」

困惑しながらも、何とか言葉を繋げるアヒル。

「先生のやったことは、確かに良くないことだ。俺だって、そう思う。だけど恵先生だって、きっと好きで、あのガキを五十音士にしたわけじゃっ…！」

「わかってる」

「へっ？」

はっきりと答える七架に、アヒルの言葉が遮られる。

「私も先生の生徒だから…悪戯に他人を巻き込んで、それを良しとする人じゃないってことくらいは、わかってる…」

アヒルに背を向けたまま、七架が言葉を続ける。

「六騎を五十音士にしたこと、先生もきっと、苦しい決断だったと思う…」

「奈々瀬…」

まるで恵を氣遣うように言う七架に、アヒルはそっと目を細めた。

「でも…でもね、六騎のことだけじゃないの…」

「えっ…？」

言葉を付け加える七架に、首を傾げるアヒル。

「今回のこと、あの始まって人たちのこと…私、どうしても、あの人たちが“悪者だ”とは、思えなかった…」

「…っ」

七架の言葉に、消えていった伍黄の姿を思い出し、アヒルが少し視線を落とす。

「私…私が戦った、あの人のこと…」

——お前が本当に優しいなら、今、俺に掛ける言葉を間違えんな
…

七架の脳裏に、死に際の碧鎖^{ヘキサ}の笑顔が、思い出される。

「倒したく、なかった…」

重く言葉を落とし、七架が強く、両拳を握り締める。

「消したくなんか、なかった…！」

「奈々瀬…」

七架の肩が、声が震えていた。だが、どうしても出来ず、アヒルはただ、その場に立ち尽くす。

「私、五十音士になった時は…朝比奈くんの力になれるって、皆と一緒に戦えるって、ただ嬉しかったの」

懐かしむように、七架がそっと目を細める。

「でも、今はわからない」

戸惑うように、投げられる言葉。

「何が正しいのか、何が間違ってるのか…わからない…」

言葉と共に、七架の音が周囲を彷徨う。

「五十音士として、この言葉で戦おうって…今は、思えない」

「……っ」

迷った末、答えの言葉が静かに落とされると、アヒルはそっと俯いた。アヒルにその言葉を否定することなど、出来はしなかった。

「ごめん…ごめんね、朝比奈くん…」

アヒルに二度、謝罪の言葉を発すると、七架は再び足を進め、廊下の突き当たりへと姿を消していく。

「あっ…」

七架を呼びとめようと、右手を前へ出したアヒルであったが、その手はすぐに下ろされる。

「……………」

七架を追うことも出来ぬまま、アヒルは遣り切れない表情で俯いた。

Word. 45 波紋 (3)

衣団、於団、そして韻の面々の必死の努力の甲斐あって、日が昇った頃、言ノ葉町には、もとの平穏な時が戻っていた。少しばかり遅くなった朝に、仕事の早い者は焦ったように支度をしながら、それでも不思議がることもなく、いつも通りに一日を始めている。忌に取り憑かれていた時の記憶は、人々には残っていないようである。そして、町の小さな八百屋『あさひな』にも、いつも通りの朝が来ていた。

「おっはよお〜！アーくう〜ん！カイワレ大根アタアック！」

「グフ！」

ベッドで眠りこけていたアヒルの顔面に、突入してきた父の投げた、ふさふさとしたカイワレ大根の束が直撃する。鼻と口をカイワレに覆われ、アヒルは苦しげに声を漏らしながら、大きく顔をしかめて、その瞳を開けた。

「今日はアーくんが珍しく、何の寝言も言ってなかったから、とりあえずカイワレ大根にしてみたあ〜！」

「なんで、とりあえずカイワレなんだよ！」

「ブフっ！」

アヒルにカイワレを投げ返され、顔面に喰らった父が、苦しげな声をあげる。

「さっすがアーくん！お父さんの息子！なんて、素晴らしいコントロール！」

「へえへえ」

何故か感動した様子で目を輝かせる父を軽くあしらい、アヒルがベッドから体を起き上がらせて、すぐ手元に置いてある時計に目をやる。

「さっき寝たとこだったのに、もう七時かよ…」

「へえ？」

「いや、何でもねえ」

不思議そうに聞き返す父に、すぐさま答えを返すアヒル。夜明け間近まで始忌と戦っており、家へ帰って来たのがほんの一時時間前だということを、父に言うわけにもいかなかった。

「はあっ、しゃあねえなあ」

寝不足であることは仕方ないと諦め、アヒルがベッドから立ち上がり、素早く制服に着替える。

「そういえば、アーくん」

「ああ？」

父に呼ばれ、アヒルが着替えながら、声だけで答える。

「今日は籠也くんも囁ちゃんも来てないみたいだけどお？」

「あ、ああ、何か昨日、夜遅くまで用事とか言ってたから、寝坊したんじゃない？」

父の問いかけに少し焦りながらも、適当な答えを返すアヒル。籠也と囁は、衣団や於団と共に最後まで、言ノ葉町の事後処理に当たっていたため、アヒルよりも家へ帰る時間は遅くなっていた。アヒルを起こしに来る余裕が、あるはずもない。

「ええ？二人が居ないと、お父さん寂しい」

「一人で勝手に寂しがってろ」

ウジウジと兩人差指を合わせている父へと冷たい言葉を投げかけ、制服に着替えたアヒルは、机の上の鞆を取り、部屋を出て、階段を降りていく。

「はよー」

階段を降りてすぐの戸を開き、居間へと入るアヒル。

「おはよう、アヒルくん」

「よおっ、今日もちゃんと起きたかあ？」

「……っ」

新聞を読んでいた顔を上げ、アヒルへ笑顔を向けるツバメと、台所から顔を出し、菜箸を持った手を軽くあげるスズメ。忌だらけとなった学校では結局、ツバメとスズメに会うことが出来なかったの

で、いつも通りの二人の様子を見て、アヒルが安心したように胸を撫で下ろす。

「良かった」

「え…？」

思わず言葉を漏らしたアヒルに、聞き取れなかったのか、ツバメが少し首を傾げる。

「いや、別に何でもねえ」

「おはようございまあーすっ」

そこへ、店の通用口が開く音と共に、明るい挨拶の声が入ってくる。

「紺平」

「おはよう、ガア」

目元にクマ一つ作らず、今日も爽やかに現れたのは、笑顔の紺平であった。紺平も檻也と共に事後処理にあたっていたため、そう寝てはいないはずだが、まったくそれを感じさせない。

「いつもにも増して、眠そうな顔だね」

「お前はシャキっとし過ぎだろ」

「風紀委員ですからっ」

呆れたように言うアヒルに、紺平は得意げに微笑んだ。

「んで？お前、何分寝たの？」

「えっ？寝てないけど？」

「えっ！？一秒も寝てねえーのかよ！？」

「どうやって一秒だけ寝るのさ」

朝食を終えたアヒルは、迎えに来た紺平と共に、いつもの道を通り、学校へと向かっていた。

「お前、それでよく学校行こうって気になるよなあ。俺だったら、絶対行かねえーけど」

「ガアみたいの不真面目じゃないんです」

呆れたように言うアヒルに対し、紺平も呆れたように言葉を返す。
「誰が不真面目だよっ。今だって、箆也や囁と違って、ちゃんとサボらずに学校行こうとしてんだろお？」

「ガアは極力、休まない方がいいよ。あの二人と違って、頭悪いんだから」

「頭悪い言うな」

「お前たちいゝ！」

「んあっ？」

前方から聞こえてくる大きな声に気付き、アヒルがゆっくりと前を見る。

「よく俺のもとに戻って来てくれたあゝ！お前たちいゝ！」

アヒルたちの進む道の前方には、何やら感動した様子で泣き叫んでいるグラサン、リーゼント男。隣校のアニキである。その周囲には、いつものように子分たちの姿があった。

「何言ってんスカあゝ？アニキ」

「俺ら別にどっこも行っていないっスよおゝ？」

「お前ら、昨日、ここに居なかったじゃないか！俺、探して、三つ隣の町まで行っちゃったんだぞ！」

『へえっ？』

必死に訴えるアニキに、子分たちが一斉に首を傾げる。

「俺ら、昨日もここに居たよなあ？」

「ああ、ああ。それで相変わらず、朝比奈に吹っ飛ばされるアニキを見た見た」

「へっ？」

次々と言い放つ子分たちに、アニキが目を丸くする。

「あつれれえゝ？俺ってば、あまりにロマンチスト過ぎて、フアンタジーな夢でも見ちゃったかなあ？」

「邪魔」

「ぎゃああ！」

『ア、アニキいゝ！』

大きく首を傾げていたアニキを、後ろからやって来たアヒルが、容赦なく蹴り倒す。大きな音を立てて地面に倒れ込むアニキに、子分たちが焦ったように声をあげた。

『だ、大丈夫ですか！？アニキ！』

「お、おのれっ、朝比奈あゝ！」

心配する子分たちに手を貸されながら、アニキが何とか起き上がる。倒れ込んだ拍子にリーゼントの先端が潰れ、何とも笑えない髪型となっていた。

「今日という今日は！コテンパンのパンパカパーンにいつ…！」

「はいはい、今日は眠いから、また明日なあ」

「あ！朝比奈！逃げるな！こら！」

勇んで戦いを挑んでくるアニキをあっさりと無視し、軽く手を振ると、アヒルはそのまま何食わぬ顔で、紺平と共に学校へ向かう道を進んだ。

「アニキさん、そんな遠くまで子分さんたち、探しに行ってたんだあ」

紺平がアニキたちの方を振り返りながら、どこか感心したように言う。

「だから忌に取り憑かれずに済んだのかなあ？」

「さあな。あいつのことなんて、マジで興味ねえ」

そう言いながらアヒルは、本当に興味なさそうに顔をしかめた。

言ノ葉高校、一年D組。

「おはよ！ガア、紺平っ」

『うわっ』

教室に入った途端、明るく声を掛けて来た想子に、アヒルと紺平は思わず声を揃え、驚きの表情を作る。

「何よ？二人して、人を化け物みたいにつ」

「ううん、別に…元気そうで良かったよ、想ちゃん…」

「はあ？」

少し引きつった笑みを浮かべながら言う紺平に、想子が大きく首を傾げる。先日、忌に取り憑かれた想子に、この教室で襲われた二人は、もとに戻った想子の姿に安心しつつも、少し戸惑ってしまっているのであった。

「ってかまあ元々、化け物みたいなもんだろ」

「何ですってえ！？バカガア！」

「ほおーら、騒いでないでとっとと席着けえ」

「……っ」

想子との言い合いを始めそうになったその時、割って入って来たその凜と響く声に、アヒルは思わず目を見開いた。

「もうすぐチャイム鳴るぞお」

教壇に立ち、アヒルたちへと声を掛けるのは、出席簿を片手に持った恵。

「あ…」

恵の姿に、今朝方の七架の一件を思い出し、アヒルがどこか少し気まずそうな顔を見せる。

「えっと…」

「おはよう」

「……っ」

戸惑うアヒルへ、恵が当たり前の挨拶を向ける。

「おはよう、ございます…」

あまり自然ではない感じで挨拶を返すと、アヒルは素早く教壇の前を横切り、一番窓側にある自分の席へと行って、静かに席を着いた。

「とっととホームルームやるぞお、席着けえ」

いつもと変わらぬ口調で、いつもと同じように生徒たちに声を掛け、授業を進める恵。七架のことで元気をなくしている素振りも見られず、アヒルはそんな恵を、ただじっと見つめた。

「今日の欠席は、神月に真田、高市に奈々瀬、か…」

よく知った名ばかりが並び、アヒルがゆつくりと教室の後方を振り返る。

「……………」

想子のすぐ前に空いた、七架の席を見つめ、アヒルはそっと目を細めた。

そして、放課後。

「ふわあー、よく寝たあ」

「授業中寝るなんて最低ね…」

「朝からずっと寝てて、六限から来た奴に言われたくねえーよ」

「フフフ…」

一日の授業を、ほぼ睡眠で潰しながらも何とか終えたアヒルは、委員会のある紺平と別れ、遅刻でやって来た囃と共に、他の生徒も多く下校している中、校舎から正門へと道を進んでいた。

「箆也は？」

「さあ…？まだ寝てるんじゃない…？」

問いかけるアヒルに、囃はあまり興味なさそうに答える。

「だよなあ。さすがに俺も、今日は休みたかったぜえ」

「七架も休みだったものね…」

「……………」

囃から七架の名が出ると、アヒルの表情が途端に曇る。そんなアヒルを見つめ、囃もそっと眉をひそめる。

「アヒるん…七架のことだけど…」

「安の神！」

『えっ？』

囃が真剣な表情でアヒルへと話しかけようとしたその時、学校では聞かれることもないはずのアヒルの呼び名が聞こえてきて、アヒルと囃は同時に目を丸くした。声の聞こえてきた正門の方を、二人が振り向く。

「安の神！」

「弓っ」

正門の前に立ち、校舎から歩いてくるアヒルたちへと元気に手を振っているのは、朝方に比べ、すっかり顔色も良くなっている弓であつた。大きな声でアヒルを呼ぶ弓に、周りの生徒たちの注目が集まっている。

「あんまりここで、神とか言わないでくれねえか？弓……」

「あ、も、申し訳ありません！安の神！」

足早に弓のもとへと駆け寄り、少し困ったように言うアヒルに、慌てて謝る弓であつたが、結局、大声で神と呼んでしまっている。

「フフフ……よくここがわかったわね……」

「はい！為ゐの神のところへ行ったら、こちらにいらっしゃるとのことでしたので！」

囁の言葉に、弓がはきはきと答える。

「傷はもういいの……？」

「はい！加守殿に治療していただきましたので、もうすっかりです！」

囁が気遣うように問いかけると、弓は両手を振り上げて、体調の良さをアピールした。

「あ、安の神」

「ん？」

思い出したように呼びかける弓に、アヒルが少し首を傾げる。

「今更なのですが、紹介させていただいても宜しいでしょうか？」

「紹介？」

「お目通り、失礼いたします、安の神」

「あっ」

正門の陰から、弓のすぐ横へと姿を現すその人物。

「五十音士“也守”、八城刃と申します」

「お前……」

そこに現れたのは、伍黄に取り憑かれていた也守の刃であつた。

こちら朝方と比べ、すっかり傷も癒え、顔色もよくなっている。刃はアヒルへと、伍黄のものではない、穏やかな笑みを向けた。

「そっか。お前と面と向かって会うのは、初めてか」

「はい」

何度も会っている感覚があるが、刃である彼と会うのは、確かに今が初めてであった。

「弓からすべて聞きました。安の神と安団の皆さんには、大変にお世話になったようで、何とお礼を申し上げてよいか…」

「礼なんていいって」

かしこまった態度を取る刃に、アヒルが困ったように笑みを浮かべる。

「元々は弓が先に、ザベスの攻撃から俺を助けてくれたんだ。だから、これで貸し借りなし。なっ？」

「安の神…」

笑いかけるアヒルに、弓も嬉しそうに笑みを零し、目を細める。

「もう一人の与守の彼はどうなったの…？ 確か、韻に保護されてるって聞いたけど…」

「はい、手当ても終わっているそうなので、今から韻へ迎えに行きます」

「我々も今回の件について、韻の聴取を受けねばなりませんので」

「そう…大変ね…」

弓に続いて答える刃の言葉に、囁が少し肩を落とす。

「では、あまり時間がありませんので、我々はこれで失礼いたします。安の神」

「ああ」

深々と一礼する刃に、アヒルが笑みを向ける。

「この御恩、一生忘れません」

「だから、そういうのやめろって。明日には忘れろ、んなもん」
「ならば…」

困ったように笑みを変えるアヒルに、刃がそっと微笑む。

「安の神が危機に瀕した時は、我らヤ行“三言衆”、必ず応援に馳せ参じましょう」

並んだ刃と弓が、アヒルへと大きな笑みを向ける。

「それで構いませんか？」

「……ああっ」

刃たちのその気持ちを受け止めるように、大きく頷くアヒル。

「それでは、失礼いたします」

「おう」

「囁さんも、お元気で…皆さんにも、宜しくお伝え下さい」

「ええ…あなたたちも元気でね…」

囁と弓が固い握手を交わすと、刃と弓は深々ともう一度、頭を下げて、アヒルたちへ背を向け、下校する生徒たちにまぎれて、道の先へと消えていった。

「行っちゃったわね…」

「ああ…」

少し名残惜しそうに、アヒルと囁が言葉を交わす。

「困ったものね…」

「へっ？」

小さく言葉を発する囁に、アヒルが振り向く。

「彼らを助けたくて戦ったのに…元氣な彼らの姿にホッとしたのと同時に…始忌が消えたことを思い知らされて、どこか哀しくなる…」

「……っ」

囁のその言葉に、アヒルが思わず表情を曇らせる。囁の言葉は、アヒルの心情そのものであった。元に戻った刃に安心したと同時に、伍黄がもう居ないと、哀しくなってしまったのである。

「本当、困ったものだわ…」

「俺たちの…」

「えっ…？」

今度はアヒルの声に、囁が振り向く。

「俺たちのやったことって…本当に、正しかったのかな…」

「……っ」

戸惑うように発せられる声に、囁がそつと眉をひそめる。

「アヒるん…」

「あっ」

少し険しい表情となって、名を呼ぶ囁に、アヒルがハツとなる。

「悪い、忘れて」

「あ…」

そう短く言うと、アヒルは歩を進め、囁が止める間もなく、正門の外へと出て行ってしまふ。

「アヒるん…」

去っていくアヒルの背中を見送り、囁はどこか不安げに声を漏らした。

Word. 45 波紋 (4)

——その頃、この部屋は、今より少しだけ、本数が少なく、
今より少しだけ、埃っぽくなかった。

「恵先生！」

言ノ葉高校の国語資料室に、元気な声が入って来る。勢いよく扉を開き、その部屋へとやって来たのは、制服姿の、爽やかな笑顔のよく似合う青年であった。少し茶色がかった髪に、透き通るようなまっすぐな瞳をしている。

「あれ？恵先生？」

「何だよ」

名を呼ばれた本人は、国語資料室の横にある小部屋で、山のよう
に本を積んだ机の横に座り、いかにも不機嫌そうな顔をその青年へ
と向けた。

「カラス」

「だから、俺の名前はカラスじゃなくってカモメだって、いつも
言ってるでしょう？」

青年は少し口を尖らせ、名を訂正しながら、恵のいる部屋の方へ
とやって来る。

「どっちでもいいだろ。鳥類なんて皆、同じようなもんだから」

「同じにされたら困りますよ。あ、これ。日誌」

「ああ」

少し眉をひそめながら、青年が片手に持っていた日誌を、恵へと
手渡す。

「そしたらウチみんな、同じってことになっちゃいますし」

「はあ？お前ん家、家族みんな鳥なのか？」

「はい！弟がいるんです！スズメとツバメとアヒル！」

「三羽もいんのかよ…」

「三人です、三人」

鳥の数え方をする恵に、青年がしっかりと訂正を入れる。

「だいたい、スズメとツバメはともかく、アヒルって…だっせえ」

「本人に言ったら、怒りますよお？それ」

「いいんだよ。どうせ会うこともねえーんだし」

「あ、じゃあ今度、連れて来ましょうか？」

「やめろ」

何の考えもなく、無邪気に提案する青年に、恵は素早く制止の言葉を投げかける。

「ほら、下校時間だ。とっとと帰れよっ」

「はいはい」

時計を指し示して言う恵に、青年が軽い口調で返事をする。

「じゃあ先生、また明日！」

青年は明るい笑みを残し、その部屋を去っていった……――

「んっ…」

相変わらず本の山盛り積まれた机の上から、恵がゆっくりと顔を上げる。本に埋もれて埃っぽい国語資料室を、恵が少し薄めた瞳で、まだ少し寝惚けた様子で見回した。

「寝ちまったか…一睡もしてなかったからな…」

始忌との戦いの間、ずっと言ノ葉町に居たとはいえ、恵も眠れてはいなかった。素早く前髪をかき上げ、恵が改めて机と向き合う。

「ええーと、日誌日誌っ…」

――あ、これ。日誌――

「……っ」

日誌を見ようと広げた恵が、思い出される日誌を差し出した青年の姿に、ペンの動きを止める。

「なんでまだ、夢なんか見るかな…」

自分自身に呆れるように、素っ気なく言葉を発する恵。

「“明日”なんて…もう永遠に來ないのに…」

悲しげに声を響かせ、恵がそっと頭を抱える。

「失礼するわよ」

「……っ」

急に入って来る声に、恵がパッと目を見開き、少し身構えるように振り向く。

「ん？どうかした？恵の神」

「エリザベス…」

国語資料室へと姿を現したのは、この学校にはあまり似つかわしくない、派手な金髪の少女、エリザであった。妙に構えた様子の恵に、扉を閉めたエリザが少し首を傾げる。

「いや…っか、古い名で呼ぶな。今の衣の神はお前だろうが」

すぐに首を横に振った恵は、話題を変えるように、エリザへと注意の言葉を投げかける。

「私が“え”の旧字体“ゑ”の言葉で神やってたのは、もう二十何年も昔の話なんだ」

「それは、そうなんだけど…ついねっ」

厳しく言い放つ恵に、エリザが少し困ったような笑みを浮かべる。

「で？何だ？」

「ああ、そうそう。言姫見張らせてる慧^{けい}から、報告が來たの」

恵に聞かれ、エリザがすぐに真剣な表情を作る。

「やっぱり韻は、前々から始忌のこと、感付いてたみたい。毛守^{ももり}にわざと始忌の一人を取り憑かせて、一部始終観察してたみたいよ」

「なのに、自分たちで手は下さず、か…相変わらず、悪趣味な奴らだ」

エリザの話聞き、恵が呆れたように深く肩を落とす。

「韻が何か企んでるのは、間違いないわね」

「ああ、調べてみる」

「こつちもこのまま引き続き、慧に言姫を見張らせるわ」
はつきりと言いつつエリザに、恵が少し眉をひそめる。

「あまり無茶はさせるなよ」

「えっ？」

忠告するように厳しい表情を見せる恵に、エリザが少し首を傾げる。

「和音は穏やかそうに見えるが、自分の目的を達成するためには、手段を選ばない奴な気がする」

恵が鋭く、目を細める。

「あまり踏み込ませると、お前の神附きが…」

「大丈夫よ。慧はうざいところあるけど、強いもの。なんせ私の一番の神附きだし」

不安げに言う恵に対し、エリザは自信に満ちた笑みを見せる。

「それに、まだそんなに派手に動く気もないから、安心してっ」

「……そうか」

エリザの言葉に、まだあまり納得はしていない様子であったが、恵はとりあえず頷いた。

「じゃあ、私はこれで。また何かあったら、連絡するわ」

「ああ、頼む」

軽く手を振り上げ、エリザが恵へと背中を向けると、再び資料室の扉の方へと歩いて行く。

「あ、そうだっ」

扉を開いたところで、何か思い出したように声を出し、エリザが恵の方を振り返る。

「与守の代わりに、始忌の緑呂ロクロに成りすましてたって奴のことなんだけど」

エリザが忘れていた話を、恵へと伝える。

「韻の手先じゃなかったみたい。あっちは別口っ」

「別口？」

「ええ。目的はまだ不明だけど、韻はその人間の見当つけてるみた

いよ。名前は確かあ…」

思い出そうと、大きく首を傾げるエリザ。

「阿修羅^{あしゅら}」

「……っ！」

告げられるその名に、大きく目を見開く恵。

「私は聞いたことないんだけど、恵、なんか知ってる？」

「………」

問いかけるエリザに答えぬまま、震える唇を隠すように、恵が手で口元を覆う。

「恵？」

「いやっ…」

エリザがもう一度、名を呼ぶと、恵はすぐさま否定の言葉を発した。

「初めて…聞く名だ」

「そう」

恵の答えに、エリザが少しがっかりしたように肩を落とす。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ」

改めてそう言うと、エリザは今度こそ振り返ることなく資料室を出て行った。扉が固く閉まり、恵だけとなった資料室は、一気に静まり返る。

「……っ」

ゆっくりと、天井を見上げる恵。

「阿修羅…」

その名を呼んだ恵は、ひどく冷たい表情を見せていた。

その頃、朝比奈家隣。二階、箆也の部屋。

「……………」

囁と違い、学校へ行かなかった箆也は、自室の寝台に横たわったまま、右手に持った言玉を天井へと掲げ、それをまっすぐに見つめていた。

——“明^あかせ”：——

脳裏を過ぎって離れないのは、取り憑いた緑呂の意識さえ食らった、冷たい目の男。

「“あ”の、言葉……」

男が使った言葉を思い出し、箆也がそっと目を細める。

「やはり、あの男が……阿修羅……」

赤い短髪に、鋭い金色の瞳をしたその男は、耳にしたピアスを揺らしながら、深い森の中を歩いていた。やがて森を抜け、ただっ広い平原へと辿り着く。

「阿修羅」

「ん？」

自分の名を呼ばれたのか、男はふと足を止め、声の聞こえてきた足元を見下ろした。

「やあ、現^{うつろ}」

「“やあ”では、ありやせんわ」

男の足元に立っていたのは、背の高い男の腰ほどまでの身長のない、小柄で痩せ細った、白髪の老人であった。右手に持っている杖の先端についている黄色い宝玉は、言玉のように見える。笑顔を向けた男に、老人は呆れた顔を向けた。

「一人で勝手な行動ばかりしておってからに」

「置き手紙、していかなかったか？」

「手紙置いてけば、いいってもんじゃないわい！」

シレつと答える男に、老人が勢いよく怒鳴りあげる。

「お前さんが勝手に動き回ったお陰で、韻に気付かれてしまったじやろうが！」

「別にいいじゃないか。今更、隠れる必要もないだろう？」

怒鳴り続ける老人に、少しも堪えた様子は見せず、笑顔を見せた男がそのまま平原を進んでいく。すると、進む道のその先に、白一色の服を纏った、茶色いセミロングの、美しい顔立ちの女が立っている。

「やあ、^{なつめ}棗」

「おかえりなさいませ」

男が声を掛けると、棗と呼ばれた女は、深々と頭を下げた。

「だいたい、何故に始忌共の……」

女のもとへと歩み寄ろうとしていた男の後方から、まだ不機嫌そうな顔の老人が、さらに言葉を発する。

「言葉の成れの果てごときのところへ、潜入に？」

「予感がしたんだ」

「予感？」

「そう」

老人の方を振り返り、男がそつと笑みを浮かべる。

「予感の通り、面白いものを見つけたよ」

男がより一層、冷たい笑みを浮かべ、再び横に立つ女の方を見る。

「附き合ってくれるか？ 棗」

「仰せのままに」

男の言葉に、女が深々と頭を下げる。

「我が神」

「……っ」

呼ばれるその名に、男は満足げに微笑んだ。

Word. 46 訪ネビト (1)

アヒルたち安団と始忌の戦いが終わってから、三日の時が流れていた。

言ノ葉町、とある民家。

「ただいまぁー！」

黒いランドセルを背負った子供が、勢いよく玄関の扉を開き、明るい声を発しながら、家へと帰って来た。

「おかえり、六騎」

エプロン姿の優しそうな母親が、玄関先までやって来て子供、六騎を迎える。

「ただいま、お母さん。んっ？」

母親に笑顔を見せていた六騎が、履いている靴を脱ごうと下を向く。すると、六騎の視界に、玄関にきれいに並べられた、子供のものよりは少しサイズの大きい革靴が入って来る。その革靴を見つけ、六騎は少し眉をひそめた。

「お姉ちゃん、今日も学校休んだの？」

「そうなのよ。体調悪いって言うわりに熱もないし、急にどうしたって言うのかしらねえ」

「……っ」

悩むように首を傾げる母親に、六騎はさらに表情を曇らせる。

「俺、ちよっと様子見てくる」

「あ、六騎！」

母親が止める間もなく、六騎は靴を脱ぎ散らかし、玄関からすぐのところにある階段を駆け上がっていく。二階には向かい合い、部屋が二つ。片方は六騎のもの、そしてもう片方は六騎の姉のものであった。六騎が少し躊躇いながらも、姉の部屋の扉の前へと立ち、コンコンと、扉を二回叩く。

「お姉ちゃん…？」

六騎がそつと呼びかける。だが、部屋の中から返事はない。

「お姉ちゃん、あのね…」

聞こえているのか、わからない。寝ているのかも知れない。だがゆつくりと、六騎は自分の言葉を続けた。

「あのね、俺…朝眠っちゃう前に、あの扇子の人からその、ちゃんと色々聞いたんだ…忌とか、言葉のこと、とか…」

六騎が子供にしては、冷静な、大人びた声を発する。

「俺ね、あの日、タカシに忌っていうのが取り憑いてたことも、あの目つき悪男に助けられたことも、全部思い出した…」

——六騎…！——

靄がかっていた、夢だとはかり思っていた夜は、今、より鮮明な記憶として刻まれている。

「あの日、お姉ちゃんが五十音士になったことも…」

「……………」

六騎がその言葉を落とすと、扉の向こうから張りつめた呼吸のよなものが、確かに感じられた。

「それで、それでねっ…俺も五十音士になったって聞いた時、俺…その…」

「やめて」

「えっ…？」

扉の向こうから、懇願するように発せられた、その小さく弱い声に、六騎が少し戸惑った表情を見せ、言葉を止める。

「お姉ちゃん…けど、あのっ…！」

「聞きたくない」

六騎が必死に伝えようとするが、その声はまたしても、扉の向こうから遮られる。

「今は何も…聞きたくないの…」

「お姉ちゃん…」
弱々しいその声に、六騎はそれ以上、言葉を続けることが出来なかった。

言ノ葉町、何でも屋『いどばた』。

「ふんふんふ、ふうんっ」

うららかな午後、まるで客のいない店の中で一人、店に並んだ、統一感のない商品を並べ直しながら、為介はどこか機嫌良さそうに鼻歌を響かせる。

「こんにちは」

「いらっしゃあ、おつかえりい」雅クウーン」

店の戸が開き、迎える言葉を発しようとした為介であつたが、よく見知った顔が入って来ると、すぐにその言葉を変え、やって来た雅を出迎えた。

「今日は早いねえ」

「部活動が休みの日なので」

「ああ、オカルト同好会ってやつう？」

「ええ」

為介と何てことはない会話を交わしながら、雅が店の戸を閉め、奥へと進んでいく。

「相変わらず、客気のない店ですね。やるだけ無駄なんじゃないですか？」

「世の中に無駄な努力なんて、たったの一つもないんだよ！雅クン！」

「正しい言葉ほど、あなたに似合わないものはありませんね」

冷たく言い放ちながら、雅が熱く語っていた為介の横を素通りし、店の奥から家の中へとあがる。

「高市君の様子はどうです？」

「あつ、忘れてたあ。朝から一回も見えてないやあ」

「はあ…」

大きく広げた右手を口元へと当て、間の抜けた表情を見せる為介を見て、雅が深々と溜息をつく。

「あなたを人として頼った僕が、馬鹿でした」

「すっごい言われよお」

落ち込むようにがっくりと肩を落とす為介を無視し、雅が勝手知った様子で屋敷の奥へと進み、右方にある客間の襖を開く。

「はあっ…あれ？」

改めてもう一度、溜息をついていた雅が、顔を上げた途端、その眉をひそめる。客間の中央に敷かれた白い布団。掛け布団は少しめくれ上がっており、布団で眠っていたはずの保の姿は、なくなっていた。

「高市：君…？」

戸惑いながらも、いくつかある屋敷の部屋を回り、保の姿を探す雅。だが洗面所にも台所にも浴室にも、保の姿はなかった。

「い、為介さん…！」

雅が為介の名を呼びながら、慌てた様子で店の方へと戻っていく。

「いないい…？高市くんがあ…？」

「はい」

「そお」

保のいない状況を説明した雅であったが、為介は特に慌てる様子もなく、暢気なままに頷いた。

「まあいいんじゃない？三日も寝れば、体力的にも問題ないだろうしい」

「まあいいって…」

軽い口調で言う為介に、雅が強く眉をひそめる。

「目が覚めて、お家に帰っちゃっただけじゃない？」

「あなたに挨拶の一つもせず、ですか？」

「それはまあ、彼が礼儀知らずってことでえ」

「……っ」

適当な答えばかりを返す為介に、雅が不満げに表情を曇らせる。

「彼の家へ行ってみます」

「まあ、待ちなっ」

「ですが」

止める為介に、雅がすぐに言葉を返す。

「始忌の例もあります。また彼に何かあればっ……」

「違うよお。彼がこっそり出て行ったのは、彼の意志」

「えっ？」

すべてを見通したように言う為介に、雅が戸惑うように首を傾げる。

「心の整理をつけたいのさあ。自分の中に居る、波城灰示のことを認識して、過去も全部思い出して、とっても混乱してる」

「全部わかってて、行かせたわけですか……」

保の心情を見通した上で、保を行かせた為介に、疲れた様子で肩を落とす雅。

「それにしても……」

そつと瞳を細め、雅がどこか心配するような表情を作る。

「奈々瀬さんのこともありますし、戦いが終わってから朝比奈君も神月君も、少し様子がおかしいですし……」

雅が困ったように、一つ肩で息を落とす。

「何だか、安団がバラバラになっていくようですね……」

「そうだねえ」

雅の言葉に、あまり興味のなさそうな相槌を返す為介。

「あの五人がこんな風になってしまうなんて、思ってもみませんでした……」

「……っ」

為介がそつと瞳を細め、手に持っていた商品を戸棚へ下ろす。

「ねえ、雅クン」

「はい？」

為介に声を掛けられ、顔を上げる雅。

「この世の中に、解けることのない結び目なんて、たったの一つもないんだよ…」

「……………」

そつと告げられる言葉に、雅は表情を曇らせる。

「先の見えない言葉ほど、あなたに似合うものはありませんね…」
困ったように言いながら、雅は少し不安げな表情を見せた。

韻^{いん}本部、重要機密書庫。

「はあっ、やっぱり“阿修羅”^{あしゅら}なんて名前の五十音士はいないかあ」
分厚い五十音士名簿と書かれた本を閉じ、エリザが目の前机へと、力なく上半身を倒す。千ページはあるであろう、その本すべてに目を通していたため、エリザの疲労は相当にものであった。

「五十音士じゃないなら、一体っ…」

「衣^えの神」

「ん？」

呼ばれる名に、エリザが顔を上げる。書庫の入口から、韻の従者と見られる黒い着物姿の男が、エリザの座っている机の方へと、足早に歩み寄って来た。

「何？」

「言姫様から、ご伝言を預かって参りました」

「言姫から？」

「はい」

深々と頭を下げた従者が、エリザに一枚の小さな紙を差し出す。

「何？任務？ええーっと、人探してみたいね」

「お願い致します」

「私まだ、受けるとは言っていないわよ？」

「言姫様も、断って良いとは仰っていませんでした」

「……………」

きっぱり言い放つ従者に、少し不快そうに眉をひそめるエリザ。

「わかったわ。すぐに出る」

「お願い致します」

念を押すようにそう言い、深々と頭を下げると、従者は再び足早に入口へと向かい、書庫を後にした。従者が出て行ったことを確認すると、エリザが大きく肩を落とす。

「こんな時に、こんな遠くまで、わざわざ神である私に、人探しねえ」

改めて紙を見つめ、エリザが眉をひそめる。

「慧^{けい}、居る？」

「ここに」

エリザの呼びかけに応え、どこからともなく、エリザのすぐ横へと降り立つ忍服姿の少女。エリザの神付き、“計^{けもり}守”の慧である。

「言姫に任務喰らったわ。私をここから遠ざけようって魂胆みたい」では、間もなく言姫様が、何らかの行動を起こすと？」

「ええ、そう踏んで間違いないと思う」

慧の問いかけに、エリザが真剣な表情で頷く。

「君はこのまま、言姫を見張って。何か動きがあったら…」

エリザが少し迷うように、その間をあける。

「アヒル、それに恵に伝えて。わかったわね？」

「はい」

エリザの指示に、慧はしっかりと頷いた。

朝比奈家隣、二階、籠也の部屋。

「……………」

窓際の寝台の上に座り、分厚い本に集中している様子の籠也は、何やらとても気難しい表情を見せていた。

「宇^うの神…」

本に書かれている言葉の一部を目にし、籠也が小さく声を発する。

「旧世代の神以降、後任無し。現在は空席」

うだん　うつき
 続くように書かれている文章を、口に出して読み上げる籠也。

「率いる宇団、うだん 宇附も後任は無く、うつぎ 現在は実質、解散状態、か…」

その一文を読み上げると、箆也は顔を上げ、窓の向こうの景色へと視線を流した。

「だが……」

籠也がそつと、目を細める。

“貫け”

“睡魔”

思い出されるのはアヒルの兄、スズメとツバメが使っていた言葉。

「あの言葉は……」

「へえ、宇の神……」

「え」

すぐ傍から聞こえてくる声に、簞也が戸惑うように振り向く。

「さ、囁……！」

「箆也が“恋盲腸”以外の本、読んでるなんて珍しいわね…フッフ

箆也の座る寝台のすぐ横に立ち、大きくその腰を折りたたんで、箆也の読んでいた本へと視線を集めているのは、制服姿の囁であった。

「人の部屋に勝手に入るな」

「あら……？ あなただって、いつも勝手にアヒるんの部屋に入ってるでしょう……？」

注意するように険しい表情を向ける籠也に、あまり悪びれた様子もなくそつと微笑んで、囁は寝台から離れ、机のすぐ横に置かれた椅子へと腰掛ける。

「どうしたの……？ その本」

改めて箆也の持っている本を、指差す囁。

「見たところ：韻の重要機密書庫にあるはずの本みたいだけれど…」
「……檻也に借りた」

少し間を置いた後、箆也が少し不本意そうに呟く。

「和音がつい最近まで、よく読んでいた本らしい。僕なら、何かわかるんじゃないかと持ってきた」

「そう、弟くんが…」

箆也の言葉を聞き、囁が納得したように頷く。神の中でも、昔から一際強い権力を持っている於の神、於崎家の人間であれば、韻の重要機密本を持ち出すことも可能であろう。

「で…？言姫様が何を考えているのか、わかったのかしら…？」

「いや…」

囁の問いかけに、箆也が暗い表情で首を横に振る。

「宇の神…そういうえば、後は宇の神だけだものね…」

「えっ…？」

その言葉に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「安はアヒるん、以はイクラちゃん、衣はザベスさんで、於は箆也の弟くんでしょう…？」

囁が名前と共に一本ずつ指を折っていき、最後、小指だけが残る。

「後は宇だけ…宇の神が最後の神様ってことよね…」

「ああ…」

囁の残った小指の一本を見つめ、箆也がそっと目を細める。

「最後の神だからこそ重要なんだ…恐らくな…」

「……っ」

何やら考え込むように、厳しい表情を見せる箆也を見つめ、囁もその表情を曇らせた。

「で？あなたは一体、何の用で人の部屋まで入ってきたんだ？」

「ああ、そうだった…」

本と閉じ、改めて問いかける箆也に、囁が思い出したように頷き、腰掛けていた椅子から立ち上がる。

「転校生くん、どこかへ行っちゃったみたいよ…」

「高市が？」

「ええ…さつき、美守の眼鏡さんから連絡が来たわ…」

「そう、か…」

俯きながら返事をする簞也は、特に焦った様子も見せなかった。

「驚かないのね…」

「え？あ、ああ。何となく、そんな気がしていたからな」

「そう…」

簞也の答えに、疑問を持った様子もなく頷く囁。囁自身も、保は一度、整理をつけに行くのではないだろうか、そんな気がしていたので、簞也の答えにも、特に問いかけは入れなかった。

「七架は相変わらず学校休みだし、アヒるんもまだ、始忌のこと、引きずってるみたい…」

囁が少し困ったように、肩を落とす。

「今、攻め込まれたら…きつと全滅ね。私たち…フフフ…」

「楽しそうに言うな」

不気味に微笑む囁に、簞也が呆れた視線を送る。

「それで…？」

「えっ…？」

「うちの加守さんは、今度はまた何を、抱え込んでるのかしら…？」

「……っ」

心の中を覗き込むように問いかける囁に、簞也が表情を曇らせる。

「別に…何でもない」

「フフフ…まあ、話してもらえとは、最初から思っていないけれど…」

簞也の答えを予想していたのか、囁はそれ以上問い詰めようとはせず、楽しげに笑う。

「おおかた、あなたの戦った始忌に成りすましていた者のことかしら…？」

「……………」

「アヒるんには何者かわからなかったって言ってたけれど…あなた、

本当は心当たりがあるんじゃない？」

「今回は本当に、今までで一番、話したくない……」

「え……？」

思いがけない箆也の言葉に、囁が首を傾げる。

「話さなくて済むなら、それが一番いい。真実を語らずに済むのであれば、このまま……」

「箆也……？」

まるで祈るように、言葉を呟く箆也に、戸惑いの表情を見せる囁。

「告げることが……今の僕には、一番怖い……」

「……っ」

箆也の表情が、事の深刻さを表しているようで、囁はそれ以上、言葉を発することが出来なかった。

Word. 46 訪ネビト (2)

言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』。

「毎度あり！」

太い大根の入った袋と釣銭を渡し、買い物に來た主婦へと笑顔を向けるのは、紺色のエプロンを纏ったアヒルであった。頭には白いタオルを巻いており、学生というよりは、どう見ても商売人のスタイルである。

「あら、アーくん」

「ああ、おばさん。こんちはっ」

前の道を通りかかった、近くに住んでいる顔なじみの女に声を掛けられ、アヒルは軽く頭を下げた。

「お父さんのお手伝い？ 珍しいわねえ」

「ああ、何か町内会の集まりがあつてどうしてもつつーからの、その間だけ」

「あら、そうなの」

アヒルの言葉に、女が納得したように頷く。

「ダメよお？ 普段からちゃんと、手伝いしないと。お父さんいつも、息子たちが冷たいって嘆いてるんだからっ」

「アハハ…」

嘆いている父の姿が目には浮かぶようで、アヒルは思わず乾いた笑みを零した。

「じゃあ、頑張つてね」

「ありがとう」

去っていく女に応えるように、軽く手を振るアヒル。

「はあっ」

女の姿が見えなくなると、深々と肩を落とす、疲れた様子で溜息をついた。実はもっと手伝いをするよう注意されたのは、先程の女が初めてではなく、通っていくあらゆる町人が、アヒルへと小言を

眩いていったのである。父はいつも、どれだけの人間に愚痴を零しているのかと、不安にすら思えた。

「たっるいなあゝまだ帰って来ねえのかなあ？オヤジ」

店の奥にかかった時計を見つめ、アヒルがうんざりとした表情を見せる。

「こんな日に限って、スー兄もツー兄も帰って来ねえし：」

「ううん：」

「んっ？」

何やら唸るような声が聞こえてきて、時計を見ていたアヒルが、再び店頭へと視線を移す。

「うううん：」

アヒルが振り向くと、そこには、店の前にしゃがみ込み、店頭に並んだ野菜の一つ、トマトをじっと見つめている男の姿があった。派手な赤毛に、鋭い金色の瞳の、印象的な顔立ちの男だ。真剣にトマトを見ているその男に、アヒルは思わず顔を引きつる。

「何だ？こいつ：って、言っちゃダメか」

すぐに引きつった顔を戻し、店頭へと出て行くアヒル。

「いらっしやい！トマト、包みましようか？」

「え：？」

声を掛けたアヒルに、男がゆっくりと顔を上げる。目が合うと、その金目はさらに深く思え、どこか吸いこまれてしまいそうな、そんな感覚すら起きた。

「いや、その：」

「トマトじゃなくて、ピーマンですか？」

「いや：」

ピーマンへと視線を移した男に、アヒルがさらに問いかけるが、男はすぐにまた否定する。

「えっと：道を聞きたいんだが：」

「道？ああ、どうぞ」

遠慮がちに言った男に、アヒルがすぐに快い笑顔を向ける。

「この辺りに、“あさひな”という八百屋はないか？」

「はっ？」

男の問いかけに、思わず大口を開いてしまうアヒル。

「この辺りだとは聞いていたんだが、細かい場所がよくわからなくて…」

「いや、あのっ…」

呆然とした様子で頭を掻きながら、アヒルが男へと声を掛ける。

「ここ、だけど。“あさひな”って八百屋」

「えっ？」

アヒルの言葉に、男が目を丸くする。

「ここ、八百屋なのか？」

「どう見たって、八百屋だろうが！」

「てつきりケーキ屋かと…」

「どっこの世界にトマトやピーマンのショートケーキが売ってんだよ！」

驚いた様子で問いかけてくる男に、アヒルが思わず怒鳴りあげてしまう。これだけ野菜の並んでいる店頭を見て、ケーキ屋と思う方が器用である。

「ああ、そうか。これが八百屋か」

「……………」

その場で立ち上がり、まじまじと店の全体を見回す男を見つめながら、引きつった表情を見せるアヒル。男が変わった人間であることは、もう明らかであり、瞬時にあまり関わり合いになりたくないと思ってしまうのである。

「あのお、折角来てもらって悪いんだけど、今、オヤジ出掛けて…」

「じゃあここが、朝比奈カモメの家か？」

「えっ？」

父が出掛けていることを理由に、とっとと男を追い払おうとしたアヒルであったが、男が口にしたその名に驚いたように目を見開き、言葉の続きを呑み込んだ。

「そう、だけど…」

「成程な。そう言われて見れば、カモメとよく似ている」

「えっ…?」

懐かしむようにアヒルを見る男に、アヒルが少し戸惑うように首を傾げる。

「お前がカモメの父親か」

「どういう目え、してんだよ! どう考えたって、俺のが年下だろうが! 弟だ、弟!」

「ああ、なんだ。弟か」

再び怒鳴るアヒルに、すんなりと納得して頷く男。男のあまりのマイペースに、アヒルはすっかり振り回されていた。

「ったく、で? あんたは?」

「ああ、カモメの学生時代の友達なんだ」

「友達?」

男の答えに、目を丸くするアヒル。男の見た目は、二十三、四歳。確かにカモメが生きていたら、同じくらいの年であっただろう。

「ああ。五年振りに近くまで来たもんだから、ついでに、カモメの家に寄って行こうと思ってな」

「あ…」

そっと微笑む男に、アヒルが少し気まずい表情を見せる。

「あの、そのお、あんたは知らないかもしれねえけど…カー兄はその、五年前に…」

「大丈夫」

「え…?」

遮って言い放つ男に、俯いていたアヒルが顔を上げる。

「線香を持参した。焼香、させてくれないか?」

「……っ」

ポケットから線香を取り出し、穏やかに微笑む男を見つめ、アヒルはそっと目を細めた。

『用があったら、家の中まで大声で呼んでください』との看板を残し、盗まれる心配はしなかったのか、店頭の野菜たちをそのままにして、アヒルは男を家の中へと招き入れた。

「……………」

カモメの写真の飾られた仏壇の前に正座し、持ってきた線香で焼香を済ませた男が、両手を合わせ、深く瞳を閉じたまま、しばらくの間、じっとしている。カモメへ祈りを捧げているのだろう。だがその時間は長く、台所で茶を淹れていたアヒルが、淹れ終わり、居間へとやって来ても、男は祈りを送り続けていた。

「……………」

アヒルがテーブルへと湯呑を置く音が響くと、男はやっと瞳を開き、仏壇に背を向け、テーブルの横に座るアヒルの方を向いた。

「ツー兄特製の不味い麦茶しかねえけど、良かったら」

「ああ、済まない」

目の前に差し出された湯呑を見て、男がそっと微笑む。

「随分と話し込んでみたいだな」

「ああ…」

麦茶を一口、口にし、男が小さく頷く。

「五年振りだと、色々と話すことも多くて…済まなかったな」

「いやっ」

申し訳なさそうに言う男に、アヒルがすぐさま首を横に振る。

「友達とか来てくれんの、久し振りだったから、カー兄も嬉しかったと思うよ」

「そうか」

アヒルの言葉を聞くと、男はどこか安心したように微笑んだ。

「学生時代の友達ってことは、あんたも言ノ葉高？」

「いや、学校は違うんだ。俺はこの町からは、少し離れたところに住んでいたから」

「へっ？」

男の答えに、アヒルが首を傾げる。

「じゃあどこで、カー兄とは友達になったんだ？」

「ううん…」

それ程、難しい問いかけではないはずだが、男は悩むように、小さく声を漏らした。

「ボランティア活動、かな」

「ボランティア活動？」

その言葉に、思わず眉をひそめるアヒル。

「んなこと、やってたっけな？カー兄」

「とても優しい男だったよ」

アヒルが深々と首を傾げる中、湯呑をテーブルの上へと戻した男が、仏壇に飾られたカモメの写真を振り返り見て、懐かしそうに話す。

「誰に対しても公平で、誰に対してもその優しさを崩さなかった」

カモメを見つめ、男がそっと目を細める。

「それなのに…いや、それだからかな、とても頑固な男で…」

男が少し、困ったように笑う。

「一度、こうと決めたら、絶対に曲げないもんだから、俺たちはよく衝突していた」

「……………」

懐かしむように話を続ける男を見て、アヒルが嬉しそうに笑みを零す。

「まあ、今となってはいい思い出が…」

「あんた、仲良かったんだな。カー兄と」

「えっ？」

アヒルの言葉に、戸惑うように振り向く男。

「よくわかってる…カー兄のことっ…」

「……………」

大きく笑みを零すアヒルを見て、男がそっと目を細める。

「そうだな」

そして再び、カメメの写真の方を振り返る男。

「仲が良かった、本当に：親友だった、俺たちは：」

自分でも確かめるように、言葉を呟くその男の声は、どこか哀しく響き渡った。

「さて、じゃあそろそろお暇するかな」

「えっ？もう！？」

そう言っただけでさまたち上がる男を見上げ、アヒルが驚きの声を発する。

「お前も店番があるんだろう？邪魔して悪かったな」

「も、もう少しゆっくりしてけば、いいじゃねえか！」

アヒルが男を追いかけるように、慌てて立ち上がる。

「もうちょっとしたらオヤジも、スー兄とツー兄：あ、俺の他の兄ちゃんとかも帰ってくるし、だから：！」

「生憎、急ぎなんだ。ここには本当について、寄っただけだから」

「そ、そっか：」

引き止めようとするアヒルであったが、男の言葉に仕方なく納得し、どこか残念そうに肩を落とす。男を先頭にして、居間を降り、店の前へと出る男とアヒル。

「お前のお陰で、久し振りにカメメと話すことが出来た」

振り返った男が、アヒルへと笑顔进行ける。

「ありがとう、アヒル」

「いや、いつでもまた来てくれよ！」

「……っ」

明るく言葉を返すアヒルに、男の表情が一瞬だけ曇ったが、それはまたすぐに、笑顔へと変わった。

「そうだな、また来る」

笑顔を見せ、しつかりと頷く男。

「じゃあ」

「あ、ちょっと待ってくれ」

引き止めて、何やら店頭へと手を伸ばすアヒルに、男が少し首を

傾げる。

「これ！」

「え？」

アヒルが男へと投げ渡したのは、赤々ときれいに熟れた、一つのトマトであった。

「やるよ！土産！」

「……ありがとう」

右手の中に収まったトマトをじっと見つめた後、男が顔を上げ、アヒルへと笑顔を向ける。

「もらっていくよ」

「おうっ」

トマトを持った右手を軽くあげた後、男が背を向け、歩き出していく様子をしばらく見つめた後、アヒルが店の方を向き、空けていた間に置いていた看板をどかせる。

「あっ」

看板を持ち上げたまま、何か思い出した様子で声をあげるアヒル。
「そういえば、あんた、名前……あれ？」

男の名を聞き忘れたことを思い出し、すぐさま振り向いて、問いかけようとしたアヒルであったが、アヒルの振り向いた先に、すでに男の姿はなかった。長い一本道、つい先程までそこを歩いていたはずだというのに、男の姿はきれいに消えている。

「歩くの、早ええな」

「あつれ〜？アヒル〜？」

「ん？」

向いていた方とは逆の方向から聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、アヒルが素早く振り返る。

「スー兄！」

「何してんだあ〜？お前っ」

少し顔をしかめながら、アヒルの方へと歩み寄って来るのはスズメであった。学校のある方角とは別方向から帰って来たところを見

ると、どこかへ行っていたようである。

「オヤジが町内会の集まりだったっーからさ、その間だけ店番頼まれて」

「ああ、町内会か。そりゃお疲れさん」

「えっ…!？」

軽く手を振り上げ、そのまま店の奥へと入っていつてしまうスズメに、アヒルが思わず驚きの声を出す。

「ちょ…!手伝ってくれよ!スー兄!」

「やなこった。俺は今から、恋盲腸のドラマCD聞いて、ヒトミにフォーリンするんだよお」

「んなくだらねえこと、やる暇があんなら、家業手伝えよ!」

「うっせえなあ。お前が頼まれたんだろ?責任持って、お前がやれよっ」

抗議の声をあげるアヒルをあっさりとあしらい、スズメが靴を脱ぎ、店の奥から居間へと上がっていく。

「んあ?」

居間へと入ったスズメが、煙をあげている仏壇の線香に気付く。その線香は長く、まだ火がつけられてから真新しい。テーブルの上には、飲みかけの客用湯呑も置かれていた。

「誰か来たのか?…っ!」

疑問に思い、首を傾げていたスズメが、急にその表情を変える。

部屋にかすかに残るその気配は、スズメが昔、感じたことのある気配であり、そして決して、忘れることの出来ない気配であった。

「なあ?スー兄、晩飯のおかず一個やるから、店番代わってくんねえ?」

そこへ、店の方から顔を出したアヒルが、居間に立ち尽くしているスズメへと、懇願の声を向ける。

「アヒル、誰が来た?」

「へっ?」

スズメの急な問いかけに、目を丸くするアヒル。何故、スズメが

客が来たことを知っているのか疑問に思ったが、テーブルに残っている湯呑を見て、アヒルがすぐに納得する。

「ああ、カー兄の友達って人」

「兄貴の？」

「うん、カー兄とは相当、仲良かったっぽかったぜ」

聞き返したスズメに、アヒルが笑顔を見せて答える。

「けど、名前聞くの忘れちゃったんだよなあ、まあ、また来るつつてたし、そんな時間くかなあ」

「……………」

アヒルの言葉を聞きながら、スズメが俯き、何やら考えるような表情を見せる。そんな様子のスズメを見て、アヒルが少し首を傾げる。

「スー兄、もしかしてあの人のこと、知ってんのか？」

「え…い、いやっ」

問いかけるアヒルに、スズメが少し慌てた様子で、否定する。

「何でもねえ。店番、ちゃんとやれよ」

「えええー!？」

不満げに声をあげるアヒルに背を向け、足早に居間を出て、階段を上り、二階へと行くスズメ。

「まさか、な…」

そう呟きつつも、どこか不安げな表情を見せるスズメであった。

「はあ…! はあ…! はあ…!」

夜の暗闇の中、人気のない道を必死に逃げる一人の男。時折照らされるライトを眩しく光返すスキンヘッドに、何故か前髪だけを生やした不思議な髪型。真っ赤な学ランに蝶ネクタイとしたその男は、ひどく怯えた表情を見せ、後方をうかがうように、何度も何度も振り返る。

「うっ…！」

振り返った男の表情が、急に強張った。

「グウウウウ…」

後方から唸り声をあげ、男の方へとゆっくりと歩み寄って来るのは、全身金色の輝く、鋭い紫目の、謎の獣。ライオンや豹のようにも見えるが、背中からは金色の羽根が生えており、人がよく知る動物の姿はしていない。

「う、うあ…！来るな！来るなあ…！」

「グアアアアア！」

「う…！うああああ…！！！」

男の凄惨な叫び声が、夜の闇にこだました。

Word. 46 訪ネビト (3)

保も七架も、そして何やら考え事をしている様子の籠也も、家に籠もりきりで、学校へもアヒルの家へも来ない状態のまま、一日、また一日と、時は流れていった。

「今日は紺平も休みかあ」

「曾守^{そもり}さんと一緒に、“変格”取得の修行旅行に出たらしいわよ…」
「ふうーん」

賑やかしかった頃から一転、囁と二人だけで並び、通学路に行くアヒル。何やら考え中の籠也や、紺平はともかく、保や七架のことは、どうにかしなければと思いながらも、どうにも出来ない今の現状に、アヒルは少なからず、もどかしい気持ちを抱いていた。

「なあに？アヒるん…私と二人きりだと、緊張しちゃう…？」

「んなわけあるか！」

「フフフ…」

強く否定するアヒルを見て、囁が楽しげな笑みを浮かべる。囁の方はというと、仲間たちの様子の变化に、それほど、もどかしがっている素振りはない。

「仕方ないわよ…」

「へ？」

急に諭すような声を掛ける囁に、アヒルが目を丸くする。

「仲間と一緒に乗り越えていく問題もあれば、一人で乗り越えて行かなきゃならない問題もある…」

「……っ」

囁の言葉に、何のことを言っているのかを理解し、そっと眉をひそめるアヒル。

「今は静かに待つことが、私たちの役目…」

「ううん…」

アヒルはまだ納得しきっていない表情を見せながら、とりあえず小さく頷いた。

「というわけで今日、二人で心霊スポット巡りデートに行かない……？」

「誰が行くか！んなもん！」

「あつれえ？」

「んん？」

聞き覚えのある声がして、アヒルが下へ向けていた顔を上げる。

「あれあれあつれえ？」

「またかよ……」

顔を上げたアヒルが、瞬時にうんざりとした表情を作る。アヒルたちの行く通学路のその先で、辺りをきよろきよろと見回し、何やら探す素振りを見せているのはアニキであった。その周りには、同じように辺りを見回している、いつもの子分たちの姿もある。

「だから邪魔だっつってんだろ、お前ら」

「うぎゃあ！」

『あ、アニキい！』

アヒルが勢いよくアニキを蹴り倒すと、子分たちが一斉に悲痛な声をあげる。

「お、おのれ！朝比奈あ！」

「今度は何探してんだよ？」

地面に打ち付けたのであろう、赤くなった鼻を押さえ、すぐさま立ち上がったアニキへと、アヒルがうんざりした表情のまま問いかける。

「子分だ！」

「はあ？子分なら、ちゃんと居んじゃねえかつ」

「お前の目は節穴かあ！？朝比奈！」

アニキを周りを囲む、多くの子分たちを見て言うアヒルであったが、アニキはそんなアヒルの言葉を、強く批判した。

「どう見たって、一人足りないだろうが！」

「どう見たって、んなもんわかんねえーよ」

熱く主張するアニキに対し、真逆の冷めきった反応を返すアヒル。
「そういえば…スキンヘッドに前髪だけ生やした、赤学ランに蝶ネクタイの人が居ないわね…」

「そう！ そうなんだよ！ さすが真田さん！」

「んな変な奴、居たっけ…？」

アニキの子分たちを見回し、ポツリと呟いた囁に、アニキが嬉しそうに何度も頷く。そんな二人の横で、アヒルは大きく首を傾げる。
「風邪でもひいてんじゃねえのかあ？」

「あいつは四十度の高熱があっても、俺との約束は守る熱い男なんだよ！」

「熱いっつーか、馬鹿だろ」

引き続き熱弁するアニキに、思わず突っ込みを入れてしまうアヒル。

「アニキ、俺らもう一回、町全体回って、探してきます！」

「おう、じゃあ俺はあいつの家に行ってみる」

その居ないという子分の一人を心配した様子で、町に散り散りに駆けていく子分たち。

「この通り、俺は忙しいからまた明日、ぶっ倒しにきてやる！ またなあ、朝比奈！」

捨て台詞のようにアヒルにそう言葉を投げかけて、子分たちに遅れながら、その場を駆け去っていくアニキ。その場に茫然と立ち尽くしたアヒルと、囁だけが残る。

「別に誰も、ぶっ倒しに来てとか、頼んでねえーけど…」

「フフフ…」

ぼやくように言うアヒルの横で、囁がそっと微笑む。

「けれど…」

「んあ？」

何やら不安げに眉をひそめる囁に、アヒルが首を傾げる。

「リーゼントくんに何かあった後って…いつも必ず、不吉なことが

起こる気が…」

「考え過ぎだろ」

不気味な雰囲気たっぷりに、不吉なことを言う囁に対し、アヒルは特に気にした様子もなく、むしろ呆れたように肩を落とす。

「どうせ、大したことじゃねえって」

「……そうだと、いいけれど…」

気を取り直して、通学路を歩きだすアヒルの背を見ながら、囁は少し不安げに呟いた。

言ノ葉町、小さな町のCDショップ。

「おっちゃん、こんちはあー」

朝のいい時間、普通の学生であれば学校へ行っているであろう時間だというのに、格好だけ一応学生服のスズメは、明るい笑顔で店の中へと入って来た。

「この、恋盲腸ドラマCD第三弾、“荒れ出す恋模様、愛の波浪警報”の巻、くださあーい！」

いかにもデロ甘そうなジャケットの描かれたCDを、ノリノリの様子で店主へと差し出すスズメ。

「三千円」

「へいへえーい」

笑顔のスズメが、ポケットから財布を取り出し、レジの前のトレーへと千円札を三枚出す。その間に店主はCDを袋へと入れ、スズメへ差し出した。

「毎度」

「ああー楽しみだなあ。二弾もすっげえ良かったよ！おっちゃんのおススメ通り！」

「……………」

「あり？」

親しげに話しかけるスズメであったが、店主からはまるで反応が

なく、スズメが少し首を傾げる。

「おっちゃん？」

「毎度、ありがとうございます」

「……っ」

スズメの言葉に答えず、ただ深々と頭を下げる店主を見て、スズメはそっと眉をひそめた。

時が過ぎ、放課後。言ノ葉高校、オカルト同好会部室。

「じゃあ、次の議題内容を決めたいと思います」

眼鏡を人差し指で押し上げた雅が、教師の代わりに教壇に立ち、机に座っている、数名の同好会部員たちを見る。

「何か意見のある人」

『………』

「ん？」

まったく返って来ない反応に、雅が少し眉をひそめる。

「意見のある人？妖怪でもお化けでも、何でも構いませんか？」

『………』

雅がもう一度問いかけるが、やはり部員たちの反応はない。何も意見がないにしても、“特に思いつきません”くらいは言うのが普通である。部員の一人ひとりをよく見てみると、雅の言葉を見無視しているというよりも、本当に反応がない。雅の言葉が、聞こえていないかのようであった。

「確かに普段から、わりと無口な方々ですけど、これは……」

その様子を見つめ、雅が表情を曇らせる。

「ツバメ君」

「うん……」

雅が振り向くと、教室の前扉付近に立っていたツバメが、真剣な表情を見せて頷いた。

「言葉が…操作されてるみたいだね…」

「操作…?」

ツバメの言葉に、雅はそつと眉をひそめた。

その頃。同じく言ノ葉高校、国語資料室。

「恵ちゃん!」

「はあ…」

資料室へと入って来る、あまり頭の良くなさそうな、無駄に明るいその声に、すでに声の主を理解したのか、本を読んでいた恵は、すぐさまその本を閉じ、深々と溜息をついた。

“先生”と呼べと、何度言ったらわかる?

本を机の上に置き、恵が睨むような瞳で、入口の方を見る。

「スズメ」

「お、正解っ」

恵に名を呼ばれたスズメは、嬉しそうに笑顔を見せた。

「恵ちゃんて、俺の名前は間違えないよねえ。兄貴とかアヒルの名前はすーぐ、間違えんのにつ」

「お前なあ…」

軽い口調を飛ばしながら、恵の方へと歩み寄って来るスズメに、恵が呆れきった視線を向ける。

「資料室にはノックしてから入れ。後、いい加減、朝一からちゃんと学校へ来い。まじで卒業出来なくなるぞ?」

「あつ、もしかして俺に恋しちゃってるから、間違えないとかあ?」

「聞け!」

恵の言葉は一切聞かず、マイペースに自分の言葉が続けるスズメに、恵が思わず怒鳴りあげる。

「まったく、恵ちゃんにはトキメキってもんが足りてないよお。恋盲腸読んだらあ?」

「読むかっ」

スズメの薦めを、恵がすぐさま拒絶する。

「で？放課後登校してまで、私に何の用だ？」

「んん？別にいゝただゑ恵ちゃんの顔見につ」

「殺すぞ…？」

「いやん、怖あゝい」

本気で怒りを見せ始める恵に、スズメが黄色い声をあげる。

「そう怒らないでよ」

「お前が怒らせてんだろうがっ」

「町の言葉に、変化が起きてる」

「……っ」

急に口調の変わったスズメの言葉に、恵もその表情を変える。

「何…？」

眉をひそめ、もう一度確認するように、スズメへと問いかける恵。

「嫌な予感が、するんだ」

恵へとそう言ったスズメは、真剣な表情を見せていた。

韻本部、言語鑑定室。

「始めて下さい」

「はい」

凜々しく言い放つ和音の言葉に頷いた白衣の女性が、書類片手に部屋中央へと歩いていき、明るく照らされた部屋の真ん中で、ただ椅子に座り込んでいる一人の男のすぐ横へと立つ。男は歩み寄って来た女性に目を与えることなく、まっすぐに前を向いたままであった。

「あなたの名前は？」

「佐々田治郎」

白衣の女性が問いかけると、佐々田と名乗った男がすぐに答えを返す。

「あなたの年齢は？」

「三十三」

「あなたの誕生日は？」

「十二月二十日」

書類を目にしながら、次々と質問していく白衣の女性。投げかけられる質問に、特に疑問を抱いた様子もなく、佐々田はすらすらと答えていく。

「あなたが今朝、食べたものは？」

「ご飯と味噌汁」

「あなたが今、食べたいものは？」

「……………」

同じように告げられたはずの質問に、何故か、佐々田の答えは止まる。

「あなたが今、やりたいことは？」

その質問にも、佐々田は答えない。

「……………」

佐々田の様子を見つめていた和音が、そっと表情を曇らせる。

「あなたが昨日、やったことは？」

「仕事」

「昨日の夜、家へ帰る前、あなたは寄り道をした？」

「した」

「何の為に？」

「買いたい物があって、言ノ葉町のホームセンターへ行った」

佐々田が告げた答えに、和音がさらに眉をひそめる。

「そこで、誰かに会いましたか？」

佐々田の方へと数歩足を踏み出して、白衣の女性に代わるように、佐々田へと質問を投げかける和音。

「ホームセンターの店員」

「では」

答えた佐々田に、和音がさらに口を開く。

「人ではない何かに、出会いましたか？」

「……………」

その問いかけに、佐々田の答えはない。

「……ここまでにしましょう」

「はい」

和音がそう言って振り向くと、白衣の女性が大きく頷く。壁際に待機していた黒い着物の韻の従者たちにより、椅子に座っていた佐々田が立ち上がられ、奥の部屋へと連れられていく。

「どう、思います？」

少し後ろを振り返り、すぐ後方に立っている“毛守”^{もり}の桃雪へと問いかける和音。

「彼の言葉からは、力というものが、まったく感じられませんでしたねえ」

軽く肩を落としながら、桃雪が和音の問いに答える。

「さっきの、一連の質疑応答から、言えることは二つ」

桃雪が右手の指を、二本突き立てる。

「一つは、自由有る答えがないこと。実際に食べたものは答えられるのに、食べたいものという、自分の願望に関しては答えなかった」
先程の佐々田の様子を、桃雪は的確に分析する。

「そして二つ目は、昨夜起こった事柄に関して、回答権がないということ。これはまあ、彼の言葉をあのように変えた者の仕業でしょう」

「ええ…」

和音が納得するように、深々と頷く。

「そして、彼の言葉を変えたその場所は、言ノ葉町」
「……………」

付け加えるように言った和音に、桃雪がそっと目を細める。

「色々と事件の絶えない町ですねえ、あそこもっ」

桃雪が口元を緩め、少し楽しげな笑みを浮かべる。

「土地が呪われているのか、はたまた、住んでる誰かさんが呪われ

てるのか」

「後者なのかも、知れませんかね…」

「言姫様」

「はい？」

部屋へと入って来た従者に呼ばれ、和音が振り返る。

「於の神が面会を求めているらしいですが」

「檻也が？」

「はい」

聞き返した和音に、従者が大きく頷く。

「わかりました。私の部屋に通して下さい」

「はい」

和音の指示に、従者は深々と頭を下げると、檻也を案内するため、すぐさま部屋を後にした。

「於の神もしつこいですねえ。これで三日連続じゃないですかあ？」

「それが、彼のいいところですわ」

呆れたように言う桃雪に、和音がそっと笑みを浮かべる。

「そして、愚かなところ…」

声の音調を落とした和音は、視線を落とした瞳を、冷たく輝かせた。

Word. 46 訪ネビト (4)

「お待たせいたしました」

「……っ」

部屋へと入って来る凜とした声に、机と本棚しかない、殺風景な部屋の奥に立ち尽くしていた檻也が振り返る。部屋の扉が開き、和音と桃雪が連れ立ってやって来た。

「お久し振り…ではなくて、昨日振りですわね。檻也」

「ああ」

檻也の方へと歩み寄っていきながら、微笑みかける和音に、檻也は決して笑みを浮かべることはなく、少し険しい表情のまま頷く。

「どうしたんですの？ 最近は毎日いらっしゃって」

「毎日、婚約者の顔を見に来てはいけないのか？」

「いいえ」

挑戦的に問いかける檻也に、和音は落ち着いた笑みを見せる。

「わたくしも毎日、檻也にお会い出来て、嬉しいですわ」

「……………」

好意的な言葉を向ける和音は、あからさまに白々しく、檻也は思わず不快そうに顔をしかめた。

「後ろは？」

「これはこれは、申し遅れましたあゝ於の神っ」

檻也が和音の後方へと視線を動かすと、和音の後ろに立っていた桃雪が、笑顔となって檻也の前へとしゃしゃり出てくる。

「五十音士“毛守”、百井桃雪と申します。以後、お見知りおきをお〜」

桃雪が笑顔のまま、その右手を檻也の前へと差し出す。

「毛守…」

だが檻也は桃雪の手を取ろうとはせず、まるで睨みつけるように、桃雪を見つめた。

「お前が、わざと始忌に取り憑かれていたという、悪趣味な五十音士か」

「……っ」

皮肉たっぷりに言い放つ檻也に、桃雪の笑みがかすかに曇る。

「まあ、否定はしませんけどねぇ」

檻也へと差し出した手を引っ込め、また笑みを浮かべる桃雪。

「けどお、口のきき方にはもう少し、気を付けた方がいいと思いますよお？あなた一応、神様なんですからっ」

“一応”という語を強調する桃雪に、檻也はさらに表情をしかめる。だがそれ以上の会話をしようとはせず、桃雪は自ら、和音の後ろへと下がった。

「従者たちが慌ただしかった。昨夜、何かあったのか？」

「ええ、まあ」

「何だ？一体、何が起こった？」

頷いた和音に、檻也が間を置くことなく、問いかけを浴びせる。

「早々、簡単に話せると思いますう？韻の最高重要機密ですよお？」

「俺は於の神だ」

「アハハァ、これは素晴らしいっ」

堂々と言い放つ檻也を見て、桃雪が楽しげに笑う。

「そうですね。五神の一人であるあなたには、報告しておきましよう」

特に躊躇った様子もなく、和音が言葉を発する。

「今朝、言葉不明瞭の人間が数名発見され、この韻へと運ばれて来ました」

「言葉不明瞭？」

和音の言葉に、檻也が眉をひそめる。

「ええ。調査を行ったところ、彼らの言葉には少しの自由もない。彼らは、自由に言葉を発する力を失ってしまっていたのです」

「自由に、言葉を発する力……？」

話を聞いていくほど、困惑した表情となっていく檻也。

「どういう、ことだ？」

「つまりい、夢や希望といった素敵いゝな言葉の数々が、すべて失われてしまったってことですよお」

「夢や、希望…」

口を挟んだ桃雪の言葉を繰り返し、檻也が少し考え込むように俯く。

「自身に選択権のある言葉を、発することが出来なくなったということか」

「まあ、そんなところですよ」

やっと事態を理解したらしき檻也に、和音がそっと頷きかける。

「そんなものを突然、何人もの人間が同時に失うはずもない。何者かの仕業ということだな？」

「ええ、恐らくは」

檻也に答えながら、少しその表情を曇らせる和音。

「ですが、彼らから何があったかを聞くことは不可能であり、我々もまだ、何の手がかりも掴んでいません」

「そうか…」

その和音の言葉に、檻也がどこか困ったように肩を落とす。

「引き続き調査は行うつもりでございますが…」

「わかってることなら、一つ、あるじゃありませんかあゝ言姫様」
「えっ…？」

桃雪に声を掛けられ、和音が戸惑うように振り向く。

「自由有る言葉を失った人間が、皆、失う直前に言ノ葉町に居た、ということですよお」

「言ノ葉っ…」

桃雪の言葉に、檻也が驚いた表情を見せると同時に、強く眉間に皺を寄せる。

「またあの町か…」

「ええ」

険しい表情を見せる檻也に、頷きかける和音。

「調査にはやはり、言ノ葉町に詳しい安の神たち安団に、お願いしようかと思っているのですが…」

「なっ…！」

和音の言葉に、檻也がすぐさま表情を一変させる。

「だ、ダメだ！」

右手を横へと振り払い、勢いよく否定する檻也。

「まだ、始忌との戦いが終わって数日だ！安団は、戦いの疲れが取れ切っていない！」

「ですが今、衣の神には別件で動いていただいて居ますし、他に人員が…」

「俺が行く！」

「……っ」

檻也のその言葉を聞き、和音が檻也には気付かれないように一瞬だけ、その口元を緩める。

「ですが檻也…」

「そうですね。あなたの団は欠番ばかりな上に、素人さんも居るでしょう？」

「ならば、従者を貸してくれ！俺一人で行く！於の神の名に懸けて、俺が…！」

「檻也…」

右手を胸に押し当て、熱く主張する檻也を見つめ、そっと目を細める和音。

「わかりました…」

和音がゆっくりとした口調でそう言い、深く頷く。

「あなたがそこまで仰るのなら、この件はあなたに一任しましょう」

「和音…」

微笑む和音を見て、檻也も嬉しそうな笑顔を見せる。

「頼みましたよ、於の神」

「ああっ」

和音の言葉に、檻は大きく頷いた。

言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』。

「珍しいねえ」

何やらとても嬉しそうな満面の笑みの朝比奈家父が、店頭の野菜を並べ直しながら、横を振り向く。

「アーくんが自分から“手伝う”って言うてくれるなんて」「んんん？」

父の振り向いた先には、今日の制服の上からエプロンを纏い、頭に白タオルを巻きつけているアヒルの姿があった。アヒルは、店の前にバケツで水を撒いている。

「珍しいというか、初めてかなあ？ だあれも、お父さん手伝ってくれないんだもん」

「育て方、間違えたんじゃないの？」

「カーくんはちゃんと、手伝ってくれたもおくん」

「そりゃ、カー兄はな」

空になったバケツを持ち上げ、アヒルが店の中へと戻って来る。

「なんで急に手伝ってくれる気になったのお？ もしかして、やっど、お父さんのカッコよさに気付いたとかあ？」

「違う」

「ううう…」

あっさりと否定するアヒルに、父が悲しげに肩を落とす。

「最近色々あったから、ちょっと気晴らしと、後…」

———また来る：———

思い出されるのは先日、ここへとやって来た、カモメの友人というあの赤毛の男。

「また来た時に、オヤジだけじゃ入って来にくいかも知んねえし……」
「へっ？」

「いや、何でもねえ」

小さく呟いたアヒルに首を傾げる父であったが、アヒルはすぐさま首を横に振り、適当に誤魔化した。

「レタス一玉」

「おっ」

店頭へとやって来た客に気付き、アヒルが素早く店先へと出る。

「おばちゃん、いらっしやい！」

店へとやって来たのは、いつもの主婦の女。この前、アヒルが店番をやっていた時も来て、アヒルにもっと手伝いをするよう注意していた、あの女であった。よく見知った女を相手に、アヒルは親しげな笑みを向ける。

「レタス一玉」

「へ？あ、ああ。百十円ね」

アヒルの挨拶にも特に応じず、店頭のレタスを指差す女に戸惑いながらも、アヒルがすぐにそのレタスを手に取り、袋の中へと入れる。

「どうも」

女からぴったりの小銭を受け取り、代わりにレタスの入った袋を手渡す。

「今日、きゅうりも安いけど！」

「……………」

「あれ？」

明るく話しかけたアヒルの言葉をあっさりと無視し、女はすぐにアヒルへと背を向け、足早にその場を去っていく。

「ま、毎度っ……」

そんな女に少し呆気を取られながらも、一応、言葉を発するアヒル。

「珍しいねえ、あの人が一言も無駄話、しないで帰ってくなんてえ」

「……っ」

後ろから声をかける父の言葉を聞き、アヒルがそっと眉をひそめる。店番をしていた時に、あれほど注意して来た女だ。アヒルが店の手伝いをしている様子を見て、一言も発しないのは珍しいを通り越して、妙な違和感を覚えた。

「何だ…？」

込み上げる胸の不安に、アヒルはその表情を曇らせた。

その頃、町の小さな何でも屋『いどばた』。

「為介さん」

「んん？あ、おかえり。雅くうゝって、あれれ？」

店の戸が開き、いつものように雅が姿を現すと、ハタキ片手に店の掃除をしていた為介が笑顔で振り向いたが、雅に続くようにして入って来た人物を見ると、為介は途端に驚きの表情を作った。

「珍しいお客さんだねえゝ君がここに来るのなんて、いつ振りだろ
お」

ハタキを下ろし、為介がそっと目を細める。

「ツバメクンっ」

「どうも…」

雅に続くようにして、『いどばた』へとやって来たのはツバメであつた。名を呼ばれ、ツバメが為介へ向け、軽く頭を下げる。

「早速ですが…呪います」

「いっやあゝ！助けて！雅クン！」

「一度、呪われてみた方がいいんじゃないですか？」

挨拶を交わした途端に藁人形を構えるツバメから、隠れるように雅の後ろへと逃げ込む為介。そんな為介に、雅が冷たく言葉を投げかける。

「というのは、冗談で…」

「あ、なんだ。冗談かあ」

藁人形を下ろすツバメを見て、為介がホッとした様子で前へと出てくる。

「最近はずっかり…弟がお世話になりっぱなしで…」

「ああ、いえいえっ」

改めて頭を下げるツバメに、為介が構うなどばかりに左手を軽く振る。

「懐かしいもんだよねえ」

為介が懐かしむように目を細め、そっと店の天井を見上げる。

「弟クンの前で言葉の力を使えない君に代わって、彼を助けに行つて、初めて彼と出会ってえ。あれは、もうどのくらい前だろう？」

「……っ」

為介のその言葉に、ツバメが少し表情をひそめ、視線を落とす。
「まあ、あの頃と比べると、朝比奈クンもだいぶ、神様っぽくなっ…」

「為の神」

「んん？」

ツバメに呼ばれ、為介が言葉を途中で止めて、顔を下げる。

「町の言葉に、変化が起こっています…」

「ああ、うん」

真剣な表情で言い放つツバメに、あっさりとした頷きを返す為介。

「大丈夫、とっくに気付いてるよ」

鋭い瞳を見せ、為介がそつと口元を緩める。

「どうやら、君たち兄弟とも関係の深い、あの神様が動き出してるようだねえ」

「あの神…」

為介の言葉を聞いた途端に、険しい表情を見せるツバメ。

「そう、堕ちた神。堕神^{だしん}がね…」

「……………」

意味深に言い放つ為介に対し、ツバメはただただ、厳しい表情を見せていた。

「しかし」

檻也が従者を連れて部屋を後にすると、檻也の出て行った扉を見つめていた桃雪が振り向き、前方の椅子にゆったりと座っている和音の方を見た。

「冷たい婚約者さんですねえ、あなたも」

桃雪が両手をあげ、軽く首を横に振る。

「堕神を相手に、彼みたいなまだまだ半人前の神様一人で、勝てるはずもないのに」

「彼はわたくしにとって、貴重な駒……」

軽い口調の桃雪とは対照的に、冷静な声を発する和音。

「存分に動いていただきます」

和音が迷いのない、鋭い瞳を見せる。

「わたくしが、すべての神を揃える為に……」

「おお、怖っ」

重々しく言葉を発する和音を見つめ、桃雪はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

その日、夜。和音から無事、任務をもらうことの出来た檻也は、韻の従者数名を連れ、言ノ葉町のホームセンターの近くへと来ていた。ホームセンターが閉まってしまい、目立つ大きな街灯は何もなくなつて、辺りはすっかり真っ暗である。

「この辺りか……」

和音から預かった報告書をもとに、自由有る言葉を失った者たちが、その前後に来たという場所を、一つずつ回っているのであった。「すっかり夜になってしまったな……」

書類から目を離し、檻也が真っ暗な空を見上げる。

「視界が悪くなっている。後方の警戒は嚴重に…」

「うあああああ！」

「何…！？」

警戒するよう伝えようとしたその瞬間、響き渡る悲鳴に、檻也が思わず焦った様子で、振り向く。

「何だ！？どうし…！」

「ぐわああああ！」

「……っ！」

檻也が振り返った途端、檻也のすぐ目の前で、激しい悲鳴をあげた韻の従者が、血を流しながら前方へと倒れ込んでいく。その光景に、大きく目を見開く檻也。

「なっ…」

さらに視線を動かすと、他の従者たちも力なく地面に倒れ込んでおり、立ち上がっているのは檻也、ただ一人であった。

「こ、これは…」

「グウウウウ…」

「あっ」

倒れた従者たちを見つめ、動揺した表情を見せていた檻也が、前方から聞こえてくる、唸るようなその声に気付き、素早く顔を上げる。

「グウウウウ…」

「動物…？」

檻也が顔を上げた先には、大きな羽根を生やした、ライオンのような金色の生物の姿があった。地面まで届きそうなほどの長い牙を持ち、前足の鋭い爪は地面に喰い込んでいる。

「あの形態…ウ段の言玉か…？」

「グアアアア…！」

「あっ…！」

分析するように眉をひそめていた檻也が、駆け込んでくるその生き物の姿に、慌てて懷から白色の言玉を取り出す。

「五十音、第五音“お”、解放：！」

檻也が声を発すると、言玉が強く輝き始める。

「“押し上げる”！」

輝く言玉を下方へと突き出すと、放たれる強い光の反動を得て、檻也が高々と飛び上がり、駆け込んでくる生き物の直線上から避ける。空中に上がり、素早く言玉を生き物へと向ける檻也。

「“お圧し潰せ”：！」

圧力のかかった重い白光を、檻也が生き物へ向け、落下させる。

その生き物ごと、地面をも圧迫した白光により、辺りの地面に大きくヒビが入り、辺りを激しく砂埃が舞った。

「ふう〜」

砂埃でよく見えない下方を見下ろしたまま、大きく肩を落とす檻也。

「とりあえず、あいつの動きを封じて、韻へ：！」

「グアアアアア！」

「何っ：！？」

今後の段取りを考えていたその時、先程の攻撃を避けていたのか、檻也の後方から、羽根を広げたあの生き物が、勢いよく檻也へと襲いかかって来た。

「まさか：！」

「グアアアア！」

「うっ：！」

焦る檻也へと、迫る鋭い牙。

「うああああああっ：！！！」

檻也の叫び声とともに、真っ赤な血が、暗闇の空に舞った。

Word 47 ソレゾレノ選択 (1)

言ノ葉高校、一年D組。

「ナナ？ナナあ？」

教室内や廊下を見回し、友の姿を探す想子。

「あつれえ？鞆あるから、やっと来たと思ったのになあ」

どこにも見当たらないその姿に、想子は少し困ったように肩を落とした。

土曜日曜と二日の休みを挟んで、また新しい週が始まった。言ノ葉高校の学生たちは、休み明けの何となくやる気の出ない、重い体を動かし、いつものように登校して来ている。

「……………」

屋上からグラウンドを見下ろす七架は、その学生一人ひとりをじっくりと観察していた。学校どころか、外に出たのも久し振りなので、吹き抜ける風がいつも以上に心地よく、そして少しばかり肌寒く感じた。

「もうすぐ、ホームルーム始まるわよ…？」

「……………」

背後から掛けられる声に、ゆっくりと振り返る七架。

「戻らなくていいの…？」

「囁、ちゃん…」

屋上の入口から現れ、外周の柵のすぐ前に居る七架の方へと、ゆっくりと歩み寄って来るのは、穏やかな笑みを浮かべた囁であった。現れた囁に一瞬、気まずそうな表情を見せる七架。囁と会うのは、始忌との戦いを終えた、あの日の朝以来であった。

「久し振りね…もういいの…？」

「うん…いい加減ちゃんと学校行かないと、親が心配するから…」

「そう…」

些細な会話を交わしながら、囁が七架のすぐ横へと並ぶ。七架がまだ入口の方を見ているのに対し、囁は先程までの七架のように、グラランドを通り、登校してくる生徒たちを見下ろす。

「けど…まだしつかりと、恵先生の顔見れる自信なくて…」

七架が少し、苦い笑みを浮かべる。

「だから、ホームルームはサボり…？」

「ダメだよね、こんなんじゃない…」

「いいんじゃない…？」

肩を落とす七架に、囁はあまり深刻でもない声を投げかける。

「無理して出て、教室で薙刀とか振るわれても困るし…逆に楽しいかしらね…フフフ…」

「……………」

冗談めかして笑う囁であったが、七架はそれに答えようとはせず、そっと視線を落としてしまう。

「囁ちゃん、私ね…」

七架がどこか、改まった口調で言葉を発する。

「五十音士として何度か戦ってきて…怖い思いとか、痛い思いとかも、それなりに経験してきて…」

過去の戦いを思い出し、そっと目を細める七架。

「それでも一回も、辛いつて思ったこととか、五十音士になんきや良かったって思ったこととか、なかったの…」

紡がれる七架の言葉を、グラランドを見下ろす囁は静かに聞き続ける。

「ただっ…」

七架が噛み締めるように、言葉を落とす。

「ただ…」

「ただ、アヒるんの力になりたかった…？」

止まってしまった七架の言葉を補うように、囁が優しく問いかける。

「ただ、アヒるんが好きだから：だから、ここまで頑張って来れた：？」

「うん：」

囁の問いかけに、七架は特に迷うこともなく、素直に頷いた。

「ホント、単純だよね：」

七架が再び柵の方を振り返り、目の前に広がる青い空を見上げる。
「自分のことしか考えてなくて、五十音士が何なのか、言葉がどういうものなのか、私、何にもわかってなかった：」

「七架：」

囁が横を向き、空を見上げる七架を見つめ、目を細める。

「何もわからないまま、戦ったから：」

——一度や二度、手を差し伸べたくらいで、お前らのやったことが許されると思うなよ：——

最期の最期まで、少しの希望を持つこともなく、自ら命を絶っていった碧鎖。

「何にも、言っただげられなかった：」

消え逝く碧鎖に七架が言えたのは、“亡くせ”という、碧鎖の存在を消し去る言葉のみであった。

「今になって、やっと気付いたの。言葉ってものが、どんなに重たいものなのか：」

七架が柵を握る手に、ぐっと力を込める。

「散々、言葉使ってきたくせに、今更だよね：重みなんて、ちっとも知らずに口にしてきた：」

どこか自嘲するような笑みを、浮かべる七架。

「ホント、無責任っ：」

「仕方ないわよ：」

柵へと額を当て、俯く七架に、囁がそっと声を掛ける。

「私たちは、あなたにじっくり考える時間なんて、あげなかったも

の…」

囁が険しい表情を作り、正面に広がる景色をまっすぐに見つめる。
「五十音士に目醒めたばかりのあなたを、ろくな説明もしないまま
神試験に参加させて、その後もずっと、考える間もない戦いの連続
だった…」

言葉を紡ぐ囁は、その言葉で自分自身を責めているような、そんな口調であった。

「あなたが五十音士や言葉について、じっくりと考えることが出来なくても、それは当然のことだわ…」

「……………」

囁の言葉を聞きながら、七架がそっと目を細める。

「今、あなたがあなたの言葉を見失っていることについても、あなた自身は決して悪くない…」

どこか悲しげに、その表情をしかめる囁。

「だから、あなたが五十音士をやめると言っても、私は止めない」
「えっ…？」

その言葉に反応し、七架が戸惑いの表情となって顔を上げる。

「やめたければ、やめればいい…弟さんのことも、やめさせなければ、やめさせればいい…」

振り向いた囁が、顔を上げた七架へと穏やかな笑みを向ける。

「別に、国民の義務ってわけでも何でもないもの。五十音士なんて軽く首を傾げ、囁が七架への笑顔を強調する。

「あなたの好きにすればいい…」

「囁ちゃん…」

微笑む囁に、どこか困ったように眉をひそめる七架。

「でも…」

「アヒるんもきつと、止めないと思うわ…」

囁の口からアヒルの名が出ると、七架は出そうとしていた言葉を呑み込んだ。

「むしろ、ホっとするかも知れない…」

そう言つて、そつと視線を落とす囁。

「あなたをこんな戦いばかりの世界に巻き込んだこと、あまり良く思つてなかったみたいだから…」

「……っ」

囁の言葉に、七架が目を細める。

——ごめんな、奈々瀬：——

思い出されたのは、神試験の後、七架に申し訳なさそうに謝った、アヒルの姿であつた。

「じゃあ、ホームルーム始まるから：私行くわね：」

軽く七架に右手を振り上げると、囁が体の向きを変え、屋上の出口の方へと歩いて行く。

「一時間目には、戻つて来るのよ：？フフフ：」

不気味な微笑みを響かせて、囁は屋上を後にした。それからすぐに、予鈴の鐘が鳴る。登校する生徒たちの姿もなくなり、少し静かになった学校を見下ろし、七架はそつと俯いた。

「五十音士をやめる、か：」

七架の声が、どこか彷徨うように放たれた。

鳴り響く予鈴を聞きながら、屋上を出た囁は、皆が教室に入り、静まり返つた空間に足音を響かせながら、ゆっくりと階段を降りていた。もうすぐホームルームが始まるので、急いだ方が良いのだが、囁にそういった焦りは一切ない。

「ふう…」

階段の間にある踊り場でふと足を止め、囁が一息つくように肩を落とす。

「後は、彼女次第つてところかしら：」

そう言いながらも、囁は少し不安げな表情を見せる。

「さあ、本鈴も鳴るし……そろそろ教室に……」

「ねえ？ 今日帰り、カラオケ寄ってかなあ……い？」

「ん……？」

廊下に響く賑やかな声に気付き、踊り場から再び階段へと足を踏み出そうとした囁が、ふと振り返る。一時間目が体育なのだろうか、体操着に着替えた女子生徒数名が、明るく言葉を発しながら、廊下を歩いていった。

「それ超いい！」

「行こ行こ！」

「……………」

「……………」

囁の目に入ったのは、皆が次々に明るい声をあげる中、一人、何言葉も発さずに俯いている女子生徒の姿であった。その女子生徒の様子を見て、囁がそつと眉をひそめる。その時、丁度本鈴が鳴り響いた。響く鐘の音と共に、女子生徒たちの会話が遠ざかっていく。

「気のせい、かしら……」

小さな引っかかりを感じながら、囁はその女子生徒に背を向けた。

アヒルたちが学校へ行っている真っ昼間、箆也はまだ、学校へ行くことはせずに、朝比奈家隣の家にある自室に籠ったまま、檻也が持ってきた韻の本を読んでいた。

「はあ……」

何度も読んだ分厚い本を閉じ、寝台の上に座る箆也が息をついて、大きく肩を落とす。

「いつまで考えていても仕方ないか……」

そう言うと言箆也が寝台を降り、持っていた本を机の上へと置く。

「明日はいい加減、学校に……」

「神いいいいっ……！！！」

「なっ…!?!」

明日の準備を整えようと、箆也が机の下に力なく落ちていた学校の鞆を拾い上げようとした丁度その時、箆也の部屋の窓が壊れるのではないかというくらい、勢いよく開き、耳に割れんばかりに響く大きな声が乱入してきた。

「あ、あなたは…」

開いた窓の方を振り向き、箆也が戸惑いの表情を見せる。

「神っ!」

「そもり曾守の…」

窓から箆也の寝台へと飛び降りるようにして、外からいきなり侵入してきたのは、於団、曾守の空音であった。箆也の部屋は二階なのだが、屋根をよじ登って入って来たのであろうか。空音はひどく、必死な表情を見せていた。

「何故、あなたがここに…」

「神! 神はどこ!?!」

「神?」

空音の問いかけに、箆也が少し首を傾げる。

「神なら今、学校に…」

「それは、あんたの神でしょ!?! 私を探してんのは、私の神よ!」

「私の? ああ、箆也のことか」

素早く寝台を降り、箆也のすぐ目の前まで押し迫ってきて、物凄い剣幕で言い放つ空音。そんな空音の圧に押され、箆也が思わず、腰が机の先につくほどまでに体を引く。

「箆也は、知らないが…」

「ここにも居ないの!?!」

「ここにも…?」

急に不安げな表情を作る空音に、箆也が眉をひそめる。

「一体、どういう…」

「空音さあゝんっ」

戸惑った表情で、箆也が空音に問いかけようとしたその時、新し

い声が響き、またしても窓から、部屋の中へと入って来る人影があった。

「小泉」

「はぁ…あ、神月くん。お邪魔します」

礼儀よく頭を下げながらも、無礼に窓から侵入して来たのは、笑顔を見せた紺平であった。必死に空音を追って、屋根を登ってきたのか、少し息を乱している。

「於団が二人して、一体どうしたんだ？ 檻也がどうかしたのか？」

「神と連絡がつかないのよ！」

「何…？」

空音の言葉に、途端に籠也の表情が曇る。

「俺と空音さん、俺が“変格”を覚えるために、何日か前から修行で出掛けてて、今朝帰ってきたんだけど」

寝台をゆっくりと降りながら、紺平が籠也へと状況を説明する。

「於崎の屋敷に戻ったら、檻也くんが三日前から帰ってないって」

「三日前？」

「うん…」

眉をひそめ、聞き返す籠也に、紺平が頷き返す。

「一体、何をしているんだ？」

少し責めるような口調となって、籠也が二人へと言葉を向ける。

「だいたい、二人しかない神附きが、神一人を残して修行など、非常識で…」

「神命令だったんだから、仕方ないでしょ！？ 私だって、こんな奴の修行になんか行きたくなかったわよ！」

「空音さん、俺泣くよ…？」

容赦なく言い放つ空音に、悲しそうにひっそりと訴える紺平。

「でも、“今からの戦いで、於団が他団の足を引っ張るわけにはいかないから”って、神が“頼む”って言うから、だから私はっ…！」

「……っ」

見るからに辛そうに俯く空音に、籠也はそれ以上、責める言葉を

投げかけることは出来なかった。

「それで？三日前の檻也の足取りは？」

「屋敷の人が、三日前、檻也くんは言姫様を訪ねて韻に行って、それっきり帰って来ないって言ってる」

問いかけた籠也に、紺平がすらすらと答える。

「だから、空音さんと二人で、韻に行ってみただけど…」

「門前払いよ！」

「えっ…？」

怒鳴るように、紺平の後に言葉を続ける空音に、益々籠也の表情が曇る。

「取り合うどころか、会ってさえくれなかったわ！」

空音が言葉を放ちながら、震える拳をきつく握り締める。

「何が重要会談中よ！ホンットムカつくわ！あのクソ姉…！」

「まあまあ、空音さん」

姉、和音に対する怒りを露にする空音を、横に並んだ紺平が必死に宥める。

「言姫様、本当に忙しかったのかも知れないし」

「だったら、中で待たせてくれるくらい、したっていいじゃない！なんで門前払いなのよ！？」

「うわっ」

勢いよく怒鳴りあげられ、紺平が少し怯えるように肩を上げる。

「あの人は昔っからそうだわ！何かやましい事がある時は、私を避けて、絶対に会おうとしないの！」

「……………」

空音の言葉に、籠也も自分の知る和音という人物を思い返し、そっと視線を落とす。

「だから今回も、神のこと、絶対何か知ってるに決まってるのよ…！」

震える拳を握り締め、空音がさらに言葉を続ける。

「神に…神に何かあったら、私っ…私は…！」

「空音さん…」

ひどく追い詰められたような、辛い表情を見せる空音に、掛ける言葉など何もなく、紺平は細めた瞳でまっすぐに空音を見つめる。

「そういう、わけなんだ」

改めて、箆也の方を振り向く紺平。

「神月くんなら、何か知ってるかと思って、韻の帰りにここへ寄ってみただけど…」

「……済まない」

少し遠慮がちに言葉をかける紺平に、箆也が短く言葉を落とす。

「まったく何も知らないんだ。檻也と連絡を取ったのも、一週間程前が最後で…」

「そう…」

箆也の答えを聞き、紺平が微笑みながらも、どこか不安げな表情を見せる。

「檻也は、本当に韻へ行ったのか？」

「うん、それは間違いないと思う。檻也くん、三日前よりも前から、毎日のように、韻へ行ってたって」

「毎日…」

少し考え込むように俯き、その表情を曇らせる箆也。

「わかった。僕が韻へ行ってみる」

「えっ…？」

深く俯いていた空音が、箆也の言葉に顔を上げる。

「僕が和音に会って、直接、檻也のことを聞こう」

檻也の身を案ずる二人へ、箆也が頼もしく言い放った。

Word 47 ソレゾレノ選択 (2)

一時間後。韻本部、和音自室。

「言姫様」

「はい？」

扉を叩き、入って来た従者の呼びかけに、自室で桃雪と何やら話をしていた和音が振り向く。

「加守、神月箆也様が言姫様への面会を求めて、来ておりますが」「箆也が？」

「はあ、彼等も相当にしつこいですねえ」

少し眉をひそめた和音の横で、桃雪が呆れたように深々と肩を落とす。

「あああ、君。いちいち伝えに來ないでいいから、さっきの於附の二人と同じように、適当言って追い払っ……」

「構いません。通して下さい」

「へっ？」

従者へ指示を送ろうとした桃雪であったが、自分が送ろうとした指示とは正反対の言葉を放つ和音に、驚いたように振り向く。従者は勿論、和音の言葉を優先し、深々と頭を下げて、部屋を後にしていった。

「通すって、言姫様あ？」

「あなたは少し、席を外して下さいますか？毛守さん」

「……っ」

和音に笑顔を向けられ、桃雪が思わず、眉をひそめる。

「あんまり彼に心を開き過ぎると、いざという時、その心が邪魔になりますよお？」

「開いていないので、何の問題もありませんわ」

何の躊躇いもない笑顔を見せる和音に、桃雪はそれ以上は何も言わず、軽く一礼すると、足早に部屋を出て行った。和音だけが残っ

たその部屋に、数分と経たぬうちに、扉を叩く音が響く。

「どうぞ」

「失礼、致します」

和音が扉へと声を掛けると、礼儀正しい声と共に、箆也が姿を現した。

「お忙しい中、ご面会いただきまして、ありがとうございます」

「いいえ…」

扉を閉めると、箆也は和音へ向け、深々と頭を下げた。そんな箆也をまっすぐに見つめ、和音が鋭く目を細める。

「用件はなんでしょう？」

「……っ」

快い笑顔で問いかける和音に、表情を曇らせる箆也。

「用件など、言わなくてもわかるだろう。先程来た、小泉とあなたの妹と同じ用事だ」

箆也が和音へと、鋭い瞳を向ける。

「箆也をどこへやった？」

「随分と不躰ですわね」

箆也の問いに、笑みを浮かべた和音は、箆也から視線を逸らし、そっと壁際を見た。

「まるでわたくしが、誘拐犯か何かのよう…」

「箆也は消息を絶った三日前、屋敷の者たちに韻へ行くと言い残していた」

「確かに彼は三日前、ここへ来ましたが、数分程話して、すぐに帰っていききました」

責め立てるように言う箆也に、少しも動じることなく、和音がすらと言葉を放つ。

「その後どこへ行ったのかは、わたくしも存じておりません」

はつきりと答える和音に、箆也が眉をひそめる。

「本当か？」

「本当ですわ」

疑うように問いかける箆也に、和音がもう一度、しっかりと答える。

「なら…」

そう短く言葉を発した後、足早に歩を進め、和音の座っているすぐ前の机へと向かっていった箆也が、机の前で足を止め、振り下ろした右手で、強く机を叩きつけた。

「僕の目を見て言え！」

机を叩きつけたその音と、箆也の鋭い言葉が重なり、壁際を見ていた和音がかすかに、その肩を上げる。少しの間を置いた後、和音はゆっくりと首を動かし、箆也へ、強い瞳を向けた。

「何も、存じておりません」

「……っ」

まっすぐに箆也の目を見て言い放つ和音に、箆也が表情をしかめる。

「檻也は僕の弟っ：あなたの婚約者だぞ！？」

「そんなことくらいは、存じておりますが…？」

怒鳴りつけるように言った箆也に、和音はどこか、挑戦的な笑みを浮かべた。和音のその笑みを見て、箆也が一瞬、強く唇を噛む。

「……変わったな、和音…」

「この世界に、“不変”のものなどありませんよ、箆也」

絞り出すように呟いた箆也へ、諭すような声を向ける和音。

「我々の言葉が、日々、変わっていくように…」

「……………」

和音の言葉を聞きながら、箆也が和音を見つめていた視線を下ろし、そっと俯いていく。

「……失礼、致しました」

「いえ…」

小さく言葉を落とすと、箆也は和音の顔を見ないまま、和音へと背を向け、入って来た扉から足早に部屋を後にした。扉が閉まる音が響くと、すぐに部屋の中は静まり返り、和音はその静けさの中、

少し頭を抱えるようにして俯く。

「後、少し…」

か細い声が、静けさの中に落ちる。

「後少しだけ…どうか…」

その小さな声が、願うように囁いた。

「はあっ…」

和音の部屋を出た箆也は、韻本部の長い廊下を歩きながら、深々と溜息をついていた。自分になれば、和音はすべてを話してくれる。何故かそう、信じ込んでいたため、はっきりと拒絶を示した和音に、箆也は少なからずショックを受けていた。

「結局、檻也の行方もわからないし、どうすれば…」

「神月殿！」

「えっ？」

箆也が困ったように首を捻っていると、そこへ、天井の方から高い声が降って来て、箆也は戸惑うように上を見た。

「あっ」

「ほ！」

箆也が顔を上げると、天井に張りつくような形で身を潜めていたその者が、気合いの入った声を漏らして、箆也のいる方へと飛び降りてくる。

「あなたは確か、計守けもりの」

「はい！慧左衛門子と申します！」

「ああ、そういえばそんな、変な名だったな…」

笑顔で答える忍装束の少女、慧に、箆也が少し引きつった表情を見せる。

「だが、何故あなたがここに…」

「我が神、エリザ様の命により、言姫様を見張らせていただいております」

「何…？」

慧の言葉に、箆也が眉をひそめる。

「衣の神の命で、和音を…？」

「はい」

聞き返す箆也に、慧は大きく頷いた。

「失礼ながら、先程の会話も聞かせていただきました」

「え…」

会話を聞かれた事実には、箆也が少し動揺を見せながらも、冷静を装う。

「あの、いかにも生意気そうな、その癖に自信のないタイプの、弟さまをお探しののでしょうか？」

「普通に於の神と言え」

的確に箆也のことを言い当てる慧に、少し恥ずかしそうに顔をしかめる箆也。

「私が聞き得たすべての情報を、お話致します」

「……っ」

どこか厳しい表情を見せる慧に、箆也はただならぬ事態を感じ、そつと目を細めた。

慧から箆也の情報を聞くことの出来た箆也は、引き続き和音を見張るという慧と別れ、空音と紺平の待つ自室へと戻って来た。

「じゃあ神は、その、言葉の変化の謎っていうのを、調査するために？」

「ああ。数名の従者を連れて、韻を出たらしい」

確かめるように聞き返した空音に、箆也が険しい表情を見せながら、しっかりと頷く。

「神一人にそんなことさせるなんて…何考えてんのよお！あのクソ姉ええ！」

「まあまあ、空音さん」

部屋の中で、今にも暴れ出しそうな空音を、紺平が横から必死に有める。

「けど、じゃあ、檻也くんはその調査の途中に……」

「ああ。何らかのトラブルに巻き込まれて、連絡の取れない状態となっているんだろう」

言葉を交わしながら、紺平と箆也が、それぞれ不安げな表情を見せる。

「急いで、神を探さなきゃ!」

「ああ」

「けど、檻也くんがどこに調査に向かったのかまでは、わからなかったんでしょう?」

空音の訴えに頷く箆也へと、紺平が横から口を挟む。

「何の手がかりもないんじゃない?」

「確かに何の手がかりもないが、言葉の変化が起きているのは、この言ノ葉町だ」

困ったように呟く紺平へ、箆也が力強い言葉に向ける。

「言ノ葉町だけであっても、相当に広いが、今は虱潰ししらみに探していくしかない」

「当たり前よ! 絶対、探し出してみせるわ!」

箆也の言葉に賛同するように、空音も決意のこもった言葉を放つ。

「そうだね」

二人の様子を見て、不安が軽減されたのか、やっと笑顔を浮かべる紺平。

「相手は未知の敵だ。素人には厳しい。あなたはここで待機して、僕たちの連絡係を務めてくれ」

「うん、わかった」

箆也の指示に、紺平がしっかりと頷く。

「僕とあなたで、手分けして檻也を探す」

「ええ」

「もっと人数多い方が良くない？俺、ガアたちにも伝えっ…」

「小泉」

アヒルにも応援を頼もうと、部屋を出て行こうとした紺平が、箆也に強く呼び止められる。

「神には今回のこと、絶対に話さないでほしい」

「えっ…？」

思いがけない箆也の言葉に、振り向いた紺平が戸惑いの表情を見せる。

「なん、で…？」

率直な疑問を口にする紺平に、唇を噛み締め、そっと下を向く箆也。

——敵の名かはわかりませんが、言姫様たちはこう仰っていました。“墮神”と……

「……っ」

思い出される慧の言葉に、箆也がさらに強く唇を噛み締めた後、再び顔を上げて、まっすぐに紺平を見つめた。

「頼む、小泉…」

「神月くん…」

懇願するその瞳は、強い意志を示しているながらも、どこか弱々しく、哀しく見えて、紺平はそれ以上の追及をすることなど出来なかった。

「わかった」

「……済まない」

頷いた紺平に、箆也が短く礼を向ける。

「では、行くぞ」

「ええ」

しっかりと頷き合うと、箆也と空音は檻也を探すため、足早に部屋を後にした。

「……っ」

二人を見送ると、紺平はどこか不安げに、目を細めた。

Word. 47 ソレゾレノ選択 (3)

久し振りの学校を終えた七架は、久々に味わう外の空気とまだ別れたくないという思いがあり、まっすぐに家に帰ることはせず、学校から程近い、小さな公園を訪れていた。子供たちの遊ぶ砂場の横を通り、少し古いベンチの前に立って、七架がゆっくりと公園を見回す。

——朝比奈くん：！——

この公園は、七架が初めて言葉を使った場所。アヒルに助けられ、アヒルを助けるため、七架が五十音士となった場所であった。

「お姉ちゃん」

「え：？」

後ろから掛けられる声に、七架が戸惑うように振り返る。

「六騎：」

七架が振り返った先に立っていたのは、まだ無邪気な笑顔を見せた、七架の弟、六騎であった。

「どうしたの？こんなところで」

「最近、毎日来るんだ、ここ」

「毎日？」

六騎の言葉に、七架が少し驚いたように目を見開く。

「何だか、懐かしくて」

言葉の通り、その若さには似合わぬ懐かしそうな瞳で、六騎がゆっくりと公園を見回す。

「結構狭いよね、この公園」

穏やかな午後の時間帯で、遊んでいる子供たちも多いせいか、公園は少し狭く感じる。

「忌から逃げてる時は、出口までが遠くって、広くって仕方なかっ

たけど…」

「……っ」

その六騎の声を聞くと、途端に七架は表情を曇らせ、落ち込むように俯いた。六騎のその言葉は、六騎があの日夜のことを鮮明に思い出したことを、物語っていた。

「けど、あいつが助けてくれた」

——奈々瀬！——

あの日、初めて見た五十音士としての、神としてのアヒルの姿を思い出し、七架がそっと目を閉じる。

「ねえ、お姉ちゃん」

六騎に呼ばれ、七架は閉じていた瞳をゆっくりと開いた。

「この前、言えなかったこと、言うね」

七架をまっすぐに見上げ、六騎が曇りのない瞳を見せる。七架は今後は逃げることなく、その見上げてくる瞳を、まっすぐに見つめ返した。

「俺ね、自分が五十音士になったって知った時、色んなこと知って、わけわかんなくなっただし、今もあんまりわかってないのかも知れないけど…」

六騎がまだそんなにないであろう自分の言葉数で、必死に自分のりの言葉を繋ぐ。

「でも、でもねっ…」

次の言葉を大事にするように、六騎がしっかりと言葉を溜める。

「嬉しかったんだ」

「……っ」

大きな笑顔を見せる六騎に、七架が思わず目を見開く。

——嬉しかったの……——

それは、かつて、七架が口にしたものと、同じ言葉。

「これでお姉ちゃんの力になれるって、これでお姉ちゃんと一緒に戦えるって、嬉しかった。嬉しかったんだよ、俺」

六騎の言葉が続く中、七架は込み上げるものを堪えるように、両手でその口を覆った。

「お姉ちゃんは、違ったの？」

笑みを止め、真剣な表情となって、六騎が七架へ問いかける。

「ここで五十音士になった時、お姉ちゃんは嬉しくなかったの？」

六騎の言葉に感情が乗り、その声が徐々に大きくなっていく。

「後悔したの？五十音士にならなきゃ良かったって、そう思ったの？」

少し責め立てるように、次々と投げかけられていく六騎の問いかけ。

「違うでしょ…？」

六騎の問いかける声が、かすかに震える。

「あいつの力になれるって、あいつと一緒に戦えるって、嬉しかったんじゃないの…!？」

「ううっ…!」

強く問いかけた六騎のその言葉に、思わず目を伏せた七架の目尻から、光る小さな粒が零れ落ちた。七架は口元を両手で覆ったまま、崩れ落ちるように、その場にしゃがみ込んだ。

「ううう…!」

「お姉ちゃん…」

涙に暮れる姉を、六騎が細めた瞳でまっすぐに見つめる。

「そう、だね…そうだねっ…」

言葉を詰まらせながら、それでも七架が声を漏らす。

「身近な人を巻き込むことは…こんなにも辛いものだったんだねっ…」

痛む胸を押さえ、必死に言葉が続ける七架。

——ごめんな、奈々瀬——
アヒルが謝ったあの時、七架は、アヒルがこんなにも辛い思いをしたことを、まったく理解していなかった。

「それでも、あの人はっ……」

——ありがとう、奈々瀬——

辛い素振りなど一つも見せずに、ただ笑顔で、応えてくれた人。

「笑って……私の意志を、汲み取ってくれたんだねっ……！」

声を、肩を震わせ、さらに涙を零して、七架が言葉を放つ。

「う……うう……！」

「ねえ、お姉ちゃん……」

泣き崩れて、背丈の少し低くなった姉の頭へと、六騎がそつと手を伸ばす。

「俺、戦いたいよ……」

六騎のまだ小さな手が、七架の頭を優しく撫でる。

「お姉ちゃんとも、あいつとも、一緒に……」

決意のこもった言葉を、七架へと向ける六騎。

「だって、あいつ、助けてくれたから」

六騎の言葉に、徐々に熱がこもる。

「だから今度は、俺があいつを助きたい……！」

「うん……うん……！」

何度も頷き、七架は目の前に立つ六騎を、思いきり抱き締めた。

「私も、助けたい……戦いたいっ……」

六騎を抱き締めたまま、七架が震えた声で、だがしっかりと言葉を発する。

「五十音士として、戦いたいっ……」

七架が強く、両拳を握り締める。

「あの人の……私のたった一人の、神様のためにつ……！」

「うん…戦おう…」

涙を流しながらも、笑みを見せる七架。抱き締められ、七架の表情が見えているはずもない六騎だが、七架が微笑んだことを感じたのか、六騎もそっと笑みを浮かべる。

「戦おう…！お姉ちゃん…！」

大きく頷き、六騎は姉の背を、強く抱き締め返した。

一方その頃、為介の家を出た保は、灰示を認識したことにより、思い出した過去の記憶を頼りに、かつて、両親と共に住んでいた町を訪れていた。小さな町であったが、八年も時が流れると大きく様変わりしており、保が見覚えのある景色など、あまり残っていなかった。

「確か、この辺…」

それでも川の流れる方角や、山の見える向きを確認し、保が歩を進める。

「あ、ここだ」

壁に貼られた住所を確認し、保が足を止める。

「……っ」

保が振り向いた先に建っていたのは、五階建ての立派なマンションであった。そう新しいわけでもなく、マンションの白い壁は黒くくすんでいる。そこはかつて、保が両親と共に暮らしていた家が建っていた場所であった。

「見事に跡形ないなあ。まあ、全焼しちゃったんだから、当たり前か」

五十音士として生きた保の父親と母親は、五十音士であることを、変な力を持っていると、町人たちに気味悪がられ、疎^{うと}まれた。あまりの悪意ある言葉の数々に、ついには忌に取り憑かれ、そんな自分たちを戒めるように、家ごと火に焼かれ、死を選んだのである。

「……………」

もう八年も経っているというのに、目を閉じれば、業火の広がっていたあの光景が浮かんでくる。保は軽く首を横に振り、マンションを見上げていたその視線を下ろした。

「ついでにお墓も寄ってこっかな」

保がマンションへと背を向け、その場から足を踏み出して、新たな目的地を目指し始める。

「八年間、放ったらかしだったから、汚くなってるだろうなあ…」

少し不安げに呟きながら、保が道を進み、何度か角を曲がって、迷いなく歩を進める。両親が死んだ時に、身寄りには保しか残っていなかったため、二人の墓は家のすぐ近くの墓地に作られたのである。十分も歩かぬうちに、保はその墓地へと辿り着いた。

「ええーっと、奥から三個目のっ…」

バケツに水を汲んだ後、保が周囲を見回し、少し迷うようにしながら、墓の間を進んでいく。

「あ、あったあった」

墓に刻まれた“高市”の文字を確認し、保がそちらへと寄っている。

「あれ？」

墓の前に立った保が、思わず間の抜けた声を漏らす。その墓は汚れもなく、周囲に生えていたであろう草も刈られていて、きれいで、つい最近掃除された様子であった。

「随分ときれいだなあ。もしか、同じ苗字の人のお墓だったりとか？」

戸惑った保が、両親のものを確認するため、墓石の後ろを覗き込み、刻まれた名前を確認する。

「あ、やっぱりあって…」

「何じゃい、お前さん」

「うわああ！」

刻まれた両親の名を確認していた保が、急に後ろから声を掛けら

れ、肩を震え上がらせ、大きな声を出す。

「ひえあゝ！こんなまるで運のなさそうな俺を、祟らないで下さい
ゝ！幽霊さあゝん！」

「誰が幽霊じゃい」

「へっ？」

その場にしゃがみ込み、頭を抱えて怯えていた保が、突っ込むように聞こえてくる声に、恐る恐るゆっくりと顔を上げる。するとそこには、しゃがみ込んだ保とそう背丈も変わらない、大きく腰の曲がった、白髪の老人が立っていた。

「あ、幽霊じゃなくて、妖怪さんでしたか」

「誰が妖怪じゃい。わしはこの墓地の管理者じゃぞ」

「えっ！？」

老人の言葉に、保が驚きの声をあげる。

「そ、それは失礼しました！あまりにも不気味なオーラ出てるんで、
てっきりこの世のものではないものとはかりっ…！」

「その発言が更に失礼じゃい」

「はあ！存在が失礼な俺が、一丁前に失礼発言しちゃってすみませ
えゝん！」

勢いよく立ちあがった保が、不機嫌そうに顔をしかめる老人に、
何度も頭を下げて謝り散らす。

「ここは墓場じゃぞ？ちったあ静かにせんか」

「んっ！」

老人に注意されると、保は素早く両手で口を塞ぎ、黙り込んだ。

「で？」

気を取り直すかのように、老人が背の高い保を思いきり見上げる。

「お前さん、ここの人たちの身内かい？」

「えっ…？」

墓を見やって問いかける老人に、保が思わず塞いでいた指の隙間
から、声を漏らす。

「あ、えと、俺はその…」

「なわけないかあ。もう八年も、誰も来ておらんのじゃからのお」
「あ…」

ついこの前まで記憶すら失っていた保には、何となくすぐに家族と名乗ることが躊躇われた。すぐに否定して肩を落とす老人に、すっかり名乗り損ねてしまい、保が少し困ったように表情をひそめる。「こんだけ来ておらんということは、もう家族も、生きておらんのかも知れんのお」

「……………」

静かに俯いたまま、保が老人の言葉を聞く。

「誰も来てないのに、このお墓はとってもきれいですね」

「ああ」

保の言葉に頷いた老人が、少し笑みを浮かべながら墓の方を振り向く。

「お爺さんが掃除を…?」

「いいやあ」

問いかける保に、老人は大きく首を横に振った。

「え…? じゃあ一体、誰が…」

「この近くに住んどる家族がおってな、その家族が定期的にやって来て、掃除してくんじゃよ」

戸惑うように首を傾げた保に、笑みを浮かべた老人がすらすらと答えていく。

「何でも昔、ここに眠る人たちに、酷い言葉を投げかけてしまったらしい」

「……………」

老人の言葉に、保が眉をひそめる。

「“こんなことくらいで許してもらえないとは思えないが、せめてもの償いに”と、そう言っておった」

「償い…」

墓の方を見つめながら話を続ける老人越しに、墓を見つめ、保がそっと目を細める。

「どんなに酷い言葉を投げかけたか、わしは知らんが……」

老人がその場にしゃがみ込み、見上げるように墓を見つめる。

「こんなに年月をかけて償っても、許してもらえないもんかねえ？
言葉というのは……」

「……………」

誰へともなく問いかける老人の声を聞きながら、保が視線を落とす。

——“救い”もあるって、俺はそう信じてるっ……！——

胸を引き裂くほどに痛む言葉があれば、その痛みをすくいあげる
ほどに優しい言葉もあること。

「……っ」

俯いた保が、何かを噛み締めるように、深く目を閉じる。

「いえ……」

「ん……？」

小さく落とされる声に、老人がゆっくりと保の方を振り返る。

「許してると思えます。とつくに……」

「えっ……？」

穏やかに微笑みながら、遠くを見るような瞳で、空を見上げてい
る保の言葉を聞き、老人が少し戸惑うように首を傾げる。

「喜んでると思います。とても……」

「お前さん……」

どこか泣き出しそうな笑みを見せる保に、老人は何か察したよう
な表情を見せたが、それ以上、言葉を投げかけることはしなかった。

Word 47 ソレゾレノ選択 (4)

「はあっ」

箆也と空音を見送った紺平は、二人からの連絡を待つ間、箆也たちの家ではどうしても落ち着かないため、自分の家へと戻ることにした。少し不安げな溜息を落しながら、箆也たちの家の玄関を出る。

「あれ？紺平？」

「えっ？」

自分の名を呼ぶ声に、紺平が顔を上げる。

「ガァ」

「あれ？戻って来てたのか、お前」

紺平へと親しげに話しかけたのは、隣にある実家から、箆也たちの家の方へとやって来たアヒルであった。制服姿に鞆を持っている姿を見ると、学校帰りに直接、ここへと来たようである。

「修行に言ってたんだろ？」

「うん。午前中に戻って来たんだ」

「そっか。で、何で箆也たちん家に？」

「えっ？」

不思議そうに首を傾げるアヒルに、紺平が思わず焦ったように声を漏らす。

「あ、ああ、ちょっと箆也くんのこと話あって」

「ふうん」

箆也のことと聞いても、箆也が行方不明であるなどとは思わなかったのだろう。特に不思議に思った様子もなく、アヒルは紺平の横を通り過ぎ、箆也たちの家へ入ろうとする。

「え！？ちょ…！どこ行くの？ガァ」

「へっ？」

焦って呼び止める紺平に、アヒルが玄関の前で振り返る。

「ちょっと気になることあって、俺も箆也に話をつて思ったんだけど？」

「あ、そう…」

頷きながら、紺平が軽く頭を搔く。

——頼む、小泉：——

「……っ」

強く懇願する箆也の表情が思い出され、紺平はそっと目を細めた。
「い、今、居ないよ？ 神月くん。何か用があるとかって、出掛けちゃって」

「そうなのかあ」

紺平の言葉を素直に受け入れ、肩を落としたアヒルが、玄関へ伸ばそうとしていた手を下ろす。

「囁もどっか行っちゃったし、どうすっかなあ」

悩むように首を傾げながら、再び自宅の方へと戻っていくアヒル。

「扇子野郎のどこでも行くかあ」

「……っ」

アヒルの呟いた言葉に、紺平の表情が曇る。何でも知っている為介のところへ行けば、檻也が行方不明であることや、箆也が韻へ行ったことが、アヒルに伝わってしまうかも知れない。

「あ、ガア…！」

「えっ？」

紺平に呼び止められ、アヒルが再び振り返る。

「時間あるならさ、俺と、手合わせしてくれないっ？」

「は？」

笑顔を見せた紺平に、アヒルは戸惑うように首を傾げた。

檻也の搜索を行う簞也と空音であつたが、まったく檻也の手がかりも見つけられないまま、時間だけが流れ、徐々に日が傾き、辺りは暗くなり始めていた。

「どうだ？」

「全然っ」

一度、合流した二人だが、簞也の問いに、空音は大きく首を横に振る。

「私の変格“蒼穹”は、架空の空を作り出すもの。その空から更に“搜索”の言葉を掛けたけど、神の姿はどこにも……」

言葉を発しながら、空音が徐々に浮かない表情となっていく。

「僕も言葉を使って探したが、手がかりはなしだ」

「もしかしたら、神はもう、この町には居ないのかも……」

檻也を見つけれられないことに不安を感じながらも、空音が冷静に分析をする。

「だが、言葉の変化が起きているのは、言ノ葉町だけだ。檻也が言ノ葉町から移動するとは、考えにくい」

「じゃあ一体……」

「ん？」

空音が簞也へと問いかけようとしたその時、簞也が何かに気付いたような声を発し、ふと顔を上げる。そんな簞也の様子に、空音が戸惑うように首を傾げた。

「何？どうしたの？」

「いや、何か変な気配を感じないか？」

「気配？」

簞也の答えに、空音が眉をひそめる。

「気配って何？忌？」

「いや……」

聞き返す空音に、簞也が険しい表情で、そっと首を横に振る。

「忌のものとは、違うっ……」

そう言った簞也が、さらに厳しい表情を作ると、その額から、一

滴の汗が流れ落ちた。

「忌とは違う？何よ？それ」

「わからない。だが…」

言葉を続けながら、箆也が懷から、素早く言玉を取り出す。

「来る…！」

「グアアアアア！」

「なっ…！？」

箆也の言葉とほぼ同時に、激しい雄たけびを轟かせながら、空を飛び上がるようにしてその場に現れたのは、翼の生えた金色のライオンのような生物であった。見慣れぬ獣の姿に、空音が驚きで目を見開く。

「何よ！？あれ！」

「知るか！」

焦った様子で問いかける空音に、怒鳴り返すように答えながら、

箆也が言玉を格子の姿へと変える。

「構えろ！来るぞ！」

「ク…！」

箆也に急かされ、空音も素早く白色の言玉を取り出す。

「“駆^かける”…！」

「“逸^それろ”！」

地面を削るようにして大地を駆け蹴り、勢いよく突っ込んでくる獣に対し、箆也と空音がそれぞれの言葉を発して、素早い動きで左右へと分かれ、避ける。

「何て速さなの…！うっ…！」

獣のあまりの素早さに、動揺を見せていた空音だが、狙いを空音に絞り、体の向きを変える獣の姿に、焦ったように身構える。

「こっの…！“削^そげ落とせ”…！」

力強く右手を突き出し、獣へと白光の無数の刃を向ける空音。

「グアアアアア！」

「えっ…！？」

だが獣がけたたましい叫び声をあげると、その声が衝撃波のように辺りに広がり、空音が向けていた刃を、一つ残らず碎き落とした。

「私の言葉を、声だけで……？」

「ガアアア！」

「あっ……！」

啞然としていた空音へと、またしても大地を蹴り上げた獣が、一気に差し迫る。

「かまいたち“鎌鼬”……！」

「ううう……！」

獣の爪がまさに空音に突き刺さろうとしたその瞬間、強い風が吹き荒れ、空音は思わず身を伏せた。強い風の塊を受け、獣は空音から引き離されるように、吹き飛ばされる。

「あんた……」

顔を上げた空音の前へと降り立ったのは、風の塊から再び格子を作り上げている箆也であった。どこか圧倒されるような空気を纏う箆也を、空音が茫然と見つめる。

「何をしている。それでも於附か」

「はあ……！」

冷たく言葉を投げかける箆也に、勢いよく顔をしかめる空音。

「フザけたこと、言ってるんじゃないわよ！あんたに助けられなくて、今の攻撃くらい……！」

「僕が隙を作る」

「えっ？」

箆也が空音の主張をあっさりと無視し、自分のペースで話を進める。

「そこを狙って、変格で奴を攻撃しろ。出来るな？」

「当ったり前でしょ！私は於附なんだから！」

「ならいい。頼むぞ」

ムキになって言い返す空音に、念を押すように言うと、箆也は素早くその場を飛び上がり、吹き飛んで行った獣の方へと向かってい

った。

「まったく、何なのよ！神の兄だからって、偉そうにしちゃって！」
不満げに愚痴を吐き捨てながら、空音が言玉を持った右手を、空
へとかざす。

「変格”…”」

空音が言葉を発すると、言玉が強く輝き始める。

「蒼穹”…！」

強い光が一気に空へと突き上げると、日の暮れた辺りの空が、真
っ白に輝き始めた。

「良し…」

光の広がっていく空を確認し、箆也が満足げに頷く。

「後はあの獣を攻める隙を…」

自分の役割を確認すると、箆也が前方を見つめ、倒れていたその
巨体を起き上がらせている獣を見つめ、そっと瞳を鋭くする。

「“火炎”…！」

手に持っていた格子を炎の姿へと変え、その塊を獣へと向ける箆
也。

「グ…！」

起き上がった獣が、向かってくる炎に気付き、慌てて背中の翼を
広げ、空へと飛び上がって炎を避ける。

「忌とは明らかに違う…」

飛び上がった獣の姿をまじまじと見つめ、箆也が考えるように、
眉をひそめる。

「金色の生物形態…ウ段の言玉か…？」

——まだ何も話せはしないよ……

「……っ」

意味深なツバメの言葉を思い出し、箆也がそっと唇を噛む。

「グアアアアア！」

空へと舞った獣が、大きく口を開き、激しい叫び声とともに、その口から、強い衝撃波のようなものを、地面に立つ箆也へと放った。
「^か変われ”」

素早く炎を格子の姿へと変え、手元に戻した箆也が、格子を空へと放つと、格子は空中で六本へと分かれていく。

「^{かえ}返せ”！」

空中で分かれた六本の格子は、その場で大きな円形を作り、勢いよく回転して、向かってくる衝撃波を弾き返した。

「ググっ…！」

獣が翼を翻し、何とか、返って来た衝撃波を避ける。

「^か変格”…」

獣が衝撃波を避けているそのわずかの間に、箆也は六本に分かれていた格子を手元に戻し、さらに変格の言葉により、格子を鎌の姿へと変えた。空中にいる獣に向かい、箆也が思いきり鎌を振り上げる。

「^か刈れ”…！」

振り下ろされた鎌の先端から、赤い一閃が放たれ、目にも留らぬ速さで、獣へと向かっていく。

「グアっ…！」

一閃に片翼を斬り裂かれ、獣がバランスを崩して、地面へと叩きつけられるようにして、落下する。

「今だ！」

「わかってる！」

叫ぶ箆也に強く返して、空音が鋭く右手を突き上げる。

「^{そそ}注げ”…！！」

空音が言葉を放つと、変格により真っ白に輝いた空から、地面へと落ちた獣へ向け、無数の刃が、絶え間なく降り注いだ。刃が獣ごと地面も貫き、豪雨のように鋭い音が、何個にも重なり合って響き渡る。やがて刃の雨が降り止み、真っ白だった空が霞んで、もとの暗い空が露見した。

「はあっ…はあっ…」

変格で相当の力を使うのであろう、大きく息を乱した空音が、突き上げていた手を下ろし、そのまま左胸へと当てて、ゆっくりと呼吸を整える。

「やったか…」

空音の攻撃を受け、地面に力なくひれ伏したまま、ぴくりとも動かない獣の姿を確認すると、箆也も構えていた鎌を下ろした。

「しかし、あの獣は一体…んっ…？」

改めて獣の正体についてを考えようとしていたその時、箆也が静けさを取り戻した辺りに、そっと響き渡る足音に気付き、眉をひそめる。箆也も空音も、その場に立ち止まっている。響く足音は、二人とは別の誰かのものである。

「誰だ…!？」

「えっ…？」

鋭く声をあげて振り向く箆也に、呼吸を整えていた空音も、戸惑うように顔を上げる。

「こんばんは…」

箆也が振り向いたその先には、白一色の服を纏った、茶色いセミロングの、美しい女性が立っていた。物静かで知的で、どこか神秘的な空気を持った女。年は二十歳前後であろうか。少し後ろに下げられた右手で、地面をひきずるようにして、何かを運んできている。

「あなた、は…」

「あなた方がお探しのものは…」

戸惑いの表情を箆也が浮かべる中、抑揚のない声を発した女が、ずっと引きずってきていたものを、箆也たちの前へと放り出す。

「“それ”、ですか…？」

『なっ…!？』

女が放り出したそれは、全身に傷を負い、血だらけとなった箆也であった。気を失っているのか、地面に強く体を打ちつけても、箆也は体をまるで動かさず、その瞳は深く閉じている。

「檻也……！」

変わり果てた檻也の姿に、一気に青ざめた表情となる籠也。

「檻也っ……！檻也！」

籠也がすぐにその場を駆け出し、倒れた檻也へと駆け寄る。檻也のすぐ横へしやがみ込み、傷ついた上半身をゆっくりと持ち上げる籠也であったが、檻也に反応はない。あまりに血を流したのか、その体は冷たく、生きてはいるが危険な状態であった。

「これはっ……」

「神に……」

「えっ？」

檻也の状態を見て、険しい表情を見せていた籠也が、ひどく震えた声が聞こえてきて、戸惑うように顔を上げる。

「神に……私の神に……」

俯いた空音が、大きく肩を震わせ、声を震わせ、震えた拳できつく言玉を握り締める。

「何をしたあああ……！！！」

怒りの表情を見せた空音が勢いよく顔を上げ、形振り構わず、女のもとへと突っ込んでいく。

「ま、待て……！」

横を駆け去っていく空音に、籠也が思わず身を乗り出す。

「やめろ！空音……！」

籠也が必死に止めるが、空音は止まらず、籠也の声すらも届いていないのであろう、自我を失ったような状態で、女へと飛びかかっていく。

「“殺^そげ”……！」

「な……」

言葉を放ち、無数の白光の刃を向ける空音に、女が焦った様子も見せず、ゆっくりと口を開く。

「“無^なくせ”……」

女が言葉を落としたその瞬間、空音が放ったはずの光が、忽然と

姿を消す。

「えっ…?」

一瞬にして消えた自らの力に、戸惑いの表情を見せる空音。そんな空音に対し、女は鋭い瞳を向けた。

「逃げる! 空音!」

箆也が叫ぶ中、女がもう一度、口を開いた。

「詰^{なじ}れ」…」

小さな声で、言葉が落とされる。

「うううっ…!」

女の右手から突き出された、赤い光の鋭く、太い刃が、空音の胸を、容赦なく貫いた。

「あっ…!」

貫かれた空音の体を見て、箆也が大きく目を見開く。

「空音えええっ!」

箆也の悲痛な声が、辺りに響く。

「あ…ああ…」

「脆^{もろ}き者…」

力ない声を漏らし、徐々にその瞳の光を失くしていく空音を見つめ、女がどこか悲しげに呟く。

「今、楽にして差し上げます…」

そう言い放ち、女がゆっくりと右腕を振り上げる。

「な…」

「“押^おさえろ”…!」

「…っ!」

女が更に言葉を放とうとしたその時、白い光を帯びた四本の格子が、女へと飛んで来た。女は素早く空音を離し、後方へと下がったが、後ろの壁に背中を当て、逃げ場を失くすと、四肢を格子に押さえつけられ、動きを封じられた。

「“お”の言葉…?」

力強く四肢を封じている格子を見つめ、女がそつと眉をひそめる。

「「^{かつ}担げ」！」

言葉を放ち、女を遠ざけた箆也が、残り二本の格子を使って、重傷の空音を、自分のすぐ傍まで運ばせる。

「^{かいふく}回復しろ」！」

箆也が険しい表情を見せながら、素早く言葉を放つ。箆也の格子から赤く淡い光が放たれると、貫かれた空音の胸の傷を包み込み、見る見るうちに傷を塞いでいく。

「はあ…あ…ああ…」

「大丈夫っ」

地面に横たわったまま、治療する箆也を見上げた空音が、何か言いたげに口を開くが、その声は途切れてしまい、言葉にならない。そんな空音に対し、箆也は力強い言葉を投げかけた。

「大丈夫だ…！」

まるで自分に言い聞かせるように、必死に言い放ち、箆也が治療に集中する。

「あの傷を治す…？」

一方、まだ箆也の格子に動きを封じられている女は、空音を治療する箆也を、興味深く見守っていた。貫き切った胸の傷をこの短時間で塞ぎ、ほぼ死にかけていた空音の顔色が徐々に戻り、目に見えて回復しているのがわかる。

「あの者の力…すでに神附きの領域を超えている…」

箆也の力を推し量り、女がそっと眉をひそめる。

「はあ…はあ…あ、あれ？」

息を乱していた空音が、薄れていた意識が戻っていくことに気づき、戸惑いの声を漏らす。先程は言葉にすらなかった声もはっきりと響き、体を襲った痛みは消え、軽々と起き上がることが出来た。

「私…」

血の跡は服に残っているが、胸を貫かれたはずの傷はすっかり塞がっており、起き上がった空音は、両手で自分の胸に触れて、少し

困惑した表情を見せる。

「はあっ…はあっ…」

「あんた…」

代わりに呼吸を乱している、空音のすぐ横に座った籠也を見つめ、空音が表情を曇らせる。

「あんた、って…」

「空音、檻也を連れて逃げろ」

「えっ…？」

話しかけようとしていた空音が、思いがけない籠也のその言葉に、勢いよく眉をひそめる。

「な、何言って…！」

「あなたの役目は何だ？ 神を守ることだろう？」

必死に言い返そうとする空音を、籠也が鋭い問いかけで遮る。

「で、でも…！」

「神付きであるなら、神を守ることを最優先に考えろ！」

「……っ」

強く言い放つ籠也に、空音はそれ以上、言い返すことが出来ず、呑み込んだ言葉を我慢するように、強く唇を噛み締める。

「行け！ 早く！」

「クっ…！」

ぐっと唇を噛んだ空音が、気を失っている檻也を肩に背負い、その場を駆け去っていく。空音の姿が見えなくなったことを確認すると、籠也は素早く立ち上がり、女の方を振り向いた。

「ふう…」

その間に女は籠也の格子を打ち破り、四肢の動きを自由に戻していた。女が、力なく落ちた四本の格子をすべて拾いあげ、高々と放り投げて、籠也へと返す。籠也は素早く格子を受け取り、手元に戻って来た六本の格子を、一本へと戻した。

「あなたは一体…」

「苦戦しているようだな、なつめ 棗」

「……っ」

女へと問いかけようとした籠也が、横から割って入って来るその声に、言葉を止める。知らない声ではない。最近聞いたばかりの、印象深いその声に、籠也は確かめることを恐れるように、ゆっくりと振り向いた。

「……………」

その場へと現れたのは、まったく笑っていない、冷たい金色の瞳で、穏やかな笑顔を見せた、赤毛の男であった。

「あなたは…」

——その時にまた、俺とお前は出会うことになる……——

籠也が始忌のアジトで出会った、緑呂に成りすましていた、あの時の男。

「申し訳ありません、神。於の神と於附一名を逃がしました」

「構わないさ」

深々と頭を下げる、棗と呼ばれた女に、男が短く言葉を投げかける。

「こちらの目的は、達した」

満足げに笑い、男がまっすぐに籠也を見つめる。

「俺の言った通りだっただろう？」

男が籠也へとゆっくりと歩を進めながら、どこか得意げに籠也へ問いかける。

「こうしてまた、俺とお前は出会うことになった」

「……っ」

籠也から少し離れたところに立ち止まり、運命めいた話し方をする男に、籠也がそつと眉をひそめる。

「あなたは一体…」

困惑するような表情を見せながらも、強く警戒し、格子を握る手に一層、力をこめる籠也。

「あなたは一体、何者だ…!？」

「何者、か…」

籠也の言葉を繰り返し、男は楽しむように、そっと笑う。

「お前は、もうとつくに気付いてるんじゃないのか？」

どこか試すように、問う男。

「なあ？ 加守を継ぎし者よ…」

「……っ」

険しい表情を見せた籠也の額から、溢れる汗が流れ落ちた。

Word 48 修羅ノ真実 (1)

——その時にまた、俺とお前は出会うことになる：——

その言葉の通り、再び箆也の前へと現れた、謎の男。

「阿修羅^{あしゅら}…」

男の言葉に答えるように、箆也が唇を震わせ、その名を放つ。

「阿修羅…！」

「ご名答」

怒りか憎しみか、何やら強い感情のこもった様子で叫ぶ箆也に対し、阿修羅と呼ばれたその男は、楽しげな笑みを浮かべる。

「知っていてくれて、嬉しいよ」

「……っ」

微笑む阿修羅を見つめ、箆也が震えた唇を強く噛み締める。

「^{なつめ}棗、あの子を見てあげてくれるか？」

箆也から視線を外した阿修羅が、近くで倒れている、あの金色の獣へと視線を向け、傍に立つ^{うつつ}棗へと声を掛ける。

「あれに傷をつけると、^{うつつ}現が五月蠅^{うるさ}いんだ」

「仰せのままに、我が神」

阿修羅の言葉に深々と頭を下げると、棗は足早に歩を進め、倒れた獣のすぐ横へとしゃがみ込み、細い左手を獣へと向けた。その左手には、^{なお}箆也たち安団のものと同じ、赤色の言玉が握られている。

「“直^{なお}せ”」

棗が言葉を発すると、言玉から赤い光が発せられ、獣の巨体を包み込んだ。

「何とか、どやされずに済みそうだな」

「何故だ…」

「ん？」

獣の治療にあたる棗を見て、安心したように肩を落としていた阿

修羅が、前方から聞こえてきたかすかな声に気づき、ゆっくりとした動作で振り向く。

「何故、今になって現れる…」

阿修羅が振り向いた先には、ひどく険しい表情を見せている籠也。「やっと、笑えるようになったのにつ…」

籠也が格子を握る手に力を込め、唇を、声を震わせる。

「やっと…」

——おっはよお！アークくん！——

——うっせえんだよ！アホ親父！——

「やっと、立ち直ろうとしているのにつ…！」

勢いよく顔を上げた籠也が、その声を強く張りあげる。

「立ち直る、か…」

籠也の言葉を繰り返した阿修羅が、浮かべていた笑みを止め、ずっとその表情を曇らせる。

「それは間違っている、加守」

断言するように、強く言い放つ阿修羅。

「人は決して、逃れられない。立ち直ることなど出来はしない。心を深く抉る哀しみからはな…」

低く響くその阿修羅の声は、否定することを躊躇ってしまうほどに重々しく、強い力があつた。

「立ち直ったなどと思うのなら、それはすべて幻想だ」

籠也を射るように見る阿修羅の瞳が、冷たく輝く。

「直りました、神」

「ああ、ありがとう。棗」

そこへ棗の声が入って来て、阿修羅を包み込んでいた重い空気が消える。阿修羅が振り向くと、棗のすぐ横に、籠也と空音が負わせた傷がすべて消え、もとの姿で立ち上がっている獣の姿がある。

「礼獣に始末させますか？」

「いや、あの者は強い。その子では荷が重いだろう」

「では、私が」

獣に代わるようにして、棗が一步前へと出て、鋭い表情を見せる。棗の視線を受け、箆也も素早く格子を身構えた。

「いい、棗。俺がやる」

「えっ…?」

阿修羅の言葉に、棗が戸惑うように振り向く。

「しかし、わざわざ神が、あのような者の相手などっ…」

「あの忌に成りすましていた時から、思っていたんだ。この者とは、“自分の言葉”で戦ってみたいとな」

そっと微笑む阿修羅の言葉に、箆也が少し眉をひそめる。確かに箆也は以前、始忌の一人、緑呂に成りすましていた阿修羅と交戦したことがあるが、その時の阿修羅は、与守よもりの振りをするため、“よ”の言葉を使っていた。

「それに興味がある」

阿修羅がまっすぐに、箆也へと視線を投げかける。

「あいつが、自分の後継者を、どれほどに育てたのかな」

「……っ」

どこか強調するように、阿修羅が意味深な言葉を投げ放つと、箆也は不快感を露にし、唇を噛んだ。

「ああ、見せてやるさ」

重く声を落とした箆也が、力強く格子を身構える。

「あなたを倒す為に受け継いだ、加守のこの力をつ…!」

勢いよく叫び、箆也が阿修羅のもとへと飛び出していく。

「来い」

箆也を待つように、阿修羅は大きく両手を開いた。

暗くなり、人通りもなくなった河原で、たった一つの街灯に照ら

されながら、アヒルと紺平は、互いの言葉をぶつけ合っていた。

「凍れ」！」

紺平が右手の白い言玉を光らせ、正面に立つアヒルへと、間の地面を凍りつかせながら言葉を向ける。

「上がれ」っ」

素早く自身へと弾丸を放ち、上空へ飛び上がって、迫り来る氷をあっさりと避けるアヒル。上空を舞うアヒルがそのまま、流れるような動作で銃を構え、下方にいる紺平へ向け、狙いを定めた。

「当たれ」！」

アヒルが言葉と共に、赤い光の弾丸を紺平へと放つ。

「え、えっと、“壊せ”！」

向かってくる弾丸に、少しもたつきながらも、何とか言葉を選んで、言玉を突き出す紺平。言玉から白い光が放たれると、アヒルの弾丸と正面から勢いよくぶつかり合った。だが、紺平の光の方があっさりと碎かれてしまい、弾丸が再び紺平へと迫る。

「あれっ？」

あっさりと碎かれた自分の力に、焦るというよりは、驚いた様子で、紺平が目丸くする。

「えーと、えーっと、こ、“転べ”！」

色々と考えた結果、言葉を放った紺平が、その言葉の通りに、思いきり転んで、地面へと倒れ込み、アヒルの弾丸をギリギリのところで避ける。転んだ紺平の真上を通った弾丸は、そのまま地面すれすれを飛び、川へと水飛沫をあげて、落ちていった。

「ふうっ」

弾丸が川に落ちたことを確認すると、紺平はどこかホッとしたように息をつき、転んでいたその体を、ゆっくりと起き上がらせた。

「んだよ？その避け方」

「ガアっ」

そこへ、上空から降りて来たアヒルが、呆れたような表情を紺平へと向ける。

「他にいい言葉、思いつかなくて」

「実戦でやったら、一発でやられっぞお？」

苦笑いを見せる紺平に、アヒルが顔をしかめて言い放ちながら、持っていた銃をもとの言玉の姿へと変え、制服のポケットの中へと片づける。

「ごめんごめん」

「それに“変格”はどうしたんだよ？ 覚えてたんじゃないのか？」

「一応はね。でもまだ上手く出来ないんだ」

アヒルの問いに答えながら、紺平がその場で立ち上がり、こちらも言玉を懐へと戻す。

「んだよ？ じゃあ、何のための手合わせなんだよ」

「アハハっ…」

不満げに言うアヒルに、乾いた笑みを零す紺平。

——頼む、小泉：——

籠也から、今回のことをアヒルに話さないよう、頼まれた紺平は、アヒルが為介のもとへ行くことを防ぐため、苦し紛れに手合わせを願いだしたのである。

「けどさ、やっぱりガアは強いよね。さっすが神様！」

「……っ」

「ガア？」

紺平が言葉を掛けた途端、浮かない表情となって俯くアヒルに、紺平が戸惑うように首を傾げる。

「どうか、した？」

「いや」

問いかける紺平に、アヒルがすぐに顔を上げる。

「俺、俺もさ、結構な数の言葉覚えて、戦いにも慣れてきて、前よりはちったあ、神らしくなったかなあって思ってたんだけど…」

ゆっくりと言葉を繋ぎながら、アヒルが川の方へと歩いていく。

「けど…?」

その先を求めるように、紺平がアヒルの背中へと問いかける。

「奈々瀬が居なくて、保が居なくて、簞也が居なくて…それで俺、思っただ」

アヒルがそつと、月の映った川を見下ろす。

「ああ、俺って全然、神じゃなかったんだなあって」

アヒルから放たれるその言葉を聞き、紺平が思わず目を細める。

「皆が居て、皆が傍で笑ってくれて…それでやっと、俺は神なんだって」

川を見つめるアヒルが、少し自嘲するような笑みを浮かべる。

「一人じゃ俺は、ただの人間なんだ」

「ガァ…」

どこか情けなそうに言葉を落とすアヒルを、紺平がまっすぐに見つめる。

「そんなの、当たり前のことじゃない?」

「えっ?」

返って来た紺平の言葉が意外だったのか、アヒルが少し目を丸くして、紺平の方を振り返る。

「そんなの、どこの神様だって一緒だよ」

紺平がそつと微笑み、優しくアヒルに言葉を掛ける。

「信じてくれる人がいなきゃ、神様なんて成り立たない。誰かが信じてるから、それが神なんだもん」

「……そっか」

少し間を置いた後、アヒルが納得した様子で頷く。

「それもそうだな」

「そうだよ。それに、今の言葉聞いたら、真田さん、きっと怒るよお? “私が居るのに不満なの?” とか言って」

「ハハハ! そりゃ言えてるな!」

忠告するように言う紺平に、楽しいな笑みを浮かべるアヒル。

「ああー、何かちょっとスッキリした。サンキューな、紺平」

「どういたしました」

言葉の通り、晴れやかな笑みを見せたアヒルを見て、紺平もどこか嬉しそうに微笑む。

「そろそろ帰っか」

「そうだねえ。お腹も空いてきたし」

アヒルが川沿いから紺平の方へと歩み寄っていくと、二人は足並みを揃え、河原から町の方へと歩き出していく。

「ウチで食ってくかあ？」

「今日の食事当番、誰？」

「スー兄」

「じゃあ、ご馳走になろうかな」

「それって、さりげにツー兄否定してね？」

軽く言葉を交わしながら、二人が緩いカーブの土手を上がり、広い道へと辿り着く。

「紺平……！」

「えっ……？」

アヒルと道を歩き出そうとしていた紺平が、後方から自分の名を大きく呼ぶ声を耳に入れ、戸惑うように振り返る。

「そ、空音さん……！？」

「ハア……！ハア……！」

紺平が振り返った先に立っていたのは、激しく息を乱した空音であった。息を切らしているだけで、顔色などは問題ないが、服にべったりと赤い血の跡をつけている空音に、紺平が驚きの表情を見せる。

「あいつって、確か……」

「ど、どうしたの！？あつ」

戸惑いの表情を見せるアヒルの横から飛び出していく、空音へと駆け寄っていった紺平が、空音の背負っている人物に気付き、顔色を変える。

「檻也くん……！」

「紺平…あいつがっ…」

空音から、気を失っている檻也を受け取る紺平に、空音がひどく追い詰められたような、険しい表情を向ける。

「あいつが…！」

「……っ」

必死の空音の表情から何かを察したのか、紺平がすぐに厳しい表情を作って、前方を振り向く。

「ガァ…！」

「えっ？」

まるで助けを求めるように叫ぶ紺平に、アヒルはそつと眉をひそめた。

Word 48 修羅ノ真実 (2)

「ハア…！ハア…！ハア…！」

全身の至るところに傷を負い、地面に自身の赤い血を広げ、力なくうつ伏せに倒れ込んでいる籠也。呼吸は大きく乱れ、肩を揺らして息をしていた。

「う、ううう…」

「弱いものだな…その程度か？」

前方から降って来る声に、苦しげな声を漏らしていた籠也が、首だけを何とか動かして、ゆっくりと顔を上げる。

「俺の神附きは、もっと強かったぞ？」

「……っ」

挑発するように言い放つ阿修羅に、籠也がその表情を大きく歪ませる。

「何が、神附きだ…」

苦しい呼吸で、言葉を繋げる籠也。

「堕ちたあなたに、神を名乗る資格などないっ…！」

勢いよく立ち上がった籠也が、まだ血の流れ落ちる体を突き動かし、阿修羅のもとへと駆け込んでいく。

「“変格”！」

駆け抜ける道の途中で籠也が、持っている格子を鎌の姿へと変形させる。

「“刈^かれ”…！！」

「……っ」

阿修羅のすぐ前で飛び上がり、力いっぱい鎌を振り下ろす籠也を見て、余裕すら見える笑みを浮かべた阿修羅は、そっと左手を差し出した。

「ク…！」

差し出した手で、籠也の振り下ろそうとしていた鎌の持ち手部分

を掴み、当たり前のように、鎌の動きを止めてしまう阿修羅。全力で振り下ろしたというのに、あっさりと止められてしまった鎌に、
箆也は強く表情をしかめる。

「こんなものか？お前の力は」

「うう…！」

「あの忌として戦った時は、もう少し、強いものだと思っていたが…」

阿修羅が左手で箆也の鎌を払い退け、今度は右手を突き出して、思いきり箆也の首を掴みあげた。絞め付けられる首に、箆也の表情が歪む。

「余計な感情が、お前の邪魔をしているのかな？」

「……っ！」

見透かすような阿修羅の発言に、箆也が大きく目を見開く。

「あなたは…」

首を絞められながら、箆也が必死に言葉を発する。

「あなただけは、絶対に許さない…！」

「許さない、か…」

箆也の言葉を繰り返し、阿修羅が少し眉をひそめる。

「ううう…！」

「許さないから、どうだと言うんだ…？」

阿修羅が箆也の首を絞める手にさらに力を込め、冷たい微笑みで言い放つ。

「なあ…？加も…」

「“当たれ”^あ！」

「……っ」

さらに箆也に問いかけようとした阿修羅が、横から入って来る言葉に気付く。阿修羅が振り向くと、大きな赤い光の塊が、阿修羅へと、一直線に向かって来ていた。

「おおっと」

阿修羅が後方へと飛び退いて、向かってきた光を避ける。阿修羅

が避けると、その赤い光は、暗く染まった空の向こうへと、消えていった。

「うう…」

首を解放され、そのまま力なくその場にしゃがみ込む籠也。

「籠也！」

「……っ」

自分の名を呼ぶ声に、籠也が閉じそうになっていた瞳を開く。

「か、み…？」

「籠也…！」

大きな声で再び籠也の名を呼びながら、籠也のもとへと駆け込んできるのは、右手に真っ赤な銃を構えた、アヒルであった。アヒルが籠也のすぐ傍までやって来て、様子をうかがうようにしゃがみ込む。

「大丈夫か！？ 籠也！」

「あれ程、言ったのに…話したのか。小泉っ…」

「はあ？」

籠也を気遣うアヒルであったが、険しい表情を見せる籠也に、戸惑うように首を傾げる。

「お前、何言ってる…」

「いいタイミングだ」

「……っ」

困惑の表情を見せていたアヒルが、背中の方から聞こえてくる声に、眉をひそめる。その声は、籠也を傷つけた未知なる敵のもののはずだったが、アヒルには確かに聞き覚えがあった。戸惑いの表情を見せながら、アヒルがゆっくりと振り返る。

「さすがは皆の神、といったところか？」

「あっ…」

振り返ったアヒルの瞳が、大きく見開かれる。

「あんた…」

そこに立っていたのは、赤毛に印象的な金色の瞳の、一度会った

ら、見間違うこともないほどに特徴的な男。

——学生時代の友達なんだ——

「あんた、は…」

アヒルの家に、カモメの友として現れた、あの男。

「また会ったな」

戸惑いの色を濃くするアヒルに、阿修羅がそっと笑みを向ける。

「トマトはとても美味しかったよ、アヒル」

「……っ」

挑戦的に言い放つ阿修羅に、アヒルの表情が一気に陰しくなる。

「なんで…」

まっすぐに阿修羅を見据え、戸惑いの声を漏らすアヒル。

「なんで、あんたがここに…？」

前方に立つその男は確かに、“また来る”と言っていたが、この再会は、アヒルにとってまったく予期せぬものであった。

「なんで、あんたがこんな…こんなことっ…！」

「……っ」

一瞬、傷ついた籠也の方を見て、アヒルが再び阿修羅へと視線を送る。ひどく困惑した表情を見せるアヒルを見つめ、阿修羅はそっと笑みを浮かべた。

「大丈夫ですか？神」

「ああ、問題ない。棗」

「“神”…？」

金色の獣を引き連れ、阿修羅のもとへと寄って来て、阿修羅の身を案ずるように問いかける棗。だが棗の姿や獣の存在よりも、アヒルが気になったのは、棗の口にした“神”という単語であった。

「神って…あっ」

さらに眉をひそめ、阿修羅を見ていたアヒルが、何かに気付いたように声を漏らす。

「あの、腕輪…」

アヒルの目を引いたのは、阿修羅の左腕に、黒い服の上からしっかりとはめられている、銀製の腕輪であった。年代ものであるのか、かなりくすんではいるが、黒ずみの間に、きらりと輝く銀色の部分が見える。そして腕輪の外側部分には大きく、『安』という文字が刻まれていた。

「あれって…」

急に思い立ったように、アヒルが制服であるシャツの袖を捲くりあげる。白いワイシャツの下から姿を現したのは、銀製のきれいな腕輪であった。こちらも外側に『安』という文字が刻まれている。

——安の神の証だよね——

その腕輪は、神試験を合格し、無事五神の一人となったアヒルに、認証式の際、為介が与えたものであった。

「同じ…？」

新しさはまるで違うが、まったく同じデザインである二つの腕輪に、アヒルが益々、戸惑った表情となる。

「ああ、同じものだ」

「えっ？」

返って来る答えに、自分の腕輪を見つめていたアヒルが顔を上げる。

「これは、“安の神”の証…」

そう言って阿修羅が、そっと自分の腕輪を撫でる。

「どういう、ことだよ？」

「俺の名は阿修羅」

問いかけるアヒルへ、阿修羅がまっすぐに視線を向ける。

「アシュラ…？」

「お前が神になる前、“安の神”と呼ばれていた者だ」

「なっ…!？」

「……っ」

阿修羅の言葉に、衝撃を走らせるアヒル。アヒルのすぐ横で籠ちは、特に驚いた様子は見せず、唇を噛み締め、辛そうに俯く。

「神……？俺の前の、安の神……？」

「ああ、そうだ」

戸惑って聞き返すアヒルに、阿修羅が大きく頷く。

「俺は、お前の先代の“安の神”だ」

「んなことっ……」

アヒルが突き出されるように、声を発する。

「んな言葉、誰が信じるかよ！」

大きな声を張り上げ、アヒルが阿修羅の発言を一蹴する。

「安の神の腕輪は、前の神が壊しちゃったって聞いた！それに、五十音士は一文字に一人のはずだろ……？」

アヒルが強い口調で、言葉を続ける。

「それとも、あんたも扇子野郎みたいに、旧世代の神だとも言うのか……！」

「いいや、“あ”に旧字体は存在しない」

「じゃあ何だってんだよ！」

「まあ、色々とあるんだが……」

「ああ……？」

説明することを面倒臭がるように、軽く頭を掻く阿修羅に、アヒルが苛立つように声を大きくする。

「腕輪だけで足りないのなら、これではどうだ？」

阿修羅が懐へと右手を入れ、そしてまたすぐに手を出す。出てきた右手に握られているのは、宝石のように輝く、一つの真っ赤な玉であった。

「言、玉……？」

「五十音、第一音……」

「えっ……？」

聞き慣れた言葉を放つ阿修羅に、アヒルが困惑する。

「“あ”、解放…」

「なっ…!」

言葉と同時に強い光を放ち始める言玉に、思わず大きく目を見開くアヒル。赤い光を放った言玉は徐々にその姿を変え、やがて一丁の銃の形となって、阿修羅の右手に収まる。太身の銃身に、子供の手のひら程もある大きな銃口、右手に余るほどに大きな持ち手。大きさも違えば、形も異なっているが、赤銅色に、銃身に描かれた『安』という文字は、アヒルの銃とまったく一緒であった。

「銃…?」

「あ…」

「…っ!」

銃口をアヒルへと向け、ゆっくりと口を開く阿修羅に、アヒルが焦りの表情となる。

「“当たれ”」

阿修羅が言葉を放つと、銃口から勢いよく、赤い光の巨大な弾丸が放たれた。

「“あ”の言葉…?クっ!」

阿修羅が口にした言葉が発動したことに焦りながらも、アヒルが向かってくる弾丸へ向け、右手に持っていた銃を構える。

「“当たれ”!」

アヒルも阿修羅と同じ言葉を口にし、同じように、銃口から赤い弾丸を放つ。同じ言葉で、同じ銃から放たれた二つの赤い光は、二人の中間地点で、強く交錯した。

「うっ…!」

だが当たったその瞬間から、アヒルの光の方が押され、アヒルの銃に一気に重圧がかかる。

「俺の力の方が、弱い…?うわあああ!」

「神…!」

かかる重圧にアヒルが戸惑いの表情を見せっていると、そう時間も置かぬうちに、阿修羅の弾丸がアヒルの弾丸を打ち破り、向かって

きたその光にアヒルが勢いよく吹き飛ばされた。遙か後方で倒れ込むアヒルに、籠也がしゃがみ込んだまま、必死に身を乗り出す。

「うう…」

吹き飛ばされ、仰向けに倒れ込んだアヒルが、額の端から流れ落ちる血を拭いながら、すぐに起き上がる。怪我はしているが、そう大きな傷は負っていないようである。

「クソ痛てえ」

「どうだ？これで信じたか？」

聞こえてくる問いかけに、アヒルが顔を上げる。

「俺が、お前と同じ“安の神”だと」

「……っ」

どこか自信に満ちた表情で笑う阿修羅を見つめ、眉をひそめたアヒルが、地面に手をつきながら、その場で立ち上がる。

「どういうことだよ…？」

アヒルが先程もした問いかけを、阿修羅へと投げかける。

「お前が安の神だってんなら、なんで俺は神になったんだよ？“あ

”の文字が一つなら、神はお前だけでいいはずだろ！？」

「そうだな、その通りだ」

アヒルの言葉を認めるように、阿修羅がしっかりと頷く。

「だが残念なことに、俺は五年前、神の座を堕ち、五十音の世界から追放されてしまっているんだよ」

「追放…？」

「ああ」

聞き返したアヒルに頷き、阿修羅が冷たく微笑む。

「神の座を堕ちて…」

「神として、決して許されないことをしたんだ」

「許されないこと…？」

「ああ」

益々、戸惑いの表情となるアヒルに、阿修羅がそっと頷きかける。
「人を殺したんだ。この“あ”の言葉で」

「……っ！」

阿修羅の言葉に、アヒルが大きく目を見開く。

「それも一人じゃない。百、二百…山程な」

「なっ…」

まるで感情のない鬼のような、冷え切った微笑みを浮かべる阿修羅に、アヒルは思わず言葉を失くす。その微笑みが、阿修羅の言葉が偽りではないことを、物語っているようである。

「なんで、んなことっ…」

「……っ」

問いかけたアヒルに、阿修羅はまったく読むことの出来ない笑みを、浮かべるだけであった。

「墮神となってから五年…やっと俺は、戻って来た」

阿修羅の浮かべるその笑みが、どこか楽しげに変わる。

「すべてを、終わらせる為に…」

「……っ！」

重々しく落とされる阿修羅の言葉に、アヒルが何か悪寒のようなものを感じ、強く全身を震わせる。

「あ、“^あ当たれ”…！」

撃とうと思っていたわけではなかったが、敵から身を守る野生の動物のように、本能で身の危険を感じたのか、アヒルが素早く引き金を引き、阿修羅へと弾丸を放った。

「“^あ当たれ”」

阿修羅が先程と同じように、アヒルとまったく同じ言葉で、同じように弾丸を放つ。二つの弾丸はぶつかり合うが、またしても阿修羅の弾丸がアヒルの弾丸を弾き飛ばし、そのまま勢いよくアヒルへと迫る。

「ク…！“^あ上がれ”！」

自らに弾丸を放ち、その場を飛び上がるアヒル。

「この…！」

上空で止まったアヒルが、地面に立つ阿修羅へと銃口を向ける。

「“浴^あびせ…!”

「“上^あがれ”」

「あっ…!」

アヒルが言葉を放つよりも先に、弾丸で自らの撃ち抜いた阿修羅が、上空へと飛び上がり、アヒルのすぐ目の前へとやって来る。

「俺はお前と同じ言葉を使えるということを、忘れるな」

「クっ…」

余裕の笑みを浮かべる阿修羅に、アヒルが悔しげに唇を噛む。

「これなら、どうだ!」

目の前に浮かぶ阿修羅へと、銃口を向けるアヒル。

「“荒^あれる”」

「……っ」

アヒルの放つ言葉に、阿修羅がかすかに眉をひそめる。

「“嵐^{あらし}”…!」

「うっ…!」

銃口から放たれた、逆巻く風の塊が、至近距離から一気に阿修羅へと襲いかかる。

「やったか…? あっ…!」

嵐に覆われた阿修羅を見て、少し笑みを零したアヒルであったが、阿修羅の体が徐々に霞みがかかり、消えていくことに気づき、大きく目を見開く。

「これは…!」

「そう、“欺^{あざむ}け”だ」

「う…!」

アヒルへと言葉を教えながら、アヒルのすぐ上空へと姿を見せる阿修羅。向けられた銃口に、アヒルが焦りの表情を見せる。

「“荒^あれ狂え”…」

「えっ…?」

阿修羅が発するその言葉に、アヒルが驚きの表情を見せる。

「まさか、名詞^{ナウン}も…!?!」

「嵐^{あらし}」……！」

「う……！うあああああ！」

今後はアヒルが、阿修羅の銃口から放たれた嵐に吞まれ、強い風に斬り裂かれながら、真っ逆さまに地面へと落ちていく。

「神……！うう……」

そんなアヒルの姿に、思わず身を乗り出す箆也であったが、全身の傷が痛み、その表情を歪めた。

「強い……」

箆也が細めた瞳を鋭くしながら、上空に浮かぶ阿修羅を見上げる。

「神より、確実に……」

そっと呟いた箆也の額から、汗が流れ落ちた。

「痛つつつつ……」

地面に落ちたアヒルが、斬り傷を負い、血の流れる全身に顔を歪ませながら、特に傷の深い左手を押さえるようにして、ゆっくりと起き上がる。強烈な嵐は、アヒルが放つそれよりも数段、威力が上に思えた。

「クソ……」

「そう、悔しがることはない」

アヒルが軽く舌を鳴らしていると、そこへ上空から、阿修羅が降りてくる。

「お前よりも先に、俺の方が神になり、お前よりも長く、俺の方が神をやっているんだ」

阿修羅がアヒルへと、挑発的な笑みを向ける。

「お前よりも俺の方が強いのは、当然のことだろう？」

「励ましの言葉っ……」

微笑む阿修羅へと、アヒルが素早く銃口を向ける。

「ありがとうよ！“当たれ”！」

アヒルが礼と同時に引き金を引き、阿修羅へ再び弾丸を向ける。

「懲りないな……“当たれ”」

すぐに引き金を引き、自らの弾丸でアヒルの弾丸を砕く阿修羅。

阿修羅の弾丸がそのまま突き進み、アヒルへと直撃する。

「ん：？」

阿修羅の弾丸に撃ち抜かれたはずのアヒルの姿が霞み、阿修羅が少し眉をひそめる。

「欺け”返しか：」

そう呟いた阿修羅が、迷うことなく上空を見上げる。

「集まれ”：！」

上空に浮かんだアヒルは、高々と銃を振り上げ、言葉を使って、その銃口の先に、赤色の光を集約させ始めていた。光が見る見るうちに大きくなり、勢力を増していく。

「これでっ：！」

「溢れろ”」

アヒルが光を集約させた銃口を振り下ろそうとしたその時、阿修羅が引き金を引き、アヒルの集めた光へと、弾丸を撃ち抜いた。

「あっ：！」

阿修羅の弾丸に貫かれた途端、集めたアヒルの光が、その集合の中から溢れ出るように零れ始め、せっかくの大きな塊が、徐々に小さくなっていく。勢力を失っていく光に、焦りの表情を見せるアヒル。

「しまった：！」

「“浴びせろ”」

「うっ：！」

焦るアヒルへと、降り注ぐ赤い光の雨。

「うわああああ！」

無数の雨を一粒残らず浴びて、アヒルが勢いよく地面へと叩きつけられる。

「ううう：！うっ：！」

胸を打ちつけ、苦しげに声を漏らした後、力なく地面に倒れ込むアヒル。光の雨に撃ち抜かれた全身の傷から、また新たに血が流れ、地面へと広がっていく。

「俺と同じ神の名を継いでいながら、随分と脆いものだ」

「クっ…」

「あっしゅく“圧縮”…」

「あ…！」

先程のアヒル同様、言葉を使い、銃口の先に光を集約させていく阿修羅に、アヒルの表情が険しくなる。強い光の集まったその銃の引き金を、阿修羅が強く引く。

「あ“当たれ”」

「グっ…！」

避ける力も、避ける時間もないアヒルは、覚悟を決めたように、強く唇を噛み締めた。

「ん？」

「へっ？」

だが阿修羅の放った弾丸は、アヒルの上、すれすれのところを通り、アヒルに傷一つつけることなく、そのまま素通りして、空の遙か向こうへと突き進んでいった。当たらなかった弾丸に、アヒルと阿修羅がそれぞれ、戸惑った表情を見せる。

「これは…」

自身の構えた銃を見つめ、阿修羅がそつと眉をひそめて、振り向く。

「はあ…はあ…」

阿修羅が振り向いた先には、激しく息を乱した箆也の姿があった。箆也は先程まで下ろしていたはずの鎌を、阿修羅へ向け突き出しており、言葉を使ったのか、その鎌はまだ淡く、赤色に輝いている。

「^{かたむ}傾け”…”」

「……っ」

箆也の口から零れ落ちた言葉を聞き、阿修羅が楽しげに微笑む。

「箆也…」

アヒルも阿修羅の視線を追うようにして、箆也の方を見る。

「言葉で弾道を変えたか」

誉めるように言いながら、箆也の方を見る阿修羅。

「そんな状態でも直、神を守る。お前は本当に、良く出来た神附きだ、加守」

「……………」

誉める言葉であったとしても、阿修羅からのものでは喜ぶことが出来ないのか、箆也は険しい表情を見せたまま、その表情を動かさない。

「忌としてお前と戦った時から、感心していたよ」

「忌として…？」

阿修羅の言葉に、眉をひそめるアヒル。

「じゃあお前が、始忌に成りすましてたっていう…？」

「まあ、そういうことだ」

再びアヒルの方を振り返った阿修羅が、笑みをを見せて頷く。

「フ、ザけやがって…！」

アヒルが声を荒げ、表情をしかめる。

「何がカー兄の友達だ！何がカー兄とはよく衝突しただよ！」

倒れ込んでいた上半身を起こし、阿修羅と交わした言葉を思い出
し、アヒルがその一つひとつを、怒りとして放出する。

「俺と戦う気なら、正面から俺に向かって来れば、よかったら
ろが！」

さらに大きく、声を荒げるアヒル。

「よりによつてカー兄使つて、くだらねえウソつきやがって…！」

「嘘じゃない」

「えっ？」

強く言葉を遮られ、アヒルは思わず言葉を呑み込み、目を丸くす
る。

「俺がお前に告げた言葉の中には、嘘など、たったの一つもない」

「何、だと…？」

はつきりと言い放つ阿修羅に、戸惑うアヒル。

「確かに俺は、朝比奈カモメの友だった」

先ほどまで浮かべていた、余裕に満ちた笑みを消し去り、真剣な
表情を見せた阿修羅が、まっすぐにアヒルを見つめる。

「お前の兄、朝比奈カモメは…」

阿修羅が視線を、アヒルから籠也へと動かす。

「そこに居る加守を加守へと導いた、先代の“加守”。“安の神”
であった俺の、神付きだったんだからな」

「えっ…？」

衝撃的な阿修羅の言葉に、声を失うアヒル。

「……っ」

しゃがみ込んだままの箆也は、力なく目を伏せ、深く俯いてしま
う。

「カー兄が、加守……？」

彷徨うアヒルの瞳が、阿修羅や箆也と見つめ、色々なところを見
回していく。

「カー兄が、五十音士……？」

それは、アヒルが考えてもみなかった真実であった。

「ああ、そうだ」

戸惑うアヒルへもう一度、告げるように、阿修羅が大きく頷きか
ける。

「カモメは俺の神付き、そして俺はカモメの神だった……」

阿修羅が過去を思い出しているのか、暗い空を見上げ、遠くを見
るような瞳を見せる。

「他の安団の仲間と共に忌退治に励み、人々の言葉を守っていた」

「そんな……」

「信じられないなら、聞いてみるか？」

空から視線を下ろした阿修羅が、再び試すような、不敵な笑みを
浮かべる。

「お前の神付きも、知っているはずだぞ？ 何せ、カモメから加守を
引き継いだんだからな」

阿修羅の冷たい視線が、しゃがみ込んだまま、深く俯いている箆
也を捉える。

「箆也……」

「……………」

どこか救いを求めるように、箆也の名を呼ぶアヒルであったが、
箆也はそのアヒルの呼びかけに答えようとはせず、深く俯いたまま、
まったく動かない。その箆也の態度が、何よりも答えを表していた。
「本当に……」

何も言わぬ箆也に、カモメが加守であったことが事実であると、

察するアヒル。

「お前は本当に、カモメのことについては、何も知らされていないかったようだな…」

阿修羅がどこか呆れたように言いながら、深々と肩を落とす。

「カー兄が…」

アヒルが少し声を震わせながら、強く左手を地面に突いて、さらに体を起こす。

「カー兄が五十音士だったとしても、言葉で人を殺したてめえなんか、附くはずがねえっ…！」

「ああ、そうだな」

「えっ…？」

あっさりと認めるように頷く阿修羅に、アヒルが眉をひそめる。「言っただろう？ あいつは誰よりも優しく、誰よりも頑固な男だったと」

阿修羅の表情から、笑みが消える。

「自身の神とはいえ、あいつは俺を許しはしなかったよ。言葉で人の命を奪った、この俺を…」

低く重く響いてくる声に、アヒルが思わず息を呑む。

「だから俺は…」

「あ…！」

言葉が続ける阿修羅に、ハツとした表情を見せ、箆也が勢いよく顔を上げる。

「やめろ…！やめろ！」

「箆也？」

「……っ」

必死に叫ぶ箆也に、アヒルが戸惑うように首を傾げ、阿修羅が嘲笑うように口元を歪める。

「やめろおお…！！」

喉が潰れてしまうのではないかと思うほどに、大きな声で叫ぶ箆也。だが阿修羅は止めることなく、アヒルへと口を開いた。

「俺は、カモメを殺した」

「……っ！」

告げられるその真実に、アヒルが大きく目を見開く。

「えっ……」

アヒルは口を開いたが、それははっきりとした言葉にはならず、ただ声として落とされた。

——おかえり、アーくん——

——アーくん、一緒に野菜スープ作ろうか？——
浮かぶ、優しい兄の笑顔。

「カー兄を……」

——兄ちゃんなんか、居なくなればいいんだ……！——

——違うんだ……違うんだよ！カー兄！——

——あああああ……！！——

自分の言葉により失ったはずの、大好きな兄の命。

「カー兄を、殺した……？」

阿修羅の発したその言葉を繰り返しながら、アヒルはひどく困惑した様子で、右手をあげ、頭を抱えるように耳の横に添わせる。

「ああ、そうだ……」

ゆっくりとした口調で、アヒルへと頷きかける阿修羅。

「俺がカモメを殺した」

強調するように、阿修羅がもう一度、同じ言葉を繰り返す。

「この銃で、お前と同じ“当たれ”の言葉を使って、あいつの心臓を思いきり撃ち抜いた」

阿修羅がどこか楽しげに、言葉を続ける。

「そしたら、死んだよ。あっさりとな」

「……っ」

冷たく微笑んで言う阿修羅に、アヒルの表情が止まる。

「あっ…」

アヒルが震えた唇で、声を発する。

「ああああああっ…!!」

怒り狂った大声をあげたアヒルが、勢いよく右手を振り上げ、強く引き金を引く。すると銃口から、赤と金の混ざり合った、巨大な光の弾丸が放たれた。

「凄い力だ…」

「神！」

地面を挟り返し、目にも留らぬ速さで阿修羅へと向かっていくその弾丸に、箆也が目を見張り、棗が思わず焦ったように、阿修羅へと身を乗り出す。

「抗え」
あらが

向かってくる光へと、素早く弾丸を撃ち込む阿修羅。阿修羅の弾丸は、アヒルの弾丸とぶつかり合い、反抗を示したが、アヒルの方が威力に勝り、阿修羅の弾丸は呑み込まれてしまう。

「俺の言葉で止められない、か…」

「神…！」

「問題ない、棗」

破られた力に眉をひそめた阿修羅であったが、不安げに呼びかける棗には、一転して余裕の笑みを向ける。

「止められないなら、砕けばいい」

そう言って阿修羅が、再び引き金を引く。

「暴け」
あば

阿修羅の銃から新たな弾丸が放たれ、アヒルの弾丸を貫くと、次の瞬間、アヒルの弾丸は内部から砕け散るように、粉々になって散っていった。周囲を舞う光の粒に、阿修羅が満足げな笑みを浮かべる。

「ん…？」

だが、先程まで前方に居たはずのアヒルの姿がそこになく、阿修

羅が少し眉をひそめる。

「後ろです…！神！」

棗の声に、阿修羅が素早く後方を振り返る。阿修羅のすぐ後ろには、すでに銃口を阿修羅へと向けているアヒルの姿があった。

「“当^あたれ”…！」

「…っ」

放たれる弾丸に、阿修羅がそっと目を細める。

「…成程」

弾丸が放たれた音を最後に、訪れた静寂を破ったのは、感心するような阿修羅の声であった。薄く笑みを浮かべた阿修羅の左頬に小さな傷が走り、そこから赤い血が流れる。

「俺が傷を負うとは…さすがは、カモメの弟だ」

「ク…！」

阿修羅が、アヒルの右手を掴み上げ、そのまま振るように持ち上げる。アヒルの両足が、地面からかすかに浮いており、腕を振じられているからか、その表情を大きく歪めている。アヒルが弾丸を放つ瞬間に、アヒルの腕を持ち上げ、その弾道を逸らしたようである。

「神っ…！」

阿修羅に捕まったアヒルに、険しい表情を見せる筈也。

「言葉に難はあるが、その力は天性のものだな…やはり、血筋か？」

「…えせ、よ…」

「ん…？」

楽しげにアヒルへと問いかけを向けていた阿修羅が、俯いたままのアヒルから聞こえてくる、掠れたような小さな声に、戸惑うように顔を上げる。

「返…せ、よ…」

ゆっくりと顔を上げ、射るような瞳で、阿修羅を見るアヒル。

「カー兄を、返せよ…」

アヒルが強い瞳で、阿修羅を睨みつける。

「俺に：俺たちにつ：カー兄を返せよおお：！！」

まるで何かに取り憑かれているように、大きく目を見開いたアヒルが、心からの叫びを放つ。

「神……」

初めて見るアヒルの様子に、思わず息を呑む箆也。

「返せよ！返せよお……！」

「……っ」

必死の叫びを続けるアヒルを見つめ、阿修羅は笑みを消すと、そつと目を細めた。

「いくら俺が神とはいえ……」

ひどく冷え切った表情を見せた阿修羅が、アヒルの腹部へと銃口を突き付ける。

「聞けない願いだな、それは」

はつきりと言い放ち、何の躊躇いもなく引き金を引くアヒル。

「“当^あたれ”」

「う……！うあああああっ！」

目の前から直接、腹へと弾丸を撃ち込まれ、アヒルが激しく叫び声をあげながら、後方へと吹き飛ばされる。

「う、う……」

地面にうつ伏せに倒れ込んだまま、もがくように、苦しげな声を漏らすアヒル。貫通はしていないが、大きく抉れた腹の傷からは、どくどくと血が流れ出し、制服の白いシャツが真っ赤に染まっていた。体を動かせば傷に響くのだろうが、痛みを堪えられないのか、アヒルがわずかに体を動かしている。銃はアヒルの右手から零れ落ち、もとの言玉の姿となって、地面に転がっていた。

「神……！ク、うう……！」

箆也が重い体を必死に動かし、何とかアヒルのもとへと行こうとする。

「脆いものだな……」

阿修羅が構えていた銃を下ろし、どこか残念そうに、深々と肩を

落とす。

「これが、俺の後に神となった者の実力か……」

「お前、だけは……」

途切れ途切れで、かすかに聞こえてくるアヒルの声に、阿修羅が顔を上げる。

「お前、だけは……絶対、許さねえ……」

「……っ」

傷だらけで倒れながらも、阿修羅に挑戦的な瞳を向け、強く言い放つアヒルの姿を見て、阿修羅がどこか満足げに笑う。

「許さない、か。さっき加守にも言われたな」

アヒルから少し視線を逸らし、横を向いて笑みを零す阿修羅。

「いいぞ、許さなくて」

再びアヒルの方を見た阿修羅が、笑みを浮かべたまま、倒れているアヒルの方へと歩いていく。

「ま、待てっ……うう……」

動くことなど出来ないであろう、アヒルのもとへと歩いていく阿修羅を何とか止めようと、必死に体を起こそうとする籠也であったが、体中に痛みが走り、ろくに動かすことが出来ない。そんな籠也を横目に、口元を歪めると、阿修羅はさらに歩を進めた。

「一生、俺のことなど、許さなくていい……」

うつ伏せに倒れているアヒルのすぐ目の前でしゃがみ込み、阿修羅がアヒルの顔を見下ろす。

「殺したければ、殺せばいい……」

「ク……」

目の前で微笑む阿修羅を、必死に顔を上げたアヒルが、強く睨みつける。

「“当^あたれ”」

睨みつけるアヒルの視線から、目を逸らすことなく、阿修羅はゆっくりと右手をあげ、狙いも定めずにその引き金を引いた。

——パアアアン！

「うあっ……！」

狙いも定めずに放たれた、阿修羅の弾丸が撃ち抜いたのは、地面に転がっていたアヒルの言玉であった。粉々に砕け散り、細かい破片となって地面に散らばる言玉に、アヒルが大きく目を見開く。

「俺の……言、玉がっ……」

散らばった赤色の破片を見つめ、目を見開いたまま、茫然とした表情を見せるアヒル。

「さあ、殺してみろ……」

求めるように語りかけながら、阿修羅が今度は、アヒルの額へと、銃口を押し当てる。

「なあ……？アヒル……」

「うっ……！」

ゆっくりと引かれる人差し指に、アヒルの表情が歪んだ。

Word. 48 修羅ノ真実 (4)

「……っ！」

だが、阿修羅が引き金を引こうとした丁度その時、横から阿修羅へと、金色の大きな光が割って入って来て、阿修羅はアヒルから離れ、後方へと飛び上がって、それを避けた。

「ふう」

アヒルから距離を取ったところで着地した阿修羅が、どこか困ったように肩を落とす。

「今日はよく邪魔が入るな」

前方を見つめ、阿修羅がそっと笑みを浮かべる。

「え……？」

アヒルも目の前に現れたその人物たちを見上げ、戸惑いの表情を見せた。

「スー兄……？ ツー兄……？」

『……………』

アヒルの前へと並んで立ったのは、アヒルの二人の兄、スズメとツバメであった。二人はいつになく厳しい表情を見せ、前方の阿修羅へと鋭い瞳を向けている。

「懐かしいな。五年前はガキだったのに、随分と大きくなったじゃないか」

「ケっ」

親しげな言葉を掛ける阿修羅に対し、スズメは表情をしかめ、地面へと唾を吐き捨てた。

「てめえは相変わらず、ムカつく面してやがるぜ」

「本当……今すぐ、呪い殺したくなっちゃうくらい……」

阿修羅を見つめる二人の瞳が、深い感情のこもっている様子で、冷たく輝く。

「カモメの自慢の弟が勢揃いか……」

目の前に現れたスズメとツバメ、そして二人の後ろで倒れているアヒルをじっくりと見つめ、阿修羅がどこか感心するように言う。

「折角、カモメのもとへ、大好きな弟を一人、送ってやれるところだったんだがな…」

「冗談じゃねえぜ」

残念そうに呟く阿修羅に、スズメが言葉を吐き捨てる。

「これ以上、お前を殺す理由が増えたら困っだろうが」

「……それもそうだ」

挑発するように言うスズメであつたが、阿修羅は特に動じることなく、ただ余裕ある笑みで頷いた。

「スーに…うう…！」

阿修羅と自然に会話をするスズメに、後方から問いかけようとしたアヒルだが、傷が痛み、言葉を途中で止めてしまう。苦しげな声を漏らすアヒルに気付き、二人が振り返る。

「お腹の傷だけでも、塞いでおいた方がいいんじゃない…？ スズメ…」

「そうみてえだな」

ツバメの助言に頷いたスズメが、アヒルの方に体を向け、しゃがみ込む。スズメが制服のポケットに手を入れると、そこから金色に輝く玉を取り出した。

「言、玉…？」

見覚えのある玉に、目を丸くするアヒル。スズメは取り出した言葉を掲げ、倒れたままのアヒルへと向けた。

「“救え”」

兄の口から言葉が放たれると、言玉から光が放たれ、強い金色の光が一瞬、アヒルの体を包み込んだ。すぐに光が消えると、体を襲っていた痛みが軽減されていることに気付き、アヒルがゆっくりと体を起こす。阿修羅の弾丸により負わされた、腹に空いた大きな傷が、きれいに塞がっている。

「言葉の、力…」

傷の塞がった腹を押さえ、戸惑いの表情を見せるアヒル。

「五十、音士…？」

アヒルがゆっくりと顔を上げ、困惑した様子で、二人の兄を見上げる。

「ここで少し休んで、アヒルくん…」

「あいつは俺たちが倒す」

ツバメがアヒルへと優しく声を掛け、スズメが立ち上がりながら鋭く言い放つと、二人が再び阿修羅の方を見る。アヒルはただ戸惑いの表情のまま、目の前に立つ二人の兄を見つめることしか出来なideいた。

「カモメの弔い合戦でもする気か？」

「当ったり前だろ？五年前のあの日から、どんなにこの日を待ち望んだか」

「今日、この日を迎える為だけに…僕らは五十音士の道を選んだ…」
スズメに続くようにして言いながら、ツバメもポケットへと手を入れ、スズメと同じ色の言玉を取り出した。それぞれ右手と左手に言玉を持った二人が、左右対称の動きで手を横へと突き出し、構えを取る。

「五十音、第十三音“す”」

「五十音、第十八音“つ”…」

スズメとツバメが言葉を発すると、徐々に言玉が金色の光を放つていく。

『解放…！』

二人の声が揃い、言玉がより一層、強い光を発した。

『クワアアアア！』

「あっ…！」

強い金色の光に視界が支配された次の瞬間、甲高い鳴き声と共に目に入ったその姿に、アヒルは大きく目を見開いた。見惚れるほどに美しい、夜空に大きく広げられる金色の翼。鋭く伸びた嘴に、しなやかで迫力ある巨体、そして、獲物を狙う鋭い瞳。言玉から解放

されたのは、二羽の巨大な、金色の鳥であった。

「鳥……」

アヒルが茫然と、その鳥たちを見上げる。

「俺と、同じ……」

かつて自らの言玉が変えたその姿と重なる鳥たちに、アヒルがそつと眉をひそめる。

「宇団、宇附うだん うつきが一、“寸守”すもり、朝比奈スズメ」

「同じく“州守”つもり……朝比奈ツバメ……」

後方に巨鳥を従え、スズメとツバメが鋭い表情を見せる。

「行くぜ、チュン吉」

「呪うよ……スワ郎……」

丸みのある胴体に、やや体格の大きめの鳥の方がスズメの声に、シャープな体つきに、嘴の長い方の鳥がツバメの声に、それぞれ鳴き声で返事をした。

「やはり、宇団……」

「無事か？ 神月」

「え……」

戦況を見つめ、現れたスズメとツバメに、アヒルと同じように戸惑いの表情を見せていた籠也が、横から名を呼ばれ、ゆっくりと振り向く。

「先生……」

籠也が振り向くと、そこには、恵、雅、そして為介の姿があった。言葉を掛けた恵を見上げた籠也が、三人の姿を見て、少し安心したように肩を落とす。

「為介、治療を」

「えええ……？ でもボク、最近、顎の調子があ……」

「早くしろ」

「はあ……い」

恵に指示された為介が、渋々、籠也の横へとしゃがみ込み、籠也へと右手の扇子を一振りする。

「“癒やせ” ええ」

淡い水色の光に包まれ、箆也の全身の傷が、徐々に癒えていく。

「為の神…」

「さつき、小泉くんが於団の二人を連れてきてねえ、それでこのこと、教えてくれたんだあ」

「えっ…？」

為介の言葉に、箆也が瞬時に眉をひそめる。

「じゃあ…！」

「大丈夫、於の神も曾守さんも無事だよ。今は真田さんが看てる」

「……っ」

微笑みかける為介に、箆也は安心した表情となって、深々と肩を落とした。

「……神がさらに二人、か…」

現れた恵たちの姿を横目で確認し、阿修羅がそつと目を細める。

「あまり良くない展開だな…」

「余所見してる場合じゃねえぜえ！」

前方から聞こえてくるスズメの大きな声に、恵たちの方を見ていた阿修羅が視線を戻す。

「“進め”！」

「“貫け”…」

『クワアアアア！』

スズメとツバメがそれぞれの言葉を発すると、二羽の鳥はさらに大きくその翼を広げ、強風を巻き起こすほどの勢いで、阿修羅へと突っ込んでいく。

「ガアアア！」

『何？』

突進する二羽の鳥の前に飛び出し、阿修羅の前に立ちはだかったのは、同じく翼の生えた金色の獣。箆也と空音が一度倒したが、棗により治療され、復活したあの獣であった。両前足を振り上げ、二

羽それぞれの嘴を押さえる獣に、スズメたちが眉をひそめる。

「んな程度で…！」

「止められると思わないでよね…」

二人が言葉と同時に手を突き出すと、鳥たちがさらに勢いを増し、立ちはだかっていた獣を押し返していく。

「思っていないさ」

そっと微笑んだ阿修羅が、押し返されてくる獣に、弾丸を撃ち込む阿修羅。

「与^{あた}えろ」

「グアアアア！」

「何…！？」

阿修羅の言葉が放たれ、弾丸が獣の体を撃ち抜いたその瞬間、獣の全身から今まで以上の強い光が放たれ、より一層大きな雄たけびをあげた獣が、逆に二羽を押し返す。

「力の強化…？」

「棗」

「は！」

ツバメが眉をひそめている間にも、阿修羅が棗を呼び、横に控えていた棗が飛びあがって、ぶつかり合っている獣たちへと右手を突き出した。

「詰^{なじ}れ”…！」

『ギャアアア！』

棗の右手から放たれた赤い光の塊が、獣もろとも二羽へと直撃し、一斉に激しい悲鳴をあげる。

「ク…！」

「あいつ等…手下ごと…！」

鳥のダメージをそれぞれ、連動して受け、表情をしかめるスズメとツバメ。

「ありがとう、棗」

「いえ」

地面へと着地した棗が、阿修羅のすぐ横へと移動し、その場で膝をつく。阿修羅はすでに銃をもとの言玉の姿に戻しており、戦闘態勢を解除していた。

「逃げる気じゃ…」

「させるかよ！」

表情を曇らせたスズメとツバメが、再び鳥たちを立ち上がらせようとするが、先程の棗の攻撃によりやられた獣が、二羽の翼の上に覆いかぶさるように倒れ込んでおり、動きを封じられてしまっている。

「これじゃあ…」

「クソ…！」

「今日は楽しかったよ。カモメの仇討ち、またいつでも挑戦してくれ」

「フザけやがって…！」

挑発するように微笑む阿修羅に、スズメが大きく顔をしかめる。

「待、て…」

「ん？」

引き止めるように聞こえてくる声に、阿修羅がゆっくりと視線を動かす。

「待て…待て！阿修羅ああ…！」

必死の形相で睨みつけるアヒルのその姿に、阿修羅が満足げに笑う。

「また会おう、アヒル」

阿修羅がアヒルへと、鋭い微笑みを向ける。

「神」

「ああ。頼むよ、棗」

呼びかけに阿修羅が頷いたことを確認すると、棗は素早く右手を掲げる。

「“靡^{なび}け”！」

『うう…！』

ほんのりと赤く輝く、一陣の強い風が吹き抜け、皆が一瞬、顔を俯かせると、次に顔を上げたその時、そこに阿修羅と棗の姿はなくなっていた。二人の姿が消えたと同時に、倒れ込んでいた金色の獣も、光の粒となって掻き消える。

「チっ…」

「逃がしちゃったね…」

獣が消え、やっと動けるようになった鳥たちをもとの言玉の姿へと戻しながら、スズメとツバメが悔しげな表情を浮かべる。

「追いかけないと…!」

「ダァゝメ」

「グ…!」

その場を飛び出して行こうとした簞也が、為介に腕を引かれ、強く止められる。

「君はまだ、治療の途中っ」

「だが、僕はあいつを…!」

「落ち着け」

何とか阿修羅を追いかけようとする簞也へと、横から冷静に声を掛けたのは、固く腕組みをし、真剣な表情を見せた恵であった。

「先生…」

「あいつを許せないと思ってんのは、お前だけじゃない」

「……っ」

恵の言葉に、そっとアヒルたち三兄弟の方へと視線を動かした簞也が、ゆっくりと俯き、どこか諦めるように肩を落とす。

「雅クン、朝比奈クンの傷の方、見てきてくれるう?」

「はい」

為介の言葉に雅が頷き、足早にアヒルや、スズメたちの居る方へと歩いていく。

「大丈夫ですか? 朝比奈く…」

「……かよっ…」

「え?」

アヒルのすぐ横へとしゃがみ込み、アヒルへ声を掛けた雅であったが、アヒルから発せられた小さな声が聞き取れず、首を傾げる。

「朝比奈君…？」

「知って、たのかよ…」

様子をうかがう雅を無視し、ゆっくりと顔を上げたアヒルは、睨みつけるような強い瞳で、目の前に立つ兄たちを見つめた。

「カー兄が、五十音士だったことも…カー兄が、あいつに殺されて死んだってことも…」

「神…」

怒りを剥き出しにして、言葉を放つアヒルを見つめ、箆也がそっと目を細める。

「スー兄たちは、全部知ってたのかよ…！？」

「……っ」

アヒルの問いかけを聞いたスズメが、少し眉をひそめた後、体の向きを変え、アヒルの方へと向き直る。

「……ああ」

「……っ！」

真剣な表情で、頷きを落とすスズメに、大きく目を見開くアヒル。「じゃあ、何で黙ってた！？全部知ってたんなら、何で俺に、俺に教えてくれなかったんだよ！？」

「朝比奈君」

身乗り出して問い詰めるアヒルに、雅が思わず止めるように声を掛ける。

「すべてを話せば、必然的に五十音士のことを知らせることになります。当時の君はまだ、五十音士では…」

「言って、どうにかなったのかよ？」

スズメたちを庇うように言う雅の言葉を遮り、アヒルへと冷たく言葉を投げかけたのは、スズメであった。

「スズメ君」

「全部言ったら、しゃべったら、お前がどうにかしてくれたっての

か？」

止めるように名を呼ぶ雅を気にすることなく、スズメがさらに、アヒルへと問いかけを向ける。

「どうにも出来ないだろうが」

「んだと…!？」

スズメの言葉に大きく表情を歪めたアヒルが、立ち上がり、スズメの胸倉を勢いよく掴み上げた。

「てめえ！もういっぺん、言ってみやがれ…!」

「何も出来ねえ、役立たずのクソガキには、話すだけ無駄だから、言わなかったつつってんだよ!」

「グ…!」

怒鳴りあげるアヒルに負けることなく、スズメもアヒルの胸倉を掴み返し、大きな声で言い放つ。スズメの睨みつける強い視線に、アヒルは思わず唇を噛み、険しい表情を見せる。

「フザけんじゃねえ！んな理由で、納得出来るはずが…!」

「一緒だよ…」

まだ怒りの熱の冷めやらない様子で、アヒルがスズメに言葉に向けてようとした時、横から口を挟んだのは、落ち着いた表情を見せたツバメであった。

「五年前知ろうが、今日知ろうが…いつ知ろうが、結果は一緒…」

胸倉を掴んでいた手を伸ばし、スズメから少し距離を離れたアヒルへ、ツバメが鋭い瞳を向ける。

「アヒルくん、あの男は殺せない…」

「……っ!」

はっきりと言い放つツバメに、アヒルが大きく目を見開く。

「ツバメ君まで…そんな言い方…」

「いつ知ったって、この事実は変わらない…見てみたら？自分の力が、どんな風に砕かれたか…」

「……………」

ツバメも雅の制止を気にすることなく、言葉が続ける。アヒルが、

ツバメの視線の促した先へと目をやると、そこには粉々に砕かれた、アヒルの言玉の破片が散らばっていた。

「話したって無駄っていう、スズメの言葉は正しいよ……」

「……っ」

スズメから手を離れたアヒルが、深く俯き、血が滲むほど強く、唇を噛み締める。

「……もういいっ……」

見切りをつけるように、短く言葉を落とすと、二人の兄へと背を向け、その場を離れるべく、足早に歩を進めていく。

「あ……」

やがてアヒルが、恵たちの居る場所まで進んできて、為介からの治療途中で、思わず立ち上がった箆也と目を合わせた。眉尻を下げた箆也が、アヒルと見合い、小さな声を漏らす。

「神……」

「……………」

箆也がどこか躊躇うように、いつも呼ぶその名を呼ぶと、アヒルはそっと俯き、箆也から視線を逸らした。

「知らなかったのは、俺だけかよ……」

吐き捨てるようにそう言って、アヒルが箆也の横を通り過ぎていく。

「あ……!」

箆也はすぐさま振り返り、アヒルを引き止めようと手を伸ばしたが、その手は空中で止まり、アヒルへと伸ばされることはなかった。アヒルの背中が遠ざかり、やがて見えなくなっていく。

「……っ」

伸ばしたはずの手を下ろし、俯いた箆也は、ひどく辛い表情を見せていた。

Word. 49 神ニ、集ウ (1)

——その人は、僕のすべてを変えてくれた人だった。

「檻也様が、“お”の言葉の力にお目醒めになられたぞ！」

「まだ四歳だというのに：檻也様は天才だ！」

「偉大なる於の神の誕生を、全力で祝わねば！」

僕が五歳の時、弟が“お”の言葉の力に目醒めた。於崎の屋敷の者たちは、それはそれは弟を称え、敬った。当然のことだろう。四歳などという、まだ言葉もろくに話せないような若さで、神の力に目醒めたのだから。父が、母が、皆が喜んだ。幼き神の誕生を。

「……………」

僕以外の皆が、喜んだ。

「“俺”も“お前”も“おかえり”も、“お”のつく言葉はすべて口にしてはなりません！」

「“お”の言葉はすべて、檻也様のもの。あなたの言葉など、たったの一つもないのです」

「あなたは、神ではないのですから、身分を弁わきまえて下さい」

皆が弟を崇める度、皆が僕を蔑んでいった。自然に話す言葉さえ制限されて、ひどく窮屈だった。息苦しかった。何故、弟が神になったのだろう。何故、僕は神に成れなかったのだろう。何故、この世界には、“神”なんてものがあるんだろう。答えの無い疑問ばかりが、頭の中を巡った。

「お前を、この屋敷から出そうと思う」

僕が八歳になった頃、父が僕に、そう告げた。

「檻也がどうも、お前の存在を気にしているようなのだ。あやつも、次代の於の神となるため、言葉の修練を始めねばならん年。今のままでは困る」

父の告げた理由の中に、僕を気に掛ける言葉は、一つもなかった。

「お前には於崎所有の別宅を与える。従者と共に、適当に暮らせ」
僕に意見を求めることはせず、最初から決めつけるように言う父に、“嫌です”などと言うことが無駄であると、子供ながらに理解した。

「今後一切、無断で、この屋敷に近付くことは許さない。いいな？
籠也」

「……………」

その時の僕に、一体、何の言葉が言えただろう。

父の言葉に従い、僕はたった一名の、もう十分に老いて、隠居も間近であろう女性の従者と共に、於崎の家を出た。与えられた別宅は、住宅街に建ち並ぶ、ごく普通の一軒家であった。

「いつてらっしゃいませ、籠也さま」

「うん…」

僕は、別宅の近くにある学校へと通うことになった。於崎家に居た時は、専属の家庭教師が来て勉強などを習っていたが、今の暮らしになってからは、そういうわけにもいかないからだ。僕に付いて来てくれた従者の老婆は、屋敷の者たちとは違って、僕を蔑みはしなかったが、こんな優しい人が自分の為に屋敷を出されたのだと思うと、余計に苦しくなった。

「於崎！遊ぼうぜ！」

「僕はいい」

「いいよ。こんな奴、一緒に遊んだって楽しくないって。行こうぜ」

「ああ、おう」

「……………」

学校でも、友達と呼べる人間は、一人も居なかった。歩み寄ろうとする気持ちも、僕にはなかった。言葉を交わして、歩み寄っていく勇気が、僕にはない。僕は、言葉を話すことに、疲れていた。

「はあ…」

一人きりの帰り道で、何度も溜息をついた。溜息をついたところ

で、この胸に抱える重たい何かが、軽くならないことは知っていたが、それでも吐きださなければいられないほどに、僕の胸は重たかった。

「はあ…」

「うっわ、また溜息」

「え…？」

上から声が降って来て、僕は戸惑いながら、地面にばかり向けていた視線を、ゆっくりと上げた。

「ダメだよお？ 若いのに、そんなに溜息ばかりついてちゃ！」

「……っ」

顔を上げた先に立っていたのは、僕より大きな男の人。制服を着ているから、学生だろう。中学生にしては大きいから、高校生くらいだろうか。僕より長い時間を生きているであろうその男は、子供っぽい無邪気な笑顔で、僕に笑いかけた。

「知ってる？ 溜息ついたら、幸せって逃げちゃうんだよ？」

「……知って、るけど…」

ただの迷信だろう、と言いたかったが、その男があまりに真剣な表情で言うので、僕は言葉を呑み込んだ。

「でさ、笑ったら笑った分、幸せは来るんだって」

男が真剣な表情を、すぐに大きな笑顔へと変える。

「だから、笑おうよ。あ、そうだ！ これ読んだら、きっと楽しくなるよお？ 俺のおススメ本！」

右肩に掛けた鞆の中を漁って、男が僕の目の前へと本を突き出す。

「これ！ メロりんこ斉藤先生作の恋愛小説！ “恋盲腸”！」

「……は…？」

やたらとキラキラとした、少女と男の描かれているその本を見せられ、僕は思わず、引きつった表情を見せた。

それが僕と、朝比奈カモメとの出会いだった……——

先代“安の神”、阿修羅^{あしゅら}に攻め込まれたアヒルたちは、宇団^{うだん}、“
寸守^{すもり}”であったスズメと、“州守^{つもり}”であったツバメたち等に助けら
れ、阿修羅たちを退^{しりぞ}けた。

だが、アヒルは、自身の言玉を砕かれ、カモメの死の真相を一人
知らなかったことを知り、箆也たちの前から去って行ってしまった。

夜もすっかり更けた頃、箆也たちは、為介の家へと戻って来た。

「外傷はほとんど、為介さんに治してもらったんだけど、体力が限
界のところまで落ちてたみたいで」

布団で眠る檻也を前に、紺平が檻也の状態を説明する。

「しばらくは目を覚まさないだろうって…」

「そうか…」

紺平の話を聞き、箆也が眠る檻也へと、そっと視線を落とす。箆
也も相当の傷を負っていたが、それも為介により治療されていた。
今は腕や足に、多少の包帯を巻いているだけである。

「空音は？」

「隣の部屋で寝てる。韻へ行って、言姫様を問い詰めるって聞かな
かったから、真田さんが“催眠”を…」

「そうか…それがいいだろう。少し気持ちを、落ち着かせることが
必要だ」

「うん」

箆也の言葉に、紺平も納得するように頷いた。

「あの、神月くん」

改めて紺平に呼ばれ、箆也が顔を上げる。

「ごめん、ね…その、ガアに、しゃべっちゃって…」

「……っ」

申し訳なさそうに俯く紺平に、箆也はそっと目を細め、その表情
を曇らせた。

「神月くんに頼まれてたのに、俺……」

「いや、あなたのせいじゃない」

続く紺平の声を、簞也がすぐさま遮る。

「僕が悪いんだ」

「え？」

自分を責めるように呟きを落とす簞也に、紺平が眉をひそめる。

「隠していた僕が、真実から逃げていた僕が、すべて悪い」

「神月くん……」

「すべて、僕が悪いんだ……」

「あっ」

簞也がその場で立ち上がり、すぐ後ろの襖を開けて、部屋を出て行く。

「か、神月く……！」

紺平の引き止めるような声が聞こえていながらも、廊下に出た簞也はすぐに襖を閉め、紺平を遮った。閉じたばかりの襖に少し背を預け、簞也が目の前に広がる庭を見つめ、そっと目を細める。

「はぁ……」

簞也の口から、溜息は自然と、零れ落ちた。

「……………」

簞也が懷から白いハンカチを取り出し、胸の前で丁寧に、そのハンカチを開く。するとそこには、粉々に碎け散った、アヒルの言玉の残骸が乗っていた。戦いが終わり、アヒルがその場を去った後、簞也が欠片の一つひとつを、拾い集めたのである。

——知らなかったのは、俺だけかよ……——

「……………」

脳裏を過ぎるアヒルの悲しげだったあの表情に、簞也はそっと目を細めた。

「笑えない……笑えないよ、カモメさん……」

空を見上げた箆也が、どこか助けを求めるように、言葉を呟く。

「箆也」

横から聞こえてくる声に、箆也が振り向く。廊下の少し先に、どこか鋭い、まるで責めるような瞳を見せた、囁が立っていた。

「囁」

「少し話、いいかしら…?」

囁の言葉に、箆也の表情がすぐさま曇る。囁の話が何であるのか、だいたいの予想がついているのだろう。

「……ああ」

短く頷くと、箆也は囁の方へと歩み寄っていった。

その頃、為介の屋敷の別の場所では、神妙な面持ちを見せた恵が、縁側から、夜空に浮かぶ、大きく欠けた月を眺めていた。遥か先の空で輝く月を、恵はどこか、焦がれるように見上げる。

「カモメ…」

月を見上げ、恵が掻き消されてしまいそうなほどに小さな声で、そつと名を呼ぶ。

「お月さまに恋焦がれてんの?」

「……っ!」

背後からやって来る声に、恵が急に警戒態勢となって身構え、険しい表情を作り、振り返る。

「恵ちゃんも結構、少女趣味なところ、あんだねえ」

「スズメ…」

感心するように言いながら、奥の部屋から恵の居る縁側へと出て来たのは、スズメであった。スズメとツバメも箆也と共に、為介の家を訪れていたのである。スズメの姿を目に映し、恵がそつと眉をひそめる。

「お月さまより俺のんが近いし、輝きもいいと思わなあゝい?恵ち

やん」

「寝惚けたこと言うな」

恵が月に背を向けたまま、縁側から立ち上がり、靴を履いて、庭へと足を下ろす。

「ちょっとしたジョークじゃ〜ん。阿修羅のことで、落ち込んでるかもな恵ちゃんを励まそうとさあ」

「私のことを気に掛ける余裕があるんなら、自分の弟を気に掛けたらどうだ？」

鋭く問いかけた恵の言葉に、少し俯いたスズメが、苦い笑みを浮かべながら、軽く頭を掻く。

「お前たちの、弟を巻き込みたくないという気持ちはわかる」

俯いたままのスズメに、まっすぐに視線を向ける恵。

「だが、あいつはもう五十音士の一人、安の神だ」

恵が瞳の光を、より強いものへと変える。

「巻き込まれずにいられるような、立場でもなければ、お前たちが守らなければならないような、弱い奴でもない」

現実をわからせるように、はっきりとした口調で、告げる恵。

「“兄の代わりに守ってやらねば”などと思っているなら、それは単なる、お前たちのエゴだ」

さらに言葉が続ける恵に、スズメの表情が曇る。

「もっと、あいつの気持ちも考えてや…」

「随分と、アヒルの肩ばっか持つんだなあ」

恵の言葉を、今までの明るい声とは異なる、少し不機嫌そうな声で、スズメが遮った。

「なんで？アヒルの方が兄貴に似てっから？」

「……っ」

挑戦的な笑みで問いかけるスズメに、恵が大きく顔をしかめる。

「……蹴りたいか？」

「マジ勘弁！恵ちゃんの蹴り喰らったら、さすがの俺でも骨とか折れちゃうよお」

恵は冷え切った表情で静かに問いかけると、スズメはすぐさま明るく笑い、全力でそれを否定した。スズメの軽い口調により、張り詰めていた空気が一掃されると、恵もすぐに表情を緩め、そっと肩を落とした。

「私は家へ帰る。後は任せると、為介に伝えておけ」

「送ってってあげよつかあ？」

「結構だ」

スズメの申し出をあっさりと断ると、恵は右足を輝かせ、言葉を使ったのか、一瞬にしてその場から消えていった。月の輝く空の下に、スズメだけが取り残される。

「やれやれえ」

縁側でしゃがみ込んだスズメが、月を見上げ、どこか困ったように声を漏らす。

「スズメ……」

「ん？ おう、ツバメ」

廊下の曲がり角の向こうから、スズメの居る縁側へと姿を現したのは、ツバメであった。木の板で出来た廊下だというのに、ツバメは足音一つ立てずに、スズメのもとへと歩み寄って来る。

「恵さんは……？」

「家帰った」

周囲を見回しながら問いかけるツバメに、スズメが短く答える。月を見上げたまま、どこか冴えない表情を見せているスズメを見て、ツバメがそっと目を細める。

「フラれた……？」

「いい感じで」

「懲りないね、スズメも……」

少し拗ねたように答えるスズメに、ツバメが思わず笑みを零す。

「あの人はまだ、兄さんの幻影を追ってるんだよ……僕らと同じように……」

「わあってるさ」

ツバメの言葉に、吐き捨てるように答えながら、しゃがみ込んでいたスズメが月から目を離し、再びその場で立ち上がる。

「スズメ君、ツバメ君」

「んあ？」

背後から呼ばれる声に、スズメとツバメが同時に振り向く。縁側の奥の部屋の襖が開くと、そこから雅が出て来た。何やら書類のようなものを、たくさん持っている。その書類を確認しながら、雅が二人のもとへと歩み寄って来る。

「おう、雅」

「於の神が持っていた資料を見てみたら、言葉に変化が起こった人間の、行動記録が記載されていました」

声を掛けたスズメに対し、雅は話をしながら進んで来る。

「これを見ると、皆、だいたい言ノ葉町のこの辺りで、あの謎の獣に襲われ…」

「ああー、雅」

「え…？」

説明の言葉を遮るスズメに、雅が戸惑うように顔を上げる。

「んな説明は必要ない。言葉の変化がどうのってのは、俺たちにはどうでもいい話だ」

「え…？し、しかし…」

「この件は、於の神が受けたもので…安団と於団がそれに介入しただけの話でしょう…？僕ら宇団には、何の関係もないよ…」

言葉を返そうとした雅に、ツバメがさらに言葉を投げかける。

「ですが、先程は…」

「さっきは阿修羅が相手だったから、たまたま助けたただけだ」

「阿修羅が相手じゃなかったら…僕たちは、他団を助けたりなんてしないよ…」

冷たく言い放つスズメとツバメに、雅が眉をひそめ、険しい表情を作る。

「しかし、朝比奈君は…！」

「俺たちは宇団だ。安団に協力する義理はねえ」

「僕は僕らで、好きなようにやらせてもらおうよ…」

「ああ、恵ちゃん、家帰ったから。為介にそう、伝えといてくれ」

「あ…！」

そう言い放ち、あっさりと雅に背を向けた二人が、靴を履いて、

縁側から庭へと降りて、屋敷の裏口へと歩いていってしまふ。

「ま、待って下さ…！」

「いいよお、止めなくってえ」

「……っ」

スズメたちを追いかけてしようとした雅であったが、後ろから声を掛けられ、出そうとしていた足を止め、振り返る。

「為介さん…」

その場へと現れたのは、相変わらず扇子片手の為介であった。

「確かに彼等は宇団。彼等への命令権は、宇の神にしかないわけだし」

「それは、そうですね…」

頷きながらも、まだあまり納得の出来ていない表情を見せ、雅が俯く。

「彼等には彼等の都合があるのさあ。しばらくは、放っておいてあげよお」

「……為介さんは」

為介の言葉を聞き、少し間を置いた後、雅がゆっくりと口を開く。

「為介さんは、知っているのですか？彼等の神が誰なのか…」

「……………」

雅の問いかけに、為介がそっと目を細める。

「そうだね…知ってるよ、よく…」

頷いた為介は、どこか意味深な笑みを浮かべた。

Word. 49 神二、集ウ (2)

「ふぁーあ、眠みい。とりあえず家帰って、寝るかあ」

為介の家を出ると、スズメが大きな欠伸をし、思いきり腕を伸ばしながら言った。時はもう、道に一人歩いていないような真夜中だ。眠気が襲ってくるのは、当然である。

「アヒルくんが居るんじゃない…?」

「ああ? んなもん気にしたら、一生、家帰れねえじゃねえかよっ」
「それはそうだけど…ん…?」

「……っ」

人一人歩いていないはずの真夜中だというのに、暗い道の前方に気配を感じ、二人は同時に足を止め、鋭い表情を見せると、警戒するように身構えた。

「お久し振ります」

前方の人影が徐々に歩み寄って来て、月明かりにやっと、その姿が見えるようになる。

「スズメ氏、ツバメ氏」

二人の前へと現れたのは、黒く長い髪を一つにまとめあげ、赤い縁の眼鏡を掛けた、いかにもインテリ風のスーツ姿の女性。三十代半ばくらいであろうか、それにしても落ち着いた雰囲気を持っている。女性は眼鏡に指をかけながら、何の迷いもなくスズメたちの名を呼んだ。

「熊子^{くまこ}」

スズメがその女性を見て、女性の名らしきものを呼ぶ。

「それに、塗壁^{ぬりかべ}も」

「久すぶりだなあ。スズさん、ツバさん」

熊子と呼んだ女性から、スズメが少し視線を横へと逸らすと、そこには気の良い笑顔を見せた、角刈り頭の大男が立っていた。もう夜になると冷え込んで来る季節だというのに、塗壁と呼ばれたその

男の上半身は、白いランニングシャツを一枚、着ているだけである。
「本当に久し振りだね…元気だった…？」

「おう、お陰さんでえ、ツバさんの呪いも受けずに済んだからのお」
「そう…じゃあ久々に呪ってあげようか…？」

「ひいひい…！」

不気味に微笑むツバメに、大男である塗壁が、その巨体を小さく丸めて、震え上がる。

「そんなくだらない話をしている場合ですか？ 塗壁」

震えている塗壁に、熊子が冷たく言葉を投げかける。

「我々は再会を喜びに来たのではないのですよ？」

熊子のその言葉に、スズメがそつと眉をひそめる。

「じゃあ、何の為に来たっていうの？ 熊子ちゃんっ」

「そんなこともわからないほどに、低能でしたか？ スズメ氏」

「低能って…」

微笑みながら問いかけるスズメに、熊子が厳しい口調で言い放つ。

「力を、使われましたね」

『……………』

強調するように言う熊子に、スズメとツバメの表情が同時に曇る。

「まあ、そりゃあちよつと、野暮用ってかさあつ」

「理由など聞いていません」

明るく言い訳をしようとしたスズメの言葉を、熊子が強く遮る。

「あなた方が力を使ったのは、これが三度目…あまり勝手な行動をされては、困ります」

熊子が、責め立てるように言葉を続ける。

「派手に力を使い、あなた方の言玉が韻に感知されれば、我らが神の存在まで、韻に気付かれてしまう恐れがあるのですよ」

「わかってるよ…」

「いいえ、わかっていません」

答えたツバメの言葉を、熊子はあっさりと否定する。

「神の存在が韻に漏れることは、決してあってはならない。我らが

神の存在を隠すことこそが、我ら宇附の唯一にして最大の任務なのですよ」

『……………』

まるで子供をしかるように、厳しく言う熊子に、スズメとツバメは言葉を言い返すことはせず、ただ黙ったまま、熊子から視線を逸らす。

「まあまあ、熊さん」

どこか宥めるように、熊子へと声を掛ける塗壁。

「そんなのは、二人だって耳タコださあ。何千回と言われてきとんでいい、十分にわかつとるでよお」

塗壁が巨体には似合わぬ穏やかな表情で、言葉を続ける。

「よっぽどの理由があったから、力を使っただんだあ。スズさんもツバさんも、ついついとかで力を使うような人じゃないだでえ」

「……ふう」

塗壁の必死の弁解を受け、熊子が深々と息をつき、肩を落とす。

「とにかく、今後は今まで以上に、軽率な行動のないよう、お願い致しますよ。スズメ氏、ツバメ氏」

「ああ」

「わかったよ…」

念を押すような熊子の言葉に、スズメとツバメがしっかりと頷く。

「用件は以上です。では、参りましょうか、塗壁。下手に集まっただいて、韻に気付かれても困ります」

「ああだでえ」

熊子が声を掛け、塗壁が頷くと、二人はスズメたちに背を向け、その場を去ろうと歩を進める。

「熊子」

不意にスズメに呼び止められ、数歩進んだところで熊子が足を止め、ゆっくりとスズメの方を振り返った。

「何でしょう？」

「今回の件…」

スズメが少し視線を落としたまま、険しい表情を作る。

「堕神、阿修羅の件：その、神は何て：」

「我が神は、まだ動く時ではない、と」

スズメが問いかけを終える前に、熊子が鋭く答えを告げる。

「まだ動く時ではないと、そう仰っていました」

「……そうか」

「では」

「元気でなあ。スズさん、ツバさん」

頷いたスズメの姿を確認すると、熊子と塗壁は二人に挨拶の言葉を残し、再び背を向け、歩を進めていった。やがて夜の暗闇の向こうに、二人の姿が消え、その場にスズメとツバメだけが残る。

「まだ動く時じゃない、か……」

「……………」

熊子の言葉を繰り返すスズメの横で、ツバメがそつと何やら考え込むように、目を細めた。

囁に話があると言われた簞也は、為介の家を出て、近くの公園へと訪れていた。家の中で話すことも出来たが、為介たちや紺平も居るため、囁が外へ出るよう促したのである。設置された街灯が公園を照らし出しているが、公園には誰の姿もない。

「真夜中だと、さすがに静かなものね……」

誰もいない公園を見回しながら、囁がゆっくりとした足取りで奥へと進んでいく。囁の後に行く簞也は、深く俯いたまま、何も言葉を発することなく、ただ囁の後に続いて歩く。

「この辺りでいいかしら……」

公園の丁度中央に來た辺りで囁が足を止め、簞也の方を振り返る。「さあ、話を始めましょうか……」

切り出すように言う囁に、少し顔を上げた簞也が、そつと眉をひ

そめる。

「この間の恋盲腸の、先生の浮気疑惑に関する、ヒトミの心情の変化についての考察なんだけれどね……」

「……………」

「ふう…ツツコミも入れてくれないのね…」

冗談のつもりで恋盲腸の話題を出した囁であったが、まったく反応のない籠也に、どこか呆れたように肩を落とした。

「だいたいのは、あの美守の眼鏡さんから聞いたわ…」

囁が真剣な表情を作り、やっと本題を話し始める。

「敵は先代の“安の神”で、死んだアヒるんのお兄さんの仇で、そのお兄さんは先代の“加守”…」

先程起こった出来事を、簡単にまとめて話す囁。

「つまり、あなたを今の加守に導いた人…」

その瞳を鋭く変える囁に、籠也が再び、俯いてしまう。

「やっと、わかったわ…」

———告げることが、今の僕には一番、怖い……—

「あの時のあなたの、あの言葉の意味が…」

俯いたままの籠也が、そっと目を細める。

「まあ、一度、神を裏切ったことのある私が言うのもなんだけれど…すべてを知っていて、それでも黙っていたというのなら…」

俯いてしまった籠也に遠慮することなく、囁はさらに言葉が続けた。

「それは確かに、神に背く行為だわ…」

「……………」

責めるように、どこか強い口調で言い放つ囁に、籠也は俯いたままそっと唇を噛み、眉間に皺を寄せ、険しい表情を見せる。

「本当に知っていたの…？」

確かめるように問いかけ、囁が少し首を傾げる。

「初めから、全部……？」

さらに問いかける囁に、箆也は一瞬、そっと目を伏せた後、またゆっくりとその瞳を開いた。

「知らなかったんだ……初めは……」

ゆっくりと、その重い口を開いた箆也に、囁が目を細め、耳を傾ける。

「僕は、カモメさんの名字すら聞いてなかったし……僕と同じくらいの弟がいるとは知ってたけど、そんなの、たくさんいるだろうし……」
一つひとつを思い出すように、箆也が言葉を続ける。

「一度だけ、家に行ったことはあったけど……それは、死んだカモメさんを、届けに行く時で……」

「……っ」

震えた拳をきつく握り締める箆也に、囁が表情を曇らせる。

「あの時は、頭の中が真っ白で……どんな家だったのかも、どんな家族だったのかも、全然覚えてなくて……」

言葉を続ける箆也の声が、かすかに震える。

「だから、知らなかった……本当に……情けないくらい、まったく気付かなかった……」

「初めて気付いたのは、ツバメさんが忌に襲われた後……？」

「ああ……」

問いかけた囁に、箆也がゆっくりと頷く。

——カモメ……？——

アヒルたちの部屋と並んで存在した、“カモメ”という名札のなかった空き部屋。

——この部屋は一体、誰の部屋ですか？——

「スズメさんから、“カモメ”という名の兄がいたことを、五年前に死んだことを聞いて……それでやっと、わかった……」

箆也が陰しい表情から、どこか脱力したような表情へと変わる。

「間拔けなものだ」

俯いたままの箆也が、自嘲するような笑みを浮かべる。

——ダチが泣いてるってのに、黙って見てられっかよお！——

「神はあんなにも：あんなにも、あの人によく似ていたのに：」

「箆也：」

焼きついている姿を思い出すように、そっと目を伏せる箆也を見つめ、囁が目を細める。

「それからすぐに、事実をすべて話そうか悩んだ」

顔を上げた箆也が、暗い空を見上げ、遠くを見るような瞳を見せる。

「でも、言えなかった：カモメさんの死を背負って、言葉をあまりにも大事にする神を見ていたら、言えなくて：」

箆也の表情が、どんと曇っていく。

「言えなくて言えなくて：隠せば隠す程、言えなくなっていつて：」顔を下げた箆也が、今度は地面へと視線を落とす。

「このまま知らなければいいと、事実を伝えないまま、このまま時間が過ぎていけばいいと、そう思った」

箆也がそっと、唇を噛む。

——知ってたんならなんで、なんで黙ってたんだよ！？——

——知らなかったのは、俺だけかよっ：——

「その結果が、招いたっ：」

辛そうに表情をしかめたアヒルの姿を思い出し、箆也が深く頭を抱える。

「僕の安易な考えが、神の心を傷つけた」

俯いた箆也が、強く拳を握り締める。

「僕は確かに：神に背いたんだ：！」

「籠也…」

きつく拳を握り締め、苦しげに声を漏らす籠也を見つめ、囁が強く、眉間に皺を寄せた。

『……………』

二人が互いに言葉を交わさぬまま、しばらくの間、沈黙が訪れる。

「ねえ、籠也」

沈黙を破ったのは、囁からの呼びかけであった。

「失礼するわ…」

「え…ぐは！」

呼びかけられ、籠也がゆっくりと顔を上げたその瞬間、囁が突き出した右拳が、顔を上げたばかりの籠也の左頬に炸裂し、籠也が勢いよく吹き飛ばされた。

「な…え？あ…」

地面に座り込んだ籠也が、真っ赤に腫れ上がった頬を押さえながら、怒るというよりは、すっかり戸惑った様子で、目を丸くして、囁を見つめる。

「さ、ささや…」

「大丈夫」

戸惑った表情で、囁の名を呼ぼうとした籠也の声を遮り、籠也へと微笑みかける囁。

「私、心は広い方だから…そんな些細なことは、きれいなサッパリ、水に流すタイプよ…」

「じゃあ、何故殴った!？」

頼もしい笑みを浮かべる囁に、殴られたばかりの籠也が思わず、勢いのいい突っ込みを入れる。

「フフフ…やっとな、いつもの籠也らしくなったわね…」

「え…？」

不気味に微笑む囁に、籠也が驚いたように声を漏らす。

「囁…」

「とても単純なことよ…ねえ、籠也」

ゆつくりとした口調で話しかけながら、囁が歩を進め、箆也のすぐ前へとやって来て、座り込んでいる箆也に視線の高さを合わせるように、しゃがみ込む。

「背いたというのなら…また、向き直ればいい…」

「……っ」

いつになく心優しい笑みを浮かべる囁に、箆也がハツとしたように目を見開く。

「もう一度、前を向いて…正面からまっすぐに、神を見ればいい…」
囁がまっすぐに箆也を見つめ、言葉を続ける。

「私は、そうしたわ…」

囁の言葉を聞きながら、箆也がそっと俯き、何やら考え込むように唇を噛み締める。

「まあ…あなたに私と同じことを求めるのは、少し荷が重いかも知れないけれど…」

「誰がだっ」

「フフフっ…」

素早く顔を上げ、鋭く言葉を挟む箆也の、そのしかめた表情を見て、囁が嬉しそうに笑う。

「そうそう、それがあなた…」

「……………」

どこか満足そうに言う囁を見て、箆也がそっと目を細める。

「ねえ、箆也…」

もう一度、改まって、囁が箆也の名を呼ぶ。

「あなたは、誰…？」

「え…？」

急な囁の問いかけに、箆也が思わず目を丸くする。

「あなたは神付き…“安の神”朝比奈アヒルの神付き、“加守”の神月箆也でしょう…？」

囁が確かめるように、箆也へと問いかける。

「なら、こんなところで…尻ごみしたり、落ち込んだり、している

場合…？」

少し首を傾げ、囁がどこか試すように声を掛ける。

「今、私たちの神が…大きな悲しみの底で苦しんで…力を碎かれ、折れてしまいそうになってる…」

そっと目を細め、表情を曇らせる囁。

「それなのに…あなたはここで、こうして落ち込んでいるの…？あなたの役目は何…？」

囁の優しい声が、声とは裏腹にはっきりと、鋭く届く。

「ねえ、箆也…あなたは何の為に、加守になったの…？」

「……………」

まっすぐに届くその問いかけに、俯いた箆也は、何かを決心するように、強く唇を噛み締めた。

Word. 49 神ニ、集ウ (3)

言ノ葉町。小さな町の八百屋さん『あさひな』。

「……………」

二階のアヒルの部屋の向かいにある、“カモメ”という名札の掛かった、今は空き部屋であるその部屋の、少し埃の溜まった机の上に、アヒルは突っ伏していた。机の棚には高校の教科書が並んでおり、その横には、まだアヒルが小学生の頃の、家族の写真が飾られていた。そこに並ぶすべてが、カモメの時が五年前で止まってしまったことを表している。

「カー兄…」

アヒルが少し顔を上げ、横目でその家族写真を見つめ、小さな声でカモメを呼ぶ。

——おかえり、アーくん！今日の晩御飯は、アーくんの大好物のカレーだよ！——

——またリレーで一番取ったの？凄いなあ、アーくんは。さすがは兄ちゃんの自慢の弟だ！——

「……………」

記憶の中のカモメの姿を思い出し、アヒルがそっと目を細める。記憶の中のカモメは、いつだって優しい笑顔をアヒルに向けてくれていた。アヒルが笑っていないカモメの姿など見たことがないほどに、カモメはいつも笑顔を浮かべていた。

——兄ちゃんなんか、いなくなればいいんだっ…！——
カモメの笑っていない顔を思い出せるとすれば、あの時だけ。

「……………」

笑顔でないカモメを思い出し、アヒルが深く目を閉じて、机の上に放り出している右手の拳を、強く強く握り締める。

「カー兄：俺、は…」

「レタスマイスイルうう！」

「ぶふ！」

ゆっくりと瞳を開き、何かを言いかけたアヒルであつたが、後方から勢いよく飛んで来たレタスが、アヒルの後頭部を見事に直撃し、アヒルは思わず、潰れたような低い声を漏らした。

「何を：すんだよ！クソ親父！」

「ぐはあ！」

投げてきた者の姿を確認しないまま、頭を直撃したレタスを持ち直し、素早く振り返って、勢いよく投げつけるアヒル。アヒルの投げたレタスは、部屋の入口に立っていた朝比奈家、父の顔面に、大きな音を立てて炸裂し、父はそのまま後方へと倒れ込んだ。

「痛たたたた：ひどいよお、アーくうくん」

「先にひどいことしたのは、そっちだろうが！」

鼻の頭を押さえながら、泣きそうな表情で起き上がる父に、アヒルが強く怒鳴りあげる。

「だいたい、なんでレタス投げられなきゃなんねえんだよ！俺は何の寝言も言ってるぞ！」

「だって、スーくんもツーくんも帰って来なくて、お父さん寂しかったから、ついっ」

「“つい”で息子、攻撃すんじゃない！」

可愛らしく言う父に、アヒルの怒りは収まるどころか、増していく。

「だいたい、どうしたのお？こんな時間に、電気も点けずに」

やっと立ち上がった父が、入口のすぐ横にあるスイッチを押し、部屋の明かりを点ける。空き部屋ではあるが、定期的に電球は変えているため、電気はすぐに点いた。ずっと暗闇に居たため、急に入って来る光に、アヒルが思わず目を細める。

「眠るなら、自分の部屋で寝なよお？」

「……っ」

声を掛ける父に答えることなく、アヒルはそっと俯いた。そんなアヒルの姿を見て、父は何か察したように、穏やかな笑顔を作る。

「何か、あった？」

「え……？」

問いかける父に、アヒルが戸惑うように顔を上げる。

「何かなきゃ、アーくんは早々、カーくんのところに相談になんか、来ないでしよう？」

少し首を傾げ、父が問いかけを続ける。

「カーくんに心配かけるの、嫌だもんね」

「………」

まるで赤子をあやすような、そんな緩みきった笑みを向けてくる父に、目を合わせていることが気まじくなり、アヒルが再び俯く。

「親父は……」

「ん？」

ゆっくりと口を開いたアヒルに、父がさらに首を傾げる。

「親父は知って……るに、決まってるよな。スー兄たちが知ってたくらいだし……」

言葉を途中で言い直し、自分自身で納得するように呟くアヒル。

「カー兄が、殺されたって……こと……」

「………っ」

アヒルの発したその言葉により、笑顔を見せていた父の表情が曇る。だがすぐにその曇りは晴れ、父はまた笑みを浮かべた。

「そうだね。知ってる」

父が、認めるように、大きく頷く。

「一応は、お父さんだからねえ」

「……俺……俺だけ、知らなかった……」

「うん。お父さんたちが皆、言わなかったからね」

「なんで……」

疑問の言葉が、すぐにアヒルの口から零れ落ちる。

「なんで…？」

アヒルは俯けていた顔を上げ、まっすぐに父を見つめ、兄へ向けた問いを同じ問いを投げかけた。

「……誰かが死ぬ時、その死には、必ず理由がある」

父がアヒルから視線を逸らし、殺風景なカモメの部屋を見回しながら、話を始める。

「理由なく死んで逝く人なんて、この世界には居ないからね」

言葉が続けながら、穏やかな笑みを浮かべる父。

「でも、その理由の大半が、死んだ人間の近い者にとっては、受け入れ難いものなんだ」

父の笑みが、少しだけ悲しげに曇る。

「寿命でも病気でも、受け容れ易い“死”なんて、この世界にはない」

「……………」

いつになく真面目に話す父の姿を、アヒルは目を逸らすことなく、まっすぐに見つめていた。

「受け入れられなかったんだよ。スーくんもツーくんも、お父さんも」

父がそう言って手を伸ばし、すぐ近くにある洋服筆筒へと手を触れる。

「カーくんが、殺されただなんて…カーくんがもう、この世界のどこにも居ないだなんて」

「……………」

その言葉を発した父の表情が、本当に悲しそうで、アヒルの胸までひどく痛み、アヒルは思わず、込み上げて来た何かを押さえ込むように、右手で口元を覆った。

「言葉にすれば、それを、現実として受け止めなきゃいけないような気がして…」

埃の溜まった筆筒の上を、手のひらで撫でながら、父がさらに言

葉を続ける。

「だから、言葉に出来なかった」

手のひらについた埃を見つめ、そっと目を細める父。

「だから、言えなかった…」

重く落とされた父の言葉には、偽りの色など一切なく、ただ伝わって来る悲しみに、アヒルは責めることなど、まるで出来なかった。

「ごめんね、アーくん」

「……っ」

心から謝る父に、アヒルが強く唇を噛み締める。

「違う…」

「え…？」

アヒルが発した小さな声に、父が戸惑うように首を傾げる。

「アーくん？」

「違う、んだ…」

搾り出すように、言葉を発するアヒル。

「俺にだけ言わなかったのは、スー兄やツー兄が、俺のことを思っ
てのことだって、ちゃんと、わかってた…」

所々、言葉を詰まらせながら、アヒルが必死に言葉を繋げる。

「カー兄が殺されたって聞いた時、俺が…俺が、一番初めに思った
ことは、なんで俺だけ知らなかったんだって怒りじゃなかった…」

アヒルの声が、大きく震える。

「カー兄が…カー兄が死んだのは…」

——兄ちゃんなんか、いなくなればいいんだっ…！——

「俺の言葉のせいじゃなかったんだって…なかったんだって俺、心
のどっかで、ホッとしたんだっ…」

震える口元に両手を近づけ、アヒルがその場で力なくしゃがみ込
んでいく。

「ホッとしたんだ…俺っ…！」

床に膝を落とし、座り込むアヒル。

「そんなこと、思った…最低なんだ…！俺は…！」

肩を震わせ、背を丸めこむようにして大きく屈み、床に額をつけたアヒルが、震える叫びを発する。

「最低なんだっ…！」

「……………」

蹲り、その言葉を繰り返すアヒルを、父がまっすぐに見つめる。

「最低じゃないよ、アーくんは」

優しく語りかけながら、父がゆっくりと歩を進め、蹲っているアヒルの方へと歩み寄っていく。

「だってアーくんは、五年前のあの日からずっと、あの言葉を背負って来たじゃない」

父がアヒルのすぐ前で歩を止め、静かにしゃがみ込む。

「あの言葉を背負って、背負って、誰かの言葉を、みんなの言葉を、大切に、大切にして来たじゃない…」

諭すような声が、蹲ったままのアヒルへと落とされる。

「お父さんは、ちゃんと知ってるよ」

ゆっくりと伸ばされた父の手が、アヒルの頭の上へと乗る。

「ずっと、見てきたもん」

頭の上に乗った父の手が、優しくアヒルの頭を撫でた。

「カーくんだって、きっと見てくれてるさ」

「けど…」

床から額を離し、少しだけ体を起こして、アヒルが小さな声を発する。

「けど…俺はっ…！」

「それに、カーくんがアーくんのことを、“最低”だなんて思うはずないよ」

アヒルの言葉を遮って、父が優しく言葉を続ける。

「だって、カーくん、言ってたでしょう？」

首を傾け、アヒルの顔を覗き込む父。

「アーくんは、自慢の弟だ”って」

「……っ！」

温かく微笑む父の姿を視界に入れ、顔を上げたアヒルが目を見開き、その表情を大きく崩す。

「うう……！」

ぐっと瞳を細め、再び顔を俯かせていくアヒル。

「大丈夫、大丈夫だよ……」

俯いたアヒルの頭を撫でながら、父が優しい微笑みを浮かべ、まるで言い聞かせるように、言葉を掛ける。

「大丈夫っ……」

「うううう……！うう……！」

その優しい言葉に、堪えるような、堪え切れないような、思いの溢れ出したアヒルの声が、カモメの部屋へと響き渡った。

『……………』

カモメの部屋の扉の外に立ち、中から聞こえてくるアヒルの声を聞いて、何やら考えるように、そっと目を細めるスズメとツバメ。

「家帰ったら……とりあえず寝るんじゃないの……？」

ツバメが前を向いたまま、中には聞こえぬような小さな声で、スズメへと問いかける。

「うん……」

ツバメの言葉に、短く頷くスズメ。

「もう、少し……」

どこか願うように呟いて、スズメはそっと俯いた。

Word. 49 神二、集ウ (4)

——あの人と出会ってから、一ヶ月の時間が、流れていた。

学校帰り、学校から家に帰る途中にある公園に立ち寄る。その公園の隅にある小さなベンチに座って、背景に花の飛び交う、やたらとキラキラした男と少女の描かれている表紙の本を読みながら、待つことが僕の日課になっていた。

「籠也！」

僕よりも学校が終わるのが遅い、あの人を待つことが。

「ただいまあ」

今日もニコニコと笑みを浮かべながら、あの人が、僕の座っているベンチへと歩み寄って来る。大きく手を振るその姿は、あまりにも無邪気で、僕より十程も年上の人とは、とても思えない。だが、僕は特に言葉は返さずに、読んでいた本を閉じ、顔を上げる。

「どうだった？ 恋盲腸“落雷警報、これが恋の始まり”の巻は」

「何がいいのか、まったくよくわからなかった」

興味津津に問いかけるその人に、僕は素っ気なく答えて、閉じたその本を差し出した。

「そっかあ。じゃあ、はい、次の巻！ “恋の鼓動はマグニチュード二百十”の巻ね」

「……………」

返して数秒も経たぬうちに差し出された、先程まで読んでいた本とそう変わり映えもしない、相変わらずキラキラとしている本の表紙を見て、僕は思わず固まる。

「僕は、“何がいいのかわからない”って、言ったんだけど」

「うん。けど別に、“面白くない”わけでも“嫌い”なわけでもないんでしょ？」

あっさりと頷いたその人が、僕へと笑顔で言い放つ。

「わからないだけなら、わかるまで読めばいいだけだよ。ほらっ」
無理やり本を手渡されると、突き返すことも出来ず、僕は仕方なく、次の巻を受け取った。

「あ、それとさあ、箆也」

僕が返した方の本を、大事そうに鞆の中に片づけながら、その人が僕へともう一度、呼びかける。

「考えてくれたあ？ 加守の件」

「……っ」

その人の言葉を聞いた途端に、僕は表情を曇らせた。

「考えるまでもない」

僕は煩わしげに、はっきりと言葉を放つ。

「あんなもの…あんなものの為に戦うなんて、絶対したくない」

“あんなもの”とか言わないでよお。一応、俺ら五十音士が崇めてる神様なんだから」

「なら、勝手に崇めていればいい」

困ったように言うその人に、僕は冷たく言葉を投げかける。

「でも、僕は崇めない」

自分自身に忠告するように、強く言う。

「あんなものが…」

——“お”のつく言葉は、すべて檻也様のものです。あなたの言葉など、一つもありません——

「あんなものが在ったから、僕の言葉は消えたんだ…」

「……っ」

そう言った僕をまっすぐに見つめ、その人はそっと目を細める。

「そっかあ、また勧誘、失敗かあ。残念っ」

軽く肩を落としながら、その人がまたそっと、笑みを浮かべる。

「ねえ、箆也」

「何だ？」

「加守にならない？」

「断ってから、一分も経っていないだろう！」

肩を落としたのも束の間、再び勧誘をしてくるその人に、僕は思わず怒鳴りあげた。

「ええ、箆也なら頭いいし、子供のくせに俺より語彙多いし、ぴったりだと思っただけだなあ」

「というか、加守の後継者なんて、まだ必要ないだろう？ あなたはまだ若いし、無駄に元氣そうだし」

「まあ、そうなんだけどねえ」

僕の言葉に頷きながら、その人が僕の横へと、腰を下ろす。

「でも、箆也」

ゆっくりと顔を横へ向けて、まっすぐに僕を見るその人。

「例え、手にしたかった言葉じゃなかったとしても、何か一つでも言葉を持ってないと、他の誰かと、言葉を交わせないよ？」

真剣な表情を向けるその人に、僕は思わず逃げるように目を逸らし、地面を見るように俯いた。

「……交わさなくていい……」

「箆也……」

答えた僕に、その人はどこか寂しそうに目を細める。

「あのさあ、箆……」

「カー兄！」

「ん？」

その人が僕に話しかけようとしたその時、公園の外の方から、呼びかける大きな子供の声が出て、その人は素早く反応し、顔を上げた。

「アーくん！」

嬉しそうな笑顔を見せて、その人が勢いよく立ち上がる。公園の外には、こちらへ向けて、大きく手を振っている、僕と同じくらいの子供の姿があった。弟だろうか。そういえば、檻也の話をした時に、自分にも弟がいると話していた。血筋なのだろうか、その弟も、

何が楽しいのかわからないほどに、大きな笑顔を浮かべている。

「ごめん、籠也。俺、今日はもう帰るよ」

「うん」

謝るその人に、別に引き止める理由もなく、僕は素直に頷く。

「じゃあ、また明日ね！籠也！」

「……………」

満面の笑みを見せ、大きく手を振るその人に、僕は手を振り返すことも、何かの言葉を掛けることも出来ず、ただ遠ざかっていくその背中を見送った。その人は駆け足で公園の出口へと向かい、外で待っていた弟と合流する。

「おかえり、お兄ちゃん！」

「ただいま、アーくん！」

笑顔で迎える弟に、その人はとびきりの笑顔を向け、まだ小さな弟の頭を撫で回す。

「アーくんは、どっか行ってたのお？」

「うん、紺平ん家」

楽しそうに言葉を交わしながら、二人は足並みを揃え、家へと帰る道を歩いていく。徐々に見えなくなっていく二人の姿を、僕はその姿が見えなくなるまで、ずっと見つめていた。

——おかえり、お兄ちゃん！——

あんな風に自然に、言葉を投げかけられたら、どんなにいいだろう。

——“お”のつく言葉を、一切、口にはなりません！——
でも、言えない。それは、叶わない。

「……………」

借りたばかりの本を抱えて、僕は、深く深く、俯いた。

次の日も同じように、僕は公園のベンチに座って、あの人が帰って来るのを待っていた。

「箆也！」

そろそろかと思った丁度その時、僕を呼ぶ声が聞こえて来て、僕は顔を上げる。

「ただいま！」

「……っ」

いつものように大きな笑顔を見せて、やって来るその人の姿を見つめ、僕はそっと目を細める。

——おかえり、お兄ちゃん！——

「あ……」

昨日の弟の姿が過ぎり、同じように言葉を投げかけられないかと口を開いた。だが、どうしても、最初の一字の音を口にすることが出来ず、僕はすぐに言葉を止めた。

「箆也？」

「あ、こ、これ」

不思議そうに首を傾げるその人に、僕は少し慌てながら、誤魔化すように、昨日借りたばかりの本を、その人へと差し出した。

「え？もう読んだの？」

「うん」

「早いなあ」

感心しながら、その人が僕から本を受け取る。

「こんなに早く読み終わると思ってなかったから、今日は続きの巻、持って来てないんだよねえ」

「じゃあ明日、持って来て」

「うん。って、へ？」

一度は頷いたものの、急に目を丸くして、その人が顔を上げる。

「来週じゃダメ？」

「出来れば明日がいい」

その人の問いかけに、僕は再度、強く主張する。

「何だあ。結構気に入ってるんじゃない」

「続きが気になるという気持ちだが、少し芽生えただけだ」

「素直に“面白い”って言えばいいのにい」

「……っ」

その人が不意に口にしたその言葉に、僕はすぐさま反応し、あからさまに表情を曇らせてしまった。そんな僕の様子に、その人は素早く気付く。

「どうかした？」

眉をひそめ、問いかけるその人に、僕は思わず俯く。

「そんな言葉…言えるわけない…」

「え…？」

僕の答えに、その人は戸惑うように首を傾げる。

「それは…僕の言葉じゃ、ない…」

言葉を途切れさせながら、僕がゆっくりと答えを口にする。

「その文字のつく言葉を…僕が口にすることは、許されて、ない…」

「……そっか」

少しの間を置いて、その人がゆっくりと頷く。

「だから、言わないのか…」

どこか納得したように呟きながら、その人が僕のすぐ前まで歩み寄り、その場でしゃがみ込んで、ベンチに座っている僕に、視線の高さを揃えた。

「ねえ、籠也」

僕をまっすぐに見つめ、その人が穏やかな笑みを浮かべる。

「誰に、許されてないの…？」

「え…？」

その人からの問いかけに、僕は少し戸惑うように顔を上げた。

「誰って、その…」

「於の神になるっていう、君の弟？それとも、於崎の人たち？」

「……っ」

言い切れずにいた僕の代わりに答えるように、その人が問いかけてくる。その人には、僕の思っていることなど、すべて見透かされているようで、僕は思わず俯いた。

「箆也」

その人がもう一度優しく、僕の名を呼ぶ。

「君の言葉は、君だけのものだよ？他の誰のものでもない」

優しい声が、まっすぐに僕へと向けられる。

「自分の言葉を、閉じ込めちゃダメだよ」

その人の僕のものよりずっと大きな手が、両手でそれぞれ僕の両頬を包み込み、俯けていた僕の顔を、ゆっくりと上げていく。

「君の言葉は、もっと自由なんだ」

僕の顔が上がると、目の前に、優しく微笑むその人の顔があった。

「ただいま、箆也」

「……っ！」

その人があまりにも優しく笑うから、その笑顔があまりにも温かったから、僕は思わず目を見開き、その瞳を潤めた。

「……おっ…」

恐る恐る口を開き、零れ落とすように、その文字を呟く。

“おかえり”……！

その言葉を落とした瞬間、僕の瞳から、涙も同時に零れ落ちた。

檻也が“お”の言葉に目醒めて、於崎の家を出されてから、涙を流したのは、それが初めてだった。

「うう……！うう……！」

「……っ」

涙を流す僕を、その人は、優しく抱き締めてくれた。とても、温かった。

それからまた、しばらくの時間が流れて、僕はカモメさんの後継者となることを決め、“加守”としての指導を受けることとなった。

「いやあ、籠也はホント、何でも覚えが早いなあ」

加守の指導が始まって、数週間が経った頃、カモメさんが、どこか感心するように言った。

「このまま行くと、一年くらいで俺、抜かれちゃうんじゃないかなあ？」

「半年もあれば十分だと思う」

「あ、言ったなあ！」

自信を持って言う僕に、カモメさんが不満げに顔をしかめる。

「あなたの言葉覚えが悪過ぎるんだ。それで本当に、五十音士をやってるのか？」

「俺、国語苦手なんだよお。担任の先生にいつも怒られてるし」
軽く頭を掻きながら、カモメさんががっくりと肩を落とす。

「籠也が安附になってくれる、安の神様は幸せだろうねえ」

「……………」

しみじみと呟くカモメさんを見て、僕は少し目を細める。

「カモメさんは…なんで僕を、加守の後継者にしようって思ったの？」

「え？ ううん…」

少し改まって問いかけると、カモメさんが少し悩むように、首を捻る。

「俺より、頭良さそうだから？ あ、後、恋盲腸好きだから！」

「あっそう…」

笑顔で答えるカモメさんに、僕は呆れたように頷く。

「それとお」

言葉を付け加え、笑みを浮かべるカモメさん。

「言葉の重みを知ってるから、かなあ」

「……………」

告げられた言葉に、僕は少し目を見開く。

「言葉の重みを知ってる人は、その分、言葉を大切に出来る。それが、五十音士にとって一番大事なことだって、俺は思ってる」

少し遠い方を見つめながら、カモメさんが話を続ける。

「だからかな。箆也なら絶対、いい神付きになれるって、そう思うんだよね」

「ふうーん」

「ねえ、箆也」

優しい声が、また僕の名を呼んで、遠くの方を見ていたカモメさんが、僕の方を振り向く。

「君がいつ加守になるのかも、君の神様がどんな人になるのかも、今はまだ、全然わからないけど…」

カモメさんの瞳が、まっすぐに僕を捉える。

「一つだけ、約束して」

強調するように、放たれる言葉。

「何があっても、どんな時も…誰よりも近くで、神を支えて、誰よりも強く、神の力になるって」

差し出された小指を見つめ、僕はそっと目を細める。

「うん…」

僕はしっかりと頷き、カモメさんの小指に、自分の小指を絡めた。

それが、僕とあの人との、最初で最後の約束……——

Word. 49 神二、集ウ (5)

朝日が昇ったばかりの早朝。朝日に照らされ、美しく輝く言ノ葉川のすぐ傍の川原に座り込み、真剣な顔つきで本を読んでいる一人の青年の姿がある。時たま、土手の上の道を行くランニング途中の人間が、その青年へと視線を落としては、すぐに目を離して、駆け抜けていく。

「面白いのか？」

「……っ」

背後からの声に気付き、その青年が本を読むのを止め、ゆっくりと顔を上げる。

「いや、何が面白いのか、まったくわからねえ」

読んでいた本を閉じ、青年が、アヒルが、はっきりと答える。やたらとキラキラとした少女と男の描かれたその本の表紙には、『恋盲腸』の文字が刻まれていた。

「だろうな」

アヒルの言葉に頷きながら、座り込んでいるアヒルのすぐ横まで歩いて来たのは、箆也であった。

「あなたが読むには、漢字が多過ぎる」

「ああ!？」

刺々しく言い放つ箆也に、アヒルがしかめた表情を、勢いよく上げる。

「読めない漢字には、振り仮名振ってあったっつーの！」

「そうか」

強く言い返すアヒルに、あしらうように短く頷く箆也。

「僕も、初めて読んだ時は、あなたと同じように、何が面白いのかわからなかった」

「え？」

目の前で流れる川を見下ろし、箆也がどこか懐かしむように語る。

急に語り始める箆也に、アヒルが少し戸惑うような表情を見せる。

「だが、二巻を読んだ後、急激に続きが気になって、気になったと思っただけの間に、恋盲腸の虜になっていた」

「別に、お前と恋盲腸の歴史に、興味ねえよ」

「恋盲腸を読んでいると、思い出すんだ」

アヒルがどこか呆れたように肩を落とす中、川を見つめたままの箆也は、眩しそうにそっと目を細めた。

——箆也！ただいまあ！——

「いつも思いきり笑っていた、あの人のことを」

「……………」

箆也の言葉を聞いて、アヒルもその瞳を細める。

「毎年さ」

閉じた恋盲腸の本をすぐ横の地面に置き、その場でゆっくりと立ち上がったアヒルが、箆也と同じように、目の前の川へと視線を向ける。

「カー兄の命日には必ず、朝一番に、家族全員揃って、墓参りに行くんだけどさ」

箆也は川の方を見たまま、アヒルの方は振り向かず、アヒルの言葉に耳を傾けた。

「毎年毎年、俺らが行ったらもう、墓の前に、でっかい白菜が供えてあんだよ。こんなでっかい白菜っ」

アヒルが白菜の大きさを表すように、少し両手を上げ、手元で広げる。

「誰が供えてんだろってのも気になったけど、なんで白菜なんだろってのが、一番、不思議だった」

川を見つめ、アヒルが口元を緩める。

「確かに俺ん家は八百屋だけど、カー兄はどっちかつーと、ナスビのんが好きだったしなあって」

当時の戸惑いを示すように、アヒルが少し首を傾ける。

「そしたらさ、親父が教えてくれたんだ。白菜の花言葉」

アヒルが上げていた両手を下ろし、川を見つめていた視線を、空へと持っていく。

「野菜にも、花言葉ってあるんだなあ。俺、八百屋の息子だけど、それ聞いた時、初めて知った」

そっと目を細め、まっすぐに空を見上げるアヒル。

「白菜の、花言葉は…」

“固い約束”

アヒルが口にする前に、答えたのは箆也であった。

「うん…」

箆也の答えに頷きながら、アヒルが空へと向けていた視線を、ゆつくりと下ろしてくる。

「親父は、この人にはきつと、カー兄との大事な約束があるんだろうって、そう言ってた」

「ああ…」

アヒルのその言葉に、箆也がしっかりと頷く。

「約束、したんだ」

自分自身でも確かめるように、はっきりと言葉を発する箆也。

“何があっても、どんな時も…”

箆也がゆつくりと、横を振り向く。

「誰よりも近くで、神を支えて、誰よりも強く、神の力になる」と
…」

まっすぐに向けられた箆也の視線が、アヒルへとぶつかった。

「だから、これを」

「え？」

そう言って箆也がアヒルへと差し出したのは、白いハンカチであった。手のひらの上に乗せたハンカチを、箆也が慎重に広げていく。ハンカチが広げられると、そこには、赤く光る、宝石か何かの欠片が、たくさん集まっていた。

「これ：俺の、言玉？」

「ああ」

戸惑うように聞き返したアヒルに、箆也がしっかりと頷く。

「すっげえ粉々……」

阿修羅に砕かれたその瞬間は、その他に色々と気に取られることがあったため、よく見れていなかったが、改めて見ると、あまりにひどい惨状である。そんな自分の言玉に、アヒルはただ苦い笑みを浮かべることしか出来なかった。

「わざわざ、集めてきたのか？」

「ああ。あなたに渡そうと思ってな」

「渡すって：見りゃ、わかるだろ？ いっくら何でも、この状態じゃ、もう……」

「例えそうであったとしても」

アヒルの言葉を遮り、箆也が強い瞳をアヒルへと向ける。

「これがあなたの武器であるなら、最後の一片まで集めることが、僕の役目だ」

「……っ」

はつきりと言い放つ箆也に、アヒルがそつと眉をひそめる。

「僕は加守として、安の神を支え、安の神の力になると、そう、あの人に、先代加守に誓った。だから……」

箆也の視線が、まっすぐにアヒルに突き刺さる。

「だから、僕はもう逃げない」

その言葉が、まるで誓いのように、辺りに強く響き渡る。

「あの人の死からも、あの男の存在からも、すべての真実から、もう逃げない」

箆也の言葉が、さらに続く。

「だから、あなたには、僕の前に立って、これからも戦っていった欲しい」

箆也の瞳が、アヒルを捉える。

「僕の神は、僕にとっての安の神は、あなたしかない」

「……………」

何の迷いもない箆也の言葉がまっすぐに届くと、アヒルはそっと目を細め、その視線を箆也から、再び目の前に流れる川の方へと移した。

「俺の言葉、同じ“あ”の言葉使ってんのに、まるで、あいつに通用しなかった」

「ああ」

「あいつの方が、使える言葉多いし、あいつの方が、比べもんならねえくらい、めっちゃくちゃ強え」

「ああ」

川を見つめながら、ポツリポツリと言葉を落としていくアヒルに對し、箆也はただ、頷きを落とすだけであった。

「言玉だって、粉々になっちまった…」

「ああ…」

箆也の頷きが、アヒルの言葉を受け止めるように、そっと響く。

「なあ、箆也」

いつかのカモメと同じように、アヒルの声が箆也の名を呼ぶ。

「それでも俺は、戦えるか…?」

「無論だ」

ゆっくりと振り向いたアヒルに、箆也は迷うことなく頷いた。

「あなたには…」

箆也の視線が動き、土手の上の方へと移っていくと、アヒルの視線も、それを追っていく。

「アヒルん…」

「アヒルさぁーん！」

「朝比奈くん！」

二人の視線の先には、土手の上の道に立ち、それぞれにアヒルへと笑顔を向けている、囁、保、七架の姿があった。

「僕たちが附いている」

大きく手を振る三人の姿を見つめ、自信を持った笑みを浮かべる

籠也。

「そっか：そう、だったなっ：」

集った仲間たちの笑顔を見回し、アヒルも零れんばかりの笑みを見せた。

一方その頃、アヒルたちの前を去った阿修羅と棗は、自分たちの根城へと帰還していた。

「阿修羅！」

戻って来た阿修羅を、根城の入口ですぐさま出迎えたのは、杖をついた小柄の老人、現であつた。

「やあ、現。ただいま」

「ただいまじゃ、ありやせんわい！」

笑みを浮かべ、挨拶を向ける阿修羅に、現が大きな怒鳴り声をあげる。

「まあ、礼獣を一匹、駄目にしよったな！」

「そうなんだ。今回は気を付けようと思ってたんだけど、意外と苦戦してさ」

「まったく！」

あまり悪びれない様子で答える阿修羅に、現は不満げに口を尖らせた。

「なあにが、意外と苦戦してじゃ！一般人の振りをして、変に関わったりするから、そんな間の抜けたことになるんじゃない！」

次々と阿修羅を罵倒する言葉を吐く現に、阿修羅の後ろに立つ棗が、不快そうに顔をしかめる。

「現、我が神にそのような口をきくことは…」

「大丈夫だ、棗」

現へ向け、右手を構えようとした棗を、阿修羅が素早く止める。止めた阿修羅に、棗は少し驚いたような顔を見せた。

「しかし、神…」

「悪かったよ、現。申し訳ないが、また新しい礼獣を創ってくれないか？」

異論を唱えようとした棗を背にし、阿修羅が穏やかな笑みを浮かべ、現へと頼みかける。

「お前さんは創れ創れと簡単に言うがなあ、創るには時間も体力もかかっ…！」

「ウルサイでございます」

さらに声を荒げようとした現の言葉を、割って入って来た声が遮る。

「あれこれと怒鳴る暇があるなら、その時間を使って、とっとと創れって感じでございます」

丁寧なのかよくわからない、不思議な口調で、根城の奥からその場へと姿を現したのは、長い茶色の巻き髪を、頭のとっぺんで団子状にまとめた、宝石のような大きな青色の瞳の、洋風の顔立ちをした、美しい女性であった。二十代半ばから、後半くらいの年であろうか。女性の大きな瞳には感情の起伏が見られず、何を考えているのか、読めない表情である。

「問題は時間より、体力なんじゃねえのお？なんせ、じじいだからなあ。イヒヒっ」

女に続くようにして現れたのは、二十代半ばあたりの、体格のいい金髪の男であった。短い金髪を立て、広い額を、強く主張させている。

「はあ…どうでもいい…」

二人の後に遅れるようにしてやって来たのは、どこか憂鬱そうな表情を見せた、整った顔立ちの黒髪の青年。こちらもう一人の金髪の男と、同じ年頃であろうか。深い溜息をつきながら、定まらないう視線をあれこれと動かしている。

「やあ、皆来ていたのか」

現れた三人の姿を見て、阿修羅がそっと笑みを浮かべる。

「墮ちし“以の神”。墮神、一条錨^{いちじょうかり}」

「イヒヒッ」

阿修羅の言葉に、額を出した金髪男が楽しげに笑う。

「墮ちし“衣の神”。墮神、榎本エカテリーナ」

「はいでございます」

続いて、茶髪の女性が返事をする。

「墮ちし“於の神”。墮神、於崎 沖也^{おきや}」

「はあ…」

阿修羅の言葉を聞き、憂鬱そうな青年が、さらに憂鬱そうに深々と溜息をつく。

「そして、墮ちし“宇の神”。墮神、浮世現^{うきよま}」

「ふん…」

ゆっくりと振り向く阿修羅を見て、現がいかに面白くなさそうに、鼻を鳴らす。

「今ここに、墮ちし五神が、すべて揃った…」

集った仲間たちを見回し、阿修羅が満足げに微笑む。

「さあ、始めようか。そして、終わらせよう…」

ゆっくりと右手をあげ、顔の目の前で、その拳を握り締める阿修羅。

「すべてを…」

その声が、重々しく響き渡った。

Word. 50 五人目ノ神附キ (1)

言ノ葉町。町の小さな何でも屋『いどばた』。

「改修」^{かいしゅう}」

「再生」^{さいせい}」

「直せ」^{なお}！」

店の奥の和室では、机を取り囲んだ箆也、囁、七架の面々が、部屋の中だというのにそれぞれの武器を突き出し、力強く言葉を放った。机の上に赤い光が集約し、しばらくすると、その光が止む。

『……………』

光の止んだ机の上へと、今度は視線を集める箆也たち。アヒルと保も加わって、安団の五人が、じっと見つめるその先には、白いハシカチに乗せられ、赤い宝石の破片が散らばっていた。

「やはり駄目か」

「そうみたいね…フフフ…」

がつくりと肩を落とした箆也と、不気味に微笑みながらも少し残念そうな表情を見せた囁が、それぞれの武器を言玉の姿へと戻す。二人の姿を確認し、七架も同じように薙刀を言玉へと戻した。机の上へと乗り出していた皆が、一斉に体を引いて離れる。

「そんなぁ！簡単に諦めないで下さいよぉ！皆さん！」

一瞬にしてやる気を失った仲間たちへと、勇気づけるような言葉を投げかける保。

「はぁ！こんな、人生を常に諦めてる俺が、一丁前なコメント言っちゃってすみませえくん！」

「叫んでいる暇があるなら、あなたも何か、使えそうな言葉を考えろ」

相変わらずの調子で謝り散らしている保に、箆也が横から冷たい言葉を浴びせる。

「使えそうな言葉、ですかぁ」

「言葉が浮かんだとしても、私たちの言葉でも駄目なのよ…？ 転校生くんの言葉で、どうにか出来るとは思えないわ…」

「はぁ〜！ てんで役に立たない、こんな俺ですみませえ〜ん！」

「うるさい…」

再び叫ぶ保に、籠也が耳を押さえ、不快そうに顔をしかめる。

「はぁ、皆の言葉でも直すのは無理かぁ」

机の上に散らばった破片の一つを指で突き、アヒルが困ったように、深々と肩を落とす。

「やっぱ、言玉、もとに戻すのは無理なのかなあ」

「朝比奈くん…」

悩むように呟くアヒルを、七架が横から心配そうに見つめる。

「ウダウダしているだけ、時間の無駄だ。力を集中させて、もう一度、言葉を…」

「失礼します」

「……っ」

籠也が皆へと呼びかけようとしていたその時、部屋の外から声が届くと、数秒もせぬ内に部屋の襖が開き、そこから、アヒルたちの人数分の茶を持った雅が、姿を現した。

「雅さん」

「お茶をお持ちしました」

名を呼ぶアヒルに笑顔で応え、雅が襖を閉じて、皆のいる方へとやって来る。雅は、台を畳の上へと置き、湯呑みの一つひとつを、丁寧に皆の前へと差し出していく。

「どうですか？ 言玉の方は、まだ、修復出来ないようですね」

問いかけようとした雅であったが、机の上で散らばっている言玉の破片を見つけ、すぐに言葉を言い換える。

「ああ、そうなんだ」

「私たちも色々と言葉を使ってみたんですけど、どれも効果なくて…」

アヒルと七架がそれぞれ、困ったような表情を見せながら、雅へ

と状況を説明する。

「困りましたねえ」

皆へと茶を配り終えた雅が、その場に座り込み、皆と同じように困った顔を見せる。

「言玉がこの状態のままでは、朝比奈君は言葉を使えず、戦うことも出来ませんし」

「そうなのよねえ：言玉がないとアヒるん、ただの頭の悪い学生さんで：」

「ああ。高市以上に使えない」

「お前ら、ちったあ遠慮しろよ！」

次々とひどい言葉を投げかける囁と箆也に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「はあ！言玉持っても使えない俺で、すみませえ〜ん！」

「高市くん：とりあえず、静かにしてよ：？」

立ち上がって頭を抱え、勢いよく叫ぶ保に、七架が呆れた表情を見せながら、宥めるように声を掛ける。

「アヒるん、為の神様に相談してみたら：？」

「へ？扇子野郎に？」

囁からの提案に、アヒルが少し首を傾げる。

「そうだな。いくら適当人間とはいえ、あれでも一応、旧世代の神。何か突破口を知って：」

「知らないねえ」

箆也の言葉にかぶさるようにして声を発し、雅の入って来た襖を開いて、部屋へと現れる為介。

「残念ながらっ」

「扇子野郎」

「為介さん」

部屋へと入って来た為介へ、皆が視線を集める。

「人並み外れた力を持ち、誰もが憧れる、伝説の五十音士である、さすがのボクでもさあ」

「そこまでは言っ
てねえよ」

自分に酔いしれるように言葉を続ける為介に、思わず呆れた表情を見せるアヒル。

「粉々に砕け散った言玉をもとに戻す方法なんて、聞いたこともないよ」

「そっか…」

為介がはっきりと言いつつと、アヒルががっくりと肩を落とす。

「旧世代の神でも、知らないか…」

「旧世代…」

箆也が小さく落としたその言葉を、雅が何気なく繰り返す。

「旧世代、旧世代…あつ」

言葉を繰り返していた雅が、不意に何か思いついたような声を漏らす。

「ん？どうかしたあ？雅く…」

「そうです、末守まもりです！朝比奈君！」

「へ？」

珍しく大きな声で言い放つ雅に、アヒルが目を丸くする。

「ま、マモリ…？」

「五十音士の“末守”です！第三十一音、“ま”の力を持つ者！」

「末守…？」

雅から教えられ、言い慣れないその単語を、ゆっくりと口にするアヒル。

「末守が一体、何だというんだ？」

困惑気味のアヒルに代わり、箆也が雅へと問いかける。

「何の言葉を使わせる気か知らないが、僕たちの言葉でも戻せなかったんだ。末守が出て来たところで、結果は一緒で…」

「末守は、安の神にとって、特別な存在の五十音士なんです」

「特別？」

「正確に言うと、旧世代までの安の神ですが」

「どういうこと…？」

雅が言わんとしていることが理解出来ず、囁が皆を代表するように、問いを投げかける。

「今の五神の神附きは、それぞれの段の力行からナ行までの、四人の五十音士ですが」

眼鏡を人差し指で押し上げ、雅が解説するように、話を始める。

「旧世代までの五神の神附きは、それぞれの段のマ行の五十音士、一人のみでした」

「マ行？」

「それは聞いたことがあるな」

首を傾げるアヒルの横で、箆也が思い出すように首を捻る。

「どうということだ？」

「今の安の神である、あなたの神附きは、僕たち加守、左守、太守、奈守の四人だが、昔の安の神の神附きは、末守一人であったということだ」

「ううーん、難しいな…」

箆也からの解説は受けるものの、すんなり理解には至らず、険しい表情を見せるアヒル。

「つまり…旧世代では、安の神は末守、為の神は美守、宇の神は武守、恵の神は女守、遠の神は毛守が神附きとして、今の私たちのように、神に附いていたというわけね…」

「はい、そうです」

「じゃあ」

囁と雅の会話を聞いていた七架が、ふと口を挟む。

「箕島先輩が、井戸端さんと行動を共にしているのは、美守が為の神の神附きだったからなんですか？」

『……っ』

「あれ？」

七架の問いかけに、為介と雅の表情が、同時に曇る。そんな二人の様子に、問いかけた七架の方が、困ったように眉をひそめる。

「あの、えっと…」

「まあ、そんなとこだよお」

聞いてはいけないことを聞いてしまったのかと、何とか言い繕おうとした七架であったが、為介が適当に答えることで、その問いかけは流した。

「奈々瀬さんの弟くんの前、先代“武守”は、旧世代、宇の神の神附きだったしねえ」

「へえ。じゃあ、恵先生は女守だから、その、昔の“恵の神”っての、神附きだったってことかあ？」

「いいやあ、あの人は“恵の神”本人さあ。女守の後任が居なくなつたから、ついでに兼ねてるだけだよお」

「そっかあ。先生は“恵の神”の方で…って、えっ!？」

為介の言葉に一度は頷きかけたアヒルであったが、頷く途中でその衝撃の事実をやっと認識し、驚きの表情で声をあげる。

「じゃあ、恵先生も旧世代の神!？」

「あれ?言ってなかったっけえ?そうだよお」

「マジ…」

「……っ」

茫然とするアヒルの横で、箆也がそつと目を細め、何やら考え込むように俯く。

「先生のことは一先ず、置いておいて…話を戻しましょう…」

取り仕切るように、囁が言葉を発する。

「あなたたち、マ行の五十音士が、旧世代の神以前の神附きであったことは理解したわ…」

囁がまっすぐに、雅を見つめる。

「でも、それとアヒルんの言玉を直すことに…何の関係があるの…?」

「先程言ったように、以前の神附きはマ行の五十音士、たった一人でした」

その問いかけに答えるように、雅がゆっくりと口を開く。

「神附きという大役を一人で任されているゆえ、マ行の五十音士に

は、神の力を制御する力が与えられていたという話です」

「神の力を、制御…？」

「ええ。自身の神が暴走した際には、神を止めるため、神の言玉を粉碎することも可能であったとか」

「粉碎って…」

雅の言葉を聞いたアヒルが思わず、机の上で散らばっている、粉碎した自分の言玉へと視線を移す。

「これ以上、砕いてどうすんだよ？ 雅さん、俺は、言玉をもとに戻す方法をつ…」

「粉碎する力を持っているのであれば、逆もまた然^{しか}り、ということですよ」

「……っ」

遮って聞こえて来た雅の言葉に、アヒルはハッとしたように、目を見開く。

「逆…」

再び砕け散った言玉を見つめ、目を細めるアヒル。

「成程ね…だから、旧世代の安の神の神附きであった、末守さんを探そうってわけ…」

「理論としては、納得出来る。だが、我が神は旧世代ではなく、新世代の神だ。それに…」

「そうそお。いくら理論として通っていても、そんなの、だあれもやったことないんだし、上手くいくかなんてわからないよお」

表情を曇らせた籠也に続くようにして、為介が暢気な口調で言葉を発する。

「じゃあ…あなたの言玉ぶっ壊して、美守さんが直せるかどうか…試してみればいいじゃない…」

「いっやあゝ、やめてえ！ 真田さん！」

本気の表情で提案する囁に、泣きそうな表情となって叫ぶ為介。

「やはり無謀過ぎましたか…」

「……………」

皆からの厳しい指摘を受け、残念そうに肩を落とす雅に対し、俯いたアヒルは何か考え込むような表情を見せ、そして再び、粉々に砕かれた自分の言玉を見た。

「俺、探すわ。末守」

『え?』

思いがけないアヒルの言葉に、皆が一斉に戸惑った表情を見せる。
「探すって、アヒるん…」

「言ったでしょ? 探したところで、本当に直せるかどうかなんて、誰もやったことないんだから、わかんないんだってえ」

「わかんねえなら、探して、やってみるしかねえだろ?」

反論するように言う為介に、アヒルが素早く言葉を言い返す。

「それこそやってみなきゃ、本当に直せるかなんて、わからねえんだから」

「神…」

迷いのない、まっすぐな瞳を見せるアヒルを見て、籠也がそっと目を細める。

——何が面白いのかわからないなら、わかるまで読めばいいだけの話だよ! ——

そのまっすぐな瞳は、かつて籠也を救ってくれた、カモメのそれと、よく似ていた。重なる姿を思い出し、籠也が口元を緩める。

「そうだな」

「へ?」

頷く籠也に、アヒルが少し戸惑うように振り向く。

「確かに、やってみなければ、わからない。他に可能性の見える手もないんだ。末守を探そう」

「俺も探す方向で賛成です!」

「あなたには聞いていない」

「ううう…結構ずっと、我慢して黙ってたのに…」

同意するように手をあげた保であったが、箆也に冷たく言い返され、落ち込むように肩を落とす。

「あなたたちは、どうだ？」

箆也が意志を確認するため、囁と七架の方を見る。

「私はすべて、神の仰せのままによ……？フフ……」

「私も、朝比奈くんがそう言うなら」

「そうか」

笑顔で頷く二人を見て、箆也が納得するように頷く。

「というわけだ、神。我ら安団は、これから全員で、末守の搜索を始める」

「おうっ」

報告するように言う箆也に、笑顔を見せたアヒルが大きく返事をする。

「問題は探す方法ですが……為介さん」

「はあ、仕方ないねえ」

雅に呼びかけられ、為介がいかに面倒臭そうに、深々と息を吐く。

「雅くん、資料室行って、現在の末守くんのデータ、調べてきてえ」

「はい！」

為介の指示を受けた雅が、大きく頷き、意気揚々とした様子で、素早くその場を立ち上がり、資料室へ行くため、その部屋をすぐに出ていく。

「扇子野郎」

「まあ、協力拒んで、君の神付きさんたちから反感買うのも嫌だしねえ」

どこか意外そうに為介の方を向くアヒルに、為介が軽い口調で言葉を投げかける。

「それに、君の力が戻ることを望んでいるのは、君たちだけじゃない」

「えっ……？」

意味深な為介の言葉に、アヒルが戸惑いの表情を見せる。

「それって、どういう…」

「さあて、そろそろ開店の準備でもしよっかなあ」

問いかけようとしたアヒルの言葉を遮って、為介が立ち上がり、部屋を出て行こうと襖を開ける。

「君たちも学校行きなよ？ 今日、平日でしょ？」

「……っ」

感情の読めない微笑みを浮かべる為介を見て、アヒルはそっと、眉をひそめた。

Word. 50 五人目ノ神附キ (2)

その日、放課後。言ノ葉高校、三年A組。

「雅くん」

後方から名を呼ばれ、鞆の教科書などを詰め、帰る支度を整えていた雅が、すぐさま振り返る。雅が振り返るとそこには、すでに帰り支度を整えた様子のツバメが立っていた。

「部室行こう…」

「あ、すみません、ツバメ君。今日、僕ちよつと…」

「雅さん！」

部活の誘いにやって来たツバメに、雅が返事をしようとしたその時、雅の席のすぐ横の窓が勢いよく開き、廊下からアヒルが顔を出した。自分の教室から、急いでここまでやって来たようである。

「今朝の話…！うえっ」

雅へと話しかけようとしたアヒルであったが、雅のすぐ横に立つツバメの姿を視界に入れ、あからさまにその表情を困ったものへと変えた。

「え、えつと…」

「今日は部長はお休みだって、伝えておくよ…」

「あ、すみません」

言葉に詰まっているアヒルを特に気にする様子もなく、ツバメは空気を読んだ様子で、雅に自然に声を掛けると、すぐに雅に背を向け、教室を後にした。恐らく、部室に向かったのであろう。去っていくツバメを見送った後、雅がどこか呆れたように、アヒルの方を振り向く。

「あなたたち兄弟にしては、珍しい光景ですね」

「悪い…」

「別に、僕に謝る必要はありませんよ」

申し訳なさそうに頭を下げるアヒルに、雅が柔らかく笑みを向け

る。

「昨夜のあれ以来、特に話はしていない感じですか？」

「ああ。ってか、あれ以来、ろくに顔も合わせてなかったから、今会って、ちょっと焦った」

少し顔を上げたアヒルが、困ったように頭を掻く。阿修羅に言玉を砕かれ、兄、カモメの真相を知ったアヒルは、何とか立ち直り、籠也とは和解したのだが、まだスズメ、ツバメ両兄とは、気まずい状態のままであった。

「まあ、あなたたち兄弟の間での問題ですので、僕は口出ししませんよ」

そう言いながら、雅が荷物を詰め、チャックを閉じた鞆を、肩へと掛ける。

「今朝の件、“末守”のことで、来られたのでしょうか？」

「あ、そう、そうだった」

雅に問いかけられ、アヒルが思い出した様子で、何度も頷く。

「データは揃えてあります。神月君たちのところへ、行きましょう」「おう！」

雅の言葉に、アヒルは気合いの入った返事をした。

言ノ葉高校、国語資料室。

「なんだって、ここに集まってくんだよ」

紙コップにポットで茶を注ぎながら、恵があからさまに嫌そうな顔を見せる。

「丁度いい、空き教室がなかったんですよ。屋上で話すには、風も強いですし」

「為介ん家、行けばいいだろうが」

「今日は為介さんの気分的に、模様替えの日なんです。行ったら、間違いなく手伝わされます」

「あっそう」

雅の言葉に、少し乱暴な返事をして、恵が茶の入った紙コップを、適当に机へと置いていく。山ほどの本を隅っこに追いやり、何とか空けた、机の小さなスペースを囲むようにして、雅と、アヒルたち安団の面々が顔を揃えていた。七架が、恵が適当に置いた紙コップを、一人ずつへ丁寧配っていく。一方、自分のものであるう湯呑みを手にした恵は、不機嫌そうな顔のまま、少し離れたところに置いてあるパイプ椅子へと腰掛けた。

「はあゝ！こんな明らかに牛乳飲みすぎの俺に、お茶淹れてもらっちゃって、すみませえゝん！」

「話が終わるまで、黙っておけ。高市」

「ん！」

茶を受け取り、いつものように謝り散らした保であったが、籠也に突き刺すように言葉を掛けられ、両手で強く口を塞ぐ。

「発言権もないのに、集まる必要あったのかな…？高市くん…」

「さあ…？フフフ…」

呆れた様子で呟く七架の横で、囁がそっと笑みを零す。

「では、“末守”の件に関して、お話したいと思います」

「ああ、頼む」

鞆から何やら白い紙を取り出す雅を見つめ、アヒルたちが真剣な表情を見せる。

「韻で作成されている、五十音士のデータベースを閲覧してきました。それによると現在、“末守”を務めている者の名は…」

雅が白い紙へと、視線を落とす。

「末宮守。まつみやまもり年齢は十六歳。性別は男」

「十六？俺たちと同じだな」

「守、守…どこかで聞いたような…」

感心するように言うアヒルの横で、囁が何かを思い出そうとするように、首を捻る。

「残念ながら、顔写真は記載されていませんでした」

雅が少し眉をひそめながら、今まで見ていたその白い紙を、皆に

見えるように、机の上へと置く。確かに、名や生年月日の記載されている欄の横に、顔写真を載せるものなのであろう箇所があるが、そこは空欄になっている。

「顔写真がないのって、厳しくない…?」

「そうだよね。十六歳の男の子なんて、山程いるだろうし」

「いや…」

表情を曇らせた囁や七架の横で、少し俯いていた箆也が、短く言葉を挟む。

「名前が分かっていたら、学校などに問い合わせ、調べることもある。奈々瀬を探していた時よりは、相当に楽なはずだ」

「まあ、それは言ってるわね…フフ…」

箆也の意見に納得し、囁が不気味に笑みを零す。

「ええ。それに、使える情報がもう一つ」

人差し指を立てる雅に、皆が視線を集める。

「代々“末守”を務めている末宮家の本家は、この言ノ葉町にあったそうです。一族が減り、数年前に言ノ葉の土地を売り払ったらしいのですが…」

「長年住み慣れた、この町に居る可能性は高いというわけね…」

「はい」

先読みするように言う囁に、雅が大きく頷く。

「ですので一先ず、この近辺の高等学校に通う生徒の中に、末宮守という名の生徒が居ないかを、調べてみてはどうかと」

「賛成だな」

「そうそうある名でもないし…意外と早く見つかるかも知れないわね…フフ…」

雅の提案に箆也と囁が同意し、意見のまとまっていく空気となる。

「よっしゃあ!じゃあ早速、近くの高校を片っ端から…!」

「回るのは僕らでやるから、神は自宅待機だ」

「へ?」

気合いを入れて立ち上がったアヒルであったが、遮って聞こえて

きた籠也の言葉に、目を丸くする。

「なんで？」

「そうだよ。言玉のない朝比奈くんが出歩いて、敵の人に襲われちゃったら大変だし」

「末守さんが見つかるまでは、安全な場所でじっとしていてももらわないとね…」

「そういうことだ」

「えええ」

アヒルががつくりと肩を落とし、力なく椅子へと座り込む。

「俺、待機とか苦手なんだけどお」

「得手不得手の問題ではない」

机の上に片頬をつけ、拗ねたように口を尖らせるアヒルに、籠也がきつぱりと答える。

「これが言ノ葉町周辺の高等学校一覧と、地図です」

「あまり数はないな…適当に割り振る。手分けして回ろう」

「ええ…」

指示を出しながら、雅に渡された一覧表に素早く書き込みを入れていく籠也。

「奈々瀬は高市と一緒に回ってくれ」

「え？なんで？」

籠也からの指示に、七架が素直に首を傾げる。

「一人で調査して回れるほどに、人として成り立っていないからだ」

「あ、そっか」

「んんんん！」

ひどい言いようをする籠也であったが、七架はしっかりと納得して頷く。そんな二人に、口を塞いだまま、何やら声をあげている保。恐らく、人として成り立っていないことを、謝り散らしているのであらう。

「割り振った。各自、これで回ってくれ」

書き込みを入れた紙を、籠也が囁と七架へ、それぞれ渡す。

「僕は為介さんの家に居ますので、何かあれば連絡下さい。皆さんへ、連絡を回しますので」

「ああ、わかった。宜しく頼む」

「いえ」

しっかりとした口調で頼む籠也に、雅は快い笑みを向けた。それぞれ一覽と地図の記載された紙を持った籠也たちが、出発するべく椅子から立ち上がる。保も引き続き口を塞いだまま、皆と同じように立ち上がった。

「わかつていると思うが、敵はすでに動き出している」

籠也が皆を見回し、真剣な表情を見せる。

「あまり時間はない。奴等が派手な動きを見せる前に、何としても末守を探すんだ」

「ええ…」

「うん」

「んん！」

籠也の言葉に、囁、七架、保がそれぞれ、しっかりと頷く。

「では神、我々は今から、末守調査に出る」

「ああ、頼む」

振り向いた籠也に、椅子に座ったままのアヒルが、大きく頷きかける。

「あなたは速やかに帰宅し、大人しく待機しているように」

「寄り道とかしちゃダメよ…？アヒるん…」

「き、きき気を付けてね、朝比奈君」

「んん！んんんん！」

最後の保が何を言ったのかは不明であるが、安団の皆は口々にアヒルへと声を掛けると、籠也を先頭として、連なるように国語資料室を後にしていった。

「では、失礼します」

「ああ」

安団の四人に遅れるようにして立ち上がった雅が、丁寧な恵に一

礼し、最後尾で資料室を出ると、ゆっくりと扉が閉まった。扉の閉まる音が響き、アヒルと恵だけとなった資料室に、静寂が訪れる。

「はぁ、苦手だけど、仕方ねえから自宅待機すっかなぁ」

気だるそうに少し伸びをしながら、アヒルがしかめた表情のまま、紙コップに残っている茶を飲み干し、立ち上がる。

「あ、そういや今朝聞いたんだけど、恵先生って、“恵の神”なんだったな」

「ああ？」

急に思い出したように言いながら振り向くアヒルに、恵が眉をひそめる。

「何だ、今更」

「今更って、俺、初耳だったんだけど…」

「いちいち言う程のことでもないだろ。今じゃ旧世代の神なんて、名ばかりの神なんだ」

「そういうもんなのかぁ？」

素っ気なく答える恵に、まだあまり、旧世代の神のこと自体を理解していないアヒルは、戸惑うように首を傾げる。

「まあいっか。先生は先生だもんな」

明るい笑みを見せるアヒルを見て、恵がそっと目を細める。

「思ったより、元気なんだな」

「へ？」

恵の言葉に、アヒルが首を傾げる。

「もっと、凹むのかと思った」

「……っ」

その言葉の意味を理解したのか、アヒルが少し表情を曇らせる。恐らく恵は、昨夜のことを言っているであろう。カモメが五十音士であったことを知り、カモメの死の真相を知り、そしてカモメの仇である阿修羅にまったく歯が立たなかったことで、アヒルがもつと落ち込むと思っていたのであろう。

「別に、凹んでねえわけじゃねえぜ？言玉だって、木端微塵に碎か

れちまったし」

アヒルが少し頭を掻きながら、恵へと言葉を向ける。

「けど、俺には…」

——大丈夫、大丈夫だよ——

——あなたには、僕たちが附いている——

「支えてくれる、家族がいる。力になってくれる、仲間がいる」
父の、籠也の言葉を思い出し、そっと口元を緩めたアヒルが、何かを掴むように右拳を握り締める。

「だから、倒れずにいられる。それだけだ」

「……そうか」

迷いのない、晴れやかな笑みを浮かべるアヒルに、恵が頷きながら、どこか安心したように微笑む。

「カモメも一安心だろうな」

「そうだいいけど…って、あれ？」

アヒルが急に目を丸くし、逸らしていた視線を戻して、再び恵の方を振り向く。

「なんで恵先生が、カー兄のこと、知ってんだ？」

「え…」

不思議そうに首を傾げるアヒルに、恵は思わず言葉に詰まる。

「あ、いや…」

「ああ、もしかして、カー兄もこの生徒だったから？」

何とか言葉を発しようとした恵にかぶさり、アヒルが言葉を投げかける。

「って、んなわけないか。恵先生、二十四とかだっけ？五年前じゃ、まだ先生じゃねえもんな」

「……っ」

自身の問いに自身で答え、納得した様子で笑顔を見せるアヒルに
対し、恵は何やら神妙な面持ちを見せ、そっと俯いてしまう。

「忌退治の時に偶然、知り合ってた…」

「そっかあ、そうだよなあ。カー兄も先生も五十音士なんだしなあ」
俯いたまま恵が発したその答えに、アヒルは特に疑問を持つこともなく、大きく頷いた。

「ほら、くだらないことばっか言ってるで、とっとと帰れよ。神月たちにどやされるぞ」

「それもそうだ」

恵の意見に激しく賛同し、アヒルが机の上に乗せていた鞆を、素早く背負う。

「んじゃ、また明日な！先生！」

「……っ！」

軽く右手をあげ、笑顔を浮かべて去っていくアヒルに、大きく目を見開く恵。アヒルが去り、扉が閉まると、恵は少し胸を押さえるようにしながら、ゆっくりと俯いていく。

——また明日！——

重なる、笑顔。それはもう、“永遠”に來ない明日。

「私も…あいつくらい強かったら、良かったのにな…」

俯いたままの恵が、そっと頭を抱え、どこか弱々しい声を落とした。

学校を出てすぐ、末守を探すためにそれぞれ散っていった籠也たちと別れた雅は、為介の家、何でも屋『いどぼた』へとやって來た。

「帰りました」

「ああ、雅くうくん」

雅が声を掛けながら店の戸を開くと、中から陽気な声が聞こえてくる。

「今日ねえ、何となく模様替えしたい気分だからあ、ちょっと手伝っ…」

「嫌です」

「うわあ、言い終わる前に断られちゃったあ」

きっぱりと答える雅に、シヨックを受けることすら出来なかった為介が、思わず両手を左右へ開く。

「神月君たちが末守の搜索をしていて、僕は今から連絡係を務めますので」

「搜索う〜？」

店の奥へと入っていきながら、状況を説明する雅に、為介が大きく首を傾げる。

「搜索ってえ？」

「末守の名前と年齢は、韻のデータベースに記載されていましたが、それを元に、この町の近辺の学校を片っ端から…」

「まあた、そういう無駄なこととしてえ」

「え？」

呆れたように言い放つ為介に、雅が後方を振り返り、戸惑うように声を漏らす。

「無駄とは言いますが、現状、末守を探す以外に、朝比奈君の言玉を直す方法が…」

「そっちなじゃないよお。無駄なのは搜索の方っ」

「え…？」

為介の答えに、雅が益々、戸惑いの表情となる。

「奈々瀬さん、探す時にも言ったでしょ〜？」

雅をまっすぐに見つめ、為介がどこか意味深な笑みを浮かべる。
「神付きは自然と、神のもとに集まるものだって」

Word. 50 五人目ノ神附キ (3)

「ふっはあゝ」

一方、末守の搜索から外されたアヒルは、学校を出て一人、とぼとぼとゆつくりとした足取りで、家へと続く道を歩いていた。まだ明るい空を見上げながら、少し欠伸を漏らす。

「ゲーセンとか行ったら、怒られるよなあ。やっぱ」

アヒルがどこかボヤクように、言葉を落とす。

「けど、こんなに早く帰ってもなあ。下手に親父に店、手伝わされても嫌だしなあ」

「ぶっはあ…」

「んあ？」

あれこれと考えを巡らせていたアヒルが、どこからか聞こえてくる、自分よりも遥かに憂鬱そうな溜息に気付き、空を見上げていた顔を下ろしてくる。

「ぶっははっはあ…」

緩やかな土手の途中の草むらに腰を下ろし、溜息かどうかもよくわからない声を漏らしながら、深々と肩を落としているのは、アニキであった。いつもはばっちり決まっているリーゼントが、今日はどこか元氣のない様子で、少し曲がっている。

「ぶっぶぶっははっはああ、は…」

「ぶっはぶっは、うっせえなあ」

「ぶはあ！」

引き続き溜息を吐こうとしたアニキであったが、不意に背中を強く蹴られ、呼吸を詰まらせたような、苦しいな声を吐き出し、前へと体を押し出された。

「いきなり何しやが…！って、朝比奈ああ！」

余程苦しかったのか、少し胸を押さえながら振り返ったアニキが、背後に立つアヒルを見上げ、勢いよくその表情をしかめる。

「てつめえ！いきなり人の背中蹴るたあ、どういうことだあ！？ど
ういう教育、受けてきやがったあ！？」

「てめえが、こっちまで不快になるような溜息、吐いてっからだろ
？」

強く捲くし立てるアニキに対し、アヒルが呆れたように言い放つ。

「溜息ばっか吐いてっと、幸せが逃げてくんだぞ？」

「仕方ねえだろ！俺には、溜息吐いても吐いても、吐き出せねえほ
どの悩みがあんだよっ」

「お前に悩み？」

アニキの答えに、アヒルが意外そうに目を丸める。

「ハハハ！お前が“悩み”って面かよお？あんま、笑かすなよなあ」

「にやにをぉー！？」

勢いよく笑い飛ばすアヒルに、アニキが顔をしかめ、その場で素
早く立ち上がる。

「もおー怒った！今日という今日こそ、コテンパンのパンダの赤ち
やんにしてやる！」

「はいはい」

「ぐふ！」

勇んでアヒルへと飛びかかっていったアニキであったが、アヒル
が肩に掛けていた鞆を軽く一振りすると、それが向かって来ていた
アニキの顔面に炸裂し、アニキは潰れたような声を漏らして、力な
くその場に倒れ込んだ。

「うう、うっ…」

「ったく、懲りねえよなあ。お前も」

鞆をもろに喰らった顔面を押さえながら、必死に起き上がるアニ
キを見下ろし、アヒルが呆れきった表情を見せる。

「俺のせいで、出席番号が四年四組四番になったのなんて、もう何
年前の話だよ？」

アヒルがその場にしゃがみ込み、土手の下に見える川を見下ろす。
「大昔の話だったのに、毎日毎日、懲りもせずに向かって来やがっ

てさあ」

「当たり前だろ」

「へ？」

弾くように返って来る声に、アヒルが不思議そうに振り向く。

「俺は男だ。一度、勝負を挑んだからには、勝つまで絶対、諦めたりしない」

「……っ」

そうはつきりと言い放つアニキに、少し驚いたように目を見開くアヒル。サングラスの下から、かすかに見えるアニキの瞳は、とてもまっすぐで、とても強い輝きを放っていた。その瞳に、アヒルが思わず口元を緩める。

「ハハハハ……！」

「んあ！？」

笑い声をあげるアヒルに、大きく顔をしかめるアニキ。

「てっめえ！また馬鹿にしやがって……！」

「違えよ。馬鹿にしてるんじゃないねえ」

「何？」

すぐさま否定するアヒルに、アニキが少し首を傾げる。

「いいよな、そういうの。俺、わりかし好きだぜ」

まったく馬鹿にしているようには見えない、純粹な笑みを向けるアヒルに、アニキが目を丸くする。だがすぐにその表情をしかめっ面に戻すと、アニキはアヒルから目を逸らした。

「ケっ！てめえに好かれたって、嬉しくも何ともねえぜ」

「だろうな」

悪態づくアニキを見て、アヒルが納得しながらも、さらに微笑む。

「まあ、真田さんに好かれるってんなら、話は別でえ……」

「アニキい……！」

「んあ？」

囁くことを思い、締まりのない笑みを浮かべていたアニキが、遠くの方から聞こえてくる、自分の名を呼ぶその声に気付き、ふと振

り向く。

「アニキ！」

「おう、ブラシ」

アヒルとアニキの居るその場へと、慌てた様子で駆け寄って来たのは、アニキと同じ黒い学ランに、派手な赤茶髪モヒカンの青年であった。アニキの呼んだ“ブラシ”というのは、恐らくあだ名であろう。髪型を見ると、まさにブラシの形である。

「って、朝比奈ああ！？」

「よう」

アニキのすぐ横に立つアヒルの姿を見て、ブラシが激しく驚いた表情を見せる。毎朝、アニキと共に現れるその青年には、アヒルも十分に見覚えがあった。

「だ、大丈夫ですかあ！？アニキ！手足の骨とか、叩き折られてませんかあ！？」

「俺は怪物かよ…」

尋常じゃない心配振りを見せるブラシに、アヒルが思わず呆れた表情となる。

「大丈夫だ！今、まさに、朝比奈が俺に降参しようとしていたところだ！」

「嘘吐くんじゃねえ！」

得意げに話すアニキに、勢いよく怒鳴りあげるアヒル。

「それよりブラシ、どうしたあ？」

「あ、そうでした！」

改めて問いかけるアニキに、ブラシが思い出したように、ポンと手を叩く。

「パンチが大変なんス！母ちゃんとケンカしたらしいんですけど、その母ちゃんが鬼のようにキレて、衝撃波みたいなの、ぶっ放つて！」

「何いい！？」

「……っ」

ブラシの言葉に、驚くアニキの横で、アヒルがそつと眉をひそめる。

「よ、よおし！ いっちょ、俺が行って仲裁を…！」

「案内しろ！ ブラシ！」

「ウィっス！」

「へ？」

気合いを入れるように両拳を握り締めたアニキであったが、アニキよりも兄貴らしく指示をするアヒルに、ブラシが素直に頷き、二人が足早にその場を去っていくと、何故か、アニキだけが取り残されてしまう。

「お、おい！ 待て！ 俺を置いていくな！」

アニキも遅れるようにして、慌ててアヒルたちの後を追った。

「ひい…！ ひい…！」

人気も車の通りもない、だだっ広い道を、必死に駆け抜ける、緑髪にパンチパーマという、派手にも程がある髪型の青年。額には汗が浮かび、青年はひどく追い込まれたような表情をしている。息も絶え絶えに、少しバランスを崩しながら、前へ前へと足を動かす。

「なんでっ…なんで、んなことに…！」

責めるような、悔いるような声を、青年が吐き捨てる。

「あ、居た居た！ パンチ！」

「…っ！ ブラシ！」

前方から聞こえてくる声に、パンチと呼ばれた青年が顔を上げる。すると、三つ程先の曲がり角から、ブラシとアヒル、そしてアニキが姿を見せた。大きく手を振るブラシに気付き、パンチが目を見開く。

「アニキも…！」

「おう、パンチ！」

「それにつゝ朝比奈ああ!？」

三人のもとへと駆けつけながら、アニキの姿を視界に入れ、嬉しそうな笑みを零したパンチであったが、アニキの横に立つアヒルの姿を見つけ、驚きの表情を見せる。

「大丈夫ですかあ!？アニキい、肋骨バキバキにされてませんかあ!？」

「だから、俺は化け物かっての」

ブラシと同じように、激しくアニキの身を案じるパンチに、アヒルが思わず顔をしかめる。

「一体、どうしたってんだよ?パンチ」

「それが、ちつとばかり、学校サボってること、うるさく言われて、おふくろとケンカしまして」

アニキのすぐ前までやって来て、やっとその足を止めたパンチが、困り果てた表情で、アニキへと状況を説明し始める。

「そんでつい、“あんたの子供になんか生まれなくなかった”って言ったら…」

パンチが恐る恐る、ゆっくりと後方を振り返る。

「グアアアアア!」

「何かいきなり、化け物みたいに襲いかかってきちまったんです!」
『……っ』

パンチが駆けて来た道の遥か向こうから、姿を現す、丸みを帯びた体型の中年女性。髪は地味だが、顔つきはよくパンチに似ている。だがその瞳は虚ろで、動きも人のものというには不自然であり、何より、女性のものとは思えない、低く重苦しい叫び声を放っている。やって来る女性の姿を見て、アヒルとアニキが同時に表情を曇らせる。

「忌…」

女から溢れるように見える黒い影と、確かに感じる気配に気づき、アヒルが眉をひそめる。

「お前ら、とにかく逃げっ…!」

「クソボケえええ！」

「どわあああ！」

パンチの母親であるというその女性に、忌がり憑いていることを察し、自分以外の皆に逃げるよう指示を出そうとしたアヒルであったが、アヒルのその声は、思いきりパンチを殴り飛ばしたアニキの、大きな怒鳴り声に掻き消された。

「へ？」

「アニキ、何を…！」

目を丸くするアヒルの横から、ブラシが驚きの表情で身を乗り出す。

「あ、アニキ…？」

アニキに勢いよく頬を殴り飛ばされ、地面へと腰をついたパンチが、腫れ上がった頬を押さえながら、どこか啞然とした様子で、アニキを見上げる。

「てめえの母ちゃんに向かって、“あんたの子供に生まれたくなかった”とは何事だぁ！？あぁん！？」

アニキがサングラスの上に見える眉毛を吊り上げ、パンチへと強く怒鳴りあげる。

「自分を生んでくれた母ちゃんに向かって、よくも、んな口が聞けたもんだなぁ！」

さらに声を荒げ、アニキが言葉を続ける。

「母ちゃんに口にしていいのは、感謝の言葉だけだぁ！それ以外は、あり得ねえ！」

眉間に皺を寄せたアニキが、何度も大きく、首を横に振る。

「……………」

熱く言葉を続けるアニキを、アヒルが真剣な表情で見守る。

「アニキ…」

「……なぁ、パンチ」

どこか弱々しくアニキの名を呼ぶパンチを見つめ、そっとしゃがみ込んだアニキが、サングラスの向こうから、まっすぐにパンチを

見つめる。

「お前が生まれて来たことを、一番喜んでくれた人に、その言葉は、一番言っちゃいけない言葉だ」

「……っ」

重みのあるアニキの言葉に、大きく目を見開くパンチ。

「か、母ちゃん！」

素早く体を起こしたパンチが、体の向きを変え、後方から迫って来る母親へと向き直って、地面に両膝をつく。

「済まねえ……！」

膝の前に両手をつき、地面に額を擦りつけるようにして、パンチが深々と頭を下げる。

「俺、ついカッとなっちまって、あんなこと……！母ちゃんに、あんなこと……！」

パンチが唇を噛み締め、地面につけた両手を震わせる。

「本当に済まねえ……！！！」

「ググ……」

パンチたちの方へと向かって来ていた母親が、急に足を止め、何やら短く、声を発する。

「母ちゃん……？」

動きの止まった母を不思議に思い、顔を上げた後、戸惑うように首を傾げるパンチ。

「グアアアア……！」

「うお……！」

次の瞬間、母親が激しい叫び声をあげると同時に、母親の全身から強い白光が放たれ、パンチや皆が、その強い光から目を逸らすように、俯いた。

「ううう、う……」

光が止むと、そっと目を閉じた母親が、力なくその場に倒れ込む。

「母ちゃん……？」

「……っ」

俯いていた顔を上げ、急に倒れた母親に首を傾げているパンチの後ろで、険しい表情を見せたアヒルが、ゆっくりと上空を見上げる。
＜グググ＞

青い空にはつきりと、黒い影の塊が浮き上がっている。

「忌が出た：母親の痛みがなくなったのか：」

鋭い瞳で黒い影の存在を捉え、アヒルがそっと呟く。

「母ちゃん？」

「一体、どうなってんだあ？」

「おい、お前等！」

戸惑っているパンチたちへと、アヒルが声を張り上げる。

「あの母ちゃんはどうかやら、急に衝撃波撃っちゃう病にかかったようだ」

「急に衝撃波撃っちゃう病？」

「んなもん、あんのかあ？」

「ああ、ある。症状はもう消えたみたいだが、一応、病院に連れてった方がいい。今すぐ、連れてけ」

不思議そうな顔を見せるパンチたちに、いかにも正論を語る口振りで話を進め、アヒルがパンチたちへと指示を送る。

「けど、病院たって、何科にいけば：」

「何科でもいいから、とっとと行け！」

「ひえええ！了解しましたあ！」

「待ってくれえ！パンチ！俺も手伝うぜえ！」

アヒルに怒りの形相を向けられたパンチとブラシが、半ば脅されたような形でアヒルの指示を呑み、倒れている母親を両脇から抱え上げて、病院へ行くべく、その場を駆け出していく。

「さてと、んあ？」

「ん？何だ？」

パンチたちが母親を連れて去り、これでやっと忌に集中出来ると思ったアヒルであったが、すぐ横に立つ気配がいつまで経っても消えず、思わず顔をしかめて振り向く。すると、そこには、しかめっ

面でアヒルを見返す、アニキの姿があった。

「何だ”じゃねえよ！お前もとつと病院行けよ！」

「何で俺が、お前の言うことを、素直に聞かなきゃいけないんだ。それに、付き添い何人もで、病院行ったら迷惑だろうが」

「意外と律儀だな！」

病院に気を配るアニキに、アヒルが感心したような指摘を入れる。
グググ……おのれ、人間……！>

「……っ！」

上空から聞こえてくる禍々しい声に、素早く顔を上げるアヒル。空中で態勢を立て直した忌は、ここを去ったパンチの母親ではなく、今、この場に居るアヒルたちへと、狙いを定めている。

「とにかく、てめえは下がってろ！」

「はあ？フザけんな。てめえが下がればいいだろうが」

「あのなあ……！」

<消え去れ！“破”……！>

「やべ……！」

アニキと言い争いを続けていたアヒルが、こちらへ向け、上空から思いきり衝撃波を放った忌の姿を横目に入れ、焦ったように前方を向く。

「五十音、第一音……！って、あっ」

制服のポケットへと手を入れたアヒルが、間の抜けた声を漏らす。
「やっべ！そういう俺、今、言玉使えないんだった！」

言玉が粉々に碎かれ、為介の家に預けたままであることを今になって、やっと思ひ出し、アヒルが頭を抱え、慌てた様子を見せる。その間にも、忌が向けた衝撃波は、刻一刻とアヒルたちに迫って来
ていた。

「マズい……！」

迫り来る衝撃波に、アヒルの表情が歪む。

「おい、アニキ！とにかく、逃げ……！」

「だから、てめえは下がってろと言ったんだ」

「へ？」

焦るアヒルとは対照的に、普段以上に落ち着き払った様子のアニキが、上空から迫り来る衝撃波をまっすぐに見上げながら足を動かして、アヒルよりも数歩前へと出る。

「お、おい！何やってんだよ！？」

前へと出るアニキに、焦りながら声を掛けるアヒル。

「死にてえのか！？」

「男は度胸」

アヒルの問いかけを背に浴びながら、衝撃波を見上げたアニキが、学ランのポケットへと右手を入れる。

「“逃げ”は、俺の辞書にはねえ…！」

「なっ…！？」

そう堂々と叫びあげ、アニキがポケットから取り出したのは、手のひらにすっぽりと収まる、小さな赤い宝玉。その宝玉を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「あ、あれは…言玉…！」

「五十音、第三十一音…」

右手に持った言玉を突き上げ、アニキが鋭い表情で言葉を放つ。

「“ま”、解放…！」

アニキがその文字を口にした途端、突き出した言玉から強い赤色の光が放たれ、一気に辺りを包み込んだ。その眩いばかりの光を、アヒルは目を逸らすこともなく、まっすぐに見つめる。

Word 50 五人目ノ神附キ (4)

「よっしゃあ！」

赤い言玉から形を変えた、二個の真っ赤な円形の金属物。周囲が刃となり、真ん中に大きな穴のあいている、その円月輪を、左右にそれぞれ一個ずつ構えるアニキ。大きな穴に人差し指だけを通し、手慣れた様子で円月輪を数度回した後、周辺部で刃ではない取手部分を手に持ち、気合いの入った声をあげる。

「ま…」

アニキが大きく口を開き、両手の円月輪を投げ放つ。

“守れ”！

放たれた円月輪が最初は前方に、並ぶようにして向かっていたのだが、衝撃波の直前まで来たところできれいに左右に分かれていくと、その間に真っ赤な光の膜のようなものが張られ、忌の放った衝撃波を真正面から受け止める。

<何っ…！？>

上空の忌が、黒い影に浮かぶ真っ赤な瞳を、大きく見開く。

<い、五十音士…！？>

“勝れ”！

忌が焦りの声をあげる中、アニキがさらに言葉を放つと、受け止めていた膜がさらに強い光を発し、衝撃波を呑み込むようにして、散り散りに砕いた。

「ふいっ」

アニキが円月輪を手元に戻し、再び指で回しながら、ゆっくりと一息つく。戦闘中であるというのに、その表情には一切の焦りもなく、余裕すらうかがえた。

「もうここに、お前の巢食う“痛み”はない。もう二度と、パンチの母親には巢食わせない」

上空に浮かぶ忌へと視線を向けたアニキが、強い口調で言い放つ。

「だからお前は、ここで消えろ、忌」

<グ…！このっ…！>

そんなアニキの言葉に、目を鋭く細めた忌が、勢いよく下降し、真正面から突っ込んでいく。

<五十音士があ…！>

「……っ」

降下して来る忌を見つめ、サングラスの奥の瞳を鋭くしたアニキが、回す手を止め、素早く円月輪を構える。

「決まりだ…」

勝負の先行きを見通すように、アヒルがそっと呟く。

「ま…」

アニキがゆっくりと口を開き、指先の向こうから流れていくように滑らかに、円月輪を投げ放つ。

「“舞え”！」

放たれたその言葉に従うように、アニキの手を離れた円月輪は、まるで風に乗る舞うように素早く、美しく動き、一瞬のうちに忌の体を縦横無尽に、何度も往復して斬り裂いた。

<グア…ギャアアアア！>

円月輪に斬り裂かれた忌が、その黒い影の体を散り散りに分けられ、激しい悲鳴とともに、強い白光を放ちながら、掻き消えていく。

「……………」

掻き消えていく黒い影を、アニキが真剣な表情で、まっすぐに見つめる。

「ふう」

忌を斬り裂いた円月輪が、アニキの手元へと戻って来る。戻って来た円月輪を指で一周、くると回すと、そのままの言玉の姿に戻し、アニキはホッとしたように一息ついた。

「……………」

そんなアニキの様子を、ただじっと見つめるアヒル。

「“守れ”、“勝れ”、“舞え”…」

アヒルが、アニキが忌との戦闘中に口にした言葉を、次々と並べていく。

「間違いない。あいつが…」

「神！」

そつと眉をひそめたアヒルが、後方から聞こえてくる、よく聞き覚えのある声と、いくつかの足音に気付き、すぐに振り返る。

「箆也」

アヒルのもとへと駆けてくるのは、箆也と、囁、保、七架の四人であった。皆、不安げな表情を見せていたが、アヒルの姿を確認したからか、少しホッとしたように笑みを零す。

「お前ら、どうして、ここに？」

「忌の気配を感じたからだ」

アヒルのすぐ傍へとやって来て足を止めた箆也が、アヒルの問いかけに短く答える。

「で？ 神は何故、ここに？」

「そうよね… 私たちがあんなに、寄り道せずに帰るよう言ったのに…」

「うっ…」

箆也と囁から睨むように見られ、アヒルが思わず、気まずそうに目を逸らす。

「い、いやあ、それはそのお… まあ、色々とあってだなあ」

「見苦しい言い訳は、求めていない」

「まあまあ、いいじゃないですかあ… アヒルさんが無事だったことが、何よりなんですからあ」

「馴れ馴れしく話しかけるな」

「いっやあゝ！ 馴れ馴れしくして欲しくないランキングがあったら、絶対一位の俺が話しかけちゃって、すみませえゝん！」

アヒルのフォローに入ったはずの保であったが、箆也に冷たく言い捨てられ、激しく謝り散らす。

「それより、大丈夫？ 朝比奈くん。忌と戦ってたんでしょ？」

「そうよね…忌の気配が消えてるけど…言玉も無いのに、一体どうやって倒したの…？」

「ああ、忌なら…」

問いかけを受け、そっと目を細めたアヒルが、仲間たちから再び、正面へと視線を向ける。

「“末守”が、倒した」

『末守？』

「ん？」

アヒルの視線を追い、一斉に前方を見る籠也たち。丁度その時、後方を振り返ったアニキが、自分の方を見つめる皆と目を合わせる。

「あ、真田さあ〜ん！」

「リ、リーゼントくん…？」

並ぶ連中の中に囁の姿を見つけ、アニキが嬉しそうに、締めまらない笑みを浮かべる。大きく手を振り上げるアニキに、囁はひどく戸惑った表情となった。

「奇遇だねえ！あ、これってあれかな？やっぱり俺と真田さんの、運命ってやつじゃあ」

「二千パーセント、運命じゃないわ」

「ううう…」

囁に全力で否定され、アニキが落ち込むように俯く。

「正気か？神。このような者が、末宮守だともいう気じゃ…」

「んあ？呼んだか？」

「……………」

アヒルへと話しかけようとした籠也であったが、呼んだつもりもないのに返事をするアニキに、途中で言葉を止めてしまう。

「末宮、守…？」

「だから、何だよ？二回も呼ばなくなたって、聞こえてるっての」
改めて名を呼びかけた籠也に、アニキが少し眉をひそめながら答える。

「本当なのか…」

「カッコイイ名前だから、もっとカッコイイ人、想像しちゃってた」
「何なんだよ！人の名前に勝手に、文句つけてんじゃねえ！」

呆然と呟く簞也と、どこか残念そうに呟く七架に、アニキが不満げに声をあげる。

「ってか、お前の名字は“安二本”だろ？」

「小三の時に、母親が再婚したんだよ。だから今は、安二本守」

「安二本守：そうか。どこかで聞いたことある名前だと思ったら：」
聞き覚えのあったその名を、どこで聞いたのかを思い出し、囁が納得したように頷く。

「では、あなたが末守、五十音士の一人“末守”であるということか？」

「へ？」

簞也からの問いかけを聞き、アニキが驚いたように、目を丸くする。

「なんで、お前らが五十音士のこと、知ってんだあ？」

「私たちも五十音士なんです」

「はあ！こんなカッコイイ肩書きがまるで似合わない俺が、五十音士ですみませえ〜ん！」

「お前らもっ？」

七架と保の言葉を聞き、アニキがさらに驚きの表情を作る。

「ああ。僕が加守、それから左守、太守、奈守だ」

「え！？真田さんも！？」

簞也の説明を聞いたアニキが、目を輝かせて、囁の方を振り向く。

「五十音士同士なんて、なんて素敵！これってやっぱり、俺と真田さんの運め：！」

「三千パーセント、違うわ」

「うう：増えた：」

きっぱりと切り捨てる囁に、アニキが深々と肩を落とす。

「本当にお前が、“末守”なんだな！？」

「あ？」

勢いよく問いかけてくるアヒルに、俯いていたアニキが、ゆつくりと顔を上げる。

「だから、そうだったってんだろ？　つつーか、まさか、お前も五十音士なのかあ？　朝比奈」

「あ？　あ、ああ」

「へえゝ意っ外だなあ」

頷いたアヒルを、アニキが感心するように見つめる。

「お前みたいな、見るからに頭悪そうな奴が、五十音士だなんてよお」

「てめえにだけは、言われたくねえわ！」

小バカにしたように言い放つアニキに、アヒルが思いきり怒鳴り返す。

「今は言い争っている場合ではない。神、早く本題に入れ」

「え？　あ、ああ。おう」

「神…？」

箆也が口にしたその単語に、アニキの表情が一気に曇る。

「実はよ、末守のてめえにちょっととした頼みってのが、あってだなあ」

「安の神…」

「へ？」

話を切り出そうとしたアヒルが、アニキが小さく落としたその声に、目を丸くする。

「“安の神”…？」

語尾の音を上げ、問いかけるように言葉を口にしたアニキが、どこか険しい表情を、まっすぐにアヒルへと向ける。

「え、えっと…」

「ああ、そうだ」

険しい表情を見せるアニキに戸惑い、答えを詰まらせていたアヒルの代わりに、箆也が大きく頷く。

「我らが安団の神、“安の神”朝比奈アヒルだ」

「……！」

アヒルが神であるというその事実、ひどく衝撃を走らせた表情を見せるアニキ。今までも神であることを何度も驚かれてきたアヒルであったが、今までとは少し違う様子のアニキに、不思議そうに首を傾げる。

「安二木？」

「アヒるん、早く本題に……」

「え？ あ、ああ」

アニキの様子に戸惑っていたアヒルであったが、囁に促され、少し慌ててアニキへと向き合う。

「安二木、末守であるお前に頼みたいことがあるんだ」

改まった様子で、アヒルがアニキへと言葉を投げかける。

「実は、とある敵に、俺の言玉を粉々に砕かれちゃった。俺は、その敵ともう一度戦う為にも、何とか言玉をもとに戻したい」

アヒルが真剣な眼差しを、アニキへと向ける。

「今の美守の人から、旧世代の神の頃、マ行の五十音士が神附きやつてたってこと聞いて、もしかして、末守なら、俺の言玉を戻せるんじゃないかって……」

「冗談じゃねえ」

「え？」

アヒルが言い終わらぬ内に、アニキが低い声を落とす。

「誰が、んなマネするかよっ」

「安二木……」

顔を上げたアニキは、煩わしげな表情を見せ、吐き捨てるように言い放った。そんなアニキの様子を見て、アヒルがそっと表情を曇らせる。

「あのだなあ、これは僕たちだけの問題ではなく、五十音士であるあなたにも関係のある話で……！」

「任せて、箆也」

アニキへと怒鳴りあげようとした箆也を止め、箆也とアニキの間

に、割って入る囁。

「ねえ、リーゼント君…」

「真田さん」

囁がまっすぐにアニキを見つめると、アニキも少し、その表情を柔らかくする。

「あなたがアヒるんを嫌っていることは知っているわ…けどこれは、そんな好き嫌いで済ませられる問題じゃないの…」

透き通るような囁の聲が、辺りに響き渡る。

「すべての言葉を守る為なの。だからお願い…アヒるんではなく、私たちの神の為に、五十音士の一人として、力を貸してく…」

「いくら真田さんの頼みでも、こればかりは聞けねえよ」

遮るアニキの声に、囁が眉をひそめる。

「あのなあ…!」

「朝比奈がどうか、そんなんじゃないんだ」

「何?」

もう一度、声をあげようとした籠也であったが、アニキの言葉に戸惑った表情を見せる。

「俺は、“安の神”が、“神”の存在が許せねえ」

鋭い瞳を見せたアニキが、その瞳でまっすぐにアヒルを見つめる。

「“神”の存在が、俺たちマ行の五十音士の運命を歪めたんだからな…!」

「え…?」

力強く叫ぶアニキに、アヒルは戸惑いの声を漏らした。

Word. 51 旧世代ノ神々 (1)

砕かれた言玉をもとに戻すため、五十音士の一人“末守”^{まもり}を探す
アヒルたち安団であったが、そんなアヒルの目の前で、“ま”の力
を使って見せたのは、毎朝アヒルに、何かと因縁をつけてくる、隣
校のアニキこと、安二木守であった。

「ど、どういうことだ？」

アヒルが守へと、戸惑いの表情を向ける。

「“神”の存在が、お前たち、マ行の五十音士の運命を歪めたって
…」

「……………」

アヒルの問いかけを受け、守がさらに、厳しい表情を見せる。

「てめえ等は言ったな。旧世代の神以前の神附きは、マ行の五十音
士が務めていたことを聞いたと」

確認するように、言い放つ守。

「ああ、言っただけ…」

「なら何故、神附きは代わった？」

「え…？」

急な守の問いかけに、アヒルが少し戸惑うような声を漏らす。

「神附きは何故、マ行の五十音士から、今のお前たちのように、カ
行からナ行の四人に代わった？」

「えっと」

答えを持たぬアヒルが、助けを求めるように、すぐ横に立つ籠也
の方を振り向く。

「かつて、旧世代の神が一斉に神の座を降り、一時、すべての神が
空席の状態だったことがあったそうだ」

守の問いに答えるというよりは、アヒルに説明するように、籠也
が言葉を放つ。

「旧世代の神ってえと…」

「ああ。あの為の神や、恵先生のことだ」

アヒルが問いかけ終える前に、箆也が素早く答える。

「その後、新世代の神が着任する際、それに伴って神附きも代わったという風に、僕は聞いている」

「へえ」

箆也の説明に、アヒルが少し驚いたように頷く。

「すべての神が空席状態の時なんつーのが、あったのか」

「まあ、間違ってるとは言わねえけどな」

考え込むように呟いていたアヒルが、前方から口を挟む守の声に、再び顔を上げる。

「けど、真実には程遠い」

「何？」

守の言葉に、箆也が眉をひそめる。

「どういう意味だ？」

アヒルの横から、箆也が厳しく言葉を向ける。

「あなたの言葉を聞いていると、僕の言葉が真実ではないと言っているようだが？」

「ああ、そう言ってんだよ」

鋭く問いかける箆也に、動じる様子もなく、普段とはまったく異なる落ち着いた様子で、守が頷く。

「てめえ等は、知ってんのか？あいつ等が何故、“旧世代の神”と呼ばれているのかを」

「へ？」

「それは先程も言ったように、すべての神が空席となった、その前後を区別するための呼び名だろう？」

目を丸くするアヒルに代わり、箆也が素早く答える。

「なら何故、あいつ等は一斉に神の座を降りた？」

「それは…」

続けて問いかける守に、箆也が言葉を詰まらせる。

「知っているか？囁」

「いいえ、何故かは知らないわ…ただ、“旧世代の神”という呼び名をよく聞くだけで…」

箆也が振り向くと、囁も少し困った様子で表情を曇らせた。

「やっぱり、聞かされてねえみたいだな」

守が呆れたように肩を落としながら、言葉を落とす。

「でなきゃ、あいつ等の言葉を、おいそれと信じられるはずがねえぜ」

「どういう、ことだよ？」

煩わしげな表情を見せる守に、アヒルが眉をひそめ、問いかけを向ける。

「彼等は、旧世代の神々は、一体…？」

「……二十数年前」

真剣な表情を見せた囁の問いかけを受け、より一層険しい表情を見せた守が、アヒルたちから視線を逸らして、ゆっくりとその口を開く。

「五十音士の歴史、始まって以来の、大事件が起きた」

「大事件？」

七架や保も真剣な表情で、守を見つめる。

「神々の反乱だ」

「神々の、反乱？」

守の言葉を繰り返し、アヒルがひどく困惑した表情となる。

「当時の五神、のちに“旧世代の神”と呼ばれる神々が、五十音士のすべての言葉を消し去ろうと、韻に対して、反乱を企てたんだ」
『な…！？』

守の口から伝えられる衝撃の事実、アヒルたち安団の皆が、驚きに大きく目を見開く。

「すべての言葉を消し去る！？神が…！？」

「ああ」

「韻に反乱を…」

信じられないといった様子で聞き返すアヒルに、静かに頷く守。
箆也もまだ、驚きを隠しきれない様子で、考え込むように深く俯く。
「なんで…なんで、んなこと…！」

「知るかよつ。自分等だけで言葉の力独占して、韻を支配しようとしたんじゃねえかってのが、当時の見解だったがな」

「支配…？」

守の答えを聞き、アヒルがさらに困惑した表情となる。アヒルの知る為介や恵は、そんな私利私欲のために力を使うような人間には、まったく見えなかった。

「奴等、神々は韻と対立したが、激しい戦いの末、結局は敗れ、そのまま五十音の世界を追放された」

「追放…」

困惑の表情を拭い去れぬまま、アヒルが守の言葉に耳を傾ける。

「だから五十音の世界は一時、すべての神を失ったんだ」

「それが…すべての神が空席となった真相…」

「ああ」

ゆっくりと言葉を落とす箆也に、守が静かに頷く。

「“旧世代の神” ってのは、今の五神と、反乱を企てた神々とを区別するために、奴等につけられた呼び名だ」

「旧世代…」

考え込むように呟いたアヒルが、信じられないもどかしさを呑み込むべく、右拳を強く握り締める。

「そして、マ行の五十音士は、神付きでありながら、神の反乱を防げず、五十音界全体に甚大な被害を与えたと責任を取らされ…」

「神付きを首になった、ってわけね…」

守の言葉に続くように、囁が言葉を放つ。

「それだけじゃねえ…」

「え…？」

その声を低く落とす守に、アヒルが少し眉をひそめる。

「神付きじゃなくなった後も、“裏切り者の神に附いていた”と罵

られ、蔑まれ続けた」

空を見上げながら、険しい表情を見せた守が、強く拳を握り締める。

「ただ自身の神を信じたただけだったのに、誰よりも裏切られたのはこっちだったのに、自分たちまで裏切り者扱いされたんだ…」

握り締められた拳が、怒りにか、小刻みに震える。

「その一族も、後任の五十音士たちも、皆っ…！」

「安二木…」

声を震わせる守を見つめ、アヒルがそつと目を細める。

「神を信じて、神のために命を賭して戦って…なのにつ…」

言葉を途中で止めた守が、悔しさを呑み込むように、強く唇を握り締める。

「神は俺たちに、何一つ与えてなんてくれなかった…ただ、俺たちの運命を歪めていただけだった…」

守の声に強く、感情がこもる。

「だから俺は、神なんて信じない」

「……っ」

素早く顔を下ろした守から鋭い視線を向けられ、アヒルが少し肩を揺らす。

「旧世代だろうが、新世代だろうが関係ねえ。俺は“神”そのものが許せねえんだ」

俯いた守が、そこにある感情を確認するように、そつと自分の左胸を撫でる。

「だから、俺はお前の頼みは聞けねえ」

左胸へと当てていた手を、ゆっくりと下ろす守。

「悪いな…」

「あっ…」

守がアヒルへと背を向け、その場を去るべく歩き出していく。

「安二木…！」

去っていく守の背中へと、大きく呼びかけるアヒル。

「待ってくれ！俺は…！」

「俺は、お前の言葉に止まる気なんてねえよ。朝比奈」
何かを言おうとしたアヒルの言葉を、守が勢いよく遮る。

「お前は、俺の“神”じゃねえんだからな」

「……っ」

向けられたその言葉を否定することも出来ず、アヒルはそのまま、何の言葉を口にすることも出来なかった。守はそのまま歩を進め、遠ざかり、やがてその背が見えなくなる。

「安二木…」

背の見えなくなった前方を見つめ、アヒルが力なく守の名を口にする。

「末守を見つければ、それだけで済むものだと思っていたけれど…」
沈黙を破るように、囁がゆっくりと言葉を発する。

「困ったわね…」

「うん。でも、何か…」

囁の言葉に頷きながら、七架がどこか悲しげな表情を見せる。

「安二木君の言葉、わからなくはなかったな…」

七架の言葉に、囁がそっと目を細める。

「これから、どうします？神月くん」

「とりあえず一旦、為の神の家に戻ろう」

不安げに問いかける保に、籠也は間を置くことなく、はっきりと答えた。

「確かめなければ、ならないことがある」

籠也の言葉に、皆、厳しい表情を見せた。

Word 51 旧世代ノ神々 (2)

言ノ葉町。町の小さな何でも屋『いどばた』。

「扇子野郎…！」

店の戸を乱暴に両開きし、まるで押し入るように店内へと駆け込んで来たのは、アヒルであった。少し息を乱し、額には流れる汗も見えるところから、全力疾走でここまで来たのであろう。

「扇子野郎！おい、扇子野郎！」

「そんなに大声出さなくても、聞こえてるよお」

店の奥から返って来る声に、アヒルが思わず眉をひそめる。

「よいしょと」

ジャンルの定まらない、何冊もの本を抱えていた為介が、すぐ近くの棚の上に、とりあえずとばかりにその本を置き、軽く肩を回すと、漸くアヒルの方を振り返る。

「いらっしやい、朝比奈クン」

「扇子野郎…」

どこか不敵な笑みを向ける為介に、アヒルが表情を曇らせる。

「どうだったあ？ 目的の末守クンとやらは、見つかったのかなあ？」

「ああ…」

軽い口調で問いかけてくる為介に、アヒルは険しい表情を見せたまま、少しもその表情を崩すことなく頷く。

「扇子野郎、あんたに聞きたいことが…」

「じゃあ、聞いたかなあ？ ボクラ、“旧世代の神”が五十音士のすべての言葉を消そうとして、五十音界を追放されたってこと」

まだ何も聞いていないというのに、アヒルが問いかけようとしていたことの答えを、ペラペラと話す為介に、アヒルが思わず驚きの表情を見せる。

「その顔、凶星だあ」

大きく目を見開いているアヒルを見て、為介がどこか楽しげに笑

う。

「本当、なのか…?」

改まるようにして問いかけるアヒルに、笑みを止め、そっと目を細める為介。

「本当だよ」

為介の答えに、アヒルは動揺を隠しきれず、瞳を大きく揺れ動かす。

「なんで…」

アヒルが戸惑いの表情を、為介へと向ける。

「なんで…んなこと…」

「詳しく、お話を聞かせていただきたいわね…」

「ああ」

アヒルに続くようにして、店内へと入って来る、厳しい表情を見せた籠也と囁。その後ろに立つ保と七架も、緊迫した表情を見せており、『いどばた』の店内は、かつてない緊張感に包まれた。

「話の内容によっては、あなたを拘束し、韻へと連行することになるかも知れないがな」

「おお、怖っ」

鋭い言葉を浴びせる籠也に、為介はどこかふざけた口調を飛ばし、身震いしているかのように、自分の両手で自分を抱き、肩を摩る。

「でも、いっくら怖くっても、まだ全部は話せないんだよねえ」

為介が不意に顔を横へと向け、アヒルたちから視線を逸らす。

「ボクはどうでもいいんだけどお、“宇の神”サンが、まだ話す時じゃないって、そう言ってるんだあ」

「何…?」

「宇の神?」

その為介の言葉に、アヒルと籠也が同時に眉をひそめる。

「どういうことだ? 宇の神とは一体、何者だ?」

「だから言ってるでしょお? まだ話す時じゃないってえ」

「ふざけるな!」

軽い口調ばかりを続ける為介に、籠也がついには声を荒げる。

「そんな言葉が通用するとしても、思っているのか！？知っていることを、すべて話せ！でなければ、今すぐ韻へ：！」

「籠也」

アヒルの呼びかけに、為介を責め立てる籠也の言葉が止まる。

「神」

「もういいって。何をどう言っただって、この人は話さない。そう決めるみてえだし」

「だが：」

アヒルの説得には応じるものの、まだどこか不満げな表情を見せている籠也。

「あんたと恵先生には感謝してる。何度も助けられたし、強くもしてもらった」

表情を柔らかくし、真正面から向き合うアヒルに、横を見ていた為介もゆっくりと振り向く。

「だから、俺はあんたたちを信じる」

「いいのお？ボクがすごい悪者で、実は君たちを利用して、ひどいことしようとしてるかもよお？」

「そんな時はそんな時かな。けど、信じ切らずに後悔するよりは、ずっとマシだと思う」

試すように問いかける為介に、アヒルは迷うことなく笑顔を見せた。アヒルの晴れやかな笑みを見て、為介は少し困ったように眉をひそめる。

「そういうとこ、そっくりだよねえ」

「へ？」

小さく落とされた為介の言葉が、かすかに耳に届き、アヒルが首を傾げる。

「まあ精々頑張って、末守クンを説得することだねえ」

軽く手を振ると、為介はそのままアヒルたちに背を向け、再び家の奥へと姿を消していった。

「良かったの…？アヒるん…」

為介の去っていった家の奥を見つめていたアヒルに、囁が横から声を掛ける。

「絞めあげてでも、全てを話させた方が良かったのではないのか？」

「無理やり知ったって、そんなの意味ねえさ」

「あれ？」

まだどこか納得のいいない表情を見せながら、問いかける簗也へと、笑みを向けるアヒル。そこへ家の中から声が聞こえてくると、すぐに雅が姿を現した。雅は右手にハタキを持ち、頭には白いタオルを巻いていて、すっかり掃除スタイルだ。何だかんだで、為介の模様替えを手伝っていたようである。

「戻っていらしたんですか」

「雅さん」

「どうでした？無事、末守は見つかりましたか？」

雅の問いかけに、アヒルたちが皆、一斉に表情を曇らせる。

「やはり、断られましたか」

「へ？やはりって？」

「僕も、彼とは同じような境遇ですからね」

聞き返したアヒルに対し、雅はまるで、アヒルたちと守との間に、どんなやり取りがあったのかを見透かすように言い、どこか悲しげな笑みを浮かべた。

「さあ、入って下さい。詳しく、お話しましょう」

その後、雅はアヒルたち五人を客間へと通し、皆へと茶を配ると、自分もアヒルの正面に来るように、テーブルのすぐ横に腰を下ろし、一息ついてから、ゆっくりと口を開いた。

「さてと…末守の彼からは、どんな話を？」

雅が皆を見回し、そっと問いかける。

「旧世代の神々が、すべての言葉を消し去るために、韻に対して反乱を起こしたと」

「戦いに負けて、皆、追放されて、五十音界には神様が居なくなっちゃったんだよね」

「その責任を取らされて、マ行の五十音士は神附きを首になったっていうんでしょ…？」

箆也、七架、囁の三人が、順序立てて答えていく。

「そんな感じです！」

「黙っている、高市」

「ん！」

何故か自信満々に親指を突き立てた保であったが、箆也に鋭く言われ、あっさりと両手で口を塞ぐ。

「君達の言葉の通りです。旧世代の神々の反乱により、五十音界から、すべての神が姿を消しました」

雅が湯呑みを手にしながら、ゆっくりとした口調で話を始める。

「その後、“ゐ”“ゑ”“を”には新しい文字、“い”“え”“お”が創られ、新しい神ができました」

「……………」

“お”の文字を持つ一族に生まれている箆也は、自分と関係のないその話に、眉間に皺を寄せる。

「“う”の文字には引き継ぐ文字もなく、今も五十音の世界に、字の神は存在しないままです」

「じゃあ」

続く雅の説明に、アヒルが思わず口を挟む。

「“あ”は？」

素朴な問いかけをするアヒルに、そっと目を細める雅。

「当時の安の神は、その戦いで命を落としたため、“あ”の文字はそのままに、新しい神が就くことが出来たのです」

「命を、落とした…？」

戦いの悲惨さを思い、アヒルがそっと眉をひそめる。

「その戦いで命を落としたのは、安の神だけではありません」

「え…？」

雅の言葉に、アヒルの表情がさらに曇る。

「当時の末守、武守むもりに女守めもりも…多くの五十音士が、その戦いで命を落としました」

「末守に武守って…」

「マ行の五十音士、つまりは当時の神附きたちか…」

「ええ…」

確かめるように言う箆也に、雅が静かに頷く。

「彼等は、反乱を起こした自身の神に、最期の最期まで付き従い、そして死んでいきました」

悲しげな表情を見せる雅に、皆の表情も曇る。

「当時の末守は、今の末守である末宮守の祖父、末宮 正一まやごちちであつたそうです」

「え？」

その言葉に、アヒルが目を丸くする。

「安二木のじいさんが、末守？」

「血によって能力の受け継がれる文字であれば、そういったケースは珍しくない」

首を傾げるアヒルに、箆也が横から解説を挟む。

「高市や僕…いや、於崎の家も、血により、その文字を受け継ぐ」
「そっか」

箆也の説明に、納得するように頷くアヒル。確かに、箆也の家は代々、於の神を受け継いでいるし、保も、父と母が共に五十音士であつたからこそ、二つの文字の力を有しているのである。

「ですが、その戦いで彼の祖父は亡くなりました。旧世代の神々が起こした反乱の中で、ただ神を守るために」

「それなのに、裏切り者の神に附いたと、残された一族たちは、蔑まれたというわけね…」

「そんな…」

囁の言葉を聞き、横に座っている七架が、どこか悲しげに俯く。

「彼が、“神”の存在を許せないのも、当然でしょう」

「へ？」

まるで、アヒルたちと守の会話を聞いていたかのように、守の発したその言葉を繰り返す雅に、アヒルが思わず戸惑った声を漏らす。アヒルたちは一切、守の様子は話していないというのに、雅には、守の言った言葉がすべて、わかってしまっているようであった。

「雅さん…」

「不思議ですか？何故僕が、彼の言ったことがわかるのか」

戸惑いの瞳を向けるアヒルに、雅がそっと笑みを向ける。

「答えは簡単。僕が、彼と同じだからです」

「同じ？」

「どういう意味だ？」

首を傾げるアヒルの横から、箆也が鋭く問いかける。

「僕も末宮や於崎と同じように、血で文字を受け継ぐ家系の生まれでしてね…」

雅が持ち上げていた湯呑みを、そっとテーブルの上に置く。

「父は、旧世代当時の美守でした」

「な…」

俯いた雅の言葉に、アヒルたちが驚きの表情を見せる。

「じゃあ、雅さんのオヤジさんも、その戦いで…？」

「いえ、父は生き残りました。でなければ、僕も生まれていませんね」

「あ、そっか」

微笑んで答える雅に、大きく頷くアヒル。

「ですが、生き残ったからこそ、父への蔑みには、他の者たち以上のものがあつたそうです」

雅の笑みが消え、その表情が徐々に曇り出す。

「父はもう十年以上も前に病気で亡くなりましたが、最期の最期まで、自身の“神”を恨み続けました」

天井を見上げた雅が、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「最期の最期まで僕に、“神を許すな”と、そう言い続けました…」
雅がその瞳を、そっと細める。

「だから僕には、神を許せないという、彼の気持ちもよくわかる…」
「……………」

雅の言葉を聞きながら、アヒルが何やら考え込むように、眉をひそめて、そっと俯く。

「美守の神という…」

「為の神。井戸端為介です」

箆也が問いかけを口にする前に、雅は答えを言う。

「為介さんとは、僕が美守を受け継いで、忌退治をしている時に、本当に偶然に出会いましたね」

話を続けながら、雅が懐かしむように口元を緩める。

「初めは、何の因果かと思いましたが…」

「なんで、扇子野郎と一緒に？」

苦笑いを浮かべる雅に、アヒルが真剣な表情で、問いかけを向ける。

「その、オヤジさんがそんなに恨んでた“神”、なのに…」

自身も神であるからか、雅にどこか負い目を感じるように、アヒルが少し遠慮がちに言葉を向ける。

「何で、でしょうね…」

自分でも戸惑うような言葉を発する雅に、アヒルは不思議そうに首を傾げた。

「最初は父の言葉の通り、恨もうと、許さずにおこうと、そう思っていたんですけど…」

——雅クウーン！このクマトカゲ人形、お店に置いたらどうかなあ？——

「あの人を見ていると、何だか、そんな気も失せてしまって」

為介の暢気な様子を思い出し、雅が柔らかな笑みを零す。

「何だかんだで、気付いたら、共に在りました」

微笑む雅を見て、アヒルがそっと目を細める。

「あなたは、何故、旧世代の神たちが言葉を消そうとしたのか、その理由を知っているのか？」

「いいえ、まったく」

あっさりと首を横に振る雅に、簞也が少し眉をひそめる。

「それでも、共に在れるのか？」

続く簞也の問いかけに、雅は笑みを浮かべたまま、そっと視線だけを落とす。

「今、共に在ることが、答えだと思っています」

迷いなく答える雅に、それ以上問いかけようとはせず、黙り込む簞也。そんな簞也の横で、アヒルも何やら考え込むように目を細める。

「だから朝比奈君も、諦めてしまわないで下さい」

「え？」

雅に笑みを向けられ、アヒルが戸惑うように声を漏らす。

「向き合ってあげて下さい。末守である彼とも、彼の一族が背負ってきたものとも……」

まっすぐな雅の視線が、真正面からアヒルを捉える。

「神が、背負わねばならぬものとも」

雅のその言葉に、少し俯き、そしてゆっくりと顔を上げたアヒルは、どこか決意したような、そんな表情を見せていた。

Word 51 旧世代ノ神々 (3)

翌日。言ノ葉高校隣校、放課後。

「ふっはあ、今日の授業もダルかったあ」

「なあ？この後、カラオケっちゃわね？」

「お！いいねえ！」

一日の授業を終え、すっかり自由空間となった放課後の教室で、小さな机を囲みながら、楽しげに話をしている赤や青、思い思いの派手な髪型をしている男子生徒の集団。毎朝、守と一緒にアヒルを待ち構えている、子分たちであった。そこには、ブラシやパンチの姿もある。

「よっしゃあ、じゃあ早速……！」

「おい」

『ん？』

窓の外から声が聞こえ、同時に振り向く子分たち。教室の窓から顔を出したのは、アヒルであった。

『ぎゃあああ！出たああ！朝比奈ああ！』

「だから、俺は化け物かっての……」

悲鳴のような叫び声をあげる子分の面々に、アヒルが思わず呆れた表情を見せる。

「何だあ！？討ち入りかあ！？」

「道場破りかあ！？」

「違えよ。そもそも、ここは道場じゃねえだろうが」

慌てふためく子分連中に、深々と肩を落としたアヒルが、力なく突っ込みを入れる。

「お前」

「へ？」

アヒルが振り向き、子分の中の一人、青いパンチパーマの青年、パンチの方を見る。

「その後、母ちゃんは大丈夫だったか？」

「あ、ああ」

母親の様子を気にかけるアヒルに、パンチは少し驚きながらも頷く。パンチの母親は昨日、パンチの思わずの言葉により、忌に取り憑かれてしまったのである。

「てか、てめえ！急に衝撃波撃っちゃう病なんて無いって、医者が言ってたぞ！？」

「んなの、当たり前だろうが」

「ああ！騙しやがったな！？」

「文句あんのか？」

「いいえ、ありません」

アヒルに睨みつけられ、パンチがすぐさま首を横に振る。

「おい、ブラシ」

「んあ？」

アヒルが今度は、もうすっかり顔馴染みのモヒカン頭、ブラシの方を見る。

「安二木は？」

「へ？アニキ？」

集まっている子分たちを見回し、守の姿を探しながら問いかけるアヒルに、ブラシが目丸くする。

「お前、アニキに何する気だぁ！？惨殺する気かぁ！？」

「やっぱ討ち入りじゃねえかぁ！」

「だから違ええつつってんだろうが！」

次々に非難の声をあげる子分たちに、アヒルがついに堪え切れなくなったのか、勢いよく怒鳴り返す。

「アニキなら、もう帰ったぜ」

「へ？もう？」

他の子分の面々とは違い、落ち着いた様子で答えるブラシに、アヒルが少し顔をしかめる。

「まじ？さっき授業終わったとこだろ？俺、すっげえ急いで来たん

だぜ」

「最近アニキ、帰るの早いよなあ」

「ああ、付き合い悪い」

「仕方ねえよ。パッツンのこと、心配してんだ」

「パッツン？」

自分たちの会話に出て来る名に、アヒルが首を傾げる。

「パッツンて？」

「俺らの仲間だよ。お前も見ただことあんだろ？坊主頭に前髪だけ生やしてる、蝶ネクタイの」

「ああ、あいつか」

ブラシに説明され、思い出した様子で頷くアヒル。守の子分は皆、目を引く派手な頭の連中ばかりであるが、あの坊主前髪の男も、鮮烈な記憶として、アヒルの中に刻まれていた。

「最近、パッツンの様子の変でよお」

「変？」

「おいおい、ブラシ。いいのかあ？よりもよって朝比奈に、んなペラペラと」

「別にいいって。ついこの間、知り合ったばかりの仲でもねえし」仲間からの指摘が入ったが、ブラシは軽い笑顔で、その言葉をかまし、再びアヒルの方を見る。

「パッツンて、前はうるせえほど、よくしゃべる奴だったのに、すっかりしゃべんなくなっちゃまってさあ」

「え…？」

ブラシの言葉に、アヒルが首を傾げる。

「何つーか、こう、あいつの意志のある言葉を、全部封じられたみたいなの、んな感じ？」

あまり的確とはいえない表現をするブラシであったが、アヒルはその言葉を聞いた途端、すぐにその表情を険しいものへと変えた。それは、檻也が追っていた謎の言葉変化と、同じ現象であった。

「んでアニキは、そんなパッツンを心配して、最近は学校終わって

からもずーっと、パッツンと行動してんだよ」

ブラシが話を終わると、アヒルは少し考え込むように俯く。

「ホント、お人好しだよなあ。うちのアニキは」

「そこがアニキのいいところじゃん」

「けど、大丈夫かなあ？パッツンの奴」

パッツンという者を気にかける、自分の一人の言葉に、面々が皆一斉にその表情を曇らせる。仲間を心配しているのは守だけではなく、この場に居る皆もまた、同じ気持ちなのだろう。

「ま、パッツンのことは、アニキに任せよって！」

「ブラシ」

暗くなった皆へと、励ますように声をかけるブラシを、アヒルがもう一度、呼ぶ。

「そのパッツンて奴の家、教えてくれねえか？」

言ノ葉町の静かな住宅街を歩く、昼間の道が似合わぬ外見の二人の青年。一人はリーゼント頭にサングラス、もう一人は派手な赤学ランに蝶ネクタイという、何とも目を引く格好をしている。時折、周囲を歩く主婦などに疑うような視線を向けられながらも、二人は気にすることなく、足並みを揃えて道を歩いた。

「今日の数学、まじ意味わかんなかったなあ！」

「……………」

リーゼントの青年、守が、横を歩くもう一人の青年、パッツンに向かって、明るく声を掛ける。声が届かないはずのない距離だといふのに、パッツンから、言葉の返信はなかった。

「まあ歴史も物理も意味わかんなかったけどなあ！」

パッツンが黙り込んだままの状態のため、守の大きな声が、さらに大きく響き渡る。

「明日は国語、あったつけかなあ！？」

「四限にある」

やっと返って来た言葉に、守がそつと眉をひそめる。それはパツツンの言葉ではなく、ただ単に事実を伝えるだけの言葉であった。

「家、着いた」

パツツンがまるで抑揚のない言葉を落とし、大きな道沿いにある、きれいな一軒家の前でその足を止める。急に足を止めたパツツンに、先へと行きそうになった守はすぐに足を止め、二、三步足を戻し、パツツンのすぐ横へと立つ。

「さようなら」

「あ……！パツツン……！」

他人行儀な挨拶を呟き、すぐに守に背を向けて、家の中へと入っていつてしまうパツツン。守は思わず手を伸ばし、パツツンを引き止めようとしたが、守の声にパツツンが振り返ることはなく、そのまま勢いよく家の扉は閉まった。

「パツツン……」

閉まった扉を見つめたまま、守がサングラスの奥の瞳を、どこか不安げに揺れ動かす。

「ぶっはあ」

守が深々と溜息を吐きながら、パツツンの家へと背を向け、再び大通りの方を振り向く。

「んあ？」

前方に立っている人影を視界に入れ、眉をひそめる守。

「何しに来たんだよ？」

少し顔をしかめた守が、不機嫌そうに問いかける。

「お前を、コッテンパンのパンナコッタにしに」

守の見つめる先に立っていたのは、涼しげな表情を見せたアヒルであった。ブラシにパツツンの家の場所を聞き、急いで守の後を追って来たのである。

「ケ！返り討ちーのチンパンジーにしてやるっての！」

そんなアヒルへ、守がいつものように悪態づく。

「だいたい今は、てめえとケンカする気分じゃねえんだよっ」

吐き捨てるように言いながら、アヒルの方へと向けていた体の向きを変え、守はパッツンの家の前を通り過ぎて、そのまま道の先へと歩き出していく。

「俺が何百回、ケンカする気分じゃねえ時に、お前の相手してやったと思ってるんだよ？」

「うるっしやい！」

前へと歩いていく守の後を、少し距離を取って続きながら、アヒルが言葉を掛ける。背中に届く声に、守は口を尖らせ、声を張り上げた。

「昨日の溜息の原因は、あいつか？」

「……っ」

アヒルの問いかけに、守が足を止めぬまま、そつと俯く。

「てめえには関係ねえだろうが」

「ああ。まあ、ただのてめえのケンカ相手なら、関係はねえな」

小さな距離をあけたまま、二人の会話が続いていく。

「けど、“安の神”である俺には、関係のある話だ」

真剣な表情を見せるアヒルに、まるで背後のアヒルの表情が見えているかのように、目を細める守。

「安二木、俺は」

「あいつよお」

不意に足を止めた守が、アヒルの声を遮って、言葉を発する。

「あいつよお、死ぬほど歌が下手くそなんだよ」

言葉を放ちながら、ゆっくりと顔を横へ向ける守。守が振り向いたその先、大通りの向こう側、土手の下には、広がる大きな言ノ葉川が、太陽の光を浴びて輝いていた。

「こっちの耳がイカれそうなほど、まじで下手くそで、そのくせに歌手になりたいとか言って、いっつも俺らをカラオケに誘うんだ」

輝く川を見つめながら、守はどこか懐かしむように、言葉が続ける。

「毎日毎日、難聴になるんじゃないかねえかってくらい、下手くそな歌聞かされ続けてよお、まじで迷惑だったけど…」

守の口元が、そっと緩む。

「今のあいつを、あんな言葉しかないあいつを見てるくらいなら、難聴にでもなった方が、ずっとマシだった」

「安二木…」

急にその表情を険しくする守に、見つめるアヒルがそっと目を細める。

「安二木、たぶん、あいつは…」

「わかってる」

真剣な表情で話を始めたアヒルの言葉を、守がすぐさま遮る。

「あいつの自由ある言葉が消えちゃったのは、明らかに人為的なものだ」

川を見つめ、守がその瞳を鋭くする。

「あの現象が起こってるのは、あいつだけじゃねえ。この町に、言葉の変化が起こってる」

「ああ」

仲間の変化に悩みながらも、冷静に今の状況を分析している守。その辺りは、やはり守も五十音士なのであろう。そんな守に、アヒルは大きく頷きかけた。

「俺が、戦わなきゃならねえ相手の仕業だ」

険しい表情を見せるアヒルの方を、守がゆっくりと振り向く。

「五十音士か？」

「名前は阿修羅。元“安の神”だった男だ」

「元、神…堕神か」

アヒルの言葉を聞き、眉をひそめた守が、何やら考え込むように俯く。

「俺は、絶対にあいつを倒さなきゃならねえ」

阿修羅の顔を、向けられた言葉の一つひとつを思い出し、アヒルが溢れる怒りを確かめるように、強く右手を握り締める。

「そのためには、言玉が必要なんだ」

握り締めていた手を開き、アヒルがゆっくりと顔を上げる。

「だから、頼む。安二本」

アヒルが真剣な眼差しを、まっすぐに守へと向ける。

「俺に力を貸して欲しい」

偽りも迷いもない、強く輝く瞳を向けてくるアヒルを真正面から捉え、守がそっと目を細める。そして、考えを巡らせるように、視線を少し泳がせた後、守は再びアヒルの方を見た。

「俺は、神が嫌いだ」

「ああ」

「てめえのことも、嫌いだ」

「ああ」

守の言葉を受け止めるように、アヒルが大きく頷きかける。

「けど、何をやってたって俺は、あいつの言葉をもとに戻してやりてえ」

自由ある言葉を失ったパッツンの姿を思い出し、守が強く、眉間に皺を寄せる。

「お前、俺に誓えるか？」

今度は守が、まっすぐにアヒルを見つめる。

「その堕神を倒して、あいつの言葉を取り戻すって」

「ああ、誓う」

守の言葉に、アヒルは一瞬も迷うことなく、すぐさま大きく頷いた。

「俺が絶対に阿修羅を倒して、お前の仲間の言葉を、自由な言葉を、取り戻してやる」

力ある言葉で、アヒルがはっきりと言い放つ。

「すべての人の言葉を守ることが、神である俺の役目だ」

「……っ」

自信さえ感じるその言葉には、アヒルの神としての誇りが込められているようであった。神嫌いの守とはいえ、その誇りを否定する

ことは許されないような、そんな力強さを感じた。

「……わかった」

少しの間を置いて、守がゆっくりと頷く。

「てめえに力を貸す。俺がてめえの言玉を、直してやるよ」

「本当かあ!？」

念願であった守の答えを聞き、すぐさま大きな笑みを零すアヒル。

「って、てめえごときが、本当に言玉直せんのかあ？」

「うるっしやい! 協力すんの、やめたるか! こらあ!」

途端に疑いの目を向けて来るアヒルに、守が勢いよく怒鳴りあげる。

「てめえはとにかく、俺に任せとけばいいんだよお」

何とか怒りを鎮めた守が、偉そうな態度を取りながら、自信を持った様子で胸を張る。

「末守である、この俺になあ!」

固く腕を組んだ守は、大きな笑顔を見せた。

Word. 51 旧世代ノ神々 (4)

言ノ葉町の静かな住宅街を抜けたその先に、言ノ葉山と呼ばれる、小さな山があった。地元の人間の間では有名な山で、遠足やピクニックで一度は訪れたことのある場所である。そんな、町人たちがよく行くハイキングコースとは別の道を行くと、木々に囲まれただけの、何もない静かな場所へと辿り着いた。景色の見渡せる場所もなく、木々に囲まれた広場の中央には、大の大人が三人ほど寝ころべそうなほど、大きな岩があった。

「何だって、んな場所に来たんだよ？」

「ここが言ノ葉町で一番、言葉の力の集まりやすい場所だからだ」

「言葉の力の集まりやすい場所？」

「ああ」

言玉の破片を大切そうに両手で抱えたアヒルが、案内として先を行く守の言葉に、不思議そうな顔を見せる。

「言ノ葉町は昔から、言葉の力が集約しやすい土地とされてるんだ。だから、多くの五十音士が、この町に身を置いている」

「へえ」

周囲を見回しながら、アヒルが感心したような声を漏らす。

「……………」

風で木が揺れる音しか聞こえないその場を、アヒルがゆっくりと見つめる。静かに佇む木の一本一本から、包みこまれるような、何やら不思議な力を感じた。確かにここは、特別な場所であるらしい。「だから、この場所が一番、砕かれたアヒルんの言玉をもとに戻しやすいというわけね…」

「そうなんだよお！真田さあ〜ん！」

アヒルの後ろを歩く囁の言葉に、勢いよく振り返った守が、締まりのない笑みを浮かべ、体をくねくねと捻らせる。

「というか、あなたごときが本当に、神の言玉を直せるのか？」

「うん。ちょっと疑わしいっていうか…」

「正直、そんなこと出来るようには、見えないですよねぇ」

囁と同じようにアヒルの後をついてきている籠也、七架、保の三人が、口々に言葉を放つ。

「はぁ！見るからにダメ人間の俺が、人を外見で判断しちゃってすみませえ〜ん！」

「えええーい、うるしい！直すの、やめたるか！」

頭を抱えて謝り散らす保に、守が勢いよく怒鳴りあげる。

「神が神なら、神附きも神附きだなぁ！本当、失礼な奴等だ！」

「まあまあ…ろくな人間に見えないのは事実なんだし、ここは諦めて、落ち着きましょう…」

「はい、真田さん！」

「今、一番失礼なこと言われたぞ？お前…」

囁の宥めなのか、ただの悪口なのか、よくわからない言葉に、満面の笑顔で頷く守を見て、アヒルが思わず呆れきった表情となる。

「じゃあねえ。んじゃ、とっとと始めるか」

守が広場の中央にある大きな岩の前で足を止め、態勢を整えるように、ぐるぐると肩を回す。止まった守に合わせ、アヒルたちも岩の前へと並んだ。

「言玉の欠片持って、その岩の上に上がれ。朝比奈」

「へ？お、おう」

守からの指示に戸惑いながらも頷いて、一度、言玉の欠片たちを囁へと預け、両手について、その大きな岩の上へとよじ登るアヒル。岩へと座ると、見下ろす形となった囁から、再び言玉の欠片を受け取る。

「これでいいのか？」

「ああ」

少し不安げに問いかけるアヒルに、守が短く頷く。

「てめえはそのまま、そこでじっとしてろ」

アヒルにそう指示を送って、守が今度は岩へと背を向け、後方に

並んでいる籠也たちの方を振り向く。

「てめえ等も協力してくれるか？」

「我が神の為だ。当然だろう」

「そうか」

迷いなく答える籠也に、少し口元を緩める守。

「じゃあ、岩の四方にそれぞれ立って、言玉を解放してくれ」

「言玉を？」

「ああ。俺たち全員の言葉の力を集約させて、朝比奈の言玉を修復する」

「わかった」

守の言葉に、四人を代表するように籠也が頷くと、四人はそれぞれ、アヒルの座る岩の前後左右に散っていき、制服のポケットから、同じ真っ赤な言玉を取り出した。

「第六音、“か”」

「第十一音、“さ”」

「第十六音、“た”」

「第二十一音、“な”」

言玉を構えた四人が、それぞれの文字を口にする。

『解放…！』

四人の声が揃い、高らかと響き渡ると、四人の言玉から、強い赤色の光が一気に放出された。

「眩し！」

周囲四方から目の中に飛び込んで来る強い光に、アヒルが思わず声を漏らし、目を細める。四人の言玉から発せられる光は、いつも以上に強かった。

「ここがいくら、力の集約しやすい場所とはいえ…これほどとはな」言玉から姿を変えたそれぞれの武器を構え、勇ましい表情を見せている四人を見回し、守がどこか感心したような声を漏らす。

「そのまま力の集中を続けてくれ」

守の言葉に従うように、皆、解放されたばかりの武器を掲げ、力

を高めるため集中し、深くその瞳を閉じる。その集中により、四人の武器から放たれる光はさらに大きくなり、周囲の木の身長すらも追い越して、高々と空に舞い上がる。青い空に、真っ赤な光がよく映えた。

「よし」

空へと突き上げる四つの光を見上げ、守が一つ頷いて、学ランのポケットからこちらと同じ、真っ赤な言玉を取り出す。

「五十音、第三十一音…」

守の握った言玉が、淡い光を放ち始める。

「“ま”、解放…！」

さらにもう一つ、強い赤色の光が放たれると、守の手の中で、言玉が二つの円月輪へと姿を変える。守は素早く手を動かし、両手に一個ずつ、その円月輪を構えた。

「ま…」

守がゆっくりと、口を開く。

「“交^{まじ}われ”…！」

自らの言葉を放って、守が空へ向け高々と、構えた円月輪を投げ放った。空へと放たれた円月輪は、突き上げられた四人の光を、まるで導くように動き、岩の四方から上がった光が、それぞれ前後と左右を直線で結ばれ、岩の上に座るアヒルの丁度真上で交わる。

「すげえ…」

頭上で交わり、さらに強まった光を、茫然とした表情で見上げるアヒル。

「言玉の欠片を、上に掲げろ。朝比奈」

「あ、おう」

空を見上げていたアヒルが、守の声に顔を下ろし、その指示に大きく頷く。アヒルは両手で欠片を抱えたまま、そのたった一欠片も落とさないよう丁寧に、両手を空へと突き上げた。アヒルが手をあげたことを確認すると、守が手元に戻って来た円月輪を再び構える。

「“祀^{まつ}れ”！」

「あ…！」

守が次の言葉を放つと、アヒルの両手の上に乗っていた言玉の欠片たちが、自然と宙に浮き上がり、四人の力の交差している地点まで、浮上していく。勝手に浮き上がっていく欠片に驚き、アヒルは大きく目を見開いた。

「お、おい！」

「俺に任せろと言ったはずだ！」

「……っ」

再び顔を下ろし、焦った様子で守へと声を掛けたアヒルであったが、上空を見つめたまま、真剣な表情で言い放つ守に、思わず息を呑む。今は守を信じ、見守るしかないと決め、アヒルはその表情に落ち着きを取り戻すと、ゆっくりと空に上がった言玉の欠片を見上げた。

「これで、最後だ」

そう言った守が、強い光に包みこまれた円月輪を、再び空へと投げ放つ。

「“纏^{まと}え”…！！」

放たれた円月輪が、上昇した欠片のもとへと達したその瞬間、辺りに存在していたすべての光がそこへと集約され、一層の強い光を放ち始める。

「ク…！」

直視すれば、目が潰れてしまうのではないかと思えるほどの強い光に、思わず身を屈め、目を細める守。

「……………」

だがアヒルは、その光に目を眩ませる様子は一切なく、大きく見開いた瞳のまま、集約するその光を、見つめ続けていた。

「居る…」

「あ？」

俯いていた守が、岩の上から聞こえてくるアヒルの声に、目に光が入らない程度に、顔を上げる。

「呼んでる…俺を…」

「……っ」

まっすぐに上空を見つめるアヒルの姿に、守はそっと目を細めた。

「ああ」

頷いた守が、穏やかな笑みを浮かべる。

「応えてやれ、朝比奈！」

守の言葉を受け、岩の上で素早く立ち上がるアヒル。立ち上がったアヒルが、光の集まる空へ向け、強く右手を突き上げた。

「五十音、第一音」

アヒルの声が、高らかと響き渡る。

「“あ”、解放！」

——パアアアン！

「クっ…」

アヒルの言葉が放たれたその瞬間、空に集約していた光が、まるで爆発するように、大きな音を立てて一気に弾け飛んだ。光の弾けた勢いで、周囲には強い風が吹き荒れる。その風に、思わず身を伏せる守。だがやがて風は止み、守はゆっくりとその顔を上げた。

「あ…」

顔を上げた守が、目の前に広がる光景に、大きく目を見開く。

「……………」

岩の上に堂々と立つ、勇ましい表情のアヒル。その突き上げられた右手にはしっかりと、真っ赤な銃が握られていた。そして、四方を囲んでいた四人の神附きは、中央に立った神を敬うように、片膝をつき、深々と頭を下げていた。

「すっげえ…」

その光景を見つめ、守が思わず、圧倒されるような声を漏らす。

「んな神々しい光景見せられたら…さすがの俺も信じそうになるなっ…」

柔らかな笑みを浮かべた守が、誰にも届かぬように、小さな声を落とした。

「よっしゃあ！大復活！」

久々に味わう銃の感触を確かめながら、アヒルが満面の笑みを零す。

「サンキューなあ！安二木！」

「ぐほおおう！」

勢いよく岩の上から飛び降りたアヒルが、下に立っていた守を、容赦なく踏み倒す。地面へと体を叩きつけられた守は、潰れたような低い声を漏らした。

「てめえ、朝比奈！やっぱ許さねえ！」

アヒルが横へと退くと、怒りの形相を見せた守が、すぐさま体を起き上がらせる。

「今日という今日は！コテンパンのパンクロッカーにしてやるう！」

「ハハハハ！」

怒鳴りあげる守に対し、一切の危機感も持たずに、楽しげな表情で笑いあげるアヒル。自分の手の中に力が戻って来たことが、余程嬉しかったのであろう。アヒルのそんな笑顔を見るのは、阿修羅が現れて以降、久々のことであった。

「やれやれ、ね…」

「まったくだ」

「でも、良かった。朝比奈くんが元気になって」

「はい！」

役目を終え、武器を言玉の姿へと戻して、一箇所に集まった籠也たちは、大きな笑顔を見せるアヒルの姿に、呆れたりもしつつ、安心した表情を見せた。

「どうやら無事、言玉は直せたようだなあ」

「へ？」

山へと登って来る道の方から聞こえてくるその声に、喜び倒していたアヒルが、やっとその笑いを止めて振り向く。アヒルと同じよ

うに、箆也たちや守も、そちらを振り向いた。

「上出来じゃねえか」

「恵先生！」

その場へと姿を現したのは、鋭い笑みを見せた恵であった。

「誰だ？」

ただ一人、恵を知らぬ守が、戸惑うように眉をひそめる。

「恵先生、なんとかで何してんだよ？」

「お前の言玉がもとに戻るのを、待ってたんだよ」

「待ってた？」

「ハァーイ、ダッグ！」

「へ？」

日本語には聞こえないその声と共に、恵の横から姿を現す、金髪青目の背の高い男。高い鼻の、いかにも洋風な顔立ちのその外国人は、アヒルへ向けて、大きく手を振っている。

「オ久シブリーフ！ガールズ、ボーイズ、アンドダッグ！」

「ラ、ライアンさん！？」

アヒルと、後方に立つ箆也たちへ向け、陽気な笑顔を見せるその外国人を見て、七架が驚きの声をあげる。箆也と囁も同じように、驚きの表情を見せた。

「ライアン……」

「確かにそうだわ……フフフ……」

「どなたでしたっけえ？はあ！記憶力悪過ぎな俺で、すみませえん！」

覚えている三人とは対照的に、一人、大きく首を傾げては、謝り散らす保。

「えっと、誰だっけ？」

「オウ！オ忘レデスカァ！？ダッグ！」

「うお！」

身を乗り出して来たライアンに勢いよく見下ろされ、アヒルが少し驚いた様子で身を引く。

「ワタシ、ライアンデス!“良守”^{らもり}ノライアア〜ン！」

「良守？」

「ああ、あん時の外国人五十音士か！」

「イエス！」

良守の単語に、守が眉をひそめる中、アヒルがやっと思い出した様子で、ライアンへと人差し指を向ける。アヒルに思い出してもらい、ライアンはとても嬉しそうに笑みを零した。

「けど、何だってライアンがここに…」

「私が連れて来た」

戸惑うアヒルに、恵が短く答える。

「恵先生が？なんで、また」

「お前の修行相手に、と思ってな」

「ああ、修行相手かあ。って、へ？」

一度は頷いたアヒルであったが、一瞬動きを止め、困惑した様子で目を丸くする。

「修行？」

「三日だ」

首を傾げたアヒルへ、恵は三本の指を突き立てた右手を向ける。

「三日でお前を、阿修羅よりも強くする」

「……っ」

恵のその言葉に、アヒルは瞳を鋭くした。

その頃、韻本部。和音自室。

「そうですか。安の神の言玉の反応が復活を」

言玉の反応を管理している、韻本部の従者から連絡を受け、自室の椅子に腰を掛けた和音が、満足した様子で頷く。

「それは朗報ですわ。ありがとうございました」

「は」

和音が深々と頭を下げると、従者は足早に和音の部屋を後にした。
「良かったですねえ、安の神が無事に復活して」

部屋の左側にあるソファーの上に、ゆったりと座り込んだ桃雪が和音へと、どこか皮肉ったような笑みを浮かべる。

「すべての神を揃えたいという、あなたにとって、安の神の存在は必要不可欠：」

「ええ」

和音がやろうとしていることを見透かすように言う桃雪に、和音は特に動じる様子もなく、素直に頷いた。

「でえ？この後はどうなさるんですう？」

「どうも致しませんよ」

「え？」

すぐさま答える和音に、桃雪が眉をひそめる。

「どうもしないんですかあ？」

「ええ。後は待つだけですから」

桃雪の問いかけに答え、遠くを見るような瞳を見せた和音が、そつと笑みを浮かべる。

「旧世代に失われてしまった、彼の神が現れるのを…」

同時刻、何でも屋『いどぼた』。

「そうですか。恵さんが朝比奈君に修行を」

「うん。三日程空けるから、その間、何かあったら頼むってさあ」

昨日、結局終わらなかった店の模様替えを、今日も引き続き行いながら、為介と雅が言葉を交わす。アヒルが守の説得に成功し、言玉を修復するために出掛けていったことは、為介たちにも連絡が入っていた。恵の修行が始まるということは、アヒルの言玉は無事、復活したのであろう。

「朝比奈君は、あの墮神よりも強くなることが出来るのでしょうか？」

「さあねえ」

少し不安げに問いかける雅に、為介は相変わらずの軽い口調で答える。

「恵さんの指導と、彼の努力次第じゃなあ〜い？」

両手にゴミ袋を持った為介が、雅へと言葉を向けながら、ゴミを捨てるべく、店の外へと出る。

「どんな気持ちで、この戦いを見守っているんでしょうねえ…」

ゴミ袋を店を出てすぐの所に置き、為介がゆっくりと空を見上げる。

「あなたは」

「ウズラさあ〜ん！」

鳥の名であるその名を、大きく呼ぶ一人の主婦。

「ウズラさん！」

「へ？」

もう一度呼ばれるその名に顔を上げたのは、白い鉢巻を巻いたヒゲ親父。八百屋『あさひな』の店主であり、アヒルたちの親である、朝比奈家の父であった。

「もう、ウズラさんてば、何回も呼んでるのに」

「ああ、俺のことでしたか」

やって来る主婦の方を振り向き、父が頭を掻きながら、少し苦い笑みを浮かべる。

「すみません。最近、クソ親父とかバカ親父とかアホ親父とかしか呼ばれてないもんで、つい」

「自分の名前に反応出来ないなんて、困った人ねえ」

「ハハ！すみません！」

呆れたように言い放つ主婦に、父が笑みを浮かべたまま、謝罪の言葉を口にする。

「今日はお手伝いしてないのねえ、アーくん」

「そうなんですよお！」

「うえっ」

息子の話題になった途端に泣きそうな表情となって、身を乗り出して来る父に、主婦が思わず顔をしかめる。

「この間までは結構、手伝ってくれてたんですけど、三日もするとサッパリでえ〜！」

「ま、まあ…三日坊主っていうものね…」

呆れた表情を作りながら、嘆く父へと、何とか励ましの言葉を送る主婦。

「やっぱり、父子のコミュニケーション不足なんですかねえ！？どう思いますう！？奥さ…！」

「さ、さあ！今日は何をいただこうかしらあ？」

父に相談を持ちかけられようとしたその時、主婦が勢いよく父の言葉を遮って、店頭に並ぶ野菜たちへと目を移した。

「へい、今日は何にしましょう？」

主婦の言葉にやっと嘆くことを止め、店主らしくなる父。

「ん〜そうねえ。大根ときゅうり、もらおうかしら」

「へい、毎度！」

店頭に並ぶ大根ときゅうりを手に取り、ウズラは大きな笑顔を見せた。

“末守”、安二木守の力を借り、ついに言玉を復活させることの出来たアヒルの前へと現れた恵は、三日でアヒルを阿修羅よりも強くすると、そう告げたのであった。

「三日で、俺を？」

「ああ」

眉をひそめ、聞き返したアヒルに、恵がはっきりと頷く。

「たったの三日で強くなれるなんて、凄いですねえ！アヒルさん！」
「そこまで言い切るということは、何か、レベルアップの当てがあるのか？」

感動した様子で、目をきらきらと輝かせる保の横から、箆也が怪訝そうに問いかける。

「別に、んなもない」

「何？」

あっさりと答える恵に、表情をしかめる箆也。

「ただ、お前たちに与えられた猶予が、三日くらいだろうってだけの話だ」

「ということとは…」

「ああ。奴等が動き出すまでの時間、それも一番長く見積もった時間が三日だ」

表情を曇らせた囁の、その不安を言葉にするように、恵が答えた。強調される期間に、皆の表情が陰しく変わる。

「その間に出来る限り、お前を強くする。阿修羅を越えられるかどうかは、お前次第だ。トンビ」

「……っ」

恵の言葉に、アヒルが鋭い瞳を見せる。アヒルの表情を見ると、知らされた短い期間に、気圧されている様子はない。

「けど、何故ライアンさんを？」

「お前たちも一度、戦ったから知っているだろうが、こいつは、助動詞“らりるれろ”を操って、相手の言葉を弾き返すことが出来る」
七架の疑問に、素早く答える恵。

「同じ文字を持つ敵と戦うトンビにとっては、打ってつけの修行相手だ」

「成程ね…」

恵の答えを聞き、囁が納得するように頷く。

「ってか、さっきから疑問なんだけどお、あの人は誰だ？」

周囲の真剣な空気を少し壊して、守が素朴な疑問をアヒルへとぶつける。恵と初対面の守が、この状況で戸惑うのは当然といえば、当然であろう。

「えっと、この人はその、俺たちの担任でえ」

「五十音士なんだろう？」

「あ、ああ」

守の問いかけに、言葉を詰まらせるアヒル。

「その、えっと、いわゆる一つの、“女守”っていうか」

「ウダウダしてないで、はっきり言ってやればいい」

煮え切らない言葉ばかりを繋げていたアヒルの声を遮ったのは、他ならぬ恵であった。

「私は、恵の神。お前がよく知る、旧世代の神の一人だ」

「えっ…？」

はつきりと言い放つ恵に、顔色を変える守。いくら、アヒルの説得に応じ、言玉復活の協力をしたとはいえ、あれほどまでに恨んでいた旧世代の神を目の前にしては、守も平静ではいられないであろう。

「あちゃー」

名乗ってしまった恵に、アヒルが思わず頭を抱える。

「旧世代の、神…」

「ああ」

険しい表情を見せる守に、恵がもう一度、頷きかける。

「恨むなり、憎むなり、好きにしろ。だが、私は謝らない」

「お、おい！」

強気に言い切る恵に、アヒルが思わず焦ったように声を掛ける。

「恵先生！んな言い方……！」

「私は、間違ったことをしたとは思っていない。だから、謝らない」
注意するように言葉を掛けようとしたアヒルであったが、はつきりと言い放つ恵の姿に、その先の言葉を呑み込む。まっすぐな瞳で守を見つめる恵には、確かに後悔している様子など、微塵も感じられなかった。

「ケ！もう、朝比奈の言玉も直しちまったんだ。今更、許さないだの、協力しないだの、言う気はねえよっ」

「安二木」

吐き捨てるように言う守に、アヒルが少し驚いたように、目を見開く。

「関わったからには、最後まで付き合わせてもらう。その修行とやらに、俺も参加させろ」

「……いいだろう」

守の申し出に、恵が笑みを浮かべる。

「安二木……」

「文句は言わせねえぜ？朝比奈。これが、俺のやり方だ」

何か言いたげに見つめるアヒルに、守は言わなくてもわかっているとはかり、どこか少し格好をつけて言い放つ。

「いや、文句つつーか、お前で俺の相手が務まるかなあって」

「うるっしやいわぁ！」

不安げに呟くアヒルに、守は勢いよく怒鳴りあげた。

「時間勝負だ。とっとと移動して、修行を始めよう」

「イエス！ティーチャー！」

「あの、恵先生」

「ん？」

ライアンへと指示を送っていた恵に、七架が横から声を掛ける。

「私たちは、どうしたら…」

「とりあえず、トンビは預かる。その間、お前等は好きにしてくれ」

「好きにしてくれて言われてもねえ…」

適当な恵の言葉に、囁が眉をひそめる。

「神と共に在ることが、私たち、神附きの役目なんですけれど…?」

「神はしっかりと守つてやるから、お前たちは附いてくるな。」

無駄に人数が多いと、修行の邪魔だ」

その言葉に、反論気味な発言をしていた囁も、そっと俯く。恵や守、ライアンが附いていれば、アヒルの安全は保証されているし、修行に附いていってもアヒルの邪魔になるということは、皆、十分に理解していた。

「わかった」

俯いた囁の代わりに、箆也が答える。

「我が神を頼む」

「ああ」

箆也の言葉に、恵は力のある笑みを浮かべた。

「さてと、じゃあ行くかな」

そう言うと、恵が服のポケットから緑色の言玉を取り出し、右手で軽く握り締める。すると言玉は淡い光を放ち始め、恵はそのまま、言玉を右足へと吸収させた。言玉を吸収した右足が、言玉と同じように、淡い緑色の光を帯びる。

「お前等、しっかり歯あ、食いしばっとけよ」

『へ?』

恵の指示に、アヒルたちが目を丸くする。

「神月」

戸惑っているアヒルたちから視線を移し、恵が箆也の方を振り返り見る。恵に名を呼ばれた箆也は、恵を見つめ、その先の言葉を待つように、少し首を傾げた。

「例えお前等が、“神附き”として、どんなに強い力を持っていようとも、今回の相手は“神”だ」

恵が鋭い瞳で、箆也を突き刺すように見る。

「今のままじゃ、足を引っ張るだけだぞ」

「……っ」

放たれたその言葉に、箆也が眉をひそめる。

「じゃあ、行くか」

再び箆也へと背を向けた恵が、右手でアヒルの手を、左手で守のリーゼントの先を、がっしりと掴む。

「“巡^{めぐ}れ”！」

『どぎゃああああ！』

「マ、待ッテ下サア〜イ！置イテカナイデ下サア〜イ！」

言葉の力を使い、目にも留らぬ速さで、言玉を吸収した右足を繰り出し、その場から飛び去っていく恵。そんな恵に引っ張られ、叫び声をあげながら、無理やり移動させられていくアヒルと守。出遅れたライアンも、何とか守の学ランの先を掴んで、皆と共に移動していく。言玉の力を使っているからか、四人の姿は、あっという間に見えなくなってしまった。

「行っちゃった…」

「どういう意味でしょうか？今のままでは、足を引っ張るだけだというのほ」

皆の姿が見えなくなつてすぐ、保が不思議そうに首を傾げる。

「はあ！もう人生そのものが“足引っ張り”の俺が、初めて聞いたくらいの感じで問いかけちゃってすみませえ〜ん！」

「言葉の通りじゃない…？」

謝り散らす保を半分ほど無視し、囁が落ち着き払った声を向ける。

「神の授かる文字、第一音から第五音は特別な音…私たちの持つ他音よりも、遥かに強い力を秘めている…」

言葉が続けながら、囁がそつと眉をひそめる。

「いくら神付きとして強くなつていても…神とじゃ、基本的な力のレベル、そのものが違うのよ…」

「そうなんですかあ。やっぱり神って凄いですねえ」

囁の説明に、感心するように頷く保。

「今回の相手は神：確かに、今までのようにはいかないかも知れないわね…」

「けど、私たちはもう“変格”も習得してしまったし、これ以上、どうやって力を上げれば…」

「目指すしかないだろうな」

困惑の表情を見せていた七架の言葉を遮ったのは、箆也であった。

「“変格”の、その上を」

「え？変格の上？」

箆也の言葉に、驚いた様子で目を丸くする七架。囁もその言葉に、表情を曇らせる。

「在り得るの…？そんなものが…」

「わからない。だが一つ、当てがある」

囁の問いに答えた箆也は、鋭い瞳を見せていた。

一方、その頃。堕ちし神々の根城。

「礼獣の調子はどうか？現」

堕ちし神々の主格、阿修羅は、棗と共に、仲間の一人、現の部屋を訪れていた。部屋というよりは、大きな広間にも見える現の部屋の中央には、謎の巨大な繭が存在していた。天井や床へ、繭から伸びた糸を張り巡らせている。繭は中からほんのりと、金色の光を放っている。

「見ての通り、順調じゃよ」

繭から阿修羅の方を振り返った現が、何やら楽しげな笑みを浮かべる。

「三日もすれば、新たな礼獣が、この世に誕生する」

「三日か」

現の告げた期間を繰り返し、そっと繭へと視線を移す阿修羅。

「人間から、礼ある言葉以外の、すべての言葉を奪う、この礼獣…」
繭を見つめる阿修羅が、少し目を細める。

「この世に、正しい言葉の秩序をもたらすためには、この礼獣が必要不可欠だ」

阿修羅が少し口調を強くして、再び現の方を見る。

「引き続き、宜しく頼むよ。現」

「お前に言われんでも、それくらい、わかっておるわい」

悪態づく現を見て、阿修羅は不快な顔など一切見せずに、余裕すら感じられる笑みを浮かべる。

「では行こうか。棗」

「はい、神」

そう言うと、阿修羅は棗を連れ、現の部屋を後にした。

「フン、若造が偉そうに」

阿修羅が部屋を出て行った途端、現が顔をしかめ、吐き捨てるように言葉を落とす。

「礼獣を創ることを提案したのは、阿修羅。偉そうにされても、仕方ないでございます」

そんな現へと声を掛けたのは、部屋の隅の方に立っている、洋風の女性、エカテリーナであった。その横には同じ堕神である錨いかり、沖也の姿もある。

「阿修羅の呼びかけで、俺たちはこうして、ここに集まっているわけだしね…どうでもいいけど…」

「偉そうにされても、誰も文句言えねえーよなあ。イヒヒッ」

口々に言う錨たちに、少し怒るように言い返し、現が再び繭を見つめる。

「あの男は気に喰わんが、いいんじゃない。わしは」

現が繭へと手を触れ、何とも嬉しそうな笑みを零す。

「何かを“生み出せば”、それでよい…」

まるでその繭に恋焦がれるように、うっとりした表情で、現が繭

をまじまじと見上げる。

「あなたは本当に、“生み出す”ことが好きでございますね」
「当然だろう」

少し呆れるように言い放ったエカテリーナに、現は間を置くことなく、すぐさま答え、楽しげに歪めたその表情を、エカテリーナたちの方へと向けた。

「“生み出す”ことこそ、我ら神のみに与えられし、神の特権：そして、わしは、その素晴らしき言葉を持っておる…」

酔いしれるように言葉を放ち、現が再び繭を見上げる。

「“生み出す”ことだけが、この命の肥やし：ヒヤハハハ」

楽しげに笑い声をあげる現のその姿は、薄気味の悪いものにしか映らず、見つめる三人は、仲間とはいえ、思わずその表情を曇らせた。

「はあ：イカれてる…」

「まったくでございます」

深々と肩を落とし、沖也とエカテリーナが呆れきった表情を見せる。

「ん？どこへ行くでございます？」

現の方を見ていたエカテリーナが、部屋の出口へと歩を進めていく錨に気付き、声を掛ける。エカテリーナに呼び止められると、錨はゆっくりと振り返った。

「散歩に行ってくんだよ」

「阿修羅からは、待機命令が出ているでございますよ？」

「三日もじっとしてられるほど、器用じゃねえんだ」

少し眉をひそめ、問いかけるエカテリーナに対し、錨は不敵な笑みを浮かべる。

「あいつにも肥やしがあるように、俺にも俺の肥やしがあるんでな」
現へと視線を移し、さらにその口元を歪める錨。

「まあ、阿修羅には適当、言っといてくれよ」

エカテリーナたちに軽く手をあげると、錨は再び歩を進め、呼び

止める間もなく、現の部屋を後にした。

「やれやれでございますね…」

困ったように言葉を落とすエカテリーナの横で、沖也がそつと目を細める。

「はぁ…どうでもいい…」

沖也の憂鬱な声が、部屋に響いた。

翌日。言ノ葉高校、三年A組。

「おおい、ツバメえ」

大きな声でツバメの名を呼びながら、教室の窓から中を覗き込むように顔を出したのは、ツバメと同じ顔を持ったスズメであった。廊下側の、窓のすぐ横の席で、帰る支度を整えていた雅が、顔を出したスズメに気付き、顔を上げる。

「スズメ君」

「おう、雅。ツバメは？」

「ツバメ君なら、もう部室に行きましたよ」

「もうかよお」

雅の言葉を聞いたスズメが、残念そうに、がつくりと肩を落とす。

「どんだけ力入れてんだよ、たかがオカルト同好会に」

「仮にも部長の目の前なんですから、もう少し、気を遣っていただけます？」

失礼極まりない言葉を放つスズメに、雅が少し眉間に皺を寄せ、眼鏡を押し上げながら、注意するように言う。

「ツバメ君に何か用ですか？」

「いや、今から“恋盲腸”の作者のメロリンコ斉藤の握手会行ってくつからさあ、今日遅くなるって親父に伝えてもらおうかと思って」

「僕からツバメ君に伝えておきましょうか？」

「マジ？」

雅の申し出に、スズメが途端に目を輝かせる。

「サンキュ！助かるよ」

「まあ、いいですよ。そのくらいは」

笑顔を見せるスズメに答えながら、荷物を鞆に入れ終えた雅が、その鞆を肩に掛け、教室の前扉から廊下へと出る。雅を追うようにして、スズメも扉の方へとやって来た。

「よっしゃあ！これで何の気兼ねもなく、握手会に行けるぜ！」

「珍しいですね。スズメ君、お父さんの顔色うかがうほど、神経の通った人じゃないのに」

「さらっと失礼なこと言うな。お前も」

廊下をゆつくりとした足取りで進みながら、会話を交わす雅とスズメ。雅の容赦ない一言に、スズメが思わず顔をしかめる。

「仕方ねえんだよ。最近親父、アヒルが家空け過ぎてて、ウザいくらいナーバスっつーか、何っつーかでさあ」

「ああ。そういえば朝比奈君、修行に出てるんでしたね」

雅のその言葉に、スズメがかすかに表情を曇らせる。その微妙な変化を、雅は見逃さなかった。

「まだ、兄弟喧嘩は続行中ですか？早く、謝ってしまえばいいのに」「うっせえなあ。居ねえ相手に、どうやって謝れてんだよ」

少し呆れたように言う雅に、スズメが頭を掻き、顔をしかめる。

「だいたい俺、悪くねえし」

「悪いのは間違いなく、スズメ君とツバメ君だと思いますけどね。僕は」

雅がはっきりと言うと、スズメはさらに険しい顔つきとなる。

「ったく、恵ちゃんといい、どいつもこいつもアヒルの味方しやがってよお」

「彼には、味方してしまいたくなるような、何かがありますからね」まるで拗ねるように口を尖らせるスズメに対し、雅は穏やかな笑みを浮かべる。

「神がゆえか、彼が持って生まれたものか…」

「へえへえ、どうせ俺は何も持ってませんよお」

「持ってるじゃないですか」

「へ？」

すぐさま言葉を返す雅に、スズメが少し目を丸くする。

「“家族”」

「……っ」

雅が大きく微笑んで言い放つと、スズメは驚くように、目を見開いた。

「父も母も早くに亡くなって、家族というものの記憶自体、僕にはあまりありませんけど、朝比奈君を見ると、弟が居るのはこんな感じかなって、たまに思います」

「雅…」

穏やかな表情で語る雅を見つめ、そっと目を細めるスズメ。

「正直、羨ましいです。いつも本当に楽しそうで、君たち兄弟が…」
雅の言葉を聞きながら、スズメが俯く。

「だから、変な意地張ってないで、早く…」

『きゃああああ！』

『……！』

雅がスズメへと掛けようとした言葉を遮って、その場へと勢いよく響いてきたのは、女生徒のものであろう、悲鳴であった。その叫び声は強烈で、起こった事態が尋常ではないことを感じさせる。

「な、何だ！？」

スズメが近くの窓から身を乗り出し、悲鳴の聞こえて来た、校舎外を見る。

「イヒヒ！出て来い！出て来いよお！安の神いい！」

「あれは…！」

身を乗り出したスズメが、グラウンドの中央に立ち、高らかと声を張り上げている金髪の男、錨の姿を見つけ、大きく目を見開く。錨の周囲には、傷ついた言ノ葉高校の生徒たちが、多く倒れ込んでいた。

「五十音士っ…」

錨の右手に、青く輝く宝玉を見つけ、雅が陰しい表情を見せる。

「阿修羅の仲間か…」

「とにかく、早く行かないと…！」

「あ、あ…！」

——力を、使われましたね……？——

「……っ」

焦る雅の声に頷き、下へと降りる階段の方へと駆けて行く雅の後を追おうとしたスズメであったが、思い出される熊子の言葉に、思わず足を止める。

「スズメ君？」

追って来る足音がないことに気付き、雅が戸惑うようにスズメの方を振り返る。

「スズメ君」

「……っ」

もう一度、促すように名を呼ぶ雅であったが、スズメは俯いたままで、ただもどかしそうに、唇を噛み締めるだけであった。そんなスズメの様子を見て、雅が何か察したように、そっと目を細める。

「スズメ君は、ここに居て下さい」

「え？」

「あの者は、僕が」

「あ、おい！雅！」

強く言い切り、スズメに背を向け、駆け出して行った雅は、呼び止めるスズメの声に止まることなく、そのまま階段を駆け降りていつてしまった。

「クソ……！」

悔しさを噛み締めるように、スズメは強く拳を握り締めた。

「イヒヒ！“雷”^{いかずち} いい！」

『うあああああ！』

空から雷を落とし、下校途中であった生徒たちに浴びせる鎧。強烈な電撃を受けた生徒たちは、激しい叫び声をあげると、力なくグランドに倒れていった。その光景を見て、他の生徒たちは悲鳴をあ

げ、逃げ惑い、周囲は激しく混乱する。

「凍てつけ」！

『きゃああああ！』

グラウンドから学校の外へと逃げようとする生徒たちへ、錨はさらに言葉を向け、吹雪を発生させて、逃げだそうとしていた生徒たちを、ひどく怯えた表情のまま、凍りづけにしてしまう。

「イヒヒ！いいねえ」

凍りづけにされた生徒たちの姿を見回し、錨が満足げに微笑む。

「早く出て来いよお！安の神！」

校舎の方を見た錨が、学校全体に響き渡るように、大きな声をあげる。

「とつとと出てこねえと、お前の学校の奴等、全員死んじまうぜえ

！？イヒヒ！」

“満ちれ”」

「んあ？」

楽しそうに笑い声を零していた錨が、横から響くその言葉を耳に入れ、すぐさま表情をしかめる。

「凍てつけ」

すぐ右方から押し寄せてくる巨大な大波を、錨が言葉を放って、先程の生徒たちと同じように凍りづけにし、直前で波の動きを止める。凍った波を見上げ、そっと目を細める錨。

「俺が所望してた文字とは、別の言葉だったようだがあ？」

「安の神は、ここには来ませんよ」

右方から前方へと視線を移した錨の前に、立ちはだかるように現れる雅。いつものように人差し指で眼鏡を押し上げた雅が、鋭い瞳で錨を見つめる。

「君など、彼が相手にするまでもないですから」

「言ってくれるねえ、たかが美守が」

挑戦的に言い放つ雅に、錨が鋭い瞳はそのままに、口元だけを大きく歪める。

「君は？あの阿修羅という者の仲間ですか？」

「ああ。堕ちし“以の神”。堕神、一条錨だ。イヒヒ」

「以の、神…」

自分とも関係性の深いその文字に、雅がそつと眉をひそめる。

「ならば、遠慮する必要はなさそうですね」

はつきりとした口調で言葉を口にしながら、雅が制服の胸ポケットから、青い言玉を取り出す。

「神に逆らう気かあ？美守」

「君は神ではありませんよ。堕神さん」

試すように問いかける錨に、雅が迷いなく言い放つ。

「神はもつと、尊いものです」

「イヒヒっ」

雅のその言葉を受け、錨が吹き出すものを堪えるような笑い声を漏らす。

「いいぜえ？じゃあ、お前に見せてやるよお」

笑顔を見せた錨が、雅と同じ青い言玉を持った右手を、高々と振り上げる。

「神の強さつてものをなあ！」

上げた右手を、一気に振り下ろす錨。

「“行け”！」

“満ちれ”…！」

二人の言葉が放たれ、錨の言玉から、まるで獣の牙のように狂気に満ちた水の塊が、雅の言玉から巨大な大波が発生し、二人の間で勢いよくぶつかり合う。

「グ…！」

すぐさま押される大波に、雅の表情が歪む。

「どうしたよお！？手応えねえなあ！」

「ク…！“乱せ”！」

余裕ある声を放つ錨に、雅はさらにその表情を陰しくしながら、右手の言玉を光らせ、次の言葉を放つ。雅の言葉が放たれた瞬間、

錨の放った水の塊に乱れが生じ、空中で大きくその形を歪めると、押されていたはずの雅の大波が、歪んだ水の塊を一気に呑み込んだ。「何？」

呑み込まれた自身の力に、錨が眉をひそめる。錨の水を呑み込んだ雅の大波は、さらに勢力を増して、一気に錨へと押し寄せる。だが錨は、押し寄せる大波にも顔色一つ変えず、余裕の表情で右手を突き出した。

「諫めろ」

錨の言葉通り、諫められた大波が、空中で弾けるようにして、消えていく。

「やはり“い”：為介さんと、同じ言葉を…」

そんな錨の姿を見ながら、雅がそっと目を細める。

「結構やるじゃねえか。たかだか美守があ」

大波を掻き消した錨が、もうすでに勝ち誇ったかのような笑みを浮かべ、雅の方を振り向く。

「これなら、どうだあ？ “挑め”！」

さらに右手を振り下ろした錨が、今度は鋭い、一つの巨大な刃のような水の塊が、雅へと物凄い速度で突っ込んでいく。

「満ちれ」！

向かって来る水塊に応戦すべく、先程と同じ言葉を放ち、大波を向かわせる雅。

「あ…！」

だが雅の放った大波が、錨の水塊に当たったその瞬間、あっという間に碎かれ、周囲に分散して力なく地面へと落ちる。落ちる大粒の水滴に、雅が驚いた様子で、大きく目を見開く。

「どうしたあ？ 当たっちゃまうぞお？」

「ク…！」

大波を突破し、引き続き向かって来る水塊に、険しい表情を見せた雅が、素早く右手を突き出す。

「導け」！

雅が大声で言葉を放ち、言玉を持った右手を、錨のいる方へ向け、大きく振り払うと、雅へと向かって来ていたはずの水塊が、あっさり向きを変え、錨の方へと戻っていく。

「これで……！」

「誘え^{いさな}」

「う……！」

水塊を弾き返し、その表情に余裕を取り戻した雅であったが、その余裕は、錨の言葉により、一瞬にして掻き消される。再び戻って来る水塊に対し、雅が放てる言葉はもう無かった。

「うああああ！」

二人の間で行き来した水塊が、ついに雅へと炸裂し、雅が痛々しい叫び声をあげて、後方へと吹き飛ばされていく。

「スズメ……！」

早々にオカルト同好会の部室へと行ったはずのツバメが、外の様子を見たのであろう、珍しく焦った表情を見せながら、スズメのもとへと駆けて来る。スズメは雅と別れた廊下に残り、窓からじっとグラウンドを見つめていた。

「スズメ！ 雅くんが……！」

「……………」

駆けて来るツバメの方を振り向きもせず、スズメはただ険しい表情で、グラウンドを見つめる。

「無理だ。雅」

届かぬ小さな声を、スズメがどこか苦しげに漏らす。

「お前はイ段の五十音士……」

窓枠へと置かれたスズメの手が、かすかに震える。

「“以の神”には、勝てないっ……」

震える拳を握り締めたスズメが、眉間に強く皺を寄せた。

「うう…う…」

全身から血を流し、制服の白いシャツを赤く染めた雅が、グラウンドにうつ伏せに倒れ込んだ体を、何とか起き上がらせようともがく。「たかが美守ごときが、神に逆らうから罰が当たんだよ。イヒヒ」倒れたままの雅を高々と見下ろしながら、錨が偉ぶるように胸を張る。その言葉を耳に入れ、起き上がろうともがいていた雅が、そつと目を細める。

「言っただけですが」

「んあ？」

返って来る声に、眉をひそめる錨。倒れたまま、顔だけを上げた雅が、鋭く錨を睨みつける。

「君は“神”ではない、と」

立ち上がれてもない状態であるというのに、決して弱腰ではなく、はつきり、堂々と言い放つ雅のその姿に、余裕の笑みを浮かべていた錨の表情が、一気に曇る。

「俺も言っただけぞえ？ 美守」

だがすぐに錨は、その曇った表情を晴れさせる。

「お前に俺の、神の強さを見せてやるってなあ！ “挑め”！」

高らかと声をあげた錨が、まだ倒れたままの雅へ向け、再び先程と同じ水塊を向ける。

「イヒヒ！ これで終わりだあ！ 美守！」

「……っ」

「何…！？」

錨が勝利を確信した笑みを浮かべたその時、倒れていた雅の体が大量の水滴となって、地面へと流れ落ちた。水となって消えた雅に、錨が眉をひそめる。

「あれはっ…」

「“魅せろ”…」

「……！」

背後から聞こえてくる言葉に、錨が目を見開き、素早く振り返る。錨が振り返った先には、傷を負い血を流しながらも、立ち上がって、錨へと右手を向けている雅の姿があった。

「幻覚か…！」

「これで終わりです。墮神」

焦ったように声を出す錨に、雅が鋭く言い放つ。

「満ちれ」！

雅の言葉と共に、錨へと放たれる大波。

「グ…！」

ずっと余裕だった錨の表情が、初めて歪む。

「なあゝんちゃって」

「え…？」

だが歪んでいたその表情はすぐに笑顔へと代わり、次の瞬間、錨の体は、水となって弾け飛んだ。飛び散る水滴に、何の手応えもなのまま、通り過ぎていく雅の大波。雅が一気に、戸惑いの表情となる。

「偽れ」

水滴となって消えていったところから、少し距離を取った場所に、笑顔で現れる錨。

「幻、覚…」

「残念だったなあ。美守」

茫然と呟く雅に、錨が鋭く、楽しげで、そして、どこか冷たい笑顔を向ける。

「茨」

錨が軽く右手をあげると、雅の上空の空一面に、まるで止まった雨のような、無数の水の刃が現れる。

「そろそろ逝つとくかあ？ 美守」

さらに口元を歪め、錨が上げていた右手を下ろす。

「埋けろ」！

「……！」

止まっていた鋭い雨が、一気に雅へと降り注いだ。

——パライイン！

「うわあ」

思いきり割れた花瓶の、その響く音に振り向き、為介がどこか間の抜けた声を漏らす。『いどばた』の店内にある棚の一角に飾ってあった花瓶が、突然床へと落ち、砕けたのであった。

「びっくりしたなあ、もう」

飛び跳ねた心臓を押さえるように、左胸を押さえながら、為介が割れた花瓶の方へと歩いていき、破片に気を配りながら、そつとしゃがみ込む。

「……っ」

破片を拾うため、伸ばした手を、為介が不意に止める。

「あんまりこういうの、信じるタチじゃないんだけどなあ……」

そう呟いた為介は、どこか不安げに眉をひそめた。

「あ……ああ……」

茨の雨を全身に浴び、さらに傷を負って、グラウンドへと仰向けに倒れ込んだ雅。あまりの痛みに全身の感覚は徐々に失われかけており、血を流し過ぎたのか、意識も薄れ始めていた。言葉にならない声を漏らしながら、雅が割れた眼鏡の向こうから、力のない瞳で、ただ目の前に広がる青空を見上げる。

「どうだ？ わかったかあ？ 美守」

前方から、倒れている雅へと、嘲笑うような声を向ける錨。

「これが、神の力だ」

錨が、自信に満ちた笑みを浮かべる。

「さあ、存分に崇めろ！イヒヒ、イヒヒ！」

「……っ」

響き渡る錨の笑い声を聞きながら、雅が空を見上げるその瞳を、そっと細める。

「“神”……」

Word 52 墮神、強襲 (3)

———僕の世界に、神は居ない。

五十音士“美守”。五十音、第二の神、“為ゐの神”の神附きとして、神を守るために生き、神を守るために存在してきたのが、僕たち箕島家の人間だった。

「神いい…！神いいい！」

「落ち着いて！あなた…！」

僕の中にある一番古い記憶は、怒り狂うように神の名を叫ぶ父と、その父を必死に抑え込む母の姿だった。

「何故、我々を裏切ったああ！？神いいい！」

決して届かぬ父の言葉が、幼いながらにひどく、耳に残った。

「いいか…？雅…」

病に倒れ、死を間近に控えた父は、床に臥しながらも、決して弱々しくない声を僕へと向けた。

「決して、神を許すな」

幼い頃から、まるで呪詛のように、聞き続けて来たその言葉。

「我らを狂わせた神を、我らを裏切った神を、決して許すな。特に、我が神…」

父の瞳が、憎しみの一色に染まる。

「“為の神”、だけはっ…」

次の日、父は死んだ。その言葉が、父の遺言となった。

神附きでなくなったことで、箕島家の勢力は弱まり、多くいた一族たちも各地へと散っていき、僕は言ノ葉の小さな家で、母と二人で暮らすこととなった。中学に入ったばかりの頃、母も病気で亡く

なり、今度は一人暮らしになった。父から“美守”を継いだ僕は、箕島家と韻からの援助を受けることができ、一人となっても、十分に生きていくことが出来た。

「満ちれ」

<ギャアアアア！>

さらに一年ほどの時が流れ、一人の生活にも慣れ始めた頃、僕はいつものように、忌退治をしていた。

「ふう…最近、忌が多いな」

「ホントホントお。ほら、あそこにも居るよお」

「え…？」

独り言のつもりで呟いた言葉に、声が返って来て、僕は戸惑うように顔を上げる。

<グアアアア！>

「う…！」

振り向いた途端、目の前へと迫り来る忌に、どうすることも出来ず、思わず目を見開く。

「射抜け」

<ギャアアア！>

「あ…」

何らかの痛みを覚悟したその瞬間、一つの言葉と共に、目にも留らぬ速さで飛んできた水弾に撃ち抜かれて、僕に襲いかかろうとしていた忌は、あつという間に消え去った。目の前で掻き消えていく黒い影を見つめながら、僕は少し戸惑った表情を作る。

「やつはおゝ大丈夫う？」

「……っ」

水弾の飛んで来た方向を振り向くと、そこには陽気で、頭の軽そうな笑みを浮かべた、袴姿の男が立っていた。年上には見えるが、まだ若いのか年をとっているのか、よくわからない。暑い時期でもないのに、右手の扇子を何度も扇いでいる。

「あなた、は…？」

「ん？ボクう？井戸端為介っていう、しがない何でも屋さんだよお」
「井戸端、為介…？」

それは僕にとって、聞き覚えのある名であった。

「為の神…！？」

父の呪った為の神を目の前にし、僕は思わず、右手に持っていた言玉を、為の神へと向けた。だが、為の神は、驚いた表情など少しも見せずに、ひどく落ち着き払った表情で、僕を見つめる。

「僕を殺す？美守の箕島雅クン」

「え…？」

微笑む為の神のその言葉に、僕は思わず眉をひそめる。

「なんで、僕の名前…」

「いいよ、君がそうしたいなら」

僕の問いかけには答えようとせず、為の神は、ただ余裕のある笑みを浮かべていた。

「君の好きにしたらしい」

目の前にした神は、僕が想像していた神とは、随分と違うものにした。思えた。

それからは、不思議な日々が続いた。

学校の帰りに、為の神がやっているという、何でも屋『いどばた』に寄る日々。為の神も、そんな僕を煩わしく思う素振りはなく、ごく自然に店番や、雑用を押しつけてきた。

「ねえねえ雅くん、これ新商品にどうかなあ？巷で話題の恋愛小説“恋盲腸”！」

「いいんじゃないですか。変態な感じが、あなたによく似合ってます」

「あ、そううー？そう言われると、照れるなあ」

「別に誉めてませんけど…」

毎日のように通ううちに、その場所は、ひどく心地良いものへと

変わっていった。

「雅クンは、ちっとも言葉を使わないんだねえ」
「は？」

為介さんの言葉に、大きく顔をしかめる。

「何を言っているんです？ボケましたか？」

「いっやあん、ボク、まだ若いつもりよお？雅くうくん」

「言葉なら、散々使っていますよ」

相変わらずの軽い口調で言葉を放つ為介さんへと、僕は当然のよう
に言い放つ。

「昨日も言葉を使って忌を倒したところですし、確か四日程前にも
忌を…」

「それは、“美守”の言葉でしょ？」

「え？」

遮る為介さんの問いに、戸惑うように首を傾げる。

「君の言葉は？」

どこか穏やかな微笑みを浮かべて、為介さんがまっすぐに、僕を
見つめる。

「だから、僕はちゃんと…」

「ううん、君はまだ全然使っていないよ。君自身の言葉を」

「僕自身の、言葉…？」

「早く、使えるようになるといいねえ」

「はあ…」

その時の僕はまだ、為介さんの言葉の意味を、理解することが出
来なかった。

為介さんの言葉の意味を、ずっと考えていた。

僕はちゃんと、こんなにも毎日、たくさんの言葉を口に出している
のに。“おはよう”も“さよなら”も言う。“ごめん”も“ありが

とう”も言う。為介さんは、僕が何の言葉を使っていないというのだろう。それがどうしてもわからなくて、そればかりをずっと考えていた。

「お前、何考えてんのかわかんなくて、気持ち悪い」

学校のクラスメイトに、突然、言われた。その言葉を口にしたのは、クラスの中でも何かしら一番、話す機会が多く、僕の中では一番、仲のいい部類に入っている者だった。

「え…？」

その言葉に少なからず衝撃を受けた僕は、戸惑った声を思わず漏らす。

「何の話してたって表情ちつとも変わんねえし、言葉に何の気持ちもこもってねえし、まるで機械みてえ」

どこかうんざりするように、放たれる言葉。

「だからお前、友達いねえんじゃないの？」

「…っ」

どうやら彼は、僕の友達ではなかったらしい。その言葉を聞いた時、僕は初めて、そのことに気付いた。

「機械みたい、か…」

放課後、教室を出て、昇降口へ向かいながらもずっと、昼間言われた、彼の言葉を思い出していた。為介さんの言葉の意味は、こういうことだったのかも知れない。よくわからないけれど、僕は僕の言葉というものを使えていなくて、機械みたいな言葉しか言えなくて、だから誰も、僕の友達にはなってくれない。

「はあ…」

自然と、溜息が零れ落ちた。

「危ねえ！」

「へ？」

横から聞こえてくる声に気付き、振り向くと、もう目前に迫った、物凄い速度のサッカーボール。

「ぶふ！」

逃げる暇など勿論なく、僕は顔面にもろに、そのボールを喰らった。そのまま廊下の壁に背中を打ちつけ、顔を抱えて、力なくしゃがみ込む。

「うわっちゃー、やっちゃったあ」

先程聞こえてきた声と同じ声が聞こえてきて、僕は痛みを堪えながら、顔を押さえたまま、少しだけ視線を上げる。すぐ傍にある教室の扉から出て来たのは、茶色い髪を逆立たせた、いかにも活発そうな少年だった。困ったように、頭を掻いている。

「だから言ったでしょう…？ スズメ…教室の中で、サッカーしちゃダメだって…」

「教壇の上でハットトリック決めたら、呪わないでおいでやるって言ったのは、お前だろ！？ ツバメ！」

教室の窓から廊下へと顔を出し、先程教室から出て来た少年へと、注意するように言う、どこか不気味な空気を纏った、もう一人の少年。双子だろうか。雰囲気はまるで違うが、二人の顔立ちがよく似ている。

「マジ悪い！ おい、お前！ 大丈夫かあ？」

ボールを蹴った方の少年が、少し慌てながら、しゃがみ込んだままの僕の方へと駆け寄ってくる。

「どっか怪我したか！？」

「い、いえ…」

必死に問いかけるその人に、僕はゆっくりと顔を上げる。

「その、大丈夫、です…」

「ぎゃああ！ 眼鏡割れてるう！ 血い、出てるう！」

僕が顔を上げた途端、悲鳴のような声をあげるその人。心配させまいと、無難に答えたつもりだったが、僕の顔は相当にひどい状態だったようで、誤魔化すことは出来なかった。

「別に、これくらいの血なら、どってことなっ…」

「保健室だ！ 保健室行くぞお！」

「え？うあ、ちょ…！」

僕が止める間もなく、その人は僕の腕を思いきり引いて、廊下を走り出していった。

「はい、これで大丈夫」

「ありがとうございます」

無理やり保健室へと引っ張っていかれた僕は、保健室で、養護の先生から手当てを受けた。割れた眼鏡のレンズの破片で、目を下を軽く切っただけで、手当ては消毒をして、絆創膏を貼っただけですぐに終わった。

「まあ二、三日もすれば、すぐに塞がるでしょ。大した傷じゃないわ」

「はあ、良かったあ」

先生のその言葉に、僕よりも数段、安心した様子で胸を撫で下ろしたのは、僕に怪我を負わせた張本人だった。

「傷のショックで失明とかなったら、マジでどうしようかと思ったあ」

「随分と大袈裟ねえ」

相当に心配していた様子のその人に対し、先生がどこか呆れたように言う。僕も、大袈裟だと思った。それに例え失明したところで、僕は彼と面識もない、ただの同じ学校の生徒だ。そこまで心配する義理など、普通に考えてないだろう。

「まあ確かに、今回は軽い怪我で済んだけど、一歩間違ったら失明だって十分にあり得たんだから、もう教室でボールは蹴っちゃダメよ？朝比奈君」

「はい！了解でっす！」

先生に言われたその人が、しっかりと返事をして、敬礼の格好をする。そんな彼を見ながら、朝比奈というのか、などと何となく考えていた。

「箕島君は、どうする？眼鏡割れちゃったし、一人で帰れなそうな

ら、先生が送っていくけど」

「あ、いえ、大丈夫」

「あ、じゃあ俺、送ってく！」

「え？」

やる気満々に手をあげた朝比奈君とやらに、僕は思わず困った顔となる。

「あ、いや、別に僕、眼鏡なくても多少は…」

「よっしゃあ！張り切って送ってくぜえ！」

「あ…」

気合いの入りまくった彼を止める術は、僕には与えられていなかった。

こうして僕は、彼、朝比奈スズメと、彼の双子の弟であるという朝比奈ツバメに、家まで送ってもらったこととなった。帰り道は、とても騒々しかった。やたらと大きな声で、思ったことをすぐさま口にするスズメ君と、スズメ君を驚かせたり、脅えさせたりといった不気味発言ばかりをするツバメ君。何がそんなに楽しいんだろうとある意味感心しながらも、僕は少しくんざりとしながら、彼等との帰路を歩いていた。

「もう、すぐそこが家なんで、ここまででいいですよ」

騒々しい会話に疲れて、家の少し手前で、スズメ君たちにそう言う。

「そっかあ？」

「今日は本当に、すみませんでした」

「なんで、お前が謝んだよ」

「そうそう…悪いのは間違いなくスズメなんだし…」

丁寧に頭を下げると、二人が口々に言葉を放つ。

「今日は本当にゴメンな。マジで悪かった！」

「いえ、そんな」

申し訳なさを顔に滲ませ、深々と頭を下げるスズメ君。すぐに

首を横に振りながらも、気持ちの入った言葉とは、こういうものを言うのだろうか、などと考えていた。悪いことをしたと、僕に対し申し訳なく思っていることが、まっすぐに伝わってくる言葉。

「大丈夫…僕がちゃんと、呪っておくから…」

「いっやあ！それだけはやめてえ！」

「はあ…」

相変わらずの二人のやり取りに、少し呆然となる。

「じゃあ、俺らはここで」

「はい」

「あ、そうだ」

去って行こうとした足を止め、スズメ君が再び、僕の方を振り返る。

「お前、名前は？」

「え…？箕島、ですけど」

「それ、名字だろ。俺聞いてんのは、名前」

「ああ、雅です」

「雅な」

僕から答えを聞いたスズメ君が、どこか満足げに笑う。

「じゃあ、またな！雅！」

「また明日、学校でね、雅くん…」

「……っ」

大きな笑顔で放たれた二人のその言葉が、何故か強く、胸に焼きつくように、印象に残った。

それから新しい春を迎えて、中学三年になった僕は、偶然にもスズメ君とツバメ君とクラスが一緒になった。何の遠慮もなく親しげに話しかけて来る二人に戸惑ったり、相変わらず騒々しい二人に困惑したりしながら、ゆっくりと、穏やかに時は流れていった。

「それで結局、ツバメ君に呪われそうになって、交換条件として、

オカルト同好会に入ることになったんです」

「へえ」

学校が終わって、『いどばた』に行ってから、僕はよく、二人の話をするようになっていた。

「雅クンが、オカルト同好会ねえ」

「しかも同好会なのに、部長なんですよ？僕」

「アハハ、いいじゃなあい。ボク、そういう矛盾、大好きだよお」
為介さんはいつものように適当な相槌を返しながらも、どこか嬉しそうな顔で、僕の話聞いてくれた。

「けど、珍しいねえ。君がこんなにも、学校のこと、ボクに話すなんてえ」

「え？」

その言葉に、思わず目を丸くする。

「今までは、サッパリぱりぱりだったのにい」

「それは…」

話さなかったわけではない。話すことがなかったのだ。機械的な会話をする相手しかなくて、為介さんにわざわざ話すような出来事など、今までは一切なかった。二人と出会って、二人と共に過ごすようになったから、きっと、僕は話をするようになったのだろう。

「僕…」

「んん？」

「僕、もっと、彼等と仲良くなってみたいんです」

「……っ」

そう言った僕に、為介さんは一瞬だけ、ほんの少し、驚いた表情をした。

「うん」

そしてすぐに笑顔となって、まるで納得するように頷く。

「それが、“君の言葉”だよ」

「え…？」

為介さんの言葉に、僕は戸惑うように声を漏らす。

「僕の、言葉…？」

「そう」

僕が聞き返すと、為介さんがもう一度、大きく頷く。今までは何故、僕の言葉ではなかったのか。何故、これが僕の言葉なのか。細かい意味はまだよくわからなかったけれど、何かが変わったということ、僕自身、確かに感じていた。

「為介さん、僕…」

「何も迷う必要はないよ」

まだまだ戸惑うばかりの僕に、為介さんはただ、笑みを向けてくれた。

「今はただ、君の言葉を素直に、発し続ければいい」

為介さんのその言葉を、僕はただ、胸に刻みつけた。

けれど、穏やかな時は、そう長くは続かなかった。

「五十音士に…！？」

「ああ」

兄であるカモメさんを失ったスズメ君とツバメ君は、自ら五十音士になることを決めた。

「ま、待って下さい！」

けれど僕は、どうしてもそのことに、賛成が出来なかった。

「もう一度、考え直して下さい！五十音士は、君たちが考えているよりももっと厳しく、辛く、醜いものです！」

五十音士であるがゆえに、人生を狂わされた父の姿を、衰えていった箕島の家を、そして、何かを背負っているらしい為介さんの姿を見てきた僕は、この世界に、二人を巻き込みたくなかった。巻き込むことで、二人が変わってしまうことが、嫌だった。

「命だって、落としかねないですよ…！？」

「命なんて、いらねえよ」

「え…？」

はつきりと言い放つスズメ君に、僕は思わず眉をひそめる。

「あいつを倒せるなら、もう家族を失わなくて済むのなら、俺は命も、何もいらない」

「スズメ君…」

「僕は、もう決めたんだ…どうか、止めないで。雅くん…」

「ツバメ君…」

僕にはどうしても止めることが出来ず、彼等は、五十音士としての道を選んでしまった。

「そう、彼等が五十音士にい」

「はい」

彼等の思いを汲んだとはいえ、止めきれなかったことを、後悔せずにはいられなかった。

「為介さん、僕はもうしたらいいんでしょうか…」

胸の中のもどかしさをどうにかしたくて、僕は思わず、為介さんへと問いかけた。

「さあ？ボクからは、何ともねえ」

「そう、ですよね…」

予想はしていたとはいえ、その適当な答えに、がっかりと俯く。人に聞いて、どうにかなるもどかしさではない。きっと誰に聞いたって、答えなんて出せないのだから。

「“どうしたらいいか”じゃなくて、君が“どうしたいか”じゃない？あ、い？」

「え…？」

続けて聞こえてくる声に、戸惑うように顔を上げる。

「君の好きにしたらいいよ。君はもう、どうすることだって出来る力を持っているんだから」

為介さんの穏やかな笑顔が、僕へと向けられる。

「力…？」

「そう。五十音士の力は、神を崇めるためにあるんじゃない」

まっすぐに見つめて、為介さんの言葉へと耳を傾ける。

「大切な人を守るために、あるんだよ」

「……っ」

あなたがそう言うてくれたから、僕は迷うことなく、“守る”道を進むことが出来た。

五十音士になった友を、命などいらなといった友を、この力で守っていく覚悟が出来た。

僕にいつだって、正しい道を示してくれた。

もう神附きではないけれど、父は許すなど、そう言ったけれど、

きつと、あなたが、

僕の、唯一無二の、“神”……――――

「“神”…」

青い空を見上げた雅が、今度はどこか呼びかけるように、もう一度、その言葉を口にする。

「イヒヒ、さあーてと、そろそろトドメを…」

「何度…」

「ああ？」

笑みを零しながら、勝敗をつけるべく、雅のもとへと歩み寄って、いこうとしていた錨が、かすかに耳に届く小さな声に気付き、足を止めて、眉をひそめる。

「何度…言えば、わかるんです…？」

苦しげな呼吸で、途切れ途切れの言葉を吐き出しながら、重い体を奮い立たせ、必死に起き上がる雅。体中の傷から血が流れ落ちるが、雅は鋭い表情を見せ、痛みに顔を引きつることなく、ゆっくりとした動作で立ち上がった。

「君は、“神”ではないと」

その言葉が、重く、強く、言い放たれる。

「“神”はもっと、尊いと…」

「……っ」

雅に突き刺さるような視線を向けられ、錨が思わず眉をひそめる。雅のその瞳には、何か気圧されるような、強い力が宿っていた。一瞬であれ、雅に気圧された錨は、その気圧された自分自身に苛立つように、あからさまに顔をしかめた。

「んなに神様が好きならなあ、もっと神様に近けえところに送ってやるよお！」

怒りを前面に押し出し、力強く叫びあげた錨が、言玉を持った右手を鋭く振り上げる。

「言葉は、大切な人を守るためにある」

構えを取った錨を、雅は落ち着いた表情で、まっすぐに見つめる。
「それが、僕の神の、唯一の教え……」

その言葉を噛み締めるように、そっと左胸に手を置く雅。

「……っ」

首だけを動かし、雅が後方を振り返る。ほんの少しだけ後方を見た雅は、校舎内の窓からこちらを見つめるスズメとツバメを、校舎内にも外にもいる多くの生徒を、グラウンドに倒れている者たちの姿を、視界の中に入れると、また前を向いた。

「だから、僕は守る」

再び錨を見た雅が、鋭く前を見据える。

「この命に代えても……！」

言玉を持った右手を、高々と上空へと突き上げる雅。

「みなぎ漲れ”……！！”」

雅の周囲から、逆立つ滝のように勢いよく、水の柱が噴き上がった。

「雅……」

先程、一瞬だけこちらへと視線を移した雅を、今、青い光に包まれ、激しい水柱を上げた雅を見つめ、眉間に皺を寄せたスズメが、一際、険しい表情を作る。

「まさか、雅くん……」

「……っ」

予感めいたものを感じたのか、不安げに言葉を漏らすツバメの声を聞き、スズメが一瞬、唇を噛む。

「クソ……！」

居ても立ってもいられず、三階だというのに窓から飛び降りていくスズメ。

「スズ……！！……っ」

スズメを呼び止めようとしたツバメであったが、少し唇を噛んだ後、意を決した表情となって、スズメの後に続くように、三階の窓から飛び降りていく。近くの木を一旦、足場にしたり二人が、器用にグラウンドへと着地する。

「雅！」

「雅くん……！」

グラウンドに居る雅のもとへと、駆けて行こうとするスズメとツバメ。

「お待ち下さい」

『……！』

グラウンドの中央へと駆けて行こうとした二人を止めるように、二人のすぐ前へと現れる人影。

「熊子……！」

それは、阿修羅が現れた夜も、突然二人の前へと現れた、眼鏡をかけたスーツ姿の女性、熊子であった。その隣には、あの夜と同じように、大男、塗壁の姿もある。熊子は、眼鏡のレンズを通して、突き刺すような鋭い視線を、スズメたちへと向けた。

「何をされる気ですか？ スズメ氏、ツバメ氏」

「熊子……」

「そこを退いてくれ、熊子」

険しい表情を見せるツバメの横から、スズメが懇願するように言葉放つ。

「退きません」

「いいから退けよ！」

「この戦いは、韻が監視しています！」

怒鳴るスズメに負けぬほど、熊子も強い口調で言い放つ。

「今ここで、あなた方が出て行けば、我ら宇附きの正体が知られ、韻は必ず我が神に辿り着く！」

熊子が熱く、言葉続ける。

「それだけは決して、あってはならないのです！」

その強い言葉に目を細め、そっと俯くスズメとツバメ。熊子の言葉が正しいことも、今出て行くことを決してしてはいけないことも、二人は十分にわかっていた。

「すべては神を守るため。堪えて下さい」

「神を…」

俯いたままのスズメが、小さな声を漏らす。

「神を守れたって、ダチ一人、守れないっ…」

スズメが血が滲みそうなほど強く、拳を握り締め、悔しげに唇を噛み締める。

「何のために…何のために五十音士になったんだよ！俺は…！」

「スズメ…」

自身への憤りを言葉にするスズメを見つめ、ツバメはどこか悲しげに、目を細めた。

「イヒヒ、イヒヒ！いいねえ！」

雅により噴き上げられた水柱を見上げ、錨が満足げな笑みを浮かべる。

「面白れえぜえ！たかだか美守のくせによお！」

目の前に現れた雅の力にも、焦った表情一つ見せず、楽しげに声をあげた錨が、待ち構えるように、大きく両手を広げる。

「さあ！来い！」

「……っ」

錨の言葉に応えるように、雅がゆっくりと、上空へと突き上げていた右手を、前方へ向けるために下ろしていく。

「すみません…」

誰へ向けたものなのか、届かない謝罪を、そっと零す雅。下ろされていった手が、前方の錨へと向けられたところで、ピタリと止まる。

「これが、僕の力のすべて」

雅の右手の中で、言玉が強く輝き始める。

「満ちれ”……!!”」

力強く放たれた言葉と共に、突き上げられた水柱が、一斉に錨へ向けて、飛び出していく。

——パァァァン！

だが次の瞬間、雅の放とうとしていた水柱たちは、錨に届くことなく、空中で一斉に弾け飛んだ。

「え……？」

雅の口から、困惑の声が零れ落ちる。

「為介、さん……」

「……………」

雅のすぐ目の前へと立ち、雅の突き出した右手を自身の左手で握り締め、雅の攻撃を止めたのは、どこか悲しげな表情を見せた為介であった。言玉から放たれる、強大な力を受け止めたからか、為介の左手からは、ボタボタと赤い血が滴り落ちる。

「なん、で……」

「いいんだよ、雅くん」

戸惑いの視線を向ける雅に、為介がそっと微笑みかける。

「ボクの言葉なんかのために、君が命を懸ける必要はないんだ」

為介の優しい微笑みに、雅が目細める。

「けど……」

険しい表情を見せた雅が、すぐに言葉を発する。

「けど僕は……あなたの、神附きとして……」

「その気持ちだけで、十分だよ」

力ないながらも、必死に訴えかけようとする雅の言葉を、受け止めるように微笑む為介。その為介の言葉を聞き、脱力するように肩を落とした雅は、突き出していた右手を、ゆっくりと下ろしていく

た。

「んだあ？」

「……っ」

後方から聞こえてくる声に、雅と向き合っていた為介が、首を動かし、少しだけ振り返る。

「せっかく楽しみにしてたのに、何止めてくれてんだよ、お前」

不満げに口を尖らせている錨を見つめ、為介がそっと目を細める。

「それとも次はお前が、この俺の相手をしたってかあ？」

すぐさま口元を歪め、笑みを浮かべる錨。

「いいぜえ？どこの誰だか知らねえが、お前にも、その、たかだか美守と同じように、神の強さってのを見せつけてやるよお」

「誰だか知らないけど、一つだけ、忠告しておいてあげるよお」

「ああ？」

まったく抑揚のない、落ち着き払った声を放つ為介に、挑発めいた発言をしていた錨が、眉をひそめ、少し戸惑うように首を傾げる。

「早々“神”の名は、騙^{かた}らない方がいい」

為介が鋭く、その瞳を細める。

「ボクが許しても、彼が許さないからねえ」

「何…？」

そっと微笑む為介に、曇る錨の表情。

「“行^いけ”」

「え…？な…！？」

戸惑っていた錨の耳に届く、ひどく聞き慣れたその言葉。言葉と共に、上空から降り落ちてくる無数の水弾に、顔を上げた錨が、大きく目を見開く。

「ク…！」

勢いよく落ちる水弾を、錨は避ける暇もなく、一斉に浴びる。水弾がすべてグラウンドへと落ちると、砂煙が舞い上がり、錨の姿を一瞬、掻き消した。

「チィ…！」

砂煙が収まると、今まで見せたこともないほどに、大きく顔を歪めた錨が再び姿を現した。水弾を喰らったため、体のところどころから血を流している。だが、すべてを喰らったにしては、傷が浅い。あの一瞬の間に、何やら防御の言葉を使ったのだろう。

「俺と同じ言葉っ…俺と同じ、“い”の言葉だと…!？」

声を荒げながらも、戸惑うように言葉を続ける錨。

「まさか…!」

錨が勢いよく、上空を見上げる。

「あれは…」

同じように空を見上げた雅が目を見開く横で、為介が薄く笑みを浮かべる。

「……………」

青い空に映える、派手なオレンジ色の髪に、どこまでも冷たく、鋭い瞳を見せた男。全身真っ黒な服を風になびかせ、何も支えのない空中で、当然のように堂々と立っている。

「現“以の神”…」

男の姿を目に入れ、一気に陰しい表情となる錨。

「伊賀栗イクラ…!」

「この世に“以の神”は、俺一人でいい…」

動揺する錨を下方に、イクラは静かに言い放った。

Word. 53 いがいナ救援 (1)

言ノ葉町から数キロ離れた町の、はずれの山奥。

「当^あたれ」！」

木の上から飛び出し、降下してくる勢いに任せて、言葉と共に弾丸を放つアヒル。銃口から、大きな赤い光の塊が飛び出し、物凄い速度で降下していく。

「オォー！マイゴッドオォー！」

その弾丸の向かう先に立っているのは、異国の五十音士、ライアン。

「ララララアゝ“良^ら”！」

歌うように自分の持つ文字を発し、ライアンが右手に構えた赤銅色の羅針盤を、勢いよく回す。何度も羅針盤の上を回った針が、『良』と書かれた部分で止まる。

「当^あた“ら”ナァゝイ！」

ライアンが言葉を放った途端、アヒルの弾丸が不自然な動きでその弾道を変え、ライアンを見事に逸れていく。

「ララララアゝ“呂^ろ”！」

ライアンが再び羅針盤を回すと、今度は針が、『呂』と書かれた部分に止まる。

「当^あた“ろ”ウカァ、当^あた“ろ”ウヨォ！」

羅針盤を回したライアンが言葉を放つと、器用にライアンを逸れていったアヒルの弾丸が、再び不自然に弾道を変え、木から飛び降り、地面へと着地したアヒルのもとへと飛び出していく。自分のもとへと戻って来る弾丸に、アヒルは焦りの表情は見せず、素早く銃を構えた。

「“扇^{あお}げ”！」

アヒルが引き金を引き、銃口から強い風を放って、戻って来た弾丸を遠くの空へと吹き飛ばす。

「オウ、ナイスデース！ダッグ！」

「……っ」

攻撃を防いだアヒルを、ライアンは誉め称えるが、当のアヒルは、あまり浮かない表情で、そっと目を細めた。

「今のは、俺の“当たれ”だから防げただけだ」

アヒルが銃を見つめながら、厳しい表情を見せる。

「あいつの“当たれ”は、もっと強い……」

阿修羅の姿を、言葉を、力を思い出し、アヒルがさらに険しい表情を作る。

「……トンビ自身の言葉を防げるようになったところで、阿修羅は越えられない」

アヒルとライアンの交戦の様子を、少し離れたところから見つめ、恵が分析するように、冷静に言葉を並べる。

「なあ」

そんな恵へと声をかける、恵の横に立っている守。守も、一度関わったからには最後まで付き合うということで、アヒルの修行に加することとなったのである。

「俺も、修行に参加させてくんね？一日見てるだけじゃあ、すっげえ暇でさあ」

「それは、トンビの奴も、気付いてるな」

「無視！？」

守の言葉には一切耳を傾けずに、考えを巡らせている恵に、守が思わずショックを受ける。

「そろそろか……」

「なあなあ。だから俺にも何かこう、ドパっとした役目をつ……」

「うるさい」

「はい、すみません」

無視されても直、恵へ訴えを続ける守であったが、恵に冷たい視線を向けられると、すぐさま頭を下げ、大人しく黙り込んだ。

「恵先生！」

「あ？」

後方から名を呼ばれ、恵が少し眉をひそめながら振り返る。

「奈々瀬弟」

急な山道を平地と同じような速度で駆けあがってくる、一頭の金色の馬。その馬の上に跨り、恵へと大きく手を振っているのは、七架の弟、六騎^{むつき}であった。その馬は、武守^{むもり}となった六騎の、言玉が変形した姿である。

「馬……」

五十音士の力であることは察しているだろうが、初めて見る、その金馬の姿に、守が少し圧倒された様子で呟く。

「どうした？」

「悪い奴の一人が、急に姉ちゃんたちの学校を襲って来て、あの眼鏡の兄ちゃんが戦ってるって！」

「何？」

六騎の言葉に、恵がすぐさま表情を曇らせる。

「阿修羅の仲間が、言ノ葉高を？」

「うん！扇子が、先生んところ行って、伝えてくれって！」

「そうか……」

手で顎を掴んだ恵が、何やら考えるように首を捻る。

「お、おい！やべえじゃねえか！」

恵の横で、焦った表情を見せる守。

「すぐに朝比奈にも伝えて、とつとと加勢しに……！」

「待て、アホ木」

「安二木だ！俺は！」

まだライアンと交戦中であるアヒルのもとへと、駆け寄って行くこととした守を、恵がささず止める。思いきり名前を間違える恵に、守は勢いよく怒鳴りあげた。

「為介は別に、助けに来てほしいからって、こいつをここへ寄越したわけじゃない」

「え？」

その恵の言葉に、目を丸くしたのは六騎であった。

「これは、修行を早めろっつー、あいつの要求だよ」

はっきりと言い放ち、恵が鋭い表情を見せる。

「け、けど、実際に敵が来て、学校で暴れてんだろ！？お前等の仲間が戦ってんなら、助けに行かなきゃヤバくねえか！？」

「アホ木」

「いや、だから安二木だつての！」

再び名を間違える恵に、勢いよく突っ込みを入れる守。

「お前が向こうで戦ってる奴の立場だったとして、仲間が修行放り出して助けに来たら、お前、それを喜ぶか？」

「へ？」

急な恵の問いかけに、守が少し戸惑った表情を見せる。だが戸惑いを見せたのは一瞬で、守はすぐさま、真剣な表情を作った。

「喜ぶわけがねえ」

「いい答えだ」

迷うことなく答える守に、恵が満足げに笑う。

「準備しろ、アホ木。これから、お前も参加させる」

守へと言い放ちながら、恵が歩を進め、戦っているアヒルとライアンのもとへと近付いていく。

「ライアン」

「ハァーイ！」

二人のもとへと歩み寄った恵が、ライアンへと呼びかけると、ライアンがすぐに恵の方を振り向く。恵が呼んだことに気付き、ライアンへと攻撃を仕掛けようとしていたアヒルも、その手を止め、構えていた銃を下ろした。

「何デスカア？ティーチャー！」

「悠長にやってる暇がなくなった。あれを出せ」

「あれ？」

恵の言葉に、不思議そうに首を傾げるアヒル。

「アレヲ、モウデスカア？」

「ああ」

聞き返すライアンに、恵がもう一度、はっきりと頷きかける。

「ワツカリマシタア」

そつとその瞳を細め、恵の指示に頷いたライアンが、今の構えていた態勢を崩し、少し脱力したような姿勢となる。そして両手で羅針盤を持ち、ゆっくりと自分の前へと差し出した。

「何だ？何始めようって、い…」

「ヘエイ、ダツグ」

戸惑うアヒルの声を遮り、ライアンがアヒルへと呼びかける。

「んだよ？」

「ダツグハ、ゴ存ジデスカア？ “変格” ヲ与エラレテイル、四ツノ行ニツイテエ」

「変格？」

急なライアンの問いかけに、アヒルが目を丸くする。

「籠也たちが使ってるやつだろ？ ええくと、囁と奈々瀬も使えっから、カ行とサ行とナ行と…」

「ラ行…」

「へ？」

アヒルの言葉に続くようにして答えるライアンに、アヒルがそつと眉をひそめる。

「ラ行ってことは…」

「ソウデス、ダツグ。ワタシモ使エルノデスヨォ」

察した様子で、眉間に皺を寄せるアヒルを見つめ、ライアンが鋭い笑みを浮かべる。

「 “変格” 、ガネエ」

強調するように言ったライアンが、体の前に差し出していた羅針盤を、勢いよく掲げる。

「 “変格” ！」

「ク…！」

ライアンがそう言葉を放った途端、掲げられた羅針盤から、辺り

一帯を覆い尽くすほどの強い赤光が発せられ、目の前に立っていたアヒルが、思わず目を細める。

「ライアンが、変格を……!?」

「ララララア〜」

アヒルが驚きの表情を見せる中、ライアンが歌うように声を響かせる。

「ララ“ラージ・羅針盤”！」

「んな……!?」

光が止むと、ライアンの後方に、巨大な羅針盤が浮かび上がっていた。先程までライアンが持っていた羅針盤と比べると、十倍以上の大きさがある。視界を覆い尽くす、その巨大羅針盤を見つめ、アヒルが表情に衝撃を走らせる。

「で、でっけえ……ってか」

圧倒されながらも、少し引つかかるように、眉をひそめるアヒル。

「ラージって……英語じゃね？」

「くだらねえこと、気にしてんな」

「先生」

呆然と呟いていたアヒルのもとへ、恵が歩み寄って来る。

「いや、くだらねえってか、結構、根源的な感じの気が……」

「変格した、あいつの羅針盤は、相手の攻撃を、その十倍の力で弾き返す」

「十倍？」

恵の言葉に、すぐさま真剣な表情となるアヒル。

「十倍って、すっげえなあ！なんて変格だよ」

驚きの表情を見せながら、守が、恵の後方でまじまじと、ライアンの巨大羅針盤を見上げている。

「じゃあ、俺が銃撃したら、その十倍の威力の弾丸が弾き返ってくるってことか」

「ああ」

珍しくスムーズに内容を理解するアヒルに、恵が大きく頷きかけ

る。

「だが、十倍となって弾き返ってくる弾丸でも、阿修羅の力には及ばないと、私は考えている」

「……！」

「マジかよ!？」

恵の言葉に、それぞれ衝撃を走らせるアヒルと守。

「おっ前、何っーもんと戦おうとしてんだあ？朝比奈」

「……………」

どこか非難するように言う守を無視し、少し考え込むように、アヒルが顔を俯ける。恵の考えが間違っていると思うことは一切なく、アヒル自身、及ばないという考えが浮かんでいた。

「及ばねえーなら、及ぶようにすりゃいいだけの話だ」

アヒルが強く瞳を輝かせ、銃を握る手に力を込める。

「よし！早速やるぞお、ライアン！」

「ドツカラデモ、カカッテ来イヤアデス！ダッグ！」

気合いを入れて、ライアンの方へと歩いていくアヒル。ライアンもアヒルに応えるように声を出し、両手を広げて、構えを取る。

「はあり、あんな話聞かされて、よく、修行しようって気になるよなあ」

ライアンの方へと歩いていくアヒルの背を見ながら、守が感心するような、呆れるような声を漏らす。

「物好きっっーか、何っーか」

「別に、同じだろ」

「へ？」

横から入ってくる恵の声に、守が目丸くする。

「何度も負けてんのに、また負けるに決まってるのに、毎朝毎朝、懲りもせずに、同じ奴に勝負を挑む馬鹿と」

「……………」

恵のその言葉に、ハッとした表情を見せる守。

「そっか」

大きく頷いた守が、口元を緩め、笑みを零す。

「俺の辞書に“逃げ”がねえのと同じで、あいつの辞書にも“諦め”はねえなんだっとな」

「そもそも、あいつの中に辞書があるのかが、疑問だな」

「ハハハ、そりゃ言えてるわ!」

恵の言葉に、守がさらに大きな笑い声をあげる。

「さあーて、で? 俺は何をすりゃいいんだ?」

「お前もライアンと一緒に、トンビと戦え」

問いかける守に、恵が冷静な声で答える。

「トンビが、あらゆる攻撃に、素早く対応出来るようにするんだ」

「了解!」

恵の指示に頷いた守が、制服の胸ポケットから真っ赤な言玉を取り出し、意気揚々とアヒルの方へと歩み寄っていく。

「よっしゃあ! 覚悟しろ、朝比奈あ! 今日こそ、コテンパンのパンナコッタにしてやるう!」

「臨むところだ!」

守の大きな声に、アヒルも負けないほどの大声で応える。

「諦めんなよ、トンビ」

守、ライアンの二人と交戦を始めるアヒルを見つめ、恵がその瞳を鋭くする。

「“堕ちた神”に勝てんのは、“今の神”しかいないんだからな」

Word 53 いがいナ救援 (2)

「現“以の神”…伊賀栗、イクラ…」

突如、言ノ葉高校を襲った墮神の一人、墮ちし“以の神”、一条錨と戦闘を繰り広げた雅は、スズメやツバメを守るため、自らの命を懸けて、錨を倒そうとした。だが、それは為介により阻止される。今度は為介へと攻撃しようとした錨の前に立ちはだかったのは、現“以の神”であるイクラであつた。

「何故、彼がここに…」

戸惑いの表情で、上空に浮かぶイクラを見上げる雅の横で、為介が薄く笑みを浮かべる。

「伊賀栗、イクラ…」

雅と同じようにイクラを見上げ、錨が表情を曇らせる。錨が見つめる中、イクラがゆっくりと下降し、足音なく、地面へと降り立った。

「誰が、変な名前だ。そんなこと、あんたに言われなくても、ウチの神は十分に理解している」

「誰も、んなこと言ってねえよお!? シャコお! 神に代わって、俺が泣いちゃうよお!」

「僕の名前はチラシ!」

「私の名前はニギリ!」

イクラが降り立つとすぐに、イクラの左右から四人の人影が現れる。

『こんな二人は、ただの他人!』

「ウザい、うるさい、漆塗り…」

「そんなひでえこと言うと、二人に代わって、俺が泣いちゃうよ! ? ってか、漆塗りって何でえ!? シャコお!」

「……………」

明るくポーズを取る、お揃いのスーツを纏った、他人らしき少年

と少女に、か細い声で酷い言葉を口にして、いる不思議な空気、の女、そして、やたらと泣いちゃうと叫んでいるニット帽の男。そんな四人の姿を見つめ、イクラがかすかに表情をしかめる。

「あれは、以団^{いだん}」

「アハハ、相変わらずだねえ。彼等っ」

イクラに続いて現れた四人を見て、さらに驚いた表情を見せる雅。騒々しい四人の様子に、為介は何やら楽しそうに笑っている。

「金八^{きんぱち}、シャコ、チラシ、ニギリ…」

『はい、神』

不快そうに眉をひそめたイクラに名を呼ばれ、四人が素早く振り向く。

「周りに転がってる奴等を何とかしろ。邪魔だ」

「治療とか避難とかしろしろってことねえ〜!」

「任せて、神! 行こう、ニギリちゃん!」

「もちもち勿論よお! チラシくん!」

イクラの言葉にポーズを決めながら頷いたチラシとニギリが、グランドの至るところに倒れている、錨の攻撃を喰らった生徒たちへと駆け寄っていく。

「仕方ない、しんどい、信号待ち…」

「信号待ちって何だあ!? シャコお!」

意味不明な言葉を残しながら、チラシやニギリと同じように、倒れている者たちのもとへと歩み寄っていくシャコの背中へと、金八が勢いよく問いかける。三人が散り、イクラの傍に金八だけが残った。

「お前も行け、金八」

「一人で戦うのかあ?」

もう一度、指示を送るイクラに、金八が大きく首を傾げる。

「何なら俺、手伝うけどお?」

「誰に向かって、言っている? 殴りたいか?」

「まっさかあゝ殴られたりしたら、俺、泣いちゃうよお」

冷たく言い放つイクラに、泣き言を言いながらも満足げな笑顔を浮かべ、金八も皆と同じように倒れている者たちの方へと向かっていく。

「随分な自信だなあ。さっすがは俺と同じ“以の神”ってどこか？」正面に立つ錨に声を掛けられ、金八たちの方を見ていたイクラが、ゆっくりと振り向く。

「神試験で、新米の安の神に負けちまったわりに、神としての自信は失ってねえみてえだなあ」

あからさまに挑発的な錨のその言葉に、イクラが鋭い眉を吊り上げる。

「俺は神試験に敗れたただだ。奴自身に負けた覚えはない」

表情をしかめたまま、堂々と言い放つイクラ。

「あんなこと言ってますよ、あの人」

「アハハあゝ、イクラクンてば負けず嫌いだからねえ」

そんなイクラの姿を見つめ、雅がどこか呆れたような表情を、為介が楽しげな笑みを、それぞれ見せる。

「そっちは…？」

「ああ、こっちはボクが治しとくよお」

為介と雅のもとへと歩み寄り、シャコが無表情のまま声を掛けると、為介が軽く手を振り上げる。

「後の人たち、お願いいゝ」

「わかった」

笑顔の為介を見て頷くと、シャコが二人の横を通り過ぎていく。

「さあてとお、じゃあ傷の治療しちやおうかあ」

「あ、はい。すみません」

扇子を振り上げる為介に、雅が少し申し訳なさそうに頭を下げる。「あつ」

為介へと右手を差し出そうとした時、雅が何か思い出したように目を開き、素早く後方を振り返った。後ろに立つ校舎の三階を見上げるが、先程まで三階の窓から、グランドを見つめていたはずのス

ズメとツバメの姿がない。校舎全体を見回しても、二人の姿は見当たらなかった。

「……っ」

見えない二人の姿に、雅が不安げに目を細める。

「彼等には、彼等の事情があるんだよお」

そんな雅に気付いてか、為介が横から諭すように声を掛ける。

「君にさえ、話すわけにはいかない事情が」

「わかって、います」

為介の言葉に頷きながらも、雅はどこか落ち込むように、そっと俯いた。

「少し、寂しいだけです」

雅の感情が偽りなくこもった素直な言葉を聞き、為介が少し困ったように肩を落とす。

「さあ、やっぱ治療の前に、ちよつとここを離れようかあ。雅くん」

「え……？」

そう言って立ち上がる為介を、雅が戸惑うように見上げる。

「周りを気遣いながら戦えるほど、器用じゃないんだよお、彼」
首を傾げる雅に、為介は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

その頃、校舎を飛び出し、グラウンドに駆けつけようとしていたはずのスズメとツバメは、それを止めた熊子、塗壁と共に、学校の裏門までやって来ていた。グラウンドであればどの騒ぎがあれば、逃げ惑う人々で混乱しているようなものだが、裏門はまるで生徒の姿もなく、静まり返っている。

「結界が張られていますね。この学校と外とを、完全に遮断しています」

熊子が裏門の間へと手を差し出し、空中で止める。確かに熊子の白い手の向こうに、薄く、青い光の膜のようなものが見えた。

「校舎内も静か過ぎる。生徒たちは皆、眠りにでもついているでしょう」

さらに校舎の方を振り向き、言葉が続ける熊子。

「以団の仕業か：好戦的と評判の彼等にしては、冷静な判断ですね」
誉めているのか貶^{けな}しているのか、よくわからない言葉を発する熊子の横を通り過ぎ、いとも簡単に結界をくぐり抜けて、スズメが裏門から、学校の外へと出る。

「スズメ氏？」

「メロリンコ斉藤の握手会、行ってくる」

首を傾げ、問いかけた熊子へと、振り返ろうとはせずに、そのまま答えるスズメ。

「もう、整理券の配布は終わってしまっているのでは？」

「それでも、わずかな望みをかけて行くのが、ファンってもんだろ」
鋭い指摘を入れる熊子へ、スズメが諦めることなく答える。

「それに、ここに居ても、別に何にも出来ねえし：」

どこか拗ねるように呟くスズメに、熊子がそっと目を細める。

「スズメ氏。私は何も、意地悪で、あなたやツバメ氏を止めたわけではありません」

スズメの背中へと、まっすぐな言葉に向ける熊子。

「私はただ、宇附^{うつき}として、我が神の意向を：」

「わかってる」

背を向けたままのスズメが、熊子の言葉を勢いよく遮った。

「俺も宇附だ。神の意志が、俺の意志。別に、あんたを責める気はねえーよ」

そう言い残すと、スズメは握手会に行くためか、足早にその場を立ち去っていった。裏門に残った熊子が、眼鏡を直しながら、少し困ったように息をつく。

「スズメ：」

「済まねえなあ。ツバさん」

「え…？」

スズメの去っていった方を見つめながら、何やら考えるように目を細めていたツバメが、上の方から降って来る声に、ゆっくりと顔を上げる。顔を上げると、遠くの方に、大男の塗壁の顔が見えた。「不器用なもんだからあ、ああいう言い方しか、出来ねえんだあ。熊子の奴はあ」

「塗壁や熊子が、謝るようなことじゃないよ…」

申し訳なさそうな顔を見せる塗壁に、ツバメはすぐさま、フオロ―するような言葉をかけた。

「スズメだって僕だって、十分わかってる…」

ツバメが視線を落とし、自分の右手を見つめる。

「十分わかってて、それでも、この文字を背負うって…そう、決めたんだから」

見つめる右拳を、ツバメが力強く握り締めた。

「「^{にな}担え”！」

「「^{ちゆ}治癒”」

「「^き消えろ”」

ニギリが言葉を使い、水を操って、グラウンドに倒れている生徒たちを運び始め、チラシと金八がそれぞれの言葉を使い、ニギリにより運ばれて来た生徒たちの傷を治す。

「まあ、いいかあ」

為介に手を借りながら、グラウンドの中央から校舎側へと歩いていく雅。グラウンド内に倒れていた他の生徒たちも、金八やシャコたちにより、離れた場所へと避難させられていく。その光景を見回しながら、錨は一人で納得した様子で、大きく頷く。

「たかだか美守相手にしてるより、俺と同じ以の神相手にした方が、張り合いありそうだし？」

再びイクラの方を振り向く錨に、イクラがそっと目を細める。

「さつきから、同じ同じと…フザけたことを言う」

「あん？」

イクラの言葉に、錨が軽く首を傾げる。

「貴様は“神”ではない」

鋭く射抜くような瞳を、錨へと向けるイクラ。

「“以の神”は、俺だ」

「……っ」

自信満々に、はつきりと言い放つイクラに、錨の表情がかすかに歪む。

「好き勝手言ってくれるなあ。たかだか俺の後釜がよお！」

大きく声を張り上げた錨が、言玉を持った右手を突き上げる。

「雷^{いかずち}」！

明るい空から降り落ちる金色の閃光を、イクラが冷静な表情で見つめる。

「稲妻^{いなずま}」…

イクラがそつと言葉を落とすと、明るい空からもう一本、金色の閃光が降り落ち、先に落ちた錨の雷に追いついて、空中で激しく交錯し、あたりに火花を飛び散らせ、そのまま相殺した。

「チ…！」

相殺する閃光に、錨が軽く舌を鳴らす。

「これならどうだよ！“行け^{いけ}”！」

錨の突き出した右手から、鋭く尖った、獣の牙のような水の塊が放たれる。

「……“行け^{いけ}”」

静かな表情で向かって来る水の塊を見つめ、錨と同じ言葉を落とすイクラ。するとイクラの言玉から、無数の水の玉が飛び出している、水塊と水弾が、二人の間で激しくぶつかり合った。数は大きく減ったが、何個かの水弾が錨の水を突き破り、錨自身へと向かっていく。

「“諫めろ^{いさめろ}”…！」

錨が言葉を放つと、空から勢いよく降り落ちた水が、向かって来ていた水弾を地面へと叩き落とし、沈静化させる。

「諫めろ」…」

その頃、イクラも、向かって来た錨の水の塊を、錨と同じ言葉で沈静化させていた。

「挑め」！」

錨が攻撃の手を止めることなく、すぐさま次の言葉を発し、イクラへと大きな波を向ける。

「挑め」」

イクラが、またしても錨と同じ言葉を放ち、同じような大波を錨へと向ける。二つの大きな波は、ぶつかり合うギリギリのところで擦れ違い、互いへと向かっていく。

『凍てつけ』…！』

二人の声が揃い、互いの言葉が放たれると、それぞれへと向かっていった大波が、ほぼ同時に凍りつく。グランドの中央で、凍りついた二つの大波の間をくぐり抜け、互いのもとへと駆け込んでいくイクラと錨。

「射れ」！」

「射れ」」

相手が至近距離に迫ったところで、二人が右手を突き出し、言玉から同時に大きな水弾を放つと、二つの水弾は二人が行き交うその間で、激しく相殺した。

「チっ…」

イクラと行き違いながら、錨が大きく顔をしかめる。

「さっきから、俺と同じ言葉ばかり、うぜえなあ！後釜あ！」

イクラの方へと体の向きを変えながら、錨が怒鳴るように声をあげる。

「俺と同じ言葉…？」

イクラも同じように、ゆっくりと錨の方を振り返った。

「フザけたことを言う…今までの言葉はすべて、俺の言葉だ」

鋭い視線を、まっすぐに錨へと向けるイクラ。

「貴様の言葉など、一つもない」

「……っ！」

挑発的なイクラの言葉に、錨があからさまに表情を歪める。

「すべて、俺の言葉だあ……？」

錨がイクラの言葉を繰り返し、鋭く眉を吊り上げる。

「俺の言葉のマネしか出来ないような奴が、生意気な口きいてんじやねえよお！」

大きく声を張り上げ、右手を高々と突き上げる錨。

「挑め……！！」

錨が右手を振り下ろし、イクラへと再び、大波を向ける。先程よりも大きな波が、凍っている二つの波を砕き割って、イクラの方へと突き進む。

「……真似、だと……？」

猛然と向かって来る大波にも、顔色一つ変えず、そっと錨の言葉を繰り返すイクラ。

「フザけたことを言う……そこまで言うのであれば、見せてやろう。

俺だけの……」

イクラが素早く、言玉を突き出す。

「“神”の言葉を」

力のこもった言葉とともに、言玉が青々と輝き始める。

「怒れ……！！」

イクラが堂々と言葉を放つと、二人の立つ周囲のグラウンドから、まるでマグマのように猛々しく、水の塊が噴き上がった。その噴き上げた水に、錨の向けていた波が、あっという間に潰されてしまう。

「何……！？う……！！」

砕かれた自身の力に驚く錨であったが、錨の足元からも同じように水が大量に噴き上げ、錨は驚いている間もなく、構えを取る。

「チ……！“諫めろ”……！」

錨が空から水を落とし、地面から噴き上げる水を鎮静化させよう

とする。だが降り落ちる水に消えることなく、水は一気に錨へと噴き上げた。

「収まらない……!?!うああああ!」

噴き上げた水に突き上げられ、錨が勢いよく吹き飛ばされる。空へと高々と飛ばされた錨は、そのまま力なくグラウンドへと落ち、その場で倒れ込んだ。

「ふう……」

そんな錨を見つめながら、イクラは余裕の表情で一つ、そっと息をつく。

Word 53 いがいナ救援 (3)

「強い…」

避難したグランドの隅から、イクラの戦い振りを見つめ、雅が思わず呟く。

「当然だろお？我が神だぜっ」

「ウザい、金八」

「俺、今、何か間違ったこと言ったあ！？俺、泣いちゃうよお！？シャコ！」

雅と為介のいるすぐ横で、錨の攻撃を受けた生徒たちの治療を行っている金八とシャコが、相変わらずのやり取りを繰り返す。二人の会話を聞きながら、雅が少し呆れたように肩を落とす。

「それにしても、堕神の彼」

雅が金八たちとは逆方向を振り向き、隣に立つ為介の方を見る。

「彼は今、何故、伊賀栗イクラと同じ言葉を使わなかったのでしょうか？」

「使わなかったんじゃないくて、使えなかったんだよお」

「え…？」

あっさりと答える為介に、雅が眉をひそめる。

「使えなかった？」

「同じ文字を持っていたても、人にはそれぞれ、使える言葉と使えない言葉っていうのがあるんだあ」

イクラも見つめ、薄く笑みを浮かべる為介。

「あの言葉、“怒れ”は、イクラ独特の言葉…」

為介がそっと、目を細める。

「“神”でありながら、激しく“神”を憎む彼にのみ、使える言葉だよ」

「こんの…！」

地面に倒れた錨が、険しい表情の顔を上げ、素早く体を起こす。

「挑め」！

上半身を起き上がらせた錨が、鋭く右手を突き出し、大きな声で言葉を放つ。放たれた大波が、中央に向かって凝縮し、ドリルのような鋭い刃を形成して、イクラへと突き進んでいく。

「これで終わりだ！後釜！」

錨の高らかとした声が響く中、イクラは落ち着き払った表情で、言玉を持った右手を突き出した。

「憤れ」

イクラがそっと、言葉を落とす。落ち着いた声とは裏腹に、グラウンド全体から、先程よりもさらに激しく、大量の水が一斉に噴き上がった。

「あ…！」

猛烈な勢いで噴き上げる水に、一瞬にして碎かれる、錨の水。

「クソ…！ぐあああ！」

再びグラウンドから噴き上げた水に突き上げられ、錨が吹き飛ばされていく。

「グア…！」

吹き飛ばされた錨が、やがて落下し、強くグラウンドへと叩きつけられる。

「ク…うう…」

錨の体の所々には、イクラの水に突き上げられた時に出来たのか、傷が刻まれており、そこから赤い血が流れ落ちていた。

「血…？俺が、血…？」

グラウンドに落ちる自らの血を見て、錨が表情を険しくする。

「この俺に…神である俺に…」

錨の声が、かすかに震える。

「菌向かうんじゃねえよお！たかだか俺の後釜があ！」

勢いよく声を張り上げ、力強く立ち上がった錨が、言玉を握り直

し、右手を突き出す。

「茨^{いばら}」！」

怒りを感じる声で錨が言葉を放つと、棘のように鋭く尖った無数の水の粒が、まるで留っている雨のように、イクラの周囲に張り巡らされる。

「……………」

取り囲む水粒を見回しながらも、冷静な表情を崩さないイクラ。

「今度こそ終わりだぜえ！後釜ああ！」

錨が大きく、声を張り上げる。

「埋^いける」！！」

言葉が放たれると、それを合図として、イクラを取り囲んでいた水粒が、一斉にイクラへと向かっていく。

「……………」

降り落ち、突き出し、噴き上げて来る水粒にも動じず、イクラはその場から一步も動こうとせず、言玉を持つ右手をそと胸の前へと持って来て、握り締める手に力を込めた。

「い…」

イクラがゆっくりと、口を開く。

「祈^{いの}れ」…！」

とても大事そうに、言玉を抱え込んだイクラがその言葉を放つと、イクラの後方から、美しい女性を象った水の像が姿を現し、イクラへと向かって来ていた水粒を、あっという間にすべて、外面へと弾き飛ばした。

「な…！？」

その目を奪われる光景に、錨が大きく目を見開く。

「こ、こんな…」

イクラの後方に立つ、巨大な水の像を見上げ、錨が圧倒された様子で、声を震わせる。

「馬鹿な…俺が、神であるこの俺がっ…」

「貴様は、神などではない」

聞こえてくる言葉に、錨が、水像からイクラへと視線を移す。

「神は、以の神は、この俺だ」

はつきりと言い放ち、イクラが言玉を持った右手を突き出した。

“行け”」

水像の女性が、ゆっくりとしなやかな動作で身を屈めると、そこから一気に速度をあげ、その姿を水の塊へと変えて、錨へと飛び出していく。

「う…うあああああ！」

大量の水に吞まれ、激しい叫び声を残し、姿を消す錨。

「よっしゃあ！」

「さすが神…」

『やったあー！神！』

生徒たちの救護を終え、戦いを見守っていた金八たち^{いっせ}以附の面々が、錨を圧倒したイクラの姿に、思い思いに喜びの表情を見せる。

「口程にもないな」

ゆっくりと右手を下ろしたイクラが、どこか物足りなさそうに眩きを落とす。

「この世に“以の神”は、俺一人がいい…」

もう一度、確かめるように呟き、イクラがグツと拳を握り締める。

「チィ…！」

その時、イクラが放った水の塊の中から、先程までよりさらに傷を増やした錨が、勢いよく飛び出てくる。

「はあ…はあ…」

空へと舞い上がった錨は、空中で止まり、乱れた呼吸を整える。

錨が険しい表情と鋭い視線で、下方に居るイクラを突き刺すように見つめる。

「んの、たかだか後釜があ…」

まだ少し乱れた呼吸のまま、錨が恨みのこもったような、低い声を漏らす。

「調子こいてんじゃねえぞお…！」

「……っ」

怒り狂った様子で叫び、勢いよく右手を振り上げる錨。錨の持った言玉が、今までとは異なる、少し赤色の混ざったような、青光を放っていることに気付き、イクラがそつと眉をひそめた。

「“神格”……！」

「そこまです」

「……！」

言玉が一層輝きを増し、錨が何かをしようとした丁度、その時、横から入って来た細い手が、振り上げられていた錨の右手を、強く掴み止めた。掴まれる手に、錨が続けて発しようとしていた言葉を呑み込み、大きく見開いた瞳で、ゆっくりと横を振り向く。

「お前は……なつめ棗」

「そこまです。一条様」

錨の手を掴み止めたのは、阿修羅に付き従っている美しい女性、棗であった。棗は無い表情で、まっすぐに錨を見つめる。

「これ以上の戦いを、我が神は望んではおられません」

「あいつが望もうが望ままいが、俺の知ったこっちゃねえよ！」

声を荒げた錨が、勢いよく棗の手を振りほどいた。

「俺は、あの後釜をだなあ……！」

「一条様」

主張を続ける錨の言葉を、棗が強く遮る。

「その力は、我が神があなたにお与えになったものであって、あなたのものではありません」

棗の言葉に、錨が表情をしかめ、あれほど強く怒鳴りあげていたというのに、あつという間に黙り込む。

「我が神の意志に反し、勝手に使おうと言うのであれば、私は我が神の意志を守るため、あなたを排除いたします」

無表情とは裏腹に、本気の殺意のこもった瞳が、錨へと遠慮することなく向けられる。

「……わかったよ」

棗に言われ、少しの間を置いた後、錨が仕方なさそうに頷く。

「おい、後釜あ！」

すぐに表情をしかめた錨が、イクラを見下ろし、声を張る。

「今度やる時は、絶対ぶっ潰してやるからな！覚えとけよ！」

イクラにそう言い放つと、錨の体は空中で、水滴となって掻き消えた。錨が消え一人、その場に残った棗も、すぐさまその場を飛び出し、あつという間に見えないところまで去っていった。

「……………」

二人を追う素振りとは特に見せず、そっと肩を落としたイクラが、右手に握り締め続けていた言玉を、静かに懷へと片づける。

「神！」

戦いを終えたイクラのもとへと、素早く駆け寄っていく金八。

「神、最後の時の、あの野郎の言玉っ……」

「……………」

眉をひそめ、小声で訴えかける金八に、イクラが表情を曇らせる。最後に何かをしようとした時の、錨の言玉から放たれた光は、明らかにそれまでのものとは異なっていた。錨が、それまでのものとは違う攻撃を仕掛けようとしていたのは、確かであろう。棗が止めに入らなければ、戦いはどうなっていたのか。そう考えると、錨を圧倒したとはいえ、イクラの心は晴れやかではなかった。

「帰る。とつと事後処理を済ませろ」

「えええ、無視！？俺、泣いちゃうよお！？神！」

「うるさい。早くしろ」

「へえーい」

イクラに冷たい言葉を投げかけられた金八が、ひどく落ち込んだ表情を見せながら、まだ生徒たちの治療を続けているシャコたちのもとへと歩いていく。

「“神格”……」

金八が気にかけていたことを、イクラも気につけ、錨が口にした言葉を、そっと繰り返す。

「やつほお」

そこへ軽い口調の声が聞こえてきて、イクラがゆっくりと振り返る。明るい笑顔を見せた為介が、右手の扇子を振りながら、イクラのもとへと歩み寄って来ていた。

「何だ。井戸端為介」

「お礼言おうと思ってさあ。さっきは、助けてくれてあんがとお」緊張感のまるでない口調で、為介がイクラへと礼の言葉を向ける。「まさか君に助けられる日が来ようとはねえ、いやはや、君の師匠やってた頃は、思ってもみなかったなあ」

「別に貴様を助けた覚えはない」

嬉しそうな笑みを向ける為介に対し、イクラが冷たく言い捨てる。「俺は俺以外の神を潰す。それだけだ」

「まあ、別にいいけどねえ。それで」

呆れたように肩を落としつつも、為介は浮かべた笑みを消すことはしなかった。

「ホントに素直じゃないよねえ。イクラクンてばあ」

「あいつ等…」

「ん？」

小さく落とされたイクラの声に気付き、為介が少し首を傾げ、聞き返す。

「あいつ等…手強いぞ」

「……っ」

イクラの短いその言葉に、為介がそっと眉をひそめる。

「うん、わかってる」

頷きながらも、為介は何やら考え込むように、そっと目を細めた。

一方、イクラたちの参戦により、言ノ葉高校を去ることとなった錨は、棗と共に、自分たちのアジトへと戻って来ていた。

「クソ…！」

時間を置きはしたが、怒りが収まらないのか、錨がしかめた表情で言葉を吐き捨てる。錨の全身には、イクラに負わされた傷が目立ち、血も滲んでいるが、当の錨は、傷を気にしている様子はまったくなかった。痛みよりも、怒りの感情の方が先をいつているのだろう。

「傷の治療を致しましょうか？」

「んなもん、自分で出来るっつーの！」

アジトの入口へと足を踏み入れながら、錨のすぐ後ろを歩く棗が声を掛けると、錨が棗の方を振り返り、まるで怒鳴るように答えた。

「クソ…！」

「元氣そうだな」

「……っ」

再び言葉を吐き捨て、アジトの奥へと進もうとした錨が、前方から聞こえてくる声に、すぐさま足を止める。

「現“以の神”に圧倒されたと聞いていたから、安心したよ」

「阿修羅…」

一気に眉をひそめた錨の前へと現れたのは、穏やかな笑みを浮かべた阿修羅であった。阿修羅のその瞳は、穏やかな笑みとは裏腹に、まったく笑っておらず、ひどく冷たく、突き刺すように感じ、錨が思わず表情を曇らせる。

「油断しただけだ。誰も圧倒なんか、されてねえ」

「そうか」

阿修羅から視線を逸らし、強気に言い放つ錨に対し、阿修羅は素直に頷く。

「油断しただけで“神格”を使うのか？お前は」

「……！」

鋭く言葉を投げかける阿修羅に、錨は動揺を見せ、大きく目を見開く。

「そ、それは…！」

「別にいい。実際に使ってしまったわけじゃないんだ。お前を責めるつもりはないよ、錨」

訴えかけようとした錨を、阿修羅が手を差し出し、制止する。

「代々“以の神”が好戦的なことは、俺も知っているし、俺は、お前のそういう所が嫌いじゃないけど」

少しの間を置いて、周囲へと視線を動かしていた阿修羅が、まっすぐに錨を見つめる。

「勝手なことをして、俺の計画を乱されるのは、ちょっと困るな」
微笑みを浮かべながら、ゆっくりとした足取りで、錨のもとへと歩み寄っていく阿修羅。

「もう、今回限りにしてくれないか？錨」

錨のすぐ横に立った阿修羅が、口元を錨の耳の方へと近付け、そっと囁くように言葉を発する。

「これ以上、勝手なことをされると、俺はお前を消したくなる…」
「……っ」

言葉がまるで刃物のように、錨の耳に鋭く突き刺さり、突き刺さった何かが、一瞬にして体中に伝染し、錨は全身が激しく震えるのを感じた。

「数少ない堕神仲間だ。出来れば、そんなことはしたくない」

阿修羅が体の向きを変え、再び錨の前方へと歩を進めていく。

「頼むよ、錨」

「あ、ああ。わかった…」

少し後方を振り返り、笑みを浮かべる阿修羅に、錨は震えた声を詰まらせながら、その震えを隠すように、素早く頷いた。

「行くぞ、棗」

「はい、我が神」

阿修羅が棗へ声をかけると、棗はすぐさま頷き、茫然と立ち尽くしている錨の横を、何もないかのように通り過ぎて、阿修羅の後ろに付き、二人で足並みを揃えて、アジトの奥へと姿を消していった。
「ク…！」

阿修羅たちの姿が見えなくなった途端、錨は力なく膝を折り、その場に深々と座り込んだ。

「ハア…！ハア…！」

床へと座り込んだ錨が、ずっと息を止めていた後のように、必死に呼吸を整える。

「クソ…！」

そんな自分の状態にか、悔しげな声を漏らす錨。

「やれやれ。自ら進んで出向いて、あのザマとは…情けない男にございます」

錨の様子を、入口付近の壁際から見つめ、エカテリーナがどこか呆れたように肩を落とす。エカテリーナの横に立つ沖也が、阿修羅の去っていった方を振り向く。

「神さえも逆らえない…」

もう見えない阿修羅の姿を思い返しながら、沖也がそっと目を細める。

「恐ろしい男だ。どうでもいいけど…」

沖也の憂鬱な声が、アジトに静かに響き渡った。

Word 53 いがいナ救援 (4)

それから、一日半の時間が流れた。

「よし、そこまでだ」

「へ？」

恵の掛け声に、守、ライアンと交戦を続けていたアヒルが、戸惑いつつも、その動きを止める。

「ぶっはあく、疲れたあ」

「モウ、一步モ動ケナイデス」

戦いを止められたと同時に、その場で深々と座り込む守とライアン。戦い続けて来たからこそ、気力が続いたが、一度動きを止めると、一気に全身に疲れが出た。食事や、夜、眠ることもほぼせずに戦い続け、体もすっかりボロボロなので、無理はない。

「んだよ？もう終わりか？」

「化け物か、お前はっ」

どこか物足りなそうに恵に訴えかけるアヒルを見て、守が思わず口を尖らせる。アヒルも同じようにボロボロではあるが、息は乱れておらず、守たちほど疲れている様子もなかった。

「まだ時間あんだろ？恵先生」

「いや、ない」

問いかけるアヒルに、恵が腕時計を確認しながら、はつきりと答える。

「へ？けど、期限は三日だろ？後半日くらい、残ってるはずじゃあ……」

「お前は今から、神月たちの所へ移動しろ。トンビ」

「籠也たちとこ？」

恵の言葉に、アヒルが大きく首を傾げる。

「なんで？つか、そもそもあいつ等が、どこに居んのか、俺知ら

ねえし」

「場所は私が知ってる」

少しまぐっていた袖をもとに戻し、腕時計をその下に隠した恵が、ズボンのポケットから言玉を取り出して、移動の準備を始める。

「お前たちは、ここで適当に休んでろ」

『ハァーイ』

守とライアンは、疲れているからか、抵抗はまったく見せず、恵の指示に大人しく頷く。

「お前は一緒に来い。久々に姉貴にも会いたいだろう」

「うん！」

為介からの伝言を届け、そのままこの場に残っていた六騎が、恵の言葉に、嬉しそうな笑みを零す。姉に会えることが嬉しいのだろう。

「なあ、なんで籠也たちとこ、行くんだ？」

改めて、恵へ、理由を問いかけるアヒル。

「合流なんて、すぐ出来るし、ギリギリまで修行してた方が良くねえか？」

「お前があいつに勝つために必要なのは、力だけか？」

「へ？」

急な恵の問いかけに、アヒルが困惑し、眉をひそめる。

「取りに行くぞ。もう一つの、必要なものを」

「もう一つ…？」

恵の言葉の意味が理解出来ず、アヒルはただ戸惑うように、首を傾げた。

アヒルが恵に連れられ、やって来たのは、言ノ葉町の北はずれにある、純和風の大きな木造の一軒家であった。家自体は於崎家ほどの広さはないが、学校のグラウンドよりも広い、大きな庭がある。家

を訪れたアヒルたちは、使用人に案内され、花畑が広がっているわけでもない、一面の草原の続くその広い庭へと、通された。

「神」

「箆也！皆も」

庭へとやって来たアヒルを出迎えたのは、箆也たち、安附の面々であった。

「元氣そうで何よりよ、アヒるん…フフフ…」

「ええ！って、こんな重症の馬鹿の俺が、アヒルさんの心配とかしちゃって、すみませえ〜ん！」

「お前らも元氣そうで、良かったよ…」

不気味に微笑む囁と、謝り散らす保を見て、アヒルが少し呆れるように肩を落とす。

「お姉ちゃん！」

「六騎！」

アヒルと共にやって来た六騎は、箆也たちと共にアヒルを出迎えた七架へと駆け寄り、嬉しそうな笑顔を見せた。七架も六騎の頭を撫で、優しく笑みを零す。

「お前等、何だってこんな所に居るんだあ？　つか、ここ、誰ん家？」

「ああ、それは…」

「お客様…？」

『……っ』

箆也がアヒルの問いに答えようとしたその時、庭の奥から、凜と響く声が聞こえて来て、アヒルと箆也が同時に振り向いた。皆も二人に合わせるように、一斉に振り向く。

「あ…」

アヒルたちが振り向いた先には、車椅子に腰かけた、一人の美しい女性の姿があった。二十代前半くらいであろうか。茶色く長い髪をまっすぐに伸ばしており、どこか知的な空気を纏っている。その美しく整った顔立ちが、アヒルには、どこか見覚えがあった。

「えっと…」

「あなたが、朝比奈アヒルさん…？」

「え…？」

戸惑っていたアヒルが、名を呼ばれ、余計に戸惑った表情となる。

「なんで、俺のこと…」

「やっぱり」

アヒルが言葉を発すると、女性はどこか嬉しそうに、キレイな笑みを零した。

「よく似ているわ。カモメと」

「…っ」

女性が口にしたその名に、アヒルが思わず目を見開く。

「兄、を…？」

「ええ、とてもよく」

満面の笑みで頷く女性に、アヒルがさらに戸惑った顔となる。顔立ちに見覚えはあるが、直接会ったことがあるようにとは思えない。カモメの友人に、こんなに綺麗な女性がいれば、父やスズメたちが話題にあげそうなものである。

「えっと、その…」

「カモメと一緒に、いかにも国語が苦手そうな顔してる」

「え！？んなもん、顔に出てんの！？」

女性の言葉を真に受け、アヒルが焦ったように、両手で自分の頬へと触れる。

「ええ。辞書を読むと、一行で眠くなる顔だわ」

「すっげえ。よくわかんない」

「はあ…」

微笑む女性に、感心の瞳を向けるアヒルに、どこか呆れるように、箆也が深々と息をつく。

「神。こちらは、相良櫻^{さがらひな}さん」

感心するアヒルと女性の間に割って入り、箆也が女性を紹介する。「彼女の希望あって、恵先生に頼み、あなたをここへ連れてきても

らった」

「この人の、希望で？」

籠也の言葉に、目を丸くするアヒル。

「カー兄の知り合いで、俺に用って、あんた一体……」

「彼女は、囁の前の左守さもり、先代左守だった人だ」

「え……!？」

籠也の説明に、アヒルが衝撃を走らせる。

「先代、左守……？」

「ええ」

聞き返しながら、再び視線を櫻へと向けたアヒルに、櫻は微笑みながら、大きく頷いた。

「カモメとは、共に安附として戦った仲間だったわ」

「安附……」

その言葉に、アヒルが眉をひそめる。

——カモメは俺の神付きであり、俺はカモメの神だった——
思い出される、阿修羅の言葉。

「つてことは……」

「ええ」

アヒルが言おうとしていることがわかっていくかのように、アヒルが言葉を言い終えないうちに、櫻は大きく頷いた。

「阿修羅は、私の神だった」

「……っ」

櫻から伝えられる言葉に、アヒルが表情を曇らせる。まだ、どこか信じられずにいた、阿修羅とカモメの関係が、もう疑う余地もない真実であることを思い知る。

「懐かしい話よ。安附として、カモメと私と私の妹と三人……」

「三人？」

「当時の太守たもりは空席だったんだ。阿修羅が安の神に就いたのは、高

市の父親が亡くなった後だからな」

「あ、そっか」

解説するように口を挟む恵に、アヒルが、すぐ傍にいる保を氣遣うように、遠慮がちに頷く。

「我が神と共に、私たちは忌と戦い、人々の言葉を守っていた…」
車椅子から空を見上げた櫻が、懐かしむように目を細める。

「とても楽しかったわ。皆、とても仲が良くて、皆、とても言葉を大切にしていた…」

かつての楽しさを思い返してか、櫻の口元からは、自然と笑みが零れる。

「けど…」

だが、空を見上げる櫻の表情は、すぐさま曇った。

——アキラアアア：！！——

「……っ」

今も耳に残る悲痛な叫び声に、櫻がそっと目を伏せる。

「壊れてしまった。私たちの安団は…」

ゆっくりと目を開き、遠くを見つめる瞳を見せながら、悲しそうに呟く櫻を見つめ、アヒルが眉をひそめる。

「戦うんでしょう…？」

櫻が空を見上げていた顔を下ろし、再びアヒルを見る。

「阿修羅と」

「……ああ」

その問いかけに、アヒルは迷うことなく答えた。

「俺は、カー兄の仇を討つ」

はつきりと言い放つアヒルを見つめ、櫻は表情を曇らせた。

「俺を止めるのか？」

「いいえ、止めはしないわ」

アヒルが問いかけると、櫻はすぐさま、首を横に振る。

「じゃあ、なんで俺を、ここへ？」

「ただ、知っておいてほしいと思ったの」
俯いたまま、櫻がそっと笑みを零す。

「あなたに、今の安団であるあなたたちに……」

アヒルと、横に並ぶ籠也たち安附を見回す櫻に、五人がそれぞれに、真剣な表情を見せる。

「私たち、かつての安団と」

櫻が再び空を見上げ、遠く、空の向こうまで見据えるような瞳となる。

「私たちの神であった、安積晶あづみあきらという人について……」

——あの頃、私には、この世界のすべてが、輝いて見えた。

「“詰なれ”！」

<ギャアアア！>

言葉を放って、襲いかかって来た黒い影の塊を掻き消す。激しい叫び声と共に、その影は薄れ、あっという間に見えなくなってしまう。

「ふうっ」

無事に影を消し去ることが出来て、私は安心するように、大きく肩を落とした。

「そろそろ、忌退治も慣れてきたかしら？」

「お姉ちゃん！」

そこへ姿を見せた、よく見知った姉の姿に、私は思わず笑みを零す。

「全然慣れて来ないよお。いつまで経っても、忌は怖いし」

「そう？結構、五十音士が板についてきたと思うわよ？」

「そうだいいけど」

微笑む姉に、困ったように頭を掻きながらも、どこか照れくさく、笑みを浮かべる。姉の言葉に、実力を認められたようで、喜びを感じていた。

「神様たちは？」

「あっち」

「あっち？」

姉の指差した方向を、ゆっくりと振り向く。

「だから、いつも言ってるだろ？ 晶は神なんだから、戦いは俺たちに任せて、下がってればいいんだって」

「お前たちの神だからこそ、一番先頭に立って戦うのが当然だろう？」

「だから、それは違うって」

「何が違うんだ？」

私たちの振り向いた先には、互いの主張をぶつけ合い、一步も譲ることなく睨み合いをきかせている二人の姿。それは、私たちのもう一人の仲間と、他ならない、私たちの神様だった。

「目立ちたがり神」

「頑固附き人」

「しゃしゃり出神」

「小うるさ附き人」

「ハイハイ、晶にカモメも。忌も倒したんだし、早く帰って、お茶でも飲みましょう」

『はい！賛成！』

小学生レベルの言い合いをしていた二人へ、姉が声をかけると、二人はすぐに大きな笑顔を作って、まるで子供のように、思いきり手をあげ、大きな返事をする。その姿がとても無邪気で、面白くて、私は思わず笑い声を吹き出してしまった。

「ウフフっ」

「あ、ほらあ。晶が変な意地張るから、なっちゃんに笑われたただろお」

「それは、こっちの台詞だ。バカモメ」

二人がまた、言い合いを始める。けれど、今度はどちらも軽く笑みを零したままで、本気でぶつかっている雰囲気ではなかった。

「帰るぞお」

『はい、我が神!』

楽しかった。楽しかった。楽しい日々が、永遠に続くと思っていた……――

「んっ…」

大きな茶色の瞳が、虚ろに輝きながら、ゆっくりと開いていく。

「起きたか？」

目覚めたばかりの意識の中へ、届く声。

「棗」

「神…」

大きな瞳を開いた棗が、少し気だるそうにしながら、上半身を起き上がらせる。そこは、棗の自室の、寝台の上であった。寝台の横にある椅子の上には、阿修羅が腰を掛けている。

「申し訳ありません。私、眠ってしまっ…」

「構わないさ。最近、色々頼みごとばかりしていたから、疲れが溜まっていたんだろう」

少し顔を俯ける棗に対し、阿修羅は穏やかな笑みを浮かべ、棗の肩に流れ落ちる髪に、そっと指を絡ませた。

「何か、夢でも見ていたのか？」

「え…？」

阿修羅の問いかけに、棗が戸惑うように、顔を上げる。

「悲しい顔をしていた」

「……っ」

微笑む阿修羅を見つめ、棗がそつと目を細める。

「いえ、何も…」

「そうか」

明らかに何か思うところのある表情を見せながら、ゆっくりと俯き答える棗に、阿修羅は特に追求をすることもなく、素直に頷き、腰かけていた椅子から立ち上がる。

「そろそろ三日だ。現^{うつ}のところへ行く」

立ち上がった阿修羅が、穏やかな笑みを、鋭いものへと変える。

「附いて来い、棗」

「はい」

部屋の出口へと去っていく背中に、すぐさま返事をする棗。

「我が神」

あの日と変わらぬその言葉が、部屋に静かに落ちた。

Word. 54 幕開ケ (1)

阿修羅たち、墮神アジト内。墮ちし“宇の神”、現の部屋。

「どうだ？ 現」

三日の時を置き、棗を連れた阿修羅が、再び現の部屋を訪れた。

「“どうだ”、じゃと？」

阿修羅が口にした言葉を繰り返しながら、部屋の中央に立った現が、ゆっくりと阿修羅たちの方を振り返る。

「見ればわかるじゃろう？」

強気に言い放った現の後方には、全身金色に輝いた、美しくも荒々しい獣の姿があった。鋭い牙と爪に、射るような瞳。今にも目の前に立つ現を噛み殺しそうなほど、狂氣的な唸り声を響かせている。その獣の姿を視界に入れ、阿修羅が満足げに微笑む。

「ああ、完璧だ」

「フン、当然じゃ」

大きく頷いた阿修羅を見て、現が得意げな笑みを零す。

「すぐに出す準備をしてくれ、現」

「言われんでも」

阿修羅の指示に素っ気ない返事をしながら、現が獣の方へと歩を進めていく。

「さあ、じゃあ行くとするか。棗」

「はい、我が神」

阿修羅の声に、棗が素早く答える。棗を従えた阿修羅が、現へと背を向け、部屋を出る。

「皆」

部屋を出た阿修羅が、扉のすぐ前で足を止め、声を出す。部屋の前には、阿修羅を待ち構えていた様子の錨、エカテリーナ、沖也の三人の姿があった。

「準備は整った。さあ、始めよう」

笑顔を見せた阿修羅が、ゆつくりと右手を振り上げる。

「俺たちの世界に、秩序ある言葉をもたらす為に」

一方、恵たちとの修行を終え、先代“左守”相良櫻との話を終えたアヒルは、自宅へと戻っていた。まだ夜の明けていない、薄暗い居間で、仏壇の前に座り込み、飾られているカモメの写真を向き合っている。両手を合わせ、深く目を閉じていたアヒルは、長い祈りを終え、やっとのことで、その瞳を開いた。

「カー兄…」

「随分と長いお話だったねえ」

「……っ」

部屋へと入ってくる声に、アヒルが少し驚いた様子で顔を上げる。

「オヤ…」

「ミラクル大根アタック！」

「ぐお！」

アヒルが居間の襖の方を振り向いた途端、勢いよく大根が飛んできて、アヒルの顔面に容赦なく突き刺さった。大根を飛ばしたのは、襖を開け、居間へと入って来たばかりの、いつものように明るい笑顔を見せたアヒルの父、ウズラであった。

「おっはあ、アーくん！」

「ああっ…おはよう、さん！」

「のおおう！」

アヒルが顔面に突き刺さった大根を、明るく手を振るウズラへと、思いきり投げ返す。大根を顔面に突き刺され返したウズラは、そのままの勢いで、後方へと倒れ込んだ。

「ひどいよおーアーくうーん」

「どっちがひどいか、よく考えろ。クソ親父」

畳の上に倒れ込んだウズラが、ゆつくりと上半身を起こしながら、

今にも泣き出しそうな声をあげると、アヒルはまだ赤い顔面を撫でながら、強く表情をしかめる。

「ってか、悪りい。起こした？」

「ううん。仕入れの時間だから、起きただけだよ」

眉をひそめたアヒルへと、ウズラが笑顔で、首を横に振る。

「そっか。仕入れか」

「うん。アーくんは？随分と早起きじゃない」

「俺は、ちよつとカー兄に話っつか、まあ」

「そう」

曖昧に答えたアヒルであったが、ウズラは特に問い質すこともなく、一つ頷きを落とすだけであった。

「あんまりカーくんに心配かけないようにね」

「それは…」

ウズラのその言葉に頷けず、アヒルがそつと俯き、視線を落とす。

「ちよつと約束、出来ねえな」

「困ったもんだねえ」

アヒルのその答えを聞き、ウズラが優しく笑みを零す。

「それじゃあ、カーくんがゆっくり眠れないよお」

「うん」

ウズラの言葉に納得し、アヒルがすぐさま大きく頷く。

「たぶん、この五年間、起こしっぱなしだと思う」

仏壇の写真をまっすぐに見つめ、薄く笑みを浮かべるアヒル。

「だからそろそろ、いい加減、ゆっくり休ませてやらねえと」

そう言ったアヒルの瞳には、何か決意したような、強い光が宿っていた。まっすぐな瞳を見せるアヒルを見つめ、ウズラがそつと察するよう目細める。

「そう」

ウズラがそつと微笑み、短く声を落とす。

「さあてえ、そろそろ仕入れに行こうかなあ」

「あ」

そう言うとうズラが居間の店側の襖を開け、サンダルを履いて、店の方へと歩いていく。そんなウズラの背中を見て、アヒルが少し慌てた様子で声を漏らした。

「親父！」

「んん？」

アヒルに呼びかけられ、ウズラがすぐさま振り返る。

「なあにいい？アーくうん。もっとお父さんと一緒に、おしゃべりしてたいってえ？」

「あ、手が滑った」

「ぎゃあ！」

満面の笑顔で答えようとしたウズラに対し、アヒルが素早く、先程投げ放った大根を拾い上げ、その大根を父の顔面へ向け、容赦なく投げつけた。物凄い力でウズラの顔面へと叩きつけられ、太い大根が砕け折れる。

「ひどいよお、アーくうん」

「くだらねえこと、言うからだろうがっ」

顔を真っ赤に腫らしながら非難するウズラに、アヒルが冷たく言葉をつき捨てる。

「でえ？何い？」

「ああ、えっと」

改めて問いかけるウズラに、アヒルが少し言葉を詰まらせる。

「昨日帰って来たところで悪いんだけど、俺、実は今日もちよっと、今から出掛け……」

「うん、いつてらっしやい」

「へ？」

あっさりと承諾の言葉を返すウズラに、アヒルが戸惑うように目を丸くする。最近、修行だの何だので家を空けてばかりいたため、昨日の夜、久々に家へと戻って来た時は、泣きじゃくるウズラに散々、縫りつかれたのだが、今日は一転して淡泊だ。

「と、止めねえの？」

「止めないよお。そんな、もう十六の息子相手に、いい年したオッサンがあ」

「昨日は泣きじゃくって、縋りつきまくったじゃねえかよ。いい年したオッサンが」

もう十分に大人なのだが、いつもより大人ぶって答えるウズラに、アヒルが少し呆れた表情を見せる。

「どこへでも、好きに行っておいで」

ウズラがアヒルへと、笑顔を向ける。

「けど、帰っておいで」

「……っ」

明るい笑みを浮かべたまま、瞳だけを真剣なものにし、少し低い声で言葉を発するウズラに、アヒルがそっと眉をひそめる。

「必ず、帰っておいで」

「親父……」

念を押すように、どこか願うように、もう一度言い放つウズラを見つめ、アヒルが目を細める。

「今日の晩御飯はアーくんの大好きな、キャベツとナスビのセロリアんかけ、ニンニク味だからねえ！」

「見事に帰って来なくなる要素、一個もねえな……」

まったく惹かれないその晩御飯のメニューに、アヒルがさらに呆れた表情で肩を落とす。

「まあいいや。味にはあんま期待出来ねえけど、とりあえず」

落とした肩を上げ、アヒルがウズラと向き直る。

「帰って来る」

「うん」

大きな笑顔を見せ、はっきりと答えるアヒルに、ウズラは満足そうに頷いた。

「じゃあ、行ってくるな！」

「はいはぁーい、いってらっしゃーい！」

アヒルは笑顔のまま、軽く手を振り上げると、そのまま駆け足で

居間を出て、通用口から家の外へと出て行った。大きく手を振り、アヒルを送り出したウズラは、開いた通用口が閉まり、アヒルの駆け出していった足音が聞こえなくなったことを確認すると、そっと手を下ろす。

「アーくん、行っちゃったよ」

再びサンダルを脱ぎ、居間の中へと戻ったウズラが、誰へともなく声をかける。

「君も、もう行かなきゃなんじゃないの？」

ウズラが居間から通じている、台所を覗き込む。

「箆也くん」

「……………」

きれいに片付けられた台所には、静かに箆也が一人で佇んでいた。台所へは、居間を通らないと入ることが出来ない。アヒルとウズラが話している間も、箆也はずっと、ここに居たのだろう。

「すみません。神を迎えに来たつもりだったんですが、出るに出れなくて…」

「いいよ。君に聞かれて、困るような話じゃないしね」

結果として二人の会話を盗み聞いてしまった箆也だが、ウズラはそんな箆也を咎める様子は、一切見せなかった。

「アーくんと一緒に行くんでしょ？」

「はい」

「なら、箆也くんも早く行かないとお。アーくんより遅刻になっちゃうよ？」

「はい。でも、その前に一つだけ」

そう言う箆也は、まっすぐにウズラに向き直り、何の躊躇いもなく、深々と頭を下げた。

「すみませんでした」

「……………」

頭を下げ、深い謝罪の言葉を落とす箆也を見つめ、ウズラがそっと目を細める。

「本当はもっと、早くに謝るべきだったのに：気付くの遅れて、こんなに後になってしまいました」

箆也が少しずつ、ゆっくりと顔を上げていく。

「情けない話ですが、僕、神を迎えにこの家に来た時、ここがカモメさんの家だって、まったく気付かなかったんです」

「無理もないよ」

自分を咎めるように言う箆也に、ウズラは優しく微笑みかける。

「あの時の君は、立っているのもやとって感じで、とても、周りの状況が理解出来るようには見えなかったし、俺たちの家や顔を覚えてなかったって、当然だよ」

ウズラの言葉を聞きながら、箆也がまだ少し俯いたまま、強く唇を噛み締める。

「けど、本当に驚いたなあ。あの時は」

箆也から視線を逸らしたウズラが、懐かしむように目を細める。

「アーくんと同じ年くらいなの、まだ小さい子が、死んだカーくんを背負って、やって来た時は…」

「……っ」

少し悲しげに曇るウズラの声に、箆也が眉をひそめる。

「魂の抜け落ちてしまったような表情で、ただ何度も“ごめんなさい”って言ったその子の顔が、目に焼き付いて…」

ウズラがゆっくりと、箆也へ視線を戻していく。

「だから、君を見た時、すぐにわかったよ。“ああ、あの時の子だ”って」

「すみません…」

「謝罪の言葉なら、あの時、十分に貰ったよ」

再び謝る箆也に、ウズラが軽く首を横に振る。

「それに、カーくんが死んだことは、君の責任じゃない」

「それでも」

ウズラの言葉に、箆也がすぐさま言葉を返す。

——ま、待って！カモメさん！——

——俺が行かなきゃいけないんだ。ごめんね、箆也——
どうしても止めることの出来なかった、あの日。

「それでも僕は、責任を感じずにはられません…」

あの時、箆也がもっと強く止めていれば、カモメは死なずに済んだのではないだろうか。もっと早く駆けつけていれば、カモメを助けることが出来たのではないか。五年前、カモメを失ったあの日から、そう後悔しない日など、一日もなかった。

「僕は…」

「じゃあ、その責任を利用させてもらってもいい？」

「え？」

返って来るウズラの言葉に、箆也が戸惑うように顔を上げる。

「あの子を、死なせないで」

顔を上げた箆也へ、薄く笑みを浮かべたウズラが、どこか願うように言葉を掛ける。その言葉を耳に入れ、箆也は少し驚いたように目を見開いた。

「どうしても責任を感じるっていうなら、その責任で、あの子を守ってあげて欲しい」

ウズラの言葉をまっすぐに受け止め、少し考え込むように俯いた後、箆也はゆっくりと顔を上げた。

「必ず」

大きく頷く箆也に、ウズラが小さく笑みを零す。

「では僕も、そろそろ行きます」

「うん」

ウズラに軽く一礼した箆也が、足早に歩を進め、台所を出て、居間を通り、通用口の方へと行く。

「あ、そうだ」

何かを思い出したように声を漏らしたウズラが、居間から顔を出し、通用口の方を覗き込む。

「箆也くん」

「え？」

「箆也くんも今晚、一緒に食べようね」

呼びかけに振り返った箆也に、ウズラが大きく微笑みかける。

「キャベツとナスビのセロリあんかけ、ニンニク味っ」

「……っ」

その言葉に、箆也は一瞬驚いたような顔を見せたが、すぐにその表情を嬉しそうな笑顔へと変えた。

「はい」

ウズラの言葉にしっかりと頷くと、箆也は再びウズラに背を向け、アヒルの後を追うように、通用口を出て、家の外へと駆け出していた。居間にウズラだけが残り、やっといつもの早朝の静けさが戻る。

「いい後継者を持ったね、カーくん」

振り返ったウズラが、仏壇のカモメの写真を見て、笑う。

「君はこの戦いを、どんな気持ちで見守っているのかな…」

笑みを消し、真剣な表情を見せたウズラが、遠くを見るような瞳を見せ、そつと言葉を落とした。

Word. 54 幕開ケ (2)

言ノ葉町、町の小さな何でも屋『いどぼた』。

「あ、来た来た！朝比奈くん！」

「おう！」

他の者たちと店の前に並んだ七架が、こちらへと歩いてくるアヒルの姿をいち早く見つけ、大きく手を振って呼びかける。アヒルもその呼びかけに応え、手を振り上げると、駆け足となって、皆のもとへと寄っていった。

「おはよう、奈々瀬」

「お、おおおはよう、朝比奈くん！今日も絶好のケン玉日和だね！」

「そ、そうか？俺、ケン玉持ってねえけど」

相変わらず、声を震わせながら、見当違いなことを言う七架に、少し引きつった表情を見せながらも、アヒルがしっかりと答える。

「ってか、来るの遅過ぎ」

「六騎むつきっ」

「んあ？」

不満げな声をあげる六騎に、すぐ横に立つ七架が注意するように名を呼ぶ。だが、悪態づかれた当のアヒルは、不快な表情を見せることもなく、六騎の姿を目に入れ、少し驚いた顔を見せた。

「なんで、クソガキがここに居んだあ？」

「クソガキじゃない！六騎だ！」

「危険だから、於の神クンたちと一緒に、店の中で留守番してるよ
う言っただけどねえ」

怒鳴り返す六騎の声に被さるようにして、為介が言葉を放つ。

「どうにも聞いてくれなくってえ」

「俺だって、五十音士なんだ！こんな大変な時に、留守番なんかしてられるか！」

困ったように肩を落とす為介に、六騎が力強く言い返す。

「もう、一人じゃ何も出来ないガキじゃないんだ。好きなようにさせてやれ」

六騎の肩を持つように、為介へと言い放ったのは、店の扉にもたれかかり、固く腕組みをした恵であった。

「けど、恵サァーン」

「お前は納得してんだろ？ 奈々瀬」
「え？」

急に問われ、七架が目を丸くする。だがすぐに七架は穏やかな笑みを浮かべ、大きく頷いた。

「はい」

「こいつと奈々瀬が納得してんなら、それ以外の奴がとやかく言う必要はない」

「ハァーイ」

恵の言葉に、仕方なさそうに頷く為介。六騎を五十音土にしたことで出来ていた、七架と恵の間のわだかまりも、無事になくなったようである。

「それよりアヒるん、箆也は一緒じゃなかったの…？」

「へえ？」

囁に問われ、アヒルが間の抜けた声を発する。

「何だ？ あいつ、まだ来てねえの？」

「ええ…だからてつきり、アヒるんと一緒かと思ったんだけど…」

「いや、知らねえぜえ？」

首を傾げながら、周囲を確認するアヒル。確かにそこに、箆也の姿は見当たらなかった。

「戦いへの恐怖で、足でもすくんでるのかしら…？」

「あいつに限って、そりゃねえだろ。腹痛とかじゃね？」

「誰が腹痛だ」

「うわ！」

すぐ後ろからする声に、アヒルが慌てて振り返る。するとそこには、アヒルたちの会話を聞いていたからか、しかめた表情を見せた

籠也が立っていた。

「おっ前、いきなり現れんなよなあ」

「気配に気付かない方が悪い」

驚きで跳ね上がった心臓を落ち着かせるように、そっと胸を撫でるアヒル。そんなアヒルに、籠也は冷たく言い放つ。

「今日は遅かったんだね、神月くん」

「どうせ遅刻するであろう神を迎えに行ったら、行き違いになって遅れただけだ」

「俺、今日はちゃんと起きたからな！」

七架の問いに、籠也が本当のことを交えながら、ウズラと話した内容は伏せて答えると、アヒルは早起き出来たことを自慢するように、大きな笑みを浮かべた。

「さあ、じゃあこれで全員……」

「すみませえくん！」

皆へと声をかけようとした為介の声を遮り、割って入って来る一つの声。

「遅れちゃいましたあ！はあ！こんな人類の進化も遅れてる俺が、時間にまで遅れてすみませえくん！」

いつものように謝り散らしながら、駆け足でその場へと現れたのは、保であった。

『あ、居なかったんだ』

「はあ！存在感、まるで無くってすみませえくん！」

保が居なかったことに今、気付いたとばかりに声を揃える皆に、保がまたしても大声で謝り散らす。

「さあ、まあじゃあ、これで本当に、全員揃ったねえ」

「ああ」

集まった仲間たちの姿を見回しながら、アヒルが大きく頷く。

「けど、こっからどうすんだ？あいつ等のアジトの場所とか、わか
って……」

——バアアアアン！

『……！』

アヒルが為介たちに問いかけようとしたその時、地面を揺さぶるほどの大きな振動が辺りに走り、皆、一斉に目を見開いて、勢いよく顔を上げた。

「見て！あれ！」

七架の声に、皆が同時に振り向く。七架が指差した先、言ノ葉町の東側から、天まで届くほどの真っ赤な光が突き上げられていた。その光は強く、しっかりと形作られており、まるで巨大な一本の柱のようにも見える。

「あれだけじゃないわ……」

「え？」

囁の声に、アヒルが振り向く。

「あ……！」

他の光を探すように周囲を見渡したアヒルが、さらに驚きの表情となる。天へと突き上げられたのは、赤色の光だけではなく、町の別の方向には、同じように突き上げられた青、黄色、緑、白の光も確認出来た。

「光の柱が、五本……」

「これは……」

表情を曇らせる籠也の横で、恵も強く眉をひそめる。

「ついに、おっ始めやがったな……阿修羅」

言ノ葉町、東端。町を見渡せる小高い丘の上。

「……………」

天まで突き上げる赤い光に包まれた阿修羅は、同じように町中から上がった、異色の光の柱を見つめ、どこか満足げな笑みを浮かべていた。

「阿修羅様」

そこへ、どこからか突然、棗が姿を現す。

「錨、現、エカテリーナ、沖也の四名、予定通りに配置致しました」

「ああ、もう光が見えてる。計画通りだ。ありがとう、棗」

阿修羅のすぐ傍に膝をつき、深く頭を下げ、棗が報告を入れる。

突き上げた光により、すでに四人の位置を確認していた阿修羅は、棗に礼の言葉を向けた。

「さて、早速始めるとしようか」

不敵に微笑んだ阿修羅が、空へと伸びる光に合わせるように、そつと右手を掲げる。

「まずは小手調べだ」

口元を歪ませた阿修羅が、ゆっくりと自らの言葉を口にする。

「与^{あた}えろ」

阿修羅が言葉を放つと、突き上げられていた五本の光の柱が、上空の高いところで一つに集約し、丁度、五本の柱の中央付近に、まるで雷のように、勢いよく落ちていく。

「グアアアアア！」

『な…！？』

上空で集約した光が、雷のように落ちたその場所から、翼の生えた、巨大な金色の獣が姿を現す。近くにある家々の背丈を遥かに超えるその巨体は、空から落ちた光を受け、まだ成長を続けている。巨大化する獣の姿を、嫌でも視界に入れることとなり、アヒルたちは皆、大きく目を見開いた。

「あれは…！」

「あん時、阿修羅たちが連れてた獣か…！？」

「ああ。姿形は微妙に異なっているが、同じ力から出来たものと見て、間違いない」

眉をひそめるアヒルの横で、箆也が冷静に言葉を落とす。箆也は

実際、阿修羅と遭遇する前に、金色の獣と戦っている。アヒルたちの中では一番、あの獣についてを把握していた。

「けど、いくら何でもデカすぎじゃね？前はもっと、こう、普通のトラくらいの大きさだったぞ？」

「恐らく…」

言葉を途中で切り、箆也がゆっくりと上空を見上げる。空には先程と変わらず、五本の光の柱が突き上げており、獣の丁度真上付近に、集約するように留まっていた。

「恐らくは五母ごぼの力を使ったんだろう」

「五母？」

横から口を挟む恵の言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「突き上げられた光は恐らく、堕神共の“あいうえお”の文字、“五母”の力。それを一点に集め、あの巨獣に与えたんだ」

「与えたって、なんで、んなマネ…」

「クアアアアア…！」

『……っ』

アヒルが恵へと問いかけようとしたその時、何やら大きな声が聞こえ、アヒルたちが一斉に振り向く。先程よりもさらに巨大化し、言ノ葉高校の校舎をも超える大きさとなった金獣が、空を見上げた格好で、何やら大きく息を吸い込む動作を見せていた。

「マズイ…！」

その金獣の動きを見て、恵がすぐさま険しい表情となる。

「全員、伏せろ！」

『え…？』

恵の大きな指示に、皆が戸惑いの表情を見せた、その時。

「グガアアアアア…！！」

金獣が耳を裂くような激しい咆哮をあげると共に、その口から、眩いばかりの、強い金色の光を放った。金色の光は空から弾けるように一気に辺りに広がり、あっという間に言ノ葉町全体を包み込んだ。

『ううう…!』

地面へと伏せたアヒルたちが、その眩しさに、固く瞳を閉じる。

「ん…」

閉じた瞼まぶたの向こうからも感じていた強い光が、やっとなくなった気配を感じ、アヒルがゆっくりと瞳を開いていく。すると、周囲にしゃがみ込んでいた仲間たちも同じように、その瞳を開いているところであった。

「何だったのかな? 今の」

「さあ…?」

自分の体を確認しながら、囁と七架が言葉を交わす。恵があまりにも必死に叫んだため、激しい衝撃波でも飛んでくるのかと覚悟していたが、周囲に特に破壊されたような痕跡はなく、自身の体にも異常は見られなかった。

「恵先生、今のは一体…」

「ク…!」

「あ、恵先生!？」

問いかけようとしたアヒルの言葉が届く前に、恵はその場を飛び出し、『いどばた』のすぐ前の道を横切って、土手の上から、下に見える川原を覗き込んだ。

『……………』

先程まで、穏やかに朝のラジオ体操を行っていたはずの団体が、何の言葉も交わさずに、まったくの無表情で、自主的に解散している。

「やっぱりそうか…」

「恵先生!」

表情を曇らせる恵のもとへ、アヒルたちが駆け寄って来る。

「どうしたんだよ? 先生」

「言ノ葉町の町人、全員の自由ある言葉が奪われた」

『え…!？』

恵の言葉に、皆が衝撃を走らせる。

「自由ある言葉こそ、人の意志。言ノ葉町に住む全員が、たった今、すべての“意志”を奪われたんだ」

何の言葉もないままに帰っていく、ラジオ体操をしていた者たちの姿を見下ろしながら、恵が厳しい表情を作る。

「そんなっ…」

「先程のあの獣の咆哮が？」

「ああ」

「人々から自由ある言葉を奪っていたのは、阿修羅本人ではなく…あの獣さんだったのね…」

箆也と恵の会話を聞きながら、冷静に分析した囁が、ゆっくりと振り返り、並ぶ家々の向こう側から見える巨大な獣を見上げ、そっと目を細める。

「とにかく、町の皆の様子を確認を…！」

「そんな悠長なこと、してる暇はないだろうねえ」

背後から近づいてくる声に、アヒルが素早く振り返る。

「扇子野郎」

「見てごらあ〜ん」

人差し指を突き立て、上空を指し示す為介につられ、皆が空を見上げる。

「まだ五母の力の集約は続いてるう」

為介の言葉の通り、突き上げられた五つの柱からの光の集約は、まだ続けられていた。金獣の頭上に集まる光が、徐々にその勢力を増しているようにも見える。

「さっきの、数秒集められただけの力でも、あの威力だあ。このまま順調に集約した力が、あの獣さんに与えられて、一気に放たれれば…」

その言葉の先を読み、アヒルがぐくりと息を呑む。

「この町なんてものじゃない。世界中から、一瞬にして、自由ある言葉が消えるよ」

『……っ』

鋭い瞳で言い放つ為介に、皆の表情は凍りつくように固まった。為介が決して、大袈裟に言っているわけではないことは、アヒルたちにも十分に理解出来ていた。

「世界から、自由ある言葉が、意志が…消える…」

「そう。まあ、当初から予想してた事態ではあるけどねえ」

どこか唾然とした表情で呟くアヒルに、為介が肩を落としながら言う。

「何もやってねえうちから、時化^{しけ}た顔見せんな」

「へ？」

恵に声を掛けられ、俯いていたアヒルが顔を上げる。

「何とかするために、この三日間、必死に修行してきたんだろうが。お前は」

「先生…」

恵の言葉に、アヒルがそつと目を細める。

「ああ、そうだな！」

笑顔となったアヒルが、大きく頷く。アヒルが笑顔を見せると、箆^{へら}也たち、アヒルの仲間からも、自然と笑みが零れ落ちた。

「で、俺たちはこっから、どうすりゃいいんだ？」

「お前たちはそれぞれ散って、堕神と戦って来い。幸い場所は、あの光の柱が教えてくれてる」

恵が、一番近くに突き上げている青色の柱の方を振り返りながら、アヒルたちへと指示を送る。

「堕神を倒せば、あの光の柱が消えて、集約している力もなくなるはずだ。そうなれば、獣に与えられる力は弱まって、さっきみたいなことはもう出来なくなる」

「それぞれ散って戦って来いって…」

その説明を受け、アヒルが少し不安げな表情を見せる。

「皆も、堕神と…？」

不安げな瞳で、すぐ傍に立つ仲間の方を振り返り見るアヒル。安団の皆が、阿修羅か、もしくは阿修羅程の力を持つ者と戦うことと

なるのだ。アヒルでも倒せるかもわからないような敵と、保や七架を戦わせることが、アヒルにとっては不安であった。

「大丈夫だ、神」

アヒルの気持ちを察し、一番に口を開いたのは、籠也であった。

「僕らとて、この三日間、だらだらと過ごしていたわけではない」

「アヒルんの神附きとして胸を張れるくらいには、頑張ったつもりよ……？フフフ……」

「任せて下さい、アヒルさん！はあ！俺が一丁前の口、きいちゃつてすみませえ〜ん！」

「うん、私たちなら大丈夫！信じて、朝比奈くん！」

「みんな……」

堕神と相對するというのは、アヒルのように不安げな表情を見せることなど一切なく、大きな笑顔を見せて、次々と言葉を放つ仲間たちの姿を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「そうだな。お前らはなんせ、俺の神附きだもんな！」

「そういうことだ」

笑顔で頷くアヒルに、籠也が誇らしげに答える。

「じゃあ、とっとと散れ。二波目が撃たれる前に、動くんだ」

「先生たちは、どうすんだ？」

「私たちは雅やアホ木、ライアンと合流して、あの獣んとこに向かう」

「え？」

大きく覗く獣の方を指差し言い放つ恵に、アヒルが少し驚いた表情を見せる。

「あのデカブツと戦う気かよっ？」

「別に倒しにかかるわけじゃない。あんなにデカいの相手じゃ、束になってかかっても勝ち目ねえからな」

「じゃあ、なんで……」

「食い止めとくんだよ。言葉を奪うだけならまだしも、あいつが下手に暴れて、町人に危害が及んだら困るだろ？」

問いかけるアヒルに、恵が眉をひそめながら答える。

「なんせ、相手は獣だからな」

「成程」

アヒルの横から、箆也が納得するように頷く。

「氣い、付けてな…」

少し不安げに言葉を投げかけるアヒルに、恵がそっと目を細める。

「デカ獣よりヤバイ奴と戦いに行くんだ。人のこと心配してる場合じゃねえだろ」

「ハハハ、それもそっか」

恵の言葉に、アヒルが苦笑しながら、軽く頭を搔く。

「朝比奈」

「へ？」

改めて名を呼ばれ、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

——また明日！恵先生！——

その言葉を最期に、永遠に來なかつた“明日”。

「……死ぬなよ」

真剣な表情を見せた恵が、アヒルへとまっすぐに言葉を投げかける。

「死ぬな」

「……っ」

その、どこか祈るような言葉に、何やらアヒルの知らない思いが込められているような氣がして、アヒルはそっと目を細めた。

「ああ、死なない」

掛けられた恵の言葉を受け止めるように、笑顔を見せたアヒルが大きく頷いた。

「「絶対帰る」って、約束したんだ」

早朝のウズラとの会話を思い出し、アヒルは笑顔を零した。約束した言葉を噛み締め、胸に刻み込むように、左手で胸を押さえる。

「だから俺は、絶対勝って、戻って来る」

「……ああ」

はつきりと言い放つアヒルに、恵も笑みを浮かべ、満足するように頷いた。

「時間勝負だ。とっとと行け」

「おう！」

恵の指示に、アヒルは気合いを入れるように、右拳を左手へと打ちつけた。

「無理しないでね、六騎」

「お姉ちゃんも気をつけて」

七架と六騎が、少し名残惜しそうにしながら、別れの挨拶を済ませる。

「行くぞ！」

『仰せのままに、我が神』

アヒルの言葉に、箆也たち四人が声を揃えて頷くと、安団の五人はその場を駆け出していく、それぞれ、光の柱の突き上げる場所へと散っていった。遠ざかっていくアヒルの背を見つめ、恵が何やら考え込むような表情を見せる。

「あいつを守ってやってくれ。カモメ……」

恵が小さな声で、願うように、その名を落とす。

「恵サン、ボクらもそろそろ」

「ああ、行こう」

声を掛けた為介に、恵は大きく頷いた。

Word. 54 幕開ケ (3)

「光は町の南北と東に一本ずつ。それに北西と南西の計五本か」
恵たちと別れ、駆け出して行った安団の面々は、きれいに道の分かれた、大きな十字路へとやって来ていた。箆也が上空を見上げ、突き上がっている光の柱の方角を確認する。

「囁が北、高市が北西、奈々瀬が南西の光へ、それぞれ向かえ」

「わかったわ…」

「うん！」

箆也からの指示に、囁と七架がそれぞれ、しっかりと頷く。

「あのお、北西っていうのは一体、どっちのことであ…」

「自分で考えろ、バカ市」

「はあ！未だに北北西が何なのか、よくわかってない俺ですみませえ〜ん！」

問いかけた保を箆也が冷たくあしらうと、保が勢いよく謝り散らす。

「転校生くんは、途中まで私が送って行ってあげる…フッフ…」

「はあ！こんな俺が真田さんの手を煩わせちゃって、すみませえ〜ん！」

「時間がないわ…とっとと行くわよ…」

謝り散らす保を引っ張るようにして、囁が北へと向かう十字路の一本を選んで、その道を迷いなく駆け出していく。

「じゃあ、私も向かうね」

「ああ」

箆也へとそう告げ、囁たちとは違う道を行こうとした七架が、ふとアヒルの前で足を止める。振り向く七架に、アヒルが少し戸惑うように首を傾げた。

「気を付けてね、朝比奈くん」

「ああ。奈々瀬もな」

アヒルが優しく微笑みかけると、七架は嬉しそうに笑みを零し、今度は止まることなく、選んだ道を駆け出して行った。十字路の分岐点に、アヒルと箆也だけが残る。

「さあーて、俺はどこの光に向かえばっ…」

「神」

問いかけようとしたアヒルの声を、箆也が勢いよく遮る。

「この道をまっすぐに進んだ先、町の東の方角に、赤色の光の柱が見えるだろう？」

「へ？あ、ああ」

箆也が東を指し示すと、つられるように振り返ったアヒルが、その視界に、天へと突き上げる真っ赤な光の柱を入れ、大きく頷いた。

「恐らくあれが、阿修羅の光だ」

「……っ」

箆也のその言葉に、光を見つめていたアヒルが、ふと眉をひそめる。

「ああ、何となく感じてわかる」

相対した時も、阿修羅の力は、アヒルたち安団と同じ、真っ赤な光を放っていた。それに、遥か遠くに見える赤い光からは、かすかに阿修羅の力強さを感じる。

「ならば、あなたは、あそこへ向かえ」

「……いいのか？」

少し躊躇うように間を置いてから、アヒルが箆也へと問いかける。

「お前だって、あいつのこと…」

「ああ、出来るならこの手で倒したい。あの男は、カモメさんの仇だからな」

はつきりと言い放つ箆也に、アヒルが少し顔を俯ける。カモメから加守を受け継いだ箆也にとってもまた、阿修羅は仇であり、憎しみの対象でもあるだろう。

「だが、僕は神附きだ。神の、あなたの意志を尊重する」

箆也がゆっくりと振り向き、アヒルへと視線を向ける。

「あなたは、誰と戦いたい？」

問いかける箆也に、そっと目を細めるアヒル。だがすぐに大きく瞳を開き、まっすぐな視線を箆也へと返した。

「俺は、阿修羅と戦いたい」

「なら、それが僕の意志だ」

強く言い切るアヒルに、箆也がそっと笑みを零す。

「あなたはこのまままっすぐに進んで、東へ向かえ。僕は南の、白い光の方へ行く」

「ああ、わかった」

箆也の指示に大きく頷き、アヒルが目の前の道を進むべく、箆也から数歩、前へと出る。

「あ、そうだ」

数歩進んだところで立ち止まり、何かを思い出したように声を漏らして、箆也の方を振り返るアヒル。そんなアヒルの様子に、箆也が戸惑うように首を傾げる。

「箆也」

「何だ？」

怪訝そうな表情を見せ、箆也がアヒルへと聞き返す。

「色々と、ありがとうな！」

「……！」

笑顔で言い放つアヒルに、箆也が衝撃を走らせた様子で、大きく目を見開く。

——色々とうね、箆也——

よく似た笑顔を残して、箆也の前から消えてしまったカモメの姿が思い出された。

「じゃあな！」

「あ……！」

再び箆也に背を向け、道の先へと駆け出していくアヒルに、箆也

が思わず手を伸ばす。

「か……!……っ」

呼び止めるため、口にしようとした言葉を無理やり呑み込み、箆也が自分を押さえこむように、伸ばした手を胸へとつける。呼び止めなかったため、アヒルはその足を止めることなく、まっすぐに前へと進んでいき、やがてその背は、箆也の視界から消えていった。

「……………」

そっと俯いた箆也が、チラつく嫌な感じを振り払うように、数度、首を横に振る。

「僕は、神を信じればいい……」

そう言って顔を上げた箆也が、南に見える白い光の柱を見据える。

「今はただ、自分のやるべきことを……!」

力強く言い放った箆也は、その場を駆け抜け、迷うことなく、南の光へと向かっていった。

恵や為介たちも金獣のもとへと向かい、『いどばた』の店内には、まだ眠ったままの檻也と、その檻也に附いている紺平、空音の三人だけが残っていた。

「あの獣……」

大窓から、町の中央に突如として現れた金獣の姿を見つめ、紺平が険しい表情を見せる。

「皆、あんなのと戦いに……」

不安げに、目を細める紺平。捉えられる金獣は、学校の校舎を遥かに超える体長を誇っており、人間が戦うものには、とても見えな
い。出払った皆が、あんな化け物と戦いに行ったのかと思うと、紺平は気が気でなかった。

「ガァ……」

友の呼び名を口にし、紺平がさらに不安げに眉をひそめる。

「紺平」

「え？って、檻也くん！？」

名を呼ばれ、紺平が振り返ると、そこには空音に支えられた檻也の姿があった。まだ眠っていた時の寝着のままだが、顔色は良く、体調は良さそうである。

「気が付いたんだねえ！良かったあ」

部屋へと入って来た檻也の方へと歩み寄りながら、紺平が安心しきった笑みを零す。檻也がここに運ばれ、眠り続けてから、三日の時間が流れているのだ。紺平の心配は、相当のものだっただろう。

「けど、すぐ起きて平気？もうちょつと寝てた方が…」

「紺平」

「へ？」

心配する紺平の言葉を遮り、檻也がもう一度、紺平へと呼びかける。

「何？檻也くん」

「行け、紺平」

「え…？」

檻也の口から放たれた、思いがけないその言葉に驚き、紺平が一気に困惑の表情となる。

「安の神の、力になりたいんだろう？」

「け、けどっ…」

檻也からの言葉に、紺平が俯き、困ったように声を漏らす。

「俺なんか行っちゃって、その、そんな役とかに立てるとは、思えないし…」

「大丈夫だ。もっと自分に自信を持て、紺平」

俯いたまま、どこかうジウジと言葉を繋げる紺平に、檻也ははっきりとした口調で、言葉を向けた。

「お前は、俺の神付きなんだからな」

「檻也くん…」

そう言って微笑む檻也を見て、紺平がそっと目を細める。

「なら、尚更行けないよ」

「何？」

紺平の答えに、檻也が戸惑うように首を傾げる。

「俺は於附で、どんな時でも於の神に附いているのが、神付きとしての責務でっ…」

「紺平」

檻也の方を見ぬまま、すらすらと五十音士としての気構えを話していた紺平の言葉を、檻也が再度、遮る。言葉を遮られ、紺平がゆっくりと、檻也の方を振り向いた。

「確かに、神に附くことは神付きの責務だが…」

檻也がまっすぐに、紺平を見つめる。

「友を助けることは、人としての責務だ」

「……っ」

その言葉に、紺平がハッとした表情となり、大きく目を見開く。

「行け、紺平」

もう一度言う檻也に、紺平は俯き、考え込むような表情を見せる。だがすぐに意を決した表情となって、その顔を上げた。

「ありがとう」

礼を言い、笑みを零す紺平に、檻也もそっと微笑む。

「早く行け」

「うん！」

檻也の言葉に大きく頷くと、紺平はすぐさま目の前の大窓を開き、外に置いてあった自分の靴を履いて、家の外へと飛び出していった。檻也が窓を見つめ、去っていく紺平の姿を見送る。

「行ってしまいましたね…」

「ああ」

少し不安げな表情を見せる空音に対し、檻也は落ち着き払った表情を見せていた。

「俺の着ていた服はあるか？空音」

「あ、はい。確か為の神の付き人が洗濯をして、先程の部屋に…」

「そうか」

「あつ」

空音の言葉を聞いた檻也が、短く頷き、元居た部屋へと戻っていき、空音は慌ててそれを追いかける。

「神！外へ出られるのですか？」

「ああ」

「紺平の応援に？」

「いや…」

すぐさま首を横に振った檻也が、そつとその瞳を鋭くする。

「行きたい場所があるんだ」

少し音調を落とした檻也が、その場で足を止め、ゆっくりと空音の方を振り返る。

「附いて来てくれるか？空音」

真剣な眼差しで問いかける檻也に、空音はすぐに笑顔を作った。

「仰せのままに、我が神」

そう言って空音は、深々と頭を下げた。

Word. 54 幕開ケ (4)

言ノ葉町、中央部。言ノ葉高校付近。

「グアアアアア！」

激しく咆哮をあげて、その巨大な爪先を、近くの民家へ向けて振り下ろす金獣。

「うわわわ！ やめろやめろ！」

すぐ近くに立っている守が、金獣のその動きを見て、焦ったように声をあげる。

「瞬^{またた}け」！

言葉を放った途端、守の姿がその場から消える。すると次の瞬間、振り上げられた金獣の爪と、民家との間に、守が姿を現した。

「守^{まも}れ」！

間に割って入った守が、両手に構えた円月輪を、下りて来る金獣の爪へと突き出す。その突き出された円月輪へ向けて、金獣は何の躊躇いもなく、爪を振り下ろした。

「うお！」

円月輪が金獣の爪と接触した瞬間、守に押し潰されそうな程の強烈な圧がかかる。

「重……！ 何っ！ 力……て、え……！」

守がかかる圧に表情を歪めていたその時、両手に構えられた円月輪の爪との接触部分が、勢いよく欠けた。欠ける円月輪に、守が大きく目を見開く。

「マジ……？」

「グアアアアア！」

「へ？ うおおおお！」

砕かれた円月輪に守が茫然としてみると、金獣が今度は物凄い勢いで爪を振り上げ、その勢いに吞まれ、守が遥か上空へと吹き飛ばされる。

「いやあああ！死ぬううう！」

上空を舞いながら、情けない声を発する守。

「導^{みちび}け」

「ありゃ？」

遙か遠くへと吹き飛ばされていこうとした守の体が、突然、薄い水の膜に包まれると、その膜により勢いは殺され、守は水に包まれたまま、ゆっくりと下降して、無事、地面へと辿り着いた。守の足が地面へとつくつと、守の包んでいた水が、自動的に消える。

「無事ですか？末^{まも}守さん」

「美^み守！」

地面へと降り立った守のすぐ傍へと歩み寄って来たのは、相変わらず、眼鏡を押し上げる動作をしている雅であった。

「助かったぜえ！サンキ……！」

「無暗に飛び込むの、やめてもらえます？助けるのにも一応、体力使うので」

「ああん！？」

例を言おうとした守であったが。あまりに冷たい雅の言葉に、勢いよくその表情をしかめた。

「何っただあ！？その言い方は！仮にも同じマ行で、同じような境遇の、五十音士仲間に向かってだなあ……！」

「ヤンキーって、嫌いなんです。僕っ」

「爽やか笑顔で、俺を全否定するんじゃないねえ！」

満面の笑みで、清々しいばかりに答える雅のその態度に、守が思わず怒鳴りあげる。

「あああ、ダメだダメだ！んなことしてるだけ、体力の無駄だぜ」
自分の心を落ち着かせるように、守が軽く肩を回す。

「今はとにかく、あいつを……！」

「グアアアア！」

「……っ」

勇んで振り向いた守であったが、荒々しく咆哮をあげている、巨

大な獣のあまりにも恐ろしいその姿に、すぐに表情を歪ませた。

「ったく、この上なく可愛げのねえペット、飼いやがって…」

「ラララァ」

「んあ？」

こんな状況の中だというのに、陽気に聞こえて来る歌声に気付き、守が振り向く。

「ラララァ〜リルレロ、ララァ」

羅針盤を片手に、針をくるくると回しながら、陽気な歌声を奏でているのは、異国の五十音士“良守”^{らもり}のライアンであった。

「おい、外人」

「ンン？」

守に呼ばれ、ライアンが歌声を止めて、顔を上げる。

「何デスカァ〜？リーゼントマン」

「誰がリーゼントマンだ。っつか、てめえもちったあ戦えよ。ただでさえ人手不足なん…」

「ノンノン！」

「あ？」

突き立てた人差し指を揺らし、大きく首を横に振るライアンに、守が戸惑うように首を傾げる。

「ワタシノ力、敵ノ言葉ヲ跳ネ返スモノデェ〜ス。デモ、今回ノ敵ハ、言葉ヲ持タナイ獣。ワタシノ力、使エマセェ〜ン！」

「誰だよ！？こいつ、呼んだの！」

自分が無力であることを、何故か得意げに話すライアン。守は湧き上がる怒りをどこへぶつけていいかもわからず、とりあえず誰も居ない方角を向いて、怒鳴りあげる。

「ったく、おい。メガネ」

「……………」

「あの、美守さん」

「何です？」

メガネでは無反応だった雅だが、守が言い直した途端、とても素

直に応じる。

「俺たちだけじゃ、荷が重めえぜ？ 本当に旧世代の連中、応援に来るんだろ？ なあ？」

「さあ？ 僕が言えることと言えば……」

軽く首を傾げた後、雅が真剣な表情を作る。

「あの人が四回に三回は、約束を破るということだけです」

「ダメじゃん！」

真面目な顔で言い放つ雅に、守がすぐさま突っ込みを入れる。

「あああー！ もう俺の人生、終わったあ！」

「諦メテハダメデス！ 最後マデ戦イ抜キマシヨウ！ リーゼントマン！」

「戦えねえ奴が、偉そうな口、きいてんじゃねえよ！」

必死に守を慰めるライアンであったが、それは、守の怒りを増させるだけであった。

「グアアアアア！」

『……！』

再びあがる咆哮に、あれこれとモメていた守たちが、一斉に顔を上げる。空へ向けて吼えた金獣が、その背に持った金色の巨大な翼を、左右へと大きく広げようとしている。

「マズイ！ あいつ、翼で空へ……！」

翼を広げ、空へと飛び立とうとしている金獣に気付き、守が焦りの表情を見せた。

「“築^{つく}け”」

「え……？」

どこからか響く言葉に、守が眉をひそめる。

『あ……！』

言葉が落ちたその瞬間、金獣の周囲から、逆流する滝のように地面から水が噴き出し、分厚い壁となって、あっという間に金獣の周りを取り囲んだ。すぐ目の前から噴き出て来た水に、雅たちが目を見張る。

「おっしゃあ！」

上空に浮かび、水に囲まれた金獣を見下ろして、ガッツポーズを作るのは金八。

「あれは…」

「誰だあ？」

眉をひそめる雅の横で、守が大きく首を傾ける。

「いいぜえ、シャコ！チラシ！」

金八が下を向き、地上で待ち構えているシャコとチラシの二人へと呼びかける。すると、チラシが先に、青い言玉を持った右手を突き上げた。

「“千切れろ”」

「ギャアアア！」

チラシが言葉を放つと、取り囲んでいた水の一部が、金獣へと襲いかかり、その巨体を一斉に斬り刻む。人と同じ赤い血を流し、金獣が苦しげな声をあげる。

「し…」

続いてシャコが、言玉を構えた。

「“沈め”」

シャコが静かに言葉を落とすと、今度は金獣の立っていた地面そのものが水に吞まれる。斬り刻まれて隙を見せていた金獣は、簡単に足を取られ、大きくバランスを崩す。

「いいよお〜ニギリちゃん！」

「はいはいはあ〜い！」

チラシの呼びかけに答えて、上空から降下してくるのは、楽しげな笑顔を見せたニギリ。ニギリは下降しながら、スーツのポケットから言玉を取り出す。

「“変格”」

ニギリの握り締めた言玉が、強い輝きを放ち始める。

「“仁王”！」

輝く言玉は、空中でニギリの手を離れ、落下しながらその姿を、

二体の巨大な水像、仁王へと変えていく。

「“躡^{にじ}れ”！」

「阿^あ！」

「咩^{うん}！」

「ガアアア！」

空中から勢いよく落下してきた仁王に、全体重をかけて左右、それぞれ翼を踏みつけられ、下方の水へと押しつけられた金獣が、苦しげな叫び声をあげる。

「かんかん完璧い〜！」

「さっすがだよお！ニギリちゃん！」

満足げに降りて来たニギリへと、チラシが素早く駆け寄っていき、早速ポーズを決める。

「これで、しばらくは食い止められそうだな」

「金八：油断禁物、優柔不断、夢占い…」

「厳しいと泣くよお！？俺、泣いちゃうよお！？シャコ！ってか、夢占いって何い！？」

こちら上空から降りて来た金八が、シャコと、相変わらずの緊張感のまるでない会話を繰り広げる。

「すっげ…」

「ハイ、トテモスーパーデス…」

だが、緊張感のない金八たちに呆れる様子もなく、守とライアンは、巨大な金獣を押さえこんだ金八たちの力に圧倒され、啞然としていた。

「あれは、以^い団^{だん}の…」

金八たち四人を見つめ、雅がそつと眉をひそめる。

「以附の彼等がまだ、ここに居るということは、彼も…？」

何やら考えるような表情を見せ、雅は突き上げた光の一本を、振り返った。

言ノ葉町、南西端。

「ハア…ハア…！」

少し息を乱しながら、皆と別れた七架は、前方に見える、空へと突き上げた青い光の柱を目指して、ひたすら言ノ葉町の道を駆け抜けていた。もう十分程走っているというのに、道にはまったく人の姿がなく、誰とも擦れ合わない。

「これも、言葉が奪われた影響、なのかな…？」

静か過ぎる町中を見渡し、七架が少し不安げな表情を見せる。

「お父さん、お母さん、想子ちゃん…」

町には七架の父と母、それに親友の想子や、他にもたくさんの方達、クラスメイト、知り合いが住んでいる。そんな大切な者たちの言葉が、今、奪われている状態なのだ。

「早く行って、何とかしなきゃ…！」

前方に見える光を見据え、七架が改めて鋭い表情を作る。

「へえ？ 行くなって、どこに？」

「……！」

すぐ後ろから聞こえて来る声に、駆けていた七架が足を止め、素早く振り返った。

「あ…！」

振り返った七架へと迫る、激しく波打つ大波。

「五十音、第二十一音…“な”、解放！」

七架が制服の胸ポケットから言玉を取り出し、間髪いれずにそれを解放させる。言玉から姿を変えた真っ赤な薙刀を右手に構え、七架はその刃先を勢いよく振り上げた。

「“^な風げ”！」

七架が薙刀を振り切ると同時に言葉を発すると、赤い光に包まれた大波は、急速に収まり、七架の目の前で掻き消える。

「ふう」

何とか波を防いだ七架が、一息つくように肩を落とす。

「へえ、“風げ”かあ。なかなかいい言葉、持ってんなあ」

波のやって来た方角から聞こえて来る声に、七架はすぐに眉をひそめ、身構えて顔を上げた。

「俺とは相性いいんじゃないの？」

ゆっくりと歩を進めながら、七架の前へと現れたのは、錨であった。錨を見つめ、七架がさらに警戒の態勢を取る。

「あなたは？」

「堕ちし“以いの神”、一条錨」

「以いの、神…」

目の前に居るこの男が、堕神であることを知った七架が、錨に隙を見せぬ程の一瞬で、後方を振り返る。七架の後ろには、先程まで七架が目指していた、あの青い光が、未だに空へと突き上がっていた。

「どうして、光が突き上がっているのに、堕神であるあなたがここに…」

「ああ」

戸惑いの表情を見せる七架に、錨が納得するように頷く。

「お前等なら、知ってんだろ？この町が、言葉の力の集約しやすい土地柄だってことはよお」

錨の言葉に、七架がそつと眉をひそめる。守がアヒルの言玉を元に戻す際、そういう話をしていた覚えがあった。

「光の突き上げてる五ヶ所はそれぞれ、言葉の力の集約しやすい場所。そこに阿修羅が前もって、“集まれ”の言葉を掛けていたんだ」

「集まれ…」

アヒルと同じ『あ』の文字の言葉に、七架が少し表情を曇らせる。

「だから力の源である俺等が動いても、あの場所が勝手に俺等の力を集めて、お空の上まで届けてくれるってわけ」

上空に集約している力を指差し、錨がどこか楽しげに笑う。

「勝手についてことは、あの人をこの場所から離しても、意味はないのね…」

七架が小さな声を発し、冷静に分析をする。自分たちで集約させているのであれば、この町から遠ざけるだけで防げるが、そういうわけではないのであれば、もう目の前の墮神を倒す以外に道はない。「だったら……！」

素早く薙刀を振り上げ、七架が臨戦態勢を取る。

「おお、やる気満々ってかあ？」

構えた七架を見つめ、焦るというよりも、楽しげに口元を歪める錨。

「いいぜえ！神直々に遊んでや……！！……っ」

「え？」

弾むような声を放ち、七架と戦うべく、右手の言玉を振り上げようとしていた錨であったが、不意にその動作を止め、言葉も途切れさせる。急に変わった錨の様子に、七架は構えを維持しながらも、戸惑うように目を丸くした。黙り込んだ錨の視線が、七架より後方に向けられていることに気付く。

「何、が……あ！」

錨の視線につられるようにして、後方を振り返った七架が、その瞳を大きく見開いた。七架の見つめる先から、ゆっくりと足音を響かせて、一人の人間がこちらへと歩み寄って来ている。

「あ、あなたはっ……」

「以の神、伊賀栗イクラ」

七架よりも先に、その者の名を口にする錨。

「……………」

その場へと現れたのは、イクラであった。

「ど、どうして、あなたがここに……」

雅が助けられた一件を知らない七架は、すぐ横までやって来るイクラを見つめ、戸惑った表情を見せる。七架にとってのイクラは、七架が初めて五十音士として戦いに参加した神試験の際の、恐ろしい敵という認識しかなかった。

「奈守^{なもり}」

イクラに呼びかけられ、七架が少し身構えるように、両肩を上げる。

「貴様は、安の神のところへでも行っている」

「え？」

イクラのその言葉に、眉をひそめる七架。

「け、けど……！」

「俺の戦いに巻き込まれて、死にたいか？」

「……っ」

冷たい視線を投げかけるイクラに、七架は続けようとしていた言葉を呑み込み、すぐさま黙り込んだ。

「わ、わかりました」

それ以上、イクラに逆らうことも出来ず、素直にイクラの指示に頷くと、七架は体の向きを変え、別の光の柱を目指して、その場を駆け出していった。七架が去り、その場にイクラと錨だけが残る。

「追わないのか……？」

「冗談！ 神の俺に、ただか奈守の相手をさせる気かよお？」

イクラからの問いかけを、錨が鼻で笑い飛ばす。

「それに俺は、てめえと戦いたかったんだあ。てめえがまだ、この町に残っててくれて良かったぜ」

楽しげにそう言いながら、錨が肩を回し、戦う準備を整える。

「さあ！ 今日こそ決めようぜえ？」

誘うように、両手を広げる錨。

「どっちが本当の“以の神”なのかをなあ！」

高らかと声を響き渡らせる錨を見つめ、イクラがそっと目を細める。

「本当の神など、決めるまでもない」

低く声を放ち、イクラは懷から、青い言玉を取り出した。

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「錨が五十音士と戦闘を開始しました。神」

「ああ、見えてる」

後方に立った棗の報告に頷きながら、丘の上から、眼下に広がる言ノ葉町の町並みを見つめる阿修羅。不気味な程に静まりかえった町の所々から、力がぶつかり合うような衝撃音が聞こえてきていた。「礼獣も、複数名の五十音士により、抑え込まれているようですが……」

「問題ない。計画は順調だよ、棗」

少し不安げに報告する棗に対し、阿修羅は一切、焦った様子はなく、余裕すら見える笑みを浮かべていた。

「もうすぐだ。もうすぐ……」

阿修羅が赤い光の突き上げる空へ向け、ゆっくりと手を伸ばす。

「もうすぐ、この世界から、秩序なき言葉は消える……」

空を見つめる阿修羅は、ひどく遠くを見つめるような、そんな瞳を見せていた。

「待っててね……」

優しく、温かで、どこか悲しげな笑みを浮かべる阿修羅。

「アスカ……」

愛おしそうにその名を呼ぶ阿修羅の背を見つめ、棗はそっと、目を細めた。

Word. 55 驕レル神 (1)

言ノ葉町、北はずれ。

「先程は凄い光でしたね。櫻様」

「ええ」

メイドらしき女性に声を掛けられ、小さく頷きを落としたのは、車椅子に腰掛けた、まだ若く美しい女性。先代“左守”^{さもり}、相良櫻^{さがら}であつた。櫻は屋敷のすぐ向こうに見える、天まで突き上げた緑色の光の柱を見つめ、そつと眉をひそめる。

「いよいよ始まったのね…」

戦いの幕開けを察知し、櫻がどこか不安げに、表情を曇らせる。

「それにしても、囁さんが“遮れ”の言葉を掛けておいてくれて、助かったわ…」

庭から、ゆつくりと上空を見上げる櫻。櫻と空の間には、薄らと赤い膜のようなものが張られており、その膜は、櫻たちの居る屋敷全体を包み込んでいた。

「あの言葉がなければ、今頃、私たちは全員、言葉を失くしていたでしょうから…」

「考えるだけで、恐ろしいですわ」

櫻の言葉に、メイドが少し肩を震わせる。

「櫻様」

名を呼びかけながら、屋敷の方から櫻の元へとやって来たのは、執事らしき、白髪の老人であつた。

「準備が整いました。すぐに、この町からの避難を…」

「私はここに残るわ。皆で避難して」

「え？」

櫻のその言葉に執事と、横に立っていたメイドがそれぞれ、驚きの表情を見せる。

「さ、櫻様！何を…！」

「櫻様を置いて、我々だけ逃げるなど、そんなこと出来ません！」
執事とメイドが身を乗り出し、櫻へと必死に訴えかける。

「お願い……」

そんな二人へ、櫻は落ち着いた声を掛けた。

「せめて、見届けさせて……」

願う小さな声が、どこか悲しげに響き渡る。

——アキラあああ！——

「あの時は、何も出来なかったから……」

「櫻様……」

過去を思い、辛そうに、悔むように瞳を細める櫻を見つめ、メイドたちが少し険しい表情となる。

「これが、私たちの神だった人の出した答え……」

櫻が車椅子の両側の車輪を手で回し、少し前へと出て、ゆっくりと上空を見上げる。

「一緒に見届けましょう……カモメ……」

言ノ葉町、北端。

「あれね……」

アヒルたちと別れ、保を北西部へと送り届けた囁が、前方に見える、空へと突き上げた緑色の光の柱を見据え、そっと目を細める。
安団の皆で決め、分散した。あの柱の元に居る者を倒すことが、囁に与えられた使命なのだ。

「グアアアアア！」

遠くから響く、激しい獣の叫び声に、少しだけ後方を振り向く囁。
町の中央では、町人すべての言葉を奪った、巨大な金色の獣が、今も咆哮をあげている。

「急いだ方が良さそうね…」

そう言うと、囁は再び前を向き、光の柱へ向かって、駆け出した。言ノ葉町の北部は、住宅街のない更地が続いている。徐々に民家などの遮るものもなくなり、前方の光が、よりはっきりと見えてきた。

「……っ」

光のすぐ前に立つ人物を捉え、囁が駆けていた足を止める。

「ようこそでございます」

突き上げる緑色の光の前に立ち、囁を出迎えたのは、茶色い巻き髪をまとめあげた、青い瞳の、日本人離れした顔立ちの女性。女性を見つめ、囁がそつと眉をひそめる。

「あなたは…？」

「堕ちし“衣えの神”。堕神、榎本エカテリーナでございます」
女性が、独特の言葉遣いで名を名乗り、囁へ向けて、軽く会釈をする。

「堕神、ね…」

予想のついていたことだが、囁にとっては初めて向きあう堕神であるエカテリーナに対し、囁はすぐに構えを取り、制服の胸ポケットから真つ赤な言玉を取り出した。

「どうやら、あなたは…私の倒さなきゃならない相手のようね…」
言玉を握り締める手に力を込める囁を見つめ、エカテリーナが少し困ったように肩を落とす。

「神を相手に迷わず武器を取るとは、とんだ冒読でございます」

「フッフ…そうね。私元々、冒読者だし…」

呆れたように言い放つエカテリーナに、囁が不気味な笑みを見せる。

「それに」

言葉を付け加えた囁が、挑戦的な瞳を作る。

「私の信じる神はただ一人…他の神を崇める義理はないわ…」

「そうでございますか。ならば」

はつきりと言い切った囁に、もう一度軽く肩を落とすと、気持ち

を切り替えるように、大きく首を振り上げた。

「私が裁いて差し上げるでございます」

そう言ってエカテリーナが、頭のとっぺんに結いあげてある、自らの髪で作られた団子の中に右手を入れると、そこから緑色の言玉を取り出した。戦いの意志を見せるエカテリーナに、囁がさらに鋭い表情となる。

「五十音、第十一音…」

囁の右手の中で、強い光を放ち始める言玉。

「“さ”、解放…」

言ノ葉町、北西。金色の光柱、付近。

「やれやれ…」

ひどく呆れ果てたような表情で、深々と肩を落とすのは、町の中央で暴れる、あの金獣を生み出した、墮ちし宇の神。墮神の一人、浮世現であった。現が居るのは、町でも一番大きな、町民グランドの中央。グランドの砂地の上に、どこからか持ってきた豪華な椅子を置き、深々と腰を掛けている。言葉を奪われた影響からか、グランドに町人の姿はまったくくない。

「三日で礼獣を創れと言うた上に、休む間もなく、このような場所へ連れてきて、何をさせる気かと思えば…」

椅子の肘掛けについた手のひらの、その上に乗せた顔をゆっくりと動かし、現が前方へと視線を送る。

「こんな小僧の相手をさせようとはのお」

「へっ？」

現に視線を送られ、その瞳を丸くして、間の抜けた声を漏らしたのは、保であった。

「はあ！こんな若造の俺が、おじいさんの視界なんかに入っちゃってすみませえくん！」

「おまけに耳障りじゃ…」

謝り散らす保から視線を逸らし、人差し指で軽く耳を塞いだ現が、不快極まりない表情を見せる。

「まったく、阿修羅は、わしを軽んじておる。そうは思わんか？のお、お前たち……」

『ぐううう』

問いかけた現が振り向いた先、現の座る椅子の両側には、低い唸り声を漏らす、よく似た金色の獣が二頭、グランドの砂地の上に寝転んでいた。その獣たちは、大きさほど、少し小さめのライオンくらいであるが、町の中心で巨大化している金獣と、姿がよく似ている。

「あの小僧、お前たちの餌にしてやろうかのお。わしが相手してやるまでもないことだしなあ」

「うえ？」

いやらしい笑みを浮かべる現に、保が寒気を感じるように、思わず表情を引きつる。現の言葉に、寝転がっていた獣たちは重い腰をあげ、保へと鋭い視線を送り始める。

「こんな俺え、あんまり美味しくないと思いますけどお」

『ぐうううう……！』

「ひい！」

大きく唸り声をあげる獣に、保が震え上がる。

「存分に味わえ、お前たち」

「うう」

楽しげに微笑む現に対し、保は怯んだ様子で、足を一步、後ろへと退く。

「……っ」

だが、足を引いた途端、保が目を開き、その動きを止める。初めは驚いた様子だったが、保はすぐにその表情を、穏やかな笑みへと変えた。

「大丈夫だよ」

保が誰へともなく、小さく声を掛ける。

「アヒルさんも、皆も戦ってる。これは安団の戦いだから、だから俺も戦うよ、灰示」

自分の中にいる、もう一人の自分へと言葉を投げかけると、その言葉に保自身も力をもらったかのように、保はその微笑みを、力強いものへと変えた。

「五十音、第十六音」

保がズボンのポケットから、真っ赤な言玉を取り出し、鋭い表情を作る。

「“た”、解放！」

言ノ葉町、南端。白い光柱、付近。

「この辺りか」

アヒルと別れた箆也は、空へと突き上げる光を頼りに、町の南端まで来ていた。言ノ葉町は海に面した町。南は海側となっており、箆也がやって来たのは、一面の砂浜であった。日の出ていない海は薄暗く、打ちつける風は肌寒い。

「あそこか」

箆也が砂浜へと足跡をつけながら、海の方へと進み、周囲を確認する。白い光が突き上げているのは、丁度、海の上からであった。海の真ん中に立っていられるはずもないので、当たり前だが、白い光の付近に人影はない。

「どこに…」

「何、探してるの？」

「……っ」

海を見渡していた箆也が、後方から静かに響いて来る声に、動きを止める。身構えながら、箆也は素早く、声のした方を振り返った。

「あれ？」

箆也の振り向いた先、防波堤に作られた階段の一段に座り、箆也へと問いかけを向けたのは、整った顔立ちをした、まだ若い青年で

あった。青年は気だるそうな空気を纏いながら、海から突き上げる白い光を、指差している。

「それとも、俺……？」

ゆっくりとその指先を自分へと向ける青年に、箆也が眉をひそめた。

「あなたが堕神であるというのなら、僕が探しているのは、あなただ」

「そう……」

はつきりと言い放つ箆也に対し、青年はやる気なく、短い頷きを落とす。

「まあ、君が何を探してるかなんて、俺にはどうでもいいんだけどね……」

「生憎、こちらはどうでも良くない」

ゆっくりとした、聞いているこちらが疲れそうな口調で話す青年に、箆也は捲くし立てるように、すぐさま言葉を放つ。

「名を名乗ってもらおうか」

「……はあ」

強要するように言う箆也に、青年は深々と、憂鬱そうな溜息を落とした。

「先生に習わなかった？ 名前を名乗る時は、まず自分からって……」

青年の言葉に顔をしかめる箆也であったが、青年の言葉が正論であるため、言い返すことが出来なかった。

「五十音士“加守”^{かもり}、神月箆也」

「加守……？」

箆也の名を聞いた途端、青年がやる気のなかったその瞳を鋭くする。

「ふうーん……」

興味のなさそうな声を漏らしながらも、ずっと座り込んでいた青年が階段から立ち上がり、ゆっくりと箆也へと歩を進める。

「じゃあ君が、現“於の神” 於崎檻也の兄、於崎箆也か……」

青年のその言葉に、箆也が驚いた様子で顔をしかめる。箆也はすでに姓を変え、於崎の家からもその名を消している。箆也が於崎家の者であったことを知るのは、極一部の五十音士のみであった。

「何故…」

箆也が戸惑いの視線を向けると、青年はどこか不敵に微笑む。

「約束だ。今度は俺の名を名乗ろうか」

微笑んだ青年は、箆也の問いに答えることなく、自分のペースで会話を進めた。

「俺の名は、於崎沖也」

「え…？」

青年の口から放たれたその名に、箆也は思わず目を見開く。

「於、崎…？」

聞き慣れたその名字を繰り返し、徐々にその表情を険しくしていく箆也。

「じゃあ、あなたは…」

「そう…」

箆也の声に、青年が、沖也が憂鬱そうな顔を落とす。

「俺は、堕ちし“於の神”。於崎沖也」

代々の於の神を受け継いできたのが、箆也や檻也の生まれた於崎家である。於崎の姓を名乗った時点で、沖也が何の神を堕ちたのか、箆也には十分、予想がついていた。

「元、於の神…」

箆也が鋭い瞳を見せ、目の前に立つ沖也を、まっすぐに見つめる。

「聞いたことがある」

深く眉をひそめ、言葉が続ける箆也。

「旧世代の神々が退き、於崎家が五神の一角を担うこととなった、その一番初めの神…」

箆也の言葉が、そっと曇る。

「於崎家から出た、最初にして、最低の神。それが、あなたか」
「最低、か…ひどい言われようだね」

籠也から視線を逸らし、海の方を見つめた沖也が、呆れたように肩を落とす。

「まあ、どうでもいいけど…」

投げやりに言葉を落とす沖也に、籠也がまたしても眉をひそめる。「阿修羅に因縁つけられたくなくて、一応、ここまでは来たんだけどね…本当はこんな戦い、俺にとっては、どうでもいいんだ…」

沖也が言葉の通り、まるで興味がなさそうに話す。

「誰の言葉が死のうと、誰のエゴが通ろうと…俺には全然、関係のないこと…」

脱力した瞳で、沖也が茫然と海を眺める。

「戦いが終わるまで、適当に昼寝でもしてようかと思ったんだけど…」

「気でも変わったのか？」

「うん、そうだね…」

問いかける籠也に、そっと微笑んで頷く沖也。

「君となら、戦ってあげてもいいよ」

海を見ていた沖也が、籠也へと視線を移す。

「同じ、於崎家に生まれた者同士。同じ、於崎家を捨てた者同士の…馴染みだね…」

楽しげに微笑む沖也のその言葉に、籠也が眉をひそめる。

「あなたが於崎を捨てたんじゃない。於崎があなたを捨てたんだ」
はつきりと言い放つ籠也に、沖也が少し眉尻を吊り上げる。

「それは、君にも言えることじゃないの…？」

「ああ、その通りだ」

「じゃあ、その馴染み…」

静かに声を落とした沖也が、流れるような手の動作で、ズボンのポケットへと手を入れ、そこから、真っ白な言玉を取り出した。その動きを見て、籠也も素早く、自分の言玉を構える。

「遊んであげるよ…」

「五十音、第六音…」

冷たく微笑む沖也を前に、怯むことなく、箆也が強く言玉を握り締める。

「“か”、解放…！」

箆也の言玉が強い赤色の光を放つと、言玉は一本の格子へと姿を変え、箆也の右手に納まった。その格子を素早く構え、箆也が鋭い瞳を見せる。

「神があつた男と戦っている…」

阿修羅の元へと向かったアヒルを思い、箆也がそつと目を細める。

「あまり時間はない。とつと倒させてもらうぞ」

「はあ…」

強気に言い放つ箆也を前に、沖也は深々と溜息を落とす。

「どうでもいい…」

憂鬱な声が落ちると共に、沖也の手の中の言玉が、強く輝いた。

Word. 55 驕レル神 (2)

言ノ葉町、南西部。“以の神”、伊賀栗イクラVS墮ちし“以の神”、一条錨。

「雷^{いかずち}”いい！」

「稲妻^{いなづま}”…」

両者の間で、金色に輝く閃光が、激しくぶつかり合う。二つの閃光が一步も譲らず、互いの力を砕き切ると、間髪入れずにイクラと錨が、同時に言玉を持つ右手を突き出した。

「挑め^{いどめ}”！」

「怒れ^{いか}”」

錨がイクラへと大波を向けると、イクラが地面からマグマのように水を噴き出させて、それを砕く。

「チ：！“茨^{いばら}”！」

舌打ちを落とすと、すぐに新たな言葉を発し、イクラの周囲へと留まったままの雨のような、水の棘を張り巡らせる錨。

「埋^いけろ”！」

錨の言葉を合図に、一斉にイクラへと降り注ぐ無数の水の棘。だが、イクラは焦りの表情一つ見せずに、静かに右手を掲げた。

「祈^{いの}れ”」

イクラがそつと言葉を落とすと、イクラの後方から、美しい女性を象った、巨大な水の像が現れる。水像が包み込むように両手を広げると、降り注いできた水の棘はすべて、その両腕に吸収され、一本として、イクラに当たることはなかった。

「チ：！また、あの像かつ」

自らの攻撃を防いだ水像を見つめ、錨が悔しげに表情をしかめる。「“祈れ”か。顔に似合わない言葉、持ってやがるぜ」

皮肉った笑みを浮かべ、錨が見つめる中、イクラが掲げていた右手をゆっくりと下ろす。すると、イクラの後方の水像はゆっくりと

崩れ落ち、跡形もなく消え去った。

「で…？」

問いかけるように声を発するイクラに、錨が少し眉をひそめる。

「俺をいつまで、こんな茶番に付き合わせる気だ…？」

イクラが射抜くような鋭い瞳を、まっすぐに錨へと向ける。

「茶番？ ひっどい言いようだなあ。俺、必死に頑張ってるのに」

「前の戦いで使った言葉ばかりを吐いているのか？」

困ったように肩を落とす錨へと、イクラがさらに挑戦的に問いかける。

「俺が何の為に、こんな退屈な町に残ったと思っている？」

さらに目を細め、錨を睨みつけるイクラ。

「とっとと見せろ。貴様がこの前の戦いで見せようとしていた、
しんかく神格”というやつをな…」

「……っ」

イクラのその言葉に、微笑んでいた錨が、そっと表情を曇らせる。

「イヒヒ、怖いねえ」

言葉とは裏腹に、嬉しそうな笑みを零す錨。

「さっすが俺の後釜。やっぱ神に隠し事は出来ねえぜ」

軽く頭を掻きながら、錨が身構えていた全身から力を抜いて、まっすぐにイクラと向き直る。その笑みは、ひどく余裕に満ちていた。

「なあ？ お前、知ってるか？ 何故、俺たちア行、すなわち五神に、

“変格”が与えられていないのか」

話題を不意に切り替え、錨がイクラへと問いかける。

「神はその段の中で、誰よりも強い存在でなければならぬというのに、“変格”を与えられているのは、力行やサ行、神以外の奴等ばかり」

ゆつくりとした口調で、錨がさらに言葉を続ける。

「何故、神は、“変格”を持たないと思う？」

「さあな。興味がない」

問いかける錨に、明らかに考えていない様子で即答するイクラ。

そんな態度を見せるイクラにも、不快な表情一つ見せず、錨はそつと微笑んだ。

「答えは簡単。“変格”なんて、しなくても強いからだ」
はつきりと言い放ち、錨がさらに口角を吊り上げる。

「神が持つ文字は、五つの母音“あいいうえお”。母音の力は、他の子音に比べて圧倒的な強さを誇る」

錨が得意げに、胸を張る。

「だから、他のすべての五十音士たちの頂点に立てる。だから、神に“変格”は必要なかった」

最後の言葉が過去形であることに気付き、イクラがそつと眉をひそめる。

「なかった…？」

「ああ、子音の力を持つ五十音士たちを服従させる程度じゃ、神に“変格”は必要なかったんだ」

静かに聞き返すイクラに、錨がすらすらと言葉を連ねる。

「だが、じゃあ、神同士が戦った場合は、どうなる…？」

鋭く問いかける錨に、目を細めるイクラ。

「同じ母音の力を持つ者同士が、ぶつかった場合は？」

問いかけを続け、錨が楽しげに笑う。

「神を堕ちた阿修羅は、後々、自分たちと同じ神と戦うことになるであろうことを予想し、俺たちに一つの力を与えた」

「力…」

「ああ」

繰り返すイクラに、錨が大きく頷く。

「神を超える力…神の“変格”…」

言葉が続けながら、錨が鋭く右手を突き上げる。

「“神格”をなあ…!!」

錨の突き上げた右手に握り締められた言玉が、眩いばかりに強い青色の光を発し始める。目を伏せてしまいそうになるほどの光だったが、イクラはまっすぐに、その光を見つめ続けた。

「これが俺の…！ “神”の力だ！」

さらに光を増す言玉を見つめ、錨が高らかと声をあげる。

「因果応報^{いんがおうほう}…！」

錨がそう言葉を発した途端、言玉から発せられる光が、まるで花火のように周囲へ弾け飛んでいった。

「神、あれを…」

「ああ」

報告するように言う棗に対し、呼びかけられた阿修羅は、落ち着き払った表情で頷く。二人の見つめる先には、強い青色の光と、噴き上げた大量の水が輝いていた。

「錨が、神格を…」

棗が眉間に皺を寄せ、険しい表情を作る。

「ああ、そのようだな」

「止めますか？」

「構わないさ」

棗の問いかけに、阿修羅はすぐさま首を横に振る。

「ここまで来れば、もう止める理由もない」

「かしこまりました」

阿修羅の決断に、反対する素振りなど一切見せず、深々と頭を下げる棗。

「では神、私もそろそろ守備につきます」

「ああ、頼む」

棗の申し出に、阿修羅が笑顔で頷く。

「では」

「ああ、棗」

その場を離れようとした棗を、そっと呼び止める阿修羅。

「何でしょうか？」

「俺は今からしばらくの間、力の集約に専念する」

聞き返した棗へと、阿修羅がまっすぐに視線を投げかける。

「だから、その間は誰一人、ここへは通さないようにしてくれ」

笑顔で指示を出す阿修羅を見つめた棗は、すぐに頷くことはせずに、一瞬、何か考えるように、伏せ目がちとなる。だがすぐに視線をあげ、また、阿修羅を見つめた。

「誰一人、ですか？」

「誰一人、だ」

確かめるように問いかける棗に、もう一度、強く言う阿修羅。

「仰せのままに、我が神」

阿修羅へと深々と頭を下げると、棗は阿修羅に背を向け、足早にその場を歩き去っていった。少し後方を振り返った阿修羅が、遠ざかっていく棗の背中を見つめ、すぐにまた前を向く。

「さてと…」

再び前を向いた阿修羅が、輝く光を見つめ、そっと口元を緩める。

「勝つのは、神か、堕神か…」

阿修羅が楽しげに、声を落とした。

「何っつー光だ！」

「トテモ眩シイデス！」

「あれは…」

言ノ葉町南西部で突き上げる青色の光のすぐ傍から、もう一つ、巨大な青色の光が出現し、どんどんと周囲を包み込むように広がっていく。その眩い光が、言ノ葉町中央にいる、守やライアンのもとへまで届いていた。同じようにその光を見つめ、雅がそっと眉をひそめる。

「水…？」

青い光に導かれるようにして、空へと噴き上げる大量の水に、戸

惑うように首を傾げる雅。五十音士であっても、水の力を使えるのはイ段に属する五十音士のみ。そう考えると、その力を噴き上げた者の正体は、限られている。

「あれあれあれってば、何い？チラシくん」

「さあ？我が神が派手に暴れてるんじゃないのお？」

ポーズを決めようと、両手を繋いだまま、くると地面の上を回りながら、チラシとニギリが暢気に会話を交わす。

「金八…あれ…」

「ああ」

背後から呼びかけるシャコの声に、真剣な表情で頷く金八。

「あれは、神の水じゃねえ」

確信を持って言い切り、金八が険しい表情を作る。

「たぶん、この前、神と戦ってたあの野郎のもんだろ」

「けど、神以外に、あんな下派手な水を使える奴が居るなんて…」

「居るんだよねえ、これが」

噴き上げた水とは別の方向から聞こえてくる声に、金八とシャコが同時に振り返る。

「てめえは」

「為の神、井戸端為介…」

二人が振り返った先に立っていたのは、扇子で自身へとゆっくり風を送る為介であった。その横には恵と、金馬に乗った六騎の姿もある。アヒルたちを見送った後、『いどぼた』から、ここへとやって来たのだ。

「為介さん」

「遅っせえぞお！お前等！」

やって来た為介たちを見て、雅と守がそれぞれ声をあげる。

「こいつ等、以団が来てなかったら、俺等とつくに、あの化けライオンの血肉になってたかも知れねえんだからなあ！」

「アハハあゝ、そうになったら、面白かったのにねえ」

「どこも面白かねえわ！」

楽しげに笑みを零す為介に、守が勢いよく怒鳴りあげる。

「やっぱ信用出来ねえぜ。旧世代」

「まあ、言い返す言葉もないですけど」

まだ笑っている為介へと、疑いの目を向ける守の横で、雅が呆れきった様子で肩を落とす。

「お前等まで協力してくれるとはな。韻から命令でも下ったか？」

為介の横から数歩前へと出た恵が、金八たちへと声を掛ける。

「まっさか。だいたい俺らが、韻の命令とか大人しく聞くわけねえじゃん」

「じゃあ何故…」

「あたいらが動く理由は、ただ一つ。我が神の命令だから…」

シャコの言葉に、恵が眉をひそめる。

「伊賀栗イクラが、言ノ葉を守るよう命令を…？」

「まっさかあゝうちの神は、壊せとは言っても、守れなんて間違っても言わねえよお」

恵の問いかけに、金八が大きく首を横に振って、全力で恵の言葉を否定する。

「我が神の命令はこうっ」

金八が得意げに微笑み、人差し指を突き立てる。

「神の戦いを邪魔する可能性のあるものを、すべて排除すること」

「成程」

その言葉に、恵がすぐさま納得するように頷く。

「あのデカ獣にギアアギア騒がれたんじゃ、自分の戦いに集中出来ないってわけか」

「イクラクくんらしいなあゝ」

恵の横で、為介が感心するように笑う。

「だが、今回の相手は堕神だ」

「堕神って、五神でありながら罪を犯して神を降ろされたってやつだろ？」

サングラスの向こうから真剣な瞳を覗かせた守が、恵へと問いか

けを向ける。

「今、以の神と戦ってるっつー、そいつは一体、何をやったってんだ？」

守の問いかけに、恵がさらに険しい表情を作る。

「……何も」

「へ？」

思いがけない恵の答えに、守が目を丸くする。

「何もって、じゃあなんで」

「堕ちし以の神、一条錨は、誰よりも強くなることを望み、何よりも力を欲した」

戸惑う守へ、恵が言葉を続ける。

「力を欲するその欲望は、あまりに異常。近い将来、自分たちに危険が及ぶのではと考えた韻が、一条を神から堕としたんだ」

「韻がそこまで警戒するなんてな」

恵の話を受け、守が険しい表情を見せる。

「ああ。だから、あの伊賀栗イクラであっても、勝てるかどうか…」

「ですが恵先生」

不安げに呟く恵へと、口を挟んだのは雅であった。

「彼は一昨日の戦いで、堕神を圧倒しています。一度、戦った相手ですし、そう心配することでは…」

「圧倒したからこそ、だ」

「え？」

強調するように言う恵に、雅が眉をひそめる。

「阿修羅は周到な男だ。負けるとわかっている者を、戦場へ連れてくるような真似は絶対にしない」

恵が固く手を組み、噴き上げる水を見つめる。

「勝つ自信があんだらう。伊賀栗イクラがどんなに強くても、それでも勝てるって自信がな」

「……っ」

厳しい表情で言い放つ恵に、雅も眉間に皺を寄せた。

Word. 55 驕レル神 (3)

「“神格”、か…」

辺りから一斉に噴き上げた大量の水を見回した後、ゆっくりと強い青色の光に包まれた錨の方を振り向いて、イクラがあまり興味なさそうに声を落とす。

「大袈裟な呼び名を付けるから、どんなものかと思えば…ただの水芸か？」

「ただの水芸に、んな大袈裟な呼び名付けると思うかあ？」

挑発するように問いかけたイクラであったが、錨は余裕のある笑みを浮かべ、問いかけ返した。

「なんなら、試してみるかあ？ただの水芸かどうか」

「…望むところだ」

自信に満ちた様子の錨を不審に思いながらも、あからさまなその挑発に、イクラが乗らないはずはなく、イクラはすぐさま言玉を構える。

「軽はずみな自分の言葉を、精々、後悔するといい」

イクラの構えた言玉が、淡い光を帯びていく。

「“怒れ”^{いか}」

言葉がイクラの口から落とされると、錨の真下から、細長く突き刺すような鋭い水の刃が、勢いよく噴き上げた。

「ううう…！」

避ける間もなく、その身を少し逸らしただけで、錨が水の刃を直に受ける。急所を狙っていた刃は、錨が身を逸らしたことで、錨の左肩へと深々と突き刺さった。水とは真反対の赤色の血が飛び散って、錨が痛みに表情をしかめる。

「他愛もない…」

傷を負った錨を見つめ、どこかがっかりするように肩を落とすイクラ。

「何が“神格”だ。こんなもののために、町に残ったのは、無駄であ……うう！」

呆れ果てた言葉が続けていたその時、イクラの左肩が突然、傷つく。

「な、に……？」

「……っ」

何の攻撃も受けていないというのに、鋭く穴があき、真っ赤な血の飛び散る自身の左肩を見つめ、大きく目を見開くイクラ。そんなイクラの様子を見て、左肩の傷を右手で押さえたままの錨が、そつと口元を歪める。

「これは一体……」

「あ……あ、悪いことしちゃったから、自分に返ってきちゃったねえ」

肩の傷を見下ろし、戸惑いの表情を見せていたイクラが、前方から届く声に、すぐさま顔を上げる。

「貴様の仕業か……？」

「仕業？神業って言って欲しいねえ」

険しい表情で問いかけるイクラに、錨がどこか茶化するように答えを返す。

「噴き上げる水に取り囲まれた、この場所で、相手に傷を負わせた場合、相手と同じ傷を自分も負うことになる」

取り囲む噴水を見回しながら、錨がわかりやすく説明をする。

「それが、俺の神格、“因果応報”」

「因果、応報……」

その言葉を繰り返し、イクラがそつと眉をひそめる。

「この中で、人を傷つけるような悪い行為をしようものなら、すぐにも天罰が下るってわけだあ」

錨が楽しそうに、笑みを零す。

「イヒヒ、どうだあ？人間に天罰を下せるなんて、神の俺に相應しい、素晴らしい力だろ？」

得意げに話す錨を見つめ、イクラが何やら思うところがある様子で、目を細める。

「さあーて、これで俺に攻撃は出来なくなったぜえ？どうする？現、以のか…」

「“憤れ”」

「え…？」

錨の言葉が終わらぬうちに、イクラの口から発せられる言葉。

「な…何！？ク…！」

先程よりも多くの水の刃が、一斉に下方から突き上げ、錨が焦った様子で表情を崩しながら、慌てて後ろへと飛び引き、その刃を避ける。

「お、お前…！」

険しい表情で顔を上げ、イクラを睨みつける錨。

「さっきの俺の説明、聞いてなかったのかよ！？俺を攻撃すれば、お前にも傷がだなあ…！」

「だったら、何だ？」

困惑した様子で訴える錨の言葉を遮って、イクラは左肩からボタボタと血を落としたまま、何食わぬ様子で、平然と言い放った。

「傷を負うとしても、貴様も負うのであれば、それで十分だ」

イクラが言玉を握る手へと、さらに力を込める。

「神の天罰など、俺は恐れたことがない」

「……っ」

堂々と言い放つイクラに、錨の表情が歪む。

「恐れたことがないだあ…？」

イクラの言葉を繰り返し、錨がさらに顔をしかめる。

「神を相手に、恐れ多いってんだよ！それがなあ！」

錨が勢いよく、言玉を持った右手を振り上げる。

「“挑め”！」

錨の右手に握り締められた言玉が強く輝き、周囲で噴き上げていく水からイクラへ向かって一斉に、水の塊が放たれる。放たれた塊

は、周囲の数個でさらに固まり合って、大きな波を形成して、四方からイクラへと攻め込んだ。

「怒れ^{いか}」！

イクラも言葉を放ち、地面から水を噴き上がらせて、錨の大波と衝突させる。だが噴き上げたイクラの水は、錨の大波にあっさりと呑み込まれてしまう。

「な……！」

大波の中に掻き消えていった自身の水に、イクラは驚きを隠せず、大きく目を見開く。

「俺の水を……」

「精々、気を付けなあ！ “神格” した俺の言葉は、さっきとは比べもんにならねえ威力だぜえ！」

波の向こうから聞こえてくる錨の声に、イクラがそつと眉をひそめる。

「避けるか、収めるか……」

四方から攻め込んでくる波を見回し、イクラが考えを巡らせる。

眉間に皺を寄せ、考え込んでいたイクラが、ふと何か思いついたような表情を見せた。

——噴き上げる水に取り囲まれた、この場所で、相手に傷を負わせた場合、相手と同じ傷を自分も負うことになる——

思い出される、先程の錨の言葉。

「試してみるか……」

小さく声を落とすと、イクラが上空へと高々と飛び上がる。イクラが居なくなったその場所に、四方から波が押し寄せ、中央で互いに激しくぶつかり合った。その際、噴き上がって来た水の滴を、イクラがわざと浴び、右腕に小さなかすり傷を負う。

「……っ」

地面へと着地しながら、イクラが少しだけ振り向き、錨の姿を確

認する。

「チっ…」

錨はイクラと同じ右腕に、まったく同じ大きさのかすり傷を負い、表情を少ししかめていた。

「やはり、そうか…」

イクラが確信するように、言葉を落とす。

「ならば」

イクラがすぐに体の向きを変え、握り締めた言玉を、錨へと向ける。

「「憤れ」！」

すぐさま言葉を放ち、噴き上がらせた水を錨へと向けるイクラ。

「「諫めろ」！」

錨も間を置くことなく言葉を発し、イクラの噴き上がらせた水を、あつという間に抑え込む。

「「稲妻」：！」

「「雷」！」

二人が同時に雷撃を放ち、互いの中心で相殺させる。

「もう一丁…！「挑め」！」

雷撃が相殺しきらないうちに、高々と右手を掲げ、次の言葉を放つ錨。だが錨が言葉を放った瞬間、イクラは鋭く目を細めた。四方から迫る大波に、イクラは特に対抗する言葉も放たずに、ただ迫り来るそれを受け入れた。

「ううう…！」

四方からの波に吞まれ、イクラが苦しげな声を漏らす。地面に何とか足を踏ん張り、その場に立ち続けたイクラであったが、波が過ぎ去った時には全身傷だらけで、赤い血が勢いよく滴り落ちていた。

「クっ…」

濡れた地面に落ち、滲んでいく自分の血を見下ろし、少し顔をしかめるイクラ。

「だが、これであいつにも…」

傷を負いながらも、どこか期待するような目で、イクラが顔を上げる。この場所では、相手に負わせた傷を、自分も負うことになる。であれば、今、錨がイクラに負わせたこの傷を、錨も負うことになるはずである。

「な…!？」

「イヒヒっ」

だが、イクラが見つめた先には、まるで無傷の錨が、笑顔で立っていた。驚きの表情を見せるイクラを見て、錨がさらに楽しげに笑う。

「馬鹿な…」

眉間に強く皺を寄せ、戸惑うように呟くイクラ。

「先程は確かに、俺と同じ傷を…」

「傷？ああ、もしかして」

微笑んだ錨が、右腕のかすり傷へと指を伸ばす。

「このことか？」

「……!」

錨が指でなぞった瞬間、錨の右腕に刻まれていたはずのかすり傷が、あっという間に消える。きれいさっぱり傷のなくなった右腕に、イクラがさらに驚きの表情を見せた。

「“偽れ”…」

「ご名答っ」

イクラの放った言葉を聞き、錨が鋭く口角を吊り上げる。

「この“神格”の決まりが俺にも有効かどうか、お前は絶対に試してくると思ってなあ、初めっから“偽れ”^{いつわ}の言葉を掛けといたってわけ」

「成程な…」

錨の説明に、イクラが厳しい表情を見せながら頷く。

「この面倒な決まりは、貴様には無効ということか」

「当たり前だろお？」

そう言うイクラに、錨が挑発的な笑みを向ける。

「ここは俺が創った空間。“神”である俺の行いは、すべてが許されるんだよお！」

再び右手を振り上げる錨に、傷だらけで、満足に動けない状態のイクラが、険しい表情となる。

「茨^{いばら}」！

イクラの周囲へと張り巡らされる、雨のような、無数の水の刃。

「埋^いける」！

その刃が、一斉にイクラへと降り注いだ。

言ノ葉町、中央部。礼獣付近。

「先程から、大地を揺るがすほどの、水の震動が続いていますね」

「ううーん、結構激しくぶつかり合ってるみたいだねえーイクラくんたちい」

遠く離れていても、かすかに伝わってくる震動を感じ取り、南西の方向を見つめながら、雅と為介が落ち着いた様子で言葉を交わす。

「大丈夫でしょうか？彼」

「さあ？墮神となんて戦ったことないから、ボクには何ともねえ」

少し不安げに問いかける雅であったが、為介はてんで他人事といった様子で、特に気に掛けている素振りはなかった。

「っていうかあ、イクラくんのこと、心配してる場合じゃないっばいよお」

「え…？」

「グアアアア！」

「な…！？」

雅が為介の言葉に首を傾げていたその時、金八が作った水の箱の中に封じ込まれていた礼獣が、激しい咆哮をあげ、両翼を抑え込んでいた仁王の水像を、強く押し返し始める。

「阿…！」

「咩…！」

「仁王…！」

「あの獣…あれだけ攻撃を受けたのに、まだ…」

苦しげに声をあげる仁王を、心配するように身を乗り出すニギリ。ニギリの後方で礼獣を見つめ、シャコが険しい表情を見せる。

「グワアアア！アアアア！」

翼で仁王を押し返ししながら、礼獣が前足を何度も叩きつけ、周囲に張り巡らされた水の壁を攻撃する。その度に多くの水滴が飛び散り、水の箱が徐々に崩れ始めていた。

「マズイぜ！このままじゃ、水の檻がぶっ壊される！」

恵や為介の方を振り返りながら、焦った様子で叫ぶ守。

「おい、為す…」

“凍れ”！」

「え？」

恵が為介へと呼びかけようとしたその時、一つの言葉が落ちてきた。落とされた言葉により、礼獣を囲み込んでいる水の箱が一瞬にして凍りつく。凍った壁は強度を増し、前足を叩きつけている礼獣が、その固さに顔をしかめた。

「恵先生！」

「小泉っ」

言葉と共に、恵のすぐ横へと現れたのは、紺平であった。現れた紺平を、恵は戸惑うように見つめる。

「お前が、どうしてここに…」

“友を助けて来い”と

問いかける恵へと、紺平が晴れやかな笑みを向ける。

「神の命で来ました」

誇らしげに言う紺平に、恵は最初、少し驚いたような表情を見せたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべ、大きく頷いた。

「そうか。なら、行って来い」

「はい！」

恵の言葉に頷き、紺平が礼獣の方へと駆けていく。

「援護します！もう一度、抑え込んで下さい！」

「ああ。お前ら！」

紺平の言葉に頷いた金八が、他の三人の仲間たちへと声を掛ける。

「おっけえ！やるやるやるわよお、チラシくん！」

「うん、ニギリちゃん！」

「うるさい、鬱陶しい、ウルグアイ……」

ノリノリで向かっていくチラシとニギリに少し遅れるようにして、面倒臭そうに呟きながら、シャコが礼獣の方へと歩き出していく。

「おっしやあ！今度は俺も協力するぜえ！」

「ワタシモ、セメテ歌ノ応援ヲ……！」

意気込んだ守とライアンも、以団の三人と紺平に続くようにして、礼獣のもとへと駆けていく。

「雅クン、君も援護を」

「はい」

「お、俺も行く！」

為介の命により駆けていく雅と、それを追いかけるように、馬に乗って駆け出していく六騎。礼獣から少し距離を取っているその場所には為介と恵、そして金八だけが残っている。

「さてとお、俺も」

皆のもとへと行こうとした金八が、踏み出そうとしたその足を止め、ふと南西の方を振り返る。激しくぶつかり合っていた水音が、今は止んでいる。

「……っ」

その方向を見つめたまま、そっと眉をひそめる金八。

「行きたきゃ行って来ていいぞ」

「へえ？」

横から声を掛けられ、金八が間の抜けた声を漏らしながら、振り向く。

「イクラが気になるんだろ？第一、神に附いているのが、お前たち

神付きの責務だしな」

金八へと声を掛けたのは、恵であった。恵が金八の心情を察する
ように、言葉を放つ。

「ここには、これだけの人数がいる。一人くらい抜けても、問題は
…」

「ダメダメ！んなことしたら、俺が神にブン殴られて、ボロ泣きし
ちゃうよぉ」

すぐさま首を横に振る金八に、恵が少し眉をひそめる。

「だが、あいつだけで勝つことは、厳し…」

「あんた、さっき言ったよなあ？相手には、勝つ自信があるんだろ
うって」

「え？」

恵の言葉を遮って問いかける金八に、恵が少し戸惑うように目を
丸める。

「あ、ああ」

「けど、自信なら、俺にだってあるんだ」

「何？」

金八の言葉に、恵が首を傾げる。

「相手が堕ちた神だろうが、どんなに強かろうが、うちの神のんが
絶対に強いて自信がなあ」

得意げに言い放った金八は、まったく疑うことのない、自信に満
ちた笑みを浮かべた。

「う、うう…」

錨の放った水の塊を容赦なく浴びたイクラは、全身に傷を負い、流し尽くしそうなほどに大量の血を流して、力なく地面に、うつ伏せに倒れ込んでいた。しかめた表情のイクラの口から、苦しい重々しい声が落とされる。

「イヒヒ、どうだあ？俺の、“神”の力は」

倒れたままのイクラへと、錨が得意げに話しかける。その言葉に、イクラは地面へと顔を向けたまま、眉だけをそっとひそめた。

「相手には天罰下しまくりだってのに、自分には一切、害がない。最高だろお？」

錨がさらに、口角を吊り上げる。

「これぞ、全知全能の神に相応しい力。そう思わねえか？現、以の神さんよお」

微笑んで意見を求める錨に、イクラが少しだけ顔を上げ、錨の方を見つめて、その表情を曇らせる。

「詭弁きべんだな…」

「何？」

イクラのそっと落とした呟きに、錨が眉をひそめる。

「他者を甚振ることが天罰、自身を守ることが全能…それこそが“神”であるというのなら…」

顔を上げたイクラが、鋭い瞳を錨へと向ける。

「この世界に生きる愚かな人間の、大半が“神”だ」
はつきりと言い放つイクラのその言葉に、錨の表情が一気に曇る。

「あんまり、神の怒りを買うなよ…」

少し低くなった錨の声が、重く響き渡る。

「死ぬぜ？」

冷たく微笑んだ錨が、勢いよく右手を突き上げた。

「雷^{いかずち}」！

「う：うあああ！」

ろくに動くことも出来ないイクラへと、頭上から激しい雷撃が降り注ぎ、イクラの体を強く焦がした。雷に打たれ、何とか起き上がろうとしていたイクラが、再び地面へと深々と倒れ込む。

「グ：」

「苦しいかあ？以の神」

弱々しい声を漏らすイクラに、楽しげに問いかける錨。

「今、神が楽にしてやるよお！“挑^{いど}め”！」

錨が高らかと言葉を放つと、大きな波が、四方からイクラへと押し寄せる。イクラは倒れ込んでいた体を何とか起こし、地面に転がっていた言玉を握り直した。

「い、“諫^{いさ}めろ”：！」

イクラが必死に言葉を発し、四方から押し寄せる波を収めようとする。だが波の勢いは強く、左右と後ろの波は抑えられたものの、前方の波だけは残って、そのままイクラへと攻め込む。

「ク：！“祈^{いの}れ”！」

同じ波を相手に、もう一度、抑え込む言葉を使うことは出来ず、イクラが違う言葉を放つ。イクラの後方から現れた巨大な水の女像が、両手を広げながら、波へと向かっていく。最後の波は、水像に包み込まれるようにして、掻き消えた。

「“急^{いそ}げ”」

「何：？」

水像が波を碎いた途端、錨が言葉を使い、目にも留まらぬ速さで、勝ち残った水像のもとへと飛び込んでいく。錨の様子に、戸惑いの表情を見せるイクラ。

「しま：！」

錨が何をしようとしているのかに気付き、イクラが焦って、水像を消そうとするが、それよりも先に、錨は水像に辿り着き、自ら飛び込むように、水像とぶつかり合った。

「うう…！」

水像と衝突し、自ら全身に傷を負う錨。

「うううう！」

そして次の瞬間、錨の負った傷がイクラの体にも刻まれ、すでに激しく傷を負っていたイクラは、より一層苦しい声を立て、今度は仰向けに倒れ込んだ。

「う、ううう…」

「イヒヒ、ああ、痛い痛い」

声にならない声を漏らすイクラを見つめながら、傷を負いながらも、楽しい笑みを浮かべた錨が、自分の右腕から流れ落ちる血を、そっと舐めあげる。

「神に傷をつけるなんて、いけねえなあ」

笑みを浮かべながらも、その瞳を鋭くし、錨が言玉を持った右手を、倒れたままのイクラへと向ける。

「挑め^{いどめ}」！」

「う、うあああああ！」

四方から押し寄せる波に吞まれ、イクラがさらに傷だらけとなって倒れ込む。

「ハア…ハア…」

苦しげに息を乱すイクラ。血を流しすぎたためか、見上げる空の景色は、すでに霞み始めていた。少しでも気を抜けば、あっさりと意識を失ってしまいそうである。

「どうだあ？これでちったあ、わかったか？俺とお前の力の差が」
遠ざかろうとしている意識の中、錨の嘲笑うような声が、イクラの耳へと届く。

「ただの無力な人間と、“神”との差だあ。どっちが本当の“神”か、これで十分にわかっただろお？」

錨が得意げに胸を張り、さらに言葉を続ける。

「“癒^いやせ” っと」

錨が自分へと言葉を向けると、錨の負っていた傷がきれいに塞が

る。だが、錨の傷が塞がっても、同じように負ったイクラの傷が塞がることはなかった。

「イヒヒ、どうだあ？そっちは苦しいままかあ？」

大きく口元を緩め、楽しそうに問う錨。

「神に逆らうから、痛い目に遭うんだよお」

「……っ」

錨のその言葉に、空を見上げていたイクラの表情が、かすかに動く。

「無力な人間共はただ、“神”の言う通りにしてりゃあ、いいんだよお」

「神の、言う通り…？」

「ああ？」

聞き返してくるその声に、饒舌に言葉を続けていた錨が、少し戸惑うように首を傾げる。

「ああ。大人しく言うこと聞いてりゃあ、全知全能の神様が、愚かな人間共にも救いつてのをくれんのさあ」

「……救い…」

まっすぐに空を見上げながら、イクラがまたしても、錨の言葉を繰り返す。

「――祈りを捧げれば、神様が私たちに“救い”を下さるからよ――」

それが、優しかった先生の教え。

「――イクラくんも神様に祈ってくれる？私が幸せになれますようにって――」

だから祈った。その言葉の通りに、毎日、必死に。

「だからお前らは、神に逆らおうだなんて思わずにだなあ」

「そうだ…」

「あ？」

言葉を遮るその声に、錨が再び眉をひそめる。

「な…!？」

次の瞬間、錨が大きく目を見開く。その見開かれた瞳は、前方でゆっくりと立ち上がる、全身傷だらけのイクラの姿を捉えていた。

「馬鹿なっ…あの傷で…」

もう何度も錨の攻撃を受けたイクラは、立ち上がることは愚か、指一本動かす力さえ、もう残っていないはずである。それだいうのに、堂々と立ち上がるイクラのその姿に、錨は思わず目を見張った。

「天罰を下す為じゃない…全知全能になる為じゃない…」

立ち上がらせた両足の膝を伸ばし、背筋を伸ばして、イクラが姿勢をまつすぐにする。

「俺はただ、あの日の神に…」

———なんで、先生を“幸せ”にしてくれなかったんだよお…!!

届くことのなかった、毎日の祈り。降り注ぐことのなかった、ただ一つの救い。

「ただ、俺自身の神に、逆らう為に…」

イクラが傷だらけの右手で、血が流れ落ちる中、それでも力強く、言玉を握り締める。

「逆らう為だけに、神になった…!」

力強いその言葉に呼応するように、イクラの手の中の言玉が、一気に強い青色の光を発する。

「ク…!」

あまりに眩しいその光に、思わず目を細める錨。

「今更、その傷で何を…!」

しかめた表情を見せ、錨が光に包まれたイクラを、睨みつけるように見る。

「性懲りもなく、まだ神に逆らう気かよ!? ああん!？」

「ああ…」

強気に問いかける錨に対し、イクラは迷うことなく頷いた。

「神に逆らい続けることだけが…」

額からまだ、赤い血の流れ落ちる中、イクラがゆっくりと顔を上げる。その表情は落ち着き払っており、だが瞳だけは熱く、強く輝いていた。

「俺が“神”である理由だ」

堂々と言い放ったイクラが、傷だらけの右手を振り上げ、言玉を持った右手を錨へと突き出す。

「神に逆らうことが、神である理由だあ…?」

大きく表情をしかめながら、錨がゆっくりとイクラの言葉を繰り返す。

「訳のわからねえことばっか、言ってんじゃねえよ!」

鋭く右手を掲げる、錨。

「“因果応報”^{いんがおうほう}!」

錨がもう一度、その特別な言葉を落とすと、周囲に噴き上げていた水柱が、さらに勢いを増した。逆流する滝のように激しく噴き上げる水を、イクラが少し見回す。

「逆らえるもんなら、逆らってみろよ! この空間の中で!」

挑戦的に、錨が言葉を投げかける。

「俺を傷つければ、お前も傷を負う! けど、俺はお前を傷つけ放題! そんな、全知全能のこの中でああ!」

「……………」

決して逆らえるはずがないと、自信を覗かせた様子で強気に言い放つ錨を、イクラは冷静な表情でまっすぐに見つめた。

「この空間を破ればいいだけの話だ…」

「ハ! 破るだあ? フザけたこと、言ってんじゃねえよ!」

イクラの言葉を、錨がすぐさま笑い飛ばす。

「こいつは“神格”の言葉で創った、特別製! たかだかお前ごとき

の、ちゃっちい言葉じゃなあ…！」

「その“神格”というものが、貴様だけに与えられた力だと、本当に思っているのか…？」

「何？」

遮るイクラの言葉に、錨が途端に眉をひそめる。

「当ったり前だろ！？これは、阿修羅が、俺たち堕神だけに与えた、特別な…！」

「特別かどうかは知らないが、たかが文字を四つ、並べる程度なら…」

イクラがまたしても、錨の言葉を遮る。

「俺にも言える」

「何…！？」

「い…」

言玉を構えたイクラが、ゆっくりと自身の文字を口にする。

「“一碧万頃”…！」
いっぺきばんけい

イクラが四つの文字を声にして、落とした途端、イクラの後方から、“祈れ”の言葉の時よりも遥かに巨大な、女性の水像が形成されていく。水像の頭は、天にまで届きそうなほどで、水像がゆっくりと両手を広げていくと、水がまるで海のように、辺り一面を包み込んだ。

「な…！？」

地上で広がっていく海に、錨が噴き上がらせていた幾つかの水柱など、赤子の手を捻るよりも簡単に、あっさりと呑み込まれていく。その光景を見つめ、大きく目を見開く錨。

「そ、そんな…馬鹿な…！」

少し震えた声をあげ、錨がまだ、信じきれないといった表情を見せる。

「俺の、俺の“神格”が…」

今はもう見る影もない、自分の力を探すように視線を動かし、錨が泣き出しそうな顔となる。

「俺たちに、俺にだけ、与えられた力：俺だけの特別な力、なのに……！」

「“俺だけに”……？」

戸惑いをそのまま声にする錨のその言葉を、イクラがゆっくりと繰り返す。

「フザけたことを言う……」

どこか呆れるように、深々と肩を落とすイクラ。

「この程度の力、二十数年も前から使っている神を、俺は知っている」

「え……？」

イクラの言葉に、錨がさらに驚きの表情を見せる。

「そ、そんな……そんなはずはねえ！俺は“神”で、神の中でも特別な“神”で、全知全能で……！だから……！」

“神”など、特別なものではない」

錨の必死の言葉を、イクラがあっさりと否定する。

「そう思うのであれば、それは貴様の驕りだ」おご

イクラの鋭い瞳が、錨へと突き刺さる。

「神を驕る者に、神を名乗る資格はない」

再び、イクラが言玉を持つ手を振り上げると、その動きに反応するように、イクラの後方の水像が、広げた両手をゆっくりと掲げていく。

「“抱^{いだ}け”」

イクラが静かに言葉を発すると、水像が広げた両手で、錨の両側から、まさに言葉の通り、錨の体を抱きしめるように、包みこんでいく。

「う……！」

自身を覆っていく巨大な水像に、視界を一面奪っていく、どこまでも続く碧に、錨は大きく目を見開き、恐怖に顔を歪ませる。

「うわあああああ……！！」

町ごと呑み込んでしまいそうなほどの、巨大な海に包まれ、激し

い叫び声と共に、錨が水の中へと、その姿を消していく。

「以の神”は、俺だ…」

荒れる海を見つめ、イクラがそっと呟いた。

「おっしやあ！」

突き上げていた噴水を掻き消し、こちらにまで響き渡る水音を立てて、攻め込んだ巨大な水像の様子を見て、礼獣との戦闘を続けていた金八が、思わずガッツポーズを作る。

「やったぜ、シャコお！神が勝ったあ！」

「当たり前、朝飯前、雨男…」

喜ぶ金八とは正反対に、落ち着き払った様子で呟きを落としているシャコ。だが、隠していてもその表情には、安堵の様子がうかがえた。

「さすすすがあ、我が神ねえ！」

「こっちも張り切って、頑張っちゃおうよお、ニギリちゃん！」

「もちもち勿論よお！」

イクラの勝利にテンションを上げたチラシとニギリは、さらに気合を入れ、ポーズを決めながら、再び礼獣のもとへと駆け出していく。

「為介さん、南西の光が」

「んんん？」

雅の指差した方向を、ゆっくりと振り向く為介。天まで突き上げていた、言ノ葉町、南西部にある青い光が、急に勢いを失い、徐々に地上へと落ちて、やがて消えていく。

「イクラが堕神を倒したことで、五母ごぼの光が一つ、消えたな」

「えええ」

横から分析するように言う恵の言葉に、為介がそっと頷く。

「それにしても、“四字熟語”とはな」

ラスト・イデオム

今はもう見えない、巨大な水像のあった方角を見つめ、恵がどこか感心するように呟く。

「数ある五十音士の言葉の中でも、最高位の言葉。神の中でも、選ばれし神しか使えない言葉だが…」

恵がゆっくりと視線を動かし、為介を見つめる。

「お前が、イクラに教えたのか？ 為介」

「まっさかあゝまるで教えてませんよお。一回か二回、見せただけで」

為介が扇子を振りながら、軽い笑みを零す。

「一回か二回、見せただけで使えるようになっちゃうとは…今度から、下手に言葉は見せられないなあ」

困ったように頭を掻きながらも、為介はどこか、嬉しそうな笑みを浮かべていた。慕い、慕われる関係ではないとはいえ、教え子の勝利に、多少喜んでいる様子である。

「さて」

恵が表情を鋭くし、まだ突き上げている光を見回す。

「後四つか…」

青光を失っても、まだ赤々と輝いている上空で集約した光を見つめ、恵はそっと眉をひそめた。

「ハア…！ハア…！ハア…！」

一方、言ノ葉町東部で突き上げる、真っ赤な光の柱を目指すアヒル。

「えっと」

まっすぐの道を通り切り、曲がり角へと差し掛かると、ひたすら動かししていた足を止め、空を見上げて、光の方角を確認する。

「あっちだから、こっちか！」

光の位置を確認し、右の道を選んで、アヒルがまた駆け出してい

く。

「……………」

アヒルの駆け去っていった曲がり角の、柱の陰からゆっくりと姿を見せたのは、神妙な表情を見せた棗であった。

「……っ」

まだかすかに見えるアヒルの背中を見つめ、棗はそつと、目を細めた。

Word. 56 更ナル変格 (1)

言ノ葉町、中央部。

「ええーと」

墮神の一人、一条錨の相手をイクラへと任せた七架は、イクラの言葉に従い、アヒルのもとへと向かうべく、一度、言ノ葉町の南西部から、中央部へと戻って来ていた。道の真ん中で立ち止まった七架が、上空を見上げ、空へと突き上げている光の柱を見回す。

「北の二本は囁ちゃん和高市くんだから、朝比奈くんはええーつと」
七架が南に浮かぶ白い光と、東に浮かぶ赤い光を見比べる。

「どっちに行っただら？朝比奈くん」

「奈々瀬？」

「え？」

困ったように呟いていた七架が、よく聞き覚えのあるその声を耳に入れ、すぐさま振り向く。

「あ、朝比奈くん！？」

「よう」

東へ向かう道から、その場へと現れたのは、穏やかな笑みを浮かべたアヒルであった。やって来たアヒルは、驚いている七架へ、軽く右手を振り上げる。

「ど、どうしたの？朝比奈くん」

「へ？」

戸惑うように問いかける七架に、アヒルが目を丸くする。

「どこかの光に向かったんでしょう？なんでまだ、こんなところに」

「ああ、それが道に迷っちゃってさ。闇雲にウロウロしても仕方ねえって思ったから、一回、戻って来たんだ」

「あ、そうだったんだ」

その答えに、戸惑ってばかりいた七架が、納得した様子で笑顔を

見せる。

「奈々瀬は？随分と早えな」

「あ、実はね」

「もう、敵をぶっ倒してきたのか？」

「……っ」

アヒルからの問いかけに、イクラのことを話そうと口を開いた七架であったが、次に放たれたアヒルの言葉に、すぐさま眉をひそめ、口を閉じた。

「さすがは俺の神付き。優秀で助かるよ」

嬉しそうに微笑むアヒルに答えようとはせず、七架は持っている薙刀へと力を込めた。

「“薙^なげ”」

「え……？」

落とされる言葉に、アヒルが表情をしかめる。

「ちょ……！」

七架が振り下ろした薙刀から、至近距離で放たれた赤い一閃を、後ろへと飛ぶことにより、何とか避けるアヒル。傷こそ負わなかったが、戸惑いきった顔つきで、アヒルが七架を見つめる。

「ど、どうしたんだよ！？奈々瀬、いきなり自分の神に攻撃するなんて、気でも狂っ……！」

「あなたは、私の神じゃないわ」

焦ったように訴えかけるアヒルの言葉を遮り、薙刀を振り上げた七架が、はっきりと言い放つ。

「私の神は、例え、倒すべき相手であっても、その人たちを“敵”とは呼ばない」

振り上げた薙刀を構え直し、その鋭い刃先を、アヒルへと向ける七架。

「私の神は、例え、倒すべき相手を倒したとしても、嬉しそうに笑って“優秀だ”なんて、絶対に言わない人よ」

七架の強い主張を受け、アヒルがゆっくりと肩を落とす。

「……そうですか」

アヒルの口から、アヒルのもととはまるで違う、若い女性の声が零れ落ちた。

「私が神に言われて嬉しいことを、言葉にしたつもりだったので……」

淡い光を帯びたアヒルの体が、一瞬、強い光を放つと、次の瞬間そこに立っていたはずのアヒルの姿は、若い女性の姿へと変わっていた。それは、先程まで阿修羅と共に居た、なつめ棗であった。

「どうやら、あなたと私とは、喜ぶ言葉が違うようですね」

「あなたは……？」

姿を見せた棗に対し、七架が険しい表情で問いかける。

「あなたと同じ文字を持つ者、と言えば、おわかりですか？」

「先代“奈守”……」

棗の答えに、七架がさらに眉をひそめる。アヒルや籠也の話聞き、阿修羅の傍に“奈守”らしき女性が附いていることは、七架も知っていた。

「私の言葉、“なじ馴染め”は、他者の姿を完璧に真似ることが出来るはずなのですが……」

自分の両手を見下ろしながら、棗がゆっくりとした口調で話す。

「我が神の与守よもりへの変装も、加守の方に見破られてしまいましたし、あなた方、安団とは相性が悪いようですね」

「朝比奈くんはどうしたの？」

棗の言葉を耳に入れていない様子で、棗へと鋭く問いかける七架。突き刺すようなその瞳からは、強い気迫を感じた。

「あなたの神は、あの東の赤い柱へと向かいました。数分もすれば、我が神のもとへ辿り着くでしょう」

「え……？」

思いがけない棗の言葉に、七架が少し驚いた表情を見せる。

「朝比奈くんを、通した？」

七架が小さく声を漏らしながら、アヒルが向かったという東の赤

い光を見つめる。あの光のもとに、棗の神が居るというのであれば、アヒルを足止めすることが、棗の役目のはずである。

「どうして…」

「ここから先は、神の領域…」

戸惑っている七架のその疑問を知るように、言葉を落としながら、棗が服の胸ポケットから、七架と同じ赤い言玉を取り出す。

「私の役目は、ここであなたを止めること」

棗が言玉を握り締めると、言玉が淡い光を放ち始める。

「第二十一音“な”、解放…」

自分と同じ文字の解放を、七架が息を呑みながら、まっすぐに見つめる。棗の手の中で輝きを増した言玉が、その姿を変え、棗の右手首に勢いよく巻き付く。

「あれは、籠手…？」

光が収まると、棗の細く白い右手の、指先から右手首にかけてを覆うように、赤銅色の籠手が装着されていた。棗が籠手の感触を確かめるように、指を折っては伸ばす動作を何度か繰り返し、そしてゆっくりと構えを取る。

「先代“奈守”として、あなたの力、試させていただきます」

そう言うと、棗がすぐさま、その場から姿を消した。次の瞬間、七架の目の前へと、棗が現れる。

「速…！」

“殴れ”」

「う…！」

棗の動きに驚いている七架へと、棗が籠手で覆われた右手を振り上げ、言葉と共に勢いよく振り下ろす。七架は必死に持っている薙刀を突き出し、下りて来る拳を、薙刀の柄の部分で受け止めた。

「なんて力…！」

「すべては我が神のため…」

あまりに強い力が薙刀から七架へと伝わり、七架が思わず表情をしかめる。そんな七架をまっすぐに見つめ、棗は強い意志のこもっ

た言葉を放つ。

「私はあなたを、倒します」

「……！」

輝きを増す棗の拳に、七架はさらに険しい表情を見せた。

言ノ葉町、南端。海岸沿い。

「落^おちろ」

堕ちし“於^おの神”、沖也がそう言葉を発すると、まだ薄暗い空から、真っ白の光の粒が、無数に降り落ちて来る。落ちて来る光を見上げ、箆也は冷静に右手の格子を振り上げた。

「^{かこ}囲え」

箆也が右手の格子を手放し、六本へ分離させる。箆也の手から離れた格子たちは、箆也の頭上で円を形成し、降り落ちて来る光から、箆也を守る。

「返^{かえ}せ」

箆也がさらに言葉を発すると、上空からの光を受け止めていた格子たちが一斉に傾き、受け止めた光を沖也の方へと弾き返した。

「収^{おさ}めろ」

戻って来る自らの力に、沖也も特に焦った様子は見せず、冷静に言葉を選んで、やって来た光を掻き消す。

「はあ……」

「変格」

憂鬱そうに溜息を落としていた沖也が、前方から聞こえてくる声に、少し眉をひそめ、顔を上げる。顔を上げたその先では、向き合っている箆也が、六本の格子の姿を変え、赤銅色の鎌を構えていた。「変格」。力行、サ行、ナ行、ラ行の五十音士にのみ与えられた、言玉の第二形態変化、か……」

さすがは元、神であっただけに、沖也も変格についてはよく知っ

ているようで、武器を変化させた箆也を見ても、特に驚いた様子は見せない。

「まあ、どうでもいいけど…」

「刈^かれ」

沖也がやる気なく肩を落とす中、箆也が鋭く鎌を振り切り、沖也へと赤い光の一閃を向ける。

「劣^{おと}れ」

白い言玉を持った右手を、ほんの少しだけ上げ、沖也が小さい声で言葉を落とす。すると、沖也へと向かっていた箆也の一閃が、徐々に勢力を落とし、その光を弱めていく。

「はあ…どうでも…」

「重^{かさ}なれ」

小さくなった光を避けようと、ゆっくりと足を踏み出した沖也であったが、そこへさらに箆也の言葉が響き、後方から駆けつけた新たな一閃が、弱まったその一閃と重なり合って、再び勢力を取り戻す。一気に速度を増して迫って来る一閃に、沖也は目を見開いた。

「クっ…」

ずっとやる気のない表情だった沖也が、初めて表情を崩す。

「終^おえろ…！」

沖也が鋭く右手を突き出し、言葉を放って、ぎりぎりのところで箆也の一閃を掻き消す。

「はあ…」

何とか攻撃を防いだ沖也の口から、今までの憂鬱そうな溜息とは異なる、かすかに乱れた息が落ちる。

「どうでもいいわりには、随分と必死だな」

挑発的な箆也の言葉に、沖也が眉をひそめる。

「どうでもいいけど、ムカつくね…」

多少、表情をしかめた沖也が、勢いよく右手を振り上げる。

「慄^{おの}け…！」

沖也が言葉を発すると、沖也の体を中心に、全角度に波状の白光

が、一気に溢れ出す。

「あ…！」

迫り来る光の波に、箆也が焦りの表情を見せるが、波の速度はあまりにも速く、箆也は何の言葉を放つ間もなく、その波に覆われた。

「これで…」

「霞^{かす}め」

「……！」

波に浚われていく箆也の姿に、小さく笑みを零そうとした沖也であつたが、その箆也の姿が徐々に霞んでいき、驚いた様子で大きく目を見開く。

「まさか…」

「翔^かけろ」

予想をつけるように沖也が顔を上げると、その予想が当たったのか、空を翔けた箆也が、沖也のすぐ真上から、勢いよく鎌を振り下ろした。

「刈^かれ」！

「う…！」

迫る鎌の刃に、沖也が唇を噛む。

「チ…！」

右腕に刃を掠めた沖也が、赤い血を滴り落としながら、素早く後方へと下がり、地面へと着地した箆也と距離を取る。振り下ろされた刃から、大きく身を逸らし、何とか致命傷は避けたようである。

「さっきの“劣れ”といい、今の“慄け”といい…」

傷口を左手で押さえながら、少し眉間に皺を寄せた沖也が、鋭く箆也を睨みつける。

「まるで、俺が何の言葉を言うか、初めからわかっているような対応だったね…」

沖也のその言葉に、鎌を下ろした箆也が、そっと目を細める。

「“お”の文字は、僕にとっては、特別な五十音」

箆也が左手を、自分の胸へと当てる。

「何よりも焦がれた文字であり、何よりも呪った文字でもある。憧れであり、戒め」

「だからこそ、何の文字よりも詳しいってわけか…」

「ああ」

少し呆れたように言う沖也に、箆也が大きく頷きかける。

「もしかしたら、自分の文字よりも詳しいかも知れないな」

「…まあ、どうでもいいけど…」

自嘲するような笑みを浮かべる箆也に対し、沖也は特に興味なく呟く。

「君がいくら“お”の文字に詳しくても、君が勝つ理由にはならないよ」

冷たく言い放った沖也が、傷口を押さえていた左手を下ろし、再び右手を突き出す。

「おお覆え」

言葉が放たれ、先程と同じように、沖也の体を中心に光が広がっていくが、今度は波状ではなく、空と地面の間を天井のように、大きく覆っていく。箆也の頭上を覆った光が、今度は地面へと方向を変え、箆也の体全体を覆っていかうとする。

「か欠けろ」

光に覆われる前に鎌を振り切り、光の天井へと穴をあける箆也。

「か…」

「おぎな補え」

あいた穴からさらに攻撃を仕掛けようとした箆也であったが、それよりも早く檻也が言葉を放ち、箆也があけた穴が再び塞がれてしまう。

「なら…か掻き消せ」！

穴を塞がれてしまった箆也が、今度は光全体を消し去ろうと、鎌を大きく横へ振るう。だが、その箆也の言葉に、覆った白光は少しも消え去らなかった。

「これは…！」

「そう何度も何度も、防げると思わないでよ……」

焦った様子で顔をしかめる箆也を、覆った光の向こうから透かすように見つめ、沖也がそつと言いつつ。

「及^{およ}べ」

「う……！」

覆った光が、一気に箆也を押し潰す。

「うあああああ……！」

足の裏以外のすべての部分から、一挙に沖也の光を浴び、全身を斬り裂かれた箆也が、血を流しながら、痛々しい叫び声をあげる。

「う、うう……」

覆った光が消えると同時に、箆也が力なくその場に膝をつく。

「落^おちろ」

箆也がまだ立ち上がれていない状態の中、沖也はさらに次の言葉を投げかけ、箆也へと光の粒を落^{かた}とす。

「か、“固^{かた}まれ”……！」

避けるまではいかず、箆也が鎌を空へと突き立て、落ちて来ていた粒を空中で固め、止める。

「降^おりろ」

「な……！」

だが沖也は箆也の言葉を上書きして、固まった粒を、そのまま箆也へと落とした。

「うああ……！」

地面に体を転がすようにして、落ちて来る固粒を、何とかかわす箆也。

「語彙力じゃ、負けないつもりだったがつ…」

籠也が傷ついた体を何とか起こしながら、険しい表情を見せる。

沖也の言葉数は、檻也や、籠也がかつて戦った七声としろなきの一人、轟を、大きく上回っていた。

「なかなかの語彙力だと思うよ」

そんな籠也の呟きを耳に入れていたのか、沖也が答えるように言い放つ。

「それは於崎の教育の賜物…？それとも於崎を見返してやろうって、必死に勉強したのかな…」

「あなたのそれは、どちらなんだ？」

「うーん、前者の方かなあ…」

少し首を捻りながら、沖也がゆっくりと答える。

「僕は後者だ」

「そう…まあどっちでもいいけどね…」

問いかけておきながら、興味のない素振りを見せる沖也。

「仮にも於崎の人間であつたなら、君は知っているんだろう…？」

体を起こそうとしている籠也に、攻撃する様子は見せずに、ただのんびりと見つめた状態で、沖也が籠也へと問いかける。

「俺が何故、神の座を堕ちたのか…」

沖也のその言葉に、籠也がそつと眉をひそめる。

「ああ、知っている」

籠也が険しい表情のまま、短く答える。

「あなたは、神になった始めの一日で、多くの罪もない人間を言葉の力で傷つけ、神を堕ちた。最低の神だ」

「また“最低”…酷い言われようだ…」

肩を落としながらも、沖也がそつと笑みを零す。

「俺ね、ずっと息苦しかったんだ…あの堅苦しい家で、神を目指し

て、ひたすら言葉を叩きこまれて…」

沖也が懐かしむように話しながら、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「君ならわかるんじゃない…？ 同じような環境で育ったんだろ…」

「…っ」

同意を求めるように振り向く沖也に、籠也が少し視線を落とす。

確かに、籠也にとつての於崎家は、息苦しい以外の何でもなかった。檻也が神となってからは、さらにその息苦しさが増し、結局は於崎家から逃げるような形になってしまったのだ。

「けどそんな時、旧世代の神たちの反乱があって、思わぬ零れ話…」

「旧世代が抜けた代わりに、“於の神”を任された」

「うん、そう」

挟まれた籠也の言葉に、大きく頷く沖也。

「俺が神になるって決まった時、親も親戚一同も、於崎の家の人間たちは、それはもう大喜びだったよ」

遠くの空を見つめていた沖也が、ゆっくりと視線を下ろしていき、その先を籠也へと移す。

「で、実際、神になってみたらさ、色んな息苦しさから解放されて、何かもう、一気にどうでもよくなっちゃったんだ…」

「その結果、何の罪もない人間を、何の理由もなく傷つけたと…？」

「うん、そう」

問いかけた籠也に、沖也が何の悪びれもない笑顔を見せて頷く。

そんな沖也の笑顔に、籠也は不快感を得ずにはいられず、思わず顔をしかめた。

「於崎はきつと必死だっただろうね。折角得た神の座を、俺のせいで台無しにされそうになったんだからさ」

笑顔を浮かべたまま、沖也がさらに言葉を続ける。

「ああー、笑える」

まるで感情のこもっていないその言葉に、目を細める籠也。

「墮神となって、人々の自由ある言葉を奪ったのは、於崎に対する復讐のつもりか？」

「まさか」

簞也の問いかけを、沖也は間を置くことなく、否定した。

「言ったでしょう…？もう、どうでもよくなっちゃったんだって…」

繰り返される沖也の言葉に、簞也はまたさらに表情を曇らせる。

確かに沖也は、何にも興味を示していない、すべてどうでもいいと思っている、そんな、口にした言葉通りの様子であった。

「本当にどうでもいいんだ。世界中の人間の言葉が奪われたって、奪われなかったって、俺にはまったく問題ない…」

「何故、どうでもいい人間のあなたが、面倒この上ないというのに、僕の相手をする？」

「うーん、そうだな…」

考えを巡らせるように、沖也が少し首を捻る。

「強いて言うなら…」

沖也の視線が、ゆっくりと簞也へと向けられる。

「迷惑かけた於崎家への、せめてもの…はなむけ餞？」

「餞、ね…」

ゆっくりと繰り返すように言って、簞也が表情を鋭くし、再び鎌を構える。

「刈^かれ」！

勢いよく鎌を振り切り、沖也へと一閃を向ける簞也。

「簡単に餞にはなってくれないか…おのの“慄^{おのの}け”！」

波状の白光を放ち、沖也が簞也の一閃を碎き去り、さらにその白光を簞也へと向ける。

「か“涸^かれろ”」

言葉を発し、向かって来ていた白光を掻き消す簞也。

「僕を倒したところで、於崎家への餞にはならないと思うぞ」

沖也の攻撃を防いだ簞也が、沖也へと鋭い視線を向ける。

「あの家は、僕のことを於崎の者などと、思っていないからな」

「そうだね…俺のこともきつと、於崎の人間だなんて思っていないよ。きつと…」

簞也の言葉に同調するように、沖也がゆっくりと言葉を呟く。

「於崎にとって、俺たち二人の戦いなんて…どうでもいいことなのかもね…」

「……そうかも知れないな」

認めるように頷きながら簞也は、それでもどこか、寂しげな表情を見せた。

「それでも僕は、負けるわけにはいかない」

自分自身に言い聞かせるように、強く言葉を発する簞也。

「鎌鼬かまいたち…！」

簞也が鎌を空へと放り投げると、鎌がその姿を風の塊へと変え、勢いよく沖也へと迫っていく。

「熟語イデオロムに、形態変化…」

向かって来る風塊を見つめ、沖也がそっと目を細める。

「腐っても於崎の血か…まあ、どうでもいいけど…」

興味なく呟いた沖也が、言玉を軽く握る。

「送おくれ」

沖也が言玉を持った右手を突き出し、向かって来る鎌鼬を、簞也へと送り返す。

「返かえせ…！」

返って来た鎌鼬を、言葉に向けて、またさらに返す簞也。再び向かって来た鎌鼬にも、沖也は表情一つ崩さず、落ち着き払った様子で口を開いた。

「贈おくれ」

先程と同じ言葉を放って、もう一度、鎌鼬を贈り返す沖也。

「また上書きか…！……っ」

再々度返って来る鎌鼬に、簞也が大きく表情をしかめる。少し考えるような表情を見せた後、何かを決めた様子で顔を上げ、鎌を振り上げる簞也。

「まだ言葉を…？」

「お…」

沖也が戸惑うように首を傾げる中、箆也が今までとは異なる文字を口にする。

「“追^おえ”！」

「何…？」

箆也が放ったその言葉に、沖也が今までで一番、驚きの表情となる。箆也の言葉により、再び沖也へと向かっていく鎌鼬。

「“お”の言葉を…？ク…！」

困惑した表情を見せながら、沖也がその場を駆け出し、向かって来る鎌鼬から逃れようとする。だが、鎌鼬は、沖也の逃げた方向と同じ方向へと流れ、どこまでも沖也を追いかけていく。

「チっ…」

逃げてでも逃げてでも追ってくる鎌鼬に、思わず舌を鳴らす沖也。

「逃げてでも無駄だ」

「そのようだね…」

強く言い放つ箆也に答えて、沖也が逃げていた足を止める。

「何を…」

「^{おぼろ}朧”…」

「あ…！」

沖也の姿が、闇に紛れるように、徐々に薄れ、消えていく。放った鎌鼬が、先程まで沖也の居た場所を通り過ぎると、箆也は焦ったように身を乗り出した。

「どこへ…！」

「ここ…」

「…！！」

沖也の声が響いたのは、箆也のすぐ後ろ。大きく目を見開いた箆也が、すぐさま後方を振り返る。

「武器を手放すのは、あまりいい攻撃じゃなかったね…」

「ク…！」

鎌鼬として放ってしまったため、手元に言玉のない箆也は、沖也の方を振り向きはしたが、どうすることも出来ず、ただ表情を歪めた。

「“^お圧せ”」

「う、うああああ！」

突き出された沖也の右手から放たれた、巨大な光の塊に圧され、箆也が勢いよく後方へと吹き飛ばされる。地面へと倒れ込んだ箆也のすぐ傍に、いつの間にか、風から元の姿へと戻った鎌が、力なく落ちる。

「グ、クウ…」

「まさか、“お”の言葉を使うとは思わなかったよ」

苦しげな声を漏らしながら、必死に上半身を起こす箆也へと、沖也がゆっくりとした口調で話しかける。

「認められてなくても何でも、一応は於崎の血は流れてるみたいだね…」

その沖也の言葉に、箆也が少し目を細め、厳しい表情を見せる。

「けど、じゃあ、なんでその言葉をもっと使わないの…？」

素朴な疑問を投げかけるように、沖也が大きく首を傾げる。

「そんな脆弱な子音の言葉なんて、使わずにさ…」

「…っ」

沖也のその言葉が引っ掛かったのか、箆也の表情が突然、曇る。

「まあ、どうでもいいけど…そうすれば、もう少しは俺に攻撃を…」

「脆弱などではない」

相変わらずやる気のない沖也の言葉を、箆也の鋭い言葉が勢いよく遮った。地面に落ちた鎌を右手で掴み、それを支えにして、箆也がゆっくりと体を立ち上がらせていく。

「この文字は、あの人が僕にくれた言葉…」

箆也が噛み締めるように、左手で胸元の服を握り締める。

——君の言葉は、もっと自由だよ、箆也——

今も目を閉じるだけで浮かんでくる、何よりも優しかった、あの笑顔。

「自分の言葉を見失った僕に、カモメさんがくれた…」
地面を見下ろしていた箆也が、力強く顔を上げる。

「誰かと言葉を交わせるように、と…！」
顔を上げた箆也が、迷いのない瞳で、堂々と言い放つ。完全に足を立ち上がらせ、支えるために地面へと付けていた鎌を振り上げ、箆也がもう一度、構え直す。

「言葉を交わせるように、ね…」
箆也の熱い言葉にも自分の温度は変えず、沖也が冷めた様子でゆつくりと言葉を繰り返す。

「じゃあ、俺と言葉を交わして、死ぬ…？」
「ああ」

あっさりと頷く箆也に、沖也が少し眉をひそめる。

「言葉は交わそう。あなたを倒す為に」
はつきりと言い放った箆也が、右手に持っている鎌を高々と掲げる。

「“倒す”、か…神を相手に恐れ多いね…」

「僕は今までもずっと、神と戦って来た」

「え…？」
箆也の言葉に、沖也が戸惑いの声を漏らす。

「自身が成れなかった神と、自身が憧れ続ける、この胸の中の神と…」

ここに神が居るとでも言うように、左胸に手を当てる箆也。
「だから今更、神を倒すことを恐れはしない…！」

力強く言い放った箆也が、胸に当てていた手を離し、力強く鎌を握る。

「五十音、第六音…“か”、解放…！」
「え…？」

鎌を掲げ、戦いの始めの時と同じ言葉を繰り返す箆也に、戸惑うように首を傾げる沖也。

「何だ…？二度も文字を解放するなんて、聞いたこともない…」

沖也が表情を曇らせ、困惑した様子で箆也を見つめる。沖也にとってみれば、意味のない行動のはずだが、明らかに赤色の強い光が、箆也の掲げた鎌へと集まっていっている。

「何だ…？一体、何を…」

「これが、変格を超える変格…」

沖也が戸惑いの色を濃くする中、箆也が鋭く瞳を輝かせる。

「“加^{かへん}変”…！！」

箆也の言葉に、鎌はさらに輝きを増した。

Word. 56 更ナル変格 (3)

言ノ葉町、北端。

「叫^{さけ}べ」

囁が真っ赤な横笛を奏で、音の塊を、エカテリーナへ向けて放つ。

「第四音“え”、解放」

神の音であるその文字を解放させ、エカテリーナが光り輝く緑色の言玉を、自らの喉へと吸収させた。

「詠^{えい}じろ」

そつと言葉を落とした後、甲高い声を辺りへと響かせるエカテリーナ。するとその声が、音波となって空中を駆け抜け、囁の音の塊を一瞬にして掻き消して、囁自身へと迫る。

「妨^{さまた}げろ」!

目の前へと赤い光膜を張り、やって来た音波を防ぐ囁。

「音を音で返されるとはね…」

口元を緩め、笑みを浮かべながらも、囁の額には、一筋の汗が滲んでいた。同じ音を使った攻撃ながら、囁の音は、少しも競り合うことなく、エカテリーナの音の前に消えてしまった。

「これが神の力ってものかしら…」

皮肉ったように言いながら、囁が横笛を口から離し、振りかぶるようにして右手で構える。

「“変格”…」

囁のその言葉と共に、姿を変えていく横笛を見つめ、エカテリーナがそつと目を細める。

「“変格”でございますか」

横笛から変わった、真っ赤な槍を構える囁を見つめながら、喉へと吸収させていた言玉を右手の中へと戻すエカテリーナ。

「神である私を相手に原型では無理と、一度の攻撃で悟ったのは、聡明な判断でございます」

囁を誉めるように、エカテリーナが言葉を向ける。その間に、囁は大きく槍を振りかぶり、エカテリーナへ向けて、鋭く振り下ろした。

「裂け」…！」

振り下ろされた槍先から、真っ赤な一閃が、まっすぐにエカテリーナへと向かっていく。

「まあ、“変格”を行ったからといって、無理である現状が変わるわけではございませんが」

冷たく言い放つと、エカテリーナが、今度は右手へと言玉を吸収させた。緑色に輝く右手を、手のひらを前へ向けるようにして、エカテリーナが迫り来る一閃へと突き出す。

“得ろ”」

「え…？」

突き出されたエカテリーナの手のひらに、吸い込まれるようにして消えていく囁の一閃。その光景を見つめ、囁が戸惑うように、眉をひそめる。

「お返しするでございます」

吸収させた手のひらを、エカテリーナがそのまま、囁へと向ける。

「映じろ」

「な…！」

エカテリーナの右手のひらから、先程、囁の放った一閃が、まるで鏡にでも映し出したかのように、真逆の動きをとって、囁のもとへとやって来る。向かって来る自身の一閃を見つめ、驚きの表情を見せる囁。

「さ、“避ける”！」

多少焦りながらも、囁が何とか言葉を発し、ぎりぎりのところで、その一閃を避ける。

「相手の力を呑み込むだけではなく…そっくりそのまま跳ね返す言葉…」

「考え事をしている余裕が、あなたにあるのでございますか？」

「え…？」

後方へと飛んでいった一閃を見送り、考え込むように首を捻らせていた囁が、エカテリーナの声に振り向く。エカテリーナはすでに、右手から吸収させていた言玉を取り出し、今度は左足へと移しているところであった。

「えんかつ円滑”」

エカテリーナが言葉を放つと、まるで氷の上のように、左足を地面に滑らせ、目にも留らぬ速度で、囁のもとへと接近してくる。

「ク…！」

迫り来るエカテリーナに囁が身構えようとするが、その囁の動きよりも素早く、エカテリーナが言玉を、軸にしている左足から、振り上げた右足へと移動させた。

「えいほう鋭鋒”」

「あああああ…！」

矛先のように鋭い光を纏った右足で、エカテリーナが勢いよく、囁を蹴り上げた。言葉を使う間もなく蹴りを受け、囁が思いきり後方へと吹き飛ばされる。

「う、うう…」

滑り込むように地面へと倒れた囁が、苦しげに声を漏らしながら、すぐに体を起こす。鋭い蹴りに斬り裂かれたのか、左腕の袖が破れ、赤い血が流れ落ちていた。

「喉に手に両足…まさに自由自在って感じね…」

上半身を起こし、困ったように言葉を落とす囁。だが、その表情にはまだ笑みが浮かんでおり、追い込まれている様子ではない。

「さすがは神ってところかしら…」

「ええ、そうでございます」

囁の言葉に、ゆっくりと囁のもとへと歩み寄って来るエカテリーナが、大きく頷く。

「私は神。神の力は、愚かな者、すべてを裁く為にあるのでございます」

いつの間にか右足から取り出した言玉を、右手の中で数度回すエカテリーナ。

「ですから、神に逆らう愚かなあなたを、私は裁くのでございます」
「フフフ…」

不気味な笑みを零す囁に、エカテリーナがそつと眉をひそめる。

「何が可笑しいのでございます？」

「別におかしいわけじゃないわ」

エカテリーナの問いに答えながら、囁がその場で立ち上がる。

「これが天命なのかしら、と思ってるね…」

「天命…？」

囁の言葉に、少し首を傾げるエカテリーナ。

「私は一度、自身の神を裏切った。でも、我が神も誰も、私に裁きを下さなかった」

かつて、七声の幹部であった囁は、アヒルと安団を裏切り、主謀者である弔ていしやうや他の仲間たちと共に、五十音士のすべての言葉を奪い尽くそうとした。だが、結局のところ、囁に罰は下らず、今もこうして、安団の一員として戦うことを許されている。

「だからその分、ここで、神であるあなたに裁かれることが、私の天命なのかしらって思っただけ…」

過去を思い出しているのか、少し遠くを見るような瞳で、囁が自嘲の笑みを浮かべる。

「そうでございますね。確かに、そうかも知れま…」

「まあ、冗談じゃないけれど」

頷こうとしたエカテリーナの言葉を、囁は勢いよく遮った。

「裁かれるにしたって、裁く神を選ぶ権利くらい、こっちにもあるわよねえ」

「……愚かな口を」

挑発するように言い放つ囁に、エカテリーナは大きく顔を歪めた。
「どこまでも神に齒向かう気であるというのなら、望み通り、私が裁いて差し上げるでございます！」

今までよりも声を張り上げたエカテリーナが、再び喉へと、右手の中の言玉を吸収させる。

「詠歌^{えいか}」！

大きく言葉を放ち、そして歌声を響かせるエカテリーナ。

「また歌……」

立ち上がったばかりの囁が眉をひそめ、美しく響く歌声を耳に入れながら、警戒するように構えを取る。エカテリーナが響かせた歌声が、激しい音波となって、囁に迫り来る。

「妨^{さまた}げろ」……！！

槍を突き出し、前方に防御膜を張る囁。まっすぐに向かって来た音波が、張られた膜に直撃した途端、膜に勢いよくヒビが入った。

「あ……！」

ヒビ割れる膜に、驚いた様子で囁が大きく目を見開く。だがじつくりと驚いている間もなく、膜が一気に砕け散り、音波が囁へと襲いかかった。

「ううう……！！」

真正面から音波を受け、囁がまたしても後方へと弾き飛ばされる。

「防御が、効かない……」

体を重たそうに起き上がらせ、囁が表情を曇らせる。

「終わりでございます」

まだ地面に座り込んだままの囁の目の前へと迫り、鋭い表情を見せたエカテリーナが、緑色に輝く右足を振り上げる。

「鋭^{えい}鋒^{ほう}」！

刃のように鋭く尖ったエカテリーナの右足が、囁の下腹部へと、勢いよく突き刺さった。だが、エカテリーナの右足にはまったく手応えがなく、突き刺されたはずの囁の体が、赤い光の粒となって、空中に掻き消えていく。

「何でございます……？」

散っていく光の粒に、眉をひそめるエカテリーナ。

「錯^{さく}覚^{かく}」……

「……！」

すぐ後ろから聞こえて来る声に、エカテリーナが大きく目を見開く。

「幻覚を……！」

“裂け”……！」

「う……！」

慌てて後方を振り返ろうとするエカテリーナであったが、囁はエカテリーナが振り返り切る前に、振り上げた槍を、勢いよくエカテリーナへと突き出した。向かって来る槍先に、エカテリーナが険しい表情を見せる。

「え……？」

だが、囁の突き出した槍は、何の手応えもなく、エカテリーナの背中を貫いた。あまりにもない手応えに、勢いよく突進した囁が、思わずバランスを崩す。

「ど、どうして……？」

何とか踏み止まり、戸惑うように目の前のエカテリーナを見つめる囁。確かに、エカテリーナは囁の目の前におり、槍もエカテリーナの背中を突き刺しているというのに、手応えだけがまるでない。

“液化”……！」

「な……！？」

エカテリーナの口から発せられる言葉を聞き、囁が大きく目を見開く。よく見れば、囁が槍を突き出したその部分のエカテリーナの背中が、水のように液体と化していた。

「そんな言葉まで……！」

「神の背中を突き刺すとは、何事でございますか？」

エカテリーナが腹側から、突き出している槍先を強く押し返すと、槍がエカテリーナの体から出て、囁が後方へと、少し押し出される。

「裁きが下るでございますよ」

押し出された囁の左手を、エカテリーナが右手で掴み止める。

“炎天”……！」

「う、あああああ…！」

囁の手を掴んだエカテリーナの右手が緑色に輝くと、その手から激しい熱が伝わってきて、掴んでいる囁の左手を強く焦がした。手を焼かれ、痛々しい叫び声をあげた囁が、何とかエカテリーナの手を振り払い、距離を取るように数歩、後ろへとさがる。

「う、ううう…」

焦げた左手を押さえながら、囁が苦しげな声を漏らす。

「ふう」

一息ついたエカテリーナが、右手から、体内に吸収していた言玉を取り出す。

「一体、何個の熟語を…」
イデオム

「“え”の文字は元来、神々の文字、五母ごぼの中でも、最も動詞ヴァーブが少ないとされる文字でございます」

囁の方へと向き直りながら、囁の疑問に答えるように、エカテリーナが言葉を発する。

「ですからその分、熟語イデオムが豊富なのでございますわ」

「成程、ね…」

納得するように頷きながら、囁がスカートのポケットから取り出したハンカチを、焦げた左手に巻きつけ、右手のみで槍を構え直す。その様子を見て、エカテリーナが目を細める。

「まだ、神に歯向かう気でございますか？」

呆れたような表情で、エカテリーナが囁へと問いかける。

「ええ、そのつもりだけれど」

「とんだ不屈き者でございますわね」

「あら、酷い言われようね…」

深々と肩を落とすエカテリーナに、囁が鋭く笑みを向ける。

「神を堕ちた堕神さんに、“不屈き”とか言われるなんて、心外だわ…」

「……っ」

その囁の言葉に、今までには珍しく、あからさまに表情を曇らせ

るエカテリーナ。

「こちらはそもそも、“墮神”と呼ばれることが、心外でございすわ」

しかめた表情を作りながら、エカテリーナが大きく腕組みをする。「私はただ、私が愚かだと思った人間共に、裁きを下しただけ」
不機嫌そうに、エカテリーナが言葉を続ける。

「それだというのに韻^{いん}は、神の力を乱用したなどと言って、私を神から墮としたのでございすわ」

さらに険しい表情を作るエカテリーナ。

「私が何をしたと言うのでございます？ 愚かな人間に裁きを下すことは、神の役目。私は何一つ、間違っていないでございすでしょう？」

組んでいた両手を広げ、エカテリーナが囁へと強く訴えかける。

「ですから私は、神を墮とされる覚えなんて、まったく…」

「そうね」

まだ続こうとしていたエカテリーナの言葉を、囁が勢いよく遮った。

「色々と胡散臭い組織だけれど…韻の、その判断だけは、正しかったと思うわ」

「何でございますって…？」

囁の言葉に、エカテリーナが強く、眉間に皺を寄せる。

「だって、人を正しき道に導くことも出来ない、裁くしか出来ない無能な神なんて…この世界には必要ないもの」

挑戦的に微笑む囁に、エカテリーナの表情が大きく歪む。

「余程、私の裁きを受けたいようでございすわね…」

少し俯いたエカテリーナが、溢れ出す怒りにか、多少その声を震わせる。

「いいでございます！そこまで望むのであれば、今すぐ、裁きを下して差し上げるでございす…！」

顔を上げたエカテリーナが、勢いよく叫び、言玉を持った右手を

振り上げようとする。

「う…！」

だが、振り上げようとしたその右手は動かず、思わずエカテリーナが苦しいような声を漏らす。

「な、何故…こ、これは…！」

戸惑うように自分の右手を見下ろしたエカテリーナが、すぐさま驚きの表情となる。エカテリーナの右手は、地面から伸びた草木により、雁字搦がんじがらめに捕らえられていた。

「何故、このような場所に植物が…？」

捕らえられた右手をそのままに、エカテリーナが周囲を見回す。二人の居る場所は、草木も何も育っていない、まったくの更地である。そんな場所に、こんなにも長い草木が伸びているなど、不自然過ぎる。

「まさか、あなたが…！」

険しい表情を見せ、エカテリーナが勢いよく囁の方を振り向く。

「フフフ…」

エカテリーナを見つめる囁は、どこか不敵な笑みを浮かべていた。

「何を、何をしたのでございますか…！？」

「別に…？ただ、言葉を口にしただけよ」

「馬鹿な…！あなた如き、神附きの言葉など、神である私の前には…！」

「私たちは、神に喧嘩を売りに来たのよ…？」

声を荒げるエカテリーナだが、またしてもその言葉は、囁によって遮られる。

「それなりの準備をしてこなきゃ、失礼ってものでしょう…？」

「準備…？」

囁の言葉に、エカテリーナが戸惑うように眉をひそめる。

「五十音、第十一音…」

ゆっくりと言葉を繋げながら、囁が自身の目の前で、鋭く槍を身構える。

「さ”、解放…」

囁がまっすぐに槍を見つめ、ゆっくりと口を動かす。

「左変”…！」

「……！」

強い輝きを放ち始める槍に、エカテリーナが大きく目を見開いた。

Word. 56 更ナル変格 (4)

「変格」

七架がそう言葉を発し、右手に構えていた薙刀の姿を、両手で抱える巨大な十字へと変える。両手で持った十字を、前方に立つ棗へと突き出す七架。

「嘆け」！

巨大な十字から、飛び出すように十字型の赤い光が放たれ、まっすぐに棗へと向かっていく。光を見つめ、棗は落ち着いた表情で、籠手の装着された右手を構えた。

「萎えろ」

棗が言葉と同時に拳を繰り出すと、その拳の触れた十字型の光が、突然、勢いを弱め、あっさりと掻き消えてしまう。

「変格の言葉でもダメか…」

掻き消えた光を見つめ、七架が険しい表情を見せる。これまでのすべての言葉も、今と同じように、棗の言葉を前に、あっさりと消されてしまったのだ。

「この程度ですか？ 現“奈守”の実力というのは」

突き出した拳を戻し、単調に言葉を投げかける棗。その挑発的な言葉に、七架が少し顔をしかめる。

「まだまだ…！」

自身に気合いを入れるように声をあげ、七架がすぐに十字を構える。

「薙ぎ倒せ」！

七架が十字を振り切り、薙刀の時よりも、さらに勢いを増した赤い一閃を、棗へと放つ。一閃が迫り来るが、棗は相変わらずの落着いた表情を、崩そうとはしなかった。

「靡け」

棗が小さく言葉を落とし、素早くその体を動かして、七架の一閃

を避ける。

「“靡け”…そんな言葉もっ…」

同じ文字を持ちながら、七架が思いもつかなかった言葉をいくつも口にする棗に、七架は険しい表情を見せながらも、どこか感心するように声を漏らす。

「向かって来る気など失せるよう、力の差を見せつけてあげましょう」

「え…？」

“変格”」

「……！」

棗が口にするその言葉に、七架が思わず大きく目を見開く。

「変格を…！？」

「当然でしょう…？私はあなたと同じ奈守」

驚きの表情で問いかける七架に、棗は表情を少しも崩さず、冷静に答える。

「あなたと同じように、私の言玉も、二度姿を変える」

棗の言葉に合わせるように、棗の右手に装着されていた籠手が姿を変える。籠手の手の甲を覆っていた部分から、鋭く細い、三本の刃が伸び、鉄爪のような武器へと変わった。

「あれが、あの人の変格…」

「な…」

七架が姿を変えた棗の武器に目を見張る中、棗は間を置くことなく、自分の文字を口にした。

「“詰^{なじ}れ”…！」

「あ…！」

素早く七架のもとへと飛び出し、振り上げたその鉄爪を、鋭く振り切る棗。七架が慌てて十字を突き出し、下りて来た爪を、ぎりぎりのところで受け止める。

「ううう…！」

だがあまりに強い力がかかり、受け止めていた十字は鉄爪により

一部が欠け、押された七架はその場で大きくバランスを崩した。その隙を逃がすことなく、棗が鉄爪を装着した右手で、力強く七架の腕を掴む。

「なげう擲て”」

「あ、あああああ！」

掴まれた腕を軽々と振り上げられ、勢いよく投げ飛ばされる七架。地面へと体を投げ出され、受け身も取れないまま、強く地面に倒れ込む。

「う、ううう…」

地面に十字の先を付け、苦しげな声を漏らしながら、何とか体を起き上がらせようとする七架。

「言葉の数、だけじゃない…」

七架の額から、一筋の汗が流れ落ちる。

「今まで戦って来た…経験の数が、違う…」

そう言葉を落としながら、七架がゆっくりと顔を上げ、細めた瞳で棗の姿を捉える。相変わらず、落ち着き払った表情の棗。常に冷静で、七架の言葉に対して、無駄な動きなく、的確な言葉を返して来る。棗は戦い慣れており、五十音士としての経験も浅い七架とのその差は、決定的なものがあった。

「どうしたのです？」

動きを止めたままの七架に、棗がゆっくりと問いかける。

「もう、終わりですか…？」

挑発的な棗の問いかけに、起き上がった七架は顔をしかめるものの、攻撃に移ろうとする動作は見せなかった。棗に対抗出来る攻撃が、今の七架には思いつかなかった。

「神付きがこの程度では、神の実力も知れたものですね」

「……っ」

今度はあからさまな挑発であったが、七架は言い返すことが出来なかった。悔しい気持ちを呑み込むように、強く唇を噛み締める。

「朝比奈、くん…」

そっと俯いた七架が、答えを求めるように、アヒルの名を呼ぶ。

「ん…？」

「え？」

棗の口から小さな声が漏れ、その声につられるように、俯いていた七架が顔を上げた。

「あの光は…」

怪訝そうに棗が見つめる、言ノ葉町の北と南の方角に、それぞれ一本ずつ、すでに突き上げている阿修羅たちの五母の光とは別の、強い赤色の光が明々と輝いていた。天まで突き上げるほどではないが、周囲を赤く照らし、相当の光を広げている。

「あれは…神月くん、それに囁ちゃん…？」

その方角が、籠也と囁の向かった先であることを察し、七架がそっと眉をひそめる。赤い光は、安団の光。何よりあの、強く温かい二つの光に、七架は見覚えがあった。

「そう、そうだよね…」

俯き、小さな声を落とす七架の方を振り向き、棗が少し表情を曇らせる。

「“大丈夫だ”って、“私たちに任せて”って、そう朝比奈くんに言ったのは、私だもの…」

自分に言い聞かせるように言葉を続けながら、地面に突き立てた十字を握る手に力を込め、七架が一気に体を立ち上がらせる。

「だから私は、その言葉を、偽りにはしない…！」

立ち上がった七架が顔を上げ、強く声を張り上げ、十字を突き上げる。

「第二十一音、“な”、解放…！」

「何…？」

七架の発する言葉に、棗がすぐさま眉をひそめる。

「今更、何を文字の解放など…」

「あなたは、あなたの言玉は二度姿を変えるって、そう言ったよね」戸惑っている棗へと、冷静な声に向ける七架。

「それが、何だとい…」

「でもね、私の、私たちの言玉は…」

七架が鋭く、目を見開く。

「三度、姿を変えるの」

はつきりと言いい放ち、十字へと視線を向ける七架。

「“奈変”^{なへん}…！」

「な…！？うう…！」

七架の発したその言葉に、初めて落ち着いていた表情を崩し、大きく目を見開く棗。だが次の瞬間、七架の突き上げた十字から、強い光が発せられ、開いていた瞳を閉じ、思わず顔を伏せた。

「な、“奈変”…？」

もう一度確認するように、棗がその言葉を繰り返す。

「神々の力にも匹敵するという、極々少数の五十音士しか辿り着けぬはずの、“変格”の更に上をいく“変格”…」

顔を伏せたまま、光をわずかに視界に入れ、棗が険しい表情を見せる。

「今では知る者すら居ないような力を、何故、彼女たちが…？……っ」

戸惑いの表情を見せていた棗であったが、ふと何か思いついたような顔つきとなり、すぐさま眉をひそめる。

「あなたが、教えたのですか…？」

棗が表情を曇らせ、かすかに声を震わせる。

「“お姉ちゃん”…」

「……………」

囁の言葉により守られている自宅の庭から、言ノ葉町内に現れた、新たな赤い光を見つめ、厳しい表情を見せる、先代“左守”の櫻。

「棗…」

櫻はどこか祈るように、小さくその名を口にした。

言ノ葉町、北西。言ノ葉町立グラウンド。

『グアアアアア!』

激しい咆哮をあげ、飛びかかってくるのは、二頭の金色の獣。

「束ねろ^{たば}」!

獣たちが向かう先に立つ保が、後方へと振りかぶっていた両腕を、勢いよく前へと突き出す。すると、保の指先から複数の赤い糸が伸び、向かって来ていた獣たちの前足を捕らえた。

『ガアア:!!』

前足を捕らえた糸を、保が手元で交差させると、二頭の獣の体が接近し、叩きつけられるように強く衝突して、獣たちが苦しげにその場に倒れ込む。

「グ、グアア!」

倒れた獣のうちの一头が、背中についた金色の翼を広げ、高々と空へと舞い上がる。空へと浮かんた獣は、下方に居る保へと焦点を合わせ、その口を大きく開いた。

「高く^{たか}なれ」

攻撃態勢を取った獣にも焦ることなく、保が冷静に言葉を落とし、両手の糸を地面へと向けた勢いを利用して、空へと舞い上がる。

「グ:!!?」

自分よりも高く上がる保に、獣が開いていた口を閉じ、焦った様子で顔を上げる。獣の少し上まで上がった保は、鋭い表情を見せたまま、大きく両手を振りかぶった。

「叩^{たた}け」!

「ギャアアアア!」

保が上から、獣の胴体目がけて糸を叩きつけると、もろに勢いを増した糸を喰らった獣が、潰れたような叫び声をあげて、地面へと降下していく。

「ガアアア！」

地面へと降下した獣に代わるように、もう一頭の獣が、保の後方から飛び掛かってくる。それにも保は落ち着いた様子で、素早く両手を構えた。

「“滾れ”…！」

「グアアア！」

鋭く向けた糸が、大きな一本の束となって、飛び掛かってきた獣の腹部を突き刺すと、その獣も痛々しい叫び声をあげ、地面を降下していった。

「ふう」

纏めていた糸を手元で解きながら、一息つく保。

『ガアアア…！』

地面で肩を並べた二頭が、上空にいる保へ向けて、大きく開いた口から同時に、激しい光の塊を放つ。だが、それにも保は動じなかった。

「“耐えろ”！」

保が糸を自身の前方で、盾のように纏めあげ、やって来た光の塊を受け止める。

「すごい威力っ」

糸から伝わってくる力の強さを感じ、保が多少、顔をしかめる。

「けど」

しかめた表情をすぐに戻し、鋭い瞳を見せる保。

「“猛ろ”…！」

受け止めていた糸を保が大きく反らせ、そして押し出すように前方へと突き出す。すると、糸が受け止めていた獣たちの光が、さらに勢いを増して、獣たちの方へと押し返される。

『グアアア…！』

自分たちの放った光を浴び、辺りの地面ごと吹き飛ばされる二頭の獣。周囲の砂が一気に舞い、景色を覆うほどの砂煙が巻き起こる。「やっぱり、凄い威力ですねえ」

感心するように言いながら、保が暢気に下方を見下ろす。

「はぁー！こんな夢も何にもない俺が、子供たちの遊び場のグランドを無茶苦茶にしちゃって、すみませえーん！」

謝る相手も居ないというのに、空中で一人、叫び散らす保。

『ガアアアア！』

そんな保のもとへ、砂煙に紛れるようにして、いつの間にか上昇してきた獣たちが、保の背中側から、鋭い爪と牙を保へと向けた。

「これ以上、グランドを壊してしまうわけにもいかないので、そろそろ終わらせてもらいます」

保がいつもの情けない表情から、すぐさま鋭い表情へと変わる。

「“断^たて”！」

赤い光を帯びた糸を鋭く振り切り、保が大きく言葉を発する。糸は目にも留らぬ速さで動き、向かって来ていた獣たちの体を、何度か往復した。獣たちは保を攻撃することなく、そのまま保の横を通り過ぎ、保の後方で止まる。

『グっ…ギアアアアア！！』

全身を複数回、斬り裂かれた獣たちが、激しい断末魔をあげながら、その体を金色の光の粒へと崩し、掻き消えていく。

「こんな俺が、勝っちゃってすみません…」

空中で消えていく光の粒を見つめ、保がそっと呟く。

「ふうー、何とか勝て…ん？」

獣たちを圧倒し、ホッとした様子で肩を落とそうとした保が、上空から見える、先程まではなかった真っ赤な三本の光に気付き、それらへと視線を向ける。

「あれは…」

「ほお…あれは、失われし三度目の言玉解放。更なる変格活用かのお」

「……っ」

何の光であるかを察し、眉をひそめた保が、下方から響く声に顔を下へと向ける。グランドに置かれた椅子に腰かけたままの現は、

保よりも前から、突き上げた光に気付いていたようで、そちらを見つめていた。保と獣たちの戦いは、見ていなかったようである。

「まだ、あのようなものが生きとったか。実に興味深い…」

光を見つめ、現が少し口元を緩める。

「あれと、わしが生み出したものたちを戦わせてみたかったのお。やれやれ」

深々と肩を落とした現が、地面へと降りて来る保へと、視線を向ける。

「たもり太守は唯一、変格のない神付き。こりや、とんだハズレクジじゃのお」

「はあ！人間としても五十音士としてもハズレな俺で、すみませえくん！」

現の嫌味にも、保は表情をしかめるといふことはせず、ただ素直に謝り散らす。

「やれやれ…本当に阿修羅は、面倒なことを押しつけてくれたわい…」

右手に持った杖を、力強く地面へと付き、現がゆっくりと椅子から腰を上げる。

「このようなハズレくじを相手に、わざわざ、このわしを動かすとはなあ…」

「……っ」

ゆっくりと立ち上がった現のその冷たい瞳に、保は少し緊張した面持ちで、ごくりと息を呑んだ。

Word. 57 生ノ根源 (1)

言ノ葉町、中央部。

「これが“奈変”^{なへん}」

視界を支配する、どこまでも広がる強い赤光をまっすぐに見つめ、
棗が茫然と呟く。^{なづめ}

「これが、言玉の第三の姿」

棗の見つめる先、正面に立つ七架のすぐ上空には、先程まで七架が抱えていたものよりも一回り小さな、赤銅色の十字架が計七つ、きれいに横並びに浮かんでいた。並ぶ十字の中心に立って、七架は鋭い瞳を棗へと向けている。

「これが、私たちの辿り着けなかったものなのですね…お姉ちゃん…」

そつと目を細めた棗が、どこか寂しげな表情を見せる。

「な…」

七架がゆつくりと口を開き、空になった右手を、棗へと向ける。

「七光」^{ななひかり}

そう七架が言葉を落とすと、空中に並ぶ七つの十字がそれぞれ、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色に輝き始める。強い輝きを見せる十字たちから、その七色の光が一斉に放たれ、まるで虹のような光線が、棗へとまっすぐに打たれた。

「う…！な、“萎えろ”^な！」

向かってくる光に焦りの表情を見せ、棗が後方へと飛び下がりがら、言葉を放ち、鉄爪を振るう。棗の爪先から、赤色の一閃が放たれたが、その光は、向かってくる七色の光に、一瞬にして掻き消されてしまった。力なく消される光に、棗が驚きの表情を見せる。

「私の力が、きかない…！？“靡け”^{なひ}！」

険しい表情を見せながらも、迎え撃つことを諦めた棗が、違う言葉の口にし、その場から素早く動いて、七架の放った七色の光を避

ける。

「ク：！」

だがあまりにも巨大な光に、完全にかわし切ることの出来なかった棗が、その右腕に掠り傷を負った。棗の白い腕から、対照的な赤い血が滴り落ちる。

「詰れ」：！」

傷を負いながらも、棗が地面に着くまでの間に右手の鉄爪を振るい、七架へと鋭い赤光の刃を数本、弾き飛ばす。

「薙ぎ払え」

七架が短めに言葉を落とすと、七架のすぐ真上に浮かんでいる十字が、素早く七架の前へと降りて来て、その横端を鋭く伸ばして、七架へと迫っていた刃をすべて、叩き落とした。叩き落とすと、十字は役目を終えたように、七架の上空へと自動的に戻っていく。

「治せ」：！」

その十字の動きに眉をひそめながら、棗が傷口に素早く左手を当て、怪我の治療をする。

「何という力：！」

そつと眉をひそめ、再び顔を上げる棗。

「あれが、“奈変”：！」

棗が細めた瞳で、正面に立つ七架を見つめる。七架の上空に浮かぶ十字たちは、攻撃を終え、先程まで発していた七色の光を収束させていた。だが七架は、攻撃の前と変わらぬ厳しい表情で、まっすぐに棗を見つめている。

「私はあなたに、何の恨みもない」

「……っ」

突然、投げかけられる七架の言葉に、棗がそつと眉をひそめる。

「あなたを倒したいわけじゃない。この力で、振じ伏せたいわけじゃない。けど」

付け加えられたその言葉が、一番、力を持つ。

「この戦いが、あなたと私の神、どちらが正しいのかを示すものな

ら…」

少し俯けていた顔を、七架がゆっくりと上げる。

「私は、あなたに負けるわけにはいかない」

堂々と言い放つ七架の姿は誇らしげで、棗はその様子に、まるで眩しいものでも見るかのように、目を細める。

「神…」

棗が答えを求めるように、そっと神の名を呼ぶ。

——やめて…！やめて！アキラ！——

——カモメえええ…！！——

「……っ」

思い出される血に染まった過去に、棗が険しい表情となり、深々と目を閉じる。目を閉じたところで、消せるわけではない。目を覆ったところで、忘れられるはずもない過去。

「そんなことは、あの日からもう、わかりきっていたこと…」

「え…？」

棗の口から零れる小さな声を、しっかりと聞き取れず、七架が少し首を傾げる。

「それでも私は…」

——棗……——

今も変わらず名を呼ぶ、優しい声。何が変わろうとも、それだけは変わらない。

「あの人の手を取った…」

言葉が続ける棗に、何かを察したように、七架は首を傾げることをやめ、そっと細めた瞳で、ただ棗を見つめる。

「私とて、あなたと同じ…」

俯いていた棗が、ゆっくりと顔を上げていく。

「この戦いに勝った方の神こそが、正しいというのなら…私も負けるわけにはいきません」

強く言い切り、棗が力強く鉄爪を構える。

「私はただ、我が神が正しいことを示す為に、ここに居るのですから…！」

「……………」

鉄爪を振り上げ、大きな声で主張する棗に、七架は少し悲しげに、目を細めた。

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「……………」

丘の上に深々と座り込んだ阿修羅^{あしゅら}は一人、言ノ葉町全体の様子を見渡していた。何本もの光が大きく天へと突き上げ、激しい衝撃音も響き渡っている。言ノ葉町で起こっているいくつもの戦いを、すべて視界に入れ、阿修羅はどこか満足げな表情を見せていた。

「やあ」

阿修羅が言ノ葉町を見つめたまま、挨拶するように言葉を発する。

「また会ったな」

座ったままの体を動かし、ゆっくりと後方を振り返る阿修羅。

「アヒル」

阿修羅の振りかえったその先には、仲間たちを別れ駆けつけた、アヒルの姿があった。アヒルは鋭い瞳を、まっすぐに阿修羅へと向けている。

「阿修羅…！」

「そろそろ見物は終わるか」

名を呼ぶアヒルから再び視線を逸らし、名残惜しそうに一度、言ノ葉町を見渡すと、阿修羅がゆっくりとその場で立ち上がり、アヒルの方へと向き直る。

「棗が通した方がいいと判断したなら、俺はそれに倣うべきなのかな…」

「え？」

「いや、こちらの話だ」

アヒルの耳には届かない、小さな呟きを落とす阿修羅に、アヒルが戸惑うように首を傾げるが、阿修羅はすぐに手を数度、振った。

「さあ、じゃあ始めるとするか。アヒル」

顔を上げた阿修羅が、涼しげな笑みで、アヒルを見つめる。

「言葉に、正しき秩序をもたらす為に…」

「……っ」

阿修羅のその言葉に、アヒルは険しい表情を作った。

言ノ葉町、中央部。礼獣付近。

「グアアアア！」

「阿ああ！」

「咩…！」

礼獣が激しく雄たけびをあげると、背中の翼を力強く上へと押し上げ、乗り上げていた仁王の水像を、思いきり吹き飛ばす。

「う…！」

「ニギリちゃん！」

吹き飛ばされる仁王に、苦しげに表情をしかめるニギリ。そんなニギリを心配するように、チラシが隣から身を乗り出す。吹き飛ばされた仁王は、叩きつけられるように地面へと落ち、大量の水飛沫となって崩れ落ちる。

「ガアアア！」

仁王から解放された礼獣が、殊更声をあげ、大きく右前足を振り上げる。

「“迎えろ”！」

振り下ろされていく前足へと、自身の乗っていた金馬を向かわせ、七架の弟、六騎が言葉を発する。金馬は六騎の言葉に従い、振り下ろされた前足を真正面から受け止めた。

「ヒヒイン…！」

「あ…！」

だが金馬は、礼獣の大爪を前にあつさりと吹き飛ばされ、勢いを付けて、六騎のもとへと返ってくる。礼獣よりはかなり小さいとはいえ、とても子供の六騎が受け止められる大きさではない金馬が迫り来て、六騎が焦りの表情を見せる。

「^{まも}守れ”！」

六騎の前に立ち塞がり、守が両手の円月輪で、六騎の代わりに力強く、金馬を受け止める。

「あ…！」

「大丈夫かあ？クソガキっ」

茫然と声を漏らす六騎へと、振り返り、笑みを向ける守。

「あ、ありがとう。オジサン」

「誰がオジサンじゃい！」

礼を言う六騎の言葉が引つ掛かり、守が思いきり怒鳴りあげる。

「“変格”…！」

その間にも、六騎の金馬と入れ替わるようにして前へと出たシャコが、右手の中で、強く言玉を輝かせる。

「“四海”^{しかい}」

「グウウ…！」

シャコが礼獣の四方を取り囲む海を形成し、再び礼獣の動きを封じる。

「^{しもり}己守…！」

「う、うん！」

シャコと呼ばれ、紺平が、妙に意気込んだ様子で前へと出て来る。

「へ、“変格”…！」

まだ言い慣れない様子でその言葉を口にし、右手に持った白い言

玉を、高々と掲げる紺平。

「紺碧^{こんぺき}」！」

「グアアアア：！」

紺平の放った言葉により、礼獣の下の地面に真っ白な海が形成され、その光の海の中に、礼獣の巨体が沈み込む。足を取られ、バランスを崩し、礼獣はまた大きく叫び声をあげた。

「ふはあゝ、何とか上手くいったあ」

「まあまあ、ぼちぼち、てふてふ…」

ホッと一息ついている紺平の横で、紺平の力を確認し、よくわからない感想を述べるシャコ。

「皆サン、頑張ッテ下サア〜イ！」

「うるさい、うざい、うさぎ跳び…」

ただ、横から応援しているだけのライアンに、シャコが思わず顔をしかめる。

「今のうちに、ニギリの回復を：」

「了解！」

振り向いたシャコの言葉に頷き、チラシが仁王を破壊され、連動するように傷を負ったニギリの治療に当たる。

「俺はまだピチピチの十六歳だ！」

「え、そうなの？」

「そんなくだらないことを言っている場合ですか？」

シャコや紺平が戦闘を続ける中、何故か自信満々に胸を張り、年齢を主張する守に、大きな驚きを見せる六騎。余程、守が十六に見えなかったのだろう。そんな二人に、呆れたように声を掛けながら、雅が歩み寄ってくる。

「君に前線は危険です。後方で皆の援護を」

「う、うん…」

雅の指示に六騎は大人しく頷くが、どこか悔しそうな、申し訳なさそうな表情を見せていた。金馬を引き連れ、六騎が雅の言葉通り、後方へと下がっていく。

「あなたはもう少し、役に立ってくれてもいいですよ？末守さん」
「うるっしやい！コテンパンのパンクパンサーにしてやろうか、この野郎！」

六騎が去った後、嫌味たっぷりに言い放つ雅に、守が大きく顔をしかめて、怒鳴りあげる。その時、守の左手から、円月輪が力なく零れ落ちた。

「おっとつと」

「……っ」

慌てて円月輪を拾いあげる守を見て、雅がそつと眉をひそめる。

「感覚が…？」

「ああ。さっき、あのバカでっけえ前足受け止めた時に、いっちなった」

雅の問いに答えながら、守が感覚を失った左手へと、無理やり掘り込むように円月輪を持たせる。その様子を見て、雅はさらに表情を曇らせた。

「ったく、大事な体だつてのによお」

「まあ、君の体がどうなろうと、僕には一切、害はないですけどね」
「もうちつと他人を労われよ！」

冷たく言い放つ雅に、守が思いきり怒鳴りあげる。

「少し休んで…」

「る暇なんて、ねえだろ？」

気遣うように放とうとした雅の言葉を、守があっさりと遮る。

「何チンタラやってんだかなあ、朝比奈の野郎は。明日、コッテンパンのパンの耳にしてやんねえと」

ぼやくように言葉を落としながら、軽く肩を回す動作を行って、守が再び、シャコたちの居る礼獣付近へと向かっていく。守の背中を見つめ、困ったように肩を落とす雅。

「……っ」

雅が目で訴えるように、少し離れた場所に立っている為介の方を見つめる。

「もう皆さん、そろそろ限界みたいですよ？恵サーン」

雅の訴えを汲み取り、為介が横に立つ恵へと、相変わらず緊迫した様子なく、言葉を投げかける。

「だろうな」

驚いた素振りも見せず、素直に頷く恵。

「あんな化け物相手に、限界ギリギリの力で戦ってんだ。精神も体力も、そう長い時間、もつはずがない」

固く腕組みをした恵が、冷静に言葉を発する。だがその額には汗が滲んでおり、恵の心中が穏やかではないことを表していた。恵が礼獣から視線を逸らし、天へと突き上げている、いくつかの光を確認する。

「いくら神月クンたちが、更なる変格活用を行っても、相手は墮神……そう簡単に勝負はつかないでしょう」

「ああ」

為介の言葉に、恵が反論することなく、素直に頷く。

「ねえ、恵サン」

いつになく真剣な表情を作り、為介が恵へと問いかける。

「もしもの場合、ボクらは動くんですか……？」

「……………」

為介の問いかけに恵は答えようとはせず、ただ、黙ったままであった。答えようとしないう恵を見て、為介が軽く肩を落とす。

「ボクらにも、神を名乗る資格はありませんね……」

そう呟いた為介は、どこか自嘲するような笑みを浮かべていた。

言ノ葉町、北端。

「左^{さへん}変”…?”」

ゆっくりと、囁の放った言葉を繰り返すエカテリーナ。

「何でございますの…? それは…」

更地から一気に、色取り取りの花の咲く庭園と変わったその場所の中央に立ち、高々と伸びあがった蔓に右手を巻き取られながら、エカテリーナが問いかける。

「何でございますの…? これは…」

問いかけを続けるエカテリーナの表情が曇り、眉間に強く皺が寄る。

“左変”。変格の上をいく変格。言玉の第三形態、とでも言うのかしらね…フフフ…」

「言玉の、第三形態…?’」

また囁の言葉を繰り返し、エカテリーナが眉尻を吊り上げる。

「愚かなことをっ…あなたの言玉は、何も姿を変えていないではございせんか!」

強く指摘するように、エカテリーナが囁を睨みつける。睨みつけるその先、囁の両手には、赤一色の、派手な横笛が握られていた。

「姿を変えるどころか、原型に戻っている! その何が、上に行く変格なのでございます!?’」

確かに、エカテリーナの言葉は最もであった。新たな形態と言いつながらも、囁の持つそれは、最初に言玉を解放した時の姿と、まったく同じ形をしている。

「私の“変格”は、形態変化自体にはそんなに意味がないのよ…槍に変えるのも、ただ単にちょっと攻撃性を増すだけのものだし…」

右手でそっと横笛を撫でながら、囁が涼しげな表情で説明をする。

「私の“変格”にとって大事なのは…言葉自体の変化…」

「言葉の、変化？」

「ええ：」

戸惑いながら聞き返すエカテリーナに頷き、囁が笑みを浮かべる。微笑んだ唇へと横笛を当て、そのまま美しい音色を奏でる囁。

「咲^さけ”：」

音色を奏でた後、囁が優しく言葉を口にする。すると、更地に自由^よに伸びあがった茎や蔓のあらゆる場所から、不自然な程に無数の花が、一斉に咲き乱れた。色取り取りの花弁が、流れる風に一気に舞う。

「こんなものっ：」

香る花の匂いに、顔をしかめるエカテリーナ。

「こんな花をいくら咲かせたところで、私には、痛くも痒くも：！」
エカテリーナが強気に言葉を発していると、風に舞った花弁の一枚が、そつとエカテリーナの腕に乗った。

「うう：！」

次の瞬間、その花弁の乗ったエカテリーナの腕が、勢いよく斬り裂かれる。エカテリーナは痛みというよりも、斬り裂かれたその事実^{じじつ}に驚き、大きく目を見開いた。

「なっ：」

「痛くも痒くも、ない：？」

驚きで思わず言葉を失ったエカテリーナへと、囁が試すように問いかける。すぐに険しい表情を作ったエカテリーナが、睨みつけるように囁を見る。

「何を：一体、何を：！？」

「“裂^さけ”」

「……！」

囁が発する言葉に、何かを察した様子で、さらに目を見開くエカテリーナ。だが気付いた時にはもう遅く、エカテリーナへと降り注いだ花弁たちが、その全身至るところを斬り裂いた。

「うううう：！」

花卉に混じって血が舞い、さすがのエカテリーナの口からも、苦しげな声が漏れる。

「二つの言葉を、同時に…！？」

「そう…」

走る痛みに表情を引きつりながら、エカテリーナが戸惑いを見せる。

「これが私の更なる変格…“左変”…」

「何が、左変…」

俯いたエカテリーナが、大きく表情を歪める。

「二つの言葉を同時に使えたからといって、それが何だというのでございますか？」

蔓に巻きつかれ、動きの封じられている右手の拳を、エカテリーナが力いっぱい握り締める。

「神を相手に、偉そうな口を叩くのはごさいませんよ！“えんてん炎天”！」

エカテリーナが言玉を持った右手を熱し、絡みついていた蔓を焼き切る。右手が自由になると、エカテリーナは素早く、言玉を右足へと吸収させた。

「“えいほう鋭鋒”…！」

右足を鋭い刃へと変えて、エカテリーナがその刃先を囁へと向ける。だが囁は落ち着いたままで、そっと横笛を奏でた。

「“さ避ける”…」

「う…！」

笛の音が耳に残るうちに囁が言葉を発し、目にも留らぬ速さで体を動かして、振り下ろされたエカテリーナの右足を避ける。一方のエカテリーナは、渾身込めて振り下ろした右足が空を斬り、勢い余って、少しバランスを崩す。

「“さ裂ける”…」

態勢を整え切れないエカテリーナへと、二つ目の言葉が落とされる。

「きゃああああ…!!」

降り注ぐ花卉により、激しく全身を斬り裂かれたエカテリーナが、甲高い悲鳴をあげながら、後方へと吹き飛ばされていく。まだ更地の残る場所まで飛ばされたエカテリーナは、その荒い地面の上に、力なく倒れ込んだ。

「う、うう…」

エカテリーナが血を流しながらも、素早く体を起こし、右足に吸収させていた言玉を取り出す。

「こ、の…!!」

「“触れ”…」

「ううう…!!」

取り出した言玉を、新たな身体部位へと吸収させようとしたエカテリーナであったが、その右手が、力強く巻きついてきた蔓により、止められる。

「あなたの強みは、エ段ならではの、自由自在の身体強化…」
動きを止められたエカテリーナへと、囁が鋭い瞳を向ける。

「少し、大人しくしてもらおうよ…」

「グ…!!」

そつと微笑む囁に、エカテリーナが険しい表情を見せる。

「“障れ”…」

「あ、ああああ…!!」

巻きついた蔓を伝うようにして、全身に激しい痺れが走り、エカテリーナが大きな叫び声をあげる。やがて、右手に巻きついた蔓にぶら下がるような形となって、エカテリーナがその場に力なくしゃがみ込む。

「その自在な身体強化も、動きを封じれば、逆に攻撃の術を失くしてしまう」

口元に持っていた横笛を少し下ろし、囁がそつと言葉を響かせる。

「どうかしら…? これでもまだ、“言葉を二つ同時に使えるから何

” っ て、言える…?”

地面に膝をつき、深々と座り込んだエカテリーナを見て、囁が冷静に問いを投げかける。

「さあ、じゃあ…あまり時間もないことだし…」

ゆっくりとした動作で再び、横笛を口元へと持っていく囁。

「そろそろ、終わらせてもら…」

「神を…」

勝利を確信するように放たれようとしていた囁の言葉を、エカテリーナの声が遮る。

「神をナメるんじゃないでございますよ!」

大きく目を見開いたエカテリーナが、勢いよく顔を上げ、右手に言玉を吸収させ、巻きついていた蔓を千切り落とし、鋭く突き上げる。

“遠雷”^{えんらい}!

「な…!?! ううう!」

エカテリーナが力強く言葉を放つと、遥か高い空から、激しい一筋の雷が降り落ちる。囁が後方へと下がり、身を伏せて、何とかそれを避ける。雷が囁のすぐ前の地面を直撃し、辺りに土煙を巻き起こす。

「まだ熟語^{イデオム}をつ…」

「神を相手に何度も何度も、愚かな、愚か過ぎる口をつ…」

その表情に怒りを浮かべたエカテリーナが、少しその声を震わせながら、右手から、吸収させた言玉を取り出す。

「もう、遠慮はしないでございます」

エカテリーナが、取り出した言玉を、自身の左胸の前へと持っていく。

「裁きを下すでございます!」

「な…!?!」

そう強く叫びあげたエカテリーナが、左胸の中へと言玉を吸収させていく。胸の中へと入り込んでいく言玉に、囁が驚いた様子で、

大きく目を見開く。

「あれはっ…まさか、心臓に…？」

言玉を吸収させたその部位に、眉をひそめる囁。

「何を…心臓を強化して、体力維持でもする気…？」

「心臓は、命の源…」

戸惑うように問いかける囁へ、エカテリーナが落ち着いた口調で言葉を向ける。言玉を吸収し、強く輝き始めたエカテリーナの左胸の、その緑色の光が、心臓から送り出される血液に乗るように、一気に全身へと広がっていく。

「私が強化するのは、この体のすべて…！」

「すべて…？」

エカテリーナの言葉の意味を表すように、左胸に輝いていた緑色の強い光がどんどんと広がり、エカテリーナの体全体を包み込んでいく。

「そしてこれが、全身強化した状態でなければ、使えぬ力…」

輝く全身の力を溜めこむように、エカテリーナが少し身を屈める。

「神との力の差を、思い知るがいいでございますよ！」

力強く言い放ったエカテリーナが、屈めていた体を一気に伸ばす。

「“神格”…！」
しんかく

「神、格…？」

エカテリーナが口にしたその言葉に、囁がさらに眉をひそめる。

「“栄枯盛衰”…！」
えいこせいすい

「う…！」

言葉が発せられると、エカテリーナの全身から放たれる光がさらに強くなり、直視していられなくなって、囁が思わず顔を俯け、目を細める。

「何て、光…え？」

あまりの光に圧倒されていた囁が、俯けていた視線のその先、地面へと落ちていく花卉を視界に入れ、戸惑いの声を発する。

「こ、これは…」

顔を上げ、戸惑いの表情のまま、周囲を見回す囁。更地を埋め尽くすほどに、囁が咲かせた色取り取りの無数の花卉が、強い風が吹いているわけでもないのに、自然と、力なく、零れ落ちるようにして散っていつている。

「さ、^さ“咲け”！“咲き誇れ”！」

必死に言葉を投げかけ、再び花を咲かせる囁。囁の言葉の通り、確かに一度、花は咲くが、それから数秒も経たぬうちにまた、力なく散っていく。ひたすらに散っていく花たちに、囁が険しい表情を作る。

「なら…^{さいせい}“再生”！」

今度は地面へと散った花卉に、言葉を向ける囁であったが、囁の言葉を受けても、散った花卉が蘇ることはなかった。

「何故っ…」

「この世の中には、栄えるものもあれば、衰えるものもあるのでございます」

正面から向けられる声に、囁が素早く、顔を上げる。

「咲くことが運命^{さだめ}というのであれば、枯れることもまた、運命…」

鋭く細めた瞳で、先程とは一転した落ち着いた声を発するエカテリーナをまっすぐに見つめ、囁が少し眉をひそめる。だがすぐにそれを振り切り、囁は微笑みを浮かべた。

「あら、随分とオシャレなことを言うのね…」

エカテリーナを誉めるように、囁が笑みを向ける。

「的ハズレなことしか、言えない人だと思ってたのに」

「…この力を前にして直、そのような愚かな口をきくでございませうか…」

「ええ、だって…」

答えるように言葉を落としながら、囁が一度、横笛へと口を落とし、美しい音色を奏でる。

「全然、恐れていないもの。“裂け”！」

横笛から口を離れた囁が、力強く言葉を発する。すると、散って

いく無数の花卉が、淡い赤色の光を帯び、一斉にエカテリーナの方へと向かっていく。

「愚か者が…」

一瞬、厳しく表情を歪めたエカテリーナが、向かってくる花卉たちへと、細い右手を無造作に突き出す。右手が出された途端、エカテリーナへと向かっていった花卉が一斉に枯れ、エカテリーナへと届くすぐ手前で、一片残らず、すべて地面へと落ちてしまう。

「衰えたあなたの力はすべて、私の栄えとなるでございます」

「な…！」

花卉たちが纏っていた淡い赤色の光を、一点へと集中させたエカテリーナが、その光をまるごと、自分の右手の中へと取り込む。吸収された光に、驚きの表情を見せる囁。

「“遠雷”！」

「う…！あああああ！」

勢いよく降り落ちてきた、先程よりも遥かに強い雷に、避ける間もなく、打たれてしまう囁。全身を容赦なく焦がされた囁が、力なくその場にしゃがみ込む。

「うう…：敵の攻撃を吸収して、自分の力に変えてしまうなんて…」

「どうでございますか？私の神格は」

苦しい声漏らしながら、エカテリーナの力を分析し、囁が陰しい表情を見せる。そんな囁へと、エカテリーナは余裕すら感じる、涼しげな表情で話しかけた。

「これが神の力。あなた方、神付きの力など及ばない、素晴らしい力にございます」

自信を持って言い放つエカテリーナに、囁がそつと眉をひそめる。

「そうね、素晴らしい力だと思うわ…でも、だから何かしら…？」

「まだ、神に齒向かうと…？」

「ええ、そうよ」

傷ついた体を何とか起こしながら、囁がまだ戦えると言わんばかりに、挑戦的に答える。囁の答えを聞いたエカテリーナがそつと目

を細め、囁とはまるで違う方向、言ノ葉町の民家の並ぶ方へと、その右手を向けた。エカテリーナのその動きに、囁は戸惑うように首を傾げる。

「何を…」

「あれらの者たちが衰えた時、私の力はどれ程に栄えるのでございましょうね」

「……！」

その言葉に、エカテリーナがやろうとしていることを察し、囁が大きく目を見開いた。

「や、やめ……！」

「“栄枯盛衰”」

囁の声に制止するはずもなく、エカテリーナが再び言葉を発すると、民家の並びへと向けられたエカテリーナの右手から、強い緑色の光の塊が放たれた。

「あ……！」

放たれた光を見送り、囁が焦りの表情を見せる。

「さ、“遮れ”！」

強く横笛を突き出し、必死に言葉を発する囁。民家へと向かっていたエカテリーナの光塊の前に、赤い光の膜が張られ、向かって来たそれを止める。だが受け止めた途端に、重い力が膜へとかかり、伝わってくる重圧に、囁も表情をしかめた。

「ううう……！ク……！」

何とか堪える囁であるが、膜にはヒビが入り、それが徐々に広がっていく。

「この、ままじゃっ……」

もう碎かれるのも間近の膜に、険しい表情を見せる囁。エカテリーナの力を浴び、囁の花は力なく散ってしまった。もし民家に住む人々があの力を浴びたら、その者たちの命に係わるかも知れない。

「それだけは、絶対に……“攫え”！」

「……？」

新たな言葉を口にし、その場から姿を消す囁に、エカテリーナが眉をひそめる。次の瞬間、囁が現れたのは、自身が張った膜のすぐ後ろであった。

「自らを犠牲にする気でございますか……」

囁の行動の意図を察し、エカテリーナが感心するように呟く。

「神には歯向かうくせに、顔も知らぬ人間共には、随分と親切なことでございますね」

エカテリーナが冷たい笑みを浮かべ、もう間もなく碎け散る膜を見つめる。

「……………」

同じように、膜の後ろ側から、まっすぐに膜を見つめる囁。激しく入ったヒビの向こうから、迫り来る光の塊が、もう寸前のところまで見えている。だが、今の囁に逃げ場はなかった。やがて大きな音を立てて、囁の張った膜が崩れ落ちる。

「ク……！」

膜を越え、迫り来る光に、囁は覚悟を決めるように強く、唇を噛み締めた。

「え……」

その時、囁の後方から響く声。

「英華^{えいかはつがい}発外」

今度ははっきりと、初めて聞く言葉が響き渡る。そして言葉が響くと同時に、囁の前に何とも巨大な一本の薔薇が囁を守るように咲き誇り、迫り来ていたエカテリーナの力を受け止めた。

「え……？」

「んなあ……！？」

現れた巨大な花の姿に、囁とエカテリーナがそれぞれ、驚きの表情を見せる。

「何っ……何でございますの、あの花は……？ いえ、そんなことより……」
あからさまに動揺したエカテリーナが、強く拳を握り締める。

「何故、枯れないんですの……！！？」

囁の花を枯らせてしまったエカテリーナの力を、真正面から受け止めているというのに、その巨大な薔薇は、まったく枯れる様子を見せず、それどころか、益々力強く咲き誇っていた。

「“英華発外”は、内面の美しさ、強さを、外面で表すもの」

「……っ」

入ってくる聞き慣れない声に、エカテリーナが素早く振り向く。

「何の関係もない人々を巻き込もうとした君に、内面の美しさで負けるほど、私の心は腐ってないわ」

「あなたは……！」

囁の後方から現れたその人物に、エカテリーナが大きく目を見開く。

「現“衣^えの神”！ 衣沢^{えざわ}・アレクサンドラ・メアリー・エリザベス……！」

「あら、初対面の人に、間違はなく名前を呼ばれたのは初めてよ」

エカテリーナの呼びかけに、意外そうな表情で答えたのは、エリザであった。囁の後方から歩み寄って来たエリザが、囁の横に並び、目の前に咲き誇っている薔薇へと、右手を向ける。

「というわけでコレ、お返しするわ」

エリザの指先が薔薇へと触れると、薔薇が強く輝き、受け止めていた光の塊を勢いよく押し返す。

「あ、あああああ……！」

返って来た力を避けることも出来ず、自らの光を喰らって、吹き飛ばされていくエカテリーナ。

「ふう〜」

「あなたは……」

一息つくエリザの方を、囁がゆっくりと振り向く。

「ザベス……」

「エリザよ！」

アヒルと同じあだ名を呼びかける囁に、エリザが力強く訂正を入れる。

「悪かったわね。駆けつけるのが、遅くなっちゃって」

「別に誰も来てくれとは言っていないし……助けてくれとも言っていないわ……」

「でも助かったでしょう！？礼くらい、言いなさいよ！」

エリザに最大のピンチから救ってもらったにも関わらず、あまり嬉しそうではない、どちらかというと、むしろ不満げな様子の囁。

そんな囁に、エリザが勢いよく怒鳴りあげる。

「仕方ないわね……ありがとう……」

「そこまで渋々言われると、何の有難みもないわね」

いかにも嫌そうに礼を言う囁に、思わず顔をしかめるエリザ。

「う、う……」

前方から聞こえてくる声に、囁とエリザが同時に振り向く。エリザにより返された自らの光を浴び、全身に傷を負ったエカテリーナが、苦しい声漏らしながら、体を起こそうとしている。

「おのれ…衣の神っ…」

エカテリーナは怒りに整った表情を大きく歪め、拳を強く握り締めている。

「ほら、茶々入れちゃったお詫びに、後は君の好きなようにさせてあげるわよ」

「あら…？」

エカテリーナの方を指し示し、そう言うエリザに、囁が意外そうな顔を見せる。

「いいのかしら…？わざわざ駆けつけていただいたのに、見せ場奪っちゃって…」

「構わないわ。元々、人の喧嘩に手出す趣味ないもの」

「そう…じゃあ遠慮なく…」

興味のない様子で、顔の前で数度、手を振るエリザに、囁がそつと楽しげに微笑み、答える。そして、右手の横笛の感触を確かめながら、ゆっくりと歩を進め、エカテリーナの方へと歩み寄っていく。
「ん…？」

やっとのことで立ち上がったエカテリーナが、前方からこちらへと歩いてくる囁の姿に気付き、眉をひそめる。

「あなたでございますか…」

「残念そうに言わないでもらえる…？傷ついてしまうわ…」

「今すぐにでも、あの神を叩き潰したいところでございますが、まああなたからでも構わないでございます」

心臓に吸収させていたはずのエカテリーナの言玉は、エリザの攻撃を受けた際にでも零れ落ちたのか、エカテリーナの右手に握られていた。

「神を裏切った愚かなあなたは、神に裁かれることこそ運命…」
さだめ

「……っ」

エカテリーナのその言葉に、囁がそつと目を細める。

「愚かな冒読者よ。私が今から、裁いてあげるでございます」

裁きを下す構えであるのか、エカテリーナが囁へと、言玉を持つ

た右手を突き出す。

「フフフ…」

エカテリーナと適度な距離を取った場所で、足を止めた囁が、不意に笑みを零す。その笑い声を耳に入れ、エカテリーナは眉をひそめた。

「何がおかしいのでございます？」

「別におかしいわけじゃないわ…」

ゆっくりと顔を上げた囁が、まっすぐにエカテリーナを見つめる。

「確かに私は冒読者…それについては、否定しない…」

自身へと刻みつけるように、囁が小さいながらも、はつきりとした口調で言葉を落とす。

「我が神の弾丸に貫かれて死ぬるなら、私は喜んで、裁きを受けるわ…でも」

付け加えられた最後の言葉が、力強く放たれる。

「それ以外の神の裁きは、一切、お断りよ」

曇りのない、晴れやかな笑みを浮かべ、何の迷いもなく、堂々と言い放つ囁。

「断れるかどうか…試してみるでございますよ！」

エカテリーナが高々と声をあげ、右手に握り締めていた言玉を、右足へと吸収させる。光輝く右足を軸に、勢いよく囁へと駆け込んでいくエカテリーナ。

「鋭鋒^{えいほう}」！

右足を刃のように鋭く突き出し、囁へと向ける。

「避^さける」

素早く横笛を奏で、言葉を落として、振り下ろされたエカテリーナの右足を避ける囁。

「さ…」

「“裂ける”という気でございましょう！？読んでいるでございませよ！」

囁が次の言葉を放つ前に、エカテリーナが素早く右足を引き、吸

収させていた言玉を、瞬時に右手へと取り込み直す。

「神が裁くでございます！」

緑色に輝く右手を、力いっぱい突き出すエカテリーナ。

「えんえん“えんえん炎”！」

「……っ」

向けられるエカテリーナの熱を持った右手を見つめ、囁はそっと口を開いた。

「さば“裁け”……！」

「な……!？」

放たれるその言葉に、エカテリーナが驚き、思わず大きく目を見開く。囁の奏でる音色に乗り、地面へと散っていた無数の花卉が一気に舞い上がると、十字のような形を作って集合し、真正面からエカテリーナへと迫っていく。

「うう……！」

迫る花卉にか、囁の向けた言葉にか、険しい表情を見せるエカテリーナ。

「う、あああああ……！」

舞い上がった花卉に全身を斬り裂かれ、エカテリーナが激しい悲鳴をあげながら、勢いよく吹き飛ばされていく。

「そ、そん……」

空中を舞いながら、信じられないといった表情を見せるエカテリーナ。

「裁かれるのは、私……だ、なんて……」

その言葉を最後に、エカテリーナは深く瞳を閉じ、囁から遠く離れた地面の上へと、倒れ込んだ。倒れたエカテリーナが、それ以上は動かなくなったことを確認すると、囁がゆっくりと、構えていた横笛を下ろす。

「私は神じゃないから……導くことは出来ない……」

倒れたままのエカテリーナへ、その耳に届くことはないのだが、囁が言葉を向ける。

「裁くことしか出来なくて：ごめんなさいね。神様」

囁の小さな謝罪が、ところどころで花の舞う、その風へと乗った。

言ノ葉町、南端。海岸付近。

「“加変”、ね：」

簞也の放った言葉を、特に興味はなさそうに繰り返す沖也。至って落ち着いた表情で見つめる先には、さらに武器の姿を変えた、簞也の姿があった。

「パッと見：大して変わってない感じだけど：？」

沖也の正面に立った簞也は、先程までと同じような、刃以外の部分が赤銅色一色に染まった、鎌を構えていた。異なるところといえば、刃部分が一回り大きくなっており、また取っ手の逆側にも、向きだけ逆の、同じような刃が付いているところだろうか。

「パッと見はな」

沖也の言葉に答えながら、両側に刃の付いたその鎌の、取っ手の中央部を握り締め、簞也が感触を確かめるように、数度回す。

「ふうーん：まあ、どうでもいいけど：」

簞也が武器の姿を変えたことにも動じず、相変わらずやる気なく眩きを落とす沖也。

「で：？かかってこないの：？」

少し首を傾げ、沖也が簞也へと問いかける。

「折角、刃増やしたんだし：斬れ味くらい、試したら：？」

「ああ。言われなくとも、そうするつもりだ」

簞也が素早く鎌を構え、その目付きを鋭くする。

「“駆かけろ”」

短く言葉を落とし、目にも留らぬ速さで、その場から駆け出していく簞也。駆け込んでくる簞也を見つめたまま、沖也は特に構えようともせず、立ち尽くしている。

「真つ向勝負…？随分と芸がないんだね…」

「“火炎”^{かえん}」

「ん…？」

すぐ傍までやって来た簞也の声を耳に入れ、沖也が眉をひそめる。

「また、形状変化…？さっき言ったでしょう？武器を手放すのは、あまりいい攻撃じゃないって…」

「“刈れ”^か！」

「え…？」

振り降りてくる、赤々とした炎を纏った刃に、忠告するように言葉を発していた沖也が、思わず目を見開き、言葉を止める。

「お、“抑えろ”^{おさ}！」

沖也が言葉を放って、前方に白い光を張り巡らし、簞也が振り下ろした刃を止める。

「炎を、纏う…？」

「“鎌鼬”^{かまいたち}」

沖也に考える暇も与えずに、引き続き聞こえてくる言葉。炎を纏った刃を抑えられた簞也が、逆側の刃に、今度は風を纏わせて、握り締めている部分を中心に、大きく回転させて、その風を纏った刃を下方から沖也へと突き出す。

「“駈ける”^か！」

「う…！」

下から振り上げられてくる刃に、沖也が表情をしかめながら、必死に後方へと身を反らす。何とか刃を避けた沖也であったが、刃が纏っていた風までは避けられず、鎌鼬が沖也の頬を掠め、傷口から赤い血が流れた。

「どうだ？斬れ味は」

挑発するように問いかける簞也に、沖也の表情がさらに歪む。

「二つの形状に二つの言葉…確かに、姿以上に中身は変わってるみたいだね…」

頬から流れ落ちる血を手で拭い、沖也がそっと笑みを浮かべる。

「まあ、どうでもいいけど」

今までよりも冷たくその言葉を落とすと、沖也が言玉を持つ右手を振り上げた。

「おのの
“慄け”…！」

振り下ろされた沖也の右手から、激しく波打つ、白い光の波が放たれる。

「かまいたち
“鎌鼬”」

向かってくる波に少し距離を取るように、後ろへと飛び、もう一度、風を纏った方の刃を振り上げる簞也。

「かば
“庇え”！」

鎌の片側の刃から放たれた風の塊が、簞也の前で竜巻のように激しく逆巻き、向かって来ていた光波を呑み込んで、その波を掻き消していく。

「正面攻撃には強いようだね…なら」

鋭く目を細めた沖也が、言玉を握る手に力を込める。

「おお
“覆え”！」

全身から強い白光を発し、簞也の居る場所の上空から地面まで、一気に光で包み込んでいく沖也。

「八方からの攻撃なら、どう…？ “および”！」

簞也の周囲、すべてを包み込んだ光が、沖也の言葉を受け、一斉に簞也へと向かっていく。

「かげろう
“陽炎”…！」

八方から迫り来る光を冷静に見回しながら、簞也が今度は炎を纏った刃を前へと出し、そっと言葉を落とす。すると、刃の纏っている炎が、赤々とした激しい炎から、透明で蠢くような炎へと変わった。

「かく
“隠せ”」

「何…？」

簞也が鎌を振り上げると、透明な炎の中に揺らめくようにして、忽然と、その場から姿を消す。八方から及んだ光は、一切、簞也を

捉えることなく、砂浜を直撃した。

「どこへ…?」

眉をひそめながら、沖也が周囲を見回す。だが左右にも後方にも、
簞也の姿は見当たらない。

「また上か…!」

簞也の姿が地上には見えないことを確認し、沖也がすぐさま、上空を見上げる。すると案の定、高い空へと浮かぶ簞也の姿があった。

かみなり
「雷」

先程、風を纏わせていた方の刃へと、甲高い音を立てた金色の閃光を纏わせる簞也。

かがや
「輝け」!

力強く言葉を放ち、簞也が閃光を纏った刃を振り下ろす。

「ク…!」

簞也の下ろした刃から、まるで天から降り注ぐ稲妻のように、勢いよく迫り来る雷撃に、地上の沖也が険しい表情を見せる。

おく
「お、遅れろ」!

避ける時間を稼ぐため、やって来る雷撃を遅らせようとする沖也。だが言葉を浴びても、雷撃の速度は速いままであった。

「速い…!」

さらに険しい表情を見せた沖也の瞳いっぱい、金色の閃光が映る。

「うあああああ!」

激しい雷撃を浴び、沖也が海岸全体に響く、大きな叫び声をあげる。雷撃が止むと沖也は、焦げた体を力なく砂浜へと下ろした。

「ううう、う…」

沖也が苦しげな声を漏らしながら、砂浜についた膝を起き上がらせようとする中、上空からゆっくりと、簞也が地上へと降りて来る。

「あなたは、神として、間違ったことをした」

砂浜へと足を付けた簞也が、まだ立ち上がれていない沖也へと、言葉を投げかける。

「僕もあなたも、もう於崎の人間ではないから、同じ於崎として責任を取るとか、そんなことを言う気はない。だが…」

強い意志を表すように、はっきりとした口調で、簞也が言葉を続ける。

「神を信じる者の一人として、僕は、神の名を汚したあなたを許しはしない」

簞也が、鎌を握る手に、もう一度、力を込める。

「だから僕が、あなたを倒す」

堂々と簞也が言い切る中、俯いた沖也は、黙ったまま、ただ簞也の言葉を耳に入れる。

「……まあ、君が神を信じてようと、信じてなかりうと…どうしてもいいんだけどさ…」

深く俯いたまま、砂浜に付いていた膝をゆっくりと立てて、その場から立ち上がる沖也。その声は落ち着いてはいるが、今まで以上に低く、そして、どこか重い。

「俺が負けることだけは、どうしてもよくないんだよね…」

ゆっくりと顔を上げた沖也が、凍りつきそうな程に冷たい視線を、まっすぐに簞也へと向ける。

「無駄なことは止めろ」

立ち上がった沖也へと、簞也が忠告するように言い放つ。

“加変”の前では、いくら神の音とは言え、最早、あなたの言葉

など…」

「君は本当に、君の言葉が最強だと思っているの…？」

「何…？」

沖也の問いかけに、眉をひそめる箆也。

「たかだか神附きの子音ごときが…本当に、神の母音に敵うとでも…？」

薄く笑みを浮かべながら、沖也が再度、箆也へと問いかける。その笑みは、強がりや虚勢というよりは、余裕すら感じるような、そんな自信に満ちた笑みであった。

「どういう、意味だ…？」

「言葉の通りだよ」

問いかける箆也に短く答え、沖也が右手の中で、言玉を軽く転がす。

「本当に神附きの音の方が強いんなら…神は神であるはずがない…」
沖也のその言葉を否定することが出来ず、箆也は固く口を閉ざしたまま、険しい表情を見せる。

「誰よりも強いから…神は神なんだ」

さらに口角を吊り上げた沖也が、鋭く右手を突き上げる。

「神格」

「え…？」

突き上げられた沖也の右手に握り締められた言玉から、今までのものとは比にならないほどの、強く眩い光が放たれる。突然、目に飛び込んできた、あまりにも強い光に、箆也が目細めながら、焦ったような表情を見せる。

「何を…？」

「偉大な母音より、その脆弱な子音を選んだこと…存分に後悔する
といいよ」

戸惑う箆也に笑みを向け、沖也が大きく口を開く。

「“往古来今”…！」

「……！」

沖也が放つその言葉に、少し顔を俯けていた箆也が、大きく目を見開く。

ラスト・イデオム

「四字熟語…？ううう…！」

さらに強さを増す白光に、目を開いていることも困難になり、箆也は俯いた状態のまま、強く目を閉じた。しばらく目を閉じていると、瞼の向こうから突き刺すように向かって来ていた光が、徐々に収まっていくことに気付く。

「んっ…」

恐る恐る、ゆっくりと、瞳を開いていく箆也。

「な…！？」

目を開けた途端、箆也はあまりの衝撃に、これ以上ないほどに目を見開いた。

「こ、これは…」

周りを見渡し、思わず言葉を失う箆也。そこは、どこまでも真っ白な光だけが広がる、何もない、何も見えない、ただの空間であった。先程まですぐ傍にあったはずの言ノ葉の景色も、海も砂浜も、一切なくなっている。そこは先程とはまったく違う場所で、まるで、瞬時に別の場所に移動してきたようであった。

「これは、一体…」

「ここは、綿々と続く、長い時間の流れの中…」

戸惑っていた箆也が、前方から聞こえてくる声に振り向く。箆也の正面には、ただ白い空間の中に、ポツリと佇んでいる沖也の姿があった。

「時間の流れの、中…？」

「そう。遠い昔から、遙か先の未来まで…無限に続く時間の流れの中に、俺たちは存在してる…」

抽象的な沖也の言葉に、はつきりと理解することが出来ず、箆也が眉間に皺を寄せる。

「無限に続く時の流れの中では、俺たちの生きている時間なんて、ちっぽけで、些細なものだよ…」

脈々と波打つ、どこまでも真っ白な空間を見回し、何か悟ったような表情で、言葉を続ける沖也。

「ちっぽけで、どうでもいいもの……」

沖也が伸ばした無造作に手で、空間の一部へと触れる。

「君が於崎に苦しめられた時間も、俺が於崎に苦しめられた時間も……」

懐かしむように言う沖也のその言葉に、簞也がそっと眉をひそめる。

「あなたと時間について、語り合う気はない。単なる時間稼ぎなら、とっとと終わらせてもらう」

きっぱりと言い放ち、右手に持った鎌を振り上げる簞也。

「鎌かまいたち」

簞也が風を纏わせた刃を、空も覗かぬ、真っ白な天井へと突き上げる。

「刈かれ」！

言葉と同時に、刃の纏った強い風が、勢いよく天井へと放たれた。風は道すがらにさらに力を増し、力強く天井に衝突する。だが、簞也の放った風は、天井に穴をあけるどころか、波打つその中へと、音もなく吸い込まれてしまった。

「な……！」

「単なる時間稼ぎ……？ そんなわけないだろう？」

驚く簞也へと言葉を向けながら、沖也が言玉を持った右手を、そっと振る上げる。

「落おちろ」

「う……！」

天井を見上げていた簞也の上空から、降り落ちる無数の白い雨。

「ああああ……！」

注いだ雨に斬り裂かれ、簞也が大きな叫び声をあげる。

「な、何故……僕の言葉が……」

傷を負った腕や肩などを、空いている左手で無意識のうちに押さ

えながら、箆也が戸惑いの表情で、再び天井を見上げる。

「きかないよ」

沖也の声に、箆也が上を向いていた顔を下ろす。

「言っただろう…？この無限に続く時間の中では…君の言葉の力なんて、ちっぽけなものだって…」

その言葉に、険しい表情を見せる箆也。まだ、時間の流れの中に居るといふ実感も、この空間がどういふものなのかもわかっていないが、攻撃でこの空間を壊せないことは、先程の一撃で理解した。

「ならば」

箆也が目つきを鋭くし、まっすぐに沖也を見つめる。

「あなた自身を倒せばいいだけの話だ！」

力強く宣言し、箆也が沖也のもとへと駆け出していく。

「“^{かえん}火炎”」

白い空間の中を駆けながら、今度は赤い炎を纏った逆側の刃を、勢いよく振り上げる箆也。

「“刈^かれ”…！」

沖也のすぐ前で飛び上がった箆也が、上から、重力の力も借りて、勢いよく刃を振り下ろす。

「無駄、だよ」

振り降りてくる刃に、沖也が冷たく言い放つ。すると、その瞬間、沖也のすぐ目の前の地面から、大きな白い波が突き上げ、沖也を庇うように、箆也の刃の前へと立ちはだかった。

「何…！？」

沖也へと下ろしたはずの刃が、前方に現れた刃に止められ、箆也が焦りの表情を見せる。

「この無限の時の中では…」

刃を止められた箆也へと、波の向こうから、沖也が右手を突き出す。

「君の存在も、ちっぽけなもの…」

「う…！」

「押し潰せ」

「うあああああ：！」

強い光の衝撃波に押され、箆也が空間の壁際まで、勢いよく吹き飛ばされる。波打つ壁に背中を打ちつけると、箆也は力なく、その場に倒れ込んだ。

「うう、う：」

「はあ：どうでもいい：」

うつ伏せに倒れた状態のまま、苦しげな声を漏らす箆也を見つめ、深い溜息と、やる気のない声を落しながら、そっと頭を抱え込む沖也。

「この限らない時の中では、この限らない空間の中では、どんなことも全部、どうでもよくなる：」

沖也が大きく両手を広げ、その空間の無限さを確かめる。

「何もかも本当に、どうでもいい：」

そっと目を閉じて、沖也がもう一度、その言葉を繰り返す。

「ねえ：君も、そうは思わない：？」

「あ：！」

再び目を開き、微笑んだ沖也が、倒れたままの箆也へと右手を向ける。輝き始める言玉に、箆也の額から汗が流れた。

「“おの慄け”」

「あああああ！」

倒れたままであった箆也は、避けることも出来ずに、容赦なく向けられた白光の波を浴び、またしても壁際まで吹き飛ばされる。背中を壁に向け、横向きに倒れた箆也は、白い空間に赤い血を流し、体中に走る痛みに、大きく顔をしかめた。

「どうでもいい：どうでもいい：」

もうあまりはつきりとは開かない瞳で、何とか視線だけを上げ、視界に沖也の姿を入れる箆也。

「君は、俺によく似ているよ」

沖也がどこか穏やかな笑みを、箆也へと向ける。

「於崎に、家族に見放された、どうでもいい存在……」

耳に入ってくるその言葉に、簞也が少し悲しげに、目を細める。

「でも、君が残念だったのは……」

微笑みを浮かべたまま、沖也がゆっくりとした動作で、またしても簞也へと右手を向ける。

「神の文字にも、見放されたところかな」

少し低く声を落とし、口角を吊り上げる沖也。

「さあ、終わりにしようか……神月簞也」

沖也の握り締めた言玉が、再び、強い光を纏っていく。その光を目に入れながらも、簞也は目を逸らすことも出来ない。もうろくに体を動かせぬ簞也には、どうすることも出来なかった。

「“神の文字にも見放された”、か……」

目に飛び込んでくる光を見つめながら、簞也がゆっくりと、沖也の放った言葉を繰り返す。

——“お”の言葉はすべて、檻也様のものです！——

——この屋敷を出て行け、簞也——

「確かに、な……」

思い出される過去に、沖也の言葉を認めるように呟いて、簞也が自嘲するような笑みを浮かべる。

——“無駄”、なんかじゃないよ——

「え……？」

続けて思い出される言葉に、簞也が力なく浮かべていた笑みを消す。

「カモメ、さん……？」

思い出された言葉を発したその人物の名を、簞也がそっと口にする。

——君が苦しんできた時間も、悲しんできた時間も、一秒だって、“無駄”なんかじゃない——
何の曇りもない、誰よりも明るい笑顔で、その人は、はっきりとそう言った。

——限りある時間の中で、苦しんだり悲しんだり出来るから、だから人は、頑張れるんだよ——

「……っ」

はつきりと、耳に届くように思い出されるその言葉に、籠也は閉じかけていた瞳を、大きく見開いた。

“終われ”……！

沖也が言葉を響かせ、今までで一番、激しく荒れ狂う白光の大波を、倒れたままの籠也へと向ける。

「はぁ……どうでもいい……」

言葉とは裏腹に、波の行く先をしっかりと見守る沖也。

「何……！？」

だが次の瞬間、沖也はひどく驚いた様子で、大きく目を見開いた。倒れたままの籠也が、右手で勢いよく鎌を振り上げ、向かって来ていた大波を、力強く受け止めたのである。

「ど、どうして……」

「確かに僕は、神の文字は得られなかった……神に成ることは、出来なかった……」

沖也が戸惑いの表情を浮かべる中、籠也がゆっくりと言葉を繋ぎながら、傷だらけのその体を起こし、立ち上がっていく。

「だが、代わりにあの人から受け継ぐことが出来た」

沖也の大波を受け止めたまま、立ち上がった籠也が、誇らしい表情に染まった、その顔を上げる。

「この文字を……！」

高らかと声をあげた籠也が、鎌を振り払い、受け止めていた大波

を右方へと弾き飛ばす。箆也が自由になった鎌を振り上げ、下側の刃を、真っ白な地面へと勢いよく突き刺す。

「“限れ”！！」

箆也の言葉が放たれると同時に、地面に突き刺さった刃から、赤い光のヒビが、白い空間全体に渡るように、一気に広がっていく。

「な、何…！？」

自分の空間に刻まれていく赤いヒビに、焦りの表情を見せる沖也。ヒビの入った空間は、光が零れ落ちるように、天井から壁から床から、どんどんと崩れ落ちていく。

「そんな…！俺の、俺の神格が…！無限の時の中が…！」

「人は、限られた短い時の中を、精一杯、生きる」

「……っ」

崩れていく空間を見回しながら、激しい動揺を見せていた沖也が、前方から響く箆也の声に振り向く。

「その輝きは、どんな無限の時の中でも、決して、色褪せはしない」
堂々と言い放つ箆也に、沖也の表情が歪む。

「“火炎”」

崩れ落ちていく白い光の中で、一際輝く、赤々とした炎を刃へと灯す箆也。刃に炎を纏わせた箆也が、まっすぐに沖也のもとへと駆け出していく。

「“刈れ”！」

「……！」

自身へと振り下ろされる刃に、沖也は大きく目を見開いた。

「うああ…！」

炎を纏った箆也の刃が、真正面から一文字に、沖也の胸部を斬り裂く。

「あ…」

空中に舞う、自分の赤い血へと、そっと手を伸ばす沖也。

「ああ…どうでも、いい…」

何度も口にしてきたその言葉を呟き、力ない笑みを浮かべると、

沖也は深く瞳を閉じ、その場に倒れ込んでいった。沖也が意識を失ったためか、崩れて落ちていた白い光も一気に消え去り、簞也の周囲に元の通り、言ノ葉町の景色が広がっていく。

「……………」

右手の鎌を下ろし、倒れた沖也を見下ろす簞也。

「僕にとつては、どうでもよくなくなかったさ…」

空へと突き上げていた、白い光の柱が消えていくことを確認しながら、簞也がそっと呟いた。

Word. 57 生ノ根源 (5)

言ノ葉町、北西。言ノ葉町立グラウンド。

「光の柱、が…」

墮ちし宇の神、現うつと交戦中の保が、言ノ葉町の南北に突き上げていた、緑色と白色の光の柱が消えたことに気付く。近くに見えていた、強い赤色の光もなくなっているところを見ると、南北で行われていた戦いが終わったのだらう。

「柱が消えたってことは、皆さんが…」

「やれやれ、じゃのう…」

仲間の勝利を察し、安心の笑みを浮かべようとした保だが、遮って聞こえてくる声に振り向く。保が振り向くと、呆れきった表情を見せた現が、深々と肩を落としていた。

「まったく、使えん奴等じゃわい」

自分の仲間を相手に、冷たく言葉を吐き捨てる現に、保が眉をひそめる。

「これでは、わしの可愛いあの子へと送る力が、弱まってしまうではないか」

町の中央で、相変わらず雄たけびをあげている礼獣へと視線を向け、現が困ったように腕を組む。確かに、天へと突き上げられていた光の柱五本のうちの、三本が失われ、残っているのはこの金色の柱と、東の赤色の柱のみ。空へと集約している光も、今の大きさから、それほど著しい成長は見せていなかった。

「まったく…いつもこいつも、わしの手を煩わせてばかりじゃ…」
うんざりと呟きながら、現が右手に持った、先端に言玉のような金色の宝玉のついた杖を、ゆっくりと振りかざす。

「五十音、第三音“う”、解放」

「あ…！」

杖の先端にある宝玉から強く放たれる金色の光に、見つめていた

保が大きく目を見開く。

「やっぱり、言玉っ…」

「う…」

保が険しい表情を見せる中、杖を掲げた現が、自身の文字を口にする。

「^{うば}奪え”…！」

「ク…！」

現の言葉により、眩さを増すその光に、保は思わず目を伏せた。

言ノ葉町、南西。

「神…！」

「……？」

錨^{いかり}との戦いを終え、地面に深々と座り込んでいたイクラのもとへと、笑顔の金八が大きく手を振りながら、駆け寄って来る。金八は先程まで中央で、皆と共に礼獣と交戦していたが、戦いを終えたイクラの身を案じ、駆けつけたのだろう。

「大丈夫かあ？ 神…」

「誰が俺のところへ来いと言った。死ね」

「泣くよお…！？ そういう冷たいこと言うと、俺、泣いちゃうよお！？ 神！」

冷たく言い放つイクラに、金八が今にも泣きだしそうな表情で訴える。大きな声をあげる金八に、イクラはさらに不機嫌そうな表情を作った。

「勝ったのかあ？」

「聞かなければ、わからないか？」

「いいゝえ！ あんたが負けるはずねえもんなあ」

強く睨みつけるイクラに、必死に首を横に振り、落ち着かせるように両手のひらを向ける金八。

「敵さんはあ？」

「そこだ」

イクラが顎で指し示した方角を、金八が振り向く。水に濡れた地面の上に、意識を失くし、深く目を閉じた錨が倒れていた。

「一応、連れてつとくかあ。誰にも頼まれてねえけど」

「あの獣は？」

「へ？」

イクラに問いかけられ、金八が再び、イクラの方を見る。

「ああ、何とか堪えてるって感じ。今はシャコたちに任せちまつてるから、とつと戻らねえと」

「獣一匹、倒せないのか。貴様等は」

「そうは言うけど、強いのお？あのライオンちゃんっ」

呆れたように肩を落とすイクラへと、苦い笑みを浮かべる金八。

金八の言葉を聞き、目を細めたイクラが、ゆっくりとその場を立ち上がる。

「なら、俺が遊んできてやる」

「おいおいおい、待ってっ！」

礼獣の居る方角へと歩き出していくイクラを、金八が慌てて呼び止める。

「あんたは先にその傷を…！」

「うああああ…！！」

『……！』

大気を斬り裂くような強烈な悲鳴に、同時に振り向くイクラと金八。

「あああああ…！」

気を失っていたはずの錨が、倒れた状態のまま、激しい悲鳴をあげている。錨の体を青色の光が包み込み、その光が天へと突き上げ、新たな光の柱となっていた。

「か、神…これって…」

「……………」

険しい表情で、イクラへと呼びかける金八。イクラも眉間に強く皺を寄せ、その光を見つめた。

「きゃああああ！」

「な、何…!？」

突然、悲鳴をあげ始めた、倒れたはずのエカテリーナを見つめ、エリザが戸惑いの表情を見せる。

「急に何だっというのよ!？」

「光が…」

戸惑うエリザの横で、先程、やっと消したというのに、再び突き上げた緑色の光の柱を見上げ、眉をひそめる囁。突き上げている光の源は、悲鳴をあげているエカテリーナ自身である。

「これは一体…」

エカテリーナの悲鳴を耳に入れながら、囁は一層、険しい表情を見せた。

「倒れた仲間の、残り少ない僅かな力をも、搾り取ろうというのか…」

その頃、錨、エカテリーナと同じように、激しい悲鳴をあげる沖也を見つめ、再び突き上げた白い光の柱を見上げて、簗也も険しい表情を作っていた。

「何という非道…」

鎌を握る手に力を込め、込み上げる怒りに、表情を歪める簗也。

「そこまで堕ちたか。阿修羅…」

「フハハハハ…!」

再び天へと突き上げた三色の光柱を見上げ、何とも楽しげな笑みを浮かべる現。柱が復活したことにより、礼獣の上空で集められている光の成長も、再び促されていく。

「うむうむ、これで良い。これで我が礼獣は、更なる力を得ることが出来る」

「何をっ…」

「んん？」

満足げに頷いていた現が、背後から聞こえてくる声に、ゆっくりと振り向く。

「何をしたんです…!!？」

険しい表情を見せ、どこか責め立てるように、問いかける保。保の問いかけを受け、現が浮かべていた笑みを、やっと消す。

「お主の仲間に負けた馬鹿共を、せめて、お役御免にしてやろうと思うてなあ」

「まさか…」

何かを察した様子で、さらに眉をひそめる保。

「負けた仲間たちの力を、無理やり…!!？」

「ああ、奪い尽くすんじゃないよ。我が愛する礼獣の、肥やしにするためになあ」

「何てことをっ…」

やっと現のしたことを理解し、保が険しい表情を見せる。

「そんなことをしたら…!!その人たちが死んでしまいます!」

「だから、何じゃ？」

「なっ…!!」

自然と聞き返す現に、驚きの表情を見せる保。

「その人たちは、あなたの仲間でしょう…!!？」

「生憎じゃが、わしはあやつ等のことを“仲間”などとは思っておらん」

「え…?」

現の答えに、保が戸惑いの声を漏らす。

「ただ同じ墮神であるというだけ……いや、まったく同じではないのお。わしとあやつ等では次元が違う」

自分自身の言葉に首を振り、現が言葉を言い換える。

「阿修羅も、他の奴等も……つい最近、神を堕ちたような、そんなヒョッ子共とは、存在が違うんじゃないよ。わしは」

「どういう、ことですか……？」

得意げな笑みを浮かべる現に、益々戸惑いの色を濃くする保。

「あなたは、一体……」

“生まれろ”」

「え？」

突然、落とされる言葉に、保が眉をひそめる。

「数百年以上の昔、とある五十音士のたった一つの、その言葉により、痛みの塊である“忌”が生まれた」

「……っ」

現の言葉に、保が表情を曇らせる。灰示と体を共有し、ついこの前、始忌たちと戦いを繰り広げたばかりの保にとっては、その話は決して他人事ではなかった。

「忌共は痛みによりどんどん増殖し、やがては、五十音士たちの手に負えないまでの広がりを見せる……」

忌についてを語る現を、困惑した表情で見つめる保。忌の生まれた理由については、保も知っていたし、その現の話に間違いがないことはわかっていた。だが何故、今、現がそのような話をするのか、わからなかった。

「一体、何の話をつ……」

「そして、その五十音士は、この世に忌を生み出した責任を取らせられ、神の座を堕とされた」

問いかけようとした保の声を遮り、現が話を続ける。

「それが、この世に初めて生まれた、“墮神”……」

「あ……」

ずっと困惑の表情を見せていた保が、何かに気付いたように、一

気に表情を険しくする。

「ま、まさかっ…」

「ほお…ただの馬鹿のわりに、察しはいいようじゃのお…」
動揺しているのか、声を震わせる保を見て、現が感心するように
笑う。

「そう…このわしこそが、この世に初めて生まれた堕神…」
現が鋭い笑みを浮かべ、胸元に手を当てる。

「初代“宇の神”…」

酔いしれるように、言葉を続ける現。

「この世に忌を“生^うみ出した”、創造主じゃよ」

「……！」

知らされる現の正体に、保は大きく目を見開いた。

Word. 58 宿敵 (1)

言ノ葉町、中央部。礼獣、付近。

「さつき消えた光の柱が、また…」

雅の指示により、礼獣から離れた場所へと下がった六騎が、空を見上げ、幼い表情を曇らせる。六騎の見つめる先では、先程消えたはずの青、緑、白の光の柱が、再び天へと突き上げていた。

「恵サン、これは…」

「ああ」

六騎のすぐ後方で、為介に呼びかけられた恵が、すぐさま頷いた。

「まず間違はなく、あの男の仕業だろう」

「初代“宇の神”、浮世現…」
うきようつし

自らが口にしたその名に、深く眉をひそめる為介。

「何百年も前の神の罪まで、あいつ等に背負わせることになるとはな…」

光の突き上げる空を仰ぎ、恵は険しい表情を見せた。

——この世に忌を生み出した、創造主じゃよ……——

言ノ葉町、北西。言ノ葉町立グランド。

「そ、そんな…」

墮神の一人、堕ちし“宇の神”現の告げたその言葉に、保は驚きを隠すことが出来なかった。見開いた瞳をそのままに、零れる声はかすかに震える。

「そ、そんなこと、あ、あるはずがありません…!」

まるで自分自身に訴えるように、声を張り上げる保。

「だ、だって、忌が生み出されたのは、数百年も昔の話で…! いく

らあなたがお爺さんだといっても、そんなに長い間、生きていられる人間なんて…！」

必死に否定するあまり、保が思わず身を乗り出す。

「はぁ！こんな“ぶっちゃけ、お前の方がどうなの？”みたいな俺が、一丁前に存在否定しちゃって、すみま…！」

「“生まれろ”の言葉は、実に偉大じゃ」

いつものように頭を抱え、謝り散らそうとした保の言葉を、現があっさりと遮る。

「万物の創生を行うことの出来る、まさに、神にのみ許されし言葉…」

現の鋭い視線を浴び、保は反論することも出来ず、ただ、続く現の言葉を聞く。

「年老的、死に逝く肉体も、新たな細胞を創ってやれば、さらに、長い時間を生き永らえることが出来る…」

「な…！」

現のその言葉に、衝撃を走らせる保。

「まさか、言葉で寿命を…！？」

「そう驚くことでもない。五十音士の中には、わしの他にも、言葉で生き永らえておる者など、山程おるぞ」

「そんな、ことが…」

信じられないといった表情を見せながらも、保が徐々に納得するように俯いていく。言葉の力の強大さは、保も十分に理解している。確かに言葉の力を使えば、人の寿命を越えて、生き続けることも可能であろう。

「この数百年、わしは他にも、あらゆるものを生み出してきたが…」言葉が続いていた現が、不意に眉をひそめる。

「あれは、忌は、わしの創ったものの中でも、最たる不良品じゃな」どこか煩わしげに言い放つ現のその言葉に、ずっと驚き一色であった保の表情が、途端に曇る。

「“痛み”を餌に、馬鹿みたいに増えよって…お陰でわしは神を墮

ちる羽目になり、大迷惑じゃった」

過去を思い返ししながら、現が顎から流れる白い髭を撫でる。

「ついこの間は、一部の忌が、“痛み”を消そうと、何やらくだらん画策を行ったらしいのお。まあ自分たちの方が、あっけなく消されたようじゃが」

現が髭から手を離し、嘲笑うような顔つきを見せる。

「まったく、無意味な存在だけあって、無意味なことしか出来ん奴等じゃわい」

「……っ」

放たれたその言葉に、一度、すべての表情を止めた保が、ゆっくりと深く、顔を俯けていく。

———なのは何故、“痛み”が消えない……？———

———お前等にわかるのか！？この声に魘され続けた、俺たちの何百年が……！———

「うん……うん、わかってる……」

「んん？」

俯いた保が、何やらぶつぶつと小さな声を零していることに気づき、現が首を傾げる。

「何じゃ？わしの言葉の偉大さに、頭でもおかしくなったか？」

「俺だって、怒ってる。怒ってるんだよ。だけど……」

現の問いかけに答えようとはせず、俯いたままの保が、独り言のように言葉を続ける。

「君の怒りの方が、きっと大きいから」

そう言って保は、両手に絡みついていた糸を元の言玉の姿へと戻し、きつく拳を握り締めた。途端に保の体から、強い黒色の光が放たれる。

「何じゃ……？」

放たれるその光を見つめ、かすかに眉をひそめる現。

「この光は…」

「はあ…」

「ん？」

グラウンドに差し込む黒色の光に視線を落としていた現が、前方から聞こえてくる、深々とした溜息に気付き、ゆっくりと顔を上げる。その溜息は、前方に立っているはずの保の声とは、違って聞こえた。

「お前さんは…」

顔を上げた現が、その表情を曇らせていく。

「誰？」とかいう問いかけなら、いらぬよ…」

現の前方に立っているのは、黒い髪に鋭い赤色の瞳の、涼しげな表情を見せた青年。保と同じ、学校の制服を纏い、保が持っていた方と同じ手で、同じ赤色の言玉を持っはいるが、保とはまったく別の人物。

「くだらないからね…」

そこに立っているのは、もう一人の保、灰示であった。

「懐かしいのお。その赤い瞳…」

目を細めた現が、言葉通り懐かしむように、灰示を見つめる。

「わしが生み出した、あのくだらん生き物と同じ瞳の色じゃ」

まるで挑発するように言う現に、灰示が涼しげだったその表情を、かすかに動かす。

「第二十六音“は”、解放」

現の言葉に反論する様子は見せず、灰示はそのまま小さく声を発し、右手に握り締めていた言玉を、数本の赤い針へと変える。

「やっと見つけたよ…イツキ…」

言玉から姿を変えた針を握り、灰示が今はもう居ない、かつての友の名を呼ぶ。

「僕らが倒すべき、“痛み”の根源を…」

「“根源”か…悪くない言葉じゃ…」

聞こえてくる灰示の言葉に、ゆっくりと言葉を返す現。

「そうじゃったのお。“太守”には変格がない代わりに、お前さん

が付いとるんじやった」

現が灰示を見ながら、保と灰示の関係性のことを、知っていた様子で頷く。

「まったく、とんだハズレくじじゃわい……」

鬱陶しそうに呟いて、現が言玉のついた杖を持つ手を一度、握り直す。面倒がつてはいるが、戦う姿勢はあるようである。

「我が最たる不良品：偉大なる神の前に、ひれ伏すが良い」

現が杖を振り上げ、灰示へ向けて、構えを取る。

「さあ、君にも贈ろう……」

針を指の間へと挟んでいきながら、灰示がそつと言葉を落とす。

「この、“痛み”を……」

赤い瞳を鋭く輝かせ、灰示は構えたばかりの針を投げ放った。

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「光が、また……」

「……………」

恵や為介たちと同じように、消えては再度、突き上げる光の柱に、阿修羅を前にしながらも、そちらへと視線を向けてしまっているアヒル。阿修羅もアヒルと同じように、再び突き上げた柱を見上げ、そつとその瞳を細めた。

「勝手なことばかりしてくれるものだ。現も……」

少し眉をひそめた阿修羅が、現の行動を読み、気に喰わない様子で呟く。

「まあいい……」

一瞬、目を伏せた阿修羅が、再び目を開くと、突き上げた光たちに背を向け、ゆっくりとアヒルの方を振り返る。振り返った阿修羅に、アヒルも視線を光柱から移し、身構えながら、表情を厳しくする。

「一応、聞こうか」

アヒルの方を見た阿修羅が、軽い笑みを向ける。

「ここへ、何をしに来た？アヒル」

阿修羅からの基本的な問いかけに、アヒルが瞳を鋭くする。

「お前を、倒しに」

「まあ、そうだろうな」

少し肩を落としながら、阿修羅が頷く。その様子はどこか余裕で、アヒルに対して警戒の姿勢はまるで見られなかった。

「俺も一応、聞いていいか？」

同じように問いかけをするアヒルに、視線を下げていた阿修羅が、再びアヒルを見る。

「何だ？」

「お前の目的は何だ？阿修羅」

聞き返した阿修羅をまっすぐに見つめ、アヒルが問いかける。

「あのデカイライオンを使って、他の堕神たちの力を集めて、お前は一体、何をしようとしている？」

一瞬、町の中央に見える巨大な礼獣の方へと目をやって、アヒルが阿修羅へと言葉を向ける。アヒルの問いかけを受け、阿修羅はずつと浮かべていた笑みを止めた。

「あの獣、礼獣の力は把握しているんだろう？」

「人の自由ある言葉を奪うって、恵先生たちはそう言った」

逆に問いかけてくる阿修羅に対し、アヒルが間を置くことなく答える。

「けど、人のすべての言葉を奪うわけじゃねえんだろ？だからお前は、七声しちせいや始忌しきの連中しちせいみたいに、言葉の消滅が目的なわけじゃない」
アヒルが自分なりの考えをまとめるように、整理しながら言葉を続ける。

「なら、お前の目的は何だ？」

まっすぐに問いかけてくるアヒルに、阿修羅が少し目を細める。

「……そうだな。戦いを始める前に、話しておくのも悪くない」

一人で納得するように頷くと、阿修羅は再び、アヒルの方を見つめた。

「あの獣、礼獣には、俺の言葉“あんねいちっしょ安寧秩序”の力を与えてある」

「あ、安眠……？」

聞きなれない言葉に、首を傾げるアヒル。

「世界が平和で、何の不安もなく落ち着いている”という意味だ。“安寧秩序”の力を浴びた者は、争いの火種と成り得る、すべての言葉を封じられる」

「え……？」

阿修羅の説明に、アヒルが戸惑いの声を漏らす。

「火種となる言葉を、封じる……？」

「ああ、そうだ」

聞き返すアヒルに大きく頷き、阿修羅がまた、笑みを浮かべる。

「お前は“自由ある言葉を奪った”と言ったが、そうじゃない。俺はただ、人から不要な言葉を失くしただけだ」

「不要な言葉……？」

——あんな言葉しかねえあいつを見てるくらいなら、難聴になってもなった方がマシだった——

アヒルの脳裏を過ぎったのは、友の言葉を奪われ、遣り切れない表情を見せていた守の姿だった。

「不要って……何が好きだとか、何がしたいとか言える、そんな自由ある言葉が不要だなんてことは……！」

「何が好き」「何がしたい」……それが、自分と他者とを大きく隔て、時に争いの火種となる」

必死に反論しようとしたアヒルの言葉を、阿修羅があっさりと遮る。

「人の自由ある言葉こそ、人々が争い合う要因となるんだ」

「それは……」

阿修羅の言葉に、放とうとしていた言葉の続きを、呑み込んでしまふアヒル。確かに阿修羅のその言葉は、間違っていない。自由ある言葉は人の望み、希望を示すものであり、その望みや希望が異なれば、時に人は争ってしまうこととなる。

「だからこそ人は、挨拶と最低限の受け答え以外の、すべての言葉を失くしてしまった。逆に言えば、それ以外の言葉がすべて、他者と争う要因に成り得るということだ」

すでに礼獣の力を浴び、言葉を失って、静まり返ってしまった町を見下ろし、阿修羅が言葉が続ける。

「俺がそうしようとしたわけじゃない。それが事実であるだけだ」
重く圧し掛かるその言葉に、アヒルが険しい表情を見せる。

「人から、争いの種になる言葉を全部消し去ることが、お前の望みなのか？」

「ああ、そうだ」

曇らせた表情で問いかけるアヒルに、阿修羅は迷うことなく大きく頷く。

「俺は、人が人を傷つけ得る、すべての言葉を失くす…」

強く拳を握り締め、決意の強さを示すように、はっきりと答える阿修羅。

——私は、どうして生きているのかな…？——

「……っ」

思い出される少女の言葉に、阿修羅が何かを堪えるように、強く唇を噛み締める。

「そのために俺は、この言葉の世界に戻って来た」

自分自身へ投げかけるように、阿修羅が言葉を放つ。

「この世界の言葉すべてに、正しき秩序をもたらすために」

力強く声を張り上げた阿修羅が、懐から、真っ赤な言玉を取り出した。

「そうか…」

阿修羅の言葉を受け止めるように、こちらも大きく頷くアヒル。

「けど俺は、人から自由ある言葉を失くしたくない」

「まあ、そうだろうな…」

「だから…」

アヒルが表情を鋭くし、制服のズボンのポケットへと手を入れる。そのポケットから、阿修羅と同じ真っ赤な言玉を取り出すアヒルを見て、阿修羅がどこか楽しげに笑う。

「俺が砕いた言玉…元に戻ったのか」

「ああ。俺はもう一度、この力を手にした」

感心するように言う阿修羅へ、迷うことのないまっすぐな瞳を向けるアヒル。

「俺は、お前を倒す…！」

力強く叫ぶアヒルに、阿修羅が不敵に微笑む。

「いいだろう…」

向き合った二人が同時に、言玉を持つ右手を突き出した。

『五十音、第一音』

アヒルと阿修羅の声が、きれいに重なる。

『“あ”、解放…！』

重なる声に反応し、二人の手の中の言玉から、強い赤色の光が放たれた。

その頃。言ノ葉高校、屋上。

「ついに始まったね…」

「ああ」

東の方角に見える、二つの赤い光を見つめ、互いに複雑な表情で言葉を交わす、スズメとツバメ。その光を発しているのがアヒルと阿修羅で、二人が戦おうとしていることは、二人も十分に察しがつ

いていた。

「手出しは無用ですよ」

背後から聞こえてくる、厳しい女性の声に、スズメとツバメが同時に振り向く。入口から、屋上へと入ってきたのは、知的な眼鏡の女性、熊子と、大男、塗壁の二人であった。二人の姿を確認し、スズメが少しうんざりした様子で肩を落とす。

「最近、本当、よく来んなあ」

「神の居場所が知れるから…僕らが不用意に集まるのは、よろしくないんじゃない？」

「あなた方を監視するため、仕方無いです」

ツバメの問いかけに、熊子が眼鏡を光らせ、はっきりと答える。
「別に監視なんかしなくっても、手出す気なんて、さらさらねえっ
ての」

「どうですかね。あなた方は元々、兄の仇であるあの男、阿修羅を倒すために、五十音士になったわけですし」

「熊さん！」

責めるように言う熊子に、横の塗壁が注意するように呼びかける。

「そういう言い方はねえでさ。二人だって、色々悩んで…」

「確かに、僕らはあの男を倒すために五十音士になった…」

二人を庇うように言う塗壁の言葉を遮って、ツバメがそっと呟きながら、赤い光の輝く方角を見つめる。

「今だって、飛んで行って呪いたいくらいだよ…」

「ああ。けど」

ツバメの後に続くように声を発し、スズメが鋭い瞳を見せる。

「弟がサシでやるって決めた喧嘩に、首突っ込むほど、根性腐ってねえんだよ。俺たちは」

「スズさん、ツバさん…」

「……………」

スズメのその言葉に、悲しげに目を細める塗壁の横で、熊子は少し呆れるように肩を落とした。

「サシの喧嘩、ですか。不良同士の小競り合いのような言い方をするんですね」

二人が見つめる東の方角へと、視線を移す熊子。

「世界中の言葉の運命が、かかっている戦いだというのに……」

熊子の言葉に、スズメとツバメは答えようとはせず、ただ厳しい表情で、放たれる赤い光を見守った。

言ノ葉町、北端。

「制御^{せいぎよ}」

「鉄壁^{てつぺき}」

同じデザインの黒と白のドレスを纏った、衣団^{えだん}の双子、誠子と徹子がそれぞれ、自分の言葉を発する。言玉を吸収し、緑色に輝いている二人の両手から放たれた光が、地面に横たわっているエカテリーナの体を包み込んだ。

「ううん…」

固く腕を組み、難しい表情を見せたエリザが、エカテリーナの体から空へと突き上げている光の柱を、まじまじと見上げる。

『どうでしょうか？エリザ様』

「うん、突き上げる力が、ちょっとは抑えられてるかも。さつきよりは随分、マシだわ」

『それは良かったです』

問いかける双子に、少し笑顔を見せて答えるエリザ。エリザの答えを聞き、誠子と徹子が安心した表情を見せる。

「しかし、いくら吸い上げられる力を軽減したとはいえ…」

「このままではいずれ、この方の力が底をついてしまいますわ。エリザ様」

「わかってる」

不安げに訴える二人に、エリザが表情を曇らせる。囁との戦いを終え、倒れたエカテリーナであったが、その後も、何らかの操作により力を奪われ続けている。このまま、この状態が続けば、エカテリーナの命が危うくなってしまうのだ。

「ともかく、何とか彼女をもたせなきゃ。悪いけど、この状態のまま彼女を、町の中央の恵のところまで、連れていってくれる？誠子、徹子」

『お易い御用ですわ、我が神』

エリザの指示に、快く頷く誠子と徹子。

「他にも、同じ状態の人間が居るかも知れないわ。音音^{ねね}は私と一緒に、その回収に」

「はい、神」

振り向くエリザの前に立った、着物姿の皆よりは少し幼い年代の少女、音音が、小さく頷く。

「それと、後はあ」

「ザベス…」

「エリザよ!」

後ろから名を呼ばれ、訂正を入れながら、勢いよく振り返るエリザ。

「どっちでもいいじゃない…」

「どっちでも良くないわよ!」

呆れたように言う囁に、エリザが強く怒鳴りあげる。エリザへと呼びかけたのは、エカテリーナとの一戦を終えたところの囁であった。衣附^{えつき}の面々によるものか、一通りの傷に応急処置がしてある。

「悪いんだけど…墮神さんたちのこと、任せてもいいかしら…?」

「え?」

囁のその言葉に、エリザが戸惑うように目を丸くする。

「君は?どうする気?」

「私は…」

エリザに問いかけられた囁が、そっと空を見上げ、赤々と輝いている東の光へと視線を移す。

「やらなければならないことがあるの…たぶん、今の安団^{あだん}である私たちが、やらなければならないことが…」

真剣な表情で答える囁を見つめ、エリザは目を細める。

「わかったわ」

笑顔を浮かべたエリザが、大きく頷くと、囁が再び、エリザの方を振り向いた。

「この場は私にドーンと任せて、君は好きなどこ行ってきなさい」
胸へと軽く拳を当てて、エリザが堂々と言い放つ。

「まあ、あなたに任せるとなると、すごく不安なんだけれど…」

「うるさいわね！他団とはいえ、神に失礼な口叩くなら、許さないわよ！？」

「フフフ：冗談よ。もう裁きは懲り懲り…」

むきになって怒るエリザを見て、囁が思わず零すように笑みを浮かべる。微笑む囁を見て、エリザもすぐに怒りを収めた。

「ありがとう：衣の神」

「いいから、早く行きなさい」

「ええ…」

エリザの言葉に頷くと、囁は足早にその場を駆け去っていった。囁の背を見えなくなるまで見送ると、エリザが顔を上げ、先程、囁が見ていた東の赤色の光を見つめる。

「アヒル…」

どこか祈るように、エリザはアヒルの名を呟いた。

言ノ葉町、中央部。礼獣、付近。

「グアアアアア！」

「ううう…！」

激しく雄たけびをあげた礼獣が、周囲を取り囲んでいた水の壁を、勢いよく突き破る。その取り囲んでいた水、変格“四海”を形成していたシャコが、破られると同時に、苦しい表情で膝をつく。

『シャコちゃん！』

膝をついたシャコの身を案じるように、必死に身を乗り出すチラシとニギリ。

「今、治療を…！」

「悪い、詫びる、梔子蕎麦…」

駆け寄るチラシに、シャコが申し訳なさそうに呟く。

「もう、ゆるゆる許さないんだからあゝ！ “仁王”！」
（におう）

「阿！」
（あ）

「咩！」
（うん）

シャコとチラシの横を通り抜け、勢いよく礼獣のもとへと駆けて行きながら、ニギリが再び変格の言葉を使い、水の仁王像を作りだす。仁王は大きく声をあげ、礼獣へとその大きな拳を振り下ろした。
「グアアアア！」

だが、一際激しく声をあげた礼獣が、仁王の繰り出した拳を真正面から受け止める。受け止めるだけでなく、すぐさま後方へと押し返していく礼獣。

「うううゝ！」

何とか堪えながらも、ニギリが苦しい表情を見せる。

「“満ちれ”！」

“増せ”！」
（ま）

そこへ、仁王の後方から雅と守がそれぞれ言葉を放つ。雅が大波を向けると、守の言葉により波が規模を増し、仁王を後押しするように、勢いよく振りかかった。大波に押し返され、礼獣が後方へと吹き飛ばされると、仁王がかかっていた重圧から解放される。

「ふああゝ重たかったあ」

両手を力なく下ろし、思わず安心の声を漏らすニギリ。

「つつか、あの化け物、さっきからどんどん強くなっていったねえかあ？」

「上空で集められている力が、あの獣を強化しているんでしよう」

眉間に皺を寄せ、問いかける守に、眼鏡を掛け直しながら、冷静に答える雅。

「一度消えた光も戻ってしまいましたし、このままでは…」

「グアアアアア！」

『あ…！』

大波の攻撃からすぐに起き上がり、再び向かってくる礼獣に、雅

と守が同時に焦りの表情を見せる。

「ま……！」

「“祈^{いの}れ”」

「へ？」

言葉を放とうとした守の声よりも先に、上空から一つの言葉が落ちてくる。その声に気づき、戸惑いながら視線を上へと向ける守。

「えええ……！」

美しい女性を象った巨大な水の像が、守たちや礼獣の上空から、勢いよく降り落ちてきていた。迫り来る巨大な像に、守が狂ったように叫び声をあげる。

「何だ！？ あれ！」

「“導^{みちび}け”」

「へ？」

守が焦るすぐ横で、素早く言葉を放って、その場から逃げ去る雅。その危険な場所に、守だけが取り残され、その間にも水像がどんどんと近付いてくる。

「どわわわわ！ ま、^{またた}“瞬^{またた}け”！」

守も何とか言葉を放って、その場から逃げる。礼獣だけが残ったその場所に、水像が勢いよく落ちた。

「ギャアアア！」

激しい水を大量に浴び、礼獣が苦しげな悲鳴をあげる。

「今のは……」

苦しむ礼獣を見つめながら、チラシに治療されているシャコが、何やら思い当たるように眉をひそめる。

「あんな野獣一匹、まともに相手出来ないのか？ 貴様等は」

「……！」

背後から聞こえてくる、聞き覚えのあるその声に、シャコが大きく目を開く。

「無能な奴は、俺の団にはいないぞ」

『神！』

冷たく言葉を放ちながら、その場へと現れたのは、イクラであった。イクラの姿を視界に入れ、シャコ、チラシ、ニギリの三人が、暗かった表情を一変させ、大きく笑みを浮かべる。

「ってか今、俺らも巻き添えになるとこだったんだけど…」

「そういう人なんですよ、前から」

喜ぶ以団の面々とは裏腹に、引きつった表情を見せる守の横で、雅が諦めたように肩を落とす。

「あれは…」

「イクラくん」

「イクラ？」

傷を負った紺平の治療を行っていた為介が、驚いた様子で現れたイクラを見る。為介が口にしたその名に少し戸惑いながら、紺平もイクラへと目をやる。

「ふいー！やあつと戻って来れたあ」

「幾守クン」きもり

イクラを見ていた二人のもとへと、ひどく疲れた様子の金八が現れると、二人は金八へと視線を移した。金八は背中に、自分とそう体格の違う男を背負っている。

「おや？背中の彼はあ？」

「ウチの神が戦ってた、墮神の一人。神が倒して、気失ってたはずなのに、急に叫び声あげて、苦しみだしてさあ」

「力を無理やり、奪われてるな…」

金八の後方から近付いた恵が、金八に背負われている錨いかりの体へと手を触れ、眉をひそめる。錨の体からは青い光が放たれ、空へと突き上げていた。

「気絶してんのか？」

「ああ。運ぶ時に、神が“うっせえ”って殴ったからな」

「相変わらず、容赦のない奴だな」

金八の答えを聞き、恵が呆れたように肩を落とす。

「そこへ寝かせろ」

「恵サァーン」

恵の指示に従い、金八が気絶した錨を地面へと寝かせる中、為介が恵へと呼びかける。すると恵はすぐに顔を上げ、真剣な表情を為介へと向けた。

「このままじゃ力を吸われ切って死んじゃう。力を与えて何とかもたせるから、援護しろ、為介」

「はいはぁい」

その言葉に頷くと、為介が素早く紺平の治療を終わらせ、恵と錨の方へと歩み寄っていく。恵が懷から取り出した緑色の言玉を、右手へと吸収させ、準備を整える。

「早速、始めるぞ」

「はぁい」

「こちらも頼む！」

横から割って入って来る声に、処置を行おうとしていた恵と為介が動きを止め、声の入って来た方を振り向いた。

「神月」

「神月くん！」

為介からの治療も終わり、再び礼獣のもとへ向かっていこうとしていた紺平が、恵に続いて、思わず声をあげる。その場へ現れたのは、ぐったりとした様子で、空へと光を突き上げ続けている沖也を背負った、箆也であった。

「そいつはお前の倒した堕神か？」

「ああ。何とか、この光を消そうとしたが、僕の言葉ではどうすることも出来なかった」

恵のもとへと歩み寄った箆也が、錨のすぐ隣へと沖也を寝かせる。

「今の僕では、与える力もない。だから、頼む」

「ああ、わかった」

頷く恵に、納得するように、箆也も頷く。

「お前は？どうする？」

「僕は神のもとへ行く」

恵が問いかけると、数秒の間も置くことなく、箆也がすぐさま答えた。

「そうか。こっちは何とか、もたせとくから、お前は安心して行つて来い」

「わかった」

送り出す恵に大きく頷き、箆也が右手に持った鎌を構え直し、再びその場を去ろうと足を踏み出す。

「あゝか、神月くん！」

慌てて呼び止める紺平の声に、箆也はすぐに振り返った。

「何だ？小泉」

「え、えっと…」

箆也に聞き返され、紺平が少し言葉に迷うように、顔を俯ける。だが迷うような顔つきは一瞬で、紺平はすぐに、真剣な表情の顔を上げた。

「ガアのこと、お願い…」

託すように言う紺平に、箆也がそっと目を細める。

「ああ」

紺平の言葉にしっかりと頷くと、箆也は再び背を向け、その場を駆け出して行った。あつという間に、箆也の姿が見えなくなる。

「じゃあやるぞ、為介」

「はいはい」

右手を錨へと向ける恵の指示に頷き、為介ものんびりと扇いでいた扇子を、沖也へと向ける。

「“恵め”！」

「“労われ” いた ええ」

言葉を使い、自身の力を錨と沖也へと与えていく恵と為介。

「グアアアア！」

その頃、イクラの攻撃を受け、地面に倒れ込んでいた礼獣が、再びその巨体を起こし、まだまだ体力が残っていることを示すように、大きな鳴き声をあげる。そんな礼獣を見据え、イクラは静かに戦闘

態勢を取った。

「一斉に攻撃を仕掛ける。出遅れたら、以附の資格はないと思え」
『仰せのままに、我が神！』

脅しのようなイクラの指示に、何故か嬉しそうな笑顔で答えるシヤコたち、以団の面々。

「あ！俺、ハブんないでよお！俺、泣いちゃうよお？神いゝ！」

そんなイクラと仲間たちのもとへと、慌てて駆け出していく金八。
「何かあいつ等、元気になってね……？」

「神の力は偉大ですね」

感心するように、呆れるように言いながら、守と雅も以団と共に、
攻撃の態勢を取る。

「俺も行かなきゃ」

まだまだ礼獣に向かっていく姿勢を崩していない、五十音士たちの姿を見つめ、自分を奮起させるように言って、紺平が皆のもとへと歩いて行こうとする。だが、進もうとした足をふと止め、紺平は
簞也の駆けていった、東の方角の空を振り返る。

「ガァ……」

紺平の祈るような声が、その場に小さく、零れ落ちた。

「“当たれ”！」

アヒルが強く引き金を引き、言玉から姿を変えた赤銅色の銃から、強い赤光の弾丸を放つ。弾丸の向かうその先に立つ阿修羅が、薄く笑みを浮かべ、右手に持った、アヒルと同じ赤銅色の銃を構えた。

「“当たれ”」

アヒルと同じ言葉を口にし、アヒルと同じように強い光の弾丸を放つ阿修羅。二つの弾丸が二人の間でぶつかり合い、きれいに相殺する。

「ほお」

相殺した光を見て、阿修羅が感心するように口元を緩める。

「随分と力が上がっているな。前は俺の弾丸に、あっさりと消されていたのに」

「お陰さまでな！ “上^あがれ”！」

阿修羅の言葉に答えながら、アヒルが素早く自分へと弾丸を放つて、暗い空へと高々と舞い上がる。

「“浴^あびせろ”！」

上昇したアヒルが、下方にいる阿修羅へと、再び弾丸を放つ。弾丸は下降する中で、小さな光の粒へと分解していき、まるで赤い雨のようになって、阿修羅へと迫る。

「……っ」

だが雨が阿修羅へと降り落ちる寸前、微笑んだ阿修羅の姿が、靄となって掻き消えた。

「“欺^あけ”か……！」

険しい表情を見せながらも、すぐに銃を構え直し、後方を振り返るアヒル。アヒルが振り返ったその先には、銃口をまっすぐにアヒルへと向けた、阿修羅の姿があった。

「“圧^あ縮”……」

「「集まれ」…！」

別の言葉を、同時に口にするアヒルと阿修羅。二人の言葉に応え、それぞれの銃口の先に、赤色の光が凝縮されていく。

『“当たれ”！』

今後は同じ言葉を、二人が口にする。その瞬間に凝縮されていた二つの光が、同時に放たれ、空中で激しくぶつかり合った。

「ク…！」

二つの力がぶつかり合う衝撃に押され、アヒルが身を屈めながら地上へと降りていく。アヒルが地面へと足をつけると、数秒も経たぬうちに、阿修羅も地上へと降りてきた。

「本当に目覚ましい成長だな。あの日から、ほんの数日しか経っていないというのに」

地面に降り立った阿修羅が、再び感心するようにアヒルを見る。

「素晴らしいもんだよ」

誉める阿修羅に、素直に喜ぶことは出来ず、アヒルはそっと目を細めた。

「いくらだって、強くなってやるさ」

力強く輝く瞳で、睨みつけるように阿修羅を見つめるアヒル。

「お前を倒すためなら」

はつきりと言い放つアヒルのその言葉を聞いて、阿修羅は一瞬だけ表情を曇らせ、すぐにもとの薄い笑みを浮かべた。

「倒す、か…」

阿修羅が、アヒルの口にした言葉を、ゆっくりと繰り返す。

「なあ、アヒル」

不意に呼びかける阿修羅に、アヒルは声ではなく、視線で応える。
「“合縁奇縁”^{あいえん きえん}、という言葉を知っているか？」

「愛煙？喫煙？ってか、また四字熟語かよ」

急な阿修羅の問いかけに、さっぱりわからないといった様子で、大きく首を傾げるアヒル。そんなアヒルの様子を見て、阿修羅が少し、口元を緩める。

「人と人との巡り合いはすべて、不思議な縁の働きによる」、という意味の言葉だ」

「へえ」

阿修羅の説明に、思わず感心するような声を漏らすアヒル。

「“あ”の言葉を持つ音士であれば、知っていてもいい言葉だと思うがな」

「ああ…!？」

馬鹿にするように言う阿修羅に、アヒルが大きく顔をしかめる。

「放っとけ！俺はこう見えてもなあ、四字熟語ってのは“一石二鳥”と“一日一善”しかわからな…!」

「俺たちのことのようにだと思わないか？」

「へ？」

自分の言葉を遮り向けられる再びの問いかけに、アヒルが目を丸くする。

「かつて神であった俺は、神付きであったカモメを殺し、神を堕ちた」

阿修羅のその言葉に、途端に表情を曇らせるアヒル。

「そして今、カモメの弟であるお前が、かつての俺と同じ“安の神”となって、俺の前に立っている」

まるで楽しむような笑みを浮かべ、阿修羅が言葉を続ける。

「この巡り合わせも、不思議な縁の働きによるものだろうか…」

誰へともなく問いかける阿修羅を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「そうかも、知れねえな…」

少し顔を俯けた状態のまま、小さく頷いたアヒルは、阿修羅には見えないだろうが、どこか遣り切れない表情を見せていた。

「なら俺は、それを受け入れるだけだ」

諦めるように短く言葉を落として、阿修羅が再び銃口をアヒルへと向ける。

「あらそ争え」

阿修羅が引き金を引くと、銃口から、閃光のように瞬いている、刺々しい光の塊が放たれ、まっすぐにアヒルへと向かっていく。

「^あ上^あがれ」！

自らへと弾丸を放ち、空へと逃げて、阿修羅の弾丸を避けるアヒル。

「あ…」

だが、阿修羅はすぐに、上空のアヒルへと、もう一度、弾丸を放った。

「^{あしかせ}足枷」

「うえ…！？」

阿修羅の銃口から放たれた細長い光が、舞い上がっている途中であったアヒルの両足へと絡みつく。ずっしりと重い光に引っ張られ、すぐさま下降していくアヒルの体。

「グ…！」

このまま下降していくと、先程、阿修羅の放った弾丸と丁度、衝突する。何とか上昇しようとするが、上がらない体に、アヒルは一瞬顔をしかめ、身を振って、地上で迫り来る弾丸へと銃口を向けた。

「^{あふ}溢れろ」！

弾丸へと、鋭い一発を向けるアヒル。アヒルの小さな弾丸に撃ち抜かれた途端、阿修羅の大きな弾丸が、内から爆発するように、碎け散る。

「うぐ…！」

その碎け散った一部の弾丸の喰らい、足の枷もあって、地面へと転がり落ちるアヒル。

「クッソ…！俺の苦手な熟語を、^{イデオム}ポンポン使いやがって…！」

「もう終わりか？アヒル」

上半身を起こし、大きく顔をしかめているアヒルに、阿修羅がどこか挑発的に微笑みかける。すると、さらにアヒルの表情が歪んだ。

「誰が…！」

勢いよく叫び、アヒルがその場で素早く立ち上がる。

「荒れろ」

右手を突き出し、阿修羅へ向けて、引き金を引くアヒル。

「嵐」……！」

アヒルが力強く言葉を発すると、銃口から風の塊が放たれ、それが空中でさらに勢力を増し、激しく逆巻いて、阿修羅へと向かっていった。迫り来る嵐にも、阿修羅は落ち着き払った表情で、銃口を向ける。

「暴け」

阿修羅が言葉と共に弾丸を放ち、嵐を貫くと、強い風の塊はどこからともなく、分解されていくように崩れ落ち、弱い風の残骸となつて、阿修羅の周囲を吹き抜ける。

「まだまだ……！」

嵐が防がれてしまうことを読んでいたかのように、すかさず阿修羅へと銃を向けるアヒル。

「当たれ」……！」

放たれた真つ赤な弾丸が、まだ風の消えきらない場所を通り抜け、まっすぐに阿修羅へと向かっていく。だが阿修羅もその攻撃を読んでいたように、銃を構えた態勢をそのままに、素早く引き金を引いた。

「褪せろ」

阿修羅の弾丸に当たった途端、アヒルの弾丸が色を失い、力なく地面に落ちて、掻き消える。

「あせろ……って、何だ？」

「当たれ」

阿修羅の放った言葉の意味すらわからない様子のアヒルへ、阿修羅がもう一度引き金を引き、光の塊を放つ。弾丸は避ける間すら与えず、アヒルへと直撃した。

「ん……？」

だが、弾丸が当たったはずのアヒルの体が掻き消え、阿修羅が眉をひそめる。

「「欺け」か…」

「俺はこっちだぜ！」

背中側から聞こえてくる声に、阿修羅が振り向く。

「喰らいやがれ！」

まだ振り向いたばかりで、銃を構えていない阿修羅へと、絶好のチャンスとばかりに、アヒルは素早く引き金を引いた。

「“当^あた…」

「“操^{あやつ}れ”」

「れ”！」

アヒルの放った言葉の間に、素早く挟まれる阿修羅の言葉。

「へ？」

次の瞬間、阿修羅へと突き出されていたはずのアヒルの右手が、アヒルの意志とは無関係に大きく折れ曲がり、構えていた銃の銃口が、アヒル自身へと向けられる。

「こ、これは…！」

アヒルが焦る中、先程のアヒルの言葉に応え、自身へと向けられているその銃口から、強い赤色の光が放たれた。

「うああああ…！」

顔のすぐ目の前から自身の弾丸を浴び、アヒルが勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

「ううう、う…」

頭から流れ出た血を、顔の側面へと滴り落しながら、アヒルがゆっくりとその体を起こす。阿修羅に成長を誉められるほどの弾丸を、至近距離から受けたダメージは、相当に大きかった。

「“操れ”って…一体何個、言葉持ってたんだよ。あいつっ…」

顔に流れ落ちる血を手で拭いながら、アヒルが思わず顔をしかめる。アヒルが攻撃を仕掛ける度に、阿修羅は別の言葉で攻撃を返してくる。あれほど言葉があっては、攻撃のパターンも読みにくく、アヒルには防ぐ手立てがないのだ。

「言葉の力は増したようだが、言葉の数は増えなかったみたいだな。

アヒル」

前方から語りかけてくるその声に、アヒルがゆっくりと顔を上げる。正面で佇む阿修羅は、相変わらず、余裕たっぷりの笑みを浮かべていた。

「うっせえなあ！俺はこう見えても、国語の成績“二”なんだよ！」
「……っ」

大きく顔をしかめ、怒鳴るように言い返してくるアヒルを見つめ、阿修羅がそっと目を細める。

——俺、こう見えても国語“二”なんだよお——

思い出されるのは、今のアヒルと同じ制服と纏った、穏やかな笑顔の男。

「やはり兄弟だな……」

「へ？」

阿修羅の声に、立ち上がろうと、地面に手をついていたアヒルが、再び顔を上げる。

「カモメもよく、そう言っていた……」

「………」

どこか遠くを見るような瞳で、懐かしそうに呟く阿修羅を、目を逸らすことなく、まっすぐに見つめるアヒル。阿修羅が浮かべる笑顔はとても穏やかで、本当にただ、カモメとの思い出を懐かしんでいるようにしか見えなかった。

「……っ」

胸の中に湧く感情を掻き消すように、アヒルが一度、深々と目を閉じて、そして再び目を開き、鋭い表情を見せて、素早くその場で立ち上がる。

「あっちのんが言葉は圧倒的に多いんだ。同じ銃で勝負したって、勝ち目がねえ」

戦況を冷静に分析しながら、アヒルが右手の中の銃を、元の言玉

の姿へと戻す。

「言玉を、戻した…？」

そのアヒルの行動に、戸惑いの表情を見せる阿修羅。

「頼むぜ」

右手の言玉に託すようにそう言葉を囁いて、アヒルが勢いよく、言玉を空へと放り投げる。上空を舞う言玉が帯びる光が、徐々に赤から金色へと変わっていく。

「あれは…」

「五十音、第一音」

阿修羅が輝く言玉へと目を見張る中、アヒルが思いきり声を響かせる。

“あ”、解放…！」

「言玉の再解放だと…？ク…！」

再び文字を解放するアヒルに戸惑う阿修羅であったが、言玉からさらに強い光が放たれ、思わず顔を俯けた。放たれた金色の光が一気に広がり、あっという間に丘全体を包み込んでいく。

「何という光…」

「クワアア…」

「……っ」

耳に届くその、明らかに人のものではない鳴き声に、俯いていた阿修羅が大きく目を見開き、すぐさま顔を上げる。

「クアアアア！」

顔を上げた阿修羅の視界を埋め尽くしたのは、きらきらと輝く、金色の巨鳥であった。神々しく光る両翼を、丘からはみ出してしまいうくらいに大きく開いて、巨鳥は甲高い鳴き声を響かせる。その鳥の姿に、目を見張る阿修羅。だがそれは、圧倒されているわけではない。

「不死、鳥…」

その、見たこともない生物の名を、阿修羅がそっと口にする。

——五十音、第六音：“か”、解放……！——
それは、かつて、阿修羅の隣に立っていた男が繰り出していた力
と、まったく同じ姿形をしていた。

「カモメ……」

目の前で鳴きあがる巨鳥を見上げ、阿修羅が何やら思いを巡らせるように、そっと目を細める。

「負けるわけには、いかないんだ」

自分自身へと言い聞かせるようにそう言って、アヒルが空いた右手を、大きく振り上げる。

「行くぜ、ガアスケ」

「クアアアア！」

アヒルからの呼びかけに、大きな鳴き声で応えるガアスケ。

“暴^{あは}れろ”！」

アヒルが言葉を発すると、ガアスケはさらに両翼を広げ、勢いよく阿修羅へと向かっていった。

言ノ葉町、中央部。

「詰^なれ」！」

上空に勢いよく飛び上がった棗^{なつめ}が、大きく右手を振り切り、纏^こった籠^こ手の先から伸びた鋭い三本の爪を、七架へ向けて放つ。

「薙^なぎ払え」

七架の言葉に反応し、七架の上空に浮かんでいた七つの十字のうちの一つが降りて来て、迫り来ていた爪をそれぞれ、叩き落とした。爪が地面へと落ちるその前に、七架が素早く、右手を振り上げる。

「嘆^{なげ}け」！」

上空に残った四つの十字から、抜け出てきたような十字型の光が飛び出し、まっすぐに棗へと向かっていく。

「う…！ きゃあああ！」

空中に居た棗は、向かってくる攻撃を避ける術がなく、四つの光すべてを直撃し、力なく降下して、そのまま地面へと倒れ込んだ。

「う、う…」

苦しい声漏らす棗を見つめながら、七架は険しい表情のまま右手を操作し、七つの十字を上空のもとの位置へと並べる。

「これで、もう…」

「な… “治^なせ” …」

「あ…」

棗の口から零れ落ちる、小さなその言葉に、七架が眉をひそめる。自身へと言葉をかけた棗は、今負ったばかりの傷を治療しながら、もうすでに立ち上がるかと、体を奮い起こしていた。

「また…」

そんな棗の姿を見て、七架が表情を曇らせる。

「“治せ”は確かに、見た目の傷は塞ぐけど、失った血液も体力も、すべてを完全に元通りにするわけじゃない！」

「知って、います…そんなことくらい…」

思わず声をあげた七架に、棗がゆっくりと立ち上がりながら答える。

「私は…あなたより長く、“奈守”をやって、いるのですから…」

「じゃあ、どうしてそんな無茶をするの!？」

どこか棗の身を案じるように、必死に問いかける七架。

「もう何度も何度も、倒れてはただ、傷だけを塞いで…このままじゃ、あなたの体が…!」

「敵の体の心配ですか…?随分と、お優しいことですね…」

俯いたまま、声を発した棗が、七架の言葉を遮る。

「でも、余りある優しさは…時に、あなた自身の足を掬うことになるかも知れませんよ…?」

ゆっくりと顔を上げ、まるで忠告のように七架を見る棗に、七架はそつと眉をひそめ、目を細める。

——一度や二度、手を差し伸べたくらいで、お前等のやったことが許されると思うなよ……

——お前が本当に優しいなら、今、俺に掛ける言葉を間違えんな……

少し俯いた七架が思い出すのは、かつて戦った始忌の一人、碧鎖^{ヘキサ}の、死に際の言葉であった。

「もう十分、掬われたよ…」

「え…?」

小さく返って来る答えに、棗が戸惑うように首を傾げる。

「“優しい”ってことがどんなに残酷か、不用意な“優しさ”がどんなに人の心を傷つけるか、もう十分に思い知った…」

七架が左胸の前に置いた手を、きつく握り締める。

「それでも私は、“優しさ”を捨てたくない」

顔を上げた七架が、まっすぐに棗を見つめ、強く主張する。

「また足を掬われることになっても、苦しむことになっても、“優しさ”は捨てないってそう、決めたの」

七架の強い決意の伝わってくるその言葉を、目を逸らすことなく、受け止めるように聞きながら、棗は何やら考え込むように、そっと目を細めた。

「だから、もうこれ以上は…！」

「抵抗せずに、敗北を認めろと…？」

棗の体を案じる七架の心情を読み、棗が七架の言葉を代弁するよう言う。

「それは無理な話です」

「けど…！」

「あなたに“優しさ”が捨てられないように、私にも、捨てられないものがあります」

「え…？」

強く遮る棗の言葉に、七架が少し戸惑うように眉をひそめる。

「それは、我が神への忠誠です」

はつきりとした口調で、棗がまるで誇るように言い放つ。

「私にとって、我が神の意志は絶対…我が神の望みを叶えるためならば、私は何だってしてみせます」

棗が籠手を纏った右手を胸につけ、噛み締めるように言葉を続ける。

「例え、この身が砕けても…」

七架に負けないほど強い意志を示す棗に、七架がそっと目を細める。

「どうして、そこまで…」

浮かんだ疑問は、すぐに七架の口から零れ落ちた。

「どうして、そこまでする必要があるの！？あなたの神様は、皆から、世界から、自由ある言葉を奪おうとしてるんだよ！？」

七架が大きく両手を広げ、必死に訴えかける。

「皆から、夢や希望の詰まった言葉を奪ってるんだよ…！？どうし

て、そんな神様に従うの!？」

続く七架の言葉に、棗が唇を噛み締める。

「どうして、そんな神様に、そこまでして従う必要があるの!？」

「あなたに何がわかるのです!？」

「……っ」

必死の七架の訴えは、それ以上の力強い棗の反論に、一気に呑み込まれた。

「あなたに…我が神の、何がわかるのです…?」

「棗、さん…」

深く俯いたまま、どこか震えるような声を発する棗に、七架が眉をひそめる。

「あの方の受けた哀しみが、あの方の背負った絶望が…あなたなどに、わかるはずがない…」

言葉が続けながら、棗が下ろした両手の拳を、血が滲みそうなほどにきつく、握り締める。

「わかるはずが、ない…」

強調するように、もう一度、その言葉を繰り返す棗。

「あの方は、とても哀しい人…」

やっと顔を上げた棗が、そのまま空を見上げ、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「誰よりも強く、言葉を愛しながら、誰よりも深く、言葉に絶望してしまった…」

悲しむような、悔いるような瞳で、言葉が続ける棗。

「私には、あの方の哀しみを、消すことは出来ない…あの方の絶望を、背負うことは出来ない…」

自身の無力さを嘆くように、棗の声が響き渡る。

「だから、せめて…」

ゆっくりと顔を下ろしながら、棗が静かな動きで、両手を前へと出す。

「我が神の願いを、私は叶える…!」

棗が声を張り上げた途端、棗が右手に纏っていた籠手が、強い赤色の光を放ち始める。

「“奈変”……！！」

「な……！？」

棗が口にするその言葉に、ひどく驚いた様子で、大きく目を見開く七架。

「まさか、あの人も“奈変”を……！？」

自分がやったように、三度目の言玉の形態変化をしようとしている棗を見つめ、七架が困惑の表情を見せる。

「けど、“奈変”は一度、言玉の姿に戻さないと出来ないし、それに……」

「ううう……！」

籠手を輝かせながら、棗はどこか、苦しげな声を漏らしている。形を変えていく言玉に、ついていけないような、そんな様子に見えた。

「不完全な“奈変”は、音士の命を削るだけ……」

櫻に教えられた言葉を思い出し、さらに険しい表情を見せる七架。

「棗さん……！」

七架が制するように叫びながら、思わずその場で身を乗り出す。

「ううう……うう……！」

だが七架の言葉に止まるはずもなく、ひたすらに、言玉の変化を続ける棗。

「神っ……」

棗の口から、まるで乞うような、弱々しい声が零れ落ちる。

「アキラ、様っ……」

「クワアアアア！」

大きく声を響かせながら、空を覆うように両翼を広げた巨鳥が、

阿修羅に尾を向け、アヒルの方へと戻っていく。

「……………」

その遠ざかっていくガアスケの背を、細めた瞳で見送る阿修羅。体よりも前へと出された、銃を持つ阿修羅の右手からは、赤い血が滴り落ちていた。

「^{あらが}抗え”でも、完全には防ぎきれないか…”」

地面へと落ちていく血へと視線を移し、阿修羅が分析するように呟く。手から零れ落ちる血を見ながらも、阿修羅はひどく落ち着いた様子で、顔色一つ変えていない。

「さすがだな…」

どこか感心するように言って微笑むと、阿修羅が静かに引き金を引く。

「^{あらそ}争え”」

阿修羅が言葉を落とすと、阿修羅の銃から、閃光のように激しく光る、刺々しい光の弾丸が、まっすぐにアヒルへと向かっていく。迫り来る弾丸を捉え、アヒルが鋭く瞳を輝かせた。

「^{あお}扇げ”！」

アヒルが言葉を発すると、ガアスケが上空に舞い上がり、高々とあげた両翼を勢いよく振り下ろす。すると、翼から嵐のような強い風が吹き抜け、アヒルへと向かっていた阿修羅の弾丸を、力強く弾き飛ばした。

「“^あ当たれ”！」

間を置くことなく、すぐさま次の言葉を発するアヒル。

「クアアアア…！」

アヒルの言葉を受け、一層大きな鳴き声をあげたガアスケが、縦に嘴を開き、口の奥から、濃縮された赤と金の光の混ざった、巨大な塊を放つ。

「……………」

向かってくる光の大玉に、阿修羅が眉をひそめながらも後方に飛び下がり、力強く銃を構える。

「「褪^あせる」…！」

銃を放ち、言葉を放つ阿修羅。阿修羅の銃から放たれた弾丸が、ガアスケの放った光の大玉を直撃する。だが、弾丸は確かに当たったものの、向かってくる大玉に変化はない。

「効かないか…」

あくまで冷静な姿勢は崩さずに、阿修羅が再び銃を構える。

「圧縮^{あっしゅく}」

大玉が迫り来る中、阿修羅も銃口の先に、光を集約させる。

「「当^あたれ」…！」

ガアスケの放った光の塊と、阿修羅が撃った光の弾丸が、正面から勢いよくぶつかり合った。

「ク…！」

二つの大きな力の衝突に、竜巻のような風が巻き起こり、周囲の木々を揺らす。吹きつける風に、アヒルも思わず片目を伏せる。

「ふう…」

風に乗って聞こえてくる一つの溜息に、アヒルが目を開き、ゆっくりと顔を上げた。互いにやっと消えた光の向こうには、さらに血の流れ落ちる右手を、左手で軽く拭っている阿修羅の姿があった。阿修羅は右手の他に頬や足、肩などにも傷を負っている。相殺しきれずに、多少、アヒルの力を浴びたのであろう。

「お前には本当に、驚かされるよ。アヒル…」

またしても感心するように微笑みながら、阿修羅が頬から流れた血も拭う。

「いくら俺と同じ“安の神”とはいえ、ここまでやるとはな…」

誉めるように言う阿修羅であるが、その表情には余裕が見られた。追い込まれているというのに、まったく焦っている様子がない。

「俺は絶対に、あんたを倒さなきゃならない」

アヒルが強い決意を覗かせるように、はつきりとした口調で阿修羅へと言い放つ。

「恵先生が言ってた。自由ある言葉は、“人の意志だ”って」

アヒルの後方へと回ったガアスケが、その翼を広げ、アヒルの言葉の邪魔をしないように、上空で大人しく静止する。

「ああ、そうだな。そして、意志のない世界に、争いはない」

「けど、未来もない」

鋭く言葉を続けてくるアヒルに、阿修羅がそつと眉をひそめる。

「言葉に意志がなきゃ、人は、哀しむことも、傷つくこともないかも知れない。けど、きっと、楽しむことも、喜ぶことも出来ない」胸の前へと持って来た右手の拳を、アヒルが強く握り締める。

「そんな言葉じゃ、何の意味もない」

アヒルが握り締めた拳を振り下ろし、その反動で、勢いよく顔を上げる。

「あんたの消そうとしてる言葉を、俺は少しも不要だなんて思えねえ……！」

「……………」

必死の訴えを続けるアヒルの声を、いつの間にか笑みを消した阿修羅が静かに、何の表情もない顔を少しも動かすことなく、聞き続けた。

「だから俺は……！」

「どんなに強く、言葉を投げかけても無駄だ、アヒル……」

やっと声を落とした阿修羅が、力の抜けたような、冷めた笑みを浮かべる。

「どんなにお前が言葉を発しても……俺とお前が、言葉を交わすことない」

「え……？」

阿修羅の言葉の意味が理解出来ず、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「俺の言葉は、もう、死んだんだ」

どこか諦めるように、落とされる声。

「五年前の、あの日に……」

――私は、どうして生きているのかな……？――

――ねえ、お兄ちゃん……――

Word. 59 死ンダ言葉 (1)

——君の居た、あの美しい世界に、還^{かえ}りたい。

七年前、韻本部。

「本日、今この時から、あなたを、五十音士の一人、“加守”と認めます」

長々と文字の書かれた書類を最後まで読み、やつのことで顔を上げたのは、小花柄の美しい着物を纏った、まだ幼さの残る少女の言姫、和音であつた。

「自身の言葉に誇りを持ち、日々、人々の言葉を守ることに励むように。良いですね？」

そう告げた和音が、柔らかに笑みを浮かべる。

「朝比奈カモメ」

「はい、了解しました！」

和音の言葉に、大きな声と笑顔で答えたのは、朝比奈カモメ。和音よりは幾つか年上だが、まだ、高校生になつたばかりの十六歳であつた。

「ほ、本当におわかりですか…？」

「はい！日本語難しくて、言姫さんの説明、九割くらい意味わかんなかったけど、わかりましたあ！」

「それは、わかつたことになるのでしょうか…」

満面の笑みで、何の悪びれもなく言い放つカモメに、和音は怒ることも出来ずに、力の抜けた様子で深々と肩を落とした。

「まあいいですわ。では引き続き、顔合わせに参りましょう」

「顔合わせ？」

「今日からあなたが共に戦っていく仲間であり、そして、あなたが守っていくべき方となります」

戸惑うように首を傾げたカモメに、和音は再び、笑みを向ける。

「さあ、どうぞ」

和音の声に反応するように、開く部屋の扉。そこから入って来る人物へと、カモメが視線を投げかける。入って来たのは、カモメとそう年の違わない、真っ赤な髪に、鋭い金色の瞳の、整った顔立ちをした青年であった。

「あ…」

青年が纏う、どこか静かで近寄りがたい、神秘的なその空氣に、カモメが思わず声を漏らす。

「神…」

「ええ、そうです。彼こそが、あなたの神」

カモメが呟いたその言葉に、和音が大きく頷く。

“安の神”、安積晶あづみあきらですわ」

「安の、神…」

和音が発した言葉を、カモメが確かめるようにゆっくりと繰り返す。

「というわけで安の神、彼が今日からあなたの神附きとなる…」

「俺の質問に、五秒以内に答えろ…」

「へ？」

続いてカモメを紹介しようとした和音の言葉を遮って、素早くカモメへと歩み寄った晶が、そう言い放つ。いきなりの晶の言葉に、カモメはただ、困惑した様子で目を丸めた。

「これ、何と読む？」

そう言ってカモメへと、一枚の紙を突き出す晶。その紙には縦に大きく二文字、『河豚』と書かれていた。

「えええ？ うう…んと…」

紙を睨むように見つめ、カモメが大きく首を捻る。

「“かわぶた”？」

「じゃあ」

「お待ち下さい、安の神！」

首を傾けたままカモメが答えると、晶はそれに何の反応も示さず

に、その場を去ろうとする。そんな晶の肩を和音ががっしりと掴み、強く引き止める。

「彼は先代加守が、自信満々で推薦した方ですわよ？彼ほど、音士に相応しい者はいないと」

「老眼でも始まってたんじゃないの？もう結構なお年だったみたいだし」

「左守さんまで…」

二人の会話に横から口を挟んだのは、晶に引き続いて部屋へと入って来た、こちらもカモメと同じ年くらいの、美しい少女であった。長い髪を掻き上げながら、鋭い微笑みを浮かべている。

「確かに言葉に難はありますが、力は相当のものですわよ？それは認定試験の際に、わたくしも確認いたしました」

「最近は五十音士の成り手が少ないから、認定試験も緩めだって聞いたけれど」

指摘するように言う少女に、和音は思わず口ごもり、少し眉をひそめる。

「もう、彼が加守に決まったんです！諦めて下さい！」

「投げたわね…フッフ…」

自棄になって叫ぶ和音に、少女が笑い声を漏らす。

「まあ別に、忌退治でも何でも、適当にやってくれればいい。俺も適当にやるから…」

「あ…！」

素っ気なく言って、あっさりとその場を去っていく晶に、和音が慌てた様子で、声をあげる。

「ちょ、ちょっと！安の神！」

「もう顔合わせも終わったんだから、いいだろう？俺は帰る…」
引き止める和音の言葉も聞かずに、晶は振り返ることなく部屋を出て行った。扉が閉まると、和音が困ったような表情で、深々と肩を落とす。

「相変わらず、奔放な方ですわね…」

「フフフ：一応、今度、注意しておくわ」

呆れたように言う和音に、少女がそっと笑みを浮かべる。

「ごめんなさいね、あんな神様で」

少女が顔の向きを変え、改めてカモメの方を見る。

「私は“左守”の相良櫻。さがらみくら今のところ、安団は三人だけだから、仲良くしましょう？」

「ううん」

右手を差し出した櫻を前に、大きく首を捻るカモメ。そんなカモメの様子に、櫻が少し戸惑う。

「どうかした？」

「さっきの“かわぶた”って、一体、何て読むのお？」

「え…？」

真ん丸とした純粋な瞳を向けてくるカモメに、櫻が思わず、啞然とする。

「だ、大丈夫かしら？うちの団…」

「さあ…？」

カモメを見つめながら、櫻は和音と共に、不安げな表情を見せた。

数日後。言ノ葉町からは少し離れた町、しおり栞町。栞高校、放課後。

「はあ」

ネクタイの締まった首元を少し緩めながら、他の下校する生徒に紛れ、ゆつくりと正門への道を進む晶。一日の授業に疲れたのか、深々と溜息を零している。

「マグネシウムが足りない気がする…水でも買って行こうかな…」

「あ、神様ああ！」

「は…？」

馬鹿でかく聞こえてくるその単語に、財布の中身を確認していた晶が、眉をひそめ、素早く顔を上げる。

「神様 あああ！」

「あいつ……」

正門の前に立ち、晶へと大きく手を振っているのは、いかにも何も考えていなさそうな笑みを浮かべた、カモメであった。カモメの姿を視界に入れ、晶が思わず顔をしかめる。

『神様？』

周りにいる下校している生徒たちが、カモメの呼んでいる名を不審に思い、疑うような視線で晶の方を見ている。それに軽く舌を鳴らすと、晶は足早にカモメのもとへと歩いて行った。

「何故、お前がここに居る……？そして、お前は誰だ……？」

「ええええ！？覚えてないのお？俺、加守だよお、加守！神様の神附きになった」

「ああ、“かわぶた”か」

首を傾けた晶へと、カモメが必死になって主張すると、晶はやっと思いだしたように頷いた。

「韻で聞いたんだあ。神様、この学校に通ってるって」

「“神様”はやめろ」

「へ？」

笑顔で答えるカモメに、鋭く注意する晶。だがカモメは、今も集めている視線には気付かずに、わけがわからないといった様子で目を丸くする。

「じゃあ何にする？神ちゃん？」

「名前で呼べ」

カモメに強い口調で言いながら、正門を抜け、道を曲がる晶。同じ学校の生徒たちの向けられている冷たい視線から、少しでも早く遠ざかりたかったのだ。足早に歩いていく晶を、カモメが後に続くように、追いかけていく。

「わかった！ええーっと、あれ？神様、名前なんだっけ？」

「安積晶だ」

「あ、そうそう。じゃあ晶だね」

冷たくあしらう晶を気にしていないのか、気付いていないだけなのか、相変わらずの笑顔を見せるカモメ。

「自分の神の名前くらい、一度で覚えろ。かわぶた」

「神様だって、俺のこと、誰かわかってなかったじゃん」

「まあ、それはそうだが…」

「あ、そうそう。あれ、読めたんだあ」

晶の素っ気ない言葉にも眉一つ動かさず、まったく気にしていない笑顔で、カモメが自分の鞆の中を漁り始める。

「“フグ”でしょ？フグ！家族に聞いても誰もわかんなかったから、国語の先生に聞いてしまった！」

カモメが鞆から取り出したのは、以前、韻での顔合わせの際に、晶がカモメへと渡した、大きく『河豚』と書かれた紙であった。

「ねえ、凄いでしょ？」

「人に聞いている時点で、凄くないだろう」

笑顔で問いかけるカモメに、晶が冷たく答える。

「だいたい、そんなもの、音士であるなら読めて当然で…」

「食べ物問題ならさあ、今度は野菜にしない？大根とか牛蒡とか玉葱とか」

晶の言葉を遮って、カモメが提案するように、人差し指を突き立てる。

「俺ん家、八百屋だから、野菜問題なら得意なんだあ」

「八百屋…？」

その言葉に反応し、晶がやっと、カモメの方を振り返る。

「何だ？それは」

「へ？」

素朴な問いかけを向ける晶に、カモメが目丸くする。

「野菜ばかり売ってるお店だよお？知らない？」

「見たことない」

「えええ？」

晶の答えに、驚きの表情を見せるカモメ。その間にも晶が前を向

き、再び足早に道を歩いていく。

「そっかぁ。葉町って言ノ葉に比べたら、都会だもんねえ。スーパ―ばかりで、八百屋なんてないのかなぁ？」

どんどんと進んでいく晶の後を追いつながら、周囲に立ち並ぶ高層マンションを見回し、カモメが少し残念そうに肩を落とす。

「あ、じゃあ今後、ウチに来ない？ トマトとか、すごい安くして……！」

「行かない」

「あ、そお」

あつさりと答える晶に、カモメはまたしても残念そうに肩を落とした。

「で？ お前はいつまで、俺に附いて来る気だ？」

「へ？」

不意に足を止め、振り返り問いかける晶に、カモメが戸惑うように顔を上げる。晶の前方には、巨大な建物が見えた。ここが、晶の目的地だろうか。

「病院……？」

十階近い高さの、清潔感のある真っ白な建物の上部には、『葉総合病院』と書かれた看板が掛けられていた。その看板を見上げ、カモメが大きく首を傾げる。

「晶、頭でも悪いのお？」

「悪いのはお前だろう。とっととその野菜ばかりの家にでも、帰るんだな」

「あ……！」

カモメに冷たく言い放つと、晶はそのままカモメに背を向け、病院の中へと姿を消してしまった。カモメが晶へと伸ばそうとした手を下ろし、ゆっくりと病院を見上げる。

「誰かのお見舞い、かなあ？」

考えを巡らせ、カモメが首を捻った。

「失礼しました」

「ああ、またね。安積君」

白衣を纏った医者らしき男に深々と礼をして、晶が部屋を出る。横幅の広い病院の廊下に出ると、車椅子や松葉杖の患者が、看護婦と共に多く、行き交っていた。晶もその流れに乗り、ゆっくりと廊下を歩き始める。

「……………」

視線を下へと向け、床ばかりを見つめて歩く晶。やがて一つの病室の前で立ち止まると、その病室の扉を見つめ、何やら考え込むように目を細めた。

——あまり良いとは言えない状態だよ。何とか症状が好転してくればいいんだけど、その可能性も低くてね……—

「はぁ…」

先程の医者 of 言葉を思い出し、晶が深々と溜息を吐く。

「知ってるう？溜息吐くと、幸せが逃げちゃうんだよお？」

「……………」

すぐ傍から聞こえてくる声に、晶が勢いよく顔をしかめる。

「幸せを呼び込むためには笑顔、笑顔！ね？」

晶の後方から、晶のすぐ横へと回り込み、兩人差し指を頬へとつけて、満面の笑みを晶へと向けるのは、カモメであった。そのカモメの笑顔に、晶が益々、眉を引きつる。

「誰だ？」

「うわぁ、たったの十分とかで、もう忘れちゃったあ？」

短く問いかける晶に、困ったような笑みを浮かべるカモメ。

「晶、ここの病室にお見舞いの？」

「お前には関係な…」

「お邪魔しまあーす！」

「お、おい！」

晶の言葉も聞かず、目の前の病室の扉を遠慮もなく開けるカモメに、晶が病院の廊下であるというのに、思わず怒鳴り声をあげる。

「お前！ いい加減に……！」

「あ、お兄ちゃん！」

「……っ」

耳に入る幼い声に、晶がカモメを怒鳴ろうとしていた声を止める。

「おかえり！」

病室の真ん中に置かれたベッドの上から、入って来た晶へと、何とも嬉しそうな笑顔を見せるのは、まだ十歳くらいの幼い、愛らしい少女であった。ぱっちりとした大きな瞳は、眼光鋭い晶とは似ても似つかないが、ふわふわとした赤毛や整った顔の造りは、よく似ていた。

「飛鳥^{あすか}……」

「飛鳥ちゃんていうのお？ こんにちはあー！」

「え？」

見知らぬ男、カモメに馴れ馴れしく名を呼ばれ、飛鳥が戸惑うように顔を上げる。

「こんにちは。お兄ちゃんのお友達さん？」

「うん！ 大親友の朝比奈カモメでえーす！」

「誰がだ」

調子よく答えるカモメに、晶が勢いよく顔をしかめる。

「いいからお前はとっとと、出て行っ……」

「私、お兄ちゃんの妹の安積飛鳥。よろしくね、カモメくん」

「うん、よろしくうー！」

「…………」

カモメを追い出そうとした晶であったが、何やら楽しげな笑顔で言葉を交わすカモメと飛鳥に割って入ることが出来ず、仕方なく黙り込む。

「何してたのお？」

「折り紙。でも、もう飽きちゃって」

問いかけるカモメに、飛鳥が少し困ったように答える。確かに、飛鳥のベッドに設置された机の上には、結構な数の折鶴が並んでいた。これだけ折れば、飽きてくるのも無理はない。

「よおーし、見てて！」

「え？」

飛鳥のベッドの隣に置いてある椅子へと腰掛けたカモメが、持っていた鞆を床へと置き、空いた両手を準備運動でもするように、小刻みに動かしていく。その様子を、少し戸惑った表情で見つめる飛鳥と晶。

「ううーん」

低い唸り声を漏らしながら、深く瞳を閉じ、何やら瞑想し始めるカモメ。

「ポン！」

カモメが大きな声をあげ、右手を突き上げたその瞬間、カモメの右手の中に、真っ赤に熟れたトマトが現れた。

「トマトお！」

突然、カモメの右手の中に現れたトマトを見つめ、飛鳥が感動の声をあげる。

「左手からもおーポン！」

カモメがまた大きな声をあげ、今度は左手を突き上げると、左手の中には、長細い緑色のきゅうりが現れた。きゅうりを見て、飛鳥がさらに瞳を輝かせる。

「今度はきゅうり！ 凄い！ カモメくんって、手品師なの！？」

「俺はただの野菜屋さんだよお」

ウキウキと弾むような声で問いかける飛鳥に、カモメが穏やかな笑みを向ける。

「野菜屋さん？ じゃあカモメくんのお家には、お野菜がいっぱいあるの？」

「うん。キャベツなんて、ダンボール五個分くらいあるよお」

「凄い！私、野菜屋さんて、行ったことないんだあ」

「いつでも遊びに来ていいよお。飛鳥ちゃんになら、どの野菜もいっぱい、オマケしちゃうから」

「ホントおー！？」

カモメと言葉を交わしていく度に、飛鳥の笑顔が大きくなり、体の動きが大きくなり、元気になっていくようであった。そんな二人の様子を、壁にもたれかかって、まっすぐに見つめる晶。

「……っ」

飛鳥の笑顔を見つめ、晶もそっと、笑みを浮かべた。

Word. 59 死ンダ言葉 (2)

「うわあ、もうこんな時間だ」

病室の掛け時計が五時半を差していることに気づき、カモメが慌てた様子で、椅子から立ち上がる。

「カモメくん、もう帰っちゃうの？」

「ごめんね、飛鳥ちゃん。俺帰って、弟たちのご飯作らないと行けないんだあ」

「そっかあ」

納得するように頷きながらも、飛鳥は残念そうに肩を落としていた。

「また来るよ。今度は抱えきれないくらいの野菜を持って」

「やめてくれ…」

「晶？」

ひっそりと聞こえてくる声に、カモメが戸惑うように振り返る。

「お兄ちゃんは野菜が嫌いな。見るのも好きじゃないから、野菜の種類とかも全然わからないんだよお」

「そりゃ大変だ！手遅れになる前に、何とかしないと！」

「何の手遅れだ…」

ひどく慌てた様子を見せるカモメに、晶は呆れたように言った。

「じゃあねえ！」

ベッドの上から大きく手を振る飛鳥に応えながら、カモメが病室を後にする。飛鳥に言われ、カモメを病院の出口まで送ることになった晶が、渋々、カモメを先導する。

「イイ子だねえ、飛鳥ちゃん」

先に行く晶の背へと、カモメが笑顔で声をかける。

「あ、俺の弟たちも負けず劣らずのイイ子なんだよお！良かったら今度、連れてく…」

「必要ない」

「あ、そお」

あっさりと晶に断られ、残念そうに肩を落とすカモメ。

「お前にも、二度と来なくていいと言おうと思っていたが」
病院の出口を出たところで、晶が足を止める。

「飛鳥のあんなに笑っている顔は、俺も久し振りに見た」
「え？」

晶につられて足を止めたカモメが、戸惑うように首を傾げる。

「だから、また、来てやってくれ」

ゆっくりと振り返り、晶がまっすぐにカモメを見る。

「今日は、ありがとう…」

向けられたその言葉に、カモメは少し驚くように目を見開いた。
素っ気なく落とされたその言葉には、何の偽りもなく、ただ素直に
晶の気持ちが表示されているような、そんな風に見えた。

「うん！またね、晶！」

カモメも、精一杯の笑顔で応え、大きく手を振ると、晶に背を向け、そのまま病院を後にしていった。道の向こうへと見えなくなっ
ていくカモメの背を、晶はしばらくの間、見つめる。

「おかしな奴…」

呆れるように言いながらも、そっと笑みを零す晶。

「ん…」

だが晶の表情が、急に鋭くなる。

「忌の、気配…」

夕焼けに染まる空を見上げ、晶はそっと表情を曇らせた。

一方、晶と別れたカモメは、自分の町である言ノ葉へ帰るため、
見知らぬ道を何となくの感覚で進んでいた。

「今日の晩御飯、何にしよっかなあ」

赤く染まる空を見上げながら、カモメが首を傾げる。

「昨日の売れ残りに人参とジャガイモと玉葱があつたし、カレーにしようかな。アーくん、カレー好きだし」

自分で納得するように数度、頷き、笑顔を浮かべるカモメ。弟たちの喜ぶ顔を連想すると、その分、足取りも軽くなる。

「さあ、早く帰……！」

「きゃああああ！」

「……！」

すぐ近くから聞こえてくる悲鳴に、カモメが軽かった足取りを止め、その場に立ち止まり、眉をひそめる。

「悲鳴？」

少し戸惑いながらも、カモメはすぐさまその場を駆け出し、悲鳴の聞こえてきた方へと駆け出した。細い道を通り抜け、人気のない裏路地へと出る。

「確か、この辺から……」

「助けて、助けて！」

再び声が聞こえてきて、カモメが振り向く。長い髪を振り乱しながら、カモメの居る方へと、必死に駆け抜けてくるのは、二十代半ばくらいの、まだ若い女であつた。女が必死に助けを求めながら、カモメのすぐ傍までやって来る。

「助けて！」

「一体、何が……」

「グアアアアア！」

しがみついてくる女に、何があつたのかを聞こうとしたカモメであつたが、その問いは、続いて聞こえてきた激しい叫び声に、見事に掻き消された。人のものとは思えない、低く、重いその叫び声に、カモメが一瞬で、険しい表情を作る。

「忌……！」

逃げてきた女を追うように、その場へと現れたのは、その女と同世代くらいの、地味めの女性であつた。大人しく控え目そうな女性の背後には、禍々しい黒い影が見える。女性の瞳は虚ろで、発して

いる声も女性のものにしては低すぎる。忌に取り憑かれているということは、すぐにわかった。

「グアアアア！ “破”！」

「あ…！」

「いやあああ！」

忌に取り憑かれた女性が、カモメと逃げてきた女へ右手を向け、激しい衝撃波を放つ。向けられた衝撃波に、カモメが焦ったように目を見開き、女が鬼気迫った悲鳴をあげる。

「五十音、第六音…！」

しがみついている女を何とか後方へと回し、制服の胸ポケットから、真っ赤な言玉を取り出すカモメ。

「“か”、解放！」

カモメの言葉に反応し、言玉が強い赤色の光を放ち始める。

「クワアアア！」

言玉から姿を変え、その場へと現れたのは、眩い金色の光で形作られた、一羽の巨大な鳥であった。上空で道幅よりも広い両翼を広げ、鳥は甲高い鳴き声をあげる。

「きやあああ！」

現れた巨鳥に、カモメの後方で、さらに悲鳴をあげる女。

「行くよ、カー坊」

カモメの呼びかけに応え、巨鳥が大きく頷く。

「“掻き消せ”！」

「クワアア！」

カモメが高らかと言葉を放つと、上空の巨鳥が大きく両翼をはためかせ、カモメたちへと向かって来ていた衝撃波を、同程度の強い風で粉碎した。

「じゃあ、町に被害出ちゃうから、何もないところまで移動しようか」

「へ？」

そう笑顔で言い放ち、もうわけがわからなくなっていた女を、降

りてきた巨鳥の背へと乗せるカモメ。そんなカモメに女が戸惑う中、カモメも続いて、巨鳥の背に乗る。

「“翔^かけろ”！」

「なんで私までええ！？」

女の悲痛な叫び声が響く中、カモメたちを乗せた巨鳥は、目にも留まらぬ速さで空を駆け抜けていった。

「ふう、この辺まで来れば平気かなあ」

人気も民家もない町はずれの平原までやって来ると、カモメは女と共に巨鳥の背から降りた。すでに日は落ち、辺りは暗闇が包んでいる。女は夜間飛行に相当、神経をすり減らされたのか、降りたばかりの地面に膝をつき、肩で大きく息をしていた。

「な、何なのよ…？あんたは、一体…」

「ねえ」

「へ？」

困惑している女へと、しゃがみ込んだカモメが視線を合わせ、呼びかける。

「さっきの女の人にさ、何を言ったの？」

「……っ」

穏やかな笑顔で問いかけるカモメに、女が勢いよく表情を曇らせる。

「別に、何も…」

「もう一回、鳥さん乗る？」

「い、言うわよ！言えばいいんでしょ！？」

脅しとも取れるカモメの誘いに、女が慌てた様子で必死に頷く。だが女はすぐに浮かない表情となって、カモメから逃げるように、視線を下へ落とした。

「あの子、地味でいつも暗いから…その、“一緒に居るとこっちまで暗くなる”って…」

少し躊躇うようにゆつくりと、言葉を繋げていく女。

「居なくなってくんない” って…言った、わ」

「うわぁ、最低」

「最低なのは、わかってるわよ！」

批判するように呟いたカモメに、女が顔を上げ、勢いよく怒鳴りあげる。

「私が悪いのは、わかってるわよ！だからって、私をあの女の前に突き出す気！？私に死ねって言う気！？」

「何だぁ、わかってるんだ」

「へ？」

必死に怒鳴り続けていた女が、カモメの言葉と、その力の抜けきったような柔らかな笑みに、思わず言葉を止め、戸惑うように眉をひそめる。

「わかってるなら、大丈夫だよ。死ぬ前に、出来ることがある」

「え…」

「グアアアアア！」

『……！』

二人が会話をしていたその時、聞き覚えのある激しい唸り声が聞こえてきて、二人はすぐに表情を険しくし、振り向いた。忌に取り憑かれた女性が、女を追ってやって来たのだ。

「破”！」

「あ…！」

間髪入れずに衝撃波を放ってくる女性に、カモメが焦ったように声を漏らす。

「カ、カー坊…！」

「“当たれ”」

「え…？」

カモメが巨鳥を呼ぼうとしたその時、一つの言葉がカモメの耳に入り、それと同時に赤い光の弾丸が、カモメの横を駆け抜けていく。思わず目を見張り、カモメが視線で追う中、光の弾丸は、迫り来る

衝撃波と正面からぶつかり合い、その場で弾け飛ぶようにして相殺した。

「敵に追われているのに、雑談している奴があるか…?」

「あ…」

ゆっくりとした足取りで、カモメと女のもとへと歩み寄って来るのは、右手に真っ赤な銃を構えた晶であった。カモメが少し茫然とした様子で、晶を見つめる。

「晶…奇遇だねえ」

「奇遇なわけがないだろう…」

笑顔で手を振るカモメに、晶が呆れた様子で肩を落とす。

「あ、もしかして晶、忌の気配を追って?」

「当たり前だ」

「グ…!」

鋭く言い放ち、銃口を向ける晶に、女性に取り憑いている忌が、少し焦ったような声を漏らす。カモメ一人の時は追って来たが、さらに五神の一人である晶まで現れ、怖気づいているのだろう。

「あの忌は、俺が倒す…お前はその女を連れて、この場を離れろ…」

「やったあ!」

晶の指示に、とても嬉しそうに両手を突き上げる女。

「さ、あんたの仲間もああ言ってることだし、私たちはとっとと…!」

「ううん、俺たちもここに居るよ」

「なんでよ!?!」

あっさりと晶の指示に首を振るカモメに、女が思わず怒鳴りあげる。まったく笑みを崩さないままカモメが、ゆっくりと女の方を振り向いた。

「さっき言ったでしょ?死ぬ前に出来ることがあるって」

カモメがさらに目を細め、大きく笑みを浮かべる。

「謝ろうよ。あの人に」

「え…?」

思いがけないカモメのその言葉に、女が驚いた様子で、大きく目を見開く。

「馬鹿なことを言うな。お前たちは今すぐ、この場を離れるんだ」

「この人に謝らせる。それまで俺は、ここを離れる気はないよ」

もう一度強く指示する晶であったが、それでもカモメは、頷きはしなかった。

「謝らせる”なんてことは、五十音士の役目ではない」

「五十音士の役目は、忌を倒すことだけ？」

言葉が続ける晶へ、カモメが真剣な表情を向ける。

「じゃあ、あの人の傷ついた心は？この人の傷つけてしまった心は、どこへ行けばいいの？」

「……っ」

まっすぐに向かってくるカモメの視線に、晶は少し不快そうに、目を細めた。

「誰が、受けとめるの…？」

「……俺はお前の神で、お前は俺の神附きだ」

カモメの問いかけに少し間を置いて、晶がそっと呟く。

「お前は、俺の指示に従っていればいい…」

「うん、わかってる」

すぐに頷いたカモメが、穏やかに微笑む。

「でも俺は、俺の神様には、誰の心も、誰の言葉も受けとめる、そういう神様で在ってほしいよ」

願うように言いながら、ただまっすぐに、優しい笑みを向けるカモメを見て、晶は少し目を細めると、何も言わないまま正面を向き直り、銃口を向けた忌の方を見つめた。

「あ…」

晶が大きく口を開き、自分の文字を口にする。

「^{あしかせ}足枷”」

「グ…！？」

晶の銃口から放たれた細長い弾丸が、忌に取り憑かれている女性

の両足へと巻きつき、女性の動きを封じる。その場から動けなくなると、忌は益々、焦りの表情を見せた。

「アシカ、背？」

「動きは止めた」

先程、晶が発した言葉の意味が理解出来ず、首を傾げているカモメへと、晶が再び声を掛ける。

「早くしろ」

振り返り、素っ気なく言う晶に、カモメは大きく目を見開くと、すぐさま嬉しそうな笑顔を見せ、後ろにいる女の方を振り返った。

「さ！神様がチャンスをくれたよお？」

「神様？」

その単語に首を傾げている女を、カモメが自分の前へと軽く押し出す。女は動きを止められている女性と向き合っていると、どこか気まずそうに何度も視線を下げながら、それでも何度も視線を上げ、やつのことでまっすぐに女性を見つめた。

「ごめん！」

「……っ」

女が発したその言葉に、女性の表情がかすかに動く。

「あんな酷いこと、いっぱいいっぱい言ってごめん！全部、私が悪かったってわかってる！だから、だから……！」

声を、思いを振り搾り、女が必死に言葉を紡ぐ。

「許して……！」

真剣な表情でその言葉を発した女の瞳から、涙が零れ落ちる。

「グ……ウ……グアアアアア！」

女性に取り憑いた忌が、途切れ途切れの苦しい声漏らしたかと思うと、突然、激しい叫び声をあげる。激しい声があがった途端、女性の体から、強い白色の光が放たれ、暗闇の包む周囲を、きつく照らし出した。

「あ……ああ……」

光が収まると、女性がゆっくりと目を閉じ、その場に倒れ込む。

「これは…」

<グググ…!>

倒れた女性を見つめ、眉をひそめていた晶が、上空から聞こえてくる声に、素早く顔を上げる。月明かりの輝く夜空に、一つの禍々しい黒い影が浮かんでいた。暗闇に潜む赤色の瞳は、明らかに忌である。

「体から抜け出た…謝られたことで、宿主の“痛み”が消えたからか…」

「“快眠”^{かいみん}」

「ん…？」

聞こえてくる言葉に、晶が振り向く。振り向いたその先では、巨鳥を操ったカモメが、謝り終えた女を眠らせ、地面へと丁寧に横たわらせていた。

「ついでに、俺たちの記憶も消しといたからね」

よく眠る女を見下ろし、カモメが優しく微笑む。

「さあ、じゃあ心置きなく、忌退治といこうかあ！」

「神を差し置いて、しゃしゃり出るな…」

張り切った様子のカモメに、晶が呆れたように声を掛ける。

<グググ…マズイな…ここは一度、逃げるか…!>

焦ったように声を漏らした忌が、二人へと背を向け、闇夜に紛れてその場を逃げ去ろうとする。

「あいつ…!」

「おい」

「へ？」

慌てて追いかけようとしたカモメを、呼び止める晶。

「何、晶？早く追わないと、あいつが…」

「俺が叩く。援護しろ」

振り返ったカモメへと、晶が強い視線を向ける。

「カモメ」

「……っ」

初めて呼ばれる名に、カモメは少し驚いたように目を見開いたが、それも一瞬で、すぐに大きな笑みを作った。

「仰せのままに、我が神」

カモメのその言葉を聞き、満足げな表情を見せると、晶が銃口を自らへと向ける。

「^あ“上^あがれ”」

そのまま自身へと弾丸を放ち、空へと上昇していく晶。

「じゃあ行こうか、カー坊」

地上に残ったカモメが、後方で舞う巨鳥へと声を掛ける。カモメの呼びかけに応えるように、巨鳥は準備万端とばかりに、大きく翼を広げる。

「^{かまいたち}“鎌鼬”！」

「クワアア……！」

巨鳥が鋭く翼を動かし、強い風の塊を上空の忌へと放つ。

「くな、何……！？ググ……！」

逃げ去ろうとしていた忌が、風の塊に吞まれ、その場で動きを止められる。

「^{あつしちく}“圧縮”……」

「く……！！」

すぐ傍で聞こえてくる言葉に、必死に風を堪えていた忌が、素早く顔を上げる。忌のすぐ前方には、忌へと銃口を向けている晶の姿があった。銃口の前に光を集約させ、晶が引き金を引く。

「^あ“当たれ”」

「く……ギヤアアア……！」

晶の放った強烈な光の弾丸を、正面から直撃し、忌は激しい悲鳴をあげながら、あっという間に黒い霧と化し、夜の闇に紛れるように、掻き消えていった。悲鳴が途絶え、光が収まると、その場にもとの静寂に戻る。辺りが静まり返る中、銃を下ろした晶が、ゆっくりと地面に下降していく。

「ふう」

地面に降り立ち、一息ついた晶が、銃をもとの言玉の姿へと戻す。

「ご苦労さま、カー坊」

手元に戻ってきた巨鳥を労うと、カモメもその姿言玉へと戻し、もとあった制服のポケットの中へと入れた。

「晶、凄かったよおゝさすが神様」

親しげに話しかけながら、カモメが晶のもとへと歩み寄っていく。やって来るカモメを見て、少し目を細めたかと思うと、晶はすぐに視線を逸らし、倒れている、忌に取り憑かれていた女性の方を見つめた。

「神になって、結構な数の忌を倒して来たが…」

女性を見つめたまま、晶が真剣な表情を見せる。

「宿主が、相手の言葉を許したところを見たのは、今日が初めてだ…」

「チャンスがなかったただけだよ。人は誰だって、人の言葉を許す」

晶の横に並んだカモメが、穏やかに笑う。

「俺はそういう、“人”の、許し合えるところが、好きだよ」

カモメの言葉を聞きながら、晶がゆっくりと、視線を空へと上げていく。

「やっぱり、おかしい奴だな。お前は…」

こうして、晶とカモメが初めて共に戦った、忌退治が終わった。

Word. 59 死ンダ言葉 (3)

翌日。

「確かに“また来い”と言ったのは、俺だが…」

今日も一日の授業を終え、飛鳥の待つ病室へとやって来た晶が、扉を開けた途端、勢いよく表情をしかめる。

「じゃーん！果物詰め合わせならぬ、野菜の詰め合わせえー！」

「すごーい！」

何故かすでに病室に居るカモメは、きつちりとベッドの横の椅子を陣取り、色取り取りの野菜の入った大きなカゴを抱えて、飛鳥と楽しげに笑い合っていた。

「おい、カモメ」

「ああ、晶」

「おかえり、お兄ちゃん！」

晶が呼びかけたことで、やっと晶が病室へと入って来たことに気付いた様子のカモメと飛鳥。

「そんなに険しい顔しなくても、誰も無理やり、晶に野菜ステイック食べさせようだなんて、思っていないよ」

「俺も別に、お前がそんなくだらないことをしようとしているとは思ってなかったがな…」

不自然なほどの笑顔で、大きく首を横に振るカモメに、晶が鋭い視線を向ける。

「何故、お前が俺より先に居る？お前も学校に通っているはずだろう…？」

「ん？それはあ、学校から“駆けろ”の言葉で、ピヤッと来ちゃったからあ」

「はあ？」

軽い口調で答えるカモメに、晶が思いきり眉をひそめる。

「そんなことに、言葉の力を使うんじゃない！」

「うわあ！」

晶に強く怒鳴られ、思わず身を縮めるカモメ。

「フフフ：晶の怒鳴り声なんて、初めて聞いたわね」

病室の扉の開く音と、入って来る凜とした声に、晶とカモメが同時に顔を上げる。開いた扉の向こうから現れたのは、大きな花束を抱えた櫻であった。

「あ、君は確かあ」

「左守の相良櫻よ。櫻でいいわ、カモメ」

首を傾げているカモメを察するように、櫻が再び名を名乗りながら、病室の中へと入って来る。

「私の知らないうちに、随分と仲良くなったようで：お二人さん」

「別に：」

含んだ笑みを向ける櫻に、晶が落ち着きを取り戻しながら、深々と肩を落とす。

「こんにちは、飛鳥ちゃん。はいこれ、お見舞い」

「ありがとう、櫻ちゃん！」

櫻から花束を受け取り、飛鳥が嬉しそうに笑みを零す。

「今日は櫻ちゃん、一人？」

「ううん」

首を傾げ、問いかける飛鳥に、櫻がそっと笑みを浮かべると、病室の入口の方を振り返る。

「いつまで廊下で見舞っているつもり？^{なつめ} 棗」

「へ？」

何やら呼びかける櫻の言葉に戸惑うように、カモメが病室の入口を振り返る。すると再び扉が開き、ゆっくりとした足取りで、新たな人物が入って来た。

「こ、こんにちは：」

「棗ちゃん！」

病室へと入って来たのは、長い茶色髪の、可愛らしい少女であった。中学生くらいだろうか、カモメたちよりは少し年下に見える。

棗と呼ばれた少女の姿を視界に入れると、飛鳥はまた、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「飛鳥ちゃん、こ、これ」

「ありがとう！棗ちゃん！」

棗からクマの人形を受け取り、飛鳥が大きく礼を言う。

「いつも済まない、棗」

「い、いえいえいえ！そ、そんなそんなそんな！」

晶が横から声を掛けると、棗はあっという間に顔を真っ赤にして、どこか必死に言葉を繋げた。そんな棗の姿を横目に、櫻が少し困ったように微笑む。

「カモメは初めてよね。この子、私の妹の棗」

「よ、よろしくお願いします」

櫻に紹介され、棗がカモメへと深々と頭を下げる。

「彼は朝比奈カモメ。私と同じ晶の神付きで、“加守”よ」

「どうもお」

「加守、さん…」

笑顔を向けるカモメを見つめながら、棗が何か考えるように、真剣な表情を見せた。

「ねえ、せっかくだたくさん集まったんだし、皆で何かして遊ぼうよ！」

「いいねえ、それ」

飛鳥の提案に、カモメが大きな笑顔で頷く。

「じゃあ、野菜シルエットクイズとかあ」

「野菜握り潰し選手権…」

「ええ！？勿体ないこと、言わないでよお晶」

「アハハ！」

こっそりと呟く晶と、そんな晶に嘆くように訴えるカモメ。二人の様子を見て飛鳥は、とても楽しそうな笑みを浮かべた。

「またねえ〜！」

余程、楽しい時間を過ごしたのか、満面の笑みの飛鳥に見送られ、四人が病室を出る。カモメが帰る時間となったため、櫻と棗もついでに帰ることとなり、晶は三人を見送りに出たのである。

「ああ〜楽しかった！明日は何の野菜、持って来よっかなあ〜」

「明日も来るのか…」

横に並んだカモメの暢気な声に、晶がどこかげっそりと、疲れたように肩を落とす。

「プチトマトの詰め合わせにしようかなあ」

「そんなに毎日持ってきて、店の経営は大丈夫なのか…？」

「大丈夫だよ。全部、売れ残りだし」

「本当に、大丈夫、なのか…？」

笑顔で答えるカモメを見つめ、晶がどこか不安げに表情を曇らせる。

「何か…雰囲気変わったよね。晶さん」

二人の少し後方を櫻と共に進みながら、棗がポツリと呟く。

「ちょっと前まではこう、もっと、近寄り難いオーラが全開だったっていうか…」

「いい傾向じゃないかしら」

戸惑う棗の横で、櫻がそっと笑みを浮かべる。

「晶って元々、人付き合いとか下手な方じゃない…？だから、あれくらい頭の軽い相手の方が、何の考えもなく付き合えるのかも」

「それって、さり気なくカモメさんに、凄く失礼なんじゃ…」

姉の失礼発言に、思わず顔を引きつる棗。

「意外と、いい団になるかも知れないわね。うちも」
「……っ」

櫻がそう言った途端、棗がどこか寂しそうに、表情を曇らせる。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん…？」

「五十音士になるには、どうしたらいいの？」

「え…？」

棗の思いがけない言葉に、いつも落ち着いている櫻も、さすがに驚きの表情を見せた。だがすぐにまた、冷静な表情に戻って、呆れたように深々と肩を落とす。

「まあ、動機が不純なのがちょっと、いただけないけど…」

「不純で言わないでよ！」

少し棘のある言い方をする櫻に、口を尖らせる棗。

「言葉を信じること」

「え…？」

櫻の言葉に、棗が戸惑うように首を傾げる。

「信じ続けていれば、いつかきっと、言葉があなたに力をくれるわ…」

「言葉が、私に…」

告げられた言葉を、噛み締めるように、棗がゆっくりと繰り返す。

「うん、わかった！」

棗は笑顔を見せ、櫻の言葉に大きく頷いた。

それから、一年半ほどの時が流れた。

「ご苦労さまでした、安の神」

「ああ」

韻から要請のあった忌退治を、安団の仲間と共に終えた晶は、そのことを報告するため一人、韻の本部へと訪れていた。無事、報告を受けた和音が、晶へと笑顔を向ける。

「次の退治依頼はあるのか…？」

「いえ、特には」

「そうか…なら俺はこれで、帰らせてもらう」

「ああ、そういえば安の神」

和音へと背を向け、部屋の出口へと歩を進めようとした晶を、和

音が不意に呼び止める。晶は少し機嫌を損ねたように眉をひそめながら、和音の方を振り返った。

「左守さんの妹さんが、奈守になられたそうですわね」

「ああ。昨日、現“衣の神”により、認定式も済んだ」

「そうですか」

そつと頷き、和音が笑みを浮かべる。

「これで安団も、四人まで揃いましたわね」

「ああ」

和音の言葉に、素っ気ない頷きのみを返す晶。

「彼、加守の朝比奈カモメは、その後どうです？」

和音が、カモメのことを気にかけるように、問いかける。カモメが加守となった当初、カモメはただ能天気明るく、晶もそんなカモメを相手にはしていないように見え、和音は少なからず不安に思っていた。

「別に、相変わらずだ。相変わらず馬鹿で、妙に頑固で、変なところばかりこだわるし、突然、ガキを加守の後継者に決めてきた。だが…」

文句を連ねた後、晶がそつと目を細める。

「“あいつほど、音士に相応しい者はいない”と言った、先代加守の言葉が…今は少し、わかるような気がする…」

「……そうですか」

晶のその言葉を聞き、和音はどこか安心するように微笑む。

「左守さんも妹さんが加わって、力が増すでしょう。益々の安団の活躍を、期待しておりますわ」

激励するように言う和音であったが、晶はその言葉に答えようとはせず、どこか浮かない表情を見せた。

「どうかいたしました？ 安の神」

「……そんなに、嬉しいものではないだろう」

首を傾げ、問いかける和音へと、晶が小さな声で答える。

「妹が、五十音士になることなど…」

俯いた晶は、苦しんでいるようにさえ見え、その姿に、和音はそっと目を細めた。

「そういえば、安の神にも妹さんがいらっしやいましたね」

晶が何を考えているのかを察するように、和音が言葉を投げかける。

「確か、生まれつきの重い病で、ずっと入院生活が続いているとか……」

踏み入るような和音の言葉に、晶が少し顔をしかめる。

「そんな顔をされるのでしたら、いっそ、言葉で病気を治して差し上げたらいしいのでは？」

その和音の言葉を聞くと、晶は途端に眉をひそめた。煩わしげな表情を作って、晶がまるで睨むように、和音を見つめる。

「お前には、五十音士としての誇りが無いらしいな……」

「では安の神は、誇りを守るためであれば、妹さんが死んでしまっても構わないと？」

「それは……」

鋭く指摘する和音に、晶が思わず口ごもる。

「綺麗事を並べたところで、救えるものなど、何もありませんよ」

晶から視線を逸らした和音が、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「言葉は崇めるものではない。利用するものです」

「……………」

冷たく響く和音の言葉を聞きながら、晶は少し考え込むように俯いた。

「あ、お兄ちゃん！おかえりなさい！」

韻本部での報告を終え、自分の町へと戻って来た晶は、家に寄ることなくまず、飛鳥の居る病院を訪れた。大きな笑顔を咲かせた飛鳥が、今日も晶を迎える。

「ああ：ただいま」

「今日は遅かったんだね」

「少し、寄るところがあったから…」

「そう」

飛鳥と会話を交わしながら、晶が病室の奥へと進み、飛鳥のベッドのすぐ横の椅子へと腰掛ける。

「今日はね、カモメくん、店番だから遊べないんだって。さっき一瞬だけ来て、すぐ帰っちゃった」

「そうか」

カモメが帰ってしまったことを残念そうに話す飛鳥を見つめながら、晶が穏やかな笑みを向ける。この笑顔だけを見ていれば、飛鳥が病気であることなど、信じられないくらいだ。

——言葉で病気を治して差し上げたら、宜しいのでは？——

「……っ」

思い出される和音の言葉に、晶が少し悩むように俯く。

「でね、これが今日のカモメくんのお土産の、カリフラワーとブロッコリーの花束でっ…」

「なあ、飛鳥…」

「え？」

カモメから貰った土産を見せようとした飛鳥が、晶に呼ばれ、再び晶の方を振り向く。

「なあに？お兄ちゃん」

すぐ目の前で、まっすぐにこちらを見つめる飛鳥の、何の汚れもないきれいな瞳を見つめ返し、晶は堪えるように、そっと目を閉じる。

「何でも、ない…」

「変なお兄ちゃん」

晶の言葉を聞き、飛鳥はまた、明るく笑った。

Word. 59 死ンダ言葉 (4)

それから、さらに、半年の時間が流れた。

言ノ葉高校、国語資料室。

「ええ！？また居残り掃除いい！？」

「当然だろう」

激しく驚くカモメに、分厚い本を読んでいる恵が冷たく言い放つ。

「お前、現国のテスト、何点だったか覚えてるか？二点だ、二点」

「五点はいったと思ったんだけどなあ」

「補習は私が面倒だから、掃除で勘弁してやる。とっとと片付けろ」

「それって単に、恵先生が得するだけのようない」

自分勝手な理由を述べる恵に呆れながらも、カモメが鞆を置き、隅に置かれていたホウキを手にとって、相変わらず埃を被っている資料室の掃除を始める。

「はあゝあ。今日は“恋盲腸”最新巻の発売日なのにい」

「お前、十八にもなってまだ、あのデロ甘小説読んでんのか？」

嘆きつつ深々と肩を落とすカモメに、恵が読んでいる本から目を離し、呆れた表情を見せて問いかける。

「先生を一途に想ってる主人公のヒトミが、恵先生を一途に想ってる俺にそっくりで、もう共感しまくっちゃってえ」

「言ってる、阿呆」

満面の笑みで答えたカモメに、冷たく言葉を投げかけ、恵が再び本へと視線を落とす。

「そんなこと言って、その内、俺が超イイ男になった時に、後悔しても知りませんよぉ？」

「ハイハイ。くだらないこと言ってないで、とっとと掃除を終わらせろ」

カモメが忠告するように言うが、恵は相手にもせず本へと集中

する。

「ちえ」

口を尖らせながら、壁に掛けられた時計を見上げるカモメ。

「今日もお見舞いには、行けそうにないなあ……」

ホウキに顎を乗せながら、カモメはどこか残念そうに呟いた。

その頃。栞町、栞総合病院。

「四時……」

ベッドのすぐ横にある棚の上に置かれた時計を見つめ、飛鳥がゆっくりと、時計の指し示している時刻を呟く。病室の中は飛鳥一人で、とても静かであった。

「カモメくん、今日も来れないのかなあ……」

飛鳥が視線を、時計から、閉まったままの扉へと移す。

「お兄ちゃんも、今日は遅くなるって言ってたし……」

一人きりの病室で、晶やカモメが居る時の明るい笑い声を思い出し、飛鳥が寂しそうに俯く。

「……………」

飛鳥が言葉を止めると、病室が一層、静かになる。塞ぎ込むような不安が、襲いかかってくるようで、その場にじっとしていることが、どうにも耐えられなかった。

「ちよつと、ちよつとだけ！」

意を決したように顔を上げ、自分に言い聞かせるようにそう言った飛鳥が、素早く布団の中から出て、ベッドを降りる。足音を立てずに扉へと近付くと、ほんの少しだけ扉を開き、そこから廊下を覗く。人通りがないことを確認すると、飛鳥はそつと、廊下へと出た。「誰か、遊び相手になつてくれそうな人、居ないかなあ。でも看護婦さんに見つかり、怒られそうだし……」

周りを何度も確認しながら、廊下を進む飛鳥。

「入口で待ってみよっかなあ。でも見つかったらかなあ」
あれこれと考えを巡らせながら、飛鳥が歩を進めていく。

「そういえば知ってる？ 四〇三号室の安積さん」

「ええ、知ってるわ。飛鳥ちゃんでしょう？」

「私？」

どこからか聞こえてくる自分の名に、思わず足を止める飛鳥。声の聞こえて来た方を振り向くと、そこには談話室と書かれた部屋があった。患者同士や、患者と面会客が歓談する場所である。飛鳥は歩を進む向きを変え、ゆっくりとその談話室へと向かっていった。
「重い病気なんでしょ？ 生まれた時からずっと、入院してるって」
「そうなのよ。十二年間ずっと、ろくに病室からも出られてないんですって」

「可哀想よねえ」

「……っ」

談話室で話しているのは、患者らしき女性三人であった。中年二人の中に一人、若めの女性が入っている。その会話の内容に、飛鳥は思わず、部屋へと入ろうとした足を止めた。

「可哀想、か……」

女性の口にした言葉を繰り返し、悲しげに目を細めた飛鳥が、談話室の前で静かにしゃがみ込む。

「ずっとお兄さんが一人で、面倒みてるんでしょう？ 海外でお仕事してるご両親の代わりに」

「まだ高校生だっていうのに、大変ねえ」

話題が自分から兄に移ったことに、飛鳥が少し、肩を揺らす。

「こう言っちゃなんだけど、妹さんが居ない方が、幸せだったかも知れないわよねえ。お兄さんも」

「……！」

聞こえてくるその言葉に、しゃがみ込んでいた飛鳥が、大きく目を見開く。

「あの子だって、そうよお？ ずっと病室にこもりきりで、ろくに外

にも出れないんじゃない」

「辛いわよねえ。何のために生まれてきたんだか、わかったもんじやないわあ」

「ずっとこのままだなんて、生きている意味がないものねえ」

聞こえてくる同情の声を、確かに耳に入れながら、それでも耳を塞ぐように、飛鳥がゆっくりと小さな両手を顔の横へと持っていく。

「あ…」

少しだけ開いた口から、掠れたような、弱々しい声を零す飛鳥。

「ああ…」

声を言葉に出来ぬまま、飛鳥はただ、深く頭を抱え込んだ。

今日も韻本部からの呼び出しを受けていた晶は、素早く用件を済ませ、やっとのことで、飛鳥の待つ病院までやって来ていた。

「はあ…」

病院の廊下を歩きながら、晶が深々と溜息を零す。

——幸せを呼び込むためには笑顔！笑顔——

「……っ」

溜息を零してすぐに、晶の脳裏に、能天気なカモメの笑顔が思い出された。

「そう、だったな…」

思い出したようにそう言って、晶が口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべる。やがて晶は、飛鳥の病室の扉の前へと辿り着いた。

「ふう」

一息ついた晶が、ゆっくりと扉を開ける。

「ただいま、飛鳥。遅くなって、悪かつ…あれ？」

扉を開けた晶が、戸惑うように声を漏らす。

「飛、鳥…？」

病室のベッドの上に、いつも笑顔で晶を迎えていたはずの、飛鳥の姿はなかった。

「……………」

病院の屋上で、柵のすぐ手前に立ち、そこから見える栞町の景色を眺めている飛鳥。その表情は、あどけない少女のものとは思えないほどに落ち着いていて、そして、どこか儚げであった。

「飛鳥…！」

「……っ」

勢いよく扉の開く音と、自分と呼ぶその声に、飛鳥がゆっくりと振り返る。

「お兄ちゃん」

息を切らしながら、必死の表情で屋上へと現れたのは、晶であった。晶の姿を瞳に映し、飛鳥がそっと笑みを浮かべる。

「おかえり、お兄ちゃん」

「病室に居ないから、心配したぞ？ 飛鳥」

晶は飛鳥の出迎えの言葉には答えずに、注意するように言い放つ。「外に出ていると、体調が悪化する。早く病室に戻るぞ」

「……………」

強く扉の方を指差す晶を見つめ、飛鳥は目を細めると、ゆっくりと俯いた。

「ねえ、お兄ちゃん…」

「ん？」

静かに呼びかける飛鳥に、首を傾げ、答える晶。

「私は…どうして生きているのかな…」

「え…？」

飛鳥のその言葉に、晶は強く眉をひそめた。

「飛鳥？何を言って…」

「私ね、生きてる意味なんてないんだって」

困惑の表情を見せた晶が、聞き返そうとした言葉を遮って、飛鳥が言葉が続ける。言葉を紡ぐ飛鳥の声は、小刻みに震えていた。

「お兄ちゃんね、私が居ない方が幸せなんだって」

「何をっ」

飛鳥の口にした言葉に、思わず声をあげる晶。

「そんなわけがないだろう…？飛鳥、馬鹿なことを言うんじゃない…」

「ねえ、お兄ちゃん」

必死に否定しようとした晶の言葉を、飛鳥が再び遮る。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

何度も何度も噛み締めるように、晶を呼ぶ飛鳥。

「飛鳥…？」

「お兄ちゃん」

晶が戸惑う中、深く俯いていた飛鳥が、ゆっくりとその顔を上げる。

「大好きだったよ」

顔を上げた飛鳥は、両目にいっぱい涙を溜めながら、晶へと、精一杯の笑顔を向ける。

「さようなら」

「え…？」

晶へと別れを告げて、飛鳥が背中から柵を越え、屋上の下へと身を投げ出す。青い空の中へと消えていく飛鳥の笑顔に、晶は大きく目を見開く。

「飛鳥ああああ…！！」

晶の悲痛な声が、空へと突き上がった。

屋上の下へと駆け降りた晶を待っていたのは、頭から血を流し、生きている体温を失くして、動かなくなった飛鳥であった。

「飛鳥：飛鳥：」

周囲に騒々しく人が集まっていく中、晶は虚ろな瞳で飛鳥の名を呼び、覚束ない足取りで、倒れている飛鳥の方へと歩み寄っていく。周囲の人間も自然と、晶が飛鳥へと向かっていく道を開いた。

「飛鳥：？」

晶が飛鳥の小さな体を抱え上げ、眠りから起こすように、優しく呼びかける。だが、その声に、飛鳥が目を開くことはなかった。

「飛鳥っ…」

声を震わせた晶が、冷たくなった飛鳥の体を、掻き抱く。

「飛鳥：！」

飛鳥の小さな体に身を寄せ、深く瞳を閉じた晶が、堪え切れないものを滲ませるように、強く全身を震わせる。

「自殺：？」

「病院にずっと入院してた子でしょ：？あの子」

「どうして、こんなことに：」

「……っ」

小声で聞こえてくる言葉たちを耳に入れ、晶が再び目を開く。その瞳は先程までの虚ろなものではなく、一切の光を失くした、冷たいものであった。

「とにかく、警察を：」

「ぐあああああ！」

「え：：？」

警察を呼ぶため、その場を離れようとした若い女性が、すぐ傍から聞こえてくる叫び声に気付き、振り向く。女が振り向くと、女の横に立っていた中年の男が、胸を貫かれ、白目を剥き、激しく血を流して、地面へと倒れていった。

「き：きやああああ！」

女の悲鳴を合図に、集まっていた人の群れが、一気に大混乱となる。

「誰、だ：」

左腕で強く飛鳥の体を抱えたまま、いつの間にか言玉を解放させた晶は、その真っ赤な銃を、倒れた男の立っていた方角へと向けていた。

「誰だ」

「がああああ！」

晶がもう一度、引き金を引き、倒れた男へと駆け寄っていた、別の男の肩を撃ち抜く。

——私ね、生きてる意味なんてないんだって——

「飛鳥に、あんなことを言った奴は……」

——お兄ちゃんね、私が居ない方が幸せなんだって——

「飛鳥に、あんな言葉を向けた奴はっ……」

人々が混乱に陥る中、晶が震える声を発し、銃を握る手に力を込める。

「誰だあああああっ……！！！！」

「何かしら？」

見舞いに訪れた櫻と棗は、病院の前に出来ている人集りに気付き、戸惑うように首を傾げた。一度、目を見合わせた櫻と棗が、ゆっくりと歩を進め、その人集りへと近寄っていく。

「お、お姉ちゃん……！！」

「こ、これは……」

思わず声をあげる棗の横で、櫻もすぐさま険しい表情を作る。病院の前には、大量の血を流した人間が何人も倒れており、倒れてい

ない数人の人間もひどく動揺した様子で呻き、茫然とし、泣き叫んでいた。まるで地獄のような、そんな光景であった。

「一体、何が…」

「きゃああああ…！」

「……っ」

その時、病院の中から、尋常ではない悲鳴が聞こえて来た。櫻と棗がさらに眉をひそめ、すぐに病院の方を振り向く。

「中ね…」

「あ、お姉ちゃん…！ま、待って！」

居ても立ってもいられないといった様子で、病院の中へと駆け出していく櫻を、棗が慌てて追っていく。櫻は棗の呼び止めにもスピードを落とさず、自動ドアをくぐり、勢いよく病院の中へと駆け込んだ。

「……！」

病院の中へと入った櫻が、大きく目を見開く。

「ぐああああ！」

必死に食らいついてきた白衣の男を、右手の銃で容赦なく撃ち抜く、一人の男。

「あき、ら…？」

櫻は自分の瞳さえ疑うように、ゆっくりと、その名を呼んだ。その声に気付き、全身に返り血を浴び、身に付けた洋服を真っ赤に染めたその男が、そっと振り返る。

「晶…」

それは見間違えるはずもなく、まさしく、晶であった。

「何を…何をしているの…？」

未だに信じられないといった表情を見せながら、櫻が、震えた声で問いかける。

「晶…！！！」

「……っ」

責め立てるように、力強く名を呼ぶ櫻を見つめ、冷たく微笑んだ

晶は、迷うことなく、その銃口を櫻へと向けた。

「晶…？」

銃口を向けられ、櫻が戸惑うようにもう一度、晶を呼ぶ。だが、あまりにも冷たい晶の笑みに、櫻は悪寒すら覚え、険しい表情を作った。

「お姉ちゃん…！」

「棗…！」

後方から聞こえてくる声に、櫻が動揺しながら、素早く振り返る。入口の自動ドアを抜け、棗がこちらへと来ようとしていた。

「来ちゃダメ！棗…！」

「え…？」

「“当たれ”」

櫻が必死に叫んだその瞬間、晶の口から、言葉が落とされた。

「ううう…！」

「……！」

病院の中へと入った途端、足を撃ち抜かれ、激しい叫び声をあげて倒れていく姉の姿を視界へと入れ、棗が大きく目を見開く。

「お姉ちゃん…！……っ」

すぐさま姉へと駆け寄ろうとした棗であったが、櫻を撃ったその人物を見て、まるで凍りついたように、その場で動きを止めてしまふ。

「か、神…？」

か細い声でそっと、晶を呼ぶ棗。

「“当たれ”」

「あああああ…！！」

晶は棗の呼びかけには答えず、その代わりもう一度、弾丸を放ち、櫻の先程撃ち抜いた方とは別の足を撃った。さらに血が飛び散り、櫻がまた、痛々しい叫び声をあげる。

「……！」

「う…！」

眉一つ動かさず、今度は棗へと、その銃口を向ける晶。そんな晶に、棗が怯えるように肩を上げる。

「え…、え…？」

目の前で起こったこの光景を、受け止めることが出来ず、棗がひどく困惑した様子で頭を抱える。

「逃げ、なさい…棗っ…」

「あ…ああ…」

両足を撃ち抜かれ、痛みに表情を歪めながらも、必死に上半身を起こし、茫然と立ち尽くす妹へと指示を送る櫻。だが棗は頭を抱えたまま、その場を動こうとはしない。

「逃げなさい…！棗…！！」

「あ…！」

櫻の決死の声に、やっと正気を取り戻したかのように、棗が大きく目を見開く。

「ううう…！」

棗は両目から涙を零しながら、必死にその場を駆け出していった。

「兄ちゃんなんか、居なくなればいいんだ…！」

「あ、アーくん…！」

カモメが呼び止めるのも聞かず、朝比奈家の末の弟は、勢いよく家を飛び出してしまった。

「あっちゃー」

居間に残ったカモメが、深々と頭を抱える。

「言い過ぎちゃったかなあ」

「放つとけよ、兄貴。あいつが馬鹿なだけなんだからさ」

恐らくはカモメの所有物であろう『恋盲腸』の本を読みながら、居間で寛いでいるスズメが、不安げに呟くカモメへと、素っ気なく言い放つ。

「やっぱり俺、アーくんに謝りに行ってくる！」

「さいですか」

「結局はアヒルくんに弱いよね…カモメ兄さんて…」

すぐさま謝ることを決心して、立ち上がるカモメに、どこか呆れたように肩を落とすスズメとツバメ。

「よし、じゃあ行って…！」

「カモメさん…！！」

「へ？」

アヒルを追って出て行こうと、居間から店へと降りたカモメが、店へと駆け込んでくる必死の声に、戸惑うように顔を上げる。

「なっちゃん？」

「カモメさん…！」

店の中へと駆け込んできたのは、大きく息を乱し、頬に涙を滲ませた棗であった。

「なっちゃん、どうし…」

「神が…！」

カモメが問いかける前に、棗が大きく口を開く。

「神があ…！！」

「え…？」

棗のその言葉に、カモメはそっと、眉をひそめた。

あの時、たった一つでも、言葉が少なければ、

あの時、たった一つでも、言葉が多ければ、

僕たちは、こんな結末を、迎えずに済んだのだろうか。

Word. 60 鬼ト化シタ神 (1)

.....

「私？私は、言葉が大好きだよ」

いつだったか、“言葉は好きか？”と問いかけた俺に、君は迷うことなく笑顔で答えた。

「だって、言葉があって、本当に良かったって思うもの」
君は右手で左胸を押さえて、噛み締めるように言う。

「私、あまりこの部屋から出られないし、体を動かして遊ぶことも出来ないでしょ？」

そう言って、少しだけ悲しそうに、眉をひそめる。

「でも、それでもたくさん、友達が出来た。櫻ちゃんに棗ちゃんにカモメくん、他にもたくさん！」

悲しそうだったその顔は一瞬で、また一層、楽しそうに笑う。

「それはきつと、言葉のお陰だと思うの。言葉を交わすことが出来たから、私は皆と友達になれた！」

その笑顔が眩しくて、思わず目を細めて、俺も笑う。

「私が嬉しいって思うことが出来るのも、楽しいって思うことが出来るのも、きつと全部、言葉のお陰！だから私は、言葉が大好きなの！」

その笑顔を見ているだけで、幸せな気持ちになれた。

「だから私は、言葉を守ってるお兄ちゃんが、大好きなの！」
力が湧いてくるようだった。
なのに。

——さようなら——

たかだか、そんなものを守るために、君を死なせた、愚かな俺を、

笑ってよ……――――

「……………」

広場で集まった人間を次々に撃ち抜いた晶は、その場から動ける者も居なくなると、自らが傷つけた人々に構う素振りも見せず、冷たくなった飛鳥を抱いて、病院の中へと戻った。悲鳴をあげて逃げ惑う院内の人間をも、次々と撃って、晶はひたすらに廊下を進み、飛鳥の使っていた病室へと辿り着いた。

「もう少しだけ…この場所で待っていて。飛鳥」

動かない飛鳥を、病室の、ずっと飛鳥が使っていたベッドの上へと横たわらせ、晶が優しく声を掛ける。

「お前に、くだらない言葉を向けた人間を、殺してくるから…」

優しい声とは裏腹に、晶の口から、残酷な言葉が零れ落ちる。

「そしたら二人で、どこかへ行こう…？」

晶が、ひどく冷たい、飛鳥の手を握り締め、笑う。

「どこか、遠くへ…」

握り締めた飛鳥の手を額へと当て、願うようにそう言うと、晶は飛鳥の手をベッドの上へと置き、そこから手を離して、再び病室を出て行った。

「きゃああああ！」

「“当たれ”」

廊下を必死に逃げ去る看護婦の背中を、晶が何の躊躇いもなく撃ち抜く。

「うわあああ！」

「いやあああ！」

逃げ惑う人々の声を聞きながら、晶がそっと、銃口を天井へと向ける。

「“贖え”」

『ぎゃああああ!』

天井へと放たれた弾丸が、晶の上方で無数に枝分かれし、周囲へと飛び散って、逃げ惑っていた人間の一人ひとりを、一瞬にして撃ち抜く。

「^{あがな}贖え”…^{あがな}贖え”…」

その言葉を何度も繰り返し、病院に居る人間を、次々と撃ち抜いていく晶。

「ハハハハっ…」

口角を吊り上げた晶の口から、小さな笑みが零れ落ちる。

「アハハハハ…!」

冷たい笑い声を響かせながら、晶は病院の奥へと進んでいった。

その頃、とある小さな公園。

「まだかな? カモメさん」

持っていた『恋盲腸』の本を読み終え、箆也が立ち上がり、やって来るはずのカモメを探すように、周囲を見回す。だがカモメの姿は見当たらず、この場へと駆けてくる足音も聞こえてはこなかった。「また居残り掃除やらされちゃったから、弟たちの晩御飯作ってか
ら来るって、さっき言ってたけど…」

箆也が顔を上げ、自分の背と比べると遥かに高いところに設置された、公園の時計を見つめる。

「遅刻するの、得意だからなあ。カモメさん」

「箆也!」

「え…?」

カモメとは明らかに異なる、少女の声に名を呼ばれ、箆也が戸惑うように振り返る。

「わ、和音?」

数名の従者と共にその公園へと現れたのは、どこか焦ったような

表情を見せた和音であつた。豪華な着物姿の和音は、この平凡な公園にはまるで合っていない。箆也は和音とは幼馴染みで、弟、檻也の婚約者ということもあり、それなりに親しい関係ではあったが、於崎の家を出てからは、会う機会もなかったので、和音の出現に、かなり驚いた。

「な、なんで和音がここに…」

「朝比奈カモメは？朝比奈カモメはどこです？」

戸惑う箆也に構うことなく、箆也のすぐ前まで歩み寄って来た和音が、箆也へと鋭く問いかける。

「カモメさん？なんで和音が、カモメさんのこと…」

「朝比奈カモメは、どこです！？」

「……っ」

まるで責め立てるように、必死に問いかける和音に、箆也が思わず、自分の言葉を呑み込む。いつも冷静な和音が、ここまで焦りを前面に出しているのは、珍しい状態であつた。余程のことが、起っているのだろう。そこにカモメが関与している。箆也の胸に、不安が込み上げた。

「一旦、家に戻ってまた来るって…でもまだ、来てない」

「すぐに彼の家へ」

「はい」

箆也の言葉を聞いた和音が、頷きもせずに従者の一人に指示を送る。その従者は、和音の言葉に頷くと、すぐさま駆け出し、公園を去っていった。

「間に合うといいのですが…」

「どう、したんだ…？」

従者を見送り、不安げに呟く和音の背へと、箆也が眉をひそめながら、問いかける。

「まさか、カモメさんに何か…」

「いえ、何か起こったのは、彼本人ではなく、彼の神です」

「カモメさんの神？」

箆也の方を振り返りながら、箆也の問いかけに答えていく和音。その表情はひどく険しく、箆也も真剣に和音の言葉に耳を傾けた。

「実は…」

「え…？」

和音の口から語られる真実に、箆也は耳を疑う。

「そん、な…」

「このことを知れば、彼はまず間違いなく、神を止めに向かうでしょう。ですから、一刻も早く彼を見つけないければ…」

深刻な表情を見せ、和音が自身でも確認するように言う。

「今、彼を失うわけには…」

「カモメさん…！」

「あ、箆也…！」

和音が止めるのも聞かず、箆也は無我夢中で、その場を走り出していた。

「ここでいい！ここで降ろして、カー坊！」

「クワア！」

棗と共に、巨鳥カー坊の背の上に乗り、言ノ葉町から栞町まで高速で移動してきたカモメは、栞町の中心部が見えて来たところで、カー坊へと指示を送った。カモメの指示に鳴いたカー坊が、町の中心部から少し離れた場所にある空き地へと着地すると、カモメと棗は素早く地上へと降り、カー坊をもとの言玉の姿へと戻して、空き地を駆け出した。

「早く病院へ…！」

「カモメさん…！」

空き地を出て、病院へと向かおうとしたカモメが、後方から聞こえてくる声に、足を止める。

「か、箆也？」

「空に、カー坊が、見えて……！良かった。間に、合って……！」

振り返ったカモメが、視界に簞也の姿を入れ、戸惑うように眉をひそめる。簞也は全力で走って来たのか、相当に息を切らしていたが、カモメを見て、安心したような笑みを浮かべる。

「簞也、どうしてここに……」

「和音から聞いた。行っちゃダメだよ、カモメさん！」

戸惑っていたカモメが、簞也の言葉にすべてを理解し、すぐさま険しい表情を作る。簞也も真剣な表情で、射るような瞳をカモメへと向けた。

「行ったら、カモメさんが危険だ！あの人のことは韻に任せて、カモメさんは……！」

「それは無理だよ、簞也」

簞也の必死の訴えに、カモメは迷うことなく、首を横に振った。

「俺が行く。俺が行かなきゃいけないんだ」

「けど……！」

「俺の、神様なんだ」

「……っ」

そう言って、どこか切なく笑うカモメに、簞也はそれ以上言葉を、続けることが出来なくなってしまう。カモメに神附きとしての在り方を教えられた簞也だからこそ、この状況で、カモメを止めることが出来なかった。

「じゃ、じゃあ僕も一緒に……！」

「“霞^{かす}め”」

「う……！」

勢いよく顔を上げ、共に行くことを申し出ようとした簞也の目の前に、言玉を突き出し、カモメが素早く言葉を放った。一瞬、体が強い赤色の光に包まれたかと思うと、簞也の意識が一気に薄れていく。

「な、ん……カモメ、さん……」

「ごめんね、簞也」

ゆっくりと目を閉じていく箆也へ、苦しい笑顔で、謝罪の言葉を零すカモメ。

「色々と、ありがとう…」

そう言うと、カモメは箆也へと背を向け、棗と共に、再び駆け出していつてしまう。

「カ、モメ…さ…」

伸ばした手をカモメの背に届かせることは出来ず、箆也は深く瞳を閉じ、その場に倒れ込んだ。

カモメと棗は、箆也を置いて、栞総合病院へとやって来た。病院の前で倒れている人間に躊躇している暇もなく、すぐに病院の中へと駆け込むと、すぐ手前の入口に、両足を撃ち抜かれ、大量の血を流して倒れている櫻の姿があった。

「櫻…」

「お姉ちゃん…！」

無残な櫻の姿にカモメが青ざめる中、棗が櫻へと駆け寄っていく。棗に上半身を持ち上げられると、櫻の口から、弱々しいが確かな声が零れ落ちた。傷はひどいが、まだ息はあるようだ。

「うがあああ！」

そこへ、病院の奥の方から、悲痛な叫び声が聞こえてくると、カモメと棗が険しい表情を見せる。

「なっちゃんはここにいて！櫻の治療をお願い！」

「あ、カモメさん！」

棗が止める間もなく、カモメは叫び声の聞こえて来た病院の奥へと、駆け出していく。遠ざかっていくカモメの背を、不安げな表情で見つめる棗。

「と、とにかく、お姉ちゃんの傷を…！」

自分の役目を確認するように言って、棗は焦りながら言玉を取り

出し、右手を姉の両足へと向ける。

「^{なお}治…」

「な、つめ…」

「え…？」

棗が言葉を放とうとしたその時、傷口へと向けようとしていた棗の首が、掴み取られた。掴み止めたその手は、流れる血に赤く染まった、櫻の手であった。

「お姉ちゃん！良かった、意識あつ…」

「カモメを…追いかけて、ましよう…」

「え？」

櫻のその言葉に、棗が大きく眉をひそめる。

「な、何を言ってるの…？お姉ちゃん」

「行かない、と…カモメと…晶の、私たちの神、のところへ…」

「無茶だよ！そんな傷で動いたら、死んじゃう…！」

「死んでも、いいわ…」

「え…？」

はつきりと言い放つ櫻に、棗は驚いた様子で、大きく目を見開いた。

「お、お姉ちゃ…」

「今、行かなきゃ…死ぬより後悔する…だから、お願い。棗…」

「……………」

必死に願う姉の真剣なその瞳に、棗がそっと目を細める。

「わかった…」

頷くと、棗は瀕死の姉を背負い、カモメの後を追うように、すぐにその場を駆け出していった。

「ハア…！ハア…！」

櫻たちのもとを駆け出したカモメは、必死に階段を駆け上がって

いた。上層階からは時折、悲痛な叫び声が響いて来る。その度に強く唇を噛み、額から汗を流し、これ以上速くならない足にもどかしさを感じながら、カモメは必死に突き進んだ。非常階段からの扉を強く開け放ち、カモメが入院棟の最上階へと辿り着く。

「うあああああ！」

「……っ」

扉を開け放った途端、耳に入る叫び声に、カモメが一層、表情を険しくし、その声の聞こえて来た方を振り向く。カモメが振り向くと、左胸を撃ち抜かれた白衣の男が、床へと倒れ込んでいく姿が目に入った。そして、その倒れた男の前に、真っ赤な銃を構えた男の姿も入って来ると、カモメがそっと目を細める。

「晶……」

「……………」

小さく呼びかけるカモメの声に、男がゆっくりと振り向く。そこに立っていたのは、服は勿論、頬や首、手足に、大量の返り血を浴びた晶であった。

「カモメ……」

晶が光の見えない、冷え切った瞳を、まっすぐにカモメへと向ける。

「晶……どうして、こんな……」

「飛鳥が死んだよ。カモメ」

「え……？」

もう一度呼びかけたカモメに、晶がそっと、呟くように言葉を落とす。晶が告げたその真実に、カモメが表情を凍りつかせる。

「飛鳥、ちゃんが……？」

「さっき、屋上から飛び降りたんだ……」

信じられないといった様子のカモメへ、晶はどこか淡々と、言葉が続ける。

「飛鳥の体、冷たくて……俺が何度呼んでも、全然目、開けなくて……」
「厳しい表情で、カモメが晶の言葉を聞き続ける。」

「死んだんだ…飛鳥が…」

もう一度、その言葉を繰り返す晶。晶自身もまだ、その事実を受け入れられていないように見えた。

「飛鳥…最期に、俺に、“大好きだよ” って…」

わずかに口元を緩めた晶の、その笑顔が、突き刺すように痛い。

「“さようなら” って…」

「……っ」

そんな晶の顔を見ていられず、思わず俯いたカモメが、遣り切れない思いを噛み締めるように、強く瞳を閉じる。

「なんで、飛鳥ちゃんが…」

「飛鳥に、“飛鳥が居ない方が、俺が幸せだ” って言った奴がいるんだ…」

顔を上げ、問いかけるカモメの言葉に、晶が笑みを浮かべていたその表情を、鬼のように冷たいものへと変える。

「飛鳥に、“生きてる意味がない”なんて、くだらない言葉を向けた奴が…この病院の、中に…」

「だから…」

カモメが、目を細め、晶を見つめる。

「だから、殺した…？」

眉間に皺を寄せ、悲しい表情を見せて、カモメが晶へと問いかける。

「……ああ」

短く頷く晶に、カモメがさらに目を細める。

「誰が飛鳥ちゃんに、その言葉を向けたかもわからないのに…？」

カモメが震える声を、搾り出すようにして、晶へと問いかける。

「誰が言ったかなんて、どうでもいい…そいつが生きていなくなれば、それでいい…」

「言葉を向けてない、罪もない人もたくさん、居たのに…？」

「誰が、何人死んだって、構わない…一緒だ」

晶が無気力に、肩を落とす。

「飛鳥が、生きていないなら…一緒だ…」

すべてを諦めてしまったように、そう言って、どこか遠くを見つめる晶の姿を、まっすぐに見つめるカモメがどこか否定するように、何度も首を横に振る。だがその行動は、否定の言葉になりはしなかった。

「カモメ：お前は、言ったな…？お前は、“人の、許し合えるところが好きだ”と…」

問いかける晶の声に、カモメが耳を傾ける。

「でも、俺は許せなかった…」

冷たく笑った晶が、視線をカモメへと戻す。

「許すことなんて、出来なかったよ。カモメ」

そう言って笑う晶に、カモメは強く唇を噛み、険しい表情となつて、ポケットから言玉を取り出す。

「俺は…」

取り出した言玉に視線を落とし、どこか迷うように目を細めるカモメ。

「……俺も、神付きとして、君を許すわけにはいかないっ…」

苦悩を表すように、わずかに声を震わせながら、それでも必死に、カモメが言葉を続ける。

「俺は、神付きとして、罪を犯した神を処分する…！」

苦しげに言葉を放って、カモメが強く言玉を握り締める。

「第六音“か”、解放…！」

「……っ」

カモメが言玉を解放する様子を見ながら、そっと微笑んだ晶が、その銃口を迷うことなく、カモメへと向ける。

「カー坊！」

“当たれ”^あ」

カモメが、目覚めたばかりの巨鳥に呼びかけるのと同時に、晶の銃口から、弾丸が放たれた。

Word. 60 鬼ト化シタ神 (2)

「う、ううう…」

「お姉ちゃん!？」

背中で苦しいな声を漏らす姉に、階段を駆け上がっていた棗が、不安げな表情で振り返る。

「いい、の…大丈夫…いいから、行って…」

あくまで自身の治療よりも、晶とカモメのもとへ行くことを先決する櫻に、険しく眉をひそめながらも、棗は先へと進む足を速めた。このままでは、櫻は本当に死んでしまう。一刻も早く二人のもとへと辿り着き、治療を始める必要があった。

「あれ? 扉が、開いてる?」

上っていく先に、乱暴に開けられたままの扉を見つめ、棗が首を傾ける。

「この階にカモメさんがっ…」

そう考えた棗は、素早く階段を駆け上がり、開け放たれたままの扉から、入院棟の中へと飛び込んだ。入った途端に、強い衝撃風が二人へと押し寄せる。

「きゃ!」

「ううう…!」

あまりに強い風に勢いよく押された棗が、右方の壁まで吹き飛ばされる。その際に櫻は棗の背から落ち、両足に傷を負っているため、力なく床へと倒れ込んだ。

「な、何がっ…」

背中を壁へと打ちつけた棗が、痛みに少し表情を歪めながら、ゆっくりと顔を上げていく。

「ああ…!」

目の前に広がる光景を見た瞬間、大きく目を見開き、表情を凍りつかせる棗。

「ああ…」

床に倒れたまま、顔だけを上げた櫻の口からも、声にならない声が零れ落ちる。二人の見つめる先では、フロアいっぱいの大きさを誇る金色の巨鳥が、粉々に碎かれ、崩れ落ちていこうをしていた。

「う…うあ…」

崩れていく巨鳥の前には、苦しい声を漏らしている、全身から激しく血を流した、カモメの姿があった。巨鳥の受けた傷を、カモメが連動して受けているのだろう。カモメは足元がふらついており、立っているのもやっとという状況であった。

「クワアアア…！」

苦しい鳴き声を放って、巨鳥が完全に崩れ落ち、金色の粒子となって散っていく。

「……………」

金の粒子が散る中、感情の無い表情を見せた晶が、すでに戦える状態でないカモメへと、さらに、銃口を向ける。向けられる銃口を見つめ、カモメはそっと目を細めた。

「……晶」

弱々しく掠れた声で晶の名を呼ぶカモメであったが、晶はその声には答えず、眉一つ動かさずに、銃の引き金に人差し指を掛けた。

「やめて…やめてっ！やめて…！！」

「アキラああああ…！！」

櫻と棗の必死の叫び声が響くが、それでも、晶の動きが止まることはなく、掛けられた人差し指がゆっくりと引き金を引く。

「“当たれ”」

晶の言葉と共に、銃口から赤い光の弾丸が放たれ、その弾丸が、容赦なく、カモメの胸を貫いた。

『……………！』

その光景に、櫻と棗が大きく目を見開く。

「カ…カモメええええ…！！」

櫻の悲痛な声が響き渡る中、胸を撃ち抜かれたカモメが、ゆっくり

りと後方へと倒れ込んでいく。

「ごめん、ね…」

倒れていくカモメの口から零れ落ちたのは、意外な言葉であった。すでに意識も薄れ、目も霞んでいる様子のカモメが、それでも穏やかに笑顔を作り、それを晶へと向ける。

「俺、神附きなのに…晶のこと、支えてあげられなくて…何の力にもなってあげられ、なくて…」

そのカモメの笑みには、どこか後悔の色が見えた。

「ごめん、ね…」

そして、ゆっくりと深く、瞳を閉じたカモメが、静かに床へと倒れ込む。そこへ倒れたまま、カモメが動くことはなかった。

『……………』

カモメが倒れた音を最後に、その場に居た者皆が黙り込み、辺りを静寂が包む。

「そ、そんな…カ、カモメさ…」

「カ…モメ…」

「あ、お姉ちゃん…!」

撃たれたカモメを目の当たりにしたことと、傷の痛みが限界に来ていたことが合わさったのか、力なくカモメの名を呟くと、櫻はそのまま意識を失い、その場に倒れ込んだ。床にうつ伏せに倒れ込む姉に、棗が思わず壁際から身を起こす。

「……………」

「う…!」

すぐに櫻のもとへと駆け寄ろうとした棗であったが、振り向いた晶に射るように睨まれ、凍りつくようにその場から動けなくなる。そんな棗へと、晶は先程、カモメを撃った銃口を向けた。

「ク…!」

銃口を向けられた棗が、諦めたように、固く目を閉じる。

「あ…」

言葉を放とうと、口を開く晶。

「お姉ちゃん…！」

「……っ」

だが、棗の口から零れ落ちた、助けを求めるその声に、晶の言葉は止まった。

——お兄ちゃん——

追い詰められ、ただ姉へと助けを求める棗の姿が、愛らしい笑顔の妹を思い出させた。

「……………」

口を閉ざした晶が、構えていた銃を、ゆっくりと下ろしていく。

「あれ…？」

いつまで経っても来ない衝撃に、棗が恐る恐る瞳を開く。すると晶はすでに銃を下ろし、その場を去ろうと、棗へと背を向けているところであった。

「あ…、あ…あ、待って！」

何人もの人間が倒れている廊下を、進んでいこうとしていた晶を、もう一度、撃たれてしまう危険もあるというのに、棗は何故か、呼び止めてしまった。呼び止められずには、いられなかった。棗の声に、晶は振り返ることはないが、足だけを止めた。

「あ、あの…」

呼び止めたものの、次の言葉が出て来ず、声を彷徨わせる棗。

「俺は、神を堕ちる…」

「え…？」

棗よりも先に、言葉を発したのは晶であった。

「それでも俺に従うというのなら、附いて来い」

そう言って、一瞬だけ棗の方を振り返った晶の瞳が、棗には、ひどく寂しそうで、壊れてしまいそうなほど脆いものに見えた。晶はすぐに前方を向き、再び歩を進めていく。

「……………」

去っていく晶の足音を聞きながら、棗が悩み込むように俯く。

——いつも済まない。棗——

何年も前から焦がれていた、不器用で優しい笑顔。

「……！」

意を決した表情で立ち上がった棗は、去っていく晶の背を、必死に追っていった。晶と棗が去り、動く者の居なくなったフロアに、静寂が訪れる。

「カモメさん！」

しばらくの沈黙の後に、フロアへと駆け込んでくる幾つもの足音。階段を駆け上がり、その場へと現れたのは籠也と和音、それに人数の韻本部の者たちであった。

「生存している者の救護を、最優先に！治療班を急がせて下さい！」

「カモメさん……！」

従者たちへと指示を送る和音の横を飛び出し、籠也がいち早く、倒れているカモメを見つけ、そちらへと駆け寄っていく。

「カモメさん……！カモメさん！」

カモメのすぐ横へと膝をつき、カモメへと必死に飛びかける籠也。

「すぐに治療を……！」

「は！」

和音に指示され、救護班とみられる、白い着物を纏った者たちが、カモメのもとへと駆けていく。

「これは……」

倒れているカモメの全身を見回し、眼鏡を掛けた、一番年上らしき男が、険しい表情を見せる。

「言姫様」

「どうしたのです？早く、治療を……」

「手遅れです。治療の施しがありません」

「な……！」

「え…!？」

男の言葉に、箆也と和音がそれぞれ、衝撃を走らせる。

「そんな…!なんだよ、それ!? 何とかしてよ…! ねえ…!」

床に膝をついたまま、男の着物の裾を握り締め、必死に訴える箆也。だが男はその言葉には応えられず、ただ申し訳なさそうに、俯くだけであった。

「カモメさんを助けてよ…! ねえ…!」

「か…ごや…?」

「え…?」

自分の名を呼ぶ小さな声に、箆也が素早く反応し、握り締めていた男の裾を離して、振り向く。

「カモメさん…!？」

「箆也…そこに、居るの…?」

薄らと開けた瞳をまっすぐに天井へと向けたまま、問いかけるように声を発するカモメ。恐らく、もう目は見えていないのであろう。

「居るよ…!」

箆也が頷き、床に落ちていたカモメの右手を、強く握り締める。

「僕はここに居る…!」

「良かった…丁度、渡したいって…思っ、たんだ…これ…」

「え…?」

そう言っ、てカモメが、箆也が握り締めていない方の手を、震わせながらゆつくりと上げる。救護班の一人の女性が、素早くその手を支え、持ち上げる動作を手伝う。上げられたその手に握り締められているのは、真っ赤な言玉であった。

「これ、言玉…」

「ちよつと…早く、なっちゃったけど…」

言葉を紡ぎながら、カモメが少し口元を緩める。

「本当は…もう少し、箆也が大きくなってから、っ、って思っ、ただけど…ごめんね。こんなこと、に…なっちゃっ、て…」

手伝われながら、動いていったカモメの手が、カモメの撃たれた

胸の上へと置かれている、箆也の左手へと辿り着く。

「けど、大丈夫：箆也、優秀だから：きっと、いい加守に、なる：」
「……っ」

瞳から大粒の涙を流しながら、箆也が拒むように、何度も必死に首を横に振る。

「知らない：知らないよっ：まだ、加守になんか、なりたくないよ：だから、死なないでよ！カモメさん：！」

耳に届くその声だけで、箆也が泣いていることがわかり、カモメは少し、困ったように眉をひそめる。

「大丈夫：俺、箆也を信じてる、から：俺、何にも心配してないよ：箆也：」

すぐに口元を緩め、優しい笑みを浮かべるカモメ。

「ああ、でもあっちが：心配、だな：」

そんなカモメの表情が、ふと曇る。

——兄ちゃんなんか、いなくなればいいんだ：！——

「きっと：凄く、傷つけちゃう：後悔、させちゃうな：」

「え：？」

カモメの言葉の意味がわからず、箆也が涙を流したまま、戸惑うように首を傾げる。

「帰りたい、けど：それももう、無理そう、だから：」

響くカモメの声が、どこか悲しげに聞こえる。

「伝え、て：届けて：俺の、最期の言葉：」

そう呟きながら、カモメがもうほぼ力の入らない指先で、そつと言玉を撫でる。すると言玉は、淡い金色の光を放ち始めた。その光を箆也や、周囲の治療班の者たちが見守る。

「^{かな}叶え”：」

カモメが言葉を放った瞬間、輝く言玉から飛び出すように、金色の鳥の姿が見えたかと思うと、鳥はあっという間にフロアを駆け抜

け、どこかへ消えていってしまった。

「あ…！」

通り抜けていった鳥を見送り、大きく目を見開く和音。

「今のは…」

鳥の消えていった窓の外を見つめ、和音が険しい表情を見せる。

「これで、いい…」

「カモメ、さん…？」

どこか満足げに笑うカモメを、箆也が戸惑うように見つめる。

「いい…？ 箆也…誰よりも神の近くで、神を支えて…誰よりも強く、神の力になる、んだよ…？」

箆也の左手の中へと、もう光の収まった言玉を押し込むように握らせて、カモメが、もう何度も繰り返し来たその教えを、再度確認するように、箆也へと伝える。

「自分の神様を…守って、あげてね…」

箆也へと言玉を渡し終えたカモメの手が、役目を終えたと思ったのか、ゆっくりと力なく、床の上へと落ちていく。

「守れなかった…俺の、分まで…」

「あ……」

カモメの瞳がそっと閉じられ、箆也が握り締めていた右手も、床へと零れ落ちていく。

「カモメ…さん…？」

深く目を閉じたカモメへと、小さく呼びかける箆也。だが、その呼びかけにカモメが答えることはなかった。鋭く振り向いた和音に、カモメの左手を取り、脈を取った治療班の女性が、首を横に振る。

「カモメさん…」

左手の中に残ったカモメの手の感触と、真っ赤な言玉を握り締め、箆也が声を漏らす。

「カモメさああああん…！！！」

その日は、日の暮れた頃から、冷たい雨が降り注いだ。

「大丈夫かな…カモメ兄さん…」

「兄貴のことだし、大丈夫だって。情けねえ顔してんなよ、ツバメ」
居間の掛け時計を見上げながら、どこか不安げに呟くツバメ。そんなツバメに、威勢よく声を掛けるスズメであったが、その表情もどこか浮かない様子であった。カモメが棗と共に家を出てから、すでに三時間以上の時間が経過している。

「ふう」

そんな二人の様子を見て、軽く息を吐きながら、店の片付けをしているウズラ。

「そういえば、アーくんも帰って来ないなあ」

カモメと喧嘩し、家を飛び出していったアヒルのことを思い出し、ウズラが店の前へと出る。

「一体、どこまで…ん？」

降り注ぐ雨を遮るように、顔の上に手のひらを置きながら、ウズラがアヒルの姿を探し、周囲を見回す。すると、激しい雨の中、傘も差さずにこちらへと向かってくる、小さな人影が見えた。

「アーくん…？」

アヒルと同じくらいの大きさの人影に、ウズラがすぐさま声を掛ける。だが、反応はない。徐々に人影が近付いてきて、その姿がはっきりとしてくる。アヒルと同じくらいの年の少年だが、アヒルではないようだ。

「君、は…あっ…」

戸惑いながら問いかけようとしたその時、少年が背負っている、少年より明らかに大きな人間の存在に、ウズラが気付く。気付いた途端、ウズラの表情がすぐさま、曇る。少年が背負っているのは、深くその瞳を閉じた、カモメであった。

「……っ」

カモメの身に何が起こったのかを察し、悔しげに目を閉じ、唇を

噛み締めるウズラ。

「ごめん、なさい…」

激しい雨音の中に、か細い少年の声が落ちる。

「ごめん…なさい…」

誰も受け止めることの出来ない謝罪の言葉が、雨音の中にこだました。

この日、一人の五十音士が命を落とし、この日、一人の神が、神の座を堕ちた……――

Word. 60 鬼ト化シタ神 (3)

「その日、安積晶が言葉で殺した人間の数は、朝比奈カモメを含め、病院関係者およそ二百五十人。五十音士の歴史始まって以来の、最低最悪の出来事だった」

力を吸い上げられ続けている錨、沖也、そして新たに運ばれてきたエカテリーナに自身の力を与え続けながら、険しい表情を見せた恵が、カモメたち先代安団の過去を話し終える。

「そんなことが…」

恵の話に、どこか遣り切れない表情を見せるのは、“衣の神”エリザベス。囁の救援に入ったエリザは、衣団の面々と共に、今もまだ礼獣との交戦を続けているこの場所へと駆けつけたのである。

「では、“阿修羅”というのは…」

「その出来事の後に、韻が奴に付けた名だ」

横から問いかける徹子に、恵がそっと目を細める。

「阿修羅…“鬼神”^{きしん}阿修羅」

「“鬼と化した神”…まさに彼に、相応しい名ですね…」

阿修羅の名を繰り返す恵の横から、同じく墮神たちに力を与えている為介が、そっと口を挟む。

「アヒルは…アヒルは、そのことを知っているの？」

「……ああ」

厳しい表情で問いかけるエリザに、少し間を置いた後、恵が短く頷く。

「先代“左守”、相良櫻の希望もあって、櫻自身から、朝比奈と安団の奴等全員に、話してもらった」

「そんなの聞いたらアヒル、いくらお兄さんの仇だっていっても、思いつきり戦えなくなるんじゃないっ…」

「だろうな」

エリザの言葉を、素直に認める恵。

「だが、何も知らないままに阿修羅と戦ったとしても、あいつはきっと全てを知ろうとしただろう」

恵が落としていた視線を上げ、東の空に突き上げている赤い光の柱を見つめる。

「誰に対しても、何よりも、その言葉と向き合う。それが、あいつだ」

「……っ」

恵の言葉を否定することは出来ず、エリザは困ったように、そっと目を細めた。

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「言葉が、死んだ…」

「ああ」

ゆっくりとその言葉を繰り返したアヒルに、阿修羅は認めるように、大きく頷いた。

「俺は五年前、必死に守ってきた“言葉”というものが、どれほどに残酷であるかを知った…」

阿修羅が右手に持っている銃を見下ろしながら、そっと目を細める。

「人の命すら、簡単に奪ってしまえるほどに、残酷であることを…」
「……っ」

昨日櫻から、安積晶に起こったすべてを聞いていたアヒルは、阿修羅の言葉が意味するものを知り得ており、どこか遣り切れない表情を見せる。

「だから俺は、すべての言葉を捨てた」

はつきりと言い放った阿修羅が、感情のない瞳で、冷たく笑う。

「言葉を信じること、言葉を守ること、言葉を崇めること…すべてをやめた」

阿修羅の言葉は、放り投げられるように、どうでもいいように、あっさりと落とされる。

「俺の言葉は、死んだんだ」

「……………」

もう一度、その言葉を繰り返す阿修羅を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「だから…」

間を置いた後、アヒルがゆっくりと口を開く。

「だから、もう、言葉は要らない…?」

少し顔を俯けて、静かに問いかけるアヒルのその言葉に、阿修羅が浮かべていた笑みを止める。

「自分の言葉が死んだから、自分は言葉を捨てたから、だから、世界中の人間も皆、言葉は要らない…?」

さらに問いかけを続けながら、アヒルがゆっくりと顔を上げていく。

「だから、この世界に“自由ある言葉”は要らないって、そう言うのか? あんたは」

まっすぐに見つめるアヒルの瞳は、阿修羅を強く否定しているように、阿修羅は少し眉をひそめた。

「ああ」

「そんな考えは、勝手過ぎる…!」

あっさりと頷く阿修羅に、アヒルが思わず声を荒げる。

「例え、あんたに言葉が不要になったとしても、俺や皆、世界には、言葉が必要なんだ! 捨てたりなんか、したくないんだ!」

何とか思いを伝えようと、必死に言葉が続けるアヒル。

「それなのに、ただ、あんたの都合で、皆の言葉を消そうなんて、そんなこと…!」

「“許せない”…?」

「え…?」

遮る阿修羅の声に、アヒルが戸惑うように言葉を止める。

「カモメを殺した」と、俺がお前に告げた日、お前は俺に言ったよな…？アヒル」

ひどく落ち着いた口調で、阿修羅がアヒルへと問う。

「俺だけは絶対に、“許さない”と…」

その言葉を強調する阿修羅が、ひどく冷たく、恐ろしく思え、アヒルが思わず息を呑んだ。

「俺もそうだ」

阿修羅が短く、言葉を吐き捨てる。

——私はどうして…生きているのかな……

頭の中から消えることのない、あの悲しい笑顔。

「残酷な“言葉”が、俺から大切なものを奪った“言葉”が、絶対に“許せない”…」

続く阿修羅の言葉を聞きながら、晶が言葉により失ったものを十分に知っているアヒルは、戸惑うこともなく、そっと目を細める。

「だから俺は、残酷な“言葉”を消す」

はつきりと告げられる言葉に、アヒルが表情を歪める。

「お前もそうだろう…？アヒル」

どこか誘うように、阿修羅があげた左手を、アヒルの方へと向ける。

「カモメを殺した俺が、人々から言葉を奪おうとしている俺が、“許せない”…」

阿修羅が口元を緩め、そっと笑みを浮かべる。

「俺も“許せない”。お前も“許せない”。だから、こうして、俺とお前は向き合っている…」

楽しげに笑う阿修羅に、険しい表情を作るアヒル。

「俺とお前の、何が違う…？お前に俺を否定出来るのか…？なあ、アヒル」

「それは…」

問いかける阿修羅に対し、アヒルはどこか逃げるように俯く。阿修羅の言葉は正しく、反論する答えを、今のアヒルは持っていないかった。

「もう、言葉は不要だ。アヒル」

どこか諭すように、阿修羅がアヒルへと告げる。

「お前がどんなに必死に、言葉を投げかけたとしても、俺はそれを受け止めない」

突き放すように言い捨て、阿修羅が鋭くアヒルを見る。

「俺たちは、後はただ…」

アヒルへと向けられる阿修羅の笑みが、さらに冷たく変わった。

「許し合わずにいればいい」

「あ…！」

下ろしていた銃を振り上げる阿修羅に、アヒルが少し焦ったように表情を歪めながら、身構える。そんなアヒルを見て、阿修羅は楽しげに笑いながら、そつと口を開く。

「これが俺が与える、最後の四字熟語だ」
ラスト・イデオム

問題でも与えるかのように、阿修羅が楽しげに笑う。

「しんかく神格」

「しん…？」

阿修羅が口にしたその言葉に、アヒルが戸惑うように眉をひそめる。

「あび きょうかん阿鼻叫喚”…！」

高らかと言葉を放つと共に、阿修羅が引き金を引き、二人の上空へと大きな弾丸を放つ。弾丸は遥か上空へと舞い上がったところで、勢いよく弾け飛んだ。

「う…！」

弾け飛んだ光のあまりの強さに、思わず目を細めるアヒル。空で飛び散った光は、上下左右にどんどんと広がり、アヒルと阿修羅の居るその場所を、円柱状に取り囲んでいく。

「こ、これは…」

辺りを真っ赤な光の壁で覆われ、表情を曇らせるアヒル。

「さあ、始めようか。アヒル」

前方から聞こえてくる阿修羅の声に、周囲を見回していたアヒルが振り向く。

「そして、終わらせよう…」

冷たく微笑み、阿修羅が上空へと向けていた銃口を、アヒルへと向ける。

「この世界の不要な言葉、すべてを…！」

「……っ」

強い憎しみを宿らせた瞳で、高らかと言い放つ阿修羅を見つめ、アヒルがどこか苦しげに俯く。攻撃態勢を取る敵を前に、俯いてしまいうアヒルを見て、後方を待っていたガースケは、どこか心配するようにアヒルを覗き込んだ。

「クワア？」

「阿修羅は、俺の言葉なんかじゃ止まらない…」

大きな首を傾けるガースケを横に、アヒルが阿修羅には聞こえない声でそっと、諦めたように呟く。

「もう、止められない…あいつを倒さなきゃ、自由ある言葉は消える…」

アヒルが空いている右手を、左胸へと当てる。

「けど…だからって、あいつを撃つのか…？」

戸惑うように言いながら、アヒルが再び顔を上げ、正面に立つ阿修羅を見つめる。

——大好きだったよ——

——飛鳥 ああああ…！！——

「撃てる、のか…？」

この世界で一番大切なものを、言葉により失ってしまった阿修羅を、残酷な言葉への憎しみにより、不要な言葉を消そうとしている

阿修羅を、“間違っている”と、“そんなことは間違っている”と言いつけることが、アヒルには出来なかった。

——あいつは俺の神付きで、俺はあいつの神だった——
——カモメもよく、そう言っていた：——

「俺は本当に：あいつを、“許せない”のか：？」
手で押さえた胸に問いかけるように、アヒルが言葉を続ける。

「“許し合わずにいる”しか、ねえのか：？」
胸を押さえた手で、制服を強く握り締めるが、答えは出て来なかった。

「わかんねえ：わかんねえよっ：」
困惑したアヒルの口から、助けを求めるような、弱々しい声が零れ落ちる。

「カー兄っ：」
苦しげに表情を歪めたアヒルが、答えを求めるように、カモメの名を呟く。

「さあ、アヒル：」
冷たく微笑んだ阿修羅が、そっとアヒルの名を呼ぶ。

「この地獄の中で、ただ、泣き叫ぶといい：！」
「ク：！」
空へと放たれる弾丸に、アヒルは険しい表情を作った。

「ハア：！ハア：！」

一方、恵たちへと沖也を任せ、アヒルの居る言ノ葉町の東端へと駆けてきた籠也は、小高い丘の中腹へとやって来たところで、その足を止めた。丘の頂上部分を包み込むようにして、強い赤光の円柱が、空へと突き上げている。

「神っ：！」

その円柱を見上げ、籠也はどこか不安げに、アヒルを呼んだ。

Word 60 鬼ト化シタ神 (4)

——ただ、あの人に、笑ってほしかった。

「棗、この人が私の神様。安積晶よ」

「よ、よろしくお願いします…!」

「ああ…」

あまり、感情を表に出さない人。あまり、人と関わることを得意としない人。

「苦手でもしっかり野菜食べないと、体悪くなっちゃうよぉ? 晶」

「苦手なわけじゃない。前世がベジタリアンだったから、今世は間に合ってるだけだ。きっと」

「何、それえ」

少し、見栄っ張りな人。かなり、照れ屋な人。困るくらい、不器用な人。

「おかえり、お兄ちゃん!」

「ただいま、飛鳥」

とても、優しい人。

笑ってほしかった。あの日と同じ笑顔で、優しく、笑ってほしかった……

言ノ葉町、中央部。

「ん、んんっ…」

大きな、扱いきれないほどに強い光に吞まれたはずの棗は、自分を覆い尽くしていた光が消えていることを肌で感じ、固く閉ざしていた瞳を、ゆっくりと、恐る恐る開いた。

「あ…！」

棗が開いたその瞳を、さらに大きく見開く。

「はあ…はあ…」

目を開いた棗のすぐ目の前には、息を乱し、上下に肩を揺らしながら、苦しげに呼吸している七架の姿があった。七架は、籠手を纏った棗の右手を、両手で握り締めており、その両手は激しく傷ついて、赤い血が滴り落ちていた。七架の周囲には、ぼろぼろに砕けた七個の十字が、無残に落ちている。

「と…止めた、のですか…？ 私の“奈変”^{なへん}を…」

状況を確認するように、周囲を一周見回した棗が、戸惑った表情で、七架へと問いかける。すると、顔を上げた七架は、そんな棗へ、優しく笑みを向けた。

「うん、私の奈変の力を正面からぶつけて。止められるかどうかは賭けだったけど、でも良かった…」

「何故です！？」

「え…？」

七架の言葉が、棗の強い問いかけにより遮られる。

「何故…何故、このような無謀なことを…！」

「だって、あのまま無理に奈変をさせたら、棗さんが危ないと思っ
て…」

「危なくて、何がいけないのです！？ 私はあなたの敵でしょう…！
？」

「……っ」

非難するように、必死に言葉を浴びせる棗を真正面に、七架がそつと目を細める。

「言ったでしょ…？ “優しさ”は捨てられないって…」

七架が口元を緩め、さらに柔らかに笑う。

「それに：私やっぱり、あなたのことを、“敵”とは思えない：」
「え：？」

七架のその言葉に、棗が眉をひそめる。

「私：よくわかるの。あなたの気持ち：」

「わかる：？」

その言葉を低い声で繰り返し、険しい表情となっていく棗。

「あなたに何がわかるというのです：？」

「棗さん：」

少し俯き、問いかける棗に、七架が眉をひそめる。

「あなたに：あなたなどに、私の何がわかるというのです：！？」

勢いよく顔を上げた棗が、喰ってかかるように、七架へと問いかけを向ける。

「あなたに、あなたなどにわかるはずがない！私の、私の気持ちなど：！」

「わかるよ」

棗の必死の声を遮って、七架はもう一度強く、主張した。

「だって、私も、私の神様が大好きだから」

「え：？」

そう言って笑う七架に、棗は必死に続けていた言葉を止め、戸惑うように声を漏らす。

「私も、あの人のことが好きだから：」

その言葉を繰り返しながら、七架が少し俯く。

——ごめんな：——

自分が放ったわけでもない“居なくなれ”という言葉に、ただ悲しげに謝ったアヒル。ただ、悲しげだったアヒルの姿が目には焼きついて、それから七架は、アヒルのことを、目で追うようになった。

「だから、出来ることなら：あの人の背負う悲しみを、消してあげたい：」

願うように言う七架を、棗は目を逸らすことなく、まっすぐに見つめた。

「あの人の背負う悲しみを、少しでも軽くするために、私に出来ることがあるなら…何だってしたい」

俯いていた七架が、ゆっくりと顔を上げていく。

「あの人にはいつだって、笑っていてほしいから…」
「……っ」

棗の胸の中にあるその言葉を、同じように口にし、笑う七架の姿を見つめ、棗は思わず、驚いたような表情を見せた。力なく俯いた棗が、苦しげに目を細める。

「私も…私、だって…」

どこか戸惑うように、途切れ途切れの言葉を落とす棗。

「私だって、ただ、あの人に笑ってもらうためだけに…!」

「あなたの道の先に、あなたの神様の笑顔はあるの…?」

「……っ」

顔を上げ、主張する棗に、真剣な表情で七架が問いかけると、棗は思わず口ごもった。

「あなたが今、進もうとしている、この道の先に…本当に、あなたの大切な人の、笑顔はあるの…?」

「そ、それは…」

すぐに答えを口に出ることが出来ず、棗がどこか逃げるように、七架から視線を逸らす。

「あ、ある…あるに決まっています!すべての言葉に秩序をもたらせば、あの人はきっと笑って…!」

「じゃあ、なんで、朝比奈くんを通したの?」

必死に答える棗の声を、七架はまたしても鋭く、遮った。

「朝比奈くんに止めてほしかったから、足止めもせずに、ここを通したんじゃないの?」

七架が射るように、まっすぐに棗を見つめる。

「本当は、わかってるんじゃないの!?!この道は、間違ってるって

こと…！この道の先に、その人の笑顔はないってこと…！」

徐々に声を荒げ、七架が熱く、言葉を放つ。

「……っ」

七架の言葉を聞きながら、棗が強く、唇を噛み締める。

「その人を止めてほしくて、だから、朝比奈くんを通したんじゃないの…！？」

「違う…！！」

「ああ…！」

強く否定した棗が、右手を掴んでいた七架の両手を振り払い、七架の体を勢いよく跳ね除ける。棗の奈変を止めることで力を使いきった七架は、抵抗することも出来ずに、力なく地面に倒れ込んだ。

「違いますっ…違います！」

「棗さん…」

何度も首を横に振り、必死に否定する棗を、七架が倒れたまま見上げ、どこか悲しげに眉をひそめる。

「私は…私は、あの人の望みを叶えるっ…」

自分に言い聞かせるように言葉を発し、棗が籠手を纏った右手を、強く握り締める。

「だから私は、あなたを倒す…！」

「あ…！」

強く決するように言葉を放って、飛び出してくる棗に、七架が焦ったように声を漏らす。すでに奈変の十字も崩れた七架には、向かってくる棗に対抗する術がなかった。

「詰^{なじ}れ”…！」

「う…！」

振り下ろされる棗の右手に、七架は覚悟を決めたように、きつく両目を閉じた。

「妨^{さまた}げろ”」

「何…！？」

「え…？」

耳に届くその言葉に、戸惑いながらも、すぐさま瞳を開く七架。七架が目を開くと、七架の周囲を取り囲むように、赤い光の膜が張られており、七架へと向けられた棗の拳は、その膜により、止められていた。

「こ、これは…！」

「大丈夫…？」

棗が戸惑う中、七架が声の聞こえてくる後方を、勢いよく振り返る。

「七架…」

「囁ちゃん…！」

後方に立つ、横笛を構えた囁の姿を視界に入れ、七架は嬉しそうな笑みを零した。

「左守っ…」

七架と同じように囁に気付いた棗は、少し表情をしかめながら、警戒するように後方へと下がり、囁との間に距離を取る。

「囁ちゃんも、大丈夫？ 堕神は？」

「大丈夫。ちょっと助けてもらっちゃったけれど、無事に終わらせたから…」

身を起こしながら、不安げに問いかける七架に、手を貸しながら、安心させるように笑みを向ける囁。七架を立ち上がらせると、囁がゆっくりと、棗の方を振り向く。

「さてと…」

横笛を握り直す囁に、素早く身構える棗。

「私の邪魔をするのであれば、あなたも…！」

「もういいわ、棗…」

「……！」

今度は囁へと攻撃するべく、構えた右拳を振りかぶった棗であったが、右方から聞こえてきた、よく聞き覚えのあるその声を耳に入れ、大きく目を見開いた。拳の動きを止めたまま、棗が恐る恐る、声の聞こえてきた方を振り向く。

「もう、やめましょう…」

そこに居るのは、車椅子に乗った、一人の女性。

「棗…」

「お姉、ちゃん…」

その女性は、五年前に別れたきりの姉、櫻であった。久し振りに見る姉の姿に、棗の表情が曇る。

「……っ」

棗は確認するように、姉の両足を見ると、気まずそうに視線を落とした。車椅子に乗っているところから、五年前、晶に撃たれた櫻の両足が、動かなくなってしまったことを察したのだろう。

「櫻、さん…？」

「私が連れてきたの…」

戸惑う七架へと、囁が小声で言う。

「今更、何をしにきたんです…？そんな体でのこのこと、こんなところまで…」

「棗…」

どこか刺々しく言う棗を見つめ、櫻がそっと目を細める。

「私と我が神の邪魔でもしにきたのですか…？そうですよね。私たちは、あなたの“敵”ですもの」

続いていく棗の言葉に、櫻の表情が曇る。

「この子たちに、奈変を教えたのも、あなたなんでしょう…？私たちの邪魔をするために、教えた…」

「ええ、そうよ…」

櫻が棗の言葉をすべて認めるように、大きく頷く。

「あなたに、晶に…もうこんなことは、人の言葉を奪うようなことはやめてほしくて、彼女たちに力を与えた」

囁と七架に少し視線を流し、櫻が答える。

「もう、やめにしましょう…棗…」

櫻が棗へと、もう一度、その言葉を掛ける。

「五年前、私たちの止めることの出来なかったものは…たくさん」

ものを、傷つけ過ぎた…だからもう、ここで、終わりにしましょう…」

棗を見る櫻の瞳が、どこか悲しげに瞬く。

「これ以上、傷つけることは…」

「どうやって、止まれっていうの…?」

「え…?」

助けを求めるように聞こえてくる問いかけに、櫻が少し戸惑う。

「棗…」

「私たちは、もう、こんなところまで来てしまった…」

俯いたままの棗が、籠手を纏っていない左手を、そっと左胸に当てる。

「もう、この悲しみは止められないっ…」

言葉を続ける棗の声が、かすかに震える。

「人の言葉を奪うことでしか…」

胸に当てていた左手を下ろすと、棗が込み上げる想いを握り潰すように、右拳へと力を込める。

「もう、あの人は、笑ってくれないの…!!」

「棗さん…!」

力いっぱい拳を握り締め、櫻のもとへと飛び出していく棗に、七架が焦った様子で声をあげる。その横で、落ち着いた表情を見せた囁は、素早く横笛を奏でた。

「“叫^{さけ}べ”」

「うううあ…!」

櫻へと攻撃しようとした棗へ、囁が振動の塊を放つ。それが棗の振り上げた右腕に直撃し、籠手が碎けると、棗はそのまま力なく、その場へと倒れ込んだ。碎けた籠手が地面に落ち、もとの赤い言玉の姿へと戻る。

「う…うう…!」

七架との戦いと、未完成の奈変の発動もあり、すでにボロボロの状態の棗であったが、それでも必死に起き上がり、落ちた言玉へと

手を伸ばそうとする。

「まだ…私は、まだっ…」

険しい表情で、棗が必死に言葉を繋ぐ。

——俺に従うというなら、附いて来い……—
思い出される、あの日の悲しげな瞳。

「私は…！」

まだ戦意は失わず、言玉へと手を伸ばす棗の姿を見て、囁がさらに言葉を向けようと、横笛の口に当てる。

「待って！」

「え…？」

音色を奏でようとした囁を止めたのは、七架であった。そんな七架に、囁が少し戸惑うように眉をひそめる。

「けれど…」

「私に任せて、お願い」

「……わかったわ」

真剣な眼差しを向ける七架に、反論することも出来ず、囁は諦めたように頷くと、構えていた横笛を下ろした。

「棗さん」

囁から棗の方へと顔を向けた七架が、凜とした声で棗の名を呼ぶ。

「どんなに悲しみを追いかけても、その先に待ってるのは、悲しみだけだよ」

「……っ」

聞こえてくるその言葉に、言玉へと届こうとしていた棗の手が、ふと止まる。言玉を掴むことにばかり集中していた棗が、ゆっくりと顔を上げ、七架の方を見る。

「悲しみの先には、悲しみしかない。悲しみを終わらせるには、きつと、立ち止まって、受け止めるしかないんだと思う」

顔を上げた棗をまっすぐに見つめ、七架が言葉を続ける。

「だから、止めないよ…」

七架がどこか、促すように言う。

「止めないよ、きつと、笑ってられない…」

どこか悲しげに細められる、七架の大きな瞳。

「あの人は、笑ってくれないよ…」

「……っ」

真正面から向けられる七架の言葉を聞き、棗が見開いていたその瞳を、ゆっくりと力なく細めていく。

「あなたなら…止め、ましたか…？」

先程までとは異なり、落ち着いた口調となって、棗が静かに七架に問う。言葉を向けられると、七架はすぐに、穏やかな笑みを作った。

「うん」

「……………」

迷いなく頷く七架の笑顔を見て、棗はゆっくりと両目を閉じ、言玉へと伸ばしていた右手を地面に落とし、そっと俯いた。

「う…ううう…！」

深く俯いた棗の、その閉じた瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。

「ううう…！」

「棗…」

櫻は車椅子を動かして、しゃがみ込んだままの棗へと近寄って、穏やかな笑顔を浮かべ、まるであやすように、優しくその髪を撫でた。

『…………』

そんな姉妹の様子を見た後、囁と七架は目を合わせ、どこか安心したように笑みを浮かべた。

Word. 61 うけ継グチカラ (1)

言ノ葉町、中央部。

「あれは…」

姉の櫻に支えられ、ゆっくりと立ち上がった棗が、東の空に突き上げる、新たな赤い光の円柱を見つめ、そっと目を細める。

「神の、晶さまの“神格”…」

その円柱の光の源に居るであろう、自身の神のことを思い、棗が複雑そうに表情を曇らせる。

「彼ならば、止めることが出来るのかしら…」

棗の横で、同じように光の円柱を見つめ、櫻がそっと呟く。

「カモメですら、止めることの出来なかった…あの人の、悲しみを…」

「……………」

櫻のその言葉に応えることなく、棗が浮かない表情で俯く。

「大丈夫…？」

「うん。一通り、塞ぎ終わった」

囁が声を掛けると、自身の傷を治し終えた七架が、安心させるように大きく微笑んで、しゃがみ込んでいたその場で立ち上がった。

二人の視線はすぐに、姉妹と同じ、東の空へと向く。

「朝比奈くん…」

祈るように名を呼ぶ七架の横で、囁も不安げに眉をひそめた。

言ノ葉町、北西部。言ノ葉町立グラウンド。

「ほお…」

その頃、囁たちと同じように、堕ちし“宇の神”現^{うつ}も、東の赤光へと視線を向けていた。感心するような声を漏らし、現が鋭く口角

を吊り上げる。

「滅多なことでは力を見せぬあやつに、“神格”を出させるとは…」
現が言葉が続けながら、ゆっくりと自身の前方を振り返る。

「なかなかの手練てだれのようじゃのお、お前さんの神は」

「間違った認識は、やめてほしいな…」

現の前方に立つ灰示が、薄く笑みを浮かべる。

「彼は、僕の神ではないよ…」

「そうじゃったのお」

灰示の言葉をあっさりと認め、大きく頷く現。

「お前さんは元来、五十音士ではない…わしが生み出した痛みの産物、“忌”じゃ…」

わかりきっているその事実を、現が強調するようにはっきりとした口調で言う。

「ならばお前さんの神は、あそこに居る現“安の神”ではなく、忌の創造主である、このわしということになるのかのお…」

「……っ」

挑発するように笑う現に、灰示の赤い瞳が、さらに鋭く光る。

「くだらない言葉は、口にしない方がいい。言葉を落しながら、死ぬことになるからね」

わずかに感じる、怒りの込められた低い声を発し、灰示が右手で針を構える。

「放はなて」

灰示が小さく言葉を落とし、現へと素早く針を投げ放つ。赤い光を纏った細長い針が、まっすぐに現へと向かっていくが、現は余裕の笑みでそれを見つめた。

「お主の言葉など…いくら向けたところで、わしの言葉の前では無力」

笑みを浮かべた現が、右手に構えた、言玉の乗った杖を、そっと振り上げる。

「受け止め…」

「“弾^{はじ}けろ”」

「何：！？」

現が言葉で受け止めようとしたその時、灰示が現よりも先に、さらに言葉を放った。灰示の言葉を受け、現へと向かっていた針が、現のすぐ目の前で、勢いよく弾け飛ぶ。

「ク：！」

受け止める間もなく、後方へと飛んで、弾け飛ぶ針の光を避ける現。だが光の一片が、現の左頬を掠め、現が再び地面へと着地したその時には、頬から赤い血が滴り落ちていた。

「へえ」

表情を歪ませながら、頬から流れる血を拭う現を見つめ、灰示がどこか感心するように声を漏らす。

「君のような人間でも、流れる血は赤いんだね：勉強になったよ」

「フン：」

挑発するように笑う灰示を睨みつけ、現が鼻を鳴らす。

「では、貴様のような忌は、一体、何色の血を流すのかのお」

「さあね：試してみるかい：？」

「そうしよう」

灰示の言葉にすぐさま答え、現は再び、杖を振り上げた。

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「これは：」

周囲を覆い尽くしていく赤い光の壁を見回しながら、アヒルが眉間に皺を寄せ、険しい表情を見せる。

「何だ？何か熱：あ！」

どこからともなく感じる熱気に戸惑っていたアヒルが、壁伝いに広がっていく赤々とした炎に気付き、さらに眉をひそめる。壁を伝った炎は、空間を一周し、アヒルと阿修羅の居る場所を取り囲んだ。

炎に包まれ、体を熱されたからか、この状況にか、アヒルの額からは汗が滴り落ちた。

「クワア！」

「え？」

警鐘のようなガスクエの声に、アヒルが顔を上げる。赤い光に覆われた天井から、その天井を埋め尽くすように、無数の鋭い針が突き出していた。

「どうだ？アヒル」

阿修羅が右手を軽くあげ、アヒルの視線を足元へと促す。

「まるで、血の海のようにじゃないか…？」

赤々とした光に包まれた地面が、阿修羅の言葉の通り、まさに血の海のように見え、アヒルは思わず息を呑んだ。地面も天井も、すべてが赤い光に覆われたその空間は、どこか異様なものに見える。

「血の海に、炎の壁に、針の空…まるで地獄だな」

「ああ、そうだ。ここは、無間の地獄…」

口を開いた阿修羅が、冷たく笑みを浮かべる。

「この空間こそが俺の神格、“阿鼻叫喚”あびきょうかん」

「阿鼻、叫喚…？」

聞き慣れない言葉に、アヒルが少し首を傾げる。

「辛く苦しい地獄の中で、泣き叫び、泣き喚わめき、ひたすらに救いを求める様子のことだ」

言葉の意味を知らぬアヒルのために、阿修羅が丁寧な説明をする。

「ほら、今も：聞こえてこないか…？」

阿修羅が左手を耳に当て、澄ますような動作を見せる。

「地獄の亡者たちの、叫喚の声が…」

その言葉に誘われるように、アヒルがそっと耳を澄ます。

《ああああああ…！！》

「う…！」

意識を外へと向けたその瞬間、アヒルの耳に、おびただしい数の悲痛な叫び声が、急激に届いてくる。頭に直接踏み込んで来るよう

に聞こえるその声に、アヒルは思わず顔をしかめた。

「こ、これは…」

「これは、俺の地獄で朽ち果てて逝った者たちの声…」

戸惑うように声を漏らしたアヒルへ、阿修羅が楽しげに語る。

「案外、お前の兄の声も聞こえてくるかも知れないな…」

「……っ」

阿修羅のその言葉に、アヒルの表情が途端に曇る。

「カー兄は、地獄なんかには居ねえよ」

「ハハ、そうだな」

険しい表情で言い放つアヒルを見て、阿修羅が軽く、笑い声を発する。

「国語の出来は悪かったが、間違っても、人に恨まれるような男じゃなかった…」

懐かしそうに、穏やかに笑みを浮かべ、カモメを語る阿修羅に、アヒルはまたしても、困惑するような、迷うような表情を浮かべる。
「ならば、この力で、お前を、カモメの居るところまで送ってやろう…」

一瞬だけ目を閉じて、阿修羅が再び、鋭く光る瞳を開く。

「さあ、泣き叫べ。泣き喚^{わめ}け、アヒル…！」

高らかと声をあげた阿修羅が、右手の銃を、光で覆われ、空も見えない針の天井へと向ける。

「浴^あびせろ」！

阿修羅が言葉を発し、上方へと弾丸を放つと、赤い光で覆われた天井から突き出ている、無数の針の山が勢いよく降り注いできた。

「ガースケ！」

「クワアアア…！」

アヒルの呼びかけに応え、ガースケがアヒルの上空で、大きくその翼を広げる。

「扇^{あお}げ」！

ガースケがその巨大な翼をはためかせ、強い風を起こして、アヒ

ルへと降り落ちて来ていた針の山を、一気に吹き飛ばす。

「「集まれ」！」

アヒルはそのまま、すぐに次の言葉を発する。上空で体の向きを変えたガアスケが、その口の前に、金色と赤色の入り混じった、強い光の塊を形成していく。

「「当たれ」：！」

言葉と同時に、ガアスケが嘴を縦に大きく開き、その作り上げた力の塊を、阿修羅へ向けて放つ。向かってくる光を瞳で捉えようと、阿修羅は素早く、そちらへと銃口を向けた。

「「暴け」」

「グ：！」

阿修羅の弾丸に撃ち抜かれ、ガアスケの放った力の塊が、辺りに弾け飛ぶようにして崩れていく。その衝撃風を真正面から受け、思わず身を伏せるアヒル。

「「浴びせろ」」

「あ：！」

放たれた言葉を耳に入れ、アヒルが焦りの表情で顔を上げる。阿修羅の放った言葉により、天井からは再び、針の山が鋭く顔を出し、押し寄せようとしていた。

「あ、「扇げ」：！」

もう一度、その言葉を放ち、先程と同じように針の山を防ごうとするアヒル。態勢を整える間がなく、ガアスケが下方を向いたまま、翼だけを大きく上へと振り上げる。巻き起こる強い風に押され、無数の針はまたしても、アヒルから逸れていく。

「「操れ」」

「何：！？」

だが阿修羅が言葉を落とし、針へ向け弾丸を放つと、針たちはすぐさま向きを変え、再びアヒルへと向かってきた。

「う：う：う：う：！」

「クワアアア！」

無数の針を雨のように浴び、アヒルとガアスケがそれぞれに、痛々しい叫び声をあげる。全身を刻まれ、思わず地面へと膝をついたアヒルの後方に、傷ついた翼を力なく折り、ガアスケが着地する。

「う、ううう…」

「どうした…？アヒル」

苦しむアヒルへと、阿修羅はどこか楽しげに話しかける。

「その程度か…？」

「ク…！」

表情をしかめながらも、アヒルが地面へとついていた膝を立ち上がらせ、大きく右手を振り上げる。

「“荒れろ”」

アヒルの動きと連動するように、降り立っていた地面から、翼を広げ、再び浮上するガアスケ。

「“嵐”！」

ガアスケの突き出した翼から、強い風の塊が放たれ、アヒルの両側を通り、アヒルの目の前で一つとなって、阿修羅へと勢いよく襲いかかる。

「“荒れろ”」

迫り来る風の塊にも表情一つ崩さず、ひどく落ち着いた声で、アヒルと同じ言葉を落とす阿修羅。

「“嵐”」

阿修羅の銃口からも、激しい風の塊が放たれると、二つの嵐が、アヒルと阿修羅の中間地点で、激しくぶつかり合う。光に覆われた空間中に風の破片が走り、ぶつかり合う嵐に呑み込まれていくようであった。

「こん、の…！」

突き出した右手に必死に力を入れ、阿修羅の風に押し負けまいとするアヒル。そんなアヒルの様子を見て、阿修羅は薄く笑みを浮かべると、ぶつかり合っている嵐へと、銃口を向けた。

「何を…？」

「与えろ」^{あた}

言葉と同時に引き金を引いた阿修羅の銃が、ぶつかり合う二つの嵐を突き抜けると、壁伝いに赤々と燃えたぎる炎が、嵐へ向けて八方から一気に降り注いだ。

「何…!？」

アヒルが、集められていく炎に驚いているわずかの間に、壁際からやって来た炎たちは、ぶつかり合っている嵐へと突っ込み、風の勢いを借りて一気に燃え広がって、勢力を増し、そのままアヒルの方へと向かってきた。

「う、うあああああ!」

炎により勢いを増した、二つ分の嵐を直撃し、アヒルが後方へと吹き飛ばされる。アヒルの吹き飛んでいく、後方の壁には、燃え盛る激しい炎。

「クソ…!」

迫る炎の壁を避けるため、アヒルが上方へと右手を伸ばす。

「上が…!」

《あああああ…!》

「何…!？」

言葉を使うため、アヒルが伸ばしたその右手が、空間から浮き出てきた、亡者のような赤い影の集団に捕らわれてしまう。

「う…!」

動きを封じられ、言葉を使うことも出来なくなったアヒルの背に、炎の壁が迫り、アヒルが険しい表情を見せた。

「焙れ」^{あや}

「あああああ…!」

阿修羅が小さく言葉を落とすと、さらに激しさを増した炎が、壁へと背を打ちつけたアヒルの体を、容赦なく焦がした。叫び声をあげて、アヒルが力なく地面へと倒れ込む。

「気を付けろ…」

倒れたままのアヒルへと、薄く笑みを浮かべ、阿修羅がそつと言

葉を向ける。

「地獄の亡者たちは、お前もこの地獄に引きずり込もうと、必死のようだ……」

「う、うう……」

脅しのような阿修羅の言葉を聞き、苦しげな声を漏らしながら、アヒルが両手を地面につき、傷だらけの体を必死に起き上がらせる。
「クワアアア……」

上半身だけを起こしたアヒルのもとへと、小さく翼を動かし、寄って来るガアスケ。アヒルの体と連動しているためか、その巨体にも激しい火傷の痕が見えたが、それでもガアスケはアヒルの身を案じるように、大きく首を曲げ、アヒルの方を覗き込んだ。

「悪い、ガアスケ。お前まで、痛い目に遭わせて……」

近付いてきたガアスケの嘴をそつと撫で、アヒルが力なく笑みを浮かべる。

「話している場合か……?」

「ク……!」

その声にあヒルが前方を向くと、そこには銃口をあヒルへと向けた阿修羅の姿があった。

「“当たれ”」

阿修羅が言葉を放ち、引き金を引くと、アヒルへと向けられた銃口から、先程までと比べ、一段と大きな赤い光の弾丸が撃たれる。

「あ……!」

自らの文字を口にしながら、必死に発すべき言葉を探すアヒル。
“抗え”……!」

言葉を放ち、アヒルがガアスケを、迫り来る弾丸へと向かわせる。両翼を大きく左右へと開き、真正面から弾丸を受け止めるガアスケ。
「そんな、俺を真似た言葉で……」

銃を構えた状態のまま、阿修羅が静かに声を落とす。

「俺に勝てると思うか……?」

「クアアアアア!」

弾丸がさらに勢力を増すと、弾丸を受け止めていたガアスケの両翼が、外側へと弾き出され、そのまま強い光がガアスケの巨体を貫いた。撃ち抜かれたガアスケが、上空へ向けて、甲高い悲鳴をあげる。

「ガアスケ…！ううう…！」

撃ち抜かれたガアスケを心配するように、身を乗り出したアヒルであったが、ガアスケの受けた攻撃がアヒルにも伝わり、走る痛み、再びその場に膝をついてしまう。

「ううう…うう…」

苦しげに声を漏らすアヒルの横へと、力なく倒れ込むガアスケ。互いの傷を連動して受けるアヒルとガアスケ、それぞれの痛みは重く、すでに立つことも出来ないほどの傷であった。

Word. 61 うけ継グチカラ (2)

「どうしたというんだ…？アヒル」

前方から届く声に、深く俯いていたアヒルが、ゆっくりと視線を上げる。

「さっきから、ろくな攻撃をしていないぞ…？」

敵であるアヒルの攻撃まで心配するほどに、余裕を見せる阿修羅。

「絶対に許せない”んだろう…？この俺が”

阿修羅が、どこか確認するように問いかける。

「大好きだった“カー兄”を殺した、この俺が…」

「……っ」

強調するように、カモメの名を出す阿修羅に、アヒルが再び眉をひそめる。阿修羅のその言葉は、わざと、アヒルを挑発しているように聞こえた。

「俺が憎いんだろう？だったら、もっと、激しく攻撃してきたらどうだ？初めて対峙した、あの夜のように…」

攻撃を誘うように、阿修羅がアヒルへと左手を差し伸べる。

「あの時のお前は、なかなか見応えがあったよ。力の差は歴然である俺に、形振り構わず向かってきて、この傷をつけた」

差し伸べた左手を動かして、阿修羅が左頬の傷の前へと持っていく。頬の浅い掠り傷は、初めてアヒルと阿修羅が対峙した夜、アヒルが唯一、阿修羅に負わせた傷であった。

「もっと、俺に見せてくれないか…？あの時のように、お前の底知れぬ憎しみを…」

また、誘うように言う阿修羅をまっすぐに見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「わから、ないんだ…」

小さく落とされたアヒルの言葉に、阿修羅が眉をひそめる。

「わからない…？」

「ああ…」

聞き返した阿修羅に、アヒルはゆっくりと頷いた。

「“許さずにいる”ことが、正しいことなのか…“許さずにいる”ことだけしか、道がないのか…」

「何を馬鹿なことを」

戸惑うアヒルの言葉を、阿修羅はすぐに笑い飛ばす。

「“許さない”と、俺にそう言ったのは、お前だろう？なのに今更、何を迷う必要がある…？」

「あんたを許せねえって思うのは、事実だ。その思いは今も変わってない。けど…」

言葉を付け加え、アヒルがそっと表情を曇らせる。

「俺があんたを殺したとして、仇を討ったとして、カー兄がそれを喜ぶと思うか…？」

真剣な表情のアヒルのその問いかけに、阿修羅が浮かべていた笑みを止め、眉間に皺を寄せる。しばらくの間、押し黙り、阿修羅は何やら考え込むように俯いた。

——幸せを呼び込むためには笑顔、笑顔おう！ねっ？——

俯いた阿修羅の脳裏に、どこまでも明るいカモメの笑顔が浮かぶ。

「……喜ばない、だろうな」

少しの時を置いて、阿修羅がゆっくりと答える。

「どんな理由があろうとも、自分のために誰かが傷つくことを、良しとはしない男だ。カモメは」

確信するように、はっきりと言い放つ阿修羅を見て、アヒルが目を細める。

「ああ、俺もそう思う」

阿修羅に賛同するように頷いたアヒルは、仇である阿修羅の前に、穏やかな笑みを浮かべていた。

「やっぱりあんた、カー兄のこと、よくわかってるよ」

しみじみと呟きながら、嬉しそうにも見える笑顔を浮かべるアヒルを見つめ、阿修羅が怪訝そうに眉をひそめる。

「だったら何だ？」

不快そうに顔をしかめ、阿修羅が鋭く問いかける。

「カモメが喜ばないから、俺を殺しはしないと、俺を許すとも言う気か？」

「んな、天使さまみてえなことは言わねえよ」

問いかける阿修羅へと、アヒルが自嘲するような笑みを向ける。

「俺はあんたのこと許せないし、あんたのやろうとしていることも許せない」

アヒルが笑みを止め、真剣な表情を作る。

「ただ、確かめたいと思ったんだ」

「何をだ？ 一体、何が言いたい？」

アヒルの言葉の真意を理解出来ず、阿修羅がどこか急くように問いかける。そんな阿修羅へと、アヒルはまっすぐにその視線を投げかけた。

「俺があんたを殺したって、カー兄は喜ばないって、あんたは言った」

「ああ」

次の言葉を求めるように、阿修羅が素早く頷く。

「なら、あんたの妹は？」

「……っ」

アヒルのその問いかけに、阿修羅の表情が凍りつくように止まる。「こんなことをして、人の自由ある言葉をすべて奪って、あんたの妹は喜ぶのか……？」

続けて問いかけるアヒルに対し、深く俯いた阿修羅は、何も答えることなく、押し黙った。見つめるアヒルと、俯いたままの阿修羅の間にしばらく、沈黙が訪れる。

「成程な……」

先に口を開いたのは、阿修羅であった。

「おかしいことばかり言うと思ったら：そうか。くだらないことを吹き込まれたか：」

阿修羅が少し口元を崩し、薄く笑みを浮かべる。

「まあ、五十音士共には知れた話だからな。韻にでも聞いたか？」

「韻じゃねえ」

「そうか。まあ、どうでもいい」

興味なく言いながら、阿修羅がゆっくりと、俯けていた顔を上げる。

「それで？俺の過去を知って、俺が哀れにでもなったか？」

「別に哀れんでねえよ。俺の言葉、ちゃんと聞いてたか？」

少し顔をしかめながら、アヒルが再び阿修羅の瞳を見つめる。

「俺は、こんなこととして、あんたの妹が喜ぶのかって聞いたんだよ」
もう一度問いかけを向けるアヒルに、柔らかくなっていた阿修羅の表情が、またしても凍りつく。

「カー兄が喜ばねえってわかってるあんたになら、わかるはずだ！
あんたの妹だって、きっと喜ばない：！」

阿修羅をまっすぐに見据え、アヒルが強く声を張り上げる。

「自分のために、自分の大好きな兄ちゃんが、人を殺したり、大事な言葉を奪ったりするなんて、絶対に喜ばない！」

真剣な表情を見せ、アヒルがはっきりと言い切る。

「そんなことくらい、あんたにだってわかるはずだ！わかってるはずだ：！」

「……………」

響き渡るアヒルの主張を耳に入れながら、すべての表情を消した阿修羅は視線を落とし、血の海のように赤く染まった地面を、ひたすらに見つめていた。

「だから、こんなことはもう：！」

「“やめろ”と：？」

言いたかったことを先に口にされ、アヒルが思わず言葉を止める。
「安っぽい説得だな、アヒル：」

向けられる冷たい視線に、眉をひそめるアヒル。

「俺は別に、復讐のために言葉を奪おうとしているわけじゃない」
「え…？」

阿修羅の発した言葉に戸惑い、アヒルが少し首を傾ける。

「これは、“贖い”だ」

「贖い…？」

「ああ、そうだ」

言葉を繰り返したアヒルへと、阿修羅が大きく頷きかける。

「“言葉”が犯してきた罪への贖い。罪を犯したものが、罰を受けるのは、当然のことだろう？」

「自由ある言葉を消し去ることが、言葉への罰だって言うのか…？」

「ああ、そうだ。それくらいのことをした。言葉は」

——私はどうして…生きているのかな…？——

「それくらいの罪を犯してきた。言葉は…」

哀しげだった妹の最期の笑みを思い出し、阿修羅が低く、声を響かせる。

「罪深き“言葉”に、贖わせることこそが、言葉の神の役目だ」
顔を上げた阿修羅が、睨みつけるようにアヒルを見つめる。

「“許さない”ことが、俺の役目だ」

「……っ」

はつきりと言い放つ阿修羅の言葉を聞き、アヒルがそつと目を細める。あげていた右手をゆっくりと地面に落とすと、アヒルは力なく顔を俯けた。

「そんなの…」

迷うように声を漏らしながら、アヒルが地面に落とした右手を、軽く握り締める。徐々に拳を握る力を強くして、アヒルは勢いよく顔を上げた。

「そんなの…！」

「“当^あたれ”」

「あ…！」

アヒルの言葉を遮るように、アヒルへと向かってくる弾丸。

「うあああ…！」

避ける間もなく弾丸に左肩を貫かれ、アヒルが地面につけていた膝のバランスを崩し、後方へと腰をつく。アヒルは血の流れ落ちる肩を押さえながら、苦しげに表情を歪めた。

「言っただろう？アヒル…」

一層冷たい表情となった阿修羅が、静かにアヒルへと言葉を向ける。

「“俺の言葉は死んだ”と」

「ク…」

射るような視線を向けられ、全身を鋭い刃で突き刺されたような感覚に陥り、アヒルは思わず眉をひそめる。

「お前がどんなに必死に言葉を投げかけても、俺はそれを受け止めない。俺とお前が、言葉を交わすことはない」

そう言って、阿修羅が素早く引き金を引く。

「お前はただ、泣き叫んでいればいい。“当^あたれ”」
「う…！」

再び向けられる弾丸に、身動きの取れないアヒルは大きく、表情を歪めた。

「クワアアアア！」

「ガアスケ…！」

翼をはためかせたガアスケが、自分の巨体でアヒルを横へと押しつけ、弾丸の軌道上からアヒルをどかせる。自身も素早く舞い上がると、弾丸は誰も居なくなった場所を駆け抜け、炎を纏った壁へと消えた。

「邪魔な鳥だ」

上空へと舞い上がったガアスケを見上げ、阿修羅が少し顔をしかめる。

「“圧縮”」

「あ…！」

ガアスケへと向けた銃口の前で、力の圧縮を始める阿修羅に、アヒルが焦った様子で声を漏らす。

「や、やめ…！」

「“当たれ”」

アヒルの制止の声が放たれきる前に、阿修羅の銃口から、巨大な光の弾丸が放たれた。

「クアアアアア…！！！」

「ガアスケ…！」

その巨体と大差ない弾丸を直撃し、ガアスケが激しい悲鳴をあげる。アヒルが思わず身を乗り出すが、撃ち抜かれたガアスケの巨体は、その体を金色の粒子へと姿を変えて、崩れ落ちていく。苦しい表情のまま、ガアスケが完全に崩れ落ちると、元の赤色の言玉が、地面に力なく落下した。

「あ…」

落ちてきた言玉へと手を伸ばしながら、アヒルが茫然とした表情を見せる。

「また、一人になったな」

「ク…！」

再び銃口をアヒルへと向ける阿修羅に、険しい表情を見せたアヒルが、撃たれた左肩を庇いながら右手を伸ばし、地面に転がる言玉を握り締める。

「第一音“あ”、解放…！」

アヒルが言玉を解放させ、真っ赤な銃を構える。

「“当たれ”…！」

銃撃の反動に顔をしかめながらも、アヒルが阿修羅へと、光の弾丸を放つ。

「“当たれ”」

余裕の笑みを浮かべた阿修羅が、静かにアヒルと同じ言葉を口に

する。阿修羅の銃から同じように放たれた光の弾丸が、迫り来ていたアヒルの弾丸と、勢いよくぶつかり合った。だがぶつかった次の瞬間、阿修羅の弾丸があつという間に、アヒルの弾丸を砕く。

「な……!? うあああ!」

押し負けたことに驚く間もなく、阿修羅の弾丸がアヒルへと襲いかかった。弾丸に吹き飛ばされ、アヒルが後方へと転がり込む。

「はあ……はあ……」

肩を揺らし、大きく息を乱しながら、引きずるようにして、必死に体を起き上がらせるアヒル。

「俺と同じ言葉では一生、俺には勝てないぞ……?」

まだ起き上がれていないアヒルへと、阿修羅が上から見下ろすように冷たい視線を送る。

「尤も、お前が、俺の知らぬ言葉など持っているはずもないか……」

嘲るようにそう言って、阿修羅が銃口をアヒルへと向ける。

「“当たれ”」

「ううああああ……!」

阿修羅が弾丸を放ち、何とか起き上がろうと踏ん張っていた、アヒルの右足を貫く。周囲に赤い血を撒き散らしたアヒルが、力なくその場に倒れ込む。

「う、うう……」

地面にうつ伏せに倒れ込んだまま、アヒルは苦しげに声を漏らすだけで、もう起き上がろうとする素振りを見せることはなかった。そんな起き上がることも出来ないアヒルへと、阿修羅がさらに銃口を向ける。

——あんたの妹は、喜ぶのか……? ——

「……っ」

思い出されるアヒルの言葉に、阿修羅がそっと目を細める。

「飛鳥のためじゃない……」

厳しい表情を見せ、阿修羅がまるで、言い聞かせるように呟く。

「これは俺の、俺自身の選んだ…」

阿修羅の金色の瞳が、より一層、鋭く輝く。

「修羅の道…！」

強く言い切ると、阿修羅が細めていた瞳を見開く。

「集まれ^{あつ}」

阿修羅が銃を握る右手に力を込め、はっきりとした口調で、自身の言葉を発する。すると、炎の壁から、針の空から、血の海から、阿修羅の形成したその空間のすべてから、赤い光が集まり始め、銃口の前に、今までで一番巨大な、光の塊を作っていく。

「これで終わりだ、アヒル」

動けぬアヒルへと、狙いを定め、阿修羅が引き金を引く。

「ク…！」

少しだけ顔を上げたアヒルが、視界を覆い尽くすほどの巨大な弾丸に、険しい表情を見せる。

「“当たれ”…！！」

阿修羅の銃から、集められた巨大な弾丸が、勢いよくアヒルへ向けて放たれた。

「“刈れ^か”！」

大きく言葉を発し、真っ赤な鎌を振り下ろす箆也。だが箆也の鎌は、分厚い赤光の壁により阻まれた。鎌の先を伝って感じる、壁の強固な感触に、箆也が眉をひそめる。

「やはり無理か…」

悔しげに言葉を落としながら、箆也が鎌を引く。

「この中に、神が居るのに…」

箆也が顔を上げ、空まで伸びている、赤光の円柱を見上げる。突如、丘の上に作られた、巨大な円柱状の空間は、恐らくは阿修羅の力によるものだろう。だが、箆也の言葉では、この空間の壁を壊し、

中へ入ることは困難であった。

「どうすればっ…」

「クワアアア」

「え…?」

戸惑うように俯いた箆也が、ふと横から聞こえてくる、鳥の鳴き声のようなものに気付き、振り向く。そこには、一般的な鳥より少し大きいくらいの大きさの、金色の鳥が浮かんていた。だが、その金色の体は透けており、体を通して向こう側が見える。

「あなたは…」

傍に浮かぶその鳥をまじまじと見つめ、眉をひそめる箆也。

「神の…? いやっ…」

その鳥は、アヒルの言玉から姿を変えるガアスケの姿によく似ていたが、少し異なる雰囲気、箆也はすぐに首を横に振った。ガアスケではないが、だが確かに箆也には見覚えがあった。

「あっ…」

考え込んでいた箆也が、何か思いついたように目を開く。

「カー、坊…?」

「クワア!」

箆也が戸惑いながら名を呼ぶと、鳥はそれに応えるように、大きく鳴いた。呼びかけに応えた鳥が、今後は何かを求めるように、その鋭い瞳でまっすぐに、箆也を見つめる。

「……そうか」

鳥の求めが通じたのか、箆也が目を細め、そっと頷く。

「わかった。援護しよう」

答えるようにそう言うと、箆也が再び、目の前に塞がる赤い壁の方を見つめ、右手に構えた鎌を、自分の体の前へと突き出す。

「あの日の言葉が、きつとあなたを導いてくれる」

確信するように言って、箆也が鎌を握る手に力を込める。

「^{かな}叶え”…!」

「んっ…」

うつ伏せに倒れ込んでいたアヒルが、ゆっくりと、その瞳を開く。

「あれ？俺…」

先程まで、意識が飛んでしまいそうなほどに感じていた痛みがなくなっていることに気付き、アヒルが戸惑うように声を出しながら、体を起き上がらせていく。体は軽々と動き、起き上がってから見回してみると、負っていたはずの無数の傷は一つもなく、制服もきれいなままであった。

「な、何だ？」

自分の両手を見つめながら、アヒルが困惑の表情を見せる。

「確か俺…あれ？一体全体、何だっつい…」

「アーくん」

「……！」

戸惑いをすべて口にするように、言葉を吐きだしていたアヒルであつたが、耳に届く、その短い声に、すぐさま言葉を止め、大きく目を見開いた。恐る恐る、どこか怯えるように、アヒルが顔を上げ、声の聞こえてきた後方を振り向く。

「アーくんっ」

ただ、どこまでも白い世界に佇む、笑顔の青年。少し首を傾けて、アヒルへと微笑みかけている。

「カー兄…」

大好きだった兄の姿を瞳に映し、アヒルはさらに困惑するように、深々と眉をひそめた。

「久し振りだねえ、アーくん。大きくなってえ。今、俺と同じ年くらいかなあ？」

「……………」

「アーくん？」

満面の笑みで、親しげに話しかけるカモメであったが、アヒルは険しい表情でカモメを見つめたまま、まったく言葉を発しようとはしない。そんな様子のアヒルに、カモメは戸惑うように首を傾げた。

「カー兄…？ いや…」

アヒルが何かを否定するように、首を横に振る。

——アーくんが言ったんだ。“居なくなれ” って——

「また、幻覚じゃ…」

警戒するように、身構えるアヒル。アヒルの脳裏には、かつて戦った始忌の一人、桃真^{トウマ}が力で見せた、カモメの姿を騙った幻覚のことが過ぎっていた。カモメの姿に惑わされ、アヒルは自らの手で幻覚を破ることが出来なかったのである。今度はそういったことのないようにと、アヒルが警戒の色を前面に押し出す。

「……っ」

強張ったアヒルの表情を見ると、少し目を細め、カモメはより一層、大きく笑った。

「アーくん」

「あ…」

再び笑顔で呼びかけるカモメに、アヒルが表情を揺らす。泣いてしまいそうになるほど、懐かしい声。温かくなる笑顔。それは、幻覚で見たカモメとは、まるで違っていた。

「か、カー兄…？」

少し首を傾け、アヒルが恐る恐る、カモメを呼ぶ。

「うん」

「カー兄…」

大きく頷くカモメに、アヒルがもう一度、今度は確信するように、カモメを呼んだ。

「本、当に…幻覚じゃ、ないんだ…」

「まあ、幻覚みたいなものなんだけどね。でもちゃんと本物だから、安心して」

カモメがアヒルの方へと歩み寄りながら、笑顔で言葉を放つ。カモメの言葉を聞いただけで、安心しきってしまう心に、アヒル自身が戸惑ってしまうほどであった。

「最期の言葉で、俺に残ったすべての力を、アーくんのところに送った」

「言葉で？」

「うん」

不思議そうに聞き返すアヒルに、カモメは優しく頷く。

「俺の力は、アーくんの中で眠ってたガアスケの一部になって、ずっとアーくんと一緒に居たんだ」

「ガアスケの…あつ」

カモメの言葉に驚いていたアヒルが、ふと何か思い出したように、声を漏らす。

——大丈夫だよ——

桃真の幻覚に、完全に挫けてしまったアヒルへと、差し出された、温かい一本の手。

——ガアスケ？——

幻覚から目覚めると、アヒルの手の中には、小さなガアスケの体があった。

「じゃあ、あの時、俺を助けてくれたのはっ…」

戸惑うように、だがどこか確信を持って、アヒルが歩み寄って来るカモメを見つめる。

「晶の空間の中じゃ、自由に動くことが出来なかったんだけど、籠也に手伝ってもらってね、何とかこうして、アーくんのところへ来れたんだ」

「籠也、の…」

目の前へとやって来たカモメの手を借りて、アヒルがゆっくりと立ち上がる。

「アーくん、どうしても伝えたいお願いがあつて」

「お願い…？」

「うん」

首を傾けたアヒルに、カモメはまた笑顔で、大きく頷いた。そして笑顔のまま、そっと目だけを細める。

「晶を、救ってほしい…」

「……っ」

切々と伝えられる、カモメのその願いに、アヒルは少し驚くように、眉をひそめた。

「阿修羅、を…？」

「うん」

戸惑うように聞き返したアヒルに、カモメは少しの間を置くこともなく頷いた。

「あいつはっ…あいつはカー兄を殺したんだぞ…！？」

まっすぐにカモメを見つめたまま、アヒルが思わず声を荒げる。

「うん」

だが、そんなアヒルの声にも動じず、カモメはあっさりと頷いた。

「他にもたくさんの人を殺した！」

「うん」

「言ノ葉町の皆の、自由ある言葉を奪った！」

「うん」

必死に言い放つアヒルの言葉の一つひとつに、カモメは頷いていく。

「今、世界中の人たちから、自由ある言葉を、意志を、奪おうとしてる…！」

「うん、うん…。知ってる、全部」

悟ったような笑みを浮かべ、カモメがそっと頷く。そんなカモメ

に、険しい表情を見せると、アヒルが強く口を閉じ、荒げていた声を止めた。

「……それでも、救えって…言うのか？」

「うん…」

先程とは打って変わって、小さく届く問いかけに、カモメは深く頷いた。

「晶は、俺の神なんだ。たった一人の、大切な神様なんだ…」

願うように紡がれるカモメの声に、アヒルが徐々に顔を俯けていく。

「殺されたってのに、まだあいつのこと…“神”だなんて、呼ぶのかよ…？」

「うん、俺の神様だよ」

批判するように問いかけるアヒルに対し、カモメは一瞬も躊躇うことなく、すぐさま答える。

「そして、俺の親友だ」

カモメのその言葉に、俯いていたアヒルの表情が、かすかに動く。

「だから、救ってほしい」

俯いたアヒルの頭を見つめ、カモメがもう一度、願う。

「それはもう、アーくんには出来ないことなんだ」

「……………」

深く俯き、カモメの声を耳に入れながら、言葉を発しようとはせず、押し黙っているアヒル。何の反応も示さないアヒルに、カモメが少し戸惑うように首を傾げる。

「アーくん…？」

少し遠慮がちに、アヒルへと呼びかけるカモメ。だが、それでも、アヒルは反応を示さない。

「やっぱあ、無理かな？調子良すぎる？あのお、えっとお…」

何も答えようとしないうアヒルに、ひどく困り切った様子でカモメが言葉を繋いでいたその時、カモメの左肩へと、アヒルの強い拳が届いた。

「うわ、痛！」

重い音を立てて、やって来た拳に、カモメが痛みというよりは、驚いた様子で声をあげる。

「アーくん、怒っちゃった！？ええっと、じゃあその、俺の宝物だった“恋盲腸特製抱き枕”を…！」

「ムズいこと、言うよなあ…」

「へ？」

焦った様子でその場を何とか取り繕おうとしたカモメが、アヒルの口から零れ落ちる小さな声を聞き取り、目を丸くする。

「“ぶっ倒せ”って言われた方が、全然楽だぜ。って、楽なわけじゃねえけど、その方が、まだマシ？」

拳を引いたアヒルが、ゆっくりと顔を上げる。アヒルは少しばかり表情をしかめていたが、カモメが気にするように、怒っている様子はまったくなかった。

「ったく、カー兄も面倒なこと、頼んでくれるよなあ」

「アーくん…」

困ったように頭を掻くアヒルを見つめ、カモメが再び笑みを浮かべる。

「けど、アーくんはわかってくれたじゃない」

優しく微笑み、カモメがアヒルの頭を撫でる。

「俺がこうして頼む前から、俺の願い、わかってくれたじゃない」「それは…」

同じような年頃となってしまった兄に、頭を撫でられ、気まずそうに俯きながらも、アヒルは久し振りのその手の感触を、振り払うことなど出来なかった。

「当たったり前だろ？俺はカー兄の弟なんだから、カー兄の言いそうなことくらい、わかるっての」

「アハハ、それもそうだね」

悪態づくように言うアヒルに、カモメはどこか嬉しそうに笑みを零した。

『あ…』

アヒルの頭から離れたカモメの手が、金色の光を放ちながら薄れていく光景を目にし、アヒルとカモメが互いに表情を曇らせる。

「そろそろ、時間だね…」

金色の光に包まれていく自身の体を見つめ、カモメが少し悲しげに微笑む。

「かなり名残惜しいけど」

「カー兄…!」

縋るように名を呼ぶアヒルを見て、そっと目を細めると、カモメは薄れ始めている両手で、アヒルの左手を取り、力一杯握り締めた。握り締めた手を持ち上げ、自分の額へと当てるカモメの姿は、まるで祈りでも捧げているかのようであった。

「俺の力…これできっと、完全になるはずだから…」

「え…?」

握り締められたカモメの両手から、全身へと伝わってくる金色の光に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。やがてカモメの両手から放たれた光が収まると、カモメはゆっくりと、額から手を離れた。

「ごめんね。大変なことばかり頼んでるのに、こんなことくらいしか、してあげられなくて…」

手を握り締めたまま、カモメがまっすぐにアヒルを見つめる。

「ごめんね。俺への言葉のせいで、ずっとずっと、いっぱいいい、苦しめて…」

「……っ」

向けられるカモメの謝罪を、必死に否定するように、アヒルが何度も何度も、首を横に振る。

「ごめんね。たったの十年しか、アーくんのお兄ちゃんで、居てあげられなくて…」

カモメの声がかすかに震え、細められた瞳が、わずかに光るもので潤む。

「違う…違う。謝るのは俺だよ、カー兄っ…」

同じように瞳を潤ませながら、アヒルが光に包まれていく兄へと、必死に言葉を投げかける。

「あんな言葉っ…」

——兄ちゃんなんか、居なくなればいいんだ……！——
ずっと、背負ってきた言葉。

「あんな言葉っ…向けて、ごめん…！」

ずっと伝えられずに、胸に持ち続けていた言葉を、アヒルがやつと口にする。

「あんなこと言って、ごめん…！ごめん、カー兄…！ごめん…！」

何度も謝るアヒルの声が、大きく震える。

「居なくなればいいなんて、思ったことっ…一回もない！俺、カー兄が居てくれて良かった…！」

必死に言葉を放つアヒルの瞳から、涙が溢れ出す。

「カー兄が兄ちゃん、本当に良かった…！！！」

「……っ」

涙を流しながら、はつきりと言い放つアヒルのその言葉に、カモメが目を細め、心の底から嬉しそうな笑顔を見せる。

「うん、許すよ」

カモメの、もう完全に光と化し、感触すらも感じない手が、流れ落ちるアヒルの涙を撫でる。

「俺は、許すよっ…」

噛み締めるようにその言葉を呟いて、カモメがアヒルから手を離し、数歩、後ろへと下がる。すでにカモメの両足は、金色の光の粒子となって、消え始めていた。

「大丈夫。アーくんなら大丈夫だって、俺は信じてる」

目一杯の笑顔を咲かせ、カモメがアヒルへと言葉を向ける。

「だって、アーくんはっ…」

「あ…！」

光となって、どんどん消えていくカモメの体に、思わず身を乗り出すアヒル。

「俺の、自慢の弟だから！」

誇らしげにそう言葉を放って、カモメの体が完全に金色の粒となって、掻き消えていく。

「カー兄っ…」

舞い上がっていく光の粒子を見上げ、目を細めるアヒル。

「カー兄iiiiiiiっ…!!」

アヒルの大きな声が、その何もない空間へと響き渡ると、空間全体が金色の強い光を放った……――

「何…!?!」

思わず顔をしかめ、声をあげる阿修羅。アヒルへと向けたはずの、今までで一番巨大な阿修羅の弾丸が、アヒルへと届くその前に、突如、跡形もなく、きれいに消えてしまったのだ。

「何だ？ 一体、何がっ…」

「……っ」

「な…!?!」

消えてしまった弾丸の向こうで、ゆっくりと立ち上がるアヒルの姿を視界に入れ、阿修羅がさらに驚いた様子で目を見開く。

「馬鹿な…あの傷で…」

今までの落ち着いていた表情とは異なり、啞然とした様子で呟く阿修羅。アヒルの傷は重く、立ち上がるどころか、指一本動かすことも困難なほどの状態であるはずだった。

「何故だ…? 何故、立てる…?」

困惑するように眉をひそめる阿修羅の額から、一筋の汗が流れ落ちる。

「……………」

戸惑う阿修羅が見つめる中、起き上がったアヒルは、ゆっくりと自身の体を見回した。全身は淡い金色の光に包まれており、その光の影響か、負った傷口から流れ出ていたはずの血が止まっている。

「行こう…」

誰かへと話しかけるように言って、アヒルが銃の握る手とは逆の手、左手を、ゆっくりと空へと掲げる。

「カー兄…！」

アヒルがカモメの名を呼んだその瞬間、掲げられたアヒルの左手から、強い金色の光が発せられた。

「ク…！」

目に飛び込んでくる強い光に、阿修羅が思わず顔をしかめる。

「何だ…？この光…あっ…！」

戸惑うように言葉を口にしていた阿修羅が、眩しさも忘れ、大きく目を見開く。掲げられたアヒルの左手の中に現れるのは、五十音士であれば誰もが見覚えのある、小さな丸い、金色の宝玉。

「言玉…？言玉だと…！？」

信じられないといった様子で叫びながらも、アヒルの右手の中を確認する阿修羅。アヒルの右手には確かに、アヒルの言玉から姿を変えた、真っ赤な銃が握り締められていた。

「アヒルの言玉は確かに、そこにっ…」

銃を確認し、阿修羅が再び、左手の中に現れた、金色の言玉へと視線を移す。

「二つ目の言玉、だと…？」

「五十音、第三音…」

阿修羅が困惑する中、アヒルがはっきりと口を開き、現れたばかりの金色の言玉を、力一杯握り締める。

「“う”、解放…！！」

アヒルの言葉と同時に、握り締めた言玉から、強い金色の光が発せられた。

「そう…」

アヒルと阿修羅の戦う丘から、少し離れたマンションの最上階に立ち、空へと突き上げている円柱状の空間を見つめながら、和音が満足げに頷く。

「あなたは、それでいいのです…」

空を仰いだ和音が、含んだような笑みを浮かべる。

「朝比奈アヒル…」

Word. 61 うけ継グチカラ (4)

言ノ葉町、北西部。言ノ葉町立グランド。

「爆^はぜろ」

「うう：！」

目の前で勢いよく爆発した針の爆風に押され、現が後方へと押し出される。

「その程度かい：？」

何とか踏み止まる現の方を見つめ、静かに問いかけるのは、前方に立つ灰示。

「案外、大したことないんだね。初代“宇の神”っていうのも：」
「この：！」

挑発めいた灰示の言葉に険しい表情を見せ、眉間にさらに皺を寄せた現が、右手の杖を振り上げる。

「唸^{うな}れ」！

『ガアアアア！』

現の杖の先についた言玉が輝くと、そこから金色の光の塊が二つ、飛び出し、大型の猟犬へと姿を変えて、地面に降り立った。激しく唸り声をあげ、猟犬たちが灰示へと襲いかかる。

「磔^{はりつけ}」

素早く両手を振り切り、向かってくる猟犬へと無数の針を投げつける灰示。自在に動いた針が、猟犬たちの四本の足をそれぞれ貫き、その場に縫いつける。

「ググ：！」

縫いつけられた足を引き剥がそうと、必死にもがいている猟犬の一匹へと、灰示が素早く針を投げ放つ。

「奔^{はし}れ」

「ギャアアア！」

目にも留まらぬ速さで、空中を駆け抜けた針に斬り裂かれ、猟犬

が光となって掻き消える。

「ガアアア！」

その隙に、突き刺さった針を無理やり剥がした、もう一匹の猟犬が、後方から灰示へと襲いかかった。灰示はすぐに振り向き、無駄のない小さな動作で、大きく開いた猟犬の口へと、針を投げ入れる。

「破裂^{はれつ}」

「グ……！」

灰示の言葉を受け、猟犬の体の中で針が弾け飛ぶと、叫び声をあげる間もなく、猟犬はあっけなく光となって消えていった。猟犬の残骸である光の粒を見上げ、灰示がそっと目を細める。

「“痛み”を与える価値もない……」

どこか物足りなさそうにそう言って、灰示が深々と肩を落とす。

「あんなものじゃ、僕に“痛み”は与えられないよ……？」

「ク……！」

ゆっくりと振り返り、現へと涼しげな笑みを浮かべる灰示の姿に、現が大きく顔をしかめる。

「良からう……！ならば、わしが直接、痛みを与えてやる……！」

現が杖を振り上げ、大きく口を開く。

「“討^うて”……！」

勢いよく突き出された現の杖の先から、熱線のような、強烈な金色の光が放たれ、まっすぐに灰示へと向かっていく。

「ウハハハハ……！消えろ、消えろ、我が失敗作！たかだか“痛み”の産物が……！」

「……………」

勝ち誇ったような現の笑い声を聞きながら、灰示が落ち着いた表情で、向かってくる熱線へと、針を一本投げ放つ。

「わしの力は、お主の、そのちゃっちい針などでは……！」

「……“果^はてろ”」

現の言葉など耳にも入れず、灰示が静かに言葉を落とす。すると次の瞬間、灰示の放った針から、グラウンド中を包み込むほどに巨大

な、黒色の光が放たれた。

「な、何…!？」

辺り一面を覆う黒光に、放った熱戦があっさりと呑み込まれ、現
が驚きの表情を見せる。その間にも、熱戦を呑み込んだ、まるで闇
のような黒色の塊は、現へと差し迫る。

「う、^う“受け止める”！」

杖を突き出し、やって来たその塊を受け止める現。だが、杖の先
に塊が触れたその瞬間、激しい圧がかかり、現の体はいとも簡単に
吹き飛ばされた。

「うああああ…!」

灰示の攻撃を真正面から喰らい、後方へと弾き出された現が、転
がるようにして地面へと倒れ込む。地面に体を打ちつけた衝撃で、
現の右手から杖が零れ落ちる。

「ううう…ク、ソ…失敗作が、調子に乗りおって…」

大きく表情を歪めながらも、すぐに地面に手をつき、起き上がる
現。灰示の攻撃を直に受けたというのに、それほど大きなダメージ
を負っているようには見えなかった。

「ん…？」

起き上がった現が、その手の中に、常に握っているはずの杖がな
いことに気付く。

「あ…!」

地面に転がっている杖に気付き、現が慌ててそれを取る。杖を再
び手にした後も、現は焦りの表情を変えず、何やら急くように、言
ノ葉町の上空を見上げた。すると、先程まで上空へと突き上げてい
たはずの青、緑、白の三本の光が、暗い空へと掻き消えていく様子
が見える。

「し、しまった…!」

消えた光の柱を確認し、現が大きく表情をしかめる。

「これでは礼獣への力の供給が…ク…!」

「ん…?」

灰示に背を向けたまま立ち上がる現に、灰示が戸惑うように眉をひそめる。

「こうなれば……！ “浮^うかべ” ！」

何かを決したように、その言葉を放って、現は灰示に背を向けたまま、空へと舞い上がり、その場をほとんど離れていく。遠ざかっていく現の姿を、落ち着いた様子で見つめる灰示。

「うん、わかってるよ……保」

自身の中にいる保に答え、灰示がゆっくりと頷く。

「逃がしはしないさ……」

赤い瞳を鋭く光らせると、灰示が現の後を追うように、その場を駆け出していった。

言ノ葉町、中央部。礼獣付近。

「な、何……？」

戸惑うように目を丸くし、大きく首を傾けたのは、七架の弟、六騎であった。

「光が、急に……」

六騎の見つめる先には、深く瞳を閉じたまま、地面に横たわっている錨、エカテリーナ、沖也の、三人の堕神の姿があった。先程まで、気を失った三人から、無理やり奪うように、突き上げていた三本の光が、突如として消えてしまったのである。

「“奪え” の言葉が無効化された。誰かが浮世現を、相当に追い込んでるようだな」

「初代“宇の神” を追い込むなんて真似が出来る人、彼等の中じゃ一人くらいしか、思いつきませんけどねえ」

三人へと力を与えていた手を止め、恵と為介が言葉を交わす。灰示が戦いに参戦していることを予想してか、為介はどこか楽しむような笑みを浮かべていた。

「何はともあれ…」

恵が上空を見上げ、礼獣の上で集約されている光が、一時的に弱まっている様子に気付き、鋭く目を細める。

「チャンスには違いない」

「集約する光の源の、半数以上が失われた！今がチャンスよ！」

恵と時を同じくして、雅やイクラたちと共に、礼獣戦に参加していたエリザが、勢いよく声をあげる。

「一気に畳みかける！衣団！」

『はっ！』

エリザの呼びかけに応じ、すぐさま礼獣へと飛び出していく、誠子と徹子の双子。二人はそれぞれ、礼獣の左右に回り込み、言玉を吸収し、緑色に輝く拳を、勢いよく突き出す。

「鉄け…！」

“貫け”

「え…？」

徹子が拳を繰り出そうとした瞬間、徹子の横を強い風を巻き起こしながら横切る、巨大な一羽の金色の鳥。前方を遮っていく巨大な、美しい翼に、徹子は思わず拳を止め、目を奪われてしまう。

「久し振りだね…徹子ちゃん…」

「ッ、ツバメっ…」

徹子の前へと現れたのは、不気味とも取れる、薄暗い笑みを浮かべたツバメであった。

“正け…！”

“進め”！

「はっ…！」

同じように、自身の攻撃を遮るようにして横切っていく金色の巨鳥に、誠子が思わず顔をしかめ、混乱の声をあげる。

「この鳥は…」

「どうしたあ？誠子っ」

聞き覚えのあるその声に、拳を下ろした誠子が、勢いよく振り向

く。

「ボーっとしてっと、俺等が先に倒しちまうぜ？」

「スズメ……！」

目の前に現れた、不敵な笑みを浮かべるスズメを見て、誠子はひどく驚いた様子で、大きく目を見開く。

「潰えろ」

“荒め”

「ギャアアア……！」

両側から巨鳥に攻め込まれ、礼獣が激しい叫び声をあげる。

「彼等は、宇団うだんのっ……！」

現れたスズメとツバメを見つめ、眉をひそめるエリザ。

「あいつ等……！」

恵も二人の姿を目にし、大きく表情を歪める。

「一体、何を……！」

「あの獣の殲滅活動に、我々、宇団も参加いたします」

「……！」

二人の元へ行くため、足を踏み出そうとした恵が、後方から聞こえてくる声に足を止め、すぐさま振り返る。恵の後方に現れたのは、眼鏡の女性、熊子と、大男、塗壁であった。

「熊子……！」

恵が熊子のことを知っている様子で、名も名乗らぬうちから、熊子の名を口にする。

「何のつもりだ！？お前等“宇団”は、こんなところに出てくるようなことは……！」

「すべては、我が神の意志」

責め立てるように言い放つ恵の言葉を、強く遮り、熊子のはつきりと言葉を発する。

「あなたに理由など、お話する必要はありません。恵あの神」

「神の意志、だと……？」

熊子の言葉に、恵が戸惑うように眉をひそめる。

「何をしているの!?! 他団に遅れを取って、私に恥をかかせる気!?!」

『あ…!』

一喝するようなエリザの声に、我に帰り、誠子と徹子が再び拳を構える。

「他団にくれてやる必要はない。あの獣は、俺たち^{いだん}以団で仕留める」
『はい、神!』

イクラの言葉に以団の面々が頷くと、イクラを先頭に金八やシャコが、次々と礼獣のもとへと飛び出していく。

「小泉君、僕らも」

「はい!」

「おっしゃー! やったるぜい!」

「オウ! ワタシモ、混ぜテ下サア!」

各団の積極的な動きに触発されるように、雅、紺平、守、ライアンまでもが次々と、礼獣のもとへと向かっていく。いくら巨体の礼獣といえども、多くの五十音士を前に多勢に無勢となり、徐々に追い込まれていく。

「我々も行きましょう、塗壁」

「合点! 承知だあ」

「……っ」

やる気満々の塗壁を従え、皆の戦う礼獣のもとへと、歩を進めていく熊子。すぐ横を通り抜けていく熊子を見送り、恵が険しい表情を見せる。

「何を、何を考えている…?」

恵が誰へともなく、小さな声で問いかける。

「お前が、お前が出て来てしまっっては、すべてが終わるんだぞ…?」

“宇の神”…」

「う」…？」

アヒルが解放させたその文字を口にし、阿修羅がより一層険しく、表情を曇らせる。

“う”だと…？」

もう一度、その文字を呟き、阿修羅がまっすぐに、前方に立つアヒルを見つめた。

「神の文字を二つ…？馬鹿な…そんな音士など、聞いたことがない…」

阿修羅が、目の前で起こった光景を否定するように言葉を発しながら、軽く首を横に振る。

「それに何だ…？」

さらに寄る、阿修羅の眉間の皺。

「あの姿は…！」

「……………」

左手に現れたもう一つの言玉を解放させたアヒルの、その手には、眩いほどに金一色の、細長く美しい銃が握られていた。持ち手のすぐ上に、羽根のような鋭い細工が施されており、その銃身には大きく『字』の文字が刻まれている。

「例え“う”の文字を持っていたとしても、ウ段の言玉の形態は“生物”…“武器”はア段特有のもののはずっ…」

阿修羅が考えを巡らせ、言葉を落とす中、アヒルはゆっくりと左手を動かし、左手に構えた金色の銃の方の銃口を、針で埋め尽くされた天井へと向ける。

「う…」

引き金を引く手に力を込めながら、アヒルがゆっくりと、その文字を口にする。

「“撃ち抜け”…！」

アヒルが言葉と共に放ったその弾丸は、針の空を貫き、阿修羅の空間を貫いた。

Word. 62 罪ト罰 (1)

言ノ葉町、東端。小高い丘の上。

「あれは…」

目の前に立ち塞がる、空まで続く巨大な赤光の円柱の上部から、その光の壁を砕き割るようにして、空へと突き上げる、一筋の金色の光。その光に目を留め、円柱のすぐ外側に立っていた箆也は、そっと目を細めた。暗い空へと舞い上がる光は、やがて左右へ広がり、まるで一羽の鳥のような姿となって、空の彼方へと美しく消えていく。

「あなたの言葉は、届いたんですね。カモメさん…」

小さく呟くと、箆也はどこか安心したように微笑んだ。

「箆也」

背後からする声に気付き、箆也が素早く振り返る。

「囁」

ゆっくりとした歩みで、その場へと現れたのは、囁であった。久々に会う仲間の姿に、箆也がずっと身構えていたままだった鎌を下ろす。

「敵は？倒したのか？」

「いいえ」

すぐさま問いかける箆也に答えるように、そっと首を横に振る囁。

「私たちに、倒すべき“敵”は居なかったわ…」

囁が穏やかに微笑み、後方を振り返る。それに流されるようにして、箆也も視線を動かした。

「大丈夫ですか？七架さん」

「うん、ありがとう」

箆也たちのもとへとやって来るのは、互いに互いの傷ついた体を支え合っている、七架と棗であった。二人とも柔らかい表情を浮かべており、敵同士の緊迫した空気は見られない。そんな二人に押さ

れ、車椅子の櫻もやって来る。

「そうか…」

その光景を見て、すべてを察したのか、簞也は満足げに微笑んだ。

「アヒるんは…?」

「もうすぐ、出てくる」

囁の問いに手短に答え、簞也が再び円柱の方を見て、顔を上げる。金色の光が突き抜け、砕け散った上部から、割れが広がり、円柱は一気に崩れ落ちていくところであった。

「神の、晶さまの“神格”^{しんかく}が…」

崩れ落ちていく赤い光を見つめ、棗が少し驚いた表情を見せる。

「無間の地獄を、撃ち破る人が、居るだなんて…」

「……………」

信じられないといった様子で呟く棗の横で、険しい表情を見せ、七架も崩れゆく光を見上げる。

「晶…」

「晶さま…」

何を願うべきなのかわからず、櫻と棗はただ、かつて神であったその者の名を呼んだ。

その頃、簞也たちの見つめる円柱の中では、阿修羅が、上部からどんと崩れ落ちてくる光の破片を見回しながら、驚きの表情を見せていた。

「俺の“神格”が、崩れる…?」

目に見えるこの光景を疑うように、阿修羅がそっと呟く。

「無間に終わるはずのない、この地獄が…?」

崩れていく壁の向こうから、暗い空が見え始め、真っ赤な光がすべてを覆っていた視界に、徐々に言ノ葉の風景が戻り始める。

「あれは…」

戻って来た空の中に消えていく、一羽の金色の鳥。天へと昇って

いくように、金色の体は薄れ、やがて空の闇へと消えていく。それは、先程までアヒルと共に戦っていたガスケではなく、阿修羅がよく見覚えのある鳥であった。

——晶——

「……っ」

名を呼ばれたような気がして、阿修羅がゆっくりと首を動かし、前方を見る。

「……………」

戻り始めた言ノ葉の景色の中に、堂々と佇むのは、赤と金、二丁の異なる銃を構えたアヒル。アヒルのすぐ背後に、かつての友の姿を見て、阿修羅は表情を曇らせる。

「カモメ…」

阿修羅の見たカモメの姿は、幻であったのだろうか、一度の瞬きで、あっという間に見えなくなる。だが、阿修羅の脳裏からは消えず、阿修羅はどこか苦しむように俯いた。

「死しても直、俺が許せないか…？カモメ…」

届くことはない問いかけを、阿修羅は、掻き消えてしまいそうなほど小さな声で発する。

「罪を犯した俺が、神が…」

阿修羅がそっと、口元を緩める。

「それでいい。そのまま、許さずにいろ…」

冷たく微笑んだ阿修羅が、再び顔を上げていく。

「俺も決して、許しはしない」

その瞳をさらに鋭いものへと変えて、阿修羅がアヒルを、アヒルの向こうに居るであろうカモメを、射るように見つめる。

「これは…」

阿修羅が鋭い視線を送る中、アヒルは、自分の手の中に現れた金色の銃を、まじまじと見下ろしていた。先程の解放は、意識もせず、

まるで導かれるように、自然と口から零れ落ちた言葉であった。アヒルの意志とは無関係に、誰かがアヒルに、この力を与えてくれたのだろう。

「カー兄……」

その誰かは、深く考えずともすぐに思いついた。

「俺の、俺の力になってくれ。カー兄」

アヒルが金色の銃を握る左手に、より一層の力を込め、決意のこもった表情を見せる。

「殺す為じゃない。倒す為じゃない。ただ……」

ゆっくりと顔を上げ、アヒルが前方に立つ阿修羅を捉える。

「皆の“言葉”を、守る為の言葉を……！」

傷の痛みも一切、顔には出さず、強い表情を見せたアヒルが、阿修羅の空間を貫いた、左手の金色の銃を握り締めたまま、右手の赤い銃を、素早くあげた。その銃口が、まっすぐに阿修羅へと向けられる。

「ク……」

向けられる銃口に顔をしかめながら、阿修羅も素早く銃を構えた。

「“^あ当たれ”！」

アヒルが大きな声で言葉を口にし、阿修羅へと、何の小細工もなくまっすぐに、真っ赤な光の弾丸を放つ。

「こんなもので……」

ただまっすぐに向かってくる弾丸に、呆れたように言葉を吐き捨てながら、阿修羅がすぐさま引き金を引く。

「“^あ当たれ”……！」

阿修羅の言葉と共に、阿修羅の銃からも、大きな光の弾丸が放たれる。二つの弾丸がぶつかり合うと、一秒と経たぬうちに、阿修羅の弾丸が、アヒルの弾丸を掻き消した。

「言っただろう？アヒル」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、阿修羅が、打ち勝った弾丸が向かう先に立つ、アヒルへと声を掛ける。

「俺と同じ言葉では、お前に勝ち目は……！」

「う……」

「何……！？」

向かってくる弾丸へと、今度は金色の銃の銃口を向けるアヒル。そのアヒルの動きに、阿修羅がどこか焦ったように声をあげる。

「撃て……！」

アヒルの口から新しい言葉が発せられると、銃口から、今度は金色の、先程よりも一回りも二回りも大きな弾丸が、勢いよく放たれた。放たれたアヒルの弾丸は、先程の仕返しとばかりに、一瞬にして、向かって来ていた阿修羅の弾丸を碎き割る。

「グ……！」

あっさりと碎かれてしまった自身の弾丸に驚きながらも、向かってくるアヒルの弾丸を何とかするべく、再び銃を構える阿修羅。

「^{あらが}抗え……！」

阿修羅がもう一度、弾丸を向ける。放たれた赤い光が、アヒルの弾丸と正面からぶつかり合った。だが、ぶつかり合ったのも一瞬で、阿修羅の二発目もまた、アヒルの弾丸にあっさりと碎かれる。

「な……！」

大きく目を見開き、阿修羅が迫り来る弾丸を見つめる。

「俺の言葉が、効かない……？ ク……！」

次の言葉を放つ時間はなく、大きく表情を歪めた阿修羅へと、アヒルの弾丸が辿り着いた。

「うああああ……！」

アヒルの弾丸を直撃し、阿修羅が後方へと吹き飛んでいく。その頃には完全に、阿修羅の神格による、周囲の円柱の壁も崩れ落ちており、阿修羅は壁に止められることなく、丘の端に立つ木まで、勢いよく吹き飛んでいった。

「ううう……！」

木の幹へと背中を打ちつけ、苦しげな声をあげながら、阿修羅が地面の上へと腰をつける。弾丸により傷ついた体からは、赤い血が

流れ落ちる。

「俺の言葉を上回るとは…」

口の端から零れ落ちた血を拭い、阿修羅がすぐさま顔を上げる。

「どうやら、“欺け”による幻覚などではなく、本物の“う”の言葉のようだな…」

顔を上げたその先には、二丁の銃を構え、鋭い表情を見せた、アヒルの姿があった。

「神格が敗れた時点で、わかってはいたことだが…」

少し俯いた阿修羅が、アヒルに聞こえないように小さな声で呟く。口の血を拭い終わると、阿修羅はすぐに身を起こし、その場で立ち上がった。だが、立ち上がった瞬間に、足元がかすかにふらつく。一撃を受けたただけだが、相当の傷を負っているようだ。

「まあいい…」

ふらついた足元を立て直し、阿修羅が銃を持った右手を構える。

「例え、お前が“宇の神”であろうともっ…」

「俺は宇の神じゃない」

阿修羅の言葉をすぐさま否定するアヒルに、言葉を途中で止めた阿修羅が、少し戸惑うように眉をひそめた。

「俺は、“安の神”」

アヒルがまっすぐな瞳で阿修羅を見つめ、はっきりと言い放つ。

「俺は、“安の神”だ」

「……っ」

誇らしく、堂々と言い放つアヒルの、眩しいばかりのその姿を見て、かつて、同じ神を名乗っていた阿修羅は、どこか煩わしげに表情を歪めた。

「ああ、そうだな」

崩していた表情を戻し、阿修羅が静かに頷く。

「そして俺も、“安の神”だ」

阿修羅自身もその名を誇るように、銃を持っていない左手を胸に当て、堂々と胸を張る。

「だから今日、この場所で決めよう。アヒル」

はつきりとした口調で、強く言い放つ阿修羅。

「どちらが真の、言葉の導き手であるのかをなあ……！」

「……！」

二人はほぼ同時に、勢いよく銃を振り上げた。

その頃、言ノ葉町中央部。

「ガアアアアア……！」

大の大人でも軽々と呑み込んでしまいそうなほどに、大きな口を開いた札獣が、荒れ狂う叫び声をあげ、強烈な光の塊を、皆の居る大地に向かって撃ち放つ。

「やっべ……！」

「急いで防御を……！」

「どいていなさい」

『え？』

向かってくる巨大な光の塊に、前線で戦っていた以団の金八と、衣団の誠子が焦ったように声をあげる。だがその声を一蹴するような、落ち着いた声が後方から聞こえ、二人は戸惑うように振り返った。

「邪魔です」

後方から、二人の元へと歩み寄って来たのは、熊子と塗壁であった。掛けている眼鏡のレンズを光らせ、熊子が冷たく言い放つ。

「邪魔！？ 泣いちゃうよぉ？ そんなこと言う俺、泣いちゃうよぉ……！」

「塗壁」

「あいよお」

泣き出しそうな金八を完全に無視し、熊子がすぐ後ろに立つ塗壁へと呼びかける。熊子に答えると、塗壁が立ち止まった熊子の前へ

と出て来て、迫り来る光の塊と向き合った。

「お、おい：！」

「何を：！」

「五十音、第二十三音」

その塗壁の行動に、金八と誠子が焦ったように声をあげる中、塗壁がズボンのポケットから、その大きな手には小さすぎる金色の言玉を、器用に取り出す。塗壁の言葉に反応し、眩く輝きを増していく言玉。

「“ぬ”、解放！」

塗壁が文字の解放と共に、言玉を空中へと放り投げると、言玉がその姿を大きく変えていく。

「ゴオオオオオオ：！」

『な：！？』

次の瞬間、大きく地面を揺らすほどの振動を起こし、地面へと降り立ったのは、金色の体毛に覆われた、人と似たような形をしているが、完全に獣の、巨大な生物であった。その姿に驚き、金八と誠子が、大きく目を見開く。

「ゴ、ゴリラあゝ？」

「ウ段の生物形態っ：」

自分たちの能力とは、明らかに異なる塗壁の力に、二人は思わず目を見張る。

「行くどお、ゴリ男！」

現れたばかりのその金色のゴリラへと、塗壁が太い右腕を向ける。

「“拭え”^{ぬぐ}！」

「ゴオオオオ！」

塗壁の言葉に反応し、ゴリ男が両手を振り上げ、そして猛然と振り切る。礼獣が放った光の塊は、ゴリ男の振り切った両腕に打たれ、まるで球のように、遠くへと吹き飛ばされていく。そのあまりの力強さに、見る者すべてが圧倒された。

「五十音、第八音」

皆が圧倒される中、一人冷静に、塗壁と同じ、金色の言玉を手にする熊子。

「く」、解放」

熊子の言葉と共に、熊子の手に使っていた言玉も、巨大な獣へと、その姿を変えていく。

「今度はクマかよ!？」

現れる、人の二倍はくだらない体長の、巨大な金色のクマの姿に、もう受け入れ切れる許容範囲を越えたように、金八が何度も首を横に振る。

「行きましようか、おクマ」

「マアア!」

熊子の呼びかけに応え、おクマが巨体とは思えぬ速度で、真正面から礼獣の方へと駆け込んでいく。礼獣に迫ると、おクマは鋭い爪の伸びた右腕を、勢いよく振り上げた。

「砕^{くだ}け」

絶妙のタイミングで熊子の言葉が放たれ、おクマの突き出した右腕が、礼獣の鼻先へと直撃する。

「ギャアアアア!」

おクマの攻撃をもろに受けた礼獣の巨体が、軽々と後方へと吹き飛んでいく。浮く姿など考えることも出来なかった礼獣が吹き飛んでいき、おクマのその力に、その場に居る皆が啞然となった。

「な、何つー力だ、あのクマ」

「凄い…」

大きく開いた瞳のまま、思わず感心の言葉を漏らす守と紺平。そんな二人の横で、雅がそつと眉をひそめる。

「あれが宇団の、“久守”^{くもり}と“奴守”^{ぬもり}の力…」

感心の表情ではなく、どこか険しい表情を見せて、雅はそつと呟いた。

「いっやあゝ、さすがに年季が違いますねえ」

少し離れた場所に立つ為介が、熊子と塗壁の戦いぶりを見つめ、

楽しげな笑みを浮かべる。

「これなら、大丈夫じゃないですかあゝ？」

「ああ…」

すぐ隣の為介の言葉に、短く頷く恵。だがその表情は、決して晴れやかではなかった。

「あの男が、このまま大人しく引き下がれば、の話だな…」

Word. 62 罪ト罰 (2)

「^{あがな}贖え”…！」

阿修羅の銃から放たれた光が、暗い空の中へと舞い上がり、そこで弾け飛んで、無数の粒となって、下方にいるアヒルへと押し寄せ

る。
「受けとれ”！」

光の向ってくる空へと、金色の銃で言葉を放ち、弾丸を撃つアヒル。放たれた金色の光が、アヒルの上空で広がり、押し寄せてきた無数の光を、すべて受け止める。その受け止めた光へ向け、今度は赤色の銃を向けるアヒル。

「^あ当たれ”！」

アヒルが弾丸で貫くと、先程放たれた金色の光は、受け止めていた阿修羅の光をも巻き込んで、大きな一つの塊となり、阿修羅へ向けて、勢いよく飛んでいく。

「チ…！」

向かってくる巨大な光の塊に顔をしかめながら、自身へと銃口を向ける阿修羅。

「^あ“上がれ”！」

赤い光に包まれ、阿修羅の体が上空へと舞い上がる。向かって来ていた光の塊は、先程まで阿修羅が立っていた場所を通り抜け、どこか遠くへと消えていった。

「^あ“当た…！ん…？”」

すぐさま銃口を下へと向け、アヒルに攻撃を仕掛けようとした阿修羅であったが、アヒルが立っていたはずのその場所に、アヒルの姿はなかった。

「どこに…！」

「^う“浮かべ”」

「……！」

すぐ傍から聞こえてくる声に、目を凝らして、下を見つめていた阿修羅が、すぐに振り向く。上空に浮かぶ阿修羅を通り過ぎるようにして、さらに上空へと、素早く舞い上がっていくアヒル。左手の金色の銃を自身へと向けており、その体は淡い金色の光に包まれている。

「速い…！」

「集まれ」

上がっていくアヒルの速度に驚きながらも、下へと向けていた銃を、必死に持ち上げてくる阿修羅であったが、アヒルはすでに、右手の赤い銃を、阿修羅へと向けていた。

「“当たれ”…！」

すぐ上方から降り落ちてくる弾丸に、阿修羅は大きく表情を歪めた。

「があああああ…！」

アヒルの弾丸に貫かれ、阿修羅が地面へと下降していく。阿修羅が地面へと強く、背中を叩きつけると、辺りの地面が抉れ、抜けた草花が風に舞う。

「う、う…！」

血の流れ落ちる腹部を押さえながら、阿修羅が苦しげに上半身を起こす。

「“う”の力、これほどか…！」

小さく開いたままの阿修羅の口から、力ない声が零れ落ちた。

「ならば」

すぐさま瞳を鋭くした阿修羅が、体を立ち上がらせ、上空へ向けて弾丸を放つ。

「“浴びせろ”！」

「ク…！」

上空から雨のように降り落ちてくる赤い光の粒に、アヒルが顔をしかめながらも、素早く左手の金銃を向ける。

「“撃ち落とせ”！」

アヒルの銃から放たれた金光は、上空で無数に分かれ、降り落ちて来ていた阿修羅の弾丸を、すべてきれいに撃ち落とした。間髪入れずに、今度は阿修羅へと、アヒルが銃口を向ける。

「撃て」！

阿修羅に向けて放たれる、大きな金色の光。

「圧縮」

向かってくる光を見つめながら、阿修羅が銃口の先に、光を凝縮させていく。

「“当たれ”！」

凝縮した光が、阿修羅の言葉により、一気に放たれる。強い赤と金の光が、アヒルと阿修羅の中央で、竜巻のような風を巻き起こしながら、激しくぶつかり合った。だが、やがて赤い光が押し戻され、二つの光が、阿修羅へ向けて押し寄せる。

「圧縮させても駄目か…」

阿修羅が小さく笑みを零しただけで、攻撃の言葉や、そこから逃れようとする言葉を放つことはなかった。

「うがああああ…！」

抵抗の素振りも見せぬまま、阿修羅が押され戻って来た自身の弾丸と共に、アヒルの強烈な弾丸を浴び、またしても勢いよく吹き飛ばされる。力なく地面へと倒れた阿修羅の体は、すでに全身傷だらけで、先程まで阿修羅に圧されていたアヒルと、そう変わらぬ状態となっていた。

「ハハ、ハ…」

掠れたような、小さな笑い声を漏らす阿修羅。

「この俺が、手も足も出ないとはな…」

どこか感心するように言いながら、阿修羅が重くなった体を、引きずるようにして起こす。

「さすがに神の文字二つは、抜けている…」

そう呟き、小さな笑みを零す阿修羅。だが体の方は、笑っている場合ではないほどに傷ついており、流れる血は、辺りの地面を赤く

染め上げていた。銃を握ったままの右手にも、最早、いつもほどの力は入らない。

「……っ」

感覚を失いかけている右手を見下ろし、阿修羅がそっと目を細める。

「はあ…はあ…」

一方で、阿修羅を追い込んでいるアヒルも、大きく肩を揺らし、どこか苦しげに表情を歪めていた。

「う…!」

金色の銃を持つ左手から、神経を伝うようにして走る痛み。その痛みが、先程貫かれた左肩の傷を刺激し、アヒルは思わず身を屈める。

「力の、反動か…?」

初めて“あ”の文字の力に目醒めた時、アヒルは戦いを終えてすぐに眠りについてしまった。初めてガースケの力を使った時は、しばらくの間、言玉の解放が出来なくなってしまった。それらの時と同様に、新たな文字の力が、アヒルの体に少なからず負担をかけているのだろう。

「けど、だからって、止まるわけにはいかねえ…」

固い決意のこもった瞳を見せ、アヒルが屈めていた体を起こし、ゆっくりと顔を上げていく。

「あ…?」

顔をあげたアヒルの視界に飛び込んできたのは、阿修羅のすぐ後方で、空まで突き上げていた、赤い光の柱が、消え去っていく光景であった。

「あれは確か、五母^{いぼ}とかっての…」

「五母の光が、失われたようだな…」

アヒルが言おうとしていた言葉を、先に口にしたのは阿修羅であった。だが阿修羅は上半身だけを起こした状態のままで、背後で消えた光の柱の姿は、確認していないようである。

「傷を負い過ぎたか：あちらに注ぐ力がなくなったようだ」

阿修羅の言葉を聞きながら、アヒルが眉をひそめる。五母の光は、自由ある言葉を奪うことの出来る礼獣に、堕神たちが力を与えるために、突き上げられていたもの。与える力がなくなれば、消え去ることも当然であろう。

「これで五母の光は、すべて失われた：」

「へ？」

その言葉に戸惑うような声を発し、アヒルが丘の上から、言ノ葉町全体を見回す。確かに、阿修羅の神格に覆われる前までは、各方に様々な色の光の柱が見えていたのだが、それがすべてなくなっていた。

「ホントだ：」

「どうやら堕神たちは、お前の仲間たちを前に、敗れ去ったようだな：」

「みんな：」

仲間たちの勝利を知り、ただ暗いだけとなった空を見上げ、アヒルが目細める。

「……っ」

空を見上げていたアヒルが、意を決した様子で、唇を噛み締める。

「もう：」

アヒルが顔を下ろし、まだ立ち上がれていない阿修羅の方を見た。

「もうやめろ、阿修羅」

向けられる声に、俯いたままの阿修羅が、かすかにその表情を動かす。

「もうあの礼獣とかったのに、力は与えられねえんだろ？ だったらもう、人の自由ある言葉を奪うことも出来ないはずだ」

強く光る瞳を、まっすぐに阿修羅へと向けるアヒル。

「言葉を奪うための、他の方法を、あんたが考えてあるとも思えねえ」

言い切るアヒルに、阿修羅は俯いたまま、否定しようとはしない。

多くの人員と期間を要した礼獣による策が撃ち破られた今、アヒルの言う通り、阿修羅に次なる術はない。

「それに、あんたの最後の言葉も砕いた。もうあんたに、これ以上の言葉はないはずだ」

阿修羅が何も答えぬ状態のまま、アヒルがさらに言葉が続ける。

「もうあんたには、何も残ってない」

はつきりと言い放つアヒルに、俯いたままの阿修羅が眉をひそめる。

——大好きだったよ——

「俺には何もない、か…」

阿修羅がゆっくりとした口調で、アヒルの放った言葉を繰り返す。

「ハハ：ハハハハハハ：！」

いきなり、声高々と笑い出す阿修羅に、戸惑いの表情を見せるアヒル。

「な、何…」

「そうだな。お前の言う通りだ、アヒル」

笑ったその意味を問おうとしたアヒルの言葉を遮り、阿修羅が鋭く言い放つ。

「俺には、何一つ、残ってなどいない」

どこか痛々しく伝えられるその言葉に、アヒルの表情が大きく曇る。

「言葉も、神の座も、大切だったものも…すべてを失った。五年も前にな…」

「阿修羅…」

どこか諦めきったように言い放つ阿修羅を見つめ、アヒルがそつと目を細める。

「初めから、この手の中には、何も有りはしない…」

空っぽの左手を、阿修羅が強く握り締める。

「何も、な…」

もう一度、その言葉を繰り返した阿修羅の声が、どこか哀しげに響く。

「だからこそ、俺にはもう失うものなど、何もない」

「阿修羅…！」

「人のくだらぬ言葉をすべて奪い切ることで以外、何もなあ…！」

さらに言葉が続ける阿修羅の姿に、アヒルは思わず口を開き、堪らなくなつて阿修羅の名を呼ぶ。だがそのアヒルの声は、感情の滲み出るような、荒々しい阿修羅の声に掻き消された。

「礼獣が砕かれたとしても、俺は必ず、新たな手を探す。この身が砕けようと、この歩みを止めはしないっ…」

傷だらけの足を奮い立たせ、やっとのことでその場に立ち上がる阿修羅。

「罪深き言葉に罰を与えることだけが、俺に残った唯一の望み…！」

「……っ」

勢いよく顔を上げた阿修羅の、鬼のような形相に気圧され、アヒルは思わず口を噤んだ。だがその言葉に負けぬために、数度首を横に振り、アヒルが俯けていた顔を上げる。

「違う、阿修羅！俺が…俺が言いたいのは、そんなことじゃ…！」

「何度も、何度も言ったはずだ。アヒル」

必死に何かを伝えようとしたアヒルを、阿修羅が強く制する。

“俺の言葉は死んだ”と

強く強調された声が、アヒルへと届く。

「俺に言葉は通じない」

顔を上げた阿修羅が、冷たい視線を、アヒルへと向ける。

「お前がどんなに必死に投げかけたところで、お前の言葉は俺には伝わらない。ただ、無駄になるだけだ」

何度目かになるその言葉を聞きながら、アヒルが強く唇を噛み締め、銃を握る両手に力を込める。

「だからもう、無駄なことは…」

「通じなきゃ、伝わらなきゃ：言っちゃダメなのかよっ…？」

「何…？」

アヒルが口にした、思いがけないその言葉に、阿修羅は戸惑うように、少し首を傾げた。

「伝わるか、伝わらねえかの問題じゃねえ」

込み上げる気持ちからか、アヒルの声がかすかに震える。

「俺が知る限り、言っただけで即効、すべての意味が伝わる言葉なんてもんの方が少ねえ…」

阿修羅をまっすぐに見据え、必死に言葉を続けるアヒル。

「だから皆、必死に伝えるんだ！わかってもらおうと、何度だって声を張り上げるんだ！」

主張するアヒルの声が、徐々に大きくなっていく。

「何度だって繰り返すその言葉を、無駄かどうかを決めるのは、俺だ！あんたじゃねえ！」

「…っ」

必死に投げかけられるその言葉に、まるで心が揺れ動かされるように、阿修羅の表情が動く。

「そうか…ならばもう、止めはしない」

表情に落ち着きを取り戻し、阿修羅がアヒルの主張を受け止めるように、頷く。

「叫ぶなり、喚くなり、お前は好きにすればいい」

阿修羅が右手を伝って流れ落ちる血を振り払い、痛みなどないかのように、傷だらけのその右手を、勢いよく振り上げる。

「俺は、お前のその無駄な言葉もすべて、奪い去るまで」

銃口を上空へと向け、阿修羅が強く言い放つ。

「この世界に飛び交う、すべてのくだらぬ言葉と共になあ…！！」

阿修羅の叫びと同時に、中に溢れる感情を現すように、阿修羅の体から、真っ赤な強い光が放たれる。その強い輝きを目に入れ、アヒルが少し目を細めた。

「まだ、あんな力が…」

光を放つ阿修羅を見つめながら、アヒルがどこか敬服するように
呟く。そして、ゆっくりと顔を下ろし、金の銃を持った左手を見た。
神経から激しく痛み出した左手は、気を緩めれば、すぐにでも感覚
が飛んでいきそうである。だが、それでもアヒルには、握る手を離
すことなど出来ない。

「ごめん、カー兄！」

今はもう居ない兄へと、小さな謝罪を漏らすアヒル。

「やっぱ俺には、“救う”とかそういう、大それたことは、よくわ
かんねえし、どうしたらいいのか、見当もつかねえ」

金色の銃に視線を向けたまま、アヒルが少し口元を緩め、こんな
状況であるというのに、穏やかな笑みを浮かべる。

「俺に、今の俺に、出来ることがあるとすれば……」

痛みを堪え、銃を握り締め、アヒルが勢いよく顔を上げる。

「自分の信じてきた“言葉”を、ただ、信じることだけ……！」

強く言い放ったアヒルの全身からも、強烈な金色の光が放たれる。

その光の中、アヒルが金銃の銃口を、鋭く阿修羅へと向けた。

「“撃て”！」

「“当たれ”……！」

言葉が同時に放たれ、今まで以上に強い光の弾丸が、激しくぶつ
かり合う。

「アヒル……！！」

「阿修羅ああ……！！」

互いの名を呼ぶ強い叫びが、まるで言葉のように、二人の間で交
わった。

Word. 62 罪ト罰 (3)

「晶さま…」

アヒルと向き合う阿修羅の姿を見つめ、棗が不安げに目を細める。二人と同じ丘の上で、二人の戦況を見守っていた籠也たちであったが、激しさを増す戦いに巻き込まれることを恐れ、少し離れた場所まで、移動してきていた。

「“神格”も敗れ、礼獣に与える力も失くし、もう言葉の力など、残っていないというのに…」

棗の見つめる先には、強い赤色の光に包まれた阿修羅。

「どこに、あんな力が…」

「命を燃やしているのよ…」

「え…？」

車椅子に乗った姉、櫻の、すぐ横から聞こえてくる声に、棗は振り向き、戸惑うように眉をひそめた。

「命、を…？」

「ええ…尽きた力の代わりに、命を燃やして、晶は言葉を使っている…」

「そんな…！」

櫻の冷静な声とは真逆に、焦りの声をあげてしまう棗。

「そんなことをしたら、晶さまが…！」

「ええ、死んでしまうでしょうね…でもそれは、彼も同じ…」

ゆっくりと視線を動かし、櫻が、阿修羅の前方で、阿修羅と同じように、金色の光に包まれたアヒルの姿を捉える。

「二人は自身の命を懸けて、この世界の言葉の行く末を、決めようとしている…」

「……………」

棗の横で、同じように櫻の言葉を聞きながら、そっと目を細める七架。

「朝比奈くん…」

七架の口から、祈るように、アヒルの名が零れ落ちる。

「助けに入らなくていいの…？ 箆也…」

櫻たちの会話に耳を傾けていた囁が、ゆっくりと首を動かし、皆の一番前方に立つ箆也の方を見る。

「すでに戦いの次元が違う。体力全快の状態で“加変”を使ったとしても、助けにも何にもなりはしない」

「それは、そうでしょうけど…」

箆也の言葉を認めるように頷きながら、囁が少し肩を落とす。

「けどまあ、弾避けくらいにはなれそうなものだけけど…」

背中から聞こえてくる囁の言葉に、箆也が目を細める。確かに囁の言葉は正しく、今、助けに入ることが、神付きとしては最善の行動なのかも知れない。だが、箆也はその場から動こうとはしなかった。

「例え、そうであったとしても…」

箆也が強く決意した表情で、向き合うアヒルと阿修羅の方を見つめる。

「今、あの戦いに割って入ることは、我が神への背徳行為だ」

「フフフ…それもそうね…」

箆也の主張を認めるように頷いた囁が、小さく笑みを零した。

「“撃^うて”！」

「“当^あたれ”…！」

もう何度目かもわからないほどに、繰り返しぶつかり合う、アヒルと阿修羅の弾丸。ぶつかり合った途端、二人の表情が同時に歪む。銃からかかる圧でさえも、痛んだ体中すべてを軋ませ、もうそれを堪えることすら、アヒルと阿修羅には厳しくなってきた。

「“当^あたれ”！」

アヒルが今度は赤銃で弾丸を放ち、ぶつかり合っていた先の二つの弾丸を、遙か彼方へと吹き飛ばす。

「足枷^{あしかぜ}」

その隙にアヒルへと新たな弾丸を放ち、アヒルの両足を、光の紐で縛りつける阿修羅。

「浴^あびせろ」！

足の動きを封じられたアヒルへと、阿修羅がさらに弾丸を放ち、無数の光の粒を落とす。降り落ちてくる弾丸を見上げ、アヒルが陰しい表情を見せつつも、左手の金銃を、自身の足元へと向けた。

「動^{うご}け」！

金色の弾丸に撃ち抜かれ、足枷が消えると、アヒルの両足が自由になる。自由になった足を踏ん張り、アヒルはすぐさま、金銃を空へ向けて撃つ。

「受^うけ止めろ」！

アヒルの上空に金色の膜が張られ、降ってきていた光の粒を、一つ残らずすべて受け止める。その受け止めた膜へと、今度は赤銃を向けるアヒル。

「浴^あびせろ」！

受け止めていた光粒が、アヒルの放った弾丸により、押し戻されるようにして再び空へと舞い上がり、今度は阿修羅の上空へと降り注ぐ。

「荒^あれろ」

厳しい表情を見せながら、阿修羅が短く言葉を落とす。

「嵐^{あらし}」！

激しい風を巻き起こし、降り落ちて来ていた光粒を、周囲へと弾き飛ばす阿修羅。だが、あまりにも近くで巻き起こしたため、自身の風により体は刻まれ、弾き切れなかった光粒によっても攻撃を受ける。

「ク…！」

負っていく傷に表情をしかめながら、それでも必死に、阿修羅が

銃口をアヒルへと向けた。

「“当たれ”……！」

すでに力も尽きているというのに、一片たりとも弱くなっていない弾丸を、アヒルへと放つ阿修羅。迫り来る弾丸に、アヒルは素早く金銃を構える。

「“失せろ”……！」

アヒルの言葉と共に、淡い金色の光に包まれると、阿修羅の放ったはずの弾丸が、どこへともなく消え失せていく。

「“撃……！”

“現れろ”……」

「あ……！」

アヒルが金銃を放つその前に、阿修羅が、まるでアヒルの言葉を予想していたように、素早く次の弾丸を放ち、先程消えたはずの初弾を、再びその場に出現させる。

「う……！」

もう一度、弾丸が現れた時、すでに弾丸はアヒルのすぐ目の前で差し迫っており、アヒルは新たな言葉を放つこともなく、ただ、その表情を歪めた。

「うああああ……！」

阿修羅の弾丸に貫かれ、アヒルが後方へと、勢いよく吹き飛んでいく。

「う、う……！」

背中から地面に倒れ込み、腹部から赤々とした血を流し、苦しげな声を漏らすアヒル。

「はあ……はあ……」

倒れたアヒルを見つめる阿修羅の全身からも、先程の攻撃により負った傷が刻まれ、血が滴り落ちていた。腕から伝った血が、さらに銃を伝い、銃口の端から地面へと落ちる。

「う、う……！」

苦しげではありながらも、どこか氣の入った声が聞こえて来て、

阿修羅が俯けていた顔を上げる。すると前方には、銃を持った両手で必死に踏ん張り、何とか立ち上がろうとしているアヒルの姿があった。そのアヒルの様子を見て、阿修羅がかすかに口元を緩める。

「ほお…まだ、立つか…」

必死に立ち上がるうともがくアヒルを見つめ、微笑んだ阿修羅が、まるで感心するように言う。

「いい目だ」

阿修羅の言葉に、顔を上げたアヒルの、その鋭い瞳を見て、阿修羅がさらに満足げに笑う。

「例え死するとしても、“許す”ことはしない。決して、“許さない”」

笑顔を見せたまま、阿修羅が言葉を続ける。

「これこそ、俺の求める戦いだ。アヒル」

「……………」

踏ん張る両手に力を入れたまま、やっと上半身だけを起こしたアヒルが、楽しげに笑う阿修羅を見つめ、そっと目を細める。

「俺は…」

少し視線を落とし、アヒルが小さく声を漏らす。

「俺は、あんたを“許さない”為に、立ち上がるんじゃない」

「何…？」

アヒルの言葉に、阿修羅が怪訝そうに眉をひそめる。

「俺はただ、常連のオバちゃんの、地味な副担任の、バカアニキのダチの、この町の皆の、自由ある言葉を取り戻す為に…」

ゆっくりとした口調で言葉を放ちながら、アヒルが傷だらけの両足に力を入れ、震えて、もうほとんど動かない膝を立たせ、その場で必死に立ち上がる。

「世界中の人たちの“言葉”を守る為に、その為に立ち上がるんだ…！」

堂々と言い放つアヒルのその言葉に、今まで笑顔だった阿修羅が、あからさまに表情を曇らせる。

「成程。言葉の神らしい言葉だ」

またしても感心したように言いながら、阿修羅が再び笑みを浮かべる。だがその笑みは、先程のような楽しげなものではなく、凍えるような、冷たい笑みであった。

「だが、そうまでして、守る必要のあるものか…？」

ひどく落ち着いた声が、アヒルへと問いかける。

「お前が命を賭けてまで戦うほどに、価値のあるものか…？」

アヒルの答えを待たぬまま、さらに問いかける阿修羅。

「言葉」というものは…」

阿修羅からまっすぐに向けられる冷たい視線に、アヒルが思わず目を細める。

「言葉が清く正しく、何者に対しても穏やかで優しい、素晴らしいものであると思っているのなら、それはお前の勘違いだ。アヒル」どこか諭すように、忠告するように、阿修羅がアヒルへと言い放つ。

「言葉は決して、清らかなものではない。優しいものでもない」言葉を続ける阿修羅の表情が、徐々に曇っていく。

——私はどうして…生きているのかな…——

「ただ残酷で、罪深いだけのものだ」

阿修羅の言葉に、ほんの少しだけ力が入り、銃を持つ右手もきつく握り締められる。

「言葉は罰せられて、然るべき存在」

眉間に皺を寄せながら、阿修羅がアヒルを見据える。

「お前が、その命を賭けて守るような、美しいものでは、決してない」

はっきりと告げられるその言葉を、アヒルは逸らすことなく聞き入れた。焦りも怒りもない、静かな表情で、アヒルが阿修羅を見つめる。

「そんなのは、わかってる…」

「何…?」

認めるように頷いたアヒルに、眉をひそめる阿修羅。

「俺だって、誰かの心を傷つける言葉を、言葉で傷ついた人の姿を…」

——神なんてものが存在したから、僕の言葉は消えたんだ——

——この世界の言葉はすべて、嘘ばかり……

——ならば何故、この世界から“痛み”が消えない…? ——

「たくさん、見てきた…」

仲間たちの姿を思い出しながら、自身の発言を続けるアヒル。

——兄ちゃんなんか、居なくなればいいんだ…! ——

「誰かの心を傷つける言葉を、たくさん口にしてきた…」

かつて兄に放った言葉を思い出し、アヒルが険しい表情を作る。

カモメは許すと言ってくれたが、あの言葉がどれほどにカモメを傷つけ、そしてアヒルの心を蝕んできたか、それは、アヒル自身が痛いほど知っていた。

「言葉がきれいなものじゃないってことは、言葉が残酷なものだったことは、こんな頭の悪い俺でも、十分に理解してる」

「ならば、何故守る…?」

アヒルの言葉が終わるとほぼ同時に、阿修羅が鋭く問いかけた。

「そんな美しくも何ともないものを、お前は何故、命を懸けてまで守ろうとする…?」

阿修羅の問いかけを受け、アヒルは少し迷うように俯いた。

「確かに、あんたの言う通り、言葉は罪を犯してきたのかも知れない」

視線を落としたまま、アヒルが静かに言葉を発する。

「罪深いものなのかも知れない。けど」

単調な口調から、強く切り出すように言葉を付け加えたアヒルが、ゆっくりと顔を上げ、前方に立つ阿修羅を、まっすぐに見つめる。

「言葉が罪を犯してきたっていうなら、それに対する罰は、“消える”ことじゃない。“消える”ことは、何の罪滅ぼしにもならない」

強く光るアヒルの視線が、阿修羅の心を突き刺すように注がれる。

「存在し続ける」ことが、罰だ」

銃を持ったままの手を胸に当て、放つ声を大きくし、アヒルがはつきりと告げる。

「“発し続ける”ことが、罰だ！」

辺りに散らばる雲を払いのけるように、すべての迷いを掻き消すように、ただまっすぐに、ただはつきりと伝わって来るアヒルの言葉に、その表情を険しくする阿修羅。

「だから俺は、言葉を守る」

許すかどうかで守っていた、先程までの表情とはまるで違い、堂々とした主張を続けるアヒル。

「謝る為に、救われる為に、やり直す為に在る言葉を、“あがな贖う”為に在る言葉を、俺は守る」

さらに鋭くした視線で、アヒルが射るように阿修羅を見つめる。

「それが俺の、“安の神”である俺の役目だ！」

「……っ」

アヒルの強い覚悟が生み出したのか、正面からどんどんと伝わって来る気迫に、阿修羅はまるで気圧されるように一步、足を後ろへと引いた。その自身の行動に対してか、阿修羅が苛立つように、さらに顔をしかめる。

「そうか…それがお前の、神としてのお前の答えか」

低く声を落とした阿修羅が、表情の苛立ちを振り払わぬまま、口角だけを上げ、引きつった笑みを零す。

「アヒル…どうやらお前に、俺の考えは伝わらぬらしい…」

左手で頭の側面を押さえ、阿修羅がどこか悩ましげに言う。

「だが、それも当然か。俺は元より、言葉を亡くした身……」

左手で胸を押さえた阿修羅が、自嘲するように笑う。

「お前に俺の考えを伝えられるとすれば……」

言葉を続けながら、阿修羅が鋭く右手をあげ、構えた銃の先を、アヒルへと向ける。

「この、力しかない……!」

銃口を向ける阿修羅に、アヒルが険しい表情を作る。

「これが、俺の最後の力……」

銃口を見つめ、阿修羅がそつと目を細める。

「さあ、共に行こう……」

赤々と輝き始める銃の銃口を、アヒルから、ゆっくりと上空へと持っていく阿修羅。暗い空を見上げた阿修羅が、優しい笑みを浮かべる。

「“飛鳥”^{あすか}……!!」

思いのこもった、力強い言葉と共に、上空へと放たれる阿修羅の弾丸。暗い空に広がった赤い光が、すぐさま阿修羅の後方へと落ちて、まるで対となった巨大な翼のような、美しい形を作りあげている。正面から見つめるアヒルからは、阿修羅の背中に赤い翼が生えたような、そんな風に見えた。

「……っ」

空に広げられていく翼を見上げ、そつと目を細めるアヒル。

「負けられない……負けたくない……」

自分の心の中を吐き出すように言葉を紡ぎ、アヒルが銃を握る両手に、精一杯の力を込める。

「力を……」

アヒルの声が、まるで祈るように響く。

「俺に、すべての言葉を守る為の、力を……!」

力強く言葉を放ち、アヒルが同時に両手を掲げると、それぞれの銃が輝きを放ち始める。アヒルは左手の輝く金銃の銃口を、さらに上へとあげている赤銃へと向けた。

「受け継げ”…！」

アヒルの言葉と共に、金銃から強い光の弾丸が放たれると、その弾丸が右手の赤銃を直撃し、帯びている赤い光のさらに上から、包み込むように金色の光が広がっていく。

『……っ』

二重の光に包まれたその赤銃を、阿修羅へと向けるアヒル。阿修羅もまた、空へと向けていた銃を、アヒルへと向ける。

『あ…』

二人が同時に、口を開く。

『“当たれ”…！！』

重なる声と共に、アヒルと阿修羅、それぞれの銃から、激しい光の弾丸が放たれた。

Word. 62 罪ト罰 (4)

『うわああ…!』

地響きのように、大きく地面を揺らす振動に、礼獣との戦いを繰り広げていた五十音士の面々が、一斉にバランスを崩す。立っていないほどの衝撃に、倒れ込んでしまう者も居れば、辺りにあるものに必死にしがみつき、何とか堪えようとする者も居る。

「これは…!?!」

「オウ! コレガジャパンノ地震トイウヤツデスカア!?!」

地面へと転がり込みながら、焦ったように言う守の横で、何やら少し感動している様子のライアン。

「二つの大きな力がぶつかり合って、こんな揺れを巻き起こしてるんだわ」

大きな揺れの中でも、強化した右足の為、倒れぬまま、東の空に見える、大きな二つの光を見つめ、エリザが冷静に呟く。

「何て力なの。アヒル…」

「……………」

エリザの横で同じ方角を見つめ、イクラが目を細め、厳しい表情を作る。

「最後のぶつかり合いか…」

まったく体を揺らさずに立ったまま、恵も、遠くに見える光を見つめ、どこか不安げに表情を曇らせる。

「朝比奈…」

恵の祈るような声が、地面の揺れる大きな音の中に、掻き消えた。

『ぐ…ううう…!』

言ノ葉町の、それよりも外の町の大地を激しく揺らしながら、命

を懸けた最後の弾丸を、互いにぶつけ合うアヒルと阿修羅。二人の中央で接触する、巨大な二つの弾丸は、一步も譲り合おうとせず、激しい拮抗を見せている。

「俺は…俺は…」

向けた銃の先を、その先に立つアヒルを見つめ、阿修羅が小さく声を零す。

——お兄ちゃんね、私が居ない方が幸せなんだって——

「くだらぬ言葉を…争いの火種と成り得る、人の心を傷つけ得る、すべての言葉を奪う…」

——私ね、生きてる意味なんて、無いんだって——

「この世界の言葉に、正しき秩序をもたらす為に…」

——大好きだったよ、お兄ちゃん——

「この言葉に、あの日の罪を、贖わせる為に…!!」

阿修羅が大きく声を張り上げ、背中に負った翼をさらに大きく広げ、もう一度、引き金を引くと、銃口から二発目の弾丸が放たれ、前方でぶつかり合っていた初弾と合流し、その勢力をさらに増す。

「ううう…!!」

拮抗していた二つの弾丸は、阿修羅がもう一発を放ったことで、阿修羅の弾丸の方が一気に、アヒルの弾丸を押し始める。銃から掛かる圧に、アヒルは思わず表情をしかめた。

「神…!」

「アヒルん」

「朝比奈くん…！」

押されていくアヒルの弾丸に、強風吹き荒れ、地面が揺れ動く中、そんなことなど気にも留めていない様子で、必死に身を乗り出す、籠也たち安団の面々。

「晶さまっ…」

「……っ」

棗と櫻も、祈るような表情で、ただ戦いを見つめる。

「何、て…力…！」

右手に掛かる強い力に、肘から先を折られてしまいそうなほどの圧を感じながら、アヒルが険しい表情を見せる。地面についているアヒルの両足は、力に押され、土を削るようにして、徐々に後方へと下がり始めていた。

「この、ままじゃ…！」

押されていく体を感じながらも、どうすることも出来ずに、もどかしげに声を放つアヒル。押されていく両足を止める力も、折られてしまいそうな腕を伸ばす力も、今のアヒルには残っていなかった。

「もうっ…」

力なく目を閉じ、小さく開いたアヒルの口から、弱々しい言葉が零れ落ちる。

——大丈夫だよ——

「……っ」

すぐ傍から語りかけるように、しっかりと聞こえてくるその声に、アヒルが閉じてしまった瞳を、勢いよく開く。隣にも後ろにも、誰も居はしないというのに、何か温かいものが近くに居るような、包み込んでくれているような、妙な感覚をアヒルは覚えた。

「カー、兄…？」

その呼びかけに応えるように光るのは、アヒルの左手の中の金色の銃。カモメとの再会により生まれた、アヒルの新たなる力。

——晶を救ってほしい：——

——アークくんなら大丈夫だって、俺は信じてる——

——アークくんは俺の、自慢の弟だから！——

「……………」

次々と思ひ出されるカモメの言葉を、噛み締めるように、アヒルは一度、深く目を閉じた。そして一瞬の間を置いて、再び目を開く。アヒルの表情にはもう、迷いも焦りもなく、静かで落ち着いた、だ
が何か強い力を宿したような表情を見せていた。

「例え…」

アヒルが強く握り締めた、左手の金銃から、アヒルの体を流れるようにして、右手の赤銃へと柔らかな光が伝わっていく。

「例え、あんたの言葉が死んだとしても…」

まっすぐに前を見据え、アヒルがその瞳で、前方の阿修羅の姿を捉える。

「カー兄の言葉は、まだ死んでねえ…！」

アヒルが折られてしまいそうだった右手を伸ばし、両足を強く踏ん張って、押されっぱなしだった体を、その場に留まらせる。

「カー兄の言葉は、俺の中に生きてる！だから…！」

右手を力強く突き出し、ぶつかり合う弾丸へと、銃口を向けるアヒル。

「だから俺は、カー兄の言葉に応える…！！」

力強く言い放ち、アヒルが思いきり、引き金を引く。

「“^あ当たれ” えええ…！！」

アヒルの魂のこもった叫び声と共に放たれる、巨大な金色の弾丸。その弾丸が、空中を突き進む中で、不死鳥のように姿を変え、さらに勢いを増してそのまま、前方でぶつかり合っていた弾丸へと追突

する。その瞬間、アヒルの弾丸の勢いが飛躍的に増し、ぶつかり合っていた阿修羅の弾丸を、呑み込んだ。

「何…!？」

鳥を模した金色の光に、呑み込まれて消える自分の弾丸に、阿修羅が大きく目を見開く。

「飛鳥…俺は…」

阿修羅の弾丸を撃ち破り、阿修羅自身へと突き進んで来るその光に、阿修羅はまるで助けでも求めるように、失った妹の名を呼んだ。
「飛鳥っ…」

——サヨウナラ：——

「飛鳥…!」

最期の笑顔を思い出し、阿修羅がきつく、唇を噛み締める。

「う…うあああああ…!!」

丘全体を包み込む、巨大な金色の光に撃たれ、阿修羅が吹き飛んでいく。阿修羅の体が宙を舞う間に、握り締めていた右手の銃が、粉々に砕け、散っていった。

「……っ」

砕けていく銃の、零れ落ちていく破片を見つめ、阿修羅がそっと、目を細める。

「ごめんね…」

ひどく穏やかな表情となって、誰へともなく呟く阿修羅。そして力なく目を閉じると、強烈な光に撃ち抜かれた阿修羅は、そのまま地面へと倒れ込んでいった。

Word. 62 罪ト罰 (5)

「はぁ…はぁ…」

右手の銃を突き出した態勢のまま、肩で大きく息をするアヒル。

「う、うう…！」

だが次の瞬間、アヒルの体中を激しい痛みが駆け巡り、アヒルは苦々しい表情を見せて、思わずその場に膝をついた。銃を下ろした右手が、激しく痙攣する。どうやらアヒルも、体の限界が来てしまったようである。

「はぁ…はぁ…」

「殺せ」

「……っ」

耳に届く短い言葉に、乱れていたアヒルの呼吸が止まる。

「阿修羅…」

アヒルへと言葉を向けたのは、仰向けに地面へと倒れ込んだままの阿修羅であった。阿修羅は今までのように、立ち上がるとうする素振りはない。最後に撃ち抜かれた弾丸により、自身の銃は碎かれ、体はもう傷だらけであった。立ち上がるどころか、手足を動かすことさえ出来ないだろう。

「引き金を引くだけだ。痙攣していない左手を使えばいい」

「……………」

こんな状況でも直、冷静に聞こえてくるその声に、アヒルがそつと俯く。少し考えるように目を細めた後、意を決した表情で顔を上げ、地面に膝をついたまま、金銃を持った左手を、倒れている阿修羅へと向けた。視線だけをわずかに動かし、銃口をこちらへと向けるアヒルの姿を確認し、阿修羅がそつと目を細める。

「カモメ…」

そのアヒルの姿を、かつての友の姿と重ね、阿修羅が思わず、カモメの名を口にする。

「これで、いい…」

諦めるように呟いて、阿修羅が穏やかな笑みを浮かべる。

「お前に“許されず”に逝けるのなら…俺も、文句はない…」
「う…」

阿修羅がゆっくりと瞳を閉じる中、アヒルが口を開いた。

「撃ち抜け」

——パアアン！

静けさの戻った丘の上に、一発の銃声が響き渡る。

「え…？」

確かに音は聞いたというのに、自分の体のどこも貫くことのなかった弾丸に、阿修羅が戸惑うように瞳を開く。必死に視線を動かすが、やはり体は撃ち抜かれていなかった。

「なっ…」

「……………」

阿修羅がアヒルへと視線を移すと、アヒルは、構えた金色の銃のその先を、ただまっすぐに空へと向けていた。そのアヒルの姿を見て、阿修羅がさらに戸惑うように声を漏らす。

「何を…何をしている？」

すぐに表情を曇らせ、まるで責めるように、アヒルへと問いかける阿修羅。

「俺が絶対に“許せない”のだろう…！？カモメを殺した俺を、決して“許せない”この俺を殺せ…！」

まるで死を望むように、阿修羅が必死に声を放つ。

「早く殺せ…！！」

「殺せねえよ」

「何故だ…？」

短く答えたアヒルに、阿修羅はすぐさま問いを投げかける。

「何故、殺さない！？俺が“許せない”のだろう…！？絶対に“許

せない”というのに、何故…！」

「思い出しちゃったんだ。カー兄の言葉」

阿修羅の問いかけを遮り、空へと向けていた銃を下ろしながら、アヒルがそつと言いつつ放つ。

「人の、許し合えるところが好きだ” って、言葉」

「……っ」

アヒルが放ったその言葉に、阿修羅がハッとした表情を見せる。

——俺は“人”の、許し合えるところが好きだよ——

その言葉は、阿修羅が初めて心を動かされた、カモメの言葉であった。

「……“許す”というのか？俺を…」

少し躊躇うように、阿修羅がアヒルへと問いかけを向ける。

「そのカモメを殺した、俺を…」

まっすぐに向けられる問いかけに、アヒルは少し迷うように俯く。

「俺は、やっぱ天使さまとかじゃねえから、今、この場で即効、あんたを“許す”とか、そういうことは出来ない」

低く曇ったアヒルの声が、その言葉が本音であることを知らせるようであった。

「カー兄を殺したあんたを、やっぱり“許せない”…」

正直に伝えられるアヒルの言葉を、阿修羅はしっかりと聞き入れる。

「でも…でもいつか、“許したい”…」

顔を上げたアヒルが、真剣な表情を阿修羅へと向ける。

「いつか“許して”、カー兄が大好きだって言ってた“人”に成りたい」

まっすぐに向けられる真剣な眼差しに、アヒルのカモメへの思いが溢れているようで、阿修羅はそれを受け止めるように、ただ一瞬も逸らすことなく、見つめ返した。

「そして、あんたにもいつか、言葉のことを“許して”ほしい」
まるで願うように、向けられる言葉。

「いつか“許し合える”ように、その為に、あんたには生きてほしい」

「……………」

告げられる願いを噛み締めるように、阿修羅は唇を噛み締め、深々とその瞳を閉じた。

「晶さま！」

「……………」

久し振りに呼ばれる本当の名に、阿修羅が閉じていた瞳をゆっくりと開く。

「晶さま…！」

「棗…」

丘の下方から、阿修羅のもとへと、勢いよく駆け込んで来たのは、棗であった。棗の姿を目にし、阿修羅が少し驚いたような表情を見せる。

「今、傷の治療を…！」

倒れている阿修羅のすぐ横にしゃがみ込み、阿修羅へと両手を向ける棗。必死な棗のその様子を、阿修羅は特に言葉もなく見つめる。

「あ…」

棗の後方から見えてくる姿に、思わず声を漏らす阿修羅。

「晶…」

棗に続き、丘の上り坂を、車椅子の車輪を強く回し、必死にその場へとやって来たのは、櫻であった。かつての名を呼び、櫻が、穏やかな笑みを、阿修羅へと向ける。

「大丈夫…？ 晶…」

「櫻…何故…」

久し振りに会った仲間の姿に、阿修羅が戸惑うように目を細める。

「何だ、ちゃんと残ってんじゃないか」

「え…？」

前方から聞こえてくるアヒルの声に、阿修羅が視線を動かす。阿修羅が見つめる先で、アヒルはどこかやさしい笑みを浮かべていた。

「……っ」

――初めから、この手の中には、何もありません……――

戦いの中で自分の放った言葉を思い出し、阿修羅がまたゆっくりと視線を動かしていく。銃を失い、傷だらけで地面に落ちた、自身の右手を見る。

「晶さま……」

しっかりと阿修羅の右手を握り締め、棗は泣き出しそうな笑みを、阿修羅へと向けた。

「………」

手の中にある温もりを感じ、阿修羅がまた、噛み締めるように、その目を閉じる。

「櫻、棗……」

瞳を閉じたまま、姉妹の名を口にする阿修羅。

「長い間、済まなかった……」

『……っ』

発せられる、かすかに震えたその声に、櫻と棗は嬉しそうな、安心したような、大きな笑みを零した。

「はぁ……」

「神！」

「ん？」

阿修羅たちの姿を見て、ホッとした様子で深々と息を吐いたアヒルが、後方から聞こえてくる聞き覚えのあるその声に、ゆっくりと振り返る。

「アヒるん……」

「朝比奈くん！」

「箆也、囁と奈々瀬も」

膝をついたままのアヒルのもとへと、不安げな表情で必死に駆けてくるのは、箆也、囁、七架の三人であった。棗たちと共に遠くで戦いを見守っていたが、戦いの終わりを察知し、ここへとやって来たのであろう。箆也がアヒルのすぐ横へと座り、痙攣している右手を持つようにして、今にも倒れそうだったアヒルの体を支える。

「悪い」

「神附きとして、当然の責務だ」

小さく微笑みかけるアヒルに、素っ気なく答える箆也。相変わらぬ様子の箆也を見て、アヒルもどこか安心したように笑った。

「腐りかけの死体になってない！？フッフ…」

「死体はしゃべんねえだろ？ったく」

不気味に問いかける囁に、アヒルが少し呆れた様子で肩を落とす。

「大丈夫？朝比奈くん」

「ああ。俺なら大丈夫だ」

不安げに顔を覗き込む七架へと、安心させるように、大きく笑みを向けるアヒル。

「右手の感覚はもう完全ねえけど、まあ後は何とかっ…」

「フハハハハハ…！！」

「……！」

七架へと言葉を向けていたアヒルが、上空から聞こえてくる大きな笑い声に、眉をひそめ、素早く顔を上げる。

「無様…！実に無様な姿じゃのお、阿修羅…！」

「あれは…」

「現…！」

戸惑う櫻の横から、棗が険しい表情でその名を呼ぶ。暗い空の中に浮かんでいるのは、白髪の小柄な老人、現であった。棗に支えられ、上半身だけを起こした阿修羅が、上空の現を見上げ、眉間に皺を寄せる。

「誰だ？あいつ」

「恐らくは、堕ちし“宇の神”だ」

「宇の…？」

籠也のその言葉に、戸惑っていたアヒルが、少し眉をひそめる。

「これも、わしの手を煩わせた罰かのお」

上から見下すような視線を注ぐ現に、阿修羅が不快そうに表情をしかめる。

「俺を笑いに來たのか…？随分と暇なことだな」

「相変わらずの減らず口じゃのお」

阿修羅が挑戦的に言うのと、現は笑みを止め、表情を歪めた。

「まったく、とんだ役立たずじゃったわい。お前も、他の堕神たちも、こんなヒヨっこ共に敗れるとはのお」

阿修羅たちが鋭い視線を向ける中、現はアヒルたちを見下ろし、呆れ果てたように首を横に振り、深々と肩を落とす。

「お陰で、五母の光はすべて失われて、我が可愛い礼獣は、集まった五十音士共によって倒されようとしておる」

「だったら、何だ…？」

上空の現を睨みつけるように見て、強気に言い返す阿修羅。

「だったら、とっと次の鴨でも見つけて、また何なりと生み出していればいいだろう」

「ほお、どうやら自分が鴨であった自覚はあるようじゃのお」

揚げ足を取るように言う現に、阿修羅がまた少し、表情を引きつける。

「お前などに言われんでも、そうするわい。じゃが、その前に…」
皆が戸惑う中、現が右手の杖を、高々と掲げる。

「一つ、やることがあったのお…！」

掲げられた杖の先端についた、金色の言玉が、強く輝き始める。

「“浮^うかべ”…！」

「うお！」

もう瀕死の状態である札獣へと、トドメとなる攻撃を繰り出そうとしたスズメとツバメが、急に強い光に包まれ、その巨体を浮かびあがらせていく札獣に、思わず攻撃を止める。

「これは……？」

ゆつくりと浮かび上がっていく札獣の巨体を見上げ、その場に居る五十音士の皆が、戸惑いの表情を見せる。

「……っ」

その中で恵が一人、険しい表情を見せる。

「何だ？あのデカ獣が……」

町の中央部から、ゆつくりと空へと浮き上がっていく札獣の姿を捉え、アヒルが首を傾げる。箆也たちや阿修羅も戸惑った様子で、巨体の浮き上がるその光景を見つめていた。

「フハハハハ……！」

再び大きな笑い声をあげた現が、遙か上空へと浮かび上がり、空中で動きを止めた札獣へと、言玉のついた杖の先を向ける。

「“生まれ変われ”……！」

「ギャアアアアア……！！！」

『……っ！』

言葉と共に、現の杖の先から飛び出た光線を浴びた途端、札獣が激しい叫び声をあげて、その原型を崩していく。粘土細工のように、無理やり捻じ曲げられて、姿を変えていく札獣に、アヒルたちが皆、目を見開き、驚きの表情を見せる。

「現！何を……！」

阿修羅の横から身を乗り出し、皆の代わりに、現へと問う棗。

「なあに、わしの可愛い札獣の体を、少し便利なように造り変えただけじゃよ」

下方に居る棗へと、現が冷たい笑みを向ける。

「便利な、ように……？」

「ああ」

曇らせた表情で聞き返す阿修羅へと、現が大きく頷きかける。

「礼獣が今、この瞬間までに溜め込んだ言葉の力を、この場で、一気に爆発させられるようにな」

「何だと…!?!」

現の言葉に、目を見開く阿修羅。

「後二分じゃ」

そんな阿修羅へと、現が指を二本、突き立てた左手を向ける。

「後二分もすれば、あの礼獣であったものは爆発し、お前たち諸共、この町は跡形もなく消え失せるのじゃよ!」

『なっ…!?!』

現が告げるその言葉に、衝撃を走らせる皆。

「言ノ葉町が、消える…?!」

現の言葉を繰り返し、アヒルも大きく目を見開いた。

Word 63 終幕 (1)

阿修羅との戦いを終えたアヒルを待ち受けていたのは、衝撃の展開であった。

「言ノ葉町が、消える…?」

ひどく困惑した表情で、堕ちし“宇の神”、現の発した言葉^{うつつ}を繰り返すアヒル。アヒルを横で支えている籠^{かご}也も、近くに立っている囁も七架も皆、あまりの衝撃に、その表情を強張らせている。

「そうじゃ、安の神」

上空からアヒルへと向けられる、嘲笑うような現の視線。

「確かに五母の光は途切れてしまい、我が礼獣に、この世界から、すべての自由ある言葉を奪う程の力はなくなってしまった。だが」
言葉を付け加え、現が楽しげに笑う。

「この町を破壊するだけなら、今まで溜め込んだ力で十分に可能」
「んなことっ…!」

アヒルが大きく表情を歪め、現を睨み上げる。

「んなこと! 誰がっ…!」

“果^はてる”

「ううう…!」

「へ?」

アヒルが現へと叫び上げようとしたその時、現の後方からまっすぐに飛んできた真っ赤な一本の針が、現の左胸部分を勢いよく貫いた。大きく目を見開く現に、アヒルが戸惑うように声を漏らす。

「今の言葉って…」

「やっと、追いついた…」

「あっ」

針の飛んできた方向をアヒルが振り向くと、そこには見慣れた者の姿があった。

「灰示…！」

アヒルたちから少し距離を置いた、丘上部の隅に立っていたのは、両手に針を身構えた灰示であった。現を追い、ここまでやって来たようである。

「バカ市と入れ替わっていたのか」

「灰示！お前…！」

「フハハハハ…！」

眉をひそめた箆也の横から、アヒルが灰示へと声を掛けようとするが、その声は、大きく響き渡る笑い声に、あっという間に掻き消された。その声に誘われ、アヒルが再び上空を見る。

「何…！？」

「ハハハハ…！」

上空には、灰示の針に左胸を貫かれたというのに、何ら変化のない様子の現の姿があった。大声で高笑いをする現の胸には、貫かれた傷も見当たらず、血の一滴も流れていない。

「なんで…あっ」

戸惑うように呟いたアヒルが、現の体が金色の光と化していくことに気付く。

「あれは…」

「幻覚だ。現の言葉、“写せ”による幻覚…」

眉をひそめたアヒルに答えるように、阿修羅が言う。

「では現は…」

「ああ。もう、この付近には居ないだろう…」

棗の問いに答え、阿修羅が厳しい表情を見せる。

「現は、跡形もなく消そうとしている町に姿を見せるほど、保身しない男ではない」

「褒め言葉と受け取っておこう。ハハハハ！」

阿修羅の言葉を聞き、さらに楽しげに笑い声をあげる現。その高笑いを聞きながら、灰示は不満げに表情をしかめると、構えていた両手の針を下ろした。

「フハハハ！わしを殺せなくて、残念じゃったのお！痛みの成れの果てよ！」

「……っ」

嘲笑うように言い放つ現の幻覚を見つめ、灰示がさらに表情を歪める。

「何故、あんな遠くの空から声が…？」

一方、浮かび上がった、礼獣であったものの真下、言ノ葉町の中央部でも、雅ら、集まった五十音士たちが皆、困惑と焦りの表情を見せていた。指程の大きさでしか見えない、東の空、上空に浮かんでいる現から、その声が確かにはっきりと声が聞こえてくるのである。

「恐らくは彼の言葉の力でしょー一気に説明した方が、面倒臭くないと思っただんじゃなあい？」

「……………」

戸惑う雅に、暢気な口調で答えを与える為介。その横で恵が、現へと鋭い視線を向ける。

「んあ？神いゝ？」

上空に浮かび上がったものへと、右手の言玉を向けるイクラに、すぐ傍に立っていた金八が、戸惑うように首を傾げる。

「何してんだあ？」

「単純な話だ。爆発する前に、あれを消し去ればいい」

「おおっと！下手な攻撃はせん方が適策じゃぞお？以の神」

不意に向けられる言葉に、イクラが攻撃しようとしていた手を止める。

「中途半端な攻撃で刺激しては、その瞬間、あれは爆発してしまうかも知れんからのお」

「……っ」

「マジィ！？俺、泣いちゃうよお！？」

はつきりと届く現の声に、さらに眉間に皺を寄せ、攻撃の手を止めるイクラ。その横で悲痛な声をあげた金八が、深々と頭を抱える。

「エリザ様」

「万事休すって感じね…」

不安げに呼びかける誠子の前で、エリザも厳しい表情を見せる。

「フハハハ！」

攻撃を止めたイクラや、絶望していく音士たちの姿を確認したのか、現が大きく笑みを零しながら、再びアヒルや阿修羅たちの方を見下ろす。

「今、この町に居る五十音士は、旧世代新世代の神も含め、およそ三十名…」

現の言葉を聞きながら、その場に居る皆が、険しい表情で現を見上げる。

「この者たちがこの場で、すべて消え去れば、わしの邪魔をする者は一気に減るじゃろう」

その場に居る一人ひとりを見回していき、現が楽しげな笑みを浮かべる。

「これでわしは、自由に創造し放題、というわけじゃ」

現を睨みつけながら、阿修羅が悔しげに、唇を噛み締める。

「現…！」

傷だらけの体を乗り出し、思わず、現の名を呼びあげる阿修羅。

そんな阿修羅を高々と見下ろし、現が満足げに笑う。

「後一分半。精々、残りの人生を楽しむがいい、五十音士諸君」

冷たく告げて、現が再び、右手の杖をあげる。すると、現の体が、一気に金色の光へと変わった。

「フハハハハハ…！！」

現の姿から変わった金色の光が、大きな笑い声を響かせながら、空の彼方へと飛んでいく。恐らくは、言葉を発した現のもとへと戻

っていくのだろう。だが、その場に居る誰にも、その光を追いかけていく力など残っていなかった。

「クソ……！」

現が居なくなり、静かになったその場に、アヒルの声が落ちる。アヒルは銃を握り締めたままの左手を、強く地面へと叩きつけていた。

「折角っ……折角、皆の言葉を守れたと思ったのに……言ノ葉町が消えちまうなんて……！」

「神……」

悔しげに言葉をぶつけるアヒルを見つめ、箆也がそっと目を細める。

「お父さんもお母さんも六騎も、友達も皆、皆、この町に居るのにっ……」

「七架……」

今にも泣き出しそうな様子で、深く頭を抱え込む七架の肩を、囁がそっと抱く。

「どうにからないのですか？お姉ちゃん」

「この町に居る五十音士全員が、万全の状態であれば、退けることも可能だったかも知れないけれど……」

棗に問われた櫻が、確認するように皆を見回す。そこに居る誰もが傷だらけで、立つことすらままならない状態であることは、見れば明らかであった。

「皆、戦いで力を使い切ってしまった……この状態では、退けることはとても……」

「そんなんっ……」

姉の言葉に、絶望を感じる表情となる棗。

「……………」

アヒルが険しい表情のまま、その場で深く俯く。

——おっはよう！アーくうん！レタスアタックうん！——

——おっはよ！馬鹿ガア！相変わらず、寝惚けた顔ねえ——
——遅い！今日で五日連続遅刻だ、トンビ！——
この町に住む多くの人間の顔が、多くの人間の笑顔が、次々と思
い出された。

「……っ」

思い出した笑顔を刻みつけるように一度、深く目を閉じると、ア
ヒルは再び目を見開いた。瞳に鋭い光を宿して、アヒルが意を決し
た表情で顔を上げる。顔を上げたアヒルは、痙攣した右手から赤銃
を落とすようにして、地面に置くと、残った左手の金銃を自分の体
へと向けた。

「神……？」

箆也が戸惑うように見つめる中、アヒルが引き金を引く。

「“浮かべ”……！」

「あ、神……！」

アヒルが自身へと弾丸を放ち、右手を支えてくれていた箆也の手
から離れ、空へと高々と飛び上がっていく。空へと遠ざかるアヒル
に、箆也が大きく目を見開いた。

「アヒるん……！？」

「朝比奈くん……！」

止める間もなく、遙か上空へと飛び出してしまったアヒル
に、囁と七架も届かぬ手を伸ばしながら、必死に身を乗り出す。

「ク……！」

険しい表情を見せ、素早く鎌を振り上げる箆也。

「“翔^かけ……ううう……！”

「神月くん……！」

言葉を発し、飛び上がっていったアヒルを追いかけてようとした箆
也であったが、突然、大きくその表情を歪めると、力なくその場に
しゃがみ込んでしまった。そんな箆也へと、囁と七架が素早く駆け
寄る。

「無茶よ、箆也：すでに“加変”を使って、あなたの体だってもう、ボロボロなんだから：」

「だが、このままでは神が：」

箆也の体を支えながら、厳しく言い放つ囁に、箆也がさらに眉をひそめる。箆也の言葉を聞き、駆け寄った七架が、アヒルの身を案じ、一気に不安げな表情となる。箆也と同じように、囁と七架の体ももう限界が来ており、アヒルの後を追うことは出来ないのだ。

「えっと…あ、そうだ！」

急に何かを思いついた様子で、後方を振り返る七架。

「波城さん：！」

七架の振り返った先では、こんな緊迫した状況であるというのに、何故か落ち着いた様子の灰示であった。七架に名を呼ばれ、灰示がゆっくりと顔を上げる。

「波城さん！あの、朝比奈くんを：！」

「無駄だ。やめろ、奈々瀬」

「え：？」

灰示へと願おうとした七架の言葉を止めたのは、箆也であった。

箆也のその声に、七架が少し戸惑うように振り向く。

「その男は、善意で人を助けるような奴ではない」

「け、けど：」

冷たい視線を灰示へと向ける箆也を見下ろし、困ったように眉をひそめる七架。

「けど、始忌の時はっ：」

「あれは、自身が関与したから助けたただけだ。元より、その男は、人間の味方ではない」

「そうだね：」

そつと微笑んだ灰示が、敵意さえ滲む箆也の言葉を認めるように、そつと頷く。

「この町が木端微塵に消し飛ばうと、この町の人間が全員死のうと、僕には、何の関係もないことだよ」

本当に他人事のように、灰示が素っ気なく言い放つ。

「案外、“痛み”ある言葉が減って、いいかも知れないしね……」

「そんな……」

灰示のあまりの言葉に、七架が険しい表情を作る。

「戦いたかった男も逃げてしまったようだし、僕はそろそろ、休ませてもらおうよ」

両手に構えていた針を光らせ、元の言玉の姿へと戻す灰示。

「僕のような忌に祈るくらいなら、君たちの神様が、どうにかしてくれることを、祈った方がいいんじゃないのかい……？」

箆也たちへと涼しげな笑みを向け、まるで助言のような言葉を投げかけると、そのまま赤い淡い光に包まれて、灰示はゆっくりとその場に倒れていった。

「こうなったら本当に……アヒるんがどうにかしてくれることを、祈るしか……」

「神とて、阿修羅との戦いを終えたところなんだぞ……？」

そっと空を見上げる囁に、箆也が鋭く言い放つ。

「これ以上、強大な力を使っては……神の体は確実に、もたない……」

『……っ』

箆也が告げる事实に、さらに不安げな表情を見せる囁と七架。

「………」

神の身を案じながらも、何も出来ないもどかしさを感じている、安団の面々を見つめながら、棗に支えられ、上半身だけを起こした阿修羅が、アヒルの消えていった、遙か空の彼方を見上げる。

——言ノ葉町？とってもいい町だよ——

空を見上げる阿修羅の脳裏に、五年前、共に在った頃の、笑顔のカモメの姿が過ぎる。

——住んでる人も皆、イイ人でさ、すっごく平和で穏やかで、晶もきっと気に入ると思うな——

——俺の生まれ育った、俺の大好きな町だよ！——

「……っ」

思い出される大きな笑顔を思い出し、阿修羅は強く、唇を噛み締めた。

「棗」

「え…？」

阿修羅に呼ばれ、皆と同じように空を見上げていた棗が、顔を下ろす。

「もういい、十分だ。ありがとう」

「晶、さま…？」

傷を回復していた棗の手を体から離し、阿修羅がその場で立ち上がる。まだまだ体は軋むが、棗の回復を受けたお陰で、軽く体を動かす程度は出来るようになったようだ。戸惑った表情で棗が見つめる中、阿修羅が歩を動かし、箆也たちの方へと歩み寄っていく。

「な、何ですか…？」

近付いてきた阿修羅に、箆也と囁の前に立って、思わず身構えてしまう七架。警戒する七架を見て、少し目を細めた後、阿修羅は箆也のすぐ横の地面へと、視線を落とした。

「その銃を…」

阿修羅が見ているのは、アヒルが痙攣した腕では持てないため、地面へと置いていった赤銃であった。

「その銃を、俺に貸してくれないか…？」

「え…？」

思いがけない阿修羅の言葉に、箆也は戸惑いの表情を見せた。

言ノ葉町、中央部。

「今、上に上がっていったのって…」

上空に浮かぶ礼獣変化後の、力の凝縮体を見上げ、その空の中に

小さな影を捉えたツバメが、そっと眉をひそめる。

「弟君のようですね」

「アヒルくん…？」

同じように空を見つめる熊子の言葉を聞き、より一層険しい表情を見せるツバメ。

「まさか、あいつ…」

ツバメと同じように、眉間に皺を寄せ、スズメもゆっくりと、高い空を見上げていく。

「たった一人で、あれを止める気か…？」

「……っ」

スズメの声を聞きながら、厳しい表情を見せる恵。

「朝比奈…」

籠也たちが止める間もなく、上空へと飛び出てきたアヒルは、暗い空の中を、安定の取れない傷ついた体で移動し、暗闇の中で明々と輝く、金色の力の凝縮体のすぐ近くまでやって来ていた。凝縮体はまるで生きているように、激しく脈打っている。

「すげえ力だ…」

光を見つめながら、アヒルが思わず声を漏らす。まだ凝縮体との距離は大分、離れてはいるが、感じる力の波動に、体が震えているのがわかる。これ以上近づけば、一気に吸い寄せられ、呑み込まれてしまいそうであった。

「こんなもんが、爆発したら…」

アヒルが視線を落とし、眼下に広がる、見慣れた町の風景を見回す。現の言葉の通り、この凝縮体が爆発すれば、言ノ葉町は跡形もなく消え去ってしまうだろう。

「守らねえと…」

自分に言い聞かせるように言って、アヒルが金銃を握る左手に、力を込める。

「皆が…皆がいつも通り、笑顔で“言葉”を交わせるように、守らねえと…」

アヒルが視線を上げ、再び、前方の凝縮体を見つめる。

「死んでだって、守らねえと…!」

力強く言い切ったアヒルが、左手をあげ、銃口をまっすぐに凝縮体へと向ける。アヒルの表情は険しく、その額からは、一筋の汗が流れ落ちた。

「下手に刺激したら、その瞬間、ドカンだ…防ぐ方法があるとすれば、たった一つ…」

「爆発のその瞬間に弾丸を放ち、爆発した力のすべてを吹き飛ばす」
「へ?」

自分が言わんとしていた言葉が聞こえてきて、アヒルが思わず目を丸くして、振り返る。

「あ、阿修羅……！」

アヒルが振り返った先から、空中を舞いながら、アヒルの方へとやって来るのは阿修羅であった。その姿に驚き、アヒルが大きく目を見開く。

「あんた、何でここに……？ つか、さっき銃が壊れて、言葉なんて使えないはずじゃっ……あっ」

戸惑っていたアヒルが、阿修羅の右手に握られている銃に気付く。

「俺の銃？」

阿修羅が握り締めていたのは、アヒルの赤銃であった。

「下に置いてあったから、借りたぞ」

「借りたって、その銃で“上がれ”の言葉を？ 人の言玉でも言葉って使えるもののなか？」

「他文字は無理だろうがな、どうやら同じ文字は使えるようだ」

少し呆れたように問いかけるアヒルに答えながら、阿修羅がアヒルのすぐ横へと移動し、前方の凝縮体をまっすぐに見据える。

「問題は、爆発の瞬間に攻撃を搾るため、一発勝負になるということだとだな」

真剣な表情を見せ、阿修羅が落ち着いて分析をする。

「たった一発で、あれほどの力を吹き飛ばすことの出来る弾丸を、放てるかどうか……」

「あ、ああ」

阿修羅から凝縮体へと視線を移し、アヒルも真剣な表情で頷く。

阿修羅が口にしたその言葉は、今、アヒルが気にかけていることと、まるで同じ内容であった。

「何発も繰り返し撃てりゃ、ちよつとはマシなんだろうけど、一発勝負ってのが、俺も不安でっ……」

「お前は、その一発で、ここから、あの凝縮体までの道を作れ」
「は？」

思いがけない阿修羅の言葉に、アヒルが思わず振り向く。

「俺がその道を行き、ギリギリのところまで近付いて、凝縮体を撃つ。そうすれば、成功率は、飛躍的に上がるはずだ」

「な、何言って…！」

続く阿修羅の言葉を聞き、表情を歪めたアヒルが、荒げた声を発する。

「んなことやったら、あんたは確実に…！」

「惜しむほどの、命ではない」

アヒルの言葉を遮った阿修羅が、そっと目を細める。

「数えきれないほどの罪を犯してきた。後はもう、罰せられることを待つのみだ」

言葉を続けながら、阿修羅がゆっくりと、アヒルの方を振り向く。
「その罰で、お前やカモメの愛したこの町を守れるなら、儲けものだろう…？」

アヒルを見た阿修羅が口元を緩め、鬼神と呼ばれた男とは思えぬほどに穏やかで、優しい笑みを浮かべる。

「カモメがよく、自慢げに話をしていたんだ…自分の住んでいる町は、とてもいいところだと」

眼下に広がる言ノ葉町を見つめ、阿修羅が懐かしそうに目を細める。

「カモメは俺に、自分の町に、家に遊びに来いと、何度も言ってくれていた。結局、カモメが生きている間に、行くことは出来なかったが…」

話を続ける阿修羅を、アヒルがまっすぐに見つめる。

「だから、すべてを始める前のあの日、この町に寄ったんだ」
阿修羅が顔を上げ、アヒルへと微笑みかける。

「……ここが、朝比奈カモメの家か…？——
——へっ？——」

アヒルと阿修羅が、初めて出会うこととなった、あの日。

「どうしても一度、見ておきたかった。俺がすべてを壊す、その前に…」

「阿修羅…」

少し曇る阿修羅の声を聞きながら、アヒルがそつと目を細める。

「散々、壊そうとした後で、こんなことを言うのもなんだが…本当にいい町だったよ、この町は。カモメの言葉は、やはり正しい」

さらに大きくした笑みを、阿修羅がアヒルへと向ける。

「俺はカモメから、命も未来も、すべてを奪ってしまった…」

凝縮体を見据える阿修羅の表情が、少し険しく変わる。

「だから、一つくらい、カモメの大切にしてきたものを、守りたいんだ」

阿修羅の言葉からは、阿修羅の強い思いが溢れているようだった。

「最期くらい、俺に、あいつの“神”らしいことをさせてくれないか…？アヒル」

「阿修羅…」

微笑む阿修羅を見つめ、アヒルは険しい表情を見せた。

「晶さま…」

アヒルの置いていった銃を使い、アヒルの後を追うように空へと消えていった阿修羅。阿修羅の舞い上がっていった空を見上げ、棗は祈るように両手を組みながら、不安げな表情を見せていた。

「大丈夫よ…」

「お姉ちゃん…」

棗を元気づけるように、櫻が組まれた棗の両手の上へと、自分の手に乗せる。

「彼等は“神”だもの…きっと、皆の言葉を守ってくれるわ…」
櫻の言葉に小さく頷いて、棗は再び、暗がりの空を見上げた。

「ク…グク…！」

「箆也」

膝を立て、必死に立ち上がろうとしている箆也に、囁が少し呆れたような表情で声を掛ける。

「先代の安附^{あつき}さんたちと違って、随分と諦めが悪いものねえ…」

「僕が…」

苦しげに表情をしかめながらも、箆也が鋭い瞳を見せる。

「僕が教えられた神附^{かみづき}きは、“誰よりも近くで神を支え、何よりも強く神の力となる”者…」

カモメからの教えを口にし、箆也が鎌を握る手に力を込める。

「こんな遠く離れた場所で、ただ祈っているだけの神附きなど、僕は御免だ…！」

『……っ』

箆也のその真剣な言葉に、すぐ傍で支えていた囁と七架の表情が揺れ動く。

「うん、行こう！朝比奈くんのところへ…！何も出来ないかも知れないけど、でも私、行きたい！」

「そうね…神様に任せっきりだなんて、せっかく神附きやってる、意味がないもの…フッフ…」

「囁、奈々瀬…」

大きな笑みを零す二人を見つめ、箆也がそっと目を細める。

「よし、行こう。問題は、もうほとんど力のない状態の僕らが、どうやって神のもとへ行くかだが…」

「ふわぁ…あっ」

聞こえてくる大きな、間の抜けた声に、箆也たち三人が、同時に振り向く。

「はぁ、よく寝たぁ…って、こんな成長し過ぎの俺が、さらに成長促しちゃって、すみませえ…ん…！」

『……………』

両手を広げ、大きく伸びをしながら、倒れ込んでいた体を起こし

たのは、暢気な表情の保であった。相変わらず一人で、謝り散らしている。その様子に、呆然とする三人。

「た、高市くん…」

「そういえば、灰示サマと交替したんだったわね…」

先程までそこに居た灰示とは、まるで違う空気感に、囁が少し呆れるように肩を落とす。

「あ、あつれえ？皆さあくん、お久し振りですねぇ」

謝り散らしていた保が、囁たちの声が聞こえたのか、振り向き、やっと皆に気付いた様子で、暢気な笑顔を見せながら、大きく手を振る。

「はあ！こんな俺が、皆さんに馴れ馴れしく話しかけちゃって、すみませえくん！」

「おい」

頭を抱え、叫びあげている保へと、鋭く呼びかける籠也。

「バカ市」

「はあ！最早、本当の名前を呼ぶ価値もない俺で、すみませえくん！」

とにかく謝り倒す保のもとへと歩み寄り、籠也が強く、保の肩を掴む。

「言葉は、使えそうか…？」

「へ？」

向けられるその問いかけに、保が目丸くし、目の前に立つ籠也を見つめる。

「はい、バッチリです」

右手に持った言玉を持ち上げながら、保ははっきりと答えた。

「フツザけんじゃねえ…！！」

「何…？」

勢いよく声をあげるアヒルに、阿修羅は浮かべていた笑みを止め、少し戸惑うように首を傾げた。

「何が、“最期くらい神らしく”だ！んなことやって、本当にカー兄が喜ぶとも思ってたのか！？」

強く声を荒げ、まるで食いかかるように、アヒルが阿修羅へと言葉向ける。

「カー兄の神だったんなら、カー兄の親友だったんなら、んなことをカー兄が望まねえことくらい、わっかんだろうが！」

必死に伝わって来る言葉の中に、アヒルのカモメへの想いが感じ取れるようで、その想いを正面からぶつけられ、阿修羅は思わず目を細めた。

「それに、命懸けてこの町守ったって、あんたの犯した罪への償いにはならない！あんたへの罰にはならない！」

顔を俯けたアヒルが、わずかに声を震わせ、さらに言葉が続ける。

「言葉と一緒にだ！“死ぬ”ことは罰じゃない！」

顔を上げたアヒルが、まっすぐに阿修羅を見つめる。

「“生きる”ことが、“生きていく”ことが罰だ！」

「……っ」

まっすぐに伝わって来る言葉に、阿修羅が衝撃を走らせるように、大きく目を見開く。

「生きて、^{あがな}贖え！カー兄にも他の人たちにも、生きて、生き続けて、一生を使って贖え……！！」

「アヒル……」

心を震わせるほど、まっすぐにぶつかって来るその言葉に、阿修羅は反論する言葉もなく、ただ圧倒されるように名を呼び、そっと目を細めた。

『……！！』

その時、前方の凝縮体がより強い波動を発し、輝きを強めていることに気付き、アヒルと阿修羅が同時に振り向く。

「爆発まで、もう数秒もない……」

「……っ」

厳しい表情で呟く阿修羅の声を耳に入れながら、アヒルが目つきを鋭くし、まっすぐに凝縮体を見据えて、一度は下ろしていた金銃を、再び凝縮体へ向けて構える。

「無茶だ、アヒル！俺が中へ飛び込んで撃つ以外、俺たち二人だけで、この爆発力すべてを吹き飛ばすことは……！」

「俺は、“安の神”だ！」

説得するように聞こえてくる阿修羅の声を、アヒルの力強い声が一蹴する。

「だから絶対、“諦め^{あきら}ない”……！！」

「アヒル……」

言葉の通り、その瞳に決して、諦めの色を浮かべていないアヒルのその姿を間近で見つめ、阿修羅がまるで眩しいものでも見るかのように、その瞳を細める。

「そうだ、諦めなくていい」

「……っ」

アヒルの言葉を受け止めるように聞こえてくる声に、阿修羅が振り向く。

「あなたには、僕たち“安附”が附いているのだからな」

アヒルと阿修羅の後方へと、地上から飛び上がるようにしてその場へと現れたのは、箆也たち、安附の四人であった。

「俺の“高くなれ”の言葉があつて、やっと上がってこれたっていうのに、素晴らしくデカイ態度ですねえ」

「うるさい。刈りあげるぞ」

「はぁ！こんな身長デカイ俺が、態度のデカさまで気にしちゃって、すみませえくん！」

こっそりと呟く保に、箆也が鋭く言い放つ。箆也に脅すように言葉を投げられ、保が勢いよく謝り散らす。ボロボロの箆也を保が支え、囁と七架はそれぞれを支え合うようにして、空中に浮かんでいる。傷だらけで、もうまともに力すら使うことのない状態ながらも

皆、鋭く瞳を輝かせていた。

「お前等っ…」

現れた仲間の姿を見つめ、思わず笑みを零すアヒル。

「安附…」

「私も共に戦います。晶さま」

「棗」

籠也たちと共に上がって来た棗が、笑顔を見せて、阿修羅のすぐ後ろへと近寄る。

「附いてんのは、安附だけじゃねえぜえ！」

新たにやって来る声に、アヒルと阿修羅が振り向く。

「この町に居る五十音士は、君たちだけじゃないことを、お忘れなく…」

「スー兄、ツー兄！イクラにエリザ、それに紺平までっ…」

スズメとツバメを先頭に、次々とその場に現れる五十音士の面々。兄や、それぞれの団を従えたイクラやエリザ、そして友である紺平の姿に、アヒルが驚くように目を見開く。

「“舞え”の言葉があって、良かったです。初めて、あなたの存在意義を見出せました」

「うっせえ！こんだけの人数、飛ばしてる俺を、ちったあ労れ！」
やって来た音士たちの中では、冷たい言葉を投げかける雅へと、守が勢いよく怒鳴りあげている。どうやら守の言葉を使い、皆、この場までやって来たようである。

「皆…」

「余所見してる場合か？」

「……っ」

集まってくれた皆の姿を見回し、感慨深げに目を細めていたアヒルが、鋭くやって来るその声に、期待のこもったような表情で、素早く振り向く。

「もう爆発する。一発勝負、タイミングを逸したら、お終いだ」

「先生…」

アヒルへと、鋭く助言を送るのは恵。

「集中しろ、朝比奈」

「ああ……！」

恵の言葉に笑顔でしつかりと頷き、アヒルがまた鋭い表情となつて、前方を見る。

「阿修羅！」

「ああ」

集まったたくさんの五十音士たちの先頭で、並んで銃を構えるアヒルと阿修羅。その後方で箆也やイクラたち、スズメやツバメも皆一斉に構えを取る。皆が見つめる中、凝縮体が膨れ上がり、その金色の膜に、小さくヒビが入る。

「今だ！」

恵の掛け声を合図に、アヒルと阿修羅は、同時に引き金を引いた。

「“撃ち抜け”！」

「“当たれ”！」

二人の言葉が放たれ、二人の銃から、同時に巨大な弾丸が放たれる。二つの弾丸が、凝縮体へと向かうその間に一つとなり、さらに後方から押し寄せる、皆のそれぞれの力とも一つとなって、強大な力の塊となり、爆発した凝縮体へと向かっていく。

『……っ！』

皆が祈るように見守る中、一つとなった力が、凝縮体へと勢いよく衝突した。

——バアアアアアン！

『ううう……！』

押し寄せる爆風に、皆が身を屈め、吹き飛ばされないように必死に堪えた。

Word. 63 終幕 (3)

「……っ」

あまりに強い風に目を開けていられず、強く瞳を閉じていたアヒルは、やがて吹きつける風が弱まったことを感じ、ゆっくりと恐る恐る、その瞳を開いた。

「あ……」

俯いていたアヒルが目を開くと、眼下に広がる、穏やかな町並み。
「言ノ葉、町……」

生まれ育ったその町の名を、アヒルが確かめるように口にする。
瞳に映るその町は、少しも失われておらず、いつもと同じ、見慣れた景色が広がっている。

「やった……やったっ……」

アヒルの口から言葉が落ち、その表情にも笑みが溢れ出る。

『おっしゃああああ！』

『やったあああ！』

スズメや守が手をあげ、集まった五十音士たちの中から、歓喜の
声が響き渡る。紺平と守、そしてライアンが抱き合って喜び、七架
たちが涙ぐみ喜び、皆が皆、嬉しそうな、晴々とした笑みを浮かべ
る。

「ハハ、ハっ……」

皆の嬉しそうな笑顔を見回し、アヒルがさらに、嬉しそうに笑う。
だが笑みを浮かべると同時に、全身の力がすべて、抜けていくのを
感じた。

「うおっ」

「神……！」

「アヒルさん！」

力を使い果たし、上空に浮かんでいる力すらも失くして、バラン
スを崩すアヒルに、籠也たちが焦ったように、身を乗り出す。

「……っ」

そんなアヒルを、掴み止める一本の手。

「阿修羅……」

その手は、アヒルのすぐ横に立っている、阿修羅の手であった。

「ありがとう……」

「いや……」

穏やかな笑みを零し、礼を言うアヒルに、阿修羅もそっと笑みを浮かべた。互いに笑みを向けるアヒルと阿修羅の姿を見て、皆が目を細め、口元を緩める。

「見て！」

後方に居たエリザの声に呼ばれるように、皆が東の空を振り向く。

「朝日がっ」

東の空から徐々に昇っていく、明るい光。光に照らされ、ずっと暗闇に包まれていた皆の居る空が、その下に広がる言ノ葉町が、まるで輝くように、その姿を明らかにしていく。

「夜が、明ける……」

「礼獣は完全に消えた」

眩しいことも気にせずに、ただまっすぐに朝日を見つめるアヒルへと、恵が横から声を掛ける。

「人々の“言葉”も、戻っているだろう」

「ああっ……」

恵の言葉に、アヒルは嬉しそうな笑みを浮かべ、大きく頷いた。

その後、すぐに韻の者たちが言ノ葉町へと駆けつけ、まだ気を失ったままの錨^{いかり}、エカテリーナ、沖也の三人の墮神^{おとじん}たちを拘束した。

「元“安の神”、“墮神”阿修羅こと、安積晶」

韻の者により、地上へと降りた阿修羅の両手首に、手錠がされる。「五年前の言葉による大量殺戮、また、今回の複数名の人間の言葉

奪取の罪で、お前を拘束する」

「……………」

阿修羅は反抗する素振りも一切なく、大人しく韻の言葉に従った。

「お姉ちゃん…」

同じように両手首を拘束された棗が、韻の者たちに連行されていくとする中、名残惜しそうに、姉の櫻と向き合った。櫻は手を伸ばし、拘束された棗の手を握り締める。

「待ってるわ…」

切ない笑みを浮かべ、まっすぐに棗を見つめる櫻。

「例え、何年かかっても…」

「うん…」

櫻の言葉に頷いた棗の瞳から、大粒の涙が零れ落ちた。

「阿修羅…」

スズメとツバメに支えられるようにして、何とか地面に立っているアヒルが、棗たちと共に連行されていく、阿修羅の背中を見つめ、複雑そうな表情を見せる。

「え…？」

じっと見つめていると、その視線が届いたかのように、阿修羅がゆつくりと、アヒルの方を振り返った。

「……………」

少しアヒルと目を合わせた後、阿修羅がアヒル、そしてアヒルのすぐ後ろに立つスズメ、ツバメへ向けて、深々と頭を下げる。十数秒、長々と頭を下げると、阿修羅は再び顔を上げ、アヒルたちへと背を向けて、韻へと連行されていた。

「……………」

遠ざかっていく阿修羅の背を見つめ、アヒルがそっと、目を細める。阿修羅の犯した罪は重い。これから阿修羅には、無間とも言えるほどの贖いの日々が待っているのだろう。その日々へと向かっていく阿修羅の背を、アヒルは目に焼きつけるように、ただ必死に見つめ続けた。

「終わったな…」

「ああ…」

すぐ隣で、保や囁に支えられ、立つ簞也に言葉を掛けられ、アヒルがゆっくりと頷く。

「さあーてと、とつとと帰ろうぜえ」

「うわっ」

ぼんやりと佇んでいたアヒルの頭に、スズメの腕が乱雑に乗ってくる。

「晩飯、っーか、もう朝飯かぁ。とりあえず何か食わねえと、俺もう、腹減っちまって」

「そういう俺も、腹減ったかも」

スズメの言葉に、思い出したように腹部に手を当て、アヒルが呟く。戦いばかりで気が逸れていたが、意識してみると、急激に空腹が感じられてきた。

「今日の晩御飯は、キャベツとナスビのセロリあんかけ、ニンニク味だ”って…昨日、父さん言ってたよ…」

「げえ！？それ、美味しいのかよ！？」

「さあ…？」

「ハハハっ」

スズメとツバメの会話を聞きながら、アヒルが穏やかに笑みを零す。帰る家を、待っていてくれる家族を思うと、自然と笑みが溢れる。

「ああ、帰ろう…」

やっと安心したように肩を落とし、アヒルがそつと呟いた。

夜明けを迎えた言ノ葉町の、とあるマンションの屋上から、一連のことをすべて見ていた和音が、解散していく五十音士たちを見下ろし、そつと目を細める。

「従者たちが罪人を連れ帰る前に、本部へ戻らねば、マズイのではあ？」

背中に届く声に、和音がゆっくりと振り返る。

「毛守さん」

「勝手に外出していたことが、バレてしまいますよお？言姫様」

屋上の入口から現れ、和音の方へと歩み寄って来るのは、含んだような笑みを浮かべた“毛守”の百井桃雪であった。

「ええ、わかっています。すぐに戻りましょう」

桃雪の言葉に答えながら、和音がもう一度、視線を下ろし、兄や仲間たちと共に家へと戻っていくアヒルの姿を見つめる。

「朝比奈アヒル」

和音の視線の先を知るように、和音のすぐ横へと並んだ桃雪が、アヒルの名を口にする。

「彼、“う”の文字に目醒めたようですねえ」

「ええ」

桃雪の言葉に、和音が満足げに頷く。

「あなたの目的は達せられたというわけですか」

「ええ」

もう一度頷き、和音が口元を緩める。

「長い時を経て、すべての神が揃いました…」

明るくなっていく空を見上げ、どこか遠くを見るような瞳を見せる和音。

「これでやっと、彼の“封印”を解くことが出来る…」

「“封印”…？」

マンションの入口が作られた、小さな塔の上部に身を潜め、和音と桃雪の会話に耳を傾けているのは、衣団“計守”の女忍者、慧であった。慧は、エリザの命により、和音を見張っていたのである。

「一体、何の話…？」

まったく理解出来ない二人の会話に、慧が怪訝そうな顔を見せる。

「よくわからないけれど、言姫様が何か企んでいるのは、間違いなさそうだし、一度、エリザ様にお伝えした方が…」

「それは困りますねえ」

「……！」

考えを巡らせていた慧が、すぐ傍から聞こえてくる声に、大きく目を見開き、顔を上げる。慧の目の前には、慧を高々と見下ろすようにして、満面の笑みを浮かべた桃雪が立っていた。

「あなたの神様にしゃべられると、困る話なんですよお。実は」

「ク……！」

慧が素早く飛び上がり、屋上へと降りていきながら、懷から緑色の言玉を取り出す。

「第九音“け”、解放……！」

輝く言玉を、一つに結びあげている長い髪の中へと、吸収させる慧。言玉を呑み込み、ほんのり緑色に輝いた髪が、縛り紐を解き、空中に自由に広がる。

「蹴散らせ……！」

屋上に足をついた慧が、広がった髪から、鋭い針のようになった髪を何本も飛ばし、桃雪へと向ける。

「……っ」

迫り来る髪を見つめ、桃雪が余裕の笑みを浮かべると、どこからともなく素早く、白色の言玉を取り出した。

「第三十五音“も”、解放……！」

白く輝く言玉を、桃雪が鋭く突き出す。

「燃^もやせ」

冷たい笑みと共に、放たれる言葉。言玉から、真っ白で巨大な炎が、勢いよく放たれと、慧が向けていた髪は一本残らず、灰となった。

「うあ……！」

慧の攻撃を燃やし尽くし、さらに勢いを増して迫って来る炎に、慧が表情を引きつる。

「きゃあああああ！」

炎を正面から食らい、広げていた髪を燃やされ、慧が悲痛な叫び声をあげて、その場に力なく倒れ込む。倒れ込んだ慧の髪の毛は、肩よりも短いところまで燃やし尽くされ、吸収されていた言玉が、力なく地面へと零れ落ちた。

「う、ううう…」

「他愛ないですねえ」

呆れたように笑いながら、目の前へと降りてくる桃雪に、顔を上げた慧が、険しい表情を見せる。一度言葉を受けただけでも、桃雪と自分との力の差を、慧は十分に感じ取ることが出来ていた。感じ取れているからこそ、もう一度、攻撃をしようとする事が出来なかった。

「殺しますか？言姫様」

慧から視線を上げ、涼しげな表情で問いかける桃雪。いつの間にか慧のすぐ後ろまで、和音が歩み寄って来ていた。上半身を起こした慧が、厳しい表情で和音を見上げる。

「いえ…」

「え…？」

否定するように言葉を発する和音に、少し驚いたように声を漏らす慧。

「今は慎重に行動せねばならぬ時…派手な行動を起こして、これまでのすべてを無駄にすることだけは、あってはなりません…」

「では、どうすると？」

問いかける桃雪に、和音がそっと目を細める。

「わたくしの言葉を、使いましょう…」

「あ…！」

着物の袖口から、赤い言玉を取り出す和音の姿に、慧がひどく驚いた様子で、目を見開く。本来、忌と戦う五十音士とは異なる立場である言姫が、自らの言玉を見せることは、極めて稀であった。

「う…！」

「大丈夫です。何も恐れることはありません」

少し怯えたように表情を引きつる慧に、優しく言葉を掛け、和音が言玉を、慧へ向けて突き出す。

「わ……………」

「……！」

和音の口から言葉が放たれると同時に、大きく目を見開く慧。

「あ…あああああ！」

耳が裂けそうなほどに、激しい叫び声をあげると、慧はそのまま瞳を閉じ、力なく地面へと倒れ込んだ。倒れ込んだまま、ピクリとも動かない慧を見て、和音がゆっくりと言玉を下ろす。

「どこまで消したんですか？」

「さあ。どうでしょうね」

問いかける桃雪に、はぐらかすように答えながら、和音が言玉を袖の中へと戻す。

「命を奪うよりも、ある意味、残酷かも知れませんねえ。あなたの言葉は」

「どう言われようと、構いません…」

皮肉ったような桃雪の言葉を気にかけることもなく、言玉を片した和音が、屋上の端へと歩を進めながら、昇っていく朝日を見つめる。

「わたくしは、わたくしの願いを叶える為ならば、どんなに酷な言葉であっても口にします」

「やれやれ…」

和音の言葉を聞きながら、桃雪が少し困ったように肩を落とす。

「本当に恐ろしい人だ。あなたは」

一方、その頃、紺平を送り出し、空音と共に言ノ葉町を出た檻也は、人里離れた静かな山奥にある、とある施設を訪れていた。

「そうですか。言姫に不審な動きあり、と…」

「はい」

大きな部屋の中央部に立った檻也が、その部屋の奥の、数段上がった先に立っている人物を見つめ、真剣な表情を見せて頷く。檻也のすぐ後ろに立つ空音も、緊張した面持ちを見せていた。

「彼女が、実際に何を行おうとしているのか、俺には分かりかねます。ですが、予感がするんです」

檻也が視線を落とし、少し不安げな表情を見せる。

「このまま放っておけば、とんでもない事態になってしまうような…そんな予感が…」

「……………」

段上で檻也と向き合うその人物は、深刻そうに呟く檻也の言葉を聞き、かすかにその眉をひそめた。

「わかりました」

部屋に響き渡る凜とした声に、俯いていた檻也が顔を上げる。

「いつか、こんな時が来ると、わかっていました。もう二十年以上も昔から」

「では…」

「動き出すとしましょう」

短く声を発した檻也に、その人物は大きく頷きかける。

「彼等、“韻”が動くというのであれば、我々、“謡”もまた…」
「……………」

その人物の言葉を聞き、檻也は細めた瞳を、さらに鋭く光らせた。

Word 63 終幕 (4)

阿修羅との戦いが終わってから、数日。

礼獣の力による影響も消え、自由ある言葉、意志の戻って来た、言ノ葉町の人々は、今日も、いつもと変わらぬ、平穏な日々を送っていた。

「ふっはあゝ、今日も一日、授業終わりい！」

言ノ葉高校のすぐ隣の高校では、派手なモヒカン頭が特徴的な、守の子分の一人、ブラシが、長かった一日の授業を終え、嬉しそうに笑みを零しながら、大きく伸びをしていた。

「帰り、どっか寄ってきませんか？アニキ」

「あ？ああ、いいぞ」

ブラシに声を掛けられ、すぐ後ろの席に座っている守が頷く。

「じゃあじゃあ！俺、カラオケ行きたいっス！アニキ！」

勢いよく手を挙げたのは、坊主頭に前髪だけを生やした、派手な赤学ランに蝶ネクタイの、一人の男。守の子分の一人、パッツンであつた。

「またカラオケかよお？昨日も一昨日もカラオケだったぞお？」

「パッツンはホント、カラオケ好きだよなあ」

笑顔のパッツンへ、他の子分たちから、呆れたような声が飛ぶ。

「どうします？アニキ」

「俺はいいぞ」

「よっしゃああ！さっすがアニキ！最高っス！」

守が頷くと、パッツンは両手を突き上げ、全力のガッツポーズを見せた。本当に嬉しそうに笑うパッツンを見て、守がどこか安心したように微笑む。

「はあゝあ、またパッツンの下手くそな歌、聞かされんのかあ」

「けどまあ、良かったじゃねえか。無口パッツンから、元のパッツ

ンに戻ってくれてよお」

「それもそうだな」

すっかり元気な様子のパツツンに、他の子分の皆からも、次々と笑顔が零れ落ちる。その笑い声を聞きながら、窓の外へと視線を移し、青く広がる空を見上げる守。

「……サンキュ」

「んあ？」

小さく呟かれた守の声を、聞き逃すことなく耳に入れ、ブラシが戸惑うように首を傾げる。

「誰に礼、言ったんスカあ？アニキ」

「ああ？」

ブラシに問われ、守がそっと目を細める。

“神様”に、だよ」

友の言葉を取り戻してくれた神の姿を思い浮かべ、守がそっと、笑みを零す。

「神様あ？いつから、んなロマンチックなこと、言うようになったんスカあ？アニキ」

「顔に似合わねえことは、やめましょうよお」

「頭、大丈夫っスカあ？」

「……っ」

次々と浴びせられる言葉たちに、穏やかな表情を浮かべていた守が、勢いよく表情を引きつる。

「うるっしやああーい！」

放課後の教室に、守の怒声が響き渡った。

さらに数日後。

夜が明けて間もない、早朝。言ノ葉霊園。

「かあー、イイ天気だなあ」

水の一杯入ったバケツを持ったアヒルが、雲一つない青空を見上げ、どこか嬉しそうな笑みを零す。

「カモメ兄さんの命日は、いつも快晴だよ…兄さんの日頃の行いが良かったからね…」

アヒルと同じように広がる青空を見上げ、大量にナスビの入った袋を持ったツバメが、穏やかに微笑む。

「じゃあスー兄ん時は、大雨だろうな」

「どういう意味だよ？ああっ？」

向けられるアヒルからの言葉に、花を抱えたスズメが、思いきり表情をしかめた。

「ちよつと待ってよお」

後ろから聞こえてくる声に、アヒルたち三人が、同時に振り返る。

「皆の大好きなお父さんを、置いていかないでよお」

「さ、ちやつちやか行こうぜえ」

「おう」

「そうだね…」

少し離れた後方から、三人を追いかけるようにして、必死に駆けてくるウズラ。大きく手を振るウズラを無視し、三人はどんどんと先へと進んでいく。

「いっやあゝお父さんを見捨てないでえゝ！スーくうゝん、ツークうゝん、アーくうゝん！」

朝の静まり返った霊園に、間の抜けたウズラの大声が響き渡ると、前を行く三人は、さらに呆れきった様子で、深々と肩を落とした。今日は、カモメの五回目の命日。アヒルたちは例年通り、朝一番に家族揃って、カモメの墓を訪れていたのである。

「おっし、着いた着いたあ」

“朝比奈家”と書かれている墓を見つけ、先頭を歩いていたスズメが足を止める。

「おっ、今年もちゃんと置いてあつぞお」

すでに墓の前に置いてあったそれを、スズメが空いている左手で

持ち上げる。

「白菜！」

「ホントだ…」

スズメが持ち上げた白菜を、感心するように見つめるツバメ。毎年、アヒルたちよりも前に来た誰かが、カモメへと供えていく白菜。「相変わらず、なんで白菜なんだろうね…」

「さあ？こいつの好物なんじゃねえの？」

「いいんだよ、白菜で」

『え？』

スズメとツバメが不思議そうに首を傾げる中、一人、白菜の意味を知るアヒルは、穏やかに笑みを零す。そんなアヒルを見て、二人は戸惑うように首を傾げた。

「持って帰って、朝御飯にでもしようかあ。とっても新鮮で、いい白菜だよ」

そこへ、やっと追いついてきたウズラが、会話に加わる。

「何せ、今朝、夜が明ける前に、ウチで買って行った白菜だからねっ」

ウズラが、アヒルにしか聞こえないように、アヒルの耳元でひっそりと呟く。そのウズラの言葉を聞き、アヒルはさらに大きく、笑みを零した。

「さ、手早く掃除、掃除いっ」

「おう」

「アヒルくん、バケツ」

「ああ」

アヒルが水の入ったバケツをその場に置き、一人ずつ、柄杓を回して、墓へと水をかけていく。

「兄貴いっ、恋盲腸で今、ヒトミが先生と大変なことになってさあ」

「もっと他に言う事、ねえのかよ？」

「ああ？恋盲腸以上の重要項目が、どこにあんだよ？」

「カーくうくん、どうやったら息子たちと、心の交流が深まるのかなあ？」

「それ、息子の兄さんに聞くこと…？」

カモメへと次々と言葉を掛ける、朝比奈家の者たちを、眩しく輝く太陽が、照らしていた。

言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』。カモメの墓参りを終えた朝比奈一家は、早朝の内に自宅へと戻り、それぞれ、開店や学校の準備を行っていた。

「完璧だわ…」

今日も勝手に朝比奈家に上がり込んでいる囁が、制服の上にエプロンを纏って、台所で、不気味な笑みを浮かべている。

「今日のは自信作よ…」

右手にお椀を持ち、居間へと行く囁。

「さあ、アヒルん…たあーんと、お食べ…」

「だから、何で白菜の味噌汁作って、汁が紫色になんだよ！」

ぐつぐつと泡立っている、紫色の汁の入ったお椀を差し出している囁に、居間に座っていたアヒルが、勢いよく怒鳴り声をあげる。

“愛”という名の調味料のお陰よ…」

「んな調味料、入れんじゃねえ！」

「はあ…」

アヒルと囁の会話を聞きながら、横で新聞を読んでいる箆也が、呆れた様子で深々と肩を落とす。

「はあ、洗濯終わったあ」

大きなカゴを抱えたスズメが、額に滲んだ汗を拭いながら、ベランダから勝手口を通り、居間の奥の部屋へと入ってくる。

「あつれえ？ 確か、この辺に片付けたと思うんだけどなあ」

「んあ？」

部屋へと入ったスズメが、部屋の押入れを漁り、中にあったものを部屋へと広げて、少し困ったような声を漏らしているウズラの姿を見つける。

「あ、あった！」

「親父……」

「あ、スーくんくん！」

スズメが呼びかけると、ウズラがとても嬉しそうな笑顔で振り向く。

「聞いて聞いてえー！ 実はお父さん、いいこと、思いついちゃっ……！」

「この忙しい朝に、こんな所で邪魔なんだけど」

「ううう……」

話を切り出す前に、冷たくあしらわれ、ウズラが一瞬にして落ち込む。

「だいたい、こんなところ、ひっくり返して、何やってんだよ？」

「これこれ、これ、探してたんだ！」

「んあ？」

ウズラが笑顔で取り出したものに、スズメが眉をひそめる。

「カメラあ？」

ウズラが両手で大事そうに持ち上げたのは、一眼レフの大きなカメラであった。形も古く、多少埃をかぶっている。相当長い間、押入れで眠っていたのだろう。

「んなもん出してきて、どうすんだよ？」

「家族写真、撮ろうと思って！」

『家族写真……？』

居間と台所からそれぞれ顔を出したアヒルとツバメも、ウズラのその言葉に、スズメと同じように、少し驚いた声を漏らす。

「何だってまた、いきなり家族写真なんか……」

「だって、五年前のままなんだよお？ カーくんの机の上に飾ってある、家族写真っ」

表情をしかめるスズメへと、ウズラが言葉を向ける。

「新しいの飾って、カーくんにも皆の成長、見てもらわないとお」
『……っ』

穏やかな笑顔を見せながら、ティッシュでカメラの埃を拭き取り始めるウズラ。その提案に、兄弟たちは皆、そつと眉をひそめはしたが、反論しようとはしなかった。

「ま、しゃあねえ。撮っとくかあ、一応」

「そうだね…案外、スズメの後ろに居る背後霊も、写し出せるかも知れないし…」

「え!?!マジ!?!俺の後ろ、居んの!?!」

ツバメの言葉に焦り、洗濯カゴをその場に置いたスズメが、必死に後方を確認する。そんな二人の様子を見て、アヒルや、居間から覗いていた籠也と囁も、楽しげに笑みを浮かべた。

「じゃあ、僕がシャッターを切りますよ」

「ダメダメえ〜! 籠也くんも囁ちゃんも、入るのお」

「え…?」

ウズラからカメラを受け取ろうとした籠也が、勢いよく断られ、戸惑うように首を傾げる。

「けど、“家族写真”って…」

「だから、でしょ?」

「……っ」

優しい笑顔で微笑みかけるウズラに、籠也が驚くように目を見開く。

「そうそ、シャッターはちゃ〜んと、親父が切ってくれっからあ」

「ええ!?! お父さん、家族写真に入れないの!?! どうしよう、カーくん〜ん!?!」

「ハイハイ、ちゃんと、隣の魚屋のオツチャンに頼んでやつから」
スズメに冷たく言い放たれ、仏壇のカモメの写真へと助けを求めに行く父に呆れつつも、アヒルが宥めるように言葉を掛けた。

「もっと寄って寄ってえ！」

白鉢巻きに長靴といった、いかにも魚屋風の、隣の魚屋の店主、源吉に撮影を頼み、アヒルたち朝比奈家の面々と籠也、囁は、八百屋『あさひな』の前に、きれいに整列していた。

「ほい、行くよお！」

源吉がカメラを構え、大きく声をあげる。

「ハイ、チーズ！」

皆が大きく笑うと共に、シャッター音が、朝の空へと響き渡った。

「よしっと」

出来たばかりの写真を写真立ての中へと納め、アヒルが満足げな笑みを浮かべる。完成したばかりの写真立てを、アヒルはすぐ前にある、カモメの机の上へと置いた。五年前、カモメが生きていた頃の家族写真のすぐ横に、並べるようにして。

「……………」

並んだ家族写真を見つめ、アヒルが穏やかに笑う。すべてが五年前で止まってしまっていたこの部屋に、やっと新しい時が刻まれた。

「アーくうくん！紺平くんが、迎えに来たよお〜！」

「ああ！今、行く！」

下から聞こえてくる父の声に、アヒルが部屋の入口を振り返り、大きく声を出す。そしてもう一度、机の方を振り向き、机の上に、そっと右手を置いた。

「じゃあ、カー兄」

机を撫でた右手が、すぐさまそこから離れる。

「いってきます！」

大きな笑みでそう言うと、アヒルは駆け足で、カモメの部屋を出て行った。

Word. 64 動キダス永遠 (1)

カモメの命日だった、その日の深夜。一日の授業を終え、山程溜まっていた仕事を終えて、夜も遅い時間にやっと言ノ葉高校を出た恵は、閉店間際の花屋で花を買い、すっかり暗闇と化し、まるで人気もない、言ノ葉霊園を訪れていた。

「……………」

すでにアヒルたちにより掃除され、きれいになっている朝比奈家の墓を見つめ、この墓の下で眠る、心優しい笑顔の青年の姿を思い出し、恵はそっと目を細めた。

「ん…？」

こんな遅くだというのに、近付いてくる足音を耳に入れ、恵が顔を上げて振り向く。

「あ…」

霊園に設置された小さな電灯に照らされ、見えるその人影に、少し驚いたような表情となる恵。

「こんばんは」

現れたその人物は、まるで敵意のない、美しく響く凜とした声を、恵へと向けた。その声を聞いた恵が、特に挨拶を返そうとはせずに、少し呆れたように肩を落とす。

「随分と遅い面会だな。もうすぐ明日だぞ？」

「仕事で遅くなってしまうて。そちらもお仕事で、遅くなりましたか？」

「いや。仕事もあったが、私は毎年、この時間だ」
「え…？」

再び墓へと視線を落としながら、そう言う恵に、その者は首を傾げ、戸惑ったように声を漏らす。

「率先して会いに来るほどでもないだろ。私なんて」
力なく声を落とした恵が、自嘲するような笑みを浮かべる。

「こいつを大切に思ってる連中は、山程いる。そいつ等が会いに来てやってれば、それで十分さ」

「自分を卑下する物言いは、相変わらずですね…」

恵の言葉を聞き、その者は少し困ったように肩を落とした。

「いつまでもあなたがその調子じゃ、カモメが哀しんでしまいますね」

「私はいつも、哀しませてばかりさ」

すぐさま言葉を発し、恵がまっすぐに墓を見つめる。

「喜ばせたことなんて、一度だってない」

「……………」

まるで悔いるように響く恵の声に、その者は掛ける言葉を見失い、口を閉じてしまった。

「今回のことは…?」

「従者から報告を受けて、おおよそは」

恵が探るように問いかけると、その者が再び口を開く。

「丁度その日、於の神が私のところへ来ました」

「於崎檻也が?」

その者の言葉に、恵が眉をひそめ、振り向く。

「言姫に不審な動きあり、と」

「……………」

その者の口から和音の名が出ると、恵の表情がさらに曇る。

「動くのか…?」

「動かざるを得ないでしょう」

険しい表情で問いかける恵に、その者は少し音調を落として呟いた。

「あの子が、安の神が“う”の文字に目醒めてしまった、今…」

「……………」

深く俯いた恵は、込み上げる感情を押し潰すように、きつく唇を噛み締め、拳を握り締める。

「あの封印だけは、絶対に守り抜かねばなりません…」

「ああ、わかってる」

鋭い瞳を見せ、恵が頷く。

「解かせやしないさ。死んだってな…」

強い決意のこもった表情で、恵ははっきりと言い放った。

カモメの命日、翌朝。言ノ葉町の小さな八百屋『あさひな』。

「んん、んん…ビーフストロ…ガンプ…」

「おは四キロカロリー！アーくうん！！」

アヒルが自室のベッドの上で丸まり、相変わらずよくわからない寝言を呟いていると、扉を蹴破るほどの勢いで、朝比奈家のヒゲ親父、ウズラが飛び込んでくる。

「これでピーマン、きつと大好きになるアタックううん！」

「だああああ！」

嵐のようにピーマンを叩きつけられたアヒルが、一瞬にして大きく目を開き、ベッドの上で勢いよく起き上がる。

「ピーマンなんて、元から大好きだったのお！」

「ぐほおおう！」

アヒルの投げ返したピーマンの一つが、見事にウズラの顎下に直撃し、ウズラがそのまま後方へと倒れ込んでいく。ウズラが倒れた振動で、朝比奈家の二階がかすかに揺れた。

「ナ、ナイスアッパー…ピーマンっ…」

倒れたウズラが、息も絶え絶えな声を漏らす。

「ったく、だいたい俺が呼んだのは、ビーフストログアンプでっ…」

「それを言うなら、ビーフストログノフよ…？アヒるん…」

「出来ないのは、国語だけではないらしいな」

「うっせえ！放っておけ！」

部屋の手ぐ外、外野から野次を飛ばす籠也と囁に、アヒルは勢いよく怒鳴り返した。

「今日も派手だなあ」

騒がしい二階を見上げながら、台所で朝食の準備をしているスズメが、少し呆れたように肩を落とす。

「アヒルの奴、兄貴のこと、吹っ切ったみてえだし、あの恒例行事もなくなるかと思ったけど…」

「そうだね…けどまあ、いいんじゃない…?」

洗濯機からカゴの中へと、洗濯物を移す作業をしていたツバメが、スズメと同じように天井を見上げ、どこか柔らかな笑みを浮かべる。

「この騒々しさにも…もう慣れたし…」

「それも、そうだな」

ツバメの言葉に頷き、スズメもそつと笑みを零した。

「クッソ！紺平の野郎、箆也たちと先に行きやがって！」

あれから結局、ウズラやスズメたちと、またあれこれと騒いでいたアヒルは、迎えに来たはずの紺平にさえ置いていかれ、一人、必死に学校への道を駆け出していた。

「ああ！これじゃあまた、遅刻だ！」

腕時計で時刻を確認した後、アヒルがひどく困った様子で頭を抱える。また遅刻してしまえば、担任の恵に、どれほど怒られるか、わかったものではない。

「ええい！とにかく急い…！」

「朝比奈！」

「ああ!？」

急いでいる真っ最中のアヒルを、遠慮もなく呼び止める大きな声。

「ここで会ったが二百年目ええ！」

『ほんの数日振りです、アニキ!』

「うるっしやーい！」

アヒルの行こうとしている道を塞ぐように現れたのは、もうすっかりお馴染みとなっている、守とその他多くの子分たちであった。

「安二木、悪いけど俺、今、マジで急いでっ…」

「朝比奈」

その場に留まっではいるが、いつでも前へと踏み出せるように足は動かしたまま、急いでいることを説明しようとしたアヒルの声を遮って、守が呼びかけ、アヒルのもとへと歩み寄って来る。

「パッツンの言葉、ばっちり戻った」

「へ？」

小声で囁かれた守の言葉に、アヒルが顔を上げ、すぐさま子分たちを見回す。派手な頭の子分たちの中に、一際目立つパッツンの姿を見つけた。パッツンはアヒルを威嚇するように睨んでおり、あれこれと罵声を浴びせているが、この前会った時よりも、ずっと生き生きとしていた。

「感謝する。ありがとう」

「安二木…」

しっかりと礼を告げる守に、アヒルがそつと口元を緩める。

「というわけで、今日という今日こそは、コッテンパンのパンチパーマにしてやる！」

「だあああ！」

詰めていたアヒルとの距離を、後ろに飛び下がるようにして再び開き、大声を放って構えを取る守。そんな守に、アヒルが肩透かしを食らったように、思いきりバランスを崩す。

「何っで、そうなるんだよ！？ お前、今、“感謝する” っつつたろ！？ 感謝はどうした、感謝は！」

「それとこれとは別問題だ」

勢いよく怒鳴りあげるアヒルに対し、しっかりと腕組みをし、口を尖らせて言い放つ守。

「というわけで…覚悟だ、朝比奈あああ！」

再び構えを取り、守がアヒルへと飛びかかっていく。向かってくる守に、しかめっ面を見せていたアヒルは、すぐさまその目つきを鋭くした。

「ぎゃああああ！」

『ア、アニキいゝ！』

アヒルの振り上げた右足により、腹部を思いきり蹴り飛ばされ、守が高々と空を舞って、路上へと倒れ込んでいく。そんな守を見て、悲鳴のような声をあげる子分たち。

「痛たたたたっ…」

守が蹴られた腹を押さえながら、何とかその場で体を起こす。

「てつめえ、朝比奈！お前、同じ五十音士である俺に、ちったあ労りとか、そういうもんはないのか！？」

「それとこれとは別問題なんだろう？俺急いでるから、じゃあな！」

「あ！待て、朝比奈…！」

守の制止に応じるはずもなく、アヒルはそのままその場を駆け出し、守の子分たちの間を通り抜けて、学校の方へと去っていったまう。

「あ…」

あっという間に取り残され、少し呆然とした声を漏らす守。

「明日こそは、勝ってやるうう！」

『いや、そんな急には無理ですって。アニキ…』

空へ向けて、勢いよく叫びあげる守に、子分たちは冷静に声を掛けた。

言ノ葉高等学校、一年D組。

「セエエーフ！」

大きく両手を横へと広げ、教室へと飛び込んでくるアヒル。

「アウトだ、阿呆」

「ぎゃあああ！」

そんなアヒルの額に、飛んで来た白チョークが勢いよく突き刺さると、アヒルが、危うく後方へと倒れ込みそうになるところを、必死に堪える。

「痛ってえなあ！体罰で訴えんぞ！？」

「これは、何度注意しても、反省の色を見せないお前への愛の鞭だ。問題ない」

怒鳴りあげるアヒルに対し、教壇に立った恵は、出席簿へと視線を落としたまま、何食わぬ顔で答える。

「セ、セーフですかああ！？」

そこへ、アヒルに一步、遅れるようにして、飛び込んでくる保。

「お前もアウトだ、馬鹿野郎」

「ひえええー！こんな年中寝惚けてる俺が、寝惚けて鍋焦がしたせいで遅刻しちゃって、すみませえーん！」

「鍋、大丈夫だったのか：？」

恵からチョークを飛ばされ、それを甘んじて受けながら、謝り散らしている保を見て、アヒルが少し呆れた表情で問いかける。

「罰として、朝比奈は居残り掃除、高市は反省文な」

「ええ！？」

「はあ！こんな大した発言もしない俺が、一丁前に反省文とか書くうとしてて、すみませえーん！」

恵の言葉に、アヒルが不満げに顔を上げ、保は相変わらずの様子で叫びあげる。

「なんで、俺が居残りで、保だけ反省文なんだよ！？」

「こんなウルサイ奴に資料室来られたら、読書が出来ないだろうが」
まだ叫びあげている保へと冷たい視線を向けながら、恵がはつきりと言いつつ。

「だったら、俺も：！」

「反省文書くかあ？国語成績“二”」

「うっ：」

恐らく、居残り掃除よりも反省文の方が時間が掛かるであろうアヒルは、恵のその言葉に、反論することが出来なかった。

「掃除、させていただきます…」

「宜しい。じゃあ二人共、とっとと席着けえ」

了承したアヒルを見て、満足げに頷くと、恵はアヒルと保に席に着くよう指示し、出席の続きを取り始める。

「ったく、相変わらず馬鹿ガアねえ」

「アハハ」

呆れたように言い放つ想子の前で、七架は楽しげな笑みを浮かべる。

激しい戦いを終えたアヒルたちに、穏やかな日常が戻って来ようとしていた。

その日、放課後。

「神月くん！」

「ん？」

一日の授業を終え一人、正門を出て、帰路につこうとしていた箆也は、後方から聞こえてくる呼びかけに、立ち止まり、振り返る。

「奈々瀬」

校舎から、グラウンドを少し駆けるようにして、箆也のもとへとやって来るのは、七架であった。

「今、帰りか？」

「うん、これからバイトなの。神月くんは一人？珍しいね」

「ああ。神は相変わらず、居残り掃除だからな」

「あ、そっか」

箆也のすぐ横へと並んだ七架が、すぐさま納得した様子で頷く。最近はいつもこんな調子で、アヒルが掃除をせずに帰ることの方が、

珍しいくらいだろう。

「高市くんは反省文だね。あ、じゃあ囁ちゃんは？」

「部活だ」

「部活？部活なんてやってたっけ？囁ちゃん」

「お料理クラブというものに入ったらしい」

「へえ。囁ちゃん、お料理とかするんだあ」

感心するように言う七架の隣で、囁が作っていた紫色をした味噌汁のことを思い出し、あれを料理と呼んでいいものかと、簞也が陰しい表情で考えを巡らせる。

「それで神月くんは、一人帰宅なんだね。あれ？でもお家、こっちだっけ？」

「いや、今日は為^ゐの神のところへ寄るんだ」
「為介さんのところへ？」

簞也の言葉に、七架が不思議そうに首を傾げる。

「衣^えの神から何か、話というものがあるらしい。恵先生に、絶対に行くよう命令されてな」

簞也が肩を落としながら、少し煩わしそうに答える。

「まったく偉そうに：旧世代の神とはいえ、僕はあの人の神附きでも何でもないというのに」

「恵先生、かあ：」

しみじみと恵の名を呟く七架に、簞也が眉をひそめる。

「どうした？」

「え？あ、ううん。大したことじゃないんだけどね、あの写真：」

「写真？」

「うん。ほら、始忌との戦いの時、恵先生のお家にお邪魔したでしょ？その時、私、たまたま部屋に飾られてた写真を見ちゃったんだけど：」

——勝手に見てるんじゃない——

——あ、すみません——

恵により、すぐさま伏せられた、笑顔の青年が写っていた、あの写真。

「あれ、朝比奈くんのお兄さんだったんじゃないかなあ、と思って」「神の兄…？カモメさんのことか？」

「うん。この前、お焼香させてもらった時に仏壇の写真見て、それで」

初めて、その写真を見た時、七架はその写真の中の青年に、どこか見覚えのようなものを感じた。あれは、その青年と出会ったというわけではなく、その青年と、ずっと共に居るアヒルが、似ていたからなのだろう。

「生徒、なわけはないよね。恵先生、二十四くらいだし。同級生、とかだったのかなあ？」

「カモメさんと、恵先生が…」

首を傾げる七架の横で、籠也は鋭い瞳を見せ、考え込むように俯いた。

Word. 64 動キダス永遠 (2)

その頃、言ノ葉高校、国語資料室。

「はあ」

箒を持ったアヒルが、深い溜め息を落とす。

「町の危機を救った神様に、居残り掃除なんて、普通させるかねえ」
「私は一教師なんぞでな。どの生徒に対しても、あくまで一生徒として、公平に接するんだよ」

「毎日、掃除させてる時点で、公平じゃねえと思うけど」

「何か言ったか？」

「いえ」

鋭く問いかけてくる恵に、すぐさま首を横に振って、アヒルが掃除をする手を早める。

「お前、その後、体の調子は大丈夫なのか？」

「へ？ あ、ああ。もうすっかり」

アヒルが右腕を大きく回しながら、笑顔で答える。戦いの後、すぐにスズメにより、傷の治療を受け、家に帰ってからウズラと少し騒動を起こしつつ、即眠ると、次の日にはすっかり回復していた。

「力は？」

「ああ、問題ねえよ。今回は前みたいに、言玉使えなくなるとかもなかったし」

「そうか」

アヒルの答えに、恵が少し安心したように肩を落とす。

「けど、戦いの途中で出てきた金色言玉が、ガアスケの姿にもならねえし、いつまで経っても消える様子なくてさあ」

「……っ」

続くアヒルの言葉に、すぐさま曇る恵の表情。

「言玉二つって結構、嵩張るんだよなあ。どうにかなんねえかなあ」
大きく首を捻り、少し悩むように呟くアヒル。アヒル自身は、新

たに得た力について、難しく考えている様子はなく、それよりも言玉が嵩張ることを気にしているらしい。そんなアヒルを見つめながら、恵が何やら思い出すように、その瞳を細める。

——動かざるを得ないでしょう……——

恵の脳裏を過ぎるのは、昨夜、カモメの墓で出会ったあの者の言葉。

「トンビ」

「だから、俺はアヒルだったの」

いつものように名を間違える恵に、呆れるように言い返しながら、アヒルがゆっくりと振り向く。

「トンビ……」

「だから……!ん?」

またしても違う名を呼ぶ恵に、今度は強く言い返そうとしたアヒルであったが、振り向いたその先で、浮かない表情を見せている恵に、戸惑うように眉をひそめた。

「恵、先生?」

「あつ」

怪訝そうに首を傾げるアヒルを見て、恵がハツとした表情を作り、慌てて持っていた本へと視線を落とす。

「拭き掃除ついでに、本棚の整理もしとけ」

「えええ……?」

恵からの言葉に、途端に顔をしかめるアヒル。

「まったく、人遣い荒いなあ」

「……………」

面倒臭そうに言いながら、箒を壁に立てかけ、近くの床に置いてあるバケツにかかっている雑巾を取るアヒルの背を見つめ、恵がそっと、目を細める。

———あの子が、安の神が“う”の文字に目醒めてしまった、今：

「……っ」

思い出される言葉に不安げな表情を見せ、恵はゆっくりと俯いた。

言ノ葉町、町の小さな何でも屋『いどばた』。

「やあ、いらっしやうい。神月クンっ」

学校の帰り、『いどばた』へとやって来た箆也を、相変わらず陽気な口調の扇子男、為介が出迎える。まるで緊張感のない笑顔の為介を見ると、箆也は少し呆れるように肩を落とした。

「衣の神は？」

「もう来てるよお。中へどうぞ」

「ああ、邪魔する」

為介に案内され、箆也が店の奥の、為介の屋敷へと入っていく。

「今日、美守^{みもり}は？」

「部活だってえ」

「ああ、オカルト同好会か」

いつも屋敷にいるはずの雅の姿が見当たらず、箆也が問いかけると、為介は短く答えた。その間に廊下を進み、奥の広めの和室へと通される。そこには、和室には似合わない外見のエリザが、正座をして待っていた。

「済まない。待たせた」

「いいえ、大丈夫よ。私が無理やり、呼びつけたんだし」

エリザへと声を掛けながら、箆也がエリザの向かいへと座る。襖を閉めると、為介も襖のすぐ横へと腰を下ろす。閉め切られた部屋に、妙な緊張感が走る。

「で、話というのは何だ？」

箆也が早速本題へ入ろうと、エリザに問いかけると、エリザは急に険しい表情を見せた。

「説明するより早そうだから、とりあえず見てもらえるかしら」

「見る…?」

「慧」

「はい、エリザ様!」

エリザが天井へ向けて呼びかけると、天井裏にでも潜んでいたのか、上から派手な忍び装束の少女が飛び降りてきた。その少女は、箆也のよく見覚えのあるエリザの神付き、“計守”^{けもり}の慧こと、慧左衛門子であった。だが、降りてきた慧は、箆也の知っている慧とは多少、違っていた。

「お久し振りです、神月殿」

「あ、ああ。髪、切ったんだな、慧」

笑顔で挨拶する慧に、箆也が言葉を返す。慧が以前、武器にもしていた長い髪は、肩より上のところまで短く切られていた。そのせいか、随分と印象が変わっている。

「は?」

「え…?」

大きく首を傾げる慧に、眉をひそめる箆也。箆也は、自分が何か、首を傾げられるようなことでも言っただろうかと考えたが、特に不自然なことは言っていないはずであった。髪型だけではない。慧に何か、違和感のようなものを感じる。

「あ…えっと、この間は済まなかった。あなたが檻也のことを、教えてくれたお陰で、何とか檻也も無事っ…」

「は?」

「……っ」

またしても首を傾げる慧に、今度ははっきりとした違和感を覚え、箆也が眉をひそめ、言葉を止める。

「衣の神、これは…」

「言ったでしょう?説明するよりも、見てもらった方が早いって」

振り向く箆也に、エリザも厳しい表情を見せる。

「数日前、突然帰って来たと思ったら、この状態」

「エリザ様？」

慧へと鋭い視線を送るエリザに、慧はわけがわからない様子で、戸惑うように首を傾げている。

「私が慧を、言姫の監視に付けていたのは、君も知ってるわね」

「あ、ああ…」

確認するように問うエリザに、箆也が詰まりながら頷く。檻也が行方不明になった際、韻に乗り込んだが、和音に真実を教えてもらうことの出来なかった箆也は、監視していた慧から礼獣のことを聞き、檻也を探しに行くことが出来たのである。

「慧、君、私に言姫を監視しろって言われた？」

「え？言姫様をですか？そのような命を、受けた覚えはありませんが」

自然と答える慧に、箆也がさらに眉をひそめる。エリザも同じように、鋭く目を細めた。慧は、嘘をついているような、様子はない。無理に言っている、様子もない。本当に自然な状態で、エリザの問いかけに正直に答えている。

「これは…」

「消されちゃったみたいだねえ」

張り詰めた空気の中に、軽い口調の声が入って来ると、箆也とエリザが同時にそちらを振り向いた。

「“記憶”」

鋭く微笑む為介に、箆也が表情を陰しくする。

「消した？記憶を？」

為介の言葉に、エリザは困惑の表情を見せる。

「それって、どういう…」

「“忘れる”」

「え？」

問いかけようとしたエリザの言葉を遮り、落とされる一つの言葉。

その言葉を口にしたのは、何やら思いつめたような、苦しい表情を見せた籠也であった。

「和音の、言葉…」

さらに目を細めながら、籠也がゆっくりと呟く。

“忘れる”…？まさか、その言葉で、慧の記憶を…？」

「……………」

聞き返すように問うエリザに答えようとはせず、籠也はただ、その場で深く俯く。

「二度と…」

俯いた籠也の口から、小さな弱々しい声が零れ落ちる。

「もう二度と、あの言葉は口にしないと…そう、約束したじゃないか。和音…」

責めるような言葉を落とした籠也は、ひどく哀しげな表情を見せていた。

韻本部、和音自室。

「失礼します」

扉を二度叩き、和音の部屋の中へとやって来たのは、“毛守”の桃雪であった。机で何やら書類を読んでいた和音が、ゆっくりと顔を上げる。

「どうでしたか？」

「ええ。この通りバツチリ、“貰い受けて”きましたよお」

和音の問いかけに笑顔で答え、右手をあげる桃雪。その右手の中には青と白の言玉が一つずつ、計二個の言玉が収められていた。

「そうですか。ご苦労さまでした」

「いいええ、お易い御用ですよ」

労う和音に、微笑みながら、桃雪は鋭い視線を和音へと投げかける。

「集めて来るのは、二つだけで、宜しかったですかあ？」

「ええ」

問いかけた桃雪に、迷うことなく頷く和音。

「残り三つは、もう間もなく、あちらからやって来ますから…」

桃雪から受け取った言玉を見つめ、和音は冷たい笑みを浮かべた。

「……………」

「エリザ様？」

黙ったまま、立ち上がるエリザを見上げ、慧が少し戸惑うように首を傾げる。

「慧、君はしばらく、南の島でトロピカル療養してなさい」

「え？ですが別に、療養するほど疲れておりませんし、それにトロピカルって…」

「神命令よ！聞けないの！？」

「あ、は、はい！」

困惑していた慧であったが、エリザにきつく言われ、少し肩を上げながら、慌てて返事をする。

「だったら、今すぐ向かいなさい。今、すぐよ！」

「わ、わかりました。失礼します」

エリザは険しい表情で、少し怒鳴るように指示をすると、エリザの真意も知らぬまま、慧はかしこまった様子でエリザへと頭を下げ、箆也と為介にも挨拶をして、足早にその場を去っていった。

「あゝああ。あんなきつい言い方しなくってもおゝ」

「出掛けてくるわ」

「え？」

慧の出でいった方を見つめ、少し呆れたように為介が言う中、エリザも歩を進め、部屋から出ていく。去っていくエリザの背中に、驚いた様子で顔を上げる箆也。

「ま、待て！衣の神！」

箆也が慌てて立ち上がり、屋敷の外へと出ていこうとするエリザを、必死に追いかける。エリザが出掛けようとしている先がどこなのか、箆也には十分に予想がついていた。

「待て！落ち着け、衣の神！」

勝手口までエリザを追っていき、箆也がエリザの背中へと声を掛ける。

「今はまだ、何もわかっていない状況だ！こんな時に、一人で動くことは……！」

「私ね」

勝手口の前で靴を履いたエリザがやっと足を止め、箆也の言葉を遮るように、声を発する。

「私ね、自分で言うのもなんだけど、わがままだし、自己中だし、正直、神附きからしたら、附いていきますってほどの神様ではないと思う」

態度とは裏腹に、落ち着いたエリザの声が、廊下にそっと響く。

「けどね」

付け加えられると共に、力を増す声。

「自分の神附き傷つけられて、黙ってられるほど、ものわかりのいい神でもないのよ」

「衣の神……」

箆也の方を振り返ったエリザは、射るような、鋭い瞳を見せていた。神附きである慧を傷つけられ、記憶を消され、エリザは激しく怒っている。エリザの怒りが十分に理解でき、箆也はただ、目を細めることくらいしか出来なかった。

「じゃあ、そういうわけだから」

「ま、待て！」

勝手口の扉を開け、屋敷を出て行こうとするエリザを、箆也がもう一度、力強く止める。

「いくら何でも、一人では危険だ！どうしても行くというのであれば、僕も一緒に……！」

「ダメよ」

「何…？」

すぐさま反対するエリザに、箆也が眉をひそめる。

「君はアヒルの神付きでしょ？なら、アヒルに附いていなきゃダメ」

「だが…！」

「何となく、予感がするの」

「え…？」

エリザのその言葉に、戸惑うように首を傾げる箆也。

「言姫が何考えてんのかなんて、私にはわからないけど、でも、その、言姫がやろうとしてることの、鍵を握ってるのは、アヒルなんじゃないかって」

「……っ」

その言葉に、箆也がハッとした表情を見せる。箆也もエリザと同じように、和音がやろうとしている何かには、アヒルの存在が大きく関わっているのではないかと、考えていた。

「アヒルが残っていれば、きっと、その何かは阻止出来るはず。だから君は、アヒルの傍で、アヒルを守って」

笑顔を見せたエリザが、まっすぐに箆也を見つめる。

「もしも私に何かあった時は…その時は、お願いね…」

「衣の神…」

今から自分の身に起こることを、知っているようなエリザのその言葉に、箆也が一層、険しい表情を見せる。

「だあゝい丈夫よ！私はなんせ、“衣の神”なんだから！」

無理に作ったような明るい笑みを浮かべ、エリザが堂々と胸を張る。

「アヒルのこと、頼んだわよ。安附」

「あ…！」

最後にアヒルのことを託し、エリザが箆也へと背を向けて、勝手口を飛び出していく。箆也は思わず手を伸ばしたが、その手は、勢いよく閉まった勝手口の扉により遮られた。伸ばそうとしていた手

を下ろし、箆也が堪えるように、きつく唇を噛み締める。

「ああ、行っちゃったのお」

家の奥から、二人に遅れるようにして、為介がやって来る。

「弱ったなあ、一応、恵サンに報告しとこうかあ」

困ったように頭を掻きながら、為介が電話のある店の方へと向かっていく。その背を少し見た後、箆也は立ち尽くしたまま、深く俯いた。

「和音っ…」

名を呼ぶその声は、まるで祈るような声であった。

「ようこそ、お出で下さいました。衣の神」

「……っ」

為介の屋敷を出てすぐに、韻本部の和音の部屋へとやって来たエリザは、満面の笑みで迎える和音へと、鋭い視線を投げつけた。

「私が何故、ここへ来たのかは、わかるわね…?」

「ええ、何となくは」

まるで脅すように、低く響く声で問いかけるエリザであったが、和音はそれに一切動じず、笑顔を崩すことなく頷く。

「恐らくは、あなたの神附きである、計守さんのことでしょう」
涼しげな表情で言う、和音がまっすぐにエリザを見つめる。

「彼女、ちゃんと“忘れて”いましたか？」

「……!」

嘲笑うように問う和音に、エリザが大きく目を見開く。

「第四音“え”、解放…!」

すぐさま懷から言玉を取り出したエリザが、大きく声を張り上げ、言玉を解放させると、緑色に輝く言玉を、自分の右足へと吸収させる。

「私は神っ…私の神附きを傷つけることは、例え言姫であっても、

許しはしないわ！」

力強く叫んだエリザが、輝く右足で床を蹴り上げ、高々と上空へと飛び上がる。

「“えぐ抉れ”……！」

空中で大きく右足を振り上げ、和音に向かって、まっすぐに降りていくエリザ。

「毛守さん」

「かしこまりました」

和音に呼ばれ、和音の前へと出た桃雪が、降りてくるエリザを見上げ、冷たい笑みを浮かべた。

Word. 64 動キダス永遠 (3)

戻って、国語資料室。

「うわっ…」

よく搾った雑巾を片手に持ったアヒルが、目の前に広がるその光景に、思わず顔を引きつり、あからさまに嫌がる声を漏らす。恵から、資料室から繋がる書庫の拭き掃除を頼まれたのだが、そこはただ、本が乱雑に山積みされた空間で、足の踏み場もないほどに荒れ果てていた。

「ついでに本の整理つつってたけど…ついでのレベルじゃねえじゃん。これ…」

散乱した山程の本を見回し、アヒルがげっそりとした表情で呟く。

「はあ…とにかく、片っ端からやってくしかねえかあ」

一度、大きく肩を落とすと、開き直ったようにそう言って、アヒルが入口すぐ近くの本を拾いながら、書庫の中へと突入していく。

「んん…」

一方、資料室では、アヒルに掃除を任せきりの恵が、ゆっくりと読書をしていた。気難しい表情で恵がページをめくっていたその時、机の上に置かれた電話が鳴る。その音を耳に入れると、恵は読んでいた本を机へと置き、受話器を取った。

「はい、国語資料室」

恵が慣れた様子で、受話器を耳に当てる。

「何だとおお!？」

「へ？」

次の瞬間、恵が勢いよく椅子から立ち上がり、大きな声をあげる。その声に驚き、掃除に励んでいたアヒルは思わず、戸惑うように顔を上げた。

「わかった!とりあえず、今からすぐ行くから、これ以上、勝手なことはさせるなよ!」

強く言い放ち、まるで投げつけるように、受話器をもとに戻す恵。

「クソ…！」

「どうか、したのか？」

「……っ」

電話を切った後、険しい表情で頭を抱えていた恵が、書庫から出てきたアヒルに声を掛けられ、すぐさま顔を上げる。

「い、いや。別に何でもない」

少し言葉を詰まらせながら、いかにも誤魔化していると言わんばかりに答える恵。そんな恵の様子を不審に思い、アヒルは少し首を傾げる。

「すぐに出る用が出来た。お前も今日はもういいから、適当に片して帰れ。いいな」

「あ、ちょ…！恵先生！？」

アヒルに発言させる時間すら与えず、一方的に言葉を放って、恵が資料室を飛び出していく。力強く閉まる戸に、アヒルは伸ばそうとした手を、伸ばしきらぬまま下ろした。

「ったく、勝手だなあ」

困ったように頭を掻きながら、アヒルが書庫へと戻っていく。

「適当に片せて、言われてもなあ…」

適当に片付けるだけでも、相当の時間を要しそうな書庫の荒れっぷりに、思わずがっくりと肩を落とすアヒル。このまま放置して帰ってもいいのだが、一度、手をつけた分、そういう気にはなれなかった。

「とりあえず、床に転がってる本だけでも全部、本棚に上げてくかあ」

決意した様子で両手を突き上げて、アヒルが再び、書庫へと足を踏み入れていく。

「ええ…っつと、んあ？」

床に散乱していた本を拾いあげていたアヒルが、その中の一冊に目を取られる。

「卒業アルバム」：？」

それは、アヒルの苦手な気難しい図書ではなく、そう書かれていた。表紙には、言ノ葉高等学校の文字もある。よく見ると、同じような表紙のアルバムが、いくつも床に落ちていた。よく見ていくと、表紙の色と、卒業の年度の数字が違っている。

「へえ、ここ何年かの卒アルかあ。こんなのあるんだ。まあ、学校の書庫なんだし、あっても当然か」

落ちているアルバムを、興味深く見回すアヒル。

「誰か、知ってる人のアルバムとかねえかなあ。あ、そういえば！」何かを思いついた様子で、アヒルがポンと手を叩く。

「カー兄、卒業は出来なかったけど、アルバムに顔写真は載せてもらってたって、親父が言ってたんだよなあ。家にあるらしいけど、見たことなかったし」

アヒルがたくさんあるアルバムの、一冊一冊の表紙を細かく見ていく。

「ええーと、五年前だから：あ、あったあった！」

目的の年度のアルバムを見つけ、笑みを零したアヒルが、すぐさま手に取る。

「確かカー兄は、F組…」

A組から順番にページをめくっていき、数秒も経たぬうちにF組へと辿り着く。出席番号順に並んだ個人写真の、一番前の方を指で辿り、探す。

「あ、居た居た！」

一番上の段に、よく見覚えのあるカモメの顔写真を発見し、アヒルが笑顔を見せる。卒業を前にこの世を去ったカモメは、皆の中で一人、アルバム用に撮った写真とは違うため、背景なども異なっていたが、写真の中で、アヒルのよく知る大きな笑顔を見せていた。

「これが、カー兄のクラスかあ」

並んだ個人写真を順に見ながら、アヒルが感心したような声を漏らす。同じ高校生となって、同じ制服を纏って見てみると、また違

う印象を持った。カモメも今のアヒルと同じように、この場所、この校舎で、この学校の友達と共に、毎日を過ごしていたのだろう。

「カー兄の他に、誰か知ってる人とかいねえかなあ」

どこか楽しげに、アヒルがアルバムを眺める。

「……！」

カモメ以外に知っている人間を探しているはずであったアヒルが、本当に知っている人間の姿をその中に見つけ、その瞳を大きく見開く。

「え……？」

思わず戸惑いの声を漏らす、アヒル。

「“クラス担任、目白恵”……？」

アヒルの見つめるその先に写っていたのは、今と何ら変わらぬ、恵の姿であった。

学校を飛び出した恵は、自身の言葉“巡れ”を使い、すぐさま『いどばた』までやって来た。

「為介！」

「あ、恵サアーン」

勢いよく店へと入った恵を、奥でゆったりと座り込んでいた為介が、暢気な口調で、扇子を振りながら迎える。店の中には、棚の間に置かれた椅子に座り、厳しい表情を見せしている籠也の姿もあった。「お前が居ながら、エリザベスを韻へ行かせたとは、どういうことだ！？」

恵が声を荒げながら、奥に居る為介のもとへと突き進んでいく。

「すみませえくん。でもボクってば、人を宥めるとか、そういう面倒なことって、すっごく苦手でえ」

「ああ、もう！」

軽い口調で答える為介に苛立ちを露にし、恵が頭を抱える。

「だって衣の神さん、すっごく怒ってたんですよ？自分の神附きさんの、記憶消されちゃってえ」

「何？」

為介の言葉に、恵が途端に表情を曇らせる。

「記憶が消されただと？まさか和音の奴、“忘れろ”を…？」

「……っ」

恵の口にしたその言葉に、箆也が強く唇を噛み締め、俯く。

「あの言葉まで使うってことは、いよいよ本格的に動き出してきたな。和音の奴…」

眉間に皺を寄せ、気難しい表情を見せる恵。

「とにかく、今すぐエリザベスを追っ…！」

『大変なんだよおっ！』

「ああ？」

恵の言葉を掻き消すように、少年と少女の合わさったような、大きな声が店の中へと飛び込んできて、恵や箆也たちが、一斉に振り返る。

「あなたたちは…」

『大変、大変なんだよおっ！』

慌てた様子で店の中へと入って来たのは、お揃いの洒落たスーツを着込んだ、よく雰囲気の良い少年と少女であった。まったく同じ動作で、流れてもない涙を吹く素振りをしている。

「確か、“知守”^{ちもり}と“仁守”^{にもり}の…」

「ボクの名前はチラシいっ！」

「私の名前はニギリいっ！」

涙を吹く動作をしたまま、名を名乗るチラシとニギリ。

『こんな二人は、ただの他人っ！』

「他人なのかよ！紛らわしいな！」

「神とまったく同じ、突っ込みだな…」

大変だと慌てているわりには、しっかりとポーズを決めるチラシたちに、恵が勢いよく怒鳴りあげる。繰り返される光景に、箆也が

思わず呟いた。

「一体、どうしたんだ？阿修羅との戦いが終わって、あなたたち、以団はこの町を出て行ったはずじゃ…」

「たいたい大変なのよぉ！加守ちゃん！」

「加守ちゃん…」

ニギリからの呼び名に、あからさまに嫌そうな顔を見せる簞也。

「ウチの神様が居なくなっちゃったんだよぉ！」

「え…？」

「何？」

チラシのその言葉に、簞也と恵が、同時に眉をひそめる。

「神様って、イクラくんがあ？」

「そうそうそうなのよぉ！」

確かめるように問いかける為介に、ニギリが大きく叫びながら頷く。

「そりゃ、今までも勝手に出掛けることはあったけど、無口で無愛想なりに、いきいき行き先くらいは言っていたのにいっ！」

「今、金八クンとシャコちゃんが必死に探してるんだけど、まだ見つからないみたいでえ」

不安げな表情で、言葉を続けるチラシとニギリ。二人の取り乱している様子を見ても、イクラが姿を消すということが、非常事態であることは明らかだ。

「以の神が、居なく…」

「え？以の神様も居なくなったの？」

新しく入って来るその声に、俯き、考えを巡らせていた簞也が、顔を上げる。

「小泉」

「あ、神月くん」

チラシとニギリの後ろから、店の中へと姿を見せたのは、紺平であった。簞也がここに居ると思っていなかったのか、紺平は少し驚いたように、簞也の方を見る。

「神月くんも来てたんだ。丁度、良かった…」

「“も”…?」

紺平の声が、恵の呟きにより、遮られる。

「今、以の神“も”と言ったか…? 小泉」

「……!」

恵のその問いかけを聞き、籠也が大きく目を見開いて、椅子が倒れそうなほどの勢いで立ち上がる。

「籠也が居ないのか…!?!」

「あ、う、うん。修行する約束してたから、於崎の屋敷に行ったんだけど、籠也くんも空音さんもどこにも居なくて…」

必死に問いかける籠也に少し圧倒されながら、紺平が答える。紺平の言葉を聞くと、籠也はさらに険しい表情となった。

「恵サン…」

「マズイな。思っていたより、動き出すのがずっと早い…」

為介が眉をひそめ、呼びかける中、恵が困ったように、頭を抱える。

「……っ」

恵と為介の会話を聞きながら、きつく唇を噛み締め、拳を握り締める籠也。

「神月。とにかくお前は、学校へ行って、トンビをここへ…」

「神を、頼む」

「何? あ、おい!」

恵の出そうとしていた指示を遮り、皆へと託すようにそう言うと、籠也が、恵が止めるのも聞かずに、全力で『いどばた』の店を飛び出していく。

「ま、待て、神月! 早まるんじゃ…!」

「“翔^かける”!」

「あ…!」

チラシやニギリを横へ押しわけ、店の外へと出て、籠也を引き止めようとした恵であったが、籠也は言葉を使い、空へと飛び去って

いってしまった。

「クソ：！」

あっという間に見えなくなる簞也の姿に、恵が悔しげに声を吐く。
「朝比奈のことがあるから、とりあえず私は、学校へ戻る！ 為介、お前はすぐに謡に連絡を！」

店の戸から顔だけを出し、奥に居る為介へと指示を出す恵。

「後っ：」

言葉を付け加え、恵が躊躇うように、少し間を置く。

“ 宇の神 ” にもだ

「……はい」

恵のその言葉に、為介は鋭い瞳を見せて、頷いた。

「和音っ：」

空をまっすぐに翔け抜けながら、簞也が困惑した表情で、和音の名を呟く。

「あなたは一体：一体、何をしようとしている…？」

今は届かぬ問いかけを、空へと響かせる簞也。

「和音：！」

もう一度、和音の名を呼びながら、簞也は先へと進むその速度を、さらに速めた。

Word. 64 動キダス永遠 (4)

言ノ葉高校、家庭科室。

「おかしい、絶対おかしいわ…」

「ええ、おかしい…」

制服の上にエプロンを纏った女子生徒たちが、眉間に皺を寄せ、顔を寄せあいながら、何やらひそひそと話をしている。

「私たちお料理クラブの、本日のメニューは、ビーフストロガノフだったはずなのに…」

「どうして、あの新入りの方のお鍋からだけ…」

女子生徒たちの視線が、一点に向けられる。

『紫色の湯気が…』

「んん…」

皆が見つめる視線のその先では、囁が少し首を傾げながら、紫色の湯気の立ち込める鍋を掻き回していた。囁は注がれる視線にも気付かずに、ひたすら鍋を見つめている。

「もう一味、加えた方がいいかしら…」

そう言って徐に、囁が手に取ったのは、山葵であった。チューブのフタを取り、囁が山葵を、鍋の中へと大量にブチ込む。

『ひい!』

その光景に寒気すら覚え、高い声を漏らすお料理クラブの皆々。

「これでよし、と…」

囁がテーブルの上に山葵を置き、再び鍋を掻き回し始める。

「アヒるん、喜んでくれるかしら…」

見守る皆とは対照的に、何やら楽しげな笑みを浮かべる囁であった。

言ノ葉高校、一年D組。

「ふっはあ」

放課後の教室に一人残り、大きな溜息を吐き出しているのは、保であった。

「二時間書いて、たったの三行」

保の机の上には、一枚の原稿用紙が置かれていた。原稿用紙は最初の数行が埋まっているだけで、半分以上、真っ白の状態である。そんな白い用紙を見つめ、困ったように肩を落とす保。

「結構難しいものですねえ。反省文って」

保が書いているのは、今日、遅刻した罰として恵に命じられた、反省文であった。

「反省文より、アヒルさんと一緒に居残り掃除の方が良かったかなあ……」

机の上へと頬を乗せ、こっそりと呟く保。

「ふわあ！こんな人生そのものが反省の俺が、一丁前に、反省文に文句付けちゃって、すみませえくん！」

勢いよく顔を上げ、保が大きな声で謝り散らす。誰も居ない教室に、保の大声が響き渡り、廊下にまでこだまする声が聞こえた。響きが良すぎて、逆に少し虚しくなる。

「はあ……書こ」

虚しさを胸に抱きながら、もう一度、ペンを手に取る保。

「ん……？」

その時、保が、ふと気付いたように、窓を振り向く。

「雨……？」

薄暗くなり始めた空から、細かい水の滴が、降り落ちて来ていた。

言ノ葉町、とあるコンビニ。

「ナナー！悪いけど、傘立て取ってきてくれる？」

「リンちゃん」

店の外の掃除をしていたリンが、中へと入って来て、レジに立つ

ていた七架へと声を掛ける。

「傘立ってって、雨？」

「うん。何か、急に降って来た」

店の奥から傘立てを運び出しながら、七架がリンへと問いかけると、リンが外を見ながら答える。

「ホントだ」

リンの手を借り、傘立てをレジ台の外へと出しながら、七架も外を見る。降り始めた雨は、一気に強くなり、いつの間にか、大粒の雨が押し寄せている。

「困ったなあ。私、今日、傘持って来てないんだよね」

「通り雨かもよ？すぐ止むんじゃない？」

「だと、いいけど…」

傘立てを店の入口横へと置いた七架が、ゆっくりと空を見上げる。

「……っ」

暗い空に、七架は少し不安げな表情を見せた。

「トンビ…！」

為介の屋敷へと行っていた恵は、またしても言葉を使い、国語資料室へと戻って来た。勢いよく扉を開け、恵が部屋の中へと駆け込む。

「トンビ！」

恵が、部屋の中を見回した後、開いている書庫の扉から、中に立っている人影を見つけ、少しホッとしたように肩を落とす。一転してゆっくりと歩を進め、恵が書庫の中へと足を踏み入れた。

「良かった。まだここに居たか」

立ち尽くしているアヒルへと、薄く笑みを浮かべ、声を掛ける恵。「トンビ。もう片付けはいいから、お前、今から為介のところにっ…」

「……………」

「トンビ？」

まるで反応のないアヒルに、恵が少し戸惑うように首を傾げる。不審に思った恵が、アヒルが右手に握り締めている一冊の本へと、視線を移した。

「……っ」

“卒業アルバム”と書かれているその表紙を見ると、恵が途端に眉をひそめる。

「掃除、してたら見つけて、さ。カー兄載ってるかなって思って、それで、見てたんだ……」

「そう、か……」

どこかぎこちない口調で説明するアヒルに、恵も少し詰まった返事をする。

「先生、カー兄の担任だったんだな。知らなかった」

アヒルの言葉に、今度は答えずに、恵がそっと俯く。

「最初はさ、まあ五年程度のことだし、恵先生、二十四とか言いつつ、実は三十くらいで、年、誤魔化したのかなあと思ってただけど……でも」

言葉を付け加えたアヒルが、その表情を曇らせる。

「恵先生、載ってた」

短く言葉を落とし、アヒルが俯く。

「二十年前のアルバムにも、載ってた」

顔を上げたアヒルが、ゆっくりと振り向き、恵の方を見る。

「今と同じ、その姿で……」

向けられるその視線と、目を合わすことが出来ずに、恵は俯いたまま、アヒルの言葉を聞き続けた。

「せ、先生って実は、俺の親父と同一年くらいとか！？だったらすっげえよなあ！見た目、超若いし、テレビとか出れんじゃねえ！？無理に明るい笑みを作り、不自然なほど弾んだ声で、アヒルが恵へと語りかける。

「……………」

「アハハ！ハハ、ハ…」

黙ったままの恵に、アヒルの笑い声が途切れ、笑顔が徐々に消えていく。

「先、生…」

完全に笑顔を消したアヒルが、恵を見つめるその瞳を、そつと細める。

「先生…あの、その…」

言葉を切り出そうとするが、なかなか口にすることが出来ず、アヒルが迷うように俯く。

「その…」

「お前の、考えている通りだ」

「え…？」

切り出す前に返って来る声に、アヒルが顔を上げる。

「二十数年前から、私は、今の姿のまま、一切、年を取ってはいない」

恵が言葉を発しながら、ゆっくりと俯けていた顔を上げていく。

「二十数年前、当時、“恵の神”であった私は…」

上がった視線が、やっと、アヒルの視線とぶつかる。

「自身の言葉“永遠”を使い、自分の若さと命を、永遠のものとした」

「……！」

告げられるその真実に、アヒルが大きく目を見開く。

「え、“永遠”…？」

恵のその言葉を繰り返したアヒルは、ひどく困惑した表情を見せていた。

「う…うあ…」

全身に激しく傷を負ったエリザが、声にならない声を漏らしなが

ら、力なく、床へと倒れ込んでいく。緑色に輝いていた右足は光を失い、そこから、吸収されていた言玉が、床へと零れ落ちた。

「やれやれ。他愛のない…」

どこかつまらなそうな表情で肩を落とした桃雪が、右手に握り締めていた白色の言玉を、服の胸ポケットへと戻す。

「終わりましたよ、言姫様」

「ご苦労さまです。毛守さん」

後方にいる和音の方を振り返り、桃雪が報告すると、和音は満足げに頷いた。短い歩幅で歩を進め、和音がうつ伏せに倒れたままのエリザのもとへと、歩み寄っていく。正確には、エリザのもとへとより、エリザのすぐ横に転がっている、エリザの言玉のもとへであった。

「これで、三つ目…」

その場にゆっくりとしゃがみ込み、転がっている言玉へと手を伸ばす和音。

「……っ」

だが、その和音の手は、もう後少しで言玉に届くという距離で、伸びてきた手により、強く掴み止められる。眉をひそめた和音が、伸びてきた手の方を振り向いた。

「何か…？」

「ハア…ハア…」

和音を止めたのは、エリザの傷だらけの手であった。倒れたまま、立ち上がることも出来ない状態のエリザが、必死に顔だけを上げ、問いかける和音を睨みつける。

「渡さ、ない…」

呼吸を乱したまま、必死に言葉を続けるエリザ。

「言葉で…人を傷つけるような、人間にっ…」

エリザが、もうほとんど残っていない力を振り絞り、和音の手首に痕がつきそうなほど強く、和音の手を握り締める。

「言葉で…人の記憶を消すような、非道な人間に、私の文字は、神

の力は渡さない…！」

「……っ」

強く放たれたエリザのその言葉に、和音が一瞬、整ったその表情を大きく崩すと、すぐさま、冷え切った表情を作る。

「くだらない、理由ですわね…」

「う…！」

低く響く声を落とし、エリザに掴まれているものとは逆の手を、エリザへと突き出す和音。向けられた和音の手には、赤い言玉が握り締められていた。光を増す言玉に、エリザが大きく目を見開く。

「“分^わかて”」

「う…！きゃああああ！」

輝いた言玉により、和音の手を掴んでいたエリザの手が、激しく斬り裂かれ、エリザが勢いよく後方へと吹き飛ばされる。

「うう…！」

後方にあった机を吹き飛ばし、さらにその後ろの壁へとエリザが背中を打ちつけると、一気に激しく走る痛みに、全身の力が抜け、エリザの意識が薄れていく。

「アヒ、ル…」

小さくアヒルの名を落とすと、エリザは瞳を閉じ、そのまま気を失った。

「ボクより容赦ないですねえ、あなたは」

言玉を手に取り、立ち上がった和音のもとへと、感心するような笑みを浮かべた桃雪が、歩み寄って来る。

「衣の神を、檻也たちと同じところへ、運んでおいて頂けますか？
毛守さん」

「了解いたしましたあ」

和音からの指示に軽い口調で頷くと、桃雪が気を失ったエリザを抱え上げ、そのまま和音の部屋を出て行く。

「……………」

部屋に一人きりとなると、和音が体の向きを変え、数歩、足を動

かす。部屋の隅にある棚の前へと立ち、棚の真ん中部分を見つめる和音。その棚には、青と白、二つの言玉が置かれていた。そのすぐ隣へ、今、エリザから回収した言玉を並べる。

「これで、三つ…」

置いた言玉から手を離し、和音が三つの言玉を見つめ、目を細める。

「後はそう、朝比奈アヒルの力さえ手にすれば…」

口元を緩め、和音が冷たい笑みを浮かべる。

「そうすれば、封印を解くことが出来る…目醒めさせることが出来る…」

顔を上げ、天井を見上げる和音。

「五十音、最後の神…“遠の神” 永遠とわを…」

静かなその部屋に、和音の高い声が響き渡った。

戻ったばかりの穏やかな日常が、終わりを告げるのに、そう、時間がかからなかった。

Word. 65 届か又言葉 (1)

——自身の言葉“永遠”^{えいえん}を使い、自分の若さと命を、永遠のものとした：——

「あ：」

アヒルの口から、言葉にならない声が零れ落ちる。すぐに否定してしまいたい気持ちと、どうしても否定することの出来ない事実が混ざり合い、動くことすら、出来なかった。

「え、“永遠”：？」

やっとのことで口を動かし、アヒルが掴みきれないその言葉を、聞き返すように呟く。

「“永遠”の言葉をかけた私と、お前たちとは、生きている時間軸そのものが異なる」

恵はひどく落ち着いた口調で、アヒルへと話し始めた。

「違う時間軸を生きていると、相手の時間の流れが違って、人は誰も、一切、違和感を持たない」

少し視線を落とした恵が、アヒルの見ていたらしい、数多くのアルバムを、ゆっくりと見回す。

「だから、私がずっと、この学校で、年も取らずに教師をしていたとしても、同僚も生徒も、誰も気付きはしないんだ」

恵の話に、アヒルがそつと眉をひそめる。恵の話し方は、誰にも気付かれないから問題ない、と言っているように聞こえた。だが、アヒルにはそれが、ひどく孤独なことのように思えた。

「お前やカモメのような、五十音士の者以外はな：」

どこか遠くを見つめるように、恵が目細める。

「なん、で：？」

アヒルが零した小さな声に、恵がアヒルの方を振り向く。

「なんで、そんな言葉：」

「……っ」

少し責めるようなアヒルの瞳に、恵が思わず視線を逸らす。

「それは…」

「目白先生！」

恵が答えを口にしようとしたその時、資料室の扉が勢いよく開き、若手の女性教師が入って来た。その教師は、アヒルも知っている数学の教師だ。

「何してるんです？職員会議、始まっちゃいますよ？」

「あ…」

その女性教師の言葉に、思い出したような表情となった恵が、資料室の掛け時計を見る。時計は四時半を差していた。

「早めにお願ひしますね。あ、後、あんまり居残りばかりやらせてると、保護者から苦情くるかもなんですから、気を付けて下さいよ？」

「あ、ああ」

恵に冗談めかして忠告すると、女性教師はすぐに資料室を出て行った。扉が閉まり、再び資料室がアヒルと恵だけの空間となる。

「職員会議か。仕方ないな」

恵が困ったように頭を掻き、机の上に乱雑に置かれている、ノートとペンを手に取る。

「お前は、真田か高市んとこにでも行ってる。まだ校内に居るはずだ。それで、会議が終わったら、私と一緒に為介のところへ行く」

荷物を脇に抱え、恵がまた、アヒルの方を振り返る。

「くれぐれも、一人で行動するなよ。いいな、朝比奈」

アヒルに強く指示を送ると、恵はそのまま足早に、資料室を後にした。叩きつけるように扉の閉まる音が、静かな資料室に響き渡る。

「……………」

一人立ち尽くしたアヒルは、ただもどかしい気持ちを抱え、険しい表情を見せていた。

「まったく、間の悪い会議だな！」

資料室を出て、急ぎ足で廊下を進む恵は、焦りからか、表情を歪めていた。和音が大きく動き出し、こちらも一刻も早く、動き出さねばならず、悠長に会議に出ている場合ではない。だが、それでも一教師である恵は、自分の仕事を疎かにし、他人に迷惑をかけることは出来なかった。

「とにかく、とっとと終わらせるよう、学年主任を睨みつけて…！」

——なんで、そんな言葉……

「……っ」

思い出される、つい先程のアヒルの言葉に、恵が思わず足を止める。責めるような、悲しむような瞳。睨みつけられるよりも、ずっと鋭く突き刺さった。

——俺、先生と同じ“時”を生きてみたいな……

「何を…」

同じように事実を告げた時、優しく微笑んだカモメの姿を思い出す。

「何を、期待してたんだかな…」

自嘲するような笑みを浮かべ、恵は再び、廊下を歩き出して行った。

韻本部地下、特別収容施設内部。

「ふう…」

目の前に広がる分厚い鉄格子を見つめ、深々と溜息を吐いているのは、“於^おの神” 於崎檻也であった。格子の一本を手で掴んでみると、それはとても固く、檻也の腕力だけでは、どうにもならないものであることを思い知らされる。

「こんなもの、言玉さえあれば一発なんだがな……」

「申し訳ありません、神」

後方から聞こえてくる声に、檻也が振り返る。

「私が附いていながら、神をこのような目に……」

険しい表情を見せ、力なく俯くのは、檻也の神付き“曾^{そもり}守”の空音。

「俺とて、言玉を奪われてしまったんだ。お前だけが悪いわけじゃない。そう、自分を責めるな」

「はい……」

檻也の言葉に頷く空音だが、その曇らせた表情を変えることはない。

「それで、お前も言玉を奪われてしまったのか？」

今度は体ごと後方を振り返った檻也が、空音のさらに後方を見る。

「“以^いの神”」

「……………」

檻也たちと同じ牢内で、後方の壁へともたれかかり、その場に座り込んで、固く腕組みをしているのは、“以^いの神” 伊賀栗イクラであった。

「ああ……？」

「う……」

勢いよく睨みつけるイクラに、檻也が思わず、表情を引きつる。

「な、何か……話しかけるなオーラ全開ですね……」

「ま、まあ、俺が神試験をやった頃から、あの男はあんな感じだ」
引きつった表情を見せながら、こそこそと会話する檻也と空音。

牢に閉じ込められているので当たり前だが、イクラはひどく不機嫌な様子で、檻也たちが立ち入れる隙はなかった。

「どうも。皆さん、ご機嫌よう」

『……っ』

牢の外から響く声に、檻也たちが一斉に振り向く。

「さあ、新入りさんですよ」

傷ついたエリザを抱え、その場へと現れたのは、何とも楽しげな笑みを浮かべた桃雪であった。素早く牢を開けた桃雪が、エリザを乱暴に牢の中へと投げ入れる。

「衣えの神……！」

投げられたエリザの体を、何とか受け止める檻也。檻也が腕で支えるようにして、エリザの体を起こすが、エリザは深く瞳を閉じたまま、まるで体を動かす気配はなかった。

「お前……！」

「そんな怖い顔しなくても、ちゃんと生きてますよお。でなきや、わざわざ牢になんて、運んで来ませんって」

睨みあげる檻也へと、軽い口調を向けながら、桃雪が再び、牢の入口を閉ざす。桃雪のその言葉に不快感を覚え、檻也はさらに表情をしかめた。

「お前は……和音とお前は一体、何を企んでいる……！？何をしようとしている……！」

「このメンバーを見ていただければ、何をしようとしているのか、だいたいわかると思うんですけどねえ」

呆れたように肩を落とす桃雪に、眉をひそめる檻也。

「神を、五神いつがみを集めて、どうするつもりだ……！」

「我々が必要なのは、貴方がた神ではなく、貴方がたの持っている言玉の方ですよお」

「何……？」

二人の会話を聞きながら、イクラも眉間に皺を寄せる。

「ああ、“持っていた”言玉ですかねえ」

「どういう……どういうことだ……！」

気を失っているエリザを空音へと任せ、檻也が立ち上がり、鉄格

子に体を押しつけるようにして、外に居る桃雪との距離を詰める。

「五神の言玉で、一体何を…！」

「お話はここまでです」

必死に問いかける檻也の前へと手のひらを突き出し、桃雪が檻也の言葉を遮る。

「ボクも忙しいんですよ。後一人を迎えに行かなきゃならないしねえ」

「後、一人…？」

桃雪の口から放たれたその言葉に、檻也が一層、険しい表情を見せる。

「ではあ、また来ますね」

「あ、待て…！おい…！」

檻也が必死に鉄格子を揺らし、大きな声を発するが、その声に桃雪が止まるはずもなく、牢の前を通り過ぎた桃雪は、重い扉を開き、その先にある階段を上がって、その場を去ってってしまった。

「クソ…！」

「神…」

鉄格子へと自分の拳を叩きつける檻也を、空音が心配そうに見上げる。

「後一人…“安の神”か」

桃雪の言っていた人物が誰であるのかを知り、檻也が叩きつけた拳を握り締め、天井を見る。

「籠也…」

檻也は不安げな表情で、兄の名を呼んだ。

「フッフ…これで今晚のアヒるんのご飯は、バッチリね…」

初参加のお料理クラブを終えた囁は、妙に笑顔の引きつった部活仲間たちと別れ、雨が降り、すっかり薄暗くなってしまった廊下を

進んでいた。大事そうに両手に抱えている鍋からは、ガスのような謎の煙が噴き上げている。

「あら？」

「あ、真田さあ〜ん！」

囁が一年D組の教室に入ると、自分の席に座っていた保が、嬉しそうな笑顔で顔を上げた。

「転校生くん…まだ、反省文書いてるの…？」

「そうなんですよお〜やと半分まで書けたんですけど」

歩み寄って来る囁に、保が、半分まで埋まった原稿用紙を見せる。

「はあ！理解の遅い俺が、筆まで遅くて、すみませえ〜ん！」

「まあ、私には関係のないことだけれど…」

謝り散らす保をあっさりとあしらって、囁が方向転換をし、教室の後方の自分の席へと歩いていく。その様子を見つめ、不思議そうな顔を見せる保。

「忘れ物ですかあ？」

「ううん…置き傘」

「ああ。さっきから、降って来てますもんねえ」

囁の言葉に頷いた保が、窓の方を振り返る。窓ガラスには、大粒の雨が流れ落ちており、外の景色がよく見えない状態となっていた。
「反省文、早く終わらせた方がいいんじゃない…？もっと雨、きつくなりそうよ…」

机の中から取り出した置き傘を持ち、囁が保へと笑みを向ける。

「アヒるんも帰ったみたいだし…」

「え？アヒルさん、居残り終わっちゃったんですかあ？」

「そうみたい…さっき国語資料室に寄ったんだけど、誰も居なかったから…」

「そうなんですかあ」

アヒルが帰ってしまったことを知ると、保は残念そうに肩を落とした。やはり居残り掃除を選んだ方が、早く帰れたようである。

「あ、じゃあ真田さん、一緒に帰…！」

「さようなら…」

「はあ！こうなるってわかってたけど、ショックな俺ですみませえん！」

あっさりと別れを告げる囁に、保はまた、勢いよく謝り散らした。

その頃、一人、学校を出たアヒルは、激しく打ちつける雨に体を濡らしながら、雨粒を避ける動作も見せずに、ゆっくりとした足取りで、特にあてもなく、道を歩いていた。アヒルが歩いていく間にも、雨は激しさを増し、濡れきったアヒルの髪から、水の滴が落ちていく。

「……………」

そつとその場に立ち止まり、水の溜まっていく地面を見下ろし、気難しい表情を見せるアヒル。

——“永遠”の言葉をかけた私と、お前たちとでは、生きている時間軸そのものが異なる——

——だから、同僚も生徒も、誰も気付きはしないんだ——

先程の資料室での恵の言葉が頭を巡ると、アヒルが苦しむように唇を噛み、頭を抱え込む。

「何、動揺してんだよ…」

自分自身を責めるように、言葉を呟くアヒル。

「俺が慌てたって、仕方ねえじゃねえか…」

必死に言い聞かせるように声を発するが、それでもアヒルの表情が落ち着くことはなかった。

「傘を、お持ちではないのですか？」

「え…？」

前方から不意に向けられた問いかけに、深く俯いていたアヒルが、

戸惑うように顔を上げる。

「風邪をひいて、しまいますよ？」

「あ…」

普段、あまり見ることもない真っ白な傘を差し、アヒルの行く道の前方に立っているのは、派手な桃色髪の、整った顔立ちの青年であった。どこか見覚えのある、その青年の姿に、アヒルが思い出そうと、眉をひそめる。

「どうも。初めまして、安の神」

「あんたは…」

笑みを向ける青年に対し、急にハツとした表情となるアヒル。

「始忌しきの…」

「んん？ ああ」

アヒルのその言葉に、一度は首を傾げた青年であったが、すぐにまた笑みを浮かべ、納得するように頷いた。

「覚えていらっしゃいましたか。では、改めまして。お久し振りですね、安の神」

言葉を変え、青年が再び、アヒルへと挨拶を向ける。

「ボクは五十音士“毛守ももり”、百井桃雪と申します。以後、お見知りおきを」

「毛、守…」

言い慣れていない様子で、アヒルが桃雪の言葉を繰り返す。

「つてことは、あんたは、始忌に取り憑かれてた五十音士の一人ってことか」

「ええ。まあ、取り憑かれたのは、わざとですけど」

「へ？」

満面の笑みで答える桃雪に、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「それって、どういう…」

「ボクと一緒に、来ていただけませんか？ 安の神」

言葉の意味を問おうとしたアヒルの声を、あっさりと遮り、桃雪がアヒルへと笑顔を向ける。

「言姫様が、あなたをお呼びです」

「言姫さんが？」

目を丸くしたアヒルが、不思議そうに首を傾げる。

「言姫さんが、なんで俺を…」

「それは、行けばわかりますよ」

戸惑うアヒルに、桃雪は、傘を持っていない左手と共に、含んだような、冷たい微笑みを向けた。

Word. 65 届かヌ言葉 (2)

「言姫様」

桃雪とエリザの戦った後、部屋の片付けを従者に行わせるため、使われていない別室へと移動した和音のもとへ、新たな従者がやって来る。天井が高く、何もないその広い部屋の、奥の段差になった場所に立ち、上を見上げていた和音が、ゆっくりと振り返る。

「何でしょう」

「加守の神月箆也殿が、言姫様に面会を求め、参られております」
従者の言葉に、和音がそっと、目を細める。

「通して下さい」

「かしこまりました」

和音へ向け、深々と頭を下げると、従者が素早く部屋を出て行く。それから一分と経たぬうちに、扉を叩く音が響いた。

「どうぞ」

「失礼いたします」

天井まで続く大きな扉が開かれると、そこから、鋭い瞳を見せた箆也が、部屋の中へと入って来た。突き刺すような箆也のその瞳を見て、和音が口元を緩める。

「怖い瞳…」

箆也の瞳を見て、和音が少し困ったように肩を落とす。

「また、誘拐犯か何かにでも、間違えられているのでしょうか…」

「色々と言いたいことはあるが…まず一つ、聞こう」

そんな和音を、箆也がまるで睨みつけるように見る。

「何故、“あの言葉”を使った？和音」

「……っ」

箆也のその問いかけに、和音の表情が曇る。

「あの言葉、とは？」

「僕の口から聞きたいか？」

平静を装い、聞き返した和音であったが、責めるように言う箴也に、その表情はまた曇る。

「確かに、聞きたくはありませんね…」

視線を落とした和音が、薄く笑みを浮かべる。

「わたくしがあの言葉を使ったのは、わたくしの願いを叶えるためですよ。箴也」

「では、あなたの願いとは何だ？」

和音の答えを聞くと、箴也はすぐさま、次の問いを向ける。

「あなたの、五神を揃えなければ叶わない、その願いとは何だ？」

箴也のその言葉に、和音がそっと目を細める。

「五神を、揃える？ 一体、何の話を…」

「誤魔化す必要はない。あなたのやろうとしていることは、おおよそ、見当がついている」

聞き返そうとした和音の声を、勢いよく遮る箴也。遮られる言葉に、和音がかすかに眉をひそめる。

「あなたが何故、我が神にこだわったのか。その理由もな…」

箴也の鋭い瞳が、まっすぐに和音を見つめる。

「五神を揃える必要のあったあなたにとって、最大の障壁となったのが“宇^うの神”の存在だ」

箴也が入口近くから、ゆっくりと和音の方へと歩み寄りながら、言葉を放つ。

「“宇の神”は旧世代以降、後任がなく、五十音界自体に、存在がなかった。“宇の神”が存在しない以上、五神を揃えることは不可能」

部屋で立ち止まり、箴也がさらに言葉を続ける。

「それでも、何としても神を揃えたかったあなたは、重要機密書庫の本を読み耽^{ふけ}り、“宇の神”に関しての情報を集めた」

「……………」

和音は特に反論する様子も見せず、ただ黙ったまま、箴也の話を聞く。

「そして、やっこのことで、あなたが見つけたのが、“宇の神”特有の黄金の不死鳥の力を持つ…」

箆也が一瞬、躊躇うように間を置き、そしてまたゆっくりと、その口を開く。

「朝比奈カモメの存在だ」

カモメの名を出すと、箆也の表情が少し険しく変わる。

「カモメさんが何故、“宇の神”の力を持ち得たのかは、わからないが、恐らくあなたはそれを知った上で、カモメさんを加守とし、自らの監視下に置いたんだろう」

箆也が再び、数歩、足を進め、和音との距離を詰める。

「だが、そこで事件は起こる」

少し低く落ちる、箆也の声。

「カモメさんの神、安積晶の暴走だ」

悲しげに、視線を落とす箆也。いくら阿修羅の件が片付き、気持ちの整理がついたとはいえ、カモメを失った悲しみが消えているわけではなかった。

「カモメさんが死ねば、またしても五神は揃わない。だからこそ、あの日、あなたはあんなにも必死になって、カモメさんを探していた」

——朝比奈カモメはどこです！？——

晶の異変を知った和音は、言姫という立場がありながらも、自ら率先して、事件の起こった栞総合病院に出向き、晶の拘束というよりも、カモメの救出に必死になっていた。

「だが、必死の救出も叶わず、カモメさんは安積晶に殺され、死んでしまった…」

箆也の視線が、床へと落ちる。

「また“宇の神”を失ってしまった。落胆したあなたの目に、飛び込んできたのが…」

――届けて…俺の、最期の言葉……

――“叶^{かな}え”……

――今のは……

「最期の言葉“叶え”を使い、自分に残ったすべての力を、誰かのもとへと送ったカモメさんの姿だった」

また視線を上げ、箆也が再び、和音を見つめる。

「僕は正直、カモメさんが死んだことで頭が真っ白になっていて、カモメさんが“叶え”の言葉を放ったことすら忘れていたが……」
箆也が目を細め、その視線を鋭くする。

「あなたには、鮮烈に記憶が残ったことだろう。そして、あなたは考えた。カモメさんが一体誰へ、その力を残したのか、な……」

鋭い視線を浴び、和音もそっと目を細める。

「それで、わたくしが朝比奈アヒルに目をつけたと……？」

「いや。カモメさんの弟は、他にスズメさんとツバメさんもいる。いきなり、神だけには絞れない」

久し振りに口を開き、問いかけた和音に、箆也がすぐさま、首を横に振る。

「だから、二人を試したのだろう……？ スズメさんとツバメさんに、“寸守^{すもり}”と“州守^{つもうり}”の称号を与えてまで」

箆也の言葉に、和音がかすかに表情を歪め、動揺の表情を見せる。
「宇団も、神すらも存在しない音士を承認出来るのは、あなたぐらいなものだ」

「……確かに、そうですね」

「だが二人の力は、“宇の神”のものとは異なっていた」

スズメとツバメの生み出していた、金色の鳥を思い出し、箆也がそっと目を細める。二人の力の形も確かに、鳥ではあるが、その姿は、カモメの持っていた不死鳥とは、多少違っていた。

「そしてあなたは、最後の望みに懸けるように、朝比奈アヒルへと

目を向けた：」

薄く瞳を細めた和音は、箆也の声を聞きながら、箆也と目を合わせようとはせずに、ただ高い天井を、じっと見上げている。

「だが、そこでまた、問題が生じる」

——“^あ当たれ” えええ：！！——

「朝比奈アヒルが“安の神”に目醒め、“あ”の力が前面に出てきてしまったため、“う”の力が内へと追いやられてしまったことだ」自身が目の前で目撃した、アヒルが言葉の力に目醒めた瞬間のことを思い出し、話を続ける箆也。

「あなたは、すぐに僕と囁を神のもとに送り、僕に細かな報告を命じて、神を監視した」

箆也がまた歩を進め、今度は和音のすぐ前まで歩いて行く。

「それから、自らも僕たちの前へと現れ、波城灰示退治、以の神との神試験を用意し、神の成長を促す」

どんどん近付いてくる声に、天井を見上げていた和音が、ゆっくりと顔を下ろしていく。

「七声との戦いを、始忌との戦いを安団に一任することで、神の内なる力を引き出す」

和音のすぐ前で足を止めた箆也と、顔を下ろした和音が、やっこのことで、その視線を交わらせる。

「そして：」

短く置かれる、一呼吸。

「カモメさんの仇である阿修羅と戦わせることで、神の“う”の力を完全なものとした：」

箆也の言葉すべてを聞き取り、和音が一瞬、そつとその瞳を閉じる。

「どこか、間違っていた点はあるか：？」

「いいえ」

確かめるように問う箆也に、和音がすぐに首を横に振る。

「ほぼ正解、と言っていいでしょうね…」

再び瞳を開いた和音が、口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべる。

「確かにわたくしは、ずっと前から、朝比奈カモメを、朝比奈アヒルを、見続けてきた…」

和音が微笑んだまま、また天井を見上げる。

「すべての神を、揃える為に…」

天井を見つめた和音が、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「そして、やっと、ここまで来た。わたくしの計画通りに、ここまでの…」

「ああ。だが」

鋭く言葉を付け加え、箆也が制服の胸ポケットから、赤色の言玉を取り出す。

「第六音“か”、解放…！」

箆也が言玉を解放すると、言玉はいきなり、変格した状態である真っ赤な鎌へと姿を変え、それを箆也が素早く構える。

「僕は神付き。神の害と成り得るものは、例え、あなたであろうと、容赦しない」

箆也が構えた鎌の刃が、和音へと向けられる。

「僕がすべてを知った以上、あなたの計画もここまでだ！和音！」

「……………」

突き付けられたその刃を、特に焦った様子もなく、落ち着き払った様子で見つめる和音。

「いいえ、箆也」

冷静な声が、箆也へと向けられる。

「“ここまで”が、わたくしの計画です」

「何…？」

和音のその言葉に、箆也が戸惑うように眉をひそめる。

「わたくしは、わかっていました。あなたが、誰よりも一番に、この真実に気付き…」

大きな和音の瞳が、射るように箆也を捉える。

「あなたが、誰よりも先に、わたくしのもとへ来ることを…」

「和音…？」

「五十音、第四十六音…」

箆也が戸惑いの声で名を呼ぶ中、和音が凜とした声を響かせる。

「わ”、解放」

「なっ…！」

袖口から取り出した、箆也と同じ赤い言玉を、解放していく和音の姿に、箆也が思わず目を見張る。

「和音が、言玉の解放を…？」

箆也は和音とは長い付き合いであったが、和音が言玉で言葉を使っているところは見ても、言玉自体を解放するところは、見たことがなかった。

「あっ…」

姿を変えていく和音の言玉を、箆也がまっすぐに見つめる。

「か、がみ…？」

和音が言玉の代わりに、右手に握り締めていたのは、丁度、顔を映し出せるくらいの、真っ赤な手鏡であった。武器には見えぬその姿に、箆也が益々、戸惑った表情となる。

「わ…」

鏡面を箆也の方へと向けながら、和音がそっと口を開く。

「“渡^{わた}せ”」

「え…？」

箆也の姿が、和音の向けた鏡の中に映し出されたその瞬間、箆也の手の中にあったはずの鎌が消え去る。鏡の中から消えた鎌に先に気付き、それから空になった自分の手へと視線を移す箆也。

「ど、どこへ…」

「探し物は、これですか…？」

「……っ」

すぐ傍へとやって来る刃に、戸惑っていた箆也が、表情を陰しく

する。箆也が顔を上げると、そこには、先程まで箆也が持っていたはずの鎌を持ち、その刃を箆也の方へと向けた、和音が立っていた。「和音：一体、どういうつも…」

「あなたの言葉、確かにほぼ正解でしたが、違っている点が幾つかあります」

「何…？」

鎌を奪われてしまった箆也が、和音の言葉に、戸惑うように眉をひそめる。

「まず一点目、わたくしは、朝比奈カモメが“う”の力を持っていることを、彼を見つける、ずっと前から知っていた」

「え…？」

その言葉に、箆也が益々、戸惑いの表情となる。

「知っていただと…？」

「二点目、わたくしが必要としているのは、五神ではなく、五神が持つ五つの言玉」

聞き返す箆也を無視し、和音が自分の言葉を続ける。

「そして、三点目」

和音が、これが最後であることを告げるように、さらにはつきりと言葉を放つ。

「朝比奈アヒルが“あ”の力に目醒めるであろうことも、わたくしには、初めからわかっていた…」

「何、だと…？」

告げられる言葉に、箆也がさらに衝撃を走らせ、大きく目を見開く。

「どういうことだ！？それは、一体…！」

「この部屋かあ？」

「……！」

問い詰めるように、和音へと言葉を向けようとした箆也が、背後から聞こえてくる扉の開く音と、よく聞き覚えのあるその声に、大きく目を見開く。

「神…？」

「へ？」

箆也が振り返ると、開かれた扉の向こうから、桃雪と共に部屋へと入って来るアヒルと目が合った。

「あれ？箆也、何でお前、ここに…」

「ク…！」

戸惑うアヒルを余所に、箆也が、すべてを悟った様子で、険しい表情を作る。

「今すぐ、ここから逃げろ、神！」

「へ？」

瞬時に判断した箆也が、アヒルへと叫びあげながら、その場を離れようと、足を踏み出す。

「うう…！」

「な…！？」

だが、箆也の動きは、首元に突き付けられた刃により、止められてしまった。その光景に、先程まで暢気な様子を見せていたアヒルも、一気に表情を強張らせる。

「和音…！」

「……………」

アヒルの方を振り向いた箆也の、すぐ後ろへと回った和音が、先程、箆也から奪った鎌の刃を、箆也の首元へと突き付けていた。箆也が少しだけ首を動かし、何とか和音の方を振り向くが、和音の表情は凍りついたように冷たく、箆也の呼びかけにも、眉一つ動かさない。

「言姫さん！な、何を…！」

「安の神」

問おうとしたアヒルの声を、和音があっさりと遮る。

「あなたの持っている二つの言玉と、あなたの神附きの命、交換していただけませんか…？」

「……………」

和音から向けられたその言葉に、アヒルは驚きの表情を見せた。

「朝比奈！」

『え？』

一年D組の教室で、囁と保があれこれと話をしていたその時、職員会議を終えた恵が、壊すのではないかというほどの勢いで扉を開き、教室の中へと突入してきた。

「恵先生…？」

「はぁ！まだ反省文できてないんです！すみませえくん！」

「お前の反省文なんか、今はどうでもいい！それより、朝比奈は！？」

「凄く時間かけて書いたのに、どうでもいい存在な俺で、すみませえくん！」

保に強く突き放すように言って、恵が必死に教室を見回す。恵のあまりの冷たさにショックを受けながらも、それでも謝ることはやめずに、保が叫ぶ。

「アヒるんは、ここには居ないけれど…もう、居残りは終わったんじゃないかったの…？」

「あいつ…！人の言いつけ、無視しやがって…！」

頭を抱え、追い詰められたような、険しい表情を見せる恵を見て、囁が眉をひそめる。ただ、居残りを逃げられただけにしては、恵の様子がおかしい。

「ああ、クソ…！とりあえずお前たちも、私と一緒に…！」

「アヒるんに…アヒるんに何かあったの…？」

「アヒルさん…？」

すぐに教室を出て行こうとした恵に、真剣な表情を見せ、囁が恵へと問いかけると、恵が眉間に皺を寄せた。二人の緊迫した空気を、さすがに感じ取ったのか、謝り騒いでいた保も、その声を止める。

「何かが“起こった”かはわからない。今まさに、“起ころうとしている”くらいかも知れない。それに…」

目を細め、厳しい表情を見せる恵。

「何かが起こるのは、“朝比奈に”じゃない」
恵が強く、拳を握り締める。

「“世界に”だ」

Word. 65 届かヌ言葉 (3)

和音に武器を奪われ、首元へと刃を突き付けられ、驚きの表情を見せていた箆也であったが、すぐさまその表情を鋭くし、責めるような視線を、和音へと向ける。

「何を：何を考えている！？和音！こんなくだらないことは、やめ…！」

「わたくしは本気ですよ。箆也」

宥めようとする箆也の声を、冷たく一蹴する和音。

「願いを叶えるためならば、あなたの命を奪うことなど、わたくしは簡単に行える…」

「和音…」

箆也の方は見ずに、ただまっすぐにアヒルを見据え、強い口調で言葉を発する和音。そんな和音の姿を目の当たりにし、箆也は悲しげに目を細める。

「わたくしは本気です、安の神」

箆也へ向けたものと同じ言葉を、和音が今度は、アヒルへと向ける。

「さあ、神附きを殺されたくなければ、あなたの持っている二つの言玉を出して下さい」

「……………」

脅しのような言葉を向けられ、厳しい表情を見せたアヒルが、ゆっくりと両手を動かし、ズボンの左右のポケットへと、それぞれの手を入れる。

「少しでも言玉を解放しようとする動きを見せたら、その瞬間、ボクの言葉で真っ黒焦げにしちゃいますからねえ？」

「……………」

アヒルのすぐ後方で、アヒルの後頭部へと自身の言玉を向け、楽しげな笑みを浮かべている桃雪。そんな桃雪の方を少し振り返り、

多少顔をしかめた後、アヒルが再び前を向く。ポケットから出てきたアヒルの右手には赤い言玉が、左手には金色の言玉が、それぞれ握り締められていた。

「“あ”と“う”の言玉……」

アヒルの取り出した言玉を見つめ、和音が満足げな笑みを浮かべる。

「さあ、それを桃雪に渡して下さい。安の神」

「ダメだ！渡すな、神！」

次の指示を送った和音の、その言葉をすぐさま止めるように、籠也が必死に身を乗り出し、声を張り上げる。

「今すぐ言玉を持って逃げろ、神！僕のことなど、僕の命など、どうでもいい！」

自分の命など気にも留めず、ただ必死に叫ぶ籠也を見つめ、アヒルが少し目を細める。

「神！早く……！」

「無駄ですよ、籠也」

その籠也の必死の叫びを遮ったのは、アヒルではなく、和音であった。

「言ったでしょう……？ “ここまで” がすべて、計画の通りだと」

「何だと……？」

「すべて、わたくしの思い描いていた通りです。あなたがそう、叫ぶことも……」

和音の冷たい瞳が、アヒルへと突き刺さる。

「この後、彼が、何と言うのかも……」

「……っ」

見透かすように言う和音に、アヒルが眉をひそめる。だが曇った表情はすぐになくなり、少し肩を落とすと、アヒルはそっと笑みを浮かべた。

「確かに、俺は単純だからな。あんたじゃなくても、俺を知ってる大抵の人間には、俺がこれから言うことくらい、わかるだろうぜ」

挑戦的に微笑んで、アヒルがまっすぐに和音を見つめる。

「例え、この言玉をあんたに渡して、この先、何か、とてつもないことが起こってしまうとしても…」

堂々と胸を張り、迷うことなく、アヒルがはっきりと言
い放つ。

「俺は、俺の仲間を見捨てるようなマネは、絶対にしない！」

アヒルの強い言葉が、広い部屋中に響き渡る。

「神…」

これ以上、止める言葉も叫べず、目を細める籠也の横で、和音が満足げに笑う。

「では、毛守さん」

「はいはい」

桃雪が自身の言玉はアヒルへ向けたまま、歩を動かし、アヒルの後方から前方へと回って、空いている左手を、アヒルへと差し出す。差し出されたその手へ、アヒルは左右の手の二つの言玉を、一つずつ、丁寧に置いた。

「どう、も！」

「ううう！」

「神…！」

言玉を受け取った瞬間、桃雪が右足を振り切り、足を引っ掛けるようにして、アヒルを床へと倒し、背中を踏みつけて、その場を動けないようにする。苦しげに声を漏らすアヒルに、籠也が目を見開き、さらに身を乗り出した。だが、鋭く刃が向けられ、籠也もまた、動きを封じられる。

「和音…！」

刃に少し首を擦り、切れた皮膚から血を滲ませながら、それでも必死に身を乗り出し、籠也が、和音へと声を張り上げる。

「これが…これが、あなたの答えだというのか…!？」

まだ信じきれないといった様子で、和音へと問いかけを向ける籠也。

「僕も檻もつゝあなたにとっては、ただの駒の一つだったと、そう言うのか！？和音…！」

「毛守さん、彼等も他の方々と同じ場所へ」

「はぁーい」

必死に言葉をかける籠也を、まったく気にしない様子で、和音が桃雪へと、冷静に指示を送る。

「あなた方、兄弟のお陰で、わたくしはわたくしの願いを叶えることが出来そうです」

桃雪に踏みつけられているアヒルへと、視線を向ける和音。和音の声に、床へと倒されたアヒルが、顔だけを上げ、和音を見る。

「あなたには、本当に感謝しています。ありがとうございました、安の神」

「……っ」

向けられる言葉に、アヒルは大きく、表情をしかめた。

—————

「ねえ、お母さん」

まだ幼い、長い黒髪の愛らしい少女が、自身の母親であろう、同じく長い黒髪の、美しい女性を呼ぶ。

「私たち人はどうして、こんなに“言葉”を大切にしているの？」

「それはね…」

問いかける少女の頭を、女性が優しく撫でる。

「“言葉”が私たちを、幸せにしてくれるからよ」

「しあ、わせ…？」

幼い少女は、女性の言葉の意味を理解出来ず、ただ戸惑うように首を傾げた。

机の上に、左から順番に赤、青、金、緑、白と置かれた、五つの言玉。椅子に腰掛け、その並んだ言玉をじっと見つめながら、和音はどこか、感慨深げな表情を見せていた。

「もう、すぐです…」

和音が白い手を伸ばし、指で、赤い、アヒルの“あ”の言玉へと触れる。

「もう後、ほんの少しで…」

「失礼します」

何かを弦こうとしたその時、扉が開く音と共に桃雪の声が入って来て、和音はすぐさま言葉を止め、言玉に触れていた手も引っ込めて、顔を上げた。

「安の神と加守さん、確かに運んで来ましたよお」

「ご苦労さまです、毛守さん」

「いいえ」

ろう和音に、桃雪はどこか含んだような笑みを向ける。

「すべては、あなたと、そして、ボク自身の願いを叶えるため。これくらい、お易い御用ですよお」

「では、その願いを叶えるため、行くとしましょうか」

椅子から立ち上がった和音が、机に並んでいた五つの言玉をすべて、抱え上げる。

「“言ノ葉町”へ…」

そう言うとき和音は、鋭く瞳を細めた。

韻本部地下、特別収容施設内、奥。

「誰か居ませんかあゝ!？」

鉄格子の間から、必死に首から先を出し、外へと向けて、何とか大声を張り上げているアヒル。アヒルの声が地下の空間中に響き渡り、その反響が、アヒルの耳へと戻って来る。だが戻って来るのは反響ばかりで、アヒルの呼びかけに対しての答えは、戻っては来なかった。

「近くには、誰も居なそうだなあ」

「無駄だ。韻本部はすでに、和音の掌中。誰かが居たとしても、僕たちをここから出してはくれない」

「けどさあ、他の神連中も、ここに捕まってるんだろ？その辺に居るかも知れねえじゃねえか」

牢の中に座ったまま、力なく言葉を落とす箆也に、アヒルがささず反論の言葉を発する。

「おーい！ザベス、檻也、イクラあー！おおーい！」

「はあ…」

箆也の言うこともきかず、大きな声で叫び続けるアヒルの様子に、箆也が少し呆れたように肩を落とす。言玉を奪われ、牢に閉じ込められてしまったというのに、アヒルには落ち込みも、緊迫感も焦りも、まるでないようであった。

「……っ」

視線を落とした箆也が、そっと眉をひそめる。

「……済まない」

「へ？」

背中から受けたその言葉に、アヒルが戸惑うように振り返る。

「恵先生に、“早まるな”と言われた。衣の神にも、あなたの傍に居るよう頼まれていたのに、それを無視して僕は…」

視線を落としたままの箆也が、深く、表情を曇らせる。

「勝手な行動をして、あなたの足を引っ張り、最悪の結果を招いてしまった…」

「箆也…」

自身を責めるように言葉を落とす箆也を見つめ、アヒルが目を細

める。

「考えのない行動をした。神付き失格だ」

「……確かめたかったんだろ？」

「え……？」

戻って来る言葉に、箆也がゆっくりと顔を上げる。

「言姫さんのこと、自分の目で」

「……っ」

責める様子など一切見せず、ただ穏やかな笑みを向けるアヒルを見つめ、箆也が険しく作っていたその表情を、少し崩す。一瞬、瞳を閉じた箆也は、再び深く俯いた。

「言姫さんに初めて会った時から思ってたけど、お前にとっての言姫さんて、何かちょっと、他の人とは違うっつか……」

アヒルが牢の外へと視線を流し、過去を思い出すように言う。

「“特別” って感じ、してたし」

「……………」

アヒルから向けられる言葉を耳に入れながら、箆也がじっと地面を見つめ、何やら考え込むように眉をひそめる。

「和音とは、幼い頃から、まるで兄弟のように、共に育った」

顔を上げた箆也が、今度は天井を見つめながら、懐かしそうに目を細める。

「僕が神に成れず、於崎の屋敷を出た後も、よく僕のところへ遊びに来てくれて、屋敷に居た頃と、何ら変わらない態度で接してくれて……」

少し間を置き、箆也が悲しげに笑う。

「そんな人間、和音だけだった……」

寂しげに響く声に、アヒルが流していた視線を、そっと落とす。

——箆也！——

思い出されるのは、愛らしい笑顔で名を呼んでくれた、あどけない姿の少女。

「……確かに、特別な存在だったのかもしれない」

過去の和音の姿を思い出し、箆也がアヒルの言葉を認めるようにそう言う。

「和音が何かを企んでいることは、前から薄々、気付いてはいた」
箆也が眉間へと皺を寄せ、険しい表情を作る。

「だから、阿修羅の件で檻也が行方不明になった時、韻まで来て、和音を問い詰めた」

天井を見つめたまま、箆也が少し目を細める。

「自信があっただと思う。僕になら、和音はすべてを話してくれる。僕なら、和音がやろうとしていることを止められる。そう、思っていた」

過去形となり、言葉がそつと曇る。

「思っ、いたけれど……」

——僕の日を見て言え！——

——何も、存じておりません——

「それは、ただの僕の思い上がりだった。和音は僕に、心を開いてなどいなかったんだ」

和音に強く壁を張られたあの時、箆也に小さな衝撃が走った。近頃と思っていた距離が、実は大きく開いていたような、そんな感覚に陥ったのだ。

「僕に、和音を止めることは出来なかった……」

天井を見ていた箆也が、ゆっくりと、力なく俯いていく。

「んな、諦め切ったような言葉、言うなよ」

「え……？」

掛けられる言葉に、箆也が戸惑うように顔を上げる。箆也が振り向くと、まっすぐに箆也の方を見据えたアヒルが、大きな笑みを浮かべていた。

「まだ、“止められない”って決まったわけじゃない。まだ、終わったわけじゃないんだからさ」

「神…」

「とりあえず、やれること全部、やってみようぜ？ “諦める”のは、一番、最後でいい」

明るく微笑みかけるアヒルを見つめ、目を細めた箆也が、またゆっくりと俯く。俯いた箆也は口元を緩め、小さな笑みを零した。

「まったく…やはり、厄介だな。あなたの言葉は」

穏やかに言葉を発しながら、箆也が困ったように笑う。

「僕から、“諦め”を奪う」

箆也のその言葉を聞き、アヒルはどこか嬉しそうに微笑んだ。

「さあ！そうと決まれば、とっとどこから出るためにも、叫ぶかあ！」

気合いの入った様子で振り向き、アヒルが再び、鉄格子の外側へと、必死に身を乗り出す。

「おおーい、誰か居っ…！」

「こんにちは」

「どわあ！」

目の前からいきなり返って来た声に、アヒルが驚き、バランスを崩して、その場に倒れ込む。

「神？」

「痛ててて…」

箆也に呆れたように見られながらも、打ちつけた頭を押さえ、何とか起き上がるアヒル。

「あらあら、驚かせてしまいましたね」

「へ…？」

上方から降って来る穏やかな声に、アヒルが戸惑うように、ゆっくりと顔を上げる。

「あっ…」

鉄格子のその向こうに立つ人物に、目を見張るアヒル。

「こんにちは、アヒル」

アヒルへと笑顔を向けたのは、茶色いショートカットの、愛らしい雰囲気を感じた、美しい女性であった。

「ど、どうして、急に韻の本部へ行くことになったの…!?!」

雨の降る道を必死に駆けながら、七架が前方を走る囁へと問いかける。コンビニでバイトをしていた七架は、突然やって来た囁と保に韻本部へ行くことを知らされ、頼み込んでバイトを早抜けしたのである。

「わからないわ…」

「恵先生が、とにかく早く行けって、そう言ってたんです!」

「恵先生が?」

必死に足を動かしながら、七架が二人の言葉に眉をひそめる。

「もしかしたら…アヒるんに何かあったのかも…」

「え!?! 朝比奈くんに!?!」

不安げに表情を曇らせる囁。アヒルの名が出ると、七架も一気に、険しい表情となる。

「箆也とも連絡が取れないし…あの先生が慌てるくらいだから、余程のことがあるのかも…」

「じゃあ、早く行こう! 朝比奈くんのところに!」

「ええ…ビーフストロガノフが冷めないうちに…」

強く頷き合って、囁と七架が、さらに足を速める。

「あ、待って下さいよ! 真田さん、奈々瀬さあ〜ん!」

前に行く二人の後を、保が叫びながら、必死に追いかけた。

言ノ葉山。言ノ葉町で一番、言葉の力の集まりやすい場所であるという、そこは、かつて、アヒルが守の力を借り、砕けた自身の言玉を、再生させた場所である。四人の神から奪った、五つの言玉を持って韻を出た和音は、桃雪と共に、この山を訪れていた。

「今日の言ノ葉の天気は、大雨のはずですがあ…」

まったく雨の降っていない、真っ青な空を見上げ、桃雪が首を傾げる。

「“分て”^{わか}の言葉を使い、この辺りの雲だけを取り払いました」

「成程」

前方を歩く和音の言葉を聞き、視線を上空から周囲へと向ける桃雪。確かに、言ノ葉山の外側に見える町並みの上空は、厚い雲に覆われて薄暗く、強い雨が打ちつけていた。この山の上の空だけが晴れており、雨の降っていない状態である。

「便利なものですねえ、あなたの言葉は」

感心するように言って、桃雪が笑う。

「それでえ？こんな山の中に、本当にいらっしゃるんですかあ？」

笑みを止めた桃雪が、和音の背中へと、どこか疑うように問いかける。

「我が神”は」

わざとらしく言葉を強調し、桃雪が再び、鋭く笑う。

「ええ、間違いありません」

桃雪の方を振り返ろうとはせず、まっすぐに前を見据え、進む歩を止めぬまま、和音が確信を持って答える。

「二十数年前の文献によれば、彼の神^かは確かに、この言ノ葉山に封印されたと、そう記録されています」

今、まさに向かっていいる山の頂上を見据え、和音が目を細める。

「彼の神、“遠^をの神”永遠^{とわ}は…」

「……っ」

和音の口から出るその名に、桃雪が嬉しそうに、口角を吊り上げる。

「我が神が封印されて二十数年…思えば、長く苦しい時間でしたよ」
桃雪が青い空を見上げながら、どこか懐かしむように目を細める。
「でも、その長く苦しかった時間も、やっと終わる…」

噛み締めるようにそう言って、桃雪がまた顔を下ろしていく。

「あなたには、本当に感謝していますよ。言姫様」

「いえ…」

背中に向けられる言葉に、短く声を落とす和音。

「復活に尽力して下さったあなたの願い、我が神が、必ず叶えてくれることでしょう」

「……………」

桃雪の言葉に、今度は答えようとはせずに、和音が何やら神妙な表情で、そっと俯く。自身の願いが叶えられるというのに、和音のその表情は、あまり嬉しそうには見えず、どこか思い詰めているようにすら見える。

——和音……！——

思い出されるのは、強く和音を責め立てるような、鋭い箆也の瞳。

「わたくし、は…」

「おやあ」

「え……？」

何かを見つけたような桃雪の声に、和音が俯けていた顔を上げる。

「あ…」

顔を上げた途端、その表情を曇らせる和音。頂上へと続く山道の中央に、まるで和音たちが来ることがわかっていたかのように、堂々と待ち構える人影があった。

「目白、恵…」

「待っていたよ、和音」

固く腕組みをした恵が、突き刺すような鋭い瞳で、まっすぐに和音を見つめる。

「おやおや、待ち伏せされてしまいましたかあ」

「お前はっ…」

和音の背後に立つ桃雪の姿に気付き、恵が眉をひそめる。恵の視線が向けられたことを知ると、桃雪はそれに応えるように、和音の

すぐ横まで出てきた。

「どうもお、お久し振りです。恵えの神」

「桃雪…」

深々と頭を下げる桃雪に、顔をしかめる恵。互いの名を知っているところを見ると、知り合いであったようである。

「和音が一人でやってるにしては、動きが早いと思っていたが…成程な。お前が附いていたというわけか」

「お変わらないようでえ」

険しい表情を見せる恵に対し、桃雪は楽しげに笑みを向ける。

「ああ。“永遠”を生きてるんですから、お変わりしたくても、出来ないんですったけえ？」

「……っ」

挑発するような桃雪の言葉に、さらに表情をしかめる恵。

「お前こそ、私を知る二十数年前から、少しも姿が変わっていないように見えるが…？」

「その辺はまあ、色々とありまして」

鋭く問いかける恵に、桃雪は誤魔化すように笑う。

「お前のことは、まあいい。和音」

恵が再びその視線を、桃雪から和音へと移す。

「ここへ、何をしに来た？」

「ここへ来られた時点で、そんなことはもう、とっくにおわかりになっっているのでは…？」

問いかける恵に対し、和音もまた、問いかけを返す。

「“恵の神” 目白恵」

和音がまっすぐに恵を見つめ、改めて、恵の名を呼ぶ。

「わたくしがここへ来たのは…」

真剣な表情を見せた和音が、ゆっくりと口を開く。

「二十数年前、あなた方、旧世代の神々がこの地に封印した、五十音最後の神、“遠の神”を復活させるためです」

「……っ」

はつきりと言い放つ和音に、恵は一際、厳しい表情を見せた。

「“遠^をの神”の復活？」

厚い鉄格子で遮られた牢から、外へと出ながら、箆也が確かめるように、聞き返す。

「それが、和音の目的である？」

「ええ」

箆也の問いかけに頷くのは、先程、アヒルたちの前へと現れた、美しい女性。柔らかな雰囲気を持っており、傍に居ると、誰もが安心してしまうような、そんな空気を纏っている。三十そこそこにか見えませんが、何か、その小柄な体の奥に、まっすぐに一本通った、強い芯のようなものを感じた。この女性の持ってきた鍵により、牢が開き、アヒルたちは外へと出ることが出来たのである。

「……………」

箆也に続くようにして牢を出たアヒルが、その女性を、じっと見つめる。まったく見覚えのない女性なのだが、どこか懐かしいような、変な感覚に囚われていた。

「言姫が、韻上層部の人間までも利用し、何か良からぬことを企てていることを察知した我々は、韻の中でひそかに同志を集め、内部組織を形成し、言姫の動きを監視していました」

「組織？」

「“謡^{よう}”という名の組織です」

「謡…」

女性の口にしたその名を繰り返し、箆也が少し俯く。

「そういえばそんな組織があると、昔、於崎に仕えていた音士から聞いたことがあるような…」

「恐らくは、あなたと同じように聞き及んでいたのでしょう。あなたの弟君である於の神が、言姫の動きを知らせに、私のところへや

って来ました」

「檻也が？」

「ええ。ですから我々も、こうして、表立って行動することを決めたのです」

「そうか…」

女性の言葉に、納得したように頷く籠也。籠也と同じように、檻也も和音の不穏な動きに気付き、一早く、行動を起こしていたのである。

「ちゃんと、理解出来ているか？神」

「へ！？」

急に籠也に話しかけられ、じっと女性を見つめていたアヒルが、慌てた様子で、間の抜けた声を漏らす。女性へと関心が向くあまり、二人の話はあまり、耳に入って来ていなかった。

「ええーっと、その…」

「まったく、仕方のない神だな。あなたにも関係のある話なんだ。しっかりと聞いておけ」

「わ、悪い…」

子供のように注意され、アヒルが申し訳なさそうに肩を落とす。

「それで、和音は何故、五つの言玉を？」

「二十数年前、今は旧世代の神とされる、かつての五神は、自分たちの言玉を使い、その力のすべてを懸けて、“遠の神”を封印しました」

改めて問いかける籠也に、女性がすらすらと答える。

「神々の言玉を用いて施された封印を解くには、同じように、神々の言玉が必要です」

「成程な…だが神を封印するとは、一体何故、そのようなことをする必要が…」

あかね
「茜様」

籠也の言葉を遮るようにして、入って来る声に、女性が素早く振り向く。茜と呼ばれたその女性のもとへと、韻の従者たちと同じ黒

い着物を纏った、一人の男が歩み寄って来た。

「アカネ…？」

聞き覚えのあるその名に、眉をひそめるアヒル。

「見張りの交替時間が迫っております。騒ぎを大きくせぬためにも、今のうちに彼等を外へ…」

「そうですね」

従者の言葉に大きく頷き、茜が再び箆也を見る。

「それを話せば、長くなります。ですが、今は一刻を争う時。その時間はありません」

「ああ、そうみたいだな」

茜の言葉に反論することもなく、すぐさま納得する箆也。今、長々と話をしてしまえば、和音に従う韻の者たちに見つかり、茜たちも含めて、再び捕まってしまう可能性もある。それだけは、避けねばならなかった。

「あなた方はすぐにここを出て、言姫を追って下さい。これは、あなたの言玉です」

「え？ 僕の？」

「五神の言玉以外は、置いていったのでしょう。言姫の部屋にありました」

「済まない」

和音に奪われていたはずの言玉を、箆也が茜から受け取る。

「だが、追うとしても、和音の場所が…」

「言ノ葉山です」

「言ノ葉山？」

言ったこともある場所の名をあげられ、アヒルが意外そうに、目を丸くする。

「ええ。そこに“遠の神”が封印されています」

「……わかった」

受け取ったばかりの言玉を強く握り締め、真剣な表情を見せて、箆也がしっかりと頷く。

「行こう、神」

「ああ。けど、まだザベスや檻也が捕まったままで…」

「残りの神々の解放は、私たちが行います」

他の神たちの心配をするアヒルに、茜が安心させるように、優しく微笑みかける。

「必ず全員、助け出しますので、ここは我々に任せ、あなたは行って下さい」

「あ、ああ。じゃあ、頼む」

向けられる優しい微笑みに、胸の奥がこそばゆくなるような、妙な感覚を覚え、アヒルは答えながら思わず、少し言葉を詰まらせてしまった。

「こちらでも頼みます。アヒル」

「……っ」

少しの違和感もなく、当たり前のように呼ばれる名に、アヒルが目を細める。

「あ、あのさ…」

少し躊躇いながら、アヒルが口を開く。

「あの、その、ええっと…」

必死に言葉を探すアヒルを見つめ、茜が穏やかに笑う。

「大丈夫ですよ」

「へ…?」

そっと伸ばされた、茜の白く細い手が、アヒルの頬へと触れる。

「またすぐに、会えますから」

何の根拠もないというのに、その言葉は、あっという間に胸の中へと染み込んで、躊躇いもなく、簡単に信じる事が出来てしまった。アヒルから自然と、笑顔が零れ落ちる。

「ああ、楽しみにしてる」

笑顔で言うアヒルに、茜も一層、笑みを零す。

「神！」

「おう！」

先を行く箆也に呼ばれ、茜の手を離れ、その場を駆け出していくアヒル。

「彼等の先導を。韻の外まで、必ず無事に、送り届けて下さい」
「はい」

茜の指示に頷くと、傍で膝をついていた従者が、すぐにその場を駆け出し、アヒルと箆也の後を追っていった。静かになったその場に、茜が一人、立ち尽くす。

「頼みましたよ、アヒル……」

茜の願うような声が、地下の空間に、そっと響き渡った。

Word. 66 わスレラレタ愛 (1)

言ノ葉町、言ノ葉山。

「遠^をの神”を、復活させるためだと…?」

「ええ」

険しい表情で聞き返す恵に、和音は冷静な声色であっさりと頷く。
「あなた方、旧世代の五神^{いつがみ}の封印を解くため、わたくしは前々から、新世代の五神の力を揃えることを目的として動いておりました」
落ち着いた口調で、和音が淡々と話す。

「知ってたさ…」

「そうですか」

睨みつけるように見る恵に対し、特に動じもせずに頷く和音。

「お前がカモメの存在にこだわっていた頃から、私はお前の目的に気付いていた」

「あなたにとって、朝比奈カモメの存在は特別でしたものね」

よく見知った者のように、和音が自然と話す。

「だからあなたは、韻の者と通じ、“謡^{よう}”という名の内部組織まで結成させた」

「ああ。お前の行動を見張るためにな」

すべてを見通している和音に、動じもせずに答える恵。陰で恵があれこれと動いていることを、和音はもう以前から、十分にわかっていただろう。そしてそのことを、恵も知っていた。

「だが、“謡”だけで抑えられると考えていた。お前が、韻上層部までもを、掌中に行っているとは思ってなかったからな」

「あの方たちは、“遠の神の力があれば、世界を我々の自由に出来る”という、わたくしの口車に、簡単に乗ってくれましたよ」

嘲笑うような和音の言葉に、恵が眉をひそめる。

「お陰で、実に動きやすかったです」

「だろうな」

恵が少し困ったように、肩を落とす。

「それで、朝比奈アヒルが“う”の力に目醒めて、お前の目的はまんまと達成されたってわけか」

「ええ」

もう一度、頷いた和音が、着物の袖へと右手を入れる。

「念願であった五神の力も、ここに」

和音が袖口から取り出したのは、五色のすべて、色の違う五つの言玉であった。揃っている五神の言玉を見て、恵がさらに表情をかめる。

「この力があれば、あなた方の力を上回り、封印を解くことが可能はず」

和音が、手の中の五つの言玉を、大事そうに握り締める。

「これで、わたくしの願いは叶う」

「お前は…お前は、何もわかっていない」

苦々しい表情を見せて、恵が和音へと言い放つ。

「お前がやろうとしていることが、どんなに危険なことなのか、何にもわかっていない」

「わかっていないのであれば、この目で確かめてみればいいだけの話です」

「確かめることで、世界中の人間を巻き込んでもか!？」

高ぶった気持ちが前面に押し出され、思わず声を張り上げる恵。

「絶対に、封印を解いてはいけない!あの神は、二度と外に出すべきではないんだ!」

恵が身を乗り出し、さらに強く訴えかける。

「何故です?」

和音が短い問いを、恵へと向ける。

「あなたは、彼の神に最も近い方。本来ならば、復活を望む側の人間では?」

「近いからこそ、言っている!」

その問いかけを、恵は強く跳ね除ける。

「この先に在るのは、絶望のみだ！希望なんてもの、在りはしない！」

大きく両手を横に広げ、声を張り上げる恵。

「踏み止まれ、和音！今ならまだ、やり直せる！」

「……っ」

恵のその言葉に、和音の表情が動く。

——お母さん、私……——

——“わす忘れて”——

「やり、直せる……？」

脳裏に刻まれた言葉を思い出しながら、和音がゆっくりと、恵の言葉を繰り返す。

「ああ、そうだ！今なら、まだ……！」

「あなたこそ、わたくしのことを何にもわかっていない」

「何……？」

和音の声を耳に入れ、恵が戸惑うように首を傾げる。

「“やり直せる”……？やり直すことが出来るのであれば、初めから、このような道を選んではいません」

「何だと？」

その言葉に、ますます戸惑った表情を見せる恵。

「どういうことだ！？一体、何を……！」

「わたくしのことを何もわかっていないのに、勝手なことばかり、言わないで下さい」

問いかけようとした恵の声を、和音は鋭く遮り、冷え切った表情の顔を上げた。

「わたくしは、わたくしの願いを叶える。そのために、“遠の神”を復活させる」

強い意志の宿る和音の瞳をまっすぐに向けられ、恵が思わず、怯むように押される。

「そのためには、あなたは邪魔です」

視線を落とし、低い声を響かせる和音。

「毛守さん」

「ええ」

和音に呼ばれた桃雪が、待っていたとばかりに、楽しげな笑顔で前へと出る。

「恵の神と遊んで差し上げて下さい」

「遊んでいる内に、つい戦闘不能になってしまったあなんてことがあってもお？」

「構いません」

「了解です」

和音の答えに、満足げに口角を吊り上げ、桃雪が懐から言玉を取り出す。

「第三十五音“も”、解放」

桃雪が文字を解放し、白く輝く言玉を、素早く恵へと向ける。

「“燃やせ”」

「チ…！第三十四音“め”、解放！」

桃雪の言玉から向けられる白色の炎塊に、恵が舌打ちを落としたが、素早く言玉を取り出し、自身の右足へと吸収させる。淡く緑色に輝く右足を、恵が勢いよく振り上げた。

「“滅せ”！」

振り切られた恵の右足より放たれた脚風により、桃雪の炎が掻き消える。だが、そのやり取りの間に、和音は歩を進め、前方に居た恵の横を通り過ぎ、山の頂上へと進んでいく。

「待て…！」

上げていた右足を下ろし、和音の方を振り返る和音。

「待て！和お…！」

「“設けろ”」

「う…！」

山頂へと向かう和音を追おうとした恵の前に、巨大な真っ白い壁

が突如、出現し、和音へと向かう道全体を塞ぐ。壁に阻まれ、足を止めた恵は、眉間に皺を寄せながら、振り返った。

「邪魔をする気か？」

「我が神の復活を阻止しようとしている方を、邪魔しない神附きが居ますかあ？」

後方に立つ桃雪へと、恵が鋭い視線を向けるが、桃雪は怯む様子も一切なく、ただ不敵な笑みを浮かべながら、右手の中で言玉を玩^{もてあそ}んでいる。

「それに折角、久々にお会い出来たんですからあ、少し遊んでいきましょうよ」

手のひらで転がしていた言玉をきつく握り締め、桃雪が冷たく笑う。

「ねえ？恵の神」

桃雪の微笑みを受け、目を細める恵。

「時間がない」

はつきりとした口調で言い放ち、恵が再び、淡く輝く右足を振り上げる。

「とっとと終わりにさせてもらうぞ」

「それはどうですかねえ」

殺気を向ける恵に対し、桃雪は余裕の笑みを浮かべた。

一方、恵を桃雪に任せた和音は、着物であるがゆえのゆっくりとした足取りで、山頂へと続く道を、歩き進めていた。表情は鋭く、頂上のただ一点だけを見つめている。

「もう、少し…」

——“忘^{わす}れて”——

「後少しで、私の望んだ言葉が手に入る…」

噛み締めるように言葉を落としながら、和音は一步一步、山頂へと続く道を進んだ。

「こちら！こちらです！」

和音により捕まり、韻本部の地下に囚われていたアヒルと籠也は、謎の女性、茜あかねにより牢から解放された。和音を止めるべく、言ノ葉町を目指す二人は、雨の降り注ぐ中、茜の従者の一人に案内され、人目を避けた道を通り、裏門から、韻本部の外へと脱出していた。
「ここから先の道は！？」

「ああ、わかる！ここまでくれば十分だ！」

必死に足を動かしながら、従者と籠也が言葉を交わす。

「では、私はここで」

「ああ、ありがとうな！」

「感謝する。あの人にも、宜しく伝えてくれ」

「はい」

その場で立ち止まる従者に、アヒルと籠也が足を止めぬまま、後方を振り返り、礼を言う。二人の素直な言葉を受け取り、若い男の従者は、柔らかい笑みを零した。

「居たぞ！あそこだ！」

『……！』

従者のさらに後方、三人が今まさに抜け出てきた裏門の方から聞こえてくる声に、アヒルたちがすぐさま表情を険しくし、思わず立ち止まって振り返る。

「脱走者だ！捕まえろ！」

裏門から続々と溢れ出てくるのは、アヒルたちを案内してくれた従者と、同じ黒い着物を纏った、韻の者たちであった。皆、武器を構え、物々しい表情で追い立ててくる。

「もう、追っ手が…」

「お二人は行って下さい…！」

箆也が表情をしかめる中、案内をしてきた従者が、立ち止まったままの二人へ行くよう促しながら、戦闘の態勢を取るように身構える。その従者の言葉に、驚きの表情を見せるアヒル。

「何言ってるんだよ！あんな数、一人じゃ…！」

「ここで、あなたがたが立ち止まっては、すべてが終わってしまいます！」

「だからって、んなこと…！」

「神」

必死に従者に訴えかけようとしたアヒルを、箆也の呼び声が止める。

「あなたは先に、言ノ葉山へ行ってくれ。僕がここに残る」

「はあ…？」

箆也の名乗り出に、大きく顔をしかめるアヒル。

「何言ってるんだよ！言姫さん止めに行くってのに、お前が行かなくてどうすんだ！残るんなら、俺が…！」

「今のあなたには、言玉がない。残ったところで、無力過ぎる」

「あのなあ！俺は別に、神になる前から、ケンカじゃ負けたことがねえんだぞ…！」

「ただの町の不良と韻の者では、レベルが違う」

「ああ…？」

「あ、あの…」

危険の迫った状況であるというのに、激しく言い争いを始めてしまったアヒルと箆也に、従者が止めに入ることも出来ず、戸惑った表情を見せる。

「どういう意味だよ…？」

「二回言わないと、理解出来ないか？」

「あの、その、正直もめている場合ではないような、その…」

『捕まえろおおー！』

「あ…！」

従者が止めることも出来ぬうちに、韻からの追っ手が、アヒルたちのすぐ傍まで迫って来る。二人から後方へと視線を移した従者は、一気に焦りの表情となった。

「と、とりあえず、逃げ…！」

「“叫^{さけ}べ”」

「え…？」

必死の従者の声と入れ違うように、追っ手たちへと向けられる言葉。

『うわあああ！』

アヒルたちの横を通り過ぎた振動の塊が、アヒルたちを追って来ていた韻の者たちの先頭集団を直撃し、二十名程の者たちを一気に吹き飛ばす。大きな叫び声と共に、吹き飛ばされていく韻の者たちを見つめ、啞然とした表情を見せるアヒル。

「今のって…」

「何だかよくわからないけれど、必要なら手を貸すわよ…？」

よく聞き覚えのある、その声を耳に入れ、アヒルが勢いよく振り返った。

「我が神」

「アヒルさあ…ん！」

「朝比奈くん！」

「囁、保、奈々瀬！」

アヒルの振り向いた先には、それぞれの武器を構えた囁、保、七架の姿があった。皆、アヒルの無事な姿を見て安心したのか、嬉しそうな笑顔を浮かべながら、アヒルへ向け、大きく手を振りながら、アヒルのもとへと駆け寄って来る。

「お前ら、なんでっ…」

「恵先生に言われてね…」

「先生に？」

すぐ傍までやって来た囁の言葉に、アヒルが首を傾げる。

「言いつけを破ったって、先生、凄く怒ってたわよ…？」

「ヤッベ。そういや、会議待ってるよう言われたのに、勝手に学校出ちまったんだった」

囁にそう言われると、学校を出る前の恵との会話を思い出し、アヒルが焦ったように頭を掻く。

「んで、その恵先生は？」

「言ノ葉山に行くって言っていましたよ」

「言ノ葉山！？」

周囲を探すように見回したアヒルに、同じように傍へと歩み寄って来た保の声に、大きく目を見開く。アヒルの隣で、籠也もそっと眉をひそめた。

「急いだ方が良さそうだ。神」

「あ、ああ」

注意喚起するように言う籠也に、アヒルも真剣な表情となって頷く。

「悪いけど、理由を話している時間がねえ。とりあえず、この場を任せてもいいか？」

「はい、任せておいて下さい！」

「あなたには言っていない」

「はあ！とても任せられるような存在じゃない俺で、すみませえん！」

冷たく言い放つ籠也に、頭を抱え、謝り散らす保。

「いいわ。その代わり、アヒルんは頼むわよ……？」

「言われるまでもない」

囁の言葉に当然のように堂々と答え、籠也が言玉を解放して、六本の格子を周囲へと張り巡らせる。

「神」

「ああ。気を付けろよ、皆！」

「朝比奈くんも、何かよくわからないけど、頑張って！」

「おう！」

七架の応援に笑顔で答えて、アヒルが籠也の格子の一本へと掴ま

る。

「行くぞ。“翔^かける”！」

箆也が言葉を放つと、アヒルと箆也がそれぞれの手で掴まった四本の格子が、勢いよく浮かび上がり、残りの二本が二人の両足をそれぞれ支えるようにして、上がっていく。そのまま格子は一気に、雨空を翔け抜け、囁たちの視界からは消えてしまった。

「本当に行っちゃった」

「フフフ…慌ただしいったら、ないわね…ビーフストロガノフを渡す暇もなかったわ…」

空を見上げ、呆然と呟く七架の横で、囁が薄く笑みを浮かべる。

「そのあなた」

「え？」

囁に呼ばれ、アヒルと箆也を案内してきた茜の従者が、戸惑った表情で振り向く。

「味方なら、後ろに下がっていてくれる…？ 同じ服着てるから、紛らわしくて、攻撃しちやいそうだわ…」

「は、はい」

不気味に微笑む囁に、少し怯えたような表情を見せながら、従者は大人しく頷き、囁たちの後ろへと駆けていく。

「貴様等！ 韻に従うべき五十音士であるというのに、韻に逆らうつもりか！？」

「逆らう…？ 可笑しなことを言うのね…」

集団の先頭で叫ぶ者の言葉を、囁が不思議そうに繰り返す。

「私たち神附きが従うべきは、我が神の言葉だけよ」

「そうです！」

「うん！」

鋭く横笛を構えた囁の言葉に、大きく頷いて、保と七架もそれぞれ、糸と薙刀を構えた。

Word. 66 わスレラレタ愛 (2)

———かつて、五十音士だった母は、誰よりも言葉を愛し、何よりも言葉を敬っていた。

「言葉ってね、とても素晴らしいものなのよ？和音」

それは、幼い頃から聞かされ続けてきた、母の口癖。

「言葉は素晴らしい力を持っているの」

「力？」

「そう」

大きく頷いた母が、誇らしげに笑う。

「私たちがね、言葉を大切にすればするほど、言葉は私たちに“幸せ”をくれるの」

「幸せに？」

「そうよお。だから私たちは、言葉を守るの」

“守る”と、言葉を守ると言った母の笑顔は、とても生き生きしていて、輝いていた。

「世界中の人たちの分も、言葉を守るのよ」

幼い私にとって、母のその笑顔が、まだよく知らない、“幸せ”というものの象徴となった。

でも、その“幸せ”が崩れ去るまで、そう時間はかからなかった。

「忌との戦いで傷が原因だったんですって…？」

「ああ…言葉による回復も、間に合わなかったらしい…」

「まだ若いのに、残念よねえ…」

五十音士だった母は、忌との戦いで傷を負い、激しく損傷した右足を、このままでは他の部分にも影響が出てしまうということで、切断了。

「お母、さん…？」

「……………」

右足を失った母は、五十音士を続けることも出来なくなり、五十音士を辞めてそのまま、家の自室に閉じこもりきりになってしまった。口数の減った母から、毎日のように聞かされていた、あの口癖を聞くことは、一度もなかった。

「お母さん、あの…」

「言葉なんて…」

窓から外の景色を眺めたまま、母が小さく声を漏らす。

「言葉なんて、無ければ良かったのに…」

それは、あんなにも言葉を愛した母の口から聞くことになるとは思ってもみなかった言葉だった。

それから一年程の時間が流れて、私が六歳になった頃、私は“わ”の文字の力に目醒めた。

「和音を、言姫に…？」

「ええ」

その事実を知った韻本部の者たちが、すぐに私の家を訪れてきた。「言姫は、音士の中でも一際、重要な役割を背負っております」

「お嬢様はまだお若いですが、今後のためにも、早々に韻へ入られて、我々の教育を受けることが好ましいかと思…」

「嫌よ！」

大声で否定した母に、韻からの従者だけでなく、私も驚いた。

「どうして…？どうして、和音が言姫なんかには、五十音士にならなきゃいけないの！？」

「そ、それは、言葉がお嬢様を選んだからで…」

「言葉に一体、何の権利があるっていうの！？」

従者の言葉に、母はさらに声を張り上げた。

「和音の自由を奪う権利が、和音の未来を決める権利が、言葉にあるっていうの！？」

「あ、あのっ」

「私の足を奪う権利が、言葉にあったっていうの……!?!」

「奥さん、落ち着いて……!」

机の上に置いてあったコップを床へと投げつけ、まるで暴れるように叫び散らす母を、従者の者たちが必死に抑え込む。

「嫌!嫌よ……!嫌ああああ……!」

「……っ」

狂ったように泣き叫ぶ母を、私はただ、見つめることしか出来なかった。

「あなたのお母様のお気持ちもわからなくはありませんが、あなたが“わ”の文字に目醒めてしまった以上、あなたには言姫になっていただく他、ありません」

何とか母を落ち着かせると、帰り際、韻の従者たちは、冷静な声で私にそう言った。

「数日後には、韻本部へ来て下さい。お母様には、あなたの方から諦めていただくよう、何とか話をつけて下さい。お願いします」

「……………」

私はその言葉に頷きもしなかったが、私の答えなど聞かずに、従者たちは韻へと帰って行った。

「お母さん……」

家に戻ると、投げつけたコップの破片で汚れた部屋の中央で、母が力なく座り込んでいた。

「お母さん。あのね、私……」

「言葉が……」

何とか言葉を投げかけようとした私の声を、母の言葉が遮る。

「言葉が、すべて奪っていくのよ……」

諦め切った、絶望の声。

「私から、大切なものをすべて：」

「……っ」

絶望した母の姿を見ているだけで、胸が押し潰されてしまいそう
で、苦しくて、辛くて、仕方なかった。こんな姿の母を、見ていら
れなかった。

「お母さん、あのね……」

それは、その時の私が選ぶことの出来た、最良の言葉。

「^{わす}忘れて」

お母さん、あなたは今、“幸せ”ですか……？

言ノ葉山、頂上。

「これが……」

和音がやつのことで辿り着いたその頂上、木々もなく広がった
草原の中央には、一つの、巨大な石が置かれていた。石というより
は最早、巨岩である。平らな表面の真ん中には、『遠』の文字が刻
まれていた。

「これが、封印石……」

その文字の刻まれた部分へと手を触れ、和音が目を細める。

「……っ」

和音が石から手を離し、周囲を見回す。石で造られた五つの台座
が、中央の封印石を取り囲むようにして置かれていた。再び袖口に
手を入れた和音が、台座と同じ数の、神々の言玉を取り出す。

「始めましょうか……」

そう言葉を落とすと、和音は一番近くの、封印石の後方の台座へ
と、歩を進めた。

「滅せ」！

緑色に強く輝く右足を、空中から降下する勢いも足して、桃雪へと目いっぱい振り下ろす恵。桃雪は言玉を持ったまま右手をあげ、下ろされた恵の足を受け止める。

「んなもんで……！」

「諸刃」

「な……！」

腕程度では止められないことを確信していた恵であったが、桃雪が落とした言葉と共に、桃雪の腕を包み込む白い光に、大きく目を見開く。

「ううう……！」

光を帯びた桃雪の腕に、受け止められていた恵の右足が、一気に斬り裂かれる。赤い血を撒き散らした右足を引きながら、恵が後方へと下がっていく。恵が、そのまま下がった場所で足を下ろすと、傷ついた右足から、吸収されていた言玉が、力なく零れ落ちた。

「他愛ないですねえ」

「ク……」

前方から聞こえてくる軽い口調のその声に、恵が険しい表情で、顔を上げる。

「あなたも、もどかしいでしょう？ “め” の文字だけで、戦わねばならないなんてえ」

光り輝いていた手をもとに戻し、また、手の中で言玉を遊びながら、桃雪が恵へと声を掛ける。

「あなたが、あなたの本来の文字“ゑ”で戦ったなら、僕に遅れを取ったりしないはず。違いますかあ？」

「……そうだな」

試すように問いかける桃雪に、恵が少し間を置いて頷く。

「“ゑ”で戦っていたら、お前ごとき、もうとっくに倒していただろう」

地面に足をついたままではあるが、まるで勝ち誇ったような、自

信に満ちた笑みを浮かべる恵に、微笑んでいた桃雪の表情が、そつと歪む。

「相変わらず、強気な物言いですねえ」

桃雪が再び笑みを浮かべるが、その笑みは少し、引きつって見えた。

「あなたのそういうところが嫌いだったんですよ。昔からね…！」
「ク…！」

言玉を持った右手を振り上げる桃雪に、恵が険しい表情を見せ、地面に落ちていた言玉を拾い上げる。

「恵先生！」

それぞれに言玉を突き出し、自身の言葉を放とうとしたが、そこへ上空から、大きく恵の名を呼ぶ声が割って入ってきて、二人は互いに動きを止め、上空を見上げた。

「恵先生…！」

「朝比奈、神月」

両手に浮かび上がった真っ赤な格子を持ち、上空から、言ノ葉山へと現れたのは、アヒルと箆也であった。空から恵の方を見ているアヒルたちの姿を確認し、恵が少し驚いた表情を見せる。

「おやおや、もう牢から出て来てしまったのですかあ」

恵と同じようにアヒルたちを見つめ、困ったように肩を下げる桃雪。

「“謠”とやらも結構、やりますねえ。さすがは内部組織。けどっ」

「あ…！」

言玉を向ける先を、恵から上空へと変える桃雪に、恵が眉をひそめる。

「ここから先へは、行かせませんよお」

桃雪が鋭く微笑み、手の中の言玉を強く輝かせる。

「“も…”」

「“明光”！」

「何…？ううう！」

先に響く言葉に、戸惑うように振り向く桃雪。だが振り向いた途端、桃雪の瞳に、強い緑色の光が入り、あまりの眩しさに目が眩んで、桃雪は思わず顔を伏せた。

「今のうちに、とっとと行け！頂上に向かった和音を、止めるんだ！」

「え？」

身を乗り出すようにして上を見上げ、叫ぶ恵に、アヒルが驚いたように目を丸くする。恵は、上空から見てもわかるほどに傷だらけで、桃雪に対し、優位に戦いを進めているようには、とても見えない。そんな状態の恵に、この場を任せることは、気が引けた。

「け、けどよ……！」

「私に構ってる場合じゃない！すべてが手遅れになるんだ！頼む、和音を止めてくれ！」

「先生……」

必死に願う恵の、その切羽詰まった様子に、アヒルが目を細める。

「神」

「ああ」

呼びかける籠也に、真剣な表情となって頷くアヒル。

「とにかく今は、言姫さんのところへっ……」

「そうは……させるか！」

「あ……！」

アヒルが籠也へと指示を送ろうとしたその時、まだ目が眩んだままの桃雪が、はっきりとは見えていない状態で、ただ感覚を頼りに、右手の言玉を突き上げる。桃雪のその動きに気付き、険しい表情を見せる恵。

「待……！」

「「燃えろ」！」

恵が食い止める間もなく、桃雪が上空のアヒルたちへと、真っ白に輝く、巨大な炎の塊を放った。炎は勢いよく上昇し、瞬く間に、二人へと迫る。

「しまった…！」

向かってくる炎を見下ろし、険しい表情を見せる箆也。すべてに避ける時間はなく、二人の体を浮かせるために格子を使っているため、防ぐ言葉を放つことが出来ない。

「朝比奈！神月！」

『ク…！』

恵が身を乗り出す中、アヒルと箆也が厳しい表情で、歯を食いしばる。

「“吸い込め”！」

「チュウウン！」

「え…？」

アヒルたちが浮かんでいる場所よりも遥か上空から、大きく羽根を広げ、舞い降りて来た金色の巨鳥が、二人の前に大きく陣取り、向かって来た炎を、思いきり開いたその口の中に、あっという間に吸い込んでいく。一気に視界を埋め尽くすその巨鳥に、アヒルは大きく目を見開いた。

「よくやったぜ、チュン吉」

「スー兄！」

チュン吉と呼ばれたその巨鳥の背の上で立ち上がる、よく見慣れた姿に、思わず名を叫ぶアヒル。

「スズメ」

「あれは、宇団うだんの…」

現れたスズメを見上げる恵の横で、やっと眩んでいた目がもとに戻り出した桃雪も、同じようにスズメの姿を見つめ、眉をひそめる。

「何故、今、宇団が…」

「“突っ込め”…」

「う…！」

スズメの姿に戸惑っている間もなく、桃雪の後方から、スズメの乗っているチュン吉と同じような、金色の巨鳥が、勢いよく突進してくる。

「ぐ…!“縛もつれろ”！」

桃雪が必死に身を振りながら言葉を発すると、巨鳥の大きな翼が、わずかにそのバランスを崩し、まっすぐだった体が傾く。傾いたその巨体と、地面との隙間を縫うようにして、身を転がし、桃雪が何とか巨鳥の攻撃を避ける。

「残念。避けられちゃったね、スワ郎…」

「ツー兄！」

桃雪を通り過ぎた巨鳥を、その場に止めるように右手をあげ、現れるツバメ。

「アヒル、籠也」

「へ？」

ツバメの方を見下ろしていたアヒルが、すぐ前方のスズメに名を呼ばれ、顔を上げる。

「恵ちゃんのフォローは、俺等がする。お前たちはとつとと、先に進め」

「スー兄」

真剣な表情で言い放つアヒルに、アヒルがそっと目を細める。

「わかった」

アヒルも真剣な表情を見せ、スズメの言葉に、しっかりと頷く。

「籠也」

「ああ。“翔かけろ”！」

アヒルに名を呼ばれると、籠也がすぐに頷き、短く言葉を落とす。すると、二人の掴まった格子が、またもや素早く空を翔け抜け、山の頂上へと向かっていった。去っていく二人の姿を、スズメがチュン吉の上から、まっすぐに見送る。

「逃がしてしまいましたか…」

地面に伏せていた体を起こしながら、同じようにアヒルたちの姿を見送り、桃雪が眉をひそめる。

「後で、言姫様に嫌味の二、三、言われてしまいそうですね。やれやれ」

桃雪がその場で立ち上がりながら、困ったように肩を落とす。

「よいしょと」

チュン吉を降下させたスズメが、その背から飛び降り、恵のすぐ横辺りへと着地する。

「傷ひどいなら、治すぜ？恵ちゃん」

「お前等、なんでここに…」

「文句は受け付けねえぜ？それでも一応、神命令で来てんだからよ」
ひそめた表情を向ける恵に、スズメが明るい笑みを向ける。

「そうか。宇の神が…」

「それと」

考えるように俯いた恵が、言葉を付け加えるスズメに、再び顔を上げる。

「恵ちゃんポイントを、稼ぎに」

「言ってる、阿呆」

「冷た！」

短く言葉を吐き捨てる恵に、スズメがショックを受けた様子で、表情を歪ませる。

「これ以上、お姫様の機嫌を損ねないためにも、とつと倒させてもらいますよ」

そう言っ、強く言玉を握り締める桃雪に、スズメとツバメが一気に鋭い表情となって、それぞれ、右手を振り上げる。

「そう簡単に、倒されてたまるかっての。行くぜ、チュン吉！」

「呪うよ、スワ郎…」

二人の呼びかけに、二羽の金鳥が、同時に桃雪へと飛びかかっていった。

Word. 66 わスレラレタ愛 (3)

言ノ葉山の頂上では、中央に置かれた封印石の周りにある、五つの台座の一つひとつに、和音が五神から奪った言玉を、一つずつ置いていつていた。封印石の左前方にある台座へと、イクラの青い言玉をゆっくりと置く。

「これで四つ。後は…」

手の中に残った最後の一つ、アヒルの赤色の言玉を見つめ、和音がそっと目を細める。

「これを祀^{まつ}れば…」

言玉を強く握り締め、今居る台座の真横、封印石の右前方にある台座の方へと、歩を進める和音。待ち望んだものが、もう目前に差し迫っているからか、和音の鼓動は高ぶり、言玉を握り締めている手も、わずかに震えていた。早く行ってしまいたい気持ちと、じつくりと噛み締めるような気持ちの狭間で、和音が台座へと向かっていく。

「これで…」

やっと台座の前まで辿り着き、和音が言玉を握り締めた右手をあげる。

「これで、私の願いが…」

「和音！」

「……っ」

耳に入ってくるその声に、和音が素早く顔を上げる。

「和音……！」

格子を掴み、空を翔け抜けてきていたアヒルと籠也が、頂上近くの山道へと着地する。二人を降ろした六本の格子を、一本に纏め、それを掴んだ籠也が、必死に和音の名を呼びながら、頂上に居る和音のもとへと駆け込んでくる。

「籠也……」

やって来る箆也の姿を見つめ、険しい表情を見せた和音が、袖口から、自身の言玉を解放させた形である、真っ赤な手鏡を取り出す。

「“割^われる”」

手鏡を地面へと振り下ろし、低く言葉を落とす和音。

「うわわ！」

「ク…！」

和音の言葉が放たれると、和音の居る頂上と、アヒルと箆也が駆けていた山道との丁度、中央の地面に、激しくヒビが入り、そのヒビがどんどんと広がって、和音と二人との距離を広げていく。地響きを立てて、揺れる地面に、アヒルと箆也が思わず、バランスを崩す。

「和音…！」

格子の先を地面に付け、それを支えに何とか踏み止まった箆也が、割れた地面の向こう側に見える和音へ向け、必死に身を乗り出す。

「これ以上、わたくしの邪魔をしないで下さい。箆也」

正面から箆也を見た和音が、凜とした声を響かせる。

「もう少し…後少しで、わたくしの願いは叶うのです」

胸に手を当て、念願であったことを表すように、和音が言葉を噛み締める。

「これ以上、邪魔をするというのであれば、今度は本当に、あなたの命を奪います」

「……っ」

はつきりと言い放つ和音の、その鋭い視線を浴びながら、箆也がそつと眉をひそめる。

「“遠^をの神”の復活」

箆也の言葉に、和音の眉がかすかに動く。

「“謡”という組織の者に聞いた。それが、あなたの望みなのだろう…？」

「ええ、そうです」

確かめるように問いかける箆也に、和音は少しの躊躇もなく頷く。

「わたくしは五神の言玉を使い、この石に封印されし五十音最後の神、“遠の神”を復活させる」

「何でだ!？」

箆也のすぐ横へと並んだアヒルが、和音へ向けて、声を張る。

「何でそこまでして、遠の神とかいう奴を、復活させようとするんだよ!？」

「……あなたは相変わらず、“何故”と問いかけるのが好きですね。安の神」

アヒルの問いかけを聞いた和音は、呆れたように言いながらも、どこか感心するような笑みを浮かべていた。

「言葉を、手にするためです」

「言葉？」

「ええ」

聞き返したアヒルに、和音が大きく頷く。

「わたくしが欲している、ただ一つの言葉を、彼の神は持っている。だから復活させる。理由は以上です」

「言葉っ……」

和音の答えを聞き、どこか考え込むように、眉間に皺を寄せるアヒル。

「“を”の、言葉……?」

「……っ」

すぐ隣のアヒルのその言葉に、箆也がハッと目を見開く。

——何故、あんなことをしたんだ! 和音! ——

——ごめんなさい! ——

「まさか……」

過去に起こった出来事を思い出し、何かを思いついた様子で、声を漏らす箆也。

「ここに居てくれ、神」

「へ？」

「“翔^かけろ”！」

「お、おい！箆也…！」

アヒルが止めるのも聞かず、箆也は自らの言葉を放ち、地面の大きな裂け目を越えて、和音のもとへと飛び出していく。

「和音！」

「う…！」

空を翔け、こちら側へとやって来る箆也の姿に、和音が思わず表情をしかめる。

「最後の一つを…！」

和音が右手に持ったアヒルの言玉を、最後の台座へと必死に伸ばす。

「“変格”」

その和音の動きを見ながら、空を翔け、地面の割れ目を飛び越えた箆也は、降下していきながら、格子の姿を鎌へと変えた。

「“刈^かれ”！」

「ううう…！」

箆也が勢いよく鎌を振り下ろすと、その刃先から飛び出した一閃が、和音の着物の袖を斬り裂き、和音の体を台座から後方へと、吹き飛ばした。必死に堪える和音の右手から、アヒルの言玉が零れ落ち、地面へと転がる。

「箆也…！」

落ち着いていた表情から一転し、感情を剥き出しにした表情を見せた和音が、顔を上げ、大きく箆也の名を呼びあげる。一方、地面に着地した箆也は、地面に落ちたアヒルの言玉を拾い上げ、鋭い瞳を、和音へと向けた。

「これは、我が神のものだ。返してもらおう」

はつきりと言い放つ箆也に、和音が唇を噛み締める。

「何故…」

込み上げる感情を溢れさせるように、声を漏らす和音。

「何故、皆、わたくしの邪魔をするのです…？」

わずかに震えた声で、和音が箆也へと問いかける。

「もう少し、後少しでわたくしの願いが叶うというのに…！」

“思い出せ”」

「……！」

箆也の口から放たれる言葉に、声を荒げていた和音が、ひどく驚いた様子で、大きく目を見開く。

「あなたの欲している言葉は、封印された神を復活させてまで手に入れようとしている言葉は、“思い出せ”」

まっすぐに和音を見据え、箆也がさらに言葉が続ける。

「そうだな？ 和音」

「………」

確かめるように問う箆也であったが、和音は答えようとはしなかった。

「思い、出せ…？」

割れた地面の向こうから、二人の様子を見守っていたアヒルが、箆也の発したその言葉に、戸惑うように首を傾げる。

「あなたは、“思い出せ”の言葉を使って、自身が忘れさせてしまった記憶を、再び取り戻そうとしているのだろう…？」

「……っ」

どこか優しく問いかける箆也に、和音はそっと、言葉もなく俯いた。

———“忘れて”。それは、あの日の私に言えたものの中で、最良だったはずの言葉。

私が二十八代言姫となり、韻本部で暮らすようになってから、数年の時間が流れた。

「ただいま帰りました」

「あ、おかえり。お姉ちゃん」

半年以上の時を空けて、久し振りの我が家に帰ると、会っていなかったうちに随分と大きくなった妹が、出迎えてくれた。

「珍しいね。お休み？」

「いいえ。近くに用があつて、寄っただけですから、すぐに出ます」

「何だあ。久々なのに、泊まってもいけないのかあ」

私の言葉に、妹は残念そうに肩を落とす。

「空音？誰か来てるの？」

久し振りに聞くその声に、思わず全身が強張る。妹に呼びかけながら、家の奥から玄関先へと姿を現したのは、あの日以来、ずっと会っていなかった母であった。右足を失った母は、義足にも慣れた様子で歩きながら、私たちのもとへとやって来る。

「あら」

母と目を合わせ、私は思わず息を呑んだ。

「お客さん？」

「……っ」

自然と首を傾げ、母が放ったその言葉に、一瞬、私の時が止まる。
「あ、えっと…」

母に問われた妹が、心底困った表情を見せて、答えとなる言葉を探す。

「はい」

「え…？」

私は、そんな妹よりも先に、声を発した。

「初めまして。和音と申します」

精一杯の笑顔を作って、私は母にそう、言葉を向ける。

「まあ、空音の友達？」

「ええ」

「ちょ、お姉…！」

「空音」

私を姉と呼ぼうとした妹の声を、強く遮る。妹が困惑する気持ち
は十分に理解出来たが、それでも今の私には、そうすることしか出
来なかった。

「そう。ゆっくりしていつてね、和音さん」

「はい、ありがとうございます」

そこには、あの日失くしたはずの、母の笑顔が、“幸せ”があっ
た。

母は、すべてを忘れていた。

自分が五十音士であったことも、それにより右足を失ってしまっ
たことも、言葉というものを大切にしていたことも、そして、娘で
ある私のことも。

当然だった。私が“忘れて”と、そう、言葉を発したのだから。

それから、一ヶ月後。私は別件で、また自宅へと立ち寄った。

「あ、おかえり」

「ただいま帰りました」

いつものように迎えてくれた妹に、そっと微笑みを向ける。

「調子はどうです？ 檻也の神附きになったのでしょうか？」

「うーん、まあまあかな」

その頃、妹は、私と文字の力に目醒め、五十音士の道を歩み始め
ていた。五十音士であった頃の記憶を失った母が、それを反対する
ことはなく、妹は五十音士になった後も、母と共に穏やかに暮らし
ていた。

「お姉ちゃんの方は…」

「空音、どなたか見えたの？」

一ヶ月前と同じように、家の奥から聞こえてくる声。声に遅れる
こと数秒、奥の部屋から、母が姿を現した。

「あら」

やって来た母が、私の姿を見つける。

「お客さん？」

「え…？」

「……っ」

母のその言葉に、妹は戸惑うように声を漏らした。妹の後方で、私思わず息を呑む。

「な、何言ってるの？お母さん。この前も来たでしょ？ほら、和音で名前で、私の友達って…」

「ええ？」

妹の言葉に、母は大きく首を傾げる。

「お母さん、記憶力はいいの。この子は来るの、初めてよお。誰か別の子と勘違いしてるんじゃないの？空音」

「なっ…」

妹は必死に訴えたが、母がまるで悪気のない笑顔で、自信すら持つて、そう言うので、返す言葉を失ったようだった。

「なんで…なんでよ！お母さ…！」

「いいのです、空音」

さらに訴えようとした妹の手を、後ろから、母に見えないようにそっと引き、止める。

「いいって、でも…！」

「どうしたっていうの？空音」

「あっ…」

何も覚えていない母に戸惑いの視線を向けられ、妹はどう答えていいかも、どうしていいかもわからない様子で、表情を曇らせる。

「えっと、その…」

「こんにちは」

何とか答えようとした妹の声を遮って、私は母に笑顔を向ける。

「初めまして。和音と申します」

別に、難しいことではない。ただ、笑えばいいだけだ。

それから、何度会いに行っても、母が、私のことを覚えていないとはなかった。これも、“忘れて”の言葉の効果だろうか。母の記憶に、“私”という存在が残ることは、どうやら無いらしい。

「こんなの！こんなの、あんまりだよ……！」

心優しい妹は、母に忘れられた私を思っ、一生懸命、泣いてくれた。

「空音？母さんちょっと、出掛けてくるわねえ」

それでも、母がごく自然に、当たり前のように妹の名を呼ぶたび、優しい妹さえ、恨めしく思ってしまう。

「気を付けて、いつてらっしゃい。空音」

妹も、五十音士なのに。私も、同じ娘なのに。

どうして、どうして、私だけが忘れられてしまったのだろう。

それは、私が、“忘れて”と、そう言葉を放ったから。

そう、これは、自業自得。

「あら、お客さん？」

「初めまして」

どうすることも出来ないもどかしさの中で、何度も何度も繰り返す。

笑顔の下で、何度も何度も生まれ出る。

黒く渦巻く、この感情。

抜け出したい。抜け出して、しまいたい。どんなことをしても

……

Word. 66 わスレラレタ愛 (4)

「“思い出せ”って…」

地面の割れ目の向こうから、飛び越えて行くことも出来ずに、箆也と和音の様子を見守るアヒルが、箆也が口にしたその言葉を、そつと繰り返す。

「忘れさせた記憶を取り戻すって、どういう意味だよ!? 箆也!」
アヒルが身を乗り出し、箆也へと強い口調で問いかける。

「和音はかつて、自身の言葉“忘れろ”により、自身の母親から、自身の記憶を消し去ったんだ」

「え…?」

箆也から伝えられる答えに、アヒルが思わず、大きく目を見開く。
「は、母親から、自分の記憶を…?」

戸惑いの表情で言葉を繰り返しながら、アヒルが、箆也から和音へと視線を移す。

「何だって、そんな真似…」

「……っ」

向けられるアヒルからの視線に、和音は目を細め、少し俯いた。

「て、ってか!“思い出せ”の言葉が必要なら、別に“遠の神”を復活させなくても、箆也の言葉で…!」

「恐らく、箆也の言葉では、無理だったのだろう」

「え?」

もっともであるアヒルの意見を、箆也はすぐに否定する。

「ワ行は、五十音の中で最も強い力を持つ文字行。そこに属する、和音の言葉の効果を打ち消すには、同じワ行の文字の力でなければならぬ」

「そんな…」

「だから、遠の神を復活させようとしているのだろう?」

アヒルが険しい表情を見せる中、箆也が和音へと視線を移す。

「檻也の言葉で打ち消せるのであれば、“あの時”、あなたはそうしていたはずだ」

「あの時？」

籠也の言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「あの時、あなたが僕の記憶を消した、あの時に」

「え…？」

その発言に、さらに驚きの表情を見せるアヒル。

「籠也の記憶を、消した…？」

表情を曇らせ、アヒルはその問いかけを投げかけぬまま、静かに籠也と和音のやり取りを見つめる。

「ええ、そうですわね…」

すべてを認めるように、和音がゆっくりと頷く。

「懐かしい話ですわ。もう、十年程前でしうか…」

晴れた空を見上げ、過去を思い返すように、そっと目を細める和音。

「わたくしは、あなたの記憶を消した。檻也が於の神に選ばれ、於崎の屋敷の者たちの心ない言葉に、泣いていたあなたの、その日の記憶を…」

——於の神でない者が、“お”のつく言葉を口にするなど、おこがましい！——

——ううう…！う、うう…！——

誰にも気付かれないように、必死に声を殺して、ただただ泣いていた、まだ幼かった少年。

「……っ」

当時のことが思い出されたのか、籠也が少し苦しげに俯く。

「あんな記憶、あなたには必要ないと思った。あんな、あなたを苦しめるだけの記憶…」

「言姫、さん…」

箆也を傷つけた言葉を憎むように、厳しい表情を見せる和音を見つめ、そっと目を細めるアヒル。和音の言葉からは、箆也への優しさのようなものが、はっきりと感じ取れた。

「けれど、あなたは怒りました」

顔を下ろした和音が、空を見つめていた瞳を、箆也へと向ける。

「例えば、どんなに辛い記憶であろうとも、そのすべてが、自分を形成するもの。消し去っていい記憶など、たったの一つもない」と

和音が口にした言葉は、箆也がかつて和音に放った言葉そのもので、一言一句間違えなく覚えているところからも、その言葉がどれほどに和音の胸に残ったのか、伝わってくる。

「あなたのあの言葉は、まるで、わたくしの胸に突き刺さるようでした…」

「和音…」

そっと微笑みを浮かべる和音を見つめ、箆也が目細める。

「ですから、わたくしは決めたのです」

和音が笑みを止め、鋭い表情を見せる。

「“思い出せ”の言葉を使い、わたくしが奪った母の記憶を、すべて取り戻すと」

「……！」

はつきりと言い放つ和音に、箆也が険しい表情を見せる。

「和音！それは……！」

「例えばあなたが相手であろうとも、邪魔はさせません……！」

何かを訴えかけるように、身を乗り出した箆也の言葉を遮り、和音が左手に持った手鏡を振り上げる。太陽の反射で輝く鏡面に、箆也の姿が映し出された。

「“渡せ”！」

「あ……！」

和音が言葉を放った瞬間、箆也の左手の中から、大事に握り締めていたはずのアヒルの赤い言玉が消え、一瞬にして、和音の右手の中へと移動する。

「しま…！」

「“分^わかて”！」

「う…！」

再び言玉を奪われ、焦っている間もなく、和音がさらに手鏡を振り切り、箆也へと鋭い一閃を向ける。

「うあああああ！」

「箆也…！」

一閃に斬り裂かれ、吹き飛ばされる箆也に、思わず身を乗り出すアヒル。

「クッソ…！」

険しい表情を見せたアヒルが、周囲の割れ目を必死に見回す。すると一部の地面の割れ目が、わずかに狭まっており、何とか飛び越えられなくもない箇所を見つけた。

「あそこからなら…！」

アヒルが足を突き動かし、その箇所へと急ぐ。

「この一つ、後一つを…！」

箆也から奪い返したアヒルの言玉を握り締め、和音が、最後の台座へと必死に駆けていく。

「和音…！」

引きつった表情を見せながら、箆也が必死に体を起こす。

「動くな！和音…！」

和音が台座の前へと辿り着くか着かないかの瀬戸際で、吹き飛ばされた箆也が立ち上がり、右手に構えたその鎌の先を、鋭く和音へと向ける。その強い声に、止まる和音の足。箆也の左肩からは、先程和音に斬り裂かれたため、赤い血が滴り落ちていた。

「一步でも動いた瞬間、あなたを攻撃する！」

真剣な眼差しを、立ち止まった和音へと向ける箆也。その鬼気迫った表情を見れば、箆也が本気であることが容易にわかる。

「あなたの気持ちはわかる。和音」

箆也が諭すような声を、まっすぐに和音へと向ける。

「だが、やはり、そこに眠る神を、復活させるべきではない！」
瞳を鋭くし、箆也がさらに言葉が続ける。

「旧世代の神々が、韻内部の者たちが、あれほどに必死になるくらいだ。僕にはよくわからないが、その神を復活させることは、余程のことを意味するのだろう」

眉間に皺を寄せ、険しい表情を見せる箆也。

「だから、やはり復活させることは……！」

「わたくしは仮にも、言葉の姫を名乗る者……」

必死に訴えようとした箆也の言葉を、和音の冷静な声が遮る。

「彼の神を復活させることで起こることは、あなた以上に、十分に理解しているつもりです」

「だったら……！」

「それでも！」

張り上げられた箆也の声を、さらに上回る大きな声を発する和音。
「例え……例え、この世界中のすべての人間の言葉を、巻き込むことになるとしてもっ……」

——あら、お客さん？——

——ゆっくりしていったね、和音さん——

「……っ」

和音が震える唇を噛み締め、勢いよく顔を上げる。

「それでも私は、たった一つの言葉が欲しい……！」

上げられた和音の顔は、今にも泣き出しそうなほどに辛そうで、哀しげなものであった。初めて見る表情を、言葉を向けられ、箆也が驚きの表情を見せる。

「和音……」

小さく名を呼んだ箆也の構えが、一瞬、解かれる。

「これでっ……」

「あ……！」

箆也の一瞬の隙を使い、台座の方を振り返った和音が、台座へと、最後の言玉を持った右手を伸ばす。やっと地面の割れ目を飛び越え、二人と同じ側へとやって来たアヒルが、伸びていく和音の手に、大きく目を見開く。

「箆也…！」

「これで…！」

アヒルが必死に箆也へと促すが、その言葉が届く前に、最後の言玉が、台座へと祀られた。すべての台座に、すべての言玉が祀られたその瞬間、五つの言玉から、強い光が突き上げられる。

「ああ…！」

見開いた瞳のまま、アヒルが突き上げた光を見上げる。

———パアアアアン！

「な、何だ！？」

町中に響き渡るほどの大きな、甲高い音と共に、言ノ葉山の頂上から空へと突き上げる、五色の光。その光に気付き、山の中腹で桃雪と戦闘中であつたスズメが、勢いよく振り向く。

「あれは…！」

「五母の光…！」

スズメと同じように振り向いたツバメが、険しい表情を見せて咳く。空へと突き上げる赤、青、金、緑、白の五色の光。それは、ついこの間、阿修羅が墮神たちと共に突き上げた、五母の光とまったく同じものであつた。墮神ではなく、今の神の言玉により形成されている分、阿修羅たちの時よりも、ずっと光が強い。

「五母の光が上がったということは…」

「アヒルたちは、間に合わなかったのか…！？」

「……っ」

スズメとツバメが焦った様子で言葉を交わしている中、向き合っていた桃雪も同じように、突き上げた光を振り向き、そっと目を細める。

「いよいよ、ですか…」

嬉しそうに笑みを浮かべた桃雪が、スズメたちが光へと目を奪われていたその隙に、その場を駆け出し、頂上へと向かっていく。

「封印が、解かれる…」

頂上で突き上げる五色の光をまっすぐに見つめ、恵が茫然と呟く。

「遠久…」

「為介さん、あれを…！」

共に部活動を行っていたツバメにより、緊急の事態を知った雅は、一度、『いどばた』へ向かい、そこで為介と合流して、言ノ葉山を目指して、言ノ葉町の道を駆けていた。目指す山の頂上から突き上げる光を視界に入れ、雅が焦った様子で、後方の為介を振り返る。

「五母の光…」

空へと突き上げる五つの光を見つめ、為介がいつになく、厳しい表情を見せる。

「もしかしたら、もう封印が…」

「先を急ごう」

不安げに声を漏らす為介の後方から、諭すような、落ち着いた言葉が投げかけられた。為介が足を進めたまま、声の聞こえて来た方を振り返る。

「為介」

雅、為介の後方を走る、もう一人の人物。

「はい、“宇の神”」

その者の言葉に、為介はしっかりと頷いた。

『あっ…』

目の前で突き上げた五母の光を、茫然と見上げるアヒルと籠也。何とかしなければならぬという思いは十分にあったのだが、二人はその場に立ち尽くしたまま、動くことが出来なかった。もう、どうすることも出来ないことを、体のどこかで、感じ取ったのかも知れない。

「これで…」

達成感に満ちた笑みを浮かべ、光の輝く空を見上げる和音。

「これで、私の望みは叶う…」

和音が見守る中、突き上げた五つの光は、上空で一つに纏まり、さらに強い虹色の光を放つと、雷のように、真下にある封印石へと降り注いだ。

『ううう…！』

光が封印石に当たった瞬間、頂上全体を強い光が包み、アヒルと籠也が思わず、目を伏せる。光が落ちると、その巨岩の中央部、『遠』の文字が刻まれた部分に、縦に大きくヒビが入った。

「わ…」

そのヒビを手鏡の鏡面に映し出し、和音がゆっくりと口を開く。

「“割^われろ”」

言葉と共に、手鏡から飛び出た赤い光線が、その、封印石に入ったヒビへと突き刺さった。その瞬間、ヒビが一気に縦全体に広がり、巨大な封印石が、左右に割れていく。

『あ…！』

割れていく石を見つめ、目を見張るアヒルと籠也。

「やっ…」

手鏡を力なく下ろした和音が、割れていく封印石を、穏やかな笑顔で見つめる。割れた石が左右それぞれ地面に倒れ、そして、今まで石のあった部分に見えてくる、一つの人影。影は思ったよりも小

さく、華奢な人物であつた。やがて日の光が降り注ぎ、その人影の全貌を明らかにしていく。

「あれは…」

「少、年…?」

戸惑いの表情で、見えてきたその人物を見つめるアヒルと籠也。

そこに立つその人物は、深く瞳を閉じてはいるが、肌艶や顔立ちから、まだ幼い人物であることが十分にわかる。十五か十六か、恐らく、アヒルたちと変わらぬ年齢であろう。恵や茜が復活を憂いていたにしては、あまりに若く、あまりに脆いものに見えた。

「あれが、“遠の神”…?」

「やっと、会えた…」

和音がゆつくりと歩を進め、その少年の前まで寄っていく。

「遠の神」

噛み締めるように、その言葉を呟く。

「“永遠”^{とわ}」

「……っ」

和音の呼ぶその名に反応してか、石の中から現れたその少年は、ゆつくりとその瞳を開いた。

Word. 67 最後ノ神 (1)

言ノ葉山、頂上。

「あれが、“遠をの神”…？」

五神いつがみの五つの言玉を揃えた和音が、言葉で割った巨大な封印石の中から姿を見せたのは、アヒルとそう変わらない年齢に見える、一人の少年であった。柔らかそうな質感の、少し癖のついた茶色の髪に、丸みのある、色素の薄い瞳。華奢な体と真っ白な肌が、どこか神秘的ではあるが、その外見は、どこにでも居るような、ごく普通の少年である。

「ようやく、お会いすることが出来ましたわね。“遠の神”永遠とわ」
「……………」

微笑みかける和音に答えることもなく、遠の神と呼ばれた少年、永遠はただ、どことも定まらぬ場所に視線を投げかけていた。表情にはまったく色がなく、何を思っているのか、少しも読めない。

「あの少年が、遠の神…？」

眉をひそめた箆也が、どこか疑うように、永遠を見つめる。何やら、他の者とは違う空気を纏っていることは感じるが、別段、強い力や殺気を持っているようには見えない。箆也は、永遠が、自身ではとても敵わない、圧倒的に強い存在には思えなかった。

「あの者ならば、今、この場でっ…」

捕らえてしまうことが出来るのではないかと、箆也が、先程まで和音に向けていた鎌を、そっと身構える。

「……っ」

向けられる、かすかな殺気に気付いたのか、永遠が、定まらなかつた視線を、ゆっくりと箆也へと向けた。何一つ感情の見えない両目が、まっすぐに箆也を見つめる。

「う…！」

永遠の視線が向けられた瞬間、箆也の全身に一気に戦慄が走った。

思わず肩を上げた箆也が、凍りついたように、その場から動けなくなる。

「な、何だ？」

動かない体に、戸惑うように視線を落とす箆也。

「これは…」

「あの方と、下手に目を合わせない方がいいですよ」

険しい表情で自身の体を見回していた箆也が、後方から聞こえてくる声に、首だけを動かし、振り返る。そこには、恵たちの足止めから、永遠復活の隙に逃れた桃雪の姿があった。

「あんまり目を合わせ過ぎると、それだけで死んでしまう」

冷たく微笑む桃雪に、箆也はさらに険しい表情となる。今、まったく体を動かすことの出来ない状況である箆也に、その桃雪の言葉を否定することは出来なかった。

「さあてと、ご苦労さまでした。言姫様」

動けない箆也を難なく通り過ぎ、桃雪が、和音と永遠の方へと歩み寄っていく。

「毛守さん」

「あなたのお陰で、僕の願いは叶いました」

振り向く和音には視線を向けず、ただまっすぐに永遠を見つめたまま、和音の横までやって来る桃雪。桃雪がその場に膝をつき、深々と頭を下げる。

「ご無沙汰しております。我が神」

常に飄々としている桃雪が、いつになく恭しく、そう言葉を落とす。永遠の視線がゆっくりと動き、頭を下げている桃雪を捉えた。

「桃、雪…？」

「はい」

小さな声を落とす永遠に、桃雪が大きく頷く。

「あなたの神附きの桃雪です。神」

「桃雪…」

もう一度、確かめるように桃雪の名を呼び、永遠がそっと目を細

める。

「やっと、やっとこの瞬間を迎えることが出来た：再び、我が神と向き合う、この時を…」

胸に手を当てた桃雪が、どこか感極まった様子で、永遠を見上げる。

「二十数年、待ち続けた甲斐がありましたよ」

嬉しそうに微笑みながら、桃雪が立ち上がり、永遠のすぐ横へと並ぶ。

「二十、数年…？」

「ええ」

小さく聞き返す永遠に、優しい笑みを向ける桃雪。

「今の、目醒めたばかりの状態では、実感がないかも知れませんが、あなたは眠り続けていたのです。この石の中で」

桃雪が足元に転がっている、封印石の欠片を見下ろしながら、言葉が続ける。

「あなたが旧世代の神々により、この石の中に眠らされてから、二十数年の時間が流れたのですよ」

顔を上げた桃雪が、そのまま空を見上げ、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「でも、桃雪は、変わってない…」

“戻れ”の言葉を使って、若返り続けていましたから。あなたが何十年後に目醒めても、待てるようにね」

少し途切れたような口調で言う永遠に、桃雪が微笑んだ顔を下ろす。

「二十数年…早いくらいですかね」

自嘲するように笑った桃雪が、永遠の前方に立つ和音の方を振り向く。

「神、こちらに居る言姫様が、現五神の言玉をすべて揃え、あなたを忌々しい封印から、復活させて下さったのです」

「言、姫…」

桃雪が和音を紹介すると、永遠の視線が、ゆっくりと和音へ移る。
「復活させた代わりと言うわけではありませんが、実は言姫様、神にお願いがあるそうなんです」

本題に入る桃雪の言葉に、和音がそっと目を細める。

「あなたをあんな石の中から、解放して下さったんですう。願いの一つや二つ、聞いて差し上げて、構わないでしょう？」

「……構わない」

軽い口調で桃雪が問いかけると、永遠は迷うことなく、小さく答えた。

「ですってえ。良かったですねえ、言姫様。これで、あなたの願いは叶う」

桃雪が笑みを浮かべ、和音の方を見る。

「さあ、あなたの願いを我が神に」

「わたくしの…」

右手を差し出す桃雪に対し、和音がゆっくりと、その口を開く。

—— “忘れて” ——
わす

—— あら、お客さん？ ——

母の記憶の中で、永遠に刻まれることのない、和音という存在。

「わたくしの、願い…」

母の笑顔を思い出し、和音が強く、拳を握り締める。

「和音…」

「言姫、さん…」

息を吞んで、その光景を見つめるアヒルと箆也。

「わたくしの、願いは…」

少し躊躇った後、和音は意を決した表情で、俯けていた顔を上げた。

韻本部地下、特別収容施設内部。

「え…？」

アヒルたちを追って、外に出払った韻の従者を、囁たちが引きつけている隙に、地下施設内では、茜たち“謡”による、アヒル以外の神の救出が行われていた。鍵の開けられた牢の中から、閉じ込められていた檻也たちが、次々と脱出していく。

「お姉ちゃんが、“遠の神”を…！？」

「はい」

驚きの表情で聞き返した空音に、茜が真剣な表情で頷く。

「五神から奪った五つの言玉を使い、言ノ葉山頂上の封印石に眠る、遠の神を復活させるつもりなのでしょう」

「遠の神って…まさかお姉ちゃん、お母さんの記憶を…」

「……………」

姉を思い、不安げな表情を見せる空音のすぐ隣で、檻也も何やら考え込むように、そっと俯く。

「それで今、安の神たちが言ノ葉山に…」

「ううう…！」

「衣の神！」

檻也たちに話の続きをしようとしていた茜が、苦しげに漏れる声と、焦ったような従者の声に振り向く。茜が振り向くと、和音、桃雪との戦いで、激しく傷を負ったエリザが、二人の従者に両側を支えられ、牢から出ようとしているところであった。

「すぐに彼女を、治療室へ連っ…」

「エリザ様！」

指示を送ろうとした茜の声を遮り、響く大きな声と共に、天井から飛び降りるようになって姿を現したのは、女忍者の慧であった。

「私が治療いたします！」

「慧…？」

必死の表情で駆け寄って来る慧を、従者により、牢のすぐ外へと

腰を下ろされながら、エリザが戸惑うように見つめる。

「君が、どうしてここに…」

「申し訳ありません。トロピカル療養に行くようご命令を受けたというのに、エリザ様が心配で、戻って来てしまいました」

問いかけるエリザに、慧が柔らかな笑みを浮かべる。

「命令違反です。処分はいかほどにも」

「そうね…考え、とくわ」

言葉ではそう言いながらも、エリザはどこか嬉しそうな笑顔を見せた。そんな二人の様子を見て、茜も指示を止め、安心したように肩を落とす。

「ん？以の神？」

再び振り向いた茜の視界に、従者や茜とろくに言葉も交わさずに、牢を出てすぐさま、地上へと続く階段に向かう、イクラの姿が入った。

「どちらへ？」

「俺の言玉を、取り戻しに行く…」

振り返らぬまま、イクラが素っ気なく答える。

「行くというのであれば、少し待って下さい。言ノ葉山までは少々、距離がありますので、今、従者に車を…」

「神！」

再び地下に大きく声が響き、茜は声の聞こえてきた、上へと続く階段の方へと視線を向けた。

「やあゝっと見つけた！」

「金八…」

勢いよく階段を駆け下りてきたのは、以団の金八であった。イクラへと大きく手を振りながら、金八が明るい笑みを浮かべる。

「無事だったかあ？神！」

「誰がいつ、俺の心配をしろなどと言った…？死ね」

「ああ！そういう言い方すると俺、泣いちゃうよお！？」

「金八…うざい、鬱陶しい、鵜飼い…」

イクラに冷たく言い放たれ、泣きだしそうな表情で叫んでいる金八のすぐ横へと、同じように階段を使って下りてきたのは、シャコであった。

「神…」

「シャコ」

「外でニギリが、仁王で待機してる。いつでも出れるよ」

今来たばかりであるというのに、すべての状況を把握し、これからイクラが行おうとしていることをも理解している様子で話すシャコ。その言葉を聞いたイクラが、ゆっくりと茜の方を振り返る。

「車は必要ない。俺は行く…」

「わかりました。どこの団も、優秀な神附きさん揃いで助かりますね」

イクラの言葉を受け、茜はどこか感心するように微笑んだ。

「ま、待て！以の神！」

金八、シャコと共に、上へと続く階段を上ろうとしたイクラを、今度は檻也が呼び止める。イクラは少し煩わしげな表情で、檻也の方を振り向いた。

「和音のっ…言玉のもとへ行くというのなら、俺も連れて行ってくれ…！頼む！」

身を乗り出し、必死の表情で訴える檻也を見つめ、イクラが眉をひそめる。

「……好きにしろ」

少しの間を置いて、イクラが短く言葉を落とす。

「あ、今のは翻訳すると、“勿論いいよお”でええす！」

「黙れ、金八。死ね」

「だから俺、そういうの、泣いちゃうよお!？」

楽しげになのか物騒になのか、あれこれと言合いながら、イクラたちが階段の上へと姿を消していく。

「一応、連れて行ってはくれそうですね…」

「ああ…」

以団の様子に少し呆れた表情を見せながら、言葉を交わす檻也と空音。

「附いてきてくれるか？空音」

「勿論です、神」

問いかける檻也に、空音が迷いなく答える。

「私も、姉と話がしたいですし：」

「そうだな」

和音のことを思っ^{そもり}てか、深刻な表情を見せる空音に、檻也が目^めを細める。

「では、曾^そ守さんにはこれを、お返ししておきます」

「これは：私の言玉？」

茜がそう言^いって空音に手渡したのは、真っ白な言玉であった。手のひらに乗った言玉を見つめ、空音が戸惑った様子で眉をひそめる。

「言姫の部屋にあったものです」

「ありがとうございます」

言玉を握り締め、空音が茜へ向けて、深々と頭を下げる。

「部屋にあったのは、空音の言玉だけか？」

「はい。五神の言玉は、言姫が持^もっていつてしまいましたから」

「言玉以外には、何もなかったか？」

「え：？」

檻也の問いかけに戸惑ったのか、茜が首を傾げる。

「何も、ありませんでしたけれど」

「そうか：」

茜の答えを聞き、檻也がどこか浮かない表情で俯く。

「どうかされたのですか？神」

「いや、その：」

同じように疑問を持^もったのか、空音が檻也へと問いかける。

「言玉と一緒に、無くなってるんだ」

檻也が右手を、自身の首へと当てる。首には、いつも掛けられていたはずの鎖が無い。

「“夢言石”が…」

『え…?』

檻也のその言葉に、空音と茜は、同時に眉をひそめた。

「どうしました？言姫様」

いつまで経っても願いを口にしない和音を不審に思ったのか、桃雪が首を傾げ、俯いたままの和音の顔を覗き込むようにして、問いかける。

「さあ、早くあなたの願いを、我が神に」

「わたくしの…」

桃雪の言葉に答えるように口を開きながら、和音が手鏡を持っていない方の手を、そっと着物の懷へと入れる。

「わたくしの、願いは…」

懷から何かを取り出し、和音がその手を、真正面へと向ける。

「あなたのその文字を、奪うこと…！」

『あ…！』

鋭い表情で、勢いよく顔を上げた和音が、前方に立つ永遠へと向けたのは、美しく輝く、小さな水晶の玉であった。その見覚えのある玉を見て、アヒルと箆也が大きく目を見開く。

「あれは…！」

「檻也の夢言石…！？」

「五十音、第五十音」

アヒルと箆也が驚き、戸惑う中、和音が高らかと声を発する。その和音の声に反応し、和音の手の中で、強く輝き始める夢言石。

「“を”、封印…！」

和音の突き出した夢言石から、強い白色の光線が放たれると、この光線はまっすぐに、永遠へと向かっていく。その予想もしていなかった光景を、アヒルと箆也は、ただ大きく見開いた瞳で見つめる。

「これで…！」

和音が祈るような表情で見つめる中、光線が、永遠の胸部を、勢いよく貫いた。光が届き、和音が笑みを零しそうになったその瞬間、

永遠の姿が、薄らと霞む。

「え…？」

霞んでいく永遠の姿に、途端に眉をひそめる和音。届いたはずの光は、そのまま、永遠の体に当たることなく、空の彼方へと突き抜け、永遠の姿は、横に居た桃雪と共に、完全に消え去ってしまう。

「こ、これは…」

「“模写”^{もしや}」

「……！」

後方から聞こえてくる言葉に、和音が一気に険しい表情となって、振り返る。

「ふう、危なかったですねえ。神」

和音の後方、少し離れた場所に立っているのは、先程、和音の目の前で姿を消した、永遠と桃雪であった。桃雪は額の汗を拭う動作を見せながらも、嘲るような、余裕の笑みを浮かべている。

「念のため、姿を模写しといて良かったですよ。ホント」

「百井、桃雪…」

完全に二人の方を振り返った和音が、微笑む桃雪を、睨みつけるように見る。

「あなた、初めから…！」

「“燃えろ”^も」

「う…！」

和音の声を遮り、言葉を発した桃雪が、和音へと向けた言玉から、真っ白な炎を放つ。和音は咄嗟に、乗り出していた身を引くが、瞬く間に炎は襲いかかった。

「あああああ！」

「和音！」

炎に右手を焼かれた和音が、苦しげに声をあげ、持っていた夢言石を、力なく地面へと落とす。その様子に、籠也が思わず身を乗り出す。焦げ落ちた着物の袖の下から覗く、火傷を負った右腕を抱え込み、その場へとしゃがみ込む和音。

「う、ううう…」

「和音…!」

「ああ、動かないで下さあい」

しゃがみ込んだ和音に、駆け寄ろうとした箆也が、響く声に足を止める。

「ううう…!」

「動く、殺しますよお?」

いつの間にか、和音のすぐ前へと立った桃雪が、和音の焼かれていない左手の方を持ち上げて、箆也へと言い放つ。負った火傷からか、振じるような形で、無理やり腕を持ち上げられているからか、和音はさらに苦しげに表情をしかめた。

「クっ…」

和音を人質に取られ、箆也が大人しくその場で、動きを止める。

「あなたも愚かな人だあ、言姫様」

箆也の方を振り返り見ていた桃雪が、前方を向き、和音へと視線を移す。

「大人しく願いを口にしていればあ、我が神はあなたの望みを叶えて下さったのにい」

「言葉を使い、模写した姿を囿にしていたのに、ですか…?」

どこか残念そうに肩を落とした桃雪に、和音が低く落とした声で、鋭く言い放つ。

「あなたは初めから、私の願いを叶えさせる気などなかった」

少し声を震わせながら、和音が強く、桃雪を睨みつける。

「あなたは自身の神を復活させるため、ただ、私を駒の一つとして利用しただけっ…」

「……フフっ」

険しい表情を見せる和音に対し、堪え切れなかったものを零すように、楽しげに微笑む桃雪。

「ええ、そうですよお」

笑顔を見せた桃雪が、あっさりと認めるように、頷きかける。

「すべて、あなたの言った通り。僕は我が神を復活させるため、あなたを利用した」

囁きかけるように言葉を放つ桃雪に、和音がさらに、その表情をしかめる。

「あなたも、それに気付いていたからこそ、於の神から夢言石を奪い、ここへ隠し持って来たのでしょうか？」

桃雪が右足をあげ、近くに落ちていた夢言石を、柔らかく踏みつける。

「私が檻也から夢言石を奪っていたことも、初めから知っていたのですね……」

「えええ。残念でしたねえ、後一步だったのにい」

まるで心のこもっていない桃雪のその言葉に、和音が眉間に皺を寄せる。そんな和音から視線を外して、桃雪は踏みつけていた夢言石を、遠くへと勢いよく蹴り上げた。今はもう無い、封印石の後方付近へと、夢言石が力なく落ちる。

「あなたには、本当に感謝していますよ、言姫様。あなたが居なければ、我が神の復活は無かった」

桃雪が再び和音を見つめ、笑みを浮かべる。

「正直、あなたがここまで役に立ってくれるとは、思っていませんでした」

微笑む桃雪を、ただまっすぐ、射るように見つめる和音。

「あなたも頑張り屋さんですねえ。自ら消した母の記憶を、取り戻すために、必死に、必死に動き回ってえ」

「……っ」

桃雪のその言葉に、和音の表情が大きく揺れる。

「知って……？」

戸惑いの表情で、和音が桃雪へと問いかける。和音は“願いを叶えるため”とは度々口にしたが、その願いの内容を、桃雪に話した覚えはなかった。

「ええ、勿論」

和音を嘲笑うかのように、自然と頷く桃雪。

「知っていなければ、あなたを選んでなどいない」

桃雪が、はっきりとした口調で言い切る。

「知っていたからこそ、僕はあなたに近づき、あなたがこう動くよう仕向けた」

「……！」

その言葉に、和音が大きく目を見開く。

——ねえ、言姫様。“遠の神”という存在を、ご存じですか？——

十年前、桃雪により、もたらされた言葉。

——現“於の神”よりも、ずっと強い力を持っているそうですよ——

それにより動かされた、和音。

「では…初めから、全部っ…」

十年以上もの自分の行動のすべてが、桃雪の計算の内であったことを知り、和音が、愕然とした表情を見せる。

「あなたは本当に、頑張っていましたよお」

桃雪を睨みつける力すらも失い、虚ろな瞳を、どこへともなく向ける和音に、桃雪がさらに言葉を向ける。

「妹を、婚約者を、大切な存在である、その加守さんを、すべての人間を欺いて、たった一人で、孤独に戦って」

続く桃雪の声が、和音の耳に、突き刺さるように響く。

「ただ、母親に思い出してほしい一心で、必死に、必死に」
和音を見つめる桃雪が、鋭く目を細める。

「そんな、一人で戦っているあなたの姿は、必死な必死なあなたの姿は…」

桃雪が持ち上げている和音の体を引き寄せ、和音の耳元へと、顔を寄せる。

「とても、滑稽でした」

「……っ」

耳元のすぐ近くから届く言葉に、和音が力なく瞳を閉じ、悔しさを堪えるように、強く唇を噛み締める。

「グ……！」

和音の悔しさが伝わるのか、箆也も同じように唇を噛み締め、血が滲みそうなほどに強く、鎌を持つ手を握り締めた。

「さあ、あなたのその頑張りも、もう終わりにして差し上げましょう」

「あ……！」

そう言って、腕を捻り上げた状態の和音へと、言玉を向ける桃雪。その桃雪の動作に、箆也が焦ったように、声を漏らす。

「和音……！」

箆也が身を乗り出す中、桃雪の握り締めた言玉が、強く輝き始める。

「……も……」

「桃雪……」

「ん？」

自らの言葉を口にしようとした桃雪であったが、その声は、小さな永遠の呼びかけにより、止まった。一旦口を閉じた桃雪が、少し戸惑うように、永遠の方を振り返る。

「何でしょう？ 神」

すぐさま笑みを浮かべ、桃雪が永遠へと問いかける。

「あなたから文字を奪おうとした、この愚かなお姫様なら、たった今、この場で僕があ……」

「避ける」

「へ？」

短く落ちる永遠の声に、首を傾げる桃雪。

「神、それはどういう……」

「“当たれ”^あ」

「……！」

永遠へと問いかけようとした桃雪が、背中側から聞こえてくる言葉に、大きく目を見開く。桃雪が素早く後方を振り向くと、真っ赤な光の大きな弾丸が、桃雪へと迫り来ていた。

「ク……！」

険しい表情を見せた桃雪が、持ち上げていた和音から手を離し、すぐさまその場から離れる。

「ううう……」

「和音！“庇^{かば}え”！」

桃雪から解放され、力なく地面に座り込んだ和音へと、弾丸が迫るが、箆也がすぐに言葉を発し、鎌を放り投げる。鎌は空中で風の塊へと姿を変え、和音を取り囲むようにして、代わりに弾丸を受けた。弾丸が完全に消え去ると、風塊は再び鎌の姿へと戻って、座っている和音のすぐ横へと落ちる。

「和音……！」

その場を駆け出し、和音へと駆け寄っていく箆也。

「ふう〜」

何とか弾丸を避けた桃雪が、永遠のすぐ横へと着地し、ホっとした様子で息を落とす。

「いやあ、危なかった。ありがとうございます、神」

危機を知らせてくれた永遠へと、桃雪が礼を言う。

「僕が言姫様に気を取られている間に、自身の言玉を手にしてらっしゃったんですねえ」

笑みを浮かべた桃雪が、封印石の右方を振り向く。

「安の神」

「……………」

桃雪の振り向いた先には、真っ赤な銃を身構え、鋭い表情を見せたアヒルが立っていた。アヒルの横には、封印石を取り囲む台座の一つがある。和音が最後に、アヒルの言玉を祀った台座であった。桃雪と和音の会話が続いているうちに、台座の近くへと移動し、ア

ヒルは言玉を取り戻したのだろう。

「お前がペチャクチャと、くだらねえことばっか、しゃべってっからだろうが」

射るような鋭い視線を、桃雪へと向けるアヒル。桃雪の和音への発言に対してか、アヒルのその視線からは、怒りが感じられた。

「尤もなご意見ですねえ。反省させていただきましょう」

またしても心のこもっていない言葉を吐いて、桃雪が涼しげな笑みを浮かべる。

「安の、神…？」

銃を構えるアヒルを見つめ、永遠が少し眉をひそめる。

「明…？」
あける

「え…？」

永遠が口にしたその名に、銃を構えたまま、アヒルが戸惑うように眉をひそめる。

「彼は旧世代“安の神”ではありませんよ、神」

永遠の方を振り向き、桃雪が丁寧に説明をする。

「彼は現“安の神”。あなたのよく知る“安の神”とは別人です」

「現、安の神…」

桃雪の言葉を繰り返し、永遠がそっと目を細める。表情にまた、色がなくなったところを見ると、桃雪の説明に納得したようである。掴めない空気を纏った永遠を見つめ、アヒルが警戒するように、表情を陰しくする。

「箆也」

和音へと駆け寄った箆也を、静かに呼ぶアヒル。その声に、座り込んだ和音の体を支えたまま、箆也が素早く振り向く。

「言姫さんを連れて、ここから逃げろ」

「え…？」

思いがけないアヒルのその言葉に、箆也が驚きの表情を見せる。

「だが、しかし…！」

「神命令だ。従え」

「……っ」

反発しようとした箆也であったが、強く言い放つアヒルの言葉に気圧されるように、続く言葉を呑み込んだ。

「……わかった」

アヒルの指示に頷くと、箆也が地面に落ちていた鎌を拾い、和音の手を自分の肩に回させ、和音の体を支えたまま、その場でゆっくりと立ち上がる。

「無事で」

「ああ」

アヒルの短い返事を聞き届けると、箆也が右手に持った鎌を振る上げる。

「“駆^かけろ”！」

箆也が言葉を発すると、箆也と、そして箆也に支えられた和音の姿が、まるで風が吹き抜けるかのように一瞬にして、その場から消え去っていった。

「そう簡単に、逃がしはっ…！」

「“当^あたれ”」

「う…！」

二人を追うべく、言玉を振り上げた桃雪であったが、その桃雪の腕を、鋭く放たれた弾丸が掠め、赤い血が滲む。走る痛みにか、笑顔を見せていた桃雪の表情が歪んだ。

「誰が追いかけていいって、言ったよ？」

「ク…」

アヒルが桃雪へと銃口を向け、強気に言い放つ。銃口を向けられたままでは、下手に追っていくことも出来ず、桃雪がさらに表情をしかめる。

「まあいいです。逃げられたところで、我が神が復活した今、あの愚かなお姫様には、何の用もない」

歪めた表情を整え、すぐに笑みを浮かべる桃雪の、和音を愚弄するその言葉に、アヒルが不快そうに眉をひそめる。

「人の思いを、言葉を、てめえの目的のただけに、散々、弄^{もてあそ}びやがって…」

鋭く瞳を細め、アヒルが桃雪を睨みつける。

「許さねえ」

「許さない、ですか」

アヒルが力強く言い放ち、銃口を桃雪へと向ける。向けられた銃口をまっすぐに見つめ、桃雪はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

「神らしいお言葉ですねえ。ですが果たして、あなたに、僕を許さないことが出来るでしょうか？」

問いかけるように言葉を放ちながら、桃雪が言玉を、アヒルへと向ける。

「“燃^もえろ”！」

言玉から放たれた白い炎が、アヒルが銃弾を撃つ間を与えることなく、空中を駆け抜け、銃を構えたままのアヒルを直撃する。白い炎に包まれるアヒルの体を見つめ、桃雪が口角を吊り上げる。

「他愛のない」

「桃雪…」

がっくりと肩を落としていた桃雪が、永遠の声に振り返る。

「避ける」

「え…？」

先程と同じように放たれる永遠の言葉に、桃雪が眉をひそめ、炎に燃えたアヒルの方を見る。だが、そこにアヒルの姿はなく、ただ白い炎が、頂上に生えた草花を燃やしていた。

「これは、“欺け”」

アヒルの使った言葉をすぐに理解し、表情を曇らせた桃雪が、勢いよく上空を見上げる。晴れ渡った青い空の中央に、銃を構えたアヒルが浮かんでいる。

「空に逃げたところで…」

桃雪が嘲笑うように言い、右手の言玉を空へと向ける。

「燃え…」

「五十音、第三音…」

「何…？」

再び言葉を発しようとした桃雪が、アヒルのその声に眉をひそめ、言葉を止める。

「“う”、解放…！」

「な…！？」

アヒルのその声に反応したのか、封印石を取り囲んでいた台座の一つから、金色の言玉が飛び出し、まるで自らの持ち主を知るように、上空のアヒルへとまっすぐに飛び上がりながら、その姿を変えていく。

「言玉が、勝手に…？」

「……っ」

桃雪が戸惑う中、アヒルが空中で言玉から姿を変えた金色の銃を、左手でしっかり握り締める。

「“撃て”！」

「う…！」

金色の弾丸が雷のように落ち、桃雪を貫く。

「うああああ！」

言葉を使う間もなく、弾丸に撃ち抜かれた桃雪が、勢いよく吹き飛ばされ、地面に倒れ込む。撃たれた神附きが横を通り抜けたというのに、永遠は眉一つ、動かさなかった。

「グ、ク…」

「観念する時が来たみたいねえ」

腹部から血を流しながら、苦しげに上半身を起こした桃雪が、前方から響く、凜とした声に、顔を上げる。

「さっきの傷と、ウチの神附きの髪を燃やした札、たっぷりとさせてもらうわよ！」

「“衣^えの神”…」

桃雪が顔を上げると、そこには、鋭い表情を見せたエリザが立っていた。エリザのすぐ横には、身構えた慧が仕えている。

「神、こっちこっち！」

「うるさい。死ね」

「そういうこと言うと、俺、泣いちゃうよお!？」

金八に誘導され、エリザに引き続き、その場へと現れたのは、見るからに不機嫌な表情を見せたイクラであった。

“以^いの神”も…」

「俺の言玉は、どこだ…?」

桃雪を容赦なく睨みつけ、イクラがそっと問いかける。そのイクラの問いが聞こえたかのように、台座の中から青い言玉が飛び出て、イクラの元へと向かっていく。同じように飛び出した緑色の言玉も、エリザの元へと戻った。最後の白い言玉も飛び出し、山の下方へと飛んでいく。

「言玉が、神々の元へと戻っていく…」

飛んでいく白い言玉を目で追いながら、桃雪が眉をひそめる。

「イクラ! ザベスも!」

「エリザよ!」

上空から嬉しそうに名を呼ぶアヒルに、しっかりと訂正を入れるエリザ。傷も癒え、すっかり元気そうである。

「遠の神だか何だか知らないけど、復活したっていうなら、倒すまでよ!」

「神は、俺だけでいい…」

「よっしゃ! 行くぜ!」

エリザとイクラがそれぞれ、戻った言玉を握り締め、アヒルが銃

を持つ両手に力を込め、それぞれに強く声を張り上げる。

「……………」

向かってくる三人の神を見つめ、永遠はそっと、目を細めた。

“ 駆ける ” の言葉により、一気に言ノ葉山の中腹まで降りた箆也が、足を止め、頂上のある後方を振り返る。

「追っ手は、来ないか…」

自分たちを追って来る姿がないことを確かめ、箆也が安心するとともに、不安げな表情を見せる。

「神…」

頂上で戦うアヒルの身を案じ、箆也が眉をひそめる。

「うう…」

「和音？」

すぐ横から聞こえ漏れてくる苦しげな声に気付き、箆也が素早く振り向く。箆也の肩に回していた手を下ろした和音が、桃雪の攻撃により激しく火傷を負った、もう一方の手を抱え込み、深く俯いていた。

「傷が痛むのか。待っている、すぐに治療する」

箆也が鎌を持っていない左手で、和音の傷ついた手を、そっと取る。

「か…」

「結局…」

言葉を放とうとした箆也が、小さく落とされた和音の声に、言葉を止め、少し戸惑うように顔を上げる。

「結局、願いも叶えられぬまま…」

顔を上げた和音は、視線を深く落とし、すべてを諦めきったような、すべての希望を失ったような、力ない表情を見せていた。

「いいように使われて、踊らされて、用済みだと殺されかけて…」

続く和音の言葉を聞きながら、箆也がそつと目を細める。

「私はただ…ただ、世界を巻き込んだだけ…」

風の音にすら掻き消されてしまいそうな和音の声が、わずかに震える。

「本当に、滑稽っ…」

震える唇を噛み締め、瞳を潤ませながら、和音が自嘲するように笑みを浮かべる。

「和音っ…」

「同情の言葉であれば、いりません…」

呼びかけた箆也の方へと顔を上げ、和音が責めるような、責められているような、険しい表情を見せる。

「軽蔑したければ、すればいい」

和音からの鋭い視線を浴び、箆也が眉間に皺を寄せる。しばらくの間、見つめ合って、箆也がゆっくりと口を開いた。

「……するわけない」

「……！」

優しく落とされるその声に、和音が大きく目を見開く。

「う…！」

見開かれた和音の瞳から、これ以上、堪え切れないとばかりに、大粒の涙が一気に溢れ出る。

「ううう…うううう…！」

今までの悲しみや辛さをすべて吐き出すように、止まることのない涙を流した和音が、助けを求めるように、前に立つ箆也へと勢いよく抱きついた。

「うううう…！」

「……っ」

和音の言葉にならない泣き声を聞きながら、箆也は深く瞳を閉じ、強く、和音を抱き締めた。

「……………」

泣き暮れる和音と、和音を強く抱き締める箆也。目の前に広がった光景が一気に焼きつく、檻也はすぐさま、その目を逸らした。イクラ、エリザとともに言ノ葉山へと駆けつけた檻也と空音は、高速で移動する箆也たちの姿に気付き、イクラたちと別れ、追って来たのであった。

「神…」

目を逸らし、俯く檻也を、空音が心配そうに見つめる。

「ん…？」

そこへ、頂上の方角から、白い言玉が、檻也の元へとゆっくりと飛んで来た。檻也の手の中へと、吸い込まれてくるようにやって来た言玉を、檻也が何の迷いもなく、握り締める。

「言玉が、勝手に…？」

空音が戸惑うように首を傾げる中、檻也は手の中の言玉を見つめ、目を細める。

「行こう。他神たちが戦っているはずだ」

「え…？」

箆也と和音に背を向けたまま、頂上へ向けて足を踏み出す檻也に、空音が少し慌てた様子で声を漏らす。

「か、神…！」

足早に頂上へと向かっていく檻也を、空音が必死に追いかける。

「よ、よろしいのですか？」

少し躊躇いがちに、檻也へと問いかける空音。

「姉は、神のっ…！」

「わかっていたことだ」

空音の言葉を遮った檻也が、その場で足を止める。急に立ち止まった檻也につられ、空音も慌てて足を止めた。

「わかっていたことだ。初めから…」

——あなたも興味がありますでしょう？箆也が認めた、安の神と

いう存在に――

――言姫様が、安の神を屋敷内にお入れになったそうです――
――箆也の害となるようなことだけは、しないと思っていた――

「和音はいつも、箆也の味方だったからな……」

過去の数々の出来事を思い返ししながら、空を見上げた檻也が、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「神……」

そんな檻也を見つめ、目を細める空音。

「言姫の婚約者は、“於の神”。別に、俺自身が選ばれたわけじゃない。俺がただ、於の神になっただけだ」

肩を落とした檻也が、どこか諦めたような口調で言う。

「俺がただ、箆也よりも早く、“お”の文字に目醒めただけだ」

「……っ」

檻也のその言葉に、空音が思わず、唇を噛み締める。

「それでもっ……」

放たれる空音の声に、檻也が少しだけ、振り返る。

「それでも、私の神は、あなた一人です」

はつきりと主張する空音に、檻也が驚くように目を開いた後、すぐさま開いた瞳を細める。

「……ありがとう」

礼を呟いた檻也が、かすかに笑みを零す。

「行くぞ。附いて来い、空音」

「仰せのままに、我が神」

表情を引き締めた檻也の言葉に、空音はしっかりと頷いた。

「第二音“い”、解放…」

手の中へと戻った言玉を光らせ、イクラが右手を、桃雪へと突き出す。

「^{いの}析れ」

言玉から飛び出した、美しい女性の水像が、両手を広げ、包み込むように、桃雪へと向かっていく。

「^{もう}設けろ」

桃雪が前方に光の壁を張り、イクラの水像を受け止める。だが水像の勢いは強く、すぐさま壁にヒビが入り、砕き割るようにして、桃雪へと突き進んでくる。

「チっ…」

向かってくる水像に表情を歪めながら、桃雪が避けるべく、上空へと飛び上がる。

「第四音“え”、解放！」

「何…!？」

しかし、桃雪の飛び上がった、そのさらに上方では、エリザが強く輝かせた言玉を、右足の中へと吸収させている。言玉を吸収した右足を、エリザが鋭く振り下ろした。

「^{えぐ}抉れ」

「うううう…!」

胸の前に両腕を交差し、振り下ろされたエリザの右足を受け止める桃雪であったが、その強烈な蹴りの勢いを殺しきれず、下方へと叩き落とされる。

「う…!」

降下していく桃雪の視界に、桃雪へと銃口を向け、照準を合わせているアヒルの姿が入る。

「“^あ当たれ”！」

「ク…！うああああ！」

空中を落ちている最中で、避ける術もなかった桃雪は、アヒルが放った巨大な赤い弾丸をもろに受け、叫び声をあげながら、地面へと落下した。

「グク…」

傷ついた体を、苦しげに声を漏らし、起こそうとする桃雪。

「さすがに、五神三人は…」

「“押おさえつけろ”」

「……！」

薄い笑みを浮かべたまま、声を漏らしていた桃雪が、背中側から響く言葉に、笑みを止め、目を見開く。言葉が響いたと同時に、地面についていた桃雪の両手足が、白い光により拘束され、地面にくっつくように封じ込められた。

「そこまでだ」

白色の言玉を突き出し、桃雪へと鋭い表情を向けたのは、檻也であつた。すぐ後ろには、空音の姿もある。

「檻也！」

「於おの神」

アヒルとエリザがそれぞれ、現れた檻也の姿を見つけ、声を発する。

「成程、五神が四人ですかあ。いやっ…」

感心するように呟いた桃雪が、自らの言葉を否定するように付け足して、視線をアヒルへと向ける。アヒルの右と左、それぞれの手には、赤銅色と金色の異なる銃。

「彼は“あ”と“う”の文字を持つ者…今、この場に、すべての神が揃ったというわけですか…」

地面に手を捕らえられたまま、桃雪が力なく肩を落とす。

「これでは、さすがの僕もお手上げですねえ」

「賢明な判断だな」

桃雪の言葉を聞き、誉めるように言うと、檻也は桃雪の動きを封

じたまま、ただ無表情で立ち尽くす永遠の方を振り返った。

「お前の神附きは、この通りだ。大人しく、俺たちに拘束されるんだな」

「……………」

檻也が挑戦的に言い放つが、その言葉にも永遠は眉一つ動かさず、答えようとする素振りすら見せなかった。そんな永遠の様子を見て、檻也が少し眉をひそめる。

「何だ？何か言ったら、どっ…」

「フ、フフ…」

永遠へと再び言葉に向けようとした檻也が、後方から漏れ聞こえてくる桃雪の笑い声に気付き、表情をしかめて、勢いよく振り返る。

「フフ、フフフ…」

「何が可笑しい…？」

堪え切れないとばかりに笑みを零す桃雪を、檻也が険しい表情で見つめる。

「いえねえ、ただ、可哀想だなあと思って」

「可哀想、だと…？」

桃雪の言葉に、檻也の表情が曇る。

「ええ。大人しく、僕くらいにやられておけば良かったのに…」

顔を上げた桃雪が、檻也を見つめ、冷たく笑う。

「我が神を、相手にしなければならいなんて」

「何…？」

桃雪の言葉に、戸惑うように眉をひそめた檻也が、再び永遠の方を振り向く。

「あ…！」

相変わらず立ち尽くしている永遠の右手の中に、いつの間にか握り締められている、一つの白い言玉。

「五十音、第五十音…」

永遠が小さな声を響かせると、永遠の手の中の言玉が、強く輝き始める。

「“を”、解放…」

文字の解放と共に、言ノ葉町中を包み込んでしまうのではないか
と思えるほどの、強烈な光が、一気に広がる。

『ううう…!』

そのあまりに強い光に、アヒルやエリザ、その場に居る者たちが
目を伏せ、身を屈める。強烈な光はしばらく続き、アヒルたちはず
っと身を屈めたままであった。やがて光が収まり、アヒルがそつと
顔を上げ、恐る恐るその瞳を開いていく。

「……………」

「あ…」

光の収まったその場所には、白い言玉を、皆の居る方へと突き出
した永遠の姿。感情の見えないその瞳を見た途端、何かを本能的に
感じ取ったのか、アヒルが背筋を震え上がらせる。

「んだよ、やろうってかあ!? 俺、泣いちゃうよお?」

「エリザ様に敵対する者は、この慧が排除致します!」

「五十音、第十五音“そ”、解放」

アヒルとは異なり、永遠を恐れる様子をまるで見せずに、金八を
初めとする以団の面々が、慧が、空音が、それぞれの言玉を解放さ
せ、一斉に攻撃の態勢を取り、永遠へ向かって飛び出していく。

「“刻め”!」

「“蹴散らせ”…!」

「“削げ”!」

「……………」

飛び出した神附きたちが、一斉に言葉を向けるが、永遠はその表
情を崩さない。

「を…」

「……………」

ゆっくりと口を開く永遠に、アヒルが目を見開く。

「み、皆、避ける!」

『え…?』

「^{その}“慄け”……」

必死に叫ぶアヒルの言葉に、永遠へと向かっていた皆が戸惑う中、永遠が一つの言葉を口にした。言葉が放たれると同時に、一瞬強く言玉が光り、目にも留まらぬ速さで、光が周囲を駆け抜けていく。

『ううああああ……！』

「え？」

前方で響く声に、エリザがふと顔を上げる。

「な……！」

顔を上げた途端、エリザが大きく目を見開く。エリザの前方では永遠に向かっていた慧と、そして金八たち以附の四人、空音が皆、気を失った様子で、深く目を閉じ、地面に倒れ込んでいた。

「け、慧……！」

「……っ」

倒れた慧へと、慌てて駆け込むエリザ。同じように、急に倒れ込んだ神附きたちを見つめ、イクラがそっと眉をひそめる。

「空音！」

エリザと同じように、倒れ込んだ空音に、檻也が駆け寄っていく。檻也が必死に呼びかけるが、深く目を閉じたまま空音は、その声に反応を見せなかった。

「残ったのは、神四名ですかあ。まあ順当ですね」

倒れることなく残ったアヒル、イクラ、エリザ、檻也の四人を見回し、桃雪が不敵に笑う。

「今の言葉は、“慄け”……」

空音の体を揺らしていた手を引いた檻也が、険しい表情で顔を上げ、言玉を突き出したままの永遠の方を見る。永遠が口にした言葉は、字は違うとはいええ、同じ音を持っている檻也にとっても、馴染みの深い言葉であった。

「“慄け”だけで、皆を……」

檻也も何度か同じ言葉を使ってきたが、大量の忌を、一瞬の間だけ退かせる程度で、傍に居た空音たちが意識を失うなどということ

は、一度もなかった。

「俺の言葉とは、次元が違うということか…」

「……っ」

檻也の眩きをすぐ傍で聞きながら、桃雪が満足げな笑みを浮かべる。

「クっ…」

アヒルが唇を噛み締め、茫然としていた表情を動かす。

「一斉に攻撃だ！」

アヒルのその言葉に、同じように茫然としていた神たちが、ハツとした表情を見せ、すぐさま攻撃の態勢を取る。

「“当たれ”！」

「“祈れ”！」

「“抉れ”！」

「“落とせ”…！」

四人の神が一斉に、自身の言葉を放つと、アヒルの銃から放たれた赤い弾丸が、イクラの言玉から放たれた水像が、エリザの右足から放たれた緑色の閃光がそれぞれ、永遠に向かって飛び出し、檻也の言玉によって、上空からは豪雨のような白い光が、一斉に永遠へと降り注ぐ。

「……………」

これほどの攻撃を向けられても、顔色一つ変えない永遠。

「を…」

言玉を持った右手をかざし、永遠がそっと口を開く。

「“終えろ”…」

永遠の口から言葉が放たれた瞬間、強烈な白光が、またしても言ノ葉町中を包み込むように、一気に広がった。

———パアアアン！

一瞬のうちに駆け抜けた光はすぐに止み、また言ノ葉山が、穏や

かな日の光に包まれる。

「あ…」

日の光の下、茫然と立ち尽くすアヒル。アヒルの右手に握られた赤銅色の銃は、銃先が鋭く割られたような状態で粉々に砕けていた。アヒルは血が流れ、傷ついた右腕と共に、構えていた銃を力なく下ろす。

「何だよ、今の…」

凍りついたように、表情を止めたアヒルが、弱々しい声を漏らす。

「何だよ、これ…」

『……………』

少し混乱するように呟いたアヒルの、すぐ横には、倒れているイクラ、エリザ、檻也の姿があった。皆、激しく傷つき、意識を失っているのか、深く目を閉じたまま、ピクリとも動かない。あの一瞬で、たった一つの言葉で、神である皆が一気に、やられてしまったのだ。

「今の、言葉は…」

「“終えろ”」

多くいたはずの仲間がすべて倒れ、たった一人残ったアヒルが、戸惑いの表情を見せていると、その戸惑いに答えるように、声が聞こえてくる。アヒルはゆっくりと首を動かし、その声の聞こえてきた方を振り向いた。

「我が神の言葉」

アヒルの振り向いた先で、そっと立ち上がる桃雪。檻也が気を失い、地面へと拘束していた光が消滅して、自由になったようである。

「“終えろ”…?」

「ええ」

聞き返したアヒルに、桃雪が薄く微笑んで答える。

「彼の言葉を持ち得たからこそ、我が神は旧世代の神々から恐れられ、この場所に封印されるに至った」

険しい表情を見せ、アヒルが桃雪の言葉に耳を傾ける。

「文字通り、言葉を終わらせ得るものです」

「言葉を、終わらせる…？」

その言葉の意味を理解しかね、眉間に皺を寄せるアヒル。

「ええ。そのあまりに圧倒的な力から、“終える”の言葉には、別の名が与えられた」

桃雪が目を細め、口角を吊り上げる。

「その名は、“无”^ん」

「“ん”…？」

そのたったの一字を繰り返し、アヒルが益々、困惑した表情となる。

「この世で唯一、すべての言葉を、終わらせることの出来る文字ですよ」

言葉を続ける桃雪が、楽しげに笑う。

「あなたのよく知る旧世代の神々が、韻の中に存在する“謡”が、ただ、ただ恐れた、禁断の文字…」

「禁断の、文字…」

続く桃雪の言葉を、アヒルがただ啞然と繰り返す。

「どうやらあなたは、二つの文字を持つ特殊な方だったのでえ、先程の攻撃を受けても、何とか無事でいられたようですが」

言葉を発しながら歩を進めた桃雪が、言玉を掲げた状態のままの永遠の後ろへと、そっと立つ。

「今度は、どうにも出来ないでしょうねえ」

桃雪は、まるで永遠に合図を与えるように、微笑んだ。

「を…」

「う…！」

再びその文字を口にする永遠に、アヒルが大きく目を見開き、怯えたような表情を見せる。避けても逃げても無駄であることは、アヒルももう十分に、理解していた。

「ク…！」

アヒルが覚悟したように、強く唇を噛み締め、瞳を閉じる。

「“終え…”

永遠がもう一度、その言葉を落とそうとした、その時であった。

「左腕を上げて」

「え…？」

すぐ傍から聞こえてくる声に、きつく目を閉じていたアヒルが、戸惑った様子で目を開く。何か、温かいものにしっかりと支えられたアヒルの腕が、力強く上がっていく。

「あっ…」

開いたその目を、すぐ前に広がるその光景からか、さらに大きく見開くアヒル。

「お、親父…？」

アヒルの目の前に立っていたのは、アヒルの父、ウズラであった。

「あれは…」

「宇田川、ウズラ…」

眉をひそめる桃雪の前で、言葉を止めた永遠が、そっとウズラの名を口にする。

「左手に力を込めて」

アヒルのすぐ横に立ったウズラが、いつになく真剣な表情を見せて、アヒルの方は一切見ずに、ただまっすぐに、永遠の居る前方を見据える。ウズラは両手でアヒルの手を抱え、力なく下ろされていたアヒルの腕を上げて、持っている金色の銃の銃口を、正面へと向けさせた。

「な、何っ…」

「前を見て、狙いを定めて」

問いかけようとするアヒルの言葉を遮り、ウズラが指示を送る。

「……諦めないで」

「……！」

父の放ったその言葉に、衝撃を走らせるアヒル。多くの疑問が浮かんで、今すぐ父を問いただきたい気持ちに駆られたが、今はその言葉の通り、前を向き、鋭い表情を見せて、前方に立つ永遠へと狙

いを定めた。

「行くよ」

ウズラの言葉に大きく頷き、アヒルが強く、引き金を引く。

『“撃て”……!!』

二人の言葉が重なると、永遠へと向けられた銃から、今までで一番巨大な、金色の弾丸が放たれた。

Word 68 うノ神ノ真実 (1)

巨大な金色の光が、頂上の山肌を削り、砕けた封印石を、周りにあった五つの台座をすべて搔つ攫つて、遙か空の彼方へと消えていく。空の果て、完全に見えなくなるまで光を見送ると、永遠はゆっくりと顔を下ろした。その表情は相変わらず色が無く、先程の光で、傷を負った様子も一切ない。

「ふう、助かりましたあ」

永遠のすぐ横の地面に、力なく座り込んだ桃雪が、気の抜けた声を漏らす。

「ありがとうございます、神」

顔を上げ、礼を言う桃雪であったが、永遠がその言葉に答えることはなかった。どうやら、あの光の攻撃の中から、永遠が桃雪を助け出したようである。

「それにしても、凄い力ですねえ」

ゆっくりと立ち上がりながら、削れた山肌を見回し、思わず感心したように呟く桃雪。

「さすがは、歴代神の中でも最強と呼ばれた神」

「え…？」

笑みを浮かべた桃雪が、そっと前方を見る。その桃雪の言葉に、ウズラのすぐ横に立ったアヒルが、戸惑うように眉をひそめる。

“神”…？」

馴染みのあるその言葉を呟きながら、アヒルがどこか不安げに、ウズラを見上げる。

「神って…」

「やはり、こちらでしたか」

「やっと見つけただよ」

「あっ」

アヒルたちの登って来た、山道の方から聞こえてくる声に振り返

ると、そこにはアヒルも見覚えのある者たちの姿があった。それぞ
れ巨鳥を従えたスズメとツバメ、それにメガネを掛けたインテリ風
の女性、熊子と、巨大な男、塗壁である。

「スー兄、ツー兄。それに、あんた等は確か…」

「宇団、宇附うつきが一、“久守くもり”、九条熊子」

「同じく“寸守すもり”、朝比奈スズメ」

「同じく州守つもり：朝比奈ツバメ…」

「同じく奴守ぬもり、塗壁ぬり夫だあ」

戸惑うアヒルに答えるように、熊子たちが次々と、名を名乗って
いく。

「宇団、の…」

「お待ちせ致しました」

「へ？」

そう言ってその場に膝をつく熊子に、アヒルが間の抜けた声を漏
らす。熊子だけでなく、スズメ、ツバメ、塗壁の三人もその場に膝
をつき、敬意を示すように、深々と頭を下げる。

『我が神』

「え…？」

声を揃える四人のその言葉に、アヒルが戸惑いの色を濃くする。
眉間に皺を寄せると、答えを求めるように、ゆっくりとウズラの方
を振り向く。

「失われし宇団が勢揃いですかあ」

桃雪が現れた四人を見回し、そっと笑みを浮かべる。

「まさか、あなたとまた、こうして会うことになるとはねえ」

スズメたちへと流されていた桃雪の視線が、まっすぐにウズラを
向く。

「旧世代“宇うの神”、宇田川うたがわウズラ」

どこかわざとらしく微笑む桃雪に、ウズラがかすかに眉をひそめ
る。

「宇の、神…？」

ウズラは真剣な表情で桃雪を見つめたままで、アヒルのその呟きに、答える素振りは見せなかった。

「いえ、もう“元、宇の神”とお呼びした方がいいのでしょうか？」

桃雪のその言葉に、目を細めるウズラ。

「熊子」

「はい、神」

ウズラが名を呼ぶと、熊子がすぐさま返事をし、一步前へと出て、ウズラとの距離を縮める。

「倒れてる人たちの手当てを頼める？」

「勿論です」

命令とも言えぬ、ウズラの柔らかな言葉に、熊子が大きく頷く。

「塗壁、倒れている者たちをこちらへ。ツバメ氏も塗壁の手伝いを。スズメ氏は先に、弟君の治療を」

「あいだあ」

「うん…」

「へえへえ」

熊子の指示が飛ぶと、塗壁は、その巨体らしい力強さで、倒れている神や以団の者たちなど、両手に三人ずつを抱え、頂上から降りる道の方に行く熊子の後を追っていく。ツバメも同じように、倒れている者たちを運ぶ。その中で、治療を頼まれたスズメが一人、熊子の指示により、アヒルの方へと歩み寄って来た。

「ほら、右手出せ」

「スー兄…」

やって来た兄を見つめ、表情を曇らせるアヒル。

「どういうことだよ？親父が神って…」

「説明は後回しだ」

問いかけようとしたアヒルの言葉を、アヒルの右手を取りながら、スズメが強く遮る。

「今は、生き残ることだけ考えろ」

「……っ」

真剣な表情で言い放つスズメに、アヒルが眉をひそめる。ウズラが現れ、宇団の皆が揃ったというのに、スズメは少しの余裕も見せていない。それほどに、敵の力が強大なのであろう。

「いやはや、本当に懐かしい」

「桃雪……」

懐かしむ桃雪を見つめ、ウズラが桃雪の名を呼ぶ。

「満足かい……？」

スズメがアヒルの右手の傷を治療する中、アヒルたちよりも数歩、前へと出たウズラが、ひそめたその表情のまま、桃雪へと問いかける。

「言姫を利用し、韻を欺き、言葉で老いることを封じてまで長年待ち望んだ、自身の神を復活させて……」

「ええ、とても」

ウズラの問いかけに、桃雪は少しの間を置くこともなく、すぐさま答えた。

「二十数年前、我が神をこの地に封じられた時は、あなた方旧世代の神々を、ひどく恨んだものですけどねえ」

桃雪が過去を懐かしむように、そっと目を細める。

「でも、もう水に流しますよお。我が神はこの通り、復活したのですからあ」

「水に流す、か……」

ウズラが少し困ったように、肩を落とす。

「君がそうであっても、俺たちはそう簡単に、水に流すわけにはいかないよ」

「流すわけには、いかない……？」

微笑む桃雪に、厳しい表情を向けるウズラ。ウズラの言葉を繰り返した桃雪が、不思議がるような表情を見せ、大きく首を傾げる。

「だからといって、どうするんですう？」

首を傾げたまま、桃雪が試すように問いかける。

「知っているんですよ。あなたは二十数年前、“う”の力を、自ら手放したあ」

「手放した…？」

桃雪の言葉に耳を傾け、困惑した表情を見せているアヒルのすぐ横で、スズメが険しい表情を作る。

「二度と五神が揃わぬよう、自ら“う”の力を捨てることで、我が神の封印を完成させたのですう」

戸惑うアヒルに説明するかのように、丁寧な説明を行う桃雪。

「自ら音士としての、神としての道を閉ざした。素晴らしい覚悟ですよねえ」

桃雪がどこか、感心したように言う。

「捨てるって、どうやって…」

疑問を口にするアヒルに、桃雪がそっと微笑む。

「聞きたいですかあ？」

試すように問いかける桃雪に、アヒルが思わず、息を吞む。

「てめえ、余計なこと、言おうってんなら…！」

「いいよ、スーくん」

アヒルへと語りかけた桃雪に対し、アヒルの治療を続けていたスズメが身を乗り出し、威嚇するように荒げた声を放つが、それをウズラが冷静に止めた。

「け、けど！親…！」

言い返そうとしたスズメへ、ウズラが鋭い視線を向ける。

「仰せのままに、我が神」

ウズラの視線を受けると、スズメが言葉を止め、呼び名を神に言い直して、大人しく頷く。

「ここまできて、黙っているのも無意味だし、これ以上、息子に嘘はつきたくないからね」

「親父…」

少し自嘲気味な笑みを浮かべるウズラを見て、アヒルが眉をひそめる。

「話すといい」

「……相変わらず、馬鹿がつくほど、まっすぐな方ですねえ」

馬鹿にしたような、誉めるような、どちらとも取れる言葉を発する桃雪。

「そこまで覚悟を決めていらっしゃるというのであれば、話させていただきますしょう」

アヒルは真剣な表情を作り、桃雪の口から放たれる言葉を待った。

「あなたのお父上は、生まれたばかりの、自分の息子さんの体の中に、“う”の力を“埋め込む”ことで力を手放し、隠したんですよ
お

「え……？」

先程の問いかけへの答えを得て、アヒルが驚きの表情を見せる。

「む、息子って……」

「あなた方のお兄さん、朝比奈カモメ氏です」

「カー兄……」

カモメの笑顔を思い出し、アヒルがさらに困惑の表情となる。

「カー兄に“う”の力を？けど、カー兄は加守だったって……」

「えええ。埋め込まれた“う”の力を目醒めさせるため、僕が言姫に指示して、彼を加守としたんですう」

「……！」

桃雪の言葉に、衝撃を走らせるアヒル。

「初めから、カモメの中に力を隠したと、気付いていたのか？」

「その音士が生きている限り、文字の力が突然、消失することはまず、有り得ません」

ウズラの問いかけに、すらすらと答える桃雪。

「あなたは、何の関係もない人間を巻き込めるような人間でもありませんし、あなたの身内を見張っていたのですよ」

「それで、カモメを見つけたと」

「えええ」

ウズラの言葉に、桃雪が大きく頷く。

「まあ勿論、彼本人はそんなこと知りませんでしたしい、五十音士のことを知らないことになっているあなたは、そんな息子さんを止めるに止められなかったようですがあ」

桃雪が嘲るような笑みを浮かべると、ウズラは苦々しい表情で、そつと俯いた。

「彼は確かに、ウ段の生物形態を使っていましたがあ、でもその力は、完全なるものではなかった」

俯いたウズラに構うことなく、桃雪が話を続ける。

「僕らが、彼の力が完全になる日を待っていた、丁度その時」

「兄貴が、阿修羅に殺された」

「えええ」

先を読むように言葉を発したスズメに、桃雪が笑顔で頷きかける。
「あの時は正直、焦りましたよ。折角、用意したものが、すべてパアになってしまったと」

當時を思い出し、軽く頭を掻きながら、言葉を発する桃雪。

「諦めかけていた時、言姫から、死の間際の彼が、誰かへ残った力を送っていたという報告を受けたのです」

桃雪の視線が、まっすぐにアヒルを捉える。

——俺の力：これできつと、完全になるはずだから：——

「……っ」

阿修羅との戦いの際に出会った、カモメの言葉を思い出し、アヒルがハッとした表情となる。

「俺”…?”」

「えええ」

戸惑うように呟いたアヒルの言葉を、桃雪がしっかりと肯定する。

「あの時、“叶^{かな}え”の言葉により、彼があなたに伝えた力こそ、“う”の力」

伸ばされた桃雪の人差し指が、まっすぐにアヒルへと向けられる。

「だから僕は言姫を使い、色々と舞台を整えて、あなたを“う”の力に目醒めさせるところまで持っていていった」

「舞台って…」

今までの戦いを思い出し、アヒルが表情を曇らせる。相手が居て、相手が必死に戦って、アヒルもそれに全力でぶつかっていった戦いばかりだった。それがすべて、桃雪の神復活のために、用意されたものだったというのであれば、どうにも遣り切れない。

「そして、お兄さんからすべての力を受け継いだあなたは、見事に“う”の力に目醒めたあ」

桃雪の言葉を受け、アヒルが自身の左手に握られている、金色の銃へと視線を落とす。確かにアヒルは、カモメとの接触により、“う”の文字に目醒めた。桃雪の言葉は、恐らくは正しいのであろう。「まあ結果的に、宇の神のその身を切った努力も、あなたにより、パアになってしまったというわけですがねえ」

「……っ」

桃雪の視線が不意に突き刺さり、アヒルが思わず眉をひそめる。

「俺や君がただ、悪戯に巻き込んだだけだよ」

少しだけ体を横へと動かし、アヒルを見つめる桃雪の視線をその体で遮ったウズラが、桃雪へと自身を責めるような言葉を投げかける。

「元はと言えば、カモメに力を埋め込んだ、俺がすべて悪い」

「親父…」

ひたすらに自分を責めるウズラの背を見つめ、アヒルがそつと目を細める。

「俺たちの判断ミスだ。二十数年前、封印なんてするべきじゃなかったんだ」

「ええ、そうですねえ」

ウズラの言葉に頷き、桃雪が笑みを浮かべる。

「尊き我が神を封じるだなんて、あなた方の判断は本当に…」

「きちんと、終わらせるべきだった」

はつきりとした口調で桃雪の声を遮るウズラに、桃雪が言葉を止め、眉をひそめる。

「終わらせる…？」

「ああ。あの日、俺たちの手できちんと、すべてを終わらせてさえおけば、後生の音士たちを、こんなに多く巻き込むこともなかったんだ」

悔いるように言いながら、ウズラが顔を上げ、まっすぐに桃雪を見つめる。

「だから今日、この場で、すべてを終わらせる」

「フフフっ…」

決意した表情で、迷いなく言い切るウズラであったが、ウズラのその言葉に、桃雪は吹き出すように笑い声を零した。

「終わらせる…？あなたが？どうやって？」

まるで見下すように、ウズラへと問いかけを向ける桃雪。

「また、息子さんの言玉を使って、言葉を使う気ですかあ？言っておきますけど、あの程度の攻撃では、我が神どころか僕すら、倒せませんよお」

両手を横へと広げた桃雪が、流暢に言葉を続ける。

「“う”の力を捨てたあなたに、尊き我が神を終わらせることなど…！」

「相変わらず、うるさい人だねえ」

桃雪の言葉を遮るように、割って入ってくる声。

「二十数年振りでも、やっぱり耳障りだよお」

「扇子野郎！」

「雅も」

頂上へと登る道の方から、その場へと姿を現したのは、雅を従えた為介であった。アヒルとスズメが二人の方を振り返り、それぞれの名を呼ぶ。

「旧世代“為の神”、井戸端為介…」

「神様よりオシャレりなところは、相変わらずだねえ、桃雪」

現れた為介の姿を見つめ、表情をしかめる桃雪に、為介がどこか親しげに声を掛ける。笑顔を崩さぬまま、その瞳だけを鋭くして、為介が桃雪から永遠へと、視線を移す。

「君も、相変わらずだね」

「……っ」

為介が挨拶をすると、ずっと無表情だった永遠が、口角を上げ、小さな笑みを浮かべた。

「君は年を取ったね、為介…」

永遠のその言葉に、為介の表情が一瞬、曇る。だが為介はすぐに

また、柔らかに微笑んだ。

「いくらフレッシュでイケイケのボクとはいえ、二十数年も経っていれば、さすがにねえ」

「そう。でも…」

為介の言葉に答えた永遠が、ゆっくりと左方を振り向く。

「あなたは変わらないね」

笑顔を見せたまま、振り向いた方角へと、言葉を向ける永遠。

「恵…」

「……………」

永遠が振り向いたその先、声を掛けたその先に立っていたのは、いつも以上に険しい表情を見せた恵であった。恵は怒るような、怯えるような、悲しむような、いくつもの感情が滲んだ瞳で、まっすぐに永遠を見つめている。

「遠久…」

恵がそう呼ぶと、永遠はどこか嬉しそうに笑った。

「恵の神まで…成程お。旧世代の神々まで大集合ですかあ」

現れた為介を、恵を見回し、桃雪が感心するように言う。

「ですが今更、昔の神様が集まったところでえ…」

「お前はさっき言ったな？桃雪」

「え？」

確認するように問いかけてくる恵に、桃雪が言葉を途中で止めて、少し戸惑うように顔を上げる。

「“私が本来の文字“ゑ”で戦っていたなら、お前に遅れを取ったりはしなかっただろう“と」

「えええ。確かに、そのようなこと言いましたねえ」

涼しげな笑みで、桃雪が頷く。

「それが、何かあ？」

「私や為介が、本来の文字を使わずに、“め”や“い”の文字を使っていたのは、かつて、その力により施した封印に、影響を与えないようにするためだった」

問いかける桃雪に、恵は鋭い表情で、言葉を続ける。

「旧世代神の五母、“あ”“ゐ”“う”“ゑ”の文字の力による遠久の封印は、近くで何度もその力を使えば、解けてしまう可能性が高かったからだ」

険しい表情を見せたまま、恵がさらに言葉を放つ。

「だがもう、封印が解けることを懸念して、自身の文字を敬遠する必要もない」

「何…？」

そう言っただけで、右手の中の緑色の言玉を、強く握り締める。

「迷うことなく、私は、私のこの文字を使える」

握り締められた恵の言玉から、強い緑色の光が溢れ出る。その光は先程、桃雪が恵と戦った時とは、比べものにならないほど、強いものであった。

「ま、まさか…！」

「五十音、第四十九音」

恵が、言玉を握り締めた右手を突き出す。

「“ゑ”、解放…！」

「ク…！」

さらに強く放たれる光に、桃雪が思わず目を細める。

「少し下がっててええゝ雅クン」

「はい」

雅を後ろへと下がらせた為介が、持っていた扇子を、真っ青な言玉の姿へと変え、握り締める。

「第四十七音“ゐ”、解放」

為介の手の中で、青色の強い光を放ち始める言玉。為介の光が加わり、さらに眩しくなった桃雪が、光に目を強く刺激されながらも、その二つの光を直視する。

「まさか、旧字の力を…！？」

桃雪が焦ったように、少し荒げた声を発する。

「扇子野郎と恵先生が、自分の文字を…」

「スーくん、アーくんの傷は？」

桃雪たちが為介と恵の光に集中している隙に、ウズラが後方を振り返り、アヒルとスズメの元へと歩み寄っていきながら、スズメへと声を掛ける。

「もう治ってる」

「そう。じゃあ他の人たちの治療をお願い」

「仰せのままに、神」

ウズラの言葉に短く頷くと、スズメはその場を駆け出し、ツバメと塗壁が運んでいる他の者たちのもとへと向かっていった。しばらくスズメの背を見た後、アヒルが戸惑うように、目の前のウズラを見上げる。

「親父……」

「謝罪も説明も、後でしっかりとするよ」

見上げるアヒルへと、ウズラが穏やかな笑みを向ける。

「だから今は、何も言わずに、力を貸して」

ウズラのその瞳は、まっすぐ真剣で、アヒルが信じるには、十分過ぎるほどの力があった。

「わかった」

アヒルもまっすぐにウズラを見つめ返し、大きく頷く。

「すべての神を揃えて……」

旧字を解放させた為介と恵、そして並んで立ったアヒルとウズラを見回し、桃雪が眉をひそめる。

「また性懲りもなく、我が神を封印するとても……？」

「ああ」

桃雪の問いかけに、恵がすぐさま頷く。

「だが封印するのは、“を”の文字だけだ」

厳しい表情を見せた恵が、はっきりと言い放つ。

「“を”の文字封印後、お前を、お前の存在を終わらせる」

「……………」

恵の視線を浴び、いつの間にか笑みを止めた永遠が、また無表情

となつて、少し目を細める。

「“終わらせる”…？」

その恵の言葉をゆっくりと繰り返し、首を傾げる永遠。

「そんなこと、無理だよ」

一片の可能性もないかのように、永遠がはっきりと言い切る。

「俺は、終わらない。終われない」

永遠の言葉が、静かな山の頂上に響き渡る。

「俺と同じ“永遠”を生きてる恵になら、わかるはずだろう…？」

「……っ」

問いかける永遠に対し、恵が表情を曇らせる。

「永、遠…」

二人の会話を聞きながら、以前の、恵との会話の中に何度か出てきたその言葉が引つ掛かり、眉をひそめ、そっと呟くアヒル。

「えええ。まあ仮にそのことがなかったとしてもお、我が神の存在は終わらないでしょう」

また永遠の前へと出てきた桃雪が、追い込まれた様子など一切ない、余裕の笑みを見せる。

「我々にはあ、まだもう一人、味方が居ますからねえ」

「何だと…？」

「フハハハハ…！」

『……！』

どこからともなく響いてくる笑い声に、戸惑いの表情を見せていた恵や皆が、一気に警戒するような態勢となつて、周囲を見回す。

「ど、どこから…？」

「ここじゃよお！“浮かべ”！」

『うううう…！』

激しく揺れる地面に、大きく体のバランスを崩すアヒルたち。立っていられずに、思わず地面に手をつく。揺れ動く頂上に地面が、先程和音の割った場所から、さらに大きく碎け割れ、そこから巨大な金色の生物が姿を現す。

「グアアアア：！！！」

言ノ葉山の中から這い出るように、割れた地面から頂上へと姿を現したのは、翼の生えた獅子のような巨大な、全身金色一色の、現実には存在しない生物であった。存在しないはずの生物であるというのに、どこか見覚えのあるその姿に、生物を見上げるアヒルが、眉をひそめる。

「これは…」

「フハハハ！ 久し振りじゃのう、安の神！」

響くその声に、アヒルがさらに顔を上げ、巨大なその生物の、頭部の上を見上げる。そこに見える、生物と比べると、あまりに小さい人影。

「今日は、わしの失敗作は一緒じゃないのかのお？」

「お前は…！」

「浮世現…！」
うきようつ

身を乗り出したアヒルの代わりに、名を強く叫ぶ恵。そこに立っていたのは、礼獣という名の生物を生み出し、阿修羅と共に言ノ葉町の言葉を奪った、最初の墮神にして、忌たちを生み出した張本人でもある、堕ちし“宇の神”、現であった。

「なんで、お前がここに…！？」

「礼獣を失い、丁度、暇を持て余したところに、その毛守と出くわしてのお」

険しい表情で問いかけるアヒルに、現が笑みを浮かべたまま答える。

「新しいものも生み出せそうじゃし、面白そうじゃから、此奴等に附いてみることにしたんじゃよお」

「最悪の組み合わせだねえ」

現の言葉を聞きながら、為介がどこか呆れたように呟く。

「しかし、この町は」

生物の上、言ノ葉山頂上よりもさらに上方から、はっきりと見える言ノ葉町の景色を見回し、現が少し煩わしげな表情を見せる。

「折角、言葉ごとキレイに消してやろうと思ったのに、失敗したみたいじゃのお。実に残念」

笑ってそう言いながら、現が軽く両肩を落とす。

「所詮、阿修羅は、堕神ではなく、“愚神”であっただいことかのお？フハハハ！」

「てっめえ：！」

高らかと笑いあげる現に、アヒルが大きく顔をしかめる。いくらカモメの仇であるとはいえ、命懸けで戦った相手である阿修羅を悪く言われることは、我慢がならなかった。

「挑発ばかりしてしないで、早くして下さい。現」

いつの間にか、現と同じ、巨大生物の頭部の上へと上がっている桃雪が、現へと声を掛ける。桃雪の後方には、永遠の姿もあった。

「何の為に、あなたを仲間にしたと思っているんです？」

「わかっておるよ」

桃雪の方を振り返った現が、その厳しい言葉に、どこかうんざりした様子で頷く。

「“浮かべ”！」

『あっ：！』

現が先に言玉のついた杖を、高々と振りかざし、言葉を放つ。すると、巨大生物の全身から、強い金色の光が放たれ、背中の両翼が大きく広がり、生物の巨体が一気に空へと舞い上がる。空へと上昇する生物と、その上に乗った永遠たちに、皆が思わず、焦ったように身を乗り出す。

「逃げる気か：！？」

「出直だけですよお」

食ってかかるように問いかける恵に、上空から桃雪が、冷静な声を返す。

「すべてを終わらせる、その為にねえ」

「すべてを、終わらせる：？」

桃雪の言葉を繰り返し、ウズラがそっと表情を曇らせる。

「えええ。ねえ、神？」

「……………」

振り向いた桃雪の呼びかけに答えぬまま、永遠は無表情で、ただ下方を見下ろす。

「では、また」

「“唸^{うな}れ”」

「グガアアア！」

桃雪の挨拶と同時に、現が言葉を発すると、大口を開いた生物が、アヒルたちの居る言ノ葉山の頂上を目がけて、巨大な光の塊を放った。

「マズイ…！」

倒れている皆の居る後方を振り向きながら、恵が険しい表情を見せる。恵だけでなく、皆が険しい表情で、何とかしようと言玉を握り締めるが、それよりも先に、アヒルが左手の金銃を突き出した。

「“受け止めろ”！」

アヒルが言葉と共に弾丸を放つと、大きな金色の弾丸が上空で一気に広がり、光の膜となって頂上を包み込み、向かってきた光塊を真正面から受け止める。

『ううう…！』

二つの力のぶつかり合いに、強く光が弾け、頂上に居る者たちが皆、思わず目を伏せた。視界が暗くなるが、いつまで経っても、衝撃が落ちてくることはなかった。戸惑った皆が、恐る恐る閉じていた瞳を開く。

「ふう〜」

そこには、一息つきながら、左手の銃を下ろすアヒルの姿があった。空を見上げるが、落ちてきていたはずの光は、きれいさっぱり無くなっている。

「あれだけの力を、受け止めきったのか…？」

「アヒルくん…」

どこか啞然とした表情で、アヒルを見つめるスズメとツバメ。

「あいつ等は…!？」

目を開いた恵は、アヒルの力に驚く様子はなく、すぐさま上空を見上げ、永遠や現たちの姿を探す。だが、すでに空に、あの巨大な生物の姿はなく、ただ青い空が広がっていた。

「クソ…!」

険しい表情を見せた恵が、右足に言玉を吸収させ、その場を駆け出しているこうとする。

「恵!」

「……っ」

だが、その恵の行動は、ウズラの強い呼びかけにより、止められた。

「ウズラ…」

「深追いは危険だよ。それに…」

振り返った恵に、ウズラが厳しい表情を向ける。

「君が追ったところで、どうにも出来ない」

「……………」

ウズラの言葉を受けた恵が、ウズラに反抗することはなく、ただ悔しげに唇を噛み締め、深く俯いた。

「はぁ、久々に文字解放したら、疲れちゃったぁ」

がっくりと肩を落とした為介は、先程までとは異なり、間の抜けた声を漏らすと、握り締めていた言玉を元の扇子の姿へと戻し、自らに風を送る。

「為介さん」

「雅クンも、熊ちゃんたちと一緒に、イクラクンたちの治療、手伝ってあげてえ」

「はい」

扇子を扇ぐ為介のもとへと歩み寄った雅は、為介の指示に頷くと、すぐに熊子たちの方へと向かっていく。塗壁により運ばれた神や神附きの面々が、スズメにより、順番に治療を受けていた。

「神!」

「ん？」

両手の銃を言玉へと戻していたアヒルが、聞き覚えのあるその声に振り返る。

「簞也」

少し慌てたような表情で、アヒルのもとへと駆けてくるのは、簞也であった。和音と共に避難したはずなのだが、やはりアヒルのことが気になり、戻って来たのだろう。

「神、先程の光は…！あ、あれ？」

他の者は気に留めず、一番にアヒルのもとへと駆け寄り、問いかけようとした簞也であったが、アヒルのすぐ横に立つその人物の姿を見つけ、戸惑うように首を傾げる。

「ウズラ、さん？」

「どうも、簞也くん。無事で何より」

戸惑ったままの簞也へ、ウズラが穏やかな笑顔を向ける。

「ど、どういうことだ？神」

「それは…」

振り向いた簞也に問われたアヒルが、真剣な表情を作り、まっすぐにウズラを見つめる。

「これから俺が、聞くとこだ」

「そうだね」

アヒルの視線を逃げることなく受け止め、笑顔を見せたウズラが、大きく頷く。

「そっちはどうかな？熊子」

「粗方、治療は終わっています。我々の力で、全員運べます」
「そう」

素早く報告する熊子に、ウズラが納得した様子で答え、再びアヒルの方を見る。

「とりあえず韻本部に行こうか。囁ちゃんたちや、“謡”^{よう}の皆のことも気になるし」

そう言ってアヒルの肩を叩くと、ウズラが右方を振り向く。

「君も一緒に、来てくれるね？」

優しい口調で、ウズラがそつと声を掛ける。

「和音」

「……はい」

大きな木の横に佇んだ和音は、ウズラの言葉に、素直に頷いた。

Word. 68 うノ神ノ真実 (3)

韻本部、上層部会談室。

「どういうつもりだ!？」

広い部屋の中央には、年齢層高めの老人たちが、韻の黒い着物を纏った従者たちにより、床に座らされ、両手足を縄で縛られ、拘束されていた。老人たちの代表であろう、小柄の白髪の老人が、怒りを前面に押し出した表情で、勢いよく声をあげる。

「我々、上層部をこのような目に遭わせて、覚悟は出来ているのであろうな!？ 宇田川茜!」

韻上層部の者らしきその老人の見上げる先で、静かな表情を見せているのは、アヒルたちを牢から救い出した、内部組織“謡”の女性、茜であった。

「私は、私が正しいと思う判断に、従っただけです」

「何だと…!？」

「“遠の神の力を使い、世界を自身の自由にしよう” などという考えを持つ者たちに、韻を任せてはけません」

「うっ…!」

茜の鋭い言葉に、老人は大きく表情をしかめ、黙り込む。

「茜様」

従者に呼ばれ、茜が振り返る。

「言ノ葉山に行っていた安の神たちが、戻られました」

従者のその言葉とほぼ同時に、会談室の大きな扉が開き、そこからアヒルを初めとする安団の皆や、ウズラたち宇団と恵、為介、そして和音が続々と、部屋の中へと入って来た。

「アヒル」

集団の前の方を歩くアヒルを見つけ、茜が嬉しそうに笑みを零す。

「こ、言姫…!」

アヒルに言葉を掛けようとする茜の声を遮り、茜に責められてい

た老人が、救いを求めるように、部屋へと現れた和音の名を呼ぶ。

「こ、これはどういうことだ！？お前は言ったじゃないか！お前の言う通りにさえしていれば、すべてがうまくいくと、そう…！」

必死に叫ぶ老人の言葉にも、表情を崩さず、ただ落ち着き払った表情を見せた和音は、アヒルの横を通り過ぎ、茜のすぐ目の前へと立った。

「今、この時より、韻のすべての決定権を、謡へお渡しいたします」
和音の凜とした声が、静かな部屋中に響き渡る。

「な、何を言っている！？勝手なことは許さんぞ！言ひ…！」

「処罰を」

反論する老人の声を、和音が強く遮る。

「我々に処罰を、お願いいたします」

そう言うと、和音は茜へ向け、深々と頭を下げた。頭を下げたまま、まったく顔を上げようとしないうちに和音を見て、茜がそっと目を細める。

「拘束中の者たちを、特別収容施設へ」

『はい』

茜の指示に従者たちが一斉に頷くと、従者たちは、嫌がったり、抵抗を見せる韻上層部の者たちを、力強く押し引きし、部屋の外へと連れていった。

「彼女も」

「はい」

小さく付け足されたその指示に、茜のすぐ横に立っていた従者が頷くと、俯いていた和音の肩をそっと押し、上層部の者たちに引き続くようにして、和音を部屋の外へと連れていく。

「安の神」

連れられていっていた和音が、アヒルの横で立ち止まる。和音の背を押していた従者も、そこで立ち止まり、和音を無理やり進めようとする素振りは見せなかった。

「謝って許されることではないと、理解しています。ですが、この

言葉だけは、伝えさせて下さい」

和音がまっすぐにアヒルを見つめた後、深々と頭を下げる。

「申し訳ありませんでした」

「言姫さん…」

頭を下げる和音に、掛ける言葉も見つけられず、アヒルはただ目を細め、和音を見つめた。しばらくの時間が経つと、和音はゆっくりと顔を上げ、アヒルの後方に居る者たちにも一礼して、再び従者と共に、部屋の外へと歩き進めていった。

「わ、和音…!」

連れて行かれる和音の姿に、箆也が追いかけようと、思わず身を乗り出す。

「待て」

恵ががっしりと箆也の肩を掴み、箆也を止める。

「お前の気持ちもわからんでもないが、あいつのやったことは、そう簡単に許されることじゃない」

「先生…」

諭すように言う恵に、そっと目を細める箆也。

「あいつもそれをわかっていいるからこそ、自ら処罰を願い出たんだ。これは、あいつのケジメだ。わかってやれ」

恵のその言葉に言い返すこともなく、箆也はただ、深く俯いた。

「残った者たちは、遠の神の探索と、運ばれて来た者たちの手当ての続きを。これから、韻の指揮は私が取ります」

『は!』

堂々と言い放った茜の言葉に強く頷くと、部屋に残っていた、謡の者だけではなく、本来、韻の者であった数十名の従者たちは、茜の指示に従い、一斉に部屋の外へと飛び出していった。

「さてと」

従者がすべて、部屋の外へと出ると、茜が少し肩を落とし、額に手を当てる。

「ここまではいいとして、これから、どうしたものか…」

「ホントだねえ」

横から聞こえてくる暢氣極まりない声に、茜が一瞬表情を止めて、ゆっくりと振り向く。

「ホント、どうするう？茜ちゃん」

「……………」

茜へと馴れ馴れしく声を掛けたのは、戦いの場に立っていた時とはまるで違う、いつものように緩みきった笑みを浮かべたウズラであった。そんなウズラを見つめ、茜がしばらくの間、固まる。

「アヒル、大丈夫ですか？」

「はあ！無視！？」

何事もなかったかのようにアヒルの方を振り向き、声を掛ける茜に、ウズラが激しくショックを受ける。

「怪我は？」

「あ、ああ。スー兄に治してもらったから、もう全然」

アヒルの身を心配する茜に、少し戸惑いつつ、答えるアヒル。

「ううう、茜ちゃんが冷たいよお」

「さっきは、まるで別人みたいに頼り甲斐あったのに、やっぱりいつものアホ親父か…」

床にしゃがみ込み、落ち込んでいる父の姿を横目に見て、アヒルが呆れたような顔つきとなる。

「ホント、戦いの時は別人だよねえ、ボクもいつつも、“本当に同じ人？”って思っちゃうもおくん」

「まあ、為介さんですけどね…」

呆れかえるアヒルへと声を掛ける為介の横で、雅がひっそりと呟く。

「ってか」

アヒルが思い出したように、茜の方を見る。

「親父の知り合いなのか？最初会った時から思ってたけど、なんで俺の名前知ってたんだ？あんた」

「え？」

アヒルの疑問視する瞳を受け、茜が戸惑うように目を丸くする。

「まあ、そりゃ知ってるだろうねえ」

茜の代わりに答えたのは、いつの間にか立ち上がったウズラであった。ウズラが歩を進め、茜のすぐ横へと並ぶ。

「だって、アーくんのお母さんだもおくん！」

「へ：？」

笑顔で茜を指差すウズラに、アヒルが一瞬、固まる。

「えええええ！？」

次の瞬間、目を見開き、大声で驚きあげるアヒル。

「いい反応：」

「ま、予想通りだけどなあ」

驚いているアヒルを見ながら、落ち着いた様子で言葉を交わすスズメとツバメ。どうやらこちらは、茜が母親であることを知っていたようである。

「か、かかかか母ちゃん！？」

「うん、そお」

激しく動揺するアヒルに、ウズラが暢気に頷きかける。

「だ、だって母ちゃんは、俺が物心つく前に、親父に愛想つかして出て行ったって：！」

「うん。出て行って、韻入って、内部組織作っちゃったんだよお」

茜ちゃんはあ

「マ、マジ：？」

茜を指差したまま、ごくごく自然に答えるウズラに、アヒルが啞然とした表情となる。父が父だけに、母が愛想をつかして出て行ったことに、特に疑問は持っていなかったが、こんな形で再会するとは、思ってもいかなかった。

「父が旧世代“宇の神”で、母が韻内部の者とはな」

「よくよく考えてみると、凄い家系よねえ。アヒるん」

こちらにも驚いた様子の箆也と、その横で感心するように微笑む囁。「というか、さっきから：」

「んん？」

小さく落とされる茜の声に、ウズラが笑顔のまま、大きく首を傾げる。

「なあに？茜ちゃっ…」

「人、指差してんじゃねえよお！ヒゲがあ！」

「ぎゃあああ！」

「いいっ!？」

問いかけようとしたウズラが、荒々しく叫びあげた茜に勢いよく殴られ、壁際まで吹き飛ばされていく。吹っ飛んでいく大きなウズラの体に、目玉が飛び出しそうなほどに驚くアヒル。

「う、うううゝ痛いよお。茜ちゃゝん」

「黙れ、ヒゲ。さあ、話の続きをしましょうか。アヒル」

「え？あ、ああ…」

床に倒れ込み、痛がるウズラに冷たい言葉を吐き捨てると、茜がすぐさま満面の笑みとなって、アヒルの方を振り向く。茜のあまりの変わりように、アヒルはただ呆然とする。

「ど、どうしよう…すっげえ怖え」

「逆らうなよお？ウチの母ちゃんは、ツバメの呪いより怖えからな」
「うん…あれには、僕の藁人形も効かない…」

実の母に怯えるアヒルに、スズメとツバメが背後から、忠告するように声を掛ける。

「で？結局のところ、あの変態馬鹿マヌケ親父に愛想をつかして、出て行ったというのは本当なの…？」

「おい。人の親にちったあ、氣い遣え」

齒に衣着せぬ言葉で、茜へと問いかける囁に、アヒルが思わず顔をしかめる。

「まあ、愛想つかしていたのは、もっと前からなんですけどね」

「酷いよおゝ茜ちゃゝん」

笑顔で答える茜に、遠くから、倒れたまま嘆くウズラ。

「変態馬鹿マヌケクソヒゲ親父は、ともかくとして」

「増えてるが…？」

さりとて言う茜に、箆也も表情を歪める。

「四人のカワイイ息子たちを残していくことは、本当に心苦しかったのですが…」

「私が頼んだんだ」

茜のすぐ横へと、出てくる恵。

「和音と韻に不審な動きがあるから、韻を内部から見張ってほしい”ってな」

「韻の、内部…」

説明した恵の言葉を繰り返して、箆也が少し考えるように俯く。

「そういえば、あなたは前、始忌^{シキ}の情報を得てきた時、韻内部にちよつとした知り合いがいると…」

「ああ。あれはこの、茜のことだ」

顔を上げた箆也の言葉に、恵が大きく頷く。

「私やウズラじゃ面が割れてる上に、その時はすでに五十音界から追放食らってたからな。茜に頼むしか、なかったんだよ」

恵が少し視線を落とし、ゆっくりと肩を落とす。

「事情があったとはいえ、幼いお前等から、母親を奪ってしまったこと、申し訳なく思う」

「恵が謝ることではありませんよ」

アヒルたち兄弟に詫げる恵に対し、茜が優しく声を掛ける。

「あの時の、あなたの判断は間違っていないかった。それに」

茜がゆっくりと、アヒルやスズメ、ツバメの方を見る。

「この子たちはこんなに、立派に育っているではありませんか」

大きく成長した三人の息子の姿を瞳に映し、茜は満足げな笑みを浮かべた。

「それはもう、お父さんが男手一つで頑張って育てたからでえ…！」

「うるさい、ヒゲ」

「いやあああ！」

やっと立ち上がり、再びやって来たウズラが、またしても茜の拳

により、勢いよく殴り飛ばされる。

「きつと、カーくんがしっかりしてくれたからですねえ」

「やっぱ怖いって…」

すぐさま笑顔を向ける茜に、アヒルがどこかげっそりとした表情となつて呟く。

「カモメさんは、知って…?」

「いえ。私からは何も話していきませんでした」

眉をひそめ、問いかける籠也に、茜が少し表情を曇らせて答える。
「ですが、何となくは察していたと思います。人の心に、よく氣のつく子でしたから」

懐かしむように目を細める茜の横で、恵が哀しげに俯く。

「スー兄とツー兄は、知ってたのか?」

「ああ。五年前、五十音士になって、宇団に入った時に会った」
振り返ったアヒルに、スズメがすぐに答える。

「内緒にしてて、ごめんね…アヒルくん…」

「別にいいよ。音士になる前の俺にじゃ、言うに言えなかったんだろうし」

謝るツバメに、アヒルが笑みを向ける。阿修羅の一件もあったので、スズメとツバメがアヒルに言えず、苦しんでいたことは、アヒルも十分に理解していた。

「て、てか、そうだ。カー兄といえば俺、親父に聞かなきゃいけないことが、あったんだった!」

思い出した様子で大きく手を叩き、アヒルが倒れ込んでいるウズラの方を振り向く。

「親父が旧世代の神だったってことの説明と、それとっ…」
アヒルが少し躊躇うように、一瞬の間を置く。

「あの、“遠の神”の永遠って奴のこと」

『……っ』

アヒルから永遠の名が出ると、ウズラや茜、そして恵たちが、一斉にその表情を曇らせる。途端に重くなる空気に、永遠という存在

の大きさを、思い知らされるようであった。

「それに関しては、私たちも一から説明を聞きたいわね……」

一歩前へと出た囁が、茜へと鋭い視線を向ける。

「アヒルさんが居るから一応、この場には集まらせてもらったけれど、言ノ葉山でのことを知らないから、正直さつきからサッパリ状態なのよね……」

『うんうん』

囁の後ろから、囁の言葉に大きく頷く保と七架。アヒルと箆也を言ノ葉山へ向かわすため、韻の追っ手と戦っていたため、遠の神復活などの情報を、まったく得ていないのであった。

「ええ。それは勿論、一から説明させていただきます」

しっかりと頷き、茜が囁たちへと笑みを向ける。

「あなた方の、いえ、この世界中のすべての人々の言葉に、関わる問題ですから……」

「……………」

茜のその言葉に、アヒルがそっと俯き、険しい表情を見せる。

——「无^ん」……この世で唯一、すべての言葉を、終わらせることの出来る文字ですよ——

「……………」

思い出される桃雪の言葉に、永遠の力に、込み上げる不安を閉じ込めるように、きつく拳を握り締めるアヒル。

「とりあえず、場所を移しましょうか」

「うん」

茜が振り向き、声を掛けると、やっと立ち上がった様子のウズラが、真面目な表情を見せて頷く。

「長い話に、なりそうだからね……」

そう言ってウズラは、そっと視線を落とした。

Word. 68 うノ神ノ真実 (4)

韻本部、内部組織“謡”中央会議室。部屋の中央に置かれた円卓に、茜、ウズラを中心に、アヒルたちやスズメ、ツバメ、恵や為介といった面々が、連なって腰を掛けている。

「成程ね…」

話を聞き終えた囁が、厳しい表情を見せながら、ゆっくりと頷く。
「つまり、二十数年前、ここに居るアヒるんパパや、恵先生、何でも屋の店主さんたち、旧世代の神々の力により施された、言ノ葉山の封印が…」

「言姫様が集めた、現五神の五つの言玉によって解かれてしまった」
「それで、中に眠っていた神様が、目醒めてしまったと」

囁、七架、保の三人が、三人のみが知り得なかった、言ノ葉山で起こった出来事を、再度確認するように、次々と言葉を発していく。
「そして目醒めてしまったのが…」

「五十音、最後の神、“遠の神”永遠」

「ええ」

三人の言葉を肯定するように、茜が大きく頷く。

「そして、彼の持つ言葉、“終えろ”こそが、禁断の文字“无”」

「……………」

茜からその文字の名が出ると、アヒルはより一層、険しい表情を作った。

「この世で唯一、すべての言葉を終わらせることの出来る文字として、我々韻や、恵たち当時の神々が、恐れて止まなかった文字です」
「具体的には、こういった力なのだ？」

アヒルの横に座った籠也が、少し戸惑うように茜へと問いかける。
「すべての言葉を終わらせると言われても、あまりピンとこないのだが…」

「あなたは、その目で見たね？アヒル」

「え？」

箆也に問われた茜が、答えを促すように、アヒルの方を見る。俯き、永遠の力を思い出していたアヒルは、少し焦った様子で顔を上げた。

「あ、ああっ」

どこか歯切れ悪く、頷くアヒル。

「け、けど、見たつつつても、一瞬強く光って、次の瞬間には、俺の銃はボロボロで、イクラやエリザが倒れててってことくらいしか……」

「それこそが、“終えろ”の力なのです」

「へ？」

茜の言葉に、アヒルが眉をひそめる。

「五十音士は、言葉の力により強さを得て、そして、言葉の力を持つてして戦う者たち」

表情を曇らせた茜が、視線を机の上へと落としながら、言葉が続ける。

「その言葉が終わらされては、五十音士は、力を得ることが出来ず、戦うことも出来ない」

「つまり、遠の神がその“无”の文字を持っている限り、私たちが、五十音士では勝てないと……」

「そうなりますね」

「そんな……」

小さく頷く茜に、七架がさらに眉間に皺を寄せる。

「ですから、旧世代の神々も、他に方法を見つけないことが出来ず、永遠を言ノ葉山に封印するに至ったのです」

茜がそう言いながら、ウズラや恵の方へと視線を移す。

「なら、その時のように、もう一度、封印してしまえばいいのではないのか？」

箆也が鋭く、茜へと提案する。

「我が神が“う”の文字にも目醒めたというのであれば、すべての

神は揃っている。それは可能はずだ」

「そうですね」

正論である簞也の言葉を、認めるように茜は頷くが、その表情は冴えず、どこか不安げであった。

「母さん？」

「勿論、封印は可能だと思います」

首を傾げ、戸惑った様子でアヒルが呼びかけると、茜は重い口を開いた。

「ですが、永遠が同じ手を二度も食らい、大人しく封印されるとは思えません」

「神付きである桃雪も、またみすみす、自身の神を封印させるとも思えないしな」

茜の声に、固く腕組みをした恵が、言葉を付け加える。

「それに…」

さらに口を開いた茜が、さらに表情を曇らせていく。

「二十数年前の封印も、決して予定通りに、うまくいったわけではありません」

机に置かれた茜の両手が、強く握り締められる。

「大きな犠牲を、払いました…」

「え…？」

茜のその言葉に、アヒルが戸惑うように眉をひそめる。その言葉に、苦しげな表情を見せたのは茜だけではなく、ウズラや恵、為介もそうであった。

「犠牲って…」

「その封印を施した時に、死んだんだよ」

アヒルが問いかける前に、苦しげな茜に代わって、ウズラが口を開いた。

「当時の“安の神”、旧世代の“安の神”が…」

ウズラが横の方へと視線を逸らし、目を細めて、どこか悲しげに俯く。

「安の神、が…？」

「うん。封印には、強大な力を要する。また行ったとして、どれほどの犠牲が出るのかもわからない」

厳しい表情を作り、言葉が続けるウズラ。

「あの時は“安の神”一人が犠牲になったけど、次にやれば、全員が命を落とすことだって有り得る」

「そんな…」

ウズラの言葉を受け、アヒルがさらに険しい表情となり、言葉を失う。このどうにも出来ない事実が伝わったのか、部屋中に、重い空気が立ち込めた。

「で、ですが」

その空気を切り裂くように、為介の隣に座った雅が、声を発する。
「例え封印することは出来なくとも、皆の力を合わせれば、永遠を倒すことが出来るのでは？」

「そうよね…いくら相手の力が強大といっても、こちらには、これだけの人数が居るんだし…」

雅の言葉に賛同するように、囁も続く。

「何なら、治療中の他の団の人たちも待って、入念な作戦でも練れば…」

「そうだよね！皆で力を合わせれば、きっと何とか…！」

「無理だ」

「え？」

席から立ち上がり、明るく言葉を放とうとした七架の声を、鋭く遮ったのは、恵であった。言葉を止めた七架が、席を立ったまま、目を丸くして、恵を見下ろす。

「無理って…」

「お前らが束になってかかったところで、あいつには勝てない」

「何故だ？」

強く言い切る恵に、箆也が眉をひそめ、問いかける。

「力不足であるというのなら、阿修羅の時のように、また皆で修行

をすればっ…」

「力の問題じゃない。もっと根本的な問題だ」

厳しい表情を見せ、恵がさらに固く、腕を組む。

「お前等とあいつとじゃ、生きている時間軸が違う…」

「……っ」

恵のその言葉に、ハッと目を見開くアヒル。

——“永遠”の言葉をかけた私と、お前たちとは、生きている時間軸そのものが異なる——

「永、遠…」

恵から聞いたその言葉を思い出し、俯いたアヒルが、小さく声を零す。

「時間軸だと？何だ、それは。どういう意味だ？」

「それを話すと、また長くなります」

どこか恵を庇うように、簞也の問いかけに代わりに答えて、穏やかに微笑む茜。

「その話はまた後で、することにしましょう」

茜の言葉を受け、そっと俯く恵。

「それに恐らく、作戦を練ったり、修行をしたりするような時間は、我々にはありません」

『え…？』

その言葉に、アヒルたち安団の面々が、一斉に首を傾げる。

「それは、どういう…」

「浮世、現…」

「何？」

すぐ横に座る保の声に、問いかけようとしていた簞也が振り向く。その名を口にした保は、怖いとさえ思えるほどに、いつになく真剣な表情を見せていた。

「ええ、そうです。浮世現がこちら側についたことで、状況は大き

く変わってしまいました」

「どういう、ことだ？」

茜の言葉の意味を理解出来ず、アヒルが戸惑いながら、茜へと問う。

「あなたが以前、戦った“礼獣”。覚えていますね？」

「あ、ああ」

茜の問いに、アヒルがしっかりと頷く。礼獣により、一度は言ノ葉町の皆の自由ある言葉が奪われ、さらに作り変えられた礼獣の自爆により、言ノ葉町は消えそうになったのだ。アヒルたちにとっては、忘れたくとも忘れられない存在である。

「あれは、宇の神を堕ちた浮世現が、自身の言葉“生まれろ”により、創り出したもの」

「ああ、聞いた」

そのことはアヒルも、戦いの後に、恵や現と戦った保から、聞き及んでいた。

「忌を生み出したのも、あいつだって」

「ええ、そうです」

「性格は最低だけど、生み出す能力に関しては、右に出る者がいないからねえ」彼

為介が肩を落としながら、どこか困ったように言う。

「……っ」

為介の言葉を聞き、灰示のことを思い出したのか、保が険しい表情を見せ、深く俯く。

「先の戦いで用いられた“礼獣”は、阿修羅の“安寧秩序”あんねいちつじょの言葉を施された生物でした」

茜がさらに、話を続ける。

「だからこそ、礼獣の集約した光を浴びた言ノ葉の町人は、礼のない、自由ある言葉をすべて失った」

「ああ」

茜の言葉に、アヒルが頷く。それは、阿修羅から直接聞いた説明

と、まったく違っておらず、正しい見解であった。

「ですがもし、浮世現により、永遠の“无”の力を施された生物が生み出され、その集約した光を、世界中に放たれてしまえば……」

「……っ」

アヒルがハツとした表情となって、ごくりと息を呑む。

「世界中のすべての人々の言葉が、“无”の文字により、終わらせてしまいます」

「終わらされたら、ど、どうなるんだ……？」

知ることを恐れるように、少し躊躇いながら、アヒルが茜へと問いかける。

「言葉は言わば、人々を動かす動力源。すべての言葉が、終わってしまったら……」

「すべての言葉が、終わってしまったら……？」

「人々はその行動のすべてを停止し、やがて、死に至るでしょう……！」

茜から告げられるその言葉に、アヒルが衝撃を走らせ、大きく目を見開く。

「死ぬ……？」

「そ、そんな……」

「……」

皆が信じられないとばかりに戸惑いの声を漏らす中、一人俯いたアヒルは、小さな言葉すら発することが出来ず、ただ茫然と床を見下ろす。

「すべてが、終わる……」

あまりに重い真実を、アヒルは受け止めることが出来なかった。

言ノ葉町、北東地点。

「それにしても、馬鹿でっかい居城じゃのお」

白い石造りの巨大な城の中にある、ただ広いだけで何もない大部屋に居る現は、遙か先に見える天井を見上げながら、感心するような、呆れたような声を漏らす。

「いつの間に、こんなものを造っておったのか」

「我が神を出迎えるのです。このくらいの城、設けておくのは、神附きとして当然でしょう？」

振り向いた現に、桃雪は涼しげな笑顔で答えた。

「そんなことよりも、あなたはあちらの準備を急いで下さい」

「言われんでも、わかっておるわい」

少し投げ槍に言葉を返しながら、現が部屋の奥へと視線を移す。高い天井からぶら下がった、巨大な繭の中に眠る、金色の巨体。今も繭の中で光り輝き、禍々しく蠢いている。

「我が神の文字、“无”の力を、世界中へと放つ為の獣……」

「ああ。阿修羅の時は“礼獣”じゃったから、今回は差し詰め、“終獣”^{しゆうじゆう}とでも名付けようかのお」

自身が生み出したその生物を見つめ、現が何とも楽しげに笑う。

「そろそろ文字の施しを始めたいんじゃないが、お前さんの神はどこかのお？」

「我が神なら、お休み中ですよ」

「休み？」

桃雪の言葉に、再び桃雪の方を振り返った現が、大きく顔をしかめる。

「こんな時に何を暢気なことを。五十音士どもがわらわらとやって来る前に、少しでも早くこの“終獣”をじゃなあ」

「大丈夫ですよ」

不安視する現の言葉を遮り、桃雪が自信を覗かせた表情で笑う。

「すべての駒は揃った」

蠢く獣を見つめ、桃雪が満足げに笑う。

「もう誰にも、我が神は止められない」

「……………」

桃雪の設けた、現たちのいる居城の上層階に存在する、大きな寝台しかない、何もない殺風景な広い部屋。その部屋の寝台の上に寝転がり、永遠は、天井に設置された巨大鏡に映る、自分の姿を見つめていた。

「同じ、顔…」

天井の鏡へと届かない手を伸ばし、永遠が小さく、声を漏らす。

「同じ声、同じ姿、同じ時間…」

永遠の小さな声が、広い部屋に響く。

「同じ、命…」

そう呟いた永遠が、体を横へと向け、鏡に映る自分の姿から、逃げるように視線を逸らす。

「終わらせなきゃ…」

シーツを握り締め、永遠が冷えきった瞳を見せる。

「終わらせなきゃ…」

自分自身に言い聞かせるような、そんな言葉が続く。

「すべてを、終わらせる…」

拳を精一杯握り締め、永遠は鋭く瞳を光らせた。

Word. 69 神ニ、託ス (1)

——世界中のすべての人間が、その行動を停止し、やがて死に至るでしょう：——

アヒルの母、茜により伝えられたのは、衝撃の現実であった。

「世界中の皆の、すべての言葉が、終わって：」

「すべての人間が、死ぬ：」

その衝撃的で、絶望的な現実には、部屋にいる誰もが言葉を失い、光の灯らない暗い表情を見せた、顔を上げる気力もなくし、ただ深く俯く。どうすることも出来ない状態であることを、誰もが瞬時に悟り、諦めてしまっていた。

「そう、暗い顔をなさらないで下さい」

「この状況で無茶を言うな」

俯いた皆へと声を掛ける茜に対し、箆也が突き放すように答える。
「五十音士では、遠の神には勝てない。遠の神の言葉により、世界中の言葉が終わる。これでどう、悲観的にならずにいると：」

「まだ、方法があります」

『え：？』

茜のその言葉に、俯いていた皆が一斉に、顔を上げる。

「世界中の言葉を守る、方法が」

「な、何だ！？」

思わず立ち上がり、アヒルが身を乗り出して、茜へと問いかける。

「その方法って、一体：！」

「それは：」

茜がゆっくりと視線を動かし、座った状態のまま、立ち上がったアヒルを、まっすぐに見上げる。

「あなたです、アヒル」

「へ？お、俺？」

正面から茜の視線を浴び、アヒルが戸惑うように声を漏らす。

「俺って、どういう…」

「この場には、二つの文字の力を持った五十音士が、数名います」
茜が真剣な表情を見せ、言葉を続ける。

「まずは、今言ったように、“あ”と“う”の文字を持っている、アヒル」

アヒルへと向けられていた茜の視線が、再び動き出す。

「それから、“ゑ”と“め”の文字を持つ恵、“ゐ”と“い”の文字を持つ為介」

恵と為介を捉え、茜がさらに視線を動かしていく。

「それに、“た”と“は”の文字を持つ、高市保さん」

「へえ！？お、俺ですかあ！？」

茜に名を呼ばれ、保が慌てて声をあげる。

「はあ！こんな存在感薄い俺が、皆さん差し置いて、名前呼ばれちゃってすみませえくん！」

「まあ、高市さんの場合は、波城灰示さんと合わせての二文字ですけど」

保が席を立ち、頭を抱えて、謝り散らしている間に、茜が笑顔でひっそりと付け加える。

「そして最後に…」

茜の視線が、アヒルのすぐ横の席へと辿り着く。

「“か”と“お”の文字を持つ、神月箆也さん」

「へ？“お”？」

「……っ」

アヒルが目を丸くして、首を傾げるその横で、箆也は眉をひそめ、どこか気まずそうに、そっと俯く。

「二つの文字を持つことが、一体、何だというのです…？」
箆也へと集まった視線を逸らさせるように、囁が茜へと問いかける。

「二つの文字を持っていれば、例えば永遠の“无”^{とわ}の力を受けても、

一撃で倒れずに済むのです」

囁の方を振り向き、茜が少し笑顔を見せる。

「他の神が倒れた中で、アヒルだけが唯一、倒れずにいられたのは、二つの文字を持っていたからこそ」

「そういや、あの桃雪とかつてのも、そんなこと言ってたな」

桃雪の言葉を思い出しながら、アヒルが再び、自分の席へとつく。

「二つの文字を持っていれば、例え、一つの文字が終わらされても、もう一つの文字で攻撃することができ、尚且つ、その間に終わらされた先の文字を再解放することが出来るのです」

強く説明を続けながら、茜が机の上に置かれた両手を、握り締める。

「二つの文字を駆使すれば、永遠を倒すことも可能なはず」

「成程ねえ…」

茜の説明に、囁が感心するように頷く。

「け、けど、それって…相当に難しいことのような…」

「そうねえ。あまり上手くいくとも思えないわ」

「ですが」

冷静に分析し、険しい表情を見せる七架と囁に、茜がすぐに言葉を掛ける。

「諦めれば、それこそ、すべて終わりなのです」

『……っ』

茜の言葉に、二人がそつと眉をひそめる。

「それしか方法がないんだ。黙って見ているわけにもいかないし、そうするしかないだろう。神」

「あ、ああ。そう、だな」

鋭く呼びかける籠也に、アヒルが少し齒切れ悪く頷く。

「ええっと、じゃあとにかく遠の神を見つけ出して、俺たち五人で遠の神をつ…」

「その前にもう一つ、アーくんたちに話しておきたいことがあるんだあ」

「へ？」

皆へ指示を送ろうとしたアヒルの声を、ウズラが遮る。

「あなた、それは…」

「きちんと話しておいた方がいいって、俺はそう思うんだよ。茜ちゃん」

どこか止めるように振り向いた茜に、ウズラが穏やかな笑顔を向ける。

「その方がきつと、後悔しない」

「……わかりました」

ウズラのその言葉に、茜はそっと目を細め、少し間を置いた後、ゆっくりと頷いた。

「な、何だよ？ 一体」

両親のただならぬ様子を察し、アヒルが緊張した面持ちとなって、躊躇いつつも、ウズラへと問いかける。

「永遠の持つ“を”の文字というのは、五十音、第五十音。つまり、五十音最後の文字になる」

真剣な表情を見せ、ウズラが落ち着いた口調で続ける。

「五十音を締めくくる、五十音最強の文字」

「だから、何だよ？ “を”の文字が強いつてことは、母さんの話で十分に…」

「その最強の文字を消せば、つまり、“を”の文字の力を持つ永遠を倒せば…」

アヒルの言葉を遮り、ウズラがまっすぐに、アヒルを見つめる。

「五十音士の持つ、すべての文字の力が失われる」

「え…？」

ウズラのその言葉に、アヒルの表情が止まる。

「すべての文字の力が、失われる…？」

「うん」

戸惑いの表情で聞き返したアヒルに、ウズラが深く頷く。

“を”を消せば、私の“さ”も、アヒるんの“あ”も籠也の“か

”も、すべての文字の力が消えてしまうということ…?”

「うん。それも、今の五十音士だけが、力を失うんじゃない」
ウズラが眉間に皺を寄せ、厳しい表情を見せる。

「文字そのものが力を失うから、五十音士の存在、そのものが失われてしまうだ」

「どうということだ？何故、そのような…」

「わかりません」

鋭く、追及するように問いかける箴也に、今度は茜が口を開く。

「ただ、それが、五十音のルールなのです」

その掟を知らせるように、はっきりと響く茜の声。

「“を”の文字を消せば、他のすべての五十音も消える。この世に五十音士が誕生した時から、決まっていたこと」

「決まって、いたこと…」

茜の言葉を、茫然とした表情で繰り返す箴也。箴也と同じようにアヒルも、他の皆も、衝撃を隠しきれない表情となっていた。

「だからこそ韻は、二十数年前、永遠を倒そうとした旧世代の神々を、反逆者とし、五十音の世界から追放しました」

茜も険しい表情となって、言葉を続ける。

「永遠により、すべての言葉が終わらされてしまうことよりも、五十音士による韻の統制が崩れてしまうことを恐れたのです」

「じゃあ…」

アヒルがまだ戸惑いの表情を見せたまま、小さく声を漏らす。

「じゃあ、親父たちは…」

下に向けられていたアヒルの視線が、まっすぐにウズラを捉える。
「自分たちの文字が、五十音士がすべて消えるってわかって、それでも、遠の神を倒そうと…？」

「……うん」

アヒルの問いかけに、薄く笑みを零した状態で、ウズラがそっと頷いた。

「永遠にあんな暴走を許してしまったのには、俺たちに責任があっ

たし、それに何より」

ウズラが笑みを深くし、アヒルと真正面から目を合わせる。

「世界中の言葉を終わらせることだけは、させたくなかったから」

「……っ」

そう言って笑う父をまっすぐに見つめ、アヒルが少し目を細める。

「けど、その選択を、アーくんたちに無理強いするつもりはない」

「え？」

考え込むように俯いていたアヒルが、ウズラのその言葉に、眉をひそめ、顔を上げる。

「今までずっと、自分たちの言葉を守るための戦いをしてきた、君たちだからね」

今までのアヒルたちの戦いを、すべて理解している様子で、ウズラが話す。

「永遠との戦いは、自分の言葉を消すための戦いになってしまう。」

君たちにそんな戦いをしろだなんて、俺は言えない」

顔を上げたアヒルに、ウズラは再び笑いかける。

「だって、今、君たちの持っている文字は、君たち自身のものだから」

「親父……」

「だから、君たち自身で考えて、選んでほしい」

ウズラの声が、どこか願うように響く。

「永遠を倒すために戦うかどうかを」

「け、けど……」

眉をひそめたアヒルが、押し出されるように、すぐさま声を出す。

「俺たちが文字を失いたくないって、そう選択しちまったら、遠の神が……」

「その時はまた、別の方法を考えるさ」

不安げに呟くアヒルに、その不安を拭い去るように、大きな笑みを向けるウズラ。

「俺はね、アーくん。君たち後生の五十音土に、後悔をさせたくない

いんだ」

「後悔…？」

「うん。俺たちの時代が、生み出してしまった永遠によって、君たちをこんなところまで、巻き込んできてしまった…」

「……………」

ウズラの笑みが、少し悲しげになる。恵もその言葉に深刻な表情となつて、深々と俯く。

「せめてその、償いかな？ 償いにも、ならないだろうけど」

「そんなの…」

悲しく笑う父に、立ち上がり、大きな声で否定してしまいたいと思うアヒルであったが、今まで起こってしまった戦いの数々と、今のこの現状の厳しさに、それを口にすることは出来なかった。

「だから、最後の道は、君たちで決めて」

ウズラがアヒルたちを見回し、もう一度、大きく微笑みかける。

「僕の結論なら、もう出ている」

「へ？」

すぐに答える箆也に、ウズラが目を丸くする。

「我が神の意志が、僕の意志だ」

「箆也」

こんな状況下、こんな重い決断だというのに、何の迷いもなくはつきりと言い放つ箆也に、隣に座るアヒルが、少し驚いたように振り向く。

「フフフ…私も箆也と同じ答え…」

「お、俺もアヒルさんが決めることには、絶対賛成です！ はあ！ 俺なんかが、偉そうにすみません！」

「わ、私も、朝比奈くんが決めることに従います！」

「お前等…」

箆也と同じように、次々と答えていく安団の面々を見回し、アヒルが目を細める。

「安団の意志は、アヒルに委ねられたようですね」

「五十音すべてに係わる問題なんだし、安団だけじゃなくって、他団にも聞いとかなないとだと思えますけどお？」

「それなら今、この場で聞いてくれる？」

「へえ？」

茜とウズラに意見していた為介が、入口の方から入ってくる声に、振り返る。その声に部屋の者たちが皆、視線を集めた。

「エリザベス」

「檻也」

恵と籠也が、それぞれ声を漏らす。入口から部屋の中へとやって来たのは、エリザと檻也、イクラ、そして三名の神附きの者たちであった。永遠に負わされた傷を治療中のはずであったが、謡の手当てが良かったのだろうか。皆、すっかり元気そうである。

「話はだいたい、聞いてたわ」

「盗み聞きは良くないって、幼少の頃、習いませんでした？エリザ様」

「うっさいわね！」

横から注意するように言う慧に、エリザが勢いよく怒鳴りあげる。

「皆さん、お怪我は？」

「だいたい治ってるわ。問題ないわよ」

「それに、大人しく寝ている場合でもなさそうだしな」

皆の体を気にかける茜に対し、エリザと檻也が口々に答える。

「とにかく！私、衣えの神と衣団は、アヒルの決定に従うわ」

「俺たち於団も、安の神に委ねる」

「えええ！？」

次々と答えるエリザと檻也の言葉を聞き、驚きの表情となるアヒル。

「委ねるって、お前等…！」

「イクラくんはあゝ？」

アヒルが何やら言いたげにする中、二人の次の答えを求めるように、為介がイクラへと問いかける。

「俺は、俺以外の神を消す…」

「はい、そちらにお渡ししまあす！」

相変わらずのことしか言わないイクラに代わり、笑顔でアヒルへと手を差し向ける金八。

「意見は一致してるようだねえ」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！そんな揃いも揃って、俺に任せられても…！」

「神」

立ち上がり、他の神たちに抗議しようとしたアヒルに、箆也が強く呼びかける。

「他神が、ああ言っているのだ。ゴタゴタと言うな」

箆也がアヒルを見ぬまま、叱るように言い放つ。

「安の神の名が下がる」

「……っ」

箆也の厳しい言葉に、ハッとした表情を見せるアヒル。顔を上げたアヒルが、ゆっくりと皆を見回す。エリザが檻也がイクラが、茜がウズラがスズメやツバメが、為介が恵が雅が、そして安団で共に戦ってきた仲間たちが、迷う様子なく、まっすぐにアヒルを見つめていた。

「……わかった」

真剣な表情を見せ、アヒルが大きく頷く。

「半日だけ、時間を与えます」

頷いたアヒルへ、茜が言い放つ。

「その間に、道を、最後の道を、選んで下さい」

願うように、詫びるように、向けられる茜の声を、アヒルがしっかりと受け止め、声なく頷く。

「さあ、そろそろ夜明けの時間だ」

部屋の壁に掛けられた時計を見ながら、ウズラが座っていた椅子から、ゆっくりと腰を上げる。

「帰ろうか。言ノ葉へ」

アヒルは、ウズラ等と共に、自宅のある言ノ葉町へと連れだって帰っていき、まだ安静が必要なエリザたちは、救護室へと戻っていた。一気に人が減り、謡の会議室には、茜と恵だけが残る。

「さてと、じゃあ私も帰る」

皆が帰った後、少し時間を置いて、恵がゆっくりと席を立つ。

「韻の方は任せたぞ」

「はい」

恵の言葉に茜が笑顔で頷くと、恵はそのまま茜に背を向け、部屋の出口へと歩き出した。

「恵」

恵が部屋を出ようと扉を開けたその時、茜が恵を呼び止める。その声に、少し戸惑うように振り返る恵。

「何だ？」

「あまり、一人で背負い込まないで下さい」

「……っ」

茜のその言葉に、恵の表情が、途端に曇る。

「遠の神のことは、あなただけが悪いわけではないのです」

笑顔を消した茜が、真剣な表情で、恵へと訴える。

「ですから、自分ばかりを責めるようなことは……」

「私が悪くないってんなら……」

茜の言葉を遮り、恵が低い声を漏らす。

「一体、誰が、悪かったって言うんだよ……」

力ない問いかけを残し、恵が開いた扉を抜けて、足早に部屋を出て行く。静まり返った部屋に、扉の閉まる音が、やたら大きく響き渡った。

「恵……」

閉まった扉を見つめ、茜はどこか悲しげに、目を細めた。

Word. 69 神ニ、託ス (2)

翌朝。言ノ葉町、小さな町の八百屋『あさひな』。

「んんゝゝ流し、そうめんゝゝ」

自室の寝台の上で大きく寝返りを打ちながら、何とも気持ち良さそうに、寝言を呟くアヒル。その直後、阿アヒルの部屋の扉が、勢いよく開いた。

「グッド、モウモウモーニング！アーくうゝん！」

全力で声を張り上げ、部屋へと飛び込んできたウズラが両手に握り締めているのは、大量のもやし。

「レッツ、流しもやしいゝ！」

「ぶふ！」

ウズラが両手いっぱいのもやしを、寝ているアヒルの顔面に向かって投げつける。大きく開いていた口の中にもやしが飛び込んできて、アヒルが呼吸を乱したのか、苦しげな声を漏らす。

「あ、起きたあ？アーくゝゝ」

「全然、流れてねええ！」

「いやあああ！」

勢いよく起き上がったアヒルが、その起き上がった反動を利用して、思いきり右足を振り上げる。アヒルの右足がウズラの顎を蹴り上げると、ウズラの容赦ない悲鳴が、家中に響き渡った。

「酷いよおゝアーくうゝん」

赤く腫れ上がった顎を押さえながら、ウズラが涙目となって、床にしゃがみ込む。

「息子をもやしで呼吸困難に追い込むことの方が、酷いだろうが！だいたい、俺が呼んだのはそうめんだ！」

「もやしも、つゆにつけたら美味しいよ？」

「つゆの問題じゃねえ！」

ウズラに怒鳴りあげながらも、散らばったもやしを、丁寧に片づ

けていくアヒル。片づけながらも、横目で情けない父の姿を見つめ、深々と溜息を吐く。昨日、永遠に相對した時の、勇ましい父の姿など、今は欠片も見当たらない。

「ったく、やっぱりいつもの親父かよ」

「へえ？」

「いや、いい。何でもない」

諦めたようにそう言うと、アヒルは集めたもやしを机に置いた。

「アヒルー！ついでに親父も、そろそろ飯だぞー！」

「おおう！」

「お父さんついでにつて、どういふこと！？スーくうーん！」

何一つ変わらず、いつものように騒がしく、朝比奈家の朝が始まった。

「さあ、アヒるん。たあーんとお食べ…」

「……………」

学校へ行く準備を整え、一階の居間へと降りたアヒルに、鍋を差し出したのは、囁であった。紫色の煙の噴き出している鍋を見つめ、アヒルが固まる。

「作ってから時間経っちゃったけど…ちゃんと温め直したから…」

確かに温かそうな煙は出ているが、問題は温かいか冷たいかではないように思える。

「ちなみに、これは何だ？」

「ビーフストロガノフよ…」

「いや、俺料理詳しくないけど、絶対別物だぞ！？これ！鍋を指差し、アヒルが必死に訴える。

「料理の見た目なんて、作る人によって違うのよ…」

「違い過ぎだろ！？」

「いいから、はい。あーん…」

「いやだあああ！」

鍋をすくったスプーンを差し出す囁から、必死に顔を逸らし、何とか逃れようとするアヒル。

「ゴタゴタ言うな。安の神の名が下がる」

「じゃあ、お前が食べよ！」

「バカ市、ご飯と味噌汁」

「はいはあーい！」

「おい！」

アヒルに注意したものの、自分は保の作った安全な朝ご飯を食べようとする籠也に、アヒルが思いきり表情をしかめ、怒鳴りあげる。「はあ！こんな人並みに出来るのは料理だけの俺が、一丁前に神月くんの言葉に答えちゃって、すみませえ〜ん！」

「うるさい、早く運べ」

「アヒるん…自発的に食べないなら、無理やりいくわよ…？」

「ぎゃあああ！」

謝り散らす保や、アヒルを追いかけ回す囁で、居間は大混乱となる。

「ああー、うっせ」

台所に立ちながら、あまりにも騒がしい居間の声に、思わず顔をしかめながら、耳に人差し指を入れるスズメ。朝から聞くには、この大声は苦痛である。

「スーくん、お父さんのご飯はあ？」

「ほら、キャベツの千切り」

居間を抜け、台所へとやって来たウズラが、スズメから差し出された、ボールいっぱい千切りキャベツを見て、固まる。

「お父さんは、カブトムシさんじゃないんだよお！？スーくん！」

「当たり前だろ。カブトムシに謝れ」

「がぁーん！」

スズメのあまりに冷たい言葉を受け、ショックを受けたウズラが、その場にしゃがみ込む。

「うう…酷いよお。仮にも自分の神様に…」

「家庭内では、神だの神附きだのは一切無しって、僕らが宇団に入る時、そう決めたのは父さんでしよう…?」

空になった洗濯かごを抱えたツバメが、庭から家の中へと戻って来ながら、ウズラへと声を掛ける。

「そうそう! 家人中では、宇の神も宇附もなしなし!」

「じゃあ、一家の大黒柱のお父さんを敬う気持ちは…」

「さ、弁当作ろ」

「掃除、掃除…」

「ううう…」

ウズラの訴えをあっさりと無視し、スズメとツバメが、それぞれ家事に励んでいく。するとウズラは、さらに深く俯き、悲しげな声を漏らした。

「おはようございまーす」

その時、通用口が開き、すっかり準備を整えた紺平が、アヒルたちを迎えにやって来る。

「いつものように、お邪魔しまーす」

「紺平!」

「へ?」

最早、遠慮もなく朝比奈家に入ろうとした紺平が、居間から廊下へと飛び出し、必死にこちらへと駆けてくるアヒルに気付き、目を丸くする。

「ガァ? どうかし…」

「俺の代わりに食ってくれ!」

問いかけようとした紺平の肩を掴み、切羽詰まった表情で、必死に懇願するアヒルの後ろに、紫色の煙を放つ鍋を抱えた、囁の姿。

「無理」

「えええ!?!」

「フフフ…」

当然ながら即答する紺平に、アヒルは大きく驚き、囁は不気味に微笑んだ。

同じ頃。言ノ葉町、町の小さな何でも屋さん『いどばた』。

「ふんふふん、ふう〜ん」

アヒルたちと共に言ノ葉町へと戻った為介は、自身の屋敷でわずかの仮眠を取ると、今日も定刻通りに起床して、開店準備を整えていた。鼻歌に合わせ、ハタキを振る手が揺れる。

「さあーて、今日はどの商品を、目玉商品にしちやおっかなあ」

楽しげに声を弾ませ、為介が店の棚に並んだものを見回す。すると為介の視界に、どこか間の抜けた表情の怪獣型の、割と大きめサイズの置時計が飛び込んできた。為介がすぐに、その時計を手にする。

「うん、この時計なんかもい…!」

しっかり動く針と見て、為介の言葉が途中で止まる。

——年を取ったね、為介……——

「……っ」

二十数年振りに出会った少年の言葉を思い出し、為介がその表情を曇らせる。

「おはようございます」

その時、店の扉が開き、きつちりと学校の準備を整えた雅が、姿を見せた。

「為介さん。今日なんですけど、僕、部活で…」

扉を閉じた雅が、為介の方を振り向くと、発していた言葉を途中で止める。

「為介さん…?」

変なデザインの置時計を見つめ、茫然と立ち尽くしている為介の様子に、戸惑うように首を傾げる雅。その声に気付いたのか、少し

ハッとなった為介が、やっと雅の方を見た。

「やおはよう、雅くん。今日は部活の日？」

「え？あ、はい」

何事もなかったかのように、笑顔で問いかけてくる為介に、雅が少し戸惑いながら頷く。

「そう。まあじっくりコトコト、励んでおいでえ」

為介の笑顔を見つめ、雅がそっと眉をひそめる。

「為介さん」

「んん？」

「大丈夫、ですか…？」

「……大丈夫」

少しの間を置いて、為介が雅に、鋭い笑みを向ける。雅を安心させるというよりは、雅のそれ以上の発言を許そうとしないような、そんな笑みであった。

「早く学校に行きなあ。遅刻しちゃうぞお？」

一瞬の鋭さを隠し、いつもの軽い口調で言葉を投げかける為介に、雅が少し困ったように、肩を落とす。

「わかりました。行ってきます」

どこか諦めるようにそう言うと、雅は店を出て行った。戸の閉まる音が響き、店がまた密室になる。

「……………」

その静かな空間の中で、目を細め、神妙な表情を見せて、再び置時計を見つめる為介。

「返事に困るのは、年を取っても同じだね…」

為介が小さく呟きを落とし、自嘲するような笑みを浮かべた。

「ぶっはあ…」

学校へと向かう道を歩きながら、少し顔色を青くしたアヒルは、

肩を落とし、深々と溜息を吐いた。

「三途の川が見えた…」

「あら、そんなに誉められると照れるわ…」

「誉めてねえ！」

すぐ隣を歩きながら、頬に手を当て微笑む囁に、アヒルが勢いよく怒鳴りあげる。

「こんな俺ですけど、今度は、川が見えるくらいの料理が作れるよう、頑張りますうー！」

「頑張らんでいいわい！」

逆隣から決意表明してくる保にも、怒鳴るアヒル。

「おぉーい、朝比奈！」

「ああ？」

いつものように、道の前方から聞こえてくる聞き覚えのあるその声に、アヒルが思いきり表情をしかめ、鬱陶しそうに振り向く。

「ここで会ったが、百年目ええ！」

『昨日振りっス！アニキ！』

「うるっしやーい！」

アヒルたちの前へと現れたのは、例によって、多くの子分を引きつれた守であった。

「あ、真田さん、おはようございまぁーす！」

「おはよう」

一転してデレデレとした表情となって、守が囁に手を振ると、囁も微笑みを浮かべ、手を振り返す。

「よぉーし、じゃあ朝比奈！今日という今日こそ、コテンパンのパンドのお昼寝にしてやるぞお！」

「今日、体調不良だからやめね？」

「にやにをお？」

まだ気持ち悪そうに腹をさすりながら、弱々しく言うアヒルに、守が大きく眉をひそめる。

「何が体調不良だ！気合いが足りん、気合いがあ！一丁、俺が気合

いを注入してやろう！」

そう意気込んで、守が両拳を構え、アヒルへと駆け込んでいく。

「おりゃああ！」

「あー、気持ち悪い」

「ぐおおおう……！」

『アニキいい！』

アヒルが力なく言葉を落としながら、腹をさすっていた手を、向かってきた守へと素早く突き出す。その手が見事にみぞおちに突き刺さった守は、何とも苦しげな声をあげながら、その場に崩れ落ちる。そんな守へと、必死に駆け寄っていく子分たち。

「何してくれてんだあ、朝比奈！相手はアニキだぞお？すんごく手加減しろお！」

「そうだ！弱い者いじめして、楽しいかあ！？」

「アニキは夢見がちな人なんだあ！現実の厳しさ、教えんじゃねえ！」

「お前等の言葉も、大概、酷いけどな……」

口々に訴える子分たちの、守を庇えていないその言葉に、アヒルが思わず呆れた表情となる。

「相変わらず、騒がしい連中だな」

「ホント」

立ち止まっているアヒルたちの少し後方を歩きながら、箆也が呆れ果てた様子で肩を落とす。箆也の言葉に、横を歩く紺平も、深々と頷いた。

「けど、結構普通なんだね」

「ん？」

紺平のその言葉に、箆也が眉をひそめ、振り向く。

「俺も一応さ、昨日のこと全部、檻也くんから聞いたんだ」

「そうか」

昨日起こった、あまりに多くの出来事を思い出し、箆也が少し視線を落とす。

「だから正直、今日の朝、どんな顔してガアに会えばいいのか、ちよっと悩んじゃって…」

紺平が前を歩くアヒルの背を見つめ、少し目を細める。あの背に、世界中のすべての人々の言葉が、すべての五十音士の運命が、負われているのかと思うと、見ているこちらが震えるような、そんな心境だった。

「でもガアも皆も、すっごくいつも通りなんだもん」

朝一番のアヒルの様子を思い出し、紺平が少し肩を落とす。

「何か少し、拍子抜けっていうかさあ」

「無理やり、普通にしているのかもな」

「え…?」

箆也のその言葉に、紺平が戸惑った様子で振り向く。紺平が振り向くと、箆也は先程までの紺平と同じように、アヒルの背を見つめ、神妙な表情を見せていた。

「神月くん?」

「無理やり、普通にしているのかも知れない。神も、皆も」

箆也がアヒルの背へと送っていた視線を、そっと空へと上げる。

「こんな、当たり前前の日常を過ごすのは、もう、最後かも知れないからな…」

「……っ」

箆也の言葉が何を意味しているのかを知り、紺平も眉をひそめ、表情を曇らせる。

「おっはよ、ガア!」

「おはよう、朝比奈くん」

「おう、おはよう。想子、奈々瀬」

前に行くアヒルが、横道からやって来た七架と想子に遭遇し、互いに笑顔で挨拶を交わす。

「ガアがこんな時間に登校なんて、明日はやりでも降るんじゃないかい?」

「うっせえ、クソ想子」

「アハハ」

「ほおーら、ナナに笑われた」

「お前のせいだろうが！」

悪戯っぽく言う想子に対し、しかめっ面を向けるアヒル。そんな二人の様子を見て、七架が楽しげに笑う。そんなアヒルたちの様子を見つめながら、紺平はそっと、目を細めた。

「最後の日常、か…」

言ノ葉高校、一年D組。

「おらあー、とっとと席つけえ」

やる気のない口調を飛ばしながら、片手に出席簿を抱え、教室へと入って来る恵。恵の言葉に、皆がすぐに自分の席に向かい、腰を下ろす。

「出席取るぞお。居る奴は、口に拳入れて、早口言葉言ええー」

「出来るかあ！」

「んあ？」

勢いよく返ってくるツツコミに、教壇に立った恵が、出席簿から視線を上げる。

「おう、トンビ。お前が遅刻じゃねえとは、珍しいな」

「だから俺はトンビじゃなくて、アヒルだっての！」

「どっちでもいいだろうが」

「どっちでも良くねえ！」

アヒルと恵のやりとりを、クラスの者たちは皆、慣れた様子で聞き流す。

「あ、そうだ。高市」

「聞けい！」

あっさりとアヒルを無視し、その横の保へと視線を移す恵に、アヒルが席から立ち上がって抗議をする。

「お前、昨日の反省文やり直しな」

「はあ！こんなサルよりも反省してない俺が、二度も反省文書いちやってすみませえ〜ん！」

恵の言葉に、謝り散らして答える保。

「んで、朝比奈は居残り掃除」

「なんで！？今日、俺、遅刻してねえーじゃん！」

「何となくだ」

「何となくって何だあ！？体罰で訴えんぞお！？」

恵の勝手な主張に、立ち上がったままのアヒルが、さらに声を張り上げる。

「うるさい」

「フッフ…」

「相変わらず、騒がしい連中ねえ」

「そ、そうだね」

そんなアヒルたちの様子を見ながら、口々に言葉を落とす籠也、囁、想子、七架。クラスの皆も笑い声を漏らし、教室は明るい空気に包まれていく。

「絶対、訴えてやる！」

「はいはい。じゃあ出席、取るぞお」

アヒルたちの当たり前の時間が、当たり前のように、過ぎていった。

Word. 69 神ニ、託ス (3)

その日、放課後。

「ふう。さあーて、部活行くかなあ」

鞆の中に教科書を詰めた想子が、すべて収まったことを確かめるように鞆を一回、ポンと叩き、席から立ち上がる。帰りのホームを終え、クラスの皆は個々に散り、それぞれの帰路につこうとしていた。

「頑張ってね、想子ちゃん」

同じように席を立ちながら、七架が想子へ笑顔を向ける。

「うん。ナナは今日もバイト？」

「うん」

「そっか。じゃあナナも頑張って」

「うん」

想子の言葉に大きく頷き、七架がまた頷く。

「うん、頑張る…」

「……っ」

笑みを浮かべながらも、どこか考え込むような、深刻な表情を見せ俯き、自分に言い聞かせるように頷く七架の、その不自然な様子に気付き、想子が眉をひそめる。

「でも、ナナ」

「え？」

再び呼びかける想子に、ゆっくりと顔を上げる七架。

「頑張り過ぎちゃ、ダメだよ？」

少し首を傾けた想子が、七架へとまっすぐに言葉を向ける。

「辛くなったら、ちゃんと人に頼るんだよ？頼る人は別に、私じゃなくってもいいからさ」

「想子ちゃん…」

穏やかな笑顔を向ける想子を見つめ、七架がそっと目を細める。

それは、七架のバイトに対して言っているのではない。七架が抱え、七架が言えずにいることを、想子は何となく察し、それでも聞こうとはせずに、優しい言葉を掛けてくれているのだろう。

「うん。ありがとう、想子ちゃん」

微笑む七架を見て、想子もどこか、安心したように笑う。

「じゃあ、また明日！」

「うん！」

部活へ向かうため、教室を出て行く想子を、七架が軽く手を振りながら見送る。想子も手を振り返すと、そのまま扉の向こうへと、姿を消していく。

「また、明日…」

想子の口にしたその言葉を噛み締めるように繰り返し、七架はそっと俯いた。

言ノ葉高校、家庭科室。

「フフフ…今日もアヒるんに、三途の川が見えるほどの料理を作らないと…」

エプロンを纏った囁が、やる気に満ちた不気味な笑みを浮かべ、何やら緑色の煙の噴き出している大鍋を、じつくりと混ぜ込んでいる。

「こ、今回は何を作る気なのかしら？あの方」

『さあ…？』

その光景をハラハラと見守る、お料理クラブの部員たち。

「私たちに出来ることは、あの料理を食べる方の、胃腸が丈夫であることを願うことだけよ」

『そうね』

「フフフ、フフフフ…」

アヒルの身を案じる部員たちの気持ちなど、まったく知らず、ただ、鍋を混ぜ続ける囁であった。

言ノ葉高校、オカルト同好会部室。

「ええー、では早速、今日の活動を始めたいと思います」

教壇に立った雅が、人差し指で眼鏡を押し上げながら、集まった部員たちへと言い放つ。雅の横には、何やら書類を持ったツバメの姿があった。

「副部长、今日の議題は？」

「トイレの花子さんは男子トイレには出ないのか」についてだよ……雅くん……」

「うん、実に興味深い内容ですね」

ツバメの発表した議題に、雅が感心するように深々と頷く。

「では、これに関して、議論を始めたいと思います。何か意見のある人は、挙手して下さい」

『……………』

集まった部員たちは、席に座ったまま、特に雑談もしようとせず、挙手する様子も見られない。部員は全体的にどこか暗めで、大人しく、物静かそうな者ばかりであった。

「わかりました。では、男子トイレには出ないということで、意見をまとめます。いいですね」

「相変わらず、マイペースだね……雅くん……」

勝手に結論付ける雅を見て、ツバメはどこか楽しげに笑った。

言ノ葉高校、三年A組。

「はぁー、ヒトミい。お前って奴はつくづく、先生がでないとダメなんだなあ」

誰も居ない教室で、窓際の席に腰掛け、机の上に伸び伸びと足を乗せたスズメが、甘ったるい空気漂う表紙の本を読みながら、どこか困ったような声をあげている。

「俺ならお前を、こんなに悲しませたりしねえのにい」

「部活動を行っていない生徒は、速やかに下校して下さい」

「お？」

しみじみ呟いていたスズメが、教室の扉の開く音と、開いた扉の向こうから入って来る声に、読んでいた本から視線を移し、そちらを振り向く。

「んだよ、紺平じゃねえか。風紀委員の見回りか？」

「部活動を行っていない生徒は、速やかに下校して下さい」

親しげに話しかけるスズメに、紺平がもう一度、丸つきり同じ言葉を放つ。

「ちゃんと部活だってえ。“恋盲腸部”」

「学校が許可していないものを、部活動とは認めません」

「ちえ。わかったって。帰るよ、帰る」

紺平の鋭い注意に、仕方なく読んでいた恋盲腸の本を閉じ、帰り仕度を始めるスズメであった。

言ノ葉高校、一年D組。

「はぁ、反省文って一体、何を書けばいいんだあ？」

皆の帰ったアヒルたちの教室では、ただ一人残った保が、反省文に苦しみ、頭を抱えていた。相変わらず、原稿用紙は、三行ほどしか埋まっていない。

「ああ！こんな繊細さとは程遠い俺が、一丁前に悩んじゃってすみませえくん！」

誰も居ない教室に、保の謝り散らす声が響き渡る。その声は廊下まで響き、遠くの方でこだましている声が、保の耳の中へと入って来た。

「……っ」

すると保は不意に真剣な表情を見せ、窓の外から景色を眺める。

「言葉の、明日……」

青く晴れた空を見つめ、保がそつと目を細める。

「ねえ、“痛い”…？ 灰示…」

自身の中のもう一人の自分に語りかけるように、保が小さく、声を漏らした。

「また明日！」

「また明日ねえ」

「うん、また明日！」

言ノ葉高校の正門では、下校する生徒たちが口々にその言葉を放ち、笑顔で手を振り、互いの家のある方へと帰っていく。

「……………」

その正門の光景を、屋上の手すりに寄りかかり、見下ろしているアヒル。その表情には薄く笑みが浮かんでいるが、瞳は鋭く、妙な緊迫感があった。

「ここに居たのか」

屋上へと入って来る声に、アヒルが振り返る。

「籠也」

扉から、屋上へと姿を現したのは籠也であった。籠也がゆっくりと歩を進め、アヒルの方へと歩み寄って来る。

「今日も居残り掃除だろう？ サボっていると、広辞苑の角で殴られるぞ？」

「ああ、わかってる。そろそろ行くつもりだ」

籠也がアヒルのすぐ横へと並ぶと、アヒルは籠也から視線を移し、また正門を見下ろした。

「もうすぐ、半日だな…」

「……………」

少し躊躇いがちに放たれた籠也のその言葉に、アヒルは言葉を返すことなく、ただ瞳を細める。今朝方、茜が待つと告げた半日。当

たり前の時間は、あっという間に過ぎ去り、もう間もなく、期限のその時間が来ようとしていた。

「何を、していたんだ？」

「見てた」

「見る？」

「ああ」

聞き返した箆也に頷き、アヒルがそっと笑みを浮かべる。

「皆の、言葉を」

「……っ」

笑顔で答えるアヒルのその言葉に、箆也が眉をひそめる。

「んで、考えてた」

アヒルが視線を上げ、真っ青な空を見上げる。

“言葉” ってものを」

空を見上げるアヒルが、遥か遠くを見つめるような、そんな瞳を見せる。

「どういう風に？」

「んー、例えば、俺は今日、一体、何人と言葉を交わしたのかなあとか」

箆也の短い問いかけに、アヒルが首を捻らせ、自身でも戸惑うような様子を見せながら、答える。

「一体、何個の言葉を口にしたのかなあとか、一体、全部で何文字言ったのかなあとか」

「人はともかく、文字は数える気にもなれないな」

「ああ」

箆也の返しを聞き、空を見上げたアヒルが、小さく笑う。

「後は？」

「後はそうだなあ。言葉が無かったら、学校ってあったのかなあとか、テレビってあったのかなあとか色々」

続きを促す箆也に、アヒルがさらに答えていく。

「テレビはなさそうだが、学校なら、あったんじゃないか？」

「だって、言葉がねえんだぜえ？授業出来ねえーだろ？」

「黒板に書けばいいじゃないか」

「言葉がないんだから、書くことがないだろ？」

「ああ、そうか」

アヒルの意見に、箆也がついに納得させられる。少し俯き、何やら考え込むような表情を見せて、それからまた、箆也が顔を上げた。「なら、ジェスチャーだな」

「ジェスチャーだけで因数分解とか、絶対教えらんねえって」
空から箆也へと視線を移したアヒルが、何やら可笑しそうに、笑みを浮かべる。

「考えれば考えるほど、不思議なんだ」

アヒルが笑みを浮かべたまま、再び屋上から、下校していく生徒たちを見下ろす。

「こんなに必要なものののに、こんなにあやふやで：何の確証もないのに、何故かやたら信じられて：」

言葉が続けながら、アヒルがそっと目を細める。

「こんなに大切なのに、人が口を閉ざしただけで、簡単に失くなっちゃおう：」

「……………」

アヒルの横に並んだ箆也も、アヒルと同じように屋上から下方を見下ろしながら、ただ、アヒルの声に耳を傾ける。

「どうして、この世界には、“言葉” っていうものが存在するんだろう…？」

また視線を空へと移し、誰へともなく、問いかけるアヒル。

「どうして俺たちは、今までの五十音士たちは、“言葉” で、他の何でもなく“言葉” で、戦って来たんだろうって：」

ひたすら空へと問う、アヒルのその姿は、その問いかけへの答えを、人が持ち得ていないと、そう思っているようであった。

「前に」

口を開く箆也に、アヒルがまた視線を下ろす。

「前に、カモメさんが言っていた」

「カー兄が？」

「ああ」

聞き返すアヒルに大きく頷き、箆也が穏やかな笑みを浮かべる。

「言葉は、“奇跡”なのだと」

箆也の声が凜と響き、屋上に吹き抜けた風に乗る。

「奇跡……？」

「ああ」

また聞き返したアヒルに、箆也が再度、頷く。

「例えば、“信じる”という言葉がある」

アヒルが真剣な表情を見せ、まっすぐに箆也を見つめ、箆也の言

葉に聞き入る。

「今、“信じる”という言葉があるのは、誰かが誰かを信じたから。信じようと思ったから、だから生まれた」

箆也が胸の前へと持って来た右手を、そっと握り締める。

「“信じる”という言葉が伝わったのは、長い時の中で、人がずっと、誰かを信じてきたから」

握り締めた手を見つめ、箆也がさらに言葉が続ける。

「信じようと思える友が、恋人が、家族が、居たから。信じようと思える相手に、巡り会えたから」

箆也が口元を緩め、小さく笑みを零す。

「変わりやすい人の思いの中で、ほんの一握りの気持ちに乗って、決して消えずに、長い時を超えて……」

一瞬の呼吸で、小さな間があく。

「今、ここに在る」

握り締められた手が、箆也の胸へと当たる。

「だから、“言葉は奇跡”なのだと」

「……っ」

その言葉を噛み締めるように、アヒルが強く手すりを握り、目を細める。

「だから、言葉には力があって、だから、言葉というものはこんなにも重いものなのだと」

箆也が視線を上げ、そっと空を見上げる。

「その重みを知っている者だからこそ、五十音士は、言葉の力で戦えるのだと」

空を見上げた箆也のその声が、どこか力強く、響き渡った。

「あの時のカモメさんの言葉が、今もはっきりと、この胸の中に残っている」

視線を下げた箆也が、開いた手のひらを、そこに在る言葉を確認めるように、胸へと当てて。

「言葉がどんなにあやふやなものであったとしても、失われやすいものであったとしても…」

溜めるように、箆也が一呼吸置く。

「あの言葉だけは、消えない。きっと一生、憶えている」
「……………」

箆也の言葉をただ聞きながら、アヒルが正門を、正門で別れ行く生徒たちを、まっすぐに見つめる。

「言葉は奇跡、か…」

その言葉を繰り返したアヒルが、そっと口元を緩める。

「顔に似合わず、洒落たこと言うよなあ。カー兄も」

「元祖恋盲腸ファンだからな、あの人は」

「アハハ、そういや、そうだった」

カモメが好きだったものを思い出し、アヒルがさらに笑みを大きくする。

「なあ、箆也」

「何だ？」

呼びかけるアヒルに、箆也が振り向くことなく、声だけを向ける。

「俺が、どんな道を選んだとしても…」

少し迷うように、止まる言葉。

「俺が選んだのが、どんな道だったとしても、お前、俺に附いて来

るか？」

振り向くアヒルに応えるように、箆也もゆっくりとアヒルを見る。その瞳は互いに真剣で、屋上に妙な静けさが吹き抜けた。

「阿呆」

「ああ!？」

箆也が短く落としたその言葉に、アヒルが大きく顔をしかめる。

「んだよ！阿呆とは、何：！」

「今まで一度でも、僕があなたに附いていなかったことがあるか？」

「へ？」

怒鳴りあげるアヒルの声を遮り、問いかける箆也に、アヒルが目を丸くする。

「まあ、ないな」

「だろう？もっと自分に自信を持て、神」

箆也が強い口調で、アヒルへと言葉を投げかける。

「皆があなたに道の選択を託したのは、皆があなたを、あなたの言葉信じているからだ」

まっすぐな箆也の、その瞳が、正面からアヒルの姿を捉える。

「そして、僕も、あなたを信じている」

箆也の思いを乗せ、届く言葉。

「だからあなたも、自分を信じろ」

その言葉が、はつきりと響く。

「僕は、あなたに附いていく」

「……っ」

伝わる箆也の言葉に、一瞬、ハッとした表情を見せた後、その視線を移し、下方に広がる学校の校庭を、正門を、言ノ葉町を見渡して、アヒルが穏やかに笑う。

「俺、決めたよ」

そう短く言ったアヒルの、その瞳には、確かな光が灯っており、一切の迷いもない、晴れやかなものに見える。

「そうか…」

アヒルの言葉を受け取り、籠也は満足げな笑みを浮かべ、そつと頷いた。

Word. 69 神ニ、託ス (4)

言ノ葉高校、国語資料室。

「失礼します」

「遅いぞ」

資料室へと入って来たアヒルの姿を見た途端、部屋の中で本を読んでいた恵は、不機嫌な表情をアヒルへと向けた。

「居残り掃除にまで、遅刻するんじゃない。とつと昨日の書庫整理の続きを…」

「恵先生」

「あ？」

不意に言葉を遮るアヒルに、恵が戸惑うように眉をひそめる。資料室の扉を閉じたアヒルは、その前に立ち、ゆっくりと俯けていた顔を上げた。

「……っ」

顔を上げたアヒルの、その決意した表情を見て、恵がハツとした表情となる。察した様子で、恵は素早く読んでいた本を閉じ、椅子から立ち上がった。

「朝比奈、お前…」

「親父に言った方がいいのか、母さんに言った方がいいのか、色々と悩んだんだけどさ」

恵が眉をひそめる中、アヒルが恵へと、笑顔を向ける。

「やっぱり最初に、恵先生に言っておきたいって思って」

笑うアヒルを、言葉もなく、ただ見つめる恵。

「俺の決めた答え、俺の選んだ、最後の道を」

「……ああ」

少し間をあけて、恵が聞くことを了承するように、そっと頷く。

「俺、今日一日、ずっと“言葉”について、考えてた」

恵へと語りかけるように、アヒルが話を続ける。

「皆の言葉を一つ一つ聞いて、俺自身の発した言葉を思い返して、周りで行き交ってる言葉を、何個も何個も耳に入れた」

恵は口を閉じたまま、真剣な表情で、アヒルの話に耳を傾ける。

「それで、思った」

自身の思いを確認するように、アヒルが自分の胸元へと視線を落とす。

「俺は、“言葉”が好きだ」

噛み締めるように言葉を発し、大きく笑みを浮かべるアヒル。

——グッドモウモウモーニング！アーくうん！——

——うるさい、早くしろ——

——さあ、たぁーんとお食べ：フフフ：——

——はぁ！こんな俺がすみませえん！——

——おはよう、朝比奈くん——

「挨拶も、笑い声も、怒る声も、さりげない言葉の一つ一つが、本当に全部好きだ」

今日一日に、行き交った言葉の数々を思い出し、アヒルがその表情全体から、笑みを溢れ出させる。

「そして、それは、“安の神”だから、好きなんじゃない」

顔を上げたアヒルが、再びまっすぐに恵を見つめる。

「“安の神”になる前から、ただの朝比奈アヒルだった頃から、俺は、“言葉”が大好きだった」

「……っ」

アヒルのその溢れる笑みに、恵も思わず、笑みを零す。

「ああ、そうだな」

アヒルの言葉を認めるように、大きく頷く恵。恵は、安の神に、五十音士になる前のアヒルも、よく知っている。そして、なる前からアヒルが、言葉を大切にしていたことも、十分理解していた。

「安の神だからじゃなくって、俺は、俺だから、朝比奈アヒルだから、言葉を、皆の言葉を守りたいんだ」

その思いの強さを表すように、アヒルが強く拳を握り締める。

「だから、俺は……」

恵をまっすぐに見据えたアヒルが、言葉の力を溜めるように、少しだけ間を置く。

「安の神として、皆の言葉を守るために戦う」

アヒルの声が、資料室に、強く響き渡る。

「安の神として、“を”の文字を、すべての五十音士の文字を、消す」

「……………」

まっすぐにアヒルを見つめた恵が、アヒルの選んだその答えを聞き、複雑そうに、表情を曇らせる。

「本当に、いいのか……？」

最後の確認をするように、アヒルへと問う恵。

「そう決めてしまったら、お前が、すべての五十音の重みを、背負うことになるんだぞ……？」

「……………わかってる」

少し視線を落とし、アヒルが短めに頷く。

「でも、もう決めたんだ」

そっと笑みを零し、再び顔をあげるアヒル。

「この重みを、背負っていくって」

「……………」

何の迷いもないまっすぐな瞳で、何の曇りもない晴れやかな笑顔で、そうはっきりと言い放つアヒルを見つめ、恵はどこか苦しげな表情を見せるが、言葉を返すことはしなかった。

「それに、本当は、結構前から、五十音士の“言葉”ってものに、ちよっと疑問持ってた」

「疑問……？」

「ああ」

眉をひそめた恵に、アヒルが大きく頷く。

「持ったのは、始忌^{シキ}との戦いの後なんだ」

アヒルが少し歩を進め、扉の前から、資料室の中へと進む。

「俺は結局、伍黄を倒すっていう選択をしたけど、あれは本当に正しかったのかなって」

——あの俺の痛みが、こんなに簡単に、掻き消されてたまるかあ
あ……！——

今も胸に刻みつき、決して離れようとしないう、あの戦いの時の伍黄の、心からの叫び。

「俺は、五十音士の言葉で、勝手に生み出されてしまったあいつを、長年の痛みから逃れようと、ただ必死だったあいつを、言葉を守るために消した」

「それはっ……」

アヒルの言葉を素直に受け入れられなかったのか、恵が思わず、すぐさま口を開く。

「それは……」

だが、口を開いた恵も、アヒルのやったことが正しかったと、そう言い切ることは出来ず、そっと俯いてしまう。

「五十音士は、言葉の重みを知る者……」

恵が何も言えぬうちに、アヒルがさらに言葉が続ける。

——俺以外の神など、この世には必要ない……！——

——それでも私は、たった一つの言葉が欲しい……！——

「言葉を何よりも重んじてるから、時に、言葉に狂わされる……」

——俺に、俺たちに……カー兄を返せよお……！——

——俺から大切なものを奪った言葉が、絶対に“許せない”……！——

「言葉を何よりも重んじているから、時に、言葉を許せない…」
イクラの、和音の、阿修羅の、必死な、そしてどこか悲しげだった姿を思い出し、アヒルが俯いたまま、目を細める。

「もしかしたら五十音士は、言葉を、重いものにし過ぎちゃったんじゃないかなって」

「……っ」

恵が視線を落とし、何やら考え込むような表情を見せる。

「確かに、そうなのかも知れないな」

「うん。だからもう、終わらせるんだ」

頷いたアヒルが、その場に立ち止まり、笑みを零す。

「たくさん痛みを、悲しみを生み出してきた五十音士を、俺たちの代で、この時代で、終わらせる」

アヒルが、決意した表情を、再び恵へと向ける。そんなアヒルを見つめ、恵はどこか不安げな表情を見せた。その恵の不安を感じ取ったのか、アヒルが安心させるように、大きく笑う。

「大丈夫」

満面の笑みで、自信満々に言葉を放つアヒル。

「五十音士がいなくなっても、言葉がなくなるわけじゃない」

アヒルが胸へと手を当て、自分自身にも言い聞かせるように、言葉が続ける。

「人が、胸の中に眠る思いを伝えたいって思えたら、伝えたいって思える相手に出会えたら、言葉はきつと、続いていける」

大切なものを噛み締めるように、一つ一つの言葉を、丁寧に落としていくアヒル。

「小さな小さな、人の思いを伝って、この長い時の中を、ずっと…」
笑みを深くし、アヒルがまた、顔を上げる。

「俺はそう、“信じる”」

「……っ」

アヒルの眩しいばかりのその笑顔を見つめ、恵はさらに、その瞳を細めた。

「随分と、洒落たことを言うんだな。トンビのくせに」

「だから俺はアヒルだったの！」

相変わらず名を間違える恵に、アヒルが大きく口を尖らせる。

「つつーか、ほとんど受け売りなんだ。さっき箆也から、カー兄の言葉、教えてもらってさ」

「そうか。あいつの言葉か」

笑顔を見せるアヒルに、恵がすぐに納得するように頷く。

「どうりで、効くはずだ…」

「え？」

小さな声で落とされた恵のその言葉を、アヒルは耳に入れることが出来なかった。

「お前がそこまでの覚悟を決めて、この戦いに臨もうとしてくれるっていうのに、黙っとくってのは、筋が通らねえよな」

「え…？」

今度は言葉を聞きいれるが、その意味がわからず、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「先生？」

「朝比奈」

呼びかけるアヒルに対し、名を呼ぶことで答える恵。

「私が自分の言葉、“永遠”^{えいえん}で、若さと命を永遠のものにしたって話した時、お前、言ったよな？」

確認するように、恵がアヒルへと問いかける。

「“なんで、そんなこと”って…」

「それは…」

恵の言葉に、アヒルがどこか気まずそうに俯く。まるで、恵を責めるような言葉。アヒルは決して、恵を責めようと思って言ったわけではなかった。ただ、あの時は、あの言葉が出てきてしまったのだ。

「その言葉に、今、答える」

「え？」

答えると言った恵に、アヒルが驚いた様子で顔を上げる。

「何故、“遠の神” 永遠が、生まれてしまったのか、そのわけも…」

「恵、先生…？」

ひどく辛そうな、思い詰めたような、そんな表情を見せる恵に、戸惑うように首を傾げるアヒル。

「永遠は、私の言葉“永遠”^{えいえん}により、私と同じように永遠の時を生きることとなった者」

恵がゆっくりと視線を上げ、その瞳で、アヒルの姿を捉える。

「私の、“弟”だ」

「え…？」

その言葉に、アヒルの表情が止まる。

「弟…？」

———死にたくない。死にたくないよ、お姉ちゃん。

ただ、君がそう、願ったから……。

Word 70 喜ビナキ少年 (1)

あの日の出来事が、間違いであったというのなら、やり直させてほしい。

今、すぐに、あの日から。

——二十六年前、韻本部。

「恵！」

「ああ？」

韻本部内の、重要機密書庫で、まだ読んでいない本はないかと、本棚をじっと見つめていたその者が、呼びかけられる声に、ゆっくりと振り返る。長い髪を一つに束ねた、鋭い瞳に、凛々しい表情の女性。五十音士の中でも最高位の神、五神いつがみの一人、“恵ゑの神” 目白恵であった。二十代前半だろうか、大人っぽい雰囲気の中に、まだわずかに幼さを残している。

「何だ、茜か」

「何だとは失礼ねえ」

恵の名を呼びながら、書庫へと現れたのは、茜と呼ばれた愛らしい少女。ふわふわとした茶色の髪に、大きな瞳で、柔らかな笑顔を見せている。どこか鋭い印象を持つ恵とは、対照的な少女だ。恵よりは、いくつか下の年齢に見えた。

「あんまり、本部内をウロウロすんなよ？いくら兄貴が神だからって、お前自身は五十音士なわけじゃねえんだから」

「わかってます。それより聞いた？新しい神様のこと」

「ああ、“為ゐの神” だろう？」

近くの本棚に手を伸ばし、適当な本を手に取りながら、恵が茜の言葉に答える。

「昨日、実施された神試験に、合格したと、芽衣子めいしから連絡が来た」
「ええ。それで、その受かった神というのがね」
「十二歳だってんだろ？」

「え？」

恵の言葉を聞き、茜が拍子抜けした様子で、その大きな瞳を丸くする。

「何だ、知ってたの」

「ああ。それも芽衣子から、連絡が来ていてな」

「芽衣子さんは、優秀過ぎるわね」

「まあ、私の神付きだからな」

がっかりと肩を落とす茜を横目に、恵が薄く笑みを浮かべる。

「にしても、十二歳かあ。若いなあ」

「ええ。何百年と続いてきた五十音士の歴史の中で、最も若い神だそうよ」

「そりゃ凄い」

本を読み進めながら、恵があまり感情のこもっていない声で誉める。

「遠久君とくみが十三歳で最年少記録を樹立した時も、随分と大騒ぎだったのに、それがたったの三年で更新されてしまうなんてねえ」

「若い音士が育つっていうのは、いいことさ」

本へと視線を落としたまま、何やら嬉しそうに笑みを浮かべる恵。

「最近の若者は、言葉を使うことが、どうにも下手くそだからねえ」

「年寄り臭いわよ？恵」

「うっせえよ」

呆れたように言い放つ茜に、恵が少し悪態づいて答える。

「それで、その新しい神様っていう子がねえ」

「それも言わなくていいぞ」

「え？」

言葉を遮る恵に、茜が首を傾げる。

「これも芽衣子さんから、聞いているの？」

「いや、今から見てくるからいいってこと」

「今から？」

茜がますます戸惑う中、恵が読んでいた本を閉じ、本棚のもとあった場所へと戻す。

「今から、五神の顔合わせなんだ」

やっと茜の方を見た恵は、どこか楽しげに微笑んだ。

「昨日付けで“為^ゐの神”になった、井戸端為介だ」

整った顔立ちをした、少女のような可憐な顔立ちの少年は、その見かけとは対照的に、偉そうな声で名を名乗った。

「別に、同じ神だからといって仲良くする気もないし、先輩の神だからといって尊敬する気もない」

固く腕組みをした少年は、椅子の上に踏ん反り返って、さらに言葉が続ける。十二歳とは思えぬ流暢な言葉の数々は、彼が幼くとも言葉の神であることを示しているのだろう。

「だから、必要最小限以外、ボクには話しかけないでくれ。以上」
『……………』

一応は、自己紹介と呼ばれるものが終わったのだろうか。だが、拍手をする気にもなれず、その場に集まった恵や他の者たちは、ただ啞然とした表情で、その少年を見つめていた。

「絵に描いたような、クソ生意気だな」

「確かに」

しかめた表情で言う恵に、思わず頷いてしまった、まだ若い、綺麗な顔立ちの女性。暗い紫色の、忍びの装束のようなものを身に纏っており、長い髪はリボンで二つに束ねてある。恵の神付き、“女^め守”の芽衣子であった。

「いいねえ、さすが若いだけあって、元気いっぱいだねえ」

「そうですか？ 私には礼儀というものが、大量に不足しているよう

に見えますけども」

暢気な口調で、明るい笑顔を見せている青年の横で、眉をひそめている眼鏡をかけた、知的そうな、まだ十五歳程の少女。その少女は、“久守”の熊子であり、現在、病氣療養中の“武守”に代わり、“宇の神”の神附きを務めていた。

「いいじゃないのお。妙に礼儀のなってるお子ちゃまなんて、お子ちゃまらしくないってえ」

そんな熊子へと、笑顔の青年は、さらに笑みを大きくして、穏やかに言葉を投げかける。見るからに優しく、温かい雰囲気を纏った、しっかりとした体格に、精悍な顔つきの青年。恵と同じ年代であろうか、二十代前半に見える。それは、恵と同じ五神の一人で、五神史上、最強の神との呼び声も高い“宇の神”、宇田川ウズラであった。

「俺は、“宇の神”の宇田川ウズラっていうんだあ。よろしくねえ、いっくうくん」

「いっくん…?」

ウズラの呼んだその名に、為介が大きく顔を引きつる。

「うん。為介だから、いっくうくん」

「人権侵害で訴えられる前に呼び名を変えるか、ボクに一生、呼びかけないか、どちらかを選べ」

「えええ!?!」

為介の言葉に、両手を広げ、大きく驚くウズラ。

「じゃあ、呼び名を変えてえ、いっちゃん?」

「ボクに一生、呼びかけないでくれ」

「えええ!?!? せっかく一緒に、美味しいイチゴパフェの店行こうって、誘うつもりだったのにい」

「必要ない」

「はあ…」

ウズラと為介のやり取りを聞きながら、恵が深々と溜息を吐く。
「そういや、後の二人はどうしたんだ? 今日、五神の顔合わせの

はずだろう？」

部屋を見回し、他の神が来ていないことに気付くと、恵がすぐ横に立っている芽衣子へと問いかける。

「遠の神は、忌退治の依頼が入ったそうで、毛守^{ももり}とお出かけになりました。顔合わせは、神試験実施の際に、済んでいるとのことだ」

「ああ。そういえば、今回の神試験をやったのは、遠久だったな」
芽衣子の言葉に、恵が納得するように頷く。

「後は、安の神ですね」

「あいつはどうした？^{まさぐち}正一」

「へ？」

振り向いた恵に問いかけられ、目を丸くする、三十代半ばから四十代の、がっちり固めたリーゼント髪に黄色い色眼鏡の、小柄の男。安の神の神附きで、“末守^{まもり}”の末宮正一であった。

「知らねえよ？」

「知らないって、正一さん、安附でしょう？」

当然のように答える正一に、芽衣子が呆れた視線を向ける。

「あいつと時間合わせてたら、こっちまで遅刻しちまうだろう？」

「それは言ってるな」

「まあ、そうでしょうけど…」

正一の言葉に、恵と芽衣子は素直に納得する。

「まあ、俺の予想じゃ、そろそろ来る頃で…」

「セエエエーフ！」

「そら、来た」

正一が口を開いた丁度その時、部屋の扉が、まるで突き破られたように、大きな音を立てて開かれ、外から人が、大声と共に勢いよく飛び込んでくる。

「セーフかあ！？セーフだろお！？」

部屋へと入って来たのは、白い鉢巻を頭に巻きつけ、『あさひな』と書かれた紺色のエプロンをした、背の高い、力強い黒色の瞳の青年であった。年は恵やウズラと同じくらいだろうが、全力で生きて

いるような、その勢いのある様子は、見た目以上に、若く感じる。
まるで少年のような青年だ。

「アウトだ、ボケ」

「遅いよおアケル明」

入って来た青年へと、恵とウズラがそれぞれ、声を掛ける。青年の名を、朝比奈明。五神の一人“安の神”にして、ウズラと共に“五神史上、最強の二神”と呼ばれる神であった。

「仕方ないだろ？ 茜のヤツが店番の時間だったのに、戻って来なくて、ずっと店で待ってたんだからよお」

「放つといたって、別に害もないだろ。あんな寂れた八百屋」

「あんだとお！？ 恵、こらあ！」

「まあまあ明、落ち着いてえ」

冷たく言葉を吐き捨てる恵に、勢いよく怒鳴りあげる明。そんな、今にも殴りかかりそうな勢いの明を、ウズラが笑顔で宥める。

「あ、いっちゃん。彼が“安の神”ねえ、安の神の朝比奈明」

「あ？」

ウズラが自身の名を紹介している為介の姿に気付き、恵を怒鳴りつけていた明が、振り向く。

「おう、お前かあ。新しい神つーのは」

目つきの悪い表情ながらも、笑顔を見せた明が、親しげに話しながら、為介の方へと近付いていく。

「まあ、しっかり頑張って、この俺のような立派な神になれよお！」

「痛い…」

大声で言いながら、数回強く、背中を叩く明に、為介が表情を引きつる。

「ボクにデカイ声で、話し掛けないでくれる？ 難聴になる。だいたい、間抜け面のあんだが、立派な神には、とても見えないし」

「ああん！？ 何だとお！？」

為介の発言に、コメカミの血管を浮き上がらせ、怒り狂う明。
「もっぺん、言ってみやがれ！ クソガキアアア！」

「ああ、ああ。明、落ち着いてえ」

「フン」

我慢ならない様子で、殴りかかろうとする明を、後ろから押さえ込み、笑顔のまま何とか引き止めるウズラ。そんな明の様子を見ながら、為介が少しの反省の色もなく、そっぽを向いて、鼻を鳴らす。

「はあ…」

そんな自分と同じ神々を見つめ、恵はまた、深々と溜息を吐いた。

結局、收拾もつかぬまま、五神の初顔合わせは終わった。まだ明と為介がもめ、ウズラが宥めているという状況が続いていたが、恵はこれ以上、付き合ってもいられず、神附きの芽衣子と共に、部屋を出た。

「あんな状態で、大丈夫なのでしょう？」

「さあな」

どこか不安げに問いかける芽衣子に、恵が肩を落としながら答える。

「まあ、五神が力を合わせて、どうこうなんて場面は、そうないんだ。仲が良からうと悪からうと、特に問題はないだろう」

「それもそうですね」

恵の言葉に少しは安心したのか、芽衣子が笑顔を見せる。

「あ、恵さま。あそこ、遠久さまじゃ、ありませんか？」

「ん？」

芽衣子の声に、恵が、芽衣子の指の向けられた、前方へと視線を移す。

「あ」

視線を移したその瞳を、はっきりと開く恵。

「遠久！」

恵がすぐさま右手をあげ、大きく響く声で、その名を呼んだ。廊下に声が響き渡り、前方に立ち、向かいに立った男と何やら会話をしていたその者が、響いた名を聞きつけ、ゆっくりと振り返る。

「お姉ちゃん！」

振り返った途端、何とも嬉しそうに、大きな笑顔を見せる少年。

年は十五、十六であろうか。顔立ちは幼さが残っているが、持っている雰囲気はどこか落ち着いていて、少し大人びている。最後の五神“遠の神”、目白遠久。恵の弟であった。

「戻ってたのか。忌退治の依頼だったんだろう？」

「うん。今、戻って来たところ」

互いに歩み寄り、距離を詰めたところで、恵と遠久が言葉を交わす。

「大丈夫か？怪我は？」

「ないよ。もう、僕だつて一応、お姉ちゃんと同じ五神の一人なんだよ？普通の忌退治で、怪我したりしないってば」

「それも、そうだな」

心配する姉に、少し拗ねたように、頬を膨らませる遠久。そんな遠久を見て、恵は困ったような笑みを浮かべた。遠久は、今は為介により更新されてしまったが、三年前、十三歳で、史上最年少の五神となった者だ。十分にその力は知っているが、それでも心配してしまうのは、恵が遠久の姉であるがゆえであった。

「ご無沙汰しております、恵の神」

「おう、桃雪。お前もご苦労だったな」

「いえ」

遠久の横から姿を現し、恵へと深々と頭を下げる、派手な桃色髪の男。先程まで、遠久と話していたその男は、遠久の神付き、“毛守”の百井桃雪であった。労う恵に、桃雪は頭を下げたまま、短く言葉を放つ。

「では神、私は報告書を言姫様に提出してきますので」

「うん、ありがとう。今日はそのまま、帰っていいよ、桃雪」

「了解いたしました」

命令とも呼べぬ、優しい口調の遠久の言葉に、深々と頭を下げると、桃雪はもう一度、恵に軽く会釈し、そのまま廊下を曲って、姿を消していった。

「恵さま、私も、このまま帰らせていただきます。今日はこの後、特に用事ありませんし、恵さまも遠久さまとお帰り下さい」

「ああ、済まない。また明日な、芽衣子」

「はい」

恵の言葉に笑顔で頷くと、芽衣子は天井に向かって、高々と飛び上がり、いつの間にか姿を消した。

「じゃあ、私たちも帰るとするか」

「うん」

振り向いた恵に、遠久が幼い笑顔で頷く。大人びた雰囲気纏う遠久も、姉の前では、まだまだ幼い子供の子供である。

「そういえば今日、顔合わせあったぞ。新しい為の神の」

「ああ。どうだった？」

「どうもこうも」

先程の光景を思い出し、恵がまたしても、眉をひそめる。

「あのガキのクソ生意気発言に、明の阿呆が怒り狂って、収拾つかなくなった」

「アハハ、やっぱり」

遠久が予想していたような言葉を発しながら、少し引きつった笑顔で、乾いた笑い声を零す。

「よくもまあ、あんなガキ、神試験に合格させたなあ？」

「実力はピカイチなんだよ。試験でちょっとだけ戦ったけど、俺も一瞬、やられそうになるくらい強かったんだ」

呆れたように言い放つ恵に、遠久が弁解するように、必死に言葉を繋ぐ。

「十二歳とは思えないくらい、すごく言葉にも詳しいし」

「力が強くて、言葉に詳しけりゃいいってもんじゃないんだよ」

必死に為介の肩を持つ遠久に、恵が口を尖らせる。

「知ってんだろ？五十音士に必要なのは、いかに言葉を大切に出来るか、その精神だ」

恵が確かめるように、遠久へと問いかける。

「その点、あのクソガキはなあ。下手したら、あんなのを神に選んだ、お前まで悪く言われかね…」

「すっごく大切にしてるって、思ったんだよね」

恵の言葉を遮り、遠久が言う。

「戦ったほんの少しの間でだけど、あの子は、すっごく言葉を大切にしてるって、そう思った。だから、迷わず合格に出来たんだ」

「遠久…」

自信を持って、晴れやかに笑う遠久を見つめ、恵がそっと目を細める。戸惑うような恵の表情は、すぐさま笑顔へと変わった。

「お前がそう言うなら、間違いないな」

「うん」

恵が軽く遠久の肩を叩くと、遠久が嬉しそうに笑う。

「けど、しばらくはうるさいぞお？明の阿呆は、すぐに怒鳴り出すからなあ」

「アハハ、そうだね！」

楽しげに言葉を交わしながら、恵と遠久の姉弟は、韻本部から、自分たちの家へと帰っていった。

Word 70 喜ビナキ少年 (2)

だが、恵と遠久の期待も虚しくなるほどに、“最年少神”、井戸端為介の、勝手な振る舞いは続いた。

「お断りします」

「へ？」

為介の口から飛び出した、思いがけないその言葉に、韻本部からの命令を伝えた従者は、思わず間の抜けた声を漏らした。

「こ、断ると…？」

「はい。そんな単純な忌退治、ボクがわざわざ出ていくほどのものではありません」

もう一度、確かめるように問いかけた従者に、為介は何の躊躇いもなく、すらすらと答えていく。

「こんなの、神にやらせずとも、その辺で暇そうにしている、雑魚音士にやらせておけば十分でしょう」

『ああ！？』

為介のあまりの発言に、周囲にいた五十音士たちが、急に殺気立つ。

「何だよ、あの言い方は！一発、ブン殴らねえと、気が済まねえ！」
殺気立った音士の一人が立ち上がり、涼しげな表情を見せている為介を、睨みつける。

「やめとけて！お前、この前の見てなかったのか？殴りかかった比守の野郎が、あいつの四字熟語で溺死しかけたとこ！」

「四、字熟語…？」

「そうだよ！あいつ、ガキだけど、化け物みてえに強ええんだ！下手に勝負挑んだら、死ぬぜ？」

「ク、クソっ…」

もう一人の、音士らしき男に説得され、立ち上がった音士は、悔しげに唇を噛み締めながらも、再び大人しく座り込む。

「フン…」

座り込んだ男の様子を見て、冷たく鼻を鳴らす為介。

「じゃあ、この件はこれで」

「あ…！」

従者に短く言葉を吐いて、為介があっさりと従者に背を向け、その場を歩き去っていく。

「為、為の神…！」

従者が必死に呼びかけるが、為介が止まる様子はない。

「も、申し訳ありません！申し訳ありません！」

啞然とする従者に何度も頭を下げているのは、まだ若い、眼鏡をかけた、細身の男。為介の神附きで、“美守”^{みもり}の、箕島充^{みのしまみつる}であった。

「わっちゃあ。あんな神様じゃあ、大変だろうなあ。充の奴」

そんな充の様子を見て、同じ部屋に居た正一が、思わず表情をしめる。そんな正一の横に座っていた明が、真剣な表情を見せ、無言で立ち上がった。

「んあ？神？」

正一が戸惑うように見つめる中、明が素早く歩を進め、部屋を出て行くこうとする為介の前へと、行く手を阻むように立ちはだかる。目の前に立った明に、足を止めた為介が、睨みつけるように視線を上げた。

「何？」

面倒臭そうに顔を上げながら、為介が嫌々、明へと問いかける。

「ボクの代わりに、忌退治でもやってくれるの？いつも暇そうだもんね、安の神は」

「お前は、言葉の神だろう？」

嫌そうな空気を前面に押し出し、問いかける為介に、明が鋭く言葉向ける。

「だったら？何？」

「だったら、相手を思いやった言葉や、相手を喜ばせるような言葉の一つ、言えねえのかよ？」

「……っ」

明のその言葉に、普段、不機嫌な表情のまま、あまり顔色を変えない為介が、珍しく大きく顔をしかめる。

「あんたに、ボク of 言葉を、とやかく言われる筋合いはない」

はつきりとした口調で言い放って、為介が明の横を通り過ぎ、部屋を出て行く。明はそれ以上、言葉を発することなく、為介を引き止める様子も見せなかった。

「ふう」

部屋を出た為介が、大きな扉を閉めた後、一息つくように、大きく息を吐く。

「クソ……」

為介が表情を歪め、小さく声を漏らす。

「悔しい？」

「え？」

前方から聞こえてくる声に、為介が驚いた様子で顔を上げる。為介が上げた視線のその先には、相変わらず穏やかな笑顔を見せた、ウズラが立っていた。

「宇の、神……」

ウズラの姿を捉え、為介がそっと目を細める。

「何の用？ 安の神といい、あんたといい、五神史上最強の二神って言われてるわりに、いっつも暇そうだよね」

為介が呆れたように肩を落しながら、ウズラへと言葉を掛ける。

「ボクは、暇なあんたたちとは違って、忙し……」

「明に、自分のこと、言い当てられちゃって、悔しい？」

ウズラのその問いかけに、悪態づくようにした為介の表情が、ぐさま止まる。そして、さらに険しい表情となって、為介はウズラを睨みつけた。

「知ったような口をきくな。あんたに、ボクの何がわかる？」

「まあ確かに、君のこと、あんまりよく知らないし、わからないけどねえ」

為介の問いかけに、口元を緩め、涼しげな笑みを浮かべるウズラ。
「君が、言葉にとっても“戸惑っている”ことくらいは、見てたらわかるよ」

「戸惑っている…?」

ウズラの言葉を繰り返し、為介が深く眉をひそめる。

「ボクは何にも、迷ってなんてない」

その言葉を否定するように、はっきりと言い放つ。

「ボクは忙しいんだ。失礼するよ」

冷たく言い切ると為介は、ウズラへと背を向け、強く足音を響かせながら、廊下を突き進んでいった。薄く微笑んだままのウズラが見送る中、為介が角を曲がり、ウズラからその姿が完全に見えなくなるまでやって来ると、そこでふと、足を止める。

――何だ、居たの。別に居なくなってくれても、良かったのに――

「……っ」

思い出される冷たい言葉に、為介が小さな体を、さらに小さく屈め込む。

「迷ってなんて、ない…」

為介のその声は、まるで自分に言い聞かせるような、弱々しく、か細い声であった。

「まったく、何なんだよ!あのクソガキヤア!」

為介の去った部屋では、明が、全力の大声をあげながら、為介への怒りを爆発させていた。

「いちいち、いちいち、生意気な口ききやがってえ!あいつの成分は全部、クソ生意気で構成されてんのかあ!?!ああ!?!」

立ったまま、両拳を握り締めて、天井へ向けて、ひたすら大声を飛ばしている明に対し、近くに腰掛けた恵や遠久が、迷惑そうな表情を見せ、手で軽く耳を塞いでいる。

「なんで、あんなクソガキ、合格させやがったんだよ!? 遠久!」

「遠久のせい、みたいに言うんじゃねえ。阿呆明」

「んだとお!? 恵、こらあ!」

明がさらに顔をしかめ、冷たく言い放った恵を睨みつける。

「まあまあ二人共おゝ落ち着いてえ」

殺気立つ二人を、ウズラが笑顔で宥める。

「ううゝん…」

「ん?」

宥めていたウズラが、恵のすぐ隣の席で、何やら気難しい表情を見せ、悩み込むような唸り声を漏らしている遠久に気付き、首を傾ける。

「どうしたのお? とおクン」

明るく笑みを零し、ウズラが遠久へと問いかける。

「いえ、やっぱり、俺の思い違いだったのかなあって思ってる」

「思い違い?」

「はい。神試験で戦ってた時、確かにあの子は、言葉を大切にしているって、直感で何かこう、思ったんですけど…」

話を続けながら、遠久の表情が徐々に曇っていく。

「でも、今までの言葉の数々を聞いていると、やっぱり思い違いだったのかなあって」

先程の為介の姿を思い出すように、遠久が部屋の扉の方を見つめ、目を細める。

「違ってないんじゃないかな、たぶん」

「え?」

ウズラの言葉に、戸惑うように振り向く遠久。

「当たってると思うよ。とおクンの直感」

「それって、どういう…」

「俺、聞いたんだ。あのクソガキのこと」

『……？』

遠久がウズラへと問いかけようとしたその時、部屋の逆側で集まっている、五十音士たちの声に気付き、ウズラと遠久が同時に振り向く。言い争っていた明と恵も、その声が聞こえた様子で、同じように振り向いていた。会話をしているのは、先程の為介の発言に、怒りを露にしていた連中である。

「あいつ、結構な資産家の息子らしいぜ？ま、子供は子供でも、愛人の子供だけだな」

「マジ？」

「マジマジ。家があいつの存在隠したがってさ、学校にも行かせずに、ずっと家に閉じ込めてたんだと」

集団の中央に立った若い音士が、面白可笑しく、為介の話をして
いる。

「実の親からすら、口きいてもらえなくて、ずっと、誰ともろくに会話せずにきたらしいぜ」

「だから、あんなに会話、下手クソなのかよお。あのガキ」

「そうそう！要は、人と会話するってことの、練習が足りてねえんだよ」

話を続ける音士が、楽しげに笑う。

「んな、人間としても終わってる奴、言葉の神にすんなって感じだよなあ！ハハハハハ！」

音士の笑い声が、部屋全体に響き渡った。

「おい」

「ハハハ……！あ？」

背後から掛けられる声に、その音士が、やっとその笑い声を止め、
振り返る。

「ああ、安の神！」

音士が振り返ったその先に立っていたのは、先程までの怒り狂った表情からは一転し、静かな、落ち着いた表情を見せた明であった。

「あんたから、韻本部へちよつと言ってやってくれよ！人との会話にも慣れてない、残念なお子様を神になんかしておくなつて」

立ち上がった音士が、明との距離を詰め、どこか馴れ馴れしく言葉放つ。

「最強神って言われてる、あんたからの意見なら、韻もちったあ、取り入れ……」

「それ以上、喋んな」

「へ？」

明から放たれた、鋭く短い声を、聞き取りきれなかったのか、音士が目丸くする。

「何だ？何て言っ……」

「だっからそれ以上、くだらねえこと喋って、言葉を汚すなつってんだよ！」

聞き返そうとした音士に、明が勢いよく右拳を振り上げた。

「ぐあああ！」

『え……！？』

明の振り上げたその右拳が、音士の頬に見事に炸裂し、辺りの机や椅子を巻き込んで、音士の男が勢いよく後方へと吹き飛ばされていく。響く大きな音に、その音士の周りに集まっていた、他の音士たちが皆、目を見開き、驚きの表情を見せる。

「安、安の神……？」

「たった十二歳のクソガキ相手に、くっだらねえ言葉ばっか、吐きやがって……」

皆が戸惑うように見つめる中、明が下ろした拳を、力強く握り締める。

「どっちが練習、足りてねえんだよ！それでも五十音士かあ！てめえらはあ……！！」

『ぎゃあああ！』

怒り狂った明が叫びあげ、近くに居る五十音士たちへと、力一杯握り締めたその拳を振り上げる。明に殴られ叫ぶ者、明から必死に

逃げ惑う者で、部屋の中は、一気に大騒ぎとなる。

「お、落ち着いて下さい、安の神！」

「どうか、冷静に！冷静にい！」

同じ五十音士を相手に暴れ回る明を、部屋に居合わせた韻の従者たちが、必死に取り押さええるが、明の力は強く、なかなか押さえきれない様子だ。

「あーあ、やっちゃまった。あの阿呆」

「やっちゃったねえ」

「やっちゃいましたね」

そんな明の様子に頭を抱えながらも、止めようとする素振りは見せない恵。ウズラは笑顔で見守り、遠久も特に慌てずに、落ち着いた表情を見せている。皆、どちらかというところ、こうなることがわかっていたような様子だ。

「こりゃまた、しばらく謹慎だな」

「止めなくていいんですか？正一さん」

暴れ回る自身の神を見つめながら、どこか暢気に呟く正一に、芽衣子が呆れた視線を向ける。

「あいつが謹慎になってくれりゃあ、俺の仕事が減っていいんだよ」
「そうですか…」

無責任な正一の発言に、芽衣子は深々と肩を落とす。

「安の神！落ち着いてえ！」

「俺はいつだって、落ち着いてるってのお！」

必死に止める従者たちと、明の怒号が、部屋中に響き渡った。

Word. 70 喜ビナキ少年 (3)

翌日。

「え？ 謹慎？」

韻本部に設けられた自室で、十二歳の子供が読むものとは思えない、分厚く難しい本を読んでいた為介は、神付きである充からの報告に、驚いた様子で顔を上げた。

「安の神が？」

「はい。神の生い立ちについてを、とやかく言っていた五十音士他、数名の音士に軽傷を負わせた上、従者が止めるのも聞かずに、しばらくの間、暴れ回ったとか」

充が眼鏡を押し上げながら、報告の書かれた紙を、読みあげていく。

「そういうわけで、本日から一週間、自宅謹慎の処分を受けられるそうです」

「そう…」

充の報告を受けて、少し表情を曇らせた為介が、視線を下へと落とす。

「面会は特に禁止されておりませんので、会いに行かれるのでしたら、地図を…」

「なんでこの忙しいのに、謹慎中の神に会うために、わざわざ時間を割かなきゃいけないの？」

「え？」

鋭く返って来る言葉に、充が戸惑うように声を漏らす。

「で、ですが安の神は、神のために…」

「あっちが勝手にやったことだよ。ボクには関係ない」

遠慮がちに訴え出た充の言葉を、為介があっさりと遮る。

「そんなくだらない報告、今後はいちいちしないでいいから。もう下がって」

「は、はあ…」

為介の指示に頷きながら、どこか困ったような、呆れたような表情を見せて、充は一度、軽く頭を下げると、そのまま足早に、為介の部屋を出て行った。

「……………」

部屋に一人きりとなった為介は、再び本に視線を落としながら、少し悩むように、目を細めた。

その日、午後。言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』。

「へい、らっしゃい！」

店の前で、大きく声をあげるのは、『あさひな』の若き店主、朝比奈明。明は、早くに死んだ両親に代わり、高校を卒業してすぐに、この『あさひな』を継ぎ、店主となったのであった。日に焼けた肌に、鉢巻にエプロンの姿が、何とも勇ましい。

「今日は何がおすすめかしら？」

「今日はねえ、大きくて、新鮮なジャガイモとタマネギが入ってるよお。今晚、カレーなんてどう？」

「明さんが言うのなら、間違いないわね。じゃあ、そうするわ。ニンジンももらえる？」

「へい、毎度！」

やって来た主婦の客に、明るく笑顔で対応し、明が素早く取った袋に、並んでいる野菜の中から、一番大きなものを選び、袋の中へと詰めていく。袋を客へと手渡し、代金をもらう明。

「ありがとうございました！また、よろしくお願いします！」

去っていく主婦の背に、大きな声を飛ばす。

「ふう〜」

客の足が止むと、明はホっとした様子で息を落とし、額に滲んだ汗を、巻いている鉢巻を上下させ、拭いた。そこへ、明の背後から、

こちらへとやって来る足音が聞こえてくる。

「へい、らっしゃい！」

すぐさま笑顔を作り、勢いよく振り返る明。

「げっ」

だが一瞬にして、明の表情は歪んだ。

「んだよ。誰かと思えば、クソガキじゃねえか」

歪めた表情をそのままに、明が少し肩を落とす。

「客かと思って、営業スマイルしちまっただろ。ああ、スマイル一回分、無駄にしたあ」

「……………」

明の前に現れた為介は、あれこれと言葉を続ける明の方は見ずに、どこかそっぽを向いたまま、気まずそうな、それでも何かを言いたげな、複雑な表情を見せている。

「スマイル代返せ、スマイル代」

「返す必要ない。ボクは客として、ここに来たんだ」

「ああ？」

やっと口を開いた為介のその言葉に、明が眉をひそめる。

「ああ、そうですかあ。じゃあ、今日は何にしましょう？」

いかにも面倒臭そうにしながら、明が一応、為介へと問いかける。

「マスクメロン、一つ」

「ウチは野菜しか、置いてねえっての！」

メロンを要求する為介に、明の怒鳴り声が、大きく響き渡った。

店番を妹の茜へと任せ、明は、為介と共に、近くの土手へと移動した。土手へと腰掛けた為介が、傾いてきた日に照らされ、美しく輝く言ノ葉川を見つめている。

「ほらよ」

そこへ、やって来た明が、為介へと一本の缶を差し出す。為介は

振り返りながら、明からのその缶を受け取った。

「野菜ジュース…」

缶の表に書かれた文字を見て、為介が少し眉をひそめる。

「こういう時って普通、オレンジジュースとか、そういうの選ぶものじゃない？」

「うっせえ！野菜ジュースのんが、体にいいんだよ。とやかく言うなら、飲むな」

文句をつける為介に、強く言い返しながら、明が為介のすぐ横へと腰を下ろす。為介はしばらくの間、不満げに野菜ジュースを見た後、喉は乾いていたのか、渋々、缶の口を開けた。野菜ジュースを口の中に飲み入れ、好みの味でなかったのか、少しその表情を曇らせる。

「んでえ、何の用なんだ？俺に話があるから、忙しいのにわざわざ、こんな所まで来たんだろ？」

同じように野菜ジュースを一口飲み、為介へと問いかける明。明の問いかけに、為介が自分の口元から、缶の口を離す。

「謹慎処分になったって、聞いたから…」

「ああ」

為介の言葉に、明が認めるように、大きく頷く。

「いつものことだ。一年の内、半分以上は謹慎してっからなあ、俺何の自慢にもなっていないが、明はどこか得意げに話す。

「ま、ウチの八百屋はべらぼうに忙しいからなあ。たまには謹慎になっって、全力注がねえと、経営がっ…」

「結構、暇そうに見えたけど」

「ああ！？んだと、こらあ！」

こっそり口を挟んだ為介の言葉を聞き逃さず、明が笑顔を崩し、激しく怒鳴りあげる。得意げになったり、怒ったり、すぐさま変わる表情は、あまり表情を変えない為介にとっては、とても不思議なものに見えた。

「でも、その…ボクのことと、殴ったって…」

深く俯いたまま、為介がどこか言いにくそうに、言葉を発する。

「ああ？それで、気になってわざわざ様子、見に来てくれたってかあ？礼儀のなってねえ、クソガキくんが」

明はあからさまに悪態づくが、その言葉を受けても、為介は俯いたままで、言い返そうとする素振りは見せない。そんなどこか落ち込んだ様子の為介を横目に見て、明は少し目を細め、肩を落とした。

「べっつに、お前のために殴ったんじゃないよ」

「え…？」

否定する明の言葉に、為介がやっと、顔を上げる。

「あいつ等が、五十音士のくせに、くだらねえことばっか言って、言葉を汚したから、殴っただけだ。俺は」

野菜ジュースをどんどん飲みながら、明が素っ気なく、言葉を続ける。

「俺が勝手にやったことなんだから、お前は全然、気にしないでいい」

「……っ」

川を見つめたまま、放たれる明のその言葉に、為介がそっと目を細める。

「昨日、あんたに“思いやりのある言葉とか、人を喜ばせるような言葉とか、一つくらい言えないのか”って言われたこと…」

「ああ？んなこと、言っただけかあ？」

「言われたこと、だけど…」

明が惚けるように、大きく首を傾げる中、川を見つめる為介の表情が、そっと曇る。

「前にも実は、同じようなこと、言われたことあるんだよね」

為介の口調は、今までの他人行儀な、攻撃的なものではなく、どこか親しみのあるもののように思えた。

「だけど、考えても、どうしたらいいのか、わからなくて…あんたと同じように言ったその人に、どうしたらそういう言葉を言えるのかって、聞いたんだ」

明もまっすぐに川を見つめ、黙ったまま、ただ為介の声に耳を傾ける。

「そしたら、その人が言った。“自分が言われて、嬉しかった言葉を、口にすればいい”って」

為介の声が、少し低くなり、どこか暗く響き渡る。

「でも、それが、わからないんだ」

小さく言葉を紡ぎながら、為介が自嘲するような笑みを浮かべる。

「ボク、生まれてきちゃ、いけない子供だったから…」

川に懸った橋へと視線を向けた為介が、どこか切り出すように、言葉を発する。その言葉に、明は少し表情を動かしたが、為介の方を振り返ろうとはしなかった。

「だから、家から出してもらえなかったし、誰も、父さんと母さんでさえ、ボクとは、ろくに話してくれなかった」

為介の幼い、だがどこか物悲しい声が、土手に響く。

「掛けられたことのある言葉って言ったら、“居なくなればいい”とか、“なんで生まれてきたんだ”とか、そういう、冷たい言葉ばかりで…」

膝の上へと置いた手を、為介が強く握り締める。

「掛けられて嬉しかった言葉なんて、一つも思い出せなくて…」

言葉を続ける為介の口元が、わずかに震える。

「だから、わからなかった」

薄く浮かべられていた為介の笑みが、ふと止まる。

「いっぱい辞書も読んだし、言葉の本も読んだけど、でも、わからなかったんだ」

「……………」

為介のその言葉を聞き、川を見つめる明が、そっと目を細める。

「だから、その…あんたがボクのために怒ってくれたって聞いた時、その、よくわからないけど、たぶん…」

少し言いにくそうにしながら、為介が明の方を振り向く。

「嬉しかった」

短い、単調な言葉を、為介が明へと向ける。

「嬉しかった、んだと思う。だから、その…」

少し躊躇うように、置かれる間。

「……ありがとう」

自分でも迷うように言葉を続けながら、為介が明へと、噛み締めるように礼を放った。礼を言うとともに、為介はまた、深く俯いてしまう。

「じゃあ、それだけだから、ボクはこれで…」

「ありがとう」

「え…？」

すぐにその場を去ろうと、為介が立ち上がろうとしたその時、明の口から放たれる言葉。その言葉に驚き、為介は思わず、去ろうとするその動きを止めた。為介が戸惑うように見上げる中、明がゆっくりと、為介の方を振り向く。

「な、なんで“ありがとう”なの？」

「別にいい？お前に“ありがとう”って言われて嬉しかったから、“ありがとう”って言い返しただけ」

困惑した様子で問いかける為介に対し、明は素っ気なく答える。

「なあ、為介」

明の野菜ジュースを持っていない方の手が、まだ小さな、為介の頭の上へと乗った。

「この世界に、“人を傷つける言葉”つつーのは山程あるけど、“人を喜ばせる言葉”ってのも、同じだけ、山程あるんだ」

言い聞かせるような明の声が、優しく響き渡る。

「お前はまだ若い。これから山程、色んな奴と出会って、山程、色んな言葉を話す」

まっすぐに為介を見つめ、明が穏やかに笑う。

「焦る必要なんてねえ。一つずつ、覚えていけばいい」

「……っ」

向けられる明の温かな笑顔を見つめ、瞳を潤ませた為介が、溢れ

出るものを堪えるように、強く唇を噛み締める。

「うんっ…」

噛み締めた唇から、小さく零れ落ちる声。

「うん…！」

明の言葉に、為介は大きく頷いた。

「いやあ、上手くいったみたいだねえ」

「ったく…」

どこかウキウキとした声をあげるウズラの横で、恵は呆れたように、深々と肩を落とす。ウズラと恵がいるのは、言ノ葉川ほとりの木陰。木陰から顔だけを出しながら、土手の上の明と為介の様子を、観察していたのであった。

「なんで神が揃いも揃って、盗み見なんてしなきゃいけないんだよ」

「盗み見じゃなくなつて、見守ってるんだよお。恵ちゃん」

「同じことだろうが」

言い直すウズラに、恵がまた肩を落とす。

「けど、やっぱり不思議だなあ。明さんって」

二人と同じように、木陰から明たちの様子を見つめていた遠久が目を細め、感慨深げな表情で呟く。

「一番、人の感情とか、そういう繊細なものには鈍感そうなのに、結局は、一番敏感で、すぐに気付いて」

遠久が、どこか感心するように言う。

「不思議な人だよね、ホント」

「明は、根っからの神様だからねえ」

「ああ。そして神は、人を救う」

ウズラの言葉に頷き、再び明たちの方を見上げた恵が、そっと笑みを浮かべる。

「あいつが守ってるのは、言葉だけじゃなくなつて、人の心ものかも知れない」

「うん…」

響く恵の言葉に、ウズラと遠久も、穏やかに微笑んだ。

「へい、らっしやうい！」

「なんでお前が、ここに居んだよ…」

為介と共に『あさひな』の店へと戻った明を出迎えたのは、頭に鉢巻きをつけ、エプロンを纏った、すっかり八百屋に染まっている、満面の笑みのウズラであった。出迎えた親友の、その笑顔を見て、明が勢いよく表情を引きつる。

「あ、お兄ちゃん、戻ったの？」

「茜」

そこへ店の奥から、明の妹、茜が姿を見せる。

「いっちゃん、この人が、明の妹で、俺の未来のお嫁さんの茜ちゃんだよ」

「まあウズラさん、お嫁さんだなんて」

「まだやるつつってねえだろうが！勝手なこと、言ってるじゃねえ！」

明るい口調で茜を紹介するウズラに対し、茜がほんのりと頬を赤く染め、明が怒り狂った様子で怒鳴りあげる。そんな皆のやり取りを、どこか新鮮そうに見つめる為介。

「外は寒かったでしょう？はい、お兄ちゃん特製の野菜スープでも飲んで」

「あ、ありがとうございます…」

茜から湯気の立ったお碗を受け取り、為介が慣れない様子で礼を眩く。夕方になって、吹いてきた冷たい風に、すっかり体は冷え切っていたので、為介はその湯気に惹かれ、すぐにスープへと口をつけた。一口飲んで、為介が大きく目を見開く。

「美味しい…」

どこか驚いたような表情で、素直な感想を漏らす為介。

「う、美味くて、当たり前だろうが！この俺様の、特製スープだぞ！？」

「あ、明さん、照れてる」

「良かったなあ、明。唯一の取柄を、誉めてもらえて」

「うっせえ！」

店の奥から、からかうように声を掛ける遠久と恵に、明が思いきり、怒鳴りあげる。

「アハハっ」

『……っ』

明のその様子を見て、為介が堪え切れなかったのか、勢いよく笑みを零す。初めて見る為介の大きな笑顔に、最初は皆、驚いた表情を見せたが、すぐに、為介と同じように、笑みを浮かべる。

『ハハハハハ！』

為介と共に、皆が大きく微笑んで、辺りを笑い声が包み込んだ。

Word 70 喜ビナキ少年 (4)

それから、数日。韻本部、為介自室。

「忌退治？」

机の前に座り、書類に判を押していた為介が、充のその言葉に顔を上げる。

「はい。片琴町かたことすぐ近くの海岸で、忌が大量発生しているらしく、韻本部から依頼が来ました」

充が書類を片手に、さらに言葉を続ける。

「今回、発生場所が海近くということもあって、水系の力を持つ神に、依頼が来たようです」

「ふうーん」

為介がどこか、興味なさそうに声を漏らす。

「わかった。行くよ」

「はい。ではすぐに、韻へ断りの連絡を…って、へ？」

為介が依頼を断る前提で、返事をしていた充が、聞き入れた言葉をやっと認識したのか、ふと言葉を止め、目を丸くして、前方の為介を見つめる。

「い、今、行くと…？」

「そう言ったでしょ。神に二回も、同じこと言わせないでよ」

机の上を軽く整理して、為介が椅子から立ち上がる。

「すぐに出る。附いてきて、充」

「は、はい！」

まだ戸惑った表情を見せながらも、部屋を出て行く為介の言葉に、大きく頷く充。為介が扉を開け、部屋を出て行くと、充が一人、取り残される。

「ど、どうしたんだろ？ 一体…」

「早く行くよ、充！」

「は、はい！ ただいま！」

不思議そうに首を傾げていた充が、廊下から響く為介の声に、慌てて部屋を出て行った。

「え？ 為介が、忌退治に？」

午後になり、本部から受けた依頼をこなし、韻へと戻って来た遠久は、神付きである桃雪から、為介が依頼を受け、忌退治に出掛けたことを、報告に受けていた。

「えええ。あれほど、単純な忌退治は断り続けていたというのに、どういった心境の変化でしょうねえ」

「そうだね」

首を傾げる桃雪に対し、明と為介との間にあったやり取りを知る遠久は、どこか嬉しそうに笑みを零した。明の言葉が為介の心を動かし、“為の神”としての為介の行動をも変えたのだろう。

「まあ、いいことですね」

「うん。俺も為介に負けないように、頑張らなくちゃ」

「神は、今以上頑張ったら、お体を壊してしまいますよ」

楽しげに言葉を交わしながら、遠久と桃雪が、韻の廊下を進んでいく。

「マジかよ!？」

「ん？」

並んだ部屋の一つから聞こえてくる、大きな声に気が付き、遠久がふと、足を止める。

「神？」

「デカイ声出すなって。誰かに聞こえたら、どうすんだよ」

桃雪が首を傾げる中、遠久が扉に近づき、耳を澄ませる。すると部屋の中から、こそこそとした小さな声が、漏れ聞こえてきた。

「言葉で、忌に細工したって？」

「ああ」

焦ったような表情で問いかける男に、得意げな笑顔で頷く、もう一人の男。頬に貼ってある絆創膏の後ろから、腫れ上がった肌が見えている。その男は、為介のことを悪く言い、明に殴り飛ばされた、あの五十音士であった。その部屋には、他にも、暴れ回った明に軽傷を負わされた音士たちが、数名、集まっている。

「マジかよ？いくら何でも、やり過ぎじゃねえか？んなことしたら、あいつ、死んでっ…」

「死にゃあ、いいんだよ。あんなクソガキ」

困ったような表情を見せた仲間の言葉を遮り、中央に立ったその音士が、冷たい笑みを浮かべる。

「どうせ、誰も悲しみやしねえんだ」

「だからってよ…」

「お前らだって、あんなクソガキに、いつまでも神だって、デカイ顔されたくねえだろうが！」

『そ、それは…』

音士の言葉に、皆が言葉を失い、深く俯く。

「それに、今更騒いだって、もう遅せえさ。今頃、あいつは忌にやられて…」

「一体、何の話？」

「……！」

勢いよく開かれる部屋の扉と、そこから入って来る鋭い声に驚き、音士が大きく目を見開く。開かれた扉から、部屋の中へと姿を見せたのは、厳しい表情を見せた遠久であった。

「遠、遠の神っ…」

「俺にも詳しく、教えてくれないかな…？」

強く睨みつける遠久に、音士たちは皆、怯えたような表情を見せた。

片琴町、海岸。

「大量の忌、ねえ」

穏やかな波の打ち寄せる海岸沿いに立った為介が、静かな海を見つめ、小さく声を落とす。どこまでも青の広がるその海には、大量どころか、一匹の忌の姿も見当たらなかった。

「場所、本当にここであってる？」

「はい。報告のあった場所は、確かにここなのですが…」

充がメモを確認しながら、為介の言葉に答える。

「見当たらないですねえ」

「うん。特に気配もないし」

頷いた為介が、困ったように肩を落とす。

「大移動でもしてしまったのでしょうか？」

「忌が大移動なんて、聞いたことないけど…まあ居ないものは、仕方ないもんね」

軽く頭を掻き、為介が充の方を振り返る。

「とりあえず一旦、韻に戻って、報告の確認を…」

<グググ…>

「あ…！」

為介の指示を受けていた充が、振り返った為介の背中の方を向こう、静かな海の中から現れた、一匹の黒い影に気付き、大きく目を見開く。

「か、神…！」

「え？」

充の必死の呼びかけに、為介が後方を振り返る。

<グアアアアア！>

「ク…！」

激しい咆哮をあげて、飛びかかってくる黒い影に、為介が険しい表情を見せながらも、懐の中へと手を入れる。すぐに取り出された手には、青い言玉が握り締められていた。

「五十音、第四十七音“ゐ”、解放…！」

言玉を輝かせ、為介が自身の文字を目醒めさせる。

「“射^{あぬ}抜け”！」

為介が言葉を発して、言玉から、鋭い矢のような水の塊を放つ。放たれた水の塊は、為介へと襲いかかろうとしていた忌の胴体を、勢いよく貫いた。

<ギャアアア！>

胴体に大きく風穴があき、忌が激しい叫び声をあげる。射抜かれた忌は、黒い煙となって、空中へと掻き消えていった。

「神…！」

忌が消えたことを確認し、充が為介のもとへと駆け寄って来る。

「一応、居るみたいだね、忌。構えておきなよ、充」

「は、はい！」

為介に言われ、充がズボンのポケットの中から、為介と同じ、青い言玉を取り出す。

「さあーて、どっから…」

<ググ、グ…>

「え…？」

他にも忌が居ないか、周囲の様子を伺おうとしていた為介が、すぐ傍から聞こえてくる、唸るような小さな声に気付き、自分のすぐ足元を見る。海岸に転がっている、先程、掻き消えたはずの忌の小さな欠片から、黒い煙が徐々に広がり、やがて二つの大きな塊となっていく。

《グアアアア！》

「な…！？」

そこから生まれる、二匹の忌に、為介が驚きの表情を見せる。

「こ、これはっ…」

「“満^みちろ”！」

《ギャアアア！》

為介の後方から打ち寄せた波にさらわれ、生まれ出たばかりの二

匹の忌が、一瞬にして掻き消える。

「神、大丈夫ですか!？」

「充…」

言玉を握り締めた為介が、為介の身を案じ、為介のすぐ横へとやって来る。

「しかし、何故忌が…」

《グ、ググ…グ…》

『……!』

さらに聞こえてくる、呻くようなその声に、為介と充が同時に目を見開き、言葉を止める。充の波に流された忌の残骸が、水の中でまた広がり、増えようとしていた。

「ま、また増える、のか…?」

充が引きつった表情で、その増えていく忌を見つめる。

《グググ、ググ…グアアアア!》

さらに多くの忌が生み出され、一斉に叫び声をあげる。

《グアアアアア…!!》

「うあ…!」

その忌たちの声を合図として、どこまでも広がる海全体から、その青を埋め尽くすように、大量の忌が顔を出す。その地獄のような光景に、為介の表情が凍りつく。

「そんな…確かに、忌の気配はなかったはず…」

《グググ…》

「あっ…」

足元に出来た水溜まりの中からも生まれ出る忌に、困惑の表情を見せていた為介が、ハツとした表情となる。

「水で、増えてる…?」

海の中から続々と顔を出す忌を見回し、為介が険しい表情を見せる。

「そんな特殊な忌…それに、そんな忌が相手なら、水系の能力を持ったボクらを選んだりなんて…まさかっ…」

為介がその可能性を思いつき、言玉を強く握り締め、その手を震わせる。

「ハメ、られた…?」

その言葉を呟き、為介がその表情を青白く変える。

《グアアアアア!》

「か、神…!」

「う…!」

一斉に襲い掛かって来る忌に、充が必死に呼びかける中、為介が険しい表情を見せた。

「お疲れ様です、恵さま」

「ああ」

韻本部に設けられた自室で、何やら多くの本やらノートやらを広げていた恵は、茶を持って部屋へとやって来た芽衣子に、顔を上げ、笑顔を向けた。

「どうですか? 教員採用の勉強の方は」

「まあまあだな」

芽衣子が、机の邪魔にならない場所へと、持って来たコップを置く。

「受かれば、来春から教師ですね」

「ああ」

微笑みかける芽衣子に、恵も大きく笑顔を見せる。

「恵さまが教育者になったら、生徒さんが皆、口悪くなるんじゃないかって心配ですけどね」

「どういう意味だよ」

棘のある言い方をする芽衣子に、恵が口を尖らせる。

「体罰には、くれぐれも気を付けて下さいね」

「その前にまず、試験に受かるかどうかだろ?」

「恵さまなら、受かりますよ」

問いかける恵に、芽衣子は当然のように言い放つ。

「絶対」

「……っ」

強く言い切る芽衣子のその言葉に、自信をもらったような気がして、恵は安心したような笑みを浮かべた。

「恵の神！」

「んあ？」

その時、恵の部屋の扉が勢いよく開き、焦った表情を見せた桃雪が、部屋の中へと飛び込んできた。

「ハア、ハア、ハア」

「桃雪？どうした？」

必死に走って、やって来たのだろう。息を乱した桃雪へと、恵がどこか不審がりながら、問いかける。

「神が、遠久様が、為の神のもとへ……！」

「何……？」

桃雪のその言葉に、恵は表情を曇らせた。

「うあ、あああああ！」

「充……！」

大量の忌に取り囲まれるようにして、黒い影の中へと姿を消していく充。水により増え続けるその忌は、海の水により、際限なくどこまでも増え続け、能力自体が水である為介と充は、その忌を倒す術を持たなかった。充の叫び声を聞き、為介は必死に身を乗り出すが、為介の周りも忌が取り囲み、とても充を助けに行ける状況ではなかった。

「クソ……！」

為介が唇を噛み締めながら、言玉を持った右手を突き上げる。

「あつべきばんけい
“一碧万頃”！」

《ギャアアアア！》

言玉を突き上げた為介が、目一杯大きな声で自身の言葉を放ち、滝のような巨大な水の塊を地面から噴き上げてさせて、周囲にいた大量の忌を、一気に掻き消す。

「守、らなきゃ…」

何度も言葉を使った影響で、子供の為介の体力はすでに限界に近付いており、足元をふらつかせ、息を乱しながらも、為介が自分へと言い聞かせるように、言葉を落とす。

「皆の言葉を、守、らなきゃ…」

《グ、グググ…》

為介の言葉が続く間にも、掻き消されたはずの忌は、また水により増殖し、新たに形を作り始める。

「ボクは…ボクはっ…」

唇を噛み締め、為介が強い瞳で、顔を上げる。

「言葉の神だから…！」

為介の今にも泣き出しそうな、それでも強い必死の声が、その場に響き渡る。

《グアアアアア…！！》

「ク…！」

新たに生まれた大量の忌が、一気に為介へと飛びかかって来ると、為介は覚悟を決めた様子で、何かを堪えるように、強く瞳を閉じた。

“落^をちろ”」

《ギャアアアアア！》

「え…？」

響いた一つの言葉と、その後に響き渡った無数の忌の叫び声に、固く瞳を閉じていた為介が、ゆっくりと瞳を開く。すると、為介の周囲では、空から落ちた雷のような白い光に打ち抜かれ、忌が次々と掻き消えていっていた。

「大丈夫？ 為介」

「あ……」

すぐ目の前から向けられる、優しい笑みに、為介は大きく目を見開いた。

「遠の、神……」

為介の前に立っていたのは、遠久であった。遠久を呼んだ為介は、命があったことにか、緊張の糸が切れたからか、ホッとした様子で肩を落とす。

「どうして、ここに……？」

「韻で、話を聞いたんだ。君を良く思っていない音士の連中が、忌を細工して、君を罠にかけたらしい」

「音士……」

遠久のその言葉に、為介の頭の中にすぐに、為介を嫌っていた五十音士たちの顔が浮かんだ。

「このことは韻に報告しておいた。彼等にはちゃんと、処分を受けてもらうから、安心して」

「……………」

微笑みかける遠久に、為介が笑顔を見せることはなかった。彼等であれば、言葉の力で忌の細工も出来るだろうし、情報を操作して、為介を向かわせることも可能だろう。だが、為介はその事実怒るというよりも、それほど嫌われていた自分に、少なからずショックを受けていた。

「大丈夫？ すぐに応援が来るから、それまで手当ては、ちょっと待ってね」

「充……充、が……」

「大丈夫。彼なら、無事だよ」

充の身を案じる為介に、遠久が少し視線を横へと流して答える。遠久の視線が向いたその先には、深く瞳を閉じた充が倒れ込んでいた。体は傷だらけだが、呼吸でわずかに肩が上下している。確かに、無事なようだ。その姿を見て、為介がさらに安心した様子を見せる。「さあ、ここじゃまた忌が発生しちゃうし、もっと安全な場所に行

…」

「……？」

不自然に途中で止まった遠久の声に戸惑い、為介が戸惑うように、ゆっくりと遠久の方を見上げる。

「遠の神……？」

「あ……ああ……」

「遠久、さん……？」

ただまっすぐに正面を見つめたまま、かすかに開いた口から小さな声を漏らす遠久のその様子に、為介がさらに戸惑い、眉をひそめる。

「ああ……」

「え……？」

開かれた遠久の口端から、流れ落ちる真っ赤な血に、為介が険しい表情となつて、すぐさま顔を下げ、自分の目線の高さと同じ高さほどの、遠久の腹部へと視線を移した。

「あ……！」

視線を移した途端、為介が大きく目を見開く。遠久の腹部を、背後から伸びた忌の黒い手が貫通し、そこから、真っ赤な血が、滝のように勢いよく溢れ出していた。

「逃げ、て……為介……」

「あ、ああっ……あっ……」

力ない声で、遠久が為介へと逃げるよう言葉を向ける中、大きく目を見開いた為介が、声にならない声を漏らす。

「逃げ……て……」

最後の最後まで為介の身を案じながら、ゆっくりと前方へと倒れ込んでいく遠久。

「あっ……あああああ……！」

為介の悲痛な叫びが、空へと突き上げられた。

あの日の出来事が、間違いであったというのなら、やり直させてほしい。

今、すぐに、あの日から。

Word 71 明日ナキ少年 (1)

とある町、とある小さな診療所。

「お忙しいのに、わざわざこんな所まで、申し訳ありません。ウズラ様」

簡素な病室の、寝台の上へと座った青年が、どこか申し訳なさそうな表情を作る。寝着をまとった青年は、色白で痩せており、見るからに体が弱そうに見えた。

「いやあ、別に忙しくはないよお。まだ、ただの学生だもん」

そんな青年へと笑顔を向ける、寝台のすぐ横の椅子へと座ったウズラ。ウズラは、診療所で療養中のこの青年、ウズラの神附きで、“武守”の武藤宗吉のもとへ、見舞いに訪れたのである。宗吉は生まれつき体が弱く、今は五十音士としての活動を休んでいた。

「僕の体が弱いせいで、ウズラ様には色々と、ご迷惑をおかけしています…」

「俺なら大丈夫だよ。代理の熊子ちゃんがよくやってくれてるし、“奴守”の塗壁クンも手を貸してくれてる」

そっと俯く宗吉に、ウズラがさらに大きな笑みを向ける。

「宇団は大丈夫さ。だから気にせず、君はしっかりと治療に専念して」

「はい」

ウズラの言葉に、どこか控えめに頷く宗吉。

「あの二人に、感謝しないといけませんね」

「そうだねえ」

しみじみと呟く宗吉に対し、ウズラも大きく頷く。

「そういえばウズラ様、最近、新しい五神が入られたそうですね」

「あああゝいっちゃんねえ」

宗吉の言葉に、生意気な少年、為介の姿を思い出し、ウズラが少し困ったような笑みを浮かべる。

「相当に若いと聞きましたが、どうですか？」

「んー、まあ最初こそ、色々と揉めたけどねえ。最近は結構、いい感じかなあ」

具体的な言葉を避け、何となくの空気だけを宗吉へと伝えるウズラ。

「けどまあ、いい神様になると思うよお」

「ウズラ様がそう仰るのでしたら、間違いありませんね」

あまりはつきりとはしていないウズラの言葉を、信じ切った様子で頷き、宗吉が穏やかに微笑む。

「若い神では、遠久様もいらっしゃいますし、五十音界はしばらく、安泰ですね」

「うん、そうだねえ。これで俺も、いつでも安心して引退出来るよお」

「やめて下さいよ。僕の体が治るまで、ウズラ様には神でいていただかないと」

「あ、そっか。アハハハ」

困ったように口を尖らせる宗吉に、ウズラは大きな笑みを零した。「神！」

その時、病室の扉が勢いよく開き、強く響く声と共に、熊子が入って来た。静けさに慣れていたウズラたちは、少し驚いた様子で、入って来た熊子の方を見る。

「なあに？ 熊子ちゃん。ここは病室なんだから、もっと静かにしな…」

注意しようとしたウズラが、ひどく焦ったような、青白い表情を見せている熊子の、いつもとは明らかに異なる様子に気付き、言葉を途中で止めて、眉をひそめる。

「何か、あったの…？」

すぐさま険しい表情となり、ウズラが熊子へと問いかける。そんなウズラをまっすぐに見据え、少し躊躇うように口を動かして、熊子がやっと、声を発した。

「為^ゐの神と、遠^をの神がつ…」

「……っ」

熊子から伝えられた言葉に、ウズラはますます、険しい表情を作った。

韻本部、集中治療室前。

「茜！」

八百屋の格好のまま、神付きの正^{まこと}一^{いち}を従え、その場へと駆け込んできたのは、明^{あける}であった。

「お兄ちゃん」

治療室の前のベンチに腰掛けていた茜が、兄の姿を見つけ、思わず身を乗り出す。

「だいたいの話は、正一から聞いた！状況は！？」

「怪我人は全員、ここに運ばれて、今、芽衣^{めい}子さんと桃雪さんが、残りの忌退治にあたってる」

明の問いかけに、冷静に答えていく茜。そんな茜と身を寄り添うようにして、ベンチに座っているのは、為介であった。為介の衣服はボロボロで、所々に赤い血が滲んでいる。

「為介！」

茜のすぐ隣に為介の姿を見つけ、明が目を見開き、すぐさま為介の方へと駆け寄っていく。

「無事か！？怪我は！？」

「………」

明が為介の目の前へと駆け寄り、必死に声を掛けるが、為介は深く俯いたまま、明の言葉に答えようとはしなかった。

「為介？」

「為介君は大丈夫」

答えない為介に代わり、為介の小さな背を支えたまま、茜が口を

開く。

「怪我は酷かったけど、もうすっかり治療は終わってるから。けど……」

言葉を付け加えた茜が表情を曇らせ、ゆっくりと前方へと視線を移す。その先には、『集中治療室』と書かれた、分厚い扉。

「遠久君が……」

「……っ」

茜のその言葉を聞き、眉をひそめた明が、茜と同じように、前方の扉を見つめる。

「遠久……」

同刻、集中治療室内。

「止血急げ！輸血準備もだ！早く！」

治療室では、忌との戦いで重傷を負い、韻本部に運ばれ、寝台の上へと横たわっている、遠久の治療が、必死に行われていた。忙しくなく動く韻の治療班の者たちの中で、恵は、寝台のすぐ横で膝をつき、祈るような表情で、血にまみれた遠久の手を握り締めている。

「遠久……」

握り締める手に力を込め、恵が目を閉じたままの遠久を見つめる。

「遠久……！」

悔しげに唇を噛み締め、恵が深く瞳を閉じる。

「心拍数、低下！処置、追いつきません！」

「腹部臓器損傷大！言葉による治療も、まったく効果無し！」

「これ以上は、手の施しようがありません！」

恵の祈りも虚しく、治療室内には、絶望的な言葉が飛び交う。瞳を閉じた恵は、現実を直視することを恐れるように、そのまま瞳を開こうとはしなかった。

「お、姉ちゃん……」

「……！」

ずっと瞳を閉じていた恵が、耳へと入って来るその声に、すぐさま大きく目を見開く。それは聞き慣れた、弟の声であった。

「遠久……!? 遠久……!」

遠久の呼びかけを確かに聞き取り、目を開いた恵が、手を握り締めたまま、必死に身を乗り出す。横たわったままの遠久が、薄らとその瞳を開いていた。

「遠久……!」

「お姉、ちゃん……」

処置を行っていた韻の者が、遠久の口元に付けられた酸素マスクを取る。そんな中で恵がもう一度、必死に名を呼ぶと、遠久は小さな声ながら、その呼びかけに答える。恵はその場で立ち上がり、上から見上げるようにして、首も動かさない遠久と視線を合わせた。

「死に、たくない……」

「え……?」

恵をまっすぐに見た遠久が、途切れ途切れの言葉で願う。

「遠久……?」

今の言葉を確かめるように、恵がまた、遠久の名を呼ぶ。

「死にたく、ないよ……お姉、ちゃん……」

「……っ」

小さいながらも、はっきりと届く言葉。弱々しいながらも、継るように強く見つめる瞳。遠久のその願いを聞き、恵が大きく目を見開く。

「心拍数、さらに低下!」

「止血、間に合いません! 危険な状態です!」

「……………」

周囲が一層、慌てふためき、切羽詰まった必死の聲が飛び交う中、乗り出していた体を後ろへと下げた恵は、一人、ひどく落ち着いた表情を見せていた。周囲の聲が、鳴り響く機械音がすべて、別世界からのもののように、遠く聞こえる。

「わかったよ、遠久……」

小さな声を落とし、恵が穏やかに微笑む。

「お前の願いは、私が叶える」

遠久の手を握り締めたまま、もう一方の手を、ズボンのポケットへと入れる恵。

「私がお前を、死なせたりしない」

強く言い切って、恵がポケットから取り出したのは、緑色の言玉であつた。

「五十音、第四十九音“ゑ”、解放…」

恵が取り出した言玉が、恵の中で強い輝きを放ち始める。徐々に治療室を覆っていく緑色の光に、忙しく動いていた周囲の者たちも動きを止め、固唾を飲んで、二人を見守る。

「ゑ…」

皆が見守る中、ゆっくりと口を開く恵。

「“永遠”^{えいえん}」

その日、一人の少年の世界から、“明日”が消えた。

数日後。

「発生した忌には、水に触れると増殖するよう、言葉が施されていたそうです」

眼鏡のレンズを光らせながら、熊子が報告の書かれた紙を読み上げている。

「発生した忌は、“女守”^{めもり}、“毛守”^{ももつ}を主とする数名の五十音士により、完全に鎮静化されました」

報告をする熊子の目の前で、ゆったりとソファーに座り、熊子の声に耳を傾けているのは、ウズラであつた。いつも明るく微笑んでいるウズラだが、今日の表情はどこか曇っており、陰しいものに見える。

「為の神を嵌めた五十音士は、その称号を剥奪、五十音界を永久追放。その他、仲間であった数名の音士も処分を受けています」

「……そう」

熊子の報告が終わると、ウズラは熊子の方を見ぬまま、小さく頷く。その頷きは、報告の内容になど、まったく興味ないように感じた。そんなウズラの様子を見て、熊子が少し困ったように肩を落とす。

「まったく、興味なさそうですね」

「うん、そうだね。興味ないかなあ」

呆れたように言い放つ熊子に、ウズラは笑みを浮かべ、あつさりと頷いた。

「だって結果じゃあ、いくら聞いても、どうにも出来ないんだもん」
「……っ」

ウズラのその言葉に、熊子がそつと眉をひそめる。

「神」

「ん〜？」

呼びかける熊子に、ウズラが声だけで答える。

「本当に、これで良かったのでしょうか…？」

真剣な表情を見せた熊子が、どこか躊躇いがちに、ウズラへと問いかける。その問いかけを受けると、ウズラは振り向かぬまま、目を細め、部屋の窓から見える、外の景色を見つめた。

「“良かった”とも“悪かった”とも言えないよ」

自身も少し戸惑うように、ウズラが言葉を繋げる。

「きっと、誰にもね…」

そう呟いたウズラは、どこか遠くを見るような瞳を見せた。

それから、さらに数ヶ月の時間が流れた。

「恵さま！」

韻本部の廊下を歩いてた恵が、背後から聞こえてくる声に気が付き、振り返る。恵が振り返ると、廊下の先から芽衣子が、こちらへ向けて、駆けて来ていた。

「芽衣子」

「教員採用試験、合格おめでとうございます」

「あ、ああ」

駆け寄って笑顔を見せる芽衣子に、恵も少し詰まりながら頷いて、笑みを零す。その笑みはあまり嬉しそうではなく、どこか曇っているように見える。

「春からはいいよ、教師ですね」

「ああ…」

「恵さま？」

念願叶ったというのに、晴れやかではない恵の様子に気付き、芽衣子が少し戸惑うように首を傾げる。

「どうか、なさいましたか？」

「いや、別に何でもな…」

「お姉ちゃん」

「……っ」

芽衣子の問いかけに答えようとしていた恵の言葉が、後方から聞こえてくるその呼びかけに、息を呑むように、止まる。

「ああ、遠久さま」

「こんにちは、芽衣子さん」

爽やかな笑顔を見せながら、二人のもとへとやって来たのは、遠久であった。遠久は顔色も良く、とても元気な様子で、体にも傷が残っているようには見えなかった。

「もうお体はよろしいのですか？」

「うん、すっかり。先週から、神としての活動にも復帰したしね」

問いかける芽衣子に、遠久は笑顔で答えていく。

「それは良かったです」

「うん。全部、お姉ちゃんのお陰だよ」

遠久のその言葉に、恵の表情がかすかに動く。

「では恵さま、私は報告がありますので、また後で」

「ああ」

「遠久さまも、失礼いたします」

「うん」

恵と遠久に丁寧な頭を下げると、芽衣子はそのまま背を向け、廊下の先へと歩き去っていった。その場に恵と遠久だけが残り、静けさが包み込む。

「今日は、依頼か？」

「ううん、桃雪との打ち合わせだけ。忌退治はもう少し、療養してからにしろって」

「そうか…」

遠久の言葉に頷きながら、恵がそつと視線を落とす。先程から恵は、遠久を直視しようとはせず、一度も遠久とは目を合わせていなかった。

「お姉ちゃん」

「ん？」

その呼びかけにも、恵は振り向かない。決してこちらを見ようとしない姉を見つめ、遠久は少し困ったように微笑み、目を細める。

「俺、後悔はしてないから」

はつきりと届くその言葉に、恵が驚いたように目を見開き、顔を上げ、やっと遠久の方を見る。

「為介を助けに行ったことも、死にたくないって願ったことも、後悔してない」

やっとこちらを見た恵へと、遠久が穏やかな笑みを浮かべる。

「今、ここに生きていられて、凄く嬉しいよ」

遠久がその笑みを、さらに大きなものへと変える。

「だから、そんな顔しないで。お姉ちゃん」

「遠久…」

恵を気遣うように、優しい言葉を投げかける遠久。恵が瀕死の遠

久へと掛けた、“永遠”^{えいえん}の言葉。それにより遠久は助かったのだが、同時に、遠久の時を止めてしまったことを、恵が悔やんでいることに、遠久も気付いていたのだろう。

「俺なら大丈夫。大丈夫だから、ね？」

微笑みかける遠久に、恵もゆっくりと微笑みを作る。

「ああ…」

恵を安心させようとする遠久の言葉に、恵自身も、遠久を安心させるために頷いた。

その時の二人はまだ、“永遠”という言葉の重みを、理解出来ていなかったのかも知れない。

Word 71 明日ナキ少年 (2)

―――三年後。

言ノ葉町、言ノ葉高校。

『目白先生、さようなら!』

「ああ、気を付けてな」

試験に合格し、晴れて教師となった春から、三年の時が流れ、恵はすっかり、教師として慣れてきた日々を送っていた。国語資料室の窓際の椅子に座り、本を読んでいた恵が、窓の向こうから手を振る女子生徒に応え、軽く手をあげる。女子生徒たちは楽しそうに、微笑み合いながら帰っていく。そんな後ろ姿を見つめながら、恵もそつと笑みを浮かべた。

「ふう」

「お疲れ様」

「ん?」

聞き覚えのある声が耳に入り、恵が窓の外から、部屋の中へと視線を移す。

「遠久」

穏やかな笑みを浮かべ、資料室へと入って来たのは、言ノ葉高校の特徴的な水色の制服を着た、恵の弟、遠久であった。

「どうした?」

「借りてた本、返そうと思って」

読んでいた本を閉じ、立ち上がった恵に、遠久が一冊の古い本を差し出す。恵は遠久の方へと歩み寄ると、その本を受け取る。

「そんなの、別に家でも構わなかったのに」

「これから韻に行かなくちゃいけないんだ」

「忌退治か?」

「うん」

問いかける恵に、遠久があっさりと頷く。

「最近、多くないか？確か昨日、退治が終わったところだろう？」

「まあ、確かに多いかなあ。でも仕方ないよ。お姉ちゃんと明さんは仕事忙しいし、ウズラさんは今、ほら」

「ああ、茜が妊娠中だったな」

遠久に促され、恵が思い出した様子で頷く。一年前、以前から交際していたウズラと茜は、多少の明の反対もあった中、結婚をし、今、茜は第一子を身ごもっていた。ウズラはそんな身重の妻の世話をするため、最近、神としての活動を休んでいるのである。

「あのはねっかえりがもうすぐ母親かと思うと、驚きだな」

「ハハハ」

しみじみと呟く恵に、遠久が乾いた笑みを零す。

「まあだから、その分、俺と為介が頑張らないとね」

「そうか。気を付けてな」

「うん」

先程、帰っていく女子生徒たちに掛けたものと同じ言葉を、恵が遠久にも送る。

「そういえば今日、遅刻した生徒にチョーク投げつけたんだって？隣のクラスの連中が、怯えてたよ」

「私の貴重なホームルームに、遅刻して来る奴の方が悪いんだよ」

「あんまり皆を怖がらせないでよ？」

厳しく言い放つ恵に、遠久が少し困ったような笑みを浮かべる。

そのまま数歩、前へと出ると、遠久は窓際に立ち、開いた窓から身を乗り出すようにして、下校していく生徒たちを眺めた。

「ここに通ってる皆ってさ、いつか、ここを卒業していくんだよね」

「そりゃそうだろう」

遠久から返ってきたばかりの本を棚へと戻しながら、恵がすぐさま言葉に答える。

「どんなに楽しくても、終わる時は来る。学校ってのは、そういう場所だ」

「うん。そう、だよね…」

恵の言葉に、歯切れ悪く頷く遠久。

「じゃあ、どうして俺は、ずっとここに居るんだろう…?」

「……っ」

小さく落とされた遠久のその言葉に、棚と向き合っていた恵が、ハッとした表情となって、目を見開く。

「あ…」

慌てて遠久の方を振り向く恵であったが、すぐに言葉は出て来なかった。

「何年経っても一年生のまま、何年経っても十六歳のまま…」

窓の外の生徒たちを見つめ、遠久がそっと目を細める。

「一緒の時間を過ごした友達が卒業していても、俺はずっとここに居る…」

「遠久…」

言葉が続ける遠久の姿に、恵が眉をひそめる。

「それは…」

「わかってるよ。“永遠”を生きる俺は、皆とは生きてる時間軸が違うんだから、同じ時を生きることには出来ないって」

恵の言葉を遮って、遠久がさらに言葉を発する。

「でも、時々ね、感じるんだ」

小さく笑みを零し、遠久が恵の方を振り返る。

「皆が歩いてる、大きな時の流れの中に、たった一人、取り残されているような、そんな感覚」

少し俯く遠久を、恵が険しい表情で、まっすぐに見つめる。

「皆が歩いていくのを、旅立っていくのを、俺は立ち止まったまま、ただ見送ることしか出来ない」

また窓の外を振り返り、正門を出て、帰っていく生徒たちの背中を見送る遠久。

「誰とも一緒に歩めないまま、ずっと一人ぼっちのまま、この“永遠”を生きていくのかなって思うと…」

窓枠に置いた右拳を、遠久がゆっくりと握り締める。

「どうしようもなく、不安になる」

「……………」

寂しげな遠久の、壊れてしまいそうなほどに不安げな遠久の背中を見つめ、恵が目を細める。

「情けないね。神様なのに、こんなの」

恵の方を振り返った遠久は、込み上げる気持ちを誤魔化すように、明るく笑みを浮かべた。その笑みが、悲しげな表情よりも強く、恵の心に突き刺さる。

「神だとか、そんなのは関係ないだろう」

少し視線を落としたまま、恵がやつのことで、言葉を発する。

「一人が怖くない人間なんていない」

言葉が続けながら、恵が遠久のもとへと歩み寄っていく。

「でも大丈夫だ、遠久」

遠久のすぐ前へと立ち、遠久の握り締められた右拳を、包み込むように掴む恵。

「私がお前を、一人になんてしない」

「え…？」

はつきりと届くその言葉に、遠久が戸惑いの表情を見せる。

「お姉ちゃ…」

“永遠”^{あいえん}」

その日、恵の世界からも、明日が消えた。

「恵！」

韻本部にある恵の部屋へと飛び込んできたのは、険しい表情を見せた茜であった。茜は、少女のようだった数年前に比べ、髪も伸び、美しい大人の女性へと成長していた。体に比べ、大きく出た腹部は、

彼女に新しい命が宿っていることを示している。

「何だ」

机の前に座り、書類を眺めていた恵が、少し不機嫌そうに顔を上げる。

「デカイ声を出すな、妊婦」

「どういふことよ!？」

恵の忠告を無視し、恵の座る机のすぐ前へとやって来た茜は、声を荒げ、机に右手を叩きつける。

「自分に“永遠”の言葉をかけたって!」

「……っ」

怒鳴りあげるようにして届く茜のその言葉に、恵が眉をひそめる。

「別に、どういふことはない」

声を荒げる茜とは対照的に、恵は努めて、冷静に話す。

「それに、私が私の言葉をどう使おうと、私の勝手だろう?」

「あなた、自分が放った言葉が何なのか、本当にわかってるの!？」
書類へと目を落としていた恵であったが、茜のその問いかけに、再び鋭く視線を上げた。

「わかっていないはずがないだろう。あれは、私の言葉だ」

「ずっと一緒に居た私たちとも、誰とも共に歩めない、ただ延々と続く時間の中を、生きていくつもり!？」

さらに投げかけられる問いかけに、恵が瞳を細める。

「それを、遠久に強いたのは私だ」

「……っ」

厳しく言い放つ恵に、茜が眉をひそめる。

「それを強いて、遠久を苦しめたのは私だ」

自分を責め立てるような言葉を、さらに続ける恵。

「だから、私も遠久と共に“永遠”を生きる。遠久を決して、一人にはしない」

そう言った恵は、一切の迷いもない、澄み切った表情を見せていた。恵の覚悟は、相当のものなのだろう。でなければ、“永遠”の

言葉を、自身にかけることなど出来るはずもない。恵の覚悟は十分に伝わってきたが、それを受け止めることが出来ず、茜は深く俯いた。

「けど…」

茜がどこか、震えたような声を漏らす。

「けど、じゃあ兄さんは、兄さんはどうなるのよ!? 兄さんは、恵のことを…!」

「明には、もう伝えた」

「え…?」

返って来る恵の声に、茜が戸惑うように瞳を揺らす。

「“お前とは共に生きられなくなった”と、もう伝えた…」

視線を落とした恵が、悲しげに、薄く笑みを浮かべる。

「そ、そんな…」

その事実には衝撃を受けた茜は、胸の前できつく両手を握り締めたまま、言葉も出ずに、ただ茫然としていた。顔を上げた恵が、茜の方を見て、また笑う。

「そんな顔をするな。八百屋は多少寂れてるが、明はいい奴だ。いい相手がすぐに見つかる」

「そんなの…そんなの!」

「茜」

何かを言いかけた茜の声を遮り、恵がそっと、茜の名を呼ぶ。

「私は、私の放った言葉に責任を持ちたいんだ」

「責任…?」

「ああ。人として、神として、自分の放った言葉から、逃げたくない」

聞き返した茜を、恵がまっすぐに見つめる。

「だから、遠久だけに“永遠”の言葉は、背負わせない。私も一緒に、背負っていく」

決意のこもった瞳で、恵が笑う。

「“永遠”に」

「恵…」

恵があまりにも晴れやかに笑うので、茜はそれ以上、何も言うことが出来なかった。

その頃。言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』。

「毎度お！」

常連の主婦客を、いつものエプロンに鉢巻姿の明が、笑顔で見送る。

「ふいふ」

客足が止むと、明は一息つくように、長く声を漏らした。

「やあ」

後方から聞こえてくる声に、明が振り返る。すると、振り返った先には、紺色のスーツを着たウズラが立っていた。仕事着を纏ってはいるが、相変わらず柔らかで、穏やかな笑みを浮かべている。そんなウズラを視界に入れ、明はすぐさま表情をしかめる。

「何だよ、昼間っから」

軽く頭を掻きながら、明が不機嫌そうに言い放つ。

「ちゃんと働け。お前が働かねえと、俺の可愛い妹とその子供が、路頭に迷うことになるんだからな」

「わかってるよお。今はお昼休みなだけで、ちゃんと働いてるってばあ」

厳しく言い放つ明に、ウズラが少し拗ねるように、口を尖らせる。

「心配しないで、お義兄ちゃん」

「次、呼んだら、大根でブン殴るぞ…？」

ウズラが首を傾け、可愛く呼びかけると、明は大根を構え、大きく、その表情を引きつった。

「振られたんだって？」

「……っ」

問いかけるウズラに、明が大根を持っていた手を、ゆっくりと下

ろす。

「ああ」

短く頷き、ウズラから視線を逸らす明。そんな明の様子を見て、ウズラが少し困ったように、肩を落とす。

「恵ちゃんのこと、本当にこれで良かったの…？」

ウズラの問いかけに、遠くの空を見つめた明が、そっと目を細める。

「良くなかったとしても、どうにも出来ねえだろ」

明が吐き捨てるように、言葉を落とす。

「俺に、あいつを止める権利はねえよ」

「…：：：そうだね」

力なく微笑み、明の言葉を認めるように頷くウズラ。どうすることも出来ないもどかしさが、二人の間を流れていく。

「本当に、重たいものだね」

ゆっくりと言葉を落とし、ウズラが明と同じように、青い空を見上げる。

「“言葉”というものは」

青い空を見上げたまま、ウズラはそっと表情を曇らせた。

「聞いたあ？恵の神の話！」

韻本部にある、五十音士や従者たちの溜まり場となっている部屋に、よく通る女性の声が響き渡った。

「自分に“永遠”の言葉、かけたってやつでしょ？聞いた聞いた」「いいよねえ。あの年のまま、ずっと年も取らないなんてさあ」

興味を引く話題だったのか、皆、急に身を乗り出すようにして、その話題に参加してくる。

「でもそのせいで、安の神と破局しちゃったらしいよ？」

「そりゃそうよねえ」だって、生きてる時間が違うんだもん。一緒

になんて、居られないでしょ」

「確かに。自分だけ年取って死んでくなんて、何か嫌だもんねえ」

「若さに目が眩んで、恋人と破局だなんて、残念な人よねえ。恵の神も」

「……………」

忌退治の報告のため、廊下を横切ろうとしていた遠久は、部屋の中から漏れ聞こえてくるその会話に、思わず立ち止まってしまった。部屋に入って、文句の一つを言うことも出来ない。まるで、すべての力を奪われたように、遠久はその場に立ち尽くしていた。

——これでもう、お前は一人じゃない。ずっと私が一緒だ、遠久……—

「……っ」

恵の笑顔を思い出し、遠久がそっと俯く。遠久に“永遠”を与えたことに罪悪感を覚えていた恵に、あんなことを言えば、恵がどう行動するのかなど、遠久にはわかっていた。それでも、わかっていたというのに、遠久は恵に言葉を向け、恵を“永遠”へと引き込んだのだ。

「神？」

その名を呼ばれ、遠久が振り返る。

「桃雪…」

遠久の後方から、遠久の方へと歩み寄って来たのは、遠久の神附きの桃雪であった。廊下の途中で立ち止まっている遠久を、不思議に思ったのだろう。桃雪は少し、首を傾げている。

「どうか、なさいましたか？」

「ううん」

問いかける桃雪に、遠久は笑みを浮かべ、首を横に振る。

「何でもないよ」

言葉が、音もなく、この心を、蝕んでいく。ゆるやかに、確実に。

Word. 71 明日ナキ少年 (3)

——恵の時間が止まって、一年。

「神！」

その呼びかけに振り返る、一人の青年。細身ではあるが、すらりと伸びた身長。長い身丈に、袴姿が良く似合っている。まだ幼さを残しながらも、どこか男らしい精悍さも共存した、そんな顔立ちだ。その口元を綻ばせ、青年が笑みを浮かべる。

「充^{みづる}」

韻本部内の廊下を駆け抜け、青年のもとへとやって来たのは、“美守^{みもり}”の充であった。

「どうしたの？」

「はい。それが韻本部から、忌退治の依頼が来まして」

「また？今、昨日の報告書出して来たところなのに」

「そうなんです、はい」

青年の言葉に頷き、充が困ったように肩を落とす。

「最近、我が団への皺寄せは激し過ぎますよ。まったく」

「まあ仕方ないよ。今、他の神は皆、忙しいんだし」

「為介君？」

名を呼ばれ、青年がゆっくりと振り返る。

「茜サン」

青年が、為介が振り返ると、そこには、茜が立っていた。穏やかな笑顔を浮かべた茜は、とても大切そうに、その両手に、小さな赤ん坊を抱えていた。

「久し振りねえ。凄く大きくなっちゃって」

懐かしそうに為介を見ながら、茜が笑みを浮かべる。四年前、茜の腰程しか身長のなかった為介も、神となった十二歳から十六歳へと成長し、今はすっかり、茜を見下ろす形となっている。

「間違えちゃった」

「茜サンこそ、すっかり“お母さん”じゃないですか」
言葉を返しながら、為介が茜のもとへと歩み寄る。

「こんにちはあ、カモメクン」

為介が、茜の腕の中の赤ん坊の、柔らかい頬に指を触れ、優しく微笑みかける。二年前、結婚したウズラと茜の間には、半年ほど前に、長男カモメが誕生していた。

「子育ては、やっぱり大変ですか？」

「うん。でもまあ、ウズラさんが手伝ってくれるし、それにお兄ちゃんも、お店しながら、何だかんだで気に掛けてくれてるから」

「明サン、すっかり甥っ子バカですもんねえ」

いつもケンカ腰の明が、必死に笑みを作り、カモメをあやしていた姿を思い出し、為介が笑みを零す。

「宇の神は、引退を考えているとお聞きしましたが？」

「え？」

「ああ」

横から口を挟んだ充の言葉に、為介は少し驚くような表情を見せるが、茜はあっさりと笑顔で頷く。

「そうなんですかあ？」

「うん、そうみたい」

「やはり、仕事と子育てに加えての、五十音士任務は厳しいと？」

「それもあるけど、前々からちよつと考えてたみたい。もう十年以上も神やってるし、そろそろ若い世代に譲りたいって」

眼鏡を押し上げ、問いかける充に、茜がすらすらと答えていく。

「若い世代って…宇の神、僕と同年なんですけどねえ」

「充も引退したらあ？」

「して欲しいんですか？」

「どうだろ？」

鋭く問いかける充に、為介が誤魔化すように笑みを浮かべる。初めこそ、為介の身勝手な態度に苦勞していた充であったが、為介が

成長したこともあり、二人の関係はすっかり良好となっていた。

「若い世代の人たちに、言葉の大切さを知って欲しいってことは、前からよく言ってたから。ウズラさん」

「そういえば、そうでしたねえ」

茜の言葉に、薄く笑みを浮かべ、為介がそっと頷く。

「新しい神様が出てきたら、為介君もついに先輩ね」

「そうですよ、神。そしたら、神試験は我々で行わないと」

「えええ、面倒だなあ」

二人に言われ、困ったように頭を掻く為介。

「充だけで、何とかならない？」

「なりません。絶対に、神に行っていただきます」

首を傾げ、機嫌をうかがうように問いかける為介に、充がきっぱりと言い切る。

「為介君が神試験かあ。そう考えると、懐かしいわあ。為介君が“為の神”になったばかりの頃が」

両手に抱いた赤ん坊を小さく揺らしながら、茜が懐かしむように目を細める。

「こうして、時は流れていくのねえ」

「……っ」

茜のその言葉に、為介の表情が曇る。

「時は、流れる…」

耳に入れた言葉を繰り返しながら、どこか神妙な表情を見せる為介。

「神？」

「ちょっと用事、思い出しちゃった。依頼は受けるから、悪いけど充、詳細聞いて、後で伝えてくれる？」

「あ、はい。仰せのままに」

為介の様子に少し戸惑いながらも、充は神付きとして、指示に素直に頷く。

「……っ」

茜と充に背を向けると、為介は途端に厳しい表情となって、足早に廊下の曲がり角の向こうへと、歩き去っていった。もう見えない為介の、居なくなっていた方向を見つめたまま、充が少し首を傾げる。

「どうかなさったのでしょうか？」

「……………」

充の問いかけに、茜は答えず、どこか悲しげに、その瞳を細めた。

一方、茜、充のもとから去った為介は、二人から見えない場所まで来ると、途端に足の速度を緩め、ゆっくりと、人気のない廊下を進んでいた。ある部屋の前まで来たところで、為介がふと足を止める。誰もいない、会議用の部屋だ。扉が開いており、廊下から全貌が見える。

——今日付けで、“為の神”になった、井戸端為介だ——

そこは、神となった為介が、初めて他の神たちとの顔合わせを行った部屋であった。ただ生意気ではなかった幼き日の自分と、怒鳴りあげていた明や、呆氣に取られていた他の神の姿を思い出し、為介がそつと目を細める。

「なんで、あんな風でしか、いらなかったのかな…」

かつての自分の振る舞いや言動を思い出し、為介が小さく声を落とす。為介がただの人であったなら、“あんな時期もあったな”と、懐かしみ、微笑むことが出来たのかも知れない。だが、為介には、とても笑うことなど出来なかった。

——逃げ、て…為介……—

——あ…あああああ…!!——

「……っ」

たった一人の人の人生を、大きく狂わせてしまったあの日の出来事を思い出し、為介が深く俯く。

「後悔したって、何にもならないのにね……」

俯いた為介が、自嘲するような笑みを浮かべる。

「為介……？」

聞き覚えのあるその声が耳に入り、大きく目を見開いた為介が、少し躊躇うように、恐る恐る後方を振り返る。

「遠、久サン……」

為介が振り返ると、そこには、四年前のあの日と、何ら変わりない姿の遠久が立っていた。

「ああ、やっぱり為介だったんだ。良かった」

振り返った為介を見て、遠久が安心したように笑う。

「この前会った時と、随分変わってたから、間違ってたらしょうかと思っちゃった」

遠久は悪戯っぽく笑うが、為介はそんな遠久に、言葉も、笑みも返すことが出来なかった。その間にも、遠久は歩を進め、ゆっくりと為介のすぐ前までやって来る。

「年を取ったね、為介……」

「…………」

伸びた身長は、いつの間にか、遠久の背も通り越していた。成長した為介を見上げ、遠久がそっと笑う。その笑みが、為介には、突き刺さるほど鋭いものに思えた。

「いくつになったんだっけ？ 為介」

「十六、です」

「そっか。じゃあ俺と同じ年だ」

「……っ」

遠久の言葉に、為介の表情がまた曇る。為介が十二の時、遠久と初めて出会った。その時も、遠久は十六であった。同じ年になど、

なるはずがないというのに、為介は今、時の止まった遠久の年に、追いついてしまったのである。

「じゃあ来年には、為介がお兄さんかぁ。もう“為介さん”て呼ばないといけないかな？」

まっすぐに向けられる遠久の視線から、逃げるように目を逸らし、唇を噛み締める為介。

「いいなあ。為介には、“明日”があって」

為介から少し距離を離し、腰の後ろで手を組んだ遠久が、またまっすぐに為介を見つめる。

「ねえ、後何センチ、身長が伸びるの？」

続く遠久の問いかけが、為介の心を責め立てる。

「遠久サン……」

やめてと願うように、俯いたまま、為介が遠久の名を呼ぶ。

「ねえ、為介は大人になったら、タバコを吸うの？お酒を飲むの？」

「遠久サン」

「愛する人と結婚するの？その人と子供を儲けるの？」

為介がもう一度、名を呼ぶが、それにも止まらず、遠久は言葉を続ける。

「ねえ、後いくつ、年を取れるの？ねえ為介、ねえ……」

「遠久サン……！」

「……っ」

遠久の声を遮るように、必死に放たれた為介の声。その声にやっとな、遠久が言葉を止める。俯いたままの為介は、深く瞳を閉じ、怯えるように、肩を拳を、震わせていた。そんな為介を見つめ、遠久が鋭く、目を細める。

「ねえ為介、俺を置いて、死んで逝くの……？」

「……」

遠久の最後の問いかけにも、為介は固く瞳を閉じたまま、答えようとはしなかった。苦しげな為介の様子を見つめ、遠久もどこか、苦しげに笑う。

「ごめんね…」

小さく謝罪の言葉を落とすと、遠久は為介に背を向け、そのままその場から、歩き去っていった。やがて遠久の姿が見えなくなり、わずかに聞こえていた足音も止む。

「ク…」

一人残った為介は、目を開けられぬまま、声にならない声を漏らす。

「ク…！」

どこにも持っていくことの出来ない気持ちを抱え、為介は、さらに深く俯いた。

韻本部、恵自室。

「それでは、報告書を言姫さまに提出してまいります」

「ああ、頼んだ。芽衣子」

「はい」

恵が判を押した書類を受け取り、芽衣子が笑顔で頷く。一年前、時の止まった恵は、遠久同様、年を取ることがなくなり、一年前とまるで同じ姿をしていた。そんな自身の神の姿をまじまじと見つめ、芽衣子がそっと表情を曇らせる。

「恵さま…」

「ん？」

芽衣子に呼ばれ、次の書類に目を落としていた恵が、ゆっくりと顔を上げる。

「後悔、されていませんか…？」

「え…？」

急なその問いかけに、恵が戸惑った声を漏らす。

「ご自身の時を、“永遠”としたこと…」

その事実には逃げることなく、まっすぐに向き合うように視線を向

けてくる芽衣子を見つめ、恵が真剣な表情となって、目を細める。
「心から嬉しく思っている、といえば嘘になるがな…だが、後悔はしていない」

小さく笑みを零し、恵が迷うことなく答える。

「自身の言葉を悔いることは、言葉の神に、あってはならぬことだからな」

「恵さま…」

「それに少し、ホッとしているんだ」

眉をひそめる芽衣子を前に、恵はさらに言葉が続ける。

「これで遠久だけに、“永遠”を強いなくて済む。遠久だけを“永遠”にしてしまっていたら、私はきつと、私自身の言葉を後悔したままだっただろう」

腰を掛けている椅子を回転させ、後方にある窓から、外の景色を見つめる恵。

「だから少し、ホッとしている…」

もう一度、その言葉を繰り返した恵の表情は、とても穏やかであった。

「お前たちと、流れていく時を生きられないのは、残念だがな」

再び振り返り、少し寂しげに笑みを浮かべる恵。

「だが、私には遠久がいる」

その笑みが少しだけ、明るくなる。

「遠久がいてくれれば、私はきつと、“永遠”の時も生きていける。だから、大丈夫だ」

「恵さま」

噛み締めるようにそう言って、恵が右手を、自身の胸へと当てる。その恵の笑顔につられるようにして、芽衣子も少し安心したように、笑みを浮かべた。

「遠久も、少しでもいいから、私を支えにしてくれればいいんだが…」

「大丈夫ですよ」

少し俯いた恵に、芽衣子がすぐさま声をかける。

「遠久さまもきつと、同じ気持ちです」

「芽衣子…」

大きく微笑む芽衣子を見つめ、恵がそっと目を細める。

「ありがとう」

その頃、韻本部、遠久自室。

「同じ、顔…」

日も暮れ始め、暗くなり始めた部屋の中で一人、遠久は電気も点けずに、壁に設置された姿見をじっと見つめていた。そこに映る自身の姿は、四年前から、一度も変わっていない。背も髪も伸びずに、ただ同じ姿を毎日、遠久に見せる。

「同じ声、同じ姿、同じ時間…」

何も変わらない自分の姿を、まっすぐに見つめながら、遠久が強く、拳を握り締める。

「同じ、命…」

言葉と共に、強く突き出された拳が、目の前の鏡面を勢いよく碎き割った。割れたガラス片が突き刺さり、遠久の拳から、赤い血が滴り落ちる。だが遠久は一切、痛みを表情には出さず、ただ静かに、床に落ちる血を見つめていた。

「失礼致します」

そこへ、数度のノックの音の後に、桃雪が部屋の中へと入って来る。

「神、先程の報告書で…神!？」

部屋へと入り、すぐに電気を点けた桃雪は、割れた姿見の前に立った遠久の姿を見つけ、流れている血を目にして、すぐに顔色を変えた。

「だ、大丈夫ですか!？神、すぐに治療を…!」

「いいよ」

慌てて駆け寄って来る桃雪に、遠久が短く答える。

「こんなに血を流したって、どうせ、死ねないんだし…」

「神…」

どこか諦めたように言葉を吐き捨てる遠久を見て、桃雪が眉をひそめる。

「ねえ、桃雪：桃雪も、俺より先に死ぬんでしょ…？」

流れ落ちる血を見つめながら、遠久が桃雪へと問いかける。

「神」

「いいな…皆には、“明日”があって」

桃雪がまっすぐに見つめる中、遠久がゆっくりと、言葉が続ける。

「俺には…俺には“明日”がない」

流れる血も、刺さったガラス片も無視し、拳を握り締める遠久。

「皆から、“明日”がなくなってしまうばいいのに…」

遠久が少し口角を吊り上げ、皮肉った笑みを零す。

「この世界中の皆から、“明日”がなくなってしまうば…」

「神…」

呼びかける桃雪の声が聞こえ、何かに取り憑かれたように、言葉が続けていた遠久は、少しハツとなって、やっとその言葉を止め、いつものように穏やかに微笑んだ。

「ごめんね。俺、今ちょっと、おかしくなっ…」

「あなたが望むのであれば、僕は年を取りません」

「え…？」

微笑みかけ、安心させるように言葉を向けようとした遠久の声を、桃雪が力強く遮る。

「あなたが望むのであれば、僕は死にません」

「桃、雪…？」

「あなたが望むのであれば、僕も“明日”などいません」

「……っ」

戸惑いの表情を見せていた遠久が、桃雪の真剣な眼差しを受け、

険しい表情を作る。

「あなたが“明日”を消すというのであれば、僕もそれに従います」
血とガラス片に汚れた遠久の手を、桃雪が握り締める。

「すべては、あなたの仰せのままに」

赤い血が、桃雪の白い手にも滲む。

「我が神」

「……………」

その言葉が、遠久の背中を押し、その言葉が、遠久に警笛を鳴らすようであった。

同じ気持ちであったならいいと、そう信じていたのは、ただそう、願っていたから。けれど。

Word. 71 明日ナキ少年 (4)

数週間後。

「謎の死体？」

「うん」

店頭から振り返った明に、店の奥にある朝比奈家の居間で、息子のカモメをあやしているウズラが、ゆっくりと頷く。今日はウズラの仕事休みであるため、ウズラは、茜、カモメと共に、朝比奈家へと遊びに来ているのだ。

「今月に入って、十体目だって。特に外傷もないし、死者は全員、病気とは縁遠い健康人」

カモメを抱いた手を左右に優しく揺らしながら、ウズラが言葉を続ける。

「しかも全員、元五十音士」

「……っ」

ウズラの言葉に、表情を曇らせる明。

「忌の仕業か？」

「韻もそう考えて、色々調べてるみたいだけどねえ」

明の問いかけに答えながら、ウズラがどこか気難しい表情を見せる。ウズラの表情は、何か思い当たることでもあるような、そんな表情であった。

「お前は、忌の仕業じゃないって、そう考えてんのか？」

「うーん」

そんなウズラの様子を察し、問いかける明に、ウズラは首を捻り、言葉を濁す。

「“言葉”の力によるものだってことは、間違いないかも知れないけど…ねえ、明」

「あ？」

不意に呼びかけるウズラに、明が眉をひそめる。

「俺たちはもう、戻れないところまで、来てしまったのかも知れない……」

「……………」

不安げに呟くウズラに、明もその表情を曇らせた。

その頃、韻本部。

「遠久は来ているか？」

「“遠の神”でございますか？」

仕事を終え、韻へとやって来た恵が、入口に設置されている受付にいる女性へと、問いかける。女性が入館記録の書類を手にし、確認していく。

「いえ、本日はいらっしやってませんが」

「そうか。わかった、ありがとう」

受付の女性に短く言葉を掛けると、恵は廊下を歩き進み、自室へと向かった。

「はあ……」

だがその表情は晴れず、少し開いた口からは、深々と溜息が零れ落ちる。

「恵さま！」

「芽衣子」

そこへ、すぐ後方から、芽衣子が駆けつけてきた。やって来る芽衣子の方を振り返ると、恵はその場で足を止める。

「受付の方とお話されていたようですが、どうかなさったのですか？」

「いや、遠久が来ていないかと思ってな……」

「遠久さま？」

恵の答えに、芽衣子が戸惑うように首を傾げる。遠久は恵と同じ家に住んでおり、恵が勤めている学校の生徒でもある。わざわざ韻

に来てまで会う必要など、ないはずであった。

「何か急用ですか？」

「いや…ここ二日間、学校を休んでるんだ。家にも、帰って来ないし…」

「え…？」

その言葉に、芽衣子が途端に表情を曇らせる。

「まさか、忌退治の際に何か、あったのでは…!？」

「そう思って、依頼記録を調べたんだが、ここ数日、遠^{をだん}団に依頼は入っていなかった」

「そう、ですか」

思わず身を乗り出した芽衣子が、また体を戻し、そっと肩を落とす。為介を助けに行き、重傷を負ってしまった件もあるので、忌退治であれば何かあったのではと思うところなのだが、そうではないようだ。

「遠久も、もう子供ではないのだから、放っておくべきかとも思ってたんだが、やはり心配だな」

「恵さま…」

晴れない表情を見せる恵を見つめ、芽衣子が目を細める。

「わかりました。私が遠久さまを探してまいります」

「え？」

芽衣子の言葉に驚き、俯いていた恵が顔を上げる。

「だ、だが…」

「無理に、連れて帰って来るようなことはしません。無事かどうかだけ、確認してまいります。そうすれば、恵さまも安心でしょう？」

「芽衣子…」

優しく微笑みかける芽衣子を見て、恵も少し安心したように、笑みを浮かべる。

「すぐに戻ってまいりますので」

「ああ。済まない」

「いえ、我が神のためですから」

詫びる恵に、芽衣子はさらに、大きく笑う。

「では、いってまいります！」

「ああ」

恵の頷きを確認すると、芽衣子は恵に背を向け、すぐさまその場を、勢いよく駆けだしていった。遠ざかる芽衣子の背を見つめながら、恵がそっと目を細める。

「遠久……」

恵の不安げな声が、廊下に小さく落とされた。

「芽衣子サン？」

「為の神」

行方不明の遠久を探すため、恵と別れた芽衣子は、韻本部を出てすぐのところで、為介と遭遇した。忌退治の帰りだろうか。為介の横には、為介の神附きである、充の姿もある。

「どうかしたの？ そんなに慌てて」

「あ、いえ、ちょっと遠久さまを……」

「遠久サン？」

芽衣子の口から出たその名に、先日の出来事を思い出したのか、為介の表情がかすかに曇る。

「遠久サンが、どうかしたの？」

「え、あ、いえ、何でもありません」

恵の個人的な問題を、相手が為介とはいえ、芽衣子が勝手に話してしまうわけにもいかず、芽衣子は明るく笑みを浮かべ、誤魔化すように首を横に振った。

「申し訳ありません、為の神。急いでおりますので、失礼させていただきます」

「あ……」

深々と頭を下げると、芽衣子は、為介に呼び止める間も与えぬまま、その場を駆け出していった。遠ざかっていく芽衣子の背を振り

返り、為介が少し眉をひそめる。

「どうかされたのでしょうか？」

「さあ？」

隣から問いかける充の声に、為介が首を傾げていた、その時。

——ドクン。

「……っ」

突然、心臓が大きく音を立て、為介は目を見開いた。まるで、危険を知らせる警笛のように、鼓動が激しく波打っている。そんな左胸を抱え、視線を自身の足へと移す為介。今、すぐにこの足を動かさなければ、大変なことになってしまうような、そんな気がした。

「神？」

「ごめん、充。先に戻ってて」

「え？」

不思議そうに首を傾げていた充に、短く言い放って、為介が芽衣子の後を追うように、その場を飛び出していく。

「あ、神……！」

呼び止める充の声に、為介が止まることはなかった。

言ノ葉町、言ノ葉山。山頂。

「……………」

山頂にある大きな岩の上へと腰掛けた遠久は、小高いその山の上から、眼下に広がる、生まれ育った町を見下ろしていた。夕暮れも近付き、町には、学校帰りの学生の姿が多く見られる。

「また明日！」

「うん、また明日ねえ」

明るい笑顔で言葉を交わし、十字路で分かれ、それぞれの家へと

帰っていく学生たち。

「“また明日”か…」

下方から聞こえてきたその言葉を繰り返し、遠久がそっと、口元を緩める。

「俺には、無い言葉…」

遠久の声が、冷たく落とされる。

「君たちの中からも、無くしてあげるよ」

そう言って遠久が、ゆっくりと岩についていた右手を、下方へおろしていく。遠久の右手の中には、真っ白い、遠久の言玉が握り締められていた。言玉を輝かせ、遠久がゆっくりと口を開く。

「を…」

「遠久さま！」

「……っ」

言葉を放とうとした遠久が、後方から自身の呼ぶ大きな声に気が付き、言葉を止め、ゆっくりと振り返る。

「遠久さま」

明るい笑顔を見せ、その場へと現れたのは、芽衣子であった。遠久が振り返り、芽衣子と視線を合わせると、芽衣子はどこかホッとした様子で、肩を落とす。

「ご無事で良かった。どうされたのですか？このような場所で」

遠久の腰掛ける岩へと歩み寄りながら、芽衣子が遠久へ問いかけを向ける。

「恵さまが心配しておいですよ？遠久さまさえ、よろしければ、私と一緒に恵さまのところへ帰っ…」

「芽衣子」

「え？」

呼び声に遮られ、止まる恵の言葉。その響きの冷たさに戸惑ったのか、芽衣子は歩み寄ろうとしていた両足を、その場で止めてしまふ。

「遠久、さま…？」

「芽衣子にも、“明日”はあるよね？」

「え…？」

向けられる遠久の問いかけに、戸惑いの表情を見せる芽衣子。

「遠久さま？　どういう…」

「だから、芽衣子はきつと、お姉ちゃんを、恵を置いて、死んで逝く…」

芽衣子に問いかけることを許さずに、遠久はさらに、言葉を続ける。

「そしたらきつと、恵は哀しむよね…」

遠久の言葉を聞きながら、遠久が何を言わんとしているのかを理解出来ずに、芽衣子はただ、戸惑いの表情を見せる。戸惑いながらも、遠久から感じる重い空気に、芽衣子の額からは、汗が流れ落ちた。

「だから、恵が哀しくないように…」

腰を掛けていた岩の上で立ち上がり、遠久がゆっくりと、芽衣子の方に体の正面を向ける。

「芽衣子の“明日”を、消してあげるよ」

「え…？」

遠久から向けられる言玉に、困惑した表情を見せる芽衣子。

「遠久さま、何をっ…」

「五十音、第五十音“を”、解放」

芽衣子が戸惑う中、遠久が自身の文字を解放させると、芽衣子へと向けられた言玉が、強い白色の光を放ち始める。光り輝く言玉を芽衣子へと突き出し、遠久が冷たく笑う。

「“終_をえろ”…」

「……！」

放たれた言葉と、向けられた強い白光に、大きく目を見開く芽衣子。

「遠久さま…！」

芽衣子の必死の呼び声も虚しく、まっすぐに向けられた白光が、

物凄い勢いで、芽衣子へと襲いかかった。最早、自身の文字を解放する時間もなく、芽衣子の表情が恐怖に歪む。その恐怖の表情を見て、遠久は満足げに笑った。

「“行け”！」

「……っ」

割って入って来る言葉に、遠久の笑みが止まる。

「ううう……！」

どこから飛んで来た青い光に、芽衣子が勢いよくその体を弾かれると、遠久の放った白光は、芽衣子の左腕を掠めただけで、直撃することはなく、そのまま空へと消えていった。弾き飛ばされた芽衣子は、苦しげな声を漏らしながら、地面へと倒れ込む。

「まさか、君が来るとは思ってなかったよ……」

どこか楽しげに微笑み、遠久が、青い光の飛んで来た方向を振り向く。

「為介」

「……………」

遠久が振り向いた先に立っていたのは、険しい表情を見せた為介であった。為介の右手には、青色の言玉が握られている。どうやら為介が言葉を使い、危機に陥っていた芽衣子を助けたようである。

「芽衣子を助けに来たの……？昔は、俺に助けられてたのに、成長したね。為介」

「遠久サン……」

深く眉間に皺を寄せ、為介がまっすぐに遠久を見据える。

「何を、しているの……？」

少し躊躇いながら、聞かないわけにはいかないと自分に言い聞かせ、為介が遠久に問いかけを向ける。

「何を、していたの……？この場所で」

その為介の問いかけを受け、遠久がまた、楽しそうに笑う。

「大したことじゃないよ」

遠久の冷たい声が、言ノ葉山に吹く、風に乗る。

「この世界の皆に、俺と同じようになってもらおうと思って」
「同じ…？」

「うん、そう。俺には、“明日”が無い。だから」

遠久が口を開いたまま、突き刺すように、為介を見つめる。

「皆の“明日”も、無くしてしまおうと思ってさ」

「な…！」

遠久のその言葉に、為介が大きく目を見開く。とても楽しげに放たれた遠久の言葉は、為介を一瞬にして、凍りつかせてしまうようであった。

「な、無くす…？皆の、“明日”を…？」

「うん」

「そんなんっ…」

あっさりと頷く遠久に、弾かれるように声を発する為介。

「そんなこと…！」

「間違ってる”って、止める…？」

為介の言葉を遮った遠久の声が、より一層、冷たく響く。

「“君”が…」

「……っ」

強調されるその言葉と、目を合わせているのも苦しくなるほどに重く、冷え切った、遠久の瞳を向けられて、為介が思わず、息を呑み込む。

——あ…あああああ…！！——

あの日、為介を助けに来たせいで、遠久の時は止まってしまった。遠久の“明日”は無くなってしまった。すべては、為介が居たから。為介が今の、目の前にいる遠久を、作り上げてしまったのだ。

「クっ…！」

震える唇を噛み締め、為介が遠久の視線から逃げるように、深く俯く。

「うううう……うう……！」

「……っ芽衣子サン？」

俯いていた為介が、少し離れた場所から届く、何とも苦しい声に気付き、顔を上げる。先程の攻撃で、地面に倒れ込んだ芽衣子が、両手で体を押さえながら、もがくように、必死に体を揺さぶっていた。

「芽衣子サン……！」

すぐさまその場を駆け出し、倒れた芽衣子のもとへと駆け寄っていく為介。倒れている芽衣子の横へとしゃがみ込み、為介が言玉を持った右手を、芽衣子の方へと向ける。

「今すぐ、治療を……“癒^ふやせ”！」

遠久の白光が掠めた左腕に、為介が言玉を光を当てる。

「うううう……！」

「え……？」

だが、為介の回復の言葉にも一切、芽衣子の傷口は塞がらず、芽衣子は先程よりも激しく、もがき始めた。そんな芽衣子の様子を目の当たりにし、為介が困惑の声を漏らす。

「め、芽衣子サ……」

「治療なんてしても無駄だよ」

前方から聞こえてくる声に、為介が鋭く、顔を向ける。

「直撃だろうと、掠り傷だろうと、俺の言葉を浴びたらなら、終わり」

振り向いた為介に、遠久が冷たく微笑みかける。

「芽衣子の“明日”は、消える」

「……………」

その残酷な言葉に、為介は強く怒鳴り返すことも、悲しげに嘆くことも、どうすることも出来なかった。

「ねえ、為介……」

静かに、そっと、遠久が為介を呼ぶ。

「君の“明日”も、消してあげようか……？」

「……っ」

そう言って為介へと言玉を向ける遠久に、為介が強く唇を噛み締める。

「ゐ……」

口を開き、すぐさま言玉を持つ右手を振り上げる為介。

「あつべきばんけい“一碧万頃”……！」

為介が力強く言葉を放つと、為介の掲げた言玉から、巨大な女性を象った水像が現れ、そのままその巨体を伏せるように体を曲げ、遠久へと一気に降りかかる。遠久は特に表情を変えぬまま、こちらへとやって来る水像を、静かに見上げた。水像が完全に倒れ込み、頂上全体に、勢いよく水飛沫が飛ぶ。崩れ落ちた水像の残骸である水が、まるで滝のように、頂上から流れ落ちた。

「……………」

流れ落ちる水の中、先程と少しも位置を変えずに、地面に立ち尽くしている遠久。髪や服は水に濡れているが、傷を負った様子はない。

ラスト・イデオム「四字熟語か……この状況で“逃げ”を選べるなんて、成長したね。

為介」

前方へと顔を上げて、遠久がそっと微笑む。遠久の前方に居たはずの為介と芽衣子の姿は、すっかりなくなってしまっていた。

「神」

「桃雪……」

そこへ、どこからともなく、桃雪が姿を現す。

「お怪我は？」

「ないよ」

「追いますか？」

「いいよ」

桃雪の問いかけに短い答えを返しながら、遠久が振り返り、再び下方に広がる言ノ葉の町並みを見下ろす。

「どうせ、もう、何をやったところで終わりさ……」

髪についた水滴を払いながら、遠久はそつと微笑んだ。

Word. 71 明日ナキ少年 (5)

「芽衣子…!」

芽衣子連れ、遠久のもとから、韻本部へと逃げ帰って来た為介は、芽衣子を韻の治療室へと運んだ。そこへ、為介からの連絡を聞きつけ、恵がやって来る。

「芽衣子!」

「恵、さま…?」

芽衣子の眠る寝台のすぐ横へと、必死に駆け寄る恵。自身の名を呼ぶその声に、深く瞳を閉じていた芽衣子が、薄く瞳を開き、か細い声を漏らす。

「治療は?」

恵の後から、治療室へと現れた明が、部屋の入口付近に立っている為介へと、小声で問いかける。その問いかけに、為介はそっと、首を横に振った。治療室に、治療班の従者は見当たらない。すでに治療は終わり、手の施しようがないことは、確認されていた。

「そうか…」

明が視線を落とし、険しい表情を見せる。

「恵、さま…」

「芽衣子…!」

その薄い瞳で恵の姿を捉え、どこか嬉しそうに微笑む芽衣子の右手を、恵が両手で強く握り締める。

「良かった…間に、合って…」

「え…?」

「私の、力…」

恵が握り締めた芽衣子の右手の中には、芽衣子の緑色の言玉が握り締められていた。芽衣子はそのまま、言玉を右手の中へと吸収させる。すると、芽衣子の右手が、緑色に輝き始めた。

「私の、言葉…消えて、しまう前に…恵さまに…」

光り輝く右手で、芽衣子がしっかりと、恵の手を握り締める。恵もそれに応え、固く握り締め合うと、やがて芽衣子の右手の光が、恵の右手へと移った。光る自身の手を見て、恵がそっと目を細める。

「芽衣子…」

「恵、さま…我が、神」

とても大切そうに、丁寧言葉に言葉を発した芽衣子が、恵を見上げ、穏やかに微笑む。

「どうか…お幸せ、に…」

願うような言葉を最期に、芽衣子の瞳が閉じられ、恵の両手に握り締められていた右手が、ゆっくりと寝台に落ちていく。その光景に、大きく目を見開く恵。

「め、芽衣子…？」

いつもすぐに返事をしていた芽衣子が、今はもう、恵の呼びかけに答えない。

「芽衣子 おお…!!」

『……っ』

恵の悲痛な声が響くと、為介と明も、遣り切れない表情できつく唇を噛み締め、その場で深く俯いた。

「ク…うう…!」

芽衣子の眠る寝台に顔を埋め、言葉にならない声を漏らす恵。

「恵…」

明の後ろで、眠るカモメを抱いたまま、恵を見つめ、茜が悲しげに眉をひそめる。

「明」

「ウズラ」

皆に遅れるようにして、ウズラが治療室へとやって来ると、明がウズラの方を振り返った。

「どうだった？上層の連中は何て…」

「韻は、動かない」

「何だと…？」

ウズラのその言葉に、明が大きく表情をしかめる。明の傍で聞いていた為介と茜も、同時に表情を曇らせた。

「どういことだ！？為介からの報告は、いつてるはずだろ！？」「治療室であるというのに、気を遣うことなく、明が思いきり声を荒げる。

「今まで発見された、死因不明の謎の死体も、恐らくは遠久の…！」
「うん、わかってる。全部わかってて、それでも韻は動かないんだよ」

明の言葉を遮り、ウズラが鋭い口調で言い放つ。韻の意志を伝えているウズラであったが、ウズラ自身、韻に怒りを感じているような、そんな様子であった。

「どういう、こと？なんで、韻は…」

「遠久くんは、五十音、最後の音“を”の力を持つ者。もし、その“を”の文字を消せば、五十音の他の文字もすべて消え、この世界から五十音士はいなくなってしまう」

戸惑った様子で問いかけた茜に、ウズラがすらすらと言葉を続ける。

「上層部は、五十音士を失い、韻の統制がなくなってしまうことを、恐れているんだよ…」

「そんなの…！」

「クソ！」

韻を批判しようとする茜の声は、明が拳を治療室の壁へと叩きつけた、その大きな音により、掻き消された。

「自分たちの権力が残れば、他の人間は、何人死んだって構わねえっというのか！？」

「兄さん…」

心からの怒りを見せる兄の姿を見て、茜がそっと、目を細める。

「でも、韻が動かないんじゃない、どうしたら…」

「消そう」

「え…？」

考え込むように下を向いた茜が、小さく聞こえてくるその声に氣付き、ゆっくりと振り向く。

「恵…」

“を”を、遠久の文字を、消そう…」

茜が振り向くと、そこには、芽衣子の眠る寝台の横から、ゆっくりと立ち上がった恵の姿があった。涙の滲む表情に、すでに悲しみはない。恵は決意したような、鋭い瞳を見せていた。

“を”の文字を消せば、すべての文字が消え、遠久にかけた、私の“永遠”の言葉も消えて、あいつは死ぬはずだ」

「……いいのか？」

少しの間を置いて、明がどこか、確かめるように聞く。

「お前はそれで、いいのか…？」

「遠久を、あんな風にしてしまったのは私だ」

問いかける明をまっすぐに見つめ、恵がはっきりとした口調で、言葉を紡ぐ。

「だから、私が遠久を止める」

「……わかった」

恵の真剣な表情を見て、決まった覚悟を感じ取って、明は大きく頷いた。

「茜、お前はカモメ連れて、家帰ってろ」

「え？ だけど…！」

「心配しなくても、死にやしねえよ。俺もウズラもな」

不安げに身を乗り出す茜に、明が安心させるように、穏やかな笑みを向ける。そしてすぐに、その表情をまた、真剣なものへと変える。

「行くぞ。言ノ葉山へ」

明の言葉に、三人の神は、迷うことなく、大きく頷いた。

「神！」

「あ、充」

言ノ葉山へ行く準備のため、韻本部にある自室へと戻った為介を出迎えたのは、為介の神付き、充であった。充が居ると思っていなかった為介は、少し驚いた様子で、充の名を呼ぶ。

「どちらへいらしてたんですか？先に戻れと言ったきり、全然帰って来られないですし」

「ご、ごめん」

眉間に皺を寄せ、険しい表情を向ける充に、為介が短く謝罪の言葉を放つ。

「まあ構いませんけど。それで、先程の報告書のことなんですけど」
「充」

報告書を取り出し、話をしようとした充の言葉を遮って、為介が充の名を呼ぶ。いつになく真剣な表情を見せている為介に気付き、充は戸惑うように首を傾げた。

「神？」

「充、あ、あのね…」

「“為の神”、井戸端為介！」

為介が充に話を切り出そうとしたその時、部屋の外から、鋭い声が届く。

「中に居るのか！？井戸端為介！」

「な、何だ？」

荒々しいその声に、戸惑うように振り返る充。

「韻への反逆行為の罪で、貴様を拘束する！抵抗せずに、大人しく我々に従え！」

「もう、手を打ってきたか…」

聞こえてくる声に、為介が険しい表情となって呟く。遠久を倒そうとするであろう為介たちの行動を察し、それを防ぐために、反逆行為などと言って、拘束しようとしているのだろう。

「時間がない。充、あの…！」

「反逆、行為…？」

「……っ」

真実を話そうとした為介の瞳に飛び込んで来たのは、為介へと冷たい、疑いの眼差しを向ける充であった。その瞳を見て、為介が思わず、言葉を止めてしまう。

「神、あなた、まさか……」

「……………」

“違う”と、否定すれば良かった。それからすべてを話せば、充は理解してくれただろう。だが、為介は、そう言うことが出来なかった。充は今、確かに為介を疑っている。為介が何も言っていないうちに、外から聞こえてくる声を信じ、為介に疑いの瞳を向けている。何も言わずとも、無条件で為介を信じてくれると、心のどこかでそう思っていた為介は、何も言うことが出来なかった。

「……ごめん」

小さく謝罪の言葉を零しながら、為介が歩を進め、部屋の奥にある窓へと向かう。

「今まで、ありがとう。充」

俯いたまま、そっと札の言葉を落とすと、為介はそのまま窓を叩き割り、部屋の外へと飛び出していった。

「井戸端為介!」

為介が出て行ったと同時に、部屋の扉が開かれ、韻の従者らしき物々しい男たちが、続々と部屋の中へと入って来る。

「窓から逃げたか。追え、追うんだ!」

『は!』

先頭に立った男の指示に頷き、従者たちが為介を追って、次々と窓の外へと飛び出していく。その様子を見つめ、その場に立ち尽くした充は、そっと目を細める。

「神……」

それが、充の、為介に対する最後の呼びかけとなった。

「ハア！ハア！」

「遅っせえぞ、クソガキ！」

「ご、ごめん」

為介が韻本部の外へと出ると、すでに明たち神と、正一や宗吉、熊子ら、その神附きの面々が集まっていた。怒鳴りあげる明に、為介が息を切らしながら、小さく謝る。

「充はどうした？」

「……っ」

明からの問いかけに、表情を曇らせる為介。

「充は…来ない」

俯いたまま答える為介に、明がすべてを察したように、そっと眉をひそめる。

「……そうか」

為介の答えに頷くと、明は為介を励ますように、軽く二度、為介の頭を叩いた。そしてすぐに皆の方を向き、真剣な表情を作る。

「チンタラしてると、追手が来る！とっとと行くぞ！」

集まった面々は、明の指示に、厳しい表情となって頷いた。

——何が、間違っていたというのだろう。あの日の僕らは確かに、笑顔で共に在れたのに。

「遠久！」

「……っ」

荒々しく名を呼ぶ明や恵を見て、遠久はただ、楽しげに笑い、右手に持った言玉を、迷うことなく、かつての仲間たちへと向ける。

「“終えろ”…」

言葉と共に、放たれる終末の光。

「神！うううう…！」

「宗吉…！」

遠久が放った光を、ウズラを庇った宗吉が受け、力なくその場に倒れ込んでいく。倒れた宗吉へと、熊子と塗壁が、必死に駆け寄っていく。

「宗氏…！」

「宗吉さん…！」

「……っ」

二人の呼びかけに応えることのない宗吉の様子を見て、ウズラが悔しげに唇を噛み締める。

「まともに戦ってたんじゃ、全員やられちまう…！」

「五母^{ごぼ}の力で封印を」

「え？」

険しい表情を見せる明に、ウズラが鋭く言葉を掛ける。

「ウズラ？」

「五母の力で、遠久の体を、文字ごと封印するんだ。もう、その方法しかない」

明をまっすぐに見据え、ウズラがいつもの明るい笑顔など一切なく、厳しい表情で言い放つ。遠久の力の強力さは、神々には、少し相対しただけでも十分に理解出来た。まともに戦っているのは、明日は守れない。ウズラのその言葉に、明や為介、恵も皆、鋭い表情となって、頷いた。

「第一音“あ”！」

「第二音“ゐ”」

「第三音“う”…」

「第四音“ゑ”…！」

四人の神が、自身の言玉を構え、それをまっすぐに、言ノ葉山頂上の岩の上へと立っている遠久へと向ける。赤、青、金、緑の光の柱が空へと突き上げられ、中央に立つ遠久を取り囲む。

『“四母^{しほ}封印”…！！』

「ううう…！」

周囲四方向から、一気に強い光を浴び、ずっと笑顔を見せていた遠久の表情が、大きく歪む。

「神……！」

「おおっと」

苦しむ遠久のもとへと駆け寄ろうとした桃雪の前に、明の神附きである正一が立ちはだかる。

「俺が相手だ。ここで大人しくしててもらうぜ、桃雪」

「ク……！」

不敵に笑う正一に、桃雪が大きく、その表情を崩す。

「グ……ううう……！！うあああああ……！！」

『……！！』

封印を進めていた四人が、苦しみながらも、必死にもがき、四つの光の柱にも負けない、巨大な白光の塊を生み出す遠久に、一斉に表情を曇らせる。

「あいつ……！今使える全部の力を結集して、この場で爆発を起こす気か……！」

「え……！？」

明の言葉に、為介が驚きの表情を見せる。

「例え封印が完成したとしても、俺たち全員が爆死したんじゃ、すぐに封印は解ける……考えたね」

「そんな……！」

冷静に言い放つウズラに、思わず声をあげる為介。ウズラは口調こそ冷静だが、その表情には焦りが浮かんでおり、額には汗が滲んでいた。

「遠久……」

光の中の弟を見つめ、恵が一層、険しい表情を見せる。

「どうしたら……」

「……一つ、方法がある」

「え？」

考えるように俯いたウズラが、明の言葉に、また顔を上げる。

「封印はほとんど完成してる。四人のうちの誰か一人が残り、封印を完成させて、他の三人が逃げ延びれば、封印は解けない」

「一人が犠牲になるっていうのかい？」

明の言葉に、どこか批判するように問うウズラ。

「そんな方法は……」

「それでいい。私が残る」

「恵！」

認めまいとウズラが言葉を発する中、恵が名乗りをあげるように、皆の前へと出る。

「あいつをこんな風にしたのは、私だ。私が残るのが、丁度いい」

「だったら……だったら、ボクが残る！」

恵の横から身を乗り出し、名乗りをあげたのは為介であった。

「為介」

「ボクが……ボクが馬鹿だったせいで、遠久サンは怪我して、あんなことに……だから、残るならボクが……！」

「ボケ」

「痛って！」

必死に主張を続ける為介の頭部に、明の容赦ない頭突きが炸裂した。相当に痛かったのか、為介が両手で頭を抱え込み、その場に蹲る。少しの間、痛がって、まだ少し涙の滲んでいる瞳で、為介がようやく顔を上げた。

「な、何す……！」

「死ぬことでしか、責任取れねえような神になってんじゃねえよ、クソガキ」

「……っ」

怒鳴りあげようとした為介の声が、明のその言葉を聞き、止まる。

「お前もだ、恵」

「………」

穏やかな笑みを浮かべ、恵の方を振り返る明に、恵は一瞬だけ目を合わせると、何も言葉を発せぬまま、すぐに深々と俯いた。

「ぐあああああ……!!」

「……っ」

さらに叫び声を大きくし、力を膨らませる遠久を振り返って、明が鋭く、目を細める。

「明……君、まさか……」

「ウズラ」

険しい表情で言葉を向けたウズラの声を遮って、明がそっと、ウズラの名を呼ぶ。

「茜とカモメのこと、頼むな。後、八百屋も……」

まっすぐにウズラを見つめ、明が穏やかに笑う。

「確かにちよっと寂れてっけど、親父たちから預かった、大事な店なんだ。だから、頼む……」

「明……」

願うような明の言葉を聞き、ウズラが目細める。他に手段もなく、止めることに意味もない。何より明は強く覚悟を決めており、何を言ったところで揺るがないことは、ウズラが一番、理解していた。理解は出来ていても、割りきれない思いを噛み潰すように、ウズラが一度、深く瞳を閉じる。

「わかった」

「……ありがとう」

再び瞳を開き、しっかりと頷いたウズラを見て、明が笑顔を見せ、礼を零す。明の笑顔を見ると、ウズラはすぐに恵や為介、倒れた宗吉に付き添っている熊子たちの方を見て、自身の言玉を突き出した。

「“動かせ”！」

『え……!?!』

ウズラの言玉から飛び出した金色の不死鳥が、まだ納得しきれていない様子で、困惑する恵たちを、次々と乗せていく。

「明……!」

「明サン！」

不死鳥の背の上から身を乗り出し、必死に明の名を呼ぶ恵と為介

を見上げ、明がそっと笑みを零す。

「正一、お前も…」

「俺はここに残るぜ」

「え…？」

明が振り向き、桃雪との交戦を続けている正一に、声をかけようとしたが、明が言葉を言い切る前に、正一は断りの返事を放った。正一の言葉を聞き、明が戸惑うように首を傾げる。

「十何年も、あんたに附いてきた。もう、遅刻しまくる神以外には、附けそうもねえ。だから、俺も残る」

「正一…」

そう言って微笑む正一を見て、明がそっと目を細める。

「ありがとな…」

明が礼の言葉を囁くと、正一は満足げに笑みを浮かべ、また桃雪との戦いを始めた。

「行け！ウズラ！」

高々と顔を上げた明が、上空にいる巨鳥へ向かって、大きく叫ぶ。

「ズラスケ！」

「クワアアアア！」

ウズラの呼びかけに甲高い鳴き声で応えると、金色の巨鳥は、その美しいばかりの両翼を広げ、勢いよくその場から飛び立っていく。

「明サン…！」

必死に身を乗り出し、明の名を叫ぶ為介。ウズラや恵も、ただ険しい表情で、まっすぐに明を見下ろす。遠ざかっていく仲間たちを見上げ、明はそっと微笑んだ。

「後の時代を、言葉の明日を、頼んだぜ…」

決して届かない声を小さく落とすと、明は上空から、前方へと視線を移した。

「あああああ…！！！」

「……っ」

皆の五母の力の中で、必死にもがき、狂ったような叫び声をあげ

る遠久を見つめ、明が鋭く目を細める。

「神…！」

「明…」

交戦中だった正一と桃雪が、思わずその手を止め、それぞれの神の行く末を見つめる。

「さあ、遠久」

遠久の名を呼び、言玉を持った右手を突き出す明。

「これで、終わりだ…！！」

明の言葉を合図とした封印の完成と同時に、遠久の生み出した、巨大な白光が勢いよく爆発し、言ノ葉山を包み込んだ。

————バアアアアン！

「あ…！」

飛び立った巨鳥の背の上から、言ノ葉山頂上での大きな爆発を確認し、為介が背の上から体が落ちてしまいそうなほどに身を乗り出して、大きく目を見開く。

「あ…明さあああん…！！」

「……っ」

為介の叫び声を聞きながら、瞳を閉じ、強く唇を噛み締め、深々と俯くウズラ。

「……………」

空へと噴き上げる爆風を見つめる恵の瞳から、一筋の涙が、零れ落ちる。

その日、五十音の世界から、すべての“神”が消えた。

Word. 72 発動 (1)

すべての五十音が消えてしまうことを覚悟し、それでもすべての言葉を終わらせぬため、“遠をの神”永遠とわを倒すことを決めたアヒルに、恵が話したのは、恵の弟、遠久とをひさであった永遠の、哀しい過去であった。

「それが、先生の“永遠えいえん”の真実…？」

「ああ」

聞き返したアヒルに、恵がゆっくりと頷く。

「そっか」

アヒルは特に驚いた様子もなく、落ち着いた表情で顔の向きを変え、国語資料室から、外の景色を眺めた。グラランドには、樂しげに下校していく生徒たちの姿が見える。かつて遠久も、今、アヒルが着ているものと同じ制服を纏い、この部屋から同じように景色を眺めて、自身の永遠を憂いたのかと思うと、哀しみにも似た、不思議な気持ちを抱いた。

「旧世代の“安アケルの神”って、俺の伯父さんだったんだな」

「ああ、明か」

アヒルの言葉を受け、恵が懐かしむように、穏やかに微笑む。

「いい奴だったよ。愛想がないから、八百屋は多少、寂れてたがな」
かつて、紺色のエプロンを纏い、白い鉢巻を巻いて、『あさひな』の店の前で、大きく声をあげていた明の姿を思い出し、恵がそっと目を細める。

「ウズラも茜もよく知っているが、不思議なもんだな。お前と初めて会った時、二人よりも先に、明のことを思い出した」

「遅刻ばっかするから？」

「かも知れん」

納得するように頷き、恵がさらに笑みを深くする。

「その明も、死んでしまった」

恵の表情が、突然、暗くなる。

「すべては、私の不用意な言葉が招いたことだ」

恵が、自身を責めるように、厳しく言い放つ。

「あの日、私が、遠久と死別する勇気を持てていれば、こんなことにはならなかった」

恵の言葉を背中に受け、景色を眺めながら、アヒルが目を細める。

「初めから、家族と死別する勇気を持ててる奴なんて、いねえよ…」

「それでも受け入れるのが、人としての務めだ」

励ますように言ったアヒルの言葉も、恵はすぐに払いのける。

「私は弱かった。だから、言葉に逃げた」

またしても続く、自身を責めるような恵の言葉。

「弱かった私の言葉のせいで、何の関係もないお前たちまで、巻き込んでしまった…」

「……先生は、後悔してる？」

アヒルは、恵の方を振り返らぬまま、恵に問いかけを向ける。

「“永遠” っていう、自分の言葉…」

「……っ」

アヒルの問いかけを受け、そっと目を細める恵。

「ああ…」

恵が、小さく頷く。後悔しないために、自身も“永遠”の道を選んだが、後悔は消え去るところか、終わらない時の中で、ただ深まる一方であった。

「後悔、している」

今まで、茜にもウズラにも明かさなかった胸のうちを、恵が噛み締めるように、言葉にする。

「俺も、死ぬほど後悔したよ」

窓枠に肘を掛け、アヒルが遙か高い、空を見上げる。

「カー兄に、“居なくなれ” って言ったこと」

「朝比奈…」

アヒルの言葉に、恵が表情を曇らせる。

「でも、あの後悔があったから、その分、俺は、“言葉”を大切に思えるようになった気がするんだ」

口元を緩めたアヒルが、穏やかに笑みを零す。

「あの日の後悔がなかったら、俺は、言葉で、簡単に人を傷つけるような奴になってたかも知れない」

淡々としたアヒルの声が、資料室に響く。

「人の痛みにも気付くことが出来ずに、ただ何の意味もなく、言葉を発し続けてたかも知れない」

空を見上げていたアヒルが、そっと視線を下ろし、窓の外から、再び部屋の中へと視線を移す。

「そんな奴だったら、“安の神”にだって、なれてなかったかも知れねえだろ？」

どこか試すような笑みを浮かべ、首を傾けて、アヒルが恵へと問いかける。

「確かに苦しかったし、辛かったし、色んなことがあったけど…」

カモメの死を背負った過去を思い出し、アヒルが少し俯いた後、またゆっくりと、その顔を上げる。

「今、“安の神”として、言葉を守るために戦えることを、俺は誇りに思ってる」

大きく胸を張り、晴れやかな笑顔で、アヒルが言い放つ。

「だから先生、“関係ない”なんて、言わないでくれよ」

アヒルの笑みが、少し困ったようになる。

「俺たちの“言葉”だ。皆の“言葉”だ。関係ない人間なんて、この世界に、たったの一人も居ない」

「朝比奈…」

「それに、俺は」

アヒルがそっと、口を開く。

「俺は、先生と同じ“時”を生きたい」

「……！」

アヒルのその言葉に、恵が驚いた様子で、大きく目を見開く。

——俺、先生と同じ“時”を生きてみたいな……——
それはかつて、カモメが恵へと放った言葉。

「俺たちがいつか、ここを卒業していくように、恵先生にもこの場所、卒業アルバムの中で、一つひとつ、年を重ねていってもらいたい」

誠実な笑みを浮かべ、アヒルがはつきりとした口調で、さらに言葉が続ける。

「その為にも、俺は戦いたい」

そのまっすぐな瞳が、何にも遮られることなく、恵へと向けられる。

「俺、頑張るからさ、だから、恵先生も一緒に戦ってくれ！な？」

アヒルがさらに、笑みを大きくする。その笑みを向けられた恵は、堪えられないものを押さえるように、右手で口元を覆い、アヒルに顔が見えないように、深く俯いた。

「……敵わないな」

「へ？」

「いや」

恵の言葉が聞き取れず、首を傾げたアヒルへ、恵がすぐに声を返し、口元を覆っていた手を下ろして、ゆっくりと顔を上げる。

「あまりにもカモメと同じことを言うから、少し昔を思い出しただけだ」

「カー兄が、同じことを？」

その言葉に、アヒルが目丸くする。

「じゃあカー兄も、先生の“永遠”を……」

「ああ、知っていた」

恵が認めるように、そっと頷く。

“永遠”の暗闇の中で苦しんでいた私にとって、たった一つの光

のようなものだった。カモメは」

「……っ」

懐かしむように目を細め、悲しげな笑みを浮かべる恵を見て、アヒルが少し眉をひそめる。

「恋人、だったのか……？」

アヒルが躊躇いがちに、一つずつ、言葉を綴る。

「え？」

「いや、その」

少し驚いた様子で振り向いた恵から、途端に目を離し、頭を掻くアヒル。

「奈々瀬がさ、恵先生の部屋行った時に、カー兄の写真飾ってあったって言ってたから、もしかして、と思ってさ」

頭を掻きながら、アヒルがどこかぎこちなく、言葉が続ける。担任の教師と、大好きだった兄が恋人同士であったかも知れないと思えば、ぎこちなくなるのも無理はないだろう。そんなアヒルを見て、恵は少し困ったように微笑んだ。

「安心しろ。そんな関係じゃない」

「へ？」

恵の答えに、アヒルが再び、恵の方を振り向く。

「大好きだった兄の恋人が、こんな乱暴教師じゃ、気が気じゃないもんなあ」

「そういうつもりで言ったんじゃない……」

また恵から視線を逸らし、俯いて、否定の言葉を発するアヒルであったが、その言葉は途中で途切れ、恵へと届きはしなかった。

「ただ、救われていたんだ」

「え……？」

聞こえてくる言葉に、アヒルがまた、顔を上げる。

「あいつの優しさに、笑顔に、言葉に……」

——先生……——

今も思い出の中で、優しく微笑みかける青年。

「その一つひとつに、私はただ、救われていた…」

天井を見上げた恵が、天井よりもさらに遠くを見つめるような瞳で、そっと微笑む。

「あいつと居る時は、何でかな」

自分でも戸惑うように、恵が呟く。

「この“永遠”の時の中じゃなくて、“刹那”を生きてるような、そんな気がしたんだ」

「恵先生…」

恵の泣き出しそうな声を聞きながら、アヒルは何も言えずに、ただ、恵を見つめ続けた。

「さあ、昔話は終わりだ」

恵が話を、自分自身の気持ちを切り替えるように、ポンと一つ手を叩き、いつものように、はっきりとした口調で、明るい笑みを浮かべ、アヒルの方を見る。

「ウズラたちにも、話しに行くんだろう？もう期限も間近だ。とつとと行けよ」

「あ、そうだった」

資料室の掛け時計を確認し、アヒルが思い出した様子で頷く。

「あれ、でも今日、居残り掃除は」

「免除してやる。今日だけ、特別な」

「サンキュ…ってか、別に今日、遅刻してねえんだから、免除は当然だろうが！」

恵の言葉に一度は礼を言いかけたアヒルであったが、今日、掃除をさせられる必要性がなかったことを思い出し、恵を力強く指差して、反論する。

「ったく！じゃあ俺行くから、また後でっ…」

「朝比奈」

「へ？」

歩を進め、部屋を出て行こうとしたアヒルを、扉を開いたところで、恵が呼び止める。アヒルは部屋から出なかった体を戻し、恵の方を振り返った。

「ありがとう」

「……っ」

笑顔の恵から向けられる言葉に、アヒルもそっと笑みを零す。

「ああ」

恵の言葉をしっかりと受け止めて、アヒルは国語資料室を後にした。大きな音を立てて扉が閉まり、部屋に一人残った恵が、静かに立ち尽くす。

「……ありがとう」

もう一度、噛み締めるように、恵はその言葉を繰り返した。

「……………」

国語資料室にある窓のすぐ下、部屋の外側の中庭に座り込んでいるスズメは、深く考え込むような、神妙な表情を見せ、しゃがみ込んだまま、青い空を見上げていた。

「また、盗み聞き？」

「ん？」

聞こえてくる、よく聞き覚えのあるその声に、スズメが空から視線を下ろし、振り向く。

「ツバメ」

スズメが振り向くと、そこにはツバメが立っていた。

「何してんだよ？オカルト同好会中だろ？」

「今日、定休日だから……」

「あっそ。つか、部活って定休日って言い方、すんのか？」

少し呆れたような表情を見せながら、スズメがツバメへと言葉を掛ける。

「アヒルちゃんと恵先生の会話、聞いてたの？」

ツバメが窓の外から部屋の中を見て、資料室で話しているアヒルと恵の姿を捉える。

「ああ。そしたら恵ちゃんがいきなり、兄貴への想いを語り出して、マジ恋心が抉れた」

スズメが両手で心臓を押さえ、その表情を大きく歪める。

「やっぱり失恋で、甘酸っぱいよなあ。あああ、あの日のヒトミの気持ち、痛いほどわかるぜ」

「はあ…」

しみじみと語るスズメを見て、ツバメが少し困ったように肩を落とす。

「スズメのそれは、恋心とかじゃなくて、ただのカモメ兄さんへの対抗心じゃないの…？」

「……っ」

ツバメの鋭い問いかけに、スズメが眉をひそめる。

「兄さんが好きになったものを、追いかけるように好きになる…スズメは、何でもそうだよね」

少し低いツバメの声が、スズメへと落とされる。

「恋盲腸も、ナスビも、恵先生も…」

ツバメの言葉を聞きながら、スズメが、その言葉を否定しようとはせず、鋭く目を細める。

「仕方ねえだろ」

短く言葉を放って、その場で立ち上がるスズメ。

「俺は男の子なの。男なら普通、兄ちゃんに対抗心の一つや二つ、燃やすだろうが」

「恵先生は、恋盲腸やナスビとは違う。人なんだよ…？」

どこか子供っぽく主張するスズメに対し、ツバメが責めるように、言葉を向ける。

「その、一つや二つの対抗心が、あの人の心を決めることだってあるんだ…」

「……………」

ツバメの言葉を聞き、スズメが頬を膨らますような子供らしい顔から、真剣な、鋭い表情へと変わる。

「はぁ、大人だよなぁ。ツバメもアヒルも」

大きく両手を伸ばしながら、スズメが少し気の抜けた声を漏らす。伸ばしていた手を下ろし、スズメはまた、上空に広がる空を見つめた。

「結局、一番ガキなのは、俺なのかなぁ」

青い空を見つめ、スズメが少し、自嘲するような笑みを浮かべる。

「さぁーて、帰りに恋雑誌キュンクルの最新号でも、立ち読みしてくっかなぁ」

上を向いたままツバメに背を向け、その場を去ろうと歩を進めていくスズメ。

「スズメ……！」

「大丈夫」

呼び止めたツバメに、スズメはすぐさま、声を返した。

「大丈夫だ」

振り返ったスズメが、ツバメに、短い言葉と共に、少し悲しげな笑みを向ける。そしてまた、すぐに背を向け、スズメはその場を去っていった。

「スズメ……」

中庭に一人、残ったツバメが、どこか不安げに、片割れの名を呟く。

「あれ？ ツバメさん？」

「え……？」

背後から名を呼ばれ、ツバメが戸惑うように振り返る。

「きゃあ！ やっぱりツバメさんだぁ！ 超偶然ですねえ！ もしかして、運命……！」

「想子ちゃん……」

勢いよくツバメの前へとやって来て、黄色い声をあげたのは、アヒルの幼馴染みで、七架の親友でもある想子であった。部活の途中

であろうか、剣道の胴着を身に纏っている。

「ツバメさん、どうしたんですかぁ？こんなところに一人で」

「あ、いや…」

不思議そうに問いかける想子に、ツバメが誤魔化すように、首を横に振る。

「想子ちゃんは、部活…？」

「はい！今日は短縮練習の日なんで、もう終わったんですけど」

「じゃあ、久し振りに一緒に帰ろうか…？僕も今日は、部活もないし」

「え！？」

ツバメのさりげない誘いに、想子は、雷撃でも走ったかのように、大きく目を見開く。

「ほ、ほほほほ本当ですか！？」

「うん。下駄箱で待ってるよ…」

微笑むツバメに、想子はさらに驚きの表情を見せた後、必死に堪えるように体を震わせて、それでも溢れ出てしまったかのように、大きな笑みを浮かべた。

「マッハで着替えてきます！」

「別にゆっくりで大丈夫だよ…」

猛スピードでその場を飛び出していく想子を、ツバメが軽く手を振り、見送る。

「ふう…」

嵐のように想子が去り、また一人となったツバメが、深く肩を落とす。

「……っ」

視線を落としたツバメは、鋭く、その瞳を細めた。

Word. 72 発動 (2)

その頃、言ノ葉霊園。

「……………」

平日の午後ということもあつてか、他の墓参り客も見当たらない霊園の、とある墓の前で、いつになく神妙な表情を見せた為介は、一人でその場に立ち尽くしていた。墓には、“箕島^{みのしま}家”の文字が刻まれている。

^{みつる}
「充…」

為介が口にしたのは、かつての自身の神附きの名であつた。

「父の墓の場所を、話した覚えはありませんでしたが」

「え…？」

横から聞こえてくる声に、為介が戸惑うように振り向く。

「雅クン…」

その場へと現れたのは、制服姿の雅であつた。学校の帰りであろうか、いつものように、人差し指で眼鏡を押し上げている。

「茜サンに、ひっそり調べてもらつてね」

戸惑っていた表情を、すぐに飄々とした笑みへと変えて、為介が雅の問いかけに答える。

「それでひっそり、時々来てるんだあ」

「そうでしたか。それはそれは、今まで一本の花も無しに、ありがとうございます」

「うわあ、刺々しい」

為介と会話を交わしながら、雅が為介のすぐ横まで歩み寄って来る。墓の前へと立つと、雅は静かにしゃがみ込み、深く目を閉じて、手を合わせ、今は亡き父へと祈りを送った。その様子を、為介は言葉もなく見守る。雅は祈りを終えると、再び目を開き、その場で立ち上がった。

「今日は部活休み？」

「ええ。毎週火曜は定休日ですので」

「そっかぁ。ってか、部活って、定休日って言い方するんだねえ」
いつもと同じ会話を交わす二人であったが、為介の口調に、いつものような明るさはなかった。

「初めて会った日、あなたが僕の名を知っていたのも、茜さんにひっそりと調べてもらっていたからですか？」

「うん。まあねえ」

雅の問いかけに、為介は少し曖昧な返事をする。

「そうですか」

為介の方は見ずに、墓を見つめたまま、雅がレンズの向こうで、そっと目を細める。

「ボク、見た目の通り、繊細だからさぁ、やっぱり、気になっちゃったんだよね」

変に明るい為介の声が、静かな墓場に響く。

「自分が裏切った、神附きのことが」

明るい声とは裏腹のその言葉に、雅が眉をひそめる。

「父も」

少し躊躇うように間を置いた後、雅がゆっくりと言葉を発する。

「父も、自身の神に“裏切られた”と、そう言っていました」

雅の言葉に、為介の表情が曇る。あの日、遠久の真実を話すことなく、充を置いて、韻を出た為介は、そのまま五十音界を追放されてしまい、それ以後、充と会うこともなかった。充にとって、為介が裏切りの神であることも、当然だろう。

「最期までそう言って、死んでいました」

死に際の父を思い出し、雅が言葉を続ける。

「けれど、それは」

暗い口調を少し変えて、雅がさらに口を開く。

「自身の神を、“信じていた”からだと思います」

「……っ」

強く言い切る雅の言葉に、為介の表情が動く。

「裏切ったと言ったのは、自身の神を心から信じていたからだ、僕はそう、信じています」

墓を見つめたまま、まっすぐな表情を見せて、雅は力強く言い放つ。その横で為介は、目を細め、何かを堪えるように、唇を噛み締める。

「だから、父の神にもそう、信じていてほしいです」

雅がどこか願うような言葉で、自身の言葉を締めくくる。

「……うん」

その言葉を受け止めるように、小さな頷きを零す為介。

「うん、そうだね…」

搾り出したような為介の声は、かすかに、震えていた。

アヒルの母、茜^{あかね}の指揮する“謡^{よう}”により占拠された韻本部では、アヒルと時を同じくして、箆也たち安団の面々が、ウズラと茜から、旧世代の神々に起こった事実を、聞かされていた。

「そん、なことが…」

走る衝撃に皆、驚きを隠せない表情で、何と言っているのか、言葉^{ことば}を失っていた。

「“永遠^{えいえん}”の時を生きる神、永遠^{とわ}…」

「うん」

自分の中で確認するように繰り返す箆也に、ウズラがそっと頷きかける。

「言ノ葉山に封印された後、韻の者たちが付けた、遠久のもう一つの名だよ」

目を細めたウズラが、どこか遠くを見るように、箆也たちから視線を逸らす。

「その後は、君たちの知ってる通り。旧世代の神々は、五十音界を追放されて、そして俺は」

ウズラが少し躊躇うように、不自然に言葉を途切れさせる。

「カーくんの体の中に、自分の力を“埋め込む”ことで、“う”の文字の存在を消し去り、遠久の封印を完全なものとした…」

今までと同じように、冷静に言葉が続けるウズラであったが、やはり、その表情は険しい。カモメに自身の文字を埋め込んだことを、ひどく後悔しているようだった。そんなウズラの様子を察してか、茜も辛そうに顔を俯ける。

「それから二十数年…俺たちは、封印が解けることのないよう、ずっと見守ってきた」

「じゃあ、皆さんが言ノ葉町に揃っておられたのは…」
「うん」

保の言葉に、頷きだけを返すウズラ。普通に考えて、小さな町に、あんなにも神が集まっていることはおかしい。封印の後も、遠久を見張るため、皆、言ノ葉にその身を置いたのだろう。

「だが…」
険しい表情を見せた箆也がすぐに口を開き、俯けていた顔を上げて、ウズラの方を見る。

「寿命のきた人間に、“生きろ”と言葉を掛けたところで、命の期限を延ばすことは出来ない。それが五十音界の法則のはずだ」

少し厳しい口調で、箆也がウズラへと発言する。

「言葉を使って、死にかけていた者の命を“永遠”のものにするなど…そんなことが本当に、有り得るのか？」

箆也の問いかけに、ウズラが眉をひそめ、表情を曇らせる。

「言葉は、人の想いの乗るもの…」

目を細めたウズラが、視線を天井へと上げる。

「人の想いの強さこそが、言葉の力の強さになる」

皆が視線を集める中、ウズラがさらに言葉が続ける。

「有り得るはずのない言葉を現実にしてしまうほど、本当に、強い想いだっただよ」

——遠久…遠久…！——

「弟を生かしたいという、恵の想いは」

「……………」

ウズラの言葉を聞いた箆也は、再び言い返すことはなく、そっと俯く。箆也にも恵と同じように、弟がいる。箆也が恵と同じ立場であれば、間違いなく、言葉を使って、檻也を生かそうとするだろう。恵の気持ち、想いの強さが、痛いほどわかるからこそ、箆也は何も言うことが出来なかった。

「あなたの弟さんを巻き込んだ時も、恵は相当に苦しんだと思います」

「え？」

不意に茜に言葉を掛けられ、七架が戸惑うように首を傾げる。

「あなたが弟さんを大事に想う気持ちは、痛いほどわかっていたでしょうから」

「……………」

茜の言葉を受け、七架が少し険しい表情となる。

——許さなくていい。好きなだけ、恨め——

潔いまでに向けられた、恵の言葉。

「先生…」

あの時の恵の気持ちを考え、七架は哀しげな表情で、胸に手を当てた。

「言ノ葉山の封印で兄が死に、その後、恵と為介君は、ますます自分を責めて、ひどく塞ぎ込んでしまいました」

茜が恵と為介の話が続ける中、ウズラが天井を見上げたまま歩を進め、箆也たちの居る辺りから、少し距離を取る。

「遠久君に怪我をさせた自分が、“永遠”の言葉をかけた自分が、何もかも悪いと、すべてを一人で背負い込んで、心を閉ざしてしま

ったんです」

言葉を続ける茜の表情は、どこか寂しげであった。茜の言葉を聞きながら、ウズラも力ない微笑みのまま、深々と俯く。

「そんな彼等に、私たちは、何の言葉を掛けてあげることが出来ませんでした…」

やっと言葉を終えて、茜が深々と肩を落とす。

「二十数年の時が経ち、様々なことが移り変わっていきました」
年を取った自分の体を、今居るこの場所を見回して、茜がそっと言葉を放つ。

「それでも私たちは、今もなお、この終わらない哀しみの中から、抜け出せずにいるんです」

茜の言葉を聞きながら、箆也たち四人は、その胸に重いものを抱えるように、深く俯く。

「このまま、抜け出せないのかも知れないねえ」

困ったように笑って、ウズラが小さく言葉を落とす。

「それこそ、永遠に」

「……っ」

ウズラの言葉を否定することも出来ず、茜も深く俯いた。

「アーくんを選択を託したけど、本当はもう、心の中で思っちゃってるのかも知れない」

何もない壁をまっすぐに見つめ、ウズラがさらに目を細める。

「ここまで来てしまったら、どんなに頑張ったところで、もう…」

「諦めるのは一番、最後でいい」

「へ？」

急に聞こえてくる言葉に、ウズラが少し目を丸めて、顔を上げる。

「我が神の言葉だ」

「箆也くん…」

真剣な表情で、まっすぐな眼差しをウズラへと投げかける箆也に、ウズラが戸惑ったような顔つきとなる。

「叫び続ければいつか、自分の想いが言葉になる」

「囁ちゃん？」

「我が神の言葉よ」

穏やかな笑みを浮かべた囁が、箆也と同じように、ウズラと茜へ、かつて自身がもらった言葉を向ける。

“言葉の中には救いもあると、そう信じる”。俺の神様の言葉です」

“何度だって繰り返すその言葉を、無駄かどうか決めるのは自分”。私の神の言葉」

保と七架も大きな笑みを浮かべ、同じように、言葉を放つ。

「僕らは皆、我が神の言葉に導かれ、今、ここに居る」

笑顔を見せた三人の一步前へと出るようにして、箆也が、ウズラと茜に向き合う。

「神の言葉があったから、ここまで戦って来られた。神が居たから、今、この場所に立ってられる」

自身の言葉を噛み締めるように、自身の胸に手を当てる箆也。

「それなのに、神の手本となるべきあなたたちが、先に諦めるのか？」

その箆也の問いかけに、二人の表情が動く。

「僕らよりも長く、神を見続けてきたあなたたちが、そんな諦め切ったような言葉を、神に向けるのか？」

箆也の言葉が、どこか責め立てるように、強く響く。

「……そうだね」

少し間を置いて、答えるように言葉を発したウズラが、いつものように穏やかで、優しく、そして、どこか力強い笑みを浮かべる。

「あなた」

「うん」

振り向いた茜にも、大きく頷きかけるウズラ。

「俺たちが一番近くで、あの子を、諦めないあの子を、見続けてきたんだもんね」

少し俯いたウズラが、過去を思い返すように目を細め、そっと口

元を緩める。

「俺たちが、諦めるようなこと、言っちゃダメだよね」

「ええ」

ウズラの言葉に、どこか泣き出しそうな笑顔を見せて、茜が大きく頷く。そんな二人の様子を見て、籠也たちも今までとは一転した、明るい笑みを零した。

「親父、母さん、居るかあ？」

そこへ、扉の開く音と共に、聞き慣れたアヒルの声が入ってくる。

「アーくん！」

部屋へと現れた息子の姿に、瞳を輝かせ、溢れんばかりの笑顔を見せるウズラ。

「アーくうくん！」

「さっきまでシリ阿斯そのものだったのに、凄い変わりようだね」

「あれが、常態だ」

緩みきった笑顔で、両手を広げ、部屋へと入って来たアヒルのもとへと駆け込んでいくウズラを見て、思わず呆れた表情を見せる七架。横の籠也は、慣れた様子で冷静に言い放つ。

「学校に居た間、お父さんに会えなくて、寂しかったでしょ！？」
さあ、お父さんの胸にどーんと、飛び込んでおい：！」

「ウザアーい！」

「ぎゃあああ！」

だが、笑顔で駆け込んでいたウズラは、アヒルのもとに辿り着く前に、茜の容赦ない蹴りに吹き飛ばされ、壁際で力なく倒れ込んだ。皆が呆気にとられる中、茜が、ウズラの代わりに、アヒルの前へとやって来る。

「おかえりなさい、アヒル。今日も元気に、過ごせました？」

「なあ、“夫婦愛”とかってねえの：？」

満面の笑みで問いかける茜に、思わず顔をしかめ、疑問をぶつけるアヒル。

「うう、痛ててて：」

「親父」

「ん？」

蹴られた背中を押さえ、壁際で何とか起き上がったウズラが、アヒルの声に振り向く。

「母さん」

「はい」

ウズラに続くように、真剣な表情で名を呼ばれ、茜も表情を引き締めて、その声に答える。

「俺、戦うよ」

皆の視線が集まる中、アヒルがはつきりとした口調で言い放つ。

「例え、すべての文字が消えてしまっても、五十音士が消えてしまっても…それでも俺は」

真剣な表情を見せていたアヒルが、穏やかに笑う。

「皆の言葉を、終わらせたくない。皆の言葉を、守りたい」

柔らかに微笑んだアヒルは、決して気負っている様子はない。だが、その瞳はどこまでもまっすぐで、強い決意を固めていることが見て取れた。

「だから、その為に、俺は戦う」

アヒルがもう一度強く、その言葉を繰り返す。

「最後まで、諦めない！」

『……っ』

さらに大きく笑みを零し、アヒルが大きな声で言い放つ。言うであらうと思っていた言葉が、期待通りにアヒルの口から零れ出ると、ウズラと茜は少し視線を交わらせ、互いに嬉しそうに微笑んだ。

「うん」

「ええ…ええ、アヒル」

アヒルの決意を受け止めるように、笑顔を見せたウズラと茜が、何度も何度も、大きく頷く。両親の笑顔を見て、安心したように微笑んだアヒルが、今度は、今まで共に戦って来た仲間たちへと視線を移す。

「皆…」

箆也たち四人は、神の言葉を待つように、黙ったまま、まっすぐにアヒルを見つめた。

「俺、遠の神と戦うことに決めた」

ウズラたちへと向けた決意を、四人にも同じように、話すアヒル。「勿論、負けたら言葉は終わっちゃうし、勝ったとしても、俺は神じゃなくなる。皆は神付きじゃなくなる」

アヒルが俯き、少し躊躇うように視線を揺らす。勝ったとしても、負けたとしても、これが安団として、皆と戦う、最後の戦いになることは、明らかであった。

「でも、だからこそ」

言葉を言い換えて、アヒルが再び、顔を上げる。

「最後まで俺に、附いてきてほしい！」

笑顔で言い放つアヒルに、箆也も囁も保も七架も、皆、一斉に笑みを零す。

『仰せのままに、我が神』

四人は声を揃え、アヒルへ、深々と頭を下げた。

Word 72 発動 (3)

言ノ葉町、北東部。永遠^{とわ}たちの居城。

「グウウウウ…」

部屋と呼ぶには広すぎる、巨大な空間を埋め尽くすほどの巨体から、漏れ聞こえる、低い唸り声。淡く金色に輝く体は、唸り声と共にかすかに揺れ動き、それが、生物であることを示している。

「うーん…」

空間の入口付近に立った現^{うつ}は、自身の生み出した、その巨大な生物を見つめ、満足げな笑みを浮かべていた。

「どうですか？」

そこへ、現のすぐ後ろの扉が開き、桃雪が姿を現す。

「“終獣”^{しゅうじゅう}の様子は」

付いたばかりの名を、どこか強調するように呼び、不敵な笑みを零す桃雪。

「順調じゃよ」

桃雪の方を振り返った現が、大きく口元を緩め、得意げな笑みを見せる。

「遠の神により施された“无”^んの文字も、あれの体に、順調に馴染んでいっておる」

現がまた、前方の獣へと、視線を移す。

「もう、間もなくじゃ…もう間もなくで、終獣は完成する」

「それは何より」

「じゃが…」

「ん？」

言葉を付け加える現に、桃雪が少し首を傾げる。

「終獣は完成に近付いておるが、終獣の力を、世界中に放つための、動力源はどうするのじゃ？」

眉をひそめた現が、桃雪へと問いかける。

「礼獣の時は、五人の墮神の五母^{はつ}の力を、阿修羅の言葉により“集め”、動力源としたが…」

現が何か、思い当たっているものがあるように、視線を上へとやる。ここは城の一階部で、この上の階には、永遠の部屋があった。

「いくらわしがおるとはいえ、あの寝起きの神と、お前さんだけで終獣の力を世界中に放てるほどの力を得られるとは、正直、考えにくい」

「ああ、そんなことですか」

「そんなこと？」

大して気にしていない様子で答える桃雪に、現がさらに、眉をひそめる。

「何じゃ？もっと他に、仲間でもおるのか？」

「まあ居ないとも言いませんけどねえ。けどまあ、そんなものは必要ありませんよ」

「何？」

その言葉に、ますます、戸惑いの表情となる現。

「そんなものどころか、僕の力も、あなたの力も必要ない」

天井を見上げ、桃雪が冷たく笑う。

「動力源など、我が神、お一人の力で十分だ」

目を細めた桃雪が、まるで、陶醉しているかのように言い放つ。

「あやつ一人の力で十分じゃと？馬鹿な」

そんな桃雪の言葉を、現はすぐさま否定し、大きく表情をしかめた。

「不甲斐ない連中であつたとはいえ、墮神が五人がかりでやっと、町一つ分の言葉を奪えるほどのレベルじゃぞ？」

大きな手ぶりをつけて、現が桃雪へと語りかける。

「それを、たったの一人でなぞっ…」

「我が神は、五十音士の歴史の中でも、最強とされた旧世代の神々、全員の力をもってして、何とか封印することの出来た神ですよ？」

現の言葉を遮り、桃雪が冷静な口調で言い放つ。

「そんじよそこらの墮神と一緒にしていただいては、困ります」
桃雪が、まるで自分のことのように、誇らしげに胸を張る。

「成程。信用ならん奴じゃが、神への忠義だけは厚いらしい」

「神附きとして、当然のことですよ」

現の棘のある言葉にも動じず、桃雪は笑顔のまま、平静に答える。
「もう間もなく、完成なのでしょう？」

「ああ」

「ならば、すぐに始めましょう。あなたは準備を。僕は神を呼んできます」

現へと指示を送り、桃雪が再び、部屋の扉を開いて、外の廊下へと足を踏み出す。

「見せて差し上げますよ」

扉を抜けたところで、現の方を振り返り、桃雪が冷たく微笑む。

「我が神の力を」

自信満々に言い放って、桃雪は閉まる扉の向こうへと、消えていった。

居城、上層階。永遠の部屋。

「同じ顔…」

相変わらず寝台に横になっている永遠は、天井に設置された巨大な鏡に映る、“永遠”の言葉を受けたあの日から、一度も変わらず自分の姿を、まっすぐに見上げていた。

「同じ声、同じ姿、同じ時間…」

何度も繰り返してきた言葉を呟き、永遠が決して届かぬ鏡面へと、その手を伸ばす。

「同じ、命…」

届かぬ手が、空中で強く、握り締められる。

「神」

そこへ、永遠を呼ぶ声が響き、部屋の扉が開いて、桃雪がやって

来た。永遠が寝転がったまま、首だけを動かし、その視界に、桃雪の姿を入れる。

「桃雪…」

「ご気分はいかがです？ 眠気は取れましたか？」

「そう、だね。まあまあ、かな」

あまり歯切れの良い答えは返さずに、永遠が寝台の上で、ゆっくりと起き上がる。

「まだ、信じられないよ。二十何年もずっと、眠っていただなんて…」

「そうでしょうねえ」

部屋の大きな窓に掛けられたカーテンを開きながら、桃雪が永遠の言葉に答える。

「何年経ってたって、俺の姿は変わらないし…」

哀しげに聞こえてくる永遠のその声に、桃雪がそっと目を細める。変わらぬ自分を嘆くその姿は、桃雪の知る二十数年前から、確かに、まったく変わっていないかった。

「あなただけじゃない」

桃雪がカーテンの方を向いたまま、永遠へと声を掛ける。

「僕の姿も、変わっていないでしょう？ 神」

その言葉を聞き、寝台の上の永遠が、少し顔を俯ける。

「ねえ、桃雪…」

「はい？」

寝台の上の永遠の方は振り返らぬまま、桃雪が声だけで返事をする。

「時は流れたけど、桃雪の言葉は、あの日のまま、変わっていない…？」

永遠のその問いかけに、もう片側のカーテンを開こうとした桃雪の手が、ふと止まる。

「ええ…」

そっと頷き、桃雪が永遠の方を振り返る。

「僕の言葉は、あの日のまま……」

永遠をまっすぐに見つめ、桃雪はそっと微笑む。

「あなたが望むのであれば、僕は、“明日”などいらない」

「……………」

はつきりと告げられる桃雪の言葉に、永遠は、自身が問いかけたというのに、頷くでもなく、笑顔を見せるでもなく、何の反応も示しはしなかった。そんな無反応の永遠を見て、桃雪が満足げに笑う。
「もう間もなく、準備が整うそうです。さあ、参りましょう、我が神」

口角を吊り上げた桃雪が、永遠へと手を差し伸べる。

「世界中のすべての人間から、あなたと同じように、“明日”を消し去るために」

桃雪の言葉を受け、永遠はゆっくりとした動作で、寝台の上から、立ち上がった。

「久しぶりですね。ツバメさんと一緒に帰るのなんて」

「そうだね……」

部活を終え、マッハで制服に着替えてきた想子は、下駄箱で待っていたツバメと無事に合流し、家へと帰る道を、ツバメと並んで歩いていた。余程、ツバメとの帰り道が嬉しいのか、想子の足取りは軽く、口調もどこか弾んでいる。

「前、一緒に帰ったのはあ……あれかな、一ヶ月くらい前、部活帰りに偶然会った時の」

想子が思い出すように、高々と空を見上げる。

「でもあの日、せっかくツバメさんと帰ったっていうのに、記憶が曖昧なんですよねえ」

その日のことを思い返ししながら、想子が険しい表情となって、大きく首を捻る。

「途中から覚えてなくて、どうやって家に帰ったのかもわからないし」

想子が一つ、深く息をつく。

「取り憑かれたような変な連中に、追い駆け回される夢なんて、見たからかなあ」

「ハハハ…」

さらに首を捻る想子の横で、どこか乾いた笑い声を零すツバメ。前回、ツバメと想子が共に帰った時、二人は忌に取り憑かれた男たちに襲われ、アヒルたちに助けられたものの、大変な目に遭ったのである。そのことを、想子に話すわけにもいかず、ツバメはただ、引きつった笑顔を見せていた。

「そういえばガア、最近、何かありました？」

「え…？」

急に問われ、ツバメが笑みを止めて、少し戸惑ったような声を漏らす。

「アヒルくん…？」

「はい。何かこう、最近、色々と吹っ切れたみたいなの、そんなような感じがして」

いつも怒鳴ってばかりの幼馴染みの姿を思い出し、想子が言葉を続ける。

「まあ今も、何か背負ってそんな感じで、時々気難しそうな顔してるけど、何てゆーか、前みたいに悲観してる感じじゃなくて…」

想子が口元に手を当て、言葉を選ぶ。

「前を見てるって、感じかな」

選んだ末の言葉を、やっと落とす想子。

「そう、見える…？」

「はい」

「そう…」

頷いた想子を確認すると、ツバメがどこか安心したように、優しい笑みを零した。

「想子ちゃんが居てくれると、安心だね」

「え…？」

ツバメのその言葉に戸惑うように、想子が大きく首を傾げる。

「アヒルくんのこと、僕よりもよく、見ていてくれるから…」

「そ、そんなこと…！」

ツバメのその温かな笑顔を見て、想子は思わず俯き、頬を赤く染めた。

「こないだ幼馴染みが居てくれて、アヒルくんは幸せ者だね…」

嬉しそうに話しながら、歩を進めていくツバメに対し、俯いたまま、歩を止めてしまった想子は、前に行くツバメから少し遅れてしまう。

「だって」

「ん？」

後ろから想子の声が聞こえ、少し前へと行ったところで止まり、ツバメが立ち止まったままの想子を振り返る。だが想子は俯いたまま、顔を上げようとはしなかった。

「想子、ちゃん…？」

「だって、ガアが悲しんでいると、ツバメさんも悲しいでしょう…？」

首を傾げたツバメへ、想子がゆっくりとした口調で、言葉を向ける。

「ガアが笑っていると、ツバメさんは喜ぶでしょう…？」

「想子ちゃん…」

「ツバメさん」

呼びかけようとするツバメの声を遮り、逆にツバメの名を呼んで、想子が勢いよく顔を上げる。その表情は真剣で、瞳には、何かを決意しているような、力があつた。

「想子ちゃん…」

想子のいつものとは違う、その様子に気付き、ツバメもつられるように、真剣な表情を作る。

「ツバメさん、私…」

ツバメがまっすぐに見つめる中、想子はゆっくりと、その口を開いた。

「グアア！」

「素晴らしい」

居城の屋上に設けられた広い空間に移された、巨大な金色の獣は、後方に見える空すらも狭そうに、その両翼を広げていた。漲る力の表れであるように、巨体からは、溢れんばかりの光が漏れ出ている。そんな獣を見上げ、現が心から嬉しそうに、笑みを零す。

「この一瞬のうちに、終獣に、これ程の力を充填出来るとはのお」
感心するように言いながら、現が後方を振り向く。

「……………」

現が見つめる先では、屋上の柵のすぐ手前に立ち、広がる言ノ葉の景色を眺める、永遠の姿があった。

「どうですか？ ご不満ですかあ？」

「いいや、十分じゃ」

すぐ傍で、試すように問いかける桃雪に、すぐさま首を横に振る現。

「まさか、これ程までとは思わなかったよ。お前さんの神の力」

「当然です」

「これだけの力が充填出来ていれば、世界中まではいかずとも、この国のすべての言葉を終わらせることは、いつでも可能なはずじゃ」
光の満ち溢れる獣をじっくりと見つめ、現が冷静に分析を行う。

「で、どうする？」

「神」

現に問われた桃雪が、その問いかけをそのまま向けるように、永遠の方を振り向く。

「あちら側を焦らせるためにも、まずは、小手調べ程度がよろしいかと」

「ああ…」

吹き抜ける風にその髪を揺らしながら、永遠が、桃雪の言葉に頷く。

「“終わらせろ”」

永遠の短い言葉が、吹き抜ける風に乗る。

「この町の、“明日”を」

「……仰せのままに」

永遠の命令に頷き、桃雪が冷たく微笑む。

「現」

「ああ」

桃雪がさらに現へと呼びかけ、現が大きく頷く。

「発動じゃ…」

右手に持っていた杖を、目の前の獣へと向けて、高々と掲げる。

杖の先端についた金色の言玉が、強く輝き始めた。

「“唸れ”！」
うな

「グアアアアア……!!」

現の言葉と共に、獣が上空へ向けて、激しい唸り声をあげ、その巨大な口から、強い金光を放った。

「私…」

ツバメが見つめる中、長い間を置いて、想子がやっこのことで口を開く。

「私、ツバメさんのことが…！」

抱える気持ちを溢れ出させるように、必死に声を張る想子。

「好…！」

———パアアアン！

「え…？」

その時、空が金色に輝いたような気がして、ツバメは思わず、想子から視線を逸らした。

「あれ…？」

だが、上を見上げて、空はいつものように青く、穏やかで、自分が感じた気配は気のせいだったのかと、ツバメが少し首を傾げ、そしてまた、視線を想子へと戻す。

「ごめん。想子ちゃ…」

謝ろうとしたツバメの言葉が、途中で途切れ、ツバメの表情が止まる。

「想子、ちゃん…？」

「……………」

想子はまっすぐにツバメを見つめ、口を開いたまま、完全に、その動きを止めていた。

「想子、ちゃん…」

ツバメの力ない声が、ただ、静かなその場に、響き渡った。

「それで昨日、パッツンがよお」

「いや、ブラシだろ」

「つーか、この前、パンチのオカンがさあ」

学校帰りの派手な頭の学生たちが、皆、自分の話を主体として、思い思いに好きなことを話している。アヒルたちの通う言ノ葉高校の隣の生徒で、アニキこと守の、子分のものたちであった。だが、その騒がしいほどの会話が、突然、止まる。

「んあ？」

一人、子分たちの前を歩いていた守が、後方から聞こえてくるたくさんの声が、一気になくなったことに気付き、進めていたその足を止める。

「急に黙って、どうした？」

リーゼント頭を風に揺らしながら、守がゆっくりと後方を振り返る。

「お前、等…？」

振り返った守の表情が、一気に曇る。

『……………』

子分たちは皆、いかにも会話の途中だった様子で、大きく口を開いたまま、凍りついてしまったかのように、その場で止まってしまっていた。

「お前、等…」

止まってしまった皆の姿に、守の表情は、厳しいものへと変わった。

言ノ葉高校、国語資料室。

「ん…？」

机に向かい、生徒から届けられた日誌を見ていた恵が、何かに気付いた様子で、パッと顔を上げる。

「妙に静かだな…」

戸惑うように呟いた恵が、その表情を曇らせ、席を立ち、資料室の窓際へと歩いていく。放課後であっても、学校という場所は、常に騒がしいもの。だが今は、小さな物音一つしない。あまりの静けさに、恵は、胸騒ぎにも似た違和感を覚えた。

「一体…」

恵が窓を開き、そこから身を乗り出すようにして、外を見る。

「な…!？」

見た途端、恵が大きく目を見開く。

「こ、これは…」

『……………』

恵の視界に飛び込んできたのは、日常のその風景のまま、完全に動きを止めた、生徒たちの姿であった。

「言葉が…」

止まった皆を見つめ、恵が険しい表情で、そっと声を落とす。

「言ノ葉の言葉が、終わった…」

窓枠に置かれた恵の右手が、力なく宙へと下ろされた。

「これは…」

雅の父、充の墓参りを終え、共に言ノ葉霊園を出た為介と雅が目の当たりにしたのは、行き交うはずの町の人々が、道の途中で不自然に動きを止め、完全に固まってしまっている、異様な光景であった。その光景を見つめ、雅が厳しい表情を見せる。

「為介、さん…」

雅がどこか助けを求めるように呼びかける中、為介もまた、険しい表情を作る。

「また、人々から“明日”を、奪い取るというの…?」

届かぬ問いかけを口にし、為介が高々と空を見上げる。

「遠久サン…」

為介の哀しげな声が、吹き抜ける風に乗った。

同刻、韻本部。

「茜さま！」

アヒルや皆の居るその部屋へと、扉を突き破りそうな勢いで駆け込んできたのは、韻の従者と同じ格好をした男であった。恐らくは、謡の者だろう。和音により、アヒルたちが地下収容施設に閉じ込められた時、助けてくれた従者の中に、居た顔である。

「どうしました？」

笑顔を見せていた茜が、従者の慌てたその様子を不審に思い、一気に表情を曇らせ、問いかける。駆け込んできた従者は、必死に呼吸を整え、厳しい表情で、顔を上げた。

「先程、言ノ葉町上空で、正体不明の巨大な金色の光を観測！」

「え…？」

従者の報告に、茜をはじめ、ウズラやアヒルの表情も険しくなる。

「その後、言ノ葉町、町民たちの言葉に異変有りと、待機中の従者から、次々と報告が上がってきております！」

「異変…？」

従者の言葉を繰り返し、茜が少し戸惑ったような声を漏らす。

「まさか、“无”^んの文字が…」

すぐ隣の箆也の言葉に、アヒルがさらに険しい表情を作る。

「すぐに、言ノ葉へ…！」

「待って、アークくん」

生まれ育った町の危機を感じ、部屋を飛び出して行こうとしたアヒルを、鋭く呼び止めたのは、ウズラであった。ウズラは真剣な表情を見せ、歩を進めて、アヒルの方へとやって来る。

「け、けど親父…！」

「状況を把握せずに動くのは、命取りだよ」

抗議しようと身を乗り出すアヒルに、ウズラが諭すように声を掛ける。

「“う”の言玉を貸してくれる？」

「へ？あ、ああ」

ウズラに言われ、アヒルが少し戸惑いながらも、制服のポケットから金色の言玉を取り出して、ウズラへと手渡す。アヒルから言玉を受け取ると、ウズラはそれを、強く握り締めた。

「第三音“う”、解放」

ウズラの手の中で、強く輝き始める言玉。光る言玉を、ウズラが大きな何もない壁へと向ける。

“映し出せ”」

言葉を放ったウズラの手の中の言玉から、金色の強い光線が放たれ、壁へと突き刺さると、光が壁全面に広がり、そしてすぐに、壁に映像が映し出された。

「これは、言ノ葉…？」

何分割かされた壁の映像は、皆、言ノ葉町の景色を映し出している。学校や商店街、今日は閉まっている『あさひな』の店の前など、どれも、アヒルたちがよく知る景色だ。

「あ、ツー兄…想子…！」

その映像の中に、兄の姿を見つけたアヒルであったが、そのすぐ傍で固まったまま、まったく動いていない想子の姿を見つけ、大きく目を見開く。

「お父さん、お母さん！」

「学校の皆や…」

「リーゼントくんの子分たちも…」

動きの止まった両親の姿を見つけ、思わず身を乗り出す七架の横で、保と囁がそれぞれ、険しい表情を見せる。

「町の住民、全員の言葉が、“无”の文字により、終わらされてし

まったのか…」

「ク…!」

冷静に分析する箆也の横で、アヒルが悔しげに唇を噛み締める。

「もう、浮世現^{うきよ}の獣は、完成しているということだね」

「ええ…そして、この状況になった今、急がなければ…」

「え？」

ウズラの言葉に答えながら、どこか焦ったように言う茜に気付き、アヒルが振り返る。

「どういうことだ？」

問いかけるアヒルに、茜が少し躊躇うように俯いてから、その表情を厳しくする。

「言葉を停止させられた人間が、停止状態のまま、生きていられる時間は、もっておよそ二日です」

「な…!?!」

茜が告げる真実に、皆の顔色が一気に変わる。

「それ以上の時間が過ぎれば、活動を停止した体は衰弱し、死に至る…」

「そ、そんな…!」

茜の言葉を聞き、七架が思わず、取り乱した様子で声をあげる。

実際に両親や親友が言葉を止められており、このままであれば、二日で死んでしまうと聞かされれば、当然であろう。

「早く…! 早く何とかしねえと、皆が…!」

「ええ、わかっています」

同じように、少し取り乱した様子で訴えるアヒルに、茜が努めて冷静に言葉を返す。

「各地五十音士に通達。すぐに集められるだけの五十音士を全員、この場に集めて下さい」

「は…!」

茜の指示を受け、報告に來た従者が、すぐさま部屋の外へと駆け出していく。

「母さん…」

「五十音士が揃い次第、作戦会議を行います。そして皆が見つめる中、茜が一層、鋭い表情を見せる。」

「明朝、すべての人々の言葉を守るため、我々は、最終決戦に臨みます！」

『……っ』

凜と響き渡るその声に、アヒルたち皆が、その表情に緊張感を走らせた。

「神」

屋上の端に立ち、広がる景色を眺めていた永遠へと、桃雪が声を掛ける。

「この町の人間たちの言葉は、五十音士である者の言葉を除いて、すべて、停止いたしました」

どこか不敵な笑みを浮かべ、報告するように、桃雪が言葉が続ける。

「これから、三十分ごとに一つずつ、隣接する町から順に、言葉を停止させていきます」

「うん…」

桃雪の策に文句を付ける様子はなく、永遠はただ、遠くを見つめ、素直に頷く。

「頼んだよ、桃雪…」

「はい」

永遠の言葉に、桃雪は深々と頭を下げた。

「さあ、皆で一緒に行こう…」

誰かを誘うような言葉を落として、永遠が、どこまでも青い空へと、真っ白な手を伸ばす。

「“明日”のない世界へ…」

そう呟くと、永遠はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

Word. 73 決戦へ (1)

「想子、ちゃん…」

何かを覚悟したような、必死な表情で、大きく口を開いた状態のまま、言葉を止め、まったく動かなくなってしまった想子の名を、向かいに立ったツバメが、そつと呼ぶ。ツバメが止まった想子の、その頬に触れるが、想子の表情は動かず、そこから先の言葉も、想子の口から落ちることはなかった。そんな想子を見つめ、ツバメが強く、唇を噛み締める。

「ごめんね…」

力なく落とされる、ツバメの声。

「君の言葉を、守ってあげられなくて…」

悲しげなツバメの言葉が、想子に届くことはなかった。

韻本部。

「ウズラ！^{あかね}茜！」

「恵ちゃん」

「先生！」

慌てた様子で、アヒルやウズラたちの居る会議室へと乗り込んで来たのは、恵であった。額には、汗が滲んでいる。ウズラの横から入って来た恵へと、身を乗り出すアヒル。

「先生！皆の、町の皆の言葉が…！」

「ああ、わかってる」

必死に訴えかけようとするアヒルの言葉を途中で遮り、恵が落ちていた声で頷く。大股で部屋の中へと入って来た恵が、ウズラの言葉により、壁に映し出された言ノ葉町の様子を見て、鋭く目を細める。

「動いてきたな。遠久…いや」

一度、弟の名を口にして、恵がすぐに首を横に振る。

「“遠の神”永遠が」

「うん」

恵の言葉に、ウズラも真剣な表情を見せ、頷く。

「まず手始めに、言ノ葉町の人たちの言葉を止めたってところだろうね。俺たちを、焦らせるために」

「では、今後他の町の人間の言葉も？」

「うん…」

籠也が険しい表情で問いかけると、ウズラもさらに眉をひそめ、深く頷いた。

「だが、町中に奴等の姿は見当たらなかった。一体、どこから…」

「北東の町はずれを見て下さいい」

「為介」

相変わらずの緊張感のない声と共に、部屋に雅を連れた為介がやって来る。

「北東って…？」

為介の言葉を受け、映し出されている言ノ葉の景色の中から、北東部の映し出されているものを探すアヒルたち。

「一番左上の映像だよお」

「左上…あっ！」

為介に誘導され、左上の映像を見たアヒルが、大きく目を見開く。そこに映し出されていたのは、田園地帯の広がる、辺鄙な町はずれには、不釣り合いの巨大な白城。そして、その屋上で輝かんばかりの光を纏う、巨大な金色の獣であった。その大きな両翼を、空に広々と翻している。

「あれは、礼獣！？」

「“礼獣”という名かは、わからないけどねえ。でも、浮世現が生み出した生物ってみて、間違いないだろうねえ」

「浮世現…」

一度戦った、忌を生み出した根源である男の姿を思い出し、保が珍しく、その表情を歪める。

「あれが、町中に“无”の文字の力を、撒き散らしたのか」

「えええ。そして、この町の人間の言葉が止まった」

恵の言葉に頷きながら、映像の中の金獣を見つめ、為介が目を細める。

「あの溢れんばかりの光を見る限り、力の充填はバッチリってところでしょう。いつ、次の町の言葉が止められてもおかしくない」

「け、けど」

為介の説明を聞いていた七架が、思わず声を発する。

「いくら何でも、早くないですか？ 礼獣の時は、堕神からの力を集めるのに、凄く時間かかったのに」

「集める必要がないからだよ」

「え？」

為介に代わって答えるウズラに、七架が戸惑うように首を傾げる。

「たった一人の力で、すぐに充填が終えられるほどに、強いんだ。

永遠の力は」

「そんな…」

「堕神五人の力よりも、さらに強力ということか…」

伝えられる衝撃的な事実にも、言葉を失ってしまう七架。冷静に分析をしながらも、籠也も険しい表情を見せている。同じようにウズラの言葉を聞き、七架の横でアヒルが厳しい表情で俯く。

「とにかく時間がない。茜、他の音士たちへの連絡は？」

「今、行っているところです」

「そうか。じゃあ、すぐに話し合いを行う。会議室の準備をしてくれ」

「わかりました」

恵の指示に頷くと、茜は傍仕えの従者を連れ、足早に部屋を後にした。

「ふう」

茜が出ていき、閉じた扉を見た後、映し出されている町の映像へと視線を移し、恵は険しい表情を見せ、深々と肩を落とす。

「言葉が止まるのって…」

「ん？」

茜が出ていき、静まり返った部屋に、囁の小さな声が響くと、恵はすぐに囁の方を振り向いた。

「言葉が止まるのって、こんな絶望的な光景なのね…」

囁は壁に映し出された言ノ葉町の映像を、まっすぐに見つめながら、そう言葉を落とした。映し出されている、皆のよく知る町は、人々がすべて動きを止め、一切の物音もせず、不気味なほどに静まり返っていた。行き交う言葉がないだけで、そこにある生気まで、失われてしまったようである。

「話す声も笑い声も、一切しない」

静かな町を見つめ、囁がそっと目を細める。

「これが、“世界の終わり”というものののかしら…」

『……っ』

囁の言葉を受け、箆也たちは、その絶望的な光景から思わず目を逸らし、深く俯いてしまう。

「落ち込んでる場合か？」

俯いた皆へ、発破をかけるように、強めの口調で言葉を投げかける恵。

「こっからが勝負だろうが。スタート地点で、下向いててどうする？」

恵がさらに言葉を投げかけるが、俯いた箆也たちは、多少表情を動かすものの、俯けたその顔を上げようとはしなかった。そんな皆の様子を見て、恵が少し困ったように肩を落とす。

「俺は」

その時、恵とは別の、アヒルの声が部屋へと響いた。

「俺は、こんな世界は嫌だ」

映し出された町の光景をまっすぐに見つめたアヒルが、ゆっくり

と噛み締めるように言葉を放つ。

「こんな、“おはよう”も“ありがとう”も、“いつてらっしゃい”も“ただいま”もない世界は、嫌だ」

「神…」

アヒルの声に顔を上げた仲間たちが、アヒルを見つめ、そつと目を細める。

「そうだね」

アヒルの背後からアヒルに歩み寄り、ポンとアヒルの肩に手を置いたウズラが、大きく頷き、その表情に、柔らかな笑みを浮かべる。

「俺も、“おかえり”のない世界は困るなあ」

「親父…」

微笑みかけるウズラの、その優しい笑顔を見上げ、アヒルもそつと、笑みを零す。

「私も、“遅刻だ”のない世界は困る」

「まあ言われたら、俺が困っけどな」

穏やかな笑みを浮かべ、言い放つ恵に対して、その笑みを困ったように変えるアヒル。

「ボクも“雅クーン”の言葉がないと、色々と雑用押し付けられなくて困るなあ」

「“最低な人間ですね”の言葉がないと困りますよ、本当」

ふざけた口調で言う為介に、眼鏡を押し上げながら、雅が冷たく言い放つ。一人ずつ、笑みを零すことで、今までの張り詰めていた空気が一気に和らぎ、部屋の雰囲気が一変する。その空気を察してか、暗い表情を見せていた安附の四人も、そつと笑みを零した。

「そうね…“さあ、召し上がれ”の言葉がないと、私がアヒるんに愛の手料理を食べてもらえないし…」

「俺も“すみません”がないと、生きていけないです！はあ！こんな俺が、しゃしゃり出ちゃって、すみませえくん！」

「私もまた、想子ちゃんに“おはよう”って言いたい！お父さんとお母さんに“ただいま”って言いたい！」

口々に言葉を発し、笑顔を振り戻していく囁、保、七架。三人を見て、安心したように微笑んだアヒルが、もう一人、まだ笑顔を見せていない自身の神付きへと、視線を移す。

「籠也」

アヒルからの呼びかけを受け、俯いていた籠也が、ゆっくりと顔を上げる。

「僕が“神”と呼ばねば、誰もあなたが神だと気付かないだろう？」

「そりゃ、そうだ」

そつと微笑み、問いかける籠也に、アヒルが大きく笑みを零す。

「皆で戦おう。そして、取り戻そう」

両拳を力強く握り締めたアヒルが、笑顔となった皆と一人ひとり、見回していく。

「言葉の明日を！」

『ああ！』

アヒルの言葉に、皆が頷き、大きく返事をした。

言ノ葉町、北東部。永遠たち居城。

「あなたがたには、それぞれ、五十音“と”と“の”の文字を“齋^{もたら}し”ました」

“終獣”が居なくなり、一気に殺風景になった一階の広間の中央に立ち、言葉を放つ桃雪。その桃雪の前には、片膝を床へと付け、深々と頭を下けている女性二人の姿があった。頭を下けているため、表情は見えないが、二人はそれぞれ、赤いショートカットと、青い長髪で、服も髪色に似た色を着ている。

「この文字の力を使い、我が神の為に、存分に戦って下さい。いいですね？」

少し首を傾けた桃雪が、二人へと冷たい笑みを向ける。

「十稀^{しき}、埜^の埜^あ」

『はい、桃雪様』

名を呼ばれ、二人がやっと顔を上げる。十稀と呼ばれた赤毛の女性も、埜亜と呼ばれた青髪の女性もどちらも、まだその顔にあどけなさを残した、十六、七歳ほどの少女であった。二人は曇りのない、まっすぐな眼差しを、桃雪へと向ける。

「すべては我が神」

「永遠様の為に」

十稀と埜亜の言葉を聞き、桃雪が満足げに頷く。

「期待していますよ」

『はい』

そう言葉を投げかけて、桃雪が二人の横を通り過ぎ、部屋の出口へと歩いていく。体の向きを変え、桃雪の背を見送りながら、二人はまた深々と、頭を下げた。十稀と埜亜に見送られ、桃雪がゆっくりと広間を出る。すると、出口を出てすぐのところに、眉をひそめた現が立っていた。

「何か用ですか？」

「あの者たちは？」

笑顔のまま問う桃雪に、現が細めた鋭い視線を送る。

「ああ。彼女たちは、韻で育てていた、五十音士候補生ですよ」

軽く腕を組んだ桃雪が、躊躇うこともなく、すらすらと答える。

「候補生の中でも、特に優秀だったんでね。僕が韻が出る前に、引き抜いて来たんです」

桃雪の笑みが、得意げなものへと変わる。

「空席の文字があれば、もっと人数を増やすことも出来たんですがねえ。生憎、今は空席が二文字しかなくて」

「随分と根回しのいいことじゃのお」

感心したように言う現であったが、その表情は訝しげで、桃雪に感心しているようには見えなかった。

「五十音士共の力を恐れてでもおるのか？何よりも自身の神を崇める、お前さんらしくない」

「まさか」

その現の言葉を、桃雪が鼻で笑い、一蹴する。

「五十音士の力を恐れる気持ちなど、微塵ありませんよ。我が神の前では、彼等の力など無に等しい」

「ならば」

「ですがね」

すぐさま言葉を返そうとした現の声を遮り、桃雪が付け加えるように言う。

「僕は、我が神の御手を煩わせたくはないのですよ、現」

桃雪の瞳が、さらに鋭く細められる。

「こんなくだらない戦いごときの為にね」

世界中の人々の命すらかかっている戦いを、くだらないと言い切る桃雪を見つめ、現がかすかに、表情を曇らせる。

「今、我が神は再び、眠りにつかれました」

桃雪が、永遠の眠る部屋を見るように、そっと視線を上げる。

「ですが、五十音士にわらわらと来られては、その貴重な眠りが妨げられてしまう」

上方へと向けられていた桃雪の視線が、また、現へと戻って来る。
「十稀と埜亜は用意しましたが、もう少し、駒が欲しいところなんですよねえ」

含んだ笑みを浮かべ、まっすぐに現を見つめる桃雪。そんな桃雪の視線を受け、何を言わんとしているのか、すべてを理解した様子で、現が困ったように肩を落とす。

「まったく、食えん男じゃ」

現がどこか呆れたように、言葉を吐き捨てる。

「お前さんにとっては、わしも駒の一つというわけか」

「ええ。そして僕も、駒の一つ」

頷いた桃雪が、穏やかな笑みを浮かべ、遠くを見るような瞳を見せる。

「我が神の望みを叶えるため、死に物狂いで動く駒」

「……………」

そんな桃雪を見つめ、現が何やら考え込むようにそつと俯き、そしてまた、すぐに顔を上げる。

「良からう。お前さんの望み通り、数えきれんほどの駒を生み出してやる」

現が口元を歪め、何やら楽しげに笑う。

「わしの、とっておきの“四字熟語”ラスト・イデオムでなあ」

現の言葉を受け、桃雪もまた、楽しげに笑った。

Word. 73 決戦へ (2)

その後、韻本部で、最終決戦へ向けての作戦会議を終えたアヒルたちは、戦いの準備を茜たち韻の者に頼み、明日に備え、夜が更ける前に、早めに、それぞれの家へと戻った。

午後九時。言ノ葉町、奈々瀬家。

「お母さん…」

台所に立ったまま、言葉を止められ、一切の動きを停止してしまった母の姿を、横から見上げ、六騎^{むつき}が何とも悲しげな表情を見せる。何度呼びかけても、母がこちらを振り向くことはない。母の優しい声を聞くことは、出来ないのである。

「六騎、明日早いから、そろそろ…六騎？」

そこへ、湯上がりのパジャマ姿の七架が、タオルで濡れた長い髪の毛を拭く動作を見せながら、やって来る。母を見上げている六騎の姿を見つけ、七架が首を傾げる。

「あっ」

やって来た姉に気づき、慌てて母から視線を流す六騎。

「う、うん。明日、早いんだもんね。もう寝るよ」

無理に作った笑みで頷き、六騎が台所の出口のある、七架の方へと近付いていく。そんな六騎を見つめ、七架はそっと眉をひそめた。

「六騎」

呼びかける七架に、六騎が台所の出口の間際で、足を止める。

「大丈夫、だよね…？」

床を見下ろしたまま、六騎が不安げな声を、七架へと向ける。

「お母さんの言葉、戻って来るよね？」

ゆっくりと顔を上げた六騎が、どこか縋るような視線を、まっすぐに七架へと向ける。そんな六騎の表情に、七架は一瞬、険しい顔

を見せた後、すぐに優しく微笑んだ。

「うん」

微笑んだ七架が、大きく頷く。

「取り戻そう、一緒に」

七架の言葉を受け、六騎がそっと笑みを浮かべる。

「うん」

その決意に応えるように、六騎も大きく頷く。

「今日は一緒に寝よっか？」

「うん！」

肩を寄せ合い、二人は、寝室のある二階へと、上がっていった。

午後十時。とある町、高市家、墓前。

「父さん、母さん」

皆と別れた保は、そのまま、まっすぐに家には戻らず、両親の眠る墓を訪れていた。墓の前でしゃがみ込んだ保が、深く目を閉じ、その前で両手を合わせて、父と母へ、言葉を掛ける。

「俺、頑張って、守ってくるよ」

保が閉じていた瞳を、ゆっくりと開いていく。

「父さんと母さんが、守ってきた“言葉”を」

目を開いた保の表情には、笑みが浮かんでいた。その保の言葉は、かつて五十音士として言葉を守っていた父と母への、誓いの言葉のようにも思えた。

「うん、そうだね。そろそろ、帰ろうか」

墓前から立ち上がった保が、その場に一人しか居ないのに、まるで誰かがすぐ傍に居るように、言葉を発する。

「明日、か」

星の瞬く空を見上げ、保はそっと、その表情を引き締めた。

午後十一時。朝比奈家二階、長男カモメの部屋。

「……………」

自宅へと戻り、晩御飯を食べ、風呂に入ったアヒルは、湯上がりの寝巻姿のまま、自室ではなく、兄カモメの部屋を訪れていた。勉強机の前にある椅子に腰かけ、アヒルが、机の上に飾られた、カモメが生きていた頃の家族写真を見つめる。

「カー兄…」

写真を見つめたまま、アヒルが、まるでそこに居るかのように、カモメへと呼びかける。

「報告？」

後方から聞こえてくる声に、アヒルが椅子に座ったまま、首だけを動かし、振り返る。カモメの部屋の入口付近にたち、アヒルへと笑顔を向けているのは、父ウズラであった。

「それとも、眠れない？」

ウズラのその問いに、アヒルは目を細め、俯いただけで、言葉を返すことはしなかった。

「明日はきつと大変な日になるから、ちょっとくらい眠れなくても、頑張って寝ないとダメだよ？」

「うん、わかってる」

どこか心配するように言うウズラに、アヒルが笑顔を見せて頷く。

「けど、ちょっと…」

少し言葉を濁したアヒルが、再び振り向き、机の上にある家族写真を見つめる。

「カーくんに相談？」

「うーん、相談っつーよりは、泣き言？」

背中に届く父の問いに答えながら、自嘲するような笑みを浮かべるアヒル。

「……俺、怖いんだ」

少し間を置いたアヒルが、ポツリと言葉を落とす。そのアヒルの言葉を聞き、部屋の中へと入り、扉を閉めたウズラが、少し眉を動かす。

「怖い…?」

「うん」

そっと聞き返したウズラに、アヒルが包み隠さず、素直に頷く。

「この町の、世界中の人たちの言葉が終わってしまうのが、怖いけど」

アヒルが目を細め、机に置いた両手を握り締める。

「今、手にしてる、この文字の力を、言葉の力を失ってしまうことも、同じくらい、すっげえ怖い」

握り締められたアヒルの両拳に、さらに力が入る。

「情けねえーよな。恵先生には、“全部背負う”って言ったし、皆の前では、“絶対取り戻そう”とか、偉そうなことばっか、言ったのにさ」

回転する椅子を回し、ウズラの方を振り返ったアヒルが、困ったように、大きく笑う。笑った後、アヒルはそのまま視線を落とす。

「けど、俺にとっては、やっと手にすることの出来た力っていうかさ」

アヒルの表情から、徐々にその笑顔が消えていく。

「カー兄のことがあって、言葉を、“傷つけるもの”としてしか捉えられなかった俺を、俺の中の“言葉”を変えてくれたのが、“あの力だった”

握り締めていた両手を開き、少し上へと挙げたアヒルが、どこか懐かしむように、自身の両手を見つめる。

「“あの”の力を得て、神として仲間と戦ってきて、それでやっと俺は、“言葉”ってものの可能性を、信じる事が出来るようになった」

言葉を続けるアヒルを、ウズラは何も言わずに、ただまっすぐに見つめる。

「だから、怖い」

もう一度、その言葉を口にし、また小さく笑みを零すアヒル。

「例え言葉を守れたとしても、俺の中のこの文字が消えた時、俺は今と同じように、言葉を大切に思うことが出来るのになって…」

笑みを浮かべたアヒルの表情が、少し不安げに揺れる。

「言葉を大切に思えなくなることが、俺はすっげえ怖い」

「……そう」

アヒルの心からの言葉を、受け止めるように頷いて、部屋の中へと歩を進めたウズラが、きれいに整頓されたカモメの寝台の上に、ゆっくりと腰を掛ける。

「ホント、情けねえよな!」

先程よりも明るめに、虚勢を張るように、声をあげるアヒル。

「言葉の神のくせに、言葉を大切に思っていられる自信がねえなんてよ! ハハハ!」

無理に大きく笑うアヒルを見つめ、ウズラが穏やかに微笑む。

「いつだったか、明^{アケル}が言ってたな」

「へ?」

ウズラの言葉に、アヒルが笑みを止め、戸惑うように首を傾げる。

「明って、旧世代の“安の神”?」

「うん。アーくんの伯父さん」

問いかけたアヒルに、ウズラが笑顔を向けて頷く。

「明がね、昔、言ってたんだ」

ウズラが懐かしむように、どこか遠くを見るような瞳を見せて、

天井を見上げる。

「神とは、誰よりも“恐れ”を知る者だって」

「恐れを?」

「うん」

戸惑った表情で聞き返したアヒルに、ウズラは天井を見上げたまま、頷く。

「“神様”って、昔話とか神話とか、出てくる物語がたくさんある

でしょう？」

天井から視線を下ろし、ウズラが再び、アヒルを見る。

「そのたくさんの物語の中で、“神様”はだいたい、洪水や大火事、色んなものから、人々を救ってる」

視線を床へと下げ、穏やかに微笑むウズラ。

「じゃあ何故、“神様”は、そんなことが出来るんだろう？」

「何故って」

父からの問いかけに、考えを巡らせるように、視線を動かし、アヒルが首を捻る。

「皆を救えるだけの力を、神様が持ってるから？」

「うん。俺もね、そう思って言ったんだ。けど、明は“違う”って言った」

床を見下ろしたまま、ウズラが懐かしむように目を細める。

「神様が、知ってるからだって」

短く言葉を落とし、ウズラが笑う。

「その出来事の後、どんなことが起こってしまうかを知ってるから、その先に待つ“恐怖”を知ってるから」

アヒルはまっすぐにウズラを見つめ、続く言葉に耳を傾ける。

「誰よりも“恐れる”から、だから救う。救おうと立ち上がる。それが、“神様”なんだって」

「誰よりも、恐れを、知る」

ウズラの言葉を噛み締めるように、ゆっくりと繰り返すアヒル。

「神様っていうのは、人々を救える力を持っている者のことを言うんじゃない」

床へと向けていた視線を、ウズラが徐々に上げていく。

「“恐れ”を知って、なお、人々を救おうと、立ち上がれる者のことを言うんだ」

上がったウズラの視線が、まっすぐにアヒルを見つめる。

「って、明の言葉」

アヒルを見たウズラが、より一層、大きく笑う。

「その言葉を聞いた時、俺も思った。“ああ、それが神だなあ”って」

「神…」

いつも自分が呼ばれているその名を繰り返し、アヒルがそっと、目を細める。

「だから、怖いのは、何にも恥ずべきことじゃないよ」

アヒルをまっすぐに見つめ、ウズラが語りかけるように、諭すように、声を掛ける。その優しい声につられるように、俯いていたアヒルが、ゆっくりと顔を上げていく。

「アーくんが今、“怖い”のは、アーくんがそれだけ、“言葉”を大切に思ってるってことだから」

優しく微笑みかけるウズラを見つめ、アヒルが少し、眉間に皺を寄せる。

「大丈夫」

大きく口を開き、はっきりと言い切るウズラ。

「アーくんは言葉を、大切に思わなくなったたりなんかしない。誰よりも長く、アーくんを見てきた俺が、保証する」

「親父…」

その言葉の一つひとつが、アヒルに勇気を与えていくようであった。

「ちょっと、信用ないかも知れないけどね」

「確かにな」

「ああ！ あっさり認めるなんて、ひどいよおーアーくうーん！」

大きく頷いたアヒルを見て、嘆くウズラは、すっかり、いつもの情けない父であった。だが、そんないつもの父の姿を見て、アヒルは呆れるのではなく、どこか安心したように笑う。

「親父」

「ん…？」

アヒルが改めて呼びかけると、ウズラが首を傾げ、アヒルを見る。
「ありがとう」

穏やかに微笑み、素直に礼を発するアヒルを見て、ウズラが少し驚いたように目を丸くした後、すぐに、何とも嬉しそうな笑みを零す。

「アーくうくん！」

「だあああ！抱きつくな、うぜえええ！」

勢いよくアヒルのもとへと飛び込んでいくウズラに、大きなアヒルの怒鳴り声が響き渡った。

「まったく、うつせえな」

二階から響く、大きな父と弟の声を耳に入れ、台所から居間へと出てきたスズメが、天井を見上げながら、困ったように顔をしかめる。

「近所迷惑になんだろうが。まったく」

「まあいいんじゃない…？」

居間のテーブルのすぐ傍に腰を下ろし、茶をすすっているツバメが、落ち着いた様子で呟く。

「しみりしてるよりは…」

「……っ」

いつものように不気味に低い声を落としながら、いつも以上に暗い、ツバメのその表情に気付き、視線を下ろしたスズメが、少し眉をひそめる。

「大丈夫か？」

気遣うようなスズメの問いかけに、ツバメがそっと目を細める。ツバメの脳裏に刻みついて、離れないのは、言葉の止まってしまった想子の姿であった。

「何が…？」

何事もなかったかのように、冷静に聞き返すツバメを見て、スズメが少し肩を落とす。

「何でもねえ」

それ以上、問いかけることはせずに、スズメがテーブルの傍へと寄り、ツバメと向き合うようにして、床へと腰を下ろす。会話が止まり、静かになった居間の中で、二人の視線は自然と、仏壇に飾られた、兄カモメの写真へと流れていった。

「絶対、勝とうな」

「うん…」

まるでカモメに誓いを立てるように、二人は短く、言葉を交わした。

午前零時。言ノ葉町、箆也、囃の家。

「ふう」

電気も点けず、薄暗い状態のまま、冷蔵庫から取り出したペットボトルの水を、一口、口に含んで、箆也が大きく息を吐く。夜も更け、言ノ葉町の言葉が止まってしまった影響もあってか、外からの音もなく、部屋はとても静かであった。

「眠れないのかしら？」

「え？」

背中に届いた声に、箆也が振り返る。すると、リビングの扉が開かれ、そこから囃が姿を見せた。

「いや、ただ喉が渴いただけだ。すぐに眠る」

「そう」

箆也の答えに頷きながら、開けた扉を閉じ、リビングへと入って来た囃は、リビングにある大窓の方へと歩を進めた。カーテンを開くと、よく見える大きな月の光が、薄暗い部屋の中へと差し込んでくる。

「あの日もこんな、月のよく見える夜だったわねえ…」

「あの日？」

「アヒるんが、“あ”の文字に目醒めた日」

箆也の問いに答えながら、囁が部屋の方を振り返り、台所の奥に立っている箆也へと視線を送る。

「私たちが、アヒるんを見つけた日」

囁の言葉に、その日を思い出すように、箆也が目を細め、そっと俯く。

「何だか、信じられないわ…」

箆也が俯いたことを確認し、囁が再び、窓の外のを眺める。

「あの日見つけたアヒるんが、すべての言葉を守るために、五十音すべての文字を背負って、戦おうとしているなんて」

月を見上げ、懐かしむように微笑む囁。だがその笑みは、単純に懐かしんでいるものではなく、厳しく、不安げで、どこか複雑に見えた。

「あの日から、そう時間も経っていないのにね…」

「ああ」

しみじみと話す囁に、箆也が賛同するように頷きを返す。

—— 勿論、行くさ。我が神を迎えにな——

—— 誰だ？ お前ら——

「……そうだな」

初めてアヒルと出会った頃のことを思い出し、箆也が小さく言葉を落とす。まだほんの数ヶ月前の出来事であるというのに、その間に色々とあったからか、随分と昔のことのように思えた。

「あの頃、自分が神であることすら知らなかったアヒるんが、今は、世界中の皆の明日を背負う、たった一人の神様ですものね」

さらに言葉が続け、穏やかな笑みを見せる囁。

「本当、不思議」

「ああ、そうだな」

背を向けたままではあるが、何となく囁が笑っていることを感じたのか、箆也もつられるようにして、穏やかな笑みを浮かべた。

「さつき、あなた、アヒるんに言ったでしょう？」

「え？」

問いかけながら振り返る囁に、箆也が俯けていた顔を上げる。

「僕が神と呼ばねば、誰もあなたが神だと気付かない”って」

「ああ」

韻本部で口にした自身の言葉を思い出し、小さく頷く箆也。

「あの言葉、私、その通りなんじゃないかって、思ったの…」

「その通り？」

「あなたは、“か”の文字を持つ者」

囁が微笑んだまま、首を傾げた箆也を、まっすぐに見つめる。

「あなたがアヒるんを“神”^{かみ}と呼ぶたびに、その言葉の力を得て、アヒるんはどんどん、皆の“神”になっていった」

—— 僕の神も、たった一人だ！ ——

—— たぶん出会ってしまったから。私の本当の神様に ——

—— けどね、彼の神様は許してくれたんだよ ——

「あなたのその言葉が、何よりも、アヒるんを“神”にしたんじゃないかって…」

「……………」

囁の言葉を受け、箆也が何やら考え込むような表情で、ゆっくりと俯く。だがすぐに、否定するように首を横に振って、箆也は微笑んだ顔を上げた。

「そんなことはない。我が神が神となったのは、我が神の力があってこそだ」

箆也が、囁の言葉をあっさりと否定する。

「例えば、僕が“阿呆”^{あほう}と呼び続けても、我が神は、皆の神となったさ」

「フフフ…そうかも知れないわね」

箆也の主張を覆そうとはせず、囁はいつものように不気味に微笑

む、そつと頷いた。

「寝るか。明日は早い」

「そうね」

その言葉に頷いた囁が、カーテンを閉め、再びリビングの扉から外へと出ていく。箆也も持っていたペットボトルを、冷蔵庫の中へと片付け、リビングの扉へと向かう。

「明日、か」

強く拳を握り締め、箆也も、リビングを後にした。

こうして、それぞれの前夜が過ぎ去り、そして、運命の日が訪れた。

Word. 73 決戦へ (3)

翌朝。言ノ葉町、町の小さな八百屋『あさひな』二階、四男アヒル自室。

「んん」

決戦への気負いなど感じさせず、いつもと同じようにぐっすりと寝台の上で眠るアヒルが、何とも気持ち良さそうに寝息を立てながら、大きく寝返りを打つ。

「カ、カリ、フラワー…」

半開きのアヒルの口から零れ落ちる、相変わらずよくわからない寝言。

「グッドモーニンモーニン！アーくうんん！」

そこへ、部屋の扉を吹き飛ばすほどの勢いで、朝からテンションの高い父ウズラが、飛び込んで来る。

「ええーい！カリフラワーアターック！」

「だあああ！」

飛び込んできたウズラから、大量のカリフラワーを投げつけられ、その一つが勢いよく顔面へとぶつかると、気持ちよく眠っていたアヒルが、その衝撃に飛び起きる。

「だから、もう少し普通に起こせつつってんだろうがぁ！」

「ぎゃあああ！」

起き上がったアヒルが、自分の顔面へと当たったカリフラワーを素早く手に取り、ウズラの額へと、思いきり投げつける。見事に喰らったウズラは、ぶつかった勢いのまま、背中から床へと転倒した。

「ううう、ヒドいよお。アーくうんん」

「どっちが酷いのか、よく考えてから言え」

赤く腫れ上がった額を押さえながら、ゆっくりと起き上がるウズラ。今にも泣き出しそうなウズラへ、アヒルが寝台の上に転がるカリフラワーを拾いながら、冷たく言い放つ。

「だいたい俺が呼んだのは、カリフラワーでって、あれ？」

自分の発した寝言と、今、手の中にあるものを確認し、アヒルが目を丸くする。

「あってるでしょ？」

床に起き上がった状態のまま、ウズラがアヒルへと、穏やかな笑みを向ける。ウズラの言葉を受け、アヒルはもう一度、手の中のカリフラワーを確認し、そして、大きく笑みを浮かべた。

「だな！」

アヒルの笑顔を見て、ウズラもより一層、大きく笑う。

「アヒルー！朝飯、出来てっぞお！」

「おう！」

「スーくん、お父さんの分はあ！？」

一階から聞こえてくるスズメの声に、アヒルとウズラはそれぞれ、大きな声を発した。

「……………」

制服に着替え、一階へと降りたアヒルは、スズメの作った朝食を食べ終わると、カモメの写真の飾られている仏壇の前に座り、深く目を閉じ、手を合わせて、カモメへと祈りを送った。

「よし！」

長い祈りを終えて、アヒルが手を下ろし、目を開く。

「カモメ兄さんへの“いってきます”報告は、完了…？」

「ああ」

洗濯物を干し終え、居間へとやって来たツバメが問いかけると、アヒルが顔を上げ、しっかりと頷く。そのまま視線を壁の上へと向け、アヒルがそこに掛けられた時計の針を確認する。

「そろそろ行かねえとな」

「おう、とっとと行って来い」

立ち上がったアヒルに気付いたのか、台所から、洗い物途中のエ

プロン姿のスズメが出てくる。

「俺のお手製料理を食べて、バッチリ、気合いも入っただろうからな」

「お手製って、別にいつも通り、余った野菜尽くしだったじゃねえか」

両手を組み、得意げに話すスズメに、アヒルが少し口を尖らせる。
「ごめんねえ、アーくうくん！ウチが八百屋なばかりにい〜！」

「あああ、ハイハイ」

叫んで謝るウズラがあまりにも鬱陶しく、アヒルが表情をしかめながら、適当にあしらう。

「つーか、お前」

スズメが、立ち上がったアヒルを見つめ、目を丸くする。

「制服で行くのかよ？学校行くわけでもねえのに」

「ああ」

アヒルが、身に付けた水色の制服を見下ろし、そっと笑みを見せる。

「今までも、大一番の時には制服着てたから、何となくな」

「ふうーん」

アヒルの言葉に、特に興味なさそうに頷くスズメ。

「いいんじゃない？」

そこへ、ウズラが明るい口調で、言葉を挟む。

「皆、お揃いの方が、結束力も高まるしね」

「へ？」

居間から店頭へと歩き、外を見ながら、笑顔で言うウズラのその言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。だが、ウズラの見つめるその先にあるものを、知っているかのように、アヒルは居間から店の中へと降り、靴を履いて、ウズラの居る店頭へと出た。

「あ…」

『……………』

店の前に並んでいるのは、アヒルと同じ、言ノ葉高校の制服を纏

った、箆也、囁、保、七架の四人であった。綺麗に整列した四人は皆、店の前へと出てきたアヒルをまっすぐに見つめ、笑顔に向けた。

「おはよう、朝比奈くん」

「おはようございます、アヒルさん！」

七架と保が、次々にアヒルへと朝の挨拶を向ける。

「はあ！こんな朝から会いたくもない、爽やかさゼロの俺が、馴れ馴れしく挨拶かましちゃって、すみませえくん！」

「うるさい」

「フフフ…いいわね。すっごく緊張感がなくて」

いつものように頭を抱え、謝り散らす保を横目に見て、箆也が勢いよく顔をしかめ、囁がそっと微笑む。

「悪夢は見なかった…？アヒルん」

「今日は遅刻をしたら、困るからな。迎えに来たぞ、神」

「お前等…」

並んだ仲間たちの姿を見回し、アヒルがどこか、嬉しそうに笑みを零す。張り詰めた空気など、漂っていない。仲間たちはいつもの笑顔で、いつもの言葉で、アヒルを出迎えてくれている。その時、大きな手がポンと、アヒルの肩の上に乗った。

「親父」

肩に乗ったその手は、ウズラのものであった。振り向いたアヒルに、ウズラが大きく笑みを浮かべる。

「いつものように、送り出させて」

どこか願うように、ウズラの言葉が響く。

「アークくんが、いつもと同じように、笑顔で、この家に戻って来られるように」

「親父…」

少し不安げに目を細めるウズラに、父の想いを汲み取り、アヒルがそっと眉間に皺を寄せる。

「ま、俺たちもすぐ行くけどな」

「気を付けてね、アヒルくん」

「スー兄、ツー兄」

アヒルを送り出すため、スズメとツバメも居間を出て、店頭に立つウズラの、すぐ後ろに並ぶ。スズメとツバメへそれぞれ視線を送った後、アヒルは再び、ウズラを見上げた。アヒルの視線を受け取り、ウズラがこれ以上ないほどに、優しく微笑む。

「いってらっしゃい、アーくん」

「……っ」

いつも聞いているその言葉に、今日は全身から何かが溢れ出してしまいそうな、そんな感覚を覚えて、アヒルは思わず、それを堪えるように、唇を噛み締めた。

「ああ」

泣き出しそうな笑みを零し、アヒルが頷く。

「行ってくる！」

大きな声で言葉を放ったアヒルを見て、ウズラもスズメもツバメも皆、そっと微笑んだ。家族、皆の笑顔を焼きつけると、アヒルが表情を引き締め、仲間たちの方を見る。

「行こう！」

「ああ」

「ええ」

「はい！」

「うん」

アヒルの言葉に、四人は皆、迷うこともなく、一斉に大きく頷いた。

言ノ葉町、北東部。永遠^{とわ}たちの居城、程近くの広場。

「城内への入口は、正面の門だけか？左右、背面は？」

「確認しましたが、いずれも扉のようなものは見当たりませんでした」

「そうか。わかった」

広場には、黒の着物を纏った、韻本部の従者たちに囲まれた、恵の姿があった。恵も、いつもの教師をしている時と同じ服装である。従者たちからの報告を、忙しなく、次々と受けている。

「いよいよ、ですね」

「うん」

広場のベンチに腰掛け、まっすぐに城を見つめている、真剣な表情の為介と、そのすぐ横に立ち、眼鏡を押し上げている雅。この広場が、今日の皆の集場所となっているのである。

「恵先生！」

「朝比奈」

程なくして、四人の仲間を連れたアヒルが、その広場へと姿を現した。大きく手を振るアヒルの姿を確認すると、恵が従者たちから離れ、アヒルたちへと歩み寄る。

「遅刻常習のお前が、こんな早くに集合するなんぞ、珍しいな」

アヒルの前へと立った恵が、意外そうな表情で、アヒルを見つめる。

「明日はヤリが降るな、ヤリ」

「うっせえ！ちったあ教え子の成長を、誉めんか！」

悪態づく恵に怒鳴りあげながらも、アヒルは、恵がいつもの調子であることを知り、どこかホッとするような思いであった。今から、何よりも大事にしてきた弟と、戦いに行くのである。恵の心中は、穏やかなものではないだろう。

「おおーい、朝比奈！」

「んあ？」

横から聞こえてくる声に、アヒルがゆっくりと振り向く。

「ここで会ったが百年目え！」

アヒルが振り向くと、そこには、いつものようにサングラスにリゼント、そして学ランという、何とも目立った格好をした守が立っていた。本来であれば、子分たちの“昨日会いました”という突

っ込みが入るところであるが、今は、子分たちが一人も居ない。

「今日という今日こそ、コッテンパンのパンナコッタにし：！」

「はいはい。朝比奈君は今、忙しいんですよ」

「大人シクシテルデエース！リーゼントマン！」

「うるっしやい！離しやがれえ！」

いつものように、アヒルへと勝負を挑もうとした守であったが、雅とライアンに押さえ込まれるようにして、あっさりと止められ、勢いよく喚き散らす。

「何だ、あれ」

「フフフ：元気そうね」

顔をしかめるアヒルの横で、囁が何やら楽しげに微笑む。

「お姉ちゃん！」

「お待たせ、六騎」

先に広場へと連れて来ていた六騎と合流し、七架が笑みを浮かべる。

「音士も順調に集まっているようだな」

「ああ、茜から連絡がいつてるはずだからな。もうじき、他団の連中も来るだろ」

「他団で、ザベスやイクラか？」

「ああ」

問いかけるアヒルに、鋭く頷く恵。

「では、神月くんの弟さんも？」

「ああ、連絡はいつているだろうからな」

「そーいや紺平、来なかったし、檻也の方に行ってるのかもな」

振り向いたアヒルに対し、籠也が言葉なく、そっと頷きだけを返す。

「恵の神！」

「あ？」

広場へと駆け込んできた従者の一人に呼ばれ、アヒルたちと向き合っていた恵が、すぐに振り返る。

「何だ？どうした？」

「城の屋上に人影が見えます！」

「何…？」

その報告に、恵だけでなく、その場に居る皆が、表情を曇らせた。

永遠の居城、屋上。

「グアアアア…」

「ホッホッホ」

低い唸り声を漏らす終獣の、その金色の巨体を撫でながら、屋上の端に立った現^{うつつ}が、下方に広がる言ノ葉の町並みを見つめている。白いひげに覆われたその口元から、いやらしい笑みが零れ落ちる。

「見える、見える。引き際を知らん、愚かな音士たちが、わんさかとなあ」

現の細い瞳が、まっすぐに、アヒルたちの居る広場へと向けられる。人の、しかも視力の衰えた老人の瞳では、アヒルたちの姿を見ることなど出来るはずもないであろうが、どうやら現には、その姿が確認出来ているようである。

「あやつらの言うなりとなって動くのは、いささか面白くないが…」
永遠や桃雪の姿を思い出し、現が少し眉をひそめる。

「言葉で絶望を生み出すのは、好きじゃからのお。我慢すると、し
ようか」

そう言うのと、楽しげに微笑み、現はゆっくりと、右手に持っている杖を、晴れ渡った空へとかざした。

「五十音、第三音“う”、解放」

現の言葉を受け、杖の先端に付けられた言玉が、眩いばかりの金色の光を放つ。

「これがわしの四字熟語…」
ラスト・イデオム

杖の先端を見上げ、現がさらに口元を歪め、笑う。

「わしの生^うみ出す絶望に、苦しむが良い」
現^{いま}が目を見開き、自身^{みづかみ}の文字を口にする。
“有^う象^{ぞう}無^む象^{ぞう}”！」

Word. 73 決戦へ (4)

「あ、あれは…！」

大きく目を見開いた恵が、思わずその場から身を乗り出す。

『忌…！？』

アヒルたちや韻の従者、皆が声を揃える。城の屋上から、眩いばかりの金色の光が放たれたかと思うと、次の瞬間、城の周りから、溢れんばかりの、黒い影の塊が、次々と生み出され、どんどんと城の周りの空を埋め尽くしていく。その禍々しい光景に、思わず表情を引きつる皆。

「馬鹿な…！」

険しい表情を見せた箆也が、荒げた声を発する。

「今は、この町全員の言葉が止められているんだぞ！？この状況で、“痛み”が生まれるはずもないのに、何故、あんなにも忌が…！」

「浮世、現」

すぐ隣に立つ保が出した名に、箆也が言葉を止め、眉間に皺を寄せる。

「浮世現…あの男がまた、新たな生物を生み出したということか…」

「……………」

箆也が吐き捨てるように言葉を落とす中、城から溢れるように、次々と生み出されていく、忌によく似た生物を見つめ、保がそっと目を細める。

「その先も考えずに、あんなにも容易く、多くの命を生み出すなんて…」

保の声が、嘆くように、悲しげに響く。

「謎の生物の一団、まっすぐにこちらへと、向かってきております！恵の神！」

「チ…！」

従者からの焦った報告に、恵が思わず舌を打つ。

「攻め込む前に、退避することになるとはな」

恵が悔しげに、唇を噛み締め、手を振り上げ、顔を上げる。

「全員、この場から退……！」

「退避する必要はありません」

「何？」

「え……？」

恵の指示を遮り、凜と響くその声に、恵は眉をひそめ、箆也は大きく目を見開いた。その声は、聞き間違うことなどないほどに、箆也には聞き覚えがあり、箆也にとって、大切な者の声であった。皆が素早く、その声の聞こえてきた方を振り向く中、箆也は一人ゆっくりと、恐る恐る振り返る。

「わ、和音……」

「……………」

広場へと現れたのは、いつものように艶やかな着物を纏い、桃雪たちに裏切られた頃の、弱々しい表情ではなく、言姫として、毅然とした態度を見せていた頃の、あの和音であった。

「言姫さん？」

「何故」

アヒルが首を傾げる中、箆也がすぐに、疑問の言葉を和音へと向ける。

「何故、あなたがここに居る？和音」

どんな事情があれ、神を傷つけ、神から言玉を奪い、最後の神“永遠”の復活を目論んだ和音は、罰を受けて然るべき。和音もそれを認め、自ら、茜に裁きを申し出たのである。だからこそ、今は韻の収容施設内に居るはずで、この場に立っていられるはずなどなかった。

「私が、彼女に頼んだんですよ」

「母さん」

箆也の問いに答えながら、和音のすぐ横へと現れたのは、アヒルの母、茜であった。

「この最後の戦場で、私の代わりに、皆の指揮を取ってほしいと」

「指揮、だと？」

「ええ」

聞き返した、訝しげな表情の箆也に、茜がそっと笑みを向ける。

「彼女が一番、今の五十音士たちの能力に詳しく、また、最良の戦略を導き出せる、有能な方だと思ったからです」

「それは…」

すぐに口を開いた箆也であったが、続く言葉は出て来なかった。

確かに茜の言う通り、和音は有能であり、また、自身の願いを叶えるために日々、音士全員の観察を怠らなかつたため、音士の能力も十分に把握しているだろう。ずっと謡うたとして身を隠していた茜より、適任なのは、明らかであった。

「それは確かに、その通りね」

言葉を詰まらせた箆也に代わるように、囁がそっと微笑む。

「わたくしが指揮を取っても、構いませんか？ 安の神」

「へ？」

和音に急に問われ、アヒルが目を丸くする。兄を、そして自身を、願いを叶えるために、和音に利用された。疑念の気持ちを持ってもおかしくないところだが、和音の真剣な表情を見て、アヒルはすぐに笑みを浮かべた。

「ああ、心強えよ」

「……ありがとうございます」

笑顔を見せるアヒルに、和音は心から感謝するように、深々と頭を下げた。

「構いませんか？ 恵の神」

顔を上げた和音が、今度は恵の方を見て、同じように問いかける。恵は固く腕を組んだまま、鋭い瞳を、和音へと向けたが、すぐに視線を逸らす。

「この戦いの大将は、こいつだ。こいつが“イイ” だった時点で、私に反対する理由はねえ」

「……っ」

認めたような、認め切れていないような、曖昧な言葉を返す恵。だが、その言葉が、恵の心の中、そのもののようにも思えた。和音もそれを察してか、それ以上問いかけることはなく、ただそっと、視線を下へと下ろした。

「んで、退避する必要がないってのは、どういうことだ？」

「ああ」

話の流れを思い出し、頷いた和音が顔を上げ、こんな緊迫した状況であるというのに、そっと笑みを浮かべる。

「あの謎の生物の一団は、ここへはやって来ません」

「何？」

はつきりと言い切る和音に、恵が眉をひそめる。

「彼等がそう簡単に、我々を城へ近付けはしないであろうと予想し、何か仕掛けてくると踏んで、城の正面三方向に、戦力を準備させていただきました」

「戦力って？」

問いかけるアヒルに、和音が自信を持って、大きく微笑む。

「あなたと同じ、言葉の神々ですよ」

永遠の居城、正面方向部。言ノ葉湖、付近。

「うっひょ、来る来る！」

城から次々と生まれ、空を待って、続々とやって来る黒い影の一団を見つめ、締まりのない、明るい声をあげているのは、金八であった。

「あれがピンク色だったら、旨そうに見えんだろうなあ」

「金八：空気読め、口閉じろ、掘削作業」

「そういうこと言うと、俺泣いちゃうよお！？ってか、掘削作業って何い？シャコお」

金八へと厳しい言葉を投げかけるのは、ショートカットの無表情の少女、シャコ。

「敵サン、わんわんわんさかよぉ〜チラシくん！」

「力入っちゃうねえ〜ニギリちゃん！」

明るく言葉を交わしながら、お揃いのスーツを纏ったチラシとニギリが、その場でくるくると回り、よくわからないポーズを決める。「さてとお」

大きく伸びをして、気合いの入った声を漏らした金八が、ゆっくりと後方を振り返る。そこには、湖近くの木の下に座り込んだ、イクラの姿があった。イクラはすでに、その鋭い瞳で、こちらへと向かってきている黒い影たちを見つめている。

「どうするう？ 神！」

「うるさい、死ね」

「そうだ。死ね、金八」

「えええ〜、俺、そんな、間違ったこと言ったあ！？ 泣いちゃうよお！？ 俺、泣いちゃうよお！？」

冷たい言葉を吐き捨てるイクラと、イクラに乗っかるシャコに、金八が情けない声をあげる。いつものその声が響き渡る中、イクラがゆっくりと、その場で立ち上がった。

「神は、俺一人でいい…」

視線を、黒い影の迫る空へと上げ、イクラがさらに、鋭い瞳を見せる。

「行くぞ、以団^{いだん}」

『仰せのままに、我が神！』

イクラの言葉に、以団の面々は皆、笑顔で大きく頷いた。

永遠の居城、正面左方向部。町はずれ平野、付近。

「凄まじい数ですわねえ。誠子^{せいこ}お姉さま」

「ええ、そうですわねえ。徹子^{てつこ}」

同じデザインの黒と白のドレスを纏った双子、誠子と徹子が、空を埋め尽くす黒い影の一団を見上げ、どこか感心するように、言葉を交わす。

「眩暈がするな……」

同じように空を見上げ、うんざりとした様子で呟く、着物の少女、
音音。^{ねね}

「言姫様の仰った通り、やはり仕掛けてきましたね。エリザ様」

「ええ。ってか君、“様”とか付けてんじゃないわよ」

「え？」

鋭く指摘するエリザに、すぐ横に立った慧が、その瞳を丸くする。

「じゃあ、ザベス？」

「エリザよ！ “私に” じゃないわよ！ “言姫に” よ！」

首を傾げながら呼びかける慧に、エリザが勢いよく怒鳴りあげる。

「この前、話したでしょう？ 君が言姫に、どんな目に遭わされたのか」

「それは確かに、聞きましたけど……」

困ったように、頭を掻く慧。エリザに指示され、和音を見張っていた慧は、重要な秘密を知ってしまい、桃雪に襲われた上に、その際の記憶を、和音の言葉により、消されてしまったのである。

「けれど今は、状況が状況ですし」

「まったく、お人好しねえ」

あっさりと答える慧に、エリザが少し呆れたように、肩を落とす。

「それよりもエリザ様、今は世界の言葉を」

「わかってるわよ」

慧の訴えに、エリザが素っ気なく答えて、その表情を鋭くし、空をまっすぐに見据える。

「足止め役ってのは多少、気に喰わないけど……」

エリザが気合いを入れるように、強く拳を握り締める。

「行くわよ、衣団^{えだん}！」

『仰せのままに、我が神』

エリザの指示に、衣団の面々は皆、深々と頭を下げた。

永遠の居城、正面右方向部。住宅地との境の森、付近。

「やはり、仕掛けてきたか。ここで待機していて、正解だったな」
地面に腰を下ろしていた檻也が、城から生まれ出てきた影の一団を、その視界に入れ、肩を回し、戦闘の準備を整えながら、ゆつくりと立ち上がる。

「さすがは和音だ」

「別にお姉ちゃんじゃなくなたって、予想出来そうなものだけ……」
和音を誉める檻也に対し、面白くなさそうに顔をしかめて、檻也には聞こえない小さな声を落とす空音。

「まあまあ、空音^{そらね}さん」

そんな空音へ、紺平が笑顔で、宥めるように声を掛ける。

「檻也くんが好きなのはわかるけど、拗ねない、拗ねない」

「だ、誰が……！」

紺平のその言葉に、空音が顔を真っ赤に染め上げ、声を大きくして、必死に言葉を放つ。

「わ、私はただ、一度、神を危険な目に遭わせた姉に、警戒の気持ちを持って、こうねえ……！」

「紺平、空音」

「はい、何でしょう。神」

強い口調で反論していた空音が、檻也からの呼びかけに、一気に奥ゆかしくなって、そっと振り向く。

「我等は他団に比べ、二人、団員が少ない。だが、だからといって、この戦いの足を引っ張るわけにはいかない」

引き締まった表情で、檻也が堂々と言い放つ。

「我等は、他団の倍、戦う。いいな？」

「うん！」

「はい、神」

強気に言い切る檻也に対し、紺平と空音は、不安げな表情を見せることなく、笑顔で大きく頷く。

「行くぞ、於団^{おだん}！」

『仰せのままに、我が神』

檻也の言葉に、紺平と空音は声を揃え、三人はそれぞれ、迫り来る影の一団に相対し、身構えた。

その頃、八百屋『あさひな』店頭。

「始まったようですね」

「みたいだなあ」

店の前へとやって来た熊子と塗壁は、北東部の空にかすかに見える、黒い影たちの姿を捉え、眉をひそめ、険しい表情を作った。

「僕たちも急がないと…」

「ああ」

熊子たちと同じく、店の前に立ったツバメの言葉に頷き、スズメが店頭から、店の中を覗き込む。

「そろそろ行こうぜ、親…！ととと、違った」

呼ぼうとしたその名を、口の中へと仕舞い込み、スズメが改めて、口を開く。

「我が神」

「うん」

スズメに神と呼ばれ、店の奥から姿を見せたのは、ウズラであった。いつもの『あさひな』の紺色のエプロンを取ったウズラは、緊張感ある、真剣な表情を見せている。

「じゃあ行こうか、宇団^{うだん}」

『仰せのままに、我が神』

ウズラの言葉に、スズメとツバメ、そして熊子と塗壁が、一斉に声を揃えた。

「じゃあ、城の正面で、ザベスやイクラや檻也たちが足止めを？」

「はい」

和音から、作戦を聞かされ、驚きの表情を見せて確認するアヒルに対し、和音が大きく頷きかける。

「彼等があゝの影の団を食い止めている間に、安団の皆さんには、あの城へと侵入していただき……」

鋭い瞳を見せ、和音がまっすぐに、アヒルを見つめる。

「永遠を、倒していただきます」

『……っ』

和音のその言葉を受け、アヒルたちの表情に、一気に緊迫感が走る。ゴクリと息を呑む音が、互いに聞こえてきそうなほどであった。

「そりゃ、そうだ。その為に、来たんだもん」

アヒルが右手に握り締めている赤い言玉を見つめ、自身の心を確かめるようにそう言うと、顔を上げ、強く言玉を握り締める。

「よっしゃ！行くぜ、安団！」

『仰せのままに、我が神！』

気合いの入ったアヒルの掛け声に、安団の面々は皆、大きな声で応えた。

Word 74 音士、集結（1）

言ノ葉町、北東部。永遠^{とわ}の居城、屋上。

「ふむ」

自らの言葉で生まれた、黒い影の塊たちが、飛び出していく光景を眺め、現^{うつ}が満足げに頷く。現は掲げていた杖を下ろすと、再び、その杖の先を、屋上の床へと付けた。

「良い眺めですね」

「ん？」

声が聞こえ、現が振り返ると、屋上の入口から、桃雪が姿を現した。桃雪も先程までの現と同じように、飛び出していった黒い影たちを見つめ、不敵な笑みを浮かべている。

「今度は一体、何を生み出したんです？」

「いや、何」

桃雪の問いに、短く言葉を落としながら、現が口元を歪める。

「“つまらないもの”じゃよ」

永遠の居城、程近くの公園。

「んで？」

茜と共に現れ、茜に代わり、この場の指揮を取ることとなった和音に、恵が腕を組んだまま、相変わらず、鋭い視線を向ける。

「あの城に侵入するたって、具体的にはどうするんだ？」

アヒルたち安団へと、居城に潜入し、永遠を倒すよう指示した和音に対し、恵が素朴な疑問をぶつける。

「侵入口は、正面の扉一つ。いくら、他の神連中が、あの黒いのを抑えてるとはいえ、あいつらが戦ってる正面方向を通らなきゃ、城には行けねえぞ」

「侵入口はもう一つ、あります」

「何？」

間を置くことなく、すぐさま答える和音に、恵が眉をひそめる。

「もう一つって？」

恵に代わり、アヒルが問いかけると、和音はすぐに真剣な表情を作り、ゆっくりと城の方を振り向いて、右手を向けた。

「屋上です」

『なっ…！？』

巨大な金色の獣の陣取った、城の屋上を指差す和音に、恵や籠也たちが皆、驚きの表情を見せる。

「屋上！？」

「あの獣のところに、わざわざ、こっちから飛び込んで行くってのか！？」

「あの獣こそ、人々の言葉を止めているもの、そのものです」

批判的に問いかける恵たちに対し、和音は冷静な口調のまま、言葉が続ける。

「あれを倒さねば、このままどんどんと、人々の言葉は止められていってしまう」

はっきりと事実を告げる和音に、皆が思わず、口ごもる。すべての人々の言葉を守るためには、あの巨大な獣とも、戦わないわけにはいかないのだ。

「それに、正面全体を攻められている、この状況であれば、屋上は逆に、守備が手薄なはずですよ」

「それは、そうかも知れないが…」

和音の言葉に納得はしながらも、険しい表情で屋上を見つめる籠也。

「守備が手薄かどうか以前に、そもそもまず、どうやって屋上まで行くのが問題じゃない…？」

「確かに」

鋭く問いかける囁の横で、七架も大きく頷き、手を叩く。

「アヒるんのガアスケに乗っていくとしても：乗れるのは精々、三、四人よ：？」

「そこで、俺らの出番ってわけだなあ！」

「え？」

横から入って来る威勢のいい声に、アヒルたちが皆、同時に振り向く。

「俺ら、“宇団”の！」

「スー兄、ツー兄！」

公園へと姿を現したのは、スズメとツバメ、それに熊子、塗壁の、宇団の面々であった。皆よりも一歩前に出たスズメが、得意げな笑顔で胸を張っている。

「それに、親父も」

四人の後方からやって来たウズラが、こちらへと視線を送るアヒルを見て、小さく頷き、穏やかな笑みを零す。その表情はいつになく真剣で、いつものような明るい笑顔で、アヒルに抱きつくこともしようとはしなかった。

「宇の神」

「ごめんね、和音ちゃん。少し遅れちゃったかな」

「いえ、問題ありません」

ウズラに笑顔を向けると、和音が再びアヒルたちの方を見て、鋭い表情を作る。

「安団、宇団の皆さん、及び恵の神、為の神には、朝比奈スズメ、ツバメ、アヒル、三名の言玉、チュン吉、スワ郎、ガアスケに乗って、城の屋上から、城内部へと侵入していただきます」

和音の言葉に、アヒルたちの表情が、厳しく引き締まる。

「それ以外の皆さんは、於団おだんの加勢にあたって下さい」

「何いいい！？」

冷静な和音の指示に、初めて反発の声をあげたのは、リーゼント男のアニキこと、守であった。

「この俺が、侵入組に入らないったあ、どういうことだあ！？言姫

様ああ！」

「うっせえなあ。忙しいんだから、ごちゃごちゃ騒ぐなよ」

「うるっしゃーい！俺にとっては、大問題なんだ！お前は引っこんでろ、朝比奈！」

煩わしそうに言い放つアヒルにも強く言い返して、守がまたまっすぐに、和音へと視線を送る。

「末守^{まもり}さんが何故、侵入組に入らないか…それは」

和音はいたって落ち着いた様子で、守の問いかけを口にする。答えを待つ守は、次の言葉を待ちきれない様子で、大きく唾を飲み込んだ。

「侵入組にするには、戦力的に不十分だからです」

「ぐっはああ、はつきり言ったあ！」

和音の齒に衣着せぬ発言に、左胸を押さえて、ショックを受ける守。

「大人シク指示ニ従ウデウス、リーゼントマン」

「ほらほら、固まってないで、とっとと行くよお」

その場から動こうとしない守を無理やり引っ張るようにして、於団の加勢に向かうべく、歩き出していくライアンと六騎^{むつぎ}。

「六騎！」

去って行こうとする弟を、七架が思わず呼び止めると、六騎は守を引いたまま、その場で立ち止まり、七架の方を振り返った。不安げに見つめる姉に、六騎が笑顔を向ける。

「俺も頑張るから、お姉ちゃんも頑張って！」

不安げな表情など見せず、満面の笑みで言い放つ六騎に、七架ははじめ、少し驚いた表情を見せたが、それからすぐに、六騎と同じように、大きな笑顔を作った。

「うん！」

はつきりと答える七架を見て、六騎が嬉しそうに笑う。

「じゃあ行ってくるね！」

「気を付けて行って来いよー、クソガキ！」

「六騎くんをよろしくね：リーゼントくん、外人くん」

「任セトクデース！」

「俺、頑張るよ！囁ちゃん！」

大きく手を振る皆に見送られ、六騎、守、ライアンの三人が、檻也たちの居る正面右方向へと、駆けだして行く。

「雅クン、君も行つてあげて」

為介が振り向き、雅へと告げると、雅は少し、眉間に皺を寄せた。一度、開こうとした口を閉じると、雅は何かを振り払うように、そつと首を横に振り、まっすぐに為介を見た。

「仰せのままに、我が神」

神の指示に従い、為介の横から前へと出て、雅も三人の駆けて行った方へと歩いていく。

「頑張つて下さい、朝比奈君」

「雅さんも、皆を頼むな」

笑顔を見せた雅が、アヒルと短く言葉を交わす。雅は、アヒルたち安団の横を通り過ぎると、今度は、先程現れたスズメとツバメの方へと歩を向けた。

「気を付けてね、雅くん…」

「ツバメ君も」

雅とツバメが、しっかりと握手を交わす。

「全部、とつとと終わらせて、また明日、学校でな」

「はい」

続けて握手を交わしたスズメの言葉に、雅が笑顔で、大きく頷く。

「“また明日”」

強く誓うように、その言葉を口にする、雅はスズメから手を離し、皆に背を向けて、守たちの去った後を、駆けて行った。雅の姿が見えなくなるまでの間、アヒルたちは皆、黙ったままで、その背を見送った。

「では、皆さんもそろそろ」

「ああ」

和音の言葉に、一早く頷くスズメ。

「ツバメは熊子と塗壁を乗せてくれ。恵ちゃんと為介、それに保は俺んところ、後はアヒルんところだ」

スズメが侵入組の面々を見回し、素早く割り振りを決める。

「はあ！俺一人だけ、安団からあぶれるのは、俺がウザイからですねえ！すみませえくん！」

「図体デカイから、分けたただけだったの」

何故か謝り散らしている保に、スズメが呆れた視線を送る。

「あれ？親父は？」

スズメの振り分けた面々の中に、父の名がないことに気付き、アヒルが戸惑った様子で、ウズラの方を見る。

「言玉も持ってないのに、一緒に行っても、足手まといだからね」
そう言っ、どこか悲しげに笑ってみせる父に、アヒルは何も言うことが出来ず、ただそっと目を細めた。ウズラが何の力にもなれないことを、悔やんでいる様子は、その表情一つで、十分に伝わってきたからだ。

「宇団」

ウズラがスズメたち、宇団の方を見る。

「君たちの役目は、あくまで安団のサポートだ。安団が城に辿り着けるよう、全力を尽くすんだよ。いいね？」

『はい、我が神』

神の言葉に、宇団の四人が一斉に頷く。

「では、お願いいたします。安の神」

「ああ」

和音の言葉に頷いたアヒルが、制服のポケットから、金色の言玉を取り出す。

「第三音“う”、解放！」

「クワアアア！」

アヒルの言葉と共に、言玉から大きく姿を変えて目醒める、見るも美しい、金色の巨鳥。

「第十三音“す”、解放！」

「第十八音“つ”、解放……」

アヒルに続くようにして、スズメとツバメもそれぞれの言玉を目醒めさせる。並んだ三羽の巨鳥に、侵入組の面々は、先程のスズメの振り分けに従って、素早く乗り込んでいく。

「恵ちゃん」

スズメのチュン吉に乗り込もうとした恵を、寸前のところで呼び止めたのは、ウズラであった。その声に、恵がゆっくりと振り返る。「自分を追い込むような戦いは、しちゃダメだよ」

ウズラのその言葉を受け、恵がそっと目を細める。だがすぐに、恵は厳しい表情を作り、鋭い視線をウズラへと向けた。

「悪いが、その言葉には頷けない」

はつきりと告げられる、恵の答え。

「行ってくる」

ウズラの返答を待たずに、恵は再びウズラへと背を向け、チュン吉の巨体へと足を掛けた。

「ほら」

すでにチュン吉の上に乗り込んでいるスズメが、登ってくる恵へと、手を差し伸べる。だが、恵はその手を取ろうとはせずに、自分の力だけで登りきり、チュン吉の背に乗る。

「ちえ、釣れねえの」

そんな恵の素っ気ない態度に、スズメは少し口を尖らせた。チュン吉とスワ郎には全員が乗り終わり、後はガアスケ、アヒルと籠也が乗り込むだけとなった。

「籠也……」

今まで鋭い表情で、皆へと指示を送り続けてきた和音が、どこか不安げな表情となって、ガアスケに乗り込みに行く籠也を見送る。

「今日、この場で、皆と共に戦ったからといって、あなたのやったことが、許されるわけじゃない」

「わかっています」

鋭く言い放つ箆也に、和音はすぐさま、素直に認めるように頷く。
「何の関係もない人々の言葉を巻き込んでしまった罪は、これから、長い時間をかけて、償っていくつもりです」

「そうか」

和音の言葉に答えながら、少し体の向きを変え、和音から顔が見えないように、角度を変える箆也。

「なら、その長い時間を共に生きるためにも、勝たないとな」

「え…？」

思いがけない箆也の言葉に、俯きがちだった和音が、目を丸くし、顔を上げる。

「箆…」

「行ってくる」

和音が言葉を口にする前に、どこか慌てて言葉をかぶせ、箆也がガアスケの上へと乗り込んでいく。そんな箆也の後ろ姿を見上げ、和音は泣き出しそうな、だが嬉しそうな、笑みを浮かべた。

「お気を付けて、箆也…」

和音が祈るように、言葉を落とす。

「赤いわよ…？顔」

「うるさい」

一方、ガアスケに乗り込んだ箆也は、からかうような笑みを浮かべる囁に、冷たく言葉を突き返した。箆也も乗り込み、残るはアヒルだけとなり、アヒルの前には、ウズラと茜、アヒルの両親が並んだ。

「じゃあ」

「うん」

切り出すように言葉を放ったアヒルに、ウズラがそつと頷く。

「気を付けて下さいね、アヒル」

アヒルの右手を両手で握り締め、茜が笑顔を向ける。茜は必死に笑顔を作っていたが、不安げで、出来ることなら引き止めたいという思いが、その表情から伝わってくるようであった。そんな母の思

いを察するように、アヒルは少し目を細める。

「ああ、絶対帰ってくるよ」

茜を安心させるように、アヒルが大きく笑顔を向ける。

「“明日”と一緒に」

「ええ」

アヒルの決意のこもったその言葉に、茜は目を潤ませながらも、しっかりと頷く。

「いってらっしゃい、アーくん」

「ああ」

いつも通りの言葉で送りだすウズラに、アヒルが笑顔を向ける。

「行ってくる！」

元気いっぱい、明るい声を張り上げると、アヒルは両親に背を向け、すでに仲間たちの乗り込んでいるガアスケの上へと飛び乗った。

「よっしゃ、行こう！ガアスケ！」

「クワアアア！」

飛び乗ったアヒルが言葉を発すると、巨鳥はその言葉に答え、空いっぱいに金色の美しい羽根を広げて、遙か上空へと舞い上がっていく。ガアスケに続くようにしてチュン吉、スワ郎も舞い上がり、空の上で並んだ三羽が、物凄い速度で、金獣の待つ屋上へと、飛び出していった。

『……………』

徐々に小さくなっていく巨鳥を、黙りこんだまま、見つめ続けるウズラと茜。

「恨んで、いるんでしょうね…」

「え？」

突然の茜の言葉に、ウズラが戸惑うように横を振り向く。

「ろくに育てもしなかったのに、母親面して、あの子にすべてを背負わせて…」

「そんなこと」

自分を責めるような茜の発言に、ウズラが困ったように笑みを浮かべる。

「恨んでいるのは、茜ちゃんでしょう…？」

茜の方は見ず、空を見つめたまま、ウズラが逆に問いかける。

「勝手に自分の文字を押しつけて、挙句、何も出来ないまま、カーくんを死なせた…」

「それは…」

返す言葉を見つけられず、茜がただ悲しげに、視線を落とす。

「悔いたことを話したら、切りがないよ」

ウズラが少し肩を落とし、口元を緩ませる。

「だから今は、ただ」

もう小さな影でしか見えない、金色の鳥たちを見つめ、ウズラがそっと目を細める。

「“明日”を祈ろう」

Word 74 音士、集結（2）

永遠の居城、正面右方向部。於団戦闘場所。

「変格：」

鋭い表情を見せた空音が、自身の真っ白な言玉を、空へと突き出す。

「蒼穹」

言玉から放たれた白光が、一気に上空へと広がり、光の空を形成していく。辺り一面に光が広がると、空音はさらに瞳を鋭くし、再び口を開いた。

「注げ」

光の空から、雨のように白い光の粒が降り注ぎ、こちらへと向かって来ていた黒い影の先頭集団が、激しい叫び声をあげて、一気に掻き消されていく。

「ふう」

やっと突き上げていた手を下ろした空音が、ホッと一息つく。

「変格」

そんな空音から少し離れた場所で、先程の空音と同じように、自身の言玉を空へと突き上げる紺平。

「紺碧」

紺平の口から言葉が放たれたと同時に、紺平の足元から広がるようにして、まるで海のように、真っ白な光が辺りの地面を覆い尽くしていく。

「凍りつけ」

光の海から突き上げた氷が、黒い影たちを捉え、集団を一気に凍りつかせると、そのままヒビ割れ、崩れ落ちていく。その様子を見て、空音が納得するように頷く。

『グワアアア！』

「うげ」

だが、空音と紺平が掻き消した先頭集団の後方から、新たな黒い影が、わんさかと攻め込んでくる。まるで湧き出るように、際限なくやって来るその影たちに、空音は思わず表情をしかめた。

「いくら、紺平が変格使えるようになったっていつても…」

「これでは、切りがないな」

「神」

空音の言葉に続くようにして、空音のすぐ横へとやって来たのは、少し曇った表情を見せた檻也であった。檻也が険しい表情で、湧き出てくる影たちを見つめる。

「神、我ら於団が足を引っ張りたくはありませんが、足を引っ張らないようにするにも、やはり三人では…」

「ああ、そうだな」

「え？」

言い出しにくそうに話した空音であったが、あっさりと頷く檻也に、少し拍子抜けするように、肩を落とす。

「そんなこと、和音にはお見通しだったようだ」

「舞え」！

「向かえ」！

「満ちれ」

檻也の言葉に空音が戸惑っていたその時、於団の者ではない言葉が、その場に高らかと響き渡った。

『ギアアアアア！』

赤く輝き、舞う円月輪に、たてがみをなびかせ、突進する金色の馬に、すべてを呑み込む、大きな波に攻め込まれ、湧き出てきた黒い影の集団が、勢いよく掻き消されていく。その場へと現れたのは、和音の指示により、於団の加勢にやって来た守、六騎、雅であった。

「皆サン、頑張ルデエース！」

「またお前は、見学かよ！」

後方で元気よく手を振っているライアンに、守が強く怒鳴りあげ

る。

「彼等は…」

「加勢の音士のようだな」

戸惑った表情で守たちを見つめる空音の横で、檻也が穏やかに笑みを浮かべる。

「雅さん」

「ご苦労さまです、小泉君」

現れた雅のもとへと、紺平が歩み寄っていく。

「ガアは？」

少し不安げな表情を見せ、すぐさま問いかける紺平。その問いを受け、雅はそっと目を細めると、静かに顔を上げ、前方に見える城へと視線を送る。

「行かれました」

雅の視線を追いかけるように、紺平も城を見つめる。

「すべての人々の、言葉の明日を、守るために」

雅からの言葉に、紺平が眉間へと皺を寄せる。

「ガア…」

まっすぐに城を見つめ、紺平がどこか祈るように、アヒルを呼ぶ。「あちらは安団に任せて、俺たちは目の前の敵を倒すことだけに集中するんだ」

「檻也くん」

そこへ、檻也と空音がやって来て、城を見ていた紺平が、檻也へと視線を戻す。

「お前の友を信じろ」

「うん」

笑顔を見せた紺平が、檻也の言葉にしっかりと頷く。

「加勢組、悪いが、ここからは俺の指示に従ってもらう」

「ええ、構いませんよ」

檻也の言葉に、雅があっさりと頷く。

「我らは引き続き、あの影の殲滅にあたる！皆、全力で戦え！」

『はい!』

檻也からの指示に、大きな声で頷く紺平や空音、六騎たち一同。皆、それぞれの言玉を握り締め、また攻め込んでくる影へと、一気に駆け出していく。

「頼んだぞ、安団」

後方に一人残った檻也は、そつと言葉を落とすと、皆と同じように、前方へと駆け出ていった。

永遠の居城、正面左方向部。衣団^{えだん}戦闘場所。

「エリザ様!」

「ん?」

黒い影たちと戦闘中であつたエリザが、後方から響く慧の声に気付き、戦いの手を止め、慧の居る後方へと飛びさがった。

「何?」

「安団や他の皆さんが、屋上から、城内への侵入を試みるそうです」
「屋上から?」

慧の報告に眉をひそめたエリザが、顔を上げ、正面に見える城を見る。確かに、エリザの見つめる先には、城の屋上を目指し、空を翔け抜ける金色の巨鳥三羽の姿が確認できた。

「あの獣目がけて、攻め込んでいくなんて、相変わらず無茶苦茶な作戦組むわねえ、言姫は」

エリザが感心するように、少し呆れたように、言い放ち、肩を落とす。

「大丈夫でしょうか? 安の神たちは」

「大丈夫なわけではないでしょ」

「え?」

あつさりと答えるエリザに、慧が驚いた様子で目を丸くする。

「大丈夫なわけないって、エリザ様…」

「今までのアヒルたちの戦いで、大丈夫だった戦いなんて、一度だ

ってなかったわ」

困ったように見つめる慧に対し、エリザはどこか落ち着いた様子で、穏やかな笑みを浮かべる。

「それでも何とかしてきたのが、アヒルたち安団」

エリザがさらに笑みを大きくし、自信を持った表情で言葉を発する。

「だから、アヒルたちを信じて、私たちはただ、戦いましょう」

「はい！」

迷いのないエリザのその言葉に、慧も迷うことなく、返事をした。

永遠の居城、正面方向部。以団^{いだん}戦闘場所。

「仁王^{におう}」！

弾むように地面を移動しながら、青色の言玉を掲げ、自身の言葉を発するニギリ。すると、ニギリの後方で、巨大な水の像が造り出されていく。

「“躡^{にじ}れ”！」

「阿^あ！」

「咩^{うん}！」

ニギリの言葉に従った二体の巨大な水像が、その大きな足を踏み出し、前へ前へと進んで、向かって来ていた黒い影を、次々と踏み潰していく。

「ニギリ、今日も超超超好調！」

「さっすがだよおーニギリちゃん！」

嬉しそうに飛び跳ねるニギリの後ろから、チラシも同じように嬉しそうに、賞賛^{しょうさん}の声を送る。

「変格、四海^{しかい}」

飛び跳ねているニギリとは異なり、いたって落ち着いた様子で、言葉を発するシャコ。シャコの前方で、巨大な水の立方体が形成され、辺りの黒い影たちを閉じ込める。

「沈^{しず}め」……

シャコの言葉と共に、閉じ込められた立方体の中で、水へと沈められていく影たち。シャコやニギリの活躍で、どんどんと黒い影は倒されていくが、まだまだ後方からは新たな影が生まれ、減っていく様子は見受けられない。

「はあ、こりゃ切りがねえなあ。おっ」

次々と湧き出てくる影を見回し、面倒臭そうに肩を落としていた金八が、城の屋上へと向かっていく、三羽の金色の巨鳥の姿を捉える。

「城への突入、始めたみたいだぜえ？ 神」

後ろを振り返り、皆の最後尾で待機しているイクラへと、声を掛ける金八。その声に反応し、一応、城の方を見はしたものの、イクラは特に表情を変えず、興味なさそうに視線を逸らした。

「神もホントは、あっち組が良かったんじゃない？ お？ 何せ相手は、五十音界最強の神らしいし」

「別に興味ない」

「へえ、珍し」

あっさりと答えるイクラに、金八が少し驚いた様子を見せる。イクラは以前から、神に執着し、自分以外の神を一切、認めようとはしなかった。今回も相手が神であるならば、一番に倒しに行こうとするのが、普通であろう。

「心境の変化でもあったわけ？」

「そんなものはない」

金八の問いにすぐさま答え、イクラがゆっくりと足を動かし、金八の横を通り過ぎて、前へと出ていく。

「言葉の明日を守るだとか、そんな暑苦しいものに巻き込まれるくらいなら、雑魚の相手でもしていた方がマシだと思ったからだ」

「成程」

イクラの答えに、金八が納得した様子で笑顔を見せる。

「最強の神だか何だか知らないが……」

懷から自身の言玉を取り出しながら、イクラがさらに言葉を続ける。

「あんな者の相手など、安の神一人で十分だろう」

「へ？」

金八が目を丸くする中、イクラは言玉を握り締め、自身の言葉を武器に、ニギリやシャコと同じように、黒い影たちとの戦闘を始める。そんなイクラを見つめ、しばらくの間、驚きの表情を見せていた金八であったが、肩を落とし、どこか困ったように微笑む。

「我が神の口から、他の神の名前が、自然と出るとはねえ」

意外そうに呟き、軽く頭を掻く金八。

「これぞ、心境の変化ってやつかな」

少し嬉しそうに言葉を弾ませながら、金八は改めて、屋上へと向かっていく金鳥を見送った。

永遠の居城、屋上。

「まっすぐに、この場所へと向かって来ますねえ」

屋上の縁に立った桃雪は、今、桃雪の居るこの場所へと、まっすぐに翔け抜けてくる三羽の金鳥を見つめ、落ち着いた様子で言葉を落とした。桃雪が振り返ると、そこには、終獣の調子をうかがっている現の姿がある。

「で、どうするんです？このまま、あっさりと侵入を許すのですか？」

「お前さんは、わしの四字熟語ラスト・イデオムを知らんようじゃのお」

試すように問いかける桃雪に対し、現は焦った様子もなく、どこか小バカにしたように言い放つ。

「あなたの四字熟語なら、先程、聞きましたよ。“有象無象”うぎむむぞうでしよう？」

「有象無象の意味を、知っておるか？」

確かめるように問いかけた桃雪の言葉には答えず、次の問いかけを、桃雪へと向ける現。

「取るに足らない雑多なものたち、多く集まった、つまらない連中」その言葉の意味を、桃雪は詰まることなく、すらすらと答える。

「ああ、そうじゃ。つまり」

少し強調するように、現が間を置く。

「この世界には、ありふれとるんじゃないよ」

『グワアアアア!』

「あれは…!」

もう間もなく、終獣の居る屋上に辿り着こうかというその時、屋上の周囲から一気に溢れ出した、黒い影の集団を視界に入れ、アヒルが大きく目を見開く。アヒルの意志に反応したのか、ガアスケが思わずその場で体を止めると、続いて飛んでいたチュン吉とスワ郎も、その場で止まった。止まった三羽を目がけて、黒い影たちは一気に飛び出してくる。

「チ…! まだ居やがったのか!」

「まだ居たというよりは、次々と生み出されていつてるんだろうねえ」

大きく舌を鳴らすスズメの後ろで、為介がいたって冷静に話す。

「この状況、ちょっとマズくない…?」

「ええ。この足場では、思いきり戦うことも出来ませんし、ここは上空。攻め込まれば、我々が不利です」

ツバメの言葉に頷き、熊子が険しい表情を見せる。

「だからって、戦わねえわけにはいかねえだろ!」

熊子の言葉を耳に入れながらも、もう目前まで迫ってきている影たちに、悩んでいる場合ではないと判断したアヒルが、ガアスケの上で立ち上がり、ポケットから赤色の言玉を取り出す。

「待て、神」

言玉を解放しようとしたアヒルを、後方から止める箆也。

「まだ、敵の城にも侵入出来ない状況で、言葉を使って、体力を浪費するのは、好ましくない」

「好ましく有ろうが無かるうが、このまま戦わなきゃ、やられて終わっちゃうだろうが！」

「それはそうだが…」

アヒルの最もな意見に、箆也も反論することが出来ず、厳しい表情となる。

「恵サン」

判断を委ねるように、横に居る恵の方を見る為介。恵は固く腕を組み、考え込んだ様子で、眉間に皺を寄せている。箆也の言うように、侵入も出来ない段階で体力を浪費したくはないが、アヒルの言うように、戦わなければやられてしまうのも事実であった。

「確かに、この状況じゃ、戦うしか…」

恵がまだ、決めきれない様子で言葉を落とす中、黒い影の集団が、先頭に居るアヒルたちの乗るガスケの、目のところまで迫った。

「クソ…！」

もう迷っている場合でもなく、それぞれの言玉を取り出すアヒル。後方に乗る箆也たちも言玉を取り出し、皆が言玉を解放しようとした、その時であった。

「“焼き払え”！」

『ギャアアアア！』

「え…？」

どこから飛び込んできた、赤々と輝く炎に焼かれ、アヒルたちへと向かって来ていた黒い影の集団が、一気に掻き消される。目の前に広がった炎と、一瞬にして消えた影たちに、アヒルたちは思わず、言玉を解放しようとしていた動きを止め、戸惑うように目を丸くした。

「い、今の言葉は…」

「安の神！」

呼ばれる名に、アヒルがゆつくりと右方向を振り向く。

「安の神！」

「ゆ、弓！？」

アヒルが振り向いたその先には、真っ青な空に一際映える、金色の巨大な一頭の象があり、象の背にまたがり、アヒルへ向けて大きく手を振っている、ポニーテールの、幼い顔立ちの少女の姿があった。

「お前、弓か？」

「はい！“由守”^{ゆもり}の弓削弓と、相棒の弓象です！ご無沙汰しております、安の神！」

もう一度、確認するように問いかけたアヒルに、少女は満面の笑みを向ける。その少女は確かに、かつて、始忌^{シキ}との戦いの時にアヒルが出会った五十音士の少女、弓であった。

「弓さん！」

「あら、本当に久し振りだわ…」

ガアスケの上から、アヒルと同じように弓の姿を確認した囁と七架が、それぞれ、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「なんで弓がここに」

「言姫様から連絡をいただきました、皆で加勢に参りました！」

「皆？ってことは、やっぱり、さっきの言葉は…」

「はい！」

笑顔で頷いた弓が、後方を振り返ると、弓の後ろで弓象の背に座っていたその者が、ゆつくりと立ち上がり、アヒルたちにその姿を見せる。

「お会いするのは、これで二度目ですね。安の神」

「や、刃^{やいば}…！」

弓の後方で立ち上がったのは、白い鉢巻を額に巻き、右手に大きな剣を持った、精悍な顔つきの青年であった。

Word 74 音士、集結 (3)

「刃：あれが“也守”の八城刃か」

アヒルが驚きの声をあげる中、すぐ後ろで、箆也は冷静に声を漏らす。

「伍黄、さん…」

一方、スズメのチュン吉の背に乗り込んでいる保は、現れた刃の姿を見つめ、そっと表情を曇らせた。その刃の姿は、かつて、保が相対したことのある姿。だが、あの時、刃の体は始忌の一人、伍黄により乗っ取られていたため、今の刃とはまるで別人だったのである。

「お前まで」

「はい。それに、もう一人」

「お初にお目にかかります、安の神」

刃の言葉を合図として、突如、弓象の頭の上に、人影が現れる。

全身に鎧を纏い、顔も分厚い鉄仮面で覆ってしまっており、その表情すらうかがえない、どこか不気味な男だ。

「“与守”の横川 鎧と申します」

「ああ、あんたが与守か」

「以後、お見知りおきを」

そう言うのと鎧が、鉄仮面をはずし、深々と頭を下げる。仮面の下に隠れていた素顔は、意外にまだ若い、彫りの深い顔立ちをした青年であった。

「今度は本物のようだな」

「へ？」

「いや」

聞き返したアヒルに、箆也がすぐさま誤魔化すように、首を横に振る。かつて、始忌の一人、緑呂に乗っ取られていたはずの鎧だが、それは阿修羅の体で、乗っ取られた振りをしていただけだったので

ある。仮面の下から覗いた顔が、当たり前ではあるが、阿修羅とはまるで別人の顔であったため、箆也は少し安心したように、肩を落とした。

「やっと、約束を果たす時が来ました」

「約束？」

刃の言葉に、アヒルが戸惑うように、首を傾げる。

「初めてお会いした時に、約束いたしました」

晴れやかな笑みを浮かべ、刃がまっすぐにアヒルを見つめる。

「安の神が危機に瀕した時、必ずや我ら三言衆、安の神の力になる」と

「ああ、そういや、んなこと言ってたなあ」

刃の言葉を受け、アヒルがやっと思ひ出したように頷く。

「団に属していないとはいえ、安の神は我が神も同然」

「我ら三言衆、全力で安の神の力になります！」

刃に続くように、鎧と弓も、それぞれ言葉を放つ。

「んな敬語だらけで敬われても困っけど、でも……」

軽く頭を掻いたアヒルが、真剣な表情を作りながら、ゆっくりと前方の城を振り向く。屋上まで目前に迫ったその前に、阻むようにして溢れ出す、多くの黒い影。

「確かに、こんなところで止まってる場合じゃねえんだ」

言葉を放ったアヒルの瞳が、決意したように強く光る。

「この場を頼む、刃！」

「すべては神の仰せのままに」

アヒルの言葉に、刃がしっかりと頷く。

「行くぞ！弓、鎧！」

刃の掛け声に、それぞれ頷く弓と鎧。刃が右手の剣を構え、鎧が真つ白な言玉を前方へと突き出す。

「“行け”！弓象！」

「パオオオン！」

弓の言葉に大きな鳴き声で返事をした弓象が、その巨体を金色に

輝かせ、目にも留まらぬ速度で空を翔けて、黒い影の集団の中へと飛び込んでいく。

「“淀め”……」

“焼き尽くせ”！」

刃と鎧の言葉により、一斉に数十匹もの影が掻き消え、再び、屋上への道が開かれる。

「今だ！行こう、スー兄、ツー兄！」

「おう！」

「うん……」

その開かれた道を逃がすことなく、三羽の巨鳥は空を翔け抜け、屋上へと突き進んでいく。

「サンキューな！刃、弓、鎧！」

「ご武運を、安の神！」

「おう！」

弓の声援に軽く手をあげて答えると、アヒルは刃たちに背を向け、永遠の待つ城へと向かっていった。

「おやおや、あっさりと破られてしまいましたねえ」

刃たちの助けを借り、再度、向けられた影の集団をも越えて、屋上へと向かってくるアヒルたちの姿を視界に入れ、桃雪がどこか楽しげに笑う。

「これもしっかりと、あなたの計算に入っているのでしょうか？」
「ク……」

試すように問いかける桃雪に、現が少し表情を崩す。先程までは余裕のあった現の表情も、今は少し焦りが見える。その表情を見ただけで、これ以上、“有象無象”による影を生み出すことは出来ないであろうことが、容易にわかった。

「まあ、あなたが他にどのような汚い策を講じているのか、知りま

せんがあ」

屋上の縁に立っていた桃雪が、足音もなく歩を進め、屋上の出口へと進んでいく。

「僕の手を煩わせぬよう、なるべく、減らしといて下さいねえ」

皮肉たっぷりの笑みを現へと向けると、桃雪はそのまま扉を開き、屋上を後にした。屋上に一人残った現が、桃雪が去り、閉じていく扉を見つめ、強く唇を噛み締める。

「何が“減らし”といて下さい”じゃ。偉そうに」

桃雪への怒りに表情を歪めながらも、現が体の向きを変え、こちらへとまっすぐに向かってくる、三羽の金色の鳥の姿を見つめる。

「たっぷりと減らしといてやろうじゃないか」

その細い瞳をさらに細め、鋭く変える現。

「最早、策などいらぬ」

数歩進み、現が、屋上に陣取った、巨大な生物の前足のすぐ横へと立つ。

「お前さえ居れば…のお？我が最高傑作よ」

その巨大過ぎる生物を見上げ、現はいやらしく、微笑んだ。

「見えたぞ、屋上！」

「止まらず、この勢いのまま、降りるんだ」

「わかった！」

先頭を切るアヒルたちの乗ったガアスケが、もう城の屋上寸前のところまで辿り着く。スズメの後方から恵が冷静に指示を送ると、アヒルはその言葉にしっかりと頷き、速度を緩めることなく、屋上にガアスケを着地させようとした。

「グアアアア！」

「何…！？」

その時、屋上の奥で、その巨体を堂々と立ち上がらせた金色の獣、

終獣が、やって来たアヒルたち目がけて、大きく口を開き、そこから強い光の玉を弾き飛ばす。

「あれは、浮世現の…！」

「クッソ！」

向かってくる光玉に、アヒルたちが皆、焦りの表情を見せる。

「こうなりや強行突破だ！ガース…！」

「避ける！」

アヒルがガースケと共に突破を試みようとしたその時、恵の大きな声が響き渡る。

「少しでも掠ったら、言葉を止められるぞ！」

恵の言葉に、皆の表情が強張る。

「塗壁…」

「おうだあ！“拔^ぬけろ”！」

「為介！」

「“誘^{いざな}え”」

ツバメとスズメがそれぞれ塗壁と為介に呼びかけると、二人が言玉をかざし、自身の言葉を発する。するとその言葉に従い、二人の巨鳥が、光玉の直撃コースから素早く逃れる。

「えええ！？ちよちよちよ…！」

去っていく兄たちの鳥に、アヒルが焦りの声をあげる。

「俺はどうしたら…！うわ、うわ、うわ！」

焦っている間にも、さらに近付いてくる光玉に、さらに焦りの声をあげるアヒル。

「“かわせ”」

焦るアヒルの後方から、籠也が冷静に言葉を落とすと、ガースケが大きく体をそらし、無事に光玉を避ける。光玉が誰もいない空へと消えていくと、焦っていたアヒルは、額に噴き出した汗を拭いた。

「ふう、助かったわ、籠也」

「まだ助かっていない」

「へ？」

厳しい表情で言い放つ箆也に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「グアアアア！」

「う…！」

箆也の方を振り返っていたアヒルが、再び前方を見ると、またしても終獣が光玉をこちらへ向けて放ってくる。大きく口を開いたまま、どんどんと屋上の前に突き進み、アヒルたちへと攻撃を続ける終獣。一瞬掠めても、言葉が終わらされてしまうその光に、アヒルたちは何よりも避けることを優先し、むしろ屋上から離されてしまう。

「フハハ、フハハ！いいぞ、いいぞ。我が可愛い獣よ！」

「あれは…！」

終獣の後方の空に浮かび、いやらしい笑い声をあげるその姿に、皆が視線を集める。

「浮世現…！」

皆の中でも、一際、険しい表情で、現を見上げる保。

「無能な五十音士の言葉など、一つ残らず消し去ってしまうがいい！」

「グアアアア！」

現の言葉に従い、終獣はさらに光玉を飛ばし続ける。

「ク…！このままじゃ降りるなんて到底、無理だぞ！？恵先生！」

答えを求めるように訴えるアヒルであったが、恵も策を思いつけないのか、険しい表情を見せ、固く腕を組むだけであった。

「五十音第八音“く”、解放」

「五十音第二十三音“ぬ”、解放」

皆が攻める手を考えられずにいたその時、ツバメの鳥に乗っていた熊子と塗壁が、自身の金色の言玉を解放させ、それぞれ大熊のおクマとゴリラのゴリ男へと変化させた。

「我々があの獣を引きつけます」

「その間に、スズさんが皆を屋上の出口へ誘導するだよお」

熊子と塗壁の言葉に、アヒルたちが衝撃を走らせる。

「何言っただよ！あいつの攻撃に当たったら、言葉止められちゃうんだぞ！？引きつけるなんて、んな危険なマネ…！」

「このまま城の中にすら入れなかったら、どの道、言葉は終わるよ…」

「ツー兄」

荒々しいアヒルの言葉を遮ったのは、落ち着いたツバメの声であった。光玉が飛び交い、巨鳥が必死にそれを避ける中、ツバメがまっすぐにアヒルを見つめる。

「このまま、皆の言葉が終わってしまうなんて、アヒルくんは嫌でしょう…？」

「そりゃあ、そうだけど…」

「僕も嫌だ」

はつきりと答え、ツバメが少し俯く。

——私、ツバメさんのことが…！——

思い出される、想子の姿。

「あの言葉の続きを聞けないまま、終わってしまうなんて…」

「へ？」

「ううん」

小さい声で呟かれたツバメの言葉を聞き取れず、アヒルが首を傾げるが、ツバメは誤魔化すように首を横に振り、またゆっくりと顔を上げた。

「僕たちが立ち止まってしまったら、その時点で、皆の言葉が終わるんだ。だから、ねえ、アヒルくん」

ツバメが諭すように、優しい声をアヒルへと向ける。

「迷ってる、場合じゃないよ…」

ツバメのその言葉に、アヒルの表情に浮かんでいた曇りが、一気に晴れていくと、アヒルはどこか、決意したような、強い表情を見せる。

「わかった、頼む」

アヒルの言葉を聞くと、ツバメが嬉しそうに微笑み、小さく頷いた。

「行こうか、熊ちゃん、塗壁……」

「いつでも」

「おうよお！」

ツバメの掛け声に、熊子と塗壁がしっかりと答える。

「スワ郎……」

ツバメが名を呼ぶと、三人の乗るスワ郎が大きく体を傾け、屋上に立つ終獣へと、急接近していく。その中で、おクマに乗った熊子が、素早くスワ郎から飛び降り、屋上の端へと着地して、おクマから降りる。

“砕^{くだ}け”

熊子の言葉を受け、その鋭い爪を、屋上の地面へと振り下ろすおクマ。すると、終獣の前足部分の乗っていた屋上の地面の一部が砕け、終獣がその巨体のバランスを崩す。

“濡^ぬらせ”！

塗壁の言葉により、ゴリ男が水を吐き出すと、その水が終獣の両瞳を襲い、終獣は思わず目を閉じて、体をのけぞらせる。

“貫^{つらぬ}け”

そこへすかさず、ツバメがスワ郎を向け、終獣を攻め立てた。

「よっしゃ、今のうちだ！アヒル！」

「お、おう！」

応戦する三人の様子を確認すると、スズメがアヒルへと声を掛ける。チュン吉のすぐ後ろへとガアスケが付けると、スズメが屋上に見える、城へと続く出入口に向けて、両手を突き出した。

“進^{すす}め”！

スズメの言葉に乗り、チュン吉とガアスケが、目にも留らぬ速さで、屋上の出入口へと下降していく。

「行かすか！」

その様子を見て、現がスズメたちへと右手の杖を伸ばす。

「唸^{うな}れ”！」

巨大な金色の光の塊を、皆へ向けて放つ現。チュン吉の上に乗ったスズメが、素早くそちらを見上げる。

“吸^すい尽くせ”、チュン吉！」

「チュン！」

嘴を向かってくる光の方へと向けたチュン吉が、大きくその口を開き、やって来た光を一気に吸い込む。

「グ……！」

「今だ、アヒル！」

「おう！ガアスケ！」

スズメに攻撃を防がれ、現が顔をしかめている間に、アヒルがガアスケをもとの金色の言玉の姿へと戻し、ガアスケに乗っていた籠也、囁、七架と共に、屋上へと降り立つ。

「皆も行ってくれ！」

スズメの言葉に頷き、保と為介がチュン吉から飛び降り、屋上の上で待つアヒルたちと合流する。二人に続き、降りようとした恵がふと足を止め、現と睨み合いを続けているスズメの方を見る。

「スズメ」

「ん？」

恵の方を振り向かぬまま、声だけを返すスズメ。スズメの背を見つめ、恵が真剣な表情を見せる。

——じゃあ先生、また明日！——

その言葉を最後に、もう見ることはなかった、カモメの笑顔。

「……死ぬなよ」

恵がどこか祈るように、スズメへと言葉を向ける。その言葉を背中に受けたスズメは、恵には見えぬところで、少し驚いた表情を見せた。だがすぐに、その表情を笑みへと変える。

「それって、愛の告白って受け取ればいいの？」

「アホ。んなわけないだろ」

「なあ〜んだ」

あっさりと否定する恵に、スズメがどこか、がっかりしたように肩を落とす。

「俺は死なねえさ。恋盲腸の完結を読み切るまではなあ」

スズメが微笑んだまま、軽い口調で言葉を向ける。

「俺のことは大丈夫だから、だから、弟を頼む」

「ああ」

スズメの言葉にしっかりと頷くと、恵もチュン吉を飛び降り、屋上へと着地した。

「んじゃまあ、言葉の明日を頼んだぜ！」

「スー兄、ツー兄、気を付けろよお！」

皆を降ろし、上昇していくチュン吉を見上げ、アヒルが屋上から、大きな声を向ける。スズメはその言葉に軽く右手をあげて応え、終獣に応戦するツバメたちに合流した。

「私たちも急ぐぞ」

「ああ」

恵の言葉に皆が真剣な表情で頷き、恵を先頭にして、屋上の出入口を開き、ついに永遠の居城内部へと侵入していく。皆が次々と中へ入っていく中、一人、屋上で足を止めたままの保が、鋭い瞳で上空を見上げる。

「ええい、何をしておる！そんな奴等、とっとと消してしまえ、終獣！」

保の瞳に映る、焦り、怒った様子の現の姿。

「……っ」

その姿に、保が厳しい表情を作る。

「保？」

皆が中へと入り、最後尾で城へと入ろうとしたアヒルが、一人立ち止まったままの保に気付き、足早に歩み寄る。

「何してんだよ？とつと中へ：」

「お願いがあります、アヒルさん」

「へ？」

保に改まった様子で言葉を向けられ、不思議そうに首を傾げるアヒル。空を見上げていた保が、ゆっくりと顔を下ろし、真剣な表情で、まっすぐにアヒルを見つめる。

「俺に、浮世現と戦わせて下さい」

保のその言葉に、驚くように、アヒルは大きく目を見開いた。

「戦うって保、お前…」

「勝手なことを言っているのは、わかっています。でも」

戸惑いの表情を向けるアヒルに対し、保はさらに真剣に、言葉を続ける。

「俺が、俺たちが、倒さなきゃならないんです」

複数になった保のその言葉が、何を意味しているのかを容易に理解し、アヒルがそつと眉をひそめる。

「決めたのか？」

「はい」

素直に頷く保を見ると、アヒルの眉間に寄っていた皺が消える。

「そうか…」

しみじみと頷いたアヒルが、穏やかな笑みを浮かべる。アヒルの笑みを見てか、保も強張っていた表情を崩し、そつと笑みを浮かべた。

「こんな、情けなさが服着て歩いてるような俺が、偉そうなこと、言っちゃってすみません」

「本当にな」

「はぁ！ やっぱり、そう思ってたんですかぁ！？ すみませえくん！」

いつもとは違い、落ち着いた様子で謝る保であったが、あっさりと頷いたアヒルを見ると、焦った様子で謝り散らす。やっといつもの様子の戻った保を見て、アヒルは可笑しそうに笑う。

「ハハハ！ やっぱ保は、こうでねえとな」

「アヒルさん」

そう言って笑うアヒルを見て、保も焦りの表情を消し、そつと微笑んだ。

「俺の勝手を、許してもらえますか？」

もう一度、真剣な表情を作り、保が改めて、アヒルへと問う。そ

の眼差しに応えるように、アヒルも真剣な表情を見せる。

「俺は、お前の神だ」

「わかっています」

アヒルの言葉に、保がすぐさま頷く。

「神の命は絶対。音士として、安団の一人として、どんなに勝手なことを言っているかは、理解しています。けれど…」

「そうじゃない」

「え？」

すぐに否定するアヒルに、戸惑うように首を傾げる保。

「神の役目は、命令を押しつけることじゃない。その勝手を、お前の意志を許すのが、お前の神である俺の役目だ」

アヒルが迷いなく、まっすぐに、保を見つめる。

「だから行って来い、保」

力強い言葉が、保へと向けられる。その言葉に、保は一瞬驚きの表情を見せた後、すぐに、心から嬉しそうな笑顔で笑った。

「はい！我が神！」

保の大きな返事を聞き、アヒルが満足げに笑う。

「何してる！？急げ！」

「神」

そこへ、すでに城内へと入った恵と箆也から、アヒルを呼ぶ声が飛ぶと、アヒルはまたすぐに笑みを止め、厳しい表情を見せた。スズメやツバメが必死に、終獣を抑えていてくれるのだ。今、ここで、アヒルが止まってしまいうわけにはいかない。

「行って下さい、アヒルさん」

「ああ」

促す保に、アヒルがしっかりと頷く。

「保」

城内へと足を踏み出すその前に、アヒルがもう一度、保の名を呼ぶ。

「死ぬなよ。お前も灰示も、絶対」

「……はい」

命令というよりは、願うようなアヒルのその言葉。その言葉に、少しの間を置いた後、保はしっかりと頷いた。保の頷きを確認すると、アヒルが保へと背を向け、城内へと駆け出していく。

「アヒルさん！」

アヒルが城へと足を踏み入れたところで、保が大きく名を呼ぶ。屋上の出入口の扉が閉じていくとする中、アヒルが後方を振り返り、保へと視線を向ける。

「また明日！」

まるで学校の放課後のように、いつもと同じように、保がそう言っ
て、笑う。その言葉に、アヒルは少し驚いた顔を見せたが、すぐに、思いきり笑顔で言った。

「また明日！」

アヒルの大きな笑顔とその言葉を最後に、屋上の扉が、完全に閉じる。アヒルたちの姿が見えなくなると、保は笑みを止め、鋭い表情を見せて、制服のポケットから、自身の赤い言玉を取り出した。

「五十音、第十六音……」

保が右手で、強く言玉を握り締める。

「“た”、解放！」

保の力強い声と共に、言玉がその姿を変えていく。無数に枝分かれした赤い糸が、広げられた保の両手に、しっかりと巻きついていく。

「“高^{たか}くなれ”！」

言葉と同時に、強く糸を地面へと打ちつけ、その反動を利用するようにして、空へと舞い上がっていく保。保が上がっていくその上空には、現が、まるで保を待つように浮かんでいる。

「何じゃ」

保が現と同じ高さまでやって来ると、現はどこかつまらなさそうに、肩を落とした。

「誰かと思えば、いつぞやの音士の小僧ではないか」

冷たいその瞳が、保の姿を捉える。

「わしの失敗作は、元気か？ん？」

そう問いかけ、小馬鹿にしたようないやらしい笑みを、保へと向ける現。挑発とはわかっていても、保は表情を歪めずにはいられなかった。

「あの黒い影たちは、あなたが？」

「ん？ああ。わしの四字熟語、ラスト・イデオム“有象無象”で生み出したものたちじゃよ」

問いかける保に、現は特に迷うことなく、すらすらと答えた。

「じゃが、さすがは“つまらないもの”じゃのお。あれほどの数、生み出してやっても、お前さんらを止められんとは…」

現が呆れ果てた様子で、深々と肩を落とす。

「これでまた、あの毛守もりに嫌味を言われるわい。まったく、使えん奴等ばかり」

俯いていた現が、再び顔を上げる。

「わしの作品はどうも、失敗作が多い」

困ったように言う現であるが、その表情は、保をからかうように、試すように、いやらしく微笑んでいる。その現の笑みを見て、保は強く、眉間に皺を寄せた。

「あなたにとって、命は軽すぎる」

保が険しい表情で、現を見つめる。

「命は、あなたの玩具じゃない。命は、あなたが、あなたのその単純な言葉で、次々と生み出していいものじゃない」

「単純な言葉？」

保のその言葉に、現が眉尻を引きつる。

「神を相手に、失礼な発言をするもんじゃのお」

「あなたはもう、尊き神ではありません」

突き刺すような、鋭い視線を向ける現にも負けず、保がはっきりと言い放つ。

「だから、今日、ここで終わらせます」

保が鋭い表情を見せ、糸の巻きついた両手を、構えるように左右に広げる。

「あなたの言葉も、意味なく生み出され続けた命も、すべて！」

強く声を張り上げ、保が堂々と宣言するように、言葉を発する。

「……愚かな口を」

保のその発言が気に喰わなかったのか、表情を歪ませ、吐き捨てるように言葉を落とす現。

「良からう。世界のすべての言葉を止める前に、その口、塞いでやるわ」

そう言って、現が右手の杖を振り上げる。保は警戒を強め、どんな攻撃にも対応できるよう身構え、ごくりと息を吞んだ。杖を振り上げた現が、大きく口を開く。

「生まれろ」！

現の口から放たれる、何度も口にされてきた、その言葉。言葉と共に、現の杖の先端についている金色の言玉から光が放たれると、保の周囲、四方向に、金色の光から噴き上がるように、黒い影の塊が形成されていく。

「こ、これは……！」

周囲に生まれ始める黒い影を見回し、険しい表情を見せる保。その影は、先程、城から湧き出てきたものたちよりも一回りほど大きく、形もより、人間に近い。顔と思われる部分に、目を思わせる、赤い二つの輝き。生まれ出る影に、保はまた眉間に皺を寄せ、睨みつけるように現を見た。

「あなたは……！」

「フハハハ！お主など、わしがわざわざ、相手してやるまでもないわ！」

高らかと笑い声を響かせ、現がさらに上空へと舞い上がっていく。現は初めから、保とまともにやり合う気などなかったのだ。それを知り、保が悔しげに、唇を噛み締める。

『グワアアア！』

「ク…！」

迫り来る四体の影に、戦わないわけにもいかず、保は険しい表情を見せながら、糸の巻きついた両手を振り上げようとした。

「“凹め” ええ！」

「え？」

その時、保へ向かって来ようとしていた黒い影の一体が、何かに吹き飛ばされ、勢いよく屋上の地面へと叩き落される。保が振り上げようとした手を止め、目を丸くし、戸惑いの声を漏らす。

「“浸せ”」

「“葬れ”…」

「“踏みつぶし” ちゃえ！私のトラトラ子！」

保が戸惑ったままの中、新たな言葉が響き、保の周りにいた黒い影が、噴き上げた水に、強い白光に、咆える金色の虎に圧倒され、屋上へと落ちていく。

「な、何じゃ…？」

その光景に、現も思わず、焦りを見せる。

「へへへ！大人しく、自分で戦えってことじゃん！ジイさん！」

「何？」

下方から響く声に、現がすぐさま視線を落とす。

「あんたの“生み出し” 芸当は、もう飽きたってこと。ヒヒッ」

「同じような黒い影ばかり…見飽きるよね、ホホホ…」

「ホントお。私のトラトラ子みたいに、もう少し個性あるもの、生み出せないのって感じい？ウフフ」

「あ…！」

屋上の上に見えるその人影たちに、保が驚いた様子で、大きく目を見開く。

「あなたたちは…！」

「久し振りじゃん？灰示様の相方」

「相方じゃない。灰示様があの者を、媒体としているだけだよ」

「不二子の灰示様は、元気でしょうねえ？」

そこに現れたのは、かつて灰示と共にアヒルたちに敵対した、五十音士八行の四人、比守のヒロト、不守の不二子、部守の兵吾、保守の蛍の四人であった。

「あなたたちがどうして、ここに…」

保が屋上へと下降していきながら、集まった四人へと問いかける。

「言姫に召集されたんじゃないん」

「処罰を食らった言姫に、大人しく協力するのも癪だから、とりあえず近くで待機してたんだけどね」

ヒロトが兵吾の言葉を補いながら、皆の代表となって、保へと言葉を送る。

「灰示様があの男を倒すためにはなら、協力してもいいかと思ってさ」
現を鋭く睨みつけた後、ヒロトが得意げな笑みを、保へと向ける。
そのヒロトの視線を受け、保は嬉しそうに笑みを零した。

『グアアアア…』

先程、四人が屋上の地面へと叩き落とした黒い影が、ゆっくりと立ち上がり、またしても、保やヒロトたちの方へと迫って来る。それを見て、ヒロトは鋭く目を細めた。

「ここは、僕らが任されてあげるから、君は上へ」

ヒロトの言葉に、迷うことなく、しっかりと頷く保。

「ありがとうございます、皆さん」

「べっつに、あんたのためにやってるんじゃないわあ。不二子の愛する灰示様のために、やってるだけ」

「はい。だから、ありがとうございます」

悪態づいた不二子であったが、灰示のために集まった皆を、自分のことのように喜ぶ保に、毒気も抜けるような気持ちとなり、不二子は呆れた様子で肩を落とした。

「灰示様の邪魔すんじゃないわよ」

「はい！」

不二子の言葉にしっかりと頷くと、保が飛び上がり、上空に浮かんだままの現の前へと、再び立つ。

「よくもまあ、次々と音士が集まるもんじゃのお」

感心するように言いながらも、現の表情は険しい。

「また生み出しますか？」

そんな現へ、保は鋭い視線を向ける。

「消えゆくだけの、意味なき命を」

静かな口調ではあるが、確かに現を責める、保の言葉。

「あそこまで言われては、さすがのわしでも怒りを覚えるんなあ」
自分のことを客観的に語りながら、現がゆっくりと右手を動かし、杖を握り直す。掲げる様子はなく、またしても何かを生み出そうとする動きではなかった。

「光栄に思うがいい」

短く言葉を落とし、現が不敵に笑う。

「わしが直々に、相手してやる」

そう言い放った現と相對し、保も真剣な表情で、構えを取った。

Word 75 最後ノ戦イへ (1)

永遠の居城、内部。

「よっ」

保と話していたため、皆より遅れていたアヒルが、やっと屋上の入口を通り、城の内部へと侵入する。すでに他の仲間たちは城に入っており、扉のすぐ前にある階段の踊り場で皆、アヒルを待っていた。

「悪い、遅れた」

「転校生くんは…?」

微笑みかけるアヒルに対し、囁が少し眉をひそめ、問いかける。囁のその問いに、アヒルはそっと視線を落とし、またすぐにそれを上げた。

「保は、来ない」

アヒルの言葉に、皆が表情を厳しくし、踊り場が静まり返る。

「大丈夫なのか?」

少し不安げな表情を見せ、籠也がアヒルへと問いかける。相手は、あの浮世現である。皆で束になって戦っても、勝てるかもわからない敵を、保一人に任せることは、誰しも不安であった。だがアヒルは、そんな籠也へと、笑みを向ける。

「大丈夫だ」

迷いのない笑みと言葉を、籠也へと向けるアヒル。

「俺は、保を信じる」

まっすぐに通るその言葉に、険しかった皆の表情が、ほんの少しだけ緩む。

「ならば、僕はあなたのその言葉を信じる」

いつものように、忠義に溢れた返事をする籠也。

「そして、僕等の仲間の力も」

付け加えられた籠也の言葉に、驚いたように、アヒルが目を丸く

する。箆也がアヒルを信じるといった発言をするのはいつものことであったが、保を仲間と呼び、そして、信じると言ったのは、これが初めてであった。驚いていたアヒルだが、すぐに、笑みを零す。

「ああ」

笑って頷くアヒルにつられるように、笑みを浮かべる囁と七架。

城内部へと侵入し、張り詰めていた緊張感は、そこで少し和らいだ。「少しの時間も無駄に出来ない」

和らいだ空気を再び引き締めるように、恵がアヒルたちへと、鋭く声を掛ける。

「外では皆、戦っている。急ぐぞ」

「ああ」

恵の言葉にアヒルがしっかりと頷くと、アヒルたちは、城の奥へと進むべく、目の前の階段を駆け降りていった。

永遠の居城、正面部。

「おっしゃあ！“築^{きず}け”！」

気合い十分に金八が言葉を発すると、周囲から四方に水壁が突き上がり、以^{いた}団と戦^{いくさ}闘中の黒い影の軍団の大部分を、一気に取り囲む。すると素早く、シャコが金八の前へと飛び出し、言玉を持った右手を突き出した。

「沈^{しず}め”…」

金八の築いた水壁の中で、シャコがさらに水を浸透させ、黒い影たちをあつという間に呑み込んでいく。

「“千切^{ちぎ}れる”！」

「やれやれやっちゃえ、“仁王^{におう}”！」

チラシとニギリも、それぞれの言葉を使い、影達と応戦する。

「い…」

皆の後方から、イクラがゆつくりと、自身の文字を口にする。

「祈^{いの}れ」

美しい女性の水像が、被さるように倒れ込み、攻め立てる影達を呑み込んだ。

永遠の居城、正面左方向部。

「行きますわよ、徹子」

「ええ、誠子お姉さま」

同じ顔で頷き合った、白と黒、色違いのドレスを纏った誠子と徹子の双子が、それぞれ、左手と右手に、自身の緑色の言玉を吸収させる。誠子の右手が、徹子の左手が、強い緑色の光を発する。

「正拳^{せいけん}」！

「鉄拳^{てっけん}」！

二人は息の合った動きで、輝く拳を繰り出し、迫り来る黒い影を粉碎した。

「粘^{ねば}れ」…

着物姿の少女、音音^{ねね}は、粘着力のある緑色の光を地面に張り巡らし、向かってくる影達の動きを、人知れず止めている。

「蹴散^{けち}らせ」！

音音の止めた影達の中央へと飛び込んでいき、短くなった髪を飛ばして、影を倒していく慧。

「扶^{えぐ}れ」！

エリザが輝く右足を振り切り、他の者たちとは比べものにならないほど多くの影を、一気に掻き消していく。影の猛攻が落ち着くと、エリザが顔を上げ、居城を見つめる。

「アヒル…」

エリザは、どこか不安げに眉をひそめた。

永遠の居城、正面右方向部。

「変格、“蒼穹”！」

「変格、“紺碧”！」

黒い影の一団と交戦を続ける於団を主とする音士たちから、紺平と空音が飛び出していき、それぞれ、自身の変格の言葉を発する。二人の言玉から放たれた白い光が、それぞれ空と地面を覆い、真っ白な空間を作りあげる。

「“注げ”！」

「“凍れ”！」

白い空から水滴のような光が降り注ぎ、白い地面から鋭い氷が突き上げて、向かって来ていた影たちを一気に掻き消していく。

「“向かえ”！」

「“満ちれ”！」

「“舞え”！」

和音の命により、於団の救援にやって来た六騎、雅、守の三人も、それぞれの言葉を使い、影を次々と倒していく。

「皆サン、頑張ッテ下サァーイ！」

「だから、お前は何の為に来たんだよ！」

皆の後方で、ひたすら声援を送っているライアンに、守が思わず怒鳴り声をあげる。

「神！」

「檻也くん！」

紺平と空音に呼びかけられ、檻也が言玉を持った右手を突き上げる。

「“落ちろ”」

檻也の言葉により、豪雨のように、白い光の粒が、辺り一面に降り注いだ。

永遠の居城、前面空中。

「弓象、“行け”！」

「パオオオン！」

黄金の象に乗った弓が、その象を勢いよく前進させ、取りつく影達を一気に振り切る。

「抑圧」

圧縮させた光で、黒い影を次々と押し潰していく鎧。

「焼き払え」！

二人のさらに上方で、刃が勢いよく大剣を振り下ろした。

永遠の居城、終獣付近。

「グアアアア！」

激しくおたけびをあげ、終獣が大きな口から、金色の光玉をいくつも放つ。

「抜ける」！

塗壁が言葉を口にする、塗壁の言玉、ゴリ男が、次々と光玉を蹴散らし、終獣へと向かっていったスズメ、ツバメ、熊子の道を開く。塗壁により攻撃を防いだ三人が、それぞれの言玉の変化した動物を、終獣へと向ける。

「朽ちろ」

「進め」！

「貫け」！

おクマ、チュン吉、スワ郎の三匹が、三人の言葉に乗り、終獣へと立ち向かった。

永遠の居城、屋上。

「ホホホ…“吠えろ”…」

「へへへ！“滅らせ”ええ！」

現の生み出した新たな生物を、保の代わりに相手することになっ

たハ行の音士、蚩と兵吾が、それぞれの言葉を使い、相手を圧倒する。

「ヒヒ、ひるがえ“翻せ”」

素早く言葉を落とし、勢いよく突進してくる黒い影から、身をかわすヒロト。

「ウフフ!“踏み潰し” ちゃえ！私のトラトラ子！」

楽しげに微笑みながら、鋭く言葉を発し、不二子が金色のトラを、黒い影へと向かわせる。トラの鋭い爪が影へと突き刺さり、影が激しい悲鳴をあげる。

「さすがよお、私の可愛いトラトラ子」

見事な攻撃を決めたトラを誉めながら、不二子が視線を移し、屋上の真上を見つめる。

「灰示様……」

自信に満ち溢れた不二子の表情が、少しだけ、不安げに曇った。

永遠の居城、屋上のさらに上空。

「光栄に思うがいい。音士の小僧よ」

得意げな笑みを浮かべ、現うつろが正面に立つ保を、鋭く見つめる。

「何せおぬしは、この世でもっとも偉大な神の言葉を受け、散るところが出来るのじゃからなあ」

現の言葉に、保が目を細め、厳しい表情を、さらに厳しく変える。

「行こうか、灰示」

もう一人の自分に呼びかけ、保は、糸の絡みついた右拳を、強く握り締める。

「たけ“猛ろ”！」

「うば“奪え”！」

力強い二人の言葉が、同時にその場から飛び出した。

永遠の居城、近くの公園。

「アヒルたちは、無事、城内に侵入することが出来たでしょうか…」
息子の身を案じるように、胸の前で両手を組み、まっすぐに城を見つめる茜。そんな茜のすぐ隣で、ウズラも厳しい表情を見せ、アヒルたちの向かった城を見つめる。

「グアアアア！」

「あ…！」

城を見守る二人のもとへと、飛び出してくる一匹の黒い影。

「あの影が、ここまで…！」

「ク…！」

焦ったように叫ぶ茜を背に押し込みながらも、今は言葉も持たないウズラが、険しい表情を見せる。

「“分^わかて”」

「ギャアアア！」

『え？』

黒い影がまさにウズラたちへと襲いかかろうとしたその時、二人と黒い影の間に、赤い光の膜のようなものが現れ、その膜に触れた瞬間、黒い影が激しい叫び声をあげ、消えていく。目の前で起こったその光景に、ウズラと茜が、戸惑いの表情を見せる。よく見れば、赤い光の膜が、まるで二人を守るように、二人の周囲を包み込んでいた。

「今の言葉は…」

「和音ちゃん」

誰の言葉かすぐに理解した様子で、ウズラが後方を振り返り、和音を見つめる。和音の右手には、和音の言玉の解放された姿である、真っ赤な手鏡が握られていた。

「あなた方、お二人は、わたくしが言姫の名にかけて、必ずお守りいたします」

和音がまっすぐに二人を見つめ、決意のこもった表情を見せる。

「あなた方は、安の神の“帰ってくる場所”です」
和音のその言葉に、自身の存在の重みを噛み締めるように、ウズラと茜は、真剣な表情を見せた。

永遠の居城、四階部分。桃雪、自室。

「素晴らしい」

真っ白な何もない壁に映し出された、居城付近のいくつもの映像を目にし、桃雪が満足げな笑みを浮かべる。壁には、城の正面や前面、屋上で戦う、五十音士たち、そして、城内部へと侵入したアヒルたちの姿が映し出されている。

「素晴らしいですよ、本当に」

「桃雪様？」

桃雪の言葉に戸惑うように、すぐ前で膝をついている短い赤毛の少女、十稀トキが、首を傾ける。

「あ、い、う、え、お…」

五十音の最初の五文字を繰り返し、桃雪がアヒルから始まり、イクラ、エリザ、檻也、この場に居る神の姿を次々と確認する。

「かきくけこ、さしすせそ…」

次々と五十音を口にし、その文字を持つ音士の姿を確認していく桃雪。

「わ、あ、う、ゑ…」

四十五音までの音士を確認し、最後に、和音、為介、ウズラ、恵の姿を確認し、桃雪がゆっくりと、その視線を上げていく。

「“を”…」

まるでその文字だけは特別であるかのように、桃雪が大事そうに、重たそうに、その文字を口にする。

「今、この場に、五十音、それぞれの文字を持つ音士がすべて、揃いました」

画面から、十稀と、青い長髪の少女、埜^{のあ}亜の方をゆっくりと振り返る桃雪。振り向いた桃雪は、とても楽しげな笑みを浮かべており、その声は、どこか弾んでいるようにも感じられた。

「韻本部であっても、こんなことはありませんでした。未だかつてない、音士の集結：実に素晴らしい」

桃雪がもう一度、強調するように、言葉を発する。

「言葉の終焉には相応しい」

再び映し出された映像へと視線を戻し、桃雪がさらに、口角を吊り上げる。

「城に数名の侵入者が現れたようです。十稀、埜^{のあ}亜、対処を」
『はい』

桃雪の命令に、二人が深々と頭を下げる。

「すべては我が神」

「永遠様の為に」

決まりきったことのように言葉を残して、十稀と埜^{のあ}亜は一瞬にして、部屋から姿を消した。その場に桃雪だけが残り、静かな空間が訪れる。

「さあ、五十音士、全員で祝おうではありませんか」

桃雪がゆっくりと両手を広げ、また、笑う。

「我々の愛した言葉の終わる、その瞬間を」

永遠の居城、最上階。永遠、自室。

「……聞こえる」

部屋の中央に置かれた、大きな寝台の上に寝転び、深く瞳を閉じていた永遠が、ゆっくりとその瞳を開く。永遠が虚ろな瞳を開くと、前方の、天井に設置された鏡には、寝むたそうな自身の姿が映った。

「聞こえる：たくさんの、言葉……」

ゆっくりとした口調で、永遠が言葉を呟く。城の外で飛び交う、いくつもの五十音士たちの言葉が、耳に届いたのだろうか。寝台の

上に転がせていた右手を、そっと耳に当てる。

「さあ、終わりにしよう…」

永遠が左手を支えに、寝台の上で、ゆっくりと起き上がる。

「一つ、残らず…」

冷たい微笑みが、言葉と共に、静かに部屋の中へと落ちた。

屋上からの長い階段を降りると、だだっ広い空間へと辿り着いた。空間の奥に、繭の張っていた跡があるところを見ると、恐らくは、終獣を生み出していた部屋なのだろう。だが今は、誰の姿もなく、閑散としている。途中、階段の側に設置されていた窓から見た景色からして、城の一階部分まで、一気に下ってきたようである。屋上から直接、一階以外の階に、行くことは出来ないのだろう。

「不気味なくらい、何も出なかったな」

「本当：外にあれだけ、黒い影が居るんだから、中でもたくさん、待ち構えてるものかと思ったけれど…」

空間の中央に立ち、少し肩透かしを食らったように、アヒルが言うと、囁が賛同するように頷いた。ここまでの道のりは、屋上の外とは違い、誰にも阻まれることなく、あっさりと来てしまったのである。

「恐らくは、この城自体を守るためでしょ」

「へ？」

為介の言葉に、アヒルが首を傾げながら、振り返る。

「この城は、屋上のあの生物を支える、大事な基盤。下手に戦わせて、基盤が崩れ落ちれば、その分、時間が無駄になる」

「成程な」

為介の言い分に納得するように、腕組みをした籠也が、深々と頷く。

「あそこに、左側に行く扉が見えますけど」

「あれは恐らく、別塔へ向かう連絡口だろう」

空間の左端を指差し、大きな扉があることを七架が伝えると、恵がすぐさま口を開いた。

「お前たちも外で見たから、知っていると思うが、この城は屋上のある右端の塔と、一番大きな中央の塔、そして、最も高い左塔で構

成されている」

恵が懷から、城の外観写真を取り出し、皆へと指し示して、城の造りを説明する。韻従者に準備させたのだろう。城のことを、よく調べてある。

「つてことは、今ここが、屋上のあるこの右端の塔だから、あの扉を通って、行けんのは…」

「ああ、この中央の塔だ」

アヒルの視線が、写真に写った中央の塔へと移ると、恵が大きく頷いた。

「塔が変わるということは、あちら側にとって、金獸さんの基盤を守るどころという、心配はなくなるということね…」

「ああ、何かを仕掛けてくる可能性が高い。十分に注意して行くんだ」

「おっしや、行くぜ！」

気合い十分の声をあげ、アヒルが先頭を切って、その場を駆け出し、空間にあるその連絡口へと入る。他の皆もアヒルに続き、屋根の取り付けられた、長い橋のような通路を急速に駆け抜けた。やがて、通路が終わり、広い部屋へと出る。

「着いた！」

視界が開けたところで、アヒルが立ち止まり、その場所を確認するべく、周囲を見回す。

「ここは…？」

恵たちも同じように、周りの確認をする。左側には連絡口よりもさらに大きな、天井まで続く扉があり、右側には、上へと続く、赤い絨毯の敷かれた、長い階段が見える。

「どうやらここは、正門を抜けた先、城の正面玄関のようだな」

「ようこそ、永遠様の居城へ」

『……！』

その場に響く、聞き慣れない女性の声に、皆が表情を陰しくし、一気に振り向く。上へと続く長い階段のその途中に、二人の少女の

姿が見えた。赤い短髪と、青い長髪の少女、十稀と埜亜である。

「お前たちは…！」

「五十音、第二十音“と”、解放」

「第二十五音“の”、解放…」

「え…？」

問いかける間もなく、懐から白い言玉を取り出し、文字の解放を行う十稀と埜亜。二人の解放するその文字に、囁が戸惑った表情を見せる。

「“飛ばせ”！」

「“残れ”…」

『う…！』

またしても問いかける間すら与えず、十稀と埜亜は、解放され、先程よりも強く輝く言玉を、アヒルたちへと向け、それぞれの言葉を放った。部屋全体を真っ白な光が包み込み、あまりの眩しさに、アヒルたちが目を細め、身を伏せる。

「ク、うう…」

やがて光が収まると、アヒルはゆっくりと目を開いた。そこは先程の部屋と何ら変わりなく、アヒルの体も、特に異常はない。

「今の言葉って、確か…」

「朝比奈くん！」

戸惑うように言葉を落としていたアヒルが、七架の焦ったその声に、慌てて振り向く。

「恵先生と井戸端さんが、居ない！」

「何…？」

七架の言葉に目を見開き、すぐさま周囲を見回すアヒル。周りを確認すると、箆也と囁の姿はあるが、確かに先程までそこに居たはずの恵と為介の姿が、どこにもなくなっていた。

「先生！扇子野郎！」

アヒルが広い部屋中を見回すが、二人の姿はやはりなかった。

「お前等…！」

何かを確信したように、アヒルが鋭い表情で十稀と埜亜の方を振り向くと、二人は何やら楽しげな様子で笑みを浮かべていた。この二人が恵たちに何かをしたことは、すでに明らかだった。

「お前等、恵先生たちに何をした!？」

「何をしたあゝ？」

アヒルの問いかけを繰り返した十稀が、少し表情をしかめる。

「今更、何言っちゃってんのお？ さっきの私の言葉、聞いてなかったわけ？」

「さっきの言葉？」

「飛ばせ」

首を傾げるアヒルの代わりに、答えるように、先程の十稀の言葉を発する籠也。

「言葉を使って、二人をどこかへ飛ばしたというわけか。そして僕等は、ここに“残した”」

埜亜の発した言葉を繰り返しながら、籠也が鋭く埜亜を見つめる。

「“と”と“の”の言葉：何故、あなたたちがその文字を：」

表情を曇らせた囁が、戸惑うように二人へと問いかける。二人の使った文字は、かつて、囁の仲間たちが使っていた、囁にとっても馴染みのある文字であった。

「私たちのこの文字は、桃雪様により“齎もたらされた”もの：」

「齎された？」

埜亜の答えに、アヒルがさらに眉をひそめる。

「桃雪様のその言葉は、今、音士の附いていない空席の文字を、自由とてつりあいのしつに第三者に与えることが可能なの：」

「“と”と“の”の文字は、轟とてつりあいのしつと罵が捕まってから、音士の後任がないから、空いていたのね：」

「そういうこと：」

感情を表に出すことなく、埜亜が静かに頷く。

「俺たちは残したって、どうして二人だけを飛ばした!？」

「ご指名が入ったからよお」

「指名？」

「そお」

首を傾げるアヒルに、十稀がゆっくりと頷く。

「指名の入った二人にはあ、この塔の左側にある塔まで、とつとと飛んでもらったわあ」

「左の塔まで？」

十稀の言葉を受け、アヒルが部屋の左側を見る。恵と為介は、やって来たばかりのこの塔にはすでにおらず、また別の塔へと移ってしまったということになる。先程と同じように、左の塔へと続く連絡口を探し、アヒルがまた、部屋を見回す。

「連絡通路は、この階には存在しないわ……」

アヒルが何を探しているのかをるように、埜亜がアヒルへと答えを向ける。

「左の塔へと続く連絡通路は、この塔の四階部分……この長い階段を上った先にある……」

埜亜が視線を動かし、階段の上方を見上げる。その視線につられるように、同じように、階段の先を見つめるアヒル。あまりはつきりとは見えないが、確かに四階くらいの高さのところで階段が終わり、部屋の入口のような場所へと続いていた。

「マズいぞ、神」

「へ？」

箆也がアヒルの傍へと寄り、険しい表情を見せる。

「指名されたのがあの二人ということは、指名したその者というのは……」

「永遠か」

箆也の言葉に促され、その名を口にしたアヒルが、厳しい表情を見せる。永遠にとって、恵と為介は特別な相手。だからこそ、二人が指名されたのだとすれば、永遠は左側の塔に居ることになる。

「二人を追いかけよう！」

アヒルの言葉に皆が頷き、その場を突破しようと、四人が長く続く階段へと足を掛ける。

「閉とざせ」

『な…!?!』

アヒルたちが連絡通路を目指し、階段を駆け上ろうとしたその時、十稀の口から言葉が放たれ、十稀と埜亜、二人の後方に白い光の壁が張り巡らされた。壁は天井まで突き上げ、階段のその向こうを、完全に塞いでしまう。塞がれた壁に、アヒルたちは思わず、足を止めた。

「残念だけれど、指名の入らなかったあなたたちはあ、左塔へと行くことは出来ないわあ」

「あなたたち四人は、この場で、私たちに倒されて終わる…」

「ク…!」

強気に言葉を投げかける十稀と埜亜に、アヒルは険しい表情で、唇を噛んだ。

「ん、ん…」

床にうつ伏せに倒れていた恵が、ゆっくりと目を開く。少し頭を押さえながら、恵はすぐに体を起こした。

「ここ、は…?」

そこは何もない、天井も床も壁も、ただ真っ白な部屋であった。無機質な空間は、気味悪く設計された部屋よりも、ある意味、不気味である。恵がその場に立ち上がり、部屋を見回す。その部屋には、恵以外の者の姿はなく、恵一人のようである。

「朝比奈たちは…」

「彼等はまだ、中央塔ですよ」

すぐ傍から聞こえてくるその声に、恵が大きく目を見開き、勢いよく振り返る。

「桃雪…！」

「ああ、ちなみに、ここは左塔です」

大きく名を呼ぶ恵に対し、突如、その場に現れた桃雪は、いたって平静に言葉が続ける。先程までこの場にいなかったはずの桃雪が、何故、この場に現れたのか。表情も感情も読めない桃雪には、最早、問いかけるだけ無駄であろう。

「左塔だと？そうか、さっきの小娘の言葉で…」

少し考え込むように俯いた恵が、すぐに状況を理解する。

「朝比奈たちは、どうした！？」

「安の神たちには、中央塔で、僕の駒と戦っていただいていますよ」

「駒ってのは、あの二人の小娘か」

「ええ」

あっさりと頷いた桃雪が、どこか冷たく笑う。

「何だって、私だけを左塔へ…」

「指名されたのは、あなただけではありませんよ」

「何？」

桃雪の言葉に、恵は眉をひそめる。だが、恵はすぐに、何かを察したように目を細めた。

「為介か」

「ええ、我が神から、左塔へ連れてくるよう指示を受けたのは、あなたと為^ゐの神のお二人」

桃雪が右手の指を二本突き立て、強調するように言う。

「あなた方お二人だけは、直接、我が神のもとへ飛ばすよう、命を受けました」

「え？」

その言葉を受け、恵が改めて、部屋の中を見回す。もう一度、部屋中を見るが、この部屋には、永遠の姿も為介の姿も見当たらなかった。

「ですが僕は、為の神だけを、我が神のもとへと飛ばした」

恵の疑問に答えるように、桃雪がさらに言葉が続ける。

「あなたは、我が神にとって、最も近い存在。ですが少々、近すぎる…」

冷静だった桃雪の表情が、わずかに曇る。

「今はすべての言葉を終わらせる、重要な時。なるべく、あなたとの接触は避けた方が良くと踏んで」

「私だけを、ここへ飛ばしたということか」

「はい」

先を読むように答えた恵に、桃雪が再び笑みを見せる。

「私なら、今のあいつを止められるとでも？随分と、買い被られたものだな」

恵が少し肩を落とし、厳しい表情を見せる。

「止められるのなら、二十数年前のあの時に…」

「止められるなどとは、思っていないですよ」

恵の言葉を、その言葉が終わる前に、あっさりと否定する桃雪。

「我が神を止められる者など、この世界には存在しない」

少し上方を見た桃雪が、どこか遠くを見つめるような視線を見せる。まるで自身の神である永遠が、誰も手に届かない、遠い存在であることを、示しているようであった。

「僕が、あなたと我が神の接触を避けた方がいいと踏んだのは、我が神を止められてしまうからではありません」

桃雪がまた視線を下ろし、恵を見る。

「我が神が、止まらなくなるからです」

それすら楽しむように、大きく笑みを浮かべる桃雪に、恵がさらに険しい表情となる。

「さあ、では、遊ぶとしましょうか。恵の神^あ」

戦いを始めるような桃雪の言葉に、恵がさらに警戒を強め、素早く緑色の言玉を取り出し、いつでも文字を解放できるよう、構えを取る。

「といっても、戦うのは僕ではありませんけれど」

「何？」

恵が眉をひそめる中、桃雪が自身の白い言玉を、右方へと突き出した。

「“模^もせ”」

桃雪の言葉が落とされると、桃雪の右方に、言玉から零れ落ちるように、大きな白い光の塊が生まれ、形を作っていく。恵が訝しげに見つめる中、その形は、徐々に人の形へと近付いていく。明らかになっていくその姿に、大きく目を見開く恵。

「な…！」

はつきりと見えるその人物に、目を見開いた恵が、思わず息を呑む。

「カ…」

声にならない声を、詰まる喉から、必死に押し出す恵。恵の目の前へと現れたのは、もう出会うはずがないと思っていた、恵にとって、とても大切な人物であった。

「久し振りですね」

水色の制服を纏った、爽やかな青年は、とても優しい笑顔を、恵へと向ける。

「先生」

「カモメ…」

久々に向けられるその笑顔に、恵はただ、戸惑いの表情を見せた。

Word. 75 最後ノ戦イへ (3)

中央塔一階、居城玄関部。

「閉ざせ」、か…」

十稀と埜亜の後方に広がった、真っ白な壁を見つめ、簞也が険しい表情を見せる。恵たちや永遠の居る左塔へと続く連絡口は、この階段を上がった先。だが、十稀の作り出した壁により、その道は、完全に塞がれてしまっていた。

「マズいな」

「先生と扇子野郎だけに、永遠と戦わせるわけにはいかねえぜ！簞也！」

「わかっている」

焦ったように叫ぶアヒルに、すぐさま返事をする簞也。簞也も内心は、アヒルと同じ程に焦りを感じていた。二人にとって、永遠の存在がどれほどに重いものかは、二十数年前の真実を聞いた皆、十分に承知していた。

「だが、あの壁は言葉の力により、生み出されたもの。あの者を倒さねば、恐らくは消えない」

「ウッフ、その通りいゝ」

十稀が、簞也の言葉を認めるように、楽しげに笑う。

「あなたたちは、ここで私たちと遊んでいくしか道がないってわけえ」

「そして、その間に我が神、永遠様が、先程の二名を消し、すべてを終わらせる…」

「クソ…！」

二人の言葉に、何も出来ないもどかしさを感じ、アヒルが悔しさを滲ませる。

「折角、ここまで来たのに、向き合うことも出来ねえなんて…！」

「朝比奈くん…」

焦った様子のアヒルを、七架が心配そうに見つめる。

「……………」

その七架のすぐ横で、何やら気難しい表情を見せ、考え込むような素振りを見せている囁。

「何とか突破の方法を…」

「籠也」

「ん？」

考えを巡らそうとした籠也が、囁に呼ばれ、戸惑った様子で振り向く。

「何だ、囁。今、僕は、この状況の打開策を考えて…」

「アヒルんを頼むわよ」

「何？」

急な囁の言葉に、籠也が戸惑うように眉をひそめる。

「一体、何を…」

「何が何でも、永遠のもとまで届けなさい。それが、神附きとしてのあなたの、最後の役目」

問いかけようとした籠也の言葉を遮り、囁が強く、籠也へと言い放つ。それは、強い指示のようにも聞こえたが、どこか、願いのようにも聞こえた。そんな、少し不自然な囁の様子に気付き、籠也がハッとした表情を見せる。

「囁、あなたは」

察した様子の籠也に、囁はそれ以上は何も言わず、微笑みだけを向ける。

「アヒルん」

「へ？」

焦りながら、頭を掻きむしっていたアヒルが、歩み寄って来る囁に名を呼ばれ、すぐに顔を上げる。

「今からあなたを、この階段の先に送るわ」

「え!？」

囁の言葉に驚き、アヒルが大きく目を見開く。

「んなこと、出来んのかよ!？」

「ええ、私の言葉を使えばね」

戸惑いながら問いかけるアヒルに、囁がそつと微笑みかける。

「出来れば、もう二度と、アヒルんには向けたくなかった言葉だけだ…」

「え？」

俯き、聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟く囁に、アヒルが眉をひそめる。あまり頭の回転の良くない方であるアヒルだが、その囁の言う言葉には、思い当たるものがあった。

「それって、もしかして…」

「でも、この状況だもの。四の五の言ってられないわよね…」
アヒルの言葉を遮るようにして、囁が顔を上げ、また微笑みかける。

「アヒルん」

囁が改めて、アヒルの名を呼び、アヒルをまっすぐに見つめる。

「同じ言葉であっても、あの日とは、あの時とは、全然違うから、それだけはわかっていて」

まるで願うように、続けられる囁の言葉。

「この言葉は、二度と会わないための挨拶じゃない。明日、また明日、笑って出会うための、挨拶だから…」

「囁…」

必死に想いを伝えようと、言葉を紡ぐ囁を、アヒルがまっすぐに見つめ返す。そしてアヒルは、ゆっくりと、大きく、温かな笑みを作った。

「ああ」

頷くアヒルを見て、囁もどこか、安心したように笑う。

「何かやる気ね、彼等…」

「そう簡単に逃がしてたまるかっていうのお」

動き出したアヒルたちの様子に気付き、眉をひそめる埜亜。十稀

も表情をしかめ、自身の言玉を、強く握り締める。

「折角、五十音士になれたのよお。いいところ見せて、桃雪様に新たな力、もらえるくらいのこと、しなくちゃ」

十稀が握り締めた言玉を、アヒルたちに向けて突き出す。

「来るな。急げ、囁」

「ええ…」

構えた十稀に気付き、箆也が囁を急かすように言う。

「七架、あなたも、アヒルたちと一緒に…」

「五十音、第二十一音“な”、解放！」

「七架？」

アヒル、箆也と共に、この場所を突破することを促そうとした囁であったが、七架は言玉を解放させ、目醒めた真っ赤な薙刀を構え、臨戦態勢を整えていた。そんな七架の様子に、囁が戸惑うように首を傾げる。

「私が、あの二人を引きつけるから、囁ちゃんはその間に、朝比奈くんと神月くんの脱出を」

「え…？」

七架の思いがけない発言に、険しい表情を見せる囁。囁の横で、アヒルも眉をひそめる。

「七架…？何を言って…」

「相手は、女の子二人だよ？私が残るのが、順当でしょう？」

「七架…」

明るく微笑みかける七架に、囁は困った表情を見せたまま、返答の言葉を詰まらせる。確かに相手は二人で、アヒルと箆也に残らせるわけにはいかない。今、この場に七架が残ってくれた方が、囁が助かることは明らかであった。

「けれど」

囁が七架のすぐ傍に駆け寄り、アヒルたちに聞こえないような小さな声を、七架へと向ける。

「それじゃあ、あなた、アヒルんと最後まで共に行けなくなるわよ」

…?」

「最後まで共に行くことだけが、仲間の役目じゃないもん」

アヒルの傍に居たいであろう、七架の想いを汲み、問いかける囁であったが、その問いかけにも、七架の気持ち揺らぐことはなかった。

「進めることだって、大事な役目。今までも、たくさんの皆がそうやって、私たちをここまで進めてくれた」

穏やかな笑みを浮かべ、七架がさらに言葉を続ける。

「だから今度は、私の番」

「七架…」

囁が目を細める中、七架がゆっくりと振り向き、まっすぐにアヒルを見つめる。

「いいよね？朝比奈くん」

問いかける七架を、アヒルはまっすぐに見つめ返す。

「奈々瀬がそう、決めたなら」

「ありがとう」

笑顔で答えるアヒルに、七架はとても嬉しそうに、表情を綻ばせた。

「ちょっとお、いつまで人のこと、そっちのけで会話してくれてんのよ！」

十稀の不満げな声が響き、皆が同時に、そちらを振り向く。

「もう、待ってやらないんだからあ！」

口を尖らせた十稀が、突き出した言玉を、強く輝かせ始める。

「来るぞ！」

「囁ちゃん、言葉を！」

焦った籠也の声に、真剣な表情を見せた七架が、囁へと言葉を促しながら、薙刀を構え、皆に背を向けて、十稀のもとへと駆けだしていく。

「“尖れ”^{とが}！」

アヒルたちに向け、無数の鋭い白光の塊を放つ十稀。

「“薙^なぎ払え”！」

皆の前へと飛び出した七架が、大きく薙刀を振るい、やって来る白光を、一つ残らず払い落とす。

「今の内だ、囁！」

「ええ…」

アヒルの言葉に頷きながら、囁が素早く、ポケットから言玉を取り出す。

「五十音、第十一音“さ”、解放…」

囁が言玉を解放させ、真っ赤な横笛を構える。

「我らが神を頼んだわよ、箆也」

「無論だ」

迷うことなく答える箆也に、囁が安心したように笑い、横笛を口へと当てる。七架たちの戦う音が響く中、それすらも掻き消すように、美しい、笛の音が響いた。

「じゃあ、アヒるん」

「ああ、頼む」

「さ…」

笛から口を離れた囁が、まっすぐにアヒルを見つめる。

「“さようなら”…」

囁がまっすぐにアヒルを見つめ、その言葉を発する。だがその表情は笑顔で、晴れやかなものであった。赤い光に包まれていく中、アヒルも囁に應えるように、大きく微笑む。

「死ぬなよ、囁、奈々瀬」

赤い光の中でアヒルが、まるで願うように言う。その言葉に、十稀と戦闘を繰り返していた七架が振り返り、どこか泣き出しそうな笑みを見せた。

「朝比奈くん！」

七架が大きく身を乗り出し、必死にアヒルへと呼びかける。

「“また明日”！」

七架のその言葉に、アヒルは真っ赤な光の中で、そっと微笑んだ。

「ああ」

アヒルが大きく頷き、また笑う。

「“また明日”！」

その言葉を最後に、アヒルと箆也を包む光が、より一層輝きを増し、その光が辺り全体を包み込んだ次の瞬間には、二人の姿はそこにはなかった。

「ふう…」

横笛を下ろした囁が、ホツとした様子で肩を落とす。

「どうやら、上手くいったようね…」

「ああゝあ」

安心した様子の囁とは対照的に、どこかがっかりしたような、残念そうな十稀の声が響き渡る。

「埜亜あゝ、逃げられちゃったあ」

「あなたがチンタラしているから…」

「何よお？ 私だけが悪いっていうのお！？」

呆れたような物言いをする埜亜に、十稀は不満げに声を荒げる。

「逃げられてしまったものは、仕方ないわ…」

埜亜が一転して、十稀を責めることをやめ、諦めたように言い切る。

「獲物を一人や二人、逃したくらいで、怒り狂われるほど、永遠様も桃雪様も、心の狭い方ではない…」

感情の読めない、その虚ろな視線を、囁と七架へと、向ける埜亜。「今、目の前に居る敵を消せば、お二人は十分に、我々を評価して下さるはず…」

「それもそうねえ」

埜亜の言葉に笑みを見せ、十稀もまた、二人を見つめる。

「囁ちゃん」

七架が後方へと飛びさがり、十稀たちと距離を取って、囁のすぐ横へと並ぶ。

「あっちはどうやら、アヒるんたちを諦めて、私と遊んでくれる気

みたいね…」

「うん、良かった」

囁の言葉に、七架が笑顔を見せる。

「これで後は、勝つだけだね」

「フフフ：強気な言葉ね」

はつきりと言い放つ七架に、囁が思わず笑い声を零す。

「けれど、あなたのそういうところ、好きよ。七架」

「ありがとう」

囁のその言葉に、七架が素直に嬉しそうに、笑う。

「さあ、じゃあ行きましょうか」

囁が表情を引き締め、再び横笛を構える。

「私たちの、最後の戦いよ」

「うん！」

しっかりと頷き合い、囁と七架は、十稀と埜亜の二人に向き合った。

「痛つつつ…」

着地の時に打ちつけた背中を押さえながら、アヒルがゆっくりと起き上がる。

「ここは？」

「中央塔、四階部のようだな」

戸惑うように周囲を見回そうとしたアヒルであったが、見回す前に返って来る答えに、視線を止める。答えは、アヒルのすぐ傍で立つ、箆也の口から放たれたものであった。

「四階部って、なんで、なんとこまで、わかんだよ？」

「あれだ」

箆也に促され、アヒルが左方を振り向く。

「あ…！」

箆也の指し示したその先には、左塔へと続く連絡通路があった。

どうやら無事に、十稀により閉ざされた空間を抜け、連絡通路のある四階まで、やって来れたようである。

「ばっちりだな。さっすが囁」

嬉しそうに笑みを浮かべながら、アヒルがその場で立ち上がる。

「皆の言葉が、作ってくれた道だ」

箆也が真剣な表情を見せ、まっすぐに連絡通路を見つめる。

「絶対に、無駄には出来ない」

「ああ」

箆也の言葉を十分に理解している様子で、アヒルも引き締まった表情で、深々と頷く。

「行こう、箆也」

「仰せのままに、我が神」

決意を新たに、アヒルと箆也は、左塔へと続く連絡通路を駆け抜けていった。

Word 75 最後ノ戦イヘ (4)

「景色からすると、結構上の階に来ちゃったっぽいなあ」

真っ赤な絨毯の敷き詰められた、長い廊下を歩きながら、為介が廊下の窓から、景色を見つめる。地面は、遙か下方にかすかに見えるだけだ。先程まで、為介の居たはずの一階とは、到底思えない。相当に上の階へと、一気に飛ばされてきてしまったようである。

「さっきの赤毛の子の言葉かあ。同じ塔の上階か、それとも」

考えを巡らせていた為介が、ふと、その場で足を止める。止めたのではなく、止めざるを得なかったという方が正しいだろう。長い廊下は終わり、為介の目の前には、この豪華な廊下とは不釣り合いな、簡素な木製の扉があった。

「畏かな」

導かれるようにしてやって来たその扉を見つめ、為介が少し、その状況を楽しむように、笑みを浮かべる。

「まあ、畏であったとしても、引き返す道なんてないけど」

どこか諦めるように肩を落とすと、為介は迷いなく扉へと手をかけ、勢いよく、その扉を開いた。木製の扉と、金具が擦れるような音が響き、ゆっくりと扉が開いていく。扉のその先に広がっていたのは、巨大な一つの部屋であった。天井は鏡張りにされており、その広い部屋の中央には、部屋の大きさには釣り合わないが、十分に大きな寝台が一つ、置かれている。その寝台の上に見える人影に、為介はそっと目を細めた。その寝台の上の人物も、入って来た為介に気付いた様子で、ゆっくりと振り返る。

「やあ、為介」

呼び慣れた様子で為介の名を口にし、そっと笑みを浮かべる永遠。

「年を、取ったね…」

「……………」

もう何度も向けられてきたその言葉に、為介がさらに目を細め、

厳しい表情を見せる。

「遠久さん……」

為介が少し戸惑いながらも、ゆっくりと、永遠の本当の名を口にする。為介を神試験に合格させ、神への道を開いてくれた神。出会った二十数年前のあの頃から、永遠のその姿は、何ら変わっていない。

「あなたが、ボクをここへ？」

「うん、桃雪に頼んでね」

寝台の上に座ったまま、永遠が微笑んで答える。

「本当は恵も呼んでただけ、桃雪が、それを許可してくれなかったみたい」

永遠が、すべてを見透かすように話す。

「そう……ボくら、二人をここへ……」

「聞かないの？」

為介をまっすぐに見つめ、永遠がまるで、試すように問いかける。

「何故……」

「……わかりきってることを、質問するほど、馬鹿じゃないよ」

厳しい表情を見せたまま、為介が、かつては見つめることすら億劫であった永遠の姿を、まっすぐに見つめる。変わらぬ姿、終わらぬ時、為介が原因となって作り出した、永遠。

「満足……？」

永遠を見つめたまま、為介が短く問いかける。

「何の関係もない人たちの言葉を止めて、明日を奪って、満足なんですか？ あなたは」

責めるような為介の口調にも、永遠は動じる様子を見せなかった。

「満足じゃないよ」

永遠は迷うことなく、ごく自然と答える。

「だってまだ、君たちの言葉が残ってる」

為介を見つめる永遠の瞳が、鋭く変わる。

「だってまだ、君たちの“明日”が終わってない」

鋭い瞳が、見つめ合っているだけだというのに、ただ痛く感じた。
「だから、俺はまだ全然、満ち足りてないよ。為介」

永遠のその言葉を受け、為介は一瞬、表情をしかめた後、何やら考えるように深く瞳を閉じ、そっと顔を俯けた。少しの間をあげ、為介がまた瞳を開く。

「どうして、ですか…？」

顔を俯けたまま、また言葉を落とす為介。

「どうして、こんなこと…」

「随分と今更な問いかけだね、為介」

永遠がそっと微笑み、少し天井を見上げ、鏡に映った自身の姿を見つめる。

「君には、初めに言ったじゃないか。そう、俺が初めて、人から言葉を奪った二十数年も前の頃に」

自身の姿を見つめたまま、永遠が懐かしむように、目を細める。

「俺には、“明日”がない。でも、君たちには“明日”がある。だから、君たちから“明日”を奪う」

すらすらと言葉を放ち、永遠がまた、為介を見つめる。

「これで、“対等”だ」

永遠が視線を戻すと、顔を上げた為介と、再び視線が合った。

「対等、ですか…」

「うん」

その言葉を繰り返す為介に、永遠がそっと頷きかける。

「奪うことでしか、対等になり得ないんですかねえ…」

「なら、君が与えてくれるの？」

困ったように頭を掻く為介に対し、永遠がすかさず問いかけを向ける。

「俺に、“明日”を」

強調されるその言葉に、眉をひそめる為介。

「俺から“明日”を奪った、君が」

「……そうですね」

永遠の言葉を認めるように、為介がそつと頷く。

「あなたの“明日”がなくなった原因は、あなたの時を、“永遠”としたすべての原因は、ボクにある」

———遠久、さん……？———

———為介、逃げて……———

神となり、愚かな振る舞いをした為介は、他の音士から疎まれ、罫に嵌められた。そして、そんな為介を助けようとして、遠久は大きな傷を負い、時を“永遠”にすることでしか、生き残れなかったのである。

「だから、あなたがボクから“明日”を奪うことで、ボクと対等になるというのなら、ボクはそれを、受け入れる」

「へえ」

為介の言葉に、感心したような声を漏らす永遠。

「随分と潔いんだね」

「けれど」

「え？」

さらに付け加えられる言葉に、寝台の上の永遠が、少し首を傾げた。

「何の関係もない人たちの“明日”を、二十数年前は生まれてもいなかったような子たちの“明日”を奪うことは、対等でも何でもない」

顔を上げた為介が、まっすぐ睨みつけるように、強く永遠を見る。

「ただの、暴虐だ」

為介の鋭いその言葉に、ずっと浮かべられていた永遠の笑みが、そつと止まる。

「暴虐、か……」

その言葉を繰り返し、永遠が少し目を細める。

「ボクも、どんなに腐っていたとしても、一度は“神”の名を名乗

った者……」

為介が右手の扇子を握り直し、その姿を、青い言玉の姿へと変えさせる。

「だから、神の暴虐を認めはしません」

「……ふうん」

言玉を握り締めた為介を見つめ、永遠が、あまり興味のなさそうな声を漏らす。

「つまり、俺を倒すってこと？」

「はい」

「そう」

あっさりと言った永遠が、その口元を緩める。

「くだらない行為だね。でもいいよ、為介」

微笑んだ永遠が、寝台の下に広がる床へと足をつけ、やっこのことで、寝台の上から立ち上がる。

「神としての君を始めたのは、俺」

やっと為介と向き合った永遠が、どこか楽しげに笑う。

「だから俺が、神としての君を終わらせてあげるよ」

永遠が両手を広げ、楽しげに笑う。為介はそんな永遠を見つめたまま、自身の言玉を握る手に、力をこめた。

「五十音、第四十七音……」

じっくりと言葉を溜め、為介が右手の中の言玉を輝かせていく。

「“ゐ”、解放」

為介の右手の中で、強く輝く青い光を見つめ、永遠はさらに楽しげに、口角を吊り上げた。

「……っ」

何かを感じた様子で、ふと顔を上げた雅が、視線を移し、正面にそびえ立つ永遠の居城を見つめる。

「“廻^{まわ}せ”！」

『ギャアアア！』

「あ…」

その時、大きく言葉が響き渡り、激しい叫び声が響き渡った。城に目を向けていた雅へと、向かってきていた黒い影たちが、掻き消されたようである。

「なあゝに、余所見してんだよ！雅！」

少し怒るように言いながら、雅のすぐ前へと現れたのは、両手に真つ赤な円月輪を構えた、守であった。どうやら守が言葉を放ち、雅を助けてくれたようである。

「敵さんはまだまだ、わんさかなんだ。油断してたら、すぐヤラれちまうぞお」

「すみません」

あつさりと自分の非を認め、謝罪する雅。確かにここは、気を抜いていい場所ではない。守の主張が、十分に正しかった。

「末^{まもり}守さん」

「んあ？何だよ？」

「先程、もしか、“雅”とか呼びました？」

「あ？」

雅の問いかけに目を丸くした守が、自分の発言を思い出すように、大きく首を傾げる。

「あああゝ、呼んだな。呼んだ呼んだ」

「不快です。金輪際、二度と呼ばないで下さい」

「何でだよ！失礼過ぎるだろうが！」

冷たく言い放つ雅に対し、守が勢いよく怒鳴りあげる。

「ほら、また敵が来ますよ。僕を怒鳴っている暇があるなら、とつと倒しちゃって下さい」

「クソー！お前なんか、嫌いだあー！」

自棄になったような叫び声をあげながら、守は再び、黒い影の集団の中へと駆け込んでいった。雅もまた戦うべく、自身の言玉を強

く握り締める。

「確かに、余所見している場合ではありませんね。こんなことでは、我が神に緩く文句を言われてしまう」

自分自身に言い聞かせるように、言葉を放って、雅がその表情を鋭くする。

「今はただ、目の前の敵を倒すことだけを考えなくては…！」
力強くそう叫んで、雅もまた、黒い影たちの中へと、飛びこんでいった。

その頃、囁の言葉により、十稀たちの手から逃れたアヒルと箆也は、中央塔からの連絡通路を抜け出ていた。

「ここが左塔か!？」

細長い通路から、開けた空間へと出ると、アヒルが足を止め、周囲を見回す。そこは、天井も壁も床も真っ白な、どこまでも広がる、巨大な部屋であった。

「そのはずだが…」

「その通りですよ」

聞こえてくるもう一つの声に、アヒルと箆也が、素早く振り向く。

「ここは左塔、四階部です」

「桃雪…!!」

真っ白な空間の中に、一際目立つ、鮮やかな桃色の髪。広い空間の中央に立っているのは、何度かの対峙で、もう見慣れてきた、桃雪の姿であった。

「随分と早い到着でしたね、安の神」

桃雪が本心の見えない、穏やかな笑みを、アヒルへと向ける。

「まあ別に、急ごしらえで作った駒で、完全に止められるとは思っていませんでしたけれど」

「駒?」

「こちらの話ですよ」

眉をひそめるアヒルに、桃雪は誤魔化すように笑う。

「我々より先に、恵先生と何でも屋が来たはずだが？」

「ああ」

アヒルの隣から、一步前へと踏み出した籠也が、桃雪へと鋭い言葉を向ける。その問いかけに、桃雪は軽い調子で頷いた。

「為の神ならもっと上です。そして恵の神は、そこ」

「そこ？」

桃雪の言葉に戸惑いながら、アヒルが、桃雪の指差す方向を振り向く。桃雪の指の先、広い空間の奥に、大きな白光の塊のようなものが見えた。中で何かが行われているのか、白い光は、時々、大きく蠢いている。

「あの中に、恵先生が？」

「ええ。今、あなたのお兄さんと、戦っていたみたいです」

「え？」

桃雪のその言葉に、アヒルの表情が変わる。

「恵先生がカー兄と？ど、どういことだよ！？」

少し慌てた様子で、桃雪に向かい、身を乗り出すアヒル。

「言葉の通りですよ。あなたもかつて、戦ったでしょう？」

焦るアヒルを嘲るように、桃雪が、さらに冷たく微笑む。

「僕の中で、あなたのお兄さんと」

「え……？」

桃雪の言葉に、戸惑いの声を発するアヒル。

「あ……」

——アークくんが言ったんだよ？ “居なくなれ” って……——

アヒルの脳裏に過ぎったのは、桃雪に取り憑いていたとされる^シ忌の一人、桃真^{トウマ}が作り出した幻惑の中で出会った、アヒルを憎む、カモメの姿であった。

「まさか、あの時のカー兄を、恵先生にも…!?!」

「ええ、そうです」

「何てことをっ…」

あっさりと頷く桃雪に、アヒルが唇を震わせる。

「恵先生…!」

「待て、神!」

恵の居るという、白い光の塊へと、駆け寄って行こうとしたアヒルを、力強く止めたのは、簞也の大きな声であった。

「何だよ、簞也!このままじゃ、恵先生が…!」

「外から下手に攻撃をすれば、中に居る者の精神そのものを、壊してしまう可能性がある」

「え…?」

声を荒げるアヒルに対し、簞也が冷静に言葉を向ける。

「あなたが幻惑に捕らわれた時、あの男が言っていた言葉だ」

「よく憶えていますねえ」

視線を向けてくる簞也に、桃雪が感心するように呟く。

「どこまでが事実かは知れないが、軽はずみな行動はしない方がいい」

「けど…!」

「大丈夫だ」

まだ訴えかけようとするアヒルに、簞也は確信を持った様子で、はつきりと言葉を放った。

「あの人は、見かけだけがカモメさんの、幻惑などに負けるほど、弱くはない」

簞也のその言葉に、アヒルがハツとした様子で、目を見開く。

「あの人と、カモメさんとの絆を信じろ」

「簞也」

力強い簞也の言葉に、アヒルの表情から徐々に、焦りの色が消えていく。

「わかった」

落ち着いた表情を取り戻し、大きく頷くアヒル。

「わかったのであれば、進め」

「え…？」

箆也の言葉に、アヒルが首を傾げる。

「あの男とは、僕が戦う」

はつきりと言い放った箆也に、アヒルは厳しい表情を作った。

Word 76 共二 (1)

永遠の居城、正面右方向部。於団おだん、戦闘場所。

「……………」

「神？」

戦いの手を一度止め、何やら考え込むような、気難しい表情を見せ、永遠の居城を見上げる檻也の様子に、近くで戦っていた空音も手を止め、戸惑うように首を傾げる。

「いかがなされました？神。どこか、お怪我でも…」

「ずっと、考えていた」

「え？」

檻也からの突然の言葉に、空音がさらに不思議そうに、眉をひそめる。

「俺が“於の神”となり、籠也が、於崎の屋敷を出されたあの日から」

懺悔でもするかのように、重苦しく言葉を落とす檻也を見つめ、空音がそつと目を細める。

「籠也にとって俺は、ただ、奪うだけの、苦しみを与えるだけの存在だったんじゃないかと」

檻也が神となり、おかしくなってしまった兄弟の仲。籠也は言葉の自由を奪われ、実の親から家を追い出され、名字すらも変えた。そのすべての要因は、先に“お”の文字に目醒めた、檻也にある。

「ずっと、後悔していた」

「神…」

かける言葉も見つからず、空音はただ、険しい表情で檻也を呼ぶ。「でも、檻也くんが“於の神”にならなかったら、神月くんは“加守”にならなかったよね」

そこへ入って来る、もう一つの声。声と共にその場に現れたのは、穏やかな笑みを浮かべた紺平であった。

「紺平」

「檻也くんがいなかったら、神月くんは、神付きにならなかったかも知れない」

檻也が振り向く中、紺平がさらに、言葉を続ける。

「そんなの、勿体無いよ」

紺平がさらに大きく、檻也へと微笑みかける。

「だって神月くんは、俺が、一番懂れてる神付きだもん」

そう言い放った紺平が、まるで自分のことのように、得意げに笑う。

「それに神月くんだって、昔は違ったかも知れないけど、今は、神付きであることを、ガアの神付きであることを、とっても誇りに思っていると思う」

言葉と共に、何の曇りもない瞳を、紺平は檻也へと向けた。

「檻也くんに、感謝してると思うよ」

その紺平の言葉を受け取り、檻也は、何か込み上げてくるものを堪えるように、強く、唇を噛み締める。

「……済まない」

少し俯いた檻也の口から零れ落ちた礼に、紺平は何も言わず、ただ、そっと微笑んだ。

「さあーて、じゃあ影退治の続きを……！ん？」

気合いを入れて、戦いの場に戻ろうとした紺平が、何やら不満げな表情で、こちらを鋭く睨みつけている空音に気付き、首を傾げる。

「そ、空音さん？」

「ちょっと、神の為にいい発言したからって、調子に乗らないでよね！」

「アハハ……」

何故か紺平へと、対抗心を剥き出しにしてくる空音に、紺平が少し、困ったように笑った。

左塔、四階部。

「箆也…」

仲間たちの協力もあり、やっと永遠^{とわ}の居る左塔へと辿り着いた、アヒルと箆也。待ち構えていた桃雪と直面すると、箆也は、自身が桃雪と戦うことを決め、アヒルへ先に進むよう告げた。そんな箆也の方を振り向き、驚いた様子ではないが、どこか複雑そうな表情を見せているアヒル。

「これはまた、予想通りの言葉ですねえ」

二人の会話を聞き、桃雪が嘲笑うように言葉を投げかける。

「僕が予想した言葉と、一言一句違っていませんでしたよ。先程のあなたの言葉」

「あなたは、神付きとして、自身の神のもとへは向かわせまいと、僕らを足止めしようとしている」

箆也が鋭い瞳で桃雪の方を見つめながら、言葉を続ける。

「そして僕は、神付きとして、自身の神を、前へと進めようとしている。別に間違っていないだろう？」

「ええ、勿論です」

箆也の問いかけに、桃雪が微笑み、すぐさま頷く。

「どうぞ、好きにしてください」

桃雪が両手を広げ、まったく阻止しようとする気がないことを強調するように、二人に言葉を投げかける。そんな桃雪の様子に戸惑い、目を見合わせるアヒルと箆也。

「どう思う？」

「さあな。相変わらず、読めない男だ」

問いかけるアヒルに対し、少し眉をひそめ、答える箆也。

「だが、いつまでもグダグダと考えていては、時間が勿体ない」

「じゃあ強行突破か？」

「ああ、何とかなるだろう」

「おっしゃ！」

箆也の言葉を聞いたアヒルが、気合いの入った様子で、大きく頷き、少し前かがみになって、走り出す準備の態勢を取る。

「行くぜ！」

大きく声を張り上げ、勢いよくその場を飛び出していくアヒル。

こちらへと駆け出してくるアヒルを見て、桃雪がそっと冷たく笑う。

「どうぞ、好きにして下さい」

涼しげな目元で、アヒルを見つめる桃雪。

「こちらも、好きにさせて頂きますので」

微笑んだ桃雪が、飛び出して来たアヒルへと、白い言玉を向ける。

「燃え尽きろ」

「え？」

床へと小さく落ちた白い炎が、何か仕掛けでもされていたのか、一気に燃え広がり、駆け出してきたアヒルの全身を、あつという間に包み込んで、燃え上がる。真っ白な炎の中に、見えなくなるアヒルの姿。

「残念ですが、あなたには、我が神の姿を見ることなく、燃え尽きていただきます」

目の前で広がる炎を見つめ、桃雪が満足げに笑う。

「安の神」

「こんなことだろうと思っていた」

「何…？」

炎の中から聞こえてくる冷静な声に、桃雪が眉をひそめ、すぐさま表情を曇らせる。

「鎌鼬」かまいたち

白い炎の中から強い風が巻き起こり、周囲の炎を吹き飛ばすようにして、掻き消す。消えた炎の中から、まっすぐに立った人影の姿が、明らかとなっていく。

「本当に、どこまでも喰えない男だな。あなたは」

「神月、箆也…」

炎の中から姿を現したのは、アヒルではなく、どこか呆れたよう

な表情を見せた箆也であった。

「では、安の神は…」

「“当たれ”！」

箆也の後方から響く声に、戸惑っていた桃雪が視線を移す。箆也の後方、先程、アヒルが飛び込んで来る前に、箆也が居たはずの場所、今後は逆にアヒルが、右手に構えた銃を天井へと向け、弾丸を放ち、天井に、上へと続く、大きな穴をあけていた。

「まさか、姿を…？」

「ああ、“換えて”いた。この塔に入る前、連絡通路を駆けている間に」

問いかける桃雪に、箆也が当然のごとく答える。

「この塔であなたが待ち構え、何かを仕掛けてくることなど、容易に予想出来ていたからな」

見透かすように言い放つ箆也に、桃雪の表情が、かすかに歪む。

「箆也つぽく喋るの、すっげえ堅苦しかったぜえ」

「お互い様だ。だが、あなたにしては、上出来だった」

大きく肩を落とすアヒルに、箆也が誉めているともけなしているとも取れるような、言葉を投げかける。

「何せ、この男を騙せたくらいだからな」

「誉め言葉として、受け取っておきましょうか」

箆也の言葉を受け取り、桃雪がどこか不敵に笑う。

「予定通り、ここは僕が抑える。行け、神」

「箆也」

「とっとと行け。時間の無駄だ」

呼びかけるアヒルに対し、箆也が少し冷たく言い放つ。箆也の言葉を受けると、アヒルは、天井へと向けていた銃口を、自身のコメカミへと向けた。

「箆也」

「聞こえなかったか？時間の無駄だ。早く…」

“また明日”！」

もう一度、アヒルに先へと進むよう、促そうとした籠也であったが、アヒルの口から出たその言葉に、言葉を止め、少し目を見開く。籠也がゆっくりとアヒルの方を振り返ると、アヒルは満面の笑顔を、籠也へと向けていた。

「また、明日」

籠也がどこか噛み締めるように言葉を落とし、そっと笑みを浮かべる。籠也の言葉を聞き、アヒルは満足そうに頷くと、自身へと向けた銃の、引き金を引いた。

「“上^あがれ”」

自身の弾丸に撃ち抜かれると、アヒルの体が浮き上がり、先程空けた天井の穴をぐぐり抜けて、アヒルが上の階へと上昇していく。

「絶対、死ぬなよ、籠也！」

穴をすぐ頭上とした空中で止まり、アヒルが籠也へと声を掛ける。「当然だろう。誰の神附きに向かって、言葉を掛けている？」

自信満々に答える籠也を見て、アヒルはその表情を少し安心したものへと変え、もう一度、大きく微笑む。

「んじゃまあ、任せた！」

その言葉を最後に、アヒルは、天井の上へと姿を消していった。アヒルの消えていった穴を見つめ、籠也がそっと目を細める。

「仰せのままに、我が神」

姿の見えなくなったアヒルに、籠也はまるで誓うように、小さく呟いた。

「成程」

納得したようなその声に、籠也がゆっくりと振り向く。

「言われてみれば、確かに不自然でした」

小さく数度頷いて、桃雪がまっすぐに籠也を見つめる。

「“何とかなる”などという曖昧な言葉は、冷静なあなた、らしからぬ言葉」

「ああ。そういう適当な言葉は、我が神の専売特許だ」
「そうでしたねえ」

箆也の言葉を聞き、桃雪がどこか楽しげに笑う。

「ですが、よろしいのですか？本当に、これで」

少しの間を置いて、桃雪が、最後の確認でもするかのように改めて、箆也へと問いかける。

「共に行かねば、神の最期の姿を、見る事が出来なくなりますよ？」

「人の言葉は、もっとよく聞いた方がいいな」

試すように問う桃雪に、箆也がまるで注意するように、鋭く言い放つ。

「僕らは、“また明日”と言ったんだ」

「その“明日”が来る保障が、どこにあると？」

「そんなもの、決まっている」

箆也が当然のように答え、右手に持っていた真っ赤な鎌を、力強く構える。

「この、言葉の中にだ」

誇らしげに言い放つ箆也を見つめ、少し目を細めると、桃雪はまた、楽しげに微笑んだ。

「素晴らしい自信ですねえ。眩しくて、眩暈がしそうですよ」

「誉め言葉として、受け取っておこう」

軽い口調で言い放つ桃雪に対し、先程の桃雪とまるで同じ言葉で、牽制するように言い放つ箆也。

「“共に行かねば、神の最期の姿が見られなくなる”と、そう言っただな？」

「ええ」

確かめるように問う箆也に、桃雪が微笑んだ表情のまま、あっさりと頷く。そんな桃雪に、箆也は、突き刺すような鋭い視線を送る。

「それは、こちらの台詞だ」

強気に言い放つ箆也に、桃雪は一瞬、驚いた様子で、その表情を崩したが、すぐにまた微笑み、楽しそうに口角を吊り上げた。

「それも、そうですねえ」

箆也の言葉を認めながらも、余裕の態度は崩さずに、桃雪が言う。
「ですが僕も、言葉で自身の時を戻してまで、もう何年もずっと、この日を待っていたのですよ」

ずっと、人のことを見透かすような発言ばかりをしていた桃雪が、やっと、自身の主張を訴えるような、発言をする。

「我が神が、すべての言葉を終わらせる、この日を」

強調されるその言葉に、箆也の表情が、険しいものへと変わる。

「ですから僕も、我が神が願いを叶える、その姿を見ずに、朽ち逝くわけにはいかない」

ずっと様子をうかがうようであった桃雪の言葉に、初めて、決意にも似た、力がこもる。

「ですから、あなたにここで、敗れるわけにはいかない」

桃雪の冷たい視線が、箆也へと突き刺さった。

「あなたも、敗れるわけにはいかない。僕も、敗れるわけにはいかない」

ゆっくりと紡がれる、桃雪の主張。

「ですので、あなたと僕とで、決めるとしましょう」

桃雪が少し誘うように、左手を横へと広げる。

「あなたと僕、どちらが最強の神付きであるかを。そして」

次の言葉を強調するように一つ、間を置く桃雪。

「あなたと僕、どちらの神が、正しき神であるかを」

桃雪の言葉に、箆也がその表情を、さらに鋭いものへと変える。

「望むところだ」

自身の神の望みを背負い、箆也と桃雪が、互いに向き合った。

永遠の居城、近くの公園。

「箆也…」

城を見つめる和音は、箆也が戦いの場面に至ったことを、何となく察したのか、言玉を解放させた姿である真っ赤な鏡を胸の前で握

り締め、どこか不安げに籠也の名を呟いた。

「大丈夫」

そんな和音の肩の上に、茜の温かな手が乗る。

「彼は、優秀な神附きですもの」

「茜さん…」

和音の不安を取り除くように、優しく微笑みかける茜を見つめ、和音がそっと目を細める。自分だって、アヒルのことで不安だろうに、茜は自分よりも和音を気遣い、声を掛けてくれているのだ。

「そうだねえ」

茜に続くように、ウズラも微笑み、口を開いた。

「何せ、俺たちの自慢の息子が、ぜひ後継にと、選んだくらいの子だからね」

得意げに笑うウズラにつられるように、和音もそっと笑みを零す。

「そうですわね…」

二人の言葉を噛み締めるように、和音は深く、頷いた。

永遠の居城、屋上。

「グウウウウ…」

「んあ？」

アヒルたちを城内へと送り届け、終獣との交戦を続けていたスズメが、チュン吉の上で、眉をひそめる。急に攻撃の手を休めた終獣が、顔を俯け、連続した低い唸り声を漏らしている。しばらくの間、交戦してきたが、こんな状態の終獣を見たのは、初めてであった。

「何か、様子がおかしいですね」

「熊子」

スズメと同じように熊子も終獣の様子に気付いたのか、攻撃の手を止め、終獣と距離を取る。

「何か、力を溜め込んでいるような…」

「あっ」

熊子の言葉に、何やら思いついたのか、ハツとした表情となるスズメ。

「全員、この場から離れろ！」

焦ったような表情を見せたスズメが、屋上の上へとチュン吉を上昇させ、屋上に居るツバメたち宇団と、ヒロトたちハ行の四人へ向け、注意喚起するように叫ぶ。

「スズメ氏？」

「そこから離れろ、ツバメ！」

熊子が戸惑う中、次の攻撃をするべく、終獣の頭上をスワ郎に乗り、飛んでいるツバメへと叫びあげるスズメ。その言葉に一瞬、戸惑うような表情を見せるツバメであったが、すぐにスズメの言う通りにスワ郎を動かし、その場を離れた。丁度、ツバメがその場を離れたところで、俯いていた終獣が、勢いよく顔を上げ、天を仰ぐ。

「グアアアアア！」

天を仰いだ終獣が、大きく口を開き、その口から、巨大な金色の光の塊を放つ。

『ううう…！』

その強烈な光が、辺りの空気を揺らし、屋上に居た皆が身を屈め、何とか吹き飛ばされないように、必死に堪える。終獣が放った光は、遙か上空で無数に分かれ、遠くの方へと飛んでいった。

「スズメ、今のって…」

「“終^をえろ”、“无^ん”の文字の力が、どこかへ飛ばされたんだ」

スワ郎と共に、スズメの方へと寄って来たツバメに対し、スズメは、光の飛んでいった方角を見つめ、厳しい表情を見せる。

「また、人々の言葉が終わった…」

スズメのその言葉に、ツバメも同じように、険しい表情を見せる。「早く何とかしねえと、皆の言葉が終わっちまうぞ」

焦った様子で、スズメが言葉を続ける。

「アヒル…」

「今の、光は…」

その頃、屋上横の上空で、現^{うつつ}との交戦を続けていた保も、空気の揺れと、終獣が放った激しい光に気付き、険しい表情で、光の飛んでいった方角を見つめていた。

「ホホホ、やはり素晴らしいのお。我が産物の力は」

聞こえてくる笑い声に、保が眉間に皺を寄せ、再び前を見る。

「ではやはり、あの生物が…」

「“終獣”、じゃよ。そう、わしの可愛い終獣が、人間の言葉を終わらせる、“无^ん”の文字の光を放ったんじゃないよ」

「また、誰かの言葉が…」

告げられる事実、少し俯き、厳しい表情を見せる保。

「何故です…？」

「んん？」

改めて問いかける保に、現は不思議そうに首を傾げる。

「あなたは、別に、言葉を消すことを、終わらせることを、望んでいるようには見えない」

保が険しい表情のまま、まっすぐに現を見つめる。

「“生まれろ”の言葉を多用する程です。むしろ、言葉が必要としているように見える」

「確かに、そうじゃのお」

保の言葉に、納得するように頷く現。

「言葉は、わしの神としての権威を示すもの。なくなってもらっては、困る」

「では、何故です？」

現の言葉を聞くと、保はすぐさま、問いかけを向けた。

「阿修羅^{あしゅら}さんの時も、今回も…何故、言葉をなくす側に協力をするんです？」

「何じゃ、そんなことか」

保の問いかけを聞き、どこかつまらなさそうに、肩を落とす現。

「答えなど、簡単じゃよ」

現が口元を歪め、いやらしく笑う。

「“面白そうだったから”じゃ」

あっさりと告げられる答えに、保が思わず、大きく目を見開く。

「面白そう、だったから…？」

「ああ」

かすかに震えた声で、現の言葉を繰り返す保に対し、現はあっさりと言を返す。

「言葉が消えれば、終わらせられれば、人間共は、お前たち五十音士共は、どんなに慌てふためくか…」

現がどこか楽しげに、その声を弾ませる。

「それを考えただけで、面白くて面白くて、胸が躍る」

その現の言葉に、保の表情が、どんどんと歪んでいき、さらに陰しいものへと変わっていく。

「じゃから、協力した。阿修羅にも、永遠にもなあ」

現の言葉が続く中、保はそっと俯き、現からその表情を背けた。

「面白、そう、だから…」

「ん？」

俯いたまま、もう一度、その言葉を繰り返す保に、現が少し眉をひそめる。

「面白そうだったから、ですか…？」

保がゆっくりと顔を上げ、再び、まっすぐに現を見つめる。その瞳は、どこか悲しげであった。

「あなたが、何百年もの大昔、“忌”^{イミ}という生物を、生み出したのは」

その問いかけに、現が一瞬、笑みを止め、その皺だらけの顔から、表情をなくす。だが無表情もすぐに終わり、現はまた、楽しげに笑った。

「ああ」

あっさりと頷く現に、保は、糸のからまった右拳を、力強く握り締める。

「あなたは、知っていますか…？」

怒りを表に出すことはなく、静かに、現への問いかけを続ける保。

「……ごめんな、保……」

かつて、五十音士でありながら、忌に取り憑かれ、自ら命を絶つことを選んだ父と母。

「……ならば何故、“痛み”が消えない…？——」

終わらない“痛み”を嘆いた、“痛み”から生まれた命。

「あなたが生み出したものの為に、どれほどの“痛み”が、“哀しみ”が生まれたか…」

悲痛なその姿を思い出し、保が、鋭い視線を、現へと向ける。

「興味がないのお」

だが現は、保のその真剣な眼差しに、正面から答えようとはしなかった。

「わしは創造神。生み出したものが、その後、何をしようと、わしには関係のない話じゃ」

現の言葉に、そっと俯き、どこか諦めるように、その瞳を閉じる保。次に目を開くと、保はもう、悲しみも戸惑いもない、落ち着き払った表情を見せていた。

「やっぱり、確信しました」

自身の胸を押さえ、保がはっきりと言い放つ。

「あなたは、神じゃない」

保のその言葉に、現がかすかに、眉尻を吊り上げる。

「自らが生み出した命を、慈しむことも出来ないような人に、神を名乗る資格はありません」

断言するように、保が強く言い切る。

「相変わらず、生意気じゃのう」

保の言葉に怒りを見せることはなく、現はどこか、余裕の表情で笑う。

「どうやら、お主のその口は、不必要なことしか言えぬ構造になっているらしい」

現が杖を持っていない方の手を前へと出し、その人差し指で、保の口元を指差す。

「んん、そうじゃ。いいことを思いついた」

何を思いついたのか、真っ白な顎髭を梳かしながら、現が楽しげに笑う。そして、先端に言玉のついた杖を、すぐに保の方へと向けた。

「“写せ”」

「え：？う！」

言葉の意味に戸惑い、保が眉をひそめたのも束の間、現の杖から、眩いばかりの金色の光が放たれ、もろにその光を瞳の中に入れてし

まった保は、あまりの眩しさに、その瞳を閉じた。目の感覚が戻ったところで、保が再び、その瞳を開く。

「今の、言葉は…」

「今の、言葉は…」

「え…？」

「え…？」

繰り返される自分の言葉に、保が戸惑うように顔を上げる。だが、その保の戸惑いの声さえも、繰り返され、保の声と重なるようにして、聞こえてきた。

『な…！？』

重なる、驚きの声。

「お、俺…？」

保の目の前に浮かんでいるのは、もう一人の保であった。今の保の表情と同じ表情をしているのか、その表情は、驚きと戸惑いに満ちている。目の前に現れた、自分とまったく同じ姿をしたその存在を見つめ、互いに、さらに戸惑った表情となっていく、二人の保。

「こ、こんなこと…」

「フハハハ！ 気に入ったかのお？」

響く笑い声に、保が勢いよく右方を振り向く。保が振り向くと、もう一人の保も、まったく同じ動きで左方を振り向き、横に浮かぶ現の姿を、その瞳に捉えた。

「あなたの言葉の…！？」

「ああ、そやつは我が言葉、“写せ”により、写し出されたお前さん自身じゃ」

現がもう一人の保を指差し、楽しげに笑う。

「さあ、不必要な言葉同士で、存分に潰し合うがいい！」

「ク…！」

高らかと響く現の言葉に、保は険しい表情を見せた。

「鎌鼬」
かまいたち

「滅せ」！
めつ

前方からやって来た風の塊を、恵が、緑色に輝く右足を勢いよく振り切り、掻き消す。

「火炎」
かえん

「う：！」

だが、また前方から、すぐさま炎の塊がやって来て、まだ右足を振り下ろし切れていない恵は、攻撃態勢を整えることも出来ず、ただ険しい表情で、唇を噛み締める。

「ああああ！」

正面から炎を食らい、後方へと弾き飛ばされる恵。真っ白な床に、焦げついた恵の体が転がる。

「う、ううう：」

「その程度？」

白い床を歩く足音と共に、聞こえてくる声に、苦しげに表情を歪めていた恵が、ゆっくりと顔を上げる。

「恵先生」

金色の巨鳥を脇に従え、恵へと歩み寄って来るのは、穏やかな笑みを見せたカモメであった。

「気安く呼ぶな」

やって来るカモメへ、恵が鋭く言葉を放つ。

「冷たいな」

恵の言葉を受け、カモメが困ったように笑う。

「“また明日”って言ったから、ちゃんとこうして、会いに来たのに」

カモメの言葉に、恵が眉間へと皺を寄せる。

——じゃあ先生、また明日！——

来ることのなかった明日を、待ち続けた、この五年。

「人の思い出を、とことん踏み躪りやがって…」

低く漏れた恵の声は、怒りを秘めていることが、すぐにわかるほどであった。

「幻覚にしたって、タチが悪過ぎるな」

恵が瞳を鋭くし、カモメを睨みつける。

「お前は、カモメじゃない」

「言葉のわりには、さっきから攻撃の手が止まってるけど」

涼しげに言い放ったカモメの姿を直視し、恵がさらに表情を険しくする。カモメではない。本物のカモメであるはずがないと、頭の中ではわかっていても、その姿を目の前になると、どうしようもないほどに戸惑い、冷静に体は動かなかった。

「俺、恵先生は、もっと強いと思ってたんだけどな」

その場で足を止めたカモメが、どこかがっかりしたように、肩を落とす。

「だって先生は」

カモメがさらに口を開き、言葉が続ける。

「“永遠”^{えいえん}なんて言葉を創って、この五十音の世界を変えた人なんだから」

カモメのその言葉に、恵が床に倒れた姿勢のまま、大きく目を見開く。

「ねえ、先生」

声だけは、やたらと優しく、恵に呼びかける。

「先生がもし、弟さんの時を永遠にしたりしなきゃ、父さんが俺に、“う”の文字を埋め込むことはなかったよね」

一度も忘れることのなかった穏やかな笑顔で、恵を見つめる。

「そしたら、言姫様も、俺を加守にしたりしなかったかも知れない」
「どんどんと追い詰められていくように、その表情を、険しいものへと変える恵。」

「そしたら俺、死ななくて済んだかも知れないんだよ？」

その言葉が、とどめの一撃のように、恵の胸に突き刺さった。

「恋盲腸読んで、父さんの八百屋手伝ってさ、今も、元気に生きてたかも知れないんだよ？」

カモメの言葉の一つひとつが、激しく恵を追い込んでいく。

「アーくんもあんなに、苦しまなくて済んだかも知れないんだよ？」
続く言葉に、目を見開く恵。

——カー兄……！——

兄に放った言葉を悔み、ひたすらに言葉の重みを背負ってきた、アヒルの姿が、恵の脳裏を過ぎった。

「ねえ、わかってる？先生」

カモメのその問いかけに、言葉も出ず、恵はただ、血が滲みそうなほどに強く唇を噛み締め、力なく瞳を閉じ、深く俯いた。

「全部、先生のせいだって、ちゃんとわかってる？」

瞳を閉じたままの恵に、カモメがもう一度、追い打ちをかけるように、問いかける。

「ねえ、先生」

さらにまた呼びかけ、カモメが恵へと、巨鳥を向けた。

「“咬^かみ砕け”」

「う、うああああ！」

カモメの言葉により、倒れたままの恵へと飛びかかっていった巨鳥が、恵の右足に勢いよく咬みつく。恵は激しく叫び声をあげ、上半身を起こし、もう一度、床へと倒れ込んだ。巨鳥の離れた右足からは、赤い血が流れ落ち、吸収されていた緑色の言玉が、力なく床へと転がる。

「う、うう……」

ろくに体を動かすことも出来ず、恵が苦しげな呻き声を漏らす。

「苦しい？恵先生」

そんな恵へと、歩を進め、さらに歩み寄りながら、カモメが、変

わらぬ穏やかな表情で問いかける。

「色んなものを背負ってきて、たくさんものを巻き込んできて、苦しい？」

痛みに遠ざかる意識の中、届くカモメのその言葉に、恵は、頷いてしまいたい気持ちで、いっぱいだった。その問いかけに頷けば、縛りつけているもの、すべてから解放されて、身軽になって、カモメのところへ行けるような、そんな気がした。

「今、俺が楽にしてあげるよ」

動けぬ恵へ、もう一度、巨鳥を向けようと、右手を振り上げるカモメ。

「……っ」

そんなカモメを見つめ、恵はそっと、目を細めた。

———初めての出会いが、どんなものだったのかなんて、もう、ろくに憶えていないけれど。

「朝比奈！」

「ひゃい？」

大きく怒鳴りあげた恵に対し、弁当のおかずだったのか、口いっぱいになすびを頬張りながら、暢気そうな顔で振り返るカモメ。

「国語の赤点、学年でお前、たった一人だったぞ！今日、放課後、居残りだ！」

「はぁーい」

「嬉しそうに返事をするな！」

明るく返事をするカモメに、さらに怒鳴りあげる恵。最初の印象はただ、出来の悪い生徒。毎度、赤点ばかり取るので、嫌でもすぐに名前は覚えた。それから、年相応といえど年相応だが、他の生徒たちと比べ、妙に純粋で、子供っぽいところがあるように見えた。今の大人びている生徒たちの中では珍しいほどに、素直で、誰にでも、信用しきった笑みを向ける。

「とにかく今日、放課後な」

「はぁーい！」

「だから、嬉しそうに返事をするな！」

だがその頃、恵にとってカモメは、その程度の印象の、ただの生徒の一人であった。

「毎度毎度、赤点ばかり。よく懲りないな、お前も」

「そんなに誉められると、照れます」

「誉めていない！」

少し頬を赤くし、頭を掻くカモメに、恵が勢いよく怒鳴りあげる。放課後の国語資料室で、恵は、カモメと一对一の補習授業を行っていた。

「これがプリントだ。とつとと始めろ」

「はぁーい」

恵からプリントを受け取ったカモメが、相変わらずの暢気な笑顔で返事をする。赤点を取った悪びれさも、補習をやることへの嫌気も、カモメからはまったく感じなかった。そんなカモメを見て、恵がどこか呆れたように肩を落とす。

「ええーっと、朝比奈カモメ、と」

氏名のところに自分の名を書くカモメを見つめ、恵はそっと目を細めた。

「お前」

「へ？」

プリントを始めようとしたまさにその時、呼びかけられ、カモメが間の抜けた様子で、顔を上げる。

「お前ん家、八百屋か？」

「あ、はい。そうです」

恵の問いかけに戸惑いながらも、カモメがあっさりと頷く。

「先生、よく知ってますね。あ、でも、先生なんだから知ってても普通かぁ」

自分で納得するように、あれこれと言葉を呟いているカモメを見つめ、恵がさらに目を細める。

――見て、恵。可愛いでしょ？ “カモメ” っていうのよ――

十数年前、親友の茜が見せに来た赤子。あの日から、恵の姿は変わっていないが、あの小さかった赤子は、これほどまでに大きくなっているのかと、時の流れに驚かされる。そして、驚かされると同時に、成長を封じられた、弟の姿を思い出した。

——どうして俺は、ここに居るんだろう——

いつまでも卒業の日を迎えることの出来なかったこの場所で、苦しむような、悲しむような、絶望したような表情を見せていた弟。その姿を思い出し、恵がそつと険しい表情を見せる。

「先生？」

「あ……」

カモメに戸惑いの表情で呼びかけられ、恵がハツとなって、再びカモメの方を見る。

「とつとと始めろ」

「はい」

悔いても仕方のないこととは思いながら、恵の心に、遠久の存在は、重く圧し掛かり続けていた。

それから、一年以上の時間が流れた。

「まあーた、赤点取りやがったな！カラス！」

国語資料室に今日も、恵の怒鳴り声が響き渡る。

「だから、俺の名前はカモメですって。恵先生」

「んなもん、どっちでもいい！ってか、いい加減、考えろ！」

カモメの名前の訂正をあつさりとは無視し、恵がさらに怒鳴りを続ける。

「毎度毎度、お前のためだけに、補習プリントを作らなきゃいけない、私の面倒を！」

「潔いほど、自分勝手ですね」

教師らしからぬ恵の言葉に、カモメは少し呆れたような、感心したような表情で、言葉を落とした。

「別に私のためだけに言ってるんじゃない」

椅子に腰をかけた恵が、固く腕組みをし、まっすぐにカモメを見つめる。

「お前だって、こんなうるさい教師と二人きりでの補習なんてせずに、とっとと帰って、遊びたいだろうが」

「うーん、それが困った話なんですよねえ」

「はあ？」

首を捻らせるカモメの言葉の意味がわからず、恵が大きく顔をしかめる。

「俺、そんなに嫌じゃないんです。補習」

穏やかな笑顔で恵を見つめ、カモメはまっすぐに、そう告げる。

「こうして補習を受けてると、恵先生が本当に、言葉を大切にしてるっていうのが、よくわかるし」

「授業だけで、わかれよ」

「授業中は、何故か睡魔が襲ってくるんですよ」

鋭く指摘する恵に、カモメは困ったように笑う。

「それに」

言葉を付け加え、カモメがまっすぐに恵を見る。

「先生と二人の時間は、心地いい」

「……っ」

その言葉に衝撃が走ったのは、恵もどこかで、同じ気持ちを抱いていたからなのかも知れない。

初めは、ウズラと茜の子で、あの時の子であるから、気になるだけだと思っていた。明と同じ苗字で、明のあの八百屋の子供ともなれば、嫌でも気になる。そう、自分に言い聞かせていた。自分の中にわずかに芽生えた感情を、必死に掻き消すように。

「先生、知ってます？この本」

ある日、補習でもないのに国語資料室へとやって来たカモメが、恵へと、とある本を見せた。

「ああ？何だあ？その見るからにデロ甘そうな、吐き気のする表紙の本は」

「“恋盲腸” っていうんですよ！俺のバイブル！」

「へえ、お前にも読める本があったんだな」

「自分の生徒に、ひどい言いようだなあ」

冷たい言い方をする恵に、カモメが少し表情をしかめる。

「一途な少女ヒトミと、その担任の先生との、切ない恋物語なんですけどね」

「くだらなさそうだな」

「何ですか！素敵じゃないですか！」

興味なさそうな言葉ばかりを落とす恵に、カモメが強く訴える。

「いつか俺も、ヒトミと先生のように、燃える恋をするんです！」

「へえ、お前が色恋に興味があるとは、思わなかった」

意外そうに笑い、恵が本から顔を上げ、カモメを見る。

「当てでもあんのか？」

少し試すように問いかけた恵に、カモメは笑うでもなく、珍しく、真剣な表情を見せた。予想とは違うカモメの表情に、恵が少し戸惑うように、首を傾げる。

「朝比奈？」

「はい」

名を呼びかけた恵に、カモメは、はっきりと頷いた。

「目の前に」

微笑んだカモメは、何の迷いもなく、そう告げた。

「だから、それもあって、妙にヒトミに感情移入しちゃって！って、先生、俺の話、聞いてます？」

再び微笑んだカモメは、まったく何の反応も示さない恵を不思議に思ったのか、少し腰を屈め、椅子に座ったままの恵の顔を覗き込む。

「無視はさすがに凹むんで、何か言ってくれると有り難いんですけど。先生？」

カモメがゆっくりと、恵の顔を見る。

「先っ…」

恵の顔を見た途端、カモメはその表情を止める。

「……………」

カモメの見た恵は、今にも壊れてしまいそうな、とても辛い表情を見せていた。

どんどん、踏み込んでくる。どんどん、動かされる。

それでも、受け入れるわけにはいかない。

“永遠”が、“永遠”が、この心を、縛りつけている限り。

それからまた一年が経ち、入学したばかりだったカモメもすでに、高校最後の年を迎えていた。

「来年の春には、卒業かあ」

もうすでに自分の場所かのように、すっかり国語資料室に居慣れた様子のカモメが、ホウキを片手に資料室の掃除をしながら、壁に掛かったカレンダーを見つめ、しみじみと呟く。

「補習の方はまだ、卒業出来てないけどな」

「アハハ」

鋭く言い放つ恵の言葉に、カモメが乾いた笑みを浮かべる。

「卒業後は、父親の八百屋を手伝うんだろ？」

「はい。弟たちもまだ小さいし、父一人じゃ、大変そうなんで」

恵の問いかけに、カモメが穏やかな笑顔で答える。明の八百屋をカモメが継ぐのかと思うと、少しでも救われたような、そんな気持ちになった。

「良かったな。お前文系のくせに、国語最低だから、進学組だったら、行くところなかったぞ」

「ひどい言われようだなあ」

齒に衣着せず言う恵に、カモメが少し拗ねるように、口を尖らせる。

「卒業、か…」

カモメがもう一度カレンダーを見つめ、真剣な表情を見せる。

「ねえ、恵先生」

「ん？」

呼びかけるカモメに、本を読みながら、適当な返事をする恵。

「先生はどうして、年を取らないの？」

カモメの問いかけに、恵の表情が止まる。

「なっ…」

「……………」

驚きの表情で恵が顔を上げると、いつになく真剣な表情を見せたカモメが、まっすぐに、恵を見つめていた。責めるでも、憐れむでもない、ただまっすぐな視線に、誤魔化すことなど出来ないことを、すぐさま感じ取る。

「いつ、気付いた…？」

「音士になって、一ヶ月くらいかな」

「そうか」

カモメの言葉に頷いた恵が、読んでいた本を閉じ、机の上へと置くと、そっと目を細める。

「言葉の力を持つ者には、わかるんだな」

恵が口元を緩め、自嘲するような笑みを浮かべる。

「同じ言葉である、“永遠”^{えいえん}が…」

「永遠…？」

首を傾げるカモメの方を振り返り、恵が、厳しい表情を見せる。

「二十数年前、当時“恵の神”^{あゐのじん}だった私は、自身の言葉“永遠”^{えいえん}を使い、自身の若さと命を、永遠のものへと変えた」

「え…？」

それから恵は、自身の弟遠久のこと、永遠のこと、旧世代の神のことをすべて、カモメへと話した。

「そっか…」

頷きながらも、カモメは驚きを隠せない表情を見せていた。当然といえば、当然であろう。いくら五十音士の一人とはいえ、早々簡単に、受け入れられる話ではない。

「だから先生は、年を取らないんだ」

「ああ」

カモメの言葉に答えた恵が、その場で深く俯く。

「私とお前たちとは、生きてる時間軸が違う」

どこか壁を張るように、冷たく言葉を投げかける恵。拒絶しなければならぬと、思っていた。生きる時間が違うことを告げ、拒絶しなければ、恵は、カモメに向けられるまっすぐな思いに、流されていってしまう。この思いに包まれてもいいのではと、変な希望を持ってしまう。

「私とお前たちとは、同じ時を、生きることが出来ない」

その言葉は、まるで諦めたような、そんな言葉であった。俯いたままの恵を見つめ、カモメがそっと目を細める。しばらくの間、沈黙のまま、時が流れた。

「でも…」

口を開いたカモメに、恵がゆっくりと顔を上げる。

「でも、俺は」

顔を上げた恵を、カモメがまっすぐに見つめる。

「俺は、先生と同じ時を生きてみたいな」

偽りのない瞳、どこまでも深く、包みこむような優しい笑顔。向けられたその言葉を聞き、恵が大きく、目を見開く。重く縛りつけられていた心が、一気に解放されていくような、そんな感覚であった。

「な、何を…」

動揺を隠しきれず、少し震えた声を、恵が発する。

「馬鹿なことをっ…」

「馬鹿なことなんかじゃないよ」

恵が言葉を言い切る前に、あっさりとその言葉を否定するカモメ。
「俺は、たった今、話を聞いただけで、恵先生の苦しみも悲しみも、全然わかってあげられないし、無くしてあげることも出来ないけど」
優しい声が、恵の耳に、言葉を届ける。

「同じ時間を生きれば、苦しみも悲しみも、一緒に背負うことが出来るでしょう？」

もう一度、大きく、恵へと微笑みかけるカモメ。

「一緒に背負って、一緒に歩いていくことが出来るでしょう？」

その言葉の一つひとつに、どうしようもないほど、心が救われていく。

「一緒に、歩む…？」

「うん」

「そんな、こと…」

「“出来ない”なんて、諦めないで」

再び俯いた恵に、カモメはすぐさま、声を掛けた。

———遠久…！———

明の犠牲にし、遠久を封印したあの日、一生、この永遠を背負って生きていくことを決めたというのに、カモメの言葉を受け、恵の心の中で、どうしようもないほどに、希望が溢れ出してきた。

「ねえ、恵先生」

膝に置いていた恵の手を、カモメが強く握り締める。

「俺、探すから、恵先生も、一緒に探そう」

カモメが恵の前へとしゃがみ込み、俯いたままであった恵を、下から覗きこむように見つめる。

「一緒に、生きていく道を」

永遠ではなく、刹那を生きたいと、ただ強く、そう思った。

好きだった。

好きだった。

あの頃は、こんな感情を、持っていないはずがないと、ただ、自分の心に首を振っていたけれど、カモメの思いに、ただ辛い顔を見せることしか出来なかったけれど、今は、はっきりとわかる。

はっきりと、言える。

優しい笑顔が、誠実な瞳が、まっすぐな言葉が、カモメのすべてが、大好きだった。

大好きだったよ、カモメ……——

「泣いているの？先生」

恵の瞳から、とめどなく零れ落ちる涙。それに気付き、カモメが恵へと問いかける。床に倒れこんだままの恵が、ただ声もなく、ひたすらに涙を流している。

「そんなに苦しいなら、俺が、先生の苦しみも悲しみも全部、消してあげる」

優しい笑顔を浮かべ、カモメが優しい言葉を、恵へ掛ける。思い出されたカモメの姿と、まったく同じ声、まったく同じ笑顔だが、その向けられた言葉だけは、恵が思い出したカモメの言葉とは、明らかに異なっていた。

「今、楽にしてあげるよ。先生」

カモメが右手をあげ、従えていた巨鳥を、恵へと向ける。

「さようなら、恵先生」

甲高い叫び声をあげ、恵へと向かっていく巨鳥。

「……五十音、第四十九音“ゑ”、解放」

巨鳥の向ってくる気配を感じながら、閉じた瞳のまま、そつと言葉を落とす恵。恵の右足から零れ落ちた緑色の言玉が、強い輝きを放ち始める。

「“遠雷”^{あんらい}」

「クワアアア！」

「な…！」

天井から降り注いだ緑色の雷撃に撃ち抜かれ、カモメの巨鳥が、勢いよく碎かれる。金色の光の破片となって散った巨鳥を目の前に、驚きの表情を見せるカモメ。

「こ、これはっ…」

自身の力を碎かれ、カモメが焦りの表情を浮かべる。

「今の言葉は、“ゑ”の…？」

「カモメは、言った」

前方から聞こえてくる声に、戸惑っていたカモメが、前を見る。すると、先程まで床に倒れ込み、最早動くことすら出来ない状態であったはずの恵が、いつの間にか、その場で立ち上がっていた。

「私の、苦しみも悲しみも、無くしてあげることが出来ないって……」
思い出されたカモメとの日々を、カモメの言葉の一つひとつを思い返ししながら、恵がゆっくりと、自身の言葉を紡ぐ。

「けど、同じ時を生きられたなら、それを、一緒に背負っていきけるって……」

大きく開いた瞳を、目の前のカモメへと向ける恵。その瞳に、もう涙はなく、先程のような迷いもない。鋭く開かれた瞳は、言玉よりも強く、輝いていた。

「だから一緒に、歩んで行こうって……！」

恵の声が大きくなると共に、床に落ちていた恵の言玉が、恵の肩のすぐ横まで浮き上がり、さらに強く輝きを増す。

「そう言ってくれた。その言葉で、私の心を救ってくれた」

恵が左手で自身の胸を押さえ、鋭い瞳で、目の前のカモメを睨みつける。

「お前は、カモメじゃない」

もう一度、先程と同じ言葉を繰り返す恵。だが、その言葉は、先程のものよりもずっと、強く、重みがあった。

「お前の安っぽい言葉で、カモメを騙るな！」

「う……！」

恵に強く睨みつけられ、カモメが怯むように、思わず後ずさる。

恵の纏う空気は重く、向き合っただけでも圧されているような、そんな感覚を、カモメは覚えていた。

「あいつの存在を穢すものは、例え何であっても、私が許さない！」
肩まで上昇していた言玉を、恵が左手で力強く、握り締める。そのまま恵が左手を胸へと当てると、握り締めていた言玉が、恵の左胸へと吸収された。左胸へと吸収された言玉の輝きが、徐々に強さ

を増しながら、恵の全身へと広がっていく。

「し、心臓に？」

「身体強化の最高技。体への負担は大きいが、この強化じゃないと、使えないんだ」

戸惑うカモメに答えるように、恵がはっきりと言い放つ。

「この言葉、私の、ラスト・イデオム四字熟語はな」

「何？」

恵の言葉に、カモメの表情が青ざめる。

「もう数十年振りだ。この言葉を使うのは」

全身が緑色に輝いていく中、恵が鋭く、カモメを見つめる。

「有り難く思うんだな」

冷たく言い切り、恵がカモメへと、輝く右手を向ける。

「ゑ……」

恵が大きく口を開き、自身の言葉を、神であった頃の自分の言葉を、口にする。

「“永永無窮”えいえいむきゆう！」

恵の言葉が響いた途端、輝く恵の全身から、緑色の光が一気に、その真っ白の空間に広がり、あつという間に、その空間を包み込んでいく。周囲を呑み込んでいく緑色の光を見回し、恐怖に怯えた表情を見せるカモメ。その情けない姿は、最早、カモメではなかった。

「う、うわああああ！」

広がる緑色の光に押し潰されるようにして、偽りのカモメの姿が、消えていく。それと同時に、真っ白な空間にヒビが入り、恵とカモメだけであったその世界が、一気に崩れ落ちていく。

「永遠の闇の中を、彷徨え」

激しい断末魔を聞きながら、恵はそっと、言葉を呟く。

「カモメ……」

崩れ落ちていく幻覚の世界の中で、恵の小さな声が、零れ落ちた。

永遠の居城、屋上空。保対現。

「“猛^{たけ}ろ”！」

空へと高々と舞い上がった保が、下方で浮かぶ現に向け、両手を突き出し、両腕に巻きついてた何本もの赤い糸を、一気に現へと向ける。

「あ…！」

だが、糸が現へと届く前に、現の前に、現の“写せ”の言葉により生み出された、もう一人の保が現れ、先程の保とまったく同じ動きで、保自身へと、無数の赤い糸を向けた。

「“猛^{たけ}ろ”！」

二つの言葉が互いにぶつかり合い、相殺されていく。まったく同じ姿をした人間が、同じ動作で、同じ言葉を使ったのだ。相殺されるのは当然だろう。だが、先程からこの繰り返しで、保は、もう一人の自分を相手にするばかりで、まったく現に攻撃することが出来ていなかった。

「ク…！」

現の思惑通りに進んでいることに焦りを感じ、保が厳しい表情を見せる。

「フフフフ、なかなか面白い光景じゃぞ？音士の小憎よ」

嘲笑うかのように、高見の見物をしている現に、保の表情が歪む。

「さあ、存分に自分自身の言葉と、戦うがいい！フハハハハ！」

「グ…！」

現の高笑いに、強く力のこもる保の拳。だが、保は、必死にそのこもる力を抑えた。今、この状況で現の挑発に乗り、もう一人の自分と戦い続ければ、やがて、保の力が尽きてしまう。そうなのは、現の思う壺だ。

「でも、どうすれば…」

「……っ」

「え…？」

どこからか聞こえる声に、俯き、考え込んでいた保が、ふと顔を上げる。だが、顔を上げたその先には、まったく同じ、少し戸惑った表情を見せた、もう一人の保の姿しかなかった。

「あ、あれ？ 気のせいかな？」

「……っ」

「……っ」

周囲を見回し、不思議そうに首を傾げていた保であったが、もう一度届くその声に、ハツとした表情を見せる。気のせいなどではなく、はつきりと届いたその声。保が再び前を向き、目の前に立つ、自分自身を見つめる。

「……わかったよ」

少しの間を置くと、保は笑みを浮かべ、そつと言葉を落とした。すぐさま真剣な表情となり、現へ向けて、糸の絡まった両手を構える。

「頭の悪い小僧じゃのお。無駄だということが、わからぬらしい」
また攻撃態勢を取った保を見て、現が呆れたように肩を落とす。
「まあいい。愚かな小僧は、愚かな言葉と共に、朽ちるさだめなのじゃろう」

「た…」

何やら悟ったように静観する現へ向け、糸を構えた保が、真剣な眼差しで、自分の言葉を口にする。

「^{たお}倒せ”！」

保が糸を放ったその瞬間、保と同じ動きで、糸を放つもう一人の保。また二つの同じ言葉が、相殺されるだけだろうと、現が静かに笑っていた、その時。

「^{たお}倒せ”！」

「何？」

もう一人の保が、突然向きを変え、保と同じように、現へと糸を放った。

「グ…！」

予想外の事態に驚きながらも、向かってくる糸たちに、現が素早く、持っていた杖を突き出す。

「失せろ」！

自身の言葉を発し、向かって来ていた糸を、次々と掻き消していく現。だが、二倍量の糸をすべて掻き消すことは出来ず、もう一人の保が放った方の糸を何本か、その右腕に受ける。

「ううう…！」

突き刺さる糸に、その表情を歪める現。傷を確認しようと、突き刺されたその右手を見た途端、現が表情を変えた。

「こ、これは…！」

血の流れ落ちる自分の右手を見つめ、現が大きく目を見開く。

「針…？」

現の右腕に突き刺さっていたのは、保の真っ赤な糸ではなく、同じ赤ではあったが、鋭く細長い針であった。どこかで見覚えのあるその針に、現が眉をひそめる。

「ハハハ…」

響く笑い声に、すぐさま顔を上げる現。

「ハハハ…」

保らしからぬ、鋭い笑みを浮かべたもう一人の保が、体から滲み出てきた黒い光に包まれ、徐々にその姿を変えていく。

「ああ…！」

屋上で、現が生み出した黒い影との戦闘を続けていた不二子が、その手を止め、上空の、黒い光に包まれていくもう一人の保の姿を見上げ、大きな瞳を輝かせる。

「へへ、待ってたじゃん」

「ホホホ…ナイスタイミングだね…」

「さすがは、あのお方だ。ヒヒ」

兵吾、螢、ヒロトの三人も、不二子と同じように上空を見つめ、嬉しそうに笑みを零す。

「ウフフ、ウフフ！」

何とも嬉しそうに微笑みながら、両手を大きく広げ、上空へと伸ばす不二子。

「灰示様ああ！」

まるで、不二子の呼びかけに応えるように、もう一人の保を包み込んでいた黒い光が、一気に晴れていく。晴れた光の先に見えるその姿に、現が、今までの余裕の表情など一切なく、険しい表情で、目を見張る。

「波城、灰示……！」

「ハハハ……」

もう一人の保から姿を変え、その場へと現れたのは、灰示であった。険しい表情で名前を呼びあげる現を見つめながら、灰示はそつと、不敵な笑みを浮かべる。

「灰示！」

「やあ、保」

不二子たち同様、嬉しそうな笑顔で、灰示のもとへと寄って来る保の方を振り向き、灰示が穏やかに笑う。

「まさか君と、外の世界で会えるだなんて、思わなかったな」

「僕もだよ、保」

互いに穏やかな表情を見せ、保と灰示が、言葉を交わす。二人は、同じ体を共有する存在。自身の中で言葉を交わすことは出来ても、こうして向き合ったのは、伍黄イツキとの戦いの際、保の心の中で対面したあの時の、たったの一度きりであった。

「さっきはよく、攻撃したね。保」

「うん、すぐにわかったから」

感心したように言う灰示に、保が大きく笑みを向ける。

「灰示が、俺を呼んでるのが」

どこか得意げに笑う保を見て、灰示は、また優しく微笑んだ。

「な、何故じゃ……!？」

どこか慌てたその声に、保と灰示が同時に振り向く。二人が振り向いた先には、珍しく、その表情を戸惑いの色に染めた、現の姿があった。並んだ保と灰示の姿を見比べ、現は益々、混乱した様子となっていく。

「な、何故、音士の小憎とお前が共に……！」

「何故？くだらない問いかけだね」

現の問いかけに、灰示はいつも通りの口癖で、呆れたように肩を落とす。

「“写せ”の言葉で、保をもう一人、生み出したのは、君だろう……？」

灰示が現を見下ろし、すべてを見透かすような口調で、問いかける。

「保と僕は、二人で一つ……保をもう一人、生み出したということは、僕をもう一人、生み出したということにもなる」

「馬鹿な！あれは、わしの言葉じゃぞ……！」

灰示の言葉を否定するように、現が必死に声を荒げる。

「わしの意志もなく、勝手に貴様の姿になるような、そんなことが有り得るはずが……！」

「随分と、理論染みたことを言うんだね」

灰示の言い分に聞く耳も持たず、必死に否定しようとする現の言葉を、灰示があっさりと遮る。

「ねえ、“創造神”」

「ク……！」

嘲笑うかのように、挑発するかのように、わざと、現のことをそう呼んだ灰示に、現は大きく表情を歪め、返す言葉もなく、口を噤む。

「初めて、君に感謝するよ。神」

まるで崇めていないその声で、灰示が現へと呼びかける。

「君の言葉のお陰でこうして、保と肩を並べて、君と戦えるのだから」

灰示のすぐ横に並んだ保が、素早く身構え、現へと、鋭い瞳を向ける。保が構えを取る中、灰示もゆっくりと、右手の中で弄んでいた赤い言玉を、目の前へと突き出した。

「第二十六音“は”、解放……」

灰示が言玉を解放させ、細長い真つ赤な針を数本、指の間に挟み込むようにして構える。

「行こうか、保」

「うん」

灰示の言葉に、保がしっかりと頷く。

「さあ、君にも贈ろう」

保と並んだ灰示が、両手を広げ、現へと高らかに言い放つ。

「この、“痛み”を」

「グ……！」

灰示のその言葉に、現の表情が、まるで気圧されるように、大きく歪んだ。

Word. 77 ありがとう (1)

永遠^{とわ}の居城、中央塔。正面玄関部。

「尖^{とが}れ」！」

輝く白色の言玉を持った右手を突き出し、鋭く尖った白い光を、無数に飛ばす、真っ赤なショートカットの少女、十稀^{とぎ}。その光の向かう先には、横笛を持った囁^{ささ}が、特に焦った様子もなく、静かに佇^{たたず}んでいる。

「……妨^{さまた}げろ」

囁^{ささ}がそつと言葉を落とすと共に、横笛を奏でると、美しい音色がその場に響き渡り、囁^{ささ}を赤色の光の膜が包んで、十稀の向けた攻撃をすべて、弾き飛ばした。

「なら、捕^{とら}えろ」！」

突き出した右手をそのままに、十稀がさらに言葉を続ける。言玉から縄状の光が何本か放たれると、囁^{ささ}を捕えるべく、勢いよく襲いかかった。だがそれにも、囁^{ささ}は動じず、口から横笛を離し、素早く振りかぶる。

「変格」

囁^{ささ}が言葉を発すると、横笛の先から鋭い刃が伸び、その形状が槍へと変化する。

「裂^さけ」

変化したばかりの槍を、囁^{ささ}が振り切り、向かって来ていた縄状の光を、一本残らず、斬り落とす。その時に放たれた鋭い光が、十稀自身にも襲いかかった。

「と……！ううう！」

すぐさま言葉が出ずに、十稀はそのまま光を受け、勢いよく左腕を斬り裂かれた。裂かれた赤い服の下から、同じように赤い血が滴り落ちる。床へと落ちる自身の血を見て、十稀はそのあどけない表情を歪め、どこか悔しげに唇を噛み締めた。だが、すぐに平静の表

情に戻し、囁へと視線を移す。

「さすがね」

まるで上から見るかのように、余裕ある言葉を向ける十稀。

「どんな言葉も、最良の言葉で対応してる。まるで私が何の言葉を使うか、予想がついてるみたい」

「ついているのよ、実際」

十稀の言葉に、囁があっさりと強気の答えを発する。

「あなたの持つその文字は、かつて、私の仲間だった者が使っていた文字…」

———こんにちはあ、囁さん———

囁の脳裏に、かつて、七声として共に夢言玉を奪った、“止守”
の棘一であつた、轟の姿が過ぎる。

「特に好きでもなかったけれど、一緒に居た時間が長かったから、彼の言葉はよく知っているの…」

「ふうーん」

話題を投げかけたわりには、十稀が特に興味もなさそうに相槌を打つ。

「それに…」

その瞳を鋭くし、まっすぐに十稀を捉える囁。

「あなた、その文字を、あの毛守ももりさんに“齎もたらされた”と言ったわね…？」

確認するように、囁が問いかける。

「それ、つい最近の話なんじゃないの…？」

囁の問いかけに、十稀は少しだけ眉をひそめるが、答えようとはしなかった。

「あなたはまだ、全然、その文字を使いこなせていない。言葉で戦うことに、慣れてもない」

突き刺すような鋭い言葉を、囁が次々に投げかける。

「さっき、咄嗟に言葉が出ずに、私の攻撃を受けたことが、いい証拠……」

囁の言葉に、十稀が深く俯く。囁からその表情は見えないが、言玉を握り締めている右手が、わずかに震えているように感じた。

「だったら？何？」

俯いたまま、変わらぬ強気の口調を、囁へと向ける十稀。

「まさか年季の違いだけで、私に勝てるんでも言う気い？オバサン！」

顔を上げた十稀が、嘲笑うかのような表情で、囁へと言葉を投げかける。その、いかにも挑発している言葉に、囁はわかっていながらも、その表情を引きつった。

「随分な言われようね。まだピチピチの十六歳だっていうのに」
あからさまに不機嫌な表情となって、囁が槍を身構える。

「毛守さんに利用されてるだけなら、説得でもして、倒すのは避けようと思っていなければ……もういいわ」

囁の表情が、冷たく変わる。

「皆も戦ってるし、時間もないの。とっとと決めさせてもらおう」

槍を身構える囁を、十稀は微笑んだ表情のまま、黙って見ている。動こうとしない十稀に遠慮することなく、囁は勢いよく槍を振り切った。

“裂け”！

振り下ろされた槍の先から、真っ赤な光の刃が駆けぬけ、まっすぐに十稀へと向かっていく。十稀は特に避ける様子も見せず、だが、焦った表情もせずに、言玉を持った右手を、突き上げた。

“閉ざせ”……

静かに言葉を落とした十稀が、さらに大きく、口を開く。

“扉”！

「え……？」

続けて放たれたその言葉に、眉をひそめる囁。十稀の言葉の通りに、十稀の目の前に、真っ白な光で造られた扉が現れ、大きな音を

立てて閉まり、囁が放った刃を、十稀を守るようにして、受け止めた。囁の刃が消えると、現れた扉もそれを確認したように消え去り、再び、囁から十稀が見えるようになる。

「今のは、私たちをこの場所へと閉じ込めた言葉……」

どこか考え込むように、左手を顎へと当てる囁。

——“荒れろ”……“嵐”！——

「動詞と名詞の組み合わせ……」

かつて、神試験でのイクラとの戦いの際に、アヒルが放った言葉を思い出し、囁がそっと目を細め、十稀を見つめる。

「“語句”」

「そうよお、さすがは音士の先輩。詳しいじゃない」

感心するような口振りで話す十稀であったが、内心ではまるで感心していないことが、すぐさまわかる声色であった。

「素人でもねえ、これくらいのことには出来るの。凄いでしょ？」

さらに言葉向けながら、十稀が再び、右手の中の言玉を輝かせていく。

「ねえ、先輩！」

張り上げられる十稀の声に何かを察し、身構えようとした囁であったが、その動作は、すでに遅かった。

「“閉ざせ”、“扉”！」

「う……！」

囁が何の言葉も放たぬうちに、先ほどの扉が、今度は囁の四方に四つ現れ、さらに上方も覆い、囁は完全に扉の中へと閉じ込められてしまう。

「私の“語句”はねえ、こおんなことも出来るのよ？ 凄いでしょ？
そして……」

十稀が口角を吊り上げ、閉ざされた扉へと、言玉を向ける。

「これで終わり。“飛び出せ”、“棘”！」

扉の中側で、無数の何かが飛び出し、また何かを突き刺したような音がいくつも響いた。やがてすべての音が止み、その場が静寂に包まれる。腕組みをした十稀は、様子をうかがうように、音の消えた扉の向こうを見つめていた。

「さあーて、そろそろ穴ぼこだらけの作品が、出来上がった頃かしらあ？」

閉ざされた扉を開こうと、十稀がゆっくりと腕組みを崩す。

“取…”

「さ…」

「え？」

自身の声に被さるようにして聞こえてくる声に、十稀がそつと眉をひそめる。

“咲き乱れろ”

空耳などではなく、はつきりと十稀の耳に入る、その言葉。

“桜”

二つめの言葉が聞こえたその瞬間、十稀が形成した扉に勢いよくヒビが入り、内側から一気に崩れ落ちる。崩れゆく扉の向こうから見えるのは、屋内で、春の穏やかな季節でもないというのに降り注ぐ、無数の桜の花びら。

「な…！」

桃色の花卉の降り注ぐ、あまりにも美しいその景色に、十稀が大きく目を見開き、信じられないといった表情を見せる。

「い、今のは…」

「私の“語句”」

少し震わせた声を発する十稀に対し、その桜吹雪の中に佇む、まったく怪我を負った様子もない囁が、堂々と言い放つ。

「凄いでしょ…？」

「う…！」

まるで十稀の言葉を真似るように、そつと微笑んで問いかける囁に、十稀は一瞬、怯えるように肩を上げたあと、そんな自分自身に

腹が立ったのか、強く唇を噛み締めた。

「オバサンではないけれど、確かに年季が違うの…」

余程、十稀の先程の言葉を根に持っているのか、もう一度、しっかりと否定しながら、囁が右手の槍を、もとの横笛の姿へと戻す。

「変格を解除した…？」

その囁の行動に、戸惑いの表情を見せる十稀。

「だから、素人の小娘さんごときに、手こずっているわけにはいかないのよ」

姿の戻った横笛を構え、囁が再び、口を開く。

“左変”^{さへん}」

「あ…！」

囁の口から放たれたその言葉に、十稀がまた、驚きの表情を見せる。

「あれは、まさか…！」

“咲け”^さ」

十稀が動揺した様子で叫ぶ中、囁が言葉を発する。先程、扉を壊す際に散っていた桜が、またさらに舞い上がり、辺り一面、十稀の居る場所までもを、あつという間に美しい桜吹雪が覆い尽くす。

“裂け”^さ！」

囁の言葉により、美しい桜の花びらが、無数の刃へと変わる。

「あああああ！」

その無数の刃に、容赦なく全身を斬り裂かれ、十稀は、桜の舞い散る中を、赤い血を舞わせながら、力なく後方へと倒れこんでいった。横笛を口から離れた囁が、倒れていく十稀を、冷静な表情で見つめる。

「う、うう…」

床へと仰向けに倒れ込んだ十稀が、苦しげな声を漏らす。全身に走る痛みに体が痺れ、十稀は起き上がることが出来なかった。

「左、変…一部の神附きしか辿り着けない、変格の上をいく変格…」

「ええ…」

倒れた状態のまま、よく知った様子で言葉を零す十稀に、囁が歩み寄っていきながら、そっと頷く。

「あなたとは、年季も、背負っているものも違うのよ」

倒れた十稀のすぐ前方へと立った囁が、十稀を見下ろし、意志の強さをうかがわせるような、はっきりとした口調で言葉を発する。

「これは、すべての言葉の明日を賭けた戦いだから」

思いを握り締めるように、囁が力一杯、拳を握る。

「だから私は、あなたに負けるわけにはいかない。だからもう、やめなさい」

またはっきりとした言葉が、十稀へと落とされる。

「つい最近、文字を齎されたくらいなんだから、遠おの神や毛守さんに特別、思い入れがあるわけでもないのでしょうか…？」

少し細めた瞳で、まっすぐに天井を見上げたまま、十稀が静かに、囁の言葉を聞く。

「だったらもう、こんなことはやめて…」

「思い入れなら、あるわ」

「え…？」

途切れがちに返って来たその言葉に、囁が眉をひそめる。

「ずっと、五十音士に憧れてた…」

天井を見つめたまま、十稀がゆっくりと、言葉が続ける。

「ずっと、五十音士になりたかった…」

その十稀の言葉が、今までとは異なり、どこか切なく響き渡って、まるで、偽りではないことを示しているようで、囁は真剣な表情で、耳を傾けた。

「絶対に文字の力を手に入れたくて…候補生の誰にも負けたくなくて…必死に、必死にやってきたわ…」

過去の自分の思い出したのか、懐かしむように目を細め、十稀がそっと笑みを浮かべる。

「折角手に入れたの、この文字を。だから…」

床についたままの十稀の右手が、強く握り締められる。

「だから私は、あんたなんかには負けたりしない！」

十稀の高ぶる思いに応えるように、傷だらけの体が立ち上がっていく。張り上げられた十稀のその声に、圧されるように、囁は少し後方へと体を引き、放とうとしていた言葉を呑み込んだ。

「止まれ！」

大きな声で、自身の言葉を発する十稀。

「時」！

「え……？」

十稀の放った言葉に驚いたその瞬間、囁は一瞬、脳を暗闇に覆われるような、変な感覚に囚われた。

「ううう……！」

感覚が戻った時には、囁の左肩に、尖った白光の刃が突き刺さっていた。いきなり走る痛み、囁が大きくその表情を歪める。

「な、何……？」

突き刺さった刃が消えると、囁の左肩から、赤い血が滴り落ちる。湧きあがったのは、痛みよりも戸惑いであった。いつ刃を受けたのか、その記憶がまったくない。見えなかったとしても、突き刺さった時の感覚くらいは残るであろうが、それすらまったく、囁の記憶には残っていないかった。

「時」……

寸前に十稀が放った言葉を思い出し、囁がハッとした表情で顔を上げる。

「止めたというの……？時を」

戸惑いの表情で問いかける囁を見て、立ち上がった十稀が、楽しげに微笑む。

「さあ？どうかしらあ？」

はぐらかすように答える十稀の声を聞いていると、またしても囁を、あの暗闇に覆われていくような、おかしい感覚が襲った。

「うあ……！」

感覚が戻ると、今度は右足に、白光の刃が突き刺さっていた。膝

下を鋭く突き刺され、バランスを崩した囁が、思わずその場にしゃがみ込む。囁の赤い血が、床に敷かれた絨毯に滲み、その広がっていくシミを見下ろしながら、囁は険しい表情を作る。

「どうやら本当に、止められるみたいね。時を…」

今度は確信した様子で、囁が十稀へと言葉を向ける。

「えええ。まあ、止められるのは一瞬だけだから、恵の神の“永遠”に比べたら、大したものじゃないけどお」

自分を卑下するように言いながらも、十稀は得意げに笑う。

「でも、先輩を倒すには、十分な時間かしらあ？」

挑発するような十稀の言葉に、表情をしかめた囁が、しゃがみ込んだまま右腕をあげ、横笛を口元へと当てて、音色を奏でる。

“触れ”」

音色のすぐ後に放たれた言葉により、十稀の周囲を取り囲む、淡い赤色の光。

“障れ”！」

その光が、閃光を放って、激しく輝いた。

「え…？」

だが、光が止んだその時、閃光の輝いたその場所に、十稀の姿はなかった。いつの間になくなっていく十稀の姿に、囁が戸惑いの表情を見せる。

「どこへ…」

「こーこー！」

背後から明るく聞こえてくる声に、囁が素早く振り返る。囁が振り返ると、囁のすぐ後ろに立った十稀が、囁へと、言玉を向けていた。言玉はすでに、白く輝き始めている。微笑んだ十稀は、迷うことなく大きく、その口を開いた。

“咎めろ”」

“避け…！うう…！”

向けられる巨大な光に、言葉を使い、逃れようとした囁であったが、言葉を言い切る前に、またしても、あの変な感覚に囚われた。

「あああああ！」

言葉を発することの出来なかった囁が、十稀の攻撃をもろに食らい、勢いよく後方へと吹き飛ばされる。広間の壁へと背中を打ちつけた囁が、壁にもたれかかるようにして、力なく床に座り込んだ。

Word. 77 ありがとう (2)

「う、うう…」

「どう？」

苦しいな声を漏らす囁に、十稀が得意げに問いかける。

「私の“フレーズ語句”は」

向けられるその言葉に、痛みになえながら、囁はそつと表情を曇らせた。一瞬とはいえ、時を止められては、攻撃も当てられず、あちらの攻撃を防ぐことも出来ない。囁にとっては、かなり追い込まれた状況であった。

「これが私の力よお！私が得た言葉の力！ね、凄いでしょ？」

誉められることを望む子供のように、十稀が活き活きと問いかける。

「やっと、やっと手に入れたわあ！この文字、この力！ずっと、これが欲しかったの」

嬉しそうに声を弾ませながら、まじまじと白色の言玉を見つめる。

「あんたたち、今の音士を倒せば、桃雪様は、私にもっと文字の力を下さると言ってたわあ」

十稀が言玉から、囁へと視線を戻す。

「だから私は、あんたを倒して、新しい文字を得る！」

迷いなく言い放ち、囁へと言玉を向ける十稀。そんな十稀を見つめ、囁は床に座り込んだまま、そつと目を細めた。

「…力だけが、欲しいの…？」

「は？」

突然の囁の問いかけに、十稀が言玉を振り上げようとしていた右手を止め、しかめた表情を見せる。

「五十音士になって、あなたが手にしたかったものは、文字の力だけ…？」

傷だらけの囁が、痛みにより呼吸も乱れているだろうに、特に言

葉にも詰まらせず、むしろ強い力すら感じるような口調で、十稀への問いかけを続ける。

「当たり前じゃない？他に一体、何があるっていうのお？」

囁の問いかけに対し、十稀がまるで、当然のように、あっさりと答える。

「世界中の人々の言葉が終わろうとしている、この状況であっても、あなたが求めるのは、自身の力だけなの…？」

「はあ？」

またしても向けられる問いかけに、十稀がさらに表情をしかめる。
「何、それ？人々の言葉が終わるとかどうとか、別にどうだっていいじゃない」

興味も持っていない様子で答える十稀に、囁が眉をひそめる。
「私は力が欲しいの。誰にも負けない、相手を屈服させることの出来る、圧倒的な力！」

欲しがる思いが強まるように、十稀の声にも熱がこもる。
「だから、音士になるために必死にやってきた。だから私は、もっともっと文字の力を得るのよお！」

「人々の言葉が、消えてしまうとしても…？」

「しつこいわねえ。他人の言葉なんか、どうでもいいって言ってるじゃない！」

「……そう」

熱の入る十稀とは対照的に、冷めた声で頷きを返す囁。

「よく、わかったわ…」

囁の瞳が、強く光り、十稀を捉える。

「あなたが、音士になれなかった理由が」

はつきりと放たれる囁の言葉に、一気に曇る十稀の表情。

「何ですって？」

少しの間を置いた後、十稀が確認するように聞き返す。だが、その不機嫌になった表情を見る限り、囁の言葉はすでに、十稀の耳に届いているのだろう。

「こんな短期間で、語句フレーズが使えるようになるくらいなもの。あなたはさぞや、優秀な候補生さんだったんでしょね：けれど」

言葉を付け加えた囁が、突き刺すように十稀を見つめる。

「あなたは、五十音士として、一番、必要なものを持っていない」
囁が強く、断定するように言葉を放つ。その言葉に、十稀の表情が、さらに強く歪んだ。

「一番、必要なものですってえ？」

囁の言葉を繰り返し、十稀が少し引きつった笑みを浮かべる。

「随分と偉そうな口振りね、先輩」

十稀は笑みを浮かべた表情ではあるが、はっきりと否定されたからであろう。内に、囁への確かな怒りを秘めていることがうかがえた。

「飛び出せ」

十稀が不意に、言葉を落とす。

「棘とげ」！

「ううう：！」

座り込んだままの囁へ、十稀が、白い光で出来た、無数の棘を打ち込む。囁は、逃れる言葉を発することもなく、その棘を受け、周囲にさらに赤い血を撒き散らして、力なく顔を俯けた。

「何を基準に、そんなこと言ってるのかしらあ？もしかして、さっきの問いかけ？」

大きく首を傾け、十稀が囁への問いかけを続ける。

「世界中の人々の言葉なんて、どうでもいいって言ったから？困るわあ」

十稀が否定するように、何度も、首を横に振る。

「たった、それくらいのことだ」

「たった、それくらい：？」

顔を俯けた状態のまま、先程よりもか細くなった声で、囁が十稀の言葉を繰り返す。

「だって、所詮は他人の言葉でしょう？自分の言葉があるんなら、

それでいいじゃない」

「……言葉の力を誇示する者が、五十音士じゃないわ……」

弱々しいながらも、はっきりとした意志を持って、囁が言葉が続ける。

「皆の言葉を慈しみ、皆の言葉を守ることの出来る者こそが、五十音士……」

囁が俯けていた顔をゆっくりと上げ、切れた頬や額から血を流しながらも、決して怯んでいない、強い表情で、まっすぐに十稀を見つめる。

「だからあなたは、五十音士には相応しくない」

またしてもはっきりと断言する囁に、十稀の表情が、目に見えて大きく歪む。

「さっきから偉そうに……言ってくれてんじゃないわよ！ “咎めろ”^{とが}」

怒りに満ちた口調で、声を張り上げた十稀が、座り込んだままの囁へ、さらに攻撃を向ける。巨大な白光の塊が囁を襲うと、囁の背を支えていた後方の壁が崩れ落ち、支えを失った囁が、そのまま床へと倒れ込む。

「う……あ……」

倒れた囁が、最早、言葉にならない声を漏らす。

「私に攻撃も当てられないくせに、私の攻撃も避けられないくせに、上から見るような物言い、するんじゃないわよ！」

囁の言葉に、相当機嫌を損ねたのか、倒れた囁を見ながら、十稀が吐き捨てるように、言葉を発する。

“皆の言葉を慈しみ、皆の言葉を守る”？馬鹿らし！

十稀が、囁の言葉を鼻で笑う。

「音士でもない人間の、些細な、くだらない言葉を守って、一体、何になるっていうの！？」

張り上げた声のまま、十稀が主張を続ける。

「音士はただ、自分の文字の、言葉の力を誇って、戦えばいいのよ

！」

左手を胸へと当て、さらに言葉を発する十稀。

「世の中の人間の、無意味な言葉なんて、守る必要ないわ！」

「無、意味……」

「ええ、そうよ！音士でもない人間の言葉なんて、全部、無意味よ！何の力もないんだもの！」

そっと言葉を繰り返した囁に、十稀がさらに声を張り上げ、言い放つ。

「無、意味……」

力なく倒れ込んだままの囁が、もう一度、十稀の放ったその言葉を繰り返す。

——そんな言葉、すべてが無意味だわ……——

それは、かつての自分が、放った言葉。

「……そう。あんな感じだったのね……」

かつての自分を、今の十稀の姿に重ね、囁は昔を懐かしむように、そっと笑みを浮かべた。

「何、笑ってんのよ！この状況で！」

床に倒れ、動くことも出来ないというのに、笑う囁を、気味悪がるように言い放ち、十稀が大きく左手を払う。

「もういいわ！とっとと、あんたを倒して、私は新たな文字を……！」

「音士以外の人の言葉には、何の力もないと言ったわね……」

「はあ？」

自分の言葉を遮って聞こえてくる囁の声に、十稀がまた、顔をしかめる。

「言ったわよ！それが何！？」

「そんなことは、ないわ」

強く問いかける十稀に対し、囁はそっと、静かに、否定の言葉を放った。

——大好きだよ、囁。世界で一番、君が大好きだ——

——愛してるわ、囁……どこに居ても、母さんはあなたと一緒に……

「何でもない人間の言葉だって、恐ろしいほど、人の心に絶望を与える……」

——“会^あいに行く”から……！——

「引き金を引かない言葉だって、戸惑うほど、人の心に希望を与え……」

両親の言葉を思い出し、少し眉をひそめながらも、囁が必死に体を動かし、両手を床について、何とか上半身を起こ上げらせる。

「些細な挨拶にも、くだらない一言にも、心はこもってる……」

さらに膝を立たせ、その場で立ち上がる囁。

「だから言葉は、人の心を動かすの」

完全に立ち上がった囁が、顔を上げ、まっすぐに、前方に立つ十稀を見据える。

「だから、この世界に、意味のない言葉なんて、たったの一つもない」

はつきりとそう言い放って、囁が笑う。

「何よ、それ……」

囁の主張を聞いた十稀が、大きく表情を歪め、吐き捨てるように言葉を落とす。

「意味、わっかんないのよ！さっきから！」

声を荒げると、攻撃態勢を取るべく、十稀が、言玉を持った右手を、高々と振り上げた。

「もういいわ！無意味なあんたの言葉は、ここで私が、とっとと終わらせる！」

「……………」

掲げた言玉を輝かせていく十稀を、まっすぐに見つめながら、囁がそっと目を細める。

「……ありがとう」

小さく、十稀には届かないほどに落とされる、囁の感謝の言葉。

「ありがとう。私に、こんな言葉を言わせてくれて…」

その言葉を繰り返す囁の表情に、穏やかな笑みが浮かぶ。

「ありがとう。私の言葉を、意味のあるものに変えてくれて…」

それは、離れた場所で戦っているであろう、自身の神へと、向けた言葉。

「ありがとう…！」

込み上げる思いを溢れさせるように、もう一度、その言葉を繰り返し、囁が、傷だらけの右腕を振り上げて、右手に持った横笛を、高々と掲げる。

「これが、我が神へ捧ぐ、私の…」

掲げた横笛を見上げ、囁がそっと、目を細める。

「私の、正真正銘、最期の言葉…！」

声を張り上げた囁が、大きく目を見開く。

「アハハハ！今更、何しようっていうわけえ！？」

囁のその動きを見ながら、十稀は余裕の笑みで、高らかと笑いあげる。

「どんな攻撃する気なのか知らないけどお、忘れてない？私はねえ、時が止められるの！」

両手を広げ、十稀が勝ち誇ったように言う。

「だから、どう足掻いても、あんたの言葉は私には…！」

「いいえ、問題ないわ」

十稀の強気な言葉を、あっさりと遮る囁。

「一瞬で、逃げられるようなものじゃないから」

「何？」

「さ…」

十稀が眉をひそめ、戸惑う中、囁がそつと口を開き、自身の文字を、今までずつと口にしてきた、共に在った自身の文字を、発する。
「沙羅双樹」……！」

囁が力強く言葉を放ったその瞬間、掲げた横笛から、思わず目を閉じたくなるほどの強い赤色の光が放たれ、囁は吹いてもいないというのに、辺りに、美しい音色が響き渡る。

「な……！ 四字熟語……！？」

その光をもろに目を入れながら、大きく目を見開く十稀。

「馬鹿な！ あれば、選ばれた神にのみ、与えられた言葉のはず……！
ク……！」

囁の放った言葉に動揺を見せる十稀であったが、広がる光と、響き渡る音色に冷静さを取り戻し、言玉を持った右手を身構える。

「例え四字熟語だとしても、時を止めれば同じよ！」

言玉を輝かせ、勢いよくかざす十稀。

「“止まれ”、“時”……！」

十稀が言葉を放ち、流れいく時間を止める。

「これで……！ え……？」

時間が止まっている間に、囁の攻撃を避けようと、足を踏み出した十稀であったが、戸惑いの声を漏らし、すぐに出した足を止めてしまう。

「な、何……？ どうして……どうして、止まってないの……！」

十稀の周囲に広がっていく、どんどんと赤い光。止められた時間の中だというのに、その勢力は止まらず、そして、広がる光と共に、十稀の周囲の床から、次々と、葉で生い茂った高い木が現れる。自分の背丈の三倍以上もある木々に取り囲まれ、視界を埋め尽くされる十稀。

「な、何よ、これ！ これじゃあ、どこにも……！ あっ……！」

—— 一瞬で、逃げられるようなものじゃないから——
焦る十稀の脳裏に浮かぶ、先程の囁の言葉。

「こういう…！」

十稀がその言葉の意味を悟った頃、止めていた時間が再び動き始める。取り囲んでいく木々の成長速度がさらに増し、やがて、木々から、強い光が放たれる。

「う…！」

取り囲まれた一面の木々から向けられる光に、時を止めたところで、どうすることも出来ないことを知った十稀は、ただ強く唇を噛み締め、その光が、自身へと辿り着くことを待った。

「あああああ…！」

光を全身に浴び、激しい悲鳴をあげながら、十稀が後方へと倒れ込んでいく。

「や…と…」

赤い光の中、倒れていきながら、十稀が目細め、自身の右手の中の、白い言玉を見つめる。言玉は中央に勢いよくヒビが入り、十稀の手の中で、粉々に崩れ落ちた。

「や…と、手に、入れたのに…な…」

手の中から零れ落ちていく、言玉の欠片を見つめながら、十稀はゆっくりと瞳を閉じた。十稀の体が、力なく地面へと落ち、生い茂った木々が消え、周囲を包んでいた光が止んでいく。

「……手に入れたと思ったのなら、それは錯覚よ…」

光が消えゆく中、掲げていた横笛を下ろし、もとの言玉の姿へと戻して、倒れた十稀を見つめ、囁がそつと呟く。

「だって、あなたの言葉は」

倒れた十稀から、天井へと視線を移し、囁が目細める。

「初めからあなたが、生まれ持っているのだから」

囁 対 十稀。勝者、囁。

Word 77 ありがとう (3)

永遠の居城、中央塔。正面玄関部、上方。

「負けたのね、十稀…」

天井を見上げ、どこか遠くを見つめるような瞳を見せた長い青髪の少女、埜亜が、誰にも聞こえないほど小さな声で呟く。すでに場所を移し、囁と十稀の様子が見えることはなかったが、仲間の敗北は察したようである。

「けれど、大丈夫。あなたの分も、私が…」

埜亜が天井から、前方へと視線を移す。

「音士を倒して、文字の力を得てみせるから」

埜亜が見つめた前方には、鋭い表情で、薙刀を構えた七架が立っていた。

「な…」

大きく口を開き、七架が自身の文字を口にする。

「“薙^なぎ倒せ”！」

振り下ろされた薙刀から、真っ赤な一閃が放たれ、まっすぐに埜亜へと向かっていく。向かってくる一閃を見つめ、埜亜はゆっくりと、白い言玉を持った右手を突き出した。

「“呑^のみ込め”」

埜亜が言葉を口にする、言玉から放たれた白色の光が、まるで巨大な口のように、埜亜の目の前で勢いよく開いて、七架の一閃を、あっという間に呑み込んでしまう。その光景に眉をひそめながらも、七架は素早く薙刀を構え直した。

「“変格”」

七架が薙刀を前へと突き出すと、赤く輝きを放ち、薙刀がその姿を、巨大な十字架へと変えていく。祈りを捧げるように十字を持ち上げ、七架が瞳を鋭く変える。

「“泣^なけ”」

言葉と共に放たれる、十字からそのまま抜け出たような、十字型の光。

「“呑み込め”」

埜亜が先程と同じ言葉を使い、やって来た十字の光を、またしても呑み込む。

「“嘆け”」

「え…？」

間髪入れずに放たれる言葉に、攻撃を防ぎ、ホッと一息ついていた埜亜が、戸惑ったように顔を上げる。埜亜が前方を見ると、先程よりも強い十字の光が、こちらへと迫って来ていた。

「の、“呑み込め”！」

埜亜が再びその言葉を放ち、白い光が埜亜の前で大きく、口を開いたが、先程よりも強い十字の光は、あっさりとその口を打ち破る。

「ク…！」

埜亜が少し焦った様子で、言玉を突き出す。

「“逃れろ”！」

自身を白い光で包み、その場から高速で移動して、何とか十字の光を避ける埜亜。埜亜に当たることのなかった光が壁へと撃ち込まれ、壁に大きな十字型の穴があく。先の見えない、深いその穴は、七架の放った光が、いかに強いものであったかを示していた。

「私の言葉では、呑み込み切れない…」

突き出していた右手を下ろしながら、埜亜が真剣な表情を見せる。

「当たったら、一溜まりもなさそうね…」

その穴を振り返りながら、埜亜が少し感心するように呟く。

「さすがは、選ばれし音士だわ…」

埜亜がまた前を見て、どこか妖艶な笑みを、七架へと向ける。

「選ばれし音士の中でも、あなたはまた、特別なのでしょう…？」

試すように問いかける埜亜に、その言葉の意味が理解出来ず、七架が少し眉をひそめる。

「だって、ほんの一握りの神付きしか辿り着けないという、変格を

超える変格を、使うことが出来るのだから…」

埜亜のその言葉に、表情にわずかだが、驚きを走らせる七架。

「なんで、そんなこと…」

「とってもよく、調べているのよ。あなたたち、五十音士のことは…」

戸惑った様子で問いかける七架に、埜亜はさらに、妖艶に笑う。

「とっても懂れていたから…あなたたち、五十音士に…」

「懂れて…？」

「ええ。私たち、もとは韻で育成された、五十音士の候補生だったの」

「候補、生…」

埜亜から告げられる事実、少し驚いた表情を見せる七架。幾度と戦いを経てきたとはいえ、七架は五十音士になって、間もない人間。韻で、そのような者たちが育てられていることなど、知るはずもなかった。

「多くの候補生の中から、十稀と二人、桃雪様に目をかけてもらってね…それで、この文字を貰ったの」

その話を聞きながら、七架が浮かない表情を見せる。

「けど、そんなの…」

「ええ、わかっているわ」

七架が何を言わんとしているのかを瞬時に察し、その言葉を遮る埜亜。

「所詮、私たちは駒。十稀がわかってたかは知らないけど、私は、桃雪様に利用されているだけであることは、わかってる…」

埜亜が、そっと天井を見上げる。

「きちんと、理解してる」

七架へと視線を戻し、埜亜が笑う。

「そこまでわかってるなら、何故…」

「もっと、欲しいから」

戸惑うように問いかける七架に、埜亜が迷うことなく、すぐさま

答える。

「他の文字も、他の言葉も、もっと知りたい。もっと見たい。もっと聞きたい」

埜亜が大きく、口角を吊り上げる。

「もっと、手にしたい」

向けられる確かな欲望に、七架が気難しい表情を見せる。

「ねえ、だから私に、見せてくれない…？」

埜亜が誘うように、大きく首を傾ける。

「私に、変格を超えたという変格、その、あなたの言葉を…」

求めるように、七架へと左手を差し出す埜亜。そんな埜亜の様子に、七架はますます、戸惑いの色を深くする。

「罨…？でも」

警戒を強める七架の脳裏に、城の外で戦っている仲間たちや、前へと進んだアヒル、箆也の姿が過ぎった。この戦いに、すべての言葉の未来が懸かっているのだ。今は、戸惑っている時間すらも惜しい。

「罨だとしても、立ち止まるわけにはいかないの…！」

声を張り上げ、七架が勢いよく、十字を掲げる。

「“奈変”^{なへん}！」

七架が言葉を発したその瞬間、七架の掲げていた十字が、勢いよく上空へと舞い上がり、空中でさらに強く輝いて、七つに分裂していく。七つの十字が周囲を取り囲む中、その中央に立った七架は、空いた右手を掲げ、鋭い表情を見せた。

「“七光”^{ななひかり}！」

空中に浮かぶ七つの十字から、それぞれ違う七色の光が放たれ、空中で混ざり合いながら勢力を増して、一気に埜亜へと向かっていく。

「とてもじゃないけど、呑み込めないわね…」

先程までとはまるで違う規模の光に、埜亜がすぐさま悟った様子で言い放ち、冷静に言玉を突き上げる。

「鈍^{のろ}くなれ」

言玉を輝かせ、迫り来る七光の速度を、少し落とす埜亜。鈍化した七光を見ながら、埜亜が言玉を、自身へと向ける。

「退^のけ」

自身へと言葉を向け、その場から移動する埜亜。七光の直撃コースから避けたところで、埜亜が立ち止まる。

「嘆^{なげ}け」！

一息ついていた埜亜へ、七架が手を緩めることなく、素早く次の言葉を放つ。七架の言葉を受け、七つの十字のうちの中央三つの十字から同時に、赤い閃光が放たれた。向かってくる新たな光に、埜亜が厳しい表情で、そっと目を細める。

「鈍^{のろ}くなれ」

埜亜がまたしても、向かってくる光の速度を落とす。

「除^{のぞ}け」

遅くなった光へ向け、埜亜が新たに言葉を放つと、迫り来る光に、埜亜の居る場所だけを抜き取るように、穴があき、光は埜亜をきれいに避けて、後方へと過ぎていった。

「ふう：さすがは、抜かりないわね」

肩を落とした埜亜が、そっと微笑み、七架へと感心の言葉を向ける。

「初めてよ：？こんなに言葉を使わされたのは」

まるで七架を誉めるような、埜亜の言葉。

「まあ、言葉で戦ったのは、あなたが初めてなんだけれどね：」

付け加えられるその言葉に、七架が表情を曇らせる。

「戦う気はあるの？」

険しい表情を見せたまま、七架が確かめるように、埜亜へと問う。
「どういう意味、かしら：？」

「さっきから避ける言葉ばかり」

はぐらかすように聞き返す埜亜に、七架が鋭く、次の言葉を放つ。
「ただの時間稼ぎなら、私は、そんなものに付き合っている時間は

…」

「大丈夫よ」

ずっと緩やかな口調であった埜亜が、珍しく強めの声で、七架の言葉をはつきりと遮る。

「桃雪様はどう、お考えか知らないけれど…」

さらに目を細め、埜亜が鋭く笑う。

「私だって、折角得たこの文字を、ただの時間稼ぎなんかにしたくないから！」

今まで以上に声を張り、埜亜が高々と言玉を掲げる。

「伸のびろ」！

埜亜の言玉から、無数の糸状の光が伸び、一斉に七架へと迫り来る。向かってくる光を見て、七架は冷静に、右手を振り上げた。

「薙なぎ払え」！

七つの十字からそれぞれ、一閃が放たれ、七架に迫り来ていた糸状の光を、次々と払い落としていく。すべての光を払い落とし、七架が一瞬、安心したような表情を見せたその時、埜亜が妖しく微笑み、真っ赤な唇の塗られた口を開いた。

「臨のぞめ」

埜亜が言葉を放つと、七架が払い落としたはずの糸状の光が、近くに落ちたもの同士で繋がり合い、またしても長い糸を形成して突き上がり、勢いよく七架の体へと絡みつく。

「グ…！」

絡み付く光に動きの自由を封じられ、険しい表情を見せる七架。だがその表情に、それほど焦りは見られなかった。

「こんなの…！」

七架が言葉で、絡みついた糸を払おうと、大きく口を開く。

「な…！」

「呪のろえ」…」

七架が言葉を放つ前に、放たれる埜亜の言葉。

「え…？」

埜亜の言葉が響いたその瞬間、七架は、全身から力が抜け落ちていくのを感じた。感じただけではない。実際に脚力も失い、七架がその場に力なく座り込む。一気に意識が薄れ、体がふらついた。

「な、何…？これ…」

自身の状態に、戸惑うように声を漏らす七架。座り込んでいることも辛く、すぐにでも倒れてしまいそうで、床に両手をつき、何とか体を支える。

「どう…？」

苦しみ、戸惑う七架へと、静かに問いかける埜亜。

「私の“呪い”は」

「の、ろい…？」

わずかに顔を上げ、埜亜を見て、その言葉を繰り返し、七架が陰しい表情を見せる。

「そんな、の…」

「信じてない…？」

七架の心の内を見透かすように、埜亜がそっと問う。

「言葉を信じないなんて、いけないわ…」

微笑んだ埜亜が、七架へと再び、言玉を向ける。

「誰よりも言葉を信じなければならぬ、五十音士である、あなたが」

埜亜の言葉に合わせるように、言玉が一瞬、強く光る。

「ううう…！」

埜亜の言葉を耳に入れた次の瞬間、七架の意識がさらに霞み、一気に体がぐらついた。ほんの少しでも気を緩めれば、あっという間に意識を失い、倒れてしまいそうである。力を保つことすら、ままならなくなり、上空の七つの十字は崩れ落ちて、もとの言玉の姿へと戻り、七架のすぐ傍の地面に落ちた。

「こんな、こんなの…」

悔しげに表情をしかめる七架であるが、その意志に反し、意識は徐々に遠のき、見つめる埜亜の姿も、どんどんと霞んでいく。

「皆…皆が戦ってる、のに…こんな、ところで…うう…」

必死に堪える七架であったが、薄れいく意識に、これ以上、抗うことは出来なかった。

「ダメ…もうっ…」

床についていた手が滑り、七架の体が、うつ伏せに倒れていく。

「朝比奈、くん…」

最後に静かにアヒルの名を呼び、そのまま七架は前へと倒れ込み、その瞳を閉じた。床に倒れた状態のまま、動かなくなった七架を見つめ、埜亜がそっと笑う。

「良き夢を、五十音士」

冷たく言い放ち、埜亜がまた、言玉を持った右手を振り上げる。

“鋸”のこぎり」

言葉により、埜亜の手の中の言玉が、その姿を変える。鋭く尖った刃を右手に握り締め、埜亜がさらに、妖しく笑う。

「願わくば我が手で」

倒れた七架へと歩み寄りながら、変わったばかりの刃を振り上げる埜亜。

「永久の眠りを…！」

「……………」

意識を失った七架へと、鋭い刃が、振り下ろされた。

Word 77 ありがとう (4)

——ある日の昼休み。言ノ葉高校、一年D組。

「え！？ツバメさんに告白！？」

教室に珍しく響き渡る、七架の大きな声。だが、クラスの皆が思い思いに話しており、教室中、とても賑やかだったため、その声が、他の者たちの視線を引くことはなかった。

「本当？本当にツバメさんに告白する気なの？想子ちゃん」

「そっ」

もう一度、確認するように問いかけた七架に、想子は清々しいまでに、はっきりと頷いた。

「決めたの。私、次にツバメさんと遭遇したら、告白する！」

拳を握り締め、想子が決意した様子で宣言する。

「小学校の時から、もう六年越しだしね！」

「それは知ってるけど…」

まだ困惑した表情で、想子へと視線を送る七架。

「でもなんでまた、いきなり…？」

「うーん」

七架の問いかけに、想子が悩むように、少し首を捻る。

「何か、もったいないと思ったんだよねえ」

「もったいない？」

「うん。だって折角、こういう想いを持ったのにさ、ずっと自分の心に閉まったまま、出さないなんて、もったいなくない？」

聞き返した七架に、想子は晴れやかな笑顔で答えた。

「折角抱いたんなら、口にして、伝えたい。だって」

一つ、間を置いて、想子がまた、大きく笑う。

「だって私は、言葉を持って、生まれてきたんだから」

想子のその言葉に、衝撃を走らせるように、七架が大きく、目を

見開く。だが想子は、そんな七架の様子には気付かず、その笑顔を、自然と七架へ向けた。

「ナナは？ 言わないの？」

「え？」

急な想子の問いかけに、七架が少し首を傾げる。

「ガアに、自分の気持ち」

「私、は…」

想子に問われた七架が、そっと視線を動かし、教室の窓際を見る。そこには、窓際の自分の席で、紺平や保、他の男子生徒たちと、楽しげに会話をしているアヒルの姿があった。皆に囲まれ、楽しげに笑いながらも、どこか張り詰めたような、そんな空気を纏っているのは、これから先に起こる戦いの壮絶さを、感じ取っているからなのかも知れない。

「言わない、かな…」

そんなアヒルを見つめ、そっと目を細めて、七架が答える。

「世界中の言葉を背負ってる人を、私の言葉のためだけで、悩ませられないもん」

「へ？」

「ううん」

小声で呟いた七架に、言葉が聞き取れなかったのか、想子が首を傾げたが、七架はその内容を伝えることはせず、ただ微笑んで、首を横に振った。

「今はまだ、言わない。けど」

言葉を付け加え、七架が、大きく笑う。

「いつか、言うよ。必ず」

先程の想子と同じように、七架も晴れやかに、そして、どこか誇らしげに笑う。

「だって私も、言葉を持って、生まれてきた」

その言葉を噛み締めるように、言い放つ七架。

「言葉を持って、生まれてきたから」

七架が右手を握り締め、力をこめる。

「だから…」

いつか伝える、その日の為に。

—— “また明日”、奈々瀬——

再び笑い合える、“明日”の為に……——

「明日」…

薄れゆく意識の中で思い出される、たった一つの言葉。暗闇の中の、たった一つの灯火のように、赤々と輝き、周囲を照らして、やがて暗闇を掻き消していく。

「明日」…

その言葉を繰り返し、七架が、閉じられたその瞳を、ゆっくりと開く。

「また、“明日”…！」

繰り返す言葉に七架が力を込めたその瞬間、七架の全身から、強い赤色の光が放たれる。

「うう…！」

七架のすぐ前まで歩み寄り、今、まさに刃を振り下ろそうとしていた埜亜が、間近で放たれる眩い光に、目を細め、耐えきれないといった様子で後方へ飛びさがり、七架との間に距離を取る。その間に、七架が床に手をつき、両膝を曲げて、その場で立ち上がろうと、体を起こす。

「なっ…」

立ち上がろうとする七架の様子を見て、驚いた様子で目を見開く埜亜。

「立ち、上がるというの…?」

埜亜が信じられないといった表情で見つめる中、七架が膝下を立たせ、両手で踏ん張るようにして上半身を起こし、ふらついたままの体を、何とか立ち上がらせる。

「ありがとう…」

立ち上がった七架が、少し顔を俯けたまま、埜亜には届かぬ小さな声を、そっと漏らす。

「ありがとう。何度も私を、立ち上がらせてくれて」
言葉を続ける七架の口元が、少し緩む。

「ありがとう。何度も私を、強くしてくれて」

その言葉は、遠くで戦う、想い人への感謝の言葉。

「ありがとう…!」

勢いよく顔を上げた七架は、誇らしげな笑みを浮かべていた。

「笑っている…」

七架の言葉が聞こえていない埜亜は、立ち上がり、顔を上げ、笑みを浮かべる七架の姿を見つめ、眉をひそめる。その笑みは決して、悲観的なものではない。苦しみも諦めも一切見えない、晴れやかな、強い笑みだ。立つことだけでも精一杯のはずの七架が、浮かべられるようなものではない。その笑みに、埜亜は険しい表情を見せずにはいられなかった。

「まあいいわ。どの道、どうにも出来はしないのだから…」

自身に言い聞かせるように、埜亜が呟く。

「私の、“変格”の前では」

確かな自信をのぞかせ、埜亜は妖しく微笑んだ。

「ハア…ハア…」

苦しげな声を漏らしながら、必死に息をする七架。立ち上がったものの、体の力が抜け、意識が薄れていくこの状況は、変わってはいなかった。一瞬でも気を抜けば、また倒れてしまうであろう。

「何か、何かの言葉が、発せられているはず…」

霞む意識の中、それでも七架が、何とか考えを巡らせる。

「あの時、あの人は：“呪い”と言った後にも、何か言葉を使ってた……」

ほんの少し前の記憶を辿る七架。“呪い”の言葉を疑った七架に對し、埜亜は信じないのはいけないと注意し、そして再び、言玉を輝かせた。その後すぐに、七架の意識がさらに薄れたことから、その時に埜亜が、何かの言葉を使ったことは、間違いない。

「何かの言葉が、今、この部屋で発動してる……」

七架がそっと視線を上げ、周囲を見回す。

「感じなきや……言葉を」

そう言うと七架は、立ち上がった状態のまま、深く瞳を閉じた。暗闇の中で耳を澄ませ、周囲の音に意識を集中させる。すると、わずかにだが、風の流れるような音が聞こえた。その音は、閉め切られたこの部屋で聞こえるには、どこか不自然な音だ。

「これは……」

その音を聞き取り、七架が何かに気付いた様子で、声を漏らす。

「まだ倒れないの。思ってたより、しぶといわね……」

立ち上がった状態で、目を閉じたまま、いっこうに動く気配を見せない七架に、埜亜が少し、うんざりとした表情で呟く。

「待っていれば、勝手にまた、倒れてくれると思っていただけ……もう待っているのにも、飽きたわ」

埜亜が長い青髪を振り払い、その瞳を鋭くする。

「やっぱりこの手で、終わらせることにしようかしら。“鋸”^{のいざつ}！」

高らかと声をあげ、埜亜が再び、鋭い白光の刃を生み出し、右手に構える。

「さあ、これで本当に終わりよ、五十音士！」

埜亜が楽しげに微笑み、高々と鋸を振り上げる。

「の……！ううう……！」

勢いよく放たれようとした埜亜の言葉が、何故か、途中で止まる。
「な、何……？こ、これ……」

ゆっくりと下ろされていく、鋸を構えた埜亜の右腕。埜亜の全身

を、強烈な脱力感が襲うと共に、その視界が霞み、意識が薄れていく。それは、先程、七架が襲われた現象と、まったく同じものであった。足の力も抜けた埜亜が、力なくその場に膝をつく。

「な、何がっ…」

「^{なが}流れろ」

戸惑う埜亜の耳へと入る、一つの言葉。激しく頭痛が響く中、埜亜が顔を上げ、前方に立つ七架を見つめる。七架は、いつの間にか、その右手に再び赤い薙刀を構えており、先程よりも、意識のはっきりしている様子で、まっすぐに埜亜を見つめていた。

「まさかっ…」

そんな七架の様子に何かを察したのか、埜亜が少し焦った様子で、自身の周囲を見回す。埜亜がよく目を凝らすと、埜亜の周囲で、淡い赤色の光に包まれた気体が、徐々に七架の方へと流れていつているのが見えた。

「気付いたというの？」

埜亜が再び七架を見て、驚きの声をあげる。

「私の“変格”、“^{のうたん}濃淡”に…！」

「濃淡…」

構えていた薙刀を少し下ろした七架が、静かに埜亜の言葉を繰り返す。

「そっか、“濃淡”。それで空気の濃度を変えて、私の周りの酸素を薄くしたんだ」

「え…？」

今、初めて気付いた様子で言う七架を見て、埜亜が眉をひそめる。「私の言葉に気付いたから、自分の言葉で、もう一度、酸素を流れ込ませたのではないの…？」

薄れる意識を必死に保ちながら、埜亜が七架へと問いかける。

「ううん。あなたが何の言葉を使ったかなんて、全然わからなかった」

埜亜の問いかけに、七架はゆっくりと首を横に振る。

「私はただ、言葉を感じただけ」

「感、じた…？」

「うん。あなたの方に、何かの言葉が流れていつているのを感じたから、それをこっちに流れ込ませれば、何か変わるかなって、そう思ったの」

「言葉が、流れる…？」

穏やかに微笑みながら答える七架に、埜亜はますます眉をひそめ、戸惑った表情となっていく。

「何を言っているの！？あなたは私が“変格”を使ったことに気づき、冷静に対処した！そうでしょう…！？」

七架の言葉の意味が理解出来ず、苛立ったのか、自身の答えを押しつけるように、埜亜が勢いよく声を張り上げる。

「ううん、“変格”だったなんて、あなたが言うまで気付かなかったよ」

だが、そんな埜亜の言葉に、七架はあっさりと、首を横に振った。「そういえば、“の”もナ行の文字だから、“変格”があるんだっただね。すっかり忘れてたよ」

「忘れていた…？」

埜亜が眉尻を吊り上げ、表情をしかめる。

「そんな候補生でも知ってる常識…あなたは、五十音士でしょう…？」

「うん」

険しい表情で追及するように問いかけてくる埜亜に、七架が少し視線を落しながら頷く。

「確かに私は五十音士だけど、まだ日も浅いし、バタバタしてたから、五十音士の仕組みとか韻とか候補生とか、正直、よく知らないの」

音士になった頃のことを思い出したのか、七架が懐かしむように笑い、そして顔を上げる。

「私が知ってるのは、言葉の大切さだけ」

堂々と胸を張り、誇らしげに笑う七架。

「私が、我が神に教わったのは、言葉の大切さだけ」

七架が胸の前で左手を握り締め、噛み締めるように、言葉を放つ。

「あら、そう。随分と不親切な神様ね」

「ううん」

特に興味なさそうに、冷たく言葉を放った埜亜に対し、七架が笑顔のまま、素早く首を横に振る。

「それだけで、いいの」

握り締めた手にさらに力を込め、七架がはっきりと言う。

「だってそれが、人にとって、一番、気付きにくくて…」

七架がまた、大きく笑う。

「五十音士にとって、一番、重要なことだから！」

堂々と響き渡る七架の声に、言葉に、埜亜の表情が歪む。

「そんなの…」

小さく言葉を発し、埜亜が強く、唇を噛み締める。

「そんなの、認めないわ！そんな五十音士、候補生よりも無知な五十音士なんて、私が認めない…！」

ふらつく体を必死に起こし、薄れる意識を保つように、強く首を横に振り、声を張り上げた埜亜が、七架へ向け、勢いよく言玉を突き出す。

「^の呑み尽くせ」！

今までで一番巨大な白光の塊を、七架へ向けて放つ埜亜。白光が獣の口のように、荒々しく開き、速度を増して、七架へと迫り行く。

「……奈変」

やって来る光の塊を冷静に見つめながら、七架は再び、言玉の姿を、薙刀から、七つの十字へと変えた。空中で舞う七つの十字へと、七架が高々と右手をかざす。

「な…」

とても大事そうに、自身の言葉を口にする七架。

「七華八裂^{ななかはちれつ}」！！

七架の言葉が放たれると、空中に浮かんでいた七つの十字が、まず中央の十字を先頭に、次々と前方へと飛び出していき、周囲の光もすべて纏って、向かってくる埜亜の白光へ向け、正面から翔け抜けていく。二つの力はぶつかり合ったが、すぐさま、七架の十字が、埜亜の白光を撃ち破った。

「な…!？」

砕かれて散る、自身の力に、大きく目を見開く埜亜。

ラスト・イデオム
「四字熟語…？まさか、ただか神附きが…！」

埜亜が戸惑う間に、白光を撃ち破った十字の列が、埜亜へと迫り来た。

「ううう…！」

最早、何の言葉を口にする間もなく、埜亜がその表情を大きく歪める。

「ああああああ…！」

七つの十字に貫かれ、激しい悲鳴をあげながら、後方へと吹き飛ばされていく埜亜。その右手から、白色の言玉が零れ落ち、ヒビ割れて、粉々に砕け散っていく。

「私…私、は…音士に…」

砕け落ちていく言玉の破片に手を伸ばしながら、埜亜が目細める。埜亜の手が言玉に届くことはなく、埜亜はそのまま、力なく瞳を閉じ、後方へと倒れていった。

「はあ…はあ…」

乱れた息を整えながら、七架が倒れた埜亜を見つめ、そっと目を細める。その七架のすぐ傍の床に、七つの十字からもとの姿に戻った言玉が、静かに落ちる。

「また明日、逢おうね…」

微笑みながら、その体をゆっくりと傾けていく七架。

「朝比奈、くん…」

七架はそのまま瞳を閉じ、静かに、その場所に倒れ込んだ。

七架 对 桡。 桡。 勝者、 七架。

永遠^{とわ}の居城。屋上、上空。

「生まれろ」

上空に浮かび上がった現^{うつ}が、金色の言玉を先に付けた杖を振りかざし、それを金色に輝かせ、高らかと自身の言葉を口にする。すると、放たれた光から、狼のような荒々しい様子の獣が二頭、生み出され、前方に居る保と灰示へと飛び掛かっていく。

「叩^{たた}け」！

「払^{はら}え」

保と灰示は、互いに落ち着いた様子で自身の言葉を使い、保が糸を振り切つて、灰示が針を放つて、それぞれ、飛び掛かってきた狼を一頭ずつ、あっさりと蹴散らす。

「生まれろ」

生み出したばかりの狼が倒されると、少しの間も置かずに、現が再び同じ言葉を放ち、今度は一頭の巨大な狼を生み出し、保に的を搾^{たす}つて、向かわせる。

「助^{たす}けろ」

激しい咆哮をあげながら、やって来る獣を目の前に、保が焦ることなく冷静に、言葉を発する。

「盾^{たて}」！

糸が幾重にも絡まって、保と獣の間に立ちはだかり、大きな口を開き、覗^{のぞ}かせた獣の鋭い牙を、盾となった糸が正面から受け止める。

「語^{フレイズ}句」か…

「こんな俺が、一丁前に語^{フレイズ}句なんか、使っちゃってすみません。弛^{たゆ}め」！

現の表情が少し曇る中、保が謝りながら、さらに次の言葉を発し、受け止めていた糸の盾を少し緩ませて、勢いよくぶつかっていた獣のそのバランスを崩す。

「は…」

獣がバランスを崩したそこへ、素早く針を放つ灰示。

「“奔^{はし}れ”」

光を放ち、勢いよく駆け抜けた針に斬り裂かれ、獣が一瞬にして、掻き消える。

「へへ、凄いコミュニケーションじゃん」

屋上から、上空の保と灰示の戦う様子を見上げ、部^{へも}守の兵吾が、どこか感心したような笑みを浮かべる。

「とても、二人で戦うのが初めてとは思えない…ホホホ…」

「当然よお」

同じように上空を見上げ、驚いたように話す蛍に、不二子が得意げに声を掛ける。

「だって灰示様だもの。灰示様なら、例えどんな虫けらにだって、神にだって、合わせることは出来るわあ」

「相変わらず、凄い忠誠っぷりだね…」

「ウフフ！」

どこか呆れたように呟く蛍に対し、不二子は特に気にしていない様子で、嬉しそうに笑う。

「灰示様と高市保は、元々一つの体を共有している存在。息が合うのも、不思議じゃないさ。ヒヒ」

そこへ、ヒロトが冷静に言葉を挟む。

「まあ」

さらに言葉を付け加えるヒロトに、他の三人の視線が集まる。

「目指す世界が同じっていうのも、大きいと思うけどね」

「“生まれろ”」

下方から八行の皆が見守る中、現が言葉を発し、大蛇のような獣

を生み出して、二人へと向かわせる。

「また…」

現が獣を生み出し、向かわせてくるのは、戦いが始まってからすでに、もう数え切れないほどの回数となっていた。向かってくる大蛇を見て、保が少しうんざりとした表情を見せながら、糸の絡みついた右手をあげる。

「いいよ、保」

そんな保を制止するように出される、灰示の針。

「あれは、僕が」

短く言葉を発し、目を細めると、灰示が鋭く、大蛇へと数本の針を放った。

「“破裂”^{はれつ}」

灰示が言葉を落とすと、針の突き刺さった大蛇が、内側から爆発するように、粉々に砕け散った。金色の光の破片が、灰示の上空から降り注ぐようにして、辺りに舞うが、それでも現は眉一つ動かさず、もう一度、杖を振り上げる。

「“生^うまれろ”」

満面の笑みを浮かべ、またしても、その言葉を口にする現。光から生み出された蝙蝠^{こうもり}のような獣が、群れを成して、灰示へと向かっていく。再度、同じ言葉を使う現に、さすがの灰示も、その表情を曇らせた。

「懲^こりないね…」

呆れたように呟きながら、新たな針を、両手に構える灰示。

“は…うう！”

「灰示？」

針と共に言葉を放とうとした灰示が、突然、その表情を大きく歪め、その場に蹲るようになって、動きを止める。その灰示の様子に、戸惑う保。

「こ、これは…」

「効いてきたかのお？」

険しい表情を見せる灰示に対し、現は含んだような笑みを見せる。
「ク…！」

蹲ったまま、まだ動かない灰示へと、現が先程はなった蝙蝠の群れが、襲いかかっていく。

「“猛ろ”！」

灰示の前へと出た保が、突き出した両手から、蜘蛛の巣のように無数の糸を張り巡らせ、やって来た蝙蝠の群れを、一匹残らず掻き消す。

「灰示！」

蝙蝠を掻き消すと、保が後方を振り返り、蹲ったままの灰示の傍へと近寄る。

「灰示、どうしたの！？」

「体、が…」

「“蠢け”」

放たれる言葉に、保が振り返り、灰示が顔を上げ、同時に言葉を発した現を見る。

「あなたの言葉の…？」

「ああ、そうじゃ。あの大蛇の体は、実は無数の微虫で出来ておつてなあ。お前さんが大蛇を破裂させた時、光となって、お前さんの体内へと入り込んだんじゃよ」

自身の上空から降り注いでいた金色の光を思い出し、灰示がそつと眉をひそめる。

「お前さんの体内に入り込んだ微虫は、お前さんの体内のありとあらゆる場所で蠢き、お前さんの体の自由を奪う」

得意げに話しながら、現がいやらしい笑みを浮かべる。

「どうじゃ？ 凄いやろう？ わしの産物は」

自身を称えるように、胸へと左手を当てる現。

「この素晴らしい産物の数々を見れば、もっと賞賛の声を浴びてもいいはずなんじゃがお」

自分でも不思議がるように、現が数度、首を横に振る。

「じゃが、たった一度の失敗で、わしは神を墮とされてしまった」
少し曇る、現の表情。

「わしの唯一の失敗作。それがお前さんたち、“忌”^{イミ}じゃよ」
現から向けられる言葉に、灰示が目を細め、厳しい表情を見せる。
「お前さんたちが、“痛み”を糧に馬鹿みたいに増殖しなければ、
今頃、わしは…」

「“滾れ”^{たぎ}！」

続く現の言葉が、大きく放たれた言葉により遮られると、互いに
絡まり合った無数の糸が、太い一本の糸へと姿を変えて、勢いよく
現へと突き出される。

「“受け止めろ”」

杖を振り上げ、冷静に言葉を発して、向かってきたその糸を、金
色の光の壁で受け止める現。

「そう逸るな、音士の小僧よ」

上から見下すような笑みを浮かべた現の、その笑みの先には、普
段の穏やかな表情とは一転し、怒りを前面に押し出したような顔つ
きの保の姿があった。

「それ以上の侮蔑の言葉は、俺が許しません」

「何故じゃ？」

はつきりと言い放つ保に対し、現は大きく首を傾ける。

「わしはお前さんらの敵である“忌”を愚弄しただけのこと。そこ
の忌の小僧が怒るならまだしも、お前さんが怒る理由はあるまい？」
「確かに、今までの忌のやって来たことは、許されるべきことじゃ
ありません」

現の問いかけに、保は、険しい表情を見せたまま、そっと口を開
く。

「忌という生物のせいで、多くの人間が苦しんだ。多くの人間が悲
しんだ。それは、忌が償うべき罪です」

灰示が細めた目を、さらに細めながら、保の言葉に耳を傾ける。
「そして、忌という生物を生み出したあなた自身が、償うべき罪で

す」

「わしが？」

保のその言葉を、現が少し驚いた様子で聞き返す。

「何故、わしが償わねばならんのじゃ？確かに生み出したのはわしじゃが、人間共を苦しめたり、悲しませたりしたのは、あやつらが好き勝手にやったこと」

冷たく放り出すように、現が言う。

「わしには、何の関係もない」

現のきっぱりとした言葉に、保の怒りに満ちていた表情が、何かを悟った様子で、少し落ち着く。

「あなたはさっき、もっと賞賛の声を浴びてもいいはずと、仰いましたね」

「ああ。これほどの産物を造り上げているのじゃ、世界中の神となつていても、おかしくはない」

保の問いかけに、現は自信に満ち満ちた様子で答える。

「世界中が、わしを崇めてもおかしくは……」

「賞賛されなくて、当然だと思います」

「何……？」

またしても遮る保の声に、現が眉をひそめる。

「あなたのような、器うつわの小さな神、誰も崇めたりはしない」

はつきりと言い放つ保に、現の表情が大きく歪む。

「“齧食”うしよく」

「あ……！ううう！」

保の糸を受け止めていた光の壁から、糸を伝うように金色の強い光が流れ、保へと逆流していく。素早く右手から糸を切り離れた保であったが、左手は間に合わず、金色の光が保の左手まで伝うと、保は、左手に激しい痺れを覚え、苦しげな声をあげた。

「調子に乗るなよ、音士の小僧」

右手で庇うようにして左手を押さえ、その場で身を屈める保に、現が強い口調で言葉を投げ放つ。

「知ったような口ばかり、叩きおってからに……」
あまりの怒りにか、現が少し、声を震わせる。

「わしのどこが、器が小さいという!? 何が小さいという!? 言うてみる!」

「そういうところだよ」

保の代わりに答えるようにして入ってくる、一つの声。

「放^{はな}て」

「う……! “浮^うかべ”!」

鋭くやって来る赤い光に、現がぎりぎりのところで言葉を発し、さらに上空へと舞い上がって、何とか避ける。

「貴様……!」

大きく歪めた表情を、下方へと向ける現。光の飛んで来たその先には、針を構えた灰示の姿があった。

「“蠢け”を喰らって、まだ……!」

「くだらないね……」

焦る現とは対照的に、灰示が涼しげな笑みを、現へと向ける。

「この程度の痛みで、僕を抑えられるとでも思ったのかい……?」

軽く左手をあげ、灰示が現へと問う。

「“痛み”の塊である、この僕を……」

「ク……!」

他者を圧倒するような、力のある笑みを浮かべる灰示に、現が言い返す言葉もなく、どこか悔しげに唇を噛み締める。その間に灰示は空中を移動し、保へと近寄った。

「戦えるかい? 保」

「うん、右手は動くから」

左手の痺れは取れないが、灰示の問いかけに、保が前向きな答えを返す。

「まったく、しつこい奴等じゃ」

手負いながらも、まだ戦う姿勢を崩さない保と灰示に、現が少し呆れた様子で表情を歪める。

「器の小さい神に、この世界を好きなようにされるわけにはいかないからね」

「まだ言うか…」

保と同じ言い方をしてみせる灰示に、現がうんざりとした様子で呟く。

「だから一体、わしのどこが、何が、小さいという!?!」

「自分のことばかり見て、他のあらゆる者を、一切見ようとしないう保へ向けてと同じ問いかけをする現に、灰示が落ち着いた口調で言葉を返す。

「そんな、自分という個体にのみ囚われた君に、世界なんて大きなものが、見えるはずもないよ」

神である現を、逆に見下すように、言い放つ灰示。

「君のような神に祈るくらいなら」

灰示が口元を緩め、穏やかに笑う。

「馬鹿みたいに他者のことしか考えない、安の神様にでも祈っている方が、余程マシだよ」

「灰示…」

アヒルのことを語り、穏やかに笑う灰示のその様子を、保が横から、少し驚いた表情で見つめる。それは、かつて敵対していたアヒルに対する感情が、灰示の中で、確実に変わっていることを示すような、そんな言葉であった。

「そうか。よう、わかった…」

先程よりも低い音調で、灰示の言葉に頷く現。

「ならば貴様らは、貴様らの神に救いを乞うがいい。そして、わたしは」

現が言葉を止め、大きく杖を振り上げる。

「わしを崇めぬお前らに、罰を与えよう!」

振り上げられた杖の先で、言玉がより一層強い、輝きを放つ。

「うちようてんがい有頂天外”…!」

言葉と共に、辺りへと放たれた光に、全身を包まれていく現。

「あれは…！」

ラスト・イデオム

「四字熟語…」

光に包まれていく現を見つめ、保と灰示がそれぞれ、険しい表情を見せる。

「フハハハハ…！」

「あ…！」

響き渡る笑い声に、保が光に包まれた現の方へと視線を向けた途端、その瞳を大きく見開く。包まれていた光を纏い、再び二人の前へと姿を見せた現は、先程までの白髪の老人の姿ではなく、若々しく、力強い、男の姿となっていた。

「あの姿は…！？」

「あれが、彼の四字熟語の力…」

驚く保の横で、灰示もそつと眉をひそめる。

「この姿になったわしは、もう止められんぞ！」

若くなつたその姿であっても、老人であつた頃の言葉遣いは変わらないが、よく通るその声は、一瞬、現のものとは気付かない。大きく笑みを浮かべた現が、右手に持っていた杖を、太くなつた腕でいとも簡単に碎き、先に付いていた言玉だけを手にして、杖の残骸を捨て去る。

「さあ、始めるとしようか。小僧共」

右手に言玉を持ち、現が大きく、両手を広げる。

「わしの、神の裁きを！」

高らかと笑いあげる現に、保と灰示が厳しい表情を見せながら、同時に身構えた。

永遠の居城。左塔、最上階。

「あれは…」

永遠が、自室に設置された大窓から見える、屋上空の巨大な金色の光を見つめ、そっと目を細める。その光はあまりに強く、光の周囲のものは一切見えなかったが、光から感じる力のようなものは、遠く離れた永遠にまで、伝わってくるようであった。

「あの男でも、本気で戦うことがあるんだな…」

その光の主を知る様子で、永遠がどこか感心したように呟く。

「凍てつけ」！

窓とは反対側、部屋の内側から聞こえ漏れてくる言葉に気付き、永遠がそちらを振り返る。床を走るようにして、永遠へと向かってくる氷の波。向かってくる波に慌てることなく、永遠が言玉を持った右手を素早く向ける。

「被え」をお

永遠の言玉から放たれた白い光が、向かって来ていた氷波に、上から被さるようになって広がり、あっという間に呑み込む。永遠が右手を下ろし、波のなくなったその先を見ると、青色の扇子を永遠へと向けた為介が、立っていた。為介は休むことなく、また扇子を振り上げる。

「“一碧万頃”…！」あつべきばんけい
ラスト・イデオム

「四字熟語か…」

やって来る部屋を埋め尽くすほどの大波を見ても、永遠は焦ることなく、そっと微笑む。

「懐かしいね、為介」

緩やかに右手をあげながら、下降してくる大波を見上げる永遠。

「神試験で、君と戦った時のことを思い出すよ」

永遠の右手の中で、言玉が強く輝く。

「“汚染”^{をせん}」

「あ：！」

永遠の言玉から放たれた白光が、大波に伝わると、大波が一瞬にして白い光の波へと変わり、その流れの向きを変えて、為介へと降り注ぐ。

「うああああ：！」

自身が放ったはずの大波に襲われ、その場に倒れ込む為介。

「ふう」

また言玉を持った手を下ろし、永遠が一息つく。

「ク、う、うう：」

「ん？」

苦しそうなその声を耳に入れ、永遠が少し目を細め、ゆっくりと振り返る。広い部屋の入口付近には、無傷の永遠とは対照的に、先程の攻撃や、今までの攻撃により、傷だらけとなった為介が、血を流しながら、それでも何とか立ち上がろうと、もがき、動いていた。

「まだ、立ち上がるつもり？ 為介」

永遠が抑揚のない声で、為介へと問いかける。

「やめておきなよ。無駄な努力だ」

必死にもがく為介に、永遠が制止を促す。

「俺の“終えろ”^をを受けた。君の言葉は、もうじき消える」

「消える：」

永遠の言葉を繰り返しながら、床に両手をつき、上半身を起こすがらせる為介。

「じゃあ、その前に：消える前に、言っておかないと：」

自分に言い聞かせるように言葉を発しながら、まだ立ち上がろうと、膝を立たせ、必死にもがく為介の様子に、永遠が少し戸惑うような表情を見せる。

「言っておく：？」

永遠がゆっくりと、為介の言葉を繰り返す。

「何？ 今までの恨み辛みかな？」

少し首を傾げ、冗談のように問いかける永遠。

「いいよ、聞いてあげる。それで君が満足するなら、君の言葉が消え逝くまで、いくらでも」

永遠が為介の言葉を待っている間に、為介が何とかその場に立ち上がり、顔を上げ、もう間もなく消えてしまいうような、弱々しい目の光の中、まっすぐに永遠を見つめる。

「ボクは…」

少し躊躇うように、落とされる声。

「ボクは、あなたに、感謝しています」

為介の口から零れ落ちた、思いがけないその言葉に、永遠の表情から笑みが消える。

「感謝…？」

為介の言葉を繰り返し、眉をひそめる永遠。

「何を…何を言っている？ 為介」

永遠が険しい表情を作り、戸惑った様子で為介へと問いかける。

「君が、俺に、この俺に、感謝なんてするはずが…」

「幼い頃」

信じ難いといった様子で、必死に為介の言葉を否定しようとする永遠であったが、その永遠の言葉は、為介の声により遮られた。

「ボクの言葉は、誰にも、届きませんでした」

今にも膝から崩れ落ちてしまいうような足を、必死に奮い立たせ、もう張ることも出来ない声を何とか紡いで、為介が自身の言葉を続ける。

「何を言っても、誰にも聞いてもらえない。ボクの言葉なんて、発する価値もない。そう、諦めていた時にボクは、神試験で、あなたに出会いました」

血の流れ落ちる頬の筋肉を動かし、為介がそっと、笑みを浮かべる。

「そして、あなたから、言葉を貰いました」

為介が過去を懐かしむように、目を細める。

「君の言葉には、誰かを救えるだけの価値がある。だから君を、神にする」と

一つひとつの言葉を噛み締めるように、言い放つ為介。その表情は、どこか晴れやかで、こんな状況であるというのに、少しも苦しげではなかった。

「嬉しかった」

込み上げる思いを、溢れ出させるように、為介が言う。

「あの言葉を貰えて、ボクは本当に、嬉しかった」

笑顔を見せる為介に、ますます曇っていく永遠の表情。

「だから、あなたに、感謝しています」

為介が胸を張り、またはっきりと言い放つと、ゆっくりと、その頭を下げていく。

「ありがとうございます……」

深々と頭を下げ、永遠へと感謝の言葉を述べる為介。そんな為介に、永遠が眉間の皺を深くし、何かを振り払うように、何度も首を横に振る。

「そんな……」

表情に浮かんだ戸惑いを押し殺すように、低く、落ち着いた声で言葉を発する永遠。

「そんな言葉を向けられて、俺が、喜ぶとも思っているのか……？」
眉をひそめ、永遠が為介へと険しい表情を向ける。

「俺が君に感謝されて、喜ぶとも……」

「思って、いません」

永遠の問いかけの途中で、為介がもう、答えを口にする。

「けど、初めから、喜んで貰えるって確証のある言葉なんて、どこにもないでしょう……？」

徐々にゆっくりと、おぼつかなくなっていく為介の言葉。それでも為介は、言葉を止めることなく、必死に自身の主張を続ける。

「皆、喜んで貰えるかなって思って、考えて、その言葉を発する……」
もう間もなく、言葉が消え失せてしまうとは思えないほどに、穏

やかな笑みを浮かべる為介。

「言葉の可能性を信じて、言葉を発する…」

噛み締めるように呟いて、為介が扇子を持っていない左手を、そっと胸に当てる。

「だからボクも、最後まで、自分の言葉の可能性を信じます。それに」

浮かべた穏やかな笑みを、永遠へと向ける為介。

「一番伝えたいことを伝えるのが、“言葉” っていうものでしょう…?」

険しい表情を見せる永遠に、為介が、躊躇うことなく、微笑みかける。過去、まっすぐに永遠の姿を見ることが出来なかった為介が、今はまっすぐに、永遠を見つめる。

「色々考えたけど、ボクが一番、あなたに伝えたかった言葉は、恨みでも辛みでもなかった」

為介の足元が、徐々に白い光へと覆われていく。光に包まれると、先程までふらつくように動いていた足が止まり、まるで動きを封じられたように、まったく動かなくなる。永遠より受けた“終えろ”の言葉により、為介の言葉が、すべての活動がもう間もなく、停止しようとしているのだ。

「感謝の言葉だった。ただ、それだけのことです」

為介を包む光が徐々に広がり、為介の上半身が腕が首が、体中のすべての動きが、止められていく。やがて光は、為介の頭まで包み込み、為介の口の動きが、遅くなっていく。

「と…お、ひさ…さ…」

「お別れだ、為介」

言葉を発することもままならなくなった為介が、声にならない声で、かすかに永遠の名を呼ぶ。その呼び声を耳に入れながら、永遠は冷たく言い放ち、そっと右手を振り上げた。

「“終えろ”」

永遠が短く言葉を落とすと、為介の全身を包み込んだ光が、強い

輝きを放ち、その光に包まれながら、ゆっくりと、為介が後方へと倒れていく。最後に、二十数年前と変わらぬ、永遠の姿を目に焼きつけ、後方へと倒れながら、為介がその瞳を閉じていく。

「扇子野郎！」

勢いよく扉が開く音と共に、入ってくる大声に、閉じかけていた為介の瞳が、わずかに動く。

「扇子野郎……！」

動かした視線の先、部屋の入口から、こちらへと駆け込んでくるアヒルの姿。もうアヒルの名を呼ぶことも出来ない為介は、その姿を確認すると、言玉を持っている右手を、わずかだが上げた。

「あ……」

最早、誰の耳にも届かない為介の言葉が、その場に落とされる。その言葉を口にする、為介は完全に瞳を閉じ、床へと仰向けに倒れ込んだ。

「あ……！」

倒れた為介を見て、アヒルが大きく目を見開く。

「扇子野郎！」

アヒルが必死に駆け込んでいき、倒れた為介の傍へと駆け寄る。床に倒れた為介は、深く瞳を閉じており、体どころか、指の一本を動かす気配も見られなかった。

「扇子野郎！ 扇子野郎……！」

「無駄だよ」

為介へと必死に呼びかけるアヒルを止めるように、永遠が背後から声を掛ける。その声にゆっくりと振り返り、永遠を見るアヒル。

「彼の言葉は、今、終わった」

落ちていた表情で言い放つ永遠を見つめ、アヒルがそっと目を細める。もう一度、為介へと視線を戻すと、気持ちを切り替えるように、一度、深く目を閉じて、また瞳を開き、その場で立ち上がって、永遠と向き合う。

「楽しいか……？」

厳しい表情を見せたアヒルが、シンプルな問いかけを、永遠へと向ける。

「皆の言葉を止めて、消して…楽しいか？」

アヒルからの問いかけに、永遠が少し、目を細める。

「楽しいよ」

短く答えを返す、永遠。

「終わらぬ時を、数えるよりは」

素っ気なく答え、永遠が、冷たく笑う。その言葉を聞き、アヒルが気難しい表情を見せる。そんなアヒルの表情を見て、永遠はまたそっと微笑んだ。

「驚かないんだね」

「え？」

永遠のその言葉に、戸惑うように声を漏らすアヒル。

「聞いたのかな？ 恵に」

永遠が少し、首を傾げる。

「俺の、“永遠”^{えいえん}のこと」

その言葉に、アヒルが表情を曇らせる。

——かつて“恵^あの神”であった私は、自身の言葉“永遠”を使い、自分の若さと命を、永遠のものとした……

悲しげであった恵の言葉を思い出し、アヒルがそっと目を細める。

「君に想像が出来るかい？」

問いかけを向ける永遠に、アヒルが俯けていた顔を上げる。

「今の君と同じ、十六という年齢から、まったく年を取らなくなった俺の気持ち」

永遠が求めるように、アヒルへと笑みを向ける。

「皆が、この絶対の時の流れの中で年老いていく中、たった一人、その場に残された俺の気持ち」

口調は穏やかだが、その言葉はどこか、アヒルを責めているよう

であった。

「ねえ」

まっすぐにアヒルを見つめ、永遠が鋭く笑う。

“安の神”朝比奈アヒル」

永遠に名を呼ばれ、アヒルの表情が強く引き締まる。

「俺は…」

真剣な表情を作り、アヒルがゆっくりと口を開く。

「俺には、わからない」

そう間を置くこともなく、アヒルがあっさりと、答えを出す。

「恵先生から話を聞いたけど、正直、“永遠”てものがどんなに長いのか、どんなに、お前や恵先生に重くのしかかったのか、理解しきることなんて出来なかった」

「本当、正直だね」

アヒルの素直な、誤魔化しのない心からの言葉に、永遠がどこか感心するように言う。

「けど、それが正しい答えだと思うよ」

そう断言し、永遠がアヒルへと笑いかける。

「永遠を生きてもないのに、永遠の重みがわかる人間なんて、きつとこの世界にはいない」

そっと目を細め、どこか遠くを見つめるような瞳を見せる永遠。

その永遠を見て、アヒルも少し考え込むように、目を細める。

「君が過去を理解し、色々と考えを巡らせて、ここへやって来たのは、よくわかった」

視線を下ろした永遠が、またまっすぐに、アヒルを見つめる。

「じゃあ、それで？」

首を傾け、永遠がまたしても、アヒルへと問いかけを向ける。

「俺のすべてを知った上で、俺のやろうとしていることを知った上で、君の出した答えは？」

求められる答えに、アヒルがまた、真剣な表情を見せる。

「俺は、お前が憎いわけじゃない。お前を、倒したいわけじゃない。」

けど…」

——ガァ！——

笑顔で呼びかけてくれた想子の、クラスの皆の、町の人々の姿を思い出し、アヒルが深く目を閉じる。

「俺は」

そしてまた目を開き、言葉を発するアヒル。

「俺は、皆の言葉を守りたい」

一切の曇りのないアヒルの声が、その部屋に、響き渡る。

「俺は、皆の言葉を、消させたりしたくない。終わらせたりしたくない。だから」

その声に、さらに力がこもる。

「だから俺は、お前を倒す！ “遠^をの神” 永遠！」

突き抜けるアヒルのその言葉を聞き、永遠は表情をしかめるところか、どこか満足げな笑みを浮かべ、小さく頷きを零す。

「倒す、か…」

アヒルが放った言葉を繰り返し、また笑う永遠。

「何故かな。君は、必ずそう言うと思ったよ…」

永遠が一人、納得した様子で笑う。

「やっぱり君は、よく似てる」

永遠の瞳が、まっすぐにアヒルの姿を捉える。

「俺が憧れた、かつての安の神に」

誰よりもまっすぐであった、アヒルとよく似た男の姿を思い出し、永遠が懐かしむように、そっと目を細める。

「じゃあ、始めるとしようか。安の神」

誘うように、永遠が、言玉を持った右手を、アヒルへと向ける。

「すべての言葉の、“明日”を賭けた、戦いを」

永遠のその言葉に、アヒルが表情を引き締め、右手に持った赤い言玉を突き出す。

「五十音、第一音」

大切に、一文字一文字を発するアヒル。
「あ”、解放…！」

「撃ち込め」!

若返った現が、よく通るその声を張り上げると、現の突き出した言玉から、雨粒のように、無数の金色の光粒が降り注ぐ。

「弾け」

針を投げ放ち、降り注ぐ光粒を弾き飛ばす灰示。だが、あまりの光粒の数に、投げる針の本数が追いつかず、弾き切れなかった光粒が、灰示へと差し迫る。

「弾ききれないか：“外れろ”!」

二つ目の言葉を放ち、残った光粒もすべて、自身の直撃コースから外させる灰示。

「打て」

「あ:!!」

だが、いつの間にか、灰示の後方へと回っていた現が、言玉から伸ばされた、金色の長い光の棒を振り上げ、振り返りきれていない灰示へと、勢いよく振り切る。

「うううう:!!」

棒に強く左腕を叩かれ、体を傾けながら、灰示が険しい表情を見せる。

「どうした? 動きが鈍いぞ」

左腕を右手で押さえ、少し身を屈める灰示に、いやらしい笑みを向ける現。

「お前が動けば動くほど、体内で蠢く微虫の動きは活発化し、お前の体の自由を奪う」

「ク:!!」

灰示が唇を噛み締め、体の向きを後方へと変えきって、現へと針を向ける。

「遅いな」

灰示のその動きよりも早く、灰示の顔前へと、自身の言玉を突き出す現。

「“討て”」

「うあああああ！」

現の言玉から放たれた金色の光の塊を、至近距離から直撃し、灰示の体が、勢いよく後方へと吹き飛ばされていく。

「灰示……！」

「他人の心配をしている場合か？」

吹き飛ばされた灰示の方へ、思わず身を乗り出した保へと、現がすぐに狙いを変え、言玉を構える。

「“生まれろ”」

輝く言玉から生み出される、獅子のような金色の生物。その生物が空を翔け抜け、まっすぐに保へと突っ込んでいく。

「“唸れ”」

「グアアアア！」

現の言葉に従うようにして、激しい咆哮をあげるその生物。生物の咆哮が、強い金色の閃光となって、保へと迫り来る。

「“助けろ”」

保が両手を前に突き出し、素早く糸を重ね合わせていく。

「“盾”」

重ね合わせた糸を盾とし、保が、やって来た閃光を受け止める。

「あ……！」

だが、閃光とぶつかり合った瞬間、盾がすぐさま綻び始め、あっという間に解けて、打ち破られる。

「そんな……！さっきは止められたのに……！」

焦りの表情を見せる保へと、盾を破った閃光が迫る。

「ああああああ！」

閃光を直撃した保が、勢いよく落下し、中央塔の上へと、背中を叩きつけるようにして倒れ込む。斬り裂かれた腕や足からは血が滲み、倒れた地面に、力なく落ちた。

「う、うう…」

表情を歪めた保の口から、苦しげな声が零れ落ちる。

「脆いものじゃのお、音士の小憎」

倒れた保を、現は空中から、高々と見下ろす。

「今、楽にしてやる」

言玉を向ける現に、保は険しい表情を見せるが、まだ体も、口も動かすことが出来なかった。

「討て」

動けぬ保へと、現が容赦なく、光の塊を放つ。

「阻め」

割って入るように言葉が響き、保へと向かっていた光が、保の前に張られた赤い光の膜により止められ、上空へと大きく弾き返された。保に届かなかった攻撃と、響いたその言葉に、現がそつと眉をひそめる。

「しつこいのお」

どこかうんざりとした様子で呟きながら、現が声の聞こえてきた後方を振り返る。

「お前さんも」

「ハア：ハア：」

現が振り返ったその先には、針を構えながらも、苦しげに息を乱した、灰示の姿があった。傷も多少は負っているが、受けている外傷以上に、灰示は苦しげである。

「すでに蠢く微虫は、全身に回っておる。普通ならば、動けるはずもないのじゃが」

現のその言葉を受け、灰示は、苦しげに表情を歪めながらも、口角を吊り上げ、そつと笑う。

「足りないね…」

乱れた呼吸で、言葉を落とす灰示。

「この程度の、“痛み”じゃ…」

「……そうか」

微笑む灰示に少し表情を曇らせた後、ほんの少しの間を置いて、
現がゆっくりと頷く。

「ならば、もっと“痛み”をやろう」

現が灰示へと、言玉を向ける。

「笑う気力など、なくなるほどのなあ！ “撃ち抜け”！」

素早く駆け抜けた、目にも留まらぬ金色の光が、灰示の胸を勢いよく貫くと、灰示は声すらもあげずに、後方へと倒れ込んでいく。

「灰示！ク…！」

撃たれた灰示の姿を見て、何とかしようと、必死に口を開く保。

「“立ち、上がれ”…！」

すでに左手は痺れており、自由がきかず、右手だけでは上半身を起こすのが、やっとであった保は、言葉を使い、糸を足へと絡めて、その絡めた糸を右手で引っ張るようにして、自身の体を立ち上げらせる。

「言葉を使ってまで、立ち上がるとはのお」

「あ…！」

やっとのことで立ち上がった、保の目の前に立ち塞がる、若返り、大きくなった現の体。

「“た…！”

「フハハハ！」

「うううう…！」

保が言葉を放つその前に、現が太くなったその左腕で、保の首を難なく掴み、体ごと勢いよく持ち上げる。保は苦しげな声を漏らしながら、必死にもがいたが、体は動かず、首を絞められ、上手く言葉を発することも出来なかった。

「どうじゃ？ わしの四字熟語ラスト・イデオムの力は。音士の小憎よ」

答えられないとわかってる保へと、問いかけを向ける現。

「“生まれる”の言葉により、全身のありとあらゆる細胞を若返らせ、力を増させる我が四字熟語、“有頂天外”」

現が、自身の言葉を解説するように話す。

「素晴らしいじゃろう？わしの言葉、“生まれろ”は強調するように言って、現が大きく微笑む。

「この言葉こそ、神に最も相応しき言葉」

現が保の体をさらに上方へと持ち上げ、言葉が続ける。

「万物創生の言葉。まさに神にのみ、与えられし能力」

現の言葉に、力が入る。

「この言葉こそ、わしが神たる所以じゃ！」

張り上げられ、辺りへと響き渡る声に、保がそっと目を細める。

「誰にも否定などせん！わしの言葉こそが、神の言葉！わしこそが、誰よりも神じゃ！神じゃあ！」

熱の入る現の言葉を、保が、静かに聞く。

「お…れ、は…」

「ん？」

保の口から零れる小さな声に気付き、現がその言葉を聞き入れようと、保の首を握り締めている手の力を、保の体が落ちない程度に、軽く抜く。

「何じゃ？音士の小憎」

発言を許すように、現が保へと視線を送る。

「俺は、少なからず…あなたのその、“生まれろ”の言葉に、感謝しています。神」

まだ呼吸の荒い中、保がまっすぐに現の見つめ、言葉を放つ。

「あなたのその言葉があったから、俺は、灰示に出会えた」

保のその言葉に、屋上の端で、うつ伏せに倒れ込んでいた灰示の体が、少し動く。

「灰示に出会えたから、俺は、“痛み”を乗り越えられた」

苦しげだった保の表情に、明かりが灯るように、そっと笑みが浮かぶ。

「“痛み”を乗り越えられたから、俺は、今っ…」

微笑んだ保が、次の言葉を囁み締めるように、間をあける。

「仲間と共に、戦える…！」

「^{ひるがえ}翻せ”！」

「何？」

保の声が響き渡った途端、横から新たな言葉が入り、地面から舞い上がった水飛沫が、現の左腕を襲って、現の手から、保の体が離れる。

「^{へこ}凹め”！」

「“踏^ふみ潰せ”、私のトラトラ子！」

「チ…！」

溢れ出した水飛沫に、思わず飛び上がった現へと、それぞれの攻撃を繰り出す兵吾と不二子。二人の姿に、現が大きく舌を鳴らす。

「雑魚共が…！」

吐き捨てるように言いながら、現は言玉を持つ右手を振り上げた。

「蚩！」

「ヒロト」

倒れた灰示のもとへと駆けつけ、すでにその体を起こし上げている蚩のもとへ、保を連れて、ヒロトがやって来る。

「すぐに二人の回復を」

「うん」

「フハハハハ！」

冷静に言葉を交わす二人であったが、上空から高々と響く笑い声に、同時に顔を上げる。

「無駄無駄無駄あ！そやつらの体を蝕むは、我が言葉！旧世代の神クラスならともかく、貴様ごとき音士の言葉に、どうにか出来るものではないわあ！」

「ク…！」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、自信満々に言い放つ現に、ヒロトと蚩が、その表情をひそめる。だが、現の言葉が事実であろうことは、二人にも予想がついていた。

「無駄でも構わない。蚩、二人に回復の言葉を…」

「いい」

ヒロトの蛍への言葉を止める、落ち着いた声。

「灰示様」

その声を放ったのは、蛍に支えられるようにして起き上がった、灰示であった。すでに全身に、現の放った微虫が回っているのだろう。顔色も青白く、見るからに生気が失われていつている。

「ですが、このままでは…！」

「保」

進言しようとしたヒロトの言葉を遮り、灰示がそっと保の名を呼ぶ。自分と呼ぶその声に、保が、深く俯けていた顔を上げ、ゆっくりと灰示の方を見た。

「僕に一つ、考えがある」

「考、え…？」

真剣な表情で言い放つ灰示に、少し戸惑うような表情を見せる保。保もすでに、左腕の痺れが上半身に渡っており、体の自由が、ほとんど奪われていた。

「何…？」

動かぬ首を少し傾け、灰示の言葉を待つ保。

「君と僕の言葉で、君と僕の“痛み”を、それぞれ半分ずつにする」
『な…！？』

灰示のその答えに、驚きを示すヒロトと蛍。だが保は、それほど体が動かないこともあってか、まったく驚きを示そうとはしなかった。

「半分、に…？」

「ああ」

聞き返す保に、灰示がそっと頷きかける。

「君のその痺れと、僕のこの体内の微虫を、それぞれ、半分ずつに分けるんだ」

「そんな無茶なこと…！」

「蛍」

保の代わりに、否定しようとした蛍を、ヒロトが止める。振り向

く蜚に、首を横に振るヒロト。これは、保と灰示が決めることであって、他の者が口を挟むべきことではないことを、ヒロトはすでに理解していた。

「そうすれば、やがて僕らは、彼の言葉の影響により、体の自由を奪われ、完全に動けなくなるだろう…」

少し曇る、灰示の表情。

「だが」

付け加えられる言葉と共に、灰示の瞳に、光が宿る。

「そうすれば僕らは、ほんの少しの間だけ、二人とも、自由に動ける」

光の灯るその瞳で、灰示がまっすぐに保を見つめる。

「その、ほんの少しの間に、彼を倒すんだ」

まっすぐに見つめる灰示に応えるように、保も真剣な表情で、まっすぐに灰示を見つめる。

「無茶な作戦で、とんでもない賭けだけどね…」

そう呟いて、灰示が自嘲するような笑みを浮かべる。

「どうだい？保」

問いかける灰示に、保はすぐに口を開こうとはしなかった。しばらくの間、灰示を見つめ、そして保がゆっくりと、その表情に笑みを浮かべる。

「うん、いいよ」

笑顔で頷く、保。

「“痛み”を分かち合うっていうのが、初めて出会った時から、君と俺との約束だったしね」

保のその言葉を聞き、灰示も穏やかな笑みを浮かべた。

「それに」

言葉を付け加えた保が、どこか嬉しそうに笑う。

「無茶は、俺の神様の得意技だ」

「そうだったね…」

いつも無茶ばかりのアヒルの姿を思い出し、保と灰示がそれぞれ、

思い出すように笑みを浮かべる。笑みを浮かべたまま、保はまたまっすぐに、灰示を見つめた。

「分かち合おう」

保が、痺れていない右手を、ゆっくりと灰示の方へと伸ばす。

「そして、乗り越えよう」

——君も、“痛い”の…？——

初めて出会った日と同じように、灰示から保へと伸ばされる、一本の手。

「灰示」

「ああ、保」

呼ばれる名に頷き、伸ばされた保の手に、灰示もゆっくりと、手を伸ばした。

——うん、“痛い”よ：——

初めて出会った日と同じように、灰示が、保のその手へと、自身の手を伸ばす。

二人の手が重なると同時に、重なった手から、真っ赤な光が放たれる。

「「運^{はこ}べ」」

「「辿^{たど}れ」」

二人の口から、それぞれの言葉が同時に零れ落ちると、その瞬間、さらに強い赤色の光が、二人の体を包み込んだ。

「うがああああ！」

「兵吾！」

現の攻撃を受け、吹き飛ばされていく兵吾に、思わず身を乗り出す不二子。

「討て”」

「あ…！」

だが、兵吾の身を案じる間もなく、現はさらに、不二子へも言葉を向ける。迫り来る金色の光の塊に、険しい表情を見せる不二子。不二子の言葉程度では、どうにも出来ないことを、不二子はすでに理解していた。

「ク…！」

不二子が痛みを覚悟するように、強く瞳を閉じる。

「外^{はず}れろ”」

瞳を閉じた不二子の耳に、確かに届く一つの言葉。向かってくるはずの光は、いつまで経ってもやって来ず、不二子がそつと瞳を開く。視界に入るその姿に、不二子がすぐさま、嬉しそうに笑みを零す。

「灰示様！」

不二子と現の間の空中を、浮かび上がっているのは、灰示であった。

「まだ立つか」

前方に現れた灰示を見つめ、現が表情をしかめる。

「いい加減、しつこいのお！」

「滾^{たぎ}れ”」

嫌気がさした様子で叫びあげた現が、言葉を放とうと右手を振り上げたその時、現の後方から言葉が響き、現が慌てて、後方を振り返る。そこには、しっかりと両手を構えた、保の姿。

「“滝”！」

「う、“受ける”！」

保の両腕から、まるで滝のように押し寄せた無数の糸を、慌てて突き出した右手で、押さえる現。だが、あまりの糸の数に、現の右手が徐々に押され始める。

「グ…！な、何故じゃ…？あやつ左手は、痺れて動かぬはず…」
強く両手を突き出している保を見ながら、現が戸惑いの表情を見せる。その間にも、現はどんどん保の糸に押されていき、後方へとさがっていつていた。

「この…！“う…！”

「“挟め”」

「な…！」

次の言葉を放ち、状況を打破しようとした現であったが、また後方から言葉が響き、左右から飛んできた針が現の右腕へと突き刺さって、その動きを止める。動きの止まった現へと、さらに、上空から針を投げ放つ灰示。

「“爆ぜろ”」

「グ…うああああ！」

右腕の動きを封じられた現が、灰示の針の針を直撃し、現の目の前で爆発が起ると、保の糸を受け止めていた態勢も崩れ、爆発の上さらに、滝の糸が、現を襲った。攻撃を受けた現が、勢いよく屋上へと叩き落とされる。

「グ、うう…！」

少し崩れた屋上の地面から、苦しい声を漏らしながらも、すぐさま起き上がる現。

「何故じゃ…？あやつも、すでに微虫は全身へと回っているはずじゃというのに、何故、あのような動きが…」

ひそめた眉で、現が上空の保と灰示を見上げる。

「何じゃ！？一体、何をした！？貴様ら…！」

考えても答えを導き出せなかった現が、直接、二人へと問いかけ

を向ける。

「くだらない問いかけだね……」

その現の問いかけを受け、いつものように微笑む灰示。

「他者を見ることもない君には、到底、理解出来ない。答えるだけ、無駄だよ」

上から見下すように言い放つ灰示に、現の表情が大きく歪む。

「お、のれ……！」

湧き上がる怒りに、その声を震わせる現。

「有象、無象……！」

現が言葉を放ち、全身から金色の光を放って、その光から、無数の黒い影を次々と生み出していく。

「あの男、また……！」

「まだ、あの数を生み出せるのか……」

生まれいく、おびただしいほどの影の数に、ヒロトたちが険しい表情を見せる。

「また……」

意味もなく生み出される命に、保も目を細め、厳しい表情を作る。

「保」

「うん」

そんな保へと、いたって冷静に声を掛け、一本の針を保の方へと向ける灰示。灰示の呼びかけに頷くと、保は糸の絡まった右手を振り上げた。

「携たずさえろ」

保が右手から糸を伸ばし、灰示の差し出した針へと結びつかせる。

保の糸の繋がれた針を、灰示は、向かってくる無数の黒い影たちへと、勢いよく投げた。

「倍ばいせ」

投げ放たれた灰示の針が、一本から二本、二本から四本と、空中でどんどん増えていく。針と共に、結びついていった保の糸も増え、青い空に、赤い糸が一気に広がった。広がった赤い糸を見上げ、保

が大きく口を開く。

「“倒^{たお}せ”！」

「んな：！？」

どんどんと増殖した針が、無数に生まれる黒い影の胸を、一匹残らず貫き、保の言葉が響くと同時に、弾けるような大きな音を響かせ、一瞬にして掻き消える。先程まで無数に存在した、自身の生み出した生物が、一瞬にして消え失せたその光景に、思わず大きく目を見開く現。

「な、な：」

「“奔^{はし}れ”」

あまりの衝撃に言葉を奪われ、茫然としてしまっている現へと、灰示が容赦なく、次の針を放つ。

「ううう！」

灰示の針に右肩を貫かれ、立ち上がったばかりの体の、バランスを崩される現。

“束^{たば}ねろ”」

現が態勢を整えようとしているその間に、保が、幾本もの糸を重ね合わせ、太い一本の糸を作り、勢いよく振り上げた。

「“叩^{たた}け”！」

「ぐああああ：！」

振り下ろされた保の糸に、腹部を強く払われ、現が後方へと吹き飛んでいく。

「グ：！」

何とか堪え、空中で体を止めた現が、両拳を力強く握り締めながら、その表情を歪ませ、保と灰示の姿を見つめる。

「貴様等：」

少し乱れた呼吸で、言葉を漏らす現。

「一体、どこに、そんな力が：」

「さあね」

問いかける現に対し、灰示がそっと微笑み、答える。

「僕も不思議だよ。“痛み”以外に、こんなにも、自分を強くしてくれるものがあるなんて、知らなかった」

自身でも驚いた様子で話し、灰示が左手を、自分の胸へと当てる。「これが、人の言う、仲間と共に戦う力ってものなのかな」

「力、じゃと…?」

涼しげに笑う灰示の言葉を受け、現が表情を歪め、唇を噛む。

「くだらぬことを…!“生まれろ”！」

現がまたしても言葉を放ち、巨大な金色の獣を造り上げる。

「唸れ”！」

生み出されたばかりの獣が、激しい咆哮をあげると、その声が光の塊となって、二人の方へと押し寄せる。だが二人は顔色一つ変えず、一歩前へと出た保が、冷静に両手を突き出した。

「耐えろ”！」

辺りに糸を張り巡らせ、向かってきた咆哮を受け止める保。その間に、灰示が獣へ向け、鋭く針を放った。

「張り裂けろ”！」

灰示により放たれた針を食らった獣が、針の突き刺さった部分から、全身を斬り裂かれるようにして、掻き消えていく。獣が消え、咆哮の光も消えたところで、保が糸を、灰示が針を、同時に構えた。

「放て”！」

「猛ろ”！」

「ぐあああああ！」

二人の攻撃がほぼ同時に、現へと直撃し、現が下方へと勢いよく降下していく。背中から屋上に落ち、屋上の隅へと転がり込んだ現の全身は、すでに傷だらけで、勝ち誇っていた先程までの余裕は、一切、なくなっていた。保と灰示がゆっくりと屋上へ降り立ち、鋭い表情で、必死に上半身を起こしている現を見つめる。

「もう、いいだろう」

終わりを告げるように、冷静に、現へと言葉を向ける灰示。

「もう、君の“生まれろ”は、僕らには、通じない」

はつきりと言い放つ灰示のその言葉に、俯いていた現の表情が、音を立てるように、大きく動く。

「何故、じゃ…」

片膝を立たせ、何とか上半身を起こしながら、現が二人へと、疑問の言葉を投げかける。

「何故、何故、わからぬ…?」

責めるような、だが困惑したような、そんな表情を、二人へと向ける現。

「遥か昔から、人は、多くの道具を、手技を、英知を生み出してきた!」

突き刺すような鋭い瞳で、現が二人を睨みつける。

「人の有りとあらゆる欲望が、数多くのものを生み出し、それが人を進化させ続けてきた…!」

床についていた両手を、左右へと広げ、現が言葉に力を込める。

「人は、“生^うみ出して”こそ、力を得る!“生^うまれろ”こそが、人の力じゃ!」

力強く胸に当てた右手を、血が滲みそうなほどに、握り締める現。

「我が言葉こそ、何よりも偉大な言葉…」

自分に言い聞かせるように、現が言葉を続ける。

「それが、何故、わからぬ…!?」

向けられる強い問いかけに、灰示は冷静な表情を崩さなかったが、保はどこか困ったような表情で、そつと目を細めた。

「別に、わかっていないわけじゃありません」

「何…?」

保のその答えに、現が眉をひそめる。

「“生み出す”ことの大切さも、“生まれろ”の言葉の偉大さも、ちゃんと、知っています」

「ならば…」

保の言葉を聞き、すぐさま口を開く現。

「ならば、何故…!」

「生まれ出ずるものは、皆すべて、いつか必ず、散り逝く」

さらに問いかけようとした現に、その問いかけが終わる前に言葉を向けたのは、灰示であった。まっすぐに現を見つめる灰示は、落ち着いた、ひどく穏やかな表情を見せていた。

「創造の後に、必ず、終焉は訪れる」

「終焉、じゃと…？」

灰示の言葉を繰り返し、まるで初めて聞く言葉かのように、戸惑った表情を見せる現。

「はい」

聞き返した現に、灰示の代わりに頷く保。

「いつか終わりが来ることを知っているから、皆、自分の命を、誰かの命を、大切に思えるんです」

保も穏やかな笑みを浮かべ、現へと微笑みかける。

「だから、皆、一生懸命、生きられるんです」

微笑んだまま、保がさらに、言葉が続ける。

「だから、皆、強くなれるんです」

「強く、じゃと…？」

保のその言葉を受け、現がさらに、眉間へと皺を寄せる。

「はい」

戸惑う現へと、もう一度、頷きかける保。

「それが、俺の信じる、“人の力”です」

先程の現の言葉に対抗するように、保がはっきりと、自分の主張を口にする。

「それが、人の力…？何を、何を馬鹿なことを…！」

すぐさま、保の言葉を否定する現。

「そんなものが、人の力であってたまるか！“生まれろ”こそが、欲望こそが、人の力じゃ！」

伝わらぬ自身の思いにか、主張を固持する現への悲しみにか、保がそっと、目を細める。

「わしは、人の力のもととなる、“生まれろ”の言葉を持っておる

…！わしは、人の頂点に立つに、相応しき者…！」

声を荒げ、自身を固持するように、必死に言葉を放つ現。

「じゃから、わしが神…！わしが神じゃ…！！」

まるで狂ったように、自身を主張し、現が叫ぶ。

「創造にばかり興味を寄せ、終焉をまったく見ようとしなない」

そんな現を見つめ、荒々しい現とはひどく対照的に、灰示が冷静に、はっきりとした口調で言い放つ。

「そんな君に、命の大切さが、人の強さが、わかるはずもない」

どこか諦めたように言い切り、灰示が鋭く、現を見つめる。

「君は、神じゃない」

「ぐううう…！」

きっぱりと否定する灰示の言葉に、表情を歪ませ、前歯を大きく出して、唇を噛み締める現。保と灰示の言葉により、自信を揺るがされているのが、目に見えてわかる。

「違う違う…！！」

現が大きく首を横に振り、先程の灰示の言葉を必死に否定する。

「わしは神じゃ！神じゃあああ！」

叫びあげるような声と共に、全身から強い金色の光を放つ現。放たれるあまりにも眩い光に、保と灰示が思わず目を細める。

「“生まれろ”、“生まれろ”、“生まれろ” おおお！！」

天を仰いだ現が、何度も言葉を繰り返し、全身から放たれる光を、どんどんと生み出していく。空へ、辺り一面へ、勢いよく広がっていく光を見つめ、表情を曇らせる保と灰示。

「あれは…」

「言葉に取り憑かれたか…」

眉をひそめる保の横で、灰示が厳しい表情を見せる。

『う…！！』

その時、保と灰示が、同時に表情をしかめた。腕に走る痺れ、全身を回る鈍痛。分かち合った痛みも、すでに限界を超え、二人の体を再び、蝕み始めていた。このままいけば、もう数分と経たずに、

二人は動けなくなってしまうであろう。

「どうやら、タイムリミットのようだね。」

少し苦しげに額に汗を滲ませながら、灰示がそっと笑う。

「彼の様子を見ても、僕らの体から見ても、次が最後だ。保」

「うん。」

灰示の言葉をよく理解した様子で、保が頷く。

「ねえ、灰示」

最後の攻撃のため、針を構えようとしていた灰示を、保がそっと呼ぶ。保の声が届くと、灰示は一旦動きを止め、保の方を振り向いた。

「何だい？保」

「一つだけ、聞いてもいい？」

「ああ」

少し躊躇うように、保が問いかけ、そして躊躇いもなく、灰示が頷く。

「あの人を倒したら、君はどうなるの……？」

保のその問いかけに、表情を曇らせる灰示。保は灰示の方は見ずに、光に包まれた現を見つめていた。灰示を見ないというよりは、見れないといった様子だった。そんな保を見つめ、灰示が目を細め、躊躇っていた口を、ゆっくりと開く。

「僕は、彼の言葉により、生み出された存在」

冷静な声とは裏腹に、灰示がどこか、切ない表情を見せる。

「彼の言葉が消えれば、僕の存在も消えるだろう」

灰示の答えに、現を見つめる保の表情が、かすかに動く。それでも、保にとっては、動揺を抑えた方であった。その答えを、予想出来なかったわけではない。現が忌を生み出した創造主であるというならば、現の言葉が消えれば、忌の存在が消えるのは、当然のことだ。だがそれでも、保は、険しい表情を作らずにはいられなかった。「このまま、すべての言葉が終われば、どうせ消える。同じことだよ」

保の心情を察するように掛けられる言葉に、保がやつのことで、灰示の方を振り向く。

「君が、悩む必要はない」

「灰示…」

優しく微笑みかける灰示を見つめ、保がそっと目を細める。

「さあ、行こう。保」

灰示が保へと、左手を差し伸べる。

「僕らの、最後の言葉だ」

「……うん」

灰示のその言葉に、保はしっかりと頷いた。

「“生まれろ” おおお!!!」

一際大きく放たれた現の言葉により、現の体から放たれた、眩いばかりの巨大な光が、上空で、人のような形を作っていく。その姿は、現自身を象っているようにも見えた。

「わしが神となり、世界を創る…!!」

強い思いを、言葉へと溢れさせる現。

「うおおおおお…!!!」

現の激しい叫び声と共に、現を象った光の塊が、保と灰示へと、勢いよく襲いかかっていく。迫り来る、今までで一番、巨大な光にも動じず、二人は落ち着いた表情でそれぞれ、糸と針を構えた。

「た…」

「は…」

とても大切なものののように、二人がそっと、言葉を零す。

「“たくげんたくこう択言択行”！」

「“はくじつしょうてん白日昇天”」

それぞれの言葉を、思いを乗せ、放たれた糸と針が、強い赤色の光を放ち、その光をどんどんと強くしながら、向かってくる金色の光へと、まっすぐに飛んでいく。糸と針が、その金色の光の人像の胸を貫くと、そこに大きくヒビが入り、大きな音を立てて、光が碎け散っていく。

「うう…！」

光を貫いた糸と針が、さらに、まっすぐに現へと向かっていく。現は大きく目を見開いたが、すべての力を結集した光を打ち破られた今、現には、どうする術も残されていなかった。

「う、うあ、うああああ！」

二人の力を直撃し、自身の攻撃と同じように、胸を貫かれた現が、真っ赤な光に包まれ、押し潰されていく。現の纏っていた金色の光はすべて払われ、言葉により若返っていたその姿も、もとの老人の姿へと戻っていく。

「わしは、わしは、わしは消えん！」

赤い光に呑み込まれていきながらも、老人の姿へと戻った現が、必死に声を張り上げる。

“生まれろ”、“生まれろ”、“生まれろ” おおお…！！」

悲痛なほどに、その言葉を繰り返しながら、赤い光の向こうへと、姿を消していく現。

『……………』

その姿を、横に並んだ保と灰示が、逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

「さようなら、創造の神」

消え逝く光を目に焼きつけ、保はどこか悲しげに、別れの言葉を呟いた。

Word. 79 神ニ、誇ル (1)

永遠^{とわ}の居城、屋上。

「……妙だな」

終獣との交戦を続けながら、屋上の端へと立ったスズメが、下方を見つめ、どこか気難しげな表情で呟く。

「何が？」

上空を舞うスワ郎から降り立ち、スズメのすぐ横へと並んで、スズメへと問うツバメ。そんなツバメの方を、スズメが振り向く。

「お前もさっき、見ただろ？ たもっちゃんと、あの忌の奴が、浮世^{うきよ}現^{うつつ}を圧倒したとこ」

「うん、チラっとだけどね」

この屋上より、さらに上空で交戦中の保、灰示と現の様子を、近くで戦うスズメたちは、終獣と戦いながらも、十分に把握していた。あまりにも激しい戦闘を繰り返すので、把握せずにはいられなかったというのが正しい。

「なのは何で、あいつ等は消えないんだ？」

スズメが視線を動かし、居城の正面部分を見下ろす。居城の正面三方向では、次々と溢れ出し続ける黒い影と、以団^{いだん}、衣団^{えだん}、於団^{おだん}、その他、多くの音士の面々が、交戦を続けていた。

「確かに、言われてみると…」

スズメと同じように視線を落とし、ツバメが少し首を捻る。

「あれは、浮世現の四字熟語^{ラスト・イデオム}、“有象無象”により、生み出されたものだもんね…」

「ああ。だから、浮世現が消えれば、あいつ等も消えるはずなんだが…」

「最早、あれ等は、浮世現の言葉ではないのです」

後方から聞こえてくる凜とした声に、スズメとツバメが、同時に振り向く。

「熊子」

二人が振り返ると、そこには、眼鏡をキラリと光らせた熊子が立っていた。

「あの獣もまた、消えてはいないでしょう…？」

「あ、そういやあ」

すぐ傍で、三人の言玉、チュン吉たちと交戦を続けている終獣を見上げ、熊子が言うところ、スズメがハツとした表情で頷く。終獣もまた、現の言葉により、生み出されたもの。現が消えれば、消えるのが当然である。

「恐らく、浮世現は、この獣を生み出すため、“无^ん”の文字を世界中へと放つため、“遠^をの神”永遠^{とわ}の力を借りた」

終獣を見つめながら、熊子がそっと、目を細める。

「その永遠の力が、逆に浮世現の力を呑み込み、支配したと？」

「ええ。これはあくまで、推測ですが」

問いかけるツバメに、熊子は振り返りながら、言葉を付け加える。

「じゃあ、永遠を倒さないと、この獣もあの黒い影たちも…」

「消えることはないでしょう」

はつきりと答える熊子に、スズメとツバメがそれぞれ、険しい表情を見せる。そしてその視線は自然と、屋上の左側に見える、居城の中でも最も高い、左塔の最上階へと流れる。

「アヒル…」

スズメの祈るような声が、そっとその場に落ちた。

永遠の居城、正面部。

「ニギリちゃん、危ない！」

「え？」

背後から、黒い影に襲われようとしていたニギリを庇うため、ニギリの後方へと飛び込んでいくチラシ。ニギリが振り返る中、黒い

影の放った光が、チラシへと迫る。

「うわああああ！」

「チラシくん！」

黒い影の放った金色の光を浴び、激しい悲鳴をあげるチラシに、ニギリが大きく目を見開く。

「刻^{とき}め」！

チラシを襲った黒い影の後方から、水で出来た刃を勢いよく振るい、その影を真つ二つに斬り裂く金八。金八が刃を下ろしながら、焦った様子で前方を見る。

「大丈夫か！？ チラシ、ニギリ！」

「チラシくん……！ チラシくん！」

金八が必死に問いかけるが、その問いへの答えはなく、ただ、ニギリのチラシを呼ぶ声が、響き渡っている。地面へと倒れ込んだチラシの体を揺すり、ニギリが泣き出しそうな表情で、何度も何度もチラシの名を呼ぶが、その呼びかけに、チラシが応じることはなかった。

「チラシ、くん……」

ニギリが茫然と呟き、チラシの体を揺すっていた手を離す。チラシは目を開き、何かを言おうと口を開いた状態のまま、まったく動かなくなった。

「言葉を、終わらされたのか……」

そんなチラシの様子を見つめ、金八が悔しげに唇を噛み締める。

「神」

他の影たちと交戦を続けながらも、少し離れた場所でのチラシの状態を察したシャコが、助けを求めるような瞳で、近くに居るイクラの方を振り向く。イクラもまた、チラシの方を見つめ、その瞳を、さらに鋭く細めていた。

「こいつ等が、減る気配はない。神、このままじゃ……」

「……………」

シャコの訴えに、イクラは言葉を返すことなく、ただ、厳しい表

情を見せていた。

「きゃあああ！」

「^ね音音！」

黒い影の攻撃に襲われ、甲高い悲鳴をあげる音音に、誠子と徹子が、同時に振り向く。攻撃を受け、地面へと倒れた音音のもとへと、必死に駆け寄っていく二人。

「音音！誠子お姉さま……！」

「……駄目ですわ」

呼びかける徹子に、誠子が険しい表情で、そっと首を横に振る。

「言葉を終わらされてしまっている。この状態では、わたくしがどんなに、治癒の言葉を投げかけたところで……」

「そんな……」

誠子の言葉に、徹子の表情も厳しく変わる。

「エリザ様……！」

三人の方を見た後、すぐさま、エリザの方を振り返る慧。

「こっちの体力はどんどん減っていくのに、黒い影はまったく減る気配がない」

城から未だに、続々と溢れ出てくる黒い影を見つめながら、エリザが眉間に皺を寄せ、厳しい表情を作る。

「このままでは、我々は全滅してしまいます！エリザ様！」

「わかっているわ」

「ならば……！」

「なら逃げて、この黒い影たちが世界中へと広がっていくのを、見物する？」

「それはっ……」

必死に訴えていた慧であったが、エリザの言葉に、思わず声を詰まらせた。

「この戦いに負ければ、どの道、皆の言葉が終わる。他に道なんて

ないわ」

きっぱりと言い切り、強い表情を見せるエリザ。

「例えば、全員の言葉が失われるとしても、私たちは、ここを動かない」

胸を張り、その声を響かせるエリザ。その声に、音音に寄り添っていた誠子と徹子も振り向き、まっすぐな視線を、エリザへと送る。

「勝利を信じて、最後の最後まで、戦い抜くのよ！」

『仰せのままに、我が神！』

エリザの強いその言葉に、神附きたちは皆、迷うことなく頷いた。

永遠の居城、正面右方向部。

「“向^むかえ”！」

六騎が、その小さな手を力強く前方へと向けると、六騎の後方から駆け出してきた金色の馬が、勢いよく前方へと突き抜け、六騎へと向かって来ていた黒い影たちを、次々と蹴散らしていく。蹴散らされた黒い影の悲鳴が響く中、六騎がゆっくりと手を下ろした。

「ハア…ハア…」

肩を大きく揺らし、苦しげに呼吸をする六騎。すでに一時間を超える長期戦となり、他の音士よりも幼い六騎の体力は、限界のところまで来ていた。

「ダメだ…こんな、ところで止まってちゃ。お姉ちゃんたちはまだ、戦ってるんだから…」

六騎が、自分に言い聞かせるように、言葉を落とす。

「俺も、まだ…」

「グアアアアア！」

「あ…！」

必死に自分を奮い立たせようとしていた六騎だが、六騎の戦う態勢が整う前に、黒い影が襲いかかる。六騎は大きく目を見開くが、体は、素早く動かない。

「六騎君……！」

「クソ！」

黒い影が目前と迫った六騎に、思わず身を乗り出す雅の横で、守が険しい表情を見せながら、素早く右手に持っていた円月輪を放つ。

「瞬^{またた}け」！」

守が円月輪を投げ放ち、言葉を放ったその瞬間、雅の横から、守の姿が消える。

「え……？」

次に、守が姿を現したのは、六騎の目の前であった。六騎が戸惑った表情で見上げる中、黒い影の振り下ろした、その影の塊で出来た手を、守が、六騎の代わりに食らう。体を貫いた影の手に、表情を歪めながらも、守が、左手の円月輪を、影へ向けて、突き出した。「撒^まき散らせ」！」

守が力強く言葉を放つと、円月輪に斬り裂かれ、断末魔をあげながら、黒い影が掻き消える。

「ううう……！」

「お兄ちゃん……！」

黒い影を倒したものの、守の負った傷は消えず、その場に苦しげにしゃがみ込む守に、六騎が不安げな表情で駆け寄る。

「末^{まもり}守さん！」

「オウ、リーゼントマン！」

雅とライアンも、守のもとへと駆けつける。

「今、治療を……！」

「いい」

言葉を掛けようとした雅を、守が素早く止める。

「もう意味ねえから、無駄な言葉で体力使うな」

守の冷静な言葉に、雅が眉をひそめる。

「言葉が？」

「ああ」

問いかける雅に、微笑みながら、守が短く頷く。

「俺の言葉は、もう終わる」

「そんな…！」

守の言葉に、険しい表情で声をあげたのは、六騎であった。

「ごめん、ごめんね！俺のせいで…！」

「バカ言ってるな。ガキ守んのは、男として、当然のことだ」

今にも泣き出しそうな表情で謝る六騎に、安心させようと、守が優しい笑みを向ける。

「サスガハ、リーゼントマンデエース！兄貴ノ中ノ兄貴！」

「へっ、お前に言われても、嬉しくねえや」

両拳を握り締め、誉め称えるライアンに、皮肉ったように言いながらも、守がまた、口元を緩める。守はゆっくりと視線を動かし、六騎たちから目を離して、青く広がる空を見上げた。

——アニキイイイ！——

「また、あいつ等と、笑い合いてえなあ…」

浮かぶ仲間たちの笑顔を、笑い声を思い出しながら、守がそっと、目を細める。

「“負^まけんなよ”…」

自身の思いを託すように、言葉を発する守。

「朝比奈…」

アヒルを呼ぶその声を最後に、守の口の動きが、すべての動きが止まった。体の動きを停止し、その場から動かなくなった守の姿を見つめ、雅たち三人が、厳しい表情を見せる。

「リーゼントマン…」

「う、ううう…！」

ライアンが茫然と守を見つめる中、堪え切れなかったのか、六騎が俯き、固く閉じた瞳から、溢れんばかりの水滴を零す。共に戦ってきた音士である者が、言葉を終わらされてしまうという光景は、皆に、果てしないほどの絶望を与えた。

「これが、言葉の終わりというもの…」

守を見つめ、眉間に皺を寄せた雅が、顔を上げ、遠くに見える居城を見つめる。

「朝比奈君…」

守の思いを乗せるように、雅もまた、城に向かって、アヒルの名を呼んだ。

永遠の居城、ほど近くの公園。

「音士の言葉が一つ、また一つと失われていく…」

小さな影でしか、戦いの様子をとらえることの出来ない距離だが、戦いの状況をすべて把握している様子で、和音が小さく言葉を落とす。その表情は険しく、皆の言葉が消えていくというのに、何も出来ないでいる自分を責めているような、そんな表情であった。

「波城灰示が浮世現と戦えば、浮世現を倒せずとも、浮世現の生み出したものたちへと注がれる力は弱まり、あの獣を消す機会も訪れると、そう踏んでいました」

和音が冷静に、言葉を続ける。

「浮世現の言葉を、永遠の力が呑み込んだことは、計算外でした」

「うん…」

和音の言葉に頷きながら、ウズラがそっと表情を曇らせる。

「際限なく増え続けるものが相手じゃ、どんなに戦ったって、勝ちは見えない」

ウズラが目を細め、どこか遠くを見つめるような瞳を見せる。

「このままじゃ、後一時間ともたずに、皆の言葉が消えてしまうだろうね…」

「そんな…」

落ちていたウズラの声に、険しい表情を見せる茜。

「どうにか、どうにか出来ないのですか？」

問いかける茜に対し、ウズラも和音も、答えようとはしなかった。答える言葉がないと言った方が、正しいかも知れない。そんな二人の様子に、答えを知ったのか、茜が唇を噛み締め、俯く。

「もう本当に、神に祈ることしか出来ないのね…」

茜が辛そうに呟き、城を見つめる。

「私たちの、神に…」

城で戦う息子を思い、胸の前で強く両手を握り締め、深く俯く茜。そんな茜の心情を察し、ウズラは優しく茜の肩を抱くが、ウズラ自身もまた、辛く、遣り切れない表情を見せていた。

「そうだね。もう本当に、祈ることしか出来ない」

少し声を震わせながら、ウズラが、茜の肩を抱いていない方の手を、固く握り締める。

「祈る、ことしか…」

どうすることも出来ないもどかしさを抱き、何とも辛そうな表情を見せる二人の、痛々しいまでのその様子を見つめながら、和音がそっと眉をひそめる。和音がゆっくりと顔を上げ、再び城の方を見る。

「籠也…」

和音もまた、祈ることしか出来ずに、大切な者の名を、そっと口にするのであった。

Word 79 神二、誇ル (2)

永遠の居城。左塔、四階。

「燃^もやせ」

「火^{かえん}炎^{えん}」！

部屋の中央で、赤と白、二色の炎が、力強くぶつかり合う。炎を真ん中に、向き合っているのは、箆也と、白い言玉を持った右手を突き出した桃雪であった。二つの炎はやがて相殺し、炎により遮られていた視界が開けて、箆也と桃雪が、互いの視線を合わせる。

「？^もげろ」

次の言葉を、先に放ったのは、桃雪であった。桃雪の言玉から放たれた白光が、鋭い刃のようなものを形成し、箆也へと向かってくる。炎となっていた、真っ赤な格子を手元に戻し、箆也が鋭い表情を見せる。

「困^{かこ}え」

一本だった格子を、六本へと分離させ、自分の周りに散開させる箆也。広がった格子が、桃雪の刃を弾き飛ばし、箆也を守る。

「変格」

六本となっていた格子が一本に戻り、また、箆也の手元へと戻ると、箆也はすぐに言葉を落とし、格子を鎌の姿へと変える。

「刈^かれ」！

鎌を振り切り、真っ赤な一閃を、桃雪に目掛けて放つ箆也。迫り来る一閃に、桃雪は焦りの色など見せず、余裕のある笑みで、言玉を光らせた。

「設^{もう}けろ」

桃雪が言葉を放ち、自身の前に真っ白な壁を作って、箆也の一閃を、天井へと弾き飛ばす。一閃を弾くと、桃雪の前に張られた壁は、すぐに消える。

「聞こえますか？」

桃雪からの急な問いかけに、箆也が眉をひそめる。

「上階からの音」

左耳に手を当て、耳を澄ます動作を見せる桃雪に、つられるようにして、箆也も身構えた態勢のまま、耳に意識を集中させる。すると、わずかにだが、天井が震えるような音が伝わってきた。相当遠くの階のようだが、城全体を揺さぶるほどの衝撃が、発せられている。

「戦いの音ですよ」

言葉を付け加える桃雪に、箆也の表情が曇る。

「僕の神とあなたの神、勝つのは一体、どちらでしょうねえ」

桃雪がどこか遠くを見つめるような瞳を見せ、そっと呟く。

「随分と、他人事のように言うんだな」

その桃雪の言葉を受け、箆也はひそめた表情のまま、桃雪へと言葉に向けた。

「あなたの言葉を聞いていると、二人の戦いになど、まるで興味がないように思える」

「そうですね。あなたのその言葉は、あながち、間違いじゃない」

箆也の言葉を、あっさりと認めるように、頷く桃雪。

「確かに僕は、さほど、あの二人の戦いの行方が、気になっていません」

視線を箆也へと戻した桃雪が、そっと微笑む。

「だって、気にする必要もないでしょう？」

首を傾げ、桃雪が箆也へと問う。

「我が神が、勝つに決まっているのだから」

当然のように言い放つ桃雪に、また曇る、箆也の表情。

「随分な自信だな」

「神付きとしては、当然のことですよ。あなたは少し、不安そうですねえ」

箆也を見透かすように見つめ、桃雪が不敵に笑う。

“我が神が負けるかも知れない”と、お考えなのでは？」

桃雪の問いかけに、表情をしかめる箆也。神を信じていないように言われることは、屈辱であつたが、箆也の心の内には、確かに不安があり、桃雪のその言葉を、跳ねのけられるほどの確信がなかった。

「そんなに不安であるなら、早く僕を倒して、神のもとへ駆けつけな」と

余裕の口ぶり、桃雪が言葉を続け、そして、箆也へと、左手の人差し指を向ける。

「そのまま、いいんですか？」

鎌を指差され、箆也が眉をひそめながらも、鎌を振り上げる。

「“加変”^{かへん}……」

箆也の振り上げた鎌が、強い赤色の光を放つ。

“か”、解放……！」

鎌の逆側からも刃が姿を現し、両端に刃のついた棒の真ん中あたりを握り締め、箆也が慣れた様子で数度回し、構えを取る。その様子を見て、桃雪は何やら、楽しげに笑う。

「それが変格を超えた変格、“加変”ですか」

見定めるようにじつくりと、箆也の武器を見つめる桃雪。

「いいですねえ。僕は正直、それと戦ってみたかったですよ」

「何？」

桃雪の言葉に、箆也が眉をひそめる。

「僕は常に、神付きとして完璧なまでに、その役割をこなしてきたと、そう自負しています」

左手を胸に当て、桃雪が自信に満ちた笑みを浮かべる。

「ですが、そんな僕にはなく、あなた方にのみ与えられている唯一のものが、その“変格”です」

胸から離れた左手の、人差し指を伸ばし、箆也の持つ武器を指差す桃雪。確かに変格は、カ行、サ行、ナ行、ラ行の音士にのみ、与えられた力。マ行の音士である桃雪が、どんなに頑張ったところで、得ることは出来ない。

「僕はそれが、悔しかった。完璧な神付きであるはずの僕が、あなたたち、他の神付きより、劣っているものが、ただ一つでもあることが」

「悔し、かった…?」

過去形で落とされる言葉を不審に思い、箆也が少し首を傾げる。

「ええ。でもあなたのお陰で、この悔みも晴れます」

桃雪が言玉を握る手に、力を込める。

「あなたの“変格”を超え、僕は、さらに、完璧な神付きとなる」
自信に満ち満ちた桃雪のその言葉に、表情を曇らせる箆也。

「完璧な、神付き…」

「ええ」

曇らせた表情のまま、言葉を繰り返す箆也に、大きく頷きかける桃雪。

「そして僕は、我が神の願いを叶えます。“燃やせ”！」

「“火炎”」

こちらへと向かってくる白い炎を、射るように見つめながら、箆也が鎌を振り下ろし、炎を纏った上側の刃を、桃雪へと向ける。

「“駆ける”！」

刃が纏っていた炎が前方へと放たれ、桃雪の炎とぶつかり合って、互いに消える。炎が消えるか消えないかを確認する前に、箆也は素早く、上側にきた先程とは逆側の刃に、風を纏わせた。

「“鎌鼬”、“翔ける”！」

鋭い風の塊を、桃雪へ向けて放つ箆也。

「“設ける”」

桃雪が短く言葉を落とし、自身の前に白い壁を張って、向かってくる風に備える。だが、鎌鼬が当たった途端、壁にヒビが入り、そのヒビが上下左右へと広がって、壁は勢いよく砕けた。砕け散る壁に、桃雪が少し眉をひそめる。

「防ぎきれませんか…“戻れ”」

防御を諦めた桃雪が、冷静に次の言葉を発し、向かって来ていた

鎌鼬を、箆也の方へと戻していく。

「掻き消せ」

箆也もまた、落ち着いた様子で言葉を落とし、鎌を軽く一振りして、戻って来た鎌鼬を、あっさりと消し去る。

「齎せ」

桃雪が再び、言玉を箆也へと向けると、桃雪の言玉から放たれた白色の光が、巨大な波のようなものを形成して、箆也へと覆いかぶさっていくように、一気に襲い掛かる。箆也は棒をまっすぐに立て、自身の前へと突き出した。

「鎌鼬」

刃の先に、再び纏わせる風の塊。

「囲え」

箆也が風を纏った刃を、自身の周囲で一回転させると、風が箆也を包み込み、向かってくる巨大な光波に対する防御壁を作る。周りを風で覆った箆也の様子を見て、桃雪が鋭く瞳を細める。

「漏れろ」

箆也の張った防御壁へ向け、新たな言葉を向ける桃雪。桃雪の言葉を受けると、風の防御壁にかすかな隙間が生じたのか、そこから光波が漏れ出し、徐々にその隙間を大きくして、そこから箆也へと攻め込んでいく。

「か、偏れ」

箆也が少し焦った表情で言葉を放ち、漏れ伝ってきた光波を、自分とは違う方向へと向かわせ、それを避けた。箆也から逸れた光波が、部屋の壁へとぶつかり、大きな風穴をあける。そこから外の景色が見え、風が吹き込んだ。風と共に、あの無数の黒い影たちのものであるう、荒々しい叫び声と、必死に戦うたくさんの音が聞こえてくる。

「ほお。外はまだ、粘っているようですねえ」

箆也と同じように、その音を聞き入れ、桃雪が微笑む。

「熱心なことだ」

「当然だ」

感心するように呟く桃雪に、箆也はすぐさま、言葉を返す。

「すべての言葉を守るために戦うことが、五十音士の役目」

力強い瞳で、箆也が桃雪を見つめる。

「すべての言葉を終わらせようとしているあなたは、五十音士として、間違っている」

鋭く指摘するように言い放つ箆也であったが、桃雪はその言葉に、顔色一つ変えず、どこか涼しげに微笑んだ。

「ですが、神の願いを叶えるために戦うことが、神付きの役目なのでは？」

問いかけを返す桃雪に、少し眉をひそめる箆也。

「我が神の願いを叶えるため、戦う僕を、あなたは、“間違っている”と、そう言うのですか？」

「それは…」

桃雪の問いかけに、思わず言葉を詰まらせる箆也。

「確かに僕は五十音士ではありますが、その前に、我が神の神付きだ」

まるでそのことを誇るように、桃雪が胸を張って言う。

「僕が我が神のためにやってきたことの中で、“間違っている”と思ったことなど、この数十年、たったの一度もありませんよ」

誇らしげに笑う桃雪に、箆也が表情を曇らせる。その桃雪の言葉は、今までの不敵なものとは違い、とても晴れやかで、まったく偽りがないように思えた。

「何故、だ…？」

抱いた疑念を、すぐに口に出す箆也。

「何故、あなたは、そうまでして、あなたの神に尽くす？」

「愚問ですね」

箆也の問いかけを、桃雪はあっさりと笑い飛ばす。

「僕が同じ問いかけを、あなたにしたとして、あなたは何と答えますか？」

問いかけを問いかけで返した桃雪に対し、箆也は少し考えるように俯いたあと、ゆっくりと顔を上げ、まっすぐに桃雪を見た。

“我が神であるから”

箆也のその答えを聞き、桃雪が満足げに笑う。

「僕も同じ答えですよ」

まるで共感するように、桃雪が言う。その桃雪の言葉を受け、また、表情を曇らせる箆也。

「神月箆也」

改めて名を呼ばれ、箆也が少し戸惑うように眉をひそめる。

「神の一族に生まれながら、神になりえなかったあなたは、神附きとなることを決め、於崎の名を捨て、神附きの“神月”へと、その名を変えた」

どこで知り得たのか、箆也の過去を見てきたかのように、すらすらと話す桃雪と、桃雪が語った自身のつらかった過去に、箆也が少し表情をひそめる。

「名まで変えるほどだ。相当な覚悟あったのことだったのでしょ」
箆也を誉めるようなその言葉は、今までの、感情の见えない不敵なものではなく、とても素直な言葉であった。

「だからこそ、あなたは待ち侘びたはずだ。自身の神の存在を」

その桃雪の言葉に、加守になって、アヒルに出会うまでの日々を思い出し、箆也がそっと俯く。

「ですがね」

言葉を付け加えた桃雪が、不意に真剣な表情を見せる。

「僕もあなたと同じように、自身の神を待ち侘びていたのですよ」

過去を懐かしむように目を細め、桃雪がそっと笑う。

「求めて、求めて、求め続けて……そして、やっと、手にすることが、出会うことが出来た。自身の神と」

強い思いのこもった、どこか重みのある桃雪の言葉を聞き、箆也が眉をひそめる。

「それが、永遠？」

「ええ」

問いかける箆也に、桃雪が自信を持って頷く。

「遠久様とんきさまは、僕が得た、たった一人の神」

微笑んだ桃雪が、誇らしげに胸を張る。

「だから僕は、神附きとして、遠久様の願いを叶えます」
迷いなく響く、桃雪の声。

「僕のこの、すべてを懸けて」

その桃雪の声を聞き、箆也が表情を曇らせる。今、世界中の人々のすべての言葉を終わらせようとしている桃雪の、その言葉は、とてもまっすぐで、箆也が否定するには、純粹すぎるものであった。同じ神附きとして、感心すらしてしまうほどの桃雪の思いを間近に、箆也がどこか、苦しむような表情を見せる。

「だが…」

必死に口を開き、何とか言葉を落とす箆也。

「だが、あなたの神は…！」

「やめましょう」

何かを訴えようと、声をあげた箆也の言葉を、桃雪はあっさりと遮った。

「どちらの神が正しいか、その言い合いなど、最早、何の意味も持たない」

どこか冷めきった表情を見せ、桃雪が笑みを止める。

「ここまで来れば、あなたと僕の神、どちらが正しいのかを決めるのは、互いに交わす、この言葉ではない」

口に手を当てるようなしぐさを見せ、桃雪が言葉が続ける。

「互いにぶつけ合う、この言葉」

桃雪が再び微笑み、右手に持った言玉を、箆也へと向ける。

「言葉の力ですよ」

箆也へと向けた言玉を、高々と天井へと掲げる桃雪。

「も…」

そっと微笑み、桃雪が自身の文字を口にする。

「もんこかいほう門戸開放”…！」

桃雪の言葉を受け、桃雪の掲げた言玉が、より一層強い光を放ち、光があつという間に、部屋全体へと広がっていく。

「ラスト・イデオム四字熟語…？」

光のあまりの眩さに目を細めながら、桃雪の放ったその言葉に、籠也が眉をひそめる。

「遠久様」

自身の生み出した光の中で、神の居る上階を見つめるように、天井を見上げながら、桃雪が穏やかに微笑んだ表情で、神の名を呼ぶ。

「僕が、僕が、あなたの願いを叶えてみせます」

胸の内から溢れ出る、強い思いを向けるように、天井へと言葉を発する桃雪。

「あの日の…」

——ねえ、桃雪。約束して——

思い出される、まだあどけない笑顔。

「あの日の約束を、果たします」

桃雪が、言玉を握る手に、力を込める。

「この、力で…！」

桃雪の声が強まると同時に、部屋に広がった光も輝きを増し、桃雪を、籠也を、その場全体を、包み込んだ。

「な、何だ…？」

城の下方、床から漏れ広がってくる、強烈な白光と、城全体を揺らす大きな振動に、左塔最上階で、永遠と向き合っていたアヒルが、戸惑いの表情を見せる。

「……………」

そんなアヒルの向かいで、そっと目を細める永遠。

「桃雪…」

Word. 79 神ニ、誇ル (3)

——三十数年前。

「ぎ、ぎゃあああ！」

闇夜に響く、凄惨な悲鳴。

「や、やめろ！やめてくれ！」

真つ暗な道端に腰をついたまま、後退していきながら、必死に前方へと右手を突き出し、命乞いをする、まだ若い男。

「な、何故だ！？何故なんだ！？桃雪！」

戸惑いと恐怖に満ちた表情で、男が、目の前に立つ者の名を呼ぶ。

「俺は、お前の神で……！」

「“燃えろ”」

「う、うわああああ！」

男の言葉を遮り、その者が酷く冷たく言葉を落とすと、真つ白な炎が男を包み込み、容赦なく、男を焼いた。男の激しい悲鳴が響き渡り、その悲鳴も、やがて聞こえなくなる。

「脆いものだ……」

闇夜に輝く炎を見つめながら、そっと呟く、まだ十代半ばほどの、幼さを表情に残した青年であった。目立つ桃色の髪に、氷のような、冷たい瞳をしている。

「残念ながら、あなたは僕の、神ではなかったようだ」

自身の神だった男を焼く炎を見つめながら、桃雪は、感情のない声で呟いた。

当時、韻本部。

「“遠の神”が重体で見つかった？」

着物を身に纏った美しい女性、和音の先代である言姫は、韻の従

者からの報告を受け、困ったような表情を見せた。

「またですか…」

「はい。命に別状はないようですが、酷く怯えた様子で、神を辞めると、そう申し出ております」

「はあ…」

続く従者の報告を聞き、言姫が、深々と溜め息をつく。

「困ったものですね」

肩を落とし、目を細める言姫。

“毛守”百井桃雪^{ももり}」

「追及し、処罰しますか？」

「いいえ」

従者からの問いかけに、言姫はすぐさま、首を横に振った。

「彼のことです。証拠など、一切、残していないでしょう。追及したところで、何にもなりません」

「ですが、このままでは…」

「神が」

従者の言葉を遮り、言姫が口を開く。

「彼の心を満たす神が、一刻も早く、現れてくれると良いのですがね」

そう言った言姫は、少し祈るような、遠い瞳を見せていた。

数年後。

「ウズラ、てめえ！」

「うわああ」

韻本部に設けられている“宇^うの神”の部屋に、まるで道場破りか強盗かのような勢いで、扉を蹴破って入ってきたのは、怒りに満ちた表情を見せた恵であった。恵の怒鳴り声に、部屋のソファアーでのんびりと寝転がっていたウズラが、飛び起きる。

「びっくりしたなあ、もう。なあにい？恵ちゃん」

「ウズラ、てめえ！神試験で、遠久を“遠の神”にしやがったとは、
どういうことだあ！？」

起き上がったばかりのウズラの胸倉を掴み上げ、恵がさらに声を張る。

「ああ！遠久くんだけ？とっても優秀だったよお。さすがは、恵ちゃんの弟でっ！」

「誰が誉めろつつったあ！」

「ぎゃああ！」

恵に殴り飛ばされ、ウズラがソファの後ろへと、転がり落ちる。

「か、神！」

「恵さま、落ち着いて！」

倒れたウズラへ駆け寄る宗吉と、まだ怒りの収まっていない様子の恵を、必死に宥める芽衣子。

「今の“遠の神”の神附きが、どんな野郎かってことくらい、てめえだって知ってんだろうが！」

「遠の神の神附きい？」

宗吉の手を借り、ゆっくりと体を起こしながら、ウズラが恵の言葉を繰り返し、思い出そうと頭を掻く。

「ああ、問題児の、毛守くんだけ？」

「気に入らなかったからって、自分の神を次々と重体にしてくる奴が、問題児なんて、可愛いもんか！」

恵が、どこか吐き捨てるように、言葉を放つ。

「あんな野郎の神にして、遠久に何かあったら、どうしてくれるんだよ！ああ！？」

「そんなこと、言われてもお」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

恵の責め立てに、ウズラが困ったように口を尖らせていたその時、二人とはまた別の声が、部屋へと入ってきた。その声にウズラと恵が同時に振り向くと、部屋の入口に、まだ幼い少年が立っていた。

神になったばかりの、まだ十四歳の遠久であった。

「遠久、なんでここに…」

「あれだけ大声出してたら、韻本部のどこに居ても聞こえるよ」
戸惑う恵に、遠久が困ったような笑顔を向ける。

「ごめんね、ウズラさん」

「いやいやあゝ全然いいよお。ちよつと痛かったけどお」

恵の代わりとばかりに謝る遠久に、ウズラが優しい笑みで答える。

「ウズラさんを責めないでよ、お姉ちゃん。俺、遠の神になれて、
本当に嬉しいんだから」

「だが遠久！ お前の神附きになる、あの男は…！」

「大丈夫だよ」

恵の言葉を遮り、遠久が、大きく微笑む。

「俺、頑張つて、歩み寄るから」

「駄目だ。危険すぎる！」

「最初から駄目だなんて決めつけたら、誰とも交われないよ」
姉の恵に対し、遠久がどこか大人びた表情で、まるで諭すように、
言葉をかける。

「俺、俺の言葉を信じてみたいんだ」

「遠久…」

まっすぐな笑顔を見せる桃雪に、困ったような表情を見せる恵。

「わ、わかったよ…」

肩を落とした恵が、渋々、頷く。

「弟くんには、めっぽう弱いねえゝ恵ちゃん」

「うるさい！」

「ぎゃああ！」

茶化すように口を挟んだウズラに、恵の蹴りが飛んだ。

それから数日後。遠久と桃雪の顔合わせが行われた。

「新しく“遠の神”になった、目白遠久。よろしくね、桃雪」

「……よろしく願います」

自己紹介をし、大きな笑顔を向ける遠久に対し、桃雪は同じように、よろしくとの言葉は呟いたものの、見定めるような、そんな冷たい瞳で、遠久を見つめていた。年相応のあどけない笑顔に、桃雪のことを知っているだろうに、まるで警戒心のない明るさ。言葉の神としての貫禄など、たったの一つも持ち得ていないその少年に、桃雪が呆れるように顔を俯ける。

「また、僕の神じゃない……」

俯いた桃雪が、遠久には聞こえないほどに、小さな声で呟く。だが、その言葉が届いたのか、遠久はそっと目を細め、穏やかに微笑んだ。

「ねえ、桃雪」

名を呼ばれ、桃雪が顔を上げる。

「今から俺と、戦わない？」

「え……？」

遠久の思いがけない言葉に、桃雪はただ、戸惑いの表情を見せた。

「“燃^もやせ”……」

“^{その}慄^れけ”！」

それから、韻の実習室を借りて、遠久と桃雪は、本当に戦いを始めた。桃雪の放った炎を、遠久が強い光で弾き返す。すでに戦いは一時間に及び、その間中、二人は互角の戦いを見せていた。

『ハア……ハア……』

さすがに疲れが見え始め、二人が、乱れた呼吸を重ね合わせる。肩を揺らし、大きく口を開けて呼吸する、前方の遠久を見つめながら、桃雪がそっと目を細める。

「強い……今までの、どの神よりも……」

また見定めるように、桃雪が遠久を見つめる。

「最年少で神になっただけのことはあるか…」

「桃雪」

どこか考え込むような表情で俯いた桃雪が、呼ばれる名に、またすぐに顔を上げる。桃雪が顔を上げると、目の前の遠久は、とても穏やかな表情で、まっすぐに桃雪を見つめていた。

「俺はまだ子供だし、お姉ちゃんやウズラさんたち、他の神に比べたら、まだ全然弱いけど」

口元を緩め、遠久が笑う。

「いつか必ず、君の望む神になってみせる」

はつきりと放たれた、どこまでも純粋なその言葉に、思わず目を見開く桃雪。

「約束する」

力強い言葉が続け、遠久が桃雪を見つめる。

「だから、ねえ桃雪。君も、約束して」

一つの曇りもない、まだあどけない、それでもどこか強い笑みを、桃雪へと向ける遠久。

「俺が、君の望む神に、誰よりも強い神になるその日まで、俺に、附いてくるって」

まるで目が離せなくなったように、ただ遠久を見つめ、桃雪が真剣な表情を見せる。氷のようだった、感情の見えなかったその瞳には、何か熱いものが、灯り始めたようにも見えた。

「例え俺が」

遠久が桃雪へと、右手を伸ばす。

「どんな道を、選んだとしても」

その力強い言葉に吸い寄せられるように、桃雪も、差し出されたその手へと、左手を伸ばす。

「仰せのままに、我が神」

桃雪がその言葉を口にしたのは、その日が、初めてのことであった……――

——例え俺が、どんな道を選んだとしても：——

「ええ、我が神」

思い出される遠き日の言葉に、答えるように眩き、白い光の中で、桃雪が微笑む。

「附いて行きましょう、例えどんな、茨の道であったとしても」

溢れ出す思いを言葉へと変え、桃雪が上階の遠久へと捧ぐように、両手を突き上げる。

「あなたを最強の神とし、あなたの願いを叶える、その日まで：！」

桃雪が声を張り上げると、その声に呼応するように、光も一層、輝きを増す。

「ううう：！」

眩い光が、まるで強い圧のように、簞也にのしかかり、思わず身を屈めた簞也が、苦しげな声を漏らす。これほどの光は、今までに見たことがない。阿修羅たちとの戦いで見た、四字熟語の光よりも、遥かに強い力を感じた。

「この、言葉はっ：！」

「もんこかいほう門戸開放」

戸惑う簞也に答えるように、放った言葉を再び口にする桃雪。その声に、簞也が苦しげな表情のまま、ゆっくりと顔だけを上げる。

「体の制御をはずし、自身の力を最大限に発揮することの出来る、ラスト・イデオム僕の四字熟語」

「制御を、はずし：？」

桃雪の言葉を繰り返し、簞也がそつと眉をひそめる。

「そんなことをしたら、あなたの体が：」

「構いません」

桃雪の身を案じるように眩いた簞也に、桃雪は迷うことなく答える。

「僕のすべては、我が神の為に在る。我が神の願いを叶え、朽ち逝けるなら、本望」

晴れやかに笑う桃雪に、益々表情を曇らせる簞也。

「さあ、始めましょうか」

「え…？」

そう言っただけで微笑んだ桃雪の姿が、簞也の視界から、突然消える。

「ど、どこに…」

「も…」

「あ…！」

一瞬にして、簞也のすぐ左側へと、姿を見せる桃雪。戸惑った表情で、周囲を見回していた簞也が、突如現れた桃雪に焦りながらも、必死に武器を振り上げる。

「か、“駆け…！”

「“？げろ”」

言葉を放とうとした簞也であったが、桃雪の言葉の方が先に落ち、強烈な白光が、簞也へと襲い掛かった。

「うああああ！」

鋭い光に左肩を抉られるように、切り裂かれ、簞也が痛々しい叫び声をあげながら、後方へとさがる。ボタボタと流れ落ちる血が、一気に床へと広がっていく。

「“燃やせ”」

必死に左肩の傷を押さえ、呼吸を整えていた簞也だが、簞也に休む暇すら与えず、桃雪が言葉を放ち、またしても白い炎を簞也へと向ける。左肩の傷で、血に染まった右手で、何とか武器を握り締め、た簞也が、刃を、向かってくる炎へと振り上げる。

「“駆ける”、“火炎”！」

刃に纏わせた赤い炎を放ち、桃雪の炎と衝突させる簞也。だが二つの炎がぶつかり合った瞬間、簞也の炎が、あっという間に桃雪の炎に呑み込まれてしまう。

「え…？う、うあああ！」

あつさりと敗れてしまった自分の力に、戸惑う間もなく、向かってきた桃雪の炎に焼かれ、後方へと吹き飛ばされる箆也。全身に火傷を負った箆也が、刃を床へと食い込ませ、それを支えとして、何とか必死に体を起こす。

「同じ言葉でも、さっきまでとは、力のレベルが、全然違う…」
受けた言葉を冷静に分析しながら、それでも苦しい表情のまま、箆也が言葉を落とす。

「考え事をしている場合ですか？」

向けられる桃雪の言葉に、箆也が顔を上げると、すでに箆也へと、言玉を向けている桃雪の姿が、前方に見えた。少し唇を噛み締め、箆也が上方の刃を見る。

「“隠せ”、^{かく}“陽炎”^{かげろう}！」

箆也が言葉を放つと、一瞬、強い赤色の光が瞬いて、箆也の周囲の姿が霞み、箆也の姿がどこへともなく消えていく。見えなくなった箆也の姿に、少し眉をひそめる桃雪。

「傷の回復のため、一度、身を隠したといったところですかね」

余裕の笑みを浮かべた桃雪が、言玉を握り締める。

「“模索”^{もさく}…」

そつと言葉を呟き、そのまま黙り込んで、訪れる静けさに、耳を澄ませる桃雪。部屋全体に広がった白い光が、周囲を探るように波打ち、そして、その波が部屋の隅の一ヶ所に辿り着いた途端、激しく波打つ。

「そこですか」

鋭く微笑んだ桃雪が、激しく波打ったそこへと、言玉を向ける。

「^{もたら}“齎せ”」

「うあああああ！」

床から激しく突き上げた波に押し出され、叫び声をあげながら、箆也が再び姿を現す。波に突き上げられた箆也は、そのまま勢いよく、床へと叩きつけられた。

「かくれんぼなど、僕には無意味ですよ」

「ク…」

冷たく微笑む桃雪に、床に倒れ込んだまま、顔だけを上げた簞也が、表情を歪める。簞也の負った傷は、特に治っている様子もない。すぐに見つけられたため、回復をする時間がなかったのだ。

「さあ、あまり長い時間、我が神の手を煩わせたくはない」

冷静に言葉を落とす、桃雪がその瞳を鋭くする。

「あなたの言葉、終わりにさせていただきますよ」

桃雪の冷たい笑みに、曇る簞也の表情。だが、どうにかしたくとも、簞也の傷だらけの体は、すでに動いてくれる状態ではなかった。
「藻搔^{もが}け」

言玉を輝かせ、桃雪が言葉を落とすと、簞也の倒れている辺りの床から、白い光の波が突き上げ、簞也の体を包み込み、軽々と持ち上げる。波に囲われ、宙に浮いた状態となった簞也が、呼吸が出来ないのか、波の中で苦しげな表情を見せる。

「さようなら、神月簞也」

波の中で苦しむ簞也を見つめ、桃雪がどこか、楽しげに笑う。

「大丈夫。すぐにあなたの神も、送って差し上げます」

安心させるような、だが、まったく優しくはない言葉。

「だから先に逝って、神を待っていてあげて下さいね」

桃雪がまた、言玉を握り締めると、簞也を包み込む光波が、より一層、強さを増した。

Word 79 神ニ、誇ル (4)

「う、ううう…」

包む光は輝きを増し、最早、光の向こうの桃雪の姿は見えない。呼吸を封じられた箆也は、負った傷の痛みもあり、すでに意識を飛ばしかけていた。目に焼きついてくる光すらも霞み始め、重かった体も軽くなり、どんどん意識が遠のいていく。

「もう…」

どこか諦めるように呟き、箆也が、逆らうことなく、閉じていく瞳を、遠のいていく意識を、受け入れようとする。

——諦めるのは、一番、最後でいい——

「……っ」

思い出されるその言葉に、もうほとんど閉じかけていた箆也の瞳が、はつきりと開かれる。

「神…」

救いを乞うように、箆也の口から零れ落ちる声。

「神」

——そんな神附きと、俺は一緒に戦えない——

——俺に附いてきてほしい！——

——箆也、俺、決めたよ——

「まったく…」

言葉を零した箆也が、そつと口元を緩める。

「相変わらず厄介だな、あなたの言葉は…」

困ったように微笑みながらも、徐々にその意識をはつきりさせ、動かなかった体を、奮い立たせていく箆也。

「僕から、諦めを奪う…！」

力強く声をあげ、箆也が右手で、鎌を振り上げる。

「押し退けろ」、かまいたち“鎌鼬”！」

刃に風を纏わせ、鎌を大きく振り切って、箆也が、自身を包み込んでいた光波を、強い風で一気に切り裂く。ヒビ割れるような、甲高い音を立てて、光波を破り、桃雪の前へと再び姿を見せる箆也に、桃雪が初めて、あからさまに表情を曇らせた。

“お”と“か”の文字を、組み合わせた…？」

箆也の放った言葉を、はっきりと耳に入れ、桃雪が眉をひそめる。
「何と、型破りな…」

「すべてを懸けて、神の願いを叶えようとする、あなたのその精神は、同じ神附きとして、尊敬に値する」

動揺を隠し切れない桃雪に対し、高らかとよく響く声を、堂々と向ける箆也。

「だが」

箆也が瞳を一気に鋭くし、射るように桃雪を見つめる。

「同じ神附きとして、神への忠義で、あなたに負けるつもりはない！」

力強く言い放ち、箆也が鎌を高々と振り上げる。

“開放”！かいほう

振り上げられた箆也の鎌から、放たれる強烈な赤色の光。部屋中を覆い尽くしていた、桃雪の白光に負けじと、どんどんと広がっていく。

“開放”：制御を外した。僕と、同じように」

部屋の中で、徐々に赤色の光に押され始める自身の光を見回しながら、その光の中心に立つ箆也を見つめ、桃雪がそっと目を細める。

——俺は、世界中のすべての人の、言葉を守りたい！——

「僕も、僕も、神の願いを叶える。その為に、戦う」

アヒルの言葉を思い出し、力いっぱい左拳を握り締め、箆也が決意のこもった、強い瞳を見せる。

「僕のこの、すべてを懸けて！」

声を張り上げた箆也が、勢いよく鎌を振りかぶった。

「駆ける”、”火炎”！」

箆也が鎌を振り下ろすと共に、下方へ降ろされた刃に纏っていた赤々とした炎が、勢いよく桃雪へと迫っていく。

「無駄なことをっ…“燃やせ”！」

真っ白な炎を放ち、向かってくる赤色の炎へと飛ばす桃雪。もう何度目かになる、赤と白、二色の炎のぶつかり合い。花火のような閃光を撒き散らして、二つの炎が、ぶつかり合った瞬間に、互いに砕け散る。

「何…！？」

砕け散った炎に、驚きの表情を見せたのは、桃雪だけであった。

先程は、圧倒的な強さで箆也の炎を呑み込んだというのに、今回は、あっさりと相殺してしまったからだ。

「あちらも制御を外して、互角になったということか…」

「刈れ”」

桃雪が険しい表情を見せる中、箆也が、間を置くことなく、炎を放った方とは逆側の刃を、桃雪へ向けて突き出す。

「鎌鼬”！」

鎌から放たれる、強い風の塊。

「“設ける”！」

目の前に光の膜を張り、やって来た風を受け止める桃雪。膜に風が勢いよくぶつかるその後ろで、箆也がさらに、鎌を振り下ろした。

「“押し切れ”！」

「な…！」

新たな言葉を受け、勢力を増す風に、桃雪が大きく目を見開く。

「うあああああ！」

次の言葉を放つ間もなく、膜を突き破られ、風の塊をもろに食ら

って、後方へと吹き飛ばされていく桃雪。壁へと背中を激突させ、力なくその場に座り込む。

「“駆^かける”、“火^{かえん}炎”！」

座り込んだままの桃雪へ、箆也がまた、炎を放ち、怒涛の攻撃を見せる。向かってくる炎を視界に入れ、険しい表情を見せて、唇を噛み締める桃雪。

「調子に、乗らないで下さい！」

声を荒げた桃雪が、座った状態のまま、言玉を持った右手を振り上げる。

「“用^{もち}いろ”！」

桃雪が言葉を放つと、桃雪へと向かっていた箆也の炎が、まるで吸い取られるように、桃雪の右手に纏わりつき、箆也の炎を纏った右手を、桃雪が箆也へと突き出す。

「“齎^{もたら}せ”！」

新たに言葉を発した桃雪が、箆也の真っ赤な炎と、自身の白い光波の混ざり合った巨大な塊を、箆也へ向けて、思い切り放つ。自身の力も取り込まれたその攻撃を、防ぐ術はなく、箆也はそれを受けた。

「うあああ：！」

炎に焼かれ、波に切り裂かれ、箆也が後方へと転がるようにして、倒れ込む。箆也が倒れると、今度は交代に立ち上がる桃雪。

「負けるわけには、負けるわけにはいかないんです：」

少し呼吸を乱しながらも、桃雪が、何かに取り憑かれたかのように、大きく見開いた瞳を見せ、自分に言い聞かせるように、必死に言葉を放つ。

「僕はずっと、ずっと、神を^{もと}求めてきた。何人もの神を、この手にかけて：」

血が滲むほど、力いっぱい握り締めた手を、左胸へと当てる桃雪^{もと}。「僕はずっと、ずっと、我が神を待ち続けてきた。自分の年齢を戻して、二十何年も、ひたすらに：」

紡ぐ桃雪の声が、かすかに震える。

「あの日の約束を」

——俺が君の望む神に、誰よりも強い神になるその日まで、俺に、
附いてくるって——

「あの日の約束を、果たすために……」

唇を噛み締め、言葉を噛み締め、桃雪が勢いよく、顔を振り上げる。

「我が神の願いを、叶えるためだけに……！」

桃雪の力強い声に呼応し、さらに輝きを増す言玉。

「“？げろ”！」

向かってくる白光の一閃を見て、箆也が痛みに表情を引きつりながらも、必死に体を起き上がらせる。血だらけの右手で、何とか鎌を前へと向ける箆也。

「か、“刈れ”！」

鎌を突き出し、赤色の一閃を放つ箆也。二人の丁度、中央で、互いの一閃が力強く、ぶつかり合う。

『ぐ、くう……！』

一步も譲らぬ衝突に、大きく表情をしかめる箆也と桃雪。どちらも最早、自身の明日のために、自身の命のために、戦っているのではない。ただ、自身の神への忠義と、神附きとしての誇りを懸けて、戦っているのだ。

「諦め、ない……」

激しい衝突を繰り返しながらも、その間に立ち上がり、言葉を落とす箆也。

「絶対……！」

箆也の声に反応し、鎌が一層、強く輝く。

「“輝け”……！」

箆也の言葉を受け、その言葉通りに、輝きを増す箆也の赤色の一

閃。輝きを増した途端に、一気に桃雪の一閃を押し切り、桃雪へと勢いよく飛び出していく。

「ううう！うがああああ！」

物凄い速度でやって来た、輝く一閃を、避ける言葉を放つ間もなく食らい、全身を切り裂かれ、またしても壁へと叩きつけられる桃雪。全身から赤い血を流しながらも、何とか足を踏ん張り、立ち上がった状態のままで堪える。

「違うっ…負けない…負けるはずが、ない…」

切れた唇で、少し詰まったような口調になりながらも、桃雪が必死に言葉を続ける。

「僕は、何年も…待ってきたんだ…何人もの神を見て、そして、やっと、辿り着いたんだ…」

——桃雪！——

「神に、我が神に…」

出会った頃の、まだあどけない笑顔を見せていた遠久を思い出し、桃雪が力いっぱい、拳を握り締める。

——桃雪も、俺より先に死ぬの…？——

——俺には、明日がない——

——世界中の皆の明日が、なくなってしまうばいいのに…——
あどけない笑顔の消えた、出会ってから二年後の冬。自身の時間を永遠へと変えられ、年を取ることのなくなった少年は、やがて笑顔を失い、希望を失い、絶望の中で、皆の明日が消えることを望んだ。

——あなたが望むというのなら、僕も、明日などいりません——
そう言って、自ら選らんだ、茨の道。

「神…遠久様…」

あどけない少年だった頃から、すべての希望を失い、絶望の神となるまで、そのすべてを、桃雪は、誰よりも一番、近くで見ってきた。永遠が抱えてきた思いならば、誰よりも知っている。

「僕が、僕が、叶える。遠久様の、願いを……」

血が流れ、わずかに震える右手で、しっかりと言玉を握り締めたまま、桃雪がゆっくりと、その右手をあげていく。右手を見つめる視線も、その動きに合わせ、徐々に上がっていく。

「その為に、その為だけに、生きてきたんだ」

感情の高ぶりからか、さらに震えの増す、桃雪の声。

「この覚悟が、他の神附きなどに、負けるはずがない……!」

右手をまっすぐに突き上げ、桃雪が鋭い瞳で、箆也を見つめる。

「僕は、僕のこの言葉で、我が神を、“最強の神”とする……!」

必死に叫びあげる桃雪の、その強い視線を浴びながらも、箆也はその強い思いに圧倒されることなく、どこか冷静な表情で、まっすぐに桃雪を見ていた。

「僕には、その言葉の意味がわからない」

「何？」

返って来る、妙に落ち着いた箆也の声に、少し戸惑うように眉をひそめる桃雪。

「別に、神附きが何をせずとも……」

箆也が傷だらけの状態であるというのに、しっかりと先を見据えた、力強い瞳を見せ、高らかと、その声を、言葉を響かせる。

「我が神は」

——俺が絶対、お前に、言葉で謝らせてやるよ! ——

——ダチが泣いてんのに、黙ってみてられっかよお! ——

「初めから、“最強”だ」

誇らしく胸を張り、箆也が穏やかに笑う。

「愚かなことを……」

誇らしく笑う簞也に対し、その簞也の態度が気に入らなかったのか、大きく表情を歪ませる桃雪。当初、不敵に微笑んでばかりいた、あの冷静な桃雪の姿は、最早、そこにはなかった。

「まあいい。あなたの言葉は、今ここで、僕が終わらせる！」

突き上げた右手の中で、言玉が明々と輝く。

「もんこかいほう門戸開放”！」

再び四字熟語を放ち、言玉から放たれた強烈な白光に、包まれていく桃雪。眩い光が部屋中に広がる中、簞也は、目を細めることもなく、まっすぐに、その桃雪の様子を見つめていた。

「もう一度、制御を外した…あれはっ」

ふと気付いた様子で、簞也が、桃雪の顔を見る。桃雪の目尻や口元に皺が寄り始め、突然、年を取り始めたような、一気に老化が進んでいくような、そんな変化が見られた。よく見れば、手の指先にも皺が寄り、体も少し小柄になっていつている。

「開放する力にすべてを注ぎ過ぎて、“戻れ”で若返らせていた体が、元に戻ろうとしているのか…」

桃雪の変化を見つめながら、簞也がどこか複雑そうに、表情を曇らせる。

「そこまでして、あなたは、あなたの神の願いを叶えたいのか…」
簞也が少し俯き、考え込むような表情を見せる。

「だが」

振り切るように数度、首を横に振り、鎌を握る手に力を込める簞也。

——また明日な、簞也！——

思い出される、自身の神の言葉。

「神が、我が神が、そう言ったんだ」

アヒルの言葉を噛み締め、簞也が思い切り、顔を上げる。

「僕だって、負けるわけにはいかない…！」

簞也が強く声を張り上げ、右手に持った鎌を、勢いよく突き上げる。突き上げられた鎌から、桃雪の白光に負けじと発せられる、強い赤色の光。白と赤の光が部屋を埋め尽くす中、簞也と桃雪が、互いを強く見つめ、そして口を開く。

「燃え尽きろ」！

先に口を開いた桃雪が、力強く言葉を放ち、今までで一番強大な白色の炎を、簞也へと向ける。向かってくる炎を、まっすぐに見据える簞也。桃雪の最後の言葉を、避ける考えは、簞也にはなかった。「これが僕の、最後の言葉…」

噛み締めるように呟いて、簞也が目つきを鋭くする。

「画竜点睛」…！！」

簞也が言葉を放った途端、鎌から放たれた強い赤光が、尾の長い、蛇のような体に、牙の鋭い、龍のような生物を形成し、城全体を震え上がらせるほどの、大きな咆哮をあげて、桃雪へ向け、勢いよく飛び込んでいく。強大な龍を前に、桃雪の放った炎は、あっさりと掻き消された。

「濁点の、四字熟語」

自分の攻撃が敗れたというのに、桃雪は落ち着いた表情で、言葉を呟く。

「本当に、型破りな神附きだ」

感心するように言って、そっと微笑む桃雪。

「僕の、負けか…」

向かってくる赤龍を見つめ、桃雪がそっと、目を細める。

「神…」

祈るようなその声を最後に、龍は、一気に、桃雪へと襲い掛かった。

「うあああああ！」

赤い光に包まれ、桃雪が、激しい叫び声をあげる。桃雪の発していた光もすべて、簞也の力に吞まれ、部屋全体が、赤色に染まっていく。赤く染まった部屋に、赤い血を流しながら、神のいる上階を

見るように、天井を見つめ、そっと目を細める桃雪。

「残った、この力……」

桃雪が、今にも右手から零れ落ちてしまいそうな言玉を、天井へと向ける。

「我が神に……持つていけ」

最後の言葉が力なく落とされると、言玉は、桃雪の手の中から、忽然と、その姿を消した。言玉を失い、さらに押し寄せる赤い光を見ながら、桃雪がそっと、口元を緩める。

「神……」

——桃雪、俺ね、神になれて、本当に嬉しいんだ——

純粹で、まっすぐで、少しの曇りもなかった、あの頃の笑顔。

——だって、皆の言葉を守るために、戦うことが出来るから——
まるで灯し火のように、暗闇を照らしてくれていた笑顔。

——終わらせろ……この世界の、言葉を——

その願いを叶えれば、取り戻せるような気がした、あの笑顔。

「この身、朽ちても……」

天井を見つめたまま、桃雪が目を細め、どこか遠くを見つめるような瞳を見せる。

「我が魂は、永遠に、我が神と共に……」

穏やかに微笑んだ桃雪の瞳が、わずかに濡れる。

「さようなら……」

届かない天井へと、伸ばされる桃雪の右手。

「遠久様……」

——パアアアアン！

強い光の輝きが、爆発するように、一気に辺りに散って、その光の中に、桃雪の姿が消えていく。

「……………」

消えいく桃雪の姿を見送り、籠也は言葉もないまま、どこか、遣り切れない表情を見せた。

Word. 80 消エユク言葉 (1)

——我が魂は、永遠に、我が神と共に……

永遠とわの居城。左塔、最上階。

「……………」

永遠のすぐ近くに、不意に現れる、小さく弱々しい白色の光。少し戸惑うような表情を見せた永遠が、その光へと左手を伸ばす。その光に永遠が触れると、光は一瞬、強く輝き、次の瞬間、光を失った白い言玉が、永遠の左手の上へと落ちた。落ちた言玉を見て、永遠がそつと表情を曇らせる。

「君も、俺を置いて、逝ってしまうんだね」

左手で言玉を握り締め、永遠が低い声を落とす。

「桃雪…」

共に在った神附きの名を呼び、永遠は、どこか哀しげな笑みを浮かべた。

「ハア…ハア…ハア…！」

その頃、桃雪の言葉によるカモメの幻覚を倒した恵は、ひたすらにその足を動かし、永遠の待つ最上階を目指して、長い階段を上り続けていた。長く続く階段に、息を乱し、滲む汗を辺りに撒き散らしている。

「ん？」

その時ふと、恵が何かに気付いた様子で顔を上げ、階段の途中で足を止める。どこからか、低く重い音が響いてくる。まるで底の方から崩れ落ちようとしているような、地響きのような音だ。音が響き始めたと同時に、天井や壁が震え始めると、恵はすぐさま、表情をしかめた。

「城が、崩れ落ちようとしているのか…?」

その考えが過ぎると、恵はさらに一層、険しい表情を見せる。

「クソ…!」

響く崩壊の音の中、それでも今更、引き返すことも出来ず、恵が再び、階段を駆け上り始める。

「朝比奈っ…」

どこか不安げに、アヒルの名を口にする恵。

「遠久…!」

必死に名を呼ぶその声がさらに、恵の足を速めた。

永遠の居城、屋上。

「行くぜ、チュン吉!」

巨大な金色の巨鳥の背に立ち、一気に空を下降して、屋上で待つ終獣へと、気合い十分の様子で向かっていくスズメ。スズメが右手を振り上げ、大きく口を開く。

「す…!」

「グアアアアア!」

「何!?!」

スズメが終獣との距離を詰め、攻撃の言葉に向けようとしたまさにその時、屋上の床の一部が突然崩れ落ち、崩れ落ちた部分に後ろ脚を取られた終獣が、激しい叫び声をあげる。終獣の叫びを聞いたスズメが、戸惑いの表情を見せながら、慌ててその場で動きを止める。

「こ、これは…」

チュン吉を上昇させながら、屋上のある右塔全体を見渡し、表情を曇らせるスズメ。突如、崩れ落ちたのは屋上ではなく、右塔の外壁の至るところにもヒビが入り、塔全体が、崩れ落ちようとしている。

「スズメ！」

「ツバメ」

啞然とした様子で、崩れゆく塔を見つめていたスズメが、自分の名を呼ぶ声に振り向く。すると、チュン吉の飛ぶすぐ横の方向に、ツバメのスワ郎が飛びあがっていた。スワ郎の背の上には、ツバメの他に、熊子と塗壁の姿もある。崩れゆく屋上の上から、ツバメが二人を回収したのだろう。

「熊子、これは……」

「原因は分かりかねますが、この城全体が崩れ始めているのは確かです」

戸惑いの表情で問いかけるスズメに、熊子が冷静な口調で答える。
「スズさんたちの弟さんがあ、永遠を倒したんじゃあ、ねえのかあ？」

「それは、ありません」

塗壁の考えを、熊子があっさりと否定する。

「そうであれば、あの獣も消えるはずです」

「そ、そうかあ」

「ですが、城内で何かが起こったことは、間違いないでしょう」

塗壁が少し残念そうに肩を落とす中、冷静な言葉を続ける熊子。

「とにかく、ここに居ては危険です。幸い、足元を取られ、あの獣も動けない状態です。今のうちに一旦、避難を、スズメ氏」

「ああ」

熊子の言葉に、スズメが表情を引き締め、頷く。

「ツバメ、お前は熊子と塗壁を連れて、先に親父たちの居るところまで、降りといてくれ」

「スズメは……？」

「俺は、たもっちゃんとハ行の連中を回収してから行く」

「わかった」

スズメとツバメが頷き合うと、二羽の巨鳥は、それぞれ別の方向へと、飛び立っていった。

永遠の居城、正面部。

「うおおおお！」

無数に生み出され続ける黒い影との、戦いを続けていた以団いだんの金八が、急にやって来る地震のような地面の激しい揺れに、焦りの声をあげる。

「な、何…あ！」

しっかりと足を踏ん張りながら、戸惑いの表情で城を見上げた金八が、また大きく声をあげる。前方に見える城の、堅く閉ざされていた巨大な正門が、中央から大きくねじ曲がり、地面へと崩れ落ちていた。崩れていつているのは正門だけではない。城全体が揺れ動き、下方から一気に崩れ落ちようとしている。この巨大な城の崩壊が、周囲の地面すらも揺らしているのだ。

「神、城が…！」

焦った様子で、後方に立つイクラの方を振り返る金八。

「城が、城が崩れてってる！」

「そんなもの、見ればわかる。いちいち、口にするな。死ね」

「泣いちゃうよお！？そんな冷たいこと言うと、俺、泣いちゃうよお！？」

吐き捨てるように言い放つイクラに、すでに泣き出しそうな表情で、金八が訴える。

「城が崩れるのは、どうでもいい。問題は別にある」

「別？」

イクラの言葉の意味を探すように、金八がまた、城の方を振り向く。

「な…！？」

振り向いた瞬間、金八が大きく目を見開く。先程、地面へと崩れ落ちた正門が、白い光に包まれ、分解されていくように無数の光の

塊を生むと、その光が、金八たちの戦っている黒い影へと姿を変えた。正門だけではなく、崩れ落ちていく城のあらゆる部分が、その姿を、黒い影へと変えていく。

「ど、どうなってやがんだよ……？」

「知るか」

戸惑いのあまり、疑問を口にしてしまった金八に、イクラが冷たく答えながら、表情をしかめる。

「神……」

そこへ、イクラの横から、不安げな表情のシャコが声を掛ける。シャコが一瞬、視線を後方へと流し、言葉を終わらされてしまったチラシと、そのチラシを抱え、未だ泣いているニギリの姿を、瞳に捉え、またイクラの方を見る。

「すでに、こちらも限界です。一旦、退かねば、このままでは全滅します」

「……………」

シャコの言葉に、イクラは眉間に皺を寄せ、気難しい表情を見せた。

「エリザ様……」

以団と同じように、城の変化に気付き、困惑したような、険しい表情を見せながら、前方に立つエリザへと、呼びかける慧。

「アヒル……」

その場に立ち尽くし、エリザはただ、アヒルの名を呟いた。

「檻也くん」

「神」

それぞれ不安げな表情を見せながら、すぐ横へと立つ檻也へと、視線を投げかける紺平と空音。二人の視線を感じながら、檻也は厳

しい表情で城を見つめる。

「ここまでか…」

檻也の口から、どこか諦めるような、弱々しい言葉が零れ落ちた。

永遠の居城、程近くの公園。

「あれは…」

遠目からでも十分に確認出来る、城の崩壊。その地響きのような音は、離れた場所に居るウズラたちの耳にも、届いていた。その音を聞き、崩壊していく城を見つめながら、茜がより一層、不安げな表情を見せる。

「あなた、あれは…」

「恐らくは、あの城を造り出していた者が死んだ影響で、言葉の効果が消えて、城が崩れ始めてるんだらうね」

「城を、造り出した者…？」

ウズラの言葉に、茜が首を傾げる。

「では、百井桃雪が…」

「うん、たぶん」

眉をひそめ、その名を呟いた茜に、ウズラがそっと頷く。

「では、城の残骸が、黒い影へと姿を変えているのは？ 永遠が、桃雪の言葉をも呑み込んだということですか？」

「いや」

茜の問いかけに、ウズラが静かに首を横に振る。

「あれは、死んでもまだ、永遠の力になりたいという桃雪の思いが、形になったんじゃないかな」

「思いが、形に…？」

「うん」

戸惑いの表情で聞き返した茜に頷きながら、ウズラがどこか、遣り切れない表情を見せる。

「神への忠義の点では、彼ほど、神附きに相応しい者はいなかったからね」

ウズラの言葉を背中で聞きながら、和音がそっと視線を地面へと落とす。

――我が神に再び会う為なら、僕は何でもしますよ――

思い出される、共に在った頃の、桃雪の言葉。桃雪に利用され、酷い目に遭わされた和音にとって、桃雪はとても許せるような存在ではないが、桃雪の、ただ自身の神を復活させたいという思いは、ただ、母親の記憶を取り戻したいという和音の思いと、どこか通じるものがあつた。利用する者と、利用される者になつてしまつたが、和音と桃雪の、自身の願いを叶えようとするまっすぐな気持ちは、同じだったのかも知れない。

「死してもなお、自身の神に尽くす…」

「うん」

そつと呟く茜の横で、ウズラが悲しげに微笑む。

「彼もまた、五十音の世界に狂わされた者の一人、だったのかも知れないね…」

ウズラの言葉を聞き、俯いていた和音が顔を上げ、何かを決意した様子で、固く唇を噛み締める。

「……前方で戦う者たちに、その場を凌ぎ、我々と合流するように、連絡を」

和音が近くで待機する従者へと、言葉を向ける。

「和音ちゃん？」

「ここは危険です。もっと離れた場所へ移動しましょう、宇の神」
首を傾げるウズラの方を振り返り、和音がはっきりとした口調で言い放つ。

「百井桃雪を倒したとはいえ、あの状況では、こちらに不利。これ以上、戦いを続けても、ただ、音士の言葉を失うだけです」

ウズラへと、真剣な眼差しを向ける和音。

「後は中に居る安の神と、安団の皆さんを信じて、待ちましょう」

和音のその表情を見つめ、ウズラがそっと目を細める。中に居る籠也のことを思えば、不安なはずがない。それでも気丈に振る舞い、的確な指示を出す和音のその姿は、胸を打たずにはいられなかった。「うん、そうだね」

和音の言葉に、ウズラはしっかりと頷いた。

「痛つつつ…」

壁際に倒れ込んでいたアヒルが、表情をしかめながら、ゆっくりとその場で上半身を起こす。永遠の自室だった最上階は、すでに為介、アヒルとの戦闘により荒れ果て、天井の巨大な鏡は割れ、壁や床も傷だらけとなり、中央に置かれていた永遠の寝台も、壁際へと追いやられていた。

「思いつきり、ケツ打ったあ。んあ？」

痛む腰付近を、両手で撫でていたアヒルが、天井や床の下から聞こえてくる、地響きのような、底の方から聞こえてくる重い音に気付き、首を傾げる。

「何の音だ？」

その音に耳を澄ませ、アヒルが少し眉をひそめる。

「桃雪が死んで、桃雪の“設ける”の言葉によって造られたこの城が、崩れ落ちようとしている」

「え？」

アヒルの問いかけに答えるように、口を開いた永遠の言葉に、アヒルが素早く顔を上げる。

「崩れ、落ちる？ここが？」

「ああ」

不安げに聞き返すアヒルに、永遠が間を置くことなく、すぐさま

頷く。その頷きを見て、さらに険しい表情を見せるアヒル。この城の中では、安団の仲間たちがおり、城の傍や屋上でも、多くの仲間が戦っている。今、この城が崩れ落ちればどうなるか、そう考えると、アヒルの表情は強張った。

「皆…」

「逃げるなら、逃げてもいいよ」

「へ？」

思いがけない永遠の言葉に、アヒルが戸惑いの声を漏らし、顔を上げる。

「仲間たちと、この城からなるべく遠くまで、逃げたらいい」

穏やかな微笑みを浮かべた永遠は、少しも笑っていない冷たい瞳で、まっすぐにアヒルを見つめている。

「俺は別に、追いかけてりしないから」

「何を…」

「まあ、君たちが逃げても」

戸惑うアヒルの言葉を遮り、永遠はまた、笑う。

「崩れゆくこの城から生まれ出る影たちは、やがて世界中に広がって、君たちの言葉を終わらせるだろうけどね」

涼しげな表情で、永遠が言葉が続ける。

「それまでの間、大切な仲間たちと、ゆっくりと言葉を交わすといい」

微笑む永遠を見ながら、アヒルが眉間に皺を寄せ、少し考えるように、視線を下へと向ける。一瞬の間、深く目を閉じると、アヒルがその場で立ち上がり、顔を上げた。迷いも戸惑いもない表情で、ただまっすぐに永遠を見つめる。

「俺は、逃げない」

アヒルの口から放たれる言葉に、永遠が笑みを止める。

「俺は、お前を倒して、言葉の明日を手に入れる」

「……そう」

笑みを止めた永遠が、特に感情も無い表情で、興味なさそうに頷

く。

「折角、仲間たちと言葉を交わせる、最期のチャンスあげたのに……」

「そんなものはいらねえさ」

永遠の言葉にはつきりと答え、右手の中の、真っ赤な銃を握り締めるアヒル。

「俺たちは、また、いくらでも言葉を交わす」

アヒルが握り締めた銃を振り上げ、その銃口を、永遠へと鋭く向ける。

「明日の中で！」

はつきりと響くアヒルのその声を聞きながら、永遠がそっと目を細める。

「そう……じゃあ、この崩れゆく城の中で、決めようとしようか。あの神」

アヒルの言葉に動じた様子一つ見せず、崩れ落ちようとしている城の中でも焦りすらなく、言葉を放った永遠が、左手を強く握り締め、桃雪の言玉を光へと変えて、自身の手の中へと吸収する。

「言葉の明日、その行く末を」

楽しげに笑う永遠に、アヒルはまた、厳しい表情を作った。

Word. 80 消エユク言葉 (2)

「あ……」

銃を構えたアヒルが、口を開き、自身の文字を声にする。

「“当たれ”！」

言葉と共に引き金を引き、永遠へと、赤い光の弾丸を向けるアヒル。向かってくる弾丸に動じもせず、永遠が落ち着いた様子で、言玉を持った右手を突き出す。

「“押し返せ”」

永遠の言玉から放たれた、強い白光の壁が、アヒルへと迫るように床を走り、あっという間に弾丸を押し返して、弾丸を乗せたまま、アヒルの方へとやって来る。

「“上^あがれ”！」

自身へと弾丸を放ち、その場で上昇して、迫り来る壁を避けるアヒル。アヒルの避けた壁は、そのまますぐに突き抜け、部屋の壁と重なりあって、大きな穴をあける。壁の崩壊により、ただでさえ崩れ始めている城が、さらに揺れを増した。その揺れが、空中で浮くアヒルにまで伝わり、アヒルが上空で少しバランスを崩す。

「“てつめえ……！”

アヒルが少し睨むように、下に立つ永遠を見下ろす。だが、永遠はまったく焦りの表情など浮かべておらず、激しく揺れ動く城の中でも、足元のバランスを崩していない。ただ、今の状況を楽しむように、笑みを浮かべていた。そんな永遠の様子に、アヒルが言葉を止め、眉をひそめる。

「崩れ落ちるのが早まろうと、おかまいなしってか？クソ！」

舌を鳴らしながら、アヒルが再び、永遠へと銃口を向ける。

「“当^あたれ”！」

永遠へと勢いよく降りていく、赤色の弾丸。

「“落^をとせ”」

永遠が静かに言葉を発すると、すぐ上から落ちてくるように降り注いだ、平面型の白色の光が、アヒルの弾丸を床へと叩き落とす。弾丸が落ちると、すぐに永遠は視線を上げ、上空に居るアヒルを見た。

「“落^をちろ”」

「へ？」

すぐさま永遠が次の言葉を放つと、先程、弾丸を叩き落としたものよりも、大きな平面型の光が、上空で舞うアヒルのすぐ上へと現れ、アヒルが戸惑う間もなく、一気に降下してくる。

「う、うわあああ！」

部屋へと響く、アヒルの叫び。その声を聞き、永遠がそっと口元を緩める。

「ん…？」

だがすぐに、永遠の表情が曇る。天井から降り落ちる光に、押し潰されようとしていたアヒルの体が、淡い赤色の光に包まれ、霞がかったように消えていくのだ。

「あれは…」

「“欺^{あざむ}け”、だよ！」

後方からやって来る声に永遠が振り返ると、そこには、銃口をまっすぐに永遠へと向けた、アヒルの姿があった。

「“荒^あれろ”」

アヒルが間を置くことなく、言葉を放つ。

「“嵐^{あらし}”！」

銃口から放たれた強い風の塊が、至近距離から、一気に永遠へと襲いかかる。迎え撃つ言葉を放つ時間すらなかった永遠は、あっという間に、その風の中へと包まれた。

「…：を」

風に包まれながらも、永遠は動じず、そっとその口を開く。

「“慄^{その}け”…！」

言葉が落とされた途端、永遠の全身から強い白色の光が放たれる

と、永遠を包み込んでいた風の塊が、一瞬にして弾き飛ばされ、細かい風に分解されるようにして、周囲へと放たれる。

「ううう…！」

その風の一部を食らい、必死に両腕で防ぐも、頬や腕、体の所々を斬り裂かれるアヒル。斬り裂かれた傷口から、赤い血が滲み、アヒルの制服を汚す。

「フリーズ語句でもダメかつ…」

「をお“覆え”」

「あ…！」

アヒルが次の作戦を練る間もなく、永遠が次の言葉を放つ。永遠の言玉から放たれた白光が、周囲へと広がり、アヒルの四方から、アヒルの体を包み込んでいく。視界を埋め尽くしていく光に、大きく表情を歪めながら、アヒルが上空を覆っていく光へと、銃口を向ける。

「あふ“溢れ出せ”！」

アヒルの銃から放たれた弾丸が、アヒルを覆っていかうとしていた白光を打ち破ると、破られた隙間からアヒルが飛び出す。飛び出したアヒルが、すぐに前下方を見下ろすが、先程までそこに立っていたはずの永遠の姿が、いつの間にか、なくなっていた。

「どこへ…」

「ここだよ」

すぐ傍から聞こえてくる声に、アヒルが目を見開き、自分よりもさらに上を見上げる。アヒルよりも上へと飛び上がった永遠が、アヒルが飛び出してくるのを待っていたかのように、アヒルへと、言玉を持った右手を向けた。

「を“圧せ”」

白い光の塊が直撃し、アヒルが何も出来ないまま、床へ叩き落とされる。床に背中を打ちつける音が響くと、城がまた、大きく揺れた。床に倒れたまま、動かなくなったアヒルを見下ろし、永遠がそっと、目を細める。

「終わった…」

どこか呆れ果てたように、永遠が言葉と肩を落とす。

「五十音、第三音…」

倒れたアヒルに、興味をなくした様子で、背を向けようとした永遠が、耳へと確かに入って来るその声に眉をひそめ、素早くアヒルへと視線を戻す。

「“う”、解放…！」

起き上がると同時に、左手に持った金色の言玉を、銃へと変えるアヒル。

「“う”の文字を…」

「う…」

永遠が珍しく表情をしかめる中、アヒルがその場で立ち上がり、金色の銃を、永遠へと向ける。

「“撃て”…！」

放たれた金色の弾丸が、先程の“当たれ”の弾丸よりも速く、上空を駆け抜け、あっという間に永遠へと迫り来る。

「を、“降りろ”！」

少し焦った様子で言葉を発し、その場を一気に下降して、アヒルの弾丸を避ける永遠。今までの、堂々と正面から迎え撃ったやり方に比べると、随分と切羽詰まった避け方であった。

「ふう…」

床へと足をつけた永遠が、少し自身を落ち着けるように、左手で胸を撫でる。

「成程な」

どこか納得したようにそう言って、永遠がアヒルへと、視線を向ける。

「何故、二つ文字を持っているのに、一つの文字でしか戦わないのかと思っていただけれど…」

永遠が、アヒルを見つめるその目を細める。すべてを見透かすような、鋭く、冷たい瞳。

「一つの文字が終わらされている間に、もう一つの文字を解放し、応戦すれば確かに、君の言葉が終わらされることはない」

一瞬にして作戦を言い当てられ、アヒルが少し眉をひそめる。

「聡明な茜さんの、君のお母さんの作戦、といったところかな？」

「よくわかったな」

「君の両親とは、旧知の仲だからね」

アヒルの言葉に答えながら、永遠が涼しげな笑みを浮かべる。

「君が生まれるより、ずっと前からの……」

自身の終わらぬ時を強調するかのような、永遠の言葉に、表情を曇らせるアヒル。向けられているのは微笑みであるというのに、突き刺すような視線が、責められているような気がしてならなかった。

「けど」

言葉を付け加えた永遠の声が、少し低くなる。

「そんな程度の策で、俺を倒せると思う？」

不敵に微笑み、永遠が素早く言玉を、アヒルへと向ける。

「押し潰せ」

言葉により、言玉から放たれる、強い白光の塊。向かい来る白光へと、アヒルが金色の銃を伸ばす。

「撃ち落とせ」！

金色の弾丸が白光を貫き、その光を床へと落とす。

「襲え」

永遠がまたすぐに別の言葉を発すると、永遠のすぐ傍の床から、白い光の棘のようなものが突き出し、それが物凄い勢いで、アヒルのもとへと迫り来る。

「浮かべ」！

“上がれ”の時と同じように、自身へと弾丸を放ったアヒルが、金色の光に包まれ、上空へと浮き上がって、床から突き上げた棘を避ける。上空へと上昇したアヒルは、すぐに銃口を下へと向け、永遠に狙いを定めた。

「撃て」！

「押し返せ」

アヒルの放った弾丸を、永遠が素早く言葉で、アヒルのもとへと返す。

「失せろ」！

左手をまっすぐに伸ばし、言葉を放って、アヒルが戻って来た弾丸を掻き消す。攻撃を防いだものの、永遠を見下ろすアヒルの表情は、険しかった。

「やっぱり、文字一つじゃ…」

阿修羅との戦いで“う”の文字にも目醒めて以降、二つの文字で戦うことに慣れていたアヒルにとって、一つの文字だけで戦うということは、攻撃の幅も狭くなり、かなり動きにくい部分があった。“あ”の文字だけの時はともかく、まだ手にして間もない“う”の文字で戦うことは、相当に厳しい。

「一回、“あ”に切替を…」

「送れ」

「あっ」

両手を突き出した永遠が、まるで吹雪のような無数の光の粒を、アヒルへと向ける。向かってくる新たな光に、アヒルは銃を構えた態勢のまま、少し慌てた様子で口を開く。

「う、“受け止める”！」

アヒルが新たな弾丸を放ち、自身の前へと金色の光の膜を張って、向かってきた無数の光を、すべて受け止める。攻撃が止められたというのに、永遠はどこか、楽しい笑みを浮かべる。

「贈れ」

永遠がまた言葉を放ち、再び吹雪のような光を向ける。

「ぐうう…！うああああ！」

さらに勢力を増す攻撃に、張った膜では受け止めきることが出来ずに、膜を碎かれたアヒルが、二つの言葉分の光を浴び、後方へと吹き飛ばされ、力なく床へと落ちる。

「う、うう…」

苦しいな声を漏らすアヒルの、傷つき、血の滲んだ左手の中で、銃から戻った金色の言玉が、そっと零れ落ちる。

「第一音“あ”……」

痛みに表情を歪めながらも、何とか右手をあげ、赤色の言玉を強く握り締めるアヒル。

「解放……！！……！！」

再び“あ”の文字を解放し、真っ赤な銃を右手に握り締めるアヒルであったが、文字を解放した途端、強い重みが、体中に走った。

「な、何だ……？」

「慣れない複数回の文字の解放が、体に負担をかけているんだよ」

戸惑うアヒルに答えるように、永遠が言葉を向ける。

「負、担……？」

「ああ、文字の解放は、音士の体にそれ相応の負担をかける。まあ、本来であれば、解放するのは一度だけだから、そう気にもならないけどね」

ゆっくりと顔を上げたアヒルの方を見て微笑みながら、丁寧な説明を試みせる永遠。かつて、優秀な神であったことがうかがえるような、わかりやすい言葉だ。

「さあ、君の体は、後何度の解放に耐えられるかな？」

「ク……」

どこか試すように問いかける永遠に、アヒルが歯を食いしばり、傷ついた体を、その場で必死に立ち上がらせる。

「“浴びせろ”……！」

立ち上がったアヒルが、天井へと銃口を向け、何度も繰り返し、引き金を引く。すると天井から、雨のような赤い光の粒が、一気に永遠へと降り注いだ。

「“覆え”……」

永遠が右手を振り上げ、先程攻撃に使った言葉を発すると、白い光が永遠の体全体を包み込み、降り注ぐ赤い雨から、永遠の身を守る。アヒルの攻撃が降り止むと、永遠を覆った光が、それを察する

ように、自動的に消えていく。

「集まれ」

覆っていた光の中から出てきた永遠が、響く言葉に、ゆっくりと振り向く。真っ赤な銃を永遠へと向けたアヒルが、その銃口の先に、赤い光を圧縮させていた。空気を伝ってくる震動が、圧縮された光の、その激しさを伝えている。光が十分に凝縮されると、アヒルは勢いよく引き金を引いた。

「当たれ」！

圧縮された、先程までとは比べものにならないほどの強烈な弾丸を、アヒルが、永遠に向けて、迷いなく撃ち放つ。だが、迫り来る強大な弾丸にも、永遠は顔色一つ、変えなかった。

「抑えろ」

永遠の言葉により、永遠の前に白光の壁が張られ、その壁がアヒルの弾丸を正面から受け止める。しかしアヒルの弾丸の力が強く、永遠の張った壁が徐々に押され始める。すると永遠は、再び言玉を持った右手を、前方へと向けた。

「補え」

永遠の言葉を受け、壁が光を増すと、押していたはずの弾丸が止まる。

「帯びろ」

永遠がさらに言葉を放つと、アヒルの放ったはずの弾丸の赤い光が、解けるように壁全体に流れ、壁が、その解けた光を纏っていく。

「及べ」

アヒルの弾丸の光すらも纏った壁が、一気に床を駆け抜け、アヒルへと迫る。天井まで続いているその壁が相手では、アヒルが例え上空に逃げても、避けることは出来ない。

「う、うああああ！」

どうすることも出来ずに、もろにその壁の光を受けたアヒルが、激しく傷を負い、後方の壁まで、勢いよく吹き飛ばされる。それと同時に、真っ赤な銃も、もとの言玉の姿へと戻った。

「う、うう…」

床にポタポタと赤い血を流し、苦しげな声を漏らしながら、壁にめり込んだ上半身を、何とか必死に起こそうとするアヒル。

「早く、“う”を…」

アヒルが傷つき、痺れ始めている左手で、金色の言玉を握り締める。

「第三、音…」

「“押をさえつけろ”」

「ううう…！」

アヒルがまた文字を解放しようとしたその時、永遠の言葉が落とされ、床から突き出てきた紐状の光が、アヒルの左手に絡みついて、握り締めていた言玉を、床へと落とさせる。

「あ…！う…！」

落ちた言玉を拾おうとするアヒルであったが、床から伸びてきたまた別の紐状の光が、アヒルの右手、両足、そして胴体を押さえつけ、アヒルの動きを、完全に封じてしまう。

「何度の解放に耐えられるか、数えるまでもなかったね」

動くことの出来なくなったアヒルの、すぐ目の前へと現れる永遠。永遠から向けられる笑みに、アヒルが険しい表情で唇を噛み締める。「何か言い残したことはある？安の神」

アヒルの顔面へと、言玉を向けながら、永遠がそつと問いかける。

「俺は…」

永遠から向けられる問いかけに、ゆっくりとその口を開くアヒル。

「俺は、“諦あきらめない”！」

圧倒的不利な状況にあるにも関わらず、永遠を睨むように見上げ、はつきりとした言葉を向けるアヒルに、永遠が涼しげな表情で、そつと微笑む。

「そう。じゃあ」

目を細めた永遠が、冷やかな笑みを浮かべる。

「さようなら」

永遠の右手の中で、輝きを放つ言玉。

「“終^をえろ”」

向けられる言葉に、アヒルは最後まで瞳を閉じないまま、強く、唇を噛み締めた。

「ハア：ハア：！」

その時、扉の開く音が高々と響き渡る。息も絶え絶えに階段を駆け上ってきた恵が、やっとのことで、最上階にあるこの永遠の部屋へと辿り着いたのだ。

「あ：：！」

扉を開いた途端に広がったその光景に、恵が大きく目を見開く。

「あ：朝比奈あああ：：！！！」

恵の目の前で、アヒルは、永遠の放った終末の光に、包まれていった。

Word. 80 消エユク言葉 (3)

永遠の居城、屋上手前。

「焼き尽くせ！」

アヒルたちの救援としてやって来た、三言衆の一人、“也守”^{やもり}の刃が、武器である巨大な剣を振るい、迫り来る黒い影を数十匹、まとめて一気に焼き払う。構えを取り直しながら、刃が目を細め、陰しい表情で城を見た。

「城が崩れば崩れるほど、影は増え、その勢力を増していく…」
城の崩壊により、地面へと落ちた瓦礫から、次々と生まれ出る黒い影の、その様子を見下ろしながら、刃がまた、眉間に皺を寄せる。この城がすべて崩れ落ちれば、一体どれほどの影が生まれ出るのか、最早、想像もつかない。

「このままでは…」

「刃！」

「弓」^{ゆみ}

刃が表情を曇らせていたその時、金色の象に乗った弓が、空を翔け抜け、やって来た。

「言姫様からの命で、この場を凌ぎ、言姫様たちの居る場所まで退くようにと！」

「退く…？」

弓から伝わる指示に、刃が少し眉をひそめる。

「そうか」

「これ以上戦っても、我らは全滅するだけだ」
「鎧」^{よろい}

冷静に言葉を発しながら、弓のすぐ横へと現れる、厚い鉄仮面の男。固く腕を組みながら、周囲を見回し、和音の命に納得した様子で、鎧が頷く。

「適切な判断だろう」

「ああ」

刃も、鎧の言葉に納得するように頷く。

「命令通り、退こう。後は、安の神を信じるしかない」

「安の神……」

弓象の上で、両手を組んだ弓が、不安げな表情で、城を見つめる。

「大丈夫」

そんな弓を元気づけるように、軽く肩を叩く刃。

「我らを救ってくれたのは誰だ？」

不安げな弓へと、刃が優しく微笑みかける。

「安の神ならば必ず、皆の言葉を救ってくれる」

「刃……」

刃の微笑みに、弓が、少し安心した様子で笑う。

「うん」

刃の言葉に、弓はどこか祈るような思いで、頷いた。

永遠の居城、正面左方向部。

「きゃあああ！」

「誠子お姉さま！」

黒い影の攻撃を受け、悲痛な叫び声と共に、その言葉と動きを止める誠子。双子の姉のその叫びに、気を取られている徹子へと、生み出された黒い影たちが、一気に迫る。

「あ……！」

迫り来る影たちに気付き、徹子が大きく目を見開くが、時はすでに遅かった。

「きゃああああ！」

影たちの放った光を浴び、徹子が誠子と同じように、悲痛な叫びをあげる。

「誠子、徹子！」

二人の声を聞き、少し離れた場所で戦っていたエリザが、素早くその場の影たちを振り払い、二人の居る方へと駆けていく。

「扶^{えぐ}れ！」

エリザが緑色に輝く右足を振り切り、誠子たちの周囲に居た影を一気に掻き消す。

「誠子、徹子……！」

周りの影をすべて倒し、必死に二人のもとへと駆けつけるエリザだが、二人がエリザの呼びかけに答えることはなかった。

「誠子、徹子……」

完全に動きの止まった二人の姿を見て、エリザがどこか茫然とした表情を見せる。

「エリザ様！」

そこへ、どこからか現れる慧。

「今、言姫様からの指示がありまして……！こ、これは……！」

エリザに和音からの指示を伝えようとした慧であったが、それよりも先に、動きの停止した仲間たちの姿が目に入り、連絡の言葉は続かなかった。

「誠子！徹子！」

慧が二人に駆け寄り、必死に呼びかけるが、二人に反応はない。^{ねね}音音に続き、さらに二人の仲間の言葉も終わらされた慧を、絶望感が一気に襲った。

「こんな……」

「慧」

発する言葉も失った慧が、静かに呼びかけるエリザの声に、ゆっくりと振り向く。エリザは慧に背を向け、まっすぐに崩れゆく城を見つめていた。

「三人を連れて、この場から退避するわ」

「エリザ様……」

背を向けたまま、言葉を発するエリザを見つめ、そっと目を細める慧。最後まで、アヒルたちの為に力になると、共に戦うと決めて

いたエリザにとって、それは苦渋の決断であろう。そのエリザの気持ちが十分に伝わり、慧は、苦しい表情で俯く。

「仰せの、まさに」

慧は、エリザからの命に、ただ、いつもと同じように頷いた。

永遠の居城、正面部。

「その場を凌いで、合流ったってなあ」

伝わった和音からの指示を繰り返しながら、金八が、困った様子で頭を掻く。

『グアアアア！』

「どうやって凌げってんだよ、これを」

周囲を、もう終わりすら見えないほどの数の黒い影に囲まれた金八が、深々と肩を落としながら、情けない声で呟く。これでは逃げ道もなく、逃げ道を作るにも、相手の数が多すぎて、逃げる前にこちらの体力が尽きてしまう。

「金八！」

「お前はチラシとニギリについてろ、シャコ！」

金八より少し後方から、不安げな表情で呼びかけるシャコに、金八が素早く言葉を向ける。シャコの傍には、言葉を終わらされたチギリと、チギリのことで未だ放心状態のニギリの姿があった。シャコは、黒い影たちから二人を守るようにして、構えている。

「金八：カッコつけ、カイワレ大根、カブトガニ：」

「最早、関係ない言葉の方が多いよお！？シャコ！」

ひっそりと呟いたシャコに、金八はこの状況であっても、緊張感のカケラもなく、突っ込みの言葉を投げかける。いつものやり取りに、少し冷静さを取り戻したのか、先程よりは落ち着いた表情となつて、金八が改めて、周囲の影たちを見回した。

「ごちゃごちゃ言っても仕方ねえし、とりあえずやるかあ」

諦めたようにそう言つて、金八が、青い言玉を握るその手に、力

を込める。

「よっしゃあ!“き…!”」

「凍^いてつけ”」

「あり?”」

金八が言葉を発する前に、別の言葉が放たれ、金八の前面の影たちが一気に凍りついていく。その光景に言葉を止め、戸惑った様子で目を丸くする金八。

「今の言葉って…」

「一碧^{いっぺきばんけい}万頃”」

「うお!」

金八が首を傾げていると突然、金八のすぐ横の地面から、巨大な水の像が現れる。溢れ出るその水の中に呑み込まれないように、必死に横へと避ける金八。

「ふっはあゝ」

「邪魔だ、どけ」

「神!」

焦った様子で金八が呼吸を整えていると、不機嫌そうに言葉を発しながら、金八のすぐ横へと、イクラが現れた。

「そういう冷たいこと言うと、また俺、泣いちゃうよお!?”」

横へとやって来たイクラに、いつものように言葉を投げかける金八。

「だいたい、こんな皆近くに居る場所で、四字熟語^{ラスト・イデオム}なんか使ったら、危な…」

「金八」

金八の言葉を遮り、イクラが金八の名を呼ぶ。イクラはまっすぐに前を見据えたまま、いつものように厳しく、鋭い表情を見せていた。

「行け」

イクラの短いその言葉に、瞬時に意味を感じ取った様子で、金八が眉をひそめる。

「神…」

「道は俺が作る。他の奴らを連れて、行くんだ」

そっと呼びかける金八に、イクラがさらに言葉が続ける。その言葉に、金八は迷うように俯いた後、険しい表情で顔を上げた。

「けど…！」

「神の言葉を聞け。聞けないなら、死ね」

言葉を遮るイクラの声に、金八が思わず押し黙る。

「……仰せのままに、我が神」

俯いたまま、金八がそっと、言葉を落とす。イクラに命令だと言われては、金八は、その言葉以外を、口にするわけにはいかなかった。

「ちゃんと命令は聞くからさ、俺の言葉も一つだけ、聞いといれくれないか。神」

金八のその言葉に、ずっと前だけを見ていたイクラが少し振り向き、金八の方を見る。すると、顔を上げた金八が、真剣な表情で、まっすぐにイクラを見つめた。

「死なないでくれ」

切に願うように放たれる、金八の言葉。その言葉に、イクラが目を細める。

「あんたが死ぬと、俺、泣いちゃうよお？」

「……勝手に言ってる」

そっと微笑んで、いつもと同じ言葉を発する金八に、イクラはまた目を逸らすように前を向いて、素っ気ない言葉を返した。そんなイクラの様子を見て、金八がまた、微笑む。

「行け、金八」

「おう！」

イクラの言葉にしっかりと頷き、シャコたちのもとへと、駆け出していく金八。金八が駆けていくのを確認すると、イクラが言玉を持った右手を掲げた。

「“祈れ”…！」

イクラが強く言葉を発すると、先程出来上がった巨大な水像が、その場で倒れ込み、前方に居た黒い影の集団を、一気に呑み込んでいく。

「行くぞ、シャコ！」

「え？」

動きの停止したチラシを背負い、放心状態のニギリの手を引いて、イクラの言葉により掻き消えた影たちにより、出来た逃げ道へと、駆け出していく金八に、シャコが戸惑いの声を漏らす。

「で、でも、神が……」

「いいから行くんだ！」

ニギリを引く手とは逆の手でシャコの手首を掴み、戸惑うシャコを無理やり引っ張って、イクラにより作られたその道を、必死に駆け抜けていく金八。金八に引かれながら、シャコが振り返り、黒い影たちの中に、たった一人、残るイクラの方を見つめる。

「神……神！」

どんどんと遠ざかっていきながら、それでも必死にイクラを呼ぶシャコ。

「……………」

そんなシャコを、金八を、仲間たちを見つめながら、イクラがそっと、目を細める。

——俺だってなあ、半端な覚悟で、神になろうってんじゃないんだよ！——

「……あの時のあいつの言葉が、今になって、わかるとはな」

神試験でのアヒルの言葉を思い出し、イクラが少し、口元を緩める。だがその表情は、すぐに鋭いものへと変わり、イクラはまた、言玉を持った右手を突き上げた。

「“祈れ”！」

永遠の居城、正面右方向部。

「退避？和音が？」

「はい。そのように指示が来ています」

聞き返した檻也に、雅が眼鏡を指で押し上げながら、冷静に答える。雅の答えを聞くと、檻也は少し考え込むように俯いた。

「そうか。和音が……」

もう一度頷きながら、檻也がそっと、城へと視線を送る。崩れゆく城では、恐らくまだ、檻也の兄でもある籠也が、戦いを続けているだろう。不安げに目を細めながらも、どうにも出来ないことを知っており、檻也はどこか、もどかしそうな表情を作った。

「この場から退避する！全員、一箇所に集まれ！」

「え？」

檻也から飛ぶ指示に、檻也よりも前方で戦っていた空音が、驚いた様子で振り返る。

「退避？」

戸惑いの表情で、檻也の方へと体を向ける空音。

「退避とは、神っ……」

「あ……！」

檻也に問いかけを向けようとする空音の、すぐ後ろへと迫る黒い影に気付き、空音を見ていた檻也が、大きく目を見開く。

「後ろだ、空音！」

「え……？」

檻也の声に空音が振り向くと、空音のすぐ間近へと迫る、黒い影の鋭い爪先。

「あ……！」

「空音……！」

空音が表情を強張らせる中、檻也が何とかしようと、必死に言玉を構えるが、黒い影の爪が、振り下ろされる方が早い。

「う……！」

空音が諦めるように、唇を噛み締めた、その時、空音の前に、飛び出してくる者の姿があった。

「ああ…！」

飛び出してきたその者は、空音を庇うように空音の前面へと立ち塞がり、空音に代わって、振り降りてきた黒い影の爪を、胸へと受ける。

「こ…紺平！」

放たれる空音の、悲痛な叫び。空音に代わり、黒い影の攻撃を受けたのは、紺平であった。後方へと倒れ込む紺平へと、空音が必死に両腕を伸ばす。

「“落ちろ”！」

「“満ちれ”！」

一歩遅く、やっと攻撃態勢の整った檻也と雅が、それぞれの言葉を発すると、巨大な波と、白い光の雨が、紺平と空音の周囲の黒い影を襲い、一気に掻き消した。

「“迎えろ”！」

檻也たちの横から六騎^{むっき}が言葉を放ち、金色の馬を使って、紺平と空音を、檻也たちのすぐ傍まで運んでくる。

「紺平！紺平…！」

倒れた紺平の体を支えながら、泣きだしそうな表情で、必死に紺平へと呼びかける空音。そんな二人のもとへと、檻也たちが歩み寄っていく。

「紺平…」

「檻也、くん…」

静かに名を呼ぶ檻也の方へと、紺平がそっと、視線を向ける。

「ごめん、ね…最後まで、附いて…いけなくて…」

謝罪する紺平に、檻也は険しい表情を見せながら、言葉もなく、ただ、首を横に振った。

「紺平、ごめん！ごめん…！私の、私のせいで、こんな…！」

「大丈夫、だよ…空音さん」

目に涙を浮かべながら、必死に謝る空音へ向け、紺平が安心させるように、笑みを向ける。

「言葉は、終わったりしない…明日は、来る…」

紺平が、確信を持って、言葉を紡ぐ。

「ガアがきつと、明日を、持って帰って来てくれる…」

紺平のその言葉には、迷いなどまるでなく、心からアヒルを信じているその様子が眩しく映り、檻也は思わず目を細めた。

「だから…」

もうほとんど閉じかけの瞳で、ゆつくりと、青く広がる空を見つめる紺平。

「“また明日”ね、ガア…」

まるで自然の挨拶のように言葉を発し、そっと微笑むと、紺平はそのまま瞳を閉じ、完全に動かなくなった。動かなくなった紺平の体を、握り締める手に力を込め、空音が俯き、瞳に溜め込んでいた涙を流す。

「小泉君…」

雅も六騎も、動かなくなった紺平を見つめ、厳しい表情を見せた。

「武守、悪いが、紺平と末守^{まもり}を運んでくれるか？」

「あ、うん」

檻也からの指示に、六騎が素直に頷く。

「全員、この場から退避する」

はつきりと言い放たれた檻也の言葉に、首を振る者は、誰も居なかった。

「ん、んん…」

どこからか感じる強い震動に、深く閉じていた瞳を、ゆっくりと開く七架。

「私…」

「気が付いた？」

そんな七架の顔を、横からそっと覗き込む者。

「囁、ちゃん…」

床に横たわった状態の七架のすぐ横に座り込み、七架の方へと視線を向けていたのは、穏やかな笑みを浮かべた囁であった。激しい戦闘があつたのか、囁は全身、傷だらけの状態だ。勿論それは、七架も同じである。

「起きれる…？」

「うん、何とか」

囁の手を借りながら、何とかその場で起き上がる七架。体中軋んで、動く度に痛みが走るが、少し寝ていたからか、意識ははっきりとしていた。

「ごめんなさいね。応急処置はしたんだけど、私、回復の言葉使えないから…」

囁の言葉を受け、七架が自分の体を見回す。激しく傷つき、出血していた場所には、丁寧に包帯が巻かれ、止血されていた。

「もっとも、今は一つの言葉も使えないけれど…」

「うん、私も」

囁に同意するように、七架が頷く。十稀とほ、埜亜のあとの戦いにより、すべての力を出しきった囁と七架には、もう一つの言葉を発する力も残っていなかった。

「この揺れ…」

七架が天井を見上げ、そっと眉をひそめる。七架を目覚めさせた、

地響きのような音と、底から崩れていくような激しい揺れ。何が起ころうとしているのかを、だいたい察し、七架が囁の方を見る。

「城が、崩れようとしてるの？」

「詳しくはわからないけれど、恐らくね……」

七架の問いかけに、囁も表情を曇らせながら答える。

「戦いは？」

「それも詳しくはわからないけれど、恐らくまだ、続いていると思うわ……」

問いに冷静に答えながら、囁が天井へと視線を向ける。

「崩壊音に紛れて、言葉の衝突音が聞こえるから……」

「じゃあまだ、朝比奈くんたちは戦ってるんだね」

囁と同じように天井を見上げ、七架が不安げに目を細める。七架の横で、囁が少し考え込むように俯いた後、どこか決意したような表情で、再び顔を上げた。

「動ける……？ 七架」

「え？」

急な問いかけに、戸惑うように目を丸くする七架。

「あ、うん。ちょっとくらいなら、何とか」

「なら、すぐに、あの二人を連れて、ここから脱出しましょう……」

「え……」

すぐ傍で倒れている十稀と埜亜へと視線を向けながら、冷静に言葉を発する囁。囁の思いがけないその言葉に、七架の表情が曇る。

「で、でも、朝比奈くんと神月くんは、まだ上に……！」

「言葉の一つも使えない私たちが後を追っても、足手まといになるだけだわ……」

「それは、そうだろうけど……」

囁の言葉が正しいとは思いつながらも、納得の出来ない表情を見せる七架。

「でも……！」

「七架」

必死に訴えようとする七架の言葉を遮り、囁が強く、七架の名を呼ぶ。

「“明日”、出会う為には、まず私たちが、生き延びなくちゃ…」
まるで諭すように、囁が真剣な表情で、七架へと言葉を向ける。
「私たちが生き延びなきゃ、アヒルんが明日を勝ち取る、意味がないでしょう…？」

「明日…」

少し俯いた七架が、胸の前で固く手を握り締め、ゆっくりとその言葉を繰り返す。

——また明日！奈々瀬！——

アヒルの言葉を思い出し、七架が深く瞳を閉じる。再び目を開くと、七架は先程までの迷いなど一切ない、まっすぐな、力強い表情を見せていた。

「行こう。囁ちゃん」

「……ええ」

はつきりと言い放つ七架に、囁は、優しい笑顔で頷いた。

やっこのことで、最上階へと辿り着いた恵が見たものは、永遠の前で、永遠の終末の光を浴び、ただ、音もなく倒れていくアヒルの姿であった。床へとうつ伏せに倒れたアヒルは、苦しげな声を漏らすこともなく、指一本を動かすこともなく、完全にすべての動きを停止してしまっている。

「そんな…朝比奈…」

目の前に広がる光景が信じられず、膝から崩れ落ちるようにして、その場に座り込む恵。表情は茫然としており、瞳に宿る光もない。

「一步、遅かったね。恵」

倒れたアヒルの前へと立った永遠が、恵の方を振り向き、そっと微笑みかける。

「彼の言葉は、今、終わった」

永遠から告げられる残酷な言葉に、恵が大きく、目を見開く。

——安の神になる前から、俺は、言葉が大好きだった！——
——俺は、先生と一緒に時を生きたい！——

「ク……！」

アヒルのまっすぐな言葉を思い出し、恵が強く唇を噛み締め、悔しげに顔を下へと向ける。膝の上で力一杯握り締められた手からは、少し血が滲んでいた。

「何でだ……遠久っ……」

俯いたままの恵の口から、零れ落ちてくる言葉を耳に入れ、永遠がそっと眉をひそめる。

「何でこんな……こんな、関係のない人間を、巻き込むようなマネ……」
恵がさらに拳を握り締め、唇を震わせる。

「お前が憎むべきなのは、私だ！私一人だ！他の人間は、関係ない……！」

勢いよく顔を上げた恵が、必死に言葉を放つ。

「私だけを倒せばいいだろう！？なのに何故、こんな……！」

「俺は、恵を恨んだりなんて、してないよ」

「何……？」

あっさりと答える永遠に、恵が必死の言葉を止め、戸惑った表情を見せる。

「だって、恵が俺の時を“永遠”にしたのは、俺に、生きていて欲しかったからでしょう？」

首を少し傾けながら、恵へと問いかける永遠。その永遠は、今まで、他の人間に見せていた、感情の一切ない、冷たいものではなく、どこか自然とした、人間らしい表情であった。

「それって、わかる気がするし、俺が恵でも、同じことしてた気がするし…」

「遠久…」

偽っている様子のない、永遠の素直なその言葉に、恵が目細める。

「だったら…！」

「俺が憎んでいるのはね、恵」

強く訴えようとした恵を、永遠の聲が、あっさりと遮る。

「恵でも為介でもなければ、韻でも五十音の世界でもない」

永遠が恵の方へと体の向きを変え、まっすぐに恵を見据えて、言葉続ける。

「終わらない、この“永遠”。他の誰も、皆に来る“明日”」

永遠の瞳が、冷えた、鋭いものへと変わる。

「ただ、それだけだよ」

先程とは異なる、どこまでも、冷たさしかない笑みを、永遠が恵へと向ける。

「恵だって、わかるだろう？ ううん、俺以外には、きっとあなたにしか、わからない」

恵を捉える、永遠の冷たい視線。

「この“永遠”を嘆く気持ちが、皆の“明日”を憎む気持ちが、俺の気持ち、恵にならきつと、わかるはずだ」

手を差し出し、言葉続ける永遠を、恵は目を逸らすことなく、まっすぐに見つめ返していた。その表情は、険しいものではない。悲しむような、そしてどこか憐れむような、そんな表情である。

「私には、わからない」

はつきりと告げられた答えに、永遠の笑みが止まる。

「私には、わからないよ。遠久」

その答えを強調するように、恵はもう一度、告げた。

「確かに、終わらぬ時は孤独で、悲しくなることもあるけど…でも」言葉付け加えた恵が、真剣な表情で、永遠を見つめる。

「皆の“明日”を、憎んだことなんて、私は、一度もない」

恵からのその言葉に、永遠がそっと、眉をひそめる。

「私は、皆には、“明日”の中で、生きていつてほしい」

——恵先生！また明日！——

もう見ることの出来ないカモメの笑顔が、同じように言葉を向けたアヒルの笑顔が、恵の胸に思い出される。

「大切な人たちには、“明日”の中で、笑っていて欲しい」

どこか泣き出しそうに目を細めながら、恵が必死に、自分の思いを言葉に乗せる。

「例え、同じ時間を生きられなくても、その人たちが幸せなら、“永遠”を生きる私でも、幸せを感じられる」

思いの強さにか、少し震える、恵の唇。

「“永遠”を生きる私でも、“刹那”を生きてるような、そんな幸せを感じられる……！」

声を張り上げ、自分の思いを叫ぶ恵。ずっと続いた恵の言葉に、永遠の表情はどんどん曇り、冷たさを増していった。体の全身から、怖いと思えるほどの、鋭い空気を放っている。

「……そう」

少しの間を置いて、永遠がそっと、小さく頷く。

「あなたには、俺と一緒に、皆の明日が終わるところを、見届けてもらおうと思っていただけ……もういいね」

冷たく言葉を落とした永遠が、恵へと、右手に持った言玉を向ける。

「そんなに刹那を生きたいなら、今この場で、俺があなたの“永遠”を終わらせてあげるよ」

言玉を向ける永遠を、恵は臆した表情一つ見せず、正面からまっすぐに見つめる。

「抵抗も逃亡も、しないの……？」

「私は初めから、このつもりだった」

恵のその言葉に、永遠が少し、表情を曇らせる。

「私が死ねば、私の“永遠”の言葉は消えて、お前も死ぬ」

言葉を続ける恵に、眉間の皺を深くする永遠。恵の言葉を、永遠が否定することはなかった。恵のその言葉は、確かに事実であった。恵の言葉により、生き永らえた永遠は、恵の言葉を終わらせれば、恵と共に死ぬであろう。

「お前をこんな風に変えたのは、すべて、私の責任だ」

恵が崩れ落ちた膝を立たせ、その場で力強く立ち上がる。

「だから私は、お前と共に逝く…！」

強く言い放ち、懷から取り出した緑色の言玉を、力一杯握り締める恵。

「五十音、第四十九音“ゑ”、解放！」

言玉を右足へと吸収させ、勢いよくその場を飛び出して、恵が永遠のもとへと向かっていく。永遠のすぐ前へと辿り着いた恵が、緑色に輝くその足を、永遠へと振り下ろす。

「“^{あひ}袂れ”！」

「……“押^をさえろ”」

言玉の光を纏った右手を前へと出して、難なく恵の足を受け止める永遠。

「グ…！」

「一つだけ、いいことを教えてあげるよ。恵」

足を受け止められ、険しい表情を見せる恵へと、永遠が涼しげな笑みを向ける。

「あなたの“永遠”の言葉なら、随分と昔に、俺の言葉が呑み込んだ」

「何…？」

「“^を圧せ”」

「ううう…！」

足を押さえていた永遠の右手に、強く圧され、恵が後方へと弾き

飛ばされて、床に勢いよく倒れ込む。

「う、ううう…」

「だから」

苦しいな声を漏らしながら、床に両手をついて、何とか起き上がる恵に、永遠が間を置くことなく、言玉を持った右手を向ける。

「あなたが消えても、俺は死なない」

「ク…！」

輝く白い言玉に、恵が覚悟するように、きつく唇を噛み締める。

「“終^をわれ”」

何の躊躇いもなく、恵へと放たれる言葉。永遠の言玉から放たれた終末の光が、まっすぐに向かってくるが、恵には、どうすることも出来ず、ただ、その光が辿り着くことを、待つしか出来なかった。その時。

“「当^あたれ”！」

一つの言葉が響いたと同時に、赤色の弾丸が駆け抜け、恵へとやって来ていた白光を、横へと吹き飛ばし、壁を突き破って、共に外へと消えていく。

「え…？」

外へと消えていった光を見送り、啞然とした声を漏らす恵。恵が少しぎこちない動きで、弾丸の飛んできた方向へと首を向ける。

「あ…」

恵の口から零れ落ちる、弱々しい声。

「朝比奈…」

そこに立っていたのは、真っ赤な銃を構えた、アヒルであった。

「よっ、恵先生！」

「朝比奈…お前、何で…」

恵の方へと歩み寄っていきながら、笑顔で元気に挨拶を向けるアヒルに、恵が戸惑いの表情を見せる。

「何故だ…」

戸惑いの表情を見せたのは、永遠も同じであった。

「何故：彼の言葉は、確かに、終わらせたはず…ん？」

眉間に強く皺を寄せ、恵の方へと歩み寄っていくアヒルを、まっすぐに見ていた永遠が、何かに気付いた様子で、声を漏らす。歩いていくアヒルの全身に、見逃してしまいそうなほど淡くではあるが、青い光が張り巡らされていた。今まで見てきた、アヒルの赤と金の光とは、まったく性質の異なる光だ。

「あの光は…あ！」

永遠が何か、思い当たったのか、勢いよく後方を振り向く。そこには、すでに言葉を終わらされ、完全に動きを停止し、倒れ込んだままの為介の姿があった。

——“ゐ……”——

アヒルがこの部屋に現れた時、倒れゆく為介は、アヒルへと指を向け、何かの言葉を呟いていた。

「まさか…あの時、為介の放った言葉は…」

「“生ゐきる”」

思い当たったものと、同じ言葉が耳に入り、永遠がまた振り向いて、前方に立つアヒルと目を合わせる。恵のすぐ横に立ったアヒルは、射るような、強い表情で、まっすぐに永遠を見つめていた。

「扇子野郎が、俺にくれた言葉。俺に、託した言葉だ」

堂々と言い放つアヒルに対し、徐々にその表情を歪め、険しくしていく永遠。

「まだ、勝負は終わってねえぜ。永遠」

アヒルが力強く言葉を放ち、その銃口を、永遠へと向ける。

「俺の言葉は、まだ、生きてる…！」

左手で自身の胸を押さえ、アヒルは、誇らしく言い放った。

Word 81 別離 (1)

永遠^{とわ}の居城。屋上、上空。

「保の傷は？」

上空に浮かびながら、そう問いかけたのは、灰示であつた。

「少しずつですが、言葉が効いています」

灰示の問いかけに答えるのは、ハ行の一人、保守^{ほもり}の蛍。

「このまま治療を続ければ、問題ないかと」

「そう」

蛍の答えを聞き、灰示が、どこかホツとしたように肩を落とす。

蛍のすぐ傍には、金色のトラの背の上に横たわり、深く瞳を閉じたままの保の姿があつた。現^{うつ}との戦いで、激しく傷を負った保は、現に勝利すると、そのまま気を失ってしまったのである。

「何で、こんなバカ間拔けに、私の可愛いトラトラ子の背を、貸してやんなきゃいけないのよお」

そのトラの横で、不満げに表情をしかめている不二子。

「こんな奴、別に死んじゃったっていいのに！」

「そういうわけには、いかないじゃん？へへ」

不二子の横で、部守^{へもり}の兵吾が、楽しげな笑みを浮かべている。

「でも、あのバカ間拔けはともかく、灰示様が無事で、本当に良かったあ」

「ああ。あのジジイが死んだら、灰示様も消えちまうんじゃないかって、マジで焦ったじゃん」

不二子と兵吾の会話を耳に入れ、灰示が視線を下へと落とす。

——“生まれろ”！——

初代“宇の神”、現の言葉により、生まれた忌。生まれた灰示。

「何故…」

形の残った自身の体を、指先を見つめ、灰示が少し険しい表情を見せる。

「灰示様」

灰示のすぐ横から、かしこまった態度で、灰示へと呼びかけるヒロト。

「灰示様も、傷の手当てを」

「僕は、痛みにより、強さを増す生き物だよ？ 必要ないさ」

「しかし…」

「お、居た居た！」

手当てを拒む灰示に、ヒロトが眉をひそめていたその時、下方から五人とはまた別の声がやってきて、灰示たちが一斉に、声のした方を見る。

「全員、無事みてえだな」

「君は…」

「“寸守”^{すもり}の朝比奈スズメ！ こうして、面と向かって話すのは初めてだな。波城灰示」

その場に現れたのは、チュン吉に乗って、空を舞って来たスズメであった。軽く右手をあげ、スズメが、親しげな笑みを、灰示へと向ける。

「安の神様の兄弟か」

「寸守ごときが、灰示様に馴れ馴れしいわよ！」

「ひつでえ言われようだなあ」

灰示の横から身を乗り出し、スズメへと鋭く人差し指を突き出す不二子に、スズメが困ったように頭を掻く。

「折角、助けに来てやったっていうのによお」

「助ける？」

ヒロトが戸惑った表情で聞き返すと、スズメはすぐに、真剣な表情を見せた。

「ああ。下の城が、崩れ始めてる。しかも崩れた城の残骸が、敵の黒い影に変わるっつー、オマケ付きだ」

「何だと？」

驚くヒロトの横で、そっと目を細める灰示。

「一旦、全員退くことになった。ま、城が崩れたお陰で、あのでっかい獣も、身動き取れなくなってるしな」

「獣……」

スズメの言葉を聞き、少し俯いた灰示が、何やら考え込むような表情を見せる。

「やっぱり、あの獣も消えてないんだね……」

「も？」

灰示の言葉に、不思議そうに首を傾げるスズメ。

「灰示、様……？」

深刻げな表情を見せる灰示を、不二子はどこか、不安げに見つめた。

永遠の居城、左塔最上階。

「“生きろ”、か」

アヒルの言葉を聞き、永遠が、少し困ったような笑みを浮かべる。
「随分と余計な言葉を、放ったくれたものだね。為介」

言葉を終わらされ、すべての動きを停止している為介の方を振り向き、永遠が、届くはずのない言葉を、為介へと向ける。

「君は本当に、俺の邪魔をするのが上手い」

為介を見つめたまま、感心するような言葉を呟きながら、冷たい笑みを浮かべる永遠。そんな永遠に視線を向けながら、恵へと歩み寄ったアヒルが、その場で足を止め、少し体を屈めるようにして、まだ床に座り込んだままの恵へと、手を差し伸べる。

「ほら、立てるか？ 恵先生」

手と共に、優しい言葉を投げかけるアヒル。だが、恵は深く俯いたまま、アヒルの言葉に答えようとはしなかった。

「恵先生？」

「すまない、朝比奈」

返ってきたのは、アヒルの問いかけへの答えではなく、弱々しい、謝罪の言葉であった。

「すまない……」

「先生が謝ることじゃねえって」

もう一度、謝罪の言葉を繰り返す恵に対し、アヒルはそれを否定しながら、優しく言葉をかける。

「すべて、終わらせられるつもりだった……」

まっすぐに床を見下ろしたまま、恵が力なく、言葉を続ける。

「私の言葉が終われば、私の“永遠”^{えいえん}が消えて、あいつも、遠久も死ぬ、そのはずだったのに……」

床についたままの右拳を、強く握り締める恵。

「私の言葉など、とっくに、あいつの言葉に呑み込まれていた」

恵の言葉を聞き、アヒルが少し眉間に皺を寄せ、険しい表情を見せる。

「共に消えることすら、許されないなんて……」

零れ落ちる恵の声が、わずかに震える。

「あいつを倒すことの出来る、たった一つの手段さえ、失ってしまった……！」

握り締めた拳をあげ、額へと付けた恵が、苦しげな声を放ち、深々と頭を抱える。見ているだけで、目を背けてしまいそうになるその姿は、もうどうすることも出来ない、その体で示しているようであった。そんな恵を見つめ、アヒルがそっと、目を細める。

「もう、どうすることも出来ない……！もう、本当に、もう……！」

「俺」

自分の声を遮るようにして聞こえてくるアヒルの言葉に、恵は頭を抱えるのを止め、反射的に顔を上げた。そこには、恵のように苦しげな表情ではなく、穏やかな笑みを浮かべたアヒルの姿があった。「俺さ、今までずっと、恵先生の言葉を、信じなかったことなんて

なかったけど」

アヒルが顔を上げた恵を、まっすぐに見下ろす。

「けど、ごめん。先生の今の言葉だけは、信じない」

「え……？」

はつきりとそう告げるアヒルに、恵が戸惑うように、首を傾げる。

「俺は、もう、どうすることも出来ないなんて、思えない。もう、本当に終わりだなんて、思えない」

戸惑う恵へ、アヒルがさらに、言葉が続ける。

「だって、俺の言葉はまだ、終わってないから！」

力強く言い放つアヒルのその姿に、恵が思わず、目を見張る。

「俺はまだ、言葉を持ってる！こうして、話せてる！だから、まだ、終わってない！終わりじゃない！」

恵へと身を乗り出し、アヒルが必死に言葉が続ける。

「そうだろ！？恵先生……！」

「……言葉を持っているから、何だっていうんだ？」

「え？」

恵から返って来る、低く重い声。恵の口から零れ落ちたとは思えないその言葉に、アヒルは自分の耳を疑うように、眉をひそめ、恵の方へとさらに体を屈めた。

「め、恵先……」

「じゃあ、お前の言葉は、あいつに通じたのか？」

視線だけを鋭くアヒルの方へと向けた恵が、冷たい問いかけを、アヒルへと放つ。

「お前の言葉は、たったの一つでも、あいつに通用したのか？」

「それは……」

恵の問いかけに、アヒルが思わず口ごもり、俯く。先程までの戦いで、アヒルは一方的に永遠に押され、その体に、たった一つの傷をつけることも出来なかった。それは、無傷の永遠を見れば、恵にも十分にわかることであった。

「通用しなかったんだろう？」

俯いたままのアヒルに、答えを確信する恵。

「どうせ、あいつには、他の音士の言葉なんて、通用しない。なら、言葉が終わっていいようが、終わっていなかろうが、一緒だ」

恵がまた視線を下ろし、項垂れたように下を向く。

「私が、共に消えるしか、方法はなかったんだ」

過去を、終わったことを悔いるような、恵の言葉。

「もう、どうすることも出来ない」

「恵先生……」

諦めきった言葉を落とす恵を見つめ、アヒルがそっと目を細める。共に消える、最後の手段すらも打ち碎かれ、恵は完全に、心を折られてしまっていた。

「アハハハ」

そんな中、高らかと響く笑い声に、アヒルが険しい表情のまま、そっと振り向く。

「傑作だね、安の神」

アヒルが振り向いた先には、何やら楽しげな笑みを浮かべている永遠の姿があった。永遠は嘲るような冷たい瞳で、まっすぐにアヒルを捉える。

「傷だらけになって、それでも何度も何度も立ち上がって、諦めずに、必死に必死に戦っているのにさ」

永遠の口角が、さらに吊り上げる。

「それなのに、その頑張りを、恩師に“意味がない”って、否定されるなんて」

その言葉を受け、アヒルが隠そうとはしていたが隠しきれず、表情を歪ませてしまう。

「本当、言葉は残酷だね」

少し笑みを大人しくした永遠が、どこか遠くを見つめるような瞳を見せる。

「君の気持ちは、よくわかるよ。安の神」

もう一度、視線を流し、今度はどこか穏やかな笑みで、永遠がア

ヒルを見つめる。

「言葉の残酷さなら、俺は、誰よりも知っている」

その永遠の言葉を聞き、言葉の意味を何となく察して、アヒルが眉間に皺を寄せる。

「何げない言葉は、他人の心を傷つける。届かない言葉は、自分の心を傷つける。すれ違う言葉は、互いの心を傷つける」

かつての言葉たちを思い出すように、目を細める永遠。

「この世界には、誰かを傷つけない言葉の方が少ない」

はつきりと言い放つ永遠に、アヒルが、否定の言葉を投げかけることはなかった。

「言葉がない方がきつと、人は幸せになれたんだろうね」

決して叶うことのない願いでも口にするように、そつと呟いて、永遠がまた、アヒルを見る。

「さあ、恵もそう言ってることだし、そろそろ、言葉の終焉というじゃないか。安の神」

「……俺は」

一通りの永遠の言葉を聞き終わった後、少しの間を置いて、アヒルが、しばらく閉じていたその口を、ゆっくりと開いた。声を発したアヒルに、永遠が視線を向ける。

「俺は、国語が嫌いだった」

突然のアヒルの言葉に、戸惑うように眉をひそめるも、視線だけを向け、その言葉に耳を傾ける永遠。

「今も正直、苦手で、漢字も古文も漢文も全然わかんないし、テストは赤点ばっかだけど、でも」

言葉を付け加えたアヒルの口元が、わずかに緩む。

「前よりちょっと、好きになれたような気がしてて、そしてそれは、国語の先生のお陰だと思ってる」

アヒルの言葉に、深く俯いていた恵が、かすかにその表情を動かす。

「その先生は、乱暴で、すぐチョーク投げてくるし、面倒臭がり屋

で、すぐに居残り掃除させてくるけど」

恵がゆっくりと顔を上げ、すぐ目の前で言葉を続ける、アヒルを見上げる。

「でも、誰よりも、言葉の大切さを知ってる先生だ」

顔を上げた恵の視界に飛び込む、どこか誇らしげに笑うアヒル。

「俺はその先生に、何度も、幾つもの言葉の大切さを教えてもらった」

——何千年もの間、人が言葉を、信じてきたからさ——

——そこに言葉を感じないか？——

——ぶつけ合うだけが、言葉じゃないだろ？——

「今の俺の言葉があるのは、間違いなく、その人のお陰だ」

思い出される今までの恵の教えを、受け止めるように、アヒルが胸へと、右手を当てる。

「そして、俺がその先生から教わった言葉は、“届かなかったら諦めろ”なんて、そんな柔^{やわ}な言葉じゃない」

アヒルが胸に当てた手を、力強く握り締める。

「“傷つけるかも知れないから、黙っておこう”とか、そんな、大人しい言葉でもない」

まっすぐに永遠を見据え、アヒルが誇らしく、笑う。

「叫んで、叫んで、叫び続ける！届くまで、発し続ける！通じなかったって、絶対に諦めない！声が枯れるまで叫んで、根性で届かせる！」

想いの強さを乗せるように、声を張り上げるアヒル。

「それが、その人から教わった、俺の言葉だ！だから俺は、この言葉がある限り、絶対に諦めない！」

そのアヒルの言葉に、恵が大きく目を見開く。

「な、先生！」

「朝比奈……」

笑顔で振り向くアヒルに、恵が目細める。込み上げる思いに、恵の瞳が、どんと潤んでいく。だが、潤んでいく瞳とは裏腹に、恵の口元は自然と緩み、諦めに支配されていた表情に、いつの間にか、笑みが浮かんでいた。

「馬鹿だな、お前：」

笑みを零し、恵がそつと呟く。

「まあ、お前が馬鹿なことなんて、昔から知っていたが」

「悪かったな」

言葉を付け加える恵に、アヒルが思わず口を尖らせる。

「恵先生」

もう一度、改めて名を呼びかけるアヒルに、恵が潤んでいた瞳を指で拭い、ゆっくりと顔を上げる。

「俺、諦めなくていいかな？」

まるで許可でも取るかのように、恵へと問いかけるアヒル。そのアヒルの真剣な表情を見つめ、恵がそつと、目を細める。

「私が“諦めろ”と言って、お前が諦めたことがあるか？」

「ない！」

「だったら、言うだけ無駄だろ」

はっきりと答えるアヒルに、少し呆れたように肩を落としながらも、恵が、穏やかに微笑む。

「諦めなくていい。諦めるな、朝比奈」

届く恵のその言葉に、勇気をもらうように、アヒルが浮かべたその笑みを、より一層、大きなものへと変える。

「ああ！」

大きな笑顔を見せたアヒルは、恵の言葉に、はっきりと頷いた。

「……“諦めない”、か：」

アヒルと恵の様子を静観し、二人が発した特別なその言葉を、永遠もそつと、口にする。永遠は、冷笑するでもなく、悲観するでもない、遠くの物事を見つめるような、そんな薄い笑みを浮かべていた。

Word 81 別離 (2)

「うお！」

その時、床が激しく横揺れを起こし、立っていたアヒルがバランスを崩して、思わずその場に膝をつく。

「大丈夫か？ 朝比奈」

「あ、ああ。びっくりした」

心配する恵に答えながらも、跳ね上がった鼓動を押さえつけるように、必死に胸を手で押すアヒル。激しい横揺れは止む気配を見せず、その揺れにより、天井や壁の崩壊も、一気に激化する。

「こ、これは…」

「城の崩壊が、本格化している」

「へ？」

横から入って来る、アヒルのものでも恵のものでもないその声に、アヒルが目丸くして振り向く。

「恐らくは、城の核となる部分が崩れたのだろう」

「か、籠也…！」

そこへ現れたのは、真っ赤な鎌を構えた籠也であった。突然、現れた籠也に、アヒルは驚いた様子で目を見開くが、籠也はいたって冷静だ。

「籠也、お前、いつの間に…」

「ここまで来れば、総崩壊もすぐだぞ。神」

「相変わらず、マイペースね。お前…」

アヒルの問いかけには答えずに、自分の話だけを進めていく籠也に、アヒルが呆れた様子で肩を落とす。傷だらけではあるが、元氣そうなその様子に、アヒルは少しホッとした。

「神月」

恵も同じように籠也の方を振り向き、眉間に皺を寄せ、そっと目を細める。

「百井桃雪を、倒したのか…？」

「……ああ」

恵の問いかけに、どこか神妙な表情を見せ、頷く簞也。この激しい揺れの中、何故か、まったくバランスを崩すことなく、床に立った簞也は、体の向きを変え、同じように、少しもバランスを崩していない永遠の方へと、体を向けた。

「あなたの神附きは、あなたの、自身の神の為に、最期の最期まで、必死に戦った」

相対した桃雪の姿を思い出し、あの姿を、少しでも永遠に伝えようと、簞也が言葉を紡ぐ。

「尊敬に値する、最期だった」

「……そうか」

簞也の言葉を受け止めた永遠が、口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべる。

「同じ神附きである君に、そう言ってもらえたなら、桃雪も本望だろう」

満足げに言葉を落としながら、長年従ってきた神附きへ、ほんの少しの祈りでも送るのか、そっと瞳を閉じる永遠。そんな永遠の様子を見つめ、目を細めた後、簞也がまた、アヒルたちの方を振り返る。

「そっか。簞也が桃雪を倒したから、急に城が…」

「ああ。もう下方の階は、崩壊が始まっている。ここが崩れ落ちるのも、時間の問題だ」

「下方って、じゃあ囁と奈々瀬は…！」

「案ずるな」

不安げに声をあげるアヒルに、簞也が冷静な声を向ける。

「あなたの神附きは、皆、優秀だ」

遠回しな言い方ではあるが、恐らく二人は無事なのだろう。簞也の言葉を聞き、アヒルがそっと胸を撫で下ろす。

「神と違ってな」

「うつせえなあ！」

一言付け加える箆也に、アヒルが思わず怒鳴りあげる。

「ったく」

「いくら永遠の時を生きているとはいえ、瓦礫に埋もれば、あなたも“痛い”くらいは思うのだろう？」

アヒルがまだ、箆也の発言に顔をしかめている中、箆也はまた体の向きを変え、目を閉じたままの永遠へと言葉をかけた。耳に入る箆也の声に、永遠がゆっくりと、その瞳を開く。

「戦いを続けるにしろ、何にしろ、一旦、この場を出……」

「ここは、桃雪が、俺の願いを叶える場所として、造ってくれた城だよ」

箆也の言葉を遮って、永遠が少し、悲しげに笑う。

「だから俺は、この場所を動かない」

穏やかな口調の中に見える、はつきりとした強い意志。

「だから俺は、この場所で、俺の願いを叶える」

「何？」

箆也が眉をひそめる中、永遠が言玉を持つ手を左手へと持ちかえ、その左手を、高々と上空へと掲げる。掲げられた言玉は、桃雪の言玉を吸収した永遠の左手の光とも重なり、より強い、白色の光を放ち始める。

「一緒にいこうか、桃雪」

左手の中の光を見つめ、永遠がそつと目を細める。

「こ、この光は……！」

あまりの眩さに、目を細めるアヒルたち。

「を……」

その中で、永遠がゆっくりと口を開く。

「厭離穢土^{をんりえど}”……！」

「きゃあ！」

金色の象に乗っていた弓が、激しく地面を震わせる揺れに、その背から弾き出されてしまい、地面へと勢いよく落下する。

「満ちれ」

弓が落ちようとしていた辺りの地面が、突然、波に覆われ、優しい水の流れが、弓の体を受け止める。

「大丈夫ですか？ 由守さん」

「す、すみません。雅さん」

問いかける雅に、弓はどこか、恥ずかしそうに俯いた。二人の周囲には、以団、衣団、於団、そして刃や鎧、六騎、ライアンの姿もある。前線で戦っていた者たちが皆、一旦引き、和音たちの待機するこの場へと集まったのである。さらに後方へとさがった待機場所からでは、崩れゆく城も最早、小さな景色の一部にしか見えない。だが、こんな離れた場所までも、崩壊の揺れは、しっかりと伝わってきていた。

「神……」

「アヒル……」

城の方を見つめ、それぞれに不安げな表情を見せる、シャコやエリザ、そしてその他の者たち。

「和音」

皆の先頭に立つ和音の横へと、空音を従えた檻也が並ぶ。

「たった今、左塔の最上階から、強烈な白色の光が発せられました」
「光……？」

和音の言葉を受け、檻也が左塔の方へと視線を移す。だが、大きく開いた距離で、ただでさえ見辛いというのに、空は暗くなり、天候も荒れ始めて、余計に視界は悪くなり、檻也には、その光を見つけて出すことは出来なかった。

「よく見えないが……」

「戦っています」

必死に目を凝らしていた檻也が、和音のその言葉に、振り向く。

「彼等はまだ、戦っています」

和音の言葉を受け止めるように、檻也はまた、まっすぐに城を見つめ、しっかりと頷く。

「ああ、まだ終わっていない」

「はい」

檻也の言葉に、和音もまた、しっかりと頷いた。

永遠の掲げた言玉から溢れ出した強烈な白光は、永遠の体全体を包み込むと、空まで突き上げる、長い筒状の光となった。光が天井を貫くと共に、鏡張りの天井が一気に崩れ落ち、そこから一面の空が覗く。暗い空へと光が真下から差し込むと、永遠は、その光に導かれるようにして体を上昇させ、崩れ落ちた天井を抜けて、空へと舞い上がっていく。

「あれは…」

そんな永遠の様子を見上げ、降って来るガラス片から自分と恵を守りながら、険しい表情を見せるアヒル。

「厭離穢土。遠久の、ラスト・イデオム四字熟語だ」

「四字熟語？」

恵の言葉に、籠也が眉をひそめる。

「どういう言葉なんだ？ 一体」

「仏語だ。煩惱にまみれた、汚れた現世を嫌い、離れるという意味の言葉…」

アヒルの問いかけに答えながら、上昇していく永遠を見つめ、恵がそっと目を細める。確かに、永遠のその姿は、現世を離れ、天にでも昇っていくような、そんな光景であった。

「実際のあの言葉は、上空に、下方に居る者からでは、決して手出しすることの出来ない、完全空間を作り出す」

「完全空間？」

「ああ。一度、その中に入ってしまったえば、遠久があの言葉を解くか、遠久を倒すかしない限り、あの空間から出ることは出来ないんだ」

「完全、空間……」

もう一度、その言葉を繰り返しながら、恵と同じように上空を見上げるアヒル。永遠を包む筒状の光は、前後左右に徐々に広がりはじめ、暗い上空で、大きな白光の空間を作り始めていた。広がっていく光を見上げながら、アヒルが眉をひそめる。

「どうやら本当に、この場を動く気はないようだな」

皆と同じように上を見ながら、箆也が少し困った表情を見せる。

箆也たちの居る、永遠の部屋であったその場所は、先程、永遠が天井を貫いたことにより、また、崩壊の速度を速めていた。これ以上、この場に居ては、もう脱出することすらも、困難になる。

「神、これ以上は……」

「箆也」

箆也が脱出を訴えようと振り向くと、そこには、いつの間にか立ち上がっている、アヒルの姿があった。

「何だ？」

問いかけた箆也に、アヒルは少し躊躇うように、間を置く。

「恵先生と扇子野郎を連れて、ここから脱出してくれ」

「な……！」

アヒルの思いがけない言葉に、しゃがみ込んだままの恵が勢いよく顔を上げ、箆也が、気難しげな表情で、そっと目を細める。

「あなたは、どうする？」

「俺は、あの空間の中に入って、永遠と戦ってくる。まだ行けるはずだ」

「馬鹿な……！」

思わず立ち上がった恵が、それでも興奮の冷めやらない様子で、声を張り上げる。

「今、説明しただろう！？あの空間に、一度、入ってしまったえば、もう……！」

「ああ、聞いた。あれは、永遠が用意してくれた、最後の戦いの舞台みたいなもんだろ？」

恵の言葉を遮って、アヒルが笑う。

「だったら俺は、それに応えないとな！」

「お前が応える必要なんて、ないだろう！」

得意げに微笑むアヒルであったが、あまりに強く響いた恵のその声に、その笑みは、ゆっくりと止まった。アヒルが振り向くと、そこには、辛そうな表情を見せた恵の姿があった。

「お前に行かせるくらいなら、私が行って、私が行って、遠久を……！」

恵の荒々しい声は、言葉の途中で、突然、止まる。

「遠久、を……」

——お姉ちゃん——

「クっ……」

浮かぶ幼い笑顔に、恵はどうしてもその言葉の先を言えず、ただ、力なく頷いた。

「うん。恵先生に、あいつは倒せない」

その恵の心情を、すべて察した様子で、アヒルが恵へと言葉を向ける。

「それに、そんなこと、親父も母さんも、旧世代の安の神だったっていう俺の伯父さんもカー兄も、きつと誰も、望まないだろうしな」
優しく微笑みながら、アヒルが言葉を続けるが、恵は俯いたまま、顔を上げようとはしなかった。

「すべてを引き起こしたのは、私なのに……私は、すべてをお前たち、後世の音士に背負わせてばかりで、結局、何も出来ない……」

俯いたまま、小さな、消え入りそうな言葉を発する恵。

「なんで、お前たちを……お前を、こんな目に……」

固く握り締められた恵の手から、赤い血が滲む。

「私は…私が情けないっ…!」

「先生…」

俯いているその表情は見えないが、恵から発せられるその声は、どこか泣いているようにも聞こえて、アヒルはそつと、目を細めた。

「恵先生のせいで、背負ってるわけじゃないよ」

アヒルが優しく声を響かせ、俯いたままの恵へと声を掛ける。

「俺は、俺たちは五十音士だから、だから言葉を守るために、命懸けで戦うんだ」

少し振り向いたアヒルへと、箆也がしっかりとした視線を送る。

「そして、俺は神だ」

短いその言葉に、俯いていた恵が、ハッとなって、目を見開く。

「俺は、安の神だから」

ゆっくりと顔を上げた恵へと、アヒルがまっすぐに視線を送る。

「だから、すべての言葉を背負って、戦う」

「朝比奈…」

誇らしく言い放つアヒルを見つめ、恵が今にも泣き出しそうに、目を細める。

「俺の、神としての、最後の命令だ」

アヒルが首を少し回し、恵から、箆也へと視線を移す。

「聞いてくれるか？箆也」

確かめるように問うアヒルから、少し視線を外し、箆也はどこか遠くを見るような瞳を見せた後、また、アヒルの方を見た。

「その言葉があなたの、神の命であるというのなら、僕が答えるべき言葉は一つだ」

迷うことなく、箆也が言葉を紡ぐ。

「“仰せのままに、我が神”」

「……ありがとう」

深々と頭を下げ、いつもと同じ言葉を返す箆也に、少し俯いたアヒルが、小さく笑みを零し、礼を言う。

「行ってくれ」

「「担^{かつ}げ」」

アヒルの言葉と同時に、箆也が言葉を発し、恵を左肩へと背負う。そのまま素早く移動し、少し離れた場所で倒れたままの為介も背負って、大きくあいた、壁の穴へと体を向ける箆也。

「……神」

「ん？」

アヒルに背を向けたまま、そっと呼びかける箆也に、アヒルが振り向く。

「「また、明日」」

箆也の放ったその言葉に、大きく笑みを零すアヒル。

「ああ。「また明日」！」

しっかりとその言葉を聞き届けると、箆也は静かに、右手を鎌を振り上げた。

「「翔^かけろ」！」

「朝比奈！朝比奈ああ…！」

言葉を放ち、壁にあいた穴から、一気に外へと飛び出していく箆也たち。箆也に背負われながら、恵が必死に身を乗り出し、手を伸ばして、アヒルの名を呼ぶ。

「……「また、明日」」

アヒルが胸に手を当て、刻みつけるように、もう一度、その言葉を口にする。口にし終えると、アヒルはすぐさま真剣な表情を作り、右手の中の赤色の言玉を、力一杯、握り締めた。

「五十音、第一音“あ”、解放！」

言玉を解放し、アヒルが真っ赤な銃の、その銃口を、自身のコメカミへと当てる。

「「上^あがれ」！」

自分へと言葉を向けると、アヒルは、上空の、真っ白な空間の中へと、姿を消していった。

Word. 81 別離 (3)

「父さん…」

「ツークン」

ツバメと熊子、塗壁の三人を乗せた巨鳥、スワ郎が、やって来る。皆の集まる場所の先頭、ウズラたちの立つすぐ傍の地面へと、スワ郎が着地すると、その背から、ツバメたちが降りてきた。

「ただいま戻りました、神」

「戻っただあ、神」

「ご苦労さま、熊子、塗壁」

「スズメは？」

熊子や塗壁へと微笑みかけるウズラの横から、茜が身を乗り出し、不安げにツバメへと問いかける。

「保くんと、ハ行の五人を乗せてから来るって…」

茜の問いに答えながら、ツバメが後方を振り返り、遠くに見える城を見つめる。

「間に合えばいいけど…」

本格的に崩れ落ちてきている城を見つめ、ツバメは、浮かない表情で呟く。

「うーん…」

「浮かない表情ですね、神」

「ん？」

熊子に声を掛けられ、ウズラが首を傾けて、振り向く。

「そりゃ、世界の言葉が終わるかも知れないって時に、浮いた顔は出来ないよお」

「あなたは、浮いた顔以外、出来ないものと思っていました」

「ひどいなあ。熊子はあ」

冷たく言い放つ熊子に、ウズラが困ったような笑みを浮かべる。
「城崩壊と永遠のこと以外にも、気になっていることがあるのでは

？」

「熊子には、敵わないね」

鋭く問いかける熊子に、ウズラが小さく頭を掻く。

「確かに気になってる」

笑みを止め、真剣な表情を見せたウズラが、細めた瞳でまっすぐに、城の方を見据える。

「本当に、創造が終わったのかどうか…」

「うおっとっと！」

吹き荒ぶ風に、空に浮かせていた体を持っていかれそうになり、慌てて近くのトラトラ子の体を掴む兵吾。暗くなった空は、時間帯によるものだけではなく、荒れ始める天候により、天の光が遮られ、厚い雲が、空全体を覆い始めている。

「この世の終わりって感じの天気じゃん」

「城が崩壊するというのも、どうやら本当のようだ」

下方に広がる城を見下ろし、ヒロトが冷静に呟く。先程まで皆が居た屋上は、最早、見る影もなく崩れ去っている。他の塔も下からの崩壊が進み、崩れゆく地響きのような音が、上空にいるヒロトたちにも届いていた。

「本当に決まってるんだろ。んな、つまらねえ嘘つくかよ」

ヒロトの言い分に、口を尖らせるスズメ。

「もう時間がねえ。とっととここを離れねえと、崩壊に巻き込まれる」

「灰示様」

スズメの言葉を受けたヒロトが、答えを求めるように、灰示の方を見る。不二子や兵吾、蛭もまた、同じように灰示を見つめた。スズメの言葉は理解しているようだが、灰示以外の者の指示に、従うつもりはないようである。

「退避だ。ただし、保の治療は続けて」

『はい!』

灰示の言葉にしっかりと頷くと、不二子がトラトラ子を動かし、背中の保と、保の治療を続ける蛍をそのままに、トラトラ子ごと、スズメのチュン吉の上へと乗り込む。トラに続き不二子も乗り込み、それにヒロト、兵吾が続く。

「よーし。皆、乗ったな」

乗り込んだ皆の姿を確認し、スズメが満足げに頷く。

「後はてめえだ…」

「朝比奈スズメ、とかいったっけ? 君」

灰示に呼びかけようとしたスズメが、急に名を呼ばれ、首を傾げる。

「ああ、そうだけど?」

「しっかり、安全なところまで運んでね」

「へ?」

灰示の言葉に、戸惑うように、眉をひそめるスズメ。

「頼んだよ…」

スズメへと託すようにそう言って、儂げな、今にも消えてしまいそうな笑みを浮かべる灰示のその姿に、ただならぬ何かを感じ、スズメが険しい表情を見せる。

「お前、何言って…」

「フハハハハハ…!!」

スズメが灰示へと、その真意を問いかけようとしたその時、地の底から這い上がるような、低く重い笑い声が響き渡り、辺りを包み込む。

「な、何だ?」

「あれ…!」

皆がその笑い声に戸惑う中、チュン吉の背の上に立った不二子が、前方の空を、勢いよく指差す。皆が不二子の指差した方を一斉に振り向くと、その途端、大きく目を見開いた。

「あ、あれは…」

「フハハハハハハ！！」

「浮世、現…！」

皆の居る辺りよりも、少し上方で、荒れ狂う空を背負うようにして浮かんでいるのは、現であつた。すっかり老人の小さな体型に戻り、服の破れた、皺だらけの上半身が明るみとなっている。すでに体はボロボロで、とても戦える状態には見えない。杖もなく、何も持っていない両手を左右に広げ、ただ、ただ、大きな笑みを浮かべている。

「生きて、生きていたのか…」

「そんなっ：灰示様たちが確かに、倒したはずなのに…」

「生きていた？倒した？とんだ絵空事じゃのお」

ヒロトや不二子の言葉を、現が高らかと笑い飛ばす。

「わしは、唯一無二の絶対神！神は不滅じゃ！フハハハハ…」

自信を持って言い放ち、現がまた、激しい笑い声をあげる。

「不滅ねえ」

そんな現の様子に、少し額から汗を流しながらも、スズメがそつと笑みを浮かべる。

「そのわりには、随分とボロボロに見えるぜ？絶対神さんよお」

スズメがまるで、挑発するように、現へと言葉を向けながら、右手を鋭く身構える。

「今の、言玉も持たない、あんた程度ならっ…」

「わしが、トドメを刺されるためだけに、ノコノコ、こんな場所まで出てくるとでも思ったか？音士の小僧」

「何？」

現の含んだその言葉に、スズメが眉をひそめる。

「見よ！」

「グアアアアア！」

『な…！？』

現が高らかと手をあげると同時に、上空へと姿を現したのは、崩

れ落ちた屋上の瓦礫の中に沈んだはずの、終獣の巨体であった。金色のその巨体を見て、スズメたちが大きく目を見開く。

「ば、馬鹿な…あいつはもう、言玉を失ったはずなのに、どうしてあの獣を…」

「例え言玉が無くとも、かつて生み出したものを、動かすことは可能なようじゃ」

戸惑うスズメに答えるように、現が笑う。

「そして、これの溜め込んだ力を、この場で爆発させることもなあ」
「……！」

現のその言葉に、スズメの表情が凍りつく。

「まさか、阿修羅の時と同じことを…？」

「ああ、そうじゃ！今度こそ、跡形もなく消し去ってやるわ！この町も、お前等もなあ…！」

「そんな…」

告げられる事実には、不二子やヒロトたちも皆、怯えたような、凍りついた表情となる。終獣の溜め込んでいる力の強大さは、近距離に居る皆に、ビリビリと伝わってくるほどである。この力がすべて爆発すれば、現の言葉の通り、間違いなく、この町も、この場に居る皆も、一気に消え去ってしまうであろう。

「ん、んな馬鹿なこと…！」

スズメが動揺に震える声を、必死に荒げる。

「てめえ、今回は幻じゃねえんだろ！？こんな所で爆発なんかさせたら、今度はてめえだって…！」

「最早、“生まれろ”の言葉は使えぬ」

必死のスズメの言葉を、あっさりと遮る現。

「とうに寿命を超えた我が命は、“生まれろ”の言葉がなければ、後は朽ち逝くのを待っただけじゃ…」

怖いとさえ思えるほどの冷たい表情で、現が言葉を続ける。

「どうせ消えるのであれば、わしは、この世界と共に消える」

強く言い切り、現が口角を吊り上げる。

「そして、わしは、世界の神になるのじゃ！フハハハハ…！」

響く笑い声に気圧されるように、思わず体を後ろへと引くスズメ。
「狂ってる…」

笑い声を続ける現を見つめ、ポツリと言葉を落とす不二子。そこに居るのは最早、神ではなく、神というものに取り憑かれた、一人の男であった。

「フハハ！フハハ！フハハハハ！」

徐々にその体内へと、力の凝縮を始めている終獣と共に、笑い声を響かせながら、上空へと昇っていく現。舞い上がっていく現のその姿を、皆が、険しい表情で見上げる。

「クッソ…！」

歯を食いしばり、悔しげな声を吐き捨てるスズメ。

「こうなりゃ、ダメもとでも…！」

「“阻め”」

「な…！」

チュン吉を上昇させ、現の後を追おうとしたスズメであったが、それは、空に張られた赤い光の膜により、遮られた。スズメが鋭い目つきで、言葉の聞こえてきた方を振り向く。

「何すんだよ…！」

「君に頼んだのは、そんなことじゃないよ」

強い口調で問いかけるスズメに、灰示がそっと、笑みを向ける。

「早く行つて」

「え…？」

灰示の言葉に、戸惑うように眉をひそめるスズメ。先程の灰示の言葉が思い出され、スズメは、何かに気付いたように、ハッとした表情を見せた。

「まさか、お前っ…」

眉間に皺を寄せたスズメが、思い当たったその考えを、まだ信じ切れていないといった様子で、膜の向こうに立つ灰示を見つめる。

「お前…」

「早く行った方がいいよ」

灰示がスズメの方を見て、再び促す。

「僕の気が、変わらないうちにね…」

そつと微笑む灰示のその表情を見て、一際、険しい表情を見せた後、スズメは込み上げるものを押し殺すように、きつく唇を噛み締め、そして、何かを振り払うように、何度も首を横に振った。

「チュン吉！」

スズメに呼ばれ、チュン吉が大きく翼を広げ、その場から飛び立つ。

『え？』

灰示を残し、その場を離れていくチュン吉に、戸惑いの表情を見せる不二子たち。

「何やってんのよ？まだ、灰示様が…」

「いいんだ」

不思議そうに問いかける不二子に、スズメがはっきりと答える。

「これが、あいつの意志だ」

「灰示様の、意志…？」

スズメの言葉を繰り返し、不二子が大きく首を傾けた後、突然、ハツとなって、大きく目を見開く。

「まさか…！」

チュン吉の上から必死に身を乗り出し、後方へと遠ざかる灰示の方を、見つめる不二子。

「灰示様…！！」

「……随分と、くだらないことをするようになったものだね。僕も…」

どこか自嘲するような笑みを浮かべると、両手に針を身構え、灰示が、現の上がついていった上空を見上げ、真剣な表情を見せる。

「“運^{はし}べ”」

短く言葉を落とし、自分の足元へと針を投げ放つ灰示。針が淡い赤光へと変わると、灰示の体はその光に押し上げられ、ゆっくりと上昇していく。暗い空の中を進んでいくと、やがて、巨大な獣の姿が見えてきた。全身から金色の光を溢れさせたそれは、最早、生物ではなく、ただの力の塊と化している。その塊の前に、小さな人影が見えた。人影は、灰示に気付いた様子で、こちらを振り向く。

「ほお、お前さんか」

灰示の姿を見て、現は別段、驚いた表情も見せず、むしろ、予想していたかのように、納得した表情を見せる。

「お前さんも、消えずに残っておったようじゃな」

「君が生きていてくれたお陰でね」

「成程。わしの“生まれろ”で存在するものが、まだ残っておったか」

感心するように笑う現に、灰示もそつと、笑みを浮かべる。

「随分と、元気そうじゃのお。音士の小憎の方は、すっかり気を失っていったのに」

「君のお陰で、僕は、“痛み”を力へと変えることが出来るようになってるからね」

「そうじゃったのお。お前は、痛みの成れの果て」

現が鋭く細めた瞳で、まじまじと灰示を見つめる。

「その、人の“痛み”の塊であるお前が、ここに来たということは……わしを止め、人の世界を救おうとでもいうのか？」

「別に、そんなくだらないことは、考えちゃいないよ」

涼しげな笑みを浮かべたまま、現の言葉を、あっさりと否定する灰示。

「ただ、思い出しただけ」

「思い出した？」

灰示の言葉に、現は戸惑うように、眉をひそめる。

「そう、思い出しただけ」

目を細めた灰示が、懐かしむように、穏やかな笑みを浮かべる。

「馬鹿まっすぐな神様の」

——俺は絶対、諦めない！——

「ただ愚かな、あの言葉を」

思い出される言葉を噛み締めるように、灰示が、胸の前へと持ってきた左手を、強く握り締める。

「フン、意味のわからぬことを」

「君には到底、理解出来ないさ」

鼻を鳴らす現に対し、灰示は、上から見下ろすような笑みを浮かべる。

「さあ、君にも贈ろう」

灰示が静かに言い放ち、両手に持った針を、そつと身構える。

「この、“痛み”を」

「戻って！今すぐ、戻って！」

「無理だ」

形振り構わず叫び散らす不二子に、スズメが前を向いたまま、はつきりと答える。

「俺はあいつに、お前等全員を、安全な場所まで連れていくよう、頼まれた」

前を見据え、不二子の方をまったく見ようとしないスズメの、力一杯握り締められた拳が、わずかだが、震えている。

「その約束を、俺は絶対に果たさなきゃいけない」

「そんなの、何よ！」

静かに強い意志を宿らせるスズメの言葉を、不二子が一瞬にして、払いのける。

「私は、別に死んだっていい！他の誰が死んだっていい！灰示様…

！灰示様の命の方が、大事よ！」

「不二子！」

大きく体を揺らし、必死に叫ぶ不二子を、後ろから抑え、宥めるように声を掛けるヒロトと兵吾。

「これは、灰示様の意志じゃん。わかれじゃん？」

「そうだ。灰示様はご自身の命を懸け、我々と、この世界を救おうとしておられるのだ」

「何が世界よ！世界なんて、どうだっていいわ！」

二人の説得も聞かず、不二子はさらにまた、声を張り上げる。その大きく見開かれた瞳からは、大粒の涙が溢れ出していた。

「もういいわ！私……！私が灰示様を止めてくる！離して、離してえ……！！」

「不二子……！」

灰示のもとへ行くため、チュン吉の上から飛び出していこうとする不二子を、ヒロトと兵吾が、必死になって抑え込む。

「不二子……」

そんな半狂乱の不二子の様子を見つめ、悲しげに目を細める蛍。

「“高^{たか}くなれ”」

「え……？」

その時、蛍のすぐ前から声が響き、そこで横たわっていたはずの人影が、起き上がって、飛び出していく。

「な……！？ちょっと！」

慌てたような蛍の大声に、ずっと前を見据えていたスズメが、戸惑うように振り向く。蛍が止めるのも聞かず、チュン吉の上から飛び出していくその人物に、スズメが大きく目を見開いた。

「バ……！」

スズメが後方を振り返り、思いきり身を乗り出す。

「馬鹿野郎！戻れ！」

遠ざかっていくその者へと、必死に声を張り上げるスズメ。

「戻れ、戻るんだ！保！」

スズメの制止の声も聞かず、まだ治療も終了していない保は、ふらつく体を何とか支えながら、必死にもといた場所へと戻っていく。

「灰示っ…灰示…！」

険しい表情を見せた保の口から、灰示の名が、何度も零れ落ちた。

Word 81 別離 (4)

——君も、“痛い”の?——

あの日、君がそう問いかけてくれなかったなら、今の僕は、きっと、この世界のどこにも居ないだろうね。

誰かのために、何かをするような、こんな、僕は。

「どうするつもりじゃ?」

答えを知るかのように、楽しげな笑みを浮かべた現が、まるで試すように、灰示へと問いかける。

「一応、言っておくが、この終獣は、以前、自爆させた札獣の、およそ五十倍の力を体内に溜め込んでおる」

後方の獣をわずかに振り返り、満足げな笑みを浮かべる現。

「お前ごときの力で、どうにか出来るようなものではないぞ?」

再び灰示を見つめ、現が口元を緩める。

「それに、あの時は山ほどの音士で力を合わせたようじゃが、今のお前は、たったの一人」

「ハハハ」

「んん?」

嘲笑うような笑みを零す灰示に、現が少し、眉をひそめる。

「何じゃ?」

「可笑しなことを言うものだ、思ってね」

表情をひそめ、問いかける現に、灰示が前髪を払いのけながら、そっと答える。

「たったの一人、か。この場に、どれほどの音士がいたところで、

僕は音士じゃない。忌だ。僕は初めから、たったの一人だよ」

はつきりとした口調で、言葉を投げかける灰示を見つめ、現が少し、目を細める。

「では、たった一人のお前は、わしと、この強大な力を持つ終獣を前に、一体、何をしようという？」

「それはさっき、言ったはずだよ」

また問いかける現に、灰示がまた、穏やかに笑う。

「僕は君に、“痛み”を贈る。人に“痛み”を与えることが、僕ら、忌の役目だ」

「“痛み”、じゃと…？」

不敵に微笑む灰示に、現が眉端を吊り上げる。

「くだらん。“痛み”などと、今更、何を…」

「ギャアアアア！」

「な…!？」

突如、後方から響く激しい叫び声に、現が驚いた様子で大きく目を見開き、すぐさま後ろを振り返る。現の後方では、金色の光を全身から発した終獣が、その巨体を捻り上がらせ、大きな口を限界まで開き、天へ向け、耳が割れんばかりの叫び声をあげていた。

「何じゃ？一体、どうしたと言うのじゃ!？我が可愛い獣よ!」

終獣は勿論、現の問いかけになど一切答えず、ひたすらに、激しい叫び声をあげている。その声は最早、尋常ではない。その終獣の様子に、現が険しい表情を見せる。

「何を、我が終獣に一体、何をした!？」

「贈っただけだよ」

身を乗り出し、問いかける現に、灰示は落ち着き払った笑顔で答える。

「贈った、じゃと？」

「そう。小さな、針を突き刺すような、小さな“痛み”をね」

右手の中で、真っ赤な針を転がし、灰示がまた、そっと笑う。

「体内に埋め込まれた小さな“痛み”は、僕の力により、無限の増

殖を繰り返す」

「な…！」

灰示のその言葉に、すべてを察するように、青ざめた表情を見せる現。

「無限の増殖？まさか…」

「やがて、“痛み”が体のすべてを侵食し、“痛み”が体のすべてを支配して、“痛み”が、あの獣自身を呑み込んでいく…」

灰示の言葉を受け、現が再び後方を振り返る。激しく歪む終獣の表情は、見るからに苦痛が滲み出ており、その叫び声は、痛々しいとしか言いようがなかった。“痛み”に蝕まれていつていることを、実感せざるを得ない。

「“痛み”が、呑み込む…」

先程聞いた灰示の言葉を繰り返し、その唇を震わせる現。

「…：そう。これが僕の、忌である僕の力。創造神だというのに、忘れてしまったのかな？」

「ク…！」

挑発するように問いかける灰示に、現が強く唇を噛み締める。

「ならば！“痛み”に呑み込まれる前に、今すぐ、この場で自爆を

…！」

はりつけ

「“磔”」

「ううう…！」

終獣が痛みに呑み込まれる前に、爆発を起こそうと、勢いよく右手を振り上げようとした現であったが、数本の針が空中を駆け抜け、現の四肢を貫き、その動きを止めた。

「貴様…！」

「くだらないことは、させないよ」

針を構え、冷静に言い放つ灰示を、動きを止められた現が、恨みがましい瞳で見つめる。

「何故じゃ…？何故、貴様が人を、人の言葉を守る…！？」

唯一、動く口を動かし、現が荒々しい声を、灰示へと放つ。

「貴様等、忌は、人の言葉から生まれる“痛み”により、生じたもの……！人の言葉を憎みこそすれ、守る義理など、ないはず……！」

「……そうだね」

放たれた現の言葉を、灰示が、認めるように頷く。

「確かに、僕と同じ“始忌^{シキ}”と呼ばれるものだった者たちは、人の言葉を憎み、“痛み”から解放されるために、人の言葉をすべて、消し去ろうとしたよ」

かつての伍黄^{イツキ}たちの姿を思い出し、灰示がそっと、目を細める。

「人の言葉を消そうとすることの方が、忌としては、自然なのかも知れない……」

「そうじゃろう……！」

突然、含みのある厭らしい笑みを浮かべた現が、灰示の言葉に、激しく同意するような声を発する。

「どうじゃ……？痛みの成れの果てよ！今すぐ、わしと手を組めば、すぐにでも人の言葉を、すべて消……！」

「くだらないね」

「う……！」

現の流れるような言葉は、灰示の重い、たった一言により、あっさりと遮られた。灰示からの突き刺さるような視線に、思わず口を閉じた現の額から、薄らと、汗が滲む。

「くだらない。世界に、君の言葉のような、くだらない言葉しかないのなら、すべて消す道も、悪くはなかったと思うけどね……けど」
言葉を付け加えた灰示が、現から上空へと視線を動かし、そっと、その口元を緩める。

——君も“痛い”の？——

——なら、分かち合おう。一緒に、乗り越えていこう。この“痛み”を——

思い出される、優しい言葉。

「消させるわけには、いかないんだ」

強い決意を言葉に漲らせ、灰示がはっきりとした口調で、言い放つ。

「人の言葉には、“救い”もあるらしいからね」

「救い、じゃと…？」

「ああ」

戸惑いの表情で聞き返す現に頷きながら、灰示が一層、穏やかに笑う。

「僕の、神様の言葉だよ」

迷いなく言い放った灰示が、素早く体を動かし、右手に、一本の赤い針を構える。

「ま、待て！わ、わしは…！」

必死に制止を促す現の、その左胸へと目がけて、灰示が一瞬の迷いもなく、構えた針を投げ込む。

「は…」

輝く針が、現へと向かう中、ゆっくりとその口を開く灰示。

「“果てろ”」

「ううう…！」

響き渡る言葉と、迫り来る針に、現の表情が歪む。

「うわあああああ！」

「ギアアアアア！」

現が針に打ち抜かれ、その身を碎かれると同時に、後方の終獣も、“痛み”が体のすべてに回ったのか、激しい悲鳴をあげながら、金色の光の粒となって、勢いよく飛び散った。

「わしが…わしが、こんな、痛みの成れの果て、など、に…」

「自身の生み出したものの手で逝けるんだ」

光が飛び交う中、針に貫かれ、その体を、儂い光へと変えていく現を見つめ、灰示がそっと、言葉に向ける。

「本望だろう？創造神」

「うう…！うあああああ！」

苦しげな声をあげると、現の体が完全に光と化し、次の瞬間、大きく弾けるような音を響かせて、完全に砕け散っていった。現というものを形成していたものは、すべて無くなり、その場にただ、光だけが舞い散る。最期に、灰示の言葉が、その耳に届いたのかはわからない。

「……終わったよ、伍黄……」

金色の光粒が舞い、激しい風が吹き荒ぶ中、何も無くなってしまった前方を見つめ、灰示がそっと呟く。今度こそ現は、灰示の目の前で、完全に砕け散った。自身を生み出した者を憎み続けた、始忌としての灰示の戦いは、今、終わったのである。

「……っ」

前へと出した、自身の両手を見下ろした灰示が、そっと眉をひそめる。その手は、淡い金色の光へと変わっていくようにして、徐々に霞んでいつている。手だけではなく、足も胴も、灰示の体のすべてが、消えいこうとしていた。

“痛み”の最期、か……

少し皮肉ったように言っ、灰示が笑う。現を消せば、現の言葉により生まれた灰示も消える。それは、灰示も十分に理解していることであつた。

「頃合い、かな……」

「灰示……！」

どこか寂しげな笑みを浮かべた灰示が、耳へと入って来るその声に、大きく目を見開く。消え逝く体で、灰示はすぐさま、声のした方を振り向いた。

「保……」

「灰示……！ 灰示……！」

暗い空の中、灰示のもとへと、傷だらけの体を引きずるようにして、必死にやって来るのは、保であつた。まだ相当に距離は開いているが、確かに届く、大きな声を響かせながら、こちらへと向かってくる保を見つめ、灰示がそっと目を細める。

「灰示っ…灰示…！」

「来てくれたんだね、保」

名を呼び続ける保を見つめ、灰示がそっと、嬉しそうに微笑む。

「良かった。言っておきたいことが、あったんだ」

必死にこちらへと向かってくる保を見つめたまま、灰示が穏やかに、言葉を続ける。

「さっきの言葉、ありがとう」

「さっき…？」

「君は、僕に出会えたことに感謝するって、そう言ってくれた」

少し戸惑うように眉をひそめた保の、その疑問に答えるように、灰示が言葉を続ける。

「今までしたことなかったけど、僕も、僕も、神というものに、感謝してるんだ。保」

灰示が保へと、優しく微笑みかける。

「君と出会えたことに、感謝してる」

「灰示…」

曇りなどまるでない、心からの笑みを浮かべる灰示を見つめ、保がそっと目を細める。

「君と出会えたから、今、僕は、ここに居る…」

光と化し、もうほとんど消えかかっている手を胸へと当てて、灰示が噛み締めるように呟く。

「人が、人が好きだった。忌として生まれたのに、もう、ずっと初めから」

灰示が困ったように笑い、懐かしむように、目を細める。

「歩み寄れる足を持つてる人が、取り合える手を持つてる人が、知り合える言葉を持つてる人が、好きだった」

まだ黒い影の塊だった頃、こっそりと、人の生きる場所を見に行ったことを思い出す。仲間に隠れて、何度も何度も見に行っては、人に懂れ、人への想いを強めた。

「人の言葉が、好きだった」

灰示の言葉を聞く保の瞳からは、いつの間にか、大粒の涙が、溢れ出していた。

「君に会えて、僕はもっと、人に近づけた。もっと、人の言葉と巡り合えた」

遠くを見ていたその瞳を、灰示が、涙に暮れる保へと戻す。

「もっと、人を好きになれた」

「灰示っ…」

保の口から零れ落ちる、灰示の名を呼ぶ声が、震える。

「だから、感謝してる。ありがとう、保」

札の言葉に向ける灰示に対し、保は、涙を流したまま、何度も何度も、首を横に振った。

「それは、俺の台詞だよ、灰示」

あまりの震えに、所々に言葉を途切れさせながら、保が、それでも必死に、言葉を紡ぐ。

「君が、君が居なかったら俺は、深い“痛み”に呑み込まれて、ただ、何もかもを諦めた人間のままだった」

——“痛い”、“痛い”よ……——

——助けて……——

訪れる痛みに、ただ、灰示の助けばかりを求めていた、あの頃。

「他人に頼ってばかりの、ダメな奴のままだった…」

ふらつく体を何とか堪え、必死に前へと、灰示のもとへと進みながら、保がさらに、言葉を続ける。

「君が居たから、俺は、“痛み”を乗り越えられた。俺は、強くなれた」

その声が、流れ出る涙に、さらに震える。

「君が居たから、俺も今、ここに居る…！」

保のまっすぐな言葉を正面から受け止め、目を細めた灰示は、どこか、泣き出しそうな笑みを浮かべた。

「ありがとう、保」

もう一度、噛み締めるように、保への言葉を繰り返す灰示。

「その言葉、貰っていくね…」

「あ…！」

穏やかな微笑みと同時に、一気に、全身を金色の光へと包まれていく灰示。灰示のその姿に、保が大きく目を見開き、前へと進むその速度を、何とか必死に速める。

「待って！待って、灰示！待って…！」

まだ届かない手を必死に伸ばし、光の中へ、その姿を霞めていく灰示へと、何度も何度も叫ぶ保。保が必死に空中を移動し、ようやく、灰示のすぐ前へと辿り着く。

「灰示…！」

光と化した灰示へと、必死にその手を伸ばす保。

「保…」

そんな保をまっすぐに見つめながら、灰示が静かに、保の名を呼ぶ。

「灰っ…！」

「さようなら」

——パァァァン！

「……！」

大きく、光が弾けるような音が響き渡ると共に、灰示へと伸ばした保の手が、宙を舞った。

「あ…」

何もない、誰も居ないその場に、ただ一人残された保が、唇を、肩を、全身を震わせる。

「はっ…灰示iiiiiiii…！」

保の悲痛な叫びが、空を切り裂くように、辺りへと響いた。

——君も“痛い”の？——
——うん、“痛い”よ。すごく、“痛い”——

さようなら、保。

Word. 82 怒レル神 (1)

——さようなら、保——

「ん…？」

籠也たちと別れ、一人、永遠とわの四字熟語ラスト・イデオム、“厭離穢土をんり えど”が作り出した空間を目指し、上昇を続けていたアヒルが、ふと、何かに呼び止められたように動きを止め、後方を振り返る。ただ広がる暗い空の向こうから、吹き抜ける、一陣の風。その風が何かを伝えたのか、風を浴びた途端、アヒルは、その表情を曇らせる。

「灰、示…」

険しい表情を見せたアヒルが、そつと、その名を口にした。

「灰示…」

現うつつと終獣が消え、そして灰示が消え、たった一人となった空に立ち尽くし、茫然自失の表情の保が、力なく、灰示の名を呼ぶ。

「灰示、灰示…」

ただ求めるように、その名を繰り返す保。だが、その呼びかけに、返って来る声はない。

「灰…」

「保！」

保の弱々しい声が、後方から響く、力強い声により、掻き消される。

「何やってんだよ、保！」

その場に現れたのは、チュン吉に乗ったスズメであった。チュン吉の背の上には、ハ行の面々もあり、皆、悲しげな、辛そうな表情を見せている。そして皆、保に、心配そうに視線を送っていた。

「もうすぐ、城が完全に崩れ落ちる！崩落に巻き込まれるぞ！？退くんだ！」

「灰示、は…？」

「え？」

スズメの呼びかけに、保は、答えになっていない言葉を落とした。

「灰示…灰示、どこ…？」

「保…」

周囲を見回し、必死に灰示の姿を探す保を見つめ、スズメが険しい表情で、目を細める。

「保、あいつは…！」

「違う！」

事実を、現実を述べようとしたスズメに対し、保は、その先に放たれる言葉を知っている様子で、それをひどく拒絶するように、強くスズメの声を遮った。

「違うよ…そんなの、そんなはず、ないっ…」

必死に首を横に振り、まるで自分に言い聞かせるように、言葉を落とす保。

「だって、だって、ずっと一緒に居たのに…」

——君も、“痛い”の…？——

互いに痛む、その手を取り合った、幼き日。

「あんなに長い間、一緒に居たのに…なのに…」

保が、自身の胸へと手を当てる。そこに、いつも感じていた灰示の気配は、もう無い。

「もう、どこにも、居ないなんて…！」

「保…」

声を震わせ、その瞳に涙をいっぱい溜め込んだ保の姿は、見ている方が痛々しく、スズメはどこか遣り切れない表情で、唇を噛み締める。急いで、避難しなければならない。その思いはあるのだが、

今のスズメには、何と保に声を掛けていいのか、わからずにいた。

「そんなわけ、そんなわけない。灰示、灰示……！」

「あ、おい！保……！」

灰示の存在を求め、崩壊も間近の城の方へと戻って行こうとする保を、焦った様子で追いかけてようとするスズメ。だが、保を止めたのは、スズメの手ではなく、保の頬に炸裂した、一発の平手打ちであつた。

「え……？」

頬を真っ赤に腫らした保が、戸惑った様子で、前方を見る。

「……………」

そこには、保以上に瞳に涙を溜め込み、真っ赤に目を腫らしながらも、強く射るような瞳で保を見つめる、不二子の姿があつた。平手打ちが効いたのか、茫然としていた保の表情が急にはつきりとし、大きく見開いた瞳で、保が不二子を見る。

「不二子、さん？」

「トラトラ子」

戸惑う保に答えることなく、不二子が、自身の言玉であるトラトラ子を呼ぶ。

「首、噛み千切ってでもいいわ。とつとつ、こいつを連れていって」

「ガウ」

「へ？」

物騒な不二子の言葉に、トラトラ子があつさりと頷くと、保の表情が一瞬にして、青ざめる。

「ぎゃああ！痛いですう！やめてえ！噛み千切らないでええ！」

噛み千切るとまではないかないものの、襟首をトラトラ子にくわえられ、無理やり引っ張られるようにして、チュン吉の背の上へと連れて行かれる保。

「ふああ……！こんな痛覚、本当にあんの？って感じの俺が、痛がっちゃって、すみませえくん！」

トラに襲われてはいるものの、いつものように謝り散らす保の姿

に、スズメがホッとした様子で、胸を撫で下ろす。

「不二子…」

保とトラトラ子に遅れるようにして、チュン吉の背の上へと戻って来た不二子へと、ヒロトがそっと声を掛ける。

「灰示様は、あいつが生き延びることを望んだ」

呼びかけたヒロトに背を向け、後方を振り返った不二子が、何もない空を見つめ、目を細める。

「不二子は、灰示様の望むことをするだけ」

「……うん」

不二子の言葉に、ヒロトが、ただ静かに頷く。不二子が泣いていることは、その震える声を聞けば、顔を見なくとも、十分にわかった。だが、ヒロトは何も言わずに俯き、兵吾と蛍もまた、悲しげに顔を下げた。

「ああ、痛かったあ」

トラトラ子に下ろされた保が、チュン吉の背の上に座り込み、先程までくわえられていた襟首を擦って、情けない声を漏らす。

「“痛い”…」

思い出深いその言葉を呟き、保が、頭を抱えて、そっと俯く。

「“痛い” よ、灰示…」

俯いた保の瞳から、また、止めどなく、涙が溢れ出る。

「……行こう。チュン吉」

悲しみに暮れる保と、ハ行の皆を見つめた後、スズメが静かに、チュン吉へと指示を送る。痛みを抱えたまま、保たちは、灰示の消えた、その場を後にした。

その頃。永遠の城、正門前。

「ハア、ハア…」

苦しげな声を漏らしながら、崩れ落ちた正門の横を通り抜け、城

を出る七架。戦闘を終え、体中傷だらけな上に、その背には、大して背丈も変わらない埜^の垂^あを担いでおり、相当に苦しそうであった。

「大丈夫…？七架」

七架の少し前を歩く、同じように十稀^{とほ}を背負った囁が、七架の方を振り返り、心配そうに声を掛ける。

「うん、何とか…でも、ちよつと、そろそろ限界、かも…」

崩れ落ちる城から、何とか脱出は出来たものの、限界の体を、さらに痛めつけるように動いたため、七架の体はすでに限界を超え、いつ倒れても、おかしくない状態となっていた。

「ごめんね。囁ちゃんだって、辛いのに…」

「謝る必要はないわよ…」

申し訳なさそうに顔を下げる七架に、囁が優しく微笑みかける。

「城は出れたんだから、もう少しだけ、頑張りましょう。崩壊に巻き込まれない程度まで離れれば、後は誰か、救援が来るのを待つ…」

『グアアアア！』

囁の言葉を遮る、けたたましい、その無数の声に、囁が一瞬にして表情を曇らせ、ゆっくりと前方へと体の向きを戻す。二人の前方には、埋め尽くすまでの黒い影の集団が、立ちはだかっていた。崩れ落ちる城の瓦礫よりさらに生まれ、その数を増やしたのだろう。最早、数える気にもなれない。

「囁ちゃん、これ…」

「もう少しだけ頑張ることも、出来なさそうね…」

険しい表情を見せる七架の前で、囁が、どこか開き直ったように笑う。

「こうなったら、もう、命がけ覚悟で“さようなら”を…」

「怒^{いか}れ」

『ギャアアア！』

「え…？」

囁が自身の言玉を握り締め、覚悟した表情を作った丁度、その時、低い声が響き渡り、無数の水玉が押し寄せると、前方の影の一団を、

あっという間に消し去った。その消えた影の向こうから見えてくる人影に、囁と七架がそれぞれ、驚いた表情を見せる。

「あなたは…」

「イクラさん！」

影の向こうに立っていたのは、イクラであった。相変わらず、愛想のない、無表情を見せている。もう相当に、影との戦闘を続けているのか、体の所々に傷を負っており、息こそ乱していないが、体力は限界にきている様子で、顔色も悪い。

「以の神。何故、あなたがこの場所に…」

「とっとと行け。くだらない会話をしている時間はない」

「え…？」

『グアアアア！』

またしても響き渡る、けたたましい声に、イクラの言葉に戸惑いの表情を見せていた囁が、再び眉をひそめ、後方を振り返る。崩れゆく城の瓦礫から、次々と黒い影が生まれ、また、こちらへと向かって来ていた。

「城跡が、影に…」

「どういう仕組みなのかしらね…」

険しい表情を見せる七架の横で、囁が引きつった笑みを浮かべる。

「わかったなら、とっとと行け」

「け、けど…！」

冷たく言い放ちながら、影と立ち向かうべく、言玉を身構えるイクラに、七架が身を乗り出す。

「あなたは…！？」

「……………」

七架のその問いかけに、イクラは答えず、ただ、鋭く、前方の影達を見つめるだけであった。

「俺のことはいい。とっとと行け」

そう言いながら、二人の横を通り抜け、後方に湧き出た影達に、相対するイクラ。そんなイクラの方を振り返り、七架が益々、険し

い表情を見せる。

「そんなの：！」

「こう言ってくれてるわけだし、とっとと行きましようか：」

「囁ちゃん！」

「冗談よ：フッフ：」

あっさりとイクラの言葉を吞もうとする囁に、鋭い視線を送る七架。そんな七架に、囁がそっと笑みを浮かべてみせる。

「問題は、どうやって、皆で生き延びるかだけど：」

『グアアアア！』

「あ：！」

囁が考えを巡らせる時間すらも与えず、生まれ出たばかりの影が、三人へと一気に襲いかかってくる。飛びだしてくる影たちに、焦ったように声をあげる七架。二人の前で、一層厳しい表情を見せたイクラが、静かに右手の言玉を突き出す。

「“い：”

“掻き消せ”」

『ギャアアアア！』

イクラが言葉を放とうとしたその時、イクラよりも数秒早く、別の言葉が放たれ、三人へと向かってきていた影を一掃した。悲鳴をあげて、掻き消えていく影たちを見つめ、イクラが眉をひそめる。

「出番を奪ったか？」

イクラへとそう問いかけながら、上空から、その場へと姿を現したのは、真っ赤な鎌を振り上げた箆也であった。箆也と目を合わせ、イクラがさらに、眉間に皺を寄せる。

「……フン」

「箆也」

「神月くん！」

不満げに鼻を鳴らすイクラとは対照的に、現れた箆也に、嬉しそうな笑顔を見せる囁と七架。

「生きてみたいね：フッフ：」

「当然だろう」

不気味に微笑む囁に、箆也が少し口を尖らせ、答える。

「滅せ^{めっ}」！

新たに響く言葉と、影たちの悲鳴に、再会を喜んでいた囁たちが、また前方を見る。そこには、緑色に輝く右足を高々と振り上げた、恵の姿があった。

「恵先生も…」

「ボヤッとしてる間に、次の影共が生まれちまう。とっとと退くぞ」
「はい」

鋭く言い放つ恵に、箆也も冷静に返事をする。確かに、話している間にも城は崩れ、その瓦礫から次の影が生まれ出る。箆也たちに、ゆっくりしている時間はなかった。

「私に掴まれ。真田、奈々瀬」

「は、はい！」

「出来れば、安全運転でお願いしたいわね…」

それぞれの反応を示しながら、囁と七架が、恵が差し出した手を取る。二人の手を握り締めると、恵が一瞬、イクラへと目をやり、そして次に、箆也の方を見た。

「そいつは任せるぞ」

「はい」

恵の指示に、しっかりと頷く箆也。箆也の頷きを確認すると、恵はまた、輝く右足を振り上げた。

「巡^{めぐ}れ」！

言葉と共に、恵が輝く右足で地面を蹴り上げ、高々と飛び上がって、二人と共に、一瞬にしてその場を去っていく。その場に、為介を背負った箆也と、イクラだけが取り残される。

「僕等も行こう。時間がない」

「行くなら、勝手に行け」

急かすように、イクラへと手を差し伸べた箆也であったが、イクラから返って来た答えは、とても淡白なものであった。

「俺は、他団の神付きの助けを借りる気はない」

はつきりと言い放つイクラに、箆也が少し眉をひそめる。だが、すぐに眉間の皺を伸ばし、どこか呆れるように、深々と溜息を落とした。

「ならば何故、あなたは、他団の神付きを助けた？」

鋭く問いかける箆也に、イクラの答えはない。イクラは、ただまっすぐに、崩れ落ちる城を見つめ、箆也の方を見ようとしなかったが、箆也は逆にまっすぐに、イクラを見つめた。

「僕の手を取れ。以の神」

強制するように言い放ち、箆也がまた、イクラへと手を伸ばす。

「今、あなたを助けねば、僕が、我が神に叱られる」

箆也のその言葉に、イクラがゆっくりと振り向き、色のない表情で、箆也を見つめる。

「……そうだな」

どこか納得するように、言葉を落とすイクラ。

「お前の神は、そういう男だったな」

諦めたようにそう言って、イクラはそっと、伸ばされた箆也の手を取った。

永遠の城、上空。厭離穢土、空間内。

「へえ」

真っ白な空間の中に立ち尽くし、前方を見つめた永遠が、口元を緩め、静かに笑う。

「追って、来たんだ」

意外そうに見つめる永遠の前方には、真っ赤な銃を右手に握り締めた、アヒルが立っていた。アヒルもまっすぐに、微笑む永遠を見つめている。

「ああ。その為にあけてたんじゃねえのか？あの穴」

そう言つて、アヒルが後方に見える、空間の床部分にあいた、小さな穴を指差す。今はもう、ほとんど閉じかけているが、その穴から、アヒルはこの空間の中へと入ってきたのである。その穴を閉じ、アヒルを侵入させないでいることも、永遠には十分に出来ただろう。「そうだな。そうかも、知れない」

自分の気持ちを確認するように、永遠が呟く。

「俺も、君と、もう少し遊びたいって、思ったのかも知れない」
アヒルをその冷たい瞳に捉え、楽しげに笑う永遠。

「言葉の明日を懸けて」

永遠のその言葉に、アヒルが、そつと表情を険しくする。

「ああ。決着をつけようぜ、永遠」

誘うように言つて、身構えた真っ赤な銃の、その銃口を、永遠へと向けるアヒル。

「俺は、俺たちは、“明日”を勝ち取る！」

強く言い放つアヒルを見て、永遠はまた、楽しそうに微笑んだ。

Word. 82 怒レル神 (2)

「城が、完全に…」

前線から引いた音士たちと共に、遠く離れた場所から、城の様子を見守っていた和音が、そっと眉をひそめる。徐々に崩れ落ちていた城は、下部から潰れるようにして、完全に崩れ落ち、巨大な城は最早、見る影も無くなっていた。

「皆さん、無事、避難出来たでしょうか」

「うん…」

不安げに呟く雅の横で、ツバメも、浮かない表情を見せる。

「しかし」

和音が表情を険しくし、崩れ落ちた城から、まっすぐその上、暗い空に明々と輝くようにして浮かぶ、真つ白な光の塊を見つめる。その光は明らかに人為的なものであり、その光が、何者の力によるものなのかも、和音にはだいたい、予想がついていた。

「あの光は…」

「厭離穢土」

和音の言葉に続くようにして、聞こえてくる言葉。

「宇の神」

和音が振り向くと、すぐ横で、同じように上空の光を見つめる、ウズラの姿があった。ウズラも恐らく、その光に予想がついているのだろう。浮かない、不安げな表情を見せている。

「たぶん、永遠が四字熟語ラスト・イデオムを使ったんじゃないかな」

「四字熟語を…」

「恵！」

響き渡る茜の大きな声に、和音とウズラが、同時に後方を振り返る。

「恵、よく無事で…！」

「私はいい。こいつ等の手当てを、してやってくれ」

「え、ええ。彼女たちの手当てを！」

囁、七架を担ぎ、その場へと現れた恵に、茜が嬉しそうに声を掛けたが、恵は、いたって冷静に、二人と、そして二人が連れてきた十稀、埜垂の手当てを申し出た。恵の言葉に頷いた茜が、近くの従者に指示を送り、四人を後方へと運んでいく。

「神！」

「神いー！泣いちゃうよー。俺、泣いちゃうよー！」

「うるさい……」

恵に続くようにして箆也がやって来ると、箆也と共に、その場へと現れたイクラに、シャコと、すでに泣いている様子の金八が、勢いよく抱きつく。大きな金八の声に、イクラは煩わしげな表情を見せていた。

「箆也……」

「ああ」

戻った箆也に、和音が安心したような笑みを浮かべ、声を掛けると、箆也はその声に応えるように、短く声を落とした。

「為介さん……！」

箆也の背負っている為介の姿を見つけたのか、少し離れた場所から、慌てた様子で、雅が駆け込んでくる。すでに為介が、雅の呼びかけに応えないことを知っている箆也は、駆け寄って来る雅の姿に目を細めながらも、向き合うように、ゆっくりと体の向きを変えた。

「為介、さん……」

箆也により、動きを停止した為介を手渡され、雅が茫然と、為介を見つめる。

「すまない」

「いえ、神月君が謝ることではありません」

箆也が少し俯いて謝ると、雅は静かに、首を横に振る。

「だが……」

「悔いたような、顔はしていません」

受け取った為介の顔を見下ろし、雅が言葉が続ける。確かに為介

は、どこかすっきりしたような、そんな表情を見せており、苦痛の末に言葉を終わらされたとか、そういった風には見えなかった。

「言いたいことは、すべて言ってきたのでしょうか」

為介の心を知るように、雅が穏やかに微笑み、また箆也の方を見る。

「それで、十分です」

微笑みを向ける雅に、箆也は礼を言いたいような気分になったが、まだ礼を言っていないような気がして、返す言葉を呑み込んだ。

「箆也」

名を呼ばれ、箆也が振り返る。

「檻也」

箆也が振り返ると、そこには、弟、檻也の姿があった。檻也の姿を見て、箆也が一瞬、ホツとした様子を見せる。

「無事だったか」

「ああ、俺はな」

付け加えられる言葉に、箆也が少し眉をひそめ、檻也の見つめる方向へと視線を向ける。視線のその先には、言葉を終わらされ、すべての動きを停止して、地面に横たわっている紺平の姿があった。他にも守、チラシなど、言葉の終わってしまった音士が、並んで倒れている。

「小泉…」

「あいつの言葉を、守ってやれなかった」

紺平を見つめ、そっと目を細める箆也の横で、檻也が悔いるように、顔を俯ける。

「俺が、あいつの神である俺が、傍に居ながら…」

「小泉は」

続く檻也の言葉を、少し遮るようにして、箆也が口を開く。

「小泉は、何か言っていたか？」

箆也のその問いかけに、檻也が顔を上げ、真剣な表情を見せる。

「“また明日”、と」

「……そうか」

檻也の答えを聞き、箆也が満足した様子で頷く。その言葉は、言葉が終わってしまう最後の最後、その瞬間も、紺平がアヒルを信じたことを、示していた。その紺平の言葉が、箆也に、“諦めるな”と言ってくれているようで、箆也はどこか、勇気づけられたような、そんな気持ちとなった。

「なら、また明日、会えばいい」

「……ああ」

檻也を励ますように、箆也が優しく微笑みかけると、檻也は少しだけ、気持ちが軽くなったようで、後悔の滲んでいた表情を柔らかくし、小さく頷いた。

「よいしょっとお！」

「スズメ……」

そこへ、チュン吉に乗ったスズメがやって来て、それに気付いたツバメが、顔を上げる。

「皆は……？ 無事……？」

地面へと降りてきたスズメに、ツバメが歩み寄って、問いかける。だが、その問いかけに、スズメは表情を曇らせ、言葉を発そうとはしなかった。

「スズメ……？」

そのスズメの様子に首を傾げ、ツバメがチュン吉の背の上を見つめる。そこには、真っ赤に目を腫らした保と、見るからに元気のない、ハ行の面々の姿があった。暗い雰囲気を纏った皆を見て、何かを察するように、ツバメもそっと、目を細める。

「浮世現が、生きていたんだね」

そこへやって来たウズラが、スズメへと声を掛けた。

「ああ。浮世現が生きてて、阿修羅の時と同じように、あの獣を爆発させて、この町を俺たちを、一気に消そうとした」

顔を俯けたまま、ウズラの問いに、ポツリポツリと、言葉を落としていくスズメ。

「それで、彼が…？」

あえて、名前を口にしなかったウズラだが、皆の様子を見れば、何があったのか、ウズラはすでに理解していることだろう。ウズラの問いに、少し悔しげに唇を噛み締めて、スズメが、ゆっくりと頷く。

「ああ。自分の忌の力を使って、あの獣と浮世現を消して、そこで、あいつ自身も…消えた」

「そう…」

スズメの言葉を受け止めるように頷き、ウズラもまた、悲しげな表情を見せる。

「人はまた、彼に救われたんだね」

ウズラの言葉を聞き、その場に居る誰もが、どこか遣り切れない表情を見せ、俯き、“痛み”から生まれた、人ではないもののことを思った。その間に、ヒロトや兵吾に手を借りて、保がゆっくりと、チュン吉の背の上から降りる。

「ありがとうございます…」

「高市」

二人に礼を向けていた保が、背後から呼ばれる声に、振り返る。

「神月、くん…」

そこには、どこか心配するように保を見つめる、箆也の姿があった。

「転校生くん…」

「高市くん」

「真田さん、奈々瀬さんも」

箆也のすぐ横へと歩み寄って来る、囁と七架。韻の従者等により、簡単な傷の治療は終えている。二人もまた、心配するように、温かい目で、保を見ている。久々に見る仲間の姿に、保はどこかホッとするように、口元を緩めた。

「皆さん、ご無事だったんですね」

「ああ」

「良かった…。あ、こんな皆さんより情けない俺が、一丁前に、皆さんの心配をしちゃって、すみま…」

「高市」

いつもの大きな、叫ぶような声ではないが、いつもと変わらぬ言葉を、皆へと向けようとした保の声を、箆也が、もう一度名を呼ぶことで、そっと遮った。

「大丈夫か…？」

他の二人を代表するように、箆也が保へと問いかける。その問いかけに、保は一瞬、瞳を閉じて、小さな笑みを浮かべた。

「大丈夫、です」

自分で確かめるように、答える保。

「いつまでも、泣いていても仕方ないですし、それに…」

保がゆっくりと顔を上げ、上空に広がる、空を見上げる。

「約束、しましたから。灰示と」

空を見上げ、目を細めた保が、懐かしむように、穏やかに笑う。

「“痛み”を、乗り越えていくって」

胸にあるその言葉を確かめるように、保が、左手を力強く、自分の胸へと当てる。痛みを忘れず、そして、痛みを乗り越えようとする、その思いがある限り、この胸の中に、灰示は居る。何の確信もないが、保には確かに、そう思えた。

「そうか」

保のその思いを受け止めるように、箆也が、しっかりと頷く。

「あの獣が消えたのであれば、永遠は生きているとはいえ、世界中の言葉が一瞬にして終わらされてしまう、その脅威はなくなったのでは？」

「いや…」

鋭く問いかける熊子に、ウズラはすぐさま表情を曇らせ、首を横に振った。

「永遠の力があれば、一瞬にして、世界中の言葉を消すことは、可能なはずだよ」

決して望まぬことを、口にし、ウズラがさらに、厳しい表情を作る。

「永遠が浮世現を仲間としたのは、ただの気まぐれだろう」

そっと視線を落とし、浮かない表情を見せるウズラ。

「永遠はそれくらいのこと、浮世現の力など借りなくとも出来る力を、もともと持っているからね」

「そう、なのですか…」

ウズラの言葉を受け、熊子がどこか、残念そうに俯く。熊子の隣の塗壁も、そして近くに立っていたスズメも、厳しい現実を突き付けられたようで、何も言えず、ただ俯くことしか出来なかった。

「アヒルは？」

チュン吉を言玉の姿へと戻したスズメが、周囲を見回し、集まった音士の中に弟の姿がないことを確認して、恵へと問いかける。恵は険しい表情を見せ、ゆっくりと、城のあった方角を見つめた。

「あそこだ」

崩壊した城のすぐ上の空に浮かぶ、真っ白な光の空間を見据え、恵が言う。恵につられるようにして、そちらを見つめたスズメは、すぐにその言葉の意味を理解したのだろう。厳しい表情を作った。

「まだ戦ってんのか、あいつは」

「うん」

スズメの言葉に、ウズラが目を細め、そっと頷く。

「結局、あいつ一人に全部、背負わせちゃった」

その場にしゃがみ込んだ恵が、深々と頭を抱え、悔やむように呟く。

「あいつ一人に全部、押しつけちゃった…！」

「恵…」

苦しみを前面に押し出し、声を震わせる恵を見つめ、茜が険しい表情を見せる。苦しみは十分にわかるが、今の茜に、恵に掛けてやる言葉は、見つけれなかった。

「押しつけたのではない」

「え…？」

否定するように、すぐさま放たれる言葉に、戸惑うように顔を上げる恵。その言葉の聞こえてきた方には、同じようにまっすぐに、その白い空間を見つめる、箆也の姿があった。

「神月…」

「我々は皆、“懸^かけた”のだ」

皆の視線が集まる中、箆也が力強く、声を発する。

「我が神の、言葉に」

箆也のその言葉に、恵がハツとした様子で、目を見開く。

「そして、我が神は、必ず、皆の懸けた思いに、応えてくれる。僕は、そう信じている」

何の迷いもなく、はっきりと言い放つ箆也。

「ええ…」

「はい」

「うん！」

箆也の言葉に同意するように、囁、保、七架の三人も、笑みを浮かべ、力強く頷く。不安げな表情を見せていた皆も、その言葉を聞き、その様子を見て、再び表情を引き締め、まっすぐに、アヒルの居る空間を見据えた。

「そうですわね」

皆を代表し、箆也の言葉に賛同するように、頷く和音。

「皆で信じましょう。そして、皆で祈りましょう」

両手を広げた和音が、今後の道を指し示すように、他の皆へと声を掛ける。

「安の神に、我々の言葉の明日を」

和音の言葉に、反論する者など一人もなく、誰もが皆、しっかりと頷き、祈るような視線を、アヒルの居る空間へと送った。

「さつき、大気が一瞬、震えたね」

ただ、真っ白な空間の中、他の誰も居ない空間の中で、静かに向き合うアヒルと永遠。戦いの構えを取る前に、永遠は、ふと思い出した様子で口を開いた。

「外部からの手出しは一切出来ない、この空間にまで震動が伝わるなんて、余程のことが、あったんだろうね」

その永遠の言葉に、アヒルがそっと眉をひそめ、顔を俯ける。この空間へとやって来る前に、アヒルに吹き抜けた一陣の風。その風を浴びた途端、何も知らないはずのアヒルへと伝わった、確かな終わり。

——灰、示：——

風と共に伝わってきた、その残像。

「恐らくは、あの創造の神がしぶとく生き延びて、何かをやったんだろうけど」

永遠もアヒルと同じように、知るはずもないが、何が起こったのか、だいたい予想しているかの口振りで、言葉が続けた。

「何があったんだろう？ 気にならない？」

どこか試すように問う永遠に、俯いていたアヒルが、ゆっくりと顔を上げる。

「別に」

あっさりと答え、アヒルが表情を引き締める。

「お前が気にすることじゃねえさ」

そう言いながら、真っ赤な銃を身構える手とは逆の手、左手で、手の中にある金色の言玉を、力強く握り締めるアヒル。

「俺の負けられねえ理由が、一つ、増えただけだからよ」

はっきりと言い放つアヒルを見て、永遠はまた、楽しげに笑う。

「そう」

「ああ、そうだ」

永遠の頷きに答え、アヒルが、握り締めた左手を、高々と掲げる。

「五十音、第三音」

アヒルの左手の中で、強い金色の光を放っていく言玉。

「う”、解放…！」

言玉が一層の輝きを放ち、アヒルの手の中で、その姿を一丁の銃へと変えていく。赤と金、二丁の銃を手にしたアヒルは、鋭い表情を見せ、素早く構えを取った。

「今度は、初めから二文字か…」

攻撃の態勢を変えたアヒルを見て、わくわくするように呟きながら、永遠も、言玉を握る右手に、そっと力を込める。

「行くぜ！」

強く声を張り上げ、アヒルが右手の赤色の銃を、永遠へと向ける。

“^あ当たれ”！」

銃から放たれ、やって来る弾丸を、静かに見つめる永遠。

「落^をとせ」

永遠が、向かってくる赤い弾丸を、短く言葉を発し、難なく床へと沈める。だがアヒルは、沈められた弾丸にも動じず、むしろ、初めから沈められることを予想していたかのように、素早く、今度は左手の金色の銃を、永遠へと向けた。

「撃^うて」!

アヒルの構えた銃から、今度は金色の弾丸が放たれ、まっすぐに永遠へと向かってくる。

「やっぱり二文字、使うんだ」

冷やかな笑みを浮かべ、永遠が、言玉を持つ右手を振り上げる。

「でもそれ、命取りだよ? “終^をえろ”」

忠告するように問いながらも、一瞬の躊躇いもなく、言葉を放つ永遠。言玉から放たれた強い白色の光が、空間内へと一気に広がり、あっという間にアヒルの弾丸を掻き消して、アヒル自身を包み込んだ。光の中に消えていくアヒルを見つめ、永遠が、穏やかに笑う。

「ほら、終わっちゃった」

どこか物足りなさそうに、呟く永遠。

「折角、厭離穢土を使ったのに、呆気なく終わっちゃったな」

掲げていた右手を下ろし、永遠が少し、肩を落とす。

「さてと」

「“当^あたれ”」!

「何」?

まだ発せられている光の塊の中から、響いてくる確かな言葉に、永遠が戸惑うように眉をひそめる。永遠が光を見たその瞬間、光の中から、赤色の弾丸が、勢いよく飛び出してきた。

「ク」!

次の攻撃などあるはずがないと、すっかり構えを解いてしまっていた永遠は、わずかに身を逸らしただけで、完全に弾丸を避けきけることは出来なかった。右頬を弾丸が掠め、切れた頬から、赤い血が流れ落ちる。

「誰が、もう終わりだって？」

薄れていく光の中から現れる、二丁の銃を構えたアヒル。鋭く微笑むアヒルの姿が、目で捉えられるようになると、頬から血を流した永遠は、そっと目を細め、少し険しい表情を見せた。

「何故だ…？ “終えろ”は確かに…ん？」

戸惑うようにアヒルの姿を観察していた永遠が、アヒルの体を包む、淡い青色の光に気付く。

「そうか。 “生きろ”」

永遠が口にしたのは、先程、アヒルが発した、為介がアヒルへ向けたという最期の言葉であった。今もアヒルを包むその淡い光は、再び立ち上がった時、アヒルが纏っていたものと同じものだ。

「君の言葉は、俺の “終えろ” により終わらされ、そして、為介の “生きろ” により、蘇った」

どこか分析するように、永遠が言葉が続ける。

「一度、終わらせた君の言葉を、俺が同じ言葉で、もう一度終わらせることは出来ない、そういうわけか…」

すべてを理解した永遠が、薄く笑みを浮かべながら、ゆっくりと肩を落とす。

「本当に、厄介なことをしてくれたものだね」

先程までよりも低く落ちる、永遠の声。

「為介…」

名を呼ぶ、その低く重い声からは、どこか深い恨みのようなものさえ、感じられた。だが、永遠の言葉が聞こえぬアヒルは、それを気にする様子もなく、右手の赤い銃を、自らのコメカミへと向ける。

「“上^あがれ”！」

自身へと言葉を放ち、空間内で一気に上昇するアヒル。上空へと

浮かんだアヒルが、下に居る永遠へと、金色の銃を向ける。

「撃ちつけろ」！

金色の銃から、先程の弾丸とは異なる、無数の細かい雨粒のような弾丸が、永遠へと降り注がれる。その金色の雨が、永遠へと届かぬうちに、アヒルは、今度は赤い銃を、永遠へと向けた。

「浴びせろ」！

アヒルが言葉を放つと、赤色の銃からも、同じように、細かい雨粒のような弾丸が放たれ、空中で、先に放たれた金色の雨と混ざり合って、一気に永遠へと降り注ぐ。やって来る雨を見つめ、鋭く目を細めた永遠が、自身の前へと、言玉を突き出す。

「覆え」

周囲に白い光の膜を張り巡らせ、降り注ぐ二色の雨を受け止める永遠。初めは順調に、降り注ぐ雨を弾いていた膜であったが、降り注ぐ雨粒の量はあまりに多く、二つの言葉が合わさっているため、その力も強く、徐々に膜が押され、ヒビ割れて、やがて、完全に崩れ落ちる。崩れ去る膜に少し表情を歪めながらも、永遠が言玉を握り直した。

「慄け」……！

永遠が次の言葉を発し、全身から、圧のような白い光を発し、残りの雨粒を一気に弾き返す。その弾き返った雨粒の一部が、上空に居るアヒルのもとへも戻って来た。

「うおっと！ “浮かべ”！」

今度は金色の銃を自らへと向けて、さらに体を上昇させ、戻って来た自身の力を、何とか避けるアヒル。

「ふう。さすがに、そう何度も簡単に、言葉を食らっちゃ、くれねえか」

額に流れる汗を拭いながら、下方に居る永遠を見つめ、アヒルが少し、困ったように笑う。だが、先程の城での戦闘よりも、アヒルは確実に、手応えを感じていた。為介の言葉のお陰で、二つの文字が使えるようになり、そして、今まで傷一つ負わせることが出来な

かった永遠の頬に、小さなものではあるが、傷を負わせることが出来た。それが、アヒルの自信に繋がっていた。

「こうなりゃ、とことん、撃ち込むまで！」

前向きに声をあげたアヒルが、両腕の銃を、永遠へと構える。

“荒れる”、“嵐”！

高らかと言葉を発し、真っ赤な銃から、強い風の塊を放つアヒル。放たれた風塊に、アヒルがさらに、金色の銃を向ける。

“唸れ”！

金色の銃から放たれた光を浴び、風の塊はさらに、その勢力を増す。音を立てて、激しく逆巻く風塊が、永遠へと迫り行く。

“押し寄せろ”

言玉から光の大波を生み出し、やって来る風塊へと、ぶつけ合わせる永遠。だが、その永遠の波は、風塊のあまりの勢力に、ぶつかった途端に砕かれてしまう。辺りに散る白い光に、また一層、永遠が表情を歪めるが、その間にも、風塊は、永遠へと突き進む。

「俺の言葉で壊せない、か…」

不満げに眉間に皺を寄せながら、永遠が、やって来る嵐へと、また言玉を向ける。

“押収”

そっと言葉を落とし、向かって来ていた風塊をすべて、掲げた言玉の中へと吸い込んでいく永遠。どんどんと吸い込まれていく自身の言葉に、アヒルが驚いた様子で目を見張る。

「あの量の風を、全部？」

アヒルが戸惑う中、永遠が、風を一陣残らず吸い込んだ、その言玉を、何の迷いもなく、自然な動きで、上空に居るアヒルへと向ける。

“贈れ”

永遠が言葉を落とすと、永遠の向けた言玉から、先程吸い込まれた風塊が、一気にアヒル目がけて、溢れ出していく。

「うわわわわ！」

戻って来る自分の言葉に焦るアヒルだが、すでに風の勢いに押され、空中で、思うような態勢が取れなくなってしまっている。ろくに身構える態勢も取れぬまま、戻って来る嵐を迎えるアヒル。

「クッソ！あ、^{あば}“暴れろ”！」

空中で、動きにくい形に体を捻らされた状態のまま、アヒルが苦しげにはあるが、何とか右手だけを伸ばし、やって来た嵐へと、弾丸を放つ。弾丸を浴びた途端、風塊はその集合体を解き、空間内に飛び散るようにして、勢いよく弾けた。

「うお！」

すぐ目の前で飛び散った嵐の、その強い風に吹き抜かれ、上空から、空間内の床へと、一気に叩きつけられるアヒル。

「何…？うう…！」

弾け飛び、空間内全域で逆巻く風の一部が、下方に居た永遠にも吹き荒れ、永遠が身を屈めるが、その腕や足を、一部、斬り裂く。

「まさか、自分の力を目の前で、弾け飛ばして、直撃を避けるとはね」

斬り裂かれた手や足から、わずかな痛みを感じながら、ゆっくりと顔を上げた永遠が、どこか感心するように呟く。顔を上げた永遠が、何かに気付いた様子で眉をひそめ、言玉を握り締める自分の右手へと、視線を下ろした。言玉を握る永遠の右手が、かすかに、だが確かに、震えている。

「風を吸い込んだ時か…」

痺れを覚える右手を見下ろし、永遠がその表情を曇らせる。その曇らせた表情を、またゆっくりと上げていく永遠。

「痛つつつつ…！はあ、痛ってえ」

前方へと向けられた視線の先では、嵐により、床へと叩き落とされたアヒルが、永遠と同じように、風によって斬り裂かれた体を見回しながら、少し歪めた表情を見せていた。痛みにも多少苦しんでいるようだが、その表情には、決して絶望の色はない。諦めた様子など、まったくない表情だ。

「返されること想定して、そんな時用の言葉を考えとくべきだったなあゝやっぱ」

反省するように頭を掻きながら、アヒルがゆっくりと、その場で立ち上がる。

「あ？」

立ち上がったアヒルが、永遠がまっすぐにこちらを見ていることに気付き、戸惑うように首を傾げる。

「何だ？どうした？」

不思議そうに問いかけるアヒルを見て、永遠がそっと、口元を緩める。

「認めてあげるよ…」

「は？」

永遠のその言葉に、アヒルがさらに、首を傾げる。

「君は、強い」

まさに、アヒルを認めるその言葉に、アヒルは傾けていた首をもとに戻し、少し驚いた表情を見せる。先程まで、永遠の足元にも及ばないような戦いしか出来ていなかったアヒルにとって、永遠からそんな言葉を向けられるとは、思ってもみなかったのだ。

「正直に言うよ。俺の言葉で壊せないような攻撃を放ったのも、俺の腕を痺れさせたのも、君が全部、初めてだ」

アヒルを誉める言葉を、永遠がさらに続ける。

「俺の時が、“永遠”となってからはね…」

言葉を付け加え、冷たく微笑む永遠に、アヒルが少し眉をひそめる。

「明^{アケル}さんの“あ”に、ウズラさんの“う”、為介の“生^ゐきる”の言葉に、それと恵の想いも背負ってるのかな…」

どこか遠くを見つめるような瞳を一瞬見せて、永遠がまた、楽しげに笑う。

「俺以外の旧世代、四人の神の力を持った君は、本当に強いよ…」
まっすぐに見つめられ、向けられるその言葉に、アヒルは怪訝そ

うに、表情を曇らせる。

「それは、単純に、誉めて貰えたあって、喜んでいいものなのかねえ？」

少し口角をあげて、アヒルが永遠へと問いかける。笑ってはいいるが、永遠の真意を見抜こうとしているような、その瞳は鋭い。

「ああ、喜んでくれていいよ」

警戒するアヒルとは異なり、永遠は何の躊躇いもなく、あっさりと頷いた。

「俺は、残念に思うけどね」

「残念？」

永遠のその言葉に、また眉をひそめるアヒル。

「ああ。だって、そうだろう？」

同意を求めるように、永遠がアヒルへと問いかける。

「君は、こんなにも強いのに……」

言葉が続けながら、まるで憂いているような、悲しげにさえ見える表情を、浮かべる永遠。

「それでも俺を、倒せないなんて」

永遠の放った言葉に、アヒルが表情を険しくする中、永遠が再び、言玉を持つ右手を掲げた。

「“押さえつけろ”」

「ううう……！」

永遠が言葉を放った途端、アヒルのすぐ後方の床から、小さな壁のようなものが突き出して、その壁から伸びた帯状の光が、アヒルの四肢を絡め取り、壁へとアヒルを押さえつける。

「こ、これは……！」

「厭離穢土は別に、絶対空間を作り出すだけの四字熟語じゃないよ」
ラスト・イデオム
すぐ後ろの壁を振り返り、険しい表情を見せるアヒルへと、永遠が解説するように、言葉を掛ける。

「この空間全体が、俺の意志で自由に動く、俺の言葉そのものとなる……」

「ク…！」

永遠の言葉が続く中、何とか捕らえられた光から脱しようと、絡め取られた手や足を、必死に動かすアヒル。

「無駄、だよ…」

「あ…！」

動けぬアヒルへと、永遠は容赦なく、その言玉を向けた。

「送^{をく}れ」

「うああああ！」

永遠の言玉から放たれる、無数の白い光の玉。だが、動きを封じられていたアヒルには、言葉でそれを退けることも出来ず、ただ、その光玉を受けるだけであった。アヒルが光を浴びた途端、背後の壁が消え去り、アヒルが勢いよく、後方へと吹き飛んでいく。

「う、ううう…」

床へと転がったアヒルが、苦しげな声を漏らす中、またアヒルへと、言玉を向ける永遠。

「押^をし上げろ」

アヒルの倒れている部分の床が、突然盛り上がり、アヒルの体ごと、一気に上空へと上がっていく。

「圧^をし潰せ」

「うああああ…！」

持ちあがった床と、天井の間で、力いっぱい挟み込まれ、骨の碎けるような重い音が響いて、アヒルの表情が、大きく歪む。

「落^をとせ」

「ううう…！」

そこからまた、天井から降り注ぐ光を直撃し、下へと叩き落とされるアヒル。光に全身を斬り裂かれ、かつて永遠も纏っていた、その水色の制服に、また血が滲んだ。

「押^をさえつけろ」…」

永遠が言葉を発すると、またアヒルのすぐ後ろに、小さな壁が出来あがって、帯状の光がアヒルの手足を取り、倒れ込んでいるアヒルの体を無理やり立たせ、壁へと押さえつける。傷だらけとなったアヒルは、今度は抵抗する力もなく、ただ、大人しく壁へと拘束された。そんなアヒルのもとへと、永遠がゆっくりと、歩み寄ってい

く。

「仕方無い。仕方無い、よね…」

虚ろな瞳で、徐々に迫って来る永遠を見つめるアヒル。そんなアヒルを見つめ返しながら、永遠がどこか、残念そうに声を落とす。

「為介の“生きる”が効いている限り、俺の“終えろ”じゃ、君の言葉は終わらない…」

永遠がアヒルのすぐ目の前へと立ったところで、その足を止める。

「静かに、何の痛みもなく、その言葉を終わらせてあげたかったけれど、でも、もう仕方無い」

どこか悲しげに、言葉を紡ぐ永遠。

「もう、君の言葉を終わらせるには…」

動かぬアヒルの顔へと、ゆっくりと、右手の伸ばす永遠。

「君の命を、終わらせるしかないよね…」

アヒルの顔の目の前で、永遠の言玉が、強く輝く。

「“墮^をちろ”」

空間の天井から、アヒルへと、真っ逆さまに落ちる白い雷撃。

「う、うあああああ！」

その雷に撃ち抜かれたアヒルが、激しい悲鳴をあげる。だが、アヒルを捕らえた壁はそのまま、アヒルは倒れ込むことさえ許されず、手足を封じられたまま、力なく顔を俯けた。

「う、うあ…」

言葉にならない声を漏らすアヒルを見つめ、永遠がそつと目を細める。

「朝比奈アヒル…」

俯いたままのアヒルを見つめ、改めて、その名を呼ぶ永遠。

「君はさっき、恵との会話の中で、こんな言葉を放っていたよね？」
確かめるような、少し優しい口調で、永遠がアヒルへと語りかける。

「“諦めない”って…」

今まで、何度も放って来た言葉を永遠に口にされ、俯いていたア

ヒルの表情が、かすかに動く。

「“諦める”か、“諦めない”か、その間で、君と恵は揺れ動いて、必死に、言葉を交わしていたよね…」

つい先程のことであるというのに、永遠が、どこか懐かしむように言う。

「けどね、アヒル」

永遠が、言玉を持っている手とは別の、左手で、アヒルの首元を掴み、深く俯けられていたアヒルの顔を、無理やり上げさせる。

「“諦める”か“諦めない”かは、君が決めることじゃないんだよ」無理やり、上げさせられたその顔で、永遠の放った言葉に、戸惑いの表情を見せるアヒル。そんなアヒルをまっすぐに見つめながら、永遠がさらに、口を開く。

「俺の時が“永遠”な時点で、君の選ぶ道なんて、決まっている」アヒルへと鋭く注ぐ、永遠の視線。

「君は、“諦める”しかない」

はつきりと放たれる言葉に、アヒルの表情が、小さく歪む。

「“諦める”しか、道なんてないんだよ。初めから」

そつと微笑んだ永遠が、アヒルの胸のすぐ前へと、自らの言玉を突き出す。

「“押^をせ”」

「うぐ…！」

永遠の言玉から放たれた強烈な光に押され、アヒルが、自らを捕らえていた壁すらも突き破って、後方へと吹き飛ばされる。転がり込むようにして、床へとうつ伏せに倒れたアヒルは、そのまま、立ち上がることも出来ずに、ただ、苦しげに声を漏らした。

「だって、そうだろう…？」

言玉を持つ手を下ろした永遠が、倒れたままのアヒルへと、静かに問いかける。

「俺の時は、“永遠”なんだ」

また、強調されるように放たれる、その言葉。

「俺の時は、俺の命は、“永遠”に終わらないんだ。なのに、君に、俺が倒せるはずがないだろう…？」

当たり前の常識でも話すかのような口調で、永遠が言葉を続ける。

「君たちに、明日が訪れるはずなんて、ないだろう…？」

両手を左右に広げ、答えを求めるような態勢を取る永遠。

「だって、俺の“永遠”を終わらせることなんて、誰にも…」

「う、っせえなあ」

自身の言葉を遮るその声に、永遠がすぐに、表情を曇らせる。その声が誰のものかなど、たった二人しか居ないこの空間の中では、考えるまでもなかった。

「あれだけの攻撃を食らって、まだ話せるのは立派だけど」

感心するように言いながらも、その表情に、冷たい笑みを浮かべる永遠。

「随分な、物言いだね…」

「やんわり言えねえくらい、イラッときちまったんだよ」

うつ伏せに倒れ込んだまま、表情すらも見えないアヒルから、永遠へと戻って来る言葉。

「俺の永遠”、“俺の永遠”て、お前は最初っからずっと、そればっかだ」

アヒルが床に両手を突っ張り、苦しげではあるが、必死に、その上半身を起こす。

「俺は永遠なんだ”、“永遠なんだ”って、諦めきったような、言葉ばかり言いやがって…」

上半身を起こしたアヒルが、ゆっくりとその顔を上げ、鋭い視線を、永遠へと向ける。

「聞いてて、イライラすんだよ！さっきっから、ずっとなあ！」

勢いよく声を張り上げるアヒルに、永遠が不快そうに、眉をひそめる。

「君がイライラするのは勝手だけど、俺は、事実を述べているだけであって、別に、諦めきった言葉を言った覚えは…」

「諦めきった言葉だろ？」

反論しようとした永遠の言葉を、アヒルがあっさりと否定する。

「お前の言葉は全部、“永遠だから明日がない”って、ただ嘆いているだけの、ただ諦めているだけの言葉だ！」

指摘するように、力強く言い放つアヒルに、永遠が珍しく、あからさまに表情を歪める。

「そうだよ。俺には“明日”がない」

一度、アヒルの言葉を認めるように、永遠が頷く。

「でも、それを口にしたからって、何だ？それも事実だし、第一、俺が“明日”を失くしたのは……」

「為介のせい？」

挟まれるアヒルの言葉に、永遠が思わず、続けようとしていた言葉を呑み込む。

「お前を巻き込んで、重症を負わせた為介のせい？お前を死なせたなくて、“永遠”の言葉を放った恵先生のせい？」

責めるような瞳を見せながらも、どこか悲しげな表情で、まっすぐに永遠を見つめるアヒル。

「力を持ち過ぎた、“言葉”のせい……？」

続けられるアヒルの言葉に、永遠が目を細め、険しい表情を見せる。

「……違う」

自らの今までの言葉を否定するように、アヒルがそっと、言葉を落とす。

「そう思ってたんなら、違うぞ」

アヒルがさらにまっすぐに上半身を起こして、何一つ遮るものもなく、真正面から、永遠を見つめる。

「お前が明日を失くしたのは、為介のせいでも、恵先生のせいでも、言葉の力のせいでもない」

確信を持つように、はっきりと言い切るアヒル。

「お前が明日を失くしたのは、お前が明日を“諦めた”からだ！」

大きく放たれるその言葉に、永遠の唇が、まるで震えるように動く。

「お前が“諦めた”から、お前から明日はなくなったんだ！」

「……！」

はつきりと告げられるアヒルの言葉に、大きく目を見開き、その表情を揺れ動かす永遠。アヒルの言葉を受けた永遠のその動揺は、見て取れるようであった。永遠が、言玉を持っていない左手を、力一杯握り締め、その指先から、赤い血を滴り落とす。

「“諦めた”から……？俺が、“諦めた”から……？」

ひどく戸惑った声で、永遠が、アヒルの放った言葉を繰り返す。

「ああ、そうだ」

聞き返した永遠へと、もう一度、強調するように、大きく頷くアヒル。

「お前が諦めなきゃ、お前の明日は、まだ……！」

「俺の、せい……？」

続こうとしたアヒルの言葉を遮り、震える声で、どこか弱々しく、問いかけを放つ永遠。永遠の視点は、すでにアヒルから離れており、アヒルの声など、もう届いていない様子であった。

「俺の……？」

「……どうして俺は、ずっとここに居るんだろう……」

「……桃雪もきつと、俺より先に死ぬよね……」

「……同じ顔、同じ姿、同じ、命……」

流れていく時の中を生きる、皆の姿に、一人取り残されていくように、ひどく孤独になった。大事な人間が、自分を置いて逝ってしまうだろう未来を想像し、ただ怯えた。いつまでも変わらない鏡の中の自分の姿に、何度も何度も、絶望した。

「なんで……？なんで、俺が悪いの……？」

「え……？」

まるで、善悪の区別も知らない子供のように、戸惑った声で、深々と頭を抱え、俯き、永遠が声を発する。一変した永遠の様子を見つめ、少し表情を曇らせるアヒル。

「だって…」

——私がお前を、一人にしたりしない——

——残念な人よねえ、恵の神も——

——世界中の皆から、“明日”がなくなってしまうばいいのに…

——あなたが望むというのなら、僕も、“明日”などいりません

……

「だって…諦めるしか、なかった…諦める以外、なかった…」
過去の出来事を、過去の言葉を、次々と思い出し、力なく言葉を続ける永遠。

——芽衣子…！——

——明さああああん…！！——

「他の道なんて、どこにも…どこにも、なかった…」

「永、遠…」

ひどく苦しんだ様子で言葉を続ける永遠に、まるで心配するように、アヒルが名を呼びかける。

「永遠、俺は…！」

「俺は」

何かを訴えるように声をあげたアヒルと、まったく同じ言葉で、その声を遮る永遠。

「俺は悪くない…！」

「ううう…！」

永遠が勢いよく叫びあげた途端、永遠の全身から、今までのどの光よりも強い白光が放たれ、その強烈な光に、アヒルの体が押され、アヒルが再び床へと倒れ込む。

「お前に…お前に、何がわかる…？」

顔を上げた永遠が、倒れ込んだアヒルへと、低く重い声で問いかける。その表情は、今までの冷たくも穏やかなものではなく、熱く、怒りや恨みの滲み出た、そんな表情であった。

「当然のように“明日”が来るお前に…“永遠”に終わらぬ時を知りもしないお前に…」

込み上げる怒りにか、大きく震える永遠の声。

「俺の、何がわかる…！？」

「うあああ…！」

さらに強く発せられる、永遠からの光に、また吹き飛ばされ、後方の壁へと背中を打ちつけるアヒル。永遠から放たれる光により、閉ざされたはずの空間の中で、荒々しい風が巻き起こる。恐らくは、永遠の逆鱗に触れてしまったのだろう。明らかに、今までの永遠とは、様子が違う。

「わかるはずがない。わかるはずが…」

——カモメっていうのよ——

——大きくなったわね、為介くん。見違えちゃった——

——また明日ねえ——

永遠には、ない言葉。永遠には、来ない未来。

「お前なんかに、わかるはずがない…！」

まるで泣き叫ぶように、必死に声を発する永遠に、壁にもたれかかったままのアヒルが、目を細め、険しい表情を見せながら、その首を、そっと横に振る。

「違う…違う、永遠」

何度も首を横に振り、何とか自分の言葉を、永遠へと届けようと

するアヒル。

「違う！俺が、言いたいの…！」

「“抑えろ”」

「うあ…！」

永遠が小さく言葉を落とした途端、アヒルの声が、言葉を形成しなくなり、アヒルの言葉が封じられる。出て来ない言葉に、焦りの表情を見せながらも、それでも必死に言葉を紡ごうと、大きく口を開くアヒル。

「無駄だよ。君の言葉は、もう誰の耳にも届かない」

必死に言葉を発しようとするアヒルに、永遠が冷たく言い放つ。

「君の言葉は、俺を強く傷つけた」

鋭く射るような視線を、アヒルへと向ける永遠。

「もう絶対に、許せない」

体中傷だらけで、言葉さえも封じられてしまったアヒルへと、永遠が容赦なく、言玉を向ける。

「もう絶対に、許さない。だから…」

永遠の右手の中で、言玉が、白色の光を放つ。

「見せてあげるよ。俺の力」

放たれる光を覆い隠すように、永遠が力強く、言玉を握り締める。

「この“を”の文字の、本当の力を…！」

永遠から伝えられるその言葉に、言葉すら発することの出来ないアヒルは、ただ、険しい表情を作った。

Word. 83 想イヲ、言葉ニ (1)

音士待機場所、前方。

「……………」

集まった多くの音士の、誰よりも前へと出て、今はもうない城の上空へと浮かぶ、真っ白な空間を、少し身を乗り出すようにして見つめるエリザ。その表情は真剣そのもので、空間から、一瞬も目を逸らそうとはしなかった。

「エリザ様」

背後から名を呼ばれ、エリザの視線が、やっと空間から離れる。

エリザが後方を振り返ると、そこには、心配そうな表情を見せた慧が立っていた。

「慧」

「もう少し後方へ、お退がり下さい。エリザ様」

慧が、エリザへと、促すように声を掛ける。

「あまり近い場所では、いつ何時、永遠の力が飛んでくるかも知れません。ご自身の言葉を守るためにも、もう少し後方へ…」

「慧」

エリザを心配する慧の言葉を、エリザは、静かに呼びかけ、遮る。

「私ね、誰よりも近くで、見たの」

「え…?」

その言葉の意味がわからず、慧が少し、戸惑うように首を傾げる。

「アヒルが、“安の神”になるところ」

——“当たれ” えええ! ——

——“あ”の、言葉…? ——

随分と、遠い昔に思える、ほんの数ヶ月前の出来事。

「一番近くで、誰よりも近くで、アヒルが神になるところを見た」

穏やかに、懐かしむように微笑んだエリザが、再び前方を見据え、上空の空間へと視線を戻す。そこに、アヒルが居る。アヒルが、戦っている。

「だから、最後も見えていたいの」

まるで願うように落とされる、エリザの言葉。

「誰よりも、近い場所で」

「エリザ様……」

少しでも近い場所で、アヒルの、神としての最後の戦いを見守りたいという、エリザの強い思いが、その背中からでも強く伝わり、慧はその行動を、止めるような言葉を放とうとは思えなくなった。

「仰せのままに、我が神」

深々と頭を下げ、慧が、エリザのすぐ後ろで待機する。

「アヒル……」

傍に立つ慧の気配を感じながら、エリザが空間を見つめ、そっと目を細める。

「頑張って、アヒル」

自身の心からの思いを、エリザが溢れ出すように、言葉へと変える。

「安の神は君。安の神は、君なんだから」

力強く言葉を繰り返し、エリザはまるで祈るように、胸の前で固く、両手を組んだ。

——見せてあげるよ。この“を”の文字の、本当の力を——

永遠ラスト・イデオムの四字熟語、“厭離穢土”をんり えど空間内。

「ほ、当、の……を……?」

永遠の言葉の影響を受け、上手く自身の言葉を発することが出来なくなってしまったアヒルが、永遠の放った言葉を、拙いながらに

繰り返し、ひどく戸惑った表情を見せる。

「いいね。とても不思議そうな顔だ」

そんなアヒルの表情を見て、永遠が満足げに笑う。アヒルのその反応が期待通りだったからか、永遠が剥き出しにしていた怒りが、少し収まる。

「すぐにでも説明してあげたいけど、でも君、確か、国語の授業は嫌いだっただろ？」

言葉の不自由なアヒルは、永遠の問いかけに、思わず素直に頷く。

「じゃあ、わかりやすいように」

不敵な笑みを浮かべ、永遠が言玉を持つ手を、アヒルへと向ける。
「実演で見せてあげるよ」

永遠の笑みが一層、冷たいものへと変わり、永遠の手の中の言玉が、強く輝く。

「刈^かれ」

「え…？」

永遠の口から放たれる、よく聞き覚えのあるその言葉に、アヒルが大きく目を見開く。だが、アヒルが驚いている間もなく、永遠の言玉から放たれた白い光の一閃が、まっすぐにアヒルへと迫った。

「あ、上がっ…！」

「禁^{きん}じろ」

「う…！」

拙いながらも、何とか言葉を放とうとしたアヒルであったが、永遠が次の言葉を放った瞬間、アヒルの全身を白い光が包み込むと、アヒルの口の中から、放とうとしていたその言葉が消えた。言葉を失くしたアヒルに、先程の一閃が迫る。

「う、うあああああ！」

不自由な言葉の中、叫び声だけはスムーズに発して、アヒルが一閃を浴び、後方へと吹き飛ばされる。一閃に右肩を大きく斬り裂かれながらも、アヒルはすぐに膝を立たせ、その場で上半身を起こした。

「“か”、“き”…？」

永遠が口にしたその文字を呟き、アヒルが益々、戸惑った表情を見せる。

「いい表情だよ、アヒル」

そんなアヒルを見て、永遠がまた、満足そうに笑う。

「顔が、信じられないって言ってる」

左手でアヒルの顔を指差し、永遠が口角をさらに吊り上げる。

「信じられないのなら、もう一度、見てみるかい？」

永遠の誘うような言葉に反応し、再び輝く永遠の言玉。

「“砕^{くだ}け”」

「グ…！」

アヒルの座り込んでいるその場の床が、突然、小さな爆発を起こして砕け散る。アヒルは身を横へと転がすようにして、何とかその衝撃を避ける。転がり避けたその場で、目の前に立つ気配を感じ、アヒルがすぐに顔を上げると、そこには、いつの間にか移動した永遠が立っていた。アヒルが態勢を整える間もなく、永遠がその口を開く。

「“蹴^け散らせ”」

アヒルの目の前に現れた永遠が、光輝く右足を振り切り、何の躊躇いもなく、アヒルを勢いよく蹴り飛ばす。またしても後方へと吹き飛ばされたアヒルは、空間の壁際へと追いやられ、その場にまた、座り込む。

「“凍^これ”」

アヒルが苦しげに声を漏らす中、永遠がまた言葉を発し、右腕に鋭い氷を纏わせる。

「“刺^させ”」

「あ…！」

永遠の腕から飛び出して来る鋭い氷に、大きく目を見開くアヒル。だが、壁際に追いやられ、言葉も不自由なアヒルには、最早、逃げ場などなかった。

「うあああ…！」

座り込んだままのアヒルの腹部に、容赦なく氷の刃が突き刺さった。アヒルの悲痛な叫びと共に、床に大量に流れ落ちる血。真っ白な空間に、その色がよく映える。

「縛^{しな}れ」

永遠が言葉を発し、帯状の光を生み出すと、その光で、床へ倒れ込もうとしていたアヒルの体を、無理やり起こし上げる。立ち上がる態勢に、さらに傷口が開いたのか、アヒルはまた、大きく表情を歪めた。

「いいザマだね、アヒル」

見るからに痛々しい表情を見せるアヒルに、楽しげに笑う永遠。そんな永遠を見て、アヒルが険しく目を細める。

「なん、で…」

重々しく、ゆっくりと口を開くアヒル。

「なん…みんな、言葉…」

「何故、俺が、他の五十音士、皆の言葉を使えるのか」

アヒルの言葉を代弁するように、永遠が、アヒルとは違って、スラスラと言葉を並べる。

「そう、聞きたいのかな？」

永遠の問いかけに、アヒルは厳しい視線を返すのみで答えた。

「じゃあ、その問いかけに答えてあげるよ」

アヒルの無言の答えを汲み取った様子で、永遠がさらに、言葉を続ける。

「今でこそ、五十音の神は、五十音最初の行、ア行の音士がやっているけれど、君も知っての通り、昔、つまり旧世代の神の頃までは、ワ行、五十音最後の行の音士たちが務めていた」

永遠の光により、立たされた状態で身動きの取れないまま、アヒルが真剣な表情を見せ、永遠の言葉へと耳を傾ける。

「それが何故か、わかる？」

その問いに、少し眉をひそめるアヒル。そんなアヒルを見て、永

遠がそつと微笑む。

「それはね、五十音の後半の音を持てば持つほど、その音士の力が強かったからだよ」

「後半の、音……？」

「そう。五十音順の数字の大きさが、強さの指標となるんだ」

わずかに首を傾げたアヒルに、永遠が丁寧に言葉を続ける。

「つまりは、君も持つ第一音が一番弱くて、俺の持つ第五十音が一番強いってことだよ」

はつきりと言い放つ永遠に、アヒルの表情が曇る。

「だからこそ、旧世代の神は、五十音で最も後半の五人、ワ行“わゐうゑを”の音士が務めた」

続く永遠の言葉をしっかりと耳に入れながらも、アヒルはまだ、どこか戸惑いの表情を見せていた。後半音の方が強く、それにより旧世代の神が決められていたということは理解出来たが、それが、永遠が他の文字の言葉を使えることと、どう関係しているのかが、繋がらなかった。

「君は思っていることが、すぐに顔に出るね」

永遠の言葉に、考え込むように視線を逸らしていたアヒルが、また永遠の方を見る。

「そうだね、じゃあ本題。何故俺が、他の音士たちの言葉を使えるのかについて、説明していこうか」

アヒルの考えていることをすべて、理解している様子で、永遠が話す。

「さっき言ったように、俺の持つ“を”の文字は、五十音、第五十音。五十音最後にして、最強の文字だ」

永遠がどこか、得意げに微笑む。

「この文字が失われれば、五十音すべての力が消える」

その言葉を受け、表情に緊迫感を走らせるアヒル。それは、すでにウズラから聞き及んでいることではあったが、永遠自身が知っているかどうかは、アヒルの知るところではなかった。

「それほどに、他の文字に影響を及ぼすこの文字を、真に解放した音士は…」

永遠が言玉を力強く握り締め、その握り締めた手を、胸へと当てる。

「五十音、すべての文字の言葉を得る」

永遠の告げたその言葉に、アヒルが衝撃を走らせる。

「つまり、俺は、君たち、他の音士全員の言葉を使うことが出来るんだよ」

胸に当てていた手を離し、素早く言玉をアヒルへと向ける永遠。

「^{すす}進め」

永遠の言葉により、アヒルの体を縛りつける光が、勝手に移動し、アヒルの体を、永遠のすぐ前まで連れて行く。

「こんな風にね」

アヒルの胸へと言玉を当て、永遠が冷たく微笑む。

「^せ攻めろ」

至近距離から勢いよく、アヒルの胸へと突き刺さる白い光の刃。

「^そ削げ」

「うああああ…！」

さらに無数の光の刃を永遠が放つと、その刃により、アヒルの体を縛りつけていた光も途切れ、アヒルが再び後方へと吹き飛ばされ、力なく床へと倒れ込む。すでに全身傷だらけで、床を染め上げてしまいそうなほどの、赤い血が流れ出していた。

「あ」と“う”、二つの文字を持っているんだったね。君は」

傷だらけで倒れ込みながら、それでも必死に奮い立ち、何とか起き上がろうともがいているアヒルを、特に興味のなさそうな瞳で見つめながら、永遠がゆっくりと言葉を発する。

「でも俺は、五十だ」

耳に入るその言葉に、険しい表情を見せるアヒル。

「さあ、どうする？ 安の神」

「ク…！」

アヒルが痛みを堪えるように、強く唇を噛み締め、何とか上半身を起こして、傷だらけの右手をあげ、手の中の真っ赤な銃を、永遠へと向ける。

「当、たれ”…！」

少し詰まらせながらも、何とか言葉を発し、真っ赤な弾丸を永遠へと向けるアヒル。放たれた弾丸は、迷うことなく、まっすぐに永遠へと向かっていくが、永遠は迫り来る弾丸を前にしても、顔色一つ、変えはしなかった。

「耐えろ」

目の前に光の防御壁を張り、アヒルの弾丸を受け止める永遠。

「散れ」

永遠が次の言葉を放つと、壁が止めていた弾丸が、突然、粉々に砕け散った。散りゆく赤い光の粒を見つめ、アヒルがまた、険しい表情を見せる。

「貫け」

「うあ…！」

鋭い光線のようなものが駆け抜けると、目にも留まらぬ速さで、アヒルの右腕を貫いた。肩を負傷し、さらに二の腕まで貫かれ、握っているだけの力も失くしたのか、アヒルの右手の指が、真っ赤な銃の引き金から抜け落ちる。貫かれた衝撃に、全身も耐えられず、アヒルはまた再び、床へとひれ伏した。

「つまらないよ、アヒル」

少し肩を落とした永遠が、その表情から笑みを消し、どこか嘆くように呟く。

「こんな、圧倒的な勝負は」

飽きたように言いながらも、永遠がさらに、アヒルへと言玉を向ける。

「出ろ」

言葉に反応し、アヒルの倒れ込んでいる付近の床が、持ち上がるように、周囲より少し、高さを増す。

「^{とが}尖れ」

「う、うあああああ……!!」

永遠の言葉により、盛り上がった部分の床から、無数の棘が突き上がり、倒れ込んでいたアヒルの全身を、思いきり突き刺した。またしても赤い血が舞い、アヒルが、今まで以上に激しい叫び声をあげる。余程の痛みにか、アヒルが動かぬ体を必死に持ち上げ、後方へと仰向けに倒れ込んで、棘の突き出た床から、必死に逃れる。

「浴びた言葉は、十五音」

倒れたままのアヒルを見つめ、永遠がそっと目を細める。

「視界も霞んできた頃じゃない？」

永遠の問いかけに対しての、アヒルの答えはない。答えないのではなく、答えられないというのが、今のアヒルの正しい状態であった。永遠の言葉の通り、すでに視界は霞み始め、意識が遠のいてきているのか、耳に入る永遠の言葉も、あまり耳に入って来ない。

「苦しいだろ？ねえ、アヒル」

口調だけは優しく、永遠がアヒルへと声を掛ける。

「そろそろ、“^を終わり”にする？」

苦しみの終わりへと誘うように、永遠は、アヒルへと言葉を向けた。

「ハア、ハア…」

「ん？」

永遠が言玉を向け、アヒルにとどめの一撃を向けようとした、その時であった。大きく息を乱しながらも、震える左手を、わずかに上げたアヒルが、苦しげな、だが、まっすぐに鋭い目で永遠を見つめ、左手の金色の銃の銃口を、永遠へと向ける。

「う…」

乱れる呼吸の中、必死に自分の文字を口にするアヒル。

「撃て”…！」

アヒルが血だらけの指で、強く引き金を引くと、今度は金色の弾丸が、まっすぐに永遠へと向かっていく。

「終わる気はなさそうだね…まったく、往生際の悪い」

迫り来る弾丸を見つめながら、永遠がどこか、呆れたように肩を落とし、手の中の言玉を光らせる。

「“無^なくせ”」

永遠の言葉により、アヒルの弾丸が、一瞬にして、どこかに消える。消された弾丸に、わずかに表情をしかめながらも、それ以上、銃を持ち上げていることが出来ずに、アヒルは力なく左手を下ろした。だが依然として、鋭い瞳だけは、まっすぐに永遠の方を向いている。その突き刺すような視線に、不快感でも覚えたのか、その表情を曇らせる永遠。

「あまり、好きじゃない顔だな」

鋭い視線でアヒルを見つめ返しながら、永遠が左手で、軽く頭を搔く。

「君のその目がまるで、“諦めない”とでも、言っているようだ」
自身の発した言葉を嫌がるように、永遠が数度、首を横に振り、また言玉をアヒルへと向ける。

「あの、意味のない言葉を」

永遠の手の中で、一層輝く言玉。

「躓^{にじ}れ」

言玉からまた新たに光が放たれ、床に仰向けに倒れ込んだままのアヒルへと、上空から踏み潰すように、覆いかぶさる。

「抜^ぬける」

覆い尽くしていた光の中から、さらにボロボロの状態となったアヒルの体が、自動的に出てくる。

「振^ねじれ」

「ううう…！」

腕を振じり上げられるようにして、床に倒れていた状態からまた、立ち上がらされるアヒル。

「昇^{のぼ}れ」

立ち上がらされたアヒルの体が、さらに上空へと持ち上げられていく。どんどんと上昇したアヒルの体は、もう間もなく天井かというところで、やっと止まった。高々と舞い上がったアヒルを見上げ、そっと目を細めながら、永遠が言玉を、そちらへと向ける。

「爆^はぜろ」

「うわああああ！」

上空に浮かぶアヒルの周辺が、突如、激しく爆発し、その衝撃に巻き込まれたアヒルが、またしても痛々しい叫び声をあげ、またその傷を増やし、力なく床へと下降してくる。床に叩きつけられるようにして、倒れ込んだアヒルの右手から、真っ赤な銃が零れ落ちた。

「どう？アヒル」

上へと向けていた言玉を下ろし、アヒルの方を見て、永遠が静かに問いかける。

「すべての音士の文字を持つ、俺の力は」

アヒルの、見るからにもう、立ち上がることに出来ない様子を見て、満足げに微笑む永遠。

「う、ううう…」

だがすぐに、その永遠の表情は曇る。指一本、動かす力すら、残っていないであろう様子であったアヒルが、必死に傷だらけの右手を伸ばし、零れ落ちた目の前の銃を、また、その手に取ろうとしている。まっすぐに銃を見据えるその瞳には、相変わらず、力強い何かが宿っている。

「まだ、“諦めない”というのか…」

不快そうに表情を歪めながらも、少し感心した様子で呟く永遠。

「……“捻り上げる”」

永遠が、銃を取ろうと、必死に伸ばされていたアヒルの手を捻り上げ、その行動を阻止する。

「本当に、往生際が悪いね…」

呆れるように、忌々しそうに言いながら、永遠がその歩を進め、倒れているアヒルのもとへと歩み寄って行く。近づく永遠に合わせるように、アヒルの捻り上げられた手が、さらに上へと引っ張られ、アヒルの体がまた立ち上がり、やって来た永遠と、視線の高さが揃う。

「ねえ、いつになったら、諦めるの？」

そのシンプルな問いかけに、アヒルはそつと目を細めた。

「あき、らめたら…そこで、言葉…は、死ぬ…」

あまりの傷に、唇も痙攣し、余計に覚束なくなった口元で、アヒルが、何とか聞きとれる程度の、言葉を紡ぐ。

「俺は、言葉、を…死なせ、ない…だから…俺は、“諦めない”…」

弱々しい口調の中、その言葉だけが、はつきりと放たれる。言葉を放ったアヒルは、恐れることなく、怯えることなく、まっすぐに永遠を見つめていた。その力強さは、永遠を圧倒しそうなほどに、まだまだ輝いている。そんなアヒルの言葉と瞳に、永遠の表情が、凍るように冷たく変わる。

「そうか。今、やっと気付いた」

自分で確かめるように、言葉を落とす永遠。

「ねえ、アヒル」

優しく話しかけながらも、永遠が、冷たく笑う。

「俺は、君の言葉の、すべてが嫌いだ」

切り捨てるように言い放ち、永遠が言玉を、アヒルの口元へと当てる。

「^{ふう}封じろ」

言玉から放たれた真っ白な光が、アヒルの口の中へと、吸い込まれるようにして消えていく。

「う…！うあ…あ…！」

必死に口を開くアヒルだが、その声は、一つの言葉にもならない。言葉にならぬ声に、戸惑いと驚きの混じり合った表情を見せるアヒル。そんなアヒルを目の前に、永遠がまた、楽しげに笑う。

「本当は、もう、この場で、君の言葉を終わらせてもいいんだけどね…」

何とか言葉を発そうと、もがき続けるアヒルを前に、余裕の表情を見せる永遠。少し後退し、アヒルとの間に距離を取る。

「けど、それじゃあ、つまらない。まだ、五十音のすべてを使ってもないしね」

玩具を見つけた子供のように、永遠が、無邪気に笑う。

「だから、もう少しだけ、俺と遊んでよ。アヒル」

距離を取ったアヒルへと、永遠がまた、言玉を向ける。

「すべての終焉、その前に」

アヒルを捉え、輝く言玉。

「^{へだ}隔たれ」

永遠が言葉を発すると、アヒルと永遠との間に、白い光の壁が現れる。

「^{ほうむ}葬れ」

隔たった空間の、アヒルの居る側にのみ、天井から無数の光粒が落ちる。強い霞のような光を浴び続け、アヒルが表情を大きく歪めるが、その苦しみの声すら、言葉にならず、ただ静かに受けるだけとなる。

「舞^まえ」

アヒルがまだ光粒を浴びている中、永遠はすでに次の言葉を発し、その背に、光の翼のようなものを生やして、高々と上空に舞い上がる。上へと移動すると、光粒を浴び続け、苦しい表情を見せているアヒルの姿が、より一層、はっきりと見えた。

「いい眺めだよ、アヒル」

そっと微笑んで、言葉を落とす永遠。だがその声は、下方にいるアヒルの耳には、届かないだろう。上空に浮かんだ永遠が、背中の翼を広げると合わせるようにして、その両手を開く。

「満^みちれ」

広がった翼が、言葉に反応し、その輝きをどんどん増していく。集まる白い光は、強いものへと変わっていき、やがて、空間全体を照らしだすほどに輝く。直視すれば、目がおかしくなってしまうだろう。それほどに強い光の中で、永遠が言葉の通り、満たされたように笑う。

「迎^{むか}えろ」

永遠が左手の指を、少し上げるような動作を見せると、まだ降り注ぎ続けていた光粒の中から、すくい上げられるようにして、アヒルが永遠の居る上空へと上がって来る。永遠と同じ高さまで来ると、アヒルの体が、自然と止まった。

「君の師の言葉だ」

そう言って永遠が、アヒルへと言玉を向ける。

「滅^{めつ}せ」

広がった翼から、一面に広がるほどの強烈な白光が放たれ、それを全身に直に浴びたアヒルが、また血を流しながら、ゆっくりと下降していく。床へと落ちていくアヒルを見下ろしながら、永遠が、次の言葉を放とうと、また言玉を握った。

「も…」

その文字を口にしたところで、永遠の言葉が止まる。今まで、何の躊躇いもなく言葉を発し続けて来た永遠にしては、珍しい光景で

あった。

「これは、君の言葉だものね……」

左手に宿る、今は亡き神附きに語りかけるように、そつと言葉を落とす永遠。そして視線をまた、下降していくアヒルへと戻すと、永遠は、開いていた口の形を変えた。

「宿^{やど}れ」

続いたの言葉を放ち、永遠が、背中の翼の光とはまた別に、右手に、強い白光を纏う。

「行^ゆけ」！

永遠が鋭く右手を払い、纏った光を、まだ下降途中のアヒルへと向ける。その光がアヒルへと直撃すると、アヒルの下降速度は一気に増し、永遠の放った光と共に、勢いよく地面に落ちた。傷を負い過ぎたアヒルは、最早、表情を動かすことすら苦痛なのか、その表情を歪めもせず、ただ、地面に倒れ込む。

「寄^よれ」……

静かに言葉を落とした永遠が、その背の翼は残したまま、ゆつくりと床へと下降していく。

「雷^{らいげき}撃」

「うう……！」

倒れたままのアヒルへと、真っ白な雷を落とす永遠。すでに傷だらけのアヒルが、さらに全身を雷で焼かれる。

「これで、最後だ」

やり切った様子で言っ、永遠がまた、言玉をアヒルへと向ける。
「分^わかて」

永遠の言葉により、言玉から放たれる、真っ白な光の一閃。その一閃が、目にも留まらぬ速さで空中を駆け抜け、雷に焼かれたばかりのアヒルを、後方へと勢いよく弾き飛ばした。吹き飛ばされたアヒルは、背中を壁へとぶつけ、そのまま壁にもたれかかるようにして、その場で座り込む。

「……………」

顔を俯けたアヒルの視界に、床に転がっている、先程落とした真っ赤な銃の姿が入る。先程追い込まれた場所を同じ場所まで、吹き飛ばされてきたようだ。遠のく意識の中、その銃をまっすぐに見つめ、アヒルが少し目を細める。

「どうだい？アヒル」

離れた場所からアヒルを見つめ、永遠がそっと問いかける。

「これが、“を”の文字の本当の力」

どこか誇らしげに言い放ち、言玉を持つ右手を、胸へと当てる永遠。

「五十音、すべての文字の言葉を得た、“を”の文字の真の力だよ」
永遠の言葉が続くが、座り込んだままのアヒルは、響き渡る声にも、顔を上げようとはしなかった。最早、顔を上げる力も、残っていないのかも知れない。アヒルの様子は気にせず、永遠がさらに、言葉を続ける。

「本当はね、いらないんだよ。四十人も、五十人も、五十音士なんて」

軽く左手をあげ、少し首を横に振って、自分の主張を続ける永遠。
「俺だけが、“を”の文字を持つ俺だけが、ただ一人居れば、それで十分だよ。五十音の、この世界は」

口角を吊り上げ、永遠が笑う。

「君もそう思うだろ？アヒル」

同意を求めるように、永遠がアヒルへと問いかけるが、勿論、アヒルからの言葉はない。

「ああ、そうか。もう君には、言葉はないんだった」

決して忘れていないはずもないだろうに、今、思い出したかのような言い方をしてみせる永遠。そんな永遠の言葉が続く中、ひたすらに俯いたままのアヒルは、ただ、落ちている自身の銃を見つめていた。

「すべての文字も使ったし、そろそろ、遊びも終わりにしようかな」
そう言うと、永遠が、胸に当てていた右手を離し、今まで以上に

ゆっくりとした動作で、言玉をアヒルの方へと向ける。素早く動かずとも、アヒルにはもう、何をする力も残っていないことを、永遠は十分にわかっていた。

「ありがとう。結構、楽しめたよ」

労うように言って、永遠が鋭く、目を細める。

「さようなら、安の神」

永遠の右手の中で、強く輝く言玉。

「“終^をえろ”」

終末の光が迫り来る中、アヒルはまだ、自身の銃を見つめ続けた。
いた。

「……………」

どんどんと遠のき始めている意識の中では、永遠の言葉も、向かってくる白い光も、まるで、別世界のここのように思えた。だからか、終末の光を向けられても、焦りの色一つ浮かべず、アヒルはただ、茫然としている。

——ねえ、アヒるん……——

遠のく意識の中で、響く声。

——もしね、アヒるんがエヘン虫で、すべての言葉を失ったとして、それでも、どうしても、私に愛の告白をしたいとして……——
——その時、アヒるんは、どうする……?——

それは、かつて囁が、アヒルへと向けた問い。その時、アヒルは、
答えた。

——叫ぶ、かな。叫び続ける——

——どんなに声を出しても、それは言葉にならないのに……?——

——ああ——

どんなに声を出しても、言葉にならない。今とまったく同じ状況になった時、どうすると問われ、そして、その時のアヒルは、迷わずに答えた。

——叫び続けてたら、いつか……——

思い出される自分自身の言葉に、アヒルがきつく、唇を噛み締める。

——いつか、俺の想いが言葉になる！——

「……！」

遠のく意識を連れ戻すかのように、はつきりと頭の中に響く言葉。閉じかけていた目を見開き、アヒルが、落ちている真っ赤な銃へと手を伸ばす。もう動けないだろうと思っていた永遠は、銃を手にするアヒルの姿に、少し眉をひそめたが、すぐにその表情を笑みへと変えた。

「愚かな…今更、銃を手にとったところで、君の言葉はもうっ…」

「あ…」

「何…？」

はつきりと響き渡るその文字に、永遠の表情が、再び曇る。銃を手にしたアヒルは、鋭い瞳を見せ、銃口を永遠へと向けて、強く、引き金を引いた。

「“^あ当たれ”…！」

アヒルの口から、はつきりとした言葉が発せられると同時に、赤い弾丸が、銃口から放たれた。

アヒルが再び手にした銃から放たれた弾丸は、先程まで以上の速度で空中を駆け抜け、永遠がアヒルへと向けた終末の光を、力強く弾き飛ばす。

「何、だと…!？」

冷静だったその表情に、大きく衝撃を走らせる永遠。アヒルの弾丸が、永遠の光を弾いたことというよりも、アヒルが言葉を放ったことへの驚きの方が、大きいだろう。光を弾いた弾丸は、まっすぐに永遠へと向かっていく。防ぐ準備など整えていなかった永遠は、きつく唇を噛み締めた。

「ぐううう…!」

正面から、もろに弾丸を喰らい、後方へ吹き飛ばされこそしなかったものの、永遠の口から、苦しげな声が漏れる。

「何故、何故だ…？」

弾丸を浴び、全身を斬り裂かれた永遠は、わずかに呼吸を乱し、肩を上下させながら、戸惑いの表情をアヒルへと向ける。

「君の言葉は、確かに、“封じた”はず…」

戸惑いに揺れる瞳が、激しい傷を負いながらも、両手に銃を持ち、再び立ち上がったアヒルの、その鋭い瞳を捉える。

「なのに何故、言葉を口に出来る…!？」

動揺からか、先程までの冷静な口調とは一転、声を張り上げて問いかける永遠。

「叫び続けてた」

アヒルが短く、答えを投げかける。

「心の中で、叫び続けてた。ずっと」

「叫び、だと…?」

「ああ」

さらに戸惑いの色を濃くし、聞き返す永遠に、アヒルがゆっくり

と頷く。

「そしたら、想いが、言葉になった」

アヒルの言葉が、迷いなく、はっきりと響き渡る。

「俺の想いが、言葉になった」

“「想いが言葉に”、だと…?”」

先程と同じように、永遠がアヒルへと問いかける。だが、先程よりも表情は険しくなり、その音調は少し低くなったようにも聞こえる。

「ああ」

永遠の変化も気にせず、アヒルがまた、ゆっくりと頷く。

「想いを乗せるのが、言葉。自分の中の想いを、相手に伝えるのが、言葉だ」

戻った言葉で、アヒルは、自身の主張を進める。

「想いを力に変えるのが、言葉だ」

さらに熱が入るように、その言葉がより一層、はっきりと響く。

「俺の知っている五十音士は…」

――神付きであることを、何よりも誇りに思っている！――

――すべての“痛み”を消す…この、言葉で！――

――俺が、俺だけが“神”だ！――

――言葉に贖わせる…それが、言葉の神である、俺の役目！――

「全員、その強い想いを力に変えて、言葉を口に使っていた」

かつて戦った者たちの言葉を思い出し、アヒルがどこか、懐かしむように、口元を緩める。

「強い想いを持って、その文字に誇りを持って、言葉を放っていた」
少し視線を下へと向けていたアヒルが、また上を向き、永遠を見つめる。

「確かにお前は、五十音、すべての文字の力を持っているのかも知れない。お前一人で、五十音、すべての言葉が放てるのかも知れな

い。けど」

言葉を付け加えたアヒルの瞳が、鋭く光る。

「お前は、他の五十音士たちの代わりになんて、なれない」

もう決まっていることのように、アヒルがはっきりと言いつつ。

「自分の文字を誇るのが、自分の想いを言葉に込めるのが、五十音士だ」

アヒルが銃を握り締める両手に、精一杯の、力を込める。

「ただ、自分の苦しいって想いを、辛いつて想いを、力で、相手に押しつけるだけのお前に、皆の代わりなんて、出来ない！」

主張を強めるように、大きく声を張り上げるアヒルに、永遠の表情が、あからさまに大きく歪む。だが、歪んだその表情は、すぐに平静さを取り戻した。

「参ったな……」

小さく、短く、そつと言葉を落とす永遠。

「まさか、俺が神になった頃には、生まれてもいなかったような子供に、俺自身の言葉を否定されるとは、思ってもみなかった……」

静かに続くその言葉には、単調だが、確かに、怒りがこもっている。

「本当に君は、どれだけ、俺の心を傷つければ、気が済むんだろう……？」

誰へでもない問いかけを向けながら、永遠がゆっくりと視線を動かしていく。

「ねえ、アヒル……」

突き刺さるような永遠の視線を浴びると、アヒルの額から、静かに汗が流れ落ちる。永遠の纏う、威圧感は重たく、ただ見られただけだというのに、アヒルの全身に悪寒が走るようであった。

「言葉が戻ったくらいで、俺に勝った気でもいるのか？」

鋭い瞳を向けたまま、永遠が今度は、アヒルへと問いかける。

「言葉で、言っておいてやるよ。君の言葉が戻ったところで、君は俺には勝てない」

確信を持って、はっきりと言いつ放つ永遠。

「消し去れ」

「う…！」

言葉を放ちながら、アヒルの方に向かって、永遠が右手を一振りする。軽く払っただけなのに、アヒルの正面へと強い風が吹き抜けると、アヒルの体を纏っていた、淡い青色の光が、一瞬にして消し飛んだ。空中へと掻き消えていく青色の光を目にし、アヒルが思わず、小さく声をあげる。

「扇子野郎の、言葉がつ…」

「これでもう、“生きる”の言葉は、無効化された」

アヒルの周りから消え去った青光に、永遠が、満足げに笑う。

「これで、心置きなく、終わらせることが出来る」

目を細めた永遠の笑みが、冷たいものへと変わる。

「君の、言葉を」

永遠のその言葉に、アヒルの表情が、より一層、厳しいものへと変わる。為介の言葉が無効化された今、一瞬でも永遠の終末の光を浴びれば、その時点で、アヒルの言葉は、すべての行動は、停止されてしまう状態となったということだ。

「満ちれ」

永遠が言葉を発すると、背中の翼が広がり、翼の持つ輝きが、またどんどん増していく。光と共に集約していく、言葉の力を肌を感じる、アヒルの眉間に皺が寄る。

「さあ、本当に終わりにしよう。アヒル」

まるで宣言でもするように、永遠がはっきりと告げ、言玉を持った右手を振り上げる。

「削げ…！」

「グ…！」

向けられる無数の光に、アヒルは、険しい表情で、唇を噛み締めた。

「圧倒的不利ですわね…」

永遠の城跡から遠く離れた場所で、ウズラや他の音士たちと共に待機している和音が、ポツリと言葉を落とす。その声に気付き、和音のすぐ横に立っていた箆也が、振り向いた。

「見えるのか？」

「わずか、ですが…」

箆也の問いに答える和音の、その視線の先には、和音の言玉の變化した姿である、真っ赤な手鏡。鏡の中に映っているのは、霞み過ぎていてわかりにくいが、アヒルと永遠の様子であった。両手で手鏡を握り締めた和音は、食い入るようにして、その鏡の中を覗き込んでいる。

「彼の四字熟語が無ければ、もう少し、はつきりと見られるのですが…」

「圧倒的不利とは、どういうことだ？ 神が押されているのか？」

箆也はアヒルの様子を気に掛けている様子で、少し焦ったように、次々と問いかけを和音へと向ける。向けられる問いかけに、和音は顔を上げ、厳しい表情を箆也へと向けた。

「はい」

大きく頷く和音に、箆也が眉をひそめる。

「安の神は、必死に戦っています。その限界を、遥かに超える程の力で。ですが」

言葉を付け加え、和音が表情を曇らせる。

「持っている文字の力の数が、あまりにも違い過ぎる…」

そう言って和音は、どこか悔やむように俯いた。

「数とは、どういうことだ？」

そこへ、箆也の少し後ろに立っていた檻也が、戸惑った様子で口を挟む。

「永遠の持つ文字は、“を”、一つのみのはずだろうか？ 文字の数だ

けなら、“あ”と“う”の二つの文字を持つ安の神の方が、勝っているんじゃない？」

「“を”の文字は、五十音、すべての文字を司る文字」

檻也の言葉を遮るようにして、声を発したのは、三人よりも手前に立ったウズラであった。ウズラは檻也たちに背を向けたまま、前方に見える空間を見つめ、言葉が続ける。

「“を”の文字を真に解放した者は、すべての文字の力を得ることが出来る」

「すべての文字、だと…？」

「そんな…」

ウズラの解説に、一気に険しい表情となる檻也と空音。

「そんな…！そんな、すべての文字の力を持った者になど、勝てるはずが…！あっ…」

思わず声を張り上げ、和音へと訴えようとした檻也であったが、籠也の姿を目で捉え、言葉を途中で呑み込む。

「す、済まない…」

「いや」

申し訳なさそうに俯く弟に、籠也は、そつと首を横に振って応えた。

「これは、賭けです」

二人のやり取りを見ていた和音が、凜とした声を響かせる。

「この世界中の、すべての言葉を懸けた賭け…」

そつと目を細めた和音が、手鏡から視線を上げ、前方の空に浮かぶ、真っ白な空間を見つめる。

「そして、わたくしたちは、安の神に、彼に賭けた」

空間を見据える瞳を鋭くし、和音がはっきりと言い放つ。

「だから後は、彼を、神を信じ、祈りましょう」

力強いその言葉は、まるで、不安がる自分自身に言い聞かせる言葉のようにも聞こえる。和音の言葉に、籠也は頷くことが出来ず、険しい表情で、そつと下を向く。

「クっ…」

「恵ちゃん…」

悔しげに唇を噛み締める恵を見つめ、心配そうに目を細めるスズメ。

「本当に、祈るだけでいいのかな…」

「え…?」

迷うようなその声に、和音が振り返る。

「奈々瀬」

和音の振り返った先に立ち、アヒルの居る空間を、ただまっすぐに見上げているのは、七架であった。同じように振り返った籠也が、和音の代わりに、七架の名を呼ぶ。

「だって、神様に祈るだけで、祈った人が全員、救われるなら、きっと、皆、祈る以外には、何にもしないよ」

和音たちの方は見ずに、ただ空間だけを見つめ、七架が言葉を続ける。

「きっと皆、一生懸命、頑張ったりしない。神様に祈るだけで救われるなら、きっと人は、頑張ることをやめてしまう」

七架のその言葉に、どこかハツとしたように、表情を動かす和音。「それじゃ、いけない。祈るだけじゃ、何にもならない」

続く七架の言葉を聞きながら、金八やシャコに囲まれ、傷の手当てを受けているイクラが、そっと視線を地面の方へと落とす。

——祈ったのに…毎日、一生懸命、祈ったのにっ……

——どうして先生を救ってくれなかったんだよお…! ——

「……っ」

祈りの届かなかった過去を思い出し、イクラがそっと目を細める。

「私は、祈るだけでいたくない。何かしたい」

胸の前で固く両手を握り締め、七架がまるで、願うように、言葉を放つ。

「何か、してあげたい」

空間を見つめる七架の瞳に、薄らと滲む雫。

「私の神様のために」

見つめる空間の中に居るアヒルを思い、七架が力一杯、両手を握り締める。

「何かしたい」…！」

七架の言葉に反応するように、握り締められた両手の中で、七架の言玉が、淡い光を放つ。

「奈守さん…」

「お姉ちゃん…」

今にも泣き出しそうなほどに、必死に、アヒルを思う七架のその姿に、胸を打たれるような気持ちで、和音がそっと目を細める。六騎も、姉のその姿に、悲しげな表情を見せる。

「俺も、なりたいです」

七架の言葉に同調するように、言葉を放ったのは、保であった。

「アヒルさんの助けになりたい。何でもいい、ほんの少しでもいいから」

七架と同じようにアヒルの居る空間を見つめ、保がそっと、笑みを浮かべる。

「助けになりたい」

保の切実な言葉が発せられると、保の右手の中の言玉が、保の気付かないところで、徐々に輝き始める。

「そうね…」

七架の肩に手を置き、そっと七架のすぐ横へと並んだのは、囁であった。

「私は、支えたいわ…」

二人同様、アヒルの居る空間を見上げ、囁が穏やかに微笑む。

「皆の言葉を背負って、きっとボロボロになってるだろう、私の神様を」

遠くに居るアヒルを思い、囁が目を細める。

「支^さえたい」…」

その言葉に反応し、囁の言玉も、そっと輝く。

「誰よりも近くで神を支え、誰よりも強く、神の力となれ」

「箴也…?」

急に、流れの繋がらない言葉を発した箴也に、和音が戸惑うように振り向く。

「危うく、先代加守の言葉を、忘れるところだった」

自分自身を咎めるように、額へと軽く手を当てて、またその手を下ろした箴也が、笑みを浮かべ、和音の方を見る。

「僕は、神付き」

箴也が誇らしげに言葉を放ち、他の三人と同じように、まっすぐに、アヒルの居る空間を見つめる。

「僕は、我が神へ祈りを捧げたいんじゃない。我が神を見守りたいんじゃない。僕は、我が神を」

次の言葉を強調するように、箴也が言葉の間に、少しの時間を置く。

「勝^かたせたい。“勝^かたせたい”んだ」

珍しく声を張り、箴也が決意を固めるように、はっきりと言葉を口にする。

「“明日”、共に笑い合うために…!」

箴也の言葉に反応し、箴也の右手の中で、言玉が強い、赤色の光を放ち始める。輝き始めた四人の言玉は、互いの言玉に呼応するように、その輝きを増し、やがて光が上空へと舞い上がって、一つに合わさっていく。

「な、何だ?」

青い空の中で、一際輝く赤い光を見上げ、戸惑いの表情を見せるスズメ。他の音士たちも皆、上空を見つめ、その赤い光を見守る。皆の視線が集まる中、光はさらに強さを増し、まるで爆発でもするかのように、勢いよく弾け飛んだ。

『ううう…!』

降り散る眩い光に、見上げていた音士たちが皆、思わず目を伏せる。

Word. 83 想イヲ、言葉ニ (4)

< “始まれ” …>

「え…？」

眩い光の降り注ぐ中で、一つの言葉が耳に届いたような気がして、保がふと、顔を上げる。

「今の、は…」

弾け飛んだ光がすべて降り落ち、やっと元の空へと戻った上空を見上げ、戸惑うように呟く保。周囲を確認するが、誰も戸惑ったような表情は見せていない。言葉が聞こえた様子があるのは、保だけだ。

「ん、んん」

「紺平！」

大きく響き渡るその声に、保が思わず振り返る。

「あ、あれ？ 僕…」

「紺平！ 紺平、紺平いいえ！」

「空音、さん…？」

保が振り返ると、ゆっくりと起き上がった紺平に、勢いよく抱きつき、涙を流す空音の姿があった。空音の様子に、目を覚ましたばかりの紺平は、ひどく困惑している。

「何故、紺平が…」

「オウ、リーゼントマン！」

目を覚ました紺平に戸惑っていた檻也が、そのすぐ隣の場所で響き渡る声に、振り向く。紺平同様、目を覚まし、起き上がった守に、ライアンが、喜び溢れる大声を向けていた。

「良かったあ！ リーゼントのお兄ちゃん！」

「ホント良カッタデューズ！ コレゾ、私ノ日頃ノ行イノ賜物！」

「よくわかんねえけど、絶対、お前の日頃の行いは関係ねえ」

起き上がったばかりの守に、心底、嬉しそうに、笑顔を向ける六騎とライアン。まだ少し寝ぼけたような表情で、乱れた髪型を整えながらも、守がしつかりと、ライアンに突っ込みを入れる。

「チラシくん！」

「ニギリちゃん……？」

「誠子、徹子、音音！」

「お姉さま、わたくしたち、一体……」

紺平と守だけでなく、チラシや誠子など、先程の戦いで、言葉を終わらされたはずの音士たちが、次々と目を覚ましていく。再び動き出した仲間の姿に、皆、歓喜し、涙を流す。

「何故、皆さんが……」

「ふわぁ、よく寝たぁ」

「あ……」

不思議そうに、目覚めた皆を見回していた雅が、背後から聞こえてくる、よく聞き覚えのあるその声に、大きく目を見開く。すぐさま振り返りたい気持ちはあったが、雅はどこか恐る恐る、ゆっくりと後方を振り返った。そこには、皆と同じように起き上がった、一人の男の姿がある。

「おはよ、雅くん」

男は、振り返った雅の方を見て、穏やかに笑う。

「もう、夜中ですよ。為介さん」

そんな為介に、雅は珍しく表情を崩し、大きな笑みを浮かべた。

「何故、失われたはずの音士の言葉が……」

「……………」

戸惑いの表情で、目覚めた皆を見つめている和音の横で、籠也が真剣な表情を見せ、少し考え込むように俯く。

＜“始まれ”……＞

「え……？」

耳に届く一つの言葉に、箆也がハツとなって、目を開く。周囲を見回すが、すぐ隣の和音にも、紺平のもとへと歩み寄っていく檻也にも、言葉が聞こえている様子はない。空耳だったかと、思おうとした、その時であった。

< “始まれ” …>

「聞こえる…」

また耳に届くその言葉に、箆也が、今度は確信を持って呟く。

「箆也？」

「言葉が、聞こえる…」

和音が不思議そうに首を傾げる中、自身の耳を左手で押さえ、箆也がもう一度、確認するように言葉を発する。

「私にも聞こえるわ…」

「私も！」

箆也と同じように、その耳に言葉が届いたのか、囁と七架が、大きな笑顔を見せ、箆也へと声を掛ける。二人につられるようにして、箆也も笑みを浮かべると、三人は同時に、まだ空を見上げている保の方を、振り向いた。

「高市」

“始まれ” …

箆也たち同様、言葉が届いた様子で、空を見上げたままの保は、耳に届いたその言葉を、ゆっくりと繰り返し、目を細める。

“始まれ” … “は” の、言葉 …

保が唇を震わせ、その瞳に、わずかに涙を滲ませる。

「神月くん、これっ…」

「ああ」

今にも泣き出しそうな表情で振り向いた保に、穏やかな笑みを見せた箆也が、大きく頷きかける。

「言っている」

確かな自信を持って、箆也が、言葉を紡ぐ。

「灰示が、僕たちに、“諦めるな”と言っている…」

箆也のその言葉に、保は一層、泣き出しそうに目を細めるが、涙を堪えるように、強く唇を噛み締め、何度も、何度も頷いた。

「はい：はい！」

しっかりと頷いた保の表情にも、溢れんばかりの笑顔が浮かぶ。

「灰示様が、終わらされた言葉を、始めさせた…」

「へへ、やるじゃん。灰示様！」

「当たり前でしょ！不治子の灰示様は、最強で最高なんだから！」

箆也と保の会話を聞き、灰示の言葉が関与していることを知ったハ行の面々も、嬉しそうな笑みを浮かべ、特に不治子は、妙に得意げに胸を張る。

「四人の想いが言葉となり、四人の言葉が波城灰示に伝わり、波城灰示の想いが、言葉となったというのか…」

先程まで、赤い光の降り注いでいた空を見上げ、恵が、どこか遠くを見つめるような瞳を見せる。

「そんな、ことが…」

「“奇跡”って、やつじゃねえの？」

横から入って来るその声に、恵がゆっくりと振り向く。そこには、大きな笑みを浮かべたスズメの姿があった。

「スズメ…」

「“言葉は奇跡”って、どっかの誰かもよく言ってたし？」

「奇跡…」

——言葉は奇跡なんですよ、先生！——

「ああ、まさに今が、そうだ」

思い出される笑顔に、恵も、強張っていた表情を綻ばせる。

「カモメ…」

かつてカモメの放ったその言葉を誇るように、大きく笑顔を見せ

ながら、恵は周囲を見回した。

「んあ？何だ？」

ニギリやシャコと共に、目覚めたチラシに駆け寄っていた金八が、突然、自分の右手の中から飛び出し、顔の前へと浮かび上がってくる言玉に、戸惑うように首を傾げる。

「言玉が…」

同じように手を離れ、浮かび上がった言玉を見つめ、眉をひそめるエリザ。言玉が勝手に動き出したのは、金八やエリザだけではない。今、目覚めた音士をはじめ、その場に居るすべての音士の言玉が動き出し、何か意志でも示すかのように、淡く輝きを放っている。「為介さん、これは…」

「言玉は、理解してくれているんだよ」

言玉へと向けていた視線を、為介へと流す雅に答えながら、為介が、その場でゆっくりと立ち上がる。

「ボクらの、想いを」

目の前に浮かぶ言玉に、軽く指を当て、為介が微笑む。

「言玉…」

皆が戸惑うように自身の言玉を見つめる中、箆也は一切、戸惑いの色など見せずに、目の前に浮かぶ自身の言玉を見つめた。淡く輝く言玉が示すその意志を、箆也はもうすでに、十分に理解しているようだ。

「行ってくれるか？僕らの代わりに、我が神のもとへ」

箆也の問いかけに、快く返事でもするかのように、箆也の言玉は一瞬、強く輝いた。

「箆也…」

「神月くん」

「ああ」

囁や保、七架をはじめとする皆が、箆也の名を呼び、箆也へと視線を向ける。その呼びかけに答えるように、しっかりと頷く箆也。すると、皆の言玉が自然と箆也の方へと寄っていき、箆也のすぐ上

で、一箇所に集まっていく。集まった言玉を見据え、箆也は、真剣な表情を見せた。

「すべての言玉よ、すべての文字よ……」

箆也が両手を広げ、集まった言玉へと声を掛ける。

「我が神のもとへ」

はつきりと言葉を口にし、箆也が鋭い瞳を見せる。

「架かけろ……！」

箆也の言葉が放たれると、集まった言玉は強く輝き、一斉に、アヒルの居る空間へと、飛び出していった。

「撃うて……！」

左手の金色の銃の引き金を引き、正面に立つ永遠へと、金色の弾丸を向けるアヒル。その背に、白い光の翼を生やした永遠は、焦りの色一つ見せずに、言玉を持つ右手を伸ばした。

「弾はじけ……」

軽く右手を一振りし、少しも苦戦する様子を見せずに、永遠が、アヒルの弾丸を弾き飛ばす。だが、そんなことなど予想していたかのように、アヒルは動じず、今度は右手の赤い銃を、永遠へと向けた。

「当あたれ……！」

「懲おこりないね……」

またもや向かってくる赤い弾丸に、永遠が少し、呆れるように肩を落とす。

「貫つらぬけ……」

短く落とされた言葉と共に、言玉から放たれる、白い光線。瞬間に駆け抜けた光線が、あっさりとアヒルの弾丸を砕き、アヒルへと迫っていく。

「う、うああああ……！」

光線に胸を貫かれ、後方へと勢いよく吹き飛ばされていくアヒル。またしても壁際まで追いやられ、その場で力なくしゃがみ込む。

「う、ううう…」

「君がどんなに頑張ったところで、持っている文字数の差は、決して埋められない」

苦しい声を漏らすアヒルに、永遠が忠告するように声を掛ける。「それに、君の力も、最初の頃と比べると、ずっと力が落ちてきている」

指摘するように、左手の人差し指で、アヒルを指差す永遠。

「傷を負い過ぎたんだ。もう君は、満足に言葉の力を発揮することも出来ない」

永遠からの言葉に、アヒルが険しい表情を見せる。永遠の言葉は、事実であった。傷を負い、血を流し過ぎた体はフラフラで、銃を持つ手に力も入らない状況だ。弾丸を放てば、逆に腕が軋み、連続して攻撃することも出来ない。アヒルの体はすでに、限界に達している。

「はつきり言うよ？今の君の力じゃ、どう足掻いたって、俺には勝てない」

その言葉を否定することも出来ず、アヒルが悔しげに、唇を噛み締める。

「“明日”はもう、終わるしかない。それが真実だ。わかるだろ？」
今までの冷たく嘲笑う表情ではなく、鋭い真剣な表情で、永遠がアヒルへと問いかける。今のアヒルには、永遠に勝つ術も、永遠に勝つ自身の姿も、とても思いつけなかった。だが、その永遠の問いかけに、頷いてしまうわけにはいかなかった。

「俺は…」

ゆっくりと口を開くアヒルに、永遠の視線が集中する。

「俺は、“諦め^{あきら}ない”…！」

放たれるアヒルの言葉に、永遠の表情が、冷たいものへと変わる。「そう、じゃあ…」

まだ立ち上がることも出来ていないアヒルへと、永遠がまた、言葉を向ける。

「俺が、諦めさせてあげるよ」

真つ白な光が、強く輝き、永遠が、大きくその口を開く。

「^を終えろ”：！」

放たれた強烈な終末の光が、まっすぐに、アヒルへと向かっていく。迫り来る眩い光を、アヒルは目を逸らすことなく見つめるが、最早、体は動かない。

「ク：！」

諦めたくない想いはあるのに、どうすることも出来ない体に、アヒルはただ、悔しげに唇を噛んだ。アヒルと終末の光との距離が、もう後わずかに迫った、その時であった。

——パアアアン！

「え：？」

空間内に大きな音が響き渡ると、まっすぐにアヒルへと向かって来ていた光が、天井の方へと弾き飛ばされる。遠ざかっていく光に、戸惑うように視線を上げるアヒル。何が起こったのかもわからず、アヒルが光の弾かれた前方へと、視線を戻す。

「あ：」

前を向いた途端、思わず言葉を漏らすアヒル。

「言、玉：？」

アヒルの前方では、一つの赤い言玉が、眩いばかりの強い光を放ち、アヒルを守るように、輝いていた。

「言玉だと：？」

突然現れた言玉を見つけ、永遠も戸惑うように、眉をひそめる。

「アヒルの言玉じゃない。何故、あんなものが：？」

アヒルの両手に存在する、二丁の銃を確認し、アヒルの前に浮かぶ言玉が、アヒルのものではないことを確認すると、永遠が一層、

表情を曇らせる。

「なんで、言玉が：一体、誰の：ん？」

前方の言玉を見つめ、首を傾げていたアヒルが、すぐ横に何か気配を感じ、そちらへと視線を移す。そこには、また別の赤い言玉が浮かんでいた。その言玉は、淡く優しい赤色の光を発し、その光がアヒルの体を照らすと、アヒルの傷だらけの体が、徐々に回復していく。その優しい光は、どこか見覚えがあった。

「これは、“治せ”^{なお}…？」

光に宿る言葉を感じ、アヒルがそつと呟く。

「奈々瀬の、言玉…？じゃあ、あれは…」

戸惑いながらも、確信を持って呟いて、アヒルがまた、前方の言玉へと視線を戻す。赤く、強い光を持つ言玉。アヒルを守り、アヒルを導くように、輝いている。その光にも、アヒルは見覚えがあった。

「籠也…」

その言玉に、籠也の姿を感じ取り、アヒルがその名を口にする。

「あ…！」

「な…！」

次の瞬間、同時に声をあげるアヒルと永遠。“厭離穢土^{をんり えど}”の分厚い光の壁を破って、次々と、色取り取りの五色の言玉が、空間内へと入って来たのだ。

「馬鹿な…！この空間は、外からの介入を一切、許さない、絶対空間だぞ…！？」

続々と侵入してくる言玉に、信じられないといった表情で、声を張り上げる永遠。永遠の言葉に反し、五十近い、たくさんの言玉が空間へとやって来て、それぞれ、力強く輝いて、しゃがみ込んだままのアヒルの周囲へと集まって来る。

「皆…」

幾つもの言玉が、励ますように、勇気づけるように、アヒルを照らす。その言玉の一つひとつに、仲間の顔が、浮かぶようであった。

「皆っ…」

もう一度、言玉を見回し、アヒルが目を細め、大きく笑みを零す。

「“ありがとう”…」

心からの言葉を放って、アヒルは再び、銃を握る手に、力を込めた。

「永遠」

呼ばれる名に、戸惑いの表情で言玉を見回していた永遠が、アヒルへと視線を移す。

「明日はまだ、終わらない。俺はまだ、諦めない」

先程よりも強い決意を込めて、多くの言玉に囲われ、支えられるようにして、アヒルがゆっくりと、その場で立ち上がる。

「お前は、五十の文字を持っているかも知れない。けど」

顔を上げたアヒルが、まっすぐに永遠を見据え、鋭い瞳を見せる。

「俺には、皆が附いている…!」

アヒルの言葉に応えるように、集まった言玉は、一斉に、強い光を放った。

Word 84 をワラヌ明日へ (1)

永遠^{とわ}の城跡、後方。音士待機場所。

「……………」

遠くの空に浮かぶ、真っ白な空間を見つめ、そっと目を細めた籠也が、どこか祈るような、願うような、真剣な表情を見せている。

「届いたかしらね…」

背後から聞こえてくる声に、少しだけ振り返る籠也。そこには、同じように空間を見つめる、囁の姿があった。近くには保、七架の姿もある。

「私たちの言葉は…」

「さあな」

囁からの問いに、籠也は短く言葉を返す。籠也たち安附、四人の強い想いにより、灰示の言葉“生まれ”が放たれ、永遠の力により、終わらされた音士たちの言葉は、すべて甦った。そして、その場に集まったすべての言玉を、籠也は、空間の中に居るアヒルへ向け、送り届けたのである。だが、その言葉が届いたかどうか、確かめる術は、籠也たちにはない。

「届いたと、そう信じたいが…」

「届いてるよ」

籠也の言葉を、あっさりと肯定する声。その声を発したのは、檻也や空音に支えられ、立ち上がり、籠也たちと同じように、アヒルの居る空間を見つめる紺平であった。

「小泉」

「だって」

振り向いた籠也に、紺平は、何の迷いもなく、穏やかに微笑む。

「ガアに、聞こえない言葉なんて、ないもん」

まるで自分のことのように、得意げに、自信を持って言い放つ紺平。その紺平の言葉と笑顔に、籠也の表情に残っていた不安の色が、

どんどんと消えていき、やがて籠也も、穏やかな笑みを浮かべた。

「そうだな…」

納得するように、頷く籠也。その横で囁も、保も七架も皆、笑顔を見せ、大きく頷く。

「けど、あいつ、俺の言葉はすぐ、ムツシングするぞお？」

「お兄ちゃん、空気読んでよお」

「ソウデス、リーゼントマン！シャーラップ！」

水差し発言をする守に、六騎とライアンが、厳しく注意を向ける。

「朝比奈君は大丈夫でしょうか？為介さん」

「さあ？」

真剣に問いかける雅に対し、為介は、いかにも適当そうな声で返事をする。

「普通に考えたら、五十音、第五十音の遠久サンに、第一音の朝比奈クンが勝つのは、不可能に近いけどねえ」

「あなたに聞いた、僕が馬鹿でした」

「えええ、ひどいなあ。雅クウーン」

皆がアヒルの勝利を祈っているというのに、一人、身も蓋もないことを言う為介に、雅が少し怒ったように表情をしかめる。為介の拗ねたような声を聞きながら、ウズラがふと、何か思い出すように、目を細めた。

「第一音、か…」

「あなた？」

「いや、ちょっと、明^{アケル}の言葉を思い出してね」

「兄さんの？」

「うん」

少し首を傾げる茜に、ウズラが優しく頷きかける

「五十音は、後半音になればなるほど、その力が強いとされている。だからこそ、旧世代の神は、最も後半のワ行“わるうゑを”の音士が務めていた」

視線を少しだけ下げて、細めた瞳で、言葉が続けるウズラの方を、

恵や為介が、まっすぐに見つめる。

「“安の神”、以外は」

「そう言われてみると、そうだね…」

すぐ近くでウズラの言葉を聞いていたツバメが、納得した様子で、口を挟む。

「強い音士に神を任せなかったんなら、もっと後半音の音士なんて、いくらでも居たはずなのに…なんで、よりにもよって、最弱である、第一音の“あ”^{アケル}の音士を神になんて…」

「これは、明日く、なんだけどね」

不思議そうな表情を見せるツバメに、ウズラはそっと、笑みを浮かべて答えた。

「“最弱だからこそ、一番、進化する可能性を秘めている”」

ウズラの口から放たれる、力強い言葉。

「他のどの文字よりも、強くなる可能性を秘めている。そういう文字なんだって。“あ”って、文字は」

ウズラの言葉を聞きながら、共に在った頃の、明の姿を思い出すように、そっと俯く恵。

「あいつらしい言葉だな…」

恵が懐かしむように、穏やかに笑う。

「ザックリとしていて、何の確証もなくて…」

「ええ。でも何故か不思議と、信じられるんですよえ」

恵の言葉に頷きながら、為介も思わず、笑みを零す。

「一番、可能生を秘めた文字」

ウズラから伝えられた言葉を、とても大切そうに、ゆっくりと繰り返す茜。

「兄さんが、そんなことを…」

「うん。今、思い出したよ」

茜に頷きかけながら、ウズラがまた、空間の方を見つめる。

「アークンを見ていたら」

今も、遠い空間の中で戦うアヒルを思い、ウズラがどこか、誇ら

しげに笑う。

「そういえば」

突然、思い出したように声をあげて、隣に立つ和音の方を振り向く箆也。

「あなたにずっと、聞きたいと思っていたことがあったんだった」

「随分と、いきなりですわね」

弾かれたように言い放つ箆也に、和音が少し驚いた様子で振り向く。

「何でしょう？」

「あの時、言ノ葉山の封印を解く前に、僕が韻を訪れた時、あなた、言っただろう？」

永遠の封印が解かれる前、和音の真意を知るべく、為介たちの制止を振り切り、韻へと乗り込んでいった箆也。その時のことを思い出し、箆也が改めて、和音へと問う。

「我が神が“あ”の文字に目醒めることも、あなたは初めからわかっていたと」

「ああ」

箆也の言葉に、和音が思い出したように頷く。

「そういえば、言いましたわね。そのようなこと」

「あれは、何故だ？」

少し眉をひそめ、箆也が和音へと問いかける。

「“あ”の文字は、血筋により受け継がれる文字ではない。ウズラさんにより隠された“う”の文字ならともかく、何故あなたは、我が神が“あ”の文字に目醒めることを、知っていた？」

ずっと心のどこかで、引っ掛かっていた疑問を、やっと口にする箆也。気になってはいたが、永遠の復活や、和音と韻の処罰などもあり、和音に聞く機会など、すっかり失われていたのだ。

「言い伝え、がありますの」

「言い伝え？」

「ええ」

戸惑った表情で聞き返す箆也に、和音が笑顔で、大きく頷く。

「五十音界に古くから伝わる、予言のようなものですわ」

「どういう、内容なんですか…？」

二人の会話に興味を引かれたのか、七架が少しかしこまった様子で、遠慮がちに和音へと問いかける。皆が言葉を待つ中、和音はゆっくりと、その口を開いた。

「“強き双神の力、やがて一人の神へと宿り、すべての言葉の行く末を決めるであろう”」

皆が注目する中、和音により、言い伝えの内容が明かされる。

「強き双神とは恐らく、歴代最強とされた二人の神、“安の神”朝比奈明と、“宇の神”宇田川ウズラのこと」

推測するように、和音が言葉を続ける。

「だからこそ、宇の神の力が、朝比奈アヒルに受け継がれていると、そう、気付いた時」

和音がまっすぐに、箆也を見つめる。

「彼が、“あ”の文字に目醒めることを、彼が、“安の神”になることを、知ったのです」

確信に満ちた和音の言葉が、箆也の疑問を、打ち消していく。

「そして今、彼は、言い伝えの通り、すべての言葉の行く末を懸け、戦っている」

「予言の、神…」

「ええ」

小さく呟きを落とした箆也に、和音が大きく、頷きかける。

「彼はまさに、言葉に選ばれた、“神”なのですわ」

「神…」

何度も呼んできたその言葉を繰り返し、箆也がまた、空間を見つめる。箆也だけではない。囁も保も七架も、その場に居る誰もが、真剣な表情を見せ、アヒルの居る空間を見つめた。

「アーくん」

「アヒル…」

互いを支え合い、ウズラと茜が、息子の名を呼ぶ。

「ダッグ」

「アヒル…」

「朝比奈君…」

ライアンが、エリザが、雅が、アヒルの名を呼ぶ。

「アヒるん…」

「アヒルさん」

「朝比奈くん」

囁が、保が、七架が、まっすぐに空間を見つめ、ただ、アヒルの名を呼ぶ。

「神……“神”……！」

皆の想いを代表するように、箆也の願うような声が、空へと響き渡った。

——神……！——

「……………」

永遠の“厭離穢土”^{をんり えど}の空間内、外からの物音など一切、聞こえないその中で、アヒルは深く瞳を閉じ、まるで耳を澄ますかのような動作を見せる。

「聞こえる…」

目を閉じたまま、そつと言葉を落とすアヒル。

「聞こえる…皆の声が。皆の、言葉が」

遠く離れた場所で、アヒルの名を呼ぶ仲間の声が、アヒルを心配する仲間の声が、アヒルの勝利を願う仲間の声が、一つとして余すことなく、確かに、アヒルの耳へと届く。

「聞こえるよ。聞こえてるよ、ちゃんと」

届く声に応えるように、言葉を発し、アヒルが柔らかく、その口

元を緩める。すると、アヒルの周囲に集まった皆の言玉が、そのアヒルの言葉に喜ぶように、また強く輝いた。

ラスト・イデオム

「俺の四字熟語“厭離穢土”、絶対空間内への侵入……」

輝くたくさんの言玉に囲まれたアヒルの、その信じがたい光景を見つめ、永遠がそっと、目を細める。

「しかも、一度、終わらせたはずの文字まである……」

アヒルを囲む言玉の一つ、青い言玉へと視線を注ぎ、眉間に皺を寄せる永遠。その言玉が宿す文字が“ゐ”であり、為介の言玉であることが、永遠には、見るだけで瞬時に理解出来た。永遠が終わらせたはずの為介の言葉が、言玉が、今また、永遠の前へと現れ、アヒルの力となっている。

「本当に、まったく、どういふことだろうねえ……」

困ったように言葉を吐いて、永遠が左手で、少し頭を抱えるような仕草を見せる。今まで、どれほどにアヒルが力を見せても、動揺を見せなかった永遠が、ここで初めて、判断が揺らぐほどの動揺を見せている。それほどに、目の前の光景は、有り得ないはずの光景であった。

「君は、“言葉の奇跡”とでも言うのかな」

集まった言玉から、中央のアヒルへと、視線を戻す永遠。

「ねえ？アヒル……」

永遠の視線が戻るのと同時に、アヒルが深く閉じていたその瞳をゆっくりと開き、アヒルと永遠の視線が、丁度のところであつかり合う。

「これは、“想い”だ」

「想い……？」

はつきりと告げるアヒルに、少し表情を曇らせる永遠。

「これは、皆の想い。言葉を守りたいという、明日を守りたいという、俺の仲間、一人ひとりの強い想いだ」

周囲に集まった言玉の、その一つひとつを見回し、アヒルが言葉が続ける。

「皆の想いが言葉になって、皆の言葉が力になって、こうして俺に、伝わってきた」

集まった言玉の、そのすべてを受け入れるように、アヒルが、銃を持った両手を、大きく広げる。

「だから俺は、それに応える」

まっすぐに前を見据えた鋭い瞳で、アヒルが、永遠を見つめる。

「皆の想いを言葉に変えて、力に変えて、俺は」

広げていた右手を戻し、握り締めていた真っ赤な銃の、その銃口を、永遠へと向けるアヒル。

「お前を倒す！」

高らかと響く、アヒルの迷いなき声。

「そして、俺たちは、“明日”^{あす}へ行く……！！」

向けられる銃口と、放たれたアヒルの言葉を正面に受け、永遠がそっと、その瞳を細める。

「“皆の想いを力に、明日へ行く”か……」

アヒルの言葉を繰り返し、どこか遠くの世界の出来事のような、そんな目で、すぐ前方に立つアヒルの姿を見つめる永遠。数秒走れば、すぐにでも届く距離に居るアヒルが、ひどく、遠い場所に居るように感じるのは、アヒルの向こうに、アヒルの背負う、アヒルと共に居る他の音士や、多くの人々の姿が、見えるからだろうか。

「どうせ、俺は一人……」

多くの仲間の言玉に囲まれたアヒルと、たった一つの言玉しか持たない自分を比較し、永遠が自嘲するような笑みを浮かべる。

———また明日なあ！———

———うん、明日！———

永遠には、行けない世界。輝いて見える、ひどく遠い、皆の世界。

「この、薄暗い“永遠”に、ただ一人、取り残される運命……」

皆と共に明日へ行こうとしているアヒルを見て、かつて、“永遠

”となつてすぐの頃、自分だけを置いて、卒業していく友たちを、羨ましく思いながら見つめていた日々を、悲しい日々を思い出し、永遠がそつと、諦めるように、目を伏せる。

「けど」

再び開かれた永遠の瞳が、鋭く光る。

「君たちだけを、“明日”へ、行かせはしない」

深く重い感情を、その瞳に宿し、永遠が低い声を発して、言玉を持つ右手を振り上げる。

「俺は、“明日”を終わらせる……!!」

アヒルに劣ることない、力強い決意を覗かせ、声を張り上げる永遠。その永遠の声に應えるように、高く掲げられた永遠の言玉が、明々と、今まで以上に強く、輝いていく。

「今度こそ、終わらせる。君の言葉を」

鋭く突き刺すような視線で、永遠が、アヒルを見やる。

「勝負だ、“安の神”！」

「ああ、勝負だ」

アヒルが、永遠の言葉に應えるように、何の迷いも、一切の怯えもなく、はつきりと頷く。

「来い、“遠の神”！」

力強く叫び、アヒルは永遠へと向けた銃の、その引き金を引いた。

Word 84 をワラヌ明日へ (2)

「注^{そそ}げ」！」

背中の両翼を大きく広げ、言葉を発する永遠。永遠の翼から、羽根のような無数の白い光が飛び出し、一気にアヒルへと迫っていく。向かってくる羽根を見つめ、アヒルはまた、その瞳を鋭くすると、左手の金色の銃を、前方へと向けた。アヒルを囲っていた金色の言玉の一つが、その構えられた銃へと、吸収されていく。

「何？」

その光景に、永遠が眉をひそめる中、アヒルは大きく口を開いた。
“吸^すい込め”！」

言葉と同時にアヒルが引き金を引くと、無数にやって来ていた羽根が、一つ残らず、アヒルの銃口の中に、勢いよく吸い込まれていく。羽根を吸い込んだ銃へと、また別の金色の言玉が、吸収されると、アヒルはもう一度、引き金を引いた。

「向^むかえ」！」

銃口から、先程の無数の羽根が、強い金色の光を帯びて、今度は逆に、永遠へと迫っていく。

「ク…！ 守^{まも}れ」！」

背中に広げていた翼を丸めるようにして、前方に壁を作り、戻って来た羽根たちを、何とか凌ぐ永遠。羽根をすべて受けとめ切ると、翼が自然と、両側に開いていく。

「言玉を銃に吸い込み、その文字の言葉を…」

アヒルが行った戦闘方法を分析しながらも、険しい表情を見せた永遠の額からは、一筋の汗が流れ落ちる。

「そんなことが、有り得るのか…？」

その問いかけに、誰が答えてくれるはずもないことを知りながらも、思わず口にしてしまうほどに、戸惑いを感じている永遠。

「しかも第一音、最弱の“あ”を持つ者などにつ…」

永遠が戸惑いを言葉にし、漏らす中、アヒルはまた、金色の銃へと、新たな言玉を吸収した。

「貫^{つらぬ}け」！」

アヒルの左手の銃から、金色の光線のような、強い弾丸が放たれ、まっすぐに永遠へと向かっていく。

「た、耐^たえろ」！」

少し焦ったように言葉を詰まらせながらも、自身の前へと壁を張り、その弾丸を受け止める永遠。だが、その間にも、アヒルは次の言玉を銃へと充填し、引き金を引いていた。

「砕^{くだ}け」！」

「ううう……！」

新たに注がれる弾丸に、永遠が張っていた壁が押され、永遠の足が、少し後ろへと押しやられる。だが、それでも、永遠は必死に歯を食いしばり、その場で何とか留まる。

「この程度の攻撃ではっ……！」

「壊^{こわ}せ」！」

「何……！？」

二発目の弾丸も何とか凌ぎ切り、わずかに笑みを零す永遠であったが、またしても響き渡る言葉と、迫り来る新たな白い弾丸に、その瞳を大きく見開いた。

「ううう……うがああああ！」

三発目の弾丸までも受けとめることは出来ずに、あっさりと前方の壁を撃ち碎かれた永遠が、正面から弾丸を浴び、後方へと吹き飛ばされていく。

「グ……！」

床へと倒れ込んだ永遠が、すぐさま、その体を起こす。永遠は全身に切り傷を負い、ほとんど無傷に近かったその体から、赤い血を流していた。口元に流れる血を拭い、永遠がその場で立ち上がる。鋭く睨みつける、その視線の先には、多くの言玉に囲まれ、二丁の銃を構えた、アヒルの姿があった。

「お、のれ…！」

悔しげに表情を歪め、永遠がまた、言玉を持つ右手を掲げる。

「満ちれ」！

言葉を発し、背中の翼に、力を集めていく永遠。先程のアヒルの弾丸により、少し欠けていた翼が、また元の美しい姿に戻り、より一層の輝きを放っていく。

「刻め」！

光を集めた翼が、その光を解放するように、一際強く輝くと、一面に広げられた翼から、目にも留まらぬ速さで、無数の羽根が放たれる。先程の羽根よりも速く、そしてその先は、鋭く尖っている。だが、アヒルは動じず、すぐ傍にあった赤い言玉を、右手の赤い銃へと吸収させた。

「囲め」！

アヒルが上空へ向けて、弾丸を放つと、アヒルの周囲に集まっていた言玉が、アヒルの前方へと移動し、きれいに並んで、壁を作る。言玉で出来た壁が、永遠の力強い攻撃を、アヒルの前で、難なく受け止める。

「浮かべ」

言玉が攻撃を止めている内に、自身の言葉を使って、上空へと舞い上がるアヒル。高く上がった位置から、下方に居る永遠へと、赤い銃で、狙いを定める。

「当たれ」…！」

アヒルが引き金を引き、永遠へと、真っ赤な弾丸を向ける。永遠は言葉を放とうとはせず、まっすぐに弾丸を見上げたまま、あっさりとその弾丸を浴びた。

「あ…！」

だが弾丸が当たった途端に、永遠の体が、白い光の塊となって、砕け散る。

「あれは、桃雪の…」

“模せ”、だよ

「ク…！」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、アヒルが焦った表情を見せ、すぐさま振り返る。だが、アヒルが振り返った時には、もうすでに、光り輝く言玉が、アヒルへと向けられていた。

「“墮^をちろ”」

「うあああああ！」

永遠が言葉を放つと同時に、天井から、白い雷のようなものが落ち、勢いよくアヒルを貫く。全身を焼かれたアヒルは、力なく地面へと落下した。

「ク、ううう…」

床にうつ伏せに倒れ込んだアヒルが、苦しげな声を漏らしながらも、すぐに、その上半身を起こす。アヒルを追うようにして、アヒルのもとへと集まって来た言玉たちが、アヒルを心配するように、淡い光を発する。その中の一つ、赤い言玉がより一層輝き、何かを求めるように、アヒルのすぐ横へと寄って来る。

「いや、いい…」

優しく断り、寄って来た言玉へと、軽く右手を振るアヒル。

「いいのかい…？」

言玉の意志を知るように、アヒルへと問いかけたのは、アヒルを追って、地面へと降りてきた永遠であった。

「その言玉、“な”だろう？」

アヒルへと寄っていった言玉を指差し、永遠がそっと微笑む。

「ひどい傷を負っている。“治せ”の言葉を使って、その傷を治療すればいい」

助言するように言う永遠に、アヒルが少し眉をひそめる。アヒルが傷を治すことを、勧めているのは、余裕の表れだろうか。アヒルは、右手の銃を握る手に力を込めると、重たそうに体を動かし、ゆっくりとその場で立ち上がった。

「お前だって、“治せ”使えんのに、使ってねえだろ？」

立ち上がったアヒルが、まっすぐに永遠を見る。

「お前が使ってねえのに、俺だけ使うなんて、何かフェアじゃねえ。だから、使わねえ」

アヒルが強い意志を持って、はっきりと言い放つ。

「アハハ」

そんなアヒルの主張を聞くと、永遠は突然、とても可笑しそうに笑い出した。

「フェア？随分と、悠長なことを言うんだね。世界中のすべての人間の、“明日”が懸かってるっていうのにさ」

「お前が言っただろ？」

嘲るように笑う永遠へと、ただ、真剣な表情を見せるアヒル。

「勝負だ”って」

またしてもはっきりと言い放つアヒルの、その、何の曇りもない瞳が突き刺さるようで、永遠は浮かべていた笑みを止め、そつと目を細めた。

「そうだね。これは勝負だ」

アヒルの言葉を肯定するように言い、永遠が鋭い表情で、アヒルへと言玉を向ける。

「だから、もう二度と、回復の時間なんて、あげないよ」

永遠の右手の中で、強く輝く言玉。

「覆え^{をお}”」

永遠の言葉と同時に、空間内の天井へと広がっていく、強い白光。

「降れ^ふ”」

天井へと広がった光から、槍のように鋭く尖った光が、豪雨のように一気に、下方に居るアヒルへと降り注ぐ。降って来る光を見上げながら、近くの赤い言玉を、真っ赤な銃へと吸収させ、そのまま銃口を、空へと向けるアヒル。

「妨^{さまた}げろ”！」

アヒルが弾丸を放つと、その弾丸がアヒルの上空で、淡い光の膜となって広がり、降って来る光を受け止める。

「墮^をちろ”」

「あ……！」

だがそこに加わるようにして、無数の白い雷が降り落ち、アヒルの張った膜を、あっという間に破る。

「うううう……！」

膜を破られたアヒルが、槍のような光と雷を、一斉に浴び、苦しげな声をあげる。だがアヒルは、痛みに怯んだ様子は見せず、すぐに、真っ赤な銃でもう一度、空へと向けて放った。

「荒れろ^{あらし}”、”嵐”！」

アヒルが銃口から風の塊を放ち、周囲に激しい竜巻を巻き起こして、次々と迫り来っていた槍光と雷を、天井へと弾き返す。目の前で吹き荒れる嵐へと、さらに、金色の銃を向けるアヒル。

「往け^ゆ”……！」

金色の弾丸が嵐を撃ち抜くと、激しく逆巻く風の団体が、勢いよく永遠へと吹き抜けた。

「ううう……！」

あまりの勢力に逃げ場もなく、永遠が正面から、その風を浴びる。風に全身を斬り裂かれ、永遠の赤い血が、辺りへと飛び散った。だが、永遠も、痛みに苦しむ時間など取らずに、すぐさま右手の言玉を、アヒルへと向ける。

「襲え^{をそ}”……！」

荒々しい獣を象った巨大な光を、アヒルへと向かわせる永遠。

「受け止めろ^う”……！」

アヒルが自らの前方に、金色の壁を作り、襲いかかって来た光の獣を、正面から受け止める。今にも壁を突き破り、飛び掛かって来そうな獣へと、アヒルがさらに、赤い銃を向けた。

「返せ^{かえ}”……！」

アヒルの放った弾丸が、獣を貫くと、獣は一瞬、大きく目を見開いた後、その巨体の向きを変え、今度は永遠に向かって、勢いよく襲い掛かってくる。返って来た獣を見ながら、永遠は落ち着いた表情で、獣へと言玉を向けた。

「戻せ^{もと}」

永遠の放った光を浴び、獣がまた、その向かう先を、アヒルへと変える。

「え！？あ、えとっ…」

再びやって来ることを想定していなかったアヒルは、次の言葉に迷い、思わず声を詰まらせてしまう。その隙に、獣はあっという間に、アヒルとの距離を詰め、そして、襲いかかった。

「うわああああ…！」

獣に真正面から、勢いよく突進され、アヒルの体が軽々と浮き上がって、後方へと吹き飛んでいく。獣が光となって消えいく中、アヒルが力なく、地面へと倒れ込んだ。

「ここで差が出たね、アヒル」

うつ伏せに倒れ込んだままのアヒルを見つめ、永遠が、もうすでに勝ったかのように、得意げに、言葉を向ける。

「例え、持っている文字の力が五十対五十、対等になったとしても、国語が苦手で、あまり言葉を知らない君では、俺には勝てない！」

永遠は、今までの冷静だった口調でも、怒り狂った口調でもない。アヒルに勝ちたいという思いを強く滲ませた、自分の感情に満ちた口調だ。それほどに真剣に、本気で、永遠がこの戦いに臨んでいるということだろう。

「さあ、そろそろ諦めてっ…」

「五十対五十じゃねえさ」

「何？う…！」

かすかに聞こえてくる声に、永遠が眉をひそめたその瞬間、永遠の背中に広がる翼を、無数の青色の光が貫いた。翼を打たれた永遠が、驚いた様子で、大きく目を見開く。

「射^あ抜け」…」

ゆっくりと上半身を起こしたアヒルが、すでに発動したその言葉を、静かに落とす。

「グ、クウウ…！」

穴だらけになり、そのバランスを崩して、一気に折れていく永遠の翼。自らの力で広がる事が出来なくなった翼が、永遠の体へと重く押し掛かってくるのを、永遠が足を踏ん張り、必死に堪える。

「ア：ヒル：！」

「お前は今まで、たくさんの言葉を使ってきたけど」

翼が完全に崩れ落ちる中、永遠がきつくアヒルを睨みつける。そんな永遠の視線を浴びながら、ゆっくりと両足を立たせ、傷ついた体を、再び立ち上がらせるアヒル。

「他の神の言葉は、一回も使わなかった」

落ち着いた様子で指摘するアヒルに、永遠は険しく唇を噛み締めるだけで、否定の言葉は発しない。どうやら、アヒルの考えは、間違っていないかったのだろう。

「お前に、他の神の言葉は使えねえ。なら、五十対五十じゃねえ」

アヒルの声が、どんどんと、その力強さを増していく。

「なら、俺の勝ちだ！」

堂々と言い放つアヒルに、大きく歪む永遠の表情。

「調子に：乗るなよ！」

その怒りに呼応するように、強く輝く言玉を、永遠がアヒルへと、鋭く向ける。

「“^{おのの}慄け”：！」

永遠の全身から放たれる、鋭い白光。アヒルが、すぐ横へとやって来た緑色の言玉を手に取り、右手の赤い銃へと吸収させ、構える。

「“滅^{めつ}せ”：！」

向かって来た永遠の白光を、恵の言葉で掻き消すアヒル。迫り来ていた白光が消えると、その向こうから姿を見せた永遠に向け、アヒルはさらに、赤い銃を身構えた。

「“^{あぐ}挟れ”：！」

「グウウウ：！」

さらに放たれた緑色の弾丸に、腹部を貫かれ、永遠が苦しげな声を漏らす。

「落^おとせ”！」

アヒルが今度は檻也の言玉を、左手の銃へと吸収し、永遠と同じ言葉で、永遠へと攻撃を向ける。空から降り注がれる光を、腹部の傷を押さえるようにして蹲っていた永遠は、避けることも出来ずに、もろに喰らい、地面へとひれ伏した。

「ハア：ハア：」

床に倒れ込んだままの永遠へ、吸収していた言玉を外へと出した両銃を、アヒルがまっすぐに向ける。

「撃^うて”、“当^あたれ”！」

同時に両銃の引き金を引き、アヒルが二つの弾丸を、永遠へと向ける。

「う、うああああ：！！」

二つの弾丸を浴び、永遠が後方へと吹き飛ばされていく。勢いよく吹き飛ばされた永遠は、空間の端にある壁へと、背中を叩きつけられるようにして、やっとその動きを止め、力なくその場に倒れ込んだ。

「う、ううう：」

床に倒れ込んだまま、言葉にならない声を漏らす永遠。すでに体は、アヒルにも劣らないほどに傷だらけであり、自由に動かせるような状態ではなかった。

「はあ：はあ：はあ：」

攻撃を決めたアヒルの方も、苦しげに息を乱し、構えていた両銃を下ろす。激しく傷ついた体で、もう何個目かもわからないほどに言葉を放ってきたアヒルにもすでに、限界は訪れていた。

「う：ああ：う：」

言葉にならない声を漏らしながら、永遠がわずかに視線だけを動かし、顔の前で、力なく倒れている右手の中の言玉を、まっすぐに見つめる。

———おおーい、遠^{とをひ}久！———

薄く開いた瞳で、言玉を見据える永遠の脳裏に浮かぶのは、優しい姉の、昔の笑顔。

——遠久、遅っせえぞお？とつと来い！——

——てつめえ、明！遅刻常習のくせに、遠久に偉そうな口、きいてんじゃねえよ！——

——まあまあ、明も恵ちゃんも落ち着いてえゝほら、遠久くうゝん！——

次々と浮かぶ、昔、永遠が言葉の神だった頃、共に神と呼ばれていた者たちの姿。アヒルにより、懐かしい神の言葉を聞いたからだろうか。かつての明やウズラの姿が、どんどんと浮かんでくる。

——遠久サン、早くしないと、皆、先に行っちゃうよお？——
永遠よりも幼かった頃の為介が、そう言っ、永遠を呼ぶ。そう言っ、永遠を呼びながら、他の者たちと共に、どんどんと遠ざかっていく。

「嫌だ…」

頭の中で、どんどんと離れていく皆の姿に、永遠が必死に、それを拒絶するように、動かぬ首を横に振る。

「嫌、だ…」

もう一度、吐き出された永遠の声が、怯えるように、泣き出しそうなほどに、震える。

「置いて、かないで…」

その瞳に滲む、わずかな水滴に呼応するように、永遠の手の中の言玉が、また輝き始める。

「“置いていかないで” えええ…！！」

Word 84 をワラヌ明日へ (3)

『ううう…!』

嵐のような、激しい風が吹き荒び、待機場所に居る音士たちが皆一斉に顔を伏せる。しっかりと足を踏ん張っていなければ、すぐにも後方に吹き飛ばされてしまいそうなほどに、強烈な風だ。自然の力が起こせる風の、その限度を超えている。

「凄い風…なんて、力なの…!」

風の吹き抜けてくる方角に見える、先程よりも一層強く、輝き始めた上空の空間を、わずかに開いた目で見つめ、弓が険しい表情を見せる。

「これ程に離れているのに、これ程に力の影響を感じるとは…」

「それほど、強い力で戦っているということだろう」

驚いたように呟く鎧に、刃が、冷静に言葉を返す。

「本当に大丈夫なんじゃん？ 安の神は!」

「僕に聞かれても、知らないよ」

焦ったように問いかける兵吾に対し、ヒロトは大して興味なさそうに答える。

「神いゝ! 俺、風強すぎて、泣いちゃうゝ!」

「うるさい…」

必死に風を堪えながら、いつものように叫んでいる金八に、冷たく言葉を吐き捨てるイクラ。その表情は真剣で、まっすぐに上空の空間を捉えている。

「雅クウーン、負傷者の皆サンを中心に援護しながら、もうちょっと後ろに下がろっかあ」

「あ、はい」

こんな状況下であるというのに、相変わらず緊迫感に欠ける為介の指示に頷き、他の音士たちとも協力して、皆を後ろへと下がらせていく雅。

「ツバメ君、君も」

雅が、すぐ前に立っているツバメに声を掛ける。だが、ツバメは、雅の声が聞こえていないのか、まるで反応を示さず、ただまっすぐに、アヒルの居る空間を見上げていた。そんなツバメの様子を見て、雅が少し、目を細める。

「ツバメ君…」

そっとツバメの名を呼んだ雅の肩に、為介の手が乗る。

「見守らせてあげよう」

「……はい」

為介の言葉にしっかりと頷き、雅はそこにツバメを残して、他の者たちと共に、後方へと移動した。

「箆也、あなたもまだ、傷の治療が済んでいません。わたくしたちと共に、後方へ…」

従者に促され、後方へと移動を決めた和音が、すぐ隣に立つ箆也へと声を掛ける。だが、その和音の声に、箆也はまったく反応を示さず、その場から、動こうとする素振りもなかった。

「箆也？あ…」

戸惑うように、箆也の顔を覗き込む和音。箆也の表情を見た途端、和音の表情が曇る。

「……………」

真剣な表情で、ただまっすぐに、上空の空間を見据える箆也。その瞳には、空間しか映っていないのだろう。こんなに近くで呼びかけているというのに、和音の声も届いていない。それほどに箆也は、すべての意識を、アヒルの戦いに、アヒルの居るあの場所に、集中させている。箆也だけではなく、すぐ近くに居る囁も保も、七架も、皆、同じ状態であった。

「箆也…」

箆也のその様子を見て、和音がそっと、目を細める。

「和音」

後ろから聞こえてくる呼びかけに、和音が箆也から目を逸らし、

振り向く。

「檻也」

「お前は後方へ移動しろ。為の神や以の神も居るから、安全だ」
檻也からの言葉に、和音が少し眉をひそめる。本当は、傷だらけの籠也も共に、後ろへ下がる方が安心ではある。だが、今の籠也に、安全だから後ろへ下がろうなどと言うことは、和音には出来なかった。

「……わかりました」

檻也の言葉に頷き、和音が、数名の従者と共に、後方へと向かっていく。

「お前も姉に附いていてやれ、空音」

「あ、はい！」

神の指示に頷き、空音が和音を追うようにして、後方へ駆け出していく。檻也が、空音が行き、その場に取り残される形となった紺平へと、視線を移す。

「お前はどうしたい？紺平」

神として指示を出すわけではなく、紺平の意志を聞こうと、問いかけを向ける檻也。

「僕は…」

少し迷うように口を開いた紺平が、そっと、穏やかな笑みを浮かべる。

「ここに居たい。ここで、見届けたい」

紺平の言葉が、願うように放たれる。

「ガアの、最後の言葉を」

悲観した様子も、不安げな様子もなく、ただ晴れやかに微笑み、アヒルの居る空を見上げる紺平のその姿を見つめ、檻也がそっと、目を細める。

「わかった。俺も付き合おう」

「ありがとう、檻也くん」

固く腕を組み、その場に残る檻也に、紺平はそっと、礼を向けた。

「なあ、恵ちゃん」

空を見上げたまま、スズメが、すぐ隣に居る恵へと声を掛ける。同じように空を見つめていた恵が、その声に振り向き、こちらを見ようともしていないスズメの方を見た。

「手、握っててもいい…？」

依然として恵の方は見ぬまま、その手だけを、恵へと差し出すスズメ。恵がスズメの手へと視線を移すと、その手は、小刻みに震えていた。弟を失うかも知れない恐怖にか、弟に何もしてやれない悔しさにか、震えるそのスズメの手を見て、恵がそっと、目を細める。

「ああ…」

静かに頷いて、恵は強く、スズメの手を握り締めた。

「あなた…」

「信じよう」

不安げに呼びかける茜の肩を、ウズラが力強く抱き寄せる。

「俺たちの息子を」

二人の視線が、二人の愛する息子の居る、空の空間へと注がれる。
「言葉の神を」

——置いていかないでえええ…！！——

「これは…」

細めた瞳で、厳しい表情を見せ、アヒルが、前方に広がる光景を見つめる。

「終わ、らせる…」

機械のように、ただ、決められた言葉を口にするだけのよう、抑揚のない声を発する永遠。その背中には、先程、アヒルが砕いたはずの、真っ白な光の翼が、再び生え広がっていた。

「終わらせる…」

二人の居る空間中が強く輝き、空間を形成している光が、永遠の背負うその翼に、徐々に吸い込まれていつている。力が集まれば集まるほど、永遠の翼は大きくなり、その輝きを増していく。

「言葉を、終わらせる…」

一切の光のない瞳で、まっすぐにアヒルを見つめる永遠。その表情には、先程まで見え隠れしていた感情も、掻き消えてしまっている。本当にすべての希望を失ってしまったような、絶望に満ちた瞳だ。

「永遠…」

そんな永遠の瞳を見つめ返し、どこか悲しげに、眉をひそめるアヒル。

「“明日”を、終わらせる…！」

強く放たれた永遠の声に反応するように、永遠の翼が勢いよく開き、開いたその圧で、強い風が巻き起こり、正面に立つアヒルへと吹き抜ける。

「うう…！」

ただの強い風でも、倒れてしまいそうなほどに傷ついている体を、必死に堪えるアヒル。

「“終わらせる”…！！！」

翼をより一層輝かせ、永遠が、まるで自分自身に言い聞かせるように、強く強く、叫びあげる。

「永遠…」

その、どこか痛々しくさえ見える永遠の姿を、目を逸らすことなくまっすぐに見つめ、アヒルが険しい表情を見せる。一面に広がった永遠の翼が、空間を形成する光の吸収を続けたため、天井部に穴が開き、久し振りに、外の空が顔を出す。

「厭離穢土が…」

開いた穴から見える空を見上げ、アヒルが少し、驚いた表情を見せる。このまま永遠が、翼による力の吸収を続ければ、この空間は数分ともたず、無くなってしまうだろう。自らが造り出した絶対空

間を、永遠が自ら、崩そうとしている。

ラスト・イデオム

「自身の四字熟語を崩してまで：次が、最後の一撃ってわけか：」
戦いの場すら犠牲にし、力を蓄え続ける永遠を見つめ、眉をひそめるアヒル。この状況だけで十分に、永遠の決意がうかがえる。

「絶対空間が崩れたんなら、逃げんのは簡単だけだな：」

上空に広がる空を見つめ、アヒルがそっと、微笑む。

——置いていかないでえええ：！！——

願うように、響いた声。

「……………」

思いを固めるように、アヒルがその場で、そっと瞳を閉じる。

「置いて、いかねえさ」

永遠に届きはしない答えを返して、アヒルが鋭く、瞳を開く。

「“上^あがれ”！」

翼への光の吸収が続き、空間内の床が崩れ落ちる中、アヒルが赤い銃を自らのコメカミへと当て、言葉を放って、その場から飛び上がる。床が完全に無くなると、永遠もその翼をはためかせ、ゆつくりと上空へと舞い上がった。

「あっ：」

消えていく光の床の下から、見えてくる景色に、アヒルが思わず、声を漏らす。

「言ノ葉、町：」

眼下に広がるのは、アヒルの生まれ育った町。大した時間を、空間内で過ごしたわけでもないのに、ひどく懐かしく感じる。よく見覚えのある町並みを見下ろし、アヒルは穏やかに笑みを零した。

「皆：」

この町に居る仲間を、大切な人を思い、アヒルがそっと、目を細める。

「俺が：」

アヒルが、銃を握る両手に、精一杯の力を込める。

「俺が、守る……！」

鋭い表情で叫び、両手の銃を、一気に上空へと掲げるアヒル。

「“集まれ”……！」

高らかとアヒルの言葉が響くと共に、アヒルの掲げた両手の二丁の銃に、アヒルの周りを囲っていた皆の言玉が、次々と吸い込まれていく。言玉を吸収し、それぞれに強く輝き始める、右手の赤色の銃と、左手の金色の銃。囲んでいたすべての言玉を、銃が吸収し終えると、アヒルはゆっくりと銃を下ろし、自分の胸の前へと持ってきた。

「終わらせる……終わらせる！すべてをお！」

同じ頃、永遠も、厭離穢土を形成していたすべての光を、その背中の翼へと吸収し終え、その暗い瞳をアヒルへと向け、日の光よりも強く輝く翼を、一気に広げる。強く叫びあげる永遠を瞳に捉え、アヒルは覚悟を決めるように、その表情を鋭く変えた。

「皆の想いを、皆の言葉を、一つに」

胸の前へと持って来た二丁の銃を、静かに、重ね合わせるアヒル。

「“合あわされ”……！」

アヒルの言葉が放たれると、二丁の銃が強い光を放ち、その赤い光と金色の光が、混ざり合うようにして、やがて一つの光となる。一つとなった光が止むと、アヒルの両手に、一丁となった銃が、握られていた。ライフルに近い程に長い銃身は赤く、その銃口の一部分と、持ち手が金色の銃だ。一丁となった銃を、アヒルが両腕で持ち上げ、その銃口を、まっすぐに、正面に居る永遠へと向ける。

「これが俺の、最後の言葉だ！」

アヒルが高らかと叫ぶと同時に、永遠もまた、言玉を持った右手を振り上げる。

「を……」

「あ……」

同時に落とされる、二つの文字。

「^を終えろ」　おおお……！！！！」

「^あ当たれ」　えええええ！！！！」

言葉が放たれると、永遠の両翼から強大な白光が、アヒルの銃から、強大な弾丸が、同時に放たれた。

Word. 84 をワラヌ明日へ (4)

『うううう…!!』

二人の中心で、二人の力がぶつかり合い、ぶつかり合ったその瞬間、二人の体に、大きな衝撃が走る。すでに、その力に耐え切れるような状態ではない。だが、譲るわけにはいかず、二人は必死に堪え、目の前の力へと、集中する。

「グ、くう…!」

必死に歯を食いしばり、銃を握る両手に、力を込め続けるアヒル。「う、ううう…!」

永遠も、突き出した右手に力を込めながら、必死に、背中の翼を広げる。

「……っ」

視界が光に支配される中、永遠がそっと、目を細める。

——死にたくないよ、お姉ちゃん……——

あの日、始まった“永遠”。

——もうお前を、一人にはしない……——

——やめて、遠久サン……!——

——あなたが望むのであれば、僕も、“明日”などいりません——
——

少しずつ狂い始めた、“何か”。

——芽衣子……!——

——明サアアアアン……!!——

——逝ってしまったんだね……桃雪……——

もう戻らない、“すべて”。

「俺が、俺が終わらせる……」

過去の出来事を思い出し、永遠がそっと呟きを落として、言玉を持つ手を、さらに強く握り締める。

「この絶望を、この悲しみを……この、“永遠”を」

わずかに震える、永遠の声。細められたその瞳は、潤んでいるようにも見える。

「この、すべてを……！」

永遠の叫び声と共に、より一層、輝きを増す永遠の翼。

「終われ、終われ！終われえええ……！！」

何度も繰り返されるその言葉に、永遠の翼がまた大きく広がり、その翼から光が放たれ、前方でアヒルの力とぶつかり合っている白光と合流し、さらに、その勢いを増す。

「うううう……！」

勢いを増す永遠の力に、一気に押され始めるアヒル。構える銃の銃身の一部にヒビが入り、そのヒビから、碎けるようにして、銃の欠片が飛ぶ。銃を持つ両腕にも、次々と傷が入り、アヒルの表情が、苦しげに歪む。

「やっべえなあ、これっ」

徐々に体を、弾丸ごと、後ろへと押されていきながら、困ったような笑みを浮かべるアヒル。笑ってはいるが、その表情に余裕の色は、少しもない。額からは、赤い血と共に、汗が流れ落ちている。永遠の力は、言葉は重く、これを弾き返すほどの力は、今の傷ついたアヒルには、どこを探してもなかった。

「クソ……！」

悔しげに唇を噛み締め、少し顔を俯けるアヒル。

「……っ」

俯いたアヒルの視界に、また、生まれ育った町の景色が、飛び込

んできた。言ノ葉の穏やかな町並みを見下ろし、アヒルがどこか、懐かしむように、目を細める。

——いつてらっしゃい、アーくん！——

——おはよう、ガア！——

——まあ、た、遅刻かあ？朝比奈！——

あの懐かしい町で、毎日のように、何げなく、交わされてきた言葉たち。

——おかえり、アーくん——

——アーくんは俺の、自慢の弟だもん！——

大切な、言葉たち。

——また、明日！——

明日、出会う日々を、約束する挨拶。

——あなたが、朝比奈アヒル：？——

——僕等は、あなたの神附きだ——

——はあ！こんな俺が、転校してきちゃって、すみませえくん！——

——お、おおおおおはよう、朝比奈くん！今日も絶好の、焼きそばパン日和だね！——

明日、出会う日々を、約束した仲間たち。

「終わらせ、ない……」

アヒルの口から、零れ落ちる言葉。それは、アヒルが発しようと

して、零れた言葉ではなかった。アヒルの胸に湧き上がった想いが、溢れ出るように、言葉となって、落とされたのだ。

「終わらせない…」

もう一度、その言葉を繰り返し、アヒルが傷ついた両手で、強く、銃を握り締める。

「諦め^{あきら}ない”…！」

アヒルの力強い言葉に呼応し、銃がまた強く輝きを放つ。銃が輝きを増すと、その光が、前方の弾丸へと伝わり、弾丸がその勢力を増して、押され始めていた永遠の光を、また強く押し返す。

「う、ううう…！」

押される光により、背中の翼も後方へと押しやられ、永遠が、苦しげに表情を歪ませる。

「俺が、俺が終わらせるんだ…！ “言葉”を、“明日”を、“永遠”を…！」

押される自身を否定するように、必死に首を横に振り、自らを信じ込ませるように、何度も何度も、強く言葉を投げかける永遠。

「俺がっ…俺がああ…！！」

永遠の命懸けの叫び声に、また、永遠の光の輝きが増す。

「ク…！」

またしても押し戻される弾丸に、腕に走る傷が増え、表情を苦痛で歪めるアヒル。だが、そこで踏ん張り、それ以上後退しないように、必死に堪える。互いに、一步も譲らないぶつかり合い。必死で、周りの状況など、とても見えている様子ではない永遠に対し、アヒルは妙に落ち着いた、静かな表情を見せていた。

「お前がどんなに、それを望んだところで、それは、終わらない」
激しい攻防が続けたまま、アヒルが冷静に、永遠へと言葉を向ける。

「それは、決して終わらない！」

確信を持った瞳で、アヒルが力強く言い切る。

「だから、俺たちは行く」

遙か先を見据えたまっすぐな瞳で、アヒルがただ、永遠を見つめ、そして大きく、口を開く。

「明日へ」……！！
あした

アヒルの力強い言葉と共に、また光を増したアヒルの弾丸が、一気に強大となり、ぶつかり合っていた永遠の白光を、呑み込んでいく。

「ああ……！」

呑み込まれていく自身の光に、大きく目を見開く永遠。だが、永遠が焦る間もなく、永遠の光を呑み込み、さらに大きな光となったアヒルの弾丸が、永遠へと迫って来る。

「あ……」

すぐそこへと迫る、もう永遠ではどうすることも出来ないほどに、大きな光の弾丸。抵抗する術もないことを悟り、永遠が力なく、目を細める。

「これが……“終わり”……」
を

ポツリと言葉を落とした永遠を、次の瞬間、アヒルの弾丸が一気に包み込んだ。

————バアアアアアン！

「あ……！」

上空の空間のあった辺りで、下の地面を揺るがすほどの、大きな光の爆発が起こり、下方から見守っていた籠也が、思わず身を乗り出す。

「か、神いいいいっ……！！」

Word 84 をワラヌ明日へ (5)

「ん、んん…」

一瞬、意識を手放していたのか、アヒルがゆっくりとその瞳を開く。アヒルの目覚めたそこは、まだ、空の上であった。空中だから、すでにボロボロの体も、割りと楽に起き上がらせることが出来た。

「お、俺、どうして…あっ」

戸惑うように、自分の体を見回したアヒルが、ふと視線を止め、そっと眉をひそめる。

「銃が…」

アヒルの右手に握りしめられた、一丁の銃。その銃は、すでに銃身に大きくヒビが入り、銃口の先も砕けて、最早、銃とは呼べない状態となっていた。激しい力のぶつかり合いに耐えられず、壊れてしまったのだろう。アヒルが険しい表情を見せながら、空いている左手で、そっと銃身を撫でる。

「あいつはっ…？」

先程まで、力のぶつけ合いを行っていた相手の姿を探し、周囲を見回すアヒル。アヒルの周りの空は、二人の力のぶつかり合い、そして最後の爆発の影響からか、細かい光の粒が無数に降り落ち、それが辺りを囲っていて、周りの景色など、ろくに見えない状況となっていた。

「どこに…」

「う、ううう…」

無数の光粒の中、人影を探していたアヒルが、かすかに耳に入るその声に気付き、素早く振り向く。

「あ…」

降り注ぐ光の中、空中に横たわっている、人の影。それは、背中に生えていた翼を失い、全身ボロボロに傷ついて、すっかり力ない

姿となってしまうた、永遠であった。

「永遠…」

永遠の姿を見つけ、そっと目を細めるアヒル。アヒルは、少し考えるように俯いた後、またすぐに顔を上げ、何やら決め込んだ表情となった。そして、空中を起き上がった態勢のまま、ゆっくりと移動し、横たわっている永遠のもとへと、近付いていく。

「永遠…」

「……寄るな」

鋭く返って来る声に、アヒルがその場で思わず、動きを止める。

永遠は深く瞳を閉じていたため、意識を手放しているのかと思ったが、しっかりと、その意識は保っていたようである。横たわった状態のまま、永遠がゆっくりとその瞳を開き、目の前へとやって来たアヒルを、鋭く見やる。

「これで、満足か…？」

「え…？」

永遠からの急な問いかけに、アヒルが、戸惑うように眉をひそめる。

「諦めなかった…“諦めなかった”君には、“明日”が来る…」

傷だらけの状態ながらも、しっかりとした意識で、はつきりと、自身の言葉を紡ぐ永遠。

「けど、“諦めた”俺には、“明日”は来ない…」

低くなる、永遠の声。険しい表情には、かすかに悲しみが感じられる。

「誰かが“諦めず”にいれば…他の誰かは、“諦めなきゃ”いけなくなるんだ…」

遠くの方を見つめていた永遠の視線が、またゆっくりと、アヒルの方へと戻っていく。

「君が“諦めない”と言った分だけ、“諦めた”人間が、この世界に居るんだよ…安の神…」

まっすぐに向けられる、責め立てるような永遠の言葉を、アヒル

は逸らすことなく、永遠を見つめ返すことで、しっかりと受け止める。

「……そんなこと、ない」

あっさりと永遠の言葉を否定するアヒルに、永遠は少し、驚いたように、目を見張った。そんな永遠の様子も気にせず、アヒルは永遠を見つめたまま、言葉を続ける。

「俺は、自分が“諦めない”からって、他の人間に“諦めろ”なんて、言ったりしない」

「……ハッ」

アヒルが放ったその言葉を、永遠が鼻で、笑い飛ばす。

「何を言い出すかと思えば。言葉の神なら、もう少し、自分の発言に責任を持てよ」

また責めるように、強くアヒルを睨みつける永遠。

「現に、さっき君は、俺にっ……」

「違う！」

責め立てる永遠の声を、アヒルが、思わず張り上げた声で、勢いよく遮った。少し眉をひそめた永遠へと、アヒルが、真剣な表情を向ける。

「違うんだ、永遠」

もう一度、強く言い放つアヒルのその言葉は、永遠に信じて欲しいと、そう願っているようだった。

「さっき、俺が言いたかったのは、“お前が、明日を諦めたのが悪いんだから、何もかもを諦めろ”とか、そんな言葉じゃないんだ」

アヒルの誠実な言葉が、まっすぐに永遠へと伝えられる。

「俺は」

力強く、永遠の瞳を見つめるアヒル。

「俺はお前に、“明日を諦めるな”って、そう、言いたかったんだ」
アヒルから告げられるその言葉を、想定していなかったのか、永遠は驚いた様子で、大きく目を見開いた。

「あき、らめるな……？」

「ああ」

戸惑った様子で聞き返す永遠へ、アヒルが大きく頷きかける。何の迷いもなく頷くアヒルに、永遠がまた、その戸惑いの色を深くする。

「な、何を…馬鹿なっ…」

わずかに動揺を見せた声で、永遠がすぐに、アヒルの言葉に、首を横に振る。

「俺に、“明日”なんてっ…俺は、“永遠”、で…」

「年を取ることが、“明日”じゃない。巡る時を過ごすことが、“明日”じゃない」

必死に否定しようとする永遠の言葉を遮り、アヒルが優しく、論すように、言葉を掛ける。

「何かしようって、どこかに出掛けようって、誰かに会いに行こうって、そう思うことが、“明日”だ」

穏やかで、大きな笑みを零して、アヒルが言い放つ。

「希望を持つことが、“明日”だ」

アヒルの大きな微笑みに、永遠がまたもや、驚いた様子で、目を見開く。

「希、望…」

「ああ。希望を持てば、どんな人間にだって絶対、“明日”は来る」
まだ、アヒルの放った言葉を受け止めきれていない様子で、少し困惑したように、アヒルの言葉を繰り返す永遠に、アヒルがしっかりと頷きかける。

「お前にも、“明日”は来る」

はっきりと放たれるアヒルのその言葉は、疑いのない真実のように、永遠の耳に響いた。

「だから、諦めないでくれ。永遠」

アヒルが、どこか願うように、永遠へと声を掛ける。

「諦めないで、希望を持てば、ほら」

その視線を動かし、自身の後方へと向けるアヒル。永遠も、アヒ

ルの見つめるその先へと、視線を移す。二人の周囲を包むようにして降り注いでいた、二人の力の残骸である光粒が、すべて散り消え、やっと、光の向こう、外の世界が見えてくる。見えてくるその光景に、アヒルはそっと微笑み、永遠は大きく、その瞳を見開いた。

「あ…」

思わず、声を漏らす永遠。二人の視線の先に見えるのは、水平線上から浮かび上がる、美しいまでに輝く、朝日であった。

「“明日”はこんなにも、輝いて見えるから」

空へと昇りゆく朝日を見つめ、アヒルがどこか、誇らしく笑う。

「ああ…」

同じように朝日を見つめ、そっと、瞳を細める永遠。

「これが、“明日”…」

細められた永遠の瞳が潤み、やがて、その瞳から、一筋の涙が零れ落ちる。青い空へと昇る、明々とした太陽を見つめ、永遠は穏やかに、そして嬉しそうに、笑みを浮かべた。

「あっ…」

朝日から永遠へと視線を戻したアヒルが、ふと、その表情を曇らせる。永遠の傷ついた右手の中に、握り締められている白い言玉が、中央から大きくヒビ割れ、勢いよく砕け散ったのだ。言玉が砕け散ると同時に、永遠の体が、真っ白な光に、包まれていく。

「これで…やっと、行ける…」

光に包まれていく自分の体を見つめながら、永遠がまた、そっと微笑む。

「“明日”へ…」

「永遠…」

穏やかに微笑む永遠を見つめ、険しい表情を見せるアヒル。

「……………」

アヒルは少し悩むように俯いた後、ゆっくりと顔を上げ、光の中に消えゆく永遠に、大きな笑顔を向けた。

「“また明日”、遠久」

今まで呼んできた名ではなく、彼の本当の名を呼んで、アヒルが遠久へ、挨拶を向ける。遠久はアヒルへと視線を向け、その穏やかな笑みを、アヒルへも向けた。

「また、明日……」

挨拶を返した遠久の体から溢れる光が、徐々に強さを増し、遠久を包み込んでいく。

「……っ」

光が体を覆い尽くしていく中、遠久は微笑んだまま、ゆっくりとその瞳を閉じた。

——パアアアン！

次の瞬間、真っ白な光はその場で碎け散り、朝日が照らす中、遠久は、空へと消えていった。

「遠久……」

遠くの空で消えた光に、“永遠”を生きてきた弟の死を感じ取り、恵がそっと、目を細める。

「ク……！」

強く唇を噛み締めた恵が、近くに落ちていた、韻従者の武器であろうナイフを取り、その刃の先を、自身の喉元へと、向けて振り下ろす。

「う……！」

だが、その刃は、恵の喉に、突き刺さる前に止まった。恵の腕を掴み、それを止めたスズメが、何とも厳しい表情で、恵を見つめている。

「やめろって、そういうの。誰も、喜ばねえから」

厳しい表情のまま、スズメが恵へと、言葉を掛ける。

「俺もアヒルも…それに、兄貴も」

向けられるスズメの言葉に、恵がそっと目を細める。脳裏に浮かぶ、カモメの優しい笑顔に、深く瞳を閉じる恵。恵の右手から、力なく、ナイフが零れ落ちた。

「ううう…う…！」

俯いた恵の瞳から、とめどない涙が、溢れ出る。

「遠久っ…遠久あああ…！！！」

もう届くことのない弟の名を呼びながら、恵はただ、その場で泣き崩れた。

「遠久サン…」

勝負の終わりを察し、下がっていた後方から、皆の居る方へと戻って来た為介もまた、遠久の消えていった空を見つめ、悲しげに目を細める。

「……………」

今までの数々の出来事を思っただ、ウズラも静かに、その瞳を閉じた。

Word 84 をワラヌ明日へ (6)

「遠久……」

辺りに放たれるように砕け、散り逝く遠久の光の残骸が、朝日に照らされ、明るくなり始めた空に、きらきらと輝きながら、舞い落ちる。その美しい光景を、まっすぐに見つめながら、アヒルはそつと、目を細めた。

「いつか、絶対、また会おう」

散り逝く光に、アヒルがまるで、誓うように声を掛ける。

「“また、明日”」

もう一度、約束するように、その挨拶を口にして、アヒルは、遠久の安らかな眠りを、希望溢れる明日を祈るように、深く、その瞳を閉じた。

「……あれ？」

その時、突然、アヒルの全身を包み込んでいた、淡い赤色の光が掻き消え、アヒルの体が、勢いよく落下し始める。

「あれあれあれえええ……!？」

昇りゆく太陽よりも上空から、真っ逆さまに落ちていく体に、焦りの声をあげるアヒル。

「どわああああ! 助けてえええ……!」

アヒルの間拔けな叫び声が、朝やけの空一面に、大きく響き渡る。

「神!？」

高い空の上から、勢いよく落下してくるアヒルの姿に気付き、籠也が大きく目を見開いて、身を乗り出す。

「あらあゝ、言葉の力が途切れちゃったみたいだねえ」

「マズいわねえ」

「冷静に言っている場合じゃないでしょう!？ 親!」

まるで他人事のように言いながら、落下しているアヒルを悠長に見つめているウズラと茜に、箆也が思わず怒鳴りあげる。

「とにかく！誰か、言葉で何とかしてくれ！」

避難していた後方から、また箆也たちの居る前面へと集まってきた音士たちの方を振り返り、箆也が助けを求めるように、必死に声を出す。

「何とかしてくれって言われてもよお、俺ら全員、言玉持ってねえぜえ？」

「あ…」

守からの指摘に、今、気付いたといわんばかりの声を漏らす箆也。ここに居る音士全員の言玉は、箆也の言葉により、アヒルのもとへと送られている。今、この場に、言葉を使える音士は居ないのである。

「そう、だった…」

「冷静な神月クンが、随分と焦ってるねえ」

思い出した様子で頷き、がっくりと俯く箆也を見て、為介がどうか、感心したように言う。

「ぎゃあああああ〜！」

「あ、ああああ朝比奈くん…！」

その間にも、激しい叫び声をあげながら、どんどんと落下してきているアヒル。アヒルを見上げながら、七架も身を乗り出し、焦った表情を見せる。

「ど、どどどどどうしよお！？囁ちゃん！」

「“勝負に勝って、重力に負けた”ってところかしらね…フフフ…」

「囁ちゃん！」

不気味に、そしてどこか楽しげに微笑む囁に、七架が怒ったように声をあげる。

「今、従者を送っていますが、恐らく、間に合わないでしょう」

「サラっと言うな！」

再び箆也のすぐ横までやって来た和音の、何の救いにもならない

言葉に、また怒鳴り声をあげる簞也。

「ガァ…」

紺平が、檻也や空音と共に、不安げに、落ちてくるアヒルを見上げる。

「ええーつと、ああーつと、どうしたら…」

「はあー！こんな時に何にもいい案の浮かばない、無能な俺で、すみませえーん！」

「気が散るから、黙っておけ。それに、あなたが無能なのは、今に始まったことではない」

勢いよく謝り散らす保に、簞也は考える姿勢を崩さぬまま、冷たい言葉を投げかける。

「ええーつと…！」

「クワアアア…！」

「え…？」

頭を強く掻きながら、必死に考えを巡らせていた簞也が、上空から聞こえる、甲高い鳴き声を耳に入れ、俯いていた顔を上げる。空へと顔を向けた簞也の、その視界の中を大きく駆け抜け、アヒルの落下していつている空へと、羽ばたいていく、一羽の金色の鳥。

「あれは…」

ウズラや為介たちも、その鳥を見上げ、目を見張る。

「ったく」

皆と同じように鳥を見上げ、スズメが少し呆れた様子で、肩を落とす。

「相変わらず、イイとこ持ってくよなあーあの人は」

「フフ…そうだね…」

少し不満げに口を尖らせるスズメの横で、ツバメが穏やかに笑う。

「あれは…あの、鳥は…」

大きく両翼を広げ、優美なまでに、朝やけの空を翔けていくその鳥は、簞也にとって、よく見覚えのある鳥。その鳥を見つめ、簞也がそっと、目を細める。

「カー、坊っ…」

翔け抜けていく、先代の力であったその鳥を見つめ、籠也はどこか、泣き出しそうな笑みを浮かべた。

「ぎゃああああ！死ぬううう！」

どんどんと加速を増していく体を、近付いてくる地面に、どうすることも出来ずに、声が枯れそうなほどに叫び声をあげるアヒル。そんなアヒルの下方に、籠也たちの居る空から、翔け抜けてきた金鳥が横から入り、落ちてくるアヒルの体を、背中で受け止めた。

「ひぎゃあああゝ！あああゝ！って、あれ？」

突然、落下の重力から解放され、背中に柔らかな感触を覚えて、アヒルが叫び声を止め、目を丸くする。

「お、俺…あっ…」

戸惑いながら、体の向きを変えたアヒルが、驚いた様子で目を見る。アヒルのすぐ下にあるのは、金色の光の巨体。その背にアヒルを乗せ、大きく翼を広げながら、ゆっくりと下降していくその鳥を見下ろし、アヒルがそっと、目を細める。

「お前、は…」

アヒルのガースケではない。スズメのチュン吉でも、ツバメのスワ郎でもない。この鳥が、誰の力であるか、誰からのものであるか、アヒルは一瞬で、すぐに理解した。

「ありがとう…」

カー坊の大きな頭を撫で、アヒルが零れんばかりの、大きな笑みを浮かべる。

「ありがとう、カー兄…！」

「クワアアアア！」

アヒルの言葉に応えるように、カー坊は、明るい空に、どこまでも響き渡る、大きな鳴き声をあげた。

「おっしやああゝ！朝比奈ああ！」

「神…！」

「ガァ！」

「朝比奈くん…！！」

カー坊の背に乗り、ゆっくりと地面へと降りてくるアヒルのもとへと、傷だらけの仲間たちは、その傷など気にすることなく、一直線に、駆け出していった。

「ふいゝ」

地面へと着地したカー坊の背の上から降り、無事、その地に足を付けたアヒルは、ひどく安心した様子で、肩を落とす、大きく息を吐いた。ホッと胸を撫で下ろしたアヒルが、ここまで送り届けてくれた、カー坊の方を振り返る。

「ありがとうな」

アヒルの言葉を聞き、喜ぶように目を細めると、カー坊は、金色の光の塊となり、空へと舞い上がるようにして、その場から去っていった。空の遥か向こうへと消えていく光を、アヒルが細めた瞳で、どこまでも見送る。

「神…！」

「アヒルさあゝん！」

「朝比奈くん！」

背後から聞こえてくる声たちに、アヒルが上げていた視線を戻し、ゆっくりと振り返る。振り返った先には、ボロボロに傷を負いながらも、嬉しそうな笑顔を見せ、こちらへと必死に駆けてくる仲間たちの姿があった。その姿に、アヒルの表情も、一気に綻ぶ。

「皆…！」

仲間を見回し、穏やかに微笑むアヒル。そんなアヒルの姿に、籠也たちと共に先頭を切って、その場へと辿り着いた七架が、勢いよ

く瞳を潤ませる。

「朝比奈くん…朝比奈くん…！」

「奈々瀬…」

その大きな瞳から、大粒の涙を流れ落とし、今にも泣き崩れそうなほどの涙に暮れる七架を見て、アヒルが少し困ったように笑う。

「ああああ朝比奈くん…！きよ、今日は本当に、プチトマト日和だねえ！朝比奈くん…！」

「そ、そうか…？ま、まあ、後でウチでプチトマト、買ってけ」

いつものように意味のわからない発言をする七架に、アヒルが少し呆れながらも、慣れた様子で言葉を返す。

「けど良かった…！朝比奈くん、本当に…！無事で良かった…！」

「んなに、泣くなよ。奈々瀬」

アヒルがゆっくりと歩を進め、涙を流す七架のもとへと歩み寄っていく。

「俺なら、この通り、全然大丈夫でっ…」

「アーくうううん！」

「がはあ！」

七架のすぐ前へと立ち、七架に、その元気な姿を見せようとしたアヒルが、前方から勢いよく突っ込んできたウズラにより、後方へと弾き飛ばされる。

「アーくんが無事で、お父さん、本当に嬉しいよお〜！」

呆然とする七架を、舞い踊るウズラ。ウズラが明るい声を響かせる中、後方に吹き飛ばされたアヒルが、ただでさえ痛む体を押さえ、ゆっくりと起き上がる。

「こんのっ…」

怒りに震える左拳を、力強く握り締めるアヒル。

「クソ親っ…！」

「カワイイ女の子より、先に抱きつきに行ってるんじゃないわよ！このヒゲがああ！」

「ぎゃああああ！」

「あ…」

アヒルが握り締めたその拳を繰り出す前に、ウズラの腹部へと飛び蹴りを決め、ウズラを勢いよく吹き飛ばしたのは、茜であった。

「アヒルの青い春を、何だと思ってるの！？えええ！？」

「ごめんなさあゝい、茜ちゃん！」

「だから、怖ええーって…」

父へと容赦なく怒鳴りあげる母の姿に、ただならぬ恐怖を感じ、アヒルが思わず表情を引きつる。

「よっ！」

「お疲れ…」

「スー兄！ツー兄！」

母に恐怖していたアヒルの両側から、笑顔で現れる二人の兄。無事な兄たちの姿を見て、アヒルも嬉しそうに笑みを零す。

「お前にしては、よく頑張ったな」

「偉そうに言うなよっ」

乱雑にアヒルの頭を撫でながら、言い放つスズメに、アヒルが少し不満げな表情を見せる。

「アヒルさあゝん！」

「うお！」

大声を発しながら、突然すぐ横へと現れる保に、思わず背筋を立たせ、驚くアヒル。

「お、お。保、お前も無事だったか」

「はいいゝ！」

少し引き気味に声を掛けるアヒルに対し、保は興奮冷めやらぬ様子で、全力で返事をする。

「こんな何の取柄もない俺ですけど、何でも言って下さい、アヒルさん！俺、今、アヒルさんのためなら、何でも出来そうな気がするんですうゝ！」

「じゃあ、黙っててくんね…？お前の大声、傷に響く…」

「んんゝ！」

アヒルの要求通り、両手で口を塞いだ保が、まだ興奮した様子で、言葉はないが、全力の返事をする。

「はぁ」

「フフフ…喜び方すらも鬱陶しいわね、転校生くんって…」

「うお！囁！」

背後から、不気味な笑みを浮かべ、現れる囁に、アヒルが少し怯えた様子で体を引く。だが、元気そうな囁の姿を見ると、アヒルはホッとしたように笑みを浮かべた。

「お前も無事でっ…」

「早速なんだけれど、アヒるん…」

「へ？」

遮る囁の言葉に、アヒルが戸惑うように首を傾げる。

「これ、私が作った栄養ドリンク…たぁんと、召し上がれ…」

「いや、いいわ」

何やら泡の吹き零れている、不気味な紫色の液体の入ったボトルを差し出され、アヒルが瞬時に断りを入れる。

「神」

呼ばれるその名に、アヒルがハッとした様子で、振り向く。

「籠也」

振り向いた先に立つ籠也を見て、また、笑みを零すアヒル。籠也も笑みを浮かべ、アヒルへと大きく頷きかける。その頷きに、アヒルもまた、大きな頷きで返した。

「あ…」

集まった多くの音士の中、皆、嬉しそうな笑顔を見せている中で一人、悲しげにも見える笑みを浮かべている人物を見つけ、アヒルがそっと目を細める。ゆっくりと歩を進めていくアヒルに、周囲の音士たちは後方へと下がり、その人物までの道を作っていく。

「恵先生…」

恵のすぐ前へと立ったアヒルが、浮かべていた笑みを止め、真剣な表情で、恵を見つめる。恵もまた、真剣な表情を作り、まっすぐ

にアヒルを見つめた。

「遠久、は…？」

少し躊躇いがちに、恵が、アヒルへと問いかけを向ける。恵のその問いに、アヒルは迷うように俯いた後、一瞬瞳を閉じ、また、顔を上げた。

「“また明日”、会う約束をした」

大きく微笑んで答えるアヒルに、恵がそっと、目を細める。

「そうか…」

細めた瞳にかすかに涙を浮かべ、恵は、今にも泣き出しそうな表情で、しっかりと頷いた。

「よっしゃあ、朝比奈あ！ここで会ったが、百年目ええ〜！」

「ダカラ空気読ムデユース、リーゼントマン！」

しみりとした雰囲気をぶち壊すように、大きな叫び声をあげて、アヒルへと飛び掛かって行こうとする守を、ライアンが必死に押さえつける。

「あれ？ガア」

「んあ？」

不意に紺平に声を掛けられ、アヒルが振り向く。

「銃がすごい光ってるけど、大丈夫？」

「へ？」

紺平に右手を指差され、アヒルが握り締めた銃へと視線を移す。確かに、しっかりと握り締めたままの銃は、赤や金だけではなく、様々な光を放って、強く輝いていた。今までも光ってはいたが、どうも、今までの光り方とは異なっている。

「な、何っ…おおおわ！」

アヒルが戸惑った様子で、銃を見ようと持ち上げた、その瞬間、銃は、弾け飛ぶような大きな音を立てて、辺りに、纏っていたその光を撒き散らした。放たれる眩い光に、その場に居る誰もが、一度、目を閉じる。光が収まったことを瞼の向こうから感じ、アヒルがゆっくりと、目を開いた。

「あっ…」

目を開いたアヒルの目の前に浮かぶ、一つの丸い玉。

「これは、言玉…」

よく見覚えのある赤いその玉は、アヒルがずっと共に戦ってきた、“あ”の言玉であった。言玉が目の前に浮かんでいるのは、アヒルだけではない。他の音士の前にも、それぞれの言玉が浮かんでいる。ウズラの前には、今までアヒルと共に在った、“う”の言玉が浮かんでいた。

「そっか。合わせてた皆の言玉が、またバラバラに…」

「言玉が、消えゆくのです」

「え…?」

その衝撃的な言葉に、アヒルが険しい表情となって振り向く。アヒルが振り向いた先には、落ち着いた表情を見せた和音の姿があった。和音のすぐ前にも、“わ”の赤い言玉が浮かんでいる。

「言玉が、消える…?」

「はい。あなたと永遠との戦いで、“を”の言玉が砕け、すべての言葉の力が無効となり、“遠の神”永遠も消えました」

“上がれ”で浮かんでいたはずのアヒルの体が、急に落下したことを思い出し、アヒルがそっと眉をひそめる。あれは、アヒルの言葉の力が、消えてしまったことを表していたのだろう。

“を”の文字が消えれば、他のすべての文字も消えゆく。それがこの、五十音の世界の決まり」

アヒルから目を離れた和音が、音士たちの傍に浮かぶ、多くの言玉を見回し、そっと目を細める。

「これで、すべての文字の力が、すべての五十音士という存在が、消えるのです」

和音の告げるその言葉に、皆が一際、真剣な表情を見せ、自身の言玉を見つめた。

「お別れ、か…短い間だったけど、色々ありがとう…」

自身の白い言玉へと指先を当て、少し寂しげに微笑む紺平。

「“神”の名がなくとも、認められるような人間になるよ…」

檻也は、自身の言玉に、誓いを立てるように、言葉を放つ。

「楽しかったわ！ありがと！」

目の前の緑色の言玉に、撫でるように触れて、エリザが、悲しみの色もなく、明るく礼を口にする。

「泣いちゃうよぉー！お別れとか、俺、泣いちゃうよぉー！」

「フン…」

もうすでに涙を流した状態で、強く言玉を握り締めている金八の様子に、呆れ切った様子で鼻を鳴らした後、イクラがゆっくりと視線を動かし、自身の青い言玉へと、視線を移す。

「……恩に着る」

短い言葉は、誰に聞こえずとも、言玉には届いたであろう。

「長い間、お疲れ様…」

共に在った、他の音士たちよりも遥かに長い時間を思い出し、為介が、労うように、言玉へと声を掛ける。

「俺の代わりに、俺の息子たちの力になってくれて、ありがとう…」
両手のひらに、金色の言玉を包み込み、ウズラがそっと、言葉を掛ける。

「長い間、苦勞をかけたな…」

すぐ傍の緑色の言玉に触れ、恵が穏やかな笑みを浮かべる。その言玉は、恵の“糸”の文字だけではなく、恵の神附きであった、芽衣子の“め”の遺志も持つ、恵にとっては特別過ぎる、言玉であった。

「ゆっくりと、眠れ…」

その言葉は、ずっと恵のことを心配していたであろう、芽衣子へと向けられた言葉のようにも聞こえた。

「本当にお別れなんだね」

「ああ…」

「悲しいですうー！」

「フフ…そうね…」

皆が言玉との別れを済ませる中、安団の五人もまた、それぞれの赤い言玉を見つめ、名残惜しそうな、悲しげな表情を見せていた。

「お別れ、か…」

自身の言玉を見つめ、七架がそっと、目を細める。

——“何とかしなきゃ”…!——

——あの人のために、私は戦うって…!——

——“な”、解放…!——

巡り合った初めての戦いを、それからずっと共に在った日々を思い出し、七架が懐かしむような、笑みを浮かべる。七架に力をくれた言葉。七架に、アヒルのために戦う力を、くれた言葉。

“何度だつて”…」

ずっと共に在った文字を口にし、七架が穏やかに微笑む。

「何度だつて」、口にするよ。これからも、いつまでも…」

七架が、言玉へと誓うように言葉を掛ける。

——“助けて” ええ!——

——“痛み”を分かち合うから、優しくなれる…乗り越えるから、強くなれる!——

——そうして生きていくんです!俺たちは…!——

“痛み”に傷ついた日も、苦しんだ日も、ずっと共に在った言葉。灰示との繋がりをくれ、そして、“痛み”を乗り越えていくための、力をくれた。

「“大切”にします…」

両手で言玉を包み込むようにして触れ、保がそっと、声を掛ける。

「“大切”にします。ずっと…」

言玉の光の温もりを感じ、保は静かに、瞳を閉じた。

——言葉はいつも、嘘ばかり：——
——サヨウナラ：——
——すべての言葉に、意味はある——

言葉に絶望した自分を、立ち上がらせてくれた。嘘ばかりだと、無意味だと、そう思っていた自分を、変えてくれた。すべての言葉に意味があると、そう信じられる、力をくれた。

「寂しくなる」わね……

名残惜しそうに、自身の文字を口にし、囁がそつと、言玉に指を触れる。

「さようなら」……

また出会うための挨拶と信じ、囁はその言葉を、言玉へと送った。

——神のせいで、僕の言葉は消えたんだ！——

——弟の言葉は、返してもらおう——

——神付きであることを、何よりも誇りに思っている！——

神に拒絶され、自由でなくなった言葉に苦しんでいた自分を、救うように、カモメが与えてくれた言葉。誰かの力になれるのだと、こんなにも自由なのだと、教えてくれた言葉。

「感謝」する……

短い言葉の中に、精一杯の想いを込めて、箆也がまっすぐに、自身の言玉を見つめる。

「感謝する」

もう一度、その言葉を繰り返し、箆也は言玉へ向け、深々と頭を下げた。

——“当たれ” えええ！——

——“会いに行く” から……！——

——“諦めない” ……！——

——“明日へ”……！——

「……………」

今まで発してきた言葉の数々を思い出し、アヒルが懐かしむように目を細め、目の前に浮かぶ、“あ”の言玉を見つめる。“あ”の文字に目醒め、神となつてからの数ヶ月。ずっと共に在り、ずっと共に戦つてきた。言葉を守りたいと願うアヒルに、守れるだけの力をくれた。ひどい言葉を放ってしまったカモメに、謝ることも出来た。“あ”の文字があつたからこそ、アヒルは今、ここに居る。

「伝えたいことは、いっぱいあんだけど…俺、国語下手だから」

少し困つたように微笑んで、アヒルが、自身の言玉を見つめる。

「一言だけ」

見つめるその瞳が、さらに薄く、細められる。

「“ありがとう”…」

自身の文字を口にし、アヒルが大きく微笑む。

「“ありがとう”…！」

アヒルの言葉に応えるように、強く輝き始める言玉。アヒルの言玉が輝き始めると、他の言玉も次々と強い光を発し、ゆっくりと浮き上がって、上空に一ヶ所に集まっていく。皆が見上げる中、それぞれの言玉の光は、やがて一つとなり、太陽と同じくらい、強く輝いた。

———パアアアアン！

強い光を放って、すべての言玉は、明るい空の中へと、消えていった。

「行ってしまったな…」

「ああ…」

言玉の消えていった空を見上げ、アヒルと箆也が、静かに言葉を

交わす。

「さあ、帰ろっか！」

空を見上げていたアヒルの両側から、アヒルの傷だらけの体を支えるようにして現れる、ウズラと茜。明るく声をあげたウズラが、アヒルへと、優しい笑みを向ける。

「皆のお家に！」

ウズラのその言葉に、アヒルも柔らかく口元を緩め、どこか嬉しそうに微笑む。

「ああ、帰ろう…」

こうして、アヒルの、“安の神”としての日々は、明日の始まりと共に、終わりを告げた。

Word. 85 あノ残響 (1)

永遠^{とわ}との戦いから、一ヶ月。

言ノ葉町はずれ、遊園地跡。

「なあーんで、よりにもよって、こんな薄気味悪いところなわけえ？」

人氣のまるでない、そう日当たりもよくない、薄暗い廃園内で、不満げな声をあげたのは、不治子であった。そんな不治子の前には、木材で作られた、小さな十字が、地面へと突き刺さっている。その十字の前には、大きな花束が、供えられていた。

「不治子の灰示様のお墓なのよお？ 駅前にでっかく、銅像建てたっていいくらいなのに！」

「そんなん、灰示様、すっげえ嫌がりそうじゃん？ へへ」

不満全開の発言を続ける不治子に、横に立った兵吾が、笑いながら突っ込みを入れる。二人の傍には、ヒロトと蛍の姿もある。皆の見つめるその先にある十字は、どうやら、灰示の墓のようだ。

「ほおー、それに、人が少ない方が、灰示様もゆっくり眠れる…」

「けど、トラトラ子はもう居ないのよお！？ もっとウチから近い方が、すぐに会いに来れるのに！」

「完全に自分の都合だな、ヒヒ」

主張を続ける不治子に、ヒロトが呆れた様子で笑みを零す。

「だいたい、あんたがこんなところがイイとか、言い出すからいけないのよお！？」

「はあ！ 発言のすべてが迷惑に繋がる、こんな俺ですみませえーん！」

不治子から勢いよく指を差され、十字のすぐ目の前で、大きな声をあげて謝り散らしたのは、保であった。保も八行の四人と共に、灰示の墓を作るため、この場を訪れていたようである。

「お詫びに俺が、トラトラ子の代わりになって、不治子さんをここまで運びますう〜！」

「いらないわよ」

相変わらずの大声で言い放つ保に、不治子が間髪入れずに、断る。「で？何だって、こんな場所を選んだわけ？」

改めて問いかける不治子に、保が、頭を抱えていた手を下ろし、目の前の十字を見つめ、穏やかに笑みを零した。

「この場所は、俺と灰示が初めて、アヒルさんと戦った場所です」周囲を見回し、保が懐かしむように、目を細める。

——この“痛み”を忘れたら、本当の笑顔で、笑えなくなってしまう気がするから……

——言葉の中には“救い”もあるって、俺はそう、信じてる……！

初めてアヒルと出会い、アヒルと戦った場所。そして、二人にとつての“言葉”というものの認識を、アヒルにより、変えてもらった場所。

「だから、思い出深くて。それに」

言葉を付け加え、保がまた、優しく笑う。

「皆さんと、共に在った思い出のあるこの場所なら、灰示も、寂しくないんじゃないかって、そう、思ったんです」

保のその言葉に、ハ行の皆が、浮かべていた笑みを止め、どこか悲しげな表情で、十字を見つめる。灰示の骨が、そこに眠っているわけではないが、かつて共に在ったこの場所が、確かに、灰示の存在を感じさせてくれるようだった。灰示との日々を懐かしむように目を細め、四人がまた、穏やかに笑う。

「次は大福でも持ってくるじゃん？」

「灰示様は、そんなものいらなと思う……」

“思う”じゃない。まず間違いなく、いらな

あれこれと言葉を交わしながらも、何やら楽しそうに笑みを零す兵吾たち。そんな兵吾たちを見て、ホッとしたように笑う保の方を見つめ、不治子が少し、目を細める。

「たまに」

「へ？」

不治子の声を耳に入れ、保が戸惑うように振り向く。

「不治子さん？」

「たまあゝに、ホントたまあゝになら、行ってあげてもいいわよ」
渋々、許可するように言う不治子に、その真意がわからず、保が大きく首を傾げる。

「行ってくて、どこへですか？」

問いかける保に、不治子はすぐには答えず、一呼吸置いてから、また口を開く。

「デート！」

「へ？」

吐き捨てるようにそう答えて、不治子が、他の三人と共に、灰示の墓に背を向け、その場を去っていく。遠ざかっていく不治子の背中を見つめ、呆然とした表情を見せる保。

「どうということかなあ？ 灰示」

わけがわからず、大きく首を傾げながら、十字の方を振り向き、問いかける保であった。

「「嗚呼」、「愛」、「会う」、「和えもの」、「青物」、「赤潮」……」

「……」
とある部屋の一室。同じテーブルの向かいに座り、分厚い辞書をそのテーブルの上へと開いて、何やらぶつぶつと言葉を呟いている姉、和音の姿を見つめ、空音が、感心する、というよりは呆れた表

情を見せている。辞書を読む和音は、以前までの着物姿ではなく、空音と同じように、ブラウスとスカートという、とてもラフな服装だ。

「折角、言姫卒業したっていうのに、言語学の勉強だなんて、お姉ちゃんも物好きよねえ」

「まだまだ、学びきれていない言葉が、星の数ほどあります」
辞書から目を逸らさぬまま、空音の言葉に答える和音。

「折角、言葉というものに巡り合ったのです。出来る限り、知り得たいではないですか」

「さすが、元言姫。私じゃ、そこまでの探究心は持てないわあ」

テーブルに付いた肘を、ゆっくりと倒しながら、空音があまり興味のない様子で言う。やっと辞書から視線を上げた和音は、そんな妹の様子に、少し困ったように肩を落とした。

「ま、あなたが興味あるのは、私が言姫ではなくなって、檻也との婚約が解消されたことくらいでしょうからね」

「んな：！？」

和音の突然の発言に、耳も頬も真っ赤に染め上げた空音が、肘をテーブルから離し、勢いよく顔を上げる。

「べ、ベベベ別に私は、そんなこと、気になったりしたりしてたりしてなんか：！」

「和音！」

空音が必死に和音の言葉を否定しようとしたその時、部屋の外から、和音を呼ぶ、女性の声が聞こえてくる。和音は空音の必死の言葉を聞かず、呼ばれたその声の方を振り向いた。

「ちょっと、来てちょうだい！」

「はい、お母さん！」

聞こえてくる声にすぐに返事をし、和音が辞書を閉じて、その場から立ち上がる。

「ふんふんふうん！」

鼻歌を歌いながら、弾むような、軽やかな足取りで、部屋を出て

行く和音のその背中を、空音がまじまじと見つめる。

——あら、お客さん？——

“忘れろ”の言葉により、母の記憶に、いつまでも残らない存在であった和音。だが今は自然に、名前を呼ばれ、和音もそれを、とても喜んでいるように見える。

「ま、いっか！」

嬉しそうな姉の姿に、空音もまた、つられるように笑みを浮かべて、その両腕を、大きく伸ばした。

於崎家、檻也自室。

「え？」

驚くように声をあげたのは、久々に檻也のもとを訪れた紺平であった。紺平の座るテーブルの向かいには、茶をすする檻也の姿がある。

「じゃあ結局、於崎には戻らないって？ 神月くん」

「ああ」

湯呑みから口を離れた檻也が、深々と肩を落とす。

「言ノ葉町にアパートを借りて、そこに住んでいる。名字も神月のままでいくそうだ」

「へえ」。確かに、転校する素振りとか、全然ないもんなあ」

学校での籠也の様子を思い返し、納得するように頷く紺平。

「じゃあ於崎の当主は、檻也くんが継ぐの？」

「そうなるかもな。まあ、“於の神”がなくなつて、継ぐというほど、大層なものでもなくなったが」

それでもどこか浮かない表情を見せ、檻也が、力なく湯呑みをテーブルの上へと置く。

「戦いの事後処理も、五十音士がなくなって、色々と騒々しい親たちへの説明も全部、俺任せ」

落ちた檻也の肩が、またさらに落ちる。

「まったく、仕方のない人だ。“兄さん”は」

「え…？」

檻也の口から自然と零れ落ちるその言葉に、紺平が驚いた様子で、思わず目を見開く。

「ん？何だ？」

「あ、ううん」

そんな紺平の様子を察し、眉をひそめ、問いかける檻也であったが、紺平はすぐに笑みを浮かべ、首を横に振った。

——俺に、兄などいない——

あの時の言葉が嘘のように、自然と、当たり前のように呼ぶ言葉。

「アハハハ」

「何だ、気味の悪い」

突然笑い出す紺平に、その笑みの理由がわからず、檻也は表情をしかめた。

名家、衣沢家。^{えざわ}

「はああゝあああゝ」

大きな花柄の見事な着物を纏い、その美しい金髪を上方で一つにまとめあげたエリザが、畳の上に正座したまま、深々と溜息を吐く。エリザの前には、生け途中の花が置かれていた。

「毎日毎日、お茶に生け花、舞踊にお琴…」

「仕方ありませんよ」

エリザの傍らに、控えるように座しているのは、慧であった。こ

ちらは、音士であった頃と変わらず、派手な忍び服を着ている。嘆くように呟くエリザに、慧は笑顔を向けた。

「エリザ様が“衣の神”をされていたため、遅れてしまったお稽古ごとが、山ほどあるのです。どんどんこなしていただき、一刻も早く、衣沢家の名に恥じぬ淑女になっていたただかねば」

「はあ…」

慧のその言葉に、エリザはまた、深く息を吐く。

「忌蹴り倒してる方が、性に合ってたなあ」

「エリザ様？」

「はいはい、わかったわよ」

慧に注意されるように名を呼ばれ、エリザは仕方なく、目の前の生け花へと集中した。

「僕の名前はチラシ！」

「私の名前はニギリ！」

相変わらずのお揃いのスーツで、楽しげに声をあげるチラシとニギリ。

『こんな二人は、ただの他人！』

『アハハハハハ！』

二人が勢いよくポーズを決めると、二人の前に集まっていた子供たちから、笑い声と歓声があがる。何が面白いのか、他の人間からは不明だが、子供からの受けはいいようである。

「うわあああーん！」

「あ、また泣かしたなあ、神！」

一方、イクラの前で大きな泣き声をあげる子供に気付き、他の子供の相手をしていた金八が、そちらへと歩み寄っていく。

「神はただでさえ、顔が怖いんだから、もっと溢れる優しさで接しないとお」

「フン…」

イクラが泣かせた子供をあやしながら、金八がイクラへと助言するような発言をする。だがイクラは、その助言を受け入れる素振りは見せず、ただ不満げに、腕を組んだ。

「金八：偉そう、エロそう、エロ呼吸…」

「二つは認めるけど、エロ呼吸って何！？そんなこと言うと、俺、泣いちゃうよお！？シャコおっ！」

横から口を挟むシャコに、いつものように叫びあげる金八。

「後はお前たちで、勝手にやってろ…」

「えええっ！？」

素っ気なく言い放って、金八たちに背を向け、その場を去っていくイクラ。そんなイクラの背中を見送り、金八が困った表情を見せる。

「ったく、“先生みたいに、身寄りのない子供たちの面倒を見る”って、神が言い出したから、付き合ってやってんのによお」

「まあ、そう言うな…」

不満げに声を漏らす金八に、シャコが諭すように、声を掛ける。

「そんなことを言うようになっただけ、神も、人間に一步步づく進化を遂げたということだ」

「確かに！すっげえ、神！」

シャコの少し失礼な言葉に、金八は納得した様子で、大きく頷いた。

「ん…？」

二人のもとを去り、子供たちの遊び場であるその部屋を出て行くとしていたイクラが、トイレにでも行っていたのか、部屋に戻って来た幼い男の子と、その目を合わせる。興味でも持ったのか、まじまじとイクラの顔を見上げる子供。イクラも目を逸らすことなく、まっすぐにその子供を見つめる。

「うわあああゝん！」

「う…」

次の瞬間、火をつけたように泣き出す子供に、思わず表情をしかめるイクラ。

「……フン」

大きく鼻を鳴らしながらも、イクラは少し困ったように、顔を下ろした。

言ノ葉町。町の小さな何でも屋『いどばた』。

「いっやあゝ、悪いねえ。雅クン」

店の奥から出てきた為介が、いつものように右手で扇子を扇ぎながら、店の中で、あれこれと片づけやら品出しやらをしている雅に、声を掛ける。為介がやって来たことに気付くと、雅は手を止め、為介の方を振り向いて、人差し指で、掛けている眼鏡を押し上げた。

「いえ、今日は部活も休みですから」

「ああ、オカルト同好会ねえ」

部活と主張して譲らない雅に対し、さらりと言い直しをする為介。為介が奥からの段を下り、サンダルを履いて、店の中へと足を踏み入れる。

「ええゝつと、今日の目玉は、“恋盲腸”のスペシャルキャラクタ―ブックつとお」

「……………」

ぶつぶつと言葉を零しながら、やたらと花の舞っている、きらきらした表紙の本を並べていく為介を見つめ、雅が真剣な表情を見せ、そっと目を細める。

「為介さん…」

「んんゝ？」

雅からの呼びかけに、為介が本を並べながら、答える。

「ずっと前から、言いたかったことがあるんですけど…」

「うん？」

何やら真剣に言葉を発する雅に、様子の違いでも察したのか、為介が手を止め、雅の方を振り返る。雅にまっすぐな視線を向けられ、為介は浮かべていた笑みを止めた。二人の間に、沈黙が流れる。

「バイト代、くれませんか？」

「あっ」

雅からの言葉に、間の抜けた声を漏らす為介であった。

言ノ葉町、言ノ葉高校。

「ナナ〜！」

一日の授業を終え、帰宅するべく、学校の正門へと向かっていた七架が、後方から自身を呼ぶ声に、ゆっくりと振り返る。

「想子ちゃん」

七架が振り返ると、大きく手を振った想子が、こちらへと駆けてきていた。七架がその場で立ち止まると、数秒も経たぬうちに、想子がそこへ辿り着く。

「今日は、バイト？」

「ううん、今日は六騎と買い物に行くの」

「へえ〜、相変わらず仲いいね」

横に並んだ二人が、足並みを揃えるようにして、正門へと向かっていく。

「想子ちゃんは、部活じゃないの？」

「今日は休みなんだ」

首を傾げ、問いかけた七架に、想子は笑顔で答えた。

「だから、川原で自主練！」

「相変わらず、真面目だね」

肩に掛けた、竹刀の入った袋を見せ、得意げに笑う想子。そんな想子に、七架が感心するように笑う。やがて二人は正門に辿り着き、正門をくぐって、別れ道へと出た。

「じゃあ、私こっちだから」

「うん」

右手を指差す想子に、七架が大きく頷く。

「また明日”ね、ナナ!”」

想子が放ったその言葉に、七架は一瞬、驚いたように目を見開いた。だが、すぐにその表情は崩れ、七架が零れんばかりの笑顔を見せる。

「うん、“また明日”！」

毎日のように放たれる、当たり前前の挨拶。その挨拶を交わし、大きく手を振り合って、二人が別々の道へと進んでいく。

「あ…！」

七架と別れ、右手の道へと足を踏み出した想子が、すぐ前方に見える背中に、大きく目を見開く。

「ツバメさん…！」

「え…？」

呼ばれるその声に、下校していく生徒たちの中、想子の前方で、ゆっくりと振り返るツバメ。

「あ、想子ちゃん…」

笑顔を見せるツバメのもとへと、想子が勢いよく駆け出していく。

「今、帰り…？」

「は、はい！今日は部活、休みなんで！」

「そう…僕も部活休みで、今帰りなんだ。一緒に帰ろうか…」

「は、はい！」

微笑み合いながら、二人が自然と横に並び、下校の道を、共に歩いて行く。少し頬を赤くした想子は、弾む心に、足取りも軽くなり、何とも嬉しそうに笑みを零す。だが、不意にその笑みが止まり、少し険しい表情を見えた想子が、意を決するように、強く唇を噛み締めた。

「あ、あの！ツバメさん…！」

「ん…？」

立ち止まって、勢いよく声をあげる想子に、少し前まで歩いて行ってしまったツバメが、ゆっくりと振り返り、想子の方を見る。

「わ、私……！ツバメさんに、き、聞いてほしいことがあるんですけど……！」

「……っ」

緊張した面持ちで、必死に言葉を発する想子に、ツバメがそっと、目を細める。

——私、ツバメさんのことが……！——

あの日途切れた、言葉の続き。

「うん、なあに……？」

穏やかな笑みを浮かべ、ツバメは、もう途切れることのない想子の言葉を待った。

言ノ葉高校、国語資料室。

「うおお、ヒトミいい！お前はなんて、一途なんだあ！」

「……………」

花の咲き乱れる、甘ったるい表紙の本を読みながら、感情をまったく抑えられていない大声をあげ、感想を漏らすスズメに、恵が、呆れ切った表情を見せる。スズメが座っているのは、国語資料室の机の上。恵が色々と仕事をしている机の、すぐ隣であった。

「おい……」

引きつった表情のまま、恵が低い声で、スズメへと声を掛ける。

「ここは憩いの場じゃないぞ？読書すんなら、他の場所行け」

「今、柵の工事中なんだよ。俺のベスポジ、屋上が」

「だからって、ここで読むんじゃない！」

本を閉じ、当然のように答えるスズメに、恵が勢いよく怒鳴り声

をあげる。

「ったく、それでも本当に受験生かあ？毎日毎日、甘ったるい本、読みやがって」

「“恋盲腸”は、俺の元気の源なの。勉強も、家ではきちんとやっていますんで、ご心配なく！」

得意げな笑みを浮かべ、恋盲腸の表紙を撫でるスズメを見つめ、恵が少し目を細める。

「大学、行くことにしたんだってな」

恵が持っていたペンを机の上に置き、仕事をしていた手を止め、スズメの方へと体を向ける。

「しかも、経営学部」

恵の言葉を聞きながら、スズメは薄く、笑みを浮かべた。

「やっと、家業を継ぐ気にでもなったか？」

「まあねえ」

やる気のない返事をしながら、スズメが、自分の座るすぐ横に、大切そうに恋盲腸の本を置く。

「ずっと“八百屋は嫌だ”と言っていたくせに」

「仕方ねえじゃん？一番上の俺が、しっかりしないと」

スズメが机から下り、立ち上がって、資料室に並ぶ、多くの本を見回す。

「兄貴はもう、居ないんだから」

スズメのその言葉に、恵の表情が曇る。スズメから目を逸らした恵は、資料室の窓へと視線を移し、下校していく生徒たちの背中を見つめた。

——お姉ちゃん！——

もう居ない、大切な人。

「そうだな。しっかり、しないとな…」

どこか自分に言い聞かせるように、恵は、スズメの放った言葉を

繰り返した。窓を見つめる恵の背を見つめ、少し目を細めるスズメ。恵が誰のことを思っているのか、そんなことは、問いかけずとも、スズメには十分にわかっていた。

「ああ、けど、もう少し後でも良かったよなあ」

「は？」

スズメの突然の言葉に、恵が戸惑うように振り返る。

「せめて、もう後、二、三年後とかさ」

「何がだ？」

「ん？」

眉をひそめ、不思議そうに問いかける恵に、スズメが悪戯っぽく笑う。

「恵ちゃんの、“永遠”が終わるのが」

「え……？」

スズメの発言に、さらに戸惑った様子となる恵。

「だってさ、そうすりゃ恵ちゃんが二十五で、俺が二十一だろお？まあまあ釣り合う感じになれたのに、残念だよなあ」

「アホか」

理由を聞いた途端、恵が大きく表情をしかめ、吐き捨てるように言葉を放って、またスズメから、窓の外へと視線を移す。顔を俯け、少し考え込むような表情を見せた後、恵がまた、顔を上げる。

「男の方が、平均寿命ってのは短いんだ」

「へ？」

窓を見たままの恵の言葉に、拗ねるように口を尖らせていたスズメが、そちらを見る。

「男が多少若い方が、死ぬ時、一緒に死ねるんだよ」

「……っ」

恵のその言葉に、驚いた様子で、目を見開くスズメ。だがすぐに、その表情は、笑顔でいっぱいになった。

「それって、プロポーズ？」

「アホ。言ってる」

「うん」

悪態づく恵に、笑顔のまま、大きく頷くスズメ。

「言ってる」

スズメのその言葉に、スズメには決して見せないが、大きな笑みを浮かべ、恵は窓から、青々を広がる空を見上げた。

Word. 85 あノ残響 (2)

言ノ葉町。町の小さな八百屋『あさひな』。

「ん、んんゝ…」

二階にある自室の寝台の上で、パジャマ姿のアヒルが、大きく寝返りを打つ。瞳は深々と閉じられ、アヒルは、とても気持ち良さそうに眠っていた。

「ふじ、りんごお……」

よだれの零れているアヒルの口から、意味のわからない寝言も零れる。

「今日も眩しい朝が来てるよぉ〜！アーくう〜ん！」

アヒルの部屋の扉を、蹴破るように勢いよく入って来て、両腕をあげたウズラが、近所迷惑にもなりかねないほどの大声をあげる。

だが、その声にも起きず、アヒルはひたすら、眠り続けている。そんなアヒルの様子を見ながら、ウズラは近くに置いてあった大きな袋へと、両手を差し込んだ。

「必殺！トマトアタアアアーク！」

「ぶふ！」

ウズラが、袋から取り出した大量のトマトを、次から次へとアヒルへ向けて、投げ放つ。すると、放たれたトマトの一つが、アヒルの顔を直撃し、勢いよく潰れて、その汁が、アヒルの顔全体に広がった。その衝撃に、さすがのアヒルも、やっと目を覚ます。

「あ、アーくん、やっと起き…」

「何してくれとんじゃあ！このクソ親父がああ！」

「ぎゃああああ！」

素早く寝台から起き上がったアヒルの回し蹴りが、見事にウズラの顎下へと炸裂し、ウズラはアヒルの部屋の扉をも越えて、廊下まで吹き飛んでいく。

「あ、あんなに小さかったアーくんが、こ、こんな見事な蹴り技を

出来るまでに、成長してくれたなんて：お、お父さんは感動だよ：」

「ハイハイ」

倒れたままのウズラの発言を軽く流しながら、アヒルが近くにあったティッシュを取り、トマトの汁にまみれた顔を拭う。

「だいたい、俺が呼んだのは富士りんごだ、富士りんご！いい加減、りんごでトマト投げつけてくんの、やめろよ！」

「じゃあ、パプリカにする？」

「ああ、そっちのんがまだ、汁出ないしマシ：って、違うわあ！とにかく、野菜投げんのやめろお！」

父の発言に、思わず乗り突っ込みをしてしまうアヒル。

「うわあー、サムい：」

「うっせえ！」

アヒルの披露した乗り突っ込みに、冷やかな視線を浴びせるウズラ。そんなウズラの視線を浴び、アヒルは勢いよく怒鳴りあげながらも、恥ずかしそうに、顔を赤く染めた。

「アヒル、飯、出来てんぞお！とっとと着替えて、降りて来おい！」

「おう！」

「スーくん、お父さんのご飯はあ！？」

一階からのスズメの声に、大きく返事をするアヒルと、必死に体を起こし、訴えかけるウズラ。

今日も朝比奈家に、いつもと変わらぬ、朝が訪れる。

「え：？今日もトマト：？」

一階へと降りたアヒルとウズラを出迎えたのは、大きな空の洗濯かごを持ち、居間へと入って来たツバメであった。ツバメはあまりない表情を、珍しく不満げに崩す。

「昨日、プチトマトだったから：シート洗ったとこだったのに：」
「ごめんねえ〜ツークン。アーくんが二日連続で、トマト呼んだりするからあ〜」

「俺のせいみたいになよ！だいたい、俺が呼んだのは、とよのかイチゴと富士りんごだ！」

大人な態度でツバメへと謝るウズラに、アヒルが不満全開で大きく怒鳴りあげる。

「ツークン、困らせるようなこと、してんじゃないわよ！このヒゲがあ！」

「ぎゃああああ！」

「いいい！？」

店の方から駆け込んできた茜の、強烈な飛び膝蹴りを、もろに顔面に受け、居間の襖を突き破って、廊下へと吹き飛んでいくウズラに、アヒルが思わず、驚きの声を漏らす。

「大丈夫よ、ツークン。シーツなら、お母さんが洗っておくから」

「あ：うん：」

ウズラを容赦なく吹き飛ばしたその後で、優しさに満ち溢れた笑みを向ける茜に、ツバメが引きつった表情を見せながら、どこかきこちなく頷く。

「アーくんは、大丈夫？あのヒゲにトマトぶつけられて、怪我してない？」

「ああ。どっちかつつーと、親父が怪我してそうだけだな：」

ツバメから向きを変え、その優しい笑みを、今度はアヒルへと向ける茜。まだ廊下で倒れたまま、起き上がっていない父を横目に、アヒルは引きつった表情を母へと向ける。

「ううう、ひどいよお〜茜ちゃん！」

「うつさい、ヒゲええ！」

「ぎゃああああ！」

『……………』

まだまだ続きそうなウズラと茜の攻防を、アヒルとツバメは、唾

然とした表情で見つめた。

「母ちゃんが帰ってきて、さらに輪をかけて、騒がしくなったな。この家……」

「ま、いいんじゃないねえのお」

「あ、スー兄、おはよう」

思わずポツリと呟いたアヒルのすぐ横へと、台所から、朝食の準備をしていたスズメが顔を出す。

「飯は？」

「ああ、お前の飯なら……」

アヒルの問いかけに、台所へと視線を流すスズメ。

「さあ、アヒるん……たぁーんと、お食べ……」

「……………」

台所から出てきたのは、朝食ではなく、紫色の液体の煮えた鍋を持った、囁であった。囁から向けられる不気味な笑みに、アヒルがその場で凍りつく。

「スー兄、飯いいい！」

まるで助けでも求めるかのように、必死にスズメへと訴えかけるアヒル。

「フフフ……本当に、照れ屋ね。アヒるんは……」

「誰も照れてねえ！……ってかもう、付き人は卒業だろ！？……いい加減、うちに入り浸るのやめろよ！」

アヒルが注意するように、囁へと声を張り上げる。

「お前も！」

「ん？」

振り向いたアヒルの見つめた先には、誰もまだ座っていない居間のテーブルに、一人、堂々と腰を下ろし、並べられた朝食を口に運んでいる籠也の姿があった。厳しい表情を向けるアヒルに、籠也が少し困ったように、肩を落とす。

「まだ、そんなことを言っているのか。順応力のない男だな」

「うっせえ！」

冷たく吐き捨てるように言い放つ箆也に、アヒルが怒りを全面に出して、思いきり怒鳴りあげる。

「おはようございまーす！」

「うわ、もう紺平の来る時間かよお！」

通用口の方から聞こえてくる紺平の声に、アヒルが焦ったように、居間の掛け時計を見上げる。

「朝飯、食いながら行くかあ」

「そう思って、携帯用にしておいたわ……」

「有り難迷惑だ！」

小さなパックに入れた紫色の液体を差し出す囁に、再び怒鳴りあげながら、アヒルが畳の上に置いていた鞆を取り、台所に用意されていた弁当を入れる。

「あああ、つと！そうだ！」

紺平の待つ通用口に向かう前に、忘れものでもあったのか、向かっていた足の方を変え、居間にある仏壇の前へと、急いで座るアヒル。

「行ってきます、カー兄！」

仏壇に飾られたカモメの写真に笑顔を向け、アヒルはすぐに、家を出た。

「え？じゃあ真田さんも、この近くにアパート借りたの？」

「ええ……」

迎えに来た紺平と、箆也、囁と共に、学校へと向かういつもの道を、ゆっくりとした足取りで進むアヒル。アヒルの隣では、囁へと問いかけた紺平が、少し驚いた表情を見せている。

「“貸し渡せ”の言葉が消えて、アヒるんのお隣さんには、佐々木さん一家が戻って来ちゃったし……」

「当たり前だろ、佐々木さんの家なんだから」

不満げに呟く囁に、アヒルが鋭く言葉を向ける。

「本当は、籠也の家に転がりこもうと思ってたんだけど……」
囁がそう言って、少し前を歩く籠也の方を見る。

「僕は構わなかったんだが、何故か、和音に反対されてな」

「ああ……まあ、そりゃ、されるだろうね……」

「フフフ……」

何故、反対されたのか、わかっていない様子で首を傾げる籠也を、どこか呆れた表情で見つめる紺平。二人のやり取りを聞きながら、囁が不気味な笑みを浮かべる。

「でも良かった。二人が転校しちゃったら、寂しいもん。ねえ、ガア？」

「俺は別に、寂しくねえーけど」

同意を求める紺平に、アヒルが素っ気なく答える。

「またまたあー、強がっちゃって」

「誰も、強がってなんか……！」

「おおーい！朝比奈ああ！」

「んあ？」

紺平の言葉を必死に否定しようとしたアヒルが、前方から聞こえてくる、全力で自分の名を呼ぶその声に、ゆっくりと前を見る。

「ここで会ったが百年目ええ！」

『昨日、会ったところです。アニキ！』

「うるっしーい！」

アヒルたちの行く道の前方へと現れたのは、今日もリーゼントがバッチリと決まっているアニキこと守と、ブラシやパツツンなど、色取り取りの髪型をした守の子分たちであった。見慣れたその顔に、アヒルが疲れたように、深々と肩を落とす。

「懲りないね、お前も」

「“決して諦めない男”と言え！」

呆れたように言うアヒルに対し、守は堂々と、誇らしげに胸を張る。

「オウ、ダッグウー！」

「へ？」

呼ばれるその名に、アヒルが、守のすぐ横へと視線を流す。守のすぐ横には、不自然にも、守たちと同じ、丈の長い学ランを身に纏った、外国人。

「ラ、ライアン！？」

その外国人は、ライアンであった。

「あらあら：どうして外人さんが、リーゼントくんと一緒に居るのかしら：？」

「ハァーイ！私、日本ノ言葉ニツイテハ、ヨオーク学ビマシタ！ダカラ次ハ、日本ノ不良ニツイテ、学ボウト思イマァース！」

囁の問いかけに、ライアンがはつらつと答える。

「それでこいつも、俺たちの仲間に入れてやったってわけよお」

「ヨロシクデス！リーゼントマン！」

「仲間に入ったからには、俺のこと、“アニキ”って呼べえ！」

「ハイ、アニキ！」

「学ぶには、師がいまいちだと思うがな…」

意外と乗り気の守と、守に大声で答えているライアンの様子を見ながら、籠也が小さく呟きを漏らす。

「ということで、朝比奈！ライアンに日本の喧嘩というものを教えるためにも、いざ、尋常にしょ：！」

「ハイハイ」

「ぎゃはあああああ！」

『アニキいい！！』

守がすべての言葉を言い終える前に、アヒルが思いきり鞆を振り上げ、その鞆が守の顔を直撃すると、守の体が、いとも簡単に、右方へと吹き飛ばされていく。吹き飛んでいく守を、慌てふためきながら、必死に追いかけていく子分たち。

「オウ！コレガ、日本ノ喧嘩デスカァァ！？」

よくわかっていない様子だが、ライアンも子分たちの後を追う、その場から去っていった。

「騒がしい連中だ」

「何があっても、あの人たちだけは変わらないような気がするなあ」
「ある意味、感心ね……」

多少、言葉は交わしながらも、何事もなかったかのように再び、学校へと向かう道を進み始める籠也、紺平、囁の三人。守を吹き飛ばした鞆を持ち直し、アヒルも三人の後を追って、その場を歩きだそうと、足を踏み出す。

「ん？」

だが、その足はすぐに止まった。アヒルの視界に入ったのは、道端の、ゴミ捨て用のバケツの上に置かれた、一つの空き缶。その空き缶を見つめ、アヒルがそっと目を細める。

「……………」

アヒルがゆっくりと右手をあげ、一度握り締めた右手の、人差し指を前へ、親指を上へと伸ばす。右手で銃の形を作ったアヒルは、その銃口、人差し指をゆっくりと、バケツの上の空き缶へと向けた。狙いを定め、アヒルがそっと、口を開く。

「あ……」

少し躊躇うように、落とされる文字。

「“当^あたれ”」

言葉と共に、まるで弾丸を放ったかのように、右手を軽く持ち上げる仕草をするアヒル。だが空き缶は動かず、辺りは静けさに包まれる。静けさを感じ、アヒルはすぐに、その右手を引いた。

「なあーんてなっ」

自嘲するように笑みを浮かべ、アヒルがその場を歩きだそうとした、その時。

——カラン。

「え……？」

風も吹いていないのに、空き缶が倒れ、バケツの下へと転がり落

ちる。

「……………」

転がり落ちた空き缶を見た後、少し戸惑った様子で、銃の形を崩した、自身の右手を見下ろすアヒル。

「……まさか、な」

そつと微笑んで、アヒルは強く、右手を握り締めた。

「ガァ！何してんのぉ！？」

「あっ」

随分と前方まで行ってしまった皆と共に立ち止まり、アヒルの方を振り返った紺平が、大きく手を振りながら、アヒルのことを呼んでいる。

「悪い、悪い！」

紺平へと応えるように、握り締めたその右手をあげ、前方へと歩き出して行くアヒル。

「アヒルさぁーん！」

「朝比奈くん！」

「おう、おはよう！保、奈々瀬！ついでに想子も！」

「誰がついでよ、馬鹿ガァ！」

いつの間にか合流したらしい保や七架、想子に挨拶を向けながら、アヒルがゆっくと、前方の皆のもとへと進んでいく。

「早くしろ。遅刻するぞ？」

走ろうとしないアヒルに、皆を代表するように、箆也が、鋭く言葉を向ける。

「“アヒル”」

箆也が呼ぶ、アヒルの名。それは自分の名であるのに、どこか聞き慣れず、アヒルは一瞬、戸惑うような表情を見せたが、すぐに、大きな笑みを浮かべる。

「おう！」

はつきりとした返事を放ち、アヒルは、皆のもとへと、駆け出していった。

言葉には、霊が宿る。

言葉には、魂が宿る。

言葉には、力が宿る。

言葉には、想いが宿る。

言葉には、明日が宿る。

だから僕たちは、言葉と共に、生きていく。

『あノ神ハキミ。』 完。

Word. 85 あノ残響 (2) (後書き)

「あノ神ハキミ。」全85章、完結いたしました。

350話近い、とても長いお話に、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

深く感謝、申し上げます。

あとがき、御礼等につきましては、ブログ、活動報告などに改めて、書かせていただきます。

ここまでアヒルと、その仲間たちの成長を見守って下さり、本当にありがとうございました。

ではまた、別の物語で出会えることを願って。

2011年2月8日 千風

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779g/>

あノ神ハキミ。

2011年2月17日08時26分発行